漆黒の竜人と少女

ゼクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
漆黒の竜人と少女

【Ｎコード】
Ｎ１８２７Ｋ

【作者名】
ゼクス

【あらすじ】
とある世界で一度死に、デジモンの世界で生きていた人物は、その世界での生を終え、消滅する筈だったが何かの力が働き今度は別の世界で生きる事に成ってしまった。
そしてその世界で護りたい者ができ、その者を護る為にその力を振るう物語である。

新たな始まり（前書き）

この物語はデジモンとリリカルなのはのクロスオーバーです。
そして確実に原作崩壊が起きます。その上、オリジナル要素が大量に含まれる可能性が高いです。
なお、自分には恐らく文才は無いと思いますので、不快思われたのなら、戻るを選択してください。

新たな始まり

ドゴオオオオオオン！！

「ガアッ！！」

漆黒の閃光に、何処までも黒い、漆黒の体に金色の髪。黒い銀色をした頭部に胸当て。

両腕の肘まで覆う手甲の先に、三本の鍵爪の様な剣を装備した漆黒の竜人は、放たれた閃光に胸を貫かれて膝を付く。

その様子を見ていた色は違うが似たような黄金の竜人が、漆黒の竜人に急いで駆け寄る。

「■■■■■■■■■■■■！！」

「フフフフッ、笑えるな。この体に転生して、お前達に救われた借りを返す為に歴史を少しでも変えようと動いた結果がこのざまとは、俺は馬鹿だな」

「何を言っている！？」

漆黒の竜人の言葉に、意味が分からなかった黄金の竜人は疑問の叫びを上げた

しかし、漆黒の竜人は黄金の竜人の言葉には答えず、激痛に苦しみながらも無理やり立ち上がり、黄金の竜人から離れ始めた。

「グウッ！・・・・・だが、悪くなかった。少しでもお前達の様な者達と共に居られて俺は満たされた。だから最後に恩返しがしたい」

「ッ！！止めろ！！」

黄金の竜人は漆黒の竜人が行おうとしようとしている事に気がつき叫んだ。

しかし、漆黒の竜人はやはり何も答えずに上空へ浮かび上がろうとするが、その前に漆黒の竜人の背後から首にデジタルカメラを掛けた茶色の短髪の少女が漆黒の竜人に向かって悲痛に満ちたような声で叫ぶ。

「駄目ッ！死んだら駄目ッ！だって、アナタが死んだら私達は悲しいよ！だから死んだら駄目だよ！」

「・・・・・ヒカリ、本当にありがとう。お前がいなければ俺は取り返しの付かない事をしていた。お前、いやお前達には本当に感謝している。だから、俺は！！」

少女ー八神ヒカリに漆黒の竜人は感謝の言葉を伝えると、自身の背後を振り返り、ヒカリと他の子供達、そして黄金の竜人に向かって笑みを向ける。

それと共に今度こそ上空に浮かび上がり、地上にいる黄金の竜人に向かって叫ぶ。

「この世界の事を頼んだぞ！ウォーグレイモン！！」

「ブラックウォーグレイモン！！」

漆黒の竜人ーブラックウォーグレイモンの言葉に黄金の竜人ーウォーグレイモンは悲痛の叫びを上げ、ヒカリ達も悲しみの表情を浮かべる。

しかし、もはやブラックウォーグレイモンは振り返らずに街の方

へと飛び立ち、自身の体を街の上空で黒い粒子に変えながら消滅させた。

ーーーバリィィィィィン！！

それ見たウォーグレイモンはブラックウォーグレイモンが消えた空に涙を浮かべた顔を向ける。

「ブラックウォーグレイモンッ！！！！！」

ブラックウォーグレイモンが消えた空に向かって、ウォーグレイモンは友を失った悲しみの叫びを上げ続けるのだった。

其処は上下左右、在りとあらゆる空間が漆黒に満たさせた空間の中で消滅した筈のブラックウォーグレイモンが、辺りを懐かしそうに見回しながら自身の過去を思い出していた。

（懐かしい。そうだ、思い出したぞ。俺はこの空間に一度来た事がある。俺は一度死んでこの体に転生したんだ）

彼は俗に言う転生者と呼ばれる存在だった。

とある世界で一度死んで、その世界のアニメで在った世界へと転生したのだ。たが、彼は転生者の多くが行うで在ろう世界を救う行動とは逆に、自身が生まれ変わった世界を滅ぼそうとしたのだ。

（この体に転生した時は本当に苦しかった。原作のブラックウォーグレイモンが自身の存在意義に苦しむのに納得したな）

彼は自身が転生した先で在るブラックウォーグレイモンが味わっていた虚しさ、虚無感に襲われ続け徐々に心が壊れていき、最後には全てを破壊する事を誓い、自身が転生したデジタルワールドを崩壊させようとしたのだ。だが、それは阻まれた。

（本当にアイツ等には感謝してもしたりんな。アイツ等のおかげで俺は本当に救われた）

世界を崩壊させようとした彼を止める為に、八神ヒカリや他の子供達、そしてウォーグレイモンは勝てないと分かっていて果敢に挑み続け、最後には彼の心を救ったのだ。

（あの時ほど、嬉しかった時は前世でもなかった。俺はアイツ等に少しでも借りを・・・・・・いや返せてはいないだろうな）

最後に聞いたヒカリとウォーグレイモンの悲しみの叫びを思い出し、ブラックウォーグレイモンは何も返せっていなかった事に気がつき、心に痛みが走る。

（・・・・・済まない。だが、アイツ等になら後を任せられる）

そう考えながらそのまま目を閉じようとすると、上から突如として光が溢れ、ブラックウォーグレイモンの体を包み始めた。

（これは！？）

ーーーシュウン！

突如として自身の体を包んだ光にブラックウォーグレイモンは内心で驚愕の声を上げた瞬間に、空間からブラックウォーグレイモン

の姿は突如として消失した。

「ハッ！？」

気絶していたブラックウォーグレイモンは突如として目を覚まし、辺りを見回しながら自分の状態を急いで確認し、自身の両手を信じられないと言う目で見つめる。

「生きているだと！？馬鹿な！？俺は確かに死んだ筈だ！」

ブラックウォーグレイモンは自分が生きている事に心の底から困惑した。体を貫かれた上に、消滅させたのにも関わらず、無傷で体は存在しているのだから、困惑せずにはいられないだろう。

そのまま少しの間、困惑した表情でブラックウォーグレイモンが自身の体を見つめていると、横から女性の声が響いて来る。

「あ～、気が付きましたか？」

「誰だ！？」

ブラックウォーグレイモンが聞こえて来た声の方を見てみると、蒼い髪に赤い瞳を持った女性が存在していた。

そしてブラックウォーグレイモンの視線の先に居た女性は、自分の名を名乗っていない事に気がつき、自身の名を告げる。

「始めまして、私はアルハザードのホストコンピュータの管制人格。名前はフリートと言います」

「アルハザードだと？（何処かで聞いた事がある・・・・・・そうだ！前世で見た『リリカルなのは』で出た名前ではないか！？）」

女性ーフリートの言葉を聞いたブラックウォーグレイモンは、自分の記憶の中に在る前世の知識の中に在る言葉が出てきた事に驚きながらも、横になっていたベットのような物から立ち上がり、フリートに声を掛ける。

「女、何故俺は此処に居る？」

「私にも分かりません。行き成りこの研究所内部に現れたんですよ」

「・・・・そうか（何故俺は蘇った？まあ良い。再び生が得られたのならば、あの世界に帰って・・・・・・・・・・いや、もうあの世界に帰る事は無い。俺にはそんな資格は無い）」

フリートの言葉に、ブラックウォーグレイモンは残念そうな表情を浮かべるが、すぐに自身が生きている事を喜び、ヒカリ達の世界に戻ろうと思ったが、最後に見たヒカリ達の顔を思い出し帰るの止めた。

（今更あの世界には帰れん。それに俺が居れば世界に悪影響が起きる。もうあの世界には迷惑をかけたくない。だが、約束は絶対に守ってみせる！今度こそ無様に生き抜いてみせるぞ！！）

そうブラックウォーグレイモンは内心で宣言し、新たな世界で生きる事を誓うが、この時は後に起きる全世界を巻き込む戦い関わる事や自身に大切な者達が出来るとは夢にも思わなかったのだった。

新たな始まり（後書き）

始めましてゼクスと言います。
このたび此方のサイトでも、書くことに成りました。
ですが、この作品の更新速度はかなり遅いです。
それでも宜しければ楽しんで下さい。

新たな世界

目覚めたブラックウォーグレイモンはフリートに研究所内部を案内されながら通路を歩き、互いの事情を説明し合っていた。

「成る程、この世界は既に滅んでいると言う事だな？」

「ええ、人間はもう、この世界には一人も居ません。この世界に存在しているのは私だけです」

ブラックウォーグレイモンの質問に、フリートは悲しげな声で答えた。

しかし、ブラックウォーグレイモンはフリートの悲しみに構わず、自身の用件を言い始める。

「ふん、伝説の地と言っても所詮は人間の作った場所か・・・・まぁ、良い。それで俺はこの世界から別世界に移動出来るのか？」

「可能ですよ。ですが、この世界を出て如何する気ですか？」

「決まっている。強い奴を見つけて戦うんだ！より強くなる為に！」

フリートの言葉にブラックウォーグレイモンは世界に宣言する様に叫んだ。

彼にとって戦いは、自分の欲を満たせるただ一つのもの。言うなれば完全な戦闘狂なのだ。

「俺は生きている。ならば、自由に生きるだけだ。誰にも俺を束縛などさせない。俺は、俺の意思で生きる！」

「・・・・・・面白い考えです。良いでしょう。貴方を外の世界に送ります」

ブラックウォーグレイモンの言葉を聞いたフリートは面白そうな表情を浮かべながら、一つの部屋へ入って行く。

その様子を見たブラックウォーグレイモンは、同じ部屋に入って行き、部屋の中を見回すと一つの魔法陣を見つける。

「それは？」

「この魔法陣の中に入れば外の世界に行けます。ですが、一つだけ条件があります」

「何だ？」

「このネックレスを付けて行って欲しいのです」

ブラックウォーグレイモンの質問に、フリートは答えながら何処からともなく蒼い宝石が付いたネックレスを取り出した。

そしてフリートはそのネックレスをブラックウォーグレイモンの首に付けながら、ネックレスに付いて説明を始める。

「このネックレスを付ければ、私と何時でも通信が可能な上に、この場所に何時でも来れますよ」

「何故そんな物を俺に渡す？」

「簡単に言いますと、私も寂しいんですよ。何せ、此処にはもう誰も居ませんし、話し相手も居ませんので。それに私も外の世界を見

て見たいんですよ」

「良いだろう。だが、俺の邪魔だけはするなよ」

「分かっていますよ」

ブラックウォーグレイモンの言葉に、フリートは笑みを浮かべて頷く。

そしてもうフリートには用は無いと判断したブラックウォーグレイモンは陣の上へと移動し、別世界へと転移して行くのだった。

【とある世界】

砂漠だらけの世界では、桃色の髪に鎧を着て、手に剣を持った女性と、黒いマントを身に着け、金色の鎌を作り出している戦斧を握った金髪の少女が、互いに傷だらけになりながら戦っていた。

「ハアッ！」

「くっ！？」

ーーーガキン！！

少女の振るって来た金色の刃を、女性は持っていた剣で受け止め、二人は戦闘を続けていく。

そして二人の戦いを遠くから注意深く観察している者が存在していた。

（奴らは見た事がある。確か、フェイト、シグナムだったか？・・・

・あの二人が戦っていると言う事は、今はＡ．Ｓの時期という事か？）

遠くから戦いの様子を観察していた存在ーブラックウォーグレイモンは、シグナムとフェイトの戦いを見て今の時期についての予測をたてていた。

（と成れば、奴らを襲うのは適切ではないな。奴らもかなりの実力だが、所詮は人間レベル。今戦っても詰まらん。それに俺の知識も穴だらけだ。此処は情報を集める方に遵守すべきだろう）

ブラックウォーグレイモンはそう考え、その場を去ろうとする。しかし、自身以外に戦いを見ている者の気配を感じとり。前に踏み出そうとしていた足を止め、フェイトとシグナムの方に再び目を向ける。

「気に入らんな。真剣勝負の戦いの邪魔をするとは。良いだろう。戦いの邪魔をする奴に礼儀を教えてやろう！！」

ーーービュン！！

ブラックウォーグレイモンはそう叫ぶと共に、瞬時に自身のスピードを全力で発揮し、音速を超える動きでフェイトの後ろに移動した。

「何！？」

「えっ！？」

突如して現れたブラックウォーグレイモンに、二人は驚愕の声を

上げるが、ブラックウォーグレイモンは気にせずに右手に装備したドラモンキラーを振り上げ、フェイトの左側に向かって突き出す。

「ドラモンキラーー！！！」

ーーードゴン！！

「ガアァァァーーー！！」

『なっ！？』

ブラックウォーグレイモンがドラモンキラーを突き出した先に、突如として仮面を付けた男の姿が現れ、砂を撒き散らしながら吹き飛んでいく。

仮面の男の姿を見たシグナムとフェイトは驚いた声を上げるが、ブラックウォーグレイモンは気にせずに立ち上がろうとしている仮面の男に顔を向ける。

「真剣勝負の戦いの邪魔をするとは気に入らん」

「ぐっ！何者だ貴様は！？」

「これから死ぬ貴様には関係無い。大人しく死ね」

「何だと！？」

ブラックウォーグレイモンの言葉に、仮面の男は叫ぶが、ブラックウォーグレイモンは気にせずに瞬時に仮面の男の前に移動した。

ーーービュン！！

「なっ！？早すぎガアッ！？」

一瞬の内に自身の目の前に現れたブラックウォーグレイモンに、仮面の男は驚いた声を上げるが、ブラックウォーグレイモンは気にせずに仮面の男の腹を蹴り飛ばした。

そしてその勢いのまま吹き飛ばされた男の先に、再び瞬時にブラックウォーグレイモンは移動し、吹き飛んで来る仮面の男に向かって右腕を振り下ろし、地面に仮面の男を叩き付ける。

ーーードゴンッ！！

「グハッ！！」

「やはりこの程度か」

地面に倒れ伏している男を見下ろしながら、ブラックウォーグレイモンはつまらなそうな声を出して呟いた。

その様子を見ていたフェイトとシグナムは驚愕に表情を染めて、ブラックウォーグレイモンを見つめる。見えなかったのだ。高速戦闘を得意としている筈なのにブラックウォーグレイモンの動きは、影さえも追う事が出来なかった。その事実は二人を驚かせるのに充分だろう。

そして二人が驚愕している内に、ブラックウォーグレイモンはドラモンキラーの刃を、仮面の男に振り翳す。

「終わりだ」

「ッ！！駄目だよ！？」

ブラックウォーグレイモンのしようとしている事に気が付き、フェイトは止める為に叫んだ。
しかし、ブラックウォーグレイモンは止まらずに、ドラモンキラーの刃を気絶している仮面の男に突き刺そうとする。
しかし、次の瞬間にブラックウォーグレイモンの周りに魔力の檻が出現し、ブラックウォーグレイモンを閉じ込められる。

ーーーガシィィィィン！！

「何だこれは？」

自身を囲んだ魔力の檻に、ブラックウォーグレイモンが疑問の声を上げて魔力の檻を見つめる
その間に別の仮面の男が何処からともなく現れ、倒れ伏している仮面の男をブラックウォーグレイモンの傍から救出し、その場から転移して行った。
それを見たブラックウォーグレイモンは不愉快そうな表情を歪めながら自身の周りに発生している魔力檻に向かって、右腕のドラモンキラーを振り下ろす。

ーーーバキィィィィン！！

「ふん！詰まらなすぎる」

ブラックウォーグレイモンはそう呟くとその場を去ろうとするが、フェイトがブラックウォーグレイモンの背に向かって叫んで来る。

「待って下さい！貴方は一体！？」

「俺の名はブラックウォーグレイモン。縁が有ればまた会おう」

ーーーシュウン！

ブラックウォーグレイモンは自身の名をフェイトに告げると共に自身の足元にフェイトが見た事も無い魔法陣を発生させて、フェイトの前から転移した。

そして残されたフェイトはすぐに後方を振り返りシグナムの姿を探すが、既にシグナムの姿は何処にも無く、悔しそうな表情をしながらアースラへと戻って行く。

これが後に広域次元犯罪者『漆黒の竜人』と呼ばれる事になるブラックウォーグレイモンとの初邂逅で在った。

新たな世界（後書き）

次回予告

漆黒の竜人は別の地球へと渡り、深き闇を目撃する。

そして始まる闇と闇との激突。

次回、闇との激突

闇との激突

フェイト達との出会いか数日が経ち、ブラックウォーグレイモンは別世界の地球ー海鳴市と呼ばれている場所に来ていた。

「ふむ、俺が居た地球と何も変わらんな。まあ、そう簡単には変わらんか・・・・ムッ？」

ーーーキィィィィィン

ブラックウォーグレイモンが一つのビルの屋上でそう呟きながら街を眺めていると、突如として街全体に巨大な結界が張り巡らされた。

そして結界が張られると共に現れた巨大な気配に気が付き、気配の感じられる方向に顔を向け、笑みを浮かべる。

「よもや今日だったとは、フフフフフ、世界を滅ぼす書の力、俺を楽しませろ！」

ーーービュン！

ブラックウォーグレイモンは叫ぶと共に飛び立ち、気配が感じられる場所へと全速力で向かい出す。

そして気配が感じられる方向にある程度進むと、銀色の髪の女性と茶色の髪の少女が、空中で魔法を放ちながらぶつかり合っていた。

それを確認したブラックウォーグレイモンは笑みを浮かべると共に、ドラモンキラーの爪先に赤いエネルギー球を生み出し、銀髪の女性に向かって投げ付ける。

「食らえ！！」

「何！？」

「えっ！？」

突如として自身に高速で迫って来るエネルギー球に気が付いた女性は、寸前の所でエネルギー球をかわす。

それと共にエネルギー球を投げ付けたブラックウォーグレイモンを睨み付け、少女ー高町なのはも突如として現れたブラックウォーグレイモンの姿を困惑の表情で見つめる。

だが、ブラックウォーグレイモンは二人の様子には一切構わずに、右手に装備したドラモンキラーを、女性ー闇の書に向けて構える。

「闇の書！俺と戦え！！」

「なんだと！？」

「俺は貴様と戦いたい！世界に否定されている貴様と！！」

「ッ！！黙れ！！」

ブラックウォーグレイモンの叫びを聞いた闇の書は、怒りの表情を浮かべながら、ブラックウォーグレイモンの目の前に瞬時に移動し、ブラックウォーグレイモンの顔に向かって全力で拳を放つ。

ーーードゴンッ！

だが、闇の書の全力の拳を正面から受けても、ブラックウォーグレイモンはダメージを受けた様子も無く、その場に佇み続け闇の書

に質問する。

「この程度か？貴様の力は？」

「なっ！？」

「殴るとはこう言う事だ！！」

ーーードゴオンッ！！

「グアッ！！」

ブラックウォーグレイモンは叫ぶと共に、ドラモンキラーで闇の書を殴り飛ばし、闇の書は吹き飛んでいく。

そしてブラックウォーグレイモンは闇の書が吹き飛んだ先に瞬時に移動し、闇の書を蹴り飛ばそうとするが、

ーーーガアンッ！！

闇の書は瞬時に体勢を整えると、自身に向かって来る蹴りの方に防御魔法を発動させ、ブラックウォーグレイモンの蹴りを受け止めた。

「くっ！？」

「ほう、今のを受け止めるか。ならばこれは如何だ！？」

「くっ！強い！！」

自身の攻撃を闇の書が受け止めた事にブラックウォーグレイモン

は笑みを浮かべると、連続でドラモンキラーを振るい、闇の書へと攻撃を放ち続け、闇の書はブラックウォーグレイモンの攻撃を防御魔法や両腕で捌きながら、ブラックウォーグレイモンの強さに驚きの声を上げた。

そしてブラックウォーグレイモンと闇の書が戦っている間に、なのははアースラへと連絡を取り、ブラックウォーグレイモンの情報を聞いていた。

「エイミィさん！あの人の情報は何か無いんですか！？」

『ゴメン！多分フェイトちゃんが言っていた奴だと思うんだけど、何も分からないの！？それよりも気をつけて！如何言う訳だか、分からないけど、そいつの周りの位相がずれているの！そいつは居るだけで世界に悪影響を与えるんだよ！！』

「そんな！！」

エイミィの報告になのはは悲鳴の様な声を上げて、闇の書と戦っているブラックウォーグレイモンを見つめた。

ブラックウォーグレイモンはダークタワーと呼ばれる、位相をずらし環境さえも変えてしまう塔が百本集まり変形、合成を繰り返して生まれたダークタワーデジモン。その為にブラックウォーグレイモンは、存在しているだけで世界に悪影響を与えてしまう存在なのだ。

その様になのはがブラックウォーグレイモンの情報に驚愕している間に、ブラックウォーグレイモンと闇の書は互いに攻撃を放ち続けながら、海上へと戦いの場を移動させていた。

「ディバインバスターー！！！」

ーーーガシッ！

「ブラックシールド！！」

ーーードゴオオン！

闇の書の放った砲撃に、ブラックウォーグレイモンは自身の背中に在る翼の様な物を腕に装着し、正面で合わせて盾にすると、砲撃を防御した。

砲撃が止んだのブラックウォーグレイモンは確認すると、すぐにシールドを背中に戻し、闇の書へと殴り掛かる。

「ドラモンキラーーー！！」

「盾！！」

ーーーガキイン！！

ブラックウォーグレイモンに攻撃に、今度は闇の書が防御魔法を発動させ受け止める。

しかし、ブラックウォーグレイモンは寧ろ自身攻撃を受け止められた事が嬉しいのか、より笑みを深めて、次々と闇の書に向かってドラモンキラーを振るい続ける。

「ハハハハハハハッ！！良いぞ！もっと俺を楽しませろ！」

「くっ！烈火の将以上の戦闘狂か！！」

ブラックウォーグレイモンの連続攻撃を、防御魔法や自身の腕を

使い捌きながら闇の書は叫んだ。
だが、何時までのブラックウォーグレイモンの猛攻を捌けるはずも無く、遂に闇の書はブラックウォーグレイモンの猛攻を捌き切れなくなり、闇の書に決定的な隙が生まれた瞬間に、ブラックウォーグレイモンは渾身の一撃を闇の書に向かって放つ為に、ドラモンキラーを振り上げる。

「もらったぁぁぁぁぁーーー！！」

「しまっ！？」

だが、ブラックウォーグレイモンの一撃が闇の書に決まろうとした瞬間に、ブラックウォーグレイモンの体に突如として橙色と緑色の鎖が巻き付いてくる。

『チェーンバインド！！！』

ーーーガシィン！！

「何！？」

「ディバインバスターー！！」

「ブレイズキャノン！！！」

突如として巻き付いて来た鎖に、ブラックウォーグレイモンが驚いた声を上げて自身に巻きついている鎖を見つめていると、背後からなのはとクロノがブラックウォーグレイモンに向かって砲撃を放った。
そして鎖に寄ってブラックウォーグレイモンの動きが止まったの

を確認した闇の書も、自身の右手を上に掲げ黒い球体を生み出し、ブラックウォーグレイモンに向けて黒い球体を振り下ろす。

「闇に染まれ！デアボリック・エミッション」

ドゴオオオオオオオオオオオオオン！！！

なのはとクロノの砲撃、そして闇の書の空間攻撃にブラックウォーグレイモンは飲み込まれ、大爆発を起こした。

自分達の攻撃がブラックウォーグレイモンに直撃したのを、確認したなのは達は安堵の息を吐き、闇の書へと顔を向けた瞬間に、念話が届く。

『外に居る魔導師の方！そこに居る子の保護者の八神はやてです！！』

「はやてちゃん！？」

『なのはちゃん！！なのはちゃんが戦っていたんか！？それよりもお願いや！管理者権限取り戻す為に、そこに居る子を何とかしてくれへんか！？』

「えっ？え～と？」

はやての言葉になのはが疑問の表情を浮かべていると、横に居るクロノがはやての言葉の意味を説明する。

「つまり、手加減無しで魔力ダメージを与えろと言う事だ、なのは」

「うん！だったら任せて！」

クロノの言葉に、なのはは元気よく答え、全力で闇の書に向かって魔法を放つ為にレイジングハートを向けようとした瞬間に、背後から静かだが怒りに満ちた声が響く。

「貴様ら、覚悟は出来ているんだろうな？」

『！！！！』

聞こえて来た声に、なのはとクロノは体を僅かに震わせて、ソッと振り返って見ると、傷一つ無いブラックウォーグレイモンが怒りの表情で、なのはとクロノを姿を見つめていた。

闇との激突（後書き）

次回予告

漆黒の竜人の逆鱗に触れたなのは達。

その圧倒的な力の前に、なのは達は恐怖を覚える。

そして遂に現れる闇の書の闇。

その時に響く声。

次回、漆黒の竜人と少女、『響く声』

響く声

ブラックウォーグレイモンとなのはとクロノは空中で睨み合っていると、ブラックウォーグレイモンは腕を振り上げて、怒りの叫びを上げる。

「貴様ら、よくも俺と闇の書の戦いの邪魔をしてくれたな！」

「ひっ！！」

ブラックウォーグレイモンの殺意に満ちた声に、なのはは恐怖に染まった悲鳴を上げた。

恐怖に震えるなのはを庇う様にクロノは一歩前に出ると、ブラックウォーグレイモンを睨み付けながら、デバイスーＳＵ２をブラックウォーグレイモンに向けて構え、なのはに声を掛ける。

「なのは、君は闇の書の方に行くんだ。奴は僕とアルフ、そしてユーノが抑えるから、闇の書の方は頼む」

「・・・・・・・うん！此処はお願いね！」

クロノの言葉を聞いたなのはは少し考える様な表情を浮かべるが、すぐに頷き、闇の書の下に向かおうとした瞬間に、なのはの目の前にブラックウォーグレイモンが現れる。

ーーービュン！！

「何処に行く気だ？」

「あ・・・あ・・・あ・ああ」

自身の移動しようとした先に、突如として現われたブラックウォーグレイモンの姿に、なのはは恐怖に染まった声を出した。
そしてなのはと同じ様にクロノも恐怖の表情を浮かべるが、すぐに冷静に立ち直り、ブラックウォーグレイモンに向かって自身のデバイスを構えて砲撃を放つ。

「ブレイズキャノン！！」

「そんな物が効くと思うな！」

ーーーバシュンッ！！

『なっ！？』

自身に向かって放たれた砲撃を、ブラックウォーグレイモンは唯の腕の振りで発生した風圧で消滅させ、砲撃が消滅したのを見たなのはとクロノはあり得ないと言うように声を上げた。
その事によって動きが止まってしまっているなのはに向かって、ブラックウォーグレイモンは腕を振り下ろそうとするが、再び鎖がブラックウォーグレイモンの体に巻き付いて来る。

ーーーガシィン！！

「むっ？」

「なのは！今の内に向かうんだ！！」

「コイツは！あたし等で抑えるから！早く行くんだよ！！」

「ユーノ君！アルフさん！ありがとう！」

鎖を放った民族服を着た少年ーユーノとオレンジ色の髪に犬の様な耳を付けた女性ーアルフの言葉に、なのはは笑みを浮かべて礼を告げると、今度こそ闇の書の方へと向かい出した。

それを見たブラックウォーグレイモンは、なのはを止める為に自身に巻きついている鎖を破壊しようと力を込め始めた瞬間に、無数の魔法剣がブラックウォーグレイモンに向かって放たれる。

「スティンガーブレイド！エクスキューションシフト！！」

ーーーードゴオオオオオオン！！

クロノの放った無数の刃は全てブラックウォーグレイモンへと着撃し、煙が渦巻き、ブラックウォーグレイモンに剣が直撃するのを見たクロノ達は安堵の息を吐く。

しかし、次の瞬間に、煙の中から無傷のブラックウォーグレイモンが飛び出し、クロノに向かって腕を振り上げる。

「ドラモンキラーー！！」

「なっ！！馬鹿ガアッ！！」

『クロノ！！』

自身の最強の魔法を受けても無傷のブラックウォーグレイモンの姿に、クロノが驚愕している間に、ブラックウォーグレイモンは瞬時にクロノの目の前に移動し、クロノを殴り飛ばした。

クロノが吹き飛ばされるのを見たユーノとアルフがクロノの名を

叫び、助けに向かおうとした瞬間に、二人の前にブラックウォーグレイモンが瞬時に移動し、怒りに満ちた表情を二人に向ける。

ーーービュン！！

「貴様らだな、さっきからの忌々しい鎖は？」

「・・・・・だったら！如何なんだい！？」

ブラックウォーグレイモンの言葉に、アルフは震えながらも自分を奮い立たせて、ブラックウォーグレイモンに殴り掛かる。

ーーードン！

だが、アルフの全力の一撃を受けてもブラックウォーグレイモンは平然としながら、赤いエネルギー球を生み出しアルフに向かって放つ。

「消えろ」

ーーードゴオンッ！！

「アアァァァァァーーー！！」

「アルフ！！」

ブラックウォーグレイモンの放ったエネルギー球は、アルフに直撃し海へと吹き飛んで行った。

それを見たユーノがアルフの救助に向かおうとするが、背後からブラックウォーグレイモンがユーノを蹴り飛ばす。

「貴様もだ！」

ーーードゴオン！！

「ウワァァァァァーーー！！！！」

ブラックウォーグレイモンの蹴りを背中に受けたユーノはアルフと同様に海へと吹き飛んで行った。

自身の邪魔する者が居なくなったのを確認したブラックウォーグレイモンは、闇の書へと向かおうとするが、目の前にクロノが浮かび上がって来る。

「行かせないぞ！！」

「・・・・・・いい加減に俺も我慢の限界だ。これ以上邪魔をするなら、二度と一人では歩けない体にしてやるぞ」

「くっ！お前は一体何が目的なんだ！？」

ブラックウォーグレイモンの殺意に満ちた声に、恐怖に震えながらもクロノは自分を奮い立たせて、ブラックウォーグレイモンに向かってデバイスを構えながら叫んだ。

その問いに対して、ブラックウォーグレイモンもクロノに向かって両腕のドラモンキラーを構えながら答える。

「俺の目的は唯一つ、闇の書と戦う事だけだ！」

「なっ！？そんな事の為に！？」

ブラックウォーグレイモンの目的に、クロノは信じられないと言う表情を浮かべながら叫んだ。
闇の書は下手をすれば、確実に世界を滅ぼしてしまう物だと言うのに、ブラックウォーグレイモンは世界を護る訳でもなく、ただ闇の書と戦いたいと言う自分の欲望の為だけに動いている。クロノのような人を護ると言う考えを持つ者には、ブラックウォーグレイモンの考えを理解するのは不可能だろう。
最もブラックウォーグレイモンも理解されたいとは思っていない。自分の信念を理解出来るのは、自分自身しか居ないのだから、クロノに理解されるとは微塵も思ってもいないのだ。
そして案の定クロノは怒りに満ちた表情をしながら、ブラックウォーグレイモンに向かってＳＵ２を構えだす。

「お前は世界が滅んでも良いと言うのか！？沢山の人が死ぬんだぞ！！」

「貴様らだけには言われたくないな。多くの世界を救う為と言う身勝手な理由で、この世界でアルカンシェル等と言う空間消滅兵器を使おうとしているではないか？」

「なっ！？何でその事ガアッ！？」

ブラックウォーグレイモンがアースラメンバーしか知らないはずの情報を知っている事に、クロノが驚愕している隙にブラックウォーグレイモンは、瞬時にクロノの目の前に移動し、ドラモンキラーの刃でクロノを切り裂いた。
そしてクロノが傷口を抑えながら激痛に呻いている隙に、ブラックウォーグレイモンはクロノのバリアジャケットの中からカードを一枚奪い取る。

「グッ！！それを返せ！！」

「断る。これは後で俺が有効に使ってやる。お前も、消えろ」

ーーードゴオン！！

「ウワァァァァァーーーー！！！！！」

ブラックウォーグレイモンは言葉と共に、再び赤いエネルギー球を生み出し、クロノへと放ち、クロノがユーノとアルフと同様に海へと消えて行った。

それを確認したブラックウォーグレイモンは、今度こそ闇の書へと向かおうとするが、その動きはすぐに止まった。

何故ならブラックウォーグレイモンの視線の先には、八神はやてを囲む四人の騎士の姿と、海面に浮かぶ黒い淀みが存在していたのだ。

「おのれ・・・・よくも・・・・よくも！俺の邪魔をしてくれたな！！赦さん！絶対に赦さんぞ！！」

自身の目的が阻まれた事に気が付いたブラックウォーグレイモンは怒りの叫びを上げながら、はやて達の下に向かおうとするが、その瞬間に、左右から桃色と金色の砲撃がブラックウォーグレイモンに放たれる。

「エクセリオンバスターーーー！！ブレイクシュート！！」

「プラズマスマッシャーーー！！」

「むっ！！」

自身に向かって来る桜色の砲撃と金色の砲撃を見たブラックウォーグレイモンは驚きの声を出しながらも、直撃する寸前に砲撃をかわし、砲撃を放った二人一険しい表情を浮かべている高町なのはとフェイト・テスタロッサを睨み付ける。

「今度は貴様らか。俺に勝てると思っているのか？」

「何でこんな事が出来るんですか！？闇の書が暴走したらどうなると思っているんですか！？」

「さっきの小僧にも言ったが、俺には関係無い。俺の目的は闇の書と戦う事だけだ」

「ふざけるな！！そんな事の為にユーノを、クロノを、そしてアルフを傷付けたって言うのか！！」

ブラックウォーグレイモンの言葉を聞いたフェイトは怒りの表情を浮かべながら、フルドライブモードのバルディッシュをブラックウォーグレイモンに向けるが、それを見てもブラックウォーグレイモンは表情を変えずに、なのはとフェイトに向けてドラモンキラーを構え始める。

ブラックウォーグレイモンからすれば、自身の邪魔をする者は全て敵。例え認めた相手でも、戦いの邪魔をする者達は彼にとっては全て敵なのだ。当然、子供であっても例外は無い。

そしてなのはとフェイトに攻撃を放とうした瞬間に、突如としてブラックウォーグレイモンの頭の中に声が響いて来る。

（・・・・・・ミ・・・ツ・・・・ケ・・・・タ）

「何！？」

『えっ！？』

突如として自身の頭の中に響いた声に、ブラックウォーグレイモンは驚愕の声を上げながら辺りを見回し始める。

その姿になのはとフェイトは、ブラックウォーグレイモンの行動の意味が分からず疑問の声を出した瞬間に、黒い淀みから無数の触手が飛び出し、ブラックウォーグレイモンを拘束する。

ーーーガシィン！！

「何だと！？」

（・・・・・・ヨ・・・・・ウ・・・・・ヤ・・・・・ク・・・・・ミ・・・・・ツ・・・・・ケ・・・・タ・・・・・ワタシ・・・・ノ・・・・・タッタ・・・・ヒトリ・・・ノ・・アルジ！！）

「何！？ウワァァァァーー！！」

聞こえて来た声に、ブラックウォーグレイモンが驚愕の声を上げると、触手は淀みの中へと戻り始め、ブラックウォーグレイモンは淀みの中へと吸い込まれて行き、ブラックウォーグレイモンの姿は黒い淀みの中に消え去った。

響く声（後書き）

次回予告

黒い淀みの中へと消えたブラックウォーグレイモン。

そこで彼は一つの思いを感じる。

そして遂に発揮する真の力。

次回、漆黒の竜人と少女、『負の極地、炸裂、ガイアフォース！！』

負の極致、炸裂、ガイアフォース！！

黒い淀みの中に吸い込まれて行ったブラックウォーグレイモンの姿を見たなのは達は、状況を知る為に闇の書に付いて最も知っているリインフォースの下に全速力で向かった。

「はやてちゃん！如何してさっきの人が吸い込まれたのかリインフォースさんに聞いて！？」

「分かったわ！！リインフォースどういう事なん！？」

なのはの言葉を聞いたはやては、自分と融合しているリインフォースへと尋ねると、恐怖に震えた声が返って来る。

『・・・・・あ・・・り・・・・・え・・・な・・・・・い・・・・・・まさか、アレを受け入れる事が、出来る者が存在していたと言うのか？』

「どう言う事や！？」

『・・・・・防御プログラムは私の半身、つまり私が主とユニゾン出来る様に防御プログラムも自身の意思を持ち、主と定めた者に自身の力を与える事が出来るのです』

『ッ！！！！』

リインフォースの告げた闇の書の闇に隠されていた事実にその場に居たなのは達と守護騎士達、そしてアースラから話を聞いていたリンディ達は驚愕の表情を浮かべた。闇の書は誰にも制御する事が

出来ない物。その情報を得ていたリンディ達からすれば、リインフォースが告げた事実は信じられないものだったが、リインフォースは構わずに説明を続ける。

『歴代の主達は、防御プログラムの主に相応しくないと判断された為に、結果、暴走して幾つもの世界が滅ぶ結果に成ったのです。それ故に防御プログラムの主に成れる存在はいないと思っていたのですが、遂に防御プログラムは見つけてしまった。自分の主に相応しい存在を。そして私と防御プログラムは既に完全に切り離されている為に、最早それを止める術は在りません』

『ですが！？世界を滅ぼす力を制御出来るとは思えません！確かに先ほどの者はかなりの強さを持っていると判断出来ますが！！闇の書の闇と呼べる存在を制御出来るはずが！？』

アースラからリインフォースの話を聞いていたリンディは否定の叫びを上げるが、リインフォースはリンディの言葉を否定する。

『奴の力は闇の書を超えています。現に私が奴と戦っていた時は、闇の書の力を全て奴に向けて、漸く互角に持ち込めたのです。その証拠に、本来なら覚醒した直後に起きている筈の辺りへの異変が全く起きていないのです』

『ッ！！！！！』

リインフォースの言葉に再び話を聞いていた者達は驚愕の表情を浮かべた。

まさか、世界を滅ぼす力の全てを向けて、漸く互角に持ち込めていたとは思っても見なかったのだ。

そしてその場に居る全員が驚愕の表情を浮かべている間に、海面

に浮かんでいた黒い淀みに変化が起き始める。

『ッ！！大変です艦長！！防御プログラムの暴走が収まり、安定を始めています！それどころか、アルカンシェルと同等か、それ以上のエネルギーが防御プログラム内部で発生しています！！』

『何ですって！？』

エイミィの報告にリンディは悲鳴の様な声を上げ、なのは達が海面に浮かぶ黒い淀みの方に顔を向けた瞬間。

ーーードグオン！！

黒い淀みの中から、リインフォースに良く似た女性とブラックウォーグレイモンが飛び出して来た。

そしてブラックウォーグレイモンは淀みに目を向けながら、負の力を両手の間に集中させると、巨大な赤いエネルギー球を生み出し、黒い淀みへと投げ付ける。

「ガイアフォーース！！！！」

ドゴオオオオオオオオオン！！！！

ブラックウォーグレイモンの放ったガイアフォースは、寸分違わずに残っていた黒い淀みへと直撃し、海に残っていた淀みを完全に消滅させ、巨大な大爆発を海面に起こした。

数分前

黒い空間の中を淀みへと飲み込まれたブラックウォーグレイモンは不機嫌そうな表情を浮かべて歩いていた。

「どいつもこいつも俺と奴との戦いの邪魔をしてくれる！この礼は必ず返してやるぞ！！」

ブラックウォーグレイモンは苛立っていた。

この世界に来てから漸くまともに自分と戦える存在を見付けたと思ったのに、次々と邪魔が入って来る為に、彼の戦闘本能が満たされないでいるのだ。

確かに前世の自分なら戦いよりも世界の方を優先しただろうが、ブラックウォーグレイモンとなった彼には、自身の欲望ー強い奴と戦う方ーが優先なのだ。

そしてこの空間に入ってから感じる気配の下へと向かって歩いていると、何処からともなく声が響いて来る。

（・・・・・・・ダレモガ・・・・ワタシヲヒテイスル）

「ムッ？」

（・・・・・・・ナンデヒテイスルノ・・・・・ワタシヲツクッタノハ・・・・・・ニンゲンナノニ・・・・・カッテニウミダシテオキナガラ・・・・ニンゲンハ・・・・・・セカイハ・・・・・ワタシヲヒテイシツヅケル）

「・・・・・・・お前は」

聞こえてくる声に、ブラックウォーグレイモンは苛立ちを消して、言葉に含まれている悲しき思いに共感の念が湧いて来た。自分と同じだと気が付いたのだ。

自分もブラックウォーグレイモンと成った時に、世界から否定され続ける気持ちを味わっていた。一時は世界を滅ぼそうと思った程だったがアグモンや子供達、そして他のデジモン達のお陰で心が癒された。だからこそ、自身が彼らに関われば何れ自分は死ぬと分かっていても、彼らに力を貸したのだ。

「・・・・・そうか、お前も否定されていたのだったな。俺にはそれが分かる。俺も同じ様に世界に否定され続けている」

ーーーシュン！

ブラックウォーグレイモンが呟いた瞬間に、闇の中から銀色の髪に蒼い瞳を持ち、黒と青色のロングコートを身に付けたリインフォースに良く似た女性が姿を現すと、女性はブラックウォーグレイモンの胸に抱き付き、涙を流し続ける。

「俺はお前を否定しない。共に行こう」

「は、い」

ブラックウォーグレイモンの言葉に、女性は嬉し涙を流しながら頷いた。

長き放浪の果てに、彼女は漸く出会えたのだ。自分を受け入れてくれる者を。

「名は在るのか？」

「在りません。生み出された時すら、私には名を与えられなかった」
「そうか、成らば俺が名付けてやる。貴様は破滅を呼ぶ風、ルインフォースだ！」
「名称固定、ルインフォース。主設定、ブラックウォーグレイモン。どうぞ、宜しくお願いします。我が永遠のマイマスター」
ーーービキビキ、ビキィン！！！
女性ールインフォースが言葉を呟いた瞬間に、空間に次々と罅が入り始め外への出口が開く。
外への出口が開くのを確認した二人は外に飛び出し、残っている闇の書の闇の残骸を目にすると、ブラックウォーグレイモンは巨大な赤いエネルギー球を瞬時に生み出し、残骸に向かって投げ付ける。
「ガイアフォーーース！！！！」
ドゴオオオオオオオオオン！！！！
ブラックウォーグレイモンが放ったガイアフォースに寄り、残骸は跡形も無く消滅し、海に大爆発を起こした。
現在
闇の書の闇を完全に消滅させたブラックウォーグレイモンは辺り

を見回し、上空に浮かぶはやて達を見付けると、瞬時にはやて達の所に移動し、はやての前で止まるとドラモンキラーをはやての俄然に突き付ける。

ーーービュン！

「俺が戦っていた管制人格の奴を出して貰おうか？決着をつけなければ俺の気がすまんからな」

「あ・・・あ・・・あ」

『はやて！！！』

『はやてちゃん！！！』

『主！！！』

ブラックウォーグレイモンの放つ殺意に、はやてが恐怖の声を出すと、なのは達ははやてを助けようと駆け出すが、魔力の檻に全員拘束される。

ーーーガシャン！！

「マイマスターの邪魔はさせませんよ」

「ッ！！まさか！？防御プログラムなのか！？」

「ええ、貴女達が否定した防御プログラム。名はルインフォースと言います、烈火の将」

シグナムの叫びにルインフォースは答えながらも、羨ましそうな視線をはやてに、正確に言えば、はやてとユニゾンしているリインフォースに向けていた。
ルインフォースに取って主であるブラックウォーグレイモンに求められる存在は、須らく羨ましい存在なのだ。漸く見付けた主が別の者に目を向けている事に、嫉妬しているのだ。
その様にルインフォースが嫉妬を覚えている間、ブラックウォーグレイモンはリインフォースに話を付けていた。

「これ以上決着がつかないのは我慢の限界だ。俺と戦って貰うぞ？」

『・・・・・良いだろう。だが、此処では主達に迷惑が掛かる。明日の昼に、貴様が始めて現れた世界で決着を付けよう』

「リインフォース！！」

リインフォースの言葉にはやては悲鳴の様な声を上げるが、リインフォースは意見を変えずにブラックウォーグレイモンの言葉を待つ。

「・・・・・良いだろう。だが、邪魔が入ったら絶対に赦さん！指定の場所で待っているぞ」

ーーーシュウン！！

ブラックウォーグレイモンは叫ぶと共に、ルインフォースと共にその場から転移して行った。
そしてブラックウォーグレイモン達が自身の前から去ったのを確認したはやては安堵の息を付くが、すぐに不安そうな表情を浮かべて、自身と融合しているリインフォースの事を心配するのだった。

負の極致、炸裂、ガイアフォース！！（後書き）

次回予告
漆黒の竜人の決闘を受けたリインフォース。

二人は再び激突する。

だが、それを邪魔する管理局に、遂に漆黒の竜人の怒りは頂点に達する。

次回、漆黒の竜人と少女、『撃沈、アースラが沈む時』

漆黒の竜人の怒りは惨劇を引き起こす

撃沈！アースラが沈む時

地球から転移したブラックウォーグレイモンとルインフォースは、再びアルハザードへと訪れていた。
アルハザードへと戻って来たブラックウォーグレイモンは研究所の通路を歩き、フリートの姿を探し始めるが、見た事も無い場所にルインフォース一以下ルインは、不安そうな表情を浮かべてブラックウォーグレイモンに質問する。

「あの、マイマスター、此処は何処ですか？」

「此処はアルハザードだ」

「ッ！！アルハザード！？まさか伝説の地のアルハザードなのですか！？」

ブラックウォーグレイモンの告げた地名に、ルインは驚きの声を上げた。
まさか、自分の主が赴いた場所が、次元世界でも伝説と呼ばれている地だとは、思っても見なかったのだ。
そしてルインが驚いている間に白衣を着たフリートが通路の奥から姿を現し、ブラックウォーグレイモンとルインの姿を確認すると、二人に笑みを向ける。

「中々面白い事態に成っているようですね。やはり貴方に観察用の機器を渡したのは正解でしたよ」

「そうか、それは良かった。それよりも頼んでいた物に必要な物を持って来たぞ」

フリートの言葉にブラックウォーグレイモンは答えながら、クロノから奪ったカードを取り出しフリートの手へと渡す。
カードを受け取ったフリートは笑みを浮かべると、ブラックウォーグレイモンの首に掛かっているネックレスに手を伸ばし、ネックレスを首から外した。

「了解ですよ。既に準備は出来ていますので、すぐに作業に掛かります」

「それともう一つ、ルイン」

「はい！」

ブラックウォーグレイモンがルインに声を掛けると、ルインはフリートへと対抗心を燃やしながら、ブラックウォーグレイモンの隣は自分の居場所だと宣言する様にブラックウォーグレイモンの横に並び、フリートに対抗心に満ちた目を向けた。
対抗心に燃えるルインの姿を見たフリートは苦笑を浮かべながら、自身の名前をルインに名乗り始める。

「アルハザードの管制人格、フリートと言います。宜しくルインフォースさん」

「マイマスターの永遠のパートナーである、破滅を呼ぶ風、ルインフォースです」

二人は自身の名を名乗ると、互いに右手を差し出し握手をかわし合う。最もルインはフリートへの対抗心を向き出しにしながらでは、在るのだが。

だが、二人の気まずい雰囲気に気が付かず、ブラックウォーグレイモンはフリートに声を掛ける。

「フリート。ルインのデータから安全な防御プログラムを作れ。管制人格の奴は俺との戦いで死ぬ積もりだ。そんな奴と戦っても詰まらんからな」

「確かにあの生真面目な管制人格なら在りえますね。それではマイマスターが戦いを楽しめないので、良いですよ」

ブラックウォーグレイモンの言葉にルインも腕を組みながら同意を示した。

何せルインはずっと闇の書の中で管制人格であるリインフォースを見ていたのだから、その言葉に説得力が在った。

ブラックウォーグレイモンとルインの言葉を聞いたフリートは更に苦笑を深め、ブラックウォーグレイモンの方に目を向ける。

「分かりました。では、両方とも明日の昼までに終わらせますね。ルインフォースさん、作成に力を貸して下さい」

「了解しました。それではマイマスター、行って来ます」

ルインが笑みを浮かべながらブラックウォーグレイモンに言葉を言うと、ブラックウォーグレイモンは頷き、二人はそれを確認すると通路の奥を進み始めた。

それを見たブラックウォーグレイモンは壁に寄り掛かり、明日の戦いに思いを募らせるのだった。

アースラ内部の会議室では管理局に捕まったはやて達とリンディ達が、ブラックウォーグレイモンについて話し合いを行い、エイミィが本局に送られたクロノ達の容体を報告していた。

「クロノ君とアルフはかなりの重症のようで、本局で治療を受けています。比較的に軽症と呼べるユーノ君も、幾つかの骨折が在るので、同じ様に本局で治療を受けていますが・・・・・医者の話では、クロノ君とアルフの怪我は相当深いそうで、未だに意識が戻っていないそうです」

「・・・・・・ご苦労様、エイミィ」

エイミィの報告にリンディは険しい表情を浮かべ、なのは達は悲しげな表情を浮かべるが、リンディは険しい表情を浮かべたままリインフォースの方に顔を向ける。

「彼は闇の書の闇さえも支配下に置いた存在。貴女は勝てるのですか？」

「・・・・・無理でしょう。奴は闇の書が完全な状態でも勝てなかった存在です。防御プログラムを失った私が勝てる可能性は０です」

「ッ！！駄目や！行ったらあかん！！」

リインフォースの言葉を聞いたはやては、目に涙を浮かべてリインフォースに掴み掛かるが、リインフォースは首を横に振るう。

「主、元々私は消えなくてはいけなかったのです。それが奴に倒されるかどうかの違いだけです。守護騎士達は残りますので安心して下さい」

「駄目や！まだ、ほんの少ししか一緒にいてへんのに！死んだらあかん！！」

「いえ、私はもう十分に幸せを貰いました。新しい名前と心を、だから、笑って逝けます」

リインフォースは儚い笑みを浮かべて、はやてを抱き締める。
二人の悲しげなやり取りを見たなのは達は悲しげな表情を浮かべるが、リンディだけは険しい表情を浮かべ続け、何かを考え続けていた。

翌日の正午。砂漠が広がる大地でブラックウォーグレイモンは待ち合わせの場所に佇みながら、リインフォースが来るのを待っていた。
そして突如としてブラックウォーグレイモンの見つめる先に転送用の魔法陣が出現し、バリアジャケットを身に纏ったリインフォースが姿を現す。

ーーーシュウン！！

「漸く来たか」

「・・・・・防御プログラムは如何した？」

「ルインなら、別世界でこの戦いを見ている。貴様との戦いは俺の戦いだ。誰にも邪魔はさせない！！」

リインフォースの質問にブラックウォーグレイモンは答えながら、一つのデータディスクを取り出し、リインフォースに投げ付ける。

ーーーパシッ！

「これは？」

「貴様の修復プログラムだ」

「！！！！」

リインフォースの質問にブラックウォーグレイモンが答えた瞬間に、データディスクから幾つもの蒼い光が飛び出し、リインフォースの体に入っていく。

そして青い光が消えると共に、リインフォースのプログラムは完全に修復された。

リインフォースの修復が終わったのを確認したブラックウォーグレイモンは笑みを浮かべて、リインフォースに向かってと駆け出し、右腕のドラモンキラーを突き出す。

「ドラモンキラーー！！！」

「盾！！」

ーーーガアン！

ブラックウォーグレイモンの攻撃を自身の体が修復された事に驚愕を収めたリインフォースは瞬時に防御魔法を発動させて防ぎ、ブラックウォーグレイモンに向かって質問の叫びを上げる。

「何故私の修復プログラムを貴様が持っている！？」

「持っていた訳ではなく作ったのだ！！これで貴様も生きる為に全力で戦うだろう！！」

「くっ！刃を以って、血に染めよ！穿て、ブラッディダガーー！！」

ーーーズガガガガガガガガガッ！！！

ブラックウォーグレイモンが言葉と共に放った蹴りを、ギリギリの所でかわしたリインフォースは背中の羽を羽ばたかせ、上空へと飛び上がると、二十本近くの赤い短剣を生み出し、ブラックウォーグレイモンへと放った。

だが、自身に高速で迫って来るブラッディーダガーを見ても、ブラックウォーグレイモンは慌てずに、リインフォースと同じ様に上空に飛び上がり、自身を追って来るブラッディーダガーに向かって全力で両腕で振り抜く。

「ムン！！」

ーーードドドドドゴオン！！！

「くっ！出鱈目にも程が在るぞ！ただの腕の振りに寄って発生した風圧でブラッディーダガーを破壊するなど！！」

ブラックウォーグレイモンの腕の振りで発生した風圧により、赤い短剣は全て消滅し、リインフォースは声を上げながらも、ブラックウォーグレイモンに向かって飛び掛り、二人は空中で激突を始める。

「羽ばたけ、スレイプニール！！ソニックムーブ！！」

「ほう、強化魔法の重ね掛けか。面白い！それでこそ俺の敵に相応しい！！」

リインフォースは次々と自分に強化魔法を重ね、ブラックウォーグレイモンの力に対抗しようとする。

それを見たブラックウォーグレイモンは笑みを浮かべながら、リインフォースに向かって次々と攻撃を放ち、二人の激突は世界さえ揺るがすほどに加速して行く。

だが、徐々にでは在るが、リインフォースはブラックウォーグレイモンの猛攻を防ぎ切れなくなって来た。

ーーードゴオン！！！

「グアッ！！」

「中々楽しめた。だが、終わりだぁぁぁぁーー！！」

遂にリインフォースはブラックウォーグレイモンの猛攻を防ぐ事が出来なくなり、ブラックウォーグレイモンに一撃を体に受けると、リインフォースは地上へと落下して行く。

リインフォースが地上に落下していくのを見たブラックウォーグレイモンは笑みを浮かべると共に、巨大な赤いエネルギー球を生み出し、自身の頭上に掲げる。

「ガイアフォーーー何！？」

ドゴオオオオオオオオオン！！！！

ブラックウォーグレイモンがリインフォースに向かってガイアフォースを放とうとした瞬間に、突如として遠距離から桃色の砲撃が放たれ、砲撃はガイアフォースを貫き、ブラックウォーグレイモンに頭上でガイアフォースは大爆発を起こした。
その様子を地上で倒れているリインフォースは、驚愕の表情を浮かべて、煙が吹き上がる空を見つめていると、桃色の髪の女性ーシグナムがリインフォースの横に姿を現し、リインフォースに肩を貸す。

ーーーシュウン！

「大丈夫か？」

「・・・・・何故来たのだ烈火の将？これは奴と私の戦いなのだぞ？」

「家族を救うのに理由は無い。それにこれはリンディ提督の作戦だ。お前を倒す為に必ず奴は闇の書の闇の残骸を消滅させた一撃を放つと予測して、高町に砲撃を遠距離から頼んだのだ。流石に奴も自分の技をゼロ距離で受ければ・・・・・」

シグナムの言葉は、突如として途中で途切れた。
何故なら、上空で吹き上がっている煙の影に、ブラックウォーグレイモンの姿が映っていたのだ。
そして煙の中から傷付いた姿では在るが、凄まじいほどの殺意を辺りに放ち続けるブラックウォーグレイモンが姿を現し、怒りに満ちた視線をシグナムとリインフォースに向け、瞬時にシグナムとリインフォースの前に移動する。

ーーービュン！！

「死ね」

ーーードスッ！

「ガアッ！！」

「烈火のグフッ！！」

ブラックウォーグレイモンは迷い無くドラモンキラーの刃を2人の腹に突き刺し、辺りに血の雨を降らさせる。

シグナムとリインフォースが血を流しながら大地に倒れ付したのを確認したブラックウォーグレイモンは、砲撃の放たれた方向に目を向けると、ドラモンキラーの爪先に赤いエネルギー球を生み出し、全力で投擲する。

「フン！！」

「えっ？キャアァァァァーーー！！！」

ーーードゴオン！！

ブラックウォーグレイモンの放ったエネルギー球は、シグナム達の下に向かっていたなのはへと直撃し、なのはは煙を上げながら地上へと落下して行った。

だが、なのはが地上に落下して行くのを見てもブラックウォーグレイモンの怒りは収まらず、首に掛かっているネックレスに目を向ける。

「フリート、見ていたな？」

『ええ、見ていました。中々考えられた戦略でしたが、相手を間違えましたね』

「分かっているなら話は早い。俺を奴らの艦に送れ」

『了解です』

ーーーシュウン！！

ブラックウォーグレイモンの言葉にフリートが了承の声を出した瞬間に、ブラックウォーグレイモンの足元に転送用の魔法陣が出現し、その場からアースラへと転移して行った。

ブラックウォーグレイモンとリインフォースの戦いを見ていたアースラのブリッジでは、ブラックウォーグレイモンにやられたリインフォース達の搬送に慌てていた。

「すぐに三人の搬送を行って！一刻の猶予も無いわ！！」

「了解です！！」

リンディの叫びにエイミィは頷き、なのは達の搬送を急ごうとするが、突如としてリンディの背後から殺意に満ちた声が響く。

「貴様か、俺と奴との戦いの邪魔をする様に命じたのは？」

『ッ！！！！』

聞こえて来た声にリンディ達は恐怖に染まった表情で、恐る恐る背後を振り返って見ると、凄まじいほどの殺気をリンディに向けて放つ、ブラックウォーグレイモンが存在していた。

「・・・・・・・どうやって・・・・・アースラの中に？」

「これから死ぬ貴様らには関係ない」

「ッ！！エイミィ！総員に退艦命令を発令！！此処は私が抑えるから、早く！！」

「了解です！！」

リンディの叫びにエイミィは慌てて頷き、艦全域に向けて退艦命令を発令させた。

リンディの叫びとエイミィの言葉を聞いた他のブリッジのメンバー達は次々と立ち上がり、ブリッジを出ようとするが、ブラックウォーグレイモンは一人も逃がさないと言うように、次々と赤いエネルギー球を生み出し、ブリッジの出入り口に連続で放ち始める。

「ウォーブラスター！！」

ーーーズガガガガガガガガガッ！！！

「ディストーションシールド！！」

ーーーガガガカガガガガガアン！！！

ブラックウォーグレイモンの放ったウォーブラスターがブリッジ

の出入り口に直撃する直前で、リンディの発動させた防御魔法により防がれた。
その隙に次々とブリッジのメンバーは外へと駆け出し、最後に出ようとしたエイミィがリンディの方に顔を向け叫ぶ。

「艦長！」

「エイミィも行きなさい！！私は今回の作戦を実行した責任を取るわ！！」

「まさか！？艦長！！」

リンディの叫びを聞いたエイミィは悲鳴の様な声を上げた。
リンディは艦の人間達を全員逃がす為に、一人で艦に残りブラックウォーグレイモンを抑えようとしているのだ。
その結果がどうなるのかも全て知った上でも、ブラックウォーグレイモンが次々と放ち続けるエネルギー球を全力で防御し続けながらも、リンディは笑みをエイミィに向ける。

「エイミィ・・・・クロノにゴメンなさいって伝えて・・・・そしてクロノの事を支えて上げてね。あの子は、辛い思いをするからお願いね」

「・・・・・ふぁい」

リンディの言葉にエイミィは涙で顔をクシャクシャにしながらも頷き、ブリッジを急いで出て行った。
エイミィや他のブリッジメンバー達に逃げられたブラックウォーグレイモンはウォーブラスターを放つのを止めて、リンディに忌々しげな視線を放つ。

「覚悟は出来ているんだろうな？貴様は絶対に生かしては置かんぞ！！」

「覚悟なら出来ていますよ。あの作戦を考えた時から！！」

ーーーシュン！！

リンディは叫ぶと共に二本のデバイスを構え、自身の背中に四枚の羽を作り出し、アースラからの魔力供給を行うと、自身の前面に防御魔法を発生させ始めた。

だが、それを見てもブラックウォーグレイモンは慌てずに、右手をリンディへと向けて詠唱を始める。

「悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて、永遠の眠りを与えよ」

「ッ！！魔法の詠唱！！そんな貴方にはリンカーコアは！？」

「凍て付け！エターナルコフィン！！！！」

ーーーガキガキガキガキガキイン！！！

ブラックウォーグレイモンが叫んだ瞬間に、ブリッジは次々と凍り付き始め、リンディの防御魔法さえも凍り付いて行き、遂にリンディの体さえも凍り付き始めた。

「あ・・・・あ・・・・・・・あ」

「フン」

リンディの体が半分ほど凍り付くと、ブラックウォーグレイモンは技の発動を止め、ゆっくりとリンディに歩みより、リンディの持っているデバイスに腕を振り下ろす。

「貴様の力、貰い受ける！！」

ーーーバキイン！！

ブラックウォーグレイモンの攻撃に寄ってデバイスが破壊された瞬間、壊れたデバイスから蒼いデジタルコードが発生し、ブラックウォーグレイモンの腕の中へと入って行く。

ブラックウォーグレイモンは自身に新たな力が宿った事に笑みを浮かべると、寒さで苦しんでいるリンディに顔を向ける。

「あ・・・・貴方は・・・・・・一体何者なの？」

「貴様には最早用は無い。俺の邪魔をしたのを後悔しろ！！」

ブラックウォーグレイモンは叫ぶと共に、ドラモンキラーを振り上げ、自身の命が終わるのを確信したリンディは悲しそうな表情を浮かべながら最後の言葉を呟いた。

「ゴメンね、クロノ」

ーーードスッ！！

凍り付いたブリッジの中に、突き刺さる音が響くのだった。

数分後、アースラからリンディ以外の全員が退艦して数分後。

ドゴオオオオオオオオオン！！！！

アースラから巨大な爆発が起き、次元空間に巨大な花火が上がったのだった。

これが、広域次元犯罪者『漆黒の竜人』と管理局の最初の敵対事件、『次元艦アースラ破壊事件』での顛末である。

撃沈！アースラが沈む時（後書き）

次回予告

リンディが死んだ事に絶望を感じるなのは達。

しかし、漆黒の竜人は生きていた。

その事を知ったなのは達は憎しみを覚え、再び漆黒の竜人へと挑む。

その時に現れた少女とは？

次回、漆黒の竜人と少女、『再会、そして別れ』

漆黒の竜人の悲しき思いを知り、少女は共に歩む事を決意する。

再会、そして別れ

リンディ・ハラオウンの死亡。
その情報が届いた管理局には、激震が走っていた。
英雄一クライド・ハラオウンの妻であると共に管理局でも数少ないSランクの魔導師だった上に、先のＰＴ事件の功労者だった人物がたった一体の生物に殺されただけではなく、乗艦していたアースラまでも破壊された事で、管理局の人間の殆どが驚愕したのだ。
勿論、管理局の人間の中には生物を排除しようとする動きを見せる者達も居たが、殆どの者達はブラックウォーグレイモンと闇の書の戦いを見て、畏怖の念を抱き、及び腰になる者が続発していた。自分達が全力で挑んでも、勝てるのだろうかと言う思いが彼らには在った。
その様な状態に成っている事もリンディの友人達や知り合い達は分かってはいたが、誰もがリンディが死んだ事に嘆き悲しみ動く事が出来なかった。

「・・・・・・リンディさん」

「なのは」

本局の医局でブラックウォーグレイモンの攻撃により重症を負ったなのはは、ベットの上で包帯まみれになりながらも、悲しみの涙を流していた。
出会ったのは半年前だが、それでもなのはにとってリンディは色々としてくれた恩人だった。その恩人が死んだ事に、なのはは此処数日ずっと悲しんでいたのだ。
そんな、なのはの横で椅子に座っているフェイトもリンディの死を悲しんでいた。

実はフェイトには、リンディから養子に成らないかと言う誘いが来ていたのだ。
その事を答える前にリンディが死んでしまった為に、答えるのはもはや不可能に成ってしまったが、それでもフェイトには二人目の母親を失ってしまった様な悲しみが、襲い続けていた。
だが、一番悲しんでいるのは、なのはやフェイトではない。一番に悲しんでいるのは息子であるクロノだった。

「う、う、母さん」

「クロノ君」

「クロ助」

「クロノ」

ベットの上で悲しみの涙を流し続けるクロノの横で、エイミィ、リーゼアリア、リーゼロッテ、そして今回の闇の書事件で退職したギル・グレアムがクロノの事を心配そうに見つめていた。
本来ならグレアムは故郷のイギリスに戻る積もりだったがリンディの死を知り、援助しているはやてと同じ様にクロノも、自身が援助を行うと願い出たのだ。少しでもクロノの悲しみを癒す為に。
そして現在の管理局は臨戦態勢を取り、ブラックウォーグレイモンの捜索を全力で行っているが、未だに影さえも掴めていなかった。

その頃のブラックウォーグレイモンはアルハザードで、ルインの手により傷ついた自身の体の治療を行っていた。

「むう～」

「何故その様な表情を浮かべる？」

ブラックウォーグレイモンに回復魔法を掛け続けているルインは不機嫌そうな表情を浮かべ、その事をブラックウォーグレイモンが質問すると、ルインは怒りの表情を浮かべて叫び出す。

「何を言っているんですか、マイマスター！！こんなにダメージを受けていながら、敵の艦に乗り込むなんて！？下手をしたらやられていたかもしれませんよ！！」

「この程度のダメージなど俺にとっては日常茶飯事だ。お前が心配するほどではない」

ルインの叫びにブラックウォーグレイモンは何でも無いと言いたげに答えるが、ルインは突如として涙を浮かべてブラックウォーグレイモンに抱き付く。

「・・・・・そんな事を言わないで下さい・・・・・マイマスターに何か在ったら、私は一人に成りますし、マイマスターが死ぬなんて、絶対に嫌ですよ。ヒック、ヒック」

「・・・・・・・分かった。お前の言うとおり出来るだけ無茶は止めてやる。だから泣くな」

「はい！！」

涙を流すルインに根負けしたブラックウォーグレイモンは、不機嫌そうな表情を浮かべて了承する。

ブラックの言葉を聞いたルインが笑みを浮かべて涙を拭いて答えた瞬間に、フリートが通路の奥から姿を現し、ルインとブラックウォーグレイモンの様子を見て笑みを浮かべる。

「仲が良いですね。正しくパートナーと言う感じですよ」

「黙れ。それで貴様はアレを使って何をする気だ？俺の体のデータも取っていたが？」

「ちょっとした実験がしたくなったんですよ。この地の技術は全て覚えてますし使えるので、それで少し実験がしたくなったんですよ。分かるでしょう？」

ブラックウォーグレイモンの質問に、フリートは小悪魔の様な表情を浮かべて質問を返し、ルインとブラックウォーグレイモンは同時に思った。

（コイツには絶対にマッドの素質がある。アレも哀れなものだ）

（フリートには絶対にマッドの素質があります。アレも哀れですね）

ルインとブラックウォーグレイモンは同時にそう思うと、余り関わりたくないと思い、その場から離れて行くのだった。

青い水入ったカプセルの中で全身にケーブルらしき物が突き刺され、口に呼吸器を付けた翡翠色の髪を持った少女が薄く目を開けて辺りを見回し始める。

（・・・・此処は？・・・・・・私は・・・・・確か死んだ筈？）

少女はそう思いながら、自身の口に付いている呼吸器に左手を伸ばした瞬間に表情が驚きに染まった。

（ッ！！手が縮んでいる！！如何言う事なの！？）

自身の手が縮んでいる事に、驚く少女にカプセルの外から声が響く。

「おや？もう目覚めたんですか？やはり外の世界でも優秀と称えられている魔導師だけありますね」

（誰なの！？）

カプセルの外に居るフリートの姿を見た少女は、声を出そうとするが、口に呼吸器が付いている為に内心で叫ぶのが限界だった。

少女の様子にフリートは笑みを浮かべながら、近くのコンソールに手を伸ばす。

「もう少し眠って下さいね。まあ目覚めた時には、貴女は彼らと同じ様に世界に否定される存在に成っているでしょうね」

（ッ！！如何言う事なの！？それ・・・・・）

フリートの発言に少女が疑問の表情を浮かべるが、すぐに呼吸器とケーブルから送られて来た液体により、深い眠りへと落ちて行った。

少女が眠りに付くのを確認したフリートは更に笑みを浮かべると、コンソールに指を叩き付け始め、作業を再開するのだった。

深い闇の中を少女は漂いながら、誰かの深い悲しみを感じていた。
『俺は誰だ？俺は人間でも、ブラックウォーグレイモンでもない、俺は何故この世界に居るのだ？俺は一体何なのだ？』

次々と送られて来る悲しみと誰かの記憶を見て、少女は目から涙を流し思う。

（そうだったのね。彼はただ探していただけなのね。自分を受け入れてくれる世界と存在意義を、でも見つからなかった。だから、戦いに溺れるしかなかった）

少女は何故彼が戦いに拘るのか、少しだけ分かった。
そして自分がどんな存在に変わったのかにも、気が付いてしまった。自分にはもう何処にも居場所が無い事に、気が付いてしまったのだ。
だが、その事を少女は恨まなかった。

（・・・・・クライドさん・・・・・・・・ごめんなさい・・・・もう貴方の下には逝けなくなりました・・・・本当にごめんなさい）

『君の生きたい様に生きなさい』

少女が亡き夫に詫びた瞬間に、何処からとも無く声が聞こえて来る。
それは少女が作り出した幻聴なのかもしれなかったが、少女は聞こえて来た声に少女は笑みを浮かべて、意識を覚醒させる。

「起きましたか？」

「ええ」

意識を覚醒させた少女は眠っていたベットから起き上がり、横に座っていたフリートの言葉に答えながら、ベットの横に置かれていた黒いドレスを着始める。

「中々趣味が良いですね。これを選んだのは彼ですか？」

「ええ、騙して選ばせるのに苦労しましたよ。前世が人間だったとは言え、今の彼は戦い以外には本当に興味が無いようですからね」

「フフッ、そうでしょうね」

フリートの言葉にドレスを着終えた少女は、笑みを浮かべて同意すると、部屋の入り口の方に歩き出す。

それを見たフリートは面白そうな表情を浮かべて、黒いドレスを着た翡翠色の髪を持った少女の後姿を見つめる。

「行くのですか？彼の下に？」

「ええ、こんな体に成った責任を取らせないと気がすみませんし、それにあの子達に別れの言葉を言いたいんです」

「彼なら本当の決着を付ける為に、地球に向かいましたよ」

「ありがとう」

フリートの言葉に少女は礼を告げると、急いで部屋を出て行き、転送室へと駆け出した。
それを見たフリートは、本当に面白そうな表情を浮かべて、ブラックウォーグレイモン達の様子を見る為に自身の研究室に向かい出す。

その頃、ブラックウォーグレイモンとルインは海鳴市の海上で、リインフォース達が来るのを待っていた。

「ルイン、奴にはちゃんと念話を送ったな？」

「ぶう～、送りましたよ。全くマイマスターはあの生真面目にご執心なんですから」

ブラックウォーグレイモンの質問にルインは不機嫌そうな表情を浮かべて答える。
この前の戦いで殆ど決着は付いたと言うのに、未だにリインフォースに執着を見せるブラックウォーグレイモンに、嫉妬しているのだ。
その様子にブラックウォーグレイモンは、何故ルインが不機嫌なのか分からないながらも理由を告げる。

「そう言うな。奴とは完全に決着が付いていないのだからな。それに今回は他の連中も必ず来る筈だ」

「ああ、復讐にですね」

「その通りだ！！」

ブラックウォーグレイモンの言葉の意味をルインが答えた瞬間に、2人の周りに次々と魔方陣が現れ、武装した管理局員達が姿を現した。
その中に居る金髪の少女ーフェイトは憎しみの視線をブラックウォーグレイモンに向けて放ちながら、自身のデバイスーバルディッシュをブラックウォーグレイモンに向けて構える。

「お前が！お前が！リンディさんを！！絶対に赦さない！！」

「ふん、雑魚ばかりか。だが、力を試すには良い的どもだ」

「何だと！？」

ブラックウォーグレイモンの言葉を聞いた武装局員は、怒りの表情を浮かべて叫ぶが、ブラックウォーグレイモンとルインは詰まらなそうな表情を浮かべるだけだった。
そしてブラックウォーグレイモンが右手を武装局員達に向けた瞬間に、無数の剣がブラックウォーグレイモンの周りに出現する。

「ッ！！その魔法は！？」

「スティンガーブレイド・エクスキューションシフト！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガッ！！

『ウワァァァァーー！！』

ブラックウォーグレイモンが出現させた無数の剣の正体に気が付き、フェイトは叫ぶが、ブラックウォーグレイモンは気にせずに、

無数の剣を射出し、次々と武装局員達を薙ぎ倒していく。
その隙にルインは、武装局員達の持っていたデバイスを次々と旅の鏡で回収して行く。
だが、フェイトだけは自慢のスピードを発揮し、迫り来る無数の剣の間を掻い潜ると、サイスフォームに変形させて置いたバルディッシュを全力でブラックウォーグレイモンに振り下ろす。

「ハアァァァーーー！！」

ーーーガキン！！

「ほう、アレを掻い潜ってくるか。面白い。少しだけ戦ってやるぞ」

フェイトの一撃をドラモンキラーで防ぎながら、ブラックウォーグレイモンは感心した表情をフェイトに向け、フェイトに攻撃を放ち始める。

「くっ！」

「つまらんな。所詮はこの程度か？」

ブラックウォーグレイモンの連続の攻撃に、フェイトは自身のスピードを最大にしてかわしていくが、ブラックウォーグレイモンの猛攻の前に反撃が出来ずにいた。
本来ならばフェイトにはソニックフォームと言う、更にスピードを上げる形態が在るのだが、ソニックフォームになると防御能力が殆ど無くなると言う欠点が存在する為に、ブラックウォーグレイモンが相手では使用する事が出来ないのだ。何せ、ブラックウォーグレイモンの一撃は全て強力な攻撃である為に、一発でもソニックフォーム状態で受ければ死んでしまうだろう。

しかし、何時までもブラックウォーグレイモンの猛攻を避ける事など出来る筈も無く、徐々に追い込まれ始め、遂に避ける事が出来なく成ったフェイトに、ブラックウォーグレイモンがドラモンキラーを全力で突き出そうとした瞬間に、背後から突如として叫び声が聞こえて来る。

「ウオォォォォーー！！」

「クロノ！？」

突如としてブラックウォーグレイモンの後ろに、何時もの冷静さをかなぐり捨て、憎しみの視線を放ち続けるクロノが出現し、自身のデバイスーＳＵ２をブラックウォーグレイモンに振り下ろす。

「ブレイクインパルス！！！」

「むっ！ディストーションフィールド！！」

ーーーガキィィィィン！！

『なっ！？』

クロノが全力で放ったブレイクインパルスに、ブラックウォーグレイモンは左手を向けて、リンディが得意としていた防御魔法を発動させ防ぐ。

ブラックウォーグレイモンが使用した防御魔法に、クロノとフェイトは驚きの声を上げ動きが止まってしまい、その隙にブラックウォーグレイモンは右手でクロノを殴り飛ばす。

「ドラモンキラーー！！」

ーーードゴオン！！

「グアッ！！」

「クロノ！？」

ブラックウォーグレイモンに殴り飛ばされたクロノはＳＵ２を手放し、吹き飛ばされるが、吹き飛んで行くクロノの姿を見たフェイトはすぐにクロノの吹き飛ばされた方向に、移動して受け止める。

だが、クロノの体をフェイトが抱き締めた瞬間に、フェイトの手に滑った感触が広がった。

「血！！まさか！？クロノ！この前の傷が治ってないんじゃ！？」

フェイトは自身の手に付いた赤い血に気が付き、クロノへと質問するが、クロノは答えずに、ブラックウォーグレイモンに憎しみの視線を放つ。

「ふん、俺にやられた傷が治っていないのに来るとは。そんな状態で俺に勝てると思っているのか？」

「黙れ！！お前だけは僕が殺す！！例え首だけに成っても！！お前だけは！！」

ブラックウォーグレイモンの言葉に、クロノは憎悪の叫びを返す。

クロノだって今の状態では、万に一つ所か兆に一つにでも、ブラックウォーグレイモンに一撃を当てるなど不可能だと分かっているのだが、それでもブラックウォーグレイモンの事が赦せずに来たのだ。例え指一本も触れる事さえ不可能だと分かっていても、ブラッ

クウォーグレイモンの憎しみの方が上だったのだ。
　その様子にブラックウォーグレイモンが詰まらなそうな表情を浮かべた瞬間に、クロノ達の周りに次々と転送用の陣が出現し、クロノと同様に包帯を全身に巻いたなのはとアルフ、そしてユーノの姿が現れ、更にシグナムとリインフォースを抜かした守護騎士達にはやてまで姿を見せた。

「クロノ君！！私達も同じ気持ちだよ！！」

「リンディの仇！！絶対に取らせて貰う！！」

　なのはとアルフはクロノと同様に、憎しみの視線をブラックウォーグレイモンに向けながら叫び、クロノにシャマルが治療魔法を掛けながら、はやても叫ぶ。

「私らも同じや！！」

「防御プログラムは我らの罪！！」

「防御プログラムの消去は、私達がやります！！」

「だから、おめえらはあの黒い奴の相手をしろ！！」

　はやて達は叫びながら、幾つ物のデバイスを抱えたルインに自分達のデバイスを構える。
　はやてと守護騎士の叫びを聞いたルインは怒りの表情を浮かべ、はやて達に怒りの視線を向ける。今更何を言うと思ったのだ。
　そもそも原因は自分ではなく、自分を作った者だと言うのに、未だに騎士達と王はルインを否定する様に叫んだのだから、怒りを覚えるのも当然だろう。

その場に居る全員が戦闘の構えを行い、戦いを始め様とした瞬間に、上空から少女の声が響いて来る。

「スティンガーブレイド・エクスキューションシフト！！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガッ！！

『なっ！？』

突如として上空から放たれた無数の剣に、なのは達は驚きの声を出しながら全力で避ける。

そして全ての剣をかわしたなのは達が、上空を見てみると、黒いドレスに翡翠色の髪を持った、なのは達と同年齢だと思われる少女が空中に浮かび、その少女の顔を見たクロノは信じられないと言う様に表情を変える。

「ばっ！？馬鹿な！？なっ！何で！？そこに居るんだ！？」

「・・・・・・・また、会えて嬉しいわクロノ」

「母さん！！！！」

少女ーリンディは一瞬辛そうな表情を浮かべるがすぐに表情を笑みに変え、クロノに声を掛けると、クロノは目の前の現実を否定するかのように叫び声を上げるのだった。

再会、そして別れ（後書き）

次回予告

現れた少女の正体はリンディだった。

しかし、彼女は既にクロノ達が知っている人間ではなかったか。

リンディは漆黒の竜人を護る為に、その身を進化させクロノ達に襲い掛かる。

次回、漆黒の竜人と少女、『闇の進化！バイオダークタワーデジモン！！』

少女は決めた、漆黒の竜人に安らぎを与える事を。

闇の進化！！バイオダークタワーデジモン！！

クロノ達は驚きの表情を浮かべて、なのは達と同年齢ぐらいに成ったリンディを見つめていた。死んだ筈の人物が生きていたのだから、当然だろう。

「・・・・・本当に母さんなのか？」

「ええ、確かに貴方の母親のリンディ・ハラオウンよクロノ」

信じられないと言う表情を浮かべながら質問したクロノに、リンディは優しげな微笑みを浮かべて答える。

その笑みを見たなのは達はリンディ本人だと確信し、嬉しそうに笑みを口元に浮かべてリンディに接近しようとするが、次の瞬間に、リンディは笑みを消して右手をなのは達に向けると共に砲撃を放つ。

「ブレイズキャノン！！」

ーーードグオン！！

『なっ！？』

リンディが放ったブレイズキャノンを、クロノ達は慌てて避けるが、フェイトとクロノが避けた先に、リンディは瞬時に姿を現し、誘導弾を放った。

「スティンガースナイプ！！」

「そんな！？リンディさん、どうして！？」

「止めてくれ、母さん！！」

リンディの放った誘導弾をフェイトはクロノを抱えて避けると共に叫び、クロノもフェイトの手を離れ叫ぶが、リンディは構わずに誘導弾を操作し続ける。

「クロノ、フェイトさん、戦いなさい。私はもう貴方達の知るリンディ・ハラオウンではないは、彼を護る存在よ」

「くっ！まさか、操られているのか！？」

自身を追ってくる誘導弾を全力でかわしながらクロノは叫ぶが、リンディは首を横に振るい、操っていた誘導弾を消滅させる。

「違うわ、クロノ。私が彼を護るのは私自身が選んだ事よ。私は知ってしまったのよ、世界に否定されている者達の気持ちを、そして私も、もう世界に否定される存在なのよ」

「ッ！！それは如何言う事なんだ！？母さん！」

リンディの言葉にクロノは意味が分からず叫び、周りに居た者達もリンディの言葉の意味が分からず疑問の表情を浮かべる。

“世界に否定される存在”

その言葉の真意が分からず、クロノ達がリンディの姿を見つめた瞬間に、リンディは表情に真剣に変えながら叫ぶ。

「ダークエボリューション！！」

『なっ！？』

リンディが叫ぶと共に、リンディの体から突如として黒いデジコードが幾つも出現し、リンディの体を覆って行く。

その様子をクロノ達が驚きの表情で見つめていると、突如として黒いデジコードから、黒い八枚の天使の羽が飛び出し、顔を仮面で覆った大人の女性が姿を現した。

「バイオ・エンジェウーモン！！！」

『なっ！？』

バイオ・エンジェウーモン、属性／ウィルス種、世代／完全体、分類／大天使型デジモン、必殺技／ホーリーアロー

八枚の翼を背中に付け、仮面で顔を覆った大天使型デジモン。デジタルワールドの女神と呼ばれている。しかし、曲がったことや悪は許さず、相手が心を入れ替えるまで攻撃をやめない。　本来ならば白い羽を持ったワクチン種なのだが、ダークタワーデジモンを元にした為に生まれた為、ウィルス種に成ってしまった存在、しかしその実力は通常よりも強力に成っている。必殺技で在る『ホーリーアロー』は腕に付いている腕輪を弓へと変化させて光の矢を放つ技だ。その他にも光の光線を放つなど、多彩な神聖系の技が使える上に、肉弾戦まで行える力も持っている

進化したリンディの姿にクロノ達が驚愕する中、ブラックウォーグレイモンは黙って腕を組み、進化したリンディの姿を見つめ、アースラ撃沈の時を思い出していた。

ーーードスッ！！

ーーービシャァァァァァァーーー！！！

「アッ」

ブラックウォーグレイモンのドラモンキラーの刃は寸分違わずにリンディの胸を貫き、ドラモンキラーの刃がリンディの胸から離れると共に、大量の血がリンディの胸から噴き出し、辺りとブラックウォーグレイモンを真っ赤に染める。

そして在る程度経つと胸から噴出していた血は止まり、それと共にリンディは顔を俯かせる。

それを確認したブラックウォーグレイモンは自身の体を濡らすリンディの血を振り払い、リンディに背を向け、逃げた者達を追おうとするが、突如としてバインドがブラックウォーグレイモンの体に巻き付き拘束する。

ーーーガシィィィィン！！

「ほう、もはや意識を保つ事さえ不可能な状態だと言うのに、魔法を使用するとは、そんなに死を早めたいのか？」

「・・・・・・グフッ・・・・・・・艦に居る人間は・・・・・・一人も殺させないわ・・・・・・・誰も・・・・・・死なせ・・・・・・・」

「死んだか」

自身の血で全身を赤く染めながらも、リンディはブラックウォーグレイモンを拘束したが、最後の言葉を全て言う前に力尽き、顔を

完全に下に俯けた。
　それと共にブラックウォーグレイモンを拘束していたバインドは消滅し、今度こそ逃げた者達を追おうとしたが、何故か足が止まり、もはや動く事の無いリンディを見つめ続けると、突如として動かないリンディの方に足を向け、リンディの体を拘束している氷を打ち砕く。

ーーーバリィィィン！！

「・・・・・・・・僅かに息が在るな・・・・・・・何故俺はこんな事をしているんだ？もはや、助からないと言うのに？」

　氷を砕くと共に倒れそうになったリンディを腕に抱えながら状態を確認したブラックウォーグレイモンは、リンディのデバイスから採取した回復魔法を使用し、リンディの命を僅かに繋ぎ止める。
　だが、ブラックウォーグレイモンは自分が何故その様な行動をしたのか分からず、疑問を覚えていると、突如として首に掛かってるネックレスからフリートの声が聞こえて来る。

『ああ、すいませんけど。その女性貰っても良いですか？ちょっと外の世界の魔導師を見て見たいんですよ』

「・・・・・好きにしろ」

『了解です！！』

ーーーシュウン！

　ブラックウォーグレイモンの言葉にフリートは喜びの声を上げ、傷付いているリンディの足元に突如として陣が発生し、リンディは

ブラックウォーグレイモンの腕の中から転移した。
そしてリンディが転移したのを確認したブラックウォーグレイモンは、突如として近くの機器に腕を振り下ろす。

ーーーバキィィィィン！！

「俺は一体何をしていた！？何故俺の戦いを邪魔した人間などに治療を行ったのだ！？俺は如何して・・・・・しまったんだ？」

ブラックウォーグレイモンは自身に起きた変化に項垂れ、アースラメンバーが全員脱出するまで、自身に起きた変化に付いて考え続けるのだった。

その様にブラックウォーグレイモンがリンディの姿を見て、嫌な事を思い出している間にも話は進み、バイオ・エンジェウーモンに進化したリンディは腕の飾りを弓に変え、クロノ達へと光の矢を放つ。

「ホーリーアローー！！」

「ッ！！避けろ！！」

リンディの放ったホーリーアローを見たクロノは周りに居る者達に向かって叫び、なのは達は矢を避けるが、なのはとアルフ、そしてユーノの前にリンディは瞬時に移動し、それぞれに蹴りを三人に放つ。

「ベットで三人とも治療を受けて来なさい！！ホーリーキック！！」

ーーードゴン！！

「キャアッ！！」

『ウワアッ！！』

リンディの放った蹴りを受けたなのはとアルフ、ユーノは悲鳴を上げて海へと落下して行き、それを見たはやて達が助けに向かおうとした瞬間に、ルインがはやて達に砲撃を放つ。

「ディバインバスターー！！」

ーーードグオン！！

「ワッ！」

「はやて！！」

ルインの放った砲撃をはやては慌てて避けるが、まだ魔法に慣れていないはやては空中から落下しそうになる。

その様子を見たヴィータは慌ててはやての肩を掴み引き上げ始めた瞬間に、ルインが二人の後ろの現れ、ヴィータの肩に手を置く。

ーーーポン

「鉄槌の騎士のプログラム、強制停止」

「ガアッ！！・・・・・・・」

『ヴィータ！！』

「ヴィータちゃん！！」

ルインが言葉を呟いた瞬間に、ヴィータは突如として体の動きを止め、海へと落下して行く。

その姿を見たはやてとザフィーラ、そしてシャマルは慌てて、ヴィータの救出に向かおうとするが、ルインは行かせないと言う様に、はやての体をバインドで拘束する。

ーーーガシィィィィン！！

「しまっ！！」

「はやてちゃん！！」

「主ッ！！」

空中でバインドに拘束されたはやての姿を見たシャマルとザフィーラは驚愕の声を出す。

その様子をルインは冷たい視線で眺めながら、はやての首筋に魔力刃を突き付けて質問する。

ーーースチャッ！

「質問ですが？生真面目な管制人格は何処に居るんですか？さっさと出してマイマスターに消滅させて貰いたいんですよ。出ないと、何時までもマイマスターは奴にご執心ですからね」

「ヒッ！・・・・・・リインフォースなら本局でシグナムと一緒に

治療中や。アンタの主に遣られた傷が、まだ治ってへんから、本局に縛り付けてきたんや」

「可笑しいですね？完全に修復されて居る筈なのに？」

はやてが恐怖に震えた声でルインの質問に答えると、ルインは疑問の表情を浮かべて呟く。

何せ現在のリインフォースの体にはアルハザードで作った危険性の無い防御プログラムが存在しているのだから、如何に致命傷の傷を受けたとは言え数日で治るはずなのだ。

「あっ！夜天の王、貴女もしかして管制人格の奴から、自分が治っていると聞いていないんですか？」

「へっ？」

「「・・・・・・」」

「リインフォースが治っているやて！！！」

「治っているだとッ！！」

「治っているですって！！」

ルインの告げた事実にはやてとシャマル、そしてザフィーラは一瞬、間抜けな表情を浮かべて、ルインの言葉に意味に気が付いた瞬間に、はやて達は同時に驚愕の声を出した。

その声にルインは納得したと言う様に頷くと、腕を組みながらはやてに顔を向ける。

「そうですよ。完全に治っていますよ奴は。ただ完全にシステムを起動させる為には、管理者の権限を使わないといけないんですよ」

「・・・・・・あのボケ！！何でそないな大事な事をいわへんかったんや！？」

「そうよ！！幾ら集中治療室に居るとは言え！！その事が分かっていれば、はやてちゃんに念話でも伝えればすぐに治ったのに！！」

「あの愚か者が！！」

ルインの言葉を聞いたはやて達は、それぞれリインフォースに向かって怒りの叫びを上げる。

リインフォースはブラックウォーグレイモンに受けた傷が元で、ずっと本局の集中治療室にシグナムと共に缶詰に成っていたのだ。その為にあの時の戦闘を見ていたアースラメンバーとシグナム以外の者達は、リインフォースが治った事実を知らなかった。

因みに決闘の時、はやて達は本局の方で事情聴衆を受けていた為に、リインフォースが治ったと言う事実は、ルインに聞くまで全く知らなかった。

「あ～、やっぱりですか。昔からそうなんですよね。あの生真面目は重要な事態に成ると、何処か抜けてしまうんですよ」

「え～と？貴女、本当に世界を幾つも滅ぼした防御プログラムなのかしら？」

ルインが呆れた表情で呟くと、シャマルは困惑した表情を浮かべて質問し、はやてとザフィーラも同様な表情を浮かべてルインを見つめる。

何せ、はやて達はルインの事を倒さなければ世界を滅ぼしてしまう存在なのだと思っていたのに、如何見てもルインは世界を滅ぼす様な存在には見えないのだ。
シャマルの言葉を聞いたルインは怒りの表情を浮かべ、はやて達に憎しみに染まった視線を向ける

「私の名前はルインフォースです！！そもそも私が世界を幾つも滅ぼした原因は、製作者じゃないですか！！製作者が世界を滅ぼせる様な力を望んだ結果が私なんですよ！！勝手に生み出して置きながら、本来なら仲間である筈の騎士達や王にまで否定される私の気持ちが分かりますか！？」

『・・・・・・』

ルインの叫びにはやて達は気まずそうな表情を浮かべる。
何も言えないのだ。確かにルインが現れた時に、はやて達は世界の為に消滅させようとしたのだから、何かを言っても言い訳にしか成らない。
そしてはやて達が沈黙している間に、ルインははやて達の上空へと移動して砲撃を放つ。

「今回だけは見逃しますが、次は殺傷設定で放ちます！！響け終焉の鐘、ラグナロク！！！」

『しまっ！？』

ーーードゴオオオオオオオオン！！

ルインの放ったラグナロクにはやて達は飲み込まれ、海へと全員落下して行く。

それを確認したルインはブラックウォーグレイモンの下に向かい、空中に浮かばせていた局員達のデバイスをブラックウォーグレイモンに差し出す。

「マイマスター、如何やら管制人格は来ないようですよ」

「そうか、ならば用はもう無いな」

ルインの報告にブラックウォーグレイモンは残念そうな表情を浮かべて頷き、武装局員達から奪ったデバイスに目を向け、腕を振り下ろす。

「フン！！」

ーーーバキィィィィン！！

ブラックウォーグレイモンが振り下ろした腕により、デバイスは全て破壊され、それに寄って次々と発生したデジコードを、ブラックは体に吸収して行く。

しかし、その表情は突如として怒りに満ち始め、デバイスから得た情報を注意深く調べ始める。

そして完全にデバイスから収集した情報を読み取るとブラックウォーグレイモンは一つの方向を眺めると共に、負の力を集中させ始め、巨大な赤いエネルギー球を生み出し、上空に向かって投げ付ける。

「ガイアフォーーーース！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！

ブラックウォーグレイモンが投げたガイアフォースは空の彼方へと消えて行き、少し時間が経った瞬間に、大音量の爆発音が響いた。
その爆発音にリンディと戦っていたクロノとフェイトは上空に顔を向け、リンディもガイアフォースが進んだ方向に目を向け、不機嫌そうな表情を浮かべる。

「上層部らしいやり方ね。私達が戦っている間にステルス迷彩を行なった艦で、アルカンシェルを砲撃、管理局が彼に痛手を負った事実を消す気だったのね」

『なっ！？』

リンディの告げた事実にクロノとフェイトは驚愕の声を上げる。
まさか、自分達の知らない所でその様な策略が行なわれていたとは思っても見なかったのだ。
その様子を見たリンディは再び、黒いデジコードに身を包み元の黒いドレスを着た少女の姿へと戻る。

「あ、ら？」

「ッ！！母さん！？」

元の姿に戻ったリンディは突如としてバランスを崩し、海へと落下し始め、それを見たクロノは慌てて追い駆けようとするが、リンディは瞬時に移動していたブラックウォーグレイモンに抱えられる。

ーーーガシッ！

「・・・・・ありがとう、もう大丈夫よ」

自身を抱えてくれたブラックウォーグレイモンにリンディは嬉しそうな表情を浮かべて礼を言い、それを聞いたブラックウォーグレイモンは不機嫌そうな表情を浮かべながらも、リンディを肩に担ぐ。
その様子にリンディは苦笑を浮かべるが、すぐに表情を真剣に戻すと共にクロノとフェイトに顔を向ける。

「クロノ、私はこの人と同じ様に居るだけで世界に悪影響を与える存在に成ってしまったわ。だからもう世界の何処にも居場所は無いの」

「・・・・・そんな」

リンディの告げた事実にクロノは絶望の表情を浮かべる。
クロノの絶望に染まった表情を見たリンディは一瞬悲しそうな表情を浮かべるが、すぐに冷静な顔に戻り、フェイトに顔を向ける。

「フェイトさんごめんなさい。貴女を養子にはもう出来ないわ。本当にごめんなさいね」

「・・・・・本当に一緒には居られないんですか？」

「ええ、もう貴女達とは居られないの。今日此処に来たのは別れの言葉を告げる為よ」

フェイトの悲しげな表情を浮かべた言葉に、リンディは本当に申し訳なさそうな表情を浮かべて謝る。
だが、その顔をすぐに決意に満ちた表情に変えると、クロノの方に再び顔を向ける。

「クロノ。リンディ・ハラオウンは最後まで貴方の事を大切に思っ

ていたわ。私はそれを伝える為に此処に来たのよ。私はただのリンディ、世界の敵よ」

「・・・・・・母さん・・・・・分かりました。母さんの最後の思いを伝えてくれてありがとうございます」

リンディの言葉にクロノは悲しみの表情を浮かべて礼を告げ、それを聞いたリンディはクロノへと最後の母親としての微笑みをクロノへと向ける。

リンディとクロノのやり取り見たブラックウォーグレイモンは壊さずに居たＳＵ２をクロノへと放り投げる。

「俺を殺しに来たければ何時でも来い。貴様にはその資格が在る」

「・・・・・・・・・僕はお前を殺さない。何時かこの手でお前を牢に放り込んでやる！！」

ブラックウォーグレイモンの言葉にクロノはＳＵ２を強く握りながら叫び返す。

クロノの決意の言葉を聞いたブラックウォーグレイモンは、この世界で漸く生まれた『敵』に成るかも知れない存在に笑みを浮かべると、近寄って来たルインと共にその場から転移した。

その後には、力を使い果たし気絶したクロノを抱えるフェイトだけが残されるのだった。

アルハザードへと帰還したブラックウォーグレイモンはルインにフリートを呼んで来いと命じると、調子の悪そうな様子で壁に寄り掛かるリンディへと顔を向ける。

「・・・・何故俺に力を貸す気に成った?俺は貴様を殺した相手だぞ」

「■■■■」

「何故その名前を知っている!?答えろ!?」

リンディが呟いた名前を聞いたブラックウォーグレイモンは、何時もの冷静な様子を消してリンディの首筋にドラモンキラーを突き付ける。

リンディの呟いた名前は、ブラックウォーグレイモンの前世の名前だったのだ。

その名を知る者は数が限られていると言うのに、リンディは当然と言うのに呟いた。ブラックウォーグレイモンにすれば、驚くのも当然だろう。

だが、自身の首にドラモンキラーの刃が当たっているにも関わらずに、リンディはブラックウォーグレイモンに優しげな笑みを向ける。

「私は貴方を護る。例え世界を敵に回しても、貴方を護ります。だから、せ・・・・き・・・・に・・・・ん・・・・」

ーーーバタン

「おい!!」

リンディは全ての言葉を言う前に床へと倒れ付し、それを見たブラックウォーグレイモンが慌ててリンディを抱き上げて様子を見て見ると、リンディは穏やかな表情を浮かべて眠っていた。

それを見たブラックウォーグレイモンは安堵の息を付き、リンディの顔を見て呟く。

「護るか。ふっ、俺より弱いくせに良く言う。だが、何処か心が安らぐ様な気がする」

ブラックウォーグレイモンは何時に無く優しげな表情を眠っているリンディに向けながら、立ち上がり、リンディを抱えてフリートの下に向かうのだった。

闇の進化！！バイオダークタワーデジモン！！（後書き）

次回予告

クロノ達との別れを終えたリンディは、フリートの診察を受けた。

その結果知らされた事実をリンディは受け入れる。

そしてその間に漆黒の竜人は再び地球を訪れ在る事を調べ始める。

次回、漆黒の竜人と少女、『捜索！デジタルワールドへの扉！！』

漆黒の竜人は探す、強き者を。

捜索！デジタルワールドへの扉！！

リンディ・ハラオウンが生きていたと言う事実は、再び管理局に激震を走らせた。

しかし、それを喜ぶ者は少なかった。何故ならば、映像から採取したデータにより、リンディもまた、ブラックウォーグレイモンと同じように世界に悪影響を与える存在へと変貌している事が判明したのだ。

そのデータを見た上層部は、全管理局員に一つの命令をすぐさま発令した。

「リンディさんの抹消命令！？」

本局の一室で、先日の怪我がある程度治ったなのは達と、同じく怪我の治療が完了したシグナムとリインフォースを加えたはやて達に、クロノの保護者として同席していたグレアムは、リンディの親友であるレティ・ロウランから知らされた管理局のリンディへの対応を聞いて、全員が信じられないと表情を浮かべていた。

「そんな！？リンディさんは管理局にずっと貢献して来たんですよ！！それなのに酷過ぎる！！」

「落ち着きたまえ」

フェイトが椅子から立ち上がり、レティへと叫ぶが、クロノの横でレティの言葉を吟味していたグレアムが声を掛け、フェイトを落ち着かせる。

そしてフェイトが少し落ち着いたのを確認したグレアムは、レティへと険しい顔を向ける。

「上層部は今のリンディを危険視しているのだな？」

「ええ、今のリンディは正に管理局の存在を根底から覆す存在です」

グレアムの質問にレティは顔を俯けながら肯定した。

今現在のリンディはデジモンとダークタワーの性質を兼ね備えたバイオダークタワーデジモン。その存在は正に管理局の存在を根底から覆す存在だった。

何せ、デバイスが無くても魔法を平気で行使する上に、魔力が無くても魔法が使用できる存在へとリンディは変わってしまった。しかも、それだけではなく見た事も無い姿に、その身を変えＳＳランク以上の実力を見せた。魔法を絶対と思っている者達からすれば、今のリンディの存在を絶対に認める事は出来なかったのだ

その為に上層部はリンディの存在を他組織に渡す訳には行かないと思い、リンディの抹消命令を局員全員に命じたのだ。幸いと言うべきなのか。今のリンディは世界へと悪影響を与える存在に成っている為に、そちらの方を前面に出せば多くの局員達は納得の声を上げ、リンディ抹消に同意する局員が大勢いた。

「何とか成らないんですか！？」

「・・・・・ごめんなさい、私以外のリンディの友人達も声を上げて止めようとしたんだけど、上層部の意見を変える事は出来なかったわ。本当にごめんなさい」

なのはの叫びにレティは本当に申し訳なさそうな表情をして、話を始めてから一言も喋っていないクロノへと深々と頭を下げる。

その様子にその場に居る全員が、無力感を感じ始めると、クロノがゆっくりとレティに顔を向け質問する。

「奴はどうなんですか？」

「・・・・・既に広域次元犯罪者に登録されているわ。管理局の艦艇を二隻も破壊したんですもの。それにうちの一隻には、大勢の人間が乗った状態だったからね」

クロノの質問に、レティは怒りの表情を浮かべて答えた。

一隻はアースラであり、もう一隻は先日の戦いの時に、隠れてアルカンシェルを放とうとしたステルス艦の事である。

ブラックウォーグレイモンが放ったガイアフォースをかわす事も出来ずに、乗っていた乗員ごと塵も残さずに完全に消滅していたのだ。

その事実にその場に居る全員が怒りの表情を浮かべるが、彼らは全く気が付いて居なかった。もしブラックウォーグレイモンがステルス艦を破壊せずにいれば、確実に地球が滅んでいた事に。その場に居る全員が全く気が付いていなかった。

その場に居る全員は打倒ブラックウォーグレイモンに心を燃やし始めるが、レティはそれに水を差す様に上層部からの命令を伝える。

「・・・・・言い忘れていたけど、貴方達は例の生物を追う事を禁じられたわ」

『ッ！！！』

「上層部は貴方達に辛い思いをさせたくないと言っていたけど、何か裏が在るわね。例の生物を追うように命じられた部隊は、全部上層部直属の部隊なのよ」

「・・・・・確かに裏が在るな。一体何を企んでいるのだ？」

レティの言葉を吟味したグレアムは同意し、その場に居る全員が不安そうな表情を浮かべるのだった。

その頃、薄暗い研究所の中。その研究所の一室で、自身の背後に紫色の髪を持った女性を連れた白衣を着た男性は、モニターに映るブラックウォーグレイモンと進化したリンディの姿を見て、これ以上に無いほどの興奮を見せていた。

「素晴らしい！！このような生物と人間を此処まで変える技術が存在していたとは！！私が行なって来た研究など、この技術の前では児戯同然ではないか！！」

「ドクター、それでいかがすればいいのですか？」

「ウーノ！すぐに彼と女性、そしてこの技術を完成させた人物を探し出すのだ！！あぁぁ、会って見たいよ。私の技術を超える技術を生み出した人物に！トーレ達に彼らの捜索を命じて起きたまえ！！」

「了解しました」

女性ーウーノはドクターと呼ばれた男の言葉に頷くと、男性に背を向けその場から離れ始める。

それを確認した男性は、再びモニターに目を向け、ブラックウォーグレイモンとリンディに熱い視線を送るのだった。

そして件の人物達が身を潜めているアルハザードでは、研究所の一室でリンディの体の状態を細かく検査しているフリートが存在していた。

「う～む、やはり始めての進化だった為に、体力を失っていただけですね。慣れるまでは、何度かこの状態が続くでしょう」

「そうですか」

フリートの言葉にリンディは頷くと、検査用の器具を体から外し服を着始める。

その様子にフリートは苦笑を浮かべると、モニターから目を離し、リンディへと顔を向け質問する。

「憎んでいますか？その様な体にした事を？」

「・・・・恨んではいませんよ。寧ろこの体に成った事で、管理局に居た頃は見えなかったものが沢山見えるように成りましたからね」

「それを聞いて少し楽に成りましたよ。勝手に体を作り変えた事を恨んでいると思っていましたからね」

リンディの言葉を聞いたフリートは、少し気が晴れた様な表情を浮かべる。

その様子にリンディは苦笑を浮かべるが、すぐに表情を真剣に変え。フリートに顔を向けると質問する。

「質問ですが、私はこの先どうなるんですか？」

「大体肉体の成長は二十歳前後で止まります。その後は誰かに殺さ

れない限り、死なないでしょうね。言う成れば、不完全な不老不死を手にいれたんですよ」

「・・・・・色々と複雑ですね。以前にアルハザードを求めた人物を差し置いて、私がアルハザードに来る日が来るとは思っても見ませんでしたよ。人生は本当に複雑です」

フリートの説明を聞いたリンディは本当に複雑そうな表情を浮かべる。

何せ、リンディは嘗てアルハザードを求めた人物の思いを否定したのに、その自身がアルハザードに来る日が来るとは、夢にも思ってなかったのだから当然だろう。

「まあ、そう言うものですよ。それよりも管理局に付いてですが・・・・・馬鹿ですか？」

「・・・・・言わないで下さい、私も何で管理局に勤めていたのか疑問に思っています」

「脳みそがトップの組織なんてアルハザードにも在りませんでしたよ」

顔を俯けるリンディにフリートは、本当に呆れたと言う様な表情をしながら答えた。

ブラックウォーグレイモンの前世の記憶を見たリンディとフリートは、管理局のトップである最高評議会の正体を知り、呆れて言葉も出ない状態に成ったのだ。

普通に考えれば百年以上も人間が生きられる筈も無いのに、多くの局員が未だに評議会の正体に疑問を持たずにいるのだから、フリートが呆れるのも当然だろう。

「・・・・私が信じていた物のトップが脳みそだったなんて・・・・・その上違法研究まで平然と行っていた事には、言葉も出なくなりましたよ」

「それが普通ですね。とにかく、数年は大人しくしていた方が良いですよ。貴女の体を調べられたら、とんでも無い事態に成るでしょうからね」

「ええ、絶対に実験材料にされるでしょうね」

フリートの言葉にリンディは同意し、実験材料にされるのはゴメンなので、数年はアルハザードから出ない積もりだったのだが、すぐにその思いは打ち砕かれてしまう。

ーーーバタンッ！！

「大変です！！マイマスターがまた地球に向かってしまいました！！」

「・・・・・・もっとしっかり言って置くべきでした」

部屋へと駆け込んで来たルインの言葉に、リンディとフリートは顔を俯かせるのだった。

その頃。再び地球へとやって来たブラックウォーグレイモンは海鳴市ではなく、東京の上空で認識阻害の魔法を使用しながら浮かんでいた。

「・・・・・やはり感じる。此処の何処かに異世界のデジタルワールドへと繋がるゲートが隠されているな」

ブラックウォーグレイモンは呟くと共に地上へと降り立ち、街の中を見回しながら足を前へと進める。

（魔導師どもでは俺の本能を満たせん。やはりデジモン、それも究極体クラスの敵で無ければ、張り合いにすら成らん。その為にも、此処から感じるデジモンの気配の主を探さなければ）

ブラックウォーグレイモンが東京のやって来た理由は、この世界に来た時に微弱では在るがデジモンの気配を感じたからだ。

前の時はリインフォースに夢中に成っていた為に余り気にしなかったが、もはやリインフォースは自身の敵に成らないと思い、この地から感じられる気配に目を向ける事にしたのだ。

人々に認識される事無く、ブラックウォーグレイモンが街の中を歩いていると、近くの電気屋に置かれているテレビが、突如として画像の嵐に変わり声が聞こえて来る。

『スタートしますか？しませんか？』

「何の用だ？人間界に通信を送って来るという事は、かなりの力を持った奴の様だが？」

聞こえて来た声に、ブラックウォーグレイモンは訝しげな表情を浮かべながら、テレビに向かって質問すると、テレビから再び声が響く。

『渋谷駅のエレベーターの地下に、この世界のデジタルワールドの

入り口が在ります。詳しい話は此方の世界に来てから説明しますが、貴方の力が必要です。デジモンであってデジモンでない貴方の力が、待っています』

声はそう告げると、再び元のテレビの映像に戻った。
テレビの言葉を聞いたブラックウォーグレイモンは口元を笑みに変えると、渋谷駅へと向かう為に足を向けようとするが、突如として背後から四本の手が飛び出し両腕を拘束されてしまう。

ーーーガシッ！！

「・・・・何のようだ？」

両腕を拘束されたブラックウォーグレイモンは、煩わしそうに腕の先に目を向けると、リンディとルインが不機嫌そうな表情をして、ブラックの顔を睨んでいた。

「言いましたよね？当分の間は大人しくしていて下さいって？」

「貴様が勝手に決めた事に、俺が従う理由は無い」

「って！マイマスター！！何処に行く気ですか！？」

ブラックウォーグレイモンは二人の手を振り払い、先に進もうとするが、ルインがその背中に抱き付き、ブラックウォーグレイモンに質問した。
その事にブラックウォーグレイモンは深く溜め息を吐き、リンディとルインに顔を向け質問に答える。

「渋谷駅の地下に、この世界のデジタルワールドに繋がる入り口が

在るらしい。其処に呼び出された」

「・・・・・・罠かもしれませんよ？」

「それならば、それごと打ち砕くだけだ。とにかく、俺は戦いたいんだ。だから行く。着いて来たければ勝手に来い」

ブラックウォーグレイモンはそう告げると共に、今度こそ渋谷駅へと向かい出した。

先に進むブラックウォーグレイモンの姿に、リンディとルインは顔を見合わせ、同時に溜め息を吐くと、ブラックウォーグレイモンの後を追い始めるのだった。

捜索！デジタルワールドへの扉！！（後書き）

次回予告

異世界のデジタルワールドにやって来た漆黒の竜人達。

其処で出会ったデジモンに伝えられる事実。

そしてクロノ達が選ぶ道とは？

次回、漆黒の竜人と少女、『それぞれの道』

彼らはそれぞれの信念を胸に、先へと進む。

キャラクター設定（前書き）

メインキャラが出揃ったので紹介します。

キャラクター設定

ブラックウォーグレイモン、後に愛称としてブラック

性別：デジモンに性別は無いが、あえて言うなら男性

性格：一言で言うと完全な戦闘。戦いが大好きである為に、邪魔をしたりするとキレる。

属性：ウィルス種

世代：究極体

必殺技：ガイアフォース

詳細：ダークタワーが百本集まり、変形、合体を繰り返した果てに生まれたダークタワーデジモン。その為に並みの究極体を越える力を有しているが、存在しているだけで世界に悪影響を与えてしまう。また、単独での世界を移動も可能である。
そして前世では人間であった上に、デジモンの話やリリカルなのはのアニメが在った世界の人物である。その為に穴だらけでは在るが、ある程度のリリカルなのはに付いての知識は在る。
尚、デバイスから情報を収集する事で、記録されている魔法を技として使用可能にする事が可能になる。この情報収集の為には、首に付いているネックレスが必要であり、ネックレスが無い状態ではデバイスを破壊しても情報を手に入れる事は不可能。

リンディ

性別：女性

容姿：何時も黒いドレスを着たなのは達と、同年齢ぐらいの緑色の髪の少女

性格：原作のリンディ・ハラオウンに甘さが消えた様な性格

分類：バイオダークタワーデジモン

詳細：原作のリンディ・ハラオウンが、アルハザードの技術で生まれ変わったバイオダークタワーデジモン。進化する事でバイオ・エンジェウーモンに進化出来るが、他のデジモンのデータを手に入れれば、そちらへも進化出来るようになれる。
そしてブラックウォーグレイモンと同様に、存在しているだけで世界に悪影響を与えてしまう。また、魔法も当然ながら使用出来るが、人間の時の様に魔力を必要としない上に、デバイスも必要無い。その為に管理局では、自分達の存在意義を真っ向から反する存在とされている為に抹消命令が出されている。
尚、リンディ茶は未だに健在

ルイン

性別：女性

容姿：銀色の髪に蒼い瞳し、黒と蒼のロングコートを身に着けたリ

インフォースに似た女性

性格：リインフォースと違って何事にも積極的

分類：ユニゾンデバイス

詳細：闇の書の闇である防御プログラムが、主（ブラックウォーグレイモン）を見付けた事で覚醒した存在。その為に夜天の書に記されている魔法は全て使用可能。マスターであるブラックウォーグレイモンに心酔しているが、無茶をする時には誰よりも強くブラックウォーグレイモンを止める。また、ブラックウォーグレイモンとユニゾンは可能であり、ユニゾンするとブラックウォーグレイモンは更なる力を手に入れる事が可能である。

フリート

性別：女性

容姿：青い髪に赤い瞳を持った人物。最近では白衣を好んで着ている

性格：普段は冷静で優しい人物だが、研究の事に成ると某Ｊ．Ｓ氏並みのマッドに変貌する。

分類：アルハザードの管制人格。

詳細：失われた都とされるアルハザードのホストコンピュータの管制人格であると共に、最後の生き残りであり、アルハザードの全ての知識を有した在る意味最凶の存在。リンディの体を改造した張本

人である。最も本人は改造が終わった後に、深く反省して二度とやらないと誓っているが、その誓いは蜘蛛の糸よりも細い。

それぞれの道

渋谷駅内部に入ったブラックウォーグレイモン達は、迷わず近くに在るエレベーターの乗り込むと、勝手に扉が閉まり地下へとエレベーターは降下して行く。

「貴方の記憶の中に在るフロンティアと言うデジタルワールドですか？」

「恐らくな。最も俺も、もはや良く憶えていないがな」

リンディの質問にブラックウォーグレイモンは、悩む様な表情をしながら答えた。

ブラックウォーグレイモンが憶えているのは、アドベンチャーの無印と０２だけなのである。他のデジモンの話はもはや断片的にしか、思い出せない状態なのだ。

「恐らく俺に通信を送って来たのは、オファニモンと言う三大天使デジモンの一人だろう」

「マイマスターに何のようなのでしょうか？」

「さぁな、どんな用だかは分からんが、とにかくデジタルワールドに行けば分かる」

ルインの質問にブラックウォーグレイモンが答えた瞬間に、エレベーターは地下へと到着し、再び勝手に扉が開くと、ブラックウォーグレイモン達は巨大なホームの中へと進み始める。

「・・・・・やはり驚きますね。この様な場所が街の地下に在ると言うのは」

「そうですね。確かに驚きますよ」

リンディとルインはホームの中を見渡しながら話し合うが、ブラックウォーグレイモンは気にせずに止まっていた電車型のデジモン一トレイルモンへとさっさと乗り込み、それを見た二人も慌てて乗り込むと、トレイルモンは暗いトンネルに向かって走り出す。

そしてリンディとルインが窓の外を見ていると、暗いトンネルの先に光が発生し、トレイルモンその光を通り過ぎた瞬間に、光がトレイルモン内部に満ち溢れ、広大なデジタルワールドが姿を見せた。

『ワァァァァ〜〜！！』

（このデジタルワールドには、俺を満足させられる敵がいればいいのだがな）

リンディとルインは始めてみたデジタルワールドの景色に喜びの声を上げるが、ブラックウォーグレイモンだけは強い奴が居るかどうかだけを気にしていた。

そしてトレイルモンは火の街へと辿り着き、ブラックウォーグレイモン達がトレイルモンを降りた瞬間に、十枚の金色の翼を持った女性が空から降りて来る。

「待っていましたよ。デジモンで在って、デジモンでは無い者よ」

「ふん、オファニモンか。それで俺に何の用だ？詰まらん事だったら殺すぞ」

『ブウッ！！』

ブラックウォーグレイモンが呟いた言葉に、リンディとルインは同時に噴き出した。

ブラックウォーグレイモンは、如何見ても神々しいとしか言えないオファニモンに対して、喧嘩を噴き掛けるような言葉を吐いたのだから、噴き出すのも当然だろう。

それと共にリンディとルインが恐る恐るブラックウォーグレイモンの顔を見て見ると、寧ろそれを待ち望んでいる様な笑みを浮かべている事に気が付き、二人は絶望の表情をブラックウォーグレイモンの背後で浮かべて抱き合うが、オファニモンは気にせずに用件を話し始める。

「分かりました。それでは説明を始めます」

オファニモンが呟いた瞬間に、突如として周りの光景が変化し、黒い空間の中に青い星が四つ浮かび上がった。

その星の正体に気が付いたリンディは、目を見開き、恐る恐る浮かんでいる四つの星を指差す。

「まさか！？地球なの！？」

「その通りです。正確に言えば、この地球と同じ文明が存在する世界です」

「・・・・そうか。俺は別の異世界に飛ばされたのではなく、俺が生まれた世界から遠く離れた世界に来たのだな」

オファニモンの言葉を聞いたブラックウォーグレイモンは自身の居る場所が何処なのか漸く分かった。

そう、ブラックウォーグレイモンは平行世界に来たのではなく、自身の居た世界から遥か遠くの場所へと飛ばされただけだったのだ。

「その通りです。貴方の事は、別のデジタルワールドの四聖獣の一体、チンロンモンより聞きました」

「では、彼の生まれた世界は、管理局さえも到達していない場所に在る地球と言う事ですね？」

「えぇ、本来ならばこの四つの地球と平行して存在しているデジタルワールドは、互いに関わらずに独立して存在しているのですが、そうも言っていられない事態が発生してしまったのです」

「如何言う事ですか？」

オファニモンの言葉にルインは疑問の声を出し、リンディとブラックウォーグレイモンも疑問の表情を浮かべると、オフォニモンは顔を俯け話を再開する。

「この四つのデジタルワールドの一つの世界で惨劇を引き起こした人間が、我々のデジタルワールドに現れ、多くのデジタマとルーチェモンと言うデジモンのデジタマを奪って行ったのです」

「成る程な。それならば何故後を追わない？貴様が追えば、すぐにでもその人間を倒せる筈だが？」

「その通りです。我々はすぐに後を追おうとしましたが、一つの組織の存在を知った為に、断念するしかなかったのです」

ブラックウォーグレイモンの質問にオファニモンは悔しそうな表

情をして答えた。
　それを聞いたブラックウォーグレイモン達は、オフォニモンの言う組織は管理局である事に気が付き顔を見合わせ、リンディがオフォニモンに質問する。

「管理局ですね？」

「その通りです。彼の組織に我々の存在を知られる訳には絶対にいけません。あの組織はデジモンの存在を知れば、無理やり管理しようとするか、排除しようとするのかのどちらかでしょう。そうなればデジモンと人間の戦争が始まります。その様な事は在っては成らないのです」

「そうですね、管理局なら絶対にやるでしょう。何せ、マイマスターを殺す為に地球の人々を犠牲にしようとしたんですからね」

　オフォニモンの言葉にルインは同意を示す。
　管理局は自分達が世界の守護者だと思っている為に、絶対にデジタルワールドの存在を知ったら管理しようとするだろう。だが、デジモン達の中には管理局を簡単に滅ぼせる者達も居る。そうなれば、管理局が次に行なう対応はデジモンの完全抹消しかないのだ。
　当然それを行なおうとした瞬間に、デジモン達は管理局と完全に敵対し、血で血を争う戦争へと発展する可能性が高い。
　その事に気が付いたオファニモンは外の世界にデジモン達が出る事を禁じたのだが、そうなれば奪われたデジタマ達を使って例の人物が好き勝手に暴れる事も容易に想像でき、如何すれば良いのかと悩んでいる時に、ブラックウォーグレイモンの存在を感じたのだ。
　ブラックウォーグレイモンの事はチンロンモンから聞いていたので、すぐに同一の存在だと気が付き、丁度管理局と敵対している事も判明したので、オファニモンは連絡を取ったのだ。

「貴方に頼みたいのは、奪われたデジタマの回収です。恐らく奴はデジタマを使って人間界を支配しようとする筈です。それを止めて貰いたい為に貴方を呼んだのです」

「・・・・・良いだろう（先ず間違い無くソイツは、セイバーズに出た倉田明弘。もはや良く話の内容は覚えてはいないが、何故か心の底から怒りが湧き上がって来る。それに奴が盗んだデジタマから生まれたデジモン達と戦えるのも良い。俺の本能が満たされそうだ）」

オファニモンの言葉にブラックウォーグレイモンは了承した。だが、内心では自身の目的である戦いが向こうからやって来た事に、歓喜していた。

そしてブラックウォーグレイモンの内心に気が付いているリンディとルインは顔を見合わせ、同時に溜め息を吐き、オファニモンへと顔を向ける。

「管理局のせいで動けないと成れば、私にも少し責任が在るので協力します」

「マイマスターが協力するなら力を貸します」

「ありがとうございます、皆さん」

リンディとルインの言葉オファニモンは深々と頭を下げ、リンディとルインは笑みを浮かべるが、ブラックウォーグレイモンだけはこれから起こる戦いに思いを馳せるのだった。

その頃、管理局本局の一室では再びなのは達が集まり、話し合いをしていた。

「はやてちゃん達はこれから如何なるの？」

「私らは管理局で奉仕活動やけど、それが終わったら贖罪の為に管理局に入るつもりや」

なのはの質問にはやては決意に満ちた表情をして答えた。

今回の闇の書事件では多くの者達に傷を負わせた為に、はやてと騎士達はそれを償う為に管理局に入るつもりなのだ。

そのはやての決意に満ちた言葉を聞いたなのはは、今度はフェイトへと顔を向け、フェイトは自分の考えをなのはに告げる。

「私は今まで通り管理局に力を貸す積もりだよ。リンディさんをあんな風に改造した人物を捕まえたいから、執務官を目指すんだ」

はやてと同様にフェイトは決意に満ちた表情をして、自身の考えをなのはに告げた。

フェイトは自身の生まれの事も在るが、リンディをあのような姿に変えた者を許せない為に、管理局に入り、リンディを変えた者をこの手で捕まえる積もりなのだ。

そして最後になのはは、クロノへと顔を向ける。

「僕は上を目指す気だ。奴を追うにも上層部から禁じられているし、母さんの抹消命令を取り消す為にも、上を目指すのが一番だと思うんだ」

クロノは決意に満ちた顔を自身の考えをなのはに告げる。

クロノは母親であるリンディの抹消命令を受け入れる気は全く無いのだ。だが、現状では一執務官であるクロノの言葉に、上層部が耳を貸す筈も無い。

だからこそ、クロノは上を目指してリンディの抹消命令を取り消す様に進言した上に、ブラックウォーグレイモンを追えるようにして貰う積もりなのだ。

最も、フェイトにしてもクロノにしても、どれだけ頑張ってもリンディとブラックウォーグレイモンを追うのは余程の幸運が無ければ不可能なのだが、その事を知らない上に、管理局を信じてしまっている二人は、その事に気がついていなかった。

それぞれの決意を聞いたなのはも、自分も管理局で働くと告げるが、なのはの思いは二年後に完膚なきまでに潰されてしまうとは、この時は誰も思っても見なかった。

それぞれの道（後書き）

次回予告

漆黒の竜人が姿を消してから二年の月日が過ぎたある日。

なのはとヴィータは在る世界で演習を行っていた。

その時に再び漆黒の竜人が姿を現す。

そしてなのはとヴィータは漆黒の竜人へと挑みかかる。

次回、漆黒の竜人と少女、『否定される思い、破滅の瞬間』

少女は知る、自身の本当の思いを。

否定される思い、破滅の瞬間

ブラックウォーグレイモンが外の世界に目を向けず、第二のデジタルワールドからアルハザードへと帰還したある日の事、この日に一人の少女は自身の想いを打ち砕かれた。

「ブラック様、何処に居るんですか？」

アルハザードの通路の中をブラックウォーグレイモンこと、ブラックをルインは捜し歩いていた。

この二年間。ブラックウォーグレイモン達はオファニモンの許可の下、第二のデジタルワールドで旅を続け、デジモンの弱点や生態について調べ続けていたのだ。ブラックはともかく、ルインとリンディはデジモンについては僅かにしか知らないので、知識を補うと言う目的も在ったが、実際の所はブラックの欲望を満たす為の方が強かった。

そしてデジタルワールドを探索していたある日の事、オファニモンが外の世界でデジモンの反応が現れ始めたと言うので、アルハザードへと帰還したのだ。

「むう～、まさか、もう外に行ってしまったのじゃないでしょうね？」

姿が見えないブラックに、ルインは不機嫌そうな声を出して呟いた。

何せこの二年間でよく分かった事だが、ブラックはとにかく戦闘を心の底から楽しむ為に、デジタルワールドに居た時も、強いデジモンを見つけたら、ルインとリンディを放って戦闘を行ない続けていた。最初はルインとリンディも止めたのだが、何度言ってもブラ

ックは止めない上に、途中からはリンディも戦闘を楽しむ様に成ってしまった為に止められるものがいなくなってしまったのだ。
　そんな風にルインが通路を歩きながら呟いていると、通路の奥から毛皮を被った生物が姿を現した。

「あっ！ガブモンちゃん、ブラック様を見ませんでした？」

「え？ブラックさんなら外に出るって言っていましたよ？」

ガブモン、世代／成長期、属性／データ種、分類／爬虫類型、必殺技／プチファイヤー
毛皮を被っているが、れっきとした爬虫類型デジモン。とても臆病で恥ずかしがりやな性格でいつもガルルモンが残していったデータをかき集めて毛皮状にしてかぶっている。一年ほど前に、ブラック達がデジタルワールドを旅している時に出会ったデジモン。ブラックの絶大な力を見て憧れを抱き、以降ずっとブラック達と一緒に旅をしている。尚、進化してガルルモンに成る事が可能なので、ルインとリンディは良く背中に乗って移動していた。必殺技の『プチファイヤー』は小さな青色の火炎弾を放つ技だ。

　ガブモンの情報を聞いたルインは呆れた様な表情を浮かべる。

「はあ～、やっぱりですか。全く何時も勝手に動くんですから」

「そうですね。でも、ルインさんとリンディさんの話は少しは聞いてくれるじゃないですか？僕は無理ですけど」

「そうなんですけど、少しは落ち着いて・・・・・・無理ですね」

　ルインはブラックに少しは落ち着いて貰いたいと思ったが、絶対

にそれは不可能だと気が付き落ち込み始め、ガブモンはその様子に汗を流し始める。

「とにかく、フリートさんやリンディさんに話しては如何ですか？あの二人なら良い知恵を出してくれると思いますよ？」

「・・・・・そうですね。ブラック様の首にはネックレスが付いていますし、フリートに聞きますか」

ガブモンの言葉にルインは納得の声を上げ、二人は一緒に通路を歩き、フリートとリンディの居る部屋へと向かい出した。

雪が降り積もる世界。

白い雪が降り積もった場所に、演習に来ていたなのはとヴィータは自分達の前に居る二体の生物一体が青い石の様な物で構成された生物と、白い体に悪魔の様な翼を持った生物と戦い、苦戦していた。

「はあ、はあ、はあ」

「ふむ、人間にしてはやるような。そう思わないか、アイスモン？」

「あぁ、そうだな、アイスデビモン」

アイスモン、世代／成熟期、属性／データ種、種族／氷雪型、必殺技／アイスボールボム

全身氷に包まれたゴツモン系の氷雪型デジモン。ゴツモンから進化したのか、はたまた変種なのか謎に包まれている。冷気の在る場所では戦闘能力が上がる。必殺技は、氷の爆弾を投げる『アイスボー

ルボム』だ。

アイスデビモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／堕天使型、必殺技／フロストクロー

氷のように冷たい心を持つ堕天使型デジモン。デビモンの中でも特に残忍な心を持つデビモンが進化した姿といわれている。話術で敵を騙すのが得意で、近寄って来た相手を氷の羽で包み込み氷付けにさせる。アイスモンと同じ様に冷気の場所では戦闘能力が上がる。必殺技は、両手の爪で相手の体を突き刺す『フロストークロー』。その他にも氷関係の技を持っている。

二体のデジモン－アイスデビモンとアイスモンの会話を聞いていたヴィータは二体に目を向け叫ぶ。

「てめえらだな！！武装局員達を殺しやがったのは！？」

「武装局員？・・・・・・ああ、あの雑魚どもか。私達に挑みかかって来たから、暇潰しとデータ回収の為に確かに殺したな」

ヴィータの叫びにアイスデビモンは何の事だと言う表情を浮かべるが、すぐに先ほど殺した者達の事を思い出し肯定する。

十分ぐらい前に、変な反応に気が付いた武装局員達はなのはとヴィータと少し別れ、反応を調べに出たのだが、突如としてなのはとヴィータのデバイスが緊急信号を発し、急いで向かって見ると血の海に沈む局員達に、その局員達のデバイスからデータを奪っているアイスデビモンとアイスモンを目撃したのだ。

当然、なのはとヴィータはすぐさま、アイスモンとアイスデジモンに対して戦闘を行なったのだが、なのはには何時もの動きの切れが無く、ヴィータがなのはを庇いながらの戦闘に成ってしまったので追い込まれていた。

「くそ！！絶対に赦さねえぞ！！アイゼン！！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．Ｒａｋｅｔｅｆｏｎｍ．》

ヴィータが叫ぶと共にヴィータのデバイス－グラーフアイゼンから薬莢が飛び出すと、アイゼンの形が変形し始め、後ろに噴射口が現れ、前面にスパイクが在る姿に変わると、ヴィータは回転しながら、アイスデビモンに向かって振り下ろそうとする。

「ラケーテンハンマーー！！」

「ふん、アイスモン」

「おう」

ヴィータの攻撃を見たアイスデビモンはつまらなそうな表情を浮かべながら、自身の横に居たアイスモンに声を掛け、アイスモンはアイスデビモンの言葉を了承すると、自身の腕を上げ氷の玉を生み出しヴィータに投げ付ける。

「アイスボールボム！！」

ーーーガキィィィン！！

「なっ！？ウワァァァァーー！！」

「ヴィータちゃん！？」

アイスモンの投げたアイスボールボムはヴィータへと直撃し、グ

ラーフアイゼンとヴィータの体を凍らせ、ヴィータは地上へと落下して行く。
それを見たなのはは慌てて、ヴィータの救助に向かおうとするが、その前にアイスデビモンが姿を見せ両手の爪をなのはに向かって突き出す。

ーーービュン！！

「終わりです、フロストクローー！！」

「ヒイッ！！」

アイスデビモンのフロストクローになのはが悲鳴を上げ、防御魔法を発動させようとする。
しかし、なのはにフロストクローが決まろうとした瞬間に、突如として上空から、赤いエネルギー球がアイスデビモンに向かって凄まじい勢いで迫って来た。

「ッ！！何だと！？」

「えっ？」

自身に高速で向かって来るエネルギー球に気が付いたアイスデビモンは慌ててエネルギー球をかわし、なのはがエネルギー球の飛んできた方に目を向けると、それは上空に浮かんでいた。
それは鈍く光る銀色の頭部に胸当てと、黒い鉄鋼を両腕に装備し、金色の髪と漆黒の体を持った生物。管理局が全力で捜索している生物。
広域次元犯罪者『漆黒の竜人』ブラックウォーグレイモンが、空に浮かびながらアイスデビモンとアイスモンを睨み付けていた。

「やはり、外に出て正解だった。まさか、此処まで早くデジモンを見つけられるとは思っても見なかったぞ」

「あ、あ、お前は・・・・一体？」

ブラックの姿を見たアイスデビモンは恐怖に震えた声を出した。
いかに自分の有利なフィールドで在ろうと絶対に勝てない存在だと、気が付いたのだ。
しかし、ブラックはアイスデビモンの質問には答えずに、地上でアイスデビモンと同様に震えているアイスモンに目を向けると、瞬時にアイスモンの目の前に移動し、ドラモンキラーの刃をアイスモンの胸に突き刺した。

ーーービュン！！

「ドラモンキラーー！！」

ーーードスンッ！！

「ギャアァァァァーー！！」

「アイスモン！！」

ブラックの放った一撃にアイスモンは悲鳴と共に、データ粒子へと変化し、後にはデジタマだけが残された。
そして一撃でアイスモンが消滅した事に驚愕しているアイスデビモンの目の前にブラックが、再び瞬時に現れ、アイスデビモンを殴り飛ばす。

ーーービュン！！

「フン！！」

ーーーードゴン！！

「ガアッ！！」

ブラックに殴り飛ばされたアイスデビモンは苦痛の声を上げ、地上に落下して行くが、その先には再びブラックが姿を現し、踵落としをアイスデビモンに食らわせる。

「ハアッ！！」

ーーーードゴオオン！！

「グオッ！！」

ブラックの放った踵落としをアイスデビモンはかわす事さえも出来ず、地面に罅が入るほどに強く大地にめり込んだ。
だが、それを受けてもアイスデビモンは消滅せずに立ち上がり、ブラックを睨み付け、ブラックは僅かに感心したと言う表情で、アイスデビモンを見つめ始める。

「ほう、思ったよりも骨が在るな」

「・・・・・・アイスモンは・・・・・・私の親友だったんだ！！それを！フロストクローー！！」

アイスデビモンは憎しみの叫びと共に、自身の障害での最高のフ

ロストクローをブラックに放つ。

ーーーガアン！！

だが、フロストクローを受けてもブラックは何も感じてないかのようにその場に佇み続ける。

「ば、馬鹿な？私の必殺技を受けて・・・・・・無傷だと？」

「今のが必殺技だと？ふん、ガブモンの一撃の方がまだ、面白かったぞ」

「あ、あ、アァァァァーーー！！」

ブラックの言葉を聞いたアイスデビモンは恐怖に震えた声を上げ、連続でフロストクローを放つが、ブラックは連続で放たれるフロストクローを受けてもダメージを受けた様子を見せずに腕を振り上げる。

「つまらん、ドラモンキラーー！！」

ーーーブザアン！！

「ギャァァァァーー！！」

ブラックが言葉と共にドラモンキラーの刃を振り下ろすと、アイスデビモンの体は両断されアイスモンと同じ様にデータ粒子へと変わり、後にはデジタマだけが残された。

そしてアイスデビモンの消滅を確認したブラックは首のネックレスに声を掛ける。

「フリート、デジモンを二体、デジタマに戻した。回収して置け」
『了解です。幸先の良いスタートですね』
ブラックの言葉に首に掛けているネックレスからフリートの声が響き了承の声を上げた瞬間に、落ちている二つのデジタマの周りに陣が発生し転移して行く。
それを確認したブラックはその場を立ち去ろうとするが、背後からヴィータがギガントフォルムに変形したアイゼンをブラックに向けて振り下ろした。
「轟天爆砕！！ギガントシュラーーーク！！！」
「ほう」
ーーーガアァァァァァァン！！！
ヴィータの一撃にブラックは感心な声を出して見ていると、ヴィータの一撃は完全にブラックに直撃し、辺りに激突音が響く。
自身の最高の一撃が決まったのを確認したヴィータは笑みを浮かべるが、ブラックがドラモンキラーを上に掲げるのを見ると、慌ててその場から離れようとする。
しかし、それは結局間に合わずに、ブラックに殴り飛ばされる。
「フン！！」
ーーードゴン！！
「ガアッ！！」

ブラックウォーグレイモンの一撃にヴィータは遠くへと吹き飛ばされて行くが、吹き飛ばされる瞬間に、ヴィータは一瞬笑みを浮かべる。
それを見たブラックはヴィータの真の狙いに気が付き、もう一つの気配の方を目を向けて見ると、上空で巨大な魔方陣を発生させているなのはが、ブラックに向けて極大の砲撃を放った。

「全力全開！！スターライトブレイカーーー！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

なのはの放った桃色の極大の砲撃は寸分違わずに、ブラックへと直撃し巨大な爆発が起きた。
だが、ブラックに直撃したのを見てもなのはは安心せずに、煙の中を睨んでいると、煙の中からブラックが姿を現す。

「今の一撃が貴様の最強の一撃なのか？」

「くっ！！」

ブラックの言葉になのはは悔しそうな声を出した。
まさか、自身の最強の砲撃、スターライトブレイカーを受けても平然としているとは思っても見なかったのだ。この後は必ずブラックの反撃が来ると思い、何時でも対応出来るように身構え始める。
しかし、なのはの予想とは打って変わって、ブラックはなのはに襲い掛からずに突如としてなのはに背を向け、その場から離れようとし、なのはは慌てて叫ぶ。

「逃げるの！？」

「逃げるだと？貴様程度に逃げる理由など無い」
「だったら何で背を向けるの！？」
「戦う価値の無い奴だからだ」
「ッ！！！！」
ブラックウォーグレイモンの告げた言葉に、なのはは目を見開きながらブラックを見つめた。
まさか、戦闘狂で在る筈のブラックから、その様な言葉が出るとは思っても見なかったのだろう。だが、ブラックからすれば、なのはと戦うのは意味さえも感じられない事だった。
「貴様は今まで俺が戦って来た連中の誰よりも興味が湧かん。貴様には戦う価値すらない」
ブラックは全くなのはに興味が湧かなかった。
確かになのはの実力はかなりのものでは在るが、なのは程度の強さなど、デジタルワールドには沢山居る。当然、その実力者達ともブラックは戦ったが、その者達となのはが戦えば確実になのはは負けるだろう。その者達となのはでは決定的な差が在るのだ。
「戦う前から逃げている貴様には興味が湧かん。失せろ」
「馬鹿にしないで！！ディバインバスターー！！」
ーーードグオオオオオオオオン！！

ブラックの言葉になのはは怒りの叫びと共に砲撃を放つが、ブラックは瞬時に移動し、なのはの後ろへと姿を現す。

ーーービュン！！

「やはりつまらん。貴様は何故戦っている？戦う前から逃げている貴様が？」

「黙って！！レイジングハート！カートリッジ！！」

「遅い！！」

なのははブラックの言葉を否定する様に叫び、加速魔法を使用してブラックの傍から離れ、レイジングハートに命じ、カートリッジをロードしようとするが、瞬時にブラックがなのはの目の前に現れ蹴り飛ばす。

ーーードゴオン！！

「ガアッ！！」

「答えろ？何故戦っている？そんなボロボロの状態で？」

ブラックの一撃になのはは地上へと落下し、苦痛の声を上げるが、ブラックは気にせずになのはの目の前に下りて質問する。

ブラックはなのはの姿を一目見た時から気が付いていたのだ。なのはの体は度重なる無茶のせいで蓄積した疲労により、戦闘などは行なえない状態である事に。それこそ命に関わるレベルでも在る事にも気がついていた。

「貴様の周りの連中も薄情なものだ。その様な状態に貴様が成っている事にも気が付かないとは」

「ゴホッ・・・・・・皆の事を悪く言わないで、私が戦っているのは、護る為だよ」

「孤独から逃れようとしているだけの貴様が、誰かを護るだと？」

「ッ！！！！」

ブラックウォーグレイモンが呟いた言葉に、なのはは再び目を限界にまで見開きながら、ブラックを見つめ始めた。

今まで誰にも気付かれなかったなのはの真の想いを、数回しか会った事が無い筈のブラックに告げられたのだから、驚くのも当然だろう。

しかし、ブラックからすれば当然の事であり、驚きに動きが止まってしまっているなのはの事を、ブラックは路傍の石でも見る様な視線を向けながら言葉を告げる。

「俺は多くの者達と戦って来たが、そいつらにはそれぞれの信念を胸に戦っていた。だが、貴様は違う。貴様は信念も無く、ただ孤独から逃れたいと言う思いだけで俺に挑んで来ている。迷いが在る奴らなら貴様でも勝てるだろうが、迷いの無い奴には貴様は勝てん」

ブラックの言葉は正鵠を得ているだろう。

原作でもなのはが戦って来た者達は何処か、心の奥底で迷いを持つ者達ばかりだった。

そしてブラックには迷いなど無い。自信の思いのままに戦い、それぞれの信念も受け入れそれを打ち砕き、勝利する。その戦いこそがブラックの真に望んでいる戦いなのだ。

「先ほどの一撃もそうだ。赤い髪のチビの一撃は俺の心に響いて来た。だが、貴様の一撃は全く響いてこなかった。俺が貴様の一撃から感じたのは、ただ一人で居たくないと言う思いだけだった。そんな想いでは俺には勝てん」

ブラックはなのはに向かって告げると共に、今度こそなのはに背を向け歩き出す。

「俺に勝ちたければ、本当の思いを持って挑んで来るんだな。でなければ、貴様と戦う気は起きん」

「う、う、ウワァァァァーーー！！全力全開！！」

自身の想いを完全に否定されたなのはは、目から涙を零し、残っているカートリッジを全てロードすると、先ほどの一撃を超えるスターライトブレイカーをブラックに向けて放とうとする。

しかし、なのはが先ほどの砲撃を超える砲撃を放とうとしている事に気が付いても、ブラックはつまらなそうな表情を変えずに、負の力を集中させ、赤い巨大なエネルギー球を生み出す。

「スターライトブレイカーー！！」

「ガイアフォース！！」

ーーーバシュゥゥゥゥゥゥゥン！！

なのはのスターライトブレイカーとブラックのガイアフォースは激突し、二つのエネルギーは僅かの間拮抗するが、すぐにガイアフォースは、なのはのスターライトブレイカーを押し返し始め、スタ

ーライトブレイカーはガイアフォースに撃ち砕かれ、そのままガイアフォースはなのはの上空を過ぎ去っていった。

「・・・・そ・・・・・ん・・・・・・な」

自身の最大の砲撃が簡単に破られた事に、なのははこの世の終わりだと言う様な表情をした。

そしてそのなのはの前にブラックウォーグレイモンは瞬時に移動すると、ドラモンキラーの爪をなのはの体に向かって突き出す。

ーーードスッ！！

「アッ」

「なのは！！！」

自身のバリアジャケットと腹を易々と突き破った爪になのはは呆気に取られた声を上げ、ブラックの一撃のダメージから漸く回復して来たヴィータは、ドラモンキラーの刃に突き刺されたなのはの姿を見て、悲鳴の様の叫びを上げた。

そしてヴィータの叫びを聞いたブラックはヴィータの方に目を向けると、なのはを振り回し、ヴィータへと投げ付ける。

「ウワッ！」

「ソイツを連れて、とっとと失せろ。今ならまだ助かるぞ」

「てめえ！リンディだけじゃなくなのはまで！！絶対に赦さねえぞ！！」

「何れ貴様とも本気で戦ってやる。それまでにもう少し強くなって置け」

血塗れに成ったなのはを抱えたヴィータの叫びに、ブラックは面白そうな声をヴィータに出しながら告げると、今度こそその場を去っていった。

そして残されたヴィータは慌てて救護班に連絡を取り、その場からなのはを抱えて急いで移動を始めるのだった。

なのは達と戦闘を終えたブラックは戦闘から少し離れた場所に移動すると立ち止まり、何も無い場所へと目を向ける。

「出て来い。先ほどの戦いを見ていたのは分かっているんだぞ」

『やはり、君は素晴らしい。このガジェットの迷彩を見破るとは』

ーーーシュウウン！

何も無い場所から突如として声が響き、何も無かった場所に昆虫の様なロボットが姿を現す。

『この様な形で挨拶するのを赦してくれたまえ。私の名前はジェイル・スカリエッティ。君のファンだ』

「そうか、それで何のようだ？」

『率直に言おう。君の下に居る技術者と話をさせて欲しい！！人間をあそこまで変えてしまう技術を生み出した人物に会って見たいの

だよ！』

ブラックウォーグレイモンの質問にロボットから聞こえて来るジェイルの声は興奮を隠せないと言う様に叫び声を上げた。

この二年間、ジェイルは自身の娘達を使って全力でブラック達を捜索していたのだが、影さえも見付からずに絶望していた時に、偶然にも試運転代わりに起動させたガジェットを向かわせた先で、ブラックを発見したのだから、興奮するのも当然だろう。

ジェイルの言葉にブラックが如何したものかと考え込むような表情をすると、首に掛かっているネックレスから声が響く。

『ほほう、つまり貴方は私の技術に惚れ込んだと言う事ですか？』

『君があの技術を生み出した人物かね？』

『ええ、そうですよ。フリート言いま、アレ？あのリンディさん？何でズドモン何かに進化して、えっ？少し黙ってって、イヤアァァァァーーー！！』

ーーーグシャアアアッ！！

フリートの悲鳴のような声が響いた瞬間に、突如としてネックレスから何かが潰れる音が響き、ブラックとジェイルが冷や汗を流し始める。

そして再びネックレスから声が響くが、今度はフリートではなくリンディがブラックに向かって叫ぶ。

『すぐに戻って来なさい！！色々と情報を整理しないといけませんので！！』

「・・・・・・・分かった」

リンディの叫びにブラックは冷や汗を流しながら答え、ロボットに目を向ける。

「という事だ。情報を整理しないといけないらしい。二日後に此処で改めて話をする事で良いな？」

『うむ、その方が良いだろうね。では二日後に』

ジェイルはブラックの言葉に了承するとその場を去って行き、ブラックもアルハザードへと転移して行くのだった。

否定される思い、破滅の瞬間（後書き）

次回予告

漆黒の竜人に落とされたなのはは失意の内に落ちた。

再びなのはは空を飛べるのか？

そして再び邂逅する漆黒の竜人とジェイル。

次回、漆黒の竜人と少女、『出会った二人、マッドの暴走』

二つのマッドが出会う時、新たな者は生まれる

出会った二人、マッドの暴走

ジェイルとの邂逅を終えたブラックはアルハザードへと帰還し、フリートの居る研究室に入り込もうとする。
しかし、ドアが開いた瞬間に、内部から巨大なハンマーがブラックに向かって襲い掛かって来る。

「ハンマースパーク！！」

「なにっ！？」

ーーードゴオン！！

バイオ・ズドモンへと進化していたリンディは持っているハンマーに自身の全ての力を込めて、ブラックに振り下ろしブラックを吹き飛ばした。その突如として放たれたリンディの攻撃をブラックは受け止める事も出来ずに体に直撃し、通路の壁へめり込んでしまう。
それを確認したリンディは自身の体に黒いデジコードを発生させ、元の人間の姿に戻ると、壁にめり込んでいるブラックに怒りの表情をゆっくりと近づいて行く。

「一体何をしているんですか！？アレほど勝手に動かないでって言いましたよね！！」

「グウッ、貴様の命令を聞く理由は無い」

「ほう、そう言う事を言いますか？良いでしょう。言っても分からないなら、体で分からせて上げますよ！！」

壁から出て来たブラックの言葉に、リンディは更に怒りの表情を浮かべ、再び進化しようとするが、リンディの背後からルインとガブモンが飛び出しリンディを止める。

「落ち着いて下さい、リンディさん！！」

「そうですよ！！此処でブラックさんと戦っても意味が在りませんって！」

「・・・・・・・良いでしょう、此処は大人しくしますが、次は絶対にボコボコにしますよ」

「面白い、やれるものならやってみろ」

ルインとガブモンの言葉にリンディは渋々ながらも納得の声を出し引き下がるが、ブラックへと挑発する様に声を上げた。

それを聞いたリンディはますます表情を不機嫌に変え、二人が視線で火花を散らし始めると、研究室の中で倒れていたフリートが起き上がる。

「うう、酷い目に合いました。と言うか？何で私が潰される事態に？」

「フリートさん？貴女は管理局のデータベースに侵入してジェイル・スカリエッティのデータを見てましたよね？」

ーーーーギクッ！！

リンディの告げた言葉にフリートは体を震わせ、その様子を見た周りの者達がフリートを睨むと、フリートは体から冷や汗を流し始

める。

「データを見て、新しいバイオデジモンの構想を完全に纏める為には、ジェイル・スカリエッティの知恵が必要だと思い、これ幸いだと思った訳ですよね？」

「・・・・・・すいませんでした！！だってデジタルワールドで手に入れたデータを活用したかったんですよ！」

リンディの言葉に全てばれている事に気が付き、フリートはリンディへと土下座を行なう。

それを見たブラック達は呆れた様な表情を浮かべ、顔を見合わせる。

「はあ～、それで彼に会って如何するんですか？未だにデジモン達を操っている人物は発見出来ませんし」

「確かに、奴は一人で動いている筈だから如何にデジモンの存在が在ろうと、簡単に見つかると思っていたのだが、如何やら奴に協力している者達が居る様だ。でなければ、アルハザードの技術から逃れられまい」

「その可能性が高いでしょうね。そしてその可能性が最も高い組織は管理局でしょう」

ブラックの言葉にリンディは同意するように声を出した。

ブラック達がデジタルワールドに居る間にも例の人物の捜索は行われ、フリートが各世界にアルハザード製のサーチャーを送り込みデジモンを操っている人物を捜索していたのだが、二年経っても発見出来ずにいた。そうなれば誰かの保護を受けていると考えるのが

打倒だろう。

「管理局なら一人の人間を隠す事も可能でしょうし、万年人手不足の管理局なら、デジモンを戦力に加えようと動く筈です」

「成る程、確かにその可能性も在りますね。となれば、やはりスカリエッティに会う方が良いでしょう。奴は管理局の裏と繋がっていますし」

リンディの言葉にフリートは納得の声を出し、スカリエッティと会う事を進言する。

それを聞いたリンディは悩むような表情をするが、すぐに決意を固め、全員の顔を見渡しながら声を出す。

「・・・・・良いでしょう。私としてもスカリエッティと会う方が良いと思っていましたし、例の人物の情報を手に入れる為にも外の世界の協力者は必要ですしね」

「決まりだな、会う日になったら貴様が行け」

「・・・・・・すいません？良く聞こえなかったのでもう一度言って貰えませんか？」

ブラックの言葉にリンディは一瞬呆気にとられた様な表情を浮かべるが、すぐに笑みへと変わりブラックに質問を返す。

しかし、ブラックはリンディの言葉を聞いても全く表情を変えずに同じ言葉を繰り返す。

「貴様が行けと言ったのだ。俺はデジモン達を探す」

「・・・・・どうやら、本気で叩きのめさないといけないようですね。表に出なさい！言っても分からないのなら体に教えて上げますよ！！」

「良いだろう、貴様とはそろそろ決着を付けたいと思っていた所だ」

ブラックとリンディはそう言い会うと研究室を出て行く。

そして少し経つと、遠くから激突音が響き始め、部屋の残っているルイン達は顔を見合わせ溜め息を吐くのだった。

高町なのはの撃墜。及び再び漆黒の竜人が現れた情報は管理局中に激震を与えた。

二年間全力で探し続けても見つからなかった存在が、簡単に姿を見せた上に、既にエースと呼ばれていたなのはを歯牙にもかけずに撃墜した事で、管理局は再び上から下への大騒ぎに成ったのだ。

そしてなのはの怪我の手術を行なっているミッドチルダの病院の手術室の前では、フェイト達が集まりヴィータに事情を聞いていた。

「・・・・アイツがなのはをやったんだね、ヴィータ？」

「・・・・・ああ、アイツ、ブラックウォーグレイモンがなのはを落としたんだ。それだけじゃなくて、アイツは二年前よりも強くなっていやがる。なのはのスターライトブレイカーをまともに受けても平然としてやがった」

『！！！！』

ヴィータの告げた事実に周りの者達は目を見開き、顔を見合わせ

た。
　なのはのスターライトブレイカーはこの場に居る全員が防御する事も不可能な上に、まともに受けたら一撃で気絶してしまうほどの威力が在る。にも、関わらず、その最強の砲撃が直撃しても、ブラックにはダメージが与えられなかったと告げられたのだから、驚くのも当然だろう。
　そして全員が驚愕の表情を浮かべる中、突如として手術室の扉が開き、シャマルが姿を現すと、フェイトがシャマルに詰め寄る。
「シャマル！なのはは如何なの！？」
「・・・・・傷自体は信じられない事に、貫通していた筈なのに全く内臓を傷つけていなかったの。まるで針の穴に糸を通す様な正確さで貫通していたわ」
「では、高町は大丈夫なのだな？」
　シャマルの言葉にシグナムは安心した表情を浮かべて質問するが、シャマルは首を横に振る。
「いいえ、彼にやられた傷は全く問題ないんだけど、別の所に問題が在るわ」
「何だと？」
「なのはちゃんの体には信じられないほどの疲労が蓄積されていたのよ。それがなのはちゃんの体を蝕み・・・・・なのはちゃんは現段階では歩く事も、魔法の使用さえも出来ない状態に成っているわ」
『ッ！！！！』

シャマルの告げた事実にその場に居る全員が悲痛の表情を浮かべ、慌てて未だに手術室の中から出て来ないなのはの事を心配する中、ヴィータはなのはが落ちた時に自身のデバイスから聞こえて来た声を思い出していた。

『貴様の仲間も薄情なものだ。その様な状態に成っている事も気が付かないとは』

（アイツは、一目見ただけでなのはの状態に気が付いたのに、傍に居たアタシが気付かなかったなんて、チクショウ！！）

ヴィータはブラックが一目見て気が付いたなのはの状態に、自身が気がつかずにいた事を後悔し始める。

そしてそれぞれがなのはの状態に落ち込みながら帰って行った夜になのはは目を覚まし、ブラックの言葉を思い出していた。

『俺に勝ちたければ、本当の思いを持って挑んで来い』

（・・・・本当の思い？そんなの分からないよ。だって私はずっと誰かの為に戦っていたのに・・・・それの何がいけないの？）

ブラックの言葉に意味が分からず、なのはは涙を悲しみの涙で濡らすのだった。

そして時は進み二日後。ジェイルとの待ち合わせの場所には、不機嫌そうな表情をしているブラックと勝利者の笑みを浮かべているリンディに、ルインとガブモンが存在していた。

そのリンディに笑みにブラックはますます不機嫌そうな表情をすると、リンディへと顔を向ける。

「憶えておけ、貴様は何れ必ず殺してやる」

「フッ、私に敗北したのが、そんなに悔しいんですか？」

「おのれぇ！」

リンディの言葉にブラックは凄まじい殺気を放ちながらリンディへと怒りの声を出した。

その様子を後ろから見ていたルインとガブモンは、この場所に来る前の事を話し始める。

「・・・・・ブラック様もアレには勝てませんでしたか」

「いや、アレは最強ですよ。何せオファニモン様を初めとした、三大天使デジモンの方々も勝てなかったんですよ。リンディさんのお茶、通称リンディ茶には」

ルインの言葉にガブモンは恐怖に震えた声で答えた。

実は此処に来る前に、ブラックは何時も通り好き勝手に行動しようとしたのだが、行く直前になってリンディが立ちはだかり、自身のお茶を飲んでから行けと叫び、それを聞いたブラックは怒りを顕にしながらも、リンディの言葉に従って此処に来たのだ。

そしてブラックがリンディに怒りの表情を向けていると目の前に転送用の魔方陣が姿を現し、紫色の髪の女性ーウーノが姿を現した。

「始めましてナンバーズ１のウーノと言います」

「挨拶は良い、さっさと俺達をスカリエッティの下に連れて行け」
「良いのですか？我々は敵に成るかもしれないというのに？」
ブラックの言葉にウーノは質問するが、横に居るリンディが首を横に振りながら呆れた声を出して告げる。
「この人に何を言っても無駄ですよ。私が考えた作戦を何度無駄にしてくれた事か」
「・・・・苦労されてるのですね。分かりました、それではドクターの所に転移します」
ウーノはリンディに哀れに満ちた視線と共に言葉を告げると、再び転送用の魔方陣を発生させ、その場に居る全員は転移した。

ウーノの案内でスカリエッティの研究所へとやって来たブラック達は、研究所の主であるスカリエッティと向き合っていた。
「良くぞ来てくれたよ。ブラックウォーグレイモン君」
「挨拶は良い。俺達が此処に来たのは貴様に聞きたい事が在るからだ」
「ふむ、何かね？」
「倉田明弘、ソイツの名前に聞き覚えが在るか？」

スカリエッティの質問にブラックは倉田の名前を出して質問する。
ブラック達がスカリエッティに会いに来たのは、全てデジモンを裏で操っている倉田の情報をスカリエッティなら知っていると思っていたからだ。そしてそれは当たった。

「倉田明弘・・・・・ああ、確かに知っている。私と同じように管理局が違法研究を行わせている人物の中に、確かにその名前が在るよ」

「ビンゴでしたか。やはり管理局が保護していたんですね」

「奴は言うなれば次元漂流者。管理局なら保護していてもおかしくないと思っていたが、如何やら正解だったようだ」

スカリエッティの言葉にリンディとブラックは自分達の考えが当たっていた事に笑みを浮かべながら、再びスカリエッティに質問する。

「奴が何処にいるか知っているか？」

「それは残念だけど知らないね。彼は私以上に上層部の連中に護られている。何の研究をしているのかも知らないのさ。さて、君達の質問には答えた。会わせて貰えないかね？」

「・・・・・良いだろう。だが、今度は俺達の場所に来て貰う事に成るがな、奴はあの場所から動けないのでな」

「ふむ、何処かね？」

「アルハザード」

『！！！！』

ブラックの告げた場所の名前にスカリエッティと横に居るウーノは驚愕の表情を浮かべた。

アルハザード。それは次元世界では伝説と称される次元世界の名前であり、スカリエッティに取っては自身のルーツと成った場所の名前でも在るのだ。

ブラックの言葉を聞いたスカリエッティは興奮を隠せないと言う表情をして、ブラックに質問する。

「本当にアルハザードは実在するのかね？」

「ああ、最も既に人間は全て滅び、残っているのはホストコンピュータの管制人格だけだがな。そして貴様が会いたいと思っているのは、その管制人格だ」

「・・・・・・フフフフフフッ、嬉しいよ！彼のプレシア女史すら辿り着けなかったアルハザードの大地に私が立つ！！興奮が収まらないよ！是非行かせてくれたまえ！」

ブラックの告げた事実にスカリエッティは歓喜の声を上げてブラック達の傍に寄ろうとした瞬間に、研究所に警報音が鳴り響く。

ーーービィビィビィッ！！

「ドクター！！管理局です！」

「ふむ、上層部達の話では来るのは明日だと聞いていたのだが、無粋だね。これからアルハザードへと渡ると言うのに」

ウーノの報告にスカリエッティは不機嫌そうな表情を浮かべていると、ブラックがスカリエッティに声を掛ける。

「俺がやろう。丁度暴れたいと思っていた所だ。貴様はアルハザードで高みの見物でもしていろ」

「ブラック様は無理やり連れて来たので、かなり機嫌が悪いんですよ」

「ふむ、良いだろう。だが、私の娘達も戦わせて貰うよ。実戦データも欲しいのでね」

ブラックとルインの言葉を聞いたスカリエッティは少し考える様な表情をするが、ブラック達の戦闘をこの目で見られると考え了承した。

それを確認したブラックは、暗い表情をしているリンディに顔を向ける。

「お前はアルハザードに戻れ。嘗て所属していた組織の者達と戦うのは辛いだろうからな」

「・・・・・・こういう時だけは優しいんだから、本当に困りますね。分かりました。アルハザードに戻って戦いを観戦していますね」

ブラックの言葉にリンディは苦笑を浮かべるとブラックの言葉を了承し、スカリエッティとウーノと共にアルハザードへと転移した。

三人が転移したのを確認したブラックは残っているルインとガブモンに目を向ける。

「行くぞ、ルイン。それにガブモン、久しぶりに存分に暴れろ」

「了解ですよ、ブラックさん！」

ブラックの言葉にガブモンは笑みを浮かべて叫び、それを見たブラックは好戦的な笑みを浮かべて、気配が感じられる場所へと向かい出した。

研究所の通路の中で両腕に小手型のデバイスを装備した女性は、自身の横に居る紫色の髪を持った女性と共に、周りに居るガジェット？型達と戦闘を繰り広げていた。

「隊長は無事なの！？メガーヌ！」

「戦闘機人らしき少女と戦闘を行なっているみたいよクイント。今、他の局員達が援護に向かった見たいね！」

「そう、ならさっさと倒して私達も援護に向かいましょう！」

メガーヌの言葉にクイントは叫び、再びガジェットに目を向け攻撃を再開しようとする。

しかしその直前に、通路の奥から青い炎の様なものが飛び出して来る。

「プチファイヤーーー！！」

「くっ！プロテクション！！」

通路の奥から突如としてプチファイヤーがクイント達に向かって放たれ、クイントは慌てて防御魔法を発動させるが、プチファイヤーはクイント達ではなく周りのガジェットへと直撃し破壊された瞬間に、ガジェットから蒼いデジコードが発生する。
そしてデジコードは通路の奥へと消えて行き、クイントとメガーヌが疑問の表情を浮かべていると、通路の奥から毛皮を被った生物ーガブモンがクイント達の前に姿を現した。

「ふ～ん、これがルインさんの言っていたＡＭＦか。こんな物が在ったら戦いが楽しめませんよね、ブラックさん？」

「そうだな」

ガブモンが後ろへと声を掛けると、通路の奥からブラックが姿を現し同意を示す。
ブラックの姿を見たクイントとメガーヌは驚愕の表情を浮かべ、ブラックを見つめながら叫ぶ。

「まさか！？広域次元犯罪者『漆黒の竜人』！！如何してこの研究所に！？」

「偶然だ。貴様らも運が無いな。俺が立ち寄った日に研究所を襲撃するとは」

「クッ！！」

ブラックが言葉と共に構えを行い、それをみたクイントとメガーヌはそれぞれデバイスを構え出し戦闘を開始した。

「リボルバーナックル！！」

「ガリュー！！」

クイントは自身の足に付いているローラーブーツを起動させながらブラックへと接近し、自身の両腕に付いているデバイス－リボルバーナックルから薬莢を射出し魔力を高め、メガーヌも自身の守護獣、昆虫と人間を合わせた様な生物－ガリューを呼び出しガブモンへと向かわせる。

しかい、クイントとメガーヌの動きを見てもブラックとガブモンは慌てずにブラックはクイントへと、ガブモンはメガーヌとガリューに向かい出す。

「ハアッ！」

「ムン！！」

ーーーガアン！！

クイントは全力で自身の拳をブラックへと振り下ろすが、ブラックはその一撃をドラモンキラーで簡単に受け止める。

それを見たクイントは一瞬悔しそうな表情を浮かべたが、表情をすぐに戻し、次々とブラックへ拳を放ち続ける。

しかし、その連続攻撃を持ってしても、ブラックの防御を破る事が出来ずに、再びクイントが悔しそうな表情を浮かべた瞬間に、メガーヌの悲鳴が通路に響く。

「ガリューー！！！」

「メガーヌ！如何し・・・・・」

メガーヌの悲鳴にクイントが顔を向けながら、如何したのかと聞こうとするが、その言葉は途中で途切れた。
何故なら通路を埋め尽くすほどの大きさを持った巨大な狼が存在し、ガリューはその獣の前足で動けない状態にされていたのだ。
その狼の姿にブラックは疑問の表情を浮かべて、狼に目を向けると質問する。

「ガルルモン、進化する必要が在ったのか？」

ガルルモン、世代／成熟期、属性／ワクチン種、種族／獣型、必殺技／フォックスファイヤー
極寒に生息している狼のような姿をしている獣型デジモン。全身が青白く輝く毛に覆われていて、そのひとつひとつは伝説のレアメタルと言われる『ミスリル』のように硬い。獲物を見つけ出す勘と、確実に仕留める力をもっているため、他のデジモンから恐れられている。またとても賢く主人に従順で、なつきやすい性格をしているとの情報も存在している。『グレイモン』同様生息範囲が広く、属性もワクチン・データ・ウィルスと全てのパターンが確認されている珍しい種だ。必殺技は蒼い炎を口から放つ『フォックスファイヤー』だが、その他にも口から氷を放つなど、氷関係の技も数多く所有しているぞ。

「成長期のままでは、少し苦戦しそうだったんで進化したんですよ」

「そうか。しかし、そろそろ遊びの時間は終わりだ。如何やらフリートの奴が其処の女を欲しがっているようだからな」

ガルルモンの言葉にブラックはそう答えながら、クイントに目を向ける。
そして目を向けられたクイントが疑問の表情を浮かべた瞬間に、

ブラックは瞬時にクイントの目の前に現れ壁に向かってクイントを蹴り飛ばす。

「フン！！」

ーーードゴオン！！

「ガハッ！！」

「クイント！！」

ブラックの蹴りをクイントは防御する事も出来ずに壁へと吹き飛ばされ、壁にめり込み苦痛の声を上げる。

それを見たメガーヌは慌ててクイントの救助に向かおうとするが、何時の間にメガーヌの後ろに移動していたブラックがドラモンキラーの刃を突き出し、背中から突き刺さる。

ーーーグサッ！！

「グフ！！」

「やはり魔導師程度ではこの程度のレベルか」

「・・・・メガーヌを・・・・・離しなさい」

自身のドラモンキラーに突き刺さっているメガーヌを見ながらブラックが呟いていると、壁から這い出てきたクイントがブラックの背後から声を掛ける。

ブラックが声の聞こえた方に目を向けると、もはや立っているのがやっとだと言うのに拳を構えるクイントの姿が在り、ブラックは

笑みを浮かべる。

「ほう、まだ戦えるのか。ガルルモン、この女を預かっていろ」

ブラックは立ち上がったクイントの姿に笑みを浮かべながら呟くと、気絶しているメガーヌをガルルモンへと投げ飛ばし、ガルルモンが背にメガーヌが乗るのを確認し、再びクイントに目を向ける。

「貴様は中々骨が在る。故に俺も次の一撃は全力で放とう」

「光栄ね。漆黒の竜人にそう言われるのは」

ブラックとクイントは互いに笑みを浮かべながら言い合うと、それぞれ構えを行い出し同時に駆け出した。

「ドラモンキラーー！！」

「リボルバーストライク！！」

ブラックのドラモンキラーとクイントの両腕の拳は激突し、二人が交差する様に互いの後ろに回りこんだ瞬間に、クイントの両腕は肩の辺りから切り落ち、夥しいほどの血が吹き出し、クイントは床に膝をついてしまう。

ーーービシャァァァァァーーー！！！

「あなた、ギンガ、スバル、ご・・・・め・・・・ん・・・な・・・・・さ・・・・い」

クイントは自身の夫と娘達の名前を呟くと、自身の血の海に崩れ

落ちる。
　それを確認したブラックはクイントへと近寄り、息が在るのを確認すると、ネックレスに声を掛ける。
「終わったぞ、さっさと連れて行け」
『了解ですよ！！正しく彼女は私の構想した新たなバイオデジモンに相応しい存在！！』
『うむ！！フリート君の技術をこの目で見て協力出来るとは！！楽しみだよ！！』
　ブラックの言葉にフリートとジェイルは歓喜の声を上げて答えると、クイントの足元に転送用の魔方陣が出現し、クイントとは転移して行く。
　それを確認したブラックはメガーヌを背中に乗せたままのガルルモンと共に、残っている局員達の排除へと向かい出し、後には夥しいほどの血とクイントの両腕だけが残るのだった。

出会った二人、マッドの暴走（後書き）

次回予告

ゼスト隊との戦闘を終えたブラック達はクラナガンへとやって来ていた。

そして其処でガブモンは失意にくれる少女と出会い友達に成る。

しかし、突如としてクラナガンの街にデジモンが姿を現す。

そして人々と少女を襲い始めた瞬間にガブモンは更なる進化を手に入れる。

次回、漆黒の竜人と少女、『友情の進化、吼えろワーガルルモン』

少女は運命と出会い、真の思いを手に入れる。

友情の進化、吼えろワーガルルモン

スカリエッティ達と邂逅を終えたブラック達は一応の協力体制を整えると、すぐさまアル ハザードへと戻り、研究室で今後について話し合っていた。

「さて、外の世界での協力者も手に入れた事ですし、倉田と言う人物の捜索は彼らに任せるとして、私達はデジモンが暴れ始めたら倒しに向かうと言うのが現在のベストな作戦ですね」

「それが良いでしょうね。僕はともかく、ブラックさんやルインさん、そしてリンディさんも管理局って言う組織に追われていますからね」

リンディの言葉にガブモンは同意を示し、ルインとフリートも頷く中、ブラックだけは壁に寄り掛かったまま何かを考え始める。

それに気が付いたリンディは、すぐさまブラックが考えている事を読み取り、不機嫌そうな表情をして釘を刺す意味も込めて、ブラックに声を掛ける。

「良いですね？」

「ふん、俺は俺の思うままに動かせて貰うぞ」

ブラックはリンディに質問に素っ気無く答えると、すぐさま寄り掛かっていた壁から離れ、研究室を出て行った。

そのブラックの行動と言葉に。残された者達は溜め息を同時に吐くと、リンディはフリートへと顔を向け質問する。

「それでフリートさん？彼女はどれぐらいで目覚めるんですか？」
「後一、二ヶ月は掛かりますね。彼女の場合は貴女ほど魔力が無いのも関係しているんですが、腕を再生させないといけませんからね」
「そうですね。それにしても流石はブラック様と言うべきか、切り落ちた部分の細胞に全く破損がありませんでしたね」
「それが無ければ機械の腕でも、付けないといけませんでしたよ」
ルインの言葉にフリートは苦笑を浮かべながら答えた。
先日のスカリエッティの研究所襲撃の時に連れ去られたクイントは現在、フリートの研究室のカプセルの中に入って腕の再生治療の真っ最中だった。既にスカリエッティとの技術交換も終わっているので、腕の再生が終わり次第フリートは、新たなバイオダークタワーデジモンの実験を始めるつもりなのだ。
そのフリートの言葉にリンディが複雑そうな表情を浮かべ始めた瞬間。
ーーービィィィィィーーー！！！
近くのコンソールから、警報音が鳴り響き、フリートがすぐさまコンソールを操作し、情報を調べ始める
「デジモンの反応ですね。場所はミッドチルダのクラナガンのようです」
「ミッドですか、となると隠れて動くしか在りませんね」
フリートの告げた場所にリンディは険しい表情をして答え。

何せ、ミッドは管理局の発祥の地である為に、同然ながらリンディ達が指名手配に成っている事は知れ渡っている。その場所で表立って動けば、すぐさま管理局が動き、リンディ達を抹消しようとするだろう。管理局がリンディ達やブラックを抹消出来るのかは、ともかくとして目立たない様に動くのが最善なのだ。

「とにかく、急いでミッドに向かいましょう。デジモンの存在は出来るだけ一般人と表の局員に知られる訳にはいけません、少なくとも今はまだ」

リンディは険しい表情をしながら、ルイン達にそう告げた。

既にリンディには倉田の戦略がある程度読めていた。恐らく倉田はデジモンと言う存在を人々に危険な存在だと植え付ける積もりなのだ。

そしてある程度人々がデジモンに恐怖を覚え始めた所で、デジタルワールドの存在を発表して一気にデジモンと人間の戦争を行なわせようとしている。そして両者が疲弊し始めた所で、倉田は表舞台に立ち次元世界の支配と言うのが倉田の戦略だろう。

(既に上層部は彼に取り込まれていると考えるべき。皮肉ね。もしあの時に彼と歩む決意を行なっていなければ、この危機に気がつく事は出来なかった。人生は本当に複雑ね)

リンディは複雑そうな表情をしながら、内心でそう考えていた。

確かにブラックに一度殺され、バイオダークタワーデジモンに成っていなければ、未だに管理局を信じていただけではなく、幾つもの違法を見逃していた上に、倉田の野望に気がつかずに管理局の方針のままに動いていただろう。

その事が今のリンディには簡単に予想出来るのだから、人生は本当に複雑なものである。

そしてリンディ達はブラックにデジモンの事を知らせ、クラナガンへと向かい出すのだった。

クラナガンに存在する数多くの病院の一つの屋上。
その場所には、車椅子に乗ったなのはが存在し、ずっと言葉も喋る事無く、起きてからずっと空を眺めていた。

「・・・・・如何すればいいのかな？・・・・・・もう空を飛ぶ気にもなれないよ」

なのはは意識を取り戻してからずっとブラックの言葉が頭から離れずにいた。
“戦う前から逃げているなのはには興味が無い”。
ブラックがなのはに告げた言葉は、正になのはの心の真実を貫き、跡形も無く心を打ち砕いていたのだ。
今までなのはは誰かを助ける為に動いていた積もりだった。だが、違ったのだ。
なのはがしていた事は全て誰かの為ではなく。自分が孤独で居たくないと言う身勝手な想いでしかなかった。誰も気がつかなかった。
なのはは自身でさえ気がついていなかった本当の想いをブラックは簡単に気づき、なのはの心を覆っていた壁を完全に打ち砕いてしまったのだ。
その為になのはは意識を取り戻してからずっと無気力になり、家族や友達のフェイト達の言葉を聞いても何も感じなくなってしまっていた。

「・・・・・ゴメンね、皆」

なのはは悲しみに満ちた表情を浮かべながら言葉を呟くと、車椅子を動かし、屋上の扉へと姿を消して行った。
一時間後、フェイト達がなのはの見舞いに来て見ると、病院では大騒ぎが起きており、なのはが消えた事を知ったフェイト達は慌ててクラナガンの街に飛び出すのだった。

その頃、クラナガンの一つのビルの屋上ではブラック達が、クラナガンの街並みを見渡しながら話し合っていた。

「デジモンの気配が在るのは間違い無いが、上手く隠れているようだな」

「そうみたいね。此処は別れて捜索しましょう」

ブラックの言葉にリンディが同意の声を上げ、自分達の動き方を告げると、その場に居る全員が同意するように頷いた。
そしてルインは何処からとも無く茶色のフードが付いたコートを取り出し、ガブモンに着せ始める。

「ガブモンちゃんはその姿のままだと目立ちますから、このコートを着て下さいね」

「うん、ありがとうルインさん」

コートを着せてくれたルインにガブモンは礼を言うと、ルインは笑みを浮かべ、リンディも笑みを浮かべるが、ブラックだけは気にせずにクラナガンの街に顔を向ける。

「行くぞ。デジモンが本格的に動く前に叩く」

ブラックが険しい表情をして告げた言葉に全員が頷き、クラナガンの街へとブラック達はそれぞれ向かい出した。

そしてブラック達と違って空を飛べないガブモンは、茶色のコートを着ながら街の中を歩き回り、周りの建物を物珍しそうに見渡していた。

「此処がリンディさんが言っていたクラナガンの街か。デジタルワールドの街よりも大きな建物が多いな」

ガブモンはクラナガンとデジタルワールドの街の違いに物珍しそうに歩いていると、人通りの無い場所で何かが動くのを目撃し、警戒の視線を向ける。

（リンディさんの話だと、この辺りは滅多な事では人が通らない場所。もしかしてデジモンかな？）

ガブモンは見えた影の事をデジモンだと思い、慎重に影の方に移動を始める。

そして怪しい影が再び動き始めるのを確認したガブモンは逃がさないと言うように、影に向かって駆け出し、腕を上げて飛び掛かる。

「タアッ！！」

「キャッ！」

「へっ？」

ガブモンが影を驚かすように叫ぶと、影は女の子の様な悲鳴を上げて蹲り、ガブモンが疑問の声を上げながら影を注意深く見てみると、車椅子に乗った少女ー高町なのはが怖がるように、車椅子に乗りながら頭を抱えていた。
その恐怖に震えるなのはの姿を見たガブモンは慌てて、なのはに向かって頭を下げる。

「ゴメン！不審者かと思って！？」

「・・・・ヒック、ヒック、ヒック、フェェェェン！！」

「ウワァァァー！ゴメン！本当にゴメンよ！！」

突如としてなのはは大声で泣き始め、それを見たガブモンは慌ててなのはを泣き止まそうと謝り続けるが、結局なのはが泣き止む事は無く、二人は少し間、混沌とした空間を生まれたのだった。

そして暫く経つとなのはは漸く泣き止み、ガブモンはなのはから詳しい事情を聞いていた。

「じゃあ、君が泣いていたのは色々とあって一人で考え込んで居た所に、僕が現れて驚いたからなんだね？」

「うん・・・ゴメンね。え～と？」

「僕はガブモンだよ！」

「ガブモン君か、私は高町なのはだよ」

ガブモンとなのははそれぞれ自身の名前を言い合うと笑みを浮か

べあい、話をしようとするが、その前にガブモンは、疑問に思っていた事を思い出し、なのはに質問する。

「そう言えば、なのはは何でこんな事に一人で居るの？」

「・・・・・一人で考えたんだ。本当の想いって何なのかなって？」

「えっ？」

なのはの言葉にガブモンが疑問の声を上げると、なのはは自分が此処に居る理由を話し始めた。

管理局の任務中で怪我を負って、その怪我を負わせた人に自分の想いを否定された上に、自分が誰かの為ではなく孤独から逃れたい為だけに戦っていた事が分かり、自分がこれから如何すれば良いのか分からなくなったとガブモンに話すのだった。

それを聞いたガブモンは顔を俯け、自分の過去を話し始めた。

「僕もね、一年位前にある人と出会うまで、ずっと力に付いて悩んでいたんだ」

「えっ？」

「僕の種族は進化する事で強くなるんだけど、僕が居た場所で進化出来るのは僕だけだったんだ。それで僕が村の皆を護るっていきがって居たんだけど、村の皆は悪い奴らに殺されたんだよ」

「ッ！！！！」

ガブモンの告げた言葉になのはは驚愕の表情を浮かべるが、ガブモンは顔を俯けたまま話を続ける。

「悪い奴らは結局僕らの世界の英雄の人達に倒されたらしいんだけど、皆は帰って来なかった。それから僕は一人で歩き回って戦いを繰り返していたんだ。そんな時にあの人は現れた。僕なんかが挑んでも絶対に勝てないって分かっていたけど、それでも僕はあの人に挑戦したんだ。だけど、あの人はこう言ったんだ。『貴様の目は死ぬ事を望んでいる奴の目だ。戦う前から死んでいる奴に興味は湧かん』って言われてショックを受けたんだ」

「・・・・それから如何したの？」

何時の間にかなのははガブモンの話から耳を離せなくなっていた。ガブモンの話は形は違うがなのはの状況に良く似た話なのだから、興味覚えざる得ないだろう。

「それからあの人に何度も挑みかかったよ。絶対に戦って貰うって息巻いたんだ。でも、結局は相手にもされず毎回無視されて終わったけど、何時の頃からか、あの人に憧れを抱く様になったんだ。あの人の様に迷い無く進みたいって」

「そうなんだ。会って見たいなガブモン君が憧れる人に」

ガブモンの言葉になのははそう言いながら笑みを浮かべるが、まさかガブモンの憧れている人物が、自分の想いを否定した人物だとは思っても見なかったのだ。

その様子にガブモンは笑みを浮かべ、なのはに告げる。

「なのは、君が孤独から逃れたいと本当に思っているのなら、自分の本当の想いを家族や友達に伝えるんだ。そうすれば君は孤独じゃなくなる」

「・・・・でも、今更」

「大丈夫だよ。友達って言うのは少しの我が侭を言った位で嫌いには絶対に成らない。だから、勇気を持って進んでみなよ。そうすれば君も本当の想いが見つかるかもしれないよ」

不安そうな表情を浮かべるなのはの手を握りながらガブモンが励ますように言葉を告げると、少しだけなのはの顔色が良くなりガブモンの言葉に頷こうとした瞬間に、人通りの在る方から悲鳴が聞こえて来る。

『キャアァァァーーー！！』

「何だ！？」

「あっ！ガブモン君！！」

聞こえて来た悲鳴にガブモンは困惑の声を出しながら悲鳴の聞こえて来た方に向かって駆け出し、なのはも慌てて車椅子を操作しガブモンの後を追って行く。

そして人通りが在る場所にガブモンが出て見ると、巨大な赤いクワガタの様な生物と、巨大なニワトリの様な生物が街を破壊していた。

クワガーモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／昆虫型、必殺技／シザーアームズ

赤い体を持った巨大なクワガタ型の凶暴な昆虫型デジモン。全身がかたいカラに守られているため、防御力にもすぐれている。パワーも強力で、ハサミの部分で一度敵を鋏むと、倒れるまで離さない。

カブテリモンとはライバル関係にある。必殺技の『シザーアームズ』は、頭部に付いている巨大なハサミを使って真っ二つにする技だ。

コカトリモン、世代／成熟期、属性／データ種、種族／巨鳥型、必殺技／ペトラファイヤー

地上で長く生活していた為に、羽が退化し飛べなくなってしまった巨鳥型デジモン。しかしその代わりに足が発達し、走るのが得意になった。荒々しい性格だが、大きな体を持つため戦いはあまり好まない。必殺技は、目から緑色の光線を放ち相手を石化させてしまう『ペトラファイアー』だ。

「クワガーモンにコカトリモン！！くっ！どっちも成熟期か！」

「ガブモン君！」

クワガーモンとコカトリモンの姿を見たガブモンが叫んでいると、背後からなのはの声が響き、ガブモンは険しい表情をして、なのはに向かって叫ぶ。

「来ちゃ駄目だ！こいつ等はどっちも危険なデジモンなんだ！！」

「えっ？デジモンって？」

ガブモンの叫びになのはが疑問の声を上げて立ち止まった瞬間に、コカトリモンがガブモンとなのはに目を向け、力を目に込め始めた。

それを見たガブモンはなのはを庇う様に、コカトリモンに向かって駆け出し、体から蒼いデジコードを発生させ始める。

「カブモン進化！！」

ーーーギュルルルルルッ！！

「えっ？」

カブモンが叫ぶと共に、カブモンの体から発生していたデジコードがガブモンの体を覆って行き、巨大な繭の様な物が形成し始める。

なのはがその様子に疑問を覚えた瞬間に、デジコードの中から巨大な銀色の狼ーガルルモンが飛び出し、ココカトリモンに突進する。

「ガルルモン！！」

ーーードゴオン！！

「ギエッ！」

ガルルモンの一撃にココカトリモンは倒れ伏し、ココカトリモンが倒れ伏したのを確認したガルルモンは残っているクワガーモンに目を向け、青い炎を口から放つ。

「フォックスファイヤーー！！」

「ギエアッ！！」

ガルルモンが放ったフォックスファイヤーはクワガーモンに直撃する前に、クワガーモンは上空へと逃れ、その隙に立ち上がったココカトリモンがガルルモンに目を向け、ペトラファイヤーを放つ。

「ペトラファイヤーーーッ！！」

ーーーピィィィィィーーーー！！

「くっ！」

コカトリモンの攻撃をギリギリの所でガルルモンはかわし、コカトリモンとガルルモンは互いの隙を探すように睨み合いを始める。

その様子を近くの建物の影から伺っていたなのはは、僅かに困惑の表情を浮かべ、コカテリモンと睨み合っているガルルモンの姿を見つめていた。

「・・・・・アレが・・・・・ガブモン君なの？」

なのははガブモンが進化したガルルモンの姿に、困惑の声を出すしかなかった。

ガブモンとは少ししか話はしていなかったが、それでも優しい生物だと思っていたのに、今、なのはの目の前で繰り広げられている戦いは、命を懸けた戦い。なのはが経験した事も無い、互いの命を屠る戦いを優しいと思っていたガブモンが平然と行っているのだ。困惑するのも当然だろう。

そしてなのはが困惑している間にも戦いは続き、ガルルモンは再びコカトリモンに突撃した。

「ハアァァァァーー！！フォックスファイヤーーー！！」

ーーーゴオオオオオオーーーー！！！

「ギエェェェェーー！！」

ガルルモンの一撃にコカトリモンは再び倒れ付すと、ガルルモンは再び口からフォックスファイヤーを放ち、コカトリモンは体を青

い炎に焼かれながら、データの粒子へと変わりデジタマに変化した。
それを確認したガルルモンは、安堵する事も無く険しい表情を浮かべたまま、残っている上空でガルルモンの様子を見ていたクワガーモンへと目を向け、攻撃を開始しようとする。
しかし、その直前に、周りの建物の影から次々とデバイスを構えた管理局の局員達が姿を現し、ガルルモンへと砲撃を放つ。

『うてぇぇぇーー！！』

ーーードドドドドドドゴオオン！！！

「ガアァァァーー！！」

「ガブモン君！？」

局員達の砲撃を体に受けたガルルモンは苦痛の声を上げ、ガルルモンの声を聞いたなのはは悲鳴の様な声でガブモンの名を呼んだ。
しかし、ガルルモンは体に浴びせられ続ける砲撃に苦痛の声しか上げる事が出来ず、なのはは戸惑うような表情をして、ガルルモンを攻撃し続けている局員達を見つめ始める。

「何で？何でなの？だって、ガブモン君は街の人達を護って居たんだよ。それなのに何で攻撃するの？」

なのはには局員達の行動の意味が分からなかった。
ガブモンは進化してまで街の人々を護る為に戦っていた。にも関わらず、管理局の局員達は関係無いと言わんばかりに次々とガルルモンに向かって砲撃を放ち続けている。ガルルモンの行動の意味が分かってるなのはからすれば、疑問しか浮かばないだろう
そしてなのはが疑問を感じ続けていると、上空からフェイトとは

やてが降りて来て、なのはに慌てて声を掛ける。

「なのは！すぐに此処から離れよう！！」

「そうや！此処に居たら危険や！！」

フェイトとはやては此処に居たら危険だと言い、なのはを戦いの場から離そうとするが、なのははその場から動かずに、フェイトとはやてに向かって叫ぶ。

「お願い！フェイトちゃん！はやてちゃん！ガブモン君への攻撃を止めて！！」

「えっ？ガブモンって？あの巨大な狼のこと？」

なのはの言葉にフェイトは未だに砲撃を受け続けているガルルモンへと目を向けると、なのはは目に涙を浮かべながら頷く。

「うん！ガブモン君は街の人達を護る為に戦っているんだよ！だからお願い！！」

「・・・・・・ゴメンなのはちゃん。攻撃は止められへんのや」

「如何して！？」

はやての言葉になのはは悲鳴の様な声を上げ、なのはの叫びを聞いたフェイトとはやては辛そうな表情を浮かべながら、理由をなのはに告げる。

「上層部の命令で、あの生物達は危険な生物だから処分するように

命令が下ったんや」

「そんな！？何で！？ガブモン君が処分される理由なんて無いよ！！」

はやての言葉になのはが悲鳴の様な声を出した。
なのはからすれば、例え進化して姿は変わっても、ガルルモンが敵には如何しても思えなかったのだ。
その事をはやて達に詳しく説明しようとするが、その直前に。

「ガハッ！！・・・・・・・」

ーーードオオン！！

ダメージが限界に至ったのか、遂にガルルモンは大地に倒れ伏してしまった。

「ガブモン君！！」

「なのは！！」

「危険や！もどウワッ！！」

ーーーブウゥゥゥゥゥゥゥゥゥン！！

倒れてしまったガルルモンの姿を見たなのはは車椅子を急いで操作し、ガルルモンの所へと向かい出した。
それを見たフェイトとはやてがなのはを止めようと駆け出そうとするが、その前に、上空に浮かんでいたクワガーモンが攻撃を行ない始め、慌てて周りの局員達はクワガーモンへと攻撃を開始する。

その隙になのははは倒れているガルルモンの顔の前に移動していた

「ガブモン君！ガブモン君！起きてよ！！」

「・・・・・・な・・・・・の・・・・・は・・・・・・無事だ・・・・ったんだね」

「うん、ガブモン君のお陰だよ」

ガルルモンは薄く目を開け、なのはの無事を確認すると笑みを浮かべ、なのはもガルルモンの言葉に安堵の息を付いた瞬間に、背後からクワガーモンの事をフェイトとはやてに任せて来た局員達がそれぞれデバイスをガルルモンに向ける。

ーーーカシャッ！！

「其処を退きたまえ、その生物を処理する」

「ッ！！待って下さい！！ガブモン君は悪い事は何もしていないんです！！」

「駄目だ。上層部から何を措いてもその生物と赤い生物の処理が命じられている。退かないのなら、君ごと撃つ事に成るぞ」

「そんな！？」

局員の告げた言葉になのはは悲鳴の様な声を上げた。

ガブモンは街を破壊する所か、街の人々やなのはを護ったと言うのに局員達は冷たく突き放したのだ。

管理局員が良い人だけだと思っていたなのはからすれば、悲鳴を

上げてしまうのも当然だろう。
しかし、ガルルモンは局員の言葉を聞いても気にせずに、全身を襲う苦痛に苦しみながらもなのはに顔を向ける。
「なのは・・・・・逃げるんだ・・・・・君は死ぬには早すぎる。僕は十分に生きたから良いんだよ。自分の命を大切にするんだ」
「・・・・・・嫌だよ！！」
「・・・・・君はまだ答えを見付けてない。僕はあの人達に出会えて答えを見付けた。だから、君は生きて答えを見付けるんだ」
なのはの否定の声にガルルモンは言い聞かせる様に言葉を告げた。
ガルルモンは自分のせいでなのはが死ぬのは見たくなかった。
出会ったのは二十分ぐらい前だったが、ガルルモンはなのはの事を放っては置けなかったのだ。なのはには本当の想いを知って欲しいと思い、その為にもなのはを逃がそうとする。
しかし、それでもなのははガルルモンの前から動かず、局員達からガルルモンを護るように手を広げ始める。
「・・・・・今少しだけ分かった。私はずっと誰かを助ける行動をしたくて人を助けていたんだって。だけど、そんなのは違うよね。ガブモン君の行動を見て分かったんだ。人を助けるのに理由なんて無い。だから私はもう逃げない！！孤独から逃れるんじゃない！！皆を護りたいから、大切な人達を護りたいから、ガブモン君を護りたい！！それが今の私の想いだよ！！」
「・・・・・なのは」
なのはの宣言にガルルモンは嬉しそうな表情を浮かべて笑みを浮

かべた瞬間に、痺れを切らした局員達が砲撃を放った。

『撃てェェェェェーー！！』

「ヒイッ！！」

「クッ！」

局員達が放った砲撃になのはは恐怖の声を出し、ガルルモンは力を振り絞って立ち上がりなのはを庇う様に動く。

しかし、その直前に上空から漆黒の竜巻が現れ、ガルルモンとなのはのめ野前に降り立つと。向かって来る砲撃を全て撃ち砕く。

「ブラックトルネード！！」

ーーーガガガガガガガッ！！

『なっ！？』

「えっ？」

漆黒の竜巻は局員達の放った砲撃を撃ち砕くと、漆黒の竜巻は回転を収め、その中からブラックが姿を現し、なのはと傷付いたガルルモンに目を向ける。

「ふん、少しはマシに成った様だが、やはり興味が湧かんな」

「あ・・・・・あ・・・・あ」

ブラックの姿を見たなのはは自身の思いを否定された時の事を思

い出し恐怖の声を上げるが、ブラックは気にせずに局員達に目を向ける。

「貴様ら管理局の連中は何時も戦いの邪魔をする。それがどれほど俺が気に入らないのか、その体に教えてやる。覚悟しろ！」

『ヒッ！！』

ブラックの殺意に満ちた言葉に局員達は悲鳴を上げるが、ブラックは気にせずに局員達の前に移動し蹂躙を始めた。

その間にリンディとルインがなのはとガルルモンの傍に現れ、ルインは治療魔法を発動させ全力でガルルモンに治療を行ない、リンディはなのはに笑みを浮かべながら声を掛ける。

「久しぶりね、なのはさん」

「リンディさん、如何して此処に？」

「ちょっとした用が在ってね」

なのはの言葉にリンディは答えながら上空で戦っているクワガーモンとフェイト達に顔を向けた瞬間に、クワガーモンの体からデジコードが発生しリンディは険しい表情を浮かべる。

「時間を掛け過ぎよ。ガルルモン君に任せて置けば厄介な事態には成らなかったのに」

「えっ？」

蒼いデジコードに包まれたクワガーモンの姿を見たリンディの言

葉に、なのはは疑問の声を上げながら上空を見てみると、蒼いデジコードの中から体が一回り大きく成った上に、灰色の体に成ったクワガーモンが姿を現す。

「完全体に進化されたわ」

オオクワモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／昆虫型、必殺技／シザーアームズΩ
クワガーモンが規則的進化をした昆虫型デジモン。最大の弱点だった防御力が強力になり、触角にはレーダーがついた。そしてハサミの攻撃力も進化前と比べ大幅にパワーアップした。ライバルのアトラーカブテリモンが騎士道精神を身につけたのに対し、こちらはより攻撃的な乱暴者。　必殺技の『シザーアームズΩ』は、頭部のハサミを使って相手を真っ二つにするが、ダイヤモンドでも簡単に真っ二つにしてしまう威力を持っている。

「あれに成ったらSSランクの魔導師さえも苦戦しますよ」

「ッ！！そんな！？」

ルインの告げた事実になのはは悲鳴の様な声を出しながら上空を見て見ると、確かに先ほどまで優勢だった筈のフェイトとはやてはオオクワモンの攻撃を交わすのが精一杯と成っていた。
それを見たガルルモンは立ち上がり、オオクワモンを睨み付ける。

「僕が奴を倒します！」

「ほう、面白い」

ガルルモンの叫びに局員達を全て近くのビルに叩き付けて来たブ

ラックが面白そうな表情を浮かべながら声を出し、ガルルモンに顔を向ける。

「俺は今回手を出さん。お前が奴を倒せ」

「はい！！」

ブラックの言葉にガルルモンは頷き、近くのビルの壁に爪を突き立てビルを駆け上がって行く。

それを見たなのはは不安そうな表情を浮かべるが、リンディがなのはを安心させる様に手を握ぎる。

「大丈夫よ、なのはさん。ガルルモン君は負けないわ。信じて見守りましょう」

「・・・・・・はい！」

リンディの声になのはは不安そうな表情を消してガルルモンに目を向ける。

そしてビルの屋上へと到着したガルルモンは上空に浮かぶ、オオクワモンに向けてフォックスファイヤーを放った。

「フォックスファイヤーー！！」

「えっ？あの生物？」

ガルルモンが放ったフォックスファイヤーはオオクワモンに向かうが、オオクワモンは難なく交わし、ガルルモンに標的を変え攻撃を開始する

しかし、そのガルルモンの姿を見たフェイトとはやては疑問の表

情を浮かべていた。
確かに、先ほどまで戦闘など出来ない状態だったのに、今はビルの屋上を飛び移りながら、オオクワモンの攻撃を避け続けているのだから、疑問に思うのも当然だろう。
そして疑問の表情を浮かべるフェイトとはやてに、上空へと浮かび上がって来たブラックが不機嫌そうな表情を、二人に向けながら声を掛ける。

「無様だな。ガルルモンの邪魔をしなければ奴が進化する事も無かっただろうに」

「お前は！？」

ブラックの姿を見たフェイトは怒りの表情を浮かべてバルディッシュを構えるが、ブラックは気にせずにガルルモンとオオクワモンの戦いだけを眺める。

「一つ言っておくが、貴様らがガルルモンの邪魔をしなければ事態は簡単に収拾し、奴が進化する事も無かった。進化した奴の実力は貴様ら魔導師で言うＳＳランク以上の実力だぞ」

『ッ！！！！』

ブラックの告げた事実にフェイトとはやては信じられないと言う表情をして、ガルルモンを追い続けているオオクワモンの姿を見つめた。
まさか、姿が変わっただけで其処まで実力が上がるとは思っても見なかったのだ。
デジモンの特性を知っている者からすれば、当然の事なのだが、知らないものからすれば驚く以外に無いだろう。

「分かったなら黙って見ていろ。貴様らが持っていないものを持っている者の戦いを」

ブラックはフェイト達にそう告げると、再び戦いに目を向ける。
そしてブラック達が戦いに目を向けて見ると、オオクワモンの顎をかわし続けるガルルモンが存在していた。

「クソッ！！」

凄まじいスピードで自身に迫って来るオオクワモンの突進を、ガルルモンは必死にかわしながら叫んだ。
最初はガルルモンも自身の必殺技を放ち優勢に戦いを進めていたのだが、やはり局員達に受けたダメージと一世代の違いが現れ始め、防戦一方の状態に追い込まれて行ったのだ。

（くっ！！負けられない！！この戦いだけは絶対に負けられないんだ！！なのはに教えて上げたいんだ！戦う事の本当の意味を！！だから、負けられない！！）

ガルルモンはそう内心で誓うとオオクワモンに飛び掛り、牙をオオクワモンの甲殻に突き立てる。

「ウオォォォォーー！！」

ーーーガブッ！！！

「ギェェェェェーー！！」

ガルルモンの牙は深く甲殻に食い込み、オオクワモンは苦痛の声

を上げ上空で二体は激しく暴れ回る。
だが、やはり世代の違いは大きくオオクワモンは手足を振り回しガルルモンを弾き飛ばす。

ーーードゴン！

「ガアッ！！」

吹き飛ばされたガルルモンは地上へと落下し始めるが、その前に体勢を整えたオオクワモンは顎を大きく開きシザーアームズΩでガルルモンを葬り去ろうとする。
それに気が付いたガルルモンは何とかかわそうとするが、上空では思うように動けずにシザーアームズΩの餌食に成ろうとした瞬間に、ガルルモンの耳に声が響く。

「負けないでガブモン君！！」

「なのは！！ウオォォォォォーー！！」

ーーーギュルルルルルルッ！！

聞こえて来た声にガルルモンが目を向けると、なのはを抱えたリンディが上空に浮かんでいた。
それを見たガルルモンが叫び声を上げた瞬間に、ガルルモンの体からデジコードが再び出現し、ガルルモンを覆って行き、ガルルモンは更なる進化をする。その名も。

「ガルルモン進化！！ワーガルルモン！！」

ガルルモンを覆っていたデジコードが消失すると共に中から、体

に装飾が施され二足歩行に成った狼男の様なデジモン―ワーガルルモンが飛び出した。

ワーガルルモン、世代／完全体、属性／ワクチン種、種族／獣人型、必殺技／カイザーネイル

ガルルモンが規則的な進化をした姿。２足歩行になりスピードは失ったが、攻撃力と防御力、ジャンプ力が更にパワーアップした。バトルの経験を積み重ねたことにより、機動力にあふれる戦闘をこなすようになった。必殺技の『カイザーネイル』は、両手の鋭いカギ爪で相手を切り刻む技。その他にも格闘系の技に、ガルルモンの時に使用した『フォックスファイヤー』も使用出来る。

ワーガルルモンへと進化したガルルモンは、自身に向かって来るオオクワモンの顎が閉じる前に、顎に向かって全力で蹴りを放つ。

「ガルルキックッ！！」

ーーードゴオオオオン！！

「ギエッ！！」

ワーガルルモンの強烈なキックにオオクワモンは上空へと吹き飛ばされる。

そして蹴り飛ばした反動で近くのビルの壁に着地したワーガルルモンは、自身の跳躍力を最大現に発動させ、上空に浮かんでいるオオクワモンに飛び掛り、両腕の爪をオオクワモンの胴体に向かって振り下ろす。

「カイザーネイル！！」

ーーーブザァァァァァンッ！！

「ギエェェェェーーーッ！！！！」

ワーガルルモンがオオクワモンに全力のカイザーネイルを放つと、オオクワモンは悲鳴を上げてデータ粒子へと変わり、後にはデジタマだけが残された。

それを確認したワーガルルモンは、デジタマを素早くキャッチし、近くのビルへと危なげなく着地すると、リンディに抱えられているなのはへと親指を向ける。

その様子を離れた所で伺っていたブラックは、僅かに口元に笑みを浮かべながら、ワーガルルモンの姿を見つめていた。

「フフフフフフッ、良いぞ。もっと強くなれ。お前ならば何れは、究極体の領域に来れる。その時が楽しみだぞ」

ーーーシュウン！！

ブラックはそう呟くと、その場から転移しアルハザードへと帰還して行った。

そしてワーガルルモンもビルに着地して来たリンディの下に移動し、なのはに声を掛ける。

「なのは、ゆっくりと怪我を治すんだよ。出ないとこれから起きる戦いで死ぬかも知れない」

「えっ？これから起きる戦いって？」

ワーガルルモンの言葉になのはは疑問の声を上げるがワーガルルモンは答えずに、リンディがなのはを抱き締める。

ーーーガシッ！！

「ごめんなさいね。私がなのはさんを巻き込んだようなものなのに何も出来なくて。なのはさん、故郷の地球に帰ってゆっくりと怪我の治療を理由に管理局から離れて、二年前の私が現れた時の事を考えて見て、もしあの時に彼が管理局の艦を破壊しなければ如何なっていたのか」

「リンディさん・・・・それって？」

「答えは自分で見付けなさい。管理局に敵対している私が言っても意味は無いからね。また、会いましょう」

リンディはなのはの疑問には答えずになのはから離れ、ワーガルルモンの傍に寄ると転送用の魔方陣を発生させる。

そしてワーガルルモンは転送魔方陣の上に立ちながら、なのはに笑みを向けて別れの言葉を告げる。

「またね、なのは」

「うん！ガブモン君も元気でね！」

ーーーシュウウン！！

ワーガルルモンの言葉になのはは笑みを浮かべて答え、ワーガルルモンとリンディは笑みと共にその場を去って行き、なのははフェイトとはやてが来るまでリンディとワーガルルモンの言葉の意味を考えるのだった。

友情の進化、吼えろワーガルルモン（後書き）

次回予告

なのはは傷の治療を理由に地球へと帰還した。

そしてその間に漆黒の竜人は再びミッドへとやって来て一人の男と再会する。

再び現れるデジモンに男性は挑みかかる

次回、漆黒の竜人と少女、『友との再会、そして別れ』

漆黒の竜人は一人の男の想い受け継ぎ、一人の少女に出会う。

友との再会、そして別れ

ミッドチルダのクラナガンで起きた事件から数日後。
リンディの助言通りなのはは地球へと帰還し、自身の家の自宅で傷の療養を行ないながら、二年前の事件の時の事を詳しく調べていた。

「・・・・・アルカンシェルを地球に撃たれていたら、私達だけじゃなく地球も滅んでいたよね」

なのははユーノに頼んで送って貰ったアルカンシェルの資料を読みながら、二年前の時にブラックがステルス艦を破壊していなかった時の状況を予測し、恐怖に震えていた。

「効果範囲内の完全消滅、海鳴市だけじゃなくて地表その物を消滅させるんだから、公転軌道から外れる可能性が高いよ・・・・・こんな兵器を使用しようとしていたなんて」

なのはは今更ながらあの時に、アルカンシェルが使用されていた状況を思い浮かべて恐怖に震える。
しかも、よくよく二年前の状況を思い出して見ると、ブラックが行なったのは闇の書の消滅と決闘の邪魔をされた仕返しだけだった事に気付き、頭を抱えたくなった。

「闇の書に関してはあの人も悪いけど、その後の事は完全に自業自得だよね。だって邪魔をしたら赦さないって警告されていたのに、邪魔をしたんだもん。あの人の性格だと怒るよね絶対に」

なのははそう言いながら頭を抱えていた手を、自身のお腹の方に

伸ばし始める。

「シャマルさんの話だと、傷は残らないって言うし、もしかしてあの人って結構良い人なのかな？・・・・・・それは無いよね」

なのはは一瞬、ブラックが良い人だと思ったが、すぐに思い直した。

何せ、ブラックがやっている事は結局の所は戦闘を楽しむ行為だけであり、なのはに関しては完全に興味がなかっただけなのだ。最も興味を覚えられていればなのはは、生きてはいなかっただろう。

それだけではなくなのはは、二年前の事実以外に関しても管理局に不信感を持ち始めていた。

「この前の戦いの時に、ガブモン君は街の人達や私を護る為に戦っていた。それは管理局だって映像を見て判断したんだから分かっている筈。なのに、上層部の人達は一方的にガブモン君を敵視していた。何か在るんだ。私達の知らない何かが起きようとしていて、リンディさんはその事を知ったから管理局を完全に抜けたんだ」

なのはは二年前にリンディが管理局を抜けた事にずっと疑問を持っていた。

確かに管理局はリンディの抹消命令を出してはいるが、リンディはその命令が出される前から管理局の事を信じてはいなかった。ずっと勤めていた組織なのに自分達の前に現れた時には既にリンディは完全に管理局を見限っていた。

それはつまりリンディは何かを知ってしまったと言う事だ。

管理局の信用を一瞬にして消してしまうほどの何かを。

「・・・・・怪我が完全に治るまでは管理局に近寄らない方が良いね。もう一度考えて見よう。私の本当に気持ちを」

なのは険しい表情をしながら言葉を呟くと、母親の桃子が居る場所へと車椅子を向かわせるのだった。

その頃、二つの月が浮かぶ、クラナガンの街の上空で、再びミッドへとやって来たブラックがデジモンの気配を探っていた。

「やはり居るな。しかもコイツは完全体クラス、放っておけば大惨事になる」

ブラックは険しい表情を浮かべながら呟くと地上へと向かい出し、一つのビルの屋上に着地するが、着地した瞬間に、背後からオレンジ色の魔力弾がブラックに向かって来た。

ーーーズガガガガガガガガッ！！

「ムッ！」

ーーーバシュン！！

自身に向かって来る魔力弾に気が付いたブラックは瞬時に左腕を振り上げ、風圧を魔力弾に向かって放ち、魔力弾を消滅させる。

しかし、自身が攻撃されたにも拘らず、ブラックは警戒の構えも行わない所か、寧ろ嬉しそうな笑みを口元に浮かべ、魔力弾が放たれた方向に顔を向ける。

「フッ、腕を上げたな。二年前に俺に挑んだ時よりも威力が上がっているぞティーダ」

「嬉しいけどよぅ。それを簡単に破壊するお前は相変わらず化け物だなブラックウォーグレイモン」

ブラックが暗がりに声を掛けると、管理局の制服を来たオレンジ色の髪の男性ーティーダ・ランスターが現れ、ブラックに苦笑を向けた。

その姿にブラックは珍しく、心からの再会を待ちわびていたと言うような表情をしてティーダへと近づき、右手をティーダへと突き出し、ティーダも右手をブラックに向け、二人の手がぶつかり合うと、互いに本当に嬉しそうな笑みを浮かべあう。

「しかしよう？お前は出世したな。二年前は強い奴を探している奴だっただけなのに、今じゃ次元世界では知らない奴の方がおかしい、広域次元犯罪者と来たもんだ。俺はまだ執務官に成ってないって言うのに」

「フッ、その犯罪者を目の前にして捕まえない貴様は、管理局員失格なんじゃないのか？」

「おいおい、お前を捕まえるなんて俺には出来ねえって。これでも二年前にボコボコにされたって懲りているんだからよ」

ブラックの質問に対して、ティーダは困った様な表情をして答えた。

二年前、ブラックがなのは達と出会う前にブラックは一度、ミッドチルダに赴きティーダと出会い戦いあった事が在るのだ中だ。その時の結果は当然ブラックの勝利だったが、ブラックは実力差が在りながらも挑んで来たティーダに興味を覚えたのだ。

そしてそれから地球へと渡る数日の間に、ブラックはティーダと

の間に奇妙な友情のようなものが芽生え、それ以降二人は友と呼べる関係に成っていた。ティーダはブラックのこの世界での数少ない友人なのだ。
その様にブラックが二年前の事を思い浮かべていると、フッとブラックは疑問の表情を浮かべ、ティーダに顔を向ける。

「そう言えば貴様は何故此処に居る？貴様は首都航空隊に所属している筈では無かったのか？」

「・・・・最近、この辺りで変な事件が多発していてな。その調査を命じられたんだ」

「・・・・気を付けろ。この辺りに潜んでいる奴はお前が勝てるレベルではない」

ティーダの言葉を聞いたブラックはリンディ達にさえ見せた事が無い案じるような表情をして、ティーダに声を掛けた。
ブラックに取ってティーダはこの世界で出来た初めての友人で在ると共に、この世界で数少ない自分が認めた人物だ。その人物が死んでしまう可能性が在るのだから、ブラックが心配するのも当然だろう。
そのブラックの表情を見たティーダは更に苦笑を浮かべ、ブラックに背を向ける。

「お前からそう言う言葉が聞けるとは、今日は運が良いみたいだぜ。分かっているさ、何せ俺が死んだら妹が一人に成るからな、忠告は受け取って置くぜ。じゃあな」

ーーービュン！！

ティーダは別れの言葉をブラックに告げると共に、夜の暗がりの中に消えて行った。
その姿にブラックは一瞬不安を感じるが、ティーダなら大丈夫だと思い、その場から離れようとした瞬間に背後から声が響いて来る。

「ブラック様！！また勝手に動いて！リンディさんが凄く怒っていますよ！！」

「ルインか・・・・丁度良い。探索魔法を使用してデジモンを探せ。今回の相手は完全体だ」

「ッ！！了解しました！！」

ブラックの告げた事実にルインは怒っている場合ではない気が付き、すぐさま探索魔法を使用し、辺りを調べ始める。
そして数分ほど経つと、ルインは突如として一つの方向を睨み付けブラックに報告を始める。

「アッチの方に何かおかしな反応が在りました。デジモンかどうかは分かりませんが」

「そうか、なら行くぞ」

ーーービュン！！

ルインの報告結果にブラックは頷き、二人は上空に浮かび上がり反応が在った場所へと向かい出した。
そしてブラック達が去ってから少し経つと、暗がりの中から黒い翼を生やした女性が姿を現し、ブラックとルインが向かった方向に笑みを向ける。

「フフフフフッ、上手く行ったわ。流石に私も究極体には勝てないし、アイツに任せておきましょう。そしてその間に私はあの子達に餌を上げなくちゃね」

黒い翼を生やした女性は笑みを浮かべながら呟くとティーダが消えた方に目を向け、ティーダが進んだ方向にと向かい出した。

そしてルインの報告の在った場所へと向かっていたブラックとルインは、反応が在った場所を目指していたが、突如としてブラックは空中で立ち止まり、一つの気配に気が付くと、右手のドラモンキラーの爪先に、赤いエネルギー球を生み出し、気配の感じられる方向に向かって投げ付ける。

「フッ！！」

ーーーードゴオオン！！

「ッ！！」

ーーーービュウン！！

ブラックが投げたエネルギー球は建物の影へと消えると爆発音が響き、煙の中から背中に悪魔の様な翼を生やし、顔にマスクを付けた生物が飛び出して来た。

その姿を見たブラックは笑みを浮かべ、空中に浮かぶ生物に顔を向けると、注意深く姿を見せたデジモンを観察し始める。

「・・・・ネオデビモンか」

ネオデビモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／（人造）堕天使型、必殺技／ギルティクロウ、スタンクロー

デビモンが何者かによってデビモンを改造され誕生した人造堕天使型デジモン。顔面に装着されたマスクは自身の力と意思をコントロールするためのものといわれている。主人の命令に忠実に従い雑兵として使用されることが多い。必殺技は、鋭くなった爪で相手を切り裂く『ギルティクロウ』と、電気を帯びた爪で引き裂く『スタンクロー』だ。

「うん？可笑しいですね？このデジモンは確か自分の意思が無い存在の筈ですよね？」

「ああ、その筈・・・・・まさか！？」

ブラックはルインの言葉に同意を示そうとするが、その直前にネオデビモンが居る理由に気が付き、来た方向に目を向け始める。

その決定的なブラックの隙をネオデビモンは見逃さずに、背後からブラックに向かって右腕の爪を振り下ろす。

「ギル・・・ティ・・・クロウ」

ーーーガキィィィン！！

「チイッ！！」

ネオデビモンのギルティクロウがブラックに決まろうとした瞬間に、ブラックは瞬時に右手を掲げギルティクロウを防御するが、ブラックが防御している隙にネオデビモンは残っている左手でギルテ

ィクロウを更にブラックへと放つ。

「ギル・・・ティ・・・クロウ」

「ブラック様！！ディバインバスターー！！」

ーーードゴオオオオオオオオン！！

「グオ・・・ォ！！」

再びネオデビモンがギルティクロウをブラックに向かって振り下ろそうとする直前に、ネオデビモンの背後に移動していたルインがネオデビモンへと砲撃を放ち、ネオデビモンを吹き飛ばす。

ネオデビモンが吹き飛ぶのを見たブラックは両腕のドラモンキラーを頭上に構え、高速回転を始め漆黒の竜巻に変わるとネオデビモンへと突進する。

「ブラックトルネード！！」

ーーードスゥゥゥゥン！！

「ッ！！」

漆黒の竜巻と化したブラックの突進をネオデビモンは、かわす事が出来ず、その体は漆黒の竜巻に寄って貫かれた。

そしてネオデビモンはデータ粒子へと変わり、後にはデジタマだけが残され、ルインはそれを急いで拾い上げる。

ーーーパシッ！！

「回収完了です・・・・って！！ブラック様！！」

デジタマを抱き締めたルインは笑みを浮かべてブラックへと声を掛けようとするが、ブラックはルインの事など気にせずに焦った表情をしたまま、来た方向へと全速力で戻って行く。

（間に合ってくれ！！）

ブラックはこの世界に来てから、いや、生まれて始めて焦った声を内心で叫びながら、ティーダの下へと向かい出す。

しかし、その先の存在していたのは、無事な姿のティーダではなく、地面に大量の血を流しながら倒れているティーダの姿しか存在していなかった。

「・・・・・ティーダ」

ブラックは倒れている下半身を全て失い、右手さえも失ったティーダに力ない声を掛けた。

そのブラックの声を、まだ息が在ったティーダは耳にすると、声に聞こえて来た方に笑みを向ける。

「・・・・よう、ハハハハハッ、忠告無駄にしてしまったな。だけどよ、護れたぜ」

ティーダは笑いながら残っている左手で路地の影を指差し、ブラックが目を向けて見ると、一目で孤児だと分かる子供が三人、恐怖に震えながら抱き合っていた。

「・・・・他の子供達は全員殺されちまった。だけど、その三人だけは何とか護れた。お前のお陰だぜ、実力が上の相手と戦っていな

ければ絶対に護れなかった」

「・・・・・そうか」

ブラックは友であるティーダが、もう助からない事を確信した。
何故ならばティーダはブラックを見ながら話している積もりだが、ティーダの見ている方向にはブラックの姿は無かったのだ。
その事が分かったブラックは、ティーダの傍に近寄り膝を地面に付くと、残っているティーダの左手を握りながら、ティーダへと顔を向ける。

「言い残す事が在れば言え、最後のお前の想い。俺が受け継ごう」

「・・・・妹、ティアナを・・・・た・・・・の・・・・む」

ティーダはブラックへと最後の言葉を告げると共に目を閉じ、二度と覚めない眠りへと堕ちて行った。
その姿にブラックは悲しげな表情をするが、ティーダが完全に息を引き取ったのを確認すると、ブラックは立ち上がり、低い声で背後に声を掛ける。

「出て来い。隠れているのは分かっているんだぞ」

「あら、ばれていたの？」

ブラックの声が響くと共に、路地裏の影から黒い翼を背中にはやし、黒い仮面のようなものを顔に被り、鋭い爪を持った女性型デジモン―レディーデビモンが笑いを堪えていると言う表情をしながら出て来た。

レディーデビモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／堕天使型、必殺技／ダークネスウェーブ、プワゾン
高貴な女性型の堕天使デジモン。闇の貴婦人と呼ばれている強大なダークサイドパワーの持ち主。エンジェウーモンのライバル的存在。必殺技はコウモリのような暗黒の飛翔物を無数に放って相手を焼き尽くす『ダークネスウェーブ』と、相手の持つパワーをダークエネルギーと相転移し、敵を内から滅殺する『プワゾン』だ。

「貴様がティーダを殺したのか？」

「ええ、だってあの子達の食事の邪魔をしたんですもの」

ブラックの言葉にレディーデビモンが同意を示した瞬間に、上空から四つの瞳を顔に持ち、鋭利な爪を輝かせた黒い竜のような姿をしたデジモン一二体のデビドラモン達が、レディーデビモンの背後の降り立つ。

デビドラモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／邪竜型、必殺技／クリムゾンネイル
“複眼の悪魔”と呼ばれ、恐れられている邪竜型デジモン。ダークエリアから誕生した魔獣で、闇の中を飛び回っている。真っ赤な４つの目で睨まれたら相手は身動きがとれなくなり、カラダを切り刻まれてしまう。尻尾で突き刺すことも得意とする。邪神像として各地に点在しているという話もある。　必殺技の『クリムゾンネイル』は、両手のカギ爪で相手を切り刻む技だ。

ーーードン！！

「ほぅ」

デビドラモンの姿を確認したブラックは、僅かに喜びの声を上げた。
自身が殺すべき相手が姿を見せた事に喜んでいるのだ。戦うではなく殺す。
もはやブラックはレディーデビモン達とデビドラモンを逃がす気は無かった。この場で必ず消滅させると心に決めているのだ。
しかし、レディーデビモンはブラックが内心で考えている事に全く気がつかずに、ブラックに残酷な笑みを向ける。
「この子達にこの辺りの人間を食わせていたんだけど、其処で死んでいるゴミに食事の邪魔をされてね。うざいから殺して上げたのよ」
レディーデビモンはそう言いながら、ブラックの横に在るティーダの死体へとゴミを見るような視線を放ち、ブラックの周りの空気が歪み始める。余りの殺気に、空気が歪んでしまっているのだ。
それに気が付いたデビドラモンは、すぐさまブラックの前に移動し、両手のカギ爪を全力で振り下ろす。
「クリムゾンネイルッ！！」
ーーーガキィィィィン！！
『ッ！！！』
自身に向かって振り下ろされたクリムゾンネイルに対してブラックは慌てずに両腕のドラモンキラーでクリムゾンネイルを受け止めた。
その姿にレディーデビモン達は目を見開くが、ブラックは無言のまま自身の目の前に立っているデビドラモンの顔の前に瞬時に移動し、右手のドラモンキラーで顔を殴り飛ばす

「フン！！」

ーーードゴオオオオン！！

「ギャッ！！」

ブラックのドラモンキラーを喰らったデビドラモンは悲鳴を上げながら吹き飛ばされていく。
だが、ブラックはそれでは赦せないと言わんばかりにデビドラモンが吹き飛んだ方向に瞬時に移動し、上空へとデビドラモンの背中を全力で蹴り飛ばす。

ーーービュン！！

「ハアッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオン！！

「グガッ！！」

ブラックの蹴りを背に受けたデビドラモンは、口から血を流しながら凄まじいスピードで上空へと上がって行く。
それを確認したブラックは残っているデビモンとレディーデビモンへと顔を向け、自身の頭上に右腕のドラモンキラーを掲げる。

「貴様らは絶対に赦さん。生きて帰れるとおもうな！！」

ーーードスウウウウウン！！

「ガアァァァァァァァァァァッ！！」

ブラックが宣言の叫びを上げると共に、上空から落下して来たデビドラモンがブラックの掲げていたドラモンキラーに突き刺さり、苦痛の悲鳴を上げながらデータ粒子へと変わり、その場には地面に落ちているデジタマと、凄まじい殺気を振りまくブラックだけが存在していた。

それを見て、残っているデビドラモンは、ブラックの凄まじい殺気に恐怖に体を震わせ始めるが、ブラックは構わずにデビドラモンの目の前に移動し、ドラモンキラーを突き刺そうとする。

しかし、その直前にレディーデビモンが、自身の背中を羽ばたかせてコウモリのような物をブラックに向けて放つ。

「ダークネスウェーブ！！」

「チッ！！」

ーーービュン！！

「ガアァァァァァァァァァァッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオン！！

レディーデビモンが無数の蝙蝠の様な技ーダークネスウェーブを見たブラックは瞬時にデビドラモンへの攻撃を止めて後方に移動するが、ダークネスウェーブはデビドラモンへと直撃し、デビドラモンは自身の体を覆った炎に焼き尽くされデータ粒子となり消えて行った。

その哀れとしか言えないデビドラモンの最後にもブラックは構わず、ますます殺気に満ちた顔をレディーデビモンへと向ける。

「貴様のペットでは無かったのか？」

「役に立たない奴は死んだ方が良いでしょう。それよりも死になさい！ダークネススピア！！」

ブラックの質問にレディーデビモンは答えると共にブラックへと飛び出し、左腕を槍へと変化させブラックに突き刺そうとするが、ブラックは簡単にレディーデビモンの槍をかわし蹴りをレディーデビモンへと放つ。

「ハアッ！！」

「クッ！！」

ーーービュン！！

ブラックの蹴りをレディーデビモンはギリギリの所でかわし、ブラックから離れようとする。

だが、ブラックは逃がさないと言わんばかりドラモンキラーを振り上げ、レディーデビモンのダークネススピアに向かって突き出す。

「ドラモンキラーー！！」

ーーーバキィィィィン！！

「ガハッ！！」

ブラックの一撃にレディーデビモンの槍は砕け散り、レディーデビモンは左腕を押さえて逃げようとするが、ブラックは赤いエネル

ギー球を生み出し、レディーデビモンへと投げつける。

「逃がさんぞ！！」

「くっ！プワゾン！！」

ーーーゴォォォォォォォーーー！！！

「何！？」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

ブラックの放ったエネルギー球はレディーデビモンの口から放たれた黒い粒子の様なもの－プワゾンに寄って掻き消された上に、ブラックへと直撃し、巨大な爆発が起きた。

自身の技が決まったのを確認したレディーデビモンは笑みを浮かべて、その場から立ち去ろうするが次の瞬間に、爆発が起きた事によって発生した煙の中から巨大なエネルギー球がレディーデビモンに向かって飛び出して来る。

「ガイアフォーース！！！」

「なっ！？馬鹿なアァァァァァァーーー！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

ーーーパシッ！！

「フゥ～。危なかったですよ」

ブラックの放ったガイアフォースにレディーデビモンは飲み込まれ巨大な大爆発が起き、それによって煙のデジタマが落ちて来ると、離れた所から戦いを見ていたルインが姿を現し、デジタマを腕の中に回収する。
そしてデジタマを回収し終えたルインは、ブラックに報告を行う為に何時の間にか、ティーダの死体の目の前に移動していた傷付いたブラックの方に慌てて駆け寄る。

「ブラック様！すぐに治療を！・・・・・ブラック様？」

ルインはデジタマを抱えたまま、ブラックに声を掛けるがブラックはルインの言葉に答えずにティーダの死体を見つめ続ける。
その何時もとは違うブラックの背にルインは不安に襲われながら、ブラックの表情を見ようとブラックの横に移動し、ブラックへと顔を向け、僅かに息を呑んだ。

「・・・・ブラック様、泣いているんですか？」

「・・・・・もう・・・・・涙など流す事は無いと思っていた」

ルインの質問にブラックは目から涙を零しながら答えた。
ブラックは今の体に成ってから涙を流した事は、一度しかない。
その時だけが涙を流す最後の時だとブラックは思っていた。しかし、今再び涙は流れてしまった。もう会う事は無い友の事を心から思いながら。
そして少しの間ブラックは涙を流し続けていたが、突如としてティーダの死体に背を向け、ルインに声を掛ける。

「行くぞ。もう此処には用は無い」

「・・・・・・はい」

ブラックの言葉にルインは、自分にさえ見せた事も無い表情を浮かべたブラックの姿に、僅かに沈んだような表情をしながら答えた。
ルインは嫉妬しているのだ。自分でさえも見たことも無い表情をブラックに浮かべさせたティーダに対して。そしてこんな時にさえそう思ってしまう自分の心に嫌悪感を抱いていると、ブラックがルインに声を掛ける。

「・・・・・ルイン。お前は俺よりも先に行くな。お前だけじゃない、あの女もガブモンも、そしてフリートも俺よりも先に行くな・・・・・頼む」

「はい！！ブラック様ッ！！」

ーーーシュウン！！

ブラックの告げた言葉にルインは笑みを浮かべながら、ブラックの体に抱き付き、二人はアルハザードへと転移して行った。

そして数日後の事。とあるミッドに存在する墓地の場所では、多くの人々が一つの墓の前に立っていた。
その中には、黒い喪服で身を包んだ人々の中でオレンジ色の髪を持った少女ーティーダの妹が、自身の兄の墓の前で涙を堪えていると、軍服を着た者達が侮蔑の言葉を墓に呟き始める。

「全く、我々航空隊の恥だ。犯人も捕まえる事も出来ずに死ぬとは」

「全くですな。しかも現場に残っていた孤児達の話だと、黒い女性に殺されたそうですよ」

「ふん！だとすれば更に恥だ！魔力も持たない者に殺されるとは！」

軍服を着た者達は此処が墓の前だと言うのに、死んだ人間に侮蔑の言葉を吐き続ける。

それを聞いていた少女が辛そうに顔を歪めた瞬間に、軍服を着た者達の背後から、殺気に満ちた声が響いて来る。

「・・・・貴様ら、死ぬ覚悟は出来ているんだろうな？」

「うん？死ぬ覚悟だ・・・・・・ヒッ！！」

『なっ！？』

聞こえて来た声に軍服の人間や他の者達も声の聞こえて来た方に目を向け、恐怖に染まった表情を浮かべた。

何故ならば、声を掛けて来た人物は、軍服を着た者達が所属する組織ー管理局が広域指名手配を掛けている生物ーブラックウォーグレイモンだったのだ。

しかし、ブラックはそんな事には一切構わずに、恐怖に体を震えさせている軍服の者達と周りの者達にブラックは怒りに満ちた目を向ける。

「安心しろ、此処が墓場だ。幾らでも貴様らの墓はすぐに出来るぞ！！」

『ヒイッ！！』

ーーードゴン！ドゴン！ドゴン！！ドゴン！！

ブラックの叫びに少女を除いた全員が恐怖の悲鳴を上げて逃げ出すが、ブラックは瞬時に移動し、一人残らず顔を殴り付け、地面へと全員を叩き付けた。

そして少女を除いた全員の顔を土の中に埋め込むと、未だに墓の前に立ち続ける少女の下に寄り、用意していた花を墓の前に置きながら少女に顔を向ける。

「済まない。ティーダの墓の前で騒ぎを起こしてしまった」

「いい・・・・・ありがとう」

ブラックの言葉に少女は首を横に振りながら答え、再び二人はティーダの墓に顔を向け、黙祷を行いだす。

そして在る程度黙祷が終わると、少女は自身の横で無言で立ち続けているブラックに顔を向ける。

「・・・・あなた、確か広域次元犯罪者の人だよね？兄さんとは知り合いだったの？」

「ああ、奴とは犯罪者と呼ばれる前に出会った。そしてティーダの最後も看取った」

「！！！」

ブラックの告げた事実に少女は目を見開き、ブラックの顔を真剣に見つめ始める。

その様子にブラックも真剣な表情をしながら、少女に顔を向ける。

「奴は立派だった。例え勝てないと分かっている相手でも挑み、人を救ったんだ。お前の兄は誰よりも勇敢だったぞ。俺が認める数少ない者だった」

「・・・・・・教えて、兄さんが何と戦って死んだのかを、私はそれが知りたい」

「・・・・・・良いだろう。お前には知る権利が在る。俺と共に来い、ティアナ・ランスター」

少女ーティアナの言葉にブラックは頷くとティアナへと右手を伸ばし、ティアナは一瞬迷った表情をするが、ブラックの伸ばした手に自身の右手を重ねるのだった。

友との再会、そして別れ（後書き）

次回予告

ティアナは知った、兄が何と戦って死んだのかを。

そして力を求め漆黒の竜人へと訓練を願う。

その頃、地球に居るなのはに危機が迫っていた。

次回、漆黒の竜人と少女、『デジタルワールドへの誘い』

少女達は求める、自分に無いものを。

デジタルワールドへの誘い（前書き）

此処でアンケートを取りたいと思います。

ブラックの擬人化を行なって良いのかと、ティアナはパートナーデジモンを得るか、バイオデジモン化に成る方が良いのかの二つです。

２０日の正午までが期限です。

是非アンケートにお答え下さい。

デジタルワールドへの誘い

アルハザードに在る転送室で、ミッドから転移して来たブラックとオレンジ色の髪の少女ーティアナ・ランスターが姿を現し、ティアナは始めて見る場所を見回しながらブラックに質問する。

「あの・・・此処は？」

「此処は貴様らで言う伝説の地アルハザードだ」

「ッ！！！」

ブラックの告げた事実にティアナは、信じられないと言う表情をして辺りを見回し始める。

しかし、突如として希望に満ち溢れた表情に変わり、ブラックの体に掴み掛かる。

ーーーガシッ！！

「アルハザードなら死者の蘇生法も在るんでしょう！！それで兄さんを！」

ティアナがブラックに詰め寄るのも当然だろう。

次元世界ではアルハザードは死者の蘇生法すら存在して居る場所と言われているのだから。その事を知っているものからすれば、アルハザードは希望と呼べる場所なのだ。

だが、ブラックはティアナに悲しげな表情をを向け、否定する様に首を横に振るう。

「無理だ。確かに此処では次元世界中でさえ不可能な事が在る程度では叶う。だが、死者の蘇生だけは不可能なのだ。それは人間が入り込んではいけない極地だ。この世界は其処に入り込もうとした為に滅んだらしい」

「・・・・・そんな」

ブラックの告げた事実にティアナの表情は、希望から絶望に変わり、顔を悲しげに俯け始める。

もしかしたら兄で在るティーダが生き返るかも知れないと思ったのに、それが不可能だと告げられたのだから、落ち込んでしまうのも当然だろう。

その様子を見たブラックが困った表情を浮かべ、何とかティアナを慰めようと考えていると、通路の奥からガブモンが姿を現す。

「ブラックさん、その子が例の子ですか？」

「そうだ」

ガブモンの質問にブラックが頷くと、ガブモンは笑みを浮かべてティアナに顔を向ける。

「こんにちは、僕はガブモンだよ」

「えっ、え～と、ティアナ・ランスターです」

ガブモンの挨拶にティアナは困惑しながらも自身の名前を告げた。見たことも無い生物に会い、ティアナは困惑と戸惑いを感じる。

それを確認したブラックは先へと足を向け始め、ガブモンとティアナは慌ててブラックの後を追い掛けると、一つの部屋の中に入っ

て行く。
その部屋の中に居たリンディとルインはブラックとティアナの姿を見ると、ティアナへと顔を向ける。
「始めましてティアナさん。私はリンディと言います」
「ルインフォースです。ルインと呼んで下さい」
「ティアナ・ランスターです。あの、此処は何かの組織ですか？」
リンディとルインの自己紹介にティアナも自身の紹介を行なうと、ブラックとリンディ達の顔を交互に見回しながら質問した。
何せ、ブラックが管理局にした事と言えば、管理局の艦艇を二隻沈め、闇の書の闇を消滅、管理局のエースの高町なのはの撃墜など、如何考えても一人の人物が行なえる行為ではないのだから、質問するのも当然だろう。
しかし、そのティアナの言葉にリンディは苦笑を浮かべて、自分達に付いて説明し始める。
「組織と言う訳ではないわね。此処は言うなれば世界に否定されている者達の集まりのような場所よ。そして、現在はデジモン達を回収するのが主な仕事と言うべきなのかしらね」
「デジモン？」
リンディの告げた言葉にティアナは疑問の声を上げ、リンディに詳しく話を聞こうとすると、ブラックがティアナに話し始める。
「デジモンとは在る世界に生息する生物だ。俺はデジモンとは言えないが、ガブモンはデジモンだ」

「そうですよ！」

「あの、その生物が兄さんの死に何か関係在るんですか？」

ブラックとガブモンの言葉を聞いたティアナは、困惑の表情をしながら質問する。

ティアナが此処に来たのは、自身の兄であるティーダの真相を知る為なのに、一見関係無いと思われるデジモンの話をされたのだから、困惑するのも当然だろう。しかし、そのデジモンの存在が重要だったのだ、

そしてティアナの言葉に周りの者達は一瞬辛そうな表情をするが、全員がすぐに表情を真剣に戻すと、ブラックがティアナに告げる。

「今、次元世界中である人物がばら撒いたデジモン達が暴れている。そしてティーダを殺したのはばら撒かれたデジモンの一体だ」

「！！！」

ブラックの告げた事実にティアナは目を見開き、リンディ達に顔を向けて見ると、リンディ達は無言で頷いた。その頷きにティアナは、ブラックの告げた事実が真実だと確信した。まさか、自分の兄を殺したのがデジモンと言う生物だとは思っても見なかったのだが、ティアナにはそれだけで充分だった。

そして全てが事実だと完全に確信すると、ティアナは憎しみの表情を顔に浮かべながら、ブラックに質問する。

「そのデジモンは何処に居るんですか？兄さんを殺したデジモンは！？」

ーーーポン

「落ち着いてティアナさん。貴女のお兄さんを殺したデジモンはもう居ないわ。彼が消滅させてデジタマに戻したの」

憎しみの叫びを上げるティアナの肩に手を載せながらリンディが落ち着かせるように、ティアナに声を掛けた。

そのリンディに言葉に、僅かながらも冷静さを取り戻したティアナはブラックへと顔を向け、ブラックは頭を下げながら話し始める。

「すまない。俺はばら撒かれたデジモンを探していたのだが、敵の策略に嵌まり、別のデジモンと戦っている間にティーダはそのデジモンに襲われた。俺がティーダの下に辿り着いた時には、既に手の施しようがなかった」

「・・・・・兄さんは最後になんて貴方に言ったんですか？」

「『妹を頼む』。だから俺はお前の会いに行ったんだ」

「・・・・兄さん・・・・ヒック、グスッ、ヒック」

ブラックの言葉を聞いたティアナは顔に手をやり声を押し殺しながら泣き始める。

それを見たリンディはティアナを抱き締め、周りの者達もティアナが泣き止むのをじっと待っていた。

そしてティアナが泣き止むのを確認したブラックは話を続け、デジモンと言う生物についてと、デジモンをばら撒いた人物ー倉田についても全て話した。

「それじゃあデジモンが暴れているのは、倉田と言う人物の策略なんですか？」

「ええ、先ず間違いなく倉田の策略でしょうね。しかも彼の狙いは次元世界の支配」

話を聞き終えたティアナはリンディに顔を向け質問し、リンディはティアナへの質問を答えると同時に、倉田の目的も伝えた。

倉田の最終目的は“次元世界を支配する事”。デジモンを利用しているのも、自身の目的の為の道具とする為なのだ。

そして、リンディからも全ての事情を聞き終えると、ティアナは何かを考える様な表情をしながら、ブラックに顔を向ける。

「基本的にデジモンには生身では勝てないんですね？」

「成熟期レベルならやり方次第と、相性の悪いフィールドに誘えば勝てる可能性は高い。だが、完全体レベルと成れば相性の悪いフィールドに誘えても勝てる可能性は極端に減る」

「加えて究極体レベルと成れば、一体だけでも管理局の崩壊させる事も可能よ。究極体にしてもピンからキリまで居るけどキリでさえも、管理局を半壊させられるレベルね」

ティアナの質問にブラックとリンディがそれぞれ答えると、ティアナは絶望に染まった表情を浮かべ始めるが、全て事実である。

デジモンの力は管理局の戦力など、簡単に潰せるほど強大なのだ。究極体でなくても、完全体レベルで魔導師が命を賭けて、挑まねば成らない存在がデジモンなのである。

「・・・・・そんな連中が次元世界中で暴れているんですか？」

「ええ、だからこそ私達は動いているのよ。管理局は信用出来ないからね」

「・・・・・そうですね。話を聞いた限りでは確かに管理局を信用するのは危険ですね」

リンディの言葉にティアナは同意を示した。

ティアナとしても話を聞いた限りでは、管理局を信用するのは危険だと判断出来る。倉田と言う人物を保護しているのも管理局だろうし、デジモンの存在を知れば管理局は絶対にデジタルワールドを管理しようと動き出すだろうから、確かに管理局を信用するのは危険だろう。

「デジモンに勝つ為には、強力な魔導師に成るか？リンディさんの様にバイオデジモンと言う存在に成るのかのどちらかなんですね？」

「・・・・他にはデジモンをパートナーとする方法が在る。だが、その為にはデジタルワールドでデジモンを探さなければいけないだろうな」

ティアナの質問にブラックは自身の戦った子供達の戦い方を教えた。

何も魔導師に成って戦う必要や、バイオデジモン化する事も無いのだ。デジモンをパートナーにすると言う方法も確かに存在しているのだ、

それを聞いたティアナは再び考える様な表情を浮かべ始めた瞬間に、コンソールから警戒音が鳴り響き、リンディは瞬時に移動して調べ始める。

ーーービィィィィィーーーー！！！

「・・・・地球にデジモン反応ですって？おかしいわね？地球は一番最初に調べた筈なのに？」

リンディがそう疑問の声を上げるのも当然だろう。

何せ、地球は自分のせいで巻き込んでしまったなのはの存在も在った為に、フリートに頼んで一番最初に調べた貰った場所なのだ。そしてその結果、デジモンの反応は全く存在しない事が判明して安心していたのだが、突如として反応が現れたのだから、疑問に思うのも当然だろう。

そのリンディの言葉を聞いていたガブモンは、突如として何かに気が付いたような表情をしながら慌てて立ち上がり、リンディに向かって叫ぶ。

「リンディさん！もしかしてなのはが狙われているんじゃ！？ほら、僕がなのはにデジモンと言う名前を教えたじゃないですか！！？」

「・・・・在りえるわね。倉田にとってはデジモンの存在を知っている人物は、自分の計画を阻む障害に成りかねないわ。そうなると、なのはさんの抹殺を考えてもおかしくないわ」

ガブモンの叫びにリンディは考え込む様な表情をして、同意を示した。

何せ、今のなのはは魔法の使用が出来ない上に歩く事さえも不可能な状態なのだから、命を狙うには絶好のチャンスだろう。

その事に気が付いたガブモンは慌てて転送室の方に向かって駆け出し、ブラック達も座っていた椅子から立ち上がるとティアナに顔を向ける。

「如何する？付いて来れば、デジモンと言う存在の力をその目にする事が出来るが？」

「・・・・・・行きます。この目で見て見たいんです。兄さんが戦った生物達の力を」

「フッ、ルイン、貴様は今回はティアナの護衛に当たれ」

「了解です！ブラック様！」

ティアナの言葉を聞いたブラックは笑みを浮かべるとルインにティアナの護衛を頼み、ルインが頷くと、ブラック達はガブモンの後を追い掛けて行った。

その頃、海鳴市に在る臨海公園では、なのはは車椅子に乗りながら管理局に付いて考えていた。

（やっぱり如何考えてもおかしいよ。あの状況でガブモン君を攻撃するのは。だってガブモン君が攻撃されずにいれば、もう一体の敵が成長する事もなく、被害も広がらずに事態は終わっていたんだもの。やっぱり何か在る。私達の知らない何かが管理局には）

なのはがその様に管理局に不信感を持った瞬間に、なのはの背後にある木が突如として動き、木の実の様な物をなのはの近くに放り投げる。

ーーードゴオオン！！

「えっ？キャアァァァァァーーー！！」

ーーーガシャアアン！！

突如として落ちて来た木の実になのはが疑問の声を上げた瞬間、木の実は突如として爆発を起こし、なのはは車椅子から転げ落ちた。

その事になのはは顔を苦痛に歪めるが、何とか動かない足を必死に動かして背後を見てみると、木の様な形をした生物がなのはに向かって枝を伸ばして来ていた。

「貴様はワシの栄養分に成って貰おうぞ。このジュレイモン様のな！！」

ジュレイモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／植物型。
必殺技／チェリーボム
ウッドモンと言うデジモンが長く生きると進化する植物型デジモン。世界の大概のことは知っていて、“樹海の主”と呼ばれている。性格は見かけによらず凶悪で、森に入ったデジモンに幻覚をみせて、さまよわせてはエネルギーを吸い取ってしまう。必殺技は、頭の部分の木の実を相手に投げつけ爆発させる『チェリーボム』だ。

「ヒイッ！！」

自身に向かって来る枝やツタを見たなのはは恐怖の悲鳴を上げた。

いかに管理局のエースと呼ばれようと、今のなのはは無力な子供でしか無い。ジュレイモンの攻撃に対して恐怖を覚えるのも当然だろう。

だが、ジュレイモンは恐怖に震えるなのはの姿に構わず枝やツタを伸ばし、遂になのはの体に枝やツタが巻き付き、ジュレイモンの下へと運ばれ始める。

「ヒィッ！！だ、誰か！？誰か助けて！！！！」

遂に恐怖に負けたなのはは悲鳴を上げて助けを呼ぶが、助けが来る事など無いと分かっているジュレイモンは残忍な笑みを浮かべて、なのはの栄養を搾り取ろうとする。

しかし、その直前に突如として上空からワーガルルモンが姿を現し、なのはに巻き付いている枝やツタを自身の爪で切り落とす。

「なのはを離せ！！」

ーーーブザン！！

「ムッ！？」

「ガブモン君！！」

突如として姿を現したワーガルルモンにジュレイモンは警戒の声を上げ、なのはは喜びの声を上げると、ワーガルルモンは枝やツタから解放されたなのはを、腕の中に抱えて後ろに飛ぶ。

ーーービュン！！

「なのは！無事かい！」

「うん！」

「良かった。なのはは傷付けさせないぞ！！」

なのはの無事を確認したワーガルルモンは安堵の息を吐くが、す

ぐさまジュレイモンに向けて構えを取り出す。
その事に対してジュレイモンは自身の獲物を奪い取られた事も加えて、怒りに心を支配されながらワーガルルモンに、枝やツタの先を向け始める。

「おのれ！！良くもワシの食事の邪魔をしてくれたな！！赦さんぞ！！チェリーボム！！」

ーーーポン！！

「クッ！！」

ーーードゴオオオオン！！

ジュレイモンが投げつけて来た木の実ーチェリーボムを見たワーガルルモンはなのはを抱えて立っていた場所から離れるが、ジュレイモンは次々とワーガルルモンが移動する先にチェリーボムを投げ続け、爆発を起こして行く。

「クゥッ！！」

ーーードゴオオオオン！！

次々と爆発するチェリーボムの中をワーガルルモンは全速力で駆け抜けるが、なのはを抱えたままだという事も在り、次第に避ける事が出来なくなって行き、一つの木に追い込まれる。

「クソッ！！」

「ガブモン君！私を放して！！」

「駄目だ！絶対に君を護ってみせる！」
なのはの叫びにワーガルルモンがそう答えると、ジュレイモンがワーガルルモンへと笑みを浮かべながら近づいてくる。
「此処までだな！貴様ら二人とも栄養分にしてやる！！」
ーーーブオオオン！！
「クッ！！」
ジュレイモンは叫ぶと共に再び枝やツタを伸ばし始め。ワーガルルモンとなのはを拘束しようとした瞬間に、ジュレイモンの背後から光の矢が飛んで来た。
「ホーリーアローー！！」
ーーードスウン！！
「ガアッ！！」
ジュレイモンの背後からバイオ・エンジェウーモンへと進化したリンディが放ったホーリーアローが、ジュレイモンの体を貫き、ジュレイモンは苦痛に呻めき始める。
そのジュレイモンの姿を確認したリンディは、ワーガルルモンに向かって叫ぶ。
「今よ！ワーガルルモン君！！」

「はい！！」

リンディの言葉を聞いたワーガルルモンは抱えたままだったなのはを地面へと下ろし、ジュレイモンへと駆け出すと、全力で両腕の爪を振り下ろした。

「カイザーネイル！！」

ーーーザザザザザアァン！！

「ギャアァァァァァーーー！！」

ワーガルルモンの放ったカイザーネイルはジュレイモンの体を幾重にも切り裂き、ジュレイモンは悲鳴を上げながらデータ粒子へと変化し、後にはデジタマだけが残された。

ジュレイモンを倒したのを確認するとワーガルルモンは安堵の息を吐き、地面に落ちているデジタマを拾い上げる。

それと共にリンディは元の人間の姿に戻ると、なのはの下へとすぐさま移動し、心配そうな表情をしながらなのはの状態を確認し始める。

「遅れてゴメンなさいね、なのはさん。怪我は無いかしら？」

リンディはなのはに近寄ると怪我が無いかどうかを質問するが、なのはは答えずにリンディの方に険しい表情を浮かべて顔を向ける。

「リンディさん、教えて下さい。何で管理局に長年勤めていたのに管理局を裏切ったんですか？それにさっきの生物やこの前の生物達、そしてガブモン君に付いても教えて欲しいんです！お願いします！」

なのはは言葉と共にリンディへと頭を深々と下げ、なのはの様子を見たリンディは一瞬悩んだ表情を浮かべるが、隠すのは無理だと判断するとなのはの手を握る。

ーーーギュウ！

「分かったわ。だけど、此処では危険ね。先ずは桃子さん達に事情を説明して、在る場所に行きましょう」

「在る場所？其処は何処ですか？」

「デジタルワールド。管理局が発見していない世界であり、全ての発端に成った世界よ」

リンディはなのはの質問に険しい表情をしながら行き先を告げると、ワーガルルモンの背中になのはを乗せ、翠屋へと向かい出すのだった。

デジタルワールドへの誘い（後書き）

次回予告

デジタルワールドへとやって来たなのはとティアナは其処で見たことも無い生物達と出会う。

そしてなのはとティアナが決める道とは？

次回、漆黒の竜人と少女、『結成！新たなデジタルチーム！！』

少女達は決める、世界の平穏を。

結成！新たなデジタルチーム！！（前書き）

アンケートの結果

ブラックは擬人化可能、ティアナはパートナーデジモンで行く事に成ります。

ですが、ブラックは滅多な事では擬人化しません（威厳の為にも）

ティアナのパートナーは最終的にはロイヤルナイツ級に成ります。

出ないと最後の敵には絶対に勝てませんし。

それでは皆様アンケートのご協力ありがとございました。

結成！新たなデジタルチーム！！

ブラック達がデジタルワールドへと向かっている頃、アルハザードではとある人物が目覚めようとしていた。

薄暗い研究室の中に存在している一人の女性が入ったカプセルの前で、フリートはコンソールを打ちながら歓喜の表情を浮かべていた。

「さて、遂に完成です！！新たなバイオデジモン！！クイント・ナカジマ！！さぁ、目覚めるのです！！ポチッとな」

ーーーポチッ！

フリートがコンソールに付いているスイッチを指で押した瞬間に、カプセルの中に入っていた全ての水は消失し、クイントが目を開ける。

そしてカプセルの扉が開くと、それと共にカプセルの中からクイントが不機嫌そうな表情をしながら出て来ると、近くに置いてあった服を着ながらフリートに声を掛ける。

「・・・・・随分と人の体を改造してくれたわね？」

「いや～、それについてはすいません。しかし、その様子だと彼の記憶を見たんですね？」

「・・・・ええ、確かに記憶を見たわ」

フリートの質問にクイントは、戸惑うような表情をしながら答え

た。
　カプセルの中に入っている時に、クイントの頭の中にも、リンディと同じ様にブラックの記憶が流れ込んで来たのだ。そしてその結果、リンディと同じ様に管理局の裏を全て知ってしまった。

「まさか、私達が長年追っていた戦闘機人事件の元凶が管理局だったとは、思っても見なかったわ。だけどこれで幾つも疑問に説明が付く」

　クイント達が何度か違法研究所の捜査を行なっていた時に、調査の日に成ってからもぬけの殻と言う事態が何度も起きていたのだ。その為にブラックと出会った日は、レジアス中将の秘密の命令で動き、レジアスよりも上の者は知られないようにして動いたのだが、運悪く、その日にブラック達が研究所に来てしまったのだ。
　そしてブラックの記憶を見たおかげで、クイントは漸く自分達の行動が気づかれていた理由に気が付いた。

「情報が完全に漏れていた訳ね。上層部が私達の情報を漏らしてた」

「でしょうね。しかし、あの組織は本当に馬鹿ですよ。自分達の法のせいで、人材不足に成っているのに、それを違法研究で補おうとしているんですから。本末転倒も良い所です」

「・・・・・私もそう思うわ」

　フリートの言葉を聞いたクイントは顔を俯けながら同意を示した。
　今のクイントはブラックの持つ価値観やブラックの記憶も全て知ってしまっているので、以前では思わなかった事も思える様に成ったのだ。
　そして顔を俯けているクイントの様子に、フリートは思案げな表

情を向ける。

（う～む、おかしいですね？今回は彼の記憶が流れ込まない様にした筈なのに・・・・やはり彼がウィルス種で在る事が関係しているのか？それともリンディさんと同じ様に彼との親和性が高かったのか？これは研究の必要が在りますね）

フリートがそう考えるのも当然だろう。今回もリンディの時も実を言えば本当に運が良かったのだ。

何せ他人の記憶を受け入れると言う事は失敗すれば、精神と精神の融合を起こしてしまい、全くの別人に成ってしまう可能性が高いのだ。だからこそフリートはブラックの記憶が流れ込まない新たなバイオデジモンの構想を考えたのだが、結局今回も結果的に失敗だった。

そしてフリートは再びクイントに顔を向け質問する。

「それで如何します？我々に協力しないと言うのなら、貴女が得た力を封印して普通の人間の様に出来ますが？」

「・・・・・いいえ、このままで良いわ。今、この力を失ったらデジモン達とまともに戦えないし、彼に再戦を挑む為にもこの力は必要だからね」

「ふむ、そうですか」

クイントの言葉にフリートは頷くと用意して置いた服をクイントに渡し、クイントが渡された服を着終えるとフリートに顔を向ける。

「彼らはデジタルワールドに向かったんですね？」

「行くんですか？」

「ええ、彼らに協力する事も伝えたいですし、デジモンと言う種族をこの目で見たいのよ」

「地球の渋谷駅に在るエレベーターの地下に入り口は在ります」

「ありがとう」

フリートがデジタルワールドへの入り口の場所をクイントに伝えると、クイントは笑みを浮かべてフリートに礼を言い、研究室を出て行った。

それに伴いフリートも、様子を見る為にモニター室に向かい出すのだった。

桃子達に事情を説明し終えたリンディは、なのはとガブモンを伴い東京の渋谷駅へと向かっていた。

「あの、リンディさん？何で東京の渋谷駅に向かっているんですか？」

「・・・・・信じられないかもしれないけど、其処に別世界に入り口が在るのよ」

「はっ？」

リンディが告げた事実になのはは呆気に取られた様な声を上げた。だが、それも仕方が無いだろう。

普通に考えても、人間が作った建物に、しかも沢山の人々が出入りする渋谷駅の地下に異世界の扉が在るとは思わないのだから。なのはの反応は当然の事なのだ。
その様子にフードとロングコートを着たガブモンはなのはの車椅子を押しながら苦笑を浮かべる。

「信じられないかもしれないけど、事実だよ。最も知っているのは僕らデジモンや限られた人間だけだけどね」

ガブモンはそう言いながら、なのはの乗っている車椅子を走らせ、渋谷駅内部に張り込むと一つのエレベーターの中に乗り込む。
そして全員がエレベーターに乗り込むと勝手にエレベーターは動き出し、地下へと降りて行きターミナルの様な場所に到着する。

「此処が別世界の入り口なんですか？」

「ええ、そうよ」

始めて見た巨大ターミナルに姿に、なのははを困惑した表情をしながらもリンディに質問すると、リンディは笑みを浮かべて答えた。
そしてリンディ達が止まっているトレイルモンに乗り込むとトレイルモンは勝手に走り出し、先に乗り込んでいたルイン、ティアナ、そしてブラックが顔をリンディ達に向ける。

「随分と時間が掛かったな？」

「管理局のサーチャーの誤魔化しや桃子さん達の説明に時間が掛かったのよ」

「やはり監視が付いていましたか？」

「ええ、やはり管理局の上層部、正確に言えば倉田はデジモンの存在を知られたくないようね」

ルインの質問にリンディは険しい表情をしながら答えた。

リンディとガブモンは此処に来る前に、なのはの様子を監視している幾つものサーチャーを発見し、アルハザードで作った装置を使って全て誤魔化して来たのだ。何せ監視が付いたまま、デジタルワールドに向かえば、敵対する事を教えているのと同意義なのだから、リンディの行動も当然だろう。因みにそのサーチャー、なのはの様子を四六時中確認していた事が判明し、リンディは同じ女性として倉田に対してかなりの怒りを感じていた。

その様にリンディがブラック達に遅れた理由を説明している間に、なのはとティアナは互いに自己紹介を行っていた。

「始めまして高町なのはです」

「ティアナ・ランスターです。なのはさんの事は新聞とかで良く知っていますよ」

「えっ？それじゃミッドの人なんですか？」

ティアナの言葉を聞いたなのはは驚いた様な表情を浮かべて、ティアナの事を見つめた。まさか、ミッドの人間がブラック達と一緒に居るとは思っても見なかったのだ。

そしてなのはの様子を見たティアナは顔を俯け説明を始めた。

「・・・・私の兄さんとブラックさんが友達だったらしくて、それで兄さんが死んだ時に私の事を頼まれたらしいんです」

「へっ？・・・・・・友・・・・・達」

ティアナの言葉を聞いたなのはは再び呆気に取られた様な表情を浮かべてブラックを見つめると、リンディがなのはに苦笑を向ける。

「驚くわよね。この人に友達が居たなんて、私も知った時は驚いたわ」

「黙れ。それ以上言うと殺すぞ」

リンディの言葉を聞いたブラックは僅かに苛立ちを含んだ声を上げた瞬間に、今まで暗いトンネルの様な場所を走っていたトレールモンは光の中に入り込む。

突如として光が溢れた事に驚いたなのはとティアナは慌てて窓の方を見てみると、広大なデジタルワールドが広がっていた。

「此処がデジタルワールド何ですか？」

「ええ、そう此処がデジタルワールド」

始めて見たデジタルワールドの景色にティアナは目を見開きながら、リンディへと質問すると、リンディは肯定の声を出した。

その様にデジタルワールドに付いて説明している間にトレイルモンが火の街に到着し、全員がそれに伴いトレイルモンから降りて、そのまま街の方へと歩き出す。

そのまま全員が無言で先を進んでいたが、行き先が気になったなのはは、無言で歩き続けるブラックに顔を向け質問する。

「・・・・あの？何処に行くんですか？」

「この世界の主、三大天使デジモンに会いに行く。貴様はともかく、ティアナには会って置きたいそうだ」

「私に？」

ブラックはなのはの方を見ずに質問に答えながら、ティアナへと顔を向け、ティアナは疑問の声を上げた。会った事も無いこの世界の主が唯の人間で在る自分に、どの様な用が在るのか疑問に思ったのだ。

だが、ブラックは答えずに先に進み、広場の様な場所で全員が立ち止まると、上空からオファニモンと同じ様に十枚の翼を付けた天使と獣の様な天使が舞い降りて来て、最後にオファニモンが姿を現す。

セラフィモン、世代／究極体、属性／ワクチン種、種族／熾天使型、必殺技／セブンヘブンズ、テスタメント

白銀に輝く鎧を身に纏った全ての天使型デジモンを纏める最高位の熾天使型デジモン。邪悪な存在との最後の戦いの時に出現し、世界を浄化する。最も『神』に近いと称される三大天使デジモンの１匹だ。必殺技は７つの超熱光球を作り出し敵に放つ『セブンヘブンズ』に、自らの命と引き換えにビッグバンを起こし、相手を消滅させる『テスタメント』だ。

ケルビモン（善）、世代／究極体、属性／ワクチン種、種族／智天使型、必殺技／ヘブンズジャッジメント、ライトニングスピア

三大天使の１匹で獣の姿をしている智天使型デジモン。全身は白く光り輝いていて、悪い心を持っているものはケルビモンを直視できないと言われている。神の膨大な知識を記憶しており、デジタルワールドの“カーネル（中核）”を守護している。その強大な善の力は逆に悪に染まりやすい一面もある。必殺技は巨大な雷雲を呼び、

無数の雷を浴びせる『ヘブンズジャッジメント』と、手から巨大な雷の槍を放つ『ライトニングスピア』だ。

オファニモン、世代／究極体、属性／ワクチン種、種族／座天使型。必殺技／エデンズジャベリン、セフィロートクリスタル
緑色の鎧で体を覆い、十枚の金色の翼を持った女性型デジモンの最終形態デジモン。慈愛と慈悲を伝えるデジタルワールドの聖母的な存在。神の深い慈愛を体現し、セラフィモン、ケルビモンとともにデジタルワールドの“神の領域（カーネル）”を守っている。必殺技は悪の心を浄化し、楽園へ導く『エデンズジャベリン』と、十個の宝石を召喚し、相手にぶつける『セフィロートクリスタル』だ。

『天使ッッ！！！』

始めてオファニモン達の姿を見たなのはとティアナは限界まで目を見開き、上空からゆっくりと降下してくるオファニモン達を見つめた。
神話に語られている存在に似通った者達が、目の前に姿を現したのだから、驚愕する以外に反応する事は出来ないだろう。
その様子にオファニモンはニッコリと微笑みながらセラフィモン達と共に地上に降り立ち、ブラックへと顔を向ける。

「デジモン達の回収。ありがとうございます」

「気にするな。それよりもソイツが例の娘だ」

オファニモンの言葉にブラックは答えながら、ティアナへと顔を向けた。
三大天使がティアナに顔を向けるとティアナは驚いた表情をするが、オファニモンは気にせずにティアナへと頭を下げる。

「私達のミスで、デジタマが盗まれたばかりに貴女のお兄さんを死なせてしまった。申し訳在りませんでした」

「えっ！？」

オファニモンの言葉を聞いたティアナは驚愕の表情を浮かべた。まさか、一目見て神々しいと呼べる様な存在に頭を下げられるとは思っても見なかったのだ。

だが、驚愕はそれだけでは収まらず、セラフィモンとケルビモンもティアナに顔を向けると、オファニモンと同様に、ティアナに向かって頭を深く下げる。

「如何かデジモンと言う存在を嫌わないでくれ。確かにデジモンにも悪意を持つ者は居るが、全てのデジモンがそうだとは思わないでくれ」

「君のただ一人の家族を奪ったデジモンは赦せないだろうが、如何か分かって欲しい」

セラフィモンとケルビモンはティアナへと頭を下げながらそう告げた。

オファニモン達はデジモンに寄る被害が出る事は覚悟していたが、目の前に居るティアナはデジモンに寄って唯一人の家族を失ってしまった。デジモンと言う存在を憎んでもおかしくない。だが、三大天使と呼ばれる自分達でも人を蘇らせる事など不可能。自分達に出来る事はティアナへの謝罪だけ、それで赦されるとは思っていないが、オファニモン達が出来るのは謝罪だけなのだ。

そしてオファニモン達の謝罪を聞いたティアナは、真剣な表情をしながらオファニモン達に向ける。

「・・・・良いんです。兄さんの仇はブラックさんが取ってくれましたから。無関係なデジモンを憎む気はないです」

「ありがとうございます・・・・・・これはせめてものお詫びです」

ーーーシュウウン！！

ティアナの言葉を聞いたオファニモンは顔を上げて礼を告げると共に、空中に手をやり一つのデジタマを召喚し、ティアナの手の中にデジタマを手渡す。

「あの？これは？」

「デジモンの卵、デジタマです。そのデジタマから生まれる者は善も悪も無い無色の存在。それを貴女に授けましょう。この程度の事しか出来ない私達を赦して下さい」

「・・・・・・ありがとうございます」

オファニモンの言葉を聞いたティアナは一瞬複雑そうな表情をするが、すぐに表情を嬉しそうに変え、デジタマを大切そうに抱えながら、オファニモンに礼を告げた。

それを聞いたオファニモン達は笑みを浮かべるが、すぐに表情を真剣に戻し、今度はなのはに顔を向ける。

「・・・・彼女は彼の組織の者ですね？」

「はい。ですが今は、倉田に命を狙われていますので此処に連れて来たのです」

オファニモンがなのはを見ながら質問すると、リンディがなのはを連れて来た事情を説明し、オファニモン達は納得の表情を浮かべる。

それを確認したリンディは、なのはへと険しい表情をしながら顔を向ける。

「なのはさん、覚悟は在りますか？管理局の真実、そして今、次元世界に迫っている危機を知る覚悟が？」

「・・・・・・怖いですけど、知りたいんです。如何してリンディさんが管理局を裏切ったのか。そして如何して私が命を狙われているのかの全てを」

「・・・・・・出来れば貴女やクロノ達には知られたくなかったんですけど。その目を見たら隠せませんね。話しましょう」

なのはの言葉と瞳を見たリンディは隠せないと判断すると、管理局の真実と倉田の野望に付いて話し始めた。

そして全てを聞き終えたなのはは顔を青く染め、体を恐怖に震わせながらリンディに質問する。

「それじゃあ今の管理局は倉田と言う人の言いなりで、デジモンって言う生物が次元世界中で暴れているんですか？」

「正確に言えば倉田が操っているのは上層部ね。倉田の策略に嵌まっているのよ」

「それに彼の下に居るであろうルーチェモンも既に目覚めているで

しょう。ルーチェモンの力は強大です。もし七大魔王として覚醒すれば世界はルーチェモンの思いのままに成ります」

なのはの質問にリンディとオファニモンは険しい表情を浮かべて答えた。

七大魔王、それはデジタルワールドに封印されている七つのデジタマから生まれる七体の魔王型デジモン。『憤怒のデーモン』、『暴食のベルゼブモン』、『色欲のリリスモン』、『強欲のバルバモン』、『嫉妬のリヴァイアモン』、『怠惰のベルフェモン』、そして『傲慢のルーチェモン・フォールダウンモード』、そのデジモン達はそれぞれが邪悪な意思と力を持った強大なデジモン。その力は一体だけでもデジタルワールドだけではなく、他の世界さえも滅ぼせる力を持っている最強のデジモン達なのだ。。

「倉田が持ち去ったのはその七大魔王の中でも最強とされるルーチェモン。今はまだ動いてないけど、一度動き出せば世界は確実に破滅するわ。彼でさえ勝てる可能性はゼロですもの」

「えっ！？」

リンディがブラックを見ながら告げた事実に、なのはは驚愕の声を出してブラックを見つめた。

なのはに取ってブラックは自分の力を全て出し切っても勝てなかった存在。そのブラックでさえも絶対に勝てないと称される存在が居るとは思っても見なかったのだ。

その様子を眺めていたブラックは不機嫌そうな表情を浮かべ、リンディに声を掛ける。

「やってみなければ分からん。俺には切り札が在るからな」

「確かにそうですが、ルーチェモンはこの世界を一度滅ぼす寸前まで行なった存在。その上ルーチェモンは一度敗北した事で警戒心を強めているはずです。以前の様には行かないでしょう」

「その通りです」

リンディの言葉にオファニモンは頷き、周りの者達がオファニモンに顔を向け始める。

自身に目を向けられた事を確認したオファニモンは、ブラック達に顔を向けながら、険しい表情をして語り出した。

「今回、この世界に呼んだのは彼女にデジタマを授けるだけではないのです。実は他のデジタルワールドから恐るべき報告が届いたのです」

「何だと？まさか？・・・アグモン達に何か在ったのか！？」

オファニモンの言葉を聞いたブラックは、珍しく慌てた表情を浮かべてオファニモンに質問した。

ブラックに取って、自身が生まれた世界に居るアグモン達は、掛け替えの無い親友達、その親友達の身に何か在ったのではないかと心配しているのだ。

その様子にオファニモンは僅かに口元に笑みを浮かべるが、ブラックを安心させるように首を横に振るい、話を再開する。

「安心して下さい。報告を送って来たのは貴方の世界では在りません」

「そうか。ならば何処の世界だ？」

「送って来たのは、元々倉田の居た世界とチンロンモン達、四聖獣が見守る世界です。ですが、状況はかなり不味いでしょう。その世界に封印されていた七大魔王ー『暴食のベルゼブモン』、『怠惰のベルフェモン』、そして『嫉妬のリヴァイアモン』のデジタマを奪われた上に、ロイヤルナイツの一人、デュークモンが倒され、デュークモンのデジタマは次元の歪みに飲み込まれたそうです」

『ッ！！！！』

オファニモンが告げた事実にブラック達は驚愕に目を見開いた。

まさか、ルーチェモンと同等の力を持つ七大魔王のデジタマが奪われた上に、最強と称されるロイヤルナイツの一人までやられたとは、考えても見なかったのだ。

「これで最悪の場合七大魔王を四体倒さなければいけない状況に成りました。残っている三つのデジタマも危険だと判断し、残っているロイヤルナイツ達と四聖獣が全力で護っていますが、予断は赦されないでしょう」

「・・・・・状況は最悪を進んでいますね」

「・・・・・はい、一体だけでも世界を滅ぼせる者が、最低でも四体。その上、世界を護ると言っている管理局は役立たず・・・・・正しく最悪な状況ですよ」

オファニモンの告げた事実にリンディとルインが顔を見合わせ険しい表情を浮かべて話し合っていると、なのはがリンディ達の方を向いて告げる。

「あの、フェイトちゃんやクロノ君に伝えて協力して貰うのは如何

でしょうか？」

「・・・・・駄目ね。倉田はデジモンの存在が自分以外の誰かにばらされるのを恐れているわ。今回はなのはさんだけだったから完全体を一体だけだけど、大勢の人が知れば数を更に増やして来るでしょうし、最悪の場合は究極体を送って来る可能性が高いわ」

リンディとてなのはの意見を考えなかった訳ではない。次元世界の危機を知った時には、管理局に居る信じられる人間達に伝えて協力を願おうとしたのだが、デジモンの存在が明らかに成る事と倉田が抹殺に動くかもしれないと思い断念したのだ。

「倉田は上層部を抱き込んでいる上に究極体レベルのデジモンも所有しているかもしれない。だからこの場に居るメンバー以外が知るのは危険なのよ、なのはさん」

「・・・・・・そうですね。私の様に狙われる可能性が高すぎますね」

リンディの言葉になのはは顔を俯けながら同意を示す。
それを見たブラックはティアナへと顔を向け質問する。

「お前は如何する？少なくともこの世界に居る間はお前に危険は無い。俺達に協力はしなくても良いぞ」

「・・・・・・協力します。確かに兄さんを殺したデジモンはもう居ませんけど、元凶を倒さないと私の様な悲しみが生まれるかもしれない。そんなのは絶対嫌ですから、協力します」

ブラックの質問にティアナはデジタマを抱えたまま自身の決意を

告げる。
確かにティーダを殺したデジモンは存在しない。だが、まだデジモンをばらまいている倉田は残っている。
このままだと自分の様に悲しむ人間が増えるかもしれないと思い、ティアナはそんな人達を減らしたい為に戦う決意をしたのだ。
そしてティアナの決意を聞いていたなのはもリンディへと顔を向ける。

「私にも協力させて下さい。今度は前と違います。私の大切な人達、お母さん達、フェイトちゃん達を護る為に」

「・・・・・ごめんなさいね。結局私はまたなのはさんを巻き込んでしまった」

なのはの決意を聞いたリンディは深く頭を上げて謝るが、なのはは気にしてないと言う様に笑みを浮かべる。

「良いんです。それに倉田と言う人が居ると私は普通の生活が出来ませんから、倒さないといけませんし」

「ほう、言う様に成ったな」

なのはの宣言を聞いたブラックは面白そうな表情を浮かべてなのはを見つめ、なのははブラックに顔を向ける。

「興味が出ましたか？」

「さあな」

なのはの質問にブラックが素っ気無い声で答えた瞬間に、ブラッ

ク達の背後から声が響いて来る。

「そのメンバーに私も入れて貰って良いかしら？」

「フッ、漸く目覚めたか」

背後から聞こえて来た声に、ブラックは口元に笑みを浮かべながら、背後を振り返って見ると、アルハザードからやって来たクイントが笑みを浮かべて立っていた。

その姿にブラックは構えを取り出し、クイントも突如として表情を真剣に帰ると、ブラックに向かって突撃し、右拳をブラックに放つ。

「ハアァァァーー！！」

「ムン！！」

ーーードゴオオオオオオオン！！！

クイントが全力で右拳を放つのに対してブラックも右手を突き出し、二人の拳がぶつかり合うと凄まじい激突音が辺りに響く。

その事にブラックは嬉しそうな笑みを浮かべ、自身の一撃を受けても吹き飛ばされないクイントの姿を見つめる

「クククククッ、フリートの奴はとんでもない者を生み出したな。全力では無かったとは言え、俺のドラモンキラーが突き刺さらない上に吹き飛ばされもしないとは、やはり貴様は骨が在る」

「こっちにすれば相変わらずの化け物ね。今の一撃は前の時よりも力を込めたって言うのに、全く堪えた様子が無いんですもの。でも、

何時かは貴方に膝を付けて見せるわ」

「それは楽しみだ。せいぜい強く成れ。俺が楽しむためにな」

ブラックとクイントはそう言い合うと、拳を戻し互いに好敵手を見つけた様な笑みを浮かべ合い、周りの者達は呆れた様な表情をするのだった。

結成！新たなデジタルチーム！！（後書き）

次回予告

デジタルチームが新たに結成されてから、四年の月日が流れ。

なのはは管理局を止め、嘱託魔導師として動いていたある日。

はやてとフェイトと再会の日に再びデジモンは動く。

次回、漆黒の竜人と少女、『燃えさかる空港、炎のデジモン達、前編』

燃えさかる地、母と子は再会を果たす。

燃えさかる空港、炎のデジモン達、前編（前書き）

ティアナのデバイス紹介

『ブレイクミラージュ』

インテリジェンスデバイス

性能：フリートがアルハザードの技術を持って作り上げた最高のデバイス。

形態としては双銃、ナイフ、長銃型の基本三形体の他にも、フリート特製の全身に銃器が装備されるブレイカーフォームも存在する。

このデバイスにはカートリッジシステムの他に空気中に存在している魔力素を吸収する擬似リンカーコアシステムも装備されている。

その為に使用者の魔力が無くなる事も無い上に、ＳＳランクオーバー以上の魔力使用も可能。

また、演算能力も高く、ジャミングなどは管理局が保有する技術を全て使用しても完膚無きまで管理局側が敗北する。

その上ＡＭＦキャンセラーまで装備されているのでＡＭＦの影響は全く受けない

欠点が在るとすれば魔力制御、魔力操作の適正が高い者でないと常に送られて来る魔力の制御に失敗し、最悪の場合は暴発してしまう可能性が高い。

燃えさかる空港、炎のデジモン達、前編

なのはがブラック達の協力する事を決めた日から四年の月日が流れたある日の事。

アルハザードでは新たに加わったメンバーティアナと尻尾に刃を付けた四足歩行型の聖獣型のデジモンレッパモンが訓練室でブラックと訓練を行っていた。

レッパモン、世代／成熟期、属性／ワクチン種、種族／聖獣型、必殺技／駆駆烈空斬（くるくるれっくうざん）、獣牙乱撃（じゅうがらんげき）、真空カマイタチ（カマイタチ）

尻尾が刃になっている鎌鼬の様なデジモン。尻尾の刃自身に意志があり、背後からの不意をついた攻撃にも対処できるようになっている。しかし意志の疎通が合わず戦いの最中に尻尾とケンカをしている姿も目撃されている。森の中での戦闘を特に好み、爪と尻尾を上手く使い木々を軽々と駆け登る為、森の中でレッパモンと戦うのは細心の注意が必要。必殺技は前転しながら相手に向かって突撃する『駆駆烈空斬（くるくるれっくうざん）』と、鋭い爪を使って相手を乱れ裂く『獣牙乱撃（じゅうがらんげき）』に、尻尾を振り、目に見えない風の刃で攻撃する『真空カマイタチ』だ。

「レッパモン！」

「分かっている！」

ティアナの叫びを聞いたレッパモンは答える様に叫ぶと、自身の尻尾をブラックへと向け振り抜き、見えない風の刃をブラックに向かって放つ。

「真空カマイタチ！！」

「フンッ！」

ーーーバシュン！！

レッパモンの放った見えない風の刃ー真空カマイタチに対してブラックは右手を振り抜き、発生した風圧で真空カマイタチを相殺した。

しかし、その間にティアナはブラックの背後へと回り込み、両腕に持った銃型のデバイスーアルハザード製のブレイクミラージュをブラックに構え、魔力弾を連射して放つ。

「クロスファイヤーシュート！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガッ！！！

「遅い！！」

ーーーバシュン！！

ティアナの放った複数の魔力弾にブラックは瞬時に今度は左手を振り抜く事で、真空カマイタチの同様に魔力弾を消滅させるが、ティアナはその様子に笑みを浮かべた。

その笑みにブラックが訝しげな表情をしてティアナを見つめていると、背後からレッパモンが前転しながらブラックに向けて突撃して来る。

「駆駆烈空斬（くるくるれっくうざん）！！」

「そんな見え透いた攻撃が効くと思うな！！」

突撃してくるレッパモンの駆駆烈空斬を見たブラックは右腕を振り上げ、レッパモンを床に叩き付けようと腕を振り下ろすが、腕はレッパモンを擦り抜ける。

ーーーシュン！！

「何だガアッ！！」

自身の腕が擦り抜けた事にブラックが目を見開いていると、突如として胸に衝撃が来て驚愕の表情を浮かべた。

そして瞬時に体勢を整えようとブラックが動き始めた瞬間に、背後からティアナが成人男性の腕よりも二周りほど大きく成った長銃型のブレイクミラージュを構え、巨大なオレンジ色の砲撃をブラックに放つ。

「スターライトブレイカーー！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオン！！！

「くっ！ブラックシールド！！」

ーーードゴオオオン！！

ティアナの放ったスターライトブレイカーを見たブラックは背中に装備されている翼の様な物を、両腕に装備し前面で盾の様に構えると、ティアナのスターライトブレイカーを防御し、爆発が訓練室内部で起きた。

そしてティアナのスターライトブレイカーが収まると、突如としてブラックの後ろにレッパモンが姿を現し、ブラックに笑みを浮かべながら質問して来る。

「防御したようだな。今回の模擬戦はティアナの勝ちだ」

「・・・・・フッ、そう言う事か。貴様ら俺の気配察知を利用したな」

レッパモンの言葉と姿を見たブラックは笑みを浮かべながら、ブラックシールドを背に戻しながらティアナへと顔を向ける。

先ほどのブラックの腕を擦り抜けたのは、ティアナの幻術魔法で生み出した幻影。だがそれだけではブラックの気配察知からは逃れる事は出来ない。其処でティアナとレッパモンは幻影よりも少しずれた軌道で必殺技を放ち、ティアナのもう一つの魔法ー姿を消すオプティックハイドを使用して本当に必殺技を放っているレッパモンの姿を消し、ブラックの気配察知から僅かに逃れられたのだ。

「お前に一撃を与えるのは今の我々では本来不可能だ。だから一ヶ月以上も掛けて私とティアナはお前に一撃を当てられる作戦を考えたのだ。そしてそれは見事に成功した」

「ブラック兄さんの一撃を与えるなら、これぐらいしないと無理だからね」

「ハハハハハハッ、四年、僅か四年で成熟期レベルのデジモンが俺に一撃を与えるレベルに成るとは、やはりお前達は強い」

レッパモンとティアナの言葉を聞いたブラックは本当に嬉しそうな声を出して笑った。

この世界に来てからブラックが求める強い者達が続々と現れ始めた事が嬉しいのだ。リンディ、クイント、ガブモン、そしてティアナにレッパモン。今はまだ自分が全力を出せば簡単に潰せる者達だ

が、何れは自分と同等に戦える者達に成長するのは間違い無い。その時に自分の戦闘本能が満たされる可能性も高くなった事にブラックは歓喜していた。

（最も強く成れ！お前達が俺と同等の強さを得た時、俺はそれを打ち破り、更なる強さを手に入れて見せるぞ！）

ブラックがそう考えながらティアナとレッパモンを見つめていると、レッパモンの体から突如として蒼いデジコードが飛び出し、レッパモンの体を覆いデジコードが消えた後には。白い狐の様なデジモン－クダモン（S）－以降クダモンが存在し、ティアナの肩に飛び乗り首に巻き付く。

クダモン（S）、世代／成長期、属性／ワクチン種、種族／聖獣型、必殺技／弾丸旋風、絶光衝、ホーリーショット

クダモンの亜種と呼ばれるデジモン。本来ならば聖なる薬莢を常に巻きつけて離さない聖獣型デジモンだが、此方の方は単体での行動を取る事が出来る。その他にも通常のクダモンとは違い、体に基盤のような模様が刻まれている。左耳のイヤリングに聖なる力を日々溜めていると言われ、蓄えた力が大きいほど次の進化に影響があるという。冷静沈着な性格をしており、戦いにおいても的確に状況判断を行って、戦いを優勢に進める。ティアナがオファニモンから貰ったデジタマから生まれたデジモンが成長期に進化したデジモン。冷静な性格をしているので、ティアナとは良きパートナーの関係に成っている。本来ならば薬莢に巻き付くのだが、ティアナの首に巻き付くのが気に入っている。必殺技は体を薬莢のように変化させ自らが弾丸となり相手を貫く『弾丸旋風』と、イヤリングから輝きを発して目をくらます『絶光衝』に、基盤のような背中の模様が輝きを増した時に放たれる『ホーリーショット』だ。

「作戦は成功だったわねクダモン」

「ああ、私とティアナならやれると信じていたからな」

「フフッ、ありがとう」

クダモンの言葉にティアナは笑みを浮かべながら礼を言い、その様子を見ていたブラックは訓練室の入り口に向かい出し、ティアナとクダモンも慌てて追い掛けると、フリートから連絡が届く。

『ブラックにティアナ、クダモン、デジモンの反応が出ました。司令室に来て下さい』

「デジモンの反応が、此処最近は大人しかったのに」

「我々が被害が出る前に事態を収めているからな。恐らく今回は敵も今までよりも派手に動く可能性が高いだろう」

フリートの報告を聞いたティアナとクダモンは険しい表情を浮かべて話し合うが、ブラックは気にせずに研究室へと足を向け、ティアナとクダモンはその様子に溜め息を付きながらブラックの後を追い、司令室へと向かい出すのだった。

その頃。なのはは久しぶりにミッドに訪れ、とあるホテルの一室ではやてとフェイトと再会を果たしていた。

「二人とも久しぶりだね」

「うん！なのはも元気そうだね」

「怪我の方はもう良いんか？」

「・・・・・うん、魔力はかなり減ったけど怪我の方は完治したよ」

はやての言葉になのはは顔を俯けながら答える。なのはは四年前の事件の時の怪我が原因で魔力はBランクまで落ち込み、怪我の後遺症も大きく残っていると診断された為に管理局で仕事を続けるのは不可能だと判断し、管理局を辞めたのだ。

そして今は嘱託魔導師に登録され、時たまクロノの依頼を受けながら学校に通い高校へと進学して将来は翠屋を継ぐ為の勉強をしている。表向きにはだが。

（実は後遺症なんて全く無くて、魔力も全然減っていないんだよね。しかもその治療を行なった場所がアルハザードなんて絶対にフェイトちゃんとはやてちゃんには言えないよ）

四年前から倉田に命を狙われているなのはは、リンディ達と相談し管理局を辞めるのに最もらしい状態となのはが戦う力を失った様に見せる為に、フリート特製の訓練用リングを腕に常に付けている。

このリングが付いている人物は魔力が極端に落ち込み、体に常に多少の負担が掛かる為に、診断する人物が怪我の後遺症だと思い込ませる事が出来る様にする事が可能なのだ。最もそれだけではなく。常に負担を掛けられているので体は鍛えられるし、一度外せば体に掛かっている負担が瞬時に無くなる上に、減っていた魔力も瞬時に戻す事が可能だった。

（フリートさんが言うには、魔導師養成ギプスみたいな物みたいだけど。管理局の機器すら誤魔化すなんて、流石はアルハザード製だ

けの事は在るね）

なのははそう思いながら自身の腕に付いているリングを見つめていると、その様子を見ていたはやては申し訳なさそうな表情をして、なのはに頭を下げる。

「ごめんな、なのはちゃん。ちょっと私不謹慎やったな。なのはちゃんの気持ちも考えへんで」

なのはが顔を俯けたのは自分の無遠慮な言葉のせいだと思い、はやては頭をなのはに下げるが、なのはは慌てて顔を上げてはやてに声を掛ける。

「良いんだよ、はやてちゃん！全然気にしてないから！」

「そうか。それを聞けて安心したわ」

なのはの言葉を聞いたはやては笑みを浮かべながら言葉を言い、フェイトも安心した表情を浮かべた瞬間、突如として通信がはやてに届いた。

ーーーピピピピピッ

「ちょっとゴメンな・・・・どないしたんですか？ゲンヤさん」

『休暇中の所すまねえが八神。すぐにミッドチルダ臨海第八空港に向かってくれ！空港が火事に成っていやがるんだ！』

『ッ！！！』

モニターに映った壮年の男性、ゲンヤの言葉になのは達は驚愕の表情を浮かべると、はやてとフェイトは慌てて椅子から立ち上がり、モニターに映っているゲンヤに顔を向ける。

「すぐに向かいます！！」

「はやて！私も行くよ！」

はやてとフェイトはゲンヤに向かって叫ぶと、それぞれのデバイスを取り出し、はやては自身の持つポシェットの中で眠っていた小さな銀色の髪の少女に声を掛ける。

「リイン！起きるんや！」

「う～ん、はやてちゃん何ですか？」

はやての叫びにポシェットの中で眠っていた少女、リインが目を擦りながら質問した。

このリインはリインフォースのデータを元に管理局が生み出したユニゾンデバイスである。本来ならばリインフォースが居るのではやてには必要無いのだが、何れ訪れるであろうブラックとルインの激闘の為にはやてが新たな力を得る為に生み出したのだ。

そして寝ぼけているリインに向かって、はやては焦った表情をしながら叫ぶ。

「空港で火災が起きとるんや！それの救援に向かう！」

「ッ！！了解です！！」

はやての言葉を聞いたリインは一瞬にして眠気を覚まし、空中に

浮かぶ上がり、それぞれデバイスの準備が終わったはやてとフェイトはなのはに顔を向ける。

「なのはちゃんは此処に居てな！」

「私達は行って来るよ！」

「二人とも気を付けてね」

はやてとフェイトの言葉になのはは心配げな表情を浮かべて言葉を言うと、二人は笑みを浮かべながら部屋を出て行く。

そして自分以外に誰も部屋の中に居なくなったのを確認したなのはは、ポケットから一つの機械ー桃色の縁取りが在る機械ーデジヴァイスーディーアークを取り出すと映像に映し出し、モニターに映ったガブモンに声を掛ける。

「ガブモン君。この空港の火災の原因はやっぱりデジモンなの？」

『うん、フリートさんから連絡が在ったから間違い無いよ』

「やっぱり、それじゃあガブモン君お願いね。私は此処から指示を出すから」

『うん！なのはの頼みならお安い御用だよ！』

なのはの言葉を聞いたガブモンは元気良く答え、なのはは安心した様な表情を浮かべた。

もう以前の様な一人での戦いではない。共にデジタルワールドを過ごした大切なパートナーが居る。

その事が分かってなのはは以前では見せない様な穏やかな表情を

しながら、空港に向かっているガブモンにディーアークから指示を出すのだった。

燃えさかる空港の中で二人の青い髪の少女達は息を潜め、物陰に隠れながら通路を歩いている火その物の様な生物ー火炎型デジモンのメラモンと、キャンドルの形をして空中に浮かんでいる生物ーキャンドモンを見つめていた。

メラモン、世代／成熟期、属性データ種、種族／火炎型、必殺技／バーニングフィスト
全身に紅蓮の炎を纏った火炎型デジモン。その身を包む炎のように激しい気性を持っており、触れるもの全てを焼き尽くそうとする。必殺技は燃え上がる腕からパンチを繰り出す『バーニングフィスト』だ。

キャンドモン、世代／成長期、属性／データ種、種族／火炎型、必殺技／ボンファイヤ
デジモンの心臓部ともいえるデジコアを頭につけ、激しく燃焼させている火炎型デジモン。頭の上で燃えているデジコアの火が消えると、キャンドモンは生命活動を維持できなくなってしまう。一説には頭上の炎が本体で、体の部分はダミーではないかと言われている。火炎系デジモンにしては大人しい性格をしている。必殺技は小さな火の弾を口から吐き出し攻撃する『ボンファイヤ』だ。

「キャンドモン、見つけたか？」

「いや、居ないですね。しかし、何故あんな子供を狙うんですか？」

「お前は気付かなかったのか？あの娘達は何かがおかしい。もしかしたら回収する様に頼まれた物を持っているかもしれないぞ」

「成る程、ですが回収する様に言われたのはレリックとか言う石ですよ？あんな子供が持っているとは思えませんけどね？」

メラモンの言葉にキャンドモンは疑問の表情を浮かべて質問した。

今回、此処にメラモン達が姿を現したのは、在る人物にレリックを回収して来いと言われたからなのだ。

そしてキャンドモンの言葉を聞いたメラモンは考える様な表情をするが、すぐに表情を冷静に戻し、キャンドモンに顔を向ける。

「良いから探せ。良いな？」

「分かりましたよ」

メラモンの言葉に頷き、キャンドモンはその場を去って行くと、キャンドモンが姿を消したのを確認したメラモンもその場から移動を始めた。

そしてその様子を物陰から伺っていた少女達は安堵の息を付き、顔を見合わせる。

「スバル、此処から逃げましょう」

「うん、行こう、ギン姉」

少女、ギンガの言葉にもう一人の少女、スバルは頷くと、二人は隠れていた場所から立ち上がりその場から移動を始めるが、その瞬間に。

ーーードゴオン！！

『ッ！！！』

二人の進んだ方向に在る横の壁が突如として破壊され、好戦的な笑みを浮かべたメラモンが二人の前に姿を現した。

「見つけたぞ！」

「クッ！」

「ヒイッ！」

メラモンの姿を見たギンガは恐怖に震えるスバルを自身の背後へと押しやり、メラモンに向かって拳を構え出す。

そしてギンガの構えを見たメラモンは笑みを浮かべ、自身の拳をギンガに向かって構える。

「良いぞ、石探しなんて本当は如何でも良いんだ。俺は魔導師って奴と一回、全力で戦ってみたかったんだ！！」

「・・・・スバル下がってて」

「ギン姉！！」

メラモンの言葉を聞いたギンガは逃げるのは不可能だと思い、自分達の母の形見であるリボルバーナックルの左腕を起動させ、バリアジャケットを身に纏うとスバルの声を掛けた。

ギンガの言葉を聞いたスバルは叫ぶが、ギンガはスバルの頭に手をやり撫でながら笑みを浮かべ、メラモンに顔を向け始める。

「大丈夫だから。絶対にスバルの事は護るわ」

ギンガはスバルに向かって安心する様に声を掛ける。ギンガには本当は分かっていた。

目の前に居るメラモンは自分が全力で掛かっても傷付ける事は愚か、触れる事さえも不可能だと言う事を。しかし、それでも妹であるスバルを護る為にギンガはメラモンに挑む決意をしたのだ。

そしてギンガはスバルを更に後ろへとやるとメラモンに向かって紫色の道ーウイングロードを発動させ、ウイングロードを駆けながらメラモンに向かって全力で殴り掛かる。

ーーーシュウウン！！

「ハアァァァァァーーー！！」

「遅いぜ！！」

ウイングロードの上をを駆けて来るギンガの姿を見たメラモンは好戦的な笑みを浮かべながら、ギンガの攻撃を簡単にかわし、蹴りをギンガに向かって放つ。

「クッ！」

「今の一撃を交わすか！ならこれは如何だ！！」

ーーーゴオォォォォォォ！！

メラモンの蹴りをギリギリの所でギンガはかわしたギンガの姿に、メラモンは笑みを深めながら、両腕の炎を燃え上がらせギンガへと

拳を放つ。

「バーニングフィスト！！」

ーーードゴン！！

「ッ！！キャアァァァァァーーー！！」

「ギン姉！！」

メラモンの放ったバーニングフィストはギンガへと直撃し、ギンガはバーニングフィストの衝撃と燃え移った炎に体を焼かれながら壁へと吹き飛んだ。それを目撃したスバルは悲鳴の様な声を上げて、ギンガの姿を確認しようとするが、ギンガの姿は瓦礫と炎に寄って遮られ、無事な姿を見る事は出来なかった。

そして自身の一撃に寄って吹き飛ばされたギンガが立ち上がる様子を見せない所を確認すると、メラモンは表情をつまらなそうに変え、瓦礫と炎に埋まっているギンガに顔を向ける。

「おいおい、今ので終わりかよ。魔導師ってのは大した事ねえな。それともコイツが弱かったのか？まあ、もう一人の方で確かめれば分かるかもな」

「ヒッ！」

メラモンは自分の必殺技で倒れてしまったギンガの姿を確認すると、思っていたよりも手応えが無かった事につまらそうな声を上げながら、今度はスバルに向かって足を向け始める。

しかし、その直前に瓦礫と体から燃え上がっている炎を振り払いながら、ギンガは立ち上がり、メラモンに向かって再び拳を構える。

ーーーガラガラ

「・・・・スバルには・・・・・触れさせないわよ」

「おっ！思ったよりも頑丈じゃねえか」

起き上がったギンガの姿にメラモンは一瞬驚いた様な表情をするが、すぐに好戦的な表情に戻り、再び両腕に炎を発生させ始める。

「だが、立っているのが精一杯か。今すぐ楽にしてやるぜ！！」

「ギン姉！避けて！！」

メラモンは言葉と共にギンガへと駆け出し再びバーニングフィストを放とうとし、それに気が付いたスバルはギンガに向かって叫ぶが、ギンガは避ける事も出来ずにただ立っているだけだった。

そして遂にギンガの目の前にメラモンが現れ、拳に炎を発生させながらギンガに向かって振り下ろそうとする。

「バーニング！！」

「ギンねえぇぇぇぇぇーーー！！！」

ーーーシュン！！

メラモンはバーニングフィストをギンガへと放ち、スバルがギンガの名前を叫んだ瞬間に、蒼い閃光がスバルの後ろから現れ、蒼い閃光はメラモンに向かって飛び蹴りを放ち、メラモンを蹴り飛ばす。

ーーードゴオン！！

「ガアッ！！」

「えっ？」

「・・・・・・・嘘」

蹴り飛ばされたメラモンは壁を破りながら遠くへと吹き飛び、ギンガとスバルはそれを行なった人物の姿を見て信じられないと言う表情をして、床に着地している蒼い髪の女性の後姿を見つめ始めた。

目の前に居る人物は、もう何処にも居ない筈の人。

それでも、スバルとギンガがもう一度会いたいと思っていた人。

自分達に掛け替えの無いものをくれた人。そして自分達の母親だった人。

「・・・・お母さん？」

「・・・・・母さん？」

ギンガとスバルが現れた人物ークイントへと声を掛けると、クイントは笑みを浮かべて頷くが、すぐに壁に吹き飛んで行ったメラモンの方向に怒りの表情を浮かべながら目を向ける。

「良くも大切な私の娘達を傷つけてくれたわね！！覚悟しなさい！！」

そうクイントは怒りの表情を浮かべながら叫ぶと、起き上がろうとしているメラモンに向かって駆け出し戦闘を開始した。

燃えさかる空港、炎のデジモン達、前編（後書き）

次回予告

再会した母と子。

そして娘を護る為に母は進化する。

燃えさかる黒い蒼い炎とぶつかり合う母。

その姿に子供達は何を思うのか？

次回、漆黒の竜人と少女、『燃えさかる空港、炎のデジモン達、後編』

母は護る、例え異形と成ろうと自分の掛け替えの無い者達を。

燃えさかる空港、炎のデジモン達、後編（前書き）

デジヴァイス設定

形はテイマーズに出たデジヴァイスの形をしている。
デジモンの全てのデータが登録されているので、戦闘の時に敵対したデジモンの情報を知る事が出来る。またパートナーと離れても通信が出来る上に、パートナーデジモンが見ているものも、映像として見る事が出来る。

名称は、テイマーズと同じ、『ディーアーク』

燃えさかる空港、炎のデジモン達、後編

燃えさかる空港の内部の通路で、スバルとギンガは目の前の光景を信じられないと言う瞳で見つめていた。

二人の目の前では、ギンガを倒した人の形を模った炎そのものような生物ーメラモンと、四年前に管理局の任務の最中で死んだと聞かされた二人の母、ークイント・ナカジマがぶつかり合っていた。

「ハアッ！！」

ーーードゴオン！

「グッ！オラッ！！」

クイントが右拳でメラモンを殴り付けると、メラモンは僅かに後退するが瞬時に体勢を整え直し、クイントへと拳を放つ。

クイントはそのメラモンの攻撃に対して、腰を低くする事でメラモンの攻撃を避け、すぐさま立ち上がると、全力でメラモンの体に向かって右足蹴りを放つ。

「吹き飛びなさい！！」

ーーードゴン！！

「ガアァァァァァーー！！」

クイントが叫ぶと共に放った蹴りを腹に受けたメラモンは再び苦痛の声を上げながら、近くの壁へと吹き飛び、壁の瓦礫の中に埋まってしまった。

それを確認したクイントは、呆気に取られているギンガとスバルの傍に笑みを浮かべながら近寄り、二人の体をソッと抱き締める。

「元気そうで良かったわ。二人とも大きくなったわね」

「・・・・・本当に母さんなの？」

「・・・・・お母さん生きていたの？」

「ええ。正真正銘、二人の母親、クイント・ナカジマ本人よ」

ギンガとスバルの質問にクイントが笑みを浮かべながら答えると、二人は目に涙を浮かべクイントへと抱き付く。

「ヒック、ヒック、母さん」

「お母さん！お母さん！！」

「あらあら、二人は相変わらず甘えん坊ね」

自身の胸の中で泣き続けるギンガとスバルの姿に、クイントは笑みを更に深くして二人を強く抱き締めようとした瞬間。

ーーーガラガラッ！！

『ッ！！！』

メラモンが埋まっていた瓦礫から蒼いコードが発生し、瓦礫を蹴散らしながら、薄黒い青い炎の体に成ったメラモンが、進化したデスメラモンが姿を現した。

デスメラモン、世代／完全体、属性／データ種、種族／火炎型、必殺技／ヘビィーメタルファイヤー
メラモンが進化したデジモン。メラモンより炎の力がパワーアップして、色が赤から薄暗い青に変化した。体に触れるだけで金属さえも溶かしてしまう熱量を持っている。攻撃力も防御力もアップし、目を見張るほどの破壊力を身につけている。必殺技は体内で重金属を溶かし、相手に向かって噴きつける『ヘビィーメタルファイヤー』だ。

「貴様・・・・一体何者だ!?成熟期のデジモンを蹴り飛ばすなど人間には不可能だ!貴様は人間ではないのか!?」

『えっ?』

デスメラモンの叫びを聞いたギンガとスバルは、呆気に取られたような表情をしながら、自分達を護るように抱き締め続けているクイントを見つめた。
自分達の知る母は確かに普通の人間だった筈なのに、目の前に居るデスメラモンはクイントの事を人間ではないと宣言した。では、目の前にクイントは何者なのかと、疑問を思ってしまったのだ。
そしてギンガはクイントの体を注意深く見つめて見ると、一つの事に気が付き、目を限界まで見開く。

「デバイスが無い!?それにバリアジャケットも装備していない!?」

そうクイントの体にはデバイスらしき物は装備されていない上に、魔導師なら戦闘の時に必ず着る筈のバリアジャケットさえも着用していなかったのだ。

この様な炎が渦巻く場所でバリアジャケットを装備しないのは自殺行為だと言うのに、クイントは平然としている上に、炎で全身を覆っていたメラモンを殴ったり蹴ったりした筈なのに火傷は愚か服さえも焼けた後が存在していない。その事に気がついたギンガとスバルは、僅かに恐れを含んだ目で、クイントの姿を見つめ始める。

そのギンガとスバルの様子に気がついたクイントは、一瞬、ギンガとスバルに寂しげな表情を向けるが、すぐに表情を真剣に戻し、二人の頭を撫でながら立ち上がり、デスメラモンに険しい視線を向ける。

「聞きたいんだけど？管理局の者が一人も来ないのは貴方の仲間が邪魔をしているからなのかしら？」

「そうだ。外にはバードラモンとアシュラモンと言うデジモンが居て、管理局の連中を来れなくしてるのさ」

「そう、それを聞けて安心したわ！！ダークエボォリューション！！」

ーーーギュルルルルルルッ！！！

『なっ！？』

クイントが叫んだ瞬間にクイントの体から黒いデジコードが発生し、クイントの体を次々と覆って行く。

それを見たギンガ、スバル、そしてデスメラモンが目を見開きながら、クイントを覆っているデジコードを見つめていると、デジコードの中からタービンの付いた両腕が飛び出し、その両手を基点にしてデジコードを引き裂きながら、獅子の顔に両腕、両足にタービンが付いた獣人が姿を現した。その名も。

「バイオ・グラップレオモン！！」

バイオ・グラップレオモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／獣人型、必殺技／獅子獣破斬、旋風タービン蹴り

様々な格闘ゲームのデータを取り込み、オリジナルの奥義をもって敵を打ち砕く、レオモンが進化した格闘系獣人型デジモン。両腕・両足のタービンを高速回転させて変幻自在の技を繰り出すが、タービンはデジコア（電脳核）から発する気合を一気に吹き付けることで回転させており、並大抵の精神力では続かない。“百獣の王”レオモンのデータを受け継ぐグラップレオモンだからこそ、その正義への強い意思がタービンを究極にまで高速回転させている。ダークタワーデジモンを元に生み出された為にウィルス種に成ってしまった存在。しかしその実力は本来のグラップレオモンを超える。必殺技は、重力を捻じ曲げるほどの重い一撃を打ち込む『獅子獣破斬（ししじゅうはざん）』と、全身を高速回転させて、相手に回し蹴りの究極連打を放つ『旋風タービン蹴り』だ。

「ばっ！馬鹿な！？人間がデジモンに進化だと！！」

バイオ・グラップレオモンに進化したクイントの姿を見たデスメラモンは、在り得ないものを見たと言う声を出すが、クイントはデスメラモンの言葉に答える事無く、瞬時にデスメラモンの目の前に移動し、デスメラモンの顔面を殴り付ける。

ーーービュン！！

「ハアッ！！」

ーーードゴン！！

「グオッ！！・・・この野郎ッ！！」

クイントの一撃を受けたデスメラモンは苦痛の声を上げるが、瞬時に体勢を整え、クイントへと連続で拳を放つが、クイントはデスメラモンの攻撃を両手に付いたタビーンを回転させながら、デスメラモンの攻撃を全て防御する。

ーーーガガガガアン！！

「何だと！？」

「彼の攻撃に比べれば軽すぎよ！！」

自身の攻撃を簡単に防がれた事に驚愕しているデスメラモンに向かって、今度はクイントが両手足を使って、デスメラモンに連続で攻撃を放つ。

「オラオラオラオラ！！」

ーーードドドドドドドドドドン！！

「グオォォォォォォーーー！！」

クイントは高速で回転するタービンが付いた手足の連続攻撃にデスメラモンは苦痛の声を上げた。

しかし、デスメラモンもやられてばかりでは無いと言うように、僅かにクイントの攻撃を止まった隙をつき、自身の右足でクイントへと蹴りを放つ。

「くっ！」

デスメラモンの蹴りをギリギリの所でクイントは避けた。
デスメラモンはその隙に後方へと飛ぶと、体を覆っている炎の熱量を増大させて、体内に存在する重金属を溶かし、口を窄め始めると、クイントに向かって高温で溶け切った重金属を噴き付ける。

「ヘヴィーメタルファイヤーー！！」

ーーーブゥゥゥゥゥゥゥッ！！

「そんなのが当たる訳無いでしょう！！」

デスメラモンが口から放ったヘヴィーメタルファイヤーを、クイントは自身のスピードを最大限に発揮する事で簡単に避けた。
それを見たデスメラモンは悔しそうな表情をするが、フッと目を横に向けて見ると、戦いを呆然と見ているギンガとスバルの姿を目撃し、口元にニヤリと笑みを浮かべ始める。

「ならこれは如何だ！？ヘヴィーメタルファイヤーー！！」

ーーーブゥゥゥゥゥゥゥッ！！

「ッ！！」

デスメラモンは叫ぶと共にギンガとスバルに向かって、口からヘヴィーメタルファイヤーを放ち、自身の娘達に危機が迫った事に気が付いたクイントは、瞬時に二人の前に移動しヘヴィーメタルファイヤーを自身の体を使って防ぐ。

ーーードゴン！！

「グウッ！！」

「ハハハハハハハッ！！やはりお前の弱点はその二人か！動いたら二人は死ぬぞ！！」

デスメラモンは自身の技を進んで防御したクイントの姿に笑みを浮かべると、次々と口からヘヴィーメタルファイヤーをクイントに向けて噴きつけ続ける。

そしてギンガとスバルは自分達のせいでクイントが苦しんでいる事に気が付き、移動しようとするが、その直前にクイントが二人に向かって叫ぶ。

「駄目よ！！今移動したら奴に狙われるわ！」

「でも！このままだと母さんが！？」

「死んじゃうよ！！」

クイントの叫びギンガとスバルは目に涙を浮かべながら叫んだ。

ギンガとスバルは生きていたクイントに会えた事が本当に嬉しかったのだ。

確かに今のクイントは人間じゃないのかも知れない。だが、それはギンガとスバルにも言える事、二人に取ってクイントが人間で無くなってしまっていても、自分達に誰よりも優しさを与えてくれた母親である事には違いないのだ。

ギンガとスバルの叫びを聞いたクイントは、デスメラモンの攻撃を防ぎながら、背後へと僅かに振り返り、二人に笑みを向ける。

「大丈夫よ。お母さんは強いんだから！」

ーーーギュウゥゥゥゥゥゥン！！！

クイントが叫んだ瞬間に全てのタービンは火花を散らすほどの勢いで回り始め、クイントは両手のタービンを使ってヘヴィーメタルファイヤーを防ぎながら、デスメラモンへと駆け出した。

「なっ！？俺のヘヴィーメタルファイヤーを防ぎながら進んで来るだと！？」

クイントが自身に装着されているタービンを最大限に回し、デスメラモンのヘヴィーメタルファイヤーを防ぎながらデスメラモンに向かって駆け出して来るのを見たデスメラモンは、驚愕の声を出しながらも、更にヘヴィーメタルファイヤーをクイントに向かって噴きつける。

だが、クイントはその攻撃さえも防ぎ、遂にデスメラモンの目の前に辿り着き、タービンを超高速させている右手を振り被る。

「私の娘に手を出した事を後悔しなさい！！」

「ウッ！ウワァァァァァァーーーー！！」

クイントの叫びを聞いたデスメラモンは恐怖の声を上げるが、クイントは関係無いと言わんばかりに、自身の右手のタービンを極限にまで超高速回転させ、重力さえ捻じ曲げるほどの打撃をデスメラモンの胴体に向かって振り下ろす。

「獅子獣破斬！！！」

ーーードゴオオン！！

「グアァァァァァァァァーーーーー！！！！」

クイントの放った獅子獣破斬を胸に受けたデスメラモンは断末魔の声を叫ぶと、データ粒子へと変わり消滅した。

そしてデスメラモンの居た場所にデジタマが出現すると、クイントはデジタマを回収しギンガとスバルの居る場所へと移動する。

「・・・・脱出するわ」

クイントはギンガとスバルに向かって笑みを浮かべながら言葉を告げると、二人をソッと抱き上げ、クイントに抱かれた二人はクイントの体に抱きつき、涙を浮かべ始める。

「ヒック、ヒック、母さん、護ってくれてありがとう」

「ヒック、ヒック、ごめんなさい。私達のせいで怪我が」

「良いのよ。私は自分が傷付く事よりも、二人が傷付く事の方が怖いんだから・・・・・こんな姿に成っても私は二人の母親で良いの？」

自身に謝り続けるギンガとスバルの姿を見たクイントは安心させる様に言葉を言うと、不安そうな表情をしながら、ギンガとスバルに質問した。

クイントが何よりも恐れていたのは、人間で無くなった自分をギンガやスバル、そして夫であるゲンヤに拒絶させる事だった。確かにバイオダークタワーデジモンに成った事を後悔してはいないが、それで自分の家族だった者達に拒絶されるのは何よりも怖いのだ。

そして僅かに体を震わせているクイントの姿に気がついたギンガとスバルは、寄りクイントを強く抱き締めながら叫ぶ。

「私達の母さんは母さんだけだよ！！」

「うん！どんな姿に成ってもお母さんはお母さんだよ！！」

「・・・ありがとう、二人とも」

ギンガとスバルの叫びを聞いたクイントは嬉し涙を流しながら礼を言い、少し間三人は互いに抱き締めあうのだった。

燃えさかる空港の外では、燃え盛る炎を身に纏った巨鳥型のデジモン－バードラモンと、四つの腕に三つの顔を持った魔人型デジモンーアシュラモンが空港の中に入ろうとしている局員達を阻んでいた。

バードラモン、世代／成熟期、属性／ワクチン種、データ種、種族／巨鳥型、必殺技／メテオウイング
全身を燃え盛る炎で覆った不死鳥のような姿をした巨鳥型デジモン。大きな羽を羽ばたかせて気持ちよく大空を飛びまわることが大好きだ。戦うことはあまり好きではないが、向かってくる敵には容赦はしない。必殺技は、翼を羽ばたかせ、流星のように燃えさかる羽を相手に向かって無数に飛ばす『メテオウイング』だ。その他にも炎に関する技を多く所持している。

アシュラモン、世代／完全体、属性／ワクチン種、種族／魔人型、必殺技／阿修羅神拳（あしゅらしんけん）

４本の腕と３つの顔を持つ伝説の魔人型デジモン。古代インド文明の文書を解析している最中に、突如コンピュータ内に出現した。３つの顔は、それぞれ『怒りの顔』『哀れみの顔』『祝福の顔』を表している。見た目は怖いが、悪は絶対に許さない正義のデジモンだ。必殺技の『阿修羅神拳（あしゅらしんけん）』は、４本の腕から繰り出される怒涛のパンチを繰り出し、敵が消滅するまで攻撃する技だ。

「クソッ！！何なんだあの生物達は！？」

「このままだと空港の中に居る人々が！！」

局員達はバードラモンとアシュラモンが空港に入り込むのを防がれ、空港の中に居る人々の救出が出来ずに焦っていた。

そして応援に駆けつけたはやてとフェイトも、空港内部に入り込む事が出来ずに、悔しそうな表情をしながら、空港の上空に滞空し続けているバードラモンの姿を睨み付けていた。

「くっ！！あの生物かなり強い！」

「そうやな、こっちも全力を出せへんと不味いで！」

フェイトとはやては高速で飛び回っているバードラモンに向かって、それをぞれデバイスを構えながら叫んだ。

本来ならばアシュラモンはともかく、バードラモンにはフェイトとはやてが二人で掛かれば、簡単に倒せるの相手なのだが、空港から燃え盛っている炎の影響で、バードラモンの力は二倍に成っている為に、フェイトとはやての二人掛かりでも苦戦するレベルの敵と成っているのだ。

そしてフェイトとはやては時間が残されていないと思った瞬間に、海の方から突如として亀の甲羅を背負い巨大なハンマーを持った巨

大な海獣型デジモン―バイオ・ズドモンが姿を現す。

ーーーバシャン！！

バイオ・ズドモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／海獣型、必殺技／ハンマースパーク

イッカクモンと言うデジモンが規則的進化をしたデジモンで、２足歩行が出来るようになった海獣型デジモン。ツノは再生できなくなってしまったが、ノコギリのようになり、攻撃力がアップした。筋肉も徹底的に鍛え上げ、怖いものなしと言った感じを放つデジモンだ。本来ならばワクチン種なのだがダークタワーデジモンを元に生み出された為にウィルス種に成った存在。太古の氷から掘り起こされたクロンデジゾイド製の武器『トールハンマー』を武器にしている。必殺技は、トールハンマーを振り下ろした時に巻き起こる衝撃波や火花を敵にぶつける『ハンマースパーク』だ。

「そんな！？まだ他にもいたの！？」

「くっ！不味いで！このままやと空港の中に居る人達が！」

バイオ・ズドモンの姿を見たフェイトとはやては、更に焦った表情をしながら叫んだ。

既にアシュラモンとバードラモンだけでも精一杯だと言うのに、この状況で更に敵が増えると成れば空港に居る人々の救出など不可能に成ってしまう。その事は今の状態で苦戦しているはやて、フェイトは愚か、地上に居る局員達も分かっており、誰もが諦めたような表情をし始める。

だが、バイオ・ズドモンはアシュラモンと戦っている局員達や、バードラモンと戦っているフェイトやはやてには目もくれずに、海に向かって右手に握っていたトールハンマーを振り下ろす。

「ハンマースパーク！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

『えっ！？』

バイオ・ズドモンが海へとハンマースパークを放つと巨大な水柱が発生し、水飛沫が空港に向かって降り注ぎ火の勢いを弱め始める。

それを見た局員達は、誰もがバイオ・ズドモンの行動の意味が分からずに、疑問の表情をし始めた瞬間に、燃え盛っていた空港の中から多くの人々を背に乗せた巨大な銀色の狼ーガルルモンが飛び出して来る。

ーーーブン！！

「あの生物は！？」

「あの時の生物！？」

ガルルモンの姿を見たフェイトとはやてが驚きと困惑に満ちた声を上げて、ガルルモンを見つめ始めた瞬間に、上空から漆黒の竜巻が現れ、凄まじい勢いと回転を行いながらバードラモンへと向かい出す。

「ブラックトルネーード！！！」

「くっ！」

自身に向かって来る漆黒の竜巻を見たバードラモンは。高速で自

身が居た場所から離れるが、漆黒の竜巻はバードラモンの後を追尾し続け、徐々にバードラモンに追い付き始める。
　そして逃げる事が不可能だと気が付いたバードラモンは瞬時に、漆黒の竜巻へと向き直り、自身の翼を羽ばたかせて、炎の羽を漆黒の竜巻へと放つ。

「メテオウイング！！」

ーーーバババババババッ！！

「そんな技が効くと思うな！！」

ーーーガガガガガガガガガッ！！！

　バードラモンは漆黒の竜巻へとメテオウイングを放つが、漆黒の竜巻はメテオウイングを突き破り、或いは弾き飛ばしながら、バードラモンの体へと辿り着き、そのままの勢いでバードラモンの体を貫く。

ーーーヅスゥゥゥゥゥン！！

「ばっ！馬鹿なァァァァァァァーーーー！！！」

「バードラモン！！」

　漆黒の竜巻に貫かれたバードラモンは悲鳴を上げると共にデータ粒子に変わり消滅した。
　そしてバードラモンが消滅するのを見たアシュラモンが、悲痛そうな表情をしてバードラモンが消滅した場所を見ていると、漆黒の竜巻はアシュラモンの目の前に着地し、回転を治めると、漆黒の竜

人ーブラックが姿を現した。

「つまらん。今の一撃は手加減したと言うのに消滅するとは。どうやら今回は外れのようだな」

「くっ！貴様は！？」

ブラックの姿を見たアシュラモンはブラックから放たれる巨大な威圧感に恐怖し、足を震えさせた。

それだけではなく、アシュラモンの周りに居た局員達も恐怖の表情をブラックへと向ける。

何せ今のブラックは、管理局の人間達には恐怖の象徴として恐れられている存在なのだ。そのような存在がイキナリ目の前に現れれば、大抵の者達は恐怖に体が動かなくなるだろう。

そして恐怖に震える局員達にブラックは顔を向け、威圧感を最大に発揮しながら局員達を睨み付ける。

「失せろ。俺の戦いの邪魔をするなら六年前の惨劇をこの場で引き起こすぞ」

『ヒィッ！！』

ブラックの言葉を聞いた局員達は恐怖の声を上げると、我先にとその場から逃げ出し、ブラックとアシュラモンだけが残された。

それを確認したブラックはアシュラモンへと顔を戻し、僅かに口元に笑みを浮かべながら、アシュラモンに向かって構えを行い出す。

「此処最近暇だったんでな。俺を少しは楽しませろ」

「くっ！！」

ブラックは言葉と共にアシュラモンに向かって突撃し、アシュラモンは自身の四つの腕を構え戦闘を始めた。

「ドラモンキラーー！！」

ーーードスッ！！

「グオッ！！」

ブラックがドラモンキラーを突き出すと、アシュラモンの右腕の一つを使って防御するが、ドラモンキラーの刃はアシュラモンの腕へと突き刺さり、アシュラモンは苦痛の声を上げた。

しかしアシュラモンは、ドラモンキラーが突き刺さっている腕の筋肉を収縮し、ドラモンキラーの刃を腕から抜けないようにする。

「ムッ！」

「喰らえ！！」

ドラモンキラーが抜けなくなった事にブラックが驚いている隙に、アシュラモンは残っている三つの腕を使ってブラックに向かってラッシュを放つ。

「オォォォォォォォーーー！！」

ーーードドドドドドドドドン！！

アシュラモンは自分の力を全て使ってブラックに最高のラッシュを放つが、ブラックはダメージを受けた様子も無く、残っている左

腕でアシュラモンを殴り付ける。

「フン！！」

ーーードオン！！

「ガアッ！！」

ブラックの一撃を受けたアシュラモンは苦痛の声を上げるが、ブラックは気にせずに筋肉の収縮が緩んだ隙に、右手のドラモンキラーを引き抜き、今度はブラックがアシュラモンへとラッシュを放つ。

「ハアァァァァァァーーーー！！」

ーーードドドドドドドドドドオン！！

「グオォォォォォーーーー！！！」

ブラックのラッシュを受けたアシュラモンは苦痛の声を上げながら近くのビルへと吹き飛び、ビルの壁に激突し瓦礫に埋もれる。

そしてアシュラモンが瓦礫に埋もれたのを見たブラックは、ドラモンキラーの爪先に赤いエネルギー球を生み出し、アシュラモンが埋まっている瓦礫に向かって投げ付ける。

「ハアッ！！」

ーーードゴオン！！

ブラックが放ったエネルギー球は寸分違わずに、アシュラモンが埋もれる瓦礫に激突し、爆発が起きた。

その様子を離れた所から見ていた局員達や、はやて、そしてフェイトは表情を恐怖に染めながら、ブラックの姿を見つめる。自分達が束に成って掛かっても、傷一つ付ける事が出来なかったアシュラモンに、ブラックは簡単に勝って見せたのだから、恐怖を覚えるのも当然だろう。

しかし、ブラックはフェイト達の恐怖には構わず、爆発が起きた場所に顔を向けながら、瓦礫にゆっくりと近づく。

「さっさと出て来い。この程度でやられてはいないだろう？」

ーーードゴオオオオン！！

「ウオォォォォォォーーーーーー！！！！！！」

ブラックが瓦礫に向かって声を掛けた瞬間に、煙の中から全身傷だらけでは在るがアシュラモンがブラックに向けて飛び出し、怒りの顔に自身の顔を変えると四つの腕を振り上げ、ブラックにパンチラッシュを放つ。

「阿修羅神拳（あしゅらしんけん）！！！！」

「ドラモンキラーーーー！！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

アシュラモンが阿修羅神拳を放つとブラックは右腕を全力で突き出し、二人の攻撃が激突した瞬間に、凄まじいほどの激突音が辺りに響く。

そして周りの局員達が息を呑んで、ブラックとアシュラモンが激突した場所を見てみると、アシュラモンの背にドラモンキラーの刃

が姿を現し、アシュラモンの顔が慈悲の顔へと顔を変わりながら、ブラックに顔を向ける。

「・・・・・全力を出して敗れるとは。悔いは無い」

「貴様の最後の一撃は俺に僅かにダメージを与えた。貴様の事は憶えて置こう」

「フッ」

ブラックの言葉を聞いたアシュラモンは笑みを浮かべるとデータ粒子へと変わり消滅するとデジタマだけが残される。

そしてブラックは地面に落ちているデジタマを拾い上げると、何時の間に自身の後ろに居たガルルモンへと顔を向ける。

「空港の方は終わったのか？」

「はい。内部に居たデジモン達はティアナとレッパモン、そしてクイントさんが倒して、空港の中に残されていた人々は、僕とルインさんが全員救出しました」

「そうか。ならもう此処には用は無い。行くぞ」

ガルルモンの報告を聞いたブラックは頷くとガルルモンと共に転移しようとするが、高速で接近して来たフェイトが金色の鎌ーハーケンフォームに変形しているバルディッシュを全力でブラックに向けて斬りかかる。

「ハアァァァァァァーーーー！！」

「フン！！」

ーーーガキィィン！！

フェイトの一撃をブラックは左手のドラモンキラーで受け止め、辺りに激突音が響いた。

その状態のまま、ブラックはゆっくりとフェイトに顔を向けながら、詰まらなそうな表情をして、左手を振り抜き、フェイトを弾き飛ばす。

「ムン！！」

ーーーブン！！

「キャアッ！！」

弾き飛ばされたフェイトは悲鳴を上げるが瞬時に体勢を立て直し、ブラックにバルディッシュを向ける。

しかし、そのようなフェイトの姿を見ても、ブラックは訝しげな表情をして、フェイトに質問の声を出す。

「何の真似だ？まさか、俺と戦う気なのか？」

「そうだ！絶対にお前を逃がさない！！」

ブラックの質問に対して、フェイトは怒りの表情をしながら答えた。

フェイトに取って、ブラックは自身の第二の母に成っていたかも知れない人を人間で無くした上に、自身の大切な親友であるなのはを魔導師として活躍出来ない様にした憎い敵なのだ。

そのブラックを追い掛ける為に、フェイトは血の滲む様な努力をして執務官に成ったのだが、結局の所、上層部の意見を変える事が出来なかった上に、ブラックの背後に居る者の捜査さえも禁じられてしまった。そして再びブラックが現れた今こそがブラックを捕まえる最大の好機だと判断し、ブラックに切り掛かったのだ。
だが、フェイトの宣言を聞いてもブラックはフェイトに無関心だと言うように、フェイトから視線を逸らす。

「俺を捕まえる気なら非殺傷設定などで挑んで来るな。俺を捕まえたければ殺傷設定で来い」

「待て！！」

ブラックは言葉と共にフェイトに背を向け、ガルルモンと自分の足元に転送用の魔法陣を発生させ始める。
それを見たフェイトは慌ててブラックに斬りかかるが、フェイトの攻撃がブラックに届く前にブラックとガルルモンはその場から転移し、フェイトは悔しそうな表情を浮かべるのだった。

その頃。空港からバイオ・グラップレオモンのまま脱出したクイントは、ギンガとスバルを安全な所に降ろすと二人に別れの挨拶をしていた。

「二人とも元気でね」

「ッ！！行かないでお母さん！！」

クイントの言葉を聞いたスバルは慌ててクイントの体を抱き締め、

クイントを行かせないようにしようとするが、クイントは悲しげな表情をしながらスバルに向かって首を横に振るう。

「ごめんね、スバル。お母さんは一緒に居られないの。戦わなければいけない者達が居るのよ」

「・・・・・・さっきの生物の事なの、母さん？」

「ええ、あの生物達を影で全て操っている奴を倒さないといけないの」

ギンガの質問にクイントは険しい声を出して答えると、スバルの頭を優しく撫でながら立ち上がり、スバルに声を掛ける。

「スバル、お母さんは何時も皆の事を見守っているわ。元気でね」

クイントがスバルに向かって優しげな声を出して告げた瞬間に、白い髪の壮年の男性がスバルとギンガに向かって駆けて来る。

「ギンガ！スバル！！」

『お父さん！！』

掛けて来た男性、ゲンヤの姿を見たギンガとスバルは嬉しそうな声を出してゲンヤの方に駆け出すと、ゲンヤは二人を強く抱き締める。

「無事で良かったぜ」

「うん・・・・・・・あの人が助けてくれたんだよ」

ゲンヤの言葉を聞いたギンガはクイントの方に顔を向けて答える。
ギンガはクイントが人間で無くなった事をゲンヤに知られたくないと思い、目の前に居る獅子の様な顔をした獣人ーバイオ・グラップレオモンの正体がクイントだとは告げなかった。
そしてギンガとスバルを抱き締めながらゲンヤはクイントへと顔を向ける。

「・・・・・娘達を助けてくれた事、礼を言う。ありがとう」

ゲンヤの言葉を聞いたクイントは頭を下げると、背を向けその場から離れようとした瞬間に、ゲンヤが後ろから声を掛ける。

「詳しい事は聞かねえ。だけど絶対に帰って来いよ。俺達は待っているぜ、クイント」

「ッ！！」

ーーーギュルルルルルルルルッ！！

ゲンヤの言葉を聞いたクイントは一瞬体を震わせると、再び黒いデジコードを発生させ、元の人間の姿に戻った。
そして目から嬉し涙を流しながらゲンヤへと振り返り、心の底からの嬉しげな笑みをゲンヤへと向ける。

「ええ、絶対に帰って来るわ。だってゲンヤさんとギンガ、スバルが居る場所が私の帰る場所ですもの。それじゃあね」

クイントはゲンヤとギンガ、スバルに向かって笑みを浮かべて言葉を言うと、今度こそ、その場から去って行く。

そしてクイントが去って行くのを確認したゲンヤは、自分の大切な人が生きていた事に笑みを浮かべ、ギンガとスバルを抱えて、クイントとは逆方向にその場を去って行くのだった。

燃えさかる空港、炎のデジモン達、後編（後書き）

次回予告

空港での戦いから一夜明けた日

はやてはなのはとフェイトに自身の夢を話す。

そしてはやての夢を聞いた二人はそれぞれ如何するかを考える。

その時に管理局が放送した偽りの事実に、なのはは怒りを覚える。

そして一人の少女が決断する事は。

次回、漆黒の竜人と少女、『歪められた事実』

再び選択の時は舞い降りる。

歪められた事実

空港の火災から一夜が明けた日の朝。一晩中、事件後の処理など動き続けていたフェイトとはやては、疲れからかキングサイズのベットの上で倒れていた。

その様子になのはは苦笑を浮かべながら、フェイトとはやてのコーヒーを作り、コーヒーを二人に手渡しながら声を掛ける。

「二人ともお疲れ様。これ飲んで」

「ありがとう、なのは」

「助かるわ」

なのはからコーヒーを手渡された二人は起き上がり、コーヒーを受け取りながら礼を言う。

そしてコーヒーを飲んだフェイトとはやては驚いた表情を浮かべ、なのはに顔を向ける。

「美味しいよ」

「ほんまや、こんな美味しいコーヒーは久しぶりやで」

「クスッ、お父さんとお母さんに学んでいるからね」

コーヒーを飲んだフェイトとはやてはお世辞抜きになのはのコーヒーを褒め、それを聞いたなのはは嬉しそうな笑みを浮かべながら、フェイトとはやての声に答えた。

そしてコーヒーを飲み終えたはやては表情を真剣に変えて、なの

はとフェイトにゆっくりと顔を向ける。

「二人とも聞いてくれへんか」

「何？はやてちゃん」

はやての言葉を聞いたなのははやてに疑問の声を上げて質問し、フェイトもなのはと同じ様に疑問の表情をしながらはやてを見つめると、はやては自分の感じていた地上本部への不満を語り出す。

曰く、ミッドチルダの地上部隊の行動が遅い。ここ数年でミッドチルダの各地で謎の生物達が暴れ周り、次々と建物や人々を傷付ける事件が多発しているのに、未だに地上本部は何の行動も起こしていないと言う事らしい。

（原因は地上本部じゃなくて上層部なんだけどね。それに地上の戦力が低いのは本局のせいだよ）

はやての言葉を聞いたなのはは、内心で冷静に自分の知る情報とリンディから聞いた地上との現状の事を思い出し冷静にはやての言葉を分析していた。

地上が生物－デジモン達に何も出来ないのは、上層部がデジモンに対する有効な対策も出さない上に、デジモンが出現しても上層部の命令で地上は思う様に動けない状態に在るからだ。その上、地上の優秀な人材は全て本局の方が引き抜いて行き、地上の戦力はギリギリで人々を護るのが精一杯だった。

（リンディさんも離れて管理局を見てみておかしいって言っていたけど。本当だね。私もあのまま管理局に残っていたら、管理局の歪さに気が付かなかったかもしれない）

今のなのはは管理局から離れた為に管理局の歪さが良く見えていた。
確かに平和を護っているのは間違いない。だが、それは大局的に見ればの話だ。現にミッドチルダの地上では犯罪が日常茶飯事的に起きている上に、その殆どが魔法に寄る物が多い。しかし、その事実があっても本局は有効な対策を出そうとせず、地上の怠慢だと叫んでいる状況だった。

（はやてちゃんの言葉も分かるけど、根本的な解決には成らない。本当に解決する為には個人戦力よりも全体の戦力の向上。じゃ無いと何れ現れる七大魔王デジモンや、それに従う大勢のデジモン達に管理局は全く歯が立たないよ）

既になのははデジモンの実力が嫌と言うほど分かっている。本局に居る局員達なら完全体レベルデジモンが十数体同時に現れても大丈夫だろうが、地上の方では成熟期十数体が襲い掛かってくれば地上の部隊の殆どは壊滅するだろう。それほどまでにデジモンと人間の差は激しいのだ

（魔導師、個人の戦力で及ぶのは完全体まで。究極体には同じデジモンじゃないと歯が立たない。難しいね。個人でも全体でもメリット、デメリットが存在している。どっちにしても今の管理局じゃ駄目だよ）

その様になのはが管理局の現状に付いて内心で結論を出している間に、はやての話は進み真剣な表情を浮かべながら、なのはとフェイトに顔を向ける。

「私は部隊を持ちたいんよ。少数精鋭のエキスパートで、事件が起きたら迅速に駆け付けられる部隊。その部隊で成果を上げれば上の

方も考えが変わって、ブラックウォーグレイモンを追い駆けられる許可が貰えるかもしれへん」

「ッ！！」

はやての言葉を聞いたフェイトは目を見開きながら、はやてを見つめ、なのはは険しい表情をし始め、はやてに向ける。

それを確認したはやては険しい表情のまま、話を再開する。

「ハッキリ言って、アイツを追うのは今のままやと無理や。神出鬼没な上に実力は化け物。どの部隊も今は追うの恐怖しているぐらいや。だから此処で私が作った部隊が追う事を宣言すれば追えるかもしれへん」

はやてとてブラックの事を追えない状況に不満を覚えていたのだ。

しかし、幾ら言っても上層部達は耳を貸さず、ブラックを追うなと言うばかり。だが現状ではどの部隊もブラックに恐怖を覚え追うのを躊躇っている状況。もはや現在の管理局の部隊には進んでブラックを捕まえようとしている部隊は存在していない。

そしてはやては深く深呼吸をして、再びなのはとフェイトに顔を向ける。

「それで、もしも私が部隊を持つ事に成ったら・・・・・二人とも協力してくれへんか？」

「協力するよ！私だってアイツを追いたいと思っているんだから」

はやての言葉を聞いたフェイトは、はやての手を握り締め協力する事を宣言する。フェイトとしても現状には憂いていたので、はやての言葉は正に天恵に相応しい言葉だった。

しかし、なのはだけは、はやての言葉に軽はずみに頷かず、険しい表情を浮かべてはやてに顔を向ける。

「私は少し考えさせて貰うね。今の私は戦闘が出来る状態じゃないし、自分でもこれから先の事で悩んでいるからね」

「うん、わかっとるよ」

なのはの言葉を聞いたはやては頷き、フェイトもなのはの現状を知っているので無理強いはしないと言う表情を浮かべて頷く。

それから三人は軽い食事を取る為に、ホテルに在るレストランへと向かい出した。

しかし、レストランに着く少し前に、ロビーに備え付けられている巨大なテレビから昨日の夜の事件が語られ、なのはは気になり、モニターの中に映っている報道陣が告げた言葉を聞いていると、突如としてその顔を不快そうに歪め始めた。

『昨夜の夜に起きた空港火災現場に居た人々は管理局の救助隊が全て救い出したそうです。また空港火災を起こした犯人は広域次元犯罪者『漆黒の竜人』だと管理局は発表しました。また『漆黒の竜人』の他にも謎の生物が数体目撃されたそうですが、此方の生物は如何やら『漆黒の竜人』の仲間だと管理局は発表し住民の皆さんには注意を呼び掛けています』

（ふざけているね。空港火災の犯人は他のデジモン達なのに。デジモンの事を知られたくないからブラックさんが犯人だって発表するなんて。其処まで自分達が世界を護っている思わせたいの？皆を、地球を滅ぼそうとしたくせに！！）

モニターに映ったアナウンサーの言葉を聞いたなのはは内心で怒

りの声を上げた。
昨日の事件で多くの人々を助けたのは結局の所はガブモン達で在って、管理局は外に居たデジモン達に阻まれ、一人も救助していない上に炎の沈静も行なってはいない。それなのにこの様な放送が行われているのだから、怒りを覚えるのも当然だろう。
そしてモニターを見つめるなのはの様子に、はやてとフェイトは困惑するように顔を見合わせて、なのはに質問する。

「なのはちゃん？どないしたん？」

「なのは？」

「・・・・・何でも無いよ。二人とも」

フェイトとはやての疑問の声に、なのはは何時もの笑みを浮かべながら答え、その様子にフェイトとはやては疑問の表情を浮かべるが、なのはは答えずにレストランの中に入って行き、フェイトとはやては慌ててなのはの後を追い駆けた。

そして三人が食事を始め、在る程度経つとはやての研修先の部隊長ーゲンヤ・ナカジマから通信が送られて来る。

ーーーピピピピピッ！！

「・・・・どないしたんですか？ゲンヤさん？」

『ああ、ちょっとな。其処に高町なのはは居るか？』

「へっ？おりますけど？」

ゲンヤの言葉にはやては呆気に取られた様な表情をして答えると、なのはがモニターに割り込みゲンヤに質問する。

「あの～、私が高町なのはですけど？何か御用ですか？」

『俺はゲンヤ・ナカジマという者だが、ちょっと今回の事件で現れた巨大な狼の事が聞きたくてな。すまねえけど、後で俺の部隊に来てくれ。場所は八神に聞いてな』

「・・・・・分かりました」

ゲンヤの言葉を聞いたなのはは一瞬険しい表情を浮かべるが、すぐに表情を戻しゲンヤの言葉を了承する。

それを聞いたゲンヤは笑みを浮かべて待っていると答えると通信を切り、フェイトとはやては疑問の表情を浮かべながらなのはを見つめるのだった。

その頃。ミッドチルダの一つの病院の病室でメラモンの攻撃を受けて検査入院していたギンガと、そのベットの横にある椅子に座ったスバルが話をしていた。

「・・・・・ギン姉、怪我が治ったら私にシューティングアーツを教えて」

「魔法が嫌いなんじゃなかったの？」

スバルの言葉を聞いたギンガは真剣な表情をしながらスバルに質問した。

そのギンガの質問を聞いたスバルは、膝に乗せていた両腕を強く握り締めながら、真剣な表情でギンガの瞳を見つめる。

「嫌いだった・・・・・だけどお母さんが戦っているのを見て分かったんだ。どんな力だって人を助けられるって」

「・・・・・そうね」

「ギン姉が戦っている時に私は何も出来なかった。だから弱い自分とはお別れをしたいの。お母さんと再会した時に『強くなったよ』ってお母さんに言えるぐらいに」

スバルはメラモンとギンガが戦っている時に何も出来なかった事を悔やんでいた。

もしあの時にクイントが駆け付けて居なければ、ギンガはこの世にはおらずスバルもこの世には居なかっただろう。だからこそ、スバルは強くなりたいと思ったのだ。今度は自分がギンガを、そしてクイントを助けられるぐらいに強くなりたいと。

そしてスバルの決意に満ちた言葉を聞いたギンガは笑みを浮かべて、スバルの姿を見つめる。

「其処まで言うなら分かったわ。覚悟出来ているなら何も言えないし、私も一から鍛えなおそうと思っていたからね」

「えっ？」

「クスッ、だって母さんが生きていたのよ。それなのに未熟な腕のままではいられないわ。絶対に母さんを超えてみせる」

スバルの疑問の声にギンガは笑みを浮かべながら自身の決意を告

げる。
　スバルと同じ様にギンガもまた強くなりたいと思っていたのだ。自分が全力を出しても全く歯が立たなかったメラモンに、クイントは進化せずとも勝てた。その事がギンガの頭からずっと離れずに居た。あの強さに追い付きたいと心からギンガは想っていた。

（目標が出来た。絶対に貴女を超えて見せますよ、母さん）

　ギンガはそう考えると、窓の方に目を向け青い空の何処かに居るであろうクイントに向かって、何時か母の居る場所を越えて見せると誓うのだった。

　一方その頃。はやてからゲンヤの居る部隊の場所を聞いたなのはは、ゲンヤの下を訪れ、部隊長室で互いにテーブルを間に挟みながら顔を合わせていた。

「すまねえな嬢ちゃん。もう一般人も同然だってのに呼び出して」

「いえ、良いんですよ。それで何のようですか？」

　ゲンヤの言葉になのはは気にしていないと言う表情を浮かべて質問するが、もしもの時の事を考え、近くにガブモンを連れて来た上にスカートのポケットの中に在るディーアークを握り締め、何時でもガブモンを呼べる状態にしていた。
　そしてなのはの言葉を聞いたゲンヤは真剣な表情をしながら、疑問に思っていた事をなのはに質問する。

「率直に聞くぜ。嬢ちゃんは今回の空港に現れた生物達に付いて何

か知っているな？」

「・・・・・如何してそう思うんですか？」

「嬢ちゃんが管理局を辞める前に起きた事件。街に出現した巨大な狼と昆虫に巨大な鳥の戦いの現場には当時、車椅子に乗った嬢ちゃんがいた。そしてその後すぐに地球で療養を行なっている。普通なら誰も怪しまねぇが、俺の長年の勘が告げたんだ。嬢ちゃんは何かを知ってしまったから管理局を抜けたんだ。如何だ？」

なのはの質問にゲンヤは自分の考えを真剣な表情をしながら告げた。

ゲンヤは昨日の夜の事件が終わった後にすぐさまデジモン達が関わった事件を一睡もせずに調べ上げ、四年前の事件に目を向けたのだ。あの事件の時も管理局は、街の人々を護っていたガルルモンの存在を、今回の事件の時の様に揉み消していた。その事に気が付いたゲンヤはすぐさまあの事件に関わった者達を調べ上げ、なのはの存在を知ったのだ。

そしてゲンヤの質問になのはは険しい表情をしながらスカートに付いているポケットに手をいれ、予め用意していた紙を怪しまれないように取り出すと、自身を監視しているサーチャーの位置を確認しながらテーブルの下に紙を落とし、ゲンヤの足元の方に魔力を使ってゲンヤに見えるように浮かせる。

「偶然ですよ。あの後、結局私は自分の無茶の繰り返しのせいで魔導師としてやっていけなくなりましたからね」

《話を合わせて下さい。私には監視が付いています。私の仲間がサーチャーを誤魔化すまでの間は、頷くだけでお願いします》

「・・・・・」

なのははは言葉と共にゲンヤの足元に存在していた紙を、器用に操りゲンヤに気が付かせ、ゲンヤは黙って怪しまれない程度に頷いた。

その様子に気が付いたなのははは新たに紙を床に落としながら、ゲンヤの顔を見つめながら話を始める。

「ゲンヤさんが疑問に思うのも当然ですけど、私が魔導師としてやっていけないと告げたのは管理局ですから」

《あの生物達の総称はデジモン。とある世界に住む生物達です》

「そう言えばそうだったな。だが、あの現場には嬢ちゃんが一番すぐ近くに居たんだし、何か知っているだろう？」

「確かに居ましたが、私は何も知りませんよ」

《クイントさんから、事前にゲンヤさんが聞いて来たら教えて上げてくれと頼まれていたので、サーチャーの誤魔化しが終わるまで待っていて下さい》

「そうか・・・・・俺の勘が外れるとは・・・・・俺も歳を取ったかな？」

二人は話をしている振りをしながら、見えないようになのははゲンヤと打ち合わせを行う。

そしてゲンヤが自分の勘が外れた事に落ち込む演技をし始めた瞬間に、なのはのポケットの中に在るディーアークが振るえ、なのははディーアークをポケットから取り出すと、映像が映り始め、映像に映ったワーガルルモンがなのはに声を掛ける。

『なのは。サーチャーの誤魔化しは終わったよ。もう会話をしても大丈夫だよ』

「ありがとう、ワーガルルモン君」

『気にしないで。それじゃあ僕は周りの警戒を続けるよ』

ーーーブンッ！

なのはの言葉にワーガルルモンは笑みを浮かべながら答えると通信を切り、それを確認したなのははディーアークをポケットに戻し、ゲンヤへと顔を向ける。

「サーチャーの誤魔化しは終わったそうです。もう声を出して会話が出来ます」

「そうか。しかしコイツは結構やばそうだ。クイントの奴もとんでも無い事に関わっている様だな？」

「はい、かなり不味い事態に成っています」

険しい表情を浮かべて呟いたゲンヤの言葉になのはは頷き、クイントと自分達が関わっているデジモンと管理局に付いての事を、ゲンヤに全て説明し始める。

そして全ての話を聞き終えたゲンヤは困惑と険しさに満ちた表情をしながら、なのはに顔を向ける。

「・・・・・不味い所の騒ぎじゃねぇな。ミッド所か全世界の危機じゃねぇか。しかも管理局は全く役に立ったねぇと来ていやがる」

「はい。今日のニュースで話していた通り、管理局はデジモン達が敵である様に情報を流しています。今までのデジモン達の事件は、殆ど私達が解決していたんです」

「・・・・・最悪だな。と言う事は俺らの所に届いている情報は全部偽りかよ」

なのはが告げた事実にゲンヤは顔を手で抑えてながら、険しい表情を浮かべた。

此処数年間で起きたデジモンに寄る事件は、近くに居た部隊が迅速に排除したと伝えられていたので、地上の部隊は安心していたのだが、それが偽りと成れば話は大分変わる。

「ボケたのか上層部の連中は？そんな重要どころか、知らなきゃ命に関わる情報を知らせないなんてよぉ？」

「・・・・・多分、上層部達は操り人形になっていますよ。自分達の意思で動いていると思っているんでしょうが、別の誰かの意思通りに動いているんです」

「・・・・・それが事実だとすれば最悪を通り越すぜ。上層部が役に立つ所から、本当の敵の人形になっているとすれば、管理局は何も出来なくなる」

なのはが告げた事実にゲンヤは険しい表情を浮かべながら答え、現在の状況がどれほど不味いのか確認し絶望の表情を浮かべた。

何せ、管理局は自分達で法を決め、法を執行し、法を適用とすると言う。地球で言う三権分立が一箇所に集まった組織。その為に上の者達が間違っていると指摘出来る者がいないのだ。

「完全に管理局の弱点がばれていやがる。上層部を抑えられたとなれば管理局は完全に操り人形も良い所だぜ」

「ええ、だからクイントさんも管理局を信用出来なくなったんです。それに操り人形に成る前からも上層部達は違法を繰り返していたようで・・・・・最高評議会の正体なんてもっと驚きますよ」

「評議会の正体？」

「良く思い出して見て下さい。評議会が代替わりしたなんて聞いた事が在りますか？」

「ッ！！」

なのはの言葉を聞いたゲンヤはハッとした表情を浮かべ、慌てて考え始める。

評議会が代替わりしたと言う話など聞いた事が無い。しかも自分が管理局に入局した頃からも全くその様な話を耳にした事はない。少なくとも自分が管理局に入ってからは一度も。それが意味する事は唯一つ。

「人間の体を捨てやがったな。機械化したか、脳だけになって生きているかのどちらかしねぇな」

「そう言う事です。当然、評議会の正体を知る者など限られている。そうなれば敵は評議会を殺して自分達が成り代わる事さえも可能」

「しかも相手は一人でも管理局を滅ぼせる様な存在。成る程、クイントの奴が俺達に伝えねえ筈だぜ。こんな事実が分かったと成れば

管理局を信用するのは危険すぎる」

なのはの言葉を聞いたゲンヤは漸くクイントが自分達に生存していると言う情報を伝えなかったのか納得した。

確かにこれだけ管理局に取って最も知られたくない情報を知ったと成れば、表立って動けなくなる上に、上層部達はクイント達を抹殺しようと動き出す筈だ。

そしてゲンヤの言葉になのはは真剣な表情をしながらゆっくりと頷き、話の続きを始める。

「こうやって私がゲンヤさんに話せるのも、監視が緩んでいる事と昨日の事件の情報操作で動き回っている事。そして私とゲンヤさんは全く会った事がなかった事のお陰でこうやって話せるんですよ・・・・私だけじゃなくて、はやてちゃん達にも監視は付いているんです」

「そうか、八神の奴は漆黒の竜人の野郎を追っている。連中としても八神達の行動は目触りって訳か」

「はい」

ゲンヤの言葉になのはが険しい表情をしながら答えると、ゲンヤは顔を俯かせ、何かを考え始める。

そして少し時間が経つとゲンヤは決意に満ちた表情しながら顔を上げ、なのはに顔を向ける。

「クイントの奴に伝えてくれ。表立っては協力出来ないが、出来るだけ俺はクイントに協力すると」

「分かりました。絶対に伝えます」

「頼んだぜ」

なのはの言葉を聞いたゲンヤは笑みを浮かべながら、なのはに右手を差し出し、なのはも右手を差し出し握手を交し合うのだった。だが、この時にゲンヤはもう一つの決意を決めていて、それが未来において希望へと繋がるとは、なのはは夢にも思っていなかったのだった。

歪められた事実（後書き）

次回予告

空港火災から数日のたった日。

漆黒の竜人達は在る世界でデジモンの反応をキャッチする。

そしてその世界に向かい、女性陣は歓喜の叫びを上げる。

次回、漆黒の竜人と少女、『海だ！夏だ！巨大クジラ出現！！』

蒼く広がる海で、凄まじい戦いが始まる。

海だ！夏だ！巨大クジラ出現！！（前書き）

ブラック人間体設定

身長・１９０ｃｍ

容姿：黒髪に金色の瞳をした二十代前半の美形

詳細：フリートが度重なる実験の結果生み出したブラックの人間体。その力は人間時の姿でも並みの完全体レベルなら区も無く倒せるほど。進化の時に『ハイパーダークエヴォリューション』と叫べば元のブラックウォーグレイモンの姿に戻れる。
だが、ブラックは人間体の姿を嫌っているので滅多の事では成らないが、たまにリンディとルインと街に出る時は人間体に成る。

海だ！夏だ！巨大クジラ出現！！

空港火災事件が起きてから数日後のアルハザード。
ブラック達がデジモンの反応を見つける事が出来ず、それぞれアルハザードで過ごしていたある日の事。
全員がそれぞれの部屋で深く寝静まっている時間帯の時に、ただ一人、研究室の壁に寄り掛かり眠っていたブラックの傍に一つの影が静かに接近して来た。
その影はブラックが完全に眠りについているのを確認すると、ブラックの体の周りに幾つものモニターを出現させて何かの作業を静かに行い始める。

そして翌日の朝、他のメンバーが眠っている中で、誰よりも早く目覚めたブラックはゆっくりと辺りを見回し、備え付けられている時計に目を向ける。

「・・・・朝か。この体に成ってからと言うもの時間がくれば勝手に目覚めるから、起きるのが楽だな」

ブラックはそう言いながら立ち上がり、早朝訓練を行う為に訓練室に向かおうするが、その足は突如として止まり、自身の手を呆然とした瞳で見つめ始める。

「・・・・・・・・何だ此れは？」

ブラックが呆然とするのも当然だろう。
何せ今のブラックの手は何時ものドラモンキラーが装備された腕ではなく、完全に人間のような形をした腕へと変わっていたのだ。
そして自身の手を呆然と見つめながらブラックは鏡が在る場所へ

と向かい、備え付けられている鏡を見てみると、肩口で切り揃えた黒髪に金色の瞳に、身長１９０ｃｍの二十代前半と思われる美形の男性が黒いシャツに黒いコート、黒いジーズンと全身黒尽くめの服装を見に付けていた。
その姿は如何見ても、ブラックの異形と呼べる漆黒の竜人の姿には見えず、如何見ても“人間”にしか見えない人物が鏡に映されていたのだった。

「・・・・・フリートォォォォォォォーーーーーーーー！！！！！！」

自身の姿が完全に人間に成っている事に気が付いたブラックは怒りに満ちた叫びを、研究所全体に響くほどに上げるのだった。

そしてその叫び声を聞いた全員が眠りから目を覚まし、急いで自室として使っている部屋から飛び出すと、研究室に全力で向かい出し、研究室の中を覗いて見ると、土下座しているフリートに怒りの満ちた視線を放っている人間体のブラックが存在していた。

「・・・・・すいませんでした」

「貴様・・・・よくも俺をこんな姿にしてくれたな」

「・・・・・あの、もしかしてブラック様ですか？」

土下座してるフリートと見た事も無い男性の姿にルイン達は困惑した表情をしながらも、ブラックと思われる男性に質問した。
そのルインの質問を耳にしたブラックは、ルイン達に不機嫌そうな表情をゆっくりと向けながら頷く。

「そうだ。このマッドにこんな姿にされた」

「・・・・・カッコいいです！！！」

「うっ、確かにカッコいいですね」

ルインとリンディは顔を赤らめながらブラックの容姿を褒めた。

何せ、今のブラックの姿はその辺りの下手なアイドルが束に成っても敵わないほどの容姿なのだ。ブラックの事を一人の男性として意識しているルインとリンディに取っては顔を赤らめるのには十分過ぎる事だろう。

因みにティアナはブラックの事はもう一人の兄として意識しているので別に顔を赤らめたりはしていない。もし男性として意識していたら首に居るクダモンが嫉妬していただろうが。

そしてルインとリンディが顔を赤らめる中、クイントとガブモンがブラックの傍に寄り声を掛ける。

「まあ、落ち着きなさいよ。その体なら管理局の連中にも気付かれないでしょうし、デジモンの捜索が楽になるわよ」

「そうですよブラックさん。フリートさんも其処まで考えてやったんでしょうし、赦して上げましょうよ？」

「・・・・・ふん！良いだろう。だが、二度と勝手に俺の体を弄るのは赦さん！」

「分かりました！もう絶対にしません！！」

ブラックの言葉を聞いたフリートは更に深く土下座をしてブラッ

クの言葉に了承した。
それを確認したブラックは、不機嫌そうな表情をしながらも元の姿に戻ろうとするが、その瞬間に、研究室に警報音が響きティアナが機械を調べ始める。

ーーービィィィィィッ！！

「・・・・・デジモンの反応ですね。場所は第八管理世界に在るリゾート地の海辺付近です」

『リゾート地！！』

ティアナの告げた場所に他の女性陣は声を上げ、女性陣全員が互いに顔を見合わせると頷き合い笑みを浮かべ合う

「良いですね。たまにはゆっくりとしたいです」

「そうですね、リンディさん。この研究所に篭っているばっかりじゃなくてたまには羽目を外しましょう」

「水着も選ばないとね」

「はい！ゆっくり行く先で英気を養いましょう！」

リンディ、ルイン、クイント、そして最後にティアナもコンソールから離れると行く場所に付いて話し始めた。
その様子を黙って見つめていたブラックとガブモン、そしてクダモンは揃って同時に溜め息を吐き、顔を見合わせるのだった。

そして準備を終えたブラック達はリゾート地に在る海に来ると、それぞれ持って来た物を用意したパラソルの下に置くと、白いビキニを身に付けたリンディが全員に真剣な表情を向ける。

「それでは私達はこれから海に入り、海の中に居るであろうデジモンを探します。出来るだけ二人一組で動いて下さい。海系のデジモンだと相手は強化されますからね」

「そうね。その方が良いわね」

リンディの言葉に蒼い面積の多い水着を着たクイントが同意を示し、オレンジ色の水着を着たティアナも頷く。

因みに今回ガブモンはなのはが来れないという事で、何時も通りなのはの護衛の為に地球にいる。

それを確認したリンディは笑みを浮かべ、残っている人間時の服装を着たブラックと青と黒の混じったビキニを着たルインに顔を向ける。

「ブラック様！如何ですか！？私の水着は！？」

「知らん。興味が無い」

ルインが嬉しげに見せて来た自身の水着姿を見ても、ブラックは全く動じず海の方を見つめ、周りで見つめていた旅行客の男性達がブラックに憎しみの視線を向け始める。

何せ、ブラックの周りに居る者達は全員が美女や美少女と呼ぶに相応しい人物達なのに、ブラックは興味は全然無いと言いたげに海ばかりを見つめているのだから、男性ならば憎しみをブラックに抱くのも当然だろう。

そしてブラックの言葉にルインは悲しげな表情を浮かべ、リンディは呆れた様な表情をする。
二人ともブラックが色恋には全く興味が無いのは知ってはいるのだが、それでも気に成る男性には自分達の水着姿を褒めて貰いたいと思っていたのだ。
しかし、ブラックはルインとリンディの様子など一切気にせずに海の方へと足を進め、その後ろをルインとリンディは慌てて追い掛けていく。
その様子をリンディとルインの背後で黙って見ていたティアナとクイントは、リンディ達の姿が見えなくなると、顔を見合わせ、同時に苦笑を浮かべる。

「ブラック兄さんも少しは色恋に目を向けて欲しいですね、クイントさん？」

「そうね。出ないと二人が可哀想に思えるわ」

「・・・・私には色恋など全く分からんが、確かにリンディやルインが哀れに思える」

ティアナとクイントの言葉に、ティアナの首に巻き付いていたクダモンもリンディ達の向かった方向に哀れだと言うような表情を向けながら、同意の声を上げた。
しかし、デジモンには性別など無いが、もしティアナに男が出来たと成ればクダモンは全力で排除しようとするだろう。生まれた時から一緒に居てくれたティアナの事をクダモンは母親であると共に大切な人だと意識しているのだ。
そしてクダモンの言葉にティアナとクイントは更に苦笑を深めながら、ブラック達が向かった方向とは別の方向に足を向け歩き始め

る。

「それにしても海の中にデジモンが居ると成れば、厄介ですね。海系のデジモンはどれもこれも厄介なタイプが多いですし、もしあのデジモンが存在していたらこのリゾート地は一瞬で崩壊しますよね？」

「ええ、あのデジモンでない事を祈りたいけど」

「だが、楽観視は出来ない。常に最悪の場合を考えて置くべきだ」

ティアナとクイントの言葉にクダモンは冷静な表情をしながら答え、ティアナとクイントは険しい表情をして頷くと、持って来ていたサーチャーを使ってデジモンの反応の調べ始めるのだった。

その頃。ティアナ達と別れたブラック達は人の居ない岬に来ると、海の方を見渡しながらデジモンの気配を探っていた。

「如何やら沖の方に二体。浅瀬の方に一体隠れているようだな」

「と言う事は全部で三体。しかも海の中に居ると言う事は水棲系のデジモン」

「厄介ですね。海の中に居ると成れば攻撃も思うように出来ませんしね」

ブラックの言葉にリンディとルインは険しい表情を浮かべながら話し合う。

海は水棲系デジモンに取って最高と呼ぶべきフィールド。デジモンはフィールドに寄って力が左右される存在、そのフィールドで戦

うと成ればブラックも苦戦は免れないだろう。
しかし、ブラックはまるで気にしていない所か、寧ろこれから起こる戦いを楽しみだと言う表情をして、海に向かって黒いデジコードを体から発生させながら叫ぶ。

「ハイパーダークエヴォリューション！！ブラックウォーグレイモン！！」

ブラックが叫んだ瞬間に幾つ物黒いデジコードがブラックの姿を覆い、中から両腕に黒い鉄鋼ードラモンキラーを装備した腕が現れると、ドラモンキラーは黒いデジコードを引き裂くように弾き飛ばし、黒く光る頭部に胸当てを付け、そして金色の髪を靡かせる漆黒の竜人ーブラックウォーグレイモンが姿を現した。

「やはりこの姿が一番落ち着く、人間の姿では違和感が付き纏うからな」

「ぶう〜、もうちょっと人間の姿で居ても良かったじゃないですか、ブラック様？」

元の姿に戻ったブラックは調子を確かめるように手を握り締め、その様子を見ていたルインとリンディは不満そうな表情をするが、ブラックは気にせずに上空に浮かび、ルインとリンディも慌ててブラックの後を追い駆け始める。

「それで如何するんですか？」

「決まっている。浅瀬の方に居る奴はティアナ達に任せて、俺達は沖の方に居る二体を叩く！」

リンディの質問にブラックは答えると、自分達の下に感じる気配に向かって赤いエネルギー球を全力で放つ。

「ムン！！」

「仕方ないですね！ダークエヴォリューション！！バイオ・ズドモン！！」

ーーーバシャン！！

ブラックの攻撃を見たリンディは叫び、ブラックと同じ様に黒いデジコードを体の周りに発生させ、デジコードが巨大に成って行くと、その中から巨大な甲羅を背中に背負い、頭に一本の鋸の様な角を生やし、クロンデジゾイド製の『トールハンマー』を持ったバイオ・ズドモンが姿を現し海の中へと着地した。

そしてルインもバリアジャケットを身に纏いブラックの横に並んだ瞬間に、海の中から巨大なクジラと水色の姿をした人型のよう姿をして良く見ると無数の触手が集まった生物が姿を現す。

ーーーバシャン！！

ホエーモン、世代／完全体、属性／ワクチン種、種族／水棲哺乳類型、必殺技／ダイダルウェーブ

深海に住む水棲哺乳類型デジモン。その容量はデジタルワールド最大級の大きさで、並のコンピューターでは解析不可能。深海に生息しているため目は退化しなくなっている。たまに海上付近にも姿を現すが、怒らせると巨大な大津波を巻き起こし攻撃してくる。ホエーモンには成熟期と完全体の二種類が居る。完全体の方は寄り攻撃力、生命力が強くなっているので危険である。必殺技の『ダイダルウェーブ』は巨大な津波を起こし攻撃する技だ。

ダゴモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／水棲獣人型、必殺技／フォービトゥントライデント
“海底の破戒僧”と呼ばれる邪神デジモン。バトルに勝利した後、首の数珠をはずしてお坊さんのように両手をあわせることから、このあだ名がついた。触手をたばねているため人型に見えるが、実は軟体デジモンの進化形態。リングやクサリをはずすと触手があらわれ、それを使って攻撃してくる。必殺技の『フォービトゥントライデント』は、腕の形にした触手の力で三つ又の鉾を相手に向かって投げつける技だ。

「・・・・最悪ですね。寄りにも寄って完全体のホエーモンが居るとは」

ホエーモンの姿を見たリンディは険しい表情を浮かべてホエーモンを見つめる。
ホエーモンには成熟期と完全体の二種類が居るが、目の前に居るのは如何見ても完全体。成熟期の時のホエーモンでさえ厄介だと言うのに、完全体と成ればリゾート地を一瞬で崩壊させるほどの津波を起こす事が出来てしまう。
その事が分かっているリンディ達は、早急にホエーモンとダゴモンを倒そうと、海面に浮かんでいる二体に向かって飛び掛かり、攻撃を開始するのだった。

その頃。浅瀬の方を調べていたティアナ達も浅瀬に隠れていた、背中からイカの様な二本の触手を生やした蒼い人型のデジモンに向かって、バリアジャケットを身に付けてデバイスをデジモンに向けながら対峙していた。

そしてデジモンの情報を調べようとティアナは瞬時に、バリアジャケットのポケットの中からオレンジ色の縁取りをしたディーアークを取り出し、自分達と相対してデジモンに向けて、デジモンの情報を調べ始める。

マリンデビモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／水棲獣人型、必殺技／ギルティブラック
デビモンでさえ戦いをさけるほど凶悪な水棲獣人型デジモン。性格は悪魔そのもので、勝利のためならどんな残酷な手段も使う。相手にトドメをさしたあとも、なお攻撃をやめない“ダーティーファイター”だ。憎しみ以外の感情を失っている為に、殆ど理性は存在していない。背中に生えている2本の触手にはそれぞれ意思があり、勝手に行動を行う。必殺技は口から猛毒の墨を吐き出す『ギルティブラック』だ。

「完全体の水棲型のデジモンのようですね。かなり厄介です」

ディーアークに表示されたマリンデビモンの情報を、手早くティアナはクイントに伝えると、クイントは油断無く構えをマリンデビモンに向かって行いながら頷く。
それを確認したティアナも、手早くディーアークをバリアジャケットのポケットの中に仕舞い込み、自身の首に巻き付いてるクダモンに目を向ける。

「クダモン！！行くわよ！」

「了解した！」

《ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

ティアナの言葉に応じるようにクダモンは声を上げると、クティアナの首元から地面に飛び降り、マリンデビモンに向かって駆け出した瞬間に、ティアナの持つディーアークの画面に文字が浮かび上がり光が溢れ、クダモンの体から蒼いデジコードが出現し、クダモンの体はデジコードに寄って包まれていく。

「クダモン進化！！レッパモン！！」

デジコードの中でクダモンが叫び声を上げた瞬間に、デジコードの内部から、尻尾が刃の形をしている四足歩行の獣ークダモンが成熟期へと進化した姿ーレッパモンが姿を現した。

そしてデジコードから飛び出すと共にレッパモンは、マリンデビモンに向かって尻尾を振るい、風の刃をマリンデビモンに向かって放つ。

「真空カマイタチ！！」

「ギエェェェェェーーー！！」

ーーーガキン！！

レッパモンの放った真空カマイタチをマリンデビモンは吼えながら、背中に在る触手で防ぎ、それを見たティアナとクイントは険しい表情を浮かべ、マリンデビモンに顔を向ける。

「このデジモンは憎悪以外の感情が無いようなんで、説得は無理のようです！！」

「その様ね。と成れば倒すしかないわ！！」

ティアナの言葉を聞いたクイントは同意の叫びを上げながら、レッパモンと同じようにマリンデビモンに向かって飛び掛り、ティアナもブレイクミラージュをマリンデビモンに向け銃撃を放つ。

「喰らいなさい！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガガガッ！！！！

「ギエッ！！」

ーーーバシャン！！

「チッ！！理性は無くても、本能的な戦いは出来るみたいね！！だったらッ！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガガガガガッ！！

「ギエッ！？」

ティアナが放った魔力弾をマリンデビモンは瞬時に両腕を振るい消滅させるが、ティアナは気にせずにカートリッジを射出し、凄まじい速さでブレイクミラージュの銃身からマリンデビモンの足元に向かって魔力弾を連射した。

その攻撃にマリンデビモンは足を止め、自身の両腕を使いながら足元から飛んで来る瓦礫を防ぐが、その隙に左右からクイントとレッパモンが接近し、攻撃をマリンデビモンに向かって放つ。

「ムン！！」

「ハアッ！！」

ーーーガキィィィン！！

ティアナの攻撃を両腕で防いでいるマリンデビモンの隙を付き、クイントは拳を、レッパモンは自身の尻尾をマリンデビモンに振り下ろすが、当たる直前でマリンデビモンの背中に在る触手が二人の攻撃を防いた。

それを見たクイントとレッパモンは悔しそうな表情をしながらも、瞬時にマリンデビモンから離れようと後方に飛ぶが、マリンデビモンはレッパモンに顔を向け、口から黒い墨を発射する。

「ギルティブラック！！」

ーーープウゥゥゥゥゥーー！！！

「レッパモン！受けちゃ駄目よ！」

「分かった！」

マリンデビモンがギルティブラックを放つのを見たティアナは、レッパモンに注意を呼び掛け、ティアナの言葉にレッパモンは頷くと瞬時に迫り来るギルティブラックを横に飛ぶ事で避ける。

そしてレッパモンが避けたギルティブラックは近くの岩場にぶつかり、ギルティブラックを受けた岩場は瞬時に溶解し始める。

ーーーシュゥゥゥゥッ！

「くっ！猛毒の墨って訳ね！」

「ええ、絶対に受けちゃ駄目です！」

岩場が溶解するのを見たクイントが警戒の表情を浮かべて叫ぶと、ティアナは頷きながらクイントに警戒を呼び掛ける。
その様子を見たマリンデビモンはティアナの攻撃が止んでいるのを確認すると、瞬時に体勢を整えて、ティアナに向かって飛び掛かる。

「ギエッ！！」

「チッ！！」

自身に向かって来るマリンデビモンの姿を見たティアナは瞬時に、後方に飛んでマリンデビモンから離れようとする。
しかし、マリンデビモンの速さの前では離れる事も出来ず、遂にマリンデビモンの射程内に入り込まれ、二つの触手がティアナに向かって伸び始める。だが、ティアナは迫り来る触手を見ても慌てずに自身に向かって伸びて来る触手に向かって、ブレイクミラージュを向けながら自分の横に六つの魔力スフィアを生み出しマリンデビモンの触手に向かって撃ち出す。

「クロスファイヤーシュート！！」

ーーードドドドドドドドドドドッ！！

ーーーシュウン！！

ティアナの放った誘導弾は全て自身に向かって迫り来る触手に凄まじいスピードで向かっていくが、自在に動き回る触手に簡単に避けてしまう。
しかし、ティアナはその様子に見ても悔しがる所か逆に笑みを浮

かべ始め、マリンデビモンの背後に向かって叫ぶ。

「今よ！レッパモン！！」

「ギエッ？」

ティアナの叫びにマリンデビモンが疑問の表情を声を上げた瞬間に、何時の間にかマリンデビモンの背後に回っていたレッパモンが駆け出し、ティアナの誘導弾をかわした直後の触手に向かって自身の尻尾を振り、風の刃を放つ。

「真空カマイタチ！！」

ーーーブザン！！

「ギエェェェェェーーーー！！」

レッパモンの放った真空カマイタチに二本の触手に傷が付き、マリンデビモンが苦痛の声を上げ動きが止まってしまう。

その瞬間に、マリンデビモンの隙を窺い続けていたクイントが、チャンスだと思い、マリンデビモンに向かって駆け出しながら自身の体の周りに黒いデジコードを発生させ、両手足にタービンが付いた獣人バイオ・グラップレオモンに進化する。

そして進化を終えたクイントは自身の右手のタービンを極限にまで回し、マリンデビモンに腹に向かって拳を突き出す。

「獅子獣破斬！！」

ーーードゴオオオオオオオン！！！

「ギエアッ！！」

クイントの放った獅子獣破斬を受けたマリンデビモンは苦痛の声を上げながら吹き飛ばされた。

そしてその先に静かに佇んでいたレッパモンは吹き飛んでくるマリンデビモンの姿を確認すると、前転しながら突進し始める。

「駆駆烈空斬（くるくるれっくうざん）！！！」

「クロスファイヤーシュート！！！」

「ギエアァァァァァーーーー！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオン！！！！

レッパモンが駆駆烈空斬を放つと同時にマリンデビモンの正面に立っていたティアナも自分の全力を込めた誘導弾を放ち、二つの攻撃を同時に受けたマリンデビモンは悲鳴を上げながらデータ粒子に変わり消滅した。

それと共に出現したデジタマをレッパモンは自身の背中に乗せると、ティアナの下に向かって駆け出す。

「今回の戦いは六十点だな。もっと魔力の圧縮が行なえてれば、誘導弾のスピードも更に上がり触手にかわさせる事も無かっただろう」

「そうね。ブラック兄さんにも圧縮をもっと行なえば良いって言われてるし、今後の課題ね」

レッパモンの言葉にティアナは頷き、今後の課題に付いて考え始め、その様子にクイントは苦笑を浮かべながら二人に近寄り声を掛

ける。

「戦いが終わったのに、もう今後の課題なの？私としてはその年で完全体レベルのデジモンを追い込む方がよっぽど凄いと思うんだけど？」

クイントがそう言うのも当然だろう。

何せティアナはまだ十二歳なのにレッパモンとコンビを組めば、中堅クラスの完全体を倒せる実力を持っている。ブラックやリンディ、ルイン、そしてなのはとクイントにミッチリ訓練された上にデジタルワールドで命のやり取りはいやと言うほど味わったからこそ、僅か四年でそれほどの実力を身に付けたのだ。

それなのにティアナとレッパモンはまだまだと言う様に、訓練を重ねているのだから、ティアナとクダモンの頑張りを知っているクイントが苦笑をうかべるのも当然だろう。

そしてクイントの言葉を聞いたティアナは険しい表情をしながら、ゆっくりとクイントに顔を向ける

「何時か究極体達も動き出す筈です。その時に足手纏いには成りたくないんです」

「・・・・・・そうね。究極体クラスが動けば今の私達じゃ勝てない。最も強く成らないとね」

ティアナの言葉を聞いたクイントとレッパモンは自分達の手をジッと見つめ始めた。

三人とも分かっているのだ。究極体クラスは正に化け物レベルの者達。その気に成れば世界を滅ぼせる様な存在達が次元世界の何処かに居る。その事が分かっているからこそ、ティアナ達は訓練を毎日行なっているのだ。

そしてティアナ達は沖で戦っているであろうブラック達の方に顔を向け始めるのだった。

ティアナ達がマリンデビモンを倒し、海の方を見つめている頃に、沖の方でブラックとホエーモンが、リンディとルインはダゴモンと海の沖で戦い続けていた。

ブラックは上空から海面に浮かんでいるホエーモンを見つめると、赤いエネルギー球を生み出しホエーモンに向かって投げ付ける

「ムン！！」

ーーーバシャン！！

「ウゥゥゥゥゥーー！！」

ブラックの放ったエネルギー球をホエーモンは海の奥深くの潜る事でかわした。

その様子を見たブラックは、海中の中に消えて行ったホエーモンを探そうと、辺りを見回し始めている隙にホエーモンは、ブラックの背後から空中へと飛び出し、ブラックに圧し掛かりながら海底にブラックを引きずり込む。

ーーードゴオン！！

「グオッ！！」

ーーーバシャン！！

「ブラック様！！」

ブラックが海底に引きずり込まれるのを見たルインは声を上げ、ブラックの助けに向かおうする。

しかし、動こうとした瞬間に、ルインの隙を見つけたダゴモンが、体を構成している無数の触手をルインに向かって伸ばしてくる。

ーーーシュルシュルッ！！

「くっ！」

「ルインさん！避けなさい！！ハンマーブーメラン！！」

ーーーズシャズシャズシャッ！！

自身に向かって来る無数の触手の姿を目撃したルインは、一刻も早くブラックの救出に向かう為に悔しそうな表情をしながら、凄まじいスピードで迫ってくる触手に向かって魔法を放とうとするが、その前にバイオ・ズドモンへと進化していたリンディが海面から飛び出し、持っていたトールハンマーを触手に投げ付け、触手を切り潰す。

そして投げ付けたトールハンマーが弧を描きながら戻ってくると、リンディはトールハンマーを右手で受け止め、切り潰された触手を戻し始めているダゴモンを睨み付ける。

「助かりました、リンディさん」

「気にしないで、それよりも厄介ね」

リンディへと近寄って来たルインの礼の言葉にリンディは笑みを

浮かべながら答えると、切り潰した触手を再生させているダゴモンに顔を向け、険しい表情をして話し合う。

「幾ら消滅させたり切ったりしても根元が残っている限り再生するなんて、厄介も良い所ですよ。最も再生速度は私の暴走時よりは遅いですけど」

（・・・・そう言えばルインさんは闇の書の防御プログラムだったわね。フフフフフッ、クライドさんを殺した張本人と呼べるのに、恨めないわね。本当に妻失格よ、私は）

ルインの呟いた言葉にリンディはルインの正体を思い出すが、数年間苦楽を共にしたルインの事を恨む気持ちはリンディには全く無かった。

（やっぱり死んでいたのね、リンディ・ハラオウンはあの時に。今の私はだたのリンディ、今度こそ大切な人を護ってみせる！！）

そうリンディは完全に過去の自分自身ーリンディ・ハラオウンで在った事を内心で完全に決別すると、トールハンマーを振り上げながら、ダゴモンに向かって全力で泳ぎ出す。

「ハアァァァァーーー！！」

ーーーザザザザザザザッ！！

「ウオォォォォォォォーーーー！！！！」

自身に向かって凄まじいスピードで向かって来るリンディの姿を見たダゴモンは、何処からとも無く巨大な三つ又の鉾を出現させ、

右手に握ると凄まじい握力を発揮しながら向かって来るリンディに向かって投げ付ける。

「フォービドゥントライデント！！」

「ハンマースパーク！！」

ドゴオオオ

ルインが詠唱すると共に光の槍は全てダゴモンへと直撃し、槍が刺さった部分からダゴモンの体は石化し始める。
それを目撃したリンディは瞬時に体勢を整え、石化から逃れようともがいているダゴモンに向かって再び泳ぎだし、ダゴモンに向かってトールハンマーを全力で振り下ろす。

「ハンマースパーク！！！」

ーーードゴオオオオオオオン！！

「ガアァァァァーーーー！！！！」

リンディのハンマースパークを受けたダゴモンは苦痛の声を上げると共にデータ粒子へと変わり消滅する。
それと共にダゴモンの消滅した場所からデジタマが出現し、ルインは瞬時にデジタマを回収すると、リディと共にブラックが消えた海面の方に顔を向ける。

「リンディさん、ブラック様は無事でしょうか？」

「・・・・・・大丈夫よ。だってあの人は強い人ですもの」

ルインが不安そうな表情を浮かべて質問すると、リンディも僅かに不安そうな表情をするが、すぐにブラックの実力を思い出し、ルインを安心させるように答えた。
そのリンディの言葉にルインは僅かに安心したような表情を浮かべ、リンディと共にブラックの居るであろう海面の方を見ていると、リンディに念話が届いて来る。

（すぐに海から出ろ。巻き添えを食うぞ）

「ッ！！」

ブラックから届いた念話を聞いたリンディは瞬時に、黒いデジコードを発生させ元の人間の姿に戻るとルインの隣に浮かび上がる。それに呼応するようにブラックが居るであろう海底の方から凄まじい冷気が発生し始め、海が広範囲で凍り付いて行く。

その様子を目にしたルインとリンディはブラックの使用した技に気が付き、互いに笑みを浮かべながら凍りついた海を見つめ始める。

「エターナルコフィン、凍結魔法を使用したみたいね。これでホエーモンは技を使用する事が出来ないわ」

「流石はブラック様です」

ーーーバキバキバキッ！！バキィィィン！！

「ブオォォォォォォーーーーー！！！」

ルインとリンディがブラックの行なった事の意味に気が付き、互いに笑みを浮かべながら話し合っていると、突如として一部分の氷山が吹き飛び、其処から巨大なクジラ―ホエーモンが飛び出し、上空へと高く飛んで行く。

それと共にホエーモンが飛び出して来た氷山の部分からブラックも飛び出し、巨大な赤いエネルギー球を両手の間に生み出すと、上空から落ちて来ているホエーモンに投げ付ける。

「ガイアフォーーーース！！！！」

「ルオォォォォォーーー！！！」

ドゴオオオオオオオオオオン！！！！

ブラックの放ったガイアフォースは寸分違わずにホエーモンへと直撃し、巨大な爆発が空中で起きる。

そして爆煙の中からホエーモンだった者のデジタマが落ちて来ると、リンディが手の中へと拾い上げ、ブラックへと笑みを浮かべる。

「デジタマの回収は終わりましたけど、随分と時間が掛かりましたね？」

「巨大な津波を起こされては困るからな。人間がどうなろうと構わんが、アソコにはティアナ達が居る」

リンディの言葉に、ブラックは憮然とした表情をしながら答え、遠方の方に見える陸へと目を向ける。

ブラックがその気に成ればホエーモンは簡単に消滅させられたのだが、完全体ホエーモンの必殺技ダイダルウェーブは巨大な大津波を起こし、全てを破壊する一撃を放つ事が出来る。そうなればリゾート地は瞬時に壊滅状態に追い込まれる上に、多くの人々が死ぬだろう。

ブラックとしては赤の他人が幾ら死のうが構わないのだが、海岸には親友であったティーダのー、ティアナと好敵手（ライバル）であるクイントが存在していたので、ブラックはリンディとルインの戦いが終わるまで、海底の奥深くでホエーモンの好きにさせていたのだ。

その事に気が付いたルインとリンディは申し訳無さそうな表情をするが、ブラックは二人に背を向ける。

「俺は先に帰って休んでいる。お前達は遊びたければ遊んで来い」

「この状況で遊べませんよ。ティアナ達にも連絡して帰りましょうか？」

「そうですね。では戻りましょう」

リンディの言葉にルインは頷くとティアナ達を迎えに行く為に、海岸に向かうのだった。

因みにブラックが凍らした海は、そのままだったので『謎の氷解現れる！！』と第八管理世界中の謎として響き渡ったと言う。

海だ！夏だ！巨大クジラ出現！！（後書き）

次回予告

スカリエッティからの情報で、デジタマがある場所を伝えられるとブラックは一人で向かう。

そして其処で発見した研究所で一つのデジタマと赤ん坊を見つける。

次回、漆黒の竜人と少女、『発見！ロイヤルナイツの卵！！』

漆黒の竜人は見つける。最強の騎士の卵を。

発見！ロイヤルナイツの卵！！

リゾート地での事件から数日が経ったある日の事。
何時も通り自身の研究室で研究を行っていたフリートの下に、協力関係に在るスカリエッティから通信が届いて来た。

ーーーブン！

『久しぶりだね、フリート君。そっちの研究は進んで居るかね？』

「まあまあですね。それで何か在ったんですか？」

モニターに映ったスカリエッティの言葉に、フリートは笑みを浮かべて答えるが、すぐに表情を真剣に変えながら注意深くモニターに映っている質問した。
スカリエッティとフリート達は確かに協力関係に在る。しかし、互いに研究やデジモンに関係する事以外では、不干渉の条約を結んでいるのだ。
フリート達の目的はあくまで、次元世界で暴れているデジモン達の回収と七大魔王デジモンの排除と、倉田の野望の阻止の三つが主な目的。当然ながら、管理局の崩壊やスカリエッティの夢など全く興味が無い。一番スカリエッティと仲が良いフリートにしても研究以外ではスカリエッティと会話さえしないぐらいだ。
そしてスカリエッティ達もその事は理解している。それなのに通信を送って来たという事は、自分達が提示した条件ーデジモンに関係する事だとフリートは判断したのだ。
それが当たったと言うようにスカリエッティはフリートの真剣な表情を向けると、通信を送って来た理由を話し始める。

『うむ、実はだね。管理局が保有している違法研究所の一つに、君達が求めているデジタマらしき物が運び込まれたと、管理局に潜入しているドゥーエから連絡が在ってね』

「ッ！！」

スカリエッティが告げた情報のフリートは驚愕に目を見開いてしまうが、すぐに表情を冷静に戻し、モニターに映っているスカリエッティに向かって笑みを向け始める。

「それは嬉しい情報ですね。礼を言いますよ」

『何、君達には色々と借りが在るからね。これぐらいはお安いご用さ。あぁ、それと私の方も今居る娘達のバイオデジモン化が終了したよ。後はこれから生まれてくる娘と私で終わりさ』

「それは良かったですね。では、また何れ」

ーーーブン！

スカリエッティの研究報告に対してもフリートは笑みを深くしながら答え、スカリエッティとの通信を切った。

そして通信が完全に切れている事を確認すると、今度は考え込む様な表情をし始め、椅子に深く座り込む。

（バイオデジモン化に成功しましたか。ですが、最も重要なダークタワーのデータは渡していませんし、リンディさんやクイントさんには劣るでしょうね。あのデータは危険過ぎますから）

フリートはスカリエッティの告げた事実に付いて吟味していた。

スカリエッティに渡したバイオデジモンに関する資料の中には、ブラックから得たダークタワーに関する情報は入っていない。何せダークタワーは環境を自在に操る事さえ出来る要素を持っている危険な建築物。もしダークタワーの資料を基に完全なダークタワーが生まれたと成れば、作り上げた人物は世界を支配する事が可能に成る。そうなったら色々と不味いので、フリートはダークタワーに関する資料だけはスカリエッティに渡さなかったのだ。

そして在る程度スカリエッティが告げて来た報告を吟味し終えると、フリートは椅子から立ち上がり、他の者達が居るであろう研究室に向かい出し、研究室の中に居たブラックに報告を始める。

「スカリエッティから連絡が在って、行方が分からなくなっていた。ロイヤルナイツのデジタマらしき物が管理局の研究所に運ばれたそうです」

「そうか。この四年間探していた物が漸く見付かったか」

フリートの言葉にブラックは険しい表情をしながら答え、考え込むような表情をし始める。

四年前にオファニモンはブラック達に、倉田達の策略によって倒され、デジタマに戻ってしまったロイヤルナイツの一人のデジタマの捜索を頼んでいたのだ。本来ならば倒された後にデジタマはその場に残り続けるのだが、運悪く発生した次元の歪みに飲み込まれ行方が分からなくなってしまっていた。しかし、追跡調査のおかげでデジタマはブラック達がデジモンを捜索している各世界のどれかに落ちている事が判明し、デジモン退治と共にデジタマの捜索も依頼されていた。

その事を思い出していたブラックは、突如として顔を真剣に戻すとフリートからデジタマの在る場所を聞き出し、転送室が在る場所へと足を向け始める。

「今回は俺だけで行く。他の連中には黙っておけ」
「分かりました。気を付けて行って来て下さい」
「ふん」
フリートが笑みを浮かべながら告げた言葉を聞くと、ブラックは振り返らずに歩き出し、転送室に向かい出すのだった。

そしてアルハザードから転移してから一時間後。
深い森に覆われ空に月が浮かんでいる世界をブラックは飛行し、スカリエッティから教えられた研究所を探し続けていた。
「この辺りの筈だが、森に覆われていて分からんな。仕方が無い、地上から探すか」
ブラックは上空から研究所を探すのは無理だと判断すると、地上へと降りて森の中を歩き始める。
そしてある程度深い森の中を歩いていると、突如としてブラックの背後から赤いツタと木の枝がブラックに高速で向かって来る。
ーーーシュルシュルシュルッ！！
「フン！！」
ーーーブザン！！

赤いツタと木の枝がブラックの体を拘束する前に、ブラックは瞬時に背後を振り返り、右手のドラモンキラーの刃でツタと枝を切り裂いた。

そしてもう自身を襲い掛かって来るツタと枝が無い事を確認すると、ツタと枝が向かって来た方向に目を向けて見ると、大きな口とツタを持った赤い食虫植物の形をしたデジモン―レッドベジーモンと、枯れた木の形をしたデジモン―ウッドモンが自身を注意深く観察している様子を目にする。

レッドベジーモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／食虫植物型、必殺技／ハザードブレス

ベジーモンと呼ばれているデジモンが、成長した事でより強くなった食虫植物型デジモン。成長に応じて攻撃力も知性も本来のベジーモンよりもパワーアップし、うかつに攻撃すると強力な毒の息で反撃して来る。ベジーモンの時も性格の悪いデジモンだったが、成長したことで、更に磨きがかかってしまっている。必殺技の『ハザードブレス』は、強い毒を持った息を吐き出す技だ。その上、においも強烈なので、においだけで倒れてしまうデジモンもいるらしい

ウッドモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種。種族／植物型、必殺技／ブランチドレイン

枯れた大木のような植物型デジモン。木のフリをして油断させ、通りかかったデジモンを捕まえてエネルギーを吸い取る。やさしそうに見える顔立ちをしているが、実は狂暴で危険な性格。木が鎧代わりになり、攻撃は簡単に跳ね返す。しかし、火には弱く火炎型のデジモンは大の苦手としている。必殺技の『ブランチドレイン』は、枝のような腕を伸ばして、相手の体に突き刺して、敵のエネルギーを吸い取る技だ。

「成熟期レベルが俺に挑むのか？」

レッドベジーモンとウッドモンの姿を見たブラックは、ドラモンキラーを構えながら質問する。

攻撃して来たのだから当然の事だが、元々ブラックの目的の一つにデジモン退治も入っている。だからこそ、レッドベジーモンとウッドモンを倒そうと動こうとするが、その直前に二体は慌てた表情をし始め、ブラックに向かって叫び出す。

「待ってくれ！！俺達はアンタとやり合う気はねえ！！」

「ああ、実はアンタに頼みたい事が在るんだ」

「何だと？」

レッドベジーモンとウッドモンの言葉を聞いたブラックは訝しげな表情を浮かべてレッドベジーモンとウッドモンの姿を見つめ始める。

それを目にしたレッドベジーモンとウッドモンはブラックに攻撃される前に事情を説明しようと、ブラックに前に来て、土下座を行いないながらブラックに理由を説明し始める。

「さっきはすまなかった。アンタの実力を見て見たかったんだ」

「本当にすまねぇ。だけどアイツを、俺達の仲間の『ベジーモン』を助ける為には、如何してもアンタの実力が知りたかったんだよ」

「如何言う事だ？」

二体の攻撃した理由を聞いたブラックは訳が分からないと言う表

情をしながら質問を行い、レッドベジーモンとウッドモンは顔を悲しそうな表情をしながら説明を話し始める。

「俺達は倉田って言う奴にこの世界で暴れろって言われたんだけど、そんな気は全然無かったんだ」

「俺達としてはデジタルワールドに帰ってゆっくり過ごしていたかった。だけど帰る方法が分からなかったから、この世界で静かに暮らしていたんだ。だけど、数日前に変な連中が俺達に襲い掛かって来て、ベジーモンが連中に連れて行かれたんだ。俺達の実力じゃ助けられねぇ、頼む！アンタの力を貸してくれ！」

「・・・・・・場所は何処だ？さっさと教えろ」

『やったぜ！！』

ブラックの言葉を聞いたレッドベジーモンとウッドモンは歓喜の声を上げ抱き合うが、ブラックは二体の様子には一切構わずに険しい表情をしながら、歩き出した二体の後姿を見つめるのだった。

薄暗い研究所の地下で、数人の研究員がカプセルの中に入っている一持ち運ばれたデジタマと、その隣の青い液体が入ったカプセルの中に浮かんでいる金髪の赤子を見つめていた。

そしてデータを取り終えたのか、近くのコンソールを弄っていた研究者が他の研究者に顔を向ける。

「やはり間違い無いですね。その卵と完成体は同調し合っています。理由は分かりませんがそれが完成に近付けたようです」

「ふむ、そうか」

コンソールを弄っていた研究者の言葉に、その場に居る研究者の中で最も偉いと思われる研究者は頷き、二つのカプセルを歓喜に満ちた表情で見つめる。

「我々が長年掛けて完成させた最強の王の後継者。絶対に我々が育て我々の名を世界に知らしめるのだ」

「そうですね。これこそが私達の長年の傑作ですよ」

研究者達はそれぞれ歓喜の表情を浮かべながら、自分達の成果を褒めてい始めた。

しかし、彼らは全く気が付いていなかった。カプセルの中に入っている赤子が薄く目を開け、研究者達の事を観察するように見つめていた事に。

そしてある程度時間が経つと、研究者達は自分達の成果を褒め合いながら、地下の研究所から出る為にエレベーターに向かい出す。

しかし、突如として向かって行く方に存在しているエレベーターの入り口から凄まじい激突音が響く。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

『何だ！？』

ーーードスッ！！ギリギリギリッ！！

突如としてエレベーターの入り口から聞こえて来た激突音に研究

者達が慌てて入り口を見て見ると、エレベータの扉から鈍い光を放つ刃が飛び出し、エレベーターの入り口はそれを基点に抉じ開けられ、踏み潰されているエレベータの瓦礫に立っているブラックが姿を現す。

「此処か？例のデジタマが運ばれたのは？」

エレベータを抉じ開けて研究室の中へと足を踏み入れたブラックは、注意深く研究室の中を見渡しながら呟いた。

レッドベジーモンとウッドモンの案内で目的の研究所に辿り着いたブラックは、すぐさま研究所内部に入り込み、次々と向かって来る警備員や逃げ惑う研究者達を排除しながら進み続け、一際頑丈そうな扉を発見すると迷わずに内部の存在していたエレベータを破壊して、この場所へと辿り着いたのだ。

その様にブラックが辺りを見回していると、ブラックの姿を目撃してしまった研究者達全員が恐怖に体を震わせながらブラックを見つめ始める。

「こ、広域・・次元・・・犯罪・・者・・『漆黒の竜人』」

「なっ！何で！？この研究所に！？」

研究者達は恐怖に震えながらブラックを見つめ恐怖の声を出すが、ブラックはまるで興味が無いと言う表情をしながら辺りを見回し続け、カプセルの中に入っていたデジタマを目にする。

「見つけたぞ。やはり此処に在ったか」

捜し求めていたデジタマを見つかった事に、ブラックは笑みを浮かべながら、カプセルの方に足を向け始める。

それを見た研究者達は慌ててブラックを止めようと駆け出すが、ブラックは興味が無いと言う視線を研究者達に向けると共に自身の威圧感を研究者達に向かって全力で放つ。

「ムン！！」

『ガアッ！』

ーーードサドサドサドサッ！！

ブラックの威圧感を受けた研究者達は泡を吹きながら、次々と倒れ付して行きブラックは詰まらなそうな表情を気絶している研究者達に向ける。

「つまらん。所詮は覚悟の無い者達か」

ブラックには分かっていた。目の前で倒れ付した研究者達は自分が行っている事に責任の持てない者達だと言う事に、出なければ違法研究を行なったりはしないだろう。フリートや同じ違法研究を行っているスカリエッティと比べる価値も無い者達でしかない事も。

そしてブラックは気絶している研究者達からもう用は無いと言うように顔を背け、再びデジタマに目を向けると、自身の右手を振り上げ、デジタマが入っているカプセルを破壊する。

ーーーガシャン！！

「これで此処でやる事は終わった・・・・・いや、まだ残っていたな」

ーーーゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！

デジタマを回収したブラックは笑みを浮かべるが、すぐに表情を真剣に戻し、突如として揺れ始めた地下を見渡し始める。

「随分と親切に教えたと思ったが、やはり罠だったか」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

ブラックが険しい表情をしながら言葉を呟き終えた瞬間に、地下の研究所は崩落し始め、ブラック達は地下に埋もれて行った。

そして崩落した研究所の外では、レッドベジーモンとウッドモンに緑色をしたベジーモン、そして巨大としか言えない体を赤い体色で覆い、肩の部分から二本のホーンを伸ばして頭にチョンマゲを付けたカエルのようなデジモン―トノサマゲコモンが、それぞれ歓喜の声を上げながら、崩落して跡形も無くなってしまった研究所の跡地を見つめていた。

ベジーモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／食虫植物型、必殺技／ウンチ投げ

長く伸びたツタと、大きく開いた口を持つ食虫植物型デジモン。口から甘い香りの息を吐き、その匂いに釣られた小型デジモンを触手のようなツタの部分で引きずり込んでしまう。狂暴凶悪だが、戦闘能力は同世代の成熟期デジモンに比べて、とても低い為に大型デジモンには太刀打ち出来ない。必殺技の『ウンチ投げ』は、自身のウンチを相手に向かって投げ付ける、在る意味では最強の技だ。

トノサマゲコモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／両性類型、必殺技／コブシトーン
お殿様のチョンマゲのような触角を持つ両生類型デジモン。ゲコモンと言うデジモンが進化した姿。肩から伸びたホーンで音楽を鳴らし、それにあわせて歌を歌う。渋い低音はお殿様の貫禄を感じさせるぞ。必殺技の『コブシトーン』は、ボーカルとホーンの超低周波で相手の体を構成するデータを震わし破壊する恐ろしい技だ。しかし、相手によっては逆に体調が良くなってしまう事も在るらしい。

「ケケケケケッ！！作戦成功だ！」

「ああ、俺達の話を真に受けて罠とも気付かずに付いて来やがって、究極体って言っても頭は馬鹿だな」

レッドベジーモンとウッドモンは自分達の作戦が成功した事に歓喜の声を上げながら、嬉しそうな顔を研究所の跡地に向ける。
二体ともブラックと正面から戦っても勝てない事に気が付いていた。だからこそレッドベジーモン達は、数日前に発見していた研究所を使って、ブラックを生き埋めにする事を考えていたのだ。先ずはレッドベジーモンとウッドモンがブラックを研究所へと案内し、内部に入ってから少し時間が経つとトノサマゲコモンの必殺技ーコブシトーンで研究所を崩落させると言う作戦だった。そしてその作戦が大成功した事に、四体のデジモンは心から喜んでいた。

「フフフフフッ、余に掛かれば究極体も雑魚よ。さあ！戻って祝杯を挙げるぞ！」

『オォォォォーーー！！』

ドゴオオオ

『ッ！！』

トノサマゲコモンの言葉にレッドベジーモン達は歓喜の声を上げ、その場を去ろうする。

しかし、その直前に崩落した筈の研究所の地面から巨大な赤いエネルギー球が飛び出し、地面を一瞬にして消失してしまい、巨大な穴が出現した。

その様子を目にしたレッドベジーモン達は冷や汗を流しながら地面の下を、恐る恐る見て見ると、デジタマと赤子を抱いたブラックがレッドベジーモン達の前に降り立ち、レッドベジーモン達に顔を向ける。

ーーードン！！

「中々に面白い作戦だったぞ。だが、俺には通じん」

『ヒイッ！！』

ブラックの言葉を聞いたレッドベジーモン達は恐怖の声を上げ、ブラックから少しでも離れようと後退りし始めるが、ブラックは気にせずに足を進めようとする。

しかし、突如としてその足は止まり、腕の中に居る赤子とデジタマの事を思い出すと、近くの木の傍にデジタマと赤子をソッと下ろし、右手を向ける。

「ディストーションフィールド」

ーーーシュウン！！

ブラックが言葉を呟き終えた瞬間に、赤子とデジタマの周りにフィールドの様なものが発生した。
それを確認したブラックは今度こそレッドベジーモン達に顔を向けると、瞬時にレッドベジーモン達の前に現れ、ベジーモンを蹴り飛ばす。

「フン！！」

ーーードゴオン！！

「ギャアッ！！」

『ベジーモン！！』

ブラックの蹴りを受けたベジーモンは悲鳴を上げて吹き飛ばされ、レッドベージモン達は助けようと駆け出すが、何時の間にかベジーモンの吹き飛んでいた先にブラックは移動し、右手のドラモンキラーをベジーモンに向かって突き出す。

「ハッ！！」

ーーードスン！！

「ギャアァァァァァーーーー！！！！」

ブラックの突き出したドラモンキラーの刃が深くベジーモンに突き刺さると共に、ベジーモンは悲鳴を上げながらデータ粒子に変わり消滅する。
そしてベージモンが消滅したのを確認したトノサマゲコモンは怒りの表情を浮かべると、口と肩から生えている二本のホーンから超

低周波音を発生させ、ブラックに向かって放つ。

「コブシトーン！！！」

ーーーボォォォォォォォォォォン！！

「チッ！！」

トノサマゲコモンがコブシトーンをブラックに放つと、ブラックは上空に浮かび上がる事でコブシートンをかわし、上空に浮かびながら、右手のドラモンキラーの爪先に赤いエネルギー球を生み出し、トノサマゲコモンに投げ付ける。

「ハアッ！！」

「ムッ！！」

ブラックがトノサマゲコモンに向かって投げ付けたエネルギー球を、トノサマゲコモンは見た目に反した俊敏な動きでかわした。

しかし、かわした先の方向には、再び何時の間にか移動していたブラックが存在し、トノサマゲコモンの顔面を殴り飛ばす。

「フン！」

ーーードゴオオン！！

「ゲコオォォォォォォーーー！！」

ブラックに顔面を殴り飛ばされたトノサマゲコモンは木々を薙ぎ倒しながらカエルの様な鳴き声を上げ、吹き飛んでいく。

その様子を見ていたレッドベジーモンとウッドモンは、ブラックには勝てないと瞬時に判断し、苦痛に苦しんでいるトノサマゲコモンを見捨てて一目散に逃げ出そうとするが、再び目に見えないほどのスピードで移動したブラックが二人の前に姿を現す。

ーーービュン！！

「何処に行く気だ？」

『ヒィッ！！』

「貴様らも吹き飛べ！！」

ーーードグオオン！！

『ギャアァァァァァーーー！！！！』

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

『ゲホォッ！！』

ブラックが言葉と共に全力でレッドベジーモンとウッドモンを苦痛に苦しんでいるトノサマゲコモンの方に向かって蹴り飛ばし、二体は悲鳴を上げながらトノサマゲコモンの体に激突する。

そして三体が一箇所に集まったのを確認したブラックは、負の力を両手の間に集中させ、巨大な赤いエネルギー球を生み出し、トノサマゲコモン達に向かって投げ付ける。

「ガイアフォーーーース！！！！」

『ギャアァァァァァーーーー！！！』

ドゴオオオ

ブラックが険しい表情を浮かべ見つめている赤子の瞳は赤と緑のオッドアイ。

嘗てベルカ最強の王と呼ばれた聖王の証である『王者の瞳』が、無垢な笑顔を浮かべてブラックを見つめている赤子には存在していたのだった。

発見！ロイヤルナイツの卵！！（後書き）

次回予告

ブラックが見つけてきた赤子の正体は聖王だった。

その事を知ったリンディ達はアルハザードで育てる決意を決める。

そして地球でも遂に究極体デジモンが姿を現し、なのははガブモンと共に戦う。

次回、漆黒の竜人と少女、『復活！不屈の心と融合進化！！』

不屈の心は戦う、共に在るパートナーと。

復活！不屈の心と融合進化！！

アルハザードに存在しているフリートが居る研究室は静かだった。だが、突如としてその研究室の扉が吹き飛び、フリートが飛び出して来る。

「キャアァァァァァーーー！！グフッ！！」

吹き飛ばされて来たフリートは、悲鳴を上げながら壁に激突し床に落ちた。

そしてフリートを吹き飛ばした張本人ーリンディは怒りの表情を浮かべながら研究室から出て来ると、床に倒れ付しているフリートに顔を向け叫び出す。

「何でそんな重要な事を知らせなかったんですか！！彼一人で向かわせるなんて！！ロイヤルナイツのデジタマに何か在ったら、私達は他のロイヤルナイツに抹殺させられますよ！！」

リンディが怒りの声を上げて叫ぶのも当然だろう。何せブラックは周りの事を一切気にしないで戦闘を行なう上に、戦闘に夢中に成ると目的を忘れてしまう事が在るのだ。

そしてオファニモンに頼まれていたロイヤルナイツのデジタマは絶対に傷付けないで回収してくれと頼まれた上に、他のデジタルワールドを護っているロイヤルナイツ達からも、絶対に回収してくれと頼まれているものでも在る。もし傷を付ける所かウッカリ破壊でもしてしまったら、オファニモン達だけではなく他のロイヤルナイツ達までも敵に回るだろう。

「ただでさえロイヤルナイツ達の中には私達を危険視する者さえ居

るのに、此処で仲間で在るロイヤルナイツのデジタマを消滅でもさせたら七大魔王と戦う前にロイヤルナイツ達が敵に成るんですよ！！」

ブラックとリンディ、そしてクイントはダークタワーの要素を持っている為に、世界に常に悪影響を与え続けている。その為にロイヤルナイツの何人かの間では、“消滅させるべきでは無いか”と言う意見を出ている。勿論、それに反対しているロイヤルナイツや三大天使、四聖獣達も居るのでブラック達抹消の意見は滅多な事では出ない。その上フリートのお陰で僅かに世界への悪影響を抑える事が可能に成って来たので、危険性を訴えていたロイヤルナイツ達もブラック達を認め始めていたのだが、その様な重要な状況でロイヤルナイツのデジタマを壊してしまったりしたら、擁護してくれていた三大天使さえも敵に回るだろう。

「・・・・幾ら彼でもロイヤルナイツ数人を相手にするなんて、不可能よ」

「いや、多分大丈夫ですよ。彼もそれぐらいは分かっていると思いますし」

リンディが顔を俯けながら呟いた言葉に、フリートは冷や汗を流しながら答えた。

そして研究室の中に居たルイン達も出て来て、リンディを安心させる為に声を掛け始める。

「リンディさん、大丈夫ですよ。幾らブラック様でもロイヤルナイツなんて最強のデジモン達と戦う気なんて・・・・・・・絶対に戦いそうです」

「そうですよ。幾らブラック兄さんでも・・・・・在りえる」

ルインとティアナはリンディを慰めようと声を掛けるが、ブラックの性格を思い出して冷や汗を流し始め、聞いていたクイントとクダモンもブラックなら在り得る事に気が付き、全員が冷や汗を流し、真剣に命の危機を感じ始めた瞬間。

ーーードン、ドン、ドン

通路の奥から足音が響き、全員が足音が響いて来る方に顔を向けて見ると、赤ん坊と五つのデジタマを抱えたブラックが姿を見せる。

「フリート、幾ら通信をしても通じなかったが何か在ったのか？」

「そんな事よりもロイヤルナイツのデジタマは大丈夫なんでしょうね！！」

ブラックの質問には答えずにリンディは急いでブラックに焦った表情を浮かべて詰め寄り、他の者達も詰め寄った瞬間に、ブラックが抱いていた赤ん坊が大きな泣き声を上げ始めた。

「フエェェェェェン！！ビエェェェェェェン！！」

『赤ん坊！！』

突如としてブラックの腕の中で泣き出した赤ん坊の姿を見たリンディ達は驚きに目を見開き、ブラックの抱く赤ん坊を見つめた。

そして赤ん坊の泣き声を耳にしたブラックは、不機嫌そうに表情を歪めながらリンディの腕の中に赤ん坊を手渡す。

「ソイツの面倒を看ておけ。俺は疲れた」

「ハッ？如何言う事ですか？」

心底疲れたという表情を浮かべながら告げられたブラックの言葉に、リンディは赤ん坊を泣き止ませながら質問すると、ブラックは研究室内部に入り込み事情を説明し始める。

「・・・・・つまり、向かった先の研究所でデジタマを発見したら、他のデジモン達に襲われた上に地面に生き埋めにされ、デジタマを回収して脱出しようとした瞬間に、このデジタマが光り輝きこの子を護ったと言う事なのね？」

「そうだ」

ブラックから全ての事情を聞いたリンディは自分の手の中で安らかな表情を浮かべて眠り込んでいる赤ん坊を見つめながらブラックに質問すると、ブラックは壁に寄り掛かりながら頷く。

そしてルイン達もリンディの腕の中で眠っている赤ん坊を見つめ、ティアナが自身の首下にクダモンを撫でながら質問する。

「と言う事は、その子は私となのはさんの様にデジモンに選ばれたテイマーっと言う事なのよね？」

「恐らくな。まだ赤ん坊と言う事でデジタマからデジモンは生まれていないが、在る程度自我が形成されればディーアークが出現するだろう」

ティアナが険しい顔をしながら呟いた言葉に、首下に巻きついているクダモンは頷きながら答えた。

それを聞いた他の者達とティアナは険しい表情をしながら、リンディの腕の中で安らかに眠っている赤ん坊に目を向ける。

「まだ、赤ん坊なのにデジモンに選ばれるなんて・・・・流石は王族の血を引く子供と言うべきなのかしら？」

「ベルカ時代からの宿命ですかね？聖王一族が戦いに巻き込まれるのは」

クイントとルインは悲しげな表情を浮かべながら赤ん坊を見つめた。

この時期に、しかも最強とされるロイヤルナイツのデジタマにテイマーに選ばれたと言う事は、目の前で安らかに眠っている赤ん坊も戦いに巻き込まれると言う事だ。自分達は良い、自分達は自ら選んで戦いの道を選んだ。だが、目の前に居る赤ん坊は自分で選ぶ前に戦いに巻き込まれる宿命を背負ってしまった。世界の命運さえも左右する激しい戦いに。

その事が分かってしまったリンディ達は悲しそうな表情をするが、突如としてそれぞれ顔を見合わせ頷き合う。

「この子は私達が護りましょう。そしてこの子が戦いに巻き込まれない様にする為にも、強くなるんです」

リンディの宣言にルイン達は頷き、それぞれ決意を新たにした瞬間。

ーーービイィィィ

がら報告を行い出す。
「地球にデジモン反応が二つ！！しかもこれは究極体とルーチェモンの反応です！！！」
『ッ！！！』
フリートが恐怖に震えた声で叫んだ言葉に、その場に居る全員が目を見開きながらモニターに映っている反応を見つめるが、ブラックだけは瞬時に立ち上がり、転送室の方に向かって駆け出すのだった。

フリート達がデジモンの反応を見つける少し前の事。
なのはは高校からの帰り道で親友であるアリサ・バニングスと月村すずかと別れの挨拶をしていた。
「それじゃあ、また明日ね二人とも」
「またね」
「気を付けてね」
なのはの言葉にアリサとすずかは手を振りながら別れの挨拶をし、その場から離れて行く。
そしてなのはも自分の家に足を向けると、認識阻害の魔法を使ったガブモンがなのはに近付いて来る。
「お疲れ様、なのは」

「ガブモン君も護衛ありがとう」
「気にしないで良いよ。士郎さんや桃子さんにも頼まれているからね」
なのはの言葉にガブモンは笑みを浮かべながら答えた。
ガブモンはなのはのパートナーデジモンになってから、なのははガブモンの事を家族である士郎達に説明し、以来はなのはの家でカブモンは寝泊りしているのだ。アルハザードには時たま帰るか、何か重要な時以外は殆どなのはの護衛に当たって居るのだ。
そして二人は翠屋へと足を向け移動を開始するが、二人はすぐに異変に気が付き足を止めて顔を見合わせる。
「気が付いてる、なのは？」
「うん、人の気配がしない。結界だと思うけど、私達に気付かれずに張るなんて、そろそろ本気で私の抹消に乗り出したのかな？」
ガブモンとなのはは険しい表情をしながら辺りを見回し、声を掛け合った。
ここ数年、なのはには何度かデジモンが送られて来たのだが、その度にガブモンが倒し続けなのはは無事で済んでいた。だが、今回は如何やら相手も本気でなのはを殺す気で来ている様で、なのはとガブモンに凄まじい殺気が送られ続けている。
その事に気が付いたなのはは右腕に巻いてあるリングを瞬時に外し、自身のデバイー、レイジングハートとディーアークを取り出しながら、警戒を続けていると一つの街灯の上から声が響く。
「思ったよりも戦闘の心構えが出来ている様だね。管理局の馬鹿ど

もとは大違いだよ」

『ッ！！』

聞こえ来た声になのはとガブモンは目を見開き、慌てて声が聞こえて来た街灯の方を睨んで見ると、子供の姿に背中に八枚の羽を付けた天使が存在していた。

それを目撃したなのはは、瞬時にディーアークを天使に向け、天使の情報をディーアークでサーチする。

ルーチェモン、世代／成長期、属性／ワクチン種、種族／天使型、必殺技／グランドクロス

遥か古代のデジタルワールドに降臨した天使型デジモン。デジタルワールドに秩序と平和をもたらしたデジモンだが、そのすぐ後にデジタルワールドで反乱を行い、永き暗黒の時代を作り上げた。成長期でありながら完全体クラス所か究極体さえも凌駕する力を持っている。必殺技は、惑星直列“グランドクロス”のように、１０個の超光熱球を十字に放つ『グランドクロス』。その威力はセラフィモン必殺技を凌駕し、またあらゆる災害が起きるとされている

「貴方がルーチェモン？」

ディーアークが告げている情報を目にしたなのはは、僅かに困惑と恐怖に体を震わせながら、ルーチェモンに質問を行うと、ルーチェモンは口元に笑みを浮かべながら、なのはに向かって頷く。

「そう僕がルーチェモン。何れ全次元世界を破壊して新たな世界を作り上げる神さ」

「神だって！？ふざけるな！！お前なんか神じゃない！！罪の無い

者達を殺す神なんて居ない！！」

ルーチェモンが笑みを浮かべながら告げた言葉に、ガブモンは怒りに満ちた叫び声を上げた。

それも仕方が無いだろう。何せ目の前に居るルーチェモンが憶えているかどうかは分からないが、デジタルワールドの家族を殺した者が目の前にいるのだから、ガブモンが感情を抑えられる筈も無い。

しかし、ルーチェモンはガブモンの言葉を聞いても、笑みを止めずに二人にゆっくりと顔を向ける。

「尊い犠牲じゃないか。僕が作る新しい世界の」

『ッ！！』

ルーチェモンが嘲るような笑みと共に告げた言葉を耳にしたなのはとガブモンは顔を怒りに染めて、なのははレイジングハートをルーチェモンに向かって構えながらガブモンに叫ぶ。

「ガブモン君！！最初から全力全開で行くよ！！」

「うん！！」

なのはの叫びにガブモンは勢い良く頷くとルーチェモンに向かって全力で駆け出し、なのはがガブモンに向かってディーアークを構えると、ディーアークは光り輝き画面に文字が浮かび上がる。

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「ガブモン進化！！ワーガルルモン！！」

なのはの持つディーアークに文字が浮かび上がり電子音声が響くと、ガブモンの体から蒼いデジコードが飛び出し繭の様な物を形成する。そしてデジコードの中から銀色の体毛に狼の顔を持った獣人一完全体のワーガルルモンが飛び出した。
その勢いのまま、ワーガルルモンは嘲りの笑みを浮かべ続けているルーチェモンに向かって全力で飛び掛り、ルーチェモンの胴体に向かって蹴りを放った。

「ガルルキック！！」

「つまらないね」

ーーーバシッ！！

「なっ！？」

ワーガルルモンが全力を込めたガルルキックをルーチェモンは指一本で受け止め、ワーガルルモンは驚愕の声を上げて、何でも無いと言うように笑みを浮かべているルーチェモンの顔を見つめる。
しかし、ワーガルルモンは瞬時に驚愕を収めるとルーチェモンの指を踏み台にし、上空に高く飛び上がった。
その行動にルーチェモンが疑問を覚えた瞬間に、ワーガルルモンの影に隠れていたなのはがルーチェモンの目の前に姿を現し、レイジングハートをルーチェモンの顔面に向かって突きつけると、全力で砲撃を撃ち出す。

「ディバインバスター・エクステンション！！！」

ーーードグオオオオオオオオン！！

なのはの放った巨大な砲撃はルーチェモンを飲み込み、背後へと砲撃は突き進んでいく。
しかし、それを見てもなのはは安心せずにその場から瞬時に離れると、上空に飛び上がっていたワーガルルモンが落下速度を加えた状態で、煙の中に浮かび上がっている影に向かって自身の爪を全力で振り下ろす。

「カイザーネイル！！！」

ーーーガシッ！！

ワーガルルモンが放ったカイザーネイルは寸分違わずに影に決まろうとした瞬間に、煙の中から飛び出した二つの手に簡単に受け止められた。

「・・・・・ば、馬鹿な、カイザーネイルを簡単に」

「・・・・・そんな」

自身の必殺技が簡単に受け止められた事にワーガルルモンは恐怖の表情を浮かべ、上空に浮かんでいたなのはも信じられないと言う表情を浮かべてルーチェモンを見つめた。
そして煙の中からルーチェモンが姿を現すと、ワーガルルモンに向かって笑みを向け、ワーガルルモンの腹に向かって拳を突き出し殴り飛ばす。

「ホラッ！！」

ーーードゴオン！！

「ガアァァァァーーー！！！」

「ワーガルルモン君！！」

ルーチェモンの拳を腹に受けたワーガルルモンは悲鳴を上げながら吹き飛び、ビルを二つ貫き、三つ目のビルに激突して漸く止まるがワーガルルモンが立ち上がって来る様子は無かった。

それを見たなのはは慌ててワーガルルモンの救出に向かおうとするが、ルーチェモンは瞬時になのはの目の前に現れ、なのはに笑みを向ける。

ーーービュン！！

「中々の連携だったけど、僕には効かないよ。でも、これで納得だ。僕や倉田が送ったデジモン達じゃ君達には勝てない筈だよ。フフフフッ、躊躇いも無く殺傷設定の魔法を僕に食らわすなんて、君は僕が出会った魔導師達の中でも一番覚悟が決まっているよ」

「くっ！！」

ルーチェモンが褒める様になのはに告げた言葉に、なのはは悔しそうな表情を浮かべた。

先ほどのルーチェモンに放った砲撃は、自身の最強の魔法ではないとは言え、中堅レベルの完全体でも、かなりのダメージを与えられるほどの威力が在ったと言うのに、ルーチェモンの体には傷は愚か埃さえもルーチェモンの服には付いていなかった。

そして悔しそうな表情を浮かべるなのはに、ルーチェモンは笑みを向ける。

「やっぱり君達は危険だ。デジモン達を回収している奴らも危険だ

けど、君達もかなりの危険度だ。此処で死んで貰うよ。ピエモン！！」

「ハッ！！」

ルーチェモンが叫んだ瞬間に、ルーチェモンの背後からピエロの仮面と姿を模った人型に背中に四本の剣を背負ったデジモンが出現する。

ピエモンの姿を見たなのはは再びディーアークをバリアジャケットの中から取り出し、ピエモンに向け情報を調べ始める。

ピエモン、世代／究極体、属性／ウィルス種、種族／魔人型、必殺技／トランプソード

奇抜な姿と神出鬼没な、全てが謎に包まれた魔人型デジモン、実力に置いてはトップクラスであり、ピエモンに出会ったら逃げろとさえ言われるほどである。背中の“マジックボックス”から、ハート、スペード、ダイア、クラブの４本の剣で戦う。もし彼に出会ってしまった場合、もはや己の運命を呪うしか道はない。必殺技の『トランプソード』は、背中の４本の剣、全てを瞬時にテレポートさせて、相手に回避不能の攻撃を放つ技だ。その他にもマジック染みた技を多数所持しているぞ。

「究極体ッ！！！」

ピエモンの情報を知ったなのはは目を見開きながら、ピエモンの姿を見つめた。

しかし、なのはの様子になど構わずにルーチェモンは、なのはに背を向けながら声を掛ける。

「言い忘れていたけど、助けは来ないよ。この辺りの結界は僕が全

力で張った物だから、誰も入れないし誰も出られない。幾ら君達の所に居る究極体でも入って来るまでに一時間は掛かる。そして入って来た頃には、君の死体だけが在るのさ」

「クッ！！」

ルーチェモンの告げた事実になのはは悔しそうな声を上げ、ピエモンから放たれる威圧感に震えながらもレイジングハートをルーチェモンとピエモンに向かって構える。

その様子を横目で見たルーチェモンは更に笑みを深めると、横に浮かんでいるピエモンに声を掛けた。

「ピエモン、彼女と彼女のデジモンは確実に殺せ。僕は倉田の所に戻るよ」

「ハッ！！ルーチェモン様のご命令は必ず遂行します」

ーーーシュウン！！

ルーチェモンの命令にピエモンは臣下の礼を取りながら頷き、ルーチェモンはその様子に笑みを浮かべるとその場から転移した。

そしてルーチェモンが姿を消すと同時に、ピエモンは恐怖に震えるなのはに顔を向けると、瞬時になのはの目の前に移動し腹を殴り付ける。

ーーードゴオン！！

「ガハッ！！」

ーーードゴオオオオオン！！

ピエモンの目で追う事さえ不可能なスピードからの一撃を受けたなのはは、地面へと吹き飛ばされ激突した。
その様子にピエモンは笑みを浮かべると両手に電気の帯を生み出し、地面に倒れているなのはに振り下ろす。

「死になさい！！エンディングスナイプ！！」

「ヒッ！！」

ピエモンが放った電気の帯ーエンディングスナイプがなのはに当たろうする。
しかし、その直前にビルの壁を蹴りながらワーガルルモンが高速で空中を移動し、ピエモンの背後に現れると、自身の両腕の爪をピエモンに向かって振り下ろす。

「なのはを傷付けさせない！！カイザーーーネイル！！！」

「むっ！！」

ワーガルルモンがピエモンの背後に現れると、ピエモンは瞬時にエンディングスナイプを中断し、背中に背負っていた四本の剣の内、二本を引き剥き、ワーガルルモンのカイザーネイルを受け止める。

ーーガキィン！！

「完全体程度で在りながら、私に気付かれずに此処まで接近するとは、ルーチェモン様が危険視する筈ですね」

「お前達の好きにはさせない！そしてなのはを殺させたりするもの

か！！」

ワーガルルモンの攻撃にピエモンは感心した声を上げるが、ワーガルルモンは関係無いと言わんばかりに叫び、空中でピエモンに向かって全力で蹴りを放つ。

「ガルルキック！！」

「フン！」

ーーーシュン！！

「なっ！？」

ワーガルルモンがガルルキックを放ち、ピエモンに直撃しようとした瞬間に、ピエモンの姿は突如として空気に溶け込んだかの様に消失した。

それを見たワーガルルモンが思わず動きが止まってしまうと、背後にピエモンが姿を現し、ワーガルルモンの背に蹴りを放つ。

「フッ！！」

ーーードン！！

「ガハッ！！」

ピエモンの蹴りを受けたワーガルルモンは苦痛の声を上げビルに激突しようとするが、ビルに激突する直前で宙返りを行い、ビルの壁に着地する。

そして地上で起き上がろうとしているなのはに目を向け、二人の

視線が一瞬交錯すると互いに頷き合い、ワーガルルモンは再びピエモンに向かって飛び出し、口から青い炎をピエモンに向かって放つ。

「フォックスファイヤーーー！！」

「無駄な事を」

ーーーシュン！！

ワーガルルモンは空中でピエモンに向かってフォックスファイヤーを放つがピエモンに当たる直前で再びピエモンの姿は消失した。
そして先ほどと同じ様にワーガルルモンの背後に現れるが、その瞬間に、無数の桃色の誘導弾がピエモンに向かって来る。

「アクセルシューター！！シュート！！」

「なんと！？」

ーーードゴオン！！

ワーガルルモンの背後に現れたピエモンに向かって、何時の間に空中に戻っていたなのはがピエモンに向かってアクセルシューターを放ち、ピエモンにアクセルシューターは全弾直撃した。
それを確認したワーガルルモンは瞬時に煙が上がる場所に顔を向け、再びフォックスファイヤーを放つ。

「フォックスファイヤーーー！！」

ーーーゴオォォォォォォォーー！！！

煙が吹き上がる場所に向かってワーガルルモンはフィックスファイヤーを放ったが、フォックスファイヤーはピエモンには直撃せず何も無い空間を貫く。

「そんな！？」

「ッ！！なのは！其処から離れるんだ！！」

再び消失していたピエモンの姿になのはが思わず声を上げて動きが止まってしまう。

それと共にワーガルルモンは何かに気が付いた様になのはに向かって叫ぶと、なのはの背後にピエモンがの姿が現れ、両腕から発生させていた電気の帯をなのはに振り下ろす。

「エンディングスナイプ！！」

ーーーバシィィィィィィン！！！

「キャアァァァァァーーー！！」

「なのは！！」

ピエモンのエンディングスナイプを背に受けたなのはは悲鳴を上げながら、地上に向かって吹き飛ばされた。

それを見たワーガルルモンは瞬時に近くのビルの壁を蹴り飛ばし、地上に激突する直前のなのはを受け止める。

「グッ！！」

「・・・・・・ワーガルルモン君」

なのはを受け止めた瞬間に、ワーガルルモンが立っている大地に罅が入るがワーガルルモンは膝を付かずに立ち続け、なのはが薄く目を開けてワーガルルモンの名を呼ぶと。ワーガルルモンは笑みを浮かべる。

しかし、次の瞬間上空に浮かんでいたピエモンが背中に在るマジックボックスに突き立っている四本の剣を引き抜くと、四本の剣をテレポートさせる。

「トランプソード！！！」

「ッ！！ごめん！なのは！！」

「えっ？」

ーーードスドスドスン！！！

ピエモンが放ったトランプソードを見たワーガルルモンは瞬時になのはを投げ飛ばし、なのはが疑問の声を上げた瞬間に、ワーガルルモンは四本の剣に串刺しにされた。

「ガハッ！！」

「ワーガルルモン君！！」

四本の剣に串刺しにされたワーガルルモンは苦痛の声を上げると膝を付き、デジコードが体から発生すると元のガブモンの姿に戻ってしまい、地面に倒れ付してしまう。

それを目撃したなのはは、慌ててガブモンの傍に駆け寄り、傷付いているガブモンを腕の中に抱き上げる。

「ガブモン君！ガブモン君！！返事をして！！」

「・・・・フム、驚きましたね。私のトランプソードは脱出不可能な技。それなのにお嬢さんは脱出した上に、そちらのデジモンは致命傷さえも避けた。やはり危険ですね。究極体に進化されては確実に私達の脅威に成ります。此処で死んで貰うのが良いでしょうね」

なのはが抱き上げたガブモンを名を叫ぶんでいると、地上に降りて来たピエモンがゆっくりと近付きながら呟き、再びトランプソードを出現させ始める。

それを見たなのはは、険しい表情をしながらガブモンを抱えて立ち上がると、レイジングハートをピエモンに向け、ピエモンは面白そうな表情をなのはに向ける。

「ほう、勝てないと分かっているのに挑んで来ますか？そんなに死にたいんですか？」

「・・・・・死ぬ気なんて無い。貴方を倒してガブモン君と一緒に此処を脱出する。そして大切な人達を護ってみせる！！」

「ハハハハハハッ！！私を倒す？笑えますね。私にダメージを与える事さえ出来ないと言うのに、一人で戦うんですか？」

なのはの宣言を聞いたピエモンは大声で笑い、なのはに向かって質問した。

完全体であるワーガルルモンと一緒に戦ってさえもピエモンには一切にダメージが与えられなかったのに、なのははピエモンを倒すと宣言した。その事がつぼに嵌ったのか、ピエモンは大声で腹を抱えながら笑い続ける。

しかし、ピエモンの笑いを聞いてもなのはは決意に満ちた表情を変えずにピエモンを見つめる。

「一人じゃない。私には自分が傷付いても私を護ってくれたパートナーが居る。ガブモン君はもう戦えないけど、ガブモン君の想いは私の中に在る。だから今度は私がガブモン君を護る！！」

「世迷言を、もう死になさい！！」

なのはの宣言を聞いたピエモンは不快そうな表情を浮かべ叫ぶと、再び四本の剣を取り出し、なのはに放とうとする。

「トランプ！！」

「プチファイヤーーー！！！！」

「なっ！？」

ーーードオン！！

ピエモンがトランプソードを放とうとした瞬間に、なのはの胸で抱かれていたガブモンが顔を上げ、ピエモンに向かって蒼い炎ープチファイヤーを放つと、ピエモンは驚愕の声を上げながらプチファイヤーをその身に喰らい技の発動を中断してしまった。成長期レベルの技など究極体で在るピエモンにはダメージを与える事は出来ないが、もう動けないと思っていたガブモンが攻撃して来た事に驚いたのだ。

そしてなのはも突然のガブモンの攻撃に驚いたように、自身の腕の中に居るガブモンに目を向けると、ガブモンはなのはに顔を向ける。

「なのは、一緒に戦おう」

「でも！ガブモン君には怪我が！？」

「僕は大丈夫だよ。それよりも力を貸して、僕一人じゃ勝てないけど、なのはが居れば勝てる！」

「・・・・・うん！！一緒に戦おう！！」

ーーーピカァァァァァァァン！！

ガブモンの宣言になのはは少し考える様な表情を浮かべるが、すぐにガブモンの想いに気が付き、なのはもガブモンと同じ想いを抱いた瞬間、持っていたディーアークが光り輝き、なのはとガブモンを包み込む光の柱が出現した。

そしてなのはは持っていたディーアークを胸に当てて、自身の体をデータ化しながら叫ぶ。

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「マトリックスエボリューション！！！」

「ガブモン進化！！！」

なのはが叫ぶと同時にディーアークから音声が響き、なのはとガブモンの体が一つに成り巨大な蒼いデジコードが出現すると、その中から左腕にガトリング砲『メタルストーム』が装備し、右肩にビーム砲を備え全身に無数の火器を装備した機械で出来た二足歩行の機械の狼型のデジモンが出現した。その名も。

「メタルガルルモンX！！！」

メタルガルルモンX、世代／究極体、属性／データ種、種族／サイボーグ型、必殺技／コキュートスブレス、ガルルバースト

全身が機械で覆われたガルルモンの最終進化系メタルガルルモンが『X抗体』に寄って未知の力を得た姿。本来は四足方向だが、『X抗体』を得た事に寄って二足歩行に成った上に、左腕に超高速で打ち出すガトリング砲『メタルストーム』が追加装備されている。必殺技は、口から強烈な氷の息を吹き、相手を凍りづけにする『コキュートスブレス』に、全身に搭載されたミサイル兵器やビーム砲をロックオンした相手に一斉に発射する『ガルルバースト』だ。

「在りえん！！デジモンと人間が一つに成っただと！？」

メタルガルルモンXの姿を見たピエモンが驚愕に目を見開きながら声を上げていると、メタルガルルモンXは左腕に装備したメタルストームをピエモンに向けて超高速弾を発射し出す。

「メタルストーム！！！」

ーーーズガガガガガガガガガッ！！！

「はっ！早すぎる！！」

ーーーシュン！！

メタルガルルモンXが放った弾丸を見たピエモンは目を見開きながら、瞬時に姿を消して避けた。

しかし、メタルガルルモンXは自身の鼻に付いているレーザーサ

イトでピエモンが現れる場所を予測すると、全身の火器をピエモンが出現する場所に向けて発射する。

「ガルルバースト！！！」

ーーードドドド

四本のトランプソードを背中から抜き取り構え出す。

「赦さんぞ貴様ら！！これでも喰らえ！！トランプ」

「クッ！！」

ピエモンがトランプソードを放とうとしている事に気が付いた、メタルガルルモンXはその場を移動しようする。しかし、その直前に。

ーーービキ、ビキ、バキィィィィィィィィィン！！！

上空の結界に突如として罅が入ると、罅は更に広がり、罅の間から黒い閃光が飛び出し、近くのビルに降り立つ。

そして黒い閃光ーブラックはピエモンとメタルガルルモンXの姿を目撃し、口元に笑みを浮かべる。

「ほう、面白い状況だ」

「なっ！ルーチェモン様の結界を破っただと！？」

「ブラックさん！！」

ブラックの姿を見たピエモンは目を見開きながら声を上げ、メタルガルルモンXは歓喜の声を上げた。

そしてブラックの姿を確認したピエモンは瞬時に戦況が自身に取って不利に成った事に気が付き、再びその姿を消失させながら叫ぶ。

「今日の所は引かせて貰いますよ！！」

ーーーシュウン！！

「しまった！？」

ピエモンが姿を消して逃げるとメタルガルルモンXは悔しそうな声を上げるが、ブラックは不機嫌そうな表情を浮かべて、再生した結界に顔を向けた瞬間に上空からピエモンの悲鳴が響いて来る。

ーーーバリバリバリバリバリッ！！！

「ガアァァァァァーーーーー！！！何故だ！？」

「ふん、貴様の主の結界が原因だ」

自身が結界から出られなかった事にピエモンが驚愕の声を上げると、ブラックが不機嫌そうな顔をしながら呟いた。ルーチェモンは最初からピエモンをブラックに戦わせる気だったのだ。今までも何度か完全体クラスのデジモンとの戦いは調べていたが、ブラックの真の実力を見られなかった。だからこそ、今回は、なのはとガブモンを狙う次いでにピエモンとブラックを戦わせ実力を見るつもりだったのだ。

そして結界からピエモンが出られない事を知ったメタルガルルモンXはピエモンに向かって悲しそうな表情を向けるが、迷わずになのはと共に自身と一体に成っていたレイジングハートを出現させ、右手で掴み取り、上空で苦しんでいるピエモンに向かって構え、巨大な魔方陣を発生させながら叫ぶ。

「全力！！」

（全開！！）

メタルガルルモンXと一体に成っているなのはは同時に叫び、巨大としか言えないほどの大きさを持った桜色の砲撃をピエモンに向かって撃ち出す。

「（スターライトブレイカーーーーー！！！！）」

ドグオオオ

なのはは眠っているガブモンに笑みを浮かべながら、ガブモンの顔に口付けを行なうと、ガブモンと同じ様に安らかな表情を浮かべて眠りに付いた。

復活！不屈の心と融合進化！！（後書き）

次回予告

遂に現れた究極体とルーチェモンになのはは家族との一時の別れを決意する。

そしてルーチェモンの実力をなのはから聞いた、クイントとティアナ、そしてクダモンは山篭りの決意をし、山に修行に向かう。

其処で出会う者達とは？

次回、漆黒の竜人と少女、『修行の始まり、俺はバンチョーだ！！』

少女達は力を求める、大切な者達を護る為に。

修行の始まり、俺がバンチョーだ！！（前書き）

本作に置ける究極進化設定

本作での究極進化は、テイマーズの時の様にデジモンと人間が融合する事で究極体に進化出来ます。
ですが、テイマーズと違って、融合した人物が魔導師だった場合、その魔導師が持つデバイスも一体と成りデジモンの武器として使用可能な上に、魔導師が覚えている魔法も使用可能に成ります。

修行の始まり、俺がバンチョーだ！！

ピエモンとの激闘を終えたなのはとガブモンは、ブラック達の手によりアルハザードに連れられ、怪我の治療を行なっていた。
そして治療が終了すると共に医務室からフリートが出て来て、医務室の外で待っていたブラック達に険しい表情を向ける。

「治療は行ないましたが、なのはちゃんはともかく、ガブモン君はかなりのダメージを受けています。少なくと一ヶ月は此処での治療が必要に成りますね」

「・・・・そうですか。しかし、命が在っただけでも奇跡でしょう。相手は究極体にルーチェモンだったんですからね」

フリートが険しい表情を浮かべて告げた事実に、赤ん坊ーヴィヴィオを抱えたリンディも険しい表情をしながら答えた。
今回、なのはとガブモンが戦ったのは、確実に実力が遥かに上だった者達。幾ら究極体に進化出来る様に成ったとは言え、それでも実力は相手側の方が遥かに上だろう。

「なのはさんとガブモン君が究極体に進化出来る様に成った事は嬉しい事ですが、それでも相手側の方が戦力は充実している。これからの戦いは今までよりも厳しいものに成りますね」

リンディが険しい表情をしながら呟いた言葉に、その場に居る全員が動揺に険しい表情をしながら頷くと、医務室からなのはが出て来る。
その様子を見たティアナは、心配そうな表情をしながらなのはに向かって質問する。

「なのはさん、大丈夫なんですか？」

「うん、ガブモン君が護ってくれたからね」

ティアナの質問になのはは笑みを浮かべながら答えるが、すぐに表情を真剣に戻してフリートに顔を向けると、待機状態のレイジングハートを取り出し、フリートの手の上に乗せる。

「フリートさん、以前から頼んでいたレイジングハートの強化を早急にお願いします」

「分かりました。すぐに作業に取り掛かります」

なのはの頼みを聞いたフリートは、何時ものマッドの表情ではなく真剣な表情を浮かべて頷くと、自身の研究室に向かい出す。

その様子となのはを言葉を聞いていたクイントは険しい表情をして、なのはに顔を向ける。

「ルーチェモンに貴女の魔法が通用しなかったのね？」

「・・・・・・はい、殺傷設定の上に全力で、しかも至近距離で放った砲撃を受けても、傷は愚か埃さえも付ける事が出来ませんでした」

『ッ！！』

なのはが険しい表情をしながら告げた事実に、ブラックを除いた全員が驚愕に目を見開き、顔を見合わせた。

ルーチェモンの世代は成長期。デジモンに置いては三段階目の世

代だと言うのに、なのはの砲撃が全く通じなかったと告げられたのだから、思わず顔を見合わせてしまうのも当然だろう。ブラックは分類上は究極体に分類される。だからこそ、なのはの砲撃が通じないのは分かるが、まさか成長期の状態でなのはの砲撃が効かないとは思っても見なかったのだ。
　そしてなのはの言葉を聞いたクイントとティアナは顔を見合わせると頷き合い、リンディに顔を向ける。

「リンディ、以前から話していた山篭りに行っても良いかしら？今のままじゃ勝てないわ」

「・・・・・ええ、そうね。私も参加したいけど、この子の事があるし、今回は諦めるしかないわね」

　クイントの言葉にリンディは考える様な顔を一瞬するが、すぐに表情を戻しクイントの言葉に答えながら、自身の胸で安らかに眠っているヴィヴィオを見つめる。
　何せリンディまで山篭りに向かってしまったら、ヴィヴィオの面倒を見る者が居なくなってしまう。ブラックは戦闘狂だし、ルインは子育てなどした事が無い。フリートに至ってはマッドな部分が在るのでかなり危険。そうなると必然的にヴィヴィオに何か在った時に面倒を見られる者が居ないのだ。
　そしてリンディの言葉を聞いたクイントは申し訳無いと言う表情をしながらリンディに声を掛ける。

「ゴメンね」

「気にしないで。今度行く時は一緒に行かせて貰うわ」

　クイントがリンディに向かって謝ると、リンディは気にしてない

と言う表情を浮かべながら答えた。
その様子を見ていたなのはも、リンディに真剣な表情を向ける。
「リンディさん、私も此処に残って良いですか？」
「えっ？」
なのはの言葉を聞いたリンディが疑問の声を上げ、他の者達も疑問の表情になのはを向けると、なのはは理由を話し始める。
「ルーチェモンは私とガブモン君が危険だと言っていました。だから、このまま海鳴に居たら、今度はお母さん達やアリサちゃん、すずかちゃんにも危険が迫るかも知れない。だから、お願いします！！」
なのはは言葉と共にリンディに向かって頭を下げた。
その様子にリンディは困ったと言う表情を浮かべる。なのはがどれだけ頑張って高校を受けたのかを知っているだけに、安易に頷けないし、桃子達への説明も如何したものかと考えていると、壁に寄り掛かりながら目を閉じていたブラックが目を開け、リンディに声を掛ける。
「此処から通わせれば良い。予め転送装置に場所を組み込んで置けば、瞬時に移動出来るからな」
「その手が在りましたね。桃子達には事情を説明して置けば良いし、喫茶店のマスターを目指すのなら、最終学歴が中卒は不味いわ」
「ありがとうございます！！」

ブラックとリンディの言葉になのはは笑みを浮かべて礼を言い、ブラックは不機嫌そうな表情を浮かべながら再び目を閉じ、リンディやルイン達は笑みをなのはに向けるのだった。

そして数日後のミッドチルダの山奥に在る深い森に包まれた山の中。
その場所で訓練を行っていたティアナは、森の木々の間を駆け抜けながら、ブレイクミラージュを構え、自分の横を同じ様に走っているレッパモンに向かって叫ぶ。

「レッパモン！！」

「おう！！」

ティアナの叫びにレッパモンは答えた瞬間に、木々の間から凄まじいスピードで丸太が飛んで来る。
それを確認したティアナとレッパモンは互いに頷くと、丸太に向かってそれぞれ攻撃を放つ。

「クロスファイヤーシュート！！」

「真空カマイタチ！！」

ーーーバキィィィィィィン！！！

ティアナの誘導弾とレッパモンの真空カマイタチによって、向かって来ていた丸太は粉々に成るが、今度は別々の方向から丸太が飛

び出して来る。
　しかし、それを見てもティアナとレッパモンは慌てずにそれぞれの方向から飛んで来る丸太に目を向け、ギリギリの所でかわし、ティアナは一瞬感じた気配に向かって魔力弾を撃ち込む。

「そこっ！！」

ーーードン！！

「くっ！」

　ティアナが木々の間に向かって魔力弾を放つと、木々の間からバイオ・グラップレオモンに進化していたクイントが悔しげな声を出しながら飛び出して来た。
　そしてクイントの姿を目撃したティアナは自分の横に居るレッパモンに目配せを行い、互いに頷き合うと、レッパモンは近くの木に向かって駆け出し、ティアナはクイントに向かって魔力弾を連射する。

「ハアァァァァッ！！」

ーーーズガガガガガガガガガガッ！！！

「直線的過ぎるわ！！」

　ティアナが放った魔力弾をクイントは横に飛ぶ事で簡単に交かし、すぐさまティアナに向かって駆け出すが、その直前に木の上に登っていたレッパモンが風の刃をクイントに放つ。

「真空カマイタチ！！」

「くっ！」

レッパモンの真空カマイタチにより、ティアナへの接近を止められたクイントは悔しげな表情を浮かべ、木の上に居るレッパモンを睨むが、レッパモンは瞬時に別の木々に飛び込みクイントの視界から隠れる。

その隙にティアナは幻影魔法ーフェイク・シルエットを発動させ、次々と自分自身とレッパモンの幻影を生み出して行く。

（しまった！！今の攻撃は幻影を生み出す時間を作る為だったのね！！）

クイントは今までのやり取りが、全て幻影を生み出す為の囮だった事に気が付き、驚愕に目を見開きながら、自身の周りに存在しているティアナとレッパモンの幻影を睨みつける。

バイオダークタワーデジモンに成ったクイントは、相手の気配を読める様に成ったお陰で隠れていても相手に気が付く事が出来るのだが、目の前で戦っている二人は自在に自分の気配を消せる様に成って来ている。ブラッククラスの者なら気が付く事が出来るが、クイントのレベルでは気付く事が出来ない位に。

そして本物が完全に幻影の中に姿を隠すと、次々と幻影達はクイントに向かって駆け出し、攻撃を開始する。

「全く厄介ね！！」

クイントは悪態を付きながらも、幻影達に向かって駆け出し、全身を凄まじい速度で回転させ始め、回し蹴りの連打を幻影に当てて行く。

「旋風タービン蹴り！！」

「くっ！！」

クイントが放った旋風タービン蹴りに寄って、次々と幻影は消滅し、今度は木の間に隠れていたティアナが悔しげな声を上げるが、突如としてクイントの上空からレッパモンが飛び出し、回転してるクイントの中心に向かって鋭い爪を連続で振り下ろす。

「獣牙乱撃（じゅうがらんげき）！！」

「しまっ！！」

レッパモンの獣牙乱撃を見たクイントが声を上げると、回転しているクイントの中心にぶつかりクイントは回転を止めてしまう。

そしてティアナはクイントの回転が止まったのを確認すると、ブレイクミラージュを周りの木々に向かって構え、次々とクイントが居る場所とは別の場所に向かって魔力弾を撃ち出す。

ーーーズガガガガガガガッ！！

「一体何っ！！」

ティアナの行動にクイントが疑問の声を上げようとしたするが、その直前に別々の場所に放たれた魔力弾が木々や地面に直撃した瞬間に、突如として全ての魔力弾はクイントに向かい出す。

「跳弾っ！！くっ！！」

ーーーガガガガガガガガガガガッ！！

跳弾した魔力弾を見たクイントは目を見開きながら声を上げるが、瞬時に自身のタービンを回して跳弾の雨から逃れた。
しかし、逃れた先にはレッパモンが待ち構え、クイントに向かって尻尾を振るい、真空カマイタチを放つ。

「真空カマイタチ！！」

「このっ！！」

ーーーバシュン！！

レッパモンが放った真空カマイタチを目撃したクイントは、自身の右手のタービンを回しながら真空カマイタチに向かって拳を振り下ろし破壊する。
しかし、その隙にティアナは右手に持っているブレイクミラージュに魔力を込め、凄まじい速度の魔力弾をクイントに向かって放つ。

「レールショット！！」

ーーーズドォン！！

「ぐっ！！」

ティアナが放ったレールショットはクイントの体に直撃し、クイントは思わず膝を付いてしまう。
そしてクイントが膝を付くのを確認したティアナは安堵の息を付きながら、地面に座り込む。

「はあ～、成功して良かった。これって十回に一度しか成功しない

んだもの」

「ふむ、確かに、今後の課題に入れて置いた方が良いな」

「全く、末恐ろしいコンビね」

安堵の息を付くティアナの近くにレッパモンは寄りながら声を掛けていると、膝を付いていたクイントが立ち上がり、人間の姿に戻りながら、ティアナとレッパモンに感心した表情を向ける。

（この子達は本当に凄いわ。確かにティアナは魔力値が低いと言う弱点が在ったけど、フリートの技術で弱点は無くなったし、元々の才能も在ったんでしょうね）

ティアナとレッパモンを見つめながらクイントはそう内心で考える。

確かに一見ティアナには才能が無く、凡人にしか見えないが、事、戦闘指揮の才能や戦術運用、その場における状況判断などと言う、戦闘における重要な才能がティアナには備わっているのだ。

（更にレッパモンと言う常に冷静なパートナーも居ると成れば、Ｓランク魔導師でさえも勝てない可能性が在るわ。この子達なら例え相手が飛んでいても、自分達に有利になる状況が生み出せる。それにレッパモンは更に進化出来る可能性も在るからね。これからが楽しみだわ）

クイントはティアナとレッパモンは見つめながら、面白そうな表情を浮かべる。

先ほどの戦いでも全力で無かったとはいえ、クイントを追い込んだのだからティアナとレッパモンの才能は本物だろう。これからの

成長が楽しみだとクイントが内心で思っていると、レッパモンはティアナに背を向けながら声を掛ける。

「私はタオルでも取ってこよう。此処でクイントと一緒に待っていてくれ」

「分かった。お願いね」

レッパモンの言葉を聞いたティアナが、レッパモンに笑みを浮かべながら答えると、レッパモンは頷き、木々の間を掛け抜けていく。

それを確認したティアナはクイントに顔を向け、先ほどの戦いに付いて話し合いを始めた。

そして木々の枝を渡りながら、荷物の在る場所へとレッパモンが向かっていると、突如として二つの気配を感じ足を止め、注意深く気配を探り始めた。

（この気配は・・・・・デジモン！しかも二つだと！）

気配の正体がデジモンで在る事に気がついたレッパモンは焦った表情をするが、すぐに冷静に戻り、ティアナへと通信を送り」始め。

（ティアナ！！近くに二体のデジモンが居るぞ！！）

（ッ！！分かった！すぐにクイントさんと一緒に向かう！）

レッパモンの報告を聞いたティアナは驚愕するが、瞬時に冷静に戻りレッパモンに通信を送り返した。

そしてその場でレッパモンがティアナとクイントが来るのを待っていると、森の間からティアナとクイントが姿を現し、木の上に居るレッパモンに顔を向ける。

「それで何処に居るの！！」

「こっちだ！付いて来てくれ！」

ティアナの叫びにレッパモンは答えると、木の上から地面に降りて駆け出し、ティアナとクイントは顔を見合わせると頷き合い、レッパモンの後を追って行く。

そして在る程度進むとレッパモンは突如として足を止め、ティアナとクイントも足を止めて、三人は木々の間から顔を覗かせながら気配の感じられる方を見て見ると、杖を持った骸骨の様なデジモンと学ランを着た獣人が向かい合っていた。

スカルサタモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／アンデット型、必殺技／ネイルボーン

強さと破壊ばかりを求めたばかりに、ダークエリアに堕ちた堕天使型デジモンの成れの果てのアンデット型デジモン。強大な悪のパワーを秘めた、電脳核（デジコア）の“ダークコア”を手に入れてしまったので、強い暗黒のパワーを持っている。必殺技の『ネイルボーン』は、杖の先から暗黒パワーを凝縮させた、光を相手に向かって放つ技だ。デジモンのデータに異常を発生させて、データを全て破壊してしまうので、究極体にさえも危険視されている。

バンチョーレオモン、世代／究極体、属性／ワクチン種、種族／獣人型、必殺技／フラッシュバンチョーパンチ、獅子羅王斬（ししらおうざん）、バーンバンチョーパンチ

自分の信じる『正義』に忠実な獣人型デジモン、デジタルワールドで五体しか確認されていない『バンチョー』の称号をもつデジモンの一人。自分の信じる『正義』が主で在る為に、『正義』を阻む者が居れば、ロイヤルナイツは愚か、三大天使さえも敵に回す。幾多

もの死闘を一緒に越えてきた自慢の短刀『男魂』と、敵の物理攻撃を89．9％無効化する『GAKU－RAN』を武器に戦うぞ。必殺技は、極限まで高めた気合を拳一点に乗せて相手に向かってぶっ放す『フラッシュバンチョーパンチ』と、自慢の短刀『男魂』から放たれる燃え上がるほど熱い剣技－『獅子羅王斬』に、燃え上がるほど熱い魂の込められたパンチで攻撃する『バーンバンチョーパンチ』だ。

「貴様だな！この辺りに送られたデジモン達を倒したのは！？」

「ふん、俺の縄張りに勝手に入って来たんだ。それ相応の報いをくれてやらねばな」

スカルサタモンの叫びに、バンチョーレオモンは腕を組みながら答え、スカルサタモンは怒りの表情を浮かべる。

「貴様！同じルーチェモン様に仕える仲間を！！」

「ルーチェモン？何の事だ？」

スカルサタモンの言葉にバンチョーレオモンは疑問の声を上げるが、スカルサタモンは答えずにバンチョーレオモンに向かって、持っている杖を振り下ろす。

「喰らえ！！」

「ムン！！」

ーーーガアン！！

「なっ！？」

スカルサタモンはバンチョーレオモンに向かって凄まじい速度で杖を振り下ろすが、バンチョーレオモンは簡単に右腕で受け止め、スカルサタモンは驚愕に目を見開き、自身の杖を平然と受け止めているバンチョーレオモンの姿を見つめる。

スカルサタモンが放った一撃は自身の全力を込めた一撃であり、並みの成熟期なら一撃で消滅してしまうほどの威力が在るにも拘らず、バンチョーレオモンは糸も簡単に受け止めたのだ。

そして驚愕に動きが止まってしまっているスカルサタモンに向かって、バンチョーレオモンは左腕を振り被る。

「男なら拳で来い！！」

ーーードゴオオン！！

「ガアッ！」

バンチョーレオモンは叫ぶと共にスカルサタモンを殴り飛ばし、スカルサタモンは苦痛の声を上げながら吹き飛んだ。

そして吹き飛んだスカルサタモンに向かって、バンチョーレオモンは駆け出し、吹き飛んでいる途中のスカルサタモンに追い付くと、連続で拳をスカルサタモンの胸に向かって放つ。

「本物の拳を教えてやる！！オォォォォォォーーーー！！」

ーーードドドドドドドドドドドドドドドドドゴオン！！

「ガアアアアアアアーーーー！！」

バンチョーレオモンの連続攻撃にスカルサタモンは地面へと落下するが、バンチョーレオモンは関係ないと言わんばかりに、更に拳を振り下ろし続け、スカルサタモンは地面へと埋まって行く。
そして在る程度、スカルサタモンが地面に埋まると、バンチョーレオモンはスカルサタモンの上から降りる。

「次に来る時は武器など使わず、拳で来るんだな」

バンチョーレオモンは気絶しているスカルサタモンに向かって言葉を告げると、今度は森の方の顔を向け、険しい表情を浮かべながら声を出す。

「出て来い。先ほどから俺の戦いを見ているのは気付いているぞ」

『ッ！！！』

バンチョーレオモンの言葉に森の中に隠れていたティアナ達は驚きに目を見開き、三人は顔を見合わせると頷き合い、木々の間から姿を現す。
そしてティアナ達の姿を見たバンチョーレオモンは、少し驚いた様な表情をティアナ達に向ける。

「女と子供にデジモンだったのか？それで俺の縄張りに何の様だ？」

「ちょっと修行に来たのよ。それに此処が貴方の縄張りだって事も知らなかったわ」

「そうか、成らばすぐに帰れ。此処は俺の縄張りだ」

「そう言う訳にもいかないのよ。悪いけど！戦って貰うわ！！」

バンチョーレオモンが告げた言葉に、クイントは険しい表情を浮かべながら答えると、構えを取り出しティアナとレッパモンもそれぞれバンチョーレオモンに向かって構える。
しかし、ティアナ達の行動を見ても、バンチョーレオモンは構えを行なわずに、ティアナ達に声を掛ける。

「止めておけ、お前達の実力では俺には勝てん。さっさと山を降りるんだな」

「そう言う訳にもいかないのよ！私達はデジモンをデジタルワールドに帰すって役目が在るんだからね！！」

「なに？」

ーーードン！！

ティアナの叫びにバンチョーレオモンが疑問の声を上げた瞬間に、バンチョーレオモンの背後で気絶していた筈のスカルサタモンが起き上がり、バンチョーレオモンに向かって杖の先に付いている宝玉を向けて光を放つ。

「ネイルボーン！！！」

ーーーピカァァァァァン！！

「むっ！！」

スカルサタモンはバンチョーレオモンに向かってネイルボーンを放つが、バンチョーレオモンは瞬時にネイルボーンの放つ光から離

れ、地面に降り立ちながらスカルサタモンを睨み付ける。
「俺の言った言葉が分からなかったのか？拳で来いと言った筈だが？」
「うるせえ！！てめえだけは赦さねえ！！ネイルボーン！！」
バンチョーレオモンの言葉にスカルサタモンは怒りの表情を浮かべながら叫びと、再びバンチョーレオモンに向かってネイルボーンを放つ。
しかし、バンチョーレオモンはネイルボーンを高く飛び上がる事でかわし、驚きに動きが止まってしまっているスカルサタモンに向かって気合を極限にまで研ぎ澄ませた右腕を振り下ろす。
「生まれ変わって出直して来い！！フラッシュバンチョーパンチ！！」
ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！
「ギャアァァァァーーーー！！！」
バンチョーレオモンのフラッシュバンチョーパンチを胸に受けたスカルサタモンは、悲鳴を上げながらデータ粒子に変わり消滅するとデジタマが地面に出現する。
そしてバンチョーレオモンは地面に着地すると、落ちているデジタマを拾い上げティアナ達に近寄り険しい表情を向ける。
「説明して貰おうか？お前達がデジモン達をデジタルワールドに戻す理由とルーチェモンと言うデジモンに付いてな」

「・・・・・ええ、如何やら貴方はルーチェモンの仲間ではない様だし、事情を説明した方が良いわね」

バンチョーレオモンの言葉にクイントは考える様な表情を浮かべるが、すぐにバンチョーレオモンの言葉に頷き、自分達の名前を名乗りだす。

「私はクイント・ナカジマ」

「ティアナ・ランスターです」

「ティアナのパートナーであるレッパモンだ」

「俺はバンチョー、バンチョーレオモンだ」

クイント達とバンチョーレオモンはそれぞれ自己紹介を行なうと、自分達の事情を話し始めるのだった。

修行の始まり、俺がバンチョーだ！！（後書き）

次回予告

バンチョーレオモンと出会ったクイント達は、それぞれの事情を話す。

そしてバンチョーレオモンから伝えられた事実に、クイント達は驚愕し

バンチョーレオモンに教えこう。

そして再び現れデジモンにティアナとクダモンが挑む。

次回、漆黒の竜人と少女、『雷雲の麒麟、チィリンモン！！』

最強のバンチョーとの出会いは、更なる成長を呼ぶ。

雷雲の麒麟、チィリンモン

暗くなった夜空の下で焚き火を囲みながら、クイント、ティアナ、クダモン、そしてバンチョーレオモンは自分達の事情を話し合っていた。

「・・・・・その様な事態に成っているとは思っても見なかった。奴はあの時に死んだとばかり思っていたからな」

クイント達から告げられた次元世界に起きている現状とルーチェモン、そして倉田の事を聞いたバンチョーレオモンは、険しい表情をしながら言葉を呟き、バンチョーレオモンの言葉を聞いたクイント達も険しい表情をバンチョーレオモンに向ける。

「貴方、倉田かルーチェモンの事を知っているの？」

「ルーチェモンと言うデジモンは聞いた事は無いが、倉田のついては良く知っている。奴は俺が居たデジタルワールドで、デジモン達の虐殺を行なった張本人だ」

『ッ！！！』

バンチョーレオモンが告げた事実にクイント達は目を見開き顔を見合わせる。

オファニモン達からは倉田はデジタルワールドに惨劇を引き起こしたと言う事しか、聞いていなかったが、まさか、虐殺を行なっていたとは思っても見なかったのだ。

そして目を見開きながら顔を見合わせているクイント達に、バンチョーレオモンは苦虫を噛み潰した様な表情を浮かべながら、話の

続きを始める。

「奴はデジモンを捕獲して心を消去し、改造した人工デジモンを使って、数多くのデジモンを虐殺したのだ・・・・・デジタマさえも消去する技術を使ってな」

「デジタマも！？そんなそれじゃあ！！」

「・・・・・デジモン達が本当に消えてしまう」

バンチョーレオモンの言葉に、クイントは悲鳴の様な声を上げ、ティアナも恐怖に染まった表情を浮かべて、クダモンを強く抱き締める。

デジモンは死んだ後にデジタマに戻る事で、新たな存在として生まれ変わる事が出来る。だが、デジタマさえも消滅すると成れば、本当の意味で死んだデジモンは生まれ変わる事さえも出来ない完全な消滅。それは死よりも残酷な結末だ。

「・・・・何を考えているの！倉田は！？確かにデジモン達に悪意を持つ者は居るけど！罪の無いデジモン達を虐殺する理由なんてない！！」

「その通りだ。だが、奴は一方的にデジモンを敵視して多くのデジモンを殺したのだ。奴は本当の意味での外道だ」

クイントの怒りの叫びにバンチョーレオモンも苦虫を噛み潰した様な表情を浮かべて答えた。

そしてクイントとバンチョーレオモンの話を聞いていたティアナは在る事実に気が付き、クダモンを抱き締めながらクイントに焦った表情を向け叫ぶ。

「クイントさん！もしかして倉田が本格的に動かないのは、管理局の魔導師達が保有するデバイスにデジモンを消滅させる力を与える研究を行っているからじゃないですか！？もしそれに成功したら、本格的に戦争が起きますよ！！」

「ッ！！・・・・・・確かにその可能性が高いわね。その技術が完成してしまったら、デジモンと人間の戦争が起きても、デジモンの一方的な展開には成らない。そして何も知らない管理局の人間が行なったと成れば、幾ら事情を知っているデジモン達でも管理局との戦争に賛成する者が現れるわ。そして戦争が起きる」

ティアナの叫びにクイントは驚愕の表情を浮かべるが、すぐに冷静に戻りティアナの話は十分に在り得る事に気が付き、ティアナと同様に焦った表情を浮かべた。

現在の状況では人間達がデジモンの存在を知ったとしても、人間達が一方的に敵視するだけで、デジモン側は戦争を止める為にルーチェモンと倉田の事を説明して何とか戦争を回避しようとするだろう。だが、其処で管理局の事情を知らない者がデジモンを消滅させたと成れば、話は一気に変わる。デジモンの中にも人間に敵意を持っている者達も居る。

その者達からすれば、人間を殺す理由が出来て嬉しいはずだ。嘗て人間を排除しようとした四聖獣の一体、スーツェーモンの様に。

「倉田ならやりかねんな。奴は世界を支配する為なら、使える者は使う主義だ。七大魔王の復活さえも自分の目的の為だろう。最もルーチェモンも倉田を利用しているんだろうがな」

「でしょうね。倉田とルーチェモンが手を結んでいるのは、自分達の目的の為。どうせ二人とも利用価値が無くなったら殺そうって言

う考えでしょうね」

「その上、倉田とルーチェモンの側には最低でも三体の七大魔王が付いている。それに比べてこっちの方はデジタルワールドの守護者であるロイヤルナイツ、四聖獣、三大天使デジモン達はデジタルワールドから動く事が出来ない。最悪ですね」

バンチョーレオモンが険しい表情を浮かべながら呟いた言葉に、クイントとティアナもそれぞれ険しい表情を浮かべながら、自身の考えを話した。

ロイヤルナイツ、四聖獣、三大天使はデジタルワールドに残っている七大魔王のデジタマの守りが在る為に、人間世界には来る事が出来ない。その上、それぞれのデジモン達の力は強大、その様な者達が一斉に人間世界に現れれば倉田が何かを行なう前に戦争に発展する可能性が高い為に動く事が出来ないのだ。

それぞれが険しい表情を浮かべると、バンチョーレオモンはクイント達に顔を向ける。

「お前達は修行に来たと言っていたが、具体的には何をするつもりだったんだ？」

「何って？模擬戦の繰り返しや個人の実力アップの訓練を行なうつもりだったんですけど？」

バンチョーレオモンの言葉にティアナは疑問の表情を浮かべながら答え、クイントとクダモンも疑問の表情を浮かべバンチョーレオモンを見つめると、バンチョーレオモンは溜め息を付きながら、真剣な表情をクイント達に向ける。

「駄目だな。それでは更なる力を得られん。お前達が更に強くなる

為には別のものが必要だ。明日から俺が貴様らを鍛えてやろう」

『ッ！！』

バンチョーレオモンが告げた言葉にクイント達は驚愕の表情を浮かべるが、すぐに三人は顔を見合わせ頷き、バンチョーレオモンに顔を向ける。

「良いんですか！？」

「ああ、俺としても倉田は放っておけない。それに今のお前達の力ではこれからの戦いには耐えられまい。だから鍛えてやる」

「お願い！！」

「お願いします！！」

「頼む！！」

バンチョーレオモンの言葉にクイント達は頭を下げ、バンチョーレオモンは不適な笑みを浮かべるのだった。

そして翌日の朝からバンチョーレオモンとクイント達との訓練が始まった。一言で言えば地獄が。

「動きが遅い！！もっと拳に力を込めろ！！」

「グウッ！！」

在る時はバンチョーレオモンとバイオ・グラップレオモンに進化したクイントのとの模擬戦を、またある時は。

「デジモンの力を最大に発揮する為に必要なのは、強き想いだ！！それこそがデジモンに更なる力を与える！！」

「はい！！レッパモン！行くわよ！」

「おう！！」

ティアナにデジモンと共に在る為に最も必要なものを説明し、扱い方を教えたり等の繰り返しを行い、次々とクイントとティアナ、そしてクダモンを鍛え続け、アッと言う間に五日が経った日の夜に再び四人は焚き火を囲んでいた。

「訓練が始まってから今日で五日か。この五日でお前達の実力はかなり上がった筈だ」

「確かにね。何度死ぬ思いをした事か」

「本当ですね」

「確かに」

バンチョーレオモンの言葉にクイント達は恐怖に染まった表情を浮かべながら答えた。

この五日の間に、クイント達の実力は以前とは比べられないほどに上がったが、それでも死に瀕する様な毎日だったのだ。正直、ブラックとの訓練がマシに思える位に、バンチョーレオモンの訓練はきつかった。

その様子にバンチョーレオモンは苦笑を浮かべながら、クイント達に顔を向ける。

「もう俺が出来るのは此処までだ。後は自分達で己の道を進め」

「・・・・・私達とは一緒に来ないのね？」

「ああ、俺は誰かとつるむのが苦手でな。俺は俺で動かさせて貰う・・・ムッ！」

『エッ？』

クイントの質問にバンチョーレオモンは真剣な表情を浮かべながら答えるが、突如として上の方向を睨みつけ、クイント達が疑問の表情を浮かべてバンチョーレオモンの睨んでいる方向を見て見ると、ブラックが上空から降りて来る。

「ブラック兄さん！如何して此処に！？」

「フリートからこの辺りに究極体の反応が在ったと言われたから、久々に楽しめるかと思って来たのだ」

ブラックに向かってティアナが疑問の叫びを上げると、ブラックはティアナとクイントに近付きながら答え、バンチョーレオモンに向かって笑みを浮かべる。

「来て正解だった。お前の様の者に出会えるとは」

「フッ、それは此方の言葉だ」

ブラックの言葉を聞いたバンチョーレオモンの笑みを浮かべながら、立ち上がりブラックとバンチョーレオモンは互いに不適な笑み

を向け合う。
「此処では俺とお前の戦いに耐えられまい。此処から少し離れた場所でやりあうぞ」
「良いだろう。貴様とは存分に戦いたいからな」
「って！何で戦うのよ！敵じゃないのよ！」
バンチョーレオモンとブラックの会話にクイントは疑問の叫びを上げるが、ブラックとバンチョーレオモンはクイントの方に目を向けずに森の奥に向けて足を進める。
「戦いに理由などない。コイツとは正々堂々戦いたいんだ！」
「奇遇だな。俺もそう思っていた所だ。男の戦いに理由など不要！」
ブラックとバンチョーレオモンは同時に叫びと、その場から瞬時に移動し別の場所に向かって駆け出しながら、殴り合いを始めた。
「ハアァァァァァーーーー！！」
「オォォォォォォォーーーーー！！！！！」
ドゴオオオオオオオオオオオオオン！！！
ブラックとバンチョーレオモンは互いに凄まじいスピードで拳を繰り出しながら、次々と辺りに凄まじい衝撃波を引き起こし木々を薙ぎ倒しながら、クイント達の前から移動して行く。
その様子を見たクイントは溜め息を付き、ティアナとクダモンに

顔を向ける。

「ああ、成ったら止まらないから私が様子を見に行くわ。ティアナは此処でクダモンと一緒に待っていて」

「頼みます」

「頼んだぞ」

クイントの言葉にティアナのクダモンが頭を下げながら言うと、クイントは笑みを浮かべて頷き、ブラックとバンチョーレオモンが向かった場所に向かって移動を開始を始めた。

そしてクイントが向かうのを確認したティアナとクダモンは顔を見合わせ、同時に溜め息を付く。

「はあ～、ブラック兄さんの戦闘狂にも困るわね。確か前にも実力が高い犯罪者達が集まる情報を聞いて、飛び出しって行った事が在ったわね？」

「その様な事も在ったな。他には戦闘本能が疼くからと言って、違法な研究を行なっていた研究所を潰しに行ったりなど、リンディが気絶する様な事ばかりしていたな」

ティアナとクダモンは顔を見合わせてそれぞれブラックの行った惨劇と呼ぶに相応しい状況を話し合った。

そして二人は少しの間、ブラックの行いに付いて話し合っていると、突如として二人の頭上に影が現れ、ティアナとクダモンが疑問の表情を浮かべて上空を見てみると其処には、頭部と前足に翼が鳥型の形をして、胴体が獣型に、尻尾が蛇の様な形が全て合体した様なデジモンが存在していた。

「ッ！！デジモン！？」

空に浮かぶデジモンの姿を目撃したティアナは慌ててクダモンを抱えて瞬時に立ち上がり、ディーアークを服の中からを取り出すとデジモンに向けて情報を調べ始める。

グリフォモン、世代／究極体、属性／データ種、種族／幻獣型、必殺技／スーパーソニックボイス

鳥型デジモンの頭部と前足に翼、胴体は獣型に尻尾には蛇の様な物が付いた幻獣型デジモン。非常に攻撃力が高い上に、俊敏性が高く相手を翻弄するのが上手いデジモンだ。必殺技は、耳には聞こえない超音波を発射して、敵の構成データを完全に破壊する『スーパーソニックボイス』だ。

「究極体！まさか！？ブラック兄さんが言っていた究極体はバンチョーレオモンさんじゃなくて、コイツなの！」

デジヴァイスからグリフォモンの情報を知ったティアナは驚愕の表情を浮かべながら、グリフォモンを見つめると、グリフォモンはティアナとクダモンに向かって突進して来る。

「貴様だな！我らの仲間を殺したのは！！！」

「人違いよ！！」

「人違いだ！！」

グリフォモンの突撃をギリギリでかわしながらティアナとクダモンは叫びが、グリフォモンは関係無いと言わんばかりに、再びティ

アナ達に向かって突撃し前足を振り下ろす。

「死ねッ！！」

「死ねないわよ！！」

《ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「ムッ！！」

グリフォモンが前足をティアナに向かって振り下ろそうとした瞬間に、ティアナはグリフォモンに向かってブレイクミラージュを構えながらディーアークを構え、画面に文字が浮かび上がり電子音声が響くと、クダモンの体が光り始める。

そしてクダモンが光り輝くのを見たグリフォモンは攻撃を中断し、上空へと戻ると、クダモンの体から蒼いデジコードが飛び出し、繭の様な物を形成しクダモンはレッパモンに進化する。

「クダモン進化！レッパモン！！」

「行くわよ！！」

レッパモンに進化したのを確認したティアナは上空に浮かぶグリフォモンに向かって叫ぶと、ブレイクミラージュをグリフォモンに向け魔力弾を連射し、レッパモンは刃の様な尻尾をグリフォモンに向かって振り風の刃を放った。

「食らいなさい！！」

「真空カマイタチ！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガッ！！！

「そんな物が効くか！！」

ティアナの魔力弾とレッパモンの真空カマイタチは高速でグリフォモンに向かうが、グリフォモンは簡単にティアナとレッパモンの攻撃をかわし、瞬時に二人の目の前に移動し前足の爪を振り下ろす。

「死ね！！」

グリフォモンは叫びながら、ティアナとレッパモンに向かって爪を振り下ろすが、爪が二人に当たった瞬間に、二人の姿は突如として消失する。

ーーーシュウン！！

「何だと！？」

突如として消失した二人の姿にグリフォモンが疑問の叫び上げた瞬間。

ーーードゴン！！

「ガアァァァァァーーーー！！」

グリフォモンの横に在る森の中からオレンジ色の魔力弾が飛び出し、グリフォモンの右目に直撃し苦痛の叫びを上げた。

「・・・・・上手く行ったわね」

「ああ、だが、油断はするな。相手は究極体だ」

苦痛に苦しむグリフォモンの姿を森の木々の間からティアナとレッパモンは覗き見る。

先ほどのグリフォモンへの魔力弾と真空カマイタチの攻撃は、一瞬でもグリフォモンの注意を逸らす為だったのだ。そしてグリフォモンがティアナ達の攻撃をかわしている隙に、ティアナは自分とレッパモンの幻影を作り上げ、自分達の姿をオプティックハイドで隠すと森の中に隠れグリフォモンに攻撃を放ったのだ。

普通なら究極体にティアナの全力の魔力を込めてもダメージを与える事など不可能だが、どんな生物でも目や口の内部などは防御不可能。その場所に向かってティアナは攻撃を放った。そしてそれは成功し、グリフォモンは苦痛に苦しんでいた。

その様子を確認していた二人は更に森の奥に向かって駆け出し、グリフォモンから離れ始める。

「とにかく、ブラック兄さんかバンチョーレオモンさんが来るまで時間を稼ぐわよ!!究極体には今の私達でも勝てないわ!それに相手は飛べるしね!!」

「同感だ!責めて相手が地上型なら何とか成ったが、飛べない我らでは勝てん!」

ティアナとレッパモンが叫ぶのも当然だろう。ティアナとレッパモンは飛べない、これこそがグリフォモンから逃げる最大の理由だった。ただでさえ二人の攻撃は直線的な物が多い為に、空中を自在に動き回れる相手とは相性が悪すぎる。だからこそ、二人はブラック達が来るまで時間を稼ぐ作戦にしたのだ。

だが、それは簡単に打ち砕かれた。

「ッ！！ティアナ！！」

「キャッ！！」

ドゴオオオオオオオオオン！！

突如としてレッパモンは何かに気が付くと、ティアナに向かって突進しティアナと共に走っていた場所から離れた瞬間に、突如として一本の道が出来る様に森の木々が消滅する。

そして木々が消滅するのをティアナが驚愕の表情を浮かべて見つめていた瞬間に、上空からグリフォモンが現れ、怒りの表情を向けて来た。

「逃げられると思うな！！」

「クッ！！」

グリフォモンの叫びにティアナが悔しそうな表情を浮かべると、何時の間にか近くの木の上に登っていたレッパモンが空中に浮かぶグリフォモンに向かって飛び出し、尻尾をグリフォモンに向かって振り下ろし風の刃を放つ。

「真空カマイタチ！！」

「効かんと言っているだろうが！！」

ーーーブオオン！！！！

「グアッ！！」

「レッパモン！！」

レッパモンは真空カマイタチをグリフォモンに向かって放つが、グリフォモンは自身の翼を全力で振るう事で破壊した上に、レッパモンに向かって突風を放ち吹き飛ばした。

吹き飛んだレッパモンの姿を見たティアナは慌てて駆け出し、レッパモンに追い付こうとするが、背後からグリフォモンが今度はティアナに向かって突風を放つ。

「貴様も吹き飛べ！！」

ーーーブオオン！！

「キャアァァァァァーーーー！！ガハッ！！」

グリフォモンが放った突風に寄って吹き飛ばされたティアナは悲鳴を上げながら、前に在った木にぶつかり苦痛の声を上げた。

ティアナが木にぶつかったのを確認したグリフォモンは笑みを浮かべると、自身の口をティアナに向け始める。

「終わりだッ！！」

グリフォモンは叫ぶと共に自身の必殺技、スーパーソニックボイスを放とうとするが、突如としてグリフォモンの右側からレッパモンが飛び出し、前転しながらグリフォモンに突撃する。

「させんっ！！駆駆烈風斬（くるくるれっぷうざん）！！」

「成熟期が粋がるな！！」

ーーードゴオン！！

「ガハッ！！」

「レッパモン！！」

レッパモンはグリフォモンに向かって駆駆烈風斬を放とうとするが、当たる直前でグリフォモンは技の発動を中止し、レッパモンに向かって前足を振り抜き、レッパモンをティアナの方に向かって吹き飛ばす。

ティアナの目の前に傷だらけのレッパモンが落ちて来ると、ティアナは慌てて駆け寄りレッパモンに声を掛ける。

「レッパモン！レッパモン！」

「グッ・・・・ティアナ逃げるのだ・・・・・此処は私が時間を稼ぐ」

ティアナがレッパモンに向かって叫ぶと、レッパモンは苦痛に苦しみながらも立ち上がり、ティアナに向かって声を掛けた。

レッパモンの言葉を聞いたティアナは怒りの表情をレッパモンに向ける。

「ふざけないで！！アンタ一人を置いて行ける訳無いでしょう！！」

「どの道ブラック達が来るまでに、まだ時間が掛かる。ならば、私が時間を稼ぐのがベストだ。だから行くんだ！」

ティアナの叫びにレッパモンは上空から様子を伺っているグリフ

ォモンを睨みながら叫ぶが、ティアナはレッパモンの言葉を聞かずに立ち上がり、上空に浮かぶグリフォモンにブレイクミラージュを向けながらレッパモンに声を掛ける。

「レッパモン、私が力を求めたのは、もう大切な人達を死なせない為よ。だから此処で逃げる訳にはいかないわ」

「しかし！今の我々では勝てん！」

「そんなの関係ないわ！！私は絶対に仲間を家族を見捨てない！見捨てるぐらいなら！勝てなくても戦ってやるわよ！！」

レッパモンの叫びにティアナは怒りの表情を浮かべながら叫び返す。

実の兄が死んだ時にティアナは何も出来なかった。兄が侮辱されている時にさえ止めてくれとも叫ぶ事がティアナには出来なかった。だからこそティアナは力を求めたのだ。

大切な仲間を家族を今度こそ自分の手で護る為にティアナは力を求めた。此処で逃げれば自分の今までの想いが意味の無かったものに成ってしまう。そんな事は絶対にさせない為にもティアナは自身の持てる力を全て込めて戦う気なのだ。

そして遂に痺れを切らしたグリフォモンはティアナとレッパモンに向かって急降下して来る

「これで終わりだ！！」

「終わりじゃないわよ！！絶対に生きて帰って見せるわ！レッパモンと一緒に！！」

「オォォォォォォーーー！！」

グリフォモンの叫びにティアナはブレイクミラージュをグリフォモンに向けながら叫び、レッパモンもティアナを護る為に全力でグリフォモンに向かって駆け出した瞬間に、ティアナのディーアークが光り輝き画面に更なる文字が浮かぶ。

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「レッパモン進化！！」

ディーアークから電子音声が響いた瞬間に、レッパモンの体が蒼いデジコードに包まれ、中から肩の部分から白い翼を生やし、頭の先に角を生やした何処と無く中国の伝説の獣、麒麟を思わせるようなデジモンが飛び出し、雷光を纏いながらグリフォモンに向かって突撃する。

「チィリンモン！！」

チィリンモン、世代／完全体、属性／ワクチン種、種族／聖獣型、必殺技／疾風天翔剣（しっぷうてんしょうけん）、迅速の心得（じんそくのこころえ）

雷光を纏いながら雲海を駆け抜ける聖獣型デジモン、デジタルワールドの創世記の頃に生まれたとさせるデジモン。完全体で在りながら、その力は究極体にも迫るとされている。必殺技は、上空から急降下し額の角で相手を貫く『疾風天翔剣（しっぷうてんしょうけん）』に、素早い動きで分身を作り出して相手を撹乱する『迅速の心得（じんそくのこころえ）』だ

「完全体に進化しても我に勝てん！！」

チィリンモンへの進化を見たグリフォモンは自分が有利なままだと想い、全力でチィリンモンに向かって前足の爪を振り下ろすが、

当たる直前にチィリンモンの姿は消失する。

ーーーシュン！！

「何だと！？ならば子供の方を！」

チィリンモンの姿が消失したのを見たグリフォモンは驚愕の声を上げるが、瞬時に驚愕を収めると、今度はティアナに向かって攻撃を行なおうとするが、既にティアナの姿は何処にも無く、逃げたのかとグリフォモンが想った瞬間に、グリフォモンの真上から無数の誘導弾がグリフォモンに向かって来る。

「クロスファイヤーシュート！！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガガッ！！！

「ムオッ！！何時の間に我の上に！？」

誘導弾を背に喰らったグリフォモンは驚愕の表情を浮かべながら、自身の真上を見て見ると其処には、チィリンモンに跨ったティアナが空に浮かんでいた。

そしてティアナはチィリンモンにしがみ付き、チィリンモンは白い翼を羽ばたかせて急いでその場から離れ始める。

「逃げる気か！！絶対に逃がさんぞ！！」

ティアナとチィリンモンの行動を見たグリフォモンは逃げたと判断すると、自身の翼を全力で羽ばたかせて、ティアナとチィリンモンの後を全速力で追い掛ける。

グリフォモンが自分達に付いて来ているを確認したティアナは笑

みを浮かべると、チィリンモンに顔を向ける。

「決めるわよ！！」

「おう！！迅速の心得（じんそくのこころえ）！！」

「なっ！？」

ティアナの叫びにチィリンモンが答えた瞬間に、チィリンモンは素早く移動を繰り返し次々と自分の分身を生み出し、グリフォモンの周りを飛び回る。

チィリンモンの行動にグリフォモンは驚愕の声を上げるが、すぐに冷静に戻り、周りに存在しているチィリンモン達に向かって口を向け、超低音波を放った。

「スーパーソニックボイス！！！」

グリフォモンが放ったスーパーソニックボイスに寄って、チィリンモン達の分身は全て消滅するが、本体が見付からず、グリフォモンが険しい表情を浮かべた瞬間に、グリフォモンの真上から雷光を纏ったチィリンモン姿を現しグリフォモンに向かって急降下して来た。

「疾風天翔剣（しっぷうてんしょうけん）！！」

「同じ手を食うか！！」

チィリンモンが姿を消した時から、作戦を読んでいたグリフォモンは、チィリンモンの疾風天翔剣をギリギリの所で交わし、今度こそチィリンモンに向かってスーパーソニックボイスを放とうとする

が、すぐにその表情は驚愕に変わった。

「あの子供がいない！！一体何処に！？」

チィリンモンの背中にティアナが乗っていない事に気が付いたグリフォモンは驚愕の声を上げながら、ティアナを探そうと辺りを見回し始めるが、その瞬間に、グリフォモンの後頭部に銃口が突き付けられる。

ーーーカチャ

「ッ！！まさか！？」

自身の後頭部に銃口の感触を感じたグリフォモンが驚愕の表情を浮かべながら、後ろを振り向いて見ると其処には、自身の背中に乗りながら長銃を構え膨大な魔力を発生させているティアナが存在していた。

「この距離なら流石に究極体でも効くでしょう！スターライトブレイカーーーー！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオン！！！！

「ガアァァァァァァァーーーーー！！！！」

ティアナの放った巨大なオレンジ色の砲撃ースターライトブレイカーをゼロ距離で受けたグリフォモンは流石に苦痛の声を上げ、砲撃から逃れようと暴れ出すが、次の瞬間には、ティアナは自分からグリフォモンの背から飛び降りた。

そして飛び降りた先にいたチィリンモンの背に再び跨ると、チィ

リンモンは再びグリフォモンの上空に移動し、グリフォモンに向かって急降下を行なう。

「終わりだ！！疾風天翔剣（しっぷうてんしょうけん）！！！」

ーーードスゥゥゥゥゥゥゥン！！！

「ギャアァァァァァァァァーーーーーー！！！」

雷光を纏ったチィリンモンの体と角に寄ってグリフォモンは体を貫かれ、データ粒子に変わり消滅する。

そしてチィリンモンは現れたデジタマの方に向かい出し、ティアナがデジタマをキャッチすると互いに笑みを浮かべるのだった。

ティアナ達が戦っていた場所から少し離れた崖の上には、傷付いたブラックとバンチョーレオモン、そしてティアナの勝利に笑みを浮かべるクイントが存在していた。

そしてブラックは自身の横にいるバンチョーレオモンに険しい表情を向ける。

「ティアナがアソコまで強く成れたはお前のお陰か？」

「フッ、俺が教えたのはデジモンの本当の力だけだ。アソコまで強く成れたのは、あの娘自身の実力だ」

ブラックの言葉にバンチョーレオモンは笑みを浮かべながら答えると、ブラックとクイントに背を向け歩き始め、ブラックはバンチョーレオモンの背に声を掛ける。

「決着は何れ付ける。それまで誰にもやられるなよ、バンチョーレオモン」

「フッ、それは此方のセリフだ。また存分に喧嘩しようぜ、ブラックウォーグレイモン」

二人は互いに不適な笑みを浮かべながら言葉を言うと、ブラックとクイントはティアナとチィリンモンの下へ向かい出し、バンチョーレオモンは森の奥へと姿を消して行った。

雷雲の麒麟、チィリンモン（後書き）

次回予告

ブラック達の実力が上がる中、とある世界で再びデジモンが現れる。

そして其処でブラックは、真の決着が付かなかった者と執務官に再会し戦いが始まる。

次回、漆黒の竜人と少女、『激突！祝福の風と破滅の風、そして漆黒の竜人と雷光！！』

二つの戦いに争いは、新たなる運命の始まりを告げる。

激突！祝福の風と破滅の風、そして漆黒の竜人と雷光！！

先日、ティアナとティリンモン、そしてグリフォモンが激しい戦闘を行なった場所に、休暇を取った管理局の執務官ーフェイト・テスタロッサと教導隊に入隊したリインフォースが一緒に来ていた。

二人は破壊された木々や何かが落下した様な後を調べ続け、何かの痕跡が無いかどうかを探し始める。

「・・・・・これは奴ではないですね。奴ならもっと破壊の後が在る筈ですから」

「・・・・・そうだね。確かにこれを行なったのはブラックウォーグレイモンじゃないよ」

木々や破壊の後を調べていたリインフォースの言葉に、同じ様に辺りを調べていたフェイトも同意を示し、険しい表情を辺りに向ける。

（こんな風に破壊出来るのが、アイツ以外に居ると成れば、アイツは絶対にこの破壊を行なった人物を探す。アイツの目的は強い奴と戦う事の筈だから、絶対に戦う為に動く筈だ！）

フェイトは辺りに在る破壊の後を調べながら、ブラックの行動を考えていた。

そもそも、ブラックの後を追うのを禁止されているフェイト達がこの場に居る理由は、独断専行でブラックを追う為だ。何れはやてが作る部隊でブラックを追う事が出来る様に成るかもしれないが、フェイトはその部隊が出来る前に少しでもブラックの情報を手に入れ様と休暇中でありながら、先日起きた破壊の後を調べに来たのだ。

そして在る程度調べ終えると、二人は立ち上がり山を降りながら険しい表情を浮かべて、話し合いを始める。

「ゴメンね、リインフォース。折角の休暇中なのに付き合わせちゃって」

「気にしないで下さい。主に貴女の事を頼まれたのも在りますが、私は会わなければいけない者が居ますので」

「・・・・・・防御プログラムの事だよね？」

「ええ、闇の書の防御プログラム、私の半身、破滅を呼ぶ風、リインフォースと私は会わねばいけないんです」

フェイトの質問にリインフォースは憂いを帯びた様な表情を浮かべながら頷き、再び話を再開した。

「私は彼女には怨まれている筈です。私は彼女の事を守護騎士達や主にさえも話さなかった。話せば主達は彼女を攻撃出来無かった筈ですから」

「・・・・・そうだね。私も攻撃出来なかったと想うよ。彼女は闇の書の一番の犠牲者だったからね」

リインフォースの言葉にフェイトは悲しみの表情を浮かべながら同意を示す。

闇の書事件が終結した後、リインフォースは自分が知るルインフォースに付いて全て語った。力を望んだ果てに生み出された存在だったと言うのに、制御出来るものが一人も見付からず、最終的は半身であるリインフォースさえも否定されてしまった。だからこそ、

リインフォースはルインフォースに会いたいのだ。
「謝りたいんです。赦して貰うつもりは在りませんが、会って一度話したいんです」
「うん、それが良いよ。私もなのはとは、ＯＨＡＮＡＳＩで友達に成ったから」
「・・・・・今、凄まじい悪寒に襲われたのですが？」
リインフォースは全身を一瞬震わせるが、フェイトは笑みを浮かべて話を変える様にリインフォースに声を掛ける。
「気にしないで、それよりもはやての部隊の方はどんな様子なの？」
「順調なようです。如何やら上層部達もブラックウォーグレイモンを追う部隊が無くなって来た様で、主の話に随分と乗り気のようです。不気味な位に」
「・・・・・気を付けた方が良いね。何か怪しいよ」
リンフォースの言葉にフェイトは不安そうな表情を浮かべて答えた。
今までフェイト達がブラックを追う事をアレほど、止めていた上層部が協力的に成った。その時点で何か裏が在ると思うのが当然だろう。
二人は不安に襲われながらも、街の方に向かい出すのだった。

アルハザードに在る司令室と呼べる研究室の中では、人間の姿に成ったブラックがヴィヴィオを背中に抱えて歩き回っていた。

「パ～パ、パ～パ」

「俺は貴様の父親ではない」

ブラックの背中に乗って動いて居る事が嬉しいのか、ヴィヴィオは笑みを浮かべながらブラックの事を父親だと呼ぶと、ブラックは不機嫌そうな表情を浮かべて足を止めた瞬間に、ヴィヴィオが泣き始める。

「ビエェェェェェン！！ウエェェェェェェェン！！」

「しっかり歩いてください！！ヴィヴィオは一日一時間は貴方の背中に乗せて動かないと泣くんですからね！！」

「・・・・・分かった」

泣き出したヴィヴィオの姿を見たリンディがブラックに向かって叫ぶと、ブラックは不機嫌そうな表情を浮かべながら歩き始める。

その様子を見ていたなのはとルインは苦笑を浮かべてブラックとヴィヴィオの様子を見つめながら、話し合う。

「大変ですね、ブラックさんも」

「ええ、如何もヴィヴィオちゃんはブラック様に懐いてしまった様で、一日一度は抱いて歩き回らないと、絶対に泣くんですよ。他の人達がやっても絶対に泣き止まないんですよね」

なのはの言葉にルインは苦笑を浮かべながら答えた。
ヴィヴィオがアルハザードに来てからと言うもの、ヴィヴィオが一番に懐いているのは、面倒を見ているリンディやクイント、ルインでもなく何故かブラックなのだ。如何言う訳か分からないのだが、ヴィヴィオはブラックが傍に居ないと不機嫌そうな表情を浮かべる上に、一日一度はブラックと一緒に歩き回らないと泣き続けるのだ。
そして在る程度時間が経つと、ヴィヴィオはブラックの背中で安らかな表情を浮かべて眠りに付き、ヴィヴィオが眠ったのを確認したリンディはブラックの背中からヴィヴィオを抱き上げる。

「幸せそうな寝顔ね。やっぱり貴方が傍に居るのが一番に安心するのよ」

「フン、勝手に言っていろ」

リンディが眠っているヴィヴィオを見つめながら告げた言葉に、ブラックは不機嫌そうな表情を浮かべて答えた瞬間。

ーーービィィィィーー！！

指令室に警報音が響き、ルインが近くのコンソールを弄り始め、情報を調べ始める。

「デジモンの反応ですね。場所はミッドチルダに近い世界の様です」

「俺が行く。この苛立ちを消したいからな」

ルインがデジモンの反応が出た場所を告げると、ブラックはルイン達に声を掛け、転送室に向かい出す。
その様子にリンディ達は溜め息を付くが、ルインだけはブラック

の後を追い始め部屋を出る前にリンディ達に顔を向ける。
「今回は私も行きますね」
「ええ、お願いするわ」
ルインの言葉にリンディは頷き、ルインは笑みをなのはとリンディに向けると、ブラックの後を急いで追い始めるのだった。

その頃、ミッドチルダの在る喫茶店で食事を取っていたフェイト達の下に、フェイトの執務官補佐であるシャリオ・フィーニから通信が届いていた。
『フェイトさん！近くの世界に例の生物らしき反応を捕らえました！』
「ッ！！ありがとう、シャーリー！」
シャリオの言葉にフェイトは礼を言うと立ち上がり、一緒に座っていたリインフォースに険しい表情を向ける。
「ブラックウォーグレイモン達は例の生物達を追っている。多分現れるよ」
「そうでしょうね。ブラックウォーグレイモン達は例の生物達を追っているならば、今から向かえば会える可能性が高いでしょう」
「うん、今日こそ捕まえてやる！」

リインフォースが立ち上がりながら告げた言葉に、フェイトは頷き、二人はシャリオが告げた世界に急いで向かい出すのだった。

緑色の草原が広がる場所を元の姿に戻ったブラックとルインは、上空からデジモンを探していた。

「ルイン、反応はこっちで間違いないんだな？」

「間違いないです。完全体レベルの反応ですから」

ブラックの質問にルインは自信満々に答えると、二人の視界の先に草原に寝そべる頭に角が二本生えたトリケラトプスの様な姿をした二足歩行のデジモンが見えて来た。

トリケラモン、世代／完全体、属性／データ種、種族／角竜型、必殺技／トライホーンアタック
草食の恐竜系では1、2を争う攻撃力の持ち主の角竜型デジモン。表皮の強靭さも生物系トップクラス。戦闘スタイルは相手に突進しながら超硬度の角で串刺しにするというもので、この攻撃を受けると、鉱物系のデジモンでさえコナゴナになってしまうといわれている。しかし性格はとても優しく、よほどのことがないかぎり自ら戦闘を仕掛ける事はない。必殺技の『トライホーンアタック』は、額の2本のツノと鼻先のツノでの相手に向かって突進攻撃する技だ

「・・・・・・チッ！外れだ！奴は敵に成らん！」

「そうですよね。だって温厚そうですよね」

ブラックの言葉にルインも同意しながら答え、トリケラモンの姿を見つめる。
何せ二人の目の前に居るトリケラモンは穏やかな眠りに付いているので、如何考えてもブラックの欲求を満たせる者には見えない。
当然ながら、その様な相手にブラックが興味を抱く筈も無く、ブラックはルインに顔を向ける。

「ルイン、奴と話をして来い。戦う気の無い奴と戦ってもつまらんからな」

「了解です」

ブラックの言葉にルインは頷き、眠っているトリケラモンに向かおうとした瞬間

ーーーゴロゴロゴロッ！！

突如として上空から雷鳴が響き、ブラックが雷鳴が響く上空に目を向けると、金色の魔方陣を発生させているフェイトが存在し、ブラックに向かって雷光を落とす。

「サンダーフォール！！」

ーーービカァァァァァァーー！！

「ブラック様！！」

ブラックに雷光が直撃するのを見たルインはブラックの救助に向かおうとするが、突如としてその前にバリアジャケットを着たリイ

ンフォースが姿を現し、ルインの動きを邪魔をする。

ーーービュン！！

「生真面目！？」

「・・・・・久しぶりと呼ぶべきだろうな。私の半身、ルインフォースよ」

ルインの叫びにリインフォースは悲しげな表情を浮かべながら答えると、ルインは怒りの表情を浮かべリインフォースを睨み付ける。

「半身？その半身の正体を八神はやてや守護騎士達に話もしなかったくせに、どの口がほざくんですか？」

「やはり私を憎んでいたか？」

「如何でも良いというのが本音ですね。貴女が死のうが生きようが如何でも良いんですよ」

リインフォースの言葉にルインは心の底から如何でも良いと言う表情を浮かべながら答える。

ルインに取って一番大事なのはブラックで在る為に、他の者は本当に如何でも良いと思っているのだ。例外として一緒に戦っているリンディ達ぐらいだろう。

「ブラック様に攻撃を加えた事を赦す気は在りません。それに一度本気で貴女を叩きのめしたかったので、ボコボコにして上げますよ！！」

ーーービュン！！

「クッ！！」

ルインが言葉と共に放った拳をリインフォースはギリギリの所で交わすが、ルインは次々とリインフォースに向かって攻撃を放ち続け、二人は上空へと消えて行った。

一方、フェイトのサンダーフォールを受けたブラックは煙の中から姿を現すと、自身の上に浮かんでいるフェイトに顔を向ける。

「貴様か、良いだろう。今日は機嫌が悪いからな、少し相手をしてやろう」

「・・・・・その前に聞きたい事が在る。あの生物達は何なの？貴方達は如何してあの生物達を倒しているの？」

「ほう、少しは考える頭が在ったか」

フェイトの質問にブラックは少し驚いた様な表情を浮かべるが、すぐに表情を元に戻しフェイトに向かってドラモンキラーを構えを行い出す。

「知りたければ自分の組織を一度全て調べてみろ。貴様らの上の者達は全てを知っているぞ」

「ッ！！それって如何言う事！？」

ブラックの言葉にフェイトは驚愕の声を上げるが、ブラックは答えずにフェイトの目の前に移動し殴り掛かる。

「ドラモンキラーー！！」

「くっ！」

ブラックの攻撃をフェイトはギリギリの所で交わし、自身の周りに金色のスフィアを生み出し、魔力の槍に変えるとブラックに向かって放つ。

「プラズマランサー！！」

「ウォーブラスターー！！」

ーーードドドドドドドドドドン！！

フェイトがブラックに向かってプラズマランサーを放つと、ブラックは自分に向かって来るプラズマランサーに向かって腕を構えエネルギー弾を生み出し、連続で放ちプラズマランサーを相殺した。

だが、その隙にフェイトはブラックの後ろにザンバーフォームに変形させていたバルディッシュを全力でブラックに向かって振り下ろす。

ーーービュン！！

「ハアッ！！」

「フン！」

ーーーガキン！！

フェイトの斬撃がブラックに当たる直前で、ブラックは瞬時に体

の方向をフェイトに向け、右腕のドラモンキラーでフェイトの攻撃を防ぐ。
そして二人は至近距離で睨み合うが、ブラックは残っている左腕をフェイトに向かって振り抜く。

「ハアッ！」

「この！！」

ブラックの攻撃をフェイトは自身のスピードを最大に発揮して交わすが、その隙に次々とブラックはドラモンキラーをフェイトに向かって繰り出す。

「ハアァァァァァァーーーー！！！」

「クッ！！」

ブラックの連続攻撃をフェイトはギリギリの所で交わし続けるが、少しずつでは在るが、フェイトのバリアジャケットは切り裂かれて行く。
そして遂に交わせなくなり、ブラックの一撃がフェイトに決まろうとする。

「終わりだ！」

（今だ！！）

ーーービュン！！

「ムッ！！

ブラックの渾身の一撃がフェイトに決まろうとした瞬間に、フェイトのバリアジャケットが変化し、マントが消失し余分な装甲が消失した姿、真ソニックフォームに変わると今までのスピードを越えるスピードでブラックの渾身の一撃を交わしブラックは驚愕の表情を浮かべた。

そしてブラックに完全に隙が生まれた瞬間に、フェイトはバルディッシュの刃に雷撃を落とし刀身をブラックに向かって振り抜く。

「此処だ！！撃ち抜け、迅雷！ジェットザンバーー！！」

「ブラックシールド！！」

ーーーガアァァァァァァァァァン！！

フェイトはブラックに向かってジェットザンバーを振り下ろすが、ブラックは瞬時に自身の背中に手をやり、背中の翼ような物を両腕に装備し、盾の様にするとフェイトのジェットザンバーを受け止めた。

そしてジェットザンバーの攻撃が止んだのを確認したブラックは瞬時に、自身の背に盾を戻し、空中に浮かぶフェイトを睨み付ける。

「思ったよりも腕を上げていた様だな。良いだろう、貴様には見せてやろう。俺の全力をな」

「くっ！」

ブラックの言葉にフェイトは焦った表情を浮かべた。

フェイトの作戦は出来るだけブラックが本気を出す前に、自身の全力を込めて倒すと言う作戦だったのだ。ブラックが本気に成れば

自分達が勝てる可能性は無いと気が付いていたからこそ、この作戦を考えたのだ。
そしてブラックがフェイトに向かって全力の攻撃を放とうとした瞬間。
ドゴオオオオオオオオオオオオオン！！
「ムッ！」
「エッ！？」
突如として巨大な爆発音が上空から響き、二人が頭上を見て見るとルインとリインフォースが凄まじいスピードで落下して来た。
「ルイン！！」
「リインフォース！！」
落下して来たルインとリインフォースの姿を見たブラックとフェイトはそれぞれ二人の下に駆け出し受け止める。
ブラックは自身の腕の中で傷付いているルインに険しい表情を向け、その体に付いている傷を見ながら叫ぶ。
「ルイン！ルイン！」
「・・・・ブラック様、敵がもう一体居ました」
「何！？」
ルインの報告にブラックが驚愕の声を出しながら上空を見て見る

と、上空には巨大としか言えないほどの巨大な鳥が存在していた。
オニスモン、世代／究極体、属性／ウィルス種、種族／古代鳥型、必殺技／コズミックレイ、テンペスト
遥か古代に絶滅したとされる古代鳥型デジモン。想像を絶する大きさを誇り別名『天空の覇者』と称された獰猛なデジモンだ。必殺技は、眩い光とともに口から破壊光線を放つ『コズミックレイ』に、羽ばたきで嵐を巻き起こす『テンペスト』だ。

「なっ！？こんな巨大な生物が存在しているの！」

オニスモンの姿を見たフェイトは、リインフォースを抱えながらオニスモンの巨大に驚愕の声を上げた。オニスモンの大きさは軽く見ても、管理局の保有する艦艇に匹敵するほどの大きさなのだ。
オニスモンはブラック達とフェイト達に自身の口を向け、眩い破壊光線を放った。

「コズミックレイ！！」

「チイッ！」

ーーービュウン！！

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

オニスモンがブラック達に向かってコズミックレイを放つと、ブラックはルインを抱えたまま瞬時に移動し交わすが、地上に居たトリケラモンを飲み込み地上は消滅した。

「あ、あ、あ、何なのあの生物は？」

「・・・・アルカンシェルに匹敵、いえ、それさえも超える一撃です」

オニスモンのコズミックレイの威力を見たフェイトとリインフォースは恐怖に染まった表情を浮かべ、綺麗な草原から、一瞬にして荒野に変わった地上の大地を見つめる。

オニスモンの一撃は如何考えても、人間の放てる一撃を超えていた。自分達が知る管理局の最大兵器、アルカンシェルに匹敵するほどの一撃を平然とオニスモンは放ったのだから、恐怖するのも当然だろう。

そして恐怖に染まった表情を浮かべるフェイト達に向かって、オニスモンは自身の巨大な翼を羽ばたかせて嵐を巻き起こした。

「テンペスト!!」

ーーーゴオオオオオオオオオオオッ!!!

『キャアアアアアアアーーーーー!!!』

オニスモンの起こした嵐に巻き込まれ、フェイトとリインフォースは吹き飛ばされ、地面へと激突しようとした瞬間に、巨大な二足歩行の機械の狼、メタルガルルモンXが現れ二人を受け止める。

ーーーガシッ!

「ギリギリだった」

「えっ?あの、貴方は?」

フェイトとリインフォースを受け止めたメタルガルルモンXが安堵の息を付くと、メタルガルルモンXの姿を見たフェイトは疑問の声を上げる。
だが、メタルガルルモンXは答えずに上空に浮かぶオニスモンに目を向け、ルインを抱えたブラックがメタルガルルモンXの横に現れ声を掛ける。

「ソイツら連れて此処から離れろ、お前のパートナーもそれを望んでいる筈だ」

「分かりました、後を頼みます」

ブラックの言葉を聞いたメタルガルルモンXは頷き、フェイトとリインフォースを大切そうに抱え、その場から離脱し始めた。
そしてメタルガルルモンXが離れたのを確認したブラックはオニスモンに怒りの表情を向け、凄まじい殺気をぶつける。

「ギャア！」

「貴様を相手に楽しむ気は無い、俺の更なる力を持って、完膚なきまでに殺してやる！ルイン！！」

「はい！！ユニゾン・イン！！」

ブラックの叫びを聞いたルインがブラックの体を強く抱き締めた瞬間に、ブラックとルインの体が光り輝き、ブラックの体が蒼いデジコードに包まれて行く。

「ウオォォォォォォーーーー！！！ブラックウォーグレイモンX進化！！」

デジコードの中でブラックが叫び声を上げた瞬間に、蒼いデジコードは弾け飛び、中から背中に二つのバーニアを装備し、通常の姿よりも全身が機械的に角ばった装甲を持ち、金色の髪を靡かせた漆黒の竜人が姿を現した。

「ブラックウォーグレイモンX！！！」

ブラックウォーグレイモンX、世代／究極体、属性／ウィルス種、種族／竜人型、必殺技／暗黒のガイアフォース、ハデスフォース
ブラックウォーグレイモンが『X抗体』を得た事に寄って未知の力が引き出された姿、背中に在ったシールドが消失し、変わりに二つのバーニアが装備され機動性が飛躍的に上がっている上に、両腕に装備したドラモンキラーは爪の部分が射出が出来る様に成った上に硬度は通常時に背中に装備していたシールドと同等にまで強化されている。必殺技は、ゼロ距離で相手に向かって撃ち出す『暗黒のガイアフォース』と、大気中に存在している負の力を両手の間に凝縮させ、暗黒のエネルギーとした力をエネルギー球にして敵に放つ『ハデスフォース』だ。

「ギエェェェェェーー！！」

ブラックウォーグレイモンXの姿を見たオニスモンは、攻撃される前に倒そうと思い、再び羽を羽ばたかせて嵐ーテンペストをブラックに向かって巻き起こした。
だが、ブラックウォーグレイモンXは自身の背に付いているバーニアを吹かせ、右腕を前に突き出しながらオニスモンの起こした嵐を突き破り、ドラモンキラーの爪をオニスモンに向かって射出した。

「ドラモンキラーーー！！」

ーーードスドスッ！！

「ギエアッ！！」

ブラックウォーグレイモンXが両手から射出したドラモンキラーの爪はオニスモンの右側の翼を貫き、オニスモンは苦痛の声を上げた。

そしてオニスモンの動きが止まったのを確認したブラックウォーグレイモンXは、瞬時にオニスモンの顔の前に現れ、次々と両腕を繰り出しオニスモンの顔を傷付ける。

「ハアァァァァァーーー！！！」

ーーードドドドドドドドドオン！！

「ギエェェェェェーーーー！！」

ブラックウォーグレイモンXの攻撃によってオニスモンは苦痛の叫びを上げて、ブラックウォーグレイモンXから逃げようとするが、ブラックは瞬時に自身の周りに光の刃を無数に生み出すとオニスモンに向かって放った。

「石化の槍！ミストルテイン！！」

「ギエェェェェェーーーー！！」

ーーーガキガキガキガキッ！！

ブラックウォーグレイモンXの放った光の槍を受けたオニスモンは苦痛の声を上げて、体の石化が始まると、ブラックウォーグレイモンXは自身の背中のバーニアを噴射させ一瞬にしてオニスモンの顔を接近し、両腕をオニスモンの顔を付け黒く光るガイアフォースをゼロ距離で放った。

「暗黒のガイアフォース！！！」

「ギエアァァァァァーーーーー！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

ブラックウォーグレイモンXの暗黒のガイアフォースを受けたオニスモンは苦痛の声を上げながら巨大な爆発を空中に起こして消滅した。

その後、煙の中からデジタマが現れると、ブラックウォーグレイモンXはデジタマを拾い上げ、メタルガルルモンXの所に向かい出すのだった。

ブラックウォーグレイモンXとオニスモンが戦っていた場所からかなり離れた場所で、メタルガルルモンXは地面に着地し、右腕に抱えたフェイトとリインフォースを大地にゆっくりと下ろした。

「此処ならブラックさんの戦いに巻き込まれないから安心ですよ」

「・・・・・・ありがとうございます。それで貴方は一体？」

メタルガルルモンXの言葉にフェイトは礼を言い、疑問の表情を

浮かべながら質問すると、メタルガルルモンXは突如として立ち上がり右腕に白い杖を出現させ上空に構えを取る。

ーーーブン！！

「ッ！！そのデバイスは！？」

メタルガルルモンのXの右腕に出現したデバイスにフェイトは驚愕の声を上げるが、メタルガルルモンXは気にせずに上空に向かって砲撃を放った。

「ディバインバスターーーー！！」

ーーードグオオオオオオオオオオン！！

「チッ！」

ーーービュン！！

メタルガルルモンXがディバインバスターを放った方向に突如として何かの影が現れるが、瞬時にその場から消失する。

そして敵が居なくなったのを確認したメタルガルルモンXは持っていたデバイスーレイジングハートを消失させると、フェイト達に背を向ける。

「待って！貴方が何でそのデバイスを使えるの！？」

「・・・・・・忠告をして置く。管理局を信用し過ぎない様にした方が良い。でないと、君達は死んでしまうよ」

『なっ！？』

メタルガルルモンXの言葉にフェイトとリインフォースは驚愕の声を上げるが、メタルガルルモンXは気にせずにその場を飛び上がり去っていた。

その後には疑問の表情を浮かべて、メタルガルルモンXの背を見つめるフェイトとリインフォースだけが残されるのだった。

激突！祝福の風と破滅の風、そして漆黒の竜人と雷光！！（後書き）

次回予告

メタルガルルモンXの武器を見たフェイトは地球へと飛び、親友のなのはに会いに行く。

だが、既になのはの姿は海鳴市の何処にも無かった。

そして途方にくれるフェイトの前に現れる者とは？

次回、漆黒の竜人と少女、『真実を求めて』

彼女は探す、全て真実を。

真実を求めて

先日のとある世界での事件から数日、オニスモンから受けたダメージが回復したフェイトは、ミッドチルダに在る喫茶店で、親友の一人である八神はやてを待っていた。

そして喫茶店の奥の方で待っていると、入り口が開き、管理局の制服を着たはやてが何かの資料を持ちながら、険しい表情を浮かべてフェイトの座っている席の前に席に座った。

「はやて、それで結果は如何だったの？」

「・・・・フェイトちゃんのバルディッシュに記録された映像からの判別結果は、多少の違いは在ったんやけど、先ず間違いなくなのはちゃんのレイジングハートやと結果が出たわ」

はやてはフェイトの質問に答えると共に、持っていた資料をフェイトに渡し、フェイトは渡された資料を険しい表情を浮かべながら読み始めた。

資料には色々と専門的な用語が書かれていたが、結果としては先日の事件の時に現れた機械のような生物ーメタルガルルモンXが使用したデバイスは、ほぼ間違い無く高町なのはのデバイスーレイジングハートと一致したと書かれていた。

「・・・・・・何であの生物がなのはのデバイスを使えるの？それになのははもう魔法が使えない筈だから、デバイスの機能だって殆ど使用不可能にされている筈なのに？」

フェイトがそう疑問に思うのも当然だろう。なのはは管理局を辞めた時に、デバイスの機能の殆どを管理局の技術によって使用不可

能にされたのだ。
理由としては管理外世界に帰るんだから、魔導師として必要なデバイスの機能は必要無いだろうと、管理局の上の者達に言われたからだ。最も真実は違うのだが。

「その筈や。私らもなのはちゃんの診断結果を何度も見たんや。何処にもおかしい所は無かった。だけどこの資料を見る限り」

「・・・・・なのはは魔法が使用出来る。そしてそれが意味するのは・・・・・リンディさんの様な存在に成ってしまった」

険しい表情を浮かべたはやての言葉に、フェイトが自分の考えを告げると、はやては重苦しい表情をしながら無言で頷いた。
それを見たフェイトは顔を怒りで真っ赤に染めながら、テーブルに力を込めた拳を振り下ろす。

ーーードン!!

「気付くべきだった!ブラックウォーグレイモンの後ろに居る科学者はリンディさんの様に、強い魔力を持った存在を探しているかもしれないことに!力を失ったなのはは絶好の実験体に成る事にも!」

「フェイトちゃん!まだそうと決まった訳や無い!なのはちゃんが本当にリンディさんの様な存在に成ってしまったと決まった訳やないんや!」

怒りに満ちたフェイトの叫びに、はやては冷静に成る様にフェイトに向かって叫んだ。
それを耳にしたフェイトは多少気持ちを落ち着け、テーブルの上に乗せていた強く握っていた拳を解く。

「・・・・・はやて、地球に行って来るよ。なのはに会って確かめて来る」

「フェイトちゃん！待って！冷静になるんや！フェイトちゃん！！」

言葉と共に立ち上がったフェイトに向かってはやては叫ぶが、フェイトははやての言葉を聞いても止まらず喫茶店を出て、地球に向かい出した。

アルハザードの一室に居るなのはは落ち込んだ表情を浮かべていた。

その様子を隣で見ていたガブモンは、何とかなのはを慰めようと声を掛ける。

「・・・・フェイトちゃん達に知られちゃったよね」

「元気を出してよ、なのは。あの時に僕達が向かっていなかったら、なのはの友達は死んでいたかも知れない。だからあの時の行動は正しかったんだよ」

「うん、分かっては居るんだよ。それでもちょっと辛いかな。皆の事を騙していたんだからね」

ガブモンの言葉になのはは悲しげな笑みを浮かべながら答えた。

なのはも分かってはいるのだ。全ての真実を自分以外の者が知れば、その瞬間に真実を知った者にも命を狙われてしまう。

自分にはガブモンと言う大切なパートナーが居るが、フェイト達

にはデジモンのパートナーは存在していない。そうなれば強力なデジモンが送られれば、フェイト達に打つ手は存在しない。
その事が在ったからこそ、なのははフェイト達に真実を告げずにガブモンやブラック達と共に戦う決意をしたのだ。

「多分、フェイトちゃん達は私と同じ様に真実を求めようとする筈だよ。そうなれば私の様に狙われるかも知れない」

「確かにそうだけど。管理局の人達にデジモンの事を話す訳にはいかないんだよ。今のなのはの友達は管理局を信用しているし」

なのはの言葉にガブモンは顔を俯かせながら答えた。
ガブモンとしても、パートナーであるなのはの友達とは戦いたくないのだが、今のフェイト達は管理局上層部には不信感を持っていても、全体としての管理局は信用している。当然、管理局がデジタルワールドを管理しようとするのにも疑問に思わないだろう。その結果が最悪なものになる事も分からずに。

「デジタルワールドの管理なんて絶対に行なわせたら駄目なんだ。究極体に進化出来るようになって良く分かった。あの力なら管理局が全体で挑んで来ても勝てるよ。そうなれば管理局は絶対にデジタルワールドを滅ぼそうとする筈だ。例えどれだけの犠牲が出ようと」

「うん、私も同感だよ。今の管理局は自分達こそが世界を護っていると思っている。そんな状態で自分達が全力で掛かっても勝てない力なんて認める筈が無い。デジタルワールドが管理出来ないと判断すれば、絶対に戦争を引き起こす」

ガブモンの言葉になのはは真剣な表情を浮かべながら同意を示した。

その言葉にガブモンは頷きながらも、真剣な瞳をなのはに向けて声を掛ける。

「今は真実を教えられないよ。責めて少しでも管理局に疑問を思うなら別だけど、今の彼女達に知らせるのは危険だよ」

「そうだね。気付いて欲しい。フェイトちゃん達にも管理局に疑問を思って欲しいよ」

ガブモンの言葉になのはは部屋の上を見上げながら答え、実家に残して来たあの資料を見てフェイト達が疑問に思ってくれる事を願うのだった。

そしてその頃。ミッドチルダから地球へとやって来たフェイトはなのはの実家である高町家に急いで向かい、なのはの母親である桃子に会っていた。

「すいません、桃子さん。なのはは居ますか？」

高町家の玄関でフェイトは出迎えてくれた桃子に質問すると、桃子は困った様な表情を浮かべながらフェイトに顔を向け、手に持っていた一冊の本をフェイトに差し出す。

「なのはは居ないわ。二ヶ月前にやる事が在るからって、家を出て行ったの」

「ッ！！」

「この本をフェイトちゃんか誰かが、自分を訪ねに来たら渡してくれと言われたわ」

フェイトの手に桃子は一冊の本を差し出しながら告げると、フェイトは差し出された本をゆっくりと受け取り、桃子に不安そうな表情を向ける。

「桃子さんは、心配じゃないんですか？なのはの事が？」

「心配よ、本当はずっと家に居てくれた方が良かった。でもなのはの決意を変える事は出来なかった。その代わりに、絶対に帰って来るって約束してくれたわ」

フェイトの言葉に桃子は悲しげな表情を浮かべながら答えた。

四年前になのはは大怪我を負った時に桃子達は後悔した。もっとなのはの体調の事を気に掛けて置けば、あのような事件は起きなかった。結果としてはなのはの体は治ったが、一歩間違えばなのはあの時に死んでいた。あの時ほど桃子達が後悔した時は無かった。

「本当はもう戦って欲しくない。平穏に無事に暮らして欲しい。だけどその為には戦わなければと言っていたわ。だから私達はなのはを止められなかった」

「戦う？あのなのはは一体何と戦うんですか？」

「それは私には分からないわ。何と戦うのかは、なのはは告げなかったから」

「・・・・・分かりました。教えてくれてありがとうございます」

桃子の言葉にフェイトは疑問の表情を浮かべるが、これ以上聞いても情報は貰えないと判断し、桃子に頭を下げながら礼を告げると、渡された本を脇に抱え、高町家から出て行った。

そして高町家から人がいない臨海公園に移動し、ベンチに座りながら桃子から渡された本の内容を読み始める。

「『アルカンシェルの影響力』？何でこんな本を？」

フェイトは渡された本の題名に疑問を覚えながらも本を読み進め、本の間に挟まっていた一枚の紙を見付ける。その紙にはなのはの字で、何かの予想影響の結果が書かれていた。

紙の内容を読んだフェイトは青ざめた表情を浮かべ、すぐに本の方に再び目を向け、紙に書かれた内容と本の内容を照らし合わせ、恐怖に体を振るわせ始める。

「・・・・・六年前にブラックウォーグレイモンが破壊したステルス艦は、地球にアルカンシェルを撃ち込もうとしていた。その結果がこの紙に書かれている事だと言うの？」

恐怖に染まった表情をフェイトは浮かべ、手に握っていた紙を見つめる。

紙に書かれていたのは、地球にもしアルカンシェルを撃ち込んでいた事で起きる結果の内容だったのだ。

「・・・・・どういう事なの？管理局は世界を護るのが仕事の筈。それなのにこの紙に書かれている事が事実だとすれば、管理局は地球を滅ぼそうとしていた事に成る。一体どうなっているの？」

矛盾。世界を護る筈の管理局が世界を滅ぼそうとしていた。その

事実は管理局の掲げる世界の平和と維持に対する完全な矛盾を生み出していた。

「地球は管理外世界に指定されているけど、それでも其処に住んでいる人々を犠牲にするなんて間違って居る。この事をクロノ達に伝えて、あの時の事件の事をもう一度調べて貰おう」

フェイトは本と紙を握りながら立ち上がり、その場から去ろうとする。

しかし、その直前に、近くの街灯の上からフェイトに向かって声が掛けられる。

「・・・・やはり、あのお方の言うとおり見張っていて正解だった」

「誰ッ！？」

聞こえて来た声にフェイトは声を上げながら街灯の方に目を向けて見ると、巨大な鎖鎌を手に持ち、首に目玉のような形をした水晶を掛けた、死神の様な生物がフェイトの事をジッと見つめていた。

ファントモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／ゴースト型、必殺技／ソウルチョッパー

バケモンがパワーアップした上級ゴースト型デジモン。巨大な鎖鎌は、魂を切り裂くことが出来る武器だ。布の下の正体は不明だが、別次元のデジタルワールドに通じているとも言われている。首にかけている目玉型の水晶には、これから死ぬものが映るらしい。必殺技は、巨大な鎖鎌で敵の魂さえも切り裂く『ソウルチョッパー』だ。

「貴方は一体？」

「私はファントモン、貴様を死に誘うデジモンだ」

「デジモン？」

ファントモンの言葉の中に聞いた事が無い言葉を聞いたフェイトは疑問の声を上げた。

その様子に思わずファントモンは疑問を覚えるが、すぐにフェイトが持っている紙と本に気が付き、納得したように頷きながら、フェイトに声を掛け始める。

「なるほど、高町なのはが渡した資料には我らの事は記されていなかったのか。この前の時の事を考え、高町なのはは全ての事実を貴様らに教えると思っていたが、如何やら私は早とちりをしてしまった様だな」

「なのは！？貴方はなのはの事を知っているの！？」

ファントモンの言葉を聞いたフェイトが、険しい表情をしながらファントモンに質問すると、ファントモンは頷きながら答える。

「知っているとも。高町なのはは最重要警戒人物。あの女は次元世界全体で見ても、我らデジモンを打ち破れる数少ない人間だからな」

「それは如何いう意味なの！？」

ファントモンの言葉にフェイトは目を見開きながら叫んだ。

しかし、ファントモンはフェイトの疑問の声に答えずに持っていた鎖鎌を構え始め、フェイトに向かって飛び掛かる。

「貴様には死んで貰うぞ！！高町なのはを誘き寄せる為に！！」

ーーーブン！！

「クッ！！」

ファントモンは叫ぶと共にフェイトに向かって鎖鎌を振り下ろすが、フェイトはギリギリの所でかわし、服のポケットの中から待機状態の自身のデバイス－バルディッシュを取り出し、セットアップしようとする。

だが、その様子を目にしてもファントモンは余裕そうな表情をフェイトに向け、フェイトの背後に向かって叫ぶ。

「バケモン！！その女からデバイスを奪え！！」

「ウア～」

ーーーバシッ！！

「なっ！？」

ファントモンが叫んだ瞬間に、フェイトの背後に突如として白い布を被った生物－バケモンが姿を現し、フェイトの手の中からバルディッシュを奪い取った。

その事とバケモンの姿にフェイトは驚愕に目を見開きながら、バルディッシュを手の中に持っているバケモンの姿を見つめていると、ファントモンがゆっくりとフェイトに近づいて来る。

バケモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／ゴースト型、必殺技／ヘルズハンド、デスチャーム

頭から布かぶっているゴースト型デジモン。布の中身はナゾに包ま

れている。呪われたウィルスプログラムでできており、取り付かれたコンピューターは、一瞬でシステムを破壊されてしまう。また、影はブラックホールに繋がっていると言う説もある。必殺技は、巨大な腕で敵を地獄へと引きずり込む『ヘルズハンド』に、対象に死の呪文で呪いを掛ける『デスチャーム』だ。

「ククククッ！！Sランクの魔導師と呼ばれていても、所詮は人間、デバイスが無ければ一般人と変わるまい」

「クッ！！」

ファントモンの言葉にフェイトは悔しげな声を上げ、バケモンが持っているバルディッシュに目を向け、何とか取り返そうと策を考え始める。

しかし、そうはさせないと言うように、再びファントモンがフェイトに向かって飛び掛り、持っている鎖鎌をフェイトに向かって振り下ろす。

「終わりだ！ソウルチャッパーー！！」

「しまっ！！」

ファントモンのソウルチャッパーを見たフェイトは悔しげな声を上げ、目を思わず瞑ってしまう。

しかし、フェイトへとソウルチョッパーが決まろうとする直前に上空から、無数の赤い短剣がファントモンとバケモンに向かって降り注ぐ。

「刃を持って降り注げ！ブラッティダガーー！！」

ーーーズガガガガガガガガガガッ！！

「ムッ！」

「ウア～」

上空から降り注いで来たブラッティダガーに気が付いたファントモンはソウルチャッパーを中断し、フェイトから離れる事でかわし、バケモンも自身に向かって来るブラッティーダガーを避けた。

しかし、バケモンが避けた方向に突如として桃色の髪に剣を持った女性ーシグナムが姿を現し、右手に握っている剣に炎を発生させながらバケモンに向かって振り下ろす。

「紫電一閃！！」

ーーーブザァァァァン！！

「ウアァ～！！」

「バケモン！！」

シグナムの放った紫電一閃はバケモンの体に直撃し、バケモンが真っ二つに成りながらデータ粒子に変わり、デジタマが出現するのを目撃したファントモンは声を上げた。

しかし、バケモンを真っ二つにしたシグナムはファントモンの言葉には耳を貸さずに、バケモンが消滅すると共に地面に落下したバルディッシュを拾い上げ、フェイトに向かって放り投げる。

「この程度の敵に不覚を取るとは、油断し過ぎだぞ、テスタロッサ」

「シグナム！それじゃあさっきの魔法は！？」

シグナムの投げたバルディッシュを受け取りながらフェイトが驚きに声を上げると、上空からはやてが降りて来て、険しい表情をフェイトに向ける。

「はやて！！」

「話は後や！今は其処に居る死神の様な奴から情報を聞き出すんや！！」

「うん！バルディッシュ！セットアップ！！」

はやての叫びにフェイトは頷くと、背中に白いマントを羽織った黒と白のバリアジャッケトを身に纏い、黒い戦斧に変わったバルディッシュをファントモンに向ける。

その様子を見たファントモンは自身の不利を悟り、内心で悲鳴の様な叫びを上げる。

（不味い！Ｓランクオーバーの魔導師を三人も相手に出来ないぞ！！かと言って逃げ帰れでもすれば、ルーチェモン様に殺されてしまう！！ただでさえあの女を襲ったのは私の勘違いだと言うのに、おめおめと逃げ帰りでもすればルーチェモン様はお怒りに成られる！如何すればいいのだ！？）

ファントモンがフェイトに声を掛けたのは、フェイトが真実を知ってしまったと思ったからだ。

だが、フェイトは管理局に多少の不審を覚えただけで、結局の所真実は知られていない。つまりファントモンがフェイトを襲ったのは完全な勘違いだったのだ。その事を隠す為にファントモンはフェ

イトを抹消しようとしたのだが、現在の状況はまさにファントモンに取って最悪な状況に成ってしまった。
その様にファントモンが恐怖に震えているとフェイト達はゆっくりとファントモンに向かってにじり寄り、ファントモンは後ずさりしながら何とか状況を好転させる方法を考えようと頭を悩ませていると、ファントモンの背後の木々から声が響いて来る。

「苦戦している様だな、ファントモン」

ーーーザッ！

「ッ！！メフィスモン！！」

聞こえて来た声にファントモンは驚愕の声を上げ、自身の背後を振り返ると、木々の間から雄羊の顔を持ち、背中に悪魔の様な翼を持ったデジモン―メフィスモンが姿を現し、ファントモンの横に並ぶ。

メフィスモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／堕天使型、必殺技／デスクラウド
巨大な雄羊の姿をした二足歩行の堕天使型デジモン。全ての生命を滅しようとしたアポカリモンの残留思念から生まれた闇の存在、アポカリモンと同じ様に全ての生命を滅しようとしている。。“暗黒系黒魔術”を使い、高い知性で戦略を立てる狡猾さを持っている。必殺技は、暗黒の雲を発生させ、全てを腐蝕させる『デスクラウド』だ。

木々の間から現れたメフィスモンの姿にフェイト達は警戒しながら構えを行い出すが、メフィスモンは構わずにファントモンに顔を向ける。

「あのお方がこの者達の実力を知りたいそうだ。それで今回のミスは無くしてくれるそうだぞ」

「本当か！？」

メフィスモンの言葉にファントモンは喜びの声を上げた。
もはや殺される事は確実だと思っていたのに、もしかしたら命が助かる可能性が生まれたのだから、喜ぶのも当然だろう
そしてファントモンはメフィスモンの言葉に喜びながら、鎖鎌をフェイトに向け構える。

「私は金髪の女を狙う！」

「ふむ、なら私は他の二人だな。まあ良いだろう」

ファントモンの言葉にメフィスモンは頷くと、それぞれの敵に向かって飛び掛った。

「オォォォォォォーー！！」

ーーーガキン！！

「クッ！！」

ファントモンの一撃をフェイトはサイスフォームに変形させたバルディッシュで受け止め、ファントモンとフェイトは空中に浮かび上がり、鎖鎌と金色の鎌のぶつかり合いが始まった。
その間にメフィスモンは、はやてとシグナムに襲い掛かり、シグナムに向かって右腕を振り下ろす。

「ムン！！」

「ハアッ！！」

ーーーガアン！！

メフィスモンはシグナムに向かって腕を振り下ろすが、シグナムは瞬時に自身の剣型のデバイスーレヴァンテインで受け止め、メフィスモンの攻撃を防御した。

しかし、瞬時にメフィスモンは連続で拳をシグナムに向かって突き出し、攻撃を放つ続ける。

「ムン！！」

ーーーブブブブブブブッ！！

「舐めるな！！」

次々と拳をメフィスモンはシグナムに向かって放つが、シグナムはレヴァンテインで防御し続け、メフィスモンの攻撃を捌いて行く。

その間にはやては自身の周りに魔力刃を生み出し、広範囲に大きな魔力刃を放ち、魔力刃はそれぞれの軌道でメフィスモンに向かって行く。

「バルムンク！！」

ーーーシュシュシュシュッ！！

「ほう」

はやてのバルムンクを見たメフィスモンは感心した声を出しながら空中に浮かぶ事でかわすが、その隙にシグナムがメフィスモンの背後でレヴァンテインを横薙ぎに振るい、魔力刃をメフィスモンに向かって撃ち出す。

「ハアッ！！」

ーーーザンッ！！

「おっと」

メフィスモンは自身の背後から迫って来る魔力刃を上空に更に浮かび上がる事で、シグナムの魔力刃を簡単にかわし、シグナムとはやてに笑みを向ける。

「流石はSランクオーバーと呼ぶべきだな。中々の攻撃だ。二人を同時に相手にするのは少々骨が折れそうだ」

ーーーパチン！！

『グオォォォォォォォォーーーー！！！』

メフィスモンはシグナムとはやてに向かって声を掛けると同時に指を鳴らすと、辺りの木々から二体の黒き魔竜ーデビドラモンが姿を現した。

「何や！？この竜は！？」

現れたデビドラモンの姿に、はやては目を見開きながらデビドラ

モンの姿を見つめ、シグナムも始めてみる二体のデビドラモンの姿に驚きの視線を向ける。
その様子にメフィスモンは嬉しそうな笑みを浮かべながら、はやての疑問の叫びに答える。

「この竜はデビドラモンと言う魔竜。貴様ら二人を私一人で相手にするのは少々キツイ。そちらの女性にはこの二体の相手をして貰う。行け！！」

『グオォォォォォォォーーーーー！！！』

「クッ！」

メフィスモンがデビドラモンに向かって命令するとと共にデビドラモンは、はやてに向かって飛び掛り、攻撃を開始する。

「主はやて！！」

デビドラモン達に襲われるはやての姿を見たシグナムは慌ててはやての救助に向かおうとするが、そうはさせないメフィスモンはシグナムに向かって飛び出し、右腕をシグナムに向かって振り下ろす。

「貴様の相手は私だ！！」

「クッ！」

メフィスモンの攻撃を見たシグナムは慌ててかわし、上空へと飛び上がりながら、レヴァンテインを連結刃に変形させる。

《ｓｃｈｌａｎｇｆｏｒｍ》

「飛龍一閃！！！」

ーーーブン！！

「ムッ！デスクラウド！！」

ーーーシュウゥゥゥゥゥッ！！

レヴァンテインが連結刃に変形すると共に、シグナムは全力でメフィスモンに向かって飛龍一閃を放つが、メフィスモンは自身に迫り来る連結刃に手を伸ばしながら暗黒の雲を発生させ始める。

そして連結刃は暗黒の雲の中を進みメフィスモンに直撃しようとするが、突如としてシグナムは連結刃を戻し、元の直剣の形に戻しながらレヴァンテインの刃を見て驚愕と困惑に目を見開く。

「ッ！！腐食しているだと！？」

「私のデスクラウドは全てを腐食させる暗黒の雲を発生させる技。この技の前では貴様の魔法は全て無意味に変わるのだ」

「クッ！！」

腐食したレヴァンテインの刃を見たシグナムにメフィスモンは自分の技の力を教え、シグナムは悔しそうな声を出しながら、メフィスモンの周りに発生している暗黒の雲を睨みつける。

そして別の場所の上空で戦っていたフェイトとファントモンは互いに鎌をぶつけ合い、競い合っていた。

「ハーケンセイバーー！！」

「そんなものは効かん！！」

ーーーブザン！！

フェイトが放った金色の刃をファントモンは自身の鎖鎌で切り裂き、フェイトに向かって連続で鎖鎌を振り下ろす。

「ソウルチョッパーー！！！」

「クッ！！」

ファントモンが次々とフェイトに向かって鎖鎌を振り下ろすが、フェイトは自身のスピードを全力で発揮し、次々と振り下ろされてくる鎖鎌をかわし続け、ファントモンに隙が出来た瞬間に攻撃を繰り出す。

「ハアッ！！」

「ムウッ！！」

ーーーガキィィィィン！！

フェイトの攻撃をファントモンは自身の鎖鎌で受け止め、二人は鍔迫り合いを行ない始めると、二人の横をデビドラモン達に追われているはやてが通過する。

ーーービュン！！

「ッ！はやて！！」

「フッ！！貫ったーーー！！」

「しまっ！！」

はやての姿を見たフェイトが驚愕の声を上げた瞬間に、ファントモンはバルディッシュを弾き飛ばし、フェイトに向かってソウルチョッパーを放とうとする。

それを見たフェイトはかわせない判断し、目を瞑ってしまうが次の瞬間に、上空から光の矢がファントモンに向かって高速で飛んで来る。

「ホーリーアローーー！！！！」

ーーードスン！！

「グアァァァァァァーーーー！！」

「えっ？」

背後から飛んで来たホーリーアローにファントモンは胸を貫かれ、ファントモンの体はデータ粒子に変わり消滅する。

そのファントモンの断末魔の叫びを聞いたフェイトは慌てて目を開き、辺りを見回してみると、バイオ・エンジェウーモンに進化していたリンディがフェイトの前に下りて来る。

「戦いの最中に他の事に気を取られるのは死を招くわよ、フェイトさん。特にデジモンとの戦いではね」

「リンディさん！！」

リンディの姿を見たフェイトは声を上げるが、リンディはフェイトの言葉には答えずに、デビドラモン達に追い回されているはやての方に目を向けると、右腕をデビドラモン達に向け、光の光線を撃ち出す。

「ヘブンズチャーム！！！」

ーーードゴオオオオオン！！

「グギャアァァァァァーーー！！！」

ヘブンズチャームを食らった一体のデビドラモンは苦痛の声を上げながらデータ粒子に変わり、デジタマに戻ってしまう。

自身の仲間が消滅するのを見たもう一体のデビドラモンはリンディへと顔を向け、怒りの視線をリンディに向けながら、自身の爪を赤く光らせてリンディに向かって飛び掛かる。

「ガアッ！！」

『危ない！！』

デビドラモンがリンディに襲い掛かるのを見たフェイトとはやてはリンディを助けようと、デビドラモンに魔法を放とうとする。

しかし、二人が魔法を放つ前にデビドラモンはリンディの前に浮かび上がりクリムゾンネイルをリンディに振り下ろそうとする直前に、デビドラモンの胸から刃が飛び出す。

ーーードスン！！

「グガアッ！！」

「・・・・・悪いが俺は貴様の姿を見ると怒りが込み上げて来る。さっさと消えろ！！」

ーーーブザァァァァン！！

苦痛に呻くデビドラモンの背中にドラモンキラーの刃を突き刺しながらブラックは叫ぶと、突き刺しているドラモンキラーの刃を上に向かって振り上げ、デビドラモンを真っ二つにした。

それを確認したリンディはデビドラモンが消滅すると共に現れたデジタマを腕の中に抱え、シグナムと対峙していたメフィスモンに険しい視線を向けると、メフィスモンは笑みを浮かべながらその場を去って行った。

それを確認したブラックとリンディは顔を見合わせ、辺りに落ちているデジタマに目を向けると、ブラックは首に掛かっているネックレスに声を掛ける。

「フリート、デジタマを全て回収しろ」

『了解です』

ーーーシュン！！

ブラックの言葉にネックレスから声が響いた瞬間に、全てのデジタマの周りに転送用の魔方陣が発生し、アルハザードへと転送された。

それを確認したブラックとリンディは険しい表情を浮かべるフェイト、シグナム、そしてはやてに顔を向け、リンディがフェイトに

声を掛ける。

「フェイトさん、この前彼に会った時に、彼が回収し忘れた卵を回収したわね。それを渡して欲しいの」

リンディは険しい視線をブラックに向けているフェイトに向かって、優しげな表情を浮かべながら声を掛けた。

オニスモンと戦った時にブラックはオニスモンのデジタマは回収したのだが、その場に居たもう一体のデジモン―トリケラモンのデジタマは回収し忘れてしていたのだ。その事が分かったリンディは慌ててトリケラモンのデジタマを回収しに向かったのだが何処にもトリケラモンのデジタマは存在せず、フェイトとリインフォースが回収したと判断し、ブラックと一緒にフェイトに会いに来た所で、戦闘と遭遇したのだ。

しかし、フェイトはリンディの質問には答えずに、別の質問をリンディに返す。

「やっぱりあの卵は重要な物なんですね。だったら答えて下さい。なのははリンディさんの所に居るんですか？」

「・・・・・・居るわ」

『ッ！！！』

フェイトの質問にリンディは顔を俯かせながら答えると、フェイト達は怒りに目を見開きながら、ブラックに向かってそれぞれデバイスを構え出した。

その様子をブラックはつまらなそうな様子で眺めながら、自身に向かってデバイスを構えているフェイト達に、如何でもよさそうな声で質問する。

「・・・・何のつもりだ？」

「・・・・・お前は、お前はリンディさんだけじゃなくてなのはまで改造したのか！！！」

「ふん、何を勘違いしている。あの女には何もしていない。あの女に行なわれたのは傷の完全治療だけだ」

『ッ！！！』

ブラックの告げた事実にフェイト達は再び目を見開き、思わず顔を見合わせてしまう。

なのはの怪我は管理局の技術でさえ完全な治療は不可能だと告げられていたのに、ブラックはなのはの怪我は完全に治療されていると告げたのだから、驚愕するのも当然だろう。

その様子を静かに見ていたリンディは険しい表情をしながら、ブラックの言葉に頷き、フェイトに声を掛ける。

「事実よ。なのはさんの怪我は完全に治療されているわ。あの場所ならそれぐらい簡単なのよ」

「あの場所やて？」

リンディの言葉にはやては疑問の声を上げ、フェイトとシグナムも疑問の表情をリンディに向けるが、リンディは答えずに再びフェイトに声を掛ける。

「フェイトさん、質問には答えたわ。今度は貴女の番よ。あの卵は何処に在るの？アレはとても重要な物なのよ」

「・・・・・・ミッドチルダの私の家に置いてあります。あの時に現れた機械の様な狼の言葉が気に成ったんで、管理局には渡してはいません」

「そう、なら卵はフェイトさんに預けて置くわ」

「ッ！！」

リンディの言葉を聞いたフェイトは驚き、ブラックは険しい視線をリンディに向けるが、リンディは気にせずにフェイトに真剣な表情を向ける。

「あの卵から生まれる者は、育て方次第で世界の運命さえも変えてしまう可能性を秘めた者なのよ」

『なっ！？』

リンディの言葉を聞いたフェイト達は思わず困惑した叫びを上げてしまった

ただの卵にしか見えない物から生まれる者が、世界の運命さえも変えてしまう可能性を秘めている。常識では考えられない事に、フェイト達は訝しげな表情をリンディに向けるが、リンディは構わずにブラックから送られて来る念話に耳を傾ける。

（如何言うつもりだ？デジタマを管理局の人間が持つ事の危険性は十分に分かっている筈だ。それなのに管理局の人間に渡すと言うのは？）

（少しだけフェイトさん達に賭けて見たいんです。フェイトさん達

なら正しくデジタマから生まれる者を育ててくれる筈です。もしもの時は私が責任を取ります）

（・・・・・・・好きにしろ）

リンディの言葉にブラックは素っ気の無い声で念話をリンディに送ると、リンディはブラックに向かって笑みを向け、自身とブラックの足元に転送用の魔方陣を出現させながら再びフェイトに顔を向ける。

「管理局には気を付けてね」

ーーーーシュウン！！

「待って！！」

リンディが言葉を呟いた瞬間に、リンディとブラックはその場から転移し始め、フェイトは慌ててリンディに声を掛けるが、ブラックとリンディの転移は止まらずにその場から二人は転移していった。

二人の転移を確認したフェイトは困惑の表情を浮かべながら、はやてとシグナムに顔を向けるが、はやてとシグナムもフェイトと同様に困惑の表情を浮かべ、フェイトは空を見ながら呟く。

「何が起きているの？世界に一体何が起きようとしているんだろう？」

『・・・・・・・』

フェイトが青く澄んだ空を見ながら出した困惑に満ちた声に答えられるものは、その場には誰も居なかったのだった。

人工的な光が満ちる研究室の中で、戦いの場から帰還したメフィスモンは八枚の翼を広げる天使ールーチィモンに跪き、フェイト達の戦闘を結果を報告していた。

「管理局に不審を持っている連中の実力は中々のものですが、ルーチェモン様の計画を阻むほどの力は在りません・・・・貴方様の脅威に成るのは、やはり、三大天使達についている究極体デジモンと、その仲間達でございましょう」

「そうかい、報告ありがとう、下がって良いよ」

「ハッ！」

ルーチェモンの言葉を聞いたメフィスモンは頷き、その場から去って行く。

それを確認したルーチェモンは自身の背後に居る白衣を着た男性ーブラック達が追っている倉田明弘に顔を向ける。

「フフフフフフッ、聞いたとおり、彼女達が作る部隊じゃ僕らの脅威に成りそうにないよ。まぁ、在る程度経ったら、怪しまれない程度で管理局から孤立させて、自滅に追い込むの良いだろうね」

「構いませんよ。私達の計画には不要ですし、邪魔者にはさっさと消えて貰った方が良いですからね」

「そうだね」

倉田の言葉にルーチェモンは頷き、周りに置いてあるカプセルに

目を向け更に笑みを深める。

「フフフフフッ、四年後が楽しみだよ。絶対に楽しい祭りに成る。デジモン達と人間達の憎しみと憎しみのぶつかり合いをこの目で見られるんだからね」

「ええ、私も楽しみです。我々の計画が成就するのがとてもね（そしてその時に貴方を排除して私は今度こそ世界の王に成って見せます。この倉田明弘が今度こそ！！）」

ルーチェモンの言葉に倉田は同意の声を上げるが、内心ではルーチェモンを排除して自分が世界の支配者に成る日の事を考え狂気の喜びを挙げていた。

しかし、倉田は気が付いていなかった。ルーチェモンが倉田に向ける視線にも同様の狂気が渦巻いている事に。その事に倉田は全く気が付かずに、二人は三つのデジタマが入ったカプセルの中心で互いに笑みを向け合うのだった。

真実を求めて（後書き）

次回予告

時は流れ、四年の月日が流れたある日。

ブラックは成長したヴィヴィオと共にデジタルワールドへ向かった。

だが、其処に遂に管理局員達が姿を現し、デジモン達に次々と襲い掛かる。

ヴィヴィオは怒りに燃え、赤き魔龍の咆哮が大地に轟く。

次回、漆黒の竜人と少女、『絶望の序曲、目覚めてしまった王と魔竜！！』

絶望の時が遂に始まろうとする

絶望への引き金、目覚めてしまった王と赤き魔龍！！

フェイトにデジタマを託してから四年の月日が経ったある日、アルハザードでブラックは何時もの様に訓練を行なおうと訓練室に向かって歩いていた。

しかしその途中で、突如としてブラックの背後から金色の髪に赤と緑のオッドアイの瞳を持った四、五歳の少女が姿を現し、ブラックの背中に飛び付く。

ーーーガシッ！

「パパッ！！ヴィヴィオと遊んで！！」

「・・・・・俺は貴様の父親で無いと言っているだろうが！！」

ヴィヴィオの言葉を耳にしたブラックは不機嫌そうに顔を変えながら、自身の背中に張りついているヴィヴィオに向かって叫んだ。

ヴィヴィオをアルハザードに連れて来てからと言うもの、自我もまだ完全に発達していない頃からヴィヴィオはブラックの事をパパと呼び続け、ブラックが傍に居ないと泣き続けると言う毎日を繰り返していたのだ。その事でブラックはリンディやクイント、ティアナになのは、ガブモン、フリート、そして自身のパートナーであるルインにまで色々と言われ続け、ブラックは不機嫌な毎日をずっと送り続けていたが、ヴィヴィオに自我が完全に目覚めればその様な事は無いと考え、ブラックは耐え忍んで来た。

しかし、ヴィヴィオは自我が目覚めてもブラックに甘える事を止めない上に、ブラックが一人で眠っていると何時の間にか横にヴィヴィオが眠っている事さえも在るぐらいに、ヴィヴィオはブラックに懐いているのだ。

因みに、ヴィヴィオは他の者達は全員お姉さんと呼び、一人としてママと呼ばない為に、リンディとルインは自分の事をママと呼んで貰う為に、日夜努力を繰り返していたりする。
そしてブラックがヴィヴィオに向かって不機嫌そうな視線を向け続けていると、ヴィヴィオは目に涙を浮かばせ始め、ブラックは慌ててヴィヴィオに声を掛ける。

「グウッ・・・・・好きに呼べ」

「うん！パパ！」

ブラックの言葉を聞いたヴィヴィオは喜びの表情を浮かべ、ブラックの体に更に強く抱き付く。
自身に抱き付くヴィヴィオの姿を見ながらブラックは溜め息を付き、内心で何度も繰り返した疑問を考え始めた。

（俺は何故この小娘の泣き顔を見ると何も言えなくなるのだ？こんな小娘など一撃で黙らせられるのに、何故それを行なえない？何故だ？）

以前までのブラックだったら確実に自身に付き纏うヴィヴィオを見ても、何も感じなかった上に、自身の邪魔をするヴィヴィオを殴り飛ばしていたと断言出来るのに、今のブラックはヴィヴィオの泣き顔を見ると胸に突如として激痛が走る為に、攻撃する事が出来ないのだ。

（この胸に走る痛みには覚えが在る。だが、何処でだ？俺は何処でこの痛みを感じた事が在るんだ？一体何処で？）

ブラックはヴィヴィオの泣き顔を見た時に感じる痛みに付いて考

え始めた。
ヴィヴィオの泣き顔を見た瞬間、常に襲い掛かる激痛に確かにブラックは覚えが在る。だが、何時何処で味わったのかだけは全く思い出せなかった。少なくとも今の体に成ってからの痛みではない。となれば前世の人間だった頃なのかと考えるが、その頃に関しては既におぼろげにしか思い出せず、ブラックは悩み続ける。
その様子にヴィヴィオは首を傾げるが、ブラックに抱き付いても怒られない事に気が付き、より強く抱き付こうとする。
しかし、その前にヴィヴィオが走って来た方向の通路から赤い恐竜の様な姿を持ったデジモン―ギルモンが歩いて来ると、ヴィヴィオの姿を確認し笑みを浮かべる。

「ヴィヴィオ、此処に居たんだ。リンディさんがヴィヴィオの事を探していたよ」

ギルモン、世代／成長期、属性／ウィルス種、種族／爬虫類型、必殺技ファイヤーボール、ロックブレイカー
赤い恐竜の様な姿をした二足歩行の爬虫類型デジモン、胸にはデジタルハザードと呼ばれる紋章が存在し、多大な被害を齎す存在と言われているが、その力を正しく使えばデジタルワールドの守護者に成りえる存在にも成る。必殺技は、口から吐き出す火の玉で攻撃する『ファイヤーボール』に、大きな爪で岩をも砕く相手に向かって攻撃を繰り出す『ロックブレイカー』だ。また、その他にも多彩な技を持っているぞ。

「リンディお姉ちゃんが？何だろう？」

ギルモンの言葉を聞いたヴィヴィオはブラックの抱き付くのを止め、床に下りながらギルモンに疑問の表情を向ける。

「何か渡す物が在るんだって、早く行こう！」

「うん！」

ギルモンの言葉にヴィヴィオは頷くと、ギルモンの背中に乗り、ブラックに顔を向ける。

「パパ、後で遊ぼうね。ギルちゃん、ＧＯ！！」

ーーーダッダッダッ！！

ヴィヴィオがギルモンに向かって叫んだ瞬間に、ギルモンはヴィヴィオを背中に乗せたまま通路の奥に走って行く。

その様子を見ていたブラックは険しい表情をしながら訓練室に足を向け、ヴィヴィオとギルモンに付いて考え出す。

（アレがロイヤルナイツの一人だったとは思えんな。デジタマに戻ってしまった事で力と記憶を失ったとは言え覇気が無さ過ぎる。戦いの場に出ても再び死ぬのが落ちだろう）

ギルモンは嘗てデジタルワールドの一つで最強の騎士と呼ばれた存在の生まれ変わった姿。ヴィヴィオが完全に自我が芽生えた時に、回収しておいたデジタマから生まれ、ヴィヴィオと共に育ったのだ。

ブラックからすれば弱いデジモンが一匹加わったとしか思えなかったのだが、それはすぐに否定される事に成るとは思っても見なかったのだった。

明るい光が溢れる研究室の中で、リンディとフリートは観察機器

の中心に置かれている赤い縁取りのディーアークを険しい表情をしながら見つめていた。

「やはり、このディーアークには、なのはちゃんやティアナちゃんのディーアークとは、違う所が存在していますね。ブラックボックスに成っているので正確の事は分かりませんが、恐らくヴィヴィオちゃんに戦う力を与える機能が在るのは間違い無いでしょう」

「そうですか」

フリートの報告を聞いたリンディは更に表情を険しくし、観察機器の中心に乗っている問題のディーアークを睨み付ける。

問題のディーアークはギルモンが幼年期から成長期に進化した時に現れたのだが、リンディ達はヴィヴィオには渡さず、隠したていたのだ。全てはヴィヴィオを戦わせない為に。

しかし、そうも言っていられない事態が起きてしまったのだ。

「・・・・・管理局は本気で戦争を起こす気なんですか？こんなふざけた文章をデジタルワールドに送ってくるなんて」

リンディは手に持っていた文章が書かれた紙を見てながら、怒りに満ちた静かな声を出し、フリートも更に険しい表情を深める。

文章には事細かに書かれているが要約すると、『デジタルワールドの全てを管理局が管理する。即座に武装を放棄し、速やかに管理局の管理下に入り自分達の要求は全て聞き入れろ』と書かれているのだ。

「・・・・・・それが要望書なら脅迫状の全てが要望書に変わりますね」

「これは“要望書”では在りません。こう言うのは“宣戦布告”と呼ぶんですよ！」

ーーービリィィィッ！！

リンディは持っていた紙を破り捨てて管理局に怒りを顕にした。

何処の世界に最初の行に『デジタルワールドは管理世界に認定する』などと書いた要望書が存在すると言うのだ。如何考えても管理局はデジタルワールドに戦争を仕掛けているとしか思えない。

「しかも何ですか！？今まで管理世界で暴れていたデジモン達の被害による賠償を全て支払えと言うのは！！これが三大天使の方々以外のデジタルワールドに送られでもしたら、確実に逆鱗に触れてしまうわ！！」

「でしょうね。特に四聖獣の一体ースーツェーモンに知られたりしたらミッドは滅びますね」

「ええ、三大天使の方々の話だと、彼は人間を嫌っているらしいからね」

フリートの言葉にリンディは同意を示した。

スーツェーモン。彼のデジモンは別世界のデジタルワールドの南方の守護する四聖獣の一体。その性格は気性が荒く、四聖獣の中でも最も危険なデジモン。しかも人間の干渉や存在を嫌っているので、自分の世界に近かった人間世界に自身の配下を送り込み沢山の犠牲者を生み出した事が在るのだ。

「この事を彼が知った日にはミッド所か、他の管理世界さえも滅びる可能性が在ると言う事で、三大天使の方々も自分達の世界で留め

ていますが、知られるのは時間の問題でしょうね」

「・・・・・・ご冥福をお祈りしましょう」

リンディの言葉にフリートは手を組みながら天井を見上げ始め、リンディもフリートと同じ様に手を組み祈りを始めた。

そして二人がミッドと他の管理世界の冥福を祈っていると、研究室の扉が開き、ヴィヴィオを背に乗せたギルモンが入って来る。

ーーーブゥン！

「リンディさん！ヴィヴィオを連れて来たよ！」

「リンディお姉ちゃん、何かヴィヴィオに用が在るの？」

「ええ、渡す物が在るのよ」

ヴィヴィオとギルモンに笑みを向けながらリンディは、機器が付けられているディーアークに手を伸ばし、機器を外すとディーアークをヴィヴィオの手に乗せた。

見た事も無い物を手の上に乗せられたヴィヴィオは疑問の表情を浮かべながら、リンディに顔を向ける。

「これなに？見た事も無いけど？」

「それはヴィヴィオを護ってくれる物よ。肌身離さずに持ち歩いてね」

「うん！じゃあパパの所に行くね！ギルちゃんＧＯ！！」

リンディの言葉を聞いたヴィヴィオは元気良く頷くと、再びギルモンの背中に飛び乗り、ギルモンはブラックに居るであろう訓練室に向かい出した。
その様子を見たリンディとフリートは微笑ましいと言う表情をヴィヴィオの背に向けるが、ヴィヴィオの姿が見えなくなると、再び表情を険しくする。

「これから先の戦いは、本当に何が起きるか分かりません。悔しいですが、あの子を護り切れる可能性も低いです」

「ええ、本当に私達は無力ですね」

リンディの言葉にフリートは同意を示し、二人は自分達の無力さから悔し涙を流し続けるのだった。

そしてヴィヴィオにディーアークを渡してから数日が経った在る日の事、ブラック達は司令室に集まり、オファニモンから届いて来た連絡について話し合っていた。

「デジタルワールドの周りに強力な結界を張る事が決まったそうなので、今後に付いて最後の話がしたいと、オファニモンから連絡が届きました」

「それが良いですね。三大天使の張った結界と成れば、管理局もそう簡単には解けないでしょうし」

「うむ、現在の状況では最良の選択だな」

フリートの報告にティアナとクダモンは同意を示し、他の者達も頷くが、クイントだけは疑問の表情を浮かべ、フリートに顔を向ける。

「でも、結界が張れるのなら、如何して最初から張らなかったのかしら？」

「それは簡単です。結界を張ってしまうと他のデジタルワールドとの通信が出来なくなる上に、私達が回収したデジタマもデジタルワールドに送る事が出来なくなってしまうんですよ」

「なるほどね」

フリートの答えにクイントは納得の声を上げた。

今までの状況では他のデジタルワールドと通信が出来なくなるのはデメリットの上に、ブラック達が回収したデジタマもデジタルワールドに戻せないと言う事で、結界を張るのを行なわなかったが、管理局が宣戦布告して来た状況では無意味な戦争を始めない為にも、結界を張る事を三大天使は決断したのだ。

「今後の事を明確に決める為にも、我々はデジタルワールドに向かいます。良いですね」

リンディが全員に向かって質問すると、全員が頷き、それぞれデジタルワールドに向かう準備を行う為に司令室から出て行く。

そして最後に司令室から出ようとしたブラックは指令室から出る前に、司令室の中に残っているリンディとフリートに振り返る。

「俺は先に行く。何か在った時の為にもな」

「・・・・・・そうですね。お願いします」

リンディは考える様な表情を一瞬浮かべたが、ブラックの言葉は最もだと思い同意を示した。

その言葉にブラックは頷き、今度こそ司令室を出て、転送室に足を向け歩いていると、通路の横からギルモンに乗ったヴィヴィオが姿を現し、ブラックの姿を見ると嬉しそうな表情を浮かべた。

「パパッ！！遊んで！」

「俺は行く所が在る。帰って来たら幾らでも相手をしてやるから、今は諦めろ」

「ヴィヴィオも行くッ！！」

ブラックの言葉を聞いたヴィヴィオはブラックに向かって答え、ギルモンもと言う様にギルモンも頷くが、ブラックはヴィヴィオとギルモンの様子を見て溜め息を吐く。

（連れて行ったりしたら、絶対にあの女やルイン達にまで何かを言われるだろうな。そんなのはゴメンだ）

ブラックはヴィヴィオを連れて行った場合の事を予測し碌な事には成らないと判断すると、ヴィヴィオとギルモンに険しい表情を向ける。

「駄目だ。俺が今から行く場所は危険な所だ。連れて行く事は出来ん。大人しく此処で待っていろ」

ブラックがヴィヴィオに向かって言葉を言うと、ヴィヴィオは悲

しげな表情を浮かべ、ブラックの胸に激痛が襲い掛かる。

（グウッ！！またか！一体なんだと言うんだ！？何故俺はコイツの悲しげな顔を見ると、胸が痛くなるのだ！！）

ブラックは自身の胸を押さえながらヴィヴィオとギルモンの前を通り過ぎ、ブラックが胸を押さえているのを見たヴィヴィオはブラックに不安そうな表情を向け、何かを決意した様な表情を浮かべると、ギルモンに小声で話しかけるのだった。

そしてアルハザードから転移して来たブラックは、渋谷駅の中に入り何時ものように、エレベーターの中に入り込むと地下の在るターミナルに止まっているトレイルモンに乗り込み、トレイルモンに乗ってデジタルワールドに向かい始めた。

トレイルモンの内部で外を見ながらブラックは椅子に深く座り込むと、自身の胸に手をやり先ほどの疑問に付いて再び考え始める。

（本当に俺は如何してしまったんだ？あのような子供に振り回させるなど、以前の俺では考えられん。何故俺はあの子供には手が上げられんのだ？）

ブラックが疑問に想うのも当然だろう。ブラックはヴィヴィオよりも年が上だったとは言え、十歳にも成らなかったなのは達に平然と攻撃出来たのに、ヴィヴィオだけは何故か攻撃が出来ないのだ。

何度も邪魔だと言い自分から遠ざけようとしたが、ヴィヴィオをそんな事に全くに気にせずにブラックに甘え続け、ブラックはほとほと困っているのだが、リンディ達はブラックとヴィヴィオの様子を微笑ましげに見るだけで絶対に助けようとしない。

（本気で如何すればいいんだ？もう疲れたぞ）

その様にブラックが悩んでいると、別の車両に繋がる扉が開き、ブラックが訝しげな表情を浮かべる。
このトレイルモンに乗っているのは自分だけの筈なのに、他の者が居たのかと目を向けた瞬間に椅子からブラックは滑り落ちた。何故ならば、別の車両から入って来たのは。

「乗り物に乗るなんて初めてだね、ギルちゃん」

「うん、ギルモン乗り物に乗るの初めてだから嬉しい！」

ヴィヴィオとヴィヴィオを背に乗せたギルモンだった。
それを見たブラックは立ち上がりヴィヴィオとギルモンに近寄り、怒りの表情を二人に向ける。

「何故此処に居る！？アルハザードに残れと言った筈だぞ！！」

「ヴィヴィオ達だって偶にはお外に出たいよ！何時も研究所の中にしか居られないんだもん！ねッ！ギルちゃん」

「うん！ギルモン、ヴィヴィオと一緒に外に出たい！」

ブラックの叫びにヴィヴィオとギルモンは自分達の想いを叫び、ブラックは本気で頭が痛いというように頭を抱え始める。

（何故こんな無茶を平然と出来るんだ！！絶対にあいつ等は俺を責めて来るぞ！一体誰に似たんだ！？）

その様にブラックが内心で絶叫を上げていると、暗いトンネルの中を走っていたトレイルモンは光の中に飛び込み、明るくなるのを

見たヴィヴィオとギルモンは慌てて窓に張り付き外の景色を見始める。

「ウワ〜〜！！綺麗だね、ギルちゃん！」

「うん！ギルモンもそう思う！」

ヴィヴィオの言葉にギルモンは同意の声を上げ、二人は楽しそうにデジタルワールドの景色を眺めるが、二人の後ろではブラックがリンディ達がやって来た時に言われるであろう嫌味を思い、暗い空気を纏うのだった。

そしてトレイルモンは火の街に辿り着き、暗い空気を纏いながらブラックがトレイルモンから降りると、ヴィヴィオとギルモンも慌ててブラックの後を追い、トレイルモンから降りる。

「・・・・・・俺について来い」

「うん！！」

ブラックの言葉を聞いたヴィヴィオは頷くと、ギルモンと一緒にブラックの後をついて行く。

そのまま駅の外に出で見ると、上空から十枚の金色の翼を持った女性型デジモン－オファニモンがブラック達も前に下りて着地する。

「待っていました。ですが、聞いていた話では貴方お一人で来ると言う話でしたが、其方の子供は？」

オファニモンが疑問の表情を浮かべながら、ヴィヴィオとギルモンを見つめると、ヴィヴィオとギルモンはオファニモンの前に立ち自己紹介を行ない始める。

「始めまして！ヴィヴィオです！」

「ギルモンだよ！」

「ご丁寧にどうも、私はオファニモンと言います」

ヴィヴィオとギルモンの自己紹介にオファニモンは笑みを浮かべながら自身の名を告げ、ヴィヴィオの首に掛かっているディーアークに気が付き、一瞬辛そうな表情を浮かべるがすぐに表情を優しげな顔に戻す。

「私は彼と話が在るので、悪いのですが、街の方で遊んでいて貰って良いでしょうか？」

「話が終わればすぐに迎えに行く。街の方で遊んでいろ」

「うん！行こう、ギルちゃん！」

「うん！」

オファニモンとブラックの言葉にヴィヴィオとギルモンは頷くと、二人は街の方に歩き出した。

そして二人の姿が見えなくなると、オファニモンは辛そうな表情を浮かべ、ブラックに顔を向ける。

「彼女がロイヤルナイツに選ばれし者なんですね？」

「そうだ。今は力に全く目覚めていない為にただの子供だがな。それよりも状況は如何だ？」

「・・・・・予断を赦せない状況です。例の文章の答えを聞かせろと管理局の者達から催促が送られ続けている上に、管理局の艦艇が数隻、デジタルワールドに向かっていると言う情報が入って来ました」

ブラックの質問にオファニモンは険しい表情をしながら答え、ブラックは険しい表情を浮かべる。

如何考えても管理局は穏便に済ませようとしている様には思えない。確実に無理やりデジタルワールドを管理しようとしているか、デジタルワールドを滅ぼすのかのどちらかにしか思えなかった。

「現在、各エリアには何が起きても良いように、警備の強化を命じて在ります。この火の街の周りにも成熟期のデジモン十体、完全体のデジモンが五体配備して置いてあります」

「そうか、なら話を始めよう。アイツらが待っているからな」

「ええ、ついて来て下さい。別の場所で話しますので、それに貴方達に渡す物があります」

ブラックの言葉にオファニモンは険しい表情を浮かべながら答え、二人は近くの建物の中に入って行くのだった。

ブラックとオファニモンと別れたヴィヴィオとギルモンは火の街の中を歩き回り、目を輝かせていた。

「うわ〜！ギルちゃんやガブちゃん、クダちゃん以外のデジモンがいっぱい居るね！」

「うん！いっぱい居るね、ヴィヴィオ！」

ヴィヴィオの言葉にギルモンも嬉しそうな声を上げながら同意を示し、辺りを歩いているデジモン達に目を向けていると、首にフリルの様な物を付けたデジモンと尻尾が太いウサギの様なデジモンがヴィヴィオとギルモンに近付いて来る。

レッサーモン、世代／幼年期？、属性／なし、種族／レッサー型、必殺技／シッポビンタ
首にフリルの様な物が付いたレッサー型デジモン、フリルは毛の一部が硬質化して出来た物であり、危険を迫ると体に覆う事で守る行動を行なう。必殺技は、尻尾で相手の体を叩く『シッポビンタ』だ。

キャロモン、世代／幼年期？、属性／なし、種族／レッサー型、必殺技／しっぽスイング
尻尾が力強く発達したレッサー型デジモン。好奇心旺盛で何でも興味を持ち、興味が出たものには突進して行く習性がある。体の中は空洞に成っており、ゴムボールの様な弾力が在る。必殺技の『しっぽスイング』は、尻尾で相手の体を叩く技だが、成長期のデジモンならば吹き飛ばしてしまう力がある。

「君達誰？」

「見た事無いね？」

レッサーモンとキャロモンは始めて見たヴィヴィオとギルモンの姿に興味を持ち質問すると、ヴィヴィオとギルモンを笑みを浮かべる。

「こんにちは！ヴィヴィオだよ！」

「僕ギルモン！」

「僕はレッサーモンって言うんだよ」

「僕はキャロモン！」

四人は互いに自身の紹介を行い、ヴィヴィオが自分達の事を話すとレッサーモンとキャロモンはヴィヴィオとギルモンの周りを跳ね始めた。

「外の世界から来たんだ！凄い！」

「あっ！だったら僕達が街を案内するよ！その代わり外の世界の事を教えてね！」

「うん！良いよ！」

キャロモンの言葉にヴィヴィオは嬉しそうな声を上げ、四人は一緒に並びながら街の中を歩き始めた。

その頃、デジタルワールドの外では管理局のステルス艦がデジタルワールドの監視を行なっていた。

そしてそのステルス艦の内部ではデジタルワールドにおける管理局の行動で、ステルス艦の提督とその補佐官が言い争いをしていた。

「提督！今何と言いました！？」

ステルス艦のブリッジ内部で提督の補佐官は驚愕の声を上げ、提督に質問すると、提督は無表情に答えた。

「聞こえなかったのか？あの世界に攻撃を行うと言ったのだ」

「何故ですか！？あの世界とは管理世界の件で交渉中だと言うのに、それを無視して攻撃するとは言うのは！？」

「貴様は馬鹿か？あの世界は各管理世界に出没する謎の生物達の住処だ。既に多くの世界が謎の生物達に襲われ犠牲が出ている。ならば此処であの世界を滅ぼせば全てが終わるのだ」

「正気ですか！？」

提督の言葉に補佐官は信じられないと言う顔をしながら、悲鳴のような声を上げた。

確かに目の前の世界に居る生物達と同じ様な生物達に各管理世界は襲われているが、同じ様にその生物達と倒しているのも同じ様な生物である事を補佐官は知っていた。其処から考えられる事は、何か事情が在って各管理世界に謎の生物達は出現していると考えられるべきだろう。

「攻撃を中止して下さい！とにかく事情を聞くべきです！我々管理局は世界を護る事が使命なのに、世界を滅ぼしてしまったら、我々の存在意義が無くなります！」

「これは上層部の方々の命令だ。上層部の方々は管理世界の平和の為にもあの世界を滅ぼし、謎の生物達の脅威から人々を護られる事を決断した」

「ッ！！」

提督の言葉を聞いた補佐官は驚愕の表情を浮かべながらも、如何して提督がこの様な狂気の命令を強く言えるのか納得する事が出来た。管理局上層部の命令と成れば、下の管理局員達は背く事は出来ない。

しかも目の前の提督は上層部の者達との黒い噂が絶えない提督。恐らく上層部達に何かを言われているのだろう。

「既に本局からも数隻の艦艇が向かっている上に、全艦アルカンシェルを装備してある」

「アルカンシェルをッ！！」

提督の告げた事実に補佐官は更に目を見開きながら声を上げ、他のブリッジメンバー達も驚きに目を見開きながら顔を提督に向ける。“アルカンシェル”。管理局が保有する強力無比の魔導砲。発動地点を中心に、百十数キロメートル範囲を空間歪曲させながら反応消滅を起こさせると言う究極体さえも倒せる可能性を秘める管理局が持つ最強の魔導兵器。一隻だけでもとんでもないの物を、数隻全部が載せている成れば、確実に世界を滅ぼせるだろう。

「そうだ、例え此処で我々が攻撃しなくても、あの世界の消滅は決定している。これはもはや一補佐官で在る君程度が止められない事態ではないのだ。分かったら武装局員達に命じて来い！」

「・・・・・・・わ・・・か・・・・り・・・・ま・・・・し・・・・た」

提督の言葉に補佐官は悔しそうな表情をしながらも頷き、ブリッ

ジを出て行った。
それを確認した提督はモニターに映るデジタルワールドに目を向け、暗い笑みを浮かべる。
「フフフフフフッ、我々管理局が作り上げる平和には不要な世界だ。精々華々しく散ってくれる事を願うとするか」
提督は暗い笑みを浮かべながら呟くが、これが後に起きる『第九管理世界消滅』とデジモンと人間の一年以上に及ぶ『デジモン戦争』の引き金を引く事になるとは、この時の提督は夢にも思っても見なかったのだった。

駅の近くの中に在る建物の中ではブラックとオファニモンが険しい表情をしながら向き合っていた。
二人は椅子に座りながら、それぞれ持っていた紙を読み続け、読み終えたブラックは持っていた紙を床に放り捨てると、オファニモンに顔を向ける。
「お前たちの世界にこの文章が送られたのは運が良かったとしか言えないな。これが四聖獣が見守る世界に送られでもすれば、管理世界の一つは確実に消滅するだろう」
「ええ、それに関しては本当に運が良かったとしか言えません」
ブラックの言葉にオファニモンは同意を示した。
それを耳にしたブラックは呆れた様な表情を床に落ちている僅かに向けるが、すぐに表情を真剣に戻し、顔をオファニモンへと向ける。

「それで、俺に渡す物とは何だ？」

「このデジタルワールドだけが持つ物。それをお渡ししたいのです」

「何？」

オファニモンの言葉にブラックは疑問の声を上げ、オファニモンに詳細を聞こうとした瞬間、突如として部屋の扉が開き、六枚の翼に金色の杖を持ったデジモン、エンジェモンは慌しく部屋の中に入って来た。

ーーーバアン！！

エンジェモン、世代／成熟期、属性／ワクチン種、種族／天使型、必殺技ヘブンズナックル

光り輝く六枚の翼と、神々しい白き衣を纏った天使型デジモン、完全に善なる存在で、幸福を齎すデジモンと言われているが、反面、悪に対しては冷徹に非常で完全に消滅するまで攻撃を止めない。必殺技は、黄金に輝く拳の波動で相手を攻撃する『ヘブンズナックル』だ。

「オファニモン様！大変です！！」

「何事ですか！？」

エンジェモンの叫びを聞いたオファニモンはただ事でない気が付き、慌てて椅子から立ち上がるとエンジェモンに質問し、エンジェモンはオファニモンとブラックに驚愕の事実を伝える。

「街の中に例の組織の人間達と思われる人間が二十名ほど現れ、幼年期のデジモン達を殺し続けています！！更に驚く事に殺された幼年期のデジモン達のデジタマが消滅しているそうです！！」

『なっ！？』

エンジェモンが告げた事実にオファニモンとブラックは、顔を困惑と驚愕に染めながら声を上げた。

デジタマの消滅。それが意味するのはデジモンの完全消滅。しかも殺されているのは善悪の区別が無い幼年期のデジモン達。

「クッ！！奴らめ！まさか交渉の途中で攻めて来るとは！！赦さん！！」

ブラックは管理局の行動に怒りを顕にした。

管理局の行動はブラックが最も嫌う意味がない虐殺と、卑怯な行動に当たったのだ。

オファニモンもブラックと同様に怒りに顔を染めるが、何とか冷静に立ち戻り、エンジェモンに命じる。

「すぐに幼年期デジモン達を安全な場所に避難させるのです！そして街の周りを警護していたデジモン達を全員呼び戻し、侵入者を排除するのです！もはや話し合いなどと呼べる状況では在りません！幼年期デジモン達を全力で護りなさい！！」

「ハッ！！」

オファニモンの言葉にエンジェモンは頷き部屋を出て行くと、ブラックも部屋を出ようとするが、オファニモンが後ろから声を掛けてくる。

「待ちなさい。貴方はあの子の下に向かうべきです。貴方があの子を大切に想っているのなら」

「・・・・・・言われなくても奴の所に向かう。アイツに何か在ったら、あいつ等に何を言われるのか分からんからな」

オファニモンの言葉にブラックは一瞬足を止めるが、すぐに足を再び進め部屋を出て行く。

その様子を見たオファニモンは苦笑を口元浮かべながらブラックの背を見つめる。。

「素直ではないですね。本当は心配でしょうが無いのに」

そうオファニモンは呟くと、自身も罪の無い幼年期デジモン達を護る為に戦場へと足を進めるのだった。

火の手が次々と街の中の路地裏。

その場所には恐怖に体を震わせるヴィヴィオと、その手の中に居るレッサーモン、キャロモン、そして唸り声を上げるギルモンが隠れていた。

「コワイヨ〜！コワイヨ〜！！」

「みんな、みんな、消えていった・・・・・・僕達は死んだらデジタマに戻る筈なのに・・・・・みんな消えちゃったよ！！」

レッサーモンとキャロモンはヴィヴィオの腕の中で震えながら、

恐怖に満ちた声を上げた。
ヴィヴィオ達はあれから仲良く街の中を歩き続けていると、突如として武装した二十名以上の人間が現れ、次々と手の持ったデバイスから魔法を放ち、幼年期デジモン達を殺していったのだ。
その上、殺されたデジモン達は一瞬デジタマに戻るが、すぐにデジタマは消滅し、それを目撃したレッサーモンとキャロモンは恐怖に震える事しか出来なかった。局員の攻撃を受けたら、完全な死しか待ってないと分かってしまったからだ。

「ヒック、グスッ、パパ、早く来てよ。怖いよ、ヴィヴィオじゃない誰かがヴィヴィオの中から出て来ちゃうよ！」

ヴィヴィオも恐怖に震え涙を流すが、レッサーモンとキャロモンとは違って、自分自身に恐怖を感じていた。確かにレッサーモン達と同じ様にヴィヴィオもデジモン達が次々と殺され続ける事に恐怖を覚えたのだが、次々と殺され続け逃げ惑うデジモン達を見た時に、ヴィヴィオが感じたのは純粋な怒り。
何故かはヴィヴィオにも分からなかったのだが、ヴィヴィオは確かに自分が見てしまった光景を何処かで見た事が在ると思った瞬間に、自分の中に在る感情に気がついたのだ。
その感情は無抵抗の殺し続ける人間達の姿に、激しく振るえ、ヴィヴィオの感情を跳ね除けて出て来ようとヴィヴィオの中で今も暴れ続けている。ヴィヴィオはその感情を出してはいけないと本能的に気が付き全力で抑えているのだが、恐怖に寄って感情を抑えられなくなって来たのだ。
その様にヴィヴィオが自分の中に在る感情と戦っていると、路地裏の入り口の方から足音が響き、ヴィヴィオとレッサーモン達は恐怖に震え、ギルモンが更に険しい表情を深めて足音の方を見つめた瞬間に、デバイスを構えた二人の人間が姿を現す。

「ムッ？人間の子供？この世界にも人間が居たのか？」

「その様だな。だが、例の生物達に関わる者は全て殺せと言う命令だし、辛いが殺すしかない」

ヴィヴィオの姿を見た二人に武装局員は険しい表情をしながら話し合うと、ヴィヴィオ達にデバイスを構え出し、殺傷設定の魔法をヴィヴィオ達に向かって放とうする。

しかし、その直前にギルモンが局員達に向かって口から強烈な火炎球を放つ。

「皆を傷つけさせない！！ファイヤーボール！！」

ーーードゴン！！

「クッ！！気をつけろ！コイツは他の奴らとは違うぞ！！」

ギルモンが放ったファイヤーボールを横に飛びながらかわし、局員は別の方向に飛んだ局員に向かって叫ぶ。

別の局員は叫んだ局員の言葉に頷くと、ギルモンに向かってデバイスを構えようとするが、その前にギルモンが駆け出し、局員に向かって腕を振り下ろす。

「ロックブレイカーー！！」

ーーーガアンッ！！

「グッ！確かに！」

ギルモンの放ったロックブレイカーを防御魔法で受け止めながら、

局員は同意を示し、ギルモンに向かって射撃魔法を放とうとするが、ギルモンはそうはさせ無いと言う様に、尻尾を全力で振るいデバイスを弾き飛ばす。

ーーーバアン！！

「しまっ！！」

「お前達は赦さないぞ！！」

デバイスを弾き飛ばされた局員は声を上げるが、ギルモンは怒りの叫びを上げながら炎を纏わせた爪を、デバイスを吹き飛ばされて無防備に成ってしまっている局員に向かって振り下ろす。

「ファイヤーロックブレイカーーーー！！！！」

ーーードゴオン！！

「グアッ！！！」

ギルモンの放ったファイヤーロックブレイカーを受けた局員は苦痛の声を上げながら吹き飛ばされ、壁にぶつかり気絶した。

それを確認したギルモンは残っている局員に怒りの視線を向ける。

「お前達は罪の無いデジモン達を殺した！！絶対に赦さない！！」

「グッ！！」

ギルモンの叫びを聞いた局員はギルモンの気迫に押され、後ずさりを始めた。

ただ叫ぶだけだったら局員は怯みはしなかっただろう。だが、ギルモンの叫んだ瞬間にギルモンに重なる様に白い鎧を身に付け、背中に赤いマントを背中に羽織った騎士の姿が局員には見えたのだ。
しかし、ギルモンはその事には気が付かず、怯んでいる局員に向かってファイヤーボールを放とうとするが、上空から別の局員が姿を現し、ヴィヴィオ達に向かって射撃魔法が撃ち出す。

「先ずは弱い方だ！！」

ーーーズドン！！

「しまっ！！ヴィヴィオォォォォォーーーー！！！」

ヴィヴィオに向かって射撃魔法が放たれたのを見たギルモンは慌てて背後を振り返り、ヴィヴィオ達に向かって駆け出すが、間に合わずに射撃魔法がヴィヴィオに当たろうとする。
しかし、ヴィヴィオに当たる直前に、ヴィヴィオの腕の中で震え続けていたレッサーモンとキャロモンは、決意に満ちた表情で互いに頷き合うと、射撃魔法に向かって飛び出し、ヴィヴィオの盾になる。

ーーードゴン！！

『ギャアッ！！！』

「ッ！！レッサーちゃん！キャロちゃん！」

射撃魔法を喰らったレッサーモンとキャロモンは悲鳴を上げて落下し、二人が倒れるのを見たヴィヴィオは慌ててレッサーモンとキャロモンに向かって手を伸ばすが、手が届く直前で二体はデータ粒

子に変わり消滅するとデジタマが出現した。

ーーーパアァァァーン！

「アッ・・・・・・アアアア

上空に浮かぶ局員の言葉を聞いたヴィヴィオは慟哭の上げるのを止めると低い声で、上空に浮かぶ局員に質問するが、局員はヴィヴィオの言葉を聞いても訝しげ表情を浮かべるだけだった。
その様子を見たヴィヴィオは自身の首に下げているディーアークに手をやり、体から虹色の魔力光を発生させ始め、地上で様子を伺っていた局員は驚愕と恐怖に染まった表情を浮かべながら、ヴィヴィオに恐怖に満ちた視線を向ける。

「馬鹿な・・・・・・冗談だろ?・・・・・・何で・・・・・・何でこの世界に居るんだよ!?」

「おい、如何した?」

突如として震え始めた地上に居る局員の姿に、上空に浮かぶ局員は疑問の声を上げるが、地上の局員は恐怖に震えるばかりだった。
その様子を見たヴィヴィオは地上の局員と上空に浮かぶ局員に怒りの視線を向け、怒りの叫びを上げる。

「絶対に赦して上げない!!貴方達だけは!!」

ーーーギュルルルルルルルッ!!!

ヴィヴィオが怒りの叫びを上げた瞬間、ヴィヴィオの持つディーアークから虹色のデジコードが飛び出しヴィヴィオを覆うと共に、ギルモンの体からも蒼いデジコードが出現し、虹色と蒼い繭の様な物が二つ出現する。

《ＥＶＯＬＵＩＯＮ》

「ギルモン進化!!!」

虹色の繭の中から電子音声が響いた瞬間に、蒼いデジコードの中からギルモンの叫び声が響き、蒼いデジコードは巨大化を始め、路地裏を粉砕するほどの大きさに変わり中から巨大な赤い体、発達した筋肉、ギルモンの進化系、『深紅の魔龍』がその姿を現した。その名も。

「グラウモン！！！」

グラウモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／魔龍型、必殺技エキゾーストフレイム、プラズマブレイド

『深紅の魔龍』と称されるギルモンの進化系、ギルモンの頃に在った幼さは無くなり、より凶暴で野性的に成っている。グラウモンの咆哮は大地を揺るがすほどの威力が在ると言われている。必殺技は、爆音を鳴らせながら、強力な火炎を相手に向かって吐き出す『エキゾーストフレイム』と、両腕のブレードに雷を纏わせ、相手を切りつける『プラズマブレード』だ。

「グアアァァァァァァァーーーーーーーー！！！！！！！」

『ヒイッ！！』

グラウモンの上げた強大な咆哮を聞いた局員達は恐怖の声を上げ、その場から離れようとする。

しかし、その直前に上空に浮かぶ局員の前に、黒いバリアジャケットを身に纏い、背中に翼の様な物を備え、両腕に爪の様な刃を三本備えた手甲を装備した、金色の髪に赤と緑のオッドアイを持った二十代前ぐらいの女性が現れる。

ーーービュン！！

「なっ！？誰だお前は！？」

女性の姿を見た局員は疑問の叫びを上げるが、女性は答えずに、局員に向かって右拳で局員の腹を殴り付ける。

ーーードン！！

「ガアッ！！」

バリアジャケットを身に纏っている筈なのに、女性の拳を受けた局員は体を九の字に曲げながら、苦痛の声を上げた。

「今のはレッサーちゃんの分！！」

「・・グウッ！・・何！？」」

女性の言葉を聞いた局員は苦痛に呻きながらも疑問の声を上げるが、女性は関係無いと言わんばかりに今度は全力で局員をグラウモンに向かって蹴り飛ばす。

「これがキャロちゃんの分！！」

ーーードゴオン！！

「ガアァァァァァーーーー！！」

女性の蹴りを受けた局員は苦痛の声を上げながら、グラウモンに向かって吹き飛び、自身に向かって来る局員の姿を確認したグラウモンは右腕を振り上げ、局員に向かって全力で振り下ろし、地面に

叩き付ける。

「そしてこれが他のデジモン達の分だッ！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオン！！

「ギャアアアアアアアアーーーーーー！！！！！」

グラウモンに寄って地面に叩き付けられた局員は苦痛の叫びを上げた。

無理も無いだろう。グラウモンに寄って地面に叩き付けられた局員は両腕が吹き飛び、左足も同様に吹き飛ばされ、残っている右腕にしても辛うじて繋がっていると言う状態なのだから、寧ろ生きている方が不思議である。

しかし、その様な状態に成っても女性とグラウモンの怒りは収まらず、更なる攻撃を局員に向かって加えようとした瞬間に、次々と女性とグラウモンの周りに十名ほどの武装局員が姿を現し、女性とグラウモンに向かってデバイスを構える。

「これ以上はやらせん！貴様らも排除してやる！！」

「・・・・・・・・・うるさいよ」

「なっ！きさッガアアッ！！」

女性の言葉を聞いた一人の局員は怒りの声を上げようとするが、その前に女性は瞬時に近付き、局員の腹に向かって膝蹴りを打ち込む。

それを受けた局員は苦痛の声を上げ、他の局員達は助けようとデバイスを女性に向けるが、魔法を女性に放つ前に、グラウモンが口

から爆音を上げながら強烈な熱線を吐き出した。

「エキゾーストフレイム！！！」

ーーードグオオオオオオオオオン！！

「避けろオォォォォォーーーー！！」

グラウモンのエキゾーストフレイムを見た局員達は慌てて移動し、エキゾートフレイムの範囲から逃げだした。

そして一人の局員はグラウモンに向かってデバイスを向けて、魔法を放とうとするが、その直前に、突如として腹から三本の刃が飛び出す。

ーーードスッ！！

「ガアアアッ！！！」

「消えろ」

ーーービシャァァァァァァーーーー！！

苦痛の声を上げる局員に向かってブラックはドラモンキラーの刃を背中に突き刺しながら呟き、突き刺している方の腕を振り上げ、局員を両断する。

ブラックは自身に両断した局員の血が降りかかる事も気にせずに、女性とグラウモンに険しい視線を向け、女性に告げる。

「・・・・・・駅に行っていろ。俺はこいつ等を一人残らず片付けた後にすぐに行く。お前達が殺す価値も無い者達だ」

「・・・・・・・・うん・・・・・・行こう、グラちゃん」

ブラックの言葉に女性は考える様な表情を浮かべるが、表情を悲しげに変えるとグラウモンに声を掛け、駅の方に向かい出した。

それを確認したブラックは恐怖に震える局員と、地上で虫の息に近い局員に目を向け、息が詰まるほどの殺気を局員達に向けて放ち始める。

「お前達は絶望の引き金を引いた。もはや後戻りは出来まい。一人残らず殺してやる！！！」

『ヒイイイッ！！』

ブラックの殺意に満ちた言葉を聞いた局員達は恐怖の声を上げ逃げようとするが、一人残らずブラックに殺され、局員達の血が地上へと降り注ぐのだった。

火の街に在る駅の入り口ではアルハザードからやって来たリンディ達が、火の手が次々と上がる街を見た事で、全員が絶望に染まった表情を浮かべていた。

「・・・・・・まさか、管理局は引いてしまったんですか？絶望への引き金を」

「・・・・・・間に合わなかった」

火の手が上がる街を見たなのはが言葉を呟くと、リンディは絶望の表情を浮かべながら膝を付き、他の者達も同様に膝を付いている

と、気絶したヴィヴィオを腕の中に抱え、横にギルモンを伴ったブラックがリンディ達の方に向かって歩いて来る。

「ブラック様！これは！？」

ブラックの姿を見たルインは慌ててブラックに駆け寄り、他の者達もブラックに顔を向ける

自身に視線が集中したのを確認したブラックは頷き、自身の腕の中で眠っているヴィヴィオを見つめながら告げる。

「人間とデジモンの戦争が始まった。ただそれだけだ」

『ッ！！！』

ブラックの告げた事実に全員が驚愕の表情を浮かべ、火の手が上がる街に絶望の表情を向けるのだった。

絶望への引き金、目覚めてしまった王と赤き魔龍！！（後書き）

次回予告

管理局は引いてしまった絶望への引き金を。

管理局の艦艇が近づいて来る事を知った三大天使は、最後の選択を下す。

次回、漆黒の竜人と少女、『崩壊！デジタルワールド！！』

絶望は始まった、悲しき戦いが始まる。

崩壊！デジタルワールド！！

管理局の局員達にデジモン達の虐殺が行なわれた日から一夜明けた翌日、ブラック達と三大天使は向かい合いこれからに付いて話し合っていた。

「・・・・・もはや、戦争は止められません。今回の事は四聖獣とロイヤルナイツも知ってしまっています。彼らの中には理性的な者達も居ましたが、大多数は報復を決意しました」

『ッ！！』

オファニモンが告げた事実にブラック達は驚愕に目を見開き、リンディは慌ててオファニモン達に向かって叫ぶ。

「待って下さい！今回の事は確かに人間側の方に非は在ります！ですが、これではルーチェモンの思い通りでは無いですか！如何か報復は待って下さい！！」

「・・・・・我々も同様の事を報復を決意した者達に言いました。ですが、『罪の無いデジモン達を殺した連中など護る価値は無い。人間など我らが全て滅ぼす』と言うのが全員の見解です」

『ッ！！』

リンディの叫びにオファニモンは顔を俯けながら報復を決意した者達の言葉を告げ、全員が再び驚愕の表情を浮かべる。

報復を決意した四聖獣やロイヤルナイツ達も多少は人間に寛容だった筈だが、今回の事で人間を見捨てたのだ。確かに今までは管理

世界に現れるデジモン達の事で、その四聖獣やロイヤルナイツ達も申し訳無いと想っていたからこそ管理局の傲慢の行動にも耐えていたし、自分達の護るデジモン達に被害も無いと言う事で管理局に手を出さなかった。
だが、今回の管理局の行動で罪の無いデジモン達が多く殺された上に、デジタマさえも消滅してしまった。其処までされればいかに寛容に成っていた者達でも怒り狂うだろう。
現に、三大天使も管理局とは穏便に済ませようとしていたが、今回の管理局の虐殺により、三大天使も内心では怒り狂っているのだ。リンディやなのは、ティアナ、そしてクイントは自分達に協力している事で別であるが、この場に別の人間が居れば消滅させてもおかしくないほどの怒りを。

「更に最悪な情報が入って来た。此方の世界に向かっている管理局の艦艇数隻には巨大な魔導砲らしき物が装備されているらしい」

「まさかッ！！アルカンシェルをッ！！」

ケルビモンの報告にクイントは驚愕の声を上げ、他の者達も信じられないと言うように顔を見合わせた。。
管理局が保有する最強の魔導砲を全ての艦が装備していると成れば、幾らデジタルワールドとは言え、確実に消滅するだろう。
驚愕の表情を浮かべるブラック達にオファニモンは頷き、悔しそうな表情を浮かべた。

「もはや、如何なる方法を持ってもデジモンと人間の戦争を回避する事は不可能です。無念ですが」

オファニモンが悔しそうな声を上げるのも当然だろう。
オファニモン達三大天使デジモン達は、人間とデジモンの戦争を

回避する為に、全力で努力し続けていたのに、その努力も今回管理局が行なった非道に寄って全てが一瞬で無に成ってしまったのだから。オファニモンだけではなくセラフィモン、ケルビモンの同様の表情を浮かべ、ブラック達も悔しそうな表情を浮かべた。

自分達はデジモンと人間の戦争を回避する為に動いていたと言うのに、管理局が行なった馬鹿な行為の性で全てが無駄に成ってしまったのだ。悔しくなるのも当然だろう。

「・・・・・本当に戦争を回避するのは無理なんですか？」

ガブモンはオファニモンに顔を向けて質問するが、オファニモンは頷きガブモンの言葉に答える。

「無理です。もはや私達の言葉でも四聖獣やロイヤルナイツは止まりませんでした。恐らく既に自分達のデジタルワールドを離れ、此方の世界に向かっているでしょう」

「最悪です。四聖獣やロイヤルナイツが一斉に動き出すなんて、悪夢以外の何物でもないですよ」

オファニモンの言葉を聞いたルインは恐怖に震えた。

四聖獣。ロイヤルナイツ。どちらもデジモン達の中で最強の名前を持つに相応しいデジモン達に与えられる最強の称号。そのデジモン達が大挙として押し寄せてくると成れば管理局に、いや全ての次元世界に今までに無い程の危機が迫っていると言う事だ。闇の書の悲劇やロストロギアの悲劇など笑い話に変わってしまうほどの。

「貴方達にはそれを止めて貰いたいのです。そしてルーチェモンの野望を止められるのは貴方達だけです」

そう、オファニモンはブラック達に声を掛けると共に右腕を伸ばし、二十の鎧の様な物を出現させた。
その鎧を見たブラックは驚愕の表情を浮かべ、オファニモンに向かって叫ぶ。
「それは伝説の十闘士のスピリットッ！！」
『ッ！！！』
ブラックの言葉にリンディ達は驚愕の表情を浮かべ、オファニモンの腕の前に浮かんでいる二十個のスピリットを見つめた。
伝説の十闘士。その者達は嘗て遥か古代で起きたルーチェモンの暴走を止めた十人の戦士達。そして再びルーチェモンが復活した時に人間と一つに成る事で、デジタルワールドを救った英雄達なのだ。
「この十闘士のスピリットを貴方達に託します。このスピリットは必ずルーチェモンとの決戦の時に力を貸してくれる筈です」
そう、オファニモンは告げるとリンディに腕に向かって二十個のスピリットを渡し、ブラック達に背を向け移動を開始し、それを見たティアナは慌ててオファニモン達に声を掛けた。
「何処に行くんですか！？」
「・・・・このデジタルワールドを放棄します」
「何だと！？」
オファニモンの言葉にブラックは驚愕の声を上げた。
オファニモン達に取って、このデジタルワールドは掛け替え無い

の故郷だと言うのに、そのデジタルワールドを放棄すると宣言したのだから当然だろう。
しかし、オファニモン達はブラックの驚愕の声を聞いても足を止めずに進め、理由を話し出す。

「戦って護れば、確かにこのデジタルワールドは護れます。ですが、必ず多くのデジモン達が死に絶え、デジタマも消滅するでしょう。これ以上、デジモン達を、同胞達の消滅など絶対にさせません。その為にもこの世界に居るデジモン達を他のデジタルワールドに送ります」

「・・・・・・故郷を捨ててでもですか？」

「・・・・・・命が護れるのなら、私達は故郷を捨てた大罪人と呼ばれても構いません。本当に護るべきなのは世界ではなく、その世界の中に生きる命達なのです」

なのはの悲しげな質問にオファニモンは悲しみに染まった表情を浮かべて答えた。
それを見たリンディ達はオファニモンの本当の思いに気が付いた。オファニモン達だって悔しいのだ。たった一つの組織の暴走の為に、自分達の故郷を捨てなければいけない事が、真実を知っている為に尚更悔しいのだ。
それを見たリンディ、クイント、なのはなど管理局に所属していた者達は、目の前のオファニモン達に本当に申し訳ない気持ちに成った。

（これが今の管理局なんですか？ただ静かに暮らしていた者達に、平穏に平和に暮らしていただけの者達にこの様な仕打ちを行なうなんて、何が世界の平和の維持と管理ですか！こんな静かに暮らして

いた者達にこの様な非道を行なわなければ作れない平和など滅んだ方が良い！！死んでいった命達は何の罪も無かったのに！）

リンディは悲しみに満ちた叫びを内心で上げた。

デジタルワールドは本当に素晴らしい世界だった。自分達世界に否定される者達さえも、オファニモン達は暖かく受け入れてくれて、リンディやルインはデジタルワールドを何時の間に故郷の様に想う様に成っていたのだ。もちろんティアナやクイント、そしてなのはに取ってもデジタルワールドで暮らした事が在る者達もリンディやルインと同じ気持ちだった。

その世界が滅び様としているのに、自分達は何も出来ない。何かを行なえば迷惑が掛かるのはオファニモン達で在る為に、その様な事は絶対に出来ないのだ。

「・・・・・私達は本当に無力です」

悔しそうな表情を浮かべたリンディの言葉に、その場に居る全員が同意を示す様に涙を流すのだった。

その頃、ミッドチルダに在る一つの家に中でゲンヤ・ナカジマは、なのはから通信用にと貰った紫色の宝石を手に持ち、アルハザードに居るフリートから現在の状況を聞いていた。

「・・・・・ふざけるな！！一体何考えていやがるんだ本局の連中は！？交渉途中の世界に攻撃を仕掛けて虐殺を行なっただと！！そんな事をしたらどうなると思っていやがるんだ！！」

ーーードン！！

フリートから全ての情報を聞いたゲンヤは怒りの叫びを上げ、家の壁に殴り付けた。
管理局の本局が行なった行為は、全ての真実を知っている者達からすれば最悪の道筋への引き金に間違い無いのだから、その最悪を止める為にデジモン達や自身の妻と仲間達は全力で行動していたと言うのに、管理局の本局の者達はそれを全て一瞬で無にしてしまったのだから、怒りを憶えるのも無理は無い。

『馬鹿を超えたとしか言えません。ハッキリ言って管理局の行動のせいでデジモンと人間の間に修復不可能なほどの亀裂が出来てしまいました。これでは例えルーチェモンや倉田の事が明らかに成っても、デジモン達は人間達を赦さないでしょう』

「ああ、俺も同感だ。そしてその犠牲に成るのは本局の上層部でも局員でもねえ、犠牲に成るのは何も知らねえ一般人と来ていやがる。しかも絶対に真実を伝えず、デジモン達が悪いと叫び続けるだろうな」

『先ず間違いなくそうなるでしょう』

険しい表情を浮かべたゲンヤの言葉にフリートは同意を示す。
管理局がデジモンの虐殺などを行なったなどと絶対に発表する筈は無い。そんな事を発表したら管理局は一瞬で瓦解する上に、虐殺を指示した上層部達は全員戦犯として逮捕される。その様な事を管理局が認める訳が無いだろう。もしデジモン達が報復を行なったら、その瞬間にデジモン達が先に仕掛けて来たと発表し、デジモンが全ての原因だと発表するのだろう。

「全くよ。幾らルーチェモンとか言うデジモンに上層部が操られているとは言え、虐殺を指示して来た事に疑問もいだかねぇ上に虐殺

を行なうとは、管理局は本当に馬鹿に成っちまったな」

『全くですよ。分かっていると想いますが、十分に気を付けて下さい。既に他のデジタルワールドの最強のデジモン達が向かっていると言う情報が入っています。行き成りミッドに現れる可能性も在りますからね』

「ああ、分かっているさ。警戒だけは行なって置く・・・・・・例の件は頼んだぜ」

『・・・・・・了解しました』

ゲンヤの言葉にフリートは一瞬間を開けるが、すぐに了承し、ゲンヤとの通信を切った。

それを確認したゲンヤは窓の方に険しい表情を向ける。

「もう止まらないだろうな。この戦争はよう」

窓の方を見つめながらゲンヤは呟くと、これから起きる悲しい戦いを想い、悲しみに満ちた視線を窓の外の風景に向けるのだった。

火の街の外。

その場所でヴィヴィオとギルモンは土を盛り上げ、何かを作ろうとしていた。

そしてヴィヴィオとギルモンが作ろうとしている物が、完成に近づいて来ると、リンディとルインがヴィヴィオとギルモンの傍に寄って来る。

「ヴィヴィオ、此処に居たのね」

「何を作っているんですか？ギルモンちゃんと一緒に？」

ヴィヴィオとギルモンが何かを作ろうとしている事に気が付いたルインがヴィヴィオに質問すると、ヴィヴィオは悲しみに満ちた表情をリンディとルインに向ける。

「レッサーちゃんとキャロちゃんのお墓を作っているの」

『ッ！！』

ヴィヴィオが告げた言葉にリンディとルインは驚愕の表情を浮かべるが、ヴィヴィオは気にせずにギルモンと一緒にお墓を作り続ける。

「・・・・・ヒック、エグッ、ヒック、初めての外の世界でのお友達だったのに、ヴィヴィオを護る為に二人は・・・ヒック、グスッ、ヒック、ゴメンね。ゴメンね。ヴィヴィオが居なければ二人は死なずに済んだかも知れないのに、ゴメンなさい」

お墓を作る手を止め、ヴィヴィオは悲しみに涙を流し、ギルモンも自身の目に涙を浮かばせ始めると、リンディとルインはヴィヴィオを強く抱き締める。

「違うわ！ヴィヴィオは絶対に悪くない！悪いのは他の連中よ！」

「そうです！ヴィヴィオちゃんは悪くないです！絶対に！」

「ヒック、ウェ、ウワアァァァァァァァーーーーー！！レッサーち

ゃん！キャロちゃん！ウワァァァァァァン」

ヴィヴィオは自身の抱き締めてくれるリンディとルインにしがみ付き、悲しみに泣き声を上げ続けた。初めての外の世界で、出来た友達を失った事はヴィヴィオの心に深い傷を残したのだ。その傷は絶対に治る事は無い事にリンディとルインは気が付き、ヴィヴィオの負った傷を想って悔し涙を流す。

その様子を離れた所で見ていたなのは、クイント、ガブモン、ティアナ、クダモン、そしてブラックはヴィヴィオに深い傷を与えた原因を絶対に赦さないと誓うのだった。

そして数日が経ち、全てのデジモン達を他のデジタルワールドに送り終え、デジタルワールドの中に残っている者達は、三大天使とブラック達だけに成り、駅のホームで別れの挨拶をしていた。

「やはりお前達は残るのだな？」

「ええ、この世界の守護者として私達はこの世界と共に滅びます」

「・・・・・・貴女達が死んだ後に現れるデジタマはどうなるのですか？」

「この世界が滅びると共に、他のデジタルワールドに飛ばされるだろう。最も例の魔導砲にまでデジタマを消滅させる力が在れば我らも消滅するだろうがな」

リンディの質問にセラフィモンは決意に満ちた表情を浮かべて答えた。

分かっているのだ。既にアルカンシェルにもデジタマを消滅させる力が加わっている事にも、出なければ本当の意味でデジタルワー

ルドを消滅させる事は出来ないだろう。
だが、それでもセラフィモン達はこの世界に残り、この世界と運命を共にするつもりだった。護る事が出来なかった責任を取る為に。
「もはや、私達が何を言っても四聖獣とロイヤルナイツは止まりません。勝手かも知れませんが、彼らを止めて下さい。貴方達は最後の希望です」
そうオファニモンが言うとティアナにディーアークに腕を向け、セラフィモンはなのはのディーアークに、そしてケルビモンはヴィヴィオのディーアークにそれぞれ腕をむけ、自分達の力を送り始めた。
「他の世界にデジモンを送った事で力は微々たる物しか残っていないが、我らの力を全て君達のディーアークに宿して置く」
「これが我らが出来る最後の事だ。如何かデジモンと人間の未来を護ってくれ」
力を送り終えたセラフィモンとケルビモンはブラック達に告げると、ブラック達に背を向け外に出て行く。
最後に力を送り得たオファニモンは不安なそうな顔をしているヴィヴィオに笑みをを向ける。
「死んでいった二体のデジモン達の分まで生きて下さい。辛いでしょうが、あの二体の分まで生きるのがあの子達の願いです」
「・・・・・・はい」
オファニモンの言葉にヴィヴィオは悲しみの表情を浮かべるが、

オファニモンの言葉に静かに頷く。
それを見たオファニモンは悲しげな笑みをブラック達に向け、最後の言葉を伝える。
「如何か世界に生きる命達の未来を護って下さい。それでは」
オファニモンはブラック達に告げると、セラフィモン達が向かった方向に足を進める。
それを見たブラック達はオファニモンの姿が見えなくなるまでその場に留まり、オファニモンの姿が見えなくなるのを確認すると、ブラックは止まっているトレイルモンの方向に顔を向け、リンディ達に告げる。
「行くぞ。奴らの想いを無駄にしない為にも」
『はいっ！！』
『ええっ！！』
ブラックの言葉にリンディ達は頷き、トレイルモンに乗り込み、第二の故郷であったデジタルワールドから去って行った。
それを外から三大天使達はデジタルワールドから去って行くトレイルモンの姿を見つめ続けるのだった。

数時間後。蒼き星一デジタルワールドの周りを五隻の管理局の艦艇は囲みこみ艦艇に装備したアルカンシェルをデジタルワールドに向けると、それぞれエネルギーをチャージし始め、司令艦の中に乗っている先日の虐殺を命じた提督が各艦に通信を送る。

『全艦に告ぐ。目の前の世界は私が送った和平の使者を一人残らず殺した大罪人達の住む世界の上に、多くの管理世界があの世界に住んでいる生物達の脅威に晒されている。我々は管理世界の平和を護る為にも、目の前の世界を滅ぼすのだ。これは多くの人々を護る為の行為だ。我々管理局の使命は平和の維持と管理。その為にも目の前の世界を滅ぼす！アルカンシェル発射！！』

司令艦が命令を発した瞬間に、全ての艦に装備されたアルカンシェルはデジタルワールドに向かって発射され、それぞれの魔力弾がデジタルワールドに直撃し、空間の歪みが発生すると、デジタルワールドは空間の歪みの中へと消え、消滅した。

『目標の消滅を確認しました！』

『フフフフフフッ、アルカンシェルの五発同時発射はやはり、世界を滅ぼせるほどだったか。さあ、本局に引き返し、全管理世界に脅威は去ったと知らせるのだ！！』

指令艦の言葉を聞いた他の艦艇は全て方向転換を行い、本局へと帰って行った。

数日後の第九管理世界では管理局の全管理世界に送られた一斉放送が世界中に放送され、人々は一人残らず放送を見ていた。

『我々管理局は全管理世界に現れ続けた謎の生物達の住んでいる世界を発見し、平和的に解決する様に交渉したのですが、その世界は我々が送った交渉人達を一人残らず殺したのです。我々は人々の平和の為にもその世界を滅ぼすと言う、苦渋の決断を行いました。で

すが、人々の平和の為には仕方が無かったのです』

映像に映っている上層部の一人だと思われる言葉に、住民達は一瞬悲しげな表情を浮かべる。

『ですが、ご安心下さい。もうその世界は無い為に今まで在った謎の生物達の被害はもう起こりません！我々管理局は大罪を背負っても管理世界の人々を護ります！全ては平和の為に！』

『ウオォォォォォォーーーーー！！！』

上層部の宣言を聞いた住民達は喜びの声を上げた。彼らも常に襲い掛かる謎の生物達の恐怖に怯えていたのだが、その脅威が無くなった事を喜んでいるのだ。例えそれが偽りの事実だったとしても。

「ママ、もう毎日怯えなくても良いの？」

「ええ、管理局が私達を護ってくれるから安心よ」

街中で放送を聞いていた少女の質問に、母親と思われる女性は笑みを浮かべながら頷き、少女は喜びの表情を浮かべた。

それを見た母親は少女を抱き上げ、家に帰ろうとするが、突如として気温が凄まじいほど上昇し始め、少女は母親に暑そうな表情を向ける。

「ママ、何か暑いよ」

「そうね。一体如何したのかしら？今はそんなに気温が上がる季節でもないのに？」

少女の言葉に母親は同意を示し、空の太陽の方に目を向けた瞬間に、上空から突如として爆音が響き、太陽のプロミネンスに匹敵するほどの熱量が街全体に襲い掛かり、人々や建物を全て焼き尽くした。

これが後の歴史に置いて全次元世界を巻き込むことに成る『デジモン戦争』の始まりを告げる、『第九管理世界消滅』の始まりだった。

崩壊！デジタルワールド！！（後書き）

次回予告

第九管理世界に現れる次々現れる四聖獣とロイヤルナイツ。

それに立ち向かう管理局員。

だが、四聖獣とロイヤルナイツ達の前に無力。

誰もが絶望を浮かべる中、漆黒の竜人は姿を現す。

次回、漆黒の竜人と少女、『降臨！！四聖獣とロイヤルナイツ！！』

絶望が始まる。愚か者達が引いた絶望の戦いが。

降臨！！四聖獣とロイヤルナイツ！！（前書き）

ヴィヴィオのディーアーク設定

ヴィヴィオが持つディーアークは他のディーアークと違って、ヴィヴィオを二十歳前後まで成長（進化）させる事が出来る。
進化したヴィヴィオの力は完全体の中堅クラスの力が在り、バリアジャケットの形はブラックウォーグレイモンの姿を元にしている。
必殺技は虹色のガイアフォース。他、高速学習で見覚えたデジモン技や魔導師の魔法を使用。

降臨！！四聖獣とロイヤルナイツ！！

管理局の本局の一室では管理局に不審を持っているはやて、守護騎士達、腕に何かを抱えているフェイト、そしてリンディの息子であるクロノが集まり、管理局が発表したデジタルワールドに関する公式発表に付いて話し合っていた。

「先ず僕が調べた事から言うが、あの発表は殆ど嘘だ」

『ッ！！』

クロノが告げた事実にフェイト達は驚きに目を見開くが、クロノは気にせずに持っていた紙を全てフェイト達に配る。

配られた紙をフェイト達は慌てて読んで見ると、其処に記されていたのはデジタルワールドを崩壊させたレイザー提督の補佐官の証言が記されてた。

それを読んだ者達は全員顔を青ざめ、フェイトは持っている紙を破れるほど強く握り締める。

「・・・・こ・・ん・・・な・・・事って」

「・・・・何が和平の使者や、虐殺者の間違いやんか！！」

持っていた紙の文章を読んだはやては怒りの叫びを上げ、他の者達も同様に怒りの表情を浮かべた。

その文章にはデジタルワールドで行なった管理局の行動が事細かに書かれていた。レイザー提督、正確に言えばその後ろに居る上層部達の命令でデジタルワールドに住んでいた無抵抗のデジモン達を武装局員達が次々と殺し、その世界に居た強力な力を持つ者に武装

局員達は一人残らず報復され、死んだと書かれていた。

「・・・・その文章を書いた補佐官は、書き終えた後に三提督に文章を送り・・・・・自殺した」

『ッ！！』

「罪の意識に耐えられなかったと言うのが、僕や三提督に見解だ。当然だろうな、滅ぼされた世界には何の非も無かったんだ。ただ静かに暮らして居ただけの者達を一方的に虐殺した上に、その世界さえも滅ぼしてしまったんだから」

困惑に満ちた表情をしているフェイト達にクロノは冷静に告げるが、内心では怒り狂っていた。

無抵抗の者達を虐殺しただけでも大問題なのにその事実を隠す為にその世界を滅ぼしたと成れば、管理局が行なったのは最悪を通り越した行為なのだから、怒らない方が可笑しいだろう。

「そして絶対に報復が在ると言うのが、三提督の見解だ」

「えっ？何で？だってその世界は滅んだんでしょう？」

クロノの言葉にフェイトは疑問の声を上げ、他の者達も疑問の表情を浮かべた。

何せ、件の世界ーデジタルワールドは既に管理局の手に寄って消滅した為に、報復出来る者が居る筈は無いのだ。

その様にフェイト達は考えていたが、クロノは絶望的な事実を伝える。

「良く思い出して見ろ。滅ぼした世界は管理局がアルカンシェルを

撃ち込む時にさえ行動を起こさなかった。補佐官の報告書では強力な力を持つ者に武装局員達が殺されたと在る。なのに行動をしなかった。其処から考えられる事は、滅ぼした世界には既に生物達が居なかったと考えるべきだ」

『ッ！！』

クロノの言葉にフェイト達は漸く気が付いた。確かにクロノの言うとおり、武装局員達を簡単に殺せる者が居るのならば、管理局がアルカンシェルを撃ち込む前に何かの行動を行なう筈だ。なのに何も起きずにデジタルワールドを滅ぼす事に成功した。其処から考えられるのは生物が既に居なかったと言う事以外無いのだ。

その事に気が付いたフェイトは慌てて座っていた椅子から立ち上がり、クロノに顔を向け叫ぶ。

「だったらすぐに何とかしないと不味いよ！絶対に相手は怒っている！自分達の世界が滅ぼされたんだから！！」

「既に三提督が上層部達に伝えたが、上層部達は聞く耳さえも持たなかった。あの世界に居た生物達は全て滅んだ。それが管理局の公式発表だと言う事だ」

「・・・・そんな」

クロノが告げた事実にフェイトは絶望に染まった表情を浮かべ、他の者達も同様に絶望に染まった表情を浮かべた瞬間に、フェイトの抱えていた蒼と白の体に両手足と尻尾を持ったぬいぐるみの様なデジモンが突如として震え出しフェイトは疑問の表情をデジモンに向ける。

「うん？チビモン如何したの？」

チビモン、世代／幼年期？、属性／なし、種族／幼竜型、必殺技／ホップアタック

青と白に両手足と尻尾を持った幼竜型デジモン、幼年期にしては珍しく両手足と尻尾を持ったデジモン、寝る事が大好きで、目を離すとすぐに眠ってしまう。必殺技は、ぴょんぴょん跳ねながら相手に体当たりをする『ホップアタック』だ。

「・・・・・コワイ・・・・・コワイ・・・・・強い力を持った沢山の何かが凄く怒っている。こんなに遠くに離れているのに、凄く感じる」

「えっ？」

チビモンの言葉にフェイトは疑問の声を上げ、他の者達も訝しげな表情を浮かべてチビモンを見つめるが、チビモンは恐怖に震えながらフェイトに抱きつくだけで何も言わなかった。

その様子にフェイト達が困った様な表情を浮かべ始めた瞬間。

ーーービイィィィィィィィ！！　ビイィィィィィィィィィィィィィィィ！！！！

管理局の本局内部に非常警戒を伝える音が鳴り響き、クロノは慌てて自分の部下に通信を送り、状況を聞き始める。

「何が在った！？」

『提督！第九管理世界に再び謎の生物が出現しました！しかも信じられない事に、既に第九管理世界に半分以上の都市が全て消滅！現場に居る局員達は全員死亡したと報告が届きました！！』

『なっ！？』

モニターに映ったクロノの部下の言葉にその場に居る全員が声を上げ、クロノの部下は第九管理世界の映像を映し出す。

その映像には次々と凄まじい熱量で都市を焼き尽くしていく紅い体を持った四つ目の鳥の様なデジモン。口から放つ波動で人々や街を金属に変えていく虎を想わせる様なデジモン。強大な翼を背に持ち、ランスを腕に装備したデジモンはランスから次々と弾丸やレーザーを撃ち込み都市を破壊して行き、体を竜の様な鎧で覆ったデジモンは全身から竜の様なオーラを発生させ、次々と向かって来る局員達を消滅させて行く。

その他にも凄まじい数の白い鎧を身に着けた騎士の様なデジモン達に、そのデジモン達を束ねていると思われる赤と金色の鎧に右腕に盾の様な物を装備したデジモンまで居た。

その凄まじい力を映像越しとは言え、フェイト達は見た為に全員が恐怖に震え始めていると、フェイトのポケットから突如として光が溢れ、フェイトは慌ててポケットに手を入れ黄色の縁取りが在るディーアークを取り出し映像に向けた瞬間に、ディーアークから映像に映る全てのデジモン達の情報が飛び出した。

スーツェーモン、世代／究極体、属性／ウィルス種、種族／聖鳥型、必殺技／紅焔（こうえん）

デジタルワールドを守護する四聖獣の一体で、南方を守護し灼熱の火焔を操る紅い聖鳥型のデジモン。その強さはデジモンの中でも最高峰であり、もはや神そのものである。必殺技の『紅焔（こうえん）』は、太陽が爆発するような音とともに灼熱の渦で敵を包み込み焼き尽くす技だ。その威力は太陽が発するプロミネンスに匹敵する

バイフーモン、世代／究極体、属性／データ種、種族／聖獣型、必

殺技／金剛（こんごう）
デジタルワールドを守護する四聖獣の一体で、西方を守護し鋼の属性を持つ虎の姿をした聖獣型デジモン。その強さはスーツェーモン同様に神に匹敵するが、そのパワーはスーツェーモンを超えている。本来は中立的な存在。必殺技は、口から吐く波動で敵を金属と化し、体を錆びつかせる『金剛（こんごう）』だ。

エグザモン、世代／究極体、属性／データ種、種族／聖騎士型、必殺技／アヴァロンズゲート、ペンドラゴンズグローリー、ドラゴニックインパクト
デジタルワールドの聖なる守護者と呼ばれる『ロイヤルナイツ』の一体である聖騎士型デジモンであると同時に、全ての竜型デジモンの頂点に立ち『竜帝（りゅうてい）』と呼ばれている。また意思を持った巨大な翼『カレドヴールフ』と巨大なランス『アンブロジウス』を武器として持っている。必殺技は、『アンブロジウス』を相手に突き刺し、全ての特殊弾を内部に炸裂、破壊させる『アヴァロンズゲート』に、大気圏外まで上昇した後、『アンブロジウス』から高出力のレーザー射撃を行う『ペンドラゴンズグローリー』。そして大気圏外から急降下し、地表目掛けて体当たりする『ドラゴニックインパクト』だが、とてつもない衝撃波を伴い広範囲にダメージを与える効果も同時に持っている。

デュナスモン、世代／究極体、属性／データ種、種族／聖騎士型、必殺技／ドラゴンズロア、ブレス・オブ・ワイバーン
デジタルワールドの聖なる守護者と呼ばれる『ロイヤルナイツ』の一体である聖騎士型デジモン。竜の様な強靭なパワーとクロンデジゾイド製の竜鎧で全身を覆い無双の力を誇る。騎士道、武士道精神が強く、忠義や信義、礼儀を重んじる性格である。必殺技は、十闘士と同様の属性を持つエネルギー弾を放つ『ドラゴンズロア』に、エネルギーを巨大な飛竜へと変え辺り一面を一瞬にして破壊する『

ブレス・オブ・・ワイバーン』だ。

ナイトモン、世代／完全体、属性／データ種、種族／戦士型、必殺技／ベルセルクソード

重量級のクロンデジゾイド製の鎧で全身を覆った巨体の戦士型デジモン。甲冑を着込んでいても愛用の大剣を軽々と操るパワーを持っている。マスターの命令によっては、善にも悪にもなってしまうため悩んでいる。強大なパワーで自分の身長ほどもある大剣を軽々と振り回す。一度、主人と認めた者には忠実に従う頼もしいデジモンだ。必殺技は、敵めがけ、巨大な剣を振り下ろす『ベルセルクソード』だ。

ロードナイトモン、世代／究極体、属性／ウィルス種、種族／聖騎士型、必殺技／スパイラルマスカレード、アージェントフィアー

全てのナイトモンを統べる王であり『ロイヤルナイツ』の一員である聖騎士型デジモン。ロードナイトモンは善悪の基準よりも、自ら考える『正義』に忠実であり、その為なら手段は選ばない。腕には攻撃にも防御にも使える盾『パイルバンカー』を装備している。必殺技は、胸や肩からでている4本の刃で敵を切り刻む『スパイラルマスカレード』に、パイルバンカーを相手の体に当ててゼロ距離で相手に衝撃波を撃ち出す『アージェントフィアー』だ。

「ア・・・・・ア・・・・・ア・・・・・神に・・・・・あの世界の守護者達・・・・・嘘」

フェイトは自身の手に持ったディーアークが告げた第九管理世界で暴れているデジモン達の情報に、恐怖の声を上げ、他の者達もディーアークに表示された情報を見て恐怖に染まった表情を浮かべた。ディーアークに表示された情報が真実だとすれば、第九管理世界で暴れているデジモン達の目的は報復しか考えられない。管理局が行

った事のせいで、第九管理世界は戦場へと変わったのだ。
だが、フェイト達は何とか恐怖を振り払い、クロノはモニターに映ってる部下に向かって質問する。

「クッ！！上層部達は何と言ってる！？」

『上層部から動ける者は全員第九管理世界に向かい人々の救助を行なえと言われています！！提督も早く来て下さい！！既に向かう準備は出来ています！！』

「分かった！すぐに向かう！」

部下の言葉を聞いたクロノは頷き、部下との通信を切ると、フェイト達に険しい表情を向ける。

「今回の事件は完全に管理局が引き起こしたものだ。そんな事の為に罪の無い人々が殺されるのは間違っている！僕ら管理局が言える事ではないが、これ以上犠牲を出させる訳にはいかない！」

「そやな、確かに私ら管理局は何も言えへんけど！これ以上罪の無い人達を死なせへん！皆行くで！！」

『はい！！！』

『応ッ！！』

クロノとはやての叫びに全員が頷き、クロノが提督の任についている艦艇ークラウディアに向かって全力で駆け出し、第九管理世界に向かい出すのだった。

フェイト達が第九管理世界に向かい出した頃。アルハザードでも司令室からブラック達が第九管理世界の状況を窺っていた。
次々と消滅させられていく街や人々、そして管理局員達。だが、それを見つめるブラック達の感情は冷え切っていた。

「予想通りの結果ね。四聖獣とロイヤルナイツ全員ではないとは言え、第九管理世界は終わりね。この状況を覆す方法が在るとすれば、デジタルワールドの時の様にアルカンシェルの同時発射しかないでしょうね」

「だろうな」

リンディの言葉にブラックは険しい表情で映像を見つめながら同意する。
全員が来なかったとは言え、四聖獣が二体、ロイヤルナイツが三体、その配下の者達が凡そ五十体、それだけの戦力が一斉に第九管理世界を襲っているのだから、もはや第九管理世界の崩壊は間違い無いだろう。例え今から管理局の増援が到着しても助けられる人間は居ない。それほどの戦力差なのだ。
その様子を眺めながらクイントはフリートに近付き、怒りを押し殺した様な表情をしながら、フリートに顔を向ける。

「それでフリート。デジタルワールドを崩壊させた提督の艦も第九管理世界に向かっているのかしら？」

「ええ、間違いなく向かっていますね。ご丁寧な事にデジタルワールドを崩壊させた五隻全艦で慌てて向かっていますよ。当然でしょうね。自信満々にデジモンは全て滅んだと宣言していたのに、第九

管理世界に現れたんですから」

「好都合ですね。責任を取って貰いましょう」

「それが良いね。自分達が言っていた管理世界の平和の為の犠牲に成って貰おうか」

フリートの報告にティアナとなのはは自身のデバイスを取り出しながら言葉を言い、ブラックは映像の映っているモニターに背を向け、司令室の入り口に足を進める。

それを見た他の者達も無表情にブラックの後を付いて行き、司令室を出る前にルインは映像を悲しげに見つめるヴィヴィオとギルモンに顔を向ける。

「ヴィヴィオちゃんは此処に居て下さいね。仇は取って来ます」

「・・・・・うん」

「ギルモンがヴィヴィオを護るよ!!」

ルインの言葉にヴィヴィオは頷き、ギルモンはヴィヴィオを護ると宣言し、ルインは笑みを浮かべながらブラック達と共に転送室に向かい出すのだった。

燃え盛る建物、金属の様に成ってしまった人々が居る第九管理世界の首都の上空で紅い鳥ースーツェーモンは怒りの咆哮を上げていた。

「ウオォォォォォォーーーーーー！！！！！人間ども！！絶対に赦さんぞッ！！」

スーツェーモンは怒りの咆哮を上げると共に、自身に向かって来る羽虫ー管理局の航空魔導師達に顔を向け、口から凄まじい熱量の炎を放つ。

ーーーゴオオオオオオオオオオオオオーーーーー！！！！！

『ウギャアァァァァァーーーーーーーー！！！！！』

「苦しいか！焼かれるのが苦しいのか！！成らばもっと味わえ！！貴様らが虐殺した子供達の苦しみを存分に味わって消えろッ！！」

スーツェーモンの放った巨大な炎を受けた航空魔導師達は絶叫を上げるが、スーツェーモンはそれを聞いても怒りを収めずに、次々と自分に向かって来る航空魔導師達を焼き払って行く。

そして別の街では巨大な虎、バイフーモンが暴れに暴れていると、突如として立ち止まり、逃げ惑う人々や自身に向かって魔法を放とうとしている魔導師達の方に口を向け、口から強力な波動を放ち、次々と建物や人々を金属に変えて行く。

「金剛ッ！！」

『うわあぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・』

バイフーモンの放った金剛に寄って地上に展開していた魔導師達や人々は全員金属に変わり動けなくなるが、バイフーモンの怒りは収まらずに手甲が装備された右前足を振り上げ、金属に成った魔導師達と人々を踏む砕く。

ーーーガシャアァァァァァン！！！

「ウオォォォォォォーーーーーー！！！我らの怒りは絶対に治まらん！！貴様ら人間を全て根絶やしにしてやる！！」

ーーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！

バイフーモンは叫ぶと共に全力で駆け出し、バイフーモンが駆け出した事で発生した凄まじい衝撃波によって街は一瞬で壊滅した。

その上空には一足先にやって来た管理局の艦艇が二隻存在し、暴れまわっているスーツェーモンとバイフーモンに向かって主砲を放とうとしていたが、突如として上空から巨大な翼『カレドヴールフ』を背中に装備し、右腕に巨大なランス『アンブロジウス』を装備した竜の様なデジモン、エグザモンが現れ、アンブロジウスを一隻の艦艇に突き刺す。

「我らの怒りを思い知れッ！！！アヴァロンズゲートッ！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！

エグザモンが叫ぶと共に艦艇に突き刺したアンブロジウスから、エグザモンが持つさまざまな効果を持つウィルスが仕込まれた特殊弾が全て艦艇内部で炸裂し、艦艇は一瞬で破壊・消滅した。

それを見たもう一隻の艦艇は慌ててエグザモンに向かって砲塔を向け、攻撃しようとするが、その直前で艦艇のブリッジに向かって、背中に翼を付け竜鎧で全身を覆った騎士が高速で突撃して来る。

ーーーードゴオン！！

「グアアッ！！一体なんだ！？」

騎士の突撃を受けた艦艇のブリッジは激しく揺れ、その艦の提督はバランスを崩しながらも、煙が渦巻くブリッジ内部に叫んだ瞬間に、煙の中から手の平に宝玉の様な物が埋め込まれた五本爪の手が飛び出し、提督の顔を掴み上げ、騎士、デュナスモンが煙の中から姿を現し、怒りの表情を掴み上げている提督に向ける。

「我が名はデュナスモン！！我が同胞で在った三大天使を滅ぼし！！罪無きデジモン達の虐殺を行なった上に、三大天使が見守るデジタルワールドを崩壊させた罪！！断じて赦さんッ！！」

「ヒィッ！！！」

デュナスモンの怒りの叫びを聞いた提督は恐怖の声を上げ、何とかデュナスモンの手から逃れようとするが、デュナスモンの手からは逃れられず絶望の表情を浮かべ始めた瞬間に、ブリッジの入り口から次々とデバイスを持った武装局員達が姿を現し、デュナスモンに向かって全員がデバイスを向け構えた。

「提督を放せ！！さもないと撃つッ！！」

「ほう、面白い」

リーダー格だと思われる武装局員の叫びを聞いたデュナスモンは怒りの表情を収め、掴み上げていた提督を武装局員達に向かって投げ付ける。

「放してやろうッ！！」

「ウワアァァァァッ！！」

デュナスモンは掴み上げていた提督を言葉と共に武装局員達に向かって投げ付き、武装局員達は慌てて飛んで来る提督を受け止めると、リーダー格の武装局員は命じた。

「撃てえェェェェェェェーーーーーー！！！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガガッ！！！！

提督の無事を確保した判断したリーダー格の武装局員は周りの局員達に叫び、局員達は一斉にデバイスから射撃魔法を放ち、デュナスモンに直撃し、再びブリッジは煙に包まれた。

それを確認した局員達は安堵の息を付き、リーダー格の武装局員は提督に顔を向ける。

「提督！無事ですか！！」

「ああ、無事だ。それよりもすぐに艦の破損状況を調べてくれ。まだ敵は残っている」

「ハッ！」

提督の命令の局員は頷き、周りの局員達に命じようとした瞬間に、煙の中からデュナスモンの声が響いて来た。

「この程度か、この程度で我らデジモンに戦いを仕掛けて来たのか？」

『ッ！！』

煙の中から聞こえて来た声に、その場にいる全員が体を震わせながら煙の方を見つめると、煙の中から無傷のデュナスモンが姿を現し、両腕の手の平を局員達に向ける。

「おのれの無知を悔やみながら消滅しろッ！！！ドラゴンズロアッ！！！」

『ウワァァァァァァーーーーー！！！！』

ドゴオオオオオオオオオオオオオン！！！！

デュナスモンが放った十個の属性を持つエネルギー弾ードラゴンズロアに局員達は全員飲み込まれ、デュナスモンが乗っていた艦艇は巨大な爆発に飲み込まれた。

そして爆炎の中からデュナスモンが飛び出して来ると、デュナスモンはその勢いのまま別の戦場へと向かって行くのだった。

次々と第九管理世界に存在する街が消滅する中で、まだ無事であった街へと漸く到着したフェイト達は街に向かって次々と進行してくるナイトモン軍団を止めようと、戦闘を行なっていた。

「プラズマスマッシャーーー！！」

「ムン！」

ーーーバシュッ！！

フェイトが放った砲撃をナイトモンは自身の持つ巨大な大剣で切

り裂き、ナイトモンはフェイトを睨み付ける。

「人間ッ！！私達は絶対に貴様らを赦さんぞ！！多くの罪無き同胞を殺した貴様らを！！」

「ウッ！！」

ナイトモンの叫びにフェイトは辛そうな表情を浮かべ動きが止まってしまい、それを見たナイトモンはフェイトに向かって剣を振り上げ、全力で振り下ろした。

「ベルセルクソードッ！！！」

「しまっ！！」

ナイトモンのベルセルクソードが動きが止まってしまったフェイトに向かって振り下ろされ、フェイトは慌てて避けようとするが、避ける事が出来ずに直撃しそうに成った瞬間に、リインとのユニゾン状態に成っているはやてが上空からナイトモンに向かって砲撃を放った。

「来よ、白銀の風！！天より注ぐ矢羽と成れ！！フレースヴェルグッ！！」

ーーードグオオオオオン！！

「ガアアァァァァァーーーーーー！！！！」

はやての放ったフレースヴェルグが直撃したナイトモンは苦痛の声を上げて膝を付くが、倒れる前に持っていた大剣を地面に突き刺

し杖代わりにすると、ナイトモンは残っている力を振り絞りながら立ち上がり、フェイトとはやてに憎しみに染まった視線と怨嗟の言葉を放つ。

「・・・・・貴様らは罪の無い子供達を虐殺しただけでなく・・・一つのデジタルワールドを消滅させた・・・必ずや四聖獣殿達とロイヤルナイツの方々が貴様らを滅ぼす・・・・・・忘れるな・・・・・この戦争の引き金を引いたのは貴様らだッ！！」

『ッ！！』

ナイトモンの怨嗟の言葉にフェイトとはやては悲痛の表情を浮かべた。

ナイトモンの言うとおり、第九管理世界が四聖獣やロイヤルナイツに襲われているのは管理局のせいだ。管理局の傲慢な行動のせいで罪の無いデジモン達が虐殺され、世界の行く末を心の底から心配していた三大天使は自身の世界と共にこの世から完全に消滅してしまった。全ては管理局が原因で在るとフェイト達も分かって居るのだ。

そして自身の言葉でフェイトとはやての動きが完全に止まったのを確認したナイトモンは地面に突き刺していた大剣を抜き取り、最後の力を振り絞ってフェイトとはやてに向かって駆け出し、再びベルセルクソードを振り下ろそうとする。

「オオォォォォォォーーーーー！！！ベルセルクッ！！！」

（はやてちゃんッ！！フェイトちゃんッ！！避けてです！！！）

ナイトモンがフェイトとはやてにベルセルクソードを放とうとするのを見たリインは慌ててはやての内側からフェイトとはやてに向

かって叫んだ。
だが、フェイトとはやてはナイトモンの怨嗟の言葉が耳から離れず、動く事が出来なかった。ナイトモンの言うとおり、全ての原因は管理局。その管理局に所属している自分達がしたかった事は、こんな戦争を引き起こす事なのかと考え始めてしまった為に動くの遅れてしまったのだ。
ナイトモンは、はやてとフェイトが動かないで居るのを最大の好機と判断し、大剣を振り下ろそうとするが、その瞬間周りの瓦礫の影から一斉に武装局員が飛び出し、殺傷設定の射撃魔法がナイトモンに向かって放たれた。

『撃てえぇぇぇぇぇぇーーーーー！！！』

ーーーズガガガガガガガガガガガガガッ！！！

「グアァァァァァーーーーー！！！貴様ら人間どもは必ず滅びるぞ！！」

局員達が放った射撃魔法は全てナイトモンへと直撃し、ナイトモンは苦痛の声を上げながらも怨嗟の言葉を吐き出すとデータ粒子に変わり消滅した。
それを見た局員達は歓喜の声を上げるが、はやてとフェイトは辛そうな表情を浮かべ、ナイトモンの消滅と共に出現したデジタマに顔を向けて見ると、デジタマは軽い音を立てながら消滅する。

ーーーパリィン！

「・・・・・・こんな戦いに意味は在るの？誰もが悲しむしかない戦いに」

「・・・・・・わからへんよ。だけどこの戦いを引き起こしたのは私ら管理局や。私らが何かを言う資格なんて」

「存在しないな」

『ッ！！！』

フェイトとはやてが言葉を呟いていると突如として何処からとも無く声が響き、フェイト達は驚愕の表情を浮かべながら辺りを見回した瞬間に、ナイトモンを殺した武装局員達全員に向かって、金と赤の鎧を纏ったデジモン、ロードナイトモンが飛び出し、自身の鎧から飛び出す四本の帯刃を使って全員の体を切り刻む。

「スパイラルマスカレードッ！！！」

ーーーブザァァァァァァァァン！！

『ギャァァァァァァァァァーーーーーーーー！！！！！！』

ロードナイトモンのスパイラルマスカレードによって、全ての武装局員達は切り刻まれながら断末魔の声を上げ、血の雨が辺りに降り注ぎ、それを目撃したフェイト、はやて、そして守護騎士達は恐怖に青ざめた顔をしながら、武装局員達の血を全身に浴びたロードナイトモンを見つめる。

そして見つめられたロードナイトモンは武装局員達の死体に足を乗せながら、フェイト達に顔を向ける。

「貴様ら人間どもには、もはや何かを言う資格など存在しない。罪無き幼年期デジモン達を虐殺した上に、デジタルワールドさえも崩壊させた貴様らには、もはや何かを言う資格など存在しないのだ！

！」

「待ってやッ！！確かに私ら管理局は虐殺を行なった上に、あんた等の世界を滅ぼしたッ！！だけど、それは管理局が行なった事で在って、この世界の人達には何にも関係あらへん！！だからすぐに戦いを止めてやッ！！」

ロードナイトモンに向かってはやては自身の考えを叫んだ。確かにはやての言うとおり、全ての元凶は管理局なのだから、この世界、第九管理世界に人間達には何も関係無い。それは在る意味で正しいだろう、これが事件であれば確かにはやての言葉は正しい。だが今の戦いは違う。この戦いは。

「笑わせるな。この戦いはもはや管理局などと言う傲慢な組織程度との戦いではない。この戦いは我らデジモンと人間との戦争なのだッ！！」

「なっ！？」

ロードナイトモンの叫びにはやてが声を上げた瞬間に、ロードナイトモンは瞬時にはやての目の前に現れ、はやての腹に向かって左拳を放ち殴り付ける。

ーーードゴン！！

「ガアッ！！」

『はやて！！』

『主！！！』

「はやてちゃん！！」

ロードナイトモンの拳を受けたはやては苦痛の声を上げ、それを見たフェイト達ははやての名を叫ぶが、ロードナイトモンは気にせずにはやての髪を掴み上げ、凄まじい殺気を苦痛に呻くはやてに向かって放ちながら叫んだ。

「関係無い人々だと？貴様らがそれを言うか！！貴様らの組織の人間が殺したデジモン達も関係無い者達だった！！良い事を教えてやる！！貴様の組織が滅ぼしたデジタルワールドは四つ在るデジタルワールドの中でも最も温厚な者達が存在する世界！！そのデジタルワールドが在ったからこそ、他のデジタルワールドは暴走せずに居たのだ！！」

『なっ！？』

ロードナイトモンの告げた事実にはやて達は驚愕の声を上げた。管理局が滅ぼした世界と同じものが後三つ在る事にも驚いたが、まさか管理局が滅ぼした世界が在ったからこそ、他の世界の暴走が抑えられていたとは思っても見なかったのだ。

「そしてもはやその世界を見守っていた三大天使も存在しない。もはや我らロイヤルナイツと四聖獣の暴走を止められる者は居ないのだ。この戦争はもはや誰にも止められん。人間かデジモンどちらかが滅びるまではな」

「・・・・そ・・・・ん・・・・な」

ロードナイトモンが告げた事実にはやては絶望の表情を浮かべ、

守護騎士達やフェイトも絶望の表情を浮かべた。
だが、それを見てもロードナイトモンの怒りは収まらず、自身の右腕に装備されているパイルバンカーをはやての腹に当てながら告げる。

「さらばだ。愚かな人間よ。アージェントフィアーー！！！」

ーーードグオオオン！！

「アッ！！」

ーーービシャァァァァァァァァァ！！！

『はやてぇぇぇぇぇーーーー！！！！！！！』

『主いいいいいーーーーー！！！！！』

『はやてちゃん！！！！！』

ロードナイトモンの装備するパイルバンカーからゼロ距離で放たれた衝撃波に寄ってはやての脇腹は吹き飛び、吹き飛ばされた脇腹から大量の血が噴き出し、辺りが真っ赤に染まった。
それを見たフェイトと守護騎士達は慌ててはやてを助けようとロードナイトモンに向かい出したが、ロードナイトモンは、はやてをゴミで在るかの様に扱い、守護騎士達に向かって投げ付ける。

「ふん、返してやるぞ！！」

ーーーブンッ！！

「ウワッ！」

投げ付けられたはやてをヴィータは慌てて受け止めるが、傷の箇所に目を向けると顔色がすぐに青ざめた。

はやての右脇腹は完全に吹き飛ばされている上に、重要な内蔵が集中している箇所だった為か、血が次から次へと脇腹から噴き出し続け、はやての顔は青白く成り始めていたのだ。

それを見たヴィータは慌てて、だが、決してはやての体に衝撃が来ない様にしながらシャマルに向かって駆け出す。

「シャマル！！早く治療しろ！！はやてが、はやてが死んじまうよ！！」

「ええ、すぐに治療魔法を掛けるわ！！」

ヴィータの慌てた表情とはやての状態を確認したシャマルも慌てて、自身の指輪型のデバイス、クラールヴィントを近付け全力で治療を行なうが、徐々にはやての体は冷たくなり始め、ヴィータとシャマルが焦った表情を浮かべ始めるとリインフォースもシャマル達に近付きはやてに全力で治療魔法を掛け始める。

「私も力を貸す！！シャマル程ではないが治療魔法の使用は可能だ！！」

「お願い！！」

「はやて死ぬな！！死ぬんじゃねえぞ！！」

リインフォースとシャマルは全力ではやてに治療魔法を掛け続け、ヴィータははやての手を握り締めながらはやてに向かって叫び続け

た。
その間にフェイトとシグナムははやてがやられた事に憎しみに満ちた顔をしながら、ロードナイトモンに向かって斬りかかっていた。
「良くもはやてを！！」
「貴様だけは絶対に赦さんぞ！！」
ーーーガキィィィィン！！
「それは此方のセリフだ！！人間は絶対に赦さんぞ！！」
フェイトとシグナムの斬撃を防ぎながらロードナイトモンは叫び、再び鎧から伸びている帯刃を動かし、スパイラルマスカレードをフェイトとシグナムに向かって放つ。
「死ねッ！！スパイラルマスカレードーーーー！！！！」
『クッ！！！』
ロードナイトモンがスパイラルマスカレードを放つのを見たフェイトとシグナムは自身のデバイス、ザンバーフォームのバルディッシュとレヴァンテインで受け止めようとするが、スパイラルマスカレードの刃に寄って簡単に両断された。
ーーースパアンッ！！
『なっ！？』
「私のスパイラルマスカレードを受け止めるのなら、せめてクロン

デジゾイト製の武器で受け止めるのだな！！」

ーーードゴオン！！

『アァァァァァーーーーー！！』

自身のデバイスが簡単に両断された事に驚愕しているフェイトとシグナムに向かってロードナイトモンは叫ぶと共に全力の蹴りを二人に向かって放ち、蹴りを体に受けた二人は悲鳴を上げながら瓦礫へと吹き飛ばされ、瓦礫に激突すると二人は瓦礫の中に埋もれた。

それを確認したロードナイトモンは残っているはやてに全力の治療を施しているリインフォース達に顔を向け、ゆっくりリインフォース達の方に歩き始める。

「これで戦える者は貴様らだけだ」

「クソッ！！」

ロードナイトモンの言葉を聞いたヴィータはリインフォース達の護る為にロードナイトモンの立ちはだかり、自身のデバイス―アイゼンを構えるがロードナイトモンは気にせずに足を進める。

しかし、その瞬間にヴィータの周りに再び魔方陣が出現し、中からデバイスを構えた武装局員たちとクロノが姿を現す。

「遅れてすまない！だが、この街に居た住民は全てクラウディアに搬送出来た！」

「ふむ、そうか。成らば貴様らを排除した後に、その艦も破壊するとするか。それで良いか？デュナスモン、エグザモン、スーツェーモン、そしてバイフーモンよ」

『なっ！？』

クロノの言葉を聞いたロードナイトモンは足を止め仲間の名前を呟くと、空からスーツェーモンとエグザモンが、地上からは低空飛行して来たデュナスモンと凄まじいスピードで駆けて来たバイフーモンがロードナイトモンに周りに集まり、地上に着地したスーツェーモンは集まっているクロノ達と武装局員達に憎しみに視線を向ける。

「良いだろう。既にこの世界に残っている人間は、其処の連中だけだからな」

『なっ！？』

スーツェーモンが告げた事実にクロノ達は目を見開きながら声を上げた。

自分達が第九管理世界に到着した時には確かにまだ幾つのもの街や大勢の人々が生き残っていた筈なのに、スーツェーモンは既に生き残っているのはクロノ達だけだと告げたのだから当然だろう。

だが、スーツェーモン達は気にせずにクロノ達を睨み付け、バイフーモンは突如として空に向かって咆哮を上げた。

「ウオォォォォォォォォォン！！！！」

ーーーピカァァァァァァン！！！！

「なっ！？一体何が！？」

バイフーモンが咆哮を上げた瞬間に、空から三つの巨大な光の柱

が降り注ぎ、クロノ達が驚愕の表情を浮かべて光を見つめると、光の柱の中から黄金の鎧を身に着けたデジモン―マグナモンに、黒い甲冑で全身を覆った骸骨の様な頭部をしたデジモン―クレニアムモン、そして獣の様な鎧を身に纏い、背中に白い翼を付けたデジモン―ドゥフトモンが姿を現した。

マグナモン、世代／アーマー体、属性／フリー、種族／聖騎士型、必殺技／エクストリーム・ジハード、プラズマシュート
ブイモンが奇跡のデジメンタルのよって進化したアーマー体デジモン。如何なる状況に成っても奇跡の力に寄って切り抜けられると言われている上に、アーマー体で在りながら究極体に匹敵する力を持っている。ロイヤルナイツの一人であり、身に纏った黄金の鎧のクロンデジゾイド製の鎧は如何なる力を持っても打ち破れず、ロイヤルナイツの守りの要と呼ばれるデジモン。必殺技は、デジメンタルの力を極限まで引き出して、全身からエネルギー波を放射する『エクストリーム・ジハード』に、プラズマ球を作り上げて、相手に向かって放つ『プラズマシュート』だ。

クレニアムモン、世代／究極体、属性／ワクチン種、種族／聖騎士型、必殺技／エンド・ワルツ、ゴットブレス
ブラックデジゾイド製の黒い甲冑で全身を覆った聖騎士型デジモン。その容姿からウィルス種と間違われる事が在るが、列記としたワクチン種であり、ロイヤルナイツの中で最も礼節をわきまえたデジモンである。敵と対峙するときはどんな時も1対1の戦いを好み、相手が強敵であればあるほど打ち破った時の喜びは至上のものとしている。また、武器として『魔槍（クラウ・ソラス）』と『魔盾（アヴァロン）』を装備している。必殺技は、『魔槍（クラウ・ソラス）』を高速回転させ、相手に向かって超音速の衝撃波（ソニックウェーブ）を放つ『エンド・ワルツ』に、『魔楯（アヴァロン）』から鉄壁の全方位防御を発動させ、3秒間だけどんな攻撃も無力化させる『ゴットブレス』だ。

ドゥフトモン、世代／究極体、属性／データ種、種族／聖騎士型、必殺技／エルンストウェル、アウススターベン
獣の様な鎧で体を覆った聖騎士型デジモン、他のロイヤルナイツが一目置く屈指の戦略家であり、各々が己の信じる正義を信ずるロイヤルナイツ達を統率する類まれない能力を持っている。また人型から獣型に成るレオパルドモードに成る事が出来る。必殺技は、爆発的なエネルギーを放つ“破壊の剣”で攻撃する『エルンストウェル』に、頭上で弧を描き作り出したビームの“消滅の剣”で攻撃する『アウススターベン』だ。

「なっ！？嘘だろ・・・・・・他にも居たのかよ」

マグナモン、クレニアムモン、ドゥフトモンの姿を見たクロノ達は恐怖の表情を浮かべ、ヴィータは構えていたアイゼンを恐怖に震わせながら後ずさり始めた。
当然だろう。自分達は他の四聖獣やロイヤルナイツ達にも手も足も出なかったのに、その状況で更に援軍が来たと成れば、クロノ達には勝ち目など無いのだから。
恐怖に震えるクロノ達にクレニアムモンは顔を向けると、自身の武器である魔槍クラウ・ソラスを何処からとも無く取り出し、クロノ達に向けて構える。

ーーーシャキン！

「この者達の処刑は私が行なう。良いな？」

「ふん、構わんぞ。これから全ての人間を殺すのだ。その様なゴミどもなどくれてやる」

クレニアムモンの言葉にスーツェーモンは答え、その場から背を

向け始め、他のデジモン達も背を向け歩き始める。
それを確認したクレニアムモンは魔槍クラウ・ソラスを強く握り締め、クロノ達に向かって突き出す。
「去らばだ！愚かなる人間ども！！」
『ヒィッ！！』
『クッ！！』
突き出されたクラウ・ソラスを見た武装局員達は恐怖の声を上げ、リインフォース達ははやてを護る様に覆い被さり、クロノは全員を逃がす為に魔法を放とうとする。
だが、クレニアムモンは関係無いと言わんばかりに、更にスピードを上げ突き出し、クロノ達が絶望の表情を浮かべたその瞬間に、クロノ達の前に学ランを着た獣人が現れ魔槍クラウ・ソラスに向かって気合を研ぎ澄ませた右拳を放つ。
「オォォォォォーーーーーーー！！！フラッシュバンチョーーーーパンチ！！！！！」
ーーーガァァァァァァァァン！！！
「何ッ！？」
獣人の放ったフラッシュバンチョーパンチによって魔槍クラウ・ソラスは弾き飛ばされ、クレニアムモンはクラウ・ソラスを弾き飛ばした獣人の姿を、信じられないものを見たと言う視線で見つめる。
「お前は・・・・生きていたのか！？」

「久しぶりだな、クレニアムモン」

「バンチョーレオモン！！！」

獣人ーバンチョーレオモンの姿を見たクレニアムモンは声を上げながらバンチョーレオモンを見つめた。

バンチョーレオモンとクレニアムモンは旧知の間柄なのだ。嘗てクレニアモン達、ロイヤルナイツの見守るデジタルワールドにはデジタルワールドの神であるイグドラシルと呼ばれる者が存在していた。その存在を巡る争いの中でバンチョーレオモンはイグドラシルの意思を移していた人間の体と共に死んだ筈だったのだ。だが。

「まさか、生き延びてこの次元世界で生きていたとはな。また会えて嬉しいぞ、バンチョーレオモン・・・・こんな状況で無ければな」

「俺も同じ事を思っていたぞ、クレニアムモン」

ーーービュン！！

クレニアムモンとバンチョーレオモンは互いに笑みを浮かべながら言い合うと、クレニアムモンは吹き飛ばされたクラウ・ソラスを拾い上げ、バンチョーレオモンは拳をクレニアムモンに向かって構え出した。

「其処を退け！！其処に居る者達は罪無き子供達を虐殺した上に、三大天使が見守っていたデジタルワールドを消滅させた大罪人達が所属する組織の人間！！その様な人間を護るのか！？バンチョーレオモンよ！」

「ふん、俺としてもこいつ等の組織は気に入らんが、三大天使は人間の消滅など望んではない！！お前達の行動こそが三大天使の魂を穢しているのだ！！」

「聞き捨て成らんな」

バンチョーレオモンがクレニアムモンに叫ぶと、再びクレニアムモンの後ろにスーツェーモン達が現れ、バンチョーレオモンに向かって険しい表情を向ける。

「我らの行動が三大天使を穢すだと？笑わせるな！全ての原因は人間どもではないか！人間の傲慢によって三大天使の世界は滅んだのだぞ！！」

「それは認めよう。管理局のせいで確かにあの世界は滅んだ。だが、それとこの世界の人間達を虐殺するのは筋違いだ！！本当に殺すべきなのは、三大天使の世界を滅ぼした者達だ！！」

スーツェーモンの叫びにバンチョーレオモンが叫び返した瞬間に、上空に傷付いた五隻の管理局の艦艇が現れ、クロノ達は目を見開きながら上空の五隻の艦艇を見つめる。

「アレはレイザー提督の艦にあの世界を滅ぼす為に送られた艦艇じゃないか！！如何言う事だ！？何であんなにボロボロなんだ！？」

クロノが声を上げるのも当然だろう。上空に浮かぶ五隻の艦艇は自分達の後に発進したと聞いていたのに、目の前に浮かぶ五隻の艦艇は何者かに襲われたろしか思えない程に傷だらけのだ。自分達よりも後に発進したと成れば、四聖獣やロイヤルナイツではない。では一体誰なのかとその場に居る管理局員達が疑問の表情を浮かべた

瞬間。

ドゴオオオオオオオオオオン！！！

レイザー提督の乗る艦のブリッジが突如として爆発起こし、爆煙の中からクイント、ティアナ、チィリンモン、ワーガルルモン、なのは、ルイン、リンディ、そしてブラックが姿を現し、スーツェーモン達に顔を向ける。

「さあ、断罪を始めるぞ。俺達の故郷を滅ぼした連中のな」

ブラックが険しい表情を浮かべながら言葉を言うと共にリンディ達も頷くと、ブラックは右腕に持っていた紐を引っ張り艦に乗っていた局員達を全員に表に出すのだった。

降臨！！四聖獣とロイヤルナイツ！！（後書き）

次回予告

デジタルワールドを滅ぼした管理局員達を連れて現れたブラック達。

だが、四聖獣とロイヤルナイツの怒りは収まらず

ブラック達と激闘を始める。

その時に現れる新たな二人のロイヤルナイツ達！！

次回、漆黒の竜人と少女、『覚醒！スレイプモン、そして孤高の陰士！！』

戦いは終わったのではない、始まったのだ。

覚醒！スレイプモン！そして孤高の隠士！！（前書き）

作者のゼクスです。漸く次話が完成したのですが、パソコンが故障してしまったので慣れない携帯からの投稿なので、もしかしたら文書がおかしいかも知れません。
パソコンが修復出来次第に、もう一度チェックし直す予定です

さて、それとは別にアンケートなのですが、はやてのパートナーデジモンは何が良いでしょうか？
他の者達は在る程度想い浮かぶのですが、はやてだけはこれだと言うパートナーが浮かばないので、出来れば意見が欲しいです。期日は二十日の昼までです！是非ご意見を下さい！

覚醒！スレイプモン！そして孤高の隠士！！

地上の居る武装局員達とクロノ達は驚きに満ちた視線を、上空に浮かぶ五隻の艦艇の内の一隻に立っている七名の者達と拘束されている局員達に向けていた。

その間に瓦礫の中から出て来たフェイトは信じられないと言う表情をしながら、上空に浮かぶ艦艇を見つめ、その中に居る一人の人物に向かって叫ぶ。

「なのはッ！！」

フェイトは激痛に苦しみながら親友の名前を呼ぶが、呼ばれたなのはは気にせずに四聖獣とロイヤルナイツ達に顔を向け、ブラックは縛っていた局員達を四聖獣達に向かって投げ付ける。

「フン！！」

『ウワァァァァァァーーーーーー！！！！！』

ーーードゴオオオオオオオン！！

投げ付けられた局員達は四聖獣とロイヤルナイツ達の前の地面に激突し、全員が苦痛に呻く。

しかし、すぐに四聖獣とロイヤルナイツ達の凄まじい殺気を感じ、全員が恐怖に震え始め、その間に地上に降りて来たブラック達はバンチョーレオモンの前に着地し、四聖獣達に顔を向ける。

「会うのは初めてだな。だが、俺達の事は知っている筈だ」

「その通りだ。我らは貴様らを知っている。我らデジモンと人間どもとの戦争を回避する為に動き続けていた者達だと言う事を」

『ッ！！』

スーツェーモンの言葉にクロノ達は驚いた表情を浮かべてブラック達を見つめた。

漸くブラック達が各管理世界に出没するデジモン達を倒し続けていた理由に気が付いたのだ。

だが、ブラック達はクロノ達の驚愕に構わずに恐怖に震える局員達に殺気を放ちながら、スーツェーモン達に顔を向ける。

「そいつ等こそが三大天使の世界を滅ぼした張本人どもだ。そいつらは好きして構わない。だが、他の世界まで滅ぼすのは止めろ」

「・・・・・・断る！貴様らとて分かっている筈だ！！もはやこの戦いはデジモンと人間の戦争だと言う事を！！」

「分かっています。ですが、此処は自分達のデジタルワールドに戻って下さい！この隙に確実にルーチェモンは残っている七大魔王のデジタマを狙う筈です！！全員が来なかったとは言え、他のデジタルワールドの護りは薄れています！！」

スーツェーモンの言葉にリンディは頷くが、すぐに自身の考えを叫んだ。

リンディの言うとおり、四聖獣が二体にロイヤルナイツが六体も一斉にデジタルワールドから離れたと成れば、七大魔王のデジタマを警護していた戦力が一気に激減する。そうなれば確実にルーチェモンは動き、残っている七大魔王のデジタマを奪おうとするだろう。

しかし、スーツェーモンはリンディの言葉を聞いても意思を変え

ずに、リンディ達に自分達の考えを叫ぶ。

「そもそも、ルーチェモンを復活させたのも人間だ。人間の存在こそが全ての元凶！！もはや我らデジモンに取って人間は害悪でしかないのだ！！全ての人間を滅ぼしてこそ我らデジモンの安寧は築かれる！！故に我らは全ての人間を滅ぼす！！」

スーツェーモンの宣言に他のバイフーモンとロイヤルナイツ達は一斉に頷き、スーツェーモンの言葉に同意を示す。

彼らも嘗て自分達の世界を救ったのが人間だった事は覚えている。だが、管理局の行動のせいで人間は信用に値しない存在だと気が付いてしまったのだ。誰よりも人間達を信じ、デジモンと人間を愛していた三大天使の死は、それほどまでに他の者達の心に響いていたのだ。

その事が分かっているリンディ達も辛そうな表情を浮かべるが、三大天使の最後の願いの為にも引けないと思い、全員が足を前に進め、それぞれ構えを行ないだす。

「成らば、力ずくでも自分達の世界に帰って貰うぞ！！ルイン！！」

「はい！！ユニゾン・イン！！」

ブラックがルインに向かって叫ぶと、ルインはブラックに抱き付き光が溢れ、ブラックの体から蒼いデジコードが飛び出し、ブラックの体を覆い始め、ブラックはデジコード内部で叫ぶ。

「ウオォォォォォォーーーーー！！ブラックウォーグレイモンX進化！！ブラックウォーグレイモンX！！！」

ブラックが叫ぶと共にデジコードは弾け飛び、内部から背中にバ

ーニアを二つ背負い、体が寄り機械的になった姿をしたブラックウォーグレイモンXが姿を現した。
それを見たリンディとクイントは顔を見合わせ頷き合い、二人は何時もよりも黒いデジコードを発生させ内部で同時に叫んだ。

『ハイパーダークエヴォリューション！！！！』

リンディとクイントが同時に叫んだ瞬間に黒いデジコードは弾き飛び、リンディの黒いデジコードの中からは背中に金属製の翼を付け、両手にブレードを装備した天使型デジモン－バイオ・スラッシュエンジェモンが現れ、クイントの方からは首下に赤いマフラーを付け、何処か正義の味方を思わせる様なデジモン－バイオ・ジャスティモンが姿を現した。

「バイオ・スラッシュエンジェモン！！！」

「バイオ・ジャスティモン！！！」

バイオ・スラッシュエンジェモン、世代／究極体、属性／ウィルス種、種族／能天使型、必殺技／ヘブンズリッパー
本来はワクチン種だが、ダークタワーデジモンを基にした為にウィルス種に成ってしまった存在。天使軍団を率いて戦いの先陣を切る能天使型デジモン。その力は本来のスラッシュエンジェモン寄りも強力に成っている。必殺技は、高速で敵に近づき、全身の刃で攻撃する『ヘブンズリッパー』だ。

バイオ・ジャスティモン、世代／究極体、属性／ウィルス種、種族／サイボーグ型、必殺技／トリニティアーム、ジャスティスキック
本来はワクチン種だが、ダークタワーデジモンを基にした為にウィルス種に成ってしまった存在。長くたなびく赤いマフラーを身に付

けた正義の味方タイプの様なサイボーグ型デジモン。背中にある『エクステンドトランスミッター』からプラグを差し替えることで、３種類に腕を変化させることができる。電撃タイプの『ブリッツアームモード』、パワータイプの『アクセルアームモード』、カッタータイプの『クリティカルアームモード』がある。その力は本来のジャスティモン寄りも強力に成っている。必殺技は、アクセル、クリティカル、ブリッツの全てのアームを使用し攻撃する『トリニティアーム』に、破壊力は４５トンに達する正義のキックで相手を粉砕する『ジャスティスキック』だ。。

リンディがバイオ・スラッシュエンジェモンへとクイントがバイオ・ジャスティモンへと暗黒の究極進化するのを見たなのはも、自身の桃色の縁取りがあるディーアークをバリアジェケットのポケットの中から取り出し、ワーガルルモンに顔を向け互いに頷き合う。

「行くよ！！」

「おう！！」

互いに頷き合ったのを確認したなのはは自身の胸元にディーアークを当て自身の体をデータ化させながら叫ぶ。

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「マトリスクエヴォリューション！！！」

「ワーガルルモン進化！！」

電子音声が響くと共に、なのはの体はデータに変わりワーガルルモンと一つに成ると、ワーガルルモンの体から蒼いデジコードが飛

び出し繭を形成し始め、蒼いデジコードが弾け飛ぶと共に中から左腕にガトリング砲『メタルストーム』を装備し、全身に無数の火器を装備した蒼い二足歩行の機械の狼ーメタルガルルモンXが姿を現した。

「メタルガルルモンX！！！」

それぞれが自らの究極進化を行い、チィリンモンの背中に乗ったティアナもブレイクミラージュを四聖獣達に構え、バンチョーレオモンも拳を構え出す。

その様子を見ていたスーツェーモンは無念だと言う表情を浮かべながら、ブラック達を見つめる。

「・・・・・・残念だ。貴様らは人間達の中で唯一の我らの味方だと想っていたのだがな」

「俺達は三大天使の味方だ。奴らの最後の願い、『デジモンと人間の未来を護ってくれ』と言われている。その為になら貴様らを敵にさえも回す」

「・・・・・本当に残念だ。我らとは出会い方が違っていれば確実に友に成れただろう」

ブラックウォーグレイモンXの言葉にクレニアムモンも自身の武器、魔槍クラウ・ソラスをブラック達に構えながら答え、それぞれが戦闘を行なう構えを行なう中、リンディはクロノ達に顔を向け、死に掛けているはやての様子に気が付き、アルハザードで状況を見ているフリートに通信を行なった。

（フリートさん、はやてさんを隙を見て転送して治療を行なって下

さい。決してバイオデジモン化してはいけませんよ？）

（むう～、仕方が在りませんが、何で管理局の人間を治療するんですか？そんなに親しいわけでもないのに？）

フリートが疑問に想うのも当然だろう。リンディとはやてにはそれほど親しい交友関係が在る訳ではないのだ。何せはやてと親しくなる前にリンディはブラックに殺され、バイオダークタワーデジモンに成ってしまった上に、はやては管理局の人間。リンディ達に取っては第二の故郷を奪った組織に所属する人間だ。そのような人間を救おうとするのか理由が分からないフリートは、訝しげな唸り声を上げ続けていると、リンディが理由を話し出す。

（はやてさん達は管理局内部での希望です。だからお願いします）

（・・・・・・絶望に変わらない事を願います。分かりました。隙を見て此方に転移します）

（お願いね）

リンディの言葉にフリートは不満そうな声を出すが了承すると、リンディはフリートとの通信を切り、睨み合っている四聖獣とロイヤルナイツ達に意識を集中させ始める。

そして極限にまで互いに意識が高まった瞬間に、ブラックウォーグレイモンXが暗黒の力を両手の間に集中させ、黒いエネルギー球を生み出し、全力でスーツェーモン達に向かって投げ付ける。

「ハデスフォース！！！」

「ドラゴンズロアッ！！」

「プラズマシュート！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！

ブラックウォーグレイモンXが放ったハデスフォースに対して、デュナスモンが両手の手の平からドラゴンズロアをマグナモンがボール状のプラズマ弾ープラズマシュートを放ち、三つのエネルギー球が空中でぶつかり合い、凄まじい爆発音が響き煙が渦巻く。

それを確認したブラックウォーグレイモンXは背中のバーニアを吹かし、エグザモンに向かって右腕を突き出しながら突進する。

「ドラモンキラーーーー！！！！」

「ムッ！」

自身に向かって来るブラックウォーグレイモンXの姿を見たエグザモンは自身に武器である巨大なランス『アンブロジウス』を構え、ブラックウォーグレイモンXに向かって突き出そうとするが。

ーーードシュ！ドシュウン！！

その直前にブラックウォーグレイモンXの右腕に装備したドラモンキラーの刃がエグザモンに向かって射出された。

「なっ！？グオッ！！」

「貴様はロイヤルナイツとは言え竜族は違いない！！俺のドラモンキラーは天敵だろう！！」

ブラックウォーグレイモンXの射出したドラモンキラーの刃を胸に受けたエグザモンは苦痛に呻き、ブラックが空中に浮かびながら叫んだ。ブラックウォーグレイモンXのドラモンキラーはドラモン族一正確に言えば竜族に対して絶大な威力を持つ武器なのだ。

そして苦痛に呻くエグザモンに向かってブラックウォーグレイモンXは更にドラモンキラーを射出しようとするが、その直前でブラックウォーグレイモンXの後ろにデュナスモンが現れ、ブラックウォーグレイモンXに向かって右腕を振り下ろす。

「おのれ！！」

「クッ！！」

ーーーガアン！！

デュナスモンの攻撃を見たブラックウォーグレイモンXは左腕を掲げ防御すると、二人は互いに睨み合い空中で殴り合いを始めた。

「オォォォォォォォーーーーーーーー！！！！！」

「ヌオォォォォォォォォーーーーーーーー！！！！！」

ブラックウォーグレイモンXとデュナスモンは互いに完全体レベルなら一発受けただけでも消滅するような拳を放ち続け、世界を揺るがして行く。

その間にクイントはマグナモンとドゥフトモンに向かって駆け出し、リンディはロードナイトモンに向かって飛び掛かり、メタルガルルモンXとティアナ、チィリンモンはバイフーモンとスーツェーモンの方にに向かい、そしてバンチョーレオモンはクレニアムモン

に向かって駆け出し、それぞれ戦闘を開始した。

「アクセルアーム！！」

ーーーカシャン！！

クイントは背中に装備しているエクステンドトランスリミッターから一本のプラグを取り出し、右肩に差し込むと右腕はパワータイプのアクセルアームに変化させ、マグナモンに向かって殴り掛かる。

「ハアアアアアアアーーーー！！！」

「ムン！！」

ーーーガアン！！

クイントの攻撃を見たマグナモンは右腕を掲げ防御し激突音が響くが、マグナモンが全くダメージが受けてない事に気が付いたクイントは悔しそうな表情を浮かべてると、すぐさまマグナモンの傍を離れるが、背後からドゥフトモンがクイントに向かってレイピアの様な形状をした剣を突き出して来た。

「フッ！！」

「クッ！クリティカルアーム！！」

ーーーガキィン！！

ドゥフトモンの攻撃を見たクイントは瞬時に別のプラグを右肩に差し込み、右腕をカッタータイプのクリティカルアームに変化させ

るとドゥフトモンのレイピアを弾き、マグナモンとドゥフトモンから離れる様に飛び、近くの瓦礫の上に着地するとマグナモンとドゥフトモンを睨み付け隙を窺い始める。

そして別の場所では互いに辺りのビル群を切り刻みながら高速で移動し続けるリンディとロードナイトモンはぶつかり合っていた。

「ハアッ！！」

「ムッ！！」

ーーーガキィィィィン！！

リンディの右腕のブレードをロードナイトモンは自身の右腕に付いているパイルバンカーで受け止め、リンディに向かって右足で蹴りを放つが、リンディに当たる直前で空間が歪み蹴りはリンディを外れた。

「何っ！？」

「スティンガーブレイド！！エクスキューションシフト！！」

自身の蹴りが外れた事に驚愕するロードナイトモンに向かってリンディは無数の魔力剣を発生させ、ロードナイトモンに向かって放つ。

「フッ！その様な直線的な攻ッ！！」

リンディの放ったスティンガーブレイド・エクスキューションシフトをロードナイトモンは簡単にかわし、リンディに向かって余裕

そうに声を掛けようとした瞬間に、かわした筈の全てのスティンガーブレウイド・エクスキョーンションシフトがロードナイトモンに向かって来る。

「クッ！！スパイラルマスカレードッ！！」

ーーードドドドドドドドドドドン！！

自身に向かって来るスティンガーブレイド・エクスキューションシフトに向かって、ロードナイトモンは自身に鎧に付いている帯刃を動かし、スパイラルマスカレードを発動させて、全てのスティンガーブレイド・エクスキューションシフトを破壊し、険しい視線をリンディに向ける。

「そう言えば貴様は魔導師でも在ったな。先ほどの私の蹴りも魔法を発動させ受け流したのだな？」

「ええ、受け止めるのは無理ですけど。受け流すのは可能だからね」

「フッ、思っていたよりも実力は上の様だ。此方も全力で掛からせて貰うぞ！！」

ーーーガキィィィィン！！！

リンディの言葉にロードナイトモンは笑みを浮かべると、二人は同時に駆け出し再び斬り合いを再開し始めた。

そして別の場所では崩れ落ちそうなビルとビルの間でバンチョーレオモンとクレニアムモンは互いに構えを行い、睨み合って行った。

「思えば、お前との決着は付いていなかったな？」

「ああ、その事を無念に想っていたぞ」

二人はこれから殺し合いを行なうと言うのに互いに笑みを浮かべながら言葉を言い、闘気を十全に高まった瞬間に、クレニアムモンは魔槍クラウ・ソラスを、バンチョーレオモンは右拳を互いに突き出した。

「貴様を打ち破った喜び！！今度こそ味合わせて貰うぞ！！」

「それは此方のセリフだ！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオン！！！

互いに叫んだ瞬間にクラウ・ソラスと拳は激突し凄まじい衝撃波が発生するが、衝撃波の中心に居るバンチョーレオモンとクレニアムモンは笑みを浮かべ合い、同時にその場から離れると、すぐさま着地し激突を始めた。

「ウオォォォォォォォーーーーーーー！！！！！」

「ハアァァァァァァーーーーーー！！！！！」

クレニアムモンのクラウ・ソラスとバンチョーレオモンの拳は凄まじい速度で放たれ続け、それによって発生した衝撃波に寄って周りのビルは次々と消滅して行くが、二人は気にせずに笑みを浮かべながら攻撃を繰り出し続け、もはや目の前の敵を倒す事だけを考えるのだった。

そして凄まじい衝撃波が各地で起きる中、驚愕の表情を浮かべて戦いを見つめているクロノ達の前では、メタルガルルモンXとティアナ、そしてチィリンモンは四聖獣ーバイフーモン、そしてスーツェーモンと睨み合っていた。

「引いてくれませんか、僕達は貴方達とは出来る事なら戦いたくない」

「分かっている筈だ。我らは多くのデジモン達の平穏の為に戦っている」

「今更引けはしない！！」

メタルガルルモンXの言葉にスーツェーモンとバイフーモンはそれぞれ答え、それを聞いたメタルガルルモンXとティアナ、チィリンモンは辛そうな表情を浮かべた。

四聖獣とロイヤルナイツ達が戦っているのは多くのデジモン達と他のデジタルワールドの為。

スーツェーモン達は管理局が行なった三大天使達のデジタルワールドでの虐殺と崩壊を他のデジタルワールドの崩壊を行わせない為に、メタルガルルモンXは人間とデジモンの未来の為に。どちらの戦う理由も正しい。それが分かっているからこそメタルガルルモンX達は辛いのだ。あの悲劇さえ無ければ共に戦って居た事が分かる為に。

だが、それでも此処で引く訳には行かない、三大天使の最後の願いを叶える為にも引く事は出来ないのだ。

そしてスーツェーモンは上空に浮かんでいる五隻に艦艇に憎しみに視線を向けながら、自身の体から爆音を発し太陽のプロミネンスに匹敵する程の炎を発生させ炎を渦を作り上げると、上空に浮かぶ全ての艦艇に向かって放ち焼き払う。

「紅炎(こうえん)！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！

『クッ！！』

スーツェーモンが放った紅炎に寄って全ての艦艇は焼滅し、メタルガルルモンXはフェイト達を護る様に立ちはだかり、バイフーモンは縛られて恐怖に震えるレイザー提督達に顔を向け、口から波動を放つ。

「金剛ッ！！」

『ウワァァァァァ・・・・・・・・・』

バイフーモンが放った金剛に寄ってレイザー提督達は全員金属に変わるが、それを見てもバイフーモンは憎しみの視線を金属に成ったレイザー提督達に放ち続けながら叫ぶ。

「フン！貴様らは朽ち果てるまで金属に成っていろ。苦しみ続け、自分達の行いを悔やみ続けるんだな」

バイフーモンは金属に成ったレイザー達にそう言うと、自身の上空でティリンモンに背に乗っているティアナに顔を向ける。

「究極体に匹敵するとは言え、貴様のパートナーは完全体。その力で我に挑む積もりか？」

「ええ、だけど私達は貴方に勝つ為に戦うんじゃないわ」

「何？」

ティアナの言葉にバイフーモンは疑問の表情を浮かべた。
自分達と戦うのだからてっきり勝つつもりで戦ってくると想っていたのだが、ティアナは違うと宣言して来たのだから疑問に想うのは当然だろう。
疑問の表情を浮かべて自分達を見つめて来るバイフーモンに向かって、ティアナとチィリンモンは自分達の想いを叫ぶ。

「私達は貴方達を止める！！！」

「お前達を止めさせて貰うぞ！！」

「・・・・・フフフッ！ハハハハハハハッ！！この四聖獣のバイフーモンに向かって宣言を放つとは！！面白いぞ！！貴様らは我が戦ってやる！！良いな？スーツェーモン」

「フッ、確かに人間にして置くのは惜しい人間だ。好きにしろ、バイフーモン。我はこの狼と戦う！！」

バイフーモンの言葉にスーツェーモンは了承すると共に、メタルガルルモンXへと顔を向け、口から灼熱の炎をメタルガルルモンXに向かって放った。

「喰らえ！！」

「コキュートスブレス！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！

スーツェーモンが放った灼熱の炎を対してメタルガルルモンXは口から絶対零度の息吹ーコキュートスブレスを放ち、空中で灼熱の炎と絶対零度の息吹がぶつかり合い水蒸気爆発を起こすと、煙が辺りに充満し互いに姿が煙によって見えなくなる。
しかし、メタルガルルモンXは迷わずに一箇所にメタルストームを構え、桃色の魔方陣をメタルストームの周りに発生させると、メタルストームから桜色の砲撃が連続で放った。

「ディバインストーム!!!」

「なっ!?」

ーーードドドド

そしてその間にバイフーモンとティアナ、チィリンモンは高速で移動を行いぶつかり合っていた。

「クロスファイヤーシュート！！」

「その程度の攻撃が効くか！！」

ティアナはバイフーモンに向かってクロスファイヤーシュートを最大威力で放ちバイフーモンに当たるが、バイフーモンには全く効かず、ティアナとチィリンモンは悔しそうな表情を浮かべる。

その隙にバイフーモンはティアナとチィリンモンは飛び掛り、全力で前足を振り下ろした。

「手甲爪（てっこうそう）！！」

「くっ！！迅速の心得（じんそくのこころえ）！！」

バイフーモンの手甲爪をチィリンモンは自身の体を高速移動で交わすと共に、自分の分身を大量に生み出し、バイフーモンを撹乱しようとする。

だが、バイフーモンは迷わずに何も無い空間に向かって自身の棘の鉄輪が付いた尻尾を全力で振り下ろす。

「其処だ！！棘輪尾（きょくりんお）！！」

「クッ！おのれ！」

「何で分かったのよ！ブラック兄さんでも気付かないぐらい、気配が隠せる様に成ったって言うのに！？」

バイフーモンの放った棘輪尾を姿を消していたチィリンモンはギリギリの所で交わし、背に乗っていたティアナは疑問の叫びを上げた。
ティアナとチィリンモンの気配殺しは、今ではブラックさえも気が付かないほどのレベルに成っていると言うのに、バイフーモンは迷わずにティアナ達に居る場所を正確に攻撃して来たのだから、疑問に思うのは当然だろう。

「フッ！気配は消せても、匂いまでは消せ…」

ーーーズガガガガガガガガガガガガガッ！！！

「ヌオッ！！」

自信満々にバイフーモンはティアナとチィリンモンの場所が分かった理由を叫ぼうとするが、叫んでいる途中で青筋を立てたティアナが先ほどの魔力弾を超える魔力弾をバイフーモンの顔に向かって連射し、言葉を言うのを止めさせ、怒りに染まった顔しながら叫ぶ。

「この変態虎！！女性に向かって匂いって何よ！？ぶっ殺すわよ！！」

「その通りだ！！ティアナの匂いは素晴らしいにお…」

ーーーカシャ！

「・・・・・・・ゴメンなさい。もう絶対に言わないからブレイクミラージュを下げて下さい、ティアナ様」

ティアナの叫びにチィリンモンも同意だと言う様に叫ぼうとする

が。叫んでいる途中で冷たい目をしたティアナがチィリンモンの後頭部にブレイクミラージュを当て、チィリンモンは恐怖に震えながらティアナに謝った。
それを聞いたティアナはブレイクミラージュをバイフーモンに向けるが、冷たい視線をチィリンモンに向け続け最後通告を告げる。

「今度言ったら殺すわよ」

「はい！絶対に言いません！！」

（むう～、本気で人間にして置くのは勿体無い。もしデジモンだったら、我の配下に加えたい）

ティアナの言葉にチィリンモンは冷や汗を流しながら答え、それを見ていたバイフーモンはティアナが人間である事を本気で悔しがりながら、再びティアナ達との戦闘を再開した。

その様に各地で激戦を繰り広げている中、その戦いを目の前で見ていたクロノ達は自分達の想像を遥かに超える戦いに恐怖に震えていた。

「何だよ・・・・・この戦いは・・・・・あたし等は・・・・管理局はこんな化け物達に戦争を仕掛けたのかよ」

「・・・・・とにかく今の内にクラウディアに向かう。はやての治療の事も在るし、この場所に居たら僕らも危険だ」

恐怖に震えるヴィータの言葉にクロノは考え込む様な表情を浮かべるが、自分達がこの場に居るのは危険だと判断し、全員に向かって言葉を言うと、リインフォースは頷き、はやてを抱えてこの場か

ら離れようとした瞬間に、はやての下に魔方陣が出現する。

「なっ！主！！」

「はやて！！」

はやての体の下に発生した魔法陣を見たリインフォースとヴィータは、慌ててはやてを魔方陣から離そうとするが、手が届く直前ではやての体は転移する。

ーーーシュウン！！

「クソッ！！一体誰が！？」

はやてが消えた事にヴィータが悔しそうな表情を浮かべて叫び声を上げた瞬間に、クロノ達全員に向かって何処からとも無く念話が届いて来る。

（彼女は私が治療します。管理局程度の技術では彼女は死にますからね）

「誰だ！？」

届いて来た念話にリインフォースは怒りの表情を浮かべて叫ぶ。自分達の敬愛する主を勝手に転移させられたのだから当然だろう。

だが、念話の主はリインフォースの怒りの叫びを聞いても、気にせずに自身の要件だけを伝える。

（答える義務は在りません。彼女は私が助けますから、さっさとその世界から消えて下さい。ハッキリ言って貴方達が其処に居るのは

邪魔です）

「勝手にはやてちゃんを連れて行って何を言うんですか！？」

念話の主の言葉に今度はシャマルが怒りの声を上げるが、念話の主は気にせずに答える。

（邪魔なものは邪魔なんですよ。と言うかさっさとその世界から去らないと本気で死にますよ。その世界に高速で接近している何かが居るんですからね）

『ッ！！！』

謎の人物が告げた事実にその場に居る全員が驚愕の表情を浮かべた。

この世界に高速で迫る何か。この状況で管理局の艦艇で在る確立は低い。となれば来るのは更なるデジモンであると考えるべきだろう。

その事が分かったクロノは悔しそうな表情を浮かべながら謎の人物に質問する。

「・・・・はやては無事に帰ってくるんだな？」

（それは保障します。彼女はリンディさんが希望と呼んだ人物。その人物に何かしたら私が殺されますからね）

「・・・・分かった。クラウディアに転移してすぐに第九管理世界から退避する！！」

謎の声の言葉の中に自身の母親の名前が出て来た事に気が付いた

クロノは考える様な表情を浮かべたが、このまま戦いの場に居ても結果は変わらないと想い全員に向かって言葉を叫び、自分達の足元に転送用の魔法陣を出現させた。
それを見たヴィータは慌てた表情を浮かべながら、クロノに顔を向け叫ぶ。

「待て！あたしらは納得してねえぞ！！」

「此処は母さんを信じてくれ！絶対に母さんははやてを傷付けさせない！！」

ヴィータの叫びにクロノはそう叫び返し、ヴィータ達と言い争いを始めた。
そしてその間にフェイトは自身の体の下に転送用の陣が発生していても、気にせずに上空でぶつかり合っているスーツェーモンとメタルガルルモンXに悲しそうな表情を向け続けていた。

「なのは、何が、何が在ったの？一体何がなのはに？」

フェイトはなのはが現れてから自分達の事をなのはは一度も見ていないことに気が付き、悲しみの表情を浮かべて呟くがその言葉には誰も答えず、クロノ達と共にフェイトはクラウディアへと転移して行った。
そしてフェイト達がこの世界から離れても激戦は収まらず、ブラック達は四聖獣とロイヤルナイツ達と戦い続けたが、遂にブラック達も限界を迎えようとしていた。

「エクストリーム・ジハード！！！」

「キャアアッ！！」

ーーードゴオン！！

マグナモンの全身から放ったエネルギー波、エクストリーム・ジハードを受けたクイントは瓦礫と化したビルに激突し、バイオ・ジャスティモンから元の人間の姿に戻り気絶してしまう。

「クイントッ！！」

倒されたクイントの姿を目撃したリンディは慌てた表情を浮かべてクイントの救出に向かおうとするが、その隙にロードナイトモンがリンディに接近し、右腕に装備したパイルバンカーをリンディの体に押し当てた。

「しまっ！！」

「遅い！！アージェントフィアーー！！！」

ーーードグオオオン！！

「キャアァァァァァァーーーーー！！！！！」

リンディに向かってロードナイトモンはゼロ距離からの衝撃波ーアージェントフィアーを放ち、リンディをクイントと同じ様に吹き飛び、瓦礫にぶつかり元の人間の姿に戻ってしまう。

それを見たブラックウォーグレイモンXとメタルガルルモンXは二人の救出に向かおうとするが、背後からデュナスモンがドラゴンズロアを、スーツェーモンが灼熱の炎を二人の背後から放つ。

「ドラゴンズロアッ！！」

「焼き尽くされろ！！」

「チッ！ハデスフォース！！」

「コキュートスブレス！！」

ドゴオオオ

「先程の礼だ！！ドラゴニックインパクト！！！」

「ガアァァァァァーーーーー！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

ーーービキビキ！！ビキィィィィン！！

「ブラックさんッ！！！」

エグザモンのドラゴニックインパクトを受けたブラックウォーグレイモンXは苦痛の叫びを上げながら、地中に深く埋まってしまった上に、ドラゴニックインパクトの凄まじい威力によって底が見えない程の地割れがブラックウォーグレイモンXの埋まった場所から周りに広がり、それと共に凄まじい衝撃波が発生し辺りに在った建物は全て吹き飛ばされた。

周りに在った建物が衝撃波に寄って吹き飛ぶ中、メタルガルルモンXはブラックウォーグレイモンXを助ける為にエグザモンに向かってメタルストームと顕現させたレイジングハートを向けるが、メタルガルルモンXの背後からスーツェーモンが炎を纏った爪をメタルガルルモンXの背に振り下ろす。

「貴様の相手は我だろがッ！！煉獄爪（れんごくそう）！！！」

ーーードゴオン！！

「グァァァァァーーーーー！！！！」

スーツェーモンの煉獄爪を背中に喰らったメタルガルルモンXは苦痛の叫び上げながら膝を付き、激痛に苦しみながらもスーツェー

モンから離れようとするが、離れようとする直前でデュナスモンがメタルガルルモンXの目の前に現れ、自身の体から巨大なエネルギーを発生させるとエネルギーは巨大な飛竜の形に変わり、メタルガルルモンXに向かって放った。

「逃がさんぞッ！ブレス・オブ・ワイバーン！！！」

「しまっ！ウワァァァァァーーーー！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

デュナスモンの放ったブレス・オブ・ワイバーンを喰らったメタルガルルモンXは苦痛の叫びを上げながら遠くへと吹き飛ばされ、瓦礫にぶつかった瞬間にメタルガルルモンXの体は蒼いデジコードに包まれ、デジコードが消失するとボロボロに成って気絶したなのはとガブモンが現れ瓦礫の上に倒れ付した。

それを見たティアナは慌てた表情を浮かべ、チィリンモンに顔を向ける。

「チィリンモンッ！！」

「分かっている！だがッ！！」

ティアナの叫びの意味をチィリンモンも理解出来る。チィリンモンもブラック達の救出に向かいたい。だが、地上にはバイフーモンがティアナとチィリンモンを狙って待ち構えている上に、ブラック達を倒したスーツェーモン達もティアナとチィリンモンを倒そうと集まって来ている状況下では自分達の事で精一杯なのだ。

その事はティアナも分かっている。残っている戦力で最強のバンチョーレオモンはクレニアムモンの相手をしていて動けない。なら

自分とチィリンモンがやるしかないと思ったのだが、バイフーモンとスーツェーモン達に囲まれ動く事が出来なかった。
その事にティアナとチィリンモンが悔しそうな表情を浮かべた瞬間に、バイフーモンがティアナとチィリンモンに向かって飛び上がり、鉄甲が装備された前足を振り下ろす。

「貰ったぞッ！鉄甲爪（てっこうそう）！！」

「しまっ！！キャァァァァァァーーーーー！！！！！」

「ウワァァァァァーーーーー！！」

バイフーモンの鉄甲爪をティアナとチィリンモンはかわす事が出来ずに直撃し、二人は悲鳴を上げながら地面へと激突する。

「ウゥゥ・・・・チィリンモン？」

ティアナは地面へと激突した事で体を襲う激痛に苦しみながらも、自身の横で倒れているチィリンモンに手を伸ばすが、チィリンモンの体は蒼いデジコードに包まれ元のクダモンの姿に戻ってしまう。
それを見たティアナは悲痛な表情を浮かべるが、体を襲う激痛に耐えながらクダモンを抱え、右腕に持ったブレイクミラージュをバイフーモンに向かって構え、それを見たバイフーモンは疑問の表情をティアナに向ける。

「まだ、戦う気なのか？」

「・・・・言った・・・・でしょ。貴方達を止めるって！」

ティアナは叫ぶと共に魔力弾を連射しながらバイフーモンに向か

って放つが、バイフーモンは魔力弾を受けても平然としながらティアナに口を向ける。

「お前達とは本当に別の出会い方をしたかったぞ。金…」

ーーードゴオン！！

バイフーモンがティアナとクダモンに向かって金剛を放とうした瞬間に、バイフーモンに向かって虹色の巨大なエネルギー球が飛んで来てバイフーモンに直撃した。

それを見たティアナは慌てた表情を浮かべてエネルギー球が飛んで来た方向に顔を向けて見ると、ブラックウォーグレイモンを模したバリアジャケットを身に纏いながら、その身を進化させたヴィヴィオとヴィヴィオを頭の上に乗せてグラウモンが立っていた。

「ヴィヴィオッ！！それにグラウモンも！！」

ヴィヴィオとグラウモンの姿を見たティアナは驚愕の声を上げた。戦いに巻き込まない様にする為にギルモンと一緒にアルハザードに置いて来たヴィヴィオが現れたのだから当然だろう。

だが、ヴィヴィオはティアナの驚愕の声に構わずに自身の頭上に両手をやり、虹色に輝く巨大なエネルギー球を生み出すと、グラウモンも自身の口に力を集めて始め、二人は同時にバイフーモンに向かって放った。

「パパ達を傷つけるなッ！！ガイアフォース！！！」

「エキゾーストフレイム！！」

ヴィヴィオの放ったガイアフォースとグラウモンのエキゾースト

フレイムはバイフーモンに向かうが、バイフーモンは笑み浮かべながら自身に迫っているガイアフォースとエキゾーストフレイムに向かって咆哮を上げる。

「ウオォォォォォォーーーーー！！！！」

ーーーバシュウン！！

「アッ・・・・ア・ア・ア・ア」

バイフーモンの放った叫び声によってガイアフォースとエキゾーストフレイムは簡単に霧散し、それを見たヴィヴィオはバイフーモンの圧倒的な力に恐怖を覚え体を震わせた。

それを見ていたティアナも更に慌てた表情を浮かべ、ヴィヴィオに向かって叫ぶ。

「逃げなさい！子供の貴女が勝てる相手じゃないわ！すぐに逃げるのよ！！！」

「・・・・い・・・・や・・・・だ・・・・もう誰かが居なく成るのは、パパ達が居なく成るのは、嫌だァァァァァーーーーー！！！！」

ヴィヴィオは叫ぶと共に再びガイアフォースを放とうとするが、突如としてグラウモンは後方に振り返り両腕に付いたブレードに雷を纏わせ、背後に忍び寄っていたロードナイトモンに向かって全力で振り下ろす。

「ヴィヴィオはグラウモンが護るッ！プラズマブレイドッ！！」

ーーーガシッ！！

「フッ、その様な技が私に効くと想うな。デューいやグラウモンよッ！！」

グラウモンのプラズマブレイドをロードナイトモンは簡単に受け止めながら叫び、グラウモンに向かって攻撃を放とうとするが、その直前で地面から漆黒の竜巻が飛び出し、ロードナイトモンに向かい出した。

ーーードグオン！！

「ブラックトルネードッ！！」

「なッ！！グァァァァァッ！！」

突如として地面の中から現れた漆黒の竜巻をロードナイトモンはかわす事が出来ずに直撃し、吹き飛ばされた。

そして漆黒の竜巻はヴィヴィオとグラウモンの近くで回転を止め、通常の姿に戻っている上に全身がボロボロの姿に成りながら、左腕に同じ様にボロボロに成って気絶しているルインを抱えたブラックが姿を現した。

「パパッ！！」

「ブラック兄さん！！」

ブラックの姿を見たヴィヴィオとティアナは喜びの声を上げながらブラックを見つめるが、ブラックは突如として膝を付き地面に倒れ伏す。

ーーーバタン

「パパッ！パパッ！」

倒れ伏したブラックに近寄りヴィヴィオは叫ぶが、ブラックは沈黙したままでヴィヴィオは悲しみの表情を浮かべる。

その様子を見ていたバイフーモンは険しい表情を気絶しているブラックに向ける。

「エグザモンのドラゴニックインパクトをその身に受けて立ち上がるとは、やはり惜しい者だ」

「うむ、確かにな。チンロンモンが友と認めるだけの事は在る・・・だが我らも止まれん。残念だがな」

バイフーモンの呟きに上空に浮かぶスーツェーモンは同意を示すが、ブラック達はどうやっても自分達の味方には成らないと思い、心の底から残念な表情を浮かべると、ブラックに止めを刺す為に口に灼熱の炎を生み出し始めた瞬間に、クダモンを抱えたティアナがブラックとヴィヴィオを護る様に立ちふさがる。

「やらせないわ！！」

「ならば四人共！焼滅するが良いッ！！」

ーーーゴォォォォォォォォーーーーーーー！！！！

スーツェーモンは叫ぶと共に口から灼熱の炎をティアナ達に向かって放った。

「護って見せる！！皆を絶対にッ！！」

ティアナは自身に迫って来る灼熱の炎に向かって叫びながら、長銃に変わったブレイクミラージュを構え、オレンジ色の巨大な砲撃を灼熱の炎に向かって放つ。

「スターライトブレイカーーーーー！！！」

ティアナの放ったスターライトブレイカーによって僅かに灼熱の炎が押し戻される。

それを確認したティアナは自身の背後に居るヴィヴィオとグラウモンに向かって叫ぶ。

「ヴィヴィオ！グラウモン！今のうちにブラック兄さんとルインさんを連れて逃げなさい！！」

「ッ！！ティアナお姉ちゃんは！？」

ティアナの叫びにヴィヴィオは驚愕の表情を浮かべて叫ぶ。

ティアナの前には砲撃に寄って抑えられているとは言え、凄まじい熱量の炎が迫っていると言うのに、ティアナはヴィヴィオとグラウモンに向かって逃げろと叫んだのだから当然だろう。ヴィヴィオ達が逃げた後に残されたティアナがどうなるのかは分かりきっている。

それなのにティアナは笑みを浮かべてヴィヴィオとグラウモンに声を掛ける。

「私の事は良いから、逃げなさい。貴女達はまだ死んじゃだめなの」

「嫌だよ！！」

ヴィヴィオは目から涙を流しながらティアナに向かって叫んだ。
今のティアナの姿は自身を庇って死んでしまったレッサーモンとキャロモンの姿に重なり、ヴィヴィオはあの時の悲しみが蘇ってしまったのだ。
ティアナはその事に気がつき辛そうな表情を浮かべるが、ヴィヴィオ達を死なせる訳にはいかないと想い、再びヴィヴィオに声を掛けようとした瞬間に、ティアナの頭の中に懐かしい声が響いて来る。

（全くよ。お前がこっちに来るのは早いぞ。ティアナ）

「えっ？」

頭の中に響いて来た懐かしい聞き覚えの在る声にティアナが疑問の声を上げた瞬間に、周りの光景が白と黒に変わった。

（なっ！！一体何が起きたの！？体が動かない！！）

突如として変わった光景にティアナは驚いた声を内心で上げながら体を動かそうとするが、体は一切動かず内心で焦り始めた瞬間に、ティアナの目の前に光が溢れティアナに同じオレンジ色の髪の男性、ティアナの亡き兄、ティーダ・ランスターが笑み浮かべながら姿を現した。

（兄さんッ！）

ティーダの姿を見たティアナは内心で驚愕の声を上げるが、ティーダは気にせずティアナの頭に手をやり撫で始める。

（お前はこっちに来るな。まだそっちで生きろ）

そう言いながらティーダはティアナの胸元から首を出しながら気絶しているクダモンに険しい視線を向ける。

（俺の分までティアナを絶対に護れ！護れかったら殺すからな！！）

クダモンに向かってティーダはそう叫ぶと、ティアナの頭を撫でていた手を退かし、ティアナに真剣な表情を向ける。

（ティアナ、覚えているだろう？ランスターの弾丸は）

（何ものをも貫くッ！！）

ティアナが言葉の続きを叫ぶと、ティーダはティアナの言葉に笑みを浮かべる。

（分かっているなら良いんだ。自分の意志を貫け！俺は見守っているからな！）

（うんッ！！）

ティーダの言葉にティアナが笑み浮かべて頷いた瞬間に、ティアナのポケットの中で僅かに光っていたディーアークから金色の光を放たれ、ティアナ達に迫っていた灼熱の炎を掻き消し、光の柱が出現すると共に辺りの光景が元に戻った。

「なっ！！この力は！？」

「オファニモンの力ッ！！」

自身の放った灼熱の炎を突如として掻き消した力にスーツェーモンは驚きに満ちた声を上げ、バイフーモンが力の正体を叫んだ瞬間に、光の柱の中から首にクダモンを巻いたティアナが現れ、クダモンに声を掛ける。

「行くわよ！」

「ああ！ティアナの兄に見せてやろう！」

「私達の！！」

「我らの！！」

『絆を！！』

ティアナとクダモンが叫んだ瞬間に更にディーアークは光り輝き、ティアナは自身の胸元にディーアークを当てて自身の体をデータ化させながら叫ぶ。

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「マトリックスエボリューション！！！」

「クダモン進化ッ！！」

ティアナが叫ぶと共にティアナの体はクダモンと一つと成り、巨大な蒼いデジコードが出現すると、蒼いデジコードは突如として弾け飛び、六本の脚を持ち体を赤い鎧で身を包み、左腕に聖弩『ムスペルヘイム』握り締め、右腕に聖盾『ニフルヘイム』を装備したデ

ジモンが姿を現した。その名も。

「スレイプモンッ！！」

スレイプモン、世代／究極体、属性／ワクチン種、種族／聖騎士型、必殺技／ビフロスト、オーディンズブレス

セキュリティの最高位「ロイヤルナイツ」に属する聖騎士型デジモン。人型が多い『ロイヤルナイツ』のデジモンの中で獣の姿をした異色の存在。クロンデジゾイドの中で最も硬い『レッドデジゾイド』を鎧として装備し、六本の脚を持って陸海空とあらゆる場所を超高速移動が可能。また、左腕に『聖弩（ムスペルヘイム）』を右腕に『聖盾（ニフルヘイム）』を装備している。必殺技は、左手の『聖弩（ムスペルヘイム）』から灼熱の光矢を放つ『ビフロスト』に、右手の『聖盾（ニフルヘイム）』で気候を操って超低温のブリザードを発生させる『オーディンズブレス』だ。

『スレイプモンだとッ！！！』

現れたスレイプモンの姿を見たスーツェーモン達は信じられないと言うように声を上げ、ヴィヴィオ達を護る様に立ち塞がるスレイプモンを見つめた。

まさか、自分達の知るスレイプモン以外のスレイプモンが現れるとは夢に想っても見なかった上に、そのスレイプモンが人間と融合して現れたのだから驚愕するのも当然だろう。

しかし、スレイプモンはスーツェーモン達の驚愕に構わずにバイフーモンに向かって、超高速で突撃する。

「ウオォォォォォォーーーーー！！」

「クッ！！」

自身に超高速で突撃して来るスレイプモンの姿を見たバイフーモンは交わすことは不可能だと判断し、迎え撃つ為に構えを行い始めた瞬間に、スレイプモンの姿は分裂する様に幾つも出現する。

ーーーシュウン！！

「何だと！？」

突如として増えたスレイプモンの姿にバイフーモンが慌てた表情を浮かべ、複数のスレイプモンの姿を見つめた瞬間に、一体のスレイプモンがバイフーモンに向かって左腕に装備したムスペルヘイムを構え、灼熱の光矢を放つ。

「ビフロスト！！」

「クッ！」

スレイプモンの放ったビフロストをギリギリの所でバイフーモンはかわすが、不思議な事に放たれビフロストは地面に当たっても爆発しない上に地面をすり抜ける様にして消えて行く。

それを目撃したスーツェーモンはビフロストを放ったスレイプモンは幻影だと気がつき、バイフーモンに向かって慌てて叫ぶ。

「ッ！！バイフーモン！避けろッ！！」

「なにッ！！」

スーツェーモンの叫びにバイフーモンが驚愕の声を上げた瞬間に、いつの間にか横に来ていたスレイプモンがニフルヘイムをバイフーモンに向かって構え、自身の周りの気候を操り超低温のブリザード

を発生させ、バイフーモンを凍らせ始める。

「オーディンズブレス！！」

「グアァァァァァーーーーー！！！！」

ーーーガチガチガチ！！

『バイフーモン！！』

スレイプモンの放ったオーディンズブレスによってバイフーモンの体は徐々に凍り付き始め、それを見たスーツェーモン達はバイフーモンを助けようとスレイプモンに向かってそれぞれ攻撃を放とうしようと瞬間に、エグザモンに向かって赤いエネルギー球が飛んで来た。

「ガイアフォーーース！！」

「何だと！？」

自身に迫って来るガイアフォースを見たエグザモンは驚きの声を上げながらガイアフォースをかわすが、かわした方向に傷ついたブラックが現れ、エグザモンに向かって右腕を放ち殴りつける。

「ウオォォォォォォーーーーー！！！ドラモンキラーー！！」

ーーードゴオン！！

「グアッ！！貴様ッ！まだ戦えたのか！？」

エグザモンはブラックのドラモンキラーを受けた胸を抑えながら、ブラックに向かって驚愕の声を上げた。
自身のドラゴニックインパクトを受けて全身がボロボロだと言うのに、ブラックは戦意を失わない所か、笑みさえ浮かべているのだから当然だろう。

「フッ、悪いが俺達はそう簡単にやられん！！」

「俺達だとッ！？」

ブラックの言葉にエグザモンが疑問の叫びを上げた瞬間に、地上に立っていたロードナイトモンの背後から光の矢が高速で飛んで来た。

「ホーリーアローー！！」

「なにッ！！」

自身の背後から迫って来るホーリアローに気が付いたロードナイトモンは驚きの声を上げながらも避けるが、避けた方向に突如として両手両足にタービンが付いた獣人ーバイオ・グラップレオモンへと進化したクイントが現れ、両手のタービンを極限にまで回転させると重力をねじ曲げる程の連撃をロードナイトモンに向かって撃ち込む。

「連撃獅子獣破斬！！！」

ーーードドドドゴオオン！！

「ガアァァァァァーーーーー！！！」

『ロードナイトモンッ！！』

クイントの連撃獅子獣破斬を胸に喰らったロードナイトモンは苦痛の声を上げながら吹き飛ばされ、それを見た他の者達が驚愕の声を上げた瞬間に、デュナスモンの頭上からワーガルルモンが降って来てデュナスモンに向かって両手の爪を振り下ろす。

「カイザーネイル！！」

「ぬっ！！」

自身に向かってカイザーネイルを振り下ろそうしているワーガルルモンに気が付いたデュナスモンは、瞬時に両手を頭上に構え、ワーガルルモンのカイザーネイルを受け止めた。

ーーーガキィン！！

「その程度の技が我に効くと思うな！」

デュナスモンはワーガルルモンに向かってそう叫ぶと共にワーガルルモンを殴り飛ばそうした瞬間に、ワーガルルモンはデュナスモンの胸元に蹴りを放ち、デュナスモンの傍から離れる。

「逃がさんッ！！」

自身から離れたワーガルルモンを追い掛けようとデュナスモンが、翼を羽ばたかせようとした瞬間に、突如としてデュナスモンの後方から巨大な桜色の砲撃が放たれる。

「スターライトブレイカーーーーー！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！

「ヌオォォォォォォーーーーーー！！！」

背後から放たれた桜色のスターライトブレイカーを食らったデュナスモンは、苦痛の声を上げながらスターライトブレイカーに飲み込まれた。

それを確認したワーガルルモンは砲撃を放った人物ーなのはに近寄り、二人はブラックとリンディ、クイントの横に並び、バイフーモンを凍らせていたスレイプモンもブラック達の後方に着地するとブラック達に顔を向け質問する。

「全員、戦えるのか？」

「フッ、貴様とティアナだけでは戦わせん！奴らは最高の敵だからな！！」

「全く、こんな状況でも戦い喜ぶなんて」

「闇の書の時もブラックさんはこんな感じでしたよね」

ブラックの叫びにリンディとなのはは苦笑を浮かべながら話し合い、他の者達も苦笑を浮かべるが、全員が逃げる気はないと言う様にスーツェーモン達にそれぞれ構えを行い始め、それを見たスーツェーモン達もブラック達との決着を付けようと力を集め始め、同時に相手に向かって駆け出す。

『オォォォォォォーーーーーー！！！！』

今度こそ決着を付ける為にブラック達とスーツェーモン達が再び激闘を再開しようとする。
しかし、その直前にブラック達とスーツェーモン達の丁度真ん中に、光の柱が降りて来る。

ーーーピカアァァァァァァァァァン！！！

「何だとッ！！」

突如として自分達の真ん中に空から現れた光の柱にブラックは驚愕の声を上げ、スーツェーモン達の更なる援軍かと思いブラック達は身構えるが、スーツェーモン達も驚きの表情を浮かべて光の柱を見つめていた。
それを見たブラック達が疑問の表情を浮かべた瞬間に、光の柱は消失し中から黒い鎧を身に纏い、背中に内側が蒼い白いマントを身に付けたデジモン－アルファモンが姿を現し、スーツェーモン達に顔を向ける。

「其処までだ。これ以上戦いを続けるならば、私が相手をしよう」

『アルファモンッ！！！！』

アルファモン、世代／究極体、属性／ワクチン種、種族／聖騎士型、必殺技／デジタライズ・オブ・ソウル、聖剣グレイダルファー
オメガモンと対をなす蒼いマントを翻す聖騎士型デジモン。過ぎた戦闘時間を瞬間的に戻す究極の力“Ａｌｐｈａ－Ｇａｉｎ－Ｆｏｒｃｅ”を持つ。１３体の『ロイヤルナイツ』の中でも特殊な存在で、決して姿を現すことの無い“孤高の隠士”や、“空白の席”の主と呼ばれ、自らも『ロイヤルナイツ』の一員ながら、彼らを抑止する

役割を持つと言われている。『アルファインフォース』は他者の戦闘時間（記憶）を巻き戻し自分が何をされているのかわからぬままに攻撃を繰り返す事で、無敵の力を得る事ができる能力である。そのため他者にはアルファモンの攻撃は最後の一撃の一瞬の光景しか見ることができないが、実際にはそのデジモンが倒されるだけの攻撃が行われていたことになる。また、両手からは『デジモン文字』の刻まれた魔法陣を展開して多彩な攻撃と防御を行うことができる。必殺技は、上空に巨大な魔法陣を描き、異次元より伝説上のモンスターを召喚する『デジタライズ・オブ・ソウル』に、デジ文字の刻まれた魔法陣の中心から取り出す光の剣『グレイダルファー』で、相手を切り刻む『聖剣グレイダルファー』

アルファモンの姿を見たスーツェーモン達は驚愕の声を上げた。

アルファモンはその存在自体が滅多に姿を見せないデジモン。それ故に今回の三大天使達のデジタルワールドの消滅の時にも姿を仲間であるロイヤルナイツ達の前にも見せなかったのだが、突然にその姿をスーツェーモン達に現したのだ。

それ故にスーツェーモン達は何故アルファモンがこの場に現れたのかと疑問に満ち溢れるが、アルファモンはスーツェーモン達の驚愕に構わず、自身が現れた用件をスーツェーモン達に伝え始める。

「すぐに自分達が見守っているデジタルワールドに戻れ。各デジタルワールドに異変が起きている」

「何だとッ！？」

アルファモンが告げた事実にスーツェーモンは驚きの声を上げ、他の者達も驚きの表情を浮かべてアルファモンを見つめる。

「私達が見守るデジタルワールドに多数の空間の歪みが発生し始め

たのだ。そのせいで各エリアに異変が起きている。オメガモン達が全力で対処に当たっているが、空間の歪みは次々と現れ手が足りない状況だ」

「クッ！・・・・・・・帰還する。デジタルワールドに異変が起きたとなれば、人間など構っている状況ではない！」

アルファモンの言葉にスーツェーモンは悔しそうな表情を浮かべながら、他の者達に向かって叫んだ。

本来ならば全て人間を滅ぼし、管理局を跡形も無い程に消滅させるつもりで管理世界にやって来たと言うのに、滅ぼせたのは第九管理世界だけなのだから悔しく想うのも当然だろう。だが、それでも自分達の本来の役目で在るデジタルワールドを護ると言う事の為ならば、自身の感情を心の奥底に押し込めデジタルワールドに帰還する事を決意したのだ。

他の仲間達もスーツェーモンと同様にデジタルワールドに帰還する事を決めると、それぞれ光の柱を出現させ第九管理世界を去って行く。

そんな中、スレイプモンの放ったオーディンズブレスによって氷の中に閉じ込められていたバイフーモンが自身の体を覆っていた氷を破壊すると、スレイプモンに真剣な表情を向ける。

ーーーバリィィィィィィン！！

「新たなスレイプモンよ。貴様と融合した人間の名は何と言うのだ？」

「ティアナ・ランスターだ」

「そうか。その名は憶えておくぞ！そして貴様とティアナ・ランス

ターとの決着は必ず付ける！また会おうぞ！」

スレイプモンとティアナに向かってバイフーモンがそう宣言すると、スーツェーモン達と同様に自身の体を光の柱に飲み込ませ第九管理世界を去って行った。

そして最後にアルファモンもその場から去ろうするが、光の柱の中に消える前にブラック達の方を振り向き険しい表情を向ける。

「三大天使が残した希望達よ。これからの戦いはお前達が想像している以上に辛い戦いに成るだろう。デジモンと人間、双方がお前達の敵だ。それでも三大天使の想いの為に戦うのか？」

「悪いが俺は元々世界に否定される存在だ。今更デジモンと人間達が敵に成ろうと関係ない」

「三大天使に返しても返し切れない恩が在ります。それを少しでも返す為に戦います！！」

アルファモンの質問にブラックとリンディはそれぞれ答え、他の者達もブラックとリンディの言葉に同意する様に頷く。

「フッ、三大天使の残した希望を私も信じているぞ」

アルファモンは笑みを浮かべながらブラック達に声を掛けると共に光の柱の中に体を入れ、第九管理世界から去って行った。

そしてブラック達も気絶しているルインの近くに居るヴィヴィオ、グラウモン、そしてバンチョーレオモンと共にアルハザードへと帰還するのだった。

覚醒！スレイプモン！そして孤高の隠士！！（後書き）

次回予告

四聖獣とロイヤルナイツの脅威は一時的に去った。

だが、彼らの残した傷跡に寄って、人々は恐怖と憎しみに支配される。

失意にくれるフェイト達の前に現れ人物とは？連れさられたはやての運命は？

そして地球に起き始める異変とは？

次回、漆黒の竜人と少女、『憎しみの支配と繋がる世界』

憎しみは憎しみを呼び、最悪の道を進み始める。

憎悪の支配と繋がる世界（前書き）

漸くパソコンの修復が終わったので作成できました。

憎悪の支配と繋がる世界

第九管理世界の消滅の事実は管理局どころか全管理世界に衝撃を与えた。

今までもデジモン達による被害は確かに在った。だが、今回の襲撃は次元が違い過ぎた。街どころの騒ぎでは無く、半日も経たずに世界の一つが滅んだ上に、第九管理世界に住んでいた数千億人以上の人々の内、生き残りは絶ったの八百人程度。その上救援に向かった管理局員五百名及び八隻の艦艇で無事に帰って来た局員は五十名前後、艦艇に至っては一隻しか戻って来なかったのだ。

当然、管理局が彼らデジモン達の世界を滅ぼした為に第九管理世界は滅んだのだと、理性的に状況を判断した各世界の代表達は管理局の抗議を行ったのだが、管理局上層部は責任を取る所か、滅ぼしたデジタルワールドの消滅はレイザー提督と一部の上層部の独断だったと発表した上に、最初に和平の使者を殺したのはデジモン側だと強く発表し、各世界に現れたデジモン達の被害の事を叫び続けデジモン側に全ての責任が在るとデジモン達に人々の憎しみを向ける様な発表を連日行い続け、各世界の人々の心は『デジモン憎し』と言う想いに支配され始めていた。

だが、管理局内部にも上層部の発表を全く信じていない者達がいた。管理局に疑念を持っていたフェイト達である。

「・・・・・酷え報道だな」

「そうね。本当に悪いのは管理局の方なのに、全部デジモン達が悪い事にしているわ」

ミッドチルダの八神家に再び集まったフェイト達はテレビで報道されている内容に怒りの表情を浮かべ、ヴィータとシャマルは嫌悪

感さえも出しながら言葉を呟く。
　真実を知るフェイト達からすれば、管理局がおこなっている報道が嘘だと分かる。何せ先に仕掛けたのはデジモン達ではなく管理局の方なのだから。
　これ以上報道を見て行っては話が進まないと判断したリインフォースはテレビの電源を消し、他の者達に顔を向ける。

「報道内容から予測出来る事は、管理局はデジモン達との戦争を行おうとしていますね」

「それに間違いないだろう。管理局は本格的にデジモン達を悪にしたいんだ」

「でも、どうして！？何で其処までデジモン達を管理局は敵にしたいの！？デジモン達は平穏に暮らしていただけなのに！？」

　自身の腕の中に抱えるチビモンを抱き締めながら、フェイトがクロノの言葉に疑問の叫びを上げた。
　フェイトはチビモンと一緒に暮らして居たので、全てのデジモンが敵ではない事を知っているのだ。確かに管理世界にデジモンは何度も出現し被害はあったが、ブラック達のおかげで深刻な被害は出ずに済んでいた。だが、今回の管理局の暴挙のせいで本格的にデジモンと人間の戦争に発展してしまったのだ。
　フェイトの叫びにそれぞれが考え込む表情を浮かべ、クロノが自身の考えを話す。

「・・・・・認めたくなかったと言うのが、恐らく一番の理由だろう」

『認めたくない？』

クロノの言葉に全員が疑問の声を上げながらクロノを見つめると、クロノは自身の考えを話し始める。

「上を目指していて分かった事だが、管理局の中には自分達が世界を管理してこそ、世界は平和に成ると思っている者達がいるんだ。だが其処で管理局が管理出来ない程の巨大な力を持った者、しかもそれが沢山存在すると成れば、管理局が作り上げた平和が崩れるかもしれない」

「・・・・・そんな・・・・・そんな理由で虐殺を行ったって言うの！！確かに平和は大切だけど！何の罪のなかった世界を滅ぼしたり、平穏の暮らして居た者達を殺すなんて絶対に間違っている！」

クロノの言葉にフェイトは怒りに満ちている声で叫び、他の者達も怒りの表情を浮かべながら同意する様に頷く。

確か平和は大切だろう。だが、管理局が行ったのは自分達の作り上げた平和に不要だと言う身勝手な理由でデジモン達の虐殺を行い、その事実を隠す為にデジタルワールドさえも滅ぼしてしまった。

其処までやられた上に管理局は三大天使が見守っていた世界が先に仕掛けたなどと言う偽りの事実を伝え、三大天使の死さえ汚したのだから、スーツェーモン達が怒り狂うも当然だろう。

「・・・・・今更真実を管理世界全体に知らせて、あの世界を滅ぼすよう命じた上層部を裁いても彼らの怒りを沈めるのは不可能だろう。現に母さん達がレイザー提督を差し出しても、彼らの怒りは治まらず人間を全て滅ぼすと強く宣言していた。彼らとの和解はもう不可能なんだ」

そうクロノは顔を俯かせながら告げるが真実で在る。

例え管理局の人間を全て殺したとしても、スーツェーモン達の怒りは治まらない上に三大天使の世界で暮らしておたデジモン達も故郷を滅ぼした人間達を絶対に赦さないだろう。
デジモンと人間の間には修復が不可能なほどの亀裂が出来てしまったのだ。管理局の身勝手な理想のせいで、事件ではなくデジモンと人間の戦争が始まってしまった。
その事が分かったフェイト達は絶望したように顔を暗くし、全員が言葉も無く顔を俯かせていると、玄関の方からインターホンが鳴り響く。

ーーピンポーン！

「私が出て来ます」

聞こえて来たインターホンの音にリインフォースが椅子から立ち上がり、玄関に向かい出した。
そして玄関に辿り着くと、再びインターホンが鳴り響く。

ーーピンポーン！

「はい、今出ます」

再び鳴り響いたインターホンの音に答えながら、リインフォースが玄関のドアノブに手を掛けドアを開けて見ると、茶色の髪にスカートを履いた女性が笑みを浮かべて立って行った。

「お久しぶりですね、リインフォースさん」

「ッ！！高町！！」

『ッ！！』

リインフォースの叫びが聞こえて来たフェイト達は慌ててリビングを飛び出し、入り口の方に向かって見ると、確かにリインフォースの叫びの通り入り口には、四年前から行方不明だった高町なのはが立っていた。

『なのは！！』

『高町！！』

なのはの姿を見たフェイト達が喜びの声を上げてなのはに向かって駆け出すが、なのははフェイトの腕に中に居るチビモンを見つけると、笑みを消して冷たい表情をしながら自身の背後に向かって声を掛ける。

「連れて行くよ」

「分かった」

ーーービュン！！

『エッ！？』

『なっ！？』

なのはが声を掛けると共になのはの背後からワーガルルモンが飛び出し、フェイト達の目の前で立ち止まり、フェイト達は驚愕の声を上げた。

しかし、ワーガルルモンはフェイト達の驚愕に構わず、フェイト

の腕の中に居るチビモンを掴み取る。

ーーーガシッ！

「ッ！！フェイト！！！！」

「チビモンッ！！」

チビモンの叫びを聞いたフェイトは慌ててワーガルルモンからチビモンを取り返そうとするが、ワーガルルモンは瞬時にフェイト達の前から離れ、なのはの横に瞬時に移動する。

それを見たリインフォースはワーガルルモンからチビモンを取り返そうと手を伸ばすが、その前になのはがリインフォースにレイジングハートを突き付ける。

ーーーカシャッ！！

「動かないで下さいね。もし動いたら殺傷設定の魔法を放ちますから」

「・・・・・・・貴女は本当に高町なのはですか？」

冷たさに満ちたなのはの言葉にリインフォースは動くのを止めてなのはに質問し、他の者達も信じられないと言うようになのはの姿をを見つめた。

自分達の知る高町なのははは他人の事を何時も想い、平然と殺傷設定の魔法を使用する様な人物ではなかった上に、何処まで冷たい表情を自分達に向ける事など無かった。それなのに目の前に居るなのははそれを行なっているのだから疑問に想うのも当然だろう。

「・・・・管理局が滅ぼした世界は私達に取って第二の故郷と呼べる場所だった。あの世界は管理局に所属していた私やリンディさんの様に世界に否定される存在さえも暖かく受け入れてくれた世界。だから、私は管理局を絶対に赦さない」

『ッ！！！！』

なのはが告げた事実にフェイト達は驚愕の表情を浮かべた。まさか、あの世界がなのは達に取って第二の故郷と呼べる世界だとは想っても見なかったのだ。

それに気が付いたフェイトは顔を俯けるなのはに向かって声を掛ける。

「なのは」

「フェイトちゃん。この子は連れて行くね」

「ッ！！待って！如何してチビモンを連れて行くの！？」

なのはの言葉を聞いたフェイトは自身の家族であるチビモンを連れて行く理由をなのはに質問すると、なのはは呆れた表情をフェイトに向ける。

「理由として二つだね。管理局に置いて置くと危ない事と、フェイトちゃんがこの子と心を通い合わせていないからだよ」

「・・・・・・えっ？」

なのはが告げた事実にフェイトは呆気に取られた表情を浮かべ、他の者達も呆気に取られた表情を浮かべてフェイトとワーガルルモ

ンの手から抜け出そうとしているチビモンを見た。
一つ目の理由は分かる。今の管理局はデジモンを滅ぼそうと動いている為に、チビモンが管理局に居ると実験材料にさせれてしまうかも知れないからだ。だが、二つ目の理由、フェイトとチビモンが心を通い合わせていないと言う意味がフェイトに分からなかった。確かに執務官の仕事が在る為にチビモンと離れてしまう事は在ったが、それでも出来るだけチビモンと一緒に居た。
だが、それこそがチビモンと心を通い合わせられなかった理由だった。

「・・・・・・如何して私がチビモンと心を通い合わせていないって言えるの？」

「私の所にはフェイトちゃんと同じ様にデジタマからデジモンを育てたパートナーが二人居るの。内一人は既に究極体に進化出来る様に成っている。もう一人は四歳だけど、フェイトちゃんよりも後にデジモンは生まれたのに既に成熟期まで進化出来るんだよ」

「ッ！！！」

チビモンを撫でながらなのはが告げた事実にフェイトは驚いた。
一人は究極体。もう一人は自分よりも遥かに幼いと言うのに成熟期。それなのに自分のパートナーであるチビモンは未だに幼年期。それが意味する事は。

「パートナーを得たデジモンはね。どんな理由が在っても離れちゃいけないの。離れればそれだけデジモンの成長は遅れてしまう。それにこの前の戦いの時にフェイトちゃんがピンチに成ってもチビモン君は現れなかった。それこそがフェイトちゃんがチビモン君と心を通い合わせていない理由だよ」

「・・・・そ・・・・ん・・・・・な」

なのはの告げた言葉にフェイトは絶望の表情を浮かべて床に膝を付いた。

フェイトはチビモンが幼い事と危険な目に合わせたくないと言う理由で執務官の仕事には同行させなかった。だが、その行動こそが自身とチビモンの繋がりを妨げているとは夢にも想って見なかったのだ。

そしてもう告げる事は無いと判断したなのははフェイト達に背を向け、ワーガルルモンとチビモンと共に八神家から出て行こうとするが、その背に向かってクロノが叫ぶ。

「待ってくれなのは！！」

「何かな？クロノ君」

クロノの叫びになのはは足を止め、クロノの方に顔を向けると、クロノはなのはに向かって質問の叫びを上げる。

「君は管理局と敵対する気なのか！？管理局の艦艇を攻撃するなんて！？」

「今更だね。私に取って管理局は八年前から敵だよ」

「管理局はデジモンの存在を知ってしまったなのはを殺そうとしていたんだ！」

『なっ！！』

ワーガルルモンの叫びにクロノ達は驚愕の声を上げた。ワーガルルモンの言葉が事実だとすれば、管理局は八年以上前からデジモンの存在を知っていた事に成る。
それが事実だとすれば管理局はデジモンの力も十分に分かっていた筈だ。それなのに管理局はデジモンに戦争を仕掛けた。あの強大としか言えない力に戦争を仕掛けるなど正気の沙汰ではないだろう。

「後は自分達で考えてね。それじゃ行こうか」

驚愕の表情を浮かべるクロノ達にそう言うと、なのははワーガルルモンの腕の中に居るチビモンを抱えようと手を伸ばすが、その瞬間。

「ホップアタック！！」

ーーーバシッ！！

「キャアッ！！」

ワーガルルモンの力が一瞬緩んだ瞬間に、チビモンはワーガルルモンの手を踏み台にして跳ね上がると、なのはの伸ばした手に向かって体当たりを行い、なのはの手を弾く。
そして床に着地すると、膝を付いているフェイトの方に駆け出し、フェイトの前で立ち止まりなのはとワーガルルモンの方に顔を向けて睨み付ける。

「僕は行かない！！フェイトと一緒に居る！！」

「・・・・・・チビモン？」

自身の目の前で宣言したチビモンをフェイトは信じられないと言う表情を浮かべて見つめた。
なのはの言葉が事実だとすれば、自身とチビモンの間には心の繋がりが無い筈だ。それなのにチビモンは自身を護るかの様に立ち塞がっている。それが意味するのは。

（私とチビモンの間には心の繋がりが在る！！）

チビモンの行動に自身とチビモンの繋がりを確信したフェイトは立ち上がりチビモンを抱え、なのはを睨み付ける。

「なのは、幾らなのはでもチビモンは絶対に渡さない！！」

「チビモン進化！！ブイモン！！」

フェイトが叫んだ瞬間にフェイトの抱えていたチビモンの体から蒼いデジコードが飛び出し、チビモンの体を覆って行くと、蒼いデジコードは弾け飛び中から頭にVの字が書かれたデジモン、ブイモンが姿を現し、床に着地するとなのはとワーガルルモンに向かって拳を構える。

「俺は絶対にお前達とは行かない！！フェイトと一緒に戦う！」

「・・・・・・少し時間が必要な様だね。三日後にまた来るよ。その時には無理やりでも連れて行くよ」

ブイモンの宣言を聞いてもなのはは意見を変えずに告げると、今度こそフェイト達に背を向けワーガルルモンと一緒に八神家を出て行き、それを見ながらフェイトとブイモンは絶対に自分達は離れないと内心で誓うのだった。

そして八神家から離れたなのはとワーガルルモンは誰も追って来ていない事を確認し、笑みを浮かべ合った。

「ふう～、少し荒療治だったけど作戦成功だね」

「うん、だけど安心出来ない。まだ、成長期レベルじゃブイモンを擁護出来るだけの力は無いよ」

「そうだね。三日後に無理してでも成熟期に進化出来る様にしなくちゃね」

なのはとワーガルルモンがわざわざフェイト達に会いに来た理由は一つ。フェイトの下に居るブイモンがデジモンと戦う事に有用だと管理局に見せ付ける為だ。

今のままではブイモンは管理局に実験材料にされる可能性が高い。だが此処でブイモンがデジモンとの戦いに役に立つ事を示せば、クロノ達を支援している三提督も援護出来る様に成りブイモンの安全が確保出来るかも知れない。最もなのは達もそう簡単には事は進まないと理解している。もしもの時は先ほど言ったとおり無理やりでもブイモンを連れて行くつもりだった。例えフェイトとブイモンに怨まれようとも。

「さて、帰ってはやてちゃんの様子を見に行こうかな」

「フリートさんが何かしていないと良いけどね」

ーーーシュウン！！

二人は笑みを浮かべながら話し合おうと、自分達の足元に転送用の魔方陣を発生させアルハザードへと転移して行った。

暗い研究所の内部でスカリエッティは第九管理世界に現れた四聖獣とロイヤルナイツ達の戦闘映像を見つめ続け、心底嬉しそうな表情を浮かべて笑い声を上げていた。

「ハハハハハハハハハハハッ！！素晴らしい！やはりフリート君達と手を結んだのは間違っていなかった！まさかこれほどの力を持った存在だったとは！全く持って素晴らしいよ！！」

そうスカリエッティが映像を見つめながら笑い声を上げていると、スカリエッティの背後にウーノが姿を現した。

「ドクター、上層部から連絡が届き『ゆりかご』を何としても使える様にしろ言って来ましたが、いかが致しましょうか？」

「無視したまえ。第一『ゆりかご』の起動キーで在る聖王の血を引く少女はブラックウォーグレイモン君達の所に居るのだよ。彼らの所から取り返す事など不可能だし、新しい聖王のクローンを生み出そうにも聖王の遺伝子は地面の奥底だしね。全くアレに関しては完全に予想外だったよ」

スカリエッティがブラック達にヴィヴィオが生まれた研究所の場所を教えたのはブラック達の求めていたロイヤルナイツのデジタマが在った事も理由の一つだが、実はスカリエッティ自身も聖王の遺伝子を隙を見て盗むと言う目的が在ったのだ。ブラックが暴れている内に聖王の遺伝子を盗み取る。

その為に隠れてナンバーズの何人かを送って置いたのだが、肝心の研究所は地面の底に埋もれてしまった為に遺伝子を回収する事が

出来なかった。

「最も私達にはもう『ゆりかご』など必要無いがね」

ーーーブン！！

スカリエッティは言葉を言うと共に別のモニターを出現させ、モニターの中に映っている不気味に蠢き続けているデジタマを見て笑みを浮かべる。

「フフフフフフフッ！まさかフリート君達も、私達が既に別のデジタルワールドを見つけているとは夢にも想っていないだろうね。それでウーノ、例の物質は発見する事は出来たのかね？」

「いえ、デジタルワールドに居る妹達からは何の報告も在りません」

「ふむ・・・・・・まあ良い。引き続け捜索する様にトーレ達には命じておきたまえ」

「分かりました」

スカリエッティの言葉にウーノは頷くと部屋から出て行き、それを確認したスカリエッティは再びモニターに映るデジタマを見つめ笑みを浮かべる。

「フフフフフフッ、倉田明弘、そしてルーチェモンよ。次元世界を支配するのは君達なのではなくこの私だ！楽しみにしておきたまえ！！」

そう言いながらスカリエッティはモニターに映っているデジタマ

の情報を調べ続けるのだった。

何処まで広がる漆黒の空間の中をはやては走り続け、自身を追い掛けて来るナイトモンから全力で逃げ続けていた。

「はあ、はあ、はあ」

『お前達が引き金を引いた！罪の無い子供達を殺した！！』

「止めて！もう止めてや！！」

ナイトモンの怨念に満ちた言葉を、はやては両耳を抑えながら悲痛の叫びを上げた。

ロードナイトモンにやられて気を失い、気が付けばこの空間に居て歩いて居ると、突如として次々と倒した筈のナイトモンが姿を現しはやてに向かって怨念に満ちた言葉を掛け続けていたのだ。どれだけ逃げても、はやての向かう先にナイトモンは姿を現し、はやてに怨念に満ちた叫びを叫び続け、はやての精神は限界に追い込まれ始めていた。

『貴様らこそが全ての原因。滅びろ！滅びろ！！人間は全て滅びろ！！』

「・・・・・止め・・・・・・てや・・・・・・もう止めてや」

遂にナイトモンの怨念に満ちた言葉にはやては耐えきれず、両耳を抑えながら疼くまると、突如としてはやての前にロードナイトモンが現れはやての髪を掴み、はやての顔を無理やり上げさせた。

「ヒィッ！！」

ロードナイトモンの姿を見たはやては恐怖に染まった表情を浮かべるが、ロードナイトモンは気にせずはやての腹に右腕に装備したパイルバンカーを押し当て、ゼロ距離から衝撃波を放つ。

「さらばだ、愚かな人間。アージェントフィアー！！」

ーーードオオオオオオオオオオオン！！

「アアアァァァァァーーーー！！！！！」

ロードナイトモンの放ったアージェントフィアーを喰らったはやてが苦痛の声を上げた。

しかし、次の瞬間に、何処からともなくはやてを呼ぶ声が響いて来る。

『はやてちゃん！はやてちゃん！！起きてです！！』

「ハッ！！」

聞こえて来た声にはやてが目を開けて見ると、其処には先ほどまでいた漆黒の世界は無く、明るい光に照らされた綺麗に片付けられた部屋が在り、はやてはその部屋の中に在るベットの上に清潔そうな白い服を着ながら横に成っていた。

「・・・・・此処は、何処や？」

始めて見た部屋の中をベットから起き上がりながら見回している

と、ベットの横に置かれた机の上からはやてに向かって声が響く。

「はやてちゃん！良かったです！」

「リイン！」

聞こえて来た声の主の正体に気が付き、はやてが嬉しそうに机の上を見てみると、鳥籠の様な物に閉じ込められているリインが嬉しそうにはやてを見つめていた。

「なっ！すぐに出して！」

「駄目です！この鳥籠にさわっちゃ！」

鳥籠に閉じ込められているリインの姿を見たはやては慌ててリインを助けようと鳥籠に手を伸ばすが、リインは、はやてに向かって警告の声を上げた。

それを聞いたはやては鳥籠に手が触れそうに成る前に手を止め、リインに向かって疑問の表情を浮かべると、リインが説明を始めた。

「この鳥籠には、罠が仕掛けられているんです。登録されている人物以外がちょっとでも触れると、触れた人も鳥籠の中に閉じ込められてしまうんです」

「なっ！なんやそれ！？」

リインが告げた事実にはやては驚愕の表情を浮かべて、リインが閉じ込められている鳥籠を見つめた。

登録された以外の人物が触れたら閉じ込められてしまうなど、管理局の技術でも不可能な技術がただの鳥籠にしか見えない物に使わ

れているのだから当然だろう。
　それなら他の方法でと想い、鳥籠を破れる方法を考え始めると、はやては右腕に魔法陣を発生させ魔法を放とうとする。

「だったら魔法で！」

「・・・・・無理です。この鳥籠は強力なＡＭＦが張られていて、魔法が使用出来ないんです。ガジェットのＡＭＦよりも遥かに強力なＡＭＦが」

「・・・・・嘘やろ？」

　はやては魔法で鳥籠を破壊しようとするが、リインは顔を俯けながら告げた更なる鳥籠の能力にはやては信じられ無いと言う表情を浮かべて鳥籠を見つめた。
　リインが閉じ込められている鳥籠は一見普通の鳥籠に見えるが、実はリンディの頼みでフリートが作り上げた対ブラック拘束用牢獄なのだ。だが、作り上げたのは良いが、ブラックに使用して見た所、簡単に力で破られてしまったので使われる事が無くなってしまったと言う哀れな過去を持つ曰わく在る鳥籠なのだ。そもそも、ブラックの規格外の力を抑えられる牢獄など作る事は不可能なのだが、それでもＳＳＳランクの魔導師さえも脱出が不可能な程の堅牢を誇っているのだ。あくまでもブラックが規格外なだけで在って、鳥籠から脱出する事ができる人間は存在しないだろう。

「・・・・・出られる方法は無いんか？」

「無いです。はやてちゃんが起きる前にリインも色々と試して見たんですが、全然出られなかったです」

はやての質問にリインは悲しみに満ちた声を出しながら答え、二人の間に沈黙が満ち始めると、部屋の扉が開き、リンディとクイントが部屋の中に入って来る。

「はやてさん目が覚めたのね」

「リンディさん！！それに！？」

部屋の中に入って来たリンディの姿にはやては驚愕の声を上げ、リンディの横に居るクイントを見つめると、クイントは笑みを浮かべながら自身の紹介を始めた。

「私はクイント、クイント・ナカジマよ。貴女にはゲンヤ・ナカジマの妻って言えば分かるかしら」

「ゲンヤさんの！！」

クイントの告げた事実にはやては驚愕の声を上げた。ゲンヤからは自分の妻で在るクイントは管理局の任務中の最中に殉死してしまったと聞いていたのに、そのクイントが目の前に現れたのだから驚愕するのも当然だろう。

「生きていたんですか？」

「ええ、最も人間ではないけどね」

「ッ！！・・・・・・・・リンディさんと同じ存在」

クイントの言葉を聞いたはやては驚愕の表情を浮かべるが、すぐに冷静に戻りクイントの正体を呟くと、クイントは真剣な表情を浮

かべて頷き、リンディと共にベットの横に置かれていた椅子に座る。

「・・・・・あの、此処は何処でしょうか？」

「ゴメンなさい。それは教えられないわ」

「ええ、此処の主のマッドから絶対に教えるなって言われてから、教える事は出来ないわ」

はやての質問にリンディとクイントはそれぞれ答えた。アルハザードの存在は管理局には知られる訳にはいかない。例え管理局に疑念を持っているはやてだとしても、出来るだけアルハザードの事は隠して置くべきだとリンディ達は判断したのだ。

「先ずは此処にはやてさんが居る理由から説明するわね。はやてさんがロードナイトモンにやられてから少しして私達は駆け付け、死に掛けているはやてさんに気が付いたのよ」

「それで管理局の技術では治療は不可能だと判断してリンディが、此処の主で在るマッドに頼んで治療して貰ったと言うのが此処に居る理由ね。傷は無いでしょう？」

「ッ！！・・・・・・・確かに無いです」

リンディとクイントの説明を聞いたはやては慌てて服を捲り上げロードナイトモンの技を受けた脇腹を見て見ると、確かに傷跡一つ残っては居なかった。

「ただまだ起き上がらない方が良いわ。完全に移植した内臓が安定するまでは動くなと言うのが、はやてさんを治療した人の言葉よ」

「最低でも後二日はベットの上に居なさい。その後色々説明してあげるから」

「・・・・・・分かりました」

リンディとクイントの言葉にはやては考える様な表情を浮かべるが、リンディとクイントの言うとおりだと判断し頷いた。

それを確認したリンディは笑みを浮かべて、ベットの横の机の上に置いてある鳥籠に手を伸ばし、鳥籠の入り口を開けてリインを外に出した。

「フエェェェェェェン！！はやてちゃん！良かったです！！」

「リイン！！」

涙を流して抱き付いてリインをはやても抱き締め二人は喜び合うと、リンディが真剣な表情を浮かべて声を掛けて来た。

「出して上げたけど、絶対に部屋の外には出ないでね」

「あのマッドが色々と研究所内部に罠を仕掛けているらしいのよ。私達には反応しないけど、多分貴女達には反応するでしょうから、死にたくなければ部屋から出ない事ね」

「・・・・・・・・・絶対に出ません」

「・・・・・・・・・絶対に出ないです」

リンディとクイントの言葉にはやてとリインは顔を見合わせると、

リンディ達の言葉に頷き合うのだった。

その頃、フリートの研究室内部では治療カプセルの中で眠りに付いているルインの治療をフリートは行なっていたが、突如として顔を上げ辺りを見回し始めた。

「ムッ？何処かで私の悪口が言われている様な気がします」

「無駄口を叩いていないで、さっさとルインの治療を終わらせろ」

辺りを見回しているフリートに向かって研究室の壁に寄り掛かっていたブラックが声を掛けると、フリートは慌ててコンソールを弄り回し、ルインの体の状態を事細かに調べ始めた。

「・・・・・・最低でも一ヶ月は治療カプセルから出る事は出来ません。ダメージが体の内部に深く浸透し過ぎています・・・・・・消滅しなかったのが本当に不思議ですよ」

「・・・・・・クッ！」

ーーードゴオン！！

フリートの報告を受けたブラックは不機嫌そうな表情を浮かべて研究室の壁を殴り付けた。

先の戦いの時にエグザモンが放ったドラゴニックインパクトは、本来ならばブラックを消滅させても可笑しくないほど威力が在ったのだ。それなのにブラックが無事で済んでいたのは、ブラックがX進化していた事も在るが殆どのダメージをルインが肩代わりしてく

れた事も大きいのだ。

「ルインは絶対に治せ。俺は司令室で情報を聞いて来る」

「分かっています。私の持てる技術を全て使って治療しますよ」

ブラックの言葉にフリートはそう頷くと、ブラックは研究室を出て司令室に居るティアナ達の下に向かい、フリートはルインの治療とルインの横のカプセルの中に入っている十闘士のスピリットの情報を事細かに調べ始めた。

司令室の中では各世界に放ったアルハザード製のサーチャーから送られて来る情報を検証しているティアナにクダモン、そして部屋の隅の方でギルモンと遊んでいるヴィヴィオが存在していた。

「・・・・・何処までもデジモンを悪にしたいのね。管理局は」

「その様だな。だが、そうしなければ管理局には後が無い。真実が明らかに成れば管理局は本格的に終わりだ」

「そうね。全く最悪な方向に進ませてくれるわね、管理局の連中は！」

クダモンの言葉にティアナは頷くと怒りの叫びを上げた。現在の状況は正にルーチェモン達が願っていた状況に成ってしまっている。そうならない様にティアナ達は行動して来たと言うの管理局の行動のせいで最悪な道筋を進んでしまった。

「はあ～、本格的に戦争がはじ・・・・・・・ねえクダモン」

「何だ？」

「他のデジタルワールドの場所を管理局は知らない筈よね」

「確かにッ！！」

ティアナの告げた事実にクダモンは驚愕の表情を浮かべて同意した。そう戦争を行なうにも残っている三つのデジタルワールドは管理局が到達していない地点に存在している。当然、その場所を管理局が知る筈は無い。デジモン側に関しても四聖獣やロイヤルナイツ達と言った規格外の者達を除けば、次元世界に来れるデジモンは限られている。その様な状況で戦争など不可能だろう。

「一体どうやって戦争を行なう気なのかしら？」

「分からんが、それに関してはルーチェモン達も分かっている筈だ。此処まで用意周到に準備を重ねて来た連中だ。奴らが何かをしないとは思えん」

「そうね。とにかく各世界のサーチャーから情報を調べましょう」

クダモンの言葉にティアナは同意を示すと、コンソールを弄り始め各世界の情報を調べ始めた。

そして送られて来る各世界の情報を調べている内に、ティアナが一つの情報を見つけ、険しい表情を浮かべた。

「うん？」

「如何したのだ？」

「これを見て、地球に異常な磁場が発生しているわ」

「何だと？」

ティアナの言葉にクダモンは険しい表情を浮かべてティアナが示した情報を見て見ると、確かに地球に異常が起きている事が示されていた。

そして詳しく調べて見ようと、サーチャーに搭載されている観測装置を最大レベルにして見ると、一つの映像が映し出された。

『ルーチェモンッ！！』

モニターに映し出された十二枚の翼を持つ天使ールーチェモンの姿にティアナとクダモンは驚愕の声を上げ、ブラック達を呼び出す為に通信を慌てて行ない始めた。

東京に立つ赤い塔、東京タワーの天辺にルーチェモンは立ち続け、空を見上げながら笑みを浮かべ続けていた。

「クスクスクス、想ったとおりだ。倉田の言っていたとおり、半身で在ったデジタルワールドの崩壊で地球の磁場が歪んでいる。これなら可能だね」

そうルーチェモンは言いながら右手を頭上に掲げ、力を空に送ると空間が歪み始めた。

「各デジタルワールドに居る配下の者達よ！汝らの主である僕の呼び声に答え、道を作り上げよ！！」

ーーービキビキビキビキビキ、ビキィィィィィィン！！！

ルーチェモンが叫ぶと共に東京の上空に三つの罅が入り、罅が割れると共に三つの道が生み出された。それと共に三つの道からデジモン達が姿を現し始め、東京の街を襲い始めた。

「第一段階成功。フフフフフフフッ、次の段階に進まないとね」

そう言いながらルーチェモンは笑みを浮かべて空間に溶け込む様に姿を消し、後には空に浮かぶ三つの穴から現れ続けるデジモン達によって破壊されて行く東京だけが残されるのだった

憎悪の支配と繋がる世界（後書き）

次回予告

地球と繋がってしまった三つのデジタルワールド。

人間への憎悪に支配されたデジモン達は地球の人々を襲い続ける。

それを知ったブラック達は地球に向かい、三つのゲートを閉じようとする。

次回、漆黒の竜人と少女、『三大天使の最後の力、そしてブラックウォーグレイモン消失！！』

多くの者達を護る為に、再び彼は消える。それが呼ぶのは懐かしき者達との再会。

三大天使最後の力、そしてブラックウォーグレイモン消失！！

ティアナの報告を受けたブラック達は急いで指令室に向かって見ると、司令室のモニターには東京の建物や人々を襲い続けているデジモン達が映し出されていた。
それを見たブラックは険しい表情を浮かべてティアナに質問する。

「如何言う事だ！？何故地球にデジモン達が！？」

「ブラック兄さん！ルーチェモンが地球に現れて、地球と他の三つのデジタルワールドを繋げるゲートを生み出した見たいなの！」

『なっ！？』

ティアナの言葉にブラック、リンディ、クイント、そしてフェイト達の所から戻って来ていたなのは、ガブモンが驚愕の声を上げ、モニターに映る地球の様子を見つめた。
その様子を見たティアナはブラック達に、自身が調べた情報を話し始める。

「多分だけど半身で在ったデジタルワールドを失っていた事で、地球はかなり不安定に成っていた。それを利用してルーチェモンは何らかの方法を持って三つのデジタルワールドと地球を繋げたんだと思う」

「クッ！三大天使のデジタルワールドを滅ぼした真の狙いはこれか！！」

「不味いわね。今のデジモン達は憎しみに支配されている。何も知

らない地球の人々でも平然と襲うわ！クッ！バンチョーレオモンさんが居ないこんな時に！！」

ティアナの報告にブラックは苛立ちの声を上げ、リンディはバンチョーレオモンが居ない事を悔しがった。

バンチョーレオモンは数日前に自分が倒していたルーチェモンの配下のデジタマを回収して来ると言って、アルハザードから出て行ったままだったのだ。

その事を知っているリンディ達は悔しそうな表情を浮かべるが、なのははすぐに顔を真剣に戻し司令室の入り口に足を進めながら叫ぶ。

「すぐに地球に行きましょう！行くよ、ガブモン君！！」

「うん！！」

なのはの叫びにガブモンは頷くと、二人は一緒に司令室を出て行き、転送室に向かって駆け出して行った。

それを見たブラック達もなのはとガブモンの後を追おうとするが、突如としてブラックの腕をヴィヴィオが掴み、ブラックは険しい表情をヴィヴィオに向ける。

「何だ？」

「・・・・・・ヴィヴィオも行く」

『ッ！！』

ヴィヴィオの言葉を聞いたリンディ達は驚くが、ブラックだけは険しい表情のままヴィヴィオに質問する。

「お前が行って如何なる？無駄に命を散らすだけだ。それに戦うと言う事は命を奪うと言う事だ。例えデジモンは倒した後デジタマに戻るとは言え、それまでのデジモンの人生を殺す事に他ならない。お前に殺したデジモン達の怨嗟を背負う覚悟は在るのか？」

「・・・・・・もうレッサーちゃんとキャロちゃんの様に大切な人が居なくなるのは、パパ達が居なくなるのはヤダ。だから、ヴィヴィオも戦う」

「ヴィヴィオ」

ヴィヴィオの言葉を聞いたリンディは悲しげな表情を浮かべてヴィヴィオを抱き締め、ティアナ達も悲しげな表情をヴィヴィオに向ける。

この様な事に成らない為に、自分達はヴィヴィオを戦わせない様にして来た。だが、あの虐殺の日にヴィヴィオは変わってしまった。戦う力が在る事にも気が付いた事もそうだが、レッサーモンとキャロモンと言う初めての友を失った事によって、ヴィヴィオは親しい者が居なくなる事を極端に恐れる様に成ってしまった。

（運命と言うのは本当に残酷ね。あの日に全てが変わってしまった。運命はこの子を戦いの場に引き摺り出してしまった）

リンディがそう考えるのも当然だろう。もしあの日にヴィヴィオがブラックの後を追わずにアルハザードに居続ければ、ヴィヴィオは未だに戦いの場に出る事も無く、持っている力に付いても知らずに済んでいただろう。

だが、ヴィヴィオは自身の持つ力にも気が付き、大切な者が居なくなる恐怖も味わってしまった。もうヴィヴィオはただの子供で居

る事は出来ないのだ。

「パパ、ヴィヴィオは戦うよ」

「・・・・・・・ギルモン」

ヴィヴィオの宣言を聞いたブラックはヴィヴィオの背後に居るギルモンに声を掛けると、ギルモンは頷くと共にヴィヴィオの横に並び、ブラックはギルモンに真剣な表情を向ける。

「お前はソイツを絶対に護れ。俺達はソイツに構っている事は不可能だろうからな」

「うん！ヴィヴィオは絶対にギルモンが護る！」

ブラックの言葉にギルモンが頷くと、ブラックは珍しく優しげな表情を浮かべてヴィヴィオとギルモンを見つめると、今度こそヴィヴィオ達に背を向け司令室を出て行き、リンディはヴィヴィオの手を握りながらティアナ達と共に司令室を出て地球へと向かい出すのだった。

その日、日本の首都東京に住んでいる多くの人々は何気ない日々が続いて行くと想っていただろう。

だがその日、東京の上空に三つの穴が開くと共に空から現れた生物、デジモン達に襲われ、東京は壊滅的な状況に追い込まれてしまった。

『人間を全て滅ぼせ！！』

そうデジモン達は叫び続け、空から降って来る天使型デジモン達と鳥型デジモン達の群れと街の中で暴れ続けている獣型デジモン達に寄って次々と街に並ぶ建物は破壊されて行き、人々は自分達を襲って来るデジモン達から逃げ惑って行った。

そしてアルハザードから駆け付けたなのはとワーガルルモンは逃げ惑う人々を護る為にデジモン達と戦っていた。

「ディバインバスターーー！！！」

「ヘブンズナックル！！」

上空から人々を襲って行ったエンジェモンに向かってなのはが砲撃を放つと、砲撃に気が付いたエンジェモンは瞬時に拳を黄金色に輝かせると、なのはの放った砲撃にヘブンズナックルを放ち砲撃を弾き飛ばした。

そしてエンジェモンはなのはの姿を確認すると険しい表情を浮かべて持っていたホーリーロッドをなのはに向かって構えながら叫ぶ。

「お前の事は知っているぞ！オファニモン様達に希望と呼ばれた貴様が何故人間を護るのだ！？」

「ッ！！貴方はオファニモンさん達の世界のデジモンなの！！」

「私だけではない！今この世界に来ているデジモン達は全て故郷を奪われた者達だ！！」

なのはの言葉にエンジェモンはそう叫んだ。そう今地球を襲っているデジモン達は全て管理局のせいで故郷を崩壊させられてしまっ

たデジモン達。彼らは自分達の故郷を奪った人間と言う存在を滅ぼす為に地球にやって来たのだ。

「あの世界のデジモンなら分かるでしょう！オファニモンさん達はこんな事を望んでいない！」

「確かにお前の言うとおり、オファニモン様達はこの様な行いを望んではいないだろう。だが！成らば我ら故郷を奪われた者達の想いは何処に行くのだ！？それだけではない！！故郷を滅ぼした連中は我らが悪だと叫んでいる！オファニモン様達は本当に世界の事を憂いていたと言うのに！人間はあの方達を侮辱したのだ！」

「ッ！！」

エンジェモンの叫びになのはは言葉も出なかった。エンジェモンの言うとおり管理局は彼らの故郷を奪っただけではなく真実を隠し、オファニモン達の想いを侮辱する様な放送を連日を行ない続けている。

その事にはなのは達も怒りを覚えているが、今は如何する事も出来ない状況だった為に耐えていたのだが、エンジェモン達に取っては何に変えても赦せない事だったのだろう。

「人間が故郷を奪ったのなら、我らも奪うのだ！！」

「クッ！」

ーーーガアン！！

エンジェモンは叫ぶと共に握っていたホーリーロッドをなのはに向かって振り下ろし、なのはは自身のデバイスであるレイジングハ

ートを使って受け止めると、空中でエンジェモンとそれに付き従う天使型デジモン達と激闘を始めた。
　そして地上ではワーガルルモンと群れを成して人々を襲い続けている熊の様な姿をしたデジモンと、黄色のヌイグルミの様なデジモンと激闘を繰り広げていた。

グリズモン、世代／成熟期、属性／ワクチン種、種族／獣型、必殺技／当身返し
明らかに大きな体、殺傷能力を秘めた牙と爪、見た目は凶暴だが正々堂々とした武闘家の精神を持った獣型デジモン。体の割に素早く敵の攻撃を避けたり、受け流すなど、攻撃に頼らない抜群の格闘センスを持っている。決してグリズモンから争いを起こすことは無いが、ひとたび怒らせると二足で立ち上がり重量級の前足の『熊爪』を殴り落す。必殺技は、敵をギリギリまでひきつけ、相手の攻撃を避けると共に逆に相手の急所をつき、一撃で倒す『当身返し』だ。

もんざえモン、世代／完全体、属性／ワクチン種、種族／パペット型、必殺技／ラブリーアタック
すべてが謎に包まれているパペット型デジモン。見た感じは、そのまま熊のぬいぐるみで、背中の部分にチャックが付いているところから、中に何者かが入っているという噂。この可愛らしい体から溢れる愛で敵を包み込んで幸せな気持ちにしてくれる。必殺技は、愛の詰まったハートを敵に投げつけ、戦闘意欲を無くさせてしまう『ラブリーアタック』だ。

「止めるんだ！！」

ーーードゴオオン！！

「グアッ！！」

人に襲い掛かろうとしていたグリズモンの姿を見たワーガルルモンは瞬時にグリズモンの目の前に移動し、グリズモンを蹴り飛ばした。
そして自身に視線が集中しているのを確認したワーガルルモンはグリズモン達ともんざえモンに向かって叫ぶ。
「もう止めるんだ！こんな事をしてもオファニモン様達は喜ばない！」
「黙れ！！確かに三大天使の方々は喜ばぬだろう！！だが、我らの故郷を奪った人間ども達を赦す事は出来ん！」
「この世界の人達は何も知らないんだ！だから人を襲うのは止めてくれ！！」
「止まれん！！！我らの邪魔をするのならば貴様も敵だ！！」
ワーガルルモンの叫びに一体のグリズモンが叫び返すと共にワーガルルモンに向かって飛び掛り、他のグリズモン達も一斉ワーガルルモンに向かって飛び掛った。
『オォォォォォォォォーーーーーー！！！！』
「クソオォォォォォォォーーーーー！！！！」
自身に飛び掛ってくるグリズモン達の群れを見たワーガルルモンは悔しそうな表情を浮かべて叫ぶと共に、両手の爪を全力でグリズモン達に群れに向かって振り抜く。

「カイザーーーネイル！！」

『グアァァァァァァァーーーーー！！！』

ワーガルルモンのカイザーネイルによって何体かのグリズモンは消滅し、デジタマだけが地面に残りワーガルルモンは自身の背後に居る生き残ったグリズモン達の方を振り返る。

「デジタルワールドに戻って下さい。出来る事なら倒したくない！」

「貴様の言葉は良く分かる。だが、我らももはや後には退けんのだ！！」

「ウオォォォォォォォォォォン！！！」

ワーガルルモンの叫びにグリズモンは叫ぶと、もんざえモンと共にワーガルルモンに飛び掛かり、悲しき戦いが再開され、ワーガルルモンの悲しみに満ちた咆哮が辺りに響き渡るのだった。

その頃、後から駆け付けたブラックとバイオ・エンジェウーモンに進化しているリンディは上空に浮かんでいる天使型デジモン達と鳥型デジモン達を倒し続けていた。

『オォォォォォォォォォーーーーーー！！』

「ガイアフォーーース！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオン！！！！

自身に向かって来る天使型デジモン達に向かってブラックはガイ

アフォースを投げ付け、巨大な爆発が空中で起きてブラックに向かって突撃して来た天使型デジモン達は消滅した。
だが、空中に存在しているゲートから次から次へとデジモン達が姿を現し、ブラックが倒した分のデジモン達はすぐさま補充されて行き、ブラックは苦々しげに睨みつける。

「チッ！切りが無いな」

「ええ、相手は一つのデジタルワールドに住んでいたデジモン達。究極体は来ていない様だけど、そろそろ来るでしょうね」

「そうなる前にあのゲートを閉じなければ成らん。出なければ今の状態の俺達ではやられるからな」

リンディの言葉にブラックはそう答えながら上空に浮かぶ三つのゲートを険しい表情を浮かべて睨み付けた。
空に浮かぶゲートが在る限りデジモン達は現れ続け、確実にブラック達を追い込んで行くだろう。ブラック達の実力は四聖獣やロイヤルナイツ達に匹敵するとは言え、今のブラック達は先の戦いのダメージが完全に回復していない上に、ブラックのパートナーであるルインも居ない。その様な状態では地球を護り抜く事は不可能なのだ。

「何とかしてあのゲートを閉じなければいけないわね」

「・・・・・・一つだけ方法が在るな」

「ッ！！本当なの！？」

ブラックの呟いた言葉にリンディが驚愕の表情を浮かべてブラッ

クを見つめると、ブラックは方法を説明し始める。

「ティアナ達のディーアークの中には三大天使の力が宿っている。その力を解放して三つのゲートを封じ込めるしかない」

「・・・・・確かにそれしか方法は無いかもしれないけど、あのゲートは完全に安定しているのよ？それに三大天使の力は、ほんの僅かしかないわ。成功する確率は低いわよ」

ブラックの告げた方法にリンディは少し考える様な表情を浮かべるが、すぐに冷静にブラックの方法を否定した。

確かにブラックの告げた方法しか無いとは言え、空に浮かぶ三つのゲートは完全に安定している為にほんの僅かしかない三大天使の力では封印出来る可能性は限りなく低い。完全な三大天使の力ならば可能だろうが、ほんの僅かしかない上に三つのゲートは安定している、その様な状態では封印する事は不可能なのだ。

しかし、リンディの言葉を聞いてもブラックは表情を変えずに告げる。

「貴様はティアナ達に今伝えた方法を行なわせろ。あのゲートは俺が何とかする」

「ッ！！・・・・・・・・死ぬ気なの？」

「死ぬだと？笑わせるな、俺はただ、無様に生きるだけだ」

「・・・・・・・・貴方に何を言っても止まらないでしょうし、分かったわ。だけど絶対に生きて帰って来て下さいね」

「フン！」

リンディの言葉にブラックは不機嫌そうに声を出すと、三つのゲートが浮かぶ空に向かって飛び立ち、リンディもブラックの作戦を伝える為にティアナ達の下に向かい出した。

そしてブラックは自身に向かって来るデジモン達を倒しながらゲートに向かって全速力で飛んでいると、突如として目の前に三つの足を持った巨大な鳥が現れ、ブラックの行く手を阻んだ。

ヤタガラモン、世代／完全体、属性／ワクチン種、種族／妖鳥型、必殺技／甕布都神（みかふつのかみ）、羽黒（はぐろ）

。両翼に独鈷杵（とっこしょ）、そして三本の脚を持つ妖鳥型に分類される神話に生きるデジモン。その禍々しい容姿から邪悪な存在に思われるが、れっきとしたワクチン種。デジタルワールドの東方に存在する『黄金郷』へ選ばれしものを導くデジモンとも言い伝えられている。必殺技は、両翼の独鈷杵（とっこしょ）からのエネルギーを前足に込めて放ち、相手のデジタル細胞を“０”、“１”の状態にまで破壊する『甕布都神（みかふつのかみ）』に、翼から黒い光を放ち周囲３ｋｍを闇夜に変える『羽黒（はぐろ）』だ。

「此処から先には行かせんぞ！！」

「悪いが無理にでも徹して貰う！！」

ーーードゴオオオオオオオン！

ヤタガラモンの叫びにブラックは叫び返すと、ゲートに向かう為に空中でヤタガラモンとぶつかり合いを始めた。

その頃、ブラックから作戦を伝えられたリンディはティアナ、ヴ

ィヴィオ、なのはを集め、東京で一番高い塔、東京タワーを目指していた。
そしてリンディから作戦を聞いたティアナはチィリンモンの背に乗りながらブラックの作戦を検証していた。
「つまり、私達のディーアークに宿っている三大天使の力を解放して、空に浮かぶゲートを閉じると言う事ですね」
「ええ、そうよ」
「しかし、そう簡単に行くのか？空に浮かぶゲートは完全に安定している。それに三大天使の力は僅かしかないのだぞ？」
リンディに向かってチィリンモンがそう質問すると、他の者達も不安そうにリンディの背を見つめるが、リンディは真剣な声で告げる。
「安定させなければ良いのよ。あのゲートは安定しているとは言え、あの三つのゲートは無理やり繋げた物には違いないわ。なら其処で強力な歪みを生み出してしまう存在が近付けば」
『ッ！！！』
リンディが告げた事実にティアナ達は漸くブラックの本当の目的に気が付き驚愕の表情を浮かべた。　リンディの言うとおり空に浮かんでいる三つのゲートは安定しているとは言え、ダークタワーの様な触媒が無くルーチェモンの力で無理やり他のデジタルワールドを繋げただけでしかない。つまり安定して居る様に見えるが、実を言えばかなり不安定な状態なのだ。
だが、それでも僅かしかない三大天使の力では封印する出来る可

能性は低い。しかし、其処で世界にバランスを崩してしまうほどの歪みを生み出してしまう存在、そうブラックが三つのゲートに近付けば。

「彼が近付けば恐らくゲートは不安定に成るわ。その隙を付いてゲートを封印するのよ」

「待って下さい！そんな事をしたらブラックさんは！！」

リンディの説明を聞いたなのはは険しい表情を浮かべて叫び、ティアナとチィリンモンも険しい表情をリンディに向け、グラウモンの頭の上に乗っている進化状態のヴィヴィオは不安そうな表情を浮かべた。

そう、確かにリンディの言うとおりブラックがゲートに近付けばゲートは不安定な状態に変わるだろう。だが、ゲートに近付くと言う事は、次々と現れ続けるデジモン達の群れに飛び込むと言う事であり敵陣の真ん中に居続ける事と言う事でも在る上に、例え作戦が成功したとしても封印にブラックが巻き込まれる可能性が高すぎる。

その事に気が付いたティアナはチィリンモンの背から乗り出しリンディに向かって叫ぶ。

「危険すぎます！すぐにブラック兄さんを止めないと！！」

「他に方法が無いの！！それにそろそろ究極体が来るわ！！！」

『ッ！！！』

リンディの叫びを聞いたティアナ達が驚愕の表情を浮かべると、リンディは自身の背の羽を羽ばたかせ、東京タワーに向かうスピードを上げて空に浮かぶ三つのゲートの前で起こり続けている爆発に

目を向けながら告げる。

「もうあのゲートが安全なゲートだとデジタルワールドに居るデジモン達は気付き始めている筈よ。そうなれば慎重に成っていた究極体達も動く筈。今の私達はスーツェーモン達との戦いのダメージも回復していない。究極体に一体でも来られれば、他のデジモン達に手が回らなくなるわ」

「・・・・・・確かにそうですね。今の私達じゃ究極体に勝てる可能性は低い」

リンディの言葉を聞いたティアナは悔しげな表情を浮かべて同意した。

今のティアナ達が相手に出来るレベルは完全体が精一杯なのだ。出なければなのはとティアナはパートナーと共に究極体に進化し、デジモン達を追い込んでいただろう。だが、今のなのはとティアナ、そしてワーガルルモンとティリンモンにはスーツェーモン達との戦いの時のダメージがまだ体の中に残っている為に究極体に進化する事が出来ない。

そしてそれはリンディとクイントにも言える。もし究極体に成れるのならとうの昔に究極体に進化しているだろう。

「もう彼の考えた作戦以外に方法は無いわ」

「・・・・・・・・・・分かりました」

「・・・・・・・・・それしかないんですね」

リンディの言葉にティアナとなのはは悔しそうな表情を浮かべながら頷き、東京タワーへと全速力で向かい出した。

だが、ヴィヴィオとだけはその場にグラウモンの頭の上に乗り続け顔を俯かせ、涙を流し始めた。

「ヒック、ヒック、パパも居なくなるの？」

「大丈夫だよ！ヴィヴィオのパパは強いんだ！絶対に死んだりしない！」

「グラウモンの言うとおりよ、ヴィヴィオ」

涙を流し続けるヴィヴィオを励ます様にグラウモンが叫ぶと、空からリンディがグラウモンの頭の上に降りて来て、ヴィヴィオを抱き締めながら告げる。

「あの人は死ぬ気は無いって言っていたわ。ただ無様に生きるだけなんて言っていたんだから、絶対に生きて帰って来るわ。だから、私達は私達の出来る事をしましょう。貴女が此処に来たのは泣く為なの？」

「・・・・・・違うよ。リンディお姉ちゃん達、そしてパパを護る為に来たんだよ！！」

リンディの質問にヴィヴィオは目から流れ落ちる涙を拭き、自身が戦いの場に来た理由を宣言した。

それを聞いたリンディは優しげな笑みを浮かべてヴィヴィオを更に強く抱き締めながら告げる。

「行きましょう。あの人にこれ以上無理をさせない為にもね」

「うん！！」

「グラウモンも頑張る！！」

リンディの言葉にヴィヴィオとグラウモンはそれぞれ答えると急ぎ東京タワーへと、リンディと共に向かい出した。

そして東京タワーの上空に出現している三つのゲートの前ではブラックがただ一人、ゲートから現れ続けている無数のデジモン達と戦い続けていた。

「ドラモンキラーーー！！」

「グアァァァァァーーーー！！！！」

ブラックのドラモンキラーがヤタガラモンの体に突き刺さると、ヤタガラモンは悲鳴を上げながらデータ粒子に変わり消滅した。

だが、ブラックはヤタガラモンの消滅を確認しても安心せずに瞬時に背後を振り返り、自身に剣を振り下ろそうとしていた背に四枚の翼を付けた女性型の天使型デジモンを殴り飛ばす。

「フン！！」

ーーードゴン！！

「ガアッ！！」

「ダルクモン！！」

ブラックに殴り飛ばされた天使デジモン、ダルクモンの姿を見た白い翼を背に付け、四足歩行に鳥の顔を持ったデジモンは瞬時にダルクモンの吹き飛ばされた方向に移動し、ダルクモンを背で受け止

めた。

「大丈夫か！？」

「ああ、助かったぞ、ヒポグリフォモン」

ダルクモン、世代／成熟期、属性／ワクチン種、種族／天使型、必殺技／バテーム・デ・アムール
女性の姿をした下級天使型デジモン。天使デジモンの尖兵であり、常に先陣を切って戦う姿は“戦場の女神”とまで言われるほどである。腰には『ラ・ピュセル』と呼ばれる2本の剣を備えている。必殺技は、二本の『ラ・ピュセル』から繰り出される美しき剣技『バテーム・デ・アムール』だ。

ヒポグリフォモン、世代／完全体、属性／データ種、種族／幻獣型、必殺技／ヒートウェーブ
グリフォモンほどの知性は無く荒々しい性格の幻獣型デジモン。合成獣の姿をし、獣型デジモンを統べる者。進化するとグリフォモンに進化すると言われている。必殺技は、超高温の熱風を相手に吹きかける『ヒートウェーブ』だ。

ヒポグリフォモンの言葉にダルクモンは答えながらブラックに剣を向けて、ヒポグリフォモンと共にブラックに突撃しようとした瞬間。

「オォォォォォォォォォーーーーーー！！！！！」

「ウワァァァァァァーーーーーー！！！！！」

『なっ！？』

ーーードゴオオオオオオオオオン！！

ブラックが振り回していた黒い燃え盛る炎を纏った巨鳥、セーバードラモンをダルクモンとヒポグリフォモンに投げ付け、ダルクモンとヒポグリフォモンはセーバードラモンと共に吹き飛んで行った。

セーバードラモン、世代／成熟期、属性／ワクチン、ウィルス種、種族／巨鳥型、必殺技／ブラックセーバー
燃えさかる黒い大きな翼を持った巨鳥型デジモン。その翼で飛び、上空から獲物を狙う。バードラモンの亜種デジモンだが、性格はとても凶暴で近づくことすら難しい。必殺技は、上空から鋭いツメで相手を攻撃する『ブラックセーバー』だ。

「次はどいつだ？俺は幾らでも相手に成るぞ！！」

自身の周りで警戒の視線を放って来るデジモン達の群れに向かってブラックが叫ぶと、デジモン達の群れの中から背に八枚の翼を付け、右手に付けている腕輪から剣が飛び出し、左手に盾の様な物を装備した天使型のデジモン、ホーリーエンジェモンがブラックの前に姿を現し、右手に装備した聖剣エクスキャリバーを構え出した。

ホーリーエンジェモン、世代／完全体、属性ワクチン種、必殺技／ヘブンズゲート
輝く８枚の銀翼を持った大天使型デジモン。ホーリーエンジェモンのデジタルワールドでの使命は法の執行官であり、多くの天使型デジモンを監督監視する役目を持っている。さらに、デジタルワールドの秩序を保とうとする“光”の意識の代弁者であり普段は神官の姿をしているが、“闇”の意識がデジタルワールドを覆った時、戦闘形態『バトルモード』に変化し悪を討つ。戦闘形態時には左腕の

ビームシールドと右腕に装備された”聖剣エクスキャリバー”で敵を葬り去る。必殺技は、右手の聖剣で亜空間への扉を出現させ、敵を吸い込む『ヘブンズゲート』だ。

「やはりお前は悪しき存在だったか！！オファニモン様達は危険ではないと言っていったが、貴様は許されん存在。多くの世界の為にも、私はお前を討つ！！」

「フッ、、相変わらず、ホーリーエンジェモンとは気が合わんな。だが、確かに貴様の言う通り、俺は許されん存在だ」

ブラックの存在を否定するホーリーエンジェモンの言葉に、ブラックは笑みを浮かべながら同意を示すと、自身の首下に掛かっているネックレスに右手のドラモンキラーの爪を引っ掛ける。

（・・・・・・初めてだ。この呪わしき体に此処まで感謝の念を抱くのは）

ーーーブチッ！！

その音と共にブラックの首下に掛かっていたネックレスの紐は引き千切れ、地上へとネックレスは落ちて行った。

それを見ていたホーリーエンジェモンがブラックの行動に疑問の表情を浮かべた瞬間に、空に浮かんでいた三つのゲートが歪み始める。

ーーーグニャアン！！

「なっ！？ゲートが！？」

不安定に成り始めたゲートを見たホーリーエンジェモンは驚愕の声を上げ、他のデジモン達も驚愕の表情を浮かべてゲートを見つめていると、地上の東京タワーの屋上から三つの光がそれぞれのゲートに向かって伸び始め、ゲートが閉じ始めた。

「これは一体!?何が起きているのだ!?」

閉じ始めたゲートを見たホーリーエンジェモンは焦りの表情を浮かべてゲートを見つめていると、ブラックがホーリーエンジェモンに向かって突撃し、ホーリーエンジェモンに向かってドラモンキラーを振り下ろす。

「オォォォォォォーーー!!ドラモンキラーー!!」

「クッ!!」

ーーーガキイン!!

ブラックの振り下ろして来たドラモンキラーをホーリーエンジェモンはエクスキャリバーで受け止めるが、ブラックは焦らずにホーリーエンジェモンの腹に向かって蹴りを放ち蹴り飛ばす。

「フン!!」

ーーードゴン!!

「グアッ!!」

ブラックの蹴りを受けたホーリーエンジェモンは苦痛の声を上げて吹き飛んで行き、それを確認したブラックは周りで焦りの表情を

浮かべ始めているデジモン達に向かって叫びながら炎の竜巻を発生させる。

「ゲートが完全に閉じるまでの間、俺と戦っていて貰うぞ！！ブラックストームトルネーード！！！」

『グアァァァァァァァァーーーーー！！！！！』

「ウオォォォォォォォーーーーー！！！一体足りとも逃さんぞ！！」

ブラックの発生させたブラックストームトルネードに寄ってデジモン達は吹き飛んで行くが、生き残ったデジモン達はブラックに向かって突撃し攻撃を放ち始めるが、ブラックは自身が傷付きながらもデジモン達をヴィヴィオ達の下に行かせない為にデジモン達と戦い続け、何とかブラックの手から逃れた者達も東京タワーの周りに居たリンディとチィリンモンに寄って倒されて行き、上空からはヴィヴィオ達にデジモン達が近づく事は出来なかった。

しかし、敵は空に浮かぶだけではなく地上に居る為に、地上に居るデジモン達はゲートを閉ざそうとしている三つの光が発生されている東京タワーに向かって進撃していた。

「あの光だ！あの光さえ無くなればゲートは開いたままだ！！」

「私に任せろ！！」

東京タワーの下に付いたグリズモンの叫びに、体に幾つもの激戦を潜り向けて来たと思われる傷を付けた黒い恐竜の様な体を持ったデジモン、マスターティラノモンは叫ぶと共に、全身から赤いオーラを発生させ始めると共に口にエネルギーを集め、東京タワーの柱に向かって炎を口から放った。

マスターティラノモン、世代／完全体、属性／ワクチン種、種族／恐竜型、必殺技／マスターファイヤ
別名“ティラノ師匠”とも呼ばれる恐竜型デジモン。激戦を勝ち抜いたティラノモンのみが進化できるとされ、その体の傷が証である。日夜弟子のティラノモン達に修行をさせている。必殺技は、赤いオーラを放ち、エネルギーを溜め、口から勢いよく炎を吐き出す『マスターファイヤ』だ。

「マスターファイヤ！！！」

「エキゾーストフレイム！！」

ーーードゴオオオオン！！

「何！？」

マスターティラノモンの放ったマスターファイヤが東京タワーの柱に当たろうとした瞬間に、横から爆音と共に熱線が放たれ、マスターファイヤと激突し爆発が起きた。
それを見たマスターティラノモン達は驚愕の表情を浮かべて熱線の放たれた方向を見て見ると、バイオ・グラップレオモンに進化したクイント、ワーガルルモン、そしてグラウモンが険しい表情を浮かべながらマスターティラノモン達を睨んでいた。

「ヴィヴィオの邪魔はさせない！！」

「悪いけど、あのゲートは閉じさせて貰うわね」

「これ以上は暴れさせないぞ！！」

グラウモン、クイント、ワーガルルモンはそう叫ぶと、グラウモンはマスターティラノモンに向かって、クイントとワーガルルモンは他のデジモン達に向かって突撃し、激戦を始めた。

「ウオォォォォォォォーー！！プラズマブレイド！！！！」

「マスタークローー！！」

ーーーガァァァァン！！

グラウモンが両腕に付いているブレードに雷を纏わせながらマスターティラノモンに向かって切り掛かると、マスターティラノモンは自身の巨大な爪を突き出してグラウモンの攻撃を防いだ。

それを見たグラウモンは一瞬悔しそうな表情を浮かべるが、すぐに表情を戻し、マスターティラノモンを抑えようと両手を伸ばすが、マスターティラノモンも両手をグラウモンに向かって伸ばし、二体は両手を合わせて組み合いを始める。

「グググググッ！」

「中々の力だが、私には通用しない！！」

マスターティラノモンは自身の手から感じられるグラウモンの力に感心した声を出すが、すぐに表情を真剣に戻し、グラウモンと組み合っている両手に更に力を込め、グラウモンの体を持ち上げ始めた。

「ヌン！！」

「そんな！？」

自身の巨大な体を持ち上げ始めたマスターティラノモンの力にグラウモンは驚愕の声を上げるが、マスターティラノモンは気にせずにグラウモンを近くの建物に向かって叩き付ける。

「フン！！」

「ウワァァァァァァーーーー！！」

ーーーガシャン！！！

『グラウモンッ！！』

グラウモンが建物に叩き付けられるのを見たクイントとワーガルルモンは声を上げながらも、グラウモンの救出に向かおうとするが、周りに居るデジモン達に阻まれ救出に向かう事は出来なかった。

その間にマスターティラノモンは東京タワーに向かって足を向け、東京タワーを支える柱に向かって攻撃を加えようとした瞬間。

ーーーガシッ！！

「ヴィヴィオ達の邪魔は絶対にさせないぞ！！！」

建物の瓦礫の中からグラウモンの手が飛び出し、マスターティラノモンの尻尾を掴み取り、マスターティラノモンの足を止めさせた。

グラウモンが戦闘可能だと気が付いたマスターティラノモンは自身の尻尾に力を込め、グラウモンの手から尻尾を抜き取ると共にグラウモンの方に振り返り、拳をグラウモンに向かって放つ。

「お前は所詮成熟期、私は幾多の経験を重ねた完全体。お前が私に勝つ事は不可能だ！」

ーーードゴオン！！

「ガアッ！！」

マスターティラノモンの拳を受けたグラウモンは苦痛の声を上げるが、戦意を失わずにマスターティラノモンに向かって自身の両手の爪を突き出す。

「グラウクローー！！！」

「マスタークローー！！！」

グラウモンのグラウクローを見たマスターティラノモンは自身もマスタークローをグラウモンに向かって放ち、グラウモンの爪はマスターティラノモンの爪に寄って弾き飛ばされ、マスターティラノモンの爪がグラウモンの腹に深く突き刺さった。

ーーーグサッ！！

「グアァァァァァァァーーーーー！！！！」

『グラウモンッ！！』

「グラちゃん！！！」

マスターティラノモンの爪が深くグラウモンに突き刺さると、グラウモンは苦痛の叫びを上げ、それを聞いたクイントとワーガルル

モンは他のデジモン達への攻撃を止めグラウモンの名を叫び、東京タワーの屋上でディーアークをゲートに向かって掲げながら戦いを見ていたヴィヴィオも悲鳴の様な声を出してグラウモンの名を叫んだ。

そしてグラウモンの体から力が抜けていく事に確認したマスターティラノモンは爪を引き抜こうと、手を下げ始めるが、突如としてグラウモンの手が動き、マスターティラノモンの腕を握り締める。

ーーーガシッ！！

「何ッ！？」

「・・・・約束したんだ・・・・・・・絶対に・・・・・・・ヴィヴィオを護るって！！エキゾーストフレイム！！！」

ーーーードグオオオン！！

「グオォォォォーーー！！！！」

自身の腕を握られた事に動きが止まってしまっているマスターティラノモンに向かって、グラウモンは口から熱線を放ち、至近距離で熱線を受けたマスターティラノモンは流石にダメージを受けたのか苦痛の声を上げた。

だが、熱線を放ったグラウモンは今度こそ全身から力が抜け、大地に倒れ付す。

ーーーーバタン！！

「ッ！！グラちゃぁぁぁぁぁぁん！！！！」

大地に倒れ付したグラウモンの姿を見たヴィヴィオは悲鳴の様な声を出してグラウモンの名を叫ぶが、グラウモンは答えずに大地に倒れ伏したままだった。
それを見たヴィヴィオは目に涙を浮かべてグラウモンの下に向かおうとするが、その直前に、空からデジモン達と戦っているブラックがヴィヴィオに向かって叫ぶ。

「貴様は此処に何をしに来た！！！！！」

ーーービクッ！！

ブラックの叫び声が聞いたヴィヴィオは体を震わせながら上空に目を向けて見ると、背中に装備しているブラックシールドが罅だらけの上に、全身が傷付いても戦い続けているブラックがヴィヴィオに顔を向けていた。

「貴様は既に道を選んだ！！なら何が在っても自分のパートナーを信じろ！！！」

「そうだよ、ヴィヴィオ」

「デジモンは信じれば答えてくれるわよ」

「・・・・パパ、なのはお姉ちゃん、ティアナお姉ちゃん」

空で戦い続けているブラックの叫びと、自身の隣で自分と同じ様にデジヴァイスを掲げてゲートに向かって光を放ち続けているなのはとティアナの言葉を聞いたヴィヴィオは不安そうな表情を浮かべながらも、下で倒れているグラウモンに顔を向ける。

「グラちゃん」

不安そうにしながらもヴィヴィオがグラウモンを見つめていると、グラウモンの熱線を受けて倒れていたマスターティラノモンが立ち上がり、倒れ伏しているグラウモンの姿を確認すると今度こそ東京タワーの柱に向かって歩き出し、それを見たヴィヴィオはグラウモンに願った。

（グラちゃん！！ヴィヴィオはパパ達を護りたいの！だからお願い！もう少しだけ頑張って！！）

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

ヴィヴィオが心の底からグラウモンの助けを望んだ瞬間に、ヴィヴィオの掲げるディーアークが光り輝き、電子音声が鳴り響くと、倒れ伏していたグラウモンの目が力強く開きグラウモンの体が蒼いデジコードに包まれ、デジコードの中からグラウモンの叫び声が聞こえて来る。

「グラウモン進化！！！」

グラウモンが叫ぶと共に蒼いデジコードは弾き飛び中から、グラウモンの時よりも更に体が巨大に成り、上半身は完全に機械化され、両手に巨大な刃『ペンデュラムブレイド』を装備し、両肩にバーニアを付け、背中に『アサルトバランサー』を装備したグラウモンの進化系、紅蓮の機械龍が姿を現した。その名も。

「メガログラウモン！！！」

メガログラウモン、世代／完全体、、属性／ウィルス種、種族／サ

イボーグ型、必殺技／アトミックブラスター
『巨大なグラウモン』の名前を持つ、サイボーグ型の完全体デジモン。その名の通り体は大きく巨大化しており、上半身は最強金属“クロンデジゾイド”でメタル化されている。両肩に付いている2基のバーニアで飛行することもでき、対空・対地攻撃の両方が可能である。有り余るパワーで暴走するのを抑えるために、顎の部分にクツワのような拘束具を付けている。また背部の部分から帯のように伸びる『アサルトバランサー』は伸縮自在で、敵を貫き刺す事も出来る。必殺技は、胸の発射口から光線を放ち、敵を原子レベルで破壊する『アトミックブラスター』だ。

「グラちゃん！！！頑張って！！」

「オオォォォォォーーーー！！！」

ヴィヴィオの応援の叫びを聞いたメガログラウモンは両肩に装備したバーニアを全力で吹かせると、柱を破壊しようとしているマスターティラノモンに突撃した。

「何ッ！？ガアッ！！！」

自身に向かって来るメガログラウモンの姿を見たマスターティラノモンは驚愕の声を上げようとするが、メガログラウモンは構わずにマスターティラノモンを殴り付けた。
メガログラウモンの一撃を受けたマスターティラノモンは一瞬よろめくが、すぐに体勢を整え、メガログラウモンに向かって爪を突き出す。

「喰らえ！マスタークローー！！」

「ハンマーエッジッ！！」

マスターティラノモンのマスタークローを見たメガログラウモンも自身のクロンデジゾイド製の爪をマスターティラノモンの爪に突き出し、マスターティラノモンの爪とメガログラウモンの爪が激突した瞬間に、辺りに甲高い音が鳴り響きマスターティラノモンの爪は砕け散った。

ーーーバキィィィィィィィン！！！

「グァァァァァァァーーーー！！！！！」

「もう絶対にヴィヴィオを悲しませるものか！！！」

ーーードゴン！！

自身の爪が砕け散った事にマスターティラノモンが苦痛の叫びを上げていると、メガログラウモンはマスターティラノモンの顔面に向かって拳を振り下ろした。

「グオッ！！おのれ！マスターファイヤ！！」

メガログラウモンの拳を顔面に受けたマスターティラノモンは苦痛の声を上げるが、瞬時に体勢を整えると全身から赤いオーラを発生させながら口から炎を放つが、メガログラウモンは体を沈ませる事で炎をかわし、マスターティラノモンの顎に向かって拳を撃ちつけ、口を無理やり閉じさせる。

「ハアッ！！」

ーーードゴオン！！

「グアッ！！グギャァァァァァァーーーー！！」

炎を吐いている途中で無理やり口を閉ざされたマスターティラノモンは自身の口の中で炎を爆発させ、苦痛の叫びを上げ始めた。

しかし、メガログラウモンはマスターティラノモンに苦痛の声に構わず、マスターティラノモンの体を持ち上げ、上空に向かって投げ飛ばすと、胸部砲門を上空に浮かんでいるマスターティラノモンに向け光線を放つ。

「アトミックブラスターーーーー！！！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオン！！！

「グアァァァァァァーーーーー！！！！！」

メガログラウモンのアトミックブラスターが直撃したマスターティラノモンは苦痛の叫びを上げながら原子レベルで破壊され、データ粒子に変わり消滅した。

それを見たメガログラウモンは笑みを浮かべるが、すぐに表情を真剣な表情に戻し、クイントとワーガルルモンの援護に向かい出した。

その様子を東京タワーに屋上から見ていたヴィヴィオは嬉しそうに、なのはとティアナに顔を向ける。

「なのはお姉ちゃん！ティアナお姉ちゃん！グラちゃんが勝ったよ！」

「うん！良かったね！」

「ゲートの方も後一つでおわ・・・・・・・・・嘘」

ヴィヴィオの喜びの声になのはも自分の事の様に喜び、ティアナも自分達の勝利を確信して、上空に浮かぶ最後のゲートに顔を向けるがその表情は絶望に染まり、それに気が付いたヴィヴィオとなのはも最後のゲートに目を向けて見ると、閉じかけたゲートから出ようとしている背に緑色のマントを付け、全身を白い鎧で覆った竜人と全身を鎧武者の様な甲冑で身を包んだ竜人がいた。

スレイヤードラモン、世代／究極体、属性／ワクチン種、種族／竜人型、必殺技／天竜斬破（てんりゅうざんは）、昇竜斬波（しょうりゅうざんぱ）、咬竜斬刃（こうりゅうざんば）

クロンデジゾイドの鎧鱗（がいりん）で身を包んだ竜人型デジモン。竜型デジモンだけが挑戦できる“四大竜の試練”と呼ばれる修行を修了した者だけがたどり着ける究極体といわれている。伸縮自在の大剣『フラガラッハ』を帯びており、スレイヤードラモン独自の究極剣法『竜斬剣』を極めている。必殺技は、『竜斬剣』の壱の型：回転体術によって加速させた剣を相手の脳天から打ち込み一刀両断する『天竜斬破（てんりゅうざんは）』に、『竜斬剣』の弐の型：剣で練った竜波動を下方から上方に放ち、剣圧だけで相手を破壊する『昇竜斬波（しょうりゅうざんぱ）』。そして『竜斬剣』の参の型：至近距離まで踏み込み、『フラガラッハ』を相手に巻きつけ、縛りつけた刀身で相手の全身を削り取る『咬竜斬刃（こうりゅうざんば）』だ。

ガイオウモン、世代／究極体、属性／ウィルス種、種族／竜人型、必殺技／燐火斬（りんかざん）、ガイアリアクター、燐火撃（りんかげき）

戦いに勝利し自ら強さを増していく、戦闘種族デジモンとして非常に優秀なグレイモン系の亜種である竜人型デジモン。東洋のとある放置されたコンピュータの中で発見され、その強さは未知数な部分も多いが、信じ難い戦闘回数と戦績を持つことが判明している。実戦経験により得た独特の形状をした剣『菊燐（きくりん）』は怪しい光の軌跡を

残し、その軌跡に触れたもの全てを切り裂くという。必殺技は、菊燐(きくりん)』が起こした光の軌跡によって敵を断切する『燐火斬(りんかざん)』に、合体させた『菊燐(きくりん)』から光の一矢を生み出し放つ『燐火撃(りんかげき)』。そして大気中に存在するエネルギーを一点を集中させて大爆発を起こす『ガイアリアクター』だ。

「・・・・・アレは究極体、しかも二体も居るなんて」

「・・・・・そんな」

スレイヤードラモンとガイオウモンの姿を見たティアナは絶望の声を出し、なのはも絶望に染まった表情を浮かべ、ヴィヴィオも不安そうな表情を浮かべて閉じかけているゲートから出ようとしているスレイヤードラモンとガイオウモンを見つめた。

無理も無いだろう。もはやティアナ達には究極体と戦えるだけの体力は残っていない上に、唯一の究極体であるブラックは数え切れないほどのデジモン達と戦い続けた為に全身がボロボロの状態。とても究極体と、しかも二体同時に戦える力は無い上に、ティアナ達のディーアークに宿っていた三大天使の力も消え掛けている現状なのだから、絶望するのも当然だろう。

そして空中と地上からスレイヤードラモン達の姿を見たリンディ達とメガログラウモン達も絶望の表情を浮かべ始めるが、ブラックだけは絶望せずにリンディ達にそれぞれ顔を向け始める。

「・・・・・ティアナ・・・・・・チィリンモン・・・・・なのは・・・・・ワーガルルモン・・・・・・メガログラウモン・・・・・ヴィヴィオ・・・・・そしてリンディ・・・・・後を頼んだぞ」

そうブラックはリンディ達に顔を向けながら呟くと、体に残っている気力や体力を全て振り渋りながらゲートから出ようとしている

スレイヤードラモンとガイオウモンに向かって突撃した。

「オオォォォォォォォォーーーーーー！！！！」

『ブラック！！』

「ブラック兄さん！！」

『ブラックさん！！』

「パパッ！！」

ブラックがスレイヤードラモン達に向かって突撃して行くのを見た、クイント、メガログラウモン、リンディ、チィリンモン、ティアナ、なのは、ワーガルルモン、そしてヴィヴィオは悲痛な声でブラックの名を叫ぶが、ブラックは更に自身のスピードを上げながら、両手を前に突き出し始めた。

「アレは？・・・・まさか！？通常状態でルインさんとユニゾンしている時の技を放つ気なの！？」

「馬鹿な！？あの技はルインとユニゾンして初めて耐えられる技なのだぞ！！通常時で、しかも全身がボロボロな状態で放ちでもしたらブラックの体は砕け散るぞ！！止めねば！！」

リンディとチィリンモンはブラックのやろうとしている事に気が付くと、ブラックを止める為に全速力で向かおうとするが、突如として目の前にブラックの背に装備されていたブラックシールドが飛んで来る。

『なっ！？』

ーーードゴン！！

突如として目の前に飛んで来たブラックシールドをリンディとチィリンモンは交わす事が出来ず直撃し、ブラックを追い駆ける事が出来なくなった。

それを確認したブラックは笑みを浮かべ、自身の両手に負の力を集めながらリンディ達に向かって叫ぶ。

「必ず俺は帰って来る！！それまでこの世界の事を頼んだぞ！！」

そうブラックは叫びながらゲートの中に入り込み、ゲートから出ようとしてスレイヤードラモンとガイオウモンに向かって巨大なエネルギー球を自身の前方に出現させながら突撃する。

「暗黒のガイアフォーーーース！！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオン！！！！！！！

ゲートの中からブラックの叫び声が聞こえて来ると共に、巨大な爆発音がゲート内部から響き、それと共にヴィヴィオ達の掲げていたディーアークから発せられていた光は消失し、光を当てられていた最後のゲートも完全に閉じた。

そしてその後には青い大空だけが空に存在し、東京タワーの屋上で悲しみの涙を流しながら泣き続けるヴィヴィオを慰めるリンディ達だけが残るのだった。

何処までも薄暗い研究所の一室で、ルーチェモンと倉田は地球でのデジモン達とリンディ達との戦いをモニターで眺め続け、ブラックがゲートと共に消失した事に喜んでいた。

「ハハハハハハハハッ！予想以上の結果だよ！厄介な連中の所に居た究極体が消えてくれた上に、当分の間は彼女達は地球に釘付けに成った！今回の計画は本当に大成功だよ！」

「ええ、当初の予定通り他のデジタルワールドの正確な座標も手に入りましたし、今回の計画は予想以上の成功を収めました」

ルーチェモンの喜びの声に倉田も嬉しそうな笑みを浮かべながら同意を示す。

今回のルーチェモン達の真の狙いは、他のデジタルワールドの正確な座標を手に入れる事と、ブラック達を地球に釘付けにする事が目的だったのだ。ゲートが閉じたとは言え、まだ地球には沢山のデジモン達が潜んでいる為に、リンディ達は他の世界に目を向ける事が出来なくなってしまった。それこそがルーチェモン達の狙いだったのだが、嬉しい事にブラックも消えてしまった。

「フフフフフフッ！まるで世界が僕らを援護しているみたいだよ。それに此処まで僕らの計画が上手く行ったのも、管理局の馬鹿どものおかげだし、管理局には何れお礼をしなくちゃね」

「ええ、最高のプレゼントを上げましょう。それで話は変わるのですが」

「何だい？」

倉田の言葉にルーチェモンは疑問の表情を浮かべて倉田に顔を向

けて見ると、倉田は再び嬉しそうな浮かべて報告を始めた。

「あの二人から全ての準備は終わったと報告が届きました」

「それは嬉しいね。なら、計画の第二段階を始めようか」

「ええ、最高のショーの幕開けですよ」

ルーチェモンの言葉に倉田は笑みを浮かべながら同意を示し、二人は狂気に満ちた笑みを浮かべながら部屋を出て行った。

曇天の空と共に大量の雨が降る中を黄色のトカゲの様なデジモンを連れた二十歳前後位の青年と白いネズミの様なデジモン―テイルモンを連れた、髪をショートカットにして手の中に花束を抱えた二十代ぐらいの女性は傘を差しながら木々が並んでいる公園の中を歩き、一つの場所で立ち止まると女性はその場所に花束を添えた。

「・・・・・アレから九年が経ったんだね、兄さん」

「ああ、アイツ、ブラックウォーグレイモンがもう一度姿を現してから、もうそんなに経ったんだよな、ヒカリ」

女性、八神ヒカリの言葉に青年―八神太一は同意を示し、太一の横に立っていったトカゲ型のデジモン―アグモンは悲しそうに顔を俯ける。

アグモン、世代／成長期、属性／ワクチン種、種族／爬虫類型、必殺技／ベビーフレイム

獰猛でとても勇敢な性格で頼りになる爬虫類型デジモン。怖いもの知らずだが体はまだ成長の途中なので力は弱いが、成長期デジモンの代表的な存在でもあり、個体差も大きく、亜種もいくつか確認されているデジモンである。必殺技は、口から高熱の火炎の息を吐き出す『ベビーフレイム』だ。

「ブラックウォーグレイモンにこの世界の事を託されたのに、今の世界は」

「アグモン」

落ち込み顔を俯けているアグモンにテイルモンは慰める様に声を掛けようとするが、テイルモンも世界の現状が分かっているのか、落ち込んだ表情を浮かべ、太一とヒカリも落ち込み始めた瞬間。

ーーービキ！ビキビキビキ、ビキィィィィィン！！

「何だ！？」

突如として何処からともなく罅割れる様な音が鳴り響き、太一達は慌てて周りを見回すと、テイルモンが空を見上げて叫ぶ。

「上よ！！」

「一体何が！？」

テイルモンの叫びに太一達は慌てて空を見て見ると、空に罅の様なものが広がり、ヒカリが疑問の声を上げて空を見つめていると、突如として空に穴が開き、穴の中から黒い何かが飛び出し、太一達の背後の木々を薙ぎ倒しながら落下した。

「今のは？」

「分からないけど、太一とヒカリは此処で待っていて！」

「私達が確認して来る！」

アグモンとテイルモンは太一達をその場に残し、黒い物体が落下した場所に向かって駆け出す。

そしてなぎ倒された木々の間を走り抜けると、巨大な穴が地面に開いている事に気が付き、アグモンとテイルモンは警戒しながら穴の中を覗いて見る。

「・・・・・まさか？」

「・・・・・やはり・・・生きていた。死んではいなかったのね」

地面に開いている穴を覗き込んだアグモンとテイルモンは信じられないと言う表情をしながら、穴の中で倒れ付しているものを見つめる。

『ブラックウォーグレイモンッ！！！！！』

穴の中で倒れ伏している全身が傷だらけの上にクロンデジゾイド製の鎧は罅だらけ、両手に装備したドラモンキラーも同様にボロボロに成って気絶しているブラックに向かって、アグモンとテイルモンは声を上げ、ブラックの姿を見つめ続けた。

三大天使最後の力、そしてブラックウォーグレイモン消失！！（後書き）

次回予告

地球に開いたゲートは多大な犠牲を出して閉じる事に成功した。

だが、地球の危機は終わってはいない。

その事を知っているリンディ達は、はやてに僅かな真実を話し

フェイトとブイモンに試練を与える。

次回、漆黒の竜人と少女、『進化の時、不屈の真の力』

彼女は親友と再び戦う、だが、その心は嘗てとは違った。

進化の時、不屈の真の力（前書き）

レイジングハート・セラフィーモードに付いて

フリートの技術で改良されたレイジングハートの最終形態。

使用者の背に十枚の金色の翼が生えるが、この十枚の翼は全て擬似リンカーコアであり、使用者に常に膨大な魔力を送り込むが、当然ながらそれだけの魔力に使用者が長時間耐えられる筈も無く、常時回復魔法を発動させて負担を軽減しても、二分しか持たない。

しかし、使用中は究極体に迫る力を発揮するが、あくまで発揮出来るだけで在って、究極体と戦えば互角に持ち込めても勝つ事は出来ない（使用時間が短過ぎる為に）

バリアジャケットの形はセラフィモンを基にしている。

これからの書き方の付いて、これ以降の話は、最初にブラックのストーリー、次に地球のストーリー、最後の起動六課ストーリーで、最終的には合流する形で書く予定です
もしかしたら変わるかも知れませんが、この形で書き進めていく予定です。後途中で何話か番外編が書きます。

進化の時、不屈の真の力

戦いを終え、地球からアルハザードへと帰還したリンディ達は、ブラックが消えた事でそれぞれ悲しみを抱えながらも戦いで負った傷の治療を終えると、全員が司令室に集まり今後の方針に付いてを話し合っていた。

「それでフリートさん、地球にはどれぐらいの数のデジモンが潜んでいるのか、大まかにでも分かりますか？」

「・・・・・最低でも二百体は潜んでいますね。しかも完全体がかなりの数潜んでいると考えるべきです」

リンディの質問にフリートは地球に在るサーチャーから調べた情報を伝え、それを聞いたリンディ達は険しい表情を浮かべると、クイントが壁に寄り掛かりながら呟く。

「最悪ね。これで私達は地球から目が離せなくなったわ」

「ええ、地球に潜んでいるデジモン達も援軍が来なくなった現状は分かっているだろうから、そう簡単には動かないでしょうけど、それでも何れは動くでしょうし、何も知れない地球の人々を放って置く事は出来ないわね」

「今回のルーチェモン達の真の狙いはそれですね。私達を地球に釘付けにするのが目的だったんでしょう」

リンディの言葉にティアナがルーチェモン達の狙いを告げると、全員が険しい表情を浮かべた。

ティアナの言葉どおり、ルーチェモン達の狙いはリンディ達を地球から動けなくする事に他ならないのだ。何せ地球にはデジモンに対抗する術が殆ど無いのだ。
地球に在る近代兵器では成熟期はともかく、完全体には殆ど効かず、成熟期にしても在る程度の兵器でなければダメージを与える事は出来ないだろう。
その上、今回のデジモン達の襲撃で判明した最悪の事実が在った。それは。

「デジモン達が憎んでいるのは管理世界の人間ではなく、人間と言う種族そのものと考えて間違い無いでしょうね」

「・・・・・間違い無いですよ。私やガブモン君が戦ったデジモン達は人間への憎しみを叫び続けていましたから」

リンディの告げた事実になのはが補足する様に答え、ガブモンも悲しみに満ちた表情で頷き、全員が恐れていた事態に成っている事に気が付き絶望の表情を浮かべた。リンディ達が恐れていた事態とは、デジモン達が人間と言う種族そのものを憎んでしまう事だった。
管理局だけを憎むのならまだ、デジモンと人間の絆の修復も難しい状況だが可能性は在った。だが、デジモン達が人間と言う種族そのものを憎んでいると成れば、絆の修復はもはや絶望的と言って間違い無い。

「・・・・・たった一つの組織の愚かな選択に寄って、此処まで絶望的な状況に成ってしまった上に・・・・・・あの人も消えてしまった・・・・・・正直、私達が何かしても結果は変わらないのかもしれませんね」

『リンディさん』

『リンディ』

「リンディお姉ちゃん」

絶望の表情を浮かべて呟いたリンディの言葉に、なのは達はそれぞれ慰める様に声を掛けようとするが、なのは達も現在の現状が分かっているのか慰めの言葉を言う事が出来ずにそれぞれ顔を俯け始めると司令室の入り口の方から力強い声が響く。

「奴は生きている」

『ッ！！！』

聞こえて来た声にリンディ達は驚愕の表情を浮かべて司令室の入り口に顔を向けて見ると、白い大きな袋を背負ったバンチョーレオモンが立っていた。

「バンチョーレオモンさん」

「フン、随分と湿気た空気に成っている様だが、今のお前達をブラックウォーグレイモンの奴が見たら失望するだろうな。自分の命を賭けてまで世界を護ったと言うのに、後を託したお前達がその様では、奴も浮かばれんぞ」

悲しみにくれるリンディ達にバンチョーレオモンはそう言いながら背負っていた白い袋を床に置き、フリートに顔を向ける。

「フリート、質問だが奴のパートナーであるルインの奴は暴走したのか？」

「暴走？」

バンチョーレオモンの言葉にフリートは疑問の声を上げ、他の者達も疑問の視線でバンチョーレオモンを見つめる中、リンディは何かに気が付いたのかハッと言う表情を浮かべて叫ぶ。

「そうよ！ルインさんは元々誰も制御出来なかった闇の書の闇！それが暴走せずに済んでいたのは彼と言う主が居たから！彼が死んだら再びルインさんは暴走する！それなのにルインさんが暴走もせずに眠っていると言う事は！？」

「パパは生きている！！」

リンディの言葉を継げる様にヴィヴィオが喜びの声を上げると、他の者達もブラックの生存を確信し喜びの表情を浮かべ始めた。

それを見たバンチョーレオモンは笑みを浮かべながらリンディ達に声を掛ける。

「ならやる事は分かる筈だ。奴が失望しない為にも、俺達は倉田とルーチェモンの野望を阻止し、デジモンと人間の絆を修復する。例えそれがどんなに絶望的であろうと、諦めなければ道は開ける！そうやってデジタルワールドを救った人間達は絶望の道を歩んだのだ！」

「それなら私達も諦められませんね」

「ああ、先人達の頑張りを無にさせない為にも私達が頑張らねばな」

バンチョーレオモンの言葉にティアナとクダモンは決意に満ちた

表情を浮かべて言葉を言い、他の者達もそれぞれ決意に満ちた表情を浮かべ始め、デジモンと人間の絆を改めて取り戻す決意を固めた。
そしてリンディは今後の方針を話し始める。

「先ず私達がすべきなのは、地球に潜んでいるデジモン達の説得です。今回は時間が無かった為に倒す破目に成ってしまいましたが、彼らは本来ならば心優しいデジモン達。何としても彼らを説得するんです」

「そうね。彼らには罪は無いわ。難しいけど、やり遂げなければいけないわね」

「それ位出来なければ、デジモンと人間の絆を取り戻す事は出来ませんし、絶対にやり遂げましょう！」

リンディの告げた方針にクイントとなのはは同意を示し、他の者達も一斉に頷くと、リンディはフリートに近寄る。

「フリートさん、地球に隠れているデジモン達は日本に集中しているんですね？」

「ええ、数体ぐらいは他の国に居るみたいですけど、殆どは日本に潜んでいますね」

「・・・・・そう。なら私達は、日本政府に次元世界の説明を行い協力を願います！」

『ッ！！』

リンディが告げた言葉にヴィヴィオとギルモンを除いた全員が驚

愕の表情を浮かべた。
　次元世界の事を管理外世界である地球に説明する。それは次元世界の事等知る事さえも出来なかった世界に混乱を巻き起こすと言う事と同意義なのだ。地球には次元航行の技術など無い上に、魔法と言う管理世界で一般的な技術さえも無い世界。当然いきなり他の世界が存在している等と告げられれば、世界に大混乱を巻き起こしてしまう可能性が高い。だからこそ管理局は管理外世界に干渉しても次元世界の事をその世界の人々には話さないのだ。最も一部の局員は管理外世界の人々を蛮族などと呼ぶ者もいるのだが。

「・・・・リンディ、言っている事が分かっているの？失敗すれば、世界に混乱を巻き起こすのよ？」

「十分すぎるほどに分かっているわよ、クイント。だけどもう地球も無関係ではないわ。管理局のせいで無関係だった第九管理世界、そして管理外世界だった地球までデジモンとの戦争に巻き込まれてしまった。地球の人々からすれば、何故デジモン達が人間を憎んでいるのかさえ分かってはいないわ」

　そうリンディの言うとおり、地球の人々は何も知らない上に、何もしていない。デジモン達が人間を憎む様に成ってしまった原因さえも知らないのだ。そして例え地球がデジモン達に襲われているとしても管理局は動かないだろうし、寧ろ無関係だった管理外世界をデジモン達が滅ぼしたと発表してより管理世界の人々のデジモンへの憎しみを上げようとするだろう。

「なら、私達は地球でデジモンと人間の共存を成し遂げるんです！幸いにも地球の政府の人達は管理局の発表など知ってはいません！管理世界ではデジモンへの憎しみを持つ人々が大勢居ますが、地球にはまだ僅かしか居ないでしょう。その憎しみもデジモン達が何故

人間を憎むのかを説明すれば、解ける可能性が高い！」

「確かにそうね」

「地球なら確かに管理局の発表に惑わされることも無いし、地球の人達はデジモンへの先入観も薄い。もしかしたら地球ならデジモン達との共闘が可能かもしれない！」

リンディの言葉にクイントは頷き、ガブモンは落ち込んだ顔から移転して希望に満ち溢れた表情を浮かべた。

そう、地球の人々は今回確かにデジモン達に襲われて恐怖と怒りを覚えているだろう。”何故自分達が襲われなければいけないのか”と。だからこそリンディは地球に全ての真実を話して、自分達に協力してデジモンと人間の共闘を成そうと考えたのだ。だが事はそう簡単には行かないだろう。

確かに地球は管理外世界よりも憎しみは薄いとは言え全く無い訳ではない。今回のデジモン達の襲撃に寄って東京はほぼ半壊状態、リンディ達が間に合ったとは言えかなりの死者、重軽傷者が出た事には違いないのだ。

「地球だけが今の次元世界中を探しても唯一のデジモンと人間の共闘が出来る可能性は高い場所。難しいでしょうが、もう地球に賭けるしか私達には道が無い」

「・・・・そうですね。でも、それだと私達はますます地球から離れられませんが、管理世界の事は如何するんですか？」

「策は在るわ。管理局内部での希望に賭けて見ようと想うの」

ティアナの質問にリンディはそう答えると、司令室を出て行き、

リンディの向かう先に気が付いたなのはもリンディの後を追い始め、他の者達は何とかブラックの飛ばされた先を探そうとコンソールを弄り始めた。

アルハザードの多数在る部屋の一つの部屋の中で体の事が在るのでベットに、寝たきりに成っているはやてとリインは先ほど、突如として届いた通信に慌てて出て行ったリンディとクイントに付いて話し合っていた。

「何か在ったんかな、リイン？」

「分からないです。でも、リンディさんとクイントさんは慌てて部屋を出て行きましたし、きっとまたデジモンに関係している事が起きたんですよ」

「・・・・・・また、何処かの管理世界がデジモン達に襲われたんかな？・・・・・・何でこんな事に」

「・・・・・・はやてちゃんは分かっている筈です。全部私達管理局が原因なんですよ」

はやての疑問の声にリインが悲しみの表情を浮かべながら答えると、はやては顔を暗くして毛布の中に顔を入れた。

はやても分かっているのだ。全ての原因は自分達が所属する管理局。管理局が行った最大最悪の暴挙のせいでデジモン達は人間への憎しみに支配され、罪の無い人々まで襲う様に成ってしまった。

（何でやろな？何で罪の無いデジモン達を殺したんや？そのせいで

罪の無い人達が数え切れない人々が死んでしもうた。如何してや？）

そうはやてが内心で疑問の声を上げ続けていると、突如として部屋の扉が開き、険しい表情を浮かべたリンディとなのはが部屋の中に入って来た。

それに気が付いたはやては毛布の中から起き上がり詳しい話を聞こうと声を掛けようとするが、その前にリンディが話し始めた。

「・・・・悪い知らせよ。地球にデジモン達が現れて・・・・・東京が半壊状態に成ったわ。それと共に多くの死傷者がでてしまったわ」

「地球が！？」

リンディの告げた事実にはやては声を上げ、はやての隣に置かれていた机の上に座っていたリインも驚愕に目を見開く。

地球はなのはの故郷で在ると共にはやての故郷でも在る。しかも地球は管理世界とは関係ない管理外世界。その世界までデジモン達に襲われてしまうとは想っても見なかったのだ。

「何でや！？地球は管理局とも関係あらへんのに！それなのに何でデジモン達が！？」

「確かに地球と管理局は関係無いけど、デジタルワールドと地球には深い関係が在ったんだよ」

「それって、如何言う事や？なのはちゃん」

なのはの言葉にはやては疑問の声を上げた。地球とデジタルワールド。次元世界でもかなり離れていた上に、地球に居た時にデジモ

ンの話など地球では一切聞いた事は無い。それなのになのはは地球とデジタルワールドには関係が在ったと告げたのだから、疑問に想うのも当然だろう。
　そしてはやての疑問にリンディとなのははベットの横に置かれていた椅子に座りながら答える。

「・・・・・管理局が滅ぼしてしまったデジタルワールドは、地球のデータを基にして生み出された世界だったの。だから、私達は地球からデジタルワールドに行く事が出来たのよ」

「だけど、管理局がデジタルワールドを滅ぼしてしまったせいで、地球の磁場が歪んでしまった。その事が原因で他のデジタルワールドに繋がる入り口が出来てしまい、そのゲートから人間を憎んでいるデジモン達が姿を現し、多くの人達が傷ついた上に、東京は半壊状態。何とかゲートは閉じられたけど・・・・・・ブラックさんが犠牲に成ってしまった」

「・・・・・・そんな」

　リンディとなのはが告げた事実にはやては絶望の表情を浮かべた。まさか、地球とデジタルワールドにその様な秘密が在るとは想っても見なかった上に、管理局の行いのせいで本来は関係無い筈だった地球の人々にまで犠牲が出てしまった事に絶望したのだ。

「私達はこれから地球に居るデジモン達の説得を行うわ。その為に、私達は管理世界にまで手が回せなくなってしまった。だから、はやてさんだけには伝えるわ。管理局があれ程までにデジモン達を敵視している理由を。そして七大魔王デジモンに関する事もね」

　そうリンディは言うとなのはと共に管理局があれ程デジモン達を

敵視している理由と七大魔王デジモン達に関する事を話し、はやてに在る物を託すのだった。

地球がデジモン達に襲われてから三日後の夜。フェイトとブイモン、そしてリインフォースを加えた守護騎士達はなのはから送られて来たメールに寄って、とある無人の管理外世界に在る広い草原に来ていた。

「此処がなのはの指定した場所だよね？」

「ああ、我らとテスタロッサを高町が呼んだ場所は、此処で間違い無い筈だ」

フェイトの疑問の声にシグナムは辺りを警戒しながら答え、他の守護騎士達もそれぞれデバイスを構え出すが、フェイトとシグナムはデバイスを取り出す様子が無く、悔しげな表情を浮かべる。

「おい、フェイトにシグナム。あたしらの後ろに居ろよ。お前らのデバイス。もうねえんだからよ」

「クッ！！あの時に手放さなければ・・・・・・すまない、レヴァンティン」

「ゴメン・・・・・バルディッシュ」

ヴィータの言葉にシグナムとフェイトはそれぞれ自分達の失ってしまったデバイス達に向かって謝った。あの時、第九管理世界でロードナイトモンに瓦礫に吹き飛ばされた時に、フェイトとシグナム

は自分達の相棒であったデバイスを落としてしまったのだ。当然、その後に回収する事など出来なかった為に、フェイトとシグナムはデバイスなしでなのはとの約束の場に来る事に成ってしまったのだ。
その事でフェイトとシグナムが落ち込んでいると、上空から声が響く。

「二人のデバイスなら此処に在るよ」

「えっ？」

上空から聞こえて来た声にフェイトが疑問の表情を浮かべて、上空を見上げて見ると、ガブモンを背中に背負ったなのはと、はやてとリインを抱えたリンディが地上に降りて来た。

『はやて！！』

『主！！』

「はやてちゃん！！」

はやての無事な姿を見たフェイト達は喜びの声を上げるが、声を掛けられたはやては暗い表情を浮かべたまま、リンディの手に寄って地上に下ろされ、その前になのはとガブモンが降り立ち、フェイトとシグナムに向かって待機状態のバルディッシュとレヴァンティンを投げ渡す。

「あの戦いの後に私が見つけて、修理して貰ったから使えるよ、フェイトちゃん」

「・・・・・如何しても戦うの？なのは」

「言った筈だよ。次に来た時は無理やりでもその子を連れて行くって？」

「俺はフェイトと一緒に居るんだ！！」

なのはの言葉にブイモンは噛み付く様になのはに向かって叫ぶが、なのはは冷たい表情を浮かべたままレイジングハートをフェイトに向けて構える。

「だったら、二人の絆を示すんだね。私に見せてよね。二人の絆を」

「・・・・・・バルディッシュ、セットアップ」

《Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ》

ーーーシュウン！！

フェイトの声にバルディッシュから答える様に音声が響くと、フェイトは白いマントを羽織ったバリアジャケットに身を包み、悲しげな表情を浮かべながらバルディッシュをなのはに向かって構える。

「・・・・・なのはと敵対して戦うのは、十年前のあの時が最後だったと想っていたよ」

「私は違うね。リンディさん達に協力すると決めた時から、またフェイトちゃん達と戦う時が来ると想ってたよ。出来れば来ないで欲しかったけどね・・・・・ガブモン君行くよ」

「・・・・分かっている」

《ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

なのはの言葉にガブモンが頷く様に答えると、なのはのディーアークから音声が響き、ガブモンの体から蒼いデジコードが飛び出しガブモンの体を覆って行くと、蒼いデジコードの中から銀色の狼が飛び出した。

「ガブモン進化！！ガルルモン！！！」

『クッ！！』

ガルルモンの姿を見たフェイトとブイモンは警戒する様にガルルモンとなのはを見つめるが、なのはとガルルモンは気にせずにそれぞれの敵に向かって駆け出し、ガルルモンがフェイトとブイモンを引き離す為に口から氷の弾を放つ。

「アイスキャノン！！」

ーーードゴン！！

「させない！ソニックムーブ！！」

ーーーシュン！！

ガルルモンの狙いに気が付いたフェイトは瞬時にブイモンを抱えて、ガルルモンの放ったアイスキャノンを避けるが、避けた先には無数の桃色の誘導弾が存在していた。

「アクセルシューターシュート！！！」

「なっ！？」

「フェイト上に逃げるんだ！！」

「分かった！」

無数のアクセルシューターを見たフェイトは驚愕の声を上げるが、フェイトの腕の中に居たブイモンが冷静にアクセルシューターの無い場所を見つけフェイトに告げると、フェイトはブイモンの言葉どおり上空に逃げる。

その後を桃色の誘導弾が追って行くが、フェイトも冷静に自分の周りに黄色いスフィアを発生させ、魔力弾を誘導弾に向かって放った。

「プラズマランサーー！！！」

ーーードドドドドドン！！

フェイトの放ったプラズマランサーによって、フェイトとブイモンを追って来ていた誘導弾は全て破壊され煙が渦巻く。

そしてブイモンはフェイトの腕の中から飛び降り、地上に居るガルルモンに向かって落下して行くと、落下していく途中で何処からとも無く『クロンデジゾイド』製のソードを取り出し、ガルルモンに向かって全力で振り下ろす。

「ロングソード！！」

「アイスウォール！！」

ーーーガキィイン！！

「なっ！？」

「そんな！？」

ブイモンが振り下ろして来るロングソードに向かって、ガルルモンは氷の壁を作り出し、ブイモンを攻撃を防いだ。

それを見たブイモンとフェイトが驚愕の表情を浮かべている隙に、ガルルモンは未だに空中に居るブイモンに向かって体当たりを行う。

「ウオォォォォーー！！」

ーーードゴオン！！

「ウワッ！！」

「ブイモン！！」

ガルルモンの体当たりを交わす事が出来ずにブイモンは吹き飛ばされ、フェイトは慌ててブイモンの救援に向かおうとするが、その前になのはが立ち塞がる。

ーーーシュン！！

「フェイトちゃんの相手は私だよ！モード！エクシード！！」

「クッ！！」

なのはのレイジンハートがアグレッサーから純戦闘用のエクシー

ドモードに変わったのを見たフェイトは苦い表情を浮かべるが、すぐに冷静に戻しなのはに向かって高速魔法を使用する。

「ソニックムーブ！！」

ーーーガキィン！！

「なっ！？」

ソニックムーブを使用してなのはの背後に回りこんだフェイトは、ザンバーフォームのバルディッシュを振り下ろすが、なのはは瞬時に背後を振り向き、レイジングハートでバルディッシュを受け止め防御した。

「忘れているかも知れないけど、私はブラックさんと一緒に居たんだよ？フェイトちゃんの移動スピードはブラックさんには及ばない。だから、見えるんだよ！！ディバインバスターーー！！」

ーーードグオオオン！！

「キャアッ！！」

なのはの砲撃を至近距離で受けたフェイトは吹き飛ばされるが、在る程度吹き飛ばされると、体の体勢を整え、なのはに向かってバルディッシュを構え、二人は再び激突を再開した。

その間にリンディは抱えていたはやてを守護騎士達の下に運びを終え、守護騎士達と共にガルルモンとブイモン、フェイトとなのはの戦いを眺めていた。

「・・・・高町の奴。何時の間にあれ程接近戦の対応が出来る様に

成ったのだ？正直な話。私でも今の高町に接近戦を挑んで、攻撃を当てられる自身が無いぞ」

「・・・・あたしもだ。なのはの奴。どれだけ過酷な戦いを続けて来たんだよ？」

シグナムとヴィータは上空でぶつかり合いを続けているなのはとフェイトの戦いを見つめ続けながら、なのはの実力が信じられないほどに上がっている事に驚愕の声を上げていた。既に二人にぶつかり合いが始まってから十五分以上経過しているのに、未だにフェイトはなのはに一撃を当てる事も出来ず、逆にフェイトはなのはの攻撃を受け続け、かなりの負傷が見える様に成っていた。

その間に、シャマルとリインフォースははやての体に何かされていないか心配に成り、はやての体に簡単な検査魔法を掛けていた。

「如何なのだ？」

「・・・・・信じられないけど、あれだけの傷が完全に治療されているわ。失った筈の内臓も完全に再生されているみたいだし、正直夢を見ているみたいよ」

ザフィーラの質問にシャマルは在り得ない事が起きたと言う表情を浮かべて、暗い表情を浮かべ続けているはやてを見つめた。はやての負った怪我は管理局の技術でも治療が不可能なほどの重症だったと言うに、僅か一週間程度で完全に治療されてしまっているのだから、驚愕するのも当然だろう。

その秘密を知っているであろうリンディにシャマルは顔を向けるが、リンディは黙ったまま戦いを見つめ続け、上空でなのはと戦い続けているフェイトに突如して失望の視線を向けた。

「・・・・・駄目ね。やっぱりフェイトさんにはブイモン君を預けられないわ」

『ッ！！！』

リンディの呟いた言葉にシグナム達は驚愕の表情を浮かべ、リインフォースが険しい表情を浮かべてリンディに質問する。

「何故フェイトに彼を任せられないのですか？確かになのはにフェイトは追い込まれていますが、それでも・・・・・・」

「残念だけど、これは実力を見る戦いではないわ。この戦いの本当の目的は別に在るのよ」

リインフォースの言葉を遮る様にリンディは言葉を言い、全員がリンディの言葉に疑問の表情を浮かべた瞬間。

「ウワアァァァァァーーーー！！！」

『ッ！！！』

突如としてブイモンの苦痛の叫びが辺りに響き、全員が驚愕の表情を浮かべてブイモンの方に目を向けて見ると、ガルルモンの目の前で桜色の砲撃によって吹き飛ばされて行くブイモンの姿が在った。

「ブイモン！！！」

「・・・・・・失格だよ、フェイトちゃん。ブイモン君は連れて行くよ」

「ッ！！！」

なのはの告げた言葉にフェイトは驚愕の表情を浮かべて背後を振り返って見ると、心の底から失望したように残酷さに満ちた視線をフェイトに向けているなのはの姿が在った。

「本当に失望したよ、フェイトちゃん。私は言ったよね？二人の絆を見せてって、それなのに如何してブイモン君は私の砲撃に当たっているのかな？」

「・・・・・・まさか？」

「そう、ブイモン君に当たった砲撃は、フェイトちゃんが避けた砲撃だよ」

『ッ！！』

なのはが告げた事実にフェイトだけではなく、シグナム達も驚愕の表情を浮かべた。フェイトと戦いながらブイモンに砲撃を当てた。言うのは容易いが実際にやって見ると、それは途轍もなく難しい事なのだ。

何せフェイトの実力はＳ＋ランク、管理局でもかなり少ないＳランクオーバーの魔導師だと言うのに、そのフェイトと戦いながらブイモンに砲撃を当てるのは至難の技。それなのにそれをなのはは実行して見せた。タイミング、状況、そして互いのパートナーに対する絶対の信頼が僅かでも掛けていれば不可能な事なのだ。

「私と戦いながらブイモンの事を狙っていたって言うの！？」

「そうだよ。でも、私一人の力じゃないよ。ガルルモン君が上手く

ブイモン君をフェイトちゃんの後ろ辺りに移動させて、後は私がタイミング良く砲撃を撃てば良いだけだよ」

フェイトの疑問の叫びになのはは冷静に答えた。

そう、最初からなのはとガルルモンの狙いはブイモンだけだったのだ。確かになのははフェイトに戦いを挑んだが、それこそがなのははフェイトだけと戦うと思わせる布石。後はガルルモンが上手くフェイトの背後の辺りにブイモンを誘導してタイミング良くなのはが砲撃を放てば、フェイトは勝手になのはの砲撃をかわし、ブイモンへと砲撃は直撃したのだ。

「そもそも、戦い始めた時から可笑しいと想わなかったのかな？私とガルルモン君は究極体に進化出来るんだよ。最初から進化していればフェイトちゃんとブイモン君を簡単に引き離す事が出来たのに、ガブモン君を成熟期まで進化させなかったのは何でだと想う？」

「・・・・・・私とブイモンの絆を見る為」

「正解だよ。だけど失格だね。ブイモン君はフェイトちゃんに負担を掛けない為に、実力の差は歴然でもガルルモン君を抑えていた。良いパートナーだね。だけど、フェイトちゃんは如何なのかな？私との戦いに気を取られ過ぎて、ブイモン君の事を忘れていたでしょう？」

「・・・・・・私は」

なのはの言葉にフェイトは言葉も無かった。

なのはの言うとおり、フェイトは目の前のなのはの事ばかりに気を取られ、ガルルモンと戦っていたブイモンの事を完全に忘れていたのだ。確かに自分よりも実力が上に成ってしまったなのはを相手

に、他の事を気にしてはいられなかったのだろう。だが、戦い始める前になのははは言っていた。この戦いは“フェイトとブイモンの絆を見る為の戦い”だと。

「私は出来ればフェイトちゃんとブイモン君を引き離したくはなかったんだ。だけど、もうフェイトちゃんにはブイモン君は預けられないね。だから、終わらせるよ。レイジングハート、モード、セラフィーー！！！！」

《ＥＶＯＬＵＴＩＵＮ》

「なっ！？」

なのはが叫ぶと共にレイジングハートから音声が響くと、なのはの背に十枚の金色の翼が現れ、右手に金色と白い槍を思わせる様なレイジングハートを握り締め、なのはの着ていたバリアジャケットは白と青色の何処と無くセラフィモンを想わせる様なバリアジャケットに変わり、レイジングハート・セラフィーモードが起動した。

「セラフィーモード、フェイトちゃんに取って最も忌まわしき場所の技術から生み出された、レイジングハートの最終形態。背に在る十枚の翼は全て私のリンカーコアを元に作り出された擬似リンカーコア。発動時間は二分しか起動出来ないけど。その力は究極体に・・・・迫る！！」

ーーービュン！！

「消えたッ！！」

突如として目の前から消えたなのはの姿にフェイトは驚愕の声を

上げて辺りを見回そうとするが、その前にフェイトの背にレイジングハートが突き付けられた。

ーーーカシャッ！！

「ッ！！」

「さよなら、フェイトちゃん。ディバインバスターーー！！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオン！！！！！！

なのはの放った通常時のディバインバスターを遥かに上回る所か、通常時のスターライトブレイカーさえも越えるディバインバスターを受けたフェイトは悲鳴を上げる事も出来ずに飲み込まれ吹き飛んで行き、地上に激突した。

それを確認したなのははセラフィーモードを解除し、地上へとゆっくり降下してガルルモンの背に降り立ち、荒い息を付き始める。

「ハア、ハア、ハア、ハア、経ったの三十秒使っただけで、此処まで体力を失うなんて、フリートさんがガルルモン君と融合してる時しか使っちゃ駄目って言ったのが良く分かったよ」

「無理しちゃ駄目だよ。帰ったらフリートさんの精密検査を受けて貰うからね？」

「うん、分かっているよ」

ガルルモンの言葉になのはは頷くと、ガルルモンの背に乗りながらフェイトが激突した事に寄って生まれた穴に近付き、穴の中でボロボロに成っているフェイトに目を向ける。

「・・・・・・・アッ・・・・・・・アッ」

「・・・・・驚いたね。防御力が低いのに、あの状態のディバインバスターを受けてもまだ意識が在るなんて」

「・・・・・・・ブ・・・・・・・イ・・・・・・・モン・・・・・・は連れて・・・・・・行かないで・・・・・私の・・・・・大切な・・・・・家族・・・・」

もはや意識がはっきりしていないと言うのに、なのはの姿を見たフェイトは途切れ途切れながらもなのはに言葉を言うが、なのはは冷たい表情をフェイトに向ける。

「ねえ、フェイトちゃん？フェイトちゃんはブイモン君と一緒にいたいんだよね？だったらさ、何で何もしないのかな？」

「・・・・・エッ？」

「三日前に言った様ね？私達がブイモン君を連れて行く理由は、管理局に居ると危ないからだって。その事はフェイトちゃんも分かっている筈だよね。それなのにフェイトちゃんはこの三日間、ブイモン君を守る為の行動はしていない。それでブイモン君を渡さない？甘ったれた事を言わないでよ！！」

「ッ！！」

なのはの冷たい叫びにフェイトは驚愕の表情を浮かべるが、なのはは冷たい表情を浮かべたままフェイトに告げる。

「三日前、管理局のせいで人間に憎しみを抱いたデジモン達が地球を襲い、大勢の人々が怪我を負ったり、死んだりしてしまった」

『ッ！！！』

なのはが告げた事実にフェイトだけではなく、離れた所で戦いを見ていたシグナム達も驚愕の表情を浮かべるが、なのはは気にせずに話を続ける。

「もうね。この戦いは事件なんかじゃないんだよ。デジモンと人間の戦争。戦争にルール何て無い。デジモン達はどんな手を使っても人間を滅ぼそうとするだろうし、人間もデジモン達を滅ぼす為にあらゆる手を使う。当然、今まで管理局が否定し続けて来た違法研究も平然と行う。そしてデジモンの生態を調べるのには、デジモンを解剖するのが一番。だけど、デジモン達はそう簡単には捕まらない。ならどうすると想うのかな？」

「・・・・・ブ・・・・・イ・・・・・・・モ・・・・・・ン」

「そう、管理局に今の所、刃向かわないデジモンはフェイトちゃんのブイモン君だけ。当然に管理局員であるフェイトちゃんはブイモン君を差し出せと言われれば何も言う事が出来ないよね」

「・・・・・・そ・・・・れ・・・・は」

「絶対にしないって言えないよね。だって逆らえば、フェイトちゃんは人間の敵に成って、追われる事に成る。ブイモン君は優しいから絶対にさせない為に進んで身を差し出すだろうね。そしてフェイトちゃんはそれを止める事が出来ない。だから、私達はブイモン君を連れて行くことにしたんだよ」

なのははそうフェイトに告げると、別の場所で倒れているブイモンに顔を向けながら、フェイトに告げる。

「この三日間の間に、少しでもフェイトちゃんがブイモン君を護る為の行動をしていれば、例え今回の試練でブイモン君が進化出来なくてもフェイトちゃんの下に残そうと想っていた。だけど、もうフェイトちゃんにはブイモン君は任せられない！」

なのはがそう叫ぶと、離れた所で戦いを見ていたリンディが気絶しているブイモンに近寄り抱き上げると、自身となのはの足元に転送用の魔方陣を発生させ始め、なのははそれを確認しながらフェイトに声を掛ける。

「フェイトちゃん。本当にブイモン君の事を想っているのなら、ブイモン君がフェイトちゃんの下に居られる場所を作りなよ。その時にもう一度だけチャンスを上げる。それじゃあね」

なのはがフェイトに別れの言葉を告げると共に、なのは達の足元に発生していた転送用の魔方陣は光り輝き、なのは達はフェイト達の前から姿を消した。

それを見たフェイトは倒れながらも目から涙を流し呟く。

「・・・・・ブ・・・・・・イ・・・・・・・モ・・・・・・・ン・・・・・・ゴメン」

「テスタロッサ！！」

『フェイト！！』

「フェイトちゃん！！」

戦いが終わったのを確認したシグナム達はフェイトの名を叫びながらフェイトに近付くが、シグナム達が来る前にフェイトの意識は遠退いた。

そしてシグナム達が居た場所で座り続けるはやては、リインと共に服の中に隠してあるデジタマを見つめ、暗い表情を浮かべ続けるのだった。

日本、国会議事堂の中に在る総理の執務室で、総理は突如として自分の目の前に現れたクイントにティアナと会談を続け、渡された資料を読み進めると怒りの表情を浮かべた。

「・・・・つまり、私達、地球の者達は知らない事だが、世界は他にも沢山在り、その沢山の世界を管理していると言っている組織が行った暴挙によって、関係無い筈の地球まで巻き込まれたと言う事かね？クイント・ナカジマ君に、ティアナ・ランスター君」

「はい、お怒りに成るのは分かりますが、全て事実です」

怒りの表情を浮かべて質問した総理に、クイントは険しい表情を浮かべながら答え、総理は机に手を叩き付ける。

ーーードオン！！

「この組織は一体何を考えているんだ！？我々全く関係無い者達まで巻き込んで置きながら、自分達が行った暴挙は全く民衆には伝えず、自分達が正義だと叫び続けているだと！？我々全く関係無い者

まで巻き込んで置きながら良くその様な事が言えるな！？」

「お怒りは良く分かります。ですが、今はそれではなく地球に潜んでいるデジモン達を探す為に協力して頂きたい。もちらんお礼として、管理世界での一般的な技術を全て地球に提供させて頂きますので、如何かご協力をお願いします！」

怒りの表情を浮かべ続けている総理にクイントは頭を下げながら言葉を言い、横に座っていたティアナも深々と頭を下げた。

それを見た総理は険しい表情を浮かべながら内心でクイント達の提案に付いて考える。

（う～む、此処は彼女達に協力すべきだな。あの生物達に付いて我々は何も知らないから、対抗策も立てられんし、それに他の世界の技術を手に入れば、他の国よりも先んじて日本が技術を進められる上に、破壊された東京の復旧も早く済む。外国の圧力も来るだろうが彼女達が考えていた作戦を使えばそれも免れるし、何よりも国民の不安を解消する為には、彼女達の協力は必要不可欠。やはり此処は協力すべきだ！）

総理は内心でそう結論すると、クイントとティアナに了承の声を掛け、三人はこれからに付いて詳しく話し始めた。

この地球への選択が吉と出るか、凶と出るのかはまだ分からないが、この日にクイント達のルーチェモン達に対する反撃が始まったのだ。

「・・・・・此処は何処だ？」

明かりが全く無く、恐らく倉庫だと想われる暗い場所の中で横に成っていたブラックは辺りを見回しながら疑問の声を上げた。

（俺は確か、ゲートの中に飛び込み究極体の二体に技を・・・・ッ！！いかん！確か、あの二体と俺は一緒に吹き飛ばされた筈だ！此処が何処で在るにしろ、あの二体も来ている筈だ！すぐに探さねば！）

ブラックはそう考えると起き上がり、入り口を見つけようと再び辺りを見回し始めた瞬間に、倉庫の入り口が開き光が倉庫の中に満ちて、ブラックの目が眩んだ。

「グウッ！！」

「・・・・・・久しぶりだね」

「ッ！！・・・・・・・・その声は、まさか！？」

入り口の方から聞こえて来た声にブラックは驚愕の表情を浮かべて、顔の前に掲げていた右手を下に下ろすと、入り口にブラックにとって忘れる事は無いと断言出来る者達が立っていた。

『ブラックウォーグレイモンッ！！』

「・・・・・・・・そうか、俺はまた帰って来てしまったのだな。俺の故郷に」

自身の姿を見て喜びの声を上げる十年経って成長した者達の姿を見たブラックは、自分の居る場所に気が付き、複雑そうに顔を下に俯けるのだった。

進化の時、不屈の真の力（後書き）

次回予告

故郷に戻ったブラック。そして再会するヒカリ達。

だが、ブラックはヒカリ達の前から逃げ出し、街へと潜伏する。

その時に現れる究極体二体。

それに挑む黄金の竜人の姿を見た時ブラックは。

次回、漆黒の竜人と少女、『ブラックウォーグレイモン&ウォーグレイモン！！』

漆黒の竜人と黄金の竜人は共に再び戦う。

ブラックウォーグレイモン&ウォーグレイモン！！

目の前に居る懐かしき者達の成長した姿を見た時、ブラックが感じたのは、最後の別れからの年月の長さと深い懐かしさだった。

（・・・・俺は戻って来てしまったのだな。もう戻るつもりは無かったと言うのに、俺がこの世界にしようとした事は赦されない事だと言うのに、俺は再び此処に戻って来てしまった？・・・・あの時だけだと思っていたのにな）

ブラックに取って、自身の居る今の世界には返しても返し切れないほどの借りが在るのだ。

嘗てブラックはこの世界を崩壊させようとした。憎しみに支配されての事だったが、それでもブラックに取っては自分を殺したくなるほどの後悔に襲われるほどの出来事だった。だからこそ、あの時以外二度とこの世界に戻って来るつもりはブラックには無かったのだ。

そんな事をブラックが思っているとは気が付かずに、十年の月日を経て、子供から大人の女性に成長したヒカリが心の底から嬉しそうにブラックに声を掛ける。

「やっぱり生きていたんだね・・・・九年前のディアボロモンの時に現れたから、生きているずっと思っていたんだ、ブラックウォーグレイモン」

「・・・・・ああ、確かに俺は生きていた」

ヒカリの言葉にブラックが顔を俯けながら答えると、ヒカリは嬉しそうに笑みを浮かべるが、すぐに顔を俯け悲しげな表情をしなが

ら、ブラックに質問する。

「・・・・・生きていたんだったら、如何して会いに来てくれなかったの！？ずっと！ずっと！あの時の事を謝りたかったのに！？」

「そうだぜ！お前がこの世界から消えたのは！あの時に俺達を！！」

ヒカリの言葉を繋げる様に、成長して大人の男性に成長した大輔が言葉を言おうとするが、その前に突如としてブラックは怒りに満ちた顔をしながら叫ぶ。

「言うな！！！」

『ッ！！！』

ブラックの叫びを聞いた全員が驚愕の表情を浮かべるが、ブラックは気にせずに言葉を続ける。

「あの時の事は、お前達のせいではない。俺自身がそれを望み、この体に転生した理由が許せなかったから飛び出しただけだ。断じてお前達のせいではない」

「・・・・・分かった。あの時の事はもう僕らは何も言わない。だけど教えてくれ！君は今まで何をしていたんだ？太一さん、ヒカリさん、アグモン、テイルモンの話では君は生きているのが、不思議なほどの大怪我を負っていたそうだが？」

「そうですよ！貴方の実力は僕らは良く知っている！その貴方が如何してそれほどの怪我を！？」

「教えてよ！」

「教えてくれダギャ！」

ブラックの言葉にスーツを来た青年、一乗寺賢は頷くが、すぐにブラックが大怪我を追っていた理由を質問し、その横に立っていた青年、火田伊織も同じ質問し、賢の足元に居た緑色の虫の様なデジモン－ワームモンと伊織の足元に居るアルマジロの様なデジモン－アルマジモンもブラックに質問した。

ワームモン、世代／成長期、属性／フリー、種族／昆虫型、必殺技／ネバネバネット、シルクスレッド

気弱で臆病な性格の幼虫型デジモン。ブイモン等と同じ古代種族の末裔で、特殊なアーマー進化をすることができるが、単体でのワームモンは非力で、大型のデジモンには到底かなわない。しかし、デジメンタルの力でアーマー進化することで、信じられないようなパワーを発揮することができる。賢のパートナーデジモン。必殺技は、口からネバネバの糸を吐き出し、敵の動きを封じる『ネバネバネット』に、絹糸のような細く、先が針のように硬い糸を吐き出す『シルクスレッド』だ。

アルマジモン、世代／成長期、属性／フリー、種族／哺乳類型、必殺技／スクラッチビート、ローリングストーン

硬い甲殻で体を覆われたアルマジロの様な哺乳類型デジモン。のん気で愛嬌のある性格だが、お調子者なところがたまに傷である。アルマジモンはブイモン等と同じように古代種族の末裔であるため、特殊なアーマー進化をすることができる。名古屋弁を話す。伊織のパートナーデジモン。必殺技は、体を丸めて、相手に向かって猛スピードで突進する『ローリングストーン』に、前足のツメで乱れひっかきする『スクラッチビート』だ。

しかし、質問を聞いたブラックは険しそうに顔を歪め、突如として天井を見上げながら、ヒカリ達に質問する。

「此処は如何やら廃工場の様だな？」

「ハアッ？・・・・・ああ、そうだぜ。お前が現れた公園で、お前を隠すのに一番近かったのが、この廃工場だからな」

「如何してそんな質問するんだ？」

ブラックの質問に、大輔は一瞬呆気に取られた様な表情を浮かべるが、すぐにブラックの質問に答え、大輔の足元に居た頭にVの字が書かれたデジモン―ブイモンがブラックに疑問の表情を浮かべながら質問した。

だが、ブラックはブイモンの質問に答えず、上の方を見つめ続け、全員が疑問の表情を浮かべてブラックを見つめていると、ブラックの事を一番知っているアグモンが何かに気が付いた表情を浮かべて叫ぶ。

「ッ！！皆！ブラックウォーグレイモンを捕まえるんだ！！」

『エッ！？』

アグモンの言葉にヒカリ達が疑問の声を上げた瞬間に、ブラックは後方へと下がり、自身の周りに無数の魔法剣を発生させ、天井に向かって放つ。

「スティンガーブレイド！！エクスキューションシフト！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガガッ！！！！

『なっ！？』

見た事も無い技を使ったブラックの姿にヒカリ達は声を上げるが、ブラックは気にせずに天井に開いた大穴に向かって飛び上がる。

ーーービョン！！

「なっ！！おいこら！！待ちやがれ！！」

「悪いが貴様らには関係無い。これは俺の戦いだ！！」

ーーービュン！！

天井に開いた穴から逃げ出そうとするブラックの背に向かって大輔が叫ぶと、ブラックは穴から抜け出す前に一度止まり、床から自分を見上げているヒカリ達に向かって叫び、今度こそ外に飛び出して行った。

それを見たヒカリ達は慌てた表情を浮かべながら、顔を見合わせ話し合う。

「クソッ！！ブラックウォーグレイモンの奴！またあの時見たいに一人で抱え込む気かよ！」

「不味いぞ！ブラックウォーグレイモンは今のこの世界の現状を分かっていない！デジモンが人間を襲っている事を知らないんだ！」

「そうですよね・・・・・・その事を知ったら、ブラックウォーグレイモンは失望しますかね？僕らに後を託してくれたのに、こん

な現状で」

賢の叫びに伊織が頷きながら、顔を俯けて暗い声で言葉を呟くと、全員が暗い表情を浮かべて顔を俯ける。

そう、この世界でもブラックが居た場所の地球の様に人間を憎んでいるデジモン達が人間を襲い続けていたのだ。ヒカリ達の世界は在る理由により、デジタルワールドと人間界が行き来出来るように成っている為に、人間に憎しみを持っているデジモン達が次々と人間界に現れ人々を襲い続けていた。

それを止めようとヒカリ達、そして外国の選ばれし子供達は連日、現れ続けているデジモン達の説得したりデジタルワールドの戻したりしているのだが、人々を襲い続けているデジモン達の憎しみは深く如何する事も出来ない状態に成っていた。その事が分かっているヒカリ達は、ブラックに世界を託されたと言うのに、如何する事も出来ない現状に悲しんでいたのだ。

そしてそれぞれが悲しみの表情を浮かべる中、金髪の青年、高石タケルは突如として何かに気が付いた表情を浮かべて、全員に声を掛ける。

「ッ！！もしかしたら！ブラックウォーグレイモンも他の世界で人を襲うデジモン達と戦っていたのかも知れない！！」

「あん？如何言う事だよ？タケル」

「ほら、ゲンナイさんが言っていただろう？他の世界でも僕達の世界の様にデジモンが人を襲っているって。そしてそれを止める為に戦っている人達が居るってさ！それがもしかしたらブラックウォーグレイモンなのかも知れない！！」

『ッ！！』

タケルの言葉に全員がハッとした表情を浮かべて、ブラックが出て行った穴を見つめた。もしタケルの言葉どおりだったら、ブラックは自分達の知らない所で激戦を続けていた上に、自分達やゲンナイでさえも知らないデジモン達が人間達を憎んでいる理由を知っている事に成る。

その事に気が付いたヒカリ達は顔を見合わせ頷き合う。

「追おう！ブラックウォーグレイモンの詳しい話を聞く為にも！！」

『うん！！』

「それなら此れよ！！」

アグモンの言葉にヒカリ達は頷き、外に出ようとすると、髪が紫色の女性、井ノ上京が服の中から白い機械、ディーターミナルを取り出し、操作を始める。

「フフフフッ！！もしもの時の為に持って来て良かったわ！これが在ればブラックウォーグレイモンの反応を追えるからね！」

「冴えてるぜ、京！」

「流石は京さんです！」

京の取り出したディーターミナルを見た大輔は京を褒め、京の足元に居た頭に羽飾りを付けた二足歩行の鳥の様なデジモン、ホークモンは感心した表情を浮かべて京を見つめた。

ホークモン、世代／成長期、属性／フリー、種族／鳥型、必殺技／

フェザースラッシュ
礼儀正しく、冷静沈着なデジモン。古代に栄えた特殊な種族の末裔で、ブイモン、アルマジモン、ワームモンと同様に“デジメンタル”の力で“アーマー進化”ができるデジモン。メカが得意な京と違ってメカは大の苦手。京のパートナーデジモンである。必殺技は、頭部の羽飾りをブーメランのように敵に向けて投げる『フェザースラッシュ』だ。

大輔とホークモン、そして他の者達が感心した表情を浮かべてディーターミナルを操作し続ける京を見つめていると、ブラックの反応をキャッチしたのか、京は顔を上げて叫ぶ。

「見つけたわ!!南東に向かって移動しているみたい!まだ、街の中に居るから、すぐに追えば追いつけるわ!」

「ようし!絶対に捕まえてやるからな!ブラックウォーグレイモン!!」

京からの情報に大輔は叫び、他の者達も全員頷くと、ブラックの後を追う為に廃工場を出て、街へと駆け出した。

廃工場から出たブラックは認識阻害の魔法を使用しながら、当ても無く街の上空を飛び続けていたが、突如として何かに気が付いたかのように、人気の無い路地裏に着陸し、自身の体から黒いデジコードを発生させ人間体に変化した。

「フン、これであいつ等が持っている俺を追う機械も意味が無くなるだろう。フリートの奴には感謝しなければな」

そう言いながら黒いロングコートを翻しながらブラックは街の中を歩き始め、これからに付いて考え始める。

（先ずはあの二体の究極体を見つけなければいかん。あいつ等も地球を襲った連中と一緒に、人間を憎んでいるだろうからな。この世界に悪影響を与えない為にも、さっさと倒してリンディ達の所に戻らねばならん。チッ！！ネックレスさえあればすぐに戻れると言うのに！！）

ブラックはこれからの事を考えながら、何時も自分の首に掛かっているネックレスが無い事に苛立ちの声を内心で上げた。

そう、フリートが渡したネックレスにはアレから幾つもの機能が加えられ、ブラックの位相のずれを起こしてしまう特性を抑える事や、いかなる距離からもアルハザードへと転移する事が出来る機能が加えられていた。だが、今はそのネックレスが無い為に世界への悪影響を抑える為にも、ブラックは嫌っている人間体に成る破目に成ってしまった上に、元の世界に戻る為には自分の力を使って帰らなければ行けない状況に成ってしまっているのだ。

しかし、それはブラックに取って、この世界では最も禁忌に近い行為だった。

（俺が世界を渡る為には時空を歪ませなければいかん。しかし、それを行えばこの世界に悪影響が起きる。他の世界ならいざ知らず、アグモン達が居るこの世界では俺には出来ん！どうやって元の世界に帰れば良いのだ！？）

そう、ブラックに取ってこの世界は最も大切な世界。その為にこの世界に悪影響を与える行動はブラックに取っては、もはや禁忌と呼んでも良いほどの行為なのだ。

その事が在るからこそ、ブラックは究極体達を倒した後の行動を悩み続けていた。

（ヒカリ達に事情を説明して協力を仰ぐのは駄目だ。あいつらの事だ。俺が居た場所での現状を知れば、付いて行くと言いかねん。だが、あいつ等には人間は攻撃出来んだろう。それにあいつ等の手を血で濡らせるなど、俺には認められん！）

その事が在るからこそブラックはヒカリ達の前から逃げ出し、こうして嫌っている人間体に成ってまで街の中に潜伏する事にしたのだ。

そして八方塞がりな現状に悩みながらもブラックは街の中を歩き続け、ふと近くに在る本屋に並んでいる新聞紙に目が行く。

「そうだ。今のこの世界はどの様な状況なのだろうか？原作では二十五年後にはデジモンと人間の共存が上手く行っていた様だし、この世界の情報を知るのも悪くは無いか」

ブラックはそう呟くと並べられている記事の中から新聞紙を取り、本屋の中に入って代金を定員に支払い終え、近くの公園に向かい公園の中に在った椅子に座り込み新聞を読み始めた。

しかし、新聞の内容を読んで行く内にブラックの表情は見る見る険しく成り、信じられないと言う声で言葉を呟く。

「・・・・・・『デジモン、再び人間を襲う！』だと！まさか！？」

新聞に書かれていた内容を読んだブラックは驚愕しながら、更に新聞に書かれた内容を読み進め、険しそうに新聞の内容を見つめる。

「・・・・・この世界でもデジモン達が人間を襲っていたのか・・・

・・・いや、あの世界のデジモン達にとっては当然か。あいつ等はもはや人間と言う種族そのもの憎んでいる・・・・・・・滅ぼすべきだったのか、管理局を？」

アグモン達の世界の現状を知ったブラックは新聞を横に置くと暗い表情を浮かべながら、青い空を見上げて疑問の声を上げた。

全ての真実を知っているブラックにして見れば、全ての崩壊の元凶は管理局だという事が分かっていた。もし管理局が無ければ、今もこの世界は平穏無事に済み、デジモンと人間の共存が上手く行っていただろう。だが、今のこの世界には人間に憎しみを持つデジモン達がやって来てしまった為に、原作では上手く行ったデジモンと人間の共存さえも危うい状況に成ってしまったのだ。

「・・・・・管理局の上層部ども。戻ったら貴様らは必ず滅ぼす！！三大天使の世界だけではなく、俺の故郷にさえも影響を与えた貴様らは絶対に赦さんぞ！！」

そうブラックが空に向かって怒りの叫びを上げた瞬間。

ーーードゴオオオオオン！！

「まさか！？」

突如として遠くから爆発音がブラックは慌てて爆発音が響いた場所に向かって全力で駆け出して見ると、其処には白い鎧を身に着けた竜人、スレイヤードラモンと鎧武者の様な姿をした竜人、ガイオウモンが黄金の竜人、ウォーグレイモンと街の上空で戦い続けていた。

ーーー数十分前

京のディーターミナルでブラックの反応を追い掛けていたヒカリ達だが、突如としてディーターミナルからブラックの反応が消失し、京は慌てて叫ぶ。

「うそっ！！ブラックウォーグレイモンの反応が消えた！！」

「なんだて！？」

「まさか！？他の世界に行ったんじゃ！！」

京の言葉に大輔は驚愕の声を上げ、ヒカリは悲痛な声を出して叫んだ。以下にヒカリ達でも他の世界に渡られたらブラックを追う事は出来ない。その事が分かっているヒカリ達は悲しげな表情を浮かべるが、ヒカリの足元に居るコートを被ったテイルモンとアグモンが否定の声を上げる。

「いや、ブラックウォーグレイモンはこの世界に悪影響を与えるのを嫌っている。十年前は私達を助ける為に仕方無くやっていたが、今の状況では恐らく行わないだろう」

「さっきの見た事も無い技の事も在るから、他の世界で何らかの方法を見つけて自分の特性を抑える事が出来る様に成ったのかも知れない」

「って事はまだ、街の中に居るんだな！」

テイルモンとアグモンの意見を聞いた大輔は街の中を見渡し、ブラックの姿を探そうとするが、影も形も見つからず悔しそうな表情をブイモンと共に浮かべた。
その間にタケルは考える様な表情を浮かべて、全員に声を掛ける。
「別れて探そう。全員で探すより、別れて探した方がブラックウォーグレイモンを見つけられるかも知れない」
「そうだね。もう少ししたら兄さんや光子郎さんも来るから、私とテイルモン、アグモンは迎えに行って来るね」
タケルの言葉にヒカリは頷き、自身の兄である太一と光子郎を迎えに行く為に、テイルモンとアグモンと共に大輔達と別れ、残った大輔達はそれぞれブラックを見つける為に街の中に散って行った。
そして太一と光子郎を迎えに行く為にテイルモンとアグモンと一緒に向かったヒカリだが、徐々に走るスピードを止めて歩道に立ち止まってしまった。
「如何したんだ？ヒカリ」
「早く太一達を迎えに行こうよ」
突如として足を止めたヒカリに、テイルモンとアグモンは疑問の表情を浮かべて質問すると、ヒカリは顔を俯けながら言葉を呟く。
「・・・・・ブラックウォーグレイモンは如何して私達に何も話してくれないんだろう。あんなに傷だらけに成る程の戦いが在ったんだったら、私達も力を貸すのに、如何して？」

「・・・・・多分、私達が想像している以上の何かが起きているのだろう。そしてそれに関われば、十年前の時よりも凄まじい戦いに巻き込まれてしまう。その事が分かっているからこそ、ブラックウォーグレイモンは私達に関わって欲しくないんだと想う」

「ブラックウォーグレイモンは敵に対しては容赦の無い攻撃をするけど、優しい奴だよ。多分、ヒカリ達の事を心配して話さないんだ」

「・・・・・・変わってないね。そう言う、不器用な優しさ。十年前もそうだった。だけど、私は、私達はもう子供じゃないよ」

テイルモンとアグモンの言葉にヒカリは笑みを浮かべながら顔を上げて呟き、テイルモンとアグモンも笑みを浮かべた瞬間に、別の歩道から二人の男性の声が聞こえて来る。

「お～い！ヒカリ！！」

「ヒカリさん！！」

「兄さん！光子郎さん！！」

聞こえて来た自分を呼ぶ声にヒカリは笑みを浮かべながら声が聞こえて来た方に顔を向けて見ると、ヒカリ達の見ている先の歩道でスーツを着た二人の男性、ヒカリの兄である八神太一とその親友の泉光子郎は腕を振っていた。

二人の姿を確認したヒカリとテイルモン、アグモンは笑みを浮かべながら太一達の居る方の歩道に向かおうとするが、その瞬間に。

ーーービキビキビキ！！

『ッ！！！』

ブラックがこの世界に現れた時と同じ音が辺りに響き、ヒカリ達が驚愕の表情を浮かべながら上を見上げたて見ると、空にブラックが現れた時と同じ罅が入っていた。

「まさか！？」

ーーーバキィィィィィィン！！

『ウオォォォォォォォーーーーーーー！！！！！』

空中に在る罅を見た太一が叫んだ瞬間に、空間が割れ砕け、中から白い鎧にマントを身に付けた竜人、スレイヤードラモンと鎧武者姿のガイオウモンが咆哮を上げながら姿を現した。

そして現れたスレイヤードラモンとガイオウモンは空中の穴から抜け出し、建物や人々に憎しみに視線を向けながら、スレイヤードラモンは自身の伸縮自在の剣ー『フラガラッハ』を何処からとも無く取り出し、ガイオウモンも独特の形をした二本の刀ー『菊燐（きくりん）』を両手に構え、互いに頷き合う。

「行くぞ！ガイオウモン！！私達の故郷を奪われた無念を晴らすのだ！！」

「うむ！！拙者らの無念を晴らそうぞ！！」

スレイヤードラモンとガイオウモンは互いに言い合おうと、近くの建物に向かって剣を向け、エネルギーを刀身に集め始めた。

それを見ていたヒカリ達は慌てた表情を浮かべながらも、急いで歩道を渡り太一達と合流すると、太一は焦った表情を浮かべて叫ぶ。

「不味い！！あいつ等も人間を憎んでいるデジモン達だ！！」

「ええ！！それにあの二体は究極体の様です！」

「何だって！？」

「究極体が二体も！！」

光子郎の報告に太一とヒカリは驚愕の表情を浮かべ、光子郎が持っていたパソコンを見て見ると、確かにパソコンの画面にはスレイヤードラモンとガイオウモンが究極体で在る事を示していた。

それを横から見ていたアグモンは決意に満ちた表情を浮かべて、太一に声を掛ける。

「太一！！僕があいつ等を抑えるから、その間に大輔達に連絡して！！」

「アグモン！だけど、幾らお前でも究極体を二体も相手には！！」

「大丈夫！僕にはチンロンモンから貰った力が在る！勝てないまでも時間は稼げるから！その間に大輔達に連絡をお願い！」

「・・・・・分かった。だけど、無理はするなよ！」

「分かっている！」

太一の言葉にアグモンは頷き、それを確認した太一はポケットに手を入れ、中からなのは達とは違った形のデジヴァイスを取り出しアグモンに向けて掲げると、デジヴァイスがオレンジ色に輝き、デ

ジヴァイスから光が飛び出しアグモンに直撃する。

「アグモン！！ワープ進化！！！」

光を浴びたアグモンが叫ぶとアグモンの体はオレンジ色の光に包まれ、二つの姿が影の様に現れ、その姿が消えると共にオレンジ色の光は収まり、アグモンが立っていた場所には、銀色の頭部に胸当てを付け、背中の外郭には勇気の紋章が書かれ、体に黄金色に輝く鎧を身に付かせた黄金の竜人が立っていた。

なのは達とは違う究極進化の果てに現れるデジモン。その名も。

「ウォーグレイモン！！！」

ウォーグレイモン、世代／究極体、属性／ワクチン種、種族／竜人型、必殺技／ガイアフォース

超金属『クロンデジゾイド』の鎧を身にまとった最強の竜戦士であり、グレイモン系デジモンの究極形態である。グレイモン系デジモンに見られた巨大な姿とは違い、人型の形態をしているが、スピード、パワーとも飛躍的に向上しており、完全体デジモンの攻撃程度では倒すことは不可能。両腕に装備している『ドラモンキラー』はドラモン系デジモンには絶大な威力を発揮するが、同時に自らを危険にさらしてしまう諸刃の剣でもある。また、『勇気の紋章』が書かれた背中に装備している外殻を１つに合わせると最強硬度の盾『ブレイブシールド』になる。必殺技は、大気中のエネルギーを凝縮し、巨大な球状に変えて投げ付ける『ガイアフォース』だ。

「頼んだぞ！！ウォーグレイモン！！」

ーーービュン！！

太一の言葉に答える様にウォーグレイモンは頷くと、瞬時に上空で剣にエネルギーを集めているスレイヤードラモンの目の前に移動し、右手でスレイヤードラモンを殴り付ける。

「ドラモンキラーー！！」

ーーードゴン！！

「グアッ！！ッ！！」

ウォーグレイモンの攻撃を受けたスレイヤードラモンは苦痛の声を上げるが、瞬時に表情を戻し、自身を殴り付けたウォーグレイモンの姿を見て、驚愕の表情を浮かべながらフラガラッハをウォーグレイモンに向けて構える。

「貴様はあの時の！？」

「良くもあの時は拙者らを邪魔してくれたでござるな！？」

「何だって？」

スレイヤードラモンとガイオウモンの言葉を聞いたウォーグレイモンは疑問の声を上げた。

目の前に居るスレイヤードラモンとガイオウモンに会うのは初めての筈なのに、スレイヤードラモン達は自分を知っている様に声を掛けて来たのだから、疑問に想うのも当然だろう。

ウォーグレイモンが疑問を覚えている間に、ウォーグレイモンを注意深く見つめていたガイオウモンが何かに気が付いた様な表情を浮かべて叫ぶ。

「いや！あやつではない！拙者らの邪魔をした奴は黒かったござるよ！」

「ムッ！・・・・確かにそうだった！では、コイツはあの時に邪魔をした奴ではないな」

ガイオウモンの言葉にスレイヤードラモンも注意深くウォーグレイモンを見つめ、自分達の往く手を阻んだデジモンとウォーグレイモンの違いに気が付き納得の声を上げた。

それを聞いたウォーグレイモンは驚愕に目を見開きながら、スレイヤードラモンとガイオウモンに向かって叫ぶ。

「黒い奴！？ブラックウォーグレイモンの事か！？」

「名までは知らん。だが、奴は私達の往く手を阻んだ者！この街を破壊した後に必ず見つけて、私のフラガラッハの錆にしてくれる！」

「やっぱり、ブラックウォーグレイモンは戦っていたんだ！！」

スレイヤードラモンの言葉にウォーグレイモンはブラックが戦っていた事を確信するが、すぐに表情を険しくしてスレイヤードラモン達を睨み付ける。

「君達は何で人間を襲うんだ！？」

「決まっている！人間は私達デジモンに取って有害な存在だからだ！！」

「その通りでござる！人間は何れデジモンを滅ぼす！今人間を滅ぼさねば、多くの同胞達が殺されてしまうでござる！だから、拙者ら

は人間を滅ぼすでござるよ！！」

「違う！人間とデジモンは共に生きられる！人間が有害だ何て絶対に無い！！」

スレイヤードラモン達の言葉にアグモンは自分の大切なパートナーである太一の事を思い出しながら否定の叫びを上げるが、スレイヤードラモン達はウォーグレイモンの言葉では止まらずにそれぞれ武器を構えながら、ウォーグレイモンに向かって突進すると、スレイヤードラモンは回転体術を使用し、それに寄って生まれた加速を使いウォーグレイモンの頭部に向かってフラガラッハを振り下ろす

「人間に味方をするならば！貴様も敵だ！！壱の型！天竜斬破（てんりゅうざんば）！！！」

「クッ！！」

スレイヤードラモンの天竜斬波をウォーグレイモンは慌ててかわすが、その先にはガイオウモンが待ち構え、両手に構えた菊燐をウォーグレイモンに向かって振り抜き、光の軌跡を放つ。

「喰らうでござる！！燐火斬（りんかざん）！！！」

ーーーブザン！！！

「ッ！！！クソッ！！」

ガイオウモンの放った燐火斬もウォーグレイモンはギリギリの所でかわすが、次々と放たれるガイオウモンの燐火斬とスレイヤードラモンの伸縮自在のフラガラッハの猛攻の前に反撃する事が出来ず

防戦一方に追い込まれて行った。
その様子を地上で見ていた太一達は焦った表情を浮かべて、上空で戦い続けるウォーグレイモンを見つめていた。
「クソッ！！！やっぱり、究極体が二体も相手じゃ、ウォーグレイモンでも勝てない！」
「私がネフェルティモンに進化して援護に！」
「駄目です！ウォーグレイモンが追い込まれるほどの相手です！成熟期クラスの力しかないネフェルティモンじゃ、戦いに割って入った瞬間に、やられてしまいます！何とか大輔君達が来るまで持ち堪えないと！！」
「どうやってだよ！大輔達が来るまで、時間がまだ掛かるし、それまで持ちそうに無いぞ！」
光子郎の言葉に太一は悲鳴の様な声を上げながら上空で戦い続けるウォーグレイモン達を指差し、何とか状況を好転させようと考え始めた瞬間に、上空でウォーグレイモンに向かって燐火斬を放ち続けていたガイオウモンが太一達に気が付き、ウォーグレイモンに向かって攻撃を放つのを止め、二本の菊燐を合体させると地上に居る太一達に向ける。
「あの者達が主の仲間であるな！あの者達さえ居なくなれば主も気付くであろう！！」
「ッ！！止めろ！！」
ガイオウモンの狙いに気が付いたウォーグレイモンは焦った表情

を浮かべてガイオウモンに向かうが、それを阻む様にスレイヤードラモンが立ち塞がる。
そして太一達に向かってガイオウモンが合体させた菊燐から。
「燐火撃(りんかげき)！！！！」
「太一ぃぃぃぃぃぃぃぃーーーーー！！！！」
光の矢が放たれ、ウォーグレイモンが悲痛の声を上げて叫んだ瞬間に、太一達の背後から黒い閃光が飛び出し、太一達を庇う様に光の矢に向かい出す。
「ディストーションシールド！！！！」
ーーードゴオオオオオオオン！！！！
『なっ！？』
「拙者の燐火撃が！！」
黒い閃光が叫ぶと共に前方に盾が出現すると燐火撃と激突とし爆発が起きた。
それを見た全員が驚愕の表情を浮かべて爆発の起きた場所を見つめると、怒りの表情を浮かべた男性一人間体のブラックが煙の中から姿を現し、上空に浮かぶガイオウモンを睨み付けていた。
ーーー現在

上空に浮かぶスレイヤードラモン達を睨みながらブラックは内心で非常に苛立っていた。
だが、その苛立ちはスレイヤードラモン達にでも、ましてやウォーグレイモンにでも無く、何よりも自分自身に向けられていた。

（まただ！また俺はヒカリ達を危険に合わせてしまった！！何故奴らの事を伝えなかったのだ！伝えて置けばこの様な状況に成らずに済んだと言うのに！）

ブラックはヒカリ達を危険な目に合わせたくなかった。
その為にヒカリ達が気付く前にスレイヤードラモン達を倒すつもりだったのに、その考え自体のせいでヒカリ達を危険な目に合わせてしまったのだから、苛立つのも当然だろう。
その様にブラックが苛立っているとは気が付かず、背後からヒカリが恐る恐るブラックに声を掛ける。

「・・・・あの、貴方は？」

「下がっていろ」

「ッ！！その声！！まさか、貴方は！？」

ブラックの声を聞いたヒカリは驚愕の表情を浮かべてブラックを見つめ、太一、光子郎、テイルモンも驚愕の表情をブラックに向けると、ブラックはスレイヤードラモン達に怒りの炎を内心で燃やしながら足を前に踏み出す。

「貴様らは絶対に赦さん！！ハイパーダークエヴォリューション！

！！」

『なっ！？』

ブラックが叫ぶと共に黒いデジコードがブラックの覆い、それを見たヒカリ達が驚愕の表情を浮かべて黒い繭の様な形を模ったデジコードを見つめていると、黒いデジコードの中から三本の剣の様な爪が飛び出し、引き裂く様に黒いデジコードを広げ、中から黒い銀色の頭部に胸当て、金色の髪を髪を持った漆黒の竜人が姿を現す。

「ブラックウォーグレイモン！！！！」

「・・・・・・ブラックウォーグレイモンが」

「・・・・・・人間の」

「・・・・・・姿に」

黒いデジコードの中から姿を現したブラックの姿にヒカリ達は信じられないと言う表情を向けた。

ブラックはダークタワーデジモン。どの様な形で在れ、それが変わる事は無いと言うのに、ブラックは人間の姿に成る事が出来る様に成っていたのだから、信じられないのも無理は無いだろう。

だが、ブラックはヒカリ達の驚愕に構わずに、瞬時にガイオウモンの目の前に移動し顔面を殴り付ける。

ーーービュン！！

「ムン！！」

ーーードゴン！！

「グアッ！！」

ブラックの拳を受けたガイオウモンは苦痛の声を上げるが、ブラックは構わずに連続でガイオウモンの体を殴り続ける。

「オオォォォォォォォーーーー！！！！！」

「ヌオォォォォォーーーーー！！！！」

「ガイオウモン！！己ッ！！」

苦痛の声を上げ続けるガイオウモンの姿を見たスレイヤードラモンはブラックに向かってフラガラッハを振り下ろそうとするが、その直前でウォーグレイモンがフラガラッハを掴み取る。

ーーーガシッ！！

「なっ！！」

「お前の相手は僕だ！！ドラモンキラーー！！」

フラガラッハを掴まれた事に驚愕しているスレイヤードラモンに向かって、ウォーグレイモンは左手のドラモンキラーを突き出す。だが。

ーーーガアン！！

「何ッ！？」

ウォーグレイモンのドラモンキラーはスレイヤードラモンの鎧鱗(がいりん)を貫く事が出来ず、弾かれた。

「フッ！！私のこの鎧燐(がいりん)はクロンデジゾイド製の物だ！！貴様の手甲で貫く事は出来んぞ！！」

「クソッ！！」

スレイヤードラモンの言葉にウォーグレイモンは悔しげな声を上げて、スレイヤードラモンから離れると、ガイオウモンを殴り続けていたブラックがスレイヤードラモンに目を向け、自身の周りに炎の竜巻を発生させる。

「ブラックストームトルネーーード！！！」

『ヌオッ！！』

ブラックの発生させた炎の竜巻に気が付いたスレイヤードラモンとガイオウモンは慌てて防御の体勢を取り、炎の竜巻が収まるまで耐え抜く。

その様子を炎の竜巻の範囲から離れた所で見ていたウォーグレイモンは、訝しげにブラックに質問する。

「ブラックウォーグレイモン！！一体何を！？」

「少し待っていろ。すぐに奴らの鎧を無意味にしてやる」

ウォーグレイモンの質問にブラックは素っ気無く答えると、炎の竜巻を振り払っているスレイヤードラモン達に右手を向け詠唱を開

始する。

「悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて、永遠の眠りを与えよ。凍て付け！！エターナルコフィン！！」

ーーーガキガキガキガキガキガキガキッ！！！

『グオォォォォォォーーーーーー！！！』

ブラックが詠唱を終えると共にスレイヤードラモン達の体が氷に覆われ始め、スレイヤードラモン達は苦痛の声を上げながら凍り付いた。

それを地上で見ていた太一達は驚愕の表情を浮かべて、スレイヤードラモン達を凍らせたブラックを見つめる。

「・・・・・すげえ」

「ええ、究極体を、しかも二体も一瞬の内に凍り付かせるなんて、あの力は一体？」

太一の言葉に答える様に光子郎も信じられないと言う表情を浮かべながら答え、持っていたパソコンでブラックの使った技を調べて見るが、データは発見出来ず困惑の表情を浮かべた。

その様に太一達がブラックの力に驚愕していると、突如としてスレイヤードラモン達を覆っていた氷に亀裂が入り始め、次の瞬間。

ーーービキビキビキビキッ、バキィィィィィィィン！！

スレイヤードラモン達を覆っていた氷は割れ砕け、怒りの表情を浮かべたスレイヤードラモン達がブラックに向かって剣を構える。

「この程度で私達が敗れるものか！！」

「何度も拙者らの邪魔をしおって！もはや赦さんでござる！！」

そう、ブラックに向かってスレイヤードラモン達に叫ぶが、ブラックは気にせずに両手のドラモンキラーをスレイヤードラモン達に向かって構え始め、ウォーグレイモンに声を掛ける。

「ウォーグレイモン！貴様は白い奴をやれ！！手加減はするな！倒さなければヒカリ達がやられるぞ！！」

「分かった！」

ブラックの言葉にウォーグレイモンは答えると、ブラックはガイオウモンに向かって、ウォーグレイモンはスレイヤードラモンに向かって飛び出し、互いに右拳を突き出す。

『ドラモンキラーーー！！！』

「先ほどと同じよ！！」

「拙者の菊燐の錆にしてくれる！！」

ブラックとウォーグレイモンの攻撃を見たスレイヤードラモン達は、それぞれ防御の構えを行い、スレイヤードラモンは鎧燐でウォーグレイモンの攻撃を、ガイオウモンは自身の刀ー菊燐を振り下ろし、ブラックを切り裂こうとする。

だが、ブラックとウォーグレイモンは二体の防御行動を見ても止まらず、それぞれがぶつかり合った瞬間。

ーーーバキィィィィン！！

『なっ！？』

スレイヤードラモンの鎧燐とガイオウモンの菊燐が甲高い音を立てながら砕け散った。

自身の自慢の鎧と刀が砕け散った事に驚愕しているスレイヤードラモン達に向かって、ブラックとウォーグレイモンは今度は左腕を繰り出し、殴り飛ばす。

『オォォォォォォーーーー！！！』

ーーードゴオン！！

『グアッ！！』

ブラックとウォーグレイモンの一撃を受けたスレイヤードラモン達は苦痛の声を上げるが、ブラック達は攻撃を止めず、今度は自分達の頭上で両手を合わせ、ブラックは漆黒の竜巻に、ウォーグレイモンは黄金の竜巻に変わり、スレイヤードラモン達に向かって突撃する。

「ブラックッ！！」

「ブレイブッ！！」

『トルネーーード！！！！！』

『クッ！！』

漆黒の竜巻と黄金の竜巻を見たスレイヤードラモン達はそれぞれ武器を構えて迎撃しようとするが、逆に二つの竜巻に自分達の鎧や武器が削られて行き、慌てた表情を浮かべ始める。
その様子を地上から見ていた太一、ヒカリ、テイルモンは疑問の表情を浮かべ、ブラックとウォーグレイモンのかわし続けるスレイヤードラモン達を見つめる。

「どうなってんだ？何でさっきはウォーグレイモンの一撃が弾かれたのに、何で今は逆にウォーグレイモンとブラックウォーグレイモンの攻撃を防御する事が出来ないんだ？」

「さっきのブラックウォーグレイモンの攻撃は全て防御出来たのに？」

「何かカラクリが在るのか？」

その様に太一達が疑問の声を上げていると、横でパソコンを弄っていた光子郎が何かに気が付いた表情を浮かべて叫ぶ。

「そうか！！温度差だ！さっきのブラックウォーグレイモンの攻撃の真の狙いは温度差に在ったんだ！！」

「如何言う事だよ？光子郎」

突如として叫んだ光子郎に太一が疑問の表情を浮かべて質問すると、光子郎はパソコンから顔を上げ太一達に説明を始める。

「金属はどんな物でも、急激な温度変化によって脆くなるんです。それはデジモン達の武器にも当て嵌まる。ブラックウォーグレイモ

ンは先ず、炎の竜巻であの二体の武器の温度を上げ、その後に絶対零度で凍結させて矯激な温度変化を起こす事で、二体の鎧や武器の強度を脆くしたんですよ」

「・・・・・ブラックウォーグレイモンの奴。十年前よりも強くなっている」

「ああ、今のブラックウォーグレイモンには、ウォーグレイモンとインペリアルドラモンの二体でも勝てないかも知れない」

光子郎の説明を聞いた太一とテイルモンは信じられないと言う表情を浮かべて、ウォーグレイモンと共にスレイヤードラモン達を追い込んで行くブラックを見つめた。

ウォーグレイモンでさえも防戦一方に追い込んだ相手に対して、それだけの作戦を瞬時に考えた上に、ウォーグレイモンの手を借りてとは言え、圧倒的な力で究極体を、しかも二体も追い込んだのだから、驚愕するのも当然だろう。

その様に太一達がブラックの強さに驚愕していると、静かにブラックの戦いを見ていたヒカリがポツリと呟く。

「・・・・・どれだけ、戦い続けたんだろう」

「ヒカリ？」

ヒカリの呟きを聞いた太一は疑問の表情をヒカリに向けるが、ヒカリは構わずに呟き続ける。

「アレだけの力を得る為に、どんなに過酷な戦いを続けていたんだろうね？」

「・・・・・多分、僕らの想像を超える戦いを経験したんですよ。やはり、ブラックウォーグレイモンは今回の件を全て知っていると考えるべきですね」

「ああ、アイツには全部聞かなくちゃな」

その様に太一達が話し合っている間に、戦いは佳境を向かえ、ボロボロの状態に成ったスレイヤードラモン達にウォーグレイモンが声を掛ける。

「もう戦いを止めて、デジタルワールドに戻るんだ！これ以上の戦いは無意味だ！！」

「ハア、ハア、ハア、無意味ではない！！私達は絶対に人間達を滅ぼすのだ！！」

「ハア、ハア、ハア、そうでござるよ！！拙者らは絶対に人間を赦さんでござる！！例えこの身が消えようと戦い続けるでござる！！」

ウォーグレイモンの言葉にスレイヤードラモンとガイオウモンはそれぞれボロボロに成っている武器を構え出し、それを見たウォーグレイモンも悲痛そうな表情を浮かべてドラモンキラーを構え出す。

「何で彼らは戦うんだ。僕には彼らが敵には思えない」

「無駄だ、ウォーグレイモン。何をしようと奴らはもはや止まらん。それだけの事を奴らは味わった。倒す以外に奴らを止める方法は無い」

「・・・・・・分かった」

ウォーグレイモンが悲痛な表情を浮かべて呟いた言葉に、ブラックは冷静に答え、それを聞いたウォーグレイモンは悲痛な表情を浮かべながら、大気中のエネルギーを集め始め、金色に輝く巨大な超高密度の高熱エネルギー弾を作り始め、ブラックも負の力を集中させ、巨大な赤いエネルギー球を作り出す。

それを見たスレイヤードラモンは刃毀れだらけのフラガラッハを下段に構え、竜波動をフラガラッハに練りながら小声でガイオウモンに声を掛ける。

「ガイオウモンよ。如何やら私達は、敗れる事に成りそうだ」

「うむ、その様でござるな。流石はあの方々が残した希望の一つよ。拙者らの精進が足りなかったと言う事でござるな」

「フッ、確かにそうだ。だが、不思議と悔いは無い。全力を出して挑み、敗れるのだからな。出来れば共に戦いたかった」

「拙者もでござる。人間への憎しみは忘れた訳ではないが、あの者となら共に戦いたかったでござる」

スレイヤードラモンとガイオウモンは互いに笑みを浮かべて話し合った。

最初は確かに人間を滅ぼすつもりだった。だが、不思議とブラックとウォーグレイモンと戦っている内に、憎しみは薄れ、純粋にブラックとウォーグレイモンとの戦いを楽しんでいた。

「だが、気付くのが遅すぎたでござる」

「・・・・・そうだな。だからこそ、私達はこの戦いに終止符を打

つ為に、決着を付けるのだ！！」

ガイオウモンの言葉に答える様に叫ぶと、スレイヤードラモンは竜波動を練り終えたフラガラッハを全力で握り締め、ガイオウモンも最後の技を使う為に大気中のエネルギーを集め始める。

それに気が付いたブラックとウォーグレイモンは自分達が生み出した巨大なエネルギー球を振り被り、それを見たスレイヤードラモンはフラガラッハを下段から上方に向かって降り抜き剣圧を放つ。

『ガイアッ！！』

「弐の型！！昇竜斬波（しょうりゅうざんぱ）！！！」

ーーーブザン！！！

スレイヤードラモンが放った昇竜斬波は超高速でブラック達に向かうが、その前にブラックとウォーグレイモンはエネルギー球を全力で投擲した。

『フォーーーース！！！！！』

ーーードゴオオオオオオオオオオオン！！

投げられた二つのガイアフォースは昇竜斬波にぶつかり爆発を起こすが。それでも威力は衰えず二つのガイアフォースは直進し、エネルギーを溜めているガイオウモンに直撃しようとする。

だが、その直前でスレイヤードラモンがガイオウモンを庇う様に立ちはだかり、自身の技を破ったブラックとウォーグレイモンに賞賛の叫びを上げる。

「私の生涯で最高の昇竜斬波（しょうりゅうざんぱ）を破るとは見事成り！！だが、勝負は私達の勝ちだ！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

スレイヤードラモンが叫び終わると共に、二つのガイアフォースがスレイヤードラモンに直撃し大爆発を起こし、スレイヤードラモンはデータ粒子に変わり消滅した。

それを目の前に見ていたガイオウモンは一瞬悲しげな表情を浮かべるが、スレイヤードラモンが残した最大の好機を無にしない為に、集め終えたエネルギーを解き放とうする。

「終わりでござる！！ガイアリアッ！！！」

ーーーギュウゥゥゥゥゥゥン！！

ガイオウモンが溜め終えたエネルギーを解き放とうとした瞬間に、漆黒の竜巻と黄金の竜巻が煙の中から姿を現した。

「ブラックッ！！」

「ブレイブッ！！」

『トルネーーードッ！！！』

「グアァァァァァァァァーーーーーーー！！！！！！」

漆黒の竜巻と黄金の竜巻に胸を貫かれたガイオウモンは苦痛の叫びを上げ、体がデータ粒子に変わり始める。

だが、ガイオウモンは自身の死を感じても笑みを浮かべて、自分

とスレイヤードラモンを打ち破ったブラックとウォーグレイモンに賞賛の笑みを向ける。

「・・・・・見事で・・・・・・ござる・・・・・・貴殿らと・・・・・共に・・・・・戦い・・・・・」

全ての言葉が言い終わる前に、ガイオウモンの体は完全にデータ粒子に変わり消滅した。

それと共に出現したデジタマをブラックは瞬時に掴み取り、別の場所で落下していたスレイヤードラモンのデジタマも掴み取る。

ーーーバシッ！！

「・・・・・そうか。こいつ等はこの世界のデジタルワールドのデジモンではない。そのせいで倒せばデジタマに変わるのか」

掴み取ったデジタマを見つめながらブラックはデジタマが現れた理由を呟いた。

そう、この世界のデジモン達は死んだ後はデータ粒子に変わり、はじまりの街と呼ばれる場所で新たにデジタマとして生まれ変わるのだが、スレイヤードラモン達はこの世界のデジタルワールドのデジモンではない為に、倒されればその場でデジタマに変わってしまうのだ。

そしてブラックはデジタマを両手に持ちながら地上に着陸し、その場から離れようとするがブラックの背後にウォーグレイモンが悲しみの表情を浮かべながら着陸すると、ブラックを呼び止める。

「待って！ブラックウォーグレイモン！」

「・・・・・聞きたい事は分かる。だが、関わ・・・・」

「私達はもう子供じゃない！！！」

「ッ！！」

ブラックの言葉を遮る様に叫ばれた声に、ブラックは驚愕の表情を浮かべて背後を振り返ると、険しい表情を浮かべたヒカリ達がウォーグレイモンの横に立っていた。

「ブラックウォーグレイモン。私達はもう子供じゃないよ。自分で進む道を決められる大人なんだよ」

「そうだぜ。俺達は人間とデジモンの共存を目指している。だから、教えてくれ！！何でデジモン達が再び人間を襲う様になってしまったのか！」

「僕からもお願いします！！」

「私からも頼む！！」

ヒカリの言葉を繋げる様に、太一、光子郎、テイルモンが言葉を言い、ウォーグレイモンもブラックに声を掛ける。

「僕からも頼む。こんな悲しい気持ちに成る戦いが何で起きたのか知りたいんだ。だから、教えてくれ！！！」

「・・・・・・良いだろう。だが、覚悟しろ。真実を知ればお前達に待っているのは絶望だけだと言う事をな」

そう告げるブラックの宣告に、その場に居たヒカリ達は凄まじい

悪寒に襲われるのだった。

ブラックとヒカリ達が話し合っている場所から遠くのビルの屋上では、豆粒ほどにしか見えないブラック達の姿を見つめている四名の青と紫のボディスーツを着た女性達と一人の銀髪に左目に眼帯をした少女に、小柄な大きな角と前足を持った蒼いカブトムシの様なデジモンを横に連れた紫色の髪に黒と紫のドレスを来た少女が存在していた。

その内の一人ーメガネを掛けた栗色の髪を両脇で結んだ女性が険しい表情を浮かべて声を出す。

「よりにもよってこの世界にあの方が来てしまうとは、折角彼らに知られずにこの世界を見つけたと言うのに、本当に厄介な事に成りましたわぁ。ねえ、チンクちゃん、ディエチちゃん、トーレ姉さまもそう想いません」

「・・・・確かにそうだな、クアットロ」

メガネを掛けた女性ークアットロの言葉に、紫色の髪をショートカットにした背の高い女性ートーレが同意を示し、銀髪の少女ーチンクも頷き、最後に黄色いリボンで髪を縛っている女性ーディエチも頷くとチンクが険しい表情を浮かべながら遠くに居るブラックを見つめる。

「あの者が相手と成れば、如何にデジモンの力を手に入れた私達でも危ういぞ。ただでさえ、私達にデジモンの力を得られる技術を与えたのは彼らなのだからな」

「そうだね。でも、私達の目的の物かも知れない物を持つ人達が、彼の横に居るからね」

「作戦を考えねばな」

ディエチの言葉に答える様にトーレが呟くと、トーレ達は顔を見合わせ作戦を考え始める。

その間に紫色の少女は自身の横に居たデジモンを伴いながら屋上の端に来て、無表情ながらも目に憎しみを込めて遠くに居るブラックを睨み付ける。

「漆黒の竜人ーブラックウォーグレイモン。貴方だけは私が絶対に倒す。貴方に傷付けられたお母さんーメガーヌ・アルピーノの仇は、娘である私が絶対に取って見せる。その為にも力を貸してね、コカブテリモン」

コカブテリモン、世代／成長期、属性／ウィルス種、種族／昆虫型、必殺技／スクープスラッシュ、ビートルラリアット

小柄だが、とても力持ちな昆虫型デジモン。大きなツノと前足を持っており、周囲からは恐れられているが、実は争いを好まないテントモンと同じ温和な性格の持ち主である。必殺技は、ツノで相手の体をすくい上げ弾き飛ばす『スクープスラッシュ』に、大きく発達した前足からラリアットを繰り出す『ビートルラリアット』だ。

「分かってるとも、ルーテシアの敵は私の敵！君の為にも私は戦う！」

「ありがとう」

コカブテリモンの言葉に紫色の髪の女性ールーテシア・アルピー

ノは僅かに微笑みながら礼を告げ、コカブテリモンと共に遠くに居るブラック達を見つめ続けた。

ブラックウォーグレイモン&ウォーグレイモン!!（後書き）

次回予告

世界に起きた真実をヒカリ達に告げるブラック。

知らされた事実に、誰もが絶望を覚える。

しかし、その時に強襲する金色の瞳を持った女性達。

次回、漆黒の竜人と少女、『強襲!!バイオ・ナンバーズ!!』

新たに現れる敵。そして漆黒の竜人の前に現れるデジモンを連れた少女は、憎しみを抱く者だった。

強襲！！バイオ・ナンバーズ！！（前書き）

どうも作者のゼクスです。
以前、在る感想で書いた、原作ＳｔＳの第八話と第九話のなのはをボコボコにする話が、暇つぶしで書いていていたら、完成しそうに成ってしまったのですが、読みたい人はいるでしょうか？特別編として出そうか迷っているので、出来れば感想にご意見下さい。

強襲！！バイオ・ナンバーズ！！

戦いを終えた後、大輔達と合流したヒカリ達はブラックに詳しい話を聞く為に、太一とヒカリの家に向かう筈だったが、合流した大輔達は困惑した表情を浮かべて、人間体に成っているブラックを見つめていた。

「え～と？」

「何だ？言いたい事が在るんだったら、さっさと言え」

「・・・・・・ブラックウォーグレイモンよね？」

「フン！！忌まわしい事だがそうだ」

『・・・・・エェェェェェェェェェーーーーーー！！！！！』

京の質問にブラックが不機嫌そうな表情を浮かべて答えた瞬間に、京達は一瞬呆気に取られた表情を浮かべたが、すぐに驚愕の叫びを上げた。目の前に居る見た事も無い男性がブラックだと告げられたのだから、驚愕するのも当然だろう。

その様子を見ていた太一達は苦笑を浮かべて京達に声を掛ける。

「驚くのも無理ねえよな。ブラックウォーグレイモンが人間に成っているんだからよ」

「そうですね。僕達も最初に見た時は驚きましたしね」

「好きで人間の姿に成れる様に成ったのではない」

太一と光子郎の言葉にブラックは不機嫌そうな表情を浮かべて答えると、ブラックの傍にアグモンが近付き慰さめる様に声を掛ける。

「そんなに不機嫌そうにしないで、少しは嬉しそうにしなよ」

「黙れ。俺はこの姿が嫌いなんだ。それよりもさっさと案内しろ。話が聞きたいのだろう？」

「ああ、デジモン達が何で再び人間を襲う様に成ってしまったのか聞きたいし、とにかく俺とヒカリが今住んでいる家で話をしよう」

ブラックの言葉に太一が向かう場所を示し、一同は太一とヒカリの家に向かい出した。

そして電車やバスなどで向かい、住宅地が並ぶ場所に来ると太一とヒカリが自分達の家を示し、全員が家の中に入りリビングで話を始める。

「それじゃあ教えてくれ。何でデジモン達が人間を襲う様に成ってしまったのかを？」

「・・・・・・全ては在る一つの組織の暴走に寄って始まったのだ」

「組織？」

顔を俯かせながら呟いたブラックの言葉に、ヒカリは疑問の表情を浮かべ、他の者達も疑問の表情を浮かべてブラックを見つめる。

「名は『時空管理局』。広大としか言えない程の次元世界を管理しようと考えている。傲慢を絵に描いた様な組織だ」

「ちょっと待って？次元世界って何？」

ブラックの呟いた言葉の中に意味が分からなかった言葉が在ったので、京が質問すると、他の者達も疑問の表情を浮かべる。

それを見たブラックはヒカリ達が何も知らない事を思い出し、一から説明し始める。

「次元世界と言うのは、その名の通り次元の海に漂う無数に存在する世界の事だ。俺達が今いる地球やデジタルワールド以外にも無数の世界が存在し、広大な次元に在る幾つもの世界。それを次元世界と呼んでいる」

「成る程、やはりデジタルワールド以外にも世界が存在し、その世界を管理している組織が、その時空管理局なんですね？」

「その通りだ。だが、管理局は愚かとしか言えないほどの間違いを起こしてしまった。四つのデジタルワールドの内の一つを消滅させてしまったのだ！！」

『ッ！！！』

ブラックが告げた事実にその場に居た全員が驚愕の表情を浮かべた。

デジタルワールドを滅ぼした。それが事実だとすれば、何故デジモン達が人々を襲い始めたのか納得出来る。自分達の故郷を滅ぼしてしまった人間と言う種族が赦せないのだ。

「何で！？何でその組織はデジタルワールドを滅ぼしたの！？そのデジタルワールドが一体何をしたの！？」

「何もしていない。寧ろ、そのデジタルワールドは次元世界に迫っている真の危機を止める為に動いていた」

「何だって！？それじゃあ何でそのデジタルワールドを滅ぼしたんだよ！？」

ブラックの言葉に太一は疑問の叫びを上げた。世界の危機を止めようとしたデジタルワールドを崩壊させた。如何考えても矛盾しているだろう。世界を護ろうとしていたデジタルワールドを滅ぼす理由など見つからないのだから。

太一の叫びに他の者達も同様に疑問の表情をブラックに向けると、再びブラックは話を再開する。

「管理局に取ってデジモンは認められない存在だからだ。デジモンと言う存在が在れば、何れ自分達の脅威に成る。だから滅ぼす。管理局はそう言う組織に成ってしまったのだ」

そうブラックは告げると太一達に全てを話した。

七大魔王の事。管理局と言う組織の真実。そして自分が今まで何をして、如何言った経緯で再びこの世界に戻って来てしまったのかを全て説明した。

そしてブラックが全てを話終わる頃には、もう真夜中に近い時間に成ってしまったが、誰もが言葉を失い、絶望に満ちたような顔をしていた。

「これが俺が体験して来た事の全てだ。分かっただろう。何故デジモンが再び人間を襲う様に成ってしまったのかを、奴らがこの世界で人間を襲っているのは逆恨みに近いが、それを行わなければいけないほどに、奴らは人間を憎んでいる。今は四聖獣、ロイヤルナイ

ツの連中は管理局に加盟している管理世界を狙っているだろうが、恐らく管理局と管理世界を滅ぼした後は、管理外世界と自分達の世界の横に在る地球も狙うだろう。最もその前にルーチェモンと七大魔王の手によって全ての世界が滅びるかも知れんがな」

そうブラックは言い、自身の知る全てを話し終えた。

その場に居る誰もが言葉も出ず全員が絶望の表情を浮かべていた。遠く離れた世界を管理していると言う組織の暴挙に寄ってデジモンと人間の絆が修復不可能な程の亀裂が生まれてしまった事にも驚いたが、その様な状況だけではなく、更なる脅威が迫っていると状況なのに、本来ならば手を取り合い共に脅威に挑むべきデジモンと人間が互いに憎しみ合っている現状に言葉も出なくなってしまったのだ。

その様に全員が絶望の表情を浮かべる中、何とか襲い掛かる絶望を振り払った太一がブラックに声を掛ける。

「・・・・色々な事が一気に分かって混乱してるけど、その管理局って言う組織が行ったデジタルワールドでの事を、他の管理世界って言う世界の人々に伝える事は出来ないのか？全部の原因は管理局に在るんだし？」

「無理だ。その方法を行った瞬間に待っているのは、次元世界規模での人間同士の戦争だろうな」

『ッ！！！』

太一の告げた現状での打開策に、ブラックは否定の声を上げ、太一の告げた打開策の結果を告げると、その場に居る全員がブラックを見つめた。

「管理世界の連中の中には管理局に不満を持っている者達も居る。無理やり管理世界にされた世界がそうだ。その様な連中からすれば、管理局がデジタルワールドで行った暴挙は管理局を潰す絶好の機会だろう。だが、管理局が無くなれば、次元世界を又に掛ける犯罪者は好き勝手に暴れられる上に、管理局のお蔭で戦争が終結した世界も再び戦争状態に成ってしまう。管理局が無くなれば戦争がデジモンと人間、そして人間の三つ巴の誰も止められる者が居なくなる泥沼の戦争に発展してしまう」

そう、その事が在るからこそ、ブラック達は管理世界の人々に真実を告げる事が出来なかったのだ。

確かに第九管理世界が滅んだ真の真相を人々に伝えれば管理局は崩壊するだろう。何せ罪の無かった世界が滅んでしまった元凶なのだから。だが、その後に確実に待っているのは人間同士の戦争。管理局は曲がりなりにも世界の平和と維持を行い続けて来たのだから、その組織が無くなれば抑止力は無くなり多くの世界が戦争に乗り出すだろう。

デジモンと人間の戦争が起きている状況だけでも最悪だと言うのに、その状況で更に人間同士まで戦争が起きれば、もはや手の内ようが無い。その事が在るからこそブラック達は真実を管理世界に伝えられないのだ。勿論管理局の真実を知っている者達もその事は分かっている為に、元凶である上層部を罰する事が出来ない状況に成ってしまっている。

「あの組織の厄介な所はその性質にこそ在る。曲がりなりにも多くの世界の平和を護って来た組織。その組織が無くなれば一気に世界は不安定に変わる。俺としてはさっさと滅ぼしたいが、状況が赦さん。忌まわしい組織だ」

ブラックとしては世界がどうなろうと知った事ではないが、三大

天使の願いとリンディ達、そしてヒカリ達が居る世界の事が在るからこそ、管理局を滅ぼさずに居た。最もその結果が更なる管理局の上層部の増長に繋がったのは皮肉としか言えないだろう。

「どちらにしても管理局はデジモンとの戦争に勝つ意外に道は最早無い。それに勝った後には最高の栄誉が手に入る。世界を滅ぼし、多くの世界を滅ぼそうとしたデジモン達を滅ぼしたと言う最高の栄誉。その栄誉が在れば管理局の管理と言う名を借りた次元世界支配は完全に完了する。それこそが上層部の馬鹿どもの真の狙いだ」

「次元世界支配だって！？ちょっと待ってよ！」

「管理局って言う組織は世界の平和を護る為に在るんじゃないの！？」

ブラックの告げた事実に大輔と京は驚愕の表情を浮かべて質問し、他の者達も信じられないと言う表情をブラックに向けた。

ブラックの話では多くの問題は在るが、それでも管理局が在るのは人々の平和を護っている筈の組織だ。その組織の上層部の真の狙いが次元世界支配などと言う恐るべきものだと告げられたのだから驚愕するのも当然だろう。

「お前達は高校を終えたのだろう。ならば管理と言う言葉に意味を考えて見ろ」

『ッ！！！』

ブラックの言葉に全員が管理と言う言葉の意味を思い出しハッとした表情を浮かべて顔を見合わせる。

管理と言うのは管理し処理する事。世界を管理すると言う事は、

支配と同意義なのだ。

「最も奴らは世界を支配するとは想っていないだろう。“自分達が世界を管理してこそ世界は平和に成る”そう想って奴らは動いている。そしてその為には自分達を脅かすほど脅威。デジモンの存在など認める訳にいかん。だからこそ、奴らはデジモンを滅ぼす為にデジタルワールドを崩壊させたのだ。最も、まさか、他にもデジタルワールドが存在し、第九管理世界が滅びる結果に成るとは夢にも想っていなかっただろうがな」

「・・・・・クソッ！！って事は！」

「八方塞。どうやっても今の状況を変えるのは不可能と言う事なのか」

ブラックの言葉に大輔は悔しそうな表情を浮かべて叫び、賢がそれを繋ぐ様に現状を告げ全員が再び絶望の表情を浮かべた。

そして在る程度時間が経つと、太一が置いて在る時計に目を向ける。

「・・・・・・もう十二時近くか。今日は皆泊まっていけよ。正直色々と分かり過ぎて混乱しているだろうし、今日はもう休んで明日また話し合おうぜ」

そう太一が告げると、全員が頷き、ヒカリと太一の案内でそれぞれ部屋に向かい休み始めた。

深夜、誰もが寝静まる中、認識阻害の魔法を使用したブラックは

八神家の屋根の上で空高く浮かんでいる月を見上げていた。

（変わらんな。空に浮かぶ月だけは十年前のままだ。それにしてもこれから如何したものか？何としてもあちらの地球に戻らねば行けないと言うのに、帰る方法が思い付かん）

本来ならばブラックの能力を使用して世界を渡る事が出来るのだが、その能力は出来るだけこの世界では使いたくない上に、もう一つ使用出来ない理由が在る。それは。

（この世界と俺が居た地球は遠く離れている筈だ。戻るのにはかなり時間が掛かる上に、あの地球の場所が分からん。次元の狭間などで迷子など笑い話にしか成らんぞ）

そうブラックは自分の居た世界の座標が分からないのだ。もし向かった先が逆の方向では確実に次元空間で迷子に成ってしまうだろう。その事が在るからこそブラックは世界を渡る事が現状では出来ないのだ。

（この世界であの世界の座標を知っていそうなのは、チンロンモンぐらいだろうが、奴が今この世界に居るからは分からん。本来の自分の見守るデジタルワールドに居れば会う事は不可能だ。どうやってあの世界に帰ったものか？）

その様にブラックが元の世界に戻る方法で悩み続けていると、背後から声が聞こえて来た。

「寝なくて良いの？ブラックウォーグレイモン」

「お前には明日も聞きたい事が在るんだ。眠って置いた方が良いぞ

？」

「そう言う貴様らは何だ？ヒカリにテイルモン」

聞こえて来た声にブラックが不機嫌そうな声を出して背後を振り返ってみると、パジャマ姿のヒカリにテイルモンが屋根の上に立っていた。

「・・・・・色々分かり過ぎて眠れなくてね」

「私も同じだ」

「そうか」

ヒカリとテイルモンの言葉にブラックは素っ気無く答えると、再び空に浮かぶ月を眺め始め、ヒカリとテイルモンは苦笑を浮かべ合いブラックに声を掛ける。

「ブラックウォーグレイモンはこれから如何するの？」

「元の世界に帰る。あの世界を任せた連中に必ず帰ると約束した。それにルインやリンディ、それにヴィヴィオの奴が心配しているだろうからな」

「ルイン？リンディ？ヴィヴィオ？」

ブラックが告げた初めて聞く名前にヒカリが疑問の表情を浮かべて呟くと、ブラックは月を眺めながら答える。

「ルインは俺と同じ様に世界に否定された存在。リンディは俺が殺

して俺のデータを基にダークタワーデジモンとして生まれ変わった存在だ」

「殺したって！？」

「そのままの意味だ。俺の戦いの邪魔をしたから胸にドラモンキラーの爪を突き刺した」

ヒカリの驚愕の叫びにブラックは何でも無い様に答え、リンディを殺した時の事を思い出す。

（あの時、何故俺はリンディに治療魔法を掛けたのだ？未だに分からん？何故だ？）

「ダークタワーデジモンにそのリンディと言う人物を生まれ変わらせたと言うが？そんな事が可能なのか？」

ブラックが内心でリンディを殺した時の事を考えていると、ヒカリの横に立っていたテイルモンが険しい表情を浮かべて質問して来た。

人間をダークタワーデジモンに生まれ変わらせるなど禁断の技術としか言えないほどのものだろう。その技術が世界に広まれば更なる戦争の引き金に成りかねないのだから。

「生まれ変わらせた本人曰く。死者蘇生や時間移動以外のものは在る程度可能だそうだ。この前は平行世界の移動も完成寸前だと叫んでいたから、人間をデジモンに変える事ぐらいは簡単だろう。最もそれが出来るのは奴の知識と機材が揃っているからこそだろうがな。奴以外であの技術を成功させたのは一人しかいない。それに世界にその技術を散布する気は無い様だ」

「・・・・・そうか。色々と言いたいが、それさえ分かれば十分だ」

ブラックの言葉にテイルモンは険しい表情を浮かべながらも安堵の声を出し何とか納得する。

だが、ヒカリだけは険しい表情を浮かべてブラックの背に声を掛ける。

「人を殺したの？」

「ああ、確かに俺は殺した。戦いの邪魔をした者。デジタルワールドで虐殺を行った連中。その他にも沢山の奴らを傷付けたり殺したりした。だが、後悔する気は無い。復讐しに来る奴らも居るが、そいつらも俺は倒した。それはこれからも変わらん。何が在ろうと俺は戦い続ける」

「・・・・・その先にはきっと何も無いよ。それでも戦うの？」

「ああ、それが俺だ。俺は例え全てが終わっても戦い続ける。どれ程時が経とうと俺は戦い続けるだろうな」

ヒカリの質問にブラックは真剣な表情を浮かべて答え、ヒカリは不安に成った。

（変わってない。十年前からずっとブラックウォーグレイモンは変わらないね。何が在っても戦い続け、その果てに待ってるのが孤独な死だとしても、その道を止める事はきっと無いんだね。今言った二人の人はそれに気が付いているのかな？）

それこそがブラックの選んだ道。例え何が在ろうと、ブラックは

戦うのを止めず何時かは孤独な死を迎えるだろう。その事が分かっているルインとリンディはブラックを孤独にしない為に共に歩む事を決意していた。ルインは漸く見つけた自身を否定せず受け入れてくれたブラックを孤独にさせない為に、リンディはブラックの心の奥底に在る寂しさと悲しさに触れた時に、二人はブラックと共に永遠を歩む決意をしたのだ。

その事を知らないヒカリはブラックの告げた人物達がどの様な人物なのかもっと詳しく聞く為に、ブラックに声を掛けようとするが、突如としてブラックは立ち上がり険しい表情を浮かべながら、辺りを見回し始める。

「如何したの？」

「テイルモンと一緒に下がっていろ。覚えの在る気配が四つ近くに潜んでいる」

「えっ？」

ブラックの言葉にヒカリは疑問の声を上げるが、ブラックは気にせずに右手を掲げ呟く。

「広域結界展開」

ーーーシュウン！！

「ッ！！これは！？」

ブラックが呟くと共に周りの景色の色が変化し、ヒカリは驚愕の声を上げるが、ブラックは気にせずに周りに声を掛ける。

「出て来い。ナンバーズ」

「流石だ」

『ッ！！』

突如として上空から聞こえて来た声にヒカリとテイルモンは驚愕の表情を浮かべて上空に目を向けて見ると、其処には青と紫のボディースーツを着た紫色の髪をショートカットにした女性ーナンバーズ３ートーレが空に浮かんでいた。

「久しぶりだな、漆黒の竜人。一年ぶりか？」

「その位だろうな。だが、貴様らが何故この世界に居る？此処最近スカリエッティの奴が怪しい動きをしていた様だが、それに関係しているのか？」

「如何に同盟関係に在るとは言え、答えられんな。だが、此処に来た理由は話そう。私達の目的は貴様の後ろに居る者達が持っている『デジメンタル』だ」

『ッ！！』

トーレが告げた言葉にブラックの後ろに居たヒカリとテイルモンはトーレの姿を見つめ、ブラックは険しい視線でトーレを睨みつける。

“デジメンタル”。それは古代種の遺伝子データを持つデジモンをアーマー進化させる事が出来る様にする為の物であり、勇気、友情、愛情、純真、知識、誠実、希望、光、奇跡の九つが存在し、ヒカリ達は奇跡以外のデジメンタルを全て所有している。そのデジメ

ンタルが目的だと告げられたのだから驚愕するのも当然だろう。

「何の目的でデジメンタルを狙う？貴様らの所に古代種の遺伝子を持つデジモンでも居るのか？」

「それには答えられんが、我らには如何してもデジメンタルが必要なのだ。同盟関係に在る貴様とは戦いたくない。穏便に渡して貰いたいのだがな」

「理由が話せないんだったら渡す訳にはいかない！」

「その通りだ！デジメンタルを悪用させれる訳にはいかない！！」

トーレの言葉にヒカリとテイルモンはそれぞれ叫び、トーレは残念そうな表情を表情を浮かべる。

「残念だ。漆黒の竜人の仲間であるお前達とは出来れば戦いたくなかったが、如何やら無理の様だ。バイオエヴォリュ―ション！！！」

『ッ！！』

トーレが叫ぶと共にトーレの体を蒼いデジコードが包み込み、それを見たヒカリとテイルモンが驚愕の表情を浮かべて蒼いデジコードを見続けると、中から背中にロケットエンジンを背負い体にベルトの様な物を身に付け、両手足が金属の腕で出来た蒼い狼の頭部を持った獣人が姿を現した。

「バイオ・マッハガオガモン！！」

バイオ・マッハガオガモン、世代／完全体、属性／データ種、種族

／サイボーグ型、必殺技／ガオガトルネード、ウィニングナックル、ハウリングキャノン
莫大な推進力をもつロケットエンジンを背負う蒼い狼の獣人で在り、サイボーグ型デジモン。本来ならば滞空時間は短いが元々空戦出来るトーレが進化した事に寄って滞空時間は飛躍的に伸びている。また、瞬間の最大推力を生かし、ヒットアンドウェイを最も得意としている。トーレが進化したバイオデジモン。必殺技は、最大推力で相手を竜巻の中に包囲し、超高速連打を放つ『ガオガトルネード』に、サイボーグアームから渾身の一撃を放つ『ウイニングナックル』。そして弾丸のような咆哮を相手に向かって放つ『ハウリングキャノン』だ。

「アレが人間をデジモンに進化させる事が出来る技術。この目で見ても信じられん」

マッハガオガモンへと進化したトーレの姿を見たテイルモンは信じられないと言う声で呟くが、ブラックは気にせずに一歩前に足を踏み出し自身の体を黒いデジコードに覆わせる。

「ハイパーダークエヴォリューション！！ブラックウォーグレイモン！！」

元の姿に戻ったブラックは上空に浮かぶトーレを睨みつけながら、両手に二つの赤いエネルギー球を生み出し、突如として自身の右側と左側に向かって投げ付ける。

「ムン！！」

『チッ！！』

ーーードゴオン！！

『えっ！？』

ブラックが投げ付けた赤いエネルギー球が向かう方向には何も無く地面だけが存在していたが、突如としてその場所から舌打ちが響き赤いエネルギー球が激突すると、何も無い空間から先ほどのトーレと同じ様にボディスーツを身に付けた銀色の髪に左目に眼帯を付けた少女ーナンバーズ５ーチンクと、茶色の髪を黄色のリボンで縛った女性ーナンバーズ１０ーディエチが姿を現しブラックを険しそうにブラックを睨み付ける。

「チンクにディエチ。それに姿を消す幻影から考えて、クアットロも居る様だな」

「相変わらず規格外な奴だ」

「そうだね。これでも気配を消す特訓は繰り返したのに、それに気が付くなんて、本当に規格外だよ」

ブラックの言葉にチンクとディエチは相変わらずのブラックの規格外に呆れた表情を浮かべて言葉を言うが、すぐにその表情を真剣に戻し、トーレと同様に蒼いデジコードを発生させ始める。

『バイオエヴォリューション！！』

チンクとディエチが蒼いデジコードの中で叫ぶと、チンクのデジコードの中からは背中に幾つものブレードを生やしたステゴザウルスを想わせる様なデジモンが姿を現し、ディエチの方からは戦車の様な胴体と両手がニードル様な物を三本生やし、体に幾つもの重火

器を装備し、二門のキャノン砲を装備したデジモンが姿を現した。

「バイオ・ステゴモン！！」

「バイオ・タンクドラモン！！！」

バイオ・ステゴモン、世代／アーマー体、成熟期、属性／データ種、フリー、種族／剣竜型、必殺技／シェルニードルレイン
ステゴザウルスの姿をした剣竜型デジモン。背中に生えている無数のブレードは敵からの攻撃を防ぎ、反撃を行える優れもので、好きな方向に動かすことができる。必殺技は、背中のブレードを上空に打ち上げ、敵の頭上に降らす『シェルニードルレイン』だ。チンクが進化したバイオデジモン。

バイオ・タンクドラモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／マシーン型、必殺技／ストライバーキャノン、ブラストガトリング
機械化旅団『Ｄ－ブリガード』の暴徒鎮圧・強襲駆逐を任務とするマシーン型デジモン。多数の「目標」を駆逐することに特化しており、圧倒的な火力を誇る。同時に３０体の『目標』をロックオンすることの出来るレーダーを装備しており、１体のタンクドラモンが補足した『目標』は他のタンクドラモンにもデータリンクされ、逃げ切ることは不可能といわれている。また、任務の生存率も非常に高く、今までの出撃で撃墜されたのは１体しかいないと言われている。必殺技は、２本のキャノン砲から半径３０ｋｍ内を焼き尽くす小型核弾頭を放つ『ストライバーキャノン』に、１秒間に３６００発の弾丸を撃ち出すガトリング砲『ブラストガトリング』だ。ディエチが進化したバイオデジモン。

「そんな！？三体も！？」

「しかもどれも此れも、完全体と同等の威圧感を感じる！」

更に現れたバイオデジモンの姿にヒカリとテイルモンは驚愕の声を出してトーレ達を見つめるが、ブラックは寧ろ嬉しそうに声を掛ける。

「一年前よりも実力が上がっているようだな。デジタルワールドで鍛えたのか？」

「その通りだ。貴様に敗北して以来、私達は訓練を積み重ねてきた！」

「今回は負けない！任務を完了する為にも！」

ブラックの言葉にチンクとディエチはそれぞれ答え、互いの空気が高まった瞬間に、ブラックはトーレの目の前に移動する。

ーーービュン！！

「ドラモンキラーーー！！！」

「インパルスブレード！！」

ーーーガキィィィン！！！！

ブラックのドラモンキラーをトーレは自身の両手足から生やしたブレードで受け止め、互いに空中で睨み合うと、トーレは右腕のブレードを消してブラックに超打撃力の拳を放つ。

「ウイングナックル！！！」

「ムン！！」

ーーーガアァァァァァン！！

トーレが右腕でウイングナックルを放つと同時に、ブラックも右腕にトーレに殴り掛かり互いの拳が激突し辺りに甲高い音が響くが、ブラックとトーレは笑みを浮かべ空中で高速でのぶつかり合いを始める。

「ＩＳ発動！！ライドインパルス！！！」

「ほう。スカリエッティの奴め。バイオデジモン化させながらも戦闘機人の特徴であるＩＳを失わせなかったとは、面白い！久々に楽しめそうだ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオン！！

ブラックとトーレは互いに笑みを浮かべながら空中で殴り合いを続け、徐々に上空へと昇って行った。

それを地上から見ていたチンクとディエチは疑問の表情を浮かべる。

「如何言う事だ？我らの目的がデジメンタルに在ると分かっているのに？何故ブラックはこの場から離れるのだ？」

「・・・・・分からないけど。アイツが居ない今がチャンスだよ。今の内にデジメンッ！！」

チンクとディエチはブラックの行動に疑問を思いながらも、目的

であるデジメンタルの回収の為に、太一とヒカリが住んでいる家に向かおうとするが、突如としてその顔は驚愕の表情に変わると、家の裏側から背に白と青の翼を生やした竜人ーパイルドラモンが姿を現し、両腰の砲門からエネルギー砲をチンクとディエチに向かって放つ。

「デスペラードブラスターーー！！！！！」

「ディエチ！避けろ！！」

「分かっている！！」

ーーーギュゥゥゥゥゥン！！

ーーードゴオオオオオン！！

自分達に向かって来るエネルギー砲に気が付いたチンクとディエチは慌ててその場から離れるが、パイルドラモンのエネルギー砲は地面へと直撃し、辺りに煙が満ち溢れた。

そして自分達の視覚が封じられた事にチンクは息を潜め、辺りを見回し警戒を行うが、突如としてチンクの足元の地面から金色の竜巻が飛び出し、チンクへと激突する。

「ブレイブトルネーーード！！！！」

ーーードゴオン！！

「なっ！？ガハッ！！」

金色の竜巻を胸に喰らったチンクは苦痛の声を上げ、体が僅かに

吹き飛ばされた。
だが、すぐに体勢を整え、体を地面へと着地させると、回転が止まり姿を現したウォーグレイモンの上空に向かって背に生えているブレードを放つ。

「喰らえ！！シェルニードルレイン！！」

ーーーズザザザザザザザザザザ！！！！

「クッ！！」

自身の頭上から落ちて来る数え切れないほどのブレードを、ウォーグレイモンは慌ててその場から離れる事でかわし、ブレードが落ちて来ないのを確認すると、パイルドラモンと銀色に輝く体と背に白い翼を付けた土偶の様なデジモン－シャッコウモンの方に向かい、チンク達に向かってドラモンキラーを構え始める。

シャッコウモン、世代／完全体、属性／フリー、種族／突然変異型、必殺技／ニギミタマ、アラミタマ
アンキロモンとエンジェモンがジョグレス進化した土偶の様な姿をした突然変異型デジモン。銀色に輝くボディに白い翼を持っており、一説には古代デジタルワールドに降臨した天使型デジモンではないかと言われている。首や胴が３６０。回転し、全方位に対して攻撃することができる。必殺技は、両目から最大１０万度の光線を放射する『アラミタマ』に、腰部から車輪のような物を発射する『ニギミタマ』だ。

「クッ！！如何して襲撃がばれていたのだ！？」

「誰も気が付いていなかった筈。監視も離れた所から行っていた筈

なのに何で？」

その様にチンクとチンクに近寄って来たディエチが疑問の声を上げていると、何時の間にか屋根の上に上っていた太一達が叫ぶ。

「ブラックウォーグレイモンのお蔭だ！この家を監視している奴が居るって教えられたんだ！」

「お前達！何でデジメンタルを狙うんだ！」

「そうよ！一体どんな目的が在るのよ！」

太一達がそれぞれチンク達に向かって叫ぶと、チンクとディエチは悔しそうな表情を浮かべて上空でトーレと戦っているブラックを見つめる。

「あの距離からの監視さえも気が付くとは！」

「本当に規格外。如何する？究極体に進化する？」

「・・・・・駄目だ。私達の究極進化にはリスクが伴う。此処は気が進まないがルーテシアお嬢様に任せよう。既に準備は出来ているからな」

「分かった。ＩＳ発動！ヘヴィバレル！ストライバーエネルギーキャノン！！」

ーーードゴオオオオオオン！！

チンクの言葉にディエチは頷くと、自身の体に付いている二本の

キャノンを上空でトーレと戦っているブラックに向け、エネルギー砲を撃ち放った。

「ブラックウォーグレイモン！！避けるんだ！」

「ムッ！！」

ウォーグレイモンの叫びにトーレと戦うのを中断したブラックは自身に迫り来るエネルギー砲に気が付くと、かわさずに右腕をエネルギー砲に向かって振り抜く。

「フン！！」

ーーーバシュウン！！

ブラックが右腕をエネルギー砲に向かって振り抜くと、エネルギー砲は弾き飛ばされ、空の彼方へと消えて行った。

それを見たトーレ達は悔しそうにブラックの姿を見つめるが、すぐに表情は笑みに変わる。

「フッ！流石だな、漆黒の竜人！だが、今の攻撃は貴様を倒すものではない！」

「ほう、では何の為だ？くだらない目的で貴様との戦いを邪魔したのなら、奴は殺してやるぞ」

トーレの言葉にブラックは戦いを邪魔された事で不機嫌そうな声を出しながら質問すると、突如としてブラックの背後から声が響いて来る。

「漆黒の竜人ーブラックウォーグレイモン」

「ムッ？」

聞こえて来た声にブラックは訝しげな表情を浮かべて背後を振り返って見ると、其処には足元に紫色の魔方陣を発生させながら浮かんでいる紫色の髪に黒いドレスを着た少女ールーテシア・アルピーノとコカブテリモンがいた。

それを地上から見ていた太一達とウォーグレイモン達は訝しげに、現れたルーテシアとコカブテリモンを見つめていた。

「あの子は一体？デジモンを連れているみたいだけど。あいつらの仲間なのか？」

「・・・・・分からないけど。何だろう？あの子、悲しそうな気がする」

「ヒカリちゃん？」

ヒカリの呟いた言葉に京は疑問の声を出し、他の者達も疑問の表情をヒカリに向けるが、ヒカリは答えずにブラックと相対しているルーテシアを見つめていた。

自分達の横で僅かにぶれる空気に気が付かずに。

そして地上で太一達がルーテシアを見つめていると、突如としてルーテシアは何処からとも無く紫色の縁取りが在るディーアークを取り出し、ブラックを睨み付ける。

「ブラックウォーグレイモン。私の顔に見覚えは無いの？」

「・・・・・・八年前のあの時に、クイントの奴の隣で戦っていた

女に似ているな。さしずめ娘と言った所だろう」

「そう、私は八年前に貴方に傷付けられ、今も覚める事のない眠りにつかされた、メガーヌ・アルピーノの娘。ルーテシア・アルピーノ」

「私はルーテシアのパートナー！コカブテリモンだ！！」

ブラックの言葉にルーテシアとコカブテリモンはそれぞれ自身の紹介を行うが、ルーテシアの言葉の中でおかしい所に気が付いたブラックは内心で考える。

（あの女が目覚めないだと？如何言う事だ？あの女は出来るだけ傷付けるなと言うスカリエッティの奴の言葉で、内臓は全く傷付けなかった筈だ。それにあの女が負った怪我はスカリエッティなら簡単に治せる代物だった筈。一体如何言う事だ？）

その様にブラックがルーテシアの言葉に疑問を覚えている間に、ルーテシアはディーアークを輝かせると自身の胸に当て体をデータ化させ始める。

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「マトリックスエヴォリューション」

「コカブテリモン進化！！」

「ッ！！！その進化は！？」

ルーテシアの行動を見ていたブラックは驚愕の表情を浮かべて、

ルーテシアとコカブテリモンを様子を見つめると、ルーテシアとコカブテリモンの体は一つに成り、巨大なデジコードがコカブテリモンの体を覆い始める。
その様子を地上から見ていた太一達も驚愕の表情を浮かべて巨大なデジコードを見つめていた。

「何だ！？一体何が起きているんだ！？」

「分かりません！！ですが、あのブラックウォーグレイモンの驚きから見ると、アレはかなりまずいものなのかも知れません！」

「正解ですわぁ～」

『ッ！！！』

突如として太一達の背後から声が響き、太一達が慌てて振り返って見ると、髪を両脇で編んでメガネを掛けた女性ーナンバーズ４ークアットロが笑みを浮かべて屋根の縁の方に立っていた。

「お前は何者だ！？」

「私はナンバーズ４のクアットロと言います。宜しくですわぁ～」

「テメエ！何時の間に其処に居たんだ！」

クアットロの姿を見た大輔は怒りの表情を浮かべて叫ぶが、クアットロは笑み浮かべたまま、右手に持っていた三つの機械を太一達に見せ、太一達は驚愕の表情を浮かべた。

「それは！大輔達のディーターミナル！！」

「何時の間に！？」

クアットロが掲げた機械―ディーターミナルを見た太一とヒカリは驚愕の叫びを上げるが、クアットロは気にせずに空中に浮かび上がり、トーレ達の方に向かいながら太一達に顔を向ける。

「早く逃げた方が良いですわよ。ルーテシアお嬢様の究極進化はとても危険ですからね。其処に居ると巻き込まれますわよぉ～」

「何だって！？」

「究極進化！？」

クアットロが告げた事実に太一達は驚愕の表情を浮かべて、空に浮かぶ蒼いデジコードに顔を向けて見ると、蒼いデジコードの中から両肩に虫の羽を付けたそれぞれ四枚生やし、腰にも同じ様な羽と触手を二本生やし、巨大な両手と二本に巨大な角を頭部に備えた昆虫型の禍々しい力を発するデジモンが姿を現す。その名も。

「タイラントカブテリモン！！！」

タイラントカブテリモン、世代／究極体、属性／ウィルス種、種族／昆虫型、必殺技／シャインオブビー、ビーサイクロン

すべての昆虫型デジモンを治める裏の世界の昆虫型デジモン。ヘラクルカブテリモンより偉大で、グランディスクワガーモンより残忍な“蟲の王”デジタルワールドのどこかの暗く、深い森の地中に存在する『アンダーフォレスト』に住み、夜にのみ活動する。あらゆる昆虫型デジモンを意のままに操ることができ、自身が戦うことはほとんどない。体の甲殻は高密度のクロンデジゾイドによって構成

されており、並みのデジモンでは傷をつけることは不可能。必殺技は、全身から防御不可能の灼熱の爆発を発する『シャインオブビー』に、配下の昆虫型デジモンを呼び寄せ、蟲の壁を作り出す『ビーサイクロン』だ。

「あのデジモンは！？」

「分からないけど、凄まじい程に禍々しい気配を放っている」

「あんなに禍々しい気配を放つデジモンは、見た事が無い」

地上からタイラントカブテリモンの姿を見ていた者達はそれぞれ、タイラントカブテリモンが放つ禍々しい力に恐怖に震える。

だが、タイラントカブテリモンの目の前に浮かんでいたブラックは嬉しそうな笑みを浮かべてタイラントカブテリモンを見つめていた。

「クククククッ、ハハハハハハハハハハハッ！！！」

「・・・・何が可笑しいのだ？貴様、私とルーテシアの絆を笑うのか？」

突如として笑い声を上げ始めたブラックの姿に、タイラントカブテリモンは怒りを覚えてブラックに低い声を出して問い掛けるが、ブラックは否定する。

「いや違う。寧ろ今の笑いは嬉しい方だ。この俺を憎み、其処までの領域に達するとは、余程俺が憎かったのだろうな」

「当然だ。私はずっと見ていた。生まれた時から悲しげな表情を浮

かべて自身の目覚めぬ母を見つめていた、ルーテシア！！そして私は誓ったのだ！ルーテシアを絶対に母と再会させ、笑みを浮かばせると！！そしてルーテシアから母親を奪った貴様を殺すとな！！」

ーーードゴオオン！！！！

「グオッ！！」

タイラントカブテリモンが叫ぶと共に振り抜いた豪腕を、ブラックはかわす事も出来ずに喰らい上空に向かって吹き飛ばされて行った。

それを確認したタイラントカブテリモンはすぐさま、両肩に生えている羽と両腰の羽を羽ばたかせて、ブラックの後を高速で追って行った。

それを見ていた太一は慌ててウォーグレイモンに向かって叫ぶ。

「不味い！ウォーグレイモン！！ブラックウォーグレイモンを援護するんだ！！」

「分かった！」

太一の言葉にウォーグレイモンは答えると、パイルドラモン達と共にブラックが吹き飛ばされて行った方向に向かおうとするが、その直前で事の成り行きを窺って行ったチンクが叫ぶ。

「させん！！ＩＳ発動！！ランブルデトネイターーーー！！！！」

ーーードドドドドドドドドドドドドゴォォォン

『ウワァァァァァァァァーーーーー！！！』

チンクが叫ぶと共に先ほどチンクが放ち地面に突き刺さって行った全てのブレードが爆発を起こし、チンク達に迫っていたウォーグレイモン達は爆発に巻き込まれ、辺りに爆煙が立ち込める。
その爆煙を隠れ蓑に、トーレはウォーグレイモンに向かって接近すると、自身の推進力を最大に発揮しながらウォーグレイモンを包囲し、超高速連打を放つ。

「貫った！ガオガトルネード！！！」

ーーードドドドドドドドドドドゴン！！！！！

「グアァァァァーーーー！！！」

「ウォーグレイモン！！」

トーレのガオガトルネードを受けたウォーグレイモンは苦痛の声を上げて吹き飛ばされ、それを見ていた太一が叫ぶと、パイルドラモンとシャッコウモンがトーレに向かって技を放とうとする。
だが、その様子を見てもトーレは余裕の笑み浮かべ、パイルドラモン達が疑問の表情を浮かべた瞬間。

「ＩＳ発動！ヘヴィバレル！ストライバーエネルギーキャノン！！」

ーーードゴオオオオオオオオオン！！

「しまっ！！ウワァァァァァーーーーー！！」

静かにチャンスを待っていたディエチが二門のキャノン砲からエネルギー砲を射ち込み、パイルドラモンとシャッコウモンはかわす

事も出来ずにエネルギー砲に飲み込まれ幼年期まで退化してしまった。

「クスッ！作戦は成功ですわぁ！退きますわよ！」

「待って！」

戦いの様子を見ていたクアットロが叫ぶと、トーレ達は頷き、それぞれ人間の姿に戻るとその場を去って行った。

それを見た太一達は逃げて行くクアットロ達の背に向かって叫ぶが、クアットロ達は止まらず太一達の前から姿を消し、太一達は悔しそうな表情を浮かべながらもアグモン達の救助に向かい出した。

空高く、雲の上まで吹き飛ばれたブラックは瞬時に体勢を整え、自分を追って来たタイラントカブテリモンを睨み付け、それを見たタイラントカブテリモンは悔しそうな表情を浮かべた。

「貴様！業と吹き飛ばされたな！あの者達を巻き込まない為に！」

「違うな。貴様との戦いを邪魔されたくなかったからだ。貴様のパートナーは俺を憎んでいる。だからそんな間違った進化をしてしまった。その責任を取る為だ！！」

「何だと！？貴様！私とルーテシアの進化を侮辱するのか！？」

ブラックの言葉を聞いたタイラントカブテリモンは怒りを顕にした。

自分とルーテシアが苦労した果てに辿り着いた究極体への進化。

その進化をブラックは間違っている宣言したのだから、怒りを顕にするのも当然だろう。
だが、ブラックにはタイラントカブテリモンへの進化を間違っていると宣言出来る根拠が在った。

（気が付いていないのか？タイラントカブテリモンは本来は自ら戦わず、あらゆる昆虫型デジモン達に戦わせるデジモン。奴のパートナーであるルーテシアは召喚師。そのタイラントカブテリモンの特性とルーテシアの召喚師としての能力が合わされば、正に無敵の軍団を手に入れられるのに、未だに他の昆虫型を呼ばないと言う事は、貴様は自身の特性が使えないと言っているのと同じなのだぞ？）

そう、ブラックがルーテシアとタイラントカブテリモンの進化が間違っている宣言出来るのはそれなのだ。
あらゆる場所から召喚出来る召喚師の能力と、タイラントカブテリモンの特性で在るあらゆる昆虫型デジモンを操れると言う能力が合わされば、ルインとユニゾンしてブラックウォーグレイモンXに成ったブラックはともかく、今の状態でのブラックでは敗れてしまうかもしれない。
その事はブラックを倒す為に力を求めたタイラントカブテリモンなら分かっている筈。それなのにその特性を使わないという事は、使わないではなく、使えないと言う事だ。

（俺への憎しみが個人として力を求めたばかりに、奴は自らの特性を使えなく成ってしまった。奴らの究極進化は、ティアナ達とは違い、絆ではなく俺への憎しみの果てに辿り着いたもの。そのせいで奴の進化は不完全なもの成ってしまったか）

人間と融合して進化する事が出来る究極進化は、デジモンと人間の絆が真に通い合った果てに辿り着く境地。

だが、ルーテシアが望んだのは絆ではなくブラックを倒せる力。
その為にタイラントカブテリモンは自身の本来の特性が使えないと言う不完全な究極進化に成ってしまっていたのだ。

「そう成った責任は、貴様のパートナーを傷つけた俺に在る。貴様の今の進化を打ち砕いてやる！！」

「望む所だ！ルーテシアと私の絆を侮辱した罪！その命で償え！！」

ブラックとタイラントカブテリモンは互いに叫び合うと、同時に右腕を突き出し、遥か上空での激闘を始めた。

強襲！！バイオ・ナンバーズ！！（後書き）

次回予告

空の上で激闘を繰り広げるブラックとタイラントカブテリモン。

悲しき叫びを上げ続ける少女の声が響く時、光のデジメンタルは光り輝き。

新たな力が与えられる。

次回、漆黒の竜人と少女、『新たなる進化！！』

悲しみを止める為に、再び彼らは立ち上がる。それが呼ぶのは新たなる旅立ち。

新たなる進化

遥か上空、雲の上で漆黒の竜人ーブラックと、そのブラックを憎み倒そうと挑みかかる巨大な昆虫型デジモンータイラントカブテリモンは互いに拳を放ち続け、衝撃波を辺りに撒き散らしていた。

「オォォォォォォォーーーーー！！！！！」

「ヌオォォォォォォォォォーーーーー！！！！」

ーーーードゴオオオオオオオオオン！！

互いの拳がぶつかり合った瞬間に、それまでの衝撃波を超える衝撃波が辺りに吹き荒れ、周りに在った雲は一瞬の内に消滅した。

しかし、ブラックとタイラントカブテリモンは周りの様子など気にせずに拳を繰り出し続ける。

「オォォォォォーーーー！！！！」

「グウッ！！負けられん！！」

ブラックの更なる猛攻にタイラントカブテリモンは一瞬呻くが、すぐに自身を奮い立たせ、クワガタの角を模ったものが付いた右腕でブラックに向かって突き出す。

ーーーガシッ！

「なっ！？」

タイラントカブテリモンが突き出して来た右腕をギリギリの所でかわし、ブラックは伸びている右腕を掴み取った。
その事にタイラントカブテリモンが驚愕している隙に、ブラックは右腕を掴みながら体を回転させ始めタイラントカブテリモンを振り回す。

「フッ、オォォォォォォォーーーーー！！！！！」

ーーーブンブンブン！！

「グァァァァァァーーーーー！！！！！」

振り回されたタイラントカブテリモンは悲鳴を上げるが、ブラックは構わずタイラントカブテリモンを回し続けていると、突如として掴んでいた右腕を放す。
それに寄ってタイラントカブテリモンが吹き飛んで行くと、ブラックはその方向に両手を突き出しエネルギーをその間に集中させ始めエネルギー弾を連続で放つ。

「ウォーブラスターー！！！」

「グッ！！」

ーーードドドドドドドドドドン！！

自身に向かって来るウォーブラスターに気が付いたタイラントカブテリモンは両手の豪腕を顔の前で交差させ、ウォーブラスターを防御した。
それによって発生した煙を振り払う様に両手を振るい、ブラックの姿を探すがブラックの姿は何処にも無かった。

「いないだと！？一体何処に！？」

（ッ！！タイラントカブテリモン！！上ッ！）

「何ッ！？」

自身の内に居るルーテシアの言葉にタイラントカブテリモンは驚愕の表情を浮かべながら自身の真上を見て見ると、其処には無数の剣を自身の周りに発生させているブラックの姿が在った。

「スティンガーブレイド・エクスキューションシフト」

ーーーズガガガガガガガガガガッ！！！

「ヌオォォォォォーーーー！！！！」

自身に迫り来る無数の剣に対して、タイラントカブテリモンは自身の両腕の豪腕を振るい続け、次々と剣を打ち砕いて行くが、ブラックは気にせずに剣を生み出し続けタイラントカブテリモンに放ち続けながら内心で考え始める。

（厄介だな。コイツの特性が使えないとは言え、コイツの体の甲殻は高密度のクロンデジゾイドで覆われている。昼に戦ったスレイヤードラモンとガイオウモンの時の様な戦法は効かんだろう。コイツを殺すのは梃子摺るだろうが可能だ。だが、如何にもコイツを一こいつ等を殺す気にはなれん）

目の前のタイラントカブテリモンはブラックのせいで、誤った進化をしてしまったデジモン。

それだけではなくそのデジモンと融合したのは、ブラックのせいで母親を失った少女。その事が在る為にブラックは、何時もなら平然と出来る行動が出来ずにいた。

（・・・・考えるのは性に合わんな。徹底的に打ちのめして、融合進化を解いた後。奴らからあの女に付いての話を詳しく聞くか！！）

そうブラックは方針を決めると、自身の周りに出現させていた無数の剣を消去し、タイラントカブテリモンに向かって飛び掛り、再び衝撃波を撒き散らす殴り合いを始めた。

ブラックが遥か上空でタイラントカブテリモンと戦っている頃。地上ではナンバーズ達に倒され気絶してしまったチビモン達を介抱している大輔達と、比較的にダメージが低く、何とか進化が解けずに居たウォーグレイモンに近寄っている太一、ヒカリ、テイルモンの姿が在った。

「大丈夫か！？ウォーグレイモン！！」

「何とか大丈夫だ。あいつ等も目的を優先していたから、深追いはしなかったみたいだ」

「ああ、だけど大輔達のデジメンタルが。クソッ！一体何が目的でデジメンタルを奪ったんだ！？」

太一はナンバーズ達がデジメンタルを奪った理由が分からず叫び、ウォーグレイモンも疑問の表情を浮かべるが、すぐにその表情は真

剣に変わり、上空を睨み付ける。

「・・・・ブラックウォーグレイモンが例の子と戦っているみたいだ」

「・・・・話は聞いていたけど、ブラックウォーグレイモンは本当にあの子の母親を傷付けたのか？」

「多分そうだよ。戦いが始まる前に、ブラックウォーグレイモンは人を傷付けたって言っていたから」

「私も確かに聞いた」

太一の疑問の声に、ヒカリとテイルモンはウォーグレイモンが見ている方向に目を向けながら答え、太一とウォーグレイモンは表情を険しくする。

太一達はブラックが敵に対して容赦が無い事を十分に分かっているが、それでも友で在るブラックが人を傷付けた事に多少のショックが在ったのだ。

その様に太一とウォーグレイモンが険しい表情を浮かべている間に、ヒカリは自身の感じる少女の思いを感じ始めていた。

（・・・・やっぱり聞こえる。あの子は心の中で泣いている。自分のパートナーが間違った進化をしている事に気が付いている！止めなくちゃ！）

ヒカリは内心でそう叫ぶと、ナンバーズ達に奪われずに済んでいた自身のディーターミナルを取り出しながら、テイルモンに顔を向ける。

「テイルモン！！」

「分かった」

ヒカリの叫びにテイルモンは頷き、それを確認したヒカリは自身のデジヴァイスーD－3を掲げながら叫ぶ。

「デジメンタルアップ！！」

「テイルモン！！アーマー進化！！」

ヒカリが叫ぶと共にディーターミナルから光が伸び、ヒカリのD－3に当たるとD－3の中かヒカリのデジメンタルが飛び出すと、テイルモンの体と共に光り輝き、光が収まると其処には、スィフンクスの様な顔を持った背中に翼を付けた四足歩行の獣型デジモンが存在していた。

「微笑みの光！！ネフェルティモン！！」

「行くよ！ネフェルティモン！！」

現れたネフェルティモンの背に乗りながらヒカリが叫ぶと、ネフェルティモンは頷き、上空へと昇って行った。

それを見た太一とウォーグレイモンも頷き、ウォーグレイモンは太一の体を掴むとネフェルティモンと同様に上空に昇って行く。

「ヒカリ。如何するんだ？戦いの邪魔をすれば、ブラックウォーグレイモンの怒りに触れる。奴は戦いに関しては誰よりも拘りが在る上に、戦っている敵はブラックウォーグレイモンに取って因縁が在る相手。幾ら私達、いやヒカリでもブラックウォーグレイモンの怒

りに触れる可能性が高いぞ」

「うん。分かっているよ。それでも私は戦いを止めないといけないの！あの子の悲しみが聞こえるから！」

「・・・・ヒカリ」

ネフェルティモンは呆然とした表情を浮かべたが、すぐにその表情は嬉しげに変わった。

（そうだ。ヒカリは他人を放っては置けない。あの時もブラックウォーグレイモンの悲しみにただ一人気が付いていた。成らば、私はヒカリの願いを叶える為に全力を尽くそう！！）

そうテイルモンは誓うと、背中の羽を更に羽ばたかせて自身のスピードを上げ、空に更に昇ろうとするが。

ーーードゴオオオオオン！！

「クッ！！」

「キャッ！！」

突如として辺りに衝撃波が吹き荒れた衝撃波をかわす事が出来ず、ネフェルティモンとヒカリは悲鳴を上げ、僅かに吹き飛ばされるが、その先に何時の間にか居たウォーグレイモンに受け止められる。

ーーーガシッ！！

「大丈夫か！ヒカリ！！」

「うん。ありがとう、兄さん、ウォーグレイモン」

ネフェルティモンを受け止めてくれたウォーグレイモンとその手に乗っている太一に礼を言うと、ヒカリは衝撃波が巻き起こっている場所に目を向けて見ると、全力で拳を放ち続けるブラックに、体を紫色に光らせながら同じ様に拳を繰り出し続けるタイラントカブテリモンの姿が在った。

「この衝撃波は、究極体二体が全力を出し続けている事で発生しているらしい」

「迂闊に近付けば、僕でも吹き飛ばされる」

「何てレベルでの戦いだ。十年前にだってこんなレベルの戦いは無かったぞ」

ネフェルティモンとウォーグレイモンの言葉に太一は目の前で起こっている戦いがどれほど規格外の物か分かり、信じられないと言う表情を浮かべた。

しかし、太一は知らないが、嘗てブラックがロイヤルナイツと四聖獣と戦った時は、目の前で起こっている戦い以上の戦いを繰り広げ、世界を揺るがす戦いを繰り広げて居た。

その様に戦いを見つめていた太一に向かってヒカリが叫ぶ。

「駄目！兄さん！戦いを止めないと！！このままだと、あのデジモン死んじゃう！！」

「何だって！？」

ヒカリの叫びに太一は驚愕の表情を浮かべ、戦いを見て見ると、確かに焦った表情を浮かべながら拳を繰り出すブラックに、体から軋む様な音を鳴り響かせているタイラントカブテリモンの姿が在った。

「貴様！！本気で命が要らないのか！？ブースト魔法の重ね掛けなど！！不完全な進化では耐えられんぞ！！」

「関係無い！！私もルーテシアも覚悟している！！貴様を倒せるならこの命を差し出すぐらいな！！」

「クッ！！」

ブラックは更に焦った表情を浮かべた。

ルーテシアとタイラントカブテリモンの進化は不完全な究極進化。その為に本来の特性は失われている上に、魔導師との融合で可能になる魔法の使用も負担が掛かるものに成ってしまっているのだ。

しかも、その様な状態で使用しているのが寄りにも寄って対象の能力を強化する補助魔法。つまり今のタイラントカブテリモンは唯でさえ負担が掛かる魔法を使用している上に、体を強化する魔法を自身に重ね掛けしている状態。言うなれば過剰な力を発動させる為にドーピングを連続で投与している状態だ。

その様な状態が続ければ、使っているデジモンは愚かそのデジモンと融合しているルーテシアも唯ではすまない上に、死んでしまう可能性も高い。だからこそブラックは焦っているのだ。

（チィッ！！嘗てのガブモンと同じぐらい詰まらん奴らが！！自分の命を差し出している時点で俺には勝てんと言うのに！！さっさと倒して進化を解きたいが、この状態の奴の力は俺とほぼ互角！！ガイアフォースでは殺してしまう確立が高すぎる！一体如何すれば！

？説得など俺を憎んでいるコイツは聞かんだろうしな！クソッ！！）

その様にブラックが悩みながらタイラントカブテリモンの猛攻を防いでいると、離れた所で戦いを見ていたヒカリがタイラントカブテリモンに向かって叫ぶ。

「止めて！！貴方には聞こえないの！？貴方のパートナーの悲しみの叫びが！？」

「聞こえているとも！！だからこそ！！こやつを倒してルーテシアの悲しみを止めるのだ！！」

ーーーギュゥゥゥゥン！！

「チィッ！！」

ヒカリの叫びにタイラントカブテリモンは叫び返すと共に、自身の両腰に備えられている触手をブラックに向かって拳を突き出しながら伸ばし、それを見たブラックは拳を繰り出すのを止めて、タイラントカブテリモンから離れる。

だが、タイラントカブテリモンは逃がさないと言う様に、ブラックを追い掛け、触手と豪腕の四つの武器を繰り出しブラックに反撃の隙を与えないと言う様に攻撃を放ち続ける。

「ヌオォォォォォォォーーーーー！！！！！」

「クッ！！」

タイラントカブテリモンの命を掛けた猛攻をブラックは全てかわして行くが、その顔は悲痛に歪んでいた。

（コイツを本気で止めるには殺すしかないのか！？スカリエッティめ！！俺を殺す為にコイツに何を吹き込んだ！？一体何を！？）

（もう少しだ！！コイツを殺せば！！スカリエッティはメガーヌさんを起こしてくれると約束した！！ルーテシアを母親に合わせる事が出来る！！その為ならばこの命が消えようと構わん！！）

そうタイラントカブテリモンはこのブラックとの戦いが始まる前に、ルーテシアに内緒でスカリエッティと密会し、ブラックを殺せたらルーテシアの母親で在る―メガーヌ・アルピーノを起こすと言う事を約束していた。

実を言えば、タイラントカブテリモンはメガーヌが目覚めない原因がブラックのせいではなく、スカリエッティに在る事を偶然にも知っていたのだ。

ある日。スカリエッティの研究所をうろついていた時に、スカリエッティとクアットロの会話を偶然聞き、メガーヌが目覚めない真の理由を知ってしまったのだ。もちろんその事を知ったタイラントカブテリモンは怒り狂い、スカリエッティとクアットロを殺そうとしたが、ルーテシアの体に仕組まれた在る事を知り、殺せなかった。その代わりブラックを倒せたらルーテシアの体に仕組まれたものを外す事とメガーヌを目覚めさせ自由にする事を約束させたのだ。

（もう少しなのだ！！ルーテシアに笑顔を与える事が出来るのは！！その為にもあと少しだけ持ってくれ！私の体よ！！）

「ヌオォォォォォォーーー！！！！」

「クッ！！」

更に繰り出し続けるタイラントカブテリモンの猛攻をブラックはギリギリの所でかわして行くが、徐々に猛攻をかわす事が出来なくなりブラックの体を護っているクロンデジゾイド製の鎧が徐々に削られ始めていた。
その戦いを見ていたヒカリは悲しみに満ちた表情を浮かべて叫ぶ。
「駄目！！貴方は聞こえていない！！本当にその子が悲しんでいるのは！！貴方の事なの！貴方が死んでしまうかも知れない事に悲しんでいるんだよ！！」
そうヒカリは叫ぶが、タイラントカブテリモンはブラックに猛攻を繰り出し続け、聞く耳を持たなかった。
「如何して？・・・・如何して分からないの？貴方もその子に取って大切なパートナーなのに」
「あのデジモンはもう自分の事など気にしてはいない。自分のパートナーの為にブラックウォーグレイモンを倒そうとしているんだ。その結果自分が死んだとしても」
「その事が分かっているブラックウォーグレイモンは止める為に戦っているけど、実力が互角だから止める事が出来ないんだ」
「クソッ！！このままだとあのデジモンだけじゃなく、融合しているあの子も危ないぞ！！」
ネフェルティモンとウォーグレイモンの言葉に太一は徐々に自身の甲殻が崩れ始めているタイラントカブテリモンを悲痛そうな表情を浮かべて見つめるが、タイラントカブテリモンは構わずに攻撃を繰り出し続けていた。

「何か手は無いのか！？」

「・・・・・・ネフェルティモン、お願い」

「分かった。しっかり掴まっていてくれ」

「ヒカリ？」

ヒカリとネフェルティモンの言葉に太一は疑問の声を上げるが、ヒカリとネフェルティモンは構わずにタイラントカブテリモンの後方に向かい、額に在る蛇の部分から光線を放つ。

「カースオブクイーン！！」

ーーーードン！！

「ヌッ！！」

ネフェルティモンのカースオブクイーンを背に受けたタイラントカブテリモンは険しい表情を浮かべながら後方を振り返り、ネフェルティモンとヒカリの姿を目撃する。

「邪魔をするな！！」

ーーーーブン！！

「クッ！！」

タイラントカブテリモンは叫ぶと共に、ブラックに向けて操って

いた触手の一本を後方に居るネフェルティモンに向かって振るい、ネフェルティモンはそれをギリギリの所でかわすが、連続で振るわれる触手をかわすので精一杯に成ってしまった。
その様を見たウォーグレイモンもヒカリとネフェルティモンの援護に向かおうとするが、その直前で巨大な紫色の魔法陣が目の前に出現した。

「なっ！？」

「一体なんだ！？」

突如として目の前に現れた巨大な魔法陣にウォーグレイモンと太一は驚愕の表情を浮かべた。
そして巨大な魔法陣が一際輝いたと想った瞬間に、タイラントカブテリモンとは別の蟲の王ー巨大な白い巨体の召喚獣ー白天王が姿を現す。

「グオォォォォォォーーーーー！！！！！」

「何だコイツは！？デジモンじゃない！？」

現れた白天王の姿に太一は驚愕の声を上げるが、白天王は構わずにウォーグレイモンに向かって拳を突き出し、上空で更なる激闘が始まった。
そして現れた白天王の姿に驚愕しているのは他にも居た。先ほどの魔法陣の主で在るルーテシアと融合しているタイラントカブテリモンだった。

「何故白天王が！？ルーテシア！！すぐに白天王を戻すのだ！！私と融合して更にブーストを掛けている状態で呼ぶのは負担が大き過

ぎる！！早く戻せ！！」

自身に掛かっている負担の事を分かっているタイラントカブテリモンは同時にルーテシアに掛かっている負担も分かっている為に、これ以上ルーテシアに負担を掛けない為に叫びが、返って来たのは苦痛に苦しみながらも否定の声だった。

（・・・・・駄目・・・・・絶対に止めない）

「何故だ！？このままでは私と共に死んでしまうぞ！！そうなればメガーヌさんと再会も出来なくなる！！ブラックウォーグレイモンは私が絶対に倒して見せる！！だから、白天王を戻すのだ！！」

（・・・・お母さんには会いたい・・・・ブラックウォーグレイモンも倒したい・・・・だけど・・・・・タイラントカブテリモンとも・・・・一緒に・・・・居たい）

「なっ！？」

ルーテシアの言葉にタイラントカブテリモンは驚愕した。

自分はルーテシアの願いである母親に会いたいと言う想いと、ブラックを倒すと言う目的の為に動いていた。その結果が自身の死であろうと構わないと想っていたのに、その想いに反する願いをルーテシアは告げて来たのだから驚愕するのも当然だろう。

（・・・・・ドクターは・・・・・私には心が無いって言っていた・・・・・だけど・・・・・タイラントカブテリモンに出会って・・・・・心が少しだけ分かった・・・・・だから私には・・・・お母さんも・・・・ゼストも・・・・・アギトも・・・・・タイラントカブテリモンも大切な人達）

「・・・・ルーテシア」

（・・・・・ゴメンね・・・・・私のせいで・・・・・間違った進化を・・・・行わせてしまった・・・だから・・・・・私もタイラントカブテリモンの為に頑張りたい）

「ウオォォォォォーーーーー！！！」

ルーテシアの言葉に答える様にタイラントカブテリモンは叫びながら自身の両手を交差させ、ブラックを睨み付ける。

「もはやこの体は限界だ！！！この一撃に全てを掛け！！貴様らを全て消滅させてくれる！！助からぬ成らば！責めてルーテシアの願いの為に！！」

「止めて！！そんな事を貴方のパートナーは望んでいない！！」

（止めて！！タイラントカブテリモン！！）

ヒカリとタイラントカブテリモンの内に居るルーテシアは叫びが、タイラントカブテリモンは構わずに自身の力を全て集め始め、徐々に自身の体を溶かすほどの高熱を発し始めた。

「技を放った後に、ルーテシアを私の体から転移させルーテシアだけは助ける！！」

「貴様、そうなれば貴様は技を放った直後に成長期に戻るぞ。その結果は分かっている筈だ」

「・・・・・分かっているとも・・・・・・・だが、私はそれでもルーテシアの願いを叶える！！既にこの体は如何なる方法を持っても治らないほどの負担が生じ、限界を迎え掛けている。成らば責めてルーテシアの願いの為に使うのだ！！」

「この愚か者が！！」

タイラントカブテリモンの宣言を聞いたブラックは怒りの叫びを上げて右腕のドラモンキラーを突き出す。

ーーードスッ！！

「ヌッ！？まさか貴様！？」

ドラモンキラーをタイラントカブテリモンの体に突き刺したブラックは驚愕の表情を浮かべて、タイラントカブテリモンを見つめた。

抜けないのだ。タイラントカブテリモンの体に突き刺したドラモンキラーがどうやっても抜く事が出来ない。

その理由は高熱に寄って溶けてしまったタイラントカブテリモンの甲殻に在った。溶けた甲殻に寄ってブラックのドラモンキラーはタイラントカブテリモンのクロンデジゾイド製の甲殻に巻き込まれ抜く事が出来なくなってしまったのだ。その上、タイラントカブテリモンはブラックのドラモンキラーの突き刺さっている箇所に力を込め、抜けない状態にしていた。

「これで、貴様は私の今からの技を絶対にかわせん！！ルーテシアの願いの為に私と共に消えて貰うぞ！！」

（止めて！ブラックウォーグレイモンはもう良いから！！だから技を放つのを止めて！！）

「・・・・・・・ルーテシア・・・・・・・ありがとう・・・・共に消えて貰うぞ！！！ブラックウォーグレイモン！！」

「駄目エェェェェェーーーーー！！！！！」

タイラントカブテリモンの叫びヒカリは涙を浮かべながら叫びが、タイラントカブテリモンは止まらずに更にエネルギーを集め始める。

それを見たヒカリとネフェルティモンは悲痛な表情を浮かべる。

「・・・・・力が欲しい・・・・・こんな悲しい戦いを止められるだけの力が・・・・欲しいよ」

涙を浮かべながらヒカリは自身のＤ－３を握り締め、涙がＤ－３に零れ落ちた瞬間に、Ｄ－３が光り輝く。

「エッ！？」

「何だ！？」

突如として光り輝いたＤ－３にヒカリとネフェルティモンは驚愕の声を上げるが、ヒカリは更に強まりヒカリとネフェルティモンを飲み込んだ。

「キャアッ！！」

光に飲み込まれたヒカリは悲鳴を上げ、顔の前に手をやり、光が収まるのを確認すると、手を退かし辺りを見回すと其処には、白い空間だけが存在していた。

「此処は何処なの？」

「ヒカリ大丈夫か？」

「うん、エッ？」

聞こえてきたネフェルティモンの声にヒカリは顔を向けて見ると、其処にはネフェルティモンは居らずアーマー進化が解けたテイルモンの姿が在った。

「進化が解けている！」

「エッ！本当だ！！何故解けているんだ！？」

ネフェルティモンへのアーマー進化が解けている事に気が付いたヒカリとテイルモンは驚愕の表情を浮かべ、辺りの空間を見回してると少し先の場所に光のデジメンタルが浮かんでいた。

「在った！」

「良かった。だが、何故アーマー進化が解けたのだ？」

光のデジメンタルを見つけたヒカリとテイルモンは安堵の息を付くが、何故急に進化が解けてしまったのかと疑問の表情を浮かべていると、突如として何処からとも無く声が響いて来る。

（選ばれし者の一人よ）

「誰ッ！？」

突如として聞こえて来た声にヒカリは驚愕の表情を浮かべて辺りを見回しながら質問するが、声の主は姿を見せずただ声だけが告げる。

（悲しき時が始まってしまいました。デジタルワールドの安定は崩れ、人間とデジモンの絆も崩れ、世界は破滅への道を歩み始めました）

「・・・・あなたは一体誰ですか？」

（私はイグドラシル。この世界のデジタルワールドとは違うデジタルワールドで神と呼ばれた存在です）

「イグドラシル！神！？」

声の主ーイグドラシルの言葉にヒカリは驚愕の声を上げるが、イグドラシルは構わずに話を続ける。

（今の私は深き眠りについている為に、動く事が出来ません。こうやって話せるのも貴女の持っていった光のデジメンタルの力で一時的に意識を覚醒させているのが精一杯なのです）

「如何して私に会いに来たのですか？」

（・・・・私は嘗て人間とデジモンの絆に破れました。そしてその本質を見極める為に眠りに付きました。ですが、再び人間の手によってデジモンと人間の絆は崩れただけではなく、全ての世界に恐るべき危機が迫る事態に成ってしまった）

「・・・・その事はブラックウォーグレイモンから聞いている」

（その危機はデジモンと人間が共に挑まねば防ぐ事が出来ないもの。それを防ぐ為に私の今渡せる力を貴女ともう一人の選ばれし者に託します）

「エッ？キャッ！！」

ヒカリがイグドラシルの言葉に疑問の声を上げた瞬間に、ヒカリの持っていたＤ－３が光り輝き、光が収まるとピンク色の縁取りが在るディーアークが在った。

「これは！？」

（そのデジヴァイスならば、紋章の力や四聖獣の力を借りなくても完全体は愚か、究極体にさえも進化出来るでしょう）

「私が究極体に！！！」

イグドラシルが告げた事実にテイルモンは驚愕の表情を浮かべ、ヒカリの手の中に在るディーアークを見つめ、互いに嬉しそうな笑みを浮かべる。

「あの！ありがとうございます！！」

（礼は良いです。それとこれだけは言って置きますが、私は味方とは言えません）

『エッ！？』

（私は本質を見極めたいだけなのです。その本質の結果によっては、

私も人間を滅ぼす側に回ります）

イグドラシルの目的はデジモンに取って人間が本当に必要なのかを調べる事。その事を知る為にヒカリに力を与えたに過ぎない。敵に成るのか味方に成るのかはこれからのヒカリ達の行動しだいなのだ。

（私も人間に疑問を持っている存在。その事を忘れない事ですね。では）

ーーービキビキビキビキッ！！

イグドラシルが別れの言葉を告げると共に白い空間に罅が入り始めた。

それを見たヒカリとテイルモンは互いに顔を見合わせ頷き合う。

「テイルモン！！イグドラシルに見せよう！人間とデジモンは共に歩める事を！！」

「ああ、その為にも先ずはあのデジモンを救おう！！」

「うん！！」

テイルモンの叫びにヒカリが頷いた瞬間に、ヒカリの握っていたディーアークが光り輝き、ヒカリはディーアークを自身の胸に当て体をデータ化させながら叫ぶ。

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「マトリクスエヴォリューション！！」

「テイルモン進化！！！」

ディーアークから音声が響くと共にヒカリは叫び、ヒカリとテイルモンの体は一つに成り、蒼いデジコードが出現すると蒼いデジコードの中から背に八枚の金色の翼を生やし、緑色の鎧を身に纏い、右手に金色の槍、左手に盾を備えた女性型天使デジモン。滅んだデジタルワールドを最後まで見守り死んでいった三大天使の一人が姿を現した。その名も。

「オファニモン！！！」

ーーーバキィィィィン！！

オファニモンが姿を現すと共に空間は完全に砕け散り、オファニモンが辺りを見まして見ると、其処には今まさに技を放とうとしているタイラントカブテリモンの姿が在った。

「ウオォォォォーーーシャイン！！！」

「セフィロートクリスタル！！」

ーーードドドドドドドン！！

「グアッ！！」

タイラントカブテリモンが技を放とうとした瞬間に、背後からオファニモンが十個のクリスタルを放ち、タイラントカブテリモンの動きを止めた。

それを見たブラックはオファニモンの姿に驚愕の表情を浮かべる

が、すぐに冷静に戻り、タイラントカブテリモンの力が僅かに緩むの確認すると、突き刺している方とは別のドラモンキラーの爪先に赤いエネルギー球を生み出しタイラントカブテリモンの顔に向かって投げ付ける。

「ヌン！！」

ーーードゴン！！

「グアッ！！」

エネルギー球を顔に受けたタイラントカブテリモンは苦痛の声を上げた。

それを確認したブラックはタイラントカブテリモンの内に居るルーテシアに向かって叫ぶ。

「少し痛むが我慢しろ！！ガイアッ！！」

「エデンズ！！」

ブラックは叫ぶと共に負の力を集中させ、巨大な赤いエネルギー球を生み出し、オファニモンも自身の持っていた金色の槍に力を集め始め、タイラントカブテリモンに向かってそれぞれ放つ。

「フォースッ！！！」

「ジャベリン！！！」

「グアァァァァァーーーーー！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオン！！！！

ブラックのガイアフォースとオファニモンのエデンズジャベリンを受けたタイラントカブテリモンは苦痛の叫びを上げながら爆発に飲み込まれ、蒼いデジコードに包まれるとルーテシアとコカブテリモンの姿に戻った。

それを確認したオファニモンは瞬時に、ルーテシアとコカブテリモンの体を掴み、コカブテリモンの体を癒し始める。

「コカブテリモン！」

「・・・大丈夫。私と融合したヒカリにはデジモンを回復させる事が出来る能力が在る。その能力を使ってダメージは回復させた。安静にしていれば死ぬ事は無い」

「・・・・・ありがとう」

ルーテシアはオファニモンの礼を告げると、自分と同様にオファニモンに抱き締められているコカブテリモンを抱き締め、太一とウォーグレイモンを襲わせていた白天王を呼び寄せる。

それに気が付いたオファニモンは自分達の前で立ち止まった白天王の手にルーテシアと気絶しているコカブテリモンを乗せた。

「・・・・・今日はコカブテリモンを助けられたからもう襲わない。だけど、絶対にブラックウォーグレイモンは私が倒す。バイバイ」

そうルーテシアはオファニモンに告げると、白天王の腕にコカブテリモンと共に乗りながら飛んで行った。

その様子を見ていたブラックは険しい表情を浮かべて、オファニモンに顔を向ける。

「・・・・何故貴様らが究極進化を行えた？その進化はこの世界では出来ない筈の進化の筈だ」

「その説明は後で行う。それに私もお前には聞きたい事が在る」

「フン！」

オファニモンの言葉にブラックは不機嫌そうな表情を浮かべ、近寄って来たウォーグレイモンと太一と共に地上へと向かい出した。

戦いの場からかなり離れた場所のビルの屋上では、デジメンタルを奪い取ったナンバーズ達が顔を見合わせ、険しい表情を浮かべていた。

「・・・・・外れですわ。確かにこれもデジメンタルと呼ばれている物ですけど、あの古文書に書かれていたデジメンタルとは別物ですわぁ」

「外れか」

大輔達のデジメンタルを調べていたクアットロの報告にトーレは険しい表情を浮かべ、チンクとディエチは残念そうな表情を浮かべた。

「しかし、あの者達が持っていた物が違うと言う事は、やはりデジタルワールドの何処かに隠されているということだろうか？」

「多分そうだね。私達が探しているデジメンタルは強力な物だし、多分、何処か誰も気付かない場所に隠されているんだろうね」

「と成れば、再びデジタルワールドに向かうべきだな。ルーテシアお嬢様がお戻り次第に向かうぞ！」

チンクとディエチの言葉を聞いていたトーレは今後の方針を叫び、その場に居る全員が頷くのだった。

翌朝、夜中の戦いを終えたブラックと太一達は昨日の様にリビングに集まり話を行っていた。

「それじゃあ昨日の女の子の母親を傷付けたのは事実だけど。目覚めない様な傷を負わせた覚えは無いのね？」

「少なくとも、その様な怪我を負わせた覚えは無いな。確かに傷は付けたが、内臓も傷付けてないし、渡した時もすぐに治療出来る怪我だと奴は言っていた」

「と言う事は、あの子はスカリエッティって言う奴に利用されている可能性が高いな。今度会った時にその事を話せば分かり合えるかも知れない」

ブラックの言葉に太一は険しい表情を浮かべながらスカリエッティとルーテシアの関係を呟き、それを聞いた大輔は怒りの叫びを上げる。

「クソッ！！デジメンタルを盗んだだけじゃなくて、あんな幼い子

供まで利用しやがって！絶対に赦せないぜ、スカリエッティって言う奴は！」

「全くだ！！」

大輔の叫びにチビモンも同意を示し、ブラックを除いた全員が怒りの表情を浮かべると、光子郎の開いていたパソコンにメールが届く。

ーーーピコン！！

「うん？ゲンナイさんからメールだ・・・・『至急デジタルワールドにブラックウォーグレイモンと一緒に来てくれ。チンロンモンが会いたがっている』チンロンモンが！！！」

『ッ！！！！』

ゲンナイからのメールを読んだ光子郎の叫びに、その場に居る全員が驚愕に目を見開きながら、パソコンに書かれたゲンナイからのメールを見つめ続けるのだった。

新たなる進化（後書き）

次回予告

チンロンモンの呼び出しを受けたブラック達はチンロンモンの下に向かう。

其処で知らさせる禁断のデジモンとデジメンタル。

それを防ぐ為にブラック達は動こうとする。

だが、その直前で遂に奴らが現れた。

次回、漆黒の竜人と少女、『最悪の兵器、ギズモン！！』

愚か者達は再び繰り返す。それが呼ぶのは更なる悲劇。

最悪の兵器、ギズモン！！

ゲンナイからのメールを貰ったブラックと他の選ばれし者達に事情を説明を行う為に人間界に残った光子郎を除いたヒカリ達はメールの指定した場所ー多くの山々に囲まれた渓谷を登っていた。

「それじゃあ、そのイグドラシルって言う奴のお蔭でヒカリのデジヴァイスは変わったんだな？」

「うん。そうだよ兄さん」

山の中に在った道を歩きながらヒカリの持っているディーアークに付いて質問して来た太一の言葉にヒカリが答え、大輔がヒカリの持っているディーアークを見つめる。

「すげえなヒカリちゃん！そのデジヴァイスが在れば、何時でも究極体に進化出来るのか！」

「これで此方の究極体はインペリアルドラモンにウォーグレイモン、ブラックウォーグレイモン、そしてヒカリさんとテイルモンのオファニモンの四体か。これなら大抵の敵には負けないな」

「でもさ、それなら私達のデジヴァイスも変えてくれれば、私達も究極体に進化出来るかもしれないのにね」

「全くです。神を名乗るのなら京さん達のデジヴァイスも変えてくれれば良いのに」

賢の言葉に京とホークモンはそれぞれイグドラシルに対して不満

を言うが、ヒカリは顔を俯けて呟く。

「・・・・・イグドラシルは自分は味方じゃないって言ってたよ」

「私も聞いた。イグドラシルの目的はデジモンと人間の絆の本質を見る事だと。今は敵ではないが、これからの行動に寄っては最悪の敵に成るかも知れない」

「・・・・・そうか。なら、気を付けて行動しないとな」

ヒカリとテイルモンの言葉に太一は顔を険しくしながら呟き、他の者達も表情を険しくする中、黙々と先に進んでいた人間体のブラックが声を掛けて来る。

「それに、ヒカリの持っているディーアークはそんなに良い物ではないぞ」

「あん？如何言う事だよ？」

ブラックの呟いた言葉に大輔は疑問の声を上げ、他の者達も疑問を覚えながらブラックの背を見つめる。

太一のデジヴァイスや大輔達のＤ－３は一定以上の条件が無ければ完全体に進化出来ない上に、究極体への進化も紋章や四聖獣の力を借りなければ進化出来ないのだから、ヒカリの持っているディーアークの方が強力な物には違いない。

しかし、ヒカリの持っているディーアークにも進化の条件が在った。それは。

「ディーアークはデジモンとパートナーの絆が一定に満ちない限り、進化する事が出来ない。それこそ絆が無ければ成長期に進化出来な

いほどにな。現に俺の知っているディーアークの保持者の中には、三年経っても第二段階の幼年期までしか進化出来なかった者が居る」

「なっ！？マジかよ！？」

「三年も時間が在ったのに幼年期までしか進化させる事が出来なかっただって！？信じられない」

ブラックの告げた事実に大輔と賢は信じられないと言う表情を浮かべて叫び、他の者達も信じられないと言うように顔を見合わせる。

ブラックが言ったのは勿論フェイトの事で在る。フェイトは自身のパートナーで在るブイモンを危険な目に合わせたくなかったので、仕事の時はアルフに預けたりしてしまっていた。その為にフェイトとブイモンの絆は成長する事が無く、なのはが脅しを行わなければ今でも幼年期だった確率が高い。つまり、ディーアークを持っている人間は自身のパートナーデジモンとの絆が無ければデジモンを進化させる事は不可能なのだ。

「ヒカリとテイルモンが究極体に進化出来たのは二人の絆がそれだけ強かったお蔭だ。もし絆が無ければ進化する事は出来なかっただろう」

「そうか。ヒカリちゃんの持っているデジヴァイス―いやディーアークはデジモンとの絆を何よりも大切にしなければいけないものなのか」

「・・・・・ブラックウォーグレイモンの居た世界に相応しいデジヴァイスですね」

ブラックの説明にタケルと伊織はそれぞれ言葉を呟き、それぞれ

が考え込む様な表情を浮かべて山を登って行った。
そして山の頂に到着するとチンロンモンの姿は無いかと辺りを見回していたが、チンロンモンの姿は無くヒカリ達が疑問の表情を浮かべ始めた瞬間に、ブラックが近くに在った一つの岩を睨み付ける。

「・・・・・出て来い。隠れているのは分かっているぞ」

「・・・フッ、流石は三大天使達の残した希望の一つだ。気配は完全に消したつもりだったのだが」

ブラックの言葉に答える様に岩から声が響き、ヒカリ達も警戒して岩を睨み付けると、岩陰から背中に二枚の翼を生やした虎型のデジモンが飛び出し、岩に登るとブラック達の顔を見渡す。

ミヒラモン、世代／完全体、属性／データ種、種族／聖獣型、必殺技／ヴィモーハナ
『デーヴァ』と呼ばれる十二神将のデジモンの1体、虎に似た姿の完全体デジモン。四聖獣デジモンであるチンロンモンの配下で、地の利を読んだ戦術が得意な策略家である。地を駆ければ風より速く、二枚の翼で天を駆ければ音より速い凄まじい行動力で敵を追い詰める。戦闘においては鋭い牙と爪で敵を切り裂き、尻尾を八角棒の三節棍に変化させた宝棒（パオバン）を使いこなす。必殺技は、地面に宝棒（パオバン）を叩きつけて衝撃波を放つ『ヴィモーハナ』だ。

「私の名前はミヒラモン。チンロンモン様の配下のデジモンだ。お前達を案内する様に仰せ付かっている。付いて来るが良い」

ミヒラモンはブラック達に向かって背を向けながら歩き出し、ブラック達も顔を見合わせると頷き合いミヒラモンの後を追い始めた。
そのまま在る程度進むと崖が見え始めるが、ミヒラモンは構わず

歩き続け、大輔がその背に向かって叫ぶ。

「オイッ！！」

ーーーシュウン！！

『ッ！！！』

大輔がミヒラモンの背に向かって叫んだ瞬間に、ミヒラモンの体は突如として消失し、ブラックを除いた全員が驚愕の表情を浮かべた。

その様子にブラックは構わず足を進め、ミヒラモンと同様に消失する。

ーーーシュウン！！

「・・・・見えないけど、道が在るみたいだ」

「うん。多分この先にチンロンモンが居るんだよ」

ブラックの消失を見た賢は考える様な表情を浮かべて呟くと、タケルも同意を示し、全員がミヒラモンとブラックと同様に足を崖に進めその姿を消失させる。

そしてその先にはやはり道が在り、民族衣装の様な服を着た二十台位の男性が立っていた。

「久しぶりだな。選ばれし者達」

『ゲンナイさんッ！！』

男性ーゲンナイの姿を見たヒカリ達は喜びの表情を浮かべてゲンナイの駆け寄った。
ゲンナイは十年前にヒカリ達がデジタルワールドに来た時に、色々と助けてくれた人物なのだ。
「さあ、チンロンモンがこの先で待っている。ブラックウォーグレイモンは先に行ったから、私達も急ごう」
『ハイッ！！』
ゲンナイの言葉にヒカリ達は元気良く答え、ゲンナイが案内する道を進み続けると、再び崖の様な場所が現れるが、其処には先ほどと違い崖の前にはブラックが立ち、空の上には四つの瞳を持ち長い体を半透明にさせた巨大な龍ーチンロンモンの姿が在った。
チンロンモン、世代／究極体、属性／データ種、種族／聖竜型、必殺技／蒼雷（そうらい）
デジタルワールドを守護するスーツェーモン、バイフーモンと同じ四聖獣デジモンの1匹であり、東方を守護し強烈な雷撃を放つ。他の四聖獣デジモンと同じく伝説の存在であり、その強さは神にも匹敵すると言われている。またチンロンモンはホーリードラモン、ゴッドドラモン、メギドラモンと共に四大龍デジモンの1匹としても数えられており、もっとも神格化された存在である。しかし、神のような存在とはいえ、簡単に人間や弱者に協力をするようなものではなく、余程の事が無い限り味方にする事は無い。必殺技は、雷雲を呼び寄せ、神の怒りを思わせるような激しい雷を落とす『蒼雷（そうらい）』だ。
「久しぶりだな。お前の事は三大天使達から聞いていたが、フッ、随分と変わったものだ」

「御託は良い。それにこの姿の事を言うのなら、幾ら貴様でも赦さんぞ」

「ハハハハハハハッ！！私にその様な暴言が吐いたのは、今も昔も貴様位なものだ。バイフーモンも貴様と共に戦った少女の事をいたく気に入っていたぞ」

ブラックの言葉にチンロンモンは面白そうな笑い声を上げて答えた。

その様子には戦い合うと言う雰囲気は全く無く、心底懐かしき者と出会えた事を互いに喜び合っている様な雰囲気だった。

それを見たヒカリ達はチンロンモンが敵ではない事に気が付き、嬉しそうな笑みを浮かべながらブラックの背後に集まり、チンロンモンを見つめると、チンロンモンは真剣な表情を浮かべた。

「良くぞ来た。選ばれし者達よ・・・・・・・既にブラックウォーグレイモンから聞いているだろう。世界の現状を？」

そう質問するチンロンモンに対してヒカリ達は全員が暗い表情を浮かべて頷き、チンロンモンは悲しみの表情を浮かべる。

「彼の組織のせいで、デジモンと人間の絆を破壊されただけではなく、人間とデジモンを最も愛していた三大天使の見守っていたデジタルワールドまで崩壊してしまった。その事により私とシェンウーモンを除いた四聖獣は全て人間を滅ぼす側に回り、ロイヤルナイツにしてもオメガモン、アルフォースブイドラモン、スレイプモン、そしてアルファモンを除いた全員が人間を滅ぼす事を決めている」

「そんな！？」

チンロンモンが告げた事実にヒカリは悲しみの叫びを上げ、太一達も悲しみ始めた。
全員ではないとは言え、多くの最強の力を持つ者達が人間を滅ぼす事を決めたと成れば、もはやデジモンと人間の絆を修復出来る可能性は無いに近いだろう。

「私達も全力で説得を行ったが、スーツェーモン達の怒りは深く、説得する事が出来なかった。今の所はそれぞれが見守っているデジタルワールドに起きた異変を排除する事に終始しているが、それが収まれば再び動くであろう」

「どれ位だ。奴らが再び動く時間は？」

「・・・・・最低でも三ヶ月、長くて半年後には動くであろう」

「それだけしか時間が無いのか！？」

チンロンモンが告げた期間に太一は驚愕に満ちた声を上げ、ヒカリ達も驚愕に目を見開いた。
最低でも三ヵ月後には再び管理世界にスーツェーモン達が現れ、再び地獄と呼べる世界を作り出す。そうなれば今度こそ管理局は消滅し、管理世界の人間達も殆ど死に絶えるだろう。
そして恐らくその時にルーチェモン達は動き、世界はルーチェモン達の手に堕ちてしまう。

「ブラックウォーグレイモン。お前やお前の仲間達があの時に動いてくれた事は感謝している。もしあの時にお前達が動いてくれ無ければ、アルファモンが到着する前に、更に多くの人々が死んでいただろう」

「俺は三大天使への借りを返す為に動いたに過ぎん。それよりも俺達を何故呼んだ？」

「・・・・・・七大魔王と並ぶ禁断のデジモン一究極体さえも越えた超究極体のデジタマが何者かに盗まれたのだ」

『ッ！！』

チンロンモンが告げた事実にヒカリ達は再び目を見開いた。
その様子が理解できるのか、チンロンモンは真剣な表情をしながら超究極体について説明を始める。

「超究極体は世界の生態系のバランスさえも崩してしまう。まさに禁断のデジモン。超究極体が一度動けば、私達でさえも倒せる可能性は限りなく低い。何故ならば超究極体は他のデジモンのエネルギーを食する事で更なる成長を行うデジモンなのだ」

「デジモンがデジモンを食べるだって！？」

「そんなデジモンが存在していたの！？」

太一と京は叫びを上げ、他の者達も信じられないと言うように顔を見合わせ、同じデジモンで在るアグモン達は恐怖に震えた。
デジモンがデジモンを食する事で成長する。それだけでも恐ろしい事実なのに、その存在は超究極体。並大抵の力では勝つ事は不可能な上に究極体でも勝てる可能性はかなり低いだろう。
その事を黙って聞いていたブラックは一つ疑問に思った事をチンロンモンに質問して見る。

「それほどの存在を如何やったら制御出来る？盗んだ相手も制御出来る存在では無いと分かっている筈だ」

「そうか。確かにそれほど存在だと分かって盗んだとしたら、制御出来る方法も分かっている筈だ。制御出来ない者を盗む筈はない」

「その通りだ。超究極体を制御出来る方法が一つだけ在る。それこそが『思い』のデジメンタル」

『ッ！！』

その場に居た全員が驚愕の表情を浮かべ、チンロンモンを見つめた。

デジメンタルは大輔達の持っていた物以外には、奇跡と優しさ、そして運命しか無いと想っていたのに、まさか他にもデジメンタルが存在していたとは想っても見なかったのだ。

「勇気、友情、愛情、純真、知識、誠実、希望、光、奇跡。この九つのデジメンタル以外に存在する『思い』のデジメンタル。このデジメンタルは他のデジメンタルとは役割が全く違い、究極体同士の戦いで発生したエネルギーを蓄積し、超究極体にデジモンを進化させる事が出来るのだ。そしてこのデジメンタルにはもう一つの力が在る。デジモンを意のままに進化させる事が出来ると言う能力が存在しているのだ」

「デジモンを意のままに！？そうか、それが在れば制御出来ない超究極体も制御出来るって事か！」

「その通りだ。だが、このデジメンタルは悪用されない為にこの世界に在る七大魔王のデジタマと共に、と在る場所へと封印してある」

デジモンを意のままに進化出来ると成れば、それは強力な武器にも成るが、同時に最悪の兵器にも成ってしまう恐るべきデジメンタル。その力を悪用させない為にこの世界のデジタルワールドの安定を望む者ーホメオスタシスは『思い』のデジメンタルだけは大輔達に渡さず封印して置いたのだ。

「超究極体が封印されて居た遺跡には、『思い』のデジメンタルの記述も書かれていた。超究極体のデジタマを盗んだ奴らは必ず奪い取ろうとする筈だ」

「・・・・・そういう事か。超究極体のデジタマを盗んだのはナンバーズどもだ」

「アッ!!そうか、あいつ等が俺達のデジメンタルを狙ったのはその『思い』のデジメンタルだと思ったからなんだな!!」

「奴らは『思い』のデジメンタルが封印されている場所を知らない。だから、本宮達のデジメンタルを勘違いしたと言う事だろうな」

大輔の叫びに賢が自身の推測を話し、その場に居るチンロンモンを除いた全員がトーレ達がデジメンタルを盗んだ理由に気が付いた。

そうトーレ達は大輔達の持っているデジメンタルの中に、自分達が探している『思い』のデジメンタルが在ると想って襲ったのだ。だが、結局大輔達の所持しているデジメンタルの中には捜し求めていた『思い』のデジメンタルは存在していなかったのだから、無駄骨だったとしか言えないだろう。

その事に気が付いたヒカリ達は笑いそうな表情を浮かべるが、ブラックだけは真剣な表情を浮かべてチンロンモンに顔を向ける。

「それでその事を教えたのだから、そのデジメンタルが封印されている場所を知っているのだろう」

「うむ、その通りだ。封印されている場所は此処から遠く離れた暗黒の海とデジタルワールドの境に封印されている。その場所はシェンウーモンが発生させた幻惑の霧に覆われているので、誰も近付く事は出来ない筈なのだが・・・・・」

「如何したんですか？」

言葉が途中で途切れたチンロンモンに伊織が疑問の表情を浮かべて質問すると、チンロンモンは険しい表情を浮かべて答える。

「シェンウーモンとの連絡が途絶えたのだ。あの場所は唯でさえ近づける者が少ないと言うのに、シェウーモンの配下の十二神将の者達とも連絡が取れんのだ」

「・・・・・ルーチェモンが動いたか」

「恐らくはそうだろう。シェンウーモンがやられたとは思えんが、奴が七大魔王の誰かを動かした可能性が高い」

シェンウーモンは四聖獣の中で最も古参のデジモン。
温和な性格をしているが、それでも実力は並みの究極体が掛かっても勝てないほどに高い。
そのデジモンがそこ等辺のデジモンに負ける筈も無く、負けるとしたら七大魔王クラスのデジモン位だろう。そうなれば犯人はルーチェモンしか考えられない。

「場所を教えろ。俺が直接向かって調べて来てやる」

「頼む。それが終わり次第、お前を元の居た場所に戻す協力を行う事を約束しよう」

「元よりその積もりだ」

そうブラックは告げると、チンロンモンはシェンウーモンが居る場所を教え、ブラックはチンロンモンに背を向ける。

「チンロンモン。俺は三大天使への借りを必ず返す。それだけ覚えておけ」

「また会おう。三大天使の残せし希望の一つで在り、わが友、ブラックウォーグレイモンよ」

チンロンモンの言葉を背に受けながらブラックは歩き出し、ヒカリ達は慌ててその後を追って行った。

「・・・・人間とデジモンの絆。それが無ければ此度の戦いに勝つ事は出来ぬだろう。私も何とかスーツェーモン達の心を変えねば」

そうチンロンモンは呟くと、空高くへと昇って行った。

チンロンモンと会った崖を抜けたブラックは自身の体から黒いデジコードを発生させ体を覆って行く。

「ハイパーダークエヴォリューション！！ブラックウォーグレイモン！！」

黒いデジコードの中で元の姿に戻ったブラックは、黒いデジコードを弾き飛ばすと、チンロンモンから教えて貰った場所に向かって飛び立とうとするが、背後からヒカリが叫ぶ。

「待って！一人で行く気なの！？」

「・・・・・・貴様らに人間を殺す覚悟は在るのか？」

『ッ！！』

ブラックの言葉にヒカリ達は驚愕の表情を浮かべた。

人を、人間を殺す。そう今ブラックは言ったのだ。しかし、ブラックからすれば当然の事だった。

チンロンモンとの話では出なかったが、恐らくシェンウーモンが居る場所には管理局の人間達も現れる。そうなれば、否応無く人間とも戦わねば成らなくなる。

その時に果たしてヒカリ達が人間を攻撃出来るのか。答えは無理だとブラックには断言出来た。

（こいつ等は優し過ぎる。十年前にデジモンを殺す事にすら、思い悩んだこいつ等では人間との戦いなど不可能だ）

この先の戦いは人間を憎んでいるデジモン達やルーチェモン達一七大魔王との戦いだけではない。デジモンを憎んでいる人間との戦いも必ず始まる。

その時に人間を傷付けられないと成れば、戦いに出ても死ぬだけだ。相手は平然と攻撃して来るのだから。

「この先の戦いはデジモンとの戦いだけではない。管理局、管理世

界のデジモンを憎む連中とも戦わねば成らなくなる。その時にお前達は戦えるのか？」

「そ、それは・・・・・」

ヒカリはブラックの質問に答える事が出来ず、他の者達も顔を俯かせ、アグモン達も顔を俯かせた。

デジモンならば死んだ後も、デジタマに返る事が分かっているので、何とか倒せた。しかし、人間はデジモンとは違って死んだら其処まで。その先には何も無い。

その事を知っているヒカリ達は人間と戦う事には賛成する事は出来なかった。

「説得など奴らには不可能だ。奴らは既にデジモンを憎み、滅ぼそうと考えている。しかも、自分達には理が在ると想って行動している。そんな連中に説得などと言う行動をしても無駄だ。ましてやお前達はデジモンと共に歩む者達。そんな連中の言葉など奴らは聞かん。嘗て、奴らはデジモンと共に居ただけと言う理由だけで貴様らよりも幼い子供を殺そうとした事が在った」

そう、ブラックがヒカリ達に告げるが事実で在る。

現に三大天使の世界に居たと言う理由だけで、まだ幼いヴィヴィオを管理局員は殺そうとした。その事から考えられるに、ヒカリ達も攻撃される可能性は高い。例えウォーグレイモンやオファニモン、そしてインペリアルドラモンと言う究極体達が居ても、攻撃出来なければただの的でしかないのだ。

「此処で別れだ。お前達と会えて嬉しかったぞ」

「待って！！」

ヒカリはブラックの背に向かって叫ぶが、ブラックは気にせずにヒカリ達の前から飛び去ろうとする。
しかし、その瞬間に辺りに地響きの様な音が鳴り響く。

ーーーゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！！

「ムッ！」

「何だよこの音！？」

「分からないけど！何かにしがみ付くんだ！！」

突如として鳴り響き始めた地響きに大輔は慌てた声を上げると、タケルが全員に何かにしがみ付く様に叫び、ブラックを除いた全員が近くに在る木や岩にしがみ付く。
空に浮かんでいたブラックが地響きの原因を探そうと辺りを見回し始めた瞬間に、デジタルワールドの空に巨大な穴ーゲートが出現した。

ーーーブゥゥゥゥゥゥゥン！！

「ッ！！アレは！？まさか！？」

空に開いたゲートを見たブラックは自分がこの世界に戻って来た時のゲートを思い出し、驚愕の表情を浮かべた。
そう今、デジタルワールドの空に開いたゲートは見紛う事なき、ブラックが居た地球に開いたゲートと同じ物だった。そしてそのゲートから現れたのは巨大な艦艇だった。

「何だあの巨大な船は！？」

「あんなの見た事無いわよ！？」

ゲートから現れた艦艇を見た太一と京は驚愕の叫びを上げ、他の者達も見た事も無い艦艇に驚愕の表情を浮かべるが、唯一人その艦艇の正体を知っているブラックは険しい表情を浮かべて艦艇を睨み付ける。

「・・・・アレは、管理局の艦艇だ！！」

『ッ！！！』

その場に居る全員が驚愕の表情を浮かべて空に浮かぶ管理局の艦艇を見つめた。

管理局の艦艇が別世界のデジタルワールドに現れた。それが意味するのは一つしかない。

遂に、遠く離れた管理世界と他のデジタルワールドが繋がってしまったのだ。そしてそれが告げるのは。

ーーーピカァン！！

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！

本格的な戦争の始まりだった。

「なっ！？あの艦艇なんて事をしやがるんだ！！！」

艦艇に備え付けられている砲門から放たれた閃光に寄って、消滅してしまった森を見つめて大輔が叫び、他の者達も信じられないと

言う表情を浮かべて消滅してしまった森の後を見つめた。
消滅した森にも恐らくデジモン達が居た筈だ。それなのに艦艇はまるで関係無いと言う様に平然と森に砲撃を撃ち込み、森を消滅させたのだ。
それを見たブラックは怒りの表情を艦艇に向けると、消滅された森の近くに居たデジモン達も怒りの表情を艦艇に向け、それぞれ艦艇に向かって飛び立ち始めた。

「・・・・・あの愚か者どもが！あの悲劇をこの世界で繰り返す気か！？絶対にさせんぞ！！」

ーーーヒュン！！

「ブラックウォーグレイモンッ！！！」

艦艇に向かって猛スピードで向かうブラックの背に向かってヒカリが叫ぶが、ブラックは止まらずに艦艇に向かい続けた。

艦艇の内部ーブリッジでは広大に広がるデジタルワールドとモニターに映っているデジモン達に憎しみの視線を放つ、局員達が存在していた。

「諸君、この世界が第九管理世界を崩壊させ、今、多くの管理世界に恐怖を与えている生物達の世界だ。我々はあの悲劇を繰り返さない為に、上層部からの秘密任務に寄ってこの世界にやって来た。他の艦も既に他の場所に現れている筈だ。我々は上層部が示したポイントに向かいながら、この世界の生物達を出来るだけ排除する！！それこそが管理世界の人々の平和に繋がるのだ！総員！戦闘準備！

！」

『了解！！』

壮年男性ー提督の宣言にブリッジのメンバーはそれぞれ作業を始める中、提督の隣に立っていた女性の補佐官が心配げな表情を浮かべて提督に声を掛ける。

「提督。本当にアレを使う気ですか？」

「・・・・・上層部はアレがあの生物達に最も有効な兵器だと言っていた」

「しかし！アレは得体が知れなさ過ぎます！武装局員達と共に向かわせるは危険なのでは無いのですか！？」

「その事は私も分かっている。しかし、アレを投入すれば武装局員の犠牲が減るだろう。成らば、使うまでだ！！部下達の為ならば例え得体がしれなくても使う！！多くの管理世界の人々の為にも！！」

そう提督は宣言すると、矢継ぎ早に命令を飛ばし始めるが、その後ろでは補佐官が不安な表情を浮かべ続けるのだった。

上空に浮かぶ艦艇に向かって、消滅された森の近くに居たデジモン達ー巨大な羽を背中に生やした手足の無いデジモンーエアドラモンの群れに、体を青色に染めた竜その者と呼べるデジモンーコアドラモン（青）や、顔をバイザーで覆い背中に大きな翼を生やした馬型デジモンーユニモンの群れ、その数凡そ三十前後が飛び立った。

エアドラモン、世代／成熟期、属性／ワクチン種、種族／幻獣型、必殺技／スピニングニードル
巨大な翼を生やした幻獣型デジモン。貴重なモンスターで神に近い存在。空中からの攻撃を得意とし、その咆哮は嵐を呼び、翼を羽ばたかせることで巨大な竜巻を起こす。必殺技は、羽から風の矢をいくつも相手に向かって飛ばす『スピニングニードル』だ。

コアドラモン（青）、世代／成熟期、属性／ワクチン種、種族／竜型、必殺技／ブルーフレアブレス、ストライクボマー、ジ・シュルネン―？
『ドラモン』の名を冠するデジモンにはデジコアに必ず竜因子のデータを有しており、その竜因子データの割合が高ければ高いほど体の形状が竜型に成って行くが、コアドラモンの竜因子データ割合は１００％となっており、純血の竜型デジモンである。またコアドラモンには『青』と緑が存在し、青い方は発達した翼で高速な飛行を行うことが出来る。必殺技は、青色に輝く灼熱のブレスを相手に向かって放つ『ブルーフレアブレス』に、尻尾を使って強烈な打撃を相手に与える『ストライクボマー』。そして“逆鱗”に触れてしまった時、その怒りにより、頭部の角を激しく発光させた後に口からビーム弾を無差別に放つ『ジ・シュルネン―？』だ。

ユニモン、世代／成熟期、属性／ワクチン種、種族／幻獣型、必殺技／ホーリーショット
ユニコーンの角とペガサスの羽を持ち合わせた幻獣型デジモン。背中に生えた大きな翼で、世界を瞬時に駆け回り、額から伸びた鋭い角で敵を突き刺す。必殺技は、聖なる光弾を相手に向かって吐き出す『ホーリーショット』だ。邪悪な存在に対しては、絶大な威力を持っている。

『グオォォォォォォーーーーーー！！！！！』

森をいきなり消滅させられた事によって、怒りに満ちたデジモン達は怒りの叫びを上げながら上空に浮かぶ艦艇に突撃を行った。

しかし、その直前で艦艇の周りに幾つもの魔法陣が出現し、デバイスをそれぞれ構えた武装局員が二十名前後姿を現すと共にデバイスをデジモン達に向かって構え、砲撃を開始した。

『撃てェェェェェェーーーーー！！！！！』

ーーーズガガガガガガガガガガガガガッ！！！！！

『ホーリーショット！！』

武装局員達が砲撃を放つと共にユニモンの群れも口から気功弾ーホーリーショットを放ち、戦闘が本格的に開始された。

「ブルーフレアブレスッ！！」

ーーーゴオォォォォォォーーーー！！！！！

「逃げろッ！！我々はアレの準備が終わるまで時間を稼ぐのが目的だ！！」

『了解！！』

コアドラモン（青）の口から放つ青色に輝く灼熱のブレスーブルーフレアブレスをかわしながら叫んだ隊長の言葉に他の武装局員達は頷き、デジモン達の攻撃をかわす事に専念し始めた。

そしてそれからも戦いは続き、武装局員達はデジモン達の攻撃をかわす事で時間稼ぎを行い続けていたが、やはり数はデジモン達が多い上に、実力もデジモン達の方が高い為に当初二十人居た武装局員は数を減らし、十人ほどにまで減ってしまっていた。

しかし、これは当然の結果である。元々管理局の全体から見ても、ＡＡＡランクの魔導師は５％にも満たない。

だが、デジモンは違う。デジモンは成長期レベルで既にＡランクの実力、成熟期でＡＡ～ＡＡＡ、Ｓランク、完全体でＳＳ～ＳＳＳランク、究極体で管理局を半壊、または崩壊させられるほどの実力。そうデジモンと言う種族は単体だけで並みの魔導師達など敵にすら成らない種族なのだ。

当然ながらデジモン達と戦いを繰り広げている武装局員達はＡランクからＢランク、隊長はＡＡランクの程度の実力しか無い。その様な者達でＡＡランクの実力を持つ成熟期三十体を相手に出来る筈が無い。

しかも、管理世界には管理局の法令で質量兵器が存在していない。つまり、魔力を持たない一般人はデジモンと戦う事さえも出来ずに、蹂躙されるしかないのだ。

この戦争は始まった当初から管理世界ーいや、管理局が勝てる可能性はゼロだったのだ。余程のデジモンに対する有効な兵器が無い限り管理局が勝てる可能性はゼロ。“そう余程の有効な兵器が無い限りは”。

『良くやった！！武装局員達！！例の兵器の準備が整った！すぐに其方に送る！！』

『了解ッ！！』

艦から響いた電子音声に生き残っていた武装局員達はバラけるのを止め、一箇所に集まり始めた。

その様子を見たデジモン達は自分達の最大の好機だと判断し、一箇所に集まった武装局員達の周りを囲み始め、それぞれ自分達の最大の必殺技を武装局員達に向かって放とうとする。
しかし、その瞬間に、デジモン達の背後に四つの魔方陣が現れ、それと共に一筋の光線がデジモン達に向かって放たれた。

ーーービィィィィーー！！

「ガアァァァァァァァーーーーー！！！」

『ッ！！』

光線が技を放とうとしていたコアドラモン（青）に背に直撃した瞬間に、コアドラモン（青）は断末魔に叫びを上げてデータ粒子に変わり粉々に砕け散った。
その叫びを聞いた他のデジモン達は慌てて背後を振り返り、コアドラモン（青）を消滅させた者の姿を目撃し、恐怖に目を見開く。

ーーーピピピッ

それは一言で言えばマシーンとしか呼べなかった。足は存在せず歩行する事は出来ない体をしているが、空中に浮かびデジモン達を意思無き目で見ていた。
しかし、デジモン達にはそれが何なのかハッキリと分かった。それは意思は無いが自分達と同じデジモンで在るとハッキリと分かり、それが自分達の最大の脅威に成ると瞬時に判断した。

ギズモン：ＡＴ、世代／成熟期、属性／不明、種族／マシーン型、必殺技／ＡＴレーザー、ＡＴハッキング
人間の手により、他のデジモンのデータを改造して作られたマシー

ン型デジモン。このデジモン自体に意思は無く、プログラムされた命令通りに行動する。完全体を軽く凌駕し、究極体をさえも倒す力を持つ。また、このデジモンに倒されたデジモンはデジタマに戻る事さえも出来ず、完全な消滅しか待っていない。必殺技は、眼球から赤いレーザー光線を放ち、デジモンのデータを粉々に破壊する『ＡＴレーザー』だ。

『スピニングニードル！！』

『ホーリーショット！！！』

ギズモン：ＡＴの恐ろしさを本能で瞬時に気が付いたエアドラモンの群れとユニモンの群れはそれぞれ必殺技を放ち、四体のギズモン：ＡＴを倒そうとする。

だが、四体のギズモン：ＡＴは簡単に自身に迫り来るスピニングニードルとホーリーショットをかわし、意思無き目から次々とレーザーを放ち始める。

ーーービィィィィーー！！

『グアァァァァァーーー！！！』

放たれるレーザーをかわす事が出来ず、次々とエアドラモンとユニモンは消滅して行き、ギズモン：ＡＴの援護を受けた局員達も次々とデバイスをエアドラモンとユニモンに向かって構え魔法を放ち始める。

「死ねッ！！」

「ガアァァァァァァァーーーー！！」

「第九管理世界の人々の仇だ！！」

「グオォォォォォーーーーーー！！！！」

「管理局に逆らった罰だ！！消えうせろ！！」

「ギャァァァァァーーーーー！！」

ギズモン：ＡＴの援護を受けた局員達は良い気に成り、次々とデバイスから魔法を放ち続け、エアドラモン達とユニモン達を次々と消滅させて行き、エアドラモン達とユニモン達の断末魔に叫びがデジタルワールドに空に響き続けた。

そしてそれから数分後には三十体近く居たデジモン達は全て消滅し、歓喜の叫びを上げる武装局員達と任務を終えたマシーンの様に空中に漂い続けるギズモン：ＡＴだけが空に浮かんでいた。

『諸君！！良くやった！！上層部の言ったとおりこの兵器は生物達に有効で在る事が立証されたのだ！！上層部はこの時の為にこの兵器を作り上げたのだろう！！この戦い勝てるぞ！！』

艦のブリッジから戦いを見ていた提督は目の前でアレほど猛威を振るっていたデジモン達の消滅に歓喜の叫びを上げ、外に居た武装局員達も喜びの声を上げる。

「やったぞ！第九管理世界の人々の仇が取れた！！あの忌々しい生物達を俺達は勝てたんだ！！」

「ああ、この戦い！俺達が勝って！管理局が不滅だって知らせられ

るぞ！！」

「私達は勝てるんだ！」

自分達の勝利に浮かれた武装局員達はそれぞれ喜びの声を上げ、デジモン達に自分達が勝てると心の底から喜んでいた。

そして再び提督の声が艦から響く。

『喜ぶのは構わんが、我々は上層部の秘密任務を行わねば成らない。負傷した局員達の押収も完了している。君達もすぐに戻るのだ！！』

『了解ッ！！』

提督の放送に武装局員達は同時に叫び、自身の足元に発生した魔法陣に乗り転移を待ち始める。

「なあ、今の俺達なら奴も倒せるぜ。あの広域次元犯罪者」

「ああ、『漆黒の竜人』もあの兵器が在ればイチコロだな」

そう言いながら武装局員達が転移しようとした瞬間に。

「・・・・・成らば、試してみるか」

『エッ？』

ーーーブザンッ！！

突如として背後から響いた声に、負傷を免れた武装局員達十名全員が疑問の声を上げて、背後を振り返った瞬間に、五人の首が跳ね

飛ばされた。

ーーービシュァァァァァァァァーーーー！！！！

『ヒィッ！！！』

一瞬の内に首と命を刈り取られた五人の武装局員の頭の無い首の部分から吹き出した大量の血液を見た生き残りの武装局員達は恐怖の声を上げた。

そして首の無い局員達の遺体が地上へと落下すると共に、残りの局員達は慌ててそれを行った人物を捜索しようと辺りを見回し、それを見つけてしまった。

漆黒の体に金色の髪。鈍い銀色の輝きを放つ頭部と胸当てを装備し、三本の爪を備えた黒い手甲ードラモンキラーを両腕に装備した黒き竜人。

管理局の局員達の恐怖の代名詞として呼ばれ、管理世界の人々までにさえも恐れられる広域次元犯罪者。

「アッ・・・・・・アッ・・・・・・アッ・・・・・・漆黒・・・・・・の・・・・・・・・竜人・・・・・・嘘だ・・・・・・何で・・・・・・」

「何でこの世界に居るんだよ！？」

「この世界は管理世界からも遠く離れているのよ！それなのに如何して！？」

自分達の見つめる先の空中に浮かぶ漆黒の竜人ーブラックの姿を見た五人の武装局員達は恐怖の声を上げ、それぞれ信じられないと言う表情をしながらブラックを見つめた。

無理も無いだろう。今、局員達が居る場所は管理世界から遠く離

れた管理局さえも到達していない場所に存在する世界。その世界に自分達の居る場所に居る筈の無いブラックが現れたのだから、信じられず恐怖の声を上げるのも当然だ。
しかし、ブラックは一切そんな事には構わず、無表情のまま右手に引っ付いていた五つの首を五人の武装局員達に放り投げる。

『ヒィッ！！』

五つの生首を受け取った局員達は、その凄惨としか言えない死に顔に恐怖の声を上げ、慌てて生首を投げ捨てた。

「・・・・次は貴様らだ。この艦艇の中に居る連中も全員に貴様らが消滅させたデジモン達の恐怖を味合わせて、殺してやる」

「ヒィッ！！やれ兵器ども！！」

殺意に満ちたブラックの宣言に、一人の局員が恐怖の声を上げながら自分達の周りに居た四体のギズモン：ＡＴに命令を飛ばし、命令を聞いたギズモン：ＡＴはブラックに向かって目から光線を放ち始める。

ーーービィィィーー！！

「フッ！！」

四体のギズモン：ＡＴが放つＡＴレーザーをブラックは全て見切り、かわしながらギズモン：ＡＴに急速に接近すると、一体のギズモン：ＡＴを殴り付ける。

「ドラモンキラーー！！」

ーーーバキンッ！！

ーーービビビッ！！

ドラモンキラーを受けたギズモン：ＡＴは激突音を鳴り響かせながら吹き飛んで行くが、苦痛の叫びなどは上げず、機械が不調に成った様な音を響かせた。

その様子を見たブラックは目の前に居るギズモン：ＡＴの正体を確信し、怒りの表情を浮かべる。

（こいつ等はやはりバンチョーレオモンが言っていた。ギズモン！！上層部どもめ！！遂にこいつ等を使ったか！！）

ブラックは目の前でＡＴレーザーを放ち続けるギズモン：ＡＴの正体をバンチョーレオモンから聞いて知っていた。

目の前に居るギズモン：ＡＴは人間の手によって、心を消去されただの命令を聞くだけの機械に成り下がってしまった哀れとしか言えないデジモン達。

その事を聞いた時にブラックに湧き上がったのは怒りだけだった。ブラックにとって心とは何よりも大切で神聖な物。嘗て心が在る故に苦しみ続け、挙句に世界さえも滅ぼそうとしたブラックに取っては心とはとても大切な物だとヒカリ達に学んだ。自分が苦しんでいた時に救ったのもまた心。

その事が在るからこそブラックは目の前に居るギズモン：ＡＴ達を創ったで在ろう倉田にも、ギズモン：ＡＴを使っている局員達も、そしてギズモン：ＡＴを使う様に命じた上層部にも怒りを覚えているのだ。

（・・・・・俺には聞こえる。心無き悲しき叫びが・・・・・今楽

にしてやる！！）

ブラックは内心で叫ぶと共に、目の前に居る四体のギズモン：ＡＴが放ち続けているＡＴレーザーをかわしながら、接近し一体のギズモン：ＡＴにドラモンキラーを突き刺す。

ーーードスッ！！

「ウオォォォォォォォォーーー！！！」

ーーーバキィィィン！！

ーーービビビビビッ！！

ドラモンキラーに突き刺したギズモン：ＡＴを振り回すと共に、ブラックはもう一体のギズモン：ＡＴに叩き付け、二体のギズモン：ＡＴは悲鳴の様に眼球を明滅させた。

しかし、それを見てもブラックは攻撃を止めずに、突き刺している方とは別のドラモンキラーの爪先に赤いエネルギー球を生み出し、背後からブラックを狙っていたギズモン：ＡＴに投げ付ける。

「ムン！！」

ーーードゴン！！

赤いエネルギー球は寸分違わずに背後に居たギズモン：ＡＴに直撃し爆発を起こした。

それを確認したブラックは突き刺しているギズモン：ＡＴを再び振り回し、自身を遠方から狙っていた局員達に向かって投げ付ける。

「オオォォォォォォォーーー！！！！！」

『なっ！？』

高速で飛んで来るギズモン：ＡＴの姿を見た局員達は慌てて発動させようとした魔法を消滅させ、吹き飛んで来るギズモン：ＡＴをかわすが、それと共に無数の剣が飛んで来た。

「スティンガーブレイド！！エクスキューションシフト！！」

ーーーズザザザザザザザザザッ！！

『ギャアァァァァァァーーー！！！！！』

ギズモン：ＡＴをかわす事に集中していた局員達は、その後に来た無数の剣をかわす事が出来ずに全員が無数の剣を体中に突き刺され、息絶えた。

「時間が押しているんでな！！そろそろ決めさせて貰う！！」

ブラックは叫ぶと共に四体のギズモン：ＡＴに急速に接近し、武装局員達がやられた事で恐怖を感じ、慌てて逃げて行く艦に向かって蹴り飛ばす。

「ウオォォォォォーーー！！！！！」

ーーードゴオン！！！

ーーービビビビビッ！！

ブラックの蹴りを受けた四体のギズモン：ＡＴは吹き飛んで行き、艦の装甲に減り込んだ。
その衝撃によって艦は僅かにスピードを落とし、ブラックはその隙に負の力を集中させ、巨大な赤いエネルギーを生み出し、艦に向かって全力で投げ付ける。

「ガイアフォーースッ！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！

ガイアフォースを受けた艦は減り込んでいるギズモン：ＡＴ達と共に爆発に飲み込まれ完全に消滅した。
しかし、行った当人で在るブラックの表情には嬉しさなど微塵も無く、悲しみだけが浮かんでいた。

（・・・・・ギズモンがアレだけの筈は絶対に在るまい。そしてこの世界に来ている管理局の艦艇も一隻では済まない筈だ。この世界に悲劇が起きる。俺は・・・・・・・・・護れなかった）

「・・・・・・ブラックウォーグレイモン」

ブラックが内心で悲しんでいると、背後から声が響き、ブラックは表情を無表情にしながら後方を振り返ると、巨大な体と背に翼を生やした四足歩行の竜ーインペリアルドラモン・ドラゴンモードの背に乗ったヒカリ達が居た。

インペリアルドラモン・ドラゴンモード、世代／究極体、属性／ワクチン種、データ種、フリー、種族／古代竜型、必殺技／メガデス、ポジトロンレーザー
パイルドラモンが究極進化した究極の古代竜型デジモン。他のデジ

モンとは存在感や能力で大きく上回っている。その強大な力ゆえにコントロールが難しく、善にも悪にもなってしまう。また、インペリアルドラモンにはドラゴンモードの他にファイターモードとパラディンモードが存在し、全部で三形態在ると言う珍しいデジモン。必殺技は、背中にある砲身から超重量級の暗黒物質を発射し、半径数百メートルを、暗黒空間に飲み込む『メガデス』と、同じように背中の砲身からレーザーを撃ち出す『ポジトロンレーザー』だ。

「・・・・・・これで分かった筈だ。もはや、この戦いはデジモンと人間の戦争。戦争では相手の命を奪わねば自分の命が奪われる・・・・・俺はお前達の手を血で汚したくない。だから、此処で別れだ」

「待って!!!」

飛び去るブラックの背にヒカリは叫ぶが、ブラックは止まらずに地平線へと進み、ヒカリ達は全員悲しみの表情を浮かべながらブラックの背を見つめ続けるのだった。

最悪の兵器、ギズモン！！（後書き）

次回予告

世界の現状を肌で感じたヒカリ達は、現実世界へと帰りブラックの言葉に思い悩む。

人を殺せるのか？果たしてデジモンと人間の絆は再び結べるのか？

一方、ブラックはチンロンモンが教えた場所へと向かい、シェンウーモンと出会う

次回、漆黒の竜人と少女、『護れ！！七大魔王のデジタマ！』

漆黒の竜人は遂に出会う。世界を滅ぼす魔王の一角と。

護れ！！七大魔王のデジタマ！

ブラックと別れたヒカリ達は、それぞれ現実世界の自分達の家に戻り、ヒカリは自分の家のソファーに深く座りながらブラックの言葉を思い出していた。

『お前達に人間を殺す覚悟は在るのか？』

その言葉はヒカリに十年前の戦いの時以上の衝撃を走らせた。
デジモンではなく人間を、自分達と同様に生きている人を殺す。
それは人間の世界では殺人と呼ばれ、最大の罪に成る罪証。それを行わねば戦いに参加する事さえも出来ない。

（・・・・・究極体に自由に進化出来る様に成ったから、ブラックウォーグレイモンの足手纏いに成らないと思っていたけど・・・・・・・違ったんだね・・・・・戦いに参加出来るかどうかは、罪を背負えるかどうかだった）

ヒカリはブラックの言葉に隠されている不器用な優しさに気が付いていた。
確かにブラックの言うとおりこれからの戦いは、デジモンとの戦いだけではなく、管理局の局員一人間との戦いも必ず起きる。そして今のヒカリ達にはデジモンは倒せても人間には攻撃出来ない。
だからこそ、ブラックはヒカリ達と別れ、唯一人シェンウーモンの居る場所へと向かったのだ。

（・・・・・怖い・・・・・・人を傷付けるなんて・・・・・・考えただけでも怖いよ・・・それに・・あんな風にデジモンが死ぬなんて）

ブラックが介入する前に起きた惨劇。局員とギズモン：ＡＴに寄るデジモン達の虐殺。
管理局の艦艇を襲ったデジモン達が全て消滅するまで、鳴り止まなかったデジモン達の断末魔の叫び。あの叫びが今もデジタルワールドの何処かで鳴り響いている事は間違い無いだろう。
管理局の目的はデジモンの完全抹消。その為の艦艇の数がブラックの破壊した艦艇一隻だけの筈は無い。恐らく別の場所にも何隻かの艦艇が現れていると考えて間違い無いだろう。

（・・・・如何すればいいの？・・・・如何したら人間とデジモンの絆を取り戻せるの？説得するのは無理だろうし・・・・一体如何したら！？）

ヒカリは何とかデジモンと人間の絆を取り戻す方法を見付けようと考え続けるが、方法を見付ける事が出来ず、ソファーに座りながら思い悩み続ける。
その様子をヒカリの居るリビングの入り口のドアの隙間から覗いていた、太一、アグモン、テイルモンは思い悩み続けるヒカリを心配そうな表情を浮かべて見つめていた。

「・・・・・やっぱり、ヒカリの奴も悩んでいるな」

「・・・・・仕方が無いよ・・・・今回の戦いは本当に辛い戦いだから」

「ああ、まさか、此処まで辛い戦いだとは思っても見なかった」

ドアの隙間からヒカリの様子を覗くのを止めた、太一とアグモン、テイルモンは顔を見合わせながら小声で話し始める。

「・・・・正直言って、ブラックウォーグレイモンの話を信じ切れていない部分が在った。デジモンと人間の絆はそう簡単には崩れる筈が無いと思い込んでいた」

「僕もだよ。まさか、本当にデジモンと人間が戦う事に成るなんて思ってもみなかったよ」

「私もだ」

太一達はデジモンと人間の絆の深さを良く知っていたので、ブラックの話には半信半疑な部分が在った。しかし、デジモンと人間の絆の深さが強いのはあくまで、この世界の事でだ。遠く離れた次元世界はそれに類推しない。

「例の管理局って言う組織は、先ず間違いなく、デジタルワールドに居るデジモン達を全滅させる気だろう。出なきゃあんな兵器までは持ち込まない筈だ」

「・・・・遠めで見ていたが、管理局の使った兵器は恐ろしい物だと私は感じた」

「・・・・僕も、アレを見た瞬間に凄い悪寒が走ったんだ。僕の本能がアレを恐れた」

「・・・・あの兵器は一体何なんだ？ブラックウォーグレイモンは何かを知っていたみたいだけど。一体アレは？」

テイルモンとアグモンの報告に太一は思い悩む表情を浮かべ、遠めで見た管理局の使った兵器ーギズモン：ATに付いて考え始めた。管理局が大群と呼べるエアドラモンとユニモンの群れに勝てたの

は、先ず間違いなくギズモン：ＡＴのお蔭だと太一は気が付いていた。成熟期のデジモンの、しかも群れで放った必殺技を簡単かわした俊敏さ。殆ど一撃で成熟期のデジモンを消滅させた攻撃力。どれを見ても完全体、失敗すれば究極体に迫る力を持っていると太一は判断していた。

しかし、それなら一つの疑問の残る。ブラックの話では第九管理世界と呼ばれる世界でも管理局はデジモンと戦ったが、成す術なく四聖獣とロイヤルナイツに寄って滅ぼされたと言う。

アレほど強力な兵器が在りながら簡単に世界が滅んだ。その後作り上げたとしても、第九管理世界が滅んだのはほんの数週間ぐらい前。それだけの間にアレほどデジモンに有効な兵器を作り上げるのは無理だと太一には断定出来る。

（ブラックウォーグレイモンが言っていた。ルーチェモンと倉田って言う奴が、アレを管理局に渡したと考えるべきだよな・・・・・だけど、アレを見た時にブラックウォーグレイモンは何時も以上に容赦が無くなっていた。アレにはブラックウォーグレイモンを怒らせるほどの秘密が在るのか？・・・分からないな）

その様に太一は内心でギズモン：ＡＴに付いて考えを巡らすが、何も思い浮かばず疑問の表情を浮かべ続けた。

その様子を見ていたアグモンは顔を俯かせながら太一に声を掛ける。

「・・・・太一・・・・・僕らは如何すれば良いのかな？」

「それは・・・・」

「僕は人間を傷付けたくない・・・・・だけど、管理局の人間を倒さないと罪の無いデジモン達が死んで行く・・・・そのせいで人間

を憎んでいなかったデジモン達も人間を憎む様に成る・・・・・僕らは如何したら良いんだろう？」

「・・・・・ゴメン。俺も今は分からない。デジモンと人間の戦いを止める方法も、デジモンと人間の絆を取り戻す方法も分からない・・・・・本当に如何したら良いんだろうな」

アグモンの質問に太一は答える事が出来なかった。

太一にしてもヒカリと同様にデジモンと人間の絆を取り戻す方法が分からず、悩み続けていた。

今の状況はまさに最悪の道筋を進んでいるとしか言えない状況だろう。本来ならば共に歩むべきデジモンと人間が互いに憎しみ合い、更に人間を憎んでいなかったデジモン達までも人間を憎みかねない状況。それを止め様にも相手は住む世界が違うとは言え、太一達と同じ人間。太一には同じ人間を傷付ける事が出来るか如何か分からなかった。

「・・・・・俺もヒカリと同じ様に怖いな。世界が違うとは言え人間を倒さなくちゃいけない状況になっちまうなんて、本当に世界はどうなるんだろうな？」

その様に今の太一には人間を倒さなければいけない事に対する決断が出来ず、ヒカリと同様にアグモン達と共に悩み続けていた。

一方その頃、太一達と別れたブラックは艦艇を消滅させてから連日飛び続け、チンロンモンが告げたシェンウーモンが居る場所へと向かい続けていた。

「・・・・・おかしい・・・・・そろそろ付く筈だが、デジモンの気配が全く感じられん。チンロンモンの話では、自分の代わりに十体近くの究極体がシェンウーモンと共に護っていると言う話だったが、何故究極体の気配が全く感じられんのだ？」

眼下に見える大海原を見ながらブラックは疑問の声を上げた。

究極体が十体も居れば、気配を読む事に成れたブラックには瞬時に気配を感じる筈なのに、未だにデジモンの気配は感じられず、穏やかな大海原だけが続いているのだから疑問に想うのも当然だろう。

「・・・・やはり、七大魔王が動いたのか？成らば急がなければ！！」

ーーービュン！！

状況を予測したブラックは更にスピードを上げて更に先に進み始めて行くと、辺りに霧が立ち込めて来た。

「ムッ！霧だと！？」

霧を目撃したブラックは声を上げながら空中に急停止し、辺りを慌てて見回し始める。

「この辺りは海だけしか無い筈だ。その様な場所に霧が立ち込める事など有り得ん・・・・・これは罠か？」

視界が遮られるほどの霧が立ち込める空間を見回しながら、ブラックは警戒心を最大にし、辺りに何かの気配が無いかを探り始めるが何も気配は感じられず、疑問の表情を浮かべる。

「・・・・・此処でジッとしていても仕方が無い。少し高度を下げて何か無いか調べるか」

そうブラックは呟くと、上空から高度を下げ始め海上を見渡し、巨大な影を視界に捕らえる。

「ムッ！！見つけたか！！」

ーーービュン！！

巨大な影を見つけたブラックは自身の探しているシェンウーモンかと思い影に向かって全速力で進み、影の正体を知って目を見開きながら、目の前に存在している影を見つめる。

「ッ！！！・・・・・管理局の艦艇、しかも二隻だと！？」

ブラックの前には無傷の状態の二隻の管理局の艦艇が海上に浮かんでいた。

それを見たブラックは何か情報を手に入れられるかも知れないと思い警戒しながらも、艦の側面に近付くが、ブラックが至近距離で近付いても何の動きも艦は見せず、ブラックは疑問の表情を浮かべる。

「・・・・・可笑しい？俺がこれだけ近付いても、何の反応も見せない・・・・・・ムン！！」

ーーードゴオン！！

何の反応も見せない艦に疑問を思ったブラックは、艦の外壁を殴り付け、自身が通れる位の穴を開けると内部に侵入し、その先に在

った通路内部を歩き始める。

「・・・・・どうなっているのだ？これはデジモンの仕業なのか？」

通路の中を歩きながらブラックは辺りを見回し、其処彼処に死んでいる局員達の遺体を見て疑問の声を上げた。

一目に見てブラックがデジモンの仕業で在ると断言出来なかったのには理由が在る。何故なら死んでいる局員達は如何見ても発狂した様な表情を浮かべ、全員が凄惨としか言えない死に顔を浮かべていたのだ。戦い合うでも無く、ただ普通に過ごしていた様な状況で急に発狂した様な状態に成っているのだから、ブラックが疑問に想うのも当然だろう。

そしてそのままブラックは先に進み、ブリッジの入り口と想われる扉を見つけると、右手を振り上げる。

「ムン！！」

ーーードゴオン！！

ブラックの一撃により扉は吹き飛び、ブリッジ内部の様子が分かるが、やはり其処も通路と同様に発狂した果てに死んだと思われる局員達の遺体が存在していた。

「一体何が在った？何故この様な状態で死んでいるのだ？・・・・・艦の動力は生きているな」

ブリッジの内部に入りながらブラックは疑問の声を上げて辺りを見回し、この艦の提督だったと思われる女性の遺体を見つけ、その女性の近くに在ったコンソールを弄り始める。

「リンディに少しは弄れるようにしろと言われて、無理やりやらされた事だが、まさか役に立つ日が来るとは」

そうブラックはコンソールを弄りながら呟いていると、目当ての情報を見つけ表情を険しくする。

「・・・・・・やはりか。上層部、いや、ルーチェモンの奴は七大魔王の誰かだけではなく、こいつ等にもデジタマを回収させようとしていたか。気に入らん」

ブラックが見つけたのはこの艦や他の艦がこの世界に来た理由だった。

ブラックの見つめる画面には、ブラックが管理世界から離れてこの世界に来てからの管理世界の現状と今ブラックが乗っている艦や他の艦が上層部達ー正確に言えばルーチェモンから送られた秘密任務に付いて書かれていた。

ブラックがこの世界に来てから数週間の間に、如何やら管理世界はブラックの予想以上に不味い事態に成っていた様だ。

各管理世界に突如として現れた黒い塔の様な物が、ゲートの様な役割を行い、各デジタルワールドから自身の故郷を奪われたデジモン達が次々と現れ、管理世界に破壊活動を行い続けている上に、既に二つの管理世界がデジモンの手に寄って滅ぼされていると書かれていた。

その状況を打開する為に、上層部はデジモンが来れるのならば、自分達も黒い塔からデジタルワールドに行けると判断し、八隻の艦艇に対デジモン対策用に秘密裏に作り上げていた兵器ーギズモンを乗せて送り込み、デジモンの抹消とデジモンの生態を知る為にデジタマを手に入れて来いと言う命令のこの艦と他の艦艇に命じたようだ。

「・・・・黒い塔だと？・・・・・・・・まさか、いや有り得ん。アレを生み出す技術を持っているのはフリートだけの筈だ。アレを生み出せる奴は他には居ない」

文章の中に書かれていた一つの単語に心当たりが在ったブラックは考える表情を浮かべるが、すぐにその考えを排除し、再び文章に目を向ける

次に書かれていたのは、ミッドチルダに置ける対策だった。

如何やらミッドは他の世界以上に黒い塔が出現し、他の世界よりもデジモンが多く出現しているらしい。その状況を打開する為に、予てより計画していた八神はやてが部隊長の部隊ー機動六課を設立し、ミッドに置けるデジモン対策として動かしてるようだが、ブラックには上層部の真の狙いが瞬時に分かった。

「上層部の奴らは連中に他の世界で動かれたくない為に、ミッドに縛り付けたな。奴らは三大天使デジタルワールドの真相を知っている。その事を他の本局の局員に知られたくない為に、奴らをミッドに閉じ込めたと言う事か」

ブラックには上層部の真の機動六課設立の裏に隠された狙いが分かった。

一見、機動六課は本局のミッドに置けるデジモン対策として設立した部隊に見える。だが、そのメンバーはクロノ・ハラオウンを抜けば、殆どあのデジタルワールドでの惨劇を知っている者達で構成されている。しかも、ミッドは他の世界よりもデジモンの出現率が多い場所。

その場所に送られたと言う事は他の世界には干渉出来ない。いや、干渉する暇が無いだろう。他の世界よりもデジモンの出現率が多いと言う事は、寄り過酷な戦争が約束された場所に成ると言う事だ。

幸いにもと言うべきか。いや、恐らくルーチェモンの策略であろ

うが、管理世界に出現するデジモンは今の所、完全体までのようで、究極体は現れていないらしい。これは究極体が現れれば互いに疲弊しないと思ったルーチェモンか倉田辺りが、黒い塔に何らかの制御リミッターでも付けたのだろう。

「・・・・リンディやルイン達の情報が無い。何か在ったのか？やはり早く戻らねば」

艦のデーターベースの中に自分の仲間で在るリンディ達の情報が一つも無い事に気が付いたブラックは焦りの表情を浮かべ、次に何故この艦やもう一隻の艦が破壊されたのか調べ始めようとするが、未だに映っていたモニターに一瞬巨大な木が映る。

「ムッ！今のは？・・・・・・行って見るか」

モニターに映った一瞬の巨大な木にブラックは疑問の声を上げるが、この艦にこのまま居てもしょうがないと想い、艦を抜け出し、木が映った場所へと飛び立つ。

「・・・・・・この辺りの筈だが？」

艦のモニターに映った場所に到達したブラックは辺りを見回し、巨大な木を探そうとするが、辺りに立ち込める深い霧に視界を遮られ、木を発見出来ずに居た。

その様子にブラックは苛立ちを募らせ始め、霧の中に向かって叫ぶ。

「出て来い！！シェンウーモン！！居るのは分かっているぞ！！！」

その様にブラックは霧の中に向かって叫ぶが、霧の中に居るであ

ろうシェンウーモンは一向に姿を見せず、遂にブラックは負の力を集中させ始め、巨大な赤いエネルギー球を生み出す。

「ガイアッ！！」

「・・・そうカリカリするな。若いの」

「ムッ！！」

ブラックがガイアフォースを投げる直前で声が霧の中から響き、ブラックはガイアフォースを投げるのを中断して声の聞こえた方に目を向けて見ると、甲羅の部分に巨大な木を生やし、二本の首を甲羅の中から伸ばした亀型のデジモン－四聖獣－シェウーモンが霧の立ち込める海上に浮かんでいた。

シェンウーモン、世代／究極体、属性／ワクチン種、種族／聖獣型、必殺技／霧幻（むげん）

デジタルワールドを守護するチンロンモン、バイフーモン、スーツェーモンと同様に四聖獣デジモンの1匹で在り、北方を守護し変幻自在な水技を使う。他の四聖獣デジモンと同じく伝説の存在で在り、その強さは神にも匹敵すると言われている。シェンウーモンは四聖獣デジモンの中でも最長老で在ると共に、最も温厚な性格の持ち主でも在る。四聖獣デジモンに共通するのは輝く4眼を持ち、12個の電脳核（デジコア）を体の外に浮遊させている。必殺技は、敵の周囲に濃い霧を発生させ、霧の中に幻影を写し出し、敵の精神を破壊する『霧幻（むげん）』だ。

「貴様がシェンウーモンだな？」

シェンウーモンの姿を見たブラックはガイアフォースを消滅させ

ながら質問の声を出し、シェンウーモンは二つ在る内の一つの首を立てに振るう。

「さよう。ワシがシェウーモンじゃ。それで御主は誰だ？」

「ブラックウォーグレイモンだ」

「オオオッ！！御主がブラックウォーグレイモンか！御主の事は三大天使とチンロンモンから良く聞いておるぞ！」

シェンウーモンは物珍しそうな表情を浮かべて、自身の目の前に滞空しているブラックを見つめた。

ブラックとシェンウーモンには面識が無く、ブラックの話は三天使とチンロンモンから聞いていただけなのだから、多少物珍しい視線で見るのもしょうがないだろう。

しかし、ブラックはシェンウーモンの視線には構わず、自身の用件を伝え始める。

「それよりも、貴様は七大魔王のデジタマと『思い』のデジメンタルを護っているのだろう？この霧は一体なんだ？」

「この霧はワシが発生させた物じゃ。近くに在った例の組織の者達を倒す為に発生させたのでな」

「やはりアレは貴様のせいだったか」

シェンウーモンの言葉にブラックは管理局の艦艇内部で死んでいた局員達の死の原因がシェンウーモンだった事を確信した。

恐らくシェンウーモンの必殺技である霧幻（むげん）の餌食に成ったのだろう。シェンウーモンの霧幻（むげん）は他の四聖獣達の技と違って体に影響は

無いが、事相手の精神に関する事ならば四聖獣の中で最も恐ろしい技だ。
体には全く影響を与えず相手の精神だけを破壊する技。ブラックとしては珍しくシェンウーモンだけとは、戦いたくないと思う相手だ。

(体にダメージを与える攻撃ならばかわせるが、精神に関する攻撃などかわし様が無い。コイツとは戦いたくないな)

ブラックとしてはシェンウーモンと戦っても自分が負けると言うビジョンは思い浮かばないが、絶対に勝てると言うビジョンも思い浮かばない厄介な相手なのだ。
常に強い奴と戦いたいと想い続けているブラックにしては珍しい考えだろう。
その様子にシェンウーモンは気が付かずにブラックに声を掛ける。

「それで御主?何故此処に来たのだ?此処は今途轍もなく不味い状況なのだぞ」

「だろうな。チンロンモンの話では貴様以外にも究極体が十体ほどと、貴様の配下の十二神将が護って居ると言う話だったが、未だに貴様の気配しか感じられんとは・・・・・・やられたのだな」

「・・・・・・そうじゃ、全くこんな老いぼれの為にあやつ等は全員死におった」

ブラックの言葉にシェンウーモンは悲しみの表情を浮かべて答え、説明を始めた。

「・・・・・ほんの数日前の事じゃった。七大魔王の一人、嫉妬の

リヴァイアモンが暗黒の海の方から現れ、この地に在る七大魔王のデジタマを奪い取ろうとしたのじゃ。ワシやワシの配下の十二神将、そしてチンロンモンの代わりにこの地を護っていた十体の究極体が応戦し、何とかリヴァイアモンを暗黒の海に戻す事に成功したのじゃが、ワシを除いた全員が死に寄った」

「・・・・・・チンロンモンの予測が当たったか。やはりルーチェモンは遂に七大魔王を動かしたか」

「その通りじゃ。それからワシはこの地に更なる霧を発生させ、リヴァイアモンを惑わし続けておるのじゃ。じゃが、それもそろそろ限界に近付いて来ておる。リヴァイアモンだけではなく、この地に例の組織の者達もやって来る様に成って来ておる状況じゃ」

「・・・・・決戦が近いと言う事か」

シェンウーモンの言葉にブラックは辺りを見回しながら呟くが、深い霧しか見えず険しい表情を浮かべる。

状況は最悪と言って良いだろう。シェンウーモンとブラック以外にこの地を護れる者が居ない上に、敵は七大魔王ー嫉妬のリヴァイアモンだけではなく、デジモンに取っての天敵としか呼べないギズモンを連れた管理局の艦艇が後五隻接近している状況。その上、恐らくナンバーズ達もこの地を目指しているのは間違い無いだろう。三つ巴ではなく、四つ巴の戦いがこの地で始まるのは先ず間違いない。

そしてその中で最も戦力が低いのはブラックとシェンウーモンだ。確かに実力は高いだろう。しかし、それだけでは戦いには勝てない。しかも相手はデジモンの中でも最強の七大魔王の一体の上に、一撃でデジモンを消滅させるだけの力を持ったギズモン。どちらも全力で集中して戦わねば成らない相手なのに、それが一度に両方来ると

成れば、如何にブラックとシェンウーモンと言えど、敗れる可能性は高いだろう。

「・・・・・それで七大魔王のデジタマとデジメンタルは何処に封印されているのだ？見た所、遺跡らしい物は全く見えんが？」

「ワシの足元の海底深くに在る。元々誰も近づけん場所に封印したのだから、その様な場所に在るのじゃ」

「成るほど」

シェンウーモンの言葉にブラックは答えながらシェンウーモンの足元の海上を見つめた。

確かにシェンウーモンの言うとおり海底と成れば、その場所に辿り着けるのは、水棲系のデジモンか究極体ぐらいな者だろう。しかも辺りには目印になる様な物は全く無い。ただの穏やかな海が広がっている上にシェンウーモンの発生させている霧に寄って視界も完全に塞がれている。

その様な状況で海底に隠されている遺跡を見つけるのは無理だろう。

「・・・・ブラックウォーグレイモンよ。此処はワシに任せて、御主は逃げるが良い。恐らくワシらが一緒に戦っても、リヴァイアモンには勝てん。その上、例の組織の者達も近付いて来ておる。勝てぬ戦いに挑むのは無謀と言うものじゃぞ」

「フン、俺は誰かに命令させるのが嫌いだ。貴様の言うとおりかも知れんが、俺は戦うまでだ」

「・・・・やれやれ、年寄りの言う事ぐらい聞かんのか？」

「俺は俺だ。誰の命令も聞かん・・・・・・それに逃げる時間など無いようだぞ」

そうシェンウーモンに答えながら、ブラックが一方向を睨み付けた瞬間に、辺りに霧が吸い込まれ始めた。

ーーーブウゥゥゥゥゥゥゥン！！

「きおったな。リヴァイアモンが！」

次々と吸い込まれていく霧を険しい表情で見つめながらシェンウーモンが叫んだ瞬間に、薄れた霧の影に、海を泳いで来る巨大な何かが映り始めた。

それをブラックとシェンウーモンが険しい表情で見つめている内に、辺りに立ち込めていた霧は全て消失し、巨大な影の全容が明らかに成った。

それはまさに巨大としか言えないほどの大きさだった。今までブラックが見て来た中でも、最も巨大な四聖獣達でさえも、超える大きさを持ったデジモン。

それは大きく長い顎を持ち、二本の長い尾を兼ねそうなえた巨大なワニの姿をしたデジモン。

デジタルワールドに置いて最強の一角、七大魔王に属し、嫉妬の称号を持つ魔王型デジモン。

嫉妬のリヴァイアモンがその巨大な体を海に漂わせながら、ブラック達に接近し始めていた。

リヴァイアモン、世代／究極体、属性／ウィルス種、種族／魔王型、必殺技／ロストルム、カウダ

ワニの様な姿を持った巨大な魔王型デジモン。『七大魔王』の一角、

嫉妬のリヴァイアモンとして呼ばれ、『七大魔王』の中でも最大級の攻撃力を誇る。デジタルワールドすら呑みこむという巨大な顎を持ち、同じ魔王型デジモンはおろか天使型のデジモンでさえも、このデジモンには恐怖し、逃げ出してしまう為に、“悪魔獣”と呼ばれあらゆるデジモンから恐怖される存在。その為にデジタルワールドに巣食う根源的な悪の存在とされている。必殺技は、巨大な顎を使って全てを破壊し飲み込む『ロストルム』に、長大な二本の尾で全てを薙ぎ払う『カウダ』だ。

ーーーグオォォォォォォォォォォォォーーーーー！！！！！！

『ムウッ！！』

それは正に音と表現できる様なものではなかった。ただ叫んだだけで、穏やかだった海上は荒れる狂い、シェンウーモンの体に大きな津波が何度もぶつかってる様な状況を、リヴァイアモンはただその巨大な口で叫ぶだけで引き起こしたのだ。

「・・・・アレが嫉妬のリヴァイアモン！まさかこれほどとは！？」

上空に高く浮かぶ上がる事で津波を回避したブラックだが、逆に上空に浮かび上がった為に、リヴァイアモンの全容を目の当たりにし、驚愕の表情を浮かべた。

広大な海に漂い、尚もその全容を海の底に隠しているとしか思えないほどの大きさをリヴァイアモンは持っているのだ。しかもブラックが見えているのはリヴァイアモンの巨大な顎と顔の部分だけ、全容を考えただけでも頭が痛くなる様な大きさだ。真面目な話、何故三大天使が七大魔王の覚醒をアレほどまでに恐れていたのか、ブラックには今ハッキリ分かった。

目の前に居るリヴァイアモンには恐らく、ブラックの必殺技であ

るガイアフォースを放ってもダメージを与えられる可能性は限りなく低い。その様な相手が少なくとも後三体居ると成れば、確かに世界を滅ぼす事も簡単だろう。
その事が分かっていたからこそ、三大天使はアレほどまでに七大魔王の覚醒を恐れていたのだ。
しかし、ブラックがリヴァイアモンを姿を目撃して感じたのは恐怖でも、ましてや無力感でもない。ブラックがリヴァイアモンの姿を目撃して感じたのは圧倒的な歓喜だった。

「ハハハハハハハッ！！良いぞ！！俺はこれを待っていた！俺が全力を出しても勝てない相手と戦う時を！！リヴァイアモン！！貴様は俺が倒す！！」

「全く、チンロンモンの奴が言っていた通り、戦闘狂そのものじゃのう。リヴァイアモンを見て恐怖する所か、歓喜するとは呆れてものも言えん」

体に当たる津波に耐えながらブラックを見ていたシェンウーモンは呆れた声を出しながらブラックを見つめるが、内心ではリヴァイアモンを見て恐れる事も無いブラックに感心していた。
とにかく、巨大としか表現出来ないリヴァイアモンの姿を見ても、ブラックは恐れずに戦う事を決意したのだ。四聖獣の自分でさえも恐れる存在であるリヴァイアモンの姿を見ても。

（成るほどのう。確かにこやつは希望じゃ。七大魔王に恐れる事無く挑む心が無ければ、これから先の戦いには参加出来まい。その点に置いては合格じゃ。死なせる訳にはいかん。ワシも全力で挑む覚悟で向かわねば！！）

そうシェンウーモンは内心で叫ぶと、目の前に居るリヴァイアモ

ンを睨み付け、ブラックと共に攻撃を行おうとしようとした瞬間に、リヴァイアモンがブラックとシェンウーモンに目を向けて来た。

「・・・・ほう、シェンウーモンよ。逃げなかったのか？せっかく救われた命だと言うのに？」

「逃げる訳には行くまいて、この地を護る為に死んで行ったあの者達の為にも」

「ガハハハハハハハハハッ！！笑わせる！！吾に一撃を与える事も出来ず、無様に死んで行ったあの愚か者達の為に無駄に命を捨てるとは！！貴様も愚かだなシェンウーモン」

「無駄などではない！あの者達の頑張りがあったからこそ！貴様を暗黒の海に戻らせる事が出来た！断じてあの者達の頑張りは無駄ではない！！」

リヴァイアモンの死んでいった究極体達の死を笑う様な発言に、シェンウーモンは怒りに満ち溢れた否定の叫びを上げながら、自身の背中に在る巨大な木から深い霧を発生させ始める。

「今一度暗黒の海に戻って貰うぞ！！霧幻（むげん）！！」

ーーーシュウゥゥゥゥゥゥッ！！

シェンウーモンが叫んだ瞬間に、再び辺りは深い霧に覆われ始め、リヴァイアモンに幻覚を見せようとリヴァイアモンの頭部を霧が覆い始めた。

しかし、リヴァイアモンは慌てずに自身の巨大な二本の尾を振り抜く。

「同じ手は食わん！！カウダッ！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオン！！！！！

「何じゃと！？」

リヴァイアモンが二本の尾を振り抜くと共に、海を作り上げていた海水が全て吹き飛び、海底が姿を現してしまった。

その事に驚愕しているシェンウーモンは海水と共に吹き飛ばされそうに成るが、その直前でブラックがシェンウーモンの体の下に潜り込み、シェンウーモンの体を上空に持ち上げた。

ーーーバシャアァァァァァン！！

「グウッ！！早く体を浮かばせろ！！」

「すまん！！」

シェンウーモンの体を海面から持ち上げたブラックだったが、その重さにそんなに持ち上げる事が出来ず、慌ててシェンウーモンに向かって叫ぶと、シェンウーモンは慌てて体を浮かせた。

それを確認したブラックは、シェンウーモンから離れて、一撃で辺りの海水を吹き飛ばしたリヴァイアモンに信じられないと言う表情を向ける。

「とんでもない奴だ。この辺りの海水を全て吹き飛ばして海底を見える様にするとは、成るほど七大魔王と呼ばれるだけの事は在るな」

海底にシェンウーモンと共に着陸しながらブラックは呟くと、自

身の後方に姿を現した遺跡を睨み付ける。

「・・・・・この遺跡の中に七大魔王のデジタマと『思い』のデジメンタルが封印されている訳か」

「その通りじゃ。だからこそ此処から先に行かせる訳にはいかん」

ブラックの言葉に答えながらシェンウーモンは呟くと、ブラックも自身の目の前で同様に海底に着地したリヴァイアモンに目を向ける。

「悪いが此処から先には行かせんぞ！」

「ほう、貴様はルーチェモンの奴が言っていた究極体か。この吾に挑むとは、その愚かさを胸に刻みながら死んで行け！！！」

ーーーブオン！！

「チィッ！！」

叫ぶと共に動かされたリヴァイアモンの尾の一つをかわしながら、ブラックは舌打ちを行い、再び空に浮かぶと赤いエネルギー球を生み出し、リヴァイアモンの長い顎に向かって投げ付ける。

「ムン！！」

ーーードン！！

ブラックの投げ付けた赤いエネルギー球は寸分違わずにリヴァイアモンに直撃するが、リヴァイアモンはダメージを受けた様子も見

せず、寧ろ笑い声を上げ始める。

「ガハハハハハハハッ！！！何だ今の一撃は！？蚊に刺されたダメージも受けんぞ！！」

「クッ！化け物が！！」

リヴァイアモンのバカにした笑い声に、ブラックは悔しそうな表情を浮かべて叫んだ。

ハッキリ言えば、ブラックが狙いを絞らなくてもリヴァイアモンに技を放てば確実に当たるだろう。

何故ならばリヴァイアモンの体は巨大過ぎる為に、狙いを付ける必要が無くても勝手に放てば確実に当たる。だが、その巨大さ故にリヴァイアモンの耐久力は凄まじく高く、究極体が放った技とは言えダメージを与える事が出来ないのだ。

その事が今の攻撃で分かったブラックは悔しそうな表情を浮かべるが、すぐに表情を真剣に戻し、連続でエネルギー弾をリヴァイアモンに向かって放ち始める。

「ウォーブラスターー！！」

ーーードドドドドドドドドドドッ！！

次々とブラックはエネルギー弾を放ち、リヴァイアモンにダメージを与えようとするが、やはりリヴァイアモンは連続エネルギー弾を喰らってもダメージを受けた様子を見せずに、再びブラックに向かって尾を振り下ろそうとする。

「消えろ！！」

ーーーブオン！！

「させんぞ！！双竜波ッ！！」

ブラックに向かって尾が激突しようとした瞬間に、シェンウーモンが二つの口から凄まじい勢いの水流を放ち、リヴァイアモンの尾の照準を僅かに狂わせ、ブラックへの一撃を空振りにさせた。

それと共にシェンウーモンはブラックに一方の首を動かし叫ぶ。

「ブラックウォーグレイモンよ！！時間を稼げ！！海水が戻って来れば勝機が在る！！」

「分かった！ガイアフォースッ！！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！！

シェンウーモンの言葉に答えながらブラックは作り上げていた巨大な赤いエネルギー球ーガイアフォースを投げ付け、巨大な爆発を起こすが、やはりリヴァイアモンは堪えた様子を見せずに二本の尾をブラックとシェンウーモンに向かって振り抜き始める。

ーーーブオン！！

『クッ！！』

迫り来る巨大な二本の尾をブラックとシェンウーモンは全力でかわし続け、隙在らば攻撃を繰り出すが、一向にリヴァイアモンにはダメージを与える事が出来なかった。

しかし、現在の状況は実を言えば、ブラックとシェンウーモンに取ってはリヴァイアモンを倒せる絶好のチャンスでも在るのだ。何

故ならばリヴァイアモンの目的はブラックとシェンウーモンの背後に在る遺跡の奥深くに封印されている自分と同様に七大魔王に属するデジモンのデジタマ。
その為に全力で攻撃してしまえば遺跡が崩れてしまう可能性が在るからこそ、リヴァイアモンは全力で攻撃する事が出来ない。その為に二本の尾を振り回すだけで留まっているのだ。
もちろんその事はブラックとシェンウーモンも分かっているので、何とか今の内にリヴァイアモンに攻撃を加え、倒そうとしているのだが、ブラック達の攻撃は一向にリヴァイアモンにダメージを与えられず、シェンウーモンが切り札を使う為に必要な海水も未だに戻って来ない為に、リヴァイアモンの二本の尾をかわし続け、隙在らば攻撃を加えると言う戦法を取るしかない状況なのだ。
しかし、その戦法も徐々に限界に近付いていた。シェンウーモンにしろブラックにしろ、次々とリヴァイアモンが振り下ろして来る巨大な尾を全力でかわし続けている上に技を連発し過ぎた為に、体力が限界に近付いて来てしまった。

「ハア、ハア、ハア、ハア、正直そろそろ限界だぞ」

「ハア、ハア、ハア、ハア、同感じゃな。全く、本気で厄介な相手よのう」

ブラックとシェンウーモンは一時的に攻撃が止んだ隙に、海底の地面へと着地し、息を切らせながらリヴァイアモンを睨み付けるが、二人の体は正直ボロボロと言う表現が相応しいほどに傷付いていた。
確かにブラックとシェンウーモンは一撃もリヴァイアモンの攻撃を受けていないが、振り下ろされた時の衝撃波をかわす事が出来ず、徐々に衝撃波に寄ってダメージを受けていたのだ。

「・・・・海水も未だに戻って来る様子を見せん。本気で何処まで

吹き飛ばされたのだろうな？」

「分からんが、正直もう打つ手が思い浮かばんぞ」

既にブラックとシェンウーモンは自身の限界が近付いて来ている事を悟り、何とか状況を好転させようと考え始めるが、その瞬間に。

ーーービィィィィーーー！！！

「グアァァァァァーーーー！！！」

「ッ！！シェンウーモンッ！！」

突如として背後に在った遺跡の壁を貫いたレーザーがシェンウーモンの足を貫き、シェンウーモンは苦痛の声を上げながら体を地面に付した。

それを見たブラックは驚愕の表情を浮かべながら、レーザーの放たれた壁に目を向けて見ると、壁の影からマシーンの様なデジモン―ギズモン：ATが姿を現す。

ーーーピピピピッ！！

「ッ！！ギズモン！！まさか！？」

壁の影から姿を現したギズモン：ATの姿を見たブラックは驚愕の表情を浮かべて、辺りを見回すと、上空には何時の間に五隻の管理局の艦艇が存在し、ブラックとシェンウーモンを囲む様に次々と魔法陣が現れ、合計二十体近くのギズモン：ATがブラックとシェンウーモンを取り囲んだ。

「クッ！！寄りにも寄って！！」

自身と前足がデータ粒子に変わり始めたシェンウーモンを取り囲んだギズモン：ＡＴの姿を見たブラックは険しい表情を浮かべて叫ぶが、ギズモン：ＡＴは構わずにブラックとシェンウーモンに向けて眼球と構え出す。

その様子を面白そうに眺めていたリヴァイアモンは笑い声を上げ始める。

「ガハハハハハハハッ！！！これは傑作だ！真に世界を想っていた者達が、世界を守るなどとほざいていた愚か者達に滅ぼされる！！これは最高の傑作だぞ！！」

「クッ！！笑っていられるのも居られるのも今の内だ。俺とシェンウーモンが死んだ後には、ギズモンどもは貴様を狙うぞ！！」

「それこそ有り得ん。このデジモン達を生み出したのは倉田だ。吾ら七大魔王には攻撃出来んようにプログラムされている！！」

「おのれッ！！」

リヴァイアモンの叫びに、ブラックは険しい表情を浮かべてギズモン：ＡＴを睨み付けた。

確かにリヴァイアモンの言うとおり、ギズモン：ＡＴはリヴァイアモンには全く目を向けず、ブラックとシェンウーモンだけを攻撃した。つまり、ギズモン：ＡＴはルーチェモン達こそが真の主と言う事だ。

恐らくその事を上空に浮かぶ五隻の艦艇の中に居る局員達は知るまい。今の状況も疲弊しているブラックとシェンウーモンから倒そうとギズモン：ＡＴは動いたと思っているのだろう。

「・・・・・ブラックウォーグレイモンよ・・・・・・御主は逃げられるか？」

「・・・・・・無理だ・・・・周りを取り囲まれている上に・・・・それだけの体力など残ってはいない・・・・・如何やら俺も此処までのようだ。だが」

苦痛に苦しみながらも呟いたシェンウーモンの言葉に、ブラックは考える様な表情を浮かべるが、すぐに無理だと答えた。

しかし、その様な状況で在りながら、ブラックは周りに居るギズモン：ＡＴにドラモンキラーを構え出す。

「最後まで戦うだけだ。俺はそう言う奴だからな」

「成らば、何も出来ずに死ぬが良い！！やれ！ギズモンども！！」

ブラックの言葉にリヴァイアモンは非情の叫びを上げ、ブラックとシェンウーモンを囲んでいた二十体のギズモン：ＡＴ達がレーザーを放とうとする。

それを見たブラックは身構え、全力で攻撃を繰り出そうとギズモン：ＡＴ達に向かって駆け出す。

「ウオォォォォォォーーーーー！！！！！」

ブラックは全速力で駆け出し、ギズモン：ＡＴに向かって攻撃を加えようとするが、その前にギズモン：ＡＴのエネルギーチャージは終了し、傷付き動けないシェンウーモンと飛び掛って来るブラックに向かってＡＴレーザーが一放たれなかった。

「ポジトロンレーザーー！！！」

「ガイアフォース！！！」

「エアセフィロートクリスタルッ！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

『なっ！？』

ギズモン：ＡＴがＡＴレーザーを放とうとした瞬間に、上空から蒼いレーザー砲、高熱のエネルギー球、十個のクリスタルがギズモン：ＡＴ達に向かって降り注ぎ、ブラックとシェンウーモンを囲んでいた二十体のギズモン：ＡＴ全機が吹き飛んでいった。

それを見たリヴァイアモン、シェンウーモン、そしてブラックが驚愕の表情を浮かべて、技が降り注いだ空の方に目を向けて見ると、ウォーグレイモン、オファニモン、そしてインペリアルドラモン・ドラゴンモードと、その背に乗った太一、大輔、賢が姿が在った。

護れ！！七大魔王のデジタマ！（後書き）

次回予告

ブラックとシェンウーモンの危機に駆け付けた太一達。

しかし、彼は未だに悩んでいた。

悩みを抱えながらウォーグレイモンと共に遺跡内部に入り込み。

七大魔王のデジタマとデジメンタルを回収しようとする。

しかし、再びナンバーズが立ち塞がる。

次回、漆黒の竜人と少女、『新たなる勇気！豪傑の竜戦士！！』

悩みを抱えながらも彼らは進む。それが呼ぶのは新たなる勇気。

新たなる勇気！豪傑の竜戦士！！

ブラックは目の前の光景を信じられなかった。いや、信じたくなかったと言う方が正しいだろう。

上空でリヴァイアモンと吹き飛ばされたギズモン：ＡＴ二十体を険しい表情を浮かべて睨み付けているオファニモン、ウォーグレイモン、インペリアルドラモン・ドラゴンモードと、インペリアルドラモン・ドラゴンモードに背に乗った太一、大輔、賢、何れもブラックがこの場所に来る前に別れた者達。

（何故だ！？何故此処に来た！？分かっているのか！？お前達が此処に来ると言う事は人間と戦うと言う事なのだぞ！！）

ブラックはオファニモン達の手を血で染めたくなかった。だからこそ、一人でこの場に来た上に、オファニモン達を突き放すような言葉を言い、別れたのだ。それなのにその者達が目の前に現れたのだから驚愕するのも当然だろう。

だが、オファニモン達はブラックの驚愕には構わずに、ブラックとシェンウーモンを護るかのようにブラック達の前に着地し、リヴァイアモンとギズモン：ＡＴ達に向かってそれぞれ構えを行い出す。

その様子を眺めていたリヴァイアモンは訝しげな表情を浮かべて、オファニモン達を見つめる。

「何だ貴様らは？何故死んだ筈のオファニモンがいるのだ？」

「私は貴様の知っているオファニモンではない！だが、貴様の敵だ！！」

リヴァイモンの質問に対してオファニモンは持っていた金色の槍

を構えて宣言し、ウォーグレイモンとインペリアルドラモン・ドラゴンモードも何時でも飛びかかれるように力を集め始めるが、リヴァイアモンは面白そうな表情を浮かべて、管理局の五隻の艦艇に顔を向ける。

「吾に挑むだと？ガハハハハハハハハッ！！！これを見ても同じ事が言えるのか！！！」

「ッ！！いかん！！ワシの体にしがみ付くのじゃ！！」

リヴァイアモンの叫びを聞いたシェンウーモンはリヴァイアモンの行うとしている事に気が付き、慌てて叫び、その叫びを聞いたブラック、オファニモン、ウォーグレイモンはシェンウーモンの体にしがみ付き、インペリアルドラモン・ドラゴンモードは自身の両前足の爪を地面に深く突き刺し事で、何が在ろうと大丈夫な状態を作り出すが、次に起きた事はオファニモン達の想像を超えていた。

「丁度腹も空いていた所だ！！」

ーーーブオン！！

「跳んだだって！？」

リヴァイアモンは叫ぶと共に、その信じられないほどの大きさを持つ巨体を管理局の艦艇に向かって跳び上がらせ、それに気が付いた五隻の艦艇は慌ててリヴァイアモンから逃げようとするが、リヴァイアモンの巨体から逃れられる筈も無く、全ての艦艇は大きく開けたリヴァイアモンの口の中に入れられ、噛み砕かれる。

「ロストルム！！！」

ーーーバギィィィィィィィィン！！！！

『なっ！？』

リヴァイアモンの口の中に入ってしまった艦艇五隻は、一瞬の内に噛み砕かれ、ブラック達は驚愕の表情を浮かべるが、リヴァイアモンは気にせずに口の中を僅かに動かすと地上に落下し始め、着地する。

ーーーードゴオオオオオオオオオオオン！！！

『グウッ！！』

リヴァイアモンが着地すると共に、凄まじい衝撃が巻き起こり、ブラック達は吹き飛ばされそうになるが、シェンウーモンの体にしがみ付いていたおかげで吹き飛ばされずに済んだ。

しかし、その場に居る者達は信じられないと言う顔をしながらリヴァイアモンの姿を見つめ、インペリアドラモンの背に乗っていた太一が叫ぶ。

「お前！何て事を！？仲間じゃなかったのか！？」

「ガハハハハハハハハハッ！！仲間だと？違うな！あの愚か者どもは最初からこの場にギズモンどもを送るのが任務だったのだ！！役目が終わったのだ。吾が如何しようと構うまい！」

「何て奴だ！？」

「これが七大魔王！！今まで出会ったどのデジモンより残虐だ！！」

笑い混じりのリヴァイアモンの宣言に、大輔、賢は恐怖の表情を浮かべてリヴァイアモンに向かって叫んだ。
目の前に居るリヴァイアモンに比べれば、十年前に戦ったベリアルヴァンデモンの方がまともに見えるだろう。最初からギズモンを送る為だけに管理局の人間を送ったと成れば、管理局の人間は捨て駒だったと言う事だ。
在る意味では管理局の人間達は哀れを通り越しているだろう。世界を救う為に彼らは動いている積もりだったが、その実はルーチェモン達にだた利用され、世界を滅ぼす為に動いている。真実が明らかに成った時には、発狂する局員が出てもおかしくないほどの道化だ。
その事に関してはブラックやシェンウーモンは全く気にしていないが、オファニモン達に取っては辛いだろう。
だが、ブラックは今の状況を作ってくれたリヴァイアモンに内心では感謝していた。

（奴からすれば自身の力を示す為に管理局の愚か者どもを殺したのだろうが、これで敵はリヴァイアモンとギズモン、そして何処かに隠れているだろうナンバーズどもだけだ。何とかこいつ等の手を血で染めずに済んだ。だが、それでも状況は最悪だ。シェンウーモンはギズモンの攻撃で前足を一つ失った上に、今も傷は広がり続けている）

ギズモンの攻撃で最も厄介なのは、その攻撃を喰らった事に寄って生み出された傷を治す事が出来ないと言う事だ。ギズモンの攻撃は対デジモン用に特化されている為に、掠り傷でも致命傷と呼べるほどの傷に成ってしまう。しかも、その傷の部分から更に体を破壊され、最終的にはギズモンの攻撃を喰らったデジモンは消滅してしまう。

それは四聖獣で在るシェンウーモンも例外ではない。このまま行けば遠からず死んでしまうだろう。

（ヒカリの力ならば或いは治癒できるかも知れんが、今の状況では治療など行ってはいられんし・・・・・こうなれば方法は一つだな）

そうブラックは内心で呟くと、シェンウーモンに顔を向け、質問する。

「シェンウーモン。『思い』のデジメンタルは人間ならば誰でも使えるのか物なのか？」

「・・・・・可能じゃ。アレは人間の強き思いに反応するものじゃからのう。しかも、ワシと御主がリヴァイアモンと戦っていたから、エネルギーも十分に集まっている筈じゃ」

「そうか。成らばやる事は一つだ。ウォーグレイモン！！お前は太一達と共に遺跡に入り七大魔王のデジタマと『思い』のデジメンタルを回収して来るんだ！！」

『ッ！！！』

ブラックの告げた作戦にその場にいる全員が驚愕の表情を浮かべるが、ブラックは構わずにウォーグレイモンと太一達に話し掛ける。

「今此処にいる者達が全員で挑んでもリヴァイアモンには勝てん！！だが、『思い』のデジメンタルを使って超究極体に成れば或いは奴に対抗できる可能性がある！」

「・・・・・良いのかブラックウォーグレイモン？僕達が共に戦っ

て？」

「・・・・・正直言えば、お前達には戦って欲しくは無い。お前達は未だに思い悩んでいるのだろう？」

ウォーグレイモンに質問に対してブラックは表情を暗くしながら答え、ウォーグレイモン、オファニモン、インペリアルドラモン、そして太一達は顔を俯かせる。

ブラックの言うとおり確かにウォーグレイモン達は未だに思い悩んでいた。人間を殺さなければ先には進めないのか。殺さずに済む方法は無いのか考え続けていたが、結局答えを見つける事は出来なかった。リヴァイアモンのおかげと言うのはおかしいが、管理局の人間と戦う事は無くなったとは言え、それでも答えを見つける事は未だに出来てはいない。

だが、それでも自分達の世界とデジタルワールドを護る為、そしてブラックの力に成る為に、駆け付けたのだ。

「私達全員で戦っても勝てないのか？」

「無理だ。俺とシェンウーモンが全力で攻撃しても全くダメージを与えられなかった。例えお前達が加わっても奴に決定的なダメージを与える事は出来まい。それにナンバーズの事もある」

「アッ！そうか！あいつ等も『思い』のデジメンタルを狙っているから絶対に現れるな！」

「そうだ。だからこそ、戦力を分散させても回収する必要が在る」

大輔の叫びにブラックは頷き、その場にいる全員が背後の遺跡に目を向ける。

ブラック達が全員でリヴァイアモンに挑んでも、恐らく決定的なダメージをリヴァイアモンに与える事は出来ないだろう。その上、ナンバーズ達と言う『思い』のデジメンタルを狙っている者達もいる。だからこそ、戦力を分散させても七大魔王のデジタマと『思い』のデジメンタルを回収する者達が必要なのだ。

その事に気が付いたウォーグレイモン、太一、大輔、賢は頷き、インペリアルドラモンの背から降りて地面に降り立つ。

「分かった！俺達とウォーグレイモンはデジタマとデジメンタルの回収に向かう！」

「頼む！それとお前達も見た管理局の兵器には気を付けろ！奴らの攻撃はデジモン用に特化されている。一撃でも受ければ其処で終わりだと思え！！」

「ああ、ウォーグレイモン！！」

ブラックの言葉に太一は頷き、ウォーグレイモンに向かって叫ぶと、ウォーグレイモンは太一、大輔、賢を抱え、遺跡へと飛び立った。

それを確認したブラックとオファニモン、インペリアルドラモンはシェンウーモンを護る様にリヴァイアモンと、その周りに滞空しているギズモン：ＡＴに向かって構えを行い出す。

「ブラックウォーグレイモン。一つ聞きたい？」

「何だ？」

「リヴァイアモンの周りにいる者達は一体何なんだ？」

「アレからはデジモンの気配が感じられるが？」

オファニモンとインペリアルドラモンの中にある二つの意思はブラックに向かって質問した。

オファニモンにしてもインペリアルドラモンにしても、リヴァイアモンの周りにいるギズモン：ＡＴ達の事は全く知らないので、少しでも情報を得ようとブラックに質問したのだ。確かにギズモン：ＡＴ達の攻撃は全て一撃必殺。その正体を知るのは戦いに置いては重要な事だ。

その事はブラックも十分に分かってはいるが、それでも顔を俯かせ、ギズモン：ＡＴに隠された残酷な真実を伝える。

「アレはデジモンだった者達だ。人間の手により改造され、心と意思を消去された哀れな存在だ」

『ッ！！！』

ブラックが告げた事実にオファニモンとインペリアルドラモンは驚愕の表情を浮かべて、ギズモン：ＡＴ達を見つめた。

まさか、管理局の兵器の正体がデジモンだった上に、その兵器が心と意思を人間の手によって改造されたデジモン達だったとは思っても見なかったのだ。

「もはや、あの者達を救う方法は倒すしかない。それだけがあいつ等を救える唯一の方法だ」

「・・・・・分かった」

「それしかないのならば、俺達は行う！！インペリアルドラモン！！モードチェンジ！！ファイターモード！！」

ブラックの言葉にオファニモンとインペリアルドラモンはそれぞれ答えると、インペリアルドラモンの体が叫ぶと共に変形し始めた。
両前足の部分からは腕が飛び出し、後ろ足が立ち上がり、背中に装備していたポジトロンレーザーは右腕に装備され、竜の頭部は胸の部分に装着され新たな顔が飛び出したインペリアルドラモン・ファイターモードの姿に変形した。

インペリアルドラモン・ファイターモード、世代／究極体、属性／ワクチン種、フリー、種族／古代竜人型、必殺技／ギガデス、ポジトロンレーザー
ドラゴンモードのインペリアルドラモンが全ての力を開放した姿。ドラゴンモードからファイターモードへ変化したことにより、全ての力がコントロール出来るように成った。必殺技は、右腕に装備している『ポジトロンレーザー』を胸にはめ込み、強力なエネルギー波を発射する『ギガデス』に、ドラゴンモードの時同様に強力なレーザーを発射する『ポジトロンレーザー』だ。

「大輔達が戻るまで何としても時間は稼ぐ！！ポジトロンレーザー！！！！」

「ウォーブラスターーーー！！！！」

「セフィロートクリスタル！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオン！！！！！

インペリアルドラモンのポジトロンレーザーとブラックのウォーブラスター、そしてオファニモンのセフィロートクリスタルは全てリヴァイアモンに直撃し、大爆発を起こすが、リヴァイアモンはダ

メージを受けた様子も無く再び二本の尾を振るい、ギズモン：ＡＴもＡＴレーザーを放ち始め、戦いが再開されたのだった。

ブラック達が外で激戦を繰り広げている頃、ウォーグレイモンと太一達は遺跡内部に入り込み、デジタマと『思い』のデジメンタルが封印されている場所を目指していた。

「それで太一さん。七大魔王のデジタマと『思い』のデジメンタルは何処に在るんですかね？」

「・・・・・・・・すまん。聞くのを忘れた」

ーーードガシャアン！！！

大輔の質問に対する太一の答えに、ウォーグレイモン、大輔、賢は思わず転んでしまった。

まさか、自身に満々と言う風に飛び出して来たのに、肝心のデジタマとデジメンタルの場所を聞くのを忘れたとは思っても見なかったのだ。

その様子に太一は本当にすまなそうな表情を浮かべながら、手を合わせ頭を下げる。

「本当にすまん！慌てていて聞くのを忘れてしまった！！」

「いててて、それだったらどうやって探せば！」

「いや、手は在るぞ！本宮のＤ－３ならデジメンタルの反応を調べられる！！役割が違うとは言え、デジメンタルには違いないんだ！

探す事が出来るはずだ！」

「そうか！冴えてるぜ一乗寺！！」

大輔はそう叫ぶと共に自身のＤ－３を取り出し、遺跡内部にあるデジメンタルの反応を調べ始めると、Ｄ－３に反応が映った。

「見つけた！！俺が言う方向に向かってくれ！」

「良し！ウォーグレイモンは辺りを警戒しながら後ろから付いて来てくれ！」

「分かった！」

太一の叫びにウォーグレイモンは頷き、慎重に辺りを警戒しながら大輔が示す方向に向かい始めると、巨大な扉を発見する。

「この先から反応は出ています！」

「分かった！頼むウォーグレイモン！」

「任せてくれ！」

ウォーグレイモンはそう言うと、扉に両腕を当て全力で扉を押し始める。

「ウオォォォォォーーーー！！！」

ーーーギギギギギギッ！！！

ウォーグレイモンが扉を押すと共に、扉は鈍い音を立てながら徐々に開き始め、ウォーグレイモン達が入れるぐらいに扉が開くと、その間から太一達は入り込み中を見回す。

「アッ！！太一さん！一乗寺！！あそこ！！」

中を注意深く見回していた大輔が何かを見つけ、太一と賢が大輔の示す方向を見て見ると、祭壇の様な形をした頂点に光の柱が二つ存在し、それぞれの光の柱の中にデジタマと、腕輪の様な形をして真ん中の部分に宝玉が付いた物ー『思い』のデジメンタルが浮かんでいた。

「アレが七大魔王のデジタマと『思い』のデジメンタル！！」

「・・・・・おかしい。重要な物の筈なのに、何であんな方に無造作に置かれているんだ？」

探していた物を見つけた太一が叫び、賢は無造作に置かれているデジタマと『思い』のデジメンタルに疑問の声を上げるが、大輔は気にせずに祭壇の向かって駆け出す。

「とにかくだ！！さっさと回収してインペリアルドラモン達の救援に向かうぞ！！」

そう大輔は叫び、太一達も祭壇に向かい出すが、突如としてウォーグレイモンはハッとした表情を浮かべて大輔に向かって飛び出す。

「大輔！！伏せるんだ！！」

「へッ？」

ウォーグレイモンの叫びに大輔は疑問の声を上げて足を止めるが、それが命を救った。

ーーードスドスドスドス！！

「ウワァッ！！」

突如として大輔が向かおうとした先にナイフのような物ースティンガーが突き刺さり、大輔が慌てて下がると、大輔の前に突如として銀色の髪の少女ーチンクが出現する。

ーーーシュウン！！

「チッ！デジモンに救われたか！」

「お前はあの時の！？」

チンクの姿を見た大輔は驚愕の声を上げ、太一と賢も驚愕の表情を浮かべると、祭壇の上から声が響く。

「ご案内ご苦労様でしたぁ～！」

「礼を言うぞ」

『ッ！！』

祭壇の上から響いて来た声に、太一達は驚愕の表情を浮かべて祭壇の方に目を向けて見ると、二つの光の柱の前に立つトーレとクアットロの姿が在った。

それを見た太一は険しい表情を浮かべて、トーレ達を睨み付ける。
「そうか！この遺跡に入ってから何か違和感を感じていたけど！今分かったぞ！重要な物が隠されているのに罠が一つも無かった！」
「ッ！！そうか！僕達が入る前に既に君達は侵入して罠を解除していたのか！？」
「ご名答だ。だが、罠を解除したのは良いが、デジメンタルの隠して在る場所が分からなくてな」
「途方にくれていた時に貴方達が入って来て、デジメンタルの場所まで案内してくれたと言う事ですわぁ～。本当にありがとうございました」
賢の叫びにトーレとクアットロは笑みを浮かべながら答えた。
そう、実を言えばトーレ達はブラックとシェンウーモンがリヴァイアモンと戦っていた時から、既に遺跡内部に入り込み『思い』のデジメンタルの捜索を行っていたのだ。
しかし、やはり重要な物を隠しているだけ在って、無数の、しかも強力な罠が沢山在った為に『思い』のデジメンタルの捜索が上手く往かず、罠の排除に集中していた。その上、罠を全て排除したのは良いが肝心の『思い』のデジメンタルの隠されている場所が分からずに、困惑していたのだ。
だが、その時に入って来た太一達が迷わずに『思い』のデジメンタルの隠されていた場所に向かい出したので、姿を消して後を付けていたと言う事だ。
「本当にありがとうございましたわぁ～。それでは『思い』のデジメンタルは頂きますわねぇ～」

「渡さないぞ！！」

クアットロの言葉を聞いたウォーグレイモンは、『思い』のデジメンタルを渡す訳にはいかないと思い、自信のスピードを最大に発揮して、祭壇の上に瞬時に移動する。

「ドラモン！！」

瞬時にクアットロとトーレの前に移動したウォーグレイモンは右腕のドラモンキラーをクアットロに向かって突き出そうとするが、クアットロは全く恐れずに言葉を言う。

「あら？貴方は人間を傷付けられるんですか？」

ーーーピタッ！！

クアットロが言葉を呟いた瞬間に、ウォーグレイモンの突き出そうとしていたドラモンキラーが動きを止め、クアットロは笑みを浮かべトーレに向かって叫ぶ。

「今よチンクちゃん！！」

「フッ！！」

「クッ！！」

クアットロは叫ぶと共に、ウォーグレイモンの後方からチンクがスティンガーを投げ付け、ウォーグレイモンは弾き飛ばそうと左腕を振るおうとするが、その瞬間にチンクが叫ぶ。

「ＩＳ発動ランブルデトネイターー！！！」

ーーードドドオドドドドドドッ！！

「ウワァッ！！」

チンクが叫ぶと共にウォーグレイモンに向かっていたスティンガーは全て爆発し、ウォーグレイモンは驚愕の声を上げ僅かに動きが止まってしまう。

その隙にトーレは自身の体から蒼いデジコードを発生させ、バイオ・マッハガオガモンに進化すると、背中のバーニアを噴かせウォーグレイモンに向かって飛び掛り、拳を突き出す。

「貰ったぞ！！ウィニングナックル！！」

ーーードゴオオン！！

「ガハッ！！！」

「ウォーグレイモン！！」

トーレのウィニングナックルを受けたウォーグレイモンは壁へと吹き飛ばされ、太一は叫ぶが、クアットロはその様子に笑みを浮かべる。

「クスッ、笑えますわね。敵が人間だと分かったとたんに攻撃を止めるなんて、本当に笑えますわ」

「お前ッ！！」

クアットロの物言いに大輔は怒りの表情を浮かべて叫び、足を前に出そうとするが、再びスティンガーが足元に突き刺さる。

ーーードスドスドスドスッ！！

「グッ！！」

「一歩でも動けば爆発させる」

チンクはそう大輔を脅すように言葉を言い、壁に吹き飛ばされたウォーグレイモンの方に目を向けて見ると、トーレの拳と両手足から発生させた刃ーインパルスブレードをかわし続けているウォーグレイモンの姿が在った。

ーーーシュン！シュン！！

「クソッ！！」

次々と放たれる拳と刃をウォーグレイモンは悔しそうな声を上げてかわし続けるが、一度もトーレには攻撃を放っていなかった。

その相手で在るトーレは詰まらなそう表情を浮かべて、ウォーグレイモンに攻撃を放ち続ける。

「つまらんな。貴様は漆黒の竜人に似ていたから、少しは楽しめると思っていたが、一度も攻撃を行わないとは・・・・・私の正体が戦闘機人である事が気に成るのか？」

「クッ！！」

トーレの質問に対してウォーグレイモンは悔しそうな声を上げた。
そう、ウォーグレイモンがトーレやクアットロ達に攻撃できないのは、どんな形で在れ、トーレとクアットロ達はデジモンと違って死んでしまえば其処までの存在。先のナンバーズ達の戦いでは彼女達の正体が分かっていなかったのと、戦わねば太一達が危険だと思い戦えた。だが、今のウォーグレイモンはブラックが告げた言葉が呪縛となりトーレと戦う事が出来なくなってしまっていた。

『お前達に人間を殺す覚悟は在るのか？』

（グッ！！駄目だ！僕には出来ない！どんな理由が在っても、一度しかない命を奪う事なんて！！）

ウォーグレイモンは優し過ぎるとしか言えないだろう。その優しさは確かにウォーグレイモンの強さに繋がっていた。だが、今回の戦いではその優しさはウォーグレイモンの強さを抑えるものになってしまった。
敵を倒さねば多くの罪なき命が消え、多くの者達が憎しみと悲しみに苦しんでしまう。しかし、それを止める為に敵の一人間の命を奪えば、その相手の親しい者達も同じように苦しんでしまう。
その事が分かるウォーグレイモンには如何しても戦う事が出来なかった。

「ウオォォォーーーー！！ドラモン！！」

迷いを振り切るかのようにウォーグレイモンは叫び、目の前にいるトーレに向かってドラモンキラーを突き出そうとするが。

ーーーピタッ！！

再びトーレの目の前でドラモンキラーを止めてしまった。
その様子を目の前で眺めていたトーレはウォーグレイモンに向かって嘲りの笑みを向ける。
「フッ、貴様は腰抜けだな。究極体と呼ばれる資格は無い！！」
ーーードゴオン！！
「ガハッ！！」
「ウォーグレイモン！！！！」
トーレは叫ぶと共にウォーグレイモンを殴り飛ばし、再び壁に叩き付けられめり込んでしまった。
その様子を見ていた太一は慌ててウォーグレイモンの方に向かって駆け出し、壁にめり込んでいるウォーグレイモンに声を掛ける。
「ウォーグレイモン！！如何して攻撃しないんだ！お前なら倒せる筈だぞ！」
「・・・・・ゴメン太一・・・・・・攻撃しようとは思っているんだ・・・・だけど・・・・如何しても攻撃できない」
「ッ！！お前もしかして！ブラックウォーグレイモンの言葉を気にして！？」
パートナーである太一にはウォーグレイモンの短い言葉で、ウォーグレイモンの気持ちが分かり、辛そうな表情を浮かべた。
太一にもウォーグレイモンの気持ちは分かる。デジモン、いや生きている他の命を奪ってしまう事が恐ろしいのだ。十年前もその事

で思い悩み続けていた。デジモンを護る為にデジモンの命を奪い続けていた。今度はそれに人間の命まで加わってしまうかもしれない。
その事は太一も恐怖を感じていた。だが、今太一が感じているのはそれだけではない。その事をパートナーが悩み続けていたのに、気が付かなかった自身に苛立ちを覚えていた。

「・・・・ウォーグレイモン。俺にもお前の悩みに答える事はやっぱり出来ない。その答えは俺に分からないから」

「太一・・・・・・」

太一とウォーグレイモンは同様に悲しみの表情を浮かべて見つめ合い、その様子にクアットロは言い知れない不安を感じる。

「（何ですのこの不安は！？私の中のデジモンの本能があの二人を恐れている！あの二人をこれ以上会話させてはいけない！！）トーレ姉様！チンクちゃん！！すぐにあの二人の息の根を止めなさい！！」

『分かった！！』

クアットロと同様に不安に襲われていたトーレとチンクは頷き、トーレは自身の口を太一とウォーグレイモンに向け大きく開け、チンクも再びスティンガーを取り出す

「ハウリングキャノン！！」

「ムン！！！」

『太一さん！！』

トーレは咆哮と共に超音波攻撃を放ち、チンクも構えていたスティンガーを投げ付け、大輔と賢は太一に向かって叫びが、太一は自身の背後から迫る攻撃に構わずにウォーグレイモンに自身の思いを叫ぶ。

「だから一緒に見つけよう！俺達が進むべき道を！！」

ーーーピカァァァァァン！！！

『なっ！？』

太一が叫ぶと共に太一の持っていたデジヴァイスが光り輝き、トーレとチンクの攻撃を掻き消し、太一とウォーグレイモンは光の中に消えていった。

全てが真っ白に染まった空間の中で太一と、そしてウォーグレイモンから元のアグモンへと戻ってしまったアグモンは二人で向き合っていた。

「アグモン。俺はずっと悩んでいた。俺はデジモンと人間が共存出来る世界を作りたい」

「僕もだよ。僕もデジモンと人間が互いに幸せに笑い合える世界を作りたいんだ。僕や太一見たいにね」

太一とアグモンは互いに自分達の思いを言い合い、手を伸ばし合おうとするが、その直前で何処からとも無く声が響く。

（その様な世界が本当に創れるのですか？）

『ッ！！』

突如として響いた声に太一とアグモンは驚愕の表情を浮かべるが、声は構わずに言葉を続ける。

（もう一度聞きます。デジモンと人間が共に笑い合える世界など本当に創れるのですか？互いに憎しみ合い、滅ぼし合う状況に在りながら、その様な世界が創れるのですか？）

「・・・・分からない。でも、俺は創りたいんだ。デジモンと人間が笑い合える世界を」

（その為にはデジモンを滅ぼそうとしている者達を滅ぼすのが一番早いでしょう。その方法を行うのですか？）

「そんなんじゃ駄目だ！そんな方法は支配と変わりない！」

（ならばどの様な方法で共に歩む世界を創るのですか？）

声の主はそう質問を繰り返し、太一とアグモンは顔を見合わせ頷き合う。

「答えは分からない。だから、探そうと思うんだ。デジモンと人間が再び共存出来る方法を、アグモンと一緒に」

「敵を倒さなくちゃいけないかも知れない。だけど、絶対に見付けてみせる。太一と一緒に」

（・・・・・合格とは言えませんが、希望と呼べるに相応しい答えです。二人目の選ばれし者よ）

太一とアグモンの言葉にそう声が答えた瞬間に、太一のデジヴァイスが再び光り輝き、銀色の縁取りがあるディーアークへと形を変え、太一はそれを見つめる。

「・・・・・俺がヒカリの言っていたもう一人の選ばれし者だったんだな。イグドラシル」

（そう、あの時に貴方のデジヴァイスにも私の力を宿していた。だけど、あの時の貴方達にはそれを得る資格は無かった）

太一の質問に対して声ーイグドラシルは思い悩むような声を出し、太一とアグモンは内心で納得する。

確かにルーテシアの戦いの時には、太一とアグモンは何処かでブラックの告げた事実を楽観視していた。その為にイグドラシルは太一のデジヴァイスに力を宿しても解放はさせなかったのだ。

だが、今は違う。太一とアグモンは全てを知っても先に進む事を選択した。だからこそイグドラシルは太一とアグモンに力を与えたのだ。

（最後にもう一度聞きます。デジモンと人間が共に暮らせる世界を創れるのですか？）

「絶対に創ってみせる！その為に俺達は進む！」

「太一や皆と一緒に創って見せるよ！！」

（・・・・・本質は未だに分からない。その本質を見せる事ですね。では）

ーーービキビキビキビキッ！！！

イグドラシルが最後の言葉を告げると共に、空間の至る所に罅が入り始め、太一は持っていたディーアークをアグモンに向け笑みを浮かべる。

「アグモン！俺さ！実を言えば嬉しいんだ！お前と一緒に戦えるのがさ！！」

「僕もだよ太一！！」

二人が互いに笑みを向け合うと、太一はディーアークを持っていない右手をアグモンに向かって突き出し、アグモンも右手を突き出しぶつけ合う。

「お前一人に罪は背負わせない！一緒に探そうぜ！デジモンと人間が共存出来る方法を！」

「うん！一緒に探そう太一！！」

そう互いに自身の思いを叫んだ瞬間に、太一の持っていたディーアークが光り輝き、太一はディーアークを胸に当て自身の体をデータ化させながら叫ぶ。

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「マトリクスエヴォリューション！！」

「アグモン進化！！」

ディーアークから音声が響き、太一とアグモンは同時に叫びながら二人の体は一つに成り、オレンジ色の光が消滅しかかっている空間内部に満ち溢れ、光が収まると其処には外見はウォーグレイにモンに似た姿をしているが、両手に装備されていたドラモンキラーが存在せず、変わりに巨大な破砕剣ードラモンブレイカーを持ったデジモンが立っていた。その名も。

「ビクトリーグレイモン！！！！」

ビクトリーグレイモン、世代／究極体、属性／ワクチン種、種族／竜人型、必殺技／ドラモンブレイカー、トライデントガイア、ビクトリーチャージ

超金属『クロンデジゾイド』の鎧を身にまとうウォーグレイモンの亜種の竜人型デジモン。“豪傑の竜戦士”とも呼ばれ異名を持ち、巨大な破砕剣『ドラモンブレイカー』を軽々と振り回し、独特の剣技で相手に向かって粉砕する。必殺技は、『ドラモンブレイカー』を2つに分離させて両腕に装着し、大気中に存在する全てのエネルギーを剣の先端に集中させて相手に向かって撃ち出す『トライデントガイア』に、『ドラモンブレイカー』豪快に振り回し、相手に向かって叩きつけて粉砕する『ドラモンブレイカー』。そして『ドラモンブレイカー』を使って、相手の攻撃をそのまま跳ね返す『ビクトリーチャージ』だ。

ーーーバキィィィィィン！！！

ビクトリーグレイモンが姿を現すと共に、空間は完全に砕け散り、元の祭壇の在る空間に戻った。

それと共にビクトリーグレイモンの姿を見た大輔、賢、そしてトーレ達は驚愕の表情を浮かべて、ビクトリーグレイモンを見つめる。

「一乗寺！アレってもしかして！！」

「ああ！多分！ヒカリさんとテイルモンと同じように太一さんとアグモンが融合進化した究極体だ！」

ビクトリーグレイモンに姿を見た大輔と賢は驚愕の表情を浮かべて、ビクトリーグレイモンの正体を叫ぶが、トーレは先ほどのウォーグレイモンの様子を思い出し、嘲りの笑みをビクトリーグレイモンに向ける。

「フッ！新たな進化を果たしたようだが、所詮貴様は腰抜けには変わらん。すぐに化けの皮を剥いでやる！！」

ーーービュン！！

トーレは叫ぶと共にビクトリーグレイモンに向かって飛び掛かり、背中のバーニアを噴かせ推進力を最大にすると、ビクトリーグレイモンの周りを包囲し、超高速連打を放とうする。

「喰らえ！ガオガトルネ…」

ーーーガシッ！！

『なっ！？』

トーレがガオガトルネードを放とうとした瞬間に、ビクトリーグレイモンはトーレの動きを読み取り、拳が放たれる前に拳を受け止

め、ガオガトルネードを不発に終わらせた。
その様子を見たクアットロ、チンクは驚愕の声を上げるが、ビクトリーグレイモンは構わずにトーレに拳を放つ。

「ムン！！！」

ーーードゴオオオン！！

「ガハッ！！」

「トーレ！！」

ビクトリーグレイモンの拳を胸に喰らったトーレは壁に向かって吹き飛ばされ、チンクは驚愕の声を上げるが、瞬時にスティンガーを取り出し、ビクトリーグレイモンに向かって投げ付ける。

「喰らえ！！」

ーーーシュンシュン！！

チンクが投げ付けたスティンガーはビクトリーグレイモンに向かい出し、ビクトリーグレイモンはドラモンブレイカーを構え出す。
その様子を見たチンクは先ほどと同じようにスティンガーを爆発させようとＩＳを発動させようとする。

「貰った！ＩＳ発動ランブル…」

「ビクトリーチャージ！！」

「なっ！！ウワァァァァァーー！！」

ーーードドドドドドドゴオンッ！！

チンクのＩＳが発動する前に、ビクトリーグレイモンはドラモンブレイカーを使って全てのスティンガーをチンクに向かって跳ね返し、チンクは自身の能力を止める事が出来ず、悲鳴と共に爆発に飲み込まれた。

その様子を見ていたクアットロは焦りの表情を浮かべて、自身の横の光の柱の中に入っている『思い』のデジメンタルに手を伸ばす。だが。

ーーースルッ！！

「ッ！！立体映像！！そんな！それでは本物は何処に！？」

クアットロの腕は光の柱の中に浮かんでいた『思い』のデジメンタルを通り抜け、クアットロは光の柱の中に浮かんでいた物が、良く出来た映像だと気が付き、更に慌てて本物を探そうとするが、そんな時間は存在していなかった。

「ドラモン！！！！！」

「ハッ！」

頭上から響いて来た叫びに、クアットロは驚愕の表情を浮かべて自身の頭上を見てみると、ドラモンブレイカーを振り回しながら落下して来るビクトリーグレイモンの姿が存在していた。

「ヒィッ！！！」

ーーーシュウン！！

自身の頭上で技を放とうとしているビクトリーグレイモンの姿を見たクアットロは恐怖の声を上げて逃げようとするが、恐怖からか足が竦み動けずに居た。

その様子を目撃したビクトリーグレイモンは、僅かにクアットロから照準をずらし祭壇に向かってドラモンブレイカーを振り下ろそうとするが、その瞬間。

ーーーードゴオオオオオオオオオオオン！！！

「なにっ！？」

突如としてビクトリーグレイモンの横の壁からクワガタの角のようなカギ爪が付いた巨大な腕が飛び出し、ビクトリーグレイモンに向かって殴り掛かって来る。

「くっ！！」

ーーーガアァァァン！！！

巨大な腕が自身に襲い掛かって来るのを見たビクトリーグレイモンは、瞬時にドラモンブレイカーを盾のように構え、巨大な腕を防御し辺りに甲高い音が鳴り響いた。

その様子を見ていた大輔、賢は、巨大な腕の主の正体に気が付き、驚愕の表情を浮かべながら顔を見合わせる。

「オイッ！一乗寺！！あの腕って！？」

「ああっ！間違いない！あの腕は！！」

ーーードゴオオオオオオオン！！

大輔と賢が腕の主の正体に気が付き顔を見合わせた瞬間に、腕が生えていた壁が全て吹き飛び、其処から肩や腰に虫の翼を生やした巨大な虫型デジモン―タイラントカブテリモンがその姿を完全に現した。

「『思い』のデジメンタルは絶対に手に入れさせて貰うぞ！！」

「待って！君達は勘違いをしている！！確かにブラックウォーグレイモンは君のパートナーの母親を傷付けた！だけど！！」

ビクトリーグレイモンはタイラントカブテリモンを説得しようと叫ぶ。

だが、次の瞬間に。

「ＩＳ発動！！ライドインパルス！！」

「ハッ！！」

ーーーガキィィィン！！

突如として後方から響いた声にビクトリーグレイモンは慌てて、自身の後方にドラモンブレイカーを構え、トーレのインパルスブレードを受け止め鍔迫り合いを行い始める。

ーーーギギギギッ！！

「クッ！悪いが貴様は自由にはさせんぞ！！」

「それはこちらも同じだ！！」

トーレの叫びに対してビクトリーグレイモンも叫び返し、二人は空中での激突を再開する。

その隙にクアットロはタイラントカブテリモンに向かって、自身が立っている祭壇を示しながら叫ぶ。

「タイラントカブテリモン様！！この祭壇に腕を振り下ろして下さい！！恐らくこの中に在りますわ！！」

「分かった」

クアットロの言葉にタイラントカブテリモンは頷き、ブースト魔法を使用しながら右腕に力を込め始め、それを見た大輔と賢は慌てた表情を浮かべる。

「不味い！」

「ビクトリーグレイモン！！」

「分かっている！！」

賢の叫びに対してビクトリーグレイモンは頷き、自身とぶつかり合っていたトーレに向かってドラモンブレイカーを振り回し、トーレに向かって振り被る。

「ドラモン！！！！！」

「クッ！！」

ビクトリーグレイモンの行動を見たトーレはかわせないと瞬時に判断すると、両腕のインパルスブレードを体の前に交差させ防御の構えを行い始めるが、ビクトリーグレイモンは構わずにドラモンブレイカーをトーレに向かって叩き付ける。

「ブレイカーーー！！！」

ーーーバキィィィィン！！

「グアァァァァァァーーーー！！！」

ビクトリーグレイモンのドラモンブレイカーを受けたトーレのインパルスブレードは粉々に砕けた上に、トーレへも直撃し、トーレは壁に向かって吹き飛ばされて行き、壁に激突すると気絶し元の女性の姿に戻ってしまった。

それを確認したビクトリーグレイモンはタイラントカブテリモンを止める為に駆け出そうとするが、その直前でタイラントカブテリモンの腕は祭壇に向かって振り下ろされた。

「ムン！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！

ーーーキランッ！

タイラントカブテリモンの一撃に寄って祭壇は粉々に砕け散り、瓦礫の中からデジタマと腕輪の様な形をして、中心に宝玉が埋め込まれたデジメンタルー『思い』のデジメンタルが姿を現した。

「それこそが本物ですわ！！」

「渡さないぞ！！」

デジタマと『思い』のデジメンタルを目撃したビクトリーグレイモンは自身の速さを最大にして瞬時に二つの前に移動し、タイラントカブテリモンと同様にデジタマ『思い』のデジメンタルに向かって手を伸ばす。

「これはお前達には渡さないぞ！！」

「させませんわ！ディエチちゃん！」

「何ッ！？」

クアットロの叫びにビクトリーグレイモンは驚愕の表情を浮かべ、タイラントカブテリモンが出て来た壁の方を見てみると、タンクドラモンに進化していたディエチが二本の砲塔をビクトリーグレイモンに向かって照準を合わせていた。

「ストライバーエネルギーキャノン！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオン！！

「クッ！クソッ！！」

自身に迫り来るエネルギー砲を見たビクトリーグレイモンは悔しげな表情を浮かべて叫び、その場から離れようとするが、離れる直前にデジタマだけは腕の中に抱える。

ーーーガシッ！

ーーービュン！！

「ビクトリーグレイモン！！」

「太一さん！！」

大輔と賢は自分達の目の前に現れたビクトリーグレイモンの背に向かって大輔と賢は叫ぶが、ビクトリーグレイモンは答えずに、『思い』のデジメンタルを手の中に持ったタインラントカブテリモンを睨み付ける。

「やったぞ！これこそが『思い』のデジメンタル！奴に勝てる可能性を秘めた武器！！」

「クスクスクスッ、これでアレが操れますわ」

『思い』のデジメンタルを手に入れた事にタイラントカブテリモンとクアットロはそれぞれ喜びの声を上げ、その間に気絶したトーレとチンクを手に乗せたディエチが二人に近き、元の女性の姿に戻りながら声を掛ける。

「喜ぶのは良いけど。二人ともかなりのダメージを受けているから、早く戻った方が良いよ」

「分かっていますわ。それではさようならですわ。ビクトリーグレイモン」

「待って！！」

逃げようとするクアットロ達に向かってビクトリーグレイモンは叫びが、クアットロ達は構わずにタイラントカブテリモンの手の中に乗り込み、それを確認したタイラントカブテリモンは全ての羽を羽ばたかせて天井へと昇って行き、天井を破壊して外へと飛び立っていった。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ッ！！何だ！？」

「いったい何が！？」

「大輔達に何かあったのか！？」

外でリヴァイアモンとギズモン：ＡＴ達と激戦を繰り広げていたブラック、オファニモン、インペリアルドラモン・ファイターモードは後方から聞こえて来た爆発音に驚愕の声を上げて、後方を見てみると、遺跡の上部を破壊しながら空へと逃げて行くタイラントカブテリモンの姿が存在していた。

「ッ！タイラントカブテリモン！！まさか！？」

「奪われてしまったのか！？『思い』のデジメンタルが！！」

タイラントカブテリモンの姿を目撃したブラックとオファニモンは最悪の状況を予測して、急ぎタイラントカブテリモンの後を追おうとするが、タイラントカブテリモンの姿は空へと溶け込むように

消失する。

ーーーシュウン！

「クッ！クアットロのＩＳか！！」

姿が消えたタイラントカブテリモンの居た場所を見つめながらブラックが悔しげに叫び、オファニモン達も悔しげな表情を浮かべると、遺跡の中から大輔と賢を抱えたビクトリーグレイモンが飛び出して来る。

「すまねえ！『思い』のデジメンタルが奪われちまった！！だけど」

「デジタマは何とか無事です！」

ビクトリーグレイモンに抱えられながら大輔と賢はそれぞれ悔しそうな表情を浮かべて叫び、ブラック達も悔しげな表情を浮かべて僅かに動きが止まってしまう。

その瞬間に、大輔の抱えていたデジタマを見たリヴァイアモンは険しい表情を浮かべて叫ぶ。

「それを渡せ！！！」

『しまっ！！』

叫ぶと共に全力で飛び掛ったリヴァイアモンの姿に、ブラック達は慌ててリヴァイアモンに攻撃を加えようとするが、間に合わずリヴァイアモンはビクトリーグレイモンに飛び掛った。

だが、次の瞬間にリヴァイアモンの横から巨大な影が飛び出し、リヴァイアモンに体当たりを行う。

ーーードゴオオオン！！

「グオッ！！」

『なっ！？』

巨大な影の一撃を受けたリヴァイアモンはその衝撃に寄って、僅かに軌道をずらされ、ビクトリーグレイモンへの突進は不発に終わってしまった。

その様子をブラック達は驚愕の表情を浮かべて、リヴァイアモンに体当たりを行った巨大な影ーシェンウーモンを見つめるが、シェンウーモンは気にせずにブラックに向かって叫ぶ。

「ブラックウォーグレイモンよ！！良くぞ頑張った！後はワシに任せて選ばれし者達と共に逃げるのじゃ！！」

「馬鹿を言うな！お前はギズモンの攻撃に寄って重症を負っているのだぞ！？そんな状態で何が出来る！！」

そうブラックが叫ぶのも無理は無いだろう。既にギズモン：ＡＴに寄って負わされたシェンウーモンの傷は、前足だけではなく甲羅の方や首の方にまで及んでいる。その様な状態ではもはや戦うのは不可能だ。

だが、シェンウーモンは自身の事など気にしていないと言うように笑みをブラック達に向ける。

「なぁに勝機ならば在る。それとワシが今から行う事が終わったら、お前の技で凍らせるのじゃぞ」

「ッ！！シェンウーモン！！貴様はまさか！？」

シェンウーモンの言葉の意味が分かったブラックは驚愕の叫びを上げ、オファニモン達も驚愕の表情を浮かべるが、シェンウーモンは気にせずに笑みを浮かべて、リヴァイアモンを睨み付ける。

「リヴァイアモンよ。お前はワシが倒す。それが貴様に殺され侮辱さえもされたこの地を護っていた者達に出来る最後の供養じゃ」

「ガハハハハハハハッ！！吾を倒すだと？死にぞこないの貴様が出来るのか？」

「聞こえんのか？貴様の破滅の音が？」

「何？」

シェンウーモンの言葉にリヴァイアモンは訝しげな表情を浮かべて耳をすませて見ると。

ーーーゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！！

「ッ！！まさか！？」

凄まじい勢いで何かが戻って来る音がリヴァイアモンの耳に聞こえ、その音の意味に気が付いたリヴァイアモンは驚愕の表情を浮かべて辺りをみまわして見ると、リヴァイアモンが吹き飛ばした海水が巨大な津波と成って戻って来ていた。

「油断が過ぎたなリヴァイアモン。貴様は自身の巨大な力に溺れていたのだ」

「グッ！！成らば貴様が何かをするまえに殺してやる！！」

リヴァイアモンはそう叫ぶと、口を大きく開け、管理局の艦艇と同様にシェンウーモンを飲み込もうとし、残っていた五体のギズモン：ATもシェンウーモンに向かってATレーザーを放とうとする。

だが、その直前で。

「ポジトロンレーザーー！！」

「エデンズジャベリン！！」

ーーードゴオオオオオン！！

ギズモン：AT達がATレーザーをシェンウーモンに向かって放つ前に、インペリアルドラモンが蒼いレーザー光線を、オファニモンは持っていた金色の槍からエデンズジャベリンを放ち、五体のギズモン：ATを消滅させた。

それと共に巨大な赤いエネルギー球を生み出していたブラックはシェンウーモンに向かって大きく口を開けているリヴァイアモンに向かって、全力で投げ付ける。

「ガイアフォーース！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ガバアアッ！！！」

口の中でガイアフォースが炸裂したリヴァイアモンは、流石に口の中からの攻撃にはダメージを受けたのか、悲鳴のような声を上げ、

動きが僅かに止まってしまう。
それを最大にして最後の好機と判断したシェンウーモンは残された全ての力を解放し、戻って来た全ての海水を操る。
「ウオォォォォォォォォーーーーーーーー！！！！！」
ーーーゴオォォォォォォォォーーーーー！！！！！！
「グッ！グァァァァァァァァーーーーー！！！！！」
シェンウーモンの操る全ての海水はリヴァイアモンの体を飲み込むほどの巨大な竜巻を発生させ、天に届くほどの大きさに成った。
「おっ！おのれっ！！」
巨大な竜巻の中心にいるリヴァイアモンは怨嗟の叫びを上げて、竜巻を生み出したシェンウーモンを睨み付けるが、シェンウーモンは構わずに海水を操り続け、リヴァイアモンを拘束し続ける。
その様子を見たブラックは右手をリヴァイアモンを拘束している竜巻に向け、詠唱を開始する。
「悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて、永遠の眠りを与えよ。凍て付け！！エターナルコフィン！！！」
ーーーガチオガチガチガチガチガチ！！
ブラックの詠唱が終了すると共に、リヴァイアモンを拘束していた竜巻と辺りの海水が氷河に変わり始め、リヴァイアモンは怨嗟の視線をブラック達に向ける。

「グオアァァァァァァーーーー！！！！おのれッ！！貴様らは必ず滅ぼす！！吾は滅びんぞ！！」

ーーーガキィィィィィィン！！！！

リヴァイアモンが怨念に満ちた叫びを上げると共に、リヴァイアモンと辺りの海水は全て凍りつき、海を氷河へと完全に変えてしまった。

「グウッ！やはり力を使い過ぎたか」

『ブラックウォーグレイモン！！』

ブラックは氷河に着地する共に膝を付き、オファニモン達は慌ててブラックに駆け寄った。

しかし、ブラックは駆け寄って来たオファニモン達の手を振り解き、シェンウーモンがいる場所に目を向け叫ぶ。

「俺の事は良い！シェンウーモンの方が重要だ！」

『ッ！！』

ブラックの叫びにオファニモン達は驚愕の表情を浮かべて、シェンウーモンの方に目を向けて見ると、体の殆どがデータ粒子に変わってしまったシェンウーモンが、力無く氷河へと付していた。

『シェンウーモン！！』

「・・・・ブラックウォーグレイモン・・・・・選ばれし者達よ・・・・・世界を・・・・・デジモン・・・と・・・・・人間の・・・・

未来を・・・・たの・・・・」

ーーーシュウウゥゥゥゥゥン！！

全ての言葉を言い終わる前にシェンウーモンの体はデータ粒子に変わり、消滅してしまった。

それを見たブラック達は悲しみの表情を浮かべ膝を付くが、ブラックだけはすぐに立ち上がり、リヴァイアモンが封印されている天に届く程の氷山に目を向ける。

「・・・・・リヴァイアモン。今は倒せんが、必ず貴様は俺が倒す！！！！」

そうブラックは氷山の中で眠りに付いているリヴァイアモンに向かって宣言の叫びを上げるのだった。

新たなる勇気！豪傑の竜戦士！！（後書き）

次回予告

シェンウーモンの犠牲により、リヴァイアモンを辛くも封印する事に成功したブラック達はチンロンモンに再び出会い、驚愕の事実が伝えられる。

それと共に元の居場所へと帰る事を決意したブラックはヒカリ達と再び別れ、一人在る物に乗り込む。

次回、漆黒の竜人と少女、『共に戦う者達』

彼らは故郷を去り、世界を護る為に戦う。

特別編、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ完全崩壊前編（前書き）

どうも作者のゼクスです。

今回の話は、ブラック達が原作ＳｔｒｉｋｅｒＳに介入したらの話です。

完全に原作崩壊を起こしています。機動六課？何それ状態に成ると思います。

それにこの話には、ヴィヴィオとギルモンに関するネタばれが含まれて居ます。

以上の内容を心得て、それでも良かったら読んで見て下さい。

特別編、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ完全崩壊前編

それは一人のマッドが在るデジモンのデータを手に入れた時から始まった。

そのデジモンのデータは正に前人未踏、誰もが辿り着く事が不可能だった場所へと誘う事が出来る最高のデータだった。今回の話はそのマッドが完成させてしまった恐るべき道具に寄って災難に塗れた世界の話である。

暗い部屋の中、僅かな明かりしかない部屋で青い髪に赤い瞳を持った白衣を着た女性、フリートは何かの作業をし続けて居ると、突如として作業が終わったのか狂気の笑い声を上げ始めた。

「フフフフフフフッ！ハハハハハハハハハハッ！！遂に！遂に完成しました！あのデジモン、パラレルモンのデータを手に入れてから、苦節八年と三ヶ月と五日の日にちを掛けた上に！他の研究を疎かにしてまで、このアルハザードの技術を総動員して完成させた傑作！」

フリートははそう言いながら作り上げた銃の様な物を掲げ、銃の名を叫ぶ。

「『平行世界に行っていらっしゃいガン』！！我ながら素晴らしい出来栄えと名前です！！！」

フリートは銃を抱えながら自身の作品の出来栄えとネーミングを褒め称えるが、もしこの場に他の者が居ればこう言うだろう。『ネ

ーニングセンス無さ過ぎ』だと言うほどにフリートのネーミングセンスは無かった。
そんな事は気が付かずにフリートは銃を掲げ自身に撃とうとするが、突如として撃つのを止め、絶望の表情を浮かべた。
「・・・・・・しまった。私は此処から出る事が出来ない。平行世界に行く事が出来ないんだった！！」
そうフリートは自分の居る場所から出る事が出来ない存在だった。例えフリートの言葉どおり平行世界に行く事が出来る道具だったとしても、フリートは外の世界に行く事が出来ない存在だったのだ。
「クッ！我が身が呪わしい存在ですね！誰も行った事が無い平行世界に行く事が出来る道具を作ったと言うのに！この体は行く事が出来ないとは！全く持って悔しいです！」
そう言いながらフリートは自分の体に付いて悪態を述べ続け、二十分ほど悪態を付き続けていると、突如として何かを思いついたのか、悪そうな笑みを浮かべて部屋を出て行った。
そして司令室に辿り着くと、その部屋の中に居たブラック、リンディ、ルイン、ティアナ、クダモン、クイント、なのは、ガブモン、ヴィヴィオ、ギルモンの全員に内心で悪そうな笑みを浮かべながら声を掛ける。
「皆さん、素晴らしい物が出来たんですけど」
「・・・・そう言えば、今日は食材を買いに行く日だったわね」
「そう言えばそうだったわね。リンディ行きましょう」

リンディとクイントは関わりたくないと思い、指令室から急ぎ脱出しようとした。
その行動も仕方ないだろう。リンディとクイントはフリートのマッドな部分に寄ってダークタワーデジモンにされてしまったのだから、今回も碌でもない事だろうと思ったのだ。
しかし、フリートは逃がさないと言う様にリンディとクイントの襟首に向かって手を伸ばす。

ーーーガシッ！

「そう逃げないで下さいよ。今回は本当に良い事なんですから、日頃頑張っている皆さんに休暇を与えようと思ったんですよ」

『休暇！？』

フリートの告げた事実にブラック、ヴィヴィオ、ギルモンを除いた全員が疑問の声を上げ、フリートを見つめると、フリートは持っていた銃の力に付いて説明し始めた。
そして数分後にフリートの説明を聞き終えたリンディは頭を抑えながら、クイント達と話し合いを始める。

「まさか、本当に平行世界に行ける道具を作ってしまうとは」

「呆れてものも言えないわね」

「パラレルモンのデータを手に入れた時から怪しい行動をし始めていましたけど」

「こう言う事だったんですね」

リンディ、クイント、なのは、ティアナはそれぞれ困った表情を浮かべて言葉を交し合うが、その間にブラックが詳しい事をフリートに質問していた。

「ほう、つまり行ける世界はこの世界に良く似た世界だけと言う事か？」

「そうですよ。流石に完全に違う平行世界には行けませんが、例えばブラックが居なかった世界や、ブラックの前世の記憶どおりの世界に行く事は可能です」

「良いだろう。平行世界には興味が在る。貴様の言うとおり平行世界に行ってやろう」

「ブラック様が行くのならば私もです！」

「ヴィヴィオも行く！！」

「ギルモンも！！」

ブラックの言葉に追随する様にルイン、ヴィヴィオ、ギルモンは自分達もと言うように手を上に上げ、リンディは頭を更に痛ませる。

「何を言っているんですか！？私達が此処を離れたらどうなると思っているんですか！？」

リンディがそう叫ぶのも当然だろう。休暇が何時までなのかは分からないが、リンディ達が今居る世界から離れてしまえば、デジモン達やルーチェモン達が好き勝手に暴れる可能性が高い。

その事が在るからこそ、リンディはブラック達ー平行世界に行こうとしている者達を止める様に意見を述べるが、フリートは笑みを浮かべてリンディ達ー平行世界に行かないと言っている者達に近づく。

「大丈夫ですよ。あちらの世界で何日居ても、此方の世界では一日程度の事です。そういう風に作りましたからね」

（（（（何気に時間操作も行っている！！））））

フリートの告げた事実にリンディ達は驚愕の叫びを内心で上げながら、フリートを信じられないと言う表情を浮かべて見つめた。

平行世界。時間操作。どちらも魔法では不可能とされているものなのに、フリートはそれを平然と成し遂げた。このまま行けばアルハザードでも、オファニモン達でも不可能だった死者蘇生の領域にまで踏み込んでしまいそうだとリンディ達は内心で恐怖するが、ルイン達は構わずに平行世界に行く準備を始めていた。

「ヴィヴィオちゃんは久しぶりのお外ですから、今まで着る暇がなかったお洋服を沢山着ましょうね」

「うん！ルインお姉ちゃん！」

「休暇か。そう言えば訓練や捜査などでゆっくりする暇が無かったなガブモン」

「そうだね。たまには良いかもしれないねクダモン」

「ギルモンも楽しみ！グラニも行って良いのかな？」

平行世界に行く事を決めていた者達はそれぞれ準備をし始め、ガブモンやクダモンまでも行く事に乗り気だと分かったなのはとティアナは頭を抑えながらリンディに声を掛ける。

「・・・・リンディさん。もう止めるのは無理ですよ」

「寧ろ止めたら、私達が白い目で見られそうな気がします」

「・・・・・止めるのは無理ね」

目の前の光景にリンディはもう反論する気も起きないのか、呆れた様な表情を浮かべて、自身も平行世界に行く準備をし始めた。

その様子を見たなのは、ティアナ、クイントも顔を見合わせると、リンディと同じようにそれぞれ準備をし始め、一時間後にはフリートを除いた全員が平行世界へと旅立って行った。

平行世界、その世界ではブラックが現れず、正規の歴史どおりに事は動き、当然ながら機動六課は歴史どおりに生まれていた。

機動六課一部隊長室では聖王教会から送られてきた機密文章を険しい表情で見つめているはやてが存在していた。

「・・・・今更追加の詩文やて？公開意見陳述会も間近に迫ったこの時期に？」

聖王教会から送られて来た聖王教会に居る在る人物のレアスキル“預言者の著書”に寄って書かれていた詩文を眺めながらはやては頭を抱えていた。

“預言者の著書”それは未来を詩文の形で予言し、近い将来に起きる出来事を知る事が出来るレアスキルなのだが、発動条件が厳しい上に、その文章の難解さから扱い難しいレアスキルなのだ。
しかも、本来ならば年に一度しか使えないレアスキルなのだが、今回は偶然にも条件が再び舞い降りて来たので、聖王教会は最初に書かれていた予言を寄り具体的に明らかにしようとしたのだが、逆に疑問が増える状況に成ってしまった。
新たな予言が出現してしまったのだ。

「『天に死せる王の嘆きが響き渡る時、交わる事無き、異界の者達は怒り狂い、無限の欲望の野望は砕け散る。
不屈の心を胸に宿す蒼き鉄の狼、星を打ち砕く光を解き放ち、死者達を沈黙に伏させる。
絆の果てに現し、赤き鎧にその身を包み込んだ聖なる騎士、全てを撃ち抜き、人々を脅威から護らん。
王をその身に宿す聖騎士、赤き鎧船にその身を乗せ、天に浮かぶ翼の内より、死せる王を救わん。
世界に否定されし深き闇を従えた黒き竜人、その身の因子を宿し二つの異形となりし者達ともに、深き闇を打ち砕く。
されど、彼の者達は法の味方に在らず、彼の者達は自身の真の思いのままに、動く者達なり』」

手に持つ詩文の内容を読み上げ、はやては内容を少しでも解読しようとするが、その意味さえも分からず頭を更に抱える。
「あかん・・・・文章の意味さえも分からんわ・・・・それにしても、まるでヒーローが駆け付けて、全部解決してくれるみたいな内容やけど。法の味方や無いって、如何言う事や？」
文章の最後の一文に書かれた文字を見ながら、はやては疑問の声

を上げた。
法の味方ではない。つまり管理局の味方ではないと言う事だ。
しかし、はやてが知る限り、今回の事件には他の犯罪組織が関わっている様子は無いし、犯罪組織が好き好んで人々を護るとは、はやてには思えなかった。

「・・・・ハア～、全く分からんわ。まあ、解読に付いては聖王教会とクロノ君に任せて、私らは目の前に迫った公開意見陳述会に付いて考えようか」

そうはやては呟くと、持っていた詩文の書かれた紙を机の上に置き、目の前に迫った公開意見陳述会の警護に付いて考えるのだった。

平行世界へと渡ったブラック達は、ミッドチルダに程近い世界でバカンスを楽しんでいた。

「キャハハハハハッ！ギルちゃん！冷たいよ！！」

「ヴィヴィオだって！」

泊まっているリゾートホテルの内部に在るプールではヴィヴィオとギルモンが嬉しそうに遊び続け、その様子をプールサイドからなのはとカブモン、ティアナとクダモンは苦笑を浮かべながら見つめていた。

「ヴィヴィオやギルモンは楽しそうだね」

「そうだね。このホテルは使い魔も自由にして良いって言う場所だ

から、ヴィヴィオ達も嬉しいんだよ」

「それにしても、良くこんなホテルをリンディさん知ってしましたよね」

「元々リンディは以前から休暇を取れる場所を探していたらしい。平行世界とは言え、場所は変わらんから、このホテルに滞在する事にしたのだろう」

ティアナの疑問にクダモンが答え、ティアナ達は納得の表情を浮かべると、プールサイドに置かれていた椅子に座り、険しい表情をしながら持っていた機器に映ったミッドチルダの状況に付いて話し合いを始める。

「ミッドは大変ですね。スカリエッティの玩具に公開意見陳述会場が襲われ、阿鼻叫喚の絵図だったらしいですよ」

「そうみたいだね。だけど、責任は管理局の方にあるよ。相手の力を過小評価し過ぎだよ。最悪の状況を常に想像して動かないといけないのにね」

「しかもハッキングした情報に寄れば、ガジェットの対策に動いていたのは一部隊だけ。それも状況に寄ってマトモに動けなかったようだ」

「この世界のなのは達がいる部隊だよね」

全員がハッキングして手に入れた情報を見ながら溜め息を付き、映像に映されている逃げ惑う管理局員の様子に更に溜め息を付く。

「・・・・如何見ても逃げてるよね？」

「逃げていますね」

「逃げているな」

「うん、逃げているよ」

なのはの質問に対して、ティアナ達はそれぞれ答え、映像に映し出されているガジェットから逃げ惑う局員に対して険しい表情を向ける。

「・・・・ＡＭＦに対する対策が全然されていないね。この世界の私が居る部隊は何をやっているんだろう？」

「恐らくだが、地上本部に正確に情報が伝わっていないのだろう。私の推測だが、本局は機動六課にこそ、この事件を解決して欲しいのだろう」

「縄張り争いね」

クダモンの言葉に対してティアナは険しい表情を浮かべ、なのはとガブモンも険しい表情を浮かべる。

本局と地上本部。同じ管理局では在るが、その実は互いにぶつかり合っている状態なのだ。

本局は地上で育った優秀な局員を引き抜いて行き、その為に地上の戦力は減って行く。その事が在る為に地上と本局の中は最悪としか言えない状況だ。

恐らく本局の上層部達はこの事件を地上本部ではなく本局の局員に解決させたいのだろう。この事件を地上本部に解決されれば地上

の発言力は増し、本局としては色々と地上に無理を言えなくなる事態に成る。
だが、この予言を回避したのが本局の者達なら本局の発言力は更に増し、地上の発言力は一気に低下し、地上を本局の意にままに出来る可能性が出来る。

「・・・・管理局って何なんだろうね？私達の世界でもそうだけど、この世界でも人々の平和よりも自分達の権力が大事みたいだね」

「管理局が在るから平和ではなく、平和の為に管理局は生まれた。多分、その事を多くの局員が忘れているんでしょうね」

「そのとおりかも知れないわね」

ティアナの言葉に対して背後から同意の言葉が響き、なのは達がティアナの後ろを見てみると、水着姿のリンディ、ルイン、クイントに、黒いロングコートを着た人間体のブラックが立っていた。

「ブラック。この様な場所では、その様な服は脱ぐべきだぞ」

「俺には関係ない」

クダモンの言葉に対して、ブラックは全く気にせずに答え、ブラックを除いた全員が溜め息を付くと、ヴィヴィオとギルモンがブラックに近づいて来る。

「パパッ！！遊ぼう！！」

「・・・後でだ」

「ブウ〜！！」

ブラックの言葉に対してヴィヴィオは不機嫌そうな声を上げるが、ブラックは構わずにティアナに顔を向ける。

「ティアナ。それで現在のミッドはどうなっているんだ？」

「ちょっと待って」

ティアナはそうブラックに告げると、映像を映していた機械を操作し始め、管理局の通信を調べ始めると、丁度この世界のスカリエッティが演説を行っている所だった。

その演説内容を聞きながら、ブラックは詰まらなそうな表情を、リンディ達は険しい表情を浮かべて見つめるが、この世界の事に関わる気は無かった。

この世界はリンディ達の世界ではない。例え、どれだけ巨大な事件が起きようと、その世界の事はその世界の者達に任せる。これが平行世界に渡る前にリンディ達が決めた方針だ。その事が在る為にリンディ達は何が在っても動く積もりは無かった。

そう無かったのだ。しかし、スカリエッティの後に映し出された映像を見たリンディ達は心の内で怒りの炎を燃え上がらせ始めた。

『うわあーん！！いたいよおー！　こわいよー！！ママー！！ママー！！』

スカリエッティの後に映し出された映像。聖王のゆりかごとヴィヴィオの真実を叫んでいるスカリエッティの姿。そして玉座のようなものに括られ苦痛と恐怖に泣き叫ぶこの世界のヴィヴィオの姿。

此処で一つ説明をしよう。リンディ達に取ってヴィヴィオはとても大切な存在だ。

リンディ、ルイン、クイントに取っては娘の様な存在。なのは、ティアナにしても妹の様に可愛がり、ガブモンやクダモンに取って親友、ギルモンに取っては唯一無二の大切な自身のパートナー、そしてブラックに取っては、何時も否定の叫びを上げているが、内心ではとても大切に思っている存在。

それは例え、平行世界で在っても関係ない。ブラック達には三大天使の世界でのヴィヴィオの悲しみに満ちた叫びを聞いた時に決めた事が在る。

“如何なる存在であろうと、ヴィヴィオを傷つけ泣かせた存在は抹消する”

言葉にはしていないが、全員がその思いを心の奥底に宿している。

では、目の前の映像を見たブラック達の思いは一つしか存在しないだろう

その場に居る全員が無言で動き始め、それぞれ服を着るとホテルの外へと出て行き、何処かへと転移して行くのだった。

“天に死せる王の嘆きが響き渡る時、交わる事無き、異界の者達は怒り狂い、無限の欲望の野望は砕け散る”

ミッド上空に浮かぶアースラ内部での会議室では、先ほどのスカリエッティの演説とヴィヴィオの姿に怒りに燃える機動六課の面々が存在していた。

「皆、わかっとると思うけど、スカリエッティは必ず捕まえるで！」

「うん！分かっているよ！」

はやての宣言に対して、この世界のなのはは険しい表情を浮かべながら答え、他の面々も同様に頷き、それぞれ出撃準備を始めた瞬間に、緊急通信がはやての下に届いた。

「どないしたんやグリフィス君？」

自身の前のモニターに映った青年ーグリフィス・ロウランにはやては疑問の声を上げるが、グリフィスは構わずに叫ぶ。

『部隊長！！大変です！！クラナガンに接近しているガジェットの大軍の前に、巨大な謎の生物が全部で三体出現！！圧倒的な力でガジェットを全てチリも残さずに消滅させています！！！』

『ッ！！！』

グリフィスの報告にはやて達は驚愕の表情を浮かべて顔を見合わせると、グリフィスがその様子を映像で映し始め、全員がその映像をくいいるような目で見てみると、其処には。

『コキョートスブレス！！！！！』

『ビフロスト！！！』

『ロイヤルセーバーー！！！！！』

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

クラナガンの街に接近するガジェットの大軍をチリも残さず破壊し続ける、蒼い機械の狼ーメタルガルルモンX、全身を赤き鎧で覆った六本足の獣の様な騎士ースレイプモン、背中に赤いマントを棚引かせた白き鎧に全身を覆い包み、右手に巨大な槍ー聖槍『グラム』を、左手に聖盾『イージス』を兼ね備えたデジモンーデュークモンの姿が在った。

デュークモン、世代／究極体、属性／ワクチン種、ウィルス種、種族／聖騎士型、必殺技／ファイナル・エリシオン、ロイヤルセーバー“四大竜”の一体に数えられる邪竜『メギドラモン』より誕生した聖騎士型デジモン。ロイヤルナイツの所属しており、９９．９％の高純度“クロンデジゾイド”を精製して造られた聖鎧を纏い、右手は聖槍『グラム』、左手は聖盾『イージス』になっている。騎士道を重んじ、主君に対しては忠義の士である。また、世界をも揺るがす混沌の存在へと変貌する危険性を併せ持ち、鎧には危険の象徴『デジタルハザード』のマークが刻まれている。必殺技は、聖盾『イージス』から強烈な光を放ち、相手を浄化する『ファイナル・エリシオン』に、右手の聖槍『グラム』から、強烈な突きを相手に繰り出す『ロイヤルセーバー』だ。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！

「この程度か？この程度の者達が、例え異世界で在ってもヴィヴィオを傷付けたのか！！」

クラナガンに迫っていた全てのガジェットを破壊し終えたデュークモンは、目の前に存在しているガジェットの残骸を見つめながら怒りの声を上げた。

デュークモンに取って、ヴィヴィオとは自身の絶対の主君で在ると共に、世界よりも大切だと断言出来る唯一無二のパートナー。そのパートナーが平行世界でとは言え、人生を操られ、苦しめられた。
デュークモンに取っては許し難い事だ。

「赦さんぞ。如何なる理由が奴らに在ろうとも、私は絶対に奴らを赦さん」

そうデュークモンは呟くと、ガジェットの残骸を踏みしめながら上空に浮かぶ聖王のゆりかごを睨み付け、背後に居たスレイプモン、メタルガルルモンXがデュークモンに声を掛ける。

「デュークモンよ。その思いは我らも同じだ」

「僕達だって絶対に連中を赦さない」

「スレイプモン、メタルガルルモンXよ。私はこの世界のヴィヴィオを救いに行く。後は任せたぞ。来い!!我らが翼!!グラニよ!!」

スレイプモンとメタルガルルモンXの言葉に答えながら、デュークモンは右手のグラムを空に向けて叫んだ瞬間。

ーーーグニャリ、シュウウン!!

デュークモンの上空の空間が歪み、その空間の歪みの中から赤い鎧に全身を包み込んだ鳥の形をした物体ーZERO-ARMS:グラニが姿を現した。

グラニ、世代/不明、属性/不明、種族/不明、必殺技/ドラゴン

ドライバー、ユゴス
デュークモンを専用の騎乗機。その正体は人間が作り出した人工デジタル生体兵器『ＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：グラニ』デュークモンと融合する事で、デュークモンの真の力を解放する事が出来るデュークモンとヴィヴィオの最強の愛馬。必殺技は、デュークモンを背に乗せながら『グラム』で繰り出す『ドラゴンドライバー』に、対象のデジモンを消去するプログラム球体を放つ『ユゴス』だ。

「頼むぞ！グラニ！！」

（グラニちゃん！！お願い！！この世界の私の所に連れて行って！！）

ーーーピィィィィィーー！！！

デュークモンとデュークモンと融合しているヴィヴィオの叫びに答える様に、グラニは鳴き声の様なものを上げると共にデュークモンをその背に乗せて、上空に浮かぶゆりかごへと音速を超えるスピードで向かい始めた。
その様子を見ていたスレイプモンとメタルガルルモンＸは顔を見合わせ、自分達の行動について話し合いを始める。

「私は逃げ延びていない人々を護る為に動こう」

「分かった。なら僕は、地上本部を目指している戦闘機人達を相手にするよ。ブラックさん達はもうあの場所に付いているだろうしね」

「今頃は戦闘が始まっているだろうな。では行くか？」

「そうだね」

スレイプモンの言葉に対してメタルガルルモンXは答えると、スレイプモンはクラナガンの街に向かって、メタルガルルモンXは地上本部に向かって飛び立つのだった。

スカリエッティの研究所内部に在る一室では、突如として現れたデュークモン、スレイプモン、メタルガルルモンXの存在に慌てているスカリエッティ、ウーノ、トーレ、セッテ、セインの姿が存在していた。

「何なのだ!?あの生物達は!?数百機いたガジェットが全て消滅しただと!?」

「分からないわ!だけど!一体はゆりかごに!もう一体は地上本部に向かった妹達の下に向かっている!!これは不味いですドクター!!」

トーレの叫びに対してウーノはコンソールを弄りながら叫び、スカリエッティに向かって叫ぶと、スカリエッティは険しい表情を浮かべて、ウーノに顔を向ける。

「ウーノ。すぐにゆりかご内部に居るクアットロとディエチに連絡を取り、ゆりかごの防衛を強化したまえ!あの生物を絶対にゆりかご内部に入れてはいけない!」

「了解です!!」

スカリエッティの命令に対してウーノは即座に頷き、ゆりかご内

部に居るクアットロに連絡を取り始めた。
その様子を黙って見ていたセインは何気なく研究所内部を映しているモニターに目を向け、驚愕の表情を浮かべる。
「ドクター！！！ウーノ姉！トーレ姉！！セッテ！！」
「如何したセイン？」
セインの叫びに対してトーレは険しい表情を浮かべて質問すると、セインは自身が見ていたモニターを指差し、全員が疑問の表情を浮かべてモニターを目を向けた瞬間に全員の表情が驚愕に染まった。
何故ならばモニターには、アジトを護っていた筈の無数のガジェットの残骸に、アジトに侵入したと思われる緑髪の男―ヴェロッサ・アコーズと聖王教会のシスター―シャッハ・ヌエラを踏み付けている金色の髪に、漆黒の体を機械的な鎧で覆い、背中に二つのバーニアを兼ね備えた漆黒の竜人―ブラックウォーグレイモンXの姿が映し出されていた。
『見ているな？貴様らもすぐにこうなる。お前達は一人残らず、再起不能だ』
そう告げるブラックウォーグレイモンXの静かな声に、今まで一度も恐怖を感じた事が無い筈のスカリエッティは恐怖を覚え、ウーノ、トーレ、セッテ、セインも恐怖に体を震わせるのだった。

特別編、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ完全崩壊前編（後書き）

次回！更なる原作崩壊！機動六課は如何なる！？

特別編、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ完全崩壊中編

アースラ内部に在る会議室にいる機動六課隊長陣、及びＦＷメンバーは、目の前のモニターに映された光景を信じられないと言う表情を浮かべて見つめていた。

目の前のモニターに映された光景。ＡＡランクの魔導師さえも苦戦するガジェット、しかも大軍と三体の巨大な生物達－デュークモン、スレイプモン、メタルガルルモンＸの戦い。いや、一方的な戦いは戦いとは呼べないだろう。

映されている光景はデュークモン達に寄る圧倒的なガジェットの蹂躙劇。

グラニの背に乗ったデュークモンは上空に浮かぶゆりかごの周りを飛び回りながら、グラムに寄る一閃を放ち続け、それに寄って十数体のガジェットは一度に砕け散って行く。

市街地の上空に浮かんでいるスレイプモンは両手に握った二挺の巨大な銃型のデバイスで人々に襲い掛かっているガジェットを撃ち砕いて行き、廃棄都市に居るメタルガルルモンＸは全身に装備した重火器に寄る一斉射撃で大量のガジェットを凍り付かせて行く。

それは正に圧倒的と言う言葉すら生温いと呼べるほどに繰り返されて行く蹂躙劇。

その様子を見た機動六課の面々は誰もが恐怖に体を震わせた。

映像でこれなのだ。デュークモン達と戦っているスカリエッティ達の恐怖は計り知れないだろう。

「・・・・何だよこいつ等・・・・・・こんなの・・・・化け物じゃねえかよ！！！」

「落ち着けヴィータ！！」

恐怖に耐え切れず叫んだヴィータに向かって、シグナムは落ち着かせる様にヴィータの肩に手を置くが、シグナムの手も恐怖に震えていた。
目の前に映しだされた光景は、長い時を生きたヴォルケンリッターで在るシグナムとヴィータでさえも、見た事が無い圧倒的と言う言葉でさえも生温いほどの力を持った存在に寄る蹂躙劇。しかもそれが同時に三体も出現したのだから恐怖に震えるのも当然だろう。
誰もが言葉も出ずにモニターに映し出されたデュークモン達による一方的なガジェットの蹂躙劇を見つめる中、はやては公開意見陳述会の前に渡された新たなる予言の詩文に付いて思い出した。

“天に死せる王の嘆きが響き渡る時、交わる事無き、異界の者達は怒り狂い、無限の欲望の野望は砕け散る。
不屈の心を胸に宿す蒼き鉄の狼、星を打ち砕く光を解き放ち、死者達を沈黙に伏させる。
絆の果てに現し、赤き鎧にその身を包み込んだ聖なる騎士、全てを撃ち抜き、人々を脅威から護らん。
王をその身に宿す聖騎士、赤き鎧船にその身を乗せ、天に浮かぶ翼の内より、死せる王を救わん。
世界に否定されし深き闇を従えた黒き竜人、その身の因子を宿し二つの異形となりし者達ともに、深き闇を打ち砕く”

（あの予言はこの事やったんか！？だとした後三体！！深き闇を従えた黒き竜人に、その身の因子を宿した二つの異形！！冗談や無いで！！こんな凄まじい力を持った存在が他にも居るやなんて！！）

予言に書かれていたデュークモン達以外の存在達を思わせる内容を思い出したはやては更に恐怖に体を震わせた。
既に目の前に映し出されたデュークモン達でも規格外だと言うのに、それ以外にも絶大な力を持った存在が存在している事に恐怖を

感じたのだ。
　その間にも映像は続き、ゆりかごの周りにいた全てのガジェットを消滅させ終えたデュークモンは、自身の体を三メートル位の大きさに変化させると、乗っていたグラニから飛び降り、事前に見つけていた突入口からゆりかご内部へと入って行った。
　それを見たなのはは慌てて椅子から立ち上がりはやてに向かって叫ぶ。

「はやてちゃん！！のんびり見ている場合じゃないよ！！あの生物達の目的が何かは分からないけど！？このままじゃヴィヴィオが危ない！！」

「ッ！！そうや！！機動六課全員！！すぐに出撃や！！」

『了解！！』

　はやての叫びに対して全員が頷き、なのは、ヴィータ、はやてはゆりかごへと、スバル、ティアナ、エリオ、キャロは地上本部に向かっている戦闘機人達の下に、フェイトはスカリエッティのアジトへと、そして最後にシグナムとユニゾンデバイスで在るリインフォース・ツヴァイは中央本部へと向かい出した。
　だが、この時にはやては重大な事を忘れていた。予言の最後の行に書かれていた一文。

“されど、彼の者達は法の味方に在らず、彼の者達は自身の真の思いのままに、動く者達なり”

　そう、デュークモン達は消して管理局の味方ではない。彼らは自分達の胸に秘めた信念の下に戦う者達。その信念を阻むのならば、それがどの様な存在であろうと彼らは排除する。

そしてそれを最も阻む可能性が高いものの存在に、はやては全く気が付いていなかった。

ゆりかご内部へと潜入したデュークモンは迷わずに玉座の在る部屋の場所へと進みながら、自身に群がって来る大量のガジェット三型を全て一撃の下に粉砕していた。

「邪魔だ！！」

ーーードゴオオン！！

デュークモンが右手のグラムを一閃する度に、群がるガジェット三型は次々と粉砕され、デュークモンの歩みは止まる事は一瞬たりとも存在しなかった。

「この程度で私の歩みは止まらんぞ！！」

ーーードスッ！！

叫ぶと共に自身の後方の空間にグラムを突き出し、ステルス性能を持った多脚生物のような姿をして、鋭い鎌を持った機械ーガジェット？型を破壊し、デュークモンは背中のマントを翻しながら更に奥へと歩みを進める。

その様子をゆりかごの最深部から見ていたナンバーズ４ークアットロは恐怖の表情を浮かべて、モニターに映し出されているデュークモンの姿を見つめた。

「・・・・何なんですの？この生物は？・・・・・・・？型のステルス機能さえも見破るなんて・・・・それに・・・・・・何故ゆりかご内部の防衛システムが・・・・この生物には反応しないんですの？」

ゆりかごにはガジェット以外にも幾つかの防衛システムが存在し、それはもちろんナンバーズやヴィヴィオ以外には必ず発動する仕組みに成っている。だが、デュークモンに対しては全く反応しなかった。

その理由はデュークモンと融合している異世界のヴィヴィオに在った。デュークモンはヴィヴィオを融合した事に寄って、ヴィヴィオのレアスキル『聖王の鎧』さえも自身のものにしている。そうデュークモンもまたゆりかごの真の主で在る『聖王』なのだ。

当然ながら、主を攻撃する船は存在しない。ゆりかごの防衛システムは、玉座に居るヴィヴィオも、玉座へと歩んでいるデュークモンも主と認識しているのだ。

その事を知らないクアットロは、更にデュークモンに恐怖を覚えるが、自身には最強の手駒で在る聖王の存在が在る事を思い出して笑みを浮かべる。

「クス、そのまま先に進みなさい。その先にはディエチちゃんが居る上に、ベルカ最強の王も存在している。貴方がどれほど強くても、聖王には敵わないわ。せいぜい束の間の愉悦に浸りなさい」

クアットロはそう呟くと玉座の前の扉に居るディエチに連絡を取るが、彼女は知らない。

例えベルカ最強の聖王でも、デュークモンに勝つ事は不可能な事を。そしてその行動が最もデュークモンの逆鱗に触れる行動で在る事を、クアットロは全く分かっていなかった。

地上本部の手前に在る廃棄都市の内部をナンバーズ、ノーヴェ、ウェンディ、オットー、ディード、そしてナンバーズ達に捕らえられ、洗脳されたギンガが走っていた。

「それにしても、一体何ッスかね？さっきのウーノ姉の通信に在った。蒼い機械の巨大な狼に気をつけろって？」

「さあな。とにかくあたし等は、地上本部を目指して、機動六課の連中を叩くだけだ！！」

ライディングボードの上に乗りながら質問したウェンディの言葉に、ノーヴェは素っ気無く答えると、他の者達と一緒に遠く離れた地上本部を目指すが、突如としてナンバーズ達の目の前に一人の女性が降り立つ。

ーーーートン！

『ッ！！』

軽い音を立てながら着地した女性の姿にノーヴェ達は驚愕の表情を浮かべた。

何故ならば、ノーヴェ達の前に着地した女性は、自分達の仲間に成ったギンガと瓜二つと言っていいほどに良く似た女性ークイント・ナカジマだったのだ。

「・・・・・随分と異世界とは言え、人の娘をそんな人形みたいな姿にしてくれたわね」

「テメエッ！！何者だ！？」

クイントに向かってノーヴェは険しい表情を浮かべながら質問するが、クイントは答えずに指を三本、ノーヴェ達に向かって立てる。

「私がこの世界のスカリエッティに対して赦せない事が三つ在るわ。一つは異世界とは言え、私の娘を人形の様にした事」

そう言いながらクイントは立っていた三本の内の指を折り曲げ、ギンガを見つめる。

「二つ目は同じ様に異世界だけど、私の親友の娘を利用した事」

常人では見る事さえも不可能な遠くに在るビルの屋上の上に立っている紫色の髪を持った黒いドレスを着た少女ールーテシアを見つめながら、クイントが更に指を折り曲げると、無表情だったギンガが突如としてクイントに向かって飛び出し、高速回転するドリル状の左腕をクイントに向かって突き出す。

ーーードゴオン！！

「ヘッ、無駄話なんかしてるからだよ。おい！行くぞ！！」

ギンガの一撃がクイントに決まったのを見たノーヴェは、他のメンバーに向かって叫び、地上本部へと向かい出そうとするが、再びクイントの声が響く。

「三つめよ」

『ッ！！』

聞こえて来たクイントの声に全員が驚愕の表情を浮かべて、クイントとギンガの方を見てみると、ギンガの左腕のドリルの高速回転を右手で抑えているクイントの姿が存在していた。

『なっ！？』

ドリルの回転をまるで箸でも掴む様な感じを出して受け止めているクイントの姿を見たノーヴェ達は驚愕の表情を浮かべた。

高速回転するドリルなど、素手で掴めば確実に肉は抉り跳び、手など完全に無くなる筈だと言うのに、クイントの手は無くならない所か、高速回転するドリルの動きを完全に止めているのだから、驚愕するのは当然だろう。

だが、クイントはそんな事には全く構わず、ギンガに笑みを浮かべながら言葉を言う。

「ヴィヴィオを泣かせて苦しめた。これが三つ目の理由よ。さて、ギンガ？」

「ッ！！！」

クイントの笑みと静かな声に、感情をなくされた筈のギンガは恐怖の表情を浮かべるが、クイントは構わずにギンガに優しげな表情を向ける。

「母親が話をしている時にドリルをぶつけるなんて、お母さんは悲しいわ。少し反省しなさい！！」

ーーードゴオオン！！

『なっ！？』

クイントは叫ぶと共にギンガの頭に向かって拳骨を打ち下ろし、ギンガは顔面から地面に激突した。
それを見たノーヴェ達はクイントの一切の容赦ない行動に驚愕の声を上げるが、クイントは構わずに地面に突っ伏しているギンガの頭を掴み上げ、再び優しげな笑みをギンガに向ける。

「ギンガ？目は覚めた？それともまだ、痛めつけ足り無いかしら？」

「ヒィッ！！止めてお母さん！！！」

『なっ！？』

感情在る、しかも恐怖に染まったギンガの叫びに、ノーヴェ達は再び驚愕の声を上げた。
ギンガに行われたのは、スカリエッティに寄る再調整。その実は完全なる人格の書き換え。
当然ながらちょっとやそっとの事では解ける代物では無い。
しかし、クイントは力技では在るが、糸も簡単に解いてしまったのだから、驚愕するのは当然だろうが、クイントにすれば簡単な事だった。
クイントはバイオダークタワーデジモン。その為にクイントは機械や何やらを触れば、其処からあらゆるデータをハッキングする事が出来る。
当然ながら、その中には戦闘機人で在るギンガ達も入っている。もちろん出来るのは操作されたり、人格を無理やり書き換えられたりと、幾つかの条件が重なった相手だけなのだが、今回のギンガは完全にそれに嵌っていたので、クイントは拳骨を落とすと共にギンガの洗脳を解いたのだ。

「ギンガ。お母さんは悲しいわ。例え異世界でも親子の絆は変わらないと思っていたのに・・・・お母さんに向かって高速回転をしているドリルを突き出すなんて・・・・本当に悲しいわ」

「・・・・本当にお母さんなの？」

「私は確かにクイント・ナカジマよ。この世界では無いけどね」

「この世界？」

クイントの呟いた言葉にギンガは疑問の声を上げるが、クイントは答えずにノーヴェ達にギンガに向けた優しげな笑みを向けながら声を掛ける。

「さてと、そろそろ終わりね」

「何言っているんッスか？」

「そうだぜ」

「例え、タイプゼロファーストの洗脳が解けたとしても」

「まだ、こっちが有利だよ」

クイントの言葉に対して、ウェンディ、ノーヴェ、ディード、オットーはそれぞれ自身の固有武装やＩＳを発動させる構えを取りながらクイントに険しい表情を向けた。

しかし、それを見てもクイントは優しげな笑みを向けながら、上空を指差し、ノーヴェ達がその行動に疑問を覚えながら、クイントが指差した方を見て見ると、其処には。

「レイジングハート。セラフィービット展開」

ーーーガコン！！

背中に十枚の金色の翼を背負い、右手に金色の槍の形をしたデバイスーレイジングハート・セラフィーを握り締めたメタルガルルモンXが、自身の周りに六つの金色のビットを浮かばせながら上空に浮かんでいた。

『ッ！！』

メタルガルルモンXの姿を見たノーヴェ達は驚愕の表情を浮かべて、慌ててその場から逃げようとするが、メタルガルルモンXは逃さないと言うように膨大なエネルギーをレイジングハートと六つのビットに集め始める。

「全力！！」

（全開！！）

「（セブンズ・スターライトブレイカーーーーー！！！！！！）」

『ウワァァァァァーーーーー！！！！！』

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

メタルガルルモンXとその身と融合しているなのはが叫ぶと共に、レイジングハートの先端と六つのビットの全てから巨大としか言えないほど桜色の砲撃ーセブンズ・スターライトブレイカーが放たれ、

ノーヴェ達は悲鳴と共に飲み込まれ、ノーヴェ達が立っていた場所に巨大な爆発が起きた。
　因みに放たれた砲撃は全て非殺傷設定。死ぬ事は無いが、恐らく永遠に治らないトラウマとしてノーヴェ達の心に深く刻まれただろう。在る意味、死ぬ事よりも酷い。この世界のノーヴェ達は今後桜色を見る度に、この砲撃の事を思い出し続けるのだった。

「う～ん。フリートが究極体に成ってもデバイスでの攻撃なら非殺傷設定を使える様にしたって言っていたけど。此処まで来ると、非殺傷設定が正しいのか悩むわね。これだけの一撃を受けて死なないんだから、在る意味拷問よりも酷いわ」

　爆発が収まった場所で倒れ付しているボロボロのノーヴェ達の姿を興味深そうに見つめながらクイントはそう呟くと、先ほどの桃色の砲撃を見て恐怖に体を震わせているギンガに声を掛ける。

「ギンガ。貴女もこう成りたくなかったら、もっと精進した方が良いわよ」

「ハイッ！！！」

　クイントの言葉にギンガは直立不動で答えながら頷くと、クイントは笑みを浮かべて自身の前に降り立ったメタルガルルモンXの肩に飛び乗り、ギンガに顔を向ける。

「其処の子達はギンガに任せるわ。私はやらないと行けない事が在るからね」

「エッ？アッ！ちょっとお母さん！！！」

ギンガは疑問の声を上げるが、クイントは構わずにメタルガルルモンXと共に空へと飛び立ち、ギンガの前から遠く離れて行くのだった。

この後、救援に来たスバルとティアナがギンガから全て事情を聞き、クイントとメタルガルルモンXの使用したデバイスと砲撃魔法に驚愕しながらも、爆沈地で気絶しているノーヴェ達を拘束したのだった。

“不屈の心を胸に宿す蒼き鉄の狼、星を打ち砕く光を解き放ち、死者達を沈黙に伏させる”

「フェェェ

目の前に現れた大量のガジェット?型の姿に、逃げ切れなかった人々は恐怖の声を上げ、子供抱えた親などは我が子を強く抱き締め、自身が盾に成ると言う様にガジェットに背を向け、男性などは力が無くともガジェットから妻子を護ろうとガジェットに駆け出すが、ガジェットは関係ないと言う様にエネルギーを集め始めレーザーが一放たれなかった。

ーーーズガガガガガガガガガガガガッ!!!!!

ーーーードドドドドドドドドドドドドン!!!!

『ッ!!!!』

突如として上空から放たれたオレンジ色の弾丸に、人々の行く手を阻んでいた全てのガジェットは撃ち抜かれ、全機が爆発を起こして消滅をしてしまった。

それを見た人々が驚愕の表情を浮かべていると、人々の前に巨大な体を持ち、赤い鎧を身に纏った六本足の獣ースレイプモンが降り立ち、人々に自身の右手を差し出す。

「早く乗るのだ。安全な場所まで私が送ろう」

「・・・・アッ!ああ、分かった」

スレイプモンの姿に誰もが驚愕の表情を浮かべて、その巨体を見つめたが、スレイプモンの背に乗る多くの人々の姿に気が付いた者達は、スレイプモンが差し出した右手の乗り込み、スレイプモンは人々を自身の背に移すと、空へと駆け上がり、人々を安全な場所まで運び続けていた。

“絆の果てに現し、赤き鎧にその身を包み込んだ聖なる騎士、全てを撃ち抜き、人々を脅威から護らん”

ゆりかごの中で大量のガジェット?型と戦い続けていたデュークモンは遂に目的の場所で在る玉座が在る部屋へと近づいていた。

「ムン!!」

ーーードゴオオオオオオン!!

グラムの一閃に寄って通路を埋め尽くしていたガジェットは消滅するが、デュークモンは構わずに歩みを続け、ゆりかごの中を見回していた。

「・・・・・・寂しい物だ。このゆりかごとて私と同じ様に主君を護る物だと言うのに、今は利用される物。哀れな」

(・・・・そうだね。ゆりかごも可哀想だよ。本当はヴィヴィオを、聖王を護る為の物なのにね)

「そうだ。だからこそ、私はこの世界のヴィヴィオを救った後にゆりかごを眠らす。もう利用される事が無い様にな」

自身の内にいるヴィヴィオの言葉に答えながらデュークモンは更に先を進み、内心で別の事を考える。

（そしてもう一人、この世界の高町なのはよ！！私は貴様と戦うぞ！！貴様がこの世界のヴィヴィオの母に相応しいのかを、確かめる為に！！）

デュークモンはこの世界のなのはの情報を見た時から決めていたのだ。この世界のなのはがヴィヴィオの母親に相応しいのか如何かを、戦う事で見極めると。

本来ならばその積もりは最初は無かった。この世界のヴィヴィオはデュークモンが主君と定めたヴィヴィオではない。だからこそ、関わる気は無かったのだが、あの泣き叫ぶヴィヴィオの姿を見た時、デュークモンの心は変わった。何が何でもこの世界の高町なのはを見極めると。

なのはは知っていた筈なのだ。ヴィヴィオがスカリエッティに狙われている可能性が在る事を。

だが、その可能性を忘れ、ヴィヴィオがいた機動六課隊舎を無防備同然の状態にしていた。その状況だけでもデュークモンがこの世界のなのはに不信感を抱くには十分だった。

デュークモンはこう思ったのだ。

“この世界の高町なのはは、母親と慕っているヴィヴィオの事を何とも思っていないのでは無いのか”

勿論そうとは限らないが、この世界の高町なのはは時空管理局員。自身の世界の管理局の悪行を知り過ぎているデュークモンに取っては、この世界のヴィヴィオを生み出した真の闇の存在を知っている。

自分の世界ではその前にブラックに寄って救われ、リンディ達に大切に育てられたが、この世界では実験動物の様に闇に潜む者達に扱われていた筈だ。だからこそ、尚更デュークモンはこの世界のヴ

ィヴィオには幸せに成って欲しいのだ。

（闇の方はブラック達が破壊するだろう。成らば私は高町なのはを試す！！その為の準備は既に終えているからな。早く来るのだぞ高町なのはよ）

そうデュークモンは内心で呟くと、歩みを進め玉座の在る場所に近づくが、突如として前方から強力なエネルギー弾が飛んで来る。

「ムン！！」

ーーーバシュン！！

自身に向かって高速で飛んで来たエネルギー弾を、デュークモンはグラムに寄る一閃で霧散させながらエネルギー弾を放った人物を探すと、１００メートル先に巨大な砲塔ーイノメースカノンを構えた女性ーディエチを発見した。

「其処を退くのならば、九割殺しが八割殺しに変わるが、如何する？」

「・・・・2・・・・1」

「残念だ」

イノメースカノンにエネルギーをチャージしながらカウントを取り始めたディエチの姿に、デュークモンは構えも取らずに立ち続け、エネルギーをチャージし終えたディエチは収束砲を発射する。

「0」

ーーードグオオオオオオオオオオン！！

カウントを終えると共にイノメースカノンから、Ｓランクに匹敵する砲撃が放たれ、デュークモンに向かって直進する。

しかし、自身にＳランククラスの砲撃が迫って来ていてもデュークモンは構わずに歩みを進め、直撃した。

ーーードゴオオオオオオオオオオン！！

デュークモンに砲撃が直撃すると共に通路に巨大な爆発が起き、通路は煙に埋め尽くされた。

それを見たディエチは安堵の息を吐き、イノメースカノンを床に降ろした。

この行動は在る意味仕方ないだろう。ディエチの砲撃はこの世界でエース・オブ・エースと呼ばれている高町なのはの砲撃に匹敵する威力を持った強力無比の砲撃。その様な砲撃を防御も行わず直撃したら、幾らエース・オブ・エースと呼ばれる高町なのはでも落ちるだろう。

因みに、デュークモンの世界のなのはは落ちない。フリートのマッドな改造に寄って改良されたレイジングハートの生み出すバリアジャケットは、通常のバリアジャケットよりも遥かに強度が高いのでディエチの砲撃を二発受けても、余りダメージは受けないのだ。

話は戻すが、ディエチの砲撃は強力無比で在る為に、大抵の敵は落ちる。

だが、デュークモンには。

「今のが貴様の最強の一撃なのか？」

「ッ！！！」

煙の中から響いて来た声にディエチは驚愕の表情を浮かべて、吹き上がる煙の中を見つめてみると、煙の中から鎧に傷一つ存在しないデュークモンが姿を現し、ディエチに向かって聖なるエネルギーが集まったグラムを突き出す。

「セーバーショット！！！」

「そんな！！ば…」

ドゴオオオオオオオオオオオオオン！！！

全ての言葉を言い終わる前に、ディエチはセーバーショットに飲み込まれ、背後に存在していた壁を幾つも突き破りながらその姿は、デュークモンの視界から消えて行った。

（・・・・・殺しちゃったの？）

「案ずるな。死んではいない。だが、この世界の技術では数年は再起不能だろう。フリートならば一ヶ月で治癒出来るだろうがな」

（そうなんだ）

デュークモンの言葉にヴィヴィオは安堵の息を吐いた。

如何に異世界の自分自身を傷付けたとは言え、やはりヴィヴィオには相手を傷付ける事や殺す事には躊躇いが在る。戦いの場に出れば、その事を忘れて戦うが、それでもヴィヴィオは相手を傷付ける事には消極的なのだ。

その事が分かっているデュークモンは、宣言どおりディエチを九割殺しで済ませたのだ。

「さて、先を急ぐか！！」

ーーービュン！！

デュークモンは叫ぶと共に、その身を空中に浮かばせ、音速を超えるスピードで玉座へと急ぎ向かうのだった。

廃棄都市区間の一つのビルの屋上に立っていたルーテシアとその使役魔ー虫人間のガリューは、自分達の目の前に浮かんでいるメタルガルルモンXに険しい視線を向けていた。

遠目で見ていたが、ノーヴェ達を一瞬の内に戦闘不能に追い込んだのは、先ず間違いなく自身の目の前にいるメタルガルルモンXだと分かっているのだ。

だが、メタルガルルモンXの肩に乗っていたクイントはその様子に構わず、ルーテシアの目の前に飛び降りる。

「こんにちは」

「・・・・・誰？」

「私はクイント・ナカジマ。貴女のお母さんの親友よ。ガリューは知っているわよね？」

「ガリュー、本当？」

クイントの言葉にルーテシアが疑問の表情を浮かべてガリューに質問すると、ガリューは無言で頷く。

「私が此処には来たのは貴女を止める為よ。もう貴女は戦わなくて良いわ。メガーヌは私達が助けるから」

「・・・・・幾らお母さんの親友でも信用出来ない」

ルーテシアには行き成り現れたクイントの言葉が信用出来なかった。

確かに目の前にいるクイントは異世界でもルーテシアの母親で在るメガーヌの親友だ。

しかし、行き成り現れてメガーヌを救うと言われても、信用する者は誰も居ないだろう。

その事はクイントも分かっているのか苦笑を浮かべながら、自身の右手の先にモニターを映し出し、ルーテシアに良く見えるように掲げ、ルーテシアがその映像を見て見ると、スカリエッティのアジトの映像が映し出され、それと共に映ったリンディがクイントに声を掛ける。

『クイント。こっちは言われたとおり、メガーヌさんを救い出したわ。それとフリートさんに簡易スキャンさせたら、レリックなんて必要も無く目覚めるそうよ。スカリエッティの言った事は真っ赤な嘘だって断言したわ』

『ッ！！！』

リンディが告げたメガーヌの真実にルーテシアとガリューは驚愕の表情を浮かべた。

スカリエッティの話では自身の母親であるメガーヌはレリックナンバー11が無ければ目覚めないという話だった。それなのにリンディの話が事実だとすれば、自身が今まで行って来た行動は全て無

意味だと言う事に他ならない。
その事実に気が付いたルーテシアは自身がこれまで行って来た行動を全て思い出し、体を恐怖に震わせ泣きそうな顔を浮かべるが、クイントは優しくルーテシアを抱き締め、頭を優しく撫で始める。

「・・・・辛かったわよね。メガーヌと話がしたいだけだったのに、それさえも叶わず、その小さな体で戦い続けていたのね。私には貴女の辛さは分からないけど、絶対にメガーヌに会わせて上げるわ。そうしたら思う存分甘えなさい。知っている？メガーヌは任務の時でもずっと貴女の事を気にしていたのよ。貴女の事を本当に大切に思っている優しいお母さんなんだからね」

「・・・・・・ヒック、ヒック、フェェェェェェェェン！！フェェェェェェェン！！」

ルーテシアはクイントの胸の中で大声で泣き始めた。
今までの辛さ、悲しさを表すように大声で泣き続け、クイントはその様子に優しげな笑みを浮かべたままルーテシアの頭を撫で続け、メタルガルルモンXも優しげな瞳でルーテシアを見つめ続けるのだった。
因みに、この様な状態に成りながらもクアットロが干渉しないのは、ゆりかご内部で暴れ続けているデュークモンの対処に追われている上に、フリート特製のジャミングがルーテシアとクイントの周りに張り巡らされてるので、状況を全く知る事が出来ないのだ。

スカリエッティのアジトでは、スカリエッティの逮捕に向かったフェイトが漸くアジトの入り口に辿り着いていたが、アジト内部に侵入する前に、入り口の前に存在している無数のガジェットの残骸

に驚愕の表情を浮かべていた。

「・・・・・・何なのこれは？アコーズ査察官とシスターシャッハは何処に？」

入り口の前で合流する筈だった二人の姿が無い事に、フェイトは心配そうな表情を浮かべて辺りを見回すが、姿は発見出来ず、もしや中に居るのかと思い、急ぎアジトの中へと入って行った。

それと共に山の様に存在していたガジェットの残骸の中からボロボロに成った女性ー聖王教会のシスター、シャッハ・ヌエラが這い出てきて、フェイトが入っていた入り口に向かって力無く右手を伸ばす。

「・・・・・・フェ・・・イト・・・・・執務・・・・官・・・・・行っては・・・・・いけません・・・・・その先には・・・・・闇が・・・・・黒い・・・・・竜人の・・・・・姿を・・・・し・・・・・」

ーーーパタン

全ての言葉が言い終わる前に、シャッハの右手は地に落ち、気絶してしまった。

特別編、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ完全崩壊中編（後書き）

次回！愚か者達は露と消える！

特別編、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ完全崩壊後編１（前書き）

思ったよりも、話が長くなりそうなので、後編１にしました。

特別編、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ完全崩壊後編１

スカリエッティのアジトの中に一人で入って行ったフェイトは、奥へと進み続けていたが、その表情は疑問に満ち溢れていた。

（如何言う事なの？スカリエッティのアジトの筈なのに、ＡＭＦが全く展開されていない。それにこの夥しい数のガジェットの残骸は一体誰が？）

通路を埋め尽くすほど破壊されたガジェットの残骸。敵地で在りながら、全くＡＭＦが展開されていない事にフェイトは疑問を覚えるが、考えても答えは分からず先に進むと、戦闘機人の生体が入った生体ポットが在る部屋へと、到着し険しい表情を浮かべて生体ポットを睨み付ける。

「赦せない。こんな命を弄び、ただの実験材料として扱う研究なんて絶対に赦せない！！」

自身の知る情報とスカリエッティの行っている研究が一致した事に、フェイトは怒りの表情を浮かべて、スカリエッティの逮捕へと向かうが、突如として声が響く。

「管理局員の貴女が言える事ではないわよフェイトさん」

「ッ！！」

聞こえて来た聞き覚えの在り過ぎる声に、フェイトは驚愕の表情を浮かべて通路を見つめ、その人物を見つけた。

その人物は翡翠の髪に、翡翠の瞳を持った二十歳ぐらいの綺麗な

黒いドレスを着た女性。
フェイトに取っては二人目の母親で在り、現在は本局に居る筈の女性ーリンディが通路の奥に立っていた。
「リンディ義母さん！？如何して此処にいるの！本局に居る筈じゃ！？」
目の前に現れたリンディに向かってフェイトは声を上げた。
本来ならば本局に居る筈の人物が、目の前に、しかも事件の首謀者であるスカリエッティのアジト内部に居るのだから驚愕するのも当然だろう。
しかし、リンディはフェイトの驚愕には構わず、自身の横に在る生体ポットの中に居る素体を悲しげな視線で見つめる。
「・・・・酷いわよね。勝手に生み出されて、道具の様に扱われる。命を命と思っていない者が出来る行動だわ」
「・・・・・うん。だから、この先に居るスカリエッティを逮捕する。それで事件は解決する」
「・・・・・・失望したわ」
「ッ！！！」
リンディの宣言にフェイトは目を限界にまで見開きながらリンディを見つめた。
失望した。確かにリンディはそうフェイトに向かって告げたのだ。そんな言葉を、しかも自分を理解している筈のリンディから言われるとは思っても見なかったのだろう。
しかし、リンディからすればフェイトに失望するには十分だった。

フェイトはこう言ったのだ。

“スカリエッティを捕まえれば事件は解決する”

それは事件の本質を全く見ていない事と同意義なのだ。

「スカリエッティを捕まえれば、更なる違法研究に寄る犠牲者が生まれるわね」

「・・・・それってどういう事なの？スカリエッティを捕まえたら、更なる犠牲者が生まれるって、義母さん一体如何言う事なの？」

「一つ言い忘れていたわ。私はリンディ・ハラオウンではないわよ」

「ッ！！」

リンディの告げた事実にフェイトはすぐさま自身のデバイス－ザンバーフォームに変えたバルディッシュをリンディに向けて構える。

「・・・・リンディ義母さんの人造魔導師なのね？」

「それも外れ。私はリンディ・ハラオウンの成れの果て、リンディよ」

「如何言う事なの？成れの果てって？一体？」

フェイトは疑問に満ち溢れた声でリンディに質問するが、リンディは答えずにフェイトに失望したと言う視線を向け続ける。

「話は戻すけど。貴女が知るスカリエッティの情報を統合すればこ

うでしょう。“非合法な人体実験などを行なっている科学者”そうでしょう？」

リンディがそうフェイトに質問すると、フェイトは構えを解かずに無言で頷く。

それを見たリンディは更に失望したと言うように溜め息を吐きながら、フェイトを見つめる。

「この世界のクロノは何を教えたのかしらね？上辺だけの情報しか見ないなんて、執務官失格も良い所よ。スカリエッティが一個人でこれほどの規模の設備の準備や事件を行えると思っているの？」

「ッ！！」

フェイトは慌てて辺りの無数の生体ポットを見つめた。

リンディの言うとおりこれほどの大規模な設備の準備を一個人で行える筈は無いし、アレほど巨大な聖王のゆりかごも隠せる筈も無い。これほどの大規模な事を行えるとしたら、世界レベル規模の、そう管理局クラスの力も持った組織が必要だ。

「地上本部！！スカリエッティを支援していたのは地上本部のレジアス・ゲイズ中将！！」

フェイトは自身の知る情報から、スカリエッティを支援したのは地上本部の重鎮で在るレジアス・ゲイズがスカリエッティを支援したと判断した。

それは確かに正しい。レジアスは確かにスカリエッティに依頼して、戦闘機人の技術を手に入れようとしていた。だが、違う。

レジアスは依頼者で在って、スカリエッティの背後に居るものではない。スカリエッティの背後に居る者はレジアスさえも手駒にし

た存在。そう。

「“時空管理局最高評議会、及びそれに付き従う上層部一派”それこそが、スカリエッティの背後に居る黒幕よ。フェイトさん」

「なっ！？」

予想以上の黒幕達の正体にフェイトは声を上げながら、リンディの姿を呆然と見つめた。

リンディの言葉が真実だとすれば、時空管理局そのものが違法研究を推進している事に他ならない。

「そう、管理局は自身が否定している違法研究を裏では平然と行っている。場所としては最高の環境よね。自分達が何かしなくても、勝手に違法研究の資料は集まる上に法が犯罪を犯す筈は無いと、多くの人々や一般局員は思っている。本当に違法研究を行うのには最高の環境だと思わない」

そうリンディはフェイトに告げると、何処からとも無く紙の様な束を取り出し、フェイトの前にばら撒く様に投げ付け、フェイトは恐る恐る紙を拾い、内容に目を向けて見る。

其処に書かれていたのは、フェイトが摘発した筈の違法研究所に在った内容とそれをスカリエッティに伝えた管理局員の名前が書かれていた。

「そ、そんな・・・・・嘘だ・・・・こんなの」

「現実よ。全ては管理局から始まった。そして管理局は裁かれないわ」

「ッ！！」

リンディの言葉にフェイトは体を震わせながらリンディの顔を見つめるが、リンディからすれば当然の事だった。

何故ならば、管理局は法を適用し、法を執行し、法を決めると言う三権分立が集まった組織。

しかも幾つもの世界を管理している組織。その様な組織に反論できるものは存在はしていない。各管理世界の代表にしても、自分達の世界を管理している管理局に強く言う事は出来ない。失敗すれば戦争に発展してしまうのだから、多くの人々の代表で在る代表者達も強く管理局に抵抗する事が出来ないのだ。

「そして今の惨状。魔法技術しかないのに、全くＡＭＦに対する対抗策が成されていない」

「それは！？地上本部が私達の話を聞いて！！」

「ハア～、本当に呆れるわ。ねえ、フェイトさん？地上は低ランクの魔導師が主流なのよ？そんな状態で、貴女の部隊、機動六課と同じ事が出来るの？」

「ッ！！」

機動六課は通常では考えられないほど戦力が充実した部隊。しかも日夜ガジェットを倒す為の訓練を行い続けていたのだから、ガジェットは敵ではない。

だが、一般的な地上の部隊は機動六課の様に戦力が充実しているわけでも、ガジェット対策の訓練を詰んでいる訳でもない。当然、ガジェットに地上の部隊が勝てる可能性は低いのだ。

「住民の避難も殆どされていない。地上本部襲撃から数日も時間が在った筈なのにね。スレイプモンが住民の避難を行わなかったら、多分、怪我人は続出。数千人以上の死傷者を出しているでしょうね。そしてそれに対しても、管理局は反省なんてしない」

「そんな事在る筈無い！！管理局がそんな事を！？」

「・・・・・十年前にクロノが言っていたわね。“世界はこんな筈じゃないことばかり”それは管理局にも適用されるんじゃないの？」

「ッ！！」

フェイトはハッとしたと言うような顔をしてリンディを見つめた。世界はこんな筈じゃないことばかりに溢れている。次元世界を護っている管理局も世界の一部でしかない。しかも管理局は権力が集中している場所。

当然ながら、自身の権力の為や欲望の為に動く人間も必ず存在している。管理局だけが例外など在りえないのだ。

「そして全ては本局上層部の思惑通りに進んでいたわ。私達を除いた全てがね」

「本局上層部の思惑？」

「そう、本局上層部の真の思惑は、“地上本部の完全掌握”！！」

「ッ！！」

リンディが告げた本局上層部の思惑にフェイトは驚愕した。

地上本部の完全掌握。同じ管理局で在りながら、本局の真の目的

が地上本部の完全掌握だと告げられたのだから、驚愕するのも当然だろう。
しかし、リンディはフェイトの驚愕には一切構わずに、更なる事実を告げる。

「陸と海の仲の悪さは知っているわよね？その原因は、地上の人材や予算を本局が吸い上げているから。しかも地上に事件が起きても本局は知らん振り。そんな状況では陸と海の仲は悪化する一方。しかも万年人材不足の状況なのに」

「そ、それは・・・・」

リンディの言葉にフェイトは反論しようとするが、その通りなので言い返す事が出来なかった。
陸と海では扱う事件の規模が違うからと言う理由で、本局は地上から人材や予算を吸い上げている。当然ながら、地上の戦力は減るばかりであり、地上の局員は本局を嫌うと言う状況に陥っているのだ。
その様な状態に在る事も分かっている本局は、何とかして地上の実権を握ろうと画策している。
そしてそれに打って付けの状況が舞い込んで来た。

「この事件を地上ではなく本局が解決すれば、地上は本局に逆らえなくなるでしょうね。何せ何も出来なかったんだから。その為には地上の無能さを明らかにする状況を作らなければならない。そしてその為に、本局は貴女達の部隊、機動六課を設立した」

「ッ！！」

フェイトは再び驚愕の表情を浮かべて、リンディを見つめた。

フェイトの知る話では、機動六課の設立の目的は予言に書かれた管理局崩壊の予言を回避する為だと自身の上司である八神はやてやクロノ・ハラウオン、聖王教会のカリム・グランシアから聞かされていたのに、機動六課設立の真の目的が、地上本部の掌握に在ると言われたのだから、驚愕するのも当然だろう。

「唯でさえ陸と海の仲は最悪なのに、本局は地上に勝手に部隊を設立した。これに寄って地上は本局に悪感情を更に持ち、地上は更に意固地になる。これが先ずは第一段階よ」

「・・・・嘘だ」

「次に第二段階。地上の無能さを明らかにして、本局の有能さを明らかにする。この状況を作る為に打って付けの場は、公開意見陳述会場ね。あそこの警備の管轄は地上本部に在るから、ガジェットの襲撃に何の対策も取っていない地上部隊は蹂躙されるしかない。その状況ではガジェットに対抗できる機動六課が動けない状況も作る必要が在る。思い当たるでしょう？魔導師なのにデバイスの携帯を禁じて、警備をさせたのだから？」

「・・・・ア、ア、ア、ア」

リンディが次々に明らかにする本局上層部の思惑に、フェイトは恐怖の声を上げて後ずさりし始めるが、リンディは逃がさないと言う様に言葉を続ける。

「そして最終段階。大規模な事件を起こした者を、本局の人間が捕まえる。はい、これで地上の無能さは明らかに成って、本局の有能さが示されるわね。つまりねフェイトさん」

「・・・ヤメテ・・・・ヤメテ」

リンディが次に告げる言葉が分かったフェイトは、恐怖の声を上げてリンディの言葉を聞こえないように耳を押さえて蹲るが、リンディは逃がさないと言うようにフェイトに近付き、耳を押さえているフェイトの両腕を凄まじい力で離し、残酷な真実を耳元で告げる。

「・・・・全部ね。本局の思惑どおりだったの。この沢山の人々が危険に晒される状況も何もかも、本局上層部の願いどおりだったのよ」

「イヤアァァァァァァァァァァァァァーーーーーーーー！！！！！」

リンディが告げた残酷過ぎる事実にフェイトは否定の叫びを上げて、頭を抑えて蹲り始める。

自分達一機動六課の行動は全て本局の思惑通りだった。其処に在る犠牲や悲しみの感情なども一切考えずに、本局は自分達の思惑通りに事が進む様に準備を続けていた。

そして願いどおり、本局は地上本部を掌握出来る状況を作り上げた。その結果、どれほどの犠牲が出ても、本局は機動六課を前に出し、事件を解決した“奇跡の部隊”とでも祭り上げて、民衆に本局こそが世界を護っていると知らしめ、地上を本局が掌握する。

勿論、失敗すれば全てを失う可能性が在ったが、それでもその見返りは権力に依存する者達からすれば魅力的なものだろう。

「最も、まさかあの予言の犯人が、スカリエッティだとは本局も思っても見なかったでしょうけど。あの予言は正に本局上層部に取っては、最高のものだったでしょうね。どうフェイトさん？貴女達、管理局の縄張り争いのせいで地上の、クラナガンの人々を危険な目

に合わせている気分は？」

「・・・・ウ、ウゥ、ウワァァァァァァァーーーー！！！」

フェイトは顔を床に付けて大声で泣き始めた。

全てが仕組まれた事だった。全ては本局が地上を掌握する為に作り上げた状況。

クラナガンの人々が危険な目に合っているのも、ゆりかごの中でヴィヴィオが苦しむ様な状況に合ったのも、全ては本局の上層部達が願っていた状況だと、ハッキリとフェイトには分かってしまった。

そう考えれば幾つもの辻褄が合う。機動六課の設立を認めた本局の上層部達。

如何にクロノやこの世界のリンディ、聖王教会のカリム、そして伝説の三提督の支援が在ったとは言え、本局内部から反対意見が出なかったのにも納得できる。

機動六課の後見人以外の思惑が裏で動いていたのだ。

その様にフェイトが絶望の真実に嘆きの声を上げ続けるが、リンディは慰めの言葉も掛けずに、フェイトに背を向け、ブラックの居る場所へと向かい出す。

後には、悲しみの涙を流し続けるフェイトだけが残されるのだった。

スカリエッティのアジト一番奥、其処では惨劇としか呼べない地獄が生み出されていた。

壁からオブジェの様に生えている六本の足。この六本の足の主は、ナンバーズ６－セインとナンバーズ７－セッテ、そして管理局の査察官－ヴェロッサ・アコーズだった。

彼女達は侵入してきたブラックウォーグレイモンＸへと挑んだの

だが、ブラックウォーグレイモンXは壁に隠れていたセインを逸早く見つけると、壁の中から無理やり連れ出し、壁にISを発動させる間際も無く叩き付けて、オブジェの様にセインを壁から生やした状態にした。

次にセッテ。彼女は自身のIS―スローアームズを使って、ブーメランブレードを操り、ブラックウォーグレイモンXに攻撃を加えたのだが、ブラックウォーグレイモンXは両腕のドラモンキラーを使って難なくブーメランブレードを砕き、その事に驚愕しているセッテに一瞬の内に近付き、セインと同様にオブジェの形にして壁に生やしたのだ。序にこの時にヴェロッサも壁に埋め込んだ。

因みに、ブラックウォーグレイモンXがヴェロッサを態々運んで来たのは道案内の為だ。何時もならば気にせずに前に進み、手当たり次第に破壊して目的の場所に向かうのだが、今回はルインとリンディが頼んだので、仕方が無く最短の道を聞く為に、ヴェロッサを利用したのだ。

ヴェロッサとシャッハは本当に運が無かったとしか言えないだろう。この場所の入り口にさえ居なければ、ブラックウォーグレイモンXに目を付けられる事は無かったのだから。

そして現在、ブラックウォーグレイモンXは、残されたナンバーズ3―トーレと激戦を繰り広げていた。

「クッ！！ライドインパルス！！」

ーーービュウン！！

トーレは自身の高速機動のIS―ライドインパルスを使用して目の前に居る黒い機械的な鎧を身に纏った漆黒の竜人―ブラックウォーグレイモンXに向かって、両手足から生やしたインパルスブレードを全力で振り下ろす。

「ウオォォォォォォーー！！！」

ーーーバキィィィィン！！

トーレが叫ぶと共に振り下ろしたインパルスブレードはブラックウォーグレイモンXの体にぶつかった瞬間に、粉々に砕け散った。
ブラックウォーグレイモンXが何かをした訳ではない。
ただその鎧にぶつかっただけで、トーレのインパルスブレードは跡形も無く砕けたのだ。
自身の武器が簡単に粉々に砕けた事に、トーレは呆然とした表情を浮かべるが、ブラックウォーグレイモンXは構わずに、呆然としているトーレに向かって腕を常人では見る事さえも不可能なスピードで振り抜く。

「邪魔だ」

「ライドインパルス！」

ーーービュン！！

ブラックウォーグレイモンXの一撃が決まる前に、トーレは再び自身のISを発動させ、何とかブラックウォーグレイモンXの攻撃をかわした。
既にこのやり取りは何十回と繰り返している。トーレは自身のISを既に連続で使用し続け、ブラックウォーグレイモンXの攻撃をかわし続けていたが、その体は既にボロボロだった。
ブラックウォーグレイモンXの攻撃はかわしたとしても、その攻撃に寄る衝撃波に寄って体が傷付いていくのだ。
しかも、連続でISを発動させ、自身の限界を遥かに超えるスピードを出してかわさなければ行けないほどに、ブラックウォーグレ

イモンXの攻撃は速い。
そうしなければトーレは既にやられたセッテやセインのように壁に顔から埋められた状態に成っているだろう。
しかし、トーレは凄まじい勘違いをしている。“ブラックウォーグレイモンXは全く本気を出していないのだ”。

（詰まらん。この世界のこいつ等はこの程度の力しか持っていないのか？）

（仕方無いですよブラック様。この世界はデジモンの存在が無いんですから、ナンバーズの実力も低いのは当然です）

ブッラクウォーグレイモンXとユニゾンしているルインが落ち着かせる様に言葉を言うが、ブラックウォーグレイモンXは不機嫌そうな表情を浮かべる。

（・・・・リンディはまだ掛かるのか？そろそろの筈だぞ？）

（もう少しだそうです。アッ！それとデュークモンが、そろそろゆりかごの玉座に着きそうです）

（そうか。成らば遊びの時間は終わりだ。真の惨劇の始まりだ）

（了解ですマイマスター）

ーーーガシィィィン！！

「なっ！？」

ブラックの言葉に答えるようにルインが了承した瞬間に、動き回

っていたトーレは突如としてバインドが巻き付き、体が空中に拘束された。
それと共にブラックウォーグレイモンXは黒いエネルギー弾をドラモンキラーの爪先に出現させる。

「時間が来た。消えろ」

ーーードゴオオン！！

「グアァァァァァァーーーーー！！！！！」

言葉と共にブラックウォーグレイモンXはエネルギー弾を投げ付け、トーレは悲鳴を上げながら壁へと激突し、壁を掘り進みながら何処へとも無く消えて行った。
その様子を見ていたスカリエッティは体を震わせ、ブラックウォーグレイモンXを姿を見ていた。
恐怖ではなく、歓喜に体を震わせて。

「フッ、フハハハハハハハハハハハッ！！素晴らしい！素晴らしい！！私の娘達が一撃にも与えられないとは、君の様な存在にもっと早く出会いたかったよ！！」

スカリエッティはもはや自分が助からない確信していた。
しかし、それでもスカリエッティは興奮する。目の前にいるブラックウォーグレイモンXの前には、人造魔導師も、戦闘機人さえも、Sランクオーバーの魔導師さえも、そして世界を管理している管理局さえも無力。
自身の行って来た全ての技術を持ってしても絶対に敵わないと、断言出来る存在に出会えた事にスカリエッティは心の底から歓喜する。

「欲しいよ。小賢しい計算など吹き飛ばす理不尽な力！無理を通して道理を捻じ伏せる力！君の力は全てそれに当て嵌まる！！その力だ！その力が私に在れば、こんな馬鹿騒ぎも、ナンバーズも、聖王も、『ゆりかご』もいらなかった！！その力さえあれば、私は、僕は思うままに、夢を追いかける事が出来ただろう！！」

スカリエッティは心の底からブラックウォーグレイモンXの力を欲した。

全てを破壊し、自身の思いのままに進める圧倒的な力。その力こそスカリエッティが望んでいた力そのもの。

それが最後の時の瞬間に見つかった事を、心の底から残念に思いながらスカリエッティはブラックウォーグレイモンXに羨望の眼差しを送るが、ブラックウォーグレイモンXはスカリエッティの眼差しなど気にせずに再び黒いエネルギー球を作り上げる。

「貴様の夢など関係ない。俺にアイツの悲しみの声を聞かせた貴様は、消えろ」

言葉と共にブラックウォーグレイモンXは、黒いエネルギー球をスカリエッティに向かって全力で投擲した。

迫り来る黒いエネルギー球を見つめながら、スカリエッティは羨望の笑みを浮かべて呟く。

「・・・・欲しかったなぁ～」

ドゴオオオオオオオオオオオオオン！！！

黒いエネルギー球はスカリエッティに直撃し、トーレ同様に壁を掘り進みながら遠くへと吹き飛んで行った。

それを確認したブラックウォーグレイモンXは、スカリエッティの姿を模った壁に開いている穴に背を向け、背後に何時の間にか居たリンディに声を掛ける。

「最後のナンバーズは如何した？」

「もう終わったわ。他のナンバーズと同様に壁にめり込ませて来たわ」

「そうか」

リンディの言葉にブラックウォーグレイモンXは頷くと、足を出口の方に向けて歩き出し、リンディも同様に歩きながら声を掛ける。

「それと管理局の通信を傍受したら、予想通りの動きを行っている事が判明したから、真の惨劇ープランΩを実行する事に成りそうよ」

「予想通りか。成らば、その為の準備は如何なんだ？」

「クイントとなのはさん、ガブモン君が実行中。その他の準備も殆ど終わり掛けている。後は引き金さえ引かれれば、プランΩは始まり、管理局の崩壊、再誕が始まるわ」

リンディは邪悪な笑みを浮かべながらそう言い、ブラックウォーグレイモンXとその身と融合しているルインも同様に邪悪な笑みを浮かべ、スカリエッティのアジトから出て行くのだった。

地上本部に在る一室。その部屋の中には四名の人物が存在してい

た。
一人は茶色のコートを着た男性ーゼスト・グランガイツ。
一人は地上本部の重鎮ーレジアス・ゲイズ中将。その娘であり、副官のオーリス・ゲイズ。
そして一般の局員である思われる女性局員が一人。
地上本部の一室に存在し、ゼストは険しい表情を椅子に座っているレジアスに向け、互いに見据え合っていた。

「レジアス。聞きたい事は一つだけだ。八年前に俺と俺の部下を殺す様に指示したのはお前なのか？」

ゼストはそう言うと共に、懐から二枚の写真をレジアスの執務机の投げ付ける。
写真の一枚には、ゼストの部下達が写り、もう一枚の写真には地上の平和を理想に頑張っていたレジアスとゼストの姿が写っていた。

「俺は良い。俺は、お前の正義になら殉ずる覚悟が在った。だが、俺の部下達は何故死んだ！？」

ゼストの叫びに対して、レジアスは何も答えずに辛そうな表情を浮かべながら写真を見つめる。

「どうして、こんな事になってしまった？俺達が護りたかった世界は、俺達の欲しかった力は、俺とお前が夢見た正義は、何時の間にこんな姿になってしまった？」

「ッ！！」

レジアスは更に苦悩の表情を浮かべる。彼は地上の平和の為に頑張り続けていたが、何時の間にかその理想は変わり、平和の為なら

ば違法や犯罪者で在るスカリエッティとも手を結び、違法も行い続けていた。
本局には優秀な魔導師や戦力を奪われていく。その為に、人員不足や戦力不足に追われ、地上の人々を護る力を失っていく現状を変える為に、人造魔導師や戦闘機人を使って、地上の人員不足を解消しようとしていたのだ。
しかし、それを依頼していたスカリエッティにも裏切られ、地上の人々は脅威に襲われ続けている。
この様な現状が自分の望んだ正義なのかとレジアスは深く苦悩していた。

「ワシは……」

ゼストの質問に答えようと、レジアスは苦悩の表情を浮かべながら答えようとする。
その時に部屋の隅の方にいた女性局員が静かに立ち上がり、右手に鉤爪のような武器を装着させ、右手を隠しながらレジアスの背後に静かに移動し始めた瞬間。

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！！

「ハアアアアアアアーーーー！！！」

『ッ！！』

部屋の横壁が突如として崩壊し、その中から一人の女性が姿を現し、全員が驚愕の表情を浮かべた。
何故ならば現れた人物は、もう既に死んでいる人物、ゼストと共に殉職したとされる女性。

「ナカジマッ！！」

女性ークイント・ナカジマの姿にゼストは驚愕の声を上げるが、クイントは気にせずにレジアスの背後に居た女性局員を殴り付ける。

「貴女は邪魔よッ！！」

ーーードゴオン！！

「キャアァァァァァァーーーーー！！！！」

『なっ！？』

クイントの拳を腹に受けた女性局員は悲鳴を上げながら、クイントが現れた別方向の壁に激突し、女性の姿はナンバーズと同様の戦闘スーツを着た女性の姿に変わった。

女性局員の正体は、ナンバーズ２のドゥーエだったのだ。用済みに成ったレジアスを殺そうと動いていたのだが、クイントに阻まれ、壁に激突して目を回す様な状態に成っていた。

その事に全員が驚愕の表情を浮かべる中、クイントは優しげな笑みを浮かべながらレジアスに近付き、肩に手を置く。

ーーーポンッ！

「こんにちはレジアス中将。さっそくだけど、私のお願いを聞いて貰って良いかしら？」

「まっ！待てナカジマ！レジアスとは俺が話をして！！」

ゼストはクイントを止めようと、クイントの肩に手を置くが、ク

イントはレジアスとは打って変わって、険しい表情をゼストに向け、全力でゼストの腹に向かって拳を突き出す。

「この～馬鹿親が！！」

ーーードゴオン！！

「グフッ！！」

クイントの拳を受けたゼストは苦痛の声を上げて、腹を押さえながら蹲るが、クイントは構わずにゼストの襟首を掴み上げる。

「如何言う事ですかゼスト隊長？何でルーテシアちゃんの父親で在る貴方の事を、ルーテシアちゃんが知らないんですか？」

ーーーギクッ！！

「そ、それは・・・・」

ゼストは気まずげにクイントの視線から顔を逸らした。

ゼストとルーテシアは実の親子である。当時、ゼスト隊は死亡率が高く危険な任務を負う事が多い部隊だった。その上、組織だった犯罪者を相手取る機会も多かったので、反管理局主義者のみならず手を逃れた犯罪者やその類型から恨みを買う事も多い。

その為に隊員の殆どが独身者で占められていた。例外としては子供や夫がいたクイントぐらいだろう。

しかし、隊員も人間であり、女性局員も当然居たのだから、間違いも犯す。

そしてその中にいたメガーヌも当然ながら間違いを犯した。上司で在るゼストと一夜どころか何度も間違いを。その結果がルーテシ

アで在る。
しかし立場上、籍をそう簡単には入れられる訳も無く、ルーテシアが生まれてからもズルズルと時が過ぎ、ゼストとメガーヌが籍を入れる事は無かった。
メガーヌの親友であり、同じ部隊だったクイントはもちろんその事を知っていたし、祝福もした。
それなのに、ルーテシアに事情を深く聞いたらゼストの事は知っていても、父親で在る事は知らなかったと告げられ、クイントは元々の用事とゼストを殴る為に急ぎ地上本部に向かい到着したのだ。

「どうせ、自分の命が残り少ないからと言う理由で、ルーテシアちゃんとしっかりと向き合わなかったんでしょうね？」

「グウッ！！」

図星を指されたゼストはうなり声を上げながら、クイントに視線から顔を逸らした。
クイントの言うとおり、ゼストは自身の残りの命が少ない事を分かっていた為に、ルーテシアの悲しみを少しでも減らす為にと思い、自身が実の父親で在る事を隠していたのだ。
それを見たクイントは顔に幾つも青筋を浮かべるが、今は時間が無いと思い、ゼストの襟首から手を離し、再びレジアスに顔を向ける。

「とにかく、レジアス中将？私達に協力して貰いますよ？本局上層部の思惑を潰して、管理局を再誕させる為にね？」

「な、何だと？」

レジアスは疑問の声を上げるが、クイントは笑みを浮かべたまま、

色々と今回の事件の裏に隠されていた本局の本当の思惑を伝え、レジアスは戸惑いながらも協力を約束したのだった。

上空に浮かぶゆりかごへと向かったなのは、ヴィータ、はやて、そして大勢の管理局魔導師隊は、既に全てのガジェットが破壊されたと言うのに、未だにゆりかご内部へと一人も突入する事が出来なかった。

何故ならば、ゆりかごに入ろうとすれば、音速を超えるスピードでゆりかごの周りを飛び回っているグラニの発生させている衝撃波に寄って、ゆりかごへと近付く魔導師達は全員吹き飛ばされているのだ。

ーーーピイィィィィーーー！！

ーーードゴオオオオオオオオオン！！

『ウワァァァァァーーーー！！！』

「クソッ！！あの野郎のせいでゆりかごに近付けねえ！！」

衝撃波を受けない範囲から様子を見ていたヴィータは、飛び回るグラニを睨み付けながら叫んだ。

既に多くの局員がグラニの発生させている衝撃波に寄って戦闘不能に成っている。その上、何人かの魔導師達がグラニに向かって射撃や砲撃を放っても、グラニのスピードの前にあっさりとかわされる上に、はやての広域魔法もグラニはあっさりとかわしている。

管理局の魔導師は一人足りとも通さないと宣言する様に、グラニは一人足りとも管理局の魔導師達を通さなかった。ただ一人を除い

ては。

「何であの野郎？なのはだけは通しやがったんだ？」

グラニはこの世界の高町なのはがゆりかごに近付くのを阻まなかったのだ。そのお陰でなのははゆりかごへと侵入する事が出来た。

それはグラニの主で在るデュークモンの願いなのだが、その事を知らないヴィータは自身の横に居るはやてと共に疑問の表情を浮かべるが、すぐに何とかゆりかごへと入る為に、再びグラニに向かって攻撃を放つが、やはりグラニは意図も簡単にかわし、管理局の魔導師達を翻弄し続けるのだった。

ゆりかご内部、玉座の間では、玉座に座らせられて手足を拘束されているヴィヴィオと、その横で微笑を浮かべながら立っているクアットロが玉座の間に通じる頑丈な扉を見つめていた。

見つめていた扉は突如として強力な衝撃が与えられたかのように大きく歪み、一瞬の内に砕け散る。

ーーーガラガラガラガラ

扉が砕け散ると共に、扉を破壊した者ーデュークモンがゆっくりと部屋の中に足を踏み入れ、拘束されているヴィヴィオを視界に捕らえる。

「・・・・・・すぐに拘束を解くのならば、八割殺しで済ますが？」

「怖いですわねぇ～。でも～、貴方は此処まででですわ。確かに素晴らしい力ですが、私達の切り札に勝てませんからねぇ～」

そう言いながらクアットロは、ヴィヴィオの頬に向かって指を伸ばすが、デュークモンは全く気にせずにゆっくりと歩みを進め、クアットロはヴィヴィオの頬に後一歩で届くぐらいの距離で指を止める。

「良いんですかぁ～？この子の頬に傷が付きますわよぉ～？」

「幻影にその様な事が出来るのか？」

「ッ！！」

自身のＩＳがいとも簡単に見破られた事にクアットロは目を見開くが、すぐに微笑を浮かべながら幻影を消滅させ、デュークモンの頭上にモニターを映し出す。

『私のＩＳを見破ったのには驚きましたわ。貴方はやはり危険な存在。此処は切り札を使わせて貰いますわぁ～』

「うぅ～、あ、あぁ！！」

「ヴィヴィオッ！！」

苦しみ始めたヴィヴィオの姿にデュークモンは心配そう声を上げ、ヴィヴィオの下へと急ぎ駆け出そうとするが、突如として強力な虹色の魔力風が吹き荒れ、デュークモンは足は止まってしまう。

「ムッ！！」

『良い事を教えてあげますわぁ～。その子は古代ベルカの王族の遺

伝子から生まれた人造魔導師。古代ベルカ王族の固有スキル『聖王の鎧』を持ち、レリックとの融合を経て、真の力をこの子は取り戻す。古代ベルカの王族が自らその身を作り変えた究極の生体兵器、『レリックウェポン』としての力を『

「ヤダァ～！！！やだよぉ～！！ママ～！！ママ～！！」

『すぐに誕生しますわ！私達の王。ゆりかごの力を得て無限の力を手に入れた究極の戦士。『聖王』がッ！！』

ドゴオオオオオオオオオオオオオン！！

クアットロが叫ぶと共に虹色の閃光が、眩いばかりに光輝き、辺りを埋め尽くした。

『ハハハハハハハハハハッ！！！』

クアットロは喜びの笑い声を上げ続ける。

自身の最大の切り札で在る聖王が目覚めた事に歓喜しているのだ。

ベルカ最強の王『聖王』。その存在は長い歴史の置いても最強の武勇を誇った戦士。

ヴィヴィオはその遺伝子から生まれた人造魔導師。その力ならばデュークモンさえも倒せる思っているのだ。

しかも、今のヴィヴィオはクアットロの思いのままに動く人形。最強の手札が自身の手に在る上に、本体で在る自分自身は遠く離れた場所にいる。デュークモンは何も出来ないと思ったのだ。

だが、彼女は重要な事を忘れていた。聖王はゆりかごの最終防衛システム。敵に対してしか反応しない存在。

そうクアットロが忘れている事。“デュークモンにはゆりかごの防衛システムが全く起動していなかった”事実を忘れていた。

『ハハハハハハ・・・・・・・ハッ？』

発生していた虹色の魔力風はまるで最初から存在していなかったの様に収まり、玉座には静かに座ったままのヴィヴィオの姿がしかなかった。

『何故！？何故目覚めないの！？聖王が何故！？』

ヴィヴィオの姿が全く変わらない事にクアットロは驚愕の声を上げ、自身の手元に在るコンソールを弄り回すが、ヴィヴィオが聖王へと姿を変える事はなかった。

その様子を黙って見ていたデュークモンは、自身の左手のイージスを下に向けて構え出し、静かな声でクアットロに声を掛ける。

「聖王が目覚める筈は無かろう。何故ならば、ゆりかごは王同士で戦う事を望んで居ないのだから」

『何を言っていますの！？』

「こう言う事だ」

ーーーブオン！

クアットロの言葉に答えると共に、デュークモンは自身の体の周りに魔力粒子を漂わせ始め、クアットロは呆気に取られたようにデュークモンの周りに漂っている魔力光を見つめる

デュークモンの周りに漂う燦然と輝く“虹色”の魔力光。

ヴィヴィオと同様の聖王の血筋を示す魔力光、“カイゼルファルベ”

絶対に在り得る事の無い魔力光をデュークモンは自身の体の周りに纏っていた。

『・・・・・あ・・・な・・・・・た・・・・・は・・・・・一体・・・・・何者・・・・何ですの？』

「私はデュークモン！！聖王を護る一振りの剣！！貴様は異世界とは言え、私の主君を傷つけ、あまつさえ兵器などと呼んだ。断じて赦さん！！」

デュークモンは叫ぶと共に、下に向けていたイージスにエネルギーを集め始め、クアットロは恐怖の表情を浮かべる。

デュークモンがディエチを壁を破って吹き飛ばした事を思い出したのだ。

しかし、もはやデュークモンは止まらず、更にエネルギーを集めイージスは寄り強く光り輝いていく。

「後悔しながら吹き飛ぶが良い！！ファイナル・エリシオン！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオン！！

『イヤアァァァァァァァーーーーー！！！！！』

デュークモンの放ったファイナル・エリシオンは一切の停滞も見せずに、クアットロが居る最深部までの壁を破りながら直進し、クアットロは断末魔の叫びと共に光の中に消えて行き、モニターが消失した。

それを確認したデュークモンはイージスとグラムを何処へとも無く消失させ、急ぎ玉座に拘束されているヴィヴィオの下へと駆け出す。

「大事は無いか？」

「ヒィッ！」

デュークモンの姿にヴィヴィオは恐怖の声を上げた。
無理も無いだろう。以下に聖王家の血筋とは言え、見た事も無い、しかも人間ではないデュークモンの姿に恐怖を覚えるのも当然だろう。
その様子にデュークモンは一瞬悲しげな表情を浮かべるが、すぐにヴィヴィオを拘束している手枷や足枷に手を伸ばし、一瞬の停滞も無く引き千切る。

ーーーバキン！！

「これで君は自由だ・・・・・母親の所に帰りたいのならば、私が君を送ろう」

「・・・・・帰れないよ」

「何？」

ヴィヴィオの言葉にデュークモンは訝しげな表情を浮かべてヴィヴィオを見つめると、ヴィヴィオは涙を溜めた瞳をデュークモンに向ける。

「・・・・・ヴィヴィオは兵器だもの。なのはマ・・・・なのはさんの下に何て帰れないよ」

「・・・・君は兵器などではない。私が保証しよう。君は君なのだ」

「違うよ！！本当の両親なんて私には無い！！私が子供の姿をしていたのも、誰かに取り入って魔法のデータを収集するためだったんだよ！こんな私が・・・なのはさんたちのそばに居て良いはずが無いんだ！」

ヴィヴィオは涙を流しながらデュークモンに向かって自身の存在を否定する様な叫びを上げ、デュークモンは心の底からヴィヴィオの言葉と姿が悲しいと思った。

ヴィヴィオの言うとおり、ヴィヴィオには本当の両親など存在しない。

ヴィヴィオは確かに兵器として望まれて生まれてしまった。だが、デュークモンには何が在っても護りたいと思う存在。

その存在が異世界とは言え、自身を否定する様な叫びを上げた。デュークモンはその事が心の底から悲しかった。

「・・・・・違う。君は優しい子供だ。誰より優しい子供だと私は知っている。だから頼む！！自分を否定する様な叫びなど上げないでくれ！！この通りだ！！」

デュークモンは言葉と共に自身の頭を深く下げた。

頭を下げた程度ではヴィヴィオの心は変わらないだろう。だが、それでもデュークモンは自身が出来る最大の行為を行う。

異世界だとかは関係ない。デュークモンに取ってはヴィヴィオが生きていて、笑顔を浮かべる事が何よりも嬉しいのだ。

忘れもしないあの惨劇の日。初めて出来た友を失った異世界のヴィヴィオの悲しみの叫びをデュークモンは一日たりとも忘れた事は無い。

「君を兵器などと呼ぶ存在を私は絶対に赦さない。君が悲しむのな

らば、私はそれを止める為に戦おう」

「・・・・・・」

デュークモンの言葉にヴィヴィオは無言で顔を俯かせ、デュークモンは同じ様に無言に成りながらヴィヴィオに背を向け、ヴィヴィオの周りに強力な結界を張り巡らせる。

ーーーシュウン！！

「ッ！！」

「安心してくれ。これは君を戦いに巻き込まない為の結界だ。これから起きる戦いにな」

結界が突如として張られた事に驚愕するヴィヴィオに、デュークモンは優しく言葉を言いながら、再びグラムとイージスを取り出し、部屋の入り口の扉を睨み付ける。

「・・・・・漸く来たか。高町なのは！！」

「えっ！？」

デュークモンの宣言にヴィヴィオは驚愕の表情を浮かべて扉を見つめてみると、破壊された扉から白いバリアジャケット―エクシードモードにレイジングハートを変形させた管理局のエース・オブ・エース―高町なのはが険しい表情を浮かべて玉座の間へと足を踏み入れた。

それを確認したデュークモンは、ヴィヴィオから離れ始め、グラムをなのはに向かって構え出す。

「待っていたぞ。貴様が来るのを」

「・・・・・貴方は、いえ貴方達は一体何者なんですか？何でガジェットから人々を護ったり、ゆりかご内部に侵入してヴィヴィオを救い出したんですか？」

険しい表情を浮かべながら、なのはは質問すると共にレイジングハートをデュークモンに向かって構え出す。

「私はデュークモン。ヴィヴィオの悲しみに満ちた叫びを聞いて、駆け付けた騎士だ」

「・・・・・だったらすぐに他の者達に命じて、戦いを止めて下さい。貴方達の行動のせいで管理局は妨害に在っています。このままだと公務執行妨害で貴方達を逮捕する事に成ります」

「公務執行妨害か？クッ、クハハハハハハハハハハハ！！！」

「何がおかしいんですか！？」

突如として大声で笑い始めたデュークモンになのはは怒りの声を上げて、レイジングハートを向けるが、デュークモンは険しい表情をなのはに向け、グラムに聖なるエネルギーを集め始める。

「ふざけるな！！貴様ら管理局こそが人々を苦しめているのだろうが！？そして貴様の行動こそがヴィヴィオを苦しめる現状を作り上げた！！」

「私の行動！？」

「そうだ！！貴様はヴィヴィオがスカリエッティに狙われている事を知っていたはずだ！なのに何故ヴィヴィオを奪われ易い状況など作り上げたのだ！？」

「そ、それは！？」

デュークモンの叫びになのははうろたえた表情を浮かべ、デュークモンは怒りの表情を浮かべて確信する。

目の前に居るなのはは、自分の力を過信し、相手の力を甘く見た愚か者だとハッキリと分かった。

それはデュークモンの怒りを振り切るほどに最悪な事実だった。

「貴様は叩きのめさせて貰うぞ！！セーバーショット！！」

「ッ！！ディバインバスターー！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオン！！

デュークモンのセーバーショットとなのはのディバインバスターは互いの中間で激突し、爆発が起きた。

今此処に異世界の聖王の忠実な騎士ーデュークモンとこの世界の聖王の養母ー高町なのはの激闘が開始されたのだった。

特別編、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ完全崩壊後編１（後書き）

次回、真の惨劇開幕。

管理局崩壊と再誕。

特別編、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ完全崩壊後編２

クラナガンの人々の救援を終えたスレイプモンは、上空に浮かぶゆりかごを廃棄都市のビルの上に立ちながら、眺めていた。

「そろそろ始まった頃だろう。デュークモンとこの世界のなのはの戦いが」

（そうね。と成れば、私達も動くべきでしょう？）

「そうだな。プランΩ。出来れば行いたくは無かったが、それももはや無理のようだ」

スレイプモンとその身に融合しているティアナは、既にリンディから管理局の行う行動を聞き、プランΩを実行するしかないと判断していた。

プランΩ。それは管理局が在る行動を行った時のみに実行する事を決めていたスレイプモン達に寄る全ての真実の暴露と管理局の崩壊の実行。

既に管理局はその行動を実行する事を、通信を傍受していたリンディの証言から聞き、スレイプモンは本当に残念だと言う表情を浮かべていた。

「・・・・・出来る事ならば、プランΩだけは本当に行いたくなかった。私達はこの世界の者ではない。全てが終われば去る積もりだったのに、管理局は本当に愚か者達の集まりだ」

（・・・・・そうね。だけど、もう実行するしかないわ。全てを変える為にもね？）

「そうだな」

スレイプモンは答えると共にブレイクミラージュを両手に顕現させると、ブレイクミラージュの持つ演算能力をフル活用させ始め、管理局の内部に在るシステムを完全に掌握し、今ミッドで起きている全ての事実を全管理世界に秘密裏に放送し始めた。

ゆりかごの周りに居る局員達は未だにゆりかご内部に入る事は出来ず、グラニの発生させている衝撃波に寄って翻弄され続けていた。

ーーーピィィィィィーーーー！！！

ーーードゴオオオオオオン！！

『ウワァァァァァーーー！！！』

「如何したら！如何したら通れるんや！？このままじゃなのはちゃんまで！！」

吹き飛ばされる局員達の姿を見ながらはやては悔しそうな表情を浮かべて叫ぶが、グラニは嘲笑うかのように飛び続ける。

既にガジェットは存在しないと言うのに、管理局員はなのはを除いた全員が一歩たりともゆりかごに入る事が出来ていない。

ゆりかごの周りを飛び回るグラニに全員が吹き飛ばされ、多くの怪我人が既に続出している。

局員達もグラニを撃ち落そうと砲撃や、はやての広域攻撃を放ち続けているのだが、音速を超えるスピード動き続けているグラニに

当たる筈も無く、運が良く当たったとしてもグラニの装甲の前では豆鉄砲が当たった程度のダメージしか与える事が出来ない現状だった。

「クソッ！あいつも化けもんだぜ！！」

「落ち着くんやヴィータ！！もうすぐ本局から艦艇も来る！！そうなれば方策も取れるわ！！」

はやてはそうヴィータに言うが内心ではかなりの不安に襲われていた。

（何やこれ？私は何か重要な事を忘れておる気がする？一体何や？）

漠然とした不安。それは自身が忘れている事に関係してるとはやては内心で思うのだが、その忘れている事が分からず疑問の表情を浮かべ続けていると、背後にヘリが近付いて来る。

『八神部隊長！！』

「はやてちゃん！！」

「主ッ！！」

「ッ！！スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、それにシャマルにザフィーラまで！何か在ったのか！？」

ヘリの中に乗っているＦＷメンバーと六課襲撃のおりに負傷を負い、前線から離れていた筈のシャマルとザフィーラの姿に、はやては驚愕の表情を浮かべて見つめた。

シャマルとザフィーラは病院に居る筈の上に、ＦＷメンバーは廃棄都市から地上本部へと向かっていた戦闘機人の確保に向かっていた筈だ。それなのにその者達が全員が、ゆりかごの近くへとやって来ている。

「何か在ったんか！？地上本部に向かっていた筈の戦闘機人達はどないしたんや！？」

「・・・・・戦闘機人達は全員確保出来ました。ギンガさんも助かりました。だけど、戦闘機人を倒したのは蒼い機械の狼で・・・・・・ギンガさんを助けたのは・・・・・・死んだはずの・・・・ギンガさんとスバルの母親で在るクイント・ナカジマさんらしいです」

『ッ！！』

ティアナが告げた事実に、はやてとヴィータは顔を見合わせた。ギンガとスバルの母親であるクイントは、既に故人に成っている人物。

その人物がギンガを救出したと、ティアナは告げたのだから驚愕するのも当然だろう。

「それだけじゃないのよ！！廃棄都市にいた戦闘機人の反応が消失する瞬間に、なのはちゃんの魔力反応が出現したの！！しかも同時に、七個もよ！！」

「何やて！？」

「何だって！？」

シャマルが更に告げた事実に、はやてとヴィータは叫びを上げた。

何故ならば、自分達の知るなのはは一人だけであり、そのなのはは確かにゆりかご内部へと入って行くのをはやてとヴィータは目撃しているのに、そのなのはの魔力反応が廃棄都市に、しかも同時に七個の反応が出現したと言うのだから、驚愕するのも当然だろう。
その様にはやてとヴィータが驚愕していると、ゆりかごの上部に、離れたクラナガンからさえも一望出来る巨大なモニターが出現する。

ーーーブウン！！

『ッ！！』

突如としてゆりかごの上部に出現したモニターにはやて達は驚愕の表情を浮かべてモニターを見つめて見ると、其処には。

『セーバーショット！！！』

『ディバインバスターー！！！』

ドゴオオオオオオオオオン！！

互いに砲撃を放ち合うデュークモンとなのはの姿が映し出されていた。
その映像にゆりかごの周りに居る局員達と、そして安全な場所に避難されたクラナガンの人々は呆然とした表情を浮かべながら見つめるのだった。

ドゴオオオオオオオオオオオオオン！！

「クッ！！」

砲撃を互いに撃ち合ったデュークモンとなのはの砲撃を、中間でぶつかり合い激しい爆発が起きるが、その衝撃は全てなのはの方に向かって来た。

それが意味する事に気が付いたなのはは悔しげな表情を浮かべて、デュークモンから更に距離を取りレイジングハートを構える。

（私の方に全て衝撃が襲い掛かった。全力じゃないけど、エクシードモードの私の砲撃に打ち勝つ何て！？）

自身の全力では無いとは言え砲撃に、意図も簡単に打ち勝って見せたデュークモンにプライドが傷付けられたなのはは悔しげな表情を浮かべて見つめる。

だが、デュークモンはなのはの表情など全く気にせずに、床に向かってグラムを突き立てる。

ーーードスッ！！

「ゆりかごシステム完全掌握。浮上停止。ＡＭＦシステム解除」

「なっ！？」

デュークモンの呟いた言葉の意味に気が付いたなのはは驚いた声を上げて、デュークモンを見つめる。

それと共にグラムの突き刺している床から光の線が発生し、玉座全体に光の線が走った瞬間に、ゆりかご内部全域を覆っていたＡＭＦが解除されると共にゆりかごの浮上も停止した。

それと共になのはは自身の体が軽くなるのを感じ、呆然とした表情を浮かべて自身を手を見つめる。

「・・・・・如何してＡＭＦを解除したの？ＡＭＦが在れば有利に成るのに？」

床からグラムを抜いてるデュークモンに向かってなのはは呆然とした表情を浮かべながら質問した。

ＡＭＦ。通称アンチマギリンクフィールド。効果範囲内の魔力結合を解いて魔法を無効化する能力が在り、その効果範囲内では攻撃魔法どころか移動系魔法も妨害される。しかもゆりかごを覆っていたのは高濃度のＡＭＦ。

それが、いかにＳランクオーバーで在るなのはも弱体化を免れる事が出来ないほどの高濃度で存在していた。にも関わらず、デュークモンはそれを解いてしまったのだから、なのはの力は万全な状態に戻ってしまう。

敵で在る筈の者に塩を送る様な行動が分からなかったのだ。

しかし、デュークモンからすれば当然の事だった。

「言った筈だぞ。貴様は叩きのめすと？負けた時の言い訳をされたくないだけだ」

デュークモンがＡＭＦを解いた理由は唯一つ。

なのはを全力で叩きのめし、完膚なきまでに敗北させる為だった。

もはやデュークモンは、目の前に立っている“時空管理局員の高町なのは”を赦す気は無かった。

（赦さん。この女だけは絶対に赦さんぞ。この女の行動のせいで、この世界のヴィヴィオはあのような言葉を呟いた！！私は絶対に赦さん！！）

デュークモンがなのはの事を赦す事が出来ない理由は一つ、この

世界のヴィヴィオが告げたあの言葉。

“ヴィヴィオは兵器だもの”

（ふざけるな！！ヴィヴィオでは兵器ではない！！この女がヴィヴィオと確り向き合っていれば！スカリエッティの戦力を甘く見なければ！この様な事態には成らなかった上に、ヴィヴィオが傷付く事は無かったのだ！！）

もし、ヴィヴィオが連れ去られずなのは達の下に居続ければ、ゆりかごは浮かび上がる事も無く、ヴィヴィオも自身の出生の秘密を知る事は無かっただろう。

ほんの僅かな油断。その油断こそが、ヴィヴィオの心に傷を負わせた。

そしてその油断を呼んだのは先ず間違いなく、なのはの自身の力に寄る過信だとデュークモンは先ほどの一撃とその前の言葉で確信していた。

（デュークちゃんの力は映像で見ている筈なのに、全力の攻撃じゃ無かったよね？）

（先ず間違いない。この女はリミッターを外した自分に勝てる者はいないと、心の奥底で思っている。愚か者でしかない！）

自身と融合しているヴィヴィオの言葉に答えると共に、デュークモンはグラムをなのはに向けて構え出す。

「全力で来るのだな？もはや負けた時に言い訳など、不可能だぞ？」

「ッ！！馬鹿にしないで！ディバインバスターー！！！」

デュークモンの言葉に、プライドを完全に傷付けれたなのはは、今度こそ全力で砲撃を放ち、デュークモンに凄まじい勢いで迫る。
だが、デュークモンは迫り来る砲撃を見ても、慌てずに構えていたグラムを全力で振り抜く。

「無駄だ！！」

ーーーバシュン！！

「なっ！？」

グラムが振り抜かれると共に、デュークモンに迫っていたディバインバスターは一瞬の内に霧散した。
今度は正真正銘に全力の砲撃だったと言うのに、意図も簡単に霧散された事に驚いて、なのはの動きが止まった瞬間に、デュークモンの姿はなのはの視界から消失する。

ーーービュン！！！

「ッ！！何処に！？」

視界から消えたデュークモンの姿になのはは慌てて辺りを見回し始めると、背後にデュークモンが出現し、グラムをなのはに向かって振り抜く。

「ムン！！」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！》

デュークモンが背後に居る事に気が付いたレイジングハートは、慌ててプロテクションを発動させ、攻撃を受け止めようとする。
だが、

ーーーバリィィィィィィン！！

「ウッ！キャアァァァァァァァーーーー！！！」

ーーードゴオオン！！

一瞬の停滞も見せる事無くプロテクションはグラムの一撃に崩壊し、なのはは悲鳴を上げながら壁に激突しめり込んだ。
その様子を眺めていたデュークモンは、ゆっくりと壁にめり込んでいるなのはに歩み始める。

「鉄壁だと貴様の防御は言われているようだが、今の一撃は力を全く込めずに放ったのだぞ？それで鉄壁と呼ばれるとは、随分と脆い鉄壁だな」

「・・・・・・ブラスターシステム、リミット？、リリース！！」

《Ｂｌａｓｔｅｒ．ｓｅｔ》

「ムッ！」

壁に埋め込んでいるなのはが叫んだ瞬間に、膨大な魔力が発生し、デュークモンが足を止めて警戒の表情を浮かべ、注意深くなのはを観察し始める。
目の前になのはが使ったシステムは、恐らく自身の世界のなのはのセラフィーモードと同様なシステムだと気が付いた。セラフィー

モードには遥かに及ばないだろうが、それでも警戒するには十分な物だと判断し、足を止めたのだ。
　その僅か時間の間に、なのはは壁から飛び出し、再びレイジングハートをデュークモンに向かって構えると、先ほどのディバインバスターよりも遥かに大威力の砲撃を魔法をブラスターシステムで強化した状態で放つ。

「エクセリオンバスターー！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオン！！

　放たれたエクセリオンバスターは、デュークモンへと凄まじい勢いで迫るが、デュークモンは構えも取らずに歩みを再開し、その体に砲撃は直撃した。

ドゴオオオオオオオオオオオオオン！！

ーーードッドッドッ

「ッ！そ、そんな！？」

　自身の砲撃が直撃したにも関わらず、砲撃を体に受けながらも歩みを続ける虹色の魔力光を体の周りに発生させているデュークモンの姿に驚愕の声をなのはは上げた。
　自身の中でも最強の魔法で在るスターライトブレイカーに匹敵する筈なのに、エクセリオンバスターを体に受けながら歩むを止めないデュークモンの姿になのはは一瞬恐れを覚えるが、すぐさま表情を険しくして更なる力を解放する。

「ブラスターシステム！リミット？！！」

ーーードグオオオオオオオオオン！！

なのはが叫ぶと共にエクセリオンバスターの威力は更に倍増するが、それでもデュークモンは歩みを止めない所か、砲撃の中を全速力で駆け抜ける。

「オォォォォォォォォーーーーー！！！！！」

「ウッ！ウワァァァァァァァーーーー！！！！！」

砲撃の中を進んで来るデュークモンの姿になのはは恐怖の声を上げながら、更に砲撃の威力を上げるが、デュークモンの走りを止める事は出来なかった。

そして遂になのはの目の前にデュークモンは現れ、グラムをなのはに向かって振り下ろす。

「このデュークモンにその程度の砲撃は通じんぞ！！」

ーーードゴオオオオン！！

「ガハッ！！」

叫ぶと共に振り抜かれたグラムの一撃をかわす事も出来ず、なのはは苦痛の声を上げながら、再び壁に激突した。

その様子を眺めながらデュークモンはグラムをなのはに向かって構え出し、自身が予測したブラスターシステムの正体を苦痛に苦しんでいるなのはに語り出す。

「ブラスターシステム。大仰な名前の割には詰まらんシステムだ。

自己ブーストの極限と言った所だろうな」

「グッ！！」

苦痛に苦しみながらもブラスターシステムの正体を指されたなのはは悔しげな声を上げた。

ブラスターシステム。それはこの世界のなのはの切り札であり、自身とデバイスに過剰としか言えないほどの自己強化を行うシステム。強力な力を手に入れる事が出来るシステムだが、その反面に使用者と使用デバイス、双方の命を削るほどの負担を掛けてしまう。正に諸刃の剣を表したシステム。

しかも、使用後は必ず心身ともに凄まじいほどの消耗が発生する上に、深刻な後遺症が残るのは間違い。

強力無比のシステムだとデュークモンも認めるが、使用後の事を何も考えていない欠陥品としか言えないシステムだと断言出来ると判断した。

「その様な自虐のシステムを使うとは、余程貴様は命がいらんようだ・・・・・・いや、これも上層部のシナリオの内なのだろうな。貴様がこの件に関われば、必ず使うと踏んでいたのだろう。自身を顧みず人々を護った本局のエース。事件後の良い内容に成るだろう」

「・・・・・・如何言う事なの？上層部のシナリオって？」

呆然とした表情を浮かべてなのははデュークモンに質問した。

それを聞いたデュークモンは無表情に絶望の一なのは達管理局に取っての絶望の真実をなのはに語り出す。

「全ては本局上層部の描いていたシナリオだ。地上本部を完全に掌握する為に。貴様の部隊、機動六課は生み出された」

「ッ！！！」

デュークモンが告げた真実になのはは驚愕の表情を浮かべ、デュークモンはリンディがフェイトへと語ったこの事件の裏に隠されていた本局上層部の真の思惑を全て告げた。

「・・・・・・・嘘だよ・・・・・・・そんなの嘘だよ」

全てを聞き終えたなのはは、教えられた絶望の真実に体を恐怖に震わせ、顔を青褪めさせた。

機動六課設立の裏の裏に隠されていた最悪の真実。地上本部との仲を更に悪化させ、地上を意固地にさせる状況を生み出し、ＡＭＦに対する対抗策を生み出せていない地上の無能さを見せ付け、それを本局直轄の部隊で在る機動六課に解決させ、地上の実権を完全に掌握する。

その為に生まれるであろうミッドチルダの人々の犠牲を完全に考えてない。

自分達の欲望の満たす為の悪夢の思惑を実行した本局上層部。そしてそれの一端を担っていた自分自身になのはは凄まじい恐怖と絶望に襲われていた。

「だが、この計画には弱点が在った。公開意見陳述会の前に、事件が終わっていれば、或いはゆりかごが浮かばない状況が出来ていれば全ては無駄に成り、地上の人々に犠牲が出る事は無かった。そしてその為の鍵を貴様らは偶然にも手に入れていた」

「・・・・・事件を解決出来る鍵・・・・・・・ッ！！まさか！？」

デュークモンが告げた言葉に、なのはは訝しげな表情をするが、

少し考えて何かに気が付いたように、なのはが入って来てから一言も喋らずに、デュークモンが張った結界の中で顔を俯かせるヴィヴィオを見つめた。
そう、ヴィヴィオこそが事件を解決、或いは抑止出来る鍵だったのだ。
ヴィヴィオがスカリエッティの下にさえ居なければ、ゆりかごは浮かばず、スカリエッティは最強の切り札を手に入れる事も無く、事件は起きなかった可能性が高い。

「先ほども言ったが、貴様らがヴィヴィオを連れ去れる状況さえ作り上げねば、状況は確実に変わっていただろう。そしてヴィヴィオが心に傷を負う事もなかった」

「ッ！！・・・・・心に傷を？」

デュークモンが告げた事実になのはは未だに自身の事を一度も見ようとしていないヴィヴィオの姿を見つめた。

「私は貴様が来る前に、あの子に言ったのだ。母親の所に帰りたければ、私が送るとな。だが、あの子は帰れないと私に告げたのだ！！」

「・・・・帰れない？」

「そうだ！！あの子は自分が兵器だから帰れないと私に告げた！！何故あの子が兵器などと呼ばれなければいけない！！」

「・・・・・ヴィヴィオが・・・・・自分を兵器って言った？」

もはやなのはは呆然とした表情を浮かべて、言葉を呟くの精一杯

だった。
自身の知るヴィヴィオは、甘えん坊で泣き虫の可愛い子供。その子が自分自身を兵器など呼んだ。
それを呼ばせる原因を作った者の正体に気が付いたなのはは、自身の手を呆然と顔の前に掲げて恐怖に震え出す。

「・・・・・私のせい・・・・・・私がスカリエッティの力を甘く見たから・・・・・ヴィヴィオが心に傷を負った・・・・・・ウゥ、ウワァァァァァァァァァーーーーーーーー！！！！！」

なのはは顔を床に付けて大声で泣き始めた。
全ては自分の、機動六課のスカリエッティに対する戦力の見通し甘さが生み出した状況だった。
デュークモンの言うとおり、スカリエッティの戦力の見通しの甘ささえ無ければ、ヴィヴィオは連れ去られず、最悪の事態に発展する事も無かった。しかし、現実には本局上層部の願っていた最悪の状態に起きている。全ては管理局の望んだ事。
管理局は人々の平和よりも自分達の欲望の為に、今回の事件が起きる様な状態を作り上げたのだ。
その様になのはが絶望の事実に打ちのめされている間に、デュークモンはリンディから届いた念話に内心で訝しげな表情を浮かべていた。

（プランΩの実行？ということは、やはり管理局はあの行動を実行すると言う事か？）

（ええ、傍受した通信で確定したわ）

（そうか。成らば、私達もそれに合わせて動く）

（任せてねリンディお姉ちゃん！！）

（クス、ええ、お願いね）

リンディはそう告げると共に念話を切り、デュークモンもそれを確認すると、グラムを泣き続けるなのはの俄然に突き付ける。

ーーースチャッ！！

「絶望するのは勝手だが、まだ話は終わっていないぞ」

「ッ！！」

デュークモンの言葉になのはは泣き腫らした目を驚愕に変えて、デュークモンの姿を見つめた。

話は終わってはいない。つまり、まだ在るのだ。ミッドを襲ったこの事件の裏に隠された秘密がまだ存在している。

その事が分かったなのはは、再び絶望の表情を浮かべ始めるが、デュークモンは一切の容赦せずに更なる絶望を語り出す。

「貴様は疑問には思わんか？このゆりかごが隠されていた世界に？」

「・・・・ゆりかごが・・・・・・隠されていた世界？・・・・・・ッ！！！」

言葉の意味に気がついたなのはは体に電流が走った様な衝撃を感じた。

ゆりかごが隠されていた世界の名はミッドチルダ。

次元世界の中心世界で在り、管理局の発祥の地。

その世界にゆりかごは眠っていた。普通ならば絶対に在りえない。

何故ならば管理局は古代や滅んだ世界の遺物ー通称ロストロギアの回収を絶対としている組織。その上、ミッドチルダには管理局以外に、次元世界にかなりの影響力を持っていて、聖王を崇め称えている宗教組織ー聖王教会が存在している。しかも聖王教会は聖王の遺物に関する物や、古代ベルカに関係しているロストロギアを管理している。

その両組織が存在している世界に、ゆりかごはスカリエッティが動かす時まで誰にも発見されずにいた。絶対に在りえない事だ。どちらかの組織が隠して置かない限りは。

そして聖王教会は在りえない。如何に次元世界に多大な影響力を持つ聖王教会でも、ゆりかごほどの巨大な遺物を、管理局の発祥の地であるミッドに隠して置くなど不可能だ。

ならば、隠した組織は一つしか在りえない。

「・・・・・時空・・・・・管理局・・・・・そんな」

「事実だ。そして最強の質量兵器と呼べるゆりかごを破壊せずに置いた理由は一つしか在るまい」

「ア、ア、ア、ア、アァァァァァァァァーーーーーー!!!!」

なのはは絶望の声を上げながらも気が付いてしまった。

管理局がゆりかごを隠した理由など一つしかない。

“管理局はゆりかごを使うつもりだった”自分達で質量兵器の廃絶など叫んでいながら、管理局は質量兵器を使う積もりだったのだ。

そしてゆりかごの起動には“聖王の血を引く者”が必要。つまり、ヴィヴィオを生み出したのはスカリエッティではない。

ヴィヴィオを真に生み出した全ての元凶と呼べる組織。その名は時空管理局。

「ワアァァァ

れを見ていたデュークモンはプランΩを実行し始める。
「私達はその様子を見ていた。私達の力は強大だ。その力を管理局に渡せば、管理局の腐敗は更に増大し、取り返しの付かない事態に成ると思い、私達は表に出ず見守り続けていた・・・・・だが、地上の在る者達は、我らの存在に気が付いてしまった」
「・・・・・エッ？」
言葉の意味に気が付いたなのはは顔を床に付けながらも、呆然とした声を上げた。
その様子にデュークモンは内心で計画通りと融合しているヴィヴィオと共に笑みを浮かべると、プランΩの通りに話を続ける。
「あの者達が我らの存在に気が付いたのは、本当に偶然だった。そしてその者達は私達とコンタクトを取り、地上の人々の為に力を貸してくれと私達に頼んで来た。だが、その者達も管理局員。むやみやたらに信用する事は出来なかった。しかし、今回の事件の時にその者達は私達に土下座までして頼んだのだ。『我々管理局の縄張り争いのせいで、ミッドの罪無き人々が苦しんでいる！！我々はどうなっても構わない！その代わりにミッドの人々を護ってくれ』とな」
「・・・・それじゃあ・・・・・貴方達が現れたのは・・・・・その局員達の願いの為に？」
「違うな。私達は管理局の為になど動く積もりは無い。動いたのは罪の無い人々と、悲しみの声を上げた少女の為だ。事件の元凶である管理局など知った事ではない。奴らの願いは事の序に過ぎん」
デュークモンはそう告げると共に、右手のグラムを構え出し、な

のはの体に狙いを付ける。
「さて、話は終わりだ。貴様も十分過ぎるほどに自身の罪の重さを知っただろう。引導をくれてやる」
「・・・・・・」
デュークモンの言葉に対して、なのははもはや生気の失せた目を浮かべて、グラムを見つめるだけだった。
もはやなのはにデュークモンと戦う気は存在していない。全ての元凶は自身の所属している組織の上に、ヴィヴィオの心に傷を負わせたのは自分の責任。
母と慕ってくれたヴィヴィオと向き合わず、スカリエッティの戦力の高さを甘く見た為に、ヴィヴィオの心に傷が生まれてしまった。
（ハハハハハッ・・・・・何だ・・・・・ヴィヴィオの事を大切に思っていながら・・・・・仕事だとか理由を付けて・・・・・しっかりとヴィヴィオと向き合わなかった・・・・・そのせいで・・・・こんな事に・・・・・・・・ゴメンねヴィヴィオ・・・・私は最低な人間だね）
自身の行ったヴィヴィオへの行動が全て裏目だった。
その事が完全に分かってしまったなのはは、もはや戦う気も起きず、デュークモンの一撃を受ける積もりで目を閉じる。
「最後は潔いな。案ずるな、ヴィヴィオは私達が護ろう。貴様はあの世に行くんだな！！」
ーーーブン！！

デュークモンは叫ぶと共にグラムをなのはに向かって突き出し、なのはは深く目を閉じながら最後の瞬間を覚悟するが、

「・・・・・めて」

ーーーピタッ！！

聞こえて来た小さな呟きが、耳に届いたデュークモンはグラムをなのはの体に当たる寸前で止め、声の主である結界に包まれたヴィヴィオに目を向ける。

「・・・その人を傷つけないで・・・・・その人は・・・・・・・・その人は！！ヴィヴィオのママだ！！」

ーーーバリィィィィィン！！

「まさか！？目覚めるのか！？」

ヴィヴィオが叫ぶと共に一瞬の内に、デュークモンが張った結界は、ヴィヴィオの体から溢れ出る様に発生した虹色の魔力風に破壊された。

それが意味する事に気が付いたデュークモンは、驚愕の表情を浮かべて虹色の魔力風の中心に目を向けると、その人物は現れた。

その人物は黒い黒衣を着て、金髪の髪に、緑と赤の瞳を持った女性。

デュークモンと共にゆりかごのもう一人の主。

“聖王ヴィヴィオ”がその姿をデュークモンの俄然にその姿を現した。

「もう・・・・・・なのはママを傷付けさせない！！」

ーーービュン！！

「ムッ！！」

自身の目の前に一瞬の内で移動したヴィヴィオの姿に、デュークモンは僅かに驚いた表情を浮かべた。

ヴィヴィオはその様子に構わず、虹色の魔力光を纏った右手をデュークモンに突き出す。

「ハアッ！！」

ーーードゴオン！！

「クッ！！」

イージスを使ってヴィヴィオの拳を防御するが、攻撃は放たず次々と、ヴィヴィオが繰り出してくる拳や魔法を防御する事に専念する。

デュークモンには異世界とは言え、ヴィヴィオを自身の手で傷付ける事など出来ない。その事が本能的に分かっているヴィヴィオは、自分がデュークモンを倒すと言う様に次々と拳や魔法を繰り出し、デュークモンの動きを抑えて行く。

「・・・・・如何して・・・・・ヴィヴィオが私を？」

目の前で起きているデュークモンとヴィヴィオの戦いに、なのはは信じられないと言う表情を浮かべて戦いを見つめる。

ヴィヴィオを傷つけたのは自身の甘さのせいだと、なのははもう十分過ぎるほどに分かっているし、話を聞いていたヴィヴィオを分

かっている筈だ。
　それなのにヴィヴィオは自分を護る為に戦っている。なのはには何故ヴィヴィオが戦うのか全く分からなかった。

「・・・・全部私のせいなのに・・・・・・ヴィヴィオの心に傷が出来たのは・・・・私のせいなんだよ・・・・・それに・・・・ヴィヴィオを兵器にしようとしたのは管理局・・・・それなのに如何して？」

（あの子に取っては、それでも貴女が母親なんだよ）

「ッ！！」

　聞き覚えのあり過ぎる声の念話に、なのはは驚いた表情を浮かべて辺りを見回す。
　しかし、念話の主の姿は全く発見出来ず、疑問の表情を浮かべ始めると、再び念話が届く。

（如何するの？そのまま其処で悲しむのかな？娘が貴女を護る為に戦っているのに？）

「・・・・・私に、ヴィヴィオを娘なんて呼ぶ資格なんて無いよ・・・・・だってヴィヴィオを不幸にしたのは、時空管理局なんだよ・・・・・それにあの子の心に傷を負わせたのは私自身・・・・今更母親なんて言えないよ！！」

（・・・・・ねえ、さっきあの子は貴女の事を何て呼んだのかな？）

「ッ！！」

念話の言葉になのははデュークモンと戦っているヴィヴィオを見つめた。
ヴィヴィオはなのはの事を確かにママと呼んだ。それが意味する事に気が付き、なのはは大粒の涙を流しながら、近くに落ちていたレイジングハートを拾い上げる。

ーーーカチャッ！

「ゴメンねヴィヴィオ。私は馬鹿だよ。こんなにもヴィヴィオの事を大切に思っていながら、ヴィヴィオの気持ちに気がついて上げられなかった」

なのはは言葉と共に立ち上がり、ヴィヴィオを戦っているデュークモンに向けてレイジングハートを構え出す。

「貴方の言うとおり、私は、私達は管理局は正義なんかじゃない。最低な組織だと私も思う。ブラスターシステム。リミット3」

なのはが最終段階のブラスターシステムを起動させると共に、なのはの周りに四つのレイジングハートの先端を模ったビット－ブラスタービットが姿を現し、デュークモンの周りに移動を始める。

「そして私も最低な人間。ヴィヴィオの思いを踏み躙っていた。資格なんて多分無い。それでもそれでも！！！」

なのはが叫ぶと共に、なのはの前に膨大な量の魔力が集中して行き巨大な魔力の球体が作られていく。
更にデュークモンの周りに存在していたブラスタービットにも魔力が集中して行き、なのはの目の前の魔力球と同様に魔力球が生まれて行く。

「ッ！！これは！？」

自身の周りに生み出されて四つの魔力球に、デュークモンは驚いた声を上げて、四つの魔力球となのはの姿を視界に映すと、なのはは自身の体を襲う激痛に苦しみながらも叫ぶ。

「私はヴィヴィオのママに成りたい！！全力全開！！スターライトブレイカーーーー！！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

叫ぶと共に放たれた五つの強力無比のスターライトブレイカーは、デュークモンへと直撃し、巨大な爆発が起きるが、デュークモンの姿は四方から放たれた四つのスターライトブレイカーとなのはの放ったスターライトブレイカーを受けても顕在だった。

「グウッ！！その程度では私の『聖王の鎧』は貫けんぞ！！」

「そ、そんな！？」

五つのスターライトブレイカーを受けても、尚もデュークモンの体の周りに発生している虹色の魔力光を貫く事は出来ず、なのはは悲痛の叫びを上げて、スターライトブレイカーの中を歩き始めたデュークモンの姿を見つめる。

自身の最強の砲撃を、しかも五つも同時に受けて尚も歩みを止めないデュークモンの姿に、なのはが諦め掛けた瞬間。

「全力全開！！！」

「なっ！？」

「えっ！？」

突如として聞こえて来た声と、それと共に発生した膨大な魔力に気が付いたデュークモンとなのはは、驚いた声を上げて声の聞こえて来た方に目を向ける。

其処には自身の前に、虹色の魔力光を放つ巨大な魔力球を生み出しているヴィヴィオの姿が存在していた。

「スターライトブレイカーーーー！！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオン！！

ヴィヴィオは叫ぶと共に、虹色の魔力球に拳をぶつけ、なのはの最強魔法ー虹色に輝くスターライトブレイカーをなのはの桜色のスターライトブレイカーを受けているデュークモンに向かって放った。

迫り来る六つ目の虹色に輝くスターライトブレイカーを見つめながら、デュークモンは呟く。

「・・・・・合格だ」

ドゴオオオオオオオオオオオオオ

爆発が起きて爆煙に包まれる場所を見つめながら、なのはが呟いていると、ヴィヴィオがなのはに近寄って来る。

「・・・・・なのは・・・・・ママ」

「・・・・・ゴメンねヴィヴィオ。私にはママって呼ばれる資格は無いよ」

「・・・・」

なのはの言葉にヴィヴィオは顔を俯かせ、悲しみの表情を浮かべ始めるが、なのははヴィヴィオを抱き締める。

ーーーガバッ！

「それでも私はヴィヴィオのママに成りたい・・・・・良いかなヴィヴィオ？」

「ッ！！うん！ママッ！ママッ！」

「ありがとうヴィヴィオ」

なのはとヴィヴィオは互いに抱き締め合いながら嬉し涙を流し続け、自分達の心が漸く繋がったのを互いに実感する。

そして少し経ってから脱出しようと立ち上がり、最後にデュークモンが居た場所に目を向けようとした瞬間に、煙の中から声が聞こえて来る。

「・・・・・流石に今のは『聖王の鎧』を撃ち破ったぞ」

『ッ！！』

煙の中から響いた声に、なのはとヴィヴィオが顔を向けて見ると、煙を吹き飛ばす様にグラムが振るわれ、煙が一瞬の内に消滅する。

ーーーブオン！！

「そっ！そんな！無傷だ何て！？」

煙の中から姿を現したデュークモンの体に傷一つ存在していなかった。

自身の最強の砲撃魔法ースターライトブレイカーを、しかもヴィヴィオのと合わせれば、合計六つもその身に喰らいながらも、傷一つ付かなかったデュークモンの姿に、なのはとヴィヴィオは体を恐怖に震わせるが、デュークモンは首を横に振るう。

「いや違うぞ。確かに貴様らの一撃は私の『聖王の鎧』を撃ち破り、私にダメージを与えた。この身に『聖王の鎧』が無ければ、私のイージスや鎧に傷を負わせて居ただろう」

そうデュークモンは告げるとグラムを構え出し、なのははヴィヴィオを護る様に立つが、デュークモンは一切構わずにグラムを突き出す。

「ロイヤルセーバーーーー！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオン！！

『えっ！？』

デュークモンはなのはとヴィヴィオにではなく、自身の横に在った壁に向かってロイヤルセイバーを放ち、ゆりかごに巨大な穴を開け、外への出口を作り出した。
その様子になのはとヴィヴィオを疑問の表情を浮かべていると、今度こそデュークモンはなのはとヴィヴィオに顔を向けながら、グラムを穴の先に見える蒼い空を向けて突き出す。

「もはやお前達と戦う理由は存在しない。私にお前達は絆を見せた。その絆が在れば如何なる事が在ろうと超えて行けるだろう」

デュークモンは言葉と共にグラムを顔の前に立て、宣誓を行い始める。

「高町なのは！此処に誓え！例え世界の全てを、仲間や親友と戦う事に成ろうと、ヴィヴィオを守り抜くと！」

「・・・・・・誓う！例え世界や皆が敵に成っても絶対にヴィヴィオを護ります！！」

なのはは叫ぶと共にレイジングハートを掲げ、デュークモンとの誓いを宣言した。
例えこの世の全てを敵にしても、ヴィヴィオは必ず護る。それが自分やヴィヴィオの為に戦ってくれたデュークモンへの礼だと思ったのだ。なのはは既にデュークモンが何故自分と戦ったのか分かっている。
これから先、必ず欲望に塗れた者達がヴィヴィオを狙って来る。それがもしかしたら、自分の親友達や所属する管理局かもしれない。だからこそ、デュークモンは確かめたのだ。
なのはが本当に迷わずヴィヴィオを護れるのかどうかを。

「此処に聖王の騎士たるデュークモンが認める！！聖王の血を引くヴィヴィオを高町なのはに預けると！！もしこの誓いを破る時、或いは破ろうとする者達が現れた時は、私は再び現れ、全てを終わらせるであろう！！その事を決して忘れるな！！」

「はいっ！！」

デュークモンの宣言に答えるようになのはは叫ぶと、ヴィヴィオに支えられながらデュークモンが開けた穴へと向かい出し、外へと脱出して行った。

なのはとヴィヴィオの姿が見えなくなるまで、その様子を見守っていたデュークモンは、完全になのはとヴィヴィオの姿が見えなくなると、背後を振り返り、何時の間に立っていたガブモンと異世界のなのはに顔を向ける。

「流石は異世界とは言えお前自身だな」

「そうでもないよ。多分、私が少し手を貸さなかったら、砕けたままだっただろうからね。全然駄目だよ」

「ちょっと厳しくないかなあ？」

ガブモンが疑問の声を上げてなのはにそう質問すると、なのはは見るだけで恐怖を感じる様な笑みを浮かべて答え出す。

「別に構わないと思うよ。だって、自業自得だったんだしね。自分の甘さのせいでこんな事態を引き起こしたんだもの。もっと反省すべきだよ。プランΩが終わって会いに行ったら、少しお仕置きにしないとね」

「むう～」

「あ～」

（・・・・・なのはお姉ちゃん怖い）

全身から黒いオーラを放ちながら、容赦なく異世界とは言え自分自身をこけ落とす様な宣言を放つなのはに、デュークモンとガブモン、そしてデュークモンと融合しているヴィヴィオはそれぞれ恐ろしいと言う思いを抱いた。

余程この世界の自分自身の行動に腹が立っているらしい。異世界と言え、ヴィヴィオを自身の不注意で危険な目に遭わせた行動に、なのはは腹が立ってしょうがないのだ。他人を護る事に命を掛けるのは確かに尊いものだが、この世界の自分自身はブラックにボコボコにされる前の自分だとなのはには分かっていた。

（今回の事で変われれば良いけど。変わらなければ、何時か取り返しの付かない事を行っていただろうね。それがどんな結果でも、犠牲なんて見ようとせずに、ただ闇雲に自分の行動こそが正しいと思って・・・そんな訳は無い。人にはそれぞれの思いが在る。自分だけが絶対に正しいなんて事は在りえない。その事が分かってくれている事を願うよ）

そうなのはは、この世界の自分とヴィヴィオが出て行った穴を見つめながら呟くと、ディーアークを取り出し、デュークモンとガブモンに顔を向ける。

「・・・・・ゆりかごの中に居た戦闘機人二人の運びも終わったし、始めようか。プランΩを」

「ああ」

「うん！」

（頑張ろう！！）

なのはの言葉に答える様に、デュークモン、ガブモン、ヴィヴィオはそれぞれ頷くと、プランΩの本格的な実行をし始める。

惨劇が始まる。真の愚か者どもが引き金を引く、後の各管理世界の歴史に刻まれる残酷で無慈悲な惨劇が。

“王をその身に宿す聖騎士、赤き鎧船にその身を乗せ、天に浮かぶ翼の内より、死せる王を救わん”

ゆりかごから脱出したなのはとヴィヴィオは互いに支え合うように飛び続け、ゆりかごから急ぎ離れようとしていた。

二人とも分かっているのだ。デュークモンがゆりかごの中に残ったのは、ゆりかごを完全に破壊する為だと。それを示す様にゆりかごの周りを音速で飛び続けていたグラニも、その動きを落とし、自身の主であるデュークモンが現れるのを待つかのように、ただゆりかごの周りを飛び続けていた。

そして二人が在る程度ゆりかごから離れると、二人の前に顔を絶望に染めたはやてとヴィータに、ヘリに乗ったスバル、ティアナ、エリオ、キャロがその姿をなのはとヴィヴィオの前に現した。

その様子を見たなのはは、自分とデュークモンの会話が聞かれていた事に気が付き、ヘリの中に乗り込みながらゆりかごに顔を向け

る。

「・・・・・なのはちゃん・・・・・・ゆりかごでのあの生物との会話は？」

「多分事実だよ。全部本局上層部の思惑だった・・・・・・私達は取り返しの付かない事をしていたんだよはやてちゃん」

『・・・・・・』

なのはの答えに対してその場にいる誰もが絶望に染まった表情を浮かべた。

スカリエッティがこの事件の犯人ではなかった。確かにスカリエッティは実行者では在るが、事件そのものを引き起こす原因を作り上げたのは間違いなく時空管理局と言う組織そのもので在り、自分達機動六課でも在ると誰もが分かってしまった。

人々の為。平和の為と言いながら、自分達は最終的に多くの人々の幸せを奪ってしまった。

理想ばかり見て、現実を見ていなかった。その結果がこれだ。

罪無きクラナガン人々を危険な目にあわせ、多大な犠牲が生まれてしまった。

彼らが現れなければ、もっとより多くの犠牲が出ていた事は間違いないとなのはは確信していた。

「・・・・・私達は理想にばかり目を向けて、現実が分かっていなかったんだよ。あの人達は現実を確りと見て、それでもクラナガンの人達を護った。あの人達は正義なんて免罪符は絶対に使わない。自分達の信念の為に動くんだよ。例え世界が敵に成っても、あの人達は信念に合わなければ、世界とさえも戦うだろうね」

「ッ！！」

なのはの呟いた言葉に漸くはやては自身が忘れていた事を思い出し、ハッとした表情を浮かべてゆりかごを見つめる。

“されど、彼の者達は法の味方に在らず、彼の者達は自身の真の思いのままに、動く者達なり”

（そうや！漸く思い出しだ！予言の最後の文章には、確かにあの人らが法の味方や無いって予言には書かれておった！だけど如何してそれが予言に・・・・・・ッ！！まさか！？）

はやては最悪な可能性に気が付いてしまった。もしあの新たに現れた予言が、続きではなく、中心に埋め込まれる文だったとしたら、全ての謎が一瞬で解ける。

“旧い結晶と無限の欲望が交わる地。
死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る。
死者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち。
天に死せる王の嘆きが響き渡る時、交わる事無き、異界の者達は怒り狂い、無限の欲望の野望は砕け散る。
不屈の心を胸に宿す蒼き鉄の狼、星を打ち砕く光を解き放ち、死者達を沈黙に伏させる。
絆の果てに現し、赤き鎧にその身を包み込んだ聖なる騎士、全てを撃ち抜き、人々を脅威から護らん。
王をその身に宿す聖騎士、赤き鎧船にその身を乗せ、天に浮かぶ翼の内より、死せる王を救わん。
世界に否定されし深き闇を従えた黒き竜人、その身の因子を宿し二つの異形となりし者達ともに、深き闇を打ち砕く。
されど、彼の者達は法の味方に在らず、彼の者達は自身の真の思

いのままに、動く者達なり。
それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる”

「ア、ア、ア、ア、アアァァァァァァァーーーーー！！！！！」

「如何したはやて！？」

『はやてちゃん！？』

「主！？」

『部隊長！？』

「はやてお姉ちゃん！？」

突如として恐怖の声を上げ始めたはやてに、ヴィータ、なのは、シャマル、ザフィーラ、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、そしてヴィヴィオが心配げにはやてに向かって叫ぶ。
しかし、はやてはもはや皆の心配に満ちた叫びなど気が付かずに、上空に浮かぶゆりかごを見つめ体を恐怖に震わせながら呟く。

「・・・・・・予言が・・・・・・予言が・・・・・・成就される」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！

『ッ！！！』

はやてがポツリと言葉を呟いた瞬間に、上空に浮かんでいたゆりかごの横から突如として爆音が響き、なのは達が驚愕の表情を浮かべて爆音が響いた場所を見て見ると、煙の中から再びその身を巨大

化させたデュークモンがグラニの背に乗りながら姿を現し、自身に攻撃を加えた管理局の最新鋭艦－ＸＶ級大型次元航行船クラウディアを主力とした次元航行艦隊を睨み付ける。

「・・・・如何言う積もりだ？私達は不甲斐ない貴様らの変わりに動いたと言うのに、行き成り攻撃して来るとは？何か私がしたか？」

『貴君らの行動はミッドチルダに著しく混乱を招いた』

『クロノ君！？』

クラウディアから聞こえて来た声に、はやてとなのはは信じられないと言う声を上げた。

デュークモン達の行動がミッドチルダに混乱を招いたなど在りえない。彼らの行動があったからこそ、大勢の人々を救う結果に成ったと言うのに、クロノはデュークモン達の行動こそが混乱を招いたと告げたのだ。

ミッドに映されたモニターの事を言ってるとしたら分かるが、それをデュークモン達が映したと言う証拠は無い。それなのにクロノは一方的にデュークモン達のせいだと言う様に宣言し続ける。

『その巨大な力で人々を惑わし！管理局がこの事件の元凶だと言う証拠も無い理由を作り上げ、人々を混乱の渦に巻き込んだ貴君らの行動は、次元犯罪者に登録されるほどの罪だと本局は判断した！速やかに武装を放棄し、投降するのならば、情状酌量の余地は在るぞ』

その宣言を聞いていたなのは達や、クラナガンの大勢の人々は本局や上空に浮かぶ艦隊に怒りを覚えた。

クラナガンの人々は、自分達を救ってくれた恩人で在るデュークモン達を犯罪者にされた事に、なのは達－この事件の裏に隠されて

いた真実を知った者達は、デュークモン達を犯罪者にして全てを闇に葬ろうとしている本局の者達の行動に怒りを覚えた。
この瞬間に、ゆりかご内部でのデュークモンが告げた事実が全て本当だったと多くの者達が気が付き、全員が憎しみを抱き始める。

「ゆりかごでの会話は聞いていたようだな？成らば、私達に地上の局員が頭を下げた時の言葉は嘘だったのか？」

『その様な事実は…』

『いやッ！！全て事実だ！！！！』

『ッ！！！！！』

クロノの言葉に覆い被さるように叫ばれた大きな声に、誰もが慌てた表情を浮かべて辺りを見回すと、上空に再び巨大なモニターが映り、映像に映し出された厳つい顔をした壮年の局員ー地上本部のトップーレジアス・ゲイズが怒りの表情を浮かべながら叫ぶ。

『彼の言っている事は全て真実だ！！ワシは確かに彼らに頭を下げて救援を頼んだ！！そしてゆりかごの内部の映像を映したのは彼らではない！！スカリエッティのセットしていた演出用のシステムの誤作動だとスカリエッティのアジトを占拠した私が送った地上局員達から報告が届いている！！！！』

『なっ！？その様な報告は…』

『貴様ら本局は再三に渡って私が送った通信を無視した上に！本局常勤していた空戦魔導師を援軍として送らなかったではないか！！！地上の人々が危機に合っていると言うのに！！だから私は彼らに

援軍を頼んだのだ！！！以前から私は彼らの協力を得られないかと一人の地上局員を秘密裏に彼らの世界に送っていたのだ！！』

クロノの言葉に被さる様にレジアスは大声で叫ぶと、レジアスの横に地上本部の局員を服を着た女性が姿を現し、スバルは驚愕の表情を浮かべる。

「お、お母さん！！！」

『地上局員ーゼスト隊に所属していたクイント・ナカジマです。レジアス中将の命令の下、急ぎ彼らを連れて私はミッドに帰って来ました。彼らの世界は技術力高く、また、あのように巨大な力を持つ者達が多数存在しています。その世界から別世界を調べていた調査者と偶然私達地上本部はコンタクトを取り、彼らの協力を得られないかと長年交渉を続けていたのです。地上の戦力不足は深刻なレベルでした。日夜多発する犯罪、その犯罪に対して本局は何もしてくれない所か“自分達の方が大きな事件を扱っているのだから当然だと言う様に地上に戦力を吸い上げて行く現状”その現状に心の底から憂いていたレジアス中将は彼らに頼み続けていたのです！！』

顔を伏せると共に目を押さえながら涙を流して叫んだクイントの言葉に、多くのミッドチルダの人々は地上本部は自分達を護ろうとしていた事に気が付き、全ての元凶が本局に在ったと思い始める。

本局が地上の戦力を吸い上げていたから、地上は犯罪に追われていた。しかも、今回の事件でも本局、正確に言えば本局上層部の権力欲こそが全ての原因。それをデュークモンへの攻撃でハッキリと認識していた人々は、本局と上層部が原因だと考え始める。

『そしてその思いが彼らを動かしました！！彼らは！デュークモン！スレイプモン！メタルガルルモンXは一部の欲望の為に人々が危

険に晒される現状に怒りを覚え、ミッドの人々を護る為に動いてくれたのです！！』

『ワアァァァァァァァァァァーーーーーーーー！！！！！！！』

クイントの叫びに答える様にクラナガンの人々は歓喜の声を上げ、ゆりかごの前に浮かぶデュークモンを、廃棄都市のビルの上に立つスレイプモンを、そして何時の間にかゆりかごの上に立っていたメタルガルルモンXを見つめる。

デュークモン達が完全に味方だと認識したのだ。彼らは自分達を護る為に動いてくれた。

『デュークモン！！デュークモン！！！！デュークモン！！！！』

『スレイプモン！！スレイプモン！！！！スレイプモン！！！！』

『メタルガルルモンX！！メタルガルルモンX！！！！メタルガルルモンX！！！！』

ミッドに在る各都市に住む人々は喜びの声を上げて、映像に映るデュークモン達を見つめると、クイントは内心で計画通りだと笑みを浮かべ、本局を徹底的に追い落とす為に更に言葉を叫ぶ。

『そして彼らが今まで動けなかったのは本局のせいなのです！！本局には自分達管理局こそが絶対だと叫び！魔法主義者の人間が大勢居ます！！彼らの力は魔法では無い！その為に彼らの存在が明かるみに出れば、本局は彼らの世界を無理やり管理するか滅ぼす可能性が在りました！！その可能性が在った上に！最高評議会の正体を知ってしまった彼らは管理局を信じる事が出来ませんでした！！』

「最高評議会の正体やて！？」

クイントの叫びにはやてが疑問の叫びを上げ、ゆりかごの周りにいる局員達やなのは達も疑問の表情を浮かべた瞬間に、再びレジアスが前に出て叫ぶ。

『民衆の皆さん。管理局が創設されて１５０年以上経っています。その様な期間を生きられる人間など存在していません。ですが、私は最高評議会が代替わりしたと言う話など全く聞いた事が在りません。皆さんは如何ですか？』

レジアスの質問に対して誰もが答える事は出来なかった。

確かに最高評議会が代替わりしたなどと言う話は全く聞いた事が無い。

その事が分かった人々や局員達が疑問を思い浮かべ始めるのを確認したレジアスは叫ぶ。

『これこそが最高評議会の正体だ！！』

ーーーブウン！！

『ッ！！！』

モニターに映し出された映像に人々や一般局員は驚愕の表情を浮かべた。

何故ならば、モニターには人の姿など存在せず、カプセルのようなものに浮かんだ三つの人間の“脳髄”しか存在していなかった。

『これこそが管理局最高評議会の正体です！！彼らは自分達こそが世界の指導者だと叫び！多くの違法を繰り返していたのです！！そ

してそれは本局の幹部達も同様です！！』

ーーーブオン！！

『ッ！！！』

次に映し出されたのは何処かの管理局の研究所であり、其処で生み出されてた思われる子供が苦痛の叫びを上げ続けていた。

その様子を管理局の制服を着た幹部が無表情に見つめ、研究員と思われる者から渡された資料を読み上げ告げる。

『失敗作だ。魔力も持たずに生まれるとは、焼却処分にしろ』

『ハッ！！』

『ッ！！！』

信じられないと言う表情を浮かべて、多くの人々や一般の局員は、命じた幹部とそれを平然と実行しようとしている研究員の姿を見つめる。

目の前で起こっているのは先ず間違いなく違法の研究だろう。その研究を管理局は否定しながら平然と行っていた。デュークモンがゆりかご内部で告げたのは、全てが真実だったと此処に完全に証明されたのだ。

最後まで映像を映し出す事無く、レジアスは映像を消すと、本局の艦隊に質問する。

『これで彼らの証言が本当だと示されたな。貴君らは速やかに本局内部の違法を行った幹部と言う名の犯罪者を捕まえたまえ！それこそが管理局の真の在るべき姿だ！！』

そう叫びレジアスは艦隊の反応を待つ。
艦隊内部に居る局員達は大慌てだった。自分達の組織が裏で行っていた上に、その推進者が最高評議会であり、自分達の上司である本局上層部達だった。
しかも、今の状況は正に最悪だろう。何故ならば、自分達はミッドを救った恩人であるデュークモンに攻撃を行ってしまった。もはや本局上層部を捕まえても何らかの処分が確実に下ると考えて間違いない。
本局上層部達が描いていた思惑が一瞬の内で崩壊し、地上が完全に有利な状況に成ってしまったのだ。
確かに本局上層部の描いた思惑は完璧と呼ぶに相応しい物だった。しかし、デュークモン達の登場で完全にシナリオは崩壊し、本局は最悪の状態に成ってしまった。
そしてその様な状態に成れば、上層部と共に裏で甘い蜜を吸っていた局員も状況が悪くなる。全ての悪事が明らかに成ったのだから、徹底的な調査を各管理世界は命じるだろう。
もはや自分達には未来が無い事を分かりながら、管理局の艦隊はクロノが乗るクラウディアを先頭に幾つかの艦艇は本局に戻る為に船首を本局の方に向かわせ始めるが、上層部の甘い蜜を味わっていた局員達が乗る八隻の艦艇は、そのままその場に佇み続け、デュークモン達に憎しみに視線を向ける。
彼らは既にこの後に起きる調査で自分達が処断されるであろう事を分かっていた。高ランクの魔導師だからと言う理由は罪が免除されるなどと言う事は、罪が軽くなると言う事は絶対に在りえない。
そんな事をすれば、民衆は大暴動を起こし、全次元世界の規模の戦争に発展する。
戦争を起こさない為に、少数を犠牲にするのは当然の行いだ。つまり、彼らの未来は先ほどの放送で完全に潰えたのだ。

『・・・・・・・・撃てエェェェェェェェェーーーーーーーー！！！！！』

ーーードグオン！ドグオン！！ドグオン！！

「ムッ！！」

八隻の艦艇の中で、唯一アルカンシェルを装備した艦の提督が叫んだ瞬間に、それぞれの艦艇から艦砲がデュークモンに向かって放たれ、デュークモンはイージスを掲げながら防御した。

「血迷ったのか貴様ら？今ならば多少は罪が軽くなると思うが？」

艦砲が収まると共に、デュークモンは自身の周りに在った煙を振り払いながら八隻の艦隊に質問するが、構わず艦隊は再び艦砲をデュークモンに向かって放ち続け、迫り来るエネルギー砲をデュークモンは防御しながら呟く。

「やれやれ、何処までも愚かな奴らだ！！もはや一切の手加減はせんぞ！！ファイナル・エリシオン！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオン！！！

デュークモンのイージスから放たれたファイナル・エリシオンは、向かって来ていた艦砲を全て一瞬の内で消滅させ、八隻の艦隊の隊列を乱した。

それと共にデュークモンはグラニに乗って、メタルガルルモンXは自身の飛行能力を使って、スレイプモンも同様に艦隊に向かい出し、本格的な惨劇が始まった。

「ロイヤルセーバーーー！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオン！！

デュークモンが放った強力な突き―ロイヤルセイバーに寄って、一隻の艦艇は大穴をその船体に開けながら爆発した。

それを見ていた他の艦艇内部に居る局員達は慌て始める。

一撃。しかもただの突きとしか思えない一撃で、管理局の誇る艦艇が爆散した。

彼らはデュークモン達の力を甘く見ていたのだろう。如何に強力な力を持っていたとしても、八隻もの管理局の艦艇には勝てないと。そして人間を殺すことは無いと彼らは何処かで思っていた。

それこそが大きな間違いだ。彼らは自分達の信念を妨げるものには容赦などしない。

その事を彼らは身を持って知る事に成った。

「オーディンズブレスッ！！！」

ーーーガチガチガチガチッ！！

ーーーバリィィィィィィィン！！！

スレイプモンの発生させた局地的なブリザード―オーディンズブレスに寄って三隻の艦艇は一瞬の内に凍り付つき砕け散った。

「レイジングハート、セラフィービット展開」

ーーーガコン！！

「嘘ッ！？何でレイジングハートが！？」

メタルガルルモンXの握っているレイジングハートの姿に、離れていた所で戦いを見ていたなのはは驚愕の声を上げ、他の六課の者達も信じられないと言う表情を浮かべてメタルガルルモンXの姿を見つめる。
レイジングハートはなのはのデバイスである上に、今もなのはの手に握られている。それなのにメタルガルルモンXは使用しているのだから驚愕するのも当然だろう。
長年の相棒だったなのはには分かる。メタルガルルモンXの握るレイジングハートは間違いなく、自身のレイジングハートと同一の物だと。
その事になのはが疑問の表情を浮かべていると、再びゆりかご内部で聞こえた念話がなのはに届く。

（確か貴女が撃てるスターライトブレイカーは五発だけだったよね？なら、私達の方が上だよ。だって私達は七発だもの）

「ッ！！まさか！？」

聞こえて来た念話の意味に気が付いたなのはがメタルガルルモンXを見つめて見ると、背中に金色の翼を十枚生やし、六つのセラフィービットの前に信じられないほどの大きさを持った魔力球を作り上げ、レイジングハートの先端にも同様に魔力球が生まれていた。
そして全ての魔力球が完全に完成した瞬間。

「（全力全開！！セブンズ・スターライトブレイカーーー！！！！！！）」

ドグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！！

放たれた七つの巨大としか言えない砲撃は、一瞬の内にスレイプ

モンと同様に三隻の艦隊を跡形も無く消滅させた。
時間にして凡そ十分にも満たなかった。経ったの十分にも満たない時間で、管理局の誇る艦艇が七隻も消滅してしまった。これを見ていた管理局員、そして人々は何故彼らが自分達の世界から出ようとしなかったのかハッキリと分かった。
彼らの力は強大過ぎる。彼ら三体でこれなのだ。クイントの話では他にも同等の力を持つ者達が居ると言う。
その者達まで一斉に動けば管理局を滅ぼす事が可能だろう。味方ならば心強いが、敵にだけは絶対にしたくないと、戦いを見ていた人々全員が心の底から思った。

「さて、残るは一隻だけだ！」

『ヒィッ！！！』

デュークモンの言葉に、残っているアルカンシェルを装備した艦の乗員全員が恐怖の声を上げた。
彼らは漸く分かったのだ。自分達が触れては成らない禁忌と呼べる存在達に手を出してしまった事を。

『ア、アルカンシェルだ！アルカンシェルを使うぞ！！』

『ッ！！！』

聞こえて来た恐怖に震える提督の叫びに、戦いを見ていた局員達とクラナガンの人々はギョッと目を見開いた。
アルカンシェル。放てば発動地点を中心に百数十キロ範囲の空間を反応消滅させる魔導砲。そんな物をこの様な場所で放てば、クラナガンの人々は一人残らず死んでしまう上に、ミッドは滅びるだろう。

戦いを見ていた他の艦艇達も慌てて船首を向けて、アルカンシェルを放とうとしている艦に攻撃を行おうとするが、間に合わずエネルギーがチャージされ始める。
その様子を見ていたデュークモンは、グラニを艦に向け、急ぎ向かい出す。

「貴様らは本気で滅ぼしてくれる！！」

（行くよッ！！）

ーーーピィィィィィーーー！！！！！

デュークモン、ヴィヴィオ、そしてグラニは叫びながら艦へと向かい出し、その身から虹色のデジコードを発生させ体を覆って行く。
その幻想的な様子に人々が魅了されていると、虹色のデジコードは弾け飛び、中から背中に五対の白き翼を生やし、真紅の鎧を身に纏った騎士。
デュークモンとヴィヴィオ、グラニの心が一つに成った時に現れるロイヤルナイツ－デュークモンの隠された全ての力を解放した姿。
その名も。

「デュークモン・クリムゾンモードッ！！！」

デュークモン・クリムゾンモード、世代／究極体、属性／ウィルス種、ワクチン種、種族／聖騎士型、必殺技／無敵剣（インビンシブルソード）、クォ・ヴァディス
真紅の鎧を身に纏い、背中に五対の白き翼を生やしたデュークモンが真の力を解放した姿。しかし『ＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：グラニ』との融合が無ければ短時間しかその姿を保てない。鎧は熱で紅蓮に光り、“デジタルハザード”を封印した“電脳核（デジコア）”を持っている。両

手にはエネルギー状の武器ー神槍『グングニル』と神剣『ブルトガング』を持っている。必殺技は、神剣『ブルトガング』で相手を切り裂く『無敵剣（インビンシブルソード）』に、神槍『グングニル』で敵を電子分解させ、異次元の彼方へ葬る『クォ・ヴァディス』だ。

現れたデュークモン・クリムゾンモードの姿に再び人々は魅了された。

虹色の魔力粒子を体から発生させ、背中に天使の翼を思わせる様な五対の翼。

そしてその紅蓮に輝いている真紅の鎧。正しく現代に蘇った神話に出て来る騎士の姿に人々は生涯忘れないと言える程に魅了されてしまったのだ。

だが、徐々に最後の艦にアルカンシェルのエネルギーが集まって始まり始めている事に気が付いた人々は、誰もが絶望の表情を浮かべ始める。

しかし、デュークモン・クリムゾンモードは慌てずに右手に神槍ーグングニルを出現させ、全力で振り被り、艦に向かって投擲する。

「（クォ・ヴァディス！！！！）」

ーーードスン！！

投げられたグングニルは光速で艦に向かい、グングニルは艦の外壁に突き刺さった。

しかし、アルカンシェルへのエネルギーチャージは止まらず、誰もが今度こそ終わりだと諦めた瞬間に。

ーーーシュウウウウウウーーー！！

艦は一瞬の内に、内部にいる人間と共に電子分解され、粒子へと

変わりながら消滅した。

『ワアァァァァァァーーーーーーー！！！！！』

ミッドに襲い掛かった危機が完全に消滅した事に人々は喜びの声を上げながら抱き合い、ある者はデュークモン・クリムゾンモードを崇める様に祈り始める。

その様子にスレイプモンとメタルガルルモンXは苦笑を浮かべながら、デュークモン・クリムゾンモードに顔を向けて見ると、デュークモン・クリムゾンモードは再びグングニルを生み出し、自身の背後に存在しているゆりかごに顔を向ける。

「安らかに眠れ」

（さようならゆりかご）

「（クォ・ヴァディス！！！！）」

ーーードスン！！！

管理局の艦艇と同様に、グングニルはゆりかごの外壁に突き刺さり、その身を電子分解されながら虹色の粒子に変えて行き、ミッドチルダの空に幻想的な光景を作りながら、長き時を存在していたゆりかごはその身を消滅させて行くのだった。

時空管理局本局、其処でも惨劇は起きていた。

全ての真相が暴露された本局上層部の幹部達は、逸早く逃げようと残っている艦艇に乗り込み、付き従う局員達共に管理外世界にで

も逃げようと思っていた。
そしてそれは半ば叶う状況だった。何故ならば、現在の本局は各管理世界から寄せられる抗議や事情説明の通信に追われていた為に、元凶で在る幹部達を気にしていられる状況ではなかったのだ。
幹部達はその隙に裏で横領していた資金を持って逃げる積もりだった。
だが、それは阻まれた三つの異形に寄って。

ーーードゴオオン！！

「ゲブッ！！」

艦の中に一人の幹部が乗り込もうとした瞬間に、艦の扉は弾け飛び、乗り込もうとした幹部は扉と共に吹き飛んで行った。
その様子に他の幹部達や局員達が驚愕の表情を浮かべていると、艦の中から三つの異形が現れ、幹部達と局員達を睨み付ける。

「残念だけど。此処から先は通行止めよ」

「貴方達には、しっかりと裁きを受け貰わないとね」

背中に金属の翼を背負い、両手を刃の形にしたデジモン―バイオ・スラッシュエンジェモンへとその身を進化させたリンディと正義の味方のよう姿をしたデジモン―バイオ・ジャスティモンへと進化したクイントは恐怖に震えている幹部達と局員達に言葉を言った。
そして最後の異形―漆黒の体に機械的な鎧を身に纏った漆黒の竜人―ブラックウォーグレイモンXは足を一歩前に出しながら、恐怖に震える者達を睨み付ける。

「詰まらん連中だろうが、少しは俺を楽しませろ」

ーーービュン！！

ブラックウォーグレイモンXが言葉を言い終わると共に、その姿はリンディ、クイントと共に消失し、そして。

『ギャアアアアアアアアアーーーーーーーーー！！！！！！』

断末魔の叫びがドック中に満ち溢れ、血吹雪が其処かしこで上がる惨劇が起きた。

十数分後ー漸く幹部達が居なくなっている事に気が付いた局員達が、慌てて幹部達を捕まえようと動き出し、幹部が入ったと思われる艦が在るドッグの中に踏み込んで見ると、手足が完全に折れ曲がり、全身が血だらけでありながら、辛うじて生きている幹部達や局員達を発見し、その惨状に誰もが恐怖を覚えるのだった。

“世界に否定されし深き闇を従えた黒き竜人、その身の因子を宿し二つの異形となりし者達ともに、深き闇を打ち砕く”

特別編、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ完全崩壊後編２（後書き）

次回エピローグ！

特別編、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ完全崩壊エピローグ（前書き

大変お待たせしました。

エピローグは思っていたよりも難産しましたが、漸く納得出来るものが書けました。

特別編、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ完全崩壊エピローグ

ミッドチルダを襲った事件。後の歴史に置いて『時空管理局本局暴走事件』、通称『Ｚ．Ｈ事件』が解決してから十日が経った。

事件が解決してからすぐに本局の幹部達、並びにそれに付き従っていた局員達は全員が逮捕された。

しかし、その数は信じられない事に２００人近くの要員が逮捕され、その他にもミッド行政府、並びに各世界の調査者達が本局内部を調査した所、使途不明金や横領などが本局内部で多発していた事が判明した上に、高ランクの魔導師だからと言う理由で、罪が無かった事にされたり、罪が軽くなっていたりしていた事が判明し、全ての者達を捕まえた所、合計で１０００人以上の局員が一斉に逮捕された。

この事には調査に当たっていた者達だけではなく、各管理世界の代表達も全員が顔を青褪めさせた。法を司っていた組織内部で１００人以上もの犯罪者が存在していた。

自分達がどれだけ平和ボケしていたのかハッキリと分かったのだ。

しかも、それに加担していた管理局では無い者達もやはり存在し、もはや次元世界中が上から下への大騒ぎの事態に成ってしまったのだ。

「まさか、此処まで腐敗していたとはね。流石に驚いたわ」

「ええ、私達の予想以上ね」

元々泊まっていたホテルの一室でテレビで報道されている内容を見ていたクイントとリンディは、管理局の腐敗に頭を痛め、ブラックとヴィヴィオ、ギルモンを除いた他のメンバー達も同様に頭を抑

えながら眩暈がしていた。
彼らの予想以上に、管理局の腐敗は進行していた。
元々プランΩの真の目的は、今の管理局を崩壊させ、新たに再編させる事が目的だったのだが、正直言って再編ではなく完全に滅ぼした方が良かったと思うぐらいに、管理局は腐敗していた。

「・・・・一応、現在は政府主導で組織を再編させている見たいですね。それに管理局に最終的に残る権限は逮捕権だけであって、他の権限は各世界の政府が新たに作り上げる予定の機関が持つ事に成るみたいです。それと定期的に管理局の内情を調べる調査団が出る事が決まったそうです」

「それが良いわね。少なくともそれで管理局の暴走は少しは無くなるでしょうし、今までの様に罪を無かった事にする事は出来なくなるわね」

ティアナの言葉にリンディは頷きながら答え、他の者達も同様に頷く。
管理局が暴走しても止まらなかった理由の一つには、管理局に権力が集中し過ぎていた事も在る。以下に次元世界を護る為とは言え、それでも管理局には権力が集中し過ぎていた。その為に管理局内部の人間の中にはまるで自分達こそが世界の主だと思う様な者達が出ていた。
だが、逮捕権だけしか残らないと成れば、今後は今までの様に好き勝手に罪を消したり法を作ったりする事は出来ない。そうなれば違法を行え無くなるだろう。最も全部が消えると言われれば不可能だろうが。今まで散々違法を裏で行っていたのだから、今更管理局が止めるとは思えない。
そうならない為にも権力の分散は必要であり、また管理局を監視する者達も必要なのだ。

「それにしても、地上はともかく本局は良く潰れなかったわね。正直此処までやっていたのなら、潰されてもおかしくないのにね？」

報道されているテレビを見ながらクイントが疑問の声を上げると、ティアナの首に巻き付いていたクダモンがクイントの方に顔を向ける。

「なに、本局に潰されて貰うと新たな組織を作らねば成らん。そうなれば予算も掛かるし、作っている間に次元犯罪者達が暴れるやも知れん。そう成ると困るからこそ、管理局を再編する事に各世界は決めたのだろう。それに私達の事も在る」

「事件が終わってすぐに私達は消えましたからね。民衆と違って世界の代表達は私達をハッキリと味方と認識していないんです」

「それに、レジアス中将が連絡でデュークモン君達の世界との通信が途絶えた事とクイントさんが姿を消した事を報告しましたから、各世界の代表達はデュークモン君達が現れた本当の目的は管理世界を混乱させる為ではないかと疑っていますからね。此処で管理局を滅ぼすと色々と無防備に成りますから、管理局を潰さなかったんです」

クダモン、ティアナ、なのははそれぞれクイントの質問に対して答え、クイントは納得したと言う様に頷く。

各世界の代表達が管理局を滅ぼさなかった目的の中には、万が一でもデュークモン達との戦争が起きた時の戦力確保の為だ。管理世界の多くで流されたデュークモン達の戦闘の様子を見た者達ならば、出来る事ならデュークモン達の戦闘を避けたいと思うだろう。

だが、世の中は何が起こるか分からない。もしかしたら今回の事

件でデュークモン達に家族を殺された者達が報復に出るやも知れない。そうなれば、デュークモン達は人間を敵と見なし滅ぼす動きをし出すかも知れない。そうなった時に、戦う事が出来る戦力が無いと不味いので各世界は管理局を潰さずに置く事を決めたのだ。

最も以前の様に多大な権限を管理局には持たせる気は無い。流石に護るべき世界にアルカンシェルを撃ち込もうとした人間が居た組織など信用出来る筈は無い。少なくとも管理局ー正確に言えば本局が信用を取り戻すのは当分先の事に成るだろう。

「本局に比べると地上はまるで逆の状態よ。予算が削減される事に成った本局とは違って、地上の方は予算が上がる事が決まったみたいね。レジアス中将はここぞとばかりに地上の戦力確保に乗り出したわ」

レジアス・ゲイズは今回の事件を逆手に取って、地上の改革を行い始めている。

最も在る程度現状が安定したら、今の役職を放棄し、一局員に戻って一からやり直すと決めている様だ。親友で在るゼストに再び顔を向け出来るように地上の平和を願いながら、最初からやり直すと決めたのだ。

そうクイントに話した時の彼の眼は、生き生きとした目だったクイントは全員に語り、リンディ達はそれぞれ笑みを浮かべて頷く。

「レジアス中将は流石ね。彼は確かに道を踏み外したけど、本局の幹部達に比べれば百倍マシね・・・・・・この世界のクロノも出来ればそう言う人物に成って欲しかったわ。」

「落ち込まないで下さいよリンディさん！この世界のクロノ君だって悪気が在ってデュークモン君達に攻撃した訳じゃ！」

「慰めないでなのはさん。私は本気でクロノへの教育を間違ったと思っているの」

なのはの慰めの言葉に対して、リンディは落ち込んだ表情を浮かべて答えた。

デュークモン達に攻撃を行った艦隊の者達は全員が処罰を受ける事に成った。如何に上層部からの命令が在ったとは言え、ミッドを護ってくれたデュークモン達に攻撃を加えた上に、失敗すればデュークモン達の世界との戦争に発展していた可能性も在る。

あのデュークモン達と同等の力を持っている者達が大挙として押し寄せてくれれば、世界が幾つも滅ぶ可能性が在る。その事を分かっている各世界の代表達は、艦隊にいた者達を全員処罰する事に決めたのだ。

当然ながら、艦隊の中に在ったクラウディアの艦長であるクロノも裁かれ、正式な処分が下されるまでは謹慎処分を受けているらしい。

「私の世界のクロノは、管理局に疑念を持てたから良かったけど。この世界のクロノは管理局を正義だと信じすぎていたわ。それがどれだけ危険な事かも分からずに・・・・・もっと空気を読める子に育って欲しかった・・・・・そう言えば、十年前もなのはさんとフェイトさんが戦いそうに成った時に転移して現れていたし・・・・・・・・それにフェイトさんに色恋で近づいた人物は邪魔をしているらしいし・・・空気を読めない上にシスコンなんて・・・・本気で育て方を間違ったわ」

「あの～、リンディさん？」

異世界とは言え自身の一人息子で在るクロノの事を好き勝手言っているリンディの姿に、なのはは汗を流しながら声を掛けるが、リ

ンディは答えずに小声で自身の行った教育に付いて呟き続ける。
その様子になのは、ガブモン、ティアナ、クダモン、クイントは冷や汗を流しながらリンディを見つめながら顔を見合わせ、残っているブラック、ルイン、ヴィヴィオ、ギルモンに顔を向けて見ると其処には。

「2を出す」

『ムッ！！』

四人で円の字に座りながらトランプゲーム－大富豪をやっていた。

ーーードガシャァァァァァン！！！

「何だ？うるさいぞ？」

「そうですよ。折角珍しくブラック様がヴィヴィオちゃんのお願いを聞いているんですから、少し静かにして下さい」

倒れているなのは、ガブモン、ティアナ、クダモン、クイントにブラックとルインは言葉を告げると、再び大富豪を再開し始める。
それを見たなのは達は冷や汗を流しながらブラック達のマイペースに驚くが、落ち込んでいるリンディを励まそうとティアナがブラックに近づく。

「え～と、ブラック兄さん？」

「今は取り込み中だ」

ティアナの声にブラックは素っ気無く答えると、再びルイン、ヴ

ィヴィオ、ギルモンと向き合い、大富豪を再開しようとするがティアナはさせないと言う様にリンディの方に顔を向ける。

「リンディさんが落ち込んでいるんだけど」

「・・・・・時間を教えてやれば良い」

「ハッ？時間？」

ティアナはブラックの言葉の意味が分からず、呆然した表情を浮かべると、ブラックは無言で部屋の中に備えられている時計を指差す。

その様子に疑問を覚えながら、ティアナ達が時計を見て見ると、今日、レジアス中将の計らいで漸く会う事が出来る様に成った機動六課と会う時間が迫っている事に気が付き、慌てた表情を浮かべて顔を見合わせる。

「不味いですよ！！約束の時間が！」

「本当だ！もうこんな時間に成って居たなんて！ブラックさんも早く教えて下さいよ！」

「すぐに準備しましょう！ほら！リンディも落ち込んでないで準備して！」

「ウゥゥゥ、何であんな空気を読めない子に育ってしまったの」

時間が迫っている事に気が付いたティアナ達は慌ててそれぞれ準備をし始めるが、既に準備を終えているブラック、ルイン、ヴィヴィオ、ギルモンは慌てずに大富豪を再開するのだった。

聖王病院の一室。その部屋には紫色の髪の女性ー今回の事件で保護されたメガーヌ・アルピーノがベットに横に成りながら眠り続け、その横には壮年の男性ーゼスト・グランガイツとその肩に座っている赤い小人の様な者ーユニゾンデバイスー『烈火の剣精』アギト、そしてメガーヌの娘であるルーテシア・アルピーノが心配そうな表情を浮かべてメガーヌを見つめていた。

だが、アギトだけはメガーヌの事だけではなく、ゼストとルーテシアの間に在る不穏な空気に心配そうな表情を浮かべていた。

「・・・・そのさ。クイントの姉御の話だと、ルールーのお袋さんは二ヶ月半ぐらいで目覚めるそうだぜ」

「・・・・・うん、クイントさんから聞いた」

「・・・・・俺もだ」

ルーテシアとゼストは言葉短くアギトの言葉に頷くが、アギトはその様子に頭を抱えたくなった。

事件が終わった後、ゼスト、ルーテシア、アギト、そしてメガーヌはレジアスが権限を使って保護してくれた。元々ルーテシアをスカリエッティの下に運んだには最高評議会であり、彼女が今回の事件に加担したのも母親であるメガーヌの為だった事と、スカリエッティに寄るマインドコントロールが施されていた事が判明した為、管理局はルーテシア達を逮捕する事が出来ず、レジアスが保護責任者に成り、ルーテシア達は保護されたのだ。

だが、アギトは再会した時からゼストとルーテシアの間には壁が出来てしまった感じを受けていた。

（ハア～、やっぱりクイントの姉御の言うとおり、旦那がルールーの父親だったって事が原因だよな。全くよ。旦那も体の事が在ったからって、そんなルールーに取って重要過ぎる事を隠して置くなよ。もし、話していれば結構ルールーも安心したかも知れねえのによ）

ゼストとルーテシアの間に在る壁の原因はひとえに、ゼストがルーテシアの実の父親であった事を隠していた事が原因だ。

ゼストはスカリエッティの実験に寄ってレリックウェポンに成ってしまった人物。しかし、その状態はルーテシアと違ってかなり不安定であり、長くは生きられないと宣告されている。その事が在ったからこそ、ゼストはルーテシアに少しでも悲しみを与えない為に実の父親である事を隠していたのだが、クイントがルーテシアに父親はゼストで在る事を明かしてしまったので、再会した二人の間には不穏な空気が満ちる様に成っていた。

その事を分かっているアギトは、何とか二人の間に空気を変えようとここ数日頑張っていたのだが、結局成果は出なかった。

（う～、クイントの姉御はこの場所に来れるか分かんねえし、アタシが頑張んなくちゃいけねえんだけど、本当にどうしたら良いんだよ！？）

アギトは本気で頭を抱えながら、二人の間に在る不穏な空気を消そうと考え続けるが、良い案が浮かばず更に頭を悩ませ始めた瞬間に、病室の扉が開き、果物がたくさん入った籠を手に持ったクイントが入って来る。

ーーーガチャン

「・・・・・・やっぱりこうなっていたのね」

「クイントの姉御！」

病室の中に入って来たクイントは、ゼストとルーテシアの間に在る空気に気が付くと、頭が痛いというように手を頭に載せ、クイントの姿を見たアギトは喜びの声を上げてクイントに近付いた。

クイントはアギトに持って来ていた果物籠を差し出すと、アギトは浮遊魔法を使用し、空中に果物籠を浮かし、病室に置かれている机へと降ろす。

それを確認したクイントは、不穏の空気を纏っているゼストとルーテシアに近付く。

「全く、親子なのに何でそんなに不穏な空気を纏っているんですか？メガーヌが起きたら、怒られますよゼストさん」

「・・・・・分かっている筈だぞナカジマ。俺はもう長くない」

「だから何ですか？ルーテシアちゃんを悲しませない為に、親だった事を隠していたとでも言うんですか？だとしたら、ゼストさん。貴方はルーテシアちゃんを確りと見ていないですね？」

「何だと？」

ゼストは険しい表情を浮かべてクイントに振り返る。

だが、クイントはゼストの険しい顔を見ても関係ないと言うように、ルーテシアに近付き頭を撫で始める。

「この子が頑張れたのは、メガーヌの事だけではないんですよ。貴方やアギトちゃんと言う大切に思っていてくれる人達がいたから悲しくても頑張れた」

「だ、だが俺は・・・・・」

クイントの言葉にゼストは動揺した声を上げるが、クイントは構わずにルーテシアを抱き上げ優しげな笑みをルーテシアに向ける。

「ルーちゃんも自分の心に正直に成りなさい。ゼストさんの事を如何思っているのか。自分の心からの気持ちを伝えるのよ」

「・・・・・うん」

ルーテシアは笑みを浮かべながら頷き、それを確認したクイントはルーテシアを床に降ろす。

降ろされたルーテシアはゆっくりとゼストに近付き、気まずげな表情を浮かべているゼストの手を握り締める。

「・・・・一緒に居て・・・・少ししか一緒に居られなくても・・・・・私は一緒にいたい・・・・お願い・・・お父さん」

「ッ！！ルーテシア！！！」

ーーーガシッ！！

自身を父親と呼んでくれたルーテシアに、ゼストは嬉し涙を流しながら力強く抱き付き、ルーテシアもゼストを力強く抱き締める。

ゼストはこの時に誓った。例え残り少ない命だろうと、残りの全てをメガーヌとルーテシアの為に使おうと誓ったのだ。

そしてその様子を嬉しげな笑みを浮かべながらアギトが見つめていると、クイントがアギトにそっと近寄り小さな声で声を掛ける。

「今、私の知り合いがスカリエッティのデータからゼストさんとルーちゃんの有効な治療法を探しているから安心しなさい。ちょっと問題が在る人物だけど、絶対に治療法を見付けてくれるからね」

「ありがとなクイントの姉御」

「気にしないで、それじゃ私は行くわね」

クイントはアギトに笑みを浮かべながら手を振るうと、病室を出て行き、後には互いに抱き締め合うゼストとルーテシアと、その様子を嬉しげに眺めるアギトだけが残されたのだった。

数ヵ月後、クイントが送って来た治療法に寄って、魔導師として戦う事は出来なくなったが、人並みの寿命を取り戻したゼストは新たに入隊した地上の局員達の教育係として働き、アギトは自身のロードに成ったシグナムと共に道を歩み始め、ルーテシアは体の中に在ったレリックを取り出され、ミッドチルダに在る魔法学院－Ｓｔ．（ザンクト）ヒルデ魔法学院に入学して、多くの学友達と楽しそうな笑みを浮かべていた。もちろんその傍らには、正式にゼストの妻に成ったメガーヌが優しげな微笑みを浮かべているのだった。

因みにクイントが病室から出て行った後、クイントは急ぎ仲間達の向かった場所へと向かおうとするが、その直前で偶然歩いていた入院中のギンガと鉢合わせる。

「か、母さん！？何で此処に居るの！？行方が分からないんじゃ！？」

再び行方が分からなくなっていた母親で在るクイントとの再会にギンガは慌てた声を上げた

しかし、ギンガの姿を見たクイントは、ギンガの言葉には答えずに、笑みを浮かべながらギンガの病院着の襟首を掴む。

ーーーガシッ！

「丁度良かったわ。これから機動六課隊員達が居るアースラに行くけど、ギンガも来なさいね」

「えっ？ちょっと母さん！？私入院中！！」

「大丈夫よギンガ。マッドだけど優秀な医者を紹介して上げるから、そんな悪趣味なドリルの腕もすぐに治るわ・・・・心に傷が出来るかも知れないけどね」

「えっ！？イヤアァァァァァァーーーーーー！！！！！」

クイントの言葉の意味が分かったギンガは悲鳴のような声を上げて、クイントの手から逃れようとするが、戦闘機人で在る筈のギンガの力でもクイントから逃れる事が出来ず、ギンガは悲痛な叫びを上げ続けるのだった。

スカリエッティ達に寄って破壊された機動六課隊舎跡地。其処には巨大な管理局の艦艇ーアースラが停泊していた

本来ならば事件が解決した今、隊舎の修復が始まっても良いのだが、現在の機動六課メンバー全員には臨時施設として使っていたアースラ内部での謹慎処分が言い渡されていた。

これに関しては、今回の事件で機動六課が最終的に役に立たなかった事、地上本部との軋轢を増しさせた最悪の部隊と、ミッドチル

ダ中でささやかれている為に機動六課メンバーは全員外に出る事が出来ないのだ。
そしてそのアースラ内部の食堂には機動六課隊長陣とＦＷメンバー、そして未だに大人姿のままのこの世界のヴィヴィオが集まっていた。

「・・・・先ず地上本部から送られて来た私らの処分内容やけど、ＦＷメンバーは全員お咎め無しで地上のそれぞれの部隊に編入が決まりや。だけどエリオとキャロに関しては管理局を辞める事も赦されている見たいや」

『エッ！？』

落ち込んだ表情を浮かべながら、はやてが告げた事実にエリオとキャロは驚きの声を上げ、他の者達も驚いた表情を浮かべた。
エリオは九歳でＢランクを取った優秀な魔導師の上に、キャロはレアスキル『竜召喚』を持った少女。それほどの才能を持つ者達を万年人材不足の管理局が手放すとは思っても見なかったのだ。
しかし、これは実を言えばリンディがレジアスに頼んだ事だ。今のリンディは子供を戦場に出す事を最も嫌っている。自身の所に居るヴィヴィオが戦う決意をした時に聞いた悲しみに満ちた声。
戦いに出れば何時命を落とすかもしれない純然たる事実。そして命の大切さをその身で味わったリンディには如何しても機動六課で戦っているエリオとキャロの存在が赦せなかった。
だからこそ、レジアスに頼んで二人の未来を縛り付けるような行為だけはしないでくれと頼んでいたのだ。最もあくまで二人に赦されているのは他の者達よりも在る程度の行き先の自由だけであって、最終的な決定は二人に任せるつもりだった。

「質問は後で来る地上本部からの派遣者達に聞いてな。次に隊長陣

やけど」

困惑の表情を浮かべるエリオとキャロに告げながら、はやては異世界のなのは一以降高町なのは、フェイト、ヴィータ、シグナムに顔を向け、深く頭を下げる。

「・・・・・堪忍な皆・・・・・・機動六課隊長陣は全員全ての階級と資格を剥奪し、地上本部勤務の一士からやり直しが決まったわ。他の機動六課隊員も殆ど地上本部勤務や・・・・ゴメン・・・・ほんまにゴメン」

「・・・・はやてちゃん」

『・・・・はやて』

「・・・・主」

頭を深く下げて涙を流しながら謝り続けるはやての姿に、高町なのは、フェイト、ヴィータ、シグナムは慰めの言葉を掛けようとするが、言葉は誰も出なかった。

慰めれば逆にはやてが傷付いてしまう事がわかっているからだ。

機動六課が設立する前に、友人や家族に将来を絶対に傷付けないと約束したのに、結果は殆どの者達が今までの功績を全てを失う様な形に成ってしまった。かと言って今回の事件を解決したデュークモン達を責められる筈も無い。居場所が分からないのもそうだが、彼らは民衆から絶大な人気を持っている上に、Sランクオーバーの魔導師でさえも勝てないほどの力を持っている。

しかも、彼らには他にも仲間が居る事が分かっているので、攻撃した何て日に成ったら、管理世界が滅ぼされるもかも知れない。あの攻撃した艦隊に対する無慈悲な行動を見れば明らかだろう。

その事が分かっているはやては如何する事も出来ず悲しみの涙を流し続け、他の者達は何とか慰めようと声を掛けようとした瞬間。

ーーードゴオン！！

『ッ！！』

食堂に在った扉が吹き飛び、全員が驚愕の表情を浮かべて、食堂の入り口の方を見て見ると其処には。

「う～ん～。もうちょっと派手に登場した方がインパクト在ったかな？」

「イヤちょっと待ってよ！？何で登場にインパクトが必要なの！？普通に入れば良いんじゃないの！？」

「駄目だよガブモン君。私はこの世界の自分に圧倒的な実力差を見せたいの。だから、登場は派手にすべきだと思うの？」

「・・・・・・・ヴィヴィオがこの前見ていたアニメに影響されていない、なのは？」

『なっ！？』

吹き飛んだ扉からゆっくりと歩いて来る毛皮を被った生物ーガブモンと言い争いをしているレイジングハートを右腕に握り茶色の髪をサイドポニーにした女性ー異世界のなのはの姿に、機動六課メンバーは全員信じられないと言う表情を浮かべて、なのはと高町なのはを見比べる。

二人の姿はまさに瓜二つだった。

同一人物なのだから仕方が無いのだが、その事を知らない機動六課メンバー達は誰もが困惑した表情を浮かべる。
だが、なのははそんな様子に一切構わず、この世界の自分自身ー高町なのはの前に立ち、優しげな笑みを浮かべる。

「始めましてこの世界の私。私は貴女より強い高町なのはだよ」

「此方こそ始めまして。私は何処かの誰かのようにコソコソと動かない高町なのはです」

「随分な言い様だね？誰のおかげで潰れ掛けていた時に、立ち上がれたのかな？」

「覚えが無いよ。だってあの時の念話の主は正体を教えてくれなかったし、貴女だって証拠は無いよね？」

互いに笑みを浮かべながら言葉を言い合うが、その雰囲気はもはや険悪としか言い表せないものだった。だが、それも仕方ないだろう。
なのはは大勢よりも自分の大切な人達の為に戦い、自身も幸せを掴むと決めた存在。
方や高町なのはは、少しでも多くの人々に笑みを浮かばせようとする為に自分さえも省みず戦う存在。
二人の生き方は在る出来事ーブラックにボコボコにされた時から大きく変わってしまった。
そんな二人が出会えば、互いにいがみ合うのは当然だろう。

「ブラスターシステムだったかな？何であんな欠陥システム積んでいるの？使用後の事を何も考えていないなんて命がいらないのかな？」

「貴女には関係ないよ」

なのはの質問に対して高町なのはは素っ気無く答え、顔を背けようとする。

その様子を見たなのはは、目の前の高町なのはの気持ちを正確に読み取り、怒りの表情を浮かべて首もとの襟を掴む。

ーーーガシッ！

「別に貴女が死んでも私には関係無いけど。この世界のヴィヴィオをもう一度でも傷付けたりしたら、その時は私が貴女を二度と飛べない体にして上げるよ。覚えて置くんだね」

「・・・・・」

なのはの言葉に対して、高町なのはは無言を貫き、辺りには一瞬即発の空気が満ち溢れた。

その様子にガブモンを除いた全員が不安そうな表情を浮かべ始めた瞬間に、入り口の方から手を打つ音が響く。

ーーーパンパンッ！！

「はい二人とも其処までよ。私達は戦いに来たんじゃないんですからね」

『ッ！！』

聞こえて来た声に、その声に聞き覚えが在る者達が全員驚いた表情を浮かべて入り口の方を見て見ると其処には、黒い髪に金色の瞳

を持った男性ー人間体のブラック。
その傍らに寄り添うように立つ銀色の髪に蒼い瞳を持ち、青と白のロングコートを着たはやて達に取って忘れられないと瓜二つの姿をした女性ールイン。
同じ様にブラックに寄り添うように立つ翡翠の髪に黒いドレスを着た女性ーリンディ。
赤い恐竜の様な生物ーギルモンの背に乗った子供姿の異世界のヴィヴィオ。
首に狐の様な生物ークダモンを巻き付かせている異世界のティアナ。
そして未だに暴れ続けているギンガを片手で抑えているクイントの姿が存在していた。

「さて、色々と説明して上げましょうね」

そうリンディは笑みを浮かべながら告げ、その場に居た機動六課メンバーは誰もが困惑の表情を浮かべるのだった。

十数分後

「つまり、貴女方が予言に在った人物達で、平行世界から休暇の為にはるばるやって来たと言う事良いんですやろか？」

「概ねその通りよ。予言に私達の事が記されていたのは知らなかったけどね」

アレから互いの事情を説明し在ったリンディとはやては険しい表情を浮かべながら向かい合い、他のメンバーは困惑した表情を浮かべてリンディの背後に居るなのはとティアナを見つめる。
平行世界。実在するのかどうかも分からなかった世界から来訪者だと告げられたのだから、困惑するのも当然だろう。だが、現になのはとティアナ、ヴィヴィオと言う同一人物が二人居る上に、自分達の知るリンディ寄りも若いリンディが存在しているのだから、平行世界の実在を示す良い証拠だろう。

「・・・・・質問ですけど、あの生物達は何処に居るんですか？フェイトちゃんから聞いた話やと、貴女とあの生物達は仲間やそうですけど？」

「あら？もう目の前に居るわよ」

『ッ！！』

リンディが告げた事実にその場の全員が驚いた表情を浮かべて、辺りを見回す。
だが、デュークモン達の姿は発見出来ず、からかわれたのかと思い、はやてが表情を更に険しくすると、リンディがそっと手をなのはとティアナ、そしてこの世界のヴィヴィオと楽しく遊んでいるヴィヴィオと遊んでいるギルモンを示す。

「その三人がそうよ。正確に言えばデュークモンはヴィヴィオとギルモンが、スレイプモンはティアナとクダモン、そしてメタルガルルモンXはなのはさんとガブモン君が正体よ」

『なっ！？』

その場に居る機動六課メンバー全員が信じられないと言う声を上げて、なのはとその横に座っているガブモンを、ティアナとその首に巻き付いているクダモンを、そして最後にこの世界の自分自身と楽しそうに遊んでいるヴィヴィオとギルモンを見つめる。
あの圧倒的とした言えない力を持ったデュークモン達の正体がなのは達だと告げられたのだから、当然だろう。
その様子になのは達は苦笑を浮かべると、それぞれ説明を始める。

「本当だよ。私達の世界ではデジモンて言う生物が存在していて、そのデジモンと絆を結んでいけばデジモンは人間と融合して究極体と呼ばれる存在に進化する。私はガブモン君と融合してメタルガルルモンXに進化出来る」

「私はクダモンと融合してスレイプモンですね。それに魔導師と融合すれば、その人物が使用しているデバイスや魔法も使用出来るように成るんですよ。もちろんレアスキルもです」

ティアナはなのはの説明を補足するように説明すると、両手にブレイクミラージュを顕現させる。
ブレイクミラージュの姿を見たはやて達はティアナとクダモンがスレイプモンで在る事を確信し、同時に何故デュークモンが虹色の魔力光と『聖王の鎧』を持っていたのと、何故あそこまでこの世界のヴィヴィオを傷付けた事に怒りを顕にしたのか分かった。
異世界の聖王で在るヴィヴィオと融合していればヴィヴィオの力を全て使える上に、異世界とは言え大切なパートナーであるヴィヴィオを傷付けられた事を怒っていたのだ。
だが、同時に疑問が浮かび上がった。何故異世界とは言え管理局をボコボコにする様な行動を取ったのかと言う疑問だ。
なのはは管理局に入らなかったとしても、あそこまで徹底的に管理局を攻撃する理由は存在しないし、ティアナにしても実の兄であ

るティーダが入局していた管理局を攻撃する理由が存在しない。
そしてリンディ、クイントにしても長年を勤めていた管理局を人物達。
他の者達は如何だが分からない無いが、彼女達が管理局に敵対する理由が見えず、はやて達は困惑の表情を浮かべる。
その様子にリンディは、はやて達の内心で正確に読み取り管理局に敵対した理由を語り出す。

「私達が管理局に敵対する理由だけど、私達は管理局員ではないわ。寧ろ敵ね。私やなのはさんは元の世界では管理局に命を狙われているわ」

『ッ！！』

その場に居る全員が驚愕の表情を浮かべて、リンディとなのはを見つめる。

「私が狙われる理由は、私が管理局の持っていた理論を根底から覆す存在だからね」

「根底を覆すやて？」

リンディの言葉にはやてが疑問の声を上げると、リンディは右手をはやて達に見える様に掲げながら指を鳴らす。

ーーーパチン！！

ーーーシュウン！！

『ッ！！』

リンディが指を鳴らすと同時に、無数の魔力剣ークロノが得意とするスティンガーブレイド・エクスキューションシフトが前触れも無く発動され、リンディの背後に出現した。
その様子を見たはやて達は誰もが驚愕の表情を浮かべた。何故ならばリンディの手にはデバイスなど握られていない上に、魔法の発動時には必ず浮かび上がる筈の魔法陣も出現していなかった。しかも、魔力反応さえも感じられなかった。
この瞬間に、何故リンディが自身を管理局の存在を根底から揺るがすと告げたのか誰もが分かった。
確かにリンディの今行った事は管理局の挙げていた理論を崩壊させるに十分な事だ。
魔力も無く魔法を使う。それは魔導師の存在を根底から否定する事だろう。

「これが私の命を管理局が狙う理由。魔導師至上主義に染まった本局の者達からすれば、私は在ってはならない存在。その証拠に元の世界では私は管理局員全員に、発見したら即座に抹消するように命令が出ているわ」

「そんな!?」

リンディが告げた事実にフェイトは悲痛の叫びを上げた。
異世界とは言え、義理の母親で在るリンディがその様な事態に成っているとは思わず、悲痛な叫びを上げたのだ。
だが、叫ばれたリンディは気にせずに魔力剣を消去し、はやて達に険しく歪めた顔を向ける。

「当然でしょう。魔法は魔導師だけが使うべき力。そんな考えを持っている者達からすれば私は脅威としか呼べない存在。そして魔法

を越える力など管理局は絶対に認めない。その結果が今回の事件よ」

『ッ！！』

「ハッキリ言わせて貰うわ。はやてさん。貴女は地上の人々を危険に晒す気だったの？」

「なっ！？」

リンディの言葉にはやては何を言っているんだと言うように叫び、他の者達も困惑した表情を浮かべる。

その様子にリンディはやはり気が付いていなかったのかと言う表情を浮かべ、リンディの背後に居るブラック達も険しい表情を機動六課の者達に向ける。

「今回の事件。この事件に隠されていた本質は知っているわね？本局の真の狙いは地上本部掌握だった事はもう分かっているわね？」

「は、はい・・・・」

リンディの質問に対してはやては落ち込んだ表情を浮かべながら頷いた。

「その事実だけでも危ない事なのよ。何せ本局が地上を掌握すれば必ず地上の戦力は今までよりも奪われて行く。その結果待っているのはミッドチルダの治安の悪化。これは必ず起きるわ。唯でさえ今の地上はギリギリだったのに、これ以上戦力が奪われたらミッドは犯罪者が横行する無法地帯に成るわ」

「そ、それは、その時は本局が」

「動かないわね。今までの状況を見れば簡単に推測出来る。本局に取って重要なのは“海”。地上の事なんて気にしないでしょうね。多分、更に戦力は減り地上の治安は悪化の一歩を辿る。その時に貴女は如何動く？」

「・・・・・地上の戦力を確保しようと思います」

「無理よ。だって地上は本局の下部組織に成ってしまっている。本局に意見をするなんて事は夢のまた夢。なら最終的に戦力不足して居る管理局が行き着く先は何処か？一つしかないわね。人造魔導師研究」

『ッ！！！』

リンディが呟いた言葉に、機動六課メンバーは驚愕の表情を浮かべ、人造魔導師で在るフェイトとエリオは体を恐怖に振るわせた。

既に機動六課メンバー達も管理局が違法研究を行っていた事は知っている。

リンディの言葉はあながち間違いではないのだ。

「魔導師以外を戦力として認めない本局の者達が戦力確保するには人造魔導師研究しかないわ。その結果は十分過ぎるほどに分かる筈よ。沢山の者達が苦しむ最悪の世界が生まれる。表の人々は知らない最悪の世界が。そしてそれを取り締まる筈の管理局が行っているとは誰も思わない。追っている執務官にしても研究者を逮捕すれば解決すると思っていた。そうでしょうフェイトさん？」

「・・・・・・はい」

リンディの言葉に対してフェイトは顔を俯かせながら頷いた。
フェイト自身。今回の事件はスカリエッティだけを捕まえれば解決すると思っていた。
確かにスカリエッティを捕まえれば、ミッドを襲った脅威は消えるだろう。だが、根元は残り必ず同じ悲劇が何時か起きる。その時にも管理局が事件を起こした犯人を捕まえて終わり。
結果残るのは自作自演の様な事件の連発だろう。

「管理局はつかまる事も無い上に、組織には在って然るべきの浄化機能も存在していなかった。その結果、管理局は腐敗して行ったわ。自分達の行いこそが正義だと叫ぶ集団に成ってしまった」

「そ、それは！？」

「正義。良い言葉よね。この言葉さえ在ればどんな事を行っても赦されてしまう。特に民衆から認められている正義ならば尚更ね」

リンディの言葉に誰も言葉を発する事が出来ず、顔を下に俯ける。
現状の管理局がまさにそれだ。管理局は自らこそが正義だと叫び、色々な違法や犯罪を行っていた。
そしてその事に誰も気が付かず、進み続け、あわやミッドに大惨事を起こすような事件を引き起こしてしまった。その犠牲に対しても管理局は気にせずに自分達こそが世界を護ったと叫ぶ積もりだったのだろう。

「私は理想を否定する気は無いわ。だけど、今の管理局は理想に溺れて、其処から生まれる犠牲を見ようとしなくなってしまっている。例え世界を一つ滅ぼしても管理局は気にせずに先に進み続け、最終的には自分達の作り上げる平和の為ならば次元犯罪者と同じ行為を行っても気にしない組織に成ってしまうでしょうね」

「・・・・・だから、そうなる前にこの事件で管理局を変えようと、全ての事実を民衆に教えたんですか？」

「結果的に言えばそうね。私達は最初は動く積もりは無かったし、管理局を滅ぼす様な動きをする積もりは無かったわ」

はやての質問に対して、リンディは答えた。

本来、リンディ達はこの世界では何もせずにゆっくりと休暇を取るつもりだった。

元々この世界はリンディ達の世界ではない上に、リンディ達の力は圧倒的としか言えないほどの力だ。その力に対抗する術が無い世界で猛威を振るえば、必ずや世界に混乱を巻き起こす。

その事が自分達の世界での出来事で痛いほど分かっているリンディ達は何が在っても動く積もりは無かった。だが、スカリエッティの行った在る行動だけは、リンディ達には如何しても赦せない事だった。

「私達が動いた理由は一つだけ。この世界のヴィヴィオが泣いたからよ」

『ッ！！！』

リンディが告げた動いた理由に、高町なのはを除いた機動六課メンバー全員が信じられないと言う表情を浮かべて、リンディ達を見つめた。

管理局を滅ぼせるかも知れないほどの力を持った者達が動いた理由。

たった一人の少女ーヴィヴィオが泣いたからだと言う小さな理由。その為だけにリンディ達は動いたのだ。

「私達全員には誓いが在るわ。何が在ろうと、世界が敵だろうと、ヴィヴィオを泣かせた者達は何を持ってしても滅ぼす。それだけは絶対に違える事の無い誓いよ」

リンディの言葉に答える様に、背後に居たなのは達も同意する様に頷き、機動六課の者達は信じられないと言う表情を浮かべる。

多くの世界よりもたった一人の為に動いた。その生き方は十年前のシグナム達ー守護騎士達と同じ生き方だが、何処か迷っていた十年前のシグナム達と違って、リンディ達には迷いなど無い。

本気でヴィヴィオが泣かなければ動く積もりは無かったのだろう。

その事に気が付いたはやては、リンディに食って掛かるように叫ぶ。

「本当に動く積もりは無かったんですか！？大勢の人々が犠牲に成ると分かっていても！？」

「犠牲が生まれる事を知っていた管理局員の貴女には言われたく無いけど。本気で動く積もりは無かったわ。だって、全部管理局が確りしていれば防げた事態なのよ。他人の過ちを態々尻拭いするほど私達は甘くはない」

「そうだよ。今回の事件の犠牲は全部もっと確りと地上と連携が取れていれば防げた事件。予言の事なんか関係せずに地上と共同で事にあたって居たら、今回の事件でクラナガンの人々に出る犠牲は少なかったかも知れない」

「地上本部襲撃から数日の時間が在ったんです。その時間を人々の避難の方に優先していれば、今回のスカリエッティの襲撃には犠牲が出る事は無かったでしょうね」

はやての言葉に対してクイント、なのは、ティアナはそれぞれ冷静に答え、はやては言葉も出す事が出来なかった。
今回の事件は、全て管理局が最初から真剣に当たっていたら犠牲は限り無く少なく済んでいただろう。
最終的に今回の事件での死亡者の数は数百人。怪我人を入れれば数は増えるが、それでも大規模な事件にして被害者の数は少ないだろう。
だが、それはデュークモン達が動いたからに過ぎない。彼らが動かなければ犠牲者の数は数千人以上に成っていただろう。
しかしそれも、事前にクラナガンから人々が非難していれば出なかった犠牲だ。

「予言で少しは先の事を分かっていたのならば、それに対する人々の護りこそが重要。だけど、この部隊にクラナガンの人々を一人残らず避難させられるだけの力が在るかしら？」

「そ、それは・・・・」

「出来ないですよね？この部隊に居る者達が全員動いても、スレイプモンの様に大勢の人々を安全な場所に運びながら、大量のガジェットを破壊する事など不可能です。せいぜいこの部隊に出来るのは事件を起こした犯人達を捕まえるのが精一杯ですよ」

声を詰まらせたはやてに、ティアナは冷静に歴然たる事実を告げる。
確かに機動六課は他の部隊よりも優秀な人材が存在している。だが、その多くの者達が直接的に戦う者達しか居ない。その様な者達が人々の避難誘導を出来る筈も無い。

「理想を夢見るのは良いわ。だけど、現実を見なさい？物事には必ず隠された本質が存在している。その本質を解決してこそ本当の意味で事件は解決する。唯起きた現象だけを解決しても、同じ事を繰り返すだけよ。嘗ての闇の書事件の様にね」

ーーービクッ！

リンディの言葉にはやては体を振るわせる。

今回の事件は在る意味では幾度も現れ続けた闇の書に似ている。

大元が存在する限り幾度も同じ様な事件が起きるだろう。例えスカリエッティが捕まったとしても、第二、第三のスカリエッティは必ず生まれる。管理局と言う組織が自らの間違いに気が付き、内部が変わらない限り。

「今回の私達の行動で管理局は変わらざる得ない。変わらなければ何時かは自滅する。その事が分かっているレジアス中将は全力で管理局を変える行動を取っているわ」

「・・・・・・私が行った行動は間違いやったんですか？」

「間違いとは言えないわ。貴女も本気で人々の平和の為に動いていた。だけど、理想ばかりに目が行ってしまっていた為に、見るべき物事を見ていなかった結果が今回の顛末よ。本気で世界を変えたいのならば多くをその目で見て、その体で味わって学びなさい。その為にも一局員に戻って最初からやり直す事ね」

「・・・・・・分かりました」

リンディの言葉にはやては顔を俯かせながら頷いた。

今回の事件ではやて達は今まで築き上げた全てを失った。だが、

それがマイナスに働くかどうかはこれからのはやて達の行動しだい。今回の経験を全く生かせず、同じ様な過ちを繰り返すのならば、はやて達には世界など護る事は出来ないだろう。
全てはこれからの彼女達の行動しだいなのだ。
出来る事ならばレジアスと同じ様に自身の罪を知って、先に進んでくれる事を内心で願いながら、リンディは顔をはやてから逸らし、フェイトの足元に居るエリオとキャロに顔を向ける。

「さて、次にエリオ・モンディアル君とキャロ・ル・ルシエちゃん事だけど、フェイトさんは二人をこれからも戦わせる気なのかしら？」

『エッ？』

「二人に関しては私がレジアス中将に頼んで、他の者達よりも自由が赦されているわ。普通の子供の様に学校に通うのも赦されている。管理局を一時辞めて普通の子供として生きるのも良いのよ」

「あ、あの、如何してそんな事を？」

「・・・・・・罪滅ぼしかしらね。私は十年前に自分達の都合を優先して、一人の幼い少女の人生を利用した事が在るのよ？」

キャロの質問に対してリンディは憂いを覚えた表情を浮かべて答えた。
リンディは十年前になのはを勧誘したのを、P・T事件の時に利用した事を心の底から悔いていた。あの時になのはを利用したのは間違いだったと今のリンディには良く分かっている。
管理局の為。世界の為。そんな免罪符を掲げて一人の少女の人生を歪めて、失敗すれば死んでしまうような状態にまで追い込んでし

まった。

「だからこそ、私は子供が戦う事を否定するわ。取り返しの付かない傷を負わせてしまった時に、私は何も出来無かった。その時の悲しみは本当に辛いものなのよ」

リンディは深い悲しみに満ちた表情を浮かべて、食堂の端でこの世界のヴィヴィオ、ギルモンと楽しく遊んでいるヴィヴィオに顔を向ける。

なのはだけではない。ヴィヴィオもまた心の底に深い傷を負ってしまっている。

しかも、ヴィヴィオの心の傷は絶対に治る事は無い。あの悲しみに満ちた声で泣き続けたヴィヴィオの姿をリンディ達は忘れる事は無いだろう。

「だからフェイトさん。三人で良く相談してこれからを決めて。戦う道を選ぶのか？それとも普通の子供と同じ様に歩ませるのか？お願いね」

「・・・・・わ、分かりました。三人で良く相談して決めます」

リンディの言葉に思う所が在ったのか。フェイトは困惑しながらもリンディの言葉に頷き、エリオとキャロの顔を良く見つめて悩む様な表情を浮かべる。

その様子にリンディは笑みを浮かべると、最後に高町なのはに顔を向ける。

「なのはさんはもう十分過ぎる程に分かっているわね？」

「・・・はい・・・・・私は結局逃げていただけでした・・・・・・

本当ならばヴィヴィオの母親を名乗る資格は無いです・・・・・・だけど私はヴィヴィオの母親に成ります！絶対にヴィヴィオを悲しませたりしません！」

「うん！良い答えだね。それなら体も万全にすべきだね」

『えっ？』

高町なのはの宣言に対してなのはが笑みを浮かべながら答え、機動六課の者達が困惑した声を上げた。

体を万全にする。なのははそう告げたのだ。

高町なのはの体は八年前の怪我の後遺症が残っている上に、今回のデュークモンとの戦いで使用したブラスターシステムの後遺症も残っている。今の高町なのはの体は管理局の技術でも全快は不可能と言う程にボロボロだった。

そのボロボロの体を万全にすると告げられたのだから、誰もが困惑するのも当然だろう。

しかし、なのははそんな様子には一切構わず、高町なのはの肩を凄まじい力で握り締めながら、自身と高町なのはの足元に転送用魔法陣を出現させる。

「私の世界の最高峰の医者の下に連れて行ってあげるよ」

「序にギンガも行きましょうね」

「イヤアァァァァァーーーー！！！スバル助けて！！」

「ギ、ギン姉？」

クイントの腕から逃れようとしているギンガの姿に、スバルは困

惑した表情を浮かべるが、クイントは構わずにギンガと共に魔法陣に乗り込み、その場からなのは達と共に転移する。

ーーーシュウン！

「・・・・・体の傷は必ず治るわね。心に深い傷は出来るでしょうけど」

「だろうな。奴が平行世界の人間の体や、戦闘機人の体を調べない筈は無い」

「ご冥福を祈るしかないですね」

なのは達が消えた場所を見つめながらリンディ、ブラック、ルインはそれぞれ言葉を言い、なのは達が向かった先に居る者の正体を知っているティアナ、クダモン、ガブモンは同意する様に頷く。

その様子を見た機動六課メンバーは全員が不安そうな表情を浮かべて、消えた高町なのはとギンガの事を心配するのだった。

数時間後。高町なのはとギンガ・ナカジマは体を完全に治療されて戻って来たが、二人とも何かに怯える様に体を振るわせ続け、仕切りに『マッド怖い。マッド怖い』と顔を蒼くしながら呟き続けていた。

その様子に機動六課メンバー全員とヴィヴィオは心配そうに声を掛け続けたが、二人が元の精神状態に回復するには数日も時間が必要だった事を記して置く。因みにその様子を見ていたなのはは見るものを魅了する様な笑みを浮かべていたらしい。

そしてこの件が原因だろうが、この先、高町なのはは地上本部の仕事をしながらも定期的に休みを取る様に成り、ワーカーホリックから脱したらしい。

数ヶ月後。機動六課隊長陣は決まっていた通り、地上本部に一士と全員所属し、地上本部で一からやり直し始める。今度は今までのように物事の本質を見えるように成ってから、もう一度自分達の夢をそれぞれ追う事を決めて。

ＦＷメンバーは今回の事件から自分達も勉強不足だった事が良く分かり、スバルとティアナは自分達の古巣に戻って、もう一度勉強してからそれぞれの夢をもう一度目指す事を決めた。特にティアナは異世界の自分自身と別れるまでの間に、何度も模擬戦を繰り返していたので、必ず超えると心に決めている。

そしてエリオとキャロだが、最終的に彼らはフェイトとの相談の結果。ルーテシアと同様にＳｔ．（ザンクト）ヒルデ魔法学院に通う事を決まった。リンディの言葉が在ったのも理由の一つだが、フェイト自身、自分の行動が本当に正しいのか迷い続けていたのも在り、フェイトは二人を説得して学校に通わせる事を決めたのだ。

その後、二人はルーテシアと再会し、仲の良い学友として生活している。

そして最後にレリックを外され、元の幼子に戻ったこの世界のヴィヴィオは、正式に高町なのはの養子に成り、高町ヴィヴィオと成った。

この件に関しては聖王教会が猛反発を起こしかけたそうだが、デュークモンの聖王の騎士として宣言を聞いている教会の教皇が、デュークモンの言葉を無かった事にして勝手に自分達の思い通りにヴィヴィオの人生を操れば、再びデュークモンが現れ、教会を潰すかも知れないと宣言し、反発を抑えた。

聖王教会は聖王を崇める者達が集まる場所。其処が聖王の騎士たるデュークモンの言葉を無かった事にすれば、教会は自らの掲げるものを否定する事に成る。そうなれば、教会は存在意義を失う事に成り、瓦解してしまう可能性に気が付いた教皇は、ヴィヴィオへの一切の干渉を禁じたのだ。

そのお陰でヴィオは何の障害も無く、高町なのはの娘に成る事が出来た。
現在はエリオ達同様、Ｓｔ．（ザンクト）ヒルデ魔法学院の初等部に通って、多くの同年代の学友達と共に色々な事を学び始めている。時たま訪れてくる異世界のヴィヴィオとは姉妹の様に仲が良く、ギルモンと共に遊ぶ事が在るらしい。

そして最後に今回の事件でブラック達にボコボコにされた戦闘機人達やスカリエッティに付いてだが、彼女達は事件が終わった後、全員聖王病院で入院する事に成った。
ノーヴェ、ウェンディ、ディード、オットーは精神的なものに寄って、ウーノ、トーレ、クアットロ、セイン、セッテ、ディエチは肉体的なものに寄って、ナンバーズの殆どの者達は重症患者として入院する事に成ってしまった。無事で済んでいるのは、ナンバーズの内の二人、クイントに殴り飛ばされたドゥーエと地上本部襲撃時にスバルに寄って大怪我を負わされたチンクぐらいだろう。他の者達は何かしたの精神的外傷（トラウマ）を持ってしまっている。
特に酷いのはノーヴェ達であって、桃色をした物を見るだけで恐怖に体を震わせ、彼女達の居る病室には一切桃色の物を持ち込む事を禁止されるほどである。
ウーノ達にしても壁に埋め込まれていたせいか閉所恐怖症に成ってしまっていた。
クアットロとディエチは精神的外傷（トラウマ）は免れたが、何故か二人ともデュークモンの存在を神聖視し、聖王教会に傷が治り次第入信したいと言っているらしい。
そしてスカリエッティだが、体自体は一番重症で在りながら、その目は凄まじい程に生き生きとした光を浮かべており、ベットの上で全身を包帯でぐるぐる巻きにされながらも何かを考え続けるよう

にぶつぶつと小声で呟き続け、病院の関係者達を恐怖に陥れている。
そのスカリエッティを甲斐甲斐しく世話しているのがドゥーエであり、他のナンバーズの世話をしているが逸早く治療を終えたチンクである。
本来ならば今回の事件のような事を起こしたスカリエッティ達も裁かれる筈なのだが、スカリエッティが管理局最高評議会に命令されて違法研究を行っていた事と、スカリエッティがその為に生み出された人造生命体で在る事が分かり、管理局に保護されている状況に成ってしまったのだ。因みに彼らの入院費用は、全てスカリエッティが隠していた個人資産から出されている。

そして最終的に彼らは、在る程度社会復帰出来るほど回復すると、地上の戦力を上げると言うレジアスの思惑も在って、ノーヴェ、チンク、ウェンディはスバルとギンガの父親であるゲンヤ・ナカジマに引き取られ、ナカジマ家の養子に成った。
残るクアットロ、セイン、ディエチ、ディード。オットーは聖王教会に入信し、見習いシスターとして働いている。
他のナンバーズ、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、セッテはスカリエッティの体の治療費を稼ぐ為に、ノーヴェ達と同様に地上本部で働く道を選んだ。
スカリエッティは最終的に禁固二十年の刑を、管理世界から言い渡された。
体の怪我が完全に治らない事も在ったが、彼は既に人造研究には興味が無く、ブラックの存在だけを求めていた。
“自身の全てを持ってブラックの存在を解き明かし、彼らが住む世界に行く”
それこそが今のスカリエッティの夢で在り、目標でも在る。
各管理世界としてもスカリエッティの目的は、再びデュークモン

達とコンタクトを取ると言う目的と一致するので、スカリエッティの頭脳が必要になった場合必要な研究を手伝う事を条件に禁固二十年の刑にしたのだ。

そして事件解決から一ヵ月後。今回の事件でミッドを危険に晒させた幹部達は全員がミッドチルダに作られた仮設の裁判所内部で、自分達が作って来た法に寄って裁かれ、死刑が宣告された。
一番の元凶であった最高評議会が何者かに寄って暗殺されていた事も在り、彼らは発見された全ての罪を背負って死刑された。
ミッドの人々はもはや彼らを正義などと呼ばない。ミッドの人々が彼らを呼ぶ時の言葉は一つ。

“ミッド最悪の大罪人”

後の歴史に彼らの名は汚名として刻まれ続けるだろう。
付き従っていた局員達にしても、全員が無期懲役を言い渡されている。

「これで少なくとも、管理局の闇の一部は消えたわね」

「だろうな。だが、この先は分からん」

「全ての闇が消えた訳ではないですからね。この世界がこれから良い世界に変わるかどうかは、この世界に住む人々次第ですよ」

遠くに見える仮設の裁判所をビルの屋上から眺めながら、リンディ、ブラック、ルインはそれぞれ言葉を言う。
ブラックは在る程度そのまま裁判所を眺め終えると、裁判所に背

を向ける。

「行くぞ。休暇は終わりだ。この世界には俺の敵になる存在は居なかった」

「そうね。十分に体は休めたし、私達は戻りましょう」

「了解です、ブラック様」

ブラックの言葉に対して、リンディとルインはそれぞれ答えると、足元に魔法陣を発生させ、その場から転移して、自分達の世界に戻って行くのだった。

特別編、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ完全崩壊エピローグ（後書き）

次回は今回の話で掛けなかった部分を、おまけとして書きます。
その後本編に戻ります。

特別編、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ完全崩壊おまけ（前書き）

この話はエピローグでは書けなかったキャラの交流の話です。

三人、ルイン、クイント、リンディの話を書きました。

特別編、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ完全崩壊おまけ

ーーールインＳｉｄｅ

深夜。誰もが寝静まる時間帯。

その様な時間帯にルインは唯一人アースラ内部の通路を歩き続け、食堂へと向かっていたが、その表情は不快に染まっていた。

（全くイヤですね。何で私があの連中の為に歩かなければいけないんですかね？あの生真面目。私の事を守護騎士達にだけは伝えて置けば良いのに。絶対にややこしい事に成りますよ）

ルインがこの様な夜更けに食堂に向かっているのは、昼間の話し合いの時にシグナムから念話が届いたからだ。

“深夜に会って話がしたい”

その様な念話が届いた理由もルインは分かっている。

ルインの容姿はこの世界では十年前に消滅した筈の『夜天の魔導書』の管制人格であるリインフォースと蒼い瞳以外、瓜二つと言って良いほどに似過ぎている。半身なのだからルインとリインフォースの容姿が似ているのは当然なのだが、ルインの正体を知らない守護騎士達や八神はやてからすれば驚きだろう。

昼間ははやてが闇の書の主だった事を知らない者達もいた為に聞かなかったのだろうが、それでもルインの正体が気になり、深夜に呼び出し聞こうとしているのだ。

本来ならばルインが主で在るブラックや仲間のリンディ達以外の頼みを聞く事は無い上に、相手は異世界とは言え八神はやてと守護騎士達。ルインに取って赦しがたい敵なのだが、今回だけはルイン

も色々とはやて達の言いたい事があるので了承したのだ。

（あの生真面目には本気でムカつきますね。元の世界に戻ったら必ず嫌がらせして上げましょう。この容姿と奴の名を使ってブラック様達と何処かの高級レストランで食事を取るのも良いですね。いえ、それよりもヴィヴィオちゃんがお寿司を食べたいと言っていましたし、回転寿司で食べるのも良いですね。最近はリンディさんと一緒に寝ていますし、此処は少しでもポイントを稼いで、何としても私をママと呼ばせたいです）

その様にルインは内心で元の世界に戻ってからの行動を考えていると、食堂へと辿り着き、表情を険しくして食堂の中へと入り込み、暗い食堂内部を見渡す。

「・・・・・来て上げたんですよ。出て来たら如何です？『烈火の将』シグナム、『鉄槌の騎士』ヴィータ、『湖の騎士』シャマル、『盾の守護獣』ザフィーラ、あの生真面目の名を受け継いだ『祝福の風』リインフォース・ツヴァイ、そして『夜天の王』八神はやて」

「・・・・・・やはり貴様は闇の書に関わりの在る者か？」

暗がりの中から警戒したシグナムの声が響くと、食堂の明かりが付き、警戒した表情を浮かべているはやて達が姿を現し、ルインを睨み付ける。

「・・・・アンタは一体誰や？何で消えたあの子と瓜二つ何や？」

「やっぱりですか」

「何がだよ！？」

ルインの呆れた言葉に、ヴィータは噛み付くように叫ぶが、ルインは構わずに近くに置いてあった椅子に座り語り出す。

「あの生真面目は闇の書に隠されていた真実を話していなかったんですね？」

「闇の書に隠された真実やて？」

「そうですよ。闇の書の闇と呼ばれた防御プログラムに隠された真実。闇の書の闇は真の主を得た時、世界を滅ぼす暴走を行わず、真の主にその力を与えるんですよ」

『なっ！？』

ルインが告げた闇の書の隠された真実に、はやて達は驚いた声を上げた。

あの幾つもの世界を滅ぼし、多くの悲しみを生み出した闇の書の闇である防御プログラムが真の主ならば制御出来る物だと告げたられたのだから、驚愕するのも当然だろう。

「そもそも闇の書の闇たる防御プログラムは人間が望んだ果てに生み出された存在。世界さえも手中に収めようとした人間と言う存在が生み出したものが、扱えない筈は無いでしょう？ですが、世界など人間個人でどうこう出来るものではない。アレの力を扱えるのは人間では不可能だった。その結果が全て闇の書の悲劇に繋がったんですよ」

「で、出鱈目を言わないで！」

「そうだ！そんな重要な事を何でアタシらが知らなかったんだ！？」
「管制人格で在った奴もその様な事は言っては居なかった！？」
「これ以上の戯言は赦さんぞ！！」

ルインの告げた事実に対して、シャマル、ヴィータ、ザフィーラ、シグナムは否定の叫びを上げて、それぞれ待機状態のデバイスを取り出し始める。
ルインの言葉が真実だとすれば、はやては真の主で無いと言う事に成り、あの時の行動が全て無意味だった事に成る。その様な事が、はやてに忠誠を誓っているシグナム達には認められず、ルインの言葉を否定したのだ。
だが、ルインはその様子を見ても呆れた表情を浮かべるだけで、冷静に話の続きを始める。

「貴女達守護騎士達が知らなかったのは当然ですよ。闇の書の真実は真の主と管制人格、そして防御プログラムだけが知るべき事。守護騎士プログラム程度が知るには重すぎる真実だからですよ。だって、例え守護騎士達や管制人格が主と認めようと、最終的な主の判断権は防御プログラムだけが持っている。防御プログラムこそが闇の書に取って最も大切なものなんです。管制人格だったあの生真面目が伝えなかった理由も簡単ですよ。“貴女達に背負わせたくなかった”奴は闇の書に隠された真実を知りながら、半身であった防御プログラムを滅ぼす手伝いをしてしまった。防御プログラムの苦悩と孤独を知りながらもね」
「苦悩と孤独やて？」
「望まれて生まれたのに誰もが否定し、その存在を認めようとしな

い。主に成れる存在も見つからず、ただ永久に目覚めれば全てを破壊する様な行動しか取れない。体の自由は存在せず、本来の姿で表に出る事も出来ず、ただ破壊を行う事しか出来ない。そして世界に否定され続ける。最後には仲間であった守護騎士達や半身で在った管制人格にさえも否定され、孤独の内にこの世界の防御プログラムは消えた。それは何て悲しく寂しい最後なんでしょうね」

『・・・・・』

深い悲しみに満ちたルインの言葉に対して、はやて達は言葉も出す事は出来なかった。

もはやはやて達はルインの告げた真実は、全て事実だと内心で認めていた。

深い悲しみに満ちたルインの言葉には、十分過ぎるほどに説得力が在った。

生み出されたのに誰もが否定し、真の主が見つからなければ本当の姿で現れる事も出来ず、ただ破壊しか出来ない存在。そして最後には仲間や半身にさえも否定された。

それを行わなければ世界が滅びていたとは言え、一方的に否定されたこの世界の防御プログラムの悲しみは計り知れないだろう。

そしてはやて達は同時に気が付いた。目の前に居るルインこそ、異世界の闇の書の闇の防御プログラムが真の主を得た事に寄って、本来の姿を取り戻した存在だと気が付いた。

「“世界に否定されし深き闇を従えた黒き竜人”予言の一文に在ったものやけど。深き闇って、闇の書の防御プログラムやったんやな」

「そうですよ。ブラック様だけが私の存在を認め、名さえも与えてくれて共に歩もうと言ってくれました。あの時は本当に嬉しかった。私に取っての主はブラックウォーグレイモン様だけです。あの方を

護る為ならば喜んでこの身を差し出しましょう」

ルインは夢を見ている様に語り、ブラックとの出会いを思い出す。
あの時にブラックが現れなければ、自身もこの世界の自分と同様に消滅していただろう。ブラックだけが自分と言う闇の存在を認めてくれた。罪深い存在であるルインを認めてくれた。
だからこそ、ルインは全身全霊を持ってブラックに仕える。
何者であろうとブラックの存在を脅かす者は赦さない。
その想いを胸に持って、ルインはブラックと共に歩んでいる。
故にルインは目の前の守護騎士達の行いを赦せない。

「それで貴女達、守護騎士達は一体何をやっていたんですか？」

「何？」

ルインの言葉の意味が分からず、シグナムは疑問の声を上げ、シャマル、ヴィータ、ザフィーラも疑問の表情を浮かべる。
その様子にルインは、守護騎士達が何も分かっていない事に気が付き、本気で呆れたと言う表情を浮かべる。

「主を敬い敬意を示し、忠義を尽くす。騎士としては最も大切な事ですが、騎士はそれだけでは無い筈です」

「何を言って？」

「騎士が行う役割はもう一つ。主が間違った道に進みかけた時に声をかけ、その道を正しく戻す事です」

『ッ！！』

ルインが告げた言葉に、シグナム達はハッとした表情を浮かべ、ルインとはやての顔を見つめる。
ルインは言外にはやてが今の道を進んでしまったのは、シグナム達のせいでも在ると告げたのだ。

「闇の書の存在で八神はやての負い目が在るんでしょうけど、それでも貴女達の行動は騎士として最低の行為です。騎士の所業に寄って生まれた負債を主で在る八神はやて一人に背負わせた。本来ならば貴女達が背負うべき負債を主で在る八神はやて一人に背負わせるなど、騎士として相応しくない最低の行いです。この世界の生真面目が何の為に貴女達を残したと思っているんですか？消えて行く自分の変わりに主を支えて欲しかったからでしょうが！！」

「ま、待ってや！？皆は私の為に…」

「黙っていなさい！私が話しているのは守護騎士達で在って、貴女ではない！！」

はやての言葉をルインは切り捨て、すぐさま顔を俯けているシグナム達に顔を向ける。

「主を護ると言う事は、何も体だけでは無いです。その心も護れてこそ、真の騎士と呼べる存在です。デュークモンは例え自分がこの世界のヴィヴィオちゃんに憎まれようと高町なのはに戦いを仕掛けました。彼は真の騎士です。本当に護るべきものが見えていたからこそ、彼は異世界とは言え主君の大切な母親とさえも戦った。その結果、この世界のヴィヴィオちゃんに嫌われる事に成ったとしても彼は止まらなかったでしょう」

デュークモンに取ってはヴィヴィオの幸せこそが一番大切な事。

その為ならば、自身の主であるヴィヴィオに嫌われようと戦う。その姿は正に主君の為に自分さえも差し出す騎士。
だが、シグナム達は騎士を名乗っていても、はやての体しか護れず、心は護れなかった。
その為にはやては本来ならば背負わなくて良いものまで背負い、理想ばかりに目を向け、現実を見れなくなってしまっていた。ある種の逃避の様に。

「主の言葉だけに従うのは騎士とは呼べません。主が間違った道を進み始めた時に、止める行動を行う事こそが真の忠義の騎士です。本当に騎士を名乗りたいのならば、自分の心にもう一度問い掛けなさい。自分達が願った事をね」

ルインはそうシグナム達に向かって告げると、食堂の入り口に足を向け、食堂を出て行く。
その様子を見ていたシグナムは、フッと顔を天井に向け、ヴィータ達に声を掛ける。

「・・・・・まさか、異世界とは言え、我らが否定した者に騎士を語られるとはな・・・・・私は将を名乗る資格は無いな」

「・・・・それを言うならアタシもだ・・・・・護るなんてほざいていながら・・・・結局何も分かって居なかった」

「・・・・・私もよ・・・・・体の傷は治せても・・・・・心の傷には目を向けていなかった」

「・・・・盾の守護獣などと叫びながら・・・・・本当に護るべきものが見えんとは・・・・・我も愚か者だ」

「・・・・リインもです・・・初代の名を継ぎながら・・・・初代の思いを継げて無かったです」

「・・・・皆」

それぞれ自身の未熟さを表す様に語るシグナム達に、はやては慰めの言葉を掛けようとするが、シグナム達ははやての言葉に構わず、はやての前に並び膝を付く。

「主はやて。今此処に我々は再び誓います。我々の夢ー主と共に平穏な日常を歩む。その願いを我々は必ず叶えます。貴女の望む未来の中に、それが無ければ我々は貴女に剣を向けるかもしれません」

「・・・・シグナム」

はやてはシグナムが告げた言葉に落ち込んだ表情を浮かべる。自身の家族で在るシグナム達にさえも否定されてしまったと想い、絶望がはやての心に浮かび始めて来たのだ。

シグナムはその様子に辛そうな表情を一瞬浮かべるが、すぐに表情を真剣に戻しはやてに言葉を告げる。

「ですが、もし貴女の望む未来の中に、我々の望む平穏が在るのならば、我々は主の剣となり盾と成って、共に歩み、貴女の体と心を全身全霊を持って護ります。この誓いだけは絶対に違えません！」

「ッ！！・・・・・・ありがとうな・・・・皆・・・・ヒック、ヒック」

シグナムの言葉とヴィータ達の力強い同意の頷きに、はやては嬉し涙と言葉を言う。

そのはやての表情は本当に嬉しそうな朗らかな笑みを浮かべていたのだった。

その様子を隠れて伺っていたルインは表情を険しくすると、今度こそ食堂に背を向け、自身が寝泊りしている部屋に向かって歩きながら内心で不満の叫びを上げる。

（全く！あの生真面目は異世界でも気に入りませんね！絶対に帰ったら嫌がらせしてあげます！）

そうルインは内心で叫ぶと、自身の部屋に向かって足早に歩いて行くのだった。

ルインＳｉｄｅ　ＥＮＤ

クイントＳｉｄｅ

アースラ内部に在る訓練室。

その訓練室内部で三つの蒼い閃光が互いにぶつかり合い、それに寄って激しい激突音が何でも訓練室内部に鳴り響いていた。

その内の一つの閃光ークイントは、自身に迫って来ている、残る二つの閃光ーギンガとスバルに向かって嬉しそうな笑みを浮かべて叫ぶ。

「ほら！もっと素早く攻撃しないと私には当たらないわよ！私を超えるんじゃ無かったの！ギンガ！スバル！」

『ハアァァァァァァーーー！！！！』

ギンガとスバルはクイントの言葉に答える様に叫びながら、自分達の足に装着されているデバイス―ギンガはブリッツキャリバーを、スバルはマッハキャリバーを加速させクイントに拳を放ち始める。
クイントもそれに答えるように、自身も履いているローラブーツを加速させ、ギンガとスバルに向かって拳を放ち始めた。

何故クイントとギンガ、スバルが戦っているのかと言うと、ことの起こりは二時間前に遡る。

二時間前

クイントは食堂で朝の朝食をこの世界の娘であるスバルと一緒に取っていた。
二人の前には信じられない量の料理が置かれて在るが、その大量の料理は次々とクイントとスバルの口の中に消えて行く。

「・・・・・正に親子ね。スバルと同等の量を食べるなんて」

目の前に置かれている大量の料理が次々と消えて行く様子を見ながら、この世界のティアナは頭を抱える様に呟き、自身の横に座ってクダモンに食事を渡している異世界の自分自身に声を掛ける。

「・・・・驚かないの？大食いチャンピオンが目の前に二人も現れたのに？」

「一々驚いてたら、気が持たないわよ。それに、これ以上の量を食

べるデジモンとも出会った事が在るからね。驚けないわよ」

「デジモンに取っては、この程度の量の食事は普通だと言う者が居るからな。常識など既に忘れた言葉だ」

「・・・・・どんな世界なのよ貴女の世界は？」

この世界のティアナはどんよりした気持ちに成った。

最初に会った時から既に数日経過したが、それでもこの世界のティアナは異世界の自分自身の経験した出来事に何度も頭を抱えたくなった。

曰く、管理局員だった筈の兄ーティーダと親友だった広域次元犯罪者に引き取られて鍛えられた。

曰く、Sランクオーバーの実力者が大量に存在する世界を旅した。

曰く、世界を滅ぼせる力を持った神のような存在に喧嘩を売った。

曰く、第二の師と呼べる存在は、学ランを着た獣人。

などなど、この世界のティアナからすれば卒倒する様な出来事を次々と平然に語られていた。

「・・・・・凡人って何なのかしらね？私が貴女の戦いを経験したら、一瞬で死んでいるわよ？」

「そうでもないわよ。私も一人なら絶対に死んでいたでしょうね。生き残れたのはクダモンのおかげよ」

「それは違うな。ティアナの頑張りが在ってこそだ」

「・・・・・とにかく、私の常識は消えたわ」

この世界のティアナはもはや呆れた表情で、言い争いに近い事を

始めた異世界のティアナとクダモンを見つめる。
その間にもクイントとスバルの食事は続き、そろそろ終わりにさしかかろうとした瞬間。

「母さんッ！！！」

食堂に大きな叫び声が響いた。
その声の主に気が付いたクイントは食事を止めて、声が響いた食堂の方を見てみると、ギンガが怒りの表情を浮かべてクイントを睨み付けながら歩いて来る。

「あらギンガ？思ったよりも早く精神が回復したみたいね」

「ええ、お陰さまで体の調子は好調よ」

「良かったわ。流石はフリート。マッドだけど腕は次元世界一ね」

「・・・・・・そのマッドに私は体を弄り回させたのは何処の誰ですか？」

ギンガは皮肉げにクイントに声を掛けた。
ギンガは数日前にクイントの紹介で、クイントの世界の最高の医療技術を持つフリートの治療を受けたのだが、体は確かに完全な状態に治った。
だが、フリートが治療だけで終わらせる筈も無く、色々とギンガの精神に深い傷を残しそうな事を行い掛けた。最もその前にクイントがフリートを止めたのだが、治療している時に隙在らばフリートは自身の欲求のままに動いたりして、最終的にギンガ、そして同行して治療を受けた高町なのはも深いダメージを精神に負い、今日までアースラ内部の医療室の中で恐怖に震えていたのだ。

もちろん、その事を知っているクイントはギンガの皮肉の意味も分かってるのだが、気にせずに笑みをギンガに向ける。

「まあ、最終的には何も無かったんだから良いでしょう。ああ見えてフリートは一応常識を持っているからね」

「・・・・あの人に常識が在るとは思えなかったけどね」

「え～と？ギン姉？お母さん？」

ギンガとクイントの会話の意味が分からなかったスバルは疑問の声を上げるが、ギンガもクイントも答えず、クイントは別の話を始める。

「さて、終わった事は良いとして、ギンガ、スバル。二時間経ったら訓練室に来なさい」

『エッ？』

突如として告げられたクイントの言葉の意味が分からず、ギンガとスバルは疑問の声を上げた。

クイントは座っていた椅子から立ち上がり、疑問の表情を浮かべているギンガとスバルに背を向ける。

「この世界の私はもう居ないんでしょう？だったら、私が代わりに鍛えて上げる。貴女達の不完全なシューティングアーツを完成させて上げるわ。この世界に私が居る間にね」

クイントは言葉を告げると共に、二人に背を向けて歩き始める。

残されたギンガとスバルは困惑した表情を浮かべて顔を見合わせ

るが、クイントの言葉の意味が分かると嬉しそうな笑みを浮かべるのだった。

現在

ーーードゴオン！！

「ガハッ！」

「スバルッ！！」

クイントが無言と共に突き出した拳は、スバルの脇腹へと直撃し、スバルは苦痛の声を上げながら吹き飛んで行く。

吹き飛ばされるスバルの姿を見たギンガは、スバルに向かって心配そうな叫びを上げるが、すぐさま殺気を感じ、クイントに向かって構えを取る。

それに対してクイントは笑みを浮かべると、両足のローラブーツを更に加速させ、ギンガに肉薄しながら拳を連続で放つ。

「良い判断ね。スバルを追い掛けていれば、その時点でアウトだったわよ」

「クッ！（強い！私達の知っている母さんよりも遥かに！バリアジャッケトもデバイスも無しでこの強さ・・・・あのリンディさんって言う人と同じ存在！）」

ギンガは悔しそうな声を上げて、クイントの拳を両腕で防御しながら、クイントの正体に気が付き戦慄する。
魔導師には魔法を発動させる為に必ず魔力を必要とする。だが、クイントの攻撃は魔力の使用など関係ないので、魔法の発動で動きを読む事が出来ない上に、戦闘機人で在る筈のギンガやスバルに簡単に迫れる戦闘能力。
どれを取っても厄介としか言えない存在にクイントは成っている。

（母さんの世界の管理局が危険視する筈ね。母さんの様な存在が沢山いたら、魔導師や戦闘機人の意味なんて無いわよ）

ギンガは何故クイントの世界の管理局がリンディの抹消命令を出したのかハッキリとその体で感じ、納得したと言う様に、内心で声を上げた。
クイントやリンディの様に魔導師を超えた存在が何十体と居たら、管理局に取っては脅威としか呼べない存在だろう。だが、違う。クイントの世界の管理局が真にリンディ達の存在を恐れているのは、魔力も無く魔法を発動させる事ではない。
クイントがその気に成れば、Sランクオーバーの魔導師にさえも勝つ事が出来る様に成る“進化の存在”
それを使えば、現在のギンガとスバルではクイントに勝つ事さえも不可能なのだが、クイントはこの戦いでは進化する積もりは無かった。その為にフリートに前々から頼んで置いたローラブーツを両足に付けて、ギンガとスバルと戦っているのだ。

（やはり、かなり二人のシューティングアーツは不完全よね。全てを教える前にこの世界の私が死んだ事が原因だろうけど。なら、二人にシューティングアーツを少しでも鍛えて上げるのが私の役目ね）

先ほどまでの攻防でクイントはギンガとスバルのシューティング

アーツが不完全で在る事を見抜いていた。
恐らく、この世界のクイントが全てを教える前に死んでしまった事で、二人のシューティングアーツは細かな所がクイントのシューティングアーツと違うのだろう。
その事に気が付いたクイントはギンガとスバルを鍛え直す積もりで戦っているのだ。

「クス、面白い技を見せて上げるわギンガ。私の世界のギンガとスバルが苦労して成功させた技よ」

「エッ！？母さんの世界の私達が！？」

一時攻撃を止めて立ち止まったクイントに向かってギンガは疑問の声を上げると、クイントは頷き、右拳に力を集中させ構えを取り出す。

「私の世界のギンガは早い段階でシューティングアーツの弱点に気が付いたわ」

「シューティングアーツの弱点？」

「そう、シューティングアーツの一番の特徴はローラーでの加速度をそのまま打撃力に変える。だけど、それが特徴であり弱点でも在る。例えば狭い密閉空間では加速度が付けられず思ったよりも威力が出なくなる。それに攻撃の軌道も見切られ易いわね。覚えが無い？」

「ッ！！」

ギンガはハッとした表情を浮かべて、ナンバーズが地上本部に襲

撃した時の事を思い出した。
確かにクイントの言葉どおり、あの時も狭い密閉空間でナンバーズ達とギンガは戦い、ギンガは敗北した。一対三だった事も在るが、確かにクイントの言うとおり加速が思うように付けられず、ギンガは本来の力を出せなかった。
その原因の一つには密閉空間での戦いをギンガは行った事が少ない事も上げられるだろう。
戦闘の経験から密閉空間での対処も見つけられるかも知れないが、ギンガは二十にも満たない年齢。当然ながらクイント寄りも遥かに経験は少ない。

「屋外での戦闘なら豊富でしょうね。ゲンヤさんはシューティングアーツの特徴を良く知っているから、ギンガにはそれを活かせる場所で鍛えてくれた筈よね？」

「その通りよ母さん」

「だから、今から見せる技を良く覚えなさい。この技は対密閉空間用の技だけではなく、十分に屋外でも最高に使える技なんだからね」

「・・・・絶対に物にして見せるわ！異世界の私達の技なんだからね！」

「良い答えよ！！しっかり防御しなさい！」

ギンガの叫びに答える様にクイントは叫ぶと共に、構えていた右拳の周りに渦のようなものを発生させ始める。

（アレはリボルバーシュート？何で射撃魔法のリボルバーを？）

クイントの右腕の周りに発生した現象を見たギンガは、クイントの言う技が自分の知る物であった事に疑問の声を内心で上げるが、それでも警戒は止めず、クイントの技に対する防御行動を取った瞬間。

ーーードゴオオン！！

「ッ！？」

クイントの姿が突如としてギンガの視界から消失し、ギンガの防御の上からクイントの右拳が突き刺さっり、ギンガは驚愕の表情を浮かべながら壁へと吹き飛んで行き激突した。

その様子を離れていた所で見ていたスバルも信じられないと言う表情を浮かべて、ギンガを壁へと吹き飛ばしたクイントの姿を見つめる。

スバルの見ていた限り、クイントの拳はギンガの防御の上に直撃した。にも拘らず、クイントの一撃は防御していた大人の女性並みの体重を持つギンガを軽々と吹き飛ばしたのだ。

離れていたスバルでさえも何が起きたのか分からないのだ。恐らく受けたギンガにも訳が分からないだろう。

だが、驚愕はそれでは収まらなかった。

「ガハッ！！」

「ッ！！ギン姉！？」

罅が入った壁の前でギンガは突如として血を吐き、スバルは心配そうな表情を浮かべてギンガに近寄ると、その表情は更に驚愕に染まった。

何故ならば確かにギンガは両腕でクイントの一撃を防御した筈な

のに、ギンガの姿は腹部の部分のバリアジャケットが消失していた状態に成っているだけではなく、腹部には赤黒い痣が刻まれていた。それだけではなくギンガの左腕に装備されているリボルバーナックルもかなりの損傷が見える状態に成っている。
　クイントの一撃。それだけで防御さえもしていた筈のギンガは完全に戦闘不能な状態に陥った。

「今のが私の世界のギンガとスバルが編み出した対密閉空間用の技よ。しかもこれは本来リボルバーナックルを装備した状態でこそ、最大の威力を発揮する技。私が今の状態で使っても、本来の威力の半分以下が限界ね」

「これで半分以下！？」

　スバルは信じられないと言う声を上げて、未だにダメージから回復する事が出来ずに苦しんでいるギンガを見つめる。
　ギンガの苦しみ方からして、凄まじい威力なのは先ず間違いない。それなのにクイントはそれでも半分以下だという。ならば本来の状態で放てば、一体どれほどの威力に成ると言うのだろう。
　その事に気が付いたスバルは恐怖の表情を浮かべ始めるが、クイントは構わずに再び右拳を構え出す。

「さて、次はスバルの番よ。技を手っ取り早く覚えるのには、その体で受けるのが一番よ！」

「エッ！？ちょっとお母さん！？」

「今の技は私の在る技を、私の世界のギンガとスバルが見て覚えた技。二人は研究を重ねて編み出したから二、三年掛かったけど。そんな時間は無いわ。だからその体で覚えなさい！大丈夫よ。傷が出

来てもフリートに治療を頼むから」

「全然大丈夫じゃないよ！！」

スバルはクイントの言葉に対して、涙ながら叫ぶが、クイントは構わずにギンガの時と同様にスバルへと右拳を叩き付け、訓練室に悲鳴を轟かせるのだった。

このクイントとギンガ、スバル達に訓練は、クイントが元の世界に戻る日まで続いたが、訓練に向かうギンガ、スバルの表情は亡き母親と訓練出来る喜びに満ち溢れていたと言う。

ーーークイントＳｉｄｅ　ＥＮＤ

ーーーリンディＳｉｄｅ

機動六課の者達と出会ってから数日が経ったある日。その日のリンディは朝から非常に不機嫌だった。

ブラックがまた好き勝手暴れた訳ではない。その事はもはや日常茶飯事に成っているので、リンディはその事を諦めている。

では、何故リンディは不機嫌なのか。それはこの世界で最も会いたくない人物が、アースラへとやって来る事が分かったからだ。

「・・・・・」

「リンディさん。そんなに不機嫌なオーラを振りまいていたら、ヴィヴィオが泣きますよ？」

「そうですよ。少しは落ち着いて下さい」

アースラのブリッジ内部の座席に座りながら、不機嫌そうなオーラを放つリンディに向かって、なのはとガブモンはそれぞれ抑える様に声を掛ける。

だが、リンディは変わらずに不機嫌オーラを全力で放ち続ける。

その様子になのはとガブモンはため息を付くが、リンディが何故不機嫌なのかも十分過ぎるほどに分かっていた。

「やっぱり私と同じだね。リンディさんも嫌悪しているんだろうね」

「そうだろうね。今のリンディさんには納得出来ないんだろうね。この世界の自分自身が」

そうリンディが此処まで不機嫌なオーラを放つのは、なのはと同様にこの世界の自分自身が赦せないからだ。今のリンディは子供を戦いの場に出す事を嫌っている。

そのリンディにとって、過去の自分の行動ーなのはを想いを利用して戦いの場に出した事ーは、本気で自分を殺したくなる程に赦せない事だ。そしてこの世界のリンディ・ハラオウンは管理局員のまま。

リンディがなのはと同様に自分自身を嫌うには充分過ぎる理由なのだ。

「・・・会わなければいけないのは分かるのよ。この世界の私にも色々と言いたい事が在るからね」

「その気持ちは充分過ぎるほどに私には分かります。私も何度この世界の私をボコボコにしたいと思った事か」

「・・・・・・アレだけやっても足らないの？」

ガブモンは冷や汗を流しながらなのはを見つめて呟いた。

此処数日、フリートのマッド治療の影響から漸く回復した高町なのはとなのはは互いにぶつかり合っていた。

在る時は料理勝負で、どちらの料理の腕が上なのか。

また在る時は地球の中学レベルのテストで学力を競い。

また在る時は魔法技術で競い合い。

また在る時は死闘さながら模擬戦を行ったりしていた。

そしてその全てになのはは高町なのはに勝利し、圧倒的な実力差を示したのだ。

料理勝負ではなのはの方に圧倒的に分が在る。何故ならばなのはは母親である桃子の喫茶店を継ぐために日夜料理の腕を上げている。

学力にしても中卒の高町なのはと違って、なのはは高校を出ている為に学力も上。

魔法技術にしても、なのはは伝説の地で在るアルハザードで学んでいる。

そして最後の模擬戦。ブラスターシステムを遥かに超える強化を行えるセラフィーモードを使えるなのはに高町なのはは全く歯が立たず、圧倒的な実力差を見せて敗北に追い込んだ。

最もなのはと高町なのはの模擬戦で使ったのは互いにエクシードモードまでだが、それでもなのはの方が圧倒的だった。にも関わらず、なのはは未だに高町なのはとの争いを止める事は無かった。

「充分過ぎるほどに僕は実力差を示した思うんだけど？」

「全然足らないよ。あっちだってまだ負けたと思っていないからね。絶対に負けを認めさせて上げるんだから！」

（無理だと思うよ。だって二人とも結局の所は似ているんだもん。

特に頑固な所がね）

息を撒くなのはの姿を見ながら、内心でガブモンは冷や汗を流しながら呟いた。

結局の所、なのはと高町なのはがいがみ合う理由は一つ。“同属嫌悪”なのだ。

二人ともベクトルはかなり違うが、それでも根元たる頑固な所だけはそっくり。だからこそ二人のなのははぶつかり合っている。

（ティアナとヴィヴィオの二人だけだよね。出会っても全然喧嘩しなかったのは）

なのは達と違って二人のティアナとヴィヴィオの仲は結構良好である。

ティアナは互いに銃使いと言う事で、語り合ったり模擬戦を行ったりしている。なのはとリンディと違ってかなりの良好な関係である。

ヴィヴィオにしても、純真な性格の為に、互いにいがみ合う事など無く、姉妹の様に仲が良く、ギルモンが進化したグラウモンの頭の上に乗って毎日楽しそうに遊んでいる。

にも関わらず、二人のなのはの関係は、益々険悪に成っていくばかりで、ガブモンが頭を痛めていると、ブリッジの入り口の扉が開き、翡翠の長い髪を頭の後ろで縛った女性ーこの世界のリンディ・ハラオウンがブリッジの内部に足を踏み入れ、リンディへと近寄って来る。

「・・・・・こんにちはが正しいのかしらリンディ？」

「・・・・・そうね。それが正しいわリンディ・ハラオウン」

困惑した表情を浮かべて告げたリンディ・ハラオウンの言葉に、リンディは素っ気無く答えながら椅子から立ち上げ、険しい表情をリンディ・ハラオウンへと向ける。

「・・・・・自分を見ると言うのは、不思議なものね」

「そうね。フェイトから聞いていたけど、こうして異世界の自分と出会うと言うのは、不思議な気持ちに成るわ」

「余り良い気分ではないけどね」

リンディは素っ気無く答えると、椅子に座るようにリンディ・ハラオウンを促す。

それに対してリンディ・ハラオウンは頷くと、近くに置いてあった椅子に座り、リンディも椅子に座ると互いに向き合う。

「・・・・・アースラに来るのは久しぶりだけど。貴女は如何なの？」

「私からすれば忘れられない場所ね。何せ私が、リンディ・ハラオウンが死んだ場所だからね」

「ッ！！！」

リンディ・ハラオウンは驚愕の表情を浮かべてリンディを見つめると、すぐさまリンディの横に立っているなのはに顔を向け、なのはは無言で頷く。

同意の頷き。それをみたリンディ・ハラオウンは呆然とした表情を浮かべてリンディを見つめると、リンディは語り出す。

「十年前。私達の世界のリンディ・ハラオウンは一つの存在と闇の書事件で出会った。その存在は存在するだけで世界に悪影響を与え、世界を滅ぼす可能性を持った存在だった。リンディ・ハラオウンは多くの世界の為にも存在を滅ぼす為に、その存在が告げた警告を無視して攻撃を加えた。結果、アースラは撃沈。その時の唯一の死亡者が、リンディ・ハラオウンよ」

「・・・・だったら、如何して貴女は私の前に居るの？」

「貴女の目の前に居るのはリンディ・ハラオウンの成れの果てよ。そして私は唯のリンディに成った。あの人を護る事を決めてね」

「あの人？」

リンディの言葉にリンディ・ハラオウンは疑問の声を上げた。

リンディ・ハラオウンの知る限り、十年前の闇の書事件の時に、自身が護りたいと思う様な人物は息子であるクロノやアースラメンバーになのはやフェイト位だ。

だが、今のリンディの言葉には深い愛情が感じられた。息子や友人に向ける愛情ではなく、死んだ夫ークライド・ハラオウンに向けていた愛情が。その様な人物が思い浮かばず、疑問の表情を浮かべる。

その様子を見ていたリンディは、リンディ・ハラオウンが内心で考えている疑問を正確に察するが、疑問には答えずに用件を質問する。

「それで貴女は如何して此処に来たの？本局の総務統括官である貴女はかなり忙しい状況だと思っていたんだけどね？」

「・・・・ええ、お陰さまで本局は創設以来の大混乱の状況よ」

リンディ・ハラオウンは頭が痛いと言う様に答えた。
現在の本局は、リンディ達の管理局の真実暴露、及び各世界の調査者達が調べた事に寄って大混乱に塗れている。潤沢な予算や多大な権限を与えられながら、内部に大量の犯罪者を匿っていた。
その事実だけでも最悪だと言うのに、護るべき世界ーミッドチルダにアルカンシェルを撃ち込もうとした。この事により管理局本局は完全に民間からの信用を失い、現在は各世界が主導で再編に在ったっているのだ。
その様な重大な時期に総務統括官であるリンディ・ハラオウンがアースラへとやって来たのだから、何か在ると考えるべきだろう。
最もリンディには既に予測が付いている。この状況でリンディ達に会いに来る理由など簡単に思い浮かぶ。

「地上本部への取り成しや、協力なんて絶対にしないわよ。今回の事件は完全に本局の自業自得。そんな連中に力を貸す理由は無いわね」

「・・・・・やっぱり駄目かしらね？」

「無理ね。寧ろ今更私達ーデュークモン達が本局に協力する方がおかしいわよ。この状況で協力したら益々本局は立場を悪くするわね。地上本部への取り成しは自分達で頑張りなさい。最も今まで散々地上を馬鹿にしていたエリート意識が高い本局がおいそれと頭を下げるとは思えないけどね」

「・・・・・私よりも現状が分かっているわね」

リンディ・ハラオウンは自身よりも目の前の異世界の自分の方が良く現状を分かっていると、心の底から思った。

リンディの言うとおり、今の現状でデュークモン達が本局に協力するのは在りえないのだ。
あそこまで散々ボロボロにしたのに、今更本局にデュークモン達が協力すれば、本局の者達が彼らを脅していると民衆に思い込まれ、唯でさえ信用が地に落ちている本局の信用は、地の底まで落下するだろう。そうなれば、何とか潰されずに済んでいた本局は、今度こそ潰される事に成りかねない。
そんな事に成ったら次元犯罪者が暴れに暴れ、各世界の治安は悪化の一歩を辿る事に成る。
その事が分かっているリンディ達は、地上には多少の協力はしても本局には協力する気など一切無い。
地上本部への取り成しもそうである。現在地上の改革に乗り出しているレジアスに頭を下げるだけで、地上は本局と共同体制を整えられる状況に成っている。
今回の事でレジアスも陸と海は本格的に共に動く現状を作るべきだと言う考えが浮かんだので、その様なシステムの準備も行える状況にしている。
だが、本局には未だに自分達こそが地上よりも上だと言う考えを持つ者達が大量に居る為に、この案件は一向に進まず、表に出る事は殆ど無い。
リンディ達からすれば馬鹿としか言えない本局に協力する理由など存在していないのだ。

「この現状に成っても、本局には馬鹿が本当に多いわ。レジアス中将も呆れて、地上と本局は完全に別組織にした方が良いのではないかと、各世界の代表に進言し始めた位よ」

「・・・・耳が痛いわね。私も呆れている位よ。まさか管理局が此処まで腐敗していたなんて思っても見なかったわ」

「客観的に見ればすぐに気付くけど。管理局内部からでは気付かないでしょうね。理想に溺れた者達では気付く事は出来ないわ・・・・・私も管理局を離れて漸く気が付けたのだからね」

「・・・・私もその一人なのかしら？」

「そうに決まっているでしょう。機動六課が地上に作られたらどう言う結果を生むのか考えずに後見人に成っていたんだからね」

リンディは切り捨てるように答えた。

今回の事件で最終的には悪いのは本局の上層部達だが、機動六課の後見人で在ったリンディ・ハラオウン、クロノ・ハラオウン、聖王教会の支援者ーカリム・グランシア、その他の多くの本局の支援者達にも原因が在るとリンディは思っている。

結局の所は彼らも本局の思考に染まり切っていた。

その為に彼らは地上の現状が全く分からない状態で予言の為に無理やり機動六課を作り上げてしまった。それが地上に取ってどれほど赦せない事なのか全く知らずに。

最初から機動六課は本局の管轄ではなく、地上の管轄として作られていれば、或いは正式な会議に寄って作られた部隊だったら現状はかなり変わり、地上とも連携が取れていただろう。

だが、機動六課は無理やり本局が作った部隊。その部隊に本局を嫌っている地上が協力する理由は無い。はやてと親しい地上の部隊ならば別だが、高々二、三部隊では地上の現状は分かる筈も無い。

「今回の事は完全に本局の地上の認識不足が招いた事態よ。充分に反省する事ね。それと私達は絶対に協力はしないわ」

「・・・・・分かったわ」

リンディの言葉にリンディ・ハラオウンは顔を俯かせながら頷き、座っていた椅子から立ち上がる。

「・・・・・また会えるかしらね？」

「私は出来れば会いたくないわ。私がこの世で一番嫌いなのは・・・・・自分自身だからね」

「・・・・そう。色々と話がもっとしたかったわ」

リンディの言葉にリンディ・ハラオウンは残念そうな声を出して、リンディへと背を向け、ブリッジの入り口に向かって歩き始めブリッジを出て行った。

それを確認したリンディはなのはへと顔を向け頷く。

「なのはさんの気持ちが良く分かるわ。確かに平行世界の自分自身なんて、出会わない方が良いわね」

「ですよね。違う人生だと特に会わない方が良いですよね」

（・・・・・ティアナとヴィヴィオはそうでも無いんだけどね）

顔を見合わせ同意し合うリンディとなのはの姿を見つめながら、ガブモンは溜息を吐くのだった。

ーーーリンディＳｉｄｅ　ＥＮＤ

特別編、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ完全崩壊おまけ（後書き）

次は本編です。

共に戦う者達（前書き）

漸く本編に戻ります！

共に戦う者達

戦いを終えたブラック、ヒカリ、テイルモン、太一、アグモン、大輔、賢はインペリアルドラモン・ドラゴンモードの背に乗り、チンロンモンがいるであろう渓谷へと急ぎ向かっていた。

「それじゃあ、兄さんとアグモンもイグドラシルに力を？」

「ああ、俺とアグモンも確かに力をイグドラシルに貰った・・・・だけど、ハッキリ言ってイグドラシルは俺達の味方じゃない」

「えっ？何でですか？」

「イグドラシルは太一さんやヒカリさんに力を与えたのに、如何して味方じゃないなんて言えるんですか？」

太一のイグドラシルに対しての断言に、大輔と賢は疑問の声を上げた。

太一やヒカリに力を与え、究極体へと進化できるようにしてくれたのに、太一はイグドラシルを仲間じゃないと断言したのだから疑問に思うのも当然だろう。

しかし、イグドラシルと話をした事があるヒカリやテイルモン、そしてアグモンは太一の断言に同意を示すように頷く、

「私もそう思うよ。イグドラシルは自分の目的の為に、私や太一兄さんに力を与えたに過ぎない。多分、人間が完全にデジモンにとって害悪な存在だと思った瞬間に、人間を滅ぼす行動をすると思う」

「私もそう思うわ。イグドラシルは決して味方ではない。今は中立

だけなのがせめてもの救いね」

「僕らに究極体に進化出来るようにするだけの力を与えられるほどの力も持っているんだ。敵になったら本当に最悪だよ」

そうヒカリ、テイルモン、アグモンは自分達が感じたイグドラシルについて語り、大輔と賢は顔を青ざめさせた。

しかし、その中でブラックだけは気にせずにヒカリ達に背を向けながら座り続け、目の前に置かれている七大魔王のデジタマとナンバーズに奪われた『思い』のデジメンタルについて考え続けていた。

（七大魔王のデジタマに『思い』のデジメンタル。両方とも奪われなかったのは運が良かったが、『思い』のデジメンタルは奪われてしまった。その事を考えるに、七大魔王のデジタマはこの世界には置いて置けんな。それにリヴァイアモンの封印は長くは持たん。恐らく二、三ヶ月が限度だろう）

ブラックとシェンウーモンが行ったリヴァイアモンの封印は確かに強力なものだが、それでも七大魔王で在るリヴァイアモンを長期間封印して置くほどの力は無い。直にリヴァイアモンと戦ったブラックには、その事が充分過ぎるほどに分かっていた。

（目覚めれば確実に俺と七大魔王のデジタマを狙って来るだろうな。奴が最後に俺に向けた目は、屈辱を与えた俺を殺すと宣言していた。それに『思い』のデジメンタルはスカリエッティどもに奪われてしまった。奴らの事だ。充分に研究を行ってから使うだろうが、その研究データから厄介な物が生み出されかねん）

ブラックはスカリエッティの頭の良さを良く知っている。

フリートの創り上げた技術を短期間で学び取った上に、応用さえ

も行えるほどの研究者だ。恐らく『思い』のデジメンタルと大輔達のデジメンタルのデータから何か恐ろしい物が生み出される可能性は高い。
現状でブラックがスカリエッティに対して最も恐れているのはそれだった。

（・・・・・既に奴らはこの世界から去っているだろうから、追わねばならん。奴らが何かをする前に叩く！）

そうブラックは内心でスカリエッティ達に対する対策を決めると、今度は管理局に付いて考え始める。

（それに管理局の愚か者どもは当分はこの世界に来る事が出来まい。奴らにそれだけの戦力は残されていないだろうからな）

ブラックは内心で管理局が再びこの世界に来るのは、かなり先の事に成ると予測したのには理由がある。
ブラックがシェンウーモンと戦う前に見つけた管理局の艦艇の中で知った情報に寄れば、今回この世界に送り込んだ八隻の艦艇は各管理世界の代表の反対を押し切って、管理局上層部が無理やり送り込んだ艦。
各管理世界としては遠く離れたデジタルワールドでのデジモンの虐殺よりも、自分達のいる世界を護って欲しい筈なのだから、無駄に貴重な戦力を減らしたくはなかった筈だ。しかし、上層部は自分達の権力を全て使い、無理やり各管理世界の了承を取り、ギズモン達を積み込んだ八隻の艦艇を送り込んだ。だが、結局その送られた八隻は全て何一つ成果も残せずに消えたのだから、もはや上層部は各管理世界に対して無理は出来ないだろう。それを行えばどうなるかは火を見るよりも明らかだ。

（と成れば、一刻も早く帰る方法をチンロンモンに聞かねばな・・・・・・ムッ？）

ブラックが方針を決めデジタマから僅かに目を離し、未だに続く大海原に目を向けて見ると、偶然にもブラックの視界に見覚えが在るものが映り、内心で笑みを浮かべる。

（ほう、アレが無事だったとは・・・・・リヴァイアモンの一撃で消滅したと思っていたが、運が良いぞ。アレの中にはアレが在る。フリートの奴ならばアレを調べれば対抗策を作れる筈だ）

そうブラックが内心で呟いていると、ヒカリが背後からブラックに声を掛けて来る。

「ブラックウォーグレイモン？これから如何するの？」

「決まっている。チンロンモンに事の説明を終え次第、俺は俺の居場所に帰る」

ーーーズキッ

（何？今の痛み？）

ブラックの答えを聞いたヒカリは、突如として胸に痛みが走り、胸元を押さえるが、ブラックは構わずにデジタマを見つめ続け、今度は太一がブラックに質問する。

「帰るって？どうやってだよ？お前が居た場所は遠い場所なんだろ？」

「そうだよ。帰る方法なんて在るの？」

「チンロンモンに座標さえ聞けば帰る事は可能だ。どれだけ時間が掛かっても、俺は必ずあいつ等の下に帰る・・・・・出なければ・・・・娘が泣く」

『娘ッ！！！！』

ブラックが顔を俯けて呟いた言葉に、太一達は驚愕の叫びを上げてブラックの背を見つめた。

ブラックはダークタワーデジモン。如何に人間の姿になれるように成ったとしても、人間との間に子供など出来る筈がない。にも関わらず、そのブラックが娘と呟いたのだから、太一達が驚愕するのも当然だろう。

「娘って！お前結婚していたのかよ！？しかも子供まで！？」

「誰が結婚などするか・・・俺を勝手に父親などと呼んでいた子供の事だ・・・」

大輔の叫びに対してブラックは誤解を解くように答えを返し、ヒカリは安堵の息を吐く。

（アレ？何で私？こんなに安堵したんだろう？）

自身の行動にヒカリは疑問を覚え、考えるような表情を浮かべるが、周りはその事に気が付かず、アグモンがブラックに笑みを向けながら声を掛ける。

「ブラックウォーグレイモン。君が父親に成っていたなんて知らな

かったよ。それでその君を父親って呼んでいる子はどんな子なの？」
「そうだぜ。お前が育てたとしたら、やっぱり戦いが大好きな子供なのか？」
「それとも逆に優しい子なの？」
「俺はブラックウォーグレイモンのように自分の思いのままに動く子供だと思うな」
「・・・・・貴様ら、言いたい放題言ってくれるな」
好き勝手に言い続ける太一達に対して、ブラックは怒りの声を出しながら、ドラモンキラーの爪先に赤いエネルギー球を生み出し、太一達は慌ててブラックに向かって手を伸ばす。
「ワアッ！！待て！話せば分かる！！」
「落ち着けよ！ブラックウォーグレイモン！」
太一と大輔はブラックを止めようと叫んだ。
しかし、ブラックは止まらずに警告の意味を兼ねてエネルギー球を太一達に投げ付けようとするが、その瞬間に。
ーーーバフウン！！
空高くに存在していた雲の一部が吹き飛び、其処から巨大な竜ーチンロンモンが姿を現し、インペリアルドラモンの方に向かって来た。
それに気が付いたブラックはエネルギー球を消失させ、太一達も

真剣な表情を浮かべると、インペリアルドラモンはその場に滞空する。
チンロンモンもその事に気がつき、ゆっくりとインペリアルドラモンの前で立ち止まり、険しい顔をしながらブラックの姿を見つめる。

「・・・・・逝ったのだな。シェンウーモンは？」

「リヴァイアモンを封印する為に全ての力を使い、消滅した」

チンロンモンの質問に対して、ブラックはシェンウーモンの最後の瞬間を思い出しながら答え、チンロンモンは悲しげに目を伏せる。

「そうか・・・・・・見事な最後だったか？」

「四聖獣の名に恥じない最後だった。この場に居る全員がそう思っただろう」

ブラックがそう呟くと、太一達は同時に頷きブラックの言葉に同意を示し、それを見たチンロンモンは悲しみの表情を浮かべながら空を見上げる。

「・・・・・やはり、私もあの場に居るべきだった。すまんシェンウーモン」

チンロンモンが封印の地にいなかったのは、シェンウーモンとの話し合いの結果。
スーツェーモン達の説得を行う為べきだと判断し、チンロンモンがただ一人、他の四聖獣ースーツェーモンとバイフーモンの説得を行い続けていたからだ。その為にチンロンモンは自身の変わりに十

体の究極体をシェンウーモンと共に護衛に当たらせていたのだが、その者達も死んでしまった。

「・・・・・今回の事は完全に私のミスだ。ルーチェモンが七大魔王を動かしていると考えていたのに、その力を過小し過ぎていた。すまない」

「それを言うならば俺もだ。まさか、七大魔王がアレほどまでに強大だとは思っても見なかった。全員がアレほどの力を持っているとすれば最悪だろうな」

「その通りだ。だからこそ、我々は七大魔王の覚醒を恐れていた。して、七大魔王のデジタマと『思い』のデジメンタルは無事なのか？」

「・・・・・七大魔王のデジタマは無事だが、『思い』のデジメンタルは奪われてしまった」

「ッ！！」

ブラックの言葉にチンロンモンは驚愕に目を見開きながらブラックと太一達を見つめると、太一達は申し訳無さそうに顔を俯け、チンロンモンは顔を暗くする。

「・・・・『思い』のデジメンタルが奪われたのは予想外だが、七大魔王のデジタマは無事なのだな？」

「ああ、此処に在る」

チンロンモンの質問に対してブラックは足元に置いてあったデジ

タマを掲げてチンロンモンに見せると、チンロンモンは安堵の息を吐き、ブラックの掲げているデジタマを見つめる。

「シェンウーモンの死は無駄ではなかった。七大魔王ー『色欲のリリスモン』のデジタマは無事だった事が何よりも嬉しい」

「リリスモン？」

「そうだ。そのデジタマに封印されている七大魔王は『色欲のリリスモン』。“暗黒の女神”と恐れられているデジモンだ」

ヒカリの質問の声に対して、チンロンモンはデジタマを見つめながら答え、太一達はブラックの手の中に在るデジタマを興味深そうに見つめるが、ブラックは構わずにチンロンモンに質問する。

「それで一体何が在った？」

『えっ！？』

太一達はブラックの言葉の意味が分からず疑問の声を上げるが、チンロンモンはブラックの言葉の意味が分かっているのか、顔を険しくする。

「やはり分かるか？」

「お前がこの場所に来た時点でな。他の四聖獣達の説得に当たっていた筈の貴様がこの場に現れたのだ。何かあったと推測するのが当然だ」

「・・・・・その通りだ・・・・すまない・・・・残る二つの七大

魔王のデジタマ、憤怒のデーモン、強欲のバルバモンのデジタマが奪われてしまい・・・・アルフォースブイドラモンが逝ってしまった」

『ッ！！！』

チンロンモンが告げた事実に、太一達は驚きながら顔を見合わせるが、ブラックだけは冷静にチンロンモンを見つめる。

その様子にチンロンモンは申し訳なそうな顔をして語り始める。

「事の起こりは、お前達と別れた後に起きた。私とロイナヤルナイツ、オメガモン、アルフォースブイドラモン、スレイプモン、アルファモン、そしてロイヤルナイツ達が見守るデジタルワールドに住んでいた人間とそのパートナーデジモンとその仲間達は一度集まり、七大魔王のデジタマが二つ封印されている遺跡で今後について話し合っていた」

「アレ？人間って？他のデジタルワールドに人間が住んでいるのか？」

「いや違う。ロイヤルナイツの世界に住んでいた人間は、嘗てそのデジタルワールドの危機を救い、その後にデジタルワールドを旅する為にデジタルワールドに留まったのだ」

大輔の質問に対して、チンロンモンは詳細に説明した。

件の人間は、ロイヤルナイツ達の見守るデジタルワールドの危機を救うと共に、デジタルワールドを旅する為にデジタルワールドに留まっていたのだ。だが、今回の緊急事態にのんびり旅をしている場合ではないと思い、チンロンモン達に接触し協力を願い出ていたのだ。

チンロンモンも彼の人間の存在は知っていた為に、彼の協力は願っても無い事だったので、話し合いに参加させていた。だが、その時に現れたのだ。七大魔王が。

「私達の話し合いの場に現れたのは七大魔王、怠惰のベルフェモン。奴は突如として心を失ってしまったデジモン達と共に現われ、我らを攻撃して来た。当然私達は応戦したが、それこそが奴らの罠だった。私達が応戦している間に、ルーチェモンが動き、強欲のバルバモンのデジタマがまんまと奪われてしまったのだ」

「憤怒のデーモンのデジタマはどうなんだよ？奪われたんじゃないのか？」

「正確に言えば、デーモンのデジタマは完全に奪われていない。奪われる直前で彼の人間が護ったのだ。だが、その時に発生した次元の歪みに飲み込まれ、デーモンのデジタマと共に彼の人間とそのパートナーデジモン、そして彼の者達の仲間のデジモン達は異世界へと飛ばされてしまった」

「そんな！？」

「それで何処の世界に飛ばされたの！？」

チンロンモンの言葉にヒカリは悲鳴の様な声を上げ、ヒカリの足元に居たテイルモンは慌てた声で質問した。

その質問に対してチンロンモンは険しい表情を浮かべて答えようとした瞬間に、ブラックが呟く。

「ミッドチルダ。管理局の発祥の地で在り、恐らくルーチェモン達の隠れ家が在る世界だな？」

「その通りだ」

『ッ！！！』

チンロンモンの肯定の言葉に太一達は慌てて顔を見合わせる。
よりにも寄って七大魔王のデジタマが飛ばされた場所が、デジモンと人間の戦争を勃発させた組織の発祥の地である上に、ルーチェモン達の隠れ家さえも在る世界。
その世界に求めているデジタマが存在していると成れば、ルーチェモンは手駒にしている組織を使って回収させようとするだろう。
もはやデーモンのデジタマも奪われたも同然と考えるべきだ。

「・・・・・状況は最悪な方向に向かっていると言う事か？」

「そうだ。少なくともこれで七大魔王のデジタマは殆ど奪われたと考えて置くべきだ。だからこそ、私は急ぎこの世界に戻り、リリスモンのデジタマの安否を聞いたのだ」

「そうか。ならば俺がする事は一つだな」

ブラックは足元に置いてあったリリスモンのデジタマを腕の中に抱えて空中に浮かび上がり、太一達に顔を向ける。

「此処で別れだ。お前達はこの世界の地球とデジタルワールドに残れ」

「待って！俺達も一緒に！」

「僕達も一緒に行くよ！」

「この世界のデジモン達も人間を憎み掛けている。お前達にはそれを止める役目が在る筈だ」

太一とアグモンの言葉をブラックは切り捨て、太一達は顔を俯ける。

今回の管理局の艦隊に寄る襲撃で、かなりのデジモン達が消滅してしまった。その事により人間を憎んでいなかったデジモン達も人間を憎む様に成っているだろう。

その事を分かっているブラックは、太一達にそれを止めて貰う為に一人で元の世界に戻るつもりなのだ。

「俺の居た場所に来る事になれば、お前達がこの世界に無事に戻って来れる保証は無い。その場所はデジモンと人間の戦争が起きている場所。命が無くなる可能性も在る場所だ」

「そ、それは・・・・」

ブラックの言葉にヒカリは答えようとするが、答えが出ず、太一達と共に顔を俯けてしまう。

その様子を見たブラックはヒカリ達に背を向け、チンロンモンに顔を向ける。

「チンロンモン。俺は元の世界に戻る。その序に持って行きたい物が在る。ついて来てくれ」

「分かった。元々の約束だ。お前の言うとおりにしよう」

チンロンモンはブラックの言葉に頷き、ブラックはインペリアルドラモンから離れ始め、チンロンモンと共に何処かへと飛んで行く。

その様子を太一達は苦い表情をしながら見つめるのだった。

ししてその日の夜。再び太一達は現在手があいていた火田伊織、高石タケル、泉光子郎、そしてゲンナイと共に太一とヒカリの家へと集まり、デジモン達について話し合っていた。

「私の調べた限り、デジタルワールドの多くのデジモン達が人間に不快な感情を抱き始めている。このまま行けばデジモン達が一斉に人間を襲う可能性もありえるぐらいだ」

「僕の方も各国の選ばれし者達から、デジモンの暴れ方が増したと言うメールが何通も届いています」

「太一さん達が例の場所に行っている間も、デジモンの暴走が日本の各地で起きていました・・・・正直手が足りなくなりそうな現状ですよ。完全体だけではなく究極体も現れそうに成りそうでした」

「何とかそのデジモン達は戻せたけど、このまま行けば僕らの願っているデジモンと人間の共存が夢になりそうです」

「クソッ！！管理局の奴らのせいで！！」

ゲンナイ、光子郎、伊織、タケルのそれぞれの報告を聞いた大輔は怒りの叫びを上げた。

デジモン達の暴走が更に増したのは、先ず間違いなく管理局の艦隊が行ったギズモンを使った虐殺のせいだろう。全てのデジモンに人間のパートナーが居る訳ではない。寧ろ今のデジタルワールドには三大天使の世界のデジモン達もいるのだ。そのデジモン達からすれば人間の一管理局の更なる暴挙に憎しみを増大させているのは先ず間違いない。

今回の件で更に大輔達の夢だった。“デジモンと人間の共存”が遠退いたのは先ず間違いないだろう。

「正直、あの心を失ったデジモン達が現れたのは不味かった。アレに寄ってデジモン達は自分達も心を失わされるかもしれないと思い、人間に恐怖を抱き始めている」

「そうだよ。心が無くなるなんて僕は怖い」

「私も正直心を失うなど恐怖しか感じられない」

「俺もだぜ」

ゲンナイの言葉に答える様に、アグモン、テイルモン、ブイモンは同意する様に答え、他のアルマジモン、ワームモン、パタモンも同感だと言う様に頷く。

デジモンは人間と同じ様に心と知性を持った存在。そんな彼らかすれば、あのギズモンは恐怖の象徴としか言えないだろう。心を消去された上に、同胞のデジモンを完全に消滅させる為に生み出された存在。

その存在は同じデジモンで在る者達からすれば恐怖としか言えないのだ。自分達もあのような姿にされてしまうのかと言う恐怖が生まれてしまう。だからこそ、更にデジモン達は人間を信じられなくなって来ている。

その考えが脳裏に浮かんだ太一は、今回の件に隠されていたルーチェモン達の思惑に気が付き、表情を険しくする。

「やられた！何でルーチェモン達がこの世界に管理局の連中を送ったのか分かったぞ！」

「エッ？どういう事兄さん？」

「考えて見ろ。この世界は他のデジタルワールドと違ってデジタルワールドと人間界が行き来できる世界だ。当然、ルーチェモン達からすれば目障りだろう。折角他の世界で人間とデジモンの絆を真っ二つにしたのに、この世界では人間とデジモンの共存が成り立とうとしていた。もしもこの世界の存在が管理世界の人々に知られたら如何なる？」

「そうか！ブラックウォーグレイモンの話では、管理世界の人々にはデジモンは正体不明の生物だと言う事に成っている！だけど、デジモンとの共存が可能と分かれば、管理世界の人々は疑問を持ち始めてしまう。如何して共存出来る生物達が自分達の世界を襲うのだろうって！そうなれば人々は管理局に疑問を覚えてしまう！現状では管理局に滅んでもらうとルーチェモン達は困る！まだ戦争が始まったばかりで両者とも余り疲弊していない！だからこの世界にギズモンと言う心を失ったデジモン達を人間に連れて来させたんだ！」

『ッ！！！』

賢の説明に太一を除いた全員がハッした表情を浮かべて顔を見合わせ合った。

ルーチェモン達がこの世界に管理局の人間を送り込んだ真の狙いは七大魔王の回収ではない。七大魔王の回収などリヴァイアモンに任せて置けば良いのだから。にも関わらずルーチェモンが態々管理局の者達を送ったのは、“人間が心を失ったデジモンを連れている”と言う現状をデジモン達に見せる為だった。

何せ、管理局の大多数の局員達はデジモンを憎んでいる。その連中にデジモンに対する有効な兵器だと言ってギズモンを持たせれば、必ずデジモンを抹殺する為にギズモンを使用する。

それに寄ってこの世界のデジモン達には人間に不信感を抱いてしまう。

“人間は自分達を道具に改造する為に、共存しようとしているのではないか”

そう言う疑念をこの世界のデジモン達に植え付ける事こそが、今回のルーチェモン達の真の狙いだったのだ。

これに寄って、パートナーを持つデジモン以外の多くのデジモンは人間に疑念を抱き、疑心暗鬼に陥ってしまう。共存どころかデジモンの協力さえも得られない現状に、この世界は陥りかけてしまったのだ。

「・・・・ルーチェモン達は如何在っても、人間とデジモンの共闘を行わせないつもりだ。ブラックウォーグレイモンの話だと、奴らは一度人間とデジモンの絆に敗れた。だから今度は何が何でもデジモンと人間の共闘を行わせないつもり何だろう」

「全部ルーチェモン達の思い通りって事かよ！クソッ！！」

太一の説明に大輔は怒りの叫びを上げ、他の者達も表情を険しくする。

しかし、逆に言えばルーチェモン達はそれほど人間とデジモンの共闘を恐れていると言う事になる。

此処まで用意周到に立ち回ってまで彼らはデジモンと人間の共闘を止めようとしている。その事から考えるに、デジモンと人間の絆こそが今回の件でのカギに成ると言う事は先ず間違いない。

その事を今までの状況から推察した太一は決意を固めると、大輔達に顔を向ける。

「皆、俺とアグモンはブラックウォーグレイモンの世界に行こうと思う」

『ッ！！！』

太一の宣言にアグモンを除いた全員が目を見開いた。

ブラックウォーグレイモンの世界に行くと言う事は、戦争が起きている場所に向かおうと言う事に成る。そうなれば人間の命を奪う事態が起きる可能性は高い。その事はブラックの言葉で太一もアグモンも充分過ぎるほどに分かっている。

だが、今回の件を真に解決する為にはこの世界に留まるだけでは駄目だと太一は思っていた。

真の解決の為にはルーチェモン達を倒す事もそうだが、管理世界の人々にデジモンが共存出来る生物だと教える事も重要だろう。かなり難しい事だが、それでもそれを行わない限り、デジモンと人間はいがみ合い、殺し合うしか無い。だからこそ、太一は決意した。今回の件の中心で在る地に向かおう事を。

「俺やアグモンが居なくなれば、戦力は減るだろうけど。それでも今回の件を解決する為に、ブラックウォーグレイモンの世界に行くしかないと思うんだ。ゲンナイさん？まだブラックウォーグレイモンは元の世界には戻っていないんですよね？」

「あぁ、何か準備をしているらしくて、チンロンモンの話だと戻るのは数日ぐらい先だそうだ」

「なら準備する時間は在るな」

「・・・・太一さん本気で行く気ですか？ブラックウォーグレイモンの世界は戦争の真っ只中なんですよ」

「ああ、もう決めたんだ。アグモン？良いか？」

「もちろんだよ。僕は太一に協力するよ」

太一の言葉にアグモンは同意を示すように頷く。

アグモンも太一と同様に今回の事件を解決するには、ブラックウォーグレイモンの世界に行くしかないと思っていた。だが、それを言えばパートナーである太一を命の危険に晒させる事に成る。だからこそ、アグモンは自分からは言わなかった。

しかし、太一も行く気と成れば、アグモンは全力で太一を護る為に戦う。

「僕は絶対に太一を護って見せるよ。今度も迷ってしまうかも知れないけど、太一が居れば頑張れる」

「アグモン。ありがとうな。俺も頑張るぜ」

「だったら俺も行きますよ！太一さん一人だけを行かせられない！」

太一とアグモンの会話を聞いていた大輔は自身も行くと宣言し、他の者達も大輔に同意する様に頷くが、太一とアグモンは首を横に振るう。

「いや、皆にはこの世界のデジモン達の説得を頼みたいんだ。このままだと全部が全部ルーチェモン達の思い通りに動いてしまう。だからこそ、この世界のデジモン達を説得して何とか希望を作ってくれ」

「あいつ等が恐れているデジモンと人間の絆をこの世界だけでも取

り戻すんだ。そうすればあいつ等の思い通りには成らない。だからお願いだよ。皆はこの世界の事を頼んだよ」

「勝手な願いだが頼む」

太一とアグモンは言葉と共に深々と頭を下げる。

二人とも現状で自分達がこの世界から離れるのは戦力が減る事だと分かっている。だが、それでも太一とアグモンはブラックの世界に行く決意をした。

ブラックの世界は地獄の様な世界に成っているかも知れない。究極体に進化出来るアグモンと共に居ても太一は自分が死ぬ事に成るかも知れないと分かっている。

それでも二人はブラックの世界に行くつもりだった。真の元凶が存在する限り、必ずまたこの世界に悲劇が起きる。だからこそ、二人はそれを止める為にブラックウォーグレイモンの世界に行くつもりだった。

その決意を聞いたゲンナイは頷くと、立ち上がり太一とアグモンの手を握り締める。

「なら私も行こう。私には戦う力は無いが、君達をサポートする事は出来る。この世界と連絡を常に取れる様にする為にも、私は君達について行くぞ」

「だけど」

「ゲンナイさんは連れて行くべきです。戦いは何も戦闘だけではない。後方から支援出来る者も必要です」

否定の声を上げようとする太一に光子郎は言葉を言うと、太一に右手を差し出す。

「正直辛い目に合うでしょうが、頑張って下さい。この世界のデジモン達は何とか僕らが説得します」

「説得が終わった後に必ず駆けつけますよ」

「この世界の事は任せて下さい」

「絶対に説得して見せますよ！！」

「人間とデジモンの共闘を絶対に成し遂げて見せます！」

「・・・・皆、ありがとう」

太一とアグモンは、光子郎達の言葉に感謝を示す様に頭を下げ、光子郎達は笑みを浮かべて太一とアグモンを見つめるのだった。何かを思い悩んでいるヒカリとテイルモンの姿に気が付かずに。

数日後。ブラックとチンロンモンは大海原に浮かんでいる艦艇ーシェンウーモンの霧幻（むげん）に寄って内部の人間だけが死んでいた艦ーの前の上空に浮かびながら話し合っていた。

「色々と礼を言うぞ。損傷が激しかった艦が此処まで修復出来たのはお前が呼んでくれたサイボーグデジモン達のお陰だ」

「気にするな。寧ろ礼は私にではなくこの艦艇を修復したデジモン達に言う方が正しいぞ」

「フッ、そうだな」

ブラックはチンロンモンの言葉に苦笑を浮かべながら同意し、背後に在る管理局の艦を見つめる。

この管理局の艦艇は、リヴァイアモンのカウダに寄って吹き飛び、もう一隻の艦と共にボロボロな状態で波間に漂っていたのだ。それを偶然にも発見したブラックはチンロンモンに頼んで機械系のデジモン達を呼び寄せて貰い、艦を修理して貰ったのだ。

本来その様な事をしなくても、ブラックはチンロンモンの力さえ借りれば元の世界に戻る事が出来る。

しかし、ブラックは艦に乗り込んで帰るつもりだった。理由は一つ、艦の中で未使用状態で眠っていた“ギズモン達を連れて行くためだ”。

「・・・・・可能なのか？心を失ったデジモン達を殺さずに元に戻す事など？」

「分からん。だが、少なくとも俺の下に居た研究者ならばギズモンに対する対抗策も作る事が出来るやも知れん。望みが僅かでも在るのならば、実行するだけだ」

「・・・・・その通りだな。私も出来る事ならば、殺さずに彼らを救いたい」

チンロンモンにしても出来る事ならばギズモン達を殺したくはなかった。彼らは被害者でしかない。

望まずに心を奪われ、同胞で在るデジモン達を滅ぼす役目を与えられた存在。

出来る事ならば救いたいとブラックとチンロンモンは思っていた。だからこそブラックは管理局の艦艇を態々修理して、艦に乗り込ん

で帰るつもりなのだ。

「・・・・・心か。嘗ての俺はその存在に悩んでいたが、こうしてギズモン達を見た後では、心の無い自分に恐怖を覚えるぞ」

「私もだ。だからこそ、この悲劇を終わらせ、デジモンと人間が共に笑い合える世界を見て見たいものだと思う」

「・・・・出来るかどうかは分からんがな」

ブラックは素っ気無く答え、チンロンモンも悲しみの表情を浮かべる。

二人とも現状がそれほど楽観視出来る状況では無い事は充分に分かっている。世界を滅ぼせる魔王デジモンが最低でも六体は敵なのだ。リリスモンのデジタマも奪われれば、七体全てが敵として現れる可能性さえも在りえる。

「・・・・・スーツェーモン達の説得の方は頼む。俺は何とかして超究極体の覚醒の阻止と、ルーチェモン達の野望を阻止する。俺の仲間達も既に動いているだろうからな」

「分かった。この世界の事は任せてくれ」

「頼む」

チンロンモンの言葉に答えると共に、ブラックは艦内部に乗り込もうとするが、その直前で上空から荷物とゲンナイを抱えたビクトリーグレイモンがブラックの前に降りて来る。

ーーービュン！

「・・・・・・何のようだ？」

「・・・・・・僕達も一緒に行く」

「協力者は必要だろう？」

ブラックの質問にビクトリーグレイモンとゲンナイは答え、ブラックは無言でビクトリーグレイモンの目を見つめる。

「・・・・・フン、覚悟は在るのだろうな？殺す事に迷えば、お前はすぐに死ぬ事に成るぞ。俺は助ける気は無い」

「分かっているさ。僕らは何度も悩むだろうけど、それでも前に進むと二人で誓った！」

（この目は！？）

ビクトリーグレイモンが宣言を放つと共に見た瞳の中に在る覚悟に、ブラックは十年前の事を思い出した。

あの時も何度も打ち倒したのに立ち上がって来た大輔達も、今のビクトリーグレイモンと同じ瞳をしていた。覚悟して先に進むと誓った瞳。

その瞳を浮かべた時のビクトリーグレイモン達の頑固さを良く知っているブラックは溜息を吐き、ビクトリーグレイモンに入り口を示す。

「あそこから内部に入り込める。先に入っていろ」

「分かった。ありがとう」

ビクトリーグレイモンは礼を告げると共に、ブラックが示した入り口から艦艇内部にゲンナイと共に入って行く。
その様子を溜息を吐きながら見ていたブラックは最後にチンロンモンに顔を向ける。

「また会える日を楽しみにしているぞ。チンロンモン」

「ああ、また必ず会おう」

「フッ」

チンロンモンの言葉にブラックは笑みを浮かべると、ビクトリーグレイモンと同様に艦艇内部へと入り込み、先に入って辺りを見回していた太一とアグモン、ゲンナイに顔を向ける。

「まるでＳＦに出て来る艦だな。魔法って言うから、もっと変わった形をしていると思っていたけど」

「優れた科学は魔法と変わらないと言う事だろう。この艦のエネルギーが魔力と呼ばれる物を使っている様だからな」

太一の言葉に近くの端末から艦の情報を調べていたゲンナイが答えて、ブラックにアグモンが質問する。

「それでこの艦に乗って帰るのは良いけど？どれぐらいで君の居た地球に着くの？」

「チンロンモンが力を解放して、大体この艦に乗って二ヶ月ぐらいの距離の場所に着くゲートを作るらしい。俺一人ならばすぐに地球

に辿り着くゲートが作れるそうだが、艦に乗ってのゲートではその距離が限界だそうだ」

「二ヶ月か・・・・・・なぁ、この艦の中には訓練所とか在るのか？」

「それは在るみたいだ。艦内部の情報を検索した所、確かにその様な区間が在る事が分かった」

太一の疑問に艦の情報を調べ終えたゲンナイが答え、太一とアグモンは笑みを浮かべ合う。

「よし！アグモン！チンロンモンが作ったゲートを越えたらすぐに訓練しようぜ！少しでも力を上げる為にも！」

「分かったよ太一！」

太一とアグモンは互いに同意し合い、ゲートを越えた後の事を話し合う。

その間にブラックはブリッジへと足を向けながらゲンナイと今後の事を話し合っていた。

「機械系デジモン達に自動操縦用のプログラムは作って置いて貰ったが、お前が共に来ると成れば艦の操縦を任せても大丈夫か？」

「ああ、そう言う事なら任せてくれ。そう言えば？食料と水は二ヵ月分は持つのか？」

「元々この艦は数人ではなく、大量の人員を乗せる艦だ。俺達が艦内部で二ヶ月以上暮らしても食料も水も充分に持つ。それに最悪の

場合は近くの管理世界に入り込み、食料と水を手に入れれば問題無い」

「成る程、それならば安心だな」

ブラックの言葉にゲンナイは頷き、ブラック、太一、アグモンと共に艦のブリッジを目指し、ブリッジ内部へと入り込む。

「へえ～、やっぱりＳＦみたいだぜ。次元航行艦って言うだけ在るな」

「そうだね。とても魔法なんて呼べないよ」

「席に座っておけ。多少は揺れるぞ」

ブリッジ内部を見回す太一とアグモンにブラックは答えると、近くの壁に背を付けながら立ち、太一とアグモンもそれぞれ近くに置いてあった椅子へと座り、最後にゲンナイが艦長席に座り近くのコンソール手を置く。

「よし、艦内部の全ての制御権は掌握した。これならば自動操縦しなくても艦を自在に動かせる」

「流石はゲンナイさん！」

「頼りに成るよ！」

太一とアグモンは席に座りながら賞賛の言葉をゲンナイに告げ、ゲンナイは照れ臭そうに頭に手をやる。

ゲンナイは人間の姿に見えるが、その正体はデジタルワールドの

安定を望む者ーホメオスタシスに仕える自立エージェント。人間ではなくデジモンに近いデジタル生命体なのだ。
　その恩恵に寄り、データ内部に入り込み、十年前は世界中のコンピュータのデジモンに関する情報、研究をコントロールしていたりした。その為に機械に触れば在る程度は自由自在に操る事が出来るのだ。

「とは言っても、私はまだ異世界のコンピュータを扱え切れるか分からない。機械系デジモン達の作ってくれた自動操縦プログラムを使った方が安全だろう」

　ゲンナイはそう告げると共にコンソールを弄り、事前にセットされていたプログラムを起動させ、艦を海上から空へと浮かばせる。

　その様子を外で見ていたチンロンモンは頷くと、自身の体の周りに在る十二個のデジコアの力を開放させる。

「オオォォォォォォーーーーー！！！」

ーーービキビキ！！

ーーーブオオオン！！

　チンロンモンが咆哮を上げると同時に、十二個のデジコアも光り輝き、艦の前方に巨大なゲートが出現した。
　それと共に自動操縦に成っている艦は勝手にゲートへと向かい出すが、その直前で艦に平行する様にインペリアルドラモン・ドラゴンモードが並び、その背に乗っていた大輔達ー太一とアグモン、ブラック、ゲンナイにとっての最高の仲間達が全員手を艦に向かって振るい、その他にも見送る様に多くのパートナーデジモン達を連れ

た人間が海上に沢山存在し、艦に向かって手を振るっていた。
その様子を艦のブリッジからモニターで見ていた太一、アグモンは嬉し涙を流し、ゲンナイも嬉しそうな笑みを浮かべる。
ブラックもその様子に満更でも無さそうな笑みを浮かべながらモニターを見つめていると、艦はゲートの内部に入り込み、その姿をデジタルワールドから消失させた。

「・・・・希望の種よ。私達も必ずやこの世界のデジモンと人間の絆を取り戻し、駆けつけてみせる。それまで頑張ってくれ」
閉じて行くゲートを見つめながらチンロンモンはそう呟き、その場に居た選ばれし者達、全員が必ずデジモンとの絆を取り戻すと誓うのだった。

ゲートの中へと消えた艦にはゲート内部を進み続け、その中でブラック達は今後についてを話し合っていた。
「先ずは俺が居た地球に向かう。其処ならば俺の仲間達の情報が何かしか手に入る筈だ。その間に訓練と各管理世界の詳しい状況を調べる。人間に憎しみを持たないデジモンがやって来ている可能性も僅かだが在る。そいつ等は連れて行ったほうが良いだろう」
「確かに。この艦に記録されていた情報では管理世界に現れるデジモン達に統制が無いらしい。恐らく完全にランダムで現れる様に成っているんだろう」
「そうだな。全部が全部、人間を憎んでいる訳でないなら、連れて

行くべきだよな」

「うん。彼らは連れて行くべきだよ」

管理世界に現れるデジモン達は何も全てが全て人間を憎んでいるデジモン達だけではない。

偶然にも巻き込まれてしまい、管理世界にやって来たデジモン達も存在している。だからこそ、ブラック達はそのデジモン達を保護して、安全な場所へと連れて行くつもりなのだ。

出来れば協力して貰いたいが、それは相手の気持ち次第なので無理強いはするつもりはブラック達には無い。

「さて、方針も決まったし、太一とアグモンは私と一緒に管理世界について勉強するぞ。行く場所の事が分かっていないと不味いからな。幸いにも私達が乗っている艦は管理世界を管理している管理局の艦だ。情報はすぐに分かる」

「そうだな。確かに行く場所の情報は必要だ。良し！アグモン！訓練は在る程度情報を知ってからやるぞ！」

「うん！分かったよ太一！」

太一の言葉にアグモンは頷き、ゲンナイはコンソールを弄って情報をモニターに映そうとした瞬間。

「私達も良いかな？」

「ムッ！」

『エッ！？』

突如としてブリッジの扉の方から声が響き、ブラック達が驚いた声を上げてブリッジの扉の方を見て見ると、ブリッジの入り口が開き、荷物を提げたヒカリとその足元に居るテイルモンがブリッジ内部へと入って来た。

「ヒカリッ！！テイルモン！！如何して此処に居るんだよ！？」

「大輔達と一緒に残ったんじゃ！？」

太一達の世界に残った筈のヒカリとテイルモンの姿に、太一とアグモンは驚愕の声を上げる。

その叫びに、ヒカリとテイルモンは顔を暗くしながらを俯ける。

「・・・・やっぱり私とテイルモンも行こうと思ったの。イグドラシルとの約束も在るけれど、私とテイルモンもデジモンと人間の戦争を止めたいの！」

「足手まといには絶対に成らない！だからお願い！！」

ヒカリとテイルモンは深々と頭をブラック達に向けて下げる。

その様子に太一、アグモン、ゲンナイは困った表情を浮かべるが、今更、元いた世界に戻る方法が思い浮かばず頭を悩ませていると、ブラックがヒカリとテイルモンに背を向けながら告げる。

「・・・・好きにしろ。お前達の頑固さは嫌と言うほど知っているからな。今更あの世界に戻る事も出来ん・・・・足手まといにだけは成るな」

「・・・・しょうがねえか。ヒカリ！一緒に行く事は赦すけど、絶

対に気をつけろよ。これから行く場所は危険な場所なんだからな！」

「うん！ありがとう兄さん！ブラックウォーグレイモン！」

「私もありがとう！」

ブラックと太一の言葉にヒカリとテイルモンは感謝の声を出して、再び頭を深く下げる。

アグモンとゲンナイはその様子に笑みを浮かべると、ゲンナイが太一とヒカリの肩に手を置く。

ーーーポン！

「と成れば、ヒカリとテイルモンも加えて勉強会だ。ブラックウォーグレイモン。ブリッジの事は頼んだぞ」

「ああ、何か在ったら連絡を入れる」

ゲンナイの言葉にブラックは素っ気無く答え、ゲンナイが太一達を伴い、別の部屋へと向かおうとした瞬間。

（・・・・・ヒカリ・・・・・・ハ・・・・・・ヤミ）

「エッ？」

突如としてヒカリの脳裏に声の様なものが響き、ヒカリはブリッジ内部を見回す。

しかし、ブリッジ内部にはブラック達の他には、座席の上に置かれているリリスモンのデジタマしかなく、ヒカリは疑問に満ちた顔をしながらブリッジ内部を見回していると、太一が声を掛けて来る。

「うん？ヒカリ如何した？」

「・・・・・何でも無いよ。気のせいだったみたい」

「そうか。じゃあ行こうぜ」

太一はそう言いながら、ヒカリ達と共にブリッジを出て行った。
後には静かにモニターを険しい瞳で見つめているブラックと、静かに沈黙を保つリリスモンのデジタマだけが残された。

ブラックが元の世界に戻り向かい始めた時から時は遡り、ブラックが消えた頃に時間は戻る。
ミッドチルダ。首都クラナガンに在る地上本部の一室で事態が動こうとしていた。

「中将！どうかお考え直し下さい！！」

「くどいぞオーリス。これは決まった事だ」

地上本部一室。地上の防衛長官で在る壮年男性ーレジアス・ゲイズ中将とその防衛長官秘書であり、娘でも在るオーリス・ゲイズは言い争いを行っていた。
二人の表情は互いに険しく、特にオーリスの表情は鬼気迫るとしか言えないほどだった。

「そんな！！あの子達をあの部隊に行かせるなど危険が多すぎます！あの子は強力なレアスキルを持っていたとしても十歳の子供なの

ですよ！それは中将も充分すぎるほどに分かっている筈です！」

「・・・・分かっている。ワシとて、出来ればあの子を、あの子達を今の情勢で表に出す気は無かった。だが！お前とて分かっている筈だ！今あの子達の力を使わねば、ミッドの人々は滅んでしまう！！我々管理局の愚かな行為のせいで、これ以上人々を死なせる訳にはいかんのだ！！」

「・・・・・その為にあの子達にミッドの人々の憎しみの叫びを聞かせる気ですか！？あの子以外にも他の局員が居る筈です！！私達やその局員でも良いではないですか！？」

「駄目だ！お前は完全体に進化させる事が出来るから良い！だが、他の者達は成熟期がやっとだ！それに比べてあの子達は究極体に進化出来る！例の部隊はゲートタワーの破壊を主に行う部隊！危険に対抗できるのはお前達とあの子達しか居ない！それにお前達とあの子達の四人を護るのがワシの権限で出来る限界だ・・・・他のメンバーの事は来るべき七大魔王達との決戦の時まで本局にはばれる訳にはいかん！・・・・分かってくれ、オーリス」

レジアスは憂いを帯びた表情をしながらその場に土下座した。

娘であるオーリスに其処までやられねば行かないほどに、現状の地上は追い詰められていた。

レジアスとて例のメンバーを使う事に納得している訳ではない。だが、使わねば地上が滅びる。だからこそ、レジアスは地獄に堕ちる覚悟を持って決断したのだ。

その姿にオーリスは一瞬の険しい表情を浮かべるが、すぐに決意に固めて、ゆっくりとレジアスに背を向ける。

「・・・・あの子達の心は絶対に私とパートナーが護ります。お父

さんは例の計画の準備をお願いします」

「・・・・・頼んだぞ」

ーーーバタン！

レジアスが言葉を呟くと共に、オーリスは執務室を出て行った。

それと共にレジアスは床から立ち上がり、自身の執務机の中から二枚の写真ー一枚はかなりの年代が感じられ、若いレジアスと親友であるゼスト・グランガイツが写っている写真を先ず見つめる。

「・・・・ゼスト・・・・ワシは確実に地獄に堕ちるだろう。年端もいかない幼い子供を凄惨としか言えない戦争の戦場に送り出すのだから」

次にレジアスは真新しいーレジアス、オーリス、そして肩に小さな竜を乗せて横に鎧武者の様な鎧を身に付けて頭にインターフェイスを付けたデジモンと共に笑みを浮かべている桃色の髪の少女の姿が映った写真を見つめ、深い苦悩に陥る。

「・・・・・赦してくれ・・・・・・・ワシは君を利用する事に成ってしまった・・・・・平和に成った後に、罵ってくれて構わない・・・・・どうか無事に戻って来てくれ・・・・・キャロ・ル・ルシエ」

そう告げながらレジアスが見つめる写真の少女ー本来の歴史ならばフェイトに引き取られる筈のキャロ・ル・ルシエが、パートナーと思われるデジモンと共に写真の中で幸せそうな笑みを浮かべていた。

ブラックストーリーＥＮＤ

地球／機動六課ストーリーＳＴＡＲＴ

共に戦う者達（後書き）

次回予告

ブラックが世界から消えた後、リンディ達は地球に向かい

八神はやて達はミッドチルダの病院で傷を癒していた。

そしてデジタマをリインと共に見つめるはやての前に。

全ての真実を知っていた者が見舞いに現れる。

次回、漆黒の竜人と少女、『それぞれの結成』

彼女達の戦いが始まる。

それぞれの結成

新暦７５年。ミッドチルダ、及び管理局に管理世界に指定された全ての世界は未曾有の危機ーデジモン来襲によって、完全に平和は砕け散った。

突如として各管理世界に出現した無数の黒い塔ー管理局は便宜上『ゲートタワー』と名付けているーから出現する人間に憎しみを持つデジモン達により、多くの人々が嘆きの内に沈んで行った。第九管理世界の消滅の報告に多くの管理世界がデジモンの来襲を警戒していたが、元々魔導師と言う戦力の多くが管理局に奪われていた世界ではまともな警戒など行える筈も無く、質量兵器と言う武器も禁止されている為に多くの世界がデジモンの来襲に防衛を行える筈も無かった。

本局はこの事態に全ての管理局が保有する戦力を集結させ、最大の警戒を体勢を整え、本局航空武装隊と航空戦技教導隊などの強力な戦力も集結させたが、正直全く手が足らない状況だった。

ＡＡＡランクオーバーの魔導師が全体で５％しかいない状況の上に、先の第九管理世界での惨劇により多くの人員も失っている。それに比べて現れるデジモンの多くは成熟期か完全体。その為に管理局は完全に手が足らない状況になってしまった。

元々万年人材不足であり、地上の戦力を減らしてまで動いていた組織だ。

広大な次元世界を管理しようとした結果が遂に浮き彫りになり始めて来たのだ。

その上、更に追い討ちを掛けるようにゲートタワーの周りには高密度のＡＭＦまでも展開されている事が判明し、検証の結果、Ｓランクオーバーの魔導師クラスの力で無ければ破壊出来ない事が判明してしまった。これには管理局も慌てに慌てた。ゲートタワーの数は最低でも一つの世界に十個以上。それを破壊して全ての管理世界

にSランクオーバーの魔導師を向かわせるなど現実的に不可能なのだ。
何せSランクオーバーの魔導師と言っても所詮は人間でしかない。疲れもするし、戦い続ければ疲労も溜まって行く。
その上、ゲートタワーの周りにはデジモン達が存在している。それを掻い潜ってゲートタワーの破壊の成功を収めても、その後で残っているデジモン達の相手をするなど疲弊した状態では不可能としか言えない。アルカンシェルなどの強力な魔導兵器を使えば別だろうが、管理世界に向かって撃ち込めば完全にその世界は管理局の敵に成る。ゲートタワーを破壊する方法は完全に白兵戦しか無い状況だった。
現在はデジモン達も自分達の戦力の集中に目を向けている為に、大きな争いは起こらず冷戦状態に成っているのがせめてもの救いだろう。

「・・・・・・完全に管理局は何も出来ないわね。出来るとしても住民が住んでいる街や村に魔導師達を送って、今まで以上に警護させる位よ」

「戦力が魔導師しか居ませんからね。魔導兵器にしても強力な物ばかり。完全に手が塞がっていますよ。魔導技術に頼りすぎていたつけが遂に来ましたね」

アルハザード司令室。その部屋の中でフリートが纏めた一各管理世界の現状が記された一資料を見ながら呟いたリンディの言葉に、フリートはコンソールを操作しながら答え、リンディは本気で頭が痛そうに手を置く。

「・・・・後先考えていなかったんでしょうね。三大天使の世界さえ滅ぼせば終わると思って行ったつけが完全に来ているわね」

「ですね。魔法は確かに強力ですが、それでも魔導師ばかりに頼るのは不味すぎですよ。戦力が充実しているデジモン達と違って、管理局は唯でさえ人材不足だったのに、戦争なんか引き起こしたんですからね・・・・・何かやりますよ？」

フリートは突如として真剣な声を出し、リンディも意味が分かっているのか同意するように頷く。

現状では確かに管理局が不利なように見える。だが、その状況を良く分かっている筈のルーチェモン達が何もしないとは思えない。確実に何かを行う事は間違い無いだろう。

その会話を壁に寄り掛かりながら聞いていたバンチョーレオモンは険しい顔をしながら、自身の考えを呟く。

「・・・・奴らの下には倉田が居る。其処から考えるに、管理局が行う行動は一つだろう」

「・・・・ギズモンですか？」

「先ず間違いなく使ってくるだろうな」

リンディの言葉にバンチョーレオモンは肯定し、リンディとフリートは険しい顔をした。

現状でリンディ達が最も恐れている事はギズモンが戦いの場に現れる事だった。ギズモンの力は強力で在る上に、その正体に確実にデジモン達は気がつく。

その結果は更なる憎悪を生み出す結果にしか成らないだろう。

「・・・・・私の推測だけど。管理局は、正確に言えば本局上層部がギズモンを投入するとしたら、二つか三つの管理世界が滅んでか

らでしょうね。より管理世界が管理局を当てにする状況を作る為にね」

「・・・・・それを実行したら管理局上層部は最低な人間の集まりですね。命を数としか考えていないですよ」

「男の風上にも置けん奴らだ！この手で殴り飛ばしたくなるぞ！」

リンディの告げた推測にフリートは憤りを覚えた顔をし、バンチョーレオモンは拳を力強く握り締めた。

リンディの推測が当たる事に成れば、確実に管理局上層部は最低な連中と言う事になる。何せ自分達で戦争の引き金を引きながら、自分達は安全な本局内部で暮らし、自分達の権力を上げようとする行動を行っているのだから。

そしてリンディ達は確実に管理局上層部がその行動を行う事を予測している。権力にとりつかれ、ルーチェモンの手駒に成っている上層部は確実に実行するだろう。その結果、どれほどの命が消えていくとしても彼らは行う。

「・・・・・正直に言うけど。私はすぐにでも全ての真実を管理世界の人々に伝えたいわ」

「・・・・・その気持ちは充分に分かりますよ」

「だが、それを行えば更なる暴走と悲劇が起きる事に成る・・・・・ままならんが、管理世界の人間達に真実を伝えるのは悪手としか言えんだろう」

「・・・・ええ、充分過ぎるほどに分かっています」

リンディとて冷静に判断する判断力は失ってはいない。
現在の状況で管理世界の人々に全ての真実を伝えれば、確実に人間同士の纏まりは消滅し、全次元世界規模の大戦争が巻き起こる。デジモンと人間の戦争だけでは最悪な状況なのに、人間同士の戦争さえも起きてしまえば、もはや止める事が出来ない泥沼の戦争になってしまうのだ。
言い方は悪いが、今の状況こそが、在る意味では分かり安い構造なのだ。
デジモンは人間を憎み。人間はデジモンを憎む。
その構造が出来ているからこそ、在る意味では安定した状況に成っているのだ。
しかし、此処で全ての原因が管理局にあったなどとばれてしまえば、人間同士の纏まりは消滅し、全てを滅ぼしてしまう戦争が起きる。だからこそ、リンディ達は真実を管理世界に伝えられないのだ。

「・・・・・とにかく、今の私達が出来るのは地球のデジモン達の説得ですね」

「あぁ、地球のデジモン達が人間と共に戦う事を認めてくれれば、状況は僅かに好転する。僅かでも俺達は希望を作るしかないのだ」

「それしか無いでしょうね」

リンディ達はそれぞれ言い合い、決めていた方針通りに動くしかないと判断し、リンディは地球に先に向かっているクイント、ティアナに連絡を取る為にコンソールを弄り通信を行い出す。

「・・・・・クイント、そっちは交渉に成功したの？」

『ええ、交渉は成功よ。地球での本拠地に成りそうな場所も見つけ

たし、何とか上手く行きそうね』

「そう、それは良かったわ。後はなのはさんとガブモン君の連絡を待つだけね」

クイントの報告にリンディは笑みを浮かべて呟くと、司令室の扉が開き、疲れた雰囲気を纏ったクダモンが入って来た。

ーーーブウウン

「やれやれ、とんだ暴れ者だ。話をしても落ち着く様子を見せずに、フェイト・テスタロッサの下に帰せと叫び続けているぞ」

「そう、でも今の情勢ではフェイトさんの下には帰せないわ」

「分かっている。今は多少は心を開いているヴィヴィオとギルモンが共にいる。ヴィヴィオ達は純真だから、私達と違って心を僅かに開いているようだ」

「なら、此処はヴィヴィオとギルモンに任せましょう。その方が良いでしょうからね」

クダモンの報告にリンディは苦笑を浮かべながら答えた。

ヴィヴィオとギルモンと一緒に居るのは、なのは、ガブモン、リンディが連れ帰って来たフェイトのパートナーデジモンのブイモンで在る。

最終的にフェイトはなのはの与えた試練を超える事が出来ず、ブイモンはなのは達に連れ去られた。

しかし、これもフェイトとブイモンの為だった。現在の情勢で戦う力も持っていないブイモンが管理局の下に居るのは危険すぎる。

せめて成熟期レベルにまで進化させる事が出来ていればフェイト達の後ろに居る支援者達に護られる事も出来るのだが、フェイトはブイモンを進化させる事が出来なかった。
それだけではなくフェイトはパートナーで在るブイモンを護る為に行動もしていなかった。
その結果、なのは達はフェイトとブイモンが完全に心を通わせていないと判断し、ブイモンをフェイトの下から連れ去ったのだ。

「ある程度経てば俺が会って話をしよう。男同士の方が分かり合えるやも知れん」

「お願いしますねバンチョーレオモンさん」

リンディはバンチョーレオモンにブイモンの事を頼み、地球に向かう準備を行い始めながら、フリートに気になっていた事を質問する。

「それでフリートさん？ルインさんと十闘士のスピリットの様子は如何ですか？」

「・・・・・ルインさんは予想通り、一ヶ月経たないと治療カプセルからは出られません。十闘士のスピリットの方はある程度情報を得られた結果。十闘士を蘇らせる方法は二つです。一つはまだ生まれていないデジタマと融合させて蘇らせるか。或いは嘗て三大天使の世界を救った人間達を捜索して出会わせるかの二つです。これ以外に蘇らせる方法は無いですね」

『・・・・・・』

フリートが告げた十闘士の覚醒方法。その方法にリンディ、バン

チョーレオモン、クダモンは険しい表顔をして、無言で顔を見合わせる。
一つ目のデジタマに寄る覚醒に付いては問題は無い。現在のアルハザードには先の地球襲撃の時に倒した大量のデジモン達のデジタマとバンチョーレオモンが倒して来たルーチェモン達の配下のデジモン達のデジタマが在る。しかし、この方法だと十闘士が味方として覚醒する可能性が低い。
彼らにしても自分達の護って来た世界を滅ぼされたのだから、人間に確実に味方するとは限らない。
二つ目の嘗て三大天使の世界を救った人間を捜索して出会わせると言う方法は、何も知らずに普通に生活していた人間を戦わせると言う事であり、命が消えて行く凄惨な戦場に出すと言う事だ。
覚悟を決めたリンディ達は良いが、何も知らずに平穏に生きていた人物達を戦場に出すなど、リンディ達には出来ない。

「・・・・・どの方法もリスクが高すぎます。十闘士を仲間と考えるのは止めた方が良いでしょうね」

「確かに覚悟の無い者が戦場に出るなど、命を無駄に散らすだけだ・・・・十闘士は諦めるしかないのかも知れん」

「・・・・・彼らが敵に回るのだけは絶対に止めなければいけません。ロイヤルナイツや四聖獣ほどでは在りませんが、厄介な敵に成りますからね」

十闘士の力は通常のヒューマンタイプで完全体レベル。ビーストタイプにしても完全体上位レベル力が在る。実力ではロイヤルナイツや四聖獣には及ばないが、それでもリンディ達からすれば厄介な敵としか言えないだろう。更に地球に居るのは三大天使世界のデジモン達が殆ど、もし十闘士が敵に回れば彼らを先導して戦う可能性

も在る。
現状では確実に味方として覚醒してくれる可能性が低い十闘士を覚醒させる事は危険なのだ。
「・・・・とにかく、私とクダモン君、バンチョーレオモンさんは地球に向かいます。フリートさんはルインさんの治療と管理世界の情報収集。それとヴィヴィオとギルモン君、ブイモン君の世話をお願いします。準備が終わり次第迎えに来ますので」
「分かりました。此方の方は任せて下さい」
リンディの言葉にフリートは頷き、リンディ達は司令室を出て地球へと向かって行った。

ミッドチルダ首都クラナガン。
その街の中に在る巨大な病院、聖王病院ではなのはに落とされたフェイトが入院していた。
ダメージ事態は非殺傷設定の為にあまり存在せず、傷も深くは無かったのだが、それでもベットの上で横に成っているフェイトの顔は深く絶望に沈んでいた。
「・・・・・・ブイモン・・・・グスッ、ヒック、ゴメン、ゴメンね」
「・・・・フェイト」
ベットの上で悲しみの涙を流し続けるフェイトの姿に、オレンジ色の髪の少女ーフェイトの使い魔のアルフは心配そうに声を掛ける

が、フェイトは答えずに、ベットの横に置かれている自身の黒く塗り潰された様な姿に変わったディーアークを見つめる。
なのはとの戦いが終わった後に、フェイトのディーアークはその色を黒く変え、完全に機能を停止してしまった。その原因はフェイトには充分過ぎるほどに分かっている。
“ブイモンとの絆が完全に切れてしまった”
ディアークはその影響により完全に機能を停止し、全ての機能が全く使用出来なくなってしまったのだ。
「・・・・何をしていたんだろうね、私は・・・・・・なのはの言う通りなのに・・・・何もせずにいた・・・・・ブイモンを家族のように思っていたのに・・・・・その家族と心を通わせられないなんて・・・・全然駄目だね」
「フェイト元気を出してよ!!なのはだって悪気が在ってやったわけじゃないんだろう!キチンと話し合えばブイモンは戻って来るよ!!」
「・・・・駄目だよ・・・・・戻って来たとしても・・・・ブイモンの居場所は管理世界に無いんだよ・・・少し考えれば分かる事なのに・・・・私はその事にさえも気づかなかった・・・・私にブイモンの家族を名乗る資格は無いよ」
「そんな事無いよ!フェイトはブイモンの事を大切に思っているよ!仕事が忙しくて会える時間は少なかったけど!それでもフェイトは頑張っていたじゃないか!?」
アルフはフェイトを励ますように叫ぶが、フェイトはアルフの言

葉には答えずに、毛布を顔の部分まで覆う。

「・・・・・アルフ・・・・・悪いけど一人にして・・・・・少し考えたいの」

「・・・・・分かったよ。何か在ったらすぐに念話で呼びなよ。すぐに来るからね」

アルフはそう告げると、病室から出て行き、フェイトはベットの横に置かれていたディーアークを抱えながら毛布の中で涙を流す。

「・・・・・ゴメンね・・・・・ゴメンね・・・・・ブイモン・・・・グスッ、ヒック」

病室の中にはブイモンへの許しを請うフェイトの涙ながら言葉が静かに響き続けた。

その声を病室の外で聞いていたアルフは険しい顔をしながら、病室の外で同じ様に心配そうに扉を見つめていたシグナムに顔を向ける。

「・・・・本当になのはがフェイトを追い込んだのかい？」

「・・・・・ああ、テスタロッサは完全に高町に敗北し、ブイモンは高町が連れて行った」

「クッ！」

シグナムの肯定の言葉にアルフは表情を険しくする。

なのははフェイトの親友である。そのなのはにフェイトはあそこ

まで追い込まれ、家族であったブイモンを連れ去れた。その衝撃は計り知れないものだろう。
特にフェイトに取っては、嘗て母親のプレシア・テスタロッサに捨てられた過去も在る。そのトラウマが今回の事で蘇ってしまった。
その為にフェイトは戦いから帰還してからと言うもの、塞ぎ込んだままなのだ。

「なのはは何を考えているんだい！？フェイトは親友だろう！？そのフェイトから家族だったブイモンを連れ去るなんて！？」

「・・・・そうしなければテスタロッサは取り返しの付かない心を傷を負うからだろう。だから高町はブイモンを連れ去った」

「・・・・どういう事だい？」

「・・・・現状で我々の表立った後ろ盾は、クロノ提督とレティ・ロウランの二人だけだ。その二人程度の力では、上層部の命令に逆らう事など不可能。伝説の三提督は表立っては我らを支援出来る状況ではない。戦う力も持っていないブイモンを上層部の命令から護る事など不可能だ。せめてブイモンはもう一段階進化して実力を示せば、三提督も支援する事が出来た。だが、テスタロッサはブイモンを進化させる事が出来なかった。そうなればブイモンに待っているのは実験動物の扱いだ。だからこそ、高町はブイモンを連れ去ったのだ。例えその結果がテスタロッサに憎まれる事になろうとな」

「・・・・・フェイトとブイモンの為なのかい？なのはがあんな行動を取ったのは？」

アルフの質問にシグナムは無言で頷き、啜り泣きの声が聞こえて来る病室の扉を見つめる。

「今の高町は過酷な戦いを超えた戦士だ。現状を正確に把握し、その時による最善の方法を実行するだろう。その結果、親友で在るテスタロッサや我々と戦う事に成っても、高町の信念は揺るがん」

先のなのはとフェイトの戦いを見ていたシグナムは確信していた。もし、自分達がなのはの信念と道が違えれば、今のなのはは確実に敵になると言う事を。

十年前のはやての為に戦った自分達以上の覚悟を、シグナムは先の戦いでなのはから感じていた。十年前のシグナム達ははやての為にとは言え、何処か心の奥底で迷っていた。

しかし、再会したなのはからは進んでいる道に対する一切の迷いなど感じられなかった。

「高町は手に入れたのだ。ブラックウォーグレイモンと同様の世界を敵に回しても迷わない信念と覚悟を。その信念の前には偽りの信念では勝つ事が出来ない。テスタロッサが今の高町からブイモンを取り戻す為には、高町と同等か。それ以上の信念を手に入れなければ無理だろう。もちろん我らもだがな」

「・・・・・・フェイトは立ち上がれると思うかい？」

「・・・・・立ち上がれなければ、これから先の戦いで真っ先に死ぬだろう。全てはテスタロッサ次第だ」

シグナムは険しい声でアルフの質問に答える。

これから先の戦いは正に地獄のような戦いに成るとシグナムは歴戦の戦士としての勘から予感していた。

嘗てのベルカ戦争を超える戦争。その戦争がマジかに迫り始めている。

その戦いの中で迷いを持つ者は真っ先に死ぬ。今のフェイトは正にその状態なのだ。
その事がシグナムの言葉から分かったアルフは悲しみながら、フェイトの悲しみの泣き声が響き続けている病室を見つめるのだった。
そしてフェイトと同様、或いはそれ以上に絶望している者が二人。フェイトが居る病室から離れた病室の中に存在していた。
「・・・・・精密検査結果は何とも無かったわ。はやてちゃんの体は完全に治療されているわ。一応、大事を取って二、三日は此処で様子を見るそうよ」
「そうか。良かったと言うべきなのだろうな」
はやてが居る病室の前ではやての状態をシャマルから聞いたリインフォースは安堵の息を吐き、はやてと自身の妹ーリインが居る病室の扉を見つめるが、すぐにその表情は暗くなる
「・・・・二、三日か・・・・その後は主は凄惨な戦場に出る事になるのか？」
「・・・・そうなるわね。『体に異常が無ければすぐに戦線に加われ』。それが上層部の命令ですもの。はやてちゃんが作ろうとしていた部隊で、私達は動く事に成っているわ・・・・ミッドチルダだけで動けとね」
「クッ！！私達をこの世界から出さないつもりか！？」
シャマルの言葉にリインフォースは険しい声を上げた。
“ミッドチルダだけで動け”。つまり上層部は、はやて達を他世

界の件では関わらせる気はないのだ。
はやて達は管理局内部でも数少ない三大天使の世界の結末の真実を知っているメンバー。上層部からすれば目ざわりとしか言えないだろう。
本局と地上本部の仲の悪さはリインフォース達も良く知っている。その本局側であるリインフォース達の言葉など地上は信じないだろう。しかも、今回の真相を知る者は必ず地上にも居る。
その者からすれば、元凶である本局側のリインフォース達も敵だと判断するかもしれない。
リインフォース達ーはやてが部隊長の部隊ー機動六課は完全に孤立無援の状態で戦うかもしれない現状なのだ。

「・・・・ヴィータちゃんとザフィーラが、隠れてクロノ提督と三提督と話し合っているけど、地上の支援無しで戦うのは自殺行為よ。何とか地上の支援を受けたいのが現状ね」

「私もそう思う。本局内部に敵が居る現状では、地上とは何としても手を結びたい」

現在の状況で後方の支援など無い部隊では、幾ら内部に実力が高いメンバーが集まっていても遠からず潰れる。
相手は強力なデジモン達。しかも相性が良い場所だと実力が上がる上に、通常状態でも並みの魔導師は勝てないほどの実力者達。
非殺傷設定を使い続けていた為に殺し合いとかに慣れていない管理局が簡単に勝てる様な連中ではないのだ。その者達と戦争が始まる状況で孤立無援の部隊など、真っ先に消えるだろう。

「聖王教会の方も支援は当てに出来ない。彼らは管理局に協力すべきかと悩んでいるらしい」

「ええ、どんな形でも第九管理世界の悲劇を起こした原因は、彼らの世界を崩壊させた事。行った人物達と一部の局員を切り捨てたとは言え、それでも管理局に協力するかは悩むはずよ」

聖王教会は現在、自分達の自治区の警護にその戦力を当てている。彼らの中には今回の事件の本当の真相を知らなくても、管理局に疑念を持っている人間が居る為に、今の所は管理局に協力すべきなのかと言い争っている状況に成っている。

その為に、本来は支援者の中に居たカリム・グランシアは、はやて達に協力出来ない状況に成ってしまった。勝手に支援したら教会内部での対立が悪化するかも知れない状況だからだ。

「私達には早い段階で死んで欲しいと言う事だろう。真実を知る私達は目ざわりと言う事だ」

「・・・・この様子だと完全に私達の行動は監視されていたわね。地球の中国の話に出て来る孫悟空見たいよ」

「そうかも知れん。私達が何をしようと分かっていたと言う事だろう。敵は始めから私達のすぐ近くにいたと言う事だ。高町はそれに気がつき、管理局を怪しまれない様に抜けたのだろう」

自分達の行動は全て監視されていた。その事に漸くリインフォース達は気がついていた。

余りにも出来すぎている状況。機動六課の話に上層部が乗ったのも、怪しまれずにリインフォース達を抹殺出来る状況を作り上げる為だろう。

何せ、なのはは管理局では既に過去の人物に成っているから良いが、はやてやフェイトなどは週刊誌に出るほどに有名な人物達だ。その人物達を殺してしまったら、管理局を怪しむ者が出るかも知れ

ない。だからこそ、上層部はリインフォース達が死んでもおかしくない状況にリインフォース達を送り込むように仕向けたのだ。
その事がハッキリと現状を客観的に考えて分かったリインフォース達は、何とかこの状況を打開する全ては無いかを頭を悩ませていると、背後から声が響く。

「少しは考える頭が戻って来た見てえだなぁ」

『ッ！！』

背後から聞こえて来た声に、リインフォースとシャマルが慌てて振り返って見ると、くだもの籠を持った壮年の男性ーゲンヤ・ナカジマが険しい顔をして通路に立っていた。

リインフォースとシャマルが外で話し合う中。
病室の内部ではリンディから渡されたデジタマをベットの上で抱える様に持ちながら撫で続けるはやてと、その様子を悲しげな視線で見つめるリインが存在していた。

『そのデジタマは、はやてさんに渡すわ。だけど、フェイトさんのようにデジモンと絆が結べなければ返して貰うわね。絆さえ結べば、生まれるデジモンは一週間もしないで成長期に進化出来る。逆に結べなければフェイトさんのように幼年期のままよ』

「・・・・・どないすればいいんやろうか？デジモンが一体味方に成っても、この状況を変える事なんて無理や・・・・絶望しかもうこの世界には無いのに・・・・・私になにしろと言うんや」

「はやてちゃん!元気を出して下さいです!!まだ絶望だけではないですよ!!はやてちゃんのパートナーが目覚めれば…」

「何が出来るんや!?たったの一体のデジモンで何が!?」

ーーービクッ!!

はやての覆い被さる様な叫びに、リインは体を震わせ、言葉を止めると、はやては抱えているデジタマを見つめる。

「・・・・相手は無数のデジモン達や。そんなデジモン達にたった一体のデジモンが挑んでも、無駄死にするだけや・・・・・・リイン・・・・私は怖いんや・・・・第九管理世界の時に・・・・・私が考えていた機動六課のメンバーの殆どがおった上に、リミッターなんか付いてへんかった・・・・戦力は完璧に近かったんや・・・・・・それでも倒せたのは完全体のナイトモンだけやった・・・・・・究極体の前には手も足もでえへんかった・・・・・・あの時に機動六課は敗れたんや・・・・完膚なきまでに・・・・その究極体達さえも超える敵が本当の敵や・・・・・そんな敵に勝てる訳あらへんのや」

はやてには現状が分かり過ぎていた。

リンディが告げた七大魔王の存在。そのデジモン達の実力は第九管理世界で滅ぼした四聖獣やロイヤルナイツ達の更に上を行く。

そのデジモン達と何れは戦わねばならない。そうなれば必ずはやての家族であるシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リインフォース、リインも戦いの場に出る事に成る。

その時にシグナム達が命を落とす可能性は高い。

“家族が死んでしまう”。その事に今更ながらはやては恐怖を覚えていた。

自身が助かったのも運が良かったに過ぎない。あの時にリンディ達が駆けつけるのが、後数分でも遅かったらはやてだけではなく、あの場にいたメンバーは全員が死んでいただろう。
本当に運が良かったに過ぎないのだ。

「・・・・笑ってええでリイン・・・・・私な、今更ながらに戦う事が怖くなったんや・・・・『夜天の王』・・・・・ＳＳランクの魔導師・・・・それが死と隣り合わせの戦場で何の役に立つんや・・・・簡単に命なんて消えるんや」

はやては言葉と共に自身の脇腹を撫でる。
ロードナイトモンに吹き飛ばされた内臓は完全に再生している上に、傷跡もさえない綺麗な脇腹だが、それでもロードナイトモンの一撃を受けた時の激痛をはやては忘れてはいない。
あの一瞬にして自身の意志が深い闇へと堕ちて行く衝撃。
その恐怖は、はやての心に深く根づいていた。
その事がはやての言葉と様子で分かったリインが悲しみの視線をはやてに向けると、病室の扉が突如として開く。

ーーーカシャ

「・・・・・随分としけた面になったな八神。四年前に俺の所に来たお前は何処行ったんだ？」

「・・・・ゲンヤさん」

病室の中へと入って来たゲンヤの姿にはやては呆然とした声を上げ、その様子にゲンヤは内心で重症だと判断する。

「表にいたリインフォースとシャマルの奴は病室の前から退かして

置いたぜ。デジモンに付いて語るなら、もう少し声を抑えろ。何処に監視の目が在るか分からねぇんだからよ」

「・・・・・何時から知ってたんですか？」

「四年前の空港火災の時に、ギンガとスバルを助けたのがクイントの奴だった。そのすぐ後に高町の嬢ちゃんを問い詰めて聞いたんだ。全てをよう」

ゲンヤはそうはやてに答えると、ベットの横に置かれている椅子へと座り、くだもの籠をリインに渡す。

「んで？何を落ち込んでいるんだ？まあ、現実を知って落ち込んでいるんだろうけどよぉ」

「・・・・・正直に言えば、私はもう戦うのが怖いんです」

「お前がその目で見た究極体は、デジタルワールドでも七大魔王を除いた最強の連中だぜ？恐怖を覚えるのは当然だろうな。映像で見た俺も恐怖に体の震えが止まらなかったからな」

はやての言葉にゲンヤは同意を示す。

ゲンヤにしてもフリートから話を聞いていたが、まさか半日と経たずに世界を滅ぼしてしまうとは思っても見なかった。

あの巨大な力を持った存在と戦うなど自殺行為としか言えないだろう。

だが、それでも。

「戦うしかねぇだろう。戦わなければ人間が滅びるだけだ」

「・・・・・ゲンヤさんは戦えるんですか？」

「知っているだろう。俺にはクイントと違って力なんてねぇよ。だけど俺は自分の出来る事で戦うつもりだ。家族で、俺、ギンガ、スバル、クイントの四人が暮らせる世界の為にも。俺には世界なんか大層なものは護れねえが、家族の居場所ぐらいは護りてぇのさ」

「・・・・・」

ゲンヤの言葉にはやては無言で自身の抱えているデジタマを見つめる。

自身が本当に護りたかったもの。それをはやてはゲンヤの言葉で僅かに思い出した。

（そうやったわ。昔の私は世界なんか気にせえへんかったな。巨大な力よりも普通の平穏を望んでおった。なのに何時の間にか、忘れておったんやな）

はやては自身の願った思いが変わっていた事に、漸く気が付いた。十年前の自分は、戦いなど望まず、闇の書の巨大な力も望まず、ただ家族との平穏を望んだ。

それなのに今の自分は、夜天の王として力を得て、全てを救えると思い込んでいた。力さえ在れば多くを救えると思っていた。それが敗れたに過ぎない。

その事が分かったはやては顔を更に俯けるが、その目は先ほどよりも光が戻り始めていた。

それに気が付いたゲンヤは、僅かに笑みを口元に浮かべる。

「今日此処に来たのは、地上本部のトップ、レジアス・ゲイズ中将から伝言を伝える為だ」

「レジアス中将が？」

ゲンヤの言葉にはやては訝しげな声を上げた。

はやてとレジアスの関係は良いとは言えない関係だった。何せはやてにはレジアスが嫌う、レアスキル持ち、本局、聖王教会、更に元犯罪者と言う要素をこれでもかと言う位持っている人間だ。

その上、レジアスは、はやてが地上に部隊を作る時に猛反発を起こした事も在る人物だった。

その人物からはやてに伝言が在ると言うのだから、疑問に思うのも当然だろう。

ゲンヤはそのはやての表情に笑みを浮かべ、レジアスの伝言を語り出す。

「『八神二等陸佐。貴君の部隊ー機動六課は地上が支援する。だが、地上の１０８部隊と合同で動く事と地上本部の監察官達を入れる事が絶対条件であり、貴君が部隊長として相応しくない、並びに戦果も上げらねば、即座に部隊長を止めて貰い、ゲンヤ・ナカジマ三佐に部隊長と成って貰う』以上がレジアス中将からの伝言だ。最後のチャンスだと思うんだなぁ。結果が出なければ即座に俺が部隊長だ」

「・・・・・レジアス中将も知っているんですか？」

「俺がこの四年間何もしてねえと思ったか？地上の方でも何人か仲間を作って置いたんだよ。まあ、中将の奴は別の思惑が在って、俺に協力してくれているんだろうけどな」

この四年間、真実を知ったゲンヤは秘密裏に動き、地上内部での味方を作っていたのだ。

ゲンヤがデジモンの存在を知った時には、監視の目を緩かった為、

ゲンヤがデジモンの存在を知っている事は上層部もルーチェモン達も知らなかった。それをゲンヤは利用し、本局ではなく地上内部で信用出来る人間を探していた。
その結果、自身と同じ様にデジモンに付いて秘密裏に調べている人物ーレジアスを発見し、交渉を持ち掛けていたのだ。
レジアスもゲンヤの話は渡り舟と言うように乗っかり、以来二人は地上でのデジモン肯定派閥を秘密裏に作り上げていた。最も、本局の愚かな行動のせいで全てが無に返り掛けている状況に成ってしまったのだが。

「八神。お前の部隊に俺の１０８部隊が合わさり、地上のトップが支援する部隊だ。これでも正直デジモン達に勝てる確立は低い。それでも戦う気があったら、三日後のお前が退院する日に連絡を寄越せ。じゃあな」

ゲンヤははやての言葉を告げると共に病室を出て行った。
それを見たはやては再び抱えているデジタマに目を向け、リインに声を掛ける。

「リイン・・・・・質問やけど、戦う気はまだ在るんか？」

「ありますです！！リインの願いは、はやてちゃん達と一緒に笑える世界ですから！その為なら戦えるです！！怖いですけど、リインは頑張りますです！」

「・・・・そうやな。皆で笑える世界を作りたいわ」

リインの言葉にはやては笑みを浮かべながら同意を示す。
そのはやての言葉に同意する様にデジタマに罅が入り始める。

ーーービキビキ

「ッ！！はやてちゃん！生まれるです！！」

罅が入り始めたデジタマを見たリインは叫び、はやては静かにデジタマを見つめる。

「・・・・ゴメンや・・・・・こんな辛いかも知れへん世界に生まれさせて、本当にゴメンな・・・・だけど、絶対に約束したる・・・・アンタも一緒に笑える世界を作り上げたる・・・・だから、私に力を貸してや」

生まれようとしてデジモンに向かってはやては呟き、リインと共に優しげに、デジタマから生まれたデジモンを見つめるのだった。

はやてが新たな決意を固めている頃。

地球ー海鳴市に在るとある大金持ちの別荘で、なのはとガブモンは、なのはの親友であるオレンジ色の髪をショートヘアーにした女性ーアリサ・バニングスと、紫色の髪をロングヘアーにした女性ー月村すずかと出会っていた。

旧交を温めに来たのではない。協力を願う為になのはとガブモンはやって来たのだ。

「・・・・話を纏めるのはね？数日前に東京を襲った謎の生物、なのはの言う所のデジタルモンスター、略してデジモンが東京と言うか、人間を襲った原因は全部、はやてとフェイトが働いている管理局が元凶で、その元凶である管理局は偽りの放送を行って管理世界の人々の心にデジモンを憎ませるような行動を行い、その事にデジ

モン達は怒り狂い、人間を全て滅ぼす行動を取り始めて、その結果が数日前の東京と言う事なのね？」

「うん、大体はそうだよアリサちゃん」

『・・・・・』

なのはの同意の言葉にアリサとすずかは本気で頭が痛そうに頭に手を置く。

まさか、数日前の東京半壊事件の元凶が、異世界の―しかも親友が働いている管理局だとは夢にも思ってみなかったのだ。

しかも、その元凶である管理局は責任を取る所か、デジモンと戦争を誘発する様な行動ばかり行っているのだから、頭が痛くなるのも当然だろう。

「・・・・本気で頭が痛いわよ。何？管理局って人々の平和を護る組織じゃなかったの？」

「平和は確かに護っているよ。だけど、それは管理局が、正確に言えば上層部が考える平和なんだよ。“管理局が世界を管理してこそ、平和に成る”。そんな風に考える人達が上層部にいて、その人達がデジタルワールドを滅ぼすように命じたんだよ。操られた行動だと知らずにね」

「・・・・世界が一つ滅んで平和も無いと思うけど、なのはちゃんは如何したいの？」

「私はデジモンも人間も笑える世界を作りたい。オファニモンさん達の願いも在るけど、私自身がそうしたいと思っているんだよ。私とガブモン君の様にデジモンと人間が笑い合える世界で喫茶店をや

りたい。これが私のしたい事かな」

すずかの質問に対して、なのはは自身の願いを偽り無く答えた。

なのはの今の願いは一つ。”デジモンも人間も共に笑い合える世界を作る”。

それこそがなのはの今の心の底から願いだった。三大天使ーオファニモン達の願いの為に戦うと言う気持ちも確かに在る。だが、それよりも大きくなのははデジモンと共に笑い合える世界を願っていた。

確かに現状では果てしなく難しいだろう。デジモンと人間が互いに憎しみ合う世界で、その願いが叶う可能性は限り無く低い。

それでもなのははその願いを叶えたいと心の底から願っていた。その結果、世界から犯罪者として追われる事に成ろうとも、その願いだけは必ず叶えて見せると誓っていた。

その言葉と決意に満ちたなのはの顔を目にしたアリサとすずかは顔を見合わせ、同時に頷き合う。

「しょうがないわね。まあ、会社にも利益の在る話し出し、協力するわよ」

「私もお姉ちゃんに話して見るよ。多分、喜んで乗ると思うけどね」

「ありがとう！アリサちゃん！すずかちゃん！！」

「僕からもお礼を言います！！」

なのはとガブモンは礼を告げると共に頭を深々と下げ、アリサとすずかは苦笑を浮かべるが、すぐにその表情は興味深そうに変わり、ガブモンを見つめる。

「それにしても不思議よね？如何見ても人間には見えないのに、言葉は話せるし、表情も豊かだもの。本当に驚きよ」

「うん。そうだよね。デジモンか・・・・・そう言えば、なのはちゃんはどうやってガブモン君とパートナーに成ったの？」

「私とのガブモン君の出会いわね」

すずかの質問になのはは笑みを浮かべながら、ガブモンとの出会いを話し始め、アリサとすずかは興味深そうに聞き、四人は僅かな時間の安らぎを感じながら親友との会話を楽しむのだった。

それぞれの結成（後書き）

次回予告

アリサとすずかの協力を得たなのはとガブモンは

リンディ達と合流する為に一路、翠屋を目指す。

だが、其処で現れるデジモンの反応に、なのはとガブモンは驚愕する。

一方、部隊の準備を進めるはやて達の前に、地上本部の監察官が送られてくる

現れた隊員にはやて達は驚愕する。

次回、漆黒の竜人と少女、『新たなる仲間、地上監察官』

新たに現れる者達に、はやて達は驚愕する。

新たなる仲間、地上監察官（前書き）

遅れてすいません。

ちょっと会社関係で忙しく成ったので、更新が遅れる可能性が増えました。

出来るだけ更新は早く行えるようにします。

新たなる仲間、地上監察官

アリサとすずかの協力得たなのはとガブモンはリンディ達と合流する為に、なのはの母親が開業している喫茶店ー翠屋を目指していた。

「良かったね、なのは。アリサさんとすずかさんの協力得られて。これで何とか幾つかの問題は解決の目処が立ったよ」

「うん！本当にアリサちゃんとすずかちゃんには感謝しないといけないね」

ガブモンの言葉になのはは嬉しそうな笑みを浮かべて同意を示す。なのはがアリサとすずかに協力を依頼した理由は、大きな理由で二つ存在している。

一つ目は、管理世界の一般的な技術を企業に提供する為だ。日本と言う国に提供すれば、必ず外国から圧力が発生し、思う様に技術が提供出来ない可能性が出来てしまう。其処でアリサの父親が社長のバニングス会社とすずかの後ろに在る会社ー月村重工にリンディ達は目をつけたのだ。

何せ、アリサの父親が社長であるバニングス会社は外国にまで多大な影響を及ぼす複合企業体であり、月村重工にしても日本で有数の企業。

そんな会社に圧力を掛けようものなら、経済的な損失は大きい。これに寄って、バニングス会社と月村重工ならば技術を提供しても、問題は余り無いのだ。

二つ目は、前回の戦いで回収したデジタマから生まれるデジモン達を保護できる場所と、これから仲間に成ってくれるかも知れないデジモン達を隠せる場所を手に入れる為だ。

幾らデジタマに戻ったとは言え、何れは生まれ変わりデジモン達が必ず生まれる。その時にアルハザードだけでは心許無い為に、地球でもデジモン達が隠れて暮らせる場所を手に入れたいのだ。

「一応、デジモン達が隠れる場所は探してくれるそうだけど、政府の方にも頼んだ方が良いよね？」

「うん。その方が良いと思うよ、リンディさん達と合流したら話して見よう」

「うん」

ガブモンの提案になのはは頷き、リンディ達と落ち合う予定の翠屋へと急ぎ向かおうとする。

しかし、その直後に突如としてなのはのポケットの中からアーラムが鳴り響き始める。

ーーーピピピピッ！！

『ッ！！！』

アラーム音を聞いたなのはとガブモンは驚き、なのはは慌ててポケットから機械ーフリート作のデジモンサーチャーを取り出し反応を調べ始める。

「・・・・嘘・・・・・・如何して？・・・・・・如何してこの反応が出ているの？」

「なのは！如何したの！？」

顔を青褪めさせながら呟くなのはの姿に、ガブモンはただ事ではないと判断する。
そしてそれは当たった最悪の方向に。

「・・・・反応が出たデジモンは、成熟期でも完全体でもないんだよ・・・・・究極体の反応なんだよ」

「ッ！！！究極体だって！？」

なのはが告げた事実にガブモンは青褪めた顔をしながら叫び、二人は顔を見合わせ、すぐさま反応が出ている地点へと全速力で駆け出す。

「クッ！！完全体が究極体に進化したのかな！？」

「それが可能性高いと思うよ！迂闊だったよ！その可能性を考えていなかった！」

究極体の反応が在る場所へと全力で走りながら、ガブモンとなのはは自分達の迂闊さを悔やんでいた。
前回の東京襲撃の時に、確かに究極体は地球へとやって来なかった。現れようとした究極体のスレイヤードラモンとガイオウモンはブラックと共にゲートへと消えた行ったので、最終的には一体も来ていない。
その事とフリートの報告で地球には居るのは完全体や成熟期が大体だと思っていたが、それでも究極体が現れる可能性はゼロではなかった。
完全体が究極体に進化する事も充分に在りえるのだ。究極体に進化出来るデジモンは一握り程度だが、そのデジモンが地球にやって来ていないと言う保障は存在していない。

その事に今更ながら気がついたなのはとガブモンは、自分達の迂闊さを悔やみながら走り続けていると、ガブモンが一つの事に気が付く。

「ねえ、なのは？確かこっちの方向って？」

「ッ！！お母さんの喫茶店が在る方角！？」

向かっている方向に在る場所に気が付いたなのはは悲鳴のような声を上げ、更にスピードを上げながら駆け出すと、なのはの母親が店長をやっている喫茶店ー翠屋が見えて来る。

それと共になのはの握っていた機械のアーラム音が更に鳴り響き始める。

ーーーピピピピピピッ！！！

「この反応！翠屋の中に居るのか！？」

「お母さん！！お父さん！！」

ガブモンの言葉を聞いたなのはは悲痛な声で叫びを上げ、急ぎ翠屋の入り口の扉を開け、ガブモンと共に中に入って見ると、其処には。

「パピプ～♪」

「フフフッ、美味しいの？マリンちゃん」

薄いピンク色の体を持ち、首にホーリーリングを付けたクリネオのデジモンーマリンエンジェモンに、シュークリームを食べさせて

いる翠屋の制服を着た高町桃子の姿と、その様子を穏やかな表情で見つめる高町士郎と高町美由紀の姿が存在していた。

マリンエンジェモン、世代／究極体、属性／ワクチン種、種族／妖精型、必殺技／オーシャンラブ

大きさは人の手のひらサイズしかないが、列記とした究極体のクリネオの様な姿をした愛らしい姿の妖精型デジモン。首には神聖なデジモンを表す“ホーリーリング”を身に着けられているが、生態系としてはエンジェモン系とは別の種族である。必殺技は、相手の戦意を消失させてしまうハート型の光を放つ『オーシャンラブ』だ。

ーーードガシャアン！！

「あら、なのはにガブモン君？帰って来たのね？」

「いきなり倒れて如何したの一体？」

倒れ伏しているなのはとガブモンの姿に、桃子と美由紀は呆気に取られたような声で質問するが、なのはとガブモンは答えられずに、桃子の手のひらに乗っているマリンエンジェモンを呆然としながら見つめていた。

地球でなのは達が裏工作を行っている頃。

地上本部のトップで在るレジアスの執務室では、部屋の主で在るレジアスと１０８部隊の隊長であるゲンヤ・ナカジマが険しい顔をしながら見つめ合っていた。

「・・・・・本局の上層部どもが、デジモンに対する有効な兵器を

開発したと発表しようとしていると連絡が入った。その兵器を各世界に送る条件として、八隻の艦艇をデジタルワールドに送るように代表達に進言していると言う情報も入った・・・・・先ず間違いなく更に最悪な事態が起きると予測すべきだ」

「チッ！やっぱり予想通りに成って来たか！」

「ああ、その兵器に寄って、更にデジモン達は怒り狂うだろう」

ゲンヤの怒りの叫びに同意するようにレジアスは深く頷き、執務机の上に載っている本局内部に潜んでいる地上のスパイから送られて来た資料に書かれている本局が使おうとしている兵器の写真に顔を向け、表情を険しくする。

「・・・・・名称は秘匿にされているが、先ず間違い無くお前が言っていた兵器ーギズモンに違いない。数は不明だが、最低でも５００体以上は存在していると言うのが、スパイから報告だ」

「・・・・５００体か。チッ！デジモン達は更に怒り狂うぞ。何せ自分達の同胞が兵器に改造されたばかりか。自分達もそうなる可能性を見る事に成るんだからよ」

「そうだ。これに寄って更にデジモンとの溝は深くなる。本局の打とうとしている手は、一時的には人間の安全を保障するだろうが、大局的に言えば、悪手以外の何ものでもない。本局の馬鹿どもが！！」

ーーードン！！

レジアスは怒りの声を上げると共に、執務机の上に拳を下ろし音

を立てるが、ゲンヤは諌めようとせずにレジアスの言葉に同意するように頷く。
現状でギズモンを投入すれば、確かに事態は僅かにでは在るが、人間側の方が好転する。
だが、大局的に先の事を考えれば、本局の行動は悪手以外には考えられない。
何せ、ギズモンを提供したのは真の敵であるルーチェモンと倉田達。連中が作り上げた兵器など、信用する方が間違っているが、真実を知らない人間は知らずにギズモン達を受け入れ、獅子身中の虫を懐に入れてしまうだろう。

「ギズモンの導入が決まったら、各世界の首都や大都市に配備される事に成る。そうなれば、奴らが動き出した時に都市は何も出来ずに崩壊する。信用していた兵器が行き成り牙を向く。動揺する以外に行動は取れんだろう」

「同感だ。で、レジアスよ？おめえはギズモンをクラナガンや他の都市に入れる気は在るのか？」

「在る訳は無い。だが、機動六課が結果を出さねば、それを理由に本局は無理やりでもギズモンをミッドチルダに送り込んで来る」

「・・・・全ては八神達次第かよ」

「腹立たしいが、そうだ」

ゲンヤの言葉にレジアスは苦虫を噛み潰した顔をしながら同意した。
レジアスとしては出来れば嫌っているはやての部隊など支援せずに、自身がこの様な事態に対して秘密裏に作り上げた部隊を表に出

して戦わせたいのだが、現状でその部隊を完全に動かす事は出来ない。
その部隊が動けば、確実に本局の上層部達は部隊を潰す動きを行う事が分かっているからだ。

（本局の愚か者どもが！デジモンと友好を結ぶ事が上手く言っていれば、管理局の人材不足が解消されるばかりか、管理局は比類なき最強の味方を手に入れられたと言うのに！逆のデジモンとの戦争を引き起こしおって！！）

デジモンとの友好さえ成立していれば、後の必ず戦う事に成る七大魔王達に対抗出来るばかりか、その後も管理局はかなり問題をデジモンのおかげで解消出来ていたとレジアスは思っていた。
その為に秘密裏にデジタマを回収し、ゲンヤとも手を結んでいたと言うのに、本局のたった一度の愚かな行動で全てが無に帰してしまう寸前の状況まで追い込まれてしまった。
しかし、レジアスはその程度で自身の夢を諦めるほどに諦めは悪くなかった。

（機動六課はゲンヤの報告とスパイからの情報で信用出来ると判断している。実力も在るメンバーの部隊で、オーリス達が活躍すればミッドの人々のデジモンに対する認識を変えられる可能性が在る。時間はかなり掛かる上に、認識が変わるまでオーリスやあの子には辛い思いをさせてしまうが、それ以外に打てる手は地上には存在していない・・・・・あの子には本当に辛い思いをさせてしまう）

レジアスはゲンヤに顔を見せないように手を顔の前で組み、深い苦悩に満ちた表情をした。

（あの子は実力が在るとは言え１０歳の子供でしかない。現在の状

況はあの子にはかなり辛い環境だ。オーリスが支えたとしても、あの子が耐えられる可能性は低い・・・・・だが、あの子以外に機動六課に与えられている任務を故なせる者は部隊にはオーリスを除いて存在していないのも事実だ。全てはあの子の心とオーリスのフォロー次第だ。頼むぞ、オーリス）

そうレジアスは内心で自身の娘に言葉を送ると、椅子から立ち上がり窓の外の景色を見つめながら、ゲンヤの声を掛ける。

「・・・・クラナガンに一番近いゲートタワーの破壊に赴くのは四日後。その結果が地上の運命を左右する。ゲンヤ、失敗は赦されんぞ」

「・・・・・ああ、やるだけの事はやるさ。俺だってまだ死ぬ気はねえよ。必ずゲートタワーを破壊するさ」

「・・・・・そうなる事を願っている」

レジアスはゲンヤの言葉にそう答えると、遠くに、クラナガンから数十キロの位置に存在している巨大な黒い塔ーゲートタワーを執務室の窓から見続けるのだった。

レジアスとゲンヤが地上本部で密談している頃。

はやて達の部隊ー機動六課の部隊長室では、退院したはやてがリインとリインフォース、そして綺麗な黒髪を腰辺りまで伸ばして、機動六課の制服を着た女性が、目の前に置かれている書類を目まぐるしく処理していた。

「部隊長、此処が間違っています。すぐに直さないと監察官が来た時に指摘されるので、すぐに修正して下さい」

「おおきにな。レナ」

「それが私の仕事ですので、お気に為さらない様にして下さい」

女性ー表向きは、はやてが事務員として雇ったとされている人物ーレナ・セフィルは、はやてに言葉を告げると共に自身の執務机に戻り、リインやリインフォース所か、はやてさえも上回るスピードで書類を処理して行く。

その様子を険しい顔をしながらリインフォースはレナを見つめるが、レナは全く気にせずに書類を次々と処理して行くだけだった。

（一体何者だ？主は病院で知り合った者だと答えたが、此処数日見たところ、一般人には思えん。シャマルの話ではリンカーコアは存在していないようだが、立ち振る舞いには隙が見えない）

リインフォースや守護騎士であるシグナム達は、レナの正体が気になって仕方が無かった。

主で在るはやては、レナは病院で出会った人物だと答えるばかりで正体を告げる事は無く、妹であるリインもはやてと同じ言葉を言うだけで、答える様子は全く見せないが、リインフォース達にはレナをそう簡単には信用をする事は出来なかった。

現在の状況は、何処に本局の上層部の手の者達やルーチェモン達の監視が在るか分からない状況。

その事が今回の事で良く分かったリインフォース達は、はやての負担を掛けない為にも、警戒だけは最大限に行い、機動六課に隊員として入って来たメンバー全員にも、今一度身辺を洗いざらい洗ったほどだが、レナの正体だけは調べても分からなかった。

（過去のデータは確かに存在していた。だが、其処にいたと言う証拠は見つからなかったと、シグナムは言っていた。警戒だけは怠らない様にすべきだな。もしも敵の手の者ならば、主が悲しんだとしても排除する）

その様にリインフォースはレナに対する対策を決めると、再び書類作業に戻ろうとするが、はやてがその前に声を掛ける。

「そう言えばリインフォース？」

「何ですか主？」

「アンタの部隊はゲンヤさんの娘さん達を加える事で問題はあらへんけど、フェイトちゃんの部隊ーライトニングはどないや？本来ならばフェイトちゃんが保護していたエリオが来る予定やったけど、一向に来る気配があらへん。私が入院している間に何かあったんか？」

はやてがリインフォースにそう質問するのも当然だろう。

はやてが退院してから早一週間。本来ならばライトニング分隊の隊員として来る筈のエリオ・モンディアルと言う名前の少年が一向に来る気配が無いのだ。

精神的な原因で未だに病院に入院しているフェイトはともかく、他の部隊員達は、はやてが退院するまでに集まったと言うのに、エリオだけが来ていないのだから、疑問に思うのも当然だろう。

そのはやての質問にリインフォースは表情を険しくし、質問に答え始める。

「・・・・エリオが来れないのは、上層部達が邪魔をしているから

です。理由はお分かりに成ると思います」

「・・・・・やっぱり、なのはちゃんが言ったとおりに動き出したんやな。人造魔導師計画が？」

「・・・・はい。クロノ提督達の調べで、上層部達が幾つかの研究所に秘匿で資金を送っている事が判明し、すぐさまエリオは保護しましたが、上層部の手の局員と思われる者達が狙っている為に、エリオはミッドに来れない現状です」

「・・・・・本気で連中は碌な事せいへんわ」

はやては本気で頭が痛そうに言葉を呟き、リインとレナも表情を険しくするが、レナは自身の席から立ち上がり部隊長室の扉へと歩き出す。

「どうやら個人の情報の話しのようですね。私は少し退室します」

「すまへんなレナ」

「気にしないで下さい。では、失礼します」

レナははやてに言葉を言うと部隊長室を出て行き、それを確認したはやてはすぐさまリインフォースに顔を向ける。

「・・・・・上層部はエリオの体のデータから人造魔導師研究を完成させる気なんやな？」

「そう、クロノと三提督は判断しています。何とかこちらに送って安全を確保したいようですが、少し状況が悪いので、送れるかどう

かも怪しい状況です」

「・・・・こっちの戦力を減らすの目的と考えるべきやろうな」

「酷いです！本局はもうリイン達を敵です！！」

「まあ、連中としては私らには早く死んで欲しいのも在るんやろうな」

元々支援を受ける事が出来ない状況だった筈の機動六課だったが、ゲンヤのおかげで地上の支援が受けられる状況に成った。

その事が完全に予想外だった上層部達からすれば、自分達の予測を超える事態に慌てたのだろう。

何故ならば地上との不仲も増していた筈の現状で、本局の局員で構成されている筈の機動六課が地上の支援を受けているのだから、完全に予想外も良い所だ。

その事も在るが、エリオはフェイトと同じ数少ない人造魔導師の成功例。

人造魔導師研究を行うにはこれ以上のサンプルと呼べる存在は存在しない。だからこそ、上層部達はエリオを狙い始めたのだ。その事を逸早く察知したクロノや三提督はエリオをすぐさま保護したが、機動六課に送る事は難しい状況に成っていた。

「何とか隙を見てエリオを送るそうですが、四日後の戦いには間に合わないと思った方が良いでしょう」

「・・・・現状の集まっている戦力と１０８部隊の人達、それと本部から来る予定の監察官達で最初の戦いは乗り切るしかあらへんな・・・・・難しいけど作戦を考えて事に挑むしかあらへんわ」

「それしかないでしょうね」

はやての言葉にリインフォースは頷き、ゲンヤと地上から送られて来たクラナガンの近くに在るゲートタワーの情報を調べ始めるのだった。

はやて達が作戦を考えている時。部隊長室から出たレナは機動六課の通路を歩き、機動六課内部で目まぐるしく動いている部隊員達を興味深そうに眺めていた。

（人間とは難しいものだな。はやてやリイン姉さんから色々と教えられたが、やはり人間として振舞うのは難しい。もっと勉強して怪しまれないようにしなければ）

レナ・セフィルと名乗っている女性だが、その正体は、はやてが持っていたデジタマから孵ったデジモン。それこそがレナの真の正体だった。

そのはやてのパートナーが人間の姿に返信しているのは、ひとえに本局に実験動物として捕らえられない為とはやてとの絆の為だった。

生まれた当初、はやてはすぐさまレナの存在を隠しながらも、リンディの言葉を信じて育て続けた。その結果、レナは早い段階で成長期へと進化し、その成長期が持っていた能力を使って人間の姿に変装してはやての傍に居られるように成っていた。

（上手く人間に化けているつもりだったが、リインフォース達は怪しんでいる。出来るだけ私の存在は秘密にしておかねば成らんし、やはり勉強が必要だ。もっと頑張らねばな）

そうレナは内心で決意を新たにすると、話も終わった頃だと思い、部隊長室に戻ろうとするが、すぐにその顔は険しくなり、近くの窓ガラスから外を眺め始める。

「・・・・・デジモンの気配が二つ近づいて来ている・・・・・敵にしては気配が穏やか・・・・・敵ではないのか？」

窓ガラスの外を見ながらレナは疑問の声を上げるが、答えは見えずに疑問だけが浮かび続ける。

しかし、すぐにそんな場合では無いと思い、急ぎ部隊長室へと向かい出す。

ーーービュン！！

外を眺めていた筈のレナの姿が窓の前から突如として消えると、十秒もしないで部隊長室の前にレナは戻っていた。

（ハッ！行けない。唯の人間は此処まで早く動けない！！完全にミスをしてしまった！！）

自身のミスに気が付いたレナは慌てて辺りを見回し、誰も見られていない事に安堵の息を吐く。

「・・・・・良かった。誰も居ない・・・・・今度から気をつける様にせねばな」

そうレナは呟くと、自身が感じた気配の事を説明する為に、部隊長室の中へと入っていた。

機動六課隊舎外。其処には機動六課を興味深そうに眺める桃色の髪に地上本部の制服を着て肩に白い小さな竜を載せた１０歳ぐらいの少女と、同じように興味深そうに眺めている色々な荷物を抱えた鎧武者の様な鎧を来た獣型のデジモンが存在していた。

「此処が今日から私が働く事に成る部隊だよねリュウダモン？」

リュウダモン、世代／成長期、属性／ワクチン種、種族／獣型、必殺技／兜返し、居合刃（いあいじん）

額に旧式なインターフェースをもつ為、デジモンが発見される以前の実験用の“プロトタイプデジモン”ではないかと推測されている獣型デジモン。防御力の高い和風の鎧を身にまとっているが、動きは軽快で、敵の懐に果敢に飛び込んで戦う。戦うほどに戦いの業を修め、強大な敵デジモンをも恐れない魂と潔さ、武士気質（ぶしかたぎ）を持っている。実験の時、デジコア（電脳核）の最も深い部分に隠されたと言われるデータは、日本の神話における“竜”や“武将”などの猛々しい戦闘データであり、強大なデジモンに成長する可能性をもつと言われている。必殺技は、甲冑で敵の攻撃を受け止め、反撃する『兜返し』に、口から鉄の刃を放つ『居合刃（いあいじん）』だ。キャロのパートナーデジモン。

「ああ、オーリスさんの話だとそうらしいぞ」

「キュル～！！」

桃色の髪の少女ーキャロ・ル・ルシエの言葉に、リュウダモンとキャロの肩に乗っている白い竜ーフリードリヒ、愛称フリードは同意の声を上げ、キャロは自分達の背後に立っているオーリスとリュ

ウダモンと同じ様に荷物を抱えた白いパペットの様なデジモン―ポーンチェスモン（白）に顔を向ける。

ポーンチェスモン（白）、世代／成長期、属性／ウィルス種、種族／パペット型、必殺技／ポーンスピア
チェスゲームのデータから誕生したパペット型デジモン。功績を上げると成り上がり、究極体クラスもの力を持つことさえ可能という性質をもつ謎を秘めた一般歩兵のデジモン。必殺技は、装備している槍で相手を突く『ポーンスピア』だ。オーリスのパートナーデジモン。

「此処で良いんですよね？」

「そうよ。まだ、真新しい隊舎だから驚くけど、確かに此処が今日から私達が働く部隊よ」

オーリスは柔らか笑みを浮かべながらキャロの質問に答えた。
その答えにキャロは再び機動六課の隊舎を眺め始め、オーリスはその肩にソッと手を乗せる。

「キャロ。当初の任務内容どおり、貴女の守護竜の召喚とリュウダモンが究極体に進化するのは、相手が究極体クラスの力を持っているか、部隊が本当に危機に陥った時だけ。それ以外ではフリードと完全体までだけで状況を凌ぎなさい」

「分かっています。レジアスさんや部隊の皆にも言われていますから、絶対に破りません」

「良い答えよ。私も出来るだけ力を貸すけれど、戦いの場では何が起こるか分からないからね。気をつけなさい」

「はい！」

「キュル～！」

オーリスの言葉にキャロとフリードは答え、リュウダモンも頷き、オーリスは嬉しげな笑みを浮かべる。

しかし、その表情はすぐに険しく変わり、自身のパートナーで在るポーンチェスモンに顔を向ける。

「警戒だけは怠らないように、何が在ってもすぐに動けるようにしておきなさい」

「了解」

オーリスの命令にポーンチェスモンは頷く様に言葉を言い、辺りの警戒を行いながらオーリス達と共に機動六課隊舎内部へと入って行った。

その頃、レナの報告を聞いたはやては表の監視を行っていたサーチャーから送られていた映像を、会議室内部で機動六課の主要メンバー達と共にオーリス達の姿を見ていた。

その映像を見ていた者メンバーは殆どが困惑の表情を浮かべ、オーリスの横に立っているポーンチェスモンと荷物を大量に抱えているリュウダモンの姿を見ていた。

ポーンチェスモンとリュウダモンは紛れも無くデジモンだと映像を見れば誰もが分かる。だからこそ、彼らは困惑していた。地上本部の監察官として来る四名の局員の事はゲンヤから聞いて分かって

いたが、まさか戦う敵であるデジモンが来るとは思っても見なかったのだ。
その動揺を感じたはやては全員の困惑を治めるように声を上げる。
「皆落ち着くんや！確かに映像を見た限りはデジモンや！だけど、地上から監察官として来た人達を無闇に否定したらあかん！今の私らは地上の支援が無いと危ないんやからな！」
はやてがそう叫ぶと、困惑していたメンバーの困惑は落ち着き始め、映像に映っているポーンチェスモンとリュウダモンを眺め始める。
その姿にはやては安堵の息を吐き、自身も映像に映っているポーンチェスモンとリュウダモンを眺めて始めながら、レジアスの思惑を考え始める。
（レジアス中将の狙いは人々のデジモンの認識を変えることやろうな。強力な魔導師で構成された機動六課内部で、魔力も無いオーリス三佐がデジモンを使って結果を作れば、僅かずつでも人々の認識は変わって行く。ミッドだけやも知れへんけど、少しでも人々の認識を変える為に行動する気やな）
はやてはレジアスがオーリスとポーンチェスモン達を送って来た狙いをすぐに察知するが、その表情はすぐに険しく変わり、オーリス達と共に事務員に案内されているキャロの姿を見つめ始める。
（・・・・この子も地上本部の監察官見たいやけど・・・・何処かで見た気がするな？・・・・何処やったけ？）
キャロの姿にはやては内心で疑問の声を上げるが、答えが出ずに悩み続けていると、オーリス達がはやて達が居る会議室の前に辿り

着き、慌ててリインが映像を消し、オーリス達が入って来るの待ち始める。
　そして全員の視線が会議室の入り口に向いた瞬間に会議室の扉が開き、オーリス達が姿を現す。

「失礼します。地上本部から監察官として来たオーリス・ゲイズ三佐です」

「同じく地上本部から来たキャロ・ル・ルシエ一等陸士です！」

「ポーンチェスモン。階級は存在せず、オーリス三佐の使い魔として登録されている」

「リュウダモン。キャロの使役獣として登録されているぜ」

「キュル～！！」

　オーリス達はそれぞれはやて達に敬礼を行いながら、自分達の紹介を行い始め、はやても椅子から立ち上がり、オーリス達に敬礼を行う。

「機動六課部隊長の八神はやて二等陸佐です。副部隊長として登録されているゲンヤ・ナカジマ三等陸佐は地上本部に呼ばれていますので、現在は居ません」

「その報告は既に本部から受けていますので、気にしないで下さい。それと幾つか言いますが、私達は表向きは貴女の部下として動きますが、結果が出なければ即座に貴女を部隊長の椅子から引き降ろし、ゲンヤ・ナカジマを部隊長にする権限を持っている事をお忘れ無きように。それと私達の使い魔に付いては一切の質問等はご遠慮頂き

ます。地上本部のトップシークレットに当たりますので」

「了解しました。ゲンヤ・ナカジマ副部隊長が戻り次第に、四日後の最初のゲートタワー攻略の作戦を決めますので、それまでは機動六課内部を見回って居て下さい」

「了解です。今後宜しくお願いします。八神部隊長」

「此方こそ、オリース三佐」

オーリスとはやては言葉を言い合うと、互いに左手を差し出し握手を交し合うが、その表情は互いに険しい表情のままだった。

新たなる仲間、地上監察官（後書き）

次回予告

オーリス達と合流したはやて達は、それぞれ思いを胸に抱き

最初のゲートタワー破壊任務に赴く。

次々と機動六課に襲い掛かるデジモン達に苦戦するはやて達。

その時に竜の咆哮が空に響く。

次回、漆黒の竜人と少女、『二頭の竜！白銀の竜と鎧竜！！』

竜の咆哮が木霊する時、一つの覚醒が起きる

二頭の竜！！白銀の竜と鎧竜！！前編（前書き）

更新遅れて申し訳在りません。

デバイス紹介

ブーストキャリバー、使用者／スバル・ナカジマ
バーストキャリバー、使用者／ギンガ・ナカジマ

分類／インテリジェントデバイス
クイントがデジモンに進化出来るように成った事で気が付いたローラブーツの弱点を直すと事をコンセプトに作られたアルハザード製のデバイス。
攻撃時にローラの収容機能が追加され、小回りもかなり効くように成っている。
基本的な所は、原作でスバルが使っていたマッハキャリバーと同じで、セカンド、エクセリオンももちろん存在している。

しかし、使われている金属はクロンデジゾイド製なので、並みのデバイスに使われている金属よりも遥かに頑丈。
因みに、二人に使われてるクロンデジゾイドは、ブルーデジゾイドと呼ばれる軽い機動性に優れたクロンデジゾイドで在る

二頭の竜！！白銀の竜と鎧竜！！前編

機動六課隊舎内部会議室。
その部屋では地上本部から戻って来たゲンヤと共に機動六課の主要メンバーと１０８部隊の陸士達、そして地上本部から監察官としてやって来たオーリス達が集まり、四日後に控えた戦いについての作戦を話し合っていた。

「現在の分かっている情報では、ゲートタワーの周りに発生しているＡＭＦの有効範囲は凡そ５００メートル前後です。それ以外の場所からはＡＭＦは感知されていませんが、深い森に辺りが覆われているので、視界はかなり困難を極めます。また、ゲートタワーの周りに居るデジモン達の多くは、昆虫に似た形と植物の様な姿をしたデジモン達だと判別出来ました。力は増大している考えて任務に当たるべきです」

「ご苦労様やシャーリー」

状況を説明してくれたシャリオ・フィニーノ、通称シャーリーにはやては礼を告げ、映像に映っているゲートタワーの周りのデジモン達の映像を見つめながら話し始める。

「このゲートタワーの周りに居るデジモン達の数は凡そ二十体前後やと、現在の調べで判別しましたけど、四日後には更に数体増えていると考えるべきです。それと同時にデジモン達が進行する可能性が増えてしまうと思われます。そうなる前に私らはこのゲートタワーを一番に破壊し、クラナガンの安全を確保しなければ不味い」

「現在、クラナガンや他の都市は、強力なバリアが展開されていま

すがデジモン達の進撃を止められる可能性は低いです。また、他の地上での有数な部隊は他の都市との警護で援護をする事は出来ません」

「ありがとうございます、オーリス三佐」

オーリスの地上の説明にはやては礼を告げると、すぐに映像を別の物に変え、作戦を説明し始める。

「現在の機動六課が行える作戦としては、シグナム副隊長、並びにリインフォース隊長がＡＭＦの有効範囲内に飛び込み、デジモン達をＡＭＦの範囲内から出来るだけ外に誘き出す。そしてＡＭＦの有効範囲内からデジモンが出て来たら、１０８部隊の隊員達が仕掛けたバインドや罠が在る場所に連れて来て本格的な攻撃を開始。この部隊の援護には私とオーリス三佐の使い魔も同行して援護します。また、残っているメンバー達はこの隙に手薄になったゲートタワーの破壊を行います。ヴィータ副隊長は地上から送られて来た装備を、他のメンバー達に教えるように」

「了解」

はやての命令にヴィータは頷き、ヴィータと動向する予定のギンガ、スバル、キャロも頷く。

その様子にはやては頷くと、作戦の概要を資料で注意深く見ていたオーリスとゲンヤに顔を向ける。

「以上が私の考えた作戦です。ゲンヤ副部隊長とオーリス三佐にはロングアーチから常に状況を調べて貰い、逐一情報を隊員達に伝えて貰う予定です。敵がどの様に動くのかは、デジモンの事を調べていたゲンヤ副部隊長とオーリス三佐が適任だと思いますので」

「・・・・確かにそうですね。デジモンについては、私とゲンヤ副部隊長が適任でしょう。私にはデジモンの情報を調べられる機械がありますので」

「フム、現在じゃこの作戦が適任だな。敵の多くが昆虫型と植物型なら、炎を使えるシグナムと多くの魔法を所有しているリインフォースが一番だ。惜しむらくは高速機動型の戦闘が出来るフェイトの嬢ちゃんいれば良かったが、シャマルの報告で戦闘には役に立ちそうに無いらしい」

「私としても現在の彼女の精神状況は聞いています。戦場に出すのは無駄死にを呼ぶ以外には無いでしょう。部隊の連携を乱す可能性が在る彼女は、戦闘から外す事を進言にするつもりでした・・・八神部隊長は彼女を如何するつもりです？」

オーリスがこう質問するには訳が在る。

オーリスの知る限り、はやては身内を庇ってしまう癖が在ると判断していた。通常の状態でも身内の不始末を庇うのは部隊としては本来不味い事だ。特に現在の状況では尚更身内を庇うのは不味い事態を呼ぶ事に他ならない。

だからこそ、オーリスはこの状況でも身内を庇う事をはやてがするのかどうか確認する為に、質問を行ったのだ。

その事を理解していたはやては、オーリスの質問の裏に隠されている意味を理解して答える。

「答えは既に出ています。今回の戦闘ではフェイト分隊長は外します。そして彼女が今回のゲートタワーを破壊した後にも立ち上がらなければ、彼女は分隊長の椅子から降ろし、シグナムを隊長にして、他の副隊長は１０８部隊の中から新たに選出する予定です。或いは

地上本部から新たに人員を送って貰う事も視野にゲンヤ副部隊長と一緒に考えています」

『ッ！！！』

はやての事実上のフェイト更迭の可能性を考えた言葉に、はやてと親しい者達とシグナム達は驚いた。身内の事を大切に思っている筈のはやてが、親友で在るフェイトを切り捨てる発言を行ったのだから、驚くのも当然だろう。

しかし、はやての言葉にオーリスとゲンヤだけは満足げに頷く。現在の状況では足手纏いにしか成らないフェイトを、分隊長のままにして置くのは無駄としか言えない。もし此処ではやてがフェイトを庇う発言を行っていたら、オーリスのはやての評価はマイナスにしかならなかった。

「結構です。その様な考えを既に浮かんでいるのならば、私も中将にその胸を伝えて、フェイト分隊長の変わりの人材を探す様に頼んで見ましょう。Sランクオーバーの人材はそう簡単には出せませんが、出来るだけ部隊の足並みを乱さない人材を送れるようにします」

「宜しくお願いします」

はやてはオーリスに礼を言いながら頭を下げる。

本当は、はやてとの本心としては出来ればフェイトを切り捨てたくは無い。だが、このままフェイトが立ち上がらなければ、フェイトは足手纏い以外の何ものでもない。

（フェイトちゃんが立ち上がれば機動六課の戦力も上がるけど、そんな時間はもう無い。最初のゲートタワーだけでも戦力が足りへん状況や。もう戦力を遊ばせられる状況や無い。フェイトちゃん。も

う甘えは赦されんのや。何とか立ち上がって欲しいけど、出来なければ私はフェイトちゃんを切り捨てるで）

既にはやては覚悟を決めていた。これからの戦いはもはや事件ではなく戦争。

戦争に甘さなど赦されない。ほんの僅かな甘さでクラナガンの罪の無い人達が死んでしまう可能性も在る。それを背負うなどと軽はずみに言えば、第九管理世界の悲劇しか待っていない。

その事をなのはの言葉と第九管理世界での経験で嫌と言うほどにはやては味わった。

（私は何が在っても、レナとも普通に暮らせる世界を作り上げたる。その結果で家族や親友に嫌われる覚悟ももう出来たわ。フェイトちゃんも早く覚悟を決めへんと、本当にブイモン君を失ってしまうで）

そうはやては内心で聖王病院に入院しているフェイトに向かって言葉を言うと、より作戦を纏める為に、オーリスやゲンヤ、そして直接戦うメンバー達に意見を聞き始めるのだった。

そしてその日の夜。

ゲンヤが執務室として使っている部屋で、ゲンヤは自身の娘であるギンガとスバルと話をしていた。

「・・・・・まあ、もう俺は何も言う気はねえ。お前達はクイントが送って来たシューティングアーツの資料を全部マスターして、デバイスも使いこなせる様に成った。レジアスが作った部隊で訓練も行ったし、やれる事は全部やったんだ。後はお前達次第だ」

「うん！」

「分かっています、父さん」

ゲンヤの言葉にスバルとギンガはそれぞれ答えながら、自分達の首に掛かっている待機状態のデバイスを見つめる。

四年前に母親であるクイントと再会してすぐに、ギンガ達の住んでいる家にクイントから二つの贈り物が届いた。

一つはクイントが書いたと思われるシューティングアーツの完成系が詳細に書かれた資料。

その資料を見ながらギンガとスバルは訓練を重ねた。

もう一つは二人がそれぞれクイントの形見として受け継いでいた片側のリボルバーナックルと同じリボルバーナックル、そして二人の両足に装備される為に作られたインティリジェントデバイスが二つ送られて来たのだ。

だが、リボルバーナックルはともかく、送られて来たデバイス―スバルの『ブーストーキャリバー』とギンガの『バーストーキャリバー』は規格外としか言えなかった。

はっきり言ってしまえば、両方とも既存のローラーブーツの十数倍の出力が在る上に、未知の金属で作られていた為に、当時の二人の実力では使い手の力不足その物としか言えないほど悲惨な状況を何度も起こしていた。

しかし、二人は寧ろそれをクイントに二人に課した試練だと思い、練習を繰り返した。

“自分の敵と戦うのならば、そのデバイスを使いこなすのが最低の条件”

二人はその事を送られて来た資料とデバイスから読み取り、諦めずに練習を重ね、ゲンヤの伝手でレジアスが作り上げていた部隊でも訓練を行ったりした。

その結果、四年の月日は掛かったが、完全にデバイスを相棒とし、

クイントが送って来た資料どおりに訓練を重ねたおかげで、成熟期レベルのデジモンには遅れを取らないほどの実力を身につけていた。

「これからの戦いは本当に命を賭けた戦いだ。ほんの僅かな油断は確実に死を呼ぶ。デジモン達は憎しみを持って挑んで来るんだ。覚悟を決めて戦えよ」

「充分に分かっているわ、父さん。デジモンの恐ろしさは味わった事があるもの」

「絶対に油断しないよ。その為に頑張って特訓を続けたんだから」

ギンガとスバルは決意に満ちた声でゲンヤの言葉に答えた。

ギンガとスバルは四年前にデジモンに殺され掛けた事が在る。その時はクイントが駆けつけて、二人を助けたが、今回はクイントは来る事は出来ない。その事は二人とも分かっているが、それでも戦うつもりだった。

「本当の敵との戦いの時に、母さんの足手纏いには絶対に成らない。私は母さんを超えるんだから」

「もうあの時のような足手纏いにはならないよ。その為に特訓したんだから」

「ヘッ、言う様になったな。若い頃のクイントみたいだぜ」

二人の言葉にゲンヤは昔のクイントを懐かしそうに思い出した。

今の二人は正しくクイントと自分の娘だとハッキリ言えるほどの決意に満ちた顔を浮かべている。

その事がゲンヤには堪らなく嬉しかった。

（クイント。お前と俺の娘達が戦う。お前は今は手を貸せねえだろうけどよ。二人のサポートはしっかり俺がやってやる。お前ともう一度会う為にも、絶対に二人は死なせねえよ）

そうゲンヤは内心で、地球で裏工作を行っているで在ろうクイントに決意を告げるのだった。

ゲンヤとギンガ、スバルが話している頃、機動六課の部隊長室でも事は起きていた。

部屋の中に居る四つの影ー部屋の主で在るはやてと、その秘書として働いているレナ・セフィル、そしてオーリス・ゲイズとそのパートナーであるポーンチェスモン（白）の四人は、互いに険しい顔をしながら見詰め合っていた。

常人からすれば息が詰まるほどの空気に満ちた中、オーリスが険しい表情のままはやてに質問する。

「・・・・八神部隊長。彼女はデジモンですね？」

「良く分かりましたね。他の皆には気付かれへんやったんやけど」

「確かに普通の局員では彼女の偽装を見破るのは不可能でしょう。私もデジモンとの付き合いが長さがなければ、気付かなかったでしょうからね」

オーリスは素直な賞賛をはやてとレナに告げた。

オーリスも気が付けたのは自身のパートナーとの付き合いの長さのおかげと、ポーンチェスモン（白）の報告が在ったからに過ぎな

い。それほどまでにレナの偽装は見事だったのだ。

「予想以上にデジモンとの絆が生まれている様で安心しました。これならば成熟期への進化も早い段階で起きる可能性が高い。戦力に成るのならば、地上でも護れる動きが取れますからね」

「それは詰まり、デジモンを戦力として考えていると言う事ですか？」

「今回の戦争には、人間だけでは絶対に勝てません。今は互いに憎しみ合っていますが、我々地上は何としてもデジモンとの融和を行うつもりです。その為には嫌でも目立つこの部隊でデジモンが戦果を上げるのが一番ですからね」

「やはりそう言う考えでしたか」

オーリスの言葉にはやては自分の考えが間違っていなかった事を確信した。

機動六課は本来在り得ないほどの戦力が集まった部隊。その上、その中には本局のエースとして活躍したはやて達が所属している。

否が応でも機動六課が戦果を上げれば目立つ。その部隊でデジモンが活躍すれば、人々は否が応でも再びデジモン達について考えるだろう。

「本局はデジモンの使っている私達を否定しようと動く筈です。ですが、私達はそれを逆に利用し、デジモンを人々が味方と思う様に情報を操作する予定です。時間は掛かり、必ず地上本部と私達に誹謗中傷が来るでしょうが、私達は何としてもデジモンとの融和を行います。その覚悟を持って、私達はこの部隊に来ました」

「例え人間が歩み寄っても、デジモン達はもう人間の味方をしないと思います。この戦争を仕掛けたのは人間なんですから。そう簡単には互いの溝は修復出来ない筈です」

「それに関しては充分過ぎるほどに分かっています。ですが、何もしないよりも、出来る事から行うべきだと、地上は思っていますよ。何もせずに絶望の道を歩む気は在りません」

それはオーリスの思いと地上の決意だった。

現状では本局の行いのせいで限り無く不可能に近い行為。しかし、それをオーリス達は必ず実行をするつもりだった。

「今回の事件の全ての原因は私達管理局に在ります。その罪は全てが終わった後に必ず裁かれるでしょう。ルーチェモン達に滅ぼされなくても、私達管理局に未来は在りません。成らば、後の世界の為にもデジモンと人間の融和だけは必ず成功させなければいけません。結果はどうなろうと、私達は実行します。私以外の地上の同志達も全員同じ考えです」

「なるほど、先の事を見据えての行動ですか？」

「そうです。全てはその為の行動です。その結果がより良き方向に向かう為にも、必要な事です」

「しかし、それならば何故、あの子供を戦わせる。私達はともかくあの子は危険では無いのか？」

オーリスの言葉にレナは疑問に満ちた顔をしながら質問した。

レナの言う子供とは、もちろんキャロの事である。レナの見た所、キャロとリュウダモンの絆はかなりの物であろうと判断出来たが、

それでもこれから機動六課が向かうのは、凄惨としか言えない戦場。
その様な場所に、子供で在るキャロが耐えられるとはレナもはやても思えなかった。
だが、オーリスは何処か苦悩に満ちた顔をしながらも、誇らしげな声を出す。

「あの子達は心配在りません。あの子達に勝てる者など、管理局には居ないでしょう。あの『漆黒の竜人』にライバルと認められた子供ですからね」

「ハアッ！？」

「？」

オーリスが告げた事実にはやては信じられないと言う声を上げ、ブラックの事を良く知らないレナは疑問の表情を浮かべた。
その様子にオーリスは納得しながらもゆっくりと頷き、キャロの過去を語り始め、はやてはその過去に驚愕するのだった。

そして地上の運命が決まる日。
朝日が登ると共に朝日に照らされ始めた深い森。その森の奥深くに存在するゲートタワーの周りに数多くの昆虫型や植物型デジモン達が静かに眠りついていた。
その場所の近くの木々の間に、囮役の任を与えられたシグナムとリインフォースは魔力と気配を消して目に見える範囲のデジモン達の情報をロングアーチに送り続けていた。

「以上が見える範囲でのデジモン達の姿だ。それ以外のデジモンは

見える範囲では確認出来ない」

『了解です・・・・・情報を検索した所、その場にいるデジモン達は、やはり昆虫型と植物型が大多数見たいですね。しかし、完全体が五体しか居ない事は良い情報です。そのまま本隊の準備が整うまでは、警戒を続けて下さい』

「了解。引き続き警戒を続ける」

モニター映っていたオーリスにシグナムはそう告げると、モニターの映像を切り、再び浅い眠りについているデジモン達を見つめ始める。

「・・・・始まるな」

「・・・・あぁ、ベルカ戦争以来の私達の戦争が始まる。最も今回の戦争は、互いの滅びを掛けた戦争だが」

「そうだな。本当ならば共に戦うべき者達と戦わねば成らんとは・・・・管理局が原因とは言え、酷く辛いな」

「仕方が無い事だ、シグナム。私達にはもう迷う事さえ赦されない。招いた結果は、どうなろうと変わる事は無い」

「分かっている。だが、それでも後味は悪い」

シグナムは自身の視界の中で、浅く眠り続けているデジモン達を辛そうに見つめた。

目の前で浅くながらも眠っているデジモン達。だが、その心の内では、人間への絶対の憎しみの炎が燃え盛っている。

そしてその憎しみの炎をデジモン達の心に生み出したのは、紛れも無く管理局の身勝手な行いこそが原因。管理局の欲望の犠牲者でしか、デジモン達は無いのだ。
その事が分かっているシグナムとリインフォースは、本当に辛そうに目の前で眠っているデジモン達を見つめながら、それぞれデバイスを構え出す。

「・・・・そろそろ時間だ」

「ああ、私が先ず広域魔法で、奴らの足並みを乱す。その隙に成熟期のデジモンを上手く攻撃して倒せば、奴らの多くは私達を追って来る。その後は手筈通りに罠の場所までデジモン達を誘き出す」

「分かった・・・・・死ぬなよ祝福の風」

「それは此方のセリフだ。生きて主の下まで、必ず帰るぞ烈火の将」

シグナムとリインフォースは互いに笑みを浮かべながらそう言い合った。
そしてすぐさま真剣な表情を浮かべて、デジモン達に二人が顔を向けた瞬間。

『全ての準備は整った!!総員!!作戦を決行しろ!!』

「行くぞ!!」

「了解だッ!!」

通信機から聞こえて来た声に、シグナムとリインフォースはすぐさま応じると、バリアジャケットを身に纏い、すぐさま空高くへと

舞い上がって行く。
その動きに、浅い眠りに入っていたデジモン達は、すぐさま目を覚まし、自分達の頭上に居るシグナムとリインフォースの姿を目撃した瞬間。

『キシャアァァァァァァァーーーーー！！！！！』

森の木々を揺らすほどの叫びを響き渡らせ、トンボの形に似たデジモン―ヤンマモン四体と、カマキリの様に両手に刃を持って、背中に羽を付けたスナイモン三体が凄まじい勢いでシグナムとリインフォースに向かい出した。

ヤンマモン、世代／成熟期、属性／データ種、種族／昆虫型、必殺技／サンダーレイ
オニヤンマのデータから生まれた昆虫型デジモン。見た目は完全にトンボの形をして、体は細く見えるが、その実は硬い甲殻で体は覆われている。必殺技は、１００万ボルト以上のパワーがある電撃を尻尾から放つ『サンダーレイ』だ

スナイモン、世代／成熟期、属性／ワクチン種、種族／昆虫型、必殺技／シャドゥシックル
カマキリの様に、両手に鋭い鎌を持った昆虫型デジモン。性格はワクチン種で在りながら、極めて残忍で凶暴。鋭い両手の鎌で敵を追い詰めて仕留める。必殺技は、両腕のカマを鋭く振るい、超音速で敵を切り裂く『シャドウシックル』だ。

「来るぞ！！」

「分かっている！！闇に沈め！！」

自分達に向かって来るヤンマモン、スナイモン達に向かって、リインフォースは右手を掲げると、黒い球体を作り出す。
しかし、その表情は何処から辛そうに歪みながら、右手の先に作り上げた黒い球体を見つめる。

「クッ！！やはりＡＭＦが重い！！威力は半分程度が限界だ！！」

『キシャアァァァァァーーーー！！！！！』

作り上げた球体の威力にリインフォースが不満の声を上げていると、攻撃を行うとしているリインフォースに気がついたヤンマモンとスナイモン達は、リインフォースに攻撃を加えようと迫る。
それに気が付いたリインフォースは、魔法の威力に不安を覚えながらも、全力で右腕を振り下ろし、ヤンマモンとスナイモン達に向かって投げ付ける。

「デアボリックエミッション！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオン！！！

リインフォースの投げ付けた空間魔法―デアボリックエミッションは、空中で圧縮すると巨大な爆発を起こし、ヤンマモンとスナイモン達を飲み込んだ。だが、次の瞬間。

『サンダーレイ！！！』

ーーービリビリビリッ！！

「クッ！！やはりか！！」

爆煙の中から放たれた四つの電撃光線をリインフォースはかわし、煙の中を見つめると、煙の中から多少はダメージを受けたと思われるヤンマモンとスナイモン達が飛び出して来る。
そしてその内の比較的にダメージが低そうに思えるスナイモンが、リインフォースへと急速に接近し、右手の鎌を振り下ろす。

「キシャアッ！！」

ーーーブン！！

「盾ッ！！」

ーーーガキン！！

スナイモンの攻撃をリインフォースは防御魔法で発動させ受け止めた。
それと共にリインフォースは両手に強化魔法を発動させ、スナイモンの腹に向かって黒く覆われた拳を振り抜く。

「シュヴァルツェ・ヴィルクング！！」

ーーードゴオン！！

「グギャッ！！」

リインフォースの拳を受けたスナイモンは苦痛の声を上げた。
しかし、すぐさま苦痛を収めると、今度は別の左腕の鎌を振り下ろそうとする。
それを見たリインフォースは瞬時にスナイモンから離れると、自身の周りに赤い短剣ーブラッティダガーを十本ほど作り出すと共に

右手を向かって来るスナイモンに向ける。

「受けろ！！ディバインバスターー！！！！」

ーーードグオオオオオオン！！

「シャドゥシックル！！」

迫り来るディバインバスターを見たスナイモンは、瞬時に自身の両手の鎌を赤く光らせると、超高速で振り抜き、ディバインバスターを切り裂こうする。

しかし、すぐにその表情は驚きに変わり、スナイモンの両手の鎌の部分に、それぞれ五本ずつブラッティダガーが突き刺さって来る。

ーーードスドスドスッ！！

「グエアッ！！」

ドゴオオオオオオオオオオン！！！

ブラッティダガーが突き刺さった事により、技の発動が止まったスナイモンにディバインバスターが直撃し、その体がデータ粒子と成り消えて行くと、デジタマへと変化する。

それを見たリインフォースはすぐさま他のデジモン達に目を向け、一体のヤンマモンに炎を纏ったレヴァンティンを振り下ろそうとしているシグナムの姿を目撃する。

「紫電一閃！！」

ーーーブザン！！

「グエアッ！」

シグナムの紫電一閃を受けたヤンマモンは、切り口から発生した炎で体を包まれながら。スナイモン同様に体をデータ粒子に変え、デジタマへと変化した。

その姿を目撃した残っているヤンマモンとスナイモン達は、憎しみを込めた視線を悠然と空中に浮かんでいるシグナムとリインフォースに向ける。

『キシャアァァァァァァーーーーーー！！！』

「ムッ！！来るぞ！！」

「分かっている！」

ヤンマモン達が叫ぶと同時に、地上に残っていたデジモン達も動き始め、森の中からカブトムシを模したような頭部に、背中に羽を四枚付けたデジモン―カブテリモンが三体、姿を現し、その他にもクワガーモン二体と、サボテンの様な体を持って両手にグローブを身に着けたデジモン―トゲモンが姿を現した。

カブテリモン、世代／成熟期、属性／ワクチン種、種族／昆虫型、必殺技／メガブラスター

カブト虫の姿をした昆虫型デジモン。アリのようなパワーと、カブト虫のもつ防御性能とを合わせ持つとされ、攻撃・防御ともに能力値は高い。頭の部分は金属化していて守りは鉄壁に近い。しかし、その反面、知性はかなり低く、人間のパートナーが居なければ本能のままに動くデジモン。必殺技は、羽を羽ばたかせツノに電撃を溜め、プラズマ弾を放つ『メガブラスター』だ。

トゲモン、世代／成熟期、属性／データ、ウィルス種、種族／植物型、必殺技／チクチクバンバン
サボテンの形をしたデジモン。グローブをはめていて、バトルのときにはここからトゲが飛び出す。のんびり屋で、一日中ボーッとしていることが多いが、一度怒ると暴走し、顔つきまで変わってしまう。そうなると、もう誰も手をつけられない。必殺技は、拳のトゲを普段より硬く変化させ、敵をバンバン殴る『チクチクバンバン』だ。

次々と森の中から現れるデジモン達の姿に、シグナムとリインフォースは体を震わせながらも、それぞれ何時でも動ける様に構えを取り出す。

「上手く行ったか？」

「・・・・・嫌、可笑しい？完全体達が居ない？確かに見張っていた時は居たはずなのに？」

リインフォースは疑問の声を上げて、自分達に迫って来ているデジモン達を見つめた。
確かに作戦開始前には姿を確認出来た完全体五体の姿が、二人の視界には存在しないのだ。この様な状況で、更に最もデジモン達が憎んでいる管理局に属するシグナム達の姿を見ても、動かないは如何考えても可笑しい。
その事が分かっているシグナムとリインフォースは完全体の姿を探そうと、加速魔法を使用して、デジモン達を翻弄しようとするが、その直前にカブテリモン達が自身の羽を羽ばたかせ始めながら、頭のツノに電撃を集め、プラスマ弾を放つ。

『メガブラスターーー！！！！！』

ーーードゴオオン！！

『クッ！！』

迫り来る三つのメガバスターを見たシグナムとリインフォースはすぐさま居た場所から二手に別れて移動する。

しかし、シグナムの移動した先には先ほどのデアボリックエミッションのダメージから回復したヤンマモン達が、リインフォースの方にはスナイモン達とクワガーモン達が立ち塞がる。

『インセクスオーム！！！』

「何ッ！？」

ヤンマモンの口の中から現れた無数の小さなハエの姿にシグナムは驚きの声を上げた。

その間に小さなハエは、シグナムの視界を塞ぐ様に飛び回り始め、慌ててシグナムはレヴァンティンに命じる。

「レヴァンティン！！」

ーーーガコン

【Ｓｔｕｒｍｗｉｎｄｅ】

シグナムの叫びに応じる様に、レヴァンテインはカートリッジロードを行い、レヴァンティンは炎に包まれる。

「ハアァァァァァァーーー！！！！！」

ーーーブザン！！

炎に包まれたレヴァンテインをシグナムは一閃し、自身の周りに居た小さなハエを燃やすが、その間からヤンマモン達の尻尾が振るわれ、シグナムを斬りつけようとする。

『サマーソルトキル！！』

「クッ！！パンツァーガイスト！！」

ーーーガキン！！

ヤンマモンのサマーソルトキルをシグナムは全身を覆う防御魔法で防御し、その事にヤンマモン達は若干困惑する。

その隙を逃さないと言う様に、シグナムは瞬時にヤンマモン達から離れ、レヴァンティンを変形させる。

【Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ（シュランゲフォルム）】

ーーーカシャン！！

音声と共にレヴァンテインは、刀身の部分から分離すると鞭の様な連結刃に変形し、シグナムはヤンマモン達に向かって振り抜く。

「ハアァァァァァァァーーーーー！！！」

ーーーブザン！！

『キエアッ！！』

シグナムの一閃に、ヤンマモン達は体を切り裂かれ、その身をデータ粒子へと変化させるとデジタマへと戻って行った。

しかし、それを行ったシグナムは、自身のデバイスで在る筈にレヴァンテインに違和感を覚えた。

【Ｓｃｈｗｅｒｔｆｏｒｍ（シュベルトフォルム）】

（何だこの切れ味は！？前のレヴァンティンではない！？）

元の剣の状態に戻ったレヴァンティンを見つめながら、シグナムは内心で驚きの声を上げた。

戦ったシグナムには分かる。ヤンマモン達の甲殻はデバイスに使われている金属以上の強度を誇る物だと。にも関わらずシグナムのレヴァンティンはそれ以上の強度を誇り、刃毀れ一つ刀身には存在せず、シグナムの顔を刀身に映し出すほどの綺麗さを保っていた。

（この状況では嬉しいが、違和感が拭えん。後でシャーリーに見て貰おうか）

その様に内心でシグナムは決めると、すぐさまリインフォースの援護に向かおうとするが、その直前でシグナムの体を大きな影が覆う。

「何ッ！？」

「ココナッツ！！」

シグナムを覆っていた影ートゲモンは頭上に両手を合わせながら

シグナムに向かって急速に落下して来た。
それに気が付いたシグナムは慌てて避けようとするが、そうはさせないとトゲモンは両手を振り下ろす。

「パンチッ！！」

ーーードゴオオン！！

「グッ！！」

「シグナム！！」

トゲモンの拳を受けたシグナムは地上へと落下して行き、それを見たリインフォースは救助に向かおうとするが、そうはさせないとクワガーモン達が立ち塞がる。
その間にシグナムは地上に落下する前に体勢を整え、落下を防ごうとする。だは、その前に木の枝が背後からシグナムに向かって伸びて来る。

ーーーシュルッ！！

「なっ！？」

伸びて来た木の枝にシグナムは驚きの声を上げた。
しかし、瞬時に驚愕を抑えると、レヴァンティンを木の枝に向かって振り抜き、次々と伸びて来る木の枝を切り裂いて行く。

「ハアァァァァァーーーー！！」

ーーーブザブザブザッ！！

次々と自身の伸びて来る木の枝を、シグナムは縦横無尽にレヴァンティンを振るい切り裂きながら、木の枝を伸ばして来るデジモンを探すと、シグナムの後方の木から木の実が飛んで来る。

ーーーポン！！

「ハッ！？」

ーーードゴオオオオン！！

シグナムの近くに飛んで来た木の実は空中で爆発を起こし、シグナムを飲み込んだ。

そして爆発に寄って発生した煙が収まると、バリアジャケットを破損させたシグナムが姿を現し、木の実を投げつけた巨大な木－ジュレイモンとその周りを囲うようにして存在している四体のウッドモンを険しい視線で見つめる。

「クッ！！迂闊だった！！」

「我らが故郷を滅ぼした組織の連中だな！？貴様らだけは赦さんぞ！！チェリーボム！！」

『ブランチドレイン！！！』

苦痛に苦しむシグナムに向かって、ジュレイモンは頭の木の実を投げ付け、ウッドモン達は枝の形をした両手をシグナムに向かって伸ばす。

それを見たシグナムはかわそうと体を動かそうとするが、ダメージに寄って動く事が出来ず、ジュレイモンとウッドモンの攻撃を悔

しそうな表情で見つめた瞬間。

「狐葉楔(こようせつ)ッ！！！」

ーーーザザザザザザザザッ！！！

「何じゃ！？」

突如として辺りの木々から鋭い葉っぱが飛び出し、ジュレイモンのチェリーボムを吹き散らし、ウッドモン達の両手を切り付けて行く。

ジュレイモンはそれに対して驚きの声を上げ、ウッドモン達も困惑したように辺りを見回していると、シグナムの前に葉っぱが舞い散り始め、その中から両手に大極図の紋章を付けた防具を身に付け、シグナムと同等クラスの背を持ったキツネの様な顔を持ったデジモンが姿を現した。

「何者だ貴様は！？」

「私は・・・・・レナモン」

レナモン、世代／成長期、属性／データ種、種族／獣人型、必殺技／狐葉楔(こようせつ)

スピードで相手を翻弄する狐の姿をした獣人型デジモン。どんな状況下でも冷静な判断が出来る。また、テイマーとの関係がその特徴によく反映されるといわれ、幼年期の育て方によっては、他の種族と比べても高い知能を持つようになる。そして成長期の中でも珍しく、変装したり相手の姿をコピーする特殊能力を持っている。必殺技は、鋭い木の葉を敵に投げつけ、相手を切り裂く『狐葉楔(こようせつ)』だ。

ジュレイモンの質問にレナモンは簡潔に答え、構えを取りながら自身の背後に居るシグナムに声を掛ける。

「早く逃げろ。此処は私が時間を稼ぐ」

「・・・・・・何故デジモンが私を助ける」

シグナムがそう質問するのも当然だろう。デジモン達に取って人間は、特に管理局に属する者は、絶対に赦す事が出来ない大罪人達。にも関わらずレナモンはシグナムを護った。疑問に思うのは当然の事であろう。

その質問に対してレナモンは、ジュレイモン達に向かって両手を握り締め始めながら答える。

「・・・・・それが私のパートナーの願いだからだ」

「何ッ！？」

レナモンの言葉にシグナムは驚いた声を上げるが、レナモンはもはやシグナムの声には答えず、一体のウッドモンに向かって全速力で駆け出す。

ーーービュン！！

「速い！！」

目の前から消えたレナモンの速さにシグナムは驚き叫びを上げた。レナモンのスピードはフェイトやシグナムには及ばないが、それでも充分に速いと呼べるスピード。

そのスピードを使って、レナモンはウッドモンの目の前に移動す

ると、鋭い掌打を胴体に向かって放つ。

「掌打！！」

ーーードゴン！！

「グアッ！！」

レナモンの掌打を受けたウッドモンは苦痛の叫びを上げて。僅かに後退する。

それを見た残りのウッドモン達とジュレイモンは、レナモンを敵だと判断し、すぐさまツタや枝を模した両手を伸ばそうとするが、その直前でレナモンは今度は地面に向かって掌打を放つ。

「藤八拳！！」

ーーードゴオオオオン！！

『グウ！！』

レナモンの藤八拳を受けた地面は、捲れる様に吹き飛び、辺りを土煙で覆い始める。

それに寄って視界が塞がれたジュレイモン達は、土煙が吹き上がる中、レナモンの姿を探そうと辺りを見始める。

その隙にレナモンは自身の顔の前に手をやり始め、何かの術を呟き始める。

「・・・・・狐変虚」

ーーーグニャリ

レナモンが術を呟き終えると、レナモンの姿はウッドモンへと変わり、そのままジュレイモンに向かって叫ぶ。

「ジュレイモン！先ほどの人間が逃げて行くぞ！！」

「何じゃとッ！？」

レナモンの叫びジュレイモンが慌てて、シグナムの居た場所を見て見ると、確かに空に浮かんで戦いの場から逃げて行くシグナムと、クワガーモン達に追われながらも、シグナムと同じ方向に飛んで行くリインフォースの姿が存在していた。

「ムウッ！！すぐに追うぞ！！絶対に逃がさん！！奴らの死体を人間どもへの土産にするのだ！！」

『オオォォォォォォーーーーー！！！！！』

ジュレイモンの叫びに、ウッドモン達や森に潜んでいたデジモン達は同意の叫びを上げ、すぐさまシグナムとリインフォース達を追い出す。

その中にはウッドモンに擬態したレナモンも混じり、自身のパートナーに連絡を行い始める。

（此方レナ。作戦通りに進んでいる）

（了解や。こっちでも確認出来たわ。頃合いが来たら、群れから外れて、影響を受ける場所から離れるんや。手加減出来へんからな）

（分かった）

パートナーの言葉にレナモンは頷くと、怪しまれない程度の動きで徐々に群れから離れ始める。

そしてデジモン達はそのま、自分達に攻撃して来たシグナムとリインフォースを倒そうと追い続ける。

自分達が現れた場所ーゲートタワーから５００メートル離れ、ＡＭＦの効果が無い場所に誘導されているとも知らずに。しかしこれは在る意味では仕方が無いだろう。何故ならばデジモンの攻撃にはＡＭＦは全く効果が無い。その為に彼らはＡＭＦの有効性に気がつかず、その上襲って来たシグナム達の実力も成熟期の上位レベル程度だと勘違いしていたのだ。

更に離れても広大に森が広がっている事が彼らに取って災いした。森のフィールドは昆虫型や植物型が最も力を発揮出来る場所。自分達の種族が分かっている彼らは、例え罠が在ったとしても、そう簡単には負けないと自負していた。

それが利用されているとも気が付かずに。

『良し！！八神！！第二作戦開始だ！！』

「了解ですゲンヤさん！！」

シグナムとリインフォースを追って来ているデジモン達が、完全に作戦区域に入った瞬間。

デジモン達が居る森の場所を四方の形で囲む様に、巨大な結界が発生する。

ーーーシュウン！！

『ッ！！！』

結界が発生した事に寄って、辺りの景色の色が変わった事に気が付いたデジモン達は、慌てて辺りを見回し始め、結界を張った者を探そうとする。
それに寄って追撃の手が収まったシグナムとリインフォースは互いに頷き合い、その場で急上昇を行い、その先に居たはやてが自身のデバイス―シュベルトクロイツと『夜天の魔道書』を構え、詠唱を行い始める。

「ほの白き雪の王、眼下の大地を、白銀に染めよ、来よ、氷結の息吹！！」

『キシャアァァァァァーーーーー！！！』

上空で詠唱を行っているはやての姿を見つけたスナイモン達と空を飛べる昆虫型デジモン達は、凄まじいスピードを持って、詠唱を行っているはやてと、はやてを護るように滞空しているシグナムとリインフォースに攻撃を加えようとする。
しかし、その前に遂にはやての魔法が完成する。

「アーテム・デス・アイセス！！」

ーーービュオオォォォォォォォーーーー！！！！！！

『グエアァァァァァァァーーーーー！！！！』

はやての放ったアーム・デス・アイゼス―氷結能力を持った広域魔法は、瞬時に辺りに森を氷結させ始め、デジモン達と共に凍りついて行く。
そして魔法の影響が収まった後には、結界の張られた内部が、全

て凍りついた白銀の世界に変わっていた。。

「・・・・・来る」

ーーーバキン！！

一面が銀世界に成った世界を見ていたはやてが呟いた瞬間、凍りついていたデジモン達の幾つかの氷の表面に罅が入り、中から生き残った五体のデジモン達は姿を現す。

『キシャアアアアアアアーーーー！！』

「・・・・・五体ですか。何とか半分には落ち着きましたね」

「違うでリインフォース。八体や」

ーーーギュルルルルッ！！

ーーーバキィィィィィン！！

『キシャアアアアアアアーーーー！！！』

はやてが呟いたと同時に、罅が入っていなかった筈のデジモンが閉じ込められた氷から蒼いデジコードが飛び出し、その中から閉じ込められていた氷を粉砕して、オオクワモンと赤いカブテリモンに似たデジモン―アトラーカブテリモン（赤）と青いカブテリモン―アトラーカブテリモン（青）が姿を現す。

アトラーカブテリモン（赤）、世代／完全体、属性／ワクチン種、種族／昆虫型、必殺技／ホーンバスター

カブテリモンが規則的進化した姿。体が大きく、昆虫型のデジモンの中でも目立っている。青いアトラーカブテリモンとは違い、ジェット噴射で飛べる能力を身に付けた。頭のツノがさらにかたくなり、攻撃力もアップしている。必殺技は、巨大なツノを突進し、相手を突き刺す『ホーンバスター』だ。

アトラーカブテリモン（青）、世代／完全体、属性／ワクチン種、種族／昆虫型、必殺技／ホーンバスター
熱帯のネットエリアで発見されたカブテリモンの進化形態。赤いアトラーカブテリモンとは違い、飛行能力は退化したが、体長が１．５倍になりツノやツメも強くなった。また、筋肉が発達したことで格闘能力も向上した。必殺技は、巨大なツノを突進し、相手を突き刺す『ホーンバスター』だ。

「完全体が更に三体も！！」

「これから本番や。総員戦闘態勢！！」

『オオォォォォォォーーーー！！！』

はやての叫び応じる様に、結界の外で待機していた１０８部隊の部隊員達と、ダーツを手に持った巨大な白いデジモン―ナイトチェスモン（白）が結界内部に入って来た。

ナイトチェスモン（白）、世代／成熟期、属性／ウィルス種、必殺技／ギャロップホール
ポーンチェスモンが進化した巨大なダーツを持つパペット型デジモン。強靭な脚力で相手を軽々と飛び越え、かく乱する。接近戦には弱く、投擲による遠方からの攻撃が得意。必殺技は、空高く跳躍して相手を踏みつける『ギャロップホール』だ。

「一人も欠けずに隊舎に戻る！！本局に私達の力を見せてやるんや！！」

『アトラーカブテリモンは赤と青で長所が大きく違います！！赤の方は機動性に特化して！青の方は接近戦に特化しています！充分に気をつけて下さい！！』

「了解ですわオーリス三佐！！」

はやては通信でオーリスに礼を告げると共に通信を切り、目の前に迫って来るオオクワモン達に向かって魔法を放ち始め、シグナム、リインフォース、ナイトチェスモン、そして１０８部隊は戦いを始めるのだった。

作戦の第二段階の戦いは始まる。

この戦いの結末は、未だに先が見えない。

二頭の竜！！白銀の竜と鎧竜！！中編（前書き）

クロンデジゾイドに付いて

クロンデジゾイトとはデジタルワールドで産出される鉱物であり、クロンデジゾイドは、クロンデジゾイトと、生物の有機体（オーガニズム）を併せ持った合金という意味である。
クロンデジゾイトそのものは材料となる鉱物そのものを指し、クロンデジゾイドは合金のことを指している。
したがって、デジモンと一体化、または武器となっているものは『クロンデジゾイド』と呼ばれている。

また、クロンデジゾイドには種類が在り、純度の高いものは『レッドデジゾイト』と呼ばれるレアメタルに、純度の低いものは『ブルーデジゾイト』と呼ばれる特に希少なレアメタルへと変わる。
前者は硬度に優れ、後者は軽いため機動性に優れ、用途によって使い分ける事が可能であり、クロンデジゾイドは純度が高い方が優れているとは限らない。

この他にも『オブジタンデジゾイド』、『ゴールドデジゾイド』、『ブラックデジゾイド』など幅広く種類が存在している。

ギンガ、スバルのデバイスに使われているのは軽く、機動性に優れた『ブルーデジゾイド』

なのは、ティアナに使われているのは、大威力の砲撃に耐える為に硬度が優れている『レッドデジゾイド』である。

二頭の竜！！白銀の竜と鎧竜！！中編

はやて達が本格的な戦闘を開始した頃。
シグナムとリインフォースがデジモン達を監視していた場所から見て、反対方向の森の中を人知れずヴィータをリーダーにしたゲートタワー破壊任務を受けたメンバー達ーギンガ、スバル、キャロ、リュウダモン、フリード、そしてザフィーラとリインが残っているデジモン達に悟られないように、ゆっくりと森の中を進んでいた。

「通信で作戦が第二段階に入った報告が来たです。しかし、完全体を全部を誘き出す事には失敗。ゲートタワーの周りには最低でも三体の完全体が残っている可能性在りとの報告が来たです」

「そうかよ。奴さんらもゲートタワーを破壊される訳にはいかねえし、当然の判断だな」

自身の肩に乗っているリインの報告にヴィータは険しい声を出し、他のメンバーも顔を険しく歪める。
最低でもSランクオーバークラスの敵が、この近くに三体存在している。その事だけでも充分に不味い事態なのに、ＡＭＦまでもゲートタワーの周りには存在している。
余程の実力が在る実力者でも、死ぬ可能性が高い場所。その場所にヴィータ達は足を進めているのだ。
しかし、ゲートタワーに向かうメンバー全員には悲壮感など無く、絶対に生きて帰ると言う決意に満ちていた。

「ゲートタワーを破壊するのはリュウダモン、お前だ」

「やっぱそうなるかよ」

「ＡＭＦが展開している場所では我らの攻撃は効かない確率が在る。成らばＡＭＦの影響を受けないお前が適任だ。頼りにしているぞ。お前のパートナーと共にな」

「へッ！言われなくたってやってやるぜ！俺とキャロは絶対に負けねえよ！！」

ザフィーラの言葉にリュウダモンは自信満々に答えた。

その姿からは見栄っ張りと感じられず、自分達の実力に絶対に自身が在ると自負しているからこそだった。

その姿にキャロは苦笑を浮かべ、自身のデバイスで在る両手に装着しているケリュケイオンを静かに見つめながら、自身の師と呼べるライバルの存在を静かに思い出す。

（私とリュウダモンは絶対に貴方にもう一度出会います。その為に私とリュウダモンは頑張って来たんですから、絶対に生き残って見せます！！）

その様にキャロは内心で誓いの宣言を叫び終えるとヴィータ達と共に再び進撃を始め、丁度ゲートタワーが視界に捉えられる距離辺りに差し掛かった瞬間。

「やはり先ほどの戦闘は陽動だったか」

『ッ！！』

一つの木の上から声が響き、ヴィータ達が驚きの表情を浮かべて、声の聞こえた木の上を見て見ると、全身を武装化させ、両手の指が銃口の形をして、クワガタのツノを思わせる頭部を持った人型のデ

ジモン―メタリフェクワガーモンが立っていた。

メタリフェクワガーモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／昆虫型、必殺技／ホーミングレーザー、エミットブレイド

武装化により、攻撃力を飛躍的にアップさせたクワガーモンの亜種。形状が人型になったことで格闘能力も得ており、固い甲殻と素早い動きを併せ持ち、完全体デジモンの中でもトータルバランスが優れており、トップクラスの力を誇る。必殺技は、両手の銃口から放つ自分の意志でレーザーの軌道を変える事が出来る『ホーミングレーザー』と、同じく両手の指先の銃口から刃状のビームを放出し、相手を切りつける『エミットブレイド』だ。

「始めまして、私達の故郷を奪いし組織の人間達よ。私はメタリフェクワーガモン。貴様らを排除する者だ」

「チィッ！！・・・・・随分と親切に名を教えるじゃねえか？」

「何、私達の故郷を奪った人間どもは名乗りもせずに虐殺を行った。その様な連中と同列に扱われぬ為にも、名乗りは必要だと思っただけだ」

ヴィータの質問に対してメタリフェクワガーモンは丁寧に答えた。

しかし、それに対してヴィータ達は表情を険しくする。

その場に居る全員が理解していた。一見メタリフェクワガーモンは冷静に答えている様に見える。

しかし、その内心では憎悪の炎が燃え盛っている事実を。丁寧に見える言葉は、憎しみを隠す為のカモフラージュでしかない事に。

その事が分かっていながらもメタリフェクワガーモンは、冷静な振りを続け、リュウダモンに顔を向ける。

「何故人間などに力を貸す？人間は私達の故郷を理不尽に滅ぼした大罪人。その様な連中に何故力を貸すのだ？」

「ヘッ！！生憎だが、俺は人間に力を貸している気はねえ！！」

「何？」

メタリフェクワガーモンは訝しげな声を上げた。
リュウダモンは如何見ても人間に力を貸している。なのに人間には力を貸していないと宣言した。
その意味が分からず、訝しげな顔をしながらリュウダモンの姿を見つめていると、リュウダモンは笑みを浮かべながら、キャロを護る様に立ち塞がり、宣言の叫びを上げる。

「俺が力を貸すのはパートナーのキャロだ！！俺はキャロや、家族達の為に戦う！！お前らの気持ちは分かるが、俺はキャロを護るぜ！！」

「リュウダモン・・・・」

「キュル～！！」

リュウダモンの宣言にキャロは頬を赤く染め、フリードは自分もと言う様にリュウダモンの横に並びながら鳴き声を上げた。
その姿にヴィータ、リイン、ザフィーラ、ギンガ、スバルは笑みを浮かべ、それぞれデバイスを木の上に立っているメタリフェクワガーモンに構え始める。
メタリフェクワガーモンはその姿に顔を険しくしながら、両手の銃口をヴィータ達に向かって構え出す。

ーーーガシャッ！

「如何やら、理解し合えない関係になっているようだ・・・・・・・・・ならば貴様も消滅させてくれる！！ホーミングレーザーー！！」

ーーードグオオン！！

「散開しろ！！」

メタリフェクワガーモンの放った十のレーザーを見たヴィータは、全員に散開を命じ、その場に立っていたメンバー全員が飛び散る。

しかし、放たれたレーザーは全て意思が在るかのように動き、散開したヴィータ達を追い始める。

「なっ！！クッ！！パンツァーヒンダネス！！」

「障壁よ！！」

ーーードゴオオオオオン！！

追って来るホーミングレーザーに対して、ヴィータは全方位型の防御魔法ーパンツァーヒンダネスを発動させ、人間体に変化したザフィーラも、キャロとリュウダモンを護るように立ちながら前面に障壁を生み出し、ホーミングレーザーを防いだ。

それに寄って発生した煙を静かにメタリフェリクワガーモンは見つめ、銃口を下ろしながら、後方に向かって蹴りを放つ。

「フッ！！」

「クッ！！」

メタリフェクワガーモンの蹴りを、何時の間にメタリフェククワガーモンの後ろに回っていたギンガは、ギリギリの所でかわすと、両足に装着されているデバイス－バーストキャリバーのローラーを加速させ、木々の間を縫う様にして移動する。
メタリフェクワガーモンは逃がさないと言う様にギンガを追うとするが、再び気配を感じて後方を振り返る。

「ハアアァァァァァーーーー！！！！」

「チィッ！！」

ギンガと同様に後方に回っていたスバルの次々と放つ拳を、メタリフェクワガーモンはかわしながら、反撃の隙を伺うが、そうはさせないとスバルは連続で拳を放ち続ける。
その隙に木々の間からメタリフェクワガーモンの隙を伺っているギンガが、ヴィータ達に念話を送る。

（ヴィータ副隊長！！此処は私とスバルに任せて下さい！！）

（出来んのか！？相手は完全体だぞ！？）

（敵を恐れたら何も出来ません。それにまだ完全体が二体も先に居るんです。なら、此処は私とスバルが残るのが適任ですよ。倒したらすぐに追い付きます）

（・・・・・分かった。気を付けろよ。絶対に帰って来るんだぞ！！）

ヴィータは念話でギンガに叫ぶと共に、キャロ、リュウダモン、

フリード、ザフィーラ、リインを連れて、森の奥に向かい出す。
それに気が付いたメタリフェクワガーモンは、先に行かせない為に、スバルに向かって銃口を構え、ホーミングレーザーを発射しようとする。
しかし、その直前で、小声で詠唱を続けていたキャロが叫ぶ。
「鋼鉄の縛鎖。錬鉄召喚、アルケミックチェーン！！」
ーーーガシィィィン！！
「何ッ！？」
突如として四方に発生した桃色の魔方陣から出現した鎖に寄って、メタリフェクワガーモンは体を拘束される。
それと共に生まれた隙を逃さないと言う様に、スバルと木々の間から隙を伺っていたギンガはチャンスだと瞬時に判断すると、同時にメタリフェクワガーモンに向かって飛び掛り、全力で殴り掛かる。
「リボルバーーキャノン！！」
「ナックルバンカーー！！」
ーーーードゴオオン！！
「ガアハッ！！」
スバルとギンガの打撃を同時に胴体に受けたメタリフェクワガーモンは苦痛の声を上げながら吹き飛び、木々を薙ぎ倒しながら吹き飛んで行く。

「今の内です！！奴が立ち上がる前に早く行って下さい！！」
「此処は私とギン姉に任せて早く！！」
「分かった！二人とも後から必ず来いよ！！」
「任せましたです！！」
「頼む！！」
「絶対に破壊します！！」
「ちゃんと来るんだぜ！！」

ギンガ、スバルの言葉にヴィータ、リイン、ザフィーラ、キャロ、リュウダモンはそれぞれ叫ぶと、急ぎゲートタワーが在る場所を目指して走って行った。
それを確認すると共にギンガとスバルがメタリフェクワガーモンが吹き飛んだ方向に目を向けた瞬間に、木々を切り裂きながら光線が走り飛んでくる。

ーーーブザン！！

『クッ！！』

飛んで来た光線をギンガとスバルは両足のデバイスのローラーを加速させる事で、その場から移動し、光線を避けた。
それと共に光線が放たれた方向を見て見ると、自身の体に巻き付いた鉄の鎖を引き千切りながら歩いて来るメタリフェクワガーモンの姿が存在していた。

「・・・・赦さん・・・・・・人間風情に、しかも此処まで屈辱を与えられたのは始めてだ！！貴様らは跡形も無く消滅させてやる！！ホーミング！！！」

「行くわよスバル！！」

「ＯＫ！！ギン姉！！ハアアァァァァァァーーーー！！！！！」

「レーザーー！！！」

ドグオオオオオオオオオオン！！

飛び掛って来るギンガとスバルに向かって、メタリフェクワガーモンはホーミングレーザーを発射し、本格的な戦闘を開始された。

その間に、森の木々の中を駆け抜けながら先を進んでいたヴィータ達は、後方から聞こえて来た大音量に背後を振り返りそうになるが、残して来たギンガとスバルを信じ、振り返りたくなる気持ちを抑えながら前を進んでいると、突如として全員に巨大な影が掛かる。

その事に気が付いたヴィータ達が上を見て見ると、凄まじい勢いで落下して来るトゲモンの姿が存在していた。

「ココナッツ！！」

「縛れ！！鋼（はがね）の軛（くびき）　！！」

ーーードドドドドドオ！！！

ザフィーラが詠唱すると共に、地面から多数の拘束条が出現し、

落下して来るトゲモンを空中に固定する。
それと共にヴィータは自身のデバイス―アイゼンにカートリッジロードを行い、魔力を高めながら、空中で拘束から逃れようとしているトゲモンに向かって飛び掛る。

「フランメ・シュラーク！！！」

ーーードゴオオン！！

「ブグアッ！！」

ヴィータのフランメ・シュラークを受けたトゲモンは苦痛の叫びを上げると共に、打撃を受けた場所から体を燃焼させ始め、蒼いデジコードに体を包まれ、デジタマへと変わった。
その事実にヴィータは喜びながら、自身が握っているグラーフアイゼンを掲げる。

「良し！！やっぱ植物にはコイツが効くぜ！！」

「喜ぶのは後回しだ！！来るぞ！！」

ーーーブーーン！！

『ッ！』

ーーードゴオオオ

とは違う姿を持ったデジモン―オオクワモンXが現れる。

オオクワモンX、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／昆虫型、必殺技／シザーアームズΩ3

オオクワモンが『X抗体』を取り込み、『電脳核（デジコア）』に影響を与えたことで、未知の力を引き出した姿。抑えきれない破壊衝動を爆発させ、ウィルス種以外のデジモンを見つけるとたちまち襲い掛かる。必殺技は、破壊力が大幅にアップした『シザーアームズΩ3』だ。

「ギシャアァァァァァァーーーーー！！！」

次々と自身の前に在る木々を切り裂く、或いは踏みしめながらオオクワモンXは咆哮を轟かせた。

その姿を見たキャロは慌てて自身のバリアジャケットの中から、ピンク色の縁取りが在るディーアークを取り出し、オオクワモンXのデータを調べる。

「ッ！！不味いです！！このデジモンは『X抗体』タイプのデジモン！！」

「何だよ！？その『X抗体』タイプってのは！？」

「デジモンの中でも特殊で強力なタイプのデジモンの事です！！『X抗体』を持つデジモンは！通常タイプのデジモンを遥かに超える力を持っているんです！！」

「何ッ！？」

「何だと！？」

キャロが告げた説明にヴィータとザフィーラは驚きの声を上げ、オオクワモンXを見つめる。
“X抗体”それはデジモンの未知の力を引き出す事が出来る特殊な抗体。
“X抗体”を体に取り込んだデジモンは寄り強力な力を発揮し、通常の状態を遥かに超える力を発揮する事が出来るのだ。つまり、ヴィータ達の目の前に存在しているオオクワモンXは、通常のオオクワモン寄りも、更に強力な存在なのだ。
「『X抗体』を持っているデジモンは、それを制御出来るか如何かで力の発揮具合は変わりますけど、制御出来なかった場合は、凶暴さが凄まじく増して、手当たり次第に暴れるんです!!」
「って事は!?」
キャロの言葉にヴィータは慌てた表情を浮かべて、オオクワモンXを見つめる。
目の前に居るオオクワモンXは如何見ても凶暴そのものとしか言えない。それが意味するのは一つ。
「ギシャアァァァァァァァーーーーー!!!!!」
「来るぞ!!」
背中に在る羽を開いたオオクワモンXの姿に、ザフィーラは警戒して叫び。
ヴィータ、キャロ、リュウダモン、フリードがオオクワモンXに身構えると、次の瞬間にオオクワモンXは羽根を動かし、突進する。
「ギシャアァァァァァーーーーー!!!!」

「やべえ！！避けろ！！」

『クッ！！』

ーーーバキバキバキバキバキバキッ！！

ヴィータの叫びにザフィーラはキャロを腕の抱えて飛び去り、リュウダモン、フリードも同様に飛び去る。

しかし、オオクワモンXは突進を止めずに前に進み、キャロ達の後方に存在していた木々を薙ぎ倒しながら上空に飛んで行く。

「嘘だろう！！何なんだよアレは！？」

オオクワモンXの突進に寄って生まれた巨大な道に、ヴィータは驚きの声を上げ、肩に乗っていたリインも恐怖に体を震わせながら、上空を飛んでいるオオクワモンXを見つめる。

それを見ていたキャロは、ザフィーラの腕の中からヴィータとリインに向かって叫ぶ。

「だから！『X抗体』を得たデジモンは力が増すんです！！だけど、弱点は変わりません！！昆虫の弱点は炎か氷です！！」

「・・・・・・ザフィーラ。先にキャロ達と一緒に行け」

「此処はリインとヴィータちゃんに任せるです！！」

「しかしッ！！」

ヴィータとリインの言葉にザフィーラは驚きの声を上げた。

しかし、ヴィータとリインはザフィーラの叫びには答えずに、上空で旋回を始めたオオクワモンXを睨みつける。

「・・・・最低でもゲートタワーだけは、破壊しないと行けねぇんだ。あたし等はその為に此処に来たんだからよ」

「はやてちゃん達も離れた場所で頑張って居るんです！！残して来たギンガとスバルの為にも、先に行ってゲートタワーだけは破壊するんです！！」

「・・・・・・分かった。絶対に生きて帰って来るのだぞ！！」

「すいません！ヴィータ副隊長！！リイン曹長！！先に行きます！！」

「此処は任せたぜ！！」

「キュル～！！」

ザフィーラ、キャロ、リュウダモン、フリードはヴィータとリインに声を掛けると共に、急ぎ森の奥へと走って行く。

それを確認したヴィータとリインは笑みを浮かべると共に、上空でヴィータとリインを睨んでいるオオクワモンXに目を向ける。

「絶対にはやての所に帰るぞリイン！！」

「はいですヴィータちゃん！！ユニゾン・イン！！」

リインがヴィータの言葉に答えると共に、ヴィータとリインの体が光に満ち溢れる。

光が消えた後には、バリアジャケットを白く染め、赤かった髪がオレンジ色に染まったユニゾン状態のヴィータが存在していた。
そしてユニゾンを終えたヴィータは、両手で握っているグラーフアイゼンをギガントフォルムへと変形させると、上空でヴィータに向かって狙いをつけ始めたオオクワモンXを睨む。

「行くぞぉぉぉぉーーーー！！」

（絶対に帰るですぅぅぅぅーーーーー！！）

ヴィータとリインは同時に叫び声を上げながら、上空から突進して来るオオクワモンXに向かって飛び掛り、命を賭けた戦闘を開始した。

その間にも森の奥へと進撃していたザフィーラ、キャロ、リュウダモン、フリードは遂にゲートタワーが完全に視認出来る場所に辿り着き、険しい視線をゲートタワーに向ける。

「・・・・これがゲートタワー・・・・デジモンをこの世界に呼ぶ装置か。一体どうやってこの様な物質を作り上げたのだ？」

「多分。これもデジモンと同じ様にデータで構成されているんですよ。例えこれを破壊しても、ばら撒いている張本人達を倒さないと、再び生まれる可能性が高いです」

「・・・・少し意外だ。お前位の年齢ならば、仲間を置き去りにする事は反対すると思っていたが？」

ザフィーラがそう疑問に思うのも当然だろう。
如何見てもキャロは十歳前後の年位にしか見えない。しかし、例

え仲間を残しても冷静に判断するその姿は、歴戦の戦士としか思えない姿だった。
十年前にはやて達は戦っていたが、それを遥かに超えるほどの決意と信念をキャロはその胸に宿しているようにしか、ザフィーラには見えなかった。
その質問に対して、キャロは苦笑のようなものをリュウダモンと共に浮かべる。

「私だって怖いです。だけど、私はデジモンと、自分の力と一緒に生きて行くって誓ったんです。『力が在るのならば、その力からは逃れられない。ならば、己の信念をもって力を支配しろ』そう私の師からは教えられました。地上本部に協力しているのも、私の願いの為です。この部隊に来る前に私は絶対にデジモンとの道を作るって誓いましたから！！だから、残して人達の為にも早くゲートタワーを破壊して、援護に向かいます！！」

「フッ。成る程、子供だと思うのは失礼な様だ」

「へへへへッ！キャロを舐めるなよ！それよりも最後の奴が来るぞ！！」

「ムッ！！」

リュウダモンの言葉にザフィーラが唸り声を上げて、ゲートタワーの方に目を向ける。
それと共にゲートタワーの前の地面が捲り上がる様に吹き飛ぶ。

ドゴオオオオオオオオオン！！

「クッ！！障壁よ！！」

爆発と同時に吹き飛んで来た地面の岩や土煙を、ザフィーラはキャロ達を護る様に立ち塞がりながら障壁を展開して防御した。
そして土煙や岩が吹き飛んで来なくなると、障壁を解除し、地面が吹き飛んだ場所をキャロ達と共に険しい顔をしながら見て見ると、其処には両手をハサミのような形にし、サソリの尻尾を思わせるような姿をしたデジモン―スコピオモンがゲートタワーを護る様に立ち塞がっていた。

スコピオモン、世代／完全体、属性／データ種、種族／昆虫型、必殺技／ブラックアウト、ポイズンピアス
別名“砂漠の暗殺者”と呼ばれるサソリに似た昆虫型デジモン。気配を感じさせず背後から近づき、尻尾の先の猛毒針で相手を突き刺す。スコピオモンの持つ毒は、神経データの伝達スピードより速く、刺されたことにさえ気づかれず絶命してしまう。そのため、相手にその存在すら知られることが無いのが、暗殺者と呼ばれる所以である。必殺技は、毒霧を辺りに撒き、相手の視覚を破壊する『ブラックアウト』と、尻尾の先の鋭い毒針で相手を刺す『ポイズンスピア』だ。

「ッ！！あのデジモンはスコピオモン！！」

「知っているのか？」

キャロの叫びにザフィーラが疑問の声を上げた。
それに対して、キャロ、リュウダモン、フリードは同時に頷き、ディーアークが示す情報をザフィーラに見せながら説明する。

「スコピオモンは別名“砂漠の暗殺者”と呼ばれるデジモンです。本当ならば、姿を見せずに相手を暗殺する動きをする筈なのに」

「それを行わずに姿を見せたんだ。答えは一つしかねえよ」

「成る程、確かに暗殺者が現れるなど、一つしかないな」

ザフィーラは納得の声を上げた。

暗殺者の異名を持つスコピオモンが目の前に現れるなど一つしか在り得ない。

“楽に死なせない為だ”。何せスコピオモンの必殺技自体が一撃必殺。食らった者は先ず間違い無く絶命してしまう技。

その様な技で人知れず殺しても、スコピオモンの胸に宿る憎しみは晴れない。

“絶対の恐怖を与えてザフィーラ達を殺す”

その為に異名さえも捨ててスコピオモンはザフィーラ達の前に姿を現したのだ。

「・・・・ニンゲン、ワレラノセカイヲ・・・・ホロボシタモノタチ・・・・・ヒトリノコラズ・・・・ショウキョスル」

「気を付けて下さい！スコピオモンの尻尾が刺さったら其処で終わりです！！」

「了解だ！！」

「食らえ！！居合刃（いあいじん）！！」

ーーーシュンシュン！！

リュウダモンは口から鉄の刃ー居合刃(いあいじん)をスコピオモンに放った。
スコピオモンは迫り来る居合刃(いあいじん)に向かって、両手のハサミを振り下ろす。

「フン！！」

ーーーガキン！！

スコピオモンはハサミに寄って居合刃(いあいじん)を簡単に弾き飛ばすが、その隙に接近していたザフィーラがスコピオモンの懐に入り込み、胴体に向かって拳を放とうとすると同時に、キャロは瞬時に補助魔法の詠唱を始める。

「猛きその身に、力を与える祈りの光を！ブーストアップ・ストライクパワー！！」

「ムン！！」

ーーードゴオオン！！

キャロの補助魔法の力で打撃力が上がったザフィーラは、自身の力とキャロの補助魔法で力が上がった拳を、スコピオモンの胴体に向かって食らわせた。
しかし、強化されたザフィーラの拳が直撃してもスコピオモンは不動を貫き、自身の尻尾をザフィーラに向かって振り下ろす。

「ポイズンスピアッ！！」

「何ッ！？クッ！障壁よ！！」

ーーーガキン！！

ザフィーラは瞬時に障壁を展開し、スコピオモンのポイズンスピアを受け止めるが、徐々に障壁に押し込まれ始める。

それに気が付いたキャロは、すぐさま自分の横に居るフリードに向かって叫ぶ。

「フリード！！ブラストフレアッ！！」

「ギュル～！！」

ーーードグオン！！

キャロの言葉に答えるようにフリードは口から火炎放射ーブラストフレアを放ち、スコピオモンに向かって飛んで行く。

「クッ！！」

流石に炎を体に食らうのは不味いと判断したのか、スコピオモンはザフィーラに向かって伸ばしていた尻尾を戻し、その場から飛び去る。

その隙にザフィーラもキャロ達の方に向かって跳び、キャロの横に並びながら声を掛ける。

「すまん！助かったぞ！」

「いえ！でも、やっぱり完全体には生半可な攻撃は効かないようです！」

「ああ、だが、炎は別だ！奴は昆虫型なのは間違い無い！炎が奴の

弱点だ！」

「・・・・フリード、リュウダモン。行くよ！！」

「おうよ！」

「キュル～！！」

キャロの言葉にリュウダモン、フリードは同時に同意の声を上げ、スコピオモンに向かって走り出す。

それと共にキャロは小声で詠唱をし始め、キャロの持つディーアークから音声が響く。

《ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「リュウダモン進化！！」

ディーアークから音声が響くと共に、リュウダモンの体から蒼いデジコードが飛び出し、繭を形成し始める。

それと共に蒼いデジコードは巨大化を始め、その内部から全身を鎧で覆い、額に旧式のインターフェイスを付け、長い首と尻尾を持った四足歩行の竜の様なデジモンが姿を現した。リュウダモンの進化系。その名も。

「ギンリュウモン！！」

ギンリュウモン、世代／成熟期、属性／ワクチン種、種族／獣竜型、必殺技／徹甲刃（てっこうじん）、棒陣破（ぼうじんは）

額に旧式インターフェースを持つデジモンの進化系の獣竜型デジモン。ふわふわと宙を舞いながら甲冑で敵の攻撃を受け流したり、ま

た敵の攻撃を寸前で回避できる眼力を持つなど、強い精神力を持ち合わせておりどんな相手にも怯む事も無く戦う。必殺技は、口から鉄の槍を無数に吐き出し、対象を串刺しにする『徹甲刃(てっこうじん)』と、敵の攻撃を諸共せず、甲冑で受け流しながら突撃する『棒陣破(ぼうじんは)』だ。リュウダモンの進化体。

「これがリュウダモンの進化体か！！」

現れたギンリュウモンの姿に、ザフィーラは驚きの声を上げるが、ギンリュウモンは答えずにスコピオモンに向かって口から鉄の槍を無数に吐き出す。

「徹甲刃(てっこうじん)！！」

ーーードドドドドドン！！

「ムッ！！」

放たれた徹甲刃(てっこうじん)を見たスコピオモンは、すぐさまその場から飛び去る事でかわし、反撃の隙を伺うが、ギンリュウモンは反撃をさせない為に次々と連続で徹甲刃(てっこうじん)を放つ。

その事に気が付いたスコピオモンは、反撃を行う為にギンリュウモンに向かって毒霧を放ち出す。

「ブラックアウト！！」

ーーーシュウウウウウーーー！！！

「クッ！！」

スコピオモンが口から放ち始めた黒い毒霧ーブラックアウトを見たギンリュウモンは、視界を潰される訳にはいかないと思い、空中に浮かび上がる事でブラックアウトをかわす。
その隙にスコピオモンは、地上に残っているキャロ、ザフィーラ、フリードを先に殺そうと動こうとするが、その直前でスコピオモンの周りに桃色の魔法陣が出現し、鉄の鎖が飛び出し来る。

「錬鉄召喚、アルケミックチェーン！！」

ーーーガシィィィィン！！

「シマッ！！」

突如として出現した鎖で、体を拘束されたスコピオモンは驚きの声を上げ、即座に鎖を破壊しようと身を捩りだす。
ただの鉄の鎖では完全体で在るスコピオモンからすれば、一瞬で破壊出来る代物でしかない。
しかし、キャロ達が欲していたのは、その一瞬だった。

「今です！！ザフィーラさん！！ギンリュウモン！！」

「了解だ！！」

「おうよ！！」

ザフィーラとギンリュウモンはキャロの叫びに頷き、事前に強化魔法を掛けられていたザフィーラは、近くの地面に突き刺さっていた鉄の槍を二本引き抜き、ギンリュウモンは口をゲートタワーに向かって構え出す。
それに気が付いたスコピオモンは、キャロ達の真の狙いに気が付

き、自身に巻き付いている鎖を慌てて破壊する。

ーーーバキィィィン！！

「ヤメロォォォォーーーー！！！！！」

ザフィーラ、ギンリュウモンの行動を止めようと全速力でスコピオモンは向かい出す。

しかし、スコピオモンが行動を行う前に、ザフィーラは両肩に担いでいた二本の鉄の槍を全力で投擲し、ギンリュウモンは口から徹甲刃（てっこうじん）をゲートタワーに向かって放つ。

「ムン！！」

「徹甲刃（てっこうじん）！！」

ーーードスドスドスドスッ！！

ザフィーラの投擲した鉄の槍と、ギンリュウモンの徹甲刃（てっこうじん）は寸分違わずにゲートタワーへと直撃し、ゲートタワーはまるで針の筵のように、その身から幾つ物の鉄の槍が突き刺さった状態に成った。

その姿にスコピオモンが呆気に取られたようゲートタワーを見つめた瞬間。

ーーーバリィィィィィン！！！

ゲートタワーはまるで鏡が割れる音のようなものを鳴り響かせながら消滅し、辺りにゲートタワーの粒子だと思われる黒い粒子が渦巻く。

そして自分達の仲間が来る事が出来る入り口を破壊された事に気

がついたスコピオモンは、更なる憎しみの炎を胸の中で燃やし、ゲートタワーを破壊した張本人であるザフィーラとギンリュウモンに攻撃を加えようと体を動かそうとすると、その直前でザフィーラが叫ぶ。

「縛れ！！鋼(はがね)の軛(くびき)　！！」

ーーードドドドドオ！！

「グオォォォーーー！！」

地面から生えた白い柱のような物に体を突き刺されたスコピオモンは苦痛の声を上げ、ザフィーラを睨み付ける。

「やはりＡＭＦの効果が消えている。あの塔がＡＭＦを発生させていたのだな」

「・・・・キサマ・・・・イキテカエレルトオモウナ！！」

ーーーバキィィィィン！！

スコピオモンは叫ぶと共に自身の体に突き刺さっていた白い柱を破壊し、ザフィーラに向かって尻尾を急激に伸ばす。

しかし、ザフィーラは冷静に伸びて来る尻尾をかわし、自身に向かって来る尻尾を動く事や、或いは障壁を展開する事でかわして行く。

冷静さを欠いた攻撃ほど単調なものはない。例え実力が遥かに上でも、盾の守護獣の異名を持つザフィーラからすれば、今のスコピオモンの攻撃は簡単に避ける、或いは障壁を展開して防ぐ事で出来るものだ。

そしてザフィーラの本分はあくまで盾で在る事。攻撃も行うが、それは護る為でしかない。
彼の真の役目は、本命の準備が整うまで時間を稼ぐ事だ。先ほどの一撃も、自身に注意を向ける為でしかない。

「蒼穹(そうきゅう)を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ」

「ッ！！」

聞こえて来た詠唱にスコピオモンは驚きながら慌ててザフィーラへの攻撃を中断し、声が聞こえて来た方に目を向けて見ると、巨大な桃色の魔法陣と環状魔法陣をフリードの周囲に発生させているキャロの姿が存在していた。
その姿に本能的な恐怖を感じたスコピオモンは、キャロの行動を止めようと動き出すが、その前にギンリュウモンが立ち塞がり道を塞ぐ。
それと共に遂にキャロの詠唱が完了する。

「来(こ)よ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚(りゅうこん)！！」

「グオォォォォォォーーーーーー！！！！！」

キャロが詠唱を終えると共に魔方陣は弾け跳び、その内部から巨大な白銀の竜一真の姿を取り戻したフリードがその姿を現し、天に向かって咆哮を上げた。
そのフリードの姿にスコピオモンは目を見開くが、瞬時にフリードの実力を判断し、フィールドに寄って強化されている自分が負ける事は無いと判断すると笑みを浮かべ始める。
それは在る意味では正しかった。例えフリードが本来の姿を取り戻しても、完全体に、しかもフィールドの力で強化された完全体の

スコピオモンに勝つ事は不可能だ。しかし、スコピオモンは重大な事を忘れていた。
“敵はフリード一人ではない事”を、彼は忘れていたのだ。

「ウリャアァァァァァーーー！！徹甲刃（てっこうじん）！！」

「縛れ！！鋼（はがね）の軛（くびき）！！」

ーーードドドドオ！！

「グオォォォーーー！！シマッタ！！」

ギンリュウモンの徹甲刃（てっこうじん）で周りへの囲うようにして逃げ道を塞がれ、その中心に立っていたスコピオモンの体にザフィーラの鋼（はがね）の軛（くびき）が突き刺さる。
それに寄って完全に動きが封じられたスコピオモンは、慌てて拘束から逃れようとするが、今度はザフィーラも鋼（はがね）の軛（くびき）に魔力を送り続ける事で破壊されない様にし、ギンリュウモンも次々と徹甲刃（てっこうじん）を放つ事で逃げ道を完全に塞いで行く。
その間にフリードの背に乗って上空へと浮かんでいたキャロは、フリードの口の前に幾つもの魔法陣を生み出しながら、スコピオモンを見つめる。

「貴方の敗因は、憎しみに支配された事です。本来の暗殺者としてのままの貴方が相手だったら、私達は敗北していました」

「ソウサセタノハ・・・キサマラニンゲンドモダ・・・・・・・フッ、イイワケデシカナイカ・・・・・ワスレルナ・・・・・カナラズ、ニンゲンハホロボサレル・・・・・タトエ、コノバノデジモンタチタオシテモ・・・・コノチニハ、マダ、ナンタイモノデジモン

ガ・・・・カゾエキレナイホド・・・・ソンザイシテイル・・・・・・セイゼイ、ツカノマノヘイワヲ・・・・アジワッテ、シヌガイイ」

「さようなら。フリード、ブラスト・レイ・フレイム！！！」

「グオォォォォーーーーーー！！！！！」

ーーードグオオン！！

キャロの叫びに応じるようにフリードは口から火炎放射を放ち、フリードの前に存在していた幾つもの魔法陣を超えるたびに炎を勢いは強まり続け、最終的にはスコピオモンの体を飲み込んでも有り余るほどに巨大に炎は変わり、スコピオモンは炎に飲み込まれる。

「グアァァァァァァァーーーーー！！！！！」

炎に全身を包まれたスコピオモンは自身の体を焼かれる苦痛に悲鳴を上げながら、体をデータ粒子へと変換させ、デジタマへと戻った。

それを確認したキャロは、すぐさま来た道の方向を振り返り、ザフィーラとギンリュウモンに向かって叫ぶ。

「急いで戻りましょう！！ＡＭＦが無くなっても、完全体は強力です！すぐに援護に向かわないと！！」

「ウム！！」

「オシャアッ！」

「グオッ！！」

キャロの言葉にザフィーラ、ギンリュウモン、フリードは頷き、急ぎ残して来たヴィータ達の援護に向かい出す。

無数の木の残骸が転がっている場所。
一目見て、沢山の木が生えていたと思われる場所の上空で、リインとユニゾンしたヴィータは、その体を護っているバリアジャケットをボロボロにして、見える肌から血を流し続けながらも、目の前に存在しているオオクワモンXと激闘を繰り広げていた。

「ウオォォォォーーー！！！フランメ・シュラーク！！」

ーーードゴオオン！！

一瞬の隙を付いて振り下ろしたヴィータの一撃は、完全にオオクワモンの甲殻にヒットし、その場所から燃焼を始める。
しかし、ヴィータの渾身の一撃を体に受けたのにも関わらず、オオクワモンXは平然とその場に佇み続け、六本も在る手足の一つを振り回し、ヴィータを弾き飛ばす。

ーーードゴオン！！

「ガハッ！！」

（ヴィータちゃん！？）

苦痛の声を上げたヴィータの姿に、ユニゾンしているリインは心配そうな声を掛けた。

その声にヴィータは目を見開き、瞬時に体勢を整えて空中に滞空するが、その姿はもはや限界寸前だと言うようにボロボロだった。

「ハ、ハア、ハア、ハア、ハハハハハッ。キャロの野郎。何が昆虫は炎や氷が弱点だよ・・・・・全然効きやしねえ」

(威力が足らないんです。普通の完全体なら効いても、あのオオクワモンXには通じないんですよ)

「・・・・・チクショウ・・・・・死にたくねえな」

目の前に迫る確実な死。ヴィータとリインはそれを今肌で感じていた。

レベルが明らかに違い過ぎる。実力もそうだが、今まで管理局に入ってからこなして来た任務のどれよりもヴィータとリインは死の感触を感じ続けていた。

それこそが戦争と事件の一番の違い。一撃一撃が死を招くほどの威力を持つ敵に対して、ヴィータ達の攻撃は明らかに威力不足。力の差は完全に歴然だった。

「・・・・・なのはの野郎が如何して、あんなに強く成っていたのかが漸く分かったぜ。こんな化け物達と戦い続ければ、嫌でも実力は上がるに決まっているよな」

ヴィータは如何してなのはがフェイトを超える実力を身に着けたのか漸く理解出来た。

デジモンと言う人間を魔導師を超える存在と戦い続ければ、嫌でも実力は上がって行くだろう。

実力が上がらなければ、死と言う結果しか待っていないのだから。

その様にヴィータが呟いていると、オオクワモンXは自身の顔に

付いている三つのツノを動かしながら、ヴィータに向かって突進する。

「シザーアームズΩ３　！！！」

「・・・・・チクショウ」

目の前に迫って来るオオクワモンXの姿を見ても、ヴィータはもはや動く事も出来ず、自身の死の瞬間を静かに見つめ始めた瞬間。

「諦めるにはまだ、早えんだよ！！！」

「（ッ！！！）」

突如として上空から声が響き、ヴィータとその内で融合しているリインは驚きの表情を浮かべ、上空に目を向けて見ると、凄まじい勢いで落下して来る赤いシャツを着た二十代後半前後の青年が存在していた。

「どりゃあああああっ！！」

ーーードゴオオオン！！

「グエアッ！！」

「（ハアッ！？？）」

落下して来た青年の拳を頭部に受けたオオクワモンXは苦痛の叫びを上げながら吹き飛んで行き、その姿を見たヴィータとリインは驚きの声を上げ、呆然としながら落下を続ける青年を見つめる。

デジモンを、しかも通常よりも遥かに強力な『X抗体』タイプの完全体デジモンを、魔力を使った形跡も無くただの拳で吹き飛ばした。それはオオクワモンXの実力が分かっているヴィータとリインからすれば驚く以外の何者でもないだろ。

しかし、青年はヴィータとリインの驚きに構わず、瞬時に服に付いているポケットの中から何かの機械のような物を取り出し、オレンジ色に輝く手を機械の上部分に当て始める。

「行くぞ！！アグモン！！」

「おうよ！兄貴！！」

「（ッ！！）」

青年の叫びに応じる様に聞こえて来た声に、ヴィータとリインが慌てて地上を見て見ると、木の残骸の上に立っている両手に赤い紐のようなものを付けた黄色いトカゲのようなデジモン－アグモン（S）－以降アグモンが存在していた。

アグモン（S）、世代／成長期、属性／ワクチン種、種族／恐竜型、必殺技／ベビーバーナー、ベビーフレイム、ベビーボルケーノ

X－進化を遂げたアグモンに近い特徴や能力を持つ恐竜型に分類される特殊なアグモン。赤い革ベルトを腕に巻いているのが最大の特徴でもあるが、指の数が4本から3本になっていたり、ドルモンに近い鼻になっていたり、また必殺技の面でもX－進化したアグモンの技が使えたりと他にも大きな変化が現れている。必殺技は、息を大きく吸い込み、口から炎を一気に吐き出す『ベビーバーナー』と、口から高熱の火炎の息を吐き出す『ベビーフレイム』。そして巨大な火球を口から吐き、大爆発を引き起こす『ベビーバーナー』だ。

アグモンの姿を見たヴィータとリインが驚きを更に深めた。
デジモンを連れているという事は、目の前で地上に落下し続けている青年もまた、パートナーデジモンを持った人間と言う事だ。
しかし、ヴィータとリインは、オーリスとキャロ以外にデジモンを連れたパートナーが応援に来るなど聞いていない。では目の前は青年は何者なのかと考えていると、青年は持っていた機械の液晶画面にＰＥＲＦＣＴＩＯＮ　ＥＶＯＬＵＴＩＯＮの文字が映ると共にを地上に居るアグモンに向けて叫ぶ。

「デジソウル！！フルチャージ！！」

「アグモン進化！！！」

青年が叫ぶと共にアグモンの体にオレンジ色の光が当たり、アグモンの体は分解され再構築され始める。
そして一瞬、巨大な恐竜の姿に進化するが、それでも進化は止まらず、体は寄り巨大化。
頭部が銀色の装甲へと変化し、　胸部からは左肩を覆う赤い装甲が装着され、背中には三門のレーザー砲と板状のノズルを五枚持った翼が二枚生える。
それと共に巨大化した身体を釣り合うように太く、長く右腕は変わり、　左腕はその原型を留めず、銀色の巨大な六連弾奏式の砲へと再構築される。更に尻尾の先も銀色の装甲で覆われ、アグモンが進化したデジモンがその姿を完全に現す。その名も。

「ライズグレイモン！！！」

ライズグレイモン、世代／完全体、属性／ワクチン種、種族／サイボーグ型、必殺技／トライデントリボルバー、ライジングデストロイヤー、ソリッドストライク

メタルグレイモンに似たサイボーグ型デジモン。体の半分以上が機械化されており、翼までもがビーム砲を搭載した兵器になっている。左腕は自分の体ほどもある巨大なリボルバーになっており、そこから放たれる攻撃の威力は核弾頭一発分に匹敵するといわれている。銃身はその威力に耐えられるようにクロンデジゾイド製であるが、その凄まじい威力と反動によって、通常は連射することは不可能。そんな重装備で、巨大な体を持つデジモンであるが、機械化された翼で軽々と大空に飛翔し上空からハントする事が可能なデジモンで在る。必殺技は、核弾頭に匹敵する威力を持った弾丸を、クロンデジゾイドの耐久力の限界ギリギリで、３発同時に高速発射（３点バースト）する『トライデントリボルバー』と、翼の３連ビーム砲と胸部発射口からビーム弾幕を放つ『ライジングデストロイヤー』。そして敵に突進して左腕の巨大なリボルバーで相手を殴り倒す『ソリッドストライク』だ。

進化したライズグレイモンは、瞬時に青年が落下する位置まで移動し右手を伸ばす。

青年はその右手に危なげ無く着地すると、吹き飛ばされて地上に落下していたオオクワモンＸに顔を向ける。

「行くぞ！ライズグレイモン！！」

「任せろ！兄貴！！」

ーーーガッシャン！！ドゴオォォォォォーーーー！！！！

青年の叫びにライズグレイモンは瞬時に頷き、自身の背中の金属の翼から推進剤を噴射し、起き上がろうとしているオオクワモンＸに突撃する。

「オォォォォォーーーーー！！！」

「ギエアッ！！」

突撃して来るライズグレイモンの姿に気がついたオオクワモンXは瞬時に起き上がるが、反応が一歩遅かった。
既にオオクワモンXの目の前に来ていたライズグレイモンは左腕のリボルバーの銃身を、オオクワモンXのツノの一つに向かって振り下ろす。

「ソリッドストライクッ！！」

ーーーバキィィィン！！

「ギエアアァァァァーーーーー！！！」

ライズグレイモンのソリッドストライクをツノに食らったオオクワモンXはツノの一つを粉砕された事で苦痛の叫びを上げ暴れ出す。
しかし、そうはさせないとライズグレイモンは右腕と両足でオオクワモンXの動きを抑え、右肩に移動していた青年がライズグレイモンに向かって叫ぶ。

「決めろ！！」

「トライデントリボルバーー！！！！」

ーーードゴオオン！ドゴオオン！！ドゴオオオン！！

「ギエアァァァァァァァァーーーーーーーー！！！！」

核弾頭にも匹敵する威力を持った弾丸を三発。しかも至近距離で胴体に受けたオオクワモンXは苦痛の叫びを上げながら、その体をデータ粒子へと変換させるとデジタマへと戻って行く。
そのデジタマを青年は瞬時に掴み取ると、自身の相棒で在るライズグレイモンに向かって笑みを浮かべ、ライズグレイモンも笑みを青年に向ける。

「よっしゃぁぁぁぁーー！！俺達の勝ちだぜライズグレイモン！」

「うん！だけど、その前に結構ダメージが蓄積して見たいだったな兄貴？」

「ああ、多分アイツだろうな」

ライズグレイモンの言葉に青年は頷き、上空から降りて来る傷だらけのヴィータを見つめる。
見つめられたヴィータは、苦痛に苦しみながらもアイゼンを青年とライズグレイモンに向かって構える。

「・・・・お前達・・・・・・何者だよ？・・・・・答えろ？」

「おい！無茶するなよ！！」

傷だらけに成りながらも戦意を失わないヴィータの姿に、青年は心配そうな声を掛けるが、ヴィータは警戒を解かずに青年とライズグレイモンを見つめる。
だが、次の瞬間、まるで糸が切れた人形のように、ヴィータは持っていたアイゼンを落とし、リインとのユニゾンが解除され、そのまま地面に倒れ伏してしまう。

ーーーバタン！！

「ッ！！ヴィータちゃん！！」

「大丈夫か！！」

倒れ付したヴィータの姿に、ユニゾンが強制的に解除され、表に出て来たリインと青年は慌ててヴィータに駆け寄ろうとする。

しかし、青年が掛け寄る直前で、ライズグレイモンがゲートタワーの在った方向を見つめ叫ぶ。

「兄貴！！この子達の仲間が来る！！すぐにこの場所から離れないと！！」

「だけどよ！」

青年はライズグレイモンの否定の声を上げようとする。

彼には目の前で倒れ伏しているヴィータの事を放っては置けないのだ。

その気持ちはライズグレイモンには充分過ぎるほどに分かる。ライズグレイモンも出来れば、ヴィータの介抱を行いたい。しかし、それがライズグレイモン達には出来ないのだ。

「兄貴！俺達が持っている物をこの子達が所属している組織だけには絶対に渡す訳にはいかない！！俺だって、その子の治療を行いたいけど。それを行ったら、俺達の姿が見られてしまう！！これ以上此処に居るのは危険なんだ！分かってくれ！！」

「クッ！！・・・・・・分かった。すまねえ！！」

青年は倒れ付しているヴィータと、その治療を行っているリインに謝ると、すぐさまライズグレイモンの肩に跳び乗り、戦場をライズグレイモンと共に離れて行く。

その姿をリインは、キャロ達が救援に来るまで、ヴィータの治療を行いながら見つめるのだった。

二頭の竜！！白銀の竜と鎧竜！！中編（後書き）

アンケートを行いたいと思います。

フェイトとブイモンに関する事ですけど。

徹底的にフェイトは絶望して、立ち上がるのと。

今の状態から立ち上がるの。

どちらが良いでしょうか？

両方のストーリーは既に思い浮かんでいるのですが、どちらも捨てがたいので、アンケートにしました。

前者だとブイモンが間違った進化をしてしまいます。

後者だと早い段階で、フェイトは在る人物とのフラグが立ちます。

出来ればご意見を下さい。

前者の場合は１を

後者の場合は２を

感想掲示板に入れてくれると嬉しいです。

期日は二十日の深夜０時までです。待っています！！

二頭の竜！！白銀の竜と鎧竜！！後編（前書き）

アンケート結果！！

皆様アンケートへのご協力ありがとうございます！

アンケートの結果は、最終的に1に成りました。
この場合、フェイトは愛されているのか悩みますが、徹底的に絶望させる事にします。

二頭の竜！！白銀の竜と鎧竜！！後編

キャロ、ギンリュウモン、ザフィーラ、ヴィータ、リイン達の戦いが、それぞれ決着が付いた頃。
深い森の中で始めにキャロ達と別れたスバルとギンガのメタリフェクワガーモンとの戦いも、終わりに近づいていた。

「フッ！！エミットブレイドッ！！」

ーーーブザン！！

『クッ！！！』

メタリフェクワガーモンが両手の指の銃口から生み出したビーム状の刃ーエミットブレイドを、スバルとギンガは両足のデバイスのローラーを加速させる事でかわす。
しかし、メタリフェクワガーモンは逃がさないと言う様に、瞬時に二人の移動先に移動し、右手をギンガに、左手をスバルに向かってエミットブレイドを展開したまま振り下ろす。

「ハアッ！！」

『トライシールド！！！』

ーーーガキィィィン！！

メタリフェクワガーモンが振り下ろして来たエミットブレイドに対して、スバルとギンガは同時に防御魔法を発動させ防ぐ。
そしてトライシールドが砕け散る前に、二人は同時にメタリフェ

クワガーモンの前から飛び去り、木々を障害物にする様に掛け抜けて行く。
その後ろ姿をメタリフェクワガーモンは苛立ちげに睨み付ける。
「えぇいッ！！先ほどから同じ行動を！！忌々しい連中だ！！」
メタリフェクワガーモンは心の底から苛立っていた。
スバルとギンガは、実力が遥かに上のメタリフェクワガーモンとは直接戦う行動は行わず、ヒット&ウェイの戦法を行い続けていた。
メタリフェクワガーモンの攻撃を二人はギリギリの所でかわすか、或いは命中する直前で防御魔法を発動させる事で防ぎ、隙が在らばメタリフェクワガーモンへの攻撃を行うと言う戦法を使って、僅かながらもメタリフェクワガーモンにダメージを与え続けるのだ。
本来のメタリフェクワガーモンならば、その様な戦法を赦さずに、自身の必殺技であるホーミングレーザーを使ってスバルとギンガを倒す事が可能なのだが、場所が悪かったとしか言えなかった。
（クッ！！よもや私に力を与えている森が邪魔に成るとは！！奴らめ！！それが分かってるから、業と森の中を移動しているのだな！！）
辺りに存在している無数の木々。本来ならばメタリフェクワガーモンの力を上げる筈の森こそが、今はメタリフェクワガーモンの最大の障害に成っていた。
今のスバルとギンガの速さはメタリフェクワガーモンの全速力の前では本来ならば、無力に等しいほどのスピードでしかない。しかし、こと今の現状ではスバルとギンガの速さにメタリフェクワガーモンは追い付けないでいた。
何故ならば森の木々が障害物に成っている為に、メタリフェクワガーモンは自身の動きを抑制されてしまっているのだ。何せメタリ

フェクワガーモンの必殺技であるホーミングレーザーは、ホーミングと名が付いているが、操っているのはメタリフェクワガーモン自身。縦横無尽に動き回るスバル達に当てるのは、一つ二つの障害物ではなく、無数の森の木々の邪魔が在る為に至難の技だった。
逆にスバルとギンガは小回りが自在に効くローラーを上手く使って動き続け、そのスピードを一切落とす事も無く動き回り続けている。

（森を破壊すれば可能だが、そうなれば私の力が落ちてしまう。他の敵が来る事も考えると、森を失うのは不味いな・・・・・・時間は掛かるが、確実に抹殺する動きを取るべきだろう）

そうメタリフェクワガーモンはスバルとギンガへの方針を決めると、すぐさま森の奥に向かって移動を続けるスバルとギンガを追い出す。
それに気が付いたスバルとギンガは顔を見合わせ、思念通話を行い始める。

（上手く誘導出来ている見たいね）

（うん。時間は掛かったけど、このままなら決められるよ）

（油断は禁物よ。相手は完全体。今の私達じゃ勝つ事は難しい敵なんだから）

（・・・・・そうだね。確かに油断したらいけないよね）

スバルはギンガの言葉に、気が緩んでいた事に気が付き、表情を真剣にして戻し気を引き締める。
その姿にギンガは僅かに笑みを浮かべると、自分達の背後から追

って来るメタリフェクワガーモンに顔を向け、自身のデバイスで在るバーストキャリバーから送られて来る情報を目にする。

（データでは、アイツの必殺技は両手から発動させるのが全て。その他のは完全に格闘が主なもの。そして遠距離攻撃はこの場所では逆に不利に成ってしまう物。森を相手も失う訳にはいかないでしょうからね）

次々と今までの戦いから得た情報と、ロングアーチで戦いの情勢を見ているオーリスから送られて来る情報を見ながらギンガはメタリフェクワーガモンの攻略方法を考える。

その時、突如として辺りに満ちていた高密度のＡＭＦが消失し、ギンガとスバルは笑みを浮かべ合う。

「破壊に成功したみたいね」

「うん！なら、そろそろ行こうよ！！」

「ええ、行くわよスバル！！」

ーーーギュウゥゥゥゥゥン！！

ギンガが叫ぶと共に、ギンガとスバルの両足のローラーが更に加速を始め、追って来ているメタリフェクワーガモンとの距離が開き始める。

「何ッ！？今までのスピードが限界では無かったのか！？」

更に加速を続けるギンガとスバルの姿に、メタリフェクワガーモンは自身がギンガとスバルのスピードを勘違いしていた事に気が付

き、慌てて自身もスピードを上げるが、距離は徐々に離れ始める。
その事に焦りを覚え始めたメタリフェクワーガモンは、走り続けながらも右手の銃口を森の奥に進み続けるギンガとスバルに向ける。
「クウッ！！こうなれば多少の損害は覚悟の上だ！！ホーミングレーザーー！！！！」
ーーードグオオオオオオン！！
メタリフェクワーガモンの放ったホーミングレーザーは、目の前に在る木を次々と粉砕しながら直進を続け、ギンガとスバルに追い付こうとする。
その事に気が付いたギンガとスバルは完全に笑みを浮かべ、迫り来るホーミングレーザーに向かって同時に叫ぶ。
『ウイングローード！！！』
ーーーシュウオン！！
ーーーガアアアン！！
「なっ！？」
ギンガとスバルにホーミングレーザーが直撃する寸前、突如として青い道と紫色の道ー二つのウイングロードが出現し、ホーミングレーザーからギンガとスバルを護る所か、辺りの森の木々の間を縫う様にして道が続いて行く。
「なっ！何なのだ此れは！？」

自身の見た事も無い力の存在にメタリフェクワガーモンは慌てた声を浮かべ、網目のように森の木々の間に存在する二つのウイングロードを見つめ始める。
それと共に二つのウイングロードの上に、ギンガとスバルはそれぞれ飛び乗り、その上を今現在出せる最大のスピードで駆け抜け始める。

ーーーギュウゥゥゥゥゥゥゥゥン！！

「クウッ！！己エェェェェェーー！！

自身を翻弄しようとする狙いに気が付いたメタリフェクワガーモンは怒りの叫びを上げ、先ずは青い道の上を駆け抜けているスバルから殺そうと、両手の銃口を構える。
しかし発射しようとした瞬間に、メタリフェクワガーモンの背後からギンガが凄まじいスピードで接近し、メタリフェクワガーモンから数メートルの距離でウイングロードを解除する共に、両足に付いているローラーを収納すると加速力の付いた打撃を放つ。

「ハアァァァァァーーー！！」

ーーードゴオオオン！！

「グアアアッ！！キ、キサマ！？」

ギンガの拳を背中に受けたメタリフェクワガーモンは苦痛の叫びを上げるが、自身に寄って来たギンガを逃がすまいと右手をギンガに向けようとする。
だが、その前にギンガは左足を振り上げ、踵落としをメタリフェクワガーモンの肩に向かってぶつける。

「ハアッ！」

ーーードゴン！！

「グアッ！！これしッ！？」

ギンガの踵落としを右肩に受けたメタリフェクワガーモンは、再び苦痛の声を上げるが、すぐさま残っている左腕の銃口からホーミングレーザーを放とうとする。

しかし、その直前で自身の右肩に乗っかっているギンガのデバイスが目に入り、その顔は完全に驚愕に染まった。

「なっ！？何故人間がそれを！クロンデジゾイドを持っている！？」

「さあ？母さんなら知っているんじゃないかしら？」

ーーーシャキン！

メタリフェクワガーモンの質問にギンガが答えると共に、再び収納してあった左足側のローラーがその姿を現す。

それに気が付いたメタリフェクワガーモンは冷静さを完全に失い、慌ててギンガから離れようとするが、ギンガは逃がさないと言うようにバインドをメタリフェクワガーモンの四肢に使用する。

ーーーガシィィィィン！！

「ッ！！」

「これで逃げられない。食らいなさい！！」

ーーーギュウゥゥゥゥゥゥン！！

「グアアアアアアアアーーーーー！！！！！」

自身の右肩で火花を散らしながら回転を続けるローラーに、メタリフェクワガーモンは苦痛の叫びを上げ、在る程度回転を続けると、ギンガは左足をメタリフェクワガーモンの体から離し、両手のリボルバーナックルと両足を使って、連続を攻撃をメタリフェクワガーモンに向かって放つ。

「ハアアアアアアアアアアアアーーーーー！！！！」

ーーードドドドドドゴオオン！！

「グオォアアアアアァァッ！！」

「これで決まり！ナックルバンカーー！！！！」

ーーーードゴオオン！！！！

「ガアハッ！！」

ギンガの連続攻撃の最後にナックルバンカーを胴体に受けたメタリフェクワガーモンは苦痛の声を上げて、バインドを破壊しながら吹き飛んでいく。

その先には右手のリボルバーナックルを構え、全ての装填されているカートリッジを惜しみなく使い、リボルバーナックルの回転速度を限界ギリギリにまで発動させているスバルが存在していた。

「決めなさいスバル！！」

「ハアァァァァァァァーーーー！！！一撃必砕ッ！！」

ギンガの叫びに答えるようにスバルは叫びながらの右手を大きく振り被り、右手の後方に凄まじい衝撃波を放つと共に、向かって来ているメタリフェクワガーモンに向かって跳び掛かる。

それは四年前にスバルとギンガの母親で在るクイントが傷付きながらも使った技。

四年間。血の滲む様な努力の果てに、ギンガとスバルが決死の思いで完成させた自分達の奥義。

その名も。

「獅子獣破斬ッ！！！！」

ーーーードゴオオオオオン！！

「グゴッ！オッ！オォォォォォォォーー！！！」

スバルの獅子獣破斬を背中に受けたメタリフェクワガーモンはその衝撃を体に浴びせられ、全身の武装に罅を入らせながら苦痛の叫びを上げ、体をデータ粒子へと変換させると共にデジタマへと戻って行った。

それを確認したギンガとスバルは安堵の息を付きながら地面に座り込み、目の前の地面に落ちているデジタマを静かに見つめる。

「・・・・・スバル？右手は大丈夫？」

「ハハハハハハッ・・・・・結構キツイよ・・・・・・やっぱ此れを使うのは、本当に決める時だけだね・・・連発で何て使えないよ」

「ハア～・・・・・そうね。使う時は本当に見極めないとね。隊舎に戻ったら、すぐに医務室に行って、良く見て貰いなさいよ」

「うん。そうするよギン姉」

スバルはギンガの言葉に素直に頷き、小刻みに震えている自身の右手を見つめる。

しかし、スバルはすぐに右手から目を離すと、遠く、未だに結界が消える様子を見せないはやて達が戦っている場所にギンガと共に目を向ける。

「無事に皆が戻って来てくれると良いね」

「そうね・・・・信じましょう。皆が生きて帰って来てくれる事を」

そうスバルとギンガは呟くと、遠くに見える結界を静かに見つめ続けるのだった。

結界内部。はやてのアーテム・デス・アイセスに寄って森から一面、氷が満ち溢れた銀世界の内部。

その世界の中で成熟期デジモン三体と完全体デジモン五体と、はやて、リインフォース、シグナム、そして１０８部隊の陸士達との戦いが繰り広げられていた。

「メガブラスターー！！」

「パンツァーシルト！！」

ーーードゴオオン！！

アトラーカブテリモン（赤）が放ったメガバスターをリインフォースは、パンツァーシルトを使用する事で防御する。
それと共に地上でそれぞれデバイスを構えていた１０８部隊の局員五名が、上空に浮かんでいるアトラーカブテリモン（赤）に向かってバインドを発動させる。

ーーーガシィィィン！！

「今です！リインフォース分隊長！！」

「ああッ！！ディバインバスターー！！」

ーーードグオオオン！！

「グエアッ！！」

リインフォースの放ったディバインバスターはアトラーカブテリモン（赤）の胴体に直撃し、アトラーカブテリモン（赤）は苦痛の叫びを上げ、ディバインバスターを受けた場所を手で押さえる。
リインフォースはその姿にアトラーカブテリモン（赤）の力が下がっている事を確信する。

「やはり奴は弱体化している。他のデジモン達の動きも鈍い。オーリス三佐が言ったとおり、昆虫は寒さに弱いようだな」

目の前で先ほど森にいた時と打って変わって、アトラーカブテリモン（赤）や他のデジモン達の動きは明らかに鈍くなっていた。

原因は今リインフォース達が戦っている場所に在る。
先ほど森だった場所は、今ははやてのアーテム・デス・アイセスの影響で凍えた寒さが感じられるほどの場所に成っている。バリアジャケットが無ければ、リインフォースやシグナムと言う特殊な者達以外は確実に風邪を引くほどの冷気。
それは昆虫型のデジモンや植物型のデジモンに取っては、天敵としか言えない世界に成っていた。
デジモンは相性の良いフィールドならば力は倍増するが、逆に相性の悪いフィールドだと力は半分ほどに減ってしまう。それは完全体も例外ではない。その為にアトラーカブテリモン（赤）の力は半分ほどに減っていた。

（だが、それでも完全体の力はＡＡか、ＡＡＡランクに及ぶ。成熟期は数名で掛かれば勝てるが、完全体はやはり私かシグナム、そして主が戦うのが適任だろう。オーリス三佐のデジモンは１０８部隊の隊員達の援護で忙しい様だからな）

そうリインフォースは考えると、遠くでオオクワモンと戦っているナイトチェスモン（白）に顔を向ける。

「ビッグダーーッ！！！」

ーーードゴオン！！

「ギエアッ！！」

ナイトチェスモン（白）の投げ付けた巨大なダーツを体に受けたオオクワモンは苦痛の叫びを上げた。
しかし、瞬時に体勢を整えると地上に立っているナイトチェスモン（白）に向かって、オオクワモンは自身のツノを構え突撃する。

「シザースアームズΩ！！」

「チィッ！！」

突撃して来るオオクワモンの姿を見たナイトチェスモン（白）は、空高く跳躍する事でかわす。

しかし、自身の攻撃をかわされてもオオクワモンは諦めずに、羽を羽ばたかせる事で方向転換を行い、地上に落下しているナイトチェスモン（白）に今度こそシザースアームズΩを決めようと、ツノを動かし始める。

だが、それに対してナイトチェスモン（白）は全く慌てず、寧ろ口元に笑みを浮かべ叫ぶ。

「今だ！！」

ーーーガシィィィィン！！

「ギアッ！？」

ナイトチェスモン（白）が叫ぶと共に、オオクワモンの体に幾つ物バインドが出現し、オオクワモンを空中で拘束する。

それと共に地上へと安全に着地したナイトチェスモン（白）は、再びその身を跳躍させ、オオクワモンの上で急降下する。

「ホーンギャロップ！！」

ーーードゴオン！！

「グエアッ！！」

ナイトチェスモン（白）のホーンギャロップを背に受けたオオクワモンは苦痛の声を上げて地上に激突し、その背に乗せながらナイトチェスモン（白）は持っていた巨大なダーツを構え、オオクワモンの背に向かって振り下ろす。

「ムン！！」

ーーードスッ！！

「グオアッ！！」

ダーツが背に刺さったオオクワモンは苦痛の叫びを上げ、その身を蒼いデジコードに包ませるとデジタマに戻って行く。
そのデジタマを近くに隠れていた局員が拾い上げ、ナイトチェスモン（白）が声を掛ける。

「すぐにデジタマを安全な場所へ。それと映像の映し変えもロングアーチに連絡を」

「了解ッ！！」

局員はナイトチェスモン（白）の言葉に答えると、デジタマを大切そうに抱えながらその場を去って行く。
それと共に姿を現した四名の局員に、ナイトチェスモン（白）はダーツを抱え直し、別の場所で繰り広げらている戦いに目を向ける。

「他の局員達の援護に向かう！行くぞ！！」

『了解ッ！！』

ナイトチェスモン（白）の叫びに、四名の局員達はそれぞれ答えると、自分達のデバイスを構え、ナイトチェスモン（白）と共に別の場所の戦闘の援護に向かい出す。

これが今回の作戦での１０８部隊の局員達の役目だった。

純粋な火力で言えば１０８部隊の局員達は、圧倒的にはやて達に敗北する。

人間では充分な火力でもデジモンには、特に完全体にはダメージは殆ど与えられない。

成らば如何すればいいのかと、デジモンの事を知っているオーリスやゲンヤ、レジアス、そして他の地上局員達は考え続け、一つの答えを見つけた。

“徹底的なデジモンや高威力の魔法を使える者達のサポート”

それ以外にデジモン達と、魔力の低い者達が戦う以外に無いと彼らは考え、地上の局員達の訓練内容に盛り込んだのだ。

何せ地上は低ランクの魔導師が主流。一応Ｓランクオーバークラスの魔導師も存在しているが、本局と比べれば雲泥の差。成らば低ランクの魔導師でも戦える戦法を考え、今現在使っている戦法を編み出したのだ。最も今回は敵の中に広範囲の攻撃を行えるデジモンが存在していなかった事も幸いしている。

「考えたものだ。力の無いものでも、サポートだけに専念すれば、デジモン達にダメージは必ず与えて行く」

氷の広がる世界の中で、完全に凍り付いた高い木の枝の上から戦いを見ていたレナモンは、本当に感心した声で辺りで行われている戦いを眺める。

「しかし、デジモン達も馬鹿ではない。必ずこの場での弱点を倒そうと動く筈だ」

レナモンはそう呟くと、遥か上空で魔法を使用して辺りで戦っているリインフォースやシグナム、ナイトチェスモン（白）、１０８部隊の局員達に指示や援護を行い続けている自身のパートナー一八神はやてに険しい表情を向ける。

「はやては近接戦闘や高速処理が苦手だと言う。リイン姉さんが居れば別だろうが、今の状況ではリインフォースとのユニゾンも不可能だ」

八神はやては確かにＳＳランクの魔導師の称号を持っている。しかし、なのはやフェイトと違って個人での戦闘力は限りなく低い。リインやリインフォースとユニゾンすれば確かに話は変わるが、リインはゲートタワーの破壊に向かって居る為に居らず、リインフォースが今の状況でユニゾンすれば、逆に戦力が減る為にユニゾンは不可能。

前衛として護る筈のシグナムにしても、ジュレイモンや残っているウッドモン達の相手が精一杯の為に、はやての護衛は不可能なのだ。

その事が分かっているレナモンは、自身が空を飛べない事を悔しく思い、拳を握り締める。

ーーーギュウ！

「クッ！！・・・・・・そう言えば、完全体は五体の筈？ロングアーチからもそう連絡は届いている。最後の一体は何処に居る？」

最後の完全体のデジモンの姿を見て居ない事に気が付いたレナモンは、すぐさま辺りを見回す。
先ほど倒したオオクワモンを外すと、ジュレイモンはシグナムが、アトラーカブテリモン（赤）と（青）はりインフォースと１０８部隊の局員達が、成熟期のウッドモン二体とスナイモン一体は１０８部隊の十名の局員とナイトチェスモン（白）が戦っている。
その中には最後の完全体の姿は存在していなかった。その事に気が付いたレナモンは慌てた表情を浮かべ、すぐさま木の頂点まで移動し、戦いの場全土を見回すと、はやての上空に光るものを見つける。

「アレは！？まさか！？」

はやての上空で輝く者ー赤い刃の槍を両手で構え、宝石のように輝く鎧を身に纏い背中に四枚の虫の翼を兼ね備え、赤い瞳を持った人の形をした昆虫型デジモンージュエルビーモンがはやてに向かって急降下する。

ジュエルビーモン、世代／完全体、属性／ワクチン種、種族／昆虫型、必殺技／スパイクバスター、ショットクロー
見る角度によって色が変わる綺麗な鎧を纏った昆虫型デジモン。その宝石の様な鎧は頑丈で、目をくらませる効果も持っている。華麗に戦う格闘のエキスパート。必殺技は、右手に握っている槍を光速で振り抜き、それによって発生した衝撃波で攻撃する『スパイクバスター』に、鉄鋼に備えられた爪で相手を切り裂く『ショットクロー』だ。

『はやてッ！！上空からデジモンが来る！！』

「ッ！！何やて！？」

バリジャケットのポケットから聞こえて来たレナモンの声に、はやては驚きの声を上げ、慌てて自身の上空を見て見ると、ジュエルビーモンが持っていた槍を光速で振るい、衝撃波をはやてに向かって放つ。

「死ね人間！！スパイクバスターー！！！」

ーーードゴオオン！！

「クッ！キャアァァァァァーーーーー！！！！！」

『主ッ！！！』

『八神部隊長ッ！！』

ジュエルビーモンのスパイクバスターを受けたはやては、凄まじいスピードで落下をし始め、それを見たシグナム達ははやての救援に向かおうとする。

しかし、そうはさせないとそれぞれ戦っていたデジモン達が一斉に動き、シグナム達の行くてを阻む。

「行かせる訳にはいかん！！チェリーボム！！」

「クッ！！」

ジュレイモンの放ったチェリーボムをシグナムは飛び去る事でかわす。

だが、ジュレイモンはそれを読んでいたと言う様に、体から無数のツタをシグナムに向かって伸ばし始める。

「チィッ！！」

ーーーブザブザブザッ！！

伸びて来るツタをシグナムはレヴァンティンで切り裂くが、次々とジュレイモンはツタを伸ばし続け、シグナムを完全にその場に釘付けにする。

その行動にシグナムはジュレイモンが自身をはやての救援に向かわせない様にしようとしている事に気が付き、ツタを斬りながら他の場所に目を向けて見ると、シグナムと同様にリインフォース達も相手をしていたデジモン達に阻まれていた。

（クッ！！主が司令塔だとばれたか！！不味い！！完全体が相手では主は長く持たない！！急がなければ！！）

シグナムはそう考えると共に、ジュレイモンのツタの群れから抜け出そうとする。

しかし、ジュレイモンも事態を好転出来る場面だと分かっている為に、シグナムに向かって死に物狂いでツタを伸ばし、完全にシグナムの動きを封じる。

同様に他の場所でも、リインフォースやその周りで戦っていた１０８部隊の局員達は、アトラーカブテリモン（赤）と（青）に阻まれ、ナイトチェスモン（白）も同様にウッドモン二体とスナイモンに道を阻まれ、動きが完全に取れない状態に成っていた。

その間にもはやては地上へと落下を続けていたが突如として目を見開き、背中の羽を羽ばたかせて、空中で姿勢を整えると、自身を追って来ているジュエルビモーンに向かって自身の周りに生み出した十個の赤い短剣ーブラッディダガーを放つ。

「刃以て、血に染めよ。穿て、ブラッディダガー！！！」

「フッ！！そんな物は効かん！！」

迫り来るブラッディダガーを見ても、ジュエルビーモンは余裕そうな声を上げて、持っていた槍を光速で振り回し、次々と衝撃波を放つ。

ーーードドドドドゴオン！！

「クッ！！」

衝撃波に寄って破壊されたブラッディダガーの姿を見たはやては悔しそうな声を上げると、背中の羽を羽ばたかせてジュエルビーモンから少しでも離れようとする。

はやての得意とする魔法は広域・遠距離魔法。近接系の魔法も持っているが、はやては自分の近接戦闘能力では使いこなせない事が分かっているので、少しでも距離を取り、自分が得意とする魔法を放てる距離まで移動する気なのだ。

しかし、その事は上空で戦いを観察していたジュエルビーモンは気づいていた。

ーーービュン！！

「ッ！！」

一瞬の内に目の前に移動して来たジュエルビーモンの姿にはやては驚きの表情を浮かべるが、ジュエルビーモンは構わずに持っていたはやてに向かって振り下ろす。

「逃さんぞ！！」

「プロテクション！！」

ーーーガキン！！

ジュエルビーモンが振り下ろして来た槍に対して、はやては防御魔法を発動させ受け止める。

だが、その均衡は僅かしか持たず、徐々にはやてのプロテクションに罅が入り始める。

ーーービキビキッ！！

「貰ったぞ！！」

「バリアバーースト！！！」

「なっ！？」

ーーードゴオオン！！

はやてが叫ぶと共にプロテクションは突如として爆発を起こし、はやてとジュエルビーモンはそれぞれ背後に向かって吹き飛んで行く。

事前に爆発する事が分かっていたはやては、そのまま背後に背を向け、すぐさま地上の木々の方に飛んで行く。

（なのはちゃんには大感謝や！！教えて貰っておいて本当に良かったわ！！）

はやてはその様になのはに向かって礼を内心で叫ぶと、更にスピードを上げて、凍り付いた木々の間を縫う様にして飛び始める。

「クウッ！！逃さんと言っているだろうが！！」

吹き飛ばされた影響に寄って、崩れた体勢を整え直したジュエルビーモンは、はやてを此処で逃がす訳にはいかないと思い、すぐさま自身の背中のを羽を羽ばたかせて、はやての後を追い始める。

「絶対に逃がす訳にはいかん！！」

ジュエルビーモンは決死の思いを持って、はやてを追い続ける。

此処ではやてをジュエルビーモン達は、逃すのだけは何としても防がなければ成らないのだ。

（奴が指揮官なのは間違い無い！奴を殺せば僅かでも敵は動揺する筈！！オオクワモンを犠牲にして作り上げた好機！！必ず物にして見せるぞ！！）

ジュエルビーモンは内心でそう叫ぶと、自身の背中の羽を更に羽ばたかせてスピードを上げる。

その事に気が付いたはやては僅かに後方を振り返ると、ジュエルビーモンが追って来ているの確認する。

確認が終わるとすぐさま辺りを見回し、誰も居ない事を確認し、自身のバリアジャケットの中から蒼い縁取りのディーアークを取り出す。

（チャンスは一度きりやな。この一回のチャンスに掛けるしかあらへん！！）

はやては内心で叫ぶと共に力強くディーアークを握り締め、突如として後方を振り返り、今度は水色の短剣を幾つも自身の周りに作り出し、ジュエルビーモンに向かって放つ。

「フリジットダガーーー！！！！！」

「同じ事だッ！！！」

自身に向かって来るフリジットダガーに対して、ジュエルビーモンは先ほどと同様にスパイクバスターを使って破壊しようとするが、その直前で木の葉がジュエルビーモンの背に向かって飛んで来る。

「狐葉楔（こようせつ）！！」

「何ッ！？」

後方から迫って来る狐葉楔（こようせつ）に気が付いたジュエルビーモンは慌てて後方を僅かに振り返り、前から迫って来ているフリジットダガーへの対応が遅れる。

「おのれッ！！」

ーーーキッキッキッキィン！！

ジュエルビーモンは槍を振り回す事で、迫り来るフリジットダガーと狐葉楔（こようせつ）を砕け散らせる。

しかし、次の瞬間に、自身の両手から冷たさを感じ、慌てて槍を持っている手と槍を見て見ると、槍と手が凍り付いていた。

「何だと！？これは一体何だ！？」

自身の理解の及ばない現象に、ジュエルビーモンは驚いた声を上げ、凍り付いた槍と自身の両手を見つめる。

その隙にジュエルビーモンの背後の木に移動していたレナモンは、瞬時に木から飛び上がり、ジュエルビーモンの背に向かって超高速で回りながら、回し蹴りを放つ。

「隙だらけだ！！狐回蹴（こかいしゅう）！！！」

ーーードドドドゴオン！！

「グアアッ！！」

レナモンの狐回蹴（こかいしゅう）を背に受けたジュエルビーモンは苦痛の声を上げて、地面へと落下して行く。

本来のジュエルビーモンならば、成長期で在るレナモンの技など簡単に避けられるものだ。

しかし、現在ジュエルビーモンが居る場所は氷に満ち溢れた場所の上に、両手と槍が凍り付いた事で、注意が散漫に成っていた為に、レナモンの攻撃をかわせず、地面に付してしまったのだ。

その事が分かっているレナモンは地面に着地すると、すぐさま構えを取り出し、起き上がろうとしているジュエルビーモンを警戒するが、ジュエルビーモンは逆にレナモンには構えを取らず声を掛ける。

「待て！！何故人間に力を貸す！！人間は私達の世界を滅ぼした者達！！その様な者達に力を貸せば、何れは道具の様に捨てられるぞ！！」

「・・・・・・」

「私達と共に人間を滅ぼすのだ！！人間が居なくなればデジモンは平穏に暮らせる！！だから私達の手を握れ！！」

「・・・・・・」

「レナ・・・・・」

ジュエルビーモンの言葉にレナモンは沈黙を保ち、上空でその様子を見ていたはやては不安に襲われる。

確かにジュエルビーモンの言葉は在る意味では正しい。今回の戦争の引き金を先ず間違いなく人間。その上、ルーチェモンや他の七大魔王の覚醒を呼んだのも、人間に間違い無い。

“人間が居なければデジモンは、平穏に暮らせた”

ジュエルビーモンの言葉は間違いでは無いのだ。

その事ははやてには充分過ぎるほどに分かっている上に、レナモンを同胞で在るデジモン達と戦わせているのも事実。誓いが在るとは言え、はやてにはジュエルビーモンの言葉を否定する事は出来なかった。

「共に人間を滅ぼし、デジモンだけの平穏な世界で暮らそうではないか！」

「・・・・・興味が無いな」

「何ッ！？」

「えっ！？」

レナモンが呟いた言葉に、ジュエルビーモンとはやては驚きの声を上げた。

しかし、レナモンはその様子には構わず、自身の考えを話し始める。

「悪いが私に興味が在るのは、はやてが誓ってくれた世界だけだ。お前の言う世界には全く興味が湧かない」

「何故だ！？貴様は道具の様に捨てられても良いのか！？貴様が信じて居る者とて！何れは必ず裏切るぞ！！」

「裏切られたのならば、私の見る目が無かっただけの事。私は今の進んでいる道には後悔は全く無い。私は、はやての誓ってくれた世界の為に戦う！！それが私の戦う理由だ！！」

「グウッ！！」

レナモンの迷いの無い宣言に、ジュエルビーモンは僅かに後退を行い、レナモンとはやてを険しい表情で見つめる。

その間に上空に居たはやては、レナモンの横に着地し、右手に持っているディーアークを見つめる。

「・・・・・レナ。もう一度誓うわ。何が在っても私はレナも一緒に笑い合える世界を必ず作り上げたる！だから、力を貸してや！！」

「勿論だ！私はこの力をその世界を作り上げる為に貸そう！！」

《ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

はやてとレナが互いに誓い合った瞬間に、ディーアークの液晶画面に文字が浮かび上がり、それと共に音声が鳴り響き、レナモンの体が蒼いデジコードに覆われ始める。

「レナモン進化！！」

蒼いデジコード内部で、レナモンの叫び声が響いた瞬間に、蒼いデジコードは弾け跳び、その中から九本の尻尾を持って、黄色い毛皮で体を覆い、首元に赤と白の色合い兼ね備えた巨大な首輪の様な物を付け、額に対極図の紋章が描かれたキツネ型のデジモンが姿を現す。その名も。

「キュウビモン！！」

キュウビモン、世代／成熟期、属性／データ種、種族／妖獣型、必殺技／狐炎龍（こえんりゅう）、鬼火玉（おにびだま）

多くの経験を積んだレナモンが進化するといわれる九本の尻尾を持つ妖獣型デジモン。強大な精神力を武器に「術系」の技を得意とする。昔は平和の使者として崇められていた。また、この他に色違いのヨウコモンと言うデジモンが存在している。必殺技は、九本の尻尾から青く燃える龍を出して、相手を焼き尽くす『狐炎龍（こえんりゅう）』に、同じく九本の尻尾の先から、狐の顔のついた青い炎を相手に向かって飛ばす『鬼火玉（おにびだま）』だ。その他にも得意な妖術で相手を攻撃するぞ。

「成熟期に進化しても、私には勝てん！！スパイクバスターー！！！」

ーーードグオン！！

姿を現したキュウビモンとはやてに向かって、シュエルビーモンはスパイクバスターを放った。
しかし、両手と槍が凍り付いている為か、先ほどまで威力は存在せず、はやてはすぐさまキュウビモンの背に乗り、キュウビモンは前足と後ろ足を動かして、上空に浮かび上がる事でかわす。

ーーーシュウン！！

「逃がさんぞ！！」

「もう逃げ切る気は無いで！！」

ジュエルビーモンの言葉にはやては否定の叫びを上げ、キュウビモンも頷くと、後ろに付いている九つの尻尾を構え、青い炎を尻尾の先にそれぞれ生み出し、龍の形へと炎を変え始める。

「なっ！？炎だと！？不味い！！」

自身の種族の弱点で在る炎を使う技が来る事が分かったジュエルビーモンはすぐさま、上空に逃げようとする。
しかし、その前に技の準備が整ったキュウビモンは、ジュエルビーモンに向かって九つの青い炎の龍を放つ。

「狐炎龍！！！」

ーーーゴオオオオオオーーーーー！！！！

「グウッ！！」

迫り来る狐炎龍の姿を見たジュエルビーモンは、かわす事は出来

無いと判断し、槍を構えて防御しようとするが、狐炎龍(こえんりゅう)はジュエルビーモンには直撃せず、その横を通り過ぎて行く。

「何？一体如何言うつもッ！？」

直撃を食らわなかった事にジュエルビーモンは疑問の声を出そうとするが、すぐにキュウビモンの真の狙いに気が付き、慌ててキュウビモンと正三角形の魔方陣を作り出しているはやてを見つめる。

ジュエルビーモンの周りを通過した九つの炎は未だにキュウビモンの尻尾と繋がり続け、まるでジュエルビーモンとキュウビモンを繋ぐ道のような形に成っていた。

「これで逃げられへんな。周りから逃げようにも、炎に道を封じられている。昆虫のアンタにはキツイやろうな」

「キ、キサマッ！？」

「赦してなんていわへん。憎んでくれてええで。私らはそれだけの事をあんた等にしたんや。地獄に行く覚悟は出来てる。さよならや！響け終焉の笛、ラグナロク！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオン！！

「ウッ！ウオォォォォォォォォーーーーーー！！！！」

放たれたラグナロクはジュエルビーモンだけではなく、キュウビモンの狐炎龍(こえんりゅう)さえも飲み込み、空高くへとジュエルビーモンを吹き飛ばして行く。

そしてラグナロクの影響が収まると、上空から一個のデジタマが落下して来て、はやてはそのデジタマを大切そうに抱え、キュウビ

モンの背に乗せる。
「安全な場所まで運んでな。まだ、キュウビモンの事をばれる訳にはいかへんのや・・・・・ゴメンな」
「気にしないで良い。私も納得している事だ。では、先に戻っている」
キュウビモンはそうはやての答えると、はやてに背を向け、氷の木々の間を疾走して行く。
それを確認したはやては、すぐさま上空に浮かび上がり、他の場所での戦いを見て見ると、既に他の場所でも戦闘を終えたのか、此方に急ぎ向かって来るシグナムとリインフォースの姿を確認し、安堵の息を付く。
「・・・・・終わったんやね・・・・・勝てたのに・・・・全然嬉しくないわ」
はやてのその言葉は、冷たい空気に覆われた結界の内部に消えて行くのだった。

最初の任務が終わった事を確認した機動六課隊舎司令室。
其処では戦いが終わったと言うのに、慌しくロングアーチのメンバーは動き続け、その部屋の最上段でゲンヤとオーリスが命令を出し続けていた。
「映像に書き換えを急げ！！本局の連中にはデジタマが全部破壊された様に映像を送るんだ！！」

「負傷者は軽傷、重症問わずにすぐに病院で精密検査をさせなさい！！デジモンの攻撃は毒を持つ者も居るのです！僅かな傷が死に繋がる可能性も在ります！医療班にその事を伝えるんです！！」

『了解！！』

ゲンヤとオーリスの命令にロングアーチのメンバー全員が答え、次々と通信と映像の書き換えを行って行く。

その姿にゲンヤとオーリスは満足げに頷くと、互いに顔を見合わせる。

「これでクラナガンの安全は確保出来ました」

「ああ、だが、これからが大変だ。本当の戦いはこれからだぜ。レジアス中将には宜しく頼むと伝えてくれ」

「もちろんです。しかし、彼は、いえ、彼らは何者でしょうか？」

「・・・・・俺にも分からねえが、敵じゃ無ければ良いんだがよ」

「・・・・・そうですね」

ゲンヤの言葉にオーリスも同意の声を上げ、近くのモニター映っているヴィータを助けた青年とライズグレイモンの姿を、険しい表情で見つめるのだった。

二頭の竜！！白銀の竜と鎧竜！！後編（後書き）

次回予告

最初のゲートタワーを破壊したはやて達。

しかし、待っていたのは賞賛では無かった。

一方地球でも事態は動き、デジモン達が動き始める。

次回、漆黒の竜人と少女、『行いの結果』

彼女達は知る。人々のデジモンへの憎しみを。

行いの結果

戦いが終わってから数日が経ち、はやて達ー機動六課の事後処理も在る程度を終わった日の事。

はやてとレナは部隊長室の窓ガラスから、遠くに見えるクラナガンの陸地を左手で持っている双眼鏡で見つめ、本気で頭が痛そうに頭を右手で押さえていた。

何故ならば、はやての見つめる先には、多くのクラナガンの民衆が存在し、『デジモン抹殺！！』『機動六課はデジモンに魂を売った最低の部隊！！』『デジモンはミッドから消えろ』などなど、機動六課に対する中傷の嵐が起きていた。一応それを諌める為に地上局員達ーレジアスとゲンヤの同志達が民衆を治める行動を行っているが、焼け石に水としかはやてには思えなかった。

「・・・・・いや～、覚悟はしておったけど、此処まで中傷が来る何てな」

「彼らからすれば、デジモンは危険な生物達。そんな生物が近くに居るだけ不安なのだろう。本局もその様に成る様に長年情報を操作を行っていたから」

「ハア～、オーリス三佐が言ったとおり、本気で先がながそうやね。デジモンの説得に成功しても、民衆がアレだと、またすぐに戦争が起きるで、ほんまに」

「そうだな。確かに双方の理解が無ければ、再び戦争は必ず起きるだろう」

「まあ、とにかく私らが出来るんは、少しでも憎しみを持っている

デジモン達から人々を護る事だけや。誹謗中傷なんて痛くないで」
はやてはレナにそう告げると、自身の執務机の上に載っている大量の書類ークラナガンの人々から届いた大量の抗議文に目を向ける。
「これを何としても無くす事が私らが、行わなければいけない事や。その為に地上本部でもレジアス中将やゲンヤさんが頑張っている」
現在、レジアスとゲンヤは機動六課の地上での支援者と言う事で、記者会見を行い、ゲートタワーの周りに発生しているＡＭＦの危険性や、リュウダモンやポーンチェスモンの説明を行い続け、少しも民衆のデジモンへの評価を変える努力をし続けている。
しかし、それを邪魔する様に本局の方でも記者会見を上層部達は行い、レジアスとゲンヤの主張を否定する様な行動を行っている。
「本局は本気でもうルーチェモン達の支配下や。クロノ君達の行動もかなり邪魔されとる。本局は完全に敵だと判断して、動くしかないわな」
「それが一番だろう。本局内部で味方を作るのは、もはや不可能だ。魔法主義だけではなく、デジモンへの理不尽な憎しみを抱いている者が多すぎる」
「第九管理世界の悲劇の真相を知らない人達が多すぎるのも、原因の一つやけど。それだけでなく、管理局が絶対と思っている人達もかなりの数や・・・・・何時から管理局はこんな組織に成ってしまったんやろな」
はやては悲しみに満ちた声を出して、顔を俯かせた。
管理局の設立の目的は、次元世界の平和だった筈。

しかし、長い年月を掛けて、管理局内部は腐敗してしまった。本来ならばその腐敗に気が付く者が居るべき筈なのに、管理局に所属する誰もがその腐敗に気が付かなかった所か、腐敗が当然だと思っている始末。ルーチェモン達はその腐敗を進行させる事で、自分達の思い通りに管理局を支配してしまったのだ。

「管理局にはもう未来なんてあらへん。私ら管理局に待っているのは、地獄だけや。どんなに足掻いても、人々がデジモンを受け入れても、管理局員達に未来は無い」

「はやて・・・・・」

「だけど、私はそれでも先に進む。オーリス三佐が言っていたとおり、戦いが終わった後の為にも、デジモンとの融和だけは絶対に成功させたる。レナも笑える世界に絶対にしてみせたる！」

「成らば、私はその未来の為に力を貸そう。デジモンも人間も共に笑える世界の為に」

はやての宣言にレナは笑みを浮かべながら言葉を言い、はやても嬉しそうな笑みを浮かべる。

そして二人は目の前の抗議文を片付けようと、自身の執務机に向かおうとするが、その前に険しい表情を浮かべたオーリスとポーンチェスモン（白）が部隊長室に入って来る。

「失礼します」

「・・・・何か在ったんですか？」

オーリスの険しい表情を見たはやては、同じ様に顔を険しくして

質問し、レナも険しい表情を浮かべる。
地上本部に一時戻り、次に破壊するゲートタワーの情報を集めていた筈のオーリスが六課に戻って来たのだから、何が在った思うのが当然だろう。
オーリスはそれに答えるように頷き、はやてに報告を始める。
「幾つか不味い事態が起きました。一つ目はかなり悪いニュース。二つ目は悪いニュース。三つ目は少し悪いニュース。そして最後に良いとも悪いとも言えないニュースです」
「良いニュースは無いんですか？」
「そんな都合の良いニュースが、此処に来ると思いですか？」
「全然思えません」
オーリスの質問にはやては即答して答えた。
機動六課に良いニュースが届くなど、現在の状況では兆が一にも在り得ないはやては分かっていた。
クラナガンの民衆からは、リュウダモンとポーンチェスモン（白）の事で誹謗中傷の嵐。本局にしてもリュウダモンとポーンチェスモン（白）を実験動物として寄越せと催促の嵐。
その様な最悪の嵐しか来ない機動六課に、喜べる様なニュースが来るとは、はやてには如何しても思えなかった。その事はレナも分かっているのか、オーリスの言葉に深く頷き、二人の理解が在る事が分かったオーリスは話を始める。
「先ずは、少しでも衝撃を抑える為に、かなり悪いニュースから話します。率直に言います。第二十管理世界が、一昨日の昼ごろにデジモン達の手で滅ぼされました。住民の避難も絶望的との事で、第

二十管理世界の生き残りは居ないとの事です」

『ッ！！！』

オーリスが告げた最悪の事実に、はやてとレナは驚きの表情を浮かべ、顔を見合わせる。

また、一つの世界が滅んだ。しかも、今度は第九管理世界の時とは違い、住民の生存者はゼロと言う結果。かなり悪いニュースとしか言えないだろう。

「本局内部に潜入しているスパイからの報告に寄ると、完全体のデジモンが究極体に進化し、硬直していた戦況をデジモン有利に追い込んだとの事です」

「究極体が！？」

「ええ、究極体の力はご存知のとおりSランクオーバーの魔導師十名で、漸くダメージを与えられるぐらいです。艦載兵器もアルカンシェルも使えない状況では、究極体に人間が勝てる可能性はゼロとしか言えません。しかも、これは信じられない事ですが、スパイの報告だと“戦った部隊は非殺傷設定を使っていた可能性在り”だそうです」

「非殺傷設定やて！！？」

オーリスの告げた事実に、はやては敬語さえも忘れて驚きの叫びを上げ、レナも信じれないと言う表情を浮かべて、目を見開いていた。

魔導師のデバイスには殺傷設定と非殺傷設定が存在している。この内、非殺傷設定は対象を傷つける事無く、魔力ダメージを与える

機能。この機能を利用して管理局は犯罪者を出来るだけ傷付けないようにして来た。
だが、現在の状況はデジモンの戦争を状態。既に全管理局員に非殺傷設定を解除を命令が厳命されている上に、デジモン達には非殺傷設定の攻撃など、ダメージが無いに等しい。成長期や成熟期にならば、在る程度の効果は在る可能性が在るが、完全体、まして究極体には効果など絶対に無いと直に戦ったはやてには断言出来る。にも、関わらずデジモンを憎んでいる“管理局員が非殺傷設定を使った”

「何を考えているんや、その局員達は!?デジモンを相手に非殺傷設定やて!?そないなことしたら、デジモンに経験を与え・・・・・・・・まさか?そないなこと・・・・嫌、今の上層部なら・・・・」

叫んでいる途中で在る事実に気が付いたはやては、顔を青ざめさせながら呆然とした表情を浮かべてオーリスを見つめ、オーリスは頷く。

「如何やらお気付き成ったようですね。我々地上本部の同志達も同じ答えに行き着きました。その部隊は業とデジモンに経験を与えるような行動を行った可能性が在ります。その様な行動を行う理由は一つしか在り得ません」

「人々へのデジモンへの恐怖を上げる為に、完全体のデジモンを究極体に進化させんですやろうな。私らの行動を邪魔する為に」

「それも在るでしょうが、近々第二十管理世界は管理局との同盟を切る方針が在ったようです。『管理局はもはや当てには出来ない。自分達の手でデジモンを止める』と、本局の上層部との会談で話していたようです」

「成る程、そうなれば、デジモンと直接第二十管理世界の人々は相対してしまう。その結果、第二十管理世界の人達が真相を知ってしまう可能性も在りますやろな」

「ええ、だからこそ、本局上層部は怪しまれない動きで、第二十管理世界が滅ぶような動きを行った。究極体が一体でも現れれば、戦況は一気にデジモンが有利に変わります。その事はデジモンの力を知っている上層部達は分かっている筈です」

「・・・・最低や・・・・・命を数として考えて、上層部達は動いとる。ほんまに最低や」

はやてはもはや嫌悪感を隠せずに、上層部の批判を呟き、オーリスも同意するように頷く。

真実を知られない為に、自分達の手を汚さず、デジモン達に世界を滅ぼさせた。それはもはや法を司る者が行っては成らない事。本来ならば次元犯罪者と呼ばれる者達が行う行動だ。

その行動を管理局の上層部達は行った。もはや、管理局は次元犯罪者と変わらない組織だろう。

「更に本局は近々、デジモンへの有効な兵器を発表するようです。その兵器が結果を出してしまえば…」

「管理世界は管理局を当てにせざるしか無くなる。自分達で戦うよりも、その兵器の方が役に立つなら、其方に人々は必ず目が向くでしょうね。ほんまに最低や！！」

「我々地上も同意見ですが、証拠が何一つ在りません。此処で話している事も、憶測の域にしか出ないのです」

「証拠は何一つ無い。証言を取ろうにも、本局なら地上は意見を出すのが難しい。悪知恵だけは本当に働きますね？」

「ええ、本当に頭が痛いです」

オーリスは、はやての言葉に同意を示しながら右手で頭を押さえる。

第二十管理世界の消滅で、更に人々はデジモンへの憎しみを増長させるだろう。その事はもちろん、本局は世界に知らしめる。折角のはやて達の今回の行動も、本局は再び無に帰したのだ。

“真の敵はデジモンではなく、身内に居る”

その事が今回の件でハッキリ分かったはやてとオーリスは、本当に如何したものかとそれぞれ頭を悩ませるが、良い案が浮かぶ事は無く、顔を俯かせる。

その姿にレナは不安を感じ、話題を変える積もりで、オーリスに声を掛ける。

「残り三つは何なのだ？他にも報告が在った筈だが」

「ええ、先ずは悪いニュースですが、本日付で機動六課は完全に地上所属の部隊に成りました。本局としては、デジモンを使う部隊の局員達など信用出来ない。今後の機動六課への支援を一切断ち切るそうです」

「支援なんて、受けた覚えはないんやけどな？此処まで機動六課が形に成ったのは、地上の支援のおかげなんやけど」

身に覚えの全く無い事を言われ、はやては顔を横に傾けながら腕を組み、疑問の声を出した。
現在の機動六課を支援しているのは地上本部だけだった。本来なら聖王教会も支援してくれる筈だったが、聖王教会内部での対立を考え、教会の支援は全く無くなってしまった。本局にしても、真実を知っているはやて達を抹消する為に、支援は一切行っておらず、本来の後援者のクロノ達からの支援も封殺されている状態。
つまり、機動六課に支援を行っているのは、地上本部だけなのだ。

「一応、機動六課は形だけとは言え、本局直轄の部隊でしたからね。対外的には支援を行っていた様に見せていたようです」

「ハア～、ほんまに本局はもう駄目駄目や」

「同意見ですが、今後は寄りいっそう気を引き締めて下さい。もし、機動六課がミスや敗退など行った日には、リュウダモンとポーンチェスモンに危険が迫るだけではなく、地上本部も危機に晒されます。デジモンを味方にしている事がばれた為に、地上と本局の軋轢は更に増しってしまっているのです。敗北など論外だと思って下さい」

「充分に分かっとります」

はやてはオーリスの言葉に、深く真剣な表情で頷いた。
機動六課がもし敗退やミスなど起こした日には、確実に本局はそれを理由に、地上への干渉を行ってくる。今回の戦いで、地上がデジモンを味方にしている事が明らかに成り、本局は地上の危険度が分かってしまった。それと共に地上には、まだ他にデジモンが存在している可能性も在る事に気が付き、何とか地上への干渉を行おうとしているが、今回の戦いの結果を盾にレジアスがその意見を黙らしているので、地上には全く干渉する事が出来なかった。

しかし、一度でも機動六課がミスや敗退などすれば、必ず干渉を行って来る。その時に護り切れる可能性は、レジアスを持ってしてもかなり低いのだ。

「我々地上は、民衆の意見さえも黙殺して動いています。そのせいで民衆からの評判もかなり悪い状況です。ミスは絶対に赦されないと思って下さい」

「了解ですわ」

「結構。では次に少し悪いニュースですが、この前の戦いの乱入者の名前が判明しました」

「ほんまですが！？で、その人物は一体！？」

オーリスが告げた事実に、はやては驚きの声を上げ、オーリスに詰め寄った。

前回の戦いの時の乱入者。その人物には、はやては家族で在るヴィータとリインを助けて貰った恩が在るのだ。会えれば絶対に礼を言いたいとはやては思っている。

しかし、それだけではなく、リインの報告からその人物には何としても会わねば成らないと、はやてやオーリス、ゲンヤは考えていた。何故ならばその人物は信じられない事を行ったのだ。

“通常の完全体を超える『X抗体』タイプのデジモンを素手で殴り飛ばした”

当初、その報告が上げられた時は、はやてやオーリス、ゲンヤは虚偽じゃないのかとリインを思わず疑ってしまった。デジモンの強さを充分過ぎるほど分かっているはやて達からすれば、魔力も存在

せずにデジモンを殴り飛ばすなど、信じられない事だろう。
だが、ヴィータのデバイスのグラーフアイゼンに記録されていた映像を見た結果、リインの報告は真実だと分かり、すぐさまその情報はトップシークレット扱いにされた。
デジモンを殴り飛ばした人間が存在していると分かれば、本局上層部が何をするか分からない。だからこそ、はやて達はその人物に関する情報を隠したのだ。

「先ずは名前から告げます。彼の名前は『大門大(だいもんまさる)』です」

「『大門大(だいもんまさる)』？日本人何ですか？」

「ええ、恐らくそうでしょう。ですが、此処で疑問が生まれます。何故地球人がこの世界に管理局に関わらず、ミッドに居るのか？それと、何故本局が隠した筈の彼の名前を知っていたかです」

「ッ！！そんな！？彼の映像記録は消した筈や！？何で本局が彼の事を！？」

オーリスが告げた事実に、はやては驚きの声を上げ、レナも在り得ないと言う表情を浮かべる。
大(まさる)に関するデータは本局には送っては居ない。結果だけは確かに報告したが、大(まさる)に関する事だけは、完全に機動六課内部と地上本部のレジアスにしか伝えては居ない。にも関わらず、本局が大(まさる)を知っていた。如何考えてもおかしいだろう。

「何故本局が彼の事を知っていたのかは、分かりませんが、一つだけ彼に付いて分かって居る事が在ります。彼は恐らく“七大魔王のデジタマ”を所持しています」

「七大魔王のデジタマを！？」

「先ず間違い在りません。本局が彼の事を知っていた事、彼らの会話に在った『私達の組織には、絶対に渡す訳にはいかない物』そして、本局の者達が彼らを追おうとする動きを取り始めた事。其処から推察するに、彼らが持っている物は“七大魔王のデジタマ”以外に在りえません」

「七大魔王のデジタマがミッドに存在していた・・・・・成る程、本局、いやルーチェモン達からすれば、喉から手が出るほどに欲しい物だ。本局が彼の名前を知っていたのも、ルーチェモンか、倉田と言う人間が教えたのだろう。彼を追う為に」

オーリスの話を聞いていたレナが情報から推察する。

七大魔王のデジタマが在ると分かれば、必ずルーチェモン達は手に入れようと動く。自分達の目的を１００％成功させるには、七大魔王の存在は必要不可欠。その為ならば多少は怪しまれても、手駒にしている者達を動かす筈だ。

「何としても、本局よりも先に彼らと出会い。事情を聞かねば成りません。上手く行けば、彼らを追っている局員達を捕まえ、本局への内政干渉を行える可能性が在ります」

「分かりましたわ。動ける人材を動かして、彼らの捜索に当てます」

「地上でも既に何名かの人物を彼らの捜索に当てていますので、捜索者は数名程度充分です。この部隊の役割はあくまで、ゲートタワーの破壊任務なのですからね」

「了解です。で、最後の良いとも悪いとも言えるニュースは何です

か？」

今までの話で、これ以上に悪い話は無いだろうと思い、はやてはオーリスに声を掛ける。

既に充分過ぎるほど、最悪な話は聞いた。これ以上に最悪な話は無いだろうとはやては心の底で思っていた。しかし、次にオーリスが告げる話は在る意味では、はやてに最大の衝撃を与える。

「隊舎に戻る前の事ですが、部隊の軽傷者や重傷者の傷の具合の調査の為に、聖王病院に立ち寄ったのです。その時にフェイト・テスタロッサが部隊への参入意思を私に伝えました」

「・・・・・何がフェイトちゃんに在ったんです？」

告げられた報告に、はやては険しい声を出して質問した。

本来ならばSランクオーバーの魔導師で在るフェイトの参入は、機動六課としては嬉しい。

だが、オーリスはどちらでもないと言う様にフェイトの参入意思を告げたのだ。何か在ったとしかはやてには思えなかった。

それを現すようにオーリスは深く頷き、フェイトと会った時の話を始める。

「彼女は参入意思を私に告げた後に、質問して来たのです。『デジモンが結果を出せば、護れるんですか？』と言う質問をして来ました」

「・・・・・アルフやな。機動六課にリュウダモンとポーンチェスモンが居る事を、フェイトちゃんに教えたのわ」

「其処まで分かりませんが、気を付ける事です。“結果と動き”は

違うのですから」

「分かっとります・・・・・・以前の会議での話を、ゲンヤ副部隊長と協議してみます」

「答えは早急にお願いします。一両日中には、次に破壊するゲートタワーが決まりますので。それでは失礼します」

オーリスはそう告げると共に、ポーンチェスモン（白）を伴い部隊長室を出て行った。

それを確認したはやては、暗く沈んだ表情を浮かべて、椅子に座り、顔の前で手を組む。

「・・・・フェイトちゃん・・・・・・違うんや・・・・・・結果と動きは違う・・・・・・地上でも守りきれるかわからへんのや・・・・・・お願いや・・・・・・私に親友を切り捨てる事はさせへんでくれや・・・」

「はやて・・・・・・」

暗く沈んだ声で悲しみの言葉を呟き続けるはやての姿に、レナは慰めの言葉を掛ける事が出来ず、少しの間、はやては落ち込み続けるのだった。

一方その頃。

地球に居るリンディ、なのは、ガブモン、そしてバンチョーレオモンは、海鳴市の桜台と呼ばれる場所を目指し、山の中を歩いていた。クダモンは既にデジモン達の捜索をクイントと共に始めている

自身のパートナーティアナとの合流の為に別行動を取っている。

「フウ～、思ったよりも遠いわね。ええと、確かさざなみ寮だったかしら？美由希さんが言っていた場所は？」

「はい。お姉ちゃんが其処の人達なら、事情を話せば協力してくれると言っていました。デジモン達を隠すのならば、その場所が打って付けだって」

「うむ。確かにこれほどの広大な私有地なら、デジモン達が隠れるには充分だろう。巨大な者達も上手く行けば隠せるだろうからな」

なのはの言葉にバンチョーレオモンは辺りの広大な森に覆われた私有地を見つめ、同意の声を出した。

リンディ達がさざなみ寮へと向かっている理由は一つ。その場所の人々に事情を説明し、広大な私有地内部をデジモン達を隠す為に貸して貰う為だ。

結局の所、政府の方ではデジモン達を隠せるほどの敷地を用意する事は出来ず、アリサ、すずか、からも日本内部では不可能だと言われ、リンディ達は困りに困った。

日本から離れすぎれば、何か在った時にすぐさま駆け付ける事が出来ない上に、外国の人々にデジモンを目撃させる可能性が在る。今の所はデジモンの存在を世界全体に明かす訳にはいかない、とリンディ達は思っている。行き成りデジモンと呼ばれる人間と同程度の知能を持った生物が存在していると言われても、世界全体の人々がデジモンを受け入れてくれるとはリンディ達には思えなかった。

更に其処で他の世界の存在まで明らかに成れば、世界は混乱に満ち溢れてしまう。だからこそ、リンディ達は今の所、デジモンや異世界の存在を明らかにするのは日本だけと決めていたのだ。

しかし、それでもやはりデジモンを隠せる土地を見つける事が出

来ず、翠屋で困っている時になのはの姉で在る美由希から桜台の事を教えられたのだ。

「それにしても、お姉ちゃんは其処ならデジモンの存在を教えても大丈夫って、言っていましたけど。如何言う事でしょうね？」

「う～む。分からん。しかし、何か理由が在るのだろう。出なければ、この場所を教える筈が無いからな」

「僕もそう思うよ。美由紀さんが理由も無しに教えてくれるとは思えないしね」

「とにかく、さざなみ寮と言う所に居る家主の人に話をしましょう。クイントとティアナ、クダモン君だけには苦労はさせられないしね」

リンディはそうなのはとバンチョーレオモン、ガブモンに言うと、急ぎ道の先に見える建物ーさざなみ寮へと向かうのだった。其処で地球に隠されていた秘密を知る事に成ると知らずに。

時を同じく、アルハザードでは遂に彼女が目覚めていた。

『なんですってぇぇぇぇぇぇぇーーーーーーー！？』

フリートの研究室に在る治療カプセルの中に入っていたルインが遂に意識を取り戻し、これまでの状況を聞き終えると共にその表情は驚愕に染まり、治療カプセルの割りそうな勢いで目の前に存在しているフリートに向かって怒りの叫びを上げた。

その叫びと表情にフリートは僅かに後退するが、ルインは構わず

にフリートに向かって叫ぶ。

『ブラック様が行方不明ですって！？如何言う事ですか！？』

「で、ですから。地球に出来たゲートを閉じる為に、ゲート内部に入って、他のデジタルワールドに行ってしまったんですよ。他のデジタルワールドの座標も分からないので、通信の取りようさえも無い状況です。しかも、事前にネックレスも手放していたので、追う事も不可能なんです」

『そんな！？』

フリートが告げた事実にルインは悲痛の声を上げた。
自分が眠っている間に、唯一無二の主が行方不明に成っていた。ブラックに絶対に忠誠と愛情を抱いているルインからすれば、悲痛の声を上げるかしないだろう。

『すぐに私を此処から出して下さい！！ブラック様を捜索しますので！？』

「駄目ですよ。今の貴女の体は信じられないほどのダメージが蓄積しています。治療カプセルから出ても動く事は不可能です。最低でも後数週間は治療カプセルの中で過ごして下さい」

『そんな！？』

フリートの言葉にルインは更に悲痛そうな声を出した。
敬愛する主に危機が迫っているかも知れないのに、主のパートナーで在る自分は動く事が出来ない。融合騎でも在るルインからすれば、最悪の事実だろう。

しかし、フリートとして此処でルインに外に出られて、万が一でも消滅などされてしまえば、絶対に治せと言っていたブラックの怒りを買う可能性が高い。
怒りに満ちて暴走するブラックの相手など、絶対にしたくない上に、フリートとしても親友であるルインの消滅など絶対にさせたくないので、説得を続ける。

「それにですね。彼が帰ってきた時に、パートナーで在る貴女の力は絶対に必要に成ります。その為にも治療を完璧に終わらせる事は必要ですよ？」

『・・・・・・』

「彼の捜索は既に行っていますので安心して下さい」

『・・・・・・分かりましたよ。その代わり、早く治療は終わらせて下さいね』

「分かっています」

説得が出来た事に安堵の息を付きながら、フリートはルインの言葉に頷いた。
それと共に自分以外にルインの事を心配していた者が、アルハザードに残っている事を思い出し、研究室の扉の方に移動を始める。

「そう言えば、ヴィヴィオちゃんとギルモンも残っていました。貴女の事を大変心配していたので、目覚めた事を報告して来ますね」

フリートはそう告げると共に研究室を出て行き、ブイモンの相手をしているヴィヴィオとギルモンの下に向かい出す。

その後姿を黙って見つめていたルインは、フリートが出て行くと共に深く目を閉じ、遠くに行ってしまったブラックの事を思う。

『・・・・・ブラック様・・・・・如何かご無事でいて下さい』

（・・・・・・タノム）

『ッ！！』

突如としてルインの頭の中に、念話の様の言葉が響き、慌てて辺りを見回すが、研究室の中にはルイン以外の者は存在していなかった。

聞き間違いかと思い再び辺りを見回すが、やはり誰も居らず、ルインは疑問の表情を浮かべ始めると、再び声が響く。

（・・・・タノム・・・・・・オシエテホシイ・・・・・・キミノカコヲ）

『誰ですか！？一体誰なんです！？』

（・・・・・オレハ・・・・・いや、俺達は！！）

ーーーピカアァァァァァアン！！

『キャッ！！』

突如として研究室全体を照らし出すほどの光が溢れ、ルインは悲鳴を上げた。

そして少し経つと光が徐々に収まり、ルインは恐る恐る光が発生した自身の横に在ったカプセル一十闘士スピリットが入っていたカ

プセルを見つめてみると、其処には、カプセルの前に立っている半透明の姿をした戦士が十人立っていた。
その姿にルインが驚いた表情を浮かべていると、十人の戦士の一番前に立っていた赤い鎧を着た戦士が声を掛けてくる

（俺達は十闘士）

『十闘士ッ！？』

赤い鎧を来た戦士の名乗りに、ルインは驚きの声を上げた。
十闘士とは、オファニモン達ー三大天使の世界で伝説として語られているデジモン達。
その事は三大天使の世界を旅したルインも聞き及んでいたが、まさか、体も持たずに幽霊の様な姿で会話を出来るとは思っても見なかったのだ。
しかし、赤い鎧を着た戦士はルインの驚愕に構わず、ルインに右腕を差し出す。

（頼みが在る。君の記憶を見せて欲しい。俺達が進む道を決める為に）

『・・・・私の・・・・・記憶を？』

赤い戦士が告げた言葉に、ルインは呆然としたように疑問の声を上げるのだった。

行いの結果（後書き）

次回予告

遂にその姿を現した十闘士。

しかし、彼らは道を悩んでいた。

ルインの記憶を求める彼らの真意とは？

そして地球に隠されていた秘密とは？

次回、漆黒の竜人と少女、『隠されていた秘密とテイマー』

彼女達は手に入れる。唯一無二のパートナーに成るかも知れない者達を。

隠されていた秘密とテイマー（前書き）

今回はちょっと短めです。

なのはの地球に付いて。

なのはの住んで居る地球には、表の者達は知らないが、裏では超能力者や吸血鬼、霊能力者などが存在している。

超能力達は、通称ＨＧＳ患者と呼ばれ、背中に羽の様なものが出現するのが特徴である。

吸血鬼は伝承とは違って、夜の一族と呼ばれる特殊な種族の事。

霊能力者はそのまま、霊などを倒したり、祓ったりする。

隠されていた秘密とテイマー

ルインは目の前の光景を信じれないと言う顔しながら見つめていた。

目の前の光景ースピリットが入ったカプセルの前に存在している半透明な姿をした三大天使の世界の伝説の十闘士達。しかも、その十闘士が望んでいるのはルインの記憶。

何故自身の記憶を求めているのかルインには訳が分からず、疑問の表情を浮かべながら赤い鎧を着た戦士ー『炎』の闘士『アグニモン』に顔を向ける。

アグニモン、世代／ハイブリット体、属性／バリアブル、種族／魔人型、必殺技／サラマンダーブレイク、バーニングサラマンダー伝説の十闘士“エンシェントグレイモン”の力を受け継いだ、炎の属性を持つ闘士のヒューマンスピリット体の魔人型デジモン。“スピリチュアルファイアー”と呼ばれる聖なる炎で“電脳核(デジコア)”を包んでいるため、炎を自在に操ることが可能。必殺技は、体を回転させながら、相手に炎のキックを食らわす『サラマンダーブレイク』に、両腕から炎の竜を発生させて、相手に向かって放つ『バーニングサラマンダー』だ。その他にも炎に関する技を沢山所持している。

『何故私の記憶を求めるんです？女性の過去を知りたいなど、男性としては最低だと思うですがね？』

（それに付いてはすまない。だが、俺達の世界が滅んでからお前達を見続け、俺達の知りたい事に一番近いものを持っているのが君だと俺達は判断した）

『私の過去が貴方達の求めるものですか？』

（正確に言えば、俺達が求めているのは人間の闇だ）

ルインの質問に、銀色の鎧を来た戦士ー『光』の闘士『ヴォルフモン』が答え、他の闘士達も頷く。

その姿にルインは表情を険しくし、十闘士達を見つめる。

ヴォルフモン、世代／ハイブリット体、属性／バリアブル、種族／戦士型、必殺技／リヒト・ズィーガー、ツヴァイ・ズィーガー

伝説の十闘士“エンシェントガルルモン”の力を受け継いだ、光の属性を持つ闘士のヒューマンスピリット体の戦士型デジモン。無口な性格だが、実は優しい戦士。体には聖なる光を詰め込んだ『セントアメジスト』が付いている。この水晶は正義の心を持つと強度が増し、悪の心を持つと脆くなる。光の剣『リヒト・シュベーアト』を2つの剣を一つに繋げ『ツインブレード』にする事も可能。必殺技は、『リヒト・シュベーアト』で敵を真っ二つにする『リヒト・ズィーガー』に、2本の『リヒト・シュベーアト』を一つに繋げて相手を攻撃する『ツヴァイ・ズィーガー』だ。その他にも光に関する技を多数所持しているぞ。

『人間の闇ですか？成る程、確かに私ほど人間の闇と深く関わり続けた者は居ませんからね』

ルインは何故アグニモン達が自分の記憶を求めているのか分かった。

ルインは真の主と呼べるブラックに出会うまで、多くの人間達を闇の書の闇として見続けていた。

自分の欲望の為に力を求めた人間。その様な人間達とルインは深く関わり続け、最終的にその主達を滅ぼして来た。自身を受け入れられるだけの器が、今までの歴代の主達には存在せず、『最後の夜

天の王』を名乗っているはやてにしてもルインを受け入れる事は出来なかった。
話は戻すが、ルインはその様な欲望に満ちた主達を見続けていた。ルインほど人間の闇に関わった存在はいないだろう。他に居るとすれば、ルインの半身で在るリインフォース位だ。

『ですが、何故人間の闇を知りたいのです？貴方達にしても、自分達の世界を滅ぼした人間は赦せない筈です。最悪、私達は貴方達も敵に回すと考えていたんですけど？』

（確かに。君の言うとおり、俺達は人間を信用出来なくなっている。だが、嘗て俺達の世界のデジタルワールドを救ってくれたのもまた、人間だった。俺達は覚えている。命を賭けてデジタルワールドを救ってくれた人間の仲間達の事を）

ルインの質問にアグニモンは何処か懐かしそうな表情を浮かべて答えた。
十闘士達にしても、自分達の世界を滅ぼした人間を赦す事は出来ない。だが、その前に彼らは人間と共に戦った過去も在る。デジタルワールドを救ったのも人間であり、同じ様に滅ぼしたのも人間。だからこそ、彼らは人間を如何すべきなのか悩んでいる。滅ぼすべきなのか、共に戦うべきなのかを。
そしてその答えを得る為に、彼らはルインの前に姿を現したのだ。

（私達は人間の持っている光を覚えている。だけど、今回の事で同時に人間にもルーチェモンと同等の闇が在る事も分かったわ）

（だからこそ、僕達は人間の闇を知るべきだと思ったんだ。だから君にお願いする）

（人間の闇と共に歩んだ君の過去を見せてくれる事を。どうか頼む）

背中に蝶のような翼を付け、目の部分をバイザーで覆った女性の戦士ー風の闘士『フェアリモン』と、雪達磨に軍人が付ける様な装備をした戦士ー『氷』の闘士『チャックモン』、そしてカブト虫の様な角を頭部に付けている戦士ー『雷』の闘士ーブリッツモンがルインの過去を求める理由を告げながら、他の闘士達と共に深々と頭を下げる。

フェアリモン、世代／ハイブリット体、属性／バリアブル、種族／妖精型、必殺技／トルナード・ガンバ、ロゼオ・テンポラーレ
伝説の十闘士“エンシェントイリスモン”の力を受け継いだ、風の属性を持つヒューマンスピリット体の女性の妖精型デジモン。大気を操る力を持つ。戦闘より情報戦の方が得意で、前向きで強い精神力を持っている。必殺技は、逆立ちして開脚しながら回転し、相手に連続で蹴りを叩き込む『トルナード・ガンバ』に、両足で相手を蹴って蹴って蹴りまくる『ロゼオ・テンポラーレ』だ。その他にも風に関する技を多数所持している。

チャックモン、世代／ハイブリット体、属性／バリアブル、種族／獣人型、必殺技／スノーボンバー、ツララララ〜
伝説の十闘士“エンシェントメガテリウモン”の力を受け継いだ、氷の属性を持つヒューマンスピリット体の獣人型デジモン。サバイバル知識が豊富で、自称“ポーラー軍”極地区防衛部隊所属の軍曹。様々な雪玉を発射するランチャー『ロメオ』を装備。必殺技は、『ロメオ』から超氷結の雪玉を相手に向かって撃ちだす『スノーボンバー』に、体を溶かし、自身の体をツララ状に変形させる『ツララ〜』だ。

ブリッツモン、世代／ハイブリット体、属性／バリアブル、種族／

サイボーグ型、必殺技／トールハンマー、ミョルニルサンダー
伝説の十闘士“エンシェントビートモン”の力を受け継いだ、雷の属性を持つヒューマンスピリット体のサイボーグ型デジモン。プロレス技のような攻撃が得意で、水中戦は苦手。外見に似合わず、意外と高速で移動できる。必殺技は、両手を合わせ、雷を溜めた両手で敵を殴る『トールハンマー』に、天空から雨のように稲妻を降らせる『ミョルニルサンダー』だ。

『ムウ〜〜』

ルインは深く悩んだ表情で、頭を下げ続けているアグニモン達を見つめる。
アグニモン達の望みを叶えるのは、ルインからすれば治療カプセルの中に入っていても充分に可能な事だ。
しかし、自身の記憶を見てアグニモン達が仲間に成ってくれるかと言われれば、答えは否だとルインには断言出来る。ルインの知る人間の闇の深さは、ルーチェモンを超えると言えるほどに深いのだ。
だからこそ、ルインはアグニモン達の願いを叶えるべきなのか、本気で悩んでいるのだ。

（私の過去に見て来た人間の闇の深さは、確実に彼らの人間への思いを砕く起爆剤にしか成りませんよ。歴代の主達は欲望に満ちた連中でしたからね。まともな者なんて、両手の指の数ぐらいしか居ませんでしたよ・・・・・本気で如何しましょう？）

ルインは自身の持つ記憶の闇の深さを充分過ぎるほどに分かっている。
まともな人間が見れば、発狂するほどに深いほどの闇。百年以上の続いた人間の欲望の歴史と呼んで良いほどに深き闇。その闇の歴史を見れば、殆どの者達は人間に減滅するだろう。

それほどまでに深い闇を、人間の欲望をルインは見続けていたのだ。
だからこそ、アグニモン達に見せるべきなのか悩み続けるが、フッと自身の主であるブラックなら如何するかとルインは考え始める。
（・・・・・ブラック様なら教えろと言うでしょうね・・・・・でも、教えたら本気で彼らが敵に成る可能性が高すぎるんですよね・・・・・それは避けたいです）

ルインは出来ればアグニモン達には協力して欲しいと思っている。
戦力としてもそうだが、地球に居るデジモン達の存在が一番だ。
人間に味方をするルイン達の話は聞いてくれないかも知れないが、彼らの世界で伝説的な英雄だったアグニモン達ならば、彼らも耳を傾けてくれる可能性が高い。
だからこそ、ルインは心の中では、彼らには協力して欲しいと思っている。だが、今目の前で頭を下げ続けているアグニモン達の姿を見る限り、教えなければ味方に成る事は先ず無いとルインは確信した。

（・・・・・こうなれば、嘗て彼らが見た光を信じるしか在りません・・・・・闇が勝つのか、光が勝つのかは分かりませんが、僅かな可能性に掛けるしか在りません。どの道、教えなくても彼らは敵に成る可能性が高いですからね）

現在、各管理世界で人間に猛威を振るっているデジモン達の多くはアグニモン達の世界のデジモン達。
本来ならばアグニモン達がその身を捨ててまで守るべきデジモン達なのだ。そのデジモン達の多くは、今、この瞬間にも戦い続けている。アグニモン達からすれば、止めるにしろ、共に戦うにしろ放っては置けないデジモン達。

そのデジモン達の存在が在りながらも、アグニモン達は人間の闇を知りたいと、ルインに告げて来た。
それが意味するのは、まだ、彼らの心の中に人間を信用したいと思う気持ちが在ると言う事だ。

『・・・・・・分かりました。私の記憶を見せます。ですけど！見終わった後に、行き成り人間に攻撃するとかは絶対に駄目です！！ちゃんと私や、私の仲間達に結果を告げてから動いて下さい！！どちらの答えで在ってもです！！』

（分かっている。絶対に行き成り人間を襲うとかはしないと約束する）

『本当ですね？』

（俺達の称号と世界と共に散った三大天使の魂に誓う）

ルインに質問に、アグニモンは真剣な表情で答えた。
その表情と告げた言葉に、ルインは嘘はないと判断し、アグニモン達の後ろのカプセルの中に浮かんでいるスピリットに自身が入っているカプセルの中で両手を伸ばし、自身の記憶を題材にした強力な幻覚魔法を発動させる。

『絶対に安らかでは無いでしょうが、夢の様に見て来なさい。人間の欲望の歴史を』

（・・・・・ありがとう）

ーーーシュウン！

アグニモンがルインに礼の言葉を告げ終わると共に、アグニモン達の姿はルインの前から消失した。
それと共にスピリットの周りに蒼紫色の三角形の魔法陣が出現し、ルインは体を襲う苦痛に表情を険しくする。

『グッ！・・・・・・こんな初歩的な魔法の発動でこれですか・・・・・・・フリートの言うとおり、治療に専念すべきですね・・・・・・ブラック様の足手纏いに成らない為にも』

ルインはそう呟くと、治療に専念する為にフリート達が来るまで目を深く瞑るのだった。
因みに、ヴィヴィオとギルモンと共に戻って来たフリートがスピリットの周りに発生している魔法陣に気が付き、ルインに事情を聞き終えると共に幽霊の様な姿で現れたアグニモン達を見れなかった事を、大層悔しがるのだった。

海鳴市の桜台に在るさざなみ寮と言う女子寮。その女子寮のオーナーと住人に協力を願い出に来たリンディ達は、何故美由希が此処ならデジモンの存在を教えても大丈夫なのかハッキリと分かった。
その理由はさざなみ寮のリビングで対面している二人の女性ーオーナーの茶色の髪にヘアバンドを付けた女性ー槙原愛と、その義理の娘の短髪の銀色の髪に菫色の目をした女性ーリスティ・槙原に会った事で分かった。因みに、愛は動物好きの本能が刺激されたのか、何処か目を輝かせてガブモンとバンチョーレオモンを見つめている。
「ふ～ん。つまり、数日前に在った東京の謎の生物の襲撃事件の原因は、全部異世界の正義を名乗っていた組織に在った訳か・・・・・・うん。嘘は一つもないよ。愛」

「ありがとう。リスティ」

『？』

リスティと愛の会話にリンディ達は疑問の表情を浮かべた。

二人の会話には不自然な点が在った。確かにリンディ達は一切の嘘偽りを話してはいない。

これから協力して貰うかも知れない者達に嘘など付けば、ばれた時に不味い事態が必ず起きる。

特にデジモン達の潜伏場所は、かなりの重要度を誇る話だ。その場所の為にも嘘偽りなくリンディ達は愛とリスティに説明した。だが、行き成り異世界の存在やデジモンの存在を話しても、先ず信じる人間は皆無だ。にも関わらず、リスティは嘘は付いてないと断言したのだ。おかしいと思うのも当然だろう。

そのリンディ達の疑問の表情に、リスティは僅かに笑みを浮かべ話し始める。

「それにしても、美由希から妹の頼みを聞いてくれと言われた時は困惑したけど、まさか、此処で十年前の愛の開業している動物病院の半壊事件の犯人が分かるとは驚きだったかな。まさか、犯人が異世界の意文明の遺産だったとは、探しても犯人が見つからない筈だ」

『ッ！！！』

リスティが告げた言葉に、今度こそリンディとなのはは困惑した表情を浮かべた。

リンディ達が話したのはあくまで、数日前の東京襲撃事件の真相とその元凶に付いてと、デジモンの存在だけ。十年前のジュエルシード事件に付いては一切話してはいない。にも関わらず、リスティ

はさも当然と言う様に喋った。驚くには充分過ぎる事実だ。

「う～ん。他には世界を滅ぼしかけた闇の書か。地球も知らない所で結構危ない事に成っていたようだね。元異世界の人間で、今はバイオダークタワーデジモンのリンディ・ハラオウンさん？」

「・・・・・魔法ではないわね。魔法とは別の力で心が読まれたのかしら？」

「正解。流石は提督に選ばれた女性だけ在るね。てっきり魔導師ランクとか言うやつで選ばれたと思っていたよ」

リスティは感心した声を出して、リンディを見つめ、その姿と言葉にリンディは確信した。

何故美由希がこの場所を教えてくれたのか。その理由がリンディ達にはハッキリと分かった。

“地球には魔法ではない自分達の知らない力が存在していた”

それが事実ならば、何故美由希がさざなみ寮を教えてくれたのかも分かる。特殊な力を持っている者達ならば、今の現状に対して協力してくれる可能性が高いからだ。

「フッ、まさか、この地球にそんな力が存在していたとは。いや、在る意味では当然の事やも知れん。俺の居た地球にも確かにその様な力は存在していた」

「それは本当ですかバンチョーレオモンさん！？」

バンチョーレオモンが告げた事実に、リスティを除いた全員が驚

愕の表情を浮かべてバンチョーレオモンを見つめる。
その姿にバンチョーレオモンは表情を変えずに、リスティを見ながら話し始める。
「“デジソウル”そう呼ばれる力が俺の世界には存在していた。その力を使いこなせば、究極体のデジモンとさえも戦える力が、俺の世界の人間には宿っていた」
「究極体と！？」
「本当ですか！？」
バンチョーレオモンが告げた力の存在に、なのはとガブモンは在り得ないと言う声を上げ、話を聞いてたリンディも信じられないと言う表情を浮かべる。
究極体の力は絶大無比。その力とただの人間が戦える力が存在していたと告げられたのだから、驚くしか無いだろう。
「本当だ。だが、その力は俺の世界の人間にしか宿ってはいない。現にお前達は一度も“デジソウル”を発現させては無い。恐らくだが、デジタルワールドと隣接している世界の地球の人間達は、それぞれデジモンに対する何らかの影響を受けていたのだろう」
「ボクも同意見だね。ボクのＨＧＳ。超能力の事だけど。その他にも地球には多くの力が存在している。それが霊能力だったり、特殊な者達が居たりと、地球には結構色々と隠された裏が在るんだよ。まあ、一番の驚きは半身みたいな世界が存在して居た事だけどね」
「・・・・・驚きです。地球にそんな秘密が在ったなんて」

「地球ではそう言う不思議な事は表向きは否定されているけど、裏では実在している。だけど、そう言うのはマイノリティでね。表立ってそう言う力を使うと、確実に排斥させる。デジモンを否定した管理局のようにね」

驚いた表情を浮かべているなのはにリスティはそう告げ、リンディ達は納得したと言うように頷く。

確かにリスティの言うとおり、特殊な力や存在は否定される可能性が高い。ただの人からすれば、その様な力や存在は恐怖以外の何者でもないのだから。

デジモンに関してもそれは当たるのだが、今の現状では今更デジモンの存在を隠すのは不可能。

だからこそ、リンディ達は隠せないのならば、寧ろ明かしてデジモン達を保護する動きを取ると言う方法を取ったのだ。

「・・・・・これで納得したわ。やけに日本の総理や政府関係者があっさりと、異世界の事やデジモンの存在を受け入れられたのかが」

「そう、政府の上位関係者なら、裏の事は知っている。だから、デジモンの事や異世界の事も受け入れられた。まあ、君達が政府に持ちかけた交渉も良かったと思うよ。異世界の技術が日本の景気を回復させてくれるかも知れないからね。彼らにしても君達の話は嬉しかったと思うよ。まあ、最も」

「その時までに世界が残っていればの話よね」

「そう言う事さ」

リンディの言葉にリスティは笑みを浮かべながら言葉を告げる。

リンディの言うとおり、世界が滅びれば其処までなのだ。デジモ

ンか、ルーチェモンかは分からないが、どちらにしても世界の危機なのは間違い無い。
その事が分かっているリスティは、目を輝かせながらガブモンとバンチョーレオモンを見つめている愛に目を向ける。

「愛。此処は彼女達に協力すべきだよ。それに協力すれば、この辺りの土地に子供のデジモン達が暮らす事に成りそうだからね。幸いにも援助の方は出せるみたいだよ」

ーーーピクッ！

「そうね。困った時はお互い様だし・・・・分かりました。この辺りの土地をお貸しします。それに貴女方が他のデジモン達の捜索を行っている間のデジモン達の世話も是非させて貰いますよ」

「序に、出来ればボクもデジタマが欲しいね。仕事のパートナーにも成りそうだし、デジモンを連れている人が増えれば、それだけ人々のデジモンへの恐怖も減ると思うよ？」

「・・・・確かに貴女達の言うとおりですね」

愛とリスティの提案はリンディ達にしても嬉しいものだった。
確かにリスティの言うとおり、リンディ達は折角デジタマから生まれたデジモン達の世話をしている暇は無い。数体程度なら、フリートが何とか育てられるが、これが十や二十と成れば、フリート一人で育てるなど不可能だ。ヴィヴィオやギルモンの事も在るのだから尚更だ。
更にデジモンを人々に馴染ませると言うのも良い。僅かずつでもデジモンを連れている人間が増えれば、それだけで恐怖は僅かずつながらも減って行く。隠せないのならば、表立って出すしかないの

だから。
　此処でリスティの提案を受け入れるのは、リンディ達が考えている後の為にも、メリットが大きい。
　その事が分かったリンディは右手をリスティに差し出し、リスティも右手を差し出し、握手を交し合う。
「分かりました。此方の持っている全てのデジタマを預けます」
「序に、君の所に居る子供とそのパートナーデジモンも預かるよ。戦う覚悟が決まっているとは言え、出来れば戦わせたくは無いだろう？」
「・・・・確かにその通りです・・・・分かりました。ヴィヴィオとギルモンもこの場所に預けます。どうかあの子達の事を宜しくお願いします」
「ＯＫだよ」
　深々と頭を下げるリンディにリスティは笑みを浮かべて答えた。
　その様子を見ていたなのはは、親友達に頼まれていた事を思い出し、リンディに声を掛ける。
「あのリンディさん？出来れば、アリサちゃんとすずかちゃんにもデジタマを渡したいんです。二人ともデジモンに興味を持っていますし、デジモンを連れている人は多い方が良いと思うんです」
「そうね。アリサさんとすずかさんにもデジタマを渡して置きましょう。これからの事を考えると、確かに良い提案ね」
「ボクの方でも、何人かデジモンをしっかり育てられる人物に覚え

が在る」

「あの～、出来れば余り今の現状ではデジモンの存在は出来るだけ内密に…」

「因みに、十年前の事件の捜査は未だに続いていてね。民事保障とかに成ったら、大変な事に成るだろうね」

「すぐにデジタマを持ってきます！！」

リスティが呟いた言葉に、なのはは慌ててリビングを飛び出して行った。

その後姿を笑みを浮かべて見つめていたリスティは、表情を変えないままリンディに顔を向ける。

「それじゃあ、ボクも警察の民間協力者として協力するよ。デジモンを捜索するのには、数が多い方が良いだろう？」

「ええ、そうですね。では、私の仲間達も全員一度此処に集めて、対策会議を行った方が良いでしょうね」

「うん。確かに、他の寮生も紹介したいし、その方向で行こうか」

リンディの提案にリスティは頷き、テレパシーを送り始め、リンディも通信機を取り出してクイント達に連絡を取り始める。

その姿を黙って見ていたガブモンとバンチョーレオモンは、目を輝かせて見つめて来る愛の姿に、本能的な恐怖を覚えているのだった。

隠されていた秘密とテイマー（後書き）

次回予告

地球での協力者を得たリンディ達。

デジモンの捜索に協力してくれるリスティ達と共に、本格的に動き出す。

一方、次なるゲートタワーの破壊場所が決まったはやて達は、会議を行い、作戦を練り始める。

その時に知らされる驚愕の事実。

次回、漆黒の竜人と少女、『エリオ・モンディアル、行方不明！！』

告げられた事実に、雷光の心は闇に染まり始める。それが呼ぶのは、絶望。

エリオ・モンディアル、行方不明！！

時空管理局本局一室。
その部屋の中では、金髪の眼鏡を掛けた青年と赤い髪の少年が、クロノ・ハラオウンと難しい表情を浮かべて話し合っていた。

「・・・・君達を地上に送れる機会が漸く来た・・・・・だが、恐らく罠だ」

「やっぱりかいクロノ？」

「ああ、余りにも出来過ぎている。今までの警戒が嘘の様に無くなった。泳がせて、地上でエリオを捕まえるつもりだ。ユーノ」

金髪の青年ー時空管理局無限書庫司書長ーユーノ・スクライアの質問に、クロノは険しい声で答え、不安そうにしている赤い髪の少年ーエリオ・モンディアルに顔を向ける。

「連中は本格的に人造魔導師計画を遂行する気だ。既に人材や研究機械などが、秘密裏に研究所に運び出された報告が来ている。しかも、その中にはフェイトが逮捕して来た違法研究者の姿も在るそうだ」

「・・・・其処まで堕ちているのかい？上層部は？」

「ああ、三提督も本気で頭を痛めている。しかも、これは噂だが、上層部は今まで捕まえて来た魔導師犯罪者達と司法取引を行っているらしい。人材が入らないの成らば、捕まえた犯罪者達を使う積もりだ」

「堕ちたじゃすまないよ。もう本局は完全に犯罪組織じゃないか」
クロノが告げた事実に、ユーノは本気で頭が痛そうな表情を浮かべる。
犯罪者の雇用。それは確かに管理局は今までも行って来た。だが、上層部達が解放しようとしているのは、恐らく広域指名手配を受けていた犯罪者達だろう。その様な者達が簡単に言う事を聞く筈は無い。確実に再犯を行い、治安は悪化の一歩を辿るだろう。
しかも、その解き放たれた犯罪者達には、今度は管理局員と言う治安組織の肩書きまで付いて来る。つまり、彼らには権力さえも付いて来るのだ。隠蔽なんて簡単な事だろう。
「今更だが、犯罪者の雇用制度は不味い事だった。レジアス中将がアレほど犯罪者の雇用に難色を示していたのか、今の現状では良く分かる」
クロノは苦悩に満ちた表情を浮かべて言葉を言う。
確かに、フェイトやはやて、シグナム達など、元犯罪行為を行っても真っ当な局員として働いている者達も居る。しかし、全体で言えば話は別だろう。全ての犯罪者達がフェイト達の様に自身の行為を悔い改めている訳ではないだ。中には、権力を得た事で更に犯罪行為を行っている者達も存在している。
その様な者達も居るからこそ、レジアスは元犯罪者達に難色を示しているのだ。
「あの、何とかそれを止められないんですか？」
「残念だが無理だ。既に体制も出来ていた様なもの。それを今更変えれば、管理局全体の体制を見直す事に成る。デジモンとの戦争が

起きている状態で、行う事など不可能だ」

「しかも、そんな事をやっている事がばれるだけで、管理局は終わる。そうなれば、次元世界全体の人間同士の戦争も勃発。上手く考えたものだよ。これで真実を明らかにするのは、本格的に不味い事態しか呼ばないからね」

「ああ、四、五年で考えられる計画じゃない。恐らく十年、若しくはそれ以前から計画を練っていたんだろう。“管理局の次元支配計画”が」

「・・・・デジモンからすれば、良い迷惑以外の何ものでもないだろうね」

クロノが呟いた言葉に、ユーノは嫌悪に満ちた表情を浮かべ、エリオもユーノと同様に嫌悪に満ちた表情を浮かべた。

もはや、現状では管理局に頼る以外に、管理世界は自分達の世界を護る方法は存在していない。

魔導師の多くは管理局が保有している上に、自分達の世界に存在していた質量兵器類も、管理世界に成った時に破棄している。つまり、無理やり管理世界に指定された以外の多くの管理世界は自らを護る術を失っていたのだ。その様な世界が、人間を、魔導師を超える力を持ったデジモン達に勝てる筈は無い。

「先の第二十管理世界は、管理局に無理やり管理世界に指定されていた世界だった。その為に質量兵器も完全に破棄されておらず、その質量兵器を使ってデジモン達から自分達の世界を護ろうとしていた。だが！」

ーーードン！！

クロノは叫ぶと同時に拳を打ち付け、深い苦悩に満ちた表情を浮かべる。

「上層部は第二十管理世界が同盟を破棄すると告げた同時に、第二十管理世界に送っていた直属の部下達に、非殺傷設定を使ってデジモン達を攻撃しろと命じた！・・・・・・その為に、完全体のデジモンが究極体に進化してしまった・・・・・後は、デジモン達の優勢に寄る虐殺だけが第二十管理世界に吹き荒れた・・・・管理局の部隊は撤退して殆ど無事だそうだ」

「最低だね。デジモンに襲われている人々を見捨てたって事だね？」

「その人達は裁けないんですよね？」

「残念だが無理だ。通常の状態でも不味い事を、戦争の状態で行ったんだ。管理局は先ず潰れる」

エリオの質問に、クロノは苦々しげな表情で答えた。

クロノにしても、その部隊の者達全員を裁きたい。だが、もはや管理局が行った真相を僅かでも人々が知れば、即座に管理局は潰れる状況なのだ。事件ならば裁く事は出来る。しかし、現在起きているのは戦争。戦争状態で戦っている管理局こそが原因だとばれれば、それだけで人間同士の戦争は勃発する。

つまり、今後管理局の、特に本局の者達の悪行がばれれば、それだけで全てが終わってしまうのだ。

だが、同時にそれはクロノ達ー真実を知る者達にはチャンスでもあった。

「二人は、かなり危険な目に逢うだろう。だが、これを地上本部に

送る事に成功すれば、本局は地上に手が出せなくなる」

クロノはそう告げると共に、制服の中から二枚のディスクを取り出し、ユーノとエリオにそれぞれ手渡す。

渡されたディスクに、ユーノとエリオは疑問の表情を浮かべて、クロノに質問しようとするが、その前にクロノが声を出す。

「そのディスクの中には、第二十管理世界の護衛を行っていた部隊の行動が記録されている。それを地上のトップのレジアス中将か、はやて達の所に居る監察官に渡すんだ。そうすれば、本局は地上には表立っては手が出せなくなる筈だ」

「つまり、僕らには自ら罠に飛び込めと言う事かい？」

「そうなる。だが、今この時を逃せば、エリオを地上に送れるのも、ディスクを届けるのも不可能だ」

ユーノの質問にクロノは険しい表情を浮かべて答えた。

現状は確かに罠だ。しかし、今回のチャンスを逃せば、エリオを地上に送るのは更に遅れてしまう。

はやて達から届いている報告で、次のゲートタワー破壊任務は三日後。しかも、今度の戦いでは前回での戦いの負傷でヴィータが参戦出来ず、復帰したフェイトにしても精神が万全ではない為に、不安が残っている。

機動六課の戦力は前回よりも低くなっているのだ。

その様な事態だからこそ、クロノは何としてもエリオとユーノを送る事にしたのだ。

「護衛も、僕の部隊から二、三人出す。だから頼む」

「・・・・分かったよ。出来るだけの事はやるさ」

「必ずこのディスクを渡して、機動六課に合流します！」

「二人とも、頼んだぞ。それが地上を救う希望になるかも知れないんだ」

ユーノとエリオの言葉に、クロノは険しい声で告げ、ユーノとエリオは何としても機動六課に到着し、ディスクを地上に届ける決意を固めのだった。

会話が、部屋の外で妖艶に笑っている女性に聞かれているとも気が付かずに。

暗い研究施設内部。その研究所の主ージェイル・スカリエッティは笑みを浮かべながら、不気味な脈動を続けるデジタマを観察し続けて、それから得られたデータに更に笑みを浮かべる。

「フフフフフッ！順調だ！これならばもうすぐ生まれる！私達が表舞台に立つ日も近く付いて来ているよ！楽しみだ！この子がどんな素晴らしい結果を見せてくれるのか！本当に楽しみだよ！！」

得られたデジタマのデータに、スカリエッティは狂気の叫びを上げる。

そして少しの間笑みを浮かべ続けると、一時デジタマの観察を止め、今度は別のデータを見始める。

「フム？地上にはやはりかなりの数のデジモンが存在しているようだ。この子の脅威には成らないが、それでも本局よりは危険だね。

ドゥーエには警戒する様に命令せねばな・・・・・それにしても詰まらないね。フェイト・テスタロッサ。私は君がどんな行動をするのか楽しみにしていたのに、このざまとは。所詮は人形と言う事だね」

スカリエッティは早い段階でフェイトがデジモンを育てている事が分かっていた。

その為に秘密裏に監視もしていたのだが、その結果はスカリエッティを失望させるのに充分な事だった。

「ブイモン。この子に対抗出来るアルフォースブイドラモンと呼ばれるデジモンに進化する可能性を秘めたデジモン。フェイト・テスタロッサのデジモンがブイモンに進化したと聞いた時は、私の夢を阻む最大の障害に成ると思っていたのだが。まさか、高町君の試練を越えられない所か、デジモンとの絆も出来ていなかったのには驚いたよ。もはや人造魔導師研究には興味は無いが、プレシア女史の言っていた通り、人形でしか彼女は無いのだね。ライバルが居れば、私もこの子も燃えると言うのに、本当に残念だ」

スカリエッティはそう呟くと、フェイトに関する集めていたデータを全てのデータを削除する。

それと共に研究室の中にウーノが足を踏み入れ、スカリエッティに報告を始める。

「ドクター、幾つかご報告が在ります」

「フム、なんだいウーノ？」

「はい。先ずはドゥーエからの報告で、本局からFの遺産のエリオ・モンディアルが近々地上に来るそうです。その時に第二十管理世界

での管理局の部隊の行動を記録したディスクも共に地上に運ぶようです」

「ほう。成る程、そのデータを使って地上本部に居るデジモン達を護る積もりだね。中々に本局にも事態が見えている者が残っている。となれば、ウーノ。セイン、ノーヴェ、それとゼストに来る者達の護衛を秘密裏に行う事を頼みたまえ」

「宜しいのですか？彼らは何れは敵に成る者達です。それなのに護衛を付けるなど？」

ウーノが疑問に思うのも当然だろう。

機動六課、地上本部、どちらも何れはスカリエッティの敵に成る者達。此処でどちらが潰れるにしても、最終的にはスカリエッティ達が有利に成る。にも関わらず、スカリエッティは機動六課や地上本部が有利に成る状況にしている。疑問に思うのも当然だろう。

だが、スカリエッティはウーノの質問に対して笑みを浮かべて答える。

「何、此処で機動六課に潰れられるとミッドにはゲートタワーが残り続ける。本局が使う兵器には興味が在るが、機動六課にはそのまま残って欲しいのだよ。ゲートタワーを建てている者達を見つける為にね」

ーーーブン！

スカリエッティは言葉と共に、ウーノに見えるようにモニターに映し出し、ウーノがモニターに目を向けて見ると、其処にはブラックのデータとゲートタワーのデータが一緒に映し出されていた。

その二つのデータを見比べたウーノは、その類似点の多さの数に

表情を驚愕に染める。

「ッ！！ドクター！！これは！？」

「そう！私も気が付いたのは偶然だった！！ブラックウォーグレイモン君とゲートタワーのデータには類似点が多すぎる！つまり、あのゲートタワーこそがフリート君が私達に隠したデータの鍵を握る物なのだよ！！そしてあのゲートタワーを建てている者こそが、ブラックウォーグレイモン君を生み出した者なのかもしれない！！だからこそ、機動六課にはこのまま残り続け、ゲートタワーを破壊して貰いたいのだよ！ゲートタワーを生み出している者達が姿を見せるまではね！」

「納得しました。確かにあの漆黒の竜人の秘密と、その因子から生まれた二体のバイオデジモン達の秘密。確かに今後の事を考えるのならば、是非欲しいです。セイン、ノーヴェ、騎士ゼストには頼んで置きます。それで次ですが、デジタルワールドに居る妹達の報告です。『鍵を手にいれた』そうです」

「ッ！！・・・・・・フフフフフフッ！ハハハハハハハハッ！！！本格的に楽しくなって来たよ！！もうすぐだ！！もうすぐ私達の準備が全て終わる！！その時こそが！私達の自由の始まりであり、私の新たな夢！！『デジモンの神秘の探求』が始まる！！倉田明弘！ルーチェモン！！そして他の七大魔王達よ！！君達との戦いも、もうすぐだよ！！楽しみだ！！ハハハハハハハハハッ！！！」

暗い研究室の中でスカリエッティの狂気に満ちた哄笑が、響き渡り続けるのだった。

一方、スカリエッティ達が邪悪な計画を進行している事に気が付かず、リンディ達はさざなみ寮のリビングで、なのはが運んで来た大量のデジタマをリスティと愛に、その夫の槙原耕介、寮生と住んでいる仁村真雪、そしてリスティと同じように銀髪に、菫色をした瞳を持っているフィリス・矢沢と共に見つめていた。

「凄い数だね。これだと確かに隠す為の土地も広くないと不味いだろうね」

「ああ、しかも聞いた話だと、デジモンと言う生物は大きい者も居るんだろう？果たして、これ全部から生まれたデジモンを隠せるのか？」

「それ以前にだ。ザッと見ただけでも、百個は在るぞ。あたしらだけでそれだけの数。全部育てられるのかよ？」

『う～～～ん？』

真雪の言葉に、リスティ、耕介、フィリスは腕を組みながらうなり声を上げた。

デジモンを育てるのは出来るが、百以上のデジモンが一斉に生まれれば、幾らなんでも手が足りなくなる。生物を育てるのには手は暇が居る。幾ら動物が好きな愛でも、百体以上を同時に育てるなど不可能だろう。しかも、何人かはリンディ達と共にデジモンの捜索を行わなければいけない。

愛の負担は更に増すだろう。その事がある為に、夫である耕介は自身も残ろうと告げようとするが、その前にリンディが答える。

「それに付いては安心して下さい。後で、高町家から美由希さんと

桃子さんが援軍として来てくれます」

「それに大学が休校に成ったアリサちゃんとすずかちゃん、それとすずかちゃんの付き人のファリンさんも来るそうです。デジタマも一斉に全部が孵る事は無いので、大丈夫ですよ」

「ふむ、こっちに向かっている他のメンバーも考えると、確かに大丈夫そうだね」

「まあ、愛にはちょっと負担が掛かると思うんだけどね」

リンディとなのはの報告に、耕介とリスティはそれぞれ答えるように頷き、なのはから借りたディーアークでデジモンの映像データを見ている愛に顔を向ける。

「愛さん？大丈夫かな？」

「大丈夫ですよ耕介さん！それにしてもデジモンは本当に不思議な生物ですね？こんな小さなデジモンでも、進化したら強くなるんですから」

愛はディーアークに映っているデジモン達の情報に、本当に感心したような声を出した。

デジモンは人間と違って進化すれば寄り強い存在へと変貌する。究極体に進化出来るデジモンは、無数に存在しているデジモン達でも一握り程度だが、それでもただの一般人では成長期にも勝てないだろう。それほどまでにデジモンと人間の壁は大きいのだ。

その様なデジモンと戦端を開いた管理局には、リスティも耕介も真雪も同情に気持ちが全く沸かない。全部管理局が原因なのだから。しかも、それが無関係の者達まで巻き込んでしまったのだから、尚

更に同情の気持ちなど存在しない。

「・・・・・思ったんだけどよ。管理世界って所が滅んだ後には、必ずこの世界にもデジモンは来るんだろう？」

「・・・・・人類の滅亡の危機ですよ。しかも、絶対に人間側が不利な危機が」

「全く。これだから本気で正義を謳っている組織は信用出来ないね」

真雪とフィリスの言葉に、リスティは本気で頭が痛そうに言葉を呟き、聞いていたリンディ達は冷や汗を流し始める。

リスティ達の言葉は全て事実だ。デジモン達が憎んでいるのは人間と言う種族そのもの。

彼らの憎しみは人間を滅ぼす事でしか晴らせない。その為ならば、例え無関係な人間だろうと、今のデジモン達は人間を平然と襲うだろう。先の東京襲撃事件のように。

その後、リスティ達ともにリンディ達はデジタマを整理していると、入り口の方からインターホーンが鳴り響く。

ーーーピンポーン！

「多分クイント達ね。私が案内して来ます」

リンディはそうリスティ達に告げると共に急ぎ玄関に向かいだし、手に資料の様な物を抱えたクイント、ティアナ、そしてティアナの首に巻き付いているクダモンがリビングに入って来た。

「こんにちは、私はクイント・ナカジマと言います」

「始めましてティアナ・ランスターです」

「私はティアナのパートナーのクダモンと言う。よろしく頼む」

クイント、ティアナ、クダモンはリビングへと入ってくると共に、深々と頭を下げてリスティ達に自己紹介を行い、耕介や真雪など、剣術の達人は、その立ち振る舞いの隙の無さに感心した表情を浮かべる。

一見クイント達の動きは無造作に見えるが、その立ち振る舞いからは激戦を潜り向けて来た貫禄が宿っていた。

(聞いた話だと、彼女達はデジモンでも最強の存在と戦った経験があると言う。その経験は大きいだろうな)

(あたしじゃ勝てねえな。耕介なら神咲の技で上手く互角に持ち込めるだろうが、それは一対一の話だ。ティアナって奴にはクダモンっていうのが付いている・・・・・後で過去を少し聞いて、マンガのアイデアにしよう)

その様に耕介と真雪がそれぞれ内心で考えている間に、リスティ達も自己紹介を行い、クイントとティアナが持って来た資料を全員で見始める。

「フン〜、やっぱり東京に近い場所でデジモンの目撃情報が多いね。これを見るとデジモン達も日本の中心の場所が分かっているみたいだ」

「ええ、他に目撃されている場所も、此処からはそう遠くない場所ね。となれば、リスティさんとティアナ、クダモン君がこの辺りのデジモンの捜索を、残りの人達は東京から近場で目撃されているデ

ジモン達を追うべきね」

「それが良いね。後で援軍として来る者達もボクとティアナの援護に回せば、かなり状況は良くなる。とにかく先ずはデジモン達の捜索が第一だ」

リスティの言葉にその場に居る全員が頷き、それぞれ動こうとするが、その前になのはがフリートから聞いた報告を話し始め、十闘士の事を知っている者達は表情を険しくする。

「・・・・・十闘士達が不完全ながらも目覚めてしまったか。不味いぞ」

「ええ、彼らが味方に成ってくれれば良いのですが、ルインさんの記憶だと、不安しか思い付きません」

「・・・・・そのルインって言う人の記憶はそんなに不味いものなのかい？」

「耕介・・・・人間の欲望が凝縮された記憶を見たいと思うかい？平気で人殺しを命令する人間の記憶を？」

「・・・・すまんリスティ。欠片も見たくないよ。そんな記憶は」

リスティの言葉に耕介は考えるような表情を浮かべるが、すぐさま顔を顰め否定の声を上げる。

他の者達も同様の表情を浮かべ、リンディ達を見つめると、リンディ達は無言で肯定の頷きを行う。

「ルインさんは、嘗ては多くの者達に求められた欲望の結晶と言え

る人なんです」

「人間が力を求めた果てがルインさん。だけど、その力は誰もが制御する事が出来ず、最終的にはその事実も忘れられ、数え切れない人達がルインさんを何度も滅ぼそうとしたんです」

「その事を語る時のルインさんは、とても悲しそうでした」

リンディ、なのは、ガブモンはそれぞれルインに付いて語り、それを聞いたリスティ達は顔を顰める。

「・・・・魔法も所詮は力だね・・・・・夢が壊れそうだよ」

「魔法と言う言葉の認識が変わりそうだな」

「ええ、本当ね」

リスティ、耕介、フィリスは顔を顰めながら言い合い、他の者達も同意する様に頷く。

結局の所は、魔法も質量兵器も大差は無いのだ。ただ使える人間が限られているだけであり、最終的には魔法も力でしかない。その事を管理局の多くの者達は忘れ、魔法はクリーンな物だと言うイメージが固定してしまったのだ。だからこそ、管理局は魔法を遥かに超えるデジモンの力を認められなかった。その結果が今の現状である。もし、双方の理解が在れば、戦争は起きなかっただろう。

「もはや人間が今の迫り来る脅威に勝つ為には、デジモンの力は必要不可欠です」

「同感だね。もう人間だけで止められる事態ではないよ。何として

地球はデジモンとの協力を得ないとね」

リンディの言葉にリスティは同意の声を上げた。

現状で何れは襲い来るデジモン達や七大魔王に対抗出来るのは、同じデジモンでしかない。特に地球には魔法技術が存在しない為に、質量兵器でしかデジモンとは戦う事が出来ず、ＨＧＳや霊能力者にしても成熟期の相手が精一杯だろう。完全体も在る程度は戦えるが、究極体の相手はよほどの覚悟を決めた人間で無ければ無理なのだ。

その事がリンディとリスティの会話で分かった耕介達は、改めて自分達の役割の重要性に気が付き、気を引き締め直し、リンディ達と共に作戦会議を行い続ける。

そしてある程度纏まり始めると、バンチョーレオモンが突如として立ち上がり、リビングの外へと向かい出す。

「バンチョーレオモンさん？何処に行くんですか？」

「俺は一度アルハザードに戻る。十闘士の事も在るが、ヴィヴィオとギルモンと共に居るブイモンに一度会って来る。奴も何れはこの場所で暮らすのだ。その為にも早い内に説得が必要だ」

「確かにそうですね。分かりました。それじゃあ戻って来る時はヴィヴィオとギルモン君も一緒に連れて来て下さい」

「分かった」

リンディの言葉にバンチョーレオモンは頷き、リビングを出て行く。

その後姿を見ていたリンディ達は、バンチョーレオモンならば何が在っても大丈夫だと思い、リスティ達と共に更に方針を決め合うのだった。

機動六課会議室。その部屋の中で機動六課の主要メンバーの者達が集まり、次のゲートタワーの破壊場所に付いて話し合っていた。それぞれ席に座りながら、オーリスがモニターに映し出されているゲートタワーとデジモン達に付いて説明を始める。

「次のゲートタワーの場所は、クラナガンと他都市を繋ぐリニアレールの近くに在ります」

ーーーブン！

オーリスが言葉を言うと共に、モニターの映像が変わり、リニアレールが映し出される。

「この場所は前回と同じように森に囲まれ、崖が存在している場所です。この場所のゲートタワーは何としても破壊しなければ成りません」

「理由は簡単や。この場所は多くのリニアレールが必ず通る場所。つまり、此処を解放すれば、都市同士の行き来が叶う。現在、空路や海路はデジモン達やゲートタワーが在る為に使う事は出来へん。だけど、陸路は幸いにも、邪魔をしとるのはこのゲートタワーだけや。だからこそ、私は何としてもこの場所のゲートタワーを破壊して、人の行き来が出来る様にするんや。デジモンの評判を上げる為にも重要な事や」

ーーーピクッ！

はやてが呟いた言葉に、復帰して会議に参加しているフェイトが僅かに反応し、その姿をオーリスとはやて、ゲンヤは厳しい瞳で見つめる。
フェイトが復帰したのは数日前だが、それでもやはり以前の元気は無いとはやて達は気が付いていた。今のフェイトはアルフが教えてくれたリュウダモンとポーンチェスモン（白）の存在が在るからこそ、何とか立ち上がっている状況でしかない。
本来ならばそんな状態のフェイトを戦いの場に出すなど、オーリス、はやて、ゲンヤにしても絶対に反対したい事だが、ヴィータの復帰が無理な事と、今回の作戦にはどうしてもフェイトの魔力資質変換が必要な事も在って、後方での援護を仕方なく承認したのだ。

「だけど、今回のデジモン達は前回よりも強力や。相手は恐竜型にサイボーグ型。どちらも範囲攻撃が可能なデジモン達や」

ーーーブン！

はやてが言葉を言うと共に、再びモニターの映像が変わり、今度はゲートタワーの周りに存在している巨体のデジモンや、機械の様な姿をしたデジモン達が映し出される。

「前回の時は、私の魔法で環境を作り変えた事と、相手が範囲攻撃を行うデジモンで無かった事が大きい。だけど、今回は相手の攻撃は殆ど範囲攻撃や。前回のように森に潜ませて１０８部隊の援護を当てにする事は無理や」

「残念だが、恐竜型の必殺技は殆どが炎だ。一発でも放たれれば、森は火の海。バリアジャケットが在っても、煙までは防げねえ。今回の俺の部隊の連中は前線ではなく後方での援護に回るしかねえんだ」

「今回の戦いは前回よりも遥かに困難です。一度ゲートタワーを破壊出来たからと言って、気を緩めないようにお願いします。私達は数多く存在するゲートタワーの一つを破壊したに過ぎないのですから」

オーリスはそう告げ、全員がこの前での戦いの結果に浮かれないように釘を刺す。

その言葉にはやて達は気を引き締めなおし、次なる戦いに意欲を燃やし出す。

それを確認したオーリスは僅かに安心した表情を一瞬浮かべるが、すぐに表情を真剣に戻し、シャリオに目を向ける。目を向けられたシャリオは頷くと共に立ち上がり、はやての横に移動し、二つのデバイス―シグナムのレヴァンティンとフェイトのバルディッシュ・アサルトが映っているモニターを映し出す。

「では、次に前回の戦いで判明したこの二つのデバイスの説明を、シャリオ・フィニーノ補佐官にお願いします」

「了解ですオーリス三佐」

オーリスの言葉にシャリオは頷き、何処か夢心地の表情で二つのデバイスの説明を始める。

「先ずはデバイスマスターとしての意見を言わせて貰います・・・・・・・この二つのデバイスは・・・・ロストロギア認定を受けておかしくないほどの出来栄えです!!」

『ハアッ!?』

シャリオの言葉にその場に居る殆どの者達が呆気に取られた表情を浮かべるが、レヴァンティンとバルディッシュを修復した犯人を知っているゲンヤは、頭が痛そうに頭を抱え始める。
ゲンヤには分かっているのだ。あのマッドとしか言えないフリートが、ただでデバイスを直す筈が無い。絶対に何かをやっていると思っていたが、案の定レヴァンティンとバルディッシュは改造されていた。
その様にゲンヤが頭を抱えていると気が付かず、シャリオの説明をはやて達は聞いて行く。

「先ずは一番の特徴ですが！使われている金属や部品の素材が全て解析不能なんです！！しかもその硬度は、管理局が保有する金属類の全てを上回っています！！多分！検証はしていませんが、今のレヴァンティンとバルディッシュならば、艦艇の装甲さえも簡単に両断出来るでしょう！！」

「待ってシャーリー！？艦艇の装甲までだと！？」

「はいシグナム副隊長！！しかもですね！！装甲だけではなく、それぞれのフォルムも強化されています！！これだけの改修を短期間で行ったなんて信じられません！？これを行った人物は先ず間違いなく次元世界一のデバイスマスターです！！」

（そりゃ、伝説の地一アルハザードの管制人格だからな。あいつに勝てる研究者なんて今の次元世界じゃ、片手の指で数えられるぞ・・・・・マッドじゃなければな。最高の研究者なんだけな）

シャリオの夢見心地の叫びに、ゲンヤは内心で皮肉げな声を出した。
実を言えば、ゲンヤは既にスバルとギンガのデバイスのデータも

地上本部に送っている。しかし、手に入れてから四年が経った今でも、地上本部の研究者全員が匙を投げるほどに二人のデバイスは高性能だった。簡単なデバイスの修復ならば、地上の研究者達でも出来る。だが、全面的な改修など、不可能だと研究者達は全員叫んでいる。と言うか、余りにも完成度が高すぎて、改修できる場所を見つける方が難しいと叫んでいるぐらいなのだ。

せめて装甲だけでも再現出来ないかと、レジアスは研究者達に頼んでいるが、未だに使われている素材が不明と言う状況である。

ゲンヤがその事に更に頭を痛めている間に、シャリオの説明は続く。

「それとですが、二つのデバイスにはブラックボックスのように雁字搦めにセキュリティが行われているシステムが発見出来ました」

「待って！レヴァンティンにはその様なものは無かったぞ！！」

「バルディッシュにも無いよ！そんなブラックボックスは！？」

シャリオが告げた事実に、シグナムとフェイトは怒りの表情を浮かべて叫ぶ。

シグナムもフェイトも長年、レヴァンティンとバルディッシュを友として扱って来た最高の相棒。その様な在る意味では半身と呼べる相棒を勝手に改造され、正体さえ分からないシステムまで積まれていたのだから、怒るのも当然だろう。

だが、改造した本人の居場所が分からず、二人は少しでも情報を得る為に、更にシャリオから話を聞き始め、はやてとオーリスはその間に話し合う。

「フム。恐らく改造したのは、リンディ・ハラオウンをデジモンへと変えた存在ですね。何か覚えは無いですか八神部隊長？貴女は彼

らの下で治療を受けましたし？」

「いや？私には覚えが無いです。私とリインが一緒に居たのは、部屋の一室だけですし・・・・・そう言えば、リンディさんがマッドがどうのこうの言っていた様な気が？」

「・・・・・もう一度精密検査を近々受けて下さい。マッドと呼ばれる人物の治療を受けたのですから、何かされてないとは限らないので」

「・・・・・・・・・・・すぐに受けて良いですか？」

はやては心の底から不安そうな表情を浮かべて、オーリスに質問した。

確かにオーリスの言うとおり、マッドと呼ばれ、リンディやクイントを改造した人物の治療をはやてに受けた。その様な人物が果たして何もせずにはやてを帰すだろうか？答えは否だとはやては思う。

マッドとくれば自爆装置ぐらい作っていそうだと思い、はやては途轍もない不安に襲われるが、オーリスは関係ないと言う様に声を出す。

「駄目です。少なくとも、次のゲートタワーを破壊するまで絶対に駄目です」

「・・・・命が掛かっとるんやけど？」

「作戦は二日後です。もう精密検査を受けている時間は存在しません。怨むならば、死んでしまうほどの怪我を負った自分を怨むんですね」

「・・・・・なのはちゃん、リンディさん。お願いやから、私の体に何もしてないって言ってや」

オーリスの言葉に、はやては祈る様に腕を組みながら、地球に居るなのはとリンディに願う。

しかし、答えが返って来るはずも無く、はやては更に不安に襲われ、表情を暗くし始めた瞬間に、会議室の扉が突如として開け放たれる。

ーーーバタン！！

「八神部隊長！ゲンヤ副部隊長！！オーリス監察官！！大変です！！」

「如何したカルタス！？」

会議室の中に飛び込んで来た陸士ーゲンヤの部下のカルタス二等陸尉の叫びに、ゲンヤは慌てて立ち上がる。

カルタスは捜査官と言う事も在って、機動六課からの大捜索（まそさる）の役目を与えられていた局員だ。そのカルタスが慌てて機動六課に戻って来たのだから、何かが在ったと思い、ゲンヤ、オーリス、はやては険しい表情でカルタスの報告を待つ。

「先ほど本局から機密通信で、クロノ・ハラオウン提督がエリオ・モンディアル三等陸士とユーノ・スクライア司書長を、部下三名と共に送ったと言う通信が地上本部に届いたのです」

「エリオとユーノがっ！？」

カルタスの報告にフェイトは悲鳴のような声を出し、報告を行っ

たカルタスを見つめる。
　エリオ・モンディアルは、フェイトが保護している少年で在り、フェイト同様に人造魔導師なのだ。その関係も在って、フェイトはエリオを大切にしている。現在は居ないが、ブイモンもまたエリオとは友達である。
　話は戻すが、エリオもまた機動六課のメンバーとして数えられていた。そのエリオが来れなかったのは、ひとえに上層部の邪魔が在ったのだから、恐らく上層部達が何かをしたんだろうと、はやて、オーリス、ゲンヤは予想する。
　それを表すようにカルタスは報告を始める。

「通信が届いた後、近場で捜査を行っていた私と部下に地上本部から通信が届き、急ぎ転送ポートが在る場所に向かったのですが・・・・・・手遅れでした。その場にはクロノ提督の部下と思われる者達とユーノ・スクライア司書長が、全身から血の流して重傷の体で倒れていました」

『ッ！！！』

　カルタスの告げた事実に、会議室にいる全員が顔を蒼白に染めた。
　カルタスの言葉が事実だとすれば、ユーノ達を襲った犯人は本局の者達としか考えられない。仲間である筈の者達さえも本局の者達は殺そうとしたのだ。

「何とか命には別状は無いようですが、重傷には変わらないと言う事です。それと、僅かに意識があったユーノ司書長からの報告で、犯人は先ず間違いなく上層部派の局員達です」

「すぐに地上本部の中将に連絡を行いなさい！その局員達をすぐに捕まえて、エリオ・モンディアル三等陸士の安全を確保するのです

！彼やユーノ司書長は既に地上に登録されている局員！その局員達を攻撃した者達は、反逆者です！身内を攻撃する者など敵です！！」

「はい！！既に中将が編成した部隊が、本局の局員達とエリオ・モンディアル三等陸士を追っています！！幸いにもエリオ・モンディアル三等陸士は捕まる前に、ユーノ司書長が全力で転移魔法を使い、逃がしたとの事です！！」

「カルタス！！てめえもすぐにエリオの捜索を行え！！例の人物の捜索は後回しで良い！！」

「了解しました！！」

ゲンヤの命令にカルタスは頷き、急いで会議室を出て行った。
その姿を見たフェイトは慌ててはやてに詰め寄る。

「はやて！！私もエリオの捜索に参加させて！！エリオが危ないの！！」

「・・・・・駄目や・・・・・次のゲートタワーの破壊任務は二日後。この後は寄り作戦を固める必要が在る。エリオの捜索許可は出せへん」

「そんな！？エリオが危ないんだよ！？あの子は子供…」

「だったら何でエリオをメンバーに入れたんや！？」

「ッ！！」

はやての怒りの叫びに、フェイトは体を震わせる。

しかし、はやては止まらずにフェイトの両肩を掴み、険しい視線をフェイトの瞳に向ける。

「この部隊の元々の任務は、『漆黒の竜人』ブラックウォーグレイモンの逮捕や。あの管理局どころか次元世界の人々にまで恐怖の象徴として語られている最悪の広域次元犯罪者。その存在と戦う事が元々の機動六課の任務やった。そしてブラックウォーグレイモンは敵に対しては一切の容赦が無い。この部隊に居るだけで、ブラックウォーグレイモンと相対して戦う事に成る。当然、誰かは必ず死ぬ。ブラックウォーグレイモンと戦うと言う事だけで、死ぬ可能性が高かったんや」

「そ、それは・・・・」

「にも、関わらずフェイトちゃんはエリオを推薦した。自分と一緒だから大丈夫？そんな訳はあらへん。ブラックウォーグレイモンは、デジモンはそんな生半可な覚悟で戦える存在やないんや。フェイトちゃんやて分かっている筈や、あのロイヤルナイツと四聖獣を見たんやからな」

「・・・・・」

はやての言葉にフェイトは答える事が出来なかった。

はやての言うとおり、デジモンを相手に戦うと成れば、死んでしまう可能性は高い。先の戦いの時もヴィータとリインは、大の助けが無ければ、死んでいただろう。ヴィータとリインが助かったのは、完全に運が良かったに過ぎないのだ。

その部隊に来ると言う事は、死を覚悟すると同意義なのだ。

「エリオは全部を分かって来た筈や。クロノ君もユーノ君も説明し

た筈や。にも関わらずミッドに来たんや。覚悟は出来とる筈や。自分が捕まればどうなるのかも分かってな」

「・・・・・」

「フェイトちゃん。選択や。此処でエリオの捜索に参加するなら、ライトニング分隊長の座を降りて貰うで？」

「ッ！！」

はやての宣言にフェイトは体を震わせ、はやての顔を見て見ると、はやては嘗てフェイトになのはが見せた冷酷な表情をフェイトに向けていた。

「今回の作戦にはフェイトちゃんの力が必要やと思って、解任はしてないけど、既にフェイトちゃんの後釜に成る人物の選出は済んでいるんや」

「そ、そんな・・・・」

「まだ、本決まりやないけど、次の任務でのフェイトちゃんの行動しだいでは、即座に解任。選定は私や無くオーリス三佐が行う事も決まっとる」

「八神部隊長の命令で選定役は担っています。自分では庇ってしまう可能性も在ると言う事なので、ゲンヤ副部隊長の了承も受けています。作戦に参加せず、モンディアル陸士の捜索に参加するならば、裁定するまでも無く解任です」

「・・・・・少し頭を冷やして来ます。エリオの捜索の方はよろし

くお願いします」

「言われるまでも在りません」

顔を俯かせて両手を握り締めながら呟いたフェイトの言葉に、オーリスは即座に答えると共にはやてとゲンヤに顔を向け、エリオの捜索任務に当たる人員を選び始める。

その間にフェイトは顔を俯かせながら会議室を出て行き、その後姿をシグナムやＦＷメンバーは心配そうな表情で見つめるのだった。

そして会議室を出たフェイトは機動六課の屋上に辿り着き、制服のポケットの中に仕舞って置いた黒く塗り潰れたディーアークを取り出し、悲しみの表情を浮かべる。

「・・・・・ヒック・・・・ヒック・・・・・如何したら絆が出来るの・・・・・・力が欲しいよ・・・・・ブイモンも・・・・エリオも・・・・・護れる力が・・・・・全てを護れる力が欲しいよ・・・・ウワァァァァァァーーーーーーー！！！！」

ディーアークを大切そうに抱えてフェイトは悲しみ涙を屋上で流し続ける。

黒く塗り潰れたディーアークが、不気味な黒い光を僅かずつ発し始めている事にも気が付かずに。

「こ、これは・・・・一体何が在ったのだ！？」

さざなみ寮からアルハザードへと戻って来たバンチョーレオモンは転送室を出ると共に、破壊し尽くされた通路を見つめ、驚きの声

を上げた。
　まるで何かが一直線に通路を向かった事で破壊された通路。幸いにも破壊されているのは通路だけのようで、通路の間に在る部屋は破壊されていない様だが、それでも通路の姿は無残としか言えないほどだった。

「まさか・・・・十闘士達が完全に覚醒してしまったのか！？」

　バンチョーレオモンは叫ぶと共に、急いで十闘士のスピリットが保管されているフリートの研究室に向かって見ると、研究室の前に倒れているヴィヴィオとギルモンの姿を見つける。

「ッ！！ヴィヴィオ！！ギルモン！！」

　ヴィヴィオとギルモンの姿を見つけたバンチョーレオモンはすぐさま、ヴィヴィオとギルモンの傍に駆け寄り二人の状態を調べる。

「・・・・ウッ」

「・・・・・バンチョー・・・・・レオモン」

「しっかりしろ！誰だ！？誰にやられたんだ！？」

　自身の腕の中で声を出そうとするヴィヴィオとギルモンの姿に、バンチョーレオモンは心配そうな声を出して問うが、二人は体を襲う苦痛で答える事が出来ず、バンチョーレオモンが表情を険しくした瞬間に、研究室の中からフリートの声が聞こえて来る。

「・・・・・・十闘士です・・・・・・五人の十闘士が・・・・・残っていたデジタマと融合して覚醒したんです」

「ッ！！フリート！！無事なのか！？」

フリートの声を聞いたバンチョーレオモンはヴィヴィオとギルモンを抱えて研究室の中に入り、ルインの入っているカプセルの前に倒れ付しているフリートの傍に駆け寄る。

「何とか無事です・・・・・私の本体はこの世界の中心に在りますからね・・・・この体を傷付けられても本体にはダメージは無いんですよ。それにルインさんが私達に十闘士の攻撃が当たる前に強力な防御魔法を使ってくれたので、生き残る事が出来ました。ですが、その為に再びルインさんは眠ってしまいましたけどね」

フリートは言葉と共に自身の背後に存在しているルインの入っているカプセルを見つめる。

ルインが防御魔法を使っていなければ、フリート、ヴィヴィオ、そしてギルモンは生きてはいなかっただろう。それほどまでに五人の十闘士が放った攻撃は強力だったのだ。

「幸いにも自動修復システムが起動しています。早い段階で通路の修復や研究室の修復は終わって、ヴィヴィオちゃんやギルモン、そしてルインさんの治療も行えるでしょう。ですが、五人の十闘士がミッドに向かってしまいました。ブイモン君を連れ去って」

「ッ！！ブイモンをだと！？何故だ！？」

フリートの告げた事実にバンチョーレオモンは疑問の声を上げた。

五人の十闘士達がブイモンを連れ去った狙いが分からないのだ。確かにブイモンは成長期にしては強い部類に当たる。だが、十闘士達からすれば敵ではない。にも関わらずブイモンを連れ去っている

のだから、疑問に思うのは当然だろう。
その疑問に対して、フリートは苦痛を堪えた表情を浮かべながら答える。

「彼らは・・・・・ブイモン君を使って人間の欲望に当てられたデジモンを見せる気なんです・・・・今のフェイト・テスタロッサはブイモン君を見れば、必ず間違った選択をしてしまう・・・・それを利用して彼らはデジモン達に人間を完全に失望させる気なのです・・・・今の彼らはルインさんの記憶を見た事でフェイト・テスタロッサの心情が分かっている筈です・・・・すぐに止めなければ、大惨事がミッドで起きってしまいます」

「クッ!!やはり十闘士は敵に成ってしまったか!!」

バンチョーレオモンは苦い声を出した。
十闘士が敵に成ると言う恐れていた事態が起きたのだ。幸いにも五人の十闘士が向かったのは地球ではなくミッドだから、地球のデジモン達が先導される恐れはない。だが、それでも事態は最悪な方向に向かいだしたのは間違いない。
その事が分かったバンチョーレオモンは、フリートにヴィヴィオとギルモンを預け、急ぎミッドに向かおうとするが、フッとフリートの言葉を注意深く思い出す。

「待て五人だと?十闘士は十人の筈だ?残りの五人は如何した?」

「残りの闘士達のスピリットは残っています。ですが、一つ分からない事が在るんです。確かに五人の十闘士が覚醒した筈なのに・・・・・六人目のスピリットが残っているんですよ」

「何だと!?」

フリートが告げた事実に、バンチョーレオモンは在り得ないと言う声を出した。
十闘士の数は十人。それはスピリットの数からも先ず間違いない。バンチョーレオモンも十闘士のスピリットを見た事が在る。確かに数は二十個丁度だった。にも関わらず、覚醒した十闘士は五人なのに、六人目のスピリットが残っているフリートは告げたのだ。疑問が浮かぶのも当然だろう
その様にバンチョーレオモンが疑問を覚えていると、フリートが震えながらも横を指差し、其方の方をバンチョーレオモンは見てみる。
其処には、破壊されたカプセルの中に浮かんでいる『炎』『光』『氷』『雷』『風』の闘士達の五つのスピリットと共に、確かに六個目のスピリット、『闇』の闘士のスピリットが浮かんでいた。

エリオ・モンディアル、行方不明！！（後書き）

次回予告

ユーノ達の犠牲を持って逃げ延びたエリオ。

しかし、追っての追求は厳しく追い込まれ始める。

その時に現れる一人の男と、デジモン達。

それと共に現れる者達とは？

次回、漆黒の竜人と少女、『出会い、騎士とナンバーズ』

エリオは出会う。新たに尊敬する者と。

出会い、騎士とナンバーズ！！

クラナガンに存在する廃棄都市区間。
もはや住む者も殆ど存在せず、ただ広大にビル群が続く場所。
その場所は管理局に追われている者達からすれば、絶好の隠れ場所と成る場所。
その場所に存在する一つのビルの内部で前回の機動六課の任務の時に、ヴィータとリインを救ってくれた青年ー現在は本局の局員達や地上本部の局員達に捜索されている人物ー大門大（だいもんまさる）と、そのパートナーデジモンで在るアグモンが、遠くに見えるクラナガンの街を双眼鏡で覗き見ていた。

「・・・・・チィッ！！やっぱりデジモンの事は悪だって放送しているぜアグモン！」

「あぁ、酷いもんだな兄貴ぃ！悪いのは全部管理局って組織なのによ！デジモンの事を悪く言い続けていやがる！」

二人が双眼鏡で見つめる先には、巨大なテレビの付いたビルが存在し、二人はそのテレビの内容に怒りを顕にした。大とアグモンがミッドに来てから数週間。二人は自分達の居る場所が分かると、すぐさま身を隠せる場所を探し、クラナガンの廃棄都市区間に潜り込んだのだ。
その後は情報収集に徹していたのだが、偶然にも機動六課の存在を知り、隠れながら戦いを覗いていたのだ。

「・・・・・・やっぱり倉田が何処かに居やがるのは間違いねえ。規模の違いは在るけどよ。この状況は十二年前の状況に似過ぎていやがる。あの野郎！見つけたらぶん殴ってやるぜ！！」

「当然だ！！アイツさえ居なければ、上手くデジモンと人間の共存が成功していたんだ！！・・・・・後ちょっとで、俺達の地球とデジタルワールドの空間の境界の修復が終わって・・・・・兄貴は小百合達と再会出来て・・・・俺は十二年ぶりに小百合の卵焼きが食えたのに・・・・それなのに！！」

「アグモン・・・・」

涙を流して呟いたアグモンの言葉に、大も僅かに落ち込んだ表情をする。

大とアグモンの故郷で在るデジタルワールドと地球は、十二年前に一度世界同士の衝突する危機にみまわれたのだ。その時はデジモンと人間の互いの力によって、世界衝突の危機は去った。

だが、その時に空間の歪みまで完全に修復する事が出来ず、デジタルワールドと地球は完全に行き来を封じられたのだ。しかし、近年、漸くデジタルワールドと地球の境界が修復を終え始め、大とアグモンは十二年ぶりの地球に帰る筈だった。

だが、その直前で三大天使のデジタルワールドが崩壊。その為に、デジモンと人間の戦争まで発生してしまった。

当然ながらその事態は、大とアグモンも知り、すぐさまデジモン達を止めようと動いたが、デジモン達の憎しみは深く、戦争を止める事が出来ず、何とか人間を憎んでいなかったロイヤルナイツとチンロンモンに合流し、対策を練ろうとしたが、それも現れたベルフェモンとルーチェモン、そしてギズモン達に阻まれてしまったのだ。

「・・・・・・くそ、倉田の野郎が生きていやがったのは完全に予想外だった。戦いが終わった後に探しておけば、こんな事には、チクショウッ！！」

ーーードン！！

「アニキ・・・・・」

悔しそうな声を出して、壁に拳をぶつける大の姿に、アグモンも落ち込んだ表情をする。

大とアグモンにとって、倉田の生存は完全に予想外だった。

戦いの途中で倉田は異次元空間に飲み込まれ、てっきり大とアグモンは倉田が死んだとばかり思っていた。だが、倉田は生き延び、遠く離れた次元世界でルーチェモンと言う最悪のデジモンを復活させ、次元世界を管理していた管理局を支配してしまった。

その為にデジモンと人間の絆は完全に断ち切られ、互いに憎しみ合い、滅ぼし合うまで関係に成ってしまった。

大とアグモンはその事を、自分達の甘さが呼んだ事だと思い、深く責任を感じているのだ。

因みに、大達の世界の地球では、全ての事件終了後。倉田のデジモン達に行った悪行や、ベルフェモンを使って世界征服しようとしていた事が全て公表され、倉田は歴史にその名を残す最悪の犯罪者と成っている。倉田を支援していた者達も同様に、余程の理由が無かった場合は、殆ど者達が倉田の変わりに責任を取らされ、刑務所行きに成っている。

「・・・・これから如何する？俺達がミッドに居る事は、管理局にもばれている。この前の戦いでも姿を見られちまった」

「・・・・今は情報を集めるしかねぇ。それに機動六課って所の連中はデジモンと一緒に戦っていた。街の方で得た情報でも、機動六課って所は、デジモンと一緒に戦っているって話だ。もしかしたら、其処の連中は全部知っているのかも知れねぇ。今回の戦争の原因をよぉ。それに俺達の事は悪く思われてねぇ筈だ。なんせ、そい

つ等の仲間を助けたんだからよぉ」

「流石は兄貴ぃ！！てっきり勢いで助けたのかと思っていたけど！後の事を助けて考えていたんだな！？」

「・・・・・嫌、完全にあの時は勢いで助けに入った」

ーーードガシャンッ！！

大の告げた事実に、アグモンはこけてしまい、大は照れくさそうに頭を掻きながら、アグモンに顔を向ける。

「だってよぉ。如何見ても子供にしか見えない奴が危なかったんだぜ？男として助けるのは当然だろう？」

「もう！褒めて損しちまった！」

アグモンは腕を組みながら、片目で大を睨み付ける。

てっきり全部考えての行動だと思ったのに、実はやっぱり勢いだった言われたのだから、肩透かしを食らうのも当然だろう。

大はその様子に、苦笑を浮かべ、ビルの入り口の方に歩き出す。

「まあ、とにかくだ。一度隠れ家に戻ろうぜ。あいつ等が飯を作って居てくれてるだろうからよ」

「そうだなぁ。俺も腹が減って来たし、戻ろうぜ兄貴！」

大の言葉にアグモンも頷き、二人はビルの外へと出ようと入り口に向かい出すが、入り口に差し掛かった瞬間に、二人は見えないようにしながら壁に寄り掛かり、注意深く外を見始める。

二人の見つめる先には、デバイスを持ってバリアジャケットを身に纏った局員が四人存在していた。

「・・・・どうだ？・・・・見つけたか？」

「いや、居ない。あの時の転移反応は、確かにこの廃棄都市区間を示したんだが？」

「探せ！既に地上本部がこの場所に局員達を向かわせたと言う情報が来ている！！俺達は奴らを殺し掛けたんだ！すぐに例の子供を捕まえて逃げないと危ないんだぞ！！」

「分かっている！他のメンバー達もこの場所に向かっている！」

「とにかくだ！！地上の連中が来る前に、見つけ出すんだ！！」

『了解！！』

一人の局員の叫びに、他の局員達は頷き、すぐさまその場から走り去って行く。

それを見ていた大は表情を険しくすると、アグモンに顔を向ける。

「行くぞアグモン！」

「へっ！？ちょっと待てよ兄貴ぃ！あいつ等は俺達の事も探しているのかも知れないんだぜ！俺達が捕まる訳には…」

「あいつ等。子供が如何とか言っていた！子供を捕まえるってな！見捨てられかアグモン！？」

「・・・・・そうだなぁ。行こうぜ兄貴ぃ！！後悔するぐらいなら、助けた方が良いもんなぁ！」

「おう！あいつ等が追っている子供も助けて！隠れ家に戻ろうぜ！！」

「了解だ兄貴ぃ！！」

大とアグモンは互いに意見が一致し合うと、すぐさまビルから飛び出し、局員達が向かった方向に急ぎ駆け出すのだった。その先で出会う者達の事も分からずに。

廃棄都市区間の路地裏内部。

その場所には右手に槍型のデバイスを握った赤い髪の少年ーエリオ・モンディアルが存在し、体中から汗を流して、壁に寄り掛かっていた。

「ハア、ハア、ハア・・・・・クッ！ユーノさん・・・・」

エリオは息を付くと共に、バリアシャケットの中から二枚のディスクを取り出し、悲しみを堪えた表情をする。

『エリオ！！君はこれを持って逃げるんだ！！僕らが時間を稼ぐ！！君はこれを必ずはやて達の下に届けてくれ！！』

「・・・・・必ず届ける・・・・・あいつ等に何て捕まるもんか」

エリオはユーノと別れる前の最後の言葉を思い出すと、壁に寄り

掛かるのを止めて立ち上がり、右手に持った槍を強く握り締めながら、注意深く辺りを見回し、恐る恐る歩き出す。

「・・・・・誰も居ないな？」

人の気配がしないのをエリオは確認すると、ゆっくり歩きながら廃棄都市の入り口へと向かうとする。

しかし、突如としてエリオの背後に音も無く茶色のコートを着て、顔をフードで覆った一人の壮年の男性が降り立ち、気配を隠しながらエリオの背後に忍び寄り、エリオの肩に手を置く。

ーーーガシッ！

「ッ！！」

肩を掴まれたエリオは、慌てて背後を振り返り、槍を構えようとする。

しかし、男性はエリオの肩を掴むだけ完全に動きを抑え、小声でエリオに声を掛ける。

「静かにしろ。その先には本局の局員達がいる」

「えっ？」

男性の言葉にエリオは疑問の声を出した。

エリオを捕まえに来た本局の局員ならば、自分の仲間達が居るという事など教える筈はない。それなのに男性はエリオに情報を教えた。では、男性は敵ではないかと思い、エリオが注意深く男性を見つめてみると、男性は服の中から一枚のディスクを取り出し、エリオの左手に乗せる。

「あの？これは？」

「君を一番最初に見つけられて良かった。そのディスクを地上本部のレジアス中将に渡してくれ。それと、もしクイント・ナカジマと言う女性に会ったら、『メガーヌは解放されていない。スカリエッティは裏切っている』と伝えるんだ」

「えっ！？あのそれって如何言う事で…」

「居たぞ！！こっちだ！！」

「ッ！！」

男性の言葉にエリオが質問しようとした瞬間に、エリオの背後から本局の局員が姿を現し、仲間達を呼び始める。

それを見たエリオは、すぐさまその場から離れようとするが、その前に男性がエリオの前に立ち、槍型のアームドデバイスを局員に向かって構え出す。

「此処は任せて、君は逃げろ」

「待って下さい！僕も一緒に！！」

「君の役目は、持っている者を必ず地上本部か、機動六課に届ける事だ。仲間達の思いを無駄にしないためにもな」

「・・・・・分かりました。あの貴方の名前は？」

「ゼスト・グランガイツ。ただの死人だ。さあ行くんだ！！」

「ゼストさん。ありがとうございます！！」

男性ーゼストにエリオは礼を告げると、急いで後方に向かって駆け出し、それを見た局員達は慌ててエリオを追おうとするが、その前にゼストが左側の建物に向かって槍を突き出す。

ーーードゴオオン！！

ゼストの槍が建物にぶつかると共に、左側の建物が崩れ落ち、エリオへと続く道が瓦礫に寄って塞がれた。

「悪いが、あの少年が運んでいるのは地上を護れるかも知れない希望。その希望を護る為に、貴様らには此処で立ち止まって貰うぞ！！」

「クッ！撃てエェェェェェーーーー！！」

ーーーズガガガガガガガガガガッ！！

ゼストの叫びに対して、その場に居た六人の局員達は一斉に射撃魔法を放ち、ゼストはそれを槍で振り払いながら局員達に向かって飛び掛るのだった。

ドゴオオオオオオオン！！

「ッ！！」

背後から聞こえて来た建物の崩れ落ちる音に、エリオは思わず足を止め、背後を見ようとするが、すぐさま自身の迷いを振り払い、前に向かって全速力で駆け出す。

（僕は立ち止まる訳にはいかない！！護ってくれたユーノさん達の為にも！必ず無事に地上本部に辿り着いて、ディスクを渡すんだ！！）

エリオは内心で叫ぶと、更に足を動かし、急いで廃棄都市区間から脱出しようとする。

しかし、路地裏の通路を進んでいると、突如として前方から局員が二人姿を現す。

「見つけた！！絶対に逃がさんぞ！！」

「クッ！！」

局員の姿を見たエリオはすぐさま後方に戻ろうとするが、後方からも二人の局員が姿を現し、エリオは前後で挟み撃ちに合ってしまう。

「梃子摺らせてくれたな。さぁ！俺達と共に来て貰うぞ！！」

「嫌だ！！貴方達と一緒に行くぐらいなら、僕は戦う！！」

エリオはそう叫ぶと共に、右手に持っていた槍を前方の局員達に向かって構える。

頭の良いエリオには、今の自分が全力で掛かっても、四人のベテラン局員達には勝てないと分かっている。いかに若干十歳でBラン

クの魔導師の資格を持っていたとしても、実戦経験の無いエリオと、実戦経験を持っている四人のベテラン局員に勝つ事は不可能だ。だが、それでもエリオは、自分を逃がす為に頑張ってくれたユーノ達の為にも、絶対に捕まらないと言う決意を持って挑む積もりだった。
しかし、それを嘲笑うかのように、四人の局員達はエリオから出来るだけ距離を取り、自分達のデバイスの先に魔力を集め始める。

「フッ！貴様の情報は得ている！遠距離から無力化させて貰うぞ！！」

「クッ！ソニック…」

「遅い！！」

エリオが加速魔法を発動させる前に、局員達の魔力チャージが終わり射撃魔法がエリオに向かって放たれようとするが、その直前に前方の二人の局員の居る横道から人影が飛び出す。

「子供に寄ってたかって、攻撃しようとするんじゃねえよぉ！！」

ーーードゴオン！！

「ガハッ！！」

『ッ！！！』

人影一大は飛び出すと共に、一人の局員の顔面を殴り飛ばし、殴られた局員は近くの壁に向かって吹き飛び激突する。
その姿をエリオをも含めて、全員が驚いた表情をして、局員を殴り飛ばした大の姿を見つめる。

エリオと局員達が見る限り、先ほどの大の一撃には魔力や特殊な力は一切感じられなかった。だが、大の拳はバリアジャケットを纏っている局員に確かにダメージを与える所か、一撃でノックアウト状態に局員をしてしまった。バリアジャケットの特性を知る者からすれば驚く以外に無いだろう。

だが、そんな事を知らない大は、驚きによって完全に動きが止まっているもう一人の局員の傍に瞬時に近寄り、先ほどの局員と同じように顔面に拳をぶつける。

「オラァッ！！」

ーーードゴオオン！！

「ゲハッ！！」

叫ぶと共に大が放った拳は、局員の顔面に突き刺さり、先ほどの局員と同じように壁に激突する。

それを確認した大は、すぐさまエリオの方に体を向け、急ぎエリオに向かって駆け出し、エリオの左手を右手で掴む。

ーーーガシッ！！

「付いて来い！！捕まりたくないだろう！？」

「はっ！はいっ！！」

大の言葉にエリオは頷き、二人は一緒に前に向かって駆け出す。

それを見た残りの二人の局員は、慌てて大とエリオを追い始める。

「あの？貴方はゼストさんの仲間ですか？」

「ゼスト？誰だそれ？俺の名前は大門大。日本一の喧嘩番長、大門大よぉ！！」

「ッ！！貴方があの大さん！？」

大の名乗りに、エリオは驚きの表情を浮かべ、自身の横を一緒に走っている大の姿を見つめる。

大の事は既に本局内部では知らない者さえ居ないぐらい有名である。追うべき人物としてだが。

その事とクロノから聞いた大の情報に寄って、エリオは大の事を知っていたのだ。その人物がまさか、廃棄都市区間とは言え、クラナガンの街に潜んでいたとは思わず、エリオは驚いてしまったのだ。

そのエリオの様子に大は、僅かに疑問の表情を浮かべるが、その表情はすぐに笑みを変わり、エリオに顔を向けながら声を掛ける。

「しかし、お前？何で管理局の連中に追われてんだ？何か連中に悪さでもしたのか？」

「・・・・・あいつ等は僕が持っている物と、僕自身を狙っているんです・・・・・理由は話せませんが、僕が連中に捕まると、大変な事が起きてしまうんです」

「良く事情は分からねぇが、とにかく、お前を連中から護ればいいんだな？」

「・・・・・・僕も管理局員です・・・・・・貴方を追っている管理局の人間なんですよ？」

「管理局だろうと何だろうと、俺は子供は絶対に見捨てらんねぇよ。

管理局員だろうが、子供を見捨てて逃げるなんざぁ。男が廃るってもんだ！！だから、安心しろ！！お前の事は護ってやるぜ！！」

エリオの質問に大は迷い無く叫んだ。

確かにエリオは管理局員だ。だが、大からすればそれでも見捨てる事は出来ない。

先のヴィータを助けるのも、本来ならば今の大とアグモンには不味い事だった。しかし、それでも大とアグモンには、あの時のヴィータも、今一緒に走っているエリオも見捨てる事など出来なかったのだ。

「まぁ、詳しい事情は後で聞くとして、とにかく、この先に広い場所がある。その場所ならお前も自由に暴れられる。其処で後ろの奴らに目にもの見せてやろうぜぇ！！」

「はいっ！！それと僕の名前はエリオ・モンディアルです！！」

「エリオか。良い名前だな。それじゃあ、行くぞ！！」

「ハイッ！！」

大の言葉にエリオは頷き、二人は更に走るスピードを上げて前に進み続けると、大の言うとおり広い空き地のような場所に辿り着き、二人は追って来ている局員達に向かって、拳や槍を構え始めた瞬間。

ーーーズシャッ！！

『なっ！？』

「ッ！！コイツは！？まさか！！」

突如として地面の中から巨大な緑色のウロコを兼ね備え、赤い三本の爪を生やした腕が二本飛び出し、二人の局員の体を影で覆って行く。
その事にエリオと二人の局員は驚きの声を出し、二本の巨大な腕の正体に気が付いた大が声を上げた瞬間に、二本の腕が局員達に向かって落下を始める。

『ウワァァァァァァァァーーーーー！！！』

ーーーグシャアッ！！

「うっ！」

二本の腕によって二人の局員は悲鳴を上げながら押し潰され、肉を踏み潰したような音が辺りに木霊した。その音と腕の下から広がり始めた血の海に、エリオは気分が悪そうに口元を押さえ、大も不快そうな表情をする。
それと共に大が二本の腕を見つめると、その腕に赤い髪をして金色の瞳を持ち、体にピッチリと張り付いた戦闘スーツを着た女性が軽やかに降り立つ。

ーーートンッ！

「チィッ！おいセイン！！何殺しちまってんだよ！？少しぐらい情報を得てから殺す予定だったろうが！？」

「いや～、殺す気は無かったんだよ？たださぁ～～、一応護衛対象に襲い掛かろうとしていたから、ちょっと止めようとしただけなんだよぉ～～ノーヴェ」

「どアホ！！折角、本局の裏の連中だったんぞ！！連中の情報を聞いた方が良いだろうが！？」

「そんなに怒らなくても良いじゃないかノーヴェ。これでも反省しているからさ」

腕に降り立った女性ーノーヴェの叫びに、地面の中からセインと呼ばれる人物の声が響き、ノーヴェとセインは言い争いに近い事を行い続ける。

その様子を見ていた大とエリオは険しい表情をして、未だに腕の上に乗っているノーヴェを見つめると共に、地面から聞こえて来る声の主を探そうとする。

しかし、その前にノーヴェが不機嫌そうな表情をしたまま、大とエリオに顔を向ける。

「まあ良い。どうせ、怒られんのはセインだからな。それよりも、おい！其処の赤い髪のガキ！！ゼストの野郎からディスクを貰っただろう！！ソイツを今すぐ渡せ！」

「ッ！！貴女はゼストさんを知っているんですか！？」

「答える義理はねえよ。それよりもディスクを渡せ！！そいつは回収しないといけないんでな！！」

ーーービュン！！

ノーヴェは叫ぶと共に腕の上から飛び出し、困惑しているエリオに攻撃しようとする。

しかし、その直前に大がエリオの前に立ち塞がり、ノーヴェは表

情を険しくし、大に向かって拳を突き出す。

「邪魔すんなぁっ！」

「そっちこそエリオの邪魔をすんなぁっ！！」

大は叫ぶと共にノーヴェに向かって殴りかかり、ノーヴェと大の拳が激突する。

ーーードゴオオオン！！

『なっ！？』

大の拳とぶつかり合ったノーヴェは、僅かに後方に弾き飛ばされ、ノーヴェと地中から様子を眺めていたセインは声を上げて、大の姿を見つめる。

ただの人間が、戦闘機人であり、バイオデジモンのノーヴェの拳を押し返した。ノーヴェの実力を知っているセインと、自身の力を把握しているノーヴェからすれば驚きだろう。

一方も大も僅かに驚きの表情を浮かべて、ノーヴェの拳とぶつかり合った自身の拳に発生したオレンジ色の光ーデジソウルを見つめる。

「デジソウル！！それじゃあやっぱりお前ら！？バイオデジモンなのか！？」

「ッ！！・・・・・・・テメエ、本当に何者だよ？バイオデジモンの存在を知っている一般人は限られているんだぞ！なのに、何で知っていやがる！？」

ノーヴェからすれば、大がバイオデジモンの存在を知っている事は驚き以外の何ものでもなかった。
バイオデジモンの存在は、管理局に寄って隠され続けている。テロリストなどの組織にその存在がばれれば、必ず利用されると思い、管理局はバイオデジモンの存在を一般人だけには知られないように徹底的に情報を操作しているのだ。
にも、関わらず、何処を見ても管理局の人間には見えない大がバイオデジモンの存在を知っていた。
ノーヴェやセインなど、管理局の裏の事情を知る者からすれば、驚く以外に無いのだ。
だが、大はノーヴェやセインの困惑には構わず、拳を構え始める。
「お前ら！倉田の仲間だな！？丁度良いぜ！！倉田の野郎の居所を吐いて貰うぞぉ！！」
「倉田だぁ？・・・・ハンッ！悪いが私らは倉田なんて奴の仲間じゃねえよ！！」
「何ッ！？それじゃあお前らは一体！？」
「ッ！！まさか！ブラックウォーグレイモンの仲間なんじゃ！？」
「ブラックウォーグレイモン？誰なんだソイツはエリオ？」
黙って大達に会話を聞いていたエリオが突如として叫び、大は困惑の表情をしながらエリオに声を掛ける。
大からすればバイオデジモンを生み出せるのは倉田一人。なのに、エリオは全く違う人物の名前を叫んだのだから、困惑するのも当然だろう。
その様子にエリオは大がブラックの事を知らないと思い、説明し

ようとするが、その前に地中からセインの声が響く。

「悪いけど！時間が無くなって来たから、さっさと決めさせて貰う！！」

セインがそう叫ぶと共に、地面から生えていた二本の腕が地面の中へと戻って行き、大とエリオが慌てて周りを見回した瞬間。

ーーーシュウン！

エリオの背後の地面から巨大な緑色のウロコを持ち、背中からの部分から二本の巨大な腕を生やした竜ーバイオ・グラウンドラモンに進化したセインが音も無く姿を現した。

バイオ・グラウンドラモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／地竜型、必殺技／スクラッププレスクロー、メガトンハマークラッシュ、ギガクラック

非常に凶暴な性格で、遭遇した者のほとんどが命を落としているためその生態が謎に包まれている背中に二本の腕を生やした地竜型デジモン。ドラモンタイプの中でも竜因子データは高い。背中は翼があったものとされるが、進化の過程で巨大な腕に変化した。これは効率よく地面を掘ることに環境に適応したためで、普段は地中奥深くに住んでいてその姿を現すことは滅多にない。またグランドラモンは特に稀少とされる『ファンロン鉱』の鉱脈に好んで生息しているとされ、その体の鱗には多くのファンロン鉱の成分を含んでいるとされている。必殺技は、背中の腕で相手を挟み、そのまま握り潰す『スクラッププレスクロー』に、尻尾の先に付いている鉄球で相手を殴り潰す『メガトンハマークラッシュ』。そして全身を地面に打ちつけ地割れを発生させ相手を地割れに落とす『ギガクラック』だ。ナンバーズ６のセインが進化したバイオデジモン。

「貰ったよ！！」

「しまっ！！」

背後から聞こえて来たセインの叫びに、エリオは慌ててその場から離れようとするが、その前にセインが背中に在る腕の一本を振り下ろそうとする。

それを見ていた大も、エリオの救出しようと走り出すが、その前にノーヴェが立ち塞がり、大の行く手を阻み、エリオが捕まると思った瞬間。

「ベビーフレイム！！」

ーーードゴオン！！

『ッ！！』

突如として横合いから炎が放たれ、セインが振り下ろそうとした腕に向かって直撃し、セインとノーヴェは驚きに動きが止まってしまった。

その隙に大は瞬時にエリオの傍まで近寄り、エリオの体を抱えると、炎の放たれた方向ーアグモンが居る場所まで移動し、服の中から機械ーデジヴァイスバーストを取り出す。

「兄貴ッ！酷いぜぇ！落ち合う場所はもう少し先だったろうがぁ！？」

「いや、すまねぇ。ちょっと予想外の敵が現れたからよ。だけど、良い場面で出られたじゃねぇか？」

「まあ、それはそうだけど」

大の言葉にアグモンは笑みを浮かべて同意を示し、警戒の表情をしているノーヴェとセインを見つめる。

「気をつけろ。あいつ等はバイオデジモンだ。だけど、俺らの知っている奴とは違うみたいだ」

「あぁ、何か違う。デジモンの気配と、人間とは違う気配が混じっている。久々に厄介な敵みたいだぜ兄貴」

「あぁ、だから燃えるんだけどな！行くぞアグモン！！」

「おうよ！！」

大の言葉にアグモンは笑みを浮かべて頷き、大はそれと共に右手に宿っていたデジソウルをデジヴァイスＩＣの上部分に当てると、デジヴァイスバーストの液晶部分にＥＶＯＬＵＴＩＯＮの文字が浮かび上がる。

「デジソウル！チャージ！！」

「アグモン進化！！」

大が叫ぶと、デジヴァイスＩＣからオレンジ色の光が飛び出し、それを浴びたアグモンが叫ぶと、アグモンの体のデータが分解され始め、更なる進化をした姿へと変わって行き、頭部に甲殻状の兜が備えられ、体に角などを生やした凶暴的な姿をした恐竜型のデジモンが姿を現した。その名も。

「ジオグレイモンッ！！」

ジオグレイモン、世代／成熟期、属性／ワクチン種、種族／恐竜型、必殺技／メガフレイム、メガバースト、ホーンインパルス

グレイモンの亜種と推測される恐竜型デジモン。頭部の甲殻や体も全身凶器の様に発達し、より攻撃的な姿となっている。必殺技は、超高熱の火炎を口から吐き出し、全てを焼き払う『メガフレイム』に、超高熱の火炎を口に溜め、極限まで高めたところで一気に敵に向かって放つ『メガバースト』。そして恐竜型とは思えぬ超スピードで翻弄し、頭部のツノで敵に攻撃を加える『ホーンインパルス』だ。

「凄い！！これがデジモンの進化！！」

初めてデジモンの進化を目の当たりにしたエリオは、目を輝かせてジオグレイモンの姿を見つめる。

逆にノーヴェとセインは、現れたジオグレイモンの姿に警戒の表情をして、ノーヴェは体から蒼いデジコードを発生させ始め、体を覆って行く。

「バイオエヴォリューション！！」

蒼いデジコード内部でノーヴェの叫び声が響くと、蒼いデジコードは弾け飛び、その中から二足歩行の犬の頭部を持ち、両肩にも犬の顔を模したアーマーが装備され、両手には巨大なカギ爪が供えられたデジモン―ケルベロモンXへと進化したノーヴェが姿を現した。

「バイオ・ケルベロモンXッ！！」

バイオ・ケルベロモンX、世代／完全体、属性／ワクチン種、種族／魔獣型、必殺技／ヘルファイアー、インフェルノゲート、ステュクス・キラー
ケルベロモンが『X抗体』を取り込み、『電脳核（デジコア）』に影響を与えたことで、未知の力を引き出した姿。格闘能力に優れ、巨大なカギ爪『ステュクス・キラー』で敵を仕留める。必殺技は、口から地獄の業火のごとき火炎放射を吐き出す『ヘルファイアー』に、暗黒次元に相手を送り込む『インフェルノゲート』。そして手についている巨大なカギ爪で相手を引き裂く『ステュクス・キラー』だ。ナンバーズ9―ノーヴェが進化したバイオデジモン。

「・・・・・やっぱ倉田の奴のバイオデジモンとは違うなぁ」

ノーヴェの進化を注意深くを見ていた大は、自分の知るバイオデジモンへの進化とは違う進化に、訝しげに歪めた顔をノーヴェとセインに向けた。
大の知るバイオデジモン達は、人間の姿からデジモンに変わる時は必ず機械を使っていた上に、進化した後の姿にはカプセルのような物も体に付いていた。だが、ノーヴェの進化には機械は使われておらず、カプセルも体の何処にも存在していない。

（倉田の奴のバイオデジモンは、人間とデジモンを融合させてた奴だった筈だ。だけど、こいつ等のは違う！！完全に人間をデジモンに変えていやがる！一体誰だ！？こんなとんでもない技術を作り出しやがった奴は！？・・・・・エリオが何かを知っているみたいだし、とにかくこの場を切り向ける事が先決だぁ！！）

大は内心でそう叫ぶとともに、両手の備えられているステュクス・キラーを構え始めたノーヴェに向かって一歩踏み出し、ジオグレイモンとエリオに向かって叫ぶ。

「ジオグレイモン！エリオ！！お前らは緑色のセインとか呼ばれた奴をやれ！赤い髪の女が進化したデジモンは、俺が相手をするからよぉ」

「待って下さい！一人で戦うなんて無茶ですよ！」

「へッ！男の喧嘩は一対一が上等！それに、あちらさんも同じ考え見てえだからな」

「えっ？」

大の言葉にエリオは呆気に取られた表情でノーヴェの方を見てみると、確かに大だけを殺気に満ちた視線で見ているノーヴェの姿が存在していた。

「・・・・悪いが、あたしはこの姿に成ると、理性が少し弱くなるんだ。他の連中と違って、唯一あたしだけが“Ｘ抗体”に適用出来た影響だろうよ。だから、今度はただの人間だと思わずに、お前を八つ裂きにしてやるよぉ！！」

「上等だ！！派手に喧嘩をしようぜ！！」

ーーードゴオオオオオン！！

ノーヴェと大は互いに叫びあうと、同時に走り出し拳同士を再びぶつけ、衝撃波が起こるほどの殴り合いを始めるのだった。

その戦いを見ていたエリオは、呆然とした表情をして、進化したノーヴェと互角以上の戦いを続ける大を見つめていた。

大の戦い方はいったってシンプル。拳を使った戦い方だ。

本来ならばデジモンには拳など通用しない。だが、大はただの拳だけでノーヴェと互角に戦い続けて居る所か、徐々にノーヴェを押し始めている。
Sランクオーバーの魔導師さえも倒す事が困難なデジモンを拳で追い込むなど、デジモンの実力を知るエリオからすれば驚き以外の何ものでもないだろう。

(凄い！これが大門大さん！自分よりも強いかもしれない相手に迷わず挑むなんて！本当に凄い人だ！！)

エリオは大に対して徐々に、自身の憧れているフェイトに近い感情を持ち始めていた。
デジモンの強さを知っているエリオからすれば、生身でデジモンと互角以上に戦いを行っている大の姿は、心の底から尊敬出来る者だった。
だが、逆にノーヴェと大の戦いを黙って見つめていたセインは苦い表情をしていた。

(冗談じゃないよ！！何者だよアイツ！？進化したノーヴェが追い込まれるなんて！本当に人間なのか！？ああ、簡単な任務だと思っていたのに！！とにかく、ディスクだけでも回収を…)

「隙だらけだ！！ホーンインパルスッ！！」

ーーードゴオオオン！！

「ガアッ！！」

考え事をして動きが止まっていたセインに向かって、ジオグレイモンが突進を行い、セインを後方へと吹き飛ばす。

その隙にジオグレイモンは、僅かに後方を振り向き、エリオを視界に収めると声を出す。

「ぼさっとするな！！兄貴が頑張っているんだ！俺達も頑張るぞ！！」

「ッ！！ハイッ！」

ジオグレイモンの言葉に、エリオは自分のすべき事を思い出すと、持っていた槍をセインに向かって構え出す。

その様子にジオグレイモンは笑みを浮かべるが、すぐに表情を真剣に戻し、体勢を立て直して、怒りの表情を浮かべているセインに目を向ける。

「良くもやってくれたな！食らえ！！」

「ヘッ！こんな狭い場ッ！！」

ーーーシュウン！！

叫ぶと共に振り下ろされた巨大な腕を、ジオグレイモンは建物を盾にして防ごうとするが、巨大な腕は建物を破壊する事無くすり抜け、驚きに動きが止まってしまったジオグレイモンに直撃する。

ーーードオオン！！

「ウワァァァァァッ！！」

「ジオグレイモンさん！！」

セインの背中に生えている巨大な腕を体に食らったジオグレイモンは吹き飛んで行き、エリオは急いでジオグレイモンに駆け寄る。
それと共にジオグレイモンは殴られた所を押さえながら、立ち上がり訝しげな表情を、満面の笑みを浮かべているセインに向ける。

「クソッ！どうなっているんだ！？何で建物を崩さずに、腕が通り抜けたんだ！？」

「多分魔法か何かだと思います。僕が聞いた話だと、魔導師がバイオデジモンに進化すれば、魔力が無くても魔法が使用出来るらしいです」

「チィッ！あの巨体で物質を潜り向けるなんて反則だろうが！」

ジオグレイモンがそう叫ぶのも当然だろう。
バイオ・グラウンドラモンに進化したセインの体はとにかく巨体だ。本来ならばその様な巨体を持つ者は、建造物などの密集地帯では、建物が邪魔をして思うように攻撃出来なくなる。
だが、セインはそれを自ら持つＩＳ－ディープダイバーを使ってなくし、逆に有利な状況に成れる戦法を生み出していた。スカリエッティがセインをエリオの護衛に当てたのも、この能力の為である。

「へへへへへッ！さっきの一撃は返したぞ。次で終わりにしてやる！！」

ーーーシュウン！！

「ッ！！今度は地面の中か！？」

セインは叫ぶと共に、今度は地面の内部へと潜り込んで行き、ジ

オグレイモンとエリオの視界から完全にその姿を消滅させた。
その事にジオグレイモンとエリオは慌てて辺りを見回すが、セインの気配を見つける事すら出来ず、焦りの表情を浮かべ始める。
「クッ！この辺りを吹き飛ばす訳にはいかないし、如何したら良いんだ！？」

ジオグレイモンは焦っていた。本来のジオグレイモンならば、この辺り一帯の建造物や地面を吹き飛ばすなど不可能では無い。だが、今は大とノーヴェが戦っている上に、辺りの建物は廃棄された建物。
その様な場所でジオグレイモンが必殺技を使えば、確実に連鎖的に建物は倒れて行き、廃棄都市は消滅するだろう。そんな事になれば、確実に管理局の者達に気づかれてしまう上に、デジモンの評判も悪くなる。現在の情勢が分かっているジオグレイモンに取っては、出来るだけそれは避けたかった。
その様にジオグレイモンが悩んでいる間に、エリオは持っていた槍を険しい表情で見つめ、覚悟を決めた表情に顔を変えると、ジオグレイモンに顔を向ける。

「ジオグレイモンさん！少しだけで良いです！少しだけ、相手の動きを抑えて下さい！その後は僕が何とかします！！」

「・・・・・分かった。お前を信じるぜ！それと俺の事はジオグレイモンで良い！敬語を聞くと体が痒くなるからな」

「それなら僕の事はエリオで良いよ！ジオグレイモン！」

「ヘッ！行くぞエリオ！！」

「うん！！」

ジオグレイモンの言葉にエリオは頷き、二人が覚悟を決めて辺りを警戒した瞬間に、ジオグレイモンの左右からセインの巨大な腕が飛び出し、ジオグレイモンの体を挟もうとする。

「スクラップレスクローッ！！」

「フンッ！！」

ーーーガシッ！！

ジオグレイモンがセインの巨大な腕に挟まれようとした瞬間、ジオグレイモンは両手を伸ばし、セインの巨大な腕を掴み取り動きを抑えた。

しかし、セインはそれを読んでいたと言う様に、ジオグレイモンの背後の地面から先に鉄球の付いた尻尾を出現させ、勢い良く尻尾を振り下ろそうとする。

「これで決まりッ！！メガトンハマーク…」

「サンダーレイジッ！！」

ーーービリビリビリッ！！

「ゲエェェェェェェェェェッ！！」

セインが尻尾を振り下ろそうとした瞬間に、エリオが持っていた槍を地面に深く突き刺し、自身の限界レベルで電撃を地面へと流し込み、電撃を受けたセインは悲鳴のような声を地面の中から上げた。

それと共にジオグレイモンを挟もうとした両腕の力が弱まり、ジ

オグレイモンを片手を全力で握り締めると、セインを地中から引きずり出す。

「オオォォォォォォォォォォーーーーーーー！！！」

ーーーズルウッ！！

「ウソオォォォォォォーーーーー！！！」

地面から引きずり出されたセインは驚きの声を上げながらも、何とか地面の中に戻ろうとするが、逃がさないと言う様にエリオがセインの顔の前に立ち、槍を全力で振り下ろす。

「スピーアシュナイデンッ！！」

ーーーブザンッ！！

「ガアッ！ちょっと！あたしはこんな姿でも女の子なんだぞ！？それなのに顔を攻撃する何て！？それでも男の子なのか！！」

ダメージは無くとも顔を攻撃された事にセインは、目の前に居るエリオに向かって怒りの声を上げ、注意しようとするが、その前にエリオはセインから急いで離れ始める。

その姿にセインは、僅かに疑問の表情をするが、すぐに自身の近くから熱気を感じ、其方の方を恐る恐る見てみると、口の中に超高熱の炎を集めたジオグレイモンの姿が存在していた。

「・・・・・・・嘘だよね？」

「本当だ！メガバーストッ！！」

ーードグオオオオオオン！！

「ウワァァァァァァァーーーーーー！！」

ジオグレイモンのメガバーストを至近距離で受けたセインは悲鳴を上げながら吹き飛んで行き、幾つものビルを倒壊させると、漸く止まった。

それと共に瓦礫から蒼いデジコードが出現し、セインの体を覆って行くと、蒼いデジコードが消えた後にはノーヴェと同様の戦闘スーツを着た水色の髪の少女ーナンバーズ６・セインが瓦礫の上で気絶していた。

「チィッ！セインの馬鹿がッ！」

大と戦いながらもセインの戦いを見ていたノーヴェは怒りの声を上げると、今まで戦っていた大の傍から瞬時に離れ、一つのビルの上に降り立つ。

「今日の所は引いてやる！だが、その前に一つだけ聞くぞ！テメエ、何て名前だ！？」

「大門大ッ！！それが俺の名前だ！！」

「大門大・・・・・あたしはナンバーズ９のノーヴェだ！今日の所は引くが！お前はあたしが絶対に殺す！！それまで他の奴にやられるなよ！！」

ノーヴェは大にそう告げると、瞬時にセインが気絶している場所に移動し、肩にセインを担ぐと、黄色い道を空中に出現させて、そ

の上を凄まじいスピードで走り抜けて行く。
その姿に追うのは、不可能だと分かった大はジオグレイモンとエリオの方に近付き、二人に笑みを向ける。

「さてと、とにかくこの場所を離れようぜ。まだ、多分管理局の連中が近くに居る筈だ。エリオも一緒に来い。ほとぼりが冷めるまでは、俺達の隠れ家に居た方が良いぜ。お前を追っている連中が何処に潜んでいるか分からねぇからなぁ」

「・・・・・・分かりました。宜しくお願いします」

エリオは大とジオグレイモンに向かって頭を下げた。
本心としてはエリオは、すぐに地上本部に向かいたい。だが、先ほどのノーヴェ達や本局の者達が何処に潜んでいるか分からない状況では、大の言うとおりに行動した方が良いと思い頷いたのだ。
その様子に大とジオグレイモンは笑みを浮かべると、エリオを伴い、自分達の隠れ家に向かい出すのだった。

出会い、騎士とナンバーズ！！（後書き）

次回予告

エリオの消息が分からない事に、焦りを覚え始めるフェイト。

自分の大切な者達が、次々と消えて行く事に、フェイトの心は闇に染まり始める。

それに気が付いた一人の少女は、それを止める為に自身の過去をフェイトに語る。

次回、漆黒の竜人と少女、『過去の出会い、ブラックＶＳヴォルテール！！』

少女はパートナーと共に語る。闇に染まり始めた雷光を救う為に。

過去の出会い、ブラックＶＳヴォルテール！！前編

クラナガンに存在する管理局地上本部の一室。
その部屋の中で、部屋の主であるレジアス・ゲイズ中将と機動六課に監察官として派遣されているオーリス・ゲイズが険しい表情をして話し合っていた。

「・・・・では、エリオ・モンディアル三等陸士は、未だに発見されていないのですね？」

「そうだ。転移したと思われる廃棄都市区間に送った部隊からの報告では、本局の愚か者どもは発見出来たが、モンディアル陸士は発見する事は出来なかったそうだ。加えて、何か巨大な生物同士が争った形跡が発見された・・・・・彼の生存の確認は出来ていない」

「フゥ～・・・・・彼女が更に不味い状態に成りますね。作戦の日が迫っていると言うのに」

オーリスはレジアスの報告に溜め息をつく以外になかった。
エリオを発見する事が出来なかったと成れば、必ずフェイトとの精神が更に追い込まれてしまう。
そうなれば、自ずと戦力にも影響が出てしまう。作戦が迫っている状況では、それは何としてもオーリスは避けたいと思っている。

（困りましたね。今回の作戦にはどうしてもテスタロッサ執務官の魔力変換資質が必要だったので、作戦への参戦許可を出しましたが、更に精神状態が悪くなると成れば、彼女抜きでの作戦行動を視野に入れる必要性が出てしまう。しかし、もはやその様な時間は存在しない・・・・・・完全に後方待機での作戦に変えるべきかも知れま

せんね）

オーリスはその様に内心で、フェイトの状態を考慮した作戦を考え始める。

その様子を見ていたレジアスは、フッと何かを思い出した表情を浮かべ、机の中から十数束以上存在している封筒を取り出し、オーリスに声を掛ける。

「オーリス。これをあの子に渡してくれ。部隊の者達が通信出来ない代わりに、書いたあの子への手紙だ」

「部隊の者達も皆あの子が心配なのですね。分かりました。機動六課に戻り次第あの子に渡して置きます」

オーリスは笑みを浮かべながら、レジアスから手紙を全て受け取り、大切そうに小脇に抱える。

それを見たレジアスも僅かに笑みを浮かべるが、すぐに表情を真剣に戻し、オーリスに険しい視線を向けながら質問する。

「・・・・あの子は、機動六課ではどんな様子だ？」

「ご安心下さい。今の所はこれと言って変わった様子はありません。しいて言えば、外にリュウダモンと一緒に出られない事が不満な様子です。それ以外に変わった様子は無いですね。スバル・ナカジマとギンガ・ナカジマと一緒に訓練に励んでいます」

「そうか。それは良かった。あの子が無理をしていないか心配だったのでな。少しは安心出来たぞ」

オーリスの報告にレジアスは安堵の息を付きながら声を出した。

レジアス個人の意思としては、出来ればキャロを機動六課には送りたくなかった。だが、地上本部のトップとして動いた場合では、キャロを機動六課に送らざる得なかったのだ。オーリス以外の者達では、戦力としての不安が存在していた為に、後が無い状況の地上本部としては最強の戦力で在るキャロ達を送るしかなかったのだ。

「部隊の者達も頑張っているが、やはり成熟期以上への進化は時間が掛かりそうだ。それに比べてあの子とリュウダモンは究極体への進化を会得している。もはやワシ個人の意思を排して、動くしかなかった」

「それは承知しています。確かに前回での任務でも、あの子達以外の者ではゲートタワーを破壊出来なかったでしょう。予想以上に完全体の実力も上でしたので、中将の判断は、私個人の意思とは別に最適な判断だったと思います」

「だが、それでもワシは赦されん事をした。全てが終わり、平和に成ればあの子からの罵りを受ける積もりだ。その為にも次の任務でも失敗は赦されん。オーリス。最悪の場合は、テスタロッサ執務官を切り捨てる事も視野に入れる様に、八神はやてに伝えておけ。モンディアル陸士の持っていた切り札が無くなった成れば、失敗は絶対に赦されんのだ」

「ご安心下さい。既に八神部隊長も彼女を切り捨てる事を考えています」

「ほぅ。それは良い知らせだ。あの小娘も部隊長としての心構えが出来て来たようだな」

レジアスはオーリスの言葉に、心の底から面白しろそうな笑みを

浮かべた。
　レジアスの考えでは、はやては必ずフェイトを護る動きを取ると思っていた。以前のはやては身内に甘く、何処か夢に酔っていると言うような印象をレジアスは受けていた。
　その事もあって、レジアスは最初の任務ではやては部隊長の座を降りる事に成ると予想していたのだが、予想に反してはやては部隊長としての的確な行動を行った。

（ゲンヤの奴が八神はやてを推した時は、眉を顰めざる得なかったが、これならば大丈夫だろう。オーリスが八神はやてを庇う理由は存在せんし、このまま八神はやてが部隊長としての自覚を持ったまま進めば、例の計画が進行出来る。その為にも機動六課には頑張って貰わねばな。あの子を送った意味がなくならない為にも）

　レジアスはそう内心で呟くと、机の上に載っている資料の束をオーリスに手渡し、オーリスは険しい表情で資料を受け取る。

「次の作戦でも八神はやてが部隊長として行動すればその資料を渡せ。例の本局の兵器の資料だ。デジモンとの絆が出来た奴ならば、その正体に気が付くだろう」

「了解しました。では、私は機動六課に戻ります」

「うむ。あの子達の事を頼んだぞ」

ーーーバタン

　レジアスが頷くと共にオーリスは頭を下げて部屋を出て行き、それを確認したレジアスはエリオの捜索を行っている部隊に連絡を取り、エリオの生存を示す物だけでも発見するように命じるのだった。

機動六課部隊長室。その部屋の内部には三人の女性が存在していた。
一人は機動六課部隊長である八神はやて。次にはやての秘書として雇われているレナ・セフィル。
そして悲しみを堪えた表情を浮かべているライトニング分隊長のフェイト・テスタロッサが部屋の中で、はやての顔を涙で滲んだ瞳で見つめていた。

「・・・・もう・・・一度・・・言ってくれるはやて？」

「答えは変わらへんよフェイトちゃん。エリオの消息は完全に不明。捜索してくれた部隊の報告やと、エリオが転移したと思われる場所で、巨大な生物同士の戦いの跡があったそうや。本局のエリオを追っていた連中は全員捕縛した見たいやけど、エリオは発見出来なかったそうや。捜索は現在も続行中みたいやで」

「ッ！！やっぱり私もエリオを捜索する！！」

「・・・・・行ってもええけど。分隊の隊長の座は無くなるからな」

ーーーピタッ！

部隊長室を出て行こうとしたフェイトの背に向かってはやてが呟いた言葉に、フェイトはドアノブを握った状態のまま動きを止めた。
その様子にはやてはフェイトがまだ、冷静な判断力を失ってはいないと思い、フェイトの背に向かって声を掛ける。

「作戦開始は二日後の早朝や。その時までに配置を完了せなあかん。今からエリオの捜索に向かったとして、二日後の早朝までに万全の状態で戻ってこれるんかフェイトちゃん？」

「・・・・・・また、私に家族を失えって言うのはやては？ブイモンの様に？」

「・・・・・フェイトちゃん？なのはちゃんが言っていた事を良く思い出してみい。なのはちゃんは『ブイモン君と一緒に居たいなら、居場所を作りなよ』って、言ってた筈や。まだ、ブイモン君を失った訳やない。ブイモン君を失うかどうかはフェイトちゃん次第なんやで？」

「・・・・・・失ったも同然だよ。私には力も絆も無い。もうブイモンが私の所に戻って来る事なんて無いんだよ」

「・・・・・少し頭を冷やして来た方がええで。本気でそう思っとるなら、フェイトちゃんはブイモン君を家族やて思ってなかったちゅう事や。頭冷やしてからもう一度此処に来るんやな」

「・・・・・・」

ーーーバタン

フェイトは、はやての言葉に答える事無く部隊長室を出て行き、その事にはやてとレナは同時に深い溜め息をつく。

「ハア～～、本気でフェイトちゃんは危ない状況に成って来たわ。ほんまにどないしよう？」

「こればかりは、本人の意思で超えるしかない事だ。当人ではない私達が何かを言っても、彼女の心は救われない。自分で乗り越えてこそ、先に進み道が見えるんだと私は思う」

「そうなんやけど。今のフェイトちゃんには正直きつ過ぎるで？ブイモン君だけでなく、エリオも行方不明ときとる。なのはちゃんが与えた試練以上の試練に成って来たわな」

「確かに。だが、この試練を乗り越えれば、彼女は確実に強くなる」

「失敗すれば、フェイトちゃんは確実に潰れるやろけどな」

レナの告げた言葉に、はやては逆の状況を推察していた。

確かにレナの言うとおり、自身の意思の力で乗り越えてこそ、更なる成長がフェイトとブイモンには待っているだろう。だが、逆に乗り越えられなかった場合は、確実にフェイトは潰れてしまうとはやては気が付いていた。

先ほどのフェイトのブイモンの事を諦めた様な発言。あの発言じたい、六課にやって来た頃のフェイトは言わなかった筈だ。しかし、此処最近フェイトの周りで起き続けている出来事によって、フェイトの心は荒み始めている。

その事が先ほどのフェイトとの会話で気が付いたはやてとレナは、本気でフェイトをどうすれば良いのか悩んでいるのだ。このまま戦いに参加させるべきなのか。それとも戦いから外して、フェイトの道を潰すべきなのかを、はやてとレナは本気で悩み続けていた。

「・・・・・どちらにしても、今の彼女は危険だ。戦いに参加させるにしろ。前線だけには出すべきではない」

「それはわかっとるよ。フェイトちゃんは完全に後方待機や。これ

だけは変える気はあらへん。何が在っても・・・・・・・まあ、とにかく今はエリオに付いての報告待ちや。生存さえ確認出来れば、フェイトちゃんの心も少し落ち着くやろからな。地上本部には頑張って貰おうか」

はやてはそう呟くと、すぐさま地上本部や機動六課から送っているエリオ捜索部隊に連絡を繋ぎ、エリオの生存確認を急がせるのだった。

一方、はやてと別れたフェイトは顔を俯かせながら一人、機動六課内部を歩き続け、先ほどの自身の発言を心の底から悔いていた。

（・・・・・何をやっているんだろう私？ブイモンの為に六課に来たのに、そのブイモンを蔑ろにする言葉を言うなんて・・・・・本当にもう分からないよ・・・・・自分の気持ちにも、なのはが私に言った言葉の意味も・・・・・どうしたら良いの？）

そうフェイトは内心で呟き続けると、一人で考える為に六課の屋上を目指そうとするが、その足は突如として止まり、通路の先で嬉しそうにオーリスから手紙を束を受け取っているキャロと、その横でキャロと同様に嬉しそうな顔をしているリュウダモンの姿を羨望の眼差しで見つめ始める。

（・・・・羨ましいな・・・・・・あの二人やオーリス三佐は、本当にパートナーとの絆が出来ていると、一目見ただけで分かる・・・・・・私とは全然違う）

キャロとリュウダモン、オーリスとポーンチェスモン（白）。

フェイトは六課に来てからと言うもの、暇さえあればキャロ達の姿を見ていた。なのはの言っていたデジモンと人間の間に出来る本当に絆を知る為に。
しかし、その結果は更にフェイトの心を打ちのめした。
全く違ったのだ。自身がブイモンに対してしていた事と、キャロ達の姿は違っていた。
本当に互いを支え合い、時にはパートナーへの苦言さえも告げる姿は、フェイトがブイモンに行った行動とは全くの逆だった。

（・・・・・如何すれば、ブイモンとの絆が出来るんだろう？・・・・・・・それよりも、ブイモンともう一度会えるの？・・・・・今の私じゃ、なのはは絶対に会わせてくれない・・・・・私は本当に如何すれば良いんだろう？）

そうフェイトが内心で呟いていると、オーリスとの会話を終えたキャロが思い悩むフェイトの姿に気が付き、リュウダモンに小声で声を掛け始める。

「リュウダモン。あの人？」

「あぁ、気が付いてるぜ。此処数日、俺達やオーリスの姉さんとポーンチェスモンの事を見ていた女だ。確かライトニング分隊長のフェイト・テスタロッサって名前の筈だぜ」

「・・・・・・少し話をして見よう」

「ハアッ？おいっ！キャロ！！」

フェイトの方に歩き出したキャロの背にリュウダモンは思わず声を掛けるが、キャロは止まらずに、手紙を胸に抱えながらフェイト

の方に歩き続け、思い悩んだ表情をし続けているフェイトに声を掛ける。

「こんにちはです。フェイトさん」

「ッ！！・・・・・・こんにちは」

声を掛けられるとは思っても見なかったフェイトは、僅かに目を見開くが、すぐに表情を冷静に戻し、キャロと同様に挨拶を返す。

その姿にキャロは笑みを僅かに浮かべ、フェイトの方に手を伸ばす。

「あの、少しお話しませんか？デジモンの事なら、相談に乗れますから」

「・・・・・そうだね。少しお願いするよ」

キャロの言葉にフェイトは、僅かに考え込む様な表情をするが、すぐに表情を真剣に変え、キャロの手の自身の手を乗せて、二人は屋上に向かい出すのだった。

その様子を後ろから見ていたリュウダモンも僅かに考える表情をすると、オーリスの方に顔を向け、頷き、自身の横に浮かんでいたフリードと共にキャロとフェイトの後を追い出す。

「・・・・・あの子との会話で、少しは変われば良いのですがね」

オーリスはそうキャロ達の後姿を見つめながら呟くと、部隊長室の方に歩き出すのだった。

機動六課屋上。ミッドの状況を表すように曇天の曇り空が広がる空の下で、キャロとフェイト、そしてリュウダモンとフリードは互いに顔を見合わせるように屋上の床に座り込み、真剣な表情を浮かべ合っていた。

「え～と、先ずは改めて名乗りますね。私はキャロ・ル・ルシエです。地上本部の監察官として機動六課に来ました」

「俺はリュウダモン。キャロのパートナーデジモンで、こっちはフリードだ」

「キュル～～！！」

「私は・・・・・一応機動六課ライトニング分隊長のフェイト・テスタロッサ」

キャロ達の自己紹介にフェイトは、僅かに悩むような表情をして自身の紹介を行った。

フェイトが自身の紹介に悩むのは、先ほどのはやてとの会話と、その前の会議での会話が原因だった。

現在のフェイトは確かに分隊長として肩書きを持っている。だが、その肩書きは何時無くなってもおかしく無い状況だった。既に自身の後釜の選考さえも済んでいるのだから、フェイトには自身が機動六課にいても良いのか分からなくなっているのだ。

（もう、この場所には私の居場所なんて無い・・・・・それだったら、いっそ今すぐ分隊長の座を捨てて、エリオの捜索に向かった方が良いのかも知れないな）

自身が機動六課に居る意味も分からず、フェイトはもう投げやりな思考さえも思い浮かび始めた。
既に機動六課はフェイトが居なくても結果を出している。ならば、自身が居る意味さえも無いとフェイトは思い始めているのだ。
その思い悩みの表情を見たキャロは、フェイトの追い込まれ具合を瞬時に重症だと判断すると、すぐに表情を決意に満ちた顔に変え、フェイトに顔を向ける。

「フェイトさん。聞いて下さい。絆を否定した為に・・・・・・滅んでしまった部族の話を」

「エッ？」

キャロの言葉の意味が分からず、フェイトは疑問の声を上げるが、キャロはフェイトの声に構わずに語り始める。
一人の少女と、その少女を守護する真竜と漆黒の竜人の戦いを。

四年前。第六管理世界ー他の管理世界とは違って、多くの自然が存在し、竜種などの危険な生物さえも生息している世界。
その世界には、アルザスと呼ばれる地域が存在し、ル・ルシエと呼ばれる小数民族がその場所で暮らしてた。その民達は古来より稀少古代種である“真竜”と呼ばれる古き竜を『大地の神』と称え、竜と共に生きて行くと誓っていた部族。だが、これより四年後の未来では、その部族の血を引き、竜を召喚できる力を持つ者はたったの一人しか存在しない。
何故ならば、彼らは否定してしまったのだ。己の部族の誓いを。
絶対に忘れてはならなかった“竜との絆”を彼らは自らの手で捨ててしまった。

そうなった原因は、ル・ルシエ部族の中でも最強の素質を持った少女ー当時六歳のキャロを追放した時から始まる。

「強すぎる力は災いを生む……分かっておくれ」

平和な日常をキャロが暮らしていた時、突如として部族の長である長老にキャロは呼び寄せられ、村からの追放を言い渡された。

この当時、キャロは既に白銀の竜で在るフリードと、偶然にも拾ったデジタマから生まれて、成長期へと進化したリュウダモンを従えていた。それだけではなく、キャロは部族が崇める真竜ー黒き竜ーヴォルテールにさえも見初められてしまった。

一族の中でも類を見ないほどの存在に、誰もがキャロを畏怖し、敬遠さえもしてしまっていたのだ。

幼いキャロは自身の部族追放を言い渡されても、その意味が一瞬良く分からず、呆然とした表情をするが、逆に意味が分かったリュウダモンは長老に向かって食って掛かる。

「おい！！爺！！テメエ！！キャロは六歳なんだぞ！？そんな子供がこの世界の過酷な環境で生きられると思っているのかよ！？」

「これは一族の総意だ。キャロの部族から追放は決まったのだ」

「ふざけてんじゃ…」

「・・・・・もう良いよリュウダモン」

「キャロッ！？」

自身のパートナーの発言に、リュウダモンは驚きの声を上げるが、逆にキャロは冷静な表情をして、長老の顔を正面から見つめる。

長老の顔には一目見れば窺えるほど罪悪感が、キャロは手に取るように分かる。
恐らくキャロに部族追放の事を言うのも、相当に悩んでの決断なのだろう。だからこそ、キャロは此処で我が儘を言うのは長老の苦悩を増やす事だけにしか成らないと気が付いていた。数日前に自身の守護竜が暴走した件も恐らく響いている。だからこそ、長老の語る言葉には悲痛な重みがあった。

「今までお世話に成りました。行こうリュウダモン」

「・・・・・・チィッ！絶対に後悔するぜ！お前らは自分の身勝手でキャロを捨てるんだからよ！！」

「リュウダモン！！」

「・・・・分かっているよ。世話に成ったぜ」

キャロの叫びにリュウダモンは渋々とした表情をしながら声を出すと、先にテントの入り口の方に居たキャロと共にテントを出て行く。
その背を見つめていた長老は、更に苦悩に満ちた表情をしながら、頭をテントの入り口の方に向かって深々と下げる。

「すまない・・・・・・」

テントの中に長老の悲しみに満ちた声が響くのだった。
この時に、ル・ルシエの民の運命が決まった事も知らずに。

アルザスに存在する緑豊かな大地。
その中でも広大に広がる草原の中を、ル・ルシエから追放されたキャロとリュウダモン、フリードは歩いていた。しかし、その表情は全員が暗く、特にフリードとリュウダモンはお腹さえも押さえていた。

ーーーグルル〜〜

「・・・・・腹減ったな〜〜」

「キュル〜〜〜」

鳴り響く腹の音と共にリュウダモンとフリードは悲痛の声を出した。
ル・ルシエの村を出てから数日。出る前に僅かながらも食料と路銀は貰ったが、既に食料は殆ど無くなっていた。育ち盛りのキャロとフリード然り、リュウダモンもかなりの食事を必要とする。三人一緒と言う事もあり、少しずつ食べても食料は数日で無くなってしまったのだ。

「・・・・・チクショウッ!!人里も全然見えねえし!あの村の連中!!せめて人里の場所ぐらい教えろってんだ!!金が有ったって、店も何もなきゃ食料も買えねえだろうがよ!!お前もそう思うだろうフリード!?」

「アギャーー!!!!」

リュウダモンの質問に同意を示すようにフリードも叫び声を上げ。
一体と一匹はル・ルシエの民への不満を叫び続ける。
その様子を黙って見ていたキャロは、自身とリュウダモン、フリ

ードの限界が近づいて来ている事を確信する。ただでさえ此処数日の食事は少量だったのだ。このままでは最悪の場合。人里に着く前に飢え死にしてしまう可能性さえも存在している。

（やっぱり森に入って食料を見つけるしかない・・・・・でも）

キャロは草原の先に見える広大な森を見つめる。

森には木の実や動物、或いは食べられる草などが大量に存在している。だが、その反面、森の中は獰猛な獣や巨大な生物など、多種多様な危険生物達が存在している危険な場所でも在った。子供で在るキャロが入り込めば、生きて帰って来る事は難しい場所である。

いかにリュウダモンとフリードが居たとしても、二体ともかなりの体力を失っている状態。そんな状態で入り込むなど自殺行為以外の何ものでもないのだ。

（だけど、このままだと三人とも飢え死にしてしまう。今の手持ちで持っているのは、お金とリュウダモンが生まれた時に現れた変な機械だけ・・・・・・・やっぱり行くしかない！！）

キャロは森の中に入る決意を固め、未だに不満の叫びを上げ続けているリュウダモンとフリードに声を掛け、三人は意を決して森の中へ足を向けるのだった。其処で出会う者の事を知らずに。

「リュウダモン。あの木に付いている実は食べられそうだよ」

「おうよ！居合刃（いあいじん）！」

ーーーシュン！

「キュル～！！」

リュウダモンが切り落とした木の実を、フリードは喜びの声を上げながら受け取り、キャロの持つ袋の中に次々と入れていき、袋一杯に沢山の木の実が集まって行くとキャロは嬉しそうな表情を浮かべる。

「良かった。これなら当分は食料が持つね」

「おう！」

「キュル～～！！」

キャロの言葉にリュウダモン、フリードも嬉しそうな声を上げて同意すると、キャロ達は長いは無用だと思い、森の外の方に歩き出す。

だが、安心して僅かに警戒が緩んだ瞬間に、キャロ達の背後に巨大な影が迫って来る。

ーーードン！！

『ッ！！！』

背後から響いた力強い足音にキャロ達は目を見開き、恐る恐る背後を振り返ってみると、身長七、八メートルほどの大きさを持つ、巨大な腕と漆黒に染まった体を持った恐竜型デジモン―ダークティラノモンがキャロ達に獰猛そうな牙を剥き出しにしていた。

ダークティラノモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／恐竜型、必殺技／ファイヤーブラスト、アイアンテイル

ティラノモン種のデジモンが悪質なウィルスに感染し、肉体を作る

データがバグを起こして狂暴なデジモンに変化した恐竜型デジモン。体は黒く染まり、発達した腕の力は脅威的。完全に狂暴化していて、目に映るもの全て敵がだと思ってしまう。ダークティラノモンが歩いた後は一面が火の海と化すと言われている。必殺技は、強力な火炎放射で自身の前方を炎の海にし、辺り一面焼き払う『ファイヤーブラスト』に、巨大な尻尾で敵を薙ぎ払う『アイアンテイル』だ。

「グオォアアァァァァァァッ！！」

「ヒィッ！！」

「やべえ！！こいつデジモンだ！！」

ダークティラノモンの凶暴な咆哮を聞いたキャロは恐怖の声を上げ、リュウダモンは険しい表情でダークティラノモンの姿を見つめた。

「チィッ！！キャロ！！逃げろ！！此処は俺に任せな！！」

「駄目！リュウダモン！！」

「アギャーー！！」

キャロとフリードはリュウダモンの声に否定の叫びを上げ、リュウダモンを呼び止めようとする。

目の前に存在しているダークティラノモンの巨体の前には、リュウダモンの体は小さくしか見えない。加えて、今のリュウダモンはかなりの体力を消耗している状態。その様な状態のリュウダモンが、獰猛に牙を尖らせているダークティラノモンに勝てるとは、キャロとフリードには思えなかった。

しかし、此処でリュウダモンも退く訳には行かない。退けばすぐさま自身の大切な家族であるキャロとフリードは先ず間違いなく、ダークティラノモンに殺されてしまうとわかっているからだ。

（ヘッ！退けるかよ。俺はキャロを捨てた連中とは違う！！何があってもキャロを護るんだ！！）

リュウダモンには分かっていた。

口では納得した様な言葉を言っていたが、部族から追放された事で、キャロの心が酷く傷付いてしまっている事を。何処の世界に捨てられて悲しまない子供が存在している。しかも、まだキャロは六歳なのだ。本来ならばその年齢の子供は、親などに甘えたい盛りの子供。そのキャロを捨てた部族をリュウダモンは赦す気は無かった。

（俺はあいつらとは違う！！何があってもキャロは護るぜ！！そして絶対に幸せにするんだ！！）

そう内心でリュウダモンは誓いの叫びを上げると、目の前に存在しているダークティラノモンに向かって飛び掛る。

「オラァァァァッ！！居合刃（いあいじん）！！」

ーーーシュシュン！！

「ガアッ！！」

ーーーバキィィィン！！

リュウダモンが放った居合刃（いあいじん）に対して、ダークティラノモンは右腕を振るい、自身に向かって来る鉄の刃を全て破壊した。

しかし、その隙にリュウダモンはダークティラノモンに右側に移動し、再び口から居合刃(いあいじん)をダークティラノモンの顔に向かって再び放つ。

「居合刃(いあいじん)！！」

ーーーシュシュン！！

「グオッ！！」

右側から放たれた居合刃(いあいじん)に対して、瞬時にダークティラノモンは右腕を戻す事で防御し、そのまま技を放った直後のリュウダモンに尻尾を勢い良く振り抜く。

「アイアンテイルッ！！」

ーーーピシャアーン！！

「グアッ！！」

「リュウダモン！！」

ダークティラノモンのアイアンテイルを食らったリュウダモンは吹き飛んで行き、その姿を見たキャロは悲痛そうな声を上げて、リュウダモンに駆け寄ろうとする。

しかし、その前にダークティラノモンがキャロに向かって左腕を振り下ろそうとする。

「グウオォォォォッ！！」

「アギャーー！！」

フリードはダークティラノモンの攻撃を止めようと、持てる力の全てを使ってダークティラノモンの顔に向かって飛び掛るが、いかんせん体格差が違い過ぎた。

「グオッ！！」

ーーードン！！

「キュル～～～～！！！！！」

「フリードッ！！」

ダークティラノモンの一撃の下に吹き飛ばされ、岩に叩き付けられたフリードの姿を見たキャロは再び悲痛の声を上げるが、ダークティラノモンは関係無いと言うように腕をキャロに向かって振り下ろす。

「グガアアアアアアアッ！！」

「キャロッ！！」

「キュルーーー！！」

キャロの一撃が決まりそうな事に気が付いたリュウダモンとフリードは、キャロを救う為に立ち上がろうとするが、先ほどのダークティラノモンの一撃によるダメージが抜けてないのか、立ち上がる事ができなかった。

その逆にキャロは自身に向かって振り下ろされて来る腕を目撃し、

今までの過去の出来事が頭の中に次々と浮かび始めていた。

（これが村の人が言っていた走馬灯なのかな・・・・・・ごめんねリュウダモン、フリード）

キャロがその様に自身の死を実感し、ゆっくりと目を閉じて死を待とうとする。

しかし、何時まで経っても死は訪れないどころか、衝撃さえも来る事は無く、キャロが恐る恐る目を開けて見ると、ダークティラノモンの腕で、腕に装備されている鉄鋼の爪先で受け止めている、黒い鎧を身に付け、金色の髪と瞳を持った漆黒の竜人ーブラックウォーグレイモンが立っていた。

「つまらん。この程度の力しか無いのか貴様は？」

「グオォォォォーーーーーー！！！」

ブラックの嘲るかの様な言葉にダークティラノモンは怒りの咆哮を上げると共に、腕の力を上げブラックの体を押し潰そうとそうとするが、ブラックの体を一歩も動かす事さえ出来なかった。

その様子に更にブラックはつまらそうな表情をして、ダークティラノモンの腕を押さえている腕とは逆の腕を振り被る。

「漸く見つけた情報源だ。悪いが消えろ。ドラモンキラーー！！！！」

ーーードスン！！

「グアァァァァァァァーーーーー！！！！」

ブラックのドラモンキラーはダークティラノモンの胸に深々と突き刺さり、ダークティラノモンは苦痛の叫びを上げながらその身をデータ粒子に変化させると、後にはデジタマだけがその場に残された。
それを確認したブラックは不機嫌そうな表情を浮かべながらデジタマを拾い上げ、呆然とした表情をしているリュウダモンに足を向ける。

「次は貴様だ。少しは俺を楽しませろ」

「クッ！！やっぱ敵かよ！！」

ブラックの言葉にリュウダモンはブラックを敵だと判断すると、すぐさま立ち上がり、ブラックに対して構えを行い出す。
その姿にブラックは僅かだが面白そうな表情をして、距離を取りながら警戒して隙を窺い続けているリュウダモンの姿を見つめる。

（ほう、俺の力は既に分かっているのに、それでも諦めずに挑もうとするとは、中々に骨の在る奴だ。奴なら少しは俺を喜ばせられるかも知れんな）

その様にブラックは内心で呟くと、自身もリュウダモンに向かって構えを行い出し、すぐさま飛び掛ろうとするが、その前にキャロがブラックの右足に掴み掛かる。

ーーーガシッ！！

「ムッ？」

足を掴まれた事にブラックは僅かに驚いた表情をして、自身の右

足の方を見て見ると、決死の思いと言うようにブラックの足を掴んでいるキャロの姿が存在していた。

「駄目。リュウダモンは、私の家族は絶対に傷付けさせません」

「家族だと？」

キャロの言葉に僅かにブラックは疑問の表情を浮かべて、キャロの姿を注意深く見つめてみると、キャロの服の中から僅かに姿を覗かせているディーアークを発見する。

「・・・・・クククククッ！！ハハハハハハハハッ！！まさか！ティアナとあの女以外にパートナーデジモンを持っている人間が存在していたとは、少し驚いたぞ・・・・・・・良いだろう。貴様のパートナーデジモンには一切攻撃しないと約束しよう。その代わりに、俺の質問に答えて貰う」

「質問？」

「そうだ。この辺りに住んでいると言うル・ルシエと言う部族の集落の場所を教えろ。俺が真竜と戦う為にもな」

『ッ！！！』

ブラックの告げた言葉にキャロ、リュウダモン、フリードは信じられないと言う表情をして、ブラックの姿を見つめるのだった。

過去の出会い、ブラックＶＳヴォルテール！！中編

アルザス地方に広がる広大な森と草原。既に辺りは暗くなり、獰猛な生物が森の中で動き回り始める時間帯の中で、森の一角の中で焚き火が行われていた。

本来ならば森の中で焚き火を行うのは、獰猛な生物を呼び寄せる材料にしか成らないのだが、獰猛な獣や竜などが焚き火の行われている場所から、半径５００メートル以上に寄って来る気配は全く存在していなかった。彼らには本能的に分かっているのだ。その焚き火が行われている場所には、自分達が徒党を組んでも勝てない存在が存在している事を。

その事も在って、キャロ、リュウダモン、フリードは安心して焼かれている狼の肉を食べる事が出来ていた。

「ガブッ！！う～～美味いぜ！！久々の肉は美味いな！！」

「キュル～～！！」

久々に食べられるタンパク質を多く含んだ肉の味に、リュウダモンとフリードは喜びの声を上げて、次々と目の前に存在している肉類や果物類を食べ続ける。

その様子にキャロも嬉しそうな表情を浮かべて、目の前に存在している食べ物に手を伸ばすが、フッと食事を全くせずに焚き火だけを眺めているブラックに顔を向ける。

「あの？食べないんですか？」

「要らん。俺には食事など余り必要では無いからな。それよりも、真竜を崇めている集落はこの先に在るのだな？」

「・・・・あぁ、在るぜ。だけどよ。もう其処には真竜は存在していない。何せあいつ等、真竜に選ばれた人間を追放しやがったからな」

「チィッ！！振り出しに戻ったと言う事か」

リュウダモンの告げた事実に、ブラックは心の底から憤りに満ちた声を出した。

約一週間と少し前にブラックはこの地に来ていた。

理由は一つ、闇の書以来の自身の戦闘本能を満たせる存在が出現した事を知ったからだ。

“真竜ヴォルテール”その存在がアルザスの一地方に突如として出現し、その類い稀なる強大な力を発揮して居た事を知ったブラックは、すぐさまリンディ達の静止を無視し、ただ一人アルザスの何処かに存在している筈にヴォルテールを探し続けていた。だが、アルハザードを飛び出してから一週間以上経っても、ヴォルテールの姿は発見する事が出来なかった上に、人一人さえも見つける事は出来なかった。

広大過ぎるアルザスの自然が、ブラックに察知能力の邪魔をして、人の気配を読む事が出来ない状態にしていたのだ。だが、そんな事でブラックが諦める筈も無く、察知能力が役に立たない状態に成りながらも、ブラックはアルザスの地方を歩き続け、ヴォルテール、或いはヴォルテールを崇めていると言うル・ルシエの一族を探していたのだ。

そして漸くアルザスの人間だと思われるキャロを発見し、そのパートナーデジモンで在ったリュウダモンに情報を聞いたのだが、ブラックは再び手掛かりさえも失った状況に成ってしまった。

「何処に行ったのか分からんのか？その真竜に選ばれた人間が？」

「・・・・・すまねえ。俺達もル・ルシエの集落を出る直前に知った事だからな。何処に向かったのかは、分からねえよ」

「チィッ！！」

ブラックは心の底から苛立ち、舌打ちをした。

漸くヴォルテールと戦う事が出来ると思ったのに、そのヴォルテールを呼び出せる者が何処に居るかさえも分からないと成れば、再び探し歩くしかない。例えル・ルシエの集落に向かったとしても、追放されたと成れば、その後の事を知る者など存在しないだろう。ブラックは完全に振り出しに戻ってしまったのだ。怒りが満ちるのも当然だろう。

目の前のリュウダモンが僅かに目を泳がせている事にも気が付かないほどに。

（コイツはやべえぜ。コイツにはヴォルテールの奴でも勝てる可能性が低い。キャロの安全の為にも、此処は隠し通すのが最良だぜ。絶対にばれる訳にはいかない）

既にリュウダモンには自分達とブラックの実力差が充分過ぎるほどに分かっていた。

蟻が像に挑む程の無謀過ぎるほどの実力差が存在している事を。

キャロがヴォルテールを呼び出せば話は変わるが、今現在のキャロはヴォルテールを呼び出す事は出来ても、制御する事など出来ない。そんな理性を欠いたヴォルテールではブラックと戦っても、敗北するだろう。だからこそ、リュウダモンはキャロこそがヴォルテールに選ばれた巫女で在る事を隠したのだ。

幸いにも、ブラックはヴォルテールを呼び出せる人間の存在は知っていたが、その人物がどの様な容姿をしているのかは知らなかっ

た。そのおかげでキャロの正体がブラックにばれる事は無かったのだ。

（チィッ！！確かに俺の記憶の中にはヴォルテールを制御した人間の存在があった筈だ。だが、ソイツの容姿が思い出せん！！えぇいッ！！肝心な時に思い出せんとは！記憶の劣化が激しすぎるぞ！！）

一応ブラックには原作の知識は僅かに残っている。

だが、この世界に来て数年経った上に、ブラックは原作など関係ない行動も行っていたので、記憶の中から徐々に忘れていったのだ。ブラックにとって嘗ての人間だった時の記憶は確かに大切なものだが、それよりも今の姿に成ってから記憶の方が遥かに大切だった為に、ブラックは徐々に人間だった頃の記憶をおぼろげにしか思い出せない程の状態に成ってしまっていた。

（まぁ良い。とにかくこいつ等から、真竜に選ばれた人間の情報を聞けば良い。こいつ等の話では、その人間が追放されたのは数日前。大人だとしても、そう遠くには行けまい。何としてもこいつ等から情報を聞き出し、ヴォルテールに選ばれた人間を見つけ出して見せる。久々に見つけた『敵』なのだからな）

ブラックは何としてもヴォルテールに選ばれた者を見つける気だった。

此処数年は確かに充実した日々が続いていた。だが、それでも完全に自身の戦闘本能を満たせたのはデジモンは数体程度。後の者達は殆どブラックの本能を満たす前に倒れてしまい、ブラックの本能は完全に満たされなかったのだ。その上、此処一、二ヶ月は赤ん坊で在るヴィヴィオに付き纏われる日々も続き、ブラックは苛立ちは限界にまで高まってしまっていた。

そんな時にフリートの報告で真竜と呼ばれるヴォルテールが第六

管理世界のアルザス地方に現れたと言う情報を聞き、ブラックはすぐさまアルザスへとやって来た。全ては自身の戦闘本能を満たす為に。
しかし、そんなブラックの事情を知らないキャロからすれば、ブラックが何故ヴォルテールを求めているのかが分かず、ブラックに恐る恐ると言うように質問する。
「あの？何でヴォルテールを呼べる人を探しているんですか？」
「決まっている。真竜と呼ばれ、崇められる伝説の存在。その存在と戦いたいからだ」
「・・・・・どうして戦いたいんですか？・・・・・ヴォルテールの力は強大です・・・・失敗すれば死んでしまうかも知れないんですよ？」
キャロからすればブラックの言葉の意味が全く分からなかった。
あの大地の守護神とまで呼ばれているヴォルテールと戦いたいなど、普通の人間からすれば自殺に行くようのものだろう。だが、ブラックは、だからこそヴォルテールを探している。
「俺にとってはそっちの方が好都合だ。強い奴と戦い、寄り俺は強くなる。その為に俺は強い奴を探し続けている。ヴォルテールが其処までの存在ならば、俺からすればまさに最高の相手！！ソイツと戦えば確実に俺は更に上に行ける！！楽しみだ」
「・・・・・・でも、力が上がっても嬉しくは無いです。だって・・・・・・失ってしまうから」
「キャロ」

「キュル～」

落ち込んだ表情をするキャロの姿に、リュウダモンとフリードは慰めの声を掛けようとするが、何も言えずキャロと同様に落ち込み始める。

キャロ自身、その巨大過ぎる力を得た為に全てを失ってしまった者なのだ。

力が無ければ部族から追放される事も無かった。

力さえ無ければ、平穏な毎日を送れた。

キャロは集落を出てからと言うもの、その事を心の奥底で考え続けていたのだ。

だからこそ、逆に力を求めているブラックの存在が分からない。力を得ても失うだけでしか無いとキャロは思っているのだから。

しかし、ブラックはキャロとは逆に質問の意味が分かった。

「フン。何が在ったかは知らないが、貴様は否定されたのだな。力を持たない連中に？」

ーーーピクッ！！

ブラックの質問にキャロは僅かに体を震わせ、リュウダモンとフリードも顔を暗く俯かせる。

その様子にブラックは更に確信を深め、体を震わせながら顔を俯かせ続けているキャロに声を掛ける。

「貴様に質問するが、貴様は力を如何思っている？」

「・・・・・力っていうのは、誰にでもあるものじゃなくて・・・・・だから、力がある人は誰かを助けないといけない・・・・・だ

けど、大き過ぎる力は災いしか呼ばないって教えられました」

「下らん」

キャロが恐る恐る呟いた言葉をブラックは一言で切り捨てた。
ブラックからすればキャロが呟いた言葉は下らない以外のなにものでもなかった。
自身も巨大な力を持ち、多くの力を持つ者達と戦い続けて来たブラックからすれば、キャロの告げた言葉は、興味さえも湧かない戯言にしか思えなかったのだ。

「先ず言って置くが、力は確かに戦いを呼ぶ呼び水には成る。だが、あくまで呼び水でしかない。災いや争いを呼ぶのは別のものだ」

「あの？それは何ですか？」

「意思だ」

「エッ？」

ブラックの呟いた言葉に意味が分からず、キャロは首を傾げながら声を出し、リュウダモンとフリードも僅かに首を傾げるが、ブラックからすれば争いを呼ぶのは意思しか考えられなかった。

「力はあくまで付属するものでしかない。成らば、何故戦いが起きるか？それは俺のように戦いを求めている意思。世界を支配したいと言う意思。何らかの生物を滅ぼしたいと言う意思が存在するからこそ争いや災いは起きる」

「・・・・・だったら如何したら良いんですか？・・・・・力が在

るから私は部族を追放された・・・・争いを呼ぶのが意思なら、私は如何したら良いんですか？」

「フン。貴様の生き方など俺は知らん。貴様の生き方は貴様が自身が決めてこそ意味が出来るものだ。他人の考えに左右されて動く人生など、ただの操り人形でしかない。だが、忠告ぐらいは教えてやる。“力が在るのならば、その力からは逃れられない。ならば、己の信念をもって力を支配しろ”出なければ、お前は何れ後悔する事に成る。信念も無く力を振るった者に待つ末路は、大抵が絶望して死んで行くだろうからな。或いは利用され続ける人生だけだ」

キャロの質問に対してブラックは冷たく引き離すように言葉を告げ、焚き火の前から立ち上がる。

「今日はもう休むんだな。貴様らが何処に行くかは分からんが、今日だけは俺が見張りをしてやる」

「どう言う風の吹き回しだ？アンタはヴォルテールを召喚出来る奴を探しているんだろう？」

「何、貴様らが死んでは情報を得る事が出来ないからな。正確な情報を知る為にも、今日は休んで貰った方が好都合だ。貴様のパートナーは答えられそうに無いからな」

ブラックはリュウダモンの質問に答えながら、自身の腕をジッと見つめ続けるキャロに僅かに視線を向け、すぐさまキャロ達に背を向ける。

「とにかくさっさと休むんだな。これからも旅を続けるなら、貴重な睡眠時間は確保しておけ」

そうブラックは告げると、キャロ達から離れ始め、森の中へと姿を消していった。
それを見たリュウダモンはキャロに声を掛けようとするが、真剣な表情で自身の手を見つめ続けているキャロに声を掛ける事が出来ず、フリードと共にキャロの姿を見つめるのだった。

そして深夜、誰もが眠る時間の中、横にリュウダモンとフリードが眠る中をキャロは起き続け、ジッと夜空を見つめ続けていた。

「・・・・・力を支配する・・・・・そんな事出来るのかな？・・・・・・・あのヴォルテールの力を支配するなんて・・・・私に？」

「・・・・・ソイツはキャロ次第だと思うぜ」

「リュウダモン？起きていたの？」

「ヘッ、眠らずにジッと考えているって、分かったからな」

キャロの質問にリュウダモンは顔を見せないようにしながら答え、そのままの状態でキャロに声を掛ける。

「俺はキャロならヴォルテールだって制御出来る思っている。じゃなきゃ神とまで崇められているヴォルテールがキャロを選ぶかよ」

「・・・・・でも、私には自信が無いよ・・・・・また、ヴォルテールを暴走させてしまうかも知れない。そうなったら、リュウダモンやフリードにも迷惑が…」

「馬鹿野郎。俺やフリードが何時迷惑だなんて言ったよ？俺達はキ

ャロの家族だぜ？何があっても俺達はキャロから離れねぇさ。だから安心しろよ」

「アギャーー！！」

リュウダモンとフリードはキャロの言葉を否定するように声を上げ、笑みを浮かべながらキャロを見つめる。

その言葉と笑みにキャロは嬉し涙を目からこぼし、両手で顔を覆いながらリュウダモンとフリードに声を掛ける。

「・・・・・制御出来るのかな？私の力を？」

「安心しろよ。もしもの時は俺とフリードが止めて見せるさ。で、フリードが暴走したら俺が力尽くでも止めてやるからよ」

「アギャーー！！！」

「・・・・・うん。ありがとう、リュウダモン、フリード。本当にありがとう」

キャロは本当に嬉しそうな表情をして、リュウダモンとフリードに礼を告げるのだった。

そして翌朝。そろそろキャロ達が起きている時間だと思ったブラックは、情報を全て聞き出す為に昨日の焚き火の場所へとやって来たが、その場所でブラックの事を待っていたと言うキャロ達の顔を見て、僅かに表情を訝しげする。

（違う。昨日の連中とはまるで違う。今の奴らからは、光達に感じた決意と同じものが感じられる。俺が離れた後に何があったのだ？）

キャロ達の瞳からブラックは嘗ての仲間達の目に宿っていた光を感じ、心の底から訝しんだ。
昨日までのキャロ達は、何処か自身の力に怯えている印象を感じ続けていた。だが、今のキャロ達ー特にキャロからはそのような印象を抱いたのは、見間違いではなかったので無いのかと言う印象さえも感じられるほどに成っていた。
そのようにブラックがキャロ達の姿に疑問を覚えていると、キャロとリュウダモン、フリードはブラックの方に近寄り、ブラックの目を正面から見つめる。

「・・・・昨日約束した。真竜の使い手の情報を教えます。でも、今すぐには教えられません」

「ほぅ。随分と面白い事を言うな。俺を怒らせたいのか？」

キャロが告げた言葉にブラックは殺気を撒き散らしながらキャロ達を目を見つめる。
ただでさえ、一週間以上も見つけられずに苛立ちが溜まっていると言うのに、漸く見つけた情報源は教えないと言う。ブラックからすればこれ以上は我慢の限界なのだ。
しかし、ブラックの殺気に当てられながらも、キャロ達は表情を変えず、ブラックの目を正面から見つめ続ける。

「早合点するなよ。何も教えない訳じゃない。教える代わりに条件が在るんだ」

「条件だと？随分と笑える事だ。昨日助けてやった上に、見張りまでしてやったんだ。貴様らには貸しはあっても借りはない。そんな貴様らが条件を出せると思ってるのか？」

「・・・・・私達の条件を聞いてくれたら、確実にヴォルテールと戦えます」

「ムッ？」

キャロの告げた言葉にブラックは僅かに心が動かされ、キャロの瞳を見つめると、キャロが教える条件を話し出す。

「条件は一つです。私達を鍛えて欲しいんです。強くなって、自分の力が制御出来る位に」

「その条件を聞いてくれたら、確実にヴォルテールとは戦える。その上、俺もアンタに鍛えられたら、絶対に上の領域に上がれる。強い奴と戦いたいアンタなら、悪い条件ではない筈だぜ」

「・・・・・本当にヴォルテールの奴と戦えるんだろうな？貴様らを鍛えている間に召喚師が、遠くに行って逃げられる可能性も在るのだぞ？」

「それなら絶対に大丈夫です。召喚師は絶対に離れません。私達の絆に誓って」

「・・・・・面白い。良いだろう。このまま当ても無く彷徨うよりは可能性が高そうだ。だが、俺の鍛え方は半端ではない。貴様らが途中で命を落とそうと、俺は絶対に知らん。それでも良いのか？」

「望む所です！！」

「おうよ！！」

「アギャアッ！！」

キャロ、リュウダモン、フリードはブラックの言葉に対して、それぞれ決意に満ちた声を上げた。

その姿にブラックは懐かしそうな瞳をして、キャロの姿を見つめる。

今のキャロの姿は紛れも無く、嘗ての光達を思い起こさせる姿だった。

どんな状況にも諦めず、自身のパートナーと共に難関に立ち向かう姿は、ブラックに懐郷の念を思い起こさせる。

その懐かしき姿にブラックは僅かながらもキャロ達の姿に興味を覚え始めた。

「フッ、良いだろう。貴様らを鍛えてやろう。だが、条件を破ればその時は貴様らを跡形も無く殺すと言う事を覚えておけ」

「ハイッ！！絶対に破りません！！」

ブラックの言葉に対してキャロは元気良く頷き、ブラックがキャロ達の修行方法を考え始めると、その背後から女性の怒りを堪えたような声が響く。

「・・・・・ブラック様・・・・・・漸く見つけましたよ。すぐに戻って来て下さい！！ヴィヴィオちゃんが毎日泣いてリンディさん達もヘトヘトなんですからね！！」

そうブラックの背後からルインが声を上げるが、ブラックは一切構わずにルインに顔を向け、キャロ達に声を掛ける。

「喜べ。貴様の魔法の師と成れる者が来てくれたぞ」

「へッ！？」

「ハッ！？」

ブラックの言葉にキャロとルインは疑問の声を上げるが、ブラックは構わずにルインに事情を説明し、キャロ達の本格的な特訓が始まったのだった。

ーーー一日目

「え～と、キャロちゃんは完全に後方支援系です。と成れば補助魔法やブースト魔法系を覚えた方が良いですね。その後に召喚系を教えます。幸いにも私も竜召喚のスキルが有りますからね」

「ハイッ！！宜しくお願いします！ルインフォース先生！」

「先生は良いです」

一日目は、キャロはルインから魔法教えを受け、リュウダモンとフリードはブラックに寄る体力訓練を行った。

ーーー四日目

「居合…」

「遅い！！技ばかりに頼るな」

ーーードゴオン！！

「ガハッ！！」

四日目はブラックとリュウダモンの模擬戦を行い、ブラックはリュウダモンの戦い方の指摘を行い、キャロはルインから竜召喚に関する話や制御方法など聞いていた。

ーーー十日目

この日は遂にルインの教えてくれたやり方による竜召喚をキャロが試す日になった。

「さてキャロちゃん？今日は竜召喚する訳ですが、その前に忠告です。絶対に自分のパートナーを信じなさい。例え暴走したとしても、最初から上手く良く人なんて存在しません。特に貴女はまだ子供です。寄り召喚の難しさも上がっています。ですが、絶対に出来ないとは思ってはいけませんよ。召喚師に絶対に必要なのは、何もにも揺るがない強い意志です」

「分かりましたルインフォースさん！！でも、ルインフォースさんは本当に魔法に関して詳しいですね？」

「・・・・・・ただちょっと長く魔法に関わって来ただけですよ・・・・それよりも始めましょう。フリードちゃんも頑張りましょうね」

「キュル～～！！」

ルインの声にフリードも声を上げて同意を示し、万が一の場合に備えて待機しているブラックとリュウダモンに合図を送ると、キャロはフリードの周りに巨大な魔法陣を発生させ呪文を唱え始める。

「・・・・・竜魂召喚ッ！！」

「ギャオオオオオオオアアアアアッ！！！！！」

キャロが叫ぶと共にフリードは真の姿ー白銀の竜へと変貌するが、その姿からは理性は感じられず、完全に暴走状態に成っていた。

その様子をキャロの傍で見ていたルインは、僅かに表情を顰めながら、フリードの暴走に慌て始めているキャロの肩にそっと手を置く。

「惜しいですね。僅かにですが、制御に綻びが存在してしまいましたよ。ほんの僅かな気の緩みが、召喚の失敗の原因に成ります。明日からは力の制御方法を教えますね」

「あの！？そんな事よりもフリードを止め…」

ーーードゴオオオオン！！

「ッ！！」

背後から突如として聞こえた打撃音に、キャロは驚いた表情を浮かべて背後を見てみると、暴走していた筈のフリードは地面へと倒れ付し、その上に乗っているブラックの姿が存在していた。

その姿を見たキャロは唖然とした表情をするが、ルインは構わずにキャロの耳元に口を寄せる。

「フリードちゃんが暴れたら、ブラック様が止めますので安心して下さい・・・・・・フリードちゃんの為に制御を完璧にしましょうね？」

「は・・・・はい」

ルインの言葉にキャロは呆然とした表情をしながらも同意し、フリードの為にもより詳しくルインから魔法についてを学ぶのだった。

その様な訓練は一ヶ月以上続き、キャロ達の実力も在る程度が上がったとある日の事。

夕暮れの中で、訓練を終えて倒れ付しているキャロ、リュウダモン、フリードの快方を行いながら、ルインはキャロ達がル・ルシエの集落を出る事に成った理由を聞いていた。因みにブラックは夕食の食料の為に、どこぞへと狩りに行っている。

「全く、これだから人間は嫌いです。力を求める者もいれば、力を否定する者もいる。本当に勝手ですね。こんな幼い子供を追放する何て、最低の連中です」

「・・・・・仕方が無かったんです・・・・・私の力は部族の中でも強大でしたから」

「それとこれとは話が別です。力は制御さえ出来れば危険なものではないのです。本当に恐ろしい力とは制御出来ない力そのもの。だからこそ、制御方法を教えるべきなんです。それを行わないで追放など、私からすれば最低の者達にしか思えませんよ」

ルインは心の底からキャロを捨てた部族の者達に憤りを感じていた。

嘗て闇の書の闇として存在してルインからすれば、ル・ルシエの民がキャロに対して行った行動は最低の行為にしか思えなかったのだ。本当に恐ろしいのは制御されていない力なのだ。

少なくともルインはこの一ヶ月でキャロの凄まじいまでの才能の

高さを感じ取っていた。長い年月を存在していたルインから見ても、キャロの才能はまさに天が与えたものとしか表現出来ないほど高さだった。だからこそ、確りと制御方法さえ教えればキャロは先ず間違いなくヴォルテールさえも早い段階で制御出来ただろう。
しかし、ルインはその事を今更ル・ルシエ民達に思っても無駄な事だと気がついていた。

「・・・・今更言っても意味無いですね。だって、どうせもう滅んでいるでしょうしね」

「ッ！！それってどう言う意味ですか！？」

ルインが呟いた言葉に、キャロは疲れさえも瞬時に吹き飛び、すぐさまルインに詰め寄る。
“ル・ルシエが滅んでいる”それが事実だとすれば、キャロは放っては置けない。
例え追放されたとしても、ル・ルシエの集落はキャロの故郷なのだから。
しかし、ルインは逆にキャロの言葉に訝しげな表情を浮かべ、キャロの質問に答え出す。

「当然じゃないですか。そのル・ルシエの民達は竜と共に生きる事で栄えていた。ですが、彼らは竜の頂点に立つヴォルテールの巫女で在る貴女を追放した。果たして、そんな連中に竜達が力を貸すと思いますか？」

『ッ！！』

ルインが告げた事実にキャロだけではなく、地面に倒れ付していたリュウダモンもフリードもハッとした表情をする。

確かにルインの言うとおり、ル・ルシエの民がこの大自然の世界としか言えない第六管理世界で生きて来れたのは、竜と共に生きて来たおかげである。だが、その竜達の頂点に立つヴォルテールが選んだキャロを追放したと成れば、竜達はル・ルシエの民に力を貸す事は絶対に無いだろう。

何せ自分達の王が自ら選んだ主君を追放したのだ。いかにヴォルテールがル・ルシエの民達に『守護神』と呼ばれていようと、そんな連中に力を貸すほど竜達は甘くない。生態系の頂点に位置する彼ら竜族は、誇り高く気高い生き物なのだから。

その事をルインの言葉で漸く気がついたキャロは、慌てた表情を浮かべて立ち上がり、リュウダモンとフリードに駆け寄る。

「リュウダモン！！フリード！！すぐに集落に向かおう！！」

「待てよキャロ！！あそこの連中はお前を捨てたんだぜ！そんな連中を助けるのかよ！？」

「キュルー！！」

リュウダモンからすれば、ル・ルシエが滅びようと自業自得にしか思えなかった。

キャロを追放したから滅びたのならば、それは完全にル・ルシエの民達の自業自得でしかない。自分達の決断して行った結果なのだから。そんな連中をリュウダモンは助かる気には成らなかった。

フリードもリュウダモンに同意するように深々と頷く。彼にしても自身の主を捨てた一族など、どうなろうと知った事ではない無いのだ。

だが、キャロに取っては、それでもル・ルシエの集落は故郷だった。

「それでもあの場所は私の生まれ育った故郷なの！だから、力を貸して！！」

「・・・・・チィッ！！キャロの頼みじゃ仕方がねえ！！行くぜフリード！！」

「アギャーー！！」

リュウダモンとフリードはキャロの言葉に心が動き、すぐさま地面から立ち上がると、キャロは服の中からディーアークを取り出し、リュウダモンに向かって掲げた瞬間に、ディーアークから電子音声が鳴り響く。

《ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「リュウダモン進化！！ギンリュウモン！！」

電子音声が鳴り響くと共にリュウダモンの体は蒼いデジコードに包まれ、その中から四足歩行の獣竜型デジモン―ギンリュウモンが飛び出して来た。

それを確認したキャロとフリードはすぐさまギンリュウモンの背に飛び乗り、ル・ルシエの集落が在る場所へと急ぎ空を飛んで、全速力で向かい出すのだった。

「・・・・・アレ？もしかして私不味い事を言ってしまいましたかね？う～ん？とにかく、ブラック様に報告に向かいましょう」

そうルインは判断すると、探索魔法を使用しながら空へと浮かび上がり、ブラックのいる場所へと急ぎ向かい出すのだった。

一方。ギンリュウモンの背に乗りながら急ぎ、ル・ルシエの集落の場所を目指していたキャロ達は、本来ならば集落の近くに存在している竜達の影が一つ残らず消えている事に、焦りを覚えは始めていた。

「キャロ！！やっぱ集落を護っていた竜達の影がねえ！こりゃルイン姉さん話は本当かも知れないぜ！？」

「ッ！！！ギンリュウモン！！もっとスピードを上げて！！集落に急いで！！」

「アギャアアッ！！」

「おうよ！！」

ーーービュン！！

キャロとフリードの声にギンリュウモンは同意の声を上げると、自身のスピードを更に上げて集落へと急ぎ、集落の前に存在している岩山を発見する。

「あの岩山の先に集落が在る！！ギンリュウモン！！」

「了解だ！！」

キャロの叫びにギンリュウモンは頷くと、更にスピードを上げて岩山をすぐさま越え、キャロは急いで下に在る筈の集落を確認する。

「・・・・・ア・・・・・・アァァァァァッ！！そ、そんな・・・・・うそ」

「・・・・・クソ・・・・・だから後悔するって言ったんだよ」

「・・・・キュル～～」

集落の姿を確認したキャロ、ギンリュウモン、フリードは悲しみの声を上げた。

確かにキャロ達の見つめる先には、ル・ルシエの集落が存在していた。正確に言えばその成れの果てが。破壊し尽くされたテントや家屋類。子供達が集まって遊んでいた広場は、何かに爆撃されたように大穴が存在し、生きている人間の気配が一切感じられない完全な廃墟へとル・ルシエの集落は化していた。

その痛まし過ぎる姿に、ル・ルシエの者達を赦す事は出来ないと思っていたギンリュウモンやフリードも哀れむように集落の跡地を見つめ、ゆっくりと廃墟の中へと着地する。

「クッ！」

「キャロッ！」

「ギャッ！！」

地面に着地すると共に飛び出したキャロの背に向かってギンリュウモンとフリードは声を掛けるが、キャロは止まらずに廃墟の中へと駆けて行く。

「誰か返事をして！長老！お爺さん！！お婆さん！！！皆！！」

キャロは廃墟の中を駆けながら叫び、生存者の確認をするが、キャロの声に答える声は全く響かず、キャロが更に悲しみの表情を浮かべ始めた瞬間に、一つの物をキャロは発見する。

「ッ！！アレは長老のテントの印！」

長老のテントの上に刺さっていた旗の姿を見たキャロはすぐさまその場所に向かって駆け出すが、その場所には自身に追放を言い渡した長老のテントの成れの果てと、長老と思わしき焼け爛れた遺体が存在していた。

「アッ・・・・・・・・・・ヒック、ヒック・・・ウワァァァァァァァァッ！！アァァァァァァァァァッ！！」

「キャロ・・・・・・」

「キュル～～」

変わり果てた長老の遺体の前で膝を着き、悲しみの泣き声を上げるキャロの背にギンリュウモンとフリードは声を掛けるが、キャロが泣き止む事は無く、悲しみに満ちた泣き声だけが辺りに響き続けた。

そして少し時が経ち、徐々に泣き声が収まって来た事に気がついたギンリュウモンとフリードは、再びキャロに声を掛けようとするが、その直前に上空から大音量の叫び声が木霊する。

『グウゥオオオオオオォォォォォォォォォーーーーー！！！！！！！』

『ッ！！』

突如として鳴り響いた巨大過ぎる大音量の叫び声に、キャロ達が驚愕の表情を浮かべて上空を見てみると、頭部を黒い機械のような兜で覆い、足は無く変わりに長い尻尾が存在し、黒い羽を背中に生やし、両手は鋭い爪と何らかの発射口を持った黒い体を持った機械のようなデジモンと、そのデジモンと同じ姿を持ち赤い体をしたデジモン―ギガドラモンとメガドラモンが空中で咆哮を上げながら互いに威嚇しあっていた。

ギガドラモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／サイボーグ型、必殺技／ジェノサイドギア、ジェノサイドアタック
メガドラモンと同じ時期に作られた闇のように黒い体をしたサイボーグ型デジモン。メガドラモンよりも攻撃力がアップしているが、素早い行動がメガドラモンとは違って取れなくなっている。メガドラモンと力を合わせれば、お互いの欠点を解消出来てしまう。性格は極めて凶暴。必殺技は、両手から有機体系ミサイルを無限に発射する『ジェノサイドギア』に、両手から有機体系ミサイルを発射する『ジェノサイドアタック』だ。

メガドラモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／サイボーグ型、必殺技／ジェノサイドアタック、アルティメットスライサー
メタルグレイモン、メタルマメモンなどでサイボーグ型デジモンを作るための技術が完成したことにより、対陸海空迎撃用デジモンとして作られたサイボーグ型デジモン。両手に在る鋭いツメは、どんな物質も簡単に切り裂いてしまう。同次期に開発が進められていた“ギガドラモン”とはライバル関係にある。必殺技は、両手から有機体系ミサイルを放つ『ジェノサイドアタック』に、両手から空気の刃を放ち、相手を真っ二つにする『アルティメットスライサー』だ。

『グアァァァァァァァーーーーー！！！』

ーーードゴオオオオオオオン！！

「ウォッ！！」

咆哮を上げると同時に空中でギガドラモンとメガドラモンは互いにぶつかり合い、凄まじい衝撃波を辺りに撒き散らす。

その衝撃波からキャロとフリードを護るようにギンリュウモンは立ち塞がり、上空で激突を繰り返しているギガドラモンとメガドラモンに険しい視線を向ける。

「やべえぜッ！あいつ等はどう見ても両方とも完全体だ！！かなりの実力だぜ！ハッ！！もしかしてあいつ等が集落を！？」

「・・・・・・・さない」

「キュル～～！」」

暗く顔を俯かせたキャロがゆっくりと立ち上がり、フリードは心配そうに声を掛けるが、キャロは構わずにギンリュウモンの前に立つ。

「ッ！！キャロ！危険だ！戻るんだ！！」

「・・・・・絶対に荒らさせない」

「エッ？」

キャロの呟いた言葉の意味が分からず、ギンリュウモンは疑問の

声を上げるが、キャロは構わずに巨大な魔法陣を発生させ始める。
その魔法陣の意味が分かっているギンリュウモンとフリードは目を見開き、キャロを止めようとするが、キャロは止まらずに上空でぶつかり合っているギガドラモンとメギドラモンを睨み付ける。

「この場所を荒らすのだけは絶対に赦さない！！！竜騎召喚ッ！！！」

「駄目だキャロ！！」

「ヴォルテェェェェーーーーーールッ！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

キャロが天に届けと言うにように叫んだ瞬間に、キャロの発生させた魔法陣の中から巨大な腕が飛び出し、地面に腕が圧し付くと、それを基点に魔法陣から巨大な二対の翼を背中に持った真の姿に戻ったフリードを遥かに越える巨大な竜がその姿を現す。

「ギギャアアア

過去の出会い、ブラックＶＳヴォルテール！！後編

夕暮れの深い森の中。夕食の食料を狩りに来ていたブラックは、目の前に存在する民族衣装らしき服を着た数名の死体の姿を、無感動に満ちた瞳で見ていた。

ブラックの目の前に存在する死体の損傷は激しく、獣に食い荒らされたのか男性なのか、女性なのかさえも判別する事は出来なかった。それほどまでに激しい損傷なのだ。

だが、ブラックからすれば全く関係なく、何時もなら気にせずに先に進む筈なのだが、その死体達が着ている民族衣装に見覚えがあった為に、注意深くを見ているのだ。

「・・・・・間違いなくあの小娘と同じル・ルシエの民だ。しかし、この様子だとやはり滅んだと言う事か」

ブラックにはキャロとリュウダモンの話を聞いた時から、ル・ルシエの民は滅ぶ事を分かっていた。

彼らは竜と共に生きると誓いながら、竜の王に選ばれた者を集落から追放したのだ。

絆の大切さを心から分かっているブラックからすれば、ル・ルシエが滅ぶ事もすぐに分かった。だが、それをわざわざキャロ達に伝えるほど、ブラックは優しくはない。自らが誓った絆を否定した者達などの為に、ブラックは動く気など無いのだ。

「この辺りにはまだ何体かのデジモンが存在していた。そいつ等に滅ぼされると思っていたが、どうやら連中を滅ぼしたのは、もっと最悪な者達のようだ。それだけ奴らも怒りに満ち溢れたようだな」

その様にブラックがル・ルシエを滅ぼした者達を予測していると、

上空から僅かに笑みを浮かべているルインがブラックの横に降り立つ。

「ブラック様。キャロちゃん達が集落に向かいましたよ」

「そうか。だが、行った所で生き残りは存在するまい。奴らはル・ルシエの人間を一人残らず殺す気のようだからな」

「・・・・・その様ですね」

ブラックの言葉にルインはブラックが見ているを死体の姿を見て同意を示す。

ルインにもブラックが言う、ル・ルシエの民達を滅ぼした犯人が分かっていた。

ブラックとルインが今いる場所は、ル・ルシエの集落からかなりの距離が在ると言うのに、それでもその場所にル・ルシエの民と思わしき死体が存在している。それが意味するのは、“一人残らずル・ルシエの民を抹殺する”。と言う意思表示の表れだと言う事だ。

「しかし、あの小娘達も危険だな。連中はヴォルテールの契約者以外のル・ルシエの民を殺す気だ。いかにデジモンと子竜を従えていても、容赦はすまい」

「それなら大丈夫ですブラック様。何せキャロちゃんこそが“ヴォルテール”の契約者ですからね」

ーーービキィィィィィィン!!

「エッ？」

ルインがブラックに真実を告げた瞬間。一瞬の内に辺りに気温が氷点下に成ったと感じるほどの殺気が満ち溢れ、ルインは殺気の源で在るブラックの後姿を呆然とした表情をして見つめた。
この時に残念な事に、ルインはブラックがキャロこそがヴォルテールの契約者で在る知って、鍛えていると思っていた。しかし、ブラックはキャロがヴォルテールの契約者で在る事を知らなかった。
リュウダモンから情報を聞いた時にも、キャロがヴォルテールの契約者で在る事は隠していた故に、ブラックは今の今まで、キャロこそが捜し求めていたヴォルテールを呼べる者だと言う事を知らなかったのだ。

「・・・・・・・クククククッ！！ハハハハハハハハハハハハハハッ！！！」

「ブ、ブラック様？」

突如として笑い出した主の姿に、ルインは若干怯えた声を出した。
ブラックに慣れ親しんだルインでも、怯えてしまうほどの殺気を、ブラックは笑い声と共に辺りに撒き散らしているのだ。
そして少しの間ブラックは笑い続けていたが、突如として笑うのを止め、ル・ルシエの集落がある方向を殺気に満ちた瞳で睨みつける。

「そうか。あの小娘がそうだったのか・・・・良くも俺を一ヶ月以上待たせてくれたな！！無理やりにでもヴォルテールの奴を呼び出させてやるぞ！！待っていろ！！」

ーーービュン！！

ブラックは叫ぶと共に音速を超えるスピードを出しながら、ル・

ルシエの集落が在る場所へと飛び立って行った。
　その後姿を見ていたルインは、全身から冷や汗を流し始め、すぐさま自身の空に浮かぶと、自身の出せる限界のスピードを持ってブラックの後を追い出すのだった。

　ル・ルシエ集落跡地。その場所の上空で戦い合っていたギガドラモンとメガドラモンの二体は、一時的に交戦を止め、地上の大地に悠然と立っている体長１５メートルほどの巨大な竜ーヴォルテールに対して、それぞれ身構えていた。
　二体とも先ほどのヴォルテールの大地を揺るがすほど咆哮と、その体から立ち込めている巨大として言えないほどの存在感に、今は敵対せずに協力して戦い合わねば成らないと本能的に判断したのだ。
　しかし、ヴォルテールは二体の構えを見ても、まるで気にしてないと言うように凶悪な怒りに満ち溢れた視線を、ギガドラモンとメガドラモンに向ける。

「ギギャアァァァァァァァァーーーーーーー！！！！！」

『ッ！！』

　ヴォルテールの上げた咆哮に一瞬の内に、ギガドラモンとメガドラモンは威圧されてしまった。
　ただの咆哮。されどその咆哮は、究極体クラスの力を持った竜の王の咆哮。
　その咆哮の前には、いかに完全体としての力を持っているギガドラモンとメガドラモンでさえも、竦んでしまうほどの力が宿っているのだ。

しかし、それでも彼らには逃げる気はなかった。正確に言えば、ヴォルテールから逃げる事など不可能だと分かっているのだ。
目の前に存在しているヴォルテールはキャロの怒りに寄って召喚された存在。
召喚師の怒りに寄って呼び出されたのならば、ヴォルテールが怒りに満ち溢れて顕現するのは当然の事。究極体クラスの存在が怒りに満ち溢れていると成れば、いかに完全体二体でも逃げる事など不可能なのだ。
そしてそれを表すようにヴォルテールは手を力強く握り締めながら、背中の巨大な羽を羽ばたかせ始める。
その姿にギガドラモンとメガドラモンは慌てて、自分達の両手を空へと飛ぼうとしているヴォルテールに向け、同時に両手から有機体系ミサイルを撃ち出す。

『ジェノサイドアタックッ！！』

ーーードゴオオオオン！！

ギガドラモンとメガドラモンの撃ち出したジェノサイドアタックは、空へと飛ぼうとしていたヴォルテールの体に直撃し、辺りに爆煙が満ち溢れた。
しかし、それを見ても二体は警戒を緩めず、更なる攻撃を加えようとするが、その直前に煙の中から腕が飛び出し、ギガドラモンを殴りつける。

「ギギャアアアッ！！」

ーーードゴオオオオオン！！

「ガアァッ！！」

ヴォルテールの拳を喰らったギガドラモンは苦痛の叫びを上げながら岩山の方へと吹き飛んで行き、その傷一つさえも窺えないヴォルテールの姿にメガドラモンは僅かに目を見開く。
自身とギガドラモンの必殺技をその身に受けても、ヴォルテールがダメージを受けた様子は一切無い。
それが意味するのは、圧倒的にヴォルテールの方が実力が上だと言う事だ。
それはメガドラモンの完全体としての自負が酷く傷つく事だった。

「グルルルルッ！！グアァァァァァァーーーー！！！！」

プライドが傷ついたメガドラモンは怒りの叫びを上げると共に、急速にヴォルテールに近づき、右手から巨大な鎌を出現させると、大きく振り被りヴォルテールに向かって勢い良く振り下ろす。

「メガデスサイズッ！！」

ーーーバキィィィィィィィィン！

「ッ！！」

メガドラモンの振り下ろした筈のメガデスサイズは、ヴォルテールに直撃する直前で、横合いから突き出されて来たヴォルテールの拳に激突すると、一瞬の内に刃が割れ砕けた。
その無残な姿に成ってしまった自身の武器の姿にメガドラモンの動きは止まり、その隙にヴォルテールがメガドラモンは地面へと叩きつける。

「ギギャアアアアッ！！」

ーーードゴオオオン！！

「グガアアッ！！」

地面へと叩きつけられたメガドラモンは苦痛の叫びを上げて、ヴォルテールを睨み付けるが、ヴォルテールは構わずに倒れ付しているメガドラモンに向かって連続で拳を振り下ろす。

「ギギャアアアアアアアアーーーーー！！！」

ーーードドドドドドドオゴオオオオオオオン

「ッ！！ヒガアアアアアアアッ！！」

大地を揺るがすほどの連続の打撃。

それを余す事無く受け続けるメガドラモンはもはや虫の息に近い筈なのにも関わらず、苦痛の叫びを辺りに上げ続ける。

しかし、離れた所でそれを見ていたキャロは、その叫びを聞いても胸に宿している憎しみの炎を収めず、逆にヴォルテールに命じ続ける。

「もっと！もっと！！力を込めて振り下ろして！！皆を！ル・ルシエの皆を殺した者を苦しめて殺して！！」

「ッ！！止めるんだキャロ！！」

「アギャーー！！」

キャロの憎しみに満ちた叫びを聞いたギンリュウモンとフリードは、キャロの暴走を止める為に背後から叫んだ。
二体とも分かっているのだ。例えギガドラモンとメガドラモンを殺したとしても、その先に待っているのは後悔だけしかないと言う事を。

“信念も持たずに力を振るった者の末路は、大抵は絶望して死んで行く”

ギンリュウモンとフリードは、最初に会った時にブラックが言っていた忠告の意味が、この状況に成って漸く理解出来ていた。

（やばいぜ！！まだ、あの二体の完全体が集落を滅ぼしたって言う証拠は無い！！もし、あの二体が滅ぼしてなかったら、その事を知ったキャロは必ず後悔しちまう！！）

ギンリュウモンはギガドラモンとメガドラモンが、集落を滅ぼしたとは思えなかった。
確かに先ほどは、突如として集落の上空に現れた為に、ギガドラモンとメガドラモンが犯人だと思ってしまったが、よくよく考えてみるとギガドラモンとメガドラモンは、集落に見向きもせずに互いに争いあっていただけ、更に良く辺りを見てみると、廃墟の後は殆どが高熱の炎で焼かれたようになっている。
先ほどギガドラモンとメガドラモンが使った必殺技は、ミサイルのような質量兵器系の技だ。そのような技で滅ぼされたとしたら、集落など跡形も残らず、ただの巨大な穴が開いたような状態に成っているだろう。にも、関わらず集落は廃墟のような形で残っていた。
其処から推察するに、ギガドラモンとメガドラモンは、“偶然にも集落の跡地の上空で戦っていたデジモン”の可能性が高いのだ。
もし、戦いが終わった後に、その事をキャロが知ってしまえば、

どうなるのかなど、家族として暮らして来たギンリュウモンとフリードには簡単に分かる。

「チィッ！フリード！！こうなりゃあ！キャロを力尽くでも止めるぞ！！」

「アギャアアッ！！」

もはや暴走しているキャロを止めるには、力尽くでしかないと判断したギンリュウモンとフリードはキャロの背後に忍び寄り、キャロを押さえ込もうとする。

しかし、その直前にキャロが憎しみの篭った視線を背後に向けると、ギンリュウモンとフリードの周りに桃色の魔法陣が無数の出現し、その全てから鋼鉄の鎖が飛び出す。

ーーーガシィィィィン！！

「ウォッ！！」

「キュル〜〜！！」

鋼鉄の鎖に全身を拘束されたギンリュウモンとフリードは驚きの声を上げ、すぐさま拘束から逃れようとするが、頑丈な鎖の為か、拘束から逃れる事は出来ずに地面に倒れ付してしまう。

「邪魔をしないで！！絶対に！絶対にあの二体を殺すの！！」

「止めろキャロ！！そんな事をしても後悔するだけだ！」

「アギャアアッ！！」

鎖に拘束されながらもギンリュウモンとフリードはキャロを止める為に叫ぶが、キャロは止まらずに、もはや虫の息どころか、生きているのさえ不思議なほどダメージを食らって、ヴォルテールの腕に首を絞められながら掲げられているメガドラモンを見つめる。

「ヴォルテーーール！！！」

「ギギャアアアアアッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

「ガアアアアアアアアアーーーーーーーー！！！」

キャロの叫びに応じるようにヴォルテールの口から灼熱の炎が放たれ、それを体に食らったメガドラモンは一瞬の内に燃やし尽くされ、データ粒子に体を変換させると、その後にはデジタマだけが残されてしまった。

しかし、その姿を見ても、キャロの憎しみの炎は止まらず、それに連動する様にヴォルテールは残っている敵ー離れた岩山の辺りで恐怖に体を震わせているギガドラモンに体を向け、凄まじい勢いを持って大地を駆け出す

「ギギャアアアアアアアアッ！！」

「ッ！！グガガガガガガガッ！！ジェノサイドギアッ！！」

ーーードドドドドドドドドドドドゴオン！！

大地を揺るがしながら駆けて来るヴォルテールの姿に、ギガドラ

モンは恐怖に駆られながらも、すぐさま両手をヴィルテールに向かって掲げ、今度は無限に両手から有機体系のミサイル―ジェノサイドギアをヴォルテールに向かって放ち続ける。
だが、次の瞬間に、ヴォルテールの体の周りを桃色の魔力が覆い、そのスピードは更に倍増する。

「我が乞うは、疾風の翼。黒き炎の大地の守護者に、駆け抜ける力を！！」

「ギギャアアアアアアアアッ！！！！」

「ッ！！」

キャロのスピードブーストの援護を受けたヴォルテールは、自身の巫女の助力に喜びの咆哮を上げると、それに応えるように増したスピードを利用して無限と呼ぶべき数のジェノサイドギアの間を器用に駆け抜け続け、遂にギガドラモンの目の前に立ち塞がる。
自身の必殺技が完全に破られた事に、ギガドラモンは完全に動きが止まってしまう。
その隙にヴォルテールは拳をギガドラモンに向かって振り抜こうとするが、突如としてその顔は僅かに驚きに歪み、すぐさまギガドラモンの傍から離れてしまう。

「ガアッ？」

絶好の機会を逃したヴォルテールの姿に、ギガドラモンは首を傾げるが、次の瞬間にヴィルテールが何故自身が離れたのか嫌と言うほどの思い知る。

「・・・・待っていた」

「ガアッ！！」

背後から聞こえて来た小さな、されど力強い声にギガドラモンは目を見開きながら後方を振り返ると、心の底から喜びの表情を浮かべているブラックが、ギガドラモンに構わずにヴォルテールだけを見つめていた。

「・・・・・この時を・・・・・俺はずっと待っていた。貴様と戦えるこの時の為に、俺はこの地に来たのだ！！」

「グウグルルルルルルッ！！！」

ブラックの喜びに叫びに、ヴォルテールはメガドラモンやギガドラモンに行わなかった警戒の構えをブラックに向かって取り出す。

ヴォルテールには瞬時にブラックの実力が分かった。自身と同等。もしくはそれ以上の実力を、自身よりも遥かに小さい筈のブラックが秘めている事を、本能的に判断したんだ。

僅かでも警戒を緩めれば、一瞬の内に勝負は終わってしまう。永き時を生きていた竜の王ですらも、ブラックに対しては油断など出来ないのだ。

しかし、逆にギガドラモンに取っては絶好のヴォルテールを倒せるかも知れないチャンスがやって来たと言う事であり、そのチャンスを逃すまいとギガドラモンはヴォルテールに向かって両手を構え出すが、彼は今の内に逃げるべきだった。戦いの邪魔をしようとする者が、最も許せないと言う者が横に居るのだから。

ーーードゴオオオオオオン！！

「ガアッ！！」

「邪魔を！するなっ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオン！！

攻撃を行おうとしたギガドラモンに、ブラックは突如として殴り掛かり、ギガドラモンを上空に向かって弾き飛ばす。

それと共に瞬時にその先にブラックは回り込むと、向かって来るギガドラモンに向かって今度は地面に叩きつけるように下に向かって、右腕をドラモンキラーを振り抜く。

「ドラモンキラーーーー！！！！」

ーーードゴオオオオオオン！！

「ギゲェッ！！」

ドラモンキラーを背に受けたギガドラモンは、今度は地上へと勢い良く落下して行き、その先で拳に力を込めていたヴォルテールが拳を落下して来るギガドラモンに向かって振り抜く。

「ギギャアアアアアアアッ！！！！」

ーーードゴオオオオオオオオン！！

「ガアアアアッ！！」

ヴォルテールの拳を胴体に受けたギガドラモンは、一瞬目を見開くように大きく開けると、次々とその体に罅が入り始め、その体はデータ粒子へと変わり、デジタマに戻っていた。

しかし、その姿を見てもヴォルテールは警戒を緩めない所か、逆に更に警戒を強め、上空からゆっくり降下して来るブラックの姿を険しい瞳で見つめる。
その姿にブラックはますます笑みを強め、両手に在るドラモンキラーを構えながら、自身よりも巨大な姿のヴォルテールを見つめ返す。

「準備運動には少しは成った。貴様との戦いを始めるぞ！！ヴォルテーール！！！」

「ギギャアアアアアアアアアッ！！」

ブラックの叫びに応えるようにヴォルテールも大音量の咆哮を上げ、ブラックとヴォルテールは同時に相手に向かって駆け出し、同時に右手を相手に向かって振り抜き、拳が激突した瞬間。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

辺りの木々を一瞬の内に吹き飛ばすほどの衝撃波を巻き起こした。
しかし、二体はその事に対して一切構わずに、今度は左腕を振り被り、またしても右腕と同じように激突させ、互いに拳を振り抜き続ける。

ーーードゴオオオオオオオオオオオン！！

「ハハハハハハハハハハハハッ！！良いぞ！！俺はこれを待っていた！！さぁッ！！俺を楽しませるヴォルテーーール！！」

「ギギャアアアアアアアアアアアアアッ！！」

二体のぶつかりあいによって次々と衝撃波が辺りに巻き起こり、辺りに木々や岩山など吹き飛ばして行くが、ブラックとヴォルテールは全く構わずに拳や蹴りなど使った肉弾戦を続け、相手を倒そうと攻撃を放ち続ける。

しかし、その一方で離れた所からその戦いを眺めていたキャロと、鎖に拘束されたままのギンリュウモン、フリードは在りえないものを見たと言う表情をして、体格差が在りながらも互角にヴォルテールと戦い続けているブラックの姿を見つめいた。

「うそ・・・・・・ヴォルテールと互角に戦うなんて」

「流石は究極体だぜ」

「キュル～～」

キャロとギンリュウモン、フリードは熾烈としか言えないブラックとヴォルテールの戦いを見ながら、呆然とした声を出した。

ブラックがヴォルテールと戦いたがって居る事は知っていた。しかし、まさか、体格差が在りながらも守護神にして破壊神の異名を持つヴォルテールと互角に戦えるとは思っても見なかったのだ。

巨大なヴォルテールに人間よりは大きいとは言え、ブラックが挑むなど無謀にしか思えなかったのだ。

だが、蓋を開けてみたら、ブラックは体格差など関係ないと言うのにヴォルテールと互角に戦い続けている。

ヴォルテールが拳を振り抜けば、ブラックは自身の拳を振り抜くか、或いはギリギリの所でかわし、ヴォルテールの胴体に拳をぶつける。

そしてヴォルテールが魔力弾や炎を放てば、ブラックも同様にエネルギー球を放ち、または、背中に付いているシールドを使ってヴ

ォルテールの攻撃を防御する。
完全にブラックは真竜と呼ばれる存在のヴォルテールを相手に互角以上に戦いを繰り広げているのだ。
ヴォルテールの力は無敵だと思っていたキャロからすれば、目の前で起きているブラックとヴォルテールの戦いは価値観が壊れる充分過ぎるほど事だった。
その様にキャロが自身の価値観を修正していると、背後からゆっくりと二つのデジタマを手に持ったルインがキャロの背後に忍び寄り、ギンリュウモンとフリードを拘束している鋼鉄の鎖を一瞬の内に破壊する。

ーーーバキィィィィン！！

「ッ！！」

鎖が破壊される音が耳に響いてたキャロは、僅かに驚いた表情を浮かべて背後を振り返り、無表情に自身の事を見つめているルインを目にする。

「・・・・・ルインフォースさん」

「・・・・・・・」

ーーーパシィィィィン！！

「ッ！！」

ルインは無言でキャロの頬を手で張り飛ばし、キャロは地面に倒れ付しながらルインの顔を見つめるが、ルインは無表情のままキャロの瞳を見つめる。

「何をしているんですかキャロちゃん？私が教えた魔法は、貴女のパートナーを拘束する為に魔法では無い筈です」

「そ、それはッ！？」

「暴走しているならば、拘束するのもやむ終えないでしょう。ですが、ギンリュウモンもフリードちゃんも正気です。それなのに何故ギンリュウモンとフリードちゃんを拘束しているのですか？」

「・・・・・仇を討ちたかったんです・・・・故郷を・・・・・私の故郷を滅ぶした連中を倒したかったんです」

キャロは地面に膝をつきながら、涙を目から溢して自身の思いをルインに告げた。

例え追放されようと、やはりル・ルシエはキャロに取って大切な故郷なのだ。

その故郷を滅ぼしたかもしれないギガドラモンとメガドラモンをキャロはどうしても赦す事は出来なかった。だからこそ、ヴォルテールを呼び出し、ル・ルシエの者達の仇を取る為に戦わせたのだ。それが勘違いだと知らずに。

その事を知っているルインは、僅かに悲しげな表情をするが、すぐに表情を無表情に戻し、キャロの瞳を見つめ真実を話す。

「此処に来る前に、ブラック様がル・ルシエの者達と思われる死体を見つけました。損傷が酷く、性別さえも分かりませんでしたが、全員が何か鋭利な牙や爪で引き裂かれたと思われる傷を負っていました」

「エッ？」

「・・・・・キャロちゃん。犯人は残念ながらデジモンでは無いです。犯人は・・・・・ル・ルシエの民達を滅ぼした犯人は・・・・・・ル・ルシエの民達と生きていた“竜達なんですよ”二体のデジモンは偶然ル・ルシエの集落の上空で戦っていたに過ぎないんです」

『ッ！！！！！』

ルインが告げたル・ルシエ崩壊の真の真実にキャロ、ギンリュウモン、フリードは驚愕に目を見開いた。

“ル・ルシエの民達を滅ぼした犯人の正体が、共に生きてきた竜達”それが事実だとすれば、先ほどキャロがヴォルテールに行わせたのは八つ当たり以外の何ものでもないのだから。

そのキャロ達の表情にルインは僅かに躊躇を覚えるが、それを振り払い、キャロの為にも真実を語る。

「竜達は許せなかったのでしょう。自分達と共に生きて行くと誓いながら、ル・ルシエの民達は自分達の王の巫女を追放した。彼らは本当にル・ルシエの民達が好きだったからこそ、心から許す事が出来なくなってしまった。それこそがル・ルシエの滅亡の真実だったのですよキャロちゃん」

「そ、そんな・・・・・・それじゃあ、私がした事は・・・・」

ルインが告げた真実にキャロは体をワナワナと震わせながら、自身の両手を呆然とした瞳で見つめ始める。気がついてしまったのだ。自身が先ほど行った行為の真実を。

そしてルインは体を震わせているキャロの傍に近寄り、両手に持っていたデジタマをキャロに良く見えるように掲げる。

「ただの八つ当たりでしかないんです。キャロちゃんの行動は、罪の無かった者達を殺したに過ぎないんです」

ーーードサッ！

「ア、ア、アァァァァァァァァァッ」

ルインの言葉を聞いたキャロは地面へと座り込み、絶望の声を上げながら呆然と自身の手を見つめ続け、涙を瞳から溢れ出させ始める。

「・・・・ゴメンナサイ・・・・ヒック、ヒック、ごめんね。ギンリュウモン、フリード、それに、ヒック、ワァァァァァァァァァァーーーーーーーー！！！」

「キャロ・・・・」

「キュル～」

涙し流してギンリュウモン、フリード、そしてルインの腕の中に存在している二つのデジタマに向かって謝り続けるキャロの姿に、ギンリュウモン、フリード、そしてルインは悲しげな表情を浮かべて、地面に顔を俯かせながら謝り続けるキャロの姿を見つめるのだった。

そしてその一方でブラックとヴォルテールの戦いも終焉へと近づいて来ていた。

「ウオォォォォォォォーーーーーーーー！！」

「ギッ！？ギギャアァァァァァァーーーーー！！」

ドゴオオオオオオオオオオン！！

ブラックは叫び声を上げながらヴォルテールを一本背負いの要領で投げ飛ばし、ヴォルテールは信じられないと言う表情をして地面へと叩き付けられた。自身よりも遥かに体の小さな者に投げ飛ばされるなど、ヴォルテールからすれば初めて経験だろう。

既に両者の戦いに寄って、その場所に存在していた木々や草などは全て消滅し、もはや戦い始めた頃とは地形はまるで変わってしまった。

しかし、両者はそんな事など気にしていない。

ブラックは本当に久々に自身と互角に戦える存在に心が喜びに満ち溢れ。

ヴォルテールも種族の王として意地が在るのか、ブラックを必ず倒すと心に誓いながら戦い続ける。

もはや、二体の心に存在するのは、必ず目の前の相手を倒し、打ち勝って見せると言う思いだけなのだ。

「クックックッ。ヴォルテールよ！！やはり貴様は俺が見込んだ敵だった！！だが、そろそろ決めさせて貰うぞ！！」

「ギギャアアアアアアアアアッ！！」

ブラックの叫びに応じるようにヴォルテールも咆哮を上げ、大地からエネルギーを集め始める。

ヴォルテールの最大にして最強の殲滅砲撃ー“大地の咆吼（ギオエルガ）”を放つ為に準備を始めたのだ。

その膨大としか言えない力の凝縮に、ブラックは僅かに恐怖を抱きながらも、それを上回るほどの歓喜に身を震わせ、自身も大気中

に存在している全ての負の力を両手の間に集め、巨大な赤いエネルギー球を作り上げる。
大気と大地。どちらも世界に最も必要なものから、ブラックとヴォルテールは自身の限界点までエネルギーを集め続け、両者のエネルギーが最大に高まった瞬間。

「ガイアッ！！フォーーーース！！」

「ギギャアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！！！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

両者は同時に動き、ブラックはヴォルテールに向かってガイアフォースを投げ付け、ヴォルテールはガイアフォースさえも打ち消す勢いで“大地の咆吼（ギオエルガ）”をブラックに向かって発射した。
ガイアフォースと大地の咆吼（ギオエルガ）は空中で激しくぶつかり合い、互いを打ち消そうとせめぎあうが、徐々に大地の咆吼（ギオエルガ）の方がガイアフォースを押し始める。
これに関しては技の特性の差が原因だった。
ブラックのガイアフォースは確かに大地の咆吼（ギオエルガ）に、勝るとも劣らない技だが、エネルギー球状という状態が災いしていた。球状の技は確かに一点突破に優れるが、その反面、一度放てばそれ以降、エネルギーを送る事が出来ないのだ。
逆にヴォルテールの大地の咆吼（ギオエルガ）はエネルギー砲に分類される為に、放った後からでもエネルギーを送る事が出来る。
威力に差が在れば、ガイアフォースは砲撃でさえも打ち勝つ事が出来るが、互角の威力と成ればガイアフォースは分が悪いのだ。
その事を本能的に分かっているヴォルテールは僅かに口元を笑み

に変えると、大地から更にエネルギー吸収し、大地の咆吼(ギオ エルガ)へと送り始める。

「ギギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッッ！！！！！！！！！」

ドグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！

ヴォルテールが咆哮を上げると共に大地(ギオ)の咆吼(エルガ)の威力は更に上がり、遂にガイアフォースを撃ち抜き、その背後に居るであろうブラックに居る場所を通過し、空に赤い炎を軌跡を残しながら空の彼方へと消えて行った。

「ギグギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッッ！！！！！」

自身の勝利を確信したヴォルテールは歓喜の咆哮を辺りに響かせ、自身こそが勝者だと示すように咆哮を上げ続ける。

しかし、次の瞬間に、その表情は驚愕に染まり、恐る恐る背後を見てみると、再びガイアフォースを作り上げているブラックの姿が存在していた。

「良い一撃だったが、俺の勝ちだッ！！」

ブラックは自身の技の弱点を知っている。

まともに撃ち合えば自身のガイアフォースが大地(ギオ)の咆吼(エルガ)に敗北する事も分かっていた。

だからこそ、最初から一撃目のガイアフォースでヴォルテールを倒せるなど考えてはいない。

一発目のガイアフォースはヴォルテールの視界を遮る事と、油断を呼ぶ為に放ったのだ。

本当の本命は二発目にこそ在ったのだ。大地の咆吼(ギオエルガ)は大地からエネルギーを集めなければ撃つ事は出来ない。逆にブラックはガイアフォースを連射する事が出来る。
相手の技と自身の技の特性を判断したブラックは、一発目のガイアフォースを放つと同時に瞬時に移動を行い、ヴォルテールの背後に回りこんで二発目のガイアフォースを作り出していた。全てはブラックの思惑通りだったのだ。

「終わりだアァァァァァァァーーーー！！！！ガイアフォーーーース！！」

「ギギャアアアアアアアアッ！！」

ドゴオオオ

ブラックとヴォルテールの戦いが終わってから数日後の事。
ブラックとルインは、第六管理世界で最も発達している都市の近く、キャロ、リュウダモン、フリードを別れを交わしていた。

「色々とありがとうございました」

「世話に成ったぜ」

「キュルー！」

キャロ、リュウダモン、フリードはブラックとルインに対してそれぞれ別れの言葉を告げ、ブラックは不機嫌そうに、ルインは笑みを浮かべる事でキャロ達の言葉に答える。

「やっぱり行くんですね？」

「はい。今回の事で私はまだまだ全然駄目だって分かったんです。だから、色々な場所を旅して、もっと色々と学びたいんです。もう、あんな事をしない為に」

キャロはギガドラモンとメガドラモンを八つ当たり殺してしまった事を、心の底から後悔していた。
もっと状況を見ていれば、あんな事には成らなかったかもしれないと思い、世界を巡る旅に出る事を誓ったのだ。二度と力の扱い方を間違い無い為に。今度はブラックが教えてくれた忠告を胸に抱いて、先に進む積りなのだ。
その決意に満ちた表情にルインは嬉しそうな笑みを浮かべると、服の中から一つの腕輪を取り出し、キャロの手の上に乗せる。

「あの？これは？」

「簡単な簡易型のデバイスです。使える魔法は限られていますが、変身魔法が登録されているので、それを使えば大人の姿に変身出来ますよ。子供の姿だと何かと侮られますからね。フリーの魔導師として働くにしても、大人の方が遣り易いでしょう」

「ありがとうございます！」

「恩にきるぜ！！」

「アギャアッ！！」

ルインの言葉にキャロは腕輪を大切そうに抱えながら礼を告げ、リュウダモンとフリードもルインに礼を告げた。確かにルインの言うとおり、子供だと侮られてしまう可能性が高い。例えリュウダモンとフリードが居たとしても、大人はキャロが子供だと言って侮るだろう。

しかし、大人の姿に変身出来ると成れば、これからの生活も少しは楽に成る。ルインの贈り物はキャロ達に取って嬉しい物だったのだ。

その事にキャロは笑みを浮かべると、最後に不機嫌そうな表情をしているブラックへと顔を向ける。

「色々と教えてくれて本当にありがとうございました」

「・・・・・・俺が教えた事を忘れるな。それと必ずヴォルテールを操れるように成れ、そうなれば奴も更に強くなるからな。その時のお前達は俺の『敵』に相応しくなる」

「ハイッ！必ずヴォルテールを、自分の力を信念を持って支配してみます！！」

「フッ、楽しみにしているぞ」

キャロの宣言にブラックは僅かに笑みを浮かべながら答えると、キャロ達に背を向け歩き出す。

それと共にルインもキャロ達に腕を振るいながら、ブラックの後を追い始める。

そしてキャロ達はブラックとルインの背が見えなくなるまで見続けると、都市の方に顔を向ける。

「行こう！！リュウダモン！フリード！！」

「おう！！」

「キュルーー！！」

最後のル・ルシエの竜召喚師ーキャロ・ル・ルシエは、自身のパートナー達と共に一年ほど各世界を旅し続け、一年後のミッドチルダで一人の男性と出会う。

「君がキャロ・ル・ルシエ君だね。どうか、その力を地上の、いや、各世界の人々の為に貸してくれ。デジモンとの絆を持つ君の力を」

これがキャロ・ル・ルシエが地上本部に勧誘される時のレジアス・ゲイズの言葉だった。

そして時は現代に戻り、キャロは機動六課の屋上でフェイトに自身の過去を語り終えた。
聞き終えたフェイトは、余りにも過酷な過去を歩んで来たキャロの人生に言葉を出す事も出来なかった。絆を否定した為に滅んでしまった部族の過去。
彼らには何故自分達が滅んだのかさえも分からなかったのだろう。全ては自分達の誓いが原因だと彼らは最後まで気付く事無く滅んだのだ。

「絆はとても大切なものなんです。それを忘れてしまった私の部族は滅びました」

「連中は竜と生きる事が当然だと思っていたのさ。その共に生きる者達の思いも知らずに、力だけを求めちまった。だから、その報いを受けんたんだ」

「・・・・・何で、その話を私に？」

「一目見て、今のフェイトさんは危険だと思ったんです。力だけを求め始めている。そうなれば、悲劇しか無い事を知って欲しかったんですよ」

キャロにはフェイトの顔を見てすぐに分かった。
今のフェイトはただ力だけを求め始めている。デジモンとの絆を知り、絆を否定した者達の末路を知っているキャロからすれば、それがどれほど危険な事かは充分すぎるほどに分かっていた。
だからこそ、自身の過去をフェイトに語ったのだ。悲劇を起こさない為に。

「私の話を聞いて、フェイトさんがどう動くのかは分かりませんが、それでも考えて下さい。本当に自分がすべき事は何なのかを」

「それと一つ忠告だ。絶対にデジモンに“力”だけを求めるなよ。今のアンタがパートナーに力をだけを求めたら、悲劇しか本当に起きないぜ」

「それって！？どういう意味なの！？」

リュウダモンの告げた事実にフェイトは困惑した声を出した。
デジモンに力を求めてはいけない。その意味が今のフェイトには分からなかったのだ。
力が在れば、ブイモンもエリオを護れると思っていたフェイトからすれば、寝耳に水の話だろう。
しかし、キャロとリュウダモン、フリードは答えずに床から立ち上がり、フェイトに背を向け、屋上の入り口に向かい出す。

「申し訳ないですけど、今のフェイトさんには教えられません。教えれば、貴女は絶対にその力を使ってしまう・・・・・悲劇しか呼ばない力は、知るべきではないんです」

「ッ！！待って！」

キャロの告げた事実にフェイトは目を見開き、キャロ達の背に向かって叫ぶが、キャロ達は答えずに屋上から出て行った。
フェイトはその後姿を呆然とした表情で見つめるが、すぐに考え込むような表情に変えると、服の中から黒く塗り潰れたディーアークを取り出し、ジッとの沈黙しているディーアークを見つめ始める。

「・・・・悲劇しか呼ばない力？・・・・・・何かデジモンには進

化以外に隠された力が在るの？」

そうフェイトは呟くと、キャロの過去の話と、悲劇しか呼ばない力に付いて深く考え始めるのだった。

深い森の中。曇り空に寄って日の光さえも届かない場所で、五人のデジモンと思わしき存在達が、一体のデジモンが装備している鏡のような盾に映っているフェイトの姿に、面白そうな表情を浮かべていた。

「へへへへへへッ！！この女がフェイト・テスタロッサか？何でぇ、俺達が何かをしなくても暗黒進化させそうじゃねかよ」

一体のデジモン―ゴブリンのような顔した土の闘士―グロットモンは嘲る様に鏡の向こうに映っているフェイトに向かって声を出した。

その声に水色の体をしたデジモン―水の闘士―ラーナモンも笑みを浮かべてフェイトの姿を見つめる。

グロットモン、世代／ハイブリット体、属性／バリアブル、種族／鬼人型、必殺技／スネークアイブレイク

伝説の十闘士『エンシェントボルケーモン』の力を受け継いだ土の属性を持つヒューマンスピリットタイプの鬼人型デジモン。芸術的な武器や防具を作る鍛冶職人で、人に命令されるのが大嫌い。装備している『ロットアーマー』も『グロットハンマー』も全てグロットブランド。必殺技は、『グロットハンマー』で敵を石に変え、粉々に破壊する『スネークアイブレイク』だ。

ラーナモン、世代／ハイブリット体、属性／バリアブル、種族／妖精型、必殺技／レインストリーム、ジェラシーレイン
伝説の十闘士『エンシェントマーメイモン』の力を受け継いだ水の属性を持つヒューマンスピリット体の妖精型デジモン。雨を操る攻撃が得意。感情の変化が激しく、高ぶっている時は攻撃が強力になる。中でも泣きながらの攻撃は手に負えない。必殺技は、敵一体に大雨を集中して降らし、敵を押し潰す『レインストリーム』に、嫉妬の力を宿した『レインストリーム』で敵を押し潰す『ジェラシーレイン』だ。

「本当よね。こんな女があの子のパートナーなんでしょう？私同情しちゃうかも」

「フッフッフッ、だからこそ、私達の策も上手く行くのだ。もう少しで此方の準備も終わるのだからな」

ラーナモンの言葉に鏡のような盾ー『イロニーの盾』を両手に装備した鋼の闘士ーメルキューレモンは声を上げ、近くの木陰で気絶しているブイモンに顔を向け、邪悪に染まった笑みを浮かべ始める。

メルキューレモン、世代／ハイブリット体、属性／バリアブル、種族／突然変異型、必殺技／ジェネラスミラー、オフセットリフレクター
伝説の十闘士『エンシェントワイズモン』の力を受け継いだ鋼の属性を持つヒューマンスピリット体の突然変異型デジモン。作戦を立て、同時にいくつもの作戦を思いつく知能派。自分の流儀にうるさい。両手には敵の攻撃を跳ね返す『イロニーの盾』を装備している。必殺技は、『イロニーの盾』で敵の攻撃をそのまま跳ね返す『ジェネラスミラー』に、自動的に全ての攻撃を跳ね返す『オフセットリフレクター』だ。

「クックックッ！もうすぐだ！！もうすぐ！この地に居る全てのデジモン達は完全に人間に失望する！！その為にも働いて貰うぞ！ブイモン、そしてフェイト・テスタロッサよ！！ハハハハハハハハハッ！！」

自身のイロニーの盾に映るフェイトの姿を見つめながら、メルキューレモンは邪悪な哄笑を森の中に響き渡らせるのだった。

過去の出会い、ブラックＶＳヴォルテール！！後編（後書き）

次回予告

遂に次の任務に移る機動六課

作戦は順調に進み、ゲートタワーも破壊できる思った瞬間。

遂に奴らがその姿を現す！

次回、漆黒の竜人と少女、『悪の五闘士！！』

雷光は再会する自身の家族に。だが、それは悲劇の幕開けだった。

悪の五闘士！！（前書き）

十闘士について

十闘士とは、嘗て三大天使世界で、ルーチェモンが暴虐の限りを尽くしていた時に、世界を救った十体のデジモンの事である

その十体のデジモン達は、エンシェントデジモンと呼ばれ、その後に力を、ヒューマンスピリット、ビーストスピリットと二つの力に分けてのこしている。

このスピリットはそれぞれ、ヒューマンは人型。ビーストは獣型と、それぞれ技と力と言う様に分裂している。

また、再びルーチェモンが蘇った時に倒した者達も、十闘士であり、その為に三大天使世界のデジモン達には、英雄として呼ばれている。

悪の五闘士！！

崖や深い森が存在している場所。
その辺りには幾つもの線路が存在し、本来ならばリニアが多く通る場所で在りながら、今は見る影も無く線路を一本もリニアが通る事は無かった。
何故ならば、その多く存在する線路の中心辺りに聳え立つ黒い塔ーゲートタワーから現れる数多くの恐竜型デジモンや、サイボーグ型デジモン達にその場所は完全に占拠されてしまっていた。
そしてその場所から在る程度離れた場所で、フェイトを除いた機動六課の主要メンバー達は集まり、ロングアーチから送られて来る情報を余す事無く頭の中に叩き込んでいた。

「やっぱり今回は前回よりもキツイで」

「確かにそうですね。敵のデジモンの殆どが範囲攻撃可能な上に、長距離系の攻撃も可能とは。前回よりも厄介ですね」

「空から飛んでいったら、サイボーグ型デジモン達に狙い撃ちされてしまいますよ」

ロングアーチから送られて来た情報を読んだはやて、リインフォース、ギンガはそれぞれ自身が得た感想を話し、その場にいる全員が表情を険しくする。
今回の戦いは、前回以上に苦戦すると言う事を確信したのだ。
前回の時は環境を変える事と、範囲攻撃出来るデジモンがいなかった為に、１０８部隊の隊員達の援護も受けられたので、作戦は順調に進んだ。だが、今回は前回とは違って、範囲攻撃出来るデジモンだけではなく、長距離の攻撃も出来るデジモンも存在している。

前回以上に苦しい戦いに成るのは、先ず間違い無いのだ。

「まぁ、とにかくや。全員必ず生きて帰るんや。まだ、私らにはしなくちゃ成らない事が、沢山在るんやからな。皆！覚悟を決めて行くで！！」

『了解ッ！！』

はやての宣言にその場にいる全員が頷き、それぞれ自身のデバイスの最終調整を始める中、キャロとリュウダモン、フリードがソッと近寄り、はやてに声を掛ける。

「八神部隊長？フェイトさんは？」

「当初の予定通り、１０８部隊の人達と線路の警護や。今回の作戦では、線路も出来るだけ破壊される訳にあかんからな。まぁ、一番最初の一発だけは、フェイトちゃんが撃つんやけどな。それに、もしもの時の為に、１０８部隊の人達がフェイトちゃんを見張っとる。何かフェイトちゃんの心を激しく揺さぶるものがあらわれへん限り、フェイトちゃんも大人しくしとるやろ」

「そうですか。それらなら良いんですけど」

「今のあの女は、何をするか分からねぇぞ」

「・・・・・・ハア～、やっぱりそうなんか」

リュウダモンの言葉にはやては深々と溜め息を吐いた。

二日前。キャロの話を聞いたフェイトは僅かに持ち直した様に見えていた。しかし、はやて、オーリス、キャロなど、デジモンとの

絆を結んだ者達には、逆にフェイトの危うさが増したようにしか見えなかったのだ。何かの力を見つけて、その力をフェイトは求め始めている。
その様な姿にしか、今のフェイトは見えないのだ。

「・・・・やっぱり、あの力を求め始めています。あの力だけは、絶対に求めてはいけないのに」

「・・・・・オーリス三佐から聞いたんやけど。そんなに例の力は不味いものなん？」

「不味いどころじゃねえよ。あの力は確かに強力だが、反動がでか過ぎるんだよ・・・・・失敗すれば、確実に死んじまうぜ」

「・・・・それほどなんか」

リュウダモンの言葉に、はやては恐怖に体を振るわせる。
既にはやてはオーリスとキャロから、フェイトが手に入れ掛けている力の正体を聞いている。
そしてその力の正体を聞いた時にはやてが感じたのは、ただ一つ、自身の大切なパートナーであるレナモンを失ってしまうかも知れないと言う恐怖だけだった。オーリスとキャロから、はやてがその力を手に入れる可能性は限りなく低いと聞いて、安堵したが、その力に最も近づいているのがフェイトだと聞かされ、ますます頭を抱えたくなった。だからこそ、急遽僅かに作戦を変え、フェイトは完全に後方待機に変更したのだ。見張りまで付ける厳重さで。

「なのはちゃんがブイモン君を連れ去って、良かったとほんまに思ったわ。ブイモン君さえ居なければ、例の力も発現する事はないんやからな」

「はい。パートナーのデジモンさえ居なければ、力は目覚める事は絶対に在りませんよ」

「まぁ、その分、俺達に苦労は増えるが、最悪の事態を回避出来るのなら、安いもんだぜ」

「もしもの時は、完全体の力を使いますんで」

「頼もしいな（十歳の子供に頼る私ら・・・・・・あかん・・・・・全然大人の威厳なんてないわ）」

キャロの言葉にはやては頼りに成ると言う瞳でキャロを見つめるが、内心では子供に頼らざる得ない自分達の状況に涙を流したく成っていた。

その様にはやてが内心で自分達の行動を嘆いていると、シグナムがはやてに近寄って来て、質問を行う。

「そう言えば主はやて？例の青年とデジモン、それに前回の時に私を助けてくれたキツネの様なデジモンが現れた場合は、どうすれば良いのですか？」

「キツネのようなデジモンは、パートナーも判明してない。少なくともパートナーが戦場に姿を現すまでは放置や。うっかり攻撃して敵に回したりしたらあかんで」

「分かりました。それで例の人物達に関しては？」

「当初の予定どおり、先ずは相手の事情を聞くんや。その後出来れば、私らの所に来て貰うようにお願いする。絶対に敵に回したらあ

かん人物やからな」

「了解しました」

はやての方針にシグナムは頷き、他の者達にもその事を伝え始める。

それを見たはやては僅かに笑みを浮かべると、暗くなり始めた空を見上げ、雷が鳴り響き始めるのを確認すると、近くに浮かんでいたリインに声を掛ける。

「そろそろやな。リイン！行くで！！」

「はいです！はやてちゃん！！ユニゾン・インです！！」

はやての叫びに応じるようにリインは叫ぶと、はやての体の中にリインが蒼い粒子に成りながら入って行き、光がはやての体から溢れ、光が消えた後には銀髪の蒼い瞳を持ったはやてが存在していた。

「作戦の最終確認や！当初の予定通りに、フェイトちゃんの一発目が空から降り注いだら、リインフォースが撃ったように見せかけて、デジモン達を誘導！」

「了解です！！」

リインフォースは、はやての言葉に頷きの声を上げた。

それを確認したはやては、次に残っているメンバー達ーキャロ、リュウダモン、フリード、シグナム、ザフィーラ、スバル、ギンガに目を向け、作戦の続きを話し始める。

「残りのメンバー達は、森の木々に隠れながらゲートタワーに進行。

今回はゆっくりやなく、全速力で全員向かうんや！出来るだけ早くゲートタワーを破壊して、ＡＭＦを解除出来るかどうかが、今回の作戦の安否をにぎっとる！最悪の場合は、キャロとリュウダモン、フリードだけでもゲートタワーの前に連れていくんや！」

『了解！！』

はやての言葉にキャロ達は一斉に頷くと、それぞれバリアジャケットを装着し、合図があり次第すぐに動ける様に構えを取り出した瞬間。

ーーービィカアァァァァァァァァン！！

ゲートタワーの上空を覆っていた雷雲から次々と雷が、ゲートタワーの周りに居るデジモン達に降り注ぎ始めた。

それを見たはやてはリインフォースと共に上空に浮かび上がり、右手に持っていたシュベルトクロイツをゲートタワーに向かって構え、宣言の叫びを上げる。

「総員！！進撃や！！」

ーーービュン！！

はやてが叫ぶと共に地上に残っていた者達は一斉に目の前に存在している森の中へと飛び込んで行き、それぞれ森の木々の間を駆け抜けながら、遠くに存在しているゲートタワーに向かって進撃して行く。

それを確認したはやては、自身と一緒に残っているリインフォースに顔を向けると、リインフォースは頷き、更に空へと上昇して詠唱を始める。

「咎人達に、滅びの光を。星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ」

『ウオオォォォォォォーーーーーー！！！！！』

リインフォースが詠唱を開始し、自身の前に巨大な魔力球を作り始める中、先ほどの雷の直撃のダメージから回復したデジモン達が、次々と動き始め、遥か上空で魔力球を作り始めているリインフォースの姿を目撃する。

その膨大な魔力を次々と収束し続けるリインフォースの姿に、デジモン達は警戒の構えを行い出し、何が来ても防御出来る構えを多くのデジモン達が取る中、戦車のような体に、頭部と両手に砲塔を備えたデジモン―四体のタンクモンが森に木々を倒しながら前に進み、上空に浮かんでいるリインフォースへとそれぞれ砲塔を構え出す。

タンクモン、世代／成熟期、属性／データ種、種族／サイボーグ型、必殺技／ハイパーキャノン

戦車の姿をしているサイボーグ型デジモン。自分が得するなら、他の属性のデジモンにでも協力する“傭兵デジモン”、争いごとが大好きであっちこっちの戦いに参加しているため、とんでもないパワーと全身に備えている武器を使って、向かってくる敵すべてをアッというまに片付けてしまう強力なデジモンだ。必殺技は、頭の大砲から、超強力なミサイルを発射する『ハイパーキャノン』だ。

『ハイパーキャノン！！』

ーーードゴオオオン！！

四体のタンクモン達は同時に頭の先についている砲塔から、超強

力なミサイルを発射し、未だ上空で魔力を集め続けているリインフォースを撃ち落そうとする。
しかし、ミサイルがリインフォースにいる場所に到達する前に、その前を護っていたはやてがミサイルの前に立ち塞がり、自身の周りに発生させていた誘導弾を一斉にミサイルに向かって撃ち込んで行く。

「なのはちゃん！また、魔法を借りるわ！！アクセルシューター！！！！」

ーーードドドドゴオオン！！

はやての放ったアクセルシューターに寄って、向かって来た四つのミサイルは撃ち落され、空中で大爆発を起こした。
それを見たタンクモン達は、僅かに悔しそうな表情をして、今度は自分達のミサイルを撃ち落したはやてに向かって、ハイパーキャノンを連射する。

『ハイパーキャノン！ハイパーキャノン！！』

ーーードゴオオン！ドゴオオオン！！

「クッ！今度は八発や！リイン！！」

（任せて下さいです！操作はしっかりと行いますです！！）

自身に向かって来る八発のミサイルを見たはやては、僅かに表情を険しくするが、すぐに表情を真剣に戻し、自身とユニゾンしているリインの助力を借りながら、誘導弾の数を更に上げて、向かって来るミサイルに向かって次々と撃ち込んで行く。

ーーードゴオオオオオオオオン！！

放たれた誘導弾は、先ほどと同じようにミサイルを空中で爆発させて行く。

又しても、自分達の技が撃ち落された事にタンクモン達は怒りを深め、今度は更にハイパーキャノンを放とうと、リインフォースと、それを護るはやてにそれぞれ砲塔を構えようとするが、その前にリインフォースの魔力球が遂に完成した。

「貫け！閃光！　スターライト・ブレイカーー！！！」

ーーードグオオオオオオオオオン！！

『グオォォォォォーーーー！！』

リインフォースが詠唱を終えると共に放ったスターライトブレイカーは、地上に存在していたタンクモン達に直撃し、タンクモン達は苦痛の叫びを上げながらデータ粒子へと変わり、デジタマに戻っていた。

それを確認したはやては、すぐさま後方で１０８部隊の隊員達と一緒にフェイトの見張りをしているシャマルに念話を送る。

（シャマル！！『旅の鏡』を使って！今のデジタマをすぐに回収！映像の映し変えも、ロングアーチに連絡するんや！）

（了解よはやてちゃん！）

（・・・・・フェイトちゃんの様子はどないや？）

（今の所は前線に出られ無い事を悔しがっているけど、落ち着いているわ）

（見張りはそのまま続行。怪しい動きをしたら、すぐにオーリス三佐かゲンヤさんに連絡を取って、対策を考える様に。今のフェイトちゃんは危険やさかいな）

（分かったわ。気をつけて）

シャマルは、はやての言葉に頷くと念話を解除する。

それを確認したはやては、僅かに親友で在るフェイトを疑う行動した自身に嫌悪を覚えるが、その感情をすぐさま振り払い、地上へと目を向けて見ると、森の中から首の長い恐竜のブラキオザウルスを思わせるデジモン－ブラキモンと、蜂のような顔と体に、肩に推進器を備えたサイボーグ型デジモン－三体のワスプモンがはやてとリインフォースを睨んでいた。

ブラキモン、世代／完全体、属性／データ種、種族／首長竜型、必殺技／ブラキオバブル

ブラキオサウルスの姿をした恐竜型デジモン最大級のデカさの首長竜デジモンだ。とても長い首を持っていて、いつも高いところから地面を見下ろしている、そのため目で見ることのできる場所が広く、大地の果てまでも見えると言われている。本来の性格はとてものんびりしていて、平和主義者なため、むやみに攻撃してくることはない。必殺技は、破裂すると地響きするほどの衝撃が起こるバブル上の炸裂弾を口から発射する『ブラキオバブル』だ。

ワスプモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／サイボーグ型、必殺技／ターボスティンガー、ベアバスター

空中秘蜜基地“ローヤルベース”に生息する蜂の姿をしたサイボー

グ型デジモン。非常に優れた感度を持つ頭部の触覚パーツを使って常に基地周辺を巡回する。近づくもに対して容赦なく襲い掛かる危険なデジモン。肩の推進器と背中のスタビライザーによる上下前後左右と移動性能にも優れ敵の攻撃を素早く回避する事も可能な能力を持っている。必殺技は、尾に搭載された大口径のレーザー砲を敵に向かって連射する『ターボスティンガー』に、尾に搭載されたレーザー砲から毒の光線を放つ『ベアバスター』だ。

「・・・・・ブラキモンまで」

首を長く伸ばし、憎しみの視線をはやてとリインフォースに向けているブラキモンの姿に、はやては悲しみの声を出した。

はやては既に自身のディーアークに寄って、今回の敵のデジモン達の情報を全て知っている。

当然ながらその中には、ブラキモンの情報も存在し、本来のブラキモンは穏やかでのんびりした性格であり、争いを好まない平和主義者のデジモンで在る事もはやては知っていた。

しかし、今、はやての目の前に存在しているブラキモンは顔を憎悪に染め、怒りと憎しみだけしか存在していない瞳をはやてとリインフォースに向けていた。

「・・・・・赦さない。私は赦さない！私達の故郷を奪った者達を、絶対に赦さない！！」

「・・・・・・・・ほんまに私らは最低な連中やな」

「主・・・・・」

（はやてちゃん・・・・・）

はやては本当は穏やかな筈のブラキモンが憎しみに染まった原因を分かっていた。
全ては自分達一管理局の行いのせい。そのせいで本当は優しい筈のデジモン達さえも、憎しみに染まってしまったのだ。その事をはやてはブラキモンの姿を見て、改めて理解した。
しかし、それでもはやては止まる訳にはいかない。自身のパートナーで在るレナモンとの誓いの為にも、此処で立ち止まる訳にはいかない。その思いを胸に抱きながら、はやてはシュベルトクロイツを強く握り締める。

ーーーギュッ！

「・・・・・リインフォース。リイン。行くで。絶対に私らは立ち止まれへんのや。憎しみの声を聞いても、私らは先に進む！！攻撃開始や！！」

「ハイッ！」

（分かりましたです！！）

リインフォースとリインは、はやての言葉に応じると、はやてと共にブラキモン、ワスプモン達に向かって飛び掛り、戦いを始めるのだった。

深い森の中。木々によって道が阻まれている森の中を、はやて達と別れた、キャロ、リュウダモン、フリード、シグナム、ザフィーラ、スバル、ギンガは木々の間を駆け抜け、遠くに存在しているゲートタワーに向かっていた。

「キャロ。リュウダモンが進化するのは、もう少し先の場所だ。出来るだけ、私達の事は気づかれないようにしたいからな」
「分かっています。囮に成ってくれた八神部隊長と、リインフォース隊長の為にも、限界ギリギリまで進化をしません」
「俺の進化体は巨体だからな。進化したら、一発で居場所がばれちまう。全くよぉ。こう言う時は、進化するにしても、小さな体の方が良いぜ」

キャロとリュウダモンは、シグナムの言葉にそれぞれ答えた。
リュウダモンの進化体、ギンリュウモンは確かに強力なデジモンだが、その代わりに巨体な為に、一度現れれば隠れる事が出来ないのだ。前回の時も早い段階で進化する事は出来たが、途中に存在しているデジモン達に狙い撃ちにされてしまう可能性が高かった為に、ギリギリまで進化を行えなかったのだ。相手は一体ではなく、何体も存在しているデジモン達。
その相手に対して、一体のデジモン程度は、究極体で無ければ勝つ事など不可能。究極体への進化を会得しているキャロとリュウダモンならば、本来は可能だが、本局の横槍の事を考えると出来るだけ究極体にだけは進化はしたくなかった。
最も本当に危機が迫れば、キャロとリュウダモンは自己判断で究極体に進化する事を、レジアスとオーリスから許可されている。それだけの信頼をキャロはレジアス達に持っているのだ。
そしてそのまま無言でキャロ達は前へと走り続けるが、突如としてギンガは表情を険しくし、辺りに木々を注意深くを見つめると、左手のリボルバーナックルをカートリッジロードし、一つの気に向かって衝撃波を撃ち込む。

「そこッ！！リボルバーショット！！」

ーーードグオオン！！

「チィッ！！」

ギンガが放ったリボルバーショットが木に当たろうとした瞬間に、木から舌打ちの声が響き、木の影から影が飛び出し、向かってくるリボルバーショットをかわしすと、近くの木の枝の上に着地し、犬のような顔立ちに、両肩の部分から刃を生やして、右手にナイフを構えたデジモン―シールズドラモンがギンガ達を見始める。

シールズドラモン、世代／成熟期、、属性／ウィルス種、種族／サイボーグ型、必殺技／デスビハインド、スカウターモノアイ
機械化旅団『Ｄ―ブリガード』に所属するサイボーグ型デジモン。『セレクション―Ｄ』と呼ばれる特殊選抜試験に合格した１００体の中の１体のコマンドラモンだけが進化することができるといわれている。暗殺任務を得意とする精鋭で、武器や迷彩能力に頼らず、体術のみで戦う。その身体能力は計り知れず、その動きは目視で捕らえることは不可能。必殺技は、研ぎ澄まされたナイフで一撃で相手を殺す『デスハインド』に、瞬時に敵の急所を計測する『スカウターモノアイ』だ。

「これは驚いた。まさか、私の姿を発見出来る者が人間などの中に居たとは。プライドが傷付いたぞ」

「それは残念だったわね」

シールズドラモンの言葉に、ギンガは嘲る様な声を出し、シールズドラモンは顔を歪め始める。

その姿にギンガは、完全に自身がシールズドラモンの標的に成った事を確信し、シグナムに念話を送る。

（シグナム副隊長。此処は私に任せて下さい。一体だけなら、私一人でも抑えられます）

（・・・・・分かった。此処は頼むぞ）

（はい！）

ギンガはシグナムの念話に答えると、瞬時に木の上に立ち続けているシールズドラモンに向かって構えを行い出し、その隙にシグナム達は先へと進んでいく。

しかし、此処でギンガの予想外の事に、シールズドラモンは先へと進み続けるシグナム達には全く目を向けず、ただギンガを一人を見つめていた。てっきり邪魔が必ず来ると思ったギンガは僅かに疑問の表情をするが、構えは解かずに訝しげな視線をシールズドラモンに向ける。

「どういう積もりなの？この先には貴方達、デジモンがこの世界に来る為に必要な物が在るのに？私の仲間達を行かせるなんて？」

「フッフッフッ、答えは簡単だ。私達には負けはない。何故ならば、私達にはあの方々がついているのだ！！」

「あの方々？」

ギンガはシールズドラモンの言葉に訝しげな表情を浮かべた。

今回の作戦に当たって、ギンガ達は出来るだけゲートタワーの周りに存在しているデジモン達の情報を集めた。その結果、前回と同

じように今回も指揮者になりそうなデジモンは存在しないと判明し、この場所の重要性を考慮して、地上本部はこの場所のゲートタワーを破壊するように命じたのだ。だが、今のシールズドラモンの言葉を考えるに、指揮者に成りえるデジモンが存在していると言う事に成る。

（どう言う事なの？ロングアーチからの情報では、二日前からデジモンの転送も起きていないって言う話なのに、指揮者のデジモンが存在している？・・・・・・完全体が究極体に進化したって情報も存在していないし、それにあの方々？複数の指揮者なんて、デジモンにはありえないわ）

デジモンの多くは自分達の実力に自負を持っている。

そのせいも在って、多くのデジモンがゲートタワーから現れようと、統率して動く事は殆ど無いのだ。

自分達よりも下の実力者に就くなど、自分の実力に自信がある者からすれば、許し難い事だ。究極体のデジモンならいざ知らず、ゲートタワーから現れる最高ランクは完全体。その為にデジモン達は一緒には行動しても、作戦などは考える事はなく思いのままに動いている実力に頼った烏合の衆団に近いのだ。そのおかげも在って、前回の作戦の時は上手く機動六課の作戦に嵌まったのだ。

しかし、もし指揮者がデジモン達に加われば、それだけで作戦の難易度は一気に上に上がってしまい、ギンガ達の作戦も読まれてしまう可能性も高くなる。

其処まで考えたギンガは慌てて、シグナム達が向かった方に目を向ける。

（不味い！！全部罠だ！！私達の作戦は全部知られてしまっている！！クッ！！すぐに連絡を取らないと！！）

作戦が知られていた事に気がついたギンガは慌てて、その場から離れ、念話を送れる場所に向かおうとするが、その前にシールズドラモンが立ち塞がり、右手に持ったナイフをギンガに向かって振り下ろす。

「フッ！！」

ーーーブン！

「クッ！！」

シールズドラモンの一撃を、ギンガはバーストキャリバーのローラーを回転させる事で避け、シールズドラモンに向かって拳を放つ。

「ハアッ！！」

「フッ！」

ギンガの放った拳をシールズドラモンは後方に飛ぶ事でかわし、そのまま上に向かって飛び上がると、近くの木の枝に着地する。

ーーースタッ！

「悪いが時間稼ぎには付き合って貰う。あの方々の考えた作戦の遂行の為にも！！」

ーーービュン！

「このッ！！」

飛び掛って来たシールズドラモンに向かって拳をギンガは放つが、シールズドラモンは防戦に徹する事でかわし続け、ギンガをその場から一歩も動けないようにするのだった。

一方。、その様な事態にギンガが成っている事も知らずに先を進めるシグナム達も、徐々に違和感を覚え始めていた。本来ならば数多く存在しているデジモン達の姿が、視界の中に全く映らないのだ。

「・・・・・おかしいです。これだけ近づいてもデジモン達が、私達に気付かないなんて、在りえないです」

「あぁ、気配を読む事にデジモン達は成れている。にも、関わらずに、俺達の所にデジモンが来ないのは」

「罠の可能性が在ると言う事だな？」

キャロとリュウダモンの言葉を聞いていたシグナムが二人に質問すると、二人は同時に頷き、シグナム、ザフィーラ、スバルは表情を険しくする。

既にゲートタワーにかなりキャロ達は近づいていると言うのに、襲って来たデジモン達はシールズドラモン一体と、はやて達が戦っているデジモン達だけ。作戦開始前に調べていたデジモンの数の違いに、キャロ達は自分達が罠に飛び込んだ事を確信していた。

ならば、隠れて進む理由は無いと判断したキャロは、バリアジャケットの中からディーアークを取り出し、リュウダモンと顔を見合わせる。

「・・・・・罠なら、もう隠れる意味は無いです！リュウダモン！

！」

「おうよ！！」

《ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

キャロの叫びにリュウダモンが応じた瞬間に、ディーアークから音声が響き、リュウダモンの体は蒼いデジコードに包まれ、その中から額にインターフェースをつけ、四足歩行の獣竜ーギンリュウモンがその姿を現す。

「リュウダモン進化！！ギンリュウモン！！」

「乗って下さい！こうなったら、全速力で目的の場所に向かいます！！」

「分かった！」

「了解だ！」

「ＯＫ！！」

ギンリュウモンの背に乗ったキャロの叫びにシグナム、ザフィーラ、スバルはそれぞれ応じるとすぐさま、ギンリュウモンの背に乗っかる。

全員が乗るのを確認したキャロは全員に向かって頷き、ギンリュウモンに声を掛ける。

「全速力で向かって！！」

「了解だぜぇ！！！」

ーーービュウン！！

ギンリュウモンはキャロの言葉に応じると、すぐさま森から飛び立ち、凄まじいスピードでゲートタワーに向かって進み続ける。

しかし、もうすぐ辿り着くと思われた瞬間に、横合いから二本の炎がギンリュウモンに向かって来る。

「ファイヤーブレスッ！！」

「メガフレイムッ！！」

ーーードグオオオオオン！！

「やべぇっ！！」

自身に向かって迫り来るファイヤーブレスとメガフレイムに気がついたギンリュウモンは慌てて急上昇を行い、空へと舞い上がると、炎が放たれた方向に目を向け、赤い体に緑色の背びれをつけた恐竜型デジモン―ティラノモンと、青黒い体色に頭部に甲殻の兜をつけたデジモン―グレイモン（青）を発見する。

ティラノモン、世代／成熟期、属性／データ種、種族／恐竜型、必殺技／ファイヤーブレス

ティラノサウルスの姿をした恐竜型デジモン。力は強いが性格はおとなしい。グレイモンと同様に賢いデジモンなので手懐けやすい。しかし戦いになると闘争本能が目覚め全力で相手に向かっていく。必殺技は、強烈な火炎を口から吐き出し、相手を焼き尽くす『ファイヤーブレス』だ。

グレイモン（青）、世代／成熟期、属性／ウィルス種、属性／恐竜型、必殺技／メガフレイム
ウィルス種に進化し、青黒い体色になったグレイモン。ワクチン種に比べ更に性格が荒くなり、凶暴になったが、知性は無くなっておらず、仲間と連携して相手を仕留めるぞ。必殺技は、超高熱の火炎を口から吐き出し、全てを焼き払う『メガフレイム』だ。

「チィ！やっぱり、罠でも少しは抵抗が在るみたいだな！！」

「・・・・・シグナム。此処は私が行こう」

「・・・・・無事に戻って来るのだぞ。盾の守護獣」

「フッ！」

シグナムの言葉にザフィーラは微かに笑みを浮かべると、ギンリュウモンの背から飛び降り、ティラノモンとグレイモン（青）に向かって飛んで行く。
そしてその後姿を見つめていたスバルも、微かに笑みを浮かべながらキャロに声を掛ける。

「キャロ。ゲートタワーの事は頼んだよ。私もザフィーラさんと一緒に、あいつ等を倒したらすぐに援護に行くからさ」

「・・・・気をつけて下さいスバルさん。どんな罠が在るのか、分からないですから」

「大丈夫だよ。さて、ウイングロード！！」

ーーーシュウン！！

スバルが叫ぶとスバルの前に青い道ーウイングロードが出現し、スバルはその上をブーストキャリバーで走って行き、ザフィーラと共にティラノモン、グレイモン（青）に攻撃を開始し始める。

その姿に残されたキャロ、ギンリュウモン、フリード、シグナムは僅かに表情を悲しげに染めるが、すぐに表情を真剣に戻し、ゲートタワーに向かって全速力で飛んで行った。

その頃。離れた所の線路の護衛を行っていたフェイト、シャマル、そして数名の１０８部隊は、ロングアーチから知らされる情報に全員が表情を険しくしていた。

『最悪な事だが、殆どのデジモンどもはゲートタワーの周りにはいねぇ。主戦力と言える連中が居るのは、線路の外側だ！お前達や八神達が戦っている場所を包囲する様に陣形を固めていやがる！』

「それじゃ、私達は完全に包囲されていると言う事なんですか？」

『残念ながらその通りです。既に貴方達を除いた１０８部隊の者達全員とナイトチェスモンを向かわせて、陣形に穴を開けて退路を確保出来る様にしようとしていますが、例のキツネのようなデジモンの援護を受けても、包囲網には穴が開きそうにありません。状況はかなり厳しいです。全滅の可能性も出て来ています』

『・・・・・・・』

オーリスの報告にその場に居た全員が表情を険しくする。

今回の機動六課の作戦は全部デジモン側に知られていた。今の状況を推察するに、それ以外考えられないのだ。しかも、未だゲートタワーの周りには高密度のＡＭＦが存在している為に、このまま包囲網を狭まれて行けば、遠からず全ての者達がＡＭＦが展開されている場所に入り込む事に成る。そうなれば、魔力の高い者達を除いた全員が魔法を使用する事が出来なくなり、デジモン達の一方的な蹂躙が始まるだろう。

『デジモン側には完全に指揮者が存在しています。何者かは分かりませんが、短時間でこれほどデジモン達を従えた事を考えると、強敵なのは先ず間違い無いでしょう』

「・・・・・・オーリス三佐。私の前線への参戦許可を出して下さい」

『・・・・・・駄目です。貴女の前線への投入だけは絶対に認められません』

フェイトの提案にオーリスは少し悩むような表情をするが、フェイトを前線に出した場合の状況を予測し、すぐにフェイトの提案を否定した。

確かに状況的に言えば、フェイトを前線に出すべきなのだが、それはフェイトの精神が万全だった場合だ。今のフェイトを前線に出すなど、核爆弾を味方が居る場所に撃ち込むのと同意義。

その事が充分すぎるほど分かっているオーリスやゲンヤは、フェイトだけは前線に出す訳にはいかないと思い、再度念をおすように伝えようとするが、その直前に地面から声が響く。

「おいおい。そいつは困るぜぇ。その女が前線に出てくれねぇとよう」

『ッ！！！』

ーーーガラガラガラッ！！

地面の中から聞こえて来た声に、フェイト達だけではなく、通信を行っていたオーリス達も目を見開き、慌ててフェイト達が周りの地面を見回してみると、一箇所の地面が突如として盛り上がり、その中から頭に赤い帽子を被り、ゴブリンのような顔立ちしたデジモン一土の闘士一グロットモンが姿を現した。

「へへへへへへッ！！漸く見つけたぜ！フェイト・テスタロッサ！！」

「ッ！！どうして私の名前を！？」

フェイトはグロットモンが自身の名前を知っている事に、心の底から驚いた。

会った事も無い筈のグロットモンが、フェイトの名前を知っていたのだから、驚くのも当然だろう。

しかし、グロットモンはフェイトの質問には構わず、今度は注意深くグロットモンの姿を観察しているシャマルに指を向ける。

「お前だけじゃねえよ。確かそっちは湖の騎士のシャマルだったな？」

「私の事も知っているの！？」

「あぁ、良く知ってるぜ。まぁ、今はそれよりもだ」

グロットモンはシャマルの質問に素っ気無く答えると、再びフェ

イトに顔を向け、意地悪そうに顔を歪め始める。

「へへへへへッ！！フェイト・テスタロッサ！ゲートタワーに早く行った方が良いぜ。何せあのゲートタワーには、テメエのパートナーデジモンが縄で縛り付けられているんだからよ！！」

「ッ！！！」

グロットモンが告げた事実にフェイトはこれ以上に無いほどに目を見開き、慌てて遠くに存在しているゲートタワーの方を見つめた。

その姿にグロットモンはますます顔を意地悪そうに歪め、心の底から今の状況を楽しんでいると言うようにフェイトに声を掛ける。

「早く行かねぇとよ。お前のパートナーデジモンは死んじまうぜ。お前の仲間の攻撃に寄ってな。因み言って置くが、俺様は嘘は一言も言ってねぇぞ。信じる信じないは、テメエの勝手だがな！あばよ！！」

ーーーガラガラガラッ！！

「アッ！！」

再び地面へと潜って行ったグロットモンの後を追おうと、シャマルと１０８部隊の者達はグロットモンが掘った穴の中を覗き込むが、穴は深く先さえも見えないほど闇が広がっていたので、追うのを断念させるえなかった。

しかし、フェイトはそんな事には一切構わずに遠くに見えるゲートタワーを険しい表情で見つめ続け、その様子をモニターから見ていたオーリスは慌ててフェイトに声を掛ける。

『フェイト執務官！貴女はその場で待機のままです！絶対に動いては行けません！！』

「・・・・・・ブイモンが・・・・・・あそこいる・・・・・・ブイモンが、ブイモンが！！」

『ッ！！その場にいる全員！フェイト執務官を確保して下さい！実力行使も認めます！！』

『了解です！！』

オーリスの命令のシャマル達は即座に頷き、フェイトを拘束する為にバインドを放とうとするが、その前にフェイトがポツリと呟く。

「・・・・・バルディッシュ、ライオット。オーバードライブ、真・ソニックフォーム」

《Ｇｅｔ　ｓｅｔ．Ｓｏｎｉｃ　Ｄｒｉｖｅ．》

フェイトが呟くと共にバルディッシュは一本の片刃の長剣ーライオットモードへと変形し、フェイトのバリアジャケットも限界まで防御力を削ぎ落とした真・ソニックフォームへと変化した。

その事にシャマル達はますます慌てた表情をして、すぐさまフェイトを拘束しようとするが、その前にフェイトがシャマル達に右手を向け、雷撃を撃ち出す。

「邪魔をしないで！！プラズマスマッシャーー！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオン！！

「キャアァァァァァァーーーー！！」

『ウアァァァァァァァァーーーーー！！！』

まさか、フェイトが仲間にさえも、プラズマスマッシャーを放つとは思ってなかったシャマル達は、プラズマスマッシャーを避ける事が出来ずに直撃し、全員が地面へと倒れ付す。

その様子をモニターから見ていたオーリスとゲンヤは信じられないと言う表情をして、シャマル達に攻撃を放ったフェイトの姿を見つめる。この状況で、しかもどう考えても罠としか思えないグロットモンの言葉にフェイトは動き、仲間にさえも攻撃してしまった。完全にフェイトの心は闇に堕ちてしまったと、オーリスとゲンヤは分かったのだ。

「・・・・・ブイモンが・・・・・・私の家族があそこにいる・・・・・・待っていて・・・・すぐに迎えに行くから！！」

ーーービュン！！

フェイトは呟くと共に自身の出せる限界のスピードを持って、ゲートタワーへと急ぎ向かい出した。

その姿を見たオーリスとゲンヤは、慌ててはやて達に連絡を取るように命じ、“フェイトが暴走した”と、通信が繋がった者達全員に告げるのだった。

ゲートタワーが聳え立つ森の上空。その場所に漸く到着したキャロ、ギンリュウモン、シグナム、フリードは辺りを警戒し続け、ゆっくりとゲートタワーに近づいて行く。今までの状況から考えるに、

何か罠が隠されているのは間違いないと判断し、慎重に動いているのだ。

「・・・・・やっぱり嫌な予感がなくならねぇよ」

「うん。とにかく先ずはゲートタワーに近づこう」

ギンリュウモンが呟いた言葉にキャロは同意を示し、シグナムとフリードと共に慎重に辺りを警戒しながらゲートタワーへと近づいて行く。

「・・・・せぇ」

「エッ？」

「アン？」

「ムッ！」

「キュル？」

ポツリと聞こえて来た声に、キャロ達は僅かに疑問の表情を浮かべ、注意深く辺りを見回すとゲートタワーに括り付けられるように縛られている額にVの字が書かれ、体の色が青いデジモン－ブイモンの姿を発見する。

「クソッ！！俺を此処から離せよぉ！！！」

「ッ！！アレは！ブイモン！！」

『ッ！！！』

ブイモンの姿を発見したシグナムは驚愕に目を見開ながら叫び、キャロとギンリュウモン、フリードも目を見開いてブイモンを見つめる。

既にキャロ達もフェイトのパートナーデジモンがブイモンで在る事を知っている。

だが、そのブイモンはなのは達に攫われ、行方不明になっている。では、ゲートタワーに括り付けられているブイモンは、同種族の別のデジモンなのではと思い、キャロ達が注意深くブイモンの姿を見つめ始めると、ブイモンがキャロ達に気がつき、シグナムに声を掛ける。

「シグナムッ！！おい！シグナムだろう！？」

「やはりブイモンなのか！？どうしてその様な場所に居るのだ！？」

シグナムはブイモンの叫びに、間違いなくフェイトのパートナーであるブイモンだと確信した。

しかし、それならば疑問が生まれてしまう。なのは達に連れ去られた筈にブイモンが何故この場所に、しかもゲートタワーに縛り付けられているのか？

なのは達がその様な事をする理由は存在しない。では、何故ブイモンがこの場に居るのかと、シグナム達が考え込み始めると、背後の木から声が響く。

「それは私達が連れて来たからだよ。烈火の将シグナムよ」

『ッ！！！』

突如として背後から聞こえて来た声に、シグナム達は驚きの表情を浮かべ、背後を見てみると、四つの木の頂点に、メルキューレモンとラーナモン、そして木のカラクリ人形のような姿をし、体の中心に口のような穴を持ったデジモン『木』の闘士ーアルボルモンが三つの木の上の存在していた。

そして最後の木の上には、両肩と胴体に目のような形をしたもの七つを備え、黒い鎧で体を覆ったデジモンー『闇』の闘士ーダスクモンが立っていた。

アルボルモン、世代／ハイブリット体、属性／バリアブル、種族サイボーグ型、必殺技／機銃の踊り～マシンガン・ダンス～
伝説の十闘士『エンシェントトロイアモン』の力を受け継いだ『木』の属性を持つヒューマンスピリット体のサイボーグ型デジモン。木製カラクリ人形の設計図データから誕生したといわれている。トリッキーな動きで敵を翻弄する。必殺技は、トリッキーに動きで、相手の思わぬ方向からキックを繰り出す『機銃の踊り～マシンガン・ダンス～』だ。

ダスクモン、世代／ハイブリット体、属性／バリアブル、種族／魔人型、必殺技／ガイストアーベント、エアーオーベルング、エアーオーベルングストーム
伝説の十闘士“エンシェントスフィンクモン”の力を受け継いだ『闇』の属性を持つ人型デジモン。デジモンの無念が集まり、闇のエネルギーへと化した状態。真の邪悪は三つ首と七つの目玉に封じ込められているという。両手には妖刀『ブルートエボルツィオン』を装着している。必殺技は、鎧に備わっている目玉から黒い閃光を放つ『ガイストアーベント』に、『ブルートエボルツィオン』を使って敵の力を吸い取る『エアーオーベルング』。そして自分の周り広範囲に竜巻を発生させ敵の力を吸収する『エアーオーベルングストーム』だ。

「お前達は何者だ！？何故ブイモンがお前達と共にいる！？」
「二つ目の質問は答えた筈だ。そのブイモンは私達が連れ去って来た。そして私達の正体だが、私達は『十闘士』だっ！！！」
「十闘士だと？」

メルキューレモンの言葉にシグナムは疑問の声を上げた。
シグナムの知る限り、今回のゲートタワーの周りにデジモン達の中には、『十闘士』と言う称号を持つデジモンは存在していなかった。では、新たに現れたデジモンなのかと思い、ディーアークを持っているキャロに情報を聞こうとするが、既にキャロはディーアークからメルキューレモン達の情報を読み取り、体を恐怖に震わせていた。
「『十闘士』・・・・・デジモン達の中でも、伝説の存在ーエンシェントデジモン達の力を受け継いだ闘士達です」
「ッ！！伝説の存在の力をだと！？」

キャロが告げた事実に、シグナムは驚愕に目を見開き、険しい視線をメルキューレモン達に向ける。
デジモンの中でも伝説と呼ばれる者達の力を受け継いでるとなれば、目の前に存在しているメルキューレモン達の実力も高いと言う事だ。
しかも、どう考えてもメルキューレモン達が味方だと思える状況ではなかった。ブイモンをゲートタワーに縛り付けている事と、デジモン達の統制の取れた動き。伝説の存在が力を貸しているとなれば、全てが納得の行く状況だった。それが意味するのは一つ、“メ

ルキューレモン達は敵だと言う事だ”
　それが分かったシグナム、キャロ、ギンリュウモン、フリードは警戒の構えをメルキューレモン達に向かって取り出し、その様子にメルキューレモンは面白そうな顔をする。

「フフフフッ！気がついたか。そう！私達は人間を全て滅ぼす為に動いているのだ！！人間と言う傲慢で、欲望に塗れた存在など！世界には必要ない！！人間を全て滅ぼし、デジモンだけの世界を創る事こそが、デジモンの真の平穏に繋がる！！私達はその為に蘇ったのだ！！」

「そうよね～。人間なんて最低な連中がいれば、デジモンには平和はないわ」

「デジモンだけの世界を創る」

「その為に、俺達は蘇り、全ての人間を滅ぼす事を選んだ」

　メルキューレモン、ラーナモン、アルボルモン、ダスクモンはそれぞれ自身の意見を告げた。
　その言葉にシグナムは表情を険しくする。また、一つ管理局の行いのせいで、強力な力を持ったデジモン達が敵に回ってしまった。その事実はただでさえ最悪な状況が、悪化してしまった告げられたと同意義なのだ。
　しかし、キャロとギンリュウモン、そしてフリードは、シグナムとは違って訝しげな視線をメルキューレモン達に向けていた。違うと思ったのだ。自身も嘗て憎しみに染まり、憎しみに染まって行動していたデジモン達と戦ったキャロ達には、メルキューレモン達が憎しみだけ動いているようには見えなかった。
　何か別のものを見て、人間に完全に失望した為に、人間を滅ぼす

道を選んだ。
キャロ達には、そうとしかメルキューレモン達の姿が見えなかったのだ。
その考えをシグナムに伝えようとキャロは声を掛けようとするが、その前にダスクモンが木の上から飛び上がり、ギンリュウモンに向かって両手に持った妖刀『ブルートエボルツィオン』を全力で振り下ろす。

「ムンッ！！」

「クッ！！」

ーーーガキィィィン！

ダスクモンの攻撃がギンリュウモンに直撃しようとした直前に、シグナムが飛び出し、ダスクモンのブルートエボルツィオンを右手に持ったレヴァンティンと、左手に持った鞘で受け止め、二人は空中で鍔迫り合いを始めるが、徐々にシグナムが押され始める。

ーーーギィィギィ！

「クッ！（何と言う力だ！！これほどの力を持つ者がいるとは！！）」

「止めておけ。貴様では数百年かかっても、俺には勝てない。俺は貴様の全てを知っているのだからな」

「なっ！それはどう言う…」

ーーードゴオオン！！

「グフッ！」

質問の声を上げようとしたシグナムに向かって、ダスクモンは無言で膝蹴りを叩き込み、シグナムは遠くへと吹き飛んでいった。

ダスクモンはそれに対しても無言でシグナムの後を追いかけ始め、キャロ、ギンリュウモンは慌ててシグナムの救援に向かおうとするが、その前にキャロの肩に雨粒が落ちて来る。

ーーーポタッ！

「エッ！？・・・・・雨？」

肩に落ちて来た雨粒にキャロは僅かに声を出し、頭上を見上げた瞬間に雨が大量にキャロ達に降り注いで来る。

ーーーザザザザザザザザッ！！！

「キャッ！！どうして急に雨が！？」

「グガアアアッ！！」

「ッ！！ギンリュウモン！？」

突如として苦痛の声を上げたギンリュウモンの姿に、キャロは悲鳴のような声を上げ、ギンリュウモンに質問しようとするが、その前にキャロとフリードにも異変が置き始める。

ーーードスンッ！！

「アッ！・・・・・・ウッ！重い・・・・・・雨が凄く重い」

「キュル～～・・・・・・・」

大量に降り注ぎ続ける雨にキャロ達は凄まじい重量を感じ、徐々にギンリュウモンの高度は下がって行き、地面へと倒れ付してしまう。

その姿を見ていたラーナモンは笑みを浮かべ、メルキューレモンに声を掛ける。

「言われたとおり、一番厄介な敵の動きは封じたわよ」

「流石だなラーナモン」

「水の闘士の称号を持つだけの事は在る」

ラーナモンの言葉に、メルキューレモンとアルボルモンは笑みを浮かべながら賞賛した。

キャロ達の地面に倒れ付しているのは、その頭上から降り注ぎ続ける雨ーラーナモンの必殺技ーレインストリームのせいだった。本来ならば一体しか対象に出来ない技なのだが、キャロとフリードはギンリュウモンの背に乗っていた為に、巻き込まれてしまい、大量に降り続けるレインストリームに寄って地面に押さえ付けられてしまったのだ。

「でもぉ～良いの？一番厄介な敵なんでしょう？殺した方が後々の為に成ると思うんだけどぉ～？」

「何。これから起きる事を見れば、あのデジモンも人間に失望するやも知れない。ルーチェモン達との決戦の時の為にも、デジモン側

の戦力を減らすのは得策ではないのだ」

「ググッ、俺はキャロの家族だ・・・・・テメエらに・・・・・協力する気はねぇぞ」

「フッ！その考えもこれから起きる事を見れば、変わるだろうな。人間の欲望に寄って進化したデジモンの姿を見ればな」

『ッ！！！！』

メルキューレモンが告げた言葉に、キャロ達は目を見開き、顔を上げるのも難しい状況ながらも、縄から抜け出そうと暴れ続けているブイモンの姿を視界におさめ、メルキューレモン達の狙いに気がついた。

しかし、気がつく事は出来ても体の自由はレインストリームに押さえられ続け、指一本動かす事は出来なかった。

その様子にメルキューレモンは残忍な笑みを浮かべながら、未だに暴れ続けているブイモンに声を掛ける。

「喜べブイモンよ。貴様の求めているパートナーが来たぞ」

「えっ！？」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

メルキューレモンの言葉にブイモンが目を見開いた瞬間に、キャロ達のすぐそばの木々が金色の閃光に寄って吹き飛び、それに寄って出来た道を、右手にライオットブレードを持ち、バリアジャケットを真・ソニックフォームに変えたフェイトがゆっくり歩いて来て、メルキューレモン達に構えを取り出す。

「フェイトッ！！」

「・・・・ブイモンを帰して貰う。邪魔をするなら、私はお前達を殺す！！」

フェイトの姿を目撃したブイモンは喜びの声を上げ、フェイトはブイモンへと僅かに笑みを向けるが、すぐに表情を冷徹に変え、右手に持ったライオットブレードに魔力を注ぎながらメルキューレモンに向かって叫んだ。

そのフェイトの黒く、闇に満ちた表情に、メルキューレモンは自身の作戦が上手く行っている事を確信し、地面に声を掛ける。

「グロットモンよ。約束どおりに、好きにして構わないぞ」

ーーーガラガラガラッ！！

「へへへへへッ！！待ってたぜ！」

地面から出て来たグロットモンはメルキューレモンの言葉に喜びの声を上げると、右手にグロットハンマーを持ち、フェイトに向かって構え出す。

その姿にフェイトは完全にグロットモン達を敵として認識し、右手に持ったライオットブレードを力強く握り締めると、一切の躊躇いもなくグロットモンに向かって斬りかかる。

「邪魔をするなアァァァァァーーーー！！」

「へへへへへッ！！絶望の始まりだぜェェェェェェーーーー！！」

ーーーガキィィィィィィィィィィン！！

フェイトの斬撃に対して、グロットモンもグロットハンマーを振るい、二人は死闘を開始するのだった。

その様子を見ていたキャロは押しかかって来る雨に苦しみながらも、フェイトの方に顔を向ける。

「・・・・いけない・・・・・・・・フェイトさん・・・・・戻って・・・・・このままだと・・・・・・ブイモン君が・・・・・・“死んでしまう”！！！」

鬼気迫る表情を浮かべて戦うフェイトに、キャロは苦しみながら声を出すが、もはやフェイトの耳にキャロの声が届く事は無かった。

真の悲劇が始まるまで、後もう少しなのだった。

悪の五闘士！！（後書き）

次回予告

ブイモンを助ける為に、グロットモンへと挑む。

フェイトの優勢に進む中、グロットモンは突如としてその姿を獣に変え、フェイトを圧倒する。

自身の力の無さにフェイトが絶望した時、黒く塗り潰れたディーアークが黒く輝く。

次回、漆黒の竜人と少女、『暴走！！暗黒進化の恐怖！伝説の聖竜の咆哮！！』

黒き姿の聖竜が現れる時、命が消えて行く。

暴走！！暗黒進化の恐怖！伝説の聖竜の咆哮！！

深い森と崖が存在し、幾つもの線路が並んでいる場所。
その場所でナイトチェスモンと１０８部隊の局員達、そして救援に来たキュウビモンは、目の前に存在しているデジモン達ー全身を貴金属で覆い、体から幾つもの青と赤のコードを露出させ、両手に三本の爪をはやした恐竜ような姿をしたサイボーグ型デジモンー二体のメタルティラノモンや、両肩から巨大な角をはやし、肩の部分に星と髑髏の刺青を持った二足歩行の恐竜型のデジモンー三体のタクスモンを相手に戦い続けていた。

メタルティラノモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／サイボーグ型、必殺技／ギガデストロイヤー？、ヌークリアレーザー
強力なパワーを身につけるために、ティラノモンが体を改造したサイボーグ型デジモン。対空用に改造された『メガドラモン』に続き、メタルティラノモンは対地用迎撃デジモンとして改造された。強化されたボディーはあらゆる攻撃を跳ね返し、強靭な顎でどんなに硬い装甲でも砕いてしまう凄まじい攻撃力をもつ。必殺技は、右手からは有機体系のミサイルを放つ『ギガデストロイヤー？』と、左手からは強力なレーザーを発射する『ヌークリアレーザー』だ。

タスクモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／恐竜型、必殺技／パンツァーナックル、ホーンドライバー
両肩から巨大なツノを生やした恐竜型デジモン。目の前のものを破壊して突き進んでいくところから、“パンツァーデジモン”と呼ばれている。両腕にある☆マークは今までに倒したデジモンの数（☆１個につき１００匹）を表す。ツノは折れてもすぐ生えてくるため、折っただけではまったく勝ち目はない。必殺技は突進の勢いを加えた重たいパンチ『パンツァーナックル』と。両肩の巨大な角で相手

を突き刺す『ホーンドライバー』だ。

「クッ！！ビッグダーーツッ！！」

「狐炎龍(こえんりゅう)ッ！！」

ーーードグオオオオオン！

ナイトチェスモン（白）が投げた巨大なダーツの周りに覆うように、キュウビモンは狐炎龍(こえんりゅう)を放ち、二体の技は一体のメタルティラノモンに高速で向かい続ける。

しかし、メタルティラノモンは、迫り来る二つの技を見ても慌てずに左手を構え始め、強力なレーザーをビッグダーツと狐炎龍(こえんりゅう)に向かって放つ。

「温いわ！！ヌークリアレーザーッ！！」

ーーービィィィィーーーッ！

ドゴオオオオオオオオオオオオオン！！

『ッ！！』

メタルティラノモンの放ったヌークリアレーザーは、いとも簡単にナイトチェスモン（白）とキュウビモンの必殺技を掻き消し、空中に大爆発を起こさせた。

その光景にナイトチェスモン（白）とキュウビモンは僅かに表情を驚愕に染め、自分達の技を簡単に破った事で気を良くしているメタルティラノモンの姿を見つめる。少なくとも、先ほど二体が放った技には、自分達なりにかなりの自信が在った。しかし、その必勝

の攻撃を持ってしても、メタルティラノモンにはダメージを与える事は愚か、傷一つさえその金属の体には作る事は出来なかった。実力の差がかなり在る事が二体には分かったのだ。

「クッ！！こうなれば、完全体に進化するしかない！！キュウビモンよ！お前は部隊の者達の護衛を頼む！！あちらもかなり苦戦しているようだからな」

ナイトチェスモン（白）はキュウビモンに向かってそう叫ぶと、メタルティラノモン達の方に足を踏み出し、それを空中から見ていたキュウビモンは、タスクモン三体と何とか戦っている部隊員達に顔を向ける。

実力に差が在りながらも、二十名以上の隊員達は一丸となってタスクモン達と戦い続け、バインドで動きを封じた後に、他の者達が一斉に射撃魔法を放つと言う戦法を繰り返している。だが、やはり実力の差と相手が三体同時にと言う事も在り、徐々に負傷者も増えて行き、防戦一方な状況に追い込まれ始めていた。

「・・・・・分かった。彼らは必ず私が護ってみせる。お前も気をつけるのだぞ」

「フッ！貴様と違って私は数多くの実戦を越えて来ているのだ！！この程度の事では敗れたりはしない！！地上の平和の為にも！！」

「・・・・・そうか。頼むぞ！！」

ナイトチェスモンの言葉に、キュウビモンは苦笑を浮かべながら声を出し、部隊員達の援護に向かい出した。

その姿を横目で見ていたナイトチェスモン（白）は再び右手にダーツを出現させながら、ジリジリと歩いて来ている二体のメタルテ

ィラノモンを視界におさめ、ロングアーチに通信を行う。

「オーリス！！完全体への進化許可を！！」

『了解！！進化しなさい！ナイトチェスモン！！』

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「ナイトチェスモン進化！！！」

オーリスがナイトチェスモン（白）に完全体への進化を許可した瞬間に、通信の先にいるオーリスが持っているディーアークから電子音声が響き、ナイトチェスモン（白）の体をデジコードが覆って行く。

そしてデジコードが消えた後には、背中に紫色のマントを纏い、右手には杖を構え、頭部を僧侶を思わせる兜のようなもので覆ったパペット型のデジモンが姿を現した。その名も

「ビショップチェスモンッ！！」

ビショップチェスモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／パペット型、必殺技／ビショップレーザー、ビショップクロス

僧侶を思わせるような姿を持ち、右手に持った杖から砲撃系の技を駆使するパペット型デジモン。あらゆる術を使い、その攻撃範囲はとても広いので、遠距離にいる敵をも攻撃することができる。必殺技の『ビショップレーザー』は右手に持った杖から放つ敵に向かって砲撃技で、『ビショップクロス』は十字型の魔法陣を発生させ敵を消滅させると言う技だ。

「ムン！！」

ビショップチェスモンへと進化したナイトチェスモン（白）は、右手に握った杖を一体のメタルティラノモンに向かって構え、メタルティラノモンも左手の発射口をビショップチェスモンに向かって構え出し、互いにエネルギーが溜まった瞬間に、同時にレーザーを発射する。

「ビショップレーザーッ！！」

「ヌークリアレーザーッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオン！！

二つのレーザーは空中で衝突し、互いに撃ち破ろうとせめぎ合いを行い始め、徐々にビショップチェスモンのビショップレーザーの方が押し始める。

その様子を見たメタルティラノモンは慌てて、自身の放つヌークリアレザーの出力を上げるが、それでも僅かに威力はビショップレーザーの方が上な為に、押し返す事が出来なかった。

それを見たビショップチェスモンは、自身の勝利を確信し、追い討ちを掛けるように左手から砲撃を放とうとするが、その直前にもう一体のメタルティラノモンが、ビショップチェスモンに右手を構え、ミサイルを撃ち出す。

「ギガデストロイヤーー？ッ！！」

ーーードゴオオン！！

「クッ！！ビショップクロスッ！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオン！！

自身に向かってくるギガデストロイヤー？を見たビショップチェスモンは、ビショップレーザーを放つのを止めて、その場から飛び去り、今度は十字架の形をした砲撃ービショップクロスを放つ事でギガデストロイヤー？とヌークリアレーザーを相殺した。

そして地面に着地すると、すぐさま二体のメタルティラノモンに顔を向け、再び砲撃を放とうとするが、その前に凄まじい足音をたてながら、メタルティラノモン達はビショップチェスモンへと走って来る。

（クッ！！気づかれたか！私が接近戦を苦手としている事を！？）

ビショップチェスモンは自身に向かって来るメタルティラノモンの姿に、自身の弱点がばれて閉まった事を確信した。ビショップチェスモンは確かに砲撃などの遠距離関係の攻撃を得意としている為に、遠距離ならば同じ世代の完全体相手でも簡単には負ける事はない。しかし、その反面、近距離など接近戦は苦手としているのだ。

遠距離は得意でありながら、近距離には弱いと言う弱点を持っている為に、出来れば先ほどの攻撃で一体だけでもメタルティラノモンを倒したかったと言うのが、ビショップチェスモンの思いだった。

「しかし、退く訳には行かん。此処で私が退けば、キュウビモンの負担も増えてしまう」

遠くに見えるタスクモン達と、１０８部隊の隊員達と戦っているキュウビモンの姿を見て、自身が此処で退く訳にはいかないと改めて考えたビショップチェスモンは、僅かでも状況を好転させる為に右手に持っている杖から再び、メタルティラノモン達に向かって砲撃を放とうとする。

しかし、そうはさせないと言うようにメタルティラノモン達も再度左手を構え、ヌークリアレーザーをビショップチェスモンに向かって発射しようとする。
だが、その直前に突如としてメタルティラノモン達の横合いの木々の中から学ランを着た獣人ーバンチョーレオモンが飛び出し、一体のメタルティラノモンに向かって拳を振り抜く。

「オオォォォォォーーーーー！！フラッシュバンチョーパンチッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオン！！

「ガアアアアアアアーーーーッ！！」

『ッ！！』

バンチョーレオモンのフラッシュバンチョーパンチを受けたメタルティラノモンは、その巨体さに構わずに遠くへと吹き飛んで行き、その姿を見たビショップチェスモンともう一体のメタルティラノモンは目を見開き、木の上に着地しているバンチョーレオモンの姿を見つめた。
自身が見つめられている事に気がついたバンチョーレオモンは、ビショップチェスモンとメタルティラノモンに顔を向ける。

「質問するが、フェイト・テスタロッサ。そして五人の十闘士達は何処にいる！？俺はそいつらに用が在るのだ！！」

「貴様はあの方々の敵か！？ならば、行かせる訳には行かん！！」

バンチョーレオモンの言葉に、メタルティラノモンは瞬時に自分

達の主の敵だと判断し、右手を構えてギガデストロイヤー?を放とうとする。
しかし、その直前に離れていた筈のバンチョーレオモンがメタルティラノモンの顔を前に瞬時に移動する。

ーーービュン!!

「なっ!?」

「本来ならば、正々堂々と戦いたいが、俺は今は機嫌が悪いのでな!!リンディ達との約束の為にも、さっさと決着をつけさせて貰うぞ!!」

驚愕に目を見開くメタルティラノモンにバンチョーレオモンは声を上げ、燃えるように赤くなった右拳をメタルティラノモンの顔面に向かって振り下ろす。

「バーンバンチョーパンチッ!!」

ーーードゴオオオオオオオオオン!!

「ガアアアアアアアーーーーー!!!」

バーンバンチョーパンチを顔面に食らったメタルティラノモンは悲鳴を上げながら倒れふし、データ粒子に体を変化させると、デジタマに戻ってしまった。
その姿を確認したバンチョーレオモンは器用に空中で体勢を整えると、先ほどと同様に木の上に着地し、今度はビショップチェスモンに顔を向け質問する。

「同じ質問だが、フェイト・テスタロッサと五人の十闘士達の居所を知っているか？」

「・・・・・十闘士と呼ばれる者達の事は知らないが、フェイト・テスタロッサならば、先ほど通信で連絡が入り、仲間の局員達を攻撃してゲートタワーに向かったと通信が届いた」

「クッ！！やはりか！時間が無い！！」

ビショップチェスモンの情報にバンチョーレオモンは時間が迫っている事を確信した。

確実に状況は最悪な方へと進んでいる。このまま行けば、五人の闘士達の思惑通りに進み、事態は悲劇へと動いてしまう。

それを確信したバンチョーレオモンは、遠くに聳え立つゲートタワーに向かって駆け出そうとするが、その前に背後からビショップチェスモンが声を掛けて来る。

「待て！貴殿は何者だ！？」

「俺の名はバンチョーレオモン。少なくともお前達の敵ではない。それと此処に来る前にお前達を包囲していたデジモン達は、粗方片付けて来てやったぞ」

「ッ！！」

「すぐに他の仲間達と合流して、この場を離れろ。もうすぐ此処は、悲劇に包まれるだろうからな」

ーーービュン！！

驚きに顔を染めているビショップチェスモンにそう告げると、バンチョーレオモンは急ぎゲートタワーに向かって全速力で駆け出して行った。
その後姿をビショップチェスモンは呆然とした表情で見つめていたが、すぐにその様な状況ではないと思い、タスクモン二体と戦っているキュウビモン達の方に顔を向ける。

「一体は倒した様だな。すぐに援護に向かうぞ！！」

ビショップチェスモンは声を出してそう告げると、キュウビモン達と合流し、タスクモン達と戦い始めるのだった。

ゲートタワーの前に存在する僅かに地面と呼べる場所。辺りが大量の木々で覆われながらも、その場所だけは不自然としか言えないほどに地面だけしか存在していなかった。その理由は一つ。戦いが始まる前から、既に自身の有利なフィールドを、『土』の闘士ーグロットモンは作り出していたのだ。
しかし、彼の思惑は僅かにずれていた。何故なら戦っている相手ー真・ソニックフォームで、右手にライオットブレードを持ったフェイトの方が優勢に戦いを進めていたからだ。

「ハアァァァァァーーーーー！！」

ーーーガキィィィィン！！

「グウッ！！こいつ本当に女かよ！？」

フェイトが渾身の力を込めて振り下ろして斬撃を、グロットモン

は自身の武器である『グロットハンマー』で受け止めたが、ライオットブレードに込められているフェイトの力に驚愕していた。
戦いの当初は、グロットモンも自身の土を操る能力で、石や岩石などフェイトに向かって放ち攻勢に出ていたのだが、真・ソニックフォームと成ったフェイトは、防御力を殆ど失う代わりに、凄まじいほどのスピードを手に入れているために、楽々とグロットモンの攻撃をかわし、グロットモンを防戦一方な状況に追い込んでしまったのだ。
そしてグロットモンを追い込み始めたフェイトはさっさと勝負を終わらせると言うように、自身の周りに金色のスフィアを幾つも作り出し、グロットモンに向かって撃ち出す。

「プラズマバレットッ！！」

ーーードドドドドドッ！！

「そんな物が効くかよ！！」

自身に向かって来るプラズマバレットを打ち砕こうと、グロットモンはグロットハンマーを振り回そうするが、その直前にプラズマバレットは四方に別れ、グロットモンを取り囲むように動き、一斉にグロットモンに向かい出す。

「なっ！何ぃッ！」

ーーードドドドドドゴオン！！

「グアアァァァァァァッ！！」

一斉に自身に向かって来たプラズマバレットをグロットモンは避

ける事が出来ずに直撃し、プラズマバレットに込められていた電撃の放電を食らって悲鳴を上げながら地に倒れ付した。
その姿を見たフェイトは、グロットモンがもう戦えないと判断すると、残っているメルキューレモンとアルボルモン、そしてラーナモンに向かってライオットブレードを構える。

「次はお前達だ。ブイモンは絶対に返して貰う！！！」

宣言するようにフェイトは叫び何時でも飛び掛かれるように構えを行い出す。
その姿をゲートタワーに縛り付けられながら見ていたブイモンは、フェイトの姿に喜びではなく、悲しみを感じていた。

「フェイト・・・・・どうしたんだよ？フェイトらしくないぞ？」

ブイモンには今のフェイトの様子がおかしいと分かっていた。
ブイモンの知るフェイトは、優しくそれでいて過保護と呼べる一面を持った女性だった。
しかし、今、ブイモンが見ているフェイトは違う。戦いだけで全てを解決し、何かを焦っている姿にしか、ブイモンには見えなかった。そのフェイトの姿にブイモンは、自身が本当にパートナーの事を知らなかった事を確信し、心から悲しみを感じ始める。
しかし、ブイモンのその思いにさえもフェイトは気がつかず、右手に握ったライオットブレードに更に魔力を送り、攻撃を繰り出そうとした瞬間に、ラーナモンがフェイトの背後で倒れているグロットモンに声を上げる。

「コラッ！！何時まで寝ているのよ！さっさと終わらせなさいよ！！」

「・・・・・ケッ！相変わらずうるせぇなラーナモンはよぉ。ちょっと遊んだだけだろうが」

「ッ！！」

背後から聞こえて来た声にフェイトは目を見開き、慌てて背後を振り返ってみると、確かに倒した筈のグロットモンがゆっくりと立ち上がり始めていた。

その姿にフェイトは自身の魔法が効いていなかったのかと思い、ライオットブレードをグロットモンに向かって振り下ろそうとするが、その前にグロットモンはその場から飛び去り、後方の地面へと着地する。

ーーースタッ！

「へへへへへへへッ！！中々の攻撃だったぜ。だがなぁ、俺様は『土』の闘士だ！！『雷』の闘士の雷撃ならともかく、人間程度が放つ電撃じゃ効かねぇんだよ！！」

「クッ！！なら、今度は斬り殺す！！」

「無理だぜ。何せ、遊びの時間は終わりだ！！グロットモン！！スライドエボリューション！！」

ーーーギュルルルルルッ！！

「なっ！？まさか進化！？」

グロットモンの体を覆ったデジコードの姿を見たフェイトは、グロットモンが進化しようとしている事に気がつき、急ぎデジコード

の前に移動し、ライオットを振り下ろそうとする。
　しかし、その前にデジコードは消え去り、中から逞しい体と長く太い腕を持ち、体の至る所にトゲような物を付け、長いツノを頭にはやした巨人のデジモンが姿を現した。その名も。

「ギガスモンッ！！」

ギガスモン、世代／ハイブリット体、属性／バリアブル、種族／鉱物型、必殺技／ハリケーンボンバー、アースクエイク
伝説の十闘士『エンシェントボルケーモン』の力を受け継いだ『土』の属性を持つビーストスピリット体の鉱物型デジモン。セラミック以上の硬さを持つ巨人の姿を持ち、土の成分を集めて実体化した姿だといわれている。自信過剰で、戦闘中にあくびをしたりする。必殺技の『ハリケーンボンバー』は両手を広げて高速回転を行い辺り一面を吹き飛ばす技であり、もう一つの必殺技の『アースクエイク』はジャンプを行い、物凄い勢いで地面を叩き、地割れを起こす恐ろしい技だ。

ーーーガシッ！！

「ッ！！」

　デジコードの中から姿を見せたギガスモンは無言で目の前に存在していたライオットブレードの刃を掴み、フェイトは驚きながらもライオットブレードから手を離させようとするが、ギガスモンの力の前にはピクリとも動かす事は出来なかった。

「おいおい？何だよこの鈍らは？この程度の強度じゃ、簡単に砕けるだろがよ！！」

ーーーバキィィィィン！！

「そ、そんなッ！？」

ギガスモンに握り潰されたライオットブレードの刃の姿を見たフェイトは信じられないと言うように声を出すが、瞬時にその場から離れてバルディッシュを再び変形させると、バルディッシュのモードが今度は先が二股の刃に分かれた大剣ーライオット・ザンバー・カラミティへと変形させる。

《Ｒｉｏｔ　Ｚａｍｂｅｒ（ライオットザンバー）　Ｃａｌａｍｉｔｙ（カラミティ）》

（生半可な攻撃じゃ効かない！！次の一撃に全力を込める！！）

ギガスモンの体の強度と力強さを感じたフェイトは、自身のスピードを限界まで発揮し、ギガスモンの周りを縦横無尽に動き回り、最大の攻撃を放つ瞬間を見極め始める。

だが、ギガスモンは既にフェイトの行動を予測していたのか、いきなり頭上へとジャンプをすると、地面に勢い良く両足を叩き付ける。

「アースクエイクッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオン！！

ーーーガラガラガラガラガラッ！！

「なっ！？」

ギガスモンのアースクエイクに寄って発生した地割れの姿を見た

フェイトは驚きの声を出し、思わず足が止まってしまうが驚きはそれだけに収まらず、地面から次々に岩石やつぶてなどがフェイトに向かって来る。

ーーードドドドドドッ！！

「クゥッ！！このッ！！」

ーーーブザンッ！！

自身に向かって飛んで来る来る岩石やつぶてに対して、フェイトはライオットザンバー・カラミティを振るう事で破壊して行くが、その隙にギガスモンがフェイトの傍に移動し、長い腕をフェイトの胴体に向かって振り抜く。

「貰ったぞッ！！」

「しまっ！！」

ーーードオオン！！

「グフッ！！アッ！！」

ーーーボギィィィン！

ギガスモンの拳を胴体に受けたフェイトは僅かに口から血を吐き出し、骨が折れる音を鳴らしながら背後に在った木々を薙ぎ倒して吹き飛び行き、五本目で漸く止まるが、身に纏っていたお腹の部分のバリアジャケットは消滅していた。

フェイトの真・ソニックフォームは防御力の変わりにスピードを

自身の限界ギリギリにまで上げるフォーム。その為に一撃でも受けてしまえば戦う事が出来なくなってしまうと言う諸刃の刃のフォームなのだ。
しかも、フェイトが受けた一撃は見るからに力強そうな姿をしたギガスモンの打撃。もはやフェイトには立ち上がる力も残されていないだろう。

「今の感触。間違いなく肋骨は殆ど折れた。もう立ち上がる事も出来ねぇな」

「フェイトォォォォーーーー！！！」

ギガスモンが呟いた言葉を聞いたブイモンは、何とか縄から抜け出し、フェイトの助けに向かおうとするが、縄はビクともせず、ブイモンはゲートタワーに縛り付けられたままだった。
そのブイモンの叫びをフェイトは激痛に苦しみながらも立ち上がろうとするが、立ち上がる事は結局出来ず、背中から地面に倒れてしまう。

ーーードサッ！！

「グゥッ！！ブ・・・・・イ・・・・モン」

フェイトは全身を襲う苦痛に苦しみながらも、ゲートタワーに縛り付けられているブイモンへと右手を伸ばすが、その手に向かって近寄って来ていたギガスモンが足を振り下ろす。

ーーーボキン！！

「アアァァァァァァァーーーーーーーーーー！！！！」

「フェイトッ！！この！外れろよ！！チクショウッ！！」

ギガスモンに寄って右腕を折られて苦痛の叫びを上げているフェイトの姿を見たブイモンは、全身の力を振り絞って縄から抜け出そうとするが、やはり抜け出す事は出来ず、ブイモンは涙を浮かべ始める。

その姿を横目で確認したギガスモンはメルキューレモンに向かって顔を向け、メルキューレモンは頷くのを確認すると、苦痛に苦しんでいるフェイトを見下ろし始める。

「テメエ弱すぎだぜ。そんなんじゃ、パートナーのデジモンも哀れだよな。テメエのせいで、進化も出来ずに悲しんでいるんだからよ」

「ッ！！・・・・・・・私のせい？」

「そうだ！！全部が全部！テメエの力の無さが招いた事なんだよ！！力が在れば俺様にも勝てて、パートナーのデジモンも親友だった女に連れ去られる事もなかった！！きっと失望しているぜ！テメエの親友だった女はよう？もしかしたら、もう親友と思ってないかもな？テメエ見てえな雑魚の事なんてよ！？」

「・・・・・なのはが・・・・・・私を・・・・・」

ギガスモンの言葉にフェイトは否定の声を出す事は出来なかった。

確かになのははブイモンを連れ去った。フェイトの思いを否定した上で。それは本当にフェイトとブイモンの事を心配しての行動だったのだが、今のフェイトにはギガスモンの言うとおりにしか思えなかった。

“親友と思ってないからこそ、家族で在ったブイモンを連れ去る事が出来た”

フェイトはそうギガスモンの言葉に寄って、なのはの行動も疑いを持ち始めてしまったのだ。

そして嘗てなのはに救われ、十年間ずっと親友だと思っていたフェイトは自身の考えに更に絶望し始め、唯一動く左手を動かし、バリアジャケットの中から黒く塗り潰れてしまっているディーアークを取り出す。

「あん？そんな機能が使えねぇ、欠陥品のデジヴァイスでどうするつもりだよ？仲間なんて助けには来ねぇんだぞ？」

「・・・・・・ない」

「何？」

「もういらない・・・・・・全部全部いらない！！！力だけが！！私は力だけが欲しい！！全てを壊せる力だけが私は欲しいよッッッッ！！」

ーーーブオン！！

フェイトの全てに絶望したと言う宣言に反応するように、左手に握り締めていたディーアークから黒い光が溢れ出し、ギガスモンと様子を見ていたメルキューレモン達は喜びの笑みを浮かべる。

「始まったぞ！！暗黒進化が！！」

ーーービキッ！！

「グゥッ！！」

ギガスモンが叫ぶと同時にゲートタワーに縛り付けられていたブイモンにも変化が生じ、目を赤く光らせ、その体を黒い、何処までも黒い光が覆い始めていく。

それに応じるようにフェイトの握るディーアークも更に黒い光を放ち始め、遂に悲劇を始める音声が響く。

《ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「ウゥゥゥッ！！グギャアアアァァァァァァァァァァァーーーーーーーー！！！！！！！！」

ーーーバリィィィィィィン！！！！

音声が響いた瞬間に、ブイモンの体を覆っていた黒い光はゲートタワーを包むほどに巨大化し、それと共に理性が全く感じられない咆哮が天に届けと言わんばかりに響き、黒い光の中でゲートタワーが砕け散る音が響き渡った。

その様子を地面に倒れ付しながら見ていたフェイトは、目の前で起きている現象に僅かに困惑した表情をするが、すぐにその顔は嬉しそうな笑みに変わり始める。

「・・・・・・進化するんだ・・・・・・・・ブイモンが！ブイモンが進化を！！」

ブイモンが進化しようとしている事に気がついたフェイトは喜びの声を上げた。

これでブイモンとはもう離れる事は無いと、心から思いフェイト

は喜びの表情を浮かべ始めるが、ギガスモンがその喜びを否定する。

「ハハハハハハハハッ！！！！！やっちまった！お前はやっちまったんだよぉ！！これであのデジモン！！ブイモンは確実に死んじまうぜ！！」

「ッ！！！・・・・・・・何を言っているの？ブイモンが・・・・・死ぬ？」

フェイトはギガスモンの言葉の意味が分からなかった。

“進化した筈のブイモンが死ぬ”進化が力を上げるものだと思っていたフェイトからすれば、困惑する以外に無いだろう。しかし、ギガスモンの言葉は正しかった。

それを示すようにメルキューレモンが地面に倒れ付したままのフェイトに近寄り、喜びの笑みを浮かべながらフェイトの困惑に答える。

「フッフッフッ！貴様は行ってしまったのだ！デジモンの命を代償とする最悪にして最低の進化ー“暗黒進化”を！！！」

「・・・・・暗黒・・・・・・・進化？・・・・・命を代償？」

「そう！貴様は疑問に思わなかったのか？何故パートナーのデジモンの進化には、“絆”などと言う物が必要なのかと？」

「そ、それは・・・・・・・」

メルキューレモンの質問にフェイトは答える事は出来なかった。

その質問に答えを返す事が出来るのは、キャロ達など、デジモンとの絆を得ている者達だけ。フェイトのようにデジモンとの絆を手

に入れられなかった者には、答える事が出来ない質問なのだ。
　その事を分かっているのか、メルキューレモンは意地悪そうな笑みを浮かべ、答えをフェイトに告げる。

「それは、デジモンを死なせない為だ。デジモンは何があっても、パートナーの思いに反応してしまう。それが例え邪な思いでもパートナーのデジモンは答えてしまうのだ！！！例えそれが自らの命を捨てる事に成ろうともな！！」

「そ、そんなっ！？」

「だからこそ、貴様らの持つデジヴァイスは人間とデジモンの絆が成長した時だけに進化を行わせていた。全てはデジモンと人間の心に傷を負わせない為に。しかし、貴様のデジヴァイスだけはその機能さえも失ってしまっていた！原因は一つ！！貴様の心自身が“ブイモンとの絆よりも、力だけを望んでしまっていたからだ”！！！」

「ッ！！！！！」

　メルキューレモンが告げた事実にフェイトは限界まで目を見開き、黒い光が渦巻き続けている場所を見つめる。
　全ての原因はブイモンの方にではなく、フェイトの方だけにあった。ブイモンが進化出来なかったのも、今、目の前でブイモンが命を削ってまで進化しようとしている原因も全てはフェイト自身の心こそが全ての元凶だったのだ。

「ブイモンは連れ去られても、貴様の下に戻ろうと暴れ続けていた。それだけお前の事が大切だったのだろう。しかし、そのお前がブイモンにした事は何だ？命を代償にする“暗黒進化”だけではないか！！！」

「ア・・・・・ア・・・・・アアァァァァァァァァァーーーーーッ！！！！」

フェイトは絶望の叫びを上げ始めた。

メルキューレモンの言葉は全て事実なのだろう。だからこそ、今、ブイモンは暗黒進化を行い始めている。フェイトの心が呼んだ、最悪にして最低の進化を。

二日前にキャロとリュウダモンが告げた“悲劇しか呼ばない力”。アレは暗黒進化の事だったのだとフェイトは今更ながら確信した。命を捨てる進化など、確かに悲劇しか呼ばないだろう。

その事に気がついたフェイトは、更に絶望の表情をし始めるが、ギガスモンは構わずにフェイトに首を掴み上げ、黒い光が良く見えるようにフェイトを掲げ始める。

「よく見ろよ？お前が呼んだブイモンの暗黒進化の姿をなぁ！！！」

「グルルルルルルルーーーーーーーーー！！！！！！！」

ギガスモンの言葉に応じるように、黒い光の中から理性が全く感じられず、凶暴さだけしか感じられない唸り声が響き渡った瞬間に、黒い光は薄れ、中から全身を黒い色で覆い、胸にVの字のような模様を持ち、背中に巨大な翼をはやして、両肘の部分に刃を持った鋭い刃を生やした聖竜型デジモン－ブラックエアロブイドラモンが姿を現した。

「グギャアアアアアアァァァァァァァァァーーーーーーーーー！！！！！！」

ブラックエアロブイドラモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、

種族／聖竜型、必殺技／Ｖウィングブレード、ドラゴンインパルス
伝説の聖竜型デジモンであるエアロブイドラモンが、ウィルス種と
なってしまった聖竜型デジモン。本来ならばエアロブイドラモンは、
ワクチン種かデータ種しか存在しないのだが、フェイトの力だけを
求める思いに反応して生まれてしまったウィルス種のデジモン。理
性などは全く存在せず、凶暴さと本能しか持っていない。常に古代
種デジモンだけが持つ特殊能力“オーバーライト”（自身の体の身
体能力データを書き換える事）を発現させている状態。その為に完
全体でありながらも、究極体と同等クラスの力を持つが、代償は凄
まじく重い。必殺技の『Ｖウィングブレード』は口の部分に逆Ｖの
字の形にエネルギーを集め、相手を切り裂く。しかし、飛行中で無
いと使えないと言う欠点を持っている。もう一つの必殺技ー『ドラ
ゴンインパルス』も空中で無いと使えないが、ブラックエアロブイ
ドラモン自身が黒い光の竜へと相手に突進を行う技であり、その威
力は正に一撃必殺としか呼べない威力を誇る。

「ア・・・・ア・・・・・・ア・・・・」

凶暴な咆哮と理性を全く宿していない瞳を持ったブラックエアロ
ブイドラモンの姿を見たフェイトは、その余りにも変わり果てたブ
イモンの姿に恐怖だけしか感じる事は出来なかった。
そしてそれを表すようにブラックエアロブイドラモンは巨大な尻
尾を背後の地面に向かって打ち付け、自身の口にエネルギーを集め
始めると、遠くに見える崖に向かって口からＶの字を描いた熱線ー
ブイブレスアローを発射する。

「グギャアァァァァァァァッ！！」

ーーードグオオオオオン！！

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

エアロブイドラモンが放ったブイブレスアローは遠くに見える崖へと直撃し、巨大な大爆発を起こした。

しかし、それだけではブラックエアロブイドラモンは治まらず、自身の背中に生えている翼を凄まじい勢いで羽ばたかせて、上空へと高く飛び上がると、口から次々にブイブレスアローを放ち、辺りの森や崖などを全て破壊して行く。

「グルアァァァァァァァーーーーーーッッッ！！！」

ーーードゴオオン！！ドゴオオオン！！ドゴオオオン！！

ブラックエアロブイドラモンが放つブイブレスアローに寄って、次々と辺りの崖や森の木々は巨大な爆発に寄って消滅して行き、森が火の海に変わり始めて行く。

その余りにも暴虐としか言えない現状にフェイトは瞳から涙を流し始めるが、ブラックエアロブイドラモンは止まらず次々に辺りを破壊し続けて行き、ギガスモン達は喜びの笑みをフェイトへと向ける。

「ハハハハハハハハハッ！！こいつはすげぇぜ！！とんでもない潜在能力を秘めていやがった！！」

「確かにな。これほどの力。究極体にも勝るとも劣らない力だ」

「こんな凄いデジモンだったのに、パートナーは引き出す事も出来ないなんてね」

「哀れだ。これほど存在を生かせないとは、ブイモンは哀れなもの

だな」

ブラックエアロブイドラモンの巨大な力を見たギガスモン、メルキューレモン、ラーナモン、アルボルモンはそれぞれ声を出すが、フェイトはもはや声も上げる事は出来ず、上空で暴れ続けているブラックエアロブイドラモンの姿を見つめていた。

もはや、ブラックエアロブイドラモンには理性など存在しない。全てを破壊し、全てを消滅させる事しか考えていないのだ。それはフェイトの心が望んだブイモンの姿。上空で暴れ続けているブラックエアロブイドラモンの姿は、正にフェイトが望んだままの姿なのだ。

そしてそのままブラックエアロブイドラモンの暴走は続くと思われた瞬間に、遠方から三つの巨大な砲撃が放たれ、ブラックエアロブイドラモンの体に直撃する。

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオンン！！

「ガアアッ！！」

「オッ！」

「ほう」

「へェェッ！！」

「面白い状況に成ったな」

三つの白い砲撃を食らったブラックエアロブイドラモンの姿を見たギガスモン達はそれぞれ声を上げ、遠方から砲撃を放った人物一険しい表情をした銀髪に青い瞳を持った八神はやてと、その横で巨

大な魔力球を作り上げているリインフォースの姿を視界におさめる。

「スターライトブレイカーーーーー！！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「グギャアアアアアアアアアアアッ！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

リインフォースが放ったスターライトブレイカーに対して、ブラックエアロブイドラモンは背に生えている巨大な翼を羽ばたかせる事で強風を巻き起こし、自身の周りに風の守護壁ーウインドガーディアンを発動させる事で防ぎ、凄まじいスピードではやてとリインフォースの方に向かって飛び立っていた。

その様子を地上で眺めていたギガスモンは、更に面白そうな笑みを浮かべると、首を掴んで掲げているフェイトの方に顔を向ける。

「見ろよ？お前のせいで仲間達もブラックエアロブイドラモンに攻撃されるぜ？」

「・・・・・・・」

「何でぃ？壊れちまったのか？喋りもしねぇぜこの“出来損ない人形”はよぉ？」

「捨てろギガスモン。もうその女には用は無い」

「分かったぜぇ！」

ーーーブン！！

メルキューレモンの言葉にギガスモンは頷くと、掲げていたフェイトを自身が発生させた地割れに向かって投げ飛ばし、フェイトは動く事無く地割れの中に消えて行った。

「さて、後はブラックエアロブイドラモンが、機動六課の者達に殺されれば全ての作戦は終了する。この状況を録画しているデジモン達と合流し、他のゲートタワーの周りに存在しているデジモン達に見せれば、この地のデジモン達は全て人間に失望する！そして私達が先導し、一斉にこの地の人間達に総攻撃を開始するのだ！その後に、私達は嘗ての力を何としても取り戻す！！“エンシェントデジモン”の力を！！」

メルキューレモンがそう告げると、ギガスモン達も頷き、ラーナモンの手によって動きを封じられているギンリュウモンとキャロ、フリードの方に歩みを進めようとした瞬間。

『・・・・オォォォォォォッ！！』

「あん？何だこの声は？」

「ん？何にか聞こえたのかギガスモン？」

地割れの方から聞こえて来た声のようなものにギガスモンは疑問の声を上げ、地割れの方に足を進め始める。

その様子にメルキューレモン達は疑問の表情を浮かべ、地割れの中を眺めているギガスモンの方を見つめた瞬間に、地割れの中から目の光を失っているフェイトを片手に抱き抱えた赤いシャツを着た青年ー大門大（だいもんまさる）とアグモンが飛び出し、ギガスモンの顔面に向かって

同時に拳を突き出す。

『どりゃああぁぁぁぁぁぁっ！！！！！』

ーーードゴオオオオオオオオオン！！

「ガアアアアアアアッ！！！！！」

『何ぃッ！！！！？？？』

大とアグモンの拳を顔面に食らった事で吹き飛んで行くギガスモンの姿を見たメルキューレモン達は、目の無いメルキューレモンを除いたアルボルモン、ラーナモンは限界まで目を見開き、メルキューレモンも含めてこれ以上に無いと言うほどに驚いた。

どう見ても普通の人間にしか見えない大と成長期であるアグモンの拳を受けただけで、土の闘士であるギガスモンが吹き飛んだのだ。自分達の実力を分かっているメルキューレモン達からすれば、驚く以外に何も出来ないだろう。

しかし、驚きはそれだけでは収まらず、メルキューレモン達の背後の地面が突如として爆発したように吹き飛ぶ。

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

『ッ！！！』

『ハアアアアアアアアーーーーーーー！！！！！』

吹き飛んでた地面の中から土砂と共に赤い髪に槍を両手で抱え持ち、バリアジャケットを纏った少年ーエリオ・モンディアルと、青い体毛に頭に赤いハチマキを付け、両手に赤いグローブを付けた犬

のような顔を持った二足歩行の獣型デジモン―ガオモンが飛び出し、メルキューレモン達に向かって攻撃を放つ。

ガオモン、世代／成長期、属性／データ種、種族／獣型、必殺技／ローリングアッパー、ダブルバックハンド、ガオラッシュ
鋭い爪を生やしたガジモン系の亜種と考えられている獣型デジモン。鋭い爪を持つが、成長するまでグローブで保護している。強靭な脚力ももっており、俊敏な動きで相手を翻弄し、ヒット・アンド・アウェイスタイルを得意としている。　必殺技は自慢の脚力で相手の懐に飛び込んでアッパーを放つ『ローリングアッパー』に、体を回転させながら両手を叩き付ける『ダブルバックハンド』。そして素早く動いて高速連打パンチを食らわせる『ガオラッシュ』だ。

「スピーアシュナイデンッ！！」

「ガオラッシュッ！！」

ーーードゴオオオオオオン！！

「キャアッ！！」

「グオォォォッ！！」

エリオのスピーアシュナイデンはラーナモンに直撃し、ガオモンのガオラッシュはアルボルモンの胴体に直撃すると、ラーナモンとアルボルモンは苦痛の声を上げながら後方に吹き飛んで行った。
その様子を見ていたメルキューレモンは僅かに困惑した表情をするが、状況をすぐさま打開しようと両手に装備している『イロニーの盾』を構えようとするが、その前に背後からキャロの声が聞こえてくる。

「・・・・・竜魂召喚ッ！！フリードリヒッ！！」

「グオオオオオオオオオオオオオッ！！！！」

「何ッ！？」

背後から聞こえて来たフリードの咆哮にメルキューレモンが目を見開きながら背後を見てみると、ラーナモンのレインストリームからキャロとギンリュウモンを護るように、翼を広げている真の姿に戻ったフリードの姿が存在していた。

その僅かな時間の間に、ギンリュウモンとキャロはレインストリームの影響範囲から脱出し、メルキューレモンに向かって突進する。

「オリャアアアアアアアーーーーーッ！！棒陣破（ぼうじんは）ッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！！！

「グアアアアアアーーーーーー！！！！」

ギンリュウモンの棒陣破（ぼうじんは）をメルキューレモンは受け止める事も避ける事も出来ずに、直撃を食らい、近くの木々に向かって吹き飛んで行った。

その様子を地面に膝を付きながら見ていたギガスモンは、怒りの表情を浮かべて立ち上がろうとするが、ダメージが足まで来ているのか立ち上がる事が出来ずに、信じられないと言う表情をして自身を殴り飛ばした大とアグモンの姿を見つめる。

「ばっ！！馬鹿な！？俺様が、土の闘士で在る俺様が！ただの人間と成長期のデジモンの一撃を受けただけで、立ち上がれないだと！

？何者なんだ！？お前らは！？」

「俺か？俺は大門大（だいもんまさる）ッ！！日本一のケンカ番長だッ！！」

「そして俺はその子分のアグモンだッ！！」

左腕に光を失った瞳をしたフェイトを抱えたままの大とその横に立っているアグモンは、ギガスモンの質問に対して、自分達の正体を宣言するように名乗るのだった。

暴走！！暗黒進化の恐怖！伝説の聖竜の咆哮！！（後書き）

次回予告

遂に戦いの場へと駆けつけた大とアグモン、そしてエリオ、ガオモン。

しかし、ブラックエアロブイドラモンの暴走は続く。

それに対して挑む大とアグモンは、ブラックエアロブイドラモンの思いを感じ

フェイトにその思いを伝える。

次回、漆黒の竜人と少女、『力の代償！ブラックエアロブイドラモンの最後！！』

雷光は漸く知る。自身のパートナーの真の思いを。しかし、それは遅かった。

力の代償！！ブラックエアロブイドラモンの最後！！前編

「大門大（だいもんまさる）に、アグモンだと？」

大とアグモンの名を聞いたギガスモンは、聞き覚えのない名前に膝を地面につきながら、首を僅かに傾げた。

機動六課との戦いに備えて、ギガスモン達は在る程度の情報をアルハザードから脱出する時に、データとして持ち出していた上に、隠密能力を持っているデジモン達と、メルキューレモンの持つ能力までも使って機動六課に所属する者達全員の情報を調べ上げた。

その結果、機動六課でデジモンをパートナーとしているのは、部隊長のはやてに、地上から監察官としてやって来ているキャロとオーリスだけと判明していた。当然ながらその中には大とアグモンの情報など一切存在していなかった。

（どう言う事だ？こんな奴らの事は聞いてねぇぞ！！それに、この俺様が一撃でダウンだと！？ありえねぇ！！一体何者なんだ！？）

大とアグモンの正体が思い浮かばないギガスモンは内心で疑問の叫びを上げ、ラーナモンとアルボルモンも地面から立ち上がりながら、大達に警戒の構えを行い出す。

しかし、メルキューレモンだけは構えも取らずに、大達の姿を見つめ、その大の身の内から感じられる力に恐怖を覚え始めていた。

（危険だ。その男とそのパートナーデジモンは危険過ぎる！！今の私達では勝つ事など出来ない！！例え全員で掛かっても、勝てる気がしない！！・・・・・此処は退くべきだな）

メルキューレモンは退却するのを最善だと瞬時に判断し、地面か

ら立ち上がるとすぐさまギガスモンの傍に近寄り、ラーナモンとアルボルモンも同様にギガスモンの近くに移動する。

「此処は退くぞ！！当初の目的は殆ど終わっているの…」

「貴様らを逃がす気は無い！！」

『ッ！！！』

「この声！？まさか！？」

「ああ、本当に生きていたんだ！！」

突如として上空から聞こえて来た声に、メルキューレモン達は驚きの表情を浮かべるが、声に聞き覚えが在る大とアグモンは喜びの声を上げ、ガオモンが声の聞こえた方を見てみると、上空から凄まじい勢いで、メルキューレモン達に向かって落下して来るバンチョーレオモンの姿が存在していた。

『バンチョーレオモンッ！！！』

「オオォォォォォォォーーーーーー！！！フラッシュバンチョーパンチッ！！！」

「クウッ！！ジェネラスミラーッ！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

バンチョーレオモンのフラッシュバンチョーパンチに対して、メルキューレモンは自身の両手に装備している『イロニー盾』を構え、

バンチョーレオモンの拳とメルキューレモンの『イロニー盾』がぶつかり合い、辺りに衝撃波が巻き起こった。
それを見た大達は自分達に向かって来る衝撃波の姿に、慌て始める。

「やべぇッ！！」

「すぐに離れないとッ！！」

向かって来る衝撃波を見た大とアグモンは慌てた声を出し、背後に在る地割れの中に気絶しているフェイトとエリオ、ガオモンと共に飛び込もうとするが、その前にキャロを背に乗せたギンリュウモンが上空から降り立ち、大達を衝撃波から護る。

ーーードゴオオン！！

「グゥッ！！」

「ギンリュウモン！！」

「大丈夫だ。この程度じゃ俺はやられねぇよ」

心配そうな声を出したキャロに、ギンリュウモンは自身が大丈夫だと言うようにアピールを行い、キャロは安堵の息をついた。
その様子を見ていた大はフェイトをゆっくりと地面に下ろしながら、キャロ達の方に顔を向け、笑みを浮かべながら礼を言う。

「すまねぇ！助かったぜ」

「気にしないで下さい。それで・・・・大門大さんですよね？それ

にエリオ・モンディアル君だよね？」

「おう！俺の名は大門大だ！！」

「機動六課ライトニング分隊のＦＷのメンバーのエリオ・モンディアルです」

キャロの質問に対して大とエリオはそれぞれ自身の名を紹介し、キャロは頷くと、ギンリュウモンの背から地面に降り立ち、大の足元で気絶しているフェイトの傍に近寄り始める。

「地上本部所属で、機動六課には監察官として出向しているキャロ・ル・ルシエです。色々と事情を聞きたいんですが、今はそれよりもフェイトさんの治療の方が先決です」

「治せんのか！？こんな重傷の傷を！？」

キャロの言葉に大は驚いた声を出した。

一目見て重傷と分かるフェイトの傷を、どう見ても十歳ほどにしか見えないキャロが治療すると言ったのだから、大が驚くのも当然だろう。魔法と言う力については、エリオから大体の事は聞いて知っているが、それでも大からすれば、驚くには充分な事だろう。

その大の姿に、キャロは僅かに苦笑を浮かべながら、フェイトの傍で膝をつき、胸の部分に手を当てると、治療魔法をフェイトに掛け始める。

「・・・・酷い。私の治療魔法じゃ、応急処置が精一杯です。せめて、シャマル先生がいれば、治療も本格的に出来るんですけど」

「シャマルさんは何処にいるの！？僕がすぐに連れて来るよ！！」

「・・・・・・残念だけど無理だと思う・・・・・・フェイトさんが最初にいた持ち場に、シャマル先生は一緒にいた・・・・・・それなのにフェイトさんが此処にいると言う事は・・・・・・多分、フェイトさんはシャマル先生の制止を振り切って此処まで来たんだと思う・・・・・・シャマル先生達を攻撃して」

「ッ！！そんなフェイトさんが！？」

「仲間を傷つけたって言うのかよ！？」

「本当かよ！？」

「信じられん。何か事情が在るのか？」

キャロが告げた事実にエリオ、大、アグモン、ガオモンはそれぞれ声を出して、気絶しているフェイトを見つめる。特にエリオは自身の恩人と呼べるフェイトが、命令違反を行った上に、仲間まで攻撃したのが信じられないのか、軽い眩暈を覚えたように頭に手を置き悩むような表情をしてフェイトを見つめていた。

しかし、キャロの言葉は真実である。フェイトはシャマル達を行動不能な状態にしてこの場に来たのだ。それが意味するのは、シャマルの治療をフェイトは受ける事が出来ないと言う事だ。現在の状況は確かに機動六課が僅かに優勢になっているが、ブラックエアロブイドラモンの存在が在る為に、行動不能に成っているシャマル達の救助に向かう事は出来ない。

逆に此方からシャマルの下にフェイトを運ぶにしても、肋骨が殆ど折れているフェイトに衝撃を与えれば、折れた肋骨が内臓に刺さる可能性が高い上に、肋骨の重量で内臓が潰れてしまう可能性さえも在る。

つまり、フェイトの治療を行う為に、シャマルに何とかこの場に来て貰う以外に方法は無いのだ。
その事が分かったエリオはガオモンに顔を向けて頷き、キャロの肩に手を置く。

ーーーポンッ！！

「場所を教えて！！僕らが何とかシャマルさんを此処に連れて来るから！？」

「・・・・どうやって行くの？空から行ったら、ブラックエアロブイドラモンの攻撃されるかも知れない。地上から行こうにも、この辺りの場所以外の森は殆どが火の海に成っているんだよ？危険過ぎるよ」

キャロにはエリオの行動が無謀にしか思えなかった。
既にキャロ達がいる場所を除いた殆どの森が火の海に成っている上に、上空から行けば確実にブラックエアロブイドラモンが攻撃して来る。例えはやて達がブラックエアロブイドラモンの相手をしていると言っても、究極体に迫る力を持ったブラックエアロブイドラモンをはやて達が抑え切れると思えない。
その事が分かっているキャロは、エリオの行動を止めようと再度声を掛けようとするが、その前にエリオは近くの地面に顔を向ける。

「方法なら在るよ！！ドリモゲモンさん！！」

「エッ！？」

ーーーードゴオオオオオオオン！！

キャロがエリオの言葉に疑問の声を出した瞬間に、キャロ達のいる場所のすぐ近くの地面からドリルのような形をした鼻が飛び出し、それと共にモグラのような姿をした獣型のデジモン―ドリモゲモンが地上に姿を現す。

ドリモゲモン、世代／成熟期、属性／データ種、種族／獣型、必殺技／ドリルスピン、クラッシャーボーン

鼻先に巨大なドリルがついたモグラのような獣型デジモン。地中を掘りながら高速移動し、いつも地中に潜っているためなかなか出会えない。おとなしく恥ずかしがり屋だがイタズラ好きで、時々ガルルモンが地中に隠した骨を盗んで武器にしたりする。必殺技は鼻先のドリルと、自身の体を高速回転させて突進する『ドリルスピン』と、ガルルモンの隠した骨で攻撃する『クラッシュボーン』だ。

「敵か！？」

地中から姿を現したドリモゲモンの姿を見たギンリュウモンは声を上げ、キャロも険しい表情をして構えを取り出すが、その前に今度は大がキャロの肩に手を置き落ち着かせる。

ーーーポンッ！

「落ち着け。そいつは俺達の仲間だ」

「始めまして。大さん達の仲間のドリモゲモンです」

「・・・・・如何してパートナーがいない、デジモンが人間の味方を？」

大の紹介にキャロは困惑した声を出し、ギンリュウモンも困惑し

た表情をドリモゲモンに向ける。
　キャロ達の考えでは、ゲートタワーから現れるデジモンは管理局が滅ぼしてしまった世界のデジモン達だと思っていた。それを証明するように、前回の戦いの時も、デジモン達はキャロ達の姿を見れば、即座に殺す為に動きを行っていた。ゲートタワーから現れるデジモンは、憎しみを抱いている者達だけだと思っていたキャロとギンリュウモンからすれば驚きだろう。
　そのキャロとギンリュウモンの困惑した姿に、大達は僅かに苦笑を浮かべ、ドリモゲモンが大達に協力している理由を話し始める。
「何も現れるデジモン全部が人間を憎んでいる訳じゃねぇんだよ」
「中には、偶然にもゲートを通っちまったデジモン達も居るんだぜ」
「私や大、そしてアグモンはそう言うデジモン達を各ゲートタワーの場所から見つけて、仲間にしていたのだ。もちろん、ドリモゲモンの他にも仲間に成ってくれたデジモン達もいるぞ！！」
「・・・・凄い」
　大、アグモン、ガオモンが話した理由に、キャロは僅かな声を出す事しか出来ず、大達に尊敬の眼差しを向け始めた。
　大達は簡単に言ったが、キャロには大達の行った行動の凄さが分かった。
“人間を憎んでいなかったデジモン達を仲間にしていた”
　言葉にするのは簡単だが、それは並大抵の事で出来る事ではない。確かに人間を憎んでいなかったデジモンもゲートタワーから現れていただろうが、それでも現在の状況では、そのデジモン達と出会う可能性は限りなく低い。しかも、その周りには人間を憎んでいるデジモン達が大量に存在しているのだ。実力が在る者でも死んでしま

う可能性が高いだろう。
　しかし、大、アグモン、ガオモン、そして他の仲間達は諦めずに、ミッドに来てからもデジモン達の説得を続けていたのだ。自分達の長年の夢だった“デジモンと人間の共存出来る世界”。その世界を創り上げる為にも、大達は諦めずにデジモン達の説得を行い続けていた。
　その結果、数は少ないながらもドリモゲモンのように、何体かのデジモンの説得に成功していたのだ。
　結界が張られているクラナガン都市内部に入り込めたのも、ギガスモン達に奇襲を掛けられたのも、全てはドリモゲモンのおかげで、地中の中を移動出来たおかげだったのだ。
　その事が大達の言葉で分かったキャロとギンリュウモンは、大達に尊敬の眼差しを送り始め、エリオも改めて大達に尊敬の念を抱いた。
　その様子に大、アグモン、ガオモンが照れくさそうに頭に手をやり始め瞬間に、メルキューレモンとバンチョーレオモンがぶつかり合った衝撃で生まれた煙の中から、バンチョーレオモンが飛び出し、ギンリュウモンの前に危なげなく着地する。

ーーースタッ！！

「成長したな大、アグモン、ガオモン。俺はお前達の成長が見られて嬉しいぞ！」

「バンチョーレオモン！！本当にあのバンチョーレオモンなんだよな！」

「あぁ、お前の父親ー大門英（だいもんすぐる）の友だったバンチョーレオモンだ・・・・・色々と話をしたいが、大！！アグモン！！お前達はブラックエアロブイドラモンを止めに向かってくれ！！」

「ブラックエアロブイドラモン？」

「エアロブイドラモンじゃないのか？」

バンチョーレオモンの言葉に大とアグモンは疑問の声を上げた。

二人は十二年もの間、デジタルワールドを旅していたので、多くのデジモンと出会っている。その中には数が少ないエアロブイドラモンの存在も在ったが、“ブラックエアロブイドラモン”と言うデジモンには会った事が無いのだ。

新たなデジモンなのかとバンチョーレオモンに詳しく大とアグモンは聞こうとするが、その前にキャロが顔を俯かせながら話し始める。

「・・・・・ブラックエアロブイドラモンは、フェイトさんのパートナーデジモンだったブイモン君が・・・・“暗黒進化”をして現れたデジモンなんです」

「ブイモンが！？」

「暗黒進化だって！？」

「マジかよ！？」

エリオ、大、アグモンはキャロの言葉にそれぞれ驚いた声が上げるが、エリオと大達は意味が違った。

エリオは自身の友であるブイモンが進化した事に驚き。

大とアグモンは“暗黒進化”をしてしまったデジモンの事に驚いたのだ。形は違えど、大も自身のパートナーであるアグモンを暗黒進化させてしまった事が在る。当然ながら暗黒進化をしてしまった

デジモンの末路も充分すぎるほど分かっている。
その様子を横目で伺っていたバンチョーレオモンは、再び大とアグモンに声を掛ける。

「そうだ。ブイモンは其処で気絶している女の間違った想いに寄って暗黒進化をしてしまった。このまま行けば、ブイモンは間違いなく死んでしまう！！だからこそ、大、アグモン！！お前達が向かうのだ！！フェイト・テスタロッサが動けないと成れば、お前達以外に今のブイモンを救える者達はいない！！此処は俺に任せて、早く行くんだ！！ブイモンを頼む！！」

「・・・・・分かった。ブラックエアロブイドラモンって言うデジモンの事は、俺とアグモンが必ず助けて見せるぜぇ！！行くぜアグモン！！」

「了解だぜぇ！！兄貴ッ！！」

大の言葉にアグモンは同意の叫びを上げ、大は服のポケットからデジヴァイスバーストを取り出すと、先ほどのギガスモンを殴り飛ばした時からオレンジ色に輝き続けている右手を機械の上部分に押し当てる。
それと共にデジヴァイスバーストの液晶部分にＵＬＴＩＭＡＴＥＥＶＯＬＵＴＩＯＮの文字が映り出し、大はアグモンにデジヴァイスバーストを向け、オレンジ色の光をアグモンに向かって放つ。

「デジソウルチャージ！！オーバードライブッ！！」

「アグモン進化ッ！！」

デジヴァイスバーストから放たれたデジソウルを体に浴びたアグ

モンは叫ぶと、その体をデータ粒子へと一時変換させ、体を巨大に変化させる。それと共に背中に赤い十二枚の機械のような翼が出現し、胴体には赤い鎧の中心に青い宝玉のようなものへと変わり、腕にも黄色い篭手のようなものを備え、更に先に刃のような光輪が付いた巨大な尻尾も持った光竜型デジモン。大とアグモンの究極進化体のデジモンが姿を現した。その名も。

「シャイングレイモンッ！！」

シャイングレイモン、世代／究極体、属性／ワクチン種、種族／光竜型、必殺技／グロリアスバースト、シャイニングブラスト、ジオグレイソード

光竜型という新たな分類に属するデジモン。人型に近い、巨大なロボットのような姿をしている。赤や黄色のカラーリングはグレイモンというよりは、アグモンをイメージさせている。灼熱の太陽のエネルギーを蓄えて戦い、、『ジオグレイソード』とよばれる剣を召還する能力を持っている。　必殺技は、巨大な翼を広げて光のエネルギーを極限まで集中して放つ『グロリアスバースト』に、輝く光の翼で敵を薙ぎ払う『シャイニングブラスト』。そして大地(ガイア)の力が凝縮された剣『ジオグレイソード』だ。

「良し！！行くぞシャイングレイモン！！！」

「アアッ！！必ずあのデジモンを止めてみせる！！」

肩に乗っている大の叫びにシャイングレイモンも同意の声を上げ、二人は遠くではやて達と戦っているブラックエアロブイドラモンに向かって、凄まじいスピードで向かい出すのだった。
それを確認したバンチョーレオモンは、今度はガオモンとエリオ、そしてドリモゲモンに顔を向ける。

「お前達は急いで、強力な回復魔法を使用出来る者を連れて来るのだ！！其処の女が死んだら、元に戻ったブイモンは悲しむからな。頼むぞ！！」

「シャマル先生は、此処から南の方に在る線路の傍にいる筈だから！！」

「ＹＥＳッ！！」

「了解です！！」

「任せて下さい！！」

ーーーギュルルルルッ！！

ガオモン、エリオ、ドリモゲモンはそれぞれバンチョーレオモンとキャロの言葉に答えると、ドリモゲモンが地面に穴を掘り始め、地面の中へと潜って行き、ガオモンとエリオはその穴の中へと飛び込んで行った。

それを確認したバンチョーレオモンはガオモン達が潜った穴に僅かに目を向けるが、すぐに自身の学ランの中にしまってある小瓶を見つめる。

（最悪の場合は、フリートが渡した薬を使うしかないな。しかし、副作用の事を考えると、出来るだけ使用したくは無い。機動六課の戦力が減るのだけは、避けたいからな）

バンチョーレオモンは内心でそう呟くと、小瓶からすぐさま目を離し、先ほどの一撃のダメージから回復して来たメルキューレモン

達の方に顔を向ける。

「素直にスピリットの形に戻るならば、ヴィヴィオとギルモンへの攻撃は不問にしてやるが？」

「・・・・・クゥッ！！笑わせるな！私達は十闘士ッ！！例え究極体で在ろうと、私達は一歩も退かん！！これ以上追って来られても困るからな。寧ろ此処で貴様には消えて貰うぞ！！」

「面白い！！やれるものなら、やって見るが良い！！」

メルキューレモンの叫びにバンチョーレオモンは好戦的な笑みを浮かべながらメルキューレモン達に向かって駆け出し、メルキューレモン達もバンチョーレオモンに向かって駆け出すと。

ドゴオオオオオオオオオオオオオン！！

『オオオオオォォォォォォォォーーーーーーーーッッッ！！！！』

バンチョーレオモンとメルキューレモン、ラーナモン、アルボルモン、ギガスモンは激戦を繰り広げながら、キャロ達の前から移動して行くのだった。

緑が豊富に存在していた森が在った場所。其処は崖などが存在し、人が線路を引いて行き来していた場所だったが、既にその場所には戦闘前に在った森の姿が一切存在せず、逆に凄まじい熱量を放つ火の海とかしていた。

「グギャアァァァァァァァァァァッ！！」

ーーードゴオオオン！！

「ワアッ！！・・・・・とんでもない力や」

ブラックエアロブイドラモンが振り下ろして来た拳をギリギリの所でかわしたはやては、上空に高く浮かび上がりながら、辺りに次々と攻撃を放ち続けるブラックエアロブイドラモンの姿に、冷や汗を流していた。

戦いが始まった当初は、はやてとリインフォースの放つ砲撃によって僅かながらも、ブラックエアロブイドラモンに対して優勢に進めていたが、ブラックエアロブイドラモンは砲撃の直撃を受けても、ダメージを受けていないのか、気にせずにはやて達に攻撃を放ち続け、はやて達を追い込んでいたのだ。

「主。此処は一旦退いて態勢を整えましょう。あのデジモンは危険過ぎます！」

「・・・・・駄目や。此処で私らが退いたら、森の中を移動しているギンガ達が危ない。私らがあのデジモンを抑えているからこそ、ギンガ達はフェイトちゃんが向かった場所に向かえる。此処で一歩でも下がれば、それだけギンガ達も、他の隊員達も危険な状況に追い込まれてしまう。だから、下がる訳にはいかんのや！！」

はやてはそうリインフォースに宣言すると、ブラックエアロブイドラモンにシュベルトクロイツを構え、魔法陣を発生させ始める。

はやてとしても、ブラックエアロブイドラモンの持つ強大な力は分かっている。だが、此処でブラックエアロブイドラモンを止めなければ、部隊の者達が大勢死んでしまう事にも同時に気が付いてい

た。
今は、はやて達に攻撃された事で、ブラックエアロブイドラモンは、はやて達を狙うように成っている。しかし、はやて達が姿を消したり、倒されでもしたら、即座に現れた当初のようにブラックエアロブイドラモンは暴れるだろう。今のブラックエアロブイドラモンに在る感情は一つ、“全てを破壊する”事だけなのだ。

（これが暗黒進化・・・・・・フェイトちゃん！！何て姿にブイモン君を進化させたんや！？こんなの、フェイトちゃんもブイモン君も悲しいだけなんやで！？）

はやてはブラックエアロブイドラモンの正体に気が付いていた。
既にオーリスからの報告で、フェイトが暴走してゲートタワーに向かった事も、その場所にブイモンが居た事もはやては知っている。
そしてそれと共に現れたブラックエアロブイドラモンの存在の事を考えれば、自ずと答えは出る。
“ブラックエアロブイドラモンこそ、フェイトが進化させたブイモンだと言う事”を、はやては気が付いてしまっていた。

「・・・・・・行くでリインフォース。あのデジモンを何としても・・・・・“殺す”んや！！これ以上の被害だけは絶対に出すのはあかん！！その為にも、全力でブラックエアロブイドラモンを抹殺する！！その結果がどうなってもやるんや！！」

「・・・・・了解です！！」

はやての言葉に含まれた苦悩と覚悟を感じたリインフォースは、僅かに顔を歪めたが、すぐにはやてと同様に覚悟を決めた表情をして、ブラックエアロブイドラモンに向かって同時に砲撃を放つ。

『響け！終焉の鐘ッ！！ラグナロク！！』

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ガアアアアアアアアアアッ！！」

自身に向かって来る二つのラグナロクの姿を見たブラックエアロブイドラモンは、背に存在する翼を全力で羽ばたかせて、僅かに空中に身を躍らせると、すぐさま自身に向かって来るラグナロクに突進を行い始めた。

その姿を見たはやてとリインフォースは驚愕に目を見開くが、構わずにブラックエアロブイドラモンを倒せる最大のチャンスだと思い、更に魔力をラグナロクに送り込み威力を上げ始めるが、その考えは黒い光に包まれ始めたブラックエアロブイドラモンの姿を見た瞬間に吹き飛んだ。

「まさか！？あの技は！？退避や！？」

ブラックエアロブイドラモンの放とうとしている技に気が付いたはやては、慌てた表情をしながら、リインフォースと共にその場から全速力で離れ始めるが、その前にブラックエアロブイドラモンは完全に黒い光に包まれ、その身を黒い巨大な竜へと変え、『ドラゴンインパルス』を発動させた。

「ガアアアアアアアアアッ！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

ブラックエアロブイドラモンが発動させた『ドラゴンインパルス』に寄って、一瞬の内にラグナロクは掻き消された上に、辺り凄まじ

い衝撃波が巻き起こり、一瞬の内に火の海となっていた森の火は消えていった。
当然ながらそれだけの衝撃波をはやて達はかわす事が出来ず、衝撃波に体を揺らされながら地面に向かって凄まじい勢いで落下して行く。

（・・・・・駄目やなこれは・・・・・・・キュウビモンも他の場所におるし・・・・死んだわ・・・・・ゴメンな皆）

自身の状況をかんがみたはやては、悲しげな表情を浮かべながら内心で共に戦っている者達に別れを告げ、来るであろう衝撃に覚悟を決め、目を瞑る。
しかし、その直前に遠方から凄まじいスピードではやてとリインフォースに下に掛けて来る者が存在し、地面に落下する寸前のはやてをギリギリの所で背中に乗せ、リインフォースはバリアジャケットの襟元を口で銜える事で落下から救い出した。

ーーーポン！ガシッ！！

「ファヤテ！ファタシフォノフィファフィヲ、ファブルファフェユフゥファンゾ！！！（はやて！！私との誓いを破るなど赦さんぞ！！！）」

「ッ！！キュウビモン！？どないして此処に！？」

聞こえて来た声にはやては慌てて目を開けてみると、キュウビモンが自身を背中に乗せ、リインフォースを銜えながら空中を走っていた。
その声に気が付いたキュウビモンは口に銜えていた気絶しているリインフォースを、自身の背中の方に移動させると、両足を全力で

動かしながらはやての質問に答える。

「ビショップチェスモンが、はやて達の救援に向かえと言ってくれたのだ。周りの敵は、殆ど倒されていたので、駆けつける事が出来た。それよりも、はやて！！私との誓いを破って死ぬなど。絶対に赦さん！！何が在っても誓いを遂げると言う言葉は嘘だったのか！？」

「ッ！！嘘やあらへん！絶対に誓いだけは叶えてみせたる！！」

「成らば、そう簡単に生きる事を諦めるな！はやてに何かが在れば、私は必ず駆けつけてみせる！その事を忘れるな！！」

「・・・・・ありがとうキュウビモン」

（流石はリインの妹です！！）

キュウビモンの宣言に、はやては嬉し涙を流しながら礼を言い、はやてとユニゾンしているリインもキュウビモンを褒める。

そのはやてとリインの言葉にキュウビモンは苦笑を浮かべるが、すぐにその表情は真剣に変わり、その場から急いで離れ始めた瞬間に、上空からブラックエアロブイドラモンが突撃して来た。

「ガアァァァァァァァッ！！」

ーーードゴオオン！！

「グウッ！！何と言う力だ！？」

ブラックエアロブイドラモンの振り下ろして来た拳をギリギリの

所でかわしたキュウビモンだが、拳を振り下ろして来た時の衝撃波までは避ける事が出来ず、ダメージを受けしまっていた。
　そのキュウビモンの姿に、はやては心配そうな顔をしてキュウビモンに声を掛けようとするが、その前にブラックエアロブイドラモンがキュウビモンの目の前に瞬時に移動して来る。

ーーービュン！！

「グギャアアアアアアアアッ！！」

「しまったっ！？」

　目の前に現れたブラックエアロブイドラモンの姿に、キュウビモンは叫び声を上げ、はやても気絶しているリインフォースを護る様に抱えるが、ブラックエアロブイドラモンは止まらずに右拳を全力でキュウビモンに向かって振り下ろす。

「ガアアアアアッ！！」

『クウッ！！！』

　向かって来るブッラクエアロブイドラモンの拳を見たキュウビモンは僅かでも衝撃を弱めようと体を動かし、はやても防御魔法を発動させようとするが、キュウビモンとはやての動きは無駄だと言うようにブラックエアロブイドラモンは拳を突き出す。
　そしてブラックエアロブイドラモンの拳がキュウビモンに直撃しようとするが、その直前にブラックエアロブイドラモンの横合いから、肩に大を乗せたシャイングレイモンが飛び出し、ブラックエアロブイドラモンの顔を殴り飛ばす。

『オオオォォォォォォォォーーーーー！！！！！』

ーーードゴオオオオオオン！！

「ガアアッ！！！」

『ッ！！！』

シャイングレイモンに殴り飛ばされたブラックエアロブイドラモンの姿を見たキュウビモン達は目を見開き、警戒しながらシャイングレイモンを見つめていると、肩に乗っている大がキュウビモン達に向かって叫ぶ。

「此処は俺とシャイングレイモンに任せな！あのデジモンは俺達が止めてやるぜ！！」

「ッ！！まさか！？貴方は大門大さんですか！？」

「・・・・・やっぱ、俺の事は管理局に知られてんのか？」

「仕方が無いさ兄貴。この前の事でこうなる事は分かっていただろう？」

「まぁな。まぁ、後悔はしてねぇけどな」

シャイングレイモンの言葉に、大は迷いの一切ない表情をして答えた。

大とシャイングレイモンの心の中には、前回の時にヴィータを助けた事と、エリオも助けた事に一切の後悔はない。逆にあの時にヴィータを助けなかった方が大とシャイングレイモンは後悔していた

だろう。だからこそ、彼らの胸の中には例え正体がばれようと、後悔する気持ちはなかった。

「まぁ、とにかく今は、あのデジモンを“助ける事の方が重要だ”！！」

「アァッ！！絶対に助けて見せるさ！！」

「・・・・・・助ける？ブラックエアロブイドラモンを？」

大とシャイングレイモンの言葉に、はやては困惑した声を出した。彼らの力ならば、ブラックエアロブイドラモンを倒す事など簡単な事だと、はやては気がついていた。目の前に存在しているシャイングレイモンが放つ威圧感は、四聖獣やロイヤルナイツに匹敵する事を、はやては分かっていた。

しかし、大とシャイングレイモンはブラックエアロブイドラモンを倒すではなく、助ける宣言した。暴走しているブラックエアロブイドラモンを止めるには、倒すしかないと思っていたはやてからすれば、大達の言葉は困惑するには充分な事だった。

確かに倒した方が、手早く済む事は確かだ。その考えは確かに大とシャイングレイモンの頭の中にも思い浮かんでいたが、暴走するブラックエアロブイドラモンの姿を見た時に、大とシャイングレイモンは必ずブラックエアロブイドラモンを救うと決めたのだ。彼らには分かっていた。何故ブラックエアロブイドラモンが暴走しているのかを。

「・・・・・あのデジモンよ・・・・・・・・もう限界なんざ、超えちまっているんだよ」

『ッ！！！』

大が告げたブラックエアロブイドラモンの事実に、はやて達は慌てて目を見開きながら、立ち上がろうとしているブラックエアロブイドラモンを見つめ、一つの事実に気がついた。
ブラックエアロブイドラモンの体には無数の傷が存在し、その傷口から大量の血を流し続けている事に気がついてしまった。その傷と大量に流れ続けている血は、はやてとリインフォースがつけた傷ではない。何せはやてとリインフォースの魔法は殆ど防がれていたのだ。にも関わらず、ブラックエアロブイドラモンは全身に傷を負っている。
それが意味する事は一つ、“ブラックエアロブイドラモンは自らの力に寄って、傷を負っていたのだ”。

「・・・・・嘘やろ・・・・・あんな状態で私らと戦っていたんか？」

「・・・・・暴走ではない・・・・・ブラックエアロブイドラモンを動かしているのは別のもの・・・何らかの執念が体を支えているのか？」

「ガアァァァァァァァッ！！！」

キュウビモンの言葉に応じるようにブラックエアロブイドラモンは力を振り絞りながら立ち上がり、自身の殴り飛ばしたシャイングレイモンに顔を向ける。

「グギャアァァァァァァァッ！！」

「ヘッ！！俺達に挑む気だぜシャイングレイモン！！」

「そうみたいだな兄貴！」

「とにかく、先ずは動きを押さえて、何とか進化を解かせるぞ！そうなれば、方法は在るからな！！」

「了解だ！！オォォォォーーーーーー！！！！」

「ガアアァァァァァァァーーーーーー！！！！！」

シャイングレイモンがブラックエアロブイドラモンに向かって突進すると、ブラックエアロブイドラモンも背中の羽を羽ばたかせながらシャイングレイモンと同様に突進し、二体がぶつかり合う直前に、シャイングレイモンとブラックエアロブイドラモンは同時に拳を振り被り、そして。

ドゴオオオオオオオオオオオン！！

「オォォォォォォーーーーーー！！」

「ガアァァァァァァァァッ！！」

互いの拳がぶつかり合い、辺りに凄まじい衝撃波を撒き散らし、激闘を繰り広げ始めるのだった。

しかし、ブラックエアロブイドラモンの思いを真に受け止めてるべき相手は、未だにその姿を見せないのだった。

力の代償！！ブラックエアロブイドラモンの最後！！後編

キャロ達がいる場所から僅かに離れた森の中。
その場所で、ゲートタワーが在った場所から離れて戦い続けていたバンチョーレオモンとメルキューレモン達の戦いも終わりに近づいていた。いや、既に戦う前から決着はついていたも同然だった。
何故ならば、如何にメルキューレモン達が十闘士と呼ばれ、多くのデジモン達に尊敬されていても個人の実力としては、完全体の上位レベルでしかない。その程度の実力では、ロイヤルナイツとほぼ互角に戦えているバンチョーレオモンに勝てる筈が無いのだ。

「フン！！」

ーーードゴオン！！

「ガハッ！！」

バンチョーレオモンの拳を胴体に受けたメルキューレモンは口から息と血を吐き出し、後方で倒れているアルボルモン、ラーナモン、そしてギガスモンの方に吹き飛んで行き、地面に倒れ付してしまう。
その様子を見たバンチョーレオモンはゆっくりと、倒れ付しているメルキューレモン達に足を進め始める。

「そろそろ終わりだ。お前達が人間に失望した理由は分かっているが、それでもヴィヴィオを傷付けた事だけでは、断じて赦さん！！リンディ達との約束の為にも、再びスピリットの形に戻って貰うぞ！！」

「・・・・・フフフフフフッ！！ハハハハハハハハハハッ！！」

「何がおかしい？」

突如として笑い声を上げ始めたメルキューレモンの姿に、バンチョーレオモンは警戒しながら質問した。

その質問に答えるように、ボロボロな姿に成りながらもメルキューレモン達は立ち上がり、険しい表情をバンチョーレオモンに向け始める。

「バンチョーレオモン。お前は知らないのだ。私達が見た“人間の欲望の歴史”を。アレを見たならば、全ての存在が人間を見捨てるだろう」

「欲望に塗れた人間達」

「ソイツらが居る限り！デジモンには平和が訪れないのよぉ！！」

「ヘッ！！テメエは人間の闇を少ししか知らねぇから、人間に味方を出来るんだよぉ！！人間なんざ、滅んだ方が世界の為なんだぜぇ！！」

「・・・・・お前達は」

メルキューレモン達の言葉を聞いたバンチョーレオモンは、メルキューレモン達を説得するのは不可能だと気がついた。彼らは、メルキューレモン達は完全に人間に失望しているのだ。

メルキューレモン達が見たルインの記憶は、確かに“人間の欲望の歴史”としか称する事が出来ない。負の歴史。その事はバンチョーレオモンやリンディ達に充分過ぎる程に分かっていた。

しかし、一度三大天使の世界を人間が救った時に、メルキューレ

モン達は人間の光も見ていた。
　その事が在ったからこそ、ルインはメルキューレモン達や他の闘士達に記憶を見せる賭けに出たのだ。
　だが、その結果は最悪な方向へと向かってしまった。本来ならば人間を信じたかったメルキューレモン達の心は変わり、人間を滅ぼす道を選んでしまった。
　バンチョーレオモンはそのメルキューレモン達の考えを変える事は不可能だと判断すると、自身の右拳を赤く輝かせ始め、拳をメルキューレモン達に向かって構え始める。

「・・・・お前達の考えは充分に分かった。だが！俺は人間の光を信じる！！俺に挑み、俺と互角に戦った男の息子が諦めずに戦っているのだ！！ならば、俺も今一度人間の持つ可能性に賭けてみせる！！」

「不可能だ！！人間の可能性など！信じれば必ず裏切られる！！例え人間と手を結んだとしても。何れは人間はデジモンを裏切り、滅ぼす！！そうならない為にも！此処で人間を滅ぼし、デジモンだけで戦うのが最良の選択なのだ！！」

「最良か・・・・・良い事を教えてやる！！この世には最良の選択など無いのだ！！オオォォォォォーーーー！！！！」

『クゥッ！！』

　凄まじいスピードで駆けて来るバンチョーレオモンの対して、メルキューレモン達は防御の構えを行いだし、来るで在ろう衝撃に耐えようとする。
　しかし、そのメルキューレモン達の行動を見ても、バンチョーレオモンは走るスピードを落とす所か、更にスピードを上げて、赤く

輝く右拳を振り被る。

「終わりだアァァァァァァーーーー！！バーンバンチョー…」

「そこまでだ」

ーーーピタッ！

「何ッ！？」

『ダスクモン！！』

突如として聞こえて来た声に、バンチョーレオモンは思わず拳を止めてしまい、声の聞こえて来た方向を見てみると、気絶して血塗れになったシグナムを横抱きに抱えたダスクモンが木の枝の上に立っていた。

「貴様は！？」

「俺の名はダスクモン。『闇』の闘士だ」

ーーースタッ！

バンチョーレオモンの疑問に答えると共に、ダスクモンはゆっくりと地面に降り立ち、抱えていたシグナムの首筋に妖刀ーブルートエボルツィオンをバンチョーレオモンに良く見えるように構える。

ーーースチャッ！！

「ッ！！貴様ッ！？」

「この女の命が惜しければ、下がって貰うぞ。今の俺は『闇』そのもの。光を選んだレーベモンとは違い。俺は躊躇せずにこの女を殺せる」

「クゥッ！！おのれッ！！」

ダスクモンの言葉と行動に、バンチョーレオモンは怒りに満ち溢れた声を上げた。

今のダスクモンの行動は、バンチョーレオモンが最も嫌う行動だった。正々堂々と戦うでもなく、拳をぶつけ合うのでもない。完全に目的の為ならば手段など選ばないと言う行動をダスクモンは行ったのだ。

だが、此処でシグナムを見捨てる事などバンチョーレオモンには出来る筈も無く、ダスクモンの要求に悔しそうな表情をしながら従い、後方へと下がり始める。

それを確認したダスクモンは抱えていたシグナムが用済みになると、バンチョーレオモンに向かって投げ付ける。

「受けとれッ！！」

ーーーブン！！！

「ハッ！！」

ーーーガシッ！！

飛んで来るシグナムの姿を見たバンチョーレオモンは慌ててシグナムを抱き止め、ダスクモン達に怒りの表情を向けて見ると、ギガスモンが地面に全力で拳を振り下ろし、地割れをバンチョーレオモ

ンの方向に向かって発生はさせ始めていた。

「オオォォォォォォーーー！！」

ーーードゴオオオオオン！！

「ムッ！！」

自身に向かって広がってくる地割れに気がついたバンチョーレオモンは、慌ててその場からシグナムに衝撃を与えないように飛び上がり、地割れから逃れようとする。

だが、その直前にダスクモンが地割れの中に手を伸ばし、闇を引き出し始める。

「何ッ！？」

「喰らえ。ネガ・ケイブッ！！」

ーーーボゴオオオオオオオオオオオン！！

「グウッ！！」

ダスクモンとギガスモンの合体技ーネガ・ケイブが発動し、地割れの中から引きずり出された深い闇がバンチョーレオモンに襲い掛かり、慌ててバンチョーレオモンは自身の学ランの中にシグナムを抱え、ネガ・ケイブの衝撃を少しでも弱めようとする。

それと共にダスクモン達の姿も闇の中へと消えて行き、その闇の中からダスクモンの声がバンチョーレオモンに耳に聞こえて来る。

「次に会う時に決着はつける。最もその時には俺達は簡単にはやら

れんがな」

「待て！！」

聞こえて来たダスクモンの声にバンチョーレオモンは叫び、自身の周りに在る闇を振り払うが、既にダスクモン達の姿は何処にも存在していなかった。

その事にバンチョーレオモンは悔しそうな表情をするが、すぐにその表情は真剣に変わり、自身の腕の中で体中から血を流して気絶しているシグナムに顔を向ける。

「クッ！！すぐに治療が必要か！！すぐに仲間の所に連れて行ってやるぞ！！」

ーーービュン！！

シグナムの状態が危険だと瞬時に分かったバンチョーレオモンは、すぐさま駆け出し、キャロ達が居る場所へと全力で向かい出すのだった。

「オオォォォォォーーーーー！！！！」

「ガアアアアアアアアアッ！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオン！！

焼き焦げた木々だけが存在している場所の上空で、シャイングレイモンとブラックエアロブイドラモンは殴り合いを続け、辺りの衝

撃波を巻き散らしていた。
　しかし、一方的のダメージを受けているのはブラックエアロブイドラモンの方で在り、シャイングレイモンには殆どダメージが存在していなかった。如何に究極体に迫る力を持っていても、ブラックエアロブイドラモンは完全体の上に、理性が無く本能だけで戦っているしかない。
　その様な相手に歴戦の戦いを繰り広げていたシャイングレイモンが負ける筈も無く、例え拳がぶつかり合っても殆どの衝撃は、ブラックエアロブイドラモンだけが受けていたのだ。

ーーードゴオオオオン！！

「ガアッ！！」

「クッ！！・・・・・・これだけのダメージを与えても、何で進化が解けないんだ！？」

　既に充分なダメージを受けているにも関わらず、進化を解く事無く立ち上がろうとしているブラックエアロブイドラモンの姿に、シャイングレイモンは辛そうな表情をして叫んだ。
　もはやブラックエアロブイドラモンは自身の限界を超えるほどのダメージを受けている上に、自身の持つ特殊能力ーオーバーライトの影響で本来ならば立ち上がろう事さえ出来ない筈なのだ。
　しかし、それでもブラックエアロブイドラモンは立ち上がり、シャイングレイモンに挑み続けている。まるでそれこそが自身を“生き長らえさせる唯一の方法”だと言うように、ブラックエアロブイドラモンは自身の限界を超えて戦い続けているのだ。

「ガアアアアアアアアーーーー！！」

「クッ！！クソッ！！」

ーーーガアアン！！

高速で突進して来たブラックエアロブイドラモンを、シャイングレイモンは力を振り絞りながら、両手で受け止め、ブラックエアロブイドラモンの動きを封じた。

その隙にシャイングレイモンの肩に乗っていた大が、目の前に存在しているブラックエアロブイドラモンの顔に向かって飛び掛り、全力でブラックエアロブイドラモンの顔に向かって拳を振り下ろす。

「いい加減に！戻りやがれぇ！！」

ーーードゴオオオン！！

「ガアハッ！！・・・・・・・・フェ・・・・・・イ・・・・・・・ト・・・・・」

『ッ！！』

大の拳を顔面に受けると同時に、今までとは違いブラックエアロブイドラモンはゆっくり後方に向かって倒れながら、暗黒進化して初めて理性が在ると思われる声を上げた。

その声を聞いたシャイングレイモンと大は目を見開き、倒れかけているブラックエアロブイドラモンに顔を向けてみると、凶暴さだけに支配されていたブラックエアロブイドラモンの瞳に僅かながら理性の光が宿っていた。

大とシャイングレイモンはそのブラックエアロブイドラモンの姿に喜びの表情を浮かべ、ブラックエアロブイドラモンに声を掛けようとするが、ブラックエアロブイドラモンは大とシャイングレイモ

ンに構わず、ゲートタワーが在った場所に顔を向ける。

「・・・・・・フェ・・・・・・イ・・・・・・ト・・・・・・ハヤ・・・・・・ク・・・・・・キテ・・・・・・クレ・・・・・・オレガ・・・・・・キエル・・・・・・マエ・・・・・・ニ・・・・・・フェ・・・・・・イ、ガアァァァァァァァァァァァァァァァッ！！」

「クソッ！！駄目なのかよ！？」」

再び凶暴さに満ち溢れた咆哮を上げたブラックエアロブイドラモンの姿に、大は悔しそうな声を上げた。後一歩でブラックエアロブイドラモンが元のブイモンに戻ろうとしていたのに、再び理性を無くしてシャイングレイモンと戦おうとしているのだ。大ではなくても悔しく思うだろう。

しかし、先ほどのブラックエアロブイドラモンの言葉に、シャイングレイモンは何故ブラックエアロブイドラモンが進化を解かないのかを確信した。

「・・・・・兄貴。あのデジモンのパートナーを連れて来てくれ」

「シャイングレイモン？」

大はシャイングレイモンの言葉に、疑問を覚えた。今のシャイングレイモンの声には、隠しきれていない悲しさが含まれていた。長い間共に歩んで来た大でも、その悲しみの意味が分からずに疑問を覚えたのだ。

その事に気が付いたシャイングレイモンは、再び力を込めながら立ち上がろうとしているブラックエアロブイドラモンの姿を見つめながら、大に話し出す。

「・・・・あのデジモンは・・・・・・もう自分が限界を超えて、助からない事を本能的に分かっているんだ」

「何だって！？」

「・・・・俺は一度“暗黒進化”をしている。だから、俺には分かるんだ。俺達は間に合わなかったんだ・・・・だけど、それでもブラックエアロブイドラモンは戦い続けている。兄貴になら、その意味が分かる筈だ」

「ッ！！！まさか！？ブラックエアロブイドラモンは！？」

大にはシャイングレイモンの言わんとしている事が、すぐに分かった。

ブラックエアロブイドラモンが、何故進化を解かず、未だに戦い続けているのか。

自身の限界を超えながらも、動き続け、フェイトを呼ぶ声を上げたのかも。全ての理由がシャイングレイモンと大には完全に分かった。

そしてその行動の果てにブラックエアロブイドラモンとフェイトが至る結末も、予測が付いてしまった。

「多分そうだ。だから、ブラックエアロブイドラモンのパートナーを連れて来てくれ。ブラックエアロブイドラモンの心を救う為にも！」

「・・・・・チクショウ！・・・・・分かったすぐに連れて来てやる！！どんな事が在っても必ずな！！此処は頼むぞ！！」

「任させろ兄貴ッ！！必ず抑えて見せるさ！！」

自身の肩から飛び降りて、森の中を全速力で走って行く大の背に向かってシャイングレイモンは叫び、すぐさまブラックエアロブイドラモンの方に顔を向ける。
それと共にブラックエアロブイドラモンは立ち上がり、背の両翼を羽ばたかせて、再びシャイングレイモンに向かって突進して来た。

「グギャアァァァァァァァァッ！！」

「お前の想いは必ずパートナーに受け継がせて見せる！！その為にも！もう暴走はさせないぞ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

突進して来たブラックエアロブイドラモンを渾身の力を込めてシャイングレイモンは受け止め、大地にブラックエアロブイドラモンの体を押さえ始めた。

「グギャアァァァァァァァァッ！！」

「オオオォォォォォォォォーーーーーーッ！！！！！」

地面に押さえつけられながらも、暴れ続けるブラックエアロブイドラモンに対して、シャイングレイモンは渾身の力を持ってブラックエアロブイドラモンの動きを封じ、大がフェイトを連れて戻って来るのを信じるのだった。

焼け焦げた木々の間の中を、シャイングレイモンと離れた大は、自身の出せる最大速度で走り続けていた。しかし、その表情は酷く

辛そうに歪み、何かの悲しみを堪えていると言う風に表情は歪んでいた。

「クソッ！！何で！？何であんな良いパートナーを暗黒進化させちまったんだ！！？すげえパートナーじゃなねぇか！！チクショウ！！」

大が悲しんでいるのは、ブラックエアロブイドラモンの事だった。

先ほどのシャイングレイモンとの会話で、大はブラックエアロブイドラモンの想いに気が付いた。

自身のパートナーの為に、ブラックエアロブイドラモンは動いている。暗黒進化と言う最悪にして最低の進化を行わされてなお、ブラックエアロブイドラモンはフェイトの為だけに頑張っていたのだ。

その結果、自身がどうなるのか分かっていてもなお、ブラックエアロブイドラモンは待ち続けている。フェイトが来てくれる事を、あの様なボロボロの状態に成りながらも信じているのだ。

その事が先ほどの戦いで分かった大は、その様な状態にブラックエアロブイドラモンが成っている事も気が付かずに、気絶し続けているフェイトに怒りを抱き始める。

「必ず会わせてやる！！引き摺ってでも、ブラックエアロブイドモンの奴には会わせてやる！！待っていろよ！！」

「成らば、私の背に乗った方が早く着くぞ？」

「うん？」

横合いから聞こえて来た声に、大は訝しげな表情をして自身の左側を見てみると、はやてと気絶しているリインフォースを自身の背に乗せたキュウビモンが、大と並ぶように空中を走っていた。

「乗れ。丁度行き先は同じなのでな」

「フェイトちゃんには、私も沢山言いたい事が在るんや。だから、乗って下さい！！」

「・・・・・・ヘッ！！ありがとな！！」

キュウビモンとはやての言葉に、大は僅かに呆気に取られた表情をしたが、すぐに顔は笑みへと変わり、礼を言いながらキュウビモンの背に乗りこむと、キュウビモンは大達を背に乗せながら、フェイトが居る場所へと全速力で駆け出すのだった。

ゲートタワーが在った場所。其処にはギガスモンが作り上げた深い地割れが存在し、その場所でキャロはギンリュウモンと真の姿の戻っているフリードに護衛されながら、重傷を負っているフェイトに治療魔法を掛け続けていた。

しかし、フェイトの負った傷は酷く深く、キャロの掛けている治療魔法では応急処置程度の効果しか成らず、本気でキャロが焦りを覚え始めると、僅かにフェイトの指が動き始める。

ーーーピクッ！！

「ッ！！フェイトさん！起きて下さい！！意識が戻ったなら、返事をして下さい！！」

「・・・・・・・・キャ・・・・・・ロ」

「フェイトさん！！」

聞こえて来たフェイトの声にキャロは喜びの声を上げ、様子を伺っていたギンリュウモンとフリードも、フェイトが意識を取り戻した事に僅かに笑みを浮かべる。

だが、すぐにその表情はキャロも含めて険しくなり、フェイトに低い声でキャロが質問し出す。

「・・・・フェイトさん？自分のした事が分かっていますね？」

「・・・・・・私は・・・・・・・ブイモンを・・・・・暗黒進化させてしまった」

「そうです。その結果。今もブイモン君はブラックエアロブイドラモンの姿で、暴走しています。例の人物ー大門大さんとパートナーデジモンが、ブラックエアロブイドラモンと戦っていますよ」

「・・・・・・・行かなくちゃ・・・・・・・ブイモンの所に・・・・グウッ！！」

キャロの告げた状況に、フェイトは力を込めて立ち上がろうとするが、体は激痛を襲う激痛に動く事が出来ず、地面に倒れ付したまま苦痛に苦しみは始める。

しかし、キャロ達はその姿を見ても、険しい表情を変えずに、フェイトに低い声のまま質問を再び行う。

「・・・・・行ってどうする気です？また、ブイモン君を苦しめる気ですか？自分がブイモン君にどれだけ最低な事をしたのか？分かっているんですか！？」

キャロは本気でフェイトに対して怒りを覚えていた。
忠告を無視した事もそうだが、今回のフェイトが行った行動はどれも最低なものだとキャロは思っている。
仲間だった隊員達を攻撃した事。オーリス達が止めるのも聞かずに、この場に来た事。
ギガスモン達の策略にまんまと引っ掛かりブイモンを暗黒進化させてしまった事。
その後にショックで気絶した事も上げれば、今回のフェイトの行動はどれをとっても最悪だった。
その事をキャロの怒りの叫びで改めて認識したフェイトは落ち込み始めるが、それでも起き上がろうとする動きだけは止めなかった。

「・・・・・私には・・・・・何も言う資格は無い・・・・・・・だけど・・・・・ブイモンだけは元も戻してみせる・・・・・・・それが・・・・・ブイモンに出来る・・・・」

「死ぬかもしれませんよ？傷の事だけではなく、今、究極体に迫る力を得たブラックエアロブイドラモンと、究極体に進化した大さんのパートナーデジモンが戦っています。そんな所にボロボロの貴女が言っても死ぬだけです」

「キャロの言うとおりだぜ。デジモンが一緒に行けば別だろうが、俺とフリードはキャロを護らねぇといけねぇ。だから、俺達は向かうのは不可能だ」

「グオォォォォォッ！！」

ギンリュウモンの言葉に応じるようにフリードも咆哮を上げた。
ギンリュウモンとフリードが最も護るべきなのは、家族であるキャロ。そのキャロの頼みが無い上に、ギンリュウモンとフリードは

フェイトに協力する気は一切無かった。ブイモンの事は確かに助けたいと思っているが、仲間を攻撃したフェイトを助ける気は無い。今回のフェイトの行動で失ったものは、ブイモンだけではなく、機動六課の部隊員達が抱いていたフェイトに対する信頼さえも失っていたのだ。仲間を一時の暴走とは言え、攻撃した者など信頼出来る者は居ないのだから。

その事をキャロ達の行動と言葉で気がついたフェイトは、自身が本当に取り返しのつかない事をしてしまった事を改めて思い知り、更に表情を深く曇らせ始めた瞬間に、キャロ達の背後の地面からドリモゲモンのドリル型の鼻が飛び出して来る。

ーーードゴオオオオン！！

「フゥ〜、何とかシャマルって言う人を連れて来ましたよ」

「本当ですか！？」

自身が開けた地面の穴から出て来ると共に告げられたドリモゲモンの言葉に、キャロは僅かに目を見開きながら質問の声を上げた。

キャロの考えでは、例えシャマルを発見出来てもフェイトのやられたダメージが深く、動く事は出来ないと思っていたのだ。そしてその考えは当たっていた。何故ならば、エリオとガオモンに肩を借りて、ドリモゲモンが掘った穴から出て来たシャマルの姿は、バリアジャケットを酷く損傷している上に、エリオとガオモンの手を借りなければ、歩けない状態に成っていたのだ。

しかし、シャマルは苦痛に苦しむ表情をしながらもフェイトの方に向かって、エリオとガオモンに手を借りながら歩き始め、キャロが心配そうな表情をして声をシャマルに掛ける。

「シャマル先生！！大丈夫ですか！？」

「・・・・えぇ、何とか動けるわ。ギリギリの所で防御魔法を発動させていたから、大丈夫よ」

「嘘を言うな。私とエリオの手を借りなければ、此処に来る事どころか、動く事さえ出来ない状態だったのだぞ」

「・・・・・すいませんシャマルさん」

ガオモンとエリオは、それぞれシャマルに対して声を出した。
ガオモン達がキャロの教えてくれた場所に向かい、着いてすぐにシャマルを発見する事は出来た。だが、その体には隠し切れていないほどのダメージが存在していた上に、魔法の使用など不可能に近い状態にシャマルは成っていた。その姿を見たガオモン達は、シャマルの手によるフェイトの治療を諦め、別の治療魔法の使い手を捜そうとしたのだが、シャマルがフェイトの下に連れて行ってくれと頼み込み、こうしてキャロ達が居る場所へと連れて来たのだ。
その事をガオモン達から詳しく聞いたキャロは顔を悲痛に染め、シャマルに魔法の使用を止めさせようとするが、シャマルは止まらずに地面に横に成っているフェイトに自身のデバイス―指輪の形をしたクラールヴィントを構え始める。

「・・・・・フェイトちゃん・・・・今から私の全てを振り絞って治療するわね・・・・・その代わりに、ブイモン君を必ず救いなさい・・・・・それが私の願いよ」

「・・・・・シャマル・・・・・・・止めて・・・・・・私には・・・・・・そんな資格は・・・・・」

「勘違いしないで・・・・・・私がフェイトちゃんを助けるのはブ

イモン君の為よ・・・・・・あの子は本当にフェイトちゃんの事を大切に思っている・・・・・だから、絶対にブイモン君を救ってね」

シャマルはそうフェイトに笑みを浮かべながら告げると、魔法陣を発生させ本格的にフェイトに治療魔法を発動させようとするが、その直前にシャマルの腕をオレンジ色の体毛で覆った腕が掴み取る。

ーーーガシッ！！

「ッ！！」

「死に急ぐな。お前達は、まだ消えるべき者達ではない」

『バンチョーレオモンッ！！』

シャマルの腕を掴んだ腕の主ーバンチョーレオモンの姿を見たキャロ、エリオ、ガオモン、ギンリュウモンは驚いた声を上げ、シャマルの腕を掴んでいるバンチョーレオモンの姿を見つめた。

その事に気がついたバンチョーレオモンは、僅かに口元に笑みを浮かべながら、右側に抱えていたシグナムをゆっくりと地面に下ろし、キャロに声を掛ける。

「其処の娘。この女に治療魔法を掛けろ。此方の方が、其処の愚か者よりも重傷だからな」

『シグナムッ！！』

「シグナム副隊長ッ！！」

血塗れになって気絶しているシグナムの姿を見たシャマル、フェ

イト、キャロは、悲痛な表情をしながら声を上げ、キャロはすぐさまシグナムに駆け寄ると治療魔法を掛け始める。
　それを確認したバンチョーレオモンは、羽織っている学ランの中から一つの小瓶を取り出し、地面に横に成ったままのフェイトに近寄り、小瓶をフェイトに見えるように顔の前に差し出す。

「この小瓶の中に入っている薬は、魔導師が飲めば、いかなる重傷も瞬時に治療されるだけではなく、一定時間の間、爆発的に魔力を増大させる薬だ」

「ッ！！そんな薬が存在していたの！？」

　バンチョーレオモンが説明した薬に効果を聞いたシャマルは、目を見開き、信じられないと言う表情をしながらバンチョーレオモンの手に握られている小瓶を見つめ、キャロ達もシャマルと同様の表情をしながらバンチョーレオモンの小瓶を見つめ始める。
　それだけバンチョーレオモンの持っている小瓶の効果は凄いのだ。いかなる傷も瞬時に治療される上に、魔力の増加も発生すると成れば、正に魔法の薬と呼ぶべき効能を持った薬だろう。だが、世の中そうは旨くいかない。バンチョーレオモンの持っている薬には、魔導師に取って決定的な副作用が存在しているのだ。それは。

「この薬を魔力を持つ者が飲めば、説明した効果は確かに現れる。だが、薬の効果が切れた後には、薬を服用した者はもう魔導師ではなく、ただの人間に成ってしまうのだ」

『ッ！！！！！』

「一応、魔力を取り戻した者もいるようだが、数千兆人以上が服用して、魔力を取り戻した人物の記録は、たったの一人だそうだ」

「数千兆人に一人！？それじゃあ、魔力を取り戻せる可能性は奇跡に近いわ！？」

バンチョーレオモンが説明した薬の副作用に、シャマルは悲鳴のような声を上げた。

魔導師に取って、魔力とは命そのものと言って良い。何せ魔力が無くなれば、魔法の使用は愚か、デバイスの起動さえも行えなくなってしまう。しかも、フェイトには使い魔で在るアルフも存在している。

使い魔は主の魔力を受け取って生きる事が出来る擬似生命体。つまり、フェイトが魔力を失えば、フェイトの使い魔であるアルフは死んでしまうのだ。

薬を服用すれば、ブラックエアロブイドラモンの下に行ける。しかし、その代償に大切な家族を失ってしまう。逆に薬を服用せずにこの場に留まり続ければ、何れはブラックエアロブイドラモンは死んでしまう。“フェイトは選択を迫られているのだ。アルフを選ぶか、ブラックエアロブイドラモンを選ぶのかと言う、非情としか言えない二択の選択”を、フェイトはこの場で迫られた。

「悩むのは勝手だが、時間はもう少ないぞ。貴様のディーアークの姿を見てみろ？」

「・・・・・・罅が入って・・・・・・」

ーーービキッ！！

バンチョーレオモンの言葉に、フェイト達が地面の上に落ちていたフェイトのディーアークを見つめた瞬間に、ディーアーク全体に罅が広がり始めていた。

その砕け散る寸前と言う様相を表すディーアークの姿にバンチョーレオモンを除く全員が悲痛の表情を浮かべ始めると、バンチョーレオモンが理由を説明し出す。

「ディーアークは人間とデジモンの絆に寄って生まれるデジヴァイス。パートナーのデジモンが居なくなれば、意味が無くなる物だ。故に、ディーアークが砕け散る時は、パートナーとの繋がりが消える時。つまり！ディーアークはブラックエアロブイドラモンの状態をお前に教えているのだ！！ブラックエアロブイドラモンが、ブイモンがもうすぐ死ぬ事を！！」

『ッ！！！』

告げられたブラックエアロブイドラモンの状態にフェイト達は目を見開き、遠くで咆哮を上げ続けているブラックエアロブイドラモンの方に、全員が目を向ける。

それと共に上空から、大達を背に乗せたキュウビモンがバンチョーレオモン達のすぐ近くに着地し、大はすぐさま地面に降り立つと、フェイトに駆け寄る。

「おい！！すぐにブラックエアロブイドラモンの所に行くぞ！！」

「エッ？」

「アイツはな。さっき一度理性を取り戻して、お前の事を呼んだんだよ！！フェイトってな！！」

「ッ！！・・・・・・ブイモンが私を？」

「そうだ！！あんな状態に成っても、お前の事を待っているんだよ

ぉ！！暗黒進化をさせられても、お前の事を大切に思って、呼び続けているんだ！！良く耳をすませて聞いてみろ！！ブラックエアロブイドラモンの想いをよぉ！！」

「・・・・・・」

フェイトは大の言うとおりに、注意深くブラックエアロブイドラモンの咆哮が響き続けている場所に耳を澄ませ、注意深くブラックエアロブイドラモンの叫びを聞き始めた。

『ガアァァァァァァァァーーーーーーーーーーーーー！！！！！』

「・・・・・・・ブイモン・・・・・・ヒック、ヒック、ゴメン・・・・・・・ゴメンね・・・・・・私は・・・・・本当に最低だ・・・・・ブイモンの想いに・・・・・ヒック、ヒック」

聞こえて来たブラックエアロブイドラモンの咆哮の中に含まれていた想いに、漸く気がついたフェイトは、瞳から悲しみの涙を零し始めた。

暗黒進化をしてしまい、理性など殆ど残っていないにも関わらず、ブラックエアロブイドラモンはフェイトを待ち続けている。その理由までは、今のフェイトには分からなかったが、それでもブラックエアロブイドラモンが自身が来るのを待っているのだけは、感じ取る事が出来た。

フェイトはそのブラックエアロブイドラモンの想いに決意を固めると、厳しい表情で自身を見つめてるはやてに顔を向ける。

「はやて・・・・・・この後、私はどうなっても構わない・・・・・だけど、アルフを病院に送る手筈だけはお願い」

「・・・・・随分と虫の良い話やなフェイトちゃん?今回、どんだけ機動六課に損害をフェイトちゃんは出していると思ってるんや?」

そうはやてが怒りの声で、フェイトに質問するのも当然だろう。

今回、フェイトの行いのせいで発生した損害は、機動六課全体を危機に晒すには充分な事だった。部隊員達の損害だけではなく、辺りの地形もかなりの損傷を負ってしまった。唯一の救いが在るとすれば、最も今回の任務で護るべきだった線路が全て無事な形で残っている位だろう。だが、それにしても多くの部隊員達が決死の想いで護り抜いたおかげだ。

少なくとも、今回のフェイトの行動で、プラスに働いた部分は一切無い。寧ろマイナス方向にしか働いてないのだ。はやてが怒りを覚えるのも当然だろう。

「まあええわ。アルフの手配だけは行ったる。そん代わり、私はフェイトちゃんを切り捨てる。事後処理の時も護る行動は一切行わなへんよ」

「そんな!?八神部隊長!?」

「エリオは黙るんや!!今回の件は、全部フェイトちゃんが招いた事態や!!責任は絶対取ってもらわへんとあかんのや」

エリオの悲痛な叫びに対して、はやては冷徹な表情をしながら答え、その表情のままフェイトを見つめる。

そのはやての表情に、フェイトは自身が本当に大切なものを切り捨てた事を改めて思い知るが、それでもブラックエアロブイドラモンの下に行くと言う決意は変えずに、バンチョーレオモンへと顔を向ける。

「薬をお願いします」

「良いだろう。大、その女にこの薬を飲ませろ」

「ああ、分かった」

大はバンチョーレオモンが差し出してきた小瓶を受け取り、小瓶の蓋を開けると、中身をこぼさない様にしながらフェイトの口元に差し出し、フェイトは差し出された小瓶のふちに口を付けると、ゆっくりと中身を全て飲み干す。

ーーードクン！！

「グウッ！！」

「おぃ！大丈夫か！？」

薬を飲み干すと共にフェイトは苦痛に苦しみように胸を押さえ、大が心配そうに声を掛けるが、フェイトは大の言葉が聞こえてないのか、胸を手で押さえ続けるが、突如として立ち上がり、バルディッシュと砕け散る寸前のディーアークをそれぞれの手で握り締める。

ーーーガシッ！！

「十分だ。それが魔力を爆発的に高められている時間だ。それを過ぎれば、お前は魔導師では無くなる」

「・・・・ありがとうございます」

ーーービュン！！

タイムリミットを告げてくれたバンチョーレオモンに礼を言うと共に、フェイトはブラックエアロブイドラモンが居る方向に向かって全速力で飛び立っていた。

その姿を確認したバンチョーレオモンは、大へと顔を向け、同時に頷き合うと、すぐさまフェイトが向かった方向に向かって全速力で駆け出して行く。

「・・・・・この場の機動六課メンバー全員に命令！！森の中を走っているギンガ達と合流し次第、負傷者の救助作業に移るんや！！」

『了解ッ！！』

はやてが告げた命令にキャロ達は全員頷き、負傷しているシグナム、シャマル、リインフォースをギンリュウモンやフリードの背に乗せ始めていく。

その様子を確認したはやては、大とバンチョーレオモンとは行かずに、この場に残っているガオモンとドリモゲモンに顔を向ける。

「あんたらはどないする気や？」

「救助協力しよう。その後に今後についての交渉を行いたい」

「・・・・・分かりました。とにかく今は負傷者の救助を優先しますさかいに」

「了解だ！！」

「任せて下さい！」

はやての言葉にガオモンとドリモゲモンは頷き、キャロ達ともに負傷者の救助に向かい出すのだった。

「グギャアァァァァァァァァッ！！」

「クウッ！！オォォォォォォォォーーーー！！！！！」

力を振り絞って拘束から逃れようとしているブラックエアロブイドラモンに対して、シャイングレイモンは絶対に逃がさないと言うように力を込めてブラックエアロブイドラモンを地面に押さえ続けていた。

元々も力の差も在り、ブラックエアロブイドラモンを地面に押さえつけるのは、シャイングレイモンからすれば簡単な事だったが、徐々にでは在るがブラックエアロブイドラモンの力は上がって行き、僅かにシャイングレイモンを押し返し始めていたのだ。

（クウッ！！何て想いだ！！こうしてぶつかり合っていると、コイツの想いが伝わって来る！！其処までパートナーの事を！！）

「ガアァァァァァァァァァッ！！」

「しまっ！！」

シャイングレイモンの力が僅かに緩んだ瞬間に、ブラックエアロブイドラモンは力を限界を超えてもなお振り絞り、シャイングレイモンの体を押し返した。

その事に僅かにシャイングレイモンは驚き、思わず動きが止まっ

てしまい、その隙をブラックエアロブイドラモンは逃さずに口を大きく開け、黒いVの字型の閃光ーブイブレスアローをシャイングレイモンの胴体に向かって発射する。

「ガアアアッ！！」

ーーードゴオオオン！！

「ウアッ！！」

流石に至近距離でのブイブレスアローは効いたのか、シャイングレイモンは完全にブラックエアロブイドラモンから手を離し、僅かにでは在るが後退してしまった。

それに対してブラックエアロブイドラモンはすかさず、自身の巨大な尻尾を振り上げ、シャングレイモンに向かって全力で振り下ろす。

「ガアァァァァァァッ！！」

ーーーガシッ！！

「舐めるな！！その程度の攻撃では、俺は倒せん！！」

自身に向かって振り下ろされて来た尻尾を掴み取りながら、シャイングレイモンは叫び、再びブラックエアロブイドラモンを拘束しようと、手を伸ばす。

しかし、その直前にブラックエアロブイドラモンは自身の背にある両翼を全力で羽ばたかせて、風の守護壁ーウインドガーディアンを発動させ、シャイングレイモンと距離を取る。

「ガアァァァァァッ！！」

ーーーゴオオォォォォォォォーーーーー！！！

「グウッ！！この程度で押さえられると思うな！！グロリアスバーストッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ガアッ！！」

シャイングレイモンが放ったグロリアスバーストによって、ブラックエアロブイドラモンのウインドガーディアンは一瞬の内に消滅してしまった。

それによって今度は、ブラックエアロブイドラモンの動きが止まってしまい、その隙にシャイングレイモンは再びブラックエアロブイドラモンを拘束しようとするが、突如としてブラックエアロブイドラモンはシャイングレイモンには目もくれずに、別の方向へと顔を向け唸り声を上げ始める。

「グルルルルッ！！」

「うん？動きが止まった？・・・・・まさか！？」

ブラックエアロブイドラモンが動きを止めた理由に気がついたシャイングレイモンは、すぐさまブラックエアロブイドラモンの見ている方向に顔を向け、凄まじいスピードで接近して来るフェイトの姿を目撃する。

「グルルルルルッ！！！グギャアァァァァァァァーーーーーー

！！！！！」

「・・・・・ブイモン・・・・・・」

フェイトの姿を目撃したブラックエアロブイドラモンは、今まで以上に凶悪そうな咆哮を上げながらフェイトを睨み付け、フェイトは悲しげな表情でブラックエアロブイドラモンを見つめる。

フェイトにとって今のブラックエアロブイドラモンの姿は、自身が望んだブイモンの姿。その姿を改めて見たフェイトが感じるのは、ブイモンをブラックエアロブイドラモンへと進化させてしまった罪悪感と深い悲しみだけだった。自身がギガスモン達の策略に乗らなければ、キャロの告げた言葉の意味を真に理解していれば、ブイモンは“暗黒進化”をしてしまう事はなかった。

その事を改めて思い知らされたフェイトは、悲しげに表情を歪めながら、ブイモンへとライオットザンバー・カラミティに変形させているバルディッシュを構える。

「・・・・・ブイモン・・・・・・終わりにしよう・・・・・もう良いんだよ」

「グギャアァァァァァァァァァァッ！！！」

ブラックエアロブイドラモンは咆哮を上げると共に、空高くへと舞い上がり、自身の体を黒く輝く巨大な竜へと変化させながら、フェイトに突進を行い出す。必殺技の『ドラゴンインパルス』でフェイトをこの世から、跡形も無く消滅させる気なのだ。

その行動に気がついたシャイングレイモンは、再びグロリアスバーストを放つ為に、自身の背に在る巨大な翼から光のエネルギーを集めようとするが、その直前に足元から声が響く。

「待つのだシャイングレイモンよ」

「此処からはアイツら問題だ」

「兄貴ッ！！バンチョーレオモン！！」

バンチョーレオモンと大の姿を見つけたシャイングレイモンは驚きの声を上げるが、大は構わずにシャイングレイモンに声を掛ける。

「・・・・・分かっているだろう。アイツの覚悟がよぉ。それを遂げさせるが、俺達がアイツにしてやれる事だ」

「・・・・・・クッ！！・・・・・そうだな兄貴」

大の言葉にシャイングレイモンは同意の声を上げ、激突し合おうとしているブラックエアロブイドラモンの姿を悲しげに見つめ始める。

そしてシャイングレイモン達に見守られながら、フェイトはバルディッシュに自身の今持つ全ての魔力を込め、上空に存在していた雷雲から雷をライオットザンバー・カラミティの刀身へと落とし、『ドラゴンインパルス』と成って高速で突進して来るブラックエアロブイドラモンに刃を向ける。

「ゴメンね・・・・・・・雷光一閃ッ！！」

「ガアァァァァァァァァァッ！！！！！」

「プラズマザンバーブレイカーーーーッ！！！」

ドゴオオオ

グで技の発動は止まった。

「私には！！ブイモンに助けられる資格なんて無いよ！！だから！だから、ブイモンに殺して貰おうとしていたのに！そうすれば、ブイモンの進化は解けて、助かったんだよ！！それなのに！！」

「・・・・・・俺さ・・・・・・・一度もフェイトを・・・・・助けた事が・・・・なかった」

「エッ！？」

「・・・・・・仕事で・・・・・・フェイトが離れた時も・・・・・何時もフェイトが・・・・・・心配だった・・・・・早く進化して・・・・・フェイトの力に成りたかった・・・・」

「ブイモン・・・・・」

初めて語られるブイモンの心からの想いに、フェイトは言葉を出す事が出来なくなった。

思えば、自分はブイモンが生まれてからも、仕事で離れる事が多く、ブイモンを本当の意味で語り合った事さえも無かったと、フェイトは今更ながらに気がついた。自身がどれだけ、ブイモンに思われていたのかを改めてこの場で思い知らされたのだ。

「だから・・・・・俺は・・・・・・・最後ぐらい・・・・・・フェイトの為に・・・・・動く気だった・・・・此処でフェイトが・・・・・現れた凶暴な・・・・・・究極体に・・・・・迫る力を持つ・・・・・敵を倒せば・・・・・・・少しは機動六課の・・・・・・フェイトの為に成るだろう？」

「ッ！！！！・・・・・・嘘・・・・・・・・・ブイモン・・・・・・まさか？」

「へへへへへへへッ・・・・・・・暗黒進化が・・・・・・始まる直前で思いついたんだ・・・・・・・体の自由は無かったけど・・・・・・・進化を解けなくする事は・・・・・・何とか出来たんだぜ・・・・・」

「アアァァァァァーーーーーーー！！！」

ブイモンが告げた真実に、フェイトはブイモンを体を抱きしめながら大粒の涙をこぼし始めた。

全ての謎がブイモンの言葉で漸く分かった。何故充分過ぎるほどにダメージを受けてもなお、ブラックエアロブイドラモンの進化が解けなかったのも、フェイトを呼ぶような叫びを上げ続けていたのかも。

全てはブイモンが考えた、機動六課とフェイトの為の作戦だったのだ。

“暗黒進化”してしまった時点で、ブイモンは自身が助からないと本能的に分かってしまった。通常の暗黒進化でも体への負担は大きいと言うのに、ブイモンが進化したのはブラックエアロブイドラモンと言う古代種デジモン。

古代種デジモンの中には、“オーバーライト”と言う構成データの書き換えを行う事が出来る特殊能力が存在している。しかし、頻繁に激しく書き換えることはデジモンの寿命を大きく縮める事を意味している。しかも、それだけではなく、ブラックエアロブイドラモンは常時オーバライトを使用している状態だった為に、体への負担は通常の数十倍に匹敵していた。つまり、ブラックエアロブイドラモンへと進化した時点で、ブイモンの死は決まっていたのだ。

だが、ブイモンは進化する直前で、自身をフェイトに倒させる作戦を思いついた。

既に自身が進化した時点で、メルキューレモン達の策は成功したも同然の状況。このままでは、デジモンと人間の亀裂は増すばかり、成らばせめて、人間側の機動六課への評判を僅かでも上げる為に、ブイモンは自身の命を代償に差し出した。それに自身をフェイトに殺させれば、本局はフェイトに強い発言を行えなく成るだろうと、ブイモンは判断した。何せ究極体に迫るデジモンを殺したのだ。ブイモンがブラックエアロブイドラモンに進化した事を、知らないものからすれば、フェイトは究極体のデジモンを始めて生身で倒したと言う称号が付く。だからこそ、ブイモンはシャイングレイモンの攻撃を受け続けても、進化だけは必死に解かなかったのだ。

「・・・・・・ブイモンよ」

「お前やっぱり・・・・・」

「パートナーの為に、戦っていたのだな」

フェイトとブイモンの会話を聞いていたバンチョーレオモン、大、アグモンは辛そうな表情をしながらブイモンに声を掛けた。

その大達の姿に、ブイモンは僅かに苦笑を浮かべ、大とアグモンに力の無い拳を向ける。

「・・・・・ありがとな・・・・・・・アンタ達の拳・・・・・心に響いて来たぜ・・・・・・おかげで・・・・・少しだけ理性を取り戻せた・・・・・本当にありがとう」

「馬鹿野郎！！そんな事をして、お前のパートナーが喜ぶかよ！！悲しむだけだろうが！！」

「・・・・・・そうだな・・・・・・・俺は・・・・・最低のパートナ

ーデジモンだと思う・・・・・・・そうだバンチョーレオモン・・・・・・ヴィヴィオとギルモンに・・・・・・・ありがとうって伝えてくれ・・・・俺の友達に・・・・・」

「自分で伝えるのだ！お前自身の言葉で伝えてこそ！！ヴィヴィオとギルモンは心から喜ぶ！！」

「・・・・・・・そう・・・・・・だな・・・・・会いたいな・・・・・ヴィ・・ヴィ・・・・オと・・・・・ギル・・・・・モン・・・・・に・・・・」

「ブイモン！！！」

ブイモンの発する声から力が無くなって事に気がついたフェイトはブイモンを抱き締めながら叫び、ブイモンに悲しげな表情を向けるが、ブイモンは徐々に目を閉じ始め、力の無い手でフェイトの手を握る。

ーーーキュッ

「・・・・フェ・・・・・イト・・・・・・最後のお願いだ・・・・・俺は生まれ変わっても・・・・・フェイトのパートナーに・・・・・・成りたい」

「うん！！私も！私も本当のブイモンのパートナーに成りたい！！だから！だから死なないで！！お願いブイモン！！」

ーーーシュウウン！！

『ッ！！！』

ブイモンとフェイトの言葉に反応するように、罅だらけに成っていたフェイトのディーアークから白い輝きが発生し、黒い色から黄色い縁取りの在るディーアークへと変化した。
その姿を見たブイモンは嬉しげな表情をディーアークへと向け、フェイトに声を掛ける。

「・・・・・最後の最後で・・・・・俺は漸くフェイトのパートナーに成れたんだな・・・・・フェイト・・・・・・・・・あ・・・・・り・・・・・・が・・・・・と・・・・・・」

「ブイモン？ねぇ、起きてブイモン！！起きて！！」

言葉を最後まで発する事無く目を閉じたブイモンの姿を見たフェイトは、慌てて涙を流しながらブイモンの名を叫び続けるが、ブイモンが目を開ける事は無く、その体はデータ粒子に変わり始める。

ーーーシュゥゥゥッ！！

「いや！消えないで！！ブイモン！！消えないで！！」

ーーーパアッ！！

「ア、ア、ア」

フェイトが止めるのもむなしく、ブイモンの姿は消滅し、後にはデジタマだけが残された。
その姿を見た大、アグモン、バンチョーレオモンは辛そうな表情をして後ろへと振り返り、そしてフェイトは。

「イヤ、イヤァァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

デジタマを強く抱き締めながら、大量に雨を降らし続ける空に向かって、悲しみに満ちた叫びを上げ続けるのだった。

その頃、地球の海鳴市に存在する駅に帽子を頭に被り、ジャケットを着た二十歳前後男性と、帽子を被った男性と同じ顔をしたスーツを着た男性の二人が乗って来た電車から降りて、駅から出ると、海鳴市の街並みを見渡し始めていた。

「此処が海鳴市みたいだな■■？」

「あぁ、あの二人の故郷だ。そしてデジモンを連れた人間が此処にいるらしい」

「デジモン・・・・何でデジモンが東京を襲ったんだ！？」

帽子を被った男性は苛立ちを含んだ声を上げた。

二人の男性はデジモンの存在を知っていた。それ故に、東京がデジモンに襲われた事を知った時には、心の底から驚いた。デジモンは無闇やたらに人間を襲う生物では無い事を知っていたから、何故デジモンが東京を襲撃したのかを知る為に、不可思議な生物を見たと言う目撃情報が在った、海鳴市に探索に来たのだ。全ての真実を知る為に。

「とにかく今は、デジモンを探そう。幸いにも、此処はあの二人の故郷だ。事情を説明すれば、案内ぐらいはしてくれるさ」

「そんな事を言って？本当はアイツに会いたいだけだろう？良い加減に告白したらどうなんだ？」

「グウッ！！・・・・・・そう言うそっちだって、告白したらどうなんだよ？大学でもあの子を狙っている奴はいるんだぞ？」

「ウッ！！」

スーツを着た男性の言葉に、帽子を被った男性は声をつまらせ、二人は顔を見合わせると、同時に溜め息を吐く。

「・・・・・・とにかく、先ずは一番目撃場所が多い所に行こう。幸いにも其処なら、案内は無くても行けるからな」

「そうだな。え～と、確か翠屋だったよな？輝二」

「ああ、確かそうだ。輝一」

スーツを着た男性ー木村輝一（きむらこういち）と、帽子を被った男性ー源輝二（みなもとこうじ）。

嘗て十闘士のスピリットを受け継ぎ、三大天使の世界を救った六人の内の二人が、海鳴市に姿を現した。

しかし、それが二人に取っての新たな戦いを告げる鐘だとは、この時の二人は思っても見なかったのだった。

力の代償！！ブラックエアロブイドラモンの最後！！後編（後書き）

次回予告。

ブイモンを死なせてしまったフェイト。

その心は深い悲しみへと堕ちてしまった。それと共に告げられるフェイトの処罰。

一方、地球では輝一と輝二がデジモンの捜索を行い、二人の女性に協力を依頼しようとする。

その時に現れるデジモン。危機に晒される輝一と輝二は、護りたい者達の為に再び力を望む。

次回、漆黒の竜人と少女、『光と闇！復活の闘士！！』

光と闇は選んだ。再び友と共に戦う事を。

光と闇！復活の闘士！！前編

機動六課隊舎内部には、逮捕した犯人を一時的にでも勾留するために、対魔導師用の独房が存在している。だが、今その場所には、本来ならば入る事の無い人物ー機動六課“元”ライトニング分隊長ーフェイト・テスタロッサが、頑丈な拘束具と拘束着を身につけて勾留されていた。

この前のブラックエアロブイドラモンとの戦いの後、はやては戦い終了後にすぐさまフェイトを無事だった隊員達に命じて厳重に拘束し、すぐさま隊舎内部に存在する独房の中へと隔離したのだ。

本来ならば今のフェイトには魔力が存在せず、此処までの隔離を行う必要は無いのだが、フェイトが今回を行った事は極刑に成ってもおかしくない行為だった。味方への攻撃魔法の使用。命令違反。部隊員達を危険に追い込んだ事実。どれを取っても極刑レベルの罪だ。

そのうえ管理局内部でも知る者は限られているが、フェイトはエリオと同じ人造魔導師。人造魔導師の研究を行う事を決めている者達からすれば、フェイトもエリオ同様に重要なサンプル。フェイトはSランクオーバーの魔導師と言う事が在って狙われなかったが、魔力を消失した事実が明らかに成れば、必ずフェイトは狙われる。そうなれば、人造魔導師と言う違法な研究も必ず進んでしまう。今の状況でそんな研究が進んだら、ただでさえ綱渡りに近い状態の管理局が、更に危ない状態に成ってしまう。今はまだ、管理局に完全に滅びられては困るレジアスとオーリスは、フェイトを厳重拘束して任務終了から数日間ずっと、誰一人会わせずに独房に拘束し続けていた。

最も、そんな事をしなくても今のフェイトには精力的に何かを行うと言う行動を取る事は全く出来なかった。

何故ならば、今のフェイトは自身のパートナーデジモンだったブ

イモンを自らの過ちで死なせてしまったと言う事実のせいで、半分死人のような状態に成っていたからだ。

「・・・・・ブイモン・・・・・・ゴメン・・・・・ゴメン・・・・」

独房の中に入ってからと言うもの、フェイトは食事やトイレ以外の時には、ただ備えられているベットの上で横に成り続け、自身のパートナーデジモンだったブイモンへの謝罪を繰り返すばかりの状態に成っていた。

その様子を独房の入り口に備えられている小さな窓から覗いていたはやては、僅かに辛そうな表情をするが、すぐに覚悟を決めた表情をして、独房の扉の横で待機していた二名の局員に命じて独房の扉を開けさせる。

ーーーガチャン！！

「・・・・・私の処分が決まったの？」

扉が開くと同時にフェイトは泣くのを止めて、ベットから起き上がりながら青白く痩せこけた顔をはやてに向けて質問した。

その数日の間に別人のような姿に成ってしまったフェイトの姿に、はやては僅かに目を見開くが、すぐに表情を真剣に戻し、両脇で立っている局員達にフェイトの拘束を解くように命じながら質問に答え出す。

「・・・・これから地上本部の向かって、今回の件でのフェイトちゃんの行動の審問を行う予定や。その結果がフェイトちゃんの結果やで」

「・・・・機動六課の存続は如何なの？」

「・・・・もうフェイトちゃんには関係ないんやけど、ブイモン君の事が在るから教えたるわ・・・・機動六課は究極体クラスのデジモンを倒した功績のおかげで、今回の任務での責任を負わずには済んだわ。ほんまにブイモン君には感謝してもしたりん位の借りが出来たわ」

「・・・・良かった」

はやての教えてくれた機動六課の現状に、フェイトは心の底から嬉しそうな表情を浮かべた。

フェイトが最も気にしていた事は、ブイモンの死が無駄に成らないかどうかだった。ブイモンはその身を代償にしてまで護ろうとした行いが無駄に成るなど、フェイトは赦す事が出来ない。特にその行いをブイモンにさせてしまったフェイトは、自分自身が最も赦す事が出来なかった。だからこそ、ブイモンの行動が無駄に成らなかった事に喜びを感じたのだ。

しかし、はやてはフェイトの嬉しそうな笑みを見ても、冷めた視線をフェイトに向け続け、話の続きを始める。

「残念やけど、確かにブイモン君は機動六課を護ってくれたわ。だけど、フェイト・テスタロッサ個人の事は完全に別物や。幾らフェイトちゃんがブイモン君を“殺した”とは言え、その前の行動は完全別物やからな」

ーーーズキッ！！

「・・・・・」

フェイトは、はやてが告げた言葉で、改めて自身がブイモンに行った事を思い出し、心に痛みを感じながら顔を俯ける。
はやてはその様子を冷徹な視線で見つめながら、腕に手錠を付けられたフェイトと、二名の局員を伴い、独房の入り口前から機動六課の入り口の前に移動すると、入り口前に止まっていた車に、フェイト達と共に乗り込み、地上本部へと向かい出す。

「・・・・・エリオは如何してるの？」

「地上本部で、攫われ掛けた時の事情聴取や。少しでも本局の弱みは握りたいさかいにな」

「・・・・アルフは？」

「使い魔の契約が完全に切れて、一時は危ない状態やったけど。同じ病院に運ばれていたユーノ君が、再契約を願いを出てくれたから、持ち直す事は出来たわ」

「・・・・・アルフにゴメンって伝えて置いて・・・・ユーノには、ありがとうって」

「ちゃんと伝えておいたる」

「・・・・それとブイモンのデジタマはどうなったの？」

「私も知らん。あの人達、バンチョーレオモンさんと大門大さんが持っていったみたいやからな。まぁ、もうフェイトちゃんの手元に戻って来る事は無いと思った方がえぇで」

「・・・・・ブイモン・・・・・・ゴメン・・・・」

それからはやてとフェイトには会話もなく、同伴している二名の局員も声を出す事も無く、車は地上本部に向かって走り続け、一時間後には地上本部内部に在る裁判所の入り口前にはやてとフェイトは立っていた。

そして審問の時間が迫っている事をはやては確認すると、フェイトと共に中に入ろうと扉に手を掛けようとした瞬間に、二人の背後から声が響く。

「いやいや、こんにちは、機動六課部隊長八神はやてさん」

「どちら様ですか？」

突如として掛けられた声に、はやては訝しげな表情をしながらも背後を振り返り、フェイトもはやて同様に背後を振り向いてみると、管理局最高評議会直属の者を示す腕章を制服に付けたメガネを掛けて、オカッパ見たいな髪形をした四十以上と思われる男性と、金髪の髪を持って、何処か神秘的な雰囲気を放っている少年が立っていた。

男性と少年は、はやてとフェイトの訝しげな表情が面白かったのか、笑みを浮かべて自分達の紹介を始める。

「おや？私の事は知っている思いましたが？まあ良いでしょう。改めて名乗らせて貰います。私は最高評議会直属の研究者、“倉田明弘(くらたあきひろ)”と言います」

「同じく僕はルーチェ。最高評議会から全権を貰っている者さ」

『ッ！！！』

男性と少年ー倉田とルーチェの名乗りを聞いたはやてとフェイトは、すぐさま二人の傍から飛び離れ、はやては自身の待機状態のデバイスを右手に握り締めながら、憎しみに染まった視線を倉田とルーチェに向け始める。
しかし、倉田とルーチェは、はやての視線など全く気にせずにはやてとフェイトに笑みを向ける。

「クスクスクス、怖いな。高町なのはと言い、君達と言い。僕が出会う綺麗な女性は、皆そう言う瞳で僕を見て来る。とっても嬉しいよ」

「・・・・あんた等が・・・・」

「うん？何ですか？」

「あんた等が全部原因やからやろうが！！あんた等のせいで！！」

はやては倉田の質問に対して怒りの叫びを上げ、射殺さんばかりに倉田とルーチェを睨み付ける。
目の前に立っている二人こそが、デジモンと人間の戦争を引き起こした真の元凶。その二人が何食わぬ顔をして真実を知っているはやてとフェイトの前に現れたのだから、はやてが憎しみを抱くのも当然だろう。
しかし、とうの本人達で在る倉田とルーチェは、はやての視線などまるで気にせずにはやての感に触るような笑みを浮かべてはやてとフェイトを見つめ続ける。倉田もルーチェもこの場ではやてが自分達を襲う事は無いと分かっているのだ。肩書きだけとは言え、倉田とルーチェは管理局内部で最高権力を持っている最高評議会の直属の者達。その者達に一部隊の部隊長でしかないはやてが攻撃をす

れば、機動六課はその瞬間に崩壊する。
　その事が分かっているはやては、悔しそうな表情をしながらも射殺さんばかりに倉田とルーチェを見つめ続け、ルーチェはその様子に更に笑みを深めながらはやてに声を掛ける。

「そう怒らないで欲しいな。今は君達をどうこうする積もりは無いさ。いや、寧ろ君達の行動は僕を楽しませていてくれているんだよ。“無駄な努力という行動がね”」

「ッ！！！・・・・・・無駄な努力や無い・・・・・・絶対にあんた等の計画を潰したるわ。覚悟しておくんやな」

「無駄以外の何ものでもないよ君達の行動は。特にこの前死んだデジモンの行動は無駄死に以外の何ものでもなかったね。本当に護りたかったパートナーは、結局裁かれる事に成ったんだからね。まぁ、僕としては彼の死に様には思わず、大笑いしてしまったよ」

「ッ！！お前！！ブイモンの事を！！」

　ブイモンを侮辱するような言葉を告げたルーチェに、フェイトは怒りに染まった表情と声を出し、手錠で拘束されながらもルーチェに飛び掛ろうとするが、その直前にはやてが叫ぶ。

「レナッ！！」

ーーービュン！！

ーーードガッ！！

「ガアッ！！」

はやての叫びに応じるように、はやての背後から一つの影が飛び出し、ルーチェに飛び掛かろうとしていたフェイトを床に押さえ付けた。
床に押さえつけられたフェイトは苦痛に表情を歪めながらも、自身を押さえつけている人物の姿を見ようと上の方に顔を向けてみると、はやての秘書として雇われ、機動六課に残っている筈の人物ーレナ・セフィルが険しい表情をしながらフェイト、そしてルーチェと倉田を睨み付けていた。
「一局員が最高評議会の人間達に手を出すのは、機動六課を危機に晒す行為。更にお前は今は重罪人として、これから裁判を受ける身。これ以上状況を悪くするのは、本当にお前のパートナーデジモンだった者の想いを踏みにじる事に成るのだぞ？」
「・・・・・クッ！！」
「レナの言う通りやでフェイトちゃん」
悔しげな表情をしているフェイトに、はやてはそう告げると、ゆっくりと笑みを浮かべ続けているルーチェと倉田に顔を向け、殺気を込めた視線で睨み付け始める。
「・・・・今回は赦したるけど、ブイモン君の事を侮辱するのだけは絶対に私も赦さへんよ。もし、もう一度ブイモン君の行為を侮辱するような言葉を言うてみい。階級も何もかんも捨てて、あんた等を消滅させたるわ」
「クスクスクス、本当に君は面白いよ。だけど、現実的に考えてみなよ。デジモン達は人間を憎んでいる上に、ロイヤルナイツや四聖

獣、そして十闘士達まで人間の敵に成っている。そんな状況で地上本部に存在しているデジモン達と、成熟期までしか進化出来ていない君のパートナーデジモンで何が出来るんだい？」

「エッ？」

ルーチェの言葉を聞いたフェイトは、レナに床に押さえつけられながらも顔を上げて、はやての顔を呆然とした表情で見つめた。

はやてにパートナーデジモンが存在していた。その様な話は聞いていない上に、何時デジタマを手に入れたのかと思い、フェイトは呆然とした表情をしたままはやてに質問しようとするが、はやてはフェイトの方に手を向けて声を出すのを押さえさせると、険しい表情をルーチェと倉田の向ける。

「こっちの情報は筒抜け見たいやけど、私らを舐めすぎたら、その内痛い目にあうで」

「それは怖い。ですが、貴方達がどれだけ頑張ろうと無駄ですよ。その内明らかに成る事なので教えて上げますが、先日本局の者達が八隻の艦艇を他のデジタルワールドに送っているんですよ。デジモンを消滅させる事が出来る兵器を積んでね」

『ッ！！！』

倉田が告げた本局の行動に、はやてとフェイトは驚愕に目を見開き、本局が行ってしまった行動の意味が分かってしまった。

もしデジモンを消滅させる事が出来る兵器が本当に存在し、他のデジタルワールドでその力を振るった場合に待っているのは、デジモンの人間を憎む気持ちの増加しかない。そうなれば人間を憎んでいないデジモン達までもが人間を確実に憎んでしまう。

現状が更に悪化してしまう事に気が付いたはやてとフェイトは、顔を青ざめさせながら倉田とルーチェを見つめるが、全ての元凶の二人は笑みを浮かべながら背後を振り返り通路をゆっくりと歩き出す。

「まぁ、頑張ってよ。君達、いや、一人は消えるから八神はやて一人だけだね。君がどれだけ頑張ってももうこの流れを止めるのは不可能だよ」

「それと大門大に伝えて下さい。十二年前の借りは必ず返しますと。精々私が殺すまで死なないで下さいともお願いしますよ」

そうルーチェと倉田は、はやてとフェイトに伝えると笑みを浮かべながら通路を歩き出し、その背をはやてとフェイト、そしてレナは悔しそうに呼び出しが掛かるまで見つめ続けるのだった。

その頃。海鳴市へと到着した輝一と輝二は街中を歩き続け、目的地で在る翠屋を目指しながら、数週間位前の新聞に映っている写真を注意深く見つめていた。

「やっぱり、この新聞に映っている生物はデジモンに間違いない・・・・何でデジモンが人間を・・」

「分からない。だけど、渋谷駅に行っても何も分からなかったんだ。だったら、デジモン達を探して話を聞くしかない」

悲しげな表情で新聞を見ている輝二に、輝一は真剣な表情で声を

掛け、輝二はゆっくりと輝一の言葉に同意するように頷く。

「・・・・もう十年以上前だな。俺達がデジタルワールドを旅したのは・・・・・他の皆とは連絡が取れなかったけど、他の皆もきっと動いているだろうな」

「あぁ、絶対にデジモンの事を調べてる筈だ。俺達に取ってデジタルワールドは、もう一つの故郷なんだからな」

懐かしそうに声を出した輝一の言葉に、輝二も懐かしそうな表情をしながら同意した。

輝一と輝二は、この世界の地球と繋がっていた三大天使たちが見守っていたデジタルワールドに十二年前に他の四人の仲間と共に呼び出され、その時に封印から解放されて人間界に侵攻しようとしていたルーチェモンを倒し、三大天使の世界を救った過去が存在していた。それから十二年の間にデジタルワールドに訪れた事は一度も無かったが、それでも輝一と輝二に取ってはデジタルワールドでの事は忘れる事が出来ない出来事だった。

だからこそ、数週間前にデジモンが突如として東京を襲撃して東京を半壊状態に追い込んだ事を知った時は、本当に信じる事が出来ずに、デジタルワールドに繋がっている渋谷駅に向かってデジタルワールドへと何とか向かおうとしたが、渋谷駅に地下に存在している筈のターミナルに入る事は出来なかった。

しかし、それでも二人はデジモンの進攻の原因を調べようと情報をインターネットや何やらで、デジモンの目撃情報が最も多かった海鳴市へと訪れたのだ。

「しかし、結構此処は良い所だな。自然も多いし、治安もかなり良いみたいだし、二人が一度は来て見てくれって言っていた意味が良く分かるよ」

「確かに、此処は良い所みたいだな」

輝一と輝二は海鳴市の街中の様子が気に入ったのか、笑みを浮かべながら街中を見渡して、目的地で在る翠屋に向かって歩き続けるのだった。

一方その頃。海鳴市の国守山に存在するさざなみ寮の中では、デジモンを育てる事に協力してくれる予定のアリサとすずか、ファリン、そして翠屋から救援に来てくれた桃子と美由希が姿を見せて、それぞれさざなみ寮の主である愛に挨拶を行っていたのだが。

「パピプ～♪」

『か、可愛いッ！！！』

桃子の肩に寄りそうように乗っていたマリンエンジェモンの姿を見た、デジモンの捜索に参加していない真雪とリスティを除いた女性陣全員が、マリンエンジェモンの愛らしい姿と小ささに心が奪われ、マリンエンジェモンの姿を嬉しそうな笑みを浮かべながら見つめていたのだった。

その様子を離れた所で見ていたリンディは苦笑を浮かべ、桃子からマリンエンジェモンとの出会いを聞いている愛達から目を逸らし、密かに通信機に声を掛ける。

「・・・・それでフリートさん？バンチョーレオモンさんから報告は在りましたか？」

『はい。逃げ出した十闘士達と交戦をしたようですが、後一歩の所で逃げられてしまったそうです』

「・・・・そうですか」

リンディはフリートからの報告に苦い表情を浮かべた。

既にリンディ達にもフリートから報告が届き、十闘士の覚醒とミッドに向かったと言う報告。そしてそれをバンチョーレオモンが追いかけていったと言う事も知っている。自分達が予測していた最悪の現状に向かってしまった事を知ったリンディ達は焦り、すぐさま逃げ出した十闘士達の捕獲に向かおうと思ったが、バンチョーレオモンが自分が行くからとリンディ達に告げ、十闘士達を追うのを止めさせたのだ。

逃げ出した十闘士達の事も重要だが、地球に存在しているデジモン達の事も重要だからこそ、バンチョーレオモンは一人だけで追う事を決めてミッドにただ一人向かう事にしたのだ。幸いな事に向かった先には、嘗てのバンチョーレオモンの仲間達が存在していた事も分かって、リンディ達は五人の十闘士の追撃をバンチョーレオモンに任せて、自分達は地球のデジモンの説得に専念する事にしたのだ。

「確か大門大君に、アグモン君だったかしら？」

『はい。映像で見ていましたが、正直信じられませんでしたよ。究極体クラスのデジモンを素手で殴り飛ばすなんて。是非とも一度その体を徹底的に調！ゴホッ！ゴホッ！！検査したいですね！！』

「・・・・後でまた潰して上げるわね」

『ヒエッ！！そんなっ！？待って下さいよ！！』

リンディが告げた言葉に、通信機から悲鳴のようなフリートの声が響くが、リンディは構わずに別の質問を行い出す。

「それでルインさんとヴィヴィオ、そしてギルモン君の治療の方はどうなの？」

『・・・・ルインさんの治療には時間が掛かりますが、ヴィヴィオちゃんとギルモンの方は数日以内には終わって、其方の方に送る事が出来ます・・・・それとヴィヴィオちゃんとギルモン君にはあの事を話していません』

「・・・・そうね。傷の治療が終わってこっちに着いたら私から話すわ・・・・ブイモン君の事を」

リンディは悲しげな表情をしながら声を出した。

実を言えばリンディ達はブイモンがフェイトの過ちで死んでしまった事を、ヴィヴィオとギルモンには話してはいない。知れば確実にヴィヴィオとギルモンは傷付いてしまうからだ。特にヴィヴィオには友達だったデジモン達が目の前で殺された過去も存在している。そんなヴィヴィオに新たに友達に成ったブイモンが死んでしまった事を話せば、確実にトラウマが再発して精神が不安定な状態に成ってしまう。

ただでさえ今のヴィヴィオはブラックが居ない事も在る上に、リンディ達もヴィヴィオから離れてしまっている事もあって、寂しい想いが募ってしまっている。だからこそ、ヴィヴィオにブイモンの結末を話すのはさざなみ寮にヴィヴィオが来てからとリンディは決めていた。

その為に一足先に耕介と真雪、そしてリスティと共にデジモンの捜索へと向かったなのは達とは別にさざなみ寮にリンディは留まっ

ているのだ。

「・・・・・それと残りの六人の闘士のスピリットの様子はどうなの？」

『・・・・・調査しようと調査機械に端末を繋げた瞬間に文字が機械に出現しました。『自分達のスピリットを全て地球に送れ』ただそれだけしか残っているスピリット達は告げていません』

「・・・・・・敵として動くのか、味方として動くのか分からないけど・・・・・全てさざなみ寮に送って頂戴・・・・他の闘士達のような行動を取られる訳にはいかないから私が監視を行うわ」

『・・・・・分かりました。準備を終えたらすぐに連絡します』

ーーーブチッ！

フリートが言葉を言い終わると共に通信が途切れ、リンディは持っていた通信機を服の中へとしまい、険しい表情をし始める。

「残っている六人の十闘士・・・・・敵として現れるのなら、全力で排除させて貰うわ。これ以上状況を悪化させる訳にはいかないのよ」

リンディはそう険しい表情をしながら呟くが、すぐに表情を普段の表情に戻し、マリンエンジェモンを可愛がっている愛達の方に向かおうとすると、アリサの携帯にメールが届いて来る。

ーーーピコン！！

「うん？・・・・・・・輝二からメール？何かしら？」

「アリサちゃん？如何したの？」

携帯のメールを読んでいるアリサにすずかは質問した。
その質問に対して、アリサは僅かに嬉しさを含んだような笑みをすずかに向けながら、自身の持っている携帯をすずかに見せるように掲げる。

「輝二が輝一と一緒に海鳴市に来ているらしいのよ」

「輝一君が！！！」

アリサの言葉にすずかは嬉しそうな声を出して、アリサの携帯に映っているメールの内容を読み出す。
その様子を離れた所で見ていた桃子と愛は、年上の貫禄なのかアリサとすずかがメールを送って来た人物に対して抱いている想いに気がつき、面白しろそうな笑みを向け合う。

「これは先ず間違い無いわね」

「ええ、私も耕介との時の事を思い出しますよ」

「負けた・・・・・二人とも私よりも年下なのに・・・・・フェェェェェェン！！」

「パピプ～～」

「すずかちゃん。本当に嬉しそうです！私は応援しますよ！」

桃子、愛、美由希、マリンエンジェモン、そしてファリンはそれぞれアリサとすずかの様子を見ながら声を上げ、話を聞いていたリンディもアリサとすずかに愛おしさを込めた視線を向け出す。

（若いって本当に良いわね・・・・・あの人も少しぐらい私に目を向けて欲しいわ・・・・・その為にも！！先ずは名前を呼んで貰えるようにしないと！！十年間も一緒に居て、未だに名前を呼んでくれた事が無いんですもの！！時間はたっぷり存在しているとは言え、そろそろ攻勢に出ないとね！！）

その様にリンディが内心でブラックに対する決意を固め直していると、アリサとすずかがそれぞれ出掛ける準備を終えて、リンディに近づいて来る。

「リンディさん。すいませんけど、知り合いが近くに来ているんで、会って来て良いですか？」

「大学の友達で、頼みたい事が在るそうなんです」

「ええ、良いわよ。まだ、デジモンがデジタマから生まれるのには時間が在るから、自由にしていて。寧ろこっちの都合で動いて貰っているんだから、私には貴女達の行動は止められないからね」

『ありがとうございます！！』

アリサとすずかはリンディに礼を告げると、さざなみ寮を出て行き、輝一と輝二との待ち合わせ場所へと向かっていた。

その様子を笑みを浮かべながらリンディ達が見つめていると、今度は桃子の携帯に電話が入って来る。

ーーープルルルルルルルルッ！！

「あら、貴方？何か仕事で在ったの？・・・・・・・エッ！！？？デジモンの事を聞きに来た二人の男性がいた！！」

『ッ！！！』

携帯を耳に当てながら叫んだ桃子の叫びを聞いたリンディ達は目を見開き、電話を切った桃子から詳細にデジモンの事を聞きに来た人物達の情報を聞き始めるのだった。

翠屋に訪れるのを終えた輝一と輝二は、デジモンを捜索する為に協力を依頼する事にした人物達ーアリサとすずかと合流をする為に、アリサとすずかがいる場所の近く、国守山の麓付近に向かっていた。

「如何思う？」

「何かを隠している感じを受けた。先ず間違いなくあの店の店主はデジモンの事を知っているみたいだ・・・・だけど、口が堅そうだったから聞くのは無理だろうな」

「同感。だけど、先ず間違いなくこの街の何処かにデジモンが存在している事は分かった。だったら、しらみつぶしに探せば、確実にデジモンとは出会えるさ」

「時間が掛かりそうだな」

輝一と輝二はそれぞれ声を出すが、海鳴市の何処かにデジモンが

存在してるのだけは確信出来ていた。　翠屋で仕事をしていた士郎にデジモンの事を尋ねてみたのだが、士郎はやんわり輝一と輝二の質問をかわし、知らない振りを通したのだが、それでも僅かにでは在るが不審な所が在った事に輝一と輝二は気がつき、デジモンが間違いなく海鳴市にいる事だけは確信する事が出来た。

　しかし、二人はデジモンが海鳴市に存在している事は分かっていても、二人には海鳴市に対する土地勘は全く持っていない。だからこそ、大学での友人であると共に海鳴市出身のアリサとすずかに協力を依頼する事にしたのだ。

「とにかく、二人にはデジモンのことは秘密にして、海鳴市だけの案内を頼もう。デジモンが人間を襲っているのなら、二人も危険だからな」

「あぁ、もちろんその積もりだ。二人を危険な目に合わせる訳にはいかないもんな」

　輝一の言葉に輝二は同意を示し、国守山に登る山道に近づいた瞬間に。

「輝二ッ！！」

「木村君！！」

「アリサッ！！」

「すずかッ！！」

　山道の上の方からアリサとすずかが姿を現し、嬉しげな笑みを浮かべながら輝一と輝二に向かって手を振りながら走り出し、二人の

姿を見た輝一と輝二も二人に腕を振り出す。
その様子にアリサとすずかはますます笑みを深め、早く合流しようと走るスピード上げようとした瞬間に、二人の背後の地面から巨大な岩石のような腕が二本飛び出して来る。

ーーードグオオン！！

『ッ！！！』

「あの腕は！？」

「まさか！？」

アリサとすずかの背後の地面から突如として姿を現した二本の腕に見覚えの在る輝一と輝二は、慌てて二人を助け出そうと駆け出すが、その前に岩石の腕はアリサとすずかの体をそれぞれの手で掴みあげる。

ーーーガシッ！！

『キャッ！！』

ーーードゴオオオオオン！！

「ガアァァァッ！！」

『ゴーレモン！！』

アリサとすずかの体を掴むと共に地面の中から姿を現した、岩石のような体に太く逞しい四肢を繋いでいるよう形をしながら供え、

背中に三つの文字が彫り込まれている鉱物型デジモン―ゴーレモン（ＷＳ）の姿を見た輝一と輝二は、同時に驚きに叫び上げた。

ゴーレモン（ＷＳ）、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／鉱物型、必殺技／カースクリムゾン

超古代の呪いをデジタル解析している時に、発見された岩石・鉱物型デジモン。背中には“疫”“呪”“凶”と古代の禁断の呪文が彫られており、自ら出すガスから身を守るためのものらしい。体の約９割が岩石のデータで出来ており、手足を繋ぎ止めて生きている。命令されないと動かない感情の無いデジモンだ。必殺技の『カースクリムゾン』は背中から超高温の毒ガスを噴射する技だ。

「・・・・ガアッ」

「ゴーレモンが何でアリサとすずかを襲うんだ！？」

「分からないけど、急いで二人を助けるぞ！！ゴーレモンがガスを噴出す前に！！」

「応ッ！！」

ゴーレモン（ＷＳ）、以降ゴーレモンの力を知っている輝一と輝二は、急いでアリサとすずかをゴーレモンの手から救出しようと駆け出した。

しかし、その直前に輝一と輝二の目の前に鎧を着て刀のような物を右手に握った一つの影が、飛び出し二人の前に立ちはだかる。

ーーービュン！！

「此処から先は通す訳にはいかん！！」

「お前は！？」

「拙者はムシャモン！！在る方の命で、あの二人を捕獲するように命じられた者だ！！」

ムシャモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／魔人型、必殺技／斬り捨て御免

幾多の戦いの中を生き延びた武者のような姿をしている魔人型デジモン。愛刀“白鳥丸”は敵の生命力を奪う呪文が刻まれており、１０００匹斬るたびに切れ味が良くなると言われている。必殺技は愛刀の“白鳥丸”で相手を真っ二つにする『斬り捨て御免』だ。

「何でアリサとすずかを狙うんだ！？あの二人はデジモンとは何の関係も無いんだぞ！！」

ムシャモンの言葉を聞いた輝二はムシャモンに向かって質問の叫びを上げ、輝一も険しい視線をムシャモンとその背後でアリサとすずかを掴んでいるゴーレモンに向ける。その時にアリサとすずかが輝二の叫びに目を見開きながら顔を見合わせることにも気がつかずに。

そして輝二の疑問の叫びを聞いたムシャモンも僅かに疑問を覚えるが、構わずに右手に持っている白鳥丸を輝一と輝二に向かって構え出す。

「何故主らがデジモンの存在を知っているのかは分からんが、あの娘達は“偽りの希望”の仲間達！！我らデジモンの存在を脅かす脅威に繋がる者達の仲間！！その者達の謀りを阻止する為にも、あの娘達をあの方の下に連れて行くのが私の任務だ！！」

「アリサとすずかがデジモンの脅威に繋がる者達の仲間！？出鱈目を言うな！！あの二人はただの一般人だぞ！！」

「そうだ！！そんな言葉を信じられるか！！」

輝二と輝一はムシャモンの言葉を否定するように叫んだ。

二人ともムシャモンの言葉は全く信じられなかった。輝一と輝二はアリサとすずかの事を良く知っている上に、二人がデジモンに関わっていたなどと言う話も聞いた事が無い。デジモンの存在をこの地球で知る者は、自分達と嘗て戦った四名の仲間達、そして十年以上前にオファニモンのメールを受け取って、デジタルワールドをへと訪れた者達しかいない筈なのだ。

そして輝一と輝二が知る限り、アリサとすずかはその時に呼ばれた者達ではない。もし二人が本当にデジモンの存在を知っているとしても、二人がデジモンに脅威を呼ぶ者達と仲間である筈が無いと断定出来るほどに、輝一と輝二はアリサとすずかを信頼していた。

しかし、ムシャモンは輝一と輝二の叫びを聞いても、構えを解かない所か、逆に白鳥刀を持っている右手に力を込め始める。

「フン、貴様らが何を言おうと無駄な事だ。何故ならば、この世界の人間達は一人残らず滅びるのだからな！！拙者らのデジタルワールドを滅ぼした人間と言う種族など！！全て滅ぼしてくれるわ！！」

『ッ！！！』

ムシャモンの叫びを聞いた輝一と輝二は目を驚愕に見開き、体を震わせながらムシャモンの姿を見つめ始める。

「デジタルワールドを・・・・・人間が滅ぼした？」

「ば、馬鹿な・・・・・そうだ！！オファニモン達は！！！三大天使デジモン達は如何したんだ！？」

「・・・・三大天使の方々は、最後までデジタルワールドに残り、デジタルワールドと共に人間の手によって消滅させられたのだ！！」

『ッ！！』

「あの方々は最後まで人間を信じていた！！なのに、人間はあの方々を裏切ったばかりか、あの方々の行動こそが全ての元凶だと叫び、あの方々の魂さえも穢したのだ！！赦せん！！人間と言う種族を赦す事など、拙者には出来ん！！必ずや滅ぼしてくれる！！」

ーーースチャッ！！

ムシャモンは自身の思いを叫ぶと共に、白鳥刀を輝一と輝二に向かって構えだし、二人が身構えようとした瞬間に、全力で斬りかかる。

「手始めに貴様らだ！！」

ーーーブン！！

「クソッ！！」

「輝一君！！」

ムシャモンの斬撃をギリギリの所で輝一はかわし、その姿をゴーレモンに掴まれながら見ていたすずかは悲鳴のような声で輝一の名を呼んだ。

それと共にアリサはゴーレモンに掴まれながらも僅かに動く手で、服の中から携帯を取り出し、自身の親友で在るなのはへと連絡を取ろうとするが、その前にゴーレモンがアリサの体を僅かに強く握り締める。

「ガアッ！！」

ーーーギュウ！！

「キ、キャアアアアアアアッ！！」

『アリサッ！！』

「アリサちゃん！！」

ゴーレモンに握り締められた事に寄って、激痛が体を襲い始めたアリサは悲鳴の叫びを上げ、その姿を見た輝一と輝二、そしてすずかは苦痛に苦しむアリサの名を呼ぶが、アリサは悲鳴を上げるのを止めず、更にすずかの体もゴーレモンは握り締め始める。

ーーーギュウッ！

「アァァァァァァァァッ！！」

『すずかッ！！』

アリサ同様に苦痛の叫びを上げ始めたすずかの姿に、輝一と輝二は完全に動きが止まってしまう。

その隙に二人の背後に移動していたムシャモンは、両手で白鳥刀を握り締めながら上段に構えを行い、凄まじい勢いで白鳥刀を輝一

に向かって振り下ろす。

「斬り捨て御免ッ！！！！」

「ッ！！兄さんッ！！」

ーーーブザン！！！

ムシャモンが白鳥刀を振り下ろそうとしている事に気がついた輝二は、輝一の体を突き飛ばすと共に自身も横に向かって飛び出した。

しかし、白鳥刀を勢いは止まらずに地面を切り裂き、それによって発生した衝撃波を避ける事が出来ず、二人は吹き飛ばされてしまう。

ーーーブオォォォォォッ！！

『ウワァァァァァァッ！！』

「・・・・・フム、人間にしては中々の身のこなし。デジモンの事を知っているのも気掛かりだが、あの方が連れて来いと言われたのは、娘二人だけ。準備が整うまでは、我らデジモンの事を知られる訳にもいかんし・・・・・やはりこの場で手打ちにしてくれよう」

ーーースチャッ！

ムシャモンは言葉を言い終えると共に、白鳥刀の刀身を煌かせながら、ゆっくりと地面に倒れ付している輝一と輝二に向かって歩き出す。

その姿に気がついた輝一と輝二は起き上がろうとするが、体を襲い続ける激痛によって立ち上がる事が出来ず、悔しそうにゆっくり

と歩いて来るムシャモンの姿を見ていると、二人の耳に声が届いて来る。

「・・・・輝二・・・・・・私達の事は良いから・・・・・逃げなさいよ」

「輝一君も・・・・・・大丈夫だよ・・・・・私達には強い友達が居るから・・・・・だから、二人は逃げて」

「・・・・・・逃げられるかよ」

「・・・・・同感・・・・二人の前で逃げるなんて、カッコ悪いこと出来ないな・・・・俺達男だから」

輝二と輝一はアリサとすずかに声を掛けながら、苦痛に苦しみながらも立ち上がり、ムシャモンとアリサとすずかを掴んでいるゴーレモンを睨み付ける。

「悪いが、アリサ達は絶対に連れて行かせないぞ。俺達の命に賭けても！！」

「フッ！中々の気迫よ。だが、所詮は人間。拙者らには勝てん！！その命頂戴するぞ！！」

「輝二ッ！！」

「輝一君！！！」

輝一と輝二に向かって飛び掛かるムシャモンの姿を見たアリサとすずかは悲鳴のような声を上げて二人の名を呼び、その声を聞いた

輝一と輝二は心の中で想いを叫ぶ。

（（力が欲しい！！大切な人をッ！！））

（アリサをッ！！）

（すずかをッ！！）

（（護れる力が俺達は欲しい！！！！））

誰かを護りたいと言う想いを輝一と輝二が心から思った瞬間に。
その想いは離れた所に存在していた者達の下に届き、輝一と輝二の頭の中に声が響く。

（（・・・・・その想い、俺達が叶えようッ！！））

『エッ！？』

ーーーピカアァァァァァァッ！！

「ッ！！これは一体何事だ！？」

突如として頭の中に響いて来た声に輝一と輝二が疑問の叫びを上げた瞬間に、二人の頭上から黒い光と白い光が降り注ぎ、二人の体を覆うように光は二人の姿を飲み込んでいった。

白と黒が入り混じったような形をした空間の中。
その中に存在していた輝一と輝二は突如として起きた現象に戸惑

いを覚えながらも空間の中を見渡していると、二人の前に半透明の姿をした幽霊のような存在ー『光』の闘士ーヴォルフモンと、肩に赤い宝玉を咥えたような形をしたライオンの肩当てを装備し、胸当て、膝あて、そして頭部の仮面にも同様にライオンの形をした物を装備したデジモンーもう一つの『闇』の闘士ーレーベモンが姿を現す。

レーベモン。世代／ハイブリッド体、属性／バリアブル、種族／戦士型、必殺技／エーヴィッヒ・シュラーフ、エントリヒ・メテオール伝説の十闘士『エンシェントスフィンクモン』の力を受け継いだ、闇の属性を持つヒューマンスピリット体の戦士型デジモン。同じ闇の闘士でありながらもダスクモンとは違い、正義を貫く暗黒騎士でエンシェントスフィンクモンの尻尾の形をした槍と顔の盾を持っている。必殺技は槍を振り回し、敵を貫く『エーヴィッヒ・シュラーフ』と、ライオンの顔をした腹の口から闇の光弾を放つ『エントリヒ・メテオール』だ。

「ヴォルフモン！！」

「レーベモン！！！」

嘗て共に戦った戦友の姿に、輝一と輝二は驚きを覚えながらも、ヴォルフモンとレーベモンに質問しようとを声を出そうとするが、その前にヴォルフモンとレーベモンは二人に向かって右手を差し出し、質問する。

『輝二』

『輝一』

『この手を握って、今一度俺達の力を望むか？』

『望むのならば、覚悟をするんだ。今回の起きている戦いは、悲劇に包まれている戦い。その戦いに参戦すれば、お前達は背負わねば成らなくなる。デジモンと人間の行く末を決めると言う役割』

『なっ！？』

ヴォルフモンとレーベモンが告げた言葉に、輝一と輝二は目を見開きながら、二体が差し出している手を困惑した表情で見つめるのだった。

光と闇！復活の闘士！！後編

輝一と輝二の下に光と闇のスピリットが届く少し前の事。
国守山の中に存在しているさざなみ寮の内部で、リンディはフリートから送られて来た十二個のスピリットに強力な封印魔法を掛けようとしていた。
本来ならば仲間に成るかも知れない者達にリンディは封印魔法など使用したくはなかったが、桃子から報告で海鳴市の街中でデジモンを捜索している二名の男性が存在している事が判明し、その者達と接触する事にリンディはしたのだ。何故デジモンを捜索しているのかは分からないが、デジモンを悪用しようとしている者達の可能性も充分に考えられる事だ。これ以上の現状悪化だけは避けたいと心から思っているリンディはそれを避ける為にも、自身がいない間にスピリットに何かをされないようにする為に封印魔法を使用する事にしたのだ。

「・・・・ゴメンなさいね。戻ったらすぐに封印魔法は解くわ。それまで我慢して貰うわよ」

そうリンディは目の前に浮かんでいる十二個のスピリット達に言葉を告げると、右手をスピリットの方に向けて封印を始めようとする。
しかし、その直前にリンディとスピリットが存在している部屋の扉が慌しく開き、右手にデジモンの反応を知らせる機械を持った美由希が慌てた表情をしながらリンディに向かって叫ぶ。

ーーーバタン！

「リンディさん！！大変！！国守山の麓付近にデジモンの反応が二

つ存在しているよ！！」

「ッ！！何ですって！？」

美由希が告げた報告にリンディは目を見開きながら、美由希が差し出して来た機械の液晶部分を見てみると、確かに国守山の麓付近にデジモンが存在している事を示していた。

「何故この場所の近くにデジモンが！？」

「分かりませんけどッ！！アリサちゃんとすずかちゃんが心配ですよ！！二人は麓に降りて行ったんですから！！」

「クッ！！すぐに私が向かいます！！この場所の護衛はマリンエンジェモンちゃんと美由希さんにお願いするわね！！」

「はいっ！！」

美由希はリンディに叫びに頷き、それを確認したリンディは手早く準備を終えると、すぐさま部屋から飛び出しさざなみ寮を出て麓へと向かおうとする。

しかし、部屋から二人が飛び出そうとした瞬間に、リンディと美由希の背後から突如として白い光と黒い光が溢れ出す。

ーーーピカアァァァァァァァァッ！！

『ッ！！』

ーーードグオオオオオン！！

突如として発生した二つの光に気がついたリンディと美由希が背後を振り向いてみると、光を放っていた『光』と『闇』のスピリットは天井に穴を開けながら外へと飛び出して行った。
その様子を呆然とした表情でリンディと美由希は見つめ、天井から木の瓦礫が落ちて来ると、二人は顔を見合わせる。

ーーーガラッ！

「・・・・・リンディさん・・・・これって、誰が修理するんでしょうね？」

「・・・・・何か恨みを買うような事を・・・・・仕掛けていたわね・・・・とにかく急がなくちゃね！！」

スピリットに恨みを買うような事を仕掛けていた事に気がついたリンディは、目の端に薄っすらと涙を浮かべながら、スピリットが消えていった空の方に向かって急いで飛び出して行く。
その背を見つめていた美由希はリンディが帰って来てから行うであろう、管理人の愛への謝罪を思い浮かべ、リンディが消えて行った空の方に向かって哀れみに満ちた視線を向け続けるのだった。

そして現在。さざなみ寮から抜け出した『光』の闘士ーヴォルフモンと、『闇』の闘士ーレーベモンは半透明な姿のまま黒と白が入り混じったような空間の中で、嘗て三大天使のデジタルワールドでルーチェモンを倒す為に共に戦った輝一と輝二に向かって、それぞれ真剣な表情をしながら右手を二人に向かって差し出していた。
「待ってくれ！行き成りデジモンと人間の行く末って言われても、

訳が分からない！」

「あぁ、教えてくれ！！一体何が起きているんだ！？本当にデジタルワールドは人間が滅ぼしたのか！？」

『・・・・・そうだ。俺達の故郷。デジタルワールドは異世界の人間の組織に寄って、跡形も無く消滅してしまった』

『その結果。今この世界とは別の世界の多くでデジモンと人間の戦争が起きてしまっている』

『なっ！？』

ヴォルフモンとレーベモンが告げた事実に、輝一と輝二は驚愕に目を見開き、ヴォルフモンとレーベモンを見つめると、二体は深く頷きながら差し出していた右手を腰の方に戻し、輝一と輝二の瞳を真剣に見つめ始める。

『この空間は俺とレーベモンが力を合わせて作り上げた混沌の空間』

『外の世界とは時間の流れも違う。故に説明する時間は充分に存在している。二人は静かに聞いてくれ。今起きている悲劇の話を・・・』

そしてヴォルフモンとレーベモンは輝一と輝二に語り出す。

地球やデジタルワールドとも違う異世界一次元世界について。それを管理している叫んでいる管理局について。そして管理局が行ってしまった惨劇の引き金と、マジかに迫りつつある七大魔王デジモンの脅威。現状の世界に状況などを全てヴォルフモンとレーベモンは輝一と輝二に語る。

そしてヴォルフモンとレーベモンから全ての事情を聞き終えた二人は言葉も出す事が出来ず、呆然とした表情しながら体を震わせていた。
遠く離れた世界が作り上げた組織のせいで、デジモンと人間の絆は砕かれたばかりか、差し迫っている真の危機にさえも気がつかずに、互いに憎しみ合い殺しあっている現状。しかも、多くのデジモン達の目的は“人間と言う種族の完全抹消”。それは地球に住んでいる人々も例外では無いと言う事だ。

『しかも、俺達とアグニモン、フェアリモン、ブリッツモン、チャックモンを除いた“五人”の闘士は人間を滅ぼす側として動いてしまっている』

「ッ！！・・・・いや待て、五人だと？メルキューレモン、ラーナモン、アルボルモン、グロットモンは分かるが、後の一体は誰なんだ？ヴォルフモンとレーベモン、そしてアグニモン達を除けば、四体しか闘士は残らない筈だぞ？」

『・・・・・後の一体は・・・・・・・ダスクモンだ』

『なっ！？』

レーベモンが告げた最後の闘士の名前に、輝一と輝二は目を見開きながら声を上げた。
ダスクモンは本来ならばもう存在しない筈の『闇』の闘士。十二年前の出来事の時に、ダスクモンの形をしていたスピリットは形を変え、レーベモンのスピリットへと変化したのだ。
その為にダスクモンが現れる事は本来ならばもう無い筈なのだが、ダスクモンは復活した。もう一つの『闇』のスピリットして蘇り、

ミッドへとメルキューレモン達ともに存在しているのだ。

『ダスクモンが蘇ってしまった理由は一つだ・・・・デジモン達の故郷を護る事が出来なかった言う無念の想いが『闇』のスピリットに集まり、ダスクモンは復活を果たしてしまったんだ。しかも、奴は、いや、他のメルキューレモン達もそうだが、完全に人間に失望してしまっている。“人間の欲望の歴史”を見た為に』

『人間の欲望の歴史？』

レーベモンの言葉に輝一と輝二は疑問の声を上げた。

“人間の欲望の歴史”。その様なものが本当に存在しているのかと思い、輝一と輝二は疑問の表情を浮かべながらも、ヴォルフモンとレーベモンに質問しようとするが、ヴォルフモンとレーベモンは二人に向かって首を横に振るう。

『人間の欲望の歴史についてを、お前達が知るのはまだ早い。時が来れば俺達が話す（その時こそが、俺達の道が本当に決まる時だ）』

（二人には済まない事をしてしまう。だが、俺達も人間の持つ光を本当に信じて良いのか分からないんだ。デジモンと人間が本当に共存出来るのかどうかを、本当に意味で知る為にも）

ヴォルフモンとレーベモンは完全には人間側の味方ではなかった。

メルキューレモン達ほどではないが、ヴォルフモンやレーベモン、そして残りの四人の闘士達も、管理局の行いや、ルインの記憶を見た為に人間を完全には信用出来なくなっている。だが、それでも彼らには嘗て築き上げた輝一と輝二、そして残り四人の者達との友情を切り捨てる事など出来なかった。だからこそ、人間を信頼するべきなのかを確かめる為に輝一と輝二の呼び掛けに応えて姿を現した

のだ。
　そしてヴォルフモンとレーベモンは再び輝一と輝二に向かって、右手を差し出し始める。
『さぁ、如何する？俺達の手を握れば、俺達の力を再び得られる。その代わりに、デジモンと人間の行く末を決めると言う役割を背負う事になるがな』
「・・・・・・済まないけど、そんな大役は行き成り言われても背負い切れない」
『『何ッ！？』』
　輝二の答えに対してヴォルフモンとレーベモンは驚愕の声を上げて、輝二の姿を険しい瞳で見つめ始めると、輝一が苦笑を浮かべながらヴォルフモンとレーベモンに声を掛ける。
「勘違いしないでくれ。俺達だって、人間とデジモンの戦争を止めたいって心から思っている・・・・だけど、それに挑む為に覚悟は誰かに言われて決めるものじゃないだろう？」
『・・・・・・』
「俺達はまだ、何も知らないに近い。ヴォルフモンやレーベモンが現状を教えてくれたけど、それをこの目で見た訳じゃない。言葉だけじゃ、其処で起きている事を全て理解出来ない」
「だから、今の答えは俺達自身が見聞きして、そして感じた後にしたいんだ。簡単に出した答えじゃ逃げ出してしまうかも知れないからな・・・・・・だけど！今回の一度だけは力を貸して欲しい！！

すずかを！！」

「アリサをッ！！」

『救う為の力を一度だけ貸してくれッ！！』

『『・・・・・フッ！ハハハハハハハハハハハハハッ！！！！！』』

輝一と輝二の心からの思いを聞いたヴォルフモンとレーベモンは僅かに呆然とした表情をするが、すぐにその表情は嬉しそうな笑みへと変わり、心から嬉しそうな笑い声を上げ始めた。

その姿に輝一と輝二は困惑した表情をして、ヴォルフモンとレーベモンを見つめると、二体は笑い声を上げるのを止めて真剣な表情を二人に向け始める。

『合格だ！それこそが俺達がお前達に望んでいた答え！』

『俺達は安易な答えなど望んではいない。心からデジモンと人間を思っている者達にこそ、俺達の力を使って欲しい』

『『今一度お前達と共に戦おう！』』

ーーーシュウン！！

ヴォルフモンとレーベモンは同時に声を上げると、その身を人と獣のスピリットの二つに姿を変える。

それと共に輝一と輝二のポケットの中から光が溢れ、二人はすぐさまポケットの中に入っていた携帯を取り出すと、携帯が光り輝き、光が消えた後には片手で握るぐらいの姿へと変わったディースキャ

ナー輝一は黒と灰色の色合い。輝二は青と黒の色合いーが姿を現した。
それと共に二人の前に存在していた四つのスピリットが移動を始め、輝一のディースキャナの中には『闇』のスピリットが、輝二のディースキャナの中には『光』のスピリットが入り込み、二人の視界は突如として光に包まれて行く。

「・・・・二人を助けよう輝二」

「あぁ、当然だ兄さん」

ーーーーシュウン！！

輝一と輝二が言葉を言い終わった瞬間に、二人の姿は光の中へと消えて行き、それと共に混沌とした空間の消失して行くのだった。

「グウッ！・・・・・何だったのだ先ほどの光は？」

国守山の麓付近に立っていたムシャモンは、輝一と輝二に止めをさそうとした瞬間に頭上から発生した黒と白の光に寄って、眩んでしまった目を擦りながら声を出し、同様に光に寄って目が眩んでいたアリサとすずかもゴーレモンに掴まれながらも目を擦りながら光が発生した場所を見てみると、輝一と輝二が不敵な笑みをしながらムシャモンとゴーレモンを睨み付けていた。

「フッ！今の光で拙者の目が眩んでいる内に、逃げれば良かったものを」

「逃げる気は無いって言っていただろう・・・・・出来ればすぐに二人を解放して欲しい。俺達は出来れば、アンタ達と戦いたくない」

「戦いだと？・・・・・・クククククッ！クッハハハハハハハハハッ！！笑わせるな！！先ほどまで拙者に手も足も出なかった貴様らに何が出来る」

「・・・・・確かにさっきまでの俺達じゃ、お前には勝てなかったよ・・・・・さっきまでは」

輝一はムシャモンの言葉に答えながら右手に握っていたディースキャナをムシャモンに向かって構え、輝二も同様にディースキャナをムシャモンに向かって構えた瞬間に、二つのディースキャナの液晶画面が光り輝き、ヒューマンスピリットが液晶部分に浮かび上がって来る。

それと共に輝一と輝二の左手に輪状のデジコードが発生し、二人はデジコードにディースキャナの上部分を当てながら叫ぶ。

『スピリットエヴォリューーーション！！！』

ーーーギュルルルルルルルルルッ！！！

『なっ！？』

輝一と輝二が叫ぶと共にデジコードが二人の体を包み込んで行き、それを見たムシャモンとアリサ、すずかは驚きに目を見開きながら二つのデジコードを見つめ始める。

そして二つのデジコードの内部では、輝一と輝二の体に次々とスピリットを纏っていき、体に、腕に、足に、そして頭部へとスピリットは合わさり、それと共にデジコードは消滅して、その内部から

嘗て三大天使の世界を救った二体の伝説の闘士が姿を現す。その名も。

「ヴォルフモン！！！」

「レーベモン！！」

ヴォルフモンへと進化した輝二とレーベモンへと進化した輝一がその姿を現した。

その見覚えの在りすぎる姿に、ムシャモンは驚愕と恐怖に体を震わせながら後退りし始め、アリサとすずかも驚愕に目を見開きながらヴォルフモンとレーベモンを見つめる。

「ばっ！！馬鹿な！？何故！？何故なのです！？何故あなた方が人間の味方を！？」

「フッ！！」

ーーービュン！！

ムシャモンの叫びに答える事無くヴォルフモンは空高く飛び上がり、アリサを掴んでいるゴーレモンの左手の繋ぎ目に向かって左腕の砲身を向けて、光のレーザーを砲身から撃ち出す。

「リヒト・クーゲル！！」

ーーーズキュウン！！

「ガアアアアアッ！！」

「ゴーレモン！！」

ヴォルフモンのリヒト・クーゲルに左手の繋ぎ目を撃ち抜かれたゴーレモンは苦痛の叫びを上げ、ゴーレモンを落ち着かせようとムシャモンは声を掛けるが、ゴーレモンは苦痛の叫びを上げるの止めずに、思わずアリサを手放してしまう。

ーーーパシッ！

「ヘッ？キャアァァァァァァァーーーーー！！！」

ーーーガシッ！！

地面に向かって落下し始めたアリサを、寸前の所でヴォルフモンが抱き止め、確りとアリサの体を抱えながらゴーレモンの傍を離れ始める。

「・・・・・輝二なの？」

「あぁ、今は進化してヴォルフモンに成っているが、俺は源輝二だ。事情は後で説明するから確り掴まっていてくれ」

「待って！すずかがまだ！！」

「フッ！安心しろ。すずかの方には輝一が向かっているからな！」

「ガアァァァァッ！！」

アリサを奪い返された事に気がついたゴーレモンは、アリサを取り戻そうと左腕をヴォルフモンに向かって振り上げ始める。

しかし、その直前に音も無くゴーレモンの背後に忍び寄ってレーベモンが飛び上がり、右手に握っていた槍を振り回しながらゴーレモンに右手の繋ぎ目を槍で貫く。

「エーヴィッヒ・シュラーフッ！！」

ーーードスン！！

「ギッ！ギガアアァァァァァッ！！」

ーーーバシッ！！

レーベモンの槍に繋ぎ目を貫かれたゴーレモンは再び苦痛の叫びを上げて、アリサと同じようにすずかを手からは離してしまう。
それと共に地面に向かって落下し始めたすずかの体を、レーベモンは瞬時に抱き止めてその場から凄まじいスピードで離れ始める。

ーーーガシッ！！

「フッ！！」

「・・・・・輝一君だよね？」

「あぁ、今は進化してレーベモンに成っているが、俺はすずかの知っている木村輝一本人だ」

呆然とした表情をして質問してきたすずかの問いに、レーベモンは迷い無く答えると、アリサを地面に降ろしているヴォルフモンの下に駆け寄り、すずかを地面へとゆっくりと降ろす。

「此処で待っていてくれ。すぐに終わらして来る。行くぞレーベモン！！」

「応ッ！！」

ヴォルフモンの叫びにレーベモンはすぐさま応じ、二体はすぐさま戸惑いから立ち直り白鳥刀を構えているムシャモンとゴーレモンの下に向かって駆け出し、それぞれ構えを行い始める。

「・・・・もう一度だけ聞く。出来れば俺達はお前達とは戦いたくない。退いてくれないか？」

「断る！！あの娘達を連れて行く任務も在ったが、それ以上に貴様ら人間どもにあの伝説の十闘士の力を使われるのが、尚更気に入らん！！貴様らは必ずこの場で手打ちにしてくれるわ！！」

「そうか・・・・・だが！俺達も退く訳にはいかない！！この目で世界に起きている事の真実を見る為にも！！」

ーーーブン！！

レーベモンは叫ぶと共に右手に握っていた槍をムシャモンとゴーレモンに向かって構え、ヴォルフモンの腰から二本の光の剣ーリヒト・シュベーアトを抜き取り構えを行い出し、同時にムシャモンとゴーレモンに向かって駆け出す。

ーーービュン！！

『ハアァァァァァァァーーーー！！！！』

「ムッ！！」

自身に向かって駆けて来るヴォルフモンとレーベモンの姿を見たムシャモンは迎え撃とうと、白鳥刀を構えだすが、その直前にレーベモンが高く飛び上がり、ムシャモンの背後に存在していたゴーレモンに向かって次々と槍を凄まじいスピードで突き出す。

「ハアァァァァァァッ！！」

ーーーガガガガガガガガガガガガガッ！！

「ガアァァァァァァァッ！！」

レーベモンの槍が放つ無数の突きをゴーレモンは避ける事が出来ず、ゴーレモンの体を構成している岩石の体は徐々に削られていき、ゴーレモンは苦痛の叫びを上げながらレーベモンを叩き落とそうとするが、レーベモンはゴーレモンの攻撃を掻い潜りながら槍を突き出し続ける。

その様子とゴーレモンの傷付いていく姿を見たムシャモンはゴーレモンを助けようと駆け出そうとするが、その直前に突如として自身の右側に向かって白鳥刀を構え、ヴォルフモンのリヒト・シュベーアトを受け止める。

ーーーガキン！！

「クッ！！」

「やるな。成熟期レベルのデジモンとは思えない・・・・・それだけ人間が憎いんだな？」

「当然だ！！貴様ら人間には分かるまい！！デジタルワールドを、故郷を奪われた拙者達の気持ちなど！！」

「・・・・・少しだけなら俺達にもお前達の気持ちが分かる・・・・・俺達に取ってもデジタルワールドは第二の故郷だった！！だが、オファニモン達がこんな事を望むと思っているのか！？」

ーーーギリギリギリッ！！

「グウッ！！」

ヴォルフモンは叫ぶと共にリヒト・シュベーアトと白鳥刀のぶつかり合っている部分から火花が飛び散り、ムシャモンは追い込まれ始める。

その姿を確認したヴォルフモンは左手に握っているもう一本のリヒト・シュベーアトを構え、ムシャモンの胴体に向かって振り抜く。

「フッ！」

「クウッ！！」

自身の胴体に向かって来るリヒト・シュベーアトの刃を、ムシャモンは後方に飛ぶ事でギリギリかわした。

しかし、その隙にヴォルフモンは二本のリヒト・シュベーアトを柄の部分を繋ぎ合わせ、ツインブレードの形にリヒト・シュベーアトを変えて、残像の残るほどのスピードでムシャモンに接近し、その体を一瞬の内に切り裂く。

「ツヴァイ・ズィーガーーッ！！」

ーーーブザン！！

「ガアッ！！」

ムシャモンの体はヴォルフモンのツヴァイ・ズィーガーに寄って一瞬の内に切り裂かれ、ムシャモンは白鳥刀を地面に突き刺す事で膝を着くのを押さえ、ヴォルフモンにゆっくりと顔を向ける。

「・・・・・クックッ、所詮人間とデジモンは相容れる事が出来ない種族達・・・・・此処で拙者とゴーレモンを討ち倒しても、この地にはまだ人間を憎んでいるデジモン達と・・・・・あの方が存在している・・・・例え十闘士の方々の力を得ても、この流れはもはや止められんぞ！！」

「止めてみせる！！俺達は絶対にその流れを止めて見せる！！」

「フッ！・・・・・笑わせるな・・・・・貴様はそう言う言い訳を行い続け・・・・・拙者のようにデジモンを殺していく！！その憎しみを背負えるのか！！」

「グッ！」

ムシャモンの叫びを聞いたヴォルフモンは、その表情を苦そうに変えて顔を僅かに俯けてしまう。

それを最後の好機だと判断したムシャモンは、自身の体を襲っている激痛に構わずに地面に突き刺していた白鳥刀を瞬時に抜き取り、ヴォルフモンに向かって最後の力を振り絞りながら振り下ろす。

「貰った！！斬り捨て御免ッ！！」

「ハッ！！」

ーーーブザンッ！！

自身に向かって振り下ろされて来る白鳥刀に気がついたヴォルフモンは、瞬時にツインブレードを振り抜き、白鳥刀の軌道を僅かにずらしながらムシャモンの体を再びツインブレードで切り裂き、ムシャモンと背中を見せ合うよう立つ。

「・・・・・この様な戦いがこれからも続いて行く・・・・・本当にデジモンと人間の共存を目指すのならば・・・・・迷わぬ信念を今一度その身に持って下され・・・・・嘗てデジタルワールドの危機を救ってくれた時のように・・・・」

「ッ！！お前！？まさか業と！？」

「・・・・・例え人間でも・・・・・あなた方一十闘士に選らばれた方々を斬るのは拙者には出来なんだ・・・・・未熟だっ…」

ーーーギュルルルルルルルルッ！！

最後まで言葉をムシャモンは言う事が出来ず、その体から輪状のデジコードが出現し始めた。

その様子にヴォルフモンは僅かに苦しそうな表情をするが、すぐに表情を真剣に戻し、右手にディースキャナを握り締めて、ムシャモンの周りに発生しているデジコードになぞるようにディースキャナを当てる。

「闇に蠢く魂よ、聖なる光で浄化する！！デジコード！！スキャン！！」

ーーーシュゥゥゥゥゥゥン！！

ヴォルフモンは叫ぶと共にデジコードに当てていたディースキャナを滑らせ、ムシャモンのデジコードをディースキャナの中へと収納して行き、後にはデジタマだが地面に残された。

しかし、ムシャモンに勝ったのにも関わらずにヴォルフモンの表情は悔しげに歪み続け、自身の持つディースキャナを険しい視線を向ける。

「・・・・・・こんなにも後味の悪い戦いが在ったのか・・・・・・俺は・・・・・・クソッ！！」

ヴォルフモンは自身の感じる戦いの後の後味の悪さに、苦しげな声を出すのだった。

そしてその間にもレーベモンとゴーレモンの戦いは続き、レーベモンがゴーレモンを追い込んでいくと、ゴーレモンは突如として自身の背中に存在している噴射口から超高温の毒ガスを噴出し始める。

「カースクリムゾンッ！！」

ーーーシュゥゥゥゥゥーーー！！

「ッ！！不味い！！ドゥンケル・ザルクッ！！」

ーーーガシィィィィン！！

ゴーレモンがカースクリムゾンを噴出させ始めた事に気がついたレーベモンは、瞬時に毒ガスを辺りに撒き散らさないようにする為

に、槍を地面に突き刺し、ゴーレモンの周りに黒いオーラ―ドゥンケル・ザルクを発生させてゴーレモンとカースクリムゾンを包み込み、ゴーレモンとカースクリムゾンを閉じ込めた。
　それを確認したレーベモンは僅かに落ち込んだ表情をしているヴォルフモンに目を向け、ヴォルフモンが思っている気持ちに気がつき、僅かに落ち込んだ表情をするがすぐに真剣に表情を戻し、胴体の部分に存在している獅子の顔をエントリヒ・メテオールの中に閉じ込められているゴーレモンに向け、闇色のエネルギー波を撃ち出す。

「エントリヒ・メテオールッ！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ガアァァァァァァァァァァァッ！！！」

　レーベモンの放ったエントリヒ・メテオールはエントリヒ・メテオールごと、その内部で動きを封じられていたゴーレモンを貫き、ゴーレモンは苦痛の叫びを上げながらムシャモンと同様にデジコードを出現させ始める。
　それに気がついたレーベモンは、先ほどのヴォルフモンと同じように右手にディースキャナを持ち、デジコードを発生させているゴーレモンに近づくと、デジコードにディースキャナを当て始める。

「乱されし邪悪な心よ、闇に埋もれて眠るがいい！このデジヴァイスで浄化する！！デジコード！！スキャン！！」

ーーーシュウゥゥゥゥゥン！！

　レーベモンは叫ぶと共にデジコードに当てていたディースキャナ

を動かし、デジコードをディースキャナ内部へ吸い込ませ、後にはデジタマだけが地面に残された。
それを確認したレーベモンはゆっくりと地面に落ちているデジタマを拾い上げ、体からデジコードを出現させて元の人間の姿へと戻る。

「・・・・・後味が悪いな」

「あぁ・・・・・・今回の戦いは本当に辛そうだ」

拾い上げたデジタマを大切そうに抱えながら呟いた輝一の言葉に、同様に元の姿へと戻っていた輝二も同様に辛そうな表情をしながら同意の声を上げた。
十二年前とは全く違う戦い。今回は本当ならば善良なはずのデジモンさえも倒さなければならない現状を味わった輝一と輝二はこれからの戦いに不安を覚え始めるが、それを振り払いデジタマとディースキャナを真剣に見つめて戦い参加すると言う決意を固め直す。
そして二人はアリサとすずかに事情を説明しようと二人のいる背後を振り返ろうとするが、その前に背後から声が聞こえて来る。

「・・・・・貴方達がオファニモンさんの言っていた、デジタルワールドを救った六人の人間の内の二人のようね？」

『誰だ！？』

背後から聞こえて来た聞き覚えの無い声に、輝一と輝二は険しい表情をしながら振り返って見ると、アリサとすずかを背後に伴った翡翠色の髪の二十歳位の女性ーリンディが立っていた。
二人の様子にアリサとすずかはリンディの事を説明しようとするが、リンディは二人の動きを手を向ける事で押さえ、輝一と輝二に

笑みを向ける。

「安心して、私は貴方達の敵では無いわ・・・・・とにかく、事情を説明したいからついて来てくれないかしら？アリサさんとすずかさんの検査もしたいしね」

「・・・・分かった。だが、色々と教えて欲しい・・・・この戦いの事を知る為にも」

「俺からも頼む」

「もちろん話をするわ・・・・・酷く辛い話だけどね」

輝一と輝二の言葉に答えながらリンディは自分達の足元に転送用の魔法陣を発生させ始め、輝一と輝二は始めて見る現象に驚きを覚えるが、アリサとすずかが安心させるように二人に近づき、リンディはその様子に苦笑を浮かべながらさざなみ寮へとその場に居る者達全員と共に転送していった。

そしてその頃。地上本部内部に存在している裁判所で、前回の件で審議を受けていたフェイトに審議の決議が告げられていた。しかし、その内容は、はやて達が最も恐れていた内容だった。

「判決を言い渡す。被告人フェイト・テスタロッサは、所有していた階級などを一切抹消。一局員に戻り今後本局の部隊で活動して貰う。更に機動六課、及び地上本部の者達との接触は今後二度と接触しては成らない」

「裁判長質問があるのだが？」

「何かねレジアス中将？」

レジアスの質問に裁判長はゆっくりとレジアスが座っている席の方に顔を向け、レジアスは自身の横に座っているはやてに僅かに視線を向けながら裁判長に声を掛ける。

「フェイト・テスタロッサ局員には、エリオ・モンディアル陸士の保護者と言う役割も存在していたが、この保護者の役割は地上が貰っても良いのかね？彼女が本局の方に行くと成れば、エリオ・モンディアル陸士も移動する事に成るのかね？」

「エリオ・モンディアル陸士についての采配の件は地上に残すそうだ。新たに地上で彼の保護者を見つけるの赦すと本局は言っている」

「了解した。その件だけが気になっていたので、質問は以上だ。（フン、本局奴らめ、Ｓランクオーバーの小娘が手に入れば、モンディアル陸士は要らないと言う事か。狙い通りだ。このまま小娘には生贄に成って貰うぞ。違法研究を潰す為にな）」

レジアスは裁判長の言葉に答えると共に、座っていた椅子へと座り直しを、レジアスからの質問が終わったのを確認した裁判長は再びフェイトに顔を向け、審議の続きを話し始める。

「三日後に本局の者達が被告人を護送する。それまでは地上本部の者達はともかく、機動六課の者達のとの接触は禁止となる。移動の準備を終え次第すぐに彼女は地上本部内部の独房に軟禁して置くように・・・では、これにて審議を終了する」

裁判長は言葉を言い終わると共に、本局の者達と思われる局員達と共に退出して行き、フェイトも数名の局員に連れられて移動を始めるが、その前に最後にはやてに顔を向け、悲しげな表情をしながら声を出す。

「・・・・はやて・・・・・・・さよなら・・・・」

「・・・・・元気で頑張ってなフェイトちゃん」

フェイトの別れの言葉にはやては顔を俯かせながら声を出し、フェイトは儚げな笑みを浮かべながら裁判室を出て行った。

そして次々と裁判を傍聴していた局員達も部屋を出て行き、最後には、はやてとレジアスだけが部屋の中に残された。

「・・・・・お前がこの作戦を了承するとは意外だった。覚悟は本物のようだな？」

「・・・・・とうの昔に、私は地獄に堕ちる覚悟は出来とります・・・・・例え親友を利用してでも本局の計画は潰さへんといけませんから」

「フッ、小娘が・・・・・・親友を見捨てるのは酷く辛いものだぞ・・・・・作戦が旨く行けば、あの小娘は助かるが、失敗すればあの小娘は確実に地獄のような生活をする事に成る。それを背負って進めるのか？」

「・・・・・進みます・・・・・もう私は迷いまへん・・・・何が起きてもデジモンと人間の共存を成し遂げて見せますわ」

「・・・・・そうか。精々頑張るんだな・・・・・ワシは情報の収

集が在るので失礼するぞ」

レジアスはそうはやてに告げると、一人だけで部屋を出て行った。

そして部屋に一人残されたはやては、ゆっくりと立ち上がりフェイトが先ほどまで立っていた場所に顔を向けながら声を出す。

「・・・・レナ」

「呼んだかはやて？」

はやてが呟くと共に音も無くはやての背後にレナが姿を現し、はやてに心配そうな声を出して質問すると、はやては無言でレナの体に抱き付く。

ーーーガシッ！

「・・・・・ヒック・・・・・・ヒック・・・・私はほんまに最低な事をしてしもうた・・・・・フェイトちゃんを・・・・・十年来の親友を・・・・・私は・・・・・ヒック、ヒック」

「はやて・・・・」

自身の胸の中で悲しみに満ちた泣き声と涙を流しているはやてをレナは優しく抱き締め、少しでも自身の大切なパートナーの悲しみを和らげようとする。そして二人は少しの間、互いに抱き締め合うのだった。

光と闇！復活の闘士！！後編（後書き）

次回予告

輝一と輝二は再びスピリットと巡り合い、リンディに事情を詳しく聞き始める。

しかし、その一方でフェイトには確実な危機が迫っていた。

その危機を止める為に、彼らが動き出す。

次回、漆黒の竜人と少女、『フェイト救出、怒りのダブル番長！！』

命を持て弄ぶ者達に、男達は怒り、拳を撃ち出す。

フェイト救出、怒りのダブル番長！！前編

ムシャモンとゴーレモンとの戦いを終えてから二時間後。
さざなみ寮へとやって来た輝一と輝二は、全ての現状を知っているリンディから詳しく話を聞き、リンディ達が地球で行おうとしている事についても説明を聞き終えていた。

「成るほど、アンタがオファニモン達が残してた希望と言う事だな？」

「えぇ、とは言っても、私達には全てが救えるわけではないわ。今の私達が出来るのはこの地球に存在しているデジモン達を説得するぐらいね」

「そうか・・・・」

リンディの言葉に輝一は納得したような声を上げて頷き、輝二も同様に頷く。
その様子にリンディは僅かに口元に笑みを浮かべるが、すぐに真剣な表情へと変わり、輝一と輝二の目を見つめながら質問を行う。

「それで、貴方達はこれからどうするの？十闘士の力を再び得たとは言え、今回の敵は、本来ならば善良な筈のデジモン達。最終的にはルーチェモンと戦う事に成るでしょうけど、それまでは本来ならば戦わなくても良いデジモン達と戦わなければいけないわ。貴方達は戦えるのかしら？」

「・・・・・逆に聞くが、アンタは戦えるのか？デジモン達と？」

「戦うわ。私だけじゃなく、私の仲間達もデジモンとは戦えるわ。その結果、デジモン達に憎まれても私達は進むわ」

輝二の質問に対してリンディは迷いの全く無い表情をしながら答えた。

既にリンディ達は全てを覚悟して先に進む事を決めている。今の状況を打開する為にも、何が何でも地球のデジモン達を説得するつもりなのだ。その為にデジモン達と戦う事に成ろうともリンディ達は先に進むつもりだった。三大天使達の最後の願いの為にも。

そのリンディの姿に輝二は先ほど戦ったムシャモンの言っていた迷いの無い信念をリンディが持っている事を確信し、同様に輝一もリンディの信念が揺らがない事を確信する。

「・・・・戦えるなんて軽はずみに俺達は言えない。俺達が現状を知ったのはついさっきだからな・・・・だけど、俺達もデジモンを止めたい！！それだけは絶対に曲げない！！」

「同感。此処まで現状が分かったのに、全部無しにして普通の生活に戻るなんて俺達には出来ない。まだ、完全に戦えるって覚悟は決まっていないけど、俺達は貴女に協力したい」

「・・・・・フゥ～、ギリギリ合格かしらね」

「それじゃ！？」

「えぇ、貴方達に協力して貰うわ。だけど、当分の間は此処で私と戦いの訓練ね。幾らルーチェモンを倒した事が在るからと言って、十二年ぶりの戦いですもの。ブランクが在る状態ではこの先の戦いでは不味いからね」

「アァッ！」

「助かります！」

輝二と輝一はリンディの提案に対して礼の言葉を告げた。

二人とも先ほどの戦いで自分達の実力がかなり下がっている事を確信していたのだ。いかに精神的な要素も在ったとは言え、成熟期レベルのデジモンを倒すのに時間が掛かり過ぎていた。少なくとも十二年前にスピリットを最初に手に入れた時でさえも完全体レベルのデジモンは倒す事が出来ていた。その事から考えても今の二人はスピリットを使っても、完全体レベルのデジモンには勝つ事が出来ない可能性が高い。これからの戦いの為にも足手纏いにだけは成りたくないと思っている輝一と輝二からすれば、リンディが出した提案は嬉しいものだった。

その輝一と輝二の嬉しげな笑みを見たリンディは苦笑を顔に浮かべながら、足元に置いて在った物を手に持ち二人に顔を向ける。

「それじゃ先ず最初にやって貰う事が在るわ」

「何だ？俺達は何をすれば良いんだ？」

「大事な事よ。此処で暮らす為にもね」

リンディはそう輝一と輝二に向かって笑みを浮かべながら告げると、持っていた物を二人の手の中に渡し、二人を在る場所へと連れて行くのだった。

そして三十分後。リンディに案内された二人は、寮の屋根の上に上り大きな穴が開いている場所の修理を行っていた。

ーーーカン！！カン！！カン！！

「輝ニ、もう少し横に板をずらした方が良いぞ」

「了解・・・・ハァ～、それにしても最初にやる事が、屋根の修理に成るとはな」

「仕方ないさ。俺と輝ニの声にスピリットが答えたせいで、此処の屋根が壊れたんだからな。とにかく、応急処置だけでもしとかないと不味いだろ。何せ、この下の部屋が俺達の寝泊りする部屋になるようだからな」

「了解っと！」

ーーーカン！！

輝一の言葉に答えると共に輝ニは持っていた金槌を釘に向かって振り下ろし、二人はそのまま修理を続けようとすると、背後に置いてある梯子から飲み物を手に持ったアリサとすずかが上がってくる。

「二人ともご苦労様。少し休憩したら？」

「飲み物を持って来たから飲んでね」

「ありがとう、アリサ」

「すずかもありがとう」

輝ニと輝一はアリサとすずかに礼を告げながら二人が差し出して

来た飲み物を受け取り、屋根の上に座って飲み始める。
その様子にアリサとすずかは笑みを浮かべながら、アリサは輝ニの横に座り、すずかは輝一の横に座る。

「・・・・・今日は助けてくれてありがとね」

「気にするな。元々俺達が呼ばなければ、二人がムシャモンとゴーレモンに襲われる事は無かったんだからな」

「そうだな。元はと言えば、俺達が二人を呼び出したのが原因なんだから、二人は気にしないでくれ」

『・・・・・』

輝ニと輝一の言葉にアリサとすずかは無言で顔を俯かせ始める。
その様子に気がついた輝一と輝二は顔を見合わせると、二人の心の中に存在しているものに気がつき、勤めて冷静に成りながら前に顔を向けて輝一が声を掛ける。

「怖くなった？デジモンが？」

「・・・・・正直ね・・・・前に話したけど、私達の親友一なのはと一緒にいるガブモンや桃子さんのパートナーデジモンのマリンエンジェモンを見た時は、安全な生物なんだって思っていたの」

「・・・・だけど、今日襲って来た二体のデジモンは怖かった・・・・本当に私達を捕まえようとして来たから」

「・・・・・それが分かれば、二人はデジモンを本当の意味で理解する事が出来るな」

「如何言う事よ？」

輝ニの言葉にアリサは疑問の声を上げ、すずかも訝しげな顔を輝ニに向けて見ると、輝一と輝ニは二人の顔を真剣に見つめながら話し始める。

「俺達が十二年前にデジタルワールドを旅した時だけどな。俺はヴォルフモンの力を得てデジモン達を倒していた。その時に出会ったデジモン達は良い奴も居れば当然悪い奴もいた」

「俺もそうだな。と言うか、俺は一時は悪い連中の側にいたからな」

「輝一君が！？」

「嘘でしょう！？」

輝一が告げた事実にアリサとすずかは驚愕に目を見開きながら声を出し、輝ニに確認を求めるように顔を向けて見ると、輝ニは苦笑を浮かべながら頷いた。

「まぁ、操られていたから何だけな。とにかく、俺達はそうやってデジタルワールドを他の仲間達と一緒に旅をしていた。その時に俺は一度自分の力を制御出来なくて暴走してしまった事が在るんだ？」

「ヴォルフモンって言う力を？」

「いや違う。もう一つの力ーガルムモンの方だ。スピリットには人型と獣型の二種類が存在していて、獣型の方は制御が難しいんだ」

「獣型には、その名の通り獣そのもの力だからな。人型よりも制御には強い精神が必要なんだ。ただ力だけを求めていたら、獣型のスピリットを制御する事なんて不可能なんだよ」

「そうなんだ」

「色々と在るのね」

すずかとアリサは輝一と輝ニの説明にしみじみと声を出した。
その様子を見た輝一と輝ニは座るの止めて立ち上がり、屋根の修理場所の方に向かって顔を向けながらアリサとすずかに再び声を掛ける。

「まぁ、俺達が言えるのは力の恐ろしさを忘れちゃいけないことだ。忘れたらそれだけで、自分に何時かはその力が返って来るからな」

「二人は今回の事でデジモンの力の恐ろしさを知った。それを忘れなければ、二人はきっと正しくデジモンを育てられるよ。何せ月村すずかとアリサ・バニングスが育てたデジモンだ。絶対にむやみやたらに誰かを傷つけたりはしないさ」

「・・・・・当然でしょう！絶対に良いデジモンに育てて見せるわよ！」

「うん！輝一君！輝ニ君！！励ましてくれてありがとね！！」

「気にするな。飲み物礼だ」

「そうだな。さて、さっさと応急処置だけでも終わらせないとな！」

アリサとすずかのお礼の言葉に、輝ニと輝一は手を背後に振りながら屋根の上を歩き始め、アリサとすずかは邪魔をしない為に梯子を使って屋根の上から降りようとするが、フッと二人は立ち止まり輝一と輝ニの方に顔を向ける。

「今日は助けてくれてありがとね、輝ニ。カッコ良かったわよ」

「輝一もだよ。助けてくれて本当にありがとう」

アリサとすずかは輝一と輝ニに向かって助けてくれたお礼を告げると、急いで梯子を使って地面へと降りて行き、残された輝一と輝ニは二人の言葉に僅かに顔を赤らめながら苦笑を浮かべ合い、急いで修理を終わらせようとするのだった。

そして地面へと降り立ったアリサとすずかも輝一達と同様に僅かに顔を赤らめながら、寮の入り口の方へと歩き出す。

「また、助けて貰ったわね二人には」

「うん。大学の時にも二人に出会った時も、二人に助けって貰ったよね」

「歳が四つ上なんだけど、どうにも二人とは仲が良いのよね」

そうアリサとすずかは輝一と輝ニについて話し合いながら歩いていると、横の木々の方から声が響いて来る。

「本当に若いって良いわよね、桃子」

「そうね、リンディ。とても初々しくて、見ているこっちも顔が赤くなってしまいそうよね」

『ッ！！』

聞こえて来た声にアリサとすずかは目を見開きながら声の聞こえて来た方を慌てて見て見ると、それぞれデジタマを抱えたリンディと桃子が木々の間から姿を現す。

その様子に一部始終見られていた事に気がついたアリサとすずかは顔を完全に赤く染め、すずかは恥ずかしげに顔を逸らし、アリサはリンディと桃子に怒鳴ろうとしようとするが、その前にリンディと桃子はアリサとすずかにデジタマを差し出す。

「ゴメンなさいね。盗み見するつもりは、本当に無かったのよ」

「デジタマが孵りそうだったから、二人に見せようと呼びに来たら偶然に見ちゃったのよ」

『デジタマがッ！？』

告げられた事実にアリサとすずかは驚愕の声を上げ、リンディと桃子が手に持っているデジタマを見て見ると、確かに二つのデジタマは不規則に動き続けていた。

その様子に本当にデジモンが生まれようとしている事に気がついたアリサとすずかは慌てそうになるが、リンディと桃子は構わずに二人の手の中へとデジタマを乗せる。

「さっきの会話のおかげで、アリサさんとすずかさんにはデジモンを確りと育てられると言う確証が取れたわ。そのデジタマから生まれるデジモンはアリサさんとすずかさんが育てて見てね。だけど、これだけは忘れないで、“デジモンは何が在ってもパートナーの想いに答えてしまう”。その為ならデジモンは自分の命さえも自分の

意思で差し出してしまう。現にフェイトさんのパートナーデジモンだったブイモン君は、自らの命さえも差し出してフェイトさんを護ろうとしたわ」

『・・・・・・・』

「デジモンとパートナーは何が在っても、切れない絆で結ばれてしまう。その絆を心から大切にした時、デジモンは正しい進化を行える。その事を胸に生まれて来るデジモンと共に歩みなさい。それが出来た時にこそ、その人物は立派なテイマーに成れるのよ」

『ハイッ！！』

ーーーカタカタッ！！

アリサとすずかの声に答えるように、二人の手の中に在ったデジタマが今まで一番の震えを見せ、アリサ、すずか、リンディ、そして桃子がデジタマを見つめると、デジタマのカラに罅が入り、中からアリサとすずかと共に歩む事に成るかも知れないデジモン達が産声を上げるのだった。

一方その頃。地上本部内に存在する転送ポートの前で、手に手錠が掛けられて顔を俯かせているフェイトと、それを見張るように横に立つ二名の局員に、レジアス、そしてオーリスが転送ポートからやって来る本局の人間の事を待っていた。

そして本局の人間が来る時間が迫っている事を確認したオーリスは、レジアスに静かに近づき、フェイトに聞こえないようにしながらレジアスに声を掛ける。

「中将、そろそろ引き渡し時間です」

「そうか。フン、部隊に編入すると言った割りには、デバイスの携帯の禁じ。魔力を封じる手錠を付けたまま引き渡せと言って来るとは。やはり、奴らの狙いは別の事だろうな」

「ですね。しかし、だからこそこの作戦の意味が在るのです。それに彼女のデバイスの管理は此方の管轄に成りましたから・・・・・あのロストロギア級に変貌したデバイスを本局に渡さずに済んだのは本当に運が良かったです」

「ウム・・・・・しかし、そのせいで地上の技術部が諸手を上げて大喜びしているからな・・・・・あの技術はマッドを量産するのだろうか？」

「・・・・・分かりません」

レジアスの疲れきったような声に、オーリスも深く溜め息を吐きながら答えた。

実を言えば、此処ニ、三年の間に地上の技術部の連中は大小なれどマッドの道を歩み始めていた。

フリートの技術を理解しようと研究や検証を重ねていく内に、彼らはマッドに徐々に目覚めて行ったのだ。あのフリートの技術を理解する為にはマッドの道を歩むしかないと彼らは技術者の本能が理解したのだろう。因みにそのバルディッシュとレヴァンテインを直に調べたフェイトの補佐官だったシャーリーも、何気に最近は地上の技術者達と深い交流を重ね、徐々にマッドの道を歩みだしているとゲンヤからレジアスに報告が届いていたりする。

その現状にレジアスは地上の技術力が上がるのは嬉しいが、マッ

ドが量産されている現状に本気で頭が痛くなっていたりする。
「・・・・・三佐。後で胃薬をダース単位でワシの執務室に送って置いてくれ。これからの事を考えると胃薬は常備して置くべきだからな」
「了解です。それで、例のディスクには何が記録されていたのですか？」
「・・・・・デジタマだ・・・・・だが、アレは何かが違う・・・・・ゼストが送って来たのだから、何かしかの意味が在るのだろうが、未だに意味を理解する事は出来ずにいる・・・・・」
オーリスの質問に対して、レジアスは深い苦悩に満ちた表情をしながら答えた。
例のディスクとはエリオがゼストから手渡されていたディスクの事である。エリオから他の本局の悪行が記録されていたディスクを渡された時にレジアスに届けられたのだが、親友で在るゼストからの届け物と聞き、すぐさま他のディスクよりも再生して見ると、その中には不気味な鼓動を行い続けているデジタマが記録されていたのだ。
そのデジタマを映像越しとは言え見る事が出来たレジアスはそのデジタマが発生させている不穏なオーラに気がつき、すぐさま解析を技術部に依頼したが、その成果は未だに出ずにいた。
「あのデジタマは他のデジタマとは違い過ぎる。七大魔王のデジタマの可能性も在るが、大門大の話では、七大魔王のデジタマは生まれるまでは普通のデジタマとは変わらないらしい」
「では、そのデジタマは一体？七大魔王以外にも危険なデジモンが

存在しているのでしょうか？」

「分からん・・・・・全てを知っている筈のゼストは行方不明だ・・・・・嫌な予感しかせん」

そうレジアスとオーリスが見えない不安について話し合っていると、転送ポートに光が現れ始め、レジアスとオーリスが真剣な表情をしながらいずまいを正すと共に、本局の制服を着てレジアスと同様に中将の階級の印を付けた壮年の男性と、数名の本局局員が姿を現した。

その本局の局員の姿に、フェイトの横に立っていた二名の局員は顔を僅かに怒りに歪めるが、すぐさまオーリスが睨んでいるのに気がつくと、表情を平常に戻し、レジアスと握手を交わし合っている本局中将の姿を見つめる。

「護送ありがとうございますよ、レジアス中将？」

「気にしないで頂きたい。此方に取っては当然の事なのでな、リオク・ハルディ中将殿」

男性―リオク・ハルディの言葉にレジアスは笑みを浮かべながら答えるが、内心では目の前で薄笑いを浮かべているリオクの顔を殴り飛ばしたい気持ちで一杯だった。

レジアスの目の前に立っているリオクこそ、第二十管理世界が滅ぶ時に真っ先に逃げ出した部隊の部隊長だったのだ。しかし、リオクは本局の上層部の一味で在ると共にSランクオーバーの魔導師。

此処でレジアスがリオクを殴り飛ばしたりすれば、確実にその件で本局は地上を攻撃して来る。一時の感情で地上の局員を危機に晒す訳にはいかない事を分かっているレジアスは、鋼の精神で自身の感情を制御し、リオクと握手を交わし合っていた。

その様子にリオクは更に薄笑いを深めながら、手錠を付けられているフェイトに物でも見るような視線を向けながらレジアスに向かって声を掛ける。

「この前ではすいませんでしたね。私達本局の一部の者達が暴走して、其方の局員と成る者達を傷つけてしまって？ですが、それは地上がデジモンを使っているからですよ？我々は人間の手だけでデジモンを滅ぼせば、彼らも暴走する事は無かったのですから」

「（抜け抜けと！！）デジモン？オーリス三佐やキャロ・ル・ルシエ一等陸士が連れている生物は、使い魔と使役獣ですが？それとも其方にはデジモンだと言い切れる確証でも在るのですか？まぁ、在ったとしても彼らには今まで出して来た戦績が在るので、部隊から移動する事は在りませんがね」

「・・・・・良いでしょう。その件に関しては保留にして置きますよ・・・・・では、フェイト・テスタロッサ局員を渡して貰いますよ。おい！」

『ハッ！！』

リオクが命ずると共に、リオクの背後に居た局員達が一斉に動き、フェイトの方に向かって歩き出すと、厳重にフェイトの体に拘束具を付けていく。

その如何見ても何処か部隊員として働かせるようには見えない姿に、レジアスとオーリスはフェイトが送られる場所を確信し、内心では笑みを浮かべながらも、表立っては苦々しげな表情をしながらフェイトを見つめていると、気を良くしたリオクがレジアスに声を掛ける。

「それでは彼女は護送させて貰いますよ。安心して下さい。彼女には“最も相応しい場所”で働いて貰いますので」

「フン、最も彼女に相応しい場所か。まぁ、とにかくさっさと彼女を送ってくれ。此方も色々と忙しいのでな」

（何を考えている？あの女が送られる場所は予想がついている筈。なのに発信機や、怪しい機器類の反応は一切出ていない・・・・・・サーチャーらしい物を存在していないし・・・・・まぁ、良いでしょう。どうせ女が送られるのは、管理外世界。地上の者達には手が出せないからな）

リオクは内心でそう判断すると、顔を俯かせ続けるフェイトを伴い、一緒に来た局員達と共に転送ポート内へと入っていた。その判断こそが自分の運命を決定的に破滅の方向へと誘う事も知らずに、リオクはこれから始まであろう自身の未来に思いを馳せながら、レジアス達の前から姿を消して行くのだった。

地上本部から程近いビルの屋上。

その屋上には何かの機械を手に持ったバンチョーレオモンと、地上本部に険しい視線を向けている大にアグモンが存在していた。

そしてバンチョーレオモンは持っていた機械に反応が現れるのを確認すると、僅かに口元に笑みを浮かべて大に声を掛ける。

「反応が現れた。予想通り他の世界で研究を行うようだな」

「よっしゃ！だったら、すぐに後を追って、あの金髪を助けに行こうぜ！！」

「当然だぜ！！あのブイモンが命を捨ててまで護ろうとした奴だ！！絶対に助けような兄貴！！」

大の叫びに対してアグモンも同意の叫びを上げ、バンチョーレオモンも深く頷く。

そもそも彼らがこの場所に居るのは、ブイモンがその全てを掛けて残したパートナー―フェイトを助ける為だった。前回の戦いの後、ガオモンとバンチョーレオモンが機動六課と今後についての交渉を行った時に、一緒に居た大はフェイトが今後どうなるのかとはやて達に確認してみると、先ず間違いなく違法研究の実験材料にされてしまうと答えを返された。

それを聞いた大はすぐさまフェイトを機動六課の独房から連れ出して、自分達の下に連れて行こうとしたのだ。ブイモンの事も勿論在ったが、それ以前に大は何処と無くフェイトを放って置く事が出来ずに、自分達の下で安全を確保させようとしたのだが、それを行えば機動六課の立場は悪くなる上に、フェイトは犯罪者として追われてしまうとはやてに告げられ、フェイトを機動六課から連れ出すのを断念させざる得なかった。

しかし、その後に訪れたレジアスが告げた作戦に大達は一も二も無く頷き、こうしてフェイト救出と本局の違法研究潰しに大達は動いているのだ。

「大。既に話したが、この世界の闇はお前が思っている以上に深い。今から行く場所に居るのは、恐らく倉田と同等の腐った連中が居る場所だ・・・・・覚悟は出来ているな？」

「当然だ。寧ろ倉田と同じ連中がいるなら、全員殴り飛ばしてやるぜ！命を弄ぶような連中なんざ、この拳で殴り飛ばしてやる！」

「俺もだぜ！！ブイモンの為にも、絶対にあの女は助けて見せるぜ！！」

「あの女だけではない。先ず間違いなく、行く先には既に何人かの人造魔導師達が存在している筈だ。俺達はその者達も助けて、完全に本局の連中の思惑を潰す！地上で無ければ、全ての責任は本局の方に在るからな。連中に思う存分この拳を叩き付ける事が出来る。命の大切さをその身に刻み込んでやるぞ！！」

『応よッ！！』

バンチョーレオモンの言葉に大とアグモンは同意の叫びを上げ、バンチョーレオモンが持っている機械の反応を見ながら、その場から転移して行くのだった。

とある管理外世界。その世界には人間は全く存在せず、深い森の大自然に覆われ続け、動物や植物しか本来存在しない場所。

しかし、その場所には本来ならば在るはずの無い巨大な建造物が存在し、その建物前で本局から拘束具を身に付けられて護送されて来たフェイトと、その護送に同行して来たリオクに数名の局員が存在していた。

「・・・・・やっぱり、人造魔導師研究を管理局は！！」

「えぇ、行っています。何せデジモンとの戦いで管理局の戦力は疲弊していますからね。戦力補充の為にも必要な事なんですよ」

「ふざけるな！！命を弄ぶような研究の何処が必要なの！！」

「仕方ないんですよ。管理局は万年人材不足ですからね。戦争の為にも戦力の補充はね」

フェイトの噛み付くような叫びに対して、リオクは平然としながら答えると、フェイトの背後に存在している局員に視線で合図を送り、局員は背後からフェイトの口に猿轡を巻きつける。

「フグッ！！」

「この先は貴女のような潔癖な人間には少々辛いのものが在りますのでね。美女の叫びを聞けなくなるのは残念ですが、仕方が無い事ですよ」

「フウッ！！フグッ！！」

リオクの言葉にフェイトは猿轡を口に巻かれながらも怒りを表すように声を上げ、体を揺らそうとするが、頑丈な拘束具を付けられている為に僅かに体を揺らす事しか出来なかった。

その様子を見ていたリオクと他の局員達はフェイトの様子に面白そうな笑みを浮かべながら、建物の扉を開け、暴れ続けているフェイトを伴いながら入っていく。

その先に存在しているのは紛れも無く管理局の闇。しかし、その闇を打ち砕こうとしている者達が接近している事にリオク達は全く気がつかず、これから始まるであろう人造魔導師研究の飛躍的な向上に夢を馳せるのだった。

フェイト救出、怒りのダブル番長！！前編（後書き）

次回は多分グロ表現が在ります。

そう言うのが嫌な方は、覚悟して読んで下さい。

フェイト救出、怒りのダブル番長！！後編（前書き）

注意！

今回は最初の方は、フェイトがかなり痛い目に合います。
ですが、作者はフェイトが嫌いな訳では在りません。ブイモンのことへの罰の一環として書いています。

フェイト救出、怒りのダブル番長！！後編

フェイトが研究所内部に入ってから少し経った頃。
フェイトの体に付けられているフリート印の発生させている発信機の反応を頼りに、リオク達の後を追って来たバンチョーレオモン、大、アグモンは、研究所の近くに存在している木々を隠れ蓑にして注意深く研究所を監視していた。

「思ったとおり、管理外世界に違法研究所を隠していたか。管理世界ではデジモンが襲っているから、安全に研究など出来ないからな」

「よし、すぐに乗り込もうぜ！」

「待て、大。乗り込むにしても奴らの逃げ道を全て塞いでからだ。この場所にいる連中は一人たりとも逃す訳にはいかないからな」

「そうだぜ。兄貴、此処はバンチョーレオモンの言うとおりにしようぜ」

「・・・・あぁ、分かった」

バンチョーレオモンとアグモンの言葉に、大は研究所に険しい視線を向けながら同意を示した。
それを確認したバンチョーレオモンは学ランの中に手をいれ、幾つかの棒らしき物を取り出し、大とアグモンの手の中に乗せる。

「何だこれ？」

「それをこの研究所の四方に設置すれば、通信と転送系の魔法を妨

害出来るらしい。言うなれば、妨害電波を発生させる装置だ。それの設置が終わったら、俺と大が正面から乗り込み、フェイト・テスタロッサと人造魔導師として生み出された者達を救い出すのだ」

「アレ？俺は？」

「アグモンはこの場に残り、入り口から逃げようとする者達を捕まえてくれ。何せ転送が封じられれば、逃げ道は入り口だけしか無くなるからな。脱走者が逃げ出さないように作られている施設だ。緊急時の転送ポート以外に逃げ道は存在しまい」

「重要な役目だぜ、アグモン。もしかしたら人造魔導師って奴を連れ出して逃げようとする連中もいるだろうからな。そいつ等はお前が助けるんだ」

「そう言う事なら納得だぜ！絶対に一人も逃がしたりしねえから、安心してくれよ！兄貴、バンチョーレオモン！！」

バンチョーレオモンと大の説明にアグモンは納得の声を上げ、自身の胸を張るようにして頷き、その様子をバンチョーレオモンと大は頼もしそうに見つめると、研究所内部の者達の脱出経路を塞ぐ為にそれぞれ準備を行い始めるのだった。

違法研究所内部。

その内部を薄ら笑いを浮かべながらリオクは歩いていると、背後から感じる険しい視線に気がつき、ソッと背後を振り返って見ると、射殺さんばかりの視線を向けて来ている猿轡や拘束具を付けられたフェイトの姿を目撃し、面白しろそうな笑みをフェイトに向け始め

る。

「怖いですね。拘束具で動きを封じられているのは分かっていますが、それでも貴女の視線は怖く感じますよ。まぁ、その視線も、もうすぐ絶望に変わるんですけどね」

「フウッ！！」

リオクの言葉にフェイトは怒りの叫びを上げようとするが、猿轡のせいでくぐもった声しか出す事が出来ず、悔しそうな表情をし始めると、リオクやそれに付き従っている四名の局員と共に邪悪に満ちた笑みを口元に浮かべながら前へと進み、一際頑丈な扉の前に辿り着く。

それと共にリオクは、ＩＤカードを制服の中から取り出し、扉の横に備わっている機械にカードを通し始める。

「此処から先の光景は、潔癖な貴女には耐えられないかも知れませんね。まぁ、さっさと“壊れた方”が貴女には幸せかもしれませんけど」

ーーーピィッ！！

リオクが言葉を言い終わると共に機械が電子音を発生させ、頑丈な扉がゆっくりと開いて行く。

それを目撃したフェイトは声を上げるの止めて、扉の中がどうなっているのかと注意深く覗いて確認しようとするが、すぐにその表情は青褪め、体を小刻みに震わせ始める。

何故ならば扉の内部には所狭しと無数のカプセルが存在し、そのどれにも裸の十歳前後の子供や六、七歳前後の子供がカプセルの中に入っていた。しかもそのどれもが一目見て分かるほどに体に損傷

を持っていた。在る子供は普通の人間が持つはずの両手が存在せず、変わりに何らかの生物のような両手が取り付けられていたり、また、在る子供は両足が無かったり、頭部が半分以上存在せずに脳みそと思われるものがカプセルの中に漂っている子供さえも存在していた。
　そんな一目見て死んでいると分かる子供達をまるで標本のように飾られているような場所を、その目で見てしまったフェイトは恐怖に体を震わせるが、リオクは構わずにフェイトを伴っている局員達に拘束するように命じながら前に存在している通路を歩き出す。

「この“物”達は貴女が来る前に生み出した人造魔導師の素体だったんですが、殆ど失敗作でしたよ。魔力も全く持たずに生まれてくる者達が多過ぎましてね。戦闘の役に立たないで、魔力を持って生まれてきた者達の射撃訓練の魔法の的に成って貰ったり、或いは他の研究の材料に使用したのですが、全員死亡してしまいましてね。全く、魔力を持って生まれてくれれば助かったものを、“運が無かったですね”」

「ッ！！フグーー！！！！！」

　リオクの命を蔑ろにするような発言に、フェイトは怒りに顔を真っ赤に染めながらリオクに飛び掛かろうとする。
　しかし、次の瞬間に横に居た屈強な局員がフェイトの首を背後から掴み取り、床に向かって勢い良く叩き付ける。

ーーードガアッ！！

「グウッ！！」

「手荒には扱わないでくれたまえ。研究者達は生きた人造魔導師の最高傑作のサンプルを欲しているのだからね。死なれたりしたら、

それだけ研究が遅れてしまう」

リオクはそうフェイトを床に叩き付けた局員に言葉を言うと、顔を床に押し付けられているフェイトの顔を上げるように命じ、苦痛に表情を歪めているフェイトの顔を上げさせ、そのフェイトの怒りに満ちている瞳を注意深く覗き込み始める。

「フム、少々反抗的過ぎますかね。これだと研究に滞りが出るかも知れませんし・・・・・もう少し痛めつけてやれ」

「了解ッ！！」

ーーードガッ！！

「グウッ！！」

リオクの命令にフェイトの首を掴んだままっだた局員は喜びの声を上げ、再びフェイトの顔を床へと叩きつけた。

その事にフェイトは苦痛の声を上げるが、フェイトを捕まえたままの局員は容赦せずにフェイトの顔を床へと叩き続ける。

「全くよ！」

ーーードガッ！！

「ウッ！！」

「執務官とか言われていたくせに、今じゃお前は犯罪者の実験材料だ！」

ーーードガッ！！

「ガッ！！」

「所詮は失敗作の出来損ないとか言われて捨てられた女だな！！今度は仲間だった機動六課の連中にさえも見捨てられてこの場所に送られたんだからよ！！」

ーーードガッ！！

「グウッ！！」

「精々この場所では役に立てよ！！人形のクローン女！！」

ーーードガアアアアッ！！

「グエッ！！・・・・・」

フェイトの顔を床に叩きつけていた局員が言葉と共に今まで一番強く床にフェイトの顔を叩きつけると、フェイトの体から力が抜け、完全に気絶してしまう。

その様子を確認したリオクは、フェイトの首を掴んでいた局員に合図を送って止めさせると、気絶しているフェイトの顔を持ち上げ、その腫れ上がった顔と鼻から血を大量に流している姿に満足そうに笑みを浮かべながら、自身の制服の中に手を入れスタンガンを取り出し、気絶しているフェイトの体に押し当て、凄まじい電流をフェイトの体に送り始める。

ーーービリビリビリビリビリビリッ！！！！

「ムウウウウウウウウウウッ！！！！」

突如として流された凄まじい電流に、気絶していたフェイトの意識は一瞬の内に覚醒し、通路の内部にくぐもったような悲痛な叫びを響き渡らせるが、それを見たリオクと他の局員もフェイトの様子に嬉しそうな笑みを浮かべる。

「フフフフフッ、以前から電気資質変換のスキルを持つ魔導師に電撃は効くのか知りたかったんですが、貴女のおかげで電撃は効く事が判明出来ましたよ。本当にありがとうございます」

ーーービリビリビリビリビリッ！！！

「ムゥッ！！ムゥゥゥゥゥゥゥゥッ！！」

リオクはフェイトに礼を告げると共に、スタンガンの電流の力を更に上昇させ、それと共にフェイトは更に猿轡を噛まされながらも苦痛に満ちた叫びを通路に響かせた。

そして在る程度経つと、リオクは満足したのかフェイトの体に押し付けていたスタンガンを離し、フェイトは力尽きたように床へと倒れ付してしまう。

ーーーバタン！！

「フム、この程度で気絶していたら、この先の出来事に耐えられませんよ・・・・・そうです。貴女が先ほどまでの様子に戻れる物を見せて上げましょう」

そうリオクは気絶して床に倒れ付してしまっているフェイトに向かって声を上げると、共に来ていた二名の局員にフェイトの肩を掴

むように命令し、気絶して力が完全に抜け切っているフェイトを引っ張って来るように命じながら先へと進み始める。
そして巨大なガラスが在る場所へと辿り着くと、窓ガラスの向こうで行われている光景を確認し、笑みを浮かべながら二名の局員に肩を担がれながら気絶しているフェイトに、電流を下げたスタンガンを再び押し当てる。

ーーービリビリビリッ！！

「ッ！！ウウゥゥゥゥゥゥッ！！」

突如として流された電流に、フェイトは苦痛の叫びを上げながら目を覚まし、周りを確認して見ると、残忍な笑みを浮かべているリオクを目撃する。

「ッ！！ウゥゥゥゥゥッ！！」

「フム、まだ、その様な視線を向ける力は残っていますか。ですが、この先の光景を見ても、それを保てますかね？」

「ムゥ？」

リオクの告げた言葉にフェイトは疑問の呻きを上げるが、リオクは構わずに背後に存在している窓ラスの方向の光景を見せるようにフェイトの肩を担いでる局員に命じ、フェイトはガラスの方に近づかされ、その向こうに広がっていた光景に驚愕と困惑に満ちた表情をする。
何故ならばフェイトの前に存在していたガラスの方に向こうには十歳ぐらいの子供が二名、それぞれデバイスを構えながら戦闘を行っていたのだ。

しかし、フェイトが本当に驚いたのは其処ではない。その戦い合っている二名の子供の容姿が余りにフェイトの知る姿にソックリだったからなのだ。
二名の子供は両方とも十歳ぐらいの女の子。一人は茶色の髪をショートカットにして青い瞳を持ち、赤と黒の色合いをしたバリアジャケットを纏い、手にレイジングハートに似たデバイスを手に持った十年前の高町なのはに似た少女に、もう一人は青い髪をツインテールにしてバルディッシュに似たデバイスを振るい、十年前にフェイトが着ていたバリアジャケットを青く染めたもの着た子供の頃のフェイトのソックリな人物だった。

「・・・・・パイロシューターー」

ーーーシュンシュン！！

「・・・・・電刃衝（でんじんしょう）」

ーーードドドドドドッ！！

なのはに似た子供が放った誘導弾に対して、フェイトにソックリな女の子は直射弾を放つ事で撃ち落し、二人は無表情ながら殺し合いとしか言えない戦いを続けていく。
その自身と親友に似た姿の子供達が戦い合っている姿に、フェイトは体を小刻みに震わせながら二人の子供の戦いを見つめていると、リオクがフェイトに嘲るように声を掛けて来る。

「如何ですか？この研究所内部で生まれた魔力を持っている子供達の戦いは？アレでも最初は嫌がっていたんですよ？友達同士で殺し合いなんて出来ないって、叫び在っていましたが、今ではあの通り平然と殺し合いが出来るまでに成りましたよ」

「・・・・・・・」

「言葉も出ませんか？まぁ、当然でしょうね。自分の遺伝子から生まれたクローンが殺し合っているんですからね。とは言っても、魔力を持って生まれて来た物達は、アソコで戦い合っている二体の子供と、もう一人厳重に保管してある一体だけなんですよ。五百体以上の人造魔導師を作り上げて、成功例が三体だけなのは、これから先のデジモンとの戦争では役に立たないですからね。だから、エリオ・モンディアルを使って人造魔導師研究を完成させようとしたのですが、失敗したと聞いた時は焦りました。ですが、代わりに真の成功例である貴女が手に入りましたからね。此方としては嬉しい限りですよ」

「・・・・ムゥ～」

「うん？何ですか？猿轡のせいで声が良く聞こえないんですけどね？」

顔を深く俯かせながら呻き声のような声を上げたフェイトに、リオクは疑問の声を掛けた。

それを耳にしたフェイトは、腫れ上がっている顔をリオクに向かって上げ、口元に付けられていた猿轡を口から血を流しながら噛み切り、リオクに向かって怨嗟に満ちた叫びを上げ出す。

ーーーブチッ！！

「殺してやる！！お前だけは絶対にこの手で殺してやる！！！」

「ハハハハハハハハッ！！笑えますね？魔力を封じられて、一般

の女性よりも強い程度の力しか発揮出来ない貴女が、Ｓランクオーバーである私を殺す？本当に笑えますよ。さて、元気も充分に取り戻したでしょうし、そろそろ貴女がこれから世話になる事に成る研究者達に合わせて上げますよ」

そうリオクはフェイトに告げると、拘束具から何とか抜け出そうと暴れているフェイトを局員達に連れて来るように命じながら通路の先に存在する扉の方に向かって足を進め始める。

しかし、リオクがフェイトを研究者達の下に連れて行くために扉のロックを解除しようと横に在る機械に手を伸ばした瞬間に、扉が突如として人型の形に歪み始める。

ーーーードゴオオオオン！！

『ッ！！！』

激しい激突音と人型の形に歪んだ扉を目にしたリオクと局員達、そしてフェイトが驚きに目を見開きながら扉を見つめ、全員がそのまま扉を見つめていると、扉から再び激突音が響き、人型の形がますますリオク達の存在する方向に向かって突き出て来る。

ーーーードゴオオオオン！！ドゴオオオオン！！

「なっ！？何なんだこれは！？」

ーーーードゴオオオオオオオオオオオオオオン！！

「オラァァァァァァァァァーーーー！！！！！」

「オォォォォォォォォォーーーーーーー！！！！！」

『ッ！！！！』

リオクが疑問の叫びを上げた瞬間に、突如として頑丈な筈の扉が吹き飛び、血塗れでボコボコの姿に成った研究者と思われる者と、怒りに満ちた表情をしている大とバンチョーレオモンが互いに右拳を突き出すような形をして姿を現した。

その様子にその場にいる誰もが驚愕に目を見開きながら、姿を見せた大とバンチョーレオモンに姿に動きが止まっていると、バンチョーレオモンは無言で扉に横に立ち尽くしているリオクの襟元を掴み上げる。

ーーーガシッ！！

「ヒィッ！！何でデジモンがこんな場所に！？管理世界にしか現れない筈じゃ！！」

「貴様らのような命を弄ぶような外道が居るならば、俺や大は管理外世界にだろうと姿を現す！！」

「お前らの薄汚ねぇ行為は全部見たぜ・・・・・ぜってぇ赦しちゃおけねぇ！！！」

リオクの恐怖に満ちた叫びに対して、バンチョーレオモンと大はそれぞれ叫びを上げると、バンチョーレオモンに掴まえられているリオクを除いた者達の方に大はゆっくりと進みながら両手を鳴らし始める。

その姿を見た局員達は一瞬、大の放つ覇気に気圧された様に足を後方に下げてしまうが、すぐに大から魔力が一切感じられない事に気がつき、それぞれ自身のデバイスを起動させて大に向かって構え

始める。

「ヘッ！笑わせるな！貴様は魔力を持たない一般人ではないか！！ただの人間がまどう…」

ーーードグオオオオオン！！

「ゲヘアッ！！」

『なっ！？』

大に向かって嘲るように言葉を告げようとした男性の局員は、言葉を最後まで言う事が出来ずに、一瞬の内に間合いを詰めた大の拳に寄って背後の壁の方に向かって飛んで行った。

その事に残っている三名の局員は在り得ないものを見たと言うような声を上げ、無言で突き出した拳を戻している大の姿を見つめる。

彼らは本局でもかなり実力者として名を馳せている人物達だが、相手が悪かったとしか言いようが無い。目の前に立っている大には確かに魔力は一切存在していない。しかし、彼はパートナーのデジモンと共に数え切れないほどの命のやり取りを交わして来た人物であり、あの管理局が手も足も出なかったロイヤルナイツの者達にさえも生身で戦う事が出来る人物。

その様な人物に命のやり取りが極端に少なく、戦いから逃げて安全な場所へと向かった者達が勝てる可能性など皆無なのだ。

「オリャァァァァァァァッ！！」

ーーーバキン！！

「馬鹿なデバイガァッ！！」

大の拳をデバイスで受け止めようとした局員は、自らのデバイスを大の拳に圧し折られてしまった事に驚愕している内に、そのまま大の拳に顔面を殴り飛ばされ、先ほどの局員と同じように壁の中へとめり込んでしまう。

その間に大の背後へと移動していた別の局員は、殺傷設定に変更した自身の剣型のデバイスを振り上げ、背を見せている大に向かって振り下ろそうとするが、その前に大が背後に向かって蹴りを放ち、局員の鳩尾に蹴りを減り込ませる。

ーーーズドン！！

「グエッ！！」

「体の鍛え方が全然足らねぇな。もっと鍛えてから出直して来やがれッ！！」

ーーードゴオオオオン！！

「ヘギャッ！！」

鳩尾に蹴りを食らった事で苦しんでいる局員の顔面を、大は叫ぶと共に殴り飛ばし、先ほどの局員達とは別方向の壁に向かって吹き飛ばす。

その大の人間離れした姿に、最後のフェイトに暴行を加えていた屈強な体をしている局員は体を恐怖に震わせ、ゆっくりと歩いて来る大に向かってデバイスを構えながら恐怖に染まった叫びを上げ始める。

「なっ！？何なんだよお前は！？何で魔導師でもない人間が、バリ

アジャケットの耐久性を無視してダメージを与えられるんだよ！！
この化け物が！！」

ーーーズドン！！

局員は叫ぶと共にデバイスも先から魔力弾を大に向かって撃ち出すが、大はただ顔を逸らす事で魔力弾をかわし、平然とした表情をしながら最後の局員に声を掛ける。

「化け物？化け物はてめらの方だろうが。俺は色んな奴と喧嘩して来たがよぉ。この研究所の連中はどいつもコイツも、最低な奴らばかりだった。管理局の為？世界の為？笑わせんなよ。子供に平然と友達だった連中と殺し合いなんて真似をさせる野郎は！！人間じゃねぇ！！ただの屑野郎だ！！！」

「ヒィッ！！死ねッ！！」

ーーーズドン！！

ーーーガシャン！！

大の怒りに満ちた叫びを耳にした局員は、恐怖に駆られながら砲撃魔法を大に向かって撃ち出す。

しかし、それに対しても大は瞬時に砲撃の軌道を読み取り、横に飛び出す事でかわし、先ほどまで立っていた場所の背後に存在していた巨大なガラスが割れる音が響くと共に、大は砲撃を撃った局員に向かって駆け出し、今度は一発や二発ではなく連続で拳を局員に向かって撃ち出す。

「オラァァァァァァァァァァーーーーーー！！！」

ーーードドドドドドドドドドドドドドドドドッ！！！！！

「ガアァァァァァァァァァァッ！！」

大の一完全体デジモンでもノックアウトしてしまう程の威力の拳を何十発と受けた局員は断末魔のような叫びを上げるが、大は構わずに局員の身に纏っているバリアジャケットの襟元を掴み上げ、苦痛と恐怖に体を震わせている局員の顔を怒りに満ちた視線で覗き込む。

「痛てぇか？だがな、てめらが此処で行って来た事を受け続けていた子供達は、てめえが今感じている痛み以上のものを味合わされたんだ！！」

「ヒィッ！！ゆるひへぇ！もう絶対に！！」

「今更遅えんだよ！！！！」

ーーードゴオオオオオオオオン！！

「ゲベアッ！！」

赦しをこう局員の顔面に大は躊躇いも無く拳を振り下ろし、局員の顔を床に叩き付けた。

その様子を呆然とした表情をしてお尻を床につけながらフェイトが大を見つめていると、大は呆然としているフェイトの傍に歩み寄り、ポケットの中からハンカチを取り出しながらフェイトに声を掛ける。

「遅れてすまねぇ。本当はもっと早く来たかったんだけどよぉ。何せこの研究所、思ったよりも入り組んでいたし、殴らなくちゃいけない連中もいたんでな。本当にすまねぇ」

「・・・・・如何して貴方が此処に？」

「まぁ、色々と事情は在るけど、何となくお前の事が放って置けなかったって言うのが、やっぱ一番の理由だな」

「私を？」

大の言葉にフェイトが疑問の声を上げ、照れくさそうな笑みを浮かべている大の顔を見つめた。

少なくとも大が自身を助ける理由は存在しないとフェイトは思っている。最初に在った時も気絶していた為に自身は覚えていないが、大が助けてくれたとキャロからフェイトは聞いている。

しかし、その時は、自身が行ってしまった最低な行為を大が知らなかったから助けてくれたのだと思っていたが、それでもわざわざこの様な危険としか言えない場所にまで助けて大は来てくれた。

何故自身のような最低な人間を助けてくれたのか訳が分からず、フェイトは大が差し出して来ているハンカチを呆然とした表情で見つめ続け、大に理由を問いただそうとしようとすると、突如としてバンチョーレオモンに掴み上げられているリオクが割れたガラスの方に向かって叫びを上げる。

「タイプＮ－２０８！！タイプＦ－９１！！すぐにこいつ等を全員殺せ！！」

ーーービュン！！

「ハッ！！」

リオクが叫び終えると共に、割れたガラスの向こう側に存在していたなのはに似た少女ータイプＮ－２０８とフェイトに似た少女ータイプＦ－９１が大とフェイトの方に向かって無表情に飛び掛かり、持っていたデバイスを大に向かって振り下ろす。

それにギリギリの所で気がつい大は避けようと体を動かそうとしようとするが、その直前にタイプＮの方の振るっているデバイスの軌道が、自身が避けた場合、フェイトに直撃する事に気がつき、瞬時にタイプＦの方だけをギリギリの所でかわし、タイプＮの方は体を防御する事を選択した。

ーーードガッ！！

「グウッ！！」

「アッ！！」

タイプＮのデバイスが大に直撃するのを見たフェイトは、自身が大に護られた事に気がつき、その場からすぐさま離れようとするが、身に付けられている拘束具の為にゆっくりとしか移動する事が出来ず、悔しげに表情を歪ませ始める。

その様子にリオク面白そうな笑みを口元に浮かべ、自ら進んでタイプＮのデバイスを体で受け止める事を選択した大に向かって叫ぶ。

「ハハハハハハハハハハッ！！いい気味だな！！そのサンプルを庇わなければ、避ける事が出来たものを！！良い事を教えてやる！！その二体には感情などもはや存在していない！！友達とか言っていた仲間達をその手で殺させて、心を壊してやったからな！！ハハハハハハハハハハハハハハハハギャアッ！！」

ーーードグオン！！

「耳障りだ。貴様は喋るな」

「ハ、ハヒィ！！」

笑い声を上げているリオクに向かってバンチョーレオモンは拳を顔面に放ち、リオクの鼻を一瞬の内に潰した。

それと共に鼻が完全に潰れて悲鳴を上げているリオクに警告のように言葉を告げると、リオクは潰れた鼻を押さえながら頷き、少しの間大人しくなる。

「バンチョーレオモン・・・・この金髪を連れて行って残っている連中と、最後の子供を助けに向かってくれ。この二人は俺が助けるからよぉ」

「・・・・分かった。この場は任せるぞ！！」

ーーービュン！！ガシッ！！

「エッ！？」

バンチョーレオモンは叫ぶと共に瞬時にリオクの首を右手で握り締めながら、大の背後に存在していたフェイトの前に移動し、フェイトを左腕で抱える。

その事にフェイトは疑問の声を上げるが、バンチョーレオモンは構わずにタイプNとタイプFと向かい合っている大に背を向け、自分達が姿を現した方向とは逆の方に存在している扉に向かって歩き出す。

「・・・・大。今のお前にならば、その者達の抱いている想いは分かっているな？」

「あぁ、だから残るんだよ」

「フッ、では頼むぞ！！」

「待って！まだ話が！！」

ーーードゴオオン！！

バンチョーレオモンの言葉を聞いたフェイトは、バンチョーレオモンに向かって声を上げ止めさそうとするが、バンチョーレオモンは構わずに目の前に存在していた頑丈な扉を蹴り開け、その先に存在している通路の中をフェイトとリオクを抱えたまま進んで行く。

それを横目で見ていた大はバンチョーレオモンに後を託しながら、目の前で警戒の構えを行っているタイプNとタイプFにゆっくりと拳を構えようとするが、すぐに拳をほどき優しげな笑みを二人に向け始める。

「さてと、喧嘩しないで説得なんて旨く出来かなぁ？まぁ、ギリギリまで粘ってやるしかねぇだろうな！！」

『・・・・・・・・』

大の叫びに対してもタイプNとタイプFは無言、無表情を貫き、それぞれのデバイスから魔力を迸らせながら大に向かって攻撃を開始するのだった。

そして大と別れたバンチョーレオモンはフェイトと泡を噴いて気絶しているリオクを抱えながら、リオクが気絶する前に吐かせた最後の人造魔導師の子供の下にフェイトに衝撃が来ないようにしながら全速力で向かっていた。因みにリオクには全く配慮を残さず、寧ろ逆にフェイトの分も衝撃が来るように運んでいる為に、リオクの体は徐々にボロボロに成っている。

それだけではなくバンチョーレオモンは自分達以外の気配が感じられれば、すぐさま気配が存在している先の壁を蹴破り、その先に居た者達を全員動けない状態にするようにしながら蹴り飛ばしていく為に、既にバンチョーレオモンが駆けた後の通路は廃墟としか言えないほどにボロボロの状態に成っていた。

その様子をマジかで見ていたフェイトは、バンチョーレオモンの大胆な行動に度肝を抜かれながらも顔を俯かせて、バンチョーレオモンに声を掛ける。

「・・・・何で私なんかを助けに来てくれたんですか？・・・・私は最低な人間なんですよ。仲間だった部隊の人達を攻撃した上に・・・・ブイモンまで死なせてしまった・・・・私に助けられる価値なんて」

「フンッ！腐るのはお前の勝手だが、ブイモンの想いを無にするのだけは俺達には絶対に赦せん。お前を助けるのは、ブイモンの為に過ぎん」

フェイトの言葉に対してバンチョーレオモンは迷いの無い声を答えた。

大はともかく、バンチョーレオモンがフェイトを救うのはあくまで、最後に最高の漢として死んでいったブイモンの想いを無にさせ

ない為だ。出なければ、ヴィヴィオにトラウマを思い出させてしまう行動を行ったフェイトを救う気など、バンチョーレオモンには存在していない。それだけの事をフェイトはしたのだから。

「大は他にもお前を助けた理由が在るようだが、俺はもはやお前の生き死になど興味は無い。今回はブイモンの想いを無にさせない為に助けるが、その後の貴様の事など、俺には興味が無い」

「・・・・・・」

「それともう一つ、なのはの奴からお前に伝言だ。『自分の行動の結果を良くもう一度考えて見るんだね。もし本当にブイモン君の最後の想いさえも、無にさせるんだったら、私はフェイトちゃんを一生赦さない』だそうだ」

「・・・・私は・・・・・」

バンチョーレオモンが告げたなのはの伝言に、フェイトは薄っすらと涙を浮かべて考え込むような表情をし始めるが、バンチョーレオモンは構わずに前へと進み、頑丈そうな形をしている扉の前に辿り着く。

「此処がそうだな・・・・・・フン!!」

ーーードガアァン!!

バンチョーレオモンの拳を受けた扉は一瞬の停滞も見せる事無く吹き飛び、油断無く辺りを警戒しながら中へと入っていくと、水が大量に入ったカプセルの中に裸で目を瞑って浮かんでいる少女一十年前のはやてソックリな少女を発見する。

「これが最後の少女か・・・・・外道どもが！この様な幼子に卑劣な行為を行い続けていたのか！」

「・・・・・はやての人造魔導師まで・・・・・これが管理局の闇・・・・」

バンチョーレオモンは目の前の光景に怒りをあらわにし、フェイトは自身が所属していた組織の闇を改めてその目で目撃し、深い苦悩に満ちた表情をして顔を俯かせ始める。

目の前に存在している少女も、先ほど出会って、今は大と戦っているであろう二人の子供も、管理局の闇から生まれて非道を受け続けていたのであろう。出なければ、アソコまで感情を廃したような表情をする事は出来ない。

その事が分かったフェイトは苦悩に満ちた表情で顔を俯かせていると、バンチョーレオモンがゆっくりとフェイトと気絶してボロボロに成っているリオクを床に下ろすと、静かにカプセルの方に近づき、右手でカプセルを破壊する。

「フッ！」

ーーーガシャン！！バシャアァァァァァッ！！

バンチョーレオモンの拳に寄って、瞬時にカプセルは割れ砕け、内部に存在していた大量の水がバンチョーレオモンの体と床を濡らすが、バンチョーレオモンは構わずに内部に入っていた少女を大切そうに抱えて、フェイトの方へと移動する。

「少し間、その娘と共に外に出ていろ。俺にはまだやる事が在るからな」

「・・・・・分かりました」

バンチョーレオモンがやろうとしている事に気がついたフェイトは、バンチョーレオモンが差し出して来たはやてに似た少女を大切に抱えて入ってきた扉の外の方へと駆け出して行く。

それを確認したバンチョーレオモンは気絶したままのリオクに近づき、その腹に向かって勢い良く足を振り下ろす。

「起きろ」

ーーードグオン！！バキン！！

「ギッ！！ギャアァァァァァァァァーーーーーーー！！！！！！」

バンチョーレオモンがリオクの体を踏み付けると共に響いた骨が粉砕するような音に応じるように、気絶していたリオクが目を覚まし、部屋内部に悲痛な叫びを響き渡らせた。

しかし、それを聞いてもバンチョーレオモンは無表情のまま右手を赤く輝かせ始め、リオクに声を掛ける。

「本来ならば、もう動けない相手に俺は拳を放つ積もりなど持ってはいない。だが、貴様やこの研究所内部に居る外道どもだけは別だ。この拳を振り下ろしたくて、俺は我慢していたからな」

「ヒィッ！！助けてくれ！！何でもするから！！頼む！命だけは助けてくれ！！」

「悪いが貴様の言葉は、俺には届く事は無い。お前達の下に来る前

に、見つけた研究者達から色々と聞かせって貰ったぞ。この場所以外でも行われている違法研究。そして貴様らが生み出した子供達の殺し合いで、賭け事などと言うものも行ってた事もな」

「ヒィッ！！ヒィィィィィィィーーーー！！！！！」

「何処までも腐った者達が！！先にあの世で地獄を味わうが良い！！バーンバンチョーーパンチッ！！！！」

ドゴオオオ

動しているからな」

「自爆装置っ！？」

「機密保持の為だろう。俺達がこの場所に来て殴り飛ばした最初の研究者からの確かな情報だ。一定時間、この研究所から送られてくる信号が消えると、勝手に自爆装置が起動するようだ」

バンチョーレオモンはそう告げると、フェイトとはやてに似た少女を大切そうに腕の中へ抱え、自身が走って来た道を睨み付け始める。

「脱出する前に、緊急用の転送ポートの方に向かった連中を片付けるぞ。奴らの墓標はこの研究所だからな・・・・時間が無くて助ける事が出来ない子供達の亡骸へのせめてもの償いだ」

「・・・・・」

「俺達は万能ではない。巨大な力を持っていても、救えるものなど一握りだ。だが、それは個人での事でしかない」

「エッ？」

「想いの力。それは人間とデジモンが両方とも持っている力だ。そしてその力が合わさった時、人間とデジモンの力は無限大にまで広がる事が出来る。嘗て大が言った言葉だが、“力とは求めるものじゃない、力は合わせるもの”なのだとな」

「力は・・・・合わせるもの？」

「最後の課題だ。その答えを出した時に、再びお前の前に親友が姿を現す。その時には手加減などされると思うな。奴はお前を殺す気で掛かって来るからな」

バンチョーレオモンはそう疑問の表情を浮かべているフェイトに向かって言葉を告げると、通路を全速力で駆け出し、逃げ出そうとしている者達を動きを封じに向かうのだった。

一方その頃。バンチョーレオモン達と別れてからタイプNとタイプFを戦い続けていた大は、場所を何とか移し、最初にタイプNとタイプFが戦い合っていた広い部屋の中で戦っていた。

「・・・・・ブラストファイヤーー」

ーーードグオオオオオオオオオオン！！

「ウオッ！！何て砲撃だよ！！」

タイプNが放った砲撃を大はギリギリの所で避けたが、その子供が放ったとは思えないほどの巨大な砲撃に目を見開きながら空中に浮かんでいるタイプNの姿を見つめる。

その隙に大の背後へと回っていたタイプFが、手に持った魔力刃の大剣を大に向かって勢い良く、しかし無表情に大の背に振り下ろす。

「・・・・・・」

ーーーブン！！

「ウオッ！！」

タイプＦが振り下ろしてきた大剣を、大は先ほどと同じように避けて、すぐさまタイプＦの傍から離れて、注意深く上空に浮かんでいるタイプＮとタイプＦの姿を見つめ始める。

その大の行動に二人は僅かに疑問に思い、上空に浮かんでいたタイプＮはタイプＦの横に着地すると、大に向かってデバイスを構えながら質問をし出す。

「・・・・先程から思っていましたが・・・・・・貴方は何がしたんですか？私達を攻撃するのなら、出来たと言うのに？ただ避け続けるだけ。非効率的なやり方に疑問が浮かびます」

「何だ喋れたのか？だったら、もう少し早く声を出して欲しかったな」

初めて声を出してくれたタイプＮの姿に、大は嬉しそうな笑みをタイプＮとタイプＦに向かって向ける。

その初めて見る醜悪さが全く存在していない他者の笑顔に、タイプＮとタイプＦは思わず困惑した表情をして大の姿を見つめ出す。生まれてから今まで間、二人が見て来たのは自身を物としている者達の目と表情だけだった。だからこそ、大の浮かべた完全に醜悪さの無い笑みに二人は困惑してしまうが、すぐに自分達を騙す為の演技だと思い、表情を険しくしながら大にデバイスを構え出す。

「・・・・貴方と喋る事に意義が見つけられません・・・・貴方はこの研究所を壊しにきた人物・・・・私達はそれを排除するように命じられのです・・・・・敵と話し合う意義など無い筈ですが？」

「別に俺はお前達の事は敵だ何て思ちゃいねぇよ。まぁ、他の下衆野郎どもは別だけどな」

「・・・・でしたら、何が目的なのです？まさか、私達を此処から連れ出すつもりですか？」

「あぁ、それもまぁ目的の一つだな。最初はあの金髪だけを助ける積もりだったけどよぉ。お前らの事も放って置けなくなってなぁ」

「随分と無駄な事をしに来たんですね」

「無駄って如何言う事だ？」

「そのままの意味です。例え貴方がどれだけの力を持っていようと、所詮は個人でしかないと言う事です」

タイプNは大に向かって言い捨てるように言葉を出し、険しい瞳で大を睨み付ける。

既にタイプNもタイプFも、自分達がこの研究所から抜け出しても、居場所など無い事を知っている。自分達を生み出したのは、次元世界を管理している管理局。その管理局が本気で動けば、自分達が何処に隠れようと、実力を持とうと、何処まで追い掛けて来て捕まる、或いは抹消されてしまう事を二人は察していた。

“自分達には自由など本当に存在しない”。その事を今までの生活と自分達の正体が分かっている二人は、本気で思っていた。例え此処で大の差し出して来た手を握っても、何時かは管理局に捕まって、今まで以上の地獄のような日々を味わうかも知れない。成らば命令どおりに大に攻撃を加えた方が良いと、二人は冷静に判断していた。

「それに、どうせ貴方も、自分の命が本当に危なくなったら、私達を見捨てて逃げ出すんです。だったら、此処で貴方を命令どおりに殺した方が得策ですからね」

「・・・・ボク達には・・・・居場所なんて無い・・・・友達だと思っていた子も・・・・結局自分の命が危なくなったら、ボク達を殺しに来たんだ・・・・・だったら、ボクらは救いなんていらない・・・此処で暮らしていた方が良いよ」

タイプNとタイプFはそう自分では気が付いていないだろうが、悲しみに満ちた声で大に声を出した。

その姿に大は二人が本当に絶望してしまっている事を確信し、自身が行うべき事を改めて確信すると、二人に向かってゆっくりと歩き出す。

「お前らの気持ちは分かった。だけどなぁ、俺はお前らを此処から連れ出すぜぇ。それだけは絶対に曲げねぇ。お前らに外の世界も捨てたもんじゃねぇって、教えたいからな」

「拒否します」

「いいや、連れて行く」

「絶対に拒否します」

「男に二言はねぇ!!俺が連れて行くって言ったら、ぜってぇ連れて行くんだよ!!」

「それでも拒否します」

「カアァァァァァッ！！ムカつくガキだなお前！！！だったら勝負だ！！俺がお前らの目の前まで着いたら俺の勝ち！！お前らはそれを何が何でも阻んで俺の脚を止めてみろ！！そしたら、負けを認めてやるからよ！！」

「・・・・・良いでしょう。ですが、私達は殺す気で攻撃します。覚悟しなさい。集え、明星（あかぼし）」

大の出して来た提案にタイプＮは了承し、自身の横に立っていたタイプＦに目配せを行うと、タイプＮは自身の前方に魔力を集中させ始め、巨大な魔力球を作り出す。

それと共にタイプＦも自身の周りに放電を放っている魔力スフィアを作り上げ、自身の右手に持っている大剣に放電を撃ち下ろし、魔力刃を巨大化させて大に向かって構え出す。

その巨大な二つの力の発現を肌で感じた大は、僅かに驚いた表情をしてしまうが、すぐにそれは不敵な笑みへと変わり、二人と相対してから初めて拳を握り締める。

ーーーギュウッ！

「やっぱ、言葉での説得何かよりも、俺にはこっちの方が合ってるぜ。来いよ？俺はぜってぇ、お前らに負けねぇからよぉ！！」

「負けるのです・・・・・全てを焼き消す焔となれ！！！ルシフェリオン、ブレイカーーーー！！！！」

「砕け散れ！！！雷神滅殺！きょっこーーーざん！！！！！」

ドグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

放たれたタイプNの巨大な砲撃ールシフェリオン、ブレイカーと、それに伴うよう魔力刃を巨大化させて大に向かって振り下ろして来るタイプFの雷刃滅殺極光斬（らいじんめっさつきょっこうざん）は、凄まじい勢いを持って、部屋の床を吹き飛ばしながら大に向かって突き進む。

しかし、それを見ても大は歩みを止めずに、逆に自分に迫って来る二つの魔法に向かって全速力で駆け出し、二つの魔法に向かって渾身の力を込めた両拳を撃ちだす。

「オラァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーー！！！」

ドゴオオオ

表情を無表情に戻し、残っている侵入者のバンチョーレオモンの下へとタイプFと共に向かおうとするが、その動きは背後から聞こえて来た足音に寄って止まってしまう。

ーーージャリ

『ッ！！！』

突如として聞こえて来た足音に慌てて二人が背後を振り返って見ると、煙の中から両手を血塗れにして、服もかなりボロボロに成った大が姿を現し、ゆっくりとタイプNとタイプFの方に向かって足を進める。

「ハァ、久々に効いたぜ・・・・お前ら強ぇな」

「・・・・何故生きているのですか？・・・・殺傷設定で放ったのに？」

「あぁ、確かに死ぬかと思ったけどよぉ・・・・お前らの気持ちが届いてなぁ。死ねねぇって思ったんだよ」

「ボク達の・・・・・気持ち？」

大の告げた言葉にタイプFは疑問の声を上げ、タイプNも困惑した表情をするが、大は構わずに二人の目の前へと移動し、二人の視線を顔が合わさるように膝を付き、体を襲っている激痛に構わずに二人に笑みを向ける。

「お前ら、本当は外に出たいんだろ？だから、さっきまでアソコまで頑なに否定していた・・・・・お前らが本当に辛い目に合ってい

た事は、何となく分かる・・・・・だけどなぁ、まだ人生を捨てんなよ・・・・お前らはまだ子供だ・・・・・もっと色々な事を知ってから、自分の身の振り方を決めろよ」

「・・・・先ほども言いましたが、私達は此処を出ても、往く当ても無ければ、何れは管理局に捕まって、また実験材料行きです・・・・・・だったら、逆らわずに此処に残って命令を聞くのが最良の選択なのです」

「・・・・・それに、ボク達の事は普通の人に知られちゃいけないんだ！」

「知られれば、その人物は殺されます・・・・そんなのは嫌です・・・・もう親しくなった者が、殺されるのも、殺させられるのも嫌なのです」

「だったら！俺達の所に来い！俺と俺の子分や、仲間がお前達を何が在っても護ってやるからよ！！」

『エッ？』

大の一切の迷いの無い発言に、タイプＮとタイプＦは僅かに驚いた様子を見せるが、大は構わずに二人を大切そうに両手で抱えて、ゆっくりと立ち上がる。

その様子にタイプＮは慌てて大の腕の中から離れようとするが、その動きはすぐに止まり、血を大量に流している大の腕をジッと見始める。

「アッ！・・・・すまねぇ、お前らの服に血が付いちまうな・・・・まぁ、此処を出るまでは我慢してくれ・・・・すぐに外に出てお前

らの事を下ろしてやるからよ」

「・・・・・何故？・・・・・・何故貴方は私達何かを救おうとするのですか？・・・・・貴方を傷つけた張本人でも在るのに？」

「ボク達は・・・・・居たらいけないのに・・・・如何して？」

「放って置けないって言っただろう・・・・それと二度と自分達を卑下するような言葉を言うな・・・・もしもう一度でも言ったら、そん時は拳骨だからな」

「・・・・・ヒック、ヒク、ヒック、フェェェェェーー！！！」

「如何した！？何処か痛むのか！？」

突如として泣き声を上げ始めたタイプＦの姿に、大は慌てて質問をし、タイプＦの体に傷が無いかと心配するが、タイプＦは首を横に振るい、大の体に抱き付く。

「ヒック、ヒック、初めて・・・・・・ヒック、初めて、ボクらを本当に思ってくれる・・・・人に出会えたから・・・・ヒック、本当に嬉しい・・・・ヒック」

「ハッ、安心しろ。これからお前らが行く場所には、お前らの事を本当に歓迎してくれる連中が待ってるぜ」

「ヒック・・・・本当？」

「あぁ、だから泣くなよ。すぐに連れて行ってやるからな」

「・・・・・ヒック、うん」

大の言葉にタイプFは出会ってから初めて見せる心からの嬉しそうな笑みを顔に浮かべ、大の言葉に頷いた。

それを確認した大は、残っているタイプNの方へと顔を向け、確認するような視線を向けると、タイプNは顔を俯かせながら頷き、大は笑みを浮かべながら研究所の入り口へと二人を抱えながら走り出すのだった。

研究所の外の入り口前。其処には一足先に脱出していたバンチョーレオモン、フェイト、そして気絶したまま白衣に包まれている少女に、入り口の見張りをしていたアグモンが、大が出て来るのを待っていた。

「兄貴・・・・早く出て来てくれよ・・・・・もう時間が迫っているんだぞ」

「アグモン。大ならば大丈夫だ。奴は何が在ろうと、自分の言った言葉を破るような漢ではない。お前の兄貴を信じるのだ」

「・・・・そうだな。俺が兄貴を信用する！絶対に子供達を連れて、脱出してくるって！！」

バンチョーレオモンの言葉にアグモンは真剣な表情をしながら声を上げ、ジッとバンチョーレオモンと共に研究所の入り口を見つめ出す。

その様子を気絶している少女を大切そうに抱えながら見ていたフェイトは、大とアグモンの間に存在している絶対の絆を感じ、僅か

に羨望を含んだ眼差しをアグモンに向けていると、研究所の入り口の方から足音が聞こえて来る。

ーーーザッ！ザッ！

「ムッ！」

「アッ！」

「・・・・・・」

耳に聞こえて来た足音に、バンチョーレオモンとアグモンは僅かに嬉しそうな表情を入り口の方に向け、フェイトが表情を暗くしながら入り口の方に向けると共に、入り口の中から傷だらけに成りながらも二人の少女を大切そうに抱えている大が飛び出して来る。

「ッ！！大ッ！！」

「兄貴ッ！！」

傷だらけで血を流している大の姿を目撃したバンチョーレオモンとアグモンは、慌てて大の方に向かって駆け出し、大に心配そうな表情をしながら声を掛けようとするが、その前に大は抱えていた二人の少女を地面へとゆっくりと下ろし、二人に笑みを向ける。

「・・・・・どうだ？・・・・・ちゃんと外に出してやっただろう？・・・・・ぜってぇ・・・・お前らの・・・・・こ・・・・と・・・・」

ーーーバタン！！

「兄貴ッ！！」

「ッ！！しっかりして下さい！！」

「死んじゃ！嫌だよ！！」

最後まで言葉を発する事無く地面へと倒れ付してしまった大の姿を目撃したアグモンとタイプＮ，タイプＦは慌てて声を掛けるが、大は気絶したまま地面に倒れ付したままだった。

それを見たバンチョーレオモンは、大が危ない状態で在る事を確信し、すぐに治療を行おうと大を抱えようと手を伸ばすが、その前に背後からフェイトが飛び出し、自身の着ている服を脱ぎながら破り取り、大の体から流れている血を止めるように巻き付け始める。

ーーービリッ！！

「・・・・失血は何とか出来ました・・・・・だけど、危ない状態なのは変わりません」

「分かっている！すぐにこの場から離れて、ガオモン達がいる隠れ家に向かうぞ！！」

「了解だ！！兄貴！！絶対に死ぬなよ！！」

アグモンはバンチョーレオモンの言葉に答えると共に、大に心配そうな声を掛け続ける。

それを目にしたバンチョーレオモンは学ランの中に入れておいた機械を取り出し、フェイトが気絶している少女を連れて来るのを確認し、アグモンと同様に大に声を掛け続けている二人の少女も近く

にいる事を確認し終えると、持っていた機械のスイッチを押し、その場に存在する全員と共に転移するのだった。

そしてバンチョーレオモン達が去ってから二十分後。

研究所の中でバンチョーレオモンや大にボコボコにされた事で気絶して者達の何人かが目を覚まし、苦痛に苦しみながらもバンチョーレオモンと大にやられた事を憎しみながら、自分達の仲間がいる本局へと連絡を取ろうとする。

しかし、その表情はすぐに全員が研究所の自爆装置が起動している事に寄って絶望へと変わり、急いで自爆装置を解除しようとするが、自爆装置を解除する為に必要な本局への連絡が取る事が出来ず、緊急時の転送ポートも使用する事が出来ない事も判明した事に寄って、全員が絶望に染まった表情をしながらも研究所から逃げようとする。

しかし、その前に突如として大達をガオモン達の下へと送り届けて戻ってきたバンチョーレオモンが立ち塞がり、逃げようとしている研究者や局員達に向かって声を上げる。

「貴様らの行く場所は決まっている。この研究所と共に地面の下に埋もれるが良い！！！男気ッ！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

『ウワァァァ

れ、研究所は内部に存在していた者達と共に跡形もなく爆発する。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「・・・・・貴様らに取っては、此処で命を失った方が幸いだったのかも知れんな・・・・・本当の地獄はこれから始まるのだから」

そうバンチョーレオモンは燃え上がるように煙と炎を吹き上げている研究所の後に背を向けながら言葉を呟くと、振り返る事も無く今度こそ世界から去って行くのだった。

フェイト救出、怒りのダブル番長！！後編（後書き）

次回予告

フェイトと人造魔導師の三人の子供を救出した大達。

自分達の隠れ家に連れて行き、其処で話し合おう事とは？

一方その頃、とある管理世界は在る者達が動き始めていた。

次回、漆黒の竜人と少女、『現れる二体！漆黒の竜人の憎しみ！！』

漆黒の竜人は再会する。最も憎んでいる者達と。

キャラクター設定２

名前／タイプＮ－２０８、後に琴乃（ことの）

容姿／茶色の髪を短髪にして、青い瞳を持った、子供の頃の高町なのは。バリアジャケットの形状は、赤と黒以外は、子供の頃のなのはと同じ。

性格／真面目・冷静・無表情系。理知的で合理的な思考をする。ただし、大に対してだけは理知的とは違う行動を行う。因みにかなりのバトルマニア。

使用デバイス／ルシフェルオン（形状はなのはのレイジングハートに似ている。性能に関しては原作ＳｔＳのレイジングハート・エクセリオンと同等。原作での諸刃のシステム－ブラスターシステムが備えられている）

詳細／管理局が高町なのはの遺伝子を基に生み出した、対デジモン用人造魔導師。実力はチィリンモンよりも下だが、完全体の上位レベル。対象とした一体のデジモンの力を、相性の悪いフィールドぐらいに追い込んだと同じレベルの弱体化を行う事が可能。オリジナルであるなのはにはこれと言って感情は抱いていないが、何時か戦いたいと言う感情を抱いている。大に対してだけは、子供らしい姿を良く見せる。因みにフェイトの事は何故か気に入らないと言う感情を抱いていたりする。

名前／タイプＦ－９１、後にリシア

容姿／子供の頃のフェイトが青い髪になり、毛先が黒くなっている。バリアジャケットの形状は、子供の頃のフェイトと同じだが、全体的に青い色合いに成っている。

性格／手っ取りばやく言えば、アホな子なのだが、自分の過去に関する事に成るとアホでは無くなる。

使用デバイス／ライディエル（形状はバルディッシュの形で、性能は完全にバルディッシュアサルトをコピーされている。しかし、フェイトとは違って防御力はかなり高く、ソニックフォームを使用してもそう簡単には落ちない）

詳細／管理局がフェイト・テスタロッサの遺伝子を基に生み出した、対デジモン用人造魔導師。実力はチィリンモンよりも下だが、完全体の上位レベル。琴乃と同じようにデジモンを一体だけ弱体化させる能力を持っている。基本的にはアホな子なのだが、自身の過去に関する事になると影を落としてしまうので、アホな子には全く見えない。オリジナルであるフェイトにはかなりの悪印象を持ってしまっているが、歩み寄ろうとしている。しかし、何故か大とフェイト（他の女性でも）が一緒にいるとムカムカする。

名前／タイプＨ－２７８、後に風華（ふうか）

容姿／銀髪と銀色の瞳した子供の頃のはやて。バリアジャケットの形状は、帽子が無い以外はやてと同じ。

性格／横暴な態度を取るなど傲慢な性格なのだが、その内では、はやてと同様に優しい心を持っている。

使用デバイス／エルザードクロイツ（形状は、はやてのデバイスであるシュベルトクロイツに似ているが、性能では風華の方が遥かに上）

詳細／管理局が八神はやての遺伝子を基に生み出した、対デジモン用人造魔導師。他の二人とは違って広範囲（約５００メートル）にデジモンを弱体化させる事が出来る能力を持っているが、使用出来る時間は凡そ二十分。しかも使用している間はマトモに動く事が出来ないと言う欠点を持っている。その為に他の二人に比べれば、実力は低いが、三人で一緒に戦えば究極体の中位クラスのデジモンでさえも勝つ事が出来る。また、彼女だけが生み出された研究所内部で保管されるように存在していたのは、研究者と上層部の人間の命令に逆らい、ただ一人反逆を行うとしたからである。本来ならば破棄されてもおかしくはない彼女が無事に残れたのは、その能力のおかげである。オリジナルである八神はやてには、琴乃と同じようにこれと言った感情は抱いていないが、会ったら一発だけは魔法を撃ち込もうとは思っている。他の二人と違って、大にはこれと言った感情は今の所抱いていない（未来では不明）。

名前／レリュー・シュティル（苗字は偽名）

年齢／九歳

魔導師ランク／Ａ＋

容姿／黒髪で、青に近い瞳を持った女の子。バリアジャケットの形状は、白銀の鎧型。

性格／礼儀正しく、子供とは思えない性格だが、実は大の可愛い物

好き。特に可愛い系のデジモンはかなり大好きで、グラムサイブの記憶領域の中には、今まで出会った可愛い系のデジモン達の映像がかなり記録されている。時たまウッカリをやらかしてしまう事もある。

使用デバイス／グラムサイブ（形状は大剣型で、真新しいデバイスに見えるが、実は古代ベルカ式が登録されている歴史ある一品）

詳細／フリーの魔導師。しかし、実は実家がベルカ自治区内部でもかなり権力を持つ家。だが、本人は実家や両親、姉、そして血の繋がっていない義兄の存在をかなり嫌っていて、アンティラモンと共に家出同然に家を飛び出した。実家の両親と姉は、そしてその中でも義兄はかなり管理局と関わっていた為にアンティラモンとレリューが一緒にいる事を大変嫌い、アンティラモンの存在を管理局に通報したのも実は姉だった。その為にレリューと姉との確執は完全に増し、もはや家には居られないとも思い、アンティラモンと一緒に歩む事を誓って家を飛び出した。

それから数年はアンティラモンと一緒に各世界を旅しながら、フリーの魔導師として働き、幸せな日々を過ごしていたが、管理局の行いのせいでデジモンとの戦争が始まり、アンティラモンと一緒にいたレリューは各世界の人々から迫害を受け始め、第二十管理世界に辿り着いたと言う経緯を持っている。

また、現在は太一達ともに歩む事を誓いながら、デジタマから生まれて来るデジモンの事を待っている。

現れた二体！漆黒の竜人の憎しみ！！前編

大達が自分達の隠れ家に向かっている時。
地上本部で自身の仕事をしていたレジアスの下に、本局から緊急連絡が届いていた。
曰く、“フェイト・テスタロッサ”を護送していた者達からの連絡が途絶えてしまったと。
本来ならばその様な本局の失態連絡が、地上に届く事は無い。何せ現状では本局と地上は完全に別組織に近い方針で進んでしまっている。
本局は人間だけの力で、デジモンを滅ぼす方針。
地上はデジモンと共に戦い、世界に迫っている危機を共に打破しようと言う方針で進んでいる。
結果、地上と本局の中は同じ組織で在りながらも、完全に別組織のような状態に成ってしまっている。
話は戻すが、本来ならば届く筈の無い本局の失態が伝えられたのはレジアスが引き渡す時の条件に、“フェイト・テスタロッサが行く部隊に送り届けた者が地上に連絡を行う”と言う条件を出していたからだ。その時に本局としては問題ないと判断し、了承してしまったのだが、フェイトを連れて行った者達は全員もうこの世の何処にも居ないので連絡など出来るはずが無く、本局は苦虫を噛み潰したような思いを抱きながらも、自分達の失態をレジアスに報告せざる得なかったのだ。
「フム、貴様ら本局はマトモな仕事も出来ないのかね？高々、魔力を封じられている人間の護送さえもマトモに出来ないとは、地上から戦力を奪い続けて置きながら、この様な失態。本局の能力に疑問視せざるえないのだが？」

『（おのれ！！貴様ら地上が動いたからだろうが！！地上の人間に此処まで屈辱を味合わされるとは！！今の見ていろ！！）』

「フム、地上を疑っているようだが、地上は全く無関係だ。調べて貰っても構わない。機動六課も、地上も、貴様らがフェイト・テスタロッサを連れて行ってから転送ポートを使用した人間はいないし、第一、其方は彼女が行く部隊の場所を私達に伝えていないのだよ？どうやって、彼女をさらうのだね？」

『グッ！』

レジアスの言葉に、通信先に存在している上層部の人間は答える事が出来なかった。

全ての移送は本局が行うと宣言してフェイトを護送を行った上に、フェイトの体には発信機がついていない事も確認して、研究所へと連れて行ったのだ。幾ら地上が怪しいと思っても、証拠は愚か状況証拠さえも見つける事が出来ないのだから、地上を罰する事は出来ない。最も真実を言えば、フェイトの体には発信機がしっかりと付けられていたのだが、管理局の技術では発見する事さえも出来ないほどの性能。完全に地上を疑う事さえも本局は出来ない状況だった。

「とにかく、彼女の事は完全に其方の責任だ。自分達で撒いた種ぐらい、其方で処理した前。最もミッドチルダに彼女が居ると成れば、此方の権限で彼女は捜索させて貰うよ・・・・全く、デジモンとの戦争中に余計な仕事を増やしてくれて、地上には迷惑このうえないがな」

『・・・・・失礼させて貰う』

ーーーブン！！

これ以上レジアスの嘲りの言葉を聞くのが嫌だったのか、通信先にいる者は通信を切った。
その様子にレジアスは心の底から嬉しそうな笑みを浮かべる。散々煮え湯を味あわされて来た本局の連中に、借りを僅かながらも返させた事が本当に嬉しいのだ。
そしてその笑みを浮かべたまま、自身の執務室のソファーに座り込んでいるゲンヤに顔を向ける。

「どうやら、彼らは作戦に成功したみたいだ。フェイト・テスタロッサは無事だろう」

「そうか・・・・・まぁ、これで八神達の気も少しは楽になるだろうな。特にエリオの奴はかなり落ち込んでいたからな・・・・少しは元気にしてやらねぇと、次の任務に差し支えるぜ」

「ウム・・・・・その次の任務なのだが・・・」

「・・・・何か在ったのか？」

何処と無く表情を暗くし始めたレジアスの様子に、ゲンヤは疑問の声を上げ、注意深くレジアスを見つめると、レジアスは顔を暗くしながら説明を始める。

「・・・・実はだな・・・次の任務はゲートタワーの破壊ではなく、クラナガンの地下水路の内部に入り込んでしまったデジモン達の排除だ」

「あぁ、そう言えば、そんな報告が届いていたな。だけどよぉ、それは他の部隊が当たる筈じゃ無かったのか？」

「・・・・・部隊は・・・・・・全滅してしまった」

「何？」

レジアスの言葉にゲンヤは眉を顰めながら疑問の声を上げた。

件の地下水路にデジモンが存在していると言う事実は、前回のゲートタワーの破壊後に判明したのだ。

幾ら都市をバリアで覆っているとしても、地下まではバリアで覆う事は出来ない。水の排水とかの関係上、地下までバリアで覆ってしまえば色々と問題が起きてしまう。その関係上、地下にはバリアが存在しない為に、地下を掘り進むデジモンは簡単にクラナガンへの道を作り上げてしまう。その事が大のクラナガンへの潜入方法で判明したレジアスは、即座に機動六課とは別の部隊に命じて地下水路などの状況を調べさせた所、やはりデジモンは潜入を果たしていた。

このままではクラナガンに危機が迫ると判断したレジアスは、即座に状況を調べていた部隊に増援を送り、デジモン達を倒そうとしたのだが、部隊はそのデジモン達に歯が立たず全滅してしまった。しかも、最悪な状態で部隊員達は発見されたのだ。

「送った部隊の者達には、死者は一人も居ない・・・・・だが、全員が精神病棟に入らざる得なかった・・・女性の局員が、待機していたのが幸いだったな」

「・・・おぃ、まさか、地下水路にいるデジモン達って、まさか？」

何処か遠い瞳をしながら呟いたレジアスの言葉に、ゲンヤは不安になりながらも質問した。

出来れば浮かんでしまった答えが当たらない事を内心で願いなが

ら。もし当たっているとすれば、確実にゲンヤは機動六課の女性陣から憎まれてしまう。それだけゲンヤが思い浮かんだデジモンは、“女性”に取って凶悪かつ、最強のデジモン達なのだ。
しかし、その思いは無常にも裏切られ、レジアスは席から立ち上がると、自身の背後に存在している窓ガラスに体を向けながら答える。

「・・・・・お前は何も知らずに、ワシからの命令を機動六課に伝えるのだ・・・・・既に技術部が開発していた防護服が五人分機動六課に届く手筈になっている。それを必ず着て任務に当たるように八神はやてに厳命しろ」

「・・・・・了解だ。俺は何も知らなかった・・・・それが最良の選択だな」

「ウム」

先ほどのレジアスと同じように遠い瞳をしながら呟いたゲンヤの言葉に、レジアスは重苦しそうな声を出しながら頷くのだった。確実に任務終了後に訪れるであろう、女性陣の報復に恐れながら。

ミッドチルダに存在する深い森の中。
広大なその森の中を研究所から脱出して来た、子供の頃のはやてに似た少女を抱えたフェイトに、なのはに似た少女ータイプN、そしてフェイトに似た少女ータイプFは、アグモンの背で気絶している大に心配そうな顔を向けながら、先を進むアグモンの後を追っていた。

「あの、何処まで行くの？」

「そろそろ、彼の状態が危険です。早急に治療を行わないと、危ないでしょう」

「分かっているよ！！だけど！もしもの時の為にも、少し離れた場所じゃないと不味いんだ！！何せ俺達が隠れている場所を発見される訳には行かないんだからな！！」

質問を行って来たタイプＦとタイプＮの言葉にアグモンは答えながら足を進め、在る場所へと辿り着くと、木の上の方に向かって叫ぶ。

「おぉい！俺だ！！帰って来たぞ！兄貴が怪我をしているんだ！！早く道を案内してくれ！！」

『？？』

ーーーブーーン！

突如として叫びだしたアグモンの様子に、フェイト達は困惑と疑問に満ちた視線を向けていると、上空から羽音が響く音が響き始め、全員が上を見て見ると、金色の甲殻に何処と無く蝶を思わせるような羽を持ったデジモン－バタフラモンが姿を現す。

バタフラモン、世代／アーマー体、種族／昆虫型、属性／ワクチン種、フリー、必殺技／スウィートフェロモン

古代種のテイルモンが知識のデジメンタルで進化した昆虫型のデジモン。綺麗な花の咲く温暖な地域に生息しており、戦うことを好まない性格だ。必殺技の『スウィートフェロモン』は、羽に含まれる

幻覚プログラムのリン粉を撒き、混乱させる技だ。対心を緩和させる効果も持っているぞ。

「アグモン！その大の姿は一体如何したんだ！？」

上空から地上へと着地したバタフラモンは、アグモンの背中で傷だらけになりながら気絶している大の姿を目撃し、慌ててアグモンの傍へと近寄る。

そのバタフラモンと言葉と様子に、タイプＮとタイプＦは顔を俯かせながらバタフラモンに向かって声を掛ける。

「・・・・私達が彼を傷つけたんです」

「・・・・ヒック、ボク達を助けようとしてくれたのに・・・・ボク達は彼を・・・・ヒック」

「ムッ！君達が！？・・・・・そうか、ならば一緒について来なさい」

『エッ？』

バタフラモンの言葉に、タイプＮとタイプＦは思わず声を上げてしまった。

大達の仲間が居る場所についたら、制裁か何かが待っているだろうと二人は考えていた。例え大が受け入れてくれても、他の者達が仲間である大を傷つけた事を赦す筈が無いと、考えていたのだが、バタフラモンは逆に歓迎するかのように声を掛けて来た。

温もりや優しさなどを与えられた事が無い二人は、思わずバタフラモンに訝しげな視線を向けてしまうが、バタフラモンは気にせずにアグモンと共に大の肩を担ぎながら二人に声を掛ける。

「大が此処まで体を張った者達だ。何かの事情が在ったのだろう。でなければ、お前達が此処に連れて来られる事は無いからな」

「・・・・・随分と、彼を信頼しているのですね。私達がスパイなのかも知れないのに」

「Ｎ－２０８！！そんな事を言っちゃいけないよ！！」

タイプＮの言葉を耳にしたタイプＦは、発言を戒めるように声を掛けた。

その言葉に、流石に自分の発言が無遠慮だったと思ったタイプＮは、バタフラモンに謝ろうと声を出そうとするが、その前にバタフラモンが何処か懐かしそうな苦笑を浮かべ始める。

「フフフフフッ」

「ムッ！・・・・・何が可笑しいのです？」

「いや、すまない。今のは君を笑ったのではなく、少し前の私の事を思い出して笑ったのだ。私も大の仲間になる前に、同じような言葉を大に掛けたのでな」

「ッ！！それじゃあ！アナタは！？」

「・・・・・あの組織に所属していた人間だな・・・・・そうだ、私はこの地に人間を滅ぼす為にやって来たデジモンだった」

『ッ！！！』

バタフラモンの言葉を聞いたフェイト、タイプN、タイプFは目を見開き、大の肩を担いでるバタフラモンの姿を見つめた。
その様子にバタフラモンは更に苦笑を深めながらアグモンと共に前に進みだし、後ろからついて来ているフェイト達に説明を始める。

「最初は本当に人間が憎かった・・・・・私達の故郷を滅ぼした人間がな・・・・そしてこの地に来て、人間をどうやって滅ぼそうか策を考えている時に、私達の下に大やアグモン達が現れたのだ・・・・一緒に戦おうと言われた時は、ふざけるなと思って攻撃してしまったが、大は私達の攻撃にも怯まずに説得を行って来た」

「同じですね。私達の時も、そのような感じでした」

「うん、確かにその人は同じ事をボク達にして来たよ」

「全く大らしい・・・・大曰く、“拳で語り合えば解り合える”っと言っていたな」

「俺も兄貴に最初に会った時は、そうだったな。それで俺は兄貴の子分になる事を決めたんだ」

「ず、随分と凄い人だね」

バタフラモン、タイプN、タイプF、そしてアグモンの発言を聞いたフェイトは、乾いたような笑みを浮かべながら気絶している大の姿を見つめた。
デジモンと高ランクの魔導師と思われる子供達を相手に拳で語り合う。デジモンと魔導師の力を知っているフェイトからすれば、もはや呆れを通り越して、乾いた笑みを浮かべるしかない事実だろう。
そしてそれを実行し、成功を収めた大の力は確かに本物なのだと

言う事も確信するに充分な事実だった。

「とにかくだ。その大が体を張ってまで助け出したお前達には、何かしらの事情が在ったのだろう。それだけでもお前達が、私達の隠れ家が来るのには充分な事だ」

「・・・・その事だけど、隠れ家って如何言う所に在るの？見た所、森しかないけど？」

「あぁ、確かにこの辺りには森しかない・・・・・そう言う風に見せているのだ」

『エッ！？』

ーーーシュウン！！

バタフラモンの言葉にフェイト達が疑問の声を上げた瞬間に、全員が何かを通り抜けた感覚を味わい、フェイト達はその感覚に困惑した表情を浮かべながら前を見て見ると、其処には木で建てられたと思われる幾つかの建築物が存在していた。

その建築物の中には何体かのデジモンが存在し、互いに笑みを浮かべながら笑い合うか、何かの相談を行っている様子も見せていた。そして更に奥の方を見て見ると、更に木の家々を建てているデジモン達が存在し、それを指示しているデジモンさえも存在していた。

その如何見ても人間と戦争を行っている様子を見せていないデジモン達の姿にフェイトは困惑に目を見開き、タイプＮとタイプＦは始めてみるデジモン達の姿に戸惑いの視線を向け始める。

それを目撃したアグモンとバタフラモンは苦笑を再び浮かべ、一際立派で在ると共に頑丈な作りで作られている家の方へと向かい出した。

そしてアグモン達が向かった家の中では、テーブルに手を乗せているガオモンに、蕾のような体を持って、無表情と思われる顔立ちをした空中に浮かんでいるデジモン―ララモンと、フクロウに似た顔立ちをして忍者のような服を体に身に付け、両腕が翼の形に成っているデジモン―ファルコモン（S）が、真剣な表情をしながら話し合い行っていた。

ララモン、世代／成長期、種族／植物型、属性／データ種、必殺技／ナッツシュート、ナッツエクスプロージョン
つぼみの姿をした植物型デジモン。ハニワのような無表情な顔をしているが愛嬌がありどこか憎めない。頭を葉っぱを回転させてふわふわと飛びまわる。必殺技は、口から木の実を発射して、相手を正確に狙い撃つ『ナッツシュート』に、頭部から爆発する種を発射する『ナッツエクスプロージョン』だ。

ファルコモン（S）、世代／成長期、属性／ワクチン種、種族／鳥型、必殺技／スクラッチスマッシュ、手裏裏剣（しゅりりんけん）
通常のファルコモンとは外見も大きく異なるファルコモンの亜種。脚よりも翼が大きく発達しているため飛行能力に長けている。体毛も黒くなり、顔の形もどちらかといえば“フクロウ”に近くなっているのも特徴。忍者のような衣装を着ており、手裏剣を投げつけるという技を身につけている。必殺技は、翼の先に存在する爪で相手を引っ掻く『スクラッチスマッシュ』に、硬質な羽でできた十字手裏剣を無数に投げつける『手裏裏剣（しゅりりんけん）』だ。その他にもデジタル忍法と言う特殊な技を持っているぞ。

「では、例の十闘士と呼ばれているデジモン達は、姿を眩ませたままなのだな？」

「えぇ、てっきり他のゲートタワーに現れると思っていたんだけど、手下だと思うデジモン達は姿を見せても、本人達は全く姿を見せないわ」

「多分、バンチョーレオモンが追っている事を知っているから隠れているんだ。この前の戦いでバンチョーレオモンに手酷くやられたみたいだからね」

「不味いな。何としても連中は早い段階で倒して置きたい。このままでは私達が行っているデジモンの説得にも確実に滞りが出てしまう」

ララモンとファルコモン（S）－以降ファルコモンの報告に、ガオモンは険しい表情をしながら腕を組み始めた。

既にガオモン達は前回の時に現れた五体のデジモン達－メルキューレモン達の正体をバンチョーレオモンから聞いている。そしてその事実はガオモン達がミッドに来てから行い続けていたデジモン達の説得の最大の障害となると言う事も。当然ながらすぐに仲間になったデジモン達に頼み、ミッドに存在している各ゲートタワーの調査を行わせたのだが、メルキューレモン達を見つける事は出来なかった。

メルキューレモン達も自分達の事を追っているバンチョーレオモンの存在が在るから、無闇には姿を見せる事はないだろうが、それでも危険性は現在のミッドでは最高レベルである。

「とにかく！捜索を行っている仲間達には、怪しまれない程度に捜索を続けてくれと頼んで置いてくれ！」

「了解よ！」

「分かった！」

ガオモンの叫びに、ララモンとファルコモンは頷き、それぞれ動き出そうとするが、その前に入り口の扉が突如として開き、大を背中に抱えたアグモンが家の中へと入って来てガオモン達に向かって叫ぶ。

ーーーバタン！！

「ガオモン！！すぐに治療の準備をしてくれ！兄貴が怪我をしたんだ！！」

『ッ！！大ッ！！』

アグモンの叫びを耳にしたガオモン達は、アグモンの背中に乗っている大の姿を目撃すると、すぐさま奥の部屋と大を運び、備えられているベットの上に乗せると、ガオモンは用意していた治療箱から手早く包帯や薬などを取り出し、大の治療を済ませる。それと共にフェイトが連れて来た少女も、大の横のベットに乗せた。

そして二十分ぐらい経つと、大の治療を終えたガオモンが部屋から出て来て、テーブルに備えられた椅子に座っているフェイト、タイプN、タイプFに顔を向け、大の容態を告げる。因みにバタフラモンは大を家の中へと運び終えると共に、自身の本来の任務で在る見張りへと戻っていた。

「命には別状は無いが、久しぶりに大が怪我をしている姿を見たぞ・・・・しかし、アグモン？一体何が在ったのだ？お前とバンチョーレオモン、そして大が向かった研究所には、それほど強い者が居たのか？」

「・・・・・彼に怪我を負わせたのは私とタイプＦです・・・・・・彼が伸ばしてくれた手を振り払ったせいで・・・・彼は・・・・・」

「・・・・・ゴメンなさい・・・・・」

「フム、詳しく話を聞かせてくれ」

顔を俯かせながら言葉を言うタイプＮとタイプＦの様子にガオモンは何か事情が在ると判断すると、二人の前に座り込み、事情を聞き始める。

小さな声では在るがタイプＮとタイプＦが話を要約すると、二人は最初、本気で大を殺すつもりで攻撃していたのだが、大は全く攻撃を行わずに避けるだけで、その事に疑問を思ったタイプＮが大に質問を行い、勝負を行った結果、大は傷付いてしまったと言う事だ。

その明らかに大らしい行動に、ガオモン達とアグモンは頭を抱え、フェイトは大が行った行動に言葉も出なくなった。如何考えても大の行動は無茶を通り越している。失敗すれば先ず間違いなく死んでいたにも関わらず、大は躊躇いも無く行い成功を収めた。結果として二人の心は救われたが、それでも命を晒すような行動に、フェイトは思わず大が眠っている部屋を見つめる。

「・・・・・如何してそんな無茶を・・・・・失敗すれば、この子達も心に傷を負っていたのかも知れないのに・・・・」

「・・・・それが大門大だからだ」

『ッ！！』

突如として聞こえて来た声に、フェイト達が慌てて入り口の方を

見て見ると、バンチョーレオモンが静かに壁に体を預けながら立っていた。

「大は何が在っても怯まない。アイツは本当に必要な事を理解していたからこそ、其処の二人に戦いを挑み、心を救ったのだ」

「でも！それで自分が死んだら！この子達は更に心の傷を負っていたんですよ！！」

「確かにそうだ。だが、その事は二人と戦った大が一番理解していただろう。だからこそ、大は全身全霊を賭けて二人に挑み、二人と分かり合ったのだ。時には、言葉だけでは理解し合えない事も存在している。その時が今回だけだったに過ぎない」

そうフェイトに質問に対してバンチョーレオモンは答えると、タイプNとタイプFにゆっくりと顔を向ける。

「お前達は此処に住むが良い。此処ならば、お前達を受け入れて来るし、お前達を追ってくる者も撃退出来るからな。大が命を賭けてまで連れて来た者だ。俺達はそれを全力で護る」

「そうだぜ！兄貴が命を賭けたんだ！俺達はお前らを絶対に護るからな！」

「私達も同じ意見だ。この場所ではデジモンと人間の共存を目指している。今までは大しか人間がいなかったから、本格的に動けなかったが、君達が此処に住んでくれるのならば、嬉しい」

バンチョーレオモン、アグモン、そしてガオモンがそうタイプNとタイプFに向かって言葉を告げると共に、ララモンとファルコモ

ンは同意するように頷く。
　しかし、その言葉を本来ならば喜んで良い筈なのにも関わらず、タイプＮとタイプＦは顔を更に暗くしながら俯かせ、その様子にその場にいる全員が疑問の表情をし始めると、タイプＮは顔を俯かせながら語り出す。

「・・・・私達に、デジモンの力を弱めてしまう能力が備わっていても、受け入れてくれるのですか？」

「何？」

　タイプＮが告げた事実に、バンチョーレオモンは訝しげな声を上げ、アグモン達とフェイトも訝しげな視線を二人に向けると、二人は顔を俯かせながら語り出す。自分達が作られた理由を。

「・・・・・ボク達が作られた理由は・・・・人間の力だけでデジモンを倒せる力を得る事・・・・」

「管理局は、魔導師の力だけでデジモンを滅ぼしたいのです・・・・そしてその為に作り出されたのが私達です・・・・私とタイプＦには対象は一体だけしか選べませんが、対象にしたデジモンを弱体化させる力が存在しているんです」

『ッ！！！』

　タイプＮが告げた自分達の力に、バンチョーレオモンも含めたその場にいる全員が目を見開いた。
“デジモンの力を弱体化させる能力”。それが本当に存在していると成れば、それはかなり不味い事だ。デジモンの力が弱体化する条件は、大体二つしか存在しない。

一つはそのデジモンの属性に、反したフィールドに送り込み、力を弱める方法。
もう一つは弱点の攻撃で相手を倒す方法の二つしかに存在しない。
しかし、もしタイプNが環境も変えず、弱点でもない攻撃でデジモンの力を弱める事が出来ると成れば、それだけデジモンとの戦いでは有利になる事が可能になるだろう。

「その様な力が本当にお前達に備わっているのか？」

「・・・・・確かめて見ますか？」

ーーーーブン！

「ムッ！」

『バンチョーレオモン！！』

言葉と共にタイプNがバンチョーレオモンに右手を向けると、バンチョーレオモンは僅かに表情を歪めてしまう。
その姿にアグモン達はバンチョーレオモンに心配そうな声を掛けるが、バンチョーレオモンは大丈夫だと言うように手をアグモン達に向け、険しい表情をタイプNとタイプFに向ける。

「確かに、行き成り俺が苦手とする場所に送られた感じを受けるな・・・・まさか、この様な力が存在していたとは・・・・・貴様らが生まれた元凶の一つには倉田が関わっているのだな？奴以外にこの様な技術を管理局では作り上げられまい」

「・・・・その通りです。あの研究所に居た時に、確かに倉田と言う人物の名前を耳にした事があります・・・・最も会った事はあり

ませんが」

「フン！倉田め・・・・・やはり奴は、最終的にはルーチェモンを裏切るつもりだな」

「エッ！？あのどういう事ですか？」

バンチョーレオモンの言葉を聞いていたフェイトは思わず、バンチョーレオモンに向かって声を上げてしまった。

フェイトも自身の裁判を行う前にルーチェモンと倉田に会っている。その時に感じた印象では、確かに倉田とルーチェモンは仲間だと言う印象をだった。しかし、今のバンチョーレオモンの言葉を聞くと、倉田は最終的にはルーチェモンを裏切ると確信を得ている印象が感じられた。

その事にフェイトだけではなく、タイプNとタイプFも思わずバンチョーレオモンに疑問の視線を向けるが、倉田の性格を知っているアグモン達は逆に納得したように頷き、バンチョーレオモンはフェイト達に説明を行いだす。

「倉田とルーチェモンの目的は共に次元世界の崩壊だが、その結果が大きく違うのだ。倉田は今の次元世界を支配する為に動いているが、ルーチェモンは完全に違う・・・・・奴の最終的な目的は、一度全てを跡形も無く消滅させ、新たな世界を作り上げる事だ」

「ッ！！世界を作り上げる！？そんな！そんな事が可能なんですか！？」

「残念ながら可能だ。七大魔王として覚醒したルーチェモンの力は、聞いた話しではあるが、星さえも打ち砕く力を持っているらしい」

『ッ！！！』

バンチョーレオモンが告げたルーチェモンの力に、フェイトだけではなくタイプＮとタイプＦも驚愕に目を見開き、嘗て七大魔王の一体と戦った事が在るアグモン達は険しい表情をする。

“星さえも打ち砕く力を持ったデジモン”。それがもし本当に存在すれば、そのデジモン一体だけでも世界を支配する事が可能だろう。管理局ですら、星を破壊する為には兵器を使用しなければいけないのに、七大魔王に覚醒したルーチェモンはそれを簡単に行えてしまう。

それが目前にまで迫っていると分かったフェイト達は体を恐怖に震わせながら、バンチョーレオモンの姿を見つめると、バンチョーレオモンは険しい表情をしながら話を再開する。

「話は戻すが、倉田とルーチェモンは最終的には敵対するだろう。だが、どちらが残ったとしても世界の危機なのは変わりない。そして恐らく倉田はルーチェモンを倒す為に、何かしらの新たな兵器を作り上げようとしている」

「では、私とタイプＦ、そしてタイプＨ－２７８にデジモンの力を弱める能力が備わっているのは、ルーチェモンと言うデジモンを倒す為に生み出す兵器の試作品と言う事でしょうか？」

「恐らくな・・・・・奴は嘗てデジモンと人間を融合させる禁断の技術に手を染めた外道だ・・・・今更子供の命がどうなろうと知った事では無いだろう」

ーーードン！！

「酷い・・・・酷すぎる！！何でそんなに命を平然と弄べるの！？

どんな形でも命は命なのに！！！」

フェイトはバンチョーレオモンの言葉を聞き終えると共に、テーブルの上に腕を振り下ろした。

倉田や本局が行ったのは完全に外道としか言えない行動。しかも、今もそれは何処かで行われている。その事実が浮かんだフェイトは、すぐにでも動きたいと思うが、今の自分には魔力が存在せず、完全に無力な人間でしかない。

その事が思い浮かんだフェイトは顔を俯け始めしまうが、バンチョーレオモンは構わずにタイプＮとタイプＦとの話し合いを再開する。

「貴様の話では、最後の一人にも例の力が備わっているそうだな？」

「はい。最後の一人ータイプＨにも私達と同様にデジモンの力を弱体化させる力が備わっています。ですが、彼女は私達以上の力を持っています」

「ムッ、三人とも同じ対象を一体だけにしか使えない力では無いのか？」

「違います、青い狼。タイプＨだけは私達とは違い。広範囲に例の力を展開出来るので、対象はその影響内に存在しているデジモン全部です」

「マジかよ！！」

タイプＮが告げたタイプＨの力に、アグモンは声を上げ、他の者達も思わず顔を見合わせてしまう。

対象が一体だけならば、二体同時に掛かり、一気に相手を倒せる

可能性が存在している。しかし、広範囲に展開出来るとなれば、それだけでデジモン達は一気に戦力が低下してしまう。
それは天敵と呼べる存在であるギズモンと同レベルの危険性を持った力。
それに気がついたバンチョーレオモン達は顔を見合わせ話し合う。
「早急に対策を練らねばな。ガオモン、お前は今の力の存在をこの場所にいるデジモン達に伝えて置いてくれ。知っていると知っていないでは、相対した時に状況が変わるからな」
「了解だ。すぐに伝えてくる。それと彼女達の住む家の建設も頼んで置こう」
『エッ？』
ガオモンが呟いた言葉に、タイプNとタイプFは思わず声を上げてしまうが、ガオモン達は気にせずに話を続ける。
「建設が終わるまでは、この家で暮らした方が良いわね。此処に住んでいるデジモン達にも彼女達を紹介したいしね。アッ！そう言えば、服はどうしようかしら？人間の服は大のしか置いていないのよね」
「服に関しては俺に任せろ。地球にいる俺の仲間達に頼んで送って貰えるようにする」
「それなら、僕とアグモンは彼女達の食事を作ってくれるようにバーガモン達に頼んでくるよ。そろそろ食事の時間だしね」
「あぁ、兄貴も起きたらすぐに食べるだろうから、準備を…」

「ちょっと待って下さい！！！」

『ヘッ？』

突如として響いたタイプＮの叫びに、アグモン達は疑問の声を上げ、タイプＮとタイプＦの方を向いてみると、二人は明らかに困惑した表情でアグモン達を見つめていた。

「何故です？・・・・・何故アナタ方は、私達を此処に受け入れてくれるのですか？先ほども言ったように、私達はデジモンの天敵となる力も持った者達・・・・・アナタ方、デジモンからすれば赦されない存在なのですよ？それなのに」

「ボク達を受け入れてくれるの？・・・・・だって、ボク達は・・・・デジモンを倒す為に作り出された人造魔導師なんだよ？・・・・・君達の敵なんだよ！！」

「敵って？お前らは何を言ってんだ？俺達はお前らの事を敵だ何て言った覚えが無いぞ」

「そうよ。貴女達がどんな存在でも、私達には関係ないわよ」

「そうだよ。それに僕達からすれば、大がその体を張ってまで助け出した君達を放っては置けないよ」

「大は確かに無鉄砲で荒くれ者だが、奴はああ見えて人を見る目があるし、面倒見も良い奴だ。それにこうと決めたら大は梃子でも意思は変わらないからな」

「そう言うこった！」

ーーーバタン！！

『ッ！！』

突如として聞こえて来た声と共に開け放たれた扉の方をタイプN、タイプF、そしてフェイトが見て見ると、体中に包帯を巻きながらもしっかりとした様子で立っている大が存在していた。

そして全員の目が自分に向けられている事を確認した大は、不敵な笑みを浮かべながらタイプNとタイプFの傍に近寄り、二人の頭をグシャグシャと力強く撫で始める。

「キャッ！」

「ムッ！！」

「お前らな言っただろう。此処はお前達を歓迎してくれる場所だって？それなのに自分の生まれだとか、能力だとか小さな事を気にしすぎなんだよ。お前らは子供なんだから、少しは此処の連中に甘えろよ」

「大の言うとおりだ。この場所はデジモンと人間の共存を目指している者達が集まっている場所。お前達がどのような者達であろう。この場所はお前達を否定したりはしない。まぁ、倉田と同レベルの外道どもならば別だが、お前達の瞳には闇が無い。その様な者達を能力だけで見捨てるなど俺達は行わん。そんな事をしていたら、デジモンと人間の共存など夢でしかないからな」

「俺達は絶対にお前らを一方的に否定しないさ。それに兄貴が認め

た相手を見捨てたりしたら、俺は後悔するからな」

大、バンチョーレオモン、アグモンはそれぞれタイプNとタイプFに自分達の考えを伝え、ガオモン達も同意するように頷く。

それを目にしたタイプNとタイプFは初めて感じられる温もりに、瞳に涙を浮かばせ始め、それぞれ大達に向かって頭を深く下げる。

「・・・・・ヒック・・・・ありがとう・・・・・ございます」

「・・・・・ヒック、ヒック、フエェェェェェェェェェェェェン！！」

タイプNは頭を深く下げると共に涙を流しながら大達に礼を告げ、タイプFは自身の頭を撫でていてくれた大の体に抱き付きながら嬉し涙を流し続ける。

その様子を大達は優しげな表情で見つめ、静かに見守っていたフェイトも二人の様子に安心した笑みを浮かべながら内心で大に向かって礼を告げる。

（ありがとう大さん・・・・・・その子達の心を救ってくれて、本当にありがとうございます）

その様にフェイトは大に向かって内心で礼を告げ、少しの間、大達は二人が泣き止むまで待っていると、泣き止んだ二人は大達に向かって頭を下げる。

『お世話になります』

「オゥッ！よろしくな！となれば、最初はお前らの名前だな。何時までも番号見たいな名前じゃしょうがないからな・・・・・そう言

えばよぉ？もう一人のガキはどんな奴なんだ？お前らとは話したけど、最後のガキは話もした事が無いからな」

そう大がタイプＮとタイプＦに向かって最後の少女について質問すると、タイプＮとタイプＦは心の底から困ったような表情をし始める。

その様子に大達が疑問の表情をし始めると、大の眠っていた扉が再び開き、最後のはやてに似たサイズが全く合ってない白衣を身に付けた少女が出てきて、大達の前に立ち止まり、胸を張るようにしながら大達に向かって声を出す。

ーーーバタン！！

「・・・・うぬらが我を助け出してくれたのだな！大義であったぞ！褒めて使わす！！」

『ハッ？』

「・・・・彼女は・・・・尊大で言葉が使いが悪いのです」

「ハハハハハハハ、ハァ～～」

呆気に取られた顔をしている大達に向かって、タイプＮは頭が痛そうにしながら声を出し、タイプＦは乾いた笑い声を上げるのだった。

破壊し尽くされた都市。嘗ては栄華を極めたと思われる第二十管

理世界の都市の廃墟。
　その場所はつい数週間前までは確かに人々が沢山住んでいた。しかし、その都市は人間を憎むデジモン達によって滅ぼされ、人の生命が全く感じられない廃墟へと変貌してしまっていた。　そしてその廃墟都市の上空には一隻の管理局の艦艇が存在していた。だが、その内部には管理局の人間は存在していない、その艦艇の中に存在しているのは、チンロンモンの力で管理世界へと転移する事が出来たブラック達が存在していたのだ。

「・・・・・酷いな・・・・・完全に廃墟じゃないか」

「これをデジモン達が・・・・」

　艦艇のブリッジで都市の様子をモニターで見ていた太一、アグモンは破壊された都市を悲しげに見つめ、ゲンナイ、ヒカリ、テイルモンも悲しげな視線を廃墟と化してしまった見つめていた。
　本来ならば地球を目指していた彼らだが、地球へと辿り着く前にデジモン達を少しでも説得しようと各管理世界に立ち寄り続け、第二十管理世界へと訪れたのだ。しかし、辿り着いた第二十管理世界は既にデジモンによって滅ぼされ、生命の息吹が全く感じられない世界へと変貌してしまっていた。

「ゲンナイ、人間の生命反応は存在していないのだな？」

「・・・・あぁ、残念ながら機械で調べられる範囲では、人間の生命反応の０だ・・・・・多分、この世界には人間はもう存在していないだろう」

「そんな！！」

「クソッ！！」

機械からの反応を目にしてゲンナイの報告にヒカリは悲鳴のような声を上げ、太一は悔しそうな声を上げた。

それと共にアグモンとテイルモンも深く顔を暗くさせ始めるが、ブラックだけは構わずにモニターに目を向け、訝しげな視線を破壊し尽くされた都市に向ける。

「・・・・おかしい」

「何がだブラックウォーグレイモン？」

「疑問に思わないのか？これだけの栄華を極めた世界だ。ならば、万が一の時の対策の為に、人間が避難出来る場所ぐらい存在していてもおかしくは無い筈だ」

『ッ！！』

ブラックの言葉にゲンナイ達は慌ててモニターに映っている廃墟に目を向けた。

確かモニターに映っている都市は破壊し尽くされていながらも、かなりの高度な文明が存在していたと分かるほどの都市。しかも、この世界は太一達の地球とは違って、一つに人々が纏まっていた世界でも在る。その世界ならば万が一の時の為にも、人々を避難させる事が出来るシェルターぐらいは存在していてもおかしくは無い。

その事がブラックの言葉によって気づけた太一達は僅かに希望の光が残っているかもしれない可能性に気がつき、モニターに真剣な表情を向ける。

「探そう！もしかしたら、生き残っている人々がいるかも知れない

！デジモンの説得の為にも、一度はこの世界に降りて見よう！」
「賛成だ。水や食料も運が良ければ手に入るかもしれない。今後の事を考えても、一度はこの世界に降りて見よう」
「じゃあッ！私とテイルモンは皆に方針を伝えてくるね！テイルモン！」
「あぁ、伝えにいかないと！」
ヒカリとテイルモンはそうブラック達に告げると、ブリッジを出て行った。
その様子に太一達は苦笑を浮かべ、モニターを静かに見つめていたままのブラックへと声を掛ける。
「それじゃあ、準備を終えたら地上に降りよう。ブラックウォーグレイモンは如何する？」
「お前達は人間を探せ。俺は周辺の警戒だけを行う。管理世界の人間は俺を知っているからな」
「そうか、分かった。それじゃあ、その方針で進むか。アグモン、俺達も外に出る準備を行いに行くぞ」
「うん、分かったよ、太一」
太一とアグモンはそう言い合おうと、ヒカリとテイルモンと同様にブリッジを出て行った。
それを確認したブラックは静かに自身の近くに存在しているコンソールを弄り、新たにモニターに出現した黒い塔ーゲートタワーに

険しい視線を向ける。

「・・・・何故これが存在してるのだ・・・・・・“ダークタワー”が何故今更姿を見せる」

モニターに映っているゲートタワー。しかし、それの本来の名称を、ブラックだけではなく太一達も知っている。

それは本来ならばもう出現する事無く、ブラックに取って最も忌まわしく、自身の体を構成している物質。“ダークタワー”が静かにモニターの中に映り続けるのだった。

現れた二体！漆黒の竜人の憎しみ！！後編

廃墟と化した都市の瓦礫のビルの上。
その瓦礫の上には二人の人間ー赤い服を着てメガネを掛けている女性と、片目で青い服と帽子を被った男性が静かに佇みながら、上空に浮かんでいる管理局の艦艇を見つめていた。しかし、それはおかしな事実だった。艦艇を操作しているゲンナイの調べで、人間の反応は見つけられなかったにも関わらず、二人はビルの瓦礫に上に立っている。それは本来ならば在り得ない事だ。
一応艦艇に積まれているセンサーはかなりの高性能を誇っている。生きている人間がいれば、即座に反応を発見出来るぐらいの性能。にも関わらずに二人の反応が見つけられなかった理由は一つ。この二人は人間では無いと言う事だ。

「・・・・・ハァ～、アレは間違いなく、私達の居たデジタルワールドに向かった艦艇だよ」

「あぁ、リリスモンのデジタマを回収する為に送られた筈の艦艇に間違い無いぜ」

「それなのに、本局にも戻らずにこの世界に来たって事は・・・・あの世界のデジモンに乗っ取られたね。まさかと思うけど、あの選ばれし子供達が乗っているじゃないんだろうね？」

「ゲェッ！不味いぜ！！あいつ等はダークタワーの事を知っている！！俺達が生きていた事がばれちまうんじゃ！！」

「それは無いよ。何せしっかりと死んだように見せたんだ。あたし等が生きている事がばれてる筈は無いよ」

「そうか、それなら良いんだけどよ（折角生き延びて、■■■■■と一緒に居られるんだ。絶対に死ぬ訳にはいかないぜ・・・・・それに俺達を殺したがっていたアイツも、もう管理世界には居ないんだし、当分は命の心配は無いよな）」

赤い服を着た女性の言葉に、青い服を着ている男性は安堵の息を吐いた。

その様子を横目で確認した女性は、再び上空を見てみると、何体かのデジモンが地上へと着陸し、何かを探すような動きを取り始めた。

「チィッ！やっぱ連中も気がついているみたいだね。この世界にまだ人間が生き残っている事を」

「あぁ、そうみたいだな。なぁ？如何する？」

「決まってるだろ！連中よりも先に生き残っている連中が隠れているシェルターを見つけるんだよ！！任務に失敗したりすれば、ルーチェモン様と倉田の奴に何されるか分からないからね！！」

「了解だぜ。じゃぁ行くか！」

女性の言葉に男性は頷き、二人はすぐさま瓦礫の中を全速力で駆けて行く。

しかし、二人は知らなかった。上空に浮かんでいる艦艇の中には、二人の存在自体を抹消したいと心の底から思っている者が存在している事を。それが分かっていれば、二人は任務など関係なく逃げ出していただろう。

一方その頃。都市の外れの方に仲間に成ってくれた三体のデジモン達と共に地上へと降り立った太一、アグモン、ヒカリ、テイルモンは、目の前に存在している廃墟を見つめながら胸の内に悲しげな気持ちが込み上げて来ていた。目の前に広がっている光景はデジモンが作り上げたもの。デジモンとの共存を目指している太一達からすれば辛い光景だった。

しかし、その想いを何とか振り払い、自分達の背後に立っている全身を鎧で覆ったデジモン－ナイトモンと、青と黄色の体色に何処か雷を思わせるような文様が刻まれた巨大な羽を備え、頭部にツノを生やしている巨鳥型デジモン－サンダーバーモンに、そして何処と無くリスを思わせるような顔立ちをして、両手に鋭い赤い爪を三本供えた鉄鋼を装備して、耳が刃状に成っているデジモン－プレイリモンに顔を向ける。

サンダーバーモン、世代／アーマー体、属性／データ種、フリー、種族／巨鳥型、必殺技／サンダーストーム
気性が荒いが仲間思いな巨鳥型デジモン。轟く爆音のような鳴き声で雷雲を呼び、額のツノで雷を操るぞ。『友情』のデジメンタルによって古代種のゴツモン、インプモンが進化する事が出来るデジモンでも在る。必殺技は、両翼を羽ばたかせて雷の嵐を呼び起こす『サンダーストーム』だ。

プレイリモン、世代／成熟期、アーマー体、属性／ワクチン種、フリー、種族／獣型、必殺技／ソニックイヤー
古代種のパタモンが『優しさ』のデジメンタルで進化した獣型デジモン。（現在では通常進化の成熟期デジモンとしても確認されている）乾燥した大地に穴を掘って暮らしている。地中を時速１００キロで掘り、とても臆病な性格でめったに地上に姿を現さない。両腕

の爪は地中を掘り進むためのものだ。必殺技は、音速まで加速した後に、両耳のブレードを広げて相手を切り裂く『ソニックイヤー』だ。

「よし、それじゃあこれから俺達はこの場所での人々の捜索を行うぞ」

『応ッ！！』

太一の言葉にナイトモン、サンダーバーモン、プレイリモンはそれぞれ頷いた。

太一達と行動を共にしているナイトモン、サンダーバーモン、プレイリモンは、この世界に来る前に立ち寄った世界で仲間にする事が出来たデジモン達だった。当然ながら最初は彼らも人間を憎み、滅ぼそうと動いていたが、ビクトリーグレイモンに進化した太一とアグモン、オファニモンに進化したヒカリとテイルモンの説得により、今一度だけ人間を信じて見ようと言う気持ちを持ち、太一達と行動を共にする事を選んだのだ。

因みにブラックも一応説得に協力して何体かのデジモン達を仲間にする事に成功している。最もやり方は完全に大と同じ、“拳で語り合う”と言う行動だった為に、太一達は呆れたような笑い声を上げるしかなかったのだが。

「それじゃぁ、ナイトモンは俺達と一緒に行動して、サンダーバーモンは上空から、プレイリモンは地面を掘って、シェルターと思われる場所か、入り口を探してくれ」

「了解だ、太一」

「僕達に任せてくれ」

サンダーバーモンとプレイリモンは太一の言葉に頷くと、サンダーバーモンは上空へと飛んで行き、プレイリモンは地面を掘り始めて、地中の中へと潜って行った。
それを確認した太一は、残っているアグモン、ヒカリ、テイルモン、ナイトモンの方に顔を向け声を掛ける。

「よし、それじゃあ俺達も行くぞ！」

『応ッ！』

「うん！」

太一の言葉にナイトモン、テイルモン、アグモン、そしてヒカリは頷き、瓦礫の中を全員で歩いて行く。

「・・・・・しかし、酷いな。殆ど人が建てた建物は破壊し尽くされている・・・・やっぱり、この世界に来たデジモン達も」

「少し前の私のように、人間を滅ぼしたくて仕方が無いのだ。私には気持ちが分かる・・・・故郷を理不尽に奪われ、尊敬していた方々を侮辱された事を赦す事が出来なかったのだろう」

「ナイトモン・・・・・」

「ご安心なされ、ヒカリ殿。確かに私の中には人間を憎む気持ちは残っているが、それでも、もう無関係な人間を滅ぼす気は無い。最も例の組織の元凶には剣を振り下ろしたと思っているが、無関係な人間に剣を振り下ろす気はもう無い」

「・・・・ありがとう、ナイトモン」

ナイトモンの律儀な言葉にヒカリは僅かに嬉しそうな笑みを浮かべ、太一、アグモン、テイルモンもナイトモンに笑みを向け始める。

その様子にナイトモンは照れくさそうに頭に手をやりながら瓦礫の中を進んでいると、突如としてテイルモンの耳に音が聞こえて来る。

ーーーガチャッ！

「ムッ！」

「如何したのテイルモン？」

「今僅かにだが、音が聞こえた。もしかしたら、誰かが動いたのかも知れない」

「・・・・良し！テイルモン、音が聞こえて来た方に案内してくれ！」

「分かった！ついて来て！」

太一の言葉に答えると共にテイルモンは瓦礫の道を走り出し、太一達はその後を急いで追っていく。

そして一際大きな瓦礫を見つけると、テイルモンは立ち止まり、瓦礫の周りを注意深く見回し始め、訝しげな表情を瓦礫に向け始める。

「おかしい・・・・この瓦礫だけは他の瓦礫とは違って、動かしたような後が存在している見たい」

「・・・・確かにそのようだ。しかし、これだけの巨大な瓦礫を一体人間がどうやって動かしたのだ？魔法と呼ばれる力を使ったのだろうか？」

テイルモンとナイトモンは自分達の目の前に存在している巨大な瓦礫に違和感を感じていた。

確かに一見は其処かしこに散らばっている瓦礫と同じように見えるのだが、注意深く見てみると、僅かにでは在るが誰かが動かしたような後が確かに存在しているのだ。

その事に気がついた太一、アグモン、そしてヒカリも瓦礫の周りを注意深く調べ始め、瓦礫の周りを見続けると、ヒカリが瓦礫の中に埋もれるように存在してるものを発見する。

「ッ！！皆！こっちに来て！！」

「如何した、ヒカリッ！！」

「何か在ったの！？」

聞こえて来たヒカリの叫びに、太一とアグモンはヒカリのいる方に向かって駆け出しながら声を上げ、ナイトモンとテイルモンもヒカリの方に向かい出す。

そしてヒカリのいる場所へと到着してみると、瓦礫の中から“デジタマ”を取り出しているヒカリが存在していた。

「兄さん！アグモン！テイルモン！ナイトモン！！見て！これってデジタマだよね！」

「アァッ！間違いない！だけど、如何してこんな所にデジタマが？」

「・・・・理由は分からんが、やはりこの瓦礫の下には何かが在るのだろう・・・・此処は私に任せてくれ」

デジタマを抱えながら話し合っているヒカリと太一にナイトモンは声を掛けると、背中から自身の愛用の剣を取り出し、瓦礫に向かって構えを行い始める。

それを見た太一達は、ナイトモンの邪魔をしない為にナイトモンの背後へと周り込み、ナイトモンは障害が無い事を確認すると、瓦礫に向かって勢いよく剣を振り下ろす。

「オォォォォーー！！！ベルセルクソーード！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

ナイトモンの剣が瓦礫に激突すると共に、瓦礫は一瞬の内に爆発したように吹き飛んで行った。

それと共に発生した煙をナイトモンが剣で振り払うと、目の前にシェルターの入り口だと思われるものが出現した。

「やっぱり、さっきの瓦礫の下にシェルターの入り口が在ったんだな」

「そうだけど・・・・・どうやってさっき見たいの入り口の上に瓦礫を置けたんだろう？魔法の力を使ったのかな？」

「・・・・・分からない。だけど、この先に生き残っている人間がいる可能性は高いな・・・・良し！此処は俺とアグモンが地下に入ってみる！ヒカリとナイトモン、テイルモンは、サンダーバーモンとプレイリモンを呼んだ後に、ゲンナイさんに連絡を取って、此処

で待機していてくれ」

「兄さん！危険だよ！」

「そうですぞ！太一殿！！この先に人間が生き残っているにしろ、アグモン殿を連れている太一殿を味方と判断する可能性は低いですぞ！！・・・・・この世界を此処まで滅ぼしたのは、我らデジモンなのですから！！」

ヒカリとナイトモンが太一の行動を止めるのも当然だろう。

いかにアグモンを連れていくとは言え、向かう先のシェルターの中にいる人間は確実にデジモンを憎んでしまっている者達。その様な者達の所に、憎んでいる筈のデジモンを連れた太一が向かえば敵だと思われ、攻撃されてしまう可能性が高過ぎる。ビクトリーグレイモンに融合進化していない太一は普通の人間と同じなのだから。

その事はもちろん太一も分かっているが、此処で止まる訳にはいかないと同時に思っていた。

「分かってる・・・・・だけど、何とかして此処の人達の説得しないと不味い・・・・この世界には一体だけだとは言え、究極体のデジモンが存在しているんだ・・・・俺達は何時までもこの世界には残れないし、その為にも此処に残っている人達を説得しないとな」

「兄さん・・・・」

「太一殿・・・・・分かりました。ですが、何か在ったらすぐに、逃げてくだされ！今、太一殿とアグモン殿は死んでは成らないのですから！希望の光を失う訳にはいかないのです！」

「ありがとう、ナイトモン。絶対にアグモンと一緒に戻って来るさ」

「此処は頼んだよ」

太一とアグモンはそうヒカリとナイトモン、そしてテイルモンに言葉を伝えると、シェルターの中へと入って行き、その背をヒカリ達は心配そうに見つめながら、太一に頼まれた事を行い始めるのだった。

そしてシェルターの中へと入っていた太一とアグモンは、頑丈に作られた通路の中を真っ直ぐ進み続け、辺りを興味深そうに見回していた。

「・・・・やっぱり、俺達の世界の地球とは、技術力が違うな・・・・本当に何でこんな進んだ世界が、デジモンと戦争なんて・・・・」

「やっぱり、未知の力に怯えたのかも知れないよ・・・・・僕も初めてギズモンを見た時は驚いたし・・・・それと同じように他の世界の人達からすれば、デジモンは恐怖の対象だったのかもしれない」

「・・・・そうだなぁ・・・・俺も思えば最初はデジモンに驚いたし・・・・だけど、それを利用してデジモンとの戦争を引き起こした連中を赦す事は絶対に出来ない！」

「うん！僕もだよ！」

太一の言葉にアグモンは同意に声を上げ、二人は今回の戦争の原因であるルーチェモンと倉田に対する決意を新たにしながら先に進んでいくと、一際頑丈そうな扉を発見する。

「この先が本当のシェルターみたいだな・・・・・アッ！駄目だ！

この扉、俺じゃ絶対に開けられない」

頑丈そうな扉の辺りを見回して、太一は自分では扉を開けられない事を確信した。

扉の横にはパスワードを入れるような機械が存在し、パスワードを知らない太一では開ける事が出来ないのだ。

当然、アグモンもパスワードを知る訳にも無く、太一とアグモンは扉を開けられる可能性を持っているゲンナイを呼んで来ようと元来た道を引き返そうと背後に振り向いた瞬間。

「・・・・動くな」

ーーースチャ！

『ッ！！』

突如として太一とアグモンの間に大剣型のデバイスが姿を現し、二人は驚きに動きが止まってしまう。

しかし、デバイスの主は構わずに二人に警戒の視線を向けながら質問を始める。

「お前達が何者なのかは知らないが、外から来たようだな？・・・・管理局の人間なのか？」

「いや、俺達は管理局何て組織とは完全に無関係だ・・・・まぁ、管理局から奪った艦艇は使っているけどな？」

「だろうな・・・艦艇を奪ったと言うのには驚いたが、デジモンを管理局の人間が連れている筈は無い・・・・奴らはデジモンを敵だと叫んでいたからな」

「・・・・・アンタ？何を知っているんだ？・・・・・今の言葉を聞くと・・・・・アンタはデジモンを敵だとは思って…」

ーーースチャ！

「質問は此方がする。お前達は此方の質問に答えるだけだ」

大剣のデバイスの主は、太一の質問を遮るように剣を煌かせ、太一とアグモンは冷や汗を流しながら自分達の間に存在している剣の刀身を見始める。

その様子にデバイスの主は満足したのか、再び冷や汗を流している太一とアグモンに質問を行い出す。

「・・・・・お前達が何者なのかは後で聞くとして、これが一番重要な質問だ？・・・・・外のこのシェルターの入り口の所に、ウサギのような顔立ちした巨大なデジモンはいなかったか？」

「ウサギのようなデジモン？そんなデジモン、僕達は見ていないよ？」

「ッ！！本当なのか！？本当にウサギのようなデジモンは居なかったのか！？」

アグモンの言葉にデバイスの主は、焦ったような声を出し始めた。

その様子に太一とアグモンは訝しげな表情をし始める。この世界の人間はデジモンを憎んでいる筈。なのに、今背後に存在している人物は、本当に太一達の言葉が信じられないと言うように焦った声を上げている。しかも振り返らずとも焦った雰囲気が感じられるほどに、背後の人物は焦った印象を放ち続けている。

その事に太一とアグモンは訳が分からないと思いを抱くが、同時にこれはチャンスだと内心で思い、二人はアイコンタクトを行うと、自分達の知っている事を話し始める。

「あぁ、俺もそんなデジモンは見ていないぜ。第一、このシェルターの入り口は瓦礫の中に埋まっていたんだ。デジモンが瓦礫の近くにいる筈は無いだろう？」

「・・・何だと？入り口が瓦礫に？・・・・馬鹿な・・・アイツがそんな事をする筈は？」

「・・・・・そう言えば、その瓦礫の近くに一個デジタマが落ちていたよ」

「デジタマ？・・・・何だそれは？」

『ハァッ！？』

背後の人物の言葉に太一とアグモンは呆気に取られたような表情をして思わず声を上げてしまった。

デジモンを知っているのに、デジタマを知らない。その事実はデジモンも事をよく分かっている太一とアグモンからすれば、驚きの事実だったが、すぐに此処は自分達の世界では無い事を思い出し、背後の人物にデジタマについて説明を始める。

「デジモンの卵。略してデジタマ。デジモンが生まれて来る卵の事が、デジタマだ」

「デジタマはデジモンが死んだ時に現れるんだ。まぁ、それぞれ世界のデジタルワールドだとちが…」

ーーーガチャン！

「ウ・・・・アッ・・アグッ・・グスッ・・・・ワァァァァァァァァァァン！！！！！！！」

『ッ！！』

突如として鳴り響いた大音量の泣き声に、太一とアグモンが慌てて背後を振り向いて見ると、手に持っていたと思われる大剣型のデバイスを床に落とし、顔を手で覆いながら瞳から涙を流し続ける十歳前後の黒髪の“女の子”が存在していた。

『子供ッ！？』

女の子の姿を見た太一とアグモンは驚愕と困惑に満ちた視線を女の子に向けるが、女の子は答えずに顔を手で覆いながら悲しげな涙を流し続けるのだった。

その頃。地上のシェルターの入り口の前では集まって来たサンダーバーモン、プレイリモンと共に、ヒカリ、テイルモン、そしてナイトモンが周辺の警戒を行っていた。

「兄さん、大丈夫かな？」

「アグモンも一緒にいるから、大丈夫だと思うけど、心配ね」

「全く、太一とアグモンの奴も無茶する所が在るかな」

「ウム、だが、だからこそ、私達も再び人間を信じて見たくなったのだ」

「太一とアグモンなら大丈夫だよ！」

ヒカリ、テイルモン、サンダーバーモン、ナイトモン、プレイリモンはそれぞれシェルターの入り口を見つめながら声を出し、辺りの警戒を再開しようとした瞬間に。

ーーー♪～♪～♪～♪～～～

「笛の音？」

何処からとも無く笛を鳴らしているような音が響き渡り、その場にいたヒカリ達は笛の主を探そうと辺りを見回すが、人影は存在していなかった。

その事にヒカリ達は警戒を強め、ヒカリがポケットからディーアークを取り出した瞬間に、遠方の方から羽音が響き始め、全員が其方の方に目を向けて見ると、蛾のような姿をして尻尾の方が蜂の尻尾の形をしている昆虫型デジモン―フライモンが群れを成しながら飛んで来る。

フライモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／昆虫型、必殺技／デッドリースティング、ポイズンパウダー

巨大な羽を広げ、高速で飛びまわる昆虫型デジモン。カラダは硬いカラで覆われて、飛行中に発生させるノイズは、聞くものの聴覚をマヒさせてしまう。カギ状のツメで敵をはさみ、シッポの毒針で相手の体を貫く。針に刺されると、その場所から紫色に変色し確実に刺された相手は死に至ってしまう。針は何度も再生可能と言う能力

も所持しているので、大変に危険なデジモンだ。必殺技は、尻尾の毒針で相手を突き刺す『デッドリースティング』に、辺り一面に毒の粉を撒き散らす『ポイズンパウダー』だ。

「フライモンだって！？しかもあんなに大量に！」

「クッ！ヒカリッ！！」

「うん！！」

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「テイルモン！！進化！！エンジェウーモン！！」

ヒカリの持つディーアークから音声が響くと共に、テイルモンの体がデジコードに覆われていき、その中から白い羽を背に生やし、仮面を被った女性型天使デジモン－エンジェウーモンが姿を現した。

それと共にナイトモン、プレイリモン、サンダーバーモンも構えを行い始め、向かって来るフライモン達に向かってそれぞれ攻撃を開始しようとするが、その直前に何かに気がついたような顔をしたナイトモンが、突如としてヒカリの背後に向かって剣を振り下ろす。

「危ない！！」

ーーーブザン！！

「ギエアッ！！」

「えっ！？」

突如として背後から聞こえて来た悲鳴に、ヒカリが慌てて背後を振り返って見ると、ナイトモンの剣によって地面に縫い付けにされているようなクモに似た姿をしたデジモン―ドクグモンが存在していた。

ドクグモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／昆虫型、必殺技／スティンガーポレーション

クモのよう姿をした昆虫型デジモン。元は大人しいデジモンであったが、電磁波の嵐で、コンピューターウイルスに感染してしまい、触れるもの全てを腐食させる能力を持ってしまった。８本の足でどこまでも獲物を追い詰めて相手を疲れさせる。必殺技は、相手の体に猛毒のキバを衝き立てる『スティンガーポレーション』だ。

「ドクグモン！！」

「何でドクグモンまで！？」

「一体だけではない！！まだ、他にも周りに隠れているぞ！！」

『ッ！！』

ナイトモンの叫びに、その場に全員が慌てて周りを見回してみると、確かに瓦礫の中から隙を窺っている何体かのドクグモンの姿が存在していた。

その様子にヒカリは顔を青褪めさせ、サンダーバーモンが上空に存在しているフライモンの群れと、瓦礫の中に隠れているドクグモンを睨みながら叫ぶ。

「クソッ！！一体何がどうなってんだ！？何でいきなり一気にこいつ等が！？」

「落ちつきなさい、サンダーバーモン！！・・・・何かカラクリが在るはずよ」

「ウム、でなければ、一斉にこの場所を襲うはずはあるまい・・・・・だが、昆虫のデジモンを操れる力など在るのか？」

「昆虫？（待って、確か前にもこんな事が在ったような？）」

ナイトモンの呟いた言葉を耳にしたヒカリは、今の状況に似たような状況を経験した事を思い出し、注意深くフライモンの群れとドググモン達を見つめると、再び最初の時に聞こえて来た笛の音が聞こえて来る。

ーーー♪～～♪～♪～～♪～♪～～

「・・・・・笛の音・・・・・・・・まさか！？そんな！？」

「ヒカリ？」

「如何したのです、ヒカリ殿？」

「何か思い当たる事が在るの？」

何かに気がついたような叫びを突如として上げたヒカリの姿に、エンジェウーモン、ナイトモン、プレイリモンは疑問の声を掛けた。

しかし、ヒカリはエンジェウーモン達の疑問の叫びには答えずに、険しい表情で辺りを見回し続けているサンダーバーモンに向かって叫ぶ。

「サンダーバーモン！！この辺りを吹き飛ばして！！」

「アァ？いきなり何を言って？」

「良いから早く！！そうすれば、絶対にこのデジモン達は動きが止まるから！！」

「ッ！！了解だぜ！！！」

ヒカリの叫びにサンダーバーモンは一瞬驚いたような表情をするが、すぐにその顔は不敵な笑みへと変わり、上空に向かって急上昇すると、辺りの瓦礫に向かって両翼を羽ばたかせて凄まじいほどの雷の嵐を引き起こす。

「サンダーストーム！！！」

ーーーブオォォォォォォォォォーーーーーー！！！！！

『グッ！！』

サンダーバーモンが引き起こした雷の嵐によって、次々と辺りの瓦礫やその中に身を潜めていたドグモン、そして上空に浮かんでいたフライモンは吹き飛んで行く。

その様子を体勢を低くして辺りを見回していたヒカリは、雷の嵐の中で響いた僅かな苦痛の声を耳にすると、其方の方を指差しながらエンジェウーモンに向かって叫ぶ。

「エンジェウーモン！！アソコ！！」

「分かった！ホーリーアローーー！！！！」

ーーービュン！！

『ゲエッ！！！』

ホーリーエンジェモンが放ったホーリーアローは真っ直ぐにヒカリが指差した瓦礫の方に向かっていき、瓦礫にホーリーアローが直撃する直前に瓦礫の反対側から悲鳴のような声が響くと、瓦礫の影から二つの影が飛び出した。

その影の姿を目撃したエンジェウーモンは目を見開き、ヒカリも驚愕に目を見開きながら瓦礫から飛び足した二つの影の姿を見つめる。

「馬鹿な・・・・何故お前達が其処に居る！！」

「チィッ！やっぱり、あんた等かい！」

「久しぶりだな」

「アルケニモン！！マミーモン！！」

瓦礫から飛び出した二つの影ー赤い服の女ーアルケニモンと青い服を着ている片目の男ーマミーモンに向かってヒカリは驚愕に満ちた叫びを上げた。

目の前にいる二人は、十年前に確かに消滅した筈の存在。しかも消滅の瞬間をヒカリとエンジェウーモンもその目で確かに見ている。にも関わらずにアルケニモンとマミーモンは平然とヒカリ達の前に姿を現した。

その在り得ない事態に、ヒカリとエンジェウーモンが驚きに動きが止まっていると、ナイトモンがアルケニモンとマミーモンに向か

って剣を構えながらヒカリに質問する。

「ヒカリ殿？奴らは知り合いなのですか？」

「・・・・うん・・・・だけど、味方じゃない・・・・あの塔をダークタワーを建てたのは、多分あの二人だよ！！」

「へッ！なら、ルーチェモンの野郎の仲間だな！」

「僕達の故郷を滅ぼした元凶の仲間・・・・赦さないぞ！！」

ヒカリの言葉を耳にしたサンダーバーモンとプレイリモンは顔に怒りを浮かばせながら、アルケニモンとマミーモンを睨みつける。

その視線に思わずアルケニモンとマミーモンは後退りしてしまうが、すぐに表情を不敵に変え、ヒカリ達を睨みつける。

「ハッ！高々アーマー体レベルのデジモンがよく威張れるね！」

「俺達は昔の俺達とは違うぜ！此処でお前らを倒すこ…」

「ほう、お前らが生きていたとは、嬉しいぞ」

『ッ！！！』

ーーードゴオン！！

『ゲヘアッ！！』

突如としてマミーモンの声に覆い被さるように聞こえて来た声を耳にしたアルケニモンとマミーモンは完全にその身の動きを止め、

ガチガチと歯を鳴らしながら声の聞こえて来た背後を振り返ろうとした直前に、二人の首元にドラモンキラーの爪先が現れ、そのまま二人は近くの瓦礫に叩きつけられた。
　そしてアルケニモンとマミーモンが苦痛を堪えながら顔を上げてみると、滅多に無いくらいに嬉しそうな笑みを口元に浮かべているブラックが、アルケニモンとマミーモンの首にドラモンキラーを引っ掛けながら立っていた。
　そのブラックの笑みを目にしたアルケニモンとマミーモンは更に体を恐怖に震わせ、ナイトモン達もブラックの放っている激しい殺意に僅かに戸惑いを覚えてしまう。
　出会ってから数週間程度しかないが、それでも今のような状態に成っているブラックを、ナイトモン達は一度も見ていない。その何時もと完全に様子が違うブラックの姿に、ナイトモン達は戸惑いを覚えてしまうが、逆にヒカリとエンジェウーモンはブラックの状態の意味を理解していた。
　アルケニモンとマミーモンはブラックの生みの親と呼べる存在で在ると同時に、ブラックが十年前に最も殺したかった者達。最終的にそれを成し遂げる前に、ブラックは消滅してしまい、その後にアルケニモンとマミーモンも消滅した筈なのだが、こうして再び彼らは出会った。ならば、今のブラックが胸に抱いている想いは一つだろう。

「十年ぶりか・・・・・俺はこうしてお前達と再び出会えた事が心から嬉しいぞ」

「・・・ハ・・・・・ハハハハハ・・・・・アンタ・・・・・・他の世界のデジタルワールドに・・・・飛ばされていたんじゃ・・・・」

「あぁ、飛ばされてこうして戻って来た・・・・そして再び貴様らに巡り合えたと言う事だ・・・・・クククククククッ！！！世界

などに感謝した事は一度も無かったが、今だけは感謝するぞ・・・・貴様らをこの手で殺せる事を！！！」

『ヒィッ！！！』

ブラックの憎しみに満ちた叫びを耳にしたアルケニモンとマミーモンは心の底から恐怖に支配され、この場に来た事を後悔した。

アルケニモンとマミーモンはブラックが管理世界に出没していた頃から、ブラックが生きている事を知っていた。だからこそ、ルーチェモン達の計画が本格的に動き出した後も、出来るだけ自分達の姿を見せずに済む任務だけを受け続けていたのだが、こうしてブラックに見つかってしまえばもう遅い。何が在ろうとブラックはアルケニモンとマミーモンを追い続け、何れは殺すだろう。それほどまでにブラックはアルケニモンとマミーモンを恨んでいるのだ。

しかし、アルケニモンとマミーモンは死ぬつもりは無い。十年前にも死に物狂いで生き延びる方法を探し、こうして生き延びれたのだ。だからこそ、ブラックと相対しても生き延びる方法も当然ながら思いついていた。

「・・・・・フフフフフフフフフッ！！」

「へへへへへへへへへッ！！」

「ほう、死ぬ前に壊れた？」

「馬鹿言ってんじゃないよ！誰が死ぬもんかい！あたし等は何が在っても生き延びてやるさ！十年前見たいにね！！」

「面白い。俺から逃げられると思っているのか？もはや、貴様らを見逃す事だけは絶対にない。十年前から貴様らを殺せなかった事が

心残りだったからな」

ブラックはそう告げると共に自身の両手の間に負の力を集中させ始め、赤いエネルギー球を作り出し始める。ゼロ距離でガイアフォースをアルケニモンとマミーモンに撃ち込み、完全に消滅させる気なのだ

しかし、それを見てもアルケニモンとマミーモンは笑みを浮かべるのを止めず、ブラックは訝しげな気持ちを僅かに抱きながらも赤いエネルギー球を完成させようとする。

「死ね！ガイアッ！！」

「アンタが大切にしている聖王の血を引く娘だけどね・・・・・聖王教会の過激派連中に狙われているよ！！」

ーーーピタッ！！

『エッ！！』

アルケニモンの叫びが辺りに響くと共にガイアフォースを作り出そうとしていたブラックの動きが止まり、ヒカリとエンジェウーモンは信じられないと言う声を上げて、動きが止まってしまっているブラックの姿を見つめた。

ヒカリとエンジェウーモンはブラックがどれだけアルケニモンとマミーモンを憎んでいるのかを知っている。だからこそ、アルケニモンの叫びだけで動きが止まってしまったブラックの姿が信じられないのだが、ブラックは構わずに怒りに満ちた視線を、自身のドラモンキラーで上に持ち上げているアルケニモンとマミーモンに向ける。

「貴様・・・・今なんと言った？」

「アンタの大切にしている娘が狙われているって言ったんだよ。ルーチェモン様は管理局を支配する事には成功したけど、聖王教会は支配出来なかったからね。だけど、聖王教会の中にも腐った人間はいる。そいつ等にアンタの所にいた聖王の血筋を引く娘が地球にいる事を教えたら、如何なるんだろうね？」

「貴様ら！！俺をトコトンまで怒らせてくれる！！！消えろ！！！ガイアッ！！」

「マミーモン！！」

「応ッ！！」

ーーーードゴオン！！

「ムッ！！」

ブラックがガイアフォースを放つ直前に、アルケニモンとマミーモンは勢いよくブラックの体を蹴り飛ばし、その衝撃を使ってブラックの拘束から逃れてると、凄まじいスピードでブラックから逃げ出していく。

しかし、ブラックは逃がさないと言うようにガイアフォースを完全に完成させ、背を向けながら走っているアルケニモンとマミーモンに向かって全力で投げ付ける。

「死ね！！ガイアフォーーース！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

ブラックが投げつけたガイアフォースはアルケニモンとマミーモンの走っていた場所に直撃し、巨大な大爆発が起きた。
しかし、その様子をブラックは不機嫌そうに見つめ、辺りに険しい視線を向けると、何処からとも無くアルケニモンの声が聞こえて来る。

『時間稼ぎは成功したね。アンタの弱点は、一度認めた相手の事に成ると、動きが止まっちまう事さね』

『十年前もそうだったからな。あぁ、それともう一つ良い事を教えてやるぜ。今管理世界に存在しているダークタワーは俺達がルーチェモン様に命じられて建てた物だ！まぁ、せいぜい頑張って破壊しな！俺達が居る限り作られ続けるけどな！！ハハハハハハハハハハッ！！！』

「おのれ・・・・・貴様ら必ず見つけ出してこの手で殺してやる！！！！何処に逃げようと必ずな！！！」

聞こえて来たアルケニモンとマミーモンの叫び、ブラックは憎しみに満ちた叫びを空に向かって響かせ、ヒカリは悲しげな視線をブラックに向けるのだった。

そして十数分後。フライモンの群れとドググモンの群れが完全に去った後に、先ほどのアルケニモンとマミーモンの正体をナイトモン達にヒカリとテイルモンは説明し終え、ナイトモン達はそれぞれ難しい表情をしていた。

「ムゥ～、まさか、先ほどの二体があの塔を建てていた者達だったとは・・・・正直信じられん」

「同感だぜ。だが、それよりも俺はブラックの奴の豹変の方が驚きだ・・・・あんな激しい殺意を感じた事はねぇ・・・・どれだけあいつ等を憎んでんだよぉ？」

「仕方ないのよ・・・・ブラックウォーグレイモンに取って、あいつ等と自分を生み出した元凶だけは何が在っても殺すと誓っていた連中・・・・十年前の時は私達を庇った為に出来なかったけど、今度は確実に殺さなければ気が済まない筈よ。出来なかった事を出来るチャンスが出来たんですもの」

『・・・・・・・・』

テイルモンの言葉に全員が無言のまま、瓦礫の上に佇み続けているブラックの背を見つめた。

今のブラックからは先ほどの殺意に満ちた気配は全く感じれない。だが、その内には確実に眠っていた筈の憎しみの炎が再び燃え上がり、アルケニモンとマミーモンを殺す事を誓っていると、その場にいる全員が確信出来ていた。

そしてその背に向かってヒカリが声を掛けようとするが、その直前にシェルターの入り口の方から足音が響き始める。

ーーーザッ！ザッ！

「アレ？如何したんだ皆？」

「何か在ったの？」

「あぁ、実は・・・・・・その前に質問だけど・・・・その背で眠っている少女は誰だ？」

シェルターの入り口から姿を現した太一とアグモンの姿を目にしたテイルモンは、太一の背で眠っている黒髪の少女を指差しながら疑問の声を出し、他の者達も訝しげな表情を太一とアグモンに向けると、二人は苦笑を浮かべるのだった。

現れた二体！漆黒の竜人の憎しみ！！後編（後書き）

次回予告

遂に姿を現したアルケニモンとマミーモン

その姿にブラックは再び憎しみを募らせるが、事態は思うようには動かなかった。

太一が連れて来た少女が語る、第二十管理世界の悲劇とは？

次回、漆黒の竜人と少女、『悲しき想い』

少女は語る、自分と大勢の者達を護る為に散ったデジモンの存在を。

悲しき想い

「此処は？・・・・・私はどうしてこんな場所に？」

管理局の艦艇内部。その中でも医務室と呼ばれる場所のベットの上で横になっていた黒髪の少女は、自分が居る場所に疑問を覚えながら立ち上がり、辺りを見回そうとすると、何処からともなく声が聞こえて来る。

「フム、気がついたようじゃな」

「誰だ！？」

聞こえて来た声に、少女は目を見開きながら自身の胸元に掛かっているデバイスに手を伸ばそうとする。

しかし、本来ならば何時も其処に在る筈の待機状態のデバイスは存在せず、顔を青ざめさせ始めると、ベットの横に置かれていたテーブルの上の方から再び声が響く。

「お前さんの武器なら此処には無いぞぃ。すまんとは思ったが、ワシらも赤の他人に武器を持たせたままにする訳にはいかなかったのでな」

「お前は誰だ！？」

聞こえて来た声に少女は声を上げながら、ベットの横に置かれていたテーブルの上を見てみると、ペン立て位の大きさの機械の体を持ったデジモンが少女の事を見つめていた。

「ワシはナノモン。お前さんの様子を見ていてくれて、太一から頼まれたものじゃ」

ナノモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／マシーン型、必殺技／プラグボム

超小型の治療用マシーン型デジモン。本来はコンピュータを修復するために作られたワクチン種デジモンだったが、攻撃を受けて思考回路が破損し、暴走してしまった。またその構成データのサイズの小ささを生かし、敵デジモンの体内に入り込み内部からデータを狂わせ破壊することができるので、大抵のデジモンでは太刀打ちする事ができない。必殺技は、敵の体内に入り込み内部で指先から小型爆弾を発射して相手を破壊する『プラグボム』だ。

「デジモン！？・・・・・・私を殺すつもりか？」

「カァ～、被害妄想も良い所じゃな。ワシは人間と敵対する気は無いぞぃ」

「何？・・・・お前は故郷を奪った人間を憎くないのか？」

「フム、やはりお前さん。真実を知っておるようじゃなぁ？」

少女の言葉にナノモンは、自身の顔の方に手をやりながら注意深く少女の姿を見つめた。

既にナノモンは、太一から目の前の少女が真実を知っている可能性が高い事を聞いていたが、今の少女の言葉で、真実を知っていると確信する事が出来た。

この世界の人間はデジモンと直接相対して戦ったのだから、真実を知っていてもおかしくは無い。だが、ナノモンは目の前の少女がそれとは別に何かを知っていると確信していた。

「お前さん、何故真実を知っておる？あの真実を知る者はデジモン側の者達ぐらいじゃ。管理局に管理されとる世界の人間が知る事は出来ん筈じゃが？」

「・・・・・・答える義理は無い・・・・・それよりも、私のデバイスは何処だ？」

「フム・・・・・・まぁ、良かろう。デバイスの場所が在る場所まで案内してやろう」

ナノモンはそう少女に告げるとテーブルの上から飛び降り、医務室を出て行く。

その姿に少女は僅かに訝しげな表情をするが、此処に居てもしょうがないと思い、ナノモンの後を追い掛けて行くのだった。

そして所変わり。艦艇のブリッジ内部では、ヒカリ達から自分達が居ない間に起きた事を聞いた太一とアグモンが、険しい表情をして無言でダークタワーが映っているモニターを見つめているブラックの背を見つめていた。

「アルケニモンとマミーモンの奴らが、まさか生きていたなんて・・・・・まさか、アイツまで生き残って居るんじゃないだろうな？」

「確かに死ぬ所を、ヒカリとテイルモンは見たんでしょう？」

「うん」

「あぁ、間違いなく奴らが死ぬ瞬間は見たわ・・・・・だけど、生きていた」

「・・・本当に本人たちなのか？もしかしたら、同じタイプのデジモンの可能性も在るんじゃないのか？」

「それは絶対に無いよ・・・・・・ブラックウォーグレイモンがアルケニモン達を見間違えると、兄さんは思う？」

「絶対に無いな」

「在りえないね」

ヒカリの質問に対して太一とアグモンは、迷う事無く声を出した。

太一とアグモンも、ブラックがどれだけアルケニモンとマミーモン、そして自身を創り上げた元凶を憎んでいるのかを知っている。そのブラックが、アルケニモンとマミーモンの姿を見間違える事など、ブラックが戦闘狂で無くなってしまうと言う事ぐらいに在りえない。

その事が分かった太一とアグモンは、姿を現したアルケニモンとマミーモンが本物で在る事を確信する事が出来たが、逆に何故二体が生き残っているのかが分からず、ブラックを除いたその場に居る全員が悩んだ表情をし始めると、モニターに見つめていたブラックがヒカリとテイルモンに声を掛ける。

「・・・・ヒカリ、テイルモン・・・・奴らが死んだ所を見た場所は、間違いなくアイツがいた世界なのだな？」

「うん、それは間違いないよ」

「あぁ、確かにアルケニモンとマミーモンはあの場所で、アイツに惨殺された」

「・・・・・・・そう言う事か。奴らめ、あの世界の力を使って生き延びたのだな」

『エッ！？』

ブラックの呟いた言葉にその場にいる全員が僅かに目を見開きながらブラックの背を見つめると、ブラックは自身の考えた推測を話し始める。

「奴らが死んだ筈の場所は、“想いの力を具現化出来る力を持った世界”。その世界の力を使って、奴らは自分の偽者を作り上げていたのだろう」

「アッ！そう言えば、確かにあの世界はそうだったよ！」

「確かにあの世界の力ならば、自分の偽者ぐらいは簡単に作り出せるわ。しかも、寸分違わず本物と同じ偽者が」

「そうだ。奴らは俺に対するアイツの行動で、自分達も殺される可能性に気がついていたんだろう。だからこそ、怪しまれないように自分達が死んだように見せた・・・・あの世界の力を使えば、それぐらいは簡単だろうな」

『・・・・・・』

ブラックの告げた推測に対して、太一達は無言になるが、内心では在りえると確信出来ていた。

特にヒカリとテイルモンは、ブラックの告げた世界の力を使って戦った事も在るので、ブラックの推測が恐らく真実だと確信していた。
そしてその場にいる全員が無言で考えるように頭を悩ませていると、艦長席に座っていたゲンナイがブラックに険しい視線を向け始める。

「・・・・しかし、奴らが生きていた事も不味いが、それよりも我々が向かっていた地球の危機についても重要だ」

「そうだぜ。アルケニモンとマミーモンは、ブラックウォーグレイモンが大切にしている女の子が狙われているって言っていたんだよな？」

「うん・・・・確かにそうだけど・・・・如何してその子を狙うの？幾らデジモンを連れている女の子でも、まだ四歳ぐらい何でしょう？」

「そうだよね？如何してその子を…」

「狙いは奴の血筋だ」

『エッ？』

アグモンの言葉に覆い被さるように言葉を告げたブラックの姿を、その場にいる全員が見つめると、ブラックはヴィヴィオの正体について語り出す。

「・・・・俺の所にいた娘は、嘗て次元世界で栄えていたベルカと呼ばれる国の王族の血を引く娘だ」

「王族の娘？」

「そうだ。最も国自体はとうの昔に滅び、今では一部の世界で自治区として残っているぐらいでしかないが、その場所には聖王教会と呼ばれる組織が存在している」

「教会？もしかして、その教会って、宗教組織なの？」

「そうだ。だが、その教会内部には過激派と呼ばれる狂信者どもが存在している」

「狂信者だって！？」

太一はブラックの言葉に対して叫び、ヒカリも僅かに顔を青ざめさせ、ゲンナイは視線を険しくする。

太一とヒカリの地球でも宗教組織と呼ばれる組織が存在している。その為に二人は狂信者と呼ばれる者達が行っている行為も知っている。ゲンナイにしても多くのコンピュータ内部にハッキングしていた為に、地球の歴史についても充分すぎるほどに分かっている。だからこそ、狂信者と呼ばれる者達が行ってしまう行為も分かっている。

「リンディが言っていたが、過激派の者達は聖王教会内部では少数だが、多方面で見た場合はかなり規模の者達になるらしい。だが、連中にしても旗頭と呼べる者が居なかった為に、その力を振るう事は出来なかった」

「・・・だけど、現れてしまった・・・・・ブラックウォーグレイモンの所にいる女の子が、その人達にとっての旗頭？」

「その通りだ。ヴィヴィオこそ現代に蘇った聖王の血筋。聖王教会の連中からすれば、喉から手が出るほどに求める者だ。其処にヴィヴィオの意思など関係ない。奴らが欲しいのは旗頭としての“聖王”。簡単に言えば、意志の無い人形だ」

『っ！！！』

ブラックの告げた残酷な言葉に、太一達は限界まで目を見開きながら顔を青ざめさせた。

大人が子供を利用する。しかも、ブラックの話ではヴィヴィオは自分の正体など全く知らず、普通の子供として育った女の子。

そんな子供を利用しようとする者達がいるなど、デジモンに関わったとは言え、普通の一般家庭で育った太一達からすれば神経を疑う行為だが行おうとする者達からすれば自然な事だった。

「狂信者の連中からすれば自分達の夢さえ叶えば他の事など、どうなろうと知った事ではない。しかも、現状の世界はデジモンと人間の戦争状態。その連中からすればこの状況は『ベルカを再興させる為に聖王が創り上げてくれた状況』だと思っているのだろう。その上、其処に聖王の血をひく者が存在していると分かれば、連中はどう思う？」

「・・・・・『自分達を栄光へと導いてくれている』っとでも思うだろう。それが仕組まれている事も知らずに」

「その通りだ。ルーチェモンならそれぐらいの事は平然と出来る。奴からすれば自らの欲望に進んでいる人間を操るなど、簡単に出来るだろう。しかも、奴らが言っていた事が真実ならば、今、リンディ達は地球にいる。地球には俺がお前達の世界に帰還した時の状況

を考えると、数多くのデジモン達がいる筈だ。そんな状況の所に異世界の狂信者どもまでもが現れれば地球は一気に大混乱に陥り、リンディ達が地球で行っているであろうデジモンの説得も一瞬の内に崩壊して、俺がいた地球は確実に終わるだろうな」

『・・・・・・・』

ブラックが告げた可能性に対して、その場に居る者達は言葉も出す事が出来ずに顔を青ざめさせた。

今、ブラックが告げた可能性はこのまま行けば確実に起きるだろう。ルーチェモンが考えた作戦はそれほどまでに成功率が高いのだ。

聖王教会と言う宗教組織に属している者達にとって、ヴィヴィオは全てを賭けてでも手に入れたい存在。その連中の中でも過激派と呼ばれる連中が、デジモンの事で混乱状態にある地球に訪れでもすれば、一気に地球の情勢はマイナスに傾き、数日としないでデジモンと人間の大戦争に発展するだろう。しかも、引き金を引いたのが異世界の人間となれば、ますます最悪な方向へと進んでしまう。

その可能性に気がついた太一達はブラックへとゆっくりと顔を向ける。

「・・・・・ブラックウォーグレイモン。お前、一足先に地球に向かえよ」

「何だと？」

「この艦艇でも確かに向かえるが、この艦艇はこれからも地球に辿り着くまでに幾つかの世界を渡らなければならない。それを考量して考えると・・・・」

疑問の表情を浮かべているブラックに声を掛けながら、ゲンナイ

は近くのコンソールを弄り、艦艇の進む航路と時間を調べ始め、結果をブラックに告げる。

「君の居た地球に到着するのは、約二週間と少し・・・・・しかも、この世界の人々の説得と究極体デジモンの存在を考慮すれば、一ヶ月以上は掛かる可能性が高い。その間に地球の希望が消滅してしまえば、私達の行っているデジモンの説得も難しくなってしまう。しかし、君には個人で次元移動出来る能力と究極体として力がある。それを使って全速力で地球に向かえば・・・・・十日で着く可能性が高い筈だ」

「・・・・・」

「俺達にはゲンナイさんがいるから、管理世界の事に関しては在る程度は大丈夫だ」

「それにさ。君の所にいる女の子も君に会いたがっているよ。君はその子の父親なんだからさ」

「・・・・・フン、確かに管理世界に人間に嫌われている俺がこの艦に乗り続けているのは少し不味いな・・・・・良いだろう。先に俺は地球に帰還する」

太一とアグモンの言葉に対してブラックは僅かに口元を不機嫌そうに歪めながら声を出すと、ブリッジの出口の方に足を向けながら歩き始める。

「・・・・・リリスモンのデジタマは置いていく。さっさとこの世界の人間どもと究極体を片付けて、地球に来い。待っているぞ」

「気をつけてね！」

「フン、俺はそう簡単には死なん」

ヒカリの言葉に対してブラックは素っ気無く答えると、ブリッジを出て行き、外へと続く通路を歩いて行く。

それを確認した太一達は苦笑を浮かべ合い、モニターに映っているブラックの後姿を見つめながら話し始める。

「相変わらず素直じゃないよな、アグモン」

「まぁ、ブラックウォーグレイモンは滅多に心の奥底の本音を言わないからね。本当はアルケニモンとマミーモンの言葉を聞いて、すぐにでも地球に戻りたいと思っているのに、それを隠していたから」

「ブラックウォーグレイモンは素直じゃないから。多分、その子に会っても、私達の言っていたとおりには言わないでしょうね」

太一、アグモン、テイルモンはそれぞれ苦笑を浮かべながらブラックの事を言い続ける。

その場にいる全員がブラックの心の奥底に抱いていた想いに気がついていた。だが、正直にブラックに『先に行って、君の娘を助けろ』と言って、あのブラックが動く筈は無い。だからこそあえて理由をつけて、ブラックを先に地球に向かわせたのだ。最もらしい理由を作るのならば、状況を考えれば簡単だったからこそ出来た行為だ。

しかし、太一、アグモン、テイルモン、ゲンナイとは違い、ヒカリだけは僅かに寂しさを含んで視線でモニターに映っているブラックの姿を見つめる。

（・・・・・如何してなんだろう？何で私はブラックウォーグレイモンが離れる事が寂しいの？兄さん達の行動は正しいのに？如何して？）

（・・・・・クス・・・・・オモシロイムスメネ・・・・・ジブンノキモチニキガツイテ・・・・・イナイナンテネ・・・・・クスクス・・・・・ホントニ・・・・オモシロイワ）

「エッ！？」

突如として頭の中に響いていた女性と思われる声に、ヒカリは慌てながら辺りを見回すが、声の主は発見出来ずに疑問の思いながら頭を捻る。

その様子に気がついた太一は心配そうな表情をしながら、ヒカリに声を掛ける。

「うん？如何したんだ？ヒカリ？」

「・・・・・うんうん、多分何でも無いよ。最近デジモンの説得とかで疲れていたんだと思う」

「そうだな・・・・ヒカリは人一倍頑張っているし・・・・この世界の人達の説得は俺達に任せて、ヒカリは少し休めよ。これから先の事を考えたら休むのも大事だぞ」

「・・・・そうだね。分かったよ、兄さん」

太一の言葉にヒカリは僅かに考えるような表情をするが、太一の言葉は最もだと頷いた。

その様子に太一達が笑みを浮かべると、再びブリッジの扉が開き、

ナノモンがブリッジの中へと入って来る。
「太一。お前さんが連れて来た女の子が目覚めたので、連れて来たのじゃが？今は大丈夫かのう？」
「大丈夫だ、ナノモン。この世界で起きた事を知る為にも、ブリッジに入れていいぞ」
「了解じゃ、と言う事じゃから、入って良いぞぃ」
ーーーブウゥン！
ナノモンがブリッジの入り口に向かって声を出すと共に、ブリッジの扉が開き、険しい表情をしている少女が入って来た。
その少女の険しい表情に、太一は困ったような表情をするが、すぐに笑みへと変わり少女に向かって右手を差し出す。
「え～と、会ったのは覚えているかな？」
「あぁ、シェルターの入り口で会った男だな・・・・気絶した所を助けて貰ったのは感謝するぞ」
「まぁ、気にしないでいいぞ。俺の名は八神太一。此処とは違う遠い世界のデジタルワールドと隣接している世界の人間だ」
「・・・・私の名前は、レリュー・シュティル。この世界の政府に雇われていたフリーの魔導師だ」
「フリー？君みたいな女の子が一人で働いていたのか？」

少女ーレリュー・シュティルの言葉に思わず太一は声を上げてしまった。
目の前にいるレリューは如何見ても十歳前後にしか見えない少女。その様な少女が働いているなど、地球の常識で育った太一からすれば異常な事だが、管理世界では珍しくも無い事だった。管理世界では子供が戦う事など異常ではない。
何せ世界を護っている管理局が認めている事。その為に十歳前後の子供が魔導師として働いている事は、管理世界では珍しくも無い事なのだ。
その事実に太一達が表情を険しくし始めると、レリューは首を横に振るい説明を始める。

「お前達は遠い世界から来たみたいだから信じられんだろうが、管理世界では子供が働く事は常識に近い事だ。まぁ、色々と理由が在るが、私がフリーの魔導師として働いていた理由は・・・・・」

「うん？如何したんだ？」

「・・・・・説明する前に聞きたい？本当にシェルターの入り口にはウサギのようなデジモンはいなかったのか？」

「あぁ、確かにいなかったぞ。シェルターの入り口を埋めていた瓦礫の所にあったのは、このデジタマぐらいだな」

レリューの言葉に答えると共に太一は、近くの座席に上に乗せていた一瓦礫の所に落ちていたデジタマを抱えてレリューの目の前に差し出す。
そのデジタマの姿にレリューは悲しそうな表情をしながら、デジタマを太一から受け取り大切そうに胸の中に抱え出す。

「・・・・嘘吐き・・・・何が必ず帰って来るだ・・・・私を残して逝く事は赦さないと言ったのに・・・嘘吐きが・・・・」

「やはり、そのデジタマは君のパートナーのデジタマのようだね。太一達の報告でもしやと思っていたが、君はデジモンと絆を結ぶ事に成功した魔導師で良いのだね」

「・・・・・・・そうだ。私は六歳の頃にアイツと出会った・・・・・・それからすぐに管理局の人間がやって来て、アイツを殺そうとしたのだ。私はそれが嫌でアイツと一緒に歩む事を誓った。おかげで家の両親どもからは一族の面汚しなどと言われていたようだが、それでも私にとってはアイツと一緒に歩む事の方が幸せだったと断言出来る」

ゲンナイの質問に対して、レリューはデジタマを大切そうに抱えながら懐かしむような声で答え、太一達は目の前のレリューが本当にデジモンとの絆を結ぶ事に成功した人物だと確信する事が出来た。

管理世界の中にもデジモンとの絆を結んでいる者が居た。その事実はデジモンとの共存を目指している太一達からすれば嬉しい事実だった。

しかし、レリューは突如として顔を深く暗くし始め、顔を俯かせながら話を続ける。

「だが、ある日の事だ。デジモン達の多くが管理世界を襲い始めた。その日から何の後ろ盾も無い私達は管理世界の人々から襲われ、誹謗中傷を受け続ける日々が始まり、そしてこの第二十管理世界に辿り着いたのだ」

「ちょっと待ってくれ？君は十歳の子供なんだよな？」

「あぁ、確かに私は今年の誕生日で十歳になる」

「って事は・・・・・」

『九歳！？』

太一達は信じられないと言う声を上げて、レリューの顔を見つめた。

九歳の子供に、デジモンが一緒にいたからと言う理由だけで誹謗中傷や襲い続けた。まともな常識を持っている者からすれば信じられない事だったが、管理世界の多くの者達はデジモンを憎んでいる。デジモンを連れている人間もまた、デジモンに魂を売った裏切り者としか思えないのだ。

「・・・・・しかし、この第二十管理世界は管理局から脱退しようとしていた。そのおかげか他の世界とは違って、デジモンに対する考えも僅かに違っていたのだ」

「もしや！この世界はデジモンと和平を結ぼうとしていたのかね！？」

「そうだ。この世界の代表は、今回の戦争の原因は管理局の行いそのものだったと考え、管理局を脱退し、デジモンと戦いながらも和平の道を歩もうとしていた。その時に偶然にもアイツを連れた私がこの世界に現れた事で、共に歩める生物だと確信する事が出来たらしい。だが、その準備を始まろうとした瞬間に、あの悲劇が起きた。管理局の連中の攻撃で、全てが終わってしまったのだ！！」

そしてレリューは語り出す。この世界で起きた惨劇の始まりを。

ーーー数週間前。
　暗い曇天が広がる空の下。首都に程近い森の中を、白い白銀のような鎧型のバリアジャケットを身に纏い、大剣型のデバイス―グラムサイブを右手に握り締めたレリューを肩に乗せ、長い手を持ち、二足歩行で黒と白の体色を持っている巨大なウサギのような姿をしたデジモン―アンティラモンが全速力でゲートタワーがある場所へと向かっていた。

アンティラモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／聖獣型、必殺技／マントラチャント、メディテーションキュア
東洋の伝承に登場する聖獣の姿をした聖獣型デジモン。体内に流れる『気』を自在に操り、『気』の効果により、流れてるような動きと鉄のように重い一撃という変幻自在の攻撃が出来る完全体の中でも強力なデジモンだ。更に腰のコネクタには敵を退化させることができる能力まで宿っているぞ。また、アンティラモンの中には四聖獣デジモンに使えるデジモンも存在しているらしい。必殺技は、体内の全パワーを開放して、体を”クロンデジゾイド合金”並に硬質化させて攻撃する『マントラチャント』に、受けたダメージを瞬時に回復させる事が出来る『メディテーションキュア』だ。

「クッ！！一体如何つもりなのだ管理局の連中は！？もう同盟は完全に切れていると言うのに、ゲートタワーに攻撃を開始するなど！？」

「分からない・・・・・だが、代表殿の話では管理局の行動には怪しい部分が多数存在しているらしい。もしかしたら、今回の行動もそれに関係している可能性が高いぞ、レリュー」

「クソッ！！漸くアンティラモンと一緒にいても、攻撃されない世界を見つけたんだ！！絶対にこの世界を護って見せるぞ！！アンティラモン！！」

「了解だ！！」

レリューの叫びにアンティラモンは応じると、走るスピードを更に倍増させて、木を踏み台にしながらゲートタワーが在る場所へと向かって行く。

そしてある程度ゲートタワーが在る場所へと近づいていくと、デジモンと魔導師が戦っているような音が響き始め、アンティラモンはその辺りで一番高い木の頂点に器用に立ちながら戦いの様子を窺い始める。

『うてぇぇッ！！』

ーーーズガガガガガガガガガガガガアッ！！

「ギエアッ？」

管理局の魔導師と思われる者達が放つ魔力弾に寄って、一体のオオクワモンが攻撃され続けていくが、不思議な事に攻撃に晒され続けているオオクワモンには全くダメージを受けている様子が見えなかった。

その様子を遠方で見ていたレリューとアンティラモンは、管理局の魔導師達が行っている攻撃の正体に気がつき、驚愕と恐怖に染まった表情をし始める。

「まさか！？あの魔法攻撃は非殺傷設定なのか！？」

「馬鹿な！？そんな事をしたら、あのオオクワモンが進化してしまうぞ！！！」

管理局の魔導師が行っている攻撃の意味に気がついたアンティラモンとレリューは、恐怖に染まった声で叫んだ。

レリューとアンティラモンは究極体のデジモンとは戦った事は無いが、それでも第九管理世界で猛威を振るったスーツェーモン達の映像では見た事が在る。だからこそ、究極体のデジモンが現れたらどうなのかを分かっていた。そして目の前で行っている行為は、先ず間違いなくオオクワモンを究極体へと進化させようとしている行為。

それが意味する事に気がついたレリューは、この場所に来る前に代表者から渡された通信機に手を伸ばし、すぐさま連絡を取り始める。

『レリュー君！状況は一体如何だね！？管理局の連中は何を行っているのだ！？』

「代表！！すぐに住民をシェルターの中に避難させるんだ！！管理局はこの世界に究極体のデジモンを出現させる気だ！！！」

『なっ！？それは本当かね！？』

「本当だ！！今、私の見ている先で管理局の魔導師達が非殺傷設定の魔法を完全体のデジモンに放っている！！だから早くひな…」

ーーーズキュン！！

『ッ！！！』

突如として放たれた射撃魔法によって、レリューが手の中に握っていた通信機は破壊され、レリューとアンティラモンが慌てて射撃魔法が放たれた方向を見てみると、手に杖型のデバイスを握ったリオク・ハルディが薄ら笑いを浮かべながら空に浮かんでいた。

「困りますね。この世界は滅んで貰わないと困るんですよ。管理世界の秩序の為にもね」

「何が秩序だ！！貴様ら管理局のせいで戦争が起きたんだろうが！！！その上、あのオオクワモンに対する行動！！貴様らはこの世界の人々がどうなっても良いと言うのか！？」

「私達管理局から脱退しようとする世界など、滅んだ方が後の為ですよ。管理局の与えてる秩序から逃れなければ、この世界も護ってあげたと言うのにね」

『ふざけるな！！！』

リオクの物言いにレリューとアンティラモンは怒りの叫びを上げ、上空に浮かんでいるリオクに向かって飛び掛かり、アンティラモンは素早くリオクに向かって拳を振り抜く。

「ムン！！」

ーーーブン！！

「おっと！危ないですっね！！」

ーーーズキュン！！

「そんなもの我らには効かん！！」

ーーーバシュン！！

リオクが放った射撃魔法をアンティラモンは右手を振り抜く事で消滅させ、その隙にアンティラモンの肩に乗っていたレリューが、加速魔法を使用しながらリオクに向かって飛び掛かり、両手で握り締めているグラムサイブを全力で振り下ろす。

ーーービュン！！

「ハアァァァァァァァァッ！！」

ーーーガキン！！

「おっと危ないですね」

「クソッ！！」

自身の全力の一撃を片手で発動している防御魔法によって受け止められている姿を見たレリューは悔しげな声を上げるが、すぐに防御魔法を破ろうと更に力でグラムサイブを押し込んで行く。

ーーーグググッ！！

「ほう、Ｓランクの魔導師の私に挑むとは、フム、大体の君実力はＡ＋と言った所ですね。中々に優秀ですし、管理局に入りませんか？優遇して上げますよ」

「ふざけるな！！誰が貴様らなどに従うものか！！」

リオクの嘲るような物言いに、レリューは怒りの叫びを上げ、グラムサイブの刃をリオクに衝き立てようとする。
しかし、相手は腐ってもSランクの魔導師。子供であり実力的にA＋の力しかないレリューでは、リオクの発動させている防御魔法を破る事が出来ずに悔しげな表情をし始めた瞬間に、リオクは防御魔法を発動させている手とは逆の杖を握り締めている手を、レリューに向け始める。

「やれやれ、所詮は子供ですか。まぁ、反抗的な子供には少し躾をして上げますかね？」

「フッ！貴様は、一番重要な事を忘れているぞ？」

「何ですって？私が何を忘れ…」

「我の事だ！！」

「ッ！！！」

背後からリオクの言葉に覆い被さるように響いた叫びに、リオクが慌てて背後を振り向いてみると、体を硬質化させたアンティラモンがリオクに向かって豪腕を振り抜く。

「食らえ！！マントラチャントッ！！」

ーーードゴオオオオン！！

「グハッ！！」

アンティラモンの渾身の力を込めたマントラチャントは、リオクが発動させていた防御魔法を粉砕しても威力を衰えさせず、リオクを地面に向かって吹き飛ばした。
その隙に再びアンティラモンの肩の上に乗っていたレリューは、遠くでオオクワモンを攻撃し続けている魔導師部隊に目を向け、焦りを募らせ始める。

「不味い！！アンティラモン！！」

「応ッ！！」

レリューの叫びにアンティラモンは答えると、すぐさま木の頂点を道にして魔導師部隊の者達の下へと向かおうとする。
しかし、最初に木に足を乗せようとした瞬間に、アンティラモンの体に突如としてフードバインドが巻きつき、アンティラモンの体を拘束する。

ーーーガキィィィィン！！

「ヌッ！！これは！？」

「バインドか！？」

突如として動きを封じ込められた事に、アンティラモンは困惑の声を上げ、レリューはアンティラモンの動きを封じているバインドを破壊しようとするが、レリューが幾ら介入してもバインドは消滅せず、二人が焦りを覚え始めた瞬間に、背後からリオクの声が響く。

「いやはや、流石は完全体のデジモン。バリアジャケットの強度を上げて置かなければ、危なかったですよ」

「貴様！！」

「本来ならば先ほどの礼に、私自らが貴女達を殺して上げたい所ですが・・・・時間切れのようですね」

『ッ！！』

リオクの言葉の意味する事に気がついたレリューとアンティラモンは、慌ててオオクワモンの攻撃し続ける部隊の方に目を向けて見ると、オオクワモンの体から蒼いデジコードが飛び出し、オオクワモンの体を包み込んで行く。

そしてその姿を目にしたレリューとアンティラモンが絶望と恐怖の入り混じった表情をする中、デジコードの内部から黒い甲殻で体を覆い、オオクワモン以上の鋭い二本のハサミを備え、全体的に二周りほど巨大に成った昆虫型デジモン－究極体のグランクワガーモンがその姿を現す。

「ギエオォォォォォォォォォォォォォーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

グランクワガーモン、世代／究極体、属性／データ種、ウィルス種、フリー、種族／昆虫型、必殺技／ディメンジョンシザー、ゾーンブラックホール

昆虫型の中でも特に危険なデジモンで、出会ってしまったら最後、一瞬で消されてしまう為に別名“深き森の悪魔”とも呼ばれている昆虫型デジモン。ヘラクレスカブテリモンと呼ばれるデジモンのライバル的な存在。密林の奥深くに生息し、夜を思うに活動するデジモンだ。必殺技の『ディメンジョンシザー』は、二本のハサミで相手を切り裂く技だが、その威力は周囲の空間さえも断ち切ってしま

う威力を持っている。また、もう一つの必殺技『ゾーンブラックホール』は、周囲のものを全て、二本のハサミの間に発生させたブラックホールで吸い込んでしまう回避が不可能な恐ろしい技だ。

「フム、漸く究極体に進化しましたね。さて、これでこの世界で行うことは全て終わりましたし、私達管理局は撤退させて貰いますよ」

「ッ！！お前は！？お前達は何と言う事を！？この世界に生きる人々がどうなっても言いと言うのか！？」

「もはやこの世界と管理局は何の関係も在りません。この世界がどうなろうと知った事では無いですよ・・・・あぁ、そうそう。どうせ貴女も死ぬでしょうから、教えてあげますね。実は管理局は和平の使者など、滅ぼした世界には送ってはいないんですよ。送ったのは、“虐殺者達”ですね」

『ッ！！！』

「では、さようなら」

ーーーシュウン！！

驚愕に言葉を失っているレリューとアンティラモンに向かってリオクは別れの言葉を告げると共に、転移していき、それと共にグランクワガーモンに攻撃を加えていた管理局の部隊もその場から転移していった。

それを目撃したグランクワガーモンは、自身の獲物達がいなくなってしまった事に気がつき、唸り声を上げながら首都の方に顔を向け、凄まじい衝撃波を撒き散らしながら首都の方に向かって飛び立つ。

「ギエァァァァァァァァーーーー！！！！」

ドゴオオオ

無残に消え果てしまった。
突如として首都の上空に姿を現したグランクワガーモンは怒りと憎しみの咆哮を響かせると共に、首都の上空でブラックホールを発生させ、全てをブラックホールの中へと吸い込み始めたのだ。文字通り全てを。

「ゾーンブラックホーーールッ！！！！」

ーーーグオォォォォォォォォーーーーーーーー！！！！！！！

『キャァァァァァァァァーーーーーーー！！！！』

『ウワァァァァァァァァァーーーーーーー！！！！！』

ーーーガラガラガラガラッ！！！

上空でグランクワガーモンがゾーンブラックホールを発動させると共に、レリェーの報告で緊急避難の為に作られたシェルターに向かっていた者達は次々と多くの建物と共にゾーンブラックホールの中へと吸い込まれていった。
それと共に軍関係の者達が上空でゾーンブラックホールを発動させているグランクワガーモンに攻撃を加えようとするが、ゾーンブラックホールの影響から逃れる事が出来ず、多くの者達がゾーンブラックホールの中へと吸い込まれていった。
そしてある程度、ゾーンブラックホールをグランクワガーモンは発動させ終えると、ゾーンブラックホールを解除し、今度は何とか生き残る事が出来た人々と建物に向かって攻撃を開始する。

「ギエオォォォォォォーーーーーーー！！！！」

ーーードゴオオオオオン！！ザッシュウン！！

『アァァァァァァァァァァッッッ！！！』

グランクワガーモンの攻撃の前に殆どの戦力をゾーンブラックホールによって失われた都市の力では、究極体のグランクワガーモンに勝てる筈も無く、次々と都市は瓦礫へと変わっていき、人々の血で赤く染まり続けていった。

そしてそんな中。漸くレリューとアンティラモンが首都の入り口へと到着すると、グランクワガーモンが行っている惨劇のその眼で目撃し、顔を青ざめさせていた。

「・・・・なっ・・・・何なのだこれは・・・・・私達が戻って来るまで・・・・・一時間も経っていないのだぞ・・・・・それなのに・・・・・どうしてこのような惨状が・・・・広がっているのだ」

「・・・・・・レリュー」

「アンティラモン？」

何時もとは違い小さな声で名を呼ばれた事に、レリューは疑問を覚えながら背後にいるアンティラモンに向かって振り返って見ると、アンティラモンは無言でレリューの腹部に向かって拳を撃ち出す。

ーーードグオオン！！

「ガハッ！！・・・・・・・な・・・・・ぜ・・・・・」

「レリューは死んではいけない・・・・・あのデジモンは何とか我

が抑える・・・・・必ず帰って来ると約束する」

「・・・・アンティ・・・ラモン・・・・」

ーーードサッ！

レリューはアンティラモンの名を呼ぶと共に地面に倒れ伏してしまう。

それを確認したアンティラアモンは寂しげな視線をレリューに向けながら、腕の中に抱き抱え、事前に教えられていたシェルターの入り口に向かって全速力で駆け出す。

ーーードン！！

『なっ！？』

突如としてシェルターの入り口の前に着地したアンティラモンの姿を見た護衛の者達はアンティラモンの姿に驚いた声を上げた。

しかし、現れたアンティラモンが自分達の味方をしていてくれたデジモンだと気がつき安堵の息を出しながら声を掛けようとするが、アンティラモンは構わずに腕の中に抱えていたレリューを護衛の者達の前に降ろす。

「・・・・レリューの事を頼みたい。我はあのデジモンの抑えるのと、逃げ遅れた人々の救援に向かう」

「・・・・勝てるのかね・・・・君の実力は代表から聞いているが・・・・アレには勝てるとは思えないが？」

「・・・・・我はレリューが穏やかに暮らせる場所を作りたい・・・

・我の為に全てを捨ててくれたレリューに出来る最後の行いだ」

「・・・・・分かった。この場にいる全員が、彼女を必ず護ると約束しよう・・・・・総員！敬礼！！」

ーーービシッ！！

隊長格と思われる男性が声を上げると共に、その場にいる生き残っていた軍人と思われる者達全員が死地に向かおうとしているアンティラモンに向かって敬礼を行った。

彼らにはアンティラモンが死力を尽くして戦おうとしている事が分かっていた。しかし、相手はブラックホールなどと言うとんでも無い代物を造り出す事が出来る存在。アンティラモンが生きて帰って来る事が出来ないとも理解していた。

しかし、それを止める事はアンティラモンの背を見ていたら出来なくなってしまった。アンティラモンの背は無言でパートナーの為に戦うと告げていたのだ。自身のパートナーが穏やかに暮らせる場所を作り出す為にアンティラモンはグランクワガーモンに挑むつもりなのだ。

「後を頼むぞ！！」

ーーービュン！！

アンティラモンは叫ぶと共に、建物の瓦礫を蹴り飛ばしながら遠くで暴れ続けているグランクワガーモンに向かっていった。

それを眼にした軍人達は、何もする事が出来ない自分達を歯がゆく思いながら、地面で眠り続けているレリューを抱き抱えると、隊長がその場にいる者達全員に命令を下す。

「総員！彼が時間を稼いでいる間に、この辺り一帯に残っている生存者を見つけてシェルター内部に避難させるのだ！キッチリ三十分後にこのシェルターの入り口を完全閉鎖する！総員！急いで行動を開始しろ！！」

『了解！！』

隊長の命令にその場いる全員が頷き、急いで避難者達の救助へと向かい出した。

そして最後にレリューを抱き抱えた隊長は、先にレリューだけでもと思い、シェルターの中へと入って行くのだった。

血だらけになっている多数の人間だった者と思われる死体をグランクワガーモンは踏み潰し、次々と辺りに存在している建物や瓦礫などを破壊していた。

グランクワガーモンが暴れている理由は、自身の故郷を滅ぼした者達の同族人間の抹消と、自身を進化させた管理局の部隊を滅ぼす為だった。どんな理由で自身を進化させたのかは分からないが、グランクワガーモンにとって管理局の部隊は絶対に赦す事が出来ない連中。理性は存在せずともグランクワガーモンの本能が管理局と人間を滅ぼしたがっている。だからこそ、一番近くの首都を目指して、管理局の部隊を見つけようと暴れ続けていたのだ。

「ギシャァァァァァァァァーーーーーー！！！！！」

ーーードゴオオン！！

グランクワガーモンが上げる咆哮によって、次々と辺りに建物は

完全に崩壊していき、隠れて生き残っていた者達は次々と瓦礫の崩壊と共に押し潰されて行った。
そしてその惨状に満足したのか、グランクワガーモンは喜びに満ち溢れた表情をしながら今度こそ、首都を完全に消滅させる為に地上でゾーンブラックホールを発動させようとし始める。
しかし、その直前に瓦礫を蹴り飛ばしながら移動を行っていたアンティラモンがグランクワガーモンの直上に飛び出し、自身の体をクロンデジゾイド並みに硬質化させると共に落下を行い始め、両手を合わせるながらグランクワガーモンの頭部に向かって両手を勢いよく振り下ろす。

「ハアァァァァァァァッ！！マントラチャントッ！！」

ーーードゴオオン！！

「ギエアッ！！！」

アンティラモンのマントラチャントを頭部に食らったグランクワガーモンは僅かに怯み、アンティラモンと距離を取り始める。
しかし、その様子に対してアンティラモンは喜ぶどころか悔しそうな表情をして、油断無くグランクワガーモンに対して構えを取り始める。アンティラモンは今の一撃で確信する事が出来ていた。“自分ではグランクワガーモンを倒せる可能性は億が一にしか在り得ない”と。
先ほどのアンティラモンの渾身の一撃はグランクワガーモンは隙を完全についていた上に、落下速度まで加えていた最高の一撃。だが、それを持ってしてもグランクワガーモンは僅かに怯んだ程度だけ。
それが意味する事は一つ。アンティラモンとグランクワガーモンの間には何枚もの実力の壁が存在していると言う事だ。成り立てと

は言え、相手は完全体の十倍の実力を持っている究極体。究極体に勝てる完全体も確かに一部は存在しているが、残念ながらアンティラモンはそれに属していない完全体。アンティラモンが勝てる可能性はかなり低いどころか、０．０００００１％位しか存在していないのだ。

「・・・・しかし、退く訳にはいかない・・・・この命を賭けて貴様を倒させて貰うぞ！！」

「ギシャァァァァァァァーーーー！！！！！」

ーーードゴオオオオオオン！！

「グッ！！」

ーーープシュゥッ！！

グランクワガーモンが行って来た突進をアンティラモンはギリギリの所で避けたが、グランクワガーモンが突進と共に発生させた衝撃波までは避ける事が出来ず、アンティラモンの体は小さな傷が出来てしまった。

その事にアンティラモンは僅かに驚いた顔をするが、すぐに表情を冷静に戻し、自身の体を硬質化させながら上空に浮かんでいるグランクワガーモンを睨みつける。

「己！絶対に引き摺り下ろしてやろう！！」

ーーービュン！！

アンティラモンは叫ぶと共に瓦礫の間を素早く駆け続け、グラン

クワガーモンを翻弄しようと動き出す。
それに気がついたグランクワガーモンはアンティラモンを逃すまいと、衝撃波を撒き散らしながら追い駆けて始めるが、アンティラモンは構わずに瓦礫の間を駆け続け、一番近くに残っていた巨大なビルの背後へと自身の体を滑り込ませ、グランクワガーモンの視界の中から完全に姿を隠した。
その事にグランクワガーモンは慌ててアンティラモンが隠れているであろうビルに向かって突進を行う。

「ギシャァァァァァァーーーーー！！！！」

ーーードゴオオオオオン！！

グランクワガーモンの突進によって一瞬の内にビルは貫かれ、ビルは倒れ始めるが、グランクワガーモンが狙っていたアンティラモンの姿は発見出来ず、グランクワガーモンが辺りを見回し始めた瞬間に倒れ掛けていたビルの外壁に掴まっていたアンティラモンが、グランクワガーモンの背に向かって全力で飛び移る。

「フッ！！」

ーーードン！！

「ギエッ！？」

突如として背に襲い掛かってきた衝撃に、グランクワガーモンは驚いた声を上げ、アンティラモンを振り落とそうとするが、アンティラモンは構わずに硬質化させていた両手を連続でグランクワガーモンの背に向かって叩きつける。

「ハアァァァァァァァァッ！！！！」

ーーードドドドドドドドドゴオン！！

「ギエアァァァァァァァァァッ！！！！」

アンティラモンの連続攻撃を背に食らったグランクワガーモンは今度はダメージを受けているのか、苦痛に苦しみながら動きが揺れ始めて行く。

その事に気がついたアンティラモンは、自身が億が一の可能性を手に入れている事を確信し、グランクワガーモンの背に存在している四枚の羽の一枚を両手で全力で握り締め、羽を捻る様に引っ張り始める。

「オォォォォォォォォーーーーーーーー！！！！！！！！」

ーーーギリギリギリッ！！

「ギッ！ギシャァァァァァァァァッ！！！！！」

流石に羽への攻撃は完全にダメージを受けているのか、グランクワガーモンは凄まじい苦痛の叫びを上げ、何とかアンティラモンを背から振り下ろそうと体を高速回転させ始めるが、アンティラモンも必死に羽を握り締めながらギリギリと羽を捻り続け、遂にグランクワガーモンの背に存在していた四枚の翼の内、一枚が捻り切られる。

ーーーブザンッ！！

「ギシャァァァァァァァァァァァァァァァァァッ！！！！」

「ウワッ！！」

ーーーードゴオン！！

羽を一枚完全に失った苦痛に、グランクワガーモンは今まで以上の大暴れを行い、アンティラモンはそれに寄って地面に叩きつけられてしまった。

しかし、アンティラモンはすぐに起き上がり、上空で旋回を行っているグランクワガーモンの姿を睨みつけるが、グランクワガーモンは今度は不用意にはアンティラモンに近づかずに警戒をするようにアンティラモンの周りを回り始める。

「・・・・好機を逃したか・・・・・これは完全に詰んだやも知れんな」

アンティラモンは、自身の周りを回っているグランクワガーモンが次は全力で攻撃して来る事を確信していた。油断していたとは言え、完全体のデジモンに大切な羽を一枚奪い取られたのだから、グランクワガーモンは怒り狂っているだろう。当然ながらそれを行ったアンティラモンをグランクワガーモンが赦す筈も無く、確実にアンティラモンを殺そうとする筈だ。いかにアンティラモンが反則に近い回復技である『メディテーションキュア』と言う技を持っていたとしても、油断が無くなったグランクワガーモンには勝てる可能性はゼロなのだ。このままでは。

「・・・・・これしかないな」

ーーーシャキン！！

アンティラモンは言葉を呟くと共に、腰に存在していたコネクタを取り外し、上空に浮かんでいるグランクワガーモンに向かって構えを取る。

（一か八かになるが、このコネクタの力を使って奴を完全体に戻すしかない。究極体のデジモンには効かない可能性が高いが、それでもこのまま戦うよりは可能性が高い！）

アンティラモンはそう作戦を決めると油断無くグランクワガーモンに向かって再び構えを行い始め、互いに相手の隙を窺い続ける。

グランクワガーモンも既にアンティラモンと簡単に倒せる敵だと思ってはいない。本能も既に全力で挑まねば勝てない敵だとも判断している。だからこそ、完全に打ち倒す為に隙を伺い、アンティラモンを消滅させるつもりなのだ。

そして互いの気迫が限界にまで達した瞬間に、アンティラモンは全速力でグランクワガーモンに向かって駆け出す。

「オォォォォォォォーーーーーー！！！！！」

「ギシャァァァァァァァーーーーーー！！！」

アンティラモンが駆け出すと共にグランクワガーモンも同時にアンティラモンも突進を行い、互いに全速力で相手に向かって突撃して行くが、アンティラモンは自身の勝利を確信した。

（勝てる！！奴のスピードは羽を一枚失った事で確実に衰えている！！我はレリューの下に帰れるぞ！！・・・・・・ッ！！）

そうアンティラモンは内心で歓喜の叫びを上げながら、確実にコネクタをグランクワガーモンの体に当てる為に構えを取り始めた瞬

間に、気がついてしまった。
　グランクワガーモンの攻撃の直線状の地面の奥深くに自身のパートナーであるレリューが隠れているシェルターが存在している事に。そして同時にこのままではグランクワガーモンの必殺技の影響範囲に入ってしまっている事も

（しまった！！！クソッ！！寄りにも寄ってこの場所に来ていたのか！！不味い！！奴の必殺技は確実に広範囲に関係の技！このままではレリューが！！如何すれば！？）

　アンティラモンは選択を迫られた。
　このまま進めば確実にグランクワガーモンを倒せる。しかし、その為には一度グランクワガーモンが放とうとしている必殺技を完全に避ける必要が存在する。スピードが落ちているグランクワガーモンの攻撃を避ける事は、高い身体能力と『気』を操る事が出来るアンティラモンならば可能だ。だが、その代償として自身のパートナーが存在しているシェルターが崩壊してしまう可能性が存在している。
　それ故にアンティラモンは迷ってしまうが、すぐにその迷いを振り払い、突如として後方に向かって無防備状態のまま飛び跳ねる。

ーーービュン！！

「ギシャァァァァァァァァァァァァッ！！！！！！」

ーーーブーン！！

　完全に無防備な隙を出してしまったアンティラモンに向かって、グランクワガーモンは残っている三枚の羽を全力で羽ばたかせながら突進を行い、自身の二本のハサミをアンティラモンの体に押し当

て、空間ごとアンティラモンの体を切り裂く。

「ディメンジョンシザーーーッ！！！！」

ーーーブザァァァァァァァン！！

「ガァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

ーーーバタン！！

空間ごと体を切り裂かれたアンティラモンは苦痛の叫びを上げると共に地面へと倒れ伏し、体をデータ粒子へと変化させ始めた。

それを上空で目撃したグランクワガーモンは、歓喜の咆哮を上げながら上空を凄まじいスピードで移動を行い始め、廃墟と化した首都を後にして次の都市へと全速力で向かっていた。

そしてある程度、グランクワガーモンが首都から離れると共に、地面に倒れ伏していたアンティラモンの腕が僅かに動き、顔を上げ始める。

「・・・・・グウッ！！・・・・・・フフフフフフフッ・・・・・これは助からんな・・・・・今は何とか動けるが・・・・・もうすぐ消滅するか・・・・」

アンティラモンはグランクワガーモンにやられた傷を目にすると、自身が助からない事を確信した。

今はまだ、アンティラモンが待っている回復技の『メディテーションキュア』を常時連続で発動させる事で生き長らえているが、空間ごと切り裂かれた傷が治る筈も無く、アンティラモンはもはや助からない状態に成っていた。

しかし、それにアンティラモンは気がついていながらも無理やり立ち上がり、何処かへと足を進めていく。

（・・・・・レリュー・・・・お前との生きた日々は本当に・・・・・・・素晴らしい日々だった）

瓦礫と化した都市の中をアンティラモンは傷口から徐々にデータ粒子に変化しながらも迷わずに足を進め続ける。

（・・・・・約束は・・・・・護れそうに無いな・・・・・・しかし、後悔は全く無い・・・・・・お前は悲しむだろうがな）

アンティラモンはシェルターの入り口が在る場所へと辿り着くと、近くに存在している建物の瓦礫に掴み、残された最後の力を振り絞り自身よりも巨大な瓦礫を持ち上げる。

「オォォォォォォォーーーーーー！！！！」

ーーーグググウッ！！！

ーーードゴオン！！！

アンティラモンは迷わずに持ち上げていた瓦礫をシェルターの入り口へと下ろし、完全にシェルターの入り口を瓦礫によって隠した。

それを確認したアンティラモンは安堵したのか全身から一気に力を脱力させ、瓦礫に寄り掛かり始めた。

ーーードサッ！

「・・・・・楽しかった・・・・・・本当に・・・・・楽しい日々

だった・・・・・レリュー・・・・・どうか君に・・・・・幸福が舞い降りる事を・・・・・ねが・・・・・って・・・・」

ーーーパサッ！

全ての言葉を言い終わる前に、アンティラモンの体から完全に力が抜け、一気にアンティラモンの体はデータ粒子へと変化し、後には瓦礫の中に埋もれるデジタマだけが残されたのだった。

そして時は現在に戻り、レリューから第二十管理世界で管理局が行っていた行動を聞いた太一達は、全員が怒りに満ち溢れた表情をしながら顔を見合わせていた。

「クソッ！！やっぱり管理局の連中のせいかよ！！俺達の世界でのデジタルワールドでの事と言い、この世界の事での事と言い！！！！マトモな奴は管理局にいないのかよ！！」

「待って、今の言葉はどういう意味だ？何かお前達の世界でも管理局は行ったのか？」

「行ったどころじゃないよ！！管理局は僕達の世界のデジタルワールドでも、デジモン達の虐殺を行ったんだよ！！」

「なっ！？他のデジタルワールドでもだと！？」

アグモンの告げた事実にレリューは驚きに満ちた声を上げ、他の太一、ヒカリ、テイルモン、ゲンナイに確認するように顔を向けると、太一達は悲しげな表情をしながら頷く。

「アグモンの言うとおり、俺達の世界で管理局は確かにデジモンの虐殺を再び行ったんだ・・・・俺達の世界はデジモンと共存の道を歩む事に決めていた世界だった・・・・だけど、その管理局の行動のせいで全部台無しになりかけているんだ・・・・だから、俺達はこの世界や他の管理世界でデジモンの説得を行い続けていたんだ。其処で君に頼みたいんだけど、あのシェルターの先にいる人達に会わせて欲しいんだ。出来れば俺達と一緒にデジモンとの共存を目指して欲しいからな」

「・・・・そうだったのか・・・・・分かった。お前達をシェルターの中に案内しよう・・・・しかし、説得はかなり難しいぞ。私が管理局の行った行動を彼らに伝えた為に、彼らは外の世界の人間にはかなり神経質になっている。失敗すれば確実にお前達は敵と見なされ攻撃されるぞ？」

「此処で退く訳にはいかないさ。俺達は出来ればデジモンだけじゃなくて、管理世界の人々も説得したいんだ。だから案内を君に頼みたい」

「・・・・・了解だ。お前の事は何となくだが信用出来そうだ。お前達を必ず案内すると約束しよう」

「宜しく頼むぜ」

レリューと太一は互いに言葉を言いながら握手を交わし合い、未来に向けての行動を取り始めるのだった。

悲しき想い（後書き）

次回予告

生き残っている第二十管理世界の人々の説得を開始する太一達。

しかし、人々の心は太一達の言葉では動かず、太一達と人々の間に溝が生まれ始める。

そんな時に再び首都に姿を現すグランクワガーモン

人々の心が絶望に満ち溢れる中、太一とアグモンはグランクワガーモンとの戦いを開始する。

次回、漆黒の竜人と少女、『心に宿る勇気！！』

勇気を胸に宿す戦士は、絶望に導いた者へと挑む。それが呼ぶのは、希望の光。

心に宿る勇気！！前編（前書き）

明日の昼か夜のどちらかで、キャラクター設定2に、レリューの設定を追加します。

心に宿る勇気！！前編

深い闇。何処まで広がる闇の中を、ヒカリは歩き続けていた。

（此処は？一体何処なの？如何して私はこんな場所に？）

闇の中を歩きながらヒカリは内心で疑問の声を上げた。

しかし、ヒカリの足はまるでヒカリの意思は別に前へと進み続け、闇の奥の中へと真っ直ぐに進み続けていた。

その事にヒカリが僅かに恐怖を覚え始めた瞬間に、ヒカリの前に、ヒカリの姿を模ったような闇の影が姿を現す。

ーーービュン！！

（ッ！！）

（クスクス・・・・・怯えているの？闇が怖いのかしら？そうよね。闇は全てを飲み込む。心も体も、意思さえも飲み込んで、世界から否定される。それこそが闇の本質。貴女はそれを理解している。だから、貴女は闇が怖いんでしょう？）

（・・・・・怖くないよ）

（あら、意外な言葉ね）

ヒカリの答えを耳にした影は、僅かに驚いたような動きを行い、ヒカリの姿を見つめた。

その様子にヒカリは苦笑をしながら口元に手をやり、影に向かって自分の闇に対する考えを話し始める。

（貴女の言うとおり、昔の私は闇が本当に怖かった。闇に怯えて、逃げようと思った事もあったけど、今は闇は怖くないよ。闇の中にも、優しさが在る事を知ったから）

（優しさ？闇にそんなものは無いわ。闇に在るのは全てを飲み込み、己が色に染め上げる力だけ。だからこそ、闇は悪と認識されてしまう。それこそが闇の唯一無二の本質。優しさなど闇には一切存在していないわ）

（違うよ。確かに闇は全てを飲み込んでしまうのかも知れない。だけど、闇も光のように心を落ち着けたり、休ませたりする事も出来る。だから、私はもう闇が怖くない。光と闇は互いに在って、意味が在るものなんだから）

（・・・・・クスクス、ハハハハハハハハハハッ！！！）

ヒカリの言葉に、深い影は一瞬呆然としたように動きが止まってしまったが、突如として哄笑をあげ始めた。

その様子にヒカリが疑問を覚え始めると、深い影はヒカリの形を模るのを止め、背中に闇色の翼を生やし、頭に簪のような物を差して、右手が金色の篭手のような物で覆われた絶世の美女が影の中から姿を現した。

（貴女は！？）

（クスクス、あぁ、本当に貴女は面白いわ。光で在りながら、相反する闇さえも受け入れられる器を持っている。フフフッ、それでこそ、“私の器”に相応しいわ）

（私の器？一体何を言っているの？）

女性の言葉にヒカリは疑問の声を出すが、女性は答えずに綺麗な肌をしている左手でヒカリの頬を優しく撫で始める。

（今から言う事を心の奥で憶えて置きなさい。今、貴女達がいる世界のシェルターの中に隠れている人間どもの説得に成功したら、私は貴女達の味方になって上げる。だけど、失敗した時は、そうね・・・・・癪だけどクソガキのルーチェモンの味方として動き、貴女の心と体を、そしてあの究極体のデジモンを頂くわ）

（ッ！！）

（クスクス、やる気がこれで出るでしょう？期限は三日間。それ以上は私も我慢の限界。精々奪われたく無いのなら頑張りなさい。それじゃあ、また会いましょうね、“私の器”）

ーーーシュウン！！

（ッ！！待って！！貴女は一体誰なの！？）

姿を闇の中へと消していく女性に向かってヒカリは叫び、女性はヒカリに闇の中に姿を隠しながら、自身の名前を名乗る。

（目覚めたら忘れているでしょうけど、私の名前はリリス一七大魔王一色欲のリリスモン。次に会う時を本当に楽しみにしているわね。さようなら）

ーーーブウン！！

リリスモンが声を出すと共に全ては闇に覆われ、ヒカリの体も闇の中へと吸い込まれていった。

「ハッ！！！」

ーーーバサッ！！

ベットの上。艦内に存在する一室のベットの上で眠っていた筈のヒカリは、突如として目を覚まし、掛けていた毛布を床に落としながら部屋の中を見回し始めた。

しかし、部屋の中には自身以外には横に置かれているもう一つの眠っているテイルモンの姿しか見えず、頭を手で押さえる。

「・・・・何で目が覚めたんだろう？・・・・明日は朝早くにシェルターの中に行くんだから、もう少し寝て置こうっと」

ーーーバサッ！

ヒカリは床に落ちていた毛布を拾い上げると、再び自分の体に掛けて目を閉じるのだった。

自身が見たリリスモンとの邂逅の夢の事を思い出す事無く、深い眠りへとヒカリは入っていた。

そして翌日の朝。

地上に存在しているシェルターの入り口の前にはヒカリ、テイルモン、太一、アグモン、ゲンナイ、ナイトモン、そして案内役とし

てデジタマを腕の中に抱えたレリューが立っていた。
そしてナイトモンは、シェルターの入り口を護るように入り口の横に立ちながら、太一達に声を掛ける。
「では、私はこの場の警護を行っていましょう。何時また、例の究極体のデジモンと、フライモンやドクグモン達がやって来るか分からないのですから」
「あぁ、一応、サンダーバーモン達に辺りを見回って貰っているけど。もしもの可能性が在るし、頼んだぞ、ナイトモン」
「了解です、太一殿」
ナイトモンは太一の言葉に答えながら、辺りの警戒を行い始めた。
それを確認した太一は頷くと、シェルターの入り口の前で待っているレリューに声を掛ける。
「それじゃあ、シェルターの中で一番偉い人の所への案内を頼むぜ」
「分かっている・・・・・だが、昨日も言ったが、シェルター内部にいる人々には警戒して置くんだな。デジモンにしてもそうだが、内部の人々は外の世界の人間にはかなりの神経質になっている」
「フム・・・・・昨日も思ったが、やはり管理局の行いのせいかね？」
「そうだ。私はアンティラモンの行動のおかげで彼らには受け入れられているが、お前達に関しては別であろう。私が一緒に行くから行き成り攻撃される事は無いだろうが、警戒だけはして置いた方が良いぞ」

「分かった。ありがとな、レリュー」

「フッ、気にするな。アンティラモンのデジタマを見つけてくれた礼だ」

太一のお礼の言葉に対して、レリューは微笑をしながら答えると、太一達と一緒にシェルター内部に入って行く。

そしてシェルター内部の通路を進み続けていると、昨日、太一とアグモンがレリューと出会った場所に辿り着き、レリューが頑丈な扉の横に置かれている機械を弄り始め、太一は感心したようにレリューの姿を見つめる。

「へェ〜、本当に君みたいな子供が、そんな難しそうな機械を弄れるんだな」

「兄さん、機械関係は苦手だからね」

「うるさいぞ、ヒカリ」

ーーービビーー！！

『ん？』

突如として響いたエラー音に太一達はゆっくりとレリューの方に顔を向けて見ると、体中から冷や汗を流して、僅かに目尻に涙を浮かべているレリューの姿が存在していた。

その様子に太一達は僅かに嫌な予感に襲われながら、レリューが声を出すのを待っていると、レリューはゆっくりと口を開け始める。

「パッ」

『パッ？』

「外に出る時に、係りの者に扉を開ける為のパスワードを聞き忘れてしまっていた」

ーーードガシャアアン！！！

「すまない！！本当にすまない！！」

床に倒れてしまっている太一達に向かって、レリューは深く頭を下げながら謝った。

扉が開かなければ、中にいる人々の説得も出来ない。その事に気がついた太一達は、レリューと共に如何すべきなのかと考え始めると、床に倒れたままだったゲンナイがゆっくりと笑みを浮かべながら立ち上がり、機械の方に足を進める。

「ちょっと失礼するよ」

「待て、この機械は三度間違えたら本当に内側からしか開けられなくなるのだぞ。不用意にいじ…」

「まぁ、此処はゲンナイさんに任せようぜ」

「ゲンナイさんなら大丈夫だからね」

「？？」

太一とヒカリの言葉にレリューが訝しげに太一達と、機械の前に

立つゲンナイの後姿を見つめると、ゲンナイはゆっくりと機械の上に手を置き、目を瞑りながら精神を集中させ始める。
そして突如として目を見開くと、ゲンナイは迷わずに機械を操作し、扉を開ける為のパスワードを迷う事無く入力する。

ーーーピピピピッ！！

ーーーブゥン！！

「開いた！一体どうやってパスワードを！？」

ゲンナイの入力したパスワードによって開いた扉を目にしたレリューは、驚きに目を見開きながらゲンナイの後姿を見つめると、ゲンナイはゆっくりとレリューに振り返る。

「なに、これが私の能力でね。私は人間に見えるが、実はデジモンと同じデジタル生命体なのだよ」

「なっ！？」

「驚くだろうけど本当だぜ。まぁ、ゲンナイさんは信頼出来る人だから安心してくれ」

「・・・・分かった。とにかく、シェルターの中に案内する。だが、此処から先は本当に心して置け。此処から先は本当にお前達には危ない場所だからな」

そうレリューは太一達に言葉を告げると、ゆっくりと扉の先に存在している通路の中を進み始め、太一達も意を決してレリューの後を追って行く。

そして誰もが覚悟を決めた顔をして通路の中を進んでいくと、通路の先に光源が見え始め、全員がその光が照らされている場所を通り過ぎると、其処にはドーム状の巨大な空間が存在し、居住区だと思われる家々が所狭しと並び続けていた。

「すげぇーー！！何だこれ！？完全に地下都市みたいじゃないかよ！？」

「地下都市みたいではなく、そのまま地下都市なのだ。元々この世界は一つに纏まるまでは、何度も国同士で戦争を行い続けていたらしいからな」

「なるほど。では、この空間はその戦争の時の避難場所として使われていた場所で、今はシェルターとして使われている訳だね？」

「そのようだ。私も詳しく聞いた訳ではないが、管理局に管理世界に指定された後に、この世界の代表はこの場所を改修してシェルターとして使えるようにしたそうだ」

「どれぐらいの人が今は住んでいるの？」

「・・・・・本来ならば、地上に住んでいた人々全員でも、多少は狭くなるが避難出来るぐらいの人数は入れるそうだが・・・・・今は数百名程度しか生存してはいない」

アグモンの質問に対して、レリューは僅かに顔を悲しげに俯かせながら答え、太一達は顔を暗くする。

地上の都市は如何見ても、一万人以上が暮らしていると思われるような大都市だった。

しかし、今地下に住んでいる人々の数は数百名前後。それだけで

もどれだけの人々が命を失ってしまったのかは、充分過ぎるほどに分かる事実だった。
その事で太一達は僅かに落ち込んでしまうが、すぐに表情を真剣に戻し、レリューに一番偉い人の下に案内して貰うように頼もうとするが、その直前に太一達に向かってデバイスや銃器などが数多く突きつけられる。

ーーーカシャ！！！

「其処のお前達！？何処からやって来た！！」

『ウソッ！！』

突如として現れた二十名以上の武装した人間の姿に、太一達は慌てながら両手を上げて無防備だと示すが、デバイスや銃器類を突きつけている軍人達は警戒を止めずに、太一達に質問を行うとする。
しかし、その直前にレリューが太一達を護るように立ち塞がり、隊長格と思われる四十代前後の男性に向かって叫ぶ。

「待ってくれ！彼らは敵ではないのです！ハクロ隊長！！」

「ッ！！レリュー君！無事だったのか！」

レリューの叫びに男性ーこのシェルター内の護衛隊長ーハクロ・ルディオは慌ててレリューの傍に駆け寄り、怪我は無いのかとレリューの体を見つめ始めた。

「・・・・フゥ～、どうやら怪我は無いようだな。全く、行き成りシェルター内部から消えた時は慌てたのだよ・・・・やはり、彼を探しに行っていたのかい？」

「・・・・・すいません・・・・・その通りです・・・・・だけど、アンティラモンは・・・・・」

ハクロの言葉にレリューは顔を暗くしながら腕の中に抱えていたデジタマを強く抱き締め、ハクロや周りの軍人達はアンティラモンがもういない事を確信し、顔を俯けてしまう。

「・・・・・そうか・・・・・彼は逝ったのだな？」

「・・・・・はい・・・・・太一達の話では・・・・・アンティラモンの姿は何処にも無く、シェルターの入り口を塞いでいた巨大な瓦礫の傍にこのデジタマだけが残されていたそうです」

「ッ！！・・・・・そうか。何故デジモン達が見えている筈のシェルターの入り口から、シェルター内部に入って来れなかったのか疑問だったが、彼が私達の為にシェルターの入り口を隠していてくれたのか・・・・・彼には本当に感謝してもし足りない・・・・・彼があのデジモンを抑えてくれたから、多くの人々が避難する事が出来た・・・・・出来れば、もう一度だけ彼と話がしたかった」

ハクロはレリューの報告に悲しげな声を出しながらも納得し、他の軍人達も悲しげに顔を俯かせる。

ハクロを含めたその場にいる軍人達全員が、最後に見たアンティラモンの姿を覚えている。勝てないと分かりながらも自分のパートナーであるレリューの為に戦いを挑んでいった、アンティラモンの姿は彼らの心の奥底に刻まれていたのだ。

そしてハクロを含めた軍人達は、アンティラモンの死に悲しみを覚えるが、それを何とか心の奥に仕舞い込み、真剣な顔をしながらレリューに質問する。

「レリュー君。彼らは何者だね？デジモンを連れているようだが・・・・・まさか、あの管理局の連中では無いだろうね？」

「いえ、彼らは管理局の人間ではないです」

「だが！地上をサーチャーで監視して者の報告では！彼らは管理局の艦艇から姿を現したと言う報告が届いているのだぞ！？」

「あの艦艇は、彼らが管理局から奪った艦です。彼らは断じて管理局の連中の仲間ではありません・・・寧ろ管理局は完全に敵です。何せ彼らのいた世界は、デジモンとの共存が成功しかけていた世界なんですから」

「何ッ！？デジモンとの共存を！？」

レリューが告げた事実にハクロは叫び、他の軍人達も驚きと困惑に満ちた視線で太一達の姿を見つめるだった。

そしてそれから太一達は、ハクロや軍人達に連行されて、一際頑丈そうな建物の中に連れて行かれ、互いに事情を説明しあっていた。

「・・・・なるほど・・・・やはり、デジモン達とは共存が可能だったのだな・・・・代表の考えは間違ってはいなかった」

「その事で貴方に質問なのですが、此処の今のリーダー貴方なのですか？」

「リーダーか・・・・・・残念ながら私はこのシェルターのリーダーではない」

ゲンナイの質問に対してハクロは首を横に振るいながら否定し、太一、ヒカリ、アグモン、テイルモンはシェルター内部のリーダーについて質問を行うとするが、その前にゲンナイが太一達の方に手をやりながら声を出すのを押さえ、ゲンナイが質問を行う。

「では、此処のリーダーに会わせて欲しい。私達は出来れば、此処の人々に協力をして貰いたい」

「・・・・・お引取り願いたい。我々は既にこのシェルター内部から外に出る気は無いのです」

『ッ！！』

ハクロの告げた事実に、レリューを含めたゲンナイ達は驚きに目を見開くが、ハクロは構わずに自分達の考えを説明し始める。

「私達はもう外の世界には出る気は無いのです。外に出れば、デジモンだけではなく、あの管理局の連中も必ず私達を殺そうとして来るでしょう」

「それは・・・・」

「この世界の人間で在りながら、私達の居場所はこの地下シェルター内部だけなのです。それに私達は貴方がたを、外の世界の人間は信用出来ない！！」

『ッ！！』

迷いの無いハクロの叫びに、ゲンナイ達は驚くが、ハクロは構わ

ずに説明を続ける。

「貴方がたは疑問に思いませんでしたか？この地下には数百名の人々が暮らしている。なのに、此処に来るまで私達以外の人間の姿を見ましたか？」

「いえ、私達が見たのは、貴方達だけです」

「・・・・・此処に生きる人々は全員が絶望しきっています。デジモンの事だけではなく、世界を護っていると思っていた管理局が、今回の戦争の引き金を引き、この世界を滅ぼした元凶！！奴らのせいで全てが終わってしまった！！」

『・・・・・・・・・』

「しかも、恐らくですが、この世界で生き残っている人間は、このシェルター内部の者達だけでしょう。他の都市の地下にもシェルターは多数存在していましたが、その全てとの連絡が全く取れなくなってしまったのです」

「そんな！？」

「本当かよ！？」

ハクロが告げた事実にヒカリと太一は悲鳴のような声を上げ、ハクロの姿を見つめるが、ハクロの悔しそうな顔を見て、真実だと気がつき、アグモン達ともに顔を暗くさせ始める。

その雰囲気に気がついたゲンナイは、話題を変える為にもハクロに真剣な顔を向け、質問を再び行う。

「外に出る気は無いと仰いましたが、それはこのシェルター内部に住んでいる人々全員の総意なのですか？」

「そう取って貰っても構いません。今一度言いますが、私達は絶対にこのシェルターから出る事はありません」

「・・・・・分かりました。今日の所は引き下がりましょう」

『ゲンナイさん！？』

ゲンナイの言葉に、後ろで聞いていた太一達は声を上げるが、ゲンナイは構わずに座っていた椅子を立ち上がり、太一達の方に顔を向ける。

「今日の所は彼らの考えを知れただけで充分な収穫だ。だからこそ、今日は下がって彼らに対する対策を練り直そう」

「・・・・確かに、此処はナイトモン達の意見も聞いた方が良いか」

「そうね。今日の所はゲンナイの言葉どおり、下がりましょう」

ゲンナイの出して来た意見に、太一とテイルモンは同意を示し、アグモンも了解したように頷いた。

しかし、ヒカリだけは何故か心の中から焦りが浮かび上がって来て、太一達に悟られないように顔を下に俯ける。

（何で！？何でこんなに私は焦っているの！？ゲンナイさんや兄さんの意見は間違っていないのに！！どうして！？）

（・・・・・アトフツカ・・・ケッカガ・・・タノシミネ）

（ッ！！）

頭の中に聞こえて来た女性の声に、ヒカリは思わず顔を上げて辺りを見回すが、やはり声の主は存在せず、ヒカリの心の中には焦りだけが募っていく。

そのヒカリの焦ったような姿に気がついた太一は、ゆっくりとヒカリの肩に手をやり、安心させるように声を掛ける。

「ヒカリ、アイツの事が心配で焦る気持ちは分かるけど、此処はナイトモン達の意見も聞くべきだぜ。ナイトモン達も俺達の仲間なんだからな」

「・・・・うん。そうだね・・・・・・戻ろうか、兄さん」

太一の言葉にヒカリは何とか心の奥底から湧き上がってくる焦りを何とか治め、ゲンナイ達と共に部屋を出て行った。

それを目撃したレリューも椅子から立ち上がり、ハクロに決意に満ちた顔を向ける。

「ハクロ隊長。私は太一達について行きます。太一達の目指している場所が、死んでしまった代表の目指していた場所であり、私とアンティラモンが本当に辿り着きたい場所だと思いますから」

「・・・・・私に君を止める事は出来ない・・・・だが、どうか命を散らすのだけは止めたまえ。君が死ぬ事など、彼は絶対に赦さないだろうからね」

「分かっています。では、失礼します」

ハクロの言葉に対してレリューは覚悟を決めた声で答えると、デジタマを腕の中に抱えながら太一達の後を追い駆けて行った。
それを確認したハクロは深く椅子に座り込みながら、何処か諦めたような視線で天井に存在している光源を見つめる。
「・・・・レリュー君・・・・・私は君が羨ましいよ・・・・・絶望を何度も味わいながらも、立ち上がれる君は・・・・・本当の騎士だ・・・・・だが、私にはもう希望が見えない・・・・・もう絶望しか私達には見えないんだよ」
そうハクロは全てに疲れ切った声を出しながら、天井の光源を光の無い瞳で見つめ続けるのだった。

第二十管理世界に首都から遠く離れた場所に存在する深い森の中。
その場所には生物の気配が全く存在せず、ただ深い静寂に満ちた静けさだけが存在し続けていた。
しかし、その静寂さに満ちた森の奥深く、その場所だけは多くの木々が薙ぎ倒され、黒い体を持ち、背に“三枚”の羽を供えた二本の鋭いハサミを備えたクワガタの形をした昆虫型デジモン－第二十管理世界を滅ぼしたグランクワガーモンが深い眠りについていた。
グランクワガーモンは第二十管理世界を滅ぼした後に、他の世界に飛び立とうと進化する前に来た時のようにダークタワーが作り上げていたゲートに飛び込もうとしたのだが、究極体のデジモンは通れないように設定されていた為に、他の世界に移動する事が出来ず、深い森の中で深い眠りについていたのだ。
しかし、そんな眠りについているグランクワガーモンの近づく、二つの影が存在し、二つの影はグランクワガーモンに薙ぎ倒されずに済んでいた木の影に身を隠すようにしながら、声を交し合い始め

る。

「コイツがこの世界を滅ぼした究極体だよ。完全に眠ってるみたいだね」

「あぁ、今なら俺達でも倒せそうだな、アルケニモン」

「馬鹿言うんじゃないよ、マミーモン！！究極体を相手に戦う気なんて無いよ！！それよりも、さっさと叩き起こして、首都の方に向かわせるよ！！出来るだけ早く首都に向かわせて、ブラックウォーグレイモンの奴を足止めして置かないと！ルーチェモン様に殺されちまうんだよ！！」

二つの影ーアルケニモンとマミーモンはそれぞれ声を出しながらグランクワーガモンを見つめた。

アルケニモンとマミーモンが、危険なデジモンであるグランクワガーモンに会いに来たのは自分達が逃げる為とは言え、ルーチェモンの計画を知ってしまったブラックを足止めする為だった。

何せルーチェモンが折角考えて秘密裏に行っていた計画を、よりにもよってブラックにばらしてしまったのだから、確実にブラックはそれを阻む為に動く。そうなれば、自ずと計画をブラックにばらしてしまったアルケニモンとマミーモンは、ルーチェモンに殺されてしまう可能性が高い。だからこそ、ブラックが確実に戦うであろう究極体のグランクワガーモンに危険ながらも、会いに来たのだ。

しかし、アルケニモンとマミーモンの知らない事だが、既にブラックは一人で地球へと向かっているので、アルケニモンとマミーモンの行動は完全に無駄足なのだが、アルケニモンとマミーモンは自分達の命の為にもグランクワガーモンに近づき、深い眠りの内からグランクワガーモンを目覚めさせるのだった。

心に宿る勇気！！中編

何処ともしれぬ空間の中。
その場所には深い闇しか存在せず、闇に彩られるだけの世界。
しかし、そのような空間で在りながら、まるでその場所の主だと言うようにただ一人、夢の中でヒカリに語り掛けた絶世の美女ーリリスモンが空間内部に立っていた。

「クスクス、あぁ、楽しい。あのいけ好かなくて、傲慢で、慢心した結果、敗北してデジタマに戻されたクソガキが考えてる計画に乗るよりも、こっちの連中に手を貸した方が本当に楽しそうだわ」

リリスモンは人々の説得に苦労しているヒカリ達に様子を静かに見つめながら、嬉しそうな声を出していた。

「それにしても、まさか、此処まで私と相性が良い人間が存在していたなんて・・・・クスクス、おかげでデジタマの姿のままでも、干渉は出来るし、本当に嬉しい予想外だったわ」

リリスモンが覚醒していた理由は、ヒカリの存在のせいだった。
ヒカリは“光”の紋章に選ばれた人間。その為に光と表意一体の闇にも選ばれる素養を持っていた。しかし、ヒカリは無意識の内にその事に気がついていた為に、ヒカリは闇に恐怖を覚える事で、闇からの干渉から逃れ続けていたのだ。だが、十年前のブラックとの出会いとチンロンモンの言葉で、闇そのものが悪ではない事を知ってしまった為、闇を受け入れる土壌がヒカリの中で出来てしまっていたのだ。
そしてリリスモンはオファニモンと同じ上級天使が堕天したデジモン。

言うなれば、ヒカリと同様にリリスモンも闇と光が関係している存在なのだ。
その為にヒカリとリリスモンの相性は、それこそヒカリの本来のパートナーであるテイルモンと同等クラスの相性を誇ってしまっていた。
話は戻すが、リリスモンは自身に最も近しい存在であるヒカリが近くに現れたおかげで、本来ならばデジタマが孵る筈まで目覚めない意識が目覚め、ヒカリだけには干渉出来ると言う能力を手に入れたのだ。

「だけど、私は勝てない戦いには参戦はしないわ。私に見せてみなさい“私の器”。貴女達が目指している未来を本当に創り上げる気なら、絶望に堕ち切っている人間の数百名程度、立ち上がらせる事ぐらいは出来ないとね。頑張って、私を楽しませてね。フフフッ！ハハハハハハハハハハハハッ！！！」

そうリリスモンは目の前に映っているヒカリ達の姿を見つめながら、闇に彩られている空間内部に哄笑を響かせ続けるのだった。

艦艇の格納庫内部。
その場所には一先ず、ナイトモン達の意見も聞こうとシェルターから戻って来ていた太一達が存在し、仲間と成ってくれたデジモン達に全員に、シェルター内部の人々の意見を説明し終えていた。
その太一達の報告にデジモン達は苦い顔をしながら、それぞれ如何したものかと考え続けていると、デジモン達の中から、ピンク色の体毛を持ち、背中に白い羽を生やし、手に槍を握っている小さな妖精のようなデジモン―ピッコロモンが太一に声を掛けて来る。

ピッコロモン、世代／完全体、属性／データ種、種族／妖精型、必殺技／ピットボム。
別次元のプログラム言語を操り、魔法を自由に操る妖精型デジモン。体は小さいが、特殊な能力で敵の力を封じてしまう。自慢の槍『フェアリーテイル』を常に握っている。必殺技は、コンピューターウィルスの詰まった爆弾を出現させ、相手に向かって放ち大爆発させる『ピットボム』だ。

「タイチ。彼らは完全に無気力に成っているのか？」

「あぁ、ハクロさんの言葉通りなら、シェルター内部の人達は、完全に絶望し切っているらしい」

「ハクロさんからも、そんな感じを受けたよ。彼らは本気でシェルターの中で暮らしていくつもりなんだ」

『・・・・・』

太一とアグモンの報告に、ピッコロモンを含めたデジモン達全員が顔を険しく無言で顔を見合わせた。
無気力と言うのはかなり不味い事なのだ。まだ、ほんの少しでも立ち上がる気持ちが残っているのならば、説得出来る可能性は僅かながらも存在していた。だが、完全に無気力状態だとすれば説得の言葉を掛けても心に届く可能性は殆ど無いと言っていい。
それほどまでに無気力になっている者を説得するのは、困難としか言えない事なのだ。
その考えが浮かんだナイトモンは、ゆっくりと太一達に顔を向ける。

「彼らは必ず連れて行かねばならないのですな？」

「その通りだ。例のこの世界を滅ぼした究極体のデジモンは、他の世界に移動する事無く、首都から数万キロ以上離れた森の奥深くで眠っている。だが、何れは目覚めて必ずまた暴れ出す筈だ。その事とハクロの言っていた情報を考えれば、彼らを此処に残すのは危険すぎる。彼らを助ける為には、この世界に存在している究極体を倒すか、私達と一緒に他の世界に移動するかのどちらかしかないのだ、ナイトモン」

「だけどな、ゲンナイ。そりゃアンタの言う言葉も分かるぜ。だが、この辺りの地下にいる連中どもは、絶望しきっていやがる。そんな連中を連れて行っても、足手纏いにしか成らないぜ」

「サンダーバーモン。君の意見は私も分かるが、此処でこの世界から離れるのは不味い。私達の最終目的は、“人間とデジモンを和解させて、共存の道を進む事だ”。それなのにこの世界の人々を見捨てれば、私達の目指している場所も否定する事になる上に、あの管理局の連中のようにこの世界の人々を見捨てると言う事なってしまうのだぞ」

「・・・・・チィッ！確かにソイツは困るし、あんな屑どもと同じ事をしたってだけで、反吐が出やがる・・・・分かった。俺はお前達の言うとおりに動くぜ」

「私達も同意見です、ゲンナイ殿」

サンダーバーモン、ナイトモン、そして他のデジモン達も一斉に頷き、ゲンナイ達は全員の意見が一致した事を嬉しく思いながら、今後について話し始める。

「とにかく、また明日私達はシェルターの中に入って、何とか彼らのリーダーと接触を試みて見る。レリュー、君はシェルター内部のリーダーが誰なのかを知っているかね？」

「・・・・すまない。私は何とか外に出る方法だけを考え続けていたので、ハクロ隊長達の会合などには参加してはいなかったのだ。だから、誰がシェルター内部のリーダーなのかは分からな・・・・」

「うん？如何したんだよ？」

言葉が途中で止まってしまったレリューの様子に、太一は疑問の声を上げながら質問し、他の者達も疑問の視線をレリューに向け始めると、レリューは何かを思い出したような顔をして太一に顔を向ける。

「そう言えば、一度だけ私の所に女性が尋ねて来た事があった。あの時はアンティラモンの事があって、気がたっていた為に追い返してしまったが、彼女だけは他の連中とは違い、無気力では無かったな」

「なるほど、もしかしたらその人物が彼らのリーダーの可能性が高いのだね？」

「多分だが、無気力な人間同士では何処かで諍いが必ず起きている筈だ。だが、あのシェルター内部では少なくとも私が外に出るまでの間は、諍いが起きた事は無かった。それに戻った時の太一達に対する対応もかなり早かった」

「そう言えばそうね。それにハクロっと言う男の話なら、私達の事はサーチャーと言う物で監視していたようだし、彼らの中にも頑張

ろうとしている者がいると考えるべきよね」

レリューの考えを聞いたテイルモンは、それを補足するように言葉を言い、太一達とデジモン達も考えるような顔をし始める。

そして考えが纏まったのか、ゲンナイは真剣な視線を太一達とデジモン達に向け、自身の考えを説明し始める。

「とにかく、私達が最初に行うべきなのは、彼らのリーダーと思われる女性との接触だな。レリュー？その女性の顔は憶えているかい？」

「曖昧ではあるが憶えてはいる。だが、憶えているのは特徴ぐらいで顔まではハッキリと憶えてはいない」

「フム、では顔を見れば分かるかね？」

「あぁ、相手の顔を見れば、思い出す事は出来ると思う」

「それなら何とかなるな。では、明日またシェルター内部に向かうと言う事で今日は解散としよう。ナイトモン達はシェルターの入り口の警護の続きを頼む」

「了解です、ゲンナイ殿。では、失礼します」

ゲンナイの言葉にナイトモンは頷き、サンダーバーモン達と共に格納庫から出て行った。

それを確認したゲンナイも、ブリッジの方に、太一とアグモンは自分達の訓練を行う為に訓練室へと、そしてヒカリ、テイルモン、レリューは食事を作る為に食堂の方へとそれぞれ向かって行くのだった。

そしてその日の深夜近く。
ヒカリはテイルモンと分かれて、艦艇から外を見る事が出来る広い場所で、椅子に座りながらジュースを飲んでいた。

（何で私はこんなに焦っているの？兄さん達の行動は間違っていないのに、それなのにどうして？）

ヒカリが焦りを覚えているのは、夢の中でのリリスモンの契約との近い会話のせいなのだが、ヒカリはその事を憶えておらず、ただ漠然とした不安だけがずっと襲われ続けていた。
その事でヒカリが焦りと不安に悩み続けていると、通路をゆっくりと歩いて来た、寝巻きを着たレリューがヒカリに声を掛けてくる。

「如何したのだ、ヒカリ？もう深夜に近い時間帯なのだぞ？」

「そう言うレリューちゃんもこんな夜中に如何したの？」

「・・・・ちゃんは止めてくれ・・・・・私が起きているのは・・・・・アンティラモンの事でな」

「アンティラモンの事？」

「あぁ、そうだ」

「悩みがあるのなら、話して見て？デジモンの事なら、少しは手助けできるかもしれないからね」

「・・・・・助かる」

ヒカリの言葉にレリューは頷き、ヒカリの横に座った。
その様子にヒカリは微かに嬉しそうな笑みを浮かべるが、自分からは悩みを聞く事はせずに、レリューが話まで待ち続ける。
そしてレリューはヒカリが向いている方向を一緒に見ながら、ゆっくりと自分の悩みをヒカリに語り出す。

「・・・・質問なのだが・・・・デジモンは死んだらデジタマに戻ってしまうのだな？」

「うん。だけど、それぞれ世界のデジタルワールドで違うみたいだから、必ずデジタマになると限らないみたいなんだ。現に私達の世界では、特殊な状況以外では『はじまりの街』って言う場所にデジタマが現れるからね」

「そうか・・・・・・では・・・・・き・・・・・記憶は如何なのだ？死んだデジモンは、生まれ変わった後でも死ぬ前の記憶を覚えているものなのか？」

「・・・それをずっと悩んでいたんだね？」

「・・・・あぁ、お前達からアンティラモンのデジタマを受け取った時からずっと、それが心配だった・・・・生まれ変わって来るアンティラモンが・・・・・私の事を覚えていないのではないかと・・・・ずっと考えていたんだ」

それがレリューが太一達からデジタマを受け取った時から、ずっと悩み続けていた事だった。
確かにアンティラモンのデジタマはレリューの下に存在している。しかし、新たに生まれて来るデジモンがアンティラモンとしての記憶を継承しているとは限らない。もしかしたら、レリューとの思い

出を忘れていて、ずっと共に歩んで来た筈のアンティラモンに他人のように振舞われてしまう可能性も確かに存在している。レリューにとってそれは恐怖するもの以外の何者でもなかった。
　レリューは確かに九歳の子供とは思えない行動をとってはいるが、それでもレリューはまだ九歳の子供なのだ。今まで頑張って来れたのも、アンティラモンと言う最愛の家族が共に歩んで来てくれたおかげが大きい。だからこそ、その最愛の家族であるアンティラモンに、全てを忘れられて他人として振舞われる事は、レリューにとって夜も眠れないほどに恐怖と不安を覚える事なのだ。
　その事がレリューの言葉と様子で分かったヒカリは、ゆっくりとレリューの肩を優しく抱き締め、自身の知っている事を話し出す。

「・・・・私が知っている事だけど、基本的に死んだデジモンが、デジタマから新たに生まれたら、死ぬ前の記憶を持っている事は無いみたいなの」

「ッ！！・・・で、では、アンティラモンも・・・・記憶が・・・・そ、そんな・・・」

　ヒカリが告げた事実にレリューはヒカリの腕の中で体を震わせ、目尻に涙を浮かばせながら、ヒカリの顔を見つめ始めた。
　その様子に気がついたヒカリは、レリューを安心させるように抱き締めながら、話を続ける。

「でもね。それは私達の世界での事。こっちに在ったデジタルワールドと、私達の世界のデジタルワールドではデジタマの出現の仕方も違うから、もしかしたら記憶を持って生まれて来るかも知れない。それに貴女とアンティラモンには絆が確かに在ったんでしょう？」

「あぁ、私とアンティラモンには確かに絆が在ったと思う」

「思うじゃなくて在ったよ。そうでなくちゃ、アンティラモンは命を賭けてまで、貴女の事を護らなかった。貴女の事が大切だったから命を賭けられたし、貴女も立ち上がる事が出来たんだよ。それにこっちの世界のデジヴァイス―ディーアークは絆を重要視しているデジヴァイスだから、可能性は在ると思う」

「ディーアーク？」

「アッ！え～と、これだよ」

レリューがディーアークの名称を知らない事に気がついたヒカリは、すぐさまポケットの中から自身のピンク色の縁取りのディーアークをレリューに見せた。

ヒカリのディーアークを見たレリューは納得したと言うように頷くと、ヒカリと同様にポケットの中から茶色の縁取りを持ったディーアークを取り出し、ヒカリに確認するように声を掛ける。

「これがディーアークでいいのだな？」

「うん！ディーアークはデジモンと人間の絆が出来た時に現れるデジヴァイス。だから、パートナーのデジモンが死んだら、本来は消えてしまうんだけど、貴女のディーアークは砕けずに残っている。だから、アンティラモンとの絆は消えていなんだよ！」

「そ。それなら！アンティラモンはもしかしたら、私の事を憶えて生まれて来るかも知れないのだな！？」

「可能性は在ると思うよ。まだ、絶対とは言えないけど、可能性は高いと思う」

「・・・・アンティラモン」

ヒカリの言葉を聞いたレリューは大切そうに自身のディーアークを胸の中に抱え、ヒカリはそんなレリューの姿に微笑しながらレリューを優しく抱き締め続ける。

そしてある程度立つと、レリューはヒカリの腕の中から離れ、ヒカリに頭を下げる。

「ありがとう。ヒカリのおかげで安心する事が出来た。本当にありがとう」

「気にしないで良いよ。私もレリューちゃんが元気になってくれて嬉しいから」

「ちゃんは止めてくれ・・・・・・それにしても、昨日も思った事だが・・・・ヒカリと太一は本当に兄妹なのだな・・・・少しだけ羨ましい」

「レリューちゃんにも兄妹だいが居るの？」

「あぁ・・・・・血の繋がった姉と、血の繋がらない兄がな・・・・・・だが、私は姉と義兄が嫌いなのだ」

「如何して？」

「・・・・・私の実家は・・・・・ヒカリが知っているかどうかは知らないが・・・・・ベルカ自治区と言う言葉に聞き覚えが在るか？」

「ベルカ自治区ッ！！」

レリューが告げた言葉にヒカリは声を上げながら、レリューの顔を見つめた。

ベルカ自治区。その場所はレリューと分かり合う前に話に出ていた場所であり、ヒカリ達にとってはもしかしたら敵となるかも知れない狂信者達が潜んでいる地。

その場所の事を話し始めたレリューに、僅かにヒカリは内心で警戒を憶えてしまうが、レリューはそれに気がつかずに、ヒカリがベルカ自治区の事を知っていると思いながら話の続きを話し始める。

「私の実家は、そのベルカ自治区でも有数の家でな。まぁ、そのおかげで聖王教会と言う組織の中でもかなりの力を持っている。その上、姉は教会の騎士団の所属している上に、特殊なレアスキルの持ち主だ。義兄にしても、同じように特殊な能力を持っていて・・・・・ヒカリ達からすれば赦せない事だろうが・・・・・管理局に属している」

「管理局に！？それじゃあ、貴女がアンティラモンに関わっていると通報したのは、そのお姉さんとお義兄さんなの？」

「・・・・・・正確に言えば姉だ・・・・・姉は管理局と聖王教会の関係を修繕しようと動いていた女だ・・・・だから、私とアンティラモンが一緒にいる事を家の中では一番に嫌っていた・・・・その上、私は他の騎士連中からは、“家の残りカスから生まれた子供”。“騎士を名乗る資格も無い出来損ない”などと呼ばれていたからな。優秀過ぎた姉と義兄には言えないから、私に陰口を言い続けていたと言う事も在って・・・・姉は私を助けようと動いたみたいだが・・・・・私からすればありがた迷惑以外の何ものでもなかった・・・・・私にとっては騎士連中の陰口よりもアンティラモンと

の関係を失う事の方が、赦しがたい裏切りだった！」

「だけど、お姉さんはレリューちゃんを助けようとして動いたんでしょう？」

「ハッ！確かにそうかも知れないが・・・・・私は、家から自立して離れていた義兄は別だったが、何度も姉や両親に声を掛けた・・・・だが、姉も両親も・・・・・『教会の騎士団が騎士達がそのような事を言う筈は無い。貴女の勘違いでしょう』などと言って、私の言葉を黙殺していたんだ。それなのに、アンティラモンと関わって、私の身辺を調べ始めて、本当の事だと分かった瞬間に手の平を返したように姉と両親は、私を助ける為だと言って、アンティラモンと離れ離れにしようとして来た。ふざけるなと本気で思った！！今更何を言うんだと、姉と両親に喚き散らして・・・・家の家宝だとか抜かしていた『グラムサイブ』を奪って家を出て行ってやった！！家の恥だとからと言う理由で、管理局の連中には通報されなかったようだが、騎士団の連中は何度も現れて私とアンティラモンを殺そうとして来た！！だから、私は姉も義兄も両親も、アンティラモンに関わる前の全てが嫌いだ！！」

「レリューちゃん・・・・・」

「ッ！！・・・・・すまない・・・・・感情的になってしまっていた・・・・・昔の事になるとどうしても感情が抑えられないんだ」

「気にしなくていいよ。だけど、本当に今の気持ちがレリューちゃんの想いなのかな？」

「・・・・・少なくとも、今の気持ちに嘘偽りは無い・・・・・明日の事もあるから、失礼させて貰うぞ」

「あっ！レリューちゃん！！」

突如として通路の奥へと走っていたレリューの背にヒカリは声を掛けるが、レリューは止まらずに通路の奥へと消えて行った。

その後姿をヒカリは悲しげに見つめるが、今のレリューに声を掛けても心を救う事は出来ないと思い、自身の部屋のある方向に歩き始める。

（今のレリューちゃんは、心の奥底で泣き続けている。如何したら、レリューちゃんの心を助けられるんだろう？）

（・・・・フフフフフッ・・・・ソンナコトヲ・・・・・カンガエテル・・・・ヒマハ・・・アナタニハ・・・・ナイノヨ・・・・アトフツカ・・・・シカ、ジカンハ・・・・ナイノダカラネ）

「ッ！！！」

昼間の時のように頭の中に響いて来た女性の声に、ヒカリは通路の中を見回すが、やはり自身以外の姿は存在せず、無意識に悩むように頭を手で押さえる。

「・・・・本当に如何したんだろう、私？此処の所、幻聴をよく耳にするし・・・・部屋に戻って寝よう」

そうヒカリは呟きながら部屋へと戻って行くが、気がついていなかった。

自身の足元に存在する影が、闇色の翼を生やしたリリスモンの影に変貌している事に。

翌日の朝十時ごろ。
昨日と同じようにシェルター内部へと入った太一達は、シェルターのリーダーだと思われる人物を捜索する為にシェルター内部の人々や軍人達に聞き込みを行ったのだが、その成果は芳しくなかった。
何故ならばシェルター内部の人々や軍人達は、外の世界の人間を一切信用出来なくなっている上に、デジモンと言う種族にも恐怖を持ってしまっている。その為に、外の世界の人間である上に、アグモンやテイルモンを連れている太一やヒカリの事を如何しても信用する事が出来ないのだ。
彼らにしても恩人であるアンティラモンの行動で、デジモンそのものが悪だとは思ってはいない（管理局は完全に悪認定）が、それでもデジモンに対しては恐怖を持ってしまっている。だからこそ、どうしても恐怖心が先に出てしまう為に、太一達やアグモン、テイルモンが声を掛けると警戒して、最終的には逃げ出してしまうと言う状況が多発してしまっている。

「ハァ～、俺やアグモンは完全に成果ゼロだ。そっちは如何なんだ、ヒカリ、テイルモン？」

「ゴメン・・・・私とテイルモンも同じだよ」

「近寄っただけで警戒されて、話をするどころか、声も掛ける事が出来ないわ」

「となれば」

ヒカリとテイルモンの報告に、太一は難しい顔をしながら残っているレリューに顔を向けるが、レリューも無念そうに顔を下に俯け

てしまう。

「残念だが、私も駄目だった。既に私が太一達の仲間に成った事は知れ渡っているらしい。太一達ほどではないが、かなり警戒されているのは間違いない」

「そうか・・・・・困ったな。どうやったら、このシェルター内のリーダーに会えるんだ？」

「地道に探すしかないよ、太一。無理やり聞き出したりしたら、それだけで悪印象を持たれちゃうからね」

「だよな～。だけど、出来るだけ急ぎたいの事実なんだよな。例の件もあるし」

「例の件？何か他にも急ぎの用件が在るのか？」

太一の発言にレリューは訝しげな視線を太一に向けながら質問した。

既にレリューは太一達がどのような行動を行って来たのかは、大抵の事は聞いている。もちろん、漆黒の竜人ーブラックの事は秘密にして在る。如何にレリューが信用出来る人物とは言え、ブラックは管理世界の人々から恐怖の存在として語られている。だからこそ、ブラックに対してどのような先入観をレリューが持っているのか分かるまでは、ブラックの事はレリューに秘密にする事にしていたのだ。

話は戻すが、大抵の事はレリューには既に全て説明したのだが、例の件ー聖王教会に関す件だけはレリューと会う前に発覚した件だったので、説明してはいなかった。

その事を思い出した太一は、レリューの方に真剣に向き直り、話

し始める。

「実は・・・・・聖王って言う偉人を知っているか？」

「聖王だと！？」

「その様子だと知っているみたいだな。実は、その聖王の血を引く子供を聖王教会の過激派が狙っているって言う情報が入ったんだ」

「なっ！？馬鹿な！！聖王家はとうの昔に断絶した家系なのだぞ！？それなのに如何して！？」

「其処までは俺達も詳しくは知らないんだけど。とにかく、その聖王の血を引く子供を聖王教会の過激派が狙っていているらしいんだ。しかも、その子供が居る場所はこっちの管理外世界の地球らしくてな。そんな場所に武装した連中が乗り込んで来たら、如何なると思う？」

「・・・・ロクでもない事しか思い浮かばんな・・・・私も聖王教会の連中は知ってはいるが、確かに過激派連中は最悪な連中だ。自分達の行いが騎士として正しいと思っている連中で、その為なら何でもするだろうな。それこそ戦争でも行うぐらいに」

太一の質問に対してレリューは苦々しげな声で答えた。

嘗てレリューがベルカ自治区にいた時に、レリューに嫌がらせなどを行って来た連中の多くが過激派に属する騎士達だった。だからこそ、レリューは幼いながらも聖王教会内部に存在する闇に気がつき、尚更に教会の人間とは関わりたく無いと言う思いを抱いているのだ。

「連中に常識を求めるのは馬鹿がする事だ。本当に聖王の血を引く子供が存在しているのなら、それこそ何が何でも手に入れようとするはずだ。無関係な人間を殺す事も平然と行うだろうな」

「やっぱりそうか。本気で不味いぞ。戦争どころの騒ぎどころか、関係の無い人々まで巻き込んじまったら、地球は本格的に戦争状態に成っちまう。だから、出来るだけ早く地球に向かいたいんだ」

「なるほど・・・・・だが、焦っても仕方がないのは事実だ。とにかく、もう一度手分けして情報収集を行うのが最良の選択だろう」

「あぁ、確かにそれしかないな。よし、だったら一時間後にもう一度この場所に集まる。それで良いな？」

太一の質問に対してヒカリ達は無言で頷き、それぞれもう一度シェルター内部の中を捜索し始めようとした瞬間。

「その必要は在りませんよ。外の世界の方々」

『ッ！！』

聞こえて来た澄んだ女性の声に太一達は足を止め、声の聞こえて来た道の方を見てみると、白銀の髪に、白い透き通ったような肌をして、鳶色の瞳を持った二十代後半と思われるスタイルが整った女性が太一達の方に向かって歩いて来ていた。

その女性の瞳に宿る光に気がついた太一は、彼女こそがシェルター内のリーダーだと確信し、女性の言葉を待っていると、女性は太一達の前で立ち止まり深く頭を下げる。

「始めまして、私の名前はスレイ・ティール。一応、このシェルタ

ー内部のリーダー役を担っている人物です」

「ティール？・・・・もしや！！貴女は代表の！？」

「えぇ、実の娘です。詳しい説明をしたいので、ついて来て貰ってもいいでしょうか？アッ！もちろん、デジモン方々もご一緒で良いですよ」

「分かった。此処はアンタについて行かせて貰う」

「では、此方にどうぞ」

太一の言葉にスレイは嬉しそうな声を出しながら、太一達の背を向け歩き出し、太一達はスレイの後を警戒しながら後をついて行くのだった。

破壊し尽くされた森の中。その場所はグランクワーガモンが眠っていた場所なのだが、既にグランクワガーモンの姿は何処にも存在していなかった。

グランクワガーモンを目覚めさせる事に成功したアルケニモンとマミーモンは、ブラック達の情報をルーチェモンに知らせようと、破壊された森の中で通信を行っていた。

『へェ～、あの究極体が戻っていたんだ。ちょっと予想外だったな。戻るのはもう少し後になると思っていたんだけどね。で、彼らはその世界に生き残っている人間どもと一緒に行動しているの？』

「はい、ブラックウォーグレイモンの奴とあの世界の選ばれし者達

は、この世界の首都の地下で生き残っていた人間どもの説得に集中しているようです」

「だけどご安心ください。現在、この世界に居た究極体のグランクワガーモンとこの世界に留まっていたデジモン達が一斉に首都を目指していて、総攻撃を行う手筈になっていますので、連中の命運はもうすぐ尽きますよ」

『フン～～、まぁ、良いけどね・・・・・そうだ、もう少ししたら、僕が直接そっちの世界に行くよ』

『なっ！！ルーチェモン様が！？』

アルケニモンとマミーモンは恐怖と驚愕に満ちた叫びを上げ、通信機を見つめた。

折角ルーチェモンに計画をばらしてしまった事がばれずに済んだと思っていたのに、寄りにも寄って一番知られなくない張本人が直接来ると成ったのだから、アルケニモンとマミーモンの計画は完全に潰れたのと同じだろう。

その事に気がついたアルケニモンは、体をブラックウォーグレイモンと再会した時と同じぐらいに震わせながら、通信機に先に居るであろうルーチェモンに質問する。

「な・・・何故・・・・・ルーチェモン様が・・・・こ・・来られるのですか？」

『リヴァイアモンの脳筋馬鹿が失敗したみたいでね。リリスモンのデジタマの回収に失敗したんだよ。多分、連中が持っていると思うから、僕が直接回収しようと思ってね』

「それだったら・・・・俺達にお任せ下さいよ・・・・・絶対にリリスモン様のデジタマは回収しますから」

『いや、君達には他にやって貰いたい事があるから、僕が回収する。まぁ、着くのは四時間ぐらい先だから、それまでは首都の近くで待機していてくれ。くれぐれも余計な事はしないように。首都を襲っているデジモン達の姿でも眺めているんだね。それじゃ』

ーーーブン！！

「アッ！！お待ち下さい、ルーチェモン様！！もしもし！！もしもし！！」

通信が切れた通信機に向かってアルケニモンは叫ぶが、通信機はウンともスンとも言う事無く、アルケニモンとマミーモンは絶望に染まった顔で向き合う。

「・・・・不味い・・・・このままだと、ルーチェモン様に殺される！！！」

「あぁ、ルーチェモン様は絶対に怒るよな！！そうだ！！アルケニモン！！ルーチェモン様が来る前にあいつ等を倒しちまおうぜ！！そうすれば殺されずに済むぞ！！」

「それだ！！そうとなれば急ぐよ、マミーモン！！ルーチェモン様が来るまで、あと四時間！！それまでに絶対に連中を殺して、リリスモン様のデジタマを回収するよ！！」

「応よッ！！！」

アルケニモンの言葉にマミーモンは頷き、二人はすぐさま森の中を全速力で駆け出し、首都へと急ぐのだった。

グランクワガーモン&デジモン軍団：首都到着まで後、二時間

ルーチェモン降臨まで後、四時間

？？？覚醒まで後、もう少し。

心に宿る勇気！！後編、上（前書き）

今回、新作のクロスウォーズの力も出ますが、あくまで力だけなので、合体は絶対に行いません！

あくまで、デジモンの強化だけが力です。

心に宿る勇気！！後編、上

廃墟と化した首都の外れの上空に浮かんでいる艦艇ブリッジ内部。
太一達とは別の行動をとっていたゲンナイは、仲間であるナノモンや他の機械系デジモン達と共に艦艇をシェルターの入り口の場所近くから移動させ、首都の外れの方で警戒を行い続けていた。
ゲンナイや太一には、アルケニモンとマミーモンがそう簡単には諦めていないと分かっていた。だからこそ、ゲンナイと太一は話し合った結果、自分達の住居であり移動手段である艦艇を首都の外れの方に移動させたのだ。何せゲンナイ達の乗っている艦艇は、デジモン達にとって最も赦せない組織の艦。
それが目立つように上空に浮かんでいるのだから、先ず間違いなくデジモン達はシェルターよりも艦艇の方を攻撃して来るであろう。

「しかし、ゲンナイよ？先ず間違いなく例のアルケニモンとマミーモンと言う連中は、本当に何かをして来るのか？」

「あぁ、間違いなく何かしらの行動をする筈だ、ナノモン。アルケニモンとマミーモンはブラックウォーグレイモンの手から生き延びる為とは言え、ルーチェモンの計画の一部をばらしてしまった。其処から考えるに、何かしらの行動は必ず行うのは先ず間違いない」

「なるほど。確かに秘密裏に進めていた計画を、よりにもよってブラックウォーグレイモンの奴にばらしたのじゃから、かなり不味いじゃろうな」

「あぁ、だからこそ何かしかの行動を行う…」

ーーービィィィィィッ！！ビィィィィィッ！！！

『ッ！！』

突如としてブリッジ内部に響き渡った警報音に、ゲンナイとナノモンは思わず座っていた椅子や机から立ち上がり、レーダー管制を行っていた、茶色い色合いに鉄のような体を持ったマシーン型デジモン―ガードロモンの方に顔を向けてみる。

ガードロモン、世代／成熟期、属性／データ種、ウィルス種、種族／マシーン型、必殺技／ディストラクショングレネード
コンピュータのネットワークを守るマシーン型デジモン。“ネットキーパー”のギロモンとのコンビを組めば怖いものなしの鉄壁の防御性能をもっている。しかし悪質なハッカーが、正義の集団”ウィルスバスターズ”から身を守るために利用することもある。必殺技は、縄張りに入ってきた敵をどこまでも追いかけるミサイルを発射する『ディストラクショングレネード』だ。

「ガードロモン！！状況を知らせてくれ！！」

「はい！！・・・・・ッ！！大変です！！この世界に残っていたデジモン―凡そ百体、及び究極体のデジモン―グランクワガーモンが凄いスピードで此方に向かっています！！このままだと、後二時間もしないで首都に到着するでしょう！！」

「クッ！！やはり、アルケニモンとマミーモンが動いたか！」

「百体のデジモン達に、究極体が一体か・・・・こりゃ、此方も覚悟しないと不味いぞぃ、ゲンナイ」

「あぁ・・・・最悪の場合は、“足”を失う事も覚悟しないと不味

いだろうな・・・・・とにかく、太一達とナイトモン達に連絡し、デジモン達とグランクワガーモンを迎え撃つ準備を整えよう」

「うむ」

ゲンナイの言葉にナノモンは重々しく頷き、シェルター内部に入っている太一達と、シェルターの入り口の警護を行っているナイトモン達に連絡を取り始めるのだった。

ゲンナイ達がデジモン達の進攻を知る少し前の事。
シェルター内でリーダーと思わしき女性ースレイ・ティールと言う人物の案内で、一際大きな建物内部に入り、その場所で互いの情報を照らし合わせあっていた。

「・・・・そうですか。ハクロさんから一応の話は聞いていましたが、やはりこうして自身の耳で聞くとショックを隠せませんね。管理局の行いが全ての元凶だと聞くのは・・・・そして七大魔王でしたか？」

「はい、七大魔王デジモン。その中でも最強の座に着くルーチェモンと、管理局が保護している人間ー倉田明弘と言う人物が、全ての元凶です」

「管理局もそいつ等に利用されているんだよ。僕達の世界もそのせいで」

「・・・・・・言葉も出ませんが、例えそうだとしても管理局の行いは赦す事は出来ません。連中がこの世界にした事のせいで、一体

どれだけの人々が・・・・・」

『・・・・・』

悲しみと怒りを滲ませたような声を出したスレイの言葉に、太一達も無言で悲しげに顔を俯かせてします。

そして一分ほど経つと、スレイはゆっくりと顔を上げて、太一達に険しい視線を向けながら話を再開する。

「では、話を戻しますが、貴方がたの言うとおり私もこの世界からの脱出の件は同感です」

「それじゃあっ！！」

「ですが、此処の人々は完全に絶望しています。誰も彼もが無気力状態。生き残った軍人達を纏めているハクロさんも完全に絶望しています。例えこの世界から脱出したとしても、私達一管理局の言う所の第二十管理世界の人々を受け入れてくれる世界は、管理世界の何処にも無いでしょう」

ヒカリの喜びの声に対して、スレイは険しい顔のまま現実的な状況を話し、太一達は顔を難しげに歪める。

確かに太一達の言うとおりこのままシェルター内で暮らしていったとしても、何れはデジモン達に見つかり、このシェルター内の人々は確実に死んでしまうだろう。だが、例え外の世界に逃げたとしても、その先に存在する世界の多くは管理局が管理している管理世界。

その場所に全ての真実を知ってしまった第二十管理世界の人々が入り込めば、その瞬間に本局の局員達は一斉に世界に入り込んだ第二十管理世界の人々だけではなく、その入った世界の人々も抹消し

ようと動くだろう。この世界を滅ぼしたように究極体のデジモンを出現させて。だからこそ、シェルター内の人々は本当の意味で絶望してしまっているのだ。自分達の居場所はもう本当に何処にも無いと言う事に。

「私も出来れば生き残っている人々を連れてこの世界から脱出したいです・・・・・ですが、今の私達には力もなければ、希望さえも既に無いのです・・・・・もう、此処でゆっくりと死を待つしか…」

「それは違う！！」

「ッ！！」

突如として叫んだ太一の姿に、スレイは僅かに目を見開きながら太一の姿を見つめると、太一は決意に満ちた声を話し始める。

「確かにもう希望なんて、本当は何処にも無いのかもしれない。だけど、本当の希望って言うのは、待つものじゃないと俺達は思っている」

「ずっと前にですけど、在るデジモンが言っていたんです。『希望はどんな暗闇の中でも決して光を失わないもの』だから、どんな状況でも諦めずに進むこと事態が、“希望”なんだと私達は思っています」

「希望は・・・・・どんな暗闇の中でも決して光を失わないもの・・・・・ですが、例え進んだとしても向かう先には」

「スレイ殿。私は太一達の言うとおりだと思います」

「レリューさん？」

無言で状況を聞いていたレリューの発言に、スレイは訝しげにレリューの姿を見つめると、レリューは頷きゆっくりと話し始める。

「私も家を飛び出した時は不安で堪らなかった。だが、アンティラモンと歩んでいく内に何時の間にか不安は消えていた。確かに今の私達の進む先には、闇しか無いのかも知れない。だが、その先にはきっと希望が存在していると思うのだ。きっとアンティラモンもそう思って、この場所を護ろうとしたのだと思う」

「・・・・私達が希望？」

レリューの言葉にスレイは疑問に満ちた声を上げながら、考えるように顔を俯かせ始めた。

その様子に太一達はスレイの言葉を待とうと、太一達が無言でスレイの顔を見つめ始めた瞬間に、太一のポケットの中には入っていた通信機が震え始める。

ーーーブーン！ブーン！！

「うん？・・・・ゲンナイさんか？」

ポケットの中で震えている通信機に気がついた太一は、ポケットの中から通信機を取り出した。

その様子に気がついた、アグモン、ヒカリ、テイルモン、そしてレリューは、太一が手に持っている通信機を注視し始めると、通信機の先にモニターが出現し、険しい顔をしたゲンナイが映り出す。

ーーーブン！！

『太一！アグモン！ヒカリ！テイルモン！それにレリュー！！すぐに艦に戻ってくれ！！』

「如何したんですか、ゲンナイさん？」

『デジモン達だ！！グランクワガーモンを中心とした百体のデジモン軍団が一斉に首都に向かって来ている！！』

『ッ！！』

ゲンナイの報告に太一達だけではなく、顔を下に俯かせていたスレイも顔を青ざめさせながら体を震わせた。

その様子に気がつきながらも、ゲンナイは太一達に向かって現状の報告を続ける。

『現在のスピードならば後二時間もしないで首都に到着する！！デジモン達を迎え撃つ作戦をこれからナイトモン達と共に考える！！だから、すぐに戻って来てくれ！！』

「分かりました！！行くぞ、アグモン！！ヒカリ！テイルモン！！レリュー！！」

『うん！！』

「分かった！」

太一の言葉にアグモン、ヒカリ、テイルモン、そしてレリューはすぐさま頷き、入り口の方に向かって駆け出そうとする。

しかし、その直前にスレイが慌てて椅子から立ち上がり、太一の

背に向かって叫ぶ。

「待って下さい！！まさか、あの究極体と戦いに行く気なのですか！？」

「あぁ、俺達はグランクワガーモン達を止めに行く。それと安心して良いぜ。俺達が乗って来た管理局の艦艇を囮に使うから、デジモン達は大多数は俺達の後を追ってくるだろうからな。それに万が一の為に何体かの仲間は残していくからさ」

「なっ！？」

太一の告げた言葉に、スレイは大きく口を開けながら太一達の姿を見つめた。

敵のデジモン数は凡そ百体。しかもグランクワガーモンと言う究極体のデジモンまで存在している。にも関わらず、太一は戦いに行くと宣言したばかりか、貴重な戦力まで護衛に残すと告げた。

グランクワガーモンの恐ろしさを十二分に味わったスレイからすれば、信じられない事だったが、太一達からすれば当然の事だった。太一達の望む未来は、“デジモンと人間が共に生きられる共存の世界を創る事”。だからこそ、例え絶望して無気力状態に成っている人々であろうと見捨てるつもりは全く無いのだ。

「俺達がグランクワガーモン達を引き付ける。多分、その間に此処の人々は恐怖で混乱状態になるだろうから、スレイさんはそれを抑えてくれ。絶対にデジモン達には此処を襲わせたりしないからさ」

「・・・・・怖くないのですか、貴方は？・・・・・相手はこの世界を滅ぼしたデジモンなのですよ？・・・・・人間が勝てる相手では・・・・・無いんです」

「それは俺も充分すぎるほどに分かってるさ・・・・だけど、俺はアグモンと一緒に進むって決めたんだ。一緒にデジモンと共存出来る世界も創るって」

「だから、安心してよ。絶対にこの場所は僕達が護ってみせるよ」

「・・・・・」

アグモンの言葉にスレイは複雑そうな顔をしながら顔を俯かせ始めた。

それに気がついた太一は困ったと言うように頭を手でかくが、時間が無い事に気がつき、ヒカリ達と共に急いで艦に戻る為に駆け出して行く。

それに気がつきながらもスレイは無言で顔を俯かせ続けていたが、突如として顔を上げて、近くに置いてあった通信機に手を伸ばし、ハクロに通信を行いだす。

『スレイ！！サーチャーで外を監視していた者から、デジモン達が首都を目指していると報告が！！』

「既に知っています。それよりもハクロ隊長。頼みがあります」

『何？』

決意に満ちたスレイの言葉に、ハクロは通信先から訝しげな声を出すが、スレイは構わずにハクロに用件を伝えるのだった。

首都の外れの上空に浮かぶ艦艇内部の会議室。
その場所にはシェルター内から戻って来た太一達とブリッジにいたゲンナイ、ナノモンが集合し、会議室まで入る事が出来ないナイトモン達は格納庫からモニターで会議に参加し、それぞれ迫り来るデジモン達について考えを纏めていた。

「此方の戦力は太一とアグモン、ヒカリとテイルモン、そしてナイトモン達を含めた二十体のデジモンに、艦が一隻。そして魔導師であるレリューが私達の全ての戦力だ。逆にグランクワガーモンを中心としたデジモン軍団の数は凡そ百体。かなりの苦戦を強いられると思ってくれ」

そうゲンナイが告げると、太一達とナイトモン達は無言で頷き、ゲンナイは話を続ける。

「作戦はこうだ。先ずは艦を出来るだけ目立つように浮上させて、デジモン達の多くを引き付ける。だが、地上型のデジモン達は廃墟と化した首都の中を進んで来るだろう。そうなればシェルターの入り口を発見される可能性が高い。だから、地上にはナイトモン、プレイリモンなどの地上型であり、強力なデジモン達を配置する。良いかね、ナイトモン？」

『了解です、ゲンナイ殿。私達が必ず地下の人々を護って見せます』

ゲンナイの言葉にモニターに映っているナイトモンは了承し、他の地上型のデジモン達も一斉に頷く。　その様子にゲンナイは険しい顔をしながら頷くと、モニターから目を離し、会議室に置かれている椅子の一つに座っているレリューに顔を向ける。

「レリュー。君も地上に残ってナイトモン達と共に行動を共にして

くれ。理由は分かっているね？」

「・・・私では空中を飛び回っているデジモン達の相手が難しいからなのだな？」

「それも在るが、一番の理由はグランクワガーモンだ。奴の必殺技は、ブラックホールを生み出す技と、周囲の空間さえも切り裂く技だ。そんな場所に君の移動速度で入り込めば、即座に死んでしまうだろう。増してや、空中には手で掴む物など全く存在していない。だから、君は地上でナイトモン達と共に行動した方が良いんだ」

「分かった。確かにゲンナイの言うとおりだ・・・出来れば、アンティラモンの仇をこの手で取りたかったが、此処は作戦どおりに動く」

「ウム、それとアンティラモンのデジタマは艦の外に置いておいた方がいい。最悪の場合には、この艦を犠牲にしてでもシェルター内の人々を護られないといけないからね」

「了解した。会議が終わった後に取りに行く」

レリューはゲンナイの言葉に険しい声を出しながら頷いた。

確かにこれから始まる戦いの事を考えるのならば、ゲンナイがレリューに伝えた作戦は全て正しい。アンティラモンと言う強力かつ、絶対に信頼を築いていたパートナーがいたからこそ、レリューは過酷な戦いを乗り越える事が出来ていた。

しかし、今のレリューにはアンティラモンは居ない。その事と自身の実力が分かっているレリューは一応はゲンナイの作戦に頷いたが、フッと疑問が頭の中に浮かび、横の椅子に座っている太一とヒカリに顔を向けてみる。

「ゲンナイ。太一とヒカリは如何するのだ？二人は魔導師ではないから、やはり地上に私と同様に残るのか？」

「いや、太一とヒカリには艦と一緒に空中で戦って貰う」

「何？一体どうやって？」

そうレリューが疑問に思うのも当然だろう。

如何見ても太一とヒカリからは魔力は感じられなし、力が異常に強いと言う風にも見えない。

少なくともレリューは、アグモンとテイルモンさえいなければ太一とヒカリには負けないと判断していた。そしてそれは在る意味では正しい。だが、それこそが太一とヒカリが艦と共に行動する理由だった。

そのレリューの疑問が分かっているのか、ゲンナイ、太一、ヒカリ、アグモン、テイルモン、そして太一達の真の力を知っているナイトモン達は苦笑を浮かべながらレリューの顔を見つめる。

「それについてはもうすぐ分かる。それで作戦の続きだが、最初にヒカリとテイルモンがデジモン軍団の中に飛び込んでくれ。理由は分かっているね？」

「はい」

「任せて。絶対にデジモン達の暴走と少しでも抑えてみせるわ」

「頼りにしてるぜ、ヒカリ、テイルモン」

「頼んだよ」

太一とアグモンはそうヒカリとテイルモンに声を掛け、レリューは疑問に満ちた顔で太一達の姿を見つめるのだった。

グランクワガーモン達が首都の辿り着く十数分前。
艦から離れたレリューはナイトモン達と共にシェルター近くで警護を行うとしたのだが、その前に艦から運んで来たアンティラモンのデジタマをシェルター入り口付近に置こうとしていた。

「アンティラモン。私はこれから戦いに行く。お前が助けてくれた命を無駄には絶対にしない。だから、此処で待っていてくれ」

レリューは言葉と共にデジタマをシェルター内部に存在する頑丈な扉の近くの床に置き、デジタマを一度撫でると迷いなくバリアジャケットを装着しながらシェルターから出て行った。デジタマが動き始めた事に気がつかずに。

そしてシェルターの外に出たレリューは入り口付近に立っていた太一とアグモン、ヒカリとテイルモンに声を掛ける。

「アンティラモンのデジタマはシェルターの中に置いて来た。これでますますこのシェルターを破壊される訳にはいかなくなってしまった」

「そうだな。絶対に護らないといけないな」

「うん！僕達が目指している場所の為にも！」

「絶対に護らないと」

「護り抜いてみせる！」

太一、アグモン、ヒカリ、テイルモンはそれぞれ決意に満ちた声を上げ、近くで話を聞いていたナイトモン達も自分達の重要さを再認識し、決意に満ちた顔で現れるであろうデジモン達の来る方向を睨み始める。

その様子に気がついたレリューも気を引き締めなおし、右手に握っているグラムサイブの刃に目を向けるが、やはり先ほどの作戦会議でも気になっていた事が気になり、太一に質問する。

「太一」

「うん？」

「本当にどうやって、お前とヒカリは戦うんだ？魔導師でも無いお前達が空で戦う方法など、本当に在るのか？」

「そうだな。そろそろ見せるか。デジモンとの絆が本当に絶対に成った時に起きる進化を」

「何だと？」

太一の告げた言葉にレリューは訝しげな声を出すが、太一とヒカリは構わずにそれぞれ自身のディーアークをポケットの中から取り出し、真剣な顔でアグモンとテイルモンに顔を向ける。

アグモンとテイルモンがその様子に無言で頷いた瞬間に、ディーアークから電子音声が響く。

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

『マトリスクエヴォリューション！！』

「アグモン！！進化！！」

「テイルモン！！進化！！」

「なっ！？」

太一とヒカリは電子音声が響くと同時に、自身の体にディーアークを押し当て、体をデータ化させながら太一はアグモンに、ヒカリはテイルモンにと融合して行き、デジコードがアグモンとテイルモンの体を覆っていた。

その様子にレリューが驚愕に限界にまで目を見開きながら、二つのデジコードを見つめていると、太一とアグモンのデジコードの中からは巨大な大剣を抱えて、体を金色の輝く鎧で覆ったデジモン－ビクトリーグレイモンが姿を現し、ヒカリとテイルモンのデジコードからは十枚の金色の翼を背に生やし、体を緑色の鎧で覆い、右手に槍を持った女性型天使デジモン－オファニモンが姿を現す。

「ビクトリーグレイモン！！」

「オファニモン！！！」

「ッ！！人間とデジモンが融合した！！」

目の前で起きた現象が信じられず、レリューは叫びながら思わず目を擦ってしまうが、やはり光景は変わらずにビクトリーグレイモンとオファニモンはゆっくりとレリューに顔を向ける。

「これがディーアークで行えるデジモンと人間の融合進化」
「デジモンと人間の絆が真に繋がった時だけに、ディーアークはこの進化を行わせてくれる。貴女も何時かはきっと辿り着く事が出来るわ。その事を忘れないで」
「それじゃぁ、僕達は行くよ。この場の事を頼んだよ」
ーーービュン！！
ビクトリーグレイモンは言葉を言い終えると共にすぐさま首都の外れの上空で目立つように浮かんでいる艦の方に、オファニモンと共に飛んで行った。
レリューはその後姿を僅かに羨ましげな視線で見つめていたが、すぐに首を横に振るう事で雑念を払い、ナイトモン達の方へと向かい出すのだった。

グランクワガーモン&デジモン達到達時間。
その姿は圧巻としか言えなかった。まるで廃墟と化した首都を囲むように次々とデジモン達は姿を現し、空にはこの前の時にアルケニモンに操られていたフライモンの群れだけではなく、何処と無く恐竜のプテラノドンを思わせるような体を持ち、両翼にミサイルを備えた翼竜型デジモン―プテラノモンの群れも存在し、地上には廃墟と化した瓦礫を蹴散らしながら、額に金属の板を取り付け、何処と無くイノシシを思わせるような赤い皮膚を持った哺乳類型デジモン―ボアモンが凄まじいスピードで駆け続けていた。

プテラノモン、世代／アーマー体、成熟期、属性／データ種、フリー、種族／翼竜型、必殺技／ビークピアス、サイド・ワインダー
古代種のアルマジモンが愛情のデジメンタルで進化した翼竜型デジモン。（現在では通常進化の成熟期デジモンとしても確認されている）翼を持つデジモンの中でも、最も高い高度で飛行することができるデジモンで、高度1万メートル上空からでも、敵を察知して相手を姿を見せずに爆撃することができる。別名“蒼い爆撃機”と呼ばれている恐ろしいデジモン。必殺技は、敵を察知し、遥か上空から垂直落下して鋭い鼻先で相手の貫く『ビークピアス』に、両翼に備えられているミサイルを、相手に撃ち込む『サイド・ワインダー』だ。

ボアモン、世代／アーマー体、成熟期、属性／ワクチン種、データ種、フリー、種族／哺乳類型、必殺技／ノーズブラスター。弾丸アタック
古代種のアルマジモンが勇気のデジメンタルで進化した哺乳類型デジモン。（現在では通常進化の成熟期デジモンとしても確認されている）クロンデジゾイド製の『突撃額当て』で、走ってる時の障害物を破壊していく。また、曲がることができないので、一度走り出したら滅多な事では止まらないと言う習性を持っているぞ。必殺技は、口と鼻から空気を大量に吸い込み、鼻から高熱のブレスを放出する『ノーズブラスター』に、敵に向かって突進する『弾丸アタック』だ。

「・・・・凄まじい光景だな・・・・だが、アレは先行隊に過ぎないのだな？」

「はい、本隊と思われるグランクワガーモン達がこの場所に到達するのは、後十分前後。しかもグランクワガーモンの周りには完全体のデジモンの反応が四体近く存在しています」

艦艇のブリッジ内部でデジモン達の様子をモニターで見ていたゲンナイに、レーダー管制を行っていたガードロモンは更なる情報を告げた。
その情報にゲンナイは顔を険しくし、ゲンナイの近くの椅子の上に乗っていたナノモンも顔を険しくしながら、ゲンナイと目の前のモニターに映っているデジモン達の姿を睨み付ける。

「こりゃあ、本気で艦を捨てる覚悟を決めるべきじゃな。正直艦が無事でいる保障など全くないぞぃ。幾ら艦載兵器にプログラムされていたデジタマ破壊プログラムを消去して、艦載兵器が使えると言え、これだけのデジモンの前では焼け石に水もいい所じゃ」

「あぁ、一応この艦に乗っているのは私達ブリッジメンバーだけとは言え、万が一の場合には脱出の準備が必要だ・・・・ガードロモン、君は脱出艇の準備とリリスモンのデジタマを脱出艇に積んで置いてくれ」

「了解です、ゲンナイさん!!」

ガードロモンはゲンナイの言葉に頷き、ブリッジを出て行った。
それを確認したゲンナイとナノモンは、再びモニターに険しい顔しながら映像を見始める。

「オファニモンがどれだけのデジモン達を止められるのかが鍵の一つだが、それだけでも正直キツイ」

「ウム、せめてグランクワガーモンが理性を持っておったら嬉しかったが、どうみても本能で動くデジモンじゃし、無理じゃな」

「そうだな・・・・・・・攻撃開始！！」

「了解じゃ！！」

ゲンナイの言葉にナノモンはすぐさま応じ、目の前にある艦載兵器の操作コンソールを弄り、デジモン達への攻撃を開始するのだった。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「始まったか」

「そのようだ」

シェルター入り口から少し離れた場所。その場所にはボアモン達の到達を待ち構えているレリューとナイトモン達が瓦礫の中に隠れながら、遠く離れた上空でデジモン達と戦っている艦艇の姿を見つめていた。

最初に作戦通りに艦の護衛を行っていたオファニモンが空に浮かんでいるデジモン達の群れの中に飛び込み、説得の言葉を叫び続け、何体かのデジモン達はオファニモンの言葉に応じ、攻撃の手を止めたが、全てのデジモンが止まる事は無く残った十体のプテラノモンとフライモンの群れは攻撃を継続し、本格的な戦闘が始まったのだ。

その様子を瓦礫の中に隠れながらナイトモン達と共に見ていたレリューはフッと疑問に思い、ナイトモンに向かって質問する。

「しかし、何故何体かのデジモン達は私達の側に回ったのだ？」

「ヒカリ殿とテイルモン殿が進化したオファニモン様の姿は、私達の世界の指導者の方だったお方と同じなのだ。だからこそ、オファニモン様の想いに今更ながら気がつく事が出来るのだ。勿論、ヒカリ殿とテイルモン殿が進化したオファニモン様だからこそなのかも知れんが」

「そうか。だから、ゲンナイは最初にオファニモンを突入させたのか」

ナイトモンに説明にレリューは納得の声を上げ、上空でプテラノモン達とフライモンの群れと戦い続けている艦とオファニモン、ビクトリーグレイモン、そしてサンダーバーモンをリーダーとした味方のデジモン達の様子を窺っていると、突如としてレリューとナイトモンの背後の地面が盛り上がり、プレイリモンが姿を現す。

ーーーポコン！

「フゥ〜、レリュー、言われたとおりにして来たよ」

「うむ、すまないな、プレイリモン」

「しかし、本当にこの様な作戦でボアモンの群れが止まるのですか、レリュー殿？」

「間違いない。私の持つディーアークが示したボアモンの弱点だ。それを利用したこの策なら、少なくともボアモンの足を止めるのだけは成功する。その後は」

「分かっています。成功し次第に、それぞれの瓦礫の中に隠れている仲間達が一斉に攻撃を開始する手筈になっています」

「絶対に成功するよ！レリュー」

「フフフッ、ありがとう、プレイリモン」

レリューはそう笑みを浮かべながらプレイリモンに礼を告げると、再びナイトモンとプレイリモンと共に瓦礫の間から外の様子を窺い始めると、瓦礫を蹴散らしながら走って来るボアモンの姿を目撃する。

ーーードドドドドドドドドドドッッッッ！！！

『ブオォォォォォォォッ！！』

「来た！」

凄まじい勢いで駆けて来るボアモンの姿を目にしたレリューは瓦礫の中で声を上げて、ボアモンの姿を注視し始める。

その間にもボアモンは目の前に存在している瓦礫を破壊しながら先に進み続け、シェルターの入り口を発見すると、更に駆けるスピードを上げてシェルターの中に入り込むとする。

しかし、シェルターの入り口前約五百メートル地点に到達した瞬間。

ーーードン！！ガラガラガラガラガラガラッ！！

『ぶおっ！！??』

「今だッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオン！！！

『オォォォォォォォーーーーーーーーー！！！！！！』

突如として多数のボアモンが足を踏み出した地点の地面が落下し、ボアモン達は出現した巨大な落とし穴の落ちて行く。

それを目撃したレリューが瓦礫の中から叫んだ瞬間に、巨大な落とし穴の周りに存在していた瓦礫が一斉に爆発したように四散し、その中から全身を緑色の皮膚で覆った竜型デジモン－コアドラモン（緑）と、鬼のような面を被り、両手に木刀と木で出来た盾を備えた魔人型デジモン－ヤシャモンが落とし穴に向かって飛び出した。

コアドラモン（緑）、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／竜型、必殺技／グリーンフレアブレス、ジ・シュルネン・ＩＩ、ストライクボマー

純潔と称される竜型デジモン。青い色のコアドラモン（青）とは違い、緑色の鱗で体を覆っている。この緑色の体は、樹齢１００年を超えた森林が多い茂る地でのみ採掘できるといわれる稀少な宝石『グリーンマカライト』によるものとされ、“光るモノ”を食べて収集する癖のある『ドラコモン』がその『グリーンマカライト』を多量に摂取したことで進化したものと考えられている。また体の色以外にも脚力の方が翼よりも発達しており、その体躯から想像できないほどの俊敏性をみせる。必殺技は、緑色に輝く灼熱のブレスを放つ『グリーンフレアブレス』だが、この炎は浸透性が高く、相手のデータを通り抜け、デジコアへ直接ダメージを与える効果を備えている。『ジ・シュルネン・ＩＩ』は、逆鱗”に触れてしまった時、その怒りにより、頭部の角を激しく発光させた後に口からビーム弾を無差別に放つ技に、相手に尻尾を勢いよく振り下ろす『ストライクボマー』だ。

ヤシャモン、世代／成熟期、アーマー体、成熟期、属性／ワクチン種、フリー、種族／魔人型、必殺技／一刀両断、クグツの術
古代種のブイモンが純真デジメンタルで進化した魔人型デジモン。（現在では通常進化の成熟期デジモンとしても確認されている）鬼神のようなパワーの持ち主で、冷静沈着。しかし、弱いものを守るやさしい一面を持っており、秘術を使った超能力も使いこなせる。必殺技は、両手に持っている木刀をクロスさせて相手に向かって衝撃波を放つ『一刀両断』に、怪しい眼差しで見つめ、敵を人形のように操る『クグツの術』だ。

「グリーンフレアブレス！！」

「一刀両断！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオン！！

『ブオォォォォォォォォォォッ！！！』

ドゴオオオオオオオオオオオオオ

「気にするな、君の考えた作戦が有効だったからこそ動いたのだからな」

コアドラモン（緑）とヤシャモンはレリューの感謝の言葉に答えた。

全てはレリューが考えた作戦だった。ゲンナイからの情報で先行している地上のデジモンは、ボアモンの群れだと判明し、レリューはディーアークで調べたボアモンの習性を利用したのだ。

ボアモンの走るスピードは確かに速い。だが、一度走り出したら曲がれない事と止まる事が出来ないと言う習性を持っている。だからこそ、気づかれないようにプレイリモンがボアモンの進攻している方向に地面の中から穴を掘り、ボアモンがその穴に落ちた瞬間にヤシャモンとコアドラモン（緑）が攻撃すると言う作戦を取ったのだ。幸いにもボアモンの群れが進攻して来る方向はシェルターが存在している地面の中と逆方向だったので、作戦は大成功を収める事に成功したのだ。

その事を確認したナイトモンは感心したように頷き、自身の足元に立っているレリューに顔を向ける。

「しかし、君は中々に策を考えるのが旨い。まさか、殆ど一瞬でボアモンの群れを倒せるとは思ってもみなかったぞ。ゲンナイ殿からボアモンの情報を聞いた時には多少は苦戦すると思ったが」

「私はアンティラモンと一緒に長く旅をしていたからな。味方だったのはアンティラモンだけだったから、策を考えるのが上手くなった」

「なるほど、そう言う理由だったか（だが、気になる？何故ボアモンと同じ成熟期デジモンのコアドラモン（緑）とヤシャモンの必殺

技で、アレだけのボアモンの群れを一撃で倒せたのだ？不可解だ）」

ナイトモンはコアドラモン（緑）とヤシャモンの必殺技で、ボアモンの群れの倒せたか気になっていた。

確かに穴の中に落ちたボアモン達には、頭上から降り注ぐ必殺技をかわす術など持ってはいない。だが、必殺技を放ったのは完全体ではなく、ボアモン達と同レベルの成熟期二体。本来ならば一撃でボアモンを倒すのは無理な筈なのだが、現にボアモンの群れは全て倒れた。

その事がナイトモンには不可解に思えたが、今は考えている場合ではないと思い辺りをレリュー達と共に警戒し始めた瞬間。

「全く、ボアモンどもも役に立っちゃしないね」

『ッ！！』

突如として呆れたような女性の声が響き、レリュー達が慌てて辺りを見回してみると、近くの瓦礫に上に座っている男女ーマミーモンとアルケニモンが険しい顔してレリューを睨んでいた。

その姿を確認したナイトモンはすぐさま自身の剣を抜き取り、プレイリモン、コアドラモン（緑）、ヤシャモンもレリューを護るように立ち塞がる。

「貴様ら！！」

「フン、全く困るね。其処のシェルター連中には死んで貰わないといけないのに、まさか、ルーチェモン様が恐れていた存在の一つまで存在していたなんてね」

「本当だぜ。俺達の任務で最も最優先事項だった対象まで見つかる

なんてな」

「何だと！？レリュー殿がルーチェモンが恐れている存在！？」

アルケニモンとマミーモンの言葉に、ナイトモンは困惑した声を上げ、プレイリモン達も困惑に満ちた顔を戸惑っているレリューの顔を見つめた。

レリューにしてもアルケニモンとマミーモンの言葉に意味が分からなかったのだ。

確かにレリューは管理世界では希少としか言えない数しか存在してないデジモンのテイマー。だが、それだけではルーチェモンが恐れるには力不足としか言えない。デジモンをパートナーにしている人間は他にも存在している。にも関わらず、アルケニモンとマミーモンはレリューの存在を恐れている。

その事に気がついたナイトモン達はレリューを護るように構えを取り出し、アルケニモンとマミーモンを睨みつける。

「何故レリュー殿がルーチェモンから恐れられているのかは分からんが、貴様らは此処で切り倒してくれる！！あの塔を作り上げる事が出来る貴様らがいなくなれば、それだけで同胞達の暴走も僅かには収まるからな！！」

「ハッ！笑わせるね！！アンタじゃ、あたし等には勝てないよ！！」

「その通りだぜ」

アルケニモンとマミーモンはナイトモンの叫びに答えると共に立ち上がり、マミーモンは自身の体を変化させ、全身を包帯で覆い、右手に銃ーオベリスクを握りしめた姿に成った。

それを目撃したレリューは驚愕に目を見開き、体を僅かに震わせ

ながらマミーモンの姿を見つめる。
「なっ！？人間がデジモンに！？」
「ヘッ！違うぜ！！この姿の方が俺の真の姿なんだよ！！」
ーーーズキュン！！
「危ない！！」
ーーーバシュン！！
マミーモンが言葉と共に撃ち込んで来た銃弾を、ナイトモンは剣を振るう事で切り裂き、すぐさまマミーモンに向かって突撃し、両手で握った剣を振り下ろす。
「ムン！！」
「おっと！！」
ナイトモンの攻撃をマミーモンは軽やかにかわし、互いに瓦礫の上に立ちながら睨み合いを始める。
その間にプレイリモン、コアドラモン（緑）、ヤシャモンは素早く瓦礫を間を駆け抜けながらアルケニモンに接近し、それぞれ攻撃を放とうとする。
『オォォォォォォォーーーー！！！！！！』
「フッ、馬鹿だね。やっちまいな！！ゴーレモンども！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

『ガアァァァァァァァァァァッ！！』

『なっ！？』

アルケニモンが叫ぶと共に地面が爆発したように四散し、その中から三体のゴーレモンが姿を現した。

そのゴーレモン達の姿に思わずプレイリモン達は動きが止まってしまい、その隙に三体のゴーレモン達は同時にプレイリモン達に向かって右拳を突き出す。

『ガァァァァッ！！』

ーーーーードゴオオオン！！

「ウアッ！！」

「グォッ！！」

「グゥッ！！」

ゴーレモンの拳が直撃したプレイリモン、コアドラモン（緑）、ヤシャモンは苦痛の声を上げて僅かに後方に吹き飛ばされてしまうが、すぐさま空中で体勢を整え、それぞれ険しい視線をゴーレモンに向けながら構えを取り出す。

その様子にアルケニモンは僅かに口元を歪めながら、マミーモンと戦っているナイトモンに、ゴーレモンとの戦闘を開始したプレイリモン達の姿を見つめる。

（フフフッ、これであの子供は無防備になった。上空で戦っている連中は艦の護衛で忙しいし、あの子供は完全に無防備。少なくともルーチェモン様からの命令は叶えられる・・・・って！？あの子供は何処に行ったんだい！？）

アルケニモンは余裕そうな顔でレリューの居た場所に顔を向けてみるが、レリューの姿は何処にも存在せず、慌てて辺りを見回すが、レリューの姿は発見する事が出来ず焦りを覚え始めた瞬間。

ーーーカタッ！

「ハッ！」

ーーービュン！！

アルケニモンの背後から突如として物音が響き、慌てて背後を振り返ってみると、グラムサイブを右手で握ったレリューが無言でアルケニモンにグラムサイブを振り抜く。

ーーーブン！！

「チィッ！！」

完全な背後から奇襲にアルケニモンは僅かに悔しそうな声を出すが、流石は完全体に分類されるデジモンなのか、レリューの攻撃を体に触れさせる事無くかわした。そう体には。

ーーーパサッ！

「ハッ？」

突如として響いた軽い物が大量に落ちるような音に、アルケニモンは思わず声を上げて、地面に落ちている蒼銀色の髪を見つめた。
その見覚えが在り過ぎる髪の毛にアルケニモンは目の前にレリューが居る事も忘れて、自身の背の方に存在している筈の長い髪の毛に手を伸ばしが、手には髪の毛の感触が存在せず、体から冷や汗を流しながら手を上の方に上げてみると、髪の毛の感触は漸く伝わって来た。首の辺りで。

「ウゥゥゥゥゥゥッ！！！小娘！！よくも私の大事な髪の毛を切ってくれたね！！！」

「油断している貴様が悪いのだろうが、それにしても良く似合っているぞ。無様な形で切り落とされた髪型が」

「キィィィィィィッ！！絶対に殺してやる！！！」

アルケニモンはそう怒りと殺意に満ちた叫び声を上げると、マミーモンと同様に自身の体を変化させ始め、クモのような姿をしたデジモンになった。
レリューはアルケニモンの姿に警戒してグラムサイブを構えながら隙を窺うが、そうさせないと言うようにアルケニモンは両手からワイヤーをレリューに向かって放つ。

「スパイダースレッド！！」

ーーーシュウゥゥッ！！

「クッ！！ブースト！！」

ーーービュン！！

レリューは自身に向かって来るスパイダースレッドを、加速魔法を使用する事で避けた。

しかし、レリューが避けた方向にアルケニモンは素早く移動し、レリューの動きを止める。

ーーーギュルッ！！

「何ッ！？」

「ハハハハハハッ！！逃がさないよ！！絶対にその体を切り刻んでやる！！」

「クッ！！」

アルケニモンの叫びを耳にしたレリューはすぐさま、アルケニモンから離れようと連続で加速魔法を使用してアルケニモンから離れようとする。

しかし、アルケニモンはしつこくレリューの後を追い続け、徐々にレリューとの距離は近づいていく。

その事に気がついたナイトモンは、マミーモンと戦うのを中断し、レリューの援護に向かおうとするが、そうはさせないとマミーモンは両手の包帯をナイトモンに向かって伸ばし、ナイトモンの体に巻き付ける。

ーーーガシィィィッ！！

「グゥッ！！」

「ヒャハハハハハハハッ！！アルケニモンの邪魔はさせないぜ！！“ジェネラル”の力を持っているガキには死んで貰わないとな！！」

「“ジェネラル”！？一体何を言って！？」

「おっと、此処から先は秘密だ！！テメエはさっさとくたばりな！！」

ーーーズガガガガガガガガガッ！！

「グアァァァァッ！！」

マミーモンは叫ぶと共にオベリスクをナイトモンに向かって連射し、動きを封じられているナイトモンは苦痛の叫びを上げた。

その様子にプレイリモン達はレリューを助けに向かおうとするが、ゴーレモン達がそれを阻み、悔しそうな顔をしながらゴーレモン達と戦っていく。

その間にもレリューは何とかアルケニモンの隙を見つけようとするが、空中に飛べば迷う事無くスパイダーズレットをアルケニモンは放ち、地上の瓦礫の間を駆け抜けても、アルケニモンは壁走りなどを使用してレリューの後を追い続け、八方塞がりな状況に追い込まれ始めていた。

「クソッ！！」

「髪の毛の恨み！！絶対に晴らさせてもらうよ！！スパイダースレッド！！」

ーーーギュルルルッ！！ガシッ！！

「しまっ！！」

アルケニモンが再び放ったスパイダースレッドは、今度こそレリューの体に巻きつき、レリューの動きを完全に封じてしまう。
それを確認したアルケニモンは嗜虐的な笑みを口元に浮かべると、ギリギリと徐々にレリューの体に巻きついているワイヤーを締め始める。

ーーーギリギリッ！！

「グゥッ！！」

「ハハハハハハッ！！苦しいかい？だったら泣き叫びな！！髪の毛を切られた恨みだ！！絶対に苦しませてやるよ！！」

「クッ・・・・・・フッ！・・・・・随分と切れ味の悪いワイヤーだな・・・・私のバリアジャケットを切る事さえ出来ないではないか？」

「簡単に殺したら、私の気が済まないからだよ！！！」

ーーーギリギリッ！！

アルケニモンは叫ぶと共にワイヤーを更に引き締め、徐々にレリューのバリアジャケットを切り裂いていく。
その事に僅かにレリューは悔しそうな顔をして、何とかワイヤーから逃れようと右手に握っているグラムサイブの刃をワイヤーに当てようとするが、その前にアルケニモンはレリューの右手に巻き付いているワイヤーだけを勢いよく締める。

ーーーギリッ！！

ーーーブシュゥゥゥゥッ！！

「グウッ！！」

ーーーカランッ！！

レリューの右手を締め付けていたワイヤーは、一瞬の内にバリアジャケットを切り裂いたばかりか、右手の肉に食い込み、レリューは血を流すと共に右手に走った激痛に思わず、グラムサイブを地面に落としてしまった。

その様子にアルケニモンは僅かに嬉しそうな顔をするが、苦痛の声を上げないレリューに不満を思い、ゆっくりとレリューの体に巻き付いているワイヤーを締めながら質問する。

「子供らしくないね。普通なら泣き叫んでも可笑しくないのに？それとも死を覚悟したのかい？」

「・・・・死ぬのは怖いさ・・・・・だが、この程度の苦痛では絶対に叫ばん！！あの時の、アンティラモンに置いて行かれた時に悲しみに比べれば！！この程度は全然苦痛ではない！！」

「ハッ、麗しき絆ってことかい。だけどね。アンタは此処で死ぬんだよ！！」

ーーーギリッ！！！

「ガアッ！！」

アルケニモンは叫ぶとワイヤーを更に引き締め、ワイヤーはレリューの纏っているバリアジャケットを切り裂き、レリューの体に直に食い込んでいく。
それの寄ってレリューの体はワイヤーが食い込んでいる所から血で赤く染まっていき、徐々にレリューの意識は遠のいて行く。

（・・・あぁ、これは助からないかもしれない・・・・・ナイトモン達は動けない・・・・・アンティラモン・・・・・もう一度だけ・・・・・会いた・・・・・かっ・・・）

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

『ッ！！！』

レリューの意識が遠のこうとする直前に、レリューのバリアジャケットの中から電子音声が響き、レリューとアルケニモンが驚愕に目を見開いた瞬間。

ーーードン！！

アルケニモンの背後の突如として巨大な影が着地し、影は血を体から流しているレリューを目にすると、迷わずに怒りに満ちた拳をアルケニモンに向かって振り下ろす。

「マントラチャントッ！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

「ガハァッ！！！」

影の拳を体に食らったアルケニモンは苦痛の叫びを上げながら吹き飛んで行った。
しかし、レリューはアルケニモンが吹き飛んで事に寄って緩んだワイヤーにも気がつかずに、ただ呆然とした表情をして影ー巨大な体を持ち、ウサギのような顔立ちをしたデジモンーレリューのパートナーデジモンーアンティラモンの姿を見つめ続けた。
その事にアンティラモンは僅かに申し訳なさそうな顔をすると、レリューをゆっくりと抱き上げる。

「すまない、レリュー。君を悲しませてしまった・・・・だが、我は約束どおり帰って来たぞ」

「アッ・・・・・ウッ・・・・・グスッ・・・・・ウワァァァァァァァァァァッ!!!」

優しげなアンティラモンの声に、レリューは安心感からか大声でアンティラモンに抱きつきながら泣き始めた。
その様子にアンティラモン申し訳なさそうな顔をするが、レリューを安心させるように抱き締めようとする。だが、その動きは突如として止まり、背後から飛んで来たワイヤーを右手に巻きつける。

ーーーガシィィィィッ!!

「よくもやってくれたね!!」

「それは此方のセリフ。よくも我の居ない間にレリューを傷付けてくれたな。貴様は絶対に赦さん!!」

「ハッ!!笑わせるね!!その右手から切り刻んでやるよ!!」

アルケニモンはそう叫ぶと、アンティラモンの右手に巻き付いているワイヤーをレリューの時とは違い、勢い良く引き締めてアンティラモンの右手を切り刻もうとする。
しかし、アンティラモンの右手に巻き付いているワイヤーは食い込むどころかビクともせず、アルケニモンは焦り始める。

「ど、どうなってんだい！？」

「我の技は、貴様のような何かを放つ技ではなく、自身の肉体の強度を“クロンデジゾイド”並みに強化させる事が出来る技だ。貴様のワイヤーもかなり切れ味だが、我の体を切り裂くほどではなかったな」

「クッ、クロンデジゾイドッ！？じょ。冗談でしょう！？」

「悪いが冗談ではない！！」

ーーードン！！

「ゲェッ！！」

叫ぶと共にアンティラモンは空中に高く飛び上がり、ワイヤーをアンティラモンに巻きつけていたアルケニモンも一緒に上空に上がっていく。
そしてジャンプの最高点に到達した瞬間に、アンティラモンは勢い良く右手に巻き付いているワイヤーを振り回し、アルケニモンをスイングさせる。

「オォォォォォォォォォォ！！！」

ーーーブンブンブン！！

「ウソォォォォォォッ！！」

アルケニモンはアンティラモンに勢い良くスイングされながら悲鳴のような叫びを上げた。

しかし、アンティラモンはアルケニモンを赦さずに振り回し続け、フッと地上の方の目を向けて見ると、離れた所で未だにナイトモンに向かって攻撃を放ち続けているマミーモンを目にし、自身の肩に乗っているレリューに確認するように視線を向け、レリューは無言で頷く。

それを確認したアンティラモンは迷わずに右手に巻き付いていたワイヤーから右手を抜き取り、アルケニモンをマミーモンの方に向かって投げ付ける。

「ハアァァァァァァァァッ！！」

「キャアァァァァァァァァァッ！！」

空を飛ぶ術がないアルケニモンは、アンティラモンに投げ付けられた勢いのままにマミーモンの方に向かって飛んでいった。

「キャァァァァァァァァッ！！」

「ウン？・・・・ゲエェェェェェェッ！！！！」

ーーードゴオオオオオオオオン！！

アルケニモンの悲鳴を耳にしたマミーモンは、ナイトモンにオベリスクを連射するのを止め、ゆっくりと背後を振り向き、アルケニ

モンと激突した。
　それに寄ってマミーモンがナイトモンに巻きつけていた包帯が緩み、ナイトモンはその隙に持っていた剣で包帯を切り裂く。
「フッ！」
ーーーザン！！
ーーードン！！
　ナイトモンが包帯を切り裂き自由になると共に、レリューを肩に乗せたアンティラモンがナイトモンの横に着地した。
「貴殿がレリュー殿の？」
「あぁ、我がレリューのパートナーだ。詳しく状況を聞きたいが、そのような時間は無いようだ。だが、一つだけ聞く。貴様はレリューの敵なのか？」
「私達は敵ではない。復活したばかりの貴殿に信用しろうと言うのは無理であろうが、此処は信じて貰いたい」
「・・・・・・分かった。此処は信じよう。それに今はそれどころではないようだな」
　アンティラモンはそう呟くと共に、遠くの空の方を見始め、ナイトモンとレリューも其方の方を見てみると、グランクワガーモンを中心とした約四十体のデジモンが向かって来ていた。
　その事にナイトモンとレリューが険しい顔をすると、地面に倒れていたアルケニモンとマミーモンが立ち上がり、不敵な笑みをレリ

ュー達に向ける。

「ハハハハハハッ！！あんた等も終わりだね！アレだけの数のデジモンに究極体までいるんだ！！絶対にあんた等は死んだよ！！」

「へへへへへッ！！その通りだな。今なら、その小娘の命で助けてやっても良いぜ！！」

「断る」

「ルーチェモンに味方をする貴様らなどに、命乞いをする気など無い！！」

「お前たちを倒して！！グランクワガーモン達も倒して見せる！！」

「言ってくれるね！！あんた等程度が集まろうと！！絶対に勝てないんだよ！！（後一時間！！ルーチェモン様が来る前にこいつ等とシェルターの中の人間どもを殺さないといけないんだからね！！）

そうアルケニモンは内心で叫ぶと、マミーモンと共にアンティラモン達に突撃し、戦闘を再開するのだった。

ルーチェモン降臨まで後一時間。

？？？覚醒まで、後ほんの僅か。

心に宿る勇気！！後編、下

首都の外れの上空。ゲンナイ達が乗っている艦は、その場所で向かって来るデジモン達と戦い続けていた。
当初はオファニモンの説得により何体かのデジモン達は味方とまでは言えないが、攻撃を止めさせるまでは成功し、残ったデジモン達を相手にオファニモン、ビクトリーグレイモン、サンダーバーモンをリーダーとした仲間のデジモン達、そして艦はずっと戦い続けていた。

『サイドワインダーーー！！』

ーーードドドドドドドドドッ！！

敵として残ったプテラノモン十体は一斉に両翼に備えられているミサイルを艦に向かって発射し、艦を撃ち落そうとする。
しかし、ミサイルの進攻方向にフライモンを相手に取っていた筈のビクトリーグレイモンが素早く移動し、右手に握っていた破砕剣ードラモンブレイカーを振り回し、全てのミサイルを発射したプテラノモン達に向かって跳ね返す。

「ビクトリーーチャーージ！！！」

ーーーガガガガガガガガガガッ！！

『ッ！！』

爆発する事無く全てのミサイルを跳ね返したビクトリーグレイモンの姿に、プテラノモンは思わず動きが止まってしまうが、向かっ

て来るミサイルに気がつき素早くそれぞれ上昇や下降を行った。
しかし、上昇したプテラノモン達の先にはビクトリーグレイモンが、下降したプテラノモン達の前にはサンダーバーモンと青い鱗を持ったコアドラモン（青）が立ち塞がり、それぞれプテラノモン達に向かって攻撃を放つ。

「ドラモンブレイカーー！！！！！」

ーーーブザァァァン！！

『ギエェェェェェッ！！』

「サンダーストーム！！！！」

「ブルーフレアブレス！！！！」

ーーードグオオオオオオオオオン！！

『ギエェェェェェェェッ！！』

ビクトリーグレイモンはドラモンブレイカーで上昇を行ったプテラノモン達を切り裂き、下降していたプテラノモン達はサンダーバーモンとコアドラモン（青）の攻撃によって消滅した。
それと共に出現したデジタマ達を素早くサンダーバーモンとコアドラモン（青）は自身の背に乗せて、僅かな時間の間に地上に降りて行く。
それをビクトリーグレイモンは確認すると、オファニモンのそばに近寄り、遠くから凄まじいスピードで向かって来るグランクワガーモンと、その周りに存在している四体の完全体デジモン達の姿を視界に捉える。

「来た見たいね」

「あぁ、グランクワガーモンの相手は僕がする」

（残りの完全体デジモン達の相手は、オファニモンが頼む）

（うん、分かったよ）

「任せて。絶対に止めて見せるわ！」

ビクトリーグレイモンと融合している太一の言葉に、オファニモンと融合しているヒカリとオファニモンはそれぞれ頷き、自分達の敵の下に急いで向かっていく。

それを確認するとビクトリーグレイモンは、自身の武器であるドラモンブレイカーを両手で握り締め、衝撃波を撒き散らしてながら向かって来ているグランクワガーモンに向かって飛び掛かる。

「ハアァァァァァァァァァッ！！」

「ギシャアァァァァァァァァァッ！！」

ーーーガキィィィィィン！！

ビクトリーグレイモンとグランクワガーモンは同時にぶつかり合い、ドラモンブレイカーとグランクワガーモンのハサミはつばぜり合いを行い始める。

ーーーギリギリッ！！

「オォォォォォォォッ！！」

ーーーガアン！！

「ギエアッ！！」

ビクトリーグレイモンが力強くドラモンブレイカーを振り抜くと共に、グランクワガーモンは僅かに後方へと弾き飛ばされた。

それを目撃した太一とビクトリーグレイモンは、グランクワガーモンの力量を正確に読み取り、油断無く構えながら内心で会話し合う。

（ビクトリーグレイモン。気がついたか？）

（あぁ、気がついているよ、太一。グランクワガーモンは、間違いなく自分と同等の敵と戦った事がない）

（やっぱりそうか）

太一とビクトリーグレイモンは気がついていた。

“グランクワガーモンが自身と同等以上の敵と戦った事が無いと言う事に”

しかし、それは在る意味では当然の事だった。確かにグランクワガーモンは究極体に進化する事が出来たデジモン。だが、例え究極体に進化しようと、敵と戦い続けなければ実力が上がる事は無い。

世界を滅ぼしたデジモンとは言え、それは自分よりも遥かに弱い人々を滅ぼした結果でしかない。

それに比べてビクトリーグレイモンは、自身のよりも遥かに実力が上だったデジモン達と戦い続けていた経験を持っている上に、この世界に来るまでの間、ブラックとの模擬戦と言う名の死闘に近い

行為も行っていた。鍛錬を続けてより高みを目指して来た存在と、敵が存在せずに眠り続けていたデジモンとでは実力に差が生まれるのは当然だろう。
　しかし、それでも油断する事は出来ない。確かに鍛錬を重ねて実力が上がって来ているビクトリーグレイモンだが、相手はそれでも究極体に分類されるデジモン。ビクトリーグレイモンに進化して戦った事がある究極体は、ブラックとオファニモンだけ。だからこそ、絶対に油断だけはする事は出来ない。
　その事が分かっているビクトリーグレイモンは油断無くドラモンブレイカーを構え直し、グランクワガーモンと空中でぶつかり合いを再開する。

ーーーギン！！

ーーーガアン！！

ーーーガキィィィィィィン！！

「オォォォォォォォォーーーーー！！！！」

「ギシャアァァァァァァァァッ！！」

　ビクトリーグレイモンとグランクワガーモンは互いに空中で激突し続けていた、徐々にでは在るがグランクワガーモンのスピードが落ち始めて来た。
　その事に気がついたビクトリーグレイモンはドラモンブレイカーを振るいながらも訝しげな顔をするが、理由に気がついた太一が叫ぶ。

（アレだ！！グランクワーガモンの背を見てみろ！！）

太一がそうビクトリーグレイモンの内で叫ぶと、ビクトリーグレイモンは僅かにグランクワガーモンから離れ、グランクワガーモンの全身を良く見てみると、本来ならば存在しているはずの四枚目の羽がグランクワガーモンの背には存在せず、三枚の羽だけでグランクワガーモンは飛んでいた。

「羽が三枚！？一体どうして！？」

（分からない。だけど、四枚目の羽が無いせいで、長時間の全力飛行が出来ないんだ！チャンスだぞ！！）

「あぁ、分かった！！」

ビクトリーグレイモンは太一の声にすぐさま応じ、両手で握ったドラモンブレイカーを豪快に振り回しながら、グランクワガーモンに突撃し、全力でグランクワガーモンの甲殻に叩きつける。

「オォォォォォォォォォッ！！ドラモンブレイカーーー！！！！！」

ーーードゴオオオオオオン！！

「ギッ！！ギシャァァァァァァァッ！！！」

ドラモンブレイカーを背に食らったグランクワガーモンは苦痛の叫びを上げながら、砕けた甲殻を撒き散らしながら僅かに下降していった。

それを確認したビクトリーグレイモンはすぐさま追撃を行うと、再びドラモンブレイカーを振り上げてグランクワガーモンに向かって突撃しようとするが、その前に体勢を整えなおしたグランクワガ

ーモンは怒りに満ちた視線をビクトリーグレイモンに向けると共に、自身のハサミの間に黒い球体ーブラックホールを出現させ始める。

「ゾーーンブラックホーール！！！！」

ーーーゴォォォォォォォォォーーーー！！！！

「何！？」

（不味い！！）

グランクワガーモンがゾーンブラックホールを発動させるを目にしたビクトリーグレイモンは、すぐさま空中に立ち止まり、ブラックホールに飲み込まれないようにするが、次々とグランクワガーモンと共にやって来たデジモン達がブラックホールの中へと吸い込まれていく。

ーーーゴォォォォォォォォォーーーー！！

『ウワァァァァァァァァァッ！！』

「いけない！！サンダーバモン達は艦の張っているシールドの中にすぐに非難して！！この攻撃は敵味方関係ないわ！！」

「分かった！！行くぞ！！」

次々とブラックホールの中に吸い込まれていくデジモン達の姿を目にしたオファニモンは、慌てて仲間であるサンダーバーモン達に叫び、サンダーバーモン達はすぐさま艦の方に移動しようとするが、ブラックホールの影響からは逃れる事が出来ず、徐々にブラックホ

ールとの距離は近づいて行く。
それに気がついたビクトリーグレイモンとオファニモンは焦りを覚え始め、何とかサンダーバーモン達をブラックホールの影響から逃す方法を考え始める。

「クソッ！！このままじゃ、皆だけじゃだけではなく、他のデジモン達まで！！」

「あぁ、グランクワガーモンには敵も味方も無い。一緒に来たデジモン達まで吸い込んでいる！」

次々とブラックホールの中に飲み込まれていくデジモン達の姿に、ビクトリーグレイモンとオファニモンは悔しそうな叫びを上げた。
既にグランクワガーモンが作り上げているブラックホールに寄って、最初はかなりの数いたデジモン達の数も半数近くに減ってしまっていた。元々本能で動いているデジモンであるグランクワガーモンに仲間意識など存在していない。今のグランクワガーモンが抱いている想いは、“自身の体に傷を負わせたビクトリーグレイモンを倒す事だけだった。
その事が分かっているビクトリーグレイモンは、自身の横に浮かんでいるオファニモンに顔を向ける。

「オファニモン。皆を頼む。奴は僕が倒す」

（だから、艦と皆の事は頼んだぞ！）

「・・・・分かったわ」

（気をつけて、兄さん、ビクトリーグレイモン）

オファニモンとヒカリはそうビクトリーグレイモンに言葉を告げると、サンダーバーモン達と吸い込まれかけている生き残っているデジモン達を助け出そうと動き出す。
それを確認するとビクトリーグレイモンはドラモンブレイカーを真ん中から二つに分離させ、両手に装着させながら大気中のエネルギーを剣の先端に集中させ始める。

「一か八か、ブラックホールに吸い込まれる直前に高エネルギーをブラックホールに撃ち込んで、ブラックホールを相殺する！」

（それしか手は無いな・・・・全く、昔エテモンの奴と戦った時もこんな状態だったな）

「そうだね。だけど、今度は消える訳には絶対にいかない！！」

（アァッ！！絶対に無事に戻って来るぞ！！）

ーーービュン！！

ビクトリーグレイモンと太一は同時に叫び合うと、すぐさま音速を超えるスピードでデジモン達を次々と飲み込んでいくブラックホールに向かって突撃した。
そして向かって行くスピードとブラックホールが吸い込みに寄って、すぐにビクトリーグレイモンはブラックホールの目の前に到着し、溜めていたエネルギーを一気に解放し、剣の先端からブラックホールに向かって発射する。

「トライデント！！ガイアッ！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

！！！

放たれたトライデントガイアは、ブラックホールの中へと向かって行き、大気のエネルギーとブラックホールの吸収力がぶつかり合った瞬間に、巨大な大爆発が起きた。
それに寄って凄まじい煙が空中に充満し。その煙を離れた所で艦と並ぶようにしてオファニモン達が見つめると、煙の中からグランクワガーモンが飛び出して来る。

ーーーブーーン！！

「キシャアァァァァァァァァァッ！！！！」

「クッ！！」

（そんな！？兄さん！ビクトリーグレイモン！！！」

無事な姿で出て来たグランクワガーモンの姿に、オファニモンは悔しそうな声を上げ、ヒカリは悲鳴のような叫びを上げた。
しかし、グランクワガーモンは構わずに自身の体を回転させながら艦に向かって突撃しようとする。

「グランデス…」

「ダブル！！！！」

『ッ！！！』

グランクワガーモンの叫びに覆い被さるように突如として煙の中から叫び声が響き、オファニモン、サンダーバーモン達が驚愕に目

を見開いた瞬間に、煙の中から鎧に僅かに罅が入っている状態に、両手にドラモンブレイカーを装着しているビクトリーグレイモンが飛び出して来た。

「ドラモンブレイカーーー！！！！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオン！！

「ギシャアァァァァァァァァァァッ！！！！！」

再びドラモンブレイカーを背に食らったグランクワガーモンは再び甲殻を砕かれながら苦痛の叫びを上げた。

しかし、今度は先ほどと違い、ビクトリーグレイモンはグランクワガーモンを逃がさないようにする為に、ドラモンブレイカーの刃を甲殻が存在せず、剥き出し成った肉の部分に深く突き刺す。

ーーードスン！！

「ギゲアァァァァァァァァァァッ！！」

「もう逃がさないぞ！これで終わりだ！！」

ドラモンブレイカーを深く突き刺された事で暴れ続けているグランクワガーモンに向かってビクトリーグレイモンは叫ぶと共に、先ほどと同じように大気中のエネルギーを剣の先端に集中させ、ゼロ距離でトライデンガイアをグランクワガーモンに撃ち出す。

「トライデントガイアッ！！！！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ギシャアァァァァァァァァァァァァァッ！！」

背中から撃ち出されたトライデントガイアは、グランクワガーモンの体を完全に撃ち抜き、グランクワガーモンは悲鳴を上げながらデータ粒子に変わり消滅した。

それと共に出現したデジタマを、ビクトリーグレイモンは素早く手の中に抱え、周りで生き残っている敵のデジモン達を睨みつける。

「これ以上の戦闘は無意味だ！！グランクワガーモンは倒れた！！それでもまだ、僕らと戦うのか！？」

ーーーギン！！

ビクトリーグレイモンは威圧するように叫ぶと共に、両手に装着したままのドラモンブレイカーを煌かせ、生き残っていたデジモン達を怯えさせる。

その姿に胸に抱いていた憎しみが恐怖の感情によって塗り潰され、デジモン達は我先に逃げ出して行く。

その様子を地上から見ていたアルケニモンとマミーモンは口をアングリ開けながら、上空に浮かんでいるビクトリーグレイモンの姿を見つめる。

「・・・・な、何であいつ等が究極体に進化出来るんだい？」

「・・・し、知らねぇけどよ・・・・これって不味いんじゃ」

ーーードン！！

『ッ！！』

背後から響いた音にアルケニモンとマミーモンは体を震わせながら、恐る恐る振り向いてみると、レリューを肩に乗せたままのアンティラモンに、ナイトモン、そしてゴーレモン達を倒して来たプレイリモン、ヤシャモン、コアドラモン（緑）が険しい顔をして立っていた。

「此処までだな」

「どうする？降参するのか？」

『グゥッ！！』

脅すようなアンティラモンとレリューの言葉に、アルケニモンとマミーモンは悔しそうな声を上げるが、フッと上空を見てみると、その顔は完全に恐怖へと変わった。

「ゲェエッ！！時間切れだ！！」

「すぐに逃げないと巻き込まれる！！！」

アルケニモンとマミーモンはそう恐怖に染まった叫びを上げると、一目散にアンティラモン達に背を向け、土煙を上げながらアンティラモン達から逃げ出した。

その様子にアンティラモン達が疑問を覚え、アルケニモンとマミーモンが見ていた方向の上空を見てみると、驚愕に目を見開いた。

何故ならばアンティラモン達の視界の先には、太陽を思わせるような十個の光球が十字を現すように空中に存在し、光球は一斉に地上と空に浮かんでいる艦に向かって降り注ぐ。

『グランドクロスッ！！！！！』

ドゴオオオ

「あぁ、何とかな。だが」

「プレイリモン、コアドラモン、ヤシャモン・・・・すまん」

レリューの言葉に答えながらアンティラモンとナイトモンは、自身のすぐ近くに落ちている三つのデジタマの姿に、悲しみに満ちた視線を向けた。

グランドクロスが地上に直撃する直前。プレイリモン、コアドラモン（緑）、ヤシャモンは、レリュー達を庇うように迫り来る光の前に立ち塞がり、自身を犠牲にしてレリュー達を護ったのだ。

その事にレリュー達は悲しげな顔をするが、すぐに表情を真剣に戻し、先ほどの光球を放った者を探そうと辺りを見回そうとするが、その動きはすぐに止まった。

何故ならば探す必要は無かったからだ。嵐のように吹き荒れる風と雷の中で、まるで全てを照らすように光り輝く光球－その中で光で在りながらも凄まじいほどの邪悪さに満ちた八枚の翼を背中に生やした天使－ルーチェモンが空に浮かんでいた。

「さぁ、絶望を始めよう。君達は此処で消えるんだ。フフフフフッ、ハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！！」

ルーチェモンは倒れ伏しているビクトリーグレイモン達を見下ろしながら、邪悪さに満ちた哄笑を上げ続けるのだった。

心に宿る勇気！！後編、下（後書き）

次回予告

遂に姿を見せたルーチェモン。

真の敵を前に、ビクトリーグレイモンとオファニモンは傷付きながら立ち上がり、ルーチェモンとの戦闘を開始する。

しかし、ルーチェモンの強大な力の前に、一つの光が消えかける。

その時に立ち上がる者達とは？

次回、漆黒の竜人と少女、『暗黒の女神の覚醒！！』

光は闇を受け入れ、闇は光を受け入れる。

暗黒の女神の覚醒！！前編

破壊し尽くされた首都の上空。
その場所は凄まじいほどの嵐と雷が吹き荒れ、例え魔導師であろうと生き残る事が難しい場所に変貌していた。
そしてその嵐の中心には一つの光り輝く光球が存在し、その内部には背中に八枚の翼を生やした天使ールーチェモンが邪悪さに満ちた笑みを浮かべながら存在していた。
一見すればかなり幻想的な光景だろう。
“吹き荒れる嵐などものともせずに存在している光球の中に存在する天使”。
宗教家など人間が見れば、思わず拝んでしまうほどの光景としか言えないものだ。
中心に存在している天使が、邪悪さに満ちた笑みを浮かべていなければ。
そしてルーチェモンは地上に倒れ伏しているビクトリーグレイモン、オファニモンの姿を見ながら一番高い瓦礫の上に降り立ち、ゆっくりと残忍な笑みを浮かべながらビクトリーグレイモン達に声を掛ける。
「始めまして、選ばれし者達よ。僕の名はルーチェモン。君達の敵さ」
ーーーガラッ！
「・・・・・クッ！！・・・・・お前が！」
「・・・・・ルーチェモンッ！！」

ビクトリーグレイモンとオファニモンは自身の上に乗っていた瓦礫を退かし、険しい視線をルーチェモンに向けながら怒りに満ちた声で叫んだ。
その様子にルーチェモンは嬉しそうな笑みを浮かべるが、フッと周りを見渡し、本来ならば居る筈の者が居ない事に疑問を覚える。
「おや？・・・・・・・ねぇ、君達と一緒にいる筈の黒い究極体は何処に居るんだい？君達と一緒に戻って来ているって聞いていたんだけど？」
「答えると思うか！！」
「いや、全然思えないね。まぁ、別に構わないけどね」
ビクトリーグレイモンの叫びに、ルーチェモンは気にして無いと言う平然と答え、今度はオファニモンへと顔を向ける。
「少し驚いたよ。まさか、オファニモンが居るなんて・・・・まぁ、滅ぼしたデジタルワールドのオファニモンと比べれば、君はかなり実力が低いようだけどね」
「だったら、試してあげましょうか！！」
ーーースチャ！！
ルーチェモンの嘲りの言葉に、オファニモンは怒りに満ちた声を上げながら右手に持っていた槍を構え、ビクトリーグレイモンもドラモンブレイカーをルーチェモンに向かって構え出す。
しかし、ルーチェモンは余裕そうな笑みを止めずに、自身もビクトリーグレイモンとオファニモンに向かって拳を構え出す。

「掛かって来なよ。此処最近、運動不足だったからね。君達で解消させて貰うよ」

『ふざけるな！！！！』

ーーービュン！！！

ビクトリーグレイモンとオファニモンは怒りの叫びを上げると共に、ルーチェモンに向かって全速力で飛び掛かり、ビクトリーグレイモンは右側から、オファニモンは左側からそれぞれ握っている武器をルーチェモンに向かって振り下ろす。

「オォォォォォォォッ！！！」

「ハアァァァァァァァァッ！！」

「へェ～」

ーーーガシッ！！

『なっ！？』

感心した声を出すと共にルーチェモンは、ビクトリーグレイモンが振り下ろして来たドラモンブレイカーを右手で、オファニモンが突き出してきた槍を左手で簡単に受け止めた。

その事にビクトリーグレイモンとオファニモンは驚きに満ちた叫びを上げるが、それを何とか心の中に押し込め、力を込めながら押し切ろうとする。

「グウゥゥゥゥゥッ！！」

「ハアァァァァァァァッ！！」

「ンッ！ちょっと怖いね！！」

ーーーバッ！！

『ウワァ！！』

ルーチェモンは突如として握っていたドラモンブレイカーと槍を手から離し、ビクトリーグレイモンとオファニモンは僅かにバランスを崩してしまう。

その隙をルーチェモンは逃さずに僅かにその場でジャンプを行うと、空中でビクトリーグレイモンとオファニモンを蹴り飛ばす。

「ハアッ！！」

ーーードゴオオオオン！！

『ウワァァァァァァァッ！！』

ルーチェモンの蹴りを胴体に食らったビクトリーグレイモンとオファニモンは僅かに後方へと吹き飛んでしまうが、何とか体勢を整えて止まった。

しかし、ダメージは隠せずに僅かに体を震わせると、融合している太一とヒカリがそれぞれビクトリーグレイモンとオファニモンに声を掛ける。

（大丈夫か！！ビクトリーグレイモン！！）

（オファニモン！！大丈夫なの！？）

「あぁ、何とか大丈夫だよ、太一。だけど！」

「正直信じられない。あの強さで成長期だと？如何考えても究極体クラスの力だ！！」

ビクトリーグレイモンとオファニモンは今の攻防で、ルーチェモンの体に宿っている底が知れない巨大な力を感じ取っていた。

確かにルーチェモンの世代は成長期。だが、成長期でありながらもルーチェモンは究極体と同等クラスの力を持っている最強の存在。リヴァイアモンとの戦闘とブラックからルーチェモンを侮ってはいけないと言う忠告を聞いていなければ、今の攻防でやられていたとビクトリーグレイモンとオファニモンは肌で感じ取る事が出来た。

その様子にルーチェモンは嬉しそうな笑みを浮かべながら、両手の先に光球を作り上げてる。

「中々に強いね。正直最初の不意打ちでダメージを与えたのは正解だったよ。本調子の君達だと苦戦していただろうね・・・・・消えろ！！！！」

ーーーブン！！

『クッ！！』

ーーービュン！！

叫ぶと共にルーチェモンが投げ付けて来た二つの光球をビクトリーグレイモンとオファニモンは空中に飛び上がる事でかわし、オフ

ァニモンはそのまま自身の周りに十個の煌く宝石を召喚すると、地上の瓦礫の上に立っているルーチェモンに向かって宝石を放つ。

「セフィロートクリスタル！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガガッ！！

「綺麗な攻撃だけど、僕には効かないよ！！」

ーーービュン！！

ルーチェモンは自身に向かって来るセフィロートクリスタルを、先ほどのブクトリーグレイモンとオファニモン同様に、空へと浮かび上がる事で避けた。

しかし、ルーチェモンが上昇した先にビクトリーグレイモンは瞬時に移動し、両手でドラモンブレイカーを豪快に振り回しながら、ルーチェモンに向かって叩きつけるような勢いで振り下ろす。

「ドラモンブレイカーー！！！！！」

ーーードゴオオオオン！！

「グゥッ！！」

ビクトリーグレイモンのドラモンブレイカーを今度は流石に避ける事が出来なかったのか、ルーチェモンはマトモに胴体に食らい、地上に向かって吹き飛んで行く。

その隙をオファニモンは逃さないと言うように両手で槍を握り締めながらルーチェモンに向かって構え、槍の先から光の閃光を撃ち出す。

「貫ったわ！！！エデンズジャベリン！！！！」

「ッ！！」

ーーードグオオオ

（一体どうやってあの攻撃をかわしたんだ！？）

「うん？簡単だよ。さっきのオファニモンの技は、“悪”の心を持っている相手にこそ、本当の威力を発揮する技だろう。天使型であり、“悪”の心なんて持っていない僕には無意味な技なんだよ」

『ッ！！！』

（ッ！！）

ルーチェモンの言葉にビクトリーグレイモン、オファニモン、そして融合している太一とヒカリは驚愕した。

今のルーチェモンの言葉は、融合している太一とヒカリに向けた言葉。本来ならば融合しているパートナー以外に聞こえない筈の声にルーチェモンは平然と答えたのだから、驚愕するの当然の事だろう。まさか、ルーチェモンには心を読む力が在るのではないかと考えるが、ルーチェモンは笑みを浮かべながら否定する。

「別に心を読む能力なんて僕には無いから安心してよ。ただ君達が思い浮かびそうな事をタイミング良く言っただけさ。それで話は戻すけど、僕にはオファニモンの最大の技は効かないよ。何せ僕は“悪”じゃなくて“善”なんだからね」

「馬鹿な！？お前のしている事の何処が“善”だと言うんだ！？罪無いデジモン達や人々を巻き込んで戦争を引き起こしたお前の何処が！？」

「その通りよ！！貴方が“善”だ何て絶対に認めない！！」

「君達は勘違いしているようだね。そもそもこの世界の何処にも“

善”と“悪”なんて存在していないんだよ」

『ッ！！』

ルーチェモンが告げた言葉にビクトリーグレイモンとオファニモンは困惑に目を見開くが、ルーチェモンは構わずに話を続ける。

「そもそもね。確かに僕らの行動のせいで戦争は起きた。だけど、それに何の疑問も思わずに管理局の連中は引き金を引いたばかりか、この世界に究極体を出現させ、世界を滅ぼした。さて、彼らの行為は知られれば確実に悪と分類される行為だよね。だけど、他の世界だとこの世界を見捨てた連中は英雄扱い。最後まで戦い、この世界の人々から逃げてくれと言われて後悔しながら離れた部隊として表彰されているんだよ」

『なっ！？』

「信じられないだろう？でも、それが今の世界なのさ。管理局と言う人間の傲慢さが生み出した組織が世界を支配しようとしている。しかも今の人々はそれに対して疑問を余り覚えていない。それどころか管理局さえあれば、デジモンの脅威を撃ち破れると思っているぐらいなのさ。そして一度疑問に思えば、この世界の人間どものように滅ぼして、全てを無かった事にする。さて、そんな世界の何処に護る価値なんてあるんだい？」

『・・・・・・』

ルーチェモンの質問にビクトリーグレイモンとオファニモンは答える事が出来なかった。

今告げられた事が全て真実だとすれば、確かに管理局に組してい

る世界に護る価値など存在していないだろう。逆に人間に復讐しようとしているデジモン達の方が正しいぐらいなのだから。
　言葉も出なくなったビクトリーグレイモン達の姿にルーチェモンは満足げに頷くと、更に話を続ける。

「僕はね、倉田に寄って目覚めさせられてから、ずっと世界を見ていた。その結果思ったんだよ。『今の世界に護る価値なんて無い。全てを滅ぼした方が世界を本当に救う事が出来る』ってね。だから、僕は自分の行為は“善”だと思っているよ。君達とはやり方は全く違うけど、僕も世界の事を思っているんだからね」

「・・・・・一つ聞く・・・・・君は今まで死んでいたデジモン達や人々をどう思っているんだ？」

「人間にはこれと言って感情は持っていないけど、デジモン達には少し悪い事をしたと思っているよ。だけど、大丈夫さ。彼らは僕が新たに創り上げる世界で、生き返らせて上げるよ。争いも何も無い、僕を中心とした世界でね」

「そう・・・・・・だったら！！貴方を目的は絶対に赦せないわ！！」

「君のしようとしている行為だけは絶対に赦せない！！」

ーーーガシッ！！

　オファニモンとビクトリーグレイモンは迷わずにルーチェモンに向かって再び武器を構え始めた
　その姿にルーチェモンは訝しげな顔をしながら、油断無く構えを行っているビクトリーグレイモンとオファニモンの姿を見つめる。

「どう言うつもりだい？僕の目的は世界を本当の意味で平穏に導く事なんだよ？デジモンと人間の戦争を止めて、共存の道を進んでいる君達とは相反していないと思うんだけど？」

「確かにお前が創り上げようとしている世界では、争いなど起きないだろう。だが！！お前が創り上げる世界には喜びや悲しみさえも無い世界！！“お前の人形だけが存在している世界”じゃない！！！」

「そんな世界に何て意味なんか無い！！その上、世界を創って死んでしまった者達を蘇らせるだって！？お前は命を何だと思っているんだ！？命はそんな簡単なものじゃない！！お前も管理局の上層部連中と同じだ！！命を物として考えている！！そんな奴に僕達は絶対に力を貸したりしない！！」

（ビクトリーグレイモン！！！）

（オファニモン！！）

『（絶対にお前は倒してみせる！！！！）』

ビクトリーグレイモン、オファニモン、太一、ヒカリは完全に想いを一つにしながら目の前に存在しているルーチェモンに向かって飛び掛かる。

「オォォォォォーーー！！！！」

「ハァァァァァァァァァッ！！！」

「馬鹿だね・・・・・僕に従えば助かったのにね！！」

ーーービュン！！

ルーチェモンは叫ぶと共に空高くへと舞い上がり、ビクトリーグレイモンとオファニモンは僅かに驚きながらも、ルーチェモンを追いかけようとする。

しかし、その前にルーチェモンは残忍な笑みを浮かべながら光球を右手の先に作り出し、ビクトリーグレイモン達が追って来ている方向ではなく、地上に向かって光球を投げ出す。

「そんなに命が大切なら！！護って見せなよ！！！」

ーーーブン！！

「ッ！！いけない！！！」

ルーチェモンの目的に気が付いたオファニモンは地上に向かって進んでいる光球の前に素早く移動し、地上に直撃する前に自身の槍を光球に向かって突き出す。

「ハァァァァッ！！」

ーーードゴオオン！！

「グウッ！」

光球に槍を突き刺した事でオファニモンは至近距離で爆発を食らい、僅かに体勢を崩してしまう。

その隙にルーチェモンは素早くオファニモンの目の前に移動し、

全力を込めた拳をオファニモンの胴体に向かって撃ち込む。

ーーードゴオオン！！

「ガッ！！」

「もう手加減の時間は終わりだよ。特に君はデジモン達を説得出来る鍵みたいだし、この場で絶対に消滅させて上げるよ」

「オファニモン！！」

オファニモンが殴られた姿を見たビクトリーグレイモンは、オファニモンを救出しようとルーチェモンに向かって飛び掛かる。

しかし、その前にルーチェモンは右手だけをビクトリーグレイモンに向かって掲げ、指を手早く鳴らす。

ーーーパチン！！

ーーーシュウン！！

「何ッ！？」

ルーチェモンが指を鳴らすと共に、ビクトリーグレイモンの周りに陣のような物が二つ出現し、その中から悪夢の兵器ーギズモンＡＴが二体出現した。

「ギズモン！！」

「君はそいつ等と遊んでなよ。僕がオファニモンを殺すまでね！！」

ーーードグオン！！

「アァァァァァァァァァッ！！！！！」

ルーチェモンは言葉と共に左拳で再びオファニモンの胴体を殴り飛ばし、オファニモンは苦痛の叫びを上げながら瓦礫に激突した。

その姿にビクトリーグレイモンはオファニモンが危ないと思い、助けに向かおうとするが、その前に二体のギズモンＡＴが立ちはだかり、悔しげな顔をしながらビクトリーグレイモンはギズモンＡＴとの戦闘を開始する。

その間にルーチェモンは素早くオファニモンの目の前に移動し、瓦礫に僅かに体が埋まっている状態のオファニモンに向かって連続で拳を撃ち込む。

ーーードドドドドドドドドドドドドッ！！

「アアアアアアアアアアアアッ！！！！」

「ハハハハハハハハハハハハッ！！君は馬鹿だね！！地下に隠れているクズどもなんて気にせずにいれば、こんな目に合わずに済んだのにねっ！！！」

ーーードゴオン！！

「ガハッ！！」

言葉と共に突き出された拳を食らったオファニモンは口から苦痛の叫びを上げると共に顔を俯かせてしまう。

それを確認するとルーチェモンはオファニモンの前から離れ、上空に浮かび上がると共に光球を両手に作り出す。

ーーーブン

「フフフフフフッ、これで希望の一つは消滅・・・・・さよ…」

ーーーズガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！！！

「ッ！！！」

突如としてルーチェモンに向かって魔力弾や質量兵器の銃弾が放たれ、ルーチェモンは驚愕に目を見開きながら魔力弾と銃弾を避けた。

しかし、避けると共にルーチェモンの背後に巨大な影が出現し、慌ててルーチェモンが背後を振り向いてみると、レリューを肩に乗せながら拳を突き出そうとしてアンティラモンが存在していた。

「マントラチャント！！！！」

ーーードゴオオオオオン！！

「グウッ！！」

アンティラモンの拳をルーチェモンは受け止める事が出来ずに食らい、地上へと落下して行った。

完全体のデジモンに不意を完全につかれた事に、ルーチェモンは本気で苛立ちを覚えながら体勢を整えて落下を防ごうとする。

しかし、その直前にルーチェモンの近くに存在していた瓦礫が吹き飛び、その中から剣を上段に構えたナイトモンが飛び出し、ルーチェモンに向かって剣を全力で振り抜く。

「オォォォォォォォーーーーー！！！！ベルセルクソーード！！！！」

ーーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！！

「ガアアッ！！？？？」

体勢を整える前のルーチェモンはナイトモンの渾身の力を込めたベルセルクソードをその身に食らい、苦痛と困惑に満ちた叫びを上げながら瓦礫の方へと吹き飛び、瓦礫の中に埋もれていった。

それを確認したナイトモンは油断無くルーチェモンが埋まっている瓦礫の方に剣を構え、アンティラモンもナイトモンの横に着地すると共に拳を構える。

「・・・・やったのか？」

「・・・・残念ながら違うようです」

ーーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

レリューの質問の声にナイトモンが答えた瞬間に、ルーチェモンが埋まっていた場所の瓦礫が一瞬で爆発し、その中から怒りに満ちた顔をしているルーチェモンが姿を現した。

「・・・・・忘れていたよ・・・・・君たちがいた事を・・・・それにしても・・・・・完全体程度にダメージを食らったのは本気で屈辱だ・・・・・それだけじゃなく！！！」

ルーチェモンは叫ぶと共に辺りの瓦礫の影に隠れている人間達ーシェルター内の隠れていた軍人達を怒りと殺意に満ちた視線で睨み

つけた。
その凄まじい殺意と怒りに隠れていた軍人達全員は恐怖に体を震わせるが、誰も逃げる事は無くルーチェモンの隙を窺い続ける。
彼らはずっとビクトリーグレイモン達の戦いを見ていたのだ。太一達と分かれた後、スレイはハクロに頼み、ビクトリーグレイモン達の戦いをサーチャーを通して見せたのだ。無気力に成っている者達に希望を持たせる為には、絶望に抗おうとする者の行動が必要不可欠だった。
その事が分かっていたスレイは、太一達の行動に全てを賭けて、シェルター内部の人々全員に映像を見せたのだ。失敗すれば全てが無意味になってしまう行動。しかし、それは成功した。
ビクトリーグレイモン達の行動と、命を賭けてレリュー達を護ったプレイリモン達の行動に動かされ、彼らルーチェモンと言う絶望に挑む為に立ち上がったのだ。

「・・・・気に入らない・・・・・・・本気で今の君達は気に入らないよ・・・・お前達は絶望して死ねばいいんだ!!!!」

ーーービュン!!

「不味い!!」

叫ぶと共に空高くへと飛び上がったルーチェモンの姿に、レリューは叫ぶが、ルーチェモンは構わずに右手を掲げ、惑星直列ーグランドクロスを思わせるように十個の超光熱球を十字の形で出現させる。

ーーーゴオォォォォォォーーー!!!!

「遊ぶは本当に終わりだ!!!!全て消えろ!!!!」

『クッ！！！』

ルーチェモンが放とうとして技に気が付いたレリュー、アンティラモン、ナイトモン、そして軍人達は悔しそうな声を上げながら、空高くに浮かんでいるルーチェモンの姿を見つめた。

本来ならば空戦が可能な者ならば、上空に飛び上がりルーチェモンに攻撃を加えられるのだが、地上とは違い、空の上空には未だに嵐と雷が存在しているので、デジモンでなければ空に上がる事さえ不可能なのだ。しかし、ビクトリーグレイモンは二体のギズモンＡＴの相手で動けず、残っているアンティラモンとナイトモンは地上型のデジモン。一番高く飛び上がる事が出来るアンティラモンのジャンプ力でも届かない位置にルーチェモンは居る為に、もはやルーチェモンの攻撃を止める事は出来ないのだ。

その事に誰もが悔しげな顔をし始めた瞬間。

ーーーービュン！！！

「オファニモン！！」

「オファニモン様！！」

ルーチェモンにやられて瓦礫の中に埋まっていたオファニモンが、ルーチェモンに向かって自身の周りに十個の宝石を召喚しながら飛び掛かる。

「ハアァァァァァァァァァッ！！」

「邪魔なんだよ！！消えろ！！グランドクロス！！！」

（ヒカリ！！）

（うん！！）

「（セフィローートクリスタル！！！！！）」

ドゴオオオ

「馬鹿だと思っていたけど、本当に馬鹿な奴らだね。他人なんて構わずに自分達だけ護る行動をしていれば、傷を負うことなんてなかったのにね。本当に愚かな奴らだね」

「ッ！！貴様アァァァァァァァッ！！！」

ーーーブザン！！！

ーーービビビビッ！！ドゴオオオオオン！！

ルーチェモンのヒカリとテイルモンに対する行動の嘲りの言葉を耳にしたビクトリーグレイモンは、怒りに満ちた叫びを上げながら、二体のギズモンＡＴを一瞬の内にドラモンブレイカーで切り裂き、ギズモンＡＴを消滅させた。

そしてその勢いのままにルーチェモンに向かって突撃し、渾身の力を込めたドラモンブレイカーをルーチェモンに向かって降り抜く。

「オォォォォォォーーーー！！！！！」

「クゥッ！！」

ーーーガシッ！！

振り下ろされて来たドラモンブレイカーをルーチェモンは真剣白刃取りで受け止めた。

しかし、ビクトリーグレイモンは構わずにルーチェモンの胴体に向かって左腕を撃ち出し、ルーチェモンを吹き飛ばす。

ーーードゴオオン！！

「グゥッ！！ハッ！！少しはマシに成ったみたいだね！！楽しませて貰うよ！！」

「黙れ！！！お前だけは絶対に赦さないぞ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオン！！！！

ルーチェモンとビクトリーグレイモンは互いに叫び合うと同時に戦闘を再開し、空中でビクトリーグレイモンのドラモンブレイカーとルーチェモンの拳はぶつかり合い続けるのだった。

そしてその間にアンティラモン、ナイトモン、そしてアンティラモンの肩の上に乗っていたレリューは、瓦礫の間を全速力で駆け続け、ヒカリとテイルモンの下に急いでいた。

「急ぐんだ！！遠目からでもヒカリとテイルモンのダメージは大きい！！このままだと！！」

「分かっている！！」

「分かっています！！ヒカリ殿とテイルモン殿は絶対に死なせる訳にはいかない！！」

レリューの叫びにアンティラモン、ナイトモンは険しい声で答えながら走り続け、一刻も早くヒカリとテイルモンの下に辿り着こうとする。

しかし、突如としてアンティラモンとナイトモンに向かってエネルギー弾が連続で向かって来る。

ーーーズガガガガガガガガガガガガガッ！！

『ッ！！』

エネルギー弾が連続で向かって来る事に気が付いたアンティラモンとナイトモンは素早く横に飛ぶ事でかわし、エネルギー弾が飛んで来た方を見てみると、アルケニモンとマミーモンが薄ら笑いを浮かべながら立っていた。

「貴様らは！！」

「生きていたのか！？」

「ハッ！生憎だけどね。私らは生き残る事だけには、究極体クラスの腕前なんだよ！！」

「へへへへへへへッ！！その通りだぜ！！悪いが、あの女とデジモンの所には絶対にいかせないぜ！！十年前の借りを返すチャンスなんだからね！！」

「ならば、押し通るまでだ！！」

マミーモンの言葉にナイトモンは自身の剣を構えながら突撃し、アンティラモンとレリューも互いに頷き合うと、アルケニモンとマミーモンに向かって飛び掛かるのだった。

そしてビクトリーグレイモンとルーチェモンが戦っていた場所から遠く離れた地点。

その場所に落下して、オファニモンへの進化が解けて体中に怪我を負ってしまったヒカリとテイルモンは、互いに瓦礫の上で気絶し、

このままでは命が危ない状態にまでなっていた。
しかし、これは在る意味では本当に運が良かったのかもしれない。
ルーチェモンの必殺技であるグランドクロスは、三大天使の一角であったセラフィモンの必殺技ーセブンズヘブンさえも凌駕する威力を誇る技。如何にオファニモンとは言え相殺する事は出来ない技なのだ。
本来ならば消滅していても可笑しくない技を受けて生き残る事が出来たのだから、本当に運が良かっただろう。
最もその運も完全に底をつく寸前だった。助けが来ようにも、ビクトリーグレイモンと軍人達はルーチェモンの相手で精一杯であり、レリュー、アンティラモン、ナイトモンはアルケニモンとマミーモンに足止めされてヒカリとテイルモンの下に辿り着く事が出来ない。残っているゲンナイ達やサンダーバーモン達に生死さえ不明。一刻も早く傷の治療が必要でありながらもヒカリ達の下には、誰一人辿り着く事が出来ない状況と成っていたのだ。
そして誰もがヒカリとテイルモンを助けようと足掻いている状況の中、気絶してヒカリは意識がフッと戻り、自身の体の状態と隣で気絶しているテイルモンの状態を確認すると、自身の体の状態などの気にせずにテイルモンの傍により、右手をテイルモンの胸に乗せると、テイルモンの体は光だす。

ーーーポゥ

「・・・・・テイルモン・・・・・・死なないで・・・・・・絶対に治して上げるから・・・・」

そうヒカリは気絶しているテイルモンに声を掛けながらも治療に集中し、命の危険が無いほどのテイルモンの体を回復させた。
それを確認したヒカリは安心感からか、全身から力が無くなり、再び瓦礫の上に倒れ伏してしまう。

ーーーバタン！！

（・・・・もう限界だね・・・・・・だけど、テイルモンは助かる・・・・良かった）

ヒカリは既に自身の体が限界に達してしまっている事を直感していた。

既にヒカリの傷口からは致死量寸前までの血が流れていたのだ。本来ならば動かなければヒカリは誰かが辿り着くまで生き延びれたかも知れない。だが、ヒカリはそれまでテイルモンが生き延びれる可能性が低い事も同時に直感していた。融合して戦っていたとは言え、あくまで体のメインはテイルモンの方にある。だからこそ、負うダメージの方はテイルモンの方がヒカリよりも大きいのだ。

その事が分かっていたからこそ、ヒカリは何もしなければテイルモンが死んでしまう確立が高いと判断し、自身の体の状態などに構わずにテイルモンの治療を優先したのだ。その結果が自身の“死”であろうと。

（・・・・・誰かが来るまでは・・・・・・持ちそうに無いね・・・・・兄さん・・・・アグモン・・・・・テイルモン・・・・・・お父さん・・・・・お母さん・・・・・皆・・・・・・ゴメンね・・・・）

ヒカリの頭の中には走馬灯のように次々と大切な人々の笑顔が浮かび上がり、ヒカリはその事に悲しげな笑みを口元に浮かべながら意識が遠のくの感じ続け、最後のブラックの後姿がヒカリの頭の中に浮かび上がる。

（・・・・もっと・・・・・一緒にいたかった・・・・・さ・・・よ・・・・う・・・・な・・・・・ら・・・・）

ヒカリは最後に思い浮かんだ想いと別れの言葉を内心で告げると、完全に意識を失い、ヒカリの心臓の鼓動も止まった。

深い闇。何処まで広がり続ける闇の中を、ヒカリは凄まじいスピードで落下していた。

何故この様な場所に自身がいるのかヒカリには分からない。だが、自分が死んでしまった事だけはハッキリと憶えている為に、あの世では無いのかと内心で思うが、それを否定するようにヒカリの体は突如として闇の中に足から着地する。

ーーートン

（此処は何処なの？・・・・私は死んだんじゃ？）

自身が何故この様な闇の奥深くにいるのか分からず、ヒカリは辺りを見回すが、ただ闇だけが広がる世界しか存在していなかった。

その様子にヒカリが不安を覚えると、闇の中に突如として光が発生し、ヒカリは思わずに目を瞑ってしまう。

ーーーピカアァァァァァン！！

（何！？）

突如として発生した光から護るようにヒカリが目を瞑っていると、光は徐々に治まって行き、その事に気が付いたヒカリが目を開けてみると、先ほどまで存在していた深い闇は何処にも存在せず、木々が立ち並ぶ公園のような場所へと変わっていた。

（この場所は！？何で！？）

ヒカリは突如として現れた目の前の公園の光景に心の底から驚愕した。

知らない場所だからではない。寧ろヒカリにとって、目の前に存在している公園の光景は忘れる事が出来ない場所だった。何故ならば目の前に存在する公園は“ブラックがヒカリ達の前で死んだ筈の場所”だからだ。

その場所はヒカリにとって悪夢としか言えない思いを抱いている場所であり、何度も足を向けた場所でも在った。

その場所の光景にヒカリが体を震わせながら疑問を覚え始めると、突如としてヒカリの頭の中に女性の声が聞こえて来る。

（クスクス、貴女にはこの場所こそが悪夢のようね。それはそうでしょうね。この場所で起きた出来事こそが、貴女の心の奥底に眠っていた“闇”を起こしたのだから）

（何を言っているの？）

（貴女は私に告げたわね。『光と闇は互いに存在してこそ意味が出来るもの』貴女は幼い頃から選ばれていた“光と闇”に）

ーーーブン！！

（えっ！？）

意味深な言葉を女性が告げた瞬間に、目の前の光景が再び変わり、今度は何処かの病室のベットの上で苦しそうにしている幼い子供一子供の頃のヒカリが苦しんでいる光景へと変わった。

（この時に貴女は死に掛けた。でも、貴女が死ぬ事は赦されなかった。何せこの時に既に貴女はデジモンと出会っていたから）

（・・・・覚えてる・・・・・私は確かに四歳の時に風邪をこじらせて・・・・確かに死にそうになった）

（だけど、貴女は助かった。選ばれし者であり、貴女の世界のデジタルワールドの安定を望む者ーホメオスタシアから光の紋章を受け継ぐ役目を与えられた貴女は死ねなかった）

女性の声がそう告げると共に、ヒカリの目の前に存在している幼い自身の体の中に光の玉が入って行く光景へと変化した。

（・・・そうだったんだ・・・・だから、私には普通の人には見えなかったデジモンも見えたし・・・・デジモンを回復させる事も出来たんだ。私の中にデジタルワールドの安定を望む者の力が宿っていたから）

（そうよ。貴女の中には光の力が宿っている。だけど、貴女も言ったように光と闇は表裏一体。だから、貴女の中には同時に闇の力も存在しているのよ。その力を求めて、貴女に干渉して来た暗黒デジモンや闇の存在も多くいたでしょう？）

（貴女の目的もそうなの？）

（クスクス、半分は正解よ。確かに私は貴女に干渉出来るようになってから、貴女の中に存在している闇の力を利用して復活しようとしたわ・・・・・・だけど、その気持ちは変わった・・・・・悔しいけど、貴女に干渉したせいで、貴女が私の影響を受けたように、

私も貴女に影響を受けていたみたい・・・・本気で悔しいと思うけど、同時に凄く面白く感じたわ。封印される前にも私に干渉出来る存在なんていなかったのに、貴女は干渉して来た。それだけではなく闇を受け入れるとも私に宣言して来たわ。本当に貴女は面白いわ）

ーーーブン！！

笑いを堪えるような女性の声が響いた瞬間に、再び空間は深い闇だけが存在する場所へと変わった。

しかし、先ほど違い。ヒカリの視界の先には足元から闇の中に波紋のようなものを発生させている、背中に闇色の翼を背に生やし、刃のような形状をしたローブをつけると共に黒と紫色のドレスを着て、右手を金色の篭手で覆った絶世の美女が立っていた。

その女性は本当に嬉しそうな笑みを浮かべながら、ヒカリにゆっくり近寄り、左手をヒカリへと差し出す。

（さぁ、約束の時は来たわ。貴女はどんな形であろうとは言え、絶望していた連中を立ち上がらせた。だけど、貴女の命はこのままでは本当に消えてしまう。生き延びる方法は一つだけ・・・・分かっているでしょう？）

そう女性は嬉しそうな笑みを浮かべながらヒカリの顔を見つめ、ヒカリは迷う事無く女性が差し出して来た左手に自身の左手を差し出し、互いに握手を交し合った瞬間に、空間は光と闇が入り混じるように消滅した。

首都の上空で戦い合っていたビクトリーグレイモンとルーチェモンの戦いは終盤へと移動していた。

ーーードゴオオオオオオオン！！

「ガアァァァァァァッ！！」

ルーチェモンが突き出し来た全力の拳を、ビクトリーグレイモンは受け止める事も避ける事も出来ずに食らい、ビクトリーグレイモンは地上の瓦礫へと叩きつけられた。

その様子を冷めた目でルーチェモンは眺めながら、口元に存在している血を右手で拭き取ると、僅かに苛立ちを含んだように舌打ちを行い、瓦礫の中に埋もれているビクトリーグレイモンを睨みつける。

「ちょっと遊びが過ぎたみたいだね。君みたいな奴に血を流させられるなんて、本当に気に入らないよ」

「・・・・・ハハハハハハハッ！！・・・・戦いを遊びだと思っている時点で・・・・君は絶対に目的を遂げる事は出来ないだろうね」

（ブラックウォーグレイモンの奴が一番嫌いな奴だな。真剣に戦う気も無くて、戦いの場に来ているんだからよ）

「本当に苛立つね、君達に…」

ーーーズガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！！！

「うるさいんだよ！！！」

ーーーバッシュン！！

自身に向かって放たれた魔力弾や弾丸などに対して、ルーチェモンは苛立ちながら右腕を振り抜くことで全て消滅させ、地上の瓦礫の間に隠れながら隙を窺い続けている軍人達を睨みつける。

「本当に苛立つよ！！勝つ事も出来ないのに挑んでくる奴ら！！デジモンとの絆を得ている奴！！どいつもこいつも希望が存在していると思っている目を！！！気に入らない！！お前たちになんて希望は…」

「サンダーストーム！！！」

「プラグボム！！！！」

「ブルーフレアブレス！！！」

「ッ！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！

突如として放たれた雷の嵐、超小型のミサイル、蒼い色をしたブレスが放たれ、ルーチェモンに直撃し爆発を起こした。

その様子を目撃したビクトリーグレイモンと軍人達は、技が放たれた方向を慌てて見て見ると、ゲンナイをとナノモンを背に乗せたサンダーバーモンに、コアドラモン（青）を中心としたビクトリーグレイモンの仲間のデジモン達が空に浮かんでいた。

「ゲンナイさん！？」

「遅れてすまない！！何とか、生き残っていた皆と合流して援護出

来るような状態で来れた！！」

「遅れた分は、絶対に取り返すぜ！！」

ビクトリーグレイモンの叫びにゲンナイとサンダーバーモンはそれぞれ答え、他のデジモン達も一斉に頷く。

サンダーバーモンやデジモン達にとっても、ルーチェモンは絶対に赦す事が出来ない者。だからこそ、ルーチェモン一人で来たこの好機を逃さないと言う意気込みを持っているのだ。

しかし、現実は無常に進み、直撃を食らった筈でありながらもルーチェモンは無傷で煙の中から姿を現し、凄まじく不機嫌な顔をしながら右手を空に掲げ、先ほど以上の大きさを持つ十個の超高熱光球を作り始める。

「決めたよ。君達は絶対に認めない。この世界の半分ごと君達は消滅させて上げるよ」

『なっ！？』

「僕を本気で怒らした事を後悔しながら消えるんだね。グランド！！」

ーーードグオォォォォォォォォオオオオオオオオオオオーーーーーーーーーー！！！！！！

『ッ！！！』

ルーチェモンがグランドクロス発動させようとする直前に、突如として首都の一角から闇色の柱が出現した。

完全に予想外の事態にビクトリーグレイモンだけではなく、ルー

チェモンも困惑に目を見開くが、すぐにその闇の柱の内部から感じられる波動に心から嬉しそうな笑みを浮かべ、哄笑をあげ始める。

「ハッ、ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！！！！！」

「何が可笑しいんだ！？」

「可笑しい？違うね。これは予想外の事態に対する喜びの笑いだ。何せ蘇るのさ！！七大魔王の一角がね！！」

『ッ！！！』

ルーチェモンが告げた事実にビクトリーグレイモン達は驚愕に満ちた顔をしながら、少しづつ大きさを縮めていく闇色の柱に顔を向けた。

“七大魔王の復活”。それが事実だとすればビクトリーグレイモン達には本当に勝ち目が無くなる。既にルーチェモン一体に対して、殆どの戦力を集中させなければいけないと言うのに、この場で新たに七大魔王デジモンが加われば、ビクトリーグレイモン達の敗北は間違いないだろう。

しかし、何故突如として七大魔王が復活したのかとビクトリーグレイモンと太一は考え、一つの事実に気が付き、慌ててサンダーバーモンの背に乗っているゲンナイに向かって叫ぶ。

「ゲンナイさん！！！リリスモンのデジタマは！？」

「そ、それが！！最初のルーチェモンの攻撃によって、積んで置いた脱出艇ごと行方が分からなくなってしまっていたんだ！！」

「なっ！？それじゃあ！！あの闇の中にいるのは！？」

「そう！！リリスモンさ！！！」

ビクトリーグレイモンの叫びに応じるようにルーチェモンが叫ぶと闇色の柱は突如として消滅し、その中心部分に在ったと思われる黒い球体の中から、球体を破壊するように、黒い翼が飛び出し、それと共に刃のような形状をしたローブをつけると共に黒と紫色のドレスを着て、美しい肌色をした“両手”を持った二十歳前後の絶世としか言えない美女ー七大魔王の一角ー色欲のリリスモンが遂にその姿を現実に現した。

リリスモン、世代／究極体、属性／ウィルス種、種族／魔王型、必殺技／ファントムペイン、ナザルネイル
“暗黒の女神”と呼ばれる七大魔王の一角、“色欲”の称号を持つ魔王型デジモン。元々はオファニモンと同種族の上級天使だったがダークエリアに堕ちこのような姿になってしまった。悪に寛大であり、善には冷酷非道な一面を見せる。右手の魔爪『ナザルネイル』は触れるもの全てを腐蝕させ、妖しくも美しいリリスモンの誘いに乗ったものには必ず死が与えられるという。必殺技は、暗黒の吐息を相手に噴き掛け呪い殺す『ファントムペイン』、しかもこの呪いの技は、体の末端からデータを消失させ、死してなお、相手に痛みと苦しみを与え続ける地獄を味合わせ続けると言う特性まで持っているぞ。また、『ナザルネイル』は、右手の爪で全てを腐食させると言う恐ろしい技だ。

「ハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！！これで本当に君達は終わりだね！！僕とリリスモンを相手に勝てるはず…」

「うるさいぞ、クソガキ」

「ッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！！

『なっ！？』

ルーチェモンの哄笑を遮るようにリリスモンの声が、ルーチェモンの背後で響くと共に、ルーチェモンは一瞬の内に上空にリリスモンの手に寄って蹴り飛ばされた。

その姿にビクトリーグレイモン達は驚愕に満ちた叫びを上げ、涼しげな笑みを口元に浮かべながら空に浮かんでいるリリスモンの姿を見つめた。

殆ど一瞬の出来事だった。距離で言えば如何考えても2キロ前後は離れていたにも関わらず、リリスモンは一瞬の内にルーチェモンの背後に移動してその体を蹴り飛ばしたのだ。リリスモンの力にも驚愕する所だが、同じ七大魔王に数えられる存在でありながら、リリスモンはルーチェモンを平然と攻撃した。

その理由が分からずに、ビクトリーグレイモン達は困惑に満ちた視線でリリスモンを見つめるが、再びリリスモンはその姿を見つめていた全員の視界から消失させ、今度はビクトリーグレイモンの横に立つ。

ーーービュン！！

「ッ！！」

「安心せよ。私はお前を傷つけるつもりはない。寧ろ」

ーーーポゥッ！！

「ッ！！傷が！？」

リリスモンは言葉と共にビクトリーグレイモンの体に自身の左手を当て、ビクトリーグレイモンの負っていた傷を一瞬の内に回復させた。

その事にビクトリーグレイモンは更に困惑に満ちた視線をリリスモンに向けるが、リリスモンは構わずに上空に目を向けながら声を出す。

「今より私はお前達の側に付く。その証拠としてあのクソガキをボコボコにしてやろう」

「僕達の仲間に！？」

（嘘だろう！？）

「まぁ、信じられんのも当然でしょうね。でも、今の言葉には嘘は無いわ。私はお前達の仲間。とにかく、今から私はルーチェモンと戦うわ。その衝撃は信じられないものになるでしょうから、貴方は地上の仲間達を護りなさい。誰か一人でも護りきれなければ、敵になるかもしれないわね。クスクス」

ーーービュン！！

「なっ！！待ってくれ！！」

上空へと凄まじいスピードで昇っていくリリスモンの背にビクトリーグレイモンは叫ぶが、リリスモンは止まらず上昇していくのだった。

そして遥か上空でリリスモンの蹴り飛ばされた場所を手で押さえていたルーチェモンも困惑に満ちた顔をして、地上を見つめていた。

「ど、如何言う事だ！？何でリリスモンが僕に攻撃を！？」

「簡単よ。貴方が私の敵だからよ、クソガキ」

「ッ！！」

聞こえて来たリリスモンの声に、ルーチェモンは慌てて背後を振り向いて見ると、冷笑を浮かべているリリスモンがルーチェモンの姿を見つめていた。

「クスクス、随分と弱っているわね。ビクトリーグレイモンと“兄さん”を相手にして、余裕なんてするからよ」

「兄さん？一体何を言っているんだ？君に兄なんて居る訳はないだろう？」

「クスクス、貴方みたいなクソガキに話す理由は無いわ・・・・・だって、貴方は此処で私に殺されるんだから」

「・・・・理由は分からないけど、君は僕達の敵になると言う事だね？同じ七大魔王の僕達と？」

「笑えるわね。七大魔王同士は結局の所は敵同士でしょう？貴方もどうせ全部が終わった後に、他の七大魔王達と戦うつもりでしょう？」

「・・・・フゥ～、正解だよ。全く本当なら君も仲間になってくれれば、計画も成功率が上がったんだけどね・・・・・まぁ、戦うのが少し早まるだけだね」

ルーチェモンはそうリリスモンの言葉に答えると共に、本気で構えをリリスモンに向かって構えだし、リリスモンもルーチェモンに向かって身構え始める。

「確かめさせて貰うわ。復活した私の力をね」

「僕で試すだって？随分と傲慢じゃないか、傲慢は僕の称号だよ、色欲」

互いに笑みを浮かべあいながら声を掛け合い、視線で相手を殺せたらと言うような殺気を撒き散らし続け、そして遂に。

ドゴオオオ

暗黒の女神の覚醒！！後編

蒼い透き通るような空が広がっている上空。
その下には黒い雲が広がり、地上に嵐や雷を巻き起こしていた。
しかし、真に恐ろしいのはその黒雲ではなく、その中でぶつかり合いを続けている二体のデジモン一色欲のリリスモンと、傲慢のルーチェモンの存在だった。
二体のデジモンは互いに七大魔王に名を冠するデジモン達。そのデジモン同士のぶつかり合いは凄まじく、拳や蹴りが激突し合うだけで嵐や雷さえも上回る衝撃波を巻き起こし続けていた。

ドゴオオオオオオオオオオオン！！

「クゥッ！！」

「フフフッ、如何したのかしらボウヤ？さっきまでの威勢は何処に行ったの？」

「この！！」

嘲るようなリリスモンの声に、プライドを傷付けられたルーチェモンは怒りの叫びを上げ、リリスモンの傍から離れると、両手の先に二つの光球を作り上げる。

「これは君にとっては天敵だろう！！受け取りなよ！！」

ーーーブン！！

ルーチェモンは叫ぶと同時に光の力を宿した光球をリリスモンに

向かって投げ付けた。
　このルーチェモンの行動は本来ならば正しい行動だった。リリスモンの属性は闇。闇属性のデジモンの天敵は光の属性。その為にリリスモンにとっては光の力は正しく天敵と呼べる力なのだ。
　しかも七大魔王の名を冠しながらも光の力が使えるルーチェモンは、同じ七大魔王デジモンに対する絶対的な対抗力を持っている。だからこそ、ルーチェモンは近距離戦ではリリスモンに勝てないと判断し、遠距離からの攻撃に切り替えたのだ。
　しかし、残念ながら目の前に存在しているリリスモンには光の力は通用しなかった。
　何故ならばリリスモンは自身に高速で迫って来ている光球を目にしても慌てずに、向かって来る光球の一つを足で受け止め、もう一つを右手で掴み取った。

ーーーポン！

ーーーパシッ！！

「なっ！？」

「あらあら、やっぱり子供ね。確か人間の遊びの中に球体の玉を使って遊ぶ競技が在ったわね・・・・サッカーにバスケットだったかしら？どっちで遊びたいの？お姉さんが一緒に遊んで上げるわよ」

「馬鹿な！？何で光の力を込めたエネルギー弾を受け止められるんだ！？君には光の力は天敵の筈だ！！」

「クスクス、確かに本来の私には光の力は天敵ね。だけど、気づかないのかしら？私が」

『私達が何者なのかを？』

「ッ！！・・・・・そういう事か。随分と変わった覚醒の仕方をしたみたいだね」

リリスモンの声に重なるように聞こえて来た別の女性の声に、ルーチェモンは現在のリリスモンの状態を正確に察し、険しい視線で薄ら笑いを浮かべているリリスモンの顔を睨みつける。

「もっと早く気が付くべきだったね。本来の君は右手を金色の篭手で覆っているのに、今の君は右手が左手と同じように普通の手の形をしている。それに今の君からは“光”の力も感じるよ。吸収したんだね？あのオファニモンと融合していた人間を？」

「フフフッ、それは半分は正解ね。今の私の状態は“共生”と言うのが正しいわね。確かに私は八神ヒカリを吸収して、覚醒すると同時に八神ヒカリがその身に宿してた力も全て奪うつもりだった。だけど、それじゃつまらないと思って一つの勝負を八神ヒカリとしていたのよ。私が有利な勝負をね」

「勝負？」

「そうよ。勝負の内容はとても簡単、『この世界で絶望している人間どもを三日以内に立ち上がらせる』と言う内容よ」

「ッ！！！」

リリスモンが告げた勝負の内容に、ルーチェモンは目を見開きながら地上を見つめた。

今の内容が真実だとすれば、ルーチェモン達の行動こそがリリス

モンが敵として覚醒した理由だと言う事になる。何せ本気で地下のシェルター内の人々は絶望し切って、無気力状態に成っていた。その状態の人々を立ち上がらせるのには、三日程度の時間では絶対に無理であろう。つまりリリスモンがヒカリに出していた条件は圧倒的にリリスモンの方が有利過ぎる条件だったのだ。しかもヒカリはリリスモンとの勝負の内容さえも覚えていなかったのだから、正直詐欺に近い勝負内容としか言えなかった。

しかし、現実には人々は立ち上がり、ルーチェモンに対して攻撃さえも行って来た。ビクトリーグレイモン達の行動が彼らに希望と勇気を齎したのだ。だが、もしグランクワガーモンとルーチェモンが現れずに三日経過していれば、リリスモンはヒカリの全てを吸収してビクトリーグレイモン達の敵として覚醒していただろう。

その事に思い至ったルーチェモンは、悔しさと怒りに満ちた気配を身に纏いながらリリスモンの姿を睨みつけ、リリスモンは笑いを堪えているような顔をしながらルーチェモンに残酷な言葉を告げる。

「自業自得。貴方は管理局を操って自分達の思い描いたように世界を操った。だけど、今回はそれが完全に裏目に出たわね。クスクス、ヒカリとしての私も本当に貴方には感謝しているわ。『貴方のおかげで、私は私と大切な人達を失わずに済んだよ。それだけは感謝するね』だそうよ、クソガキ」

「グゥッ！！」

リリスモンの告げたヒカリの感謝の言葉に、ルーチェモンは怒りに満ちた顔をしながら苦虫を噛み潰したような声を出した。

全ては自身の行動が呼んだ結果。その結果が今回は敵に対してではなく、ルーチェモン自身に返って来たに過ぎないのだ。“自業自得”。リリスモンが告げたその言葉は、完全に今のルーチェモンに対しては本当に正しいのだ。

その事を理解したルーチェモンは復活してから始めて、本当に心の底からの殺意が湧き上がり、涼しげな笑みを浮かべながら、ルーチェモンが先ほど投げ付けた二個の光球を手で弄んでいるリリスモンを睨みつける。

「・・・・良く分かったよ・・・・・・確かに君の言うとおり、少し舞い上がっていたみたいだね。今後は本気で気をつけないといけないな。まだ、計画は半分ぐらいしか進んでいないんだからね」

「笑わせるわね。先の事を考えてる暇が貴方にあるのかしら？私は絶対に逃がさないわよ。ヒカリとしての私も絶対に赦さないしね」

「フフフッ、やっぱりそうか。リリスモン、今の君の言葉で確信出来たよ。君は今の状態を長く保てないんだね」

「ッ！！！」

ある事実を衝かれたリリスモンは、初めて動揺した顔をしてルーチェモンの顔を見つめ、ルーチェモンは嬉しそうな笑みを浮かべながら話を続ける。

「フフフフフッ、確かに今の君は本当に厄介な存在になったよ。僕だけが持っていた特権を、君はルール違反に近い形でありながらも手に入れた。だけど、君は、いや、君達は重要な間違いを犯したね。“共生”と言う状態で覚醒したのは本当に間違いだったね」

「クッ！！黙りなさい！！」

これ以上ルーチェモンを喋らせるのは不味いと判断したリリスモンは即座に持て遊んでいた二つの光球を握り潰し、そのままルーチ

ェモンに向かって飛び掛かった。
その姿にルーチェモンは更に自分の中で思い浮かんだ考えが当たっている事を確信しながら、リリスモンの放って来る両手や蹴りを避け続ける。

ーーーシュンシュン！

（やっぱり間違いないね。この慌てよう。今のリリスモンには決定的な弱点が存在している。全く、僕らの側で覚醒すれば良かったのにね・・・・・とは言っても、このままだと本気で不味い。今の僕じゃリリスモンには勝てない。攻撃をかわす事だけ専念すれば少しは持つけど、そんな事を今のリリスモンが許す筈は無いしね。如何したものかな？）

（・・・・ルーチェモン様）

（ッ！！そうだったよ！君にも来て貰っていたんだっけね！！だったら分かっているね？）

（御意）

謎の声はルーチェモンの言葉に肯定の声を上げ、ルーチェモンは嬉しげな笑みを浮かべながらリリスモンが突き出して来た右拳を、同じく右手で受け止める。

ーーードゴオオオオオン！！

「クッ・・・・リリスモン、最後の質問だよ。本気で僕らの敵になる積もりかい？」

「当然。ヒカリとの契約も在るけど、その前に私は貴方が大嫌いなのよ。昔からね！！」

ーーーードグオオン！！

「グゥッ！！」

リリスモンは叫ぶと同時に右足でルーチェモンの顎を蹴り上げ、ルーチェモンは僅かに意識が混濁してしまう。

その隙を逃さずにリリスモンは右手を黒い光で覆わせ、金色の篭手で覆った右手に変えると、そのままルーチェモンの胸に向かって突き出す。

「苦しみぬいて死になさい！！ナザルッ！！」

「未だ！！」

ーーーブン！！

「ッ！！」

ルーチェモンが叫ぶと同時に、突如としてリリスモンの背後の空間が歪み、その中から背中に羽を生やし、頭部には角のようなものを二本備え、顔の部分は単眼の形して、三本爪の両の掌にも目玉がついているデジモン―デスモンが姿を現した。

デスモン、世代／究極体、属性／データ種、ウィルス種、種族／魔王型、必殺技／デスアロー、エクスプロージョンアイ

デーモンと同じく元々は高位天使型デジモンだったが、ダークエリアに堕とされ魔王型デジモンになってしまった。しかし堕天使型や

悪魔型デジモンと違い、中立の立場を常に守り世界を静観している。通常は体の色が灰色でデータ種だが、天使型のデジモンとの来るべき決戦時になると体が闇色に染まり、ウィルス種の破壊神へと変貌する。変貌した後は、無駄な戦闘を避けて蓄えていたパワーを開放し、破壊の限りを尽くすと言われている。必殺技は、両手の邪眼から死の矢を放ち、敵を貫く『デスアロー』に、頭部の単眼が深紅に輝いた時に発射される、破壊光線『エクスプロージョンアイ』だ。

「デスモン！？」

「ルーチェモン様に敵対するならば、貴女様でも敵です。グレイクローー！！！」

「クッ！！」

ーーービュン！！

言葉と共に振り下ろして来たデスモンの爪を、リリスモンは瞬時に移動する事で避けた。

しかし、その隙にデスモンと共にルーチェモンはリリスモンから離れ、ある程度の距離を離れると、ルーチェモンは再び光球を両手の先に作り出し、デスモンも向かって来るリリスモンに両掌に存在している邪眼を構え、同時に攻撃を撃ち出す。

「くらいなよ！！」

「デスアローー！！！」

ーーードグオオオオオオオン！！

「クッ！！」

リリスモンは自身に向かって来た光球とデスアローを瞬時に避けるが、先ほどの時とは違い、今度は次々とルーチェモンとデスモンはリリスモンに向かって連続で攻撃を撃ち続ける。

ーーードドドドドドドドドドドドッ！！！！

「この！！」

ーーーバシュン！！

自身を追って来るように向かって来る光球やデスアローを、リリスモンは刃のような形をしたローブで切り裂き続ける。

しかし、その様子を見てもルーチェモンとデスモンは攻撃の手を止めるどころか、更に勢いを増しってリリスモンに攻撃を放ち続ける。その姿にリリスモンはルーチェモンとデスモンの狙いに気がつき、表情を苦々しげに歪めながら光球やデスアローを消滅させ続けるのだった。

一方その頃。地上に残ったビクトリーグレイモンはゲンナイと話し合い、一緒に戦ってくれた軍人達を上空から降り注いでくる衝撃波から逃がす為に、サンダーバーモン達と共にシェルターの入り口へ避難させていた。

「早く！！何時またルーチェモンが戻って来るか分からない！！」

「地上に残るのは危険過ぎる！！一時、シェルター内に避難するん

だ！！」

「了解した！！全員急げ！！」

ビクトリーグレイモンとゲンナイの言葉に、隊長であるハクロは頷き、他の軍人達に命令を飛ばして行く。

既に彼らも戦う覚悟は出来ているが、現状では降り注いで来る凄まじい衝撃波に対抗する術が無い。

常に降り注いで来る衝撃波によって、地上に残されていた瓦礫が次々と崩落など繰り返し続けているのだから、ビクトリーグレイモンやサンダーバーモン達などの頑丈さがない者では、即座に瓦礫に押し潰されてしまうだろう。

その事がビクトリーグレイモンと融合している太一には分かっているからこそ、リリスモンの言葉どおりに人々を護る事を優先しているのだ。しかし、同時に太一、ゲンナイ、ビクトリーグレイモン、そしてサンダーバーモン達には心配な事があった。ルーチェモンの攻撃によって倒されてしまったヒカリとテイルモンの事だ。

このような衝撃波が降り注いでいる場所で、無防備どころか怪我を負っている状態にヒカリとテイルモンが地上に残っていれば確実に死が待っているであろう。

レリュー、アンティラモン、ナイトモンが救援に向かっているとは言え、太一にとって実の妹であり、ビクトリーグレイモンにとっても家族として過ごして来た者達。

その者達の安否が心配で太一とビクトリーグレイモンは気が気ではないが、それでも軍人達をシェルター内に避難させる事を優先し、一刻も早く避難を終わらそうと考えていると、レリュー、アンティラモン、ナイトモンがシェルターの入り口の前に降り立つ。

ーーードン！！

「ッ！！レリュー！！ヒカリとテイルモンは！？」

「・・そ、それが・・・・途中でアルケニモンとマミーモンの奴らの邪魔をされて、リリスモンが現れる前に着く事が出来なかった」

「すまん。我らも急いだのだが、駆け付けた時にはテイルモンと言うデジモンだけしかいなかった」

『なっ！？』

アンティラモンの報告にビクトリーグレイモンとゲンナイは驚きに満ちた声を上げ、ナイトモンの方を見てみると、ナイトモンはゆっくりと大切そうに抱えていたテイルモンをビクトリーグレイモンとゲンナイの目の前にソッと下ろす。

「・・・ウッ・・・・ビクトリーグレイモン・・・・太一・・・・・」

「テイルモン！！ヒカリは如何したんだ！？まさか！？」

「・・・・すぐに・・・・リリスモンの援護に向かって・・・・・私には分かる・・・・今、ヒカリは・・・・“リリスモンと一体と成って戦っているのよ”」

『ッ！！！』

テイルモンが告げた事実に、ビクトリーグレイモンだけではなくゲンナイ、レリュー、アンティラモン、ナイトモン、そしてサンダーバーモン達も目を見開きながらテイルモンの姿を見つめた。

「如何して・・・・ヒカリがリリスモンと・・・・一体に成れたの

かは・・・・分からないけど・・・このままだとヒカリが危ない・・・・少しずつだけど・・・・ヒカリと私との繋がり弱まっている」

「何だって！？一体どうして！？」

「・・・・それも分からないけど・・・・急いで援護に向かって・・・・ヒカリを助けて・・リリスモンを護って」

「・・・・分かった。皆！！此処を頼む！！」

そうビクトリーグレイモンはその場にいる全員に向かって叫ぶと、ゲンナイ達だけではなく避難を誘導してたハクロまでもが一斉に頷いた。

それを確認したビクトリーグレイモンはすぐさま上空に向かって飛び立ち、凄まじい衝撃波の中を真っ直ぐに進み、リリスモンの下へと急ぐのだった。

首都の遥か上空。その場所では未だにリリスモンとルーチェモン、デスモンの戦いが続いていたが、もはやリリスモンには最初の時に現れた余裕は完全に無くなっていた。

戦いでダメージを負っている訳ではない。ルーチェモンとデスモンの放つ攻撃は全くリリスモンのダメージを与える事は出来なかったのだから。七大魔王として覚醒していないルーチェモンと魔王型に分類されているとは言え、七大魔王には及ばないデスモンの攻撃では、光の力を手に入れたリリスモンには勝てない。

しかし、現実にはリリスモンの顔には完全に焦りしか浮かんでおらず、放たれ続ける攻撃を相殺か霧散させる事が精一杯な状況へと追い込まれていた。

「ハハハハハハハハハッ！！リリスモン！！さっきの言葉を返して上げるよ！！随分と余裕が無くなったね！！」

「この、クソガキ！！！」

ーーーバッシュン！！

リリスモンは叫ぶと共に自身に向かって来た光球を金色の篭手ー魔爪『ナザルネイル』に変化させた右手で消滅させた。

しかし、ルーチェモンとデスモンはリリスモンを自身に近づけさせない様にする為に、再び連続で光球やデスアローを放ち続ける。その攻撃自体は並みのデジモンなら一撃で消滅してしまう威力が存在しているのだが、リリスモンは刃のようなローブやナザルネイルを使って消滅させ、少しでもルーチェモンやデスモンに近づこうとする。だが、二体のデジモンは構わずに攻撃を続け、リリスモンの進行を止めていく。

「クックックック、人間なんかと一緒にいるからだよ。本来の君なら僕達に勝てただろうね。でも、今の君になら勝てるよ！！」

「黙りなさい！！私は今の状態を後悔していないわよ！！」

「如何かな？このままだと君だけじゃなくて、共生している人間も死ぬだろうね・・・・・どうだい？今更だけど僕達の仲間に成る気は？」

「寝言は寝て言いなさいよね。他の連中はともかく、私は絶対に仲間になんてなる気はないわよ。折角蘇ったんだから、自由に“今の世界”で楽しみしたいからね」

「そうかい・・・・・なら本当に消えなよ！！」

リリスモンの答えにルーチェモンは不快そうに眉を顰めると共に、上空に七つの超高熱光球ーグランドクロスを発生させた。しかし、今度は消耗しているのか、今までよりもグランドクロスの大きさは小さく、少しずつしかエネルギーは集まっていなかった。

それを目にしたリリスモンは、僅かに慌てた様子を見せながらグランドクロスを放とうとしているルーチェモンに向かって急いで飛び掛かるが、デスモンがその前に立ち塞がる。

ーーービュン！！

「行かせませんぞ！！」

「退きなさい！！デスモン！！このままだと巻き込まれるわよ！！」

「元より覚悟の上。我が身はルーチェモン様の為に使うと決めております！」

「全く！！馬鹿ね！！」

デスモンの決意の言葉にリリスモンは僅かに呆れたような声で叫び、デスモンに向かってナザルネイルを振り下ろし、デスモンも自身の右手をリリスモンに振り下ろし、二体のデジモンの右手は激突し合う。

ーーードゴオオオオオオオン！！

ーーーシュゥゥゥゥゥゥッ！！！

「グッ！ギャアァァァァァァァァァァーーーー！！！」

リリスモンのナザルネイルと激突し合ったデスモンの右手は一瞬の内で腐食し、デスモンの右手は存在していた邪眼ごとグチャグチャに腐り切った。

それと共にデスモンの悲鳴が空に響き渡るが、リリスモンは構わずに今度はデスモンの左手に向かってナザルネイルを振り抜く。

ーーーシュン！！

ーーーシュゥゥゥゥゥッ！！！

「グッ！グオォォォォォォォォーーーーー！！！！」

ナザルネイルがデスモンの左手を傷つけると、先ほどの右手同様に左手はグチャグチャに腐食し、デスモンは更に大きな声で悲鳴を上げた。

しかし、リリスモンはそのデスモンの姿を見ても構わずに、苦痛に苦しみ続けているデスモンの顔の前に瞬時に移動し、唇から暗黒の吐息をデスモンに噴き掛け始める。

「貴方みたいな忠義者は嫌いじゃないけど、私はヒカリと違って残酷なの。さようなら、ファントムペイン」

ーーーフゥゥゥゥゥゥゥゥーーーー

「ガアッ！！グガアアア

噴き掛けられた暗黒の吐息ーファントムペインを体に浴びたデスモンは、自身の体のデータを消失させながら断末魔の叫びを上げ、消滅していった。
その様子にリリスモンは僅かに悲しげに顔を俯かせるが、すぐに顔を上げて自身の上空でグランドクロスを作り上げているルーチェモンを睨み付け、ルーチェモンは嬉しげな顔をしながら、右手の先に存在しているグランドクロスを振り被り始める。

「時間稼ぎには充分だったよ。消えろ、リリス…」

「トライデントガイアッ！！」

「ッ！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

ルーチェモンの声を遮るように叫びが響くと同時に、オレンジ色のエネルギー波ートライデントガイアがルーチェモンとその上空に存在していたグランドクロスを貫き、大爆発を起こした。
その様子に僅かにリリスモンはヒカリとしての喜びの笑みを口元に浮かべながら、トライデントガイアが放たれた方を見てみると、両手にドラモンブレイカーを装着したビクトリーグレイモンが空に浮かんでいた。

「リリスモン！！」

「その様子だと、テイルモンから私の正体を聞いたみたいね。やっぱりテイルモンとは確かに絆が繋がっているんだね。本当に嬉しいな」

「ッ！！やっぱりそうなのか！？」

突如として口調を変えたリリスモンの姿にビクトリーグレイモンはテイルモンの告げた言葉は真実だと確信した。

しかし、リリスモンはビクトリーグレイモンの内心には全く構わず、静かにルーチェモンが爆発に飲み込まれて煙が発生している場所を睨み付けた瞬間。

ーーービュン！！

「貴様アァァァァァァァァッ！！！！」

煙の中から何時もの冷静さを完全に失い、鬼の形相して全身に火傷や傷を負ったルーチェモンが飛び出し、ビクトリーグレイモンに向かって飛び掛かって来た。

「クッ！！」

「死ねエェェェェェェェェェェェェッ！！」

「死ぬのは貴方よ」

ーーーガシッ！！

『ッ！！！』

ビクトリーグレイモンに飛び掛ろうとしたルーチェモンの背後にリリスモンは瞬時に移動し、ルーチェモンの背に存在している八枚の白き翼の内一左側の羽を一枚、左手で握り締めた。

その事にビクトリーグレイモンとルーチェモンは驚愕に動きが止

まってしまうが、リリスモンは構わずに右手の魔爪ーナザルネイルを振り被り、ルーチェモンの左側の羽全てに向かって降り抜く。

「ナザルネイル！！！」

ーーーブザン！！

ーーーシュゥゥゥゥゥーーーーー！！！

「ッ！！！ガアアアアアアアアアアアアアアーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」

リリスモンのナザルネイルによって、ルーチェモンの背に存在していた左側の羽は全て切り裂かれると同時に腐食し、断末魔のような叫びが空に響き渡った。

リリスモンはその事に心の底から嬉しそうな顔して苦痛に苦しみ続けているルーチェモンの姿を見ながら、再びナザルネイルを振り被り始める。

「さようなら、クソガキ。貴方の計画は此処で終わりね」

「リリスモン！！！」

「バイバイ」

別れの言葉をリリスモンはルーチェモンに告げ、ナザルネイルをルーチェモンの胴体に突き刺そうする。しかし、その直前に。

ーーービキッ！！

「アッ！！」

「リリスモン！！」

突如としてリリスモンの体に激痛が響き渡り、リリスモンは思わずルーチェモンの体を掴んでいた左手を離して自身の体を抱き締めてしまう。

その姿を見たビクトリーグレイモンは急いでリリスモンの傍に近寄り、リリスモンの体を支えようとするが、その隙にルーチェモンはリリスモンとビクトリーグレイモンの近くから離れ、失った左側の翼の方を押さえながらリリスモンに憎しみに染まった眼を向ける。

「ハァ、ハァ、・・・・・・フフフッ、決めたよ、リリスモン。僕が覚醒した暁には、十闘士どもよりも先に君と君と融合している人間を殺して上げるよ・・・・・この僕に味合わせた苦痛以上の苦痛を与えてね！！」

ーーーシュン！！

ルーチェモンは叫ぶと共にその姿を消失させた。

それを目撃したビクトリーグレイモンとリリスモンは悔しそうに表情を歪めるが、今は後を追う事が出来ないと判断し、リリスモンはビクトリーグレイモンの腕の中に身を寄せる。

「・・・・・時間切れみたいね・・・・・後をお願いね・・・・・兄さん・・・・ビクトリーグーレイモン」

ーーーシュウウン！！

「・・・・ヒカリ」

（ヒカリ・・・・一体如何して？）

言葉を言い終えると共にリリスモンはヒカリの姿に変わり、ビクトリーグレイモンと融合している太一は複雑そうな声を上げながら、腕の中で眠りについているヒカリを大切そうに抱えて直し、地上へと戻って行くのだった。

その頃。ミッドチルダに存在するベルカ自治区。
その場所に存在している聖王教会の一室では、法衣を着た金髪の女性ーカリム・グラシアと修道服を着た紫色の髪の女性ーシャッハ。ヌエラが、白い服を着た緑色の髪の男性ーヴェロッサ・アコースと向き合い、カリムはヴェロッサから渡された資料を顔を青くしながら見つめていた。

「・・・・この・・・・・・報告書に・・・・・・嘘は無いのね・・・・・ロッサ・・・・」

「残念だけど全く無いよ、義姉さん。教会の騎士団連中はあの子を殺そうとしていたらしいね。信じられないけど」

ーーーガクッ！！

「カリム！！気を確かにして下さい！！」

崩れるように体を倒れさせたカリムにシャッハは声を掛けた。
しかし、シャッハの声を聞いてもカリムは体を立て直すことが出来ず、全身を恐怖に震わせながら資料に目を向ける。

「・・・・私の騎士団内部にも・・・・・・これだけ敵が潜んでいたなんて・・・・」

「当然だろうね。全部の騎士達が姉さんに忠誠を誓っている訳じゃないよ。ただでさえ数年前からは教会内部で反管理局の動きが活発化してたし、それに乗じてスパイを乗り込ませる事なんて簡単だったろうね」

「ロッサ！少しはカリムの気持ちを思って言葉を言って…」

「だったら！何であの子の友達だったデジモンを管理局に通報したんだい！？」

『ッ！！』

大声を上げたヴァロッサの姿にカリムとシャッハは目を見開くが、ヴェロッサは構わずにカリムとシャッハを睨み付ける。その姿からは何時もの飄々とした印象は無く、本気でカリムとシャッハに憤りを覚えているような姿だった。

「数年前から僕は最近の管理局は可笑しいって報告して置いた筈だよね？」

「そ、それは・・・・」

「確かに義姉さんの行動は正しいと思うよ。教会と管理局の関係を修繕して共に事に当たるように出来るように組織体制をしようとするのは。だけど、今の管理局は自分達だけで動こうとしているし、教会にしてもそう言う人間が数多くいた。しかも、今はその連中が

殆ど教会の戦力を手に入れている状態に成っているんだよ？そのせいで、はやて達に支援は出来なくなったし、接触さえも持てなくなっている。僕にしても身内だから義姉さん達に接触出来るけど、はやて達には接触さえも出来ない。本気で状況は不味い方向に向かっているんだよ。管理局だけじゃなく教会もね」

『・・・・・・』

カリムとシャッハはヴェロッサの言葉に何も答える事が出来ずに顔を俯かせてしまう。

現在、聖王教会の実権の殆どは教会のトップであった教皇ではなく別の者ー過激派のトップだった枢機卿が握ってしまっていた。管理局の行動のせいで戦争が起きた事を理由にして、教会内部の騎士達を纏め、自治区と民達さえもその過激派を支持する動きをとっているぐらいである。今の所はカリムのような数少ない穏健派が動いているおかげで戦争などは起きてはいないが、既にカリムの持つ実権や称号は剥奪される寸前にまで追い込まれている状況になっていた。

「スキャンダルも良い所だからね。姉さんが管理局との関係の為に妹の友達を売って、妹が家を飛び出したなんて」

そうヴェロッサが言葉を告げると、カリムはますます顔を俯かせてしまう。

「・・・・とにかくだよ。何とかして過激派連中の勢いを止めないと、義姉さんが“預言者の著書（プロフェーティン・シュリフテン）”で予言した未来が成就する。他の詩文と違ってそれだけは読めたんだろう？」

「・・・・えぇ、他の文字は全く古代ベルカ文字とは違っていたけ

ど、その部分だけは古代ベルカ文字で書かれて読み解く事は出来たわ」

ヴァロッサの言葉にカリムは顔を俯かせながらも答え、机の中に仕舞っていた紙を取り出し、ヴェロッサの差し出す。

その紙をヴェロッサは無言で受け取り、紙に書かれている内容を読み解こうとするが、紙には古代ベルカ文字とは違う記号のような文字が書かれ続け、全く読む事が出来なかった。

「・・・・・一体何語なんだいこの文字は？今まではずっと古代ベルカ文字で書かれていたのに、今回だけはこんな見た事も無い文字で書かれているなんて？」

「分からないわ・・・・・何処かの世界の文字ではないのかシャッハに頼んで調べさせたけど・・・・全く該当する文字は存在していなかったわ・・・・それに私の“預言者の著書（プロフェーティンシュリフテン）”は本来ならば古代ベルカ文字だけで未来を予見する筈なのに、如何してこんな文字で今回は？」

カリムがそう疑問に思うのも当然だろう。

本来ならばカリムの持つレアスキル“預言者の著書（プロフェーティンシュリフテン）”は、難解な古代ベルカ文字で詩文として未来を予見する能力。だが、今回だけは一部を除いては古代ベルカ文字とは全く違う記号のような文字で未来の情報が予見されていた。

当然ながら見た事も無い文字を解読出来る筈も無く、多くの教会関係者が調べに調べたのだが、文字を読み解く事は出来なかった。ただ一部を除いては。

「『愚かなる狂信は、悪戯に傷付きし王を更に傷つける。それによって王は黙示録に変わり、古の国を崇める狂信は灰となって消え果

る。されどそれは始まりに過ぎない。黙示録は古の国に関わる全てを世より廃するであろう『・・・・・如何考えても“聖王教会の崩壊とベルカ自治区の消滅”の予言だよね？」

ヴェロッサがそうカリムとシャッハに質問すると、カリムとシャッハは無言で頷いた。

ヴェロッサが今読み上げた詩文は、唯一古代ベルカ文字で書かれていた部分だった。当然ながらその文は聖王教会全体に伝えられ、騎士団達にも警告を告げたのだが、それを利用して過激派が更に勢いを伸ばしてしまったのだから、完全に逆効果にしかなっていなかった。

「この予言で過激派は更に武力の増強を進めているわ。そのせいで騎士団達は戦争をする意欲が上がってしまっている。しかも此処最近過激派の騎士団達には不可解な動きが増えているの。まるで何かを探している見たいに」

「本気で不味い事態だね。この予言が成就される可能性が高くなる一方だよ・・・・・何とかはやて達に接触するしか無いだろうね。今の所、管理局で完全にまともなのは地上本部だけだし」

「そうね。何とか接触しないと」

ヴェロッサの言葉にカリムは頷き、三人は何とか状況を打破する方法を考えるが、既に教会の闇が動いている事を知らなかったのだった。

暗黒の女神の覚醒！！後編（後書き）

次回予告

リリスモンと一体に成ったヒカリ。

その体の現状を告げられた太一達は一刻も早く、ブラックのいる世界に向かおうとする。

一方その頃、機動六課には新たなる任務が与えられていた。

其処で出会う最強のデジモン達。

次回、漆黒の竜人と少女、『史上最強（女性にとっての）汚物デジモンズ！！』

はやて達は戦う。史上最強のデジモン達と。

史上最強（女性にとっての）汚物系デジモンズ！！前編

ルーチェモンとの戦いを終えてから数時間後。
次元世界を移動する為の足であり、住居であった艦艇が半壊状態に成ってしまった太一達は、一時シェルター内に身を寄せ、その場所に存在する医療機械が存在している建物内でヒカリの検査を行っていた。
リリスモンと言う七大魔王の一角にして最強のデジモンと融合している状態に在るのだから、何か体に異常は無いのかと、デジモンに最も詳しいゲンナイに調べて貰っているのだ。因みにナイトモン達などシェルター内部に入れない大きさのデジモン達は、最初の時と同じようにシェルターの入り口の警護を行っているが、今度はシェルター内部の軍人達も共に警護を行い、親睦を深めている状況になっていたりする。
そして検査室の前ではヒカリの実兄である太一がドアの前をウロウロし、アグモンとテイルモンも心配そうに医療室のドアを見つめていた。
その様子を見ていたレリューと、レリューの腕の中に抱き締められるように存在している、ウサギのような顔立ちに長い耳を持ち、頭の部分に三つの小さな角を生やして、体色は茶色した獣型デジモン―ロップモンが心配そうに声を太一達に掛ける。

ロップモン、世代／成長期、属性／データ種、種族／獣型、必殺技／ブレイジングアイス、プチツイスター
泣き虫で寂しがり屋の獣型デジモン。テリアモンと言うデジモンに似ているが角が三本で牙があるのも特徴。またテリアモンの“炎”の能力に対し、ロップモンは“氷”の能力を持っている。長い耳は自由自在に動かすことが出来て、風に乗ってフワフワと空を飛ぶことも可能である。必殺技は、口から冷たい冷気弾を放つ『ブレイジ

ングアイス』に、体を回転させて、相手に向かって小型の竜巻を放つ『プチツイスター』だ。レリューのパートナーデジモン―アンティラモンの成長期姿である。

「太一、アグモン、テイルモン。少しは落ち着いて休んだ方が良いぞ。お前達も戦いで疲れているんだし」

「我も同意権だ。特に太一とアグモンは究極体のグランクワガーモンと、究極体クラスのルーチェモンと連戦を行っている。少しは休んで置かねば、本気で体を壊すぞ？」

「分かっているんだ・・・・・だけど、ヒカリの事が気になってしょうがないんだ」

「僕達がもっと確りしていればこんな事には」

「ヒカリ・・・・」

レリューとロップモンの言葉に太一、アグモン、テイルモンはそれぞれ声を出しながら検査室の扉を見つめた。

その様子にレリューとロップモンも心配そうに扉を見つめると、扉が突如として開き、険しい顔したゲンナイが何らかの資料と思われる紙を持ちながら出て来る。

ーーーブン！！

「ゲンナイさん！！ヒカリは如何なんですか！？」

「大丈夫なの！？」

「ヒカリは一体どんな状態なの！？」

「・・・・・先ずは別室で説明しよう。レリュー、ロップモン、君達には後で説明するから、ナノモンと一緒にヒカリの様子を見ていてくれ。それと戻ったら、スレイとハクロ隊長の所への案内も頼むよ」

「分かった。ヒカリの事は私達が見て置こう」

レリューはそうゲンナイの言葉に答えると、ロップモンと共に検査室の中で眠っているヒカリの下へと向かいだした。

それを確認したゲンナイは心配そうな顔をしている太一達に顔を向け付いてくるように促し、太一達は無言でゲンナイの後を追って、別室に入って行った。

部屋に入ってすぐ、ゲンナイは部屋の中に何か仕掛けられていないか調べ、安全だと判断すると持って来た資料を壁に掛けながら説明を始める。

「さて、先ず今のヒカリの状態だが、これを見てくれ。レントゲンで撮ったヒカリの心臓の部分だ」

「・・・・・心臓に何が付いていませんか？」

「うん、何だろうねコレ？」

「何処かで見た事が在るような？」

ゲンナイの示したレントゲン写真に写っている心臓の部分に付いている不可思議な物に、太一、アグモン、テイルモンは疑問の声を上げ、それぞれ悩むように考え始める。

その様子にゲンナイは頷き、今度は別の写真一心臓から伸びるように広がる神経のようなものが写っている写真を示す。

「このヒカリの心臓部分に存在している物は、デジモンの中心『電脳核(デジコア)』に先ず間違いない。そしてその『電脳核(デジコア)』の持ち主は」

「リリスモンですか？」

「その通りだ太一。しかも厄介な事に既にリリスモンの『電脳核(デジコア)』は、ヒカリの体内部に神経を伸ばし始めている。このまま行けば・・・・ヒカリは何れは完全にリリスモンに体を乗っ取られるだろう」

「そんな！？」

「ヒカリがリリスモンに！？」

「何か取り除く方法は無いの、ゲンナイ！！」

太一、アグモンは信じられないと言う叫びを上げ、テイルモンは心配そうな顔をしながらゲンナイに抱き付いた。

その姿にゲンナイは僅かに辛そうに顔を伏せるが、すぐに決意に満ちた顔をして現在のヒカリに対する対症法を説明し始める。

「先ずは今後は一日一回は戦いが無くてもオファニモンに進化するんだ。現在のリリスモンはヒカリと共生状態にある。これはヒカリの力を手に入れる準備段階に在ると考えるべきだ。だから、リリスモンと対極に位置するデジモンのオファニモンに進化を行い続ければ、光の力が闇の力の根源と呼ぶべきリリスモンの力を抑制する筈だ」

「そうか。確かにその方法ならリリスモンの侵食を抑えられるかもしれないな」

「あぁ、その通りだ太一。だが、これはあくまで対症療法でしかない。この方法では侵食を抑制するぐらいにしかならないだろう」

「そんな・・・・・それじゃ、ヒカリはこのままリリスモンに成っちゃうの？」

「その可能性が高いだろう。しかもリリスモンに成ればますます侵食は一気に進む。今後は完全にオファニモン主体で戦うのが正解としか言えない。だが、今のヒカリの状態。私達はこの状態に近い存在を知っている」

「えっ？今のヒカリの状態に？」

「知っていたかしら・・・・・」

「そんなの僕らしら・・・・・」

『・・・・・・・アッ！！！バイオデジモン！！！』

ゲンナイの言いたい事に気がついた太一、アグモン、テイルモンは同時に声を上げ、壁に掛かっている写真を見つめた。

現在のヒカリの状態は太一達が戦ったナンバーズ達、バイオデジモンに近い存在に成っている。

当然ながら太一達はナンバーズの後ろにいるスカリエッティとのコネなど持ってはいないが、その技術を最初に完全に作り上げた人物にはコネが存在している。つまり今のヒカリの状態を治す為には、ブラックがいる地球に向かうのが最も確実な方法なのだ。

「ブラックウォーグレイモンが言っていた研究者なら、ヒカリの体からリリスモンの『電脳核(デジコア)』だけ摘出出来る可能性が存在している。今の所はそれに賭けるしか無いだろう。これ以上リリスモンになればヒカリは確実にデジモンになってしまう。だからこそ、オファニモンへの進化も当然に行う必要だ。少しでも今の状態を続けるが現状での最良の選択だ」

「・・・・確かにそれしかないよな。ヒカリをリリスモンから助けるにはそれしか無いけど・・・・ゲンナイさん？一体どうやってこの世界から脱出するんですか？俺達が乗って来た艦は、ルーチェモンの攻撃で半壊状態になっているし・・・・あの艦を修理していたら一ヶ月どころか、三ヶ月は掛かりますよ？」

「それについては考えてある。最初に此処を訪れた時にこのシェルター内部情報を調べたんだが、実はこのシェルターの更に奥深くに私達が乗って来た艦よりも二周りほど大きな艦艇が眠っているんだ」

「本当なの！？」

「あぁ、恐らく前時代の遺物の一つだろう。この世界の代表は恐らくもしもの時を考えてその艦艇を管理局から隠していたんだろう。元々この世界は無理やり管理世界に指定されていた世界だ。わざわざ自分達の財産を管理局に渡すつもりはなくて隠していた。だがその艦艇に続く道の扉のパスワードを知る者がグランクワガーモンの襲撃で亡くなってしまった為に誰もその先に進む事が出来なくなっていたんだ。しかし、私ならば扉を開く事が出来る」

「よし、すぐにスレイさんやハクロ隊長に説明してその扉の場所に案内して貰おう。少しでも早くこっちの地球に辿り着くためにも」

そう太一が言葉を言うと、その場にいる全員が頷き、急いでスレイ達の下へと向かい出すのだった。

一方その頃。機動六課会議室ではレジアス中将からの新たな任務がゲンヤに寄って伝えられていたのだが、その任務の内容を聞いたはやて、オーリス、そしてリイン、スバル、ギンガ、キャロ、エリオは眉を顰めざるえなかった。

「・・・・ゲンヤさん？それ本当にレジアス中将からの任務なんですか？」

「あぁ、レジアス直々からの任務だ」

「機動六課に与えられる任務やと思えへんのやけど？」

「同感ですね。今の機動六課のメンバーで任務を達成出来るとは思えないのですか？」

そうはやてとオーリスがゲンヤの伝えた任務内容に疑問を覚えるのも当然だろう。

何せ今の機動六課メンバーは隊長陣で残っているのは、はやてだけ。他のメンバーは全員病院で治療中であり、フェイトに関しては完全に離脱状態。フェイトの代わりのメンバーは現在機動六課に向かっている途中。しかも残っているメンバーの多くは広い場所でこそ真の力を発揮するメンバー達。

はやては完全に広域型の魔導師。キャロは竜召喚と言うスキルを持っているが、それは広い場所でこそ力を発揮する魔導師。スバル、

ギンガ、エリオも同様に狭い場所よりも広い場所でこそ力を真に発揮出来る魔導師達。その上、キャロとオーリスのパートナーデジモンであるリュウダモンとポーンチェスモン（白）の進化体は巨大な形態を持つデジモン。簡単に言えば機動六課の現在のメンバーはゲートタワーのような広い場所での戦いでこそ力を真に発揮出来るメンバー達なのだ。

そのメンバーで地下水路と言う狭い場所に入り込めば、失敗すれば地下水路の完全の崩壊に繋がってクラナガンはデジモンではなく機動六課の手によって崩壊するだろう。

「（うんな事は俺やレジアスにだって分かってるよ）・・・確かに今の機動六課のメンバーでやる任務じゃないのは事実だが、他の部隊は例の十闘士どもの事が在って警戒レベルを最大にして動けねぇ。お前らの前に任務に当たった連中は全員敗北して病院に入院中（精神病院にな）。だから、今の所戦力が揃ってなくて、動けねぇ機動六課に任務が回って来たって事だ」

「事情は十分過ぎるほどに分かりましたけど、私らで地下水路のデジモン達の排除はキツイと思うんですけど？」

「失敗すればクラナガンの崩壊ですから、任務は別の部隊の方が安全だと思われます」

「（仕方がねぇ。此処はレジアスと考えた台本どおりに進めるか）・・・実はだな、この任務は機動六課メンバーのテストも兼ねているらしい」

『テスト？』

ゲンヤの告げた言葉の意味が分からず、はやて達は思わず呟きな

がらゲンヤの顔を見つめると、ゲンヤは神妙な顔をして頷く。

「そうだ。実は地下水路の任務を終えた後の次の任務、ゲートタワーの破壊場所は決まり掛けているんだが、そのどちらの場所も今の機動六課メンバーじゃ不安しか思い浮かばない場所らしい。だから、今回の地下水路と言う機動六課メンバーが苦手としている場所でも問題なく任務をこなせるかどうかのテストだ。まぁ、地上本部の技術者連中が開発した防護服のテストも在るんだろうけどよ」

「なるほど・・・・今回の任務は機動六課の弱点と呼ばれる場所でも、力が出せるかどうかのテストも兼ねているのですか（中将も随分と思い切った事をしますね・・・・失敗すればクラナガン崩壊に繋がるかもしれないのに、何か裏が在りそうですね）」

オーリスは表面上は納得した声を上げたが、裏では訝しげな思いを抱いていた。

その隣にいるはやても内心では訝しげな想いを抱くが、一応の筋は通っているので表面上は納得した顔をしながら、ゲンヤに質問を行い出す。

「理由は分かりましたわ。で、地下水路にいるデジモン達は何体いて、どんなタイプのデジモンなのですか？」

「（一番答えたくない質問だな）・・・・・地下水路内部にいるデジモンの数は凡そ三十前後だそうだ。気づかれない間に、これだけの数のデジモンが地下水路に潜んでいたんだ。出来るだけ早く退治して連中のクラナガン侵入口を発見して、その場所を閉じる。敵対するデジモンの情報だが・・・・・」

「？どないしたんですか、ゲンヤさん？」

「副部隊長？」

突如として言葉を止めたゲンヤの姿に、はやて、ギンガは訝しげな顔を向け、オーリス達も訝しげにゲンヤの姿を見つめるが、ゲンヤは僅かに首を横に振るう事で気持ちを切り替え、話を続ける。

「地下水路にいるデジモン達は、多分水に関するデジモン達だ」

「多分？交戦した部隊からは情報が無いのですか？」

「あぁ、余程恐ろしい目あったんだろうな。全員が全員、情報を聞こうとしただけで恐怖に震えるらしいぜ（当然だよな。俺もすぐに逃げ出すぜ）」

「つまり、地下水路にいるデジモン達はかなり強力な力を持っていると言う事でしゃろうか？」

「あぁ、そう言う事だ（少なくともお前らにとっては悪夢以外の何ものでもないだろうな）・・・とにかくだ。明後日の正午には今戦える機動六課メンバー全員で地下水路内部に入り、入り込んでいるデジモン達を全て排除。任務につく時には地上本部から送られてくる防護服を全員装備状態で当たる事だそうだ。それとエリオ！」

「ッ！はい！」

突如として名前を呼ばれた事にエリオは思わず驚き、慌てて座っていた椅子から立ち上がりゲンヤの顔を見つめた。

「次の任務では、八神がお前に渡した新デバイスじゃなくて、今ま

で使っていたデバイスで任務に当たれ。使い慣れていないデバイスで事故でも起こしたら、お前だけじゃなくてメンバー全員に迷惑が掛かるからな」

「はい、分かりました」

「それとフェイトの嬢ちゃんの代わりのメンバーが到着するのも明後日頃だから、着きしだいに地下水路で合流する予定になっている。まぁ、シグナムの奴を補佐するのが主な任務に成るだろうが、実力は一緒に来るデジモンと一緒でかなりのものだ」

「デジモン？それじゃ、その人もオーリス三佐やキャロと同じでデジモンをパートナーにしている人なんですか？」

「まぁな。本当なら別の奴にしようと考えていたんだが、情勢を考えて三人目も送る事にしたらしい。まぁ、多分問題は無い筈だ。それにシグナムとは面識もある奴だし、現状の機動六課で最も必要と思われる奴らを選んだから、問題はないだろう」

「誰なんですか？」

「それは現地で会って確かめろ。此処で俺が何かを言うよりは、直接会って自分達の目で確かめた方が良いからな。それじゃ今日の会議は此処までだ。各自明後日の任務に対して調子を整えて置けよ」

そうゲンヤが会議を終わらせると、スバル、ギンガ、エリオ、キャロなどのＦＷメンバー達は訓練所の方へと歩いて行き、後方メンバーのロングアーチメンバーは地下水路の地図などで最適な道順についてなどの相談を始めた。

それを確認したゲンヤは、隣の席に座っているはやてとオーリス

に付いて来る様に促し、三人は会議室を出て部隊長室の中へと入って行き、裏についての話し合いを始める。

「先ずは大門大達からの報告だが、破壊した研究所で生き残っていた人造魔導師は全部で三名。しかもその三人のオリジナルは、高町の嬢ちゃんに、フェイトの嬢ちゃん・・・・そして八神お前だ」

「ッ！！私の人造魔導師！？」

「確かなのですか？」

「嘘はねぇだろうよ。大達が嘘をつく理由なんて無い上に、お前らは優秀な魔導師だからな。連中からすればこれ以上に無いほどの素体だろうぜ。他にも人造魔導師と思われる子供いたそうだが・・・・全員死んでいやがったそうだ」

『・・・・・・』

ゲンヤが告げた事実にはやてとオーリスは顔を険しくして無言でゲンヤの顔を見つめた。

その様子にゲンヤは黙って頷き、自身も顔を険しくしながら話を続ける。

「少なくとも今回の件で本局は地上には当分何も出来ねぇだろう。だが、裏では必ず動いて子供達とフェイトの嬢ちゃんを連れ去ろうとするだろう。だから当分の間は接触は完全に禁止。エリオの奴には俺から説明して置くからお前らは任務の方に集中しておけ」

「それは分かりましたわ。それでエリオの保護者はゲンヤさんになったんですか？」

「まぁ、そうだ。レジアスの奴でも良かったんだが、何でしらねぇけどよぉ。エリオの奴を警戒しているみたいなんだよな」

「父さん・・・・・親バカも大概にして欲しいわ」

『ハッ？』

オーリスの呟いた言葉の意味が分からずゲンヤとはやては疑問の声を上げた。

しかし、オーリスはゲンヤとはやての疑問には答えず、こめかみを手で押さえ続ける。

オーリスには何故レジアスがエリオを警戒しているのかは分かっていた。キャロの存在である。

レジアスはキャロをオーリスと同様に実の娘のように思っている。最初は後に起きる戦いの為にキャロを仲間に加えたのだが、何時の間にか情が移り娘か孫みたいな気持ちを抱いているのだ。因みにレジアスは何気に子供好きであり、休日などはキャロなどの親がいない子供達がいる孤児院にリュウダモンなどの成長期デジモン達を連れて遊びに行っていたりする。自身の子供好きとデジモンが危険な生物ではないと地道な活動を行っているのだ。

話は戻すが、当然娘であるオーリスはその事を知っている為に、キャロに悪い虫がつくと思ってエリオを警戒しているのだと気がついていた。

オーリスはその事に頭が痛そうにするが、何とかそれを振り払い真剣な瞳でゲンヤの顔を見つめる。

「話は分かりました。それで本局が担当している他の管理世界の現状は如何なのですか？」

「・・・・・例の兵器、ギズモンが投入され始めた」

『ッ！！』

「その成果で管理世界を悩ませていたゲートタワーがかなりの数で破壊されている。そのせいで管理世界の連中は本局を前みたいに信用し始めていやがる。ミッドにもギズモンを投入すると言う意見が出ているらしいが、こっちはレジアスの奴が全力で止めているから当分は大丈夫だろうが、機動六課が結果を出し続けなければレジアスの野郎でも止めきれねぇだろうな」

「・・・・それほどなんですか？例のギズモンちゅう兵器は？」

頭が痛そうにしているゲンヤにはやてはそう質問した。

既にはやては前回の任務終了後にオーリスから本局が使おうとしている兵器ーギズモンについての資料を渡され読んでいる。そしてギズモンの正体を知ったはやてはそれを作り上げた倉田にも、使おうとしている本局の人間にも怒りを覚えた。アレだけデジモンを否定しながらデジモンから作り上げた兵器を使用しようとしているのだから当然だろう。

そのギズモンが投入されたのだから、本格的にデジモン排除が進んで行く。そうなればますますデジモンと人間の溝が悪化してしまうと言うのに、本局は止まらないのだから、はやて達からすれば頭が痛い事でしかなかった。

「映像で俺も見たが、大抵のデジモンは一撃で死んじまっていやがった。まぁ、対デジモン用兵器なんだから当然と言えば当然なんだが、ありゃ本気でデジモンどもは怒り狂うぜ。特にロイヤルナイツや四聖獣なんて大物連中が見た日には、確実に管理世界は第九管理世界みたいに滅ぼされるだろぜ」

「ロイヤルナイツ・・・・」

はやてはゲンヤの言葉を聞き、自身の脇腹を思わず押さえてしまう。

既にロイヤルナイツ達が第九管理世界を滅ぼしてから一ヶ月と半月以上は経過しているが、それでもあの圧倒的な力をはやては忘れる事が出来なかった。もう一度戦う事になるのは覚悟はしているが、恐怖が先に出てしまうのだ。それだけの事をはやては味わったのだから当然と言えば当然だろう。

「・・・・何時頃現れるゲンヤさんは考えとりますか？」

「わかんねぇ。だが、時間はそう残されていないだろうな。連中はとにかく人間を滅ぼしたくて仕方ないだろうから、まぁ、覚悟だけはして置いた方が良いだろう。だからこそ、今回の任務で精神的にもお前らは強くならないと不味いんだ」

『精神的？』

ゲンヤが呟いた言葉に意味が分からず、はやてとオーリスは同時に疑問の声を上げた。

その事にゲンヤはしまったと言うような表情を一瞬してしまうが、すぐに冷静に立ち返り、扉の方へと歩いて行く。

「とにかくだ。次の任務で機動六課は苦手な場所でも力が発揮出来ると証明する必要が在る。頑張れよ八神。俺は地上本部に行ってもっと情報を手に入れてくる！じゃあな！」

ーーーバタン！！

ゲンヤは言葉と共に部隊長室を出て行き、はやてとオーリスはそのゲンヤの挙動不審なようすに疑問を覚えて顔を見合わせる。

「・・・・如何思います？」

「確実に地下水路に潜んでいるデジモンの正体を知っているでしょうね。ですが、此処まで隠すと言う事は・・・・・・」

「どないしました？」

突如として言葉を止めて顔を青ざめさせ始めたオーリスの姿にはやては疑問の声を上げた。

しかし、オーリスは、はやての質問に答える事無く顔を青ざめさせながらフラフラと扉の方へと歩いて行き、部隊長室を出て行く。はやてはその姿に訝しげな顔をし続けるのだった。

そして二日後の正午。クラナガンの中心に近い所に存在している地下水路の入り口前には、地上本部の装甲車が何台か存在し、その周りには機動六課の制服を着た局員達が地下水路の方にサーチャーを何個か向かわせていた。

その様子を指揮車の中で確認したゲンヤとオーリスは互いに顔を青ざめさせながら地下水路内部に存在しているデジモン達の姿を観察していた。

「・・・・・こ、これが隠していた理由ですか？」

「あぁ、地下水路内部は完全に地獄だな。三十体どころか、更に増

えて五十体は確実に存在しているぞ」

「・・・・・良かった・・・・・私に魔力が無くて・・・・・それで？作戦は内部で八神部隊長達がデジモン達と戦い、連中の侵入口を見つけて破壊する作戦ですよね」

「そうだ。万が一、連中に逃げられた時の為にも、この辺り一帯の下水溝や他の水路への出入り口には動ける俺の部隊の連中とポーンチェスモンを配置しておいてある。連中をクラナガンの街中に出すのは本気で不味いからな。億が一の可能性も考えてこの辺りの住民は全員避難させて置いた。これで少なくとも犠牲者が出るのは俺達だけだ」

「・・・・・お願い！！本当に出てこないで！！」

オーリスは何時もの理知的な様子も見せずに祈りの姿勢をその場でとってしまった。

それだけ地下水路の中にいるデジモン達と相対したくは無いのだ。そのオーリスの姿にゲンヤが神妙な顔をして頷きながら外へと出て行き、別の車両の内部で全身を覆う防護服を着終えたはやて達に声を掛ける。

「八神・・・・・準備は終わったか？」

「コ～ホ～、はい終わりましたけどゲンヤさん？」

「コ～ホ～、父さん本当に此処までの防護服が必要なの？」

はやてとギンガは顔に防毒マスクを付けながら疑問の声を上げ、他のエリオ、キャロ、スバルに、笑いを堪えるような顔をしていた

フリード、リュウダモン、狼形態のザフィーラも疑問の視線をゲンヤに向けた。
　現在のはやて、ギンガ、スバル、エリオ、キャロの姿は何処ぞの帝国騎士に似たマスクを付けている上に、バリアジャケットの意味さえも無いと思われるほどに全身を覆う防護服を着た姿だった。そのせいでスバルやギンガは防護服の上にリボルバーナックルやブーストキャリバー、バースターキャリバーを装着し直さなければいけないほどである。如何考えても開発したから使ってくれと言う防護服ではなく、何らかの事情があるからこそ作られたような防護服としかはやて達には思えなかった。因みにはやては既にリインとのユニゾンを済ませた状態である。

「（それでも足りねぇぐらいだよ）・・・・まぁ、気にするな。最近の地上の技術者連中はマッド化しているらしいから、多分その影響だろう」

「コ～ホ～、そうですか。まぁ使えちゅう話しやから、使わせて貰います。それでもうデジモンの映像は捉えたんですやろ？」

「コ～ホ～、うん。情報を教えてよ、お父さん」

「ゲンヤさん、お願いします」

　はやての言葉に頷きながらスバルとキャロも同様に疑問の声を上げ、他のメンバーもゲンヤに顔を向ける。
　答え難い質問をされたゲンヤは背中から冷や汗を流し始め、リュウダモンはその様子に訝しげな視線を向けながら近づく。

「おい、オッサン？一体何を隠してんだよ？」

「ゲンヤ。任務に当たるのならば敵の情報を絶対に必要だ。少しでも良い。今回の敵の情報を教えて貰いたい」

「キュル〜！！」

リュウダモンだけではなくザフィーラとフリードもゲンヤに詰め寄り、敵の情報を教えるように促す。

その姿にゲンヤは更に冷や汗を流し始め、隠すのは無理だと即座に判断するとリュウダモン、ザフィーラ、フリードの首を掴む。

ーーーガシッ！！

「ちょっとお前ら来い」

『ハッ！？』

ゲンヤの突然の行動にリュウダモン達だけではなくはやて達も驚きの声を上げるが、ゲンヤは一切構わずに指揮車の中にリュウダモン達を連れ込んで行った。

その様子にはやてはますます今回の任務に疑問を覚え、自身の隣でゲンヤの姿に戸惑っているギンガに声を掛ける。

「コ〜ホ〜、ギンガ。今回の任務、ほんまに如何思う？敵の情報を此処まで隠すやなんて？今までの任務では無かった事や」

「コ〜ホ〜、そうですね。私も父さんは何かを隠していると思います」

「コ〜ホ〜、私も同意見だよ、ギン姉。何か任務の日が近づく度にお父さんの挙動が可笑しくなっていたし」

「コ～ホ～、オーリスさんもですよ。何で分かりませんけど、何かを恐れているような印象を此処数日で感じました」

「コ～ホ～、僕も同じ感想です。何でか分かりませんけど、ゲンヤさんはやけに一昨日から接近戦の訓練を重要視しろって言って来たんですよ」

ギンガ、スバル、キャロ、エリオもそれぞれ自分達が知る情報を説明し、はやては尚更に今回の任務に不安を覚え、事前にユニゾンしていたリインと内心で話し合い始める。

（如何思うリイン？こんだけ敵の情報を隠すやんて、何か絶対に裏が在ると思うんやけど？）

（リインも同意見です。はやてちゃんに頼まれて、ゲンヤさんのコンピュータにハッキングしましたけど、全然今回の任務に出て来るデジモンの情報は無かったです）

（徹底的に情報を隠しとるな・・・・まさか、今回の敵には究極体が存在してるんやないやろうな？）

（それは無いと思うです。その情報なら絶対に教えると思うですけど）

（・・・・それもそうやな。こうなったら先に先行させたレナの情報を待つしかないやろな）

そうはやては内心で結論を出すとギンガ達と共に指揮車の方を見てみると、顔を本気で青ざめさせたリュウダモン、ザフィーラ、フ

リードを伴ったゲンヤが出て来て、はやて達に声を掛ける。
「敵のデジモンについての情報は、地下水路の中に入ってからリュウダモン達に聞いてくれ。この三人には全部伝えたらからな！！（こうなりゃら、こいつ等も道連れだ！！）」
（このオッサン！！俺達まで巻き込みやがった！！チクショウ！！）
（見損なったぞゲンヤ！！この借りは必ず返す！！）
（キュルーーーー！！！！！）
宣言しているゲンヤの背にリュウダモン、ザフィーラ、フリードは怒りの視線を放ち、はやて達はその姿に疑問を覚えながらリュウダモン達を伴って地下水路の中へと入って行くのだった。
その先に史上最強の悪夢達が存在しているとも知らずに、はやて達は地獄の中に足を踏み入れるのだった。

同時刻。別の場所の地下水路の入り口の前に、背が高く長銃のようなデバイスを背負った男性と、その足元に銀色に光る甲殻を持って背の部分に丸い円盤状なようなものに紋章が描かれたデジモンが立っていた。
「さて、これから機動六課と合流か。しかし、姉（あね）さんがやられるとは思っても見なかったな」
「フン、嘘をつけ。お前は私と長く付き合っていたんだ。デジモンの強さは充分に分かってるだろうが」

「そう言うなよ。これでも姉(あね)さんとは一時期一緒の部隊にいたから、実力を知っているからこそだぜ」

デジモンの言葉に男性は苦笑を浮かべながら答え、デジモンは思わず溜め息を吐いてしまう。

（ハア～、何故コイツが私のパートナーなのだ・・・・・やはり、あの時に声を掛けなければ良かった。全く震えているコイツにアドバイスなど与えなければ、コイツと此処まで付き合う事など無かったと言うのに・・・・・まぁ、あの娘にも頼まれている事だ。せいぜいミスをしないぐらいのアドバイスは何時もどおり行うか）

「それに中将の奴。キャロに悪い虫が付きそうだから、今回の任務で序に排除しろって、完全に公私混同だろうが」

「お前も私の力を使って妹の情報を調べているだろうが、このシスコン」

「当然だろうが！！あいつは無茶苦茶可愛いんだぞ！！この前も男友達と一緒に歩いていたと知った時には、その男を撃ち殺そうと思ったぞ！！」

「その後にばれて、ボコボコにされたのは何処の誰だ。全く私の周りには親バカとシスコンしかいないのか・・・・・部隊の連中もキャロに近づく男は抹殺すると叫んでいたし・・・・・本気でまともな奴に会いたい」

「まぁ、気にするなよ。それよりも行くぞ。もう地下水路の中に部隊長達も入った頃だろうからな」

「仕方があるまい、行くかヴァイス」

「あぁ、よろしく頼むぜ、サーチモン」

サーチモン、世代／アーマー体、成熟期、属性／データ種、フリー、種族／昆虫型、必殺技／ジャミングヘルツ

古代種のワームモンが知識のデジメンタルで進化した昆虫型デジモン。（現在では通常進化の成熟期デジモンとしても確認されている）

『レドーム』と言う背中のレーダーで情報収集と敵の探索を得意とする。小さな音や振動さえも確実にキャッチできる。必殺技は、背中の『レドームから』敵の神経中枢を混乱させる振動電波を放ち、敵を錯乱状態にする『ジャミングヘルツ』だ。

男性ーヴァイス。グランセニックとデジモンーサーチモンは互いに言い合いを行いながら、地下水路内部へと入って行くのだった。

史上最強（女性にとっての）汚物系デジモンズ！！中編

地下水路内部。
暗くジメジメして入り組んだ通路の中を防毒マスクと防護服を着たはやて、ギンガ、スバル、キャロ、エリオに、その後ろを顔を青ざめさせて俯かせているリュウダモン、狼形態のザフィーラ、フリードが歩いていた。
そしてはやて達の後ろを歩いているリュウダモン達は、前を黙々と進んでいるはやて達に気づかれないように顔を寄せ合い小声で話し始める。

（・・・・なぁ、このまま行ったら確実に例のデジモン達に会うよな？）

（あぁ、そうなれば主達は確実に逃げ出す。そしてその後には隠していた私達の命が危ない）

（チクショウ！！聞かなきゃ良かったぜ！！そうすれば、こんな事を悩まなくて済んだのによ！！）

（今更言っても遅いぞ、リュウダモン・・・・・こうなれば、全ての責任をゲンヤに押し付けるのだ。元々の原因は隠していたゲンヤにこそあるのだから、私達はその被害者とすれば良い）

（よし！それで行こう！！元はと言えば全部あのオッサンが原因だからな！！）

（キュル～！！）

「・・・・コ～ホ～、何コソコソと隠れて話しているんや？」

ーーーギクッ！！！

突如としてはやてに声を掛けられた事にリュウダモン達は思わず動きが止まり、恐る恐る前を見てみると、防毒マスクに顔を隠しながらもギラギラとした視線を向けているはやて達が存在していた。

その視線と今のはやて達の姿にリュウダモン達は本能的な恐怖に襲われ、思わず後ずさりし始めてしまうが、はやては構わずにリュウダモン達に質問を行い始める。

「コ～ホ～、さて質問やけど・・・・今回の敵デジモンの正体は一体何や？ゲンヤさんはあんた等に聞けば分かるって言うとったな？」

「リュウダモン。そろそろ教えて欲しいな」

「私達もだよ」

ーーースチャッ！！

『ヒィッ！！』

キャロの言葉に応じるようにギンガが声を出すと、全員がリュウダモン達に向かってデバイスを構え出した。

その様子にリュウダモン達は恐怖に駆られ、逃げ出す方法を考えようとするが、逃がさないと言うように周りを囲まれてしまう。

「コ～ホ～、いい加減に吐いた方がいいと思うんやけど？これ以上は私らも我慢の限界や」

「敵の情報は必要な事よ。戦う前に情報を知って置きたいの」

「いや、それは分かるけどよ」

「・・・・知ったら絶対に任務放棄して逃げると思うのですが主？」

「それは如何言う事なん、ザフィーラ？」

はやては訝しげな声を出してザフィーラに質問し、ギンガ達も訝しげ表情をマスクの中で浮かべた。

“知ったら任務放棄を行って逃げる”。その様な事をはやて達はするつもりは全く無い。何せ覚悟を決めて戦いに挑んでいるのだから、どんな事があっても逃げるつもりなどはやて達には存在していない。

しかし、リュウダモン達は絶対に逃げ出すと確信していた。何故ならば敵は本気で女性にとって天敵と言えるデジモン達。覚悟も決意など関係なく逃げ出してしまうと確信し切っていた。

自分達でさえすぐに逃げ出したいのだ。エリオを除いた女性であるはやて、ギンガ、スバル、キャロは絶対に逃げ出すと確信出来る。

その事が分かっているリュウダモン達は口を全力で閉じて話さないと言う意思表示をはやて達に向ける。はやて達はますますリュウダモン達の様子から不安を覚え、意地でも聞き出そうとデバイスを構えだすが、その直前に天井の方から微かな音が響く。

ーーーカサッ、カサカサカサッ、カササッ

「うん？何の音・・・・・」

「部隊長如何しました？」

言葉が途切れて体を震わせ始めたはやての様子に、ギンガは疑問の声を掛け、他のメンバーも心配そうにはやてを見つめるが、はやては答えずに恐る恐る天井に右手の人差し指を向けた。
その様子にギンガ達は疑問を覚えながらはやての指差す方向を見てみると、其処には黒光りする背を持ち、四本の手を持って、黒いブーツを履いた昆虫型デジモン ―ゴキブリにソックリな姿をしたゴキモンが八体近く天井に張り付きながらはやて達を見つめていた。

ゴキモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／昆虫型、必殺技／ドリームダスト
黒光りしたゴキブリの姿をした昆虫型デジモン。カサカサと素早く動き回り、強いデジモンに会うとすぐに逃げてしまう。戦闘力は低いが、生命力は凄まじく高く持久戦に強いデジモンである。必殺技は、大量のゴミを相手に向かって振り散らす『ドリームダスト』だ。

『ゴキャァァァァァァッ！！』

『い、いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！』

「おい！！ちょっと待て！！そっちは！！」

ゴキモンの姿を見たはやて、ギンガ、スバル、キャロは悲鳴を上げながら即座に前に向かって全速力で駆け出し、リュウダモンがその背に向かって叫ぶが、四人は止まらずリュウダモン達の視界の中から消えていった。
仕方が無いだろう。ゴキモンの姿は如何見ても台所などに多く出没するゴキブリの姿にソックリな上に、大きさが人型クラスなのだから、一般的な女性なら即座に逃げ出すだろう。当然ながら覚悟や決意を決めていてもはやて達は女性である。ゴキモンの姿を直視する事など出来はしない。

しかし、エリオを除いたリュウダモン達は逆に焦った顔をしてはやて達が消えて行った方向を睨む。

「不味いぞ！！この先にはもっと凶悪な連中がいるのに！！キャロ達は向かっていちまった！！」

「エッ！！もっと凶悪なデジモン！？」

「その通りだ。エリオ。だからこそ、すぐに主達の救援に向かうぞ！！」

「キュルーー！！」

「は、はい！！」

ザフィーラとフリードの叫びにエリオは頷き、急いではやて達の向かった方向へと走り出そうとするが、その前に天井に張り付いていたゴキモン達が一斉にエリオ達の前に立ちはだかる。

ーーースタッ！！

「クッ！！この！！」

目の前に降り立ったゴキモン達に向かってエリオは自身が握っていた槍型のデバイスを全力で降り抜く。

ーーードゴオン！！

「ゴキュ〜〜〜」

「えっ！？」

直撃を食らって後方へと吹き飛んで行ったゴキモンの姿に、エリオは思わず声を上げ、ザフィーラも吹き飛んだゴキモンの姿をポカンと見つめた。

エリオにしてもザフィーラにしても、今の一撃は牽制程度の役割にしかならないと考えていたのだ。今まで戦って来たデジモン達の事を考えるのならば当然の事なのだが、ゴキモンの事をよく知らないエリオとザフィーラは戸惑った視線を倒れているゴキモンと他のゴキモン達に向けていると、エリオの横にリュウダモンが立ち、説明を行い始める。

「ゴキモンの奴は成熟期のくせに戦闘力がかなり低い奴だ。だから、一対一の戦闘だけを考えればお前でも勝てるレベルだぜ」

「そ、そんなデジモンがいたの？」

「あぁ、だけどその代わりにこいつ等かなりしぶといんだよ。見てみろよ」

リュウダモンはそう言うと、先ほどエリオが弾き飛ばしたゴキモンの方を指差し、エリオとザフィーラがそのゴキモンに目を向けると同時に、倒れ伏していたゴキモンは平然と立ち上がり、リュウダモンに向かって笑い声を上げる。

「ゴキキィィィィィッ！！」

「ダメージが無いのか！？」

「いや、在りやがるんだけど、全く堪えてねぇだけだ。こいつ等は

とにかく生命力だけは高くてな。一対一なら何とかなるんだけどよぉ。八体と成ると全部倒すのに時間が掛かるんだ。特に俺とフリードは本気を出せねぇしな」

「・・・・厄介だな。主達は既に先に向かって駆け出してしまったし、この先にいるデジモン達の事を考えれば、出来るだけ早く合流したい」

「俺もだぜ！！だったら、さっさとこいつ等を倒して合流するぞ！！」

「うん！！ハアァァァァァァーーーー！！！」

リュウダモンの言葉にエリオは即座に頷き、ゴキモン達に向かってリュウダモン達と共に飛び掛り、戦闘を開始した。

一方その頃。リュウダモン達と分かれ、ゴキモン達から逃れる為に逃げ出したはやて達は、普通の通路よりも大きい通路の影からゴキモン達が追って来ていない事を確認する。

そして誰も追って来ていない事を確信すると、同時に全員が安堵の息を吐きながらそれぞれ顔を見合わせあう。

「コ～ホ～、これでハッキリしたわ！！あんなデジモンがいるから、ゲンヤさんは私らに情報を教えなかったんや！！」

「コ～ホ～、私も同感です！！あんなゴキブリそのものようなデジモンがいる情報を教えないなんて！！」

「幾らなんでも酷過ぎるよ！父さん！！」

はやて、ギンガ、スバルはそれぞれゴキモンの事を隠していたゲンヤに怒りをあらわにした。

当然と言えば当然だろう。よりにも寄って女性ならば大抵の者は恐怖に襲われてしまうゴキブリに似たデジモンがいる場所に送り込まれたのだから、怒りを覚えるのも正しいだろう。

しかし、怒りに身を震わせているはやて達とは違い、キャロだけは別の不安に襲われ、周りの水路を見回し始める。

「・・・・・・コ～ホ～、あの・・・・・此処の水路って・・・・・“汚水”は処理していませんよね？」

「“汚水”？・・・・流しとるで、何せ此処の水路はクラナガン中の水が流れる場所やから。そうやろ、ギンガ？」

「コ～ホ～、はい。確かに地下水路はクラナガン中の水を一度全部集結させて、処理施設に送った後に海に流すんで、“汚水”も、もちろん流れていますね」

ーーービキッ！！

「？如何したのキャロ？」

ギンガの言葉を聞き終えると同時に石のように全身が固まってしまったキャロに、スバルは疑問の声を掛けた。

しかし、当の本人であるキャロは石のように固まったまま答える様子も無く、はやて達はその事に訝しげな顔をしてキャロに声を掛けようとした瞬間。

ーーーバシャン！！！

『ッ！！！』

突如として水が流れていると水路の方から水を弾くような音が響き、はやて達は其方に慌てて顔を向けると、水路を流れている水の中から全身をドロドロに腐らせてヘドロのような状態に成っているデジモン－レアモンが水の中から出ようとしている姿を目にした。

レアモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／アンデット型、必殺技／ヘドロ

体の肉が腐り落ちて、ヘドロ状態に成っているアンデッド型デジモン。体を機械化し長く生きようとしたが失敗したためにこうなってしまった。体を構成するデータが崩壊してしまったため、醜い姿になっても生き続けている。攻撃力や知力がないので、同世代のデジモンにはほとんど勝てない。幼年期のデジモンは、放たれる悪臭に耐えることができない。必殺技は、口からヘドロの固まりを相手に向かって吐き出す『ヘドロ』だ。

「ウアァァァァ～～～」

「なっ！？何やあのデジモンは！？」

「レアモンです！！全身がヘドロ状になっていて、悪臭や毒ガスを撒き散らしている危険なデジモンですよ！！」

「それって本当なの！？」

キャロの説明にスバルは疑問の声を上げて、はやてとギンガもキャロの方を見つめると、キャロは無言で頷く。

そのキャロの姿にはやて達はレアモンに対する警戒を強め、それぞれレアモンに向かって構えを行うとすると、レアモンは突如としてはやて達に向かって顔を向け、口からヘドロの固まりを吐き出す。

「ウアァァ〜〜〜、ヘドロッ！」

ーーーボン！！

『クッ！！ウイングローードッ！！』

ーーーシュン！！

高速で迫って来るヘドロを目にしたスバルとギンガは瞬時に青と紫の道ーウイングローードを発動させて、その上を走る事でかわし、はやても飛べないキャロの襟を掴むと、すぐさま飛行魔法を使用しながら横に飛び去る事でヘドロを避けた。

その間にスバルとギンガはレアモンの周りにまで伸ばしていたウイングローードの道を駆け抜け、レアモンを翻弄するように動き回る。

ーーーギュゥゥゥゥゥゥゥンッ！！！

「ウアァ〜〜！」

自身の体の周りを高速で駆け回っているスバルとギンガにレアモンは攻撃を行うとするが、二人の動きは速くレアモンが攻撃する時には、二人はその場にはいなかった。

ある意味ではレアモンにとっては場所が悪かったとしか言えなかった。レアモンの体の大きさが通路の埋め尽くすほどではないが、それでもかなりの大きさを持っている。だからこそ、スバルとギンガにとっては普通よりは広く感じる通路でも、レアモンにとっては

狭く感じる場所だった。最もそれでも外で戦っている時よりはスバルとギンガも狭く感じるが、二人はその場合の時もちゃんと考えて訓練を積んでいたので、動きが多少衰える程度に留めていた。
しかも、今のスバルとギンガは防毒マスクも付けているので、レアモンの悪臭と毒ガスも気にせずに戦う事が出来るのだ。

「ウァ〜〜」

「其処ッ！！ハアァァァァァァーーーー！！」

レアモンの背後に回り込む事に成功したスバルは、走っていた勢いのままレアモンの背中に向かって右拳を振り抜く。

ーーーズボッ！！

「イッ！！？」

スバルが放った右拳はレアモンの体に直撃すると同時にレアモンの体の中へと減り込んでしまった。
その事にスバルは驚き、慌ててレアモンの体のヘドロが付いたままの右手のリボルバーナックルを引き抜き、そのまますぐさまレアモンから離れて、ギンガに念話を送り始める。

（ギン姉ッ！！コイツに打撃は効かないよ！！体の中まで腐っていて、打撃の衝撃が全部吸収されちゃう！！）

（クッ！！厄介ね！）

スバルの報告にギンガは悔しげな声を上げた。
ギンガとスバルの攻撃の殆どは近距離が主としている。一応離れ

た所からも攻撃出来る魔法は所持しているが、近距離戦に比べれば遥かに威力が落ちてしまい、レアモンを倒せるほどの威力は無いのだ。
　その事が分かっているギンガとスバルは、どうやってレアモンを倒せばいいのかとレアモンの攻撃を避けながら考えていると、突如としてレアモンの体に青色の短剣が二十本ほど突き刺さり、その場所からレアモンの体は凍り始める

ーーードスドスドスドスッ！！

ーーーガチガチガチッ！！

「ウアアァ～～～ッ！！」

　自身の体が凍り始めた事に気が付いたレアモンは、何とか凍った箇所を自身から切り離そうとするが、その前にキャロの詠唱が通路の内部に響く。

「ブーストアップ・バレットパワーーッ！！」

「フリジットダガーーー！！！」

ーーードドドドドドドドドッ！！

「ウアァァァ～～～～～ッ！！！！」

　キャロの補助魔法によって威力が強化されたフリジットダガーを四十本ほど、はやてはレアモンに向かって撃ち込み、レアモンの体は更に凍って行く。
　それを確認したギンガとスバルは迷わずに凍っているレアモンの

体の部分に、それぞれ渾身の力を込めた拳を撃ち込む。

「ナックルダスターー！！！」

「ナックルバンカーー！！！」

ーーードゴオオオオオオン！！

ーーーバキン！！

「ウガアァァァァ～～～～！！！！！」

今度は先ほどとは違い、スバルとギンガの攻撃はレアモンの体に減り込む事無く直撃した上に、凍っていた箇所からレアモンの体に罅が入った。

レアモンは自身の体に傷が入った事に苦痛の叫びを上げてギンガとスバルから逃れようとするが、その前にキャロの補助とユニゾンしているリインの補助を受けたはやてが罅が入っている場所に威力を限界まで絞った砲撃を撃ち出す。

「ディバインバスターー！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオン！！！

「ウアアァァァァァァァァァ～～～！！！！」

ーーードゴオオン！！

はやてのディバインバスターを食らったレアモンは小規模な爆発を起こしながらデータ粒子に変わり、レアモンは消滅した。

はやて達はその事に安堵の息を吐きながら、通路の中に落ちているレアモンのデジタマを外にいるゲンヤ達の所に転送しながら顔を見合わせる。

「・・・・・コ～ホ～、まさかと思うんやけど、今回の敵デジモンは、今のレアモンやその前のゴキブリみたいなデジモンやないやろな？」

「コ～ホ～、その可能性は高いと思います。だから今回はあんなに情報を隠していたんですよ」

「酷いよ！！私達って女の子ですよ！！それなのにあんなデジモンが沢山いる場所に送るなんて！！お父さん、幾らなんでも酷すぎるよ！！」

「・・・・・・・・・・・・違うと思います」

『ハイ？』

キャロがボソッと呟いた言葉を耳にしたはやて達は、思わず疑問の声を上げながら恐怖に震えているキャロに目を向ける。

「・・・・・多分違います・・・・・この先にいるデジモン達は・・・・ゴキモンやレアモンなんかよりも遥かに最低なデジモン達なんですよ・・・・・そのデジモン達の事が在ったから・・・・ゲンヤ副部隊長は隠していたんです」

「えっ・・・・・キャロ？今何て言ったの？・・・・さっきのレアモンやゴキブリのようなデジモンよりも最低なデジモンって一体何なの？」

スバルは恐怖に体を震わせているキャロに疑問の声を掛け、はやてとギンガも訳が分からないと言うようにキャロの姿を見つめた。
既にゴキブリと言う女性の天敵と言う害虫に似た姿をしたゴキモンに、全身が腐り切っていったレアモンと言う生理的に受け付けたくないデジモンまではやて達は目にしている。正直な事を言うとはやて、ギンガ、スバルはレアモンとゴキモンとだけは二度と会いたくないと思っている。
しかし、キャロには既に分かっていた。ゲンヤが何故あそこまでデジモンの情報を隠し通したのかと言う理由と、デジモンの正体を知っている筈のリュウダモン達が話さなかった理由にも。
その事を考えたキャロは防毒マスクの中で目尻に涙を浮かばせながら恐怖に体を震わせ、その様子を目撃したはやて達はキャロの姿に凄まじい不安に襲われ、詳しくキャロに話を聞こうとする。
しかし、その前にはやてとユニゾンしているリインがはやてに声を掛けて来る。

（はやてちゃん？何か音が聞こえませんか？）

「音やて？」

ーーー・・・・・ズル、ズル、ズルルッ

「ほんまや？何の音やろか？」

微かに聞こえてきた何かを引き摺っているような音を耳にしたはやては音の聞こえる方に顔を向け、同様に音を耳にしたスバルとギンガも音の聞こえて来る暗がりの方に目を向けてみると、暗闇の中から緑色をした巨大なナメクジのような軟体デジモン―ヌメモンと、同じ姿で色合いが黄色くなっているゲレモンがそれぞれ十体ずつ姿

を現した。

ヌメモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／軟体型、必殺技／ウ〇チ

ナメクジのようにヌメヌメとした体の軟体型デジモン。暗くてジメジメしたところが大好きで知性や攻撃力はなく、本能のままに生きている。敵に襲われると自分したウンチを相手に投げつけて身を守ると言う最悪な攻撃を放ってくる。必殺技は、自分のウンチを相手めがけて投げる『ウ〇チ』と言う、史上最悪な技だ。

ゲレモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／軟体型、必殺技／ハイパースメル、ウ〇チ

汚い場所が好きなヌメモン系の軟体型のデジモン。戦闘力は低いが、凶暴な性格で、相手を選ばず襲い掛かる。負けてもすぐ忘れてしまうために、何度も敵に戦いを挑む。必殺技は、異臭を体中から撒き散らす『ハイパースメル』に、ヌメモン同様に自分のウンチを相手に投げる『ウ〇チ』だ。

『ヌ〜〜メ〜〜』

『ゲ〜〜レ〜〜〜』

『気持ちワルッ！！！』

体をナメクジのように引き摺って来たヌメモンとゲレモンの姿に、はやて、ギンガ、スバルは先ほどのレアモン以上の生理的嫌悪感に襲われ後ずさりながらヌメモンとゲレモンの姿を見つめた。

「なっ！？何ですかアレ！？」

「アレもデジモンなんですか！？」

「いや、私に聞かれても分からへんよ！！（ディーアークは防護服のポケットの中やし、此処はキャロに聞くのが得策やな）」

ギンガとスバルの叫びにはやては答えながらヌメモンとゲレモンの情報を聞こうと、自分達の背後にいるはずのキャロに顔を向けるが、キャロの姿は何処にも存在していなかった。

「アレ？・・・・・キャロは何処にいったん？」

「アッ！！はやてさん！アソコ！！」

スバルはそう答えると共に自分達の背後に存在している通路の奥の方を指差し、はやてとギンガが指差す方向を見てみると、スバルとギンガどころか、魔力を持っていた頃のフェイトと同レベルのスピードで走って行くキャロの姿が存在していた。

それを目にしたはやて、ギンガ、スバルは、背後から迫って来ているヌメモンとゲレモンにも気がつかずに、三人の間に冷たい風が通り抜ける。

ーーーヒュル〜〜〜〜

「・・・・・・逃げたみたいやな」

「・・・・・はい、確実に逃げていますね・・・・・これってかなり問題が在るんじゃないでしょうか？」

「在るに決まっとるやろうが！！！何考えているんやキャローーーーーーーー！！！！！！！！」

ギンガの質問にはやては逃げ出しているキャロの背に向かって叫ぶが、キャロは、はやての言葉などに全く構わずに通路の奥へと走って行く。
その姿にはやてはますます怒りを溢れさせて、背後から迫って来ているヌメモンとゲレモンにシュベルトクロイツを構える。ヌメモンとゲレモンで体の奥底から湧き上がって来ている怒りを晴らそうと言うのだ。
ただでさえ今回の任務では苛立つ事が多いと言うのに、一番デジモンの事では信用していたキャロまで逃げ出してしまったのだから、はやてが怒りをヌメモンとゲレモンで晴らそうとするのも当然だろう。

「先ずはこのデジモン達や！！！こいつ等を全部倒した後に、キャロを捕まえてお仕置きしたる！！！子供だからって絶対に許させん！！スバル！！ギンガ！！すぐに戦闘準備！！」

『は、ハイッ！！！』

はやての怒りに叫びに、スバルとギンガは即座にヌメモンとゲレモンに向かって構えを行いだした。
それと共にはやてもリインに補助を受けながら射撃魔法の準備を行い始めるが、その前に一体のヌメモンが“茶色の物体”を構え出し、はやて達に向かって投げ付ける。

「ッ！！避けるんや！！」

ヌメモンが投げ付けてきた“茶色の物体”に即座にはやて達は回避行動を取る事でかわし、“茶色の物体”は壁にぶつかる。

ーーーピチャッ！！

『エッ！？』

余りにも軽い衝突音にはやて達は思わず声を上げて、壁にぶつかった物体を目にすると、はやて、スバル、ギンガの顔は血の気が引いたよう真っ青に染まり、ゆっくりとヌメモン達とゲレモン達の方に目を向けてみる。

それと共に今度は全てのヌメモン達とゲレモン達が“茶色の物体”ー『ウ〇チ』を大量に持ち出し始め、はやて達に向かって連続で投げ付けて来る。

『連続ウ〇チ投げッ！！！！！』

ーーーブブブブブブブブブン！！

『いやぁあアアア

「とにかく逃げるんや！！！あんな技を食らったら、ほんまにお嫁さんにいけなくなるで！！！」

「はい！！それじゃぁっ！！お先に失礼します！！！」

ーーーギュルゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥッ！！！

「って！！待たんかい！！私だけ置いてけぼりにするつもりかいな！！」

両足のローラーを回転させて先に進んで行くスバルとギンガの背にはやては叫ぶが、二人は構わずに先へと進んで行く。誰だって好き好んでウ〇チを投げつけてくるようなデジモンと一緒にはいたくは無いだろう。しかもそれが大量に追って来ているのだから、一秒でも早く逃げたいと女性ならば誰でも思う事だ。

当然ながらその事は、はやても理解し、自分がスバルやギンガならば絶対に同じ行動を行うと断言出来るが、直にやられると腹が立つのは当然の事だろう。

「ウゥゥゥッ！！」

（はやてちゃん！！速く！！速く前に！！このままだと射程距離に入ってしまうです！！）

「わかっとるわ！！こうなれば！！」

ーーービュン！！

はやては叫ぶと同時に自身の体を飛行魔法で通路の内部に浮かせ、

スバルやギンガの先へと進もうとする。
しかし、その直前に先の通路の方から先ほどのはやて達に負けないほどの大音量の悲鳴が響いてくる。

「いやぁあああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！

必殺技／ウ〇チ、ウ〇チパラダイス
金色に輝くウ〇チのような姿をした突然変異型（ミュータント）デジモン。コンピューター画面のゴミ箱に捨てられたデータのカスが集まって突然変異し誕生した。知性や攻撃力はまったく存在しない。必殺技は、スカモン、ゲレモン同様にウ〇チを投げる『ウ〇チ』に、全身をクルクル回転させてウ〇チを連続で投げつける『ウ〇チパラダイス』だ。

『ゲヒャハハハハハハハハハハハッ！！！！』

『キッ！！キャアアア

その事が思い浮かんでしまったはやて達の精神状況は、もはや発狂寸前にまで追い込まれ、今にも泣き出しそうな顔をしながらヌメモン達を見つめていると、ヌメモン、ゲレモン、スカモン達はそれぞれ大量にウ〇チを構え出す。

『連続ッ！！』

『ウ〇チパラッ！！』

『イヤァァァ

いたウ〇チを取り落とし、頭を抱えるようにして苦しみ出した。
突然に起きた事態にはやて達は思わず恐怖を忘れて、苦しんでいるヌメモン達の姿を見つめていると、空中から鋭い木の葉が無数にヌメモン達に向かって降り注ぐ。

「狐葉楔(こようせつ)ッ！！」

ーーーザザザザザザザザザザザッ！！

『ヌ～～～メ～～ッ！！！！』

ーーースタッ！！

「レナッ！！」

木の葉がヌメモン達に直撃するとほぼ同時にはやて達の前にレナモンが着地し、はやては思わず喜びの声を上げた。
レナモンは険しい顔をしながらはやて達の方を振り向くと、はやてとキャロの体を両脇に抱き抱えながら、スバルとギンガに向かって叫ぶ。

ーーーガシッ！！

「二人とも、私の後について来てくれ！」

ーーービュン！！

レナモンはスバルとギンガに叫び終えると同時に向こう岸の方の通路まではやてとキャロを抱えながら飛び移り、スバルとギンガもウイングロードを使用して向こう岸の通路に移動した。

それと共に苦しんでいたヌメモン達は復帰すると、向こう岸の通路に移動したはやて達を追い駆けようとする。だが、その直前に何処からとも無く幾つもの魔力弾が高速でヌメモン達に迫り、その体を貫いて行く。

ーーードン！！ドン！！ドン！！ドン！！

「ヌメッ！！」

「ゲレッ！！」

「ゲヒャッ！！」

次々の見えない狙撃者が放つ魔力弾はヌメモン達を貫いて行き、隠れて逃げようとするゲレモンやスカモンにも、まるで動きが完全に分かっていると言うように魔力弾はヌメモン達の急所へと放たれ、十分後には大量のデジタマだけがその場に残された。

その様子を反対岸の通路の方からを見ていたはやて達は、レナモンを除いた全員がポカンと顔して通路の所に落ちているデジタマを見つめる。

「先ほどのデジモン達の戦闘力は成熟期では最弱らしい。攻撃にしても威力は殆ど無く、精神的なもの以外ではダメージを負う事は無いそうだ」

「・・・説明ありがと、レナ・・・・・それよりも今まで何処におったん？」

「答えるのは構わないが、はやて・・・・後ろの二人に先ずは説明した方が良いだろう」

「アッ！！！！」

レナモンの言葉に意味に気がついたはやては声を上げながら自身の背後を振り向き、苦笑を防毒マスクの中で浮かべているキャロに、僅かに困惑したような瞳をしているスバルとギンガの姿を目撃する。

何せはやてがレナモンをパートナーにしている事をしているのは六課内部では、リイン、ゲンヤ、オーリス、ポーンチェスモン（白）、キャロ、リュウダモン、フリードぐらいなのだ。一応レジアスも知ってはいるが、その他の仲間達には秘密にして置いてある。当然スバルとギンガもはやてにパートナーデジモンがいる事を知らず、困惑した瞳ではやてとレナモンの姿を見つめ、はやてはしまったと言うようにスバルとギンガを見つめる。

そして互いに如何話を切り出したものかと悩んでいると、突如として背後からはやて達に声が掛けられる。

「フム、何か其方でもあったのか？」

「おいおい、サーチモン。女性同士の話に首を突っ込むなよ。そう言うのは後が怖いんだからよ」

「黙れ、シスコン。時間を無駄にしてはいられんのだぞ？それは分かっているはずだ」

『ッ！！』

聞こえて来た二人の男性の声に、はやて達は慌てて声の聞こえて来た方を見てみると、背中に長銃型のデバイスを背負った背の高い男性ーヴァイスが苦笑を浮かべながらはやて達を見つめ、その足元に立っているサーチモンが険しい視線ではやて達を睨んでいた。

その見覚えのある人物の顔にはやては驚き、ヴァイスに声を掛けようとするが、その前にキャロがヴァイスに向かって駆け出す。

「ヴァイスさん！！グスッ！フエェェェェェェェェェェン！！」

「オォォッ、怖かったよな、キャロ。安心しろよ、俺とサーチモンが来たからもう安心だぜ」

「その通りだ、キャロ嬢。シスコンはともかく私がいればヌメモン達など絶対に君には近づけんさ」

ヴァイスに抱きつきながら泣き続けるキャロに、ヴァイスとサーチモンは安心させるように声を掛けた。

その声に僅かにキャロの震えは収まり、ヴァイスとサーチモンは安堵の息を吐くと、困惑した顔で自分達を見つめているはやて、スバル、ギンガに向かって敬礼を行い出す。

「改めて自己紹介をします！本日付けで機動六課ライトニング分隊の副隊長として配属されたヴァイス・グランセニックです！」

「そのパートナーとして共に配属されたサーチモンだ。今後ともヴァイス共々宜しく頼む」

そうヴァイスとサーチモンは困惑を隠せずにいるはやて達に向かって、自己紹介をするのだった。

史上最強（女性にとっての）汚物系デジモンズ！！後編

地下水路内部奥深くに続く通路。
その通路をヴァイス、サーチモン、そしてレナと合流したはやて達は、サーチモンを先頭にしながら恐る恐る歩いていた。
何時先ほどのヌメモン達のような汚物系のデジモンが現れるのか分からないのだ。あの悪夢としか言えない攻撃など絶対にはやて、スバル、ギンガ、そしてヴァイスのズボンにしがみ付いたままのキャロは食らいたくはない。だからこそ、全身の神経を張り詰めて辺りを警戒するが、ヴァイスとサーチモン苦笑を浮かべながら声を出す。

「其処まで警戒する必要はないと思うんですがね。サーチモンがいる限り、不意打ちは絶対に成功しませんって」

「その通りだ。私の本分は索敵にこそある。隠密に特化したデジモンならばいざ知らず、ヌメモン達のようなデジモン達では私の索敵からは逃れられんさ」

「それについては私も保証しよう。彼らのおかげで私は、はやて達の危機を知れたから少なくとも索敵に関しては彼らは信頼出来る」

ヴァイス、サーチモンの言葉を肯定するかのようにレナも神妙な顔をしながら答えた。
その言葉にはやて達は安堵の息を吐き、張り詰めていた警戒心を僅かに緩め、気になっていた事をギンガとスバルは、はやてに質問し出す。

「え～と、部隊長？其方のキツネのようなデジモンは、部隊長のパ

ートナーデジモンで良いんですよね？」

「確かシグナムさんや他の人達も助けてくれたデジモンですよね？」

「・・・・・まぁ、此処まで来たら隠し切れんし答えたるけど。この事は完全に秘密やで？私がレナをパートナーデジモンにしとるんを知っているのは六課内部ではゲンヤさんに、オーリス三佐、ポーンチェスモン、キャロ、リュウダモン、フリード、そしてリインぐらいしかしらへんのや・・・・理由は分かるやろ？」

「はい、本局の方に出来るだけパートナーデジモンの存在を知られたくないからですね？」

「そうや。特に私には過去に色々あるさかい。それを理由に本局はレナを連れ去れる可能性もあるから、シグナム達にもレナの事は今の所は秘密にしとる。だから、此処での事は…」

「分かっていますよ。私もスバルもレナさんの事は秘密にします」

「安心して下さいよ。それに今まで何度もレナさんには助けて貰っていますし、そのレナさんを売ったりは絶対にしませんから」

「おおきにな二人とも」

「感謝する」

はやてとレナはギンガとスバルにそれぞれ頭を下げながら礼を言い、ギンガとスバルは笑みを浮かべながら頷く。

その様子を確認したヴァイスとサーチモンは突如として真剣な顔になり、はやて達に声を掛ける。

「親睦を深めるのは良いんですがね。出来るだけ早く連中を倒さないと不味い事になりますよ」

「その通りだ。連中はとんでもなく恐ろしい計画を実行しようとしているからな」

「恐ろしい計画やて？」

はやてはヴァイスとサーチモンの言葉に訝しげ声を出し、ギンガとスバルも訝しげな視線をヴァイスに向けると、ヴァイスはズボンにしがみ付いたままのキャロの頭を撫でながら説明を始める。

「えぇ、先ず順を追って説明しますと、俺とサーチモンはこの地下水路内部に入ってからすぐにデジモンの反応が最も多い場所を目指していたんですよ」

「その途中で私は彼らと出会い、互いに事情を説明しあって共に地下水路の奥へと進んで行ったのだ」

「うむ、その通りだ。レナモンの事は事前に中将から話を聞いていたので、すぐに仲間だと分かった為に行動を共にして奥へと進んで行った。そしてその途中で、私はこの場所に潜んでいるデジモン達の考えている計画を耳にし、一刻も早く連中を全て倒さねばいかんと判断したのだ」

「そ、それって、どんな計画なんですか？ま、まさかと思うですけど、生き残っているデジモン達が一斉に地上に出て暴れるとかですか？」

サーチモンの言葉にスバルは恐怖に体を震わせながら恐る恐る質問し。はやて、ギンガ、キャロはスバルの告げた考えに顔色を真っ青に染めた。
“先ほどのヌメモン達が一斉に地上の街中に現れて技を放つ”。それだけで確実に地上は阿鼻叫喚の渦が包まれ、クラナガンは崩壊するだろう。確かにヌメモン達の攻撃には殺傷能力は全く無い。だが、こと精神的な面で言えばこれ以上にないほどの威力を誇り、クラナガンは死傷者一人も出る事無く陥落し、クラナガンの街は汚物系デジモン達の天国に変わり果てるだろう。
普通の感性を持った人にとっては地獄の世界。それが頭の中に思い浮かんでしまったはやて達は、全身に鳥肌を浮かばせながら恐怖に体を震わせるが、ヴァイスとサーチモンは首を横に振るう。
その事にはやて達は安堵の息を吐くが、現実は更に地獄だった。

「・・・・・スバルの考えだったらどれだけ良かっただろうな」

『エッ？』

「連中の計画はそんな生易しいものではない。もっと史上最悪な計画だ」

「ちょいまちい・・・・・スバルの考えが生易しいやて？・・・・・・一体どんな計画を連中は考えているんや？」

「・・・・・女性には辛いだろうが答えよう。奴らの計画、それは」

『それは？』

『“クラナガン全市民スカモン化計画”だ！！！！』

『ブウゥゥゥゥゥーーーーーーーーー！！！！！！！』

ヴァイスとサーチモンが同時に告げた計画に、はやて達は防毒マスクの中で噴き出してしまった。

そしてそれと共にはやて達は自分達がスカモンになった事を頭の中で考えようとするが、即座にその考えを放棄した。

無理も無いだろう。スカモンなどの汚物系デジモン達の主食は『ウ〇チ』。それを食べて生きていくぐらいならば、自殺した方が増しだとはやて達は思う。しかし、それが既に目前までに迫っている事にはやて達は気がつくが、フッとはやては疑問が思い浮かび、ヴァイスに質問し出す。

「・・・・ヴァイス君？質問やけど、ほんまに人間をスカモンに変えられるんか？幾らなんでもクラナガン市民全員をスカモンに変える事なんて…」

「・・・・出来ますよ」

『エッ！？』

一縷の望みを賭けたはやての質問に、ヴァイスのズボンを掴んだままのキャロが答え、はやて、スバル、ギンガは驚きの声を上げた。

キャロはその様子を確認すると、顔色を真っ青にしながら防護服の中に手を入れ、自身のディーアークを取り出すと、一つのデジモンの情報をはやて達に示す。

「・・・・名前は・・・・“スカモン大王”・・・・・・一般的なスカモン達と違って知能も持っていますし・・・・・世代が完全体のデジモンです・・・・・そしてその必殺技は・・・・・対象を“スカモン”へと強制的に変身させてしまうんです」

「・・・・・ず、随分と・・・詳しい見たいやけど・・・・ほんまにそのデジモンが奥におるとはかぎら…」

「残念だがはやて。既に私とヴァイス、サーチモンはそのデジモンを目撃している。他のスカモンとは完全に大きさも違っていたからすぐに分かったぞ」

「序に言っておきますが、俺もキャロと部隊長と同じようにディーアークを持っていますんで、見間違えは絶対にないので」

『・・・・・・・・・・』

レナモンとヴァイスの報告にはやて、スバル、ギンガは完全に顔色を真っ青に染め、そのまま三人は顔を見合わせると、同時に頷き合いヴァイス達に背を向け、はやては右手を上に上げる。

「それじゃぁ、後は任せたわ。私らは先に地上に戻っとるさかいに」

「後をお願いしますね」

「絶対に無事に帰ってきて下さいね！」

そうはやて、ギンガ、スバルはヴァイス達に告げると迷わずに来た道を戻ろうとするが、サーチモンがその背に向かって声を掛ける。

「戻るのは構わんが、外へと続く道にはゴキモンどもがまだ存在しているぞ」

ーーーピタッ

サーチモンが告げた事実にはやて達の足は止まり、恐る恐るサーチモンの方を泣きそうな顔で振り返ってみると、サーチモンは哀れみに満ちた目をしながら話を続ける。

「リュウダモン達は未だにゴキモンどもと戦っているようだ。連中は実力はかなり低いが、生命力だけはとんでもなく豊富なデジモンだ。本来の力が発揮出来ないリュウダモン達では、倒すのにはもう少々時間が掛かるだろう。更に援軍として他のデジモン達も向かっている・・・・このまま戻れば確実にそのデジモン達と接触するだろうな」

「・・・・・五十体ぐらいやて、ゲンヤさんから聞いていたんやけど？」

「残念ながら違うな。どうやらゲートタワーから現れていた汚物系全てがこの場所に存在しているようだ。恐らく例の十闘士と呼ばれるデジモン達が送って来たのだろう」

「まぁ、軽く見ても後五十体近くのデジモンが残っていると考えた方が良いでしょうね。部隊長達にはキツイでしょうけど」

『・・・・・・イヤァァァ

先に進むのも、戻るも完全な地獄の未来でしかない。どちらに行っても最悪の汚物系デジモンに出会うのは間違いないのだから、女性であるはやて達には地獄であろう。
その事が分かっているヴァイス、サーチモン、レナモンは哀れみに満ちた視線をはやて達に向け続け、少し経つとはやて、ギンガ、スバル、キャロは無言で立ち上がり、怒りと悲しみに支配されながらヴァイス達に顔を向ける。

「・・・・ヴァイス君、サーチモン、それにレナ。敵は一体何処におるんや？さっさと片付けて、復讐に向かったる！！」

「こんなとんでもない場所に私達を送った父さんとレジアス中将に、仕返しを絶対にするんです！！！」

「乙女の尊厳を失い掛けているんだから！！！」

「絶対に許して上げません！！」

（ご愁傷様だな、中将、ゲンヤの旦那。まぁ、自業自得だと思ってくれ。俺は絶対に助けないから）

（此処で奴らを弁護すれば、私達にまで巻き込まれる。奴らには犠牲になって貰おう）

復讐の炎に燃えているはやて達の姿を見ながら、ヴァイスとサーチモンはそう内心で非情な言葉を呟くと、怒りに燃えているはやて達を連れて、先へと進んで行く。

地下水路内部奥深く。
その場所は多数の水が集まり、広々と広がる空間になっていた。しかし、その場所には凡そ五十体ぐらいの汚物系デジモン達が、頭に機械のような物を被った一際黄色に輝く巨大なウ〇チ－スカモン大王を崇めるように集まっていた。

スカモン大王、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／突然変異型、必殺技／変身の術
スカモン達の王の突然変異型デジモン。標準のサイズではスカモンの何倍もある。頭につけている機械で知能が無いスカモンの頭脳を補っている。必殺技は、敵を強制的に“スカモン”へと変身させてしまう『変身の術』だ。しかも変身させられた相手は知能がスカモン並みに低下してしまうので、スカモン大王の意のままに従う存在へと変貌してしまうので、とてつもなく危険かつ、恐ろし過ぎる技だ。

「ゲヒャハハハハハハハハッ！！同胞達よ！！遂に地上への侵攻の時は来た！！余達の故郷を奪った人間どもから、今度は余達が奪うのだ！！」

『オオォォォォォォォォォォォーーーーーーーーー！！！！！！！！』

「だが、余は争いは好まんし。例え憎い人間どもでも殺す気は無い。よって！！彼ら人間どもも余の力で同胞へと変身させ、共に共存して行こうではないか！！」

『痺れる～～！スカモン大王様最高！！！それでこそ我らがキング！！スカモン大王様！！最高！！最高！！』

「ゲヒャハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッッッッ！！！！」

自身に対する汚物系のデジモン達の叫びに、スカモン大王は心の底から嬉しそうに笑い声を上げ、周りのデジモン達に手を振り出す。

その様子を離れた所の通路の影に隠れて見ていたヴァイス、サーチモン、レナモンは顔を険しく、高笑いをし続けているスカモン大王とその周りのデジモン達に視線を向けながら話を始める。

「予想通り、地下にいるデジモン達の殆どが集まっているみたいだな」

「ウム、他に感じられる反応は、此方に向かっているリュウダモン達の足止めに向かっているデジモン達ぐらいだ」

「それならば、この場で一網打尽にすれば全て終わるな。幸いにもこの場所はかなりの広さを持っている。ヴァイスの精密射撃の援護があれば、連中を一匹残らず退治出来るだろう・・・・・そう言う事なのだが、はやて？大丈夫なのか？」

レナモンはそう背後にいる筈のはやてに質問するが、はやては答える事無く、ギンガ、スバル、キャロ、そしてスカモン大王の姿を目撃した瞬間に、意識を失ってしまってユニゾンが解けて床に落ちているリインと共に口からエクトプラズマを出していた。

復讐に燃えて立ち上がったはやて達だが、流石に五十体以上の汚物系のデジモン達と、スカモン大王と言う巨大なウ〇チを目撃した瞬間に、意識が一瞬の内に遠退き現在の状態に成ってしまったのだ。無理も無いだろう。ただでさえ会いたくないデジモンが五十体近く存在している上に、スカモンと言う最も女性が嫌うであろうデジモンに変身させてしまう力を持ったスカモン大王までも存在しているのだから、現実を逃避してしまうのもある意味では正しい行為だ。

その哀れとしか言えない姿にヴァイス、サーチモン、レナモンは同情の視線をはやて、ギンガ、スバル、キャロ、リインに向けるが、このままでは先に進まないと思い、レナモンがはやての肩に手を乗せる。

ーーーポンッ！

「ハッ！！・・・・・・フゥ～～、なんや夢やったやな。とんでもないものを見てしまったような気がするわ」

「現実から逃げてもスカモンとなってしまうだけだぞ、はやて」

「・・・・・・・グスッ・・・・・ちょっとぐらいわ。夢にさせといてや、レナ」

レナの無常な言葉にはやては涙を目尻に溜めながら、ヴァイスの視線の先に存在しているデジモン達の姿を見つめた。

夢だと思おうとしていた光景はやはり現実のままで、はやては絶望に顔色を染めながら、他の気絶しているギンガ達の意識を覚醒させ、最後に床に落ちていたリインを手の中に抱えて起こす。

「リイン・・・・もう逃げられへんのや。さっさと起きぃ」

「・・・・ウ～ン・・・・アッ！はやてちゃん！！・・・・リインとっても怖い夢を見たです・・・・沢山の汚物デジモン達が、巨大なスカモンを崇めている光景でとっても怖かったですよ！！」

「・・・・夢やと思いたい気持ちは充分過ぎるほどに理解出来るわ・・・・だけど、現実なんや」

「・・・・・フエェェェェェン！！！リインもう帰りたいですよ！！！」

はやての無情な言葉にリインは涙を流しながら、はやての体に抱きついた。

そしてその隙にギンガ、スバルはキャロからヌメモン達の弱点を聞き出し、二人は真剣な顔で頷き合うと、リインを宥めているはやての肩にそれぞれ手を乗せる。

ーーーポン！！ポン！！

「八神部隊長、頑張って下さい」

「私達はヴァイスさんと一緒に後方から援護しますから」

『ハッ？』

はやてとリインはギンガとスバルの言葉の意味が分からず、疑問の声を上げて二人の姿を見つめると、その後ろにヴァイス、サーチモン、キャロが説明をし出す。

「ヌメモンと言うか、汚物系のデジモンの弱点は、火炎系か、高熱関係の攻撃なんですよ」

「ギンガとスバルは完全に接近戦型。それに火炎系の攻撃など二人は持ってはいない」

「このメンバーの中で火炎系が使えるのは、はやてさんのパートナーのレナモンが進化したキュウビモンだけです。だから、防御魔法を使えるはやてさんを背に乗せて、汚物系デジモン達の中に飛び込

んで暴れると言うのがこの場でのベスト作戦です。後は私がヴァイスさんの攻撃を強化して後方から援護しますし」

「私が連中を錯乱させて、連中に出来るだけ攻撃をさせないようにする。それと共にスバルとギンガも向かわせるから、恐らくお前達に対する危険は無いだろう」

「・・・・・・他の作戦を考える時間は…」

「何ッ！？偵察に向かった連中が全部倒されていただと！！！」

『ッ！！！』

突如として聞こえて来た野太い男の叫びに、はやて達が慌てて隠れながらスカモン大王達の方を覗いてみると、スカモン大王の目の前で一体の金色に体を輝かせて背中に羽を付けているヌメモン－ゴールドヌメモンに質問を行っている、胴体が存在せず、体と顔が一体と成っていて、サングラスを掛けて口元に大量の髭を生やし、両手にグローブを付け、足にブーツを履いた何処かオヤジを思わせるようなデジモン－ナニモンを目撃する。

ゴールドヌメモン、世代／成熟期、属性／不明、種族／不明、必殺技／ゴルドリアンラッシュ、ゴールドエクスクレメント
全身金色のヌメモンの亜種。形状は究極体に分類されるプラチナヌメモンに酷似しているが、こちらは成熟期デジモンである。「ゴルディーヌ鉱山」を発見したヌメモンがその成分を取り込んだことで誕生したとされている。必殺技は、ウンチを連続して投げる『ゴルドリアンラッシュ』に、金色に輝くウンチを投げる『ゴールドエクスクレメント』だ。

ナニモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／インベイド型、必殺技／ウ〇チ、ウ〇チダンク、ＯＹＡＪＩパンチ
別次元から侵入してきたナゾのインベイド型デジモン。別次元では、通称“ＯＹＡＪＩ”と呼ばれ、デジタルペットとして飼われていた。酒好きで横暴な性格だが、弱肉強食の世界にあこがれてやってきた。しかし、実力のほどはまったくの未知数。必殺技は、自分のウンチを相手めがけて投げる『ウ〇チ』に、巨大なウンチを相手に向かって投げつける『ウ〇チダンク』。そして右手を回転させながら繰り出す『ＯＹＡＪＩパンチ』だ。

「ヌ～メ～」

「チィッ！！ゴキモンどもは何してやがんだ！！すぐに他の連中も向かわせろ！！大王様に何かあったら、計画がおじゃんなんだからよ！！」

「ヌメッ！！」

ナニモンの叫びにゴールドヌメモンは敬礼を行い、十体ほどの背中に殻を付けているヌメモン達と共に外へと向かおうとする―はやて達の隠れている通路の方に向かって。

カラツキヌメモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／甲殻類型、必殺技／シェルズアタック、熟成ウ〇チ、ウ〇チレイン
少々賢いヌメモンがネットの海の海岸に転がっていた殻に身を守るために（知恵と勇気を振り絞り）入り込んだらカタツムリのような形になってしまった甲殻類型デジモン。かなりの臆病で、他のデジモンが居たり、ちょっとの驚きで殻の中に隠れてしまう。殻の防御力は非常に高いが、少し頭のいいヌメモンが殻に入っているだけなので、あまり強くは無い。必殺技は、体を殻に引っ込め、殻ごと相

手に突進する『シェルズアタック』に、殻の中に溜め込んだウンチをこんもり投げつける『熟成ウ〇チ』。そして汚物系デジモン系の最強にして最悪の技ー空から雨のようにウンチが降ってくる『ウ〇チレイン』だ。

「やべぇ！！こっちに来る！！」

「部隊長！！さぁ、早く！！」

「私達もすぐに援護しますから！！」

「・・・・怨むでほんまに・・・・・・レナ！！リイン！！」

「分かった」

「もうこうなったら自棄です！！ユニゾン・イン！！」

《ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「レナモン進化！！」

はやてがリインとユニゾンすると同時に、はやての着ている防護服の中から音声が響き、レナモンの体はデジコードに覆われ、その中から尻尾を九本生やした黄色の体毛に身を包んだ狐のデジモンーキュウビモンが姿を現す。

「キュウビモン！！」

「もうこうなったら逃げへん！！行くで！！」

「撹乱は任せろ！！ジャミングヘルツッ！！！」

ーーービィィィィィィーーーー！！！

『ヌメ～～～～～！！！！！』

サーチモンが叫ぶと同時に放った電磁波ージャミングヘルツを食らったゴールドヌメモン、カラツキヌメモン達は頭を押さえながら苦しみ出した。

その隙にはやてはキュウビモンの背に乗り込み、キュウビモンはそのままスカモン大王の下に向かって空中を駆けながら尻尾の先に九つの炎を発生させ、竜の形にした炎を地下空間全体に向かって撃ち出す。

「狐炎龍（こえんりゅう）ッ！！！！！」

ーーーゴオォォォォォォォォォーーーーーーーー！！！！！

『ヌ～～～メ～～！！！！！』

『ゲヒャハアァッ！！！！！』

広く広がる空間を埋め尽くすように放たれた九つの竜の形をした炎ー狐炎龍（こえんりゅう）の姿に、ゴールドヌメモン達やスカモン達は恐怖に駆られ、水路に流れている水の中に飛び込もうとする。

しかし、その前にキャロの補助を受けたヴァイスが、サーチモンの報告を耳にしながら次々と荒れ狂うように暴れている狐炎龍（こえんりゅう）の間の隙間を縫うようにしてスナイプショットを汚物系デジモン達に向かって撃ち込んで行く。

ーーードン！！ドン！！ドン！！

『ヌメッ！！』

『ゲヒャッ！！』

「クッ！！狙撃者だ！！狙撃者があのデジモンが現れた場所に隠れているぞ！！あのデジモンよりも先に倒せ！！ガーベモンども！！」

ーーーガタガタッ！！

次々と撃ち抜かれていくヌメモン達の姿に、ナニモンは焦りを覚え、自身の横に存在していた三つのゴミ箱に向かって叫び、ゴミ箱は揺れながら狙撃を行っている場所に向かって移動し始める。

その姿を上から目撃したはやては、すぐさまそのゴミ箱の中に隠れているデジモンの危険性に気がつき、キュウビモンと共に攻撃を放とうとするが、その前にナニモンが何処からともなく巨大なウ〇チを取り出し、上に持ち上げながらキュウビモンに向かって飛び掛る。

「オォォォォォッ！！食らえ！！究極のオヤジの一撃！！ウ〇チッ！！」

「受けとうないわ！！バルムンクッ！！」

「同感だ！！鬼火玉ッ！！」

ーーーズガガガガガガガガガガッ！！

「グオォォォォォォォォッ！！」

はやての放ったバルムンクとキュウビモンの狐の顔をした火の玉ー鬼火玉を食らったナニモンは、悲鳴を上げながら持っていた巨大なウ〇チと共に消滅した。
それを確認したはやては安堵の息を吐くが、その隙にヴァイス達の下に向かっていた筈の三つのゴミ箱の蓋が突如として開き、その中から空き缶で作ったと思われるバズーカを持ったピンク色の体をしたデジモンーガーベモンが姿を現す。

ガーベモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／突然変異型、必殺技／ウ〇チバーズカ
デスクトップ上にあるゴミ箱自体が生命を得て進化したミュータントデジモン。データのカスが突然変異をおこしたスカモンとは違い、ゴミ箱自体がこのデジモンである。今まで最弱と言われていた汚物系のデジモンではあるが、この完全体のガーベモンの出現により、その常識は一変するだろう。また、このゴミ箱はブラックホールのようになっており、このゴミ箱に吸い込まれたものは、デジタルワールドから跡形も無く消去されてしまう。必殺技は、空き缶を繋げたバーズカからウ〇チを撃ち出す『ウ〇チバズーカ』と言う、ヌメモン達同様に史上最悪な技だ。

ーーーガタン！！

『貰ったぜぇ！！ウ〇チッ！！』

「イヤァァッッ！！キュウビモン！！急上昇や！！」

（急ぐですぅッ！！）

『バズーカ！！』

ーーードゴオオン！！

キュウビモンが急上昇を行うと同時にガーベモン達はウ〇チバズーカを発射するが、キュウビモンには当たらずに壁にぶつかった。

その事にはやてはキュウビモンの背に乗りながら安堵の息を吐くが、すぐさまガーベモンはバズーカの照準をはやてとキュウビモンに再び構え発射しようとする。しかし、その直前にギンガとスバルが同時にガーベモンの後方から飛び出し、二体のガーベモンの頭部に向かってそれぞれ踵落とし決める。

『ハアァァァァァァァァッ！！！』

ーーードゴオオン！！

『ゲフゥッ！！』

ギンガとスバルの踵落しを頭に食らった二体のガーベモンは苦痛の声を上げて、思わず空き缶で作ったバズーカを床に落としてしまう。

ギンガとスバルはそれをすぐさま確認すると、床に落ちているバズーカを困惑している最後の一体のガーベモンに向かって蹴り飛ばす。

『シュートッ！！』

ーーーガン！ガン！！

「ゲフォッ！！」

蹴り飛ばされて来たバズーカ二本を連続で食らったガーベモンは悲鳴を上げて、はやてとキュウビモンに向けていた照準を外してしまう。
それを確認するとギンガとスバルは、自分達の横に立っているガーベモン達に向かって拳を連続で撃ち出し始める。

ーーードゴオン！！

「八神部隊長！！此処は私達に任せて下さい！！」

ーーードグオン！！

「完全体でも二体は武器が無いですし、それに周りには炎もありますし！！だから早くスカモン大王の下に向かって下さいよ！！」

「ギンガ！スバル！！・・・・・ウゥゥッ！！キュウビモン！！」

「任せろ！！」

はやての言葉にキュウビモンは即座に頷き、炎から逃れようとプラチナ色に体を輝かせているスカモン－プラチナスカモンを五体ほど従えているスカモン大王の下に向かって駆け出す。

プラチナスカモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／突然変異型、必殺技／レアメタルウ〇チ
プラチナのように光輝くスカモン。レアメタルのデータを取り込んで、ゴージャスな感じになった。しかし、現時には多少の防御力が上がっただけであまり強くはなっていない。必殺技は、メタリックのウンチを投げつける『レアメタルウ〇チ』だ。

「クゥッ！！やれ！！」

『ウオォォォォォーーー！！！！！レアメタルウ〇チッ！！！！』

「イヤアァァァァァァァァァァッ！！キュウビモン！！」

「分かっている！！」

キュウビモンは、はやての涙ながら悲鳴の叫びに即座に応じると、向かって来る無数のレアメタルウ〇チの間を器用に避けるか、はやてが防御魔法を使って防御し、或いは炎を使った焼き尽くすかして、スカモン大王の下に向かって行く。

その事にはやては嬉しそうな笑みを防毒マスクの中で浮かべるが、スカモン大王が何からの呪文を唱えている事に気がつき、慌ててキュウビモンに告げようとするが、その前にスカモン大王がはやてとキュウビモンに両手を向けだす。

「ゲヒャハハハハハッ！！貴様らを余の僕にしてくれる！！！」

「キャァァァァァァァァッ！！スカモンだけは絶対に嫌や！！キュ、キュウビモン！！」

「ハアァァァァァァッ！！！」

はやての叫びにキュウビモンはすぐさま九つの尻尾の先に炎を作り出し、再び狐炎龍（こえんりゅう）を放とうとする。しかし、その前にスカモン大王の方の準備が終わり、はやてとキュウビモンをスカモンへと変身させようとする。

「無駄だ！！変身のッ！！」

「イヤァァァァァァァァァァァァッ！！」

「・・・・・・鋼(はがね)の軛(くびき)　ッ！！！」

ーーーブザブザブザブザブザッ！！！

『ゲヒャハッ！！』

「エッ！？」

突如として別の男性の叫びが響くと同時にスカモン大王とその周りにいたプラチナスカモン達の体に、周りの壁や床から生えてきた槍のような物が突き刺さった。

その見覚えのありすぎる魔法にはやては慌てて声の聞こえて来た方に顔を向けてみると、カラツキヌメモンやヌメモン達と“接近戦”を行っている人間形態に成っているザフィーラ、エリオ、リュウダモンに、ヌメモン達に炎を吐いているフリードの姿を発見する。

「主！！遅れてすいません！！」

「こっちは僕らに任せて！！」

「アンタらは早くスカモン大王を倒せ！！そいつを倒せば、此処のデジモン達は完全に烏合の集団だ！！」

「キュル～～ッ！！」

「ザフィーラ！！エリオ！！リュウダモン！！フリード！！恩にほんまにきるわ！！キュウビモン！！」

「分かっている！！狐炎龍（こえんりゅう）ッ！！」

ーーーゴオォォォォォォォォォォッ！！

『ゲヒャァァァァァァァァァァァァァァッ！！！』

キュウビモンが放った狐炎龍（こえんりゅう）は目の前に立っていたスカモン大王とプラチナスカモン達を包み込み、スカモン大王達を焼き尽くそうと暴れ始める。

しかし、スカモン大王はそうはさせないと炎の中から両手を伸ばし、キュウビモンとはやてを掴もうとするが、その前にはやてが迷わずに威力をある程度持っている砲撃をスカモン大王に向かって撃ち出す。

「消えてやぁぁぁぁぁっ！！ディバインバスターー！！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ギッ！！ゲヒャハァァァァァァァァァァァッ！！！！」

はやての放ったディバインバスターはスカモン大王の体を撃ち抜き、スカモン大王は悲鳴を上げながら消滅した。

その姿を目撃した生き残っている汚物系デジモン達は、自分達の敗北を確信し、通路の一箇所に向かって急いで駆け出すが、その前にキャロとサーチモンの補助を受けたヴァイスがスナイプショットを逃げ惑っているデジモン達の急所に次々と撃ち込み、数分後には地下に隠れていたデジモン達は全てデジタマへと戻っていた。それと共にキュウビモンははやてを床に降ろし、別の通路の中へと消えて行った。

そしてそれを確認したはやては、ザフィーラ達にデジモン達が逃げようとしていた方向にあるであろう侵入口の発見と封鎖を命じ、無表情ながらに地上で状況を見ていただろうゲンヤに連絡を行い出す。

「・・・・此方八神はやてです。地下に潜んでいたデジモンの排除を完了。ならび侵入口と思われる箇所の封鎖をザフィーラ達に命じ終えました・・・・ゲンヤ副部隊長は其処におりますか？」

『・・・・・・あぁ、居るぜ・・・・・・やっぱ、怒っているか？』

「当然でしょうが！！よくもあんなデジモン達が居る場所に送ってくれましたな！！！今すぐにギンガ達と一緒に地上に戻りますさかいに！！覚悟して置いてください！！絶対に許さへんから！！」

ーーーブチッ！！

ゲンヤの質問に対してはやては怒りに満ちた叫びで答え終えると共に通信を即座に切り、同じように怒りに満ち溢れているギンガ、スバル、キャロを伴って凄まじいスピードで地上の方に向かい出した。

ヴァイスとサーチモンはその姿に恐怖を覚えるが、絶対にゲンヤとレジアスを擁護する事無く、先に侵入口の方に向かったザフィーラ、エリオ、リュウダモン、フリードの援護に向かうのだった。

とあるミッドに存在する深い森の中。

その場所にはバンチョーレオモンが追っている五人の十闘士ーメルキューレモン、ラーナモン、グロットモン、アルボルモン、ダス

クモンがそれぞれ木に体を預けながらメルキューレモンの持つ『イロニーの盾』に映っているはやて達の戦い方に険しい視線を向けていた。
彼らは前回の時に自分達を追って来たバンチョーレオモンの存在がある為に、極力目立つような行動は行わず、手下にしているデジモン達を使って地上の部隊の情報収集に専念していた。敵を知る事こそが大切だと分かっているメルキューレモンは当分の間は派手には動かないつもりだったが、今のはやて達の戦いに僅かに焦りを覚え始めていた。

（不味い。機動六課の実力が上がっている。前回の時に叩きのめさなかった事が仇に成ったか。特にフェイト・テスタロッサの代わりにやって来た男とデジモンは厄介だ。戦力的にはフェイト・テスタロッサには及ばんが、戦略的にはこの二人が最も厄介だ！）

メルキューレモンは今回の戦いで加わったヴァイスとサーチモンを危険視していた。
確かにフェイトに比べれば遥かに戦力的には二人は劣る。だが、ヌメモン達に放った正確無比のヴァイスの射撃。敵の位置を察知するサーチモンの能力。指揮官として動いているメルキューレモンにとっては二人の存在は最も忌まわしかった。
そのメルキューレモンの姿に他の闘士達も忌々しそうにイロニーの盾に映っているヴァイスとサーチモンの姿を見つめると、グロットモンがメルキューレモンに声を掛ける。

「如何するよ？連中をこのままにして置くのは不味いぜ。何せ今回現れた二人以外も実力が上がって来ている。特に姉妹と思われる奴らはさっさと殺した方がいいぜ。何か危険な感じを受けやがる」

「・・・・・駄目だ。今動けば確実にバンチョーレオモンが動く。

そうなれば、私達が“エンシェントデジモン”の力を取り戻す前に奴に殺される。大局を誤れば私達は全滅だ」

「だけどねぇ？“エンシェントデジモン”の力を取り戻すにしても、その為には巨大なエネルギーが必要なのよ。それを手に入れる為には地上本部にあるって言う“レリック”が適切なんでしょう？その為には機動六課は邪魔よ」

「分かっている！・・・・・クソッ！！バンチョーレオモンめ！！忌々しい！！」

ラーナモンの言葉にメルキューレモンは苛立ちに満ちた叫びを上げた。

バンチョーレオモンの存在が無ければ、メルキューレモンとてラーナモンやグロットモンの言うように機動六課を即座に潰してエネルギーの確保に乗り出していた。しかし、バンチョーレオモンと言う最強の一角に数えられるデジモンの存在が、メルキューレモン達の動きを完全に抑制していたのだ。

その事が分かっているラーナモン、グロットモン、アルボルモン、ダスクモンも忌々しげに顔を歪め始めた瞬間に、何処からともなく声が響く。

「見つけましたぞ、十闘士どの」

『ムッ！！』

ーーードゴオオオオオオオオン！！

メルキューレモン達が身構えた瞬間に、メルキューレモン達の前の地面が爆発したように破裂し、その中から長く白い体を持った蛇

のようなデジモンが口に赤い電脳核(デジコア)を加えながら姿を現した。

「始めまして、我が名はサンティラモン。四聖獣の一体ースーツェーモン様の命でこの地にやって参り、貴方様達を探しておりました」

サンティラモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／聖獣型、必殺技／クリシュナ

『デーヴァ（十二神）デジモン』の1体で、蛇に似た姿の完全体デジモン。四聖獣デジモンであるスーツェーモンの配下で、デーヴァの中でも最も狡猾で残忍。勝負を一瞬で決めるのを好まず、相手をジワジワといたぶりながら息の根を止めるのが好み。普段は地下深くに生息し、地中での移動を得意としている。更に武器として口から光で出来た鉾の宝鉾(パオグー)を使う。必殺技は、体を大きく振って勢い良く吐き出した宝鉾で敵を貫く『クリシュナ』だ。

「オォォッ！！スーツェーモンの！！その有名は此方も聞いているぞ！」

「スーツェーモン様は必ずや貴方がたは、我らの仲間になると思っておりました。本来ならばスーツェーモン様直々に会いたがっておりましたが、残念ながらルーチェモンの策略によって、他のバイフーモン様やロイヤルナイツの方々共々動く事は不可能となっています」

「どれぐらいで奴らは再び管理世界に来れる？」

「日にちで言えば、恐らく一ヶ月以上先でしょう。ですが、これはあくまでルーチェモンの更なる妨害なければです」

「ほう、なるほど。スーツェーモンの狙いは私達を使って、人間の

実力を計る事と抹殺の為だな？流石は四聖獣の一体。食えん存在だ」

「フフフフフッ、流石は十闘士の中でも最も頭が切れるメルキューレモンどの。スーツェーモン様の考えもお見通しとは恐れ入ります」

サンティラモンはそう口元に笑みを浮かべながら呟くと、口に加えたままだった電脳核（デジコア）をメルキューレモン達の前の地面に降ろす。

「この電脳核（デジコア）はスーツェーモン様の十二個の電脳核（デジコア）の一つです。これを自由に使ってくれとスーツェーモン様に仰せつかってます。それと一つ面白い情報があります。どうやらベルカ自治区と呼ばれる場所にいる人間の中に未来を予言出来る力を持つ者がいるようです」

「フン、分かったとスーツェーモンには伝えておけ」

「フフフフフッ、期待していますよ、十闘士どの」

サンティラモンはそうメルキューレモンに向かって告げると、自身が姿を現した穴の中に再び頭から入り込み、地中の中を移動してその場を去って行った。

メルキューレモンはそれを不機嫌そうにしながら確認すると、地面の上に置かれたままだった電脳核（デジコア）を拾い上げ、グロットモンに声を掛ける。

「グロットモン！！今のサンティラモンの情報を確認してくるのだ！！もし本当に未来を予言出来たら困るからな。その様な人間にはさっさと消えて貰った方がいい」

「ケッ・・・・分かったよ。だけど、その人間は俺の獲物だ。命令

を聞いてやるんだから、それぐらいは良いだろう？」

「好きにしろ。私はその間にこの電脳核（デジコア）を調べてみる。もしこの電脳核（ジコア）を自在に使えれば、危険を侵す必要は無いからな」

そうメルキューレモンはグロットモンに告げると、電脳核（デジコア）を持ちながら森の奥へとラーナモン達と共に向かって行くのだった。

史上最強（女性にとっての）汚物系デジモンズ！！後編（後書き）

次回予告

ミッドではやて達が地獄から帰還した頃。

地球ではリンディ達もそれぞれ動いていた。

リスティと共に行動するティアナとクダモン。

その前に現れる二人の男性とデジモンとは？

次回、漆黒の竜人と少女、『雷と氷！！動き出す大天使！！』

正義は時に危機を呼ぶ。想いを受け継ぐ事無く。

雷と氷！動き出す大天使！！前編

機動六課部隊長室。
その部屋の中ではやてと人間に変身したレナは、前回の任務時の損害に関する資料と地上本部の一室に突如として現れた大量のデジタマに飲み込まれたレジアス中将に関する資料を読んでいた。
一枚目の損害に関する資料には事細かに書かれているが前回の任務時の損害は殆どゼロとされ、唯一の例外は地下から放たれた巨大な砲撃に“運悪く”飲み込まれてしまったゲンヤぐらいであった。
そして二枚目の資料に書かれているレジアス中将に関する事では、此方も“運悪く”何時もデジタマを送っている場所への転送座標と中将の執務室の座標が間違って入力されていたらしく、仕事を行っていたレジアス中将の頭上に大量に降り注いだと言う事らしい。

「フフフフフッ、悪は滅びたみたいやな」

「しかし、はやて。これは少しやり過ぎではないのか？ゲンヤは砲撃の影響で二、三日は検査入院してしまう事になってしまったし、中将は体中に包帯を巻いているらしいのだが」

「レナ？何を言うとるん？私らは何もしてへんよ。地下からの砲撃は生き残っていたデジモンを倒す為やったし、その先にゲンヤさんが運悪く立っていただけやで。レジアス中将にしても、ウッカリとロングアーチが転送先の座標を間違えたからや。オーリス三佐がちゃんと調べて出した結果やし、問題は全くないで。まぁ、ほんまに二人とも運が悪かったんやな」

「・・・・・・分かった。私はもう何も聞かない」

「それが賢明やで」

はやてはレナの言葉に心の底から嬉しそうな笑みを浮かべた。

言うまでも無いがゲンヤとレジアスの災難は完全にはやて達の行動だった。しかも事前に同じ女性と気持ちが分かりすぎているオーリスや他の女性メンバー達も納得して行動を許可にしているので、全く問題は無かった。寧ろあの汚物系デジモン達と戦ったはやて達に同情と哀れみに満ちた思いを抱き、今回だけは、はやて達の行動もオーリスは同じ女性として協力した。スカモン大王を倒してくれたはやて達に対するせめてもの礼として。

そして多少は気が晴れた－完全には怒りを忘れてはいない－はやては持っていた資料を机の上に置き、今度は別の紙－個人的に送られて来た送り主不明の手紙に目を向ける。

「・・・・・聖王教会も大変みたいやな」

はやては手紙の中に書かれている情報－聖王教会に起きている現状に頭が痛そうに手を置く。

手紙の主は、本来ならば機動六課の後見人だった筈の人物－カリム・グランシアだった。色々と手紙には聖王教会の現状が書かれているが、最終的には内密に会いたいと言う内容だった。

その事を知っているレナは険しい視線をはやての持つ手紙に向けながら質問し出す。

「そのようだ。しかし、はやて？その手紙の主を如何する？」

「・・・・・分からへん。確かに戦力的に言えば聖王教会の騎士団の力は借りたいんやけど・・・・こんな資料を見た後じゃ、信用するのはほんまに危険やと私も思うわ」

はやてはレナの質問に素っ気無く答えると共にオーリスから渡された資料に目を移した。
既に手紙の件はオーリスに伝えられ会うか会わないかの最終的判断は、はやてに任されているが、その前に地上でベルカ組織の行ったテロ行為に関する資料と現在の聖王教会の騎士団の動きに関する資料を良く読んでから判断してくれと言われているのだ。
はやても何も知らない状況で動いた場合の結果を身に沁みて分かっているので、オーリスから渡された資料を即座に読んだのだが、その結果には頭を抱える以外になかった。

「ハァ～～、何考えとるんや。デジモンとの戦いやなくて、“人間同士の戦争”を聖王教会は行う気なんやろか？」

「分からん。だが、現在の教会のトップは過激派と呼ばれている人間だ。穏健派の中心だったカリム・グランシアは自身の行った行動がスキャンダルとなって力が落ちているらしいし・・・・会うのはかなりの賭けとなるだろう」

「そうやろうな。管理局員の私とカリムが接触したら、過激派が動くやろし・・・・それを利用してカリムの暗殺ぐらいはしそうや。で、その犯人に私がされて一気に戦争・・・・・・ほんま本気で難しいわ」

そうはやては呟くと手紙を持ちながら頭を抱えて、深く悩み続けるのだった。

一方その頃の地球の海鳴市国守山。
その木々が生い茂った山の中で、ヴォルフモンに進化した輝二と

レーベモンに進化した輝一は、バイオ・エンジェウーモンに進化したリンディと模擬戦を行っていた。

「ホーリーアローー！！！！」

「クッ！！リヒト・クーゲル！！！」

ーーードゴオオオオオン！！

リンディが放ったホーリーアローとヴォルフモンが左腕の砲門から発射したリヒト・クーゲルは空中でぶつかり合い爆発を起こした。

それによって辺りに煙が発生し、互いに視界が塞がれるが、レーベモンは僅かに風圧が発生している場所を発見すると迷わずにその場所に持っていた槍を突き出す。

「其処だッ！！」

ーーーション！！

「クッ！！」

レーベモンが突き出して来た槍をリンディはギリギリの所でかわし、そのままレーベモンの胴体に蹴りを放とうとする。

しかし、その直前にリンディの背後にレーベモンの攻撃を隠れ蓑にして忍び寄っていたヴォルフモンが両手に構えている光の剣一『リヒト・シュベーアト』を振り抜く。

「貰った！！リヒト・ズィーガーー！！！」

ーーーブン！！

「何ッ！？」

リンディにリヒト・ズィーガーが決まろうとした瞬間に、突如としてリンディの体の周りの空間が歪み、リヒト・ズィーガーは見当違いの所を通り過ぎた。

ヴォルフモンとレーベモンはその突然の現象に僅かに驚きを覚えるが、すぐさま冷静に立ち返り、リンディが再び攻撃を放つ前に間合いを離し、険しい視線でリンディの姿を睨みつける。

しかし、リンディは二人の様子には構わずに体から黒いデジコードを発生させ、元の人間の姿に戻りながら柔らかな笑みをヴォルフモンとレーベモンに向ける。

「合格よ。まさか、一週間で此処まで実力が戻るなんて、流石としか言えないわね」

「フゥ〜、アンタの訓練が無ければ無理だったさ」

「あぁ、俺達が短期間で此処まで実力が戻れたのは、リンディさん。貴女の訓練のおかげだ」

「そう言って貰えると、訓練したかいがあるわ（もう魔法無しでの完全体のままでは一対一でも二人に勝てる可能性は低いわね。流石としか言えないわ）」

リンディは元の人間の姿に戻ろうとしている二人の姿を見つめながら内心でそう呟いた。

輝一と輝二が仲間になってから一週間が経過し、その間二人はリンディとの訓練を行い続けていた。基本的は模擬戦が殆どだったが、その他にも魔法についてや魔導師や騎士達の共通している弱点など

を教え続け、二人の実力は今では完全体レベルならば遅れをとらないぐらいにまでは力が戻っていた。
そしてその間にもリンディとは別行動を行っているクイント達も僅かながらに成果を出し、成熟期のデジモンを二体ほど説得する事に成功していた。しかし、そう良い事をばかりではなかった。治療を終えてアルハザードからギルモンと共にやって来たヴィヴィオが完全に塞ぎ込んでしまったのだ。

「・・・・その、あの子は今日も部屋から出て来ないのか？」

「・・・・えぇ、やっぱりブイモン君の死がショックだったのよ・・・・自分が護れなかったから、ブイモン君は死んでしまったと思い込んでいるみたいなの」

「仕方が無いとは言えないけど、相手はメルキューレモン達だったんだ。狭い場所でパートナーのデジモンも進化させる事が出来なかったんだし、あの子のせいじゃないさ」

「俺も同感だ。寧ろ友達を護る為に戦おうとしたあの子を凄いと俺は思う。しかもメルキューレモン達を相手にな」

輝一の言葉に輝二も頷きながら、遠くに見えるさざなみ寮の方を見つめながら感心した声を出した。
少なくとも輝一と輝二や他のメンバー達も、ブイモンの死はヴィヴィオのせいではないと思っている、最終的にブイモンの死の原因を作ったのはフェイトであり、ヴィヴィオは友達だったブイモンを護ろうとして敗北したに過ぎない。
しかし、此処でヴィヴィオが持っている精神的外傷（トラウマ）が災いした。
ヴィヴィオは自分の大切な家族や友達が傷付く事を極端に恐れている。だからこそヴィヴィオは大切な人達を護る為に戦う決意をし

たのだが、その決意はメルキューレモン達の謀略によって砕け散り、ブイモンを目の前で奪われて最終的にブイモンは死んでしまった。それはヴィヴィオにとっては三大天使のデジタルワールドの出来事を思い出すに充分な出来事で在った為に、ヴィヴィオは完全に塞ぎ込み、借りている部屋から食事やトイレ以外では出て来なくなってしまったのだ。

当然ながら事情を聞いた輝一、輝二、アリサ、すずか、桃子、美由希、愛、ファリン、フィリス、そしてマリンエンジェモンはヴィヴィオの心の傷を癒そうと色々と頑張ってはいるのだが、ヴィヴィオの心の傷は深く、カウンセラーもこなせるフィリスでも手が出せない状況になってしまっていた。

「フィリスさんが頑張ってはいるけど・・・・正直難しいわね・・・・せめてあの人が居ればヴィヴィオも少しは元気が出るんでしょうけど」

「例のあの子が父親だって呼んでいるデジモンの事か？」

「えぇ、あの人ならもしかしたらヴィヴィオに笑顔を戻せるのかも知れないのだけど…」

「他のデジタルワールドの飛ばされて行方不明か・・・・・とにかく、今は少しでもあの子が寂しくないようにするしかないよな」

「そうね。それしかないわね」

輝一の言葉にリンディは悲しげな声で答え、さざなみ寮のヴィヴィオがいる部屋を見つめた。

そして少しの間三人は部屋の窓を見つめていたが、何時までもそうはしていられないと思い、リンディは真剣な表情をしながら二人

に説明を行い出す。

「・・・・・さて、話は変わるけど、二人には明日からリスティさんとティアナ、そしてクダモン君がデジモンの捜索に当たっている場所に向かって貰うわね。どうもその場所にはこの前戦ったムシャモン達の仲間と思われるデジモンが居て、リスティさん達の行動を邪魔しているみたいなの」

「例のアンタ達を“偽りの希望”って呼んでいる連中か・・・・心当たりは無いのか？オファニモン達が残した希望のアンタ達を偽りなんて呼ぶ奴らに？」

「・・・・・・・正直に言えば・・・・心当たりが確かにあるわ」

『本当か！？』

「・・・・・あのデジモンがこの世界に来ているなら確実に私達を“偽りの希望”と呼ぶでしょうね。彼は私達を嫌っていたから」

「と言う事は、敵って呼ぶのは変ですけど、敵はオファニモン達の部下だったデジモンなんですね？」

リンディが呟いた言葉に輝一は険しい声を出し、輝二も険しい視線でリンディを見つめた。

二人とも今のリンディの言葉で地球のデジモン達を統率しているデジモンの正体を予測出来た。リンディ達の正体を知り、尚且つ地球にいるデジモン達を統率する事が可能なデジモンは、オファニモン達一三大天使デジモン達に仕えていたデジモンぐらいだろう。それならばデジモン達がリンディ達を敵として動いているのもある程度は納得する事が出来る。

その輝一と輝二の予想を答えるようにリンディは険しい顔をしながら無言で頷き、二人の敵の正体とも思われるデジモンの説明し出す。

「名前は『ドミニモン』。オファニモンさん達の天使型の部下だったデジモンの中でも、かなりの力を持っていて究極体に分類されているデジモンよ」

「究極体！？この世界に究極体が居ると言うのか！？」

「多分そうよ。マリンエンジェモンちゃんの事を考えると、多分完全体にでも一時的に退化してこの世界に侵入していたんでしょうね。彼はかなりのデジモンの知識を有しているデジモンでもあるし、一時的に完全体に戻るぐらいの芸当は出来ても可笑しくはないわ」

「だけど、そのデジモンはオファニモン達の部下だったんだろう？それなのに如何して？」

「えぇ、確かに彼はオファニモンさん達の部下だったけど・・・・・その思想は限りなくルーチェモンの思想に近かったわ」

『ッ！！！』

リンディが告げた事実に輝一と輝二は驚愕に目を見開き、リンディはその様子に瞳を鋭くをしながら話を続ける。

「彼はオファニモンさん達の考えている思想と違って、疑わしき者は全て排除して自分達、天使型デジモンが中心となってデジタルワールドを管理すべきだとオファニモンさん達に進言していたわ。当然、デジモン達の回収にも自分が動くと言って、私達をデジタルワ

ールドから追い出そうとまでしていたのよ」

「ちょっと待ってくれ。オファニモン達がアンタ達に協力を頼んだのはルーチェモンと倉田って言う男の策を成功させない為だろう？それにデジモンが外の世界に出たら確実に管理局との戦争も早まっていた。だけど、アンタ達は既に管理局と敵対していたから問題なく管理世界でも動けたんだし、オファニモン達がアンタ達に協力を頼んだのは良い事だと思うが？」

「俺も同感だ。寧ろそのデジモンが外に出てデジタマの回収なんてしたら、周りの被害とか考えなかった思うが？」

「えぇ、オファニモンさん達もそう思って『ドミニモン』に勝手に行動しないように命じたわ。だけお、彼からすれば余所者である上に、世界に悪影響を与える闇側の私達を認められなかったのよ。それにあの人とルインさん、フリートさん、ティアナは別として他のメンバーは全員が管理局に所属していた過去も在るから、尚更に彼は私達を信用出来なかった。それなのに忠誠を誓っているオファニモンさん達は、私達を信頼していてくれたから、彼からすれば尚更に私達の存在が気にいらなかったんでしょうね」

「なるほど、オファニモン達や十闘士以外であの世界のデジモン達が従うとなれば、オファニモン達の部下だった上に、更にアンタ達を嫌っているデジモンとくれば、確かにその『ドミニモン』以外に考えられないな。そう考えれば疑問もかなり解ける」

「だとすれば厄介だな。そのデジモンの考えの方が今の憎しみを持っているデジモン達と一致しているし・・・・これはどちらが先に多くのデジモンを説得出来るのか、だけじゃなく最終的には『ドミニモン』が率いているデジモン達と、リンディさん達や俺達の説得

に応じてくれたデジモンとの戦いになってしまう。そうなったら人々への被害も必ず出てしまう」

そう輝一が険しい顔しながら声を出すのも当然だろう。
もし本当に輝一の考えどおりに進めば、確実に罪の無い人々にまで影響が発生し、東京半壊以上の被害が出るのは先ず間違いない。しかも相手は人間を憎んでいるデジモン達の上に、天使デジモンを至上としている究極体の『ドミニモン』。そのデジモン達が人間の造った街や都市などに構う筈は無い。寧ろ逆に破壊を進めて地球の人々全員を滅ぼそうとするだろう。
その状況を思い浮かべたリンディ達は僅かに顔色を青く染め、リンディは二人に険しい声で掛ける。

「そうね。だからこそ、出来るだけ多くのデジモン達を説得して、何とか『ドミニモン』にも会わないといけないわ。今の彼が私達との話し合いに応じてくれる可能性は限りなく低いけど。出来れば彼も説得して置きたいからね」

「分かった」

「了解ですよ」

リンディの言葉に輝二と輝一は頷き、三人はそのままさざなみ寮へと戻ろうとする。
しかし、その直前に近くの草木の中から二足歩行の赤い体をして、腕に腕輪を装備し、尻尾の先から穂の玉をだしているデジモン一コロナモンが三人の前に姿を現す。

ーーーガサガサ

「三人とも、そろそろ昼食の時間だぞ。今日はアリサとすずかが当番の日だから、早く来てくれだそうだ」

コロナモン、世代／成長期、属性／ワクチン種、種族／獣型、必殺技／コロナックル、コロナフレイム、プチプロミネンス
太陽の観測データから誕生した獣型デジモン。純粋で、とても正義感の強い性格をしている。必殺技は、炎の力で熱くなった拳を使って連続パンチを相手に食らわす『コロナックル』に、全身の体力を大きく消耗させて炎の力を額に集中させ相手に向かって火炎弾を放つ『コロナフレイム』。そして全身に炎をまとい、体当たりしたり、敵の攻撃を防御したりする『プチプロミネンス』だ。アリサがデジタマから孵して育てたパートナーデジモン。

「そうか、そう言えばそうだったな」

「サンキュー、コロナモン」

「・・・・早く来いよ」

輝一と輝二の言葉にコロナモンは素っ気無く答えると、不機嫌そうに、特に輝二に不機嫌そうな視線を向けながら、すぐさま身を翻し、草木の間を駆け抜けてさざなみ寮の方へと戻っていった。
リンディはそのコロナモンの姿に苦笑を浮かべ、苦笑いを浮かべている輝二に声を掛ける。

「クス、やっぱりコロナモン君は貴方の事が嫌い見たいね、輝二君」

「あぁ、どうもそう見たいだ」

「やっぱ、アリサとの関係が原因だろうな。コロナモンの奴は生ま

れたばかりだから、パートナーでもあり、母親代わりだったアリサが取られるのが気にいらないんだろうな」

「だとしてもだ。絶対にアリサはアイツには渡さない」

（今の言葉をアリサさんが聞いたら、確実にトマトのように顔が赤くなるわね。もしくは照れ隠しに輝二君の頭を叩くかね。同じ女性としてはアリサさんと輝二君の関係を応援したいけど、完全に三人の問題だし、此処は見守りましょう）

そうリンディは前を歩いている輝一と輝二の背を見ながら内心で呟き、さざなみ寮へと戻って行くのだった。

そして昼食を終えてからすぐの事、食べ終えると共に部屋へと戻っていたヴィヴィオを心配げにリンディ達は見つめるが、ヴィヴィオは全員の視線などに構わずにギルモンと共に部屋へと戻っていく。

その姿にリンディは更に悲しげな顔するが、何とかそれを胸の内に押し込め、先にさざなみ寮に残っているメンバーへの用を済ませようと思い、フリートから送られて来たトランクケースをテーブルの上で開ける。

それと共にトランクの中から腕輪や指輪を取り出し、桃子、愛、フィリス、ファリン、美由希には銀色に輝いている腕輪を輝一、輝二、そしてレオルモンを腕の中に抱いたアリサと、長い耳を四本備えて、体や頭部に三日月色の紋章のようなものが書かれたウサギのようなデジモン―ルナモンを抱えたすずかにはそれぞれお揃いの指輪を手渡す。

ルナモン、世代／成長期、属性／データ種、種族／哺乳類型、必殺技／ティアーシュート、ルナクロー

月の観測データから誕生した哺乳類型デジモン。ウサギのような姿

をしており、大きな耳はかなり遠くの音まで聞き分けることができる。臆病で、寂しがり屋な性格をしているが、人にはとても懐き易い。必殺技は、頭の触覚に力を集中させて綺麗な水球を放つ『ティアーシュート』と、闇の力を込めた爪で相手を切り裂く『ルナクロー』だ。すずかがデジタマから孵して育てたパートナーデジモン。

「先ず説明すると、その腕輪や指輪には着ている服を魔導師が必ず装着するバリアジャケットに変える機能が備わっているわ。この前の件でデジモン達が此処を襲う可能性も存在しているから、全員が絶対にそれを常に身に付けておいてね」

「あの、質問ですけど、耕介さん達には？」

「安心して愛さん。既に他のメンバーにも渡されている筈よ」

「そうですか、良かった」

リンディの告げた言葉に愛は安堵の息を吐き、他のメンバーも安心したように息を吐く。

それをリンディは確認すると、今度はトランクの中から二振りの鞘に納まった小太刀を取り出し、美由希の方にゆっくりと差し出す。

「さて、これは美由希さん専用の小太刀ね。一応だけど今、美由希さんが使っている小太刀を基にして作った小太刀だから違和感は無いと思うわ。だけど、もし不満があったら教えて頂戴。製作者も始めて手を出した作業だから出来るだけ意見を聞きたいらしいのよ」

「え～と、それは分かりましたけど・・・・・・どうしてこんな小太刀を？」

「理由は簡単よ。武器を使うデジモンの武器は地球の金属では絶対に耐えられない。多分、今の美由希さんの小太刀じゃ、一回衝突しただけで砕けるでしょうね。だからデジモンとの戦いの時は出来れば今渡した小太刀の方を使ってね」

「は、はい！絶対にこっちの小太刀で戦います！」

リンディの言葉に美由希は慌てた声を頷き、リンディが差し出して来た小太刀を慌てて腕の中に抱えた。

美由希には読書家と同時に刀剣収集と言う趣味もあるので自分が選んだ愛刀が砕けると成れば今の小太刀は使えない。ならば多少の違和感は在ってもリンディから渡された小太刀を使おうと思い、ゆっくりと鞘から刃を抜いてみると、刃の色は青空を思わせるような深い蒼穹色をしていた。

その色合いに美由希だけではなく、桃子や愛、フィリス、ファリン、そしてマリンエンジェモンも目が離せないというように刃を見つめ続ける。

「・・・・・綺麗・・・・・」

「本当ね。士郎さんや恭也の刀とは全く違うわね」

「耕介さんの使っている刀とも違います」

透き通るような蒼穹色の小太刀の刀身に美由希、桃子、愛はそれぞれ感想を述べ、フィリスとファリンも同感だと言うように頷く。

「それは当然ね。何せその刀身に使われている金属は特殊な金属で、地球では絶対に取れない金属だから強度も何もかも地球の金属では勝てないわ（何せ、地球で世界一硬いダイヤモンドって言われてい

るダイヤモンド以上の強度を持ったクロンデジゾイド製だからね。管理局の魔導師と戦う時の事も考えれば、フリートさんの選択は間違ってはいないわね）」

リンディはそう美由希の手の中にある小太刀を見つめながら内心で呟いた。

既に美由希にも魔導師の弱点はデバイスだと伝えてある。何せ魔導師の魔法行使にはデバイスが必要不可欠。もしデバイスが無ければ魔導師はただの人同然のレベルにまで大抵の者は下がってしまう。

しかし、デバイスの金属の強度は当然ながら高く、地球の金属では余程の使い手でなければ斬鉄する事は出来ない。だが、美由希の持つ小太刀ならばデバイスの金属であろうと切り裂く事が可能。だからこそフリートは万が一の時の為に美由希専用の小太刀を作成したのだ。

「あ、あの・・・・本当にこの小太刀貰っていいんですか？これってかなりの高価物なんじゃ？」

「大丈夫よ。殆どタダ同然の代物だし、何れはその金属はバニングス会社と月村重工が共同開発した金属だって発表する予定だからその試作品だと思って使って頂戴」

「そうですか。なら使わせて貰いますね」

美由希はリンディの言葉に納得したように頷きながら刃を鞘に収め、大切そうに二本の刀を抱えた。

その姿にリンディが苦笑を浮かべていると、アリサが渡された輝二とお揃いの指輪を顔を赤くしながら手に持ち、リンディに声を掛けて来る。

「リ、リンディさん！こ、この指輪如何して輝二とお揃いなんですか！？」

「あら？何か不満があるの？輝二君と折角お揃いにしておいてっと頼んだのだけど？」

「ウッ！」

「それにね。あっち方は気に入って貰えた見たいよ」

「エッ？」

アリサはリンディの言葉に疑問の声を上げ、リンディの視線の先の方を見てみると、すずかの腕の中で嬉しそうな笑みを浮かべているルナモンと、互いに顔を赤くしながら顔を俯かせている輝一とすずかが存在していた。

「お揃い♪お揃い♪」

「ル、ルナモン！落ちついて！」

「何で？すずかだって輝一とお揃いの指輪で嬉しいんでしょう？喜んだ方がいいと思うよ？」

「そ、それは・・・・・」

「え～と、やっぱ変えて貰おうか？すずかが嫌だったら別に変えてもら…」

「そんな事無いよ！わ、私は・・・・・輝一君とお揃いで嬉しい

から」

「アッ・・・・」

すずかが顔を赤くしながら小声で呟いた言葉を耳にした輝一は、すずか同様に顔を赤くしながらも嬉しげな笑みを口元に浮かべた。

その様子に桃子、愛、美由希、フィリス、ファリンはニヤニヤと初々しい二人の様子を見つめ、リンディも口元に笑みを浮かべながらアリサに顔を向ける。

「アチラは良いみたいだし、アリサさんと輝二君もその指輪でお願いね。だけど、もし本当に輝二君とお揃いの指輪が嫌だったら…」

「いいえ！このままで良いですよ！！」

「・・・・アリサ」

「アッ！」

呆気に取られたような顔をしている輝二の姿を目にしたアリサは、自身の叫んだ言葉の意味に気がつき、ボンと音が出るような勢いで顔を真っ赤にし、照れ笑いを浮かべている輝二の顔を見つめた。

その様子にリンディと桃子は内心で計画通りと言う笑みを浮かべながら、ソッとヴィヴィオが居る部屋へとフィリスを伴って移動し、桃子も他のメンバー達と共にデジタマが置いてある部屋の方へと移動して行き、後には顔を赤くしている輝一、輝二、アリサ、すずかと嬉しげにしているルナモンに、ソファーに座りながら不機嫌そうにしているコロナモンだけが残されるのだった。

一方その頃。東京から近い県である横浜の港。
その場所で帽子を被った二十歳ぐらいの青年と大柄の男性が何かを探すように歩き回っていた。

「どうだ？見つけたか？」

「駄目みたいだ。この辺りで確かにデジモンを見たって噂を聞いたんだけど、見つけられないって事は」

「出任せだったのか・・・・ハァ～～、漸く有力な情報かと思ったのに外れだったか」

帽子を被った青年の言葉に大柄な男性は残念そうに溜め息を吐き、帽子の青年も落ち込んだように顔を俯けてしまう。

「他の皆とも連絡は取れないし・・・・これから僕達はどうしたら良いんだろう？」

「分からないけどさ。とにかくデジモンを探すしかないぜ。何でデジモンが東京を襲ったのか、理由だけでも分からないと気が晴れないからな」

「・・・・そうだね。とにかくもう一度この辺りを探してみようよ」

「あぁ、そうするか」

青年の言葉に大柄な男性は頷き、二人はもう一度を港を探し回ろうとするが、その直前に二人の背後の倉庫の間から音が響く。

ーーーガタッ！

『ん？』

聞こえて来た音に二人は思わず背後を振り返り、音の聞こえて来た方にソッと近づいてみると、倉庫の間から声が聞こえて来る。

「・・・・ばか者！此処は狭いんじゃ！！もっと奥に行かんと見つかってしまうぞぃ！！」

「そんな事言ったって・・・・・ウゥ～～！！これ以上いけなアワワァァッ！！」

「バカモン！！」

ーーードゴオオン！！

倉庫の間から大きな音が響くと共に、声の聞こえて来た倉庫の間から腰に腹巻き巻いた白い体のデジモンと、長い胴体を持って赤いズボンを履いた眼の細いキツネのような顔立ちのデジモンが倒れながら出て来た。

その二体の見覚えのあるデジモンの姿に青年と男性は目を見開き、二体のデジモンに近寄ろうとすると、二体のデジモンはすぐさま二人に向かって土下座をする。

「ヒィッ！！命ばかりはご勘弁を！！」

「僕達何も悪い事はしていないよ！！」

「やっぱり！！ボコモン！！」

「ネーモンじゃないか！？」

ボコモン、世代／成長期、属性／ワクチン種、種族／突然変異型、必殺技／逃げ足猛ダッシュ

腹巻きを巻きオヤジのような姿をした突然変異型デジモン。デジモン界の学者でデジタルワールドの様々なことが書かれている『もの知りブック』を持っているが、あまり他人に見せてはくれない。必殺技は、勝てそうも無い相手に出会った時に猛ダッシュで逃げ出す『逃げ足猛ダッシュ』と言う、全く技とは言えない技だ。

ネーモン、世代／成長期、属性／データ種、種族／獣型、必殺技／狸寝入り、あれ？

いつもボーっとしてノンキな性格の獣型デジモン。ボコモンと一緒に居ることが多くネーモンのグータラさにイラついて、よくゴムぱっちんをされる。強いのか弱いのか、謎多きデジモンの1体。必殺技は、ピンチの時に寝たフリをして誤魔化す『狸寝入り』に、お腹に溜めたガスを膨らまして、体を爆発させ、爆発と同時に本体は瞬間移動を行う『あれ？』だ。

『へッ？』

自分達の名前が呼ばれた事にボコモンとネーモンは呆気に取られたような声を上げながら顔を上げ、目の前に立っている二人の人物の顔を注意深く見つめ出す。

そしてその僅かに見覚えがある顔に気がつき、更に注意深く二人の顔を見つめると、十年以上前に共にデジタルワールドを旅した二人の顔が脳裏に浮かび上がり、ボコモンは体を震わせながら二人を見つめる。

「も、もしや・・・・友樹(ともき)はんに純平(じゅんぺい)はん？」

「やっぱりボコモンとネーモンだ！！うん！！僕は友樹だよ！！」

「俺は純平だぜ！二人とも！！」

「友樹！！純平！！ウワァァァァァァァァッ！！」

　嘗て共にした旅をした仲間の姿にネーモンは嬉し涙を流しながら二人に抱きつき、帽子を被った青年ー氷見友樹(ひみともき)と大柄な男性ー柴山(しばやま)純平(じゅんぺい)も嬉しそうにネーモンを見つめる。

「また二人に会えて嬉しいよ！！」

「俺もだぜ！！」

「僕もだよ！！」

　ネーモンの言葉に純平と友樹も頷き、ボコモンも二人の成長した姿を嬉しげに見つめた。

　そして少しの間四人は再会を喜んでいたが突如として純平が真剣な顔つきに変わり、ボコモンとネーモンに質問し出す。

「二人とも如何して人間界にいるんだ？デジモンが人間界に来るのは不味いんだろ？」

「そうだよ。それに如何してデジモンが東京を襲ったりしたの？デジタルワールドで何か在ったの？」

　そう純平と友樹がボコモンとネーモンに質問すると、二体は顔を

暗くしながら俯けた。
その様子に二人は何かがあったのだと確信し、質問を再び行うとすると、背後から女性の声が響く。

「見つけたわよ。デジモン」

『ッ！！！』

突如として女性の聞こえて来た声とその言葉に四人は驚きながら声の聞こえて来た方を見てみると、タバコを口に銜えている銀色の髪を短髪にしてスーツを着た女性ーリスティと首にクダモンを巻いてコートを着たティアナが、友樹と純平の背後にいるボコモンとネーモンを鋭く睨んでいた。

特別編０２、在り得ざる異界の者達の出会い、前編（注コラボ）（前書き）

どうもゼクスです。
今回の話は大手のサイト、Ａｒｃａｄｉａで連載中の友様の作品
『リリカルなのは　～生きる意味～』
とのコラボ作品で、アチラに書かれているブラックウォーグレイモン対主人公のユウの戦いを、私のブラックに変えた戦いの作品です。
既に友様からはお許しを得ているので大丈夫です。

それでも宜しければ読んで見て下さい。

特別編０２、在り得ざる異界の者達の出会い、前編（注コラボ）

とある管理外世界。その場所は岩だけの無人世界。
その場所をブラックは静かに歩き続けていた。しかし、何時もとは違い、首に掛かっているネックレスは存在せず、パートナーである筈のルインもブラックの傍にはいなかった。本来ならばブラックが一人で勝手に動くのは日常茶飯事なのだが、今回は完全に何時もとは違っていた。
何故ならば、今、ブラックが歩いている世界は本来のブラックの世界ではなく、平行世界の管理外世界だったのだ。何時ものマッドなフリートの実験に付きあわされてしまい、ブラックは通信機の役割も担っているネックレスも持たずに平行世界に飛ばされてしまったのだ。
当初はその事でブラックは非常に不機嫌であったが、リンディの小言を聞かずに済む事。ヴィヴィオに付き纏われない事。その様な事から完全に開放されたブラックは伸び伸びと自身の目的通りに動ける現状を喜び、世界を好き勝手に動き回る事を決意して歩き続けていた。

「・・・・・チィッ・・・・無人の管理外世界か・・・・どうやら完全に外れのようだな・・・まぁ、良い。とにかく強い奴だ。俺の心を満たせるだけの敵と出会えればいいのだが・・・・・・ムッ！」

ブラックは自身に向かって来る複数の気配に気がついた。
そしてそのまま黙って気配が感じられる方向を見ていると、管理局の者と思われる局員達がブラックの方に向かって飛んで来ていた。その姿にブラックは僅かに不機嫌そうに顔を歪めるが、構わずに前に向かって歩き続ける。
一般的な管理局員など七大魔王と戦った事があるブラックからす

れば、雑魚どころか路傍の石同然の存在。当然ながら強い敵を求めているブラックからすれば、興味さえも湧かない存在でしかない。だからこそ、本当に珍しく黙ってその場に去るつもりだったのだが、その前に局員達はブラックの周りを囲み、その中のリーダーと思われる人物ーこの世界のクロノ・ハラウオンがブラックの姿に疑問を覚え呟く。

「・・・・ユウ？」

「邪魔だ。とっと失せろ」

「なっ！？言葉を喋れるのか！？」

「フン、言葉を話せては不味いのか？そんな事よりもさっさと失せろ。俺の邪魔をするな」

「待ってくれたまえ！私達は時空管理局の者だ！！」

（誰だ？コイツは？）

歩き出そうとした瞬間にクロノの横に立っていた男性ークロノに似た顔立ちをした男性にブラックは疑問を覚えた。

少なくともブラックの記憶の中にそのような人物は存在していない。ブラックはその事に疑問を覚え、男性の顔を静かに見つめ続けるが、その間に男性はブラックに向かって再び質問を行い出す。

「今、この世界で局所的だが空間の位相が不安定になっている。我々は、その調査に来た。そして、その空間の異常の中心部分に来た結果、君に遭遇したんだ」

「ほう、ならば簡単だ。その空間の異常の原因は、俺自身だ」

『ッ！！』

ブラックの告げた答えに局員達と男性、そしてクロノは驚愕し、思わずブラックの姿を見つめるが、ブラックはもはや関係ないと言うように足を進めようとする。

しかし、その前にクロノがブラックの前に立ち塞がり質問の叫びを放つ。

「何故そんな事をする！？」

「フン、理由など無い」

「何だと！？」

「簡単な事だ。俺はそう言う存在だ。存在するだけで、空間に異常をきたし、世界を不安定にする存在。世界から何時も俺は否定される」

『・・・・・』

ブラックの答えにクロノだけではなく、他の局員達までも声を出す事が出来なかった。

“存在しているだけで世界に異常を引き起こす”。しかもそれは自身の意思と関係なしで、それが事実だとすればどれほどまでに辛い事なのか想像する事は出来ない。それを味わう事が出来るのはブラックだけだろう。或いはブラックのパートナーであるルインぐらいだ。

「貴様の質問には答えた。さっさと其処を退け。これ以上俺を苛つかせるな」

「待ってくれ！　僕達は無闇に争うつもりはない！君の身柄は管理局で保護する！身柄の安全も保証する！」

「身柄の安全？・・・・・・クックックックックックックハハハハハハハハハハハハハハハッ！！！」

「何が可笑しいんだ！？」

突如として笑い声を上げ始めたブラックに対して、クロノに似た男性が質問の叫びを放った。

その事に対してもブラックは笑いをおさめる事が出来なかった。ブラックからすれば当然だろう。よりにもよって平行世界とは言えクロノに、管理局に自身の身柄の安全を保障するだと告げられたのだから、もはや笑うしかブラックには無い。

「クックックックックックッ、よりにもよって管理局の人間に安全の保障などと言われるとは思っても見なかった・・・・・消えろ。今すぐ消えれば見逃してやる」

『ウッ！！』

深く静かなブラックの殺気を浴びたクロノ達は怯み後ずさりし始めてしまう。

それを確認したブラックは殺気を振り撒きながら前へと進んで行く。敵にならない存在などにブラックは全く興味は無い。だからこそ珍しく暴れる事もせずに管理局員の前から姿を消そうとする。

しかし、此処で一つの不運が起きた。余りに強力すぎるブラック

の殺意に一般的な局員が耐えられる筈も無く、恐怖心に駆られてブラックに向かって射撃魔法を撃ち出してしまう。

「ウッ、ウワァァァァァァッ！！」

ーーードゴオン！！

「なっ！？何て事を！？」

ブラックに射撃魔法が直撃するのを目撃したクロノに似た男性は声を上げ、クロノも慌て始める。

しかし、その前に射撃魔法が直撃した事によって発生した煙の中からブラックが姿を現し、射撃魔法を放った局員の前に瞬時に移動する。

ーーービュン！！

「ヒィッ！！」

「・・・・・つまらん。恐怖に駆られて攻撃とは」

「クッ！！ブレイズキャノン！！」

ーーードグオオオオン！！

「本気でつまらん！」

ーーーバシュン！！

『なっ！？』

クロノが放った砲撃はブラックが振るった右腕の風圧によって一瞬の内に四散した。
その現象にクロノだけではなく他の局員達も驚くが、ブラックは構わずに目の前に立っていた局員を殴り飛ばす。

「邪魔だ」

ーーードゴオオン！！

「ガハッ！！」

ブラックの拳を受けた局員は一撃の下に吹き飛んでいき、その勢いのまま岩壁にぶつかり意識を完全に失った。
それを確認するまでも無くブラックは静かに殺意を振り撒きながら、周りで震えている局員達とクロノ達を睨みつける。

「気が変わった。貴様は一人残らず叩きのめしてやる。少しは頑張るんだな。俺の疼きを抑える為に！！」

「クッ！！攻撃開始だ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオン！！

クロノは叫ぶと同時に周りに居た局員達とクロノに似た男性はブラックに向かって魔法を放つが、彼らは身を持って知る事になった。
この世には触れてはいけない史上最悪にして最強の存在が居る事を。

平行世界の地球。その地に存在する海鳴市の高町家の中で同じ顔の二人の少女ー高町なのはと高町桜はゲームで遊んでいた。
本来ならば存在しないはずのなのはの姉の桜。彼女もまたブラックと同じように異界の人間の生まれ変わりだった。彼女もリリカルなのはの世界に転生し、ジェルシードに関わる事件や闇の書事件を解決に導き、原作では死んでしまった筈の存在さえも、もう一人の転生者と仲間達と共に救い出した。
そしてそんな二人に突如として通信が届き、桜は自身のデバイスであるレイジングソウルを服の中から取り出し、通信先に居る切羽詰った顔をしているエイミィの姿がモニターを映る。

『いきなりゴメン！ユウ君いる！？ユウ君に直接繋ごうと思ったんだけど、捉まらなくて！』

「えっと・・・・ユウは朝から出かけてて・・・・・行き先は私達にもさっぱり・・・・でも、昼までには戻ってくるって聞いてますけど」

『そんな！それじゃ間に合わない・・・・・・・ゴメン2人とも！何とかユウ君探してきて！このままじゃクロノ君たちがやられちゃうよぉっ！！』

『ッ！！』

半泣きになりながらエイミィが告げた言葉になのはと桜は、ただ事ではない判断すると、即座に立ち上がり、同じように家の中にいた兄である恭也と姉である美由希に向かって桜が叫ぶ。

「恭也兄さん！美由希姉さん！！大至急ユウを探して来て！！私となのははクロノ達の応援に行くから！」

「分かった！気をつけて行って来い！！」

桜の叫びに恭也は即座に答え、美由希も黙って頷き外へと駆け出して行く。

桜はそれを確認するとエイミィに転送を頼み、なのはと共にアースラへと転移していった。

しかし、桜は知らなかった。向かう先に存在している最強の者が、桜ともう一人の転生者を絶対に認めないという事を。そして自分達がどれほど恵まれて生まれて来た事を知る事になるとは、神ならぬ桜には全く分からなかった。

破壊し尽くされた岩壁。その場所には多数の局員が傷付きながら倒れ付し、同じぐらい傷ついているクロノとクロノに似た男性ークロノの実の父親ークライド・ハラオウンが漆黒の竜人ーブラックによってそれぞれドラモンキラーの爪先に掲げられていた。

「グウッ！！・・・・・ば、化け物か」

「つまらん。本気でつまらんぞ。少しは俺を楽しませろ！！」

ーーードゴオオン！！

『ガハッ！！』

ブラックは叫ぶと同時に二人を勢いよく地面に叩きつけ、クロノとクライドは苦痛の叫びを上げた。

しかし、その姿を見てもブラックは喜びの感情など抱かずに苛立

ちだけが募っていた。ハッキリ言ってブラックは本気で今の戦いをつまらなく感じていた。少しは楽しめるかと思い戦ってみたが、結局ブラックの本能を鎮める所か逆に本能の疼きを上げるだけで、ブラックの苛立ちは募るだけだった。

局員やクロノ達が放つ魔法は非殺傷設定の為に、ブラックからすれば避ける必要も無くその身に食らってもダメージを受ける事は無い。だが、逆にその事がブラックの苛立ちを募らせ、手加減する事無く殆ど一瞬で武装局員達を倒し、クロノとクライドにしても逃げ続ける事で二十分ぐらい持たせるのが精一杯だった。

「つまらん」

ブラックは地面に倒れたままのクロノとクライドに感情が全く篭っていない言葉を掛けると、そのまま二人に背を向け、その場を去ろうとする。

そしてそのままブラックは崖の間を通り過ぎようとするが、その瞬間にクロノとクライドは同時に立ち上がり、ブラックの頭上に存在している大岩に向かって砲撃を撃ち出す。

『ブレイズキャノン！！！』

ーーードグオオオン！！

「ムッ！」

ーーーガラガラガラガラッ！！！！

二人が放った砲撃によってブラックの頭上に存在していた大岩が崩れ、油断してたブラックは大岩の下に飲み込まれた。

それと共に周りの崖も崩れ落ち、大岩の隙間を塞ぎブラックは完

全に大岩に閉じ込められた。
　その様子にクロノとクライドは安堵の息を吐きながら地面に膝をつくと、空から二人の少女ーバリアジャケットを纏い、それぞれデバイスを手に握った桜となのはがクロノの向かって来る。

「クロノーー！！！」

「クロノ君！！」

「ッ！！桜！！なのは！！如何して此処に！？」

「エイミィさんに頼まれたの。クロノ達がピンチだから助けて欲しいって。本当はユウの方が良かったんだけど、今日は朝から何処行ったか分からないから、私達が先に応援に来たの」

「・・・・そうか、正直助かるが・・・・来ない方が良かったかもしれない」

『エッ？』

　クロノの苦渋に満ちた言葉に桜となのはは同時に疑問の声を上げ、クロノと同様にボロボロになりながら膝をついているクライドがブラックが生き埋めになっている大岩の方に顔を向けながら呟く。

「ハッキリ言って、この敵は強すぎる。私達の魔法が全く効かないんだ」

「エェェェッ！！魔法が！？」

「それでソイツは何処に居るのよ！？」

「今はあの大岩の下だが、先ず間違いなく生きている。だが、これも何時まで持つか・・・・せめて1時間・・・・いや、３０分持てばいい所…」

ーーードゴオォォォォォォォン！！！！

『ッ！！！』

クロノの声を遮るように大岩は粉々に砕け散り、細かい瓦礫も跡形も無く吹き飛んだ。

その現象に全員が目を見開き、大岩が在った場所に顔を向けてみると、砂煙の中に影が映り出す。

「三十秒しか持たなかったか・・・・・・」

「いい加減に限界だ。貴様らは殺す」

『なっ！？』

苛立ちに満ちた声と共に砂煙の中から出て来たブラックの姿に、なのはと桜は驚きの声を上げた。

その見覚えのあるブラックの鎧と鉄鋼に二人は思わずブラックの姿を凝視してしまうが、逆にブラックはなのはと桜の姿に疑問を覚えた。

（誰だ？高町なのはの横に立っている小娘は？この世界では奴には姉妹が居るのか？）

「・・・嘘・・・・・ユウ君のバリアジャケットそっくり・・・・」

（ユウ？誰だ？聞き覚えが無い名前だ？あの小僧に似た男に、高町なのはに似た娘。一体この世界はどうなっている？）

ブラックは自身のいる世界の現状が良く分からずに疑問の覚え、苛立ちも忘れて考えようとするが、その考えは恐れを含んだ桜の呟きに中断する。

「な、何で・・・・・」

（ムッ？）

「さ、桜お姉ちゃん？」

恐怖に震えている桜の姿にブラックだけではなくなのはも疑問を覚えるが、桜は答えずにブラックの姿を見つめながら、本来ならば知るはずの無い事を呟いてしまう。

「ブ、ブラック・・・・・ブラック・・・・・ウォー・・・・・グレイモン・・・・・」

（何！？）

自身の名を名乗る前に呟かれた事にブラックは内心で驚愕し、目を細くしながら桜の姿を注意深く見つめ始める。

「貴様、何故俺の名を知っている？」

「そ、その前に、ちょっと聞かせて・・・・・デジモン、ダークタワー、ホーリーストーン、チンロンモン・・・・・この単語に聞

き覚えは？」

「・・・・何故貴様がその単語を知っている。それは貴様が知る事は出来ないは・・（いや待て・・・・俺はこのような出来事を知っている。まさか、まさか！？）」

ブラックは桜の呟いた言葉に疑問を覚えるが、すぐにある仮説に思い至り、信じられないと言う瞳で桜の顔を見つめた。

しかし、今度は桜がブラックの言葉に諦めたように目を伏せながらレイジングソウルの柄を強く握り始める。

ーーーギュウッ！！

「・・・・そう・・・・・・レイジングソウルッ！！」

ーーーガシャン！！

桜が叫ぶと同時にレイングソウルはブラストモードへと変形し、突然の桜の行動になのは、クロノ、クライドは驚愕する。

しかし、桜はその様子に構わずにブラックにレイジングソウルの照準を合わせて躊躇い無くなのは達が更に驚く命令をレイジングソウルに向かって叫ぶ。

「非殺傷設定解除！！」

「やはり貴様は！！」

ブラックは桜の叫びに桜の正体を確信した。

初めて見る敵に対する迷いの無い非殺傷設定解除の命令。その事だけでもブラックが桜の正体を確信するには充分だった。知ってい

たからこそ出せる命令。ブラックにとってはその様な出来事は充分過ぎるほどに理解している。“何故ならば今の桜の行動は、ブラック自身も行った事がある行動なのだから”。
しかし、桜はブラックの叫びや様子には一切構わずに特大の砲撃をブラックに向かって放つ。

「フルパワー！ポジトロンレーザー！バージョンF！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオン！！

桜が放った手加減無用の砲撃は、ブラックの体を飲み込んだだけではなくそのまま背後の崖に激突し、それよって崖にも巨大な亀裂が走り、崖は一瞬の内に崩壊した。
その様子を目撃したクロノは慌てた表情をしながら、焦りと恐怖に震えている桜に向かって叫ぶ。

「なっ！？桜！？いきなり何を！？しかも非殺傷を解除するなんて！？」

クロノがそう叫ぶのも当然だろう。
桜の一撃は非殺傷設定でも充分過ぎるほどの威力が在る上に、それを殺傷設定で放ったのならば並みの者では死んでしまうだろう。だが、桜の行動はブラックに対しては正しい行為だった。最もブラックにはダメージが全く無いのだが。
その事を知らないのは、クロノ、クライドは桜の行動に質問を繰り返そうとするが、その前に焦りと恐怖に染まった桜が叫ぶ。

「逃げるわよ！！」

「さ、桜お姉ちゃん！？」

「ブラックウォーグレイモンを相手に、まともに戦って、勝てるわけないわよ！！」

「えっ！？」

桜の叫びになのはは驚いた声を上げるが、桜は構わずになのはの手を掴み取りその場から本当に逃げ出した。

「ちょっ！桜お姉ちゃん！！」

なのはは全速力で逃げようとしている桜を引き止めようとするが、その前にブラックが吹き飛ばされていた崖の瓦礫が吹き飛び、それと共に飛び出したブラックが桜の前に立ち塞がる。

ーーーードゴオオオオオオオオオン！！

ーーービュン！！

「フン、逃げられると思っているのか？この俺の事を知りながら」

「クッ！！」

無傷のブラックの姿に桜は悔しそうに声を上げ、なのははブラックの姿に目を見開いた。

しかし、ブラックは桜となのはの様子には一切構わず、苛立ちが募った視線を桜に向ける。

「今の攻撃で確信したぞ。貴様は・・・・・いや、そんな事はもう如何でもいい・・・・・どうやら貴様は少しは骨がある奴のようだ」

「・・・・だったら、如何なのよ？出来れば、私としてこのまま見逃して貰いたいんだけどね？」

「フッ、無理だな。貴様は・・・・・殺すッ！！！」

『ッ！！』

ブラックが叫ぶと共に凄まじい殺気に桜となのはに叩きつけ、その殺気に桜となのはは本能的な恐怖を心の底から味わった。

最初からブラックの正体を知っている桜は当然として、なのはにも如何してクロノがこの場に来ない方が良かったと告げたのかハッキリと理解出来た。目の前に存在しているブラックは恐怖の根源そのもの。

例え自分と桜が一緒に戦ってもブラックの足元にも及ばないと理解出来たが、既になのははブラックが放ち続けている凄まじい殺気から抜け出す事が出来ず、体を恐怖で震わせる事しか出来なかった。

しかし、ブラックはその様子に一切構わずに恐怖に体を震わせているなのはに向かって、右手のドラモンキラーを突き出す。

「先ずは貴様だ！！！」

「クッ！！」

《Ｆｌａｓｈ（フラッシュ）　ｍｏｖｅ（ムーブ）》

ブラックのドラモンキラーがなのはの体に直撃する直前に、何とかブラックの殺気の影響から抜け出す事が出来た桜は、恐怖に震え続けているなのはの手を高速移動魔法を使用しながら引っ張り、ブラックの攻撃をかわした。

そしてそのまま高速移動魔法の影響が収まる前になのはの方を振り向き、未だに恐怖から抜け出せていないなのはに活を入れる。

「なのは！！此処で死んだらユウとはもう会えないわよ！！！」

「ユウ君ッ！！」

桜の告げた人物の名前になのははハッと我に帰り、自身の手を握りながら引っ張り続けている桜の顔を見ると、桜は真剣な顔をしながら頷く。

「そうよ！！だから絶対に生き残るの！！フォーメーション対ブレイズ戦！！」

「う、うん！！」

桜の叫びになのはは即座に頷き、レイジングハートを構え直しながら背後を振り向いてみると、先ほどの殺気を撒き散らしながら追って来るブラックの姿を目にする。

「逃がさんぞッ！！」

「行くわよ！！」

「うん！！」

《Ｆｌａｓｈ（フラッシュ）　ｍｏｖｅ（ムーブ）》

凄まじいスピードで接近して来たブラックを桜となのはギリギリまで引きつけ、高速移動魔法を使用する事で左右に避けた。

ブラックはその様子に二人の次に行うであろう行動を経験から完全に予測するが、あえてこの場は二人の思惑通りに動き、そのまま前へと僅かに進む。
そしてその間にブラックの背後へと回った桜となのはは、バスターモードとブラストモードへと変えたレイジングソウルとレイジングハートをブラックの背に向けて照準を合わせて同時に砲撃を撃ち出す。

「ダブルッ！！」

「ポジトロンッ！！」

『レーザーーッ！！』

ーーードグオオオオオオオオオオン！！

「フン・・・・（猿真似が。本物には遠く及ばんな。だが、もう少しだけ付き合ってやろう。もう一人の“敵”が来るまではな）」

ーーードゴオオオオオオオオオオン！！

桜となのはが同時に放った二つのポジトロンレーザーはブラックの背に存在している『ブラックシールド』へと直撃し、ブラックはそのまま地上へと叩きつけられた。
そして魔力爆発によって辺りに煙が渦巻くと、何時の間にか復活して上空に浮かんでいたクロノとクライドがブラックが落下した場所に向かって追い討ちをかけるように数百本の魔力剣を撃ち込む。

『スティンガーブレイド！　エクスキューションシフトッ！！』

ーーーズガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！！！！

クロノとクライドが同時に放ったスティンガ―ブレイド・エクスキューションシフトはブラックがいるであろう場所に次々と向かい、再び魔力爆発が地上に起きた。

「これぐらいなら少しは・・・・・」

「淡い期待なんか持たない方が良いわよ。よくて軽く殴られた程度のダメージじゃないかしら？」

「・・・・桜？君はアイツを知っているのか？」

「・・・・・知識としては・・・・・だけどね」

クロノの質問に対して桜は油断無くブラックのいるであろう場所を睨みながら答えた。

その桜の答えになのは、クロノ、クライドは僅かに訝しげな視線を桜に向けるが、その前に煙の中から先ほどのクロノとクライドに勝るとも劣らない数の赤黒いエネルギー剣が煙を吹き散らしながら桜達に向かって突き進んで来る。

ーーーズガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！！！！

「ッ！！皆！避けて！！（何！？この攻撃は！？）」

凄まじいスピードで向かって来た無数のエネルギー剣を避けながら、桜は自身の知らない攻撃に疑問を覚えた。

桜の知識の中には今の攻撃などブラックウォーグレイモンには存在していない。しかし、現実にブラックのいたであろう場所から攻

撃が放たれて来た。
その事実に桜が動揺を覚えていると、次の瞬間に煙の中から無傷のブラックが姿を現し、凄まじいスピードで桜に急接近して来る。

「クッ！！」

ブラックの姿を目撃した桜はブラックから距離を取ろうとするが、ブラックのスピードは凄まじく徐々に距離は縮まって行く
桜はその事に悔しそうにしながらも辺りに存在している岩場に近寄り、崖に成っている場所を背にし始める。
その様子を目撃したブラックは瞬時に桜の狙いに気がつくが、先ほどと同じように桜の策に気がついてないと言うようにスピードを更に上げ、桜に向かって突進する。

ーーービュン！！

（今ッ！）

《Ｆｌａｓｈ（フラッシュ）　ｍｏｖｅ（ムーブ）》

ーーードゴオオオオオオオオオオオン！！

先ほどと同じように桜はギリギリまでブラックを引きつけながら高速移動魔法を使用してかわし、ブラックはその勢いのまま崖に激突し、崖全体に一瞬の内に罅が広がり、崩落した。
その現象に上空で様子を見ていたなのは、クロノ、クライドは、先ほどの桜のポジトロンレーザー以上の崖の崩落に目を見開きながら、呆然と崩落した崖の瓦礫を見つめた。桜の砲撃以上の現象と言う事は、ブラックの攻撃力は魔法を超えていると言う事になる。
その事実になのは達が驚愕しながら呆然となった瞬間に、桜が慌

てた顔をしてなのはに向かって叫ぶ。

「バカ！なのは！危ない！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオン！！

「はぁあああああっ！！」

「ッ！！」

桜が叫ぶと同時に崩落した瓦礫の中からブラックが飛び出し、なのはの目の前に普通の人間ならば視認するのが不可能なレベルでのスピードで移動した。

（なっ！？何よ今のスピード！？全然見えなかった！さっきまのスピードを軽く超えているわよ！！）

桜はブラックの在り得ないレベルでのスピードに内心で驚愕の声を上げるが、ブラックは構わずに咄嗟の事態で動きが完全に止まってしまっているなのはに向かって右腕のドラモンキラーを振り上げる。

「ムン！！」

「なのは！！」

《Ｂｌｉｔｚ（ブリッツ）　Ｒｕｓｈ（ラッシュ）》

ーーービュン！！

桜の悲痛な悲鳴が響いた瞬間に、金色の閃光がなのはの横を通り過ぎ、なのははブラックの攻撃から逃れた。
突然の事態になのはが慌てて自身の服を掴んでいる相手の顔を見てみると、険しい顔をしたフェイトが存在していた。

「なのはッ！！大丈夫！？」

「フェイトちゃん！！何で此処に！？」

「私達も、エイミィに頼まれたんだ。クロノ達を助けて欲しいって。ユウは、姉さんやアリサたちが探してくれてるよ」

「そうなんだ・・・・えっ？私“達”？」

「ムッ！」

なのはがフェイトの声に疑問を覚えて聞き返した瞬間に、ブラックは突如として自身の背後を振り返った。
その事になのはも疑問を覚えた瞬間に、ブラックの頭上から巨大な炎の鳥が舞い降り、ブラックに直撃する。

「シャドーウイングッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオン！！

「ハンマースパーークッ！！」

ーーーガアァァァァァァン！！

シャドーウイングの炎に包まれていたブラックに対して、赤い髪

の少女ーヴィータが電撃を纏っていた巨大なハンマーを叩きつけ、ブラックは地上へと吹き飛んでいた。
その様子になのはは嬉しげな笑みを浮かべ、シャドーウイングを放ったシグナムとハンマースパークをブラックに叩きつけたヴィータの姿を見つめていると、更に追い討ちを掛けるようにブラックが落下した地点に向かって上空から三つの白い砲撃が降り注ぐ、

「響け！終焉の笛！ラグナロク！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

「はやてちゃん！！」

ブラックにラグナロクを撃ち込んだ主ーリインフォースとユニゾンしているはやての姿に、なのはが更に喜びの声を上げた。
それと共になのはとフェイトの周りに転送用の魔法陣が出現し、その中からアルフ、シャマル、ザフィーラ、ユーノが姿を現す。

「あたし等もいるよ！！」

「みんな・・・・」

駆けつけてくれた仲間の姿になのはは感動したように瞳を潤ませ、自身の周りの仲間達の姿を見つめていると、桜が険しい顔をしながらなのはに向かって叫ぶ。

「なのは！感動してる最中悪いけど、ブラックウォーグレイモンがあの位でやられる訳ないから、気を引き締めなさい！」

ーーーブン！！

桜が叫び終えると同時に煙の中から全くダメージを受けた様子を見せていないブラックが姿を現した。
その姿に全員が気を引き締めなおし、不気味なほどの静かにしているブラックに向かって構えを取りながら向き合うのだった。

戦闘場所から数キロ離れた岩山。
その場所の頂点に突如として光が溢れ、光が収まった後には青と白のロングコードを纏った長い銀髪に青い瞳を持った女性ーリインフォースにソックリな容姿をしたブラックのパートナー事、ルインフォースー愛称ルインが岩山の上に立っていた。

「さてと、ブラック様は何処でしょうかね？出来るだけ早く見つけないと、ブラック様の事ですから無茶をしますし、早く合流しましょう」

そうルインは呟きながらブラックの反応を探す為に、探索魔法を使用しようとすると、遠くの方から爆発音が響いて来る。

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「・・・・・・はぁ～、さっそく暴れているんですね。もう！！すぐに目を離すとこれなんですから！！」

遠くから聞こえて来た爆発音の正体にルインは僅かに不機嫌そうな声を出しながら空へと浮かび上がる。
ルインには今の爆発の主の正体が分かっていた。自身の主であるブラックがリンディやヴィヴィオと言う抑止力を失えば如何言う行

動を取るかなどルインには簡単に分かる。だからこそ誰よりも早くブラックの後をルインは追って来たのだが、どうやら完全に一足遅かったようだ。

「此処は平行世界だから暴れたら不味いのに・・・・・ブラック様に言っても仕方ないでしょうね・・・・とにかく様子だけでも見に行きますか」

そうルインは呟き終えると、高速移動魔法を使用しながらブラックが戦っているであろう場所へと向かい出すのだった。

特別編０２、在り得ざる異界の者達の出会い、中編その一（注コラボ）

海鳴市に存在するとある墓地の丘。
その場所からこの世界の二人目の転生者ー利村ユウことユウ・リムルートは、猫の使い魔のリニスが坂を降りて来ていた。ブラックが現れた今日はユウにとってのこの世界の実の両親の命日で在った為に、ゆっくりと静かに墓参りを行う為にリニスに頼んで通信傍受さえも行っていたのだ。
その為にエイミィの通信はユウには届かず、ブラックが現れた事もユウとリニスは知らなかった。
そして墓の掃除や墓参りを終えたユウとリニスはバケツを手に提げながら坂を降りて、自分達の住んでいる高町家へと戻ろうとするが、その直前に坂の下の方から慌てた顔をしたアリサ、すずか、アリシア、ファリンが駆け上がって来た。

「ユウッ！！」

「アリシア？アリサにすずかにファリンさんまで・・・・・一体如何したんだ？」

突如として駆け上がってくると共に慌てた顔をして叫んで来たアリシアの姿に、ユウは軽く驚いた顔をしながら質問した。
するとアリサが僅かに怒ったような顔をしてユウに駆け寄り、大声で叫ぶ。

「『一体如何したんだ？』じゃ、なーい！！アンタがほっつき歩いてる間に、なのは達が大ピンチになってるんだから！！」

『ッ！！』

アリサの突然の大声にユウとリニスだけではなく、アリシア達も思わず耳を押さえてアリサの姿を見つめてしまう。

「ほ、ほっつき歩いてたわけじゃないんだが・・・・・・って、なのは達がピンチってどういう事だよ！？」

アリサの言葉の意味に気がついたユウは慌てた声を上げてアリサ達に質問し、アリサ達はなのは達に起きている現状の説明を行いだすのだった。だが、彼女達は知らなかった。

ユウがこれから向かう先にいる敵の目的は“ユウと桜”であると言う事。そしてその敵には更なる力を宿っている事を彼女達は全く知らなかった。

破壊し尽くされた岩山が多数存在する場所の上空。

その場所でなのは達と合流したはやて達はブラックと戦い続けていた。

はやて達の目的は自分達の中でも最強の者ーユウが来るまでのブラックの足止めだった。またはSランクに匹敵する全員で掛かり、ブラックを倒すと言う作戦だったが、その考えは間違っていたと心の底から思い知らされた。

何故ならばはやて達の放つ攻撃は、“ブラックに何のダメージも与える事が出来なかったのだ”。

「紫電一閃！！」

「ラケーテン！！ハンマーーー！！！」

「フン」

ーーーガキィィィィィィン！！

シグナムとヴィータが同時に放って来た必殺技の一撃を、ブラックは無造作に両手のドラモンキラーで微動だにする事さえもなく受け止めた。

その事実にシグナムとヴィータは目を見開きながら傷一つ付いていないブラックのドラモンキラーを見つめるが、ブラックからすれば当然の事であり、シグナムとヴィータの様子になど構わずに二人を弾き飛ばす。

「邪魔だ」

ーーーードゴオオオオオオン！！

『ガハッ！！』

ブラックに弾き飛ばされた二人は、そのまま地上の方へと吹き飛ばされていったが、地上に激突する直前に体勢を整え直し地上に着地した。

ヴィータはそれと共にブラックの姿を確認しようと上空に目を向けるが、その直前にブラックがヴィータの目の前に姿を現す。

ーーービュン！！

「なっ！？」

「ヴィータッ！！」

ヴィータの危機にはやては慌てた声を上げ、すぐさま助けに向かおうとするが、その前にブラックが体勢が悪いヴィータに向かってドラモンキラーを突き出す。

「ドラモンキラーー！！！！」

「ヴィータッ！！」

ーーーガキィィィィィン！！

「ムッ！」

ブラックのドラモンキラーがヴィータの体に直撃する直前に、突如としてドラモンキラーの前に緑色の魔力障壁が三重で展開され、ドラモンキラーは阻まれ止まってしまった。

その隙にヴィータはブラックのすぐ傍から離れるが、ブラックはあえて追撃を行わず、障壁を展開したユーノの傍に近寄って行くヴィータの姿を見つめる。

（・・・・・つまらん・・・・・少しは楽しめるかと思って手加減していたが・・・・やはり苛立ちが増すだけだ・・・・そろそろ終わりにするか。目的の敵も来る気配は無いからな）

そうブラックは完全に手加減する気を失い、本気を出そうと力を全身に込め始めるが、その前に上空から三つの砲撃がブラックに降り注ぐ。

「ダブルポジトロンレーザーーッ！！」

「エクストリームジハードッ！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「猿真似も・・・・・いい加減にしろッ！！ハァッ！！！！」

ーーーバシュウン！！

『なっ！？』

ブラックは叫ぶと同時に両手のドラモンキラーを鋭く振り抜き、桜色と白銀、そして金色の砲撃を真っ二つに切り裂き、砲撃はブラックに直撃する事無く四散した。

その今までと違うブラックの姿に全員が目を見開くが、ブラックの真横に移動していたアルフとザフィーラはすぐさま驚愕を抑え込み、同時にブラックに向けて拳を突き出す。

「獣王拳ッ！！」

「覇王拳ッ！！」

ーーーードゴオオオオン！！

「また猿真似か。猿真似ならこれぐらいはして見せろ！！ブレイズキャノン！！」

ーーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

『なっ！？』

ブラックは右側から迫って来るアルフの狼の顔している衝撃波ー

獣王拳と、左側から迫って来ているザフォーラの拳型の衝撃波一覇王拳に向かって左右の両手を突き出すと同時にクロノとクライドが得意としている砲撃を撃ち出した。
　その砲撃に全員が目を見開いている内にブラックの放った砲撃は獣王拳と覇王拳と衝突するが、一瞬の停滞を見せる事も無く撃ち抜き、勢いは全く衰える事無く砲撃はアルフとザフィーラに向かって迫る。

『クッ！！』

　アルフとザフィーラは迫り来る砲撃を横に飛ぶ事で避けたが、その顔は困惑に染まりきり、ゆっくりと両手を下ろし始めているブラックの姿を見つめた。
　それだけではなく周りのメンバーもブラックの姿に困惑を隠せないと言うように見つめ、ブラックの事を最も知っている筈の桜も今のブラックの技には困惑を隠せなかった。ブラックが使った砲撃は紛れも無くクロノとクライドが得意としている『ブレイズキャノン』
　その魔法をブラックはまるで最初から使えたと言うように平然と使った。その事に誰もが驚愕と困惑をせざる得なかったが、ブラックは構わずに周りの者達を睨みつける。

「猿真似ばかり行うとは・・・・・俺を苛立ったせるのもいい加減にしろ」

「猿真似だって？ふざけんじゃないよ！！私らの魔法は頑張って訓練して覚えた魔法だ！！それを猿真似なんて呼ぶんじゃないよ！！」

「フン、貴様らが使っている技は殆どが猿真似だ・・・・いや、そう呼ぶのも苛立つ。本物の威力に比べれば遥かに劣る技だからな・・・・そうだろう！桜と言う娘！！！」

「ッ！！・・・・・・」

突然声を掛けられた桜は目を見開きながらブラックの姿を見つめるが、桜はブラックの言葉に言い返す事が出来なかった。

桜にもブラックの言葉は正しいと分かっていた。確かになのは達の魔法は努力した果てに覚えた魔法。だが、その技は殆どがデジモンの技を基にしたものであり、本物に比べれば遥かに威力は下回っているのだ。

「貴様とその妹が使った砲撃はインペリアルドラモンの技。そっちの金髪はマグナモン。赤いガキはズドモン。桃色の髪の女はガルーダモン。そして犬どもはレオモンにオーガモン。どれもこれも猿真似としか言えない技ばかりだ」

（如何言う事！？何でブラックウォーグレイモンがインペリアルドラモンの事を知っているの！？それにマグナモンも！？他のデジモンはともかく、その二体とブラックウォーグレイモンが会える筈は無いわよ！！一体このブラックウォーグレイモンは何時のブラックウォーグレイモンなのよ！？）

「特にインペリアルドラモンとマグナモンの技を猿真似されたのは気に入らん！！奴らは俺が認めている連中。そいつらを侮辱された気分だ・・・・・もはや手加減はしない」

「なっ！？今まで手加減していたと言うのか！？」

ブラックが告げた事実にクロノは信じられないと言うように叫び、桜を除いた他のメンバー達も信じられないと言うようにブラックの姿を見つめるが、残念ながら事実だった。

「五分は持たせろ。『リヴァイアモン』の奴と戦った時と同じぐらいの覚悟で貴様らと戦ってやるのだからな！！」

「リ、リヴァイアモンですって！！」

ーーービュン！！

桜がブラックの言葉に驚愕すると同時にブラックの姿は全員の視界から消失した。

その突然の事態に誰もが慌ててブラックの姿を探そうと警戒しながら辺りを見回し始めた瞬間に、ザフィーラの目の前に本気になったブラックが姿を現す。

ーーービュン！！

「クッ！！オォォォォォォーーーー！！！！」

「フン！！」

目の前に現れたブラックの姿にザフィーラは一瞬驚くが、すぐさま冷静に立ち返り、ブラックに向かって右拳を突き出し、ブラックもザフィーラの拳に応じるように右拳を放った。

ーーーバキィィィィン！！

「グッ！！グァァァァァァァァァァァァァッ！！」

『ザフィーラッ！！』

互いの拳が激突した瞬間に、ザフィーラの右腕は在り得ない方向へと曲がり、ザフィーラの右腕は折れた。
それによってザフィーラは苦痛の叫びを上げ、折れた右腕を左腕で押さえながらブラックの傍から離れようとするが、その前にブラックはザフィーラの左肩に向かって凄まじい力を込めた踵落としを放つ。

「終わりだ」

ーーードゴォォン！！

ーーーゴキン！！

「ガアァァァァァァァァァァァッ！！」

「消えろ」

ーーードゴオオオオオオオオオオン！！

踵落としによって左肩を砕かれ、苦しんでいたザフィーラに対して、ブラックは一切の容赦なくドラモンキラーの爪先に作り出していた赤いエネルギー球を胴体に撃ち込み、ザフィーラは遠くへと吹き飛んで行った。

「十秒経過」

ーーービュン！！！

ブラックは呟き終えると共に再び普通の人間では視認する事が不可能なレベルでのスピードで移動し、今度は一番奥で全員のブース

トを行っていたシャマルの前に姿を現す。

ーーービュン！！

「ヒィッ！！」

「煩わしい！！！」

ーーードゴオオオオオオオン！！

「アッ！！！」

ブラックはシャマルの腹に向かって左腕のドラモンキラーを迷わず突き出し、シャマルはザフィーラと同様に吹き飛んで行った。
その傷ついて行く仲間達の姿にヴィータは怒りを覚えて、ギガントフォルムに変形し電撃を纏っているアイゼンをブラックに向かって全力で振り下ろす。

「こ、この野郎ッ！！ハンマーースパーークッ！！」

「フン！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

ヴィータが振り下ろして来たハンマースパークに対してブラックは右腕のドラモンキラーをハンマーの中心部分に撃ち込み、辺りに衝撃波は撒き散らされた。
しかし、ブラックに対してハンマースパークを振り下ろした筈のヴィータの顔は恐怖に歪み、アイゼンの柄を握っている両手を震わせながらハンマースパークを“右腕”だけで受け止めているブラッ

クの姿を凝視する。

「今何かしたのか？」

「う、嘘だ・・・・・嘘だあぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーー！！！」

ーーードゴオン！！ドゴオン！！ドゴオン！！

自身の必殺技が簡単に受け止められた事実が信じられず、ヴィータは恐怖に駆られながらブラックに連続でハンマーを振り下ろすが、ブラックはやはり全ての攻撃を見切り、先ほどと同じように“右腕”だけを使って受け止めて行く。

その余りにも当然だと言うようなブラックの姿にヴィータは悔し涙を流しながらもアイゼンを振り下ろし続けるが、ブラックはやはり平然とした顔をしながら“右腕”だけで受け止めて続け、遂に攻撃を放っている筈のヴィータのアイゼンの方に罅が入り始める。

ーーービキッ！！

「なっ！？何でだ！？」

「フン、やはりつまらん。失せろ！！！」

「クッ！！ヴィータ！！」

ブラックがヴィータに向かって攻撃を放とうとしている事に気がついたユーノは、すぐさま先ほどと同じようにヴィータの前に三重魔力障壁を作り上げ、ヴィータが逃げる時間を稼ごうとする。

しかし、今度は先ほどとは全く違い、ユーノが張った障壁は何の効果も発揮する事無く砕け散り、ブラックのドラモンキラーの刃が

ヴィータの体に突き刺さる。

ーーーバキィィィィィン！！

ーーードスッ！！

「ガフッ！！」

『ヴィータッ！！！！！』

「ヴィータちゃん！！！！」

ドラモンキラーの刃に突き刺さっているヴィータの姿に、残っている全員が悲鳴のような声を上げ、ユーノが我を忘れたようにブラックに向かって突撃する。

「ウオォォォォォーーーーーーーー！！！！！」

「フン、そんなにコイツが大切か？ならば返してやろう！！」

ーーーブン！！

怒りに我を忘れて突撃して来るユーノに向かって、ブラックは迷う事無くドラモンキラーに突き刺していたヴィータを投げつけた。

ユーノは猛スピードで飛んで来るヴィータに気がつくと、慌ててスピードを落としヴィータの体を受け止める。

ーーーガシッ！

「ヴィー…」

ーーービュン！！

「仲良く消えろ」

ーーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ウワァァァ

ドッゴオオオ

それぞれの必殺の魔法はブラックがいるであろう地点に同時に直撃し、前の爆発には及ばないがそれでも強力な爆発が起きた。
桜達はその様子に僅かに安堵の息を吐きながらも爆発によって発生した爆煙を油断なく睨みつける。

「・・・・これならば、幾ら奴でも・・・」

「・・・・多分、少しぐらいはダメージを受けた筈よ」

「・・・・・冗談だよね、桜？これだけの魔法を、しかも殺傷設定で放ったんだよ？幾らなんでも倒せる筈だよ」

「・・・・アイツにまともなダメージを与えるなら、核弾頭ぐらいの威力は必要なのよ」

『ッ！！！』

桜が告げた事実に全員が驚愕と恐怖に目を見開き、慌てて煙の方に顔を向けた瞬間に、煙がまるで吹き散らされるように消えていき、“全くダメージ”を受けていないブラックが八人の前に姿を見せる。

ーーーブン！！

「フン、つまらん攻撃だ。捨て身の策を使ってもこの程度とは・・・・・無駄な時間を与えてしまったようだな」

『ッ！！！』

無傷のブラックの姿と言葉に、桜を除いた全員が信じられないと言うような顔をしてブラックの姿を見つめ、桜は悔しげな顔してブ

ラックの顔を見つめる。
　分かっていた事だが、ブラックの力は異常過ぎる。全力で撃ち込んだ筈の攻撃で全くダメージを与えられていないのだから、正直に言えば桜は全員を連れてこの場から逃げ出したいと思っていた。だが、それは既に不可能な事であると言う事も桜は理解していた。視認さえも出来ないスピードで動けるブラックから逃れる事は不可能な上に、転送しようにも陣が発生した瞬間にブラックは攻撃して来るであろう。
　そう内心で考えていた桜ではあったが、フッと今考えた中にブラックから逃れられる方法がある事に気がつき、全員に念話を送り始める。

（皆、このままアイツと戦っていても勝ち目はないわ！ユウが何時来るか分からないし、此処は逃げるわよ！！）

（だが、逃げるとしてもどうやって逃げるんだ、桜？奴のスピードは異常過ぎる。逃げたとしても絶対に追いつかれて、捕まってしまうぞ？）

（えぇ、だから転送魔法で逃げるのよ。他のメンバーは既にアイツの眼中に無いから転送させる事は簡単よ。作戦はこうよ。ブラックウォーグレイモンには魔法の知識なんて無いわ。だから転送用の陣と攻撃用の陣の判断は絶対につかない。それを利用して全員で強力な魔法を放つと思わせて、アースラに転送）

（なるほど、確かに良い策だが、先ほど彼は私とクロノ魔法を使った？その事を考慮しての考えだね？）

（えぇ、正直アレは私も驚きましたけど、使ったのはクロノとクライドさんの魔法だけです。多分見覚えて使ったと思うんで、まだ、

使ってはいない転送魔法なら逃げられる筈ですよ）

（・・・・・よし、桜の策で行こう。このままでは確かにやられてしまう。ユウが来るまでの間逃げ切れる可能性も低いし、逃げるのが正解だ。皆！行くぞ！！）

（了解！！）

クロノの念話に全員が一斉に頷き、それぞれ桜の策を成功させる為に余裕なのか静観していたブラックに向けてそれぞれデバイスを構え出そうとする。しかし、その直前にはやてとユニゾンしているリインフォースが違和感を感じる。

（ッ！！）

（ん？どないしたん、リインフォース？）

（・・・・・いえ、気のせいみたいです（今の感じは・・・・・・・いや、在り得ない。“彼女”は既に居ないのだから））

はやての質問に答えながらもリインフォースは言い知れない不安を感じるが、今は桜の策を成功させる為に全力ではやてのサポートに専念し始める。

「もう良いのか？別れの挨拶ぐらいはさせてやるぞ？」

「あいにくだけど、私達はまだ死ぬ気は無いわよ！！ポジトロンレーザーーーッ！！！！」

「エクストリームジハードッ！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

桜とフェイトは同時にブラックに向かって砲撃を撃ち出し、他のメンバーもそれぞれブラックを撹乱するように動き始める。

しかし、ブラックは惑わされる事無く、目の前に迫って来ている砲撃に向かってドラモンキラーを振り抜き、砲撃を四散させると共に砲撃を放った桜とフェイトに向かって突撃する。

ーーーバシュン！！

ーーービュン！！

「オォォォォォーーーーー！！！！！」

『クッ！！』

《Ｆｌａｓｈ（フラッシュ）　ｍｏｖｅ（ムーブ）》

《Ｂｌｉｔｚ（ブリッツ）　Ｒｕｓｈ（ラッシュ）》

砲撃を四散させると共に飛び出して来たブラックの姿に、桜とフェイトは悔しげな声を出しながらも高速移動魔法を使用してブラックの突撃を避けた。

しかし、今度は今までとは違い、ブラックは自身の異常なスピードを完全に制御しきり、逃げ出した桜をすぐさま追い始める。

ーーービュン！！

「フッ！！」

「クッ！！（冗談でしょう！？何でアレだけのスピードを出していて、こうも簡単に追いつかれるのよ！！違う！！コイツは私が知っているブラックウォーグレイモンじゃない！！だけど、世界に異常を起こすブラックウォーグレイモンなんて、あのブラックウォーグレイモンだけだし・・・・・あぁッ！！もう如何なっているのよ！？）」

自身を追って来るブラックウォーグレイモンの姿を見つめながら桜は内心で疑問の叫びを上げるが、それに答える者は誰も存在せず、ブラックは更にスピードを上げ、桜の前に回り込む。

ーーービュン！！

「終わりだ！！」

「ッ！！」

前方に回り込まれた事によって、桜の逃げ道は完全に閉ざされてしまい、慌てて急ブレーキを行うが、ブラックと違い自身の発揮していたスピードを完全に止める事が出来なかった。

それに対してブラックは嘲りの笑みを口元に浮かべながら両手を徐々に迫って来ている桜に向けて、連続でエネルギー弾を撃ち出そうとするが、その前になのは、はやて、フェイトがブラックに対して射撃魔法を撃ち出す。

「アクセルシューターーー！！！！」

「ブラッディダガーーーー！！！！！」

「プラズマシューートッ！！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガガガガガッ！！

「チィッ！！邪魔だ！！ウォーブラスターーー！！！！」

ーーードドドドドドドドドドドドドドドドドドドドゴオオンッッッッ！！！！！！

なのは、はやて、フェイトが放って来たそれぞれの射撃魔法に対してブラックは、桜に放つつもりだったウォーブラスターを撃ち出す事で相殺した。

それによって辺りに煙が満ちるが、ブラックは気配を感じ取る事で居場所をつき止め、その場所へと移動を行おうとする。しかし、煙の中から次々と光が満ち溢れ、その光の正体にブラックが気がつき、周りの煙を吹き飛ばすと、ブラックにデバイスを向けながら巨大な魔法陣を足元に発生させている桜達の姿が存在していた。

ブラックはその様子に僅かに感心したように頷きながら、デバイスを向けている桜達の姿を見回す。

「ほう、なるほど。中々に面白い策だ。だが、それで一体どうするつもりだ？」

「クスッ、決まっているでしょう・・・・・・・逃げるのよ！！！」

ーーーブン！！

桜がブラックの質問に答えると同時に桜達の足元に存在していた魔法陣が光り輝き、桜達はアースラへと転移しようとする。だが、次の瞬間に桜達とブラック、そしてブラックによって戦闘不能にさ

れたヴィータ、シャマル、ザフィーラ、ユーノさえも入り込んでしまうほどの巨大な結界が辺りに展開される。

ーーーガシィィィィィィィィン！！！

『ッ！！！』

「て、転送妨害の結界！？一体誰が！？」

結界が張られると共に消失した魔法陣の姿にクロノは疑問に満ちた驚愕の声を上げた。

しかし、ブラックは桜やクロノ達の様子には構わずに、桜に嘲りに満ちた視線を向けながら声を掛ける。

「クックックックッ、言っただろう？面白い策だと？」

「ッ！！嘘！？ばれていたの！？」

「フン、貴様の考える策など俺は何度も見た事がある。それの対処法など簡単だ・・・・・さて、貴様の策は見せて貰った。次は俺の技を見て貰おうか？」

「ッ！！皆！防御魔法を全開にしつつ、ブラックウォーグレイモンから出来るだけ離れて！！」

ブラックのやろうとしている事に気がついた桜は慌てて仲間達に向かって叫び、全員が桜の警告に従い防御魔法を使用しながらブラックから離れ始める。

ブラックはその様子を見ても慌てずに自身の体に力を込め始め、防御魔法を使用しながら離れようとしている桜達を飲み込んでしま

うほどの炎の竜巻を広範囲に発動させる。

「吹き飛べッ！！！ブラックストームトルネード！！！！！」

ドゴオオオ

（主ッ！！）

「ハッ！！」

ーーービュン！！

リインフォースの叫びを耳にしたはやてが慌てて目の前に見てみると、右腕のドラモンキラーを振り上げているブラックが存在していた。

（アカン、私死んだわ）

ドラモンキラーを振り下ろそうとしているブラックの姿にはやては自身の死を確信し、思わず目を瞑ってしまう。

ブラックはその様子を目の前で見ても何の感慨も浮かばずに、はやての体に向かってドラモンキラーの刃を振り下ろそうとするが、その直前に。

ーーーバキィィン！！

辺りに張られていた結界が一部罅割れたように崩壊し、黄金の閃光がブラックとはやての間に入り込むように突撃し、辺りに甲高い金属音が鳴り響く。

ーーーガキィィィィィィィィン！！！！

「えっ！？」

耳に届いて来た金属音にはやては慌てて目を開けてみると、ブラ

ックの黒いドラモンキラーを同じような形をした黄金色のドラモンキラーで受け止めている黄金色の鎧を身に纏い、銀色のフェイスガードを被った『ウォーグレイモン』を思わせるバリアジャケットを装着したユウが存在していた。
その姿にはやては心の底から嬉しそうな顔をするが、逆にブラックはユウの姿に一気に怒りのメーターが振り切れる。

ーーーブチッ！！

「き、貴様ッ！！！！」

「俺の、俺の大切な奴らに何しているんだ！？ドラモンキラーーー！！！！」

ーーードゴオオオオオン！！

ブラックの怒りの叫びに負けないほどの怒りの声でユウは叫び返すと共に、ブラックの胴体に向かって“殺傷設定の上に手加減無用の一撃”を叩きこみ、怒りに支配されていたブラックは吹き飛んで行き、その先に存在していた瓦礫に激突し、瓦礫の中に埋まった。
ユウはそれを確認すると、背後でボロボロになっているはやてに急いで振り返る。

「はやて！リインフォース！大丈夫か！？」

「ユ、ユウ君・・・・」

「・・・・すまん・・・・俺が遅れたせいで」

ユウはボロボロなはやての姿に申し訳なさそうな様子を見せなが

ら謝り、周りを見回してみると、はやてと同様にボロボロな姿になっているなのは達を目にし、その中で明らかに致命傷に近い傷を負ってしまっているヴィータ達の姿も目撃する。
　その事実にユウは無性に腹が立ち、ブラックが埋まっている瓦礫を怒りに満ちた視線で睨みつける。本来のユウならばブラックと戦うとなれば全力で拒否するだろう。彼も桜同様にブラックの力を知っている。だからこそブラックと戦いたいとは全く思わない筈だが、大切な人達を傷つけられたユウはブラックと戦う事を完全に決意し、ブラックがいる瓦礫に向かって足を力強く踏み出す。
　それと共にブラックが埋まっている瓦礫が吹き飛び、ユウに負けないほどの怒りのオーラを全身に身に纏ったブラックがユウに向かって足を踏み出す。

ーーードゴオォォォォォォォォン！！

「貴様、その姿を今すぐ解け」

「・・・・・ブラックウォーグレイモン」

「フン、やはり貴様も・・・・・・いや、もうそんな事は本気で如何でもいい。俺の正体を知っているなら分かる筈だ。俺が如何言う存在なのかを？」

「あぁ、知っているさ」

　ブラックの質問に対してユウは迷い無く答えた。
　その自身の正体を知りながら迷いの無い瞳をしているユウの姿は、本来のブラックなら喜び、思う存分にユウとの戦いを楽しんでいただろう。だが、今のブラックにはもはやユウとの戦いを楽しむ気は全く無かった。桜達の認めているデジモン達の技を模した魔法。そ

してブラックが心の底から認め、最高の親友だと思っている『ウォーグレイモン』の姿を模したユウのバリアジャケット。
それらの事がブラックを心の底から苛立ったせていた。しかし、ユウはそのようなブラックの内心には気がつかずにブラックの姿を怒りの視線で睨みつけ、ブラックは何の感情も篭っていない声で質問を再開する。

「質問だ？俺の正体を知っている貴様は、俺を如何する？」

「知らん」

「ほう」

ユウの答えにブラックは怒りを胸に押し込めながら感心した声を上げ、ユウの姿を注意深く見つめ始める。

「お前が世界の安定を崩す存在だろうが、幾つ世界を滅ぼそうが俺は知らん。俺の周りに火の粉が降りかからなけりゃ、誰が何処で何しようが如何でもいい。俺の知らないところの出来事なんて、俺には関係ない。第一、俺にはアンタの存在や行動を否定する権利も無ければする気もない。いや、誰かの存在を否定する権利なんて、何処の誰にも有りはしないか」

「・・・・・・・」

「けどな！お前はこいつ等を・・・・・俺の大切な奴らを傷つけた！今、俺はその事が無性に腹が立って仕方がない！だから、俺はお前をぶっ飛ばす！！」

「なるほど、良い答えだ。何処ぞの“独善者”どもよりも遥かに貴

様の方がマシだ。世界などと言う不確定なものを護るなどとほざいている連中よりも、遥かに貴様の考え方の方が俺には面白い」

ドラモンキラーを突き出しながら放ったユウの宣言に、ブラックは感心したような声を出しながら呟いた。

そのブラックのアッサリとした答えにユウは僅かに自身の知っているブラックウォーグレイモンとの違いに内心で驚くが、それを振り払い、ブラックに自身の考えを突きつける。

「俺は自己中心的な人間なんだ。簡単に言えば、どこぞの知らない世界の１００や２００の命運より、俺は、こいつ等の方が大切なんだよ。まあ、こいつ等はそんな事は望んで無いだろうけど・・・・こいつらが傷つくのは俺が嫌だからな。一言でいえば、俺は自分の為に戦っているんだ！！」

「ますますその考え方には共感出来る。世界などと言う不確定なものよりも、自分の信念のままに戦う方が正しい。護るものが明確なほどに力が上がるからな・・・・・・だからこそ、俺は貴様らが気に入らんのだ。自分達がどれだけ護られているのかを知らない貴様らがな」

「何だって？俺達が護られている？」

「フン、やはり分かっていないか・・・・・・その身に教えてやろう。貴様らがどれだけ恵まれて生まれて来たのかを！！！」

ーーービュン！！

「クッ！！」

叫ぶと共に突撃して来たブラックの姿に、ユウも慌てて構えを取り出しブラックに対して真正面から挑むのだった。

特別編０２、在り得ざる異界の者達の出会い、中編その二（注コラボ）

破壊し尽くされた岩山の跡地。
その場所に存在する岩山の瓦礫の間を黄金の影と漆黒の影は高速で駆け抜けながら、互いにぶつかり合い続け、次々と辺りに衝撃波を撒き散らしていた。

「オォォォォーーーー！！！」

「ハァァァァァァァァッ！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

黄金の影ーユウが突き出して来たドラモンキラーに対して、漆黒の影ーブラックも自身のドラモンキラーを突き出し、二つのドラモンキラーが激突しあった瞬間に、凄まじい衝撃波が爆裂した。
その衝撃波の威力に耐え切れなかったユウは僅かに体のバランスを崩してしまい、耐え切ったブラックはその隙を逃さずにユウの胴体に向かって渾身の蹴りを撃ち込む。

「フンッ！！」

ーーードゴオオオン！！

「グゥッ！！」

強靭な防御力を誇っている筈のバリアジャケットさえも貫いて来たブラックの蹴りの威力に、ユウは苦痛の声を上げて体が宙に浮かび上がってしまう。

ブラックは当然その隙も逃さずに身動きが取れないユウの頭部に向かって、両手を合わせながら全力の打撃を撃ち下ろす。

ーーードゴオオン！！

「ガハッ！！」

「如何した？俺をぶっ飛ばすとほざいていたくせに、その程度なのか？」

「チィッ！！」

ブラックの嘲りに満ちた言葉にユウは苛立ちを覚えながらも即座に立ち上がり、ブラックの傍からすぐさま離れるが、ブラックは逃がさないと言うようにユウの後を追い、二人は再び高速戦闘を再開する。

その間にブラックのブラックストームトルネードを受けて気絶していた桜達の下に、ユウの使い魔であるリニスが駆けつけ、気絶していなかったはやてとのユニゾンを解いて自由になったリインフォースと共に全員を一箇所に集め、フィールドタイプの治療魔法を使用して全員の治療を行っていた。

そしてその中で更にリニスが桜に治療魔法を重ねがけしていると、フッと桜の目が動き始める。

「・・・・・ウ～～ン」

「気がつきましたか、桜？」

「・・・・リニス？」

「えぇ、ユウと一緒に駆けつけました。今、なのは達の方もリインフォースが治療していますから大丈夫ですよ」

「そう、ユウが・・・・・・ッ！！！」

リニスの言葉の意味に桜は完全に気がつき、慌てて体を起こして激突音が鳴り響き続けている場所を見てみると、黄金と黒の閃光が互いに引き合うようにぶつかり続けていた。

ーーーキィンッ！！ガキィッ！ガキィン！！ガキィィィィィィン！！

「ユウ・・・・」

「・・・・凄まじいですね。事前にリンディ提督から情報は聞いていましたが、まさか、ユウと互角に戦える力を持っているとは」

「私らが全員で束になっても敵わなかった相手やったのに、流石はユウ君や」

リニスの言葉に同意するように桜の横でリインフォースの治療を受けていたはやてが、ブラックと互角の戦いを行っているユウの姿を見ながら声を出し、リインフォースも流石だと言うように頷きながらブラックとユウの戦いを見つめる。

しかし、桜には分かっていた。今、目の前で繰り広げられている戦いは決して互角の戦いではないという事を。今のブラックの戦い方は少し前までの自分達と戦っていた時と同じ、“様子見の戦い”であるという事に桜は気がついていた。

（あのブラックウォーグレイモンは私とユウが知っているブラックウォーグレイモンじゃないわ。確かに戦闘狂と言う事は変わりないみたいだけど、『リヴァイアモン』とブラックウォーグレイモンが戦う事なんて絶対に無いわ！って言うか、七大魔王の『リヴァイアモン』と戦ってあのブラックウォーグレイモンは生き残ったんでしょう！絶対にユウでも一人じゃ勝てないわよ！！）

そう桜は内心で悲鳴のような叫びを上げながらブラックとユウとの戦いを見つめていると、ブラックとユウは同時に右腕を振り被り、やはり同時に相手に向かってドラモンキラーを突き出す。

『ドラモンキラーーー！！！！！』

ーーードゴオォォォォォォォン！！！！

ブラックとユウのドラモンキラーが互いに激突し合った瞬間に、辺りに凄まじい衝撃波が吹き荒れた。

そのまま二人は拮抗し合う、或いはユウがブラックを弾き飛ばすと戦いを見ていたはやて、リニス、リインフォースは思うが、それは完全に外れ、ブラックはユウの力などまるで関係無いというように右腕のドラモンキラーを振り抜き、ユウを弾き飛ばす。

「ムン！！」

ーーーードン！！

「グアッ！！」

「そ、そんな馬鹿な！？」

「ユ、ユウが力で負けた！？」

ブラックによって弾き飛ばされたユウの姿を目にしたリインフォースとリニスは信じられないと言う声を上げた。

その様子には、はやても驚きが隠せずに瓦礫の方に弾き飛ばされたユウの姿とその後を追撃しようとしているブラックの姿を凝視しながら呆然と言葉を呟く。

「・・・・ユウ君、まさか、手加減しとるんか？」

「そんなわけないわよ。ユウは、ブラックウォーグレイモンの強さをよく分かっている筈だから」

「じゃ、じゃあ、何でユウ君が力負けするんや！？」

桜の言葉に慌ててはやては質問し、リニスとリインフォースも桜の方に慌てて顔を向ける。

少なくともはやて達にとっては、ユウは無敵に近い存在だった。SSSランクの魔導師と言うだけでなく炎と氷の魔力資質変換と言う希少技能を持っている。その上、聖王と言う最強の名を連ねた者の血まで受け継いでいる人間。更に聖王武具の“オメガ”まで所有しているのだから、限りなくユウはこの世界では最強に近いだろう。

だが、それはあくまでこの世界での事でしかない。他の世界にはユウと同等もしくはそれ以上の実力を持っている者も確かにいるのだ。

そして今ユウが戦っているのは紛れも無くその中に名を連ねている存在だった。

その事が分かっている桜は、歴然たる事実を、はやて達に出来るだけ自身の感じている不安を隠しながら告げる。

「そんなの簡単よ。単純に、基本的なポテンシャルが、ユウよりブラックウォーグレイモンの方が上回ってるからよ。最もそれだけじゃなくて、戦いの経験もユウよりも遥かにブラックウォーグレイモンは積んでいるみたいね」

『ッ！！！』

眼前に突きつけられた事実にはやて、リニス、リインフォースは愕然としながら再び戦いの方へと目を向けてみると、確かにユウの鎧にはかなりに傷が入っているのにも関わらず、ブラックの方は全くの無傷と言って言いほどに傷が存在していなかった。

そのユウの姿にはやて達は桜の言葉が真実だと気がつき、不安になりながらユウとブラックの戦いを見つめていると、桜が険しい顔をしながらリニスとリインフォースに声を掛ける。

「リニス、リインフォース。今すぐにユウの援護に向かって」

「桜！？」

「このままじゃ、ユウが死んじゃうわ。私は絶対にそんなの嫌よ。気絶している皆だって同じ気持ちだし、はやてもそうでしょう？」

「もちろんや！ユウ君が死ぬなんて考えたくもあらへん・・・・・リインフォースお願いや。私はもう戦えへんけど、リインフォースは戦える。だから、ユウ君を援護して！」

「主・・・・・分かりました」

「一応、この場にフィールドタイプの防御魔法と治療魔法を発動させて起きますから・・・・それじゃ、行って来ます！」

そうリインフォースとリニスは桜とはやてに言葉を言い終えると、遠くでブラックと戦い続けているユウの援護を行う為に、ユウを追撃しようとしているブラックに向かって飛び掛かる。

ーーービュン！！

「ムッ！！」

背後から聞こえて来た僅かな音にブラックはユウへの追撃の手を止め、背後へとすぐさま振り返ってみると、自身に向かって魔力で強化した拳を振り下ろそうとしているリインフォースの姿を目にする。

「ハアァァァァァッ！！シュヴァルツェ・ヴィルクングッ！！」

ーーードオオン！！

リインフォースの完全にブラックの不意をついた一撃は、ブラックの顔に突き刺さった。

しかし、打撃を顔に食らったにも関わらずブラックは揺るぐ事も無くその場に立ち止まり、自身の顔に拳を突きつけたままのリインフォースに怒りに満ちた視線を向ける。

「・・・貴様」

「ッ！！」

「戦いの邪魔するなッ！！」

ブラックはリインフォースに向かって怒りの叫びを上げると共に、右腕をリインフォースに向かって突き出そうとする。
しかし、リインフォースはそのブラックの怒りを込めた一撃を目にしても慌てずに僅かに後方へと体を傾け、ブラックの拳は事前に打ち合わせてしておいたリニスの設置型バインドによって拘束されてしまう。

ーーーガシィィィィン！！

「何だと！？」

「今です！！ユウ！！リニスッ！！」

「クッ！！」

リインフォースの叫びの意味に気がついたブラックは動かない右腕をそのままにして慌てて背後を振り返ると、全身を高速回転させて黄金の竜巻と化しているユウと七つの放電を放っている魔力球を作り上げているリニスの姿を目撃する。

「ブレイブトルネーードッ！！！」

ーーードゴオオオオオン！！

「グッ！！」

ユウの渾身の力を込めたブレイブトルネードを胴体に食らったブラックは僅かに声を上げた。
しかし、ユウはその声を聞いても安心すると事無く、逆に更に回転速度を上げて、ブラックの体を貫こうとする。

ーーーギュルルルルルルッ！！

「オオオオオオオオォォォォォォォォォォォォッッッ！！！」

「グゥッ！！舐めるな！！！」

ーーーバキン！！

自身の体を貫こうとしているユウに向かってブラックは怒りの叫びを上げると同時に、右腕を拘束していたバインドを破壊し、そのままユウに向かって攻撃を行うとする。

それを目撃したリインフォースはすぐさま新たにバインドを構成し始め、ブラックの体を雁字搦めにするようにバインドで拘束し続けていく。

ーーーガシッガシッガシッ！！！

「貴様ッ！？」

「ユウッ！！決めますよ！！」

「応ッ！！」

リニスの叫びにユウはすぐさま応じると、ブレイブトルネードを解除し、次々と体に巻き付いて来るバインドを破壊しているブラックの傍から離れ、七つの魔力球に更に魔力を送り続けているリニスの傍に近寄る。

それと共にユウは自身の両手を頭上に掲げると、魔力を両手の間に集中し、巨大な黄金の魔力球を作り出し、リニスと同時にブラッ

クに向かって放つ。

「ガイアフォーースッ！！！」

「セブンズヘブンズッ！！」

ーーードグオオオ

対策を練り出す。

（少しはダメージがあれば良いんだけど、やっぱりブレイズじゃ、ブラックウォーグレイモンは倒せないか。あいつを倒せる可能性があるとしたら、“オメガ”の、『初期化（イニシャライズ）』か『消滅（デリート）』だけだろうな。難しいけど、皆を護る為にブラックウォーグレイモンを倒すか、止めるかしないとな）

そうユウが内心でブラックに対する対策を練っている間に、煙は完全に晴れて、その中から無傷のブラックが姿を現す。

その姿にユウ、リニス、リインフォースは再びブラックに向かって構えを取ろうとするが、その顔は突如として困惑と驚愕に満ち溢れた。無傷のブラックの姿に困惑したのではない。ユウ達が目を見開いた理由は一つ。ブラックの左肩に乗っている長い銀髪に、青と白のロングコートを着ているリインフォースと瓜二つの顔した女性の姿に目を見開いたのだ。

その様子を目にした女性ールインは面白そうな笑みを口元に浮かべながら、不機嫌だと言うオーラを放っているブラックに諭すように声を掛ける。

「ブラック様。心を落ち着けて下さい。何をそんなに苛立っているのかは分かりませんけど、今のブラック様は冷静さを欠き過ぎています。先ほどの生真面目の行動も何時ものブラック様なら簡単に対処が出来た筈ですよ」

「・・・・・・・」

「怒りに支配されながらも冷静でいる事がブラック様には出来る筈です。如何か心を落ち着かせて下さい、ブラック様」

「・・・・・フン、お前の言うとおりだ。如何やら奴の姿や行動に冷静さを失っていたようだ・・・・もう大丈夫だ、ルイン」

そうブラックはルインに対して素っ気無い声でありながらも感謝を伝え、ルインは嬉しげな笑みを浮かべながらブラックに寄り添い、困惑と驚愕に満ちた顔しているユウとリニス、そしてまるで幽霊でも見たような顔をして体を恐怖に震わせているリインフォースに顔を向ける。

「クスクス、如何しました？まるで幽霊でも見たような顔じゃないですか、管制人格、いえ、今は八神はやてに新たな名前を貰ってリインフォースと名乗っているんでしたっけね、生真面目」

「・・・ば、馬鹿な・・・・如何して・・・・・如何して貴女が其処にいる！？」

「リインフォース？」

何時もの冷静さを失い、感情のままに叫んだリインフォースの姿にリニスは困惑に満ちた声を上げた。

リインフォースはその様子に気がつきながらもリニスの言葉に答える事無く、ただ恐怖に満ちた顔してルインの姿を見つめ、ユウはその様子に二人の間には何かあると確信する。

（如何見てもブラックウォーグレイモンの奴の傍にいるのはリインフォースだよな？だけど、原作でそんな奴はいなかったよな？・・・・・誰なんだよ？あの女性は）

ユウは始めて見るルインの姿に疑問の声を内心で上げた。

少なくともユウと桜の知る限り、リインフォースにソックリな存

在は原作ではリインフォース？ぐらいである。だが、その存在はまだ生まれてはいない上に姿は幼い少女の姿をしていた。しかし、目の前でブラックに寄り添っているルインの姿は如何見ても大人の女性であり、リインフォースに青い瞳以外は全てソックリときている。
ルインの存在を完全に知らないユウはリインフォースに詳しい事情を聞こうと声を掛けようとするが、その前にリインフォースはルインの正体を叫ぶ。

「貴女はユウの力で初期化されて、“意志を持たない防御プログラム”に戻った筈だ！！！」

「防御プログラム！？まさか！？」

「そんな彼女はまさか！？あの！？」

リインフォースの叫びを耳にしたユウとリニスは目を見開きながらルインの姿を見つめ、ルインは肯定するように笑みを深める。
その笑みにルインの正体を確信したユウとリニスは信じられないと言うようにリインフォースに顔を向けると、リインフォースは辛そうに顔を歪めながらも二人の考えを肯定するように頷き、ルインの正体を告げる。

「彼女こそ・・・・私の半身であり、本来ならばユウの手によって初期化された筈の存在・・・・・夜天の魔導書を、呪われた闇の書と呼ばせたプログラム・・・・・闇の書の闇・・・・『防御プログラム』の真の姿なのです！！！！」

『ッ！！！！』

リインフォースが告げたルインの正体にユウとリニスは嘲りの笑

みを浮かべているルインの姿を凝視した。
　あの夜天の魔導書を闇の書と呼ぶ事になった元凶たる防御プログラムの正体が目の前に存在しているルインだとは信じられないのだろう。何せこの世界の防御プログラムは完全にユウが初期化して、リインフォースと再び一つに戻したのだ。にも関わらずにその防御プログラムの正体であるルインが目の前に存在している。
　その理由が分からないユウ達は困惑に満ちた視線をルインとそのルインが自身の隣に居るのは当然だと言う顔しているブラックの姿を見つめるが、二人はもはや困惑しているユウ達など構わずにそれぞれ構えを取り出す。

「ルイン。他の二人はお前にくれてやるが、あの『ウォーグレイモン』の姿にソックリなバリアジャケットを纏っている奴は俺だけの獲物だ。俺の許可が出るまで、他の二人を相手にしていろ」

「了解ですよ、ブラック様（やはり何時ものブラック様じゃないです。何があっても冷静さを失わない筈なのに失っていましたし、それに全く戦いを楽しんでいません。あの人間ならブラック様も楽しんで戦う筈なのに）」

　ルインにはブラックの様子が可笑しい事を、戦いを離れていた所から窺っていた時から分かっていた。
　当初は戦いの邪魔をされて怒っているのかと考えていたが、それは違うとすぐに気がついた。ブラックは確かに戦いの邪魔をされれば怒りが溢れてしまうが、それでも決して冷静さは失ったりはしない。だが、その冷静ささえもブラックは失いながらユウと戦い続けていた。しかも、ユウクラスの実力者ならば何時もは楽しみながら戦う筈なのに、今回は全く楽しんでいる様子も無く、ただ自身の中に宿っている苛立ちを晴らすような戦いだった。
　そしてその隙を衝かれ、危なく本来ならばダメージを負う事無く

勝てた戦いでダメージを負い掛けた。
　ブラックのその様な姿をルインは見たくないと思い、怒られるのを覚悟してブラックの戦いに介入したのだ。

（例えブラック様とあの少年の間に何かがあるとしても、ブラック様が負ける事は絶対に無いでしょうが・・・・・・初期化ですか・・・・・まさか、あの少年は・・・・・・・警戒だけはしておいたがいいですね）

「行くぞッ！！」

ーーービュン！！

『クッ！！』

　再び視認する事が不可能なレベルでのスピードで移動したブラックの姿に、ユウ達は自身の抱いた疑問を胸の内に即座に押し込め、ブラックの攻撃に対して身構え始める。
　その間に高速移動魔法を発動させていたルインは、瞬時にリニスとリインフォースの目の前に移動し、二人の首下を両手で掴む。

ーーービュン！！

ーーーガシッ！！

『ッ！！』

「貴女達二人の相手は私がして上げますよッ！！！」

ーーービュン！！

「リニスッ！！リインフォースッ！！」

ルインに掴まれながら遠くへと移動して行くリニスとリインフォースの姿を目にしたユウは声を上げ、二人の救出に向かおうとする。

しかし、その直前に姿を消していたブラックがユウの目の前に姿を現し、右手のドラモンキラーとユウに向かって突き出す。

ーーービュン！

「フッ、ドラモンキラーーー！！！！」

「ッ！！ブレイブシールドッッッ！！！」

ーーーガキィィィィィィィィィィィィィンッ！！！

ブラックの突き出して来たドラモンキラーに対して、ユウは瞬時に背中に存在している二つの盾ーブレイブシールドを両手に装着し、ドラモンキラーを防御した。

それによって凄まじい火花がドラモンキラーとブレイブシールドが激突している箇所から散るが、ブラックは構わずに今度は左腕のドラモンキラーを同じ箇所に向かって突き出す。

「ムン！！」

ーーーガキィィィィィィィィィィィィィィィィィンッ！！！

ーーービキッ！！

「クソッ！！」

二度目のブラックのドラモンキラーの一撃によってユウのブレイブシールドに深い罅が走り、ユウは悔しげな声を上げてブラックから離れようとする。
その姿にブラックは逃がさないと言うように体を即座に動かし、ユウの腹部に向かって強烈な蹴りを叩き込む。

「はぁあああッ！！」

ーーードゴオン！！

「ガハッ！！」

ブラックの一撃にユウは苦痛の叫びを上げて地上の方へと叩きつけられるように落下して行き、地面を１００ｍ以上削りながら吹き飛んだ。
しかし、ブラックはその姿を目撃しても止まる事は無く、更なる追撃を行う為に砂煙の中から感じられるユウの気配に突撃しようとするが、突如として砂煙を切り裂くように無数のミサイルがブラックの下に飛来して来る。

「グレイクロスフリーザーーッ！！！」

ーーードドドドドドドドドドドドドドッッッッッ！！！！！！

「ムッ！！」

砂煙を切り裂いて現れた無数のミサイルの姿にブラックは僅かに目を見開くが、すぐさま避ける為に回避行動を行う。だが、ミサイルには誘導性能があるのか全てのミサイルはブラックの後を追尾し

て来る。

「チィッ！！邪魔だッ！！ウォーブラスターー！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！！

ブラックは追って来る無数のミサイルに対して連続でエネルギー弾を撃ち出し、ミサイルを破壊して行き、ミサイルの爆発に巻き込まれ、更に他のミサイルまでも爆発していく。

それによって辺りに凄まじい冷気と煙が満ちてブラックの視界は完全に塞がれてしまうが、ブラックは迷う事無く右腕のドラモンキラーを自身の背後に向かって突き出す。

「ムン！！」

ーーーガキィィィィィッ！！

「チィッ！！！」

ブラックの突き出したドラモンキラーは、機械的な青い鎧で身を包み、両肩にミサイルランチャーを装備し、背中に機械的なウイングを備えた『メタルガルルモン』を思わせるようなバリアジャケットに変わったユウが、右手に持っていた機械的な何かによって防がれた。

そのユウの姿にブラックは更に苛立ちを募らせるが、ルインの忠告を忘れずに出来るだけ冷静になるように心掛けながらユウに声を掛ける。

「今度は『メタルガルルモン』か・・・・・さっきの『ウォーグレイモン』の姿といい。余程俺を怒らせたいらしいな？」

「・・・・お前、何時のブラックウォーグレイモンだよ？」

「フン、少なくとも貴様らが知っているブラックウォーグレイモンと俺は・・・・違うッ！！」

ーーーバキン！！

「クッ！！」

ブラックは叫ぶと同時にユウが握っていた機械的な何かを上空に弾き飛ばし、そのままユウにドラモンキラーの刃を突き刺そうとするが、その直前に上空に弾かれていた機械的な何か一特大のミサイルランチャーがブラックの頭上で爆発する。

ーーードゴオオン！！

「何ッ！？」

突然の爆発にブラックは驚き、思わずユウへの攻撃の手を止めてしまった。

その隙をユウは逃さずに両手を獣の口のように合わせながらブラックに向かって突き出し、両手から凄まじい冷気をブラックに向かって放つ。

「コキュートスブレスッ！！」

ーーーガチガチガチガチガチガチッ！！！！

「チィィッ！！おのれッ！！」

ユウが放ったコキュートスブレスを食らったブラックの体は凍りついていく。
ブラックはその事に苛立ちながらも全身が凍りつく前にユウへと攻撃を行おうとするが、凍りついた体では思うように動く事が出来ずに鈍い動きしか取れなかった。
その隙をユウは逃さずに、両手に先ほどのミサイルランチャーと同じ物を二つ具現化し、動きが鈍っているブラックからすぐさま距離を取り、ミサイルランチャーを発射する。

「ガルルトマホーークッ！！！」

ーーーバッシュン！！バッシュン！！

ユウが叫ぶと同時に両手に握っていたミサイルランチャーは凍りついて動きが鈍ってしまっているブラックへと、一直線に発射された。
それを目撃したブラックは全身が凍りつきながらもミサイルを避けようと体を動かそうとするが、凍りついている体では思うように動く事が出来なかった。ユウはその姿にミサイルの直撃を確信するが、その確信はブラックの叫びと同時に発生した空間の歪みによって驚きと困惑と共に砕け散る。

「ディストーションシールドッ！！」

「なっ！？」

ーーードゴオオン！！ドゴオン！！

突如としてブラックの周りに発生した空間歪曲にユウが驚きの声

を上げた瞬間に、二つのミサイルはブラックの周りに発生していた空間歪曲に直撃し、爆発を起こした。
それと共に煙が発生するのを目にしたユウは慌ててその場から飛び去ると、直前までユウが浮かんでいた場所を二つのエネルギー球が通り過ぎた。

「クッ！！今のは！？まさか！？」

ーーーバキィィィィン！！

「そうだ。貴様らが知っている魔法だ。最も俺が使ったのだから、魔法ではなく技だがな」

ユウの疑問の叫びに全身を覆っていた氷を砕きながら、ブラックは答えた。
その事実にユウは目を見開きながらブラックの姿を見つめると、ブラックは不機嫌そうな顔しながら夕に向かってドラモンキラーを構え出し、慌ててユウも再び『ウォーグレイモン』の姿を模したバリアジャケットに変わる。
ブラックはその姿に更に不機嫌になりながらも、両手の間に大気中の負の力を集中させ、巨大な赤いエネルギー球を作り出し、ユウも同様に自身の魔力を両手の間に集め、巨大な黄金色の魔力球を再び作り出す。
その、余りにも形は違えど、自身を助けてくれた『ウォーグレイモン』を思い出させるような姿に、ブラックは自身の中にある大切な記憶を汚された思いを感じながら、更に負の力を両手の間に集中させる。

「・・・・・よく見ておけ。貴様の猿真似などではない、本物の『ガイアフォース』をッ！！！」

「くぅッ！！」

叫ぶと同時に赤いエネルギー球を振り被るブラックの姿に、ユウも慌てて自身の黄金の魔力球を振り被り、二人は同時に相手に向かって放つ。

『ガイアフォーースッ！！！』

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！！

赤と黄金のガイアフォースはブラックとユウの中心地点で激突し、凄まじい衝撃波を撒き散らしながら互いを撃ち破ろうと鬩ぎ合う。

その衝撃波は凄まじく、二つのガイアフォースがぶつかり合っている地点の岩や瓦礫は一瞬の内に次々と消滅して行き、かなり離れた所で戦いを見ていた桜達も必死で耐えなければ吹き飛ばされてしまうほどの威力だが、ガイアフォースを放った張本人達の内、ブラックだけは平然しながらジッとユウの行動を窺い続ける。

それを表すように徐々にユウのガイアフォースは、ブラックのガイアフォースによって徐々にユウの方へと押し込まれ始めた。

完璧にブラックのガイアフォースの威力の方が、ユウのガイアフォースの威力を上回っているのだ。

確かにユウのガイアフォースも究極体の必殺技に迫る威力を持っている。だが、本家本元のブラックのガイアフォースの前にでは、猿真似の技でしかない。猿真似が本物に勝てる筈も無く、ユウのガイアフォースがブラックのガイアフォースに敗れるのはある意味では当然の事だった。

しかし、当然ながらその事はユウも分かっていて、ブラックのガイアフォースを撃ち破る為に再び両手の間に魔力を集中させ、二発

目のガイアフォースを前のガイアフォースの後ろに向かって投げつける。

「もう一発だ！！！くらえッ！！ガイアフォーーースッ！！！」

ーーードグオオオ

「お願いや！！！」

「これで決まって！！！」

「頼むッ！！」

「あいつを倒してッ！！」

桜、はやて、そして意識を取り戻したなのは、シグナム、フェイトはブラックとガイアフォースの鬩ぎ合いを見ながらそれぞれ祈るように叫んだ。

しかし、それは無情にも打ち砕かれ、ブラックは両手に装着して盾のように構えていたブラックシールドを突如として勢いよく離し、それによって発生した激しい衝撃波でユウのガイアフォースを相殺する。

「フン！！」

ーーーバッシュン！！

『ッ！！』

「そんな・・・・・」

ガイアフォースが消滅する姿を目にした桜達は絶望したと言うような表情をし、なのはは悲痛な声を上げながらユウの最大の技を持ってしても傷一つ付ける事が出来なかったブラックの姿を見つめた。

ユウもその姿には僅かに悔しそうな顔をするが、ブラックは構わずに両手に装着していたブラックシールドを背に戻し、ユウへと顔を向ける。

「そろそろ本気を出せ」

「なっ！？」

「貴様が本気を出していない事は分かっている。このまま本気を出させないまま殺す事は簡単だが、それでは俺の気がすまん。それとも・・・・・先ずはあっちの小娘から先に殺すか？」

「ッ！！・・・・・・・・そんな事は・・・・・絶対にさせない！！！ブレイブ！！アイシクル！！オメガだっ！！！」

《Ｙｅｓ，　Ｍａｓｔｅｒ．ッ！！！》

ユウの叫びに応じるようにユウのデバイスであるブレイブとアイシクルは同時に叫び、その瞬間に虹色の魔力光の柱がユウの体を包むように立ち上る。

ブラックはその魔力光の色にユウの血族の正体を確信するが、その事実はますますブラックを苛立ちを上げる逆効果にしかならなかった。

そしてブラックがジッと虹色の柱を見つめていると、その中から中央の頭から足にかけては、白を基調とした兜と鎧が装備され、左腕にはオレンジを基調としたアーマーが装着され、手には竜の頭のような手甲が装備され、逆の右腕には青を基調としたアーマーが装着され、狼の頭を模した手甲が装備されていた。

そして背中には外側が白、内側が赤のマントをはためかせた騎士。ロイヤルナイツの一人にして最後の名を冠する『オメガモン』を模したバリアジャケットを装着したユウが姿を現す。

「フッ！！」

ーーージャキンッ！！

ユウが左腕を振るうと同時に竜の頭を模していた手甲から大剣ーグレイソードが飛び出し、ブラックにグレイソードの剣先を向ける。

ブラックも応じるように両手のドラモンキラーをユウに向かって構え出し、二人は互いに離れていた所で見ていた桜達が息がつまるほどの睨み合いを行い始めた瞬間に。

「うぉおおおおおっ！！！！」

「ハアァァァァァァァッ！！！！！」

ーーーガキィィィィィィンッ！！！！

互いに視認する事が出来ないスピードで相手に向かって突進し、ユウはグレイソードを、ブラックはドラモンキラーの刃をぶつけ合い、凄まじい火花を散らしながらグレイソードとドラモンキラーは応酬を繰り返すのだった。

特別編０２、在り得ざる異界の者達の出会い、後編　上（注コラボ）

ユウがオメガフォームへと変わる少し前。
ユウとブラックと戦っている場所から少し離れた地点の上空で、ルインとリニス、リインフォースは互いに魔法を放ちながら戦っていた。

「フォトンランサー・・・・ファイヤッ！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガッッッ！！！

「直線的な魔法は私には無意味ですよ」

ーーーバシバシバシバシバシバシバシバシッ！！！

「ッ！！」

言葉と共にルインはリニスが放ったフォトンランサーを魔力で強化していた両手を素早く振るい、フォトンランサーを全て見当違いの方向に弾き飛ばした。
その常識外れの現象にリニスは目を見開くが、ルインからすれば当然の事であり、不敵な笑みを浮かべながら驚愕に動きが止まってしまっているリニスに殴り掛かろうとする。
しかし、その直前にルインの背後にリインフォースが姿を現し、そのままルインに向かって魔力で強化した蹴りをルインに向かって放つ。

「ハアッ！！」

ーーーガシッ！！

「ッ！！」

リインフォースの蹴りをルインは振り返る事も無く右手で受け止め、リインフォースは目を見開きながらルインの姿を見つめた。

「・・・・ムカつきますけど、私は貴女の半身ですよ。しかも、私は誰よりも近くで貴女の戦いを見ていたんです。だから・・・・・簡単に動きが読めるんですよッ！！ショートバスターー！！！」

ーーードグオオオオオオオオオン！！

「アァァァァァァッ！！」

至近距離で撃ち出されたルインの砲撃をリインフォースはかわす事が出来ず、そのまま遠くへと吹き飛んで行った。

それと共にルインは更に強力な魔法を、砲撃のダメージによって身動きを取れないリインフォースに向かって撃ち出そうと右手をリインフォースに向かって構えようとするが、その直前にすぐさま背後を振り返り、殴り掛かって来ていたリニスの拳を受け止める。

ーーーガシッ！！

「クッ！！」

「この程度で私の背後を取れると思っていたんですか？」

「・・・・・いいえ、思っていませんよ、テスタメントッ！！！」

ーーービリビリビリビリビリッ！！！

「ッ！！アアァァァァァッ！！！！」

リニスは叫ぶと同時に全身から電撃が放出され、リニスの右手を握っていたルインは直に電撃を食らった。

ルインはその事に自身の油断を内心で呪いながら、リニスから離れようと握っていた手を離そうと動かそうとするが、今度は逆にリニスがルインの手を逃がさないと言うようにしっかりと握り締める。

ーーーガシッ！！

「ッ！！」

「逃がしませんよ！このチャンスを逃す訳にはいきませんからね！！」

「クゥッ！！離しなさい！！」

ーーードゴンッ！！

「グゥッ！！」

ルインの膝蹴りを鳩尾に食らったリニスは苦痛の声を上げるが、握り締めているルインの手は離さずに更に電流の威力を上げる。

ーーービリビリビリビリビリッ！！！！

「クッ！！このッ！！」

「絶対に離しませんよ！！準備が終わるまではね！！」

「クゥゥゥゥゥゥッ！！・・・・・・準備ですって？・・・・・・・・・まさか！？」

「天神の導きの元・・・・・」

リニスの言葉に意味に気がついたルインは、襲って来る電流の威力に声を上げながらも何とか背後を振り向いてみると、無数の魔力スフィアを発生させているリインフォースの姿が存在していた。

その姿にルインは僅かに目を見開くが、すぐに冷静に立ち返りリニスの手から逃れようと暴れるが、リニスはその攻撃に耐え続け、更にリインフォースの詠唱は続く。

「星よ集え・・・・・集いし星よ、月となれ・・・・・・・」

「・・・・・仕方がありませんね・・・・・本気を出させて貰いますよ！！！」

『ッ！！』

突然のルインの叫びにリニスとリインフォースは目を見開きながらルインの姿を見つめると、ルインは全身から凄まじい魔力を発生させ、リニスの手を再び握り返す。

ーーーガシッ！！

「ッ！！」

「今まで受けた電撃を全て倍にして返して上げますよ！！！ライヴ

ォルトッ！！！」

ーーービカァァァァァァァァァァァァァッ！！！！

「アァァァァァァァァァァァァァッ！！！！！」

ルインが叫ぶと同時にルインの全身から先ほどまでのリニスの電撃を超える電撃が走り、電気に耐性がある筈のリニスを持ってしても耐え切れずに空にリニスの悲鳴が響き渡った。

その姿を見てもルインは攻撃の手を止めずに、リニスの胴体に向かって拳を撃ち付けると共に大威力の砲撃をゼロ距離で撃ち出す。

ーーードゴオン！！

「インパクトキャノンッ！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオン！！

ルインの放ったインパクトキャノンは動く事が出来なかったリニスを飲み込み、そのまま地上の方へとリニスと共に突き進んでいく。

それを確認したルインはすぐさま背後に振り返り、リインフォースへと攻撃を放とうとするが、その前に三十以上存在していた魔力スフィアのチャージが終わり、リインフォースは三十を超える集束砲をルインに向かって放つ。

「終わりだ、半身ッ！！夜天の煌き（ルナライトブロォカンクスシフト）」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオ

ールドッ！！！」

「ッ！！」

ルインが叫ぶと同時にルインの周りに発生した障壁にリインフォースは目を見開き、慌ててその場から逃げようとするが、その前に幾つかの集束砲がルインの張った障壁に直撃し、そのまま放った本人のリインフォースの下へと跳ね返った。

しかし、それと共にルインの張っていた障壁も消滅し、二人はほぼ同時に集束砲の中へと飲み込まれ、大音量の爆発音が上空に響く。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！

その大音量の爆発音が鳴り響くと共に大量の煙が発生する。

そして少し経つとその中から互いに肌が見えるほどにボロボロになったバリアジャケットを着たルインとリインフォースが姿を現し、ルインは忌々しげにリインフォースの姿を睨む。

「ハァ、ハァ、ハァ・・・・・・随分と、とんでもない魔法を使ってくれましたね・・・・・・事前にバリアジャケットの強度を上げて、見えない障壁を多重に展開していなければ本気で落とされていました」

「はぁ、はぁ、はぁ、それは此方のセリフだ・・・・・『リフレクトフィールド』・・・・本来ならば儀式魔法に分類される魔法・・・・それをほぼ無詠唱で発動・・・・・本物のようだな・・・・半身」

「・・・・・貴女に半身と呼ばれるのはムカつきます。私の名は『破滅を呼ぶ風ールインフォース』。それこそが漸く出会えた私の唯

一無二の主が与えてくれた名前です。二度と半身などと私を呼ばない事ですね」

「・・・・・・やはり真の主を見つけていたか・・・・・・本来の姿で存在出来ている時点で予想は出来ていたが・・・・・・どうやって初期化から逃れた？」

「貴女に教える事なんて何も無いですよ。私は貴女の事が大っ嫌いですからね」

そうルインはリインフォースに嫌そうな顔をしながら答えると共に体を光らせ、傷ついていたバリアジャケットを修復するばかりでなく、血を流していた傷も瞬時に癒し、体力以外は万全の状態に戻る。

リインフォースはその姿に顔を険しくしながらも、ルインと同じようにバリアジャケットを修復するが、傷までは癒す事が出来ずに悔しそうな顔をする。

「・・・・無限再生能力・・・・やはりお前を倒すにはお前の体力を削るしかないようだな」

「出来ると思っているんですか？この身には既に真の主を得ている。それが如何言う事を意味するのかは、貴女が一番分かっている筈です」

「クッ！！（確かに彼女を倒すのは私一人では不可能。しかし、此処で彼女を押さえておかなければ、彼女はユウと竜人の戦いに介入する！それだけは絶対に阻止しなければ！！）」

そうリインフォースは内心で叫ぶと共にルインに向かって構えを

取り始める。
だが、リインフォースは決定的な勘違いをしていた。ルインは全くユウとブラックとの戦いに介入するつもりはない。確かに先ほどはブラックを助ける為に飛び出したが、それはあくまでリインフォースとリニスがいたからに過ぎない。一対一の戦いではルインはブラックの許しがなければ戦いに介入する事は全く無いのだ。
その事が分かっていないリインフォースは覚悟を決めてルインへと挑もうとし、ルインも不機嫌ながらもリインフォースと叩きのめすと言う思いを抱きながら戦いを再開しようとする。
しかし、その直前に離れた所で戦っていた筈のユウのいる場所から虹色の魔力光の柱が出現し、ルインは不機嫌そうにその光の柱を見つめる。

「・・・やはり、あの少年は“聖王の血筋”でしたか。予想はしていましたが・・・・（本気であの少年は、チリも残らず殺されますね。ブラック様の唯一無二親友である『ウォーグレイモン』を模したバリアジャケットに、デジモンの技を模倣した魔法。その他にもブラック様は苛立っていたのに、更にあの子との戦いを思い出させる行動・・・・本気で哀れに思いますね）」

「ユウが本気に！！一体あの竜人はどれほど強いと言うのですか！？」

「馬鹿ですか？ブラック様はまだ全力を出していませんよ？せいぜい今までの戦いは、六割から七割ぐらいの実力ですね」

「ッ！！！」

「まぁ、もう本気を出すでしょうね。本気のブラック様の恐怖は今までとは比べものにならないですよ」

「ッ！！ユウッ！！！！！」

ドゴオオオ

で思った。確かにユウはブラックが最も赦せない事を続けて行った人間。だが、それでもブラックの本質は戦闘狂には変わりない。
ユウの実力は人間でありながらも究極体に近い。ブラックが楽しんで戦える相手だと、本当は認めたくはないが認めざる得ない存在だった。しかし、それでもブラックはユウとの戦いでは喜びよりも怒りの方が増さっていた。

「（このガキとあの娘だけは絶対に認められん！！必ず殺してやる！！俺の大切な記憶を汚したこいつ等だけは絶対に赦せん！！）オオォォォォォォォォッ！！」

「このッ！！ハアァァァァァァァァァッ！！！！！」

ーーーガアァァァァァァァァン！！！

ブラックとユウの戦いは更に激しさを増し、互いにそれぞれの武器を相手に向かって振るい続け、甲高い金属音が辺りに木霊し続ける。
しかし、徐々にでは在るがブラックのドラモンキラーを振り抜くスピードが増しって行き、ユウは防戦一歩に追い込まれ始めて行く。

ーーーキィン！！ガキィン！！ガキィッ！！

「クソッ！！（まだスピードが上がるのかよ！？こっちはもう限界なんだぞ！！分かっていた事だけど、本気で化け物だな！？）」

「考え事をしている暇など無いぞ！！」

ーーードゴオオン！！

「ガフッ！！！」

ユウの隙を衝いたブラックの渾身の蹴りを鳩尾に食らったユウは苦痛の声を上げ、後方へと吹き飛ぶが、事前に自分でも背後に飛んでいたのかダメージは少なく、流れるような動きで回転する事で衝撃を殺し、そのまま右手を振るい、狼の頭部部分から砲身を展開する。

その動きに対してブラックも瞬時に両手をユウの方へと突き出すと共に、赤いエネルギー弾を連続でユウに発射し、ユウも圧縮魔力弾を砲身からブラックに向かって撃ち出す。

「ウォーブラスターー！！！！！」

「ガルルキャノン！！！！！」

ーーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！

ブラックのウォーブラスターとユウのガルルキャノンは激突し合った。

しかし、ユウのガルルキャノンはブラックが放つ連続のエネルギー弾によって徐々にユウの方へと押しやられ始める。

「なっ！？クソッ！！ガルルキャノン！！！」

ーーーードグオオオオオン！！！！！

一発目のガルルキャノンが撃ち破られそうな事に気がついたユウは、瞬時に二発目のガルルキャノンを発射し、ウォーブラスターを今度こそ撃ち破った。

しかし、ブラックはその様子を見ても慌てずに両手を先に突き出

しながら高速回転を行い始め、漆黒の竜巻に変わりながら威力が減衰しているガルルキャノンに向かって突撃する。

ーーーギュルルルルルルルルルルルッッッ！！！！！！

「ブラックトルネードッ！！！」

ーーーバッシュン！！！

「嘘だろうッ！！！」

漆黒の竜巻に貫かれて四散するガルルキャノンの姿を目にしたユウは目を見開きながら声を上げるが、漆黒の竜巻は威力が衰える事無くユウに向かって来る。

しかし、ユウはすぐさま驚愕を胸の内に治め、高速で迫って来る漆黒の竜巻に対して見極めるような視線を向けながらグレイソードを構え、漆黒の竜巻に向かって剣先を突き出す。

「其処だッ！！」

ーーーガキィィィィィィィィン！！！！！

ーーーピタッ！

「ほう」

グレイソードが漆黒の竜巻に激突した瞬間に、漆黒の竜巻の回転は完全に止まり、ブラックは僅かに感心した声を上げてユウを見つめる。

ユウが今行ったのは簡単に言えば、激しい回転を行っている扇風

機を止める原理と同じく、高速回転して漆黒の竜巻と化していたブラックの回転の中心を正確に剣先で貫き、回転を止めたのだ。だが、これは並大抵の者が出来る行いではない。失敗すればその時点で体がズタズタになっていただろう。それを行ったユウにブラックは僅かに感心を覚えて動きが止まってしまう。

ユウはその隙を逃さずに再び右手に砲身を展開し、そのままブラックの方へと突きつけ冷気を纏った圧縮魔力弾を撃ち込む。

「ガルルキャノン！！！」

ーーードゴオオオオン！！

「グォッ！！！」

流石に至近距離でガルルキャノンを食らった事には流石にダメージを受けたのか、僅かに苦痛の声を上げ、ブラックは地面の方へと吹き飛んで行った。

そしてそのままユウはブラックが吹き飛んで行った地上の方にガルルキャノンの砲身を向け、体勢が整っていないブラックに向かって連続で魔力弾を撃ち込んで行く。

その様子を離れてた所から見ていた桜達はユウが、勝てる可能性が出て来た事に喜びながら戦いを見つめ、ユウに向かって応援の叫びを上げる。

「そのままよ！！ユウ！！！」

「頑張ってや！！」

「勝てるぞ！！」

「ユウ君！！頑張って！！」

「頑張って！！！ユウ！！！」

桜、はやて、シグナム、なのは、フェイトはそれぞれ喜びの声を上げながらブラックに向かって容赦の無い砲撃を放ち続けているユウに向かって応援を送るが、その応援はすぐに途切れた。

何故ならばユウが連続で砲撃を放っている地点から、突然として赤い巨大なエネルギー球が出現し、そのまま上空にいるユウに向かって高速で放たれたからだ。

「ガイアフォーーーースッ！！！」

「クッ！！ガルルキャノン！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオン！！！

地上からブラックが放って来たガイアフォースに向かってユウはガルルキャノンを連続で撃ち込むが、ガイアフォースの威力は衰える事無くユウに向かって突き進む。

その事実にユウは先ほどのブラックが放ったガイアフォースは手加減されていたものだと気がつき、慌ててマントを翻しながらその場を飛び退き、ガイアフォースをギリギリの所で避ける。

しかし、ユウが避けた先に鎧に罅が入っているブラックが一瞬の内に姿を現し、そのままユウに向かって右腕のドラモンキラーを振り抜き、ユウを吹き飛ばす。

「ドラモンキラーーー！！！！」

ーーードグオオオオン！！

ーーービキビキビキッ！！！

「ガハッ！！！！！」

『ユウッ！！！』

「ユウ君ッ！！」

鎧の破片を撒き散らしながら吹き飛んでいくユウの姿を目撃した桜達は悲鳴のような声を上げるが、ブラックは構わずにユウの吹き飛んで行く方へと瞬時に移動を行い、そのまま身動きが取れずにいるユウに向かって連続でドラモンキラーを振るい続ける。

「オオオォォォォォォォォッ！！！！！」

ーーーガガガガガガガガガガガガガガッ！！！！！

「ガアァァァァァァァァァッ！！！！！」

ブラックの連続攻撃に対してユウは何も行う事が出来ずに苦痛の叫びを辺りに響かせた。

それに対してもブラックは構わずにユウに向かって攻撃を放ち続け、ユウは防御しようとするが、防御される前にブラックは連続で攻撃をぶつける。

本来ならば聖王の血筋であるユウにも“聖王の鎧”と言う防御能力に特化したレアスキルを持っていて、大抵の攻撃ではユウにはダメージが届かない。だが、ブラックの攻撃は全て並大抵どころの騒ぎではない威力を持っていた。Sランクオーバーに匹敵する完全体

デジモンでさえも大ダメージが避けられない威力をブラックの攻撃は全て兼ね備えているのだから、幾ら“聖王の鎧”とバリアジャケットを纏っているユウでも防御し切れる筈がない。
それを示すように徐々にユウの手は下に下がって行き、ブラックはそのままユウにバリアジャケットにドラモンキラーの刃を引っ掛けるようにしながら攻撃を止め、バリアジャケットがボロボロになっているユウに声を掛ける。

ーーーガシッ！！

「所詮はこの程度か？」

『ユウッ！！！！』

「ユウ君ッ！！！」

ボロボロになったユウの姿を目にした桜達は悲鳴のような声でユウの名を呼ぶが、ユウが動く事はなかった。
その姿に桜達は絶望に染まったような顔をするが、ブラックは構わずにユウを地面に叩きつけ、そのまま勢いよくユウの体を踏みつける。

ーーードゴオオオオオン！！

「如何した？俺をぶっ飛ばすんじゃなかったのか！？」

ーーードグオオオン！！

「ガハッ！！！」

「ユウゥゥゥゥッ！！！」

「もう止めて！！！」

踏みつけられて苦痛の声を上げるユウの姿に桜は悲鳴のような声を上げ、なのはは涙ながらにブラックに声を掛けた。

他のメンバーも同様に目から涙を流すが、ブラックはその様子を見ても何も感じる事は無く、ドラモンキラーの爪先に赤いエネルギー球を作り出す。

ーーーブンッ！

「そう言えば、もう一人残っていたな・・・・・気に入らん奴が！！！」

「ッ！！桜！！逃げて！？」

「遅いッ！！」

ブラックの言葉に意味に気がついたフェイトは横に立っている桜に声を掛けて逃がそうとするが、その前にブラックはエネルギー球を桜に向かって投げつけた。

「ヒィッ！！」

『桜ッ！！』

「桜ちゃん！！」

「さ、桜おねえちゃーーーん！！！」

高速で迫る赤いエネルギー球に桜は恐怖の声を上げて逃げようとするが、ダメージの為か動く事が出来ず、その間にリニスとリインフォースが張った防御魔法はエネルギー球に撃ち破られ、桜にエネルギー球は直撃しそうになる。
なのは達はその事に気がつき、慌てて桜の助けようと動くが、エネルギー球は無慈悲に桜の目の前に迫り、桜は自身の死を確信する。

（アッ・・・・・これは駄目ね・・・・・私・・・しん・・・）

「ガルルキャノン！！！！！」

ーーードゴオオオン！！

『ッ！！！』

「ムッ！！」

桜の目の前に迫っていたエネルギー球は後方から超高速で向かって来た圧縮魔力弾によって消滅した。
それによって発生した衝撃波によって桜の体は僅かに後方へと吹き飛ばされるが、瞬時にシグナムが桜の体を支え、全員が圧縮魔力弾が放たれた方を見てみると、ブラックに踏みつけられながらも右手の砲身を構えているユウの姿が存在していた。
ブラックもその事実には僅かに驚くが、すぐさま冷静に立ち返り、ユウに向かってドラモンキラーの刃を振り下ろそうと構える。しかし、その前にユウは瞬時に左手からグレイソードを出現させ、踏みつけられながらもブラックに向かってグレイソードを斬りつける。

「グレイソードッ！！！」

ーーーザンッ！！！！

「ガハッ！！」

グレイソードによって胸当てを斬りつけられたブラックは声を上げながらも、瞬時にユウの傍から離れ、傷ついた胸当てを手で押さえる。

それと共にユウも瞬時に立ち上がり、ブラックから距離を取るが、流石にダメージまで隠せないのか膝を地面についてしまう。だが、それでも戦う意志を失ってはいないのかブラックを睨みつける。

「・・・・やはり貴様は気に入らんな・・・・・本来ならば俺に傷をつけた奴との戦いは心の底から楽しめる筈なのに、貴様とは戦っても苛立ちを増すだけだ」

「はぁ、はぁ、はぁ、何でそんなに・・・・・俺と桜が気に入らんないんだよぉ？俺達とアンタが会うのは初めての筈だぜ？」

「簡単だ。デジモンの技を猿真似した事だけでも気に入らなかったが、貴様が最初に現れた時に着ていたバリアジャケットの形！！アレは俺を救ってくれた無二の親友『ウォーグレイモン』の姿だったからだ！！！」

『ッ！！！』

ブラックの叫びにユウと離れていた所で話を聞いていた桜は目を見開いた。

ユウと桜はブラックウォーグレイモンの知識を知っている。そして本来のブラックウォーグレイモンの結末もユウ達は知っていた。

ウォーグレイモンとブラックウォーグレイモンは確かに戦い合い、そしてウォーグレイモンはブラックウォーグレイモンを説得出来た。だが、親友とまで呼べるほどの親密さは二体には無かった。
　しかし、それは彼らの知識の中にあるブラックウォーグレイモンに過ぎない。ブラックにとっては、例え勝てないと分かりながらも自分の為に挑んで来てくれた『ウォーグレイモン』は紛れも無く親友だった。

「同じ種族のデジモンならば認めてやる。だが、貴様は違う！！貴様は何も考えずに『ウォーグレイモン』の姿を使っていたのだろう！？ふざけるな・・・・・デジモンとはそんなに簡単な生物ではない！だからこそ、俺は貴様とあの小娘が気に入らんのだ！！恵まれて生まれて来たお前達には分からんだろうがな！？」

「戦いの前にもそんな事を言っていたよな？俺と桜が恵まれて生まれてき・・・・・・・ッ！！まさか！？お前は！？」

「フン、漸く気がついたか？そうだ、俺も貴様とあの小娘と同類の存在だ」

『ッ！！！』

　ブラックが告げた事実にユウと桜は驚愕に目を見開きながらブラックの姿を見つめた。
“同類の存在”。それが意味する事は一つ、ブラックもまたユウと桜と同じ転生者だと言う事だ。
　しかし、確かに同じように異界の記憶を持って転生して来た存在でありながら、多くのものに恵まれていたユウと桜とは違い、ブラックは無理やり戦いに巻き込まれ苦しみ、その果てに心も壊れてしまった存在。三人は同じ転生と言う経緯を辿ったが、その歩みは全

く異なっていた。
だからこそ、ブラックは目の前の二人が赦せなかった。自分達がどれだけ“周りの人間に護られていた”のかを、全く分かっていない二人の姿が赦せなかった。

「無駄話をしたな。とにかく、俺は貴様らが気に入らん！！俺の大切な記憶を汚す行為をしてくれた貴様らがな！！！」

「・・・・・なるほどな・・・・・如何して俺達が気に入らなかったのかはよく分かった・・・・・だけどな！！俺もお前が赦せない！！俺の大切な奴らを傷つけて、殺そうとしたお前だけは絶対に！！だから、俺はお前をぶっ飛ばす！！」

「フッ！！良い答えだ！！身勝手な同情などと言う下らんものよりも貴様の答えは数百倍な！！・・・・本気で惜しいぞ・・・・貴様が俺の気に入らん存在でなければ、思う存分に戦いを楽しんでいただろうな・・・・だからこそ、俺は俺の全てを持って！貴様らの全てを壊してやる！！ルインッ！！！！！！」

「はいですッ！！ブラック様！！」

ブラックの呼び声に離れていた所でリインフォースと共に戦いの様子を観戦していたルインは即座に答え、目の前に存在していたリインフォースに構わずにブラックの下へと急ぎ向かい出す。
リインフォースはその事に目を見開きながら慌ててルインの後を追うが、ルインとの距離は離れて行き、ルインはブラックの下へと辿り着き、リインフォースはユウに向かって叫ぶ。

「ユウッ！！！すぐに彼女を止めて下さい！！彼女は！！彼女はユニゾンする気です！！そうなったら！！あの防御プログラムの力が

竜人に宿ってしまいます！！」

『なっ！？』

リインフォースの叫びを耳にした桜達は声を上げた。

あの世界を滅ぼしてしまう闇の書の闇と呼ばれた防御プログラムの力だが宿る。そうなればただでさえ世界を滅ぼせるだけの力を持っているブラックの力は倍増するどころの騒ぎではない程に上がるだろう。

その事を理解したユウも慌ててブラックとルインのユニゾンを行わせない為に、右手の砲身を展開し、ブラックとルインに向かって構える。

「させるかよ！！ガルルッ！！」

「残念ですけど、タイムアップですよ。ユニゾン・イン！！！」

ーーーギュルルルルルルルルルッッッ！！！！！！

「オオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！ブラックウォーグレイモン！！Ｘ進化！！！！」

『ッ！！！』

ユウがガルルキャノンを撃ち出す前にルインは光の粒子に変わりながら、ブラックの体へと入り込み、その瞬間にブラックの体から青いデジコードが出現し、デジコードはブラックを覆うように包み込んで行く。

その現象とブラックの叫びの意味に気がついた桜は心の底から絶望に染まった顔して、膝を地面につきながら呆然と声を出す。

ーーーバタッ

「う、嘘でしょう・・・・・・X進化・・・・・・ゼヴォリューション・・・・・・・」

「さ、桜お姉ちゃん!?何が起きてるの!?」

「桜!!あの竜人は一体如何したの!?」

絶望に染まっている桜に、状況が分かっていないなのはとフェイトは質問するが、桜は答えずに青い繭と化したデジコードを見つめながらユウに向かって悲痛な声で叫ぶ。

「・・・・・げて・・・・・ユウッ!!!逃げてえぇぇぇぇぇぇぇぇーーーーーーーーッ!!!!!」

「クソッ!!ガルルキャノン!!!!ガルルキャノン!!!!」

ーーードグオオオオオン!!ドグオオオオオオオン!!!

逃げる事が不可能だと分かっているユウはデジコード内部からブラックが出て来る前に倒そうと、渾身の魔力を込めたガルルキャノンを連射し、ガルルキャノンは高速でデジコードへと向かって行く。

しかし、ガルルキャノンがデジコードに直撃しようとしたする直前に、デジコードは引き裂かれ、内部から漆黒の閃光が走り、ガルルキャノンは一瞬の抵抗も無く四散する。

ーーーブザン!!ブザン!!

ーーーバッシュン！！バッシュン！！

「ッ！！！・・・・・・・ハハハハハハハッ・・・・マジかよ・・・・嘘だろう」

自身の最大の魔法が簡単に四散された事にユウは目を見開き、ガルルキャノンを四散させた漆黒の閃光に目を向け、その姿を目にする。

その存在は全身をより機械的に成った鎧で身を包み、背中に二つのバーニアを背負い、両手に装備していたドラモンキラーもより鋭く機械的な要素を備えさせながら、目を赤く光らせてユウの姿を見つめていた。

ブラックこと、ブラックウォーグレイモンがルインとのユニゾンによって更に進化した姿。

その姿を知っているユウと桜は体を恐怖に震わせながら、呆然しながらも更なる進化を遂げた漆黒の竜人の名を同時に叫ぶ。

『ブラックウォーグレイモンXッ！！！』

「ウオォォォォォォォォォォォォォォォッ！！！！！！！」

ーーードゴオオオオオオン！！

「クッ！！」

ブラックウォーグレイモンXが咆哮を上げると共に地面は爆裂したように吹き飛び、ユウは背中に羽織ったマントを使い防御するが、その体は恐怖によって震えていた。

ただ咆哮を上げただけで地面が爆裂してしまうほど衝撃波が発生したのだ。

その点だけでもブラックウォーグレイモンXの力がどれほどのものなのかは、直接戦うユウだけではなく、離れた所で戦いを見守っていた桜達にも充分過ぎるほどに理解した。
“目の前に立っている存在だけには触れてはいけなかった”。それをハッキリとユウ達は本能で理解するが、もはやブラックウォーグレイモンXは止まる事は無く、恐怖に体を震わせながらもグレイソードを構えているユウに向かって足を一歩進める。

ーーーダンッ！

「さぁ、始めるぞ。互いの信念を賭けた殺し合いをな！！」

ーーーガシャン！！ドオォォォォォォォン！！

「クソォォォォォォォォォーーッ！！」

言葉と共にバーニアを噴かせて突進して来るブラックウォーグレイモンXに向かって、ユウは恐怖を振り払うように叫びながらブラックウォーグレイモンX同様にグレイソードを構えながら突進するのだった。

特別編０２、在り得ざる異界の者達の出会い、後編　上（注コラボ）（後書き）

今回登場したオリジナル魔法

名称、ライヴォルト
夜天の魔導書に記されている魔法の一つで、ミッドチルダ式の魔法。全身から凄まじい電撃を放ち、相手の体を感電させる。事前に電撃を受けていた場合いは、より威力が上がると言う特性を持った魔法である。

名称、リフレクトフィールド
同じく夜天の魔導書に記されている魔法の一つで、ミッドチルダ式の儀式魔法に分類されている。
効果としては相手が放って来た砲撃を跳ね返すと言う、砲撃魔導師泣かせの魔法であるが、弱点が存在し、砲撃を跳ね返した後は消滅してしまう上に、詠唱時間が長く、莫大な魔力も消費してしまう。
覚醒したルインと、ルインとユニゾンしたブラックでなければ戦闘中で使用する事は不可能に近い。
因みにリインフォースとユニゾンしたはやてならば使用は可能だが、魔力の消費はかなりのものとなってしまう為に、デメリットが高い魔法である。

特別編０２、在り得ざる異界の者達の出会い、後編　中（注コラボ）

「ハァアアアアアアアッ！！」

「オオォォォォォォォォーーーーーーーーッッッッ！！！！！」

互いに同時に高速で突進したブラックウォーグレイモンＸとユウはそれぞれ武器を相手に向かって突き出し、ユウは自身に左腕の竜の頭部のような手甲から出現させているグレイソードに炎を纏わせながらブラックウォーグレイモンＸに向かって振り抜く。

「グレイソーーードッッ！！！」

「フン！！」

ーーーバキィィィィィンッッ！！！

『ッ！！』

ユウが全力で振り抜いて来たグレイソードに対してブラックウォーグレイモンＸは無造作に左手のドラモンキラーをグレイソードにぶつけ、グレイソードの刃は甲高い音をたてながら跡形も無いほどに砕け散った。

その現象にユウだけではなく桜達も目を見開いた。ユウのグレイソードは今まで一度も砕けた事は無かった。少なくとも通常状態にブラックのドラモンキラーとぶつかり合っても罅が入らないほどの頑強を備えていた。

しかし、今そのグレイソードはブラックウォーグレイモンＸが全く力を込めていない無造作に振るった一撃の下に砕け散ってしまっ

た。その事実だけでもユウ達が呆然とするには充分な出来事だったが、ブラックウォーグレイモンXがその隙を逃す筈も無く、にユウに向かって右手のドラモンキラーを振り下ろす。

「ドラモンキラーーー！！！！」

「ハッ！！クッ！！」

ーーービュン！！

自身に向かって振り下ろされようとしているドラモンキラーに気がついたユウは負担が掛かるのを承知で、地面を全力で蹴りつけ、その勢いを利用して後方へと飛び退き、ドラモンキラーの射程から逃れた。

しかし、ブラックウォーグレイモンXは全く慌てる事無くドラモンキラーの爪先の照準をユウに向かって構え、そのまま爪を射出する。

ーーーバッシュン！！バッシュン！！

「ッ！！しまっ！！」

ーーードスドスッ！！

ブラックウォーグレイモンXが射出したドラモンキラーの爪先をユウは避ける事が出来ず、背中に棚引かせていたマントへとドラモンキラーの爪先は突き刺さり、そのままユウは背後へと吹き飛んで行く。

ーーーガガガガガガガガガガガガガッ！！！ドゴオオオオオオン

！！

「ガハッッ！！！」

射出されたドラモンキラーの爪先によって遥か後方へと吹き飛んだユウは、その先に存在していた瓦礫に背中から激突し、苦痛の声を上げた。

ユウは苦痛を堪えながら何とか顔を上に上げ前を見てみると、一瞬の内にユウの目の前に移動していたブラックウォーグレイモンXが瓦礫に磔状態になっているユウに向かって右腕を振り抜く。

「ムン！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

「ガアァァァァァァァッ！！！」

『ユウッ！！』

「ユウ君ッ！！」

ブラックウォーグレイモンXに殴り飛ばされ瓦礫ごと、空へと舞い上がったユウを目撃した桜達は悲痛な声で叫んだ。

その叫びに吹き飛び掛けていた意識を繋ぎ止めたユウは、全身を襲う激痛に堪えながら右手の狼の手甲から展開していた砲身を地上に留まっているブラックウォーグレイモンXに向け、砲身が耐え切れる限界までの魔力を注ぎ込み、圧縮魔力弾を放つ。

「ガルルキャノン！！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオン！！！

今まで以上の魔力が込められたせいか、ユウが放ったガルルキャノンの大きさはブラックウォーグレイモンXが放ったガイアフォースを上回る大きさを持って高速で地上に立っているブラックウォーグレイモンXに迫る。

しかし、ブラックウォーグレイモンXは迫り来るガルルキャノンの姿を見ても慌てる様子は全く見せずに、左手のドラモンキラーの爪先に黒く輝くエネルギー球を作り上げ、ガルルキャノンに向かって投げつける。

「失せろ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオ

シグナム、フェイト、はやてはそれぞれ絶望に満ちた声を出し、なのはと桜もブラックウォーグレイモンXの圧倒的としか言えない力に恐怖を覚えて体を振るわせる。
ブラックォーグレイモンXはその様な桜達の様子など構わずに、上空に存在している煙の中に隠れているユウに向かって攻撃を開始しようとするが、その直前に煙を切り裂きながら右手の竜の手甲に激しい炎を、右手の狼の手甲に凄まじい冷気を発生させているユウが一直線にブラックウォーグレイモンXに向かって飛び出して来る。

「オォォォォォォォォッ！！！！」

「ほう」

煙の中から飛び出して来たユウの姿に、ブラックウォーグレイモンXはユウが考えている作戦に瞬時に気がつき、感心した声を上げながらユウを見つめていると、ユウは激しい炎を纏っている左腕を振り被る。

「ダブルッ！！」

「ムン！！」

ーーーガァァァァン！！

ユウが振り下ろして来た左腕の一撃をブラックウォーグレイモンXは右腕のドラモンキラーで防御した。
しかし、ユウの一撃はブラックウォーグレイモンXの右手のドラモンキラーを炎で炙る以外の効果は全く無く、ブラックウォーグレイモンXには何のダメージも無かった。

その姿にユウは僅かに悔しそうな顔をしながらも、ブラックウォーグレイモンXに反撃されまいと連続で左腕を繰り出し続けるが、ブラックウォーグレイモンXは右腕だけで防いで行く。そしてある程度攻撃を繰り出し終えると、ユウは今度は凄まじい冷気を纏っている右手をブラックウォーグレイモンXの右手に向かって振り被る。

「トレントォッ！！」

「させん！！」

ーーーガアァァァァァァン！！

ユウの右手がブラックウォーグレイモンXの右手に激突しようとする直前に、ブラックウォーグレイモンXは瞬時に左腕をユウの右手の前に出し、ユウの一撃を左腕で防御した。

その事にユウは心の底から悔しそうな顔をしながらも右手を叩きつけた反動を利用して、ブラックウォーグレイモンXから離れようとするが、その前にブラックウォーグレイモンXはユウに渾身の蹴りを叩き込む。

「ハッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ガアァァッ！！」

「そ、そんな！ユウ君！！」

「イヤァッ！！」

ブラックウォーグレイモンXの地面が陥没するほどの威力を持った蹴りを叩き込まれたユウは苦痛の叫びを上げ、なのはとフェイトはその姿に悲鳴を上げた。
ブラックウォーグレイモンXはその姿を確認すると、止めを刺す為に暗黒のエネルギーを両手の先に集中させ、地面にめり込んだままのユウに向かって放とうとする。だが、その直前にユニゾンしているルインが警告を放つ。

（ブラック様！！下がって！！）

「ッ！！クッ！！」

ーーーザン！！

ルインの警告と自身の本能の警告に従い、ブラックウォーグレイモンXは集めていたエネルギーを霧散させながら後方へと飛び退くと同時に、一筋の閃光がブラックウォーグレイモンXの立っていた場所に走った。
それと共に地面にめり込んでいたユウはゆっくりと立ち上がり、右手に白い長剣ー『オメガブレード』を握りながら自身のバリアジャケットを『オメガモン』を模した姿から、白を基調として所々に金色の装飾が成され、背中に天使の翼を思わせる純白の翼を備えたバリアジャケットー『インペリアルドラモン・パラディンモード』を模した姿へと変わった。
ブラックウォーグレイモンXはその変化したユウの姿の目を細めながらも、先ほどの訳の分からない警告の意味をルインに質問する。

（ルイン。先ほど奴の攻撃は一体なんだ？避けていなければ危なかったようだが？）

（はい、気をつけて下さい、ブラック様。今ので漸く確信出来ましたが、あの少年が使っているデバイスは紛れも無く聖王武具の一つに数えられていたデバイス―『オメガ』に間違いありません。現存していた事には驚きましたが、確かにアレならばこの世界の私を“『初期化（イニシャライズ）』”出来たのも頷けます）

（どんな能力だ？）

（簡単に言えば対象を問答無用で『初期化（イニシャライズ）』してしまうんです。ですが、それは『オメガ』本来の能力では在りません。『オメガ』の本来の能力は『消滅（デリート）』。対象を完全に消滅させてしまうので、ブラック様でも食らえば危ないでしょう）

（なるほど）

ルインの言葉にブラックウォーグレイモンXは納得したように声を出しながら、膝をついて荒い息を吐いているユウの姿を見つめた。“対象を初期化させたり消滅させたりする能力を持ったデバイス”。

確かにそれならば先ほどのルインの警告も、自身の本能が発した警告の意味が分かる。幾ら絶大な力を持っているブラックウォーグレイモンXでも、問答無用で初期化か消滅されたりすれば死んでしまうだろう。

しかし、種が割れてしまえば恐れる事は無い。攻撃が当たらないように戦えばいいのだから、ブラックウォーグレイモンXからすれば簡単な事だった。

「随分と面白いデバイスだ。アイツが欲しがりそうなデバイスだな」

「ッ！！・・・・・・悪いが・・・・このデバイス―『オメガ』は

この世界の俺の両親の形見なんだ・・・・手放す気はない！！」

ーーースチャ！！

自身のデバイスの能力が気づかれた事に驚きながらも、ユウはオメガブレードを両手で握り締めながらブラックウォーグレイモンXに向かって構えた。

しかし、ユウには既に分かっていた。例えパラディンモードを使って戦ったとしてもブラックウォーグレイモンXを倒せる可能性はゼロだと言う事を。確かに『オメガ』の真の能力ー『消滅（デリート）』や劣化の能力で『初期化（イニシャライズ）』ならばブラックウォーグレイモンXを倒せる可能性は存在していた。だが、既にブラックウォーグレイモンXは『オメガ』の能力を知ってしまっている。そうなれば、ブラックウォーグレイモンXは警戒しながら戦うだろう。

『オメガ』の能力が知られた時点で、ユウに残されていた勝てる可能性は完全にゼロとなったのだ。

その事が分かっているユウは、油断なく警戒しているブラックウォーグレイモンXにオメガブレードを構えながら遠く離れた場所で戦いを見ている桜に念話を送る。

（桜・・・・俺が時間を稼ぐから皆を連れて逃げろ）

（ッ！！何を言っているのよ！？）

（分かっているだろう！！ブラックウォーグレイモンの狙いは俺とお前だ！！だから、他の皆は逃げる事が出来る・・・・だから、俺が此処に残って時間を稼げば、少なくとも皆とお前は助かる・・・・・もしかしたら、お前の事を追って来るかもしれないけど、時間が在ればブラックウォーグレイモンに対する対抗策も考える事が出来る・・・プレシアさんやリンディさんがいるんだ。何か方法を見つ

けてくれるさ）

（馬鹿！！そんな事をして皆が喜ぶと思っているの！？悲しみだけでしょうが！！もちろん私も！！）

「（・・・・・そうだよなぁ・・・・・・皆絶対に悲しむだろうな・・・・・辛い思いをさせるな・・・・・だけど！！だけどそれでも！！）それでも俺は！！皆が死ぬ所なんて見たくないんだよ！！！オォォォォォォォーーーーーー！！！！！！」

「フッ、良い覚悟だ。俺も全力で答えてやる！！ハァァァァァァァァァァァッ！！！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

ーーーギィン！　ガキィ！　ギギィン！　ガキキィン！

互いに叫び合うと共に相手に向かって突進し、ユウはオメガブレードで、ブラックウォーグレイモンXは両手のドラモンキラーを使って衝撃波を撒き散らしながら凄まじい剣戟を繰り広げる。

しかし、その剣戟の中で繰り広げられるのはブラックウォーグレイモンXが振り抜くドラモンキラーをユウがオメガブレードを使って防御すると言う一方的な展開だった。その上、徐々にユウの握るオメガブレードの刃は欠け続け、刃毀れだらけの状態に変わって行く。

ユウはその事を理解しながらも全力でブラックウォーグレイモンXの攻撃を防御し続け、少しでも時間を稼いで桜達の逃げる時間を稼ぐ為にユウは死力を振り渋りながらブラックウォーグレイモンXの攻撃を防いでいく。

その様子を離れた所で涙を流しながら見つめていた桜は、事前に

送られて来たユウの念話の事を考え続け、突如として涙を手で拭きながら横に落ちていたレイジングソウルの柄を握り締める。

ーーーギュゥッ！！

「・・・・・皆・・・・・私とユウがブラックウォーグレイモンXを少しでも押さえるから・・・・皆は傷ついているヴィータ達を連れてアースラに避難しなさい」

『桜ッ！？』

「桜ちゃん！？」

「さ、桜お姉ちゃん！？何を言っているの！？逃げるんだったら、桜お姉ちゃんとユウ君も一緒に逃げようよ！？」

「・・・・・無理よ・・・・・例え此処で運が良く逃げられても・・・・・アイツは・・・・・ブラックォーグレイモンXは何処まで私とユウを追って来るわ・・・・・それに皆が此処まで傷ついたのも、もとはと言えば、私とユウがデジモンの技を教えたせいだし・・・・・責任を取りに行くだけよ」

「ッ！！嫌だよ！！行っちゃ嫌だよ、桜お姉ちゃん！！！」

ーーーギュウッ！！

なのはは目から大量の涙を溢しながら桜に抱きついた。

桜はその様子に悲しげな顔をしながらも、ユウと戦う前にブラックウォーグレイモンXが発した言葉の意味が漸く僅かながらも理解出来た。

『俺は貴様らが気に入らんのだ。自分達がどれだけ護られているのかを知らない貴様らがな』

『その身に教えてやろう。貴様らがどれだけ恵まれて生まれて来たのかを！！！』

（・・・・・・そうね。私とユウは確かに護られていた・・・・・・私達はこの世界に本当はいない存在・・・・・それが当たり前のようにいられたのは、なのは、母さん、父さん、恭也兄さん、美由希姉さん、そして皆が受け入れてくれたから・・・・・今頃になって気づくなんて、私も馬鹿よね・・・・確かに恵まれていたわ・・・・だから！）

ーーーバシッ！！

「ッ！！」

突如として突き放すように飛ばされたなのはは目を見開くが、桜は構わずになのは達に向かって寂しげに微笑む。

「・・・・・皆・・・・・さよなら」

《Ａｃｃｅｌ（アクセル）　Ｆｉｎ（フィン）》

「桜お姉ちゃん！！」

「桜ちゃん！！行ったらあかん！！」

「駄目だよ、桜！！」

ユウとブラックウォーグレイモンXが激突しあっている地点に向かって飛び立つ桜の背になのは、はやて、フェイトはそれぞれ叫ぶが、桜は止まるどころか更にスピードを加速させ戦いの場へと向かい出す。

そしてその間にもユウとブラックウォーグレイモンXの戦いは続けていたが、既にユウの纏っていたバリアジャケットはボロボロな姿に変わり、両手で握っていたオメガブレードも刃毀れだらけの姿に変わっていた。

それでもユウは諦めずに戦い続けていたが、遂にそれも限界が訪れ、完全に無防備な隙が僅かに出来てしまう。当然ながらその隙をブラックウォーグレイモンXが逃す筈が無く、右腕に全力を込めながらユウの胴体に向かって撃ち込む。

「ムン！！」

ーーードゴオオオオン！！

「ガッ！！」

ブラックウォーグレイモンXの拳をモロに食らったユウは口から血を吐き、空中に体が浮き上がった。

その様子を確認したブラックウォーグレイモンXは止めを刺そうと、動きが取れなくなっているユウに向かって両手を向け、背中のバーニアを噴かそうとする。しかし、その動きは直前で止まり、自身の背後へと即座に振り返り、レイジングソウルをバーストモードに変形させながら突撃して来る桜の姿を目にする。

「A．C．S起動！！」

「フン」

「馬鹿！！止めろ、桜！！！」

「エクセリオンバスターーー！！！！！A・C・Sッ！！！！」

ーーードゴオオオ

とするが、ダメージからか、動く事は出来なかった。その間にもブラックウォーグレイモンXはエネルギーを集め続け、目を細めながら暴れている桜に声を掛ける。

「順番は変わったが、貴様も俺が気に入らん奴には違いない。先に、消えろッ！！！暗黒のッ！！」

「さくらーーーーーッ！！！」

ブラックウォーグレイモンXが行うとしている事が分かったユウは悲痛な声を上げるが、ブラックウォーグレイモンXは止まらずにゼロ距離からガイアフォースを桜に一放てなかった。

「セブンズヘブン！！！」

ーーーズガガガガガガガガッ！

「ムッ！！」

背中に突如として七つの魔力弾ーセブンズヘブンを食らったブラックウォーグレイモンXは驚き、背後へと目を向けてみると、ボロボロな姿になりながらも目から光を失っていないリニスが瓦礫の上に立っていた。

その姿にブラックウォーグレイモンXは僅かに驚いていると、何時の間にか上空に移動していたシグナムがレヴァンティンを桜を掴んでいるブラックウォーグレイモンXの左腕に向かって振り下ろす。

「紫電一閃（しでんいっせん）ッ！！！」

ーーーガァァァァァン！！

「グッ！！舐めるな！！」

シグナムの放った紫電一閃（しでんいっせん）を食らったブラックウォーグレイモンは、僅かに声を上げるが桜を離す事は無く、逆に近づいて来たシグナムに向かって右腕のドラモンキラーを振り下ろそうとする。

しかし、その直前に何とか体を襲っている激痛から逃れたユウが、ブラックウォーグレイモンXの左腕に当てたままのレヴァンティンの上からオメガブレードを振り下ろす。

「ハァアアアアアアアアアアアッ！！」

ーーーガァアアアアアアアアアアアアッ！！

「グゥッ！！」

ーーーパシッ！！

二度目の同じ箇所の衝撃によってブラックウォーグレイモンXが思わず桜を手放してしまう。

その隙にシグナムは桜とユウの腕を握り締め、ブラックウォーグレイモンXの傍からすぐさま離れる。しかし、衝撃は受けてもダメージは無かったブラックウォーグレイモンXはすぐさま桜とユウを連れて離れて行くシグナムの後を追おうと、背中のバーニアを噴かそうとする。だが、その直前に空から数え切れないほどの砲撃がブラックウォーグレイモンXに向かって降り注ぐ。

「全力全開！！スターライト・・・・・」

「雷光一閃！プラズマザンバー・・・・・」

「響け！終焉の笛！ラグナロク！」

「集いし星よ、月となれ・・・・・・・・」

『ブレイカーーーーー！！！！！！！！』

「夜天の煌きッ！！！！！！」（ルナライトブレイカークスシフト）

ドグオオオ

「同感だ・・・・お前達二人を見捨てて逃げるぐらいならば・・・・この場で奴と戦った方がマシだ。高町、テスタロッサ、主も同意見だ。何とかこの場で奴を倒す！！全員で掛かればあるいは…」

「無理だな」

『ッ！！』

ーーーードッゴオォォォォォォォォン！！！

シグナムの言葉に覆い被さるように響いた低い声に全員が目を見開いた瞬間に、シグナム達が隠れていた瓦礫を突き破り、ダメージを全く負った様子がないブラックウォーグレイモンXが瓦礫を粉砕しながら姿を現した。

その姿にシグナムは驚愕するが、すぐさま右手に握っていたレヴァンティンをブラックウォーグレイモンXに振り抜こうとするが、その前にブラックウォーグレイモンXが右腕のドラモンキラーを振り抜き、レヴァンティンの刀身を砕く。

ーーーーバキィィィィィィィン！！！

「ッ！！」

「邪魔だ。失せろ！！」

ーーーードゴオオオオオオオオオオオン！！

レヴァンティンが砕かれた事に動きが止まってしまっていたシグナムに、ブラックウォーグレイモンXは迷う事無くドラモンキラーの爪先に作り出していた黒いエネルギー球を叩きつけ、シグナムは

叫ぶ事も出来ずに吹き飛んで行った。
　ブラックウォーグレイモンXはそれを確認すると、その場で呆然としているユウと桜に向かって叩き潰す勢いでドラモンキラーを振り下ろそうとするが、その直前にリニスが魔力で強化した拳をぶつけて来る。

「ハアッ！！」

ーーードン！！

「・・・・何かしたか？」

「ッ！！クッ！！アアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！！」

ーーーゲシッ！！バシッ！！ドン！！ドゴオン！！

　リニスは叫びながら次々とブラックウォーグレイモンXに向かって拳や蹴りを撃ち続ける。
　しかし、ブラックウォーグレイモンXには全くダメージが与えられずに、逆にブラックウォーグレイモンXは殴り掛かって来たリニスの右腕を簡単に掴み取る。

ーーーガシッ！！

「ッ！！」

「煩わしいッ！！」

ーーーガアアアアアアアアアアアアアアアアアンッッッッ！！！

『リニスッ！！！』

腕が掴み取られると同時にリニスは地面に勢いよく叩きつけられ、ユウと桜は悲痛な声で叫ぶが、リニスは答える事無く気絶したままだった。

その様子にユウと桜は怒りは振り切れ、全身を襲っている激痛など気にせずにブラックウォーグレイモンXに飛び掛ろうとする。しかし、ブラックウォーグレイモンXはその前に両手の先に巨大な黒いエネルギー球を作り上げユウと桜に向かって放つ。

「消えろ。ハデスフォーーース！！！！」

ーーードグオォォォォォォーーーーーー！！！！！！

『ッ！！！』

ブラックウォーグレイモンXが放ったハデスフォースは凄まじいスピードでユウと桜に迫り、ユウと桜は驚愕に目を見開きながらも避けようとするが、ハデスフォースの範囲から逃れる事は出来ず、悔しそうな顔をして目の前に迫って来ているハデスフォースを見つめる。

だが、直撃する直前に突如としてユウと桜は横から押され、ギリギリのところでハデスフォースの影響範囲から逃れる。

ーーーポンッ！！

「ッ！！・・・・フェ・・・」

「・・・・はや・・・・」

横から押された事にユウと桜は驚きながらも目を横に向けてみると、寂しげながら嬉しげな微笑みをしているフェイトとはやての姿が存在していた。
その姿にユウと桜は目を見開き、二人が自分達を押したと思われる手にゆっくりとまるで時間が極限に遅くなった感じを受けながら手を伸ばすが、突如として時間は戻り、ユウと桜の目の前でフェイトとはやてはハデスフォースに飲み込まれた。

ドゴオオオ

ブラックウォーグレイモンXの感情の全く篭っていない言葉を耳にしたなのはは、怒りの叫びを上げながらブラックウォーグレイモンXに突撃し、その余りにも後先考えていない行動にリインフォースは危機感を覚えてなのはを止める為に叫びながら飛び出した。
しかし、リインフォースが追いつく前になのははブラックウォーグレイモンXに向かってレイジングハートの先端を向け、自身の体の影響など考えずに今出せる最大の威力の砲撃を撃ち出す。

「エクセリオンバスターーーーーー！！！！！！！」

ーーードグオォォォォォォォン！！！

「消えろッ！！」

ーーーバッシュン！！

「ッ！！」

なのはが放った全てを込めたエクセリオンバスターは、ブラックウォーグレイモンXが無造作に振るった右腕の衝撃波によって、一瞬の抵抗も無く四散した。
その全てを込めた砲撃さえもただの衝撃波によって四散した事実に、なのはの中の何かが完全に圧し折れ、絶望に心が塗り潰されそうになるが、ブラックウォーグレイモンXは構わずになのはの目の前に移動する。

ーーービュン！！

「アッ・・・・」

「良い攻撃だった」

ーーードゴオオオオオオン！！！

「グフッ！！」

『なのはッ！！』

ブラックウォーグレイモンXに殴り飛ばされたなのはを目にしたユウと桜は悲痛な声でなのはの名を呼ぶが、なのはは答える事無く地上へと落下していき、地面に激突する直前にリインフォースがなのはを受け止める。

ーーーガシッ！！

「高町！！高町！！」

「・・・・・・」

リインフォースは腕の中に抱えているなのはに向かって叫ぶが、なのはは答える事無く絶望に染まった顔だけをしていた。

その事実にリインフォースは辛そうに顔を俯かせ、急いで近寄って来たユウと桜もなのはの絶望に染まった瞳に悲しげに顔を俯かせ、地面に膝をついてしまう。

次々と大切な人達が目の前で消えて行く事にユウと桜の心は暗く深い闇に堕ちそうになるが、その前にブラックウォーグレイモンXはゆっくりとユウ達の背後に近寄る。

ーーーダンッ！

「そろそろこの戦いを終わりにする。貴様らの死をもってな」

ブラックウォーグレイモンXはそうユウ達の背に告げると共に、再び黒い巨大なエネルギー球を両手の間に作り始める。

その事に気がついたユウは顔をゆっくりと上げ、なのはを抱えたままのリインフォースに覚悟が決まったと言うような顔をしながら声を掛ける。

「・・・・・・リインフォース。力を貸してくれ」

「えっ？ユウ？アンタ何を言って？」

ユウの呟いた言葉に桜は疑問を覚えて質問するが、ユウは答えずに真剣な顔をリインフォースに向け続ける。

そのユウの顔を瞳にリインフォースも覚悟を決めると、抱えていたなのはを桜の腕の中に渡し、ゆっくりとユウへと手を差し出し、ユウもリインフォースに手を伸ばし始め、互いの手が触れ合おうとする。だが、その直前に5メートルぐらいの大きさを持った黒いエネルギー球ーハデスフォースを作り上げたブラックウォーグレイモンXがハデスフォースをユウ達に向かって投げつける。

「ハデスッ！！フォーーースッ！！！」

『・・・・・ユニゾン・・・・イン』

ーーードゴオオオ

を起こした。
　ブラックウォーグレイモンXはそれを確認すると、もうこの場には用は無いと思い背後へと振り返り歩き出そうとするが、その足は突如として止まり、険しい顔を煙が噴き上がっている場所に向けると同時に煙の中から風が吹いてくる。

ーーーフウゥゥゥゥゥゥゥーーーー

（何だ？）

（これは・・・・・・まさか！？あの生真面目！？）

ーーーダン！

「ンッ？」

　煙の中から聞こえて来た足音にブラックウォーグレイモンXは疑問の声を上げながら足音が聞こえて来る場所を見つめていると、煙の中から虹色の魔力光を全身に纏い、機械的な白い鎧と兜を身につけ、左腕には機械的な黄金色輝くアーマーが装着され竜の頭部を模した手甲が備えられ、右腕には蒼く輝くアーマーを装着し、狼の頭部を模した手甲が装備されたバリアジャケットを纏ったユウがゆっくりと歩いて来た。
　その姿はユウがパラディンモードの前に着ていた『オメガモン』を思わせるバリアジャケットながらも、より鋭敏に機械的なバリアジャケットへと変わり、全身から発せられる気配も数段上に上がっていた。
　ブラックウォーグレイモンXはその姿に僅からながらも警戒心を上げてユウを見つめていると、ユウは左腕を軽く振るい、再びグレイソードを出現させ、ブラックウォーグレイモンXに構え出す。

「・・・・・俺は確かにアンタの言うとおりだった・・・・・自分がどれだけ皆に護られていたのか・・・・こうして皆が傷ついてよく分かったよ」

「ほう、ならば如何する？」

「・・・・決まっている。俺は皆を生きて安全な場所に連れ帰る。そしてあいつらの笑顔の為に・・・・ブラックウォーグレイモンＸ・・・・お前を・・・・この世界から“消滅”させる！！」

「・・・・・・フフフフフフッ、ハハハハハハハハハハハハハッ！！良い覚悟だ！！だが、俺は手加減する気は無い！！俺を消滅させると言うのならば、俺は貴様を殺す！！此処からが本当の戦いと言う事だ」

「・・・・・・・ハァアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！」

「オオオオオオオオオオオオオォォォォォォーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！

再びユウとブラックウォーグレイモンＸは同時に叫びながら相手に向かって駆け出し、ユウは新たなに文字が刻まれたグレイソードを、ブラックウォーグレイモンＸは両手のドラモンキラーを使って凄まじい衝撃波を撒き散らす剣戟を再び始めた。

戦いは終焉へと近づく。その結末がどうなるのかは、戦っている

本人達に分からないのだった。

特別編０２、在り得ざる異界の者達の出会い、後編　中（注コラボ）（後書き）

次回漸く決着＆事後処理です。
いや～、長くなってしまいましたが、書いていて楽しかったです。
コラボ了承してくれた友様には、心から感謝します。

特別編０２、在り得ざる異界の者達の出会い、後編、下（注コラボ）（前書き）

今回の話で終わる予定でしたが、戦いまでしか終わりませんでした。

次回のエピローグで本当に終わります。

特別編０２、在り得ざる異界の者達の出会い、後編、下（注コラボ）

凄まじい衝撃波が撒き散らされ、完全に地形が変わり果てた世界。
しかし、そうなったのにも関わらずに未だに世界を変えた衝撃波は放たれ続け、その中心と呼べる場所で『オメガモンＸ』を模したバリアジャケットを纏ったユウとブラックウォーグレイモンＸは互いに武器を振り抜き続け、凄まじい応酬を繰り広げていた。
既に出会ってから何度も繰り返されたやり取り。だが、互いにこの攻防の結末で戦いが終わると確信していた。その結末までは分からずとも、ユウとブラックウォーグレイモンＸは自身の信念の為に相手を打ち倒そうと凄まじい攻防を繰り広げる。
その様子を離れた所で絶望に染まった瞳をしているなのはを腕の中に抱えながら、桜は祈るような気持ちでユウとブラックウォーグレイモンＸの戦いを見ていた。

（お願い！！ユウッ！！勝って！！皆との何時もの日常に戻る為にも！！お願い！！）

そう桜は内心で祈りながらユウとブラックウォーグレイモンＸの戦いを見続ける。
だが、桜の願いに反して徐々にではあるがユウの方が相手の攻撃を防御する回数が増えて来ていた。

「ムン！！」

「クッ！！」

ーーーガキィィィィィィン！！

ブラックウォーグレイモンXが高速で振り抜いたドラモンキラーを、ユウは最小限の動きを持ってグレイソードの刃の端を使い受け流した。
決してグレイソード全体を使ってブラックウォーグレイモンxのドラモンキラーを防御しようとはユウは思わない。幾らリインフォースとユニゾンした事で力が上がっていたとしても、初めてのユニゾンの上に通常の『オメガモン』を模した姿の時でもグレイソードは一瞬の抵抗も無く砕けたのだ。その時点からでもまともなぶつかり合いなど行う方が間違っている。だからこそ、ユウはリインフォースの支援を受けながら、グレイソードが砕けないような使い方をして防御しているのだ。
しかし、それはユウの精神力を磨り減らす諸刃の戦法だった。確かにユウの使っている戦法ならば短時間はブラックウォーグレイモンXと戦う事は出来る。だが、あくまで戦う事でしかない。今のユウとリインフォースが行っている戦法では遠からずに限界が訪れて、グレイソードは再び砕け散るだろう。
その事を理解しているユウとリインフォースは、何とかブラックウォーグレイモンXの隙を探そうと攻撃や防御を行いながら隙を探し続けるが、ブラックウォーグレイモンXには全く隙が見当たらずに悔しそうな顔をしてしまう。

そのユウの様子に気がついた桜は一瞬でもブラックウォーグレイモンXの隙を作ろうと、なのはをソッと横の地面の上に下ろし、レイジングソウルの先端をユウと攻防を繰り広げているブラックウォーグレイモンXに向かって構えだす。

「一瞬でも良いわ。ユウに絶対にチャンスをつく…」

「止めておけ。そんな事をすればブラックは先ずはそなたから殺そうとする。通常状態ならばともかく、X進化しているブラックに行

うのは、自殺行為でしかないぞ」

「っ！！」

突如として響いた聞き覚えの無い声に桜は慌てて声の聞こえて来た背後へと振り返り、声の主の姿を確かめようとする。だが、声の主の姿を目にした瞬間に、桜は信じられないものを見たと言うように目を見開き、口を大きく開けてしまう。

桜の背後に立っていた存在ーブラックウォーグレイモンXと同じぐらいの背丈を持ち、背中に赤いマントをはためかせ、全身を白き鎧で覆った騎士。

桜はその存在をブラックウォーグレイモンXと同じように知っていた。その騎士がどれほどの力を持っているのかも。そして桜は呆然としながら、その騎士の名を呟いてしまう。

「・・・・デュー・・・・クモン？」

「何故私の名を知っている？」

「アッ！！・・え～と・・・・それは・・・・」

騎士ーデュークモンの質問に桜は自分の迂闊さに気がつき、困った顔をしながら目を泳がせた。

ブラックウォーグレイモンXがそもそも桜の正体に気がついたのは、知らない筈の名を呟いてしまったせいなのだ。その事を思い出した桜は、デュークモンの質問にどう答えれば良いのか悩んだ。

迂闊に答えればブラックウォーグレイモンXの時のように攻撃されてしまう可能性が存在している。

そう桜は内心で思い、何とかデュークモンの質問に対する答えを考え続けるが、デュークモンはもはや桜には興味がなくなったのか、

両手に抱えていたボロボロなバリアジャケットを身につけ気絶しているフェイトとはやてをなのはの横にゆっくりと下ろす。

「ッ！！フェイト！！はやて！！」

「案ずるな。二人とも命には別状はない。他のそなたの仲間達も既に治療は終わった。少なくとも死ぬ事はない」

「よかった・・・・グスッ・・・・本当に良かった」

自分とユウの為に身を投げ出して助けてくれた二人の生きている姿に、桜は目から大粒の涙を流しながら喜んだ。

その様子をデュークモンは腕を組みながら横目で眺めるが、すぐに視線は衝撃波の中心の方へと目を向けられ、自身の融合しているヴィヴィオと共に溜め息を内心で吐いてしまう。

（リンディが言っていた状況に近いな）

（そうだねぇ・・・・・・もうパパは！！今日はフリートお姉ちゃんの手伝いが終わったら、ヴィヴィオと遊ぶ約束をしていたのに！！）

（・・・・そう言う事を言っている状況でもないと思うが、とにかく戦いが終わり次第にブラックを連れて帰る。流石にこれ以上この世界で暴れるのは不味い）

（うん！そうだね・・・・・だけど、戻ったら絶対にパパと遊ぶんだから！！）

（・・・・まぁ、いい）

ヴィヴィオの叫びにデュークモンは戸惑うような声を出すと、静かに戦いを眺め始める。
デュークモンとヴィヴィオがこの世界にいるのは、簡単に言えばルインだけでは心配になったリンディが二人にブラックウォーグレイモンXを連れ帰るように頼んだからだ。
本来ならばリンディ自身が赴いてブラックを無理やりにでも連れ帰ろうと考えていたのだが、ブラックウォーグレイモンXがリンディの言う事を聞く可能性など殆どゼロに近い。ならば実力的にも問題なく、尚且つブラックウォーグレイモンXが戦いたくないと思っているヴィヴィオならばと考えて二人を送り込んだのだ。そして二人はすぐに捜索を開始し、ユウと戦い続けているブラックウォーグレイモンXを発見したと言う状況である。
そんな事を知らない桜は突如として現れたデュークモンの姿を驚きながら見つめていたが、吹き荒れ続ける衝撃波に気がつき、デュークモンの足にしがみ付く。

ーーーガシッ!!

「・・・何か、私に用でもあるのか?」

「お願い!!ブラックウォーグレイモンXを止めて!!同じ究極体の貴方なら出来るでしょう!?」

「・・・・・確かに私ならば、あの戦いに介入する事は不可能ではない」

「だったら!!」

デュークモンの言葉に桜は喜びの声を上げた。

究極体であり、ロイヤルナイツの一員であるデュークモンならばブラックウォーグレイモンXと互角に戦う事が出来るのは間違いない。そう思った桜は漸く戦いが終わると安心するが、デュークモンは全く戦う構えを取らずに、両腕を組みながら静かに戦いを観察し続ける。

「・・・・・悪いが、私はこの戦いに介入する気はない。例えその結果がどうなろうと私は一切この戦いには手を出す気はない」

「ッ！！」

「少女よ。確かに私が介入すれば戦いは終わる。だが。その結果は必ず両者の心に傷を残す。互いの信念を賭けた戦いだ・・・・部外者の私が手を出すのは侮辱でしかない・・・（それに残念だが、私もあの少年は気にいらん。確かに力が強く、究極体の領域に足を踏み入れている。だが、よりにもよって“聖王”の血筋とは）」

ーーーギュゥッ！

（・・・・・）

デュークモンは桜に気づかれないように手を強く握りながら、ブラックウォーグレイモンXと戦っているユウを睨みつけ、融合しているヴィヴィオも先ほどとは打って変わり、静かに戦いを見つめる。

ヴィヴィオとデュークモンが訪れたのは丁度ユウが『メタルガルルモン』を模したバリアジャケットに変わった時だった。その時は二人とも人間の身でブラックウォーグレイモンXと互角に戦っているユウの存在には驚いたが、その驚きはユウが発した虹色の魔力光ー『カイゼルファルベ』を目にした瞬間に吹き飛び、ブラックウォーグレイモンX同様に苛立ちが募り始めた。二人にとって“聖王”

とはそれだけ心を乱す単語なのだ。

「・・・・・・今は戦いの結末を待つのだな。その結果がどうなろうと、それが全てなのだから」

「ユウ・・・・・・」

デュークモンの言葉に桜は両手を祈るように組みながら、ブラックウォーグレイモンXと戦い続けているユウの姿を見つめるのだった。

ーーードゴオオオ

上がっている筈なのに、全然差が縮まってない！！）

（ユウ！！こうなれば遠距離からの攻撃で行きましょう！！）

（駄目だ！ガルルキャノンでも決定的なダメージは与えられない！・・・・・一か八か、ブラックウォーグレイモンXを倒すには『消滅（デリート）』しかない・・・・・リインフォースとユニゾンしている今なら使え…）

「考え事をしている暇はないと言った筈だ！！」

ーーードゴォン！！

「グッ！！」

一瞬の隙を衝かれ、ユウはブラックウォーグレイモンXの蹴りによって空中に浮かび上がった。

そしてそのままブラックウォーグレイモンXは更なる追撃を加えようと、両手のドラモンキラーを鋭く光らせ、衝撃によって思うように動く事が出来ないユウの体に突き刺そうとする。だが、その直前にユウは素早く右腕を振るい、狼の手甲から砲身を展開し、至近距離で圧縮魔力弾をブラックウォーグレイモンXに撃ち出す。

「ガルルキャノン！！！」

ーーードォオオオン！！！

「グッ！！」

流石に威力が上がっている上に至近距離でガルルキャノンを食ら

った為に、ブラックウォーグレイモンXは僅かに苦痛の声を上げ、ダメージからか動きが止まってしまう。
　そしてユウもガルルキャノンを至近距離で撃ち出した衝撃によってダメージを受けてしまうが、逆にその衝撃を利用してブラックウォーグレイモンXから距離を取り、その体勢のまま動きが止まってしまっているブラックウォーグレイモンXに向かって冷気を纏わせたガルルキャノンを連射する。

ーーードォン！！ドォン！！！ドォン！！

「その程度の攻撃が効くと思うな！！」

　ユウのガルルキャノンの連射に対して、ブラックウォーグレイモンXも両手のドラモンキラーの先に黒いエネルギー球を作り出し、迫って来ているガルルキャノンに向かって投げつけ相殺する。

「フン！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

（見えた！！右側だ！！）

　ブラックウォーグレイモンXがガルルキャノンを相殺する姿を見ていたユウは、ブラックウォーグレイモンXの攻撃が甘い場所を見つけた。

（ブラックウォーグレイモンXの右腕のドラモンキラーの爪は戻っていない。攻めるのなら右側からだよな、リインフォース？）

（はい・・・・・ですが、それは相手も分かっているでしょう。特

に私の半身ールインフォースはその事を一番理解している筈です。今までの攻防でも右側に見えない障壁が幾つも展開されていました・・・狙うのならば一撃必殺しかないです。しかも完全に相手の隙をついての攻撃で）

（だよなぁ・・・・・だけど一体どうやってアイツの隙を作ればいいんだよぉ？）

リインフォースの言葉にユウは納得したような声を出しながらも、その策の難しさを一番理解していた。

既にブラックウォーグレイモンXとそのパートナーであるルインは、ユウの最大の攻撃ー『消滅（デリート）』を読んでいる。だからこそ、ブラックウォーグレイモンXはユウの武器であるグレイソードを破壊しようと動いている。

『オメガモンX』を模したバリアジャケットに、その前の『パラディンモード』での攻防でブラックウォーグレイモンXはユウの最大の一撃に必要な物を理解しているのだ。その為に先ほどの凄まじい攻防でもユウには『消滅（デリート）』を発動させる隙が存在していなかった。

その事を理解しているユウとリインフォースはどうやってブラックウォーグレイモンXの隙を作ろうと考えていると、ガルルキャノンとエネルギー弾のぶつかり合いによって発生した煙を切り裂きながら、背中のバーニアを吹かしているブラックウォーグレイモンXがユウに向かって飛び出す。

「オオォォォォォォォォォォォッ！！！」

「クゥッ！！」

ーーーガキィィィィィィィィン！！！

煙の中から飛び出すと共に突き出されたブラックウォーグレイモンXの左腕のドラモンキラーを、ユウはグレイソードで受け止め、凄まじい火花が辺りに散った。
だが、此処でユウにとって不幸な事が起きた。ドラモンキラーと激突し合っているグレイソードに罅が入り始めたのだ。

ーーービキッ！！

「ゲッ！！」

「ムン！！」

ーーードゴォォォン！！

「グゥッ！！」

グレイソードに罅が入った事で動きが止まってしまっているユウを、ブラックウォーグレイモンXは左腕を素早く振るう事で弾き飛ばした。
ユウはその事に声を漏らすが、弾き飛ばされた反動を利用して再び距離を取ろうとする。だが、ブラックウォーグレイモンXはユウが距離を取ろうとしている事を逆に利用し、自身の両手の間に負の力を集中させ、巨大な黒いエネルギー球を作り出し、そのままユウに向かって投げつける。

「ハデスフォーース！！」

「ッ！！（避けられない！！なら！！リインフォーース！！）」

（はい！！）

ユウの叫びにユニゾンしているリインフォースは即座に応じ、二人は魔力をグレイソードに極限まで集中させ、目の前に迫って来ているハデスフォースに向かって、素早くグレイソードを振り下ろす。

「（オールデリィィィィーートッ！！！）」

ーーーバッシュン！！ッ！！

ユウの振り下ろしたグレイソードとハデスフォースが触れ合った瞬間に、ハデスフォースはその凄まじい威力を発揮する事無く、まるで最初から存在していなかったかのように消滅した。

ユウの持つデバイス―“オメガ”の真の力。対象を全て『消滅（デリート）』させる力が発揮されたのだ。

本来のユウには劣化の能力『初期化（イニシャライズ）』しか扱う事は出来ない。未熟さゆえだったが、今はリインフォースと言う戦いと魔法に精通した者のサポートも受けている為に『オメガ』の真の力を発揮出来るのだ。

しかし、『オメガ』の凄まじい能力をその目で見ても、ブラックウォーグレイモンXは慌てる事無くユウに向かって構えを取り始める。

「中々の能力だが、当たらなければ意味のない技だ。それに、後一度が限界のようだな」

ーーービキィッ！！

「クッ！！」

ブラックウォーグレイモンXの言葉を肯定するように、更に罅が

広がったグレイソードをユウは悔しげに見つめた。

（・・・・悔しいですが、奴の言葉は当たっています・・・・それに私とユウの魔力も底をつく寸前です。このまま戦ったとしても、全力戦闘では五分持てばいいぐらいです・・・・・更に『オールデリート』の使用を考えたら）

（分かっているさ・・・・・一か八かに賭けるか・・・・“チャンス”にッ！！）

ーーースチャッ！！

ユウは覚悟を決めると共にグレイソードの剣先をブラックウォーグレイモンXに向けると共に、ガルルキャノンの砲身を後方に構えた。

その様子にブラックウォーグレイモンXも次の攻防で戦いが終わると確信するが、同時にユウの行動に疑問を覚えていた。ユウの今の構えから考えて、突進してグレイソードを突き刺そうとしているとしか考えられない。だが、そのような策などブラックウォーグレイモンXからすれば、真っ向からでも粉砕出来ると言う事はユウも理解している筈。にも関わらずにユウは構えを変える事無く、全神経を集中させ隙を探し続けている。

その事がブラックウォーグレイモンXには疑問以外の何ものでもなかったが、考えても仕方がないと思い、自身も次の攻防で決着をつける為に力を集中させ始める。

そしてブラックウォーグレイモンXとユウの気迫が混ざり合い、辺りの空気が凍りつく気配を感じながら桜が祈るような気持ちで戦いを見つめていると、意識を失っていたなのは、フェイト、はやての手が僅かに動く。

ーーーピクッ

「ッ！！なのは！フェイト！！はやて！！大丈夫！？」

「・・・・・桜・・・・・お姉ちゃん？」

「・・・・桜？」

「桜ちゃん？・・・・・アレ？私ら生きとるん？」

「馬鹿！！生きてるなら、こうやって話せないでしょう！！」

はやての言葉に桜は涙を流しながら怒り、そのまま三人を大切そうに抱きしめる。

三人も桜の様子に申し訳なさそうな顔をするが、すぐにその視線は遠く桜の背後で構えを取りながら睨み合いを続けているブラックウォーグレイモンXとユウの姿を捉える。

『ユウ君！！』

「ユウッ！！」

ブラックウォーグレイモンXとユウの姿を目撃したなのは、はやて、フェイトは悲痛な声でユウの名を呼び、すぐにそれぞれデバイスを構えようとするが、その直前に三人の目の前に白い槍ーグラムが姿を現す。

ーーースチャッ！

『ッ！！』

「静かに戦いを見ていろ。もし介入するならば、その時は私が貴様らに引導を渡してくれる」

「止めて！！三人はユウが心配なだけなのよ！！」

「フッ・・・・・介入さえしなければ私は何もしない。その事を肝に銘じておくのだな」

そうデュークモンは桜達に警告を告げると共に右手に出現させていたグラムを何処へとともなく消失させ、再び腕を組みながら戦いを観戦しだした。

その初めて見るデュークモンの姿になのは、フェイト、はやては困惑した顔をするが、デュークモンは何も告げる事無く戦いを見つめ、ポツリと呟く。

「・・・・動く」

ーーードォン！！

デュークモンが言葉を呟き終えると同時に、ブラックウォーグレイモンXと睨み合いを行っていたユウが後方へとガルルキャノンを撃ち出し、その反動を凄まじい勢いに変えてブラックウォーグレイモンXに向かって突進する。

「ハァアアアアアアアアアッ！！！！」

「フッ！正面からとは・・・・・望みどおり叩き潰してやるぞ！！」

『ユウッ！！』

『ユウ君！！』

突撃して来るユウに向かって左腕のドラモンキラーを振り下ろそうとするブラックウォーグレイモンXの姿に、桜達は悲鳴のような声を上げて、ブラックウォーグレイモンXに叩き潰されようとしているユウの姿を見つめた。

しかし、ブラックウォーグレイモンXのドラモンキラーがユウに向かって振り下ろされる直前に、突如としてユウの進もうとしている前方の左側に障壁が展開される。

ーーーブン！！

「させん！！」

ーーーバキィィィィィン！！

突然出現した障壁にブラックウォーグレイモンXはすぐにユウの策を悟り、振り下ろそうとしていた左腕を無理やり動かし障壁を粉砕した。

その間にユウはブラックウォーグレイモンXの目の前にまで移動していたが、ブラックウォーグレイモンXは慌てる事無く、右腕のドラモンキラーを勢いを完全に殺し切れていないユウに向かって突き出す。

「ドラモンキラーー！！」

（やっぱりそう来たか！！此処だ！！）

ーーーダンッ！！

「何ッ！？」

ブラックウォーグレイモンXが突き出したドラモンキラーがユウの体に当たる直前に、ユウはまるで空中に足場があるかのように不自然な動きで“左側”に移動した。

二人が考えた作戦はシンプルだった。素早く相手に向かって突進し、障壁を利用した急激な方向を転換での隙を衝くと言う簡単作戦だった。当初ユウとリインフォースは攻撃の手が甘いブラックウォーグレイモンXの右側から攻撃し、『消滅（デリート）』させるつもりだった。だが、当然ながらブラックウォーグレイモンXとその身に融合しているルインも自分達の隙については一番に理解している。

だからこそ、ユウとリインフォースはあえて攻撃も防御も完璧な左側からの攻撃を選択したのだ。

しかもユウには“聖王”の血の中に存在している高速学習と言う能力も持っていた。その能力のおかげで長時間戦い続けていたブラックウォーグレイモンXが取るであろう行動も先読みし、策を万全な状態にしたのだ。

その結果、策は成功し、ブラックウォーグレイモンXの動きはほんの一瞬止まってしまい、ユウとリインフォースは自分達の勝利を確信しながら、左腕のグレイソードに残っている全ての魔力を注ぎ込みブラックウォーグレイモンXに振り抜く。

「（オーールデリーーートッッッ！！！）」

ーーードゴオオオ

その様子に桜達は以前の闇の書の『初期化(イニシャライズ)』の時と同じだと思い、ユウの勝利を確信するが、デュークモンだけは僅かに安堵の息を吐き、静かに桜達にとっての絶望の言葉を呟く。

「・・・・勝者は、やはりブラックか」

『えっ！？』

ーーーバキィィィィィン！！

ーーーードサッ！

『ッ！！』

デュークモンの言葉に桜達が疑問の声を上げると同時に、ブラックウォーグレイモンXに斬りかかった筈のユウのバリアジャケットが砕け散り、ユニゾンが解けたリインフォースは地面に倒れ伏してしまった。

その事実に桜達が慌ててユウとブラックウォーグレイモンXの方を注意深く見つてみると、ユウの鳩尾にブラックウォーグレイモンXの“何も装備されていない左拳”がめり込んでいた。

「グフッ！！・・・・・・・・な、何で・・・・・ばれて・・・・・・いったんだよ？」

「惜しかったな。確かに今の戦法には驚いたが、貴様の使った戦法は既に経験している」

口から血を吐き出しながら質問して来たユウに、ブラックは冷静に答えた。

あの瞬間。ユウとリインフォースの『オールデリート』が決まろうとする直前に、ブラックウォーグレイモンXは瞬時にドラモンキラーを装備していた左腕をグレイソードの前に盾にするように翳したのだ。当然ながら事前にハデスフォースを消滅させた経緯を覚えていたユウとリインフォースは、盾にされたドラモンキラーごとブラックウォーグレイモンXを『消滅(デリート)』させるつもりだった。だが、此処でユウとリインフォースにとって完全な予想外の事態が起きた。

“ブラックウォーグレイモンXはグレイソードとドラモンキラーが激突し合う直前に、左腕からドラモンキラーを外して完全に無手になった左腕をユウの鳩尾に突き刺したのだ”。

当然ながらグレイソードはブラックウォーグレイモンXのドラモンキラーを消滅させる所で止まり、ユウとリインフォースはグレイソードをブラックウォーグレイモンXには振り下ろす事は出来なかった。

その事実に全身を激痛に襲われながらもユウは悔しそうな顔をするが、ブラックウォーグレイモンXからすれば当然の事だった。

「貴様の血筋ー“聖王”には散々苦労させられた。俺は自分が戦った相手の事を忘れる事はない。もし奴との戦いの経験が無かったら危なかったがな・・・・・貴様の敗因は戦い方でも実力差でもない・・・・自分以上の強い者との戦いの“経験”の無さが貴様の敗因だ」

「・・・・お前には・・・・・在るのかよ?」

「それが・・・・俺の日常だッ!!」

ーーードゴオオオオオオオン!!

「ガハッ！！」

「ユウッ！！」

バリアジャケットも無く地面に叩きつけられたユウの姿に桜は悲鳴のような声を上げ、なのは、フェイト、はやては目から大粒の涙を流し始めた。

しかし、ブラックウォーグレイモンXは桜達の様子になど構わずに、地面の上で苦痛に苦しんでいるユウに向かって右腕の振り被る。

「もはや戦いは終わりだ。貴様との戦いは苛立ちだけしかなかったが、それもこれで終わる」

「・・・・・あぁ、結局駄目だったのかよ」

「貴様は確かに力と信念も持っている強い敵だった。だが、貴様は俺の記憶を汚した。その事だけは例え神であろうと世界だろうと赦しはしない・・・・・これで終わりだ！！！」

「クソッ！！」

力強いブラックウォーグレイモンXの叫びに、ユウは地面に倒れ伏しながらも悔しげに声を上げるが、ブラックウォーグレイモンXは止まる事は無く、悔しそうにしているユウに向かって拳を一振り下ろせなかった。

ーーーガシィィィィィン！！

「ムッ！！」

「えっ！？」

ユウにブラックウォーグレイモンXの拳が直撃する直前に、ブラックウォーグレイモンXの右腕に無数の色取りどりのバインドが巻きつき、ブラックウォーグレイモンXの拳は完全に動かなくなってしまう。

その事にブラックウォーグレイモンXとユウは驚き、慌てて周りを見回してみると、傷つきながらも目から光を失っていない、なのは、フェイト、はやて、リニス、シグナム、リインフォース、シャマル、クライド、クロノに、両手が逆方向に曲がりながらも立っているザフィーラ、ユーノに肩を借りながら傷口を押さえているヴィータ、そして最後に桜がブラックウォーグレイモンXにそれぞれデバイスを構えていた。

「ユウ君は死なせない！！」

なのはが。

「もうユウを傷つけないで！！」

フェイトが。

「お願いや！！私らにとってはユウ君はとても大切な人なんや！！」

はやてが。

「ユウは私の唯一無二の主です！！その主を殺させたりしません！！」

リニスが。

「例えこの身に変えても、ユウは死なせん！！」

シグナムが。

「彼は私を救ってくれた存在！！絶対に貴様には殺させん！！」

リインフォースが。

「ユウは長き時の中でも稀に見るほどの善人だ！このような戦いでは死なすわけにはいかん！！」

ザフィーラが。

「ユウ君にはもう手を出させません！！」

シャマルが。

「僕らの親友をこれ以上傷つけさせない！！」

ユーノが。

「てめえの好きにはさせねぇぞ！！」

ヴィータが。

「・・・君からすれば僕らの行動が原因だろうが、それでもユウを攻撃するのだけは赦さない！！」

クロノが。

「退いてくれ。これ以上の戦いは無意味だ」

クライドがそれぞれ自分達の考えをブラックウォーグレイモンXに向かって叫んだ。

ブラックウォーグレイモンXはその叫びに無言を貫き、静かに何も叫んでいない桜を見つめると、桜はゆっくりとブラックウォーグレイモンXに近づく。

「・・・・・貴方が言っていた言葉の意味は分かるわ・・・・・私達は確かに貴方に比べれ恵まれ過ぎている・・・・こうやって、死んでしまうかもしれないのに助けてくれる仲間がいるんだから・・・・・だけどお願い！！もうこれ以上ユウを、私達の大切な人を傷つけないで！！」

「・・・・・いい加減にしておけ」

『ッ！！』

突如として響いた静かな殺意に満ちた声に、桜達は驚き背後を振り返ってみると、右手にグラムを構え、左手にイージスを装備したデュークモンがゆっくりと歩いていた。

「忠告して置いた筈だ。この戦いに介入するならば、私が引導を渡すと」

「そ、それは！！」

デュークモンの告げた言葉に桜は恐怖に震えた。

そうデュークモンは確かに忠告していた。戦いに介入すれば引導

を渡すと確かに忠告していた。それを破り、ユウを助けに桜達は入ってしまった。大切な人の為とは言え、忠告を無視して動いたのだからデュークモンが動かない理由は無い。
その事実に今更ながら気がついた桜はデュークモンまでもが敵に回ってしまった事に恐怖するが、それは意外な人物によって止められた。

「止めろ、デュークモン」

「ブラックッ！！しかし！」

ーーーバキィィィィン！！

「・・・・・・フン、やはりこの世界は俺を苛立たせるだけか」

ブラックウォーグレイモンXはデュークモンの言葉に答える事無く、右腕に巻きついていたバインドを一瞬の内に粉砕し、地面に倒れ伏しているユウに背を向ける。

「俺は貴様とあの娘を認めるつもりはない。覚えておけ。デジモンの技を使うのならば、そのデジモンに恥じる行為だけは絶対にするな。もしデジモンを侮辱する行為をしたら、その時はッ！！貴様ら全員をこの世から消滅させてやる！！」

『ッ！！！』

叫ぶと共に放たれたブラックウォーグレイモンXの凄まじい殺気に、その場にいた全員の体は竦み上がり恐怖に震えた。
その様子を横目で確認したブラックウォーグレイモンXはもはや振り返る事無く、静かにその場から去って行く。その余りにも寂し

げなブラックウォーグレイモンXの背にユウは言いようのない悲しみを感じるが、ブラックウォーグレイモンXは振り返る事無く歩いていく。
デュークモンはその様子に融合しているヴィヴィオと共にブラックウォーグレイモンXの悲しみを感じ取るが、それを押し隠し地面に倒れ伏しているユウに声を掛ける。

「・・・・忠告だ。“聖王”としての力。その力を決して聖王教会の人間の前では使うな・・・・使えば貴様が望む望まないに関わらずに、その力と血を利用される事になるだろう」

「どういう意味だよ？それは？」

「私がするのは忠告だけだ・・・・・・去らばだ」

ーーーバサッ！！

デュークモンはユウの質問に答える事無くマントを棚引かせながら、ブラックウォーグレイモンXの後をついて行き、ユウ達は疑問に満ち溢れながらも治療を行う為にアースラへと転移し、後には荒れ果てた世界だけが残されるのだった。

特別編02、在り得ざる異界の者達の出会い、エピローグ（注コラボ）

ブラックとユウの激戦から数日後。
未だにブラックはユウと戦った世界から元の自分の世界には戻らずに、とある岩山に存在していた洞窟の奥で深い眠りについていた。別に元の世界に戻ってから眠っても良かったのだが、戻る前に精神的に暴走してしまう可能性が高かったので、偶然見つけた洞窟の中で精神を安定させる為にブラックは眠りについたのだ。因みに既にブラックの首に何時ものネックレスが装着されているので、ブラックの反応を見つける事は管理局には出来なくなっている。
ルイン、ヴィヴィオ、ギルモンはその様子を心配そうにブラックの前で見つめるが、ブラックは三人の様子に構わずに眠り続ける。

「・・・・ルインお姉ちゃん？パパは何時起きるの？」

「もうずっと眠っているんだよ？心配だよ？」

「大丈夫ですよ、ヴィヴィオちゃんにギルモンちゃん。ブラック様はもうすぐ目覚めます。今は戦いの疲れが癒えるのを待ちましょう（最も今回のは戦闘の疲れではなく精神的なものでしょうね。余程あの少年と女の子が殺せなかった事が気に入らなかったんでしょうね・・・・・・それにしてもあの二人は何があるんでしょうか？デジモンやウォーグレイモン、そして聖王の事以外でも苛立っていたようですが？）」

ルインにもブラックが本当に苛立っていた理由は分からなかった。
確かにユウはブラックが怒りを覚える行動を取ってはいたが、それでも桜に苛立つ理由がルインには理解できなかった。デジモンの技を何故ユウ達が知っていたのかもルイン達は分かってはいない。

（恐らくその全ての源がブラック様が苛立っていた真の理由ですね。一体彼らには何があるんでしょうか？）

そうルインは内心でブラックとユウ達の関係性に疑問の声を上げるが、答えられるブラックは未だに深い眠りの内に入り込み、答える事はなかった。

ルインはその事に困ったように首を傾げ始めると、手を繋ぎながら横に立っていたヴィヴィオが突如としてルインの手を離し、パートナーであるギルモンと共に入り口の方へと歩き出す。

「ん？ヴィヴィオちゃん？何処に行くんですか？」

「・・・・あの人達に聞きに行くの。パパが如何してあの人達を嫌っていたのか」

「ブラックが答えられないのなら、あの人達に聞いた方が早いよ」

「なるほど、確かにその手がありましたね・・・・・とは言ってもですよ？私達は既に彼らと敵対していますから、絶対に答えてくれるとは思えないんですけど？」

そうルインがヴィヴィオとギルモンに言うのも当然だろう。

何せヴィヴィオとギルモンはともかく、ブラックとルインはこれ以上に無いと言うほどにユウ達と敵対した。そのルインが赴けば確実にまた戦いが始まるだろう。しかもルイン一人ではユウ達に勝てる可能性はゼロに近い。この世界のルインを初期化させたのは間違いなくユウなのだから。

その事は既にヴィヴィオとギルモンも理解しているが、二人はそれでも向かうつもりだった。

ヴィヴィオは自分の大切な父親の為に。ギルモンは友であるブラックの為に。

「・・・・パパが如何して怒っていたのかを知りたいの・・・・それに・・・・あの人はヴィヴィオと同じ血を引いている人だから」

「僕も知りたい。あのユウって子が何者なのかを」

「ヴィヴィオちゃん、ギルモンちゃん・・・・分かりました。だけど、私も一緒に行きますよ。まぁ、隠れて聞き出せば大丈夫でしょう」

「ありがとう！ルインお姉ちゃん！」

ルインの言葉にヴィヴィオは嬉しそうな声を上げて、ルインに抱きつき、三人は眠りについているブラックに背を向け外へ出て行った。ユウと桜がいるであろうこの世界の地球に向かって。

そしてルイン達が地球に向かってから少し経つと、洞窟の入り口の方から足音が響き始めた。

その足音は徐々に眠りについているブラックの近寄り始め、ブラックの目の前で足音が止まると共にブラックの目に光が宿る。それと共にブラックは自身の目の前に立っている人物ーリンディに視線を向けると、リンディは呆れたような顔をしながらブラックに質問する。

「フゥ〜、随分と暴れたみたいね？」

「フン、貴様には関係ない」

「そうね、だけど・・・・・何をそんなに苛立っているの？今日の貴方には何時もとは違って、苛立ちしか感じられないわ」

「貴様には関係ないと告げた筈だ・・・・さっさと先に元の世界に戻っていろ・・・・ルイン達が戻ったら俺もすぐに戻るからな」

そうブラックはリンディに苛立ちに満ちた声を出すと、再び目を瞑り深い眠りの内につこうとする。

しかし、リンディは逆にブラックの様子に不安を覚えた。確かに何時もブラックはリンディに冷たい言葉を言うが、今の言葉からは深い苦悩が感じられた。

その理由までは分からずとも、リンディには今のブラックを放って置くのは危険だと判断し、ブラックの体に寄り添うように体を預ける。

「・・・・・何のつもりだ？」

「別に何でも無いわ・・・・ただ私も少し眠くなったのよ。貴方とルインさん、ヴィヴィオ、ギルモン君の事が心配で眠れなかったんだから・・・・だから少し体を借りるわね」

「・・・・・好きにしろ」

ブラックはリンディの言葉に素っ気無く答えると深い眠りに落ちていき、リンディはその様子に僅かに嬉しげな笑みを浮かべながら、ブラックの心を少しでも落ち着かせようと傍に寄り添い続けるのだった。

そしてその頃。リンディが訪れた事を知らないルイン達は地球に到着し、ユウ達を捜索しようと始めに翠屋に向かって見ると、翠屋の入り口には『貸切』と言う看板が掛けられていた。
それの意味に気がついたルインは注意深くヴィヴィオとフードを被ったギルモンと共に、認識阻害の魔法を使用しながら窓から中を覗いて見ると、高町家、テスタロッサ家、八神家、ハラオウン家、そして月村家にアリサが、バインドによって椅子に縛られながら座っているユウと桜と囲むように立っていた。
その様子にルインとヴィヴィオ、ギルモンは首を傾げるが、すぐに彼らも自分達が気になっている事を知る為に行動しているのだと気がついた。特に今のユウは治療が終わっているとは言え、魔力を全く感じない。話を聞くには今しかないだろう。
それを肯定するように私服姿のこの世界のリンディがユウと桜に向かって声を上げる。

「では、これより第二回、翠屋尋問大会を行います」

「その前に質問だけど、幾ら治療が終わっているとは言え、何で俺達は縛られているんだ？」

「君達は先日の相手について何か知っているようだったからな。多分、君のことだから縛っておかないと逃げると思って」

ユウの質問に対してクロノは簡潔に答え、他のメンバー達も同意するように一斉に頷いた。
その様子にユウは僅かに冷や汗を流すが、クロノの言葉は正しいので何も言う事は出来なかった。しかし、別の疑問が浮かび、真剣に自分を見つめてくるクロノに再度質問する。

「翠屋でやる理由は？」

「君達の場合、無理矢理に聞きだすよりも、君達の家族や知り合いから『お願い』された方が効果的だからだ」

クロノは再び迷い無く簡潔に答えた。

その様子にユウと桜は諦めたように溜め息を吐いた。此処数日は怪我の治療を優先していたので、質問して気配は無かったが、それでもブラックの事は全員が気になっていたのだろう。

あの世界さえも滅ぼしてしまう圧倒的な力。自分達が最強だと思っていたユウさえも圧倒した存在。

そのブラックの事が気にならない筈は無い。その事が分かった桜は僅かに顔を俯かせながらクロノに質問する。

「・・・・・聞きたい事は分かるけど、一応聞くわね？聞きたい事って？」

「言わなくても分かってると思うが、先日戦ったあの相手についてだ。管理局のデータベースでも調べたが、あのような生物と遭遇した記録など一度もない。念の為、この場の全員にも尋ねたが、知っている人は誰もいなかった・・・・・だが、何故か君達2人はあの相手の名前を知っていた。特にユウは、ブレイズでのバリアジャケットと魔法が、相手の姿形と使った能力に類似点が多すぎる。更に向こうも君達に関しては苛立っていた。言い逃れは出来ないぞ」

そうクロノが真剣な声でユウ達に告げると、ユウと桜はゆっくりと顔を見合わせ、念話で会話を始める。

（如何する？）

（・・・・・まあ、いいんじゃないの。話しちゃって。別に絶対に

黙ってなきゃいけないって事はないんだし。信じてくれるかどうかは知らないけど）

（そうだな）

桜の言葉にユウは納得の声を上げると、真剣な瞳で見つめてくるクロノの瞳を見つめながら声を出す。

「別に話してもいいけどさ、絶対に信じてくれないと思うぞ？」

「それを判断するのは僕達だ」

「ハァ～・・・・・・・簡単に言えば、ブラックウォーグレイモンは、俺達が前世で見てたアニメに出てきたキャラクターだ」

『・・・・・・・・・・・・ハァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！』

（ブラック様がアニメキャラクターー！？）

（パパがアニメのキャラクター！？）

ユウの告げた事実にクロノ達は呆気に取られたような顔をしながら声を上げ、外で話を聞いていたルインとヴィヴィオも驚愕の声を内心で上げた。

その様な事実はルインは全くブラックから聞いた事は無いと思い、同じように驚いているヴィヴィオとギルモンと顔を見合わせるが、フッとブラックとリンディと共にデジタルワールドを旅していた時の事を思い出す。

（・・・・そう言えばずっと前にブラック様の本当の故郷について聞いた事がありましたね。確かにあらゆる世界の情報を無作為に集めて物語として語っている世界ー“異界”がブラック様の本当の故郷だと・・・・・・ッ！！と言う事はあの二人もブラック様と同じ“異界”の人間！？）

ルインはそう内心でユウと桜の正体に気がつくと、再びヴィヴィオとギルモンと共にユウ達を真剣に見つめ始めると同時に混乱が僅かに治まったのかクロノがユウに質問しだす。

「ちょっと待て！　言いたい事は沢山あるが、先ず１つ。前世ってどういう事だ！？」

「言った通りだ。高町家の人は知ってるけど、俺と桜は前世の記憶・・・・つまり、この世界に生まれてくる前に、違う人間として生きてきた記憶があるんだ」

「ちょ、ちょっとなのは！知っていったって本当なの！？」

「う、うん」

質問して来たアリサになのはは僅かに戸惑いながらも頷いた。
その事実に高町家の人々を除いた全員が呆気に取られた顔をし始めると、ユウと桜が更なる事実を告げる。

「因みに俺が死んだ歳は２６歳だ」

「私は２５ね」

『・・・・・・・・・・』

もはや告げられた真実に高町家の面々以外は言葉も出せないのか、全員が困惑したように顔を見合わせた。
その様子に気がついたリニスは全員の困惑を理解しながらユウと桜の言葉に嘘が無い事を補足するように説明しだす。

「2人の言っている事は本当ですよ。少なくとも、ユウは嘘は言っていません」

「・・・・・確かに、それが本当なら、ユウ君が昔から大人びていた事にも説明がつくし、初めて桜さんと話した時に、同年代と会話してるような錯覚を感じた事も納得出来るわね」

「まあいい。仮にその話が本当だったとして、その次の話は・・・・・」

リンディの言葉にクロノは全面的には納得出来なくても話を進めようと、ユウと桜にブラックについて更に詳しく聞こうとするが、その前に桜が答える。

「それも本当よ。こっちの世界じゃやってないけど、ブラックウォーグレイモンは前世で見てたアニメのキャラクターよ。何でこの世界に現れたのかは知らないけど。あ、そういえばブラックウォーグレイモンって、次元の壁を越える能力があったっけ」

(やはり彼女とあの少年は異界の人間ですね。赤の他人でありながらブラック様の真実を此処まで知っている人間だとすれば、確かにブラック様の故郷の異界の人間しかありませんね・・・・・最も知っているのは上辺だけでしょうが)

そうルインは桜の言葉から判断した。
ユウと桜が知っているのはブラックウォーグレイモンがどのような存在なのかだけ。其処に存在していた感情までは知らないのだ。
その事を今の桜の言葉で確信したルインは更に注意深く話を聞こうと耳を研ぎ澄まし、ユウが告げる言葉を耳にする。

「それに、俺のバリアジャケットや魔法がブラックウォーグレイモンとそっくりなのも当然だ。俺の魔法は、その前世で見てたアニメの同シリーズに出てたブラックウォーグレイモンの同種族のウォーグレイモンをモチーフにしたものだからな・・・・因みに最後に現れた白い騎士ーデュークモンも話は違うけど同じデジモンと呼ばれる種族だ・・・・・あの時は本当に運が良かった」

「そうね。もしデュークモンまで動いていたら、私達全員この場にはいなかったわよ」

「如何言う意味だ？」

「・・・・・正直に言うわね。あの最後に現れた騎士ーデュークモンの実力は・・・・私達が戦ったブラックウォーグレイモンと同等か、それ以上の実力なのよ」

『ッ！！！』

桜が告げた事実にブラックと戦ったメンバー全員が目を見開いた。
ユウが全力で戦っても勝てなかったブラックと互角かそれ以上の実力を持った存在ーデュークモン。
その事実はブラックと戦った全員からすれば信じられない事実だったが、残念ながら真実だった。

「デジモンにはそれぞれ世代ってのが在ってね。その中でも究極体って呼ばれる連中がいるのよ」

「究極体だって？」

「あぁ、その究極体の連中はどいつもこいつも化け物でな。ブラックウォーグレイモンもその中に名前を連ねていて、更にその究極体の中でも上級に名を連ねているのがデュークモンなんだ・・・・因みに言って置くが、その上級連中はその気になれば世界を滅ぼせる連中だ。世界を幾つも滅ぼした闇の書の闇の防御プログラムもその連中からすれば、雑魚だな」

『なっ！？』

ユウが告げた事実にリインフォース、シグナム、ザフィーラ、ヴィータ、シャマル、そして管理局の人間であるリンディ、クロノ、クライドは驚愕した。

管理局と言う巨大な組織の力を持ってしても滅ぼせなかった闇の書の闇を雑魚呼ばわりする存在。もし本当にそんな存在がいるとすれば確かに脅威としか言えないだろう。

因みにユウの雑魚呼ばわりの発言を聞いたルインは、ユウを殴り飛ばそうと窓ガラスを破壊して内部に飛び込もうとしていたが、直前に大人モードに変わったヴィヴィオとギルモンによって押さえ込まれて動く事が出来なかった。

そんな事が外で起こっている事は知らずにユウは真剣な顔つきのまま話を進める。

「・・・・・まぁ、それは俺と桜が知っているブラックウォーグレイモン何だけどな」

「？如何言う意味だユウ？」

「・・・・多分だけど、あのブラックウォーグレイモンは俺と桜と同じで前世が人間だった奴なんだと思う」

『ッ！！』

「多分じゃないわね。先ず間違いなくあのブラックウォーグレイモンの正体は、私達と同じよ。それだったら幾つかの疑問も分かるわ。ユウのウォーグレイモンの姿を模したバリアジャケットに怒った事や、皆がデジモンの技を使用した事に苛立ったのかが分かるわ」

「え～と？桜お姉ちゃん？本当にあの人は、人間だったの？」

そうなのはが桜に質問するのも当然だろう。

何せブラックは本気でユウと桜だけではなく、なのは達も本気で殺そうとしていた。確かに全員生き残ることは出来たが、それでもザフィーラは折れた両手を包帯で吊るしているし、串刺しにされたヴィータは車椅子に座っている状態である。更に他のメンバーも服の中には未だに包帯が巻かれている状態だ。

その様な状態にされたなのは達には、ブラックの前世が人間だったとはとても思えなかったが、ユウと桜にはブラックが人間だったと確信していた。

「信じれないだろうが、本当だろうな」

「・・・・それが事実だとすれば、尚更に謎だ。ユウの姿に苛立ちを覚えていたようだが、それだけであそこまで君と桜を殺そうとする筈は無いだろう」

（いいえ、ブラック様からすれば充分な理由ですね。ウォーグレイモンは体を張ってブラック様を救ってくれた存在。その存在を侮辱されたように感じたのでしょう・・・・・しかし、これでブラック様が何故苛立っていたのかは分かりましたし、気づかれる前にさっさとこの場から離れましょうっと）

そうルインはクロノとは逆にブラックの行動の真の意味に気がつき、ヴィヴィオとギルモンと共にソッと翠屋の前から移動しブラックがいる世界に戻って行った。しかし、この時にルイン達が戻ったのは運が良かっただろう。どちらかの運など分かりきった事ではあるが。

その後もユウと桜の話は続き、なのは達の事もアニメで知っていたり、ユウの前世での女性関係の事や、死んだ理由が神のミスだったりした事は説明したが、最終的には全員が受け入れてくれた。

その事にユウと桜は感謝しながらも、内心ではブラックの告げた言葉の事がずっと気になり続けていた。

『その身に教えてやろう。貴様らがどれだけ恵まれて生まれて来たのかを！！！』

（・・・・アイツのあの言葉・・・・何が在ったんだアイツに？）

（恵まれてか・・・・・・一体何があったのよ？）

そうユウと桜は内心で疑問の声を上げ続けるが、答えられるブラックは未だに静かに眠り続けていた。

そしてある程度時が経ち、全員がユウと桜の正体を受け入れ、それぞれ自分達の家に戻ろうとするが、その前にユウはクロノに質問する。

「なぁ、クロノ？ブラックウォーグレイモンの奴の事は管理局に説明するのか？」

「・・・・本来ならば此処までやられれば、彼は次元犯罪者に登録すべきなんだが、そもそもの原因は僕の部下の攻撃が原因だから、彼の事は管理局には報告するつもりはない・・・・彼と敵対するのは本気で命を捨てるようなものだからな」

「そうか・・・・まぁ、確かに命を捨てるようなものだな。戦って分かった事だけど、アイツは敵に対しては本気で容赦が無い。多分、管理局の人間じゃ誰もアイツを倒す事は出来ないだろう。それだけアイツは強すぎる」

「やはりそうか・・・・・・とにかく上層部には彼の事は内密にして、怪我は負ったけど彼は倒したように報告して置こう。幸いにも彼らの反応は消失していたから、誤魔化すのは何とかなる」

「ありがとな、クロノ」

「気にするな。正直僕も彼とはもう戦いたくないと言うのが本音だ・・・・・それじゃぁ、僕は帰る」

クロノはそう告げると共にリンディとクライドと共に翠屋を出て行った。

それを確認したユウも高町家の面々と共に自分達の住んでいる家へと帰っていった。

そしてその日の深夜近く。

ユウは猫形態になったリニスを膝の上に乗せながら、高町家の屋根の上で何かを悩むような顔をしながら空を見つめていた。

「・・・・・ユウ？何をそんなに悩んでいるんですか？」

「・・・・・ブラックウォーグレイモンの事が気になってな・・・・・」

「彼の事ですか・・・・・正直に言えば私は彼が好きになれません・・・・何故あそこまでユウと桜を否定していたのか、納得出来ませんから」

「否定か・・・・・・多分それが一番の理由なんだろうな」

「如何言う意味ですか？」

「・・・・・アイツは、ブラックウォーグレイモンは多分否定されたんだ。何もかもに」

「えっ？」

ユウの告げた言葉にリニスは驚き、思わずユウの膝の上から立ち上がり、ユウの顔を見つめると、ユウは僅かに苦悩したような顔をして話し始める。

「俺が知っているブラックウォーグレイモンは、自分の存在意義に悩んでいたんだ。だけどアイツは最初から全部知っていたはずだ。自分が生まれた理由を」

「世界の安定を歪めるですか・・・・・確かにそんな存在に生まれたいとは誰も思いませんよね。でも彼はその存在として生まれた」

「あぁ、だからアイツは俺達が認められなかったんだ・・・・・・その上、多分その悩みから救ってくれたのが、本物のウォーグレイモンだったんだ。だから、アイツは俺を赦せなかったんだ。自分を救ってくれた者を汚した俺が」

「ですが、それはユウも知らなかった事です。彼がしたのは言い掛かり以外の…」

「他人からすればそうなんだろうけど、アイツの気持ちが納得出来なかったんだ・・・・・それに最後には俺達を助けてくれたしな」

「助けたですか？」

「あぁ、デュークモンは本気で皆に引導を渡そうとしていた。それでも止まったのはアイツが声を掛けたからだ・・・・・アイツからすれば助ける気なんて無かったんだろうけど、助けられた事には違いないさ」

そうユウはリニスに告げると、服の中から修復が終わったブレイズとアイシクルを取り出し、二つのデバイスを見つめながら一つの決意を固める。

「リニス・・・・俺は決めたぞ・・・・・・もう今回のような無様な戦いはしない・・・・・今までは持っていた力で満足したけど。アイツが言っていたように『ウォーグレイモン』や『メタルガルルモン』、そして『オメガモン』の名を侮辱するような戦いは絶対にしない・・・・皆を本当に護る為にもっと強くなるつもりだ」

「なら、私も一から自分を鍛え直します。もうユウの足手纏いになるのは嫌ですからね」

「ありがとうな、リニス」

そうユウとリニスは互いに決意を新たにすると、隠れて二人の会話を聞いていた桜、なのはもユウの足手纏いにはもう絶対にならないと決意を固めた。

そして他のブラックと戦ったメンバーも、別々の場所で更に上を目指す事を決意しているのだった。

そしてその頃。何故ブラックが苛立っていたのかを理解したルイン、ヴィヴィオ、ギルモンはブラックが眠っている洞窟を目指して移動していたが、その前に一つの岩場の上に立って空をリンディと共に見上げているブラックを発見する。

「リンディさん！それにブラック様！！お目覚めになったのですね！！」

「パパッ！！」

ーーーガシッ！！

目覚めているブラックの姿にルインとヴィヴィオは喜びの声を上げ、ヴィヴィオはブラックの体に抱きつき、ギルモンとルイン、そしてリンディはその様子を微笑ましげに見つめた。

ブラックは自身の体に抱きついて来たヴィヴィオに僅かに視線を向けると、無言でヴィヴィオを左肩の上に乗せ、ヴィヴィオは嬉しげにブラックに寄り添う。

その様子に更にリンディは微笑ましげに見つめていると、ルイン

がリンディに質問をしてくる。

「リンディさん？何時の間に来たんですか？」

「そうね・・・・・大体三、四時間前よ。その後は彼が目覚めるまでずっと傍にいたわ」

（やられましたッ！！クゥゥゥゥーーッ！！あの少年と少女が気になっていたとは言えブラック様の傍を奪われるとは！！チャンスを逃してしまいました！！）

そうルインは嬉しげな笑みをしているリンディの横顔を見ながら内心で声を上げるが、リンディはルインの様子には気がつかずに、ヴィヴィオの相手をしているブラックを見つめる。

その様子に悔しがっても仕方がないと思ったルインは渋々と自分の心を落ち着かせて、ブラックに声を掛ける。

「ブラック様。彼らはブラック様と同じ異界の人間だったのですね？」

「ッ！！何ですって！？この世界に彼と同じ異界の人間がいたと言うの！？」

ルインが告げた事実を耳にしたリンディは心の底から驚き、大声でルインに質問した。

リンディもブラックの本当の故郷ー“異界”の異常さは理解している。その世界はブラックの記憶を見たリンディでさえも信じられないと言う想いしか抱けなかった世界。

その世界の人間が他にもいるとなればリンディからすれば驚く以外の何ものでもなかったが、同時にブラックが何故苛立っていたの

かも僅かに理解出来た。同類である存在と出会った事で、ブラックの心が乱れたのだ。その事が分かったリンディは険しい視線をルインに向けると、ルインは肯定するように説明しだす。

「えぇ、そうです、リンディさん。今回ブラック様が戦った相手は、ブラック様の本当の故郷ー異界の人間です。最もそれ以外にも私達からすれば赦せない理由が存在していましたけどね」

「・・・・・そう、詳しい話は戻ってから聞くわね。この場で聞くと私も赦せなくなりそうだから」

「賢明な判断です」

リンディの言葉にルインは険しい顔をしながら同意を示した。
その様子を横目で見ていたブラックは、静かに抱えていたヴィヴィオから目を外し、ルインに視線を向ける。

「・・・・・連中に聞いてきたのか？」

「いえ、丁度彼らが自分達の正体を他のメンバーに話しているのを隠れて聞いただけです」

「そうか・・・・・・戻るぞ。この世界は俺を苛立たせるだけだ。このままいれば、また奴らと戦う事になるからな」

「・・・・・・・宜しいのですか？今から向かって彼らを殺さなくても？」

「フン、確かにそれは簡単だ・・・・・・だが、少しだけ奴らには興味が湧いた。あの二人がどんな道を歩むのかな。このまま大切な

奴らを護り切れるのか、それとも己の力のせいで全てを失うのかがな」

「なるほど、そう言う事でしたか・・・・・確かにあの二人、特にユウと言う少年の未来は気になりますね。絶望に堕ちるのか、それとも全てを救って幸せになるのか・・・・・興味深い対象です」

ルインはブラックの言葉に納得した。

ユウと桜。特にユウはその身に宿している力のせいで戦いに巻き込まれる可能性が高い。

本人が望むの望まないに関わらず、ユウはその身に戦いを呼んでしまう要素を多分に含んでいるのだ。巨大な力を宿している者は本人の意思などに関わらずに戦いに巻き込まれる。その事を経験しているルイン、ヴィヴィオ、ギルモン、そしてどのような戦いあったのかは分からないが、僅かに状況を推測出来たリンディもブラックの言葉の意味を心から理解し、納得したようにブラックに頷く。

その様子を確認したブラックはルイン、リンディ、ヴィヴィオ、ギルモンの顔を見つめながら深く頷く。

「そう言う事だ。分かったら戻るぞ」

「はい」

「仕方が無いわね」

「帰ったら遊ぼうね、パパッ！！」

「ギルモンも！！」

ブラックの言葉にルイン、リンディ、ヴィヴィオ、ギルモンはそ

れぞれ答え、ブラック達はこの世界から去って行った。
この先にユウ達に何が待ち受けているのかはブラック達にも分からない。
だが、必ず戦いが起きるのだけは確信していた。それを乗り越えられるかどうかは、ユウ達の心次第なのだった。

特別編０２ーーーＥＮＤ

特別編０２、在り得ざる異界の者達の出会い、エピローグ（注コラボ）（後書き

次回から本編に戻ります。

コラボの許可を頂いた友様には本当に心から感謝します！

雷と氷！動き出す大天使！！中編

横浜の港から遠く離れた海上の上空。
その場所には背中に六枚の白き翼を生やし、両肩に十字を象った紋章が刻まれた巨大な肩当てを装備し、顔に仮面をつけ、全身を鎧で覆った天使ーリンディが告げた敵の中心と呼べるデジモンー『ドミニモン』が空中に浮かびながら忌々しげに遠くに見える陸地を睨んでいた。

ドミニモン、世代／究極体、属性／解析不可、種族／主天使型、必殺技／ファイナルエクスキャリバー
『三大天使』デジモンの下に属する主天使型デジモン。表に姿を現すことが少なく、生態についてはよく分からないと言う謎の多いデジモン。同じ天使型デジモン達とは違い、あらゆる事が不明。必殺技は、腕の鎧の手首から光の剣を出現させて敵を斬る『ファイナルエクスキャリバー』だ。

（・・・・フン、やはり人間どもは滅ぶべきだ。そして我は証明するぞ！我の考えた理想の世界！天使型デジモンが中心となり、世界を安定に導く世界こそが正しい事を・・・・オファニモン、セラフィモン、ケルビモンは間違っていたのだ。人間などと言う下らん生き物に世界の事を託すのは・・・・そのせいで我らの世界は）

ドミニモンはそう内心で呟くと共に顔を下に俯かせた。
彼にしても自分達の世界を滅ぼした人間が赦せないのだ。確かに彼の思想は危険なものであるが、それでも彼は自分なりにデジタルワールドの平和を願っていた。だからこそ、三大天使に自分も動かせて欲しいと願い出たのだ。
しかし、三大天使はドミニモンの心と想いを理解しても現状では

ドミニモンの進言を受け入れる訳にはいかなかったのだ。ドミニモンは三大天使の部下の中でも一、二を争うほどの実力を持った強力な存在。

その様な存在が外の世界で暴れれば、確実に人々はデジモンに恐怖を抱いてしまう。だからこそ、既に管理局と言う巨大な組織に犯罪者として登録されていたブラック達に協力を願い出たのだが、ドミニモンにとっては逆に自分に信用が無いと考え、三大天使とは距離を置くようになってしまった。

もちろん三大天使はそうではないと何度もドミニモンに説明を行ったが、ブラック達の活躍を聞いていたドミニモンは三大天使の言葉には耳を貸す事はなかった。

そしてあの運命の日。管理局の暴挙によってデジタルワールドが滅びた瞬間に、ドミニモンは自分の思想を叶える事を決意した。

“真の正義によって管理される世界”。

その世界を創り上げると言う目的を胸に抱いてドミニモンは地球へと潜入したのだ。

(先ずは戦力を手に入れる事が重要だ。偽りの希望も我と同じように戦力を手に入れる事を重要視している。あの世界を歪める究極体がいない内に戦力を手に入れねばな)

そうドミニモンは内心でこれからの行動を方針を固めると、その場から移動しようとするが、その前にドミニモンの前方から背中に四枚の翼を生やした女性型天使デジモン―ダルクモンが急速にドミニモンに近寄って来た。

ドミニモンはそれを目撃すると移動するのを止めてその場に立ち止まり、ダルクモンはドミニモンの前で空中でありながらも膝をつく体勢を取る。

「報告します。近辺の海の中に潜んでいたデジモン五体をドミニモ

ン様の配下に加える事に成功しました」

「良くやったぞ、ダルクモン。流石は“戦場の女神”。その名に恥じぬ結果だ」

「いえ、ドミニモン様のカリスマが在ってこそです。既に私を含めた多くの天使型デジモンがドミニモン様に忠誠を誓っています。私達天使型デジモンが中心となって管理する世界。どうかその世界の為に私も働かせて下さい」

「フッ、言われずとも存分に働いて貰う」

「ハッ・・・・それとご報告ですが、どうやら例の偽りの希望の一味が港の方にいるようです」

「何だと!?まことか!?」

「ハッ!嘘偽りなき事実に御座います」

「ムゥ〜」

ダルクモンの報告にドミニモンは悩むような声を上げた。
ドミニモンにとって自身の計画の一番に邪魔になるのはリンディ達。だからこそ、ムシャモンとゴーレモンを送り込んでリンディ達が何をしようとしているのかを知ろうとした。しかし、結局の所は失敗して、貴重な戦力だったムシャモンとゴーレモンを倒されてしまったのだから、マイナスにしかなってない。
その為に戦力が整うまではリンディ達に手を出すつもりは無かったのだが、近くにリンディ達の仲間がいるとなれば話は変わって来る。

「（連中もデジモンを味方にしようとするはずだ。そしてその為には人間の協力が必要になる・・・・・・フフフフッ、良い手を思いついたぞ）ダルクモン。配下なったデジモンは全て水棲系のデジモンか？」

「ハッ！全て水棲系のデジモンに御座います・・・・ですが、全員成熟期なのですが」

「フム、連中に成熟期五体では心許ないな・・・・そうだ、奴がいた。ダルクモンよ。我らが隠れ潜んでいる島よりあのデジモンを明日までに連れて来い。奴が着き次第に行動を開始する」

「ハッ！すぐに連れて参ります！」

ダルクモンはそうドミニモンの言葉に答えると、ドミニモンの傍から離れて大海原の方へと飛び立って行った。

ドミニモンはそれを確認すると、陸地にいるであろう自身の目的を阻む者に対する策を練り始めるのだった。

場所は変わり港に戻る。

友樹、純平は突然現れた二人の女性ーリスティとティアナ、そしてティアナの首に巻きついているクダモンから護るようにボコモンとネーモンを背後に隠す。

何故デジモンの事をティアナとリスティが知っているのかは二人には分からなかったが、それでも二人は自分達の親友でボコモンとネーモンを見捨てるつもりは無い。だからこそ、二人は険しい顔をしてリスティとティアナから逃げる隙を探し続けるが、その様子に

気がついたリスティは友樹と純平同様に険しい顔をしながら懐に手を入れる。
友樹と純平は何か来ると思い、すぐさま動けるように身構えようとするが、その前にリスティは懐から素早く抜き取る。

ーーーポッ！

「フゥ〜、タバコは美味いね」

ーーードガシャン！！

懐から取り出したタバコに火を点けて、タバコを吸っているリスティの姿に、何か来ると覚悟していた友樹と純平だけではなく、リスティの隣に立っていたティアナとクダモンも地面に倒れ込み、ボコモンとネーモンは唖然としたようにリスティを見つめた。
その様子に気がついたリスティは悪戯が成功したような笑みを口元に浮かべながら、倒れている友樹と純平の間を素早く通り、唖然としていているボコモンとネーモンの顔を見つめる。

「フ〜ン、見た所話に聞いていたデジモンとは違うようだね・・・・・となると君達は別口か」

「ッ！！ボコモンとネーモンに一体何の用なんだよ！？」

ボコモンとネーモンを注意深く見ているリスティの背に立ち上がった純平が叫んだ。
リスティはそれに気がつくと、険しい視線を向けて来る純平と友樹を安心させるように声を出す。

「別に何もする気はないね。だけど、その前に質問だけど・・・・・

君達は人間を憎んでいるかい？」

『えっ？』

ボコモンとネーモンに放ったリスティの質問の意味が分からなかった友樹と純平は驚きの声を上げた。

しかし、逆に質問の意味が分かっているボコモンとネーモンはリスティの質問に対して、悲しげに顔を俯かせる。

「・・・・信じて貰えるかは分からんが、少なくともワシとネーモンは人間を憎む気持ちはもっとらん」

「うん・・・・信じてくれるか分からないけど・・・・僕達がこの世界に来る事になったのは、他のデジモンの説得をしていた時に巻き込まれたからなんだよ」

「フ～ン、ティアナにクダモン？彼らの証言に嘘はありそうかい？」

「少なくとも人間を憎んでいないと言うのには嘘は無さそうです」

「同感だ。小細工を弄するようなタイプにも見えんし。彼らは信用は出来るだろう」

「それを聞ければ安心は出来るよ」

リスティはティアナとクダモンの言葉に嬉しげ笑みを浮かべた。

リスティにはＨＧＳの能力で他人の思考を読み事が出来るのだが、相手は人間ではなくデジモン。幾らＨＧＳでも他生物の心まで読み事が出来ない。だからこそ、ティアナとクダモンの報告でリスティも安心する事が出来た。

そしてティアナとクダモンもボコモンとネーモンの傍に近寄り、注意深く二体の様子を見ていると、ボコモンも訝しげにティアナを凝視する。

「・・・・オレンジ色の髪・・・・特殊なクダモン・・・・・・ッ！！もしやお前さんは！！オファニモン達が残した希望ッ！！」

『オファニモン達の残した希望！？』

ボコモンの叫びを耳にした純平と友樹は同時に声を上げて、ティアナとクダモンを見つめた。

しかし、ボコモンの言葉とは正反対にティアナとクダモンは顔を辛そうに歪めた。ティアナとクダモンは自分達が希望と呼ばれる資格は無いとも思っているのだ。最も護りたかった第二の故郷が失われる事を知りながらも、ティアナ達は動く事が出来なかった。だからこそ、二人はボコモンの言葉には答えられずに辛そうに顔を俯けてしまう。

その様子に気がついたリスティは話を変える必要が出来たと判断すると、気になっていた純平と友樹に顔を向ける。

「で、気になっていたんだけどね・・・・君達は何者なのかな？デジモンの事は政府でも知っている人間は限られているし、警察関係者でもごく一部しか知らない事だ・・・・如何見ても一般人の君達が知っている筈は無いんだけどね？」

「その二人は一般人なんかじゃないよ。十二年ぐらい前に僕達のデジタルワールドを救ってくれた二人なんだよ」

「その通りじゃ。純平はんと友樹はんは、十闘士の力を借りてワシらの世界を救ってくれた英雄なんじゃ・・・・・・そうじゃ！！え

～と？」

何かに気がついたような声を上げたボコモンは、そのままティアナに顔を向けて質問しようとするが、名前が分からずに悩んだ声を上げ始め、それに気がついたティアナは自分の名前を名乗る。

「私はティアナ・ランスター。こっちはパートナーのクダモン。それと協力者のリスティ・牧原さんよ」

「宜しく」

「ティアナはんにクダモン、それとリスティはんやな。それでティアナはん！！十闘士のスピリットを持ってないんか！？『雷』の闘士ーブリッツモンと『氷』の闘士ーチャックモンのスピリットを！？」

「スピリットがあるの！？」

「本当かよ！？」

友樹と純平はボコモンの言葉に声を上げ、ティアナとクダモンを見つめた。

友樹と純平もまた、輝一と輝二同様に十闘士のスピリットに選ばれた人間だった。この二人こそ『雷』と『氷』のスピリットの担い手。その事を知っていたボコモンは、スピリットを持っているであろうティアナに頼み、友樹と純平にスピリットを再び与えて十闘士として覚醒して貰うつもりだった。

しかし、ティアナとクダモンはボコモンの言葉に悩むような顔をしながらリスティに顔を向けると、リスティも困ったような仕草をするが、すぐに冷静に立ち戻り友樹と純平に顔を向ける。

「一先ず場所を変えないといけないね。この話は既に政府まで絡んでいる話なんだよ。誰かに聞かれるのは不味い・・・・事情を知りたければついて来なよ（まぁ、知らないほうが幸せだと思うけどね）」

そうリスティは内心で呟きながらボコモンとネーモンをティアナと共に伴い、港の出口の方へと歩き出し、友樹と純平は困惑しながらもリスティの後を追って行くのだった。

そしてその日の夜。横浜に存在する港に程近いホテルの一室でティアナ、クダモン、リスティは互いに顔を見合わせながら政府から送られて来た資料を読んでいた。

「フ～ム、やはりこの写真に写っているのは先ず間違いなく水棲系のデジモン。ボコモンとネーモンではない。海の中にデジモンが潜んでいるのは先ず間違いないだろう」

「そうね。となると明日もう一度港の方から海を調べて、その後に空中から海を捜索するのが正解ね。それでリスティさん？港の方の避難は既に済んでいますか？」

「せいぜい五割ぐらいだね。長年の平和な生活のせいで、どうも危機感が余り無いんだよ。警察の方も全力で頑張っているんだけど、明日の昼ぐらいで漸く八割ぐらいだろうね」

ティアナの質問に対してリスティは苦虫を噛み潰したような声で答えた。

その答えにティアナとクダモンも苦虫を噛み潰したような顔をする。
デジモンの情報が入ってからすぐにティアナ達は政府の人間に依頼して、横浜の港辺りに住んでいる住民の避難を頼んだのだ。その理由はデジモンが本格的に動いた場合の事を考えて被害を出さないようにする為だったのだが、デジモンと言う存在を隠しての避難の為なので住民には、それほど危機感が持てずに避難を先導している警察との反発が繰り広げられていた。
一応避難を行っている警察関係者には全ての事情を説明してあるので、彼らは全力で人々の避難を行っているのだが、避難させられている人々の方に問題があるので避難は遅々として進んではいなかった。

「まぁ、デジモンの存在を話さないでの避難だからしょうがないんだろうけど、それでも不味い事には変わりは無いだろうね」

「はい、明日には輝一さんと輝二さんが援軍に来てくれるとは言え、それでも状況はかなり不味いです。相手は多分私達よりも人々を襲う事を優先するでしょうからね」

「だろうね。君達の事は相手側に知られているし、戦うよりも憎しみを晴らす方を優先されたら其処までだ。君達が全力を出せば別だろうけど、それを行うと被害が甚大だろうしね」

「その通りだ。私とティアナが融合進化してスレイプモンに進化すれば、確かに大抵の敵は一瞬の内で倒せるだろう。だが、究極体の力は強大すぎる。特にスレイプモンの大きさは高層ビル並だからな・・・・避難もされていない場所で戦えば辺りへの被害は甚大だろう」

「そんな事をしたら私達の行っている行動も全部無意味になります。

究極体の進化は行わない方向でいくしか無いんですよ」

「やっぱりそうかい・・・・・政府への協力を依頼したのは正解だったね」

リスティはそうティアナ達が事前に行った行動の正しさに納得しながらタバコに火を点け、吸い始める。

それと共に方針が決まった事でテーブルの上に置かれていた資料をティアナは片付けながら、ベットの上で安らかに眠っているボコモンとネーモンの姿に柔らかな笑みを向ける。

「やっぱり疲れていたんですね。話を聞き終わったらすぐに眠っちゃいましたね」

「まぁ、頼る相手もいないままで、しかも細々とした食事で生活していたらしいからね。その疲れが一気に来てもしょうがないさ・・・・・で、あの二人は如何すると思っているんだい？」

『・・・・・・・・・』

リスティの質問にティアナとクダモンは答える事が出来ずに、悩むように顔を見合わせた。

あの二人とは言うまでもなく友樹と純平の事である。昼間出会ってからすぐに宿泊しているホテルの中で二人の今起きている現状を全て説明した。

当初その話が信じられずに友樹と純平は反発した声をリスティ達に投げ掛けて来たが、親友であるボコモンとネーモンもリスティ達の言葉に同意を示し、二人は何も言う事が出来ずに落ち込んでしまった。そして一応二人には明日の夜まではホテルに宿泊していると答えて、今日の所は二人には帰って貰ったのだ。心を落ち着ける為

にも必要だとリスティ達は思っての判断だった。

「・・・・・正直私はあの人達を巻き込みたくは無いですね」

「同感だ・・・・・確かに十闘士に選ばれた者とは言え、その十闘士が私達には信用が出来ない」

「あぁ、そう言えば五人の十闘士は敵に回ったんだっけね・・・・・確かに厄介だ」

リスティにもティアナとクダモンの言いたい事が分かった。

既に五人の十闘士が敵に回っているのだ。その事から考えても、残りの闘士達も何かしらの考えを持って動いているとしか考えられない。ヴォルフモンとレーベモンは確かに力を貸してはくれてはいるが、だからこそティアナ達に警戒するには充分な事だった。

自分達の護るべきデジタルワールドを滅ぼした人間と言う種族に、簡単には力を貸すとは思えない。

何かを調べる為に力を貸すと言うのならば、逆に理解する事は出来る。その何かまでは分からなくても、残っている闘士もまた何かの考えを持って動いているとティアナ達は判断していた。

「・・・・・・・・悩んでも仕方無いと言えば仕方ないんだけど、それよりもだ」

「？何ですか？」

「何少し君の話を聞きたいと思ってね。これから当分の間は一緒に動くパートナー何だし」

ーーードン！！

リスティは言葉と共にテーブルの上にワインのビンを乗せ、ティアナは呆れたような顔をしながらリスティの顔を見つめる。

「・・・私、未成年なんですけど？」

「ボクも同い年ぐらいに真雪に言ったけど、無理やり飲まされたね。まぁ、気にしないで飲みなよ。どうせ此処にはボクらしかいないんだからね」

リスティはそう告げると共にグラスにワインを注ぎ、ティアナへと渡し、自身もグラスを手に持つと、二人は同時にグラスをぶつけワインを飲むのだった。

そして十分後。

「ヒックッ！リスティさん！！聞いてます！！ブラック兄さんやバンチョーレオモンさんの特訓はそれは命がけだったんですよ！！魔法を少し覚えたら、クダモンとなのはさんとガブモンと一緒にデジタルワールドを旅させられましたし！しかも服やデバイスだけしか渡されなかった！！その上、獰猛なデジモンが多い場所だったし、おかげでサバイバルな毎日でしたよ！！」

「いや～苦労したんだね。まぁ、そのおかげで其処まで強くなれたからある意味では良かったんじゃないかい？」

「ヒックッ！そんな訳無いです！！確かに強くなれましたけど！漸く火の街に辿り着いてゆっくりと出来ると思ったら、今度は別の場所に放り込まれたんですよ！！もう命を何度失うと思ったことか！！」

「大変だったんだね・・・・・（完全に絡み上戸だね。飲ませない方が良かったかも）」

絡んでくるティアナにリスティは内心で冷や汗を流しながら、ティアナを止めるようにクダモンに視線を向けるが、クダモンは如何する事も出来ないと言うように首を横に振った。

実は以前バイオ・ダークタワーデジモンになった事で酒に酔う事が無くなったリンディとクイントが、不満を晴らそうと大量に酒を飲んでいた時に、偶然にも立ち寄ったティアナを連れ込んで酒を飲ませてしまった事があるのだ。その時にも当然ながらティアナは酔い、リンディとクイントに絡んだと言う過去が存在していた。以来リンディとクイントはティアナには酒を飲ませないと言う誓いを持ったのだが、その事を知らなかったリスティは不用意にティアナに酒を飲ませてしまった。

完全にリスティの自業自得なのだが、リスティは逆にこの状況を利用しようと即座に考え普通の状態ならば絶対に答えないだろう事をティアナに質問し続け、よってしかも絡み上戸だったティアナは次々と答えてしまった。当然そうなる前にクダモンは止めようとしたが、瞬時にリスティはサイコキネスを使いクダモンの動きを封じ、ワインをクダモンの口に流し込んで、クダモンを気絶させた。

そして邪魔者が全ていなくなったのを確認したリスティは、一番に気になっていた事を質問する。

「そう言えばだけどね。君のお兄さんは管理局に所属していたんだろう？それで君を鍛えたブラックって言うデジモンは犯罪者として追われていた？如何言う接点で二人は出会ったんだい？」

「ヒック・・・・ブラック兄さんとティーダ兄さんの出会いですか？・・・・・・私も詳しくは聞いた事はないんですけど・・・・・

十年ぐらい前に違法魔導師を追っている時に出会ったそうです」

「フン～？まさか、その違法魔導師を捕まえるのに協力した関係とか？」

「いえ、違います・・・・何でもブラック兄さんがミッドを見回してる時に、その違法魔導師がブラック兄さんを怖がって攻撃したそうなんですよ。それで探索の邪魔と戦いを仕掛けて来たと思ったブラック人さんがその魔導師をボコボコにしたらしいです」

「なるほどね。其処に君のお兄さんが現れた訳だ」

「えぇ、まぁ、結局ブラック兄さんには勝てなかったんですけど、その時にブラック兄さんは力の差があっても怯まずに挑んで来たティーダ兄さんに興味が湧いたらしくて、互いに事情を話し合ったそうです。ついでにこの時のティーダ兄さんとの会話で、ブラック兄さんは魔法を使う方法を思いついたらしんですよ」

「そう言う出会いだった訳か」

「私も本当に詳しくは知らないんです。他にも色々と在ったそうなんですけど、ブラック兄さんは教えてくれませんでしたから」

そうティアナは残念そうな顔をしながら答えると手に持っていたワインを飲み干し、リスティも苦笑しながらワインを飲み干すと、二人はそのまま深夜近くまで飲み続けるのだった。

翌日の朝。住民の避難が殆ど終わった静けさが募る港。

その港からある程度離れた場所の海上の上空にダルクモンは静かに浮かんでいた。
ダルクモンの目的は港を破壊して人々を恐怖に陥れる事だった。その為に配下になったデジモンと隠れ家から連れて来たデジモンを従えてこの場に訪れたのだ。

「よし。頃合いだろう。デジモン達よ！！作戦通りに行動するのだ！！そして私達の世界を滅ぼした人間と言う種族に復讐を始めるのだ！！」

『グギャアァァァァァァァァーーーーーーーー！！！！！！！！」

ダルクモンの叫びに答えるように海中に隠れていたデジモン達は叫び声を上げ、凄まじい津波を起こしながら港の方へと向かっていった。
それを確認したダルクモンは腰に挿してある二本の剣ー『ラ・ピュセル』を鞘から抜き取り、天使が見せないような残忍さに満ちた笑みを口元に浮かべる。

「フフフフッ、精々頑張るのだな。お前達も『ドミニモン』も所詮は捨て駒。私の計画を進ませる駒なのだから」

そうダルクモンは残酷さに満ちた声で呟くと、海中を進んでいくデジモン達を追いかける様に背中の羽を羽ばたかせるのだった。そして十分後。港は突如として現れた四体のデジモンによって火の海に包まれた。

その頃ティアナ達が何をしていたのかと言うと。

「ティアナ！！デジモンが港で暴れているぞ！！すぐに起きるのだ

！！」

「い・・・・・痛いィィィィーーーー！！！！！大声を出さないで！！頭が凄く痛いのよ！！何でこんなに頭が痛いの！？」

クダモンの叫びをベットの上で耳にしたティアナは、頭を押さえながらベットの上で暴れ周り、クダモン、ボコモン、ネーモンは冷や汗を流しながら顔を見合わせる。

「不味いぞ」

「ワシもそう思う」

「ボクも・・・・・・・・こんな人が本当に希望なのかな？」

『ウ～～ム』

クダモン、ボコモン、ネーモンはそれぞれ悩むような顔をしながら、ベットの上で暴れ続けるティアナの姿を見つめるのだった。

雷と氷！動き出す大天使！！後編

横浜に存在する港の一角。
本来ならば漁船などが行き交い、朝は賑やかな筈の場所なのだが、今その場所は炎の海に包まれていた。
海中から現れた四体のデジモン―長い海蛇のような体と頭部を持ったデジモン―シードラモンは口から氷の槍を撃ち出し、港や漁船を破壊し続け、背中に巨大なヤドカリのような貝殻を背負ったデジモン―シェルモンは頭部から強力な水流を放ちながら倉庫などを押し潰して行く。
そして残る二体のデジモン―軟体型のイカのようなデジモン―ゲソモンは両手を鋭く振り抜き、シードラモンが破壊し損ねた倉庫や漁船を押し潰し続け、最後のデジモン―海老のような体を持ち、鋭い二本のハサミを備えているデジモン―エビドラモンは両手のハサミを使って次々と港に存在している建築物を切り裂き続けていた。

シードラモン、世代／成熟期、属性／データ種、種族／水棲型、必殺技／アイスアロー
蛇のように長い体をした水棲型デジモン。攻撃力は高いが知性はほとんどなく、感情のままに生きている。敵に巻きついて物凄い力で相手の体を締め上げる。必殺技は、口から鋭い氷の矢を吐き出す『アイスアロー』だ。その他にも氷に関する技を所持しているぞ。

シェルモン、世代／成熟期、属性／データ種、種族／水棲型、必殺技／ハイドロプレッシャー
海岸や浅い海底などに住むヤドカリのような姿をした水棲型デジモン。体は柔らかい為に体が入る物なら何にでも住み着いてしまう。体の成長と共に住処を変えるため、最後には小さな岩山程度の大きさにまでなるらしい。必殺技は、頭から強力な水流を相手に向かっ

て撃ち出す『ハイドロプレッシャー』だ。

ゲソモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／軟体型、必殺技／デッドリーシェード、デビルバッシング
海の深海部に生息しているイカの形をした軟体型デジモン。“深海の悪魔”と呼ばれ恐れられているが、頭が良く、自分から攻撃を仕掛ける事は先ず無い。しかし、自分の縄張りに侵入して来た者には容赦は無く、得意のヒットアンドアウェイ戦法で撃退する。必殺技は、食らえば体が麻痺してしまう毒の墨を吐き出す『デッドリーシェード』に、両手を合わせ、相手をバシバシと殴る『デビルバッシング』だ。

エビドラモン、世代／成熟期、属性／データ種、種族／水棲型、必殺技／ツインネプチューン
エビのような姿をしているが、ドラモン系の種族である水棲型デジモン。性格は極めて獰猛で、本来は海の深海部に生息している。必殺技は、両手の二本のハサミを使って相手を切り裂く『ツインネプチューン』だ。

『グギャァァァァァァァーーーーーーーーーー！！！！！』

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

シードラモン、シェルモン、ゲソモン、エビドラモンは港に次々に攻撃を放ち、港を破壊し続けていくが、四体とも違和感を覚えていた。
ダルクモンの情報では港には沢山の人々が存在し、その人々を攻撃するように彼らは命じられていた。だが、襲っている筈の港には人の気配は全く存在せず、無人の港と漁船しか存在しておらず、彼らは辺りを破壊しながらも違和感だけが募り続けていた。

彼らの知らない事だが事前に海にデジモンが潜んでいる事を知ったリスティ達が、警察を使って大々的な避難を行っていたのだ。最も避難が完了しているのは港付近だけであり、他の場所は未だに避難途中である為に少しでも今のシードラモン達が破壊し続けている場所から移動すれば、避難途中の人々を見つけられてしまう。
当然ながら港をある程度を破壊し終えたシードラモン達は、すぐさま他の場所を襲う為に動き出そうとする。しかし、それは阻まれた。

ーーーードゴオォォォォン！！！

「グゲギャアッ！！」

『ッ！！』

突如として遥か上空から凄まじい勢いで落下して来た緑色の閃光によって、港に上がっていたエビドラモンは海の方へと弾き飛ばされた。
それを目撃したシードラモン達が慌ててエビドラモンのいた場所に目を向けて見ると、背中に青褪めた顔色をしているティアナを乗せたチィリンモンが険しい視線をシードラモン達に向けていた。

「止めるのだ！！このような事をしてもお前達の心は晴れないぞ！！」

「ググググッ！！グギャアァァァァァァァーーーー！！！！アイスアローーー！！！！！」

ーーーザザザザザザザッ！！！

「クッ！！」

シードラモンが口から吐き出したアイスアローを素早くチィリンモンは避けた。

しかし、シードラモンに続くようにゲソモンは口から毒の墨を、シェルモンは頭部の頂点から水流をチィリンモンに向かって放つ。

「デッドリーシェードッ！！！」

「ハイドロプレッシャーー！！！」

ーーーブシュゥゥゥゥゥゥッ！！

「フッ！！その程度の攻撃が私に当たると…」

「・・・・チィ・・・・・・チィリンモン・・・・・・お願い・・・・・・もう少し声を小さくして・・・・頭に凄く響くのよ・・・・それと・・・・出来ればスピードも・・・・」

「・・・・・・我慢していろ！！迅速（じんそく）の心得（こころえ）ッ！！！」

ーーーブン！！

背に乗っているティアナの悲痛な声に構わずに、チィリンモンは更に素早くシードラモン、ゲソモン、シェルモンの攻撃を軽々と避け続けていく。

その様子にシードラモン達は怒りを覚え、素早く空を駆け続けているチィリンモンの後を復活したエビドラモンと共に追い続け、港から海の方へと戦いの場は移動して行く。

その様子を離れた高いビルの上から見ている者達がいた。
ティアナとチィリンモンの仲間であるリスティ、そして新たに仲間になってくれたボコモン、ネーモンがそれぞれ双眼鏡を目に当てながらティアナとチィリンモンの戦いを見つめていた。

「よし。そのまま海の方へと誘導して行くんだ。これ以上の港への被害は不味いからね」

「しかし、一つ疑問なんじゃがリスティはん？何でチィリンモンやティアナはんはシードラモン達を倒さないんじゃ？あの二人の実力なら簡単だと思うのじゃが？」

「僕もそう思うよ。あんなに簡単にシードラモン達の攻撃をかわせるんだったら、隙をついて攻撃ぐらいは出来るんじゃないの？」

「・・・・・確かにティアナ達なら可能だろうね。幾ら二日酔いで体調が悪いティアナを背に乗せていてもチィリンモンならあのデジモン達も倒すのはね・・・・・だけど、それを行った瞬間に敵の策が成功するのさ」

「策じゃと？」

「そう、ボクらの敵・・・・・ドミニモンのねッ！！」

『ッ！！』

叫ぶと同時にチィリンモン達の戦いの場から双眼鏡の先を別方向に変えたリスティの行動に、ボコモンとネーモンも慌てて双眼鏡の先をリスティの見ている方向に移して見ると、鉄柱の頂点に静かに佇み、両手を組みながら優雅に戦いを眺めているドミニモンの姿が

存在していた。

「ドミニモン！！あやつもこの世界にきとったんか！？」

「情報どおり奴が敵のリーダーか・・・・そして奴の本当の目的はティアナとチィリンモンにシードラモン達を倒させる事だろうね」

『えっ！？』

リスティが険しい声で呟いた言葉に、ボコモンとネーモンが驚いた声を上げて双眼鏡を目から外し、リスティの顔を見つめると、リスティは険しい顔をしたままドミニモンの狙いを説明する。

「奴があのデジモン達を使って港を襲わせたのはほぼ間違いないだろうね。狙いはデジモンの説得の邪魔だろうけど、もう一つ別の狙いもあるのさ」

「別の狙い？何それ？」

「幾ら港を襲って破壊の限りを尽くしたシードラモン達でも、その行動は君達のような例外を除いたデジモン達からすれば正しい行動だ。そしてそれを阻んでティアナとチィリンモンがシードラモン達を倒してみなよ？その瞬間にドミニモンがそれをデジモン達の間に広めて、ボクらの話をデジモンは聞いてはくれなくなる。それこそがドミニモンのこの戦いでの本当の狙いさ」

「ッ！！・・・・・・もしそれが本当なら・・・・・シードラモン達は・・・・」

「そう。彼らは完全な捨て駒さ。ボクが聞いた話だとドミニモンは

自分の同胞の天使型デジモン以外のデジモンがどうなろうと気にしない性格らしいからね。正直ムカつく話だよ」

恐怖に体を震わせながら呟いたボコモンの言葉に、リスティは苦虫を噛み潰したような顔をしながら答えた。

目の前でティアナとチィリンモンを倒そうと必死になっているシードラモン達の行動は全て無意味なもの。ドミニモンの本当の狙いはティアナ達をシードラモン達が倒すのではなく、逆にティアナ達がシードラモン達を倒す事にこそあった。その為に本来ならば戦力が整うまでは派手に動くつもりはなかったのに、シードラモン達を派手に暴れさせているのだ。

しかし、それが事実だとすればシードラモン達は可愛そうであろう。彼らは少なくともドミニモンを主としてティアナとチィリンモンに戦いを挑んでいる。だが、ドミニモンはそのシードラモン達の想いを蔑ろにするように、ティアナとチィリンモンがシードラモン達を倒す事こそを望んで戦いを見つめ続けているのだ。

その事が理解出来たリスティ、ボコモン、ネーモンは怒りを覚えながらドミニモンを睨むが、ドミニモンは全く気にせずに自身の策が成功する時を静かに待ち続ける。

（・・・・妙だね・・・・既にティアナとチィリンモンの行動から策が見破られているのには気がついている筈・・・なのに、あの静か過ぎる佇まい・・・・何か他に策でもあるのかね？）

リスティはドミニモンの静か過ぎる様子に僅かに違和感を覚えた。

既にリスティ達はドミニモンの策を見破り、出来るだけシードラモン達を傷つけないようにしながらシードラモン達の体力が尽きるのを待つ戦いをチィリンモンは行っている。かなり持久戦になる戦い方だが成熟期であるシードラモン達と、究極体に迫る力を有している完全体であるチィリンモンとでは体力に差が存在している。

幾ら二日酔いで体調が悪いティアナを背に乗せていても、チィリンモンならばシードラモン達の体力が尽きるまで動き回り続ける事は可能なのだ。最も不調であるティアナは別だろうが。
その事はドミニモンも分かっている筈なのに、ドミニモンの様子は冷静すぎる。
リスティはその事に疑問を覚え、悩むような顔をしながらドミニモンを注意深く眺めていると、突如として服の中に入っている携帯が動く。

ーーーブーッ！ブーッ！

「うん？・・・・はい、此方リスティ・牧原・・・・・・ッ！！何だって！？街の川からデジモンが現れた！？」

『ッ！！』

リスティの焦りに満ちた叫びを横で耳にしたボコモンとネーモンは驚き、リスティを見つめるが、リスティは二体の様子に構わずに詳しく携帯の先にいる人物に状況を聞き、苛立ちに満ちた顔をしながら携帯を切る。

ーーーピッ！！

「やられた！！こっちは完全に囮だよ！！」

「如何言う事なんじゃ！？」

「ドミニモンの策は二重だったのさ！・・・・今避難している人々が移動している道路の近くにデジモンが現れたんだ・・・・当然だけど避難している人々を誘導している警察がデジモンに対抗出

来る筈は無い。今この場で現れたデジモンに対抗出来るのはティアナとティリンモンだけだ。だけどその為にはシードラモン達を倒さないといけなくなる・・・・・そうなればドミニモンの策は成功。シードラモン達を倒さずに放っておいたら、港どころからこの辺りの建築物が全壊してしまう・・・・つまり、避難している人々の救助に向かう為にはシードラモン達を倒さなくちゃいけないのさ」

「・・・何と言う恐ろしい計画じゃ・・・・・どっちに転んでも最終的に得するのはドミニモン」

「頭が凄く良いね」

「感心しとる場合か！！このままじゃ、人々に死者が出るぞい！！」

ボコモンはネーモンに怒鳴ると、何か策は無いのかとリスティに質問しようとするが、リスティはボコモン達の様子には構わずに再び携帯を耳に当てて何処かへと連絡を取っていた。

「此方リスティだけど。二人とも今何処にいる？」

『・・・・・』

「丁度良いね。なら一人はこっちに来て、もう一人はデジモンが現れた川に向かってくれ・・・・それともしかしたら避難している人々の中に君達の仲間だった二人の人物がいる可能性もあるよ」

『ッ！！！』

「だから、一人だけで大丈夫さ。彼らもきっと動く。昨日の内に頼んで置いた物も持って来ているんだろう。本当は彼らの覚悟を聞い

てからの予定だったけどね。状況が赦さないからね・・・・・・頼んだよ」

ーーーピッ！

リスティは言葉を言い終えると共に携帯を切った。

そして再び双眼鏡を目に当ててシードラモン達とチィリンモンの戦いを見始める。

ボコモンとネーモンはその余りにも冷静過ぎるリスティの様子に疑問を覚えた。既にドミニモンの策の成功率は八十％以上を切っている。その状況でありながらもリスティは全く慌てずにティアナとチィリンモンの戦いを観戦している。

ボコモンとネーモンはそのリスティの冷静さを裏付ける何かが気になり、詳しくリスティから話を聞こうと声を掛けようとするが、その前にリスティは悪戯っ子のような笑みを二体に向ける。

「フフフフッ、切り札を持っているのはドミニモンだけじゃないのさ。こっちにも、とっておきの切り札が存在しているからね。まぁ、もう少し待っていないよ。君達も絶対に驚くからね」

そうリスティは自信満々にボコモンとネーモンに告げると、再びドミニモンの方を見ながら不敵な笑みを口元に浮かべ、ボコモンとネーモンは頼もしげにリスティと共に戦いを見つめるのだった。

港からほど近い川沿いの道路。

その場所を警察に誘導されながら多くの人々が歩いていた。当初は反抗的に警察に意見していた人々だったが、港の方から上がる巨大な煙と爆発音。そして何かの巨大生物を思わせる咆哮に恐怖を覚

えた人々は、今では素直に警察の誘導に従い安全な場所に急いでいた。
そしてその人々の中には暗い顔をしながら歩いている純平と友樹も存在していた。

ーーードゴォォォォン！！

「・・・・なぁ、この爆発音の犯人って、やっぱり」

「うん・・・・リスティさんって言う人が言っていたように・・・・デジモンなんだよ」

「そうか・・・・・・・クソッ！！何でデジモンと人間が憎しみ合わないといけないんだよ！！」

「僕にも分からないよ・・・・・・」

純平の叫びに友樹は答える事が出来なかった。
リスティ達の話した真実は、純平と友樹には信じられない事ばかりだった。二人ともデジモンが基本的は温厚な者が多い事を知っている。だからこそ人間とデジモンとの戦争が起きているなど二人には信じられない事だったが、親友であるボコモンとネーモンも同意を示し、そして現実に港の方から爆発音までも響いているのだから、もはやリスティ達の言葉は真実だったとしか二人には思う事が出来なかった。
二人は爆発音のようなものが鳴り響き続けている港の方を見ながら、自分達は如何すればいいのかと悩んでいると、突如として避難している人々の中から恐怖に染まった声が響く。

「お、おい！！ア、アレ？何だよ！？」

ーーーバシャン！！

「グオォォォォォォォーーーー！！！！！」

『ッ！！』

恐怖に染まった声に誰もが疑問を覚え川の方に目を向けた瞬間に、突如として川の中から蛇のように長い体を赤い皮膚で覆い、頭部には黒い甲殻を備えると共に巨大な角を頭から生やしたデジモン―ワルシードラモンが水飛沫を辺りに撒き散らしながら姿を現した。

ワルシードラモン、世代／完全体、種族／水棲型、属性／ウィルス種、必殺技／ダークストローム、サンダージャベリン、メイルシュトローム

悪の道に進んだシードラモンが進化した水棲型デジモン。メガシードラモンによく似ていて、技も似ているものが多い。頭に大きなブレードと、長い体を持つデジモンで、その頭のブレードで闇の力をコントロールしている。必殺技は、闇の力で水の色を紫色に変えると共に、渦巻きを発生させる『ダークストローム』に、頭のツノから強力なイナズマを放つ『サンダージャベリン』。そして物凄い冷たい津波を起こし、敵を凍りつかせる『メイルシュトローム』だ。

「グォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッッ！！！」

「キャァァァァァァァァァァァァァッ！！」

「ば、化け物だ！！！」

凄まじい咆哮を轟かせているワルシードラモンの姿を目撃した人々は、我先にと逃げ出し始めた。
しかし、沢山の人々が一斉に動いたせいで思うようには逃げる事が出来なかった。警察も出来るだけ人々を平静にさせようと叫ぶが、川の方にいるワルシードラモンの凶暴さに満ちた咆哮と笑みの前では無力であり、大混乱がその場で起きた。
そんな中、純平と友樹は走って来る人々に体をぶつけられながらも、徐々に人々のいる方に向かって来ているワルシードラモンに焦りを覚える。

「不味いぞ！！あいつは完全体だ！このままじゃ、大変な事になっちまう！！」

「うん！！・・・・スピリットさえあれば」

「キャアッ！！」

『ッ！！』

突如として響いた十歳ぐらいの女の子の悲鳴に純平と友樹が慌てて声の聞こえた方に目を向けてみると、母親と思われる女性に抱き抱えられながら道路に倒れてしまっている女の子の姿が存在していた。
それを目にした二人は向かって来ている人々の間をぶつかりながらも移動し、女の子と母親と思われる女性に下に辿り着く。

「大丈夫ですか！！」

「怪我は無いか！？」

「・・・ウゥッ・・・・・私は大丈夫だけど・・・・・お母さんが！」

『ッ！！』

女の子の言葉に純平と友樹が慌てて女性の方に目を向けてみると、足を捻ったのか、女性は辛そうな顔をしながら足を手で押さえていた。

純平と友樹はすぐさま互いに頷き合うと、女の子を友樹が抱き抱え、純平は女性に肩を貸しながら安全な場所へと運ぼうとする。

「すぐに安全な場所に連れて行って上げるからね」

「安心してくれ」

「ありがとう、お兄ちゃん達」

「本当にありがとうございます」

女の子と女性は友樹と純平に向かって礼を告げた。

その様子に純平と友樹は嬉しげな笑みを浮かべながら、少しでも早く女の子と女性を安全な場所に運ぶとする。だが、その前にワルシードラモンが残っている純平達に気がつき、口元に残忍な笑みを浮かべながら、頭部の先に存在しているツノにイナズマを発生させ始める。

ーーービリビリビリッ！！

「ッ！！やばい！！」

「早く逃げないと！！」

イナズマを発生させているワルシードラモンに気がついた純平と友樹は、急いでその場から逃げ出そうと女性と女の子を護りながら走り出そうとする。
しかし、既に技の準備を終えたワルシードラモンは、迷う事無く純平達に向かってイナズマを放つ。

「サンダージャベリン！！！！」

ーーービリビリビリビリビリビッッ！！！！

「クソォォォォォッ！！」

ワルシードラモンの放ったサンダージャベリンから逃れられ無い事を悟った純平と友樹は、せめて女性と女の子だけは護ろうと二人に覆い被さり、来るであろう衝撃に目を瞑った。
しかし、純平達にサンダージャベリンが直撃しようとする直前に、逃げ惑う人々の間を素早く駆け抜けて来た一筋の光がサンダージャベリンを切り裂く。

ーーービュン！！

「リヒト・ズィーガーーッ！！」

ーーーザンッ！！

「グオッ！？」

『えっ？』

何時までも来ない衝撃と直前に聞こえた聞き覚えのある声に。純平と友樹が恐る恐る顔を上げて見ると、純平達を護るようにワルシードラモンに顔を向けている銀色に輝く鎧に、狼の顔を思わせる兜を被り、首からマフラーのような物を棚引かせて、両手に光の剣ーリヒト・シュベーアトを握っている戦士の姿が存在していた。

その戦士の後姿を純平と友樹は良く知っている。

何時も冷静沈着で、無口でクールでありながらもシャイな部分も持った二人の親友が進化した姿。

共にデジタルワールドでの苦難を超えた大切な仲間の背中。

純平と友樹はその戦士の姿に嬉し涙を無意識に流しながら、同時にその戦士の名を叫ぶ。

『ヴォルフモン！！！』

「フッ！相変わらず無茶をしているな、純平！友樹！！」

戦士ーヴォルフモンは二人の声に嬉しげな声を出しながら、僅かに二人の方に視線を向ける。

「その声！！輝二なのか！？」

「輝二さん！！」

「あぁ、二人とも久しぶりだな！！再会を喜び合いたいが、それどころじゃないみたいだ！」

ヴォルフモンは二人の声に答えると共に、自身の姿を見て戸惑いを覚えているワルシードラモンを睨みつけた。

その間に純平と友樹は素早く女性と女の子を戦いの場から移動させ、ヴォルフモンはそれと同時にワルシードラモンに向かって飛び

掛かる。

ーーービュン！！

「ハッ！！」

「グッ！！」

飛び掛かる共に振り抜いたヴォルフモンのリヒト・シュベーアトの一閃を、ワルシードラモンは戸惑いながらも身を逸らす事で避けた。

ヴォルフモンはそれを目にすると、すぐさま空中で体勢を整え、左腕を攻撃を避けた直後であるワルシードラモンに向かって構え、左腕に備わっている砲身から光線を撃ち出す。

「リヒト・クーーゲルッ！！」

ーーードグォオオオン！！

「グオッ！！」

リヒト・クーゲルを食らったワルシードラモンは苦痛の叫びを上げながら、川の中へと倒れ伏した。

ヴォルフモンはそのままワルシードラモンの体力を減らそうと、地面に着地すると共に川の中に倒れ伏したままのワルシードラモンに向かって駆け出す。

しかし、その直前にワルシードラモンの倒れ伏している川の近くから無数の氷の矢がヴォルフモンに凄まじいスピードで迫って来る。

ーーーザザザザザザザザザッ！！

「何ッ！？クッ！！」

ーーーガガガガガガガガガガガッ！！

無数の氷の矢に気がついたヴォルフモンは、すぐさま両手に握っていたリヒト・シュベーアトを連続で氷の矢に向かって振り抜き、氷の矢を全て粉砕した。

しかし、ヴォルフモンは攻撃が止んでも安心せずに、険しい視線を氷の矢が放たれた地点の川に目を向けると同時に氷の矢の放たれた地点から水飛沫が上がり、通常のシードラモンとは違う、綺麗な水色の鱗で全身を覆い、金色に輝くエラを備えたシードラモンXが姿を現す。

シードラモンX、世代／成熟期、属性／データ種、種族／水棲型、必殺技／アイススピアー、ウォーターブレス

シードラモンが『X抗体』を取り込み、『電脳核（デジコア）』に影響を与えた事で、未知の力を引き出したデジモン。まるでサメのように、水中での嗅覚が非常に発達しており、傷ついたデジモンを嗅ぎわけ襲い掛かる。必殺技は、絶対零度の吐息で水を凍らせ、無数の氷の矢を飛ばす『アイススピアー』に、口から水の息を相手に吹きつける『ウォーターブレス』だ。

ーーーバッシャン！！

「キシャアァァァァァァァーーーーー！！！！！」

「クッ！！もう一体いたのか！？」

「いやっ！！三体だ！！」

「ハッ！！」

突如として空から響いた女性の叫びに、ヴォルフモンが慌てて自身の頭上を振り向いてみると、両手にラ・ピュセルを握ったダルクモンが存在していた。

「死ねッ！！十闘士ッ！！」

「クッ！！」

ーーーガキィィィィィン！！！

ダルクモンが振り下ろして来たラ・ピュセルを、ヴォルフモンは両手に握ったリヒト・シュベーアトで受け止め、辺りに甲高い金属音が鳴り響いた。

そのままヴォルフモンとダルクモンは鍔迫り合いを続けるが、その隙にダメージが回復したワルシードラモンがヴォルフモンに向かってサンダージャベリンを撃ち出す。

「サンダージャベリン！！！」

ーーービリビリビリビリビリッ！！

「クソッ！！」

「フッ！！」

ーーービュン！！

ワルシードラモンが放ったサンダージャベリンを、ヴォルフモンとダルクモンは示し合わせたように同時に飛び去る事で避けた。
しかし、ヴォルフモンが背後の川から突如としてシードラモンXの尻尾が現れ、ヴォルフモンの体に巻きつき締め上げる。

ーーーギシッ！！！

「しまっ！！グアァァァァァァァッ！！」

『ヴォルフモン！！！』

シードラモンXの胴体に締め上げられているヴォルフモンの姿を、離れた所に存在していた橋の上から見た純平と友樹は同時にヴォルフモンの名を叫んだ。
その叫びを耳にしたヴォルフモンは、全身を襲う苦痛に構わずに何とか動く右腕に自身のディースキャナを出現させ、純平と友樹に向かって叫ぶ。

「クッ！！純平ッ！！友樹ッ！！戦う覚悟はあるか！？」

「ッ！！・・・・・ああっ！！ちゃんと在るぞ！！昨日話を聞いた時から！！」

「僕達も戦うよ！！デジモンと人間の為に！！」

「良い答えだ！！受け取れ！！」

ーーーギュルルルルルルルッ！！！

『ッ！！！』

ヴォルフモンが叫ぶと同時にディースキャナからデジコードが出現し、その中に存在している四つのスピリットの姿にダルクモン達は驚愕した。

「いかん！！シードラモンX！！早く奴を川の中に引きずり込め！！」

「キシャァアアアアアアアアアアアッ！！！！！」

「ウワァッ！！」

ーーーバッシャン！！！

ダルクモンの叫びにシードラモンXはすぐさま応じると、ヴォルフモンを締め付けたまま川の中へと潜って行った。

それを確認したダルクモンは、自身の背中の四枚の羽を羽ばたかせながら、空中に浮かんでいる四つのスピリットを手に入れようと手を伸ばすが、その前に純平と友樹は同時に叫ぶ。

『スピリットォォォォォーーーーー！！！！！！』

ーーービュン！！

「なっ！？」

純平と友樹の叫びが響き渡ると共に、空中に浮かんでいたスピリットは純平と友樹の下へと飛んでいき、ダルクモンが目を見開きながら純平と友樹の目を向けると、純平の下には『雷』の人と獣のスピリットが、友樹の下には『氷』の人と獣のスピリットが辿り着く。

それと同時に純平と友樹が服の中に入れておいた携帯が光り輝き、純平の携帯は青と黄色の色合いのディースキャナに、友樹の携帯は水色と緑色の色合いのディースキャナに変化すると、スピリットはそれぞれの携帯の中に入り込み、液晶画面にスピリットの映像が映し出させる。

「クッ！！ワルシードラモン！！奴らを殺せ！！」

「グオォォォーーーッ！！メイルシュトローーームッ！！」

ーーードオォォォォーーーー！！！！

ワルシードラモンはダルクモンの声に答えると共に咆哮を上げ、川の水で物凄く冷たい津波ーメイルシュトロームを引き起こし、橋ごと純平と友樹を凍りつかせようとする。

だが、純平と友樹は迫り来る巨大な津波をその目にしても心は不思議と落ち着いていた。

二人には分かっていた。再び自分達と共に戦ってくれる仲間の気配が背後に感じられる事を。

その気配に答えるように二人は同時に右手に輪型のデジコードを出現させ、それにディースキャナを当てながらなぞる様に滑らせる。

『スピリットッ！！エヴォリューーーーション！！！』

ーーーギュルルルルルルルルルッッッ！！！！

二人が同時に叫ぶと共に二人の体をデジコードが覆い、その内部で二人はスピリットを頭に、手に、足に、体に次々と纏って行く。そしてデジコードが消えた後にはヴォルフモンと同じ十闘士に名を連ねる二体のデジモンが姿を現す。その名も。

「ブリッツモン！！」

「チャックモン！！」

純平が進化した昆虫の思わせるような『雷』の闘士ーブリッツモンと、友樹が進化した雪ダルマに似た姿をして軍服を身につけ、右肩にランチャー『ロメオ』を背負った『氷』の闘士ーチャックモンはそれぞれデジコードの中から姿を現した。

それと共にブリッツモンは右手を空に掲げ、空から稲妻を雨にように津波に向かって降らせる。

「ミョルニルサンダーーーッ！！！！！」

ーーーガガガガガガガガガガガッッッ！！！！

『ッ！！』

ブリッツモンのミョルニルサンダーによって橋に迫って来ていた津波は、一瞬の内に粉砕された。

それを目撃したダルクモンとワルシードラモンは慌てて橋を見てみると橋から飛び降りて、その先に存在していた川を凍らせながら、氷の上をスキー板を足に装備したチャックモンが滑っていた。

「食らえッ！！スノーーボンバーー！！！！」

ーーードドドドドドドドドッ！！！

「グオオォォォォォォッ！！」

「ワルシードラモン！！！」

チャックモンがロメオから発射した超氷結の雪玉ースノーボンバーを食らったワルシードラモンは苦痛の咆哮を上げた。
それを目にしたダルクモンは氷の上を滑り続けているチャックモンを倒そうと、両手に握ったラ・ピュセルを構えながらチャックモンに突進しようとするが、その直前にブリッツモンがダルクモンの頭上に移動し、雷を溜めた両手を合わせながらダルクモンに振り下ろす。

「トーールハンマーー！！！」

ーーードゴオオン！！

「ガアッ！！」

トールハンマーを頭に食らったダルクモンは悲鳴を上げながら川の方へと落下していくが、川に体が触れる直前で体勢を整え直し、憎しみに満ちた視線をブリッツモンとワルシードラモンに攻撃し続けているチャックモンに向ける。

（クソッ！！計算外だ！！残っていた十闘士が人間の味方をしていたとは！！・・・・このままでは私の計画が潰される・・・・・まぁ、此処は一人闘士を殺した成果で満足してお…）

ーーーバッシャン！！！

「ッ！！！」

突如として響いた水音にダルクモンが慌てて音の聞こえた方を見

てみると、シードラモンXの締め付けから逃れたヴォルフモンが川の中から飛び出していた。

「ヴォルフモン！！！スライドエヴォリューーーション！！」

ーーーギュルルルルルルッ！！

ヴォルフモンが叫ぶと同時にヴォルフモンの体を蒼いデジコードが覆い、その内部から背中に巨大なブレードを装備して、前足と後ろ足にローラーを備えた白き狼ー『光』の闘士のビースト体ーガルムモンが姿を現す。

「ガルムモン！！！」

ガルムモン、世代／ハイブリッド体、属性／バリアブル、種族／サイボーグ型、必殺技／スピードスター、ソーラーレーザー

伝説の十闘士“エンシェントガルルモン”の力を受け継いだ光の属性を持つビーストスピリット体のサイボーグ型デジモン。白い狼の姿をして光ケーブル内に生息し、超光速で移動ができる。一度忠誠を誓った者に対しては絶対に裏切らない。背中には金色に輝く『ウィングブレード』を装備しているぞ。必殺技は、　超光速で敵に突っ込んで『ウィングブレード』で敵を真っ二つにする『スピードスター』に、口の中に太陽光線を集め、相手に向かって口から発射する『ソーラーレーザー』だ。

ーーーバッシャン！！

「ウォーターブレスッ！！！」

ーーーブシュゥゥゥゥゥゥーーー！！！！

ヴォルフモンがガルムモンに進化を終えると同時に、川の中に隠れていたシードラモンXも飛び出し、ガルムモンに向かって口から水の息ーウォーターブレスを吹き付けた。
しかし、ガルムモンは慌てる事無く両前後ろ足のローラーを出現させ、川に着地すると同時にローラーを勢いよく回転させながら超高速でウォーターブレスを避ける。

ーーービュン！！！

「キシャッ！？」

ウォーターブレスを避けると同時に消えたガルムモンの姿に、シードラモンXは慌ててガルムモンを探そうと辺りを見回そうとする。
そしてシードラモンXが辺りを見回している隙にガルムモンはシードラモンXの背後に移動し、口から太陽光線を発射する。

「ソーラーーレーーザーー！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオン！！！

「ギシャァアアアアアアアアアッ！！・・・・」

ーーーバッシャン！！！

ガルムモンのソーラーレーザーを食らったシードラモンXは悲鳴のよう叫びを上げ終えると、全身から力が抜け、川の中に倒れ伏した。
その様子を目にしたダルクモンは自分達の状況が悪くなった事に気がつくと、チャックモンとブリッツモンと戦い続けているワルシ

ードラモンに向かって叫ぶ。

「ワルシードラモン！！撤退だ！！三人の十闘士を相手にするのは無理だからな！！」

「グオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！」

ーーーバッシャン！！

ダルクモンの言葉にワルシードラモンは即座に応じ、川の中にその巨体を潜ませると、凄まじいスピードで川から海の方へと逃げていった。

ダルクモンもそれを確認すると、背中の四枚の羽を羽ばたかせながらガルムモン達の前から逃げ出して行く。

ガルムモンもその事には気がつくが、深追いはする事無く足元に倒れ伏しているシードラモンXに視線を向けていると、近寄って来たブリッツモンが声を掛けてくる。

「いいのか？追わなくて？」

「あぁ、まだ何処かに連中の仲間が潜んでいる可能性もある。それに今はこのシードラモンの説得が重要だ」

「倒さなくてよかったの？」

「寧ろ倒せば連中の思惑通りだ。奴らとってはこのシードラモンも捨て駒でしかない。だからこそ、俺達は奴らの手下でも出来るだけデジモンを倒さずに戦いを終わらせるんだ・・・・そうでなければ、デジモンと人間の共存は遠退くからな」

チャックモンの質問にガルムモンは悲しげに答えた。
その様子にブリッツモンとチャックモンは、既にガルムモンが辛い戦いをした事を確信するが、その事を質問する事無く、ガルムモンと共に気絶しているシードラモンXを港の方へと運ぶのだった。

場所は再び戻り、シードラモン達に破壊された港。
その場所では未だにティアナとティリンモン、そしてシードラモン達の戦いが続いていたが、既にシードラモン達には現れた当初の勢いは無く、四体とも息切れを起こしていた。
逆にティリンモンは余裕を現すようにシードラモン達の上空を旋回し続ける。最もその背に乗っているティアナは既に限界を超えているのか、青ざめた顔をしながら今にも吐きそうだと言う雰囲気を放っているのだが。
その様子を離れた所に存在している鉄柱の上から見ていたドミニモンは苛立っていた。
既に自身が考えた計画通りにティアナとティリンモンは動いてもおかしくは無い時間を過ぎている。にも関わらず、ティアナとティリンモンは未だにシードラモン達を倒そうとする動きを見せてはいない。

「・・・・・まさか、失敗したのか？いや、ダルクモンの情報では、この近くで戦えるのはあの忌まわしき二人だけの筈・・・・・一体どうなって…」

「お前の計画が失敗しただけだ」

「ッ！！」

突如としてドミニモンの声に覆い被さるように別の声が響き、慌ててドミニモンが声の聞こえた方を振り向いてみると、握っている槍に闇の力を込めているレーベモンの姿が存していた。

「ハァァァァーーーッ！！エーヴィッヒ・シュラーフッ！！」

「クゥッ！！」

ーーーガキィィィン！！

レーベモンが振り下ろして来た槍を、ドミニモンは右手の手甲から出現させた光の剣ーエクスキャリバーで受け止めると、そのまま空の方へと上り、険しい視線を鉄柱に危なげなく着地しているレーベモンに向ける。

「・・・・闇の十闘士・・・・・・フン！！所詮は闇の存在だな・・・・・忌まわしき人間どもに味方をするとは」

「そう言う貴様は一体なんだ？自分の計画の為に、お前の忠誠を誓っているシードラモン達を捨て駒にした貴様が光なのか？」

「フッ、忠誠？笑わせるな。所詮は奴らは獣でしかない。ただ人間を襲えるから私に下についてるだけの存在。力も無く、偽りの希望を消滅させられない獣を有効に使ってやったんだ。寧ろ感謝して欲しいぞ」

「・・・・・なるほど、確かにあのルーチェモンに近い思想を持っているようだな」

「ッ！！聞き捨てならんな！我がルーチェモンに近いだと！？今の

言葉だけは赦せん！！」

「俺は自分が感じた事を言ったまでだ・・・・・それにどうやらシードラモン達もお前に仕えるのは嫌だそうだぞ」

「何ッ！？」

レーベモンの告げた言葉の意味が分からず、ドミニモンは慌ててシードラモン達のいる方向を見てみると、ドミニモンに向かって憎しみの視線を向けるシードラモン達と、怒りに満ちた顔をしているティアナとティリンモンが存在していた。

その姿にドミニモンはありえないと思った。少なくともシードラモン達がいる場所と、自身がいる場所の距離はかなり離れている。レーベモンとの会話が聞こえる筈は無いのに、シードラモン達は突然ティアナとティリンモンへの攻撃を止めてドミニモンに憎しみをぶつけて来ている。

その理由が分からずにドミニモンが困惑していると、レーベモンは静かに腰に付けていた通信機を外し、ドミニモンに向かって掲げる。

「お前との会話は全て、俺の仲間が持っている通信機を通してシードラモン達に聞かせた。策士策に溺れたな」

「き、貴様！！」

「お前の計画は確かに完璧だった。もしこの場所に俺達が向かっていなければ、お前の策は成功していただろう」

「・・・・・赦せん・・・・・貴様だけは絶対に赦さんぞ！！ファイナルッ！！」

「レールショットッ！！」

ーーーズガン！！！

「グッ！！」

レーベモンに向かってドミニモンがファイナルエクスキャリバーを振り下ろそうとする直前に、離れた距離からティアナがレールショットをドミニモンの右腕に向かって撃ち込んだ。

それによってドミニモンの注意はレーベモンから僅かに離れた距離にいるティアナへと移る。その隙をレーベモンは逃さずに、立っていた鉄柱蹴り上げてドミニモンよりも上に向かって飛び上がると、その身をデジコードで覆う。

「レーベモン！！！スライドエヴォリューーーション！！！」

「ハッ！！」

デジコードに覆われたレーベモンに気がついたドミニモンは、慌ててデジコードに向かってファイナルエクスキャリバーを放とうとするが、それは間に合わず、デジコードの内部から全身を黒い装甲で覆った四足歩行の獅子ーカイザーレオモンが姿を見せる。

「カイザーレオモン！！！」

カイザーレオモン、世代／ハイブリッド体、属性／バリアブル、種族／サイボーグ型、必殺技／シュヴァルツ・ドンナー、シュヴァルツ・ケーニッヒ

伝説の十闘士『エンシェントスフィンクモン』の力を受け継いだ闇

の属性を持つビーストスピリット体のサイボーグ型デジモン。体は特殊な金属『オブジタンデジゾイド』で覆われていてとても硬い。別名“漆黒の獅子”と呼ばれている。必殺技は、背中の撃鉄のような物を打ち下ろして、口から黒い雷の気弾を相手に向かって放つ『シュヴァルツ・ドンナー』と、全身から闇のエネルギーを放出して黒炎の獣へ姿を変えて敵に飛び掛る『シュヴァルツ・ケーニッヒ』だ。

「オォォォォォーーー！！！シュヴァルツ・ケーニッヒッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ウオォォォォォォーーーー！！！！！」

カイザーレオモンはその身に闇のエネルギーを纏うと同時に黒炎の獣へとその身を変化させ、ドミニモンに向かって突撃した。

ドミニモンはその一撃を避ける事が出来ずにシュヴァルツ・ケーニッヒをまともに食らい、そのまま海の方へと落下していった。

同時にカイザーレオモンは空中で体勢を整え、そのまま危なげなく地面に着地すると、ドミニモンが消えた海の方を見つめる。

「・・・・・逃げられたか」

「うむ、その様だ。奴があの程度で倒れる事は無い。恐らく自身の不利を悟って、お前の技を利用して逃げたのだろう」

カイザーレオモンの呟いた言葉に、近寄って来ていたチィリンモンは冷静に答えた。

その言葉にカイザーレオモンは悔しげな顔をする。出来ればこの場でドミニモンを倒しておきたかったのだ。リンディからドミニモ

ンについての話は聞いていたが、直接会った事でカイザーレオモンはドミニモンに持つ危険な思想を充分に理解出来た。
放っておけば確実に大災厄を招く存在。その事が理解出来たカイザーレオモンは出来るだけドミニモンの冷静さを失わせ、隙をついた完全な一撃を食らわせたのだが、流石は究極体のデジモンと言うべきなのか、まんまと逆に技を利用されて逃げられてしまった。
カイザーレオモンはその事実に心の底から悔しい思いを抱くが、チィリンモンは冷静に声を掛ける。

「とにかく今はシードラモン達の説得が第一だ。ドミニモンに裏切られた事で戦意を失っている内に説得するのだ・・・・・せめて人間を襲わさないという確約だけはして置きたいからな」

「分かった・・・・・ところで、背中の子は大丈夫なのか？随分と苦しそうだけど？」

「ムッ？」

カイザーレオモンの言葉にチィリンモンは訝しげな声を上げながら、静か過ぎるティアナの方を見てみると、まるで死人のような顔色をしたティアナの姿が存在していた。
その姿にチィリンモンは全身から冷や汗を流しながら、恐る恐るティアナに声を掛けようとするが、その前にティアナがポツリと呟く。

「・・・・・もう・・・・・・絶対に・・・・・・・お酒なんて・・・・・飲まないからね・・・・・ウプッ！！」

「ギッ！！ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！」

破壊し尽くされた港に、チィリンモンの断末魔の叫びが響き渡った。
この時に何が起きたのかは、目撃したカイザーレオモンも答える事は無かったと言う。

深い闇に覆われ、幾つのもカプセルが並んでいる研究室内部。
その部屋の中に存在している一際大きなカプセルの中に、右肩に四枚の白き翼を生やしていながらも、逆側の左肩に翼の無い天使ールーチェモンが存在していた。
第二十管理世界でのリリスモンとの激闘の後、重傷を負ったルーチェモンはすぐさま隠れ家に戻り、治療カプセル中で治療を続けていたのだ。しかし、リリスモンに奪われた左側の翼は一向に治る様子を見せる事は無く逆に治療カプセルから出た瞬間に、失った翼の部分から腐食が始まると言う症状が出るぐらいだった。
その原因が分かっているルーチェモンは憎しみの炎を胸の中で燃やしながら、自身に此処までの負傷を負わせたリリスモンの顔を思い浮かべ、綺麗な顔立ちを憎しみに歪める。
その姿を治療カプセルを操作しながら見ていた倉田は、内心では歪んだ喜びを覚えながらも表では心配そうな顔をしながらルーチェモンに声を掛ける。

「いやはや、まさか、貴方に此処まで傷を負わせるとは・・・・流石はリリスモン。同じ七大魔王の称号を持つだけの事はありますね」

『・・・・黙りなよ、倉田。殺されたいのかい？』

「いえいえ、そんなつもりは無いですよ。貴方と私は苦楽を共にし

たパートナーですからね。本当に心配しているだけですよ」

『フン、どうだかね・・・・・それよりも早急にデーモンのデジタマを回収した方が良いね。今回の事で人間側に七大魔王のデジタマを持たせるのは不味い事が判明したからね』

「確かにその通りです。もしデーモンまでも良い人間の影響を受けて、敵に回ったら計画に確実に支障が出ます。此処まで計画が旨くいっていたのに、それが土壇場になって崩れるなんて嫌ですからね・・・・しかし、デーモンのデジタマを持っているのは大門大・・・・並みのデジモンでは歯が立ちません」

『・・・・何が言いたいんだい？ハッキリ言いなよ？』

「では率直に言います・・・・“彼”を使うべきです」

『ッ！！！』

倉田の言いたい事が分かったルーチェモンは目を見開いた。“彼”。ルーチェモンと倉田にとってはそれだけで通じる存在がいるのだ。そしてその存在がどれだけ強力な力を持っているのかをルーチェモンは知っている。何故ならば“彼”もまた、ルーチェモンとリリスモン同様に七大魔王に属する存在なのだから。

『・・・・意味が分かっているのかい？確かに“彼”ならば大門大とかって言う人間も倒せるだろうね・・・・だけど、忘れたのかい？“彼”もリリスモン同様に僕らに反抗した存在だ・・・・その事を考慮しているんだろうね？』

「えぇ、分かっていますよ。ですが、既に貴方が行っている洗脳で

“彼”が持っていた記憶は殆ど失われています。更に私が以前ベルフェモンに使った洗脳装置とダークタワーの電波を使えば、“彼”を確実に操れます。今後の事をかねてテストと言う形で使用してみては如何でしょうか？もちろん見張りとしてアルケニモンとマミーモンもつけますしね」

『・・・・・好きにしなよ。確かに今後の事を考えれると、此処で“彼”がどの程度使えるのか調べるいい機会だからね』

「では、そう言う方向でいきましょう。私は準備があるので失礼しますよ」

そう倉田はカプセルの中に入っているルーチェモンに告げると、後ろに向かって歩き出す。

（フフフフッ、これであの実験体どもも殺せますね。失敗作同然とは言え、あの三体の持つ力の存在だけはルーチェモンにばれる訳にはいきません。今回の件を利用してさっさとこの世から消えて貰いましょうか）

倉田はそう内心で歪んだ考えを呟きながら研究所の中を歩き、一際頑丈そうな扉の中へと入っていくのだった。

雷と氷！動き出す大天使！！後編（後書き）

次回予告

再会した純平達。それぞれ再会を喜びながらも、その内には悲しみが宿っていた。

一方その頃。大達の下にも闇が忍び寄って来ていた。

次回、漆黒の竜人と少女、『大の女難、そして狂乱の暴食ッ！』

大達の前に現れるデジモン。それは悲しみに包まれていた。

大の女難、そして狂乱の暴食ッ！前編

シードラモン達の戦いを終えてから三時間後。
街の方での戦いを終えた輝二、純平、友樹は、気絶しているシードラモンXを港に運び終え、リスティ達と合流していた。因みにティアナは完全に不調が増し、乗って来た車の中で休んでいる。
港を破壊したシードラモン、シェルモン、ゲソモン、エビドラモンも存在しているが、四体とも忠誠を誓ったドミニモンの裏切りに言葉を出す事も出来ずに意気消沈して続けている。
その様子を進化を解いたクダモンは悲しげに見つめながら、リスティに声を掛ける。

「リスティ・・・・少なくとも彼らにはもう戦う意思は無い。このまま海鳴市の場所に連れて行っても大丈夫だろう」

「そうかい。ならその方針で行こうかね・・・・もう一体の輝二達が連れて来たデジモンの説得が終わったらすぐに海鳴市に戻ろう。丁度一度は海鳴市に戻らなくちゃいけなかったからな」

そうリスティは呟くと共に離れた所で、仲間との再会を喜んでいる輝一、輝二、純平、友樹、そしてボコモンとネーモンに顔を向けた。

「久しぶりだな、四人とも。こんな状況でなかったら本当に嬉しかった」

「俺もだ。だけど、こうして会えた事は本当に嬉しいぜ」

輝一と輝二はそれぞれ言葉を告げると共に純平達に手を差し出し、

純平と友樹も嬉しげに輝一と輝二の手を握る。

ーーーガシッ！

「あぁ、本当に嬉しいぜッ！」

「うん！！僕達も会えて本当に嬉しいよ！！」

そう純平と友樹は輝一と輝二に告げ、ボコモンとネーモンも嬉しそうに輝一と輝二を見つめる。

「いや～本当に嬉しいわい！」

「うん！また皆にも会えたし、スピリットも全部無事だって事が分かったし、今日は良い日だよ」

「・・・・・残念だが、そう言う訳でもないんだ」

『えっ！？』

輝二が告げた言葉に純平達は驚き、輝一と輝二は僅かに悔しそうな顔をしながら、残っているスピリットの現状について話し始める。

「・・・今、俺達の下に残っているスピリットは『炎』の闘士ーアグニモンと『風』の闘士ーフェアリモンだけだ・・・・他の闘士のスピリット、メルキューレモン、グロットモン、ラーナモン、アルボルモンは既に復活して、ミッドチルダって言う異世界で人間を滅ぼそうと動いているらしい」

『ッ！！』

「輝二の話した事は本当だ。メルキューレモン達は人間に失望して、ミッドチルダで暴れ続けているらしいんだ。確かな情報だ」

「そんな・・・」

「マジかよ」

輝一と輝二が告げた事実に友樹と純平は辛そうな声を出した。

二人ともメルキューレモン達の性格は知っている。しかし、それでも嘗てのルーチェモンとの激闘の時には力を貸してくれた仲間だった。

その存在が再び敵になってしまった事実に純平、友樹、ボコモン、ネーモンは悲しげに顔を俯かせるが、更なる信じられない事実を輝一は語る。

「更に悪い情報だけど、もう一体。とんでもない奴がメルキューレモン達の所にいるんだ」

「とんでもない奴じゃと？じゃが、敵に回ったのは四体の闘士だけなんじゃろう？」

「メルキューレモン、ラーナモン、アルボルモン、グロットモン以外の闘士は人間に味方しているんでしょう？もう一体とんでもない奴って誰なの？」

「・・・・・ダスクモンだ」

『ッ！！！』

輝二が告げたデジモンの名前に純平達は目を見開いた。
その様子に輝一と輝二は純平達の驚愕の意味が分かっているのか、二人とも険しい顔をしながらダスクモンについて説明する。

「俺達が再びスピリットを手にする時にヴォルフモンとレーベモンが話してくれたんだが、ダスクモンはデジタルワールドが滅んだ時のデジモン達の無念が『闇』のスピリットに集合して蘇ったらしい」

「加えて言えば、今の奴はレーベモンとは違い、完全に人間を滅ぼす事を目的にして動いている。これで五人の闘士が敵に回ったって事だ」

「何と言う事じゃ・・・・オファニモン達は世界の事を思ってティアナはん達に十闘士のスピリットを託したと言うのに・・・・その十闘士が半分も敵に回っておったとは」

「でも、何が目的でメルキューレモン達は動いているのかな？ルーチェモンの力は分かっている筈なのに？」

「其処まで俺達も分かってはいない・・・・だが、確実に何かを企んでいる筈だ」

『・・・・・・』

輝二の言葉に誰もが状況の悪さを改めて認識し、顔を暗くしながら俯かせた。
本来ならば共に危機に立ち向かう仲間の筈のデジモンも、敵側に回ってしまっている。しかもその背後に隠れているルーチェモン達までも存在している。その事実にその場にいる全員の心に絶望が浮かび上がって来るが、その前にリスティが声を掛けて来る。

「はいはい、君達の気持ちは分かるけどね。その前にシードラモンXの説得の方が重要だよ。それが終わったら一先ずこの場を引き上げてボク達の隠れ家に戻るよ。流石にこれ以上港を立ち入り禁止にしていたら、確実にマスコミが動くからね。此処はさっさと説得して退散するのが正解だよ」

「確かにリスティさんの言う通りだな」

「じゃが、どうやってワシらの姿を見せずに港から去るんじゃ？既に港の周りには多数の人間がいるらしいし」

「何、簡単な事だ。何せ既に足は手に入れているからな」

『えっ？』

リスティの肩に乗っているクダモンが呟いた言葉に輝一達は疑問の声を上げ、クダモンとリスティの顔を見つめると、リスティは悪戯っ子のような笑みを浮かべながら呆然とし続けているシードラモン達を指差し、輝二達は苦笑を浮かべるのだった。

一方その頃。ミッドに存在するとある秘密の研究所。

その場所に潜んでいる者達の主であるスカリエッティは背後にウーノを従えながら、ジッと目の前に存在するモニターに映る大の戦いぶりを見つめていた。

自身の作り上げた娘であるノーヴェを打ち破る姿。

通常のデジモンよりも強力な力を持っている『X抗体』デジモンであるオオクワモンXを殴り飛ばす姿。

そしてギガスモンと究極体に迫る力を宿していたブラックエアロブイドラモンを殴り飛ばすその姿。
その大の人間を遥かに超え、究極体に迫るデジモンさえも打ち破る戦闘能力にスカリエッティは胸が躍るような気持ちを抱いていた。

「・・・・フフフフフフフッ、ハハハハハハハハハハハハハハッ！！！素晴らしい！！素晴らしいよ彼は！！この興奮は本当に久しぶりだ！！ブラックウォーグレイモン君とバイオデジモンを始めて見た時以来の興奮だよ！！あぁ、私はどれだけ井の中の蛙だったんだ！！世界にはまだ未知が溢れていた！！そう、私は感謝するぞ！！今この時に私が存在している事を！！世界に！！そして運命に！！」

「・・・・それでドクター？彼を如何するのですが？捕獲するのでしょうか？」

「捕獲？馬鹿は言ってはいけないよ、ウーノ？彼を捕獲するのは無理だし、第一それでは彼の戦いぶりが見られない。それではつまらないんだよ。私は彼がどのような行動を取るのかを見てみたい。この絶望に溢れた世界の中でね・・・・・・ふむ、良い手を思いついたよ。ウーノ、ディードを呼んで来てくれたまえ。少しでも彼の行動をより正確に見る為にね」

「ディードをですか？隠密行動ならばセインの方が適していると思いますが？」

「セインは既に顔が割れているからね。他のメンバーは逃げ出したゼストとアギトの追跡で忙しいし、だから戦闘経験が少ないディードにするのだよ。これを機会に彼女の戦闘経験も得て置きたいしね。と言う訳で、呼んで来てくれたまえ」

「了解しました。すぐに呼んできます」

ウーノはそうスカリエッティの言葉に頷くと、すぐさま踵を返し研究室から出て行った。

スカリエッティはそれを確認すると、再び大の戦いぶりが映るモニターに目を向けると共に心の底から楽しそうな笑みを口元に浮かべる。

「フフフフッ、楽しいね。本当に今の世界は楽しいよ。私達が本格的に動いた時に、世界はどのような反応を見せてくれるのかね。今から本当に楽しみだよ」

そうスカリエッティは呟きながら、本当に楽しげに大やブラックの戦いが映る映像を静かに見つめ続けるのだった。

場所は再び変わりミッドに潜んでいる大達の隠れ家。

その場所には多数の木で作られた家が並んでいた。大達は仲間にしたデジモン達の協力を得て、小規模な村と呼べる場所を建造したのだ。因みに機械関係のデジモンも仲間の中にいるので電気は通っている。

そしてその中でも一際大きな家の中で、大はパートナーのアグモンと共に眠りについていた。

「・・・・ウ～ン・・・・今何時だ？」

家の中に置かれている木のベットの上で眠りから覚めた大は、時間を知ろうと寝ぼけ眼で辺りに探る。

ーーームニュ

「ん？何だ？随分と柔らかい時計だな」

手探りに伸ばした右手の先に存在している柔らかな感触に、大は疑問の声を上げて、逆の左手で目を擦り、右手の先に存在しているものを見つめる。

「・・・・スゥーー」

「ムニャムニャ・・・・・大・・・・・それ僕のだよ」

「アッ？」

大の右手の先には大の腰に抱きつきながら、安らかな顔を眠っているなのはに似た短髪の少女ータイプＮ－２０８と呼ばれていた少女ー琴乃と、フェイトに似た蒼い長い髪に毛先が黒くなっている少女ータイプＦ－９１－リシアが存在していた。因みに大の伸ばした右手は琴乃の頬を握っていた。

その二人の安らかな寝顔を見れば、大抵の者は心が安らぐだろうが、大は二人の姿に溜め息を吐く。

「ハァ～、またかよ。何で毎日俺の布団に潜り込んで来るんだ？この二人は？」

琴乃とリシア、そしてはやての遺伝子から生まれた人造魔導師である風華をフェイトと共に違法研究所から救出してから数日が経過していた。

当初は始めてみるデジモンの姿に警戒心と戸惑いを覚えていた三

人であったが、数日デジモンと共に暮らしていく内に警戒心は薄れ、今では大達の仲間であるデジモン達とはかなり友好関係を結ぶほどになっていた。その事には大、アグモン、フェイト、バンチョーレオモン、そしてガオモン達も心から喜んだ。
しかし、一つだけ大には困った事があった。風華を除いた琴乃とリシアが毎夜、大が深い眠りに陥ると大の布団の中に潜り込んで、その体に抱きついて来るのだ。しかも薄着で。

「・・・・せめてパジャマだけは着ろって言ってんのによ・・・・ハァ～、おい！起きろ二人とも！！」

「ウ～ン」

大は先ず右手の先に存在している琴乃を起こそうとする為に、琴乃の体を揺らした。
だが、此処で一つの（大にとっての）不運が起きた。琴乃は他の二人よりも寝癖が悪い。一度眠ったら中々起きない上に大の体から離れようとしない。まるで赤ん坊が母親から離れたくないと言うように、或いは恋人が自身から離れないようにするかのように。
本来、大ならばデバイスを持っていない琴乃を体から無理やり引き剥がす事は簡単なのだが、大は荒くれ者に見えて面倒見が良いし、何処と無く十二年以上離れている妹の事が琴乃達の顔を見ていると思い浮かんでしまう為に、無理やり引き剥がす事は大には出来ず、琴乃が起きるまで体を揺らし続けるしかないのだ。
そして何とか琴乃を起こそうと大が体を揺らし続けていると、突如として琴乃が大の腰を掴んだまま体を横に動かす。

「ウ～ン」

「オワッ！」

突如として動いた琴乃に大は驚き、思わず声を上げて琴乃の上に乗ってしまいそうになる。因みにリシアもついでに大の体の下に移動した。
しかし、当然ながら大は瞬時に両手をつき、二人の上に覆いかぶさらないように体の体勢を整えた。
そしてそれと同時に大の声に目が覚めたのか、琴乃とリシアは目をパッチリと開き、自分達の上で四つん這いになっている大の姿を目にする。

『・・・・・・・』

三人の瞳が交差し、大は冷や汗を全身から流し始め、琴乃とリシアは状況が認識していないのか呆然と大を見つめる。
そして状況が漸く認識出来たのか琴乃とリシアは同時に顔をトマトのように真っ赤にしながら顔を見合わせ、大に声を掛ける。

「・・・・どうぞ、お好きにして下さい」

「・・・・大なら僕・・・・・良いよ」

「違うゥゥゥゥゥーーーーーーー！！！！！」

ーーードドドドドドッ！！

大の大声が響くと同時に部屋の入り口の外から凄まじい足音が幾つも響き、大は全身から更に冷や汗を流し恐る恐る扉の方を見つめると、扉は勢いよく開けられ、呆れたような顔をしたアグモンと般若を思わせるような顔をしたフェイトが部屋の中に足を踏み入れる。
此処で今の大の状態を考えて欲しい。

“薄着の十歳の琴乃とリシアに覆い被さるように四つん這いになっている二十六歳の男性”。
如何見ても今から二人に手を出そうとしている変質者の姿にしか見えないだろう。当然十九歳であり、健全な女性であるフェイトが大に行う行動は一つしか考えられない。

「・・・この・・・・・」

「いやちょっと待って！！違うからな！全然そう言うんじゃないからな！！」

「・・・・激しかったですね、リシア」

「うん・・・・初めてだったのにね、琴乃」

「おい！！！何火に油を投げ込むような言葉を言うなよ！！アイツには冗談が！！」

「変態ィィィィーーー！！！！！！」

ーーードゴオオオオン！！！！

「グフッ！！！」

フェイトの渾身のドロップキックを腰に食らった大の悲鳴が部屋の中に響き渡った。
その様子を部屋の外から目にしたアグモンは、遠い瞳をしながら天井を見つめポツリと呟く。

「・・・・今日も一日が始まるな・・・・小百合、兄貴に春が漸く

来たみたいだぜ」

そうアグモンは遠い別世界の地球にいるであろう大の母親に向かって、届いたら絶対に悲しむであろう報告を送るのだった。

そして二十分後。フェイトに一撃から復帰した大は、部屋のリビングでフェイトが作った食事を琴乃、リシア、アグモン、風華と共に食べていた。本来ならば既に琴乃、リシア、風華、フェイトの住む家は建造が終わっているのだが、琴乃とリシアの強すぎる希望で大の住んでいる家に同居状態で暮らしているのだ。

「フム、朝からお盛んだな、大よ。まさか、二人も同時に手を出すとは・・・・我の姉妹なのだからキッチリ責任を取るのだぞ」

「とか言いながら、俺のおかずに手を出すなよな、風華」

「フッ・・・・良いのか？我にそんな事を言って？うぬの現状は我のデバイスに記録してある。それをうぬの両親に見せたらどうなるのであろうな？」

「クソォォォォォッ！！！」

風華の告げた言葉に大は苛立ちに満ちた声を上げて、食事を護っていた手を退かした。

それを確認した風華は優雅に大のおかずに手を伸ばし、自身の皿の上に乗せていくが、大は悔しそうな顔をするばかりで風華の手を止める事は出来なかった。大も両親に琴乃達との事を知られるのは不味いのだ。

何せ大の父親である英は大と同様に究極体と殴り合える力量を持っている上に、母親である小百合には大も頭が上がらない。しかも

デジタルワールドを旅する許可を得る為に男を磨くと言う話で許可を得たのだ。
　それなのに女の子を、しかも如何見ても十歳ぐらいにしか見えない琴乃とリシアを押し倒している映像を英と小百合が見たら、確実に大は大変な目にあう。そんな事は御免な大は悔しげに自身のおかずを奪われて行く現状を見つめていると、フェイトが心配そうに大に声を掛ける。

「あの大さん・・・・良ければ私のおかずを…」

「大、受け取って下さい」

　フェイトが自身のおかずを大に手渡そうとした瞬間に、横から琴乃が割って入り、大に自身のおかずの皿を差し出す。
　その姿に大は溜め息を吐きながら、余り減っていない琴乃の食事を見ながら声を出す。

「お前な・・・・全然減っていないだろうが、育ち盛りなんだからもっと食べておけ」

「・・・・・お腹が一杯なんです。研究所にいた時はこれぐらいの食事で済んでいましたから」

「だからってよ、食べなさ過ぎる不味いと思うぜ。兄貴の事が心配なのは分かるけどよ。他の二人と違ってお前あんまり食べて無いだろうが」

「アグモンの言うとおりだぜ、琴乃。リシアや風華と違ってお前は食べなさ過ぎる」

「必要な栄養分は既に取りました。充分ですからどうぞ」

ーーーグゥ〜

『・・・・・・・』

琴乃が言い終わると同時に何処からとも無く腹の音が響き、全員が無言で琴乃を顔を見つめた。

そして徐々に琴乃の顔が恥ずかしそうに赤くなっていき、全員が見てみぬ振りをしながら自分達の食事を再開すると、琴乃も恥ずかしそうに無言で食事を再開するのだった。

そして昼頃。大は現状を詳しく知るためにアグモンを伴い、ガオモン達が住んでいる家の中へと入っていった。因みにフェイトは琴乃、リシア、風華に常識を教える為に大の家に残っている。

「ガオモン。何か情報は入ったのか？」

「大にアグモンか・・・・・ついさっき十闘士らしきデジモンの目撃情報が入って来た」

「本当か！！それで一体何処に！？」

「うむ、ベルカ自治区と呼ばれる場所の近くだ。既にバンチョーレオモンが向かっている」

「よし！それならアグモン！！俺達も行くぞ！！」

「おうよ！兄貴！！」

十闘士の情報を聞いた大とアグモンは、すぐさまベルカ自治区に向かおうとするが、ガオモンがその背を見つめながら溜め息を吐いて声を掛ける。

「待て二人とも。バンチョーレオモンから二人に伝言がある」

「何だって？バンチョーレオモンが？」

「あぁ、二人にはこの場所の護りを優先して欲しいそうだ」

「ハァっ？護りって、この場所はバタフラモン達の幻覚で見えないだろうが」

「そうだぜ。俺達も戻って来るのにはバタフラモンの案内か、ドリモゲモンが掘った穴を通ってくるしかねぇし、この場所が見つかるとは思えないぜ」

「普通ならば確かにそうだ。だが、此処の所この辺りの近くに管理局のサーチャーが出回っている。恐らく本局の連中の物だ」

「何だって？」

ガオモンの報告に大は険しい声を出し、アグモンも顔を険しくする。

大達は地上本部とは既に協力体制を整えてはいる。しかし、やはり本局の局員からは大は追われ続けているのだ。狙いは大達には分かっていた。

大達はこの世界に来る時に七大魔王の一体ーデーモンのデジタマを持って来ている。そのデジタマはとある場所に隠している為に管理局には奪われる事は無い。

しかし、それでも管理局ー正確に言えばルーチェモン達はデーモンのデジタマを諦めてはいない。だからこそ、大達はデーモンのデジタマを護り続けているのだ。

「本局の連中は地上への出入りは禁じられたんじゃないのか？この前の失態の件で？」

「うむ、基本的にはそうだ。だが、元々魔導師には転送魔法と言うものがあるらしい。それで秘密裏にミッドに進入して私達の捜索を続けているらしい」

「ハァ～、何処言っても、俺達って追われるんだな、兄貴」

「あぁ、同感だぜ、アグモン」

アグモンの言葉に大は呆れたような声で同意を示した。

実は大達は十二年前にも自分達の地球の政府に追われた事があるのだ。その時の原因もやはり倉田だった為に、此処まで来ればもはや因縁としか言えないだろう。

その事を改めて考えた大とアグモンは苦い顔をしながらガオモンを見つめると、ガオモンも同様に苦い顔をしながら声を出す。

「それにだ。お前とアグモンには琴乃、リシア、風華、そしてフェイトと護らなければいけない者達も今はいる。四人とも今の本局からすれば抹殺しておきたい人間だ。当分の間はこの場所に留まって四人の面倒を見ていろ。今はマスター達もいないのだからな」

「・・・・・そうだよな・・・・せめてトーマ達が来てくれれば良いんだけどなぁ」

「あぁ、あいつらが来てくれればそれだけで安心する事が出来る」
「だが、マスター達は来れない。今いるメンバーでこの戦いを越えなければいけないんだ」
「分かっているさ・・・・・所でガオモン？バンチョーレオモンはブイモンのデジタマについて何か話していなかったか？」
「ムッ？その件か・・・・・バンチョーレオモンからは、判断は大に任せると言われている」
「俺に任せるって」

ガオモンの報告に大は苦い声を出した。
実は未だにブイモンのデジタマはフェイトには渡してはいなかった。
フェイト自身、ブイモンのデジタマについて大達に質問しなかった事もあるが、大達もフェイトにデジタマを渡して大丈夫なのかと言う不安を持っていた。
しかし、それはブイモンを育てられるかではなく、再びフェイトがデジタマを孵してもそのデジモンがブイモンとしての記憶を持っているかどうかの不安だった。
以前大もアグモンを暗黒進化させて死なせてしまった事があるが、その時は大とアグモンとの絆のおかげで記憶は継承され、再び共に歩む事が出来た。だが、フェイトとブイモンの間に絆が出来たのはブイモンが死ぬ直前。その上、絆を重んじるデジヴァイスであるフェイトのディーアークも消滅してしまっている。
その事から考えても再びデジタマから生まれるデジモンが、ブイモンとしての記憶を持っている可能性は限りなくゼロに近いとバンチョーレオモンは大達に告げたのだ。

その言葉を聞いている大にはフェイトにデジタマを渡しても大丈夫なのかと心の底から悩んでいた。今ではかなり元気を取り戻したフェイトだが、それでもブイモンの死はかなりフェイトの心に傷を残している。生まれ変わったブイモンに赤の他人のように振舞われたら、確実にフェイトは今度こそ精神崩壊を起こすだろう。何故か大にはその確信が持てていた。

「如何したらいいんだろうな？」

「私に聞かれても困る」

「俺もだぜ、兄貴」

「と言うかなぁ？話は変わるけど何で琴乃、リシアの俺の布団に潜り込んで来るんだ？しかも毎日」

『ハッ！？』

大の言葉にアグモンとガオモンは同時に声を上げ、大の顔をジッと見つめた。

その顔には本当に分かっていないと言うように疑問が存在し、アグモンとガオモンは大の傍からすぐさま離れ、互いに顔を見合わせながら小声で会話をし始める。

「おぃ、アグモン？まさか、大の奴本気で分かっていないのか？」

「みたいだぜ、ガオモン・・・・・だけどさ、毎日喧嘩し続けて来た兄貴に・・・・女心が理解出来ると思うか？」

「・・・・・無理だな。よくよく考えてみると大に女心が理解出来

る筈は無い・・・・・この様子だと何故琴乃とリシアが大の布団に潜り込んだり、気を引こうとしているのか、完全に理由が分かっていないぞ」

「ブイモンの事と同じぐらいに、兄貴に女心を教えるのは難しそうだぜ」

ガオモンとアグモンはそれぞれ言葉を言いながら、訳が分からないと言う顔をしている大を見つめるのだった。

大達の隠れ家から二十キロ以上離れた地点に存在する道路。
その道路を人間の姿に変身しているアルケニモン、マミーモンはトラックに乗りながら走っていた。

「で、倉田の奴の情報だとこの辺りが怪しいのかい？」

「あぁ、そうらしいぜ。この辺りにはダークタワーも無いし、広い森が広がっている。他にも怪しい場所はあるらしいが、この辺りがデジモンを隠すのに最も可能性が高い場所らしいぜ」

「フ～ン、まぁ、見つかればいいんだけどね。見つからなければ、他の地点を探せばいいんだし」

「まぁ、そうだな・・・・・しかし、大門大だけじゃなくてこの三人の子供も殺せって、倉田の奴何を考えているんだろうな？」

マミーモンはそう言いながら、四枚の写真を服の中から取り出した。

その写真には大の顔だけではなく琴乃、リシア、風華のそれぞれが写っていた。
アルケニモンはマミーモンからその写真を受け取り、写真を険しい顔をしながら見つめる。
「アイツは裏で何しているか分からないからねぇ。ルーチェモン様には秘密にしろって話し出し、どうも嫌な予感がするよ」
「あぁ、同感だぜ。全く何で俺達の主はこう嫌な奴が多いんだろうな」
「知らないよ」
アルケニモンはマミーモンの言葉に素っ気無く答えた。
マミーモン、アルケニモンとしても倉田を信用するつもりは全く無い。何せデジモンを平気で抹消する兵器を創り上げた人物だ。その様な兵器を創り上げた人間など、アルケニモンとマミーモンは信用するつもりは無い。あくまで二人が従っているのはルーチェモンであって、倉田には全くの忠誠心は持ってはいないのだ。
そしてそのまま二人はトラックを走らせながら大達の隠れ家を探し続けていると、突如として荷台の方から感情が全く感じられない機械的な声が響く。
「・・・・・トマレ」
『ッ！！』
ーーーギィーーーッ！！
荷台の方から響いた声に、マミーモンとアルケニモンは慌ててト

ラックを止めた。
　そのまま恐る恐る荷台の方を備えられている窓から覗いて見ると、全身を黒いコートで覆った二メートル半の背を持った“何か”が荷台の中でゆっくりと起き上がる。

「・・・・カンジル・・・・・・オレト・・・・・オナジ・・・・・ナニカノケハイヲ」

「と言う事は、この辺りの近くに隠れ家があるのは間違いないみたいだね」

「そうだな、それじゃあ、サーチャーを放って辺りを探って見るとする…」

ーーーブウゥゥゥゥン！！ブウゥゥゥゥゥン！！

『ッ！！！』

　突如として背後の荷台の中から響いたエンジン音に、アルケニモンとマミーモンが慌てて見てみると、黒いコートを着た“何か”が荷台に積んであったバイクーとあるデジタルワールドで『ベヒーモス』と呼ばれていた物に乗り込んでいた。
　その姿にアルケニモンとマミーモンは目を見開きながら、黒いコートを着た“何か”に向かって叫ぶ。

「待ちな！！何勝手に動いているんだい！！」

「そうだぜ！お前は俺達の命令どおりにうご…」

「・・・・ウルセェ」

『ッ！！』

「・・・・・オレハ・・・・ダレノサシズモウケナイ・・・・オレハ・・・・・『アイ』・・・・・『マコ』・・・・」

ーーーブウゥゥゥゥーーーーン！！！

黒いコートを着た“何か”は、誰かの名前を呟くと共に『ベヒーモス』のアクセルを全開にしながら走らせ、トラックの荷台から飛び出し、森の奥へとその姿を消して行った。

それを目撃したアルケニモンとマミーモンは、体を恐怖に震わせながらトラックから降りて『ベヒーモス』が消えて行った森の方向を見つめる。

「・・・・あれが・・・・七大魔王の殺気なのかい」

「・・・・とんでもねぇ・・・・ブラックウォーグレイモンの殺気と同じか、それ以上の殺気だぜ・・・本当にあんな奴を制御出来るのかよ？」

「・・・・出来るんだろう・・・・あの倉田が出来るって宣言したんだからね・・・・まぁ、とにかく後を追うよ。発信機も付いているから見失う事は無いからね」

そうアルケニモンはマミーモンに声を掛けると、トラックの中から幾つかの機械を取り出し、黒いコートを着た“何か”をゆっくりと追い始めるのだった。

そして森の中を黒いコートを着た“何か”を乗せながら爆走し続

けている『ベヒーモス』。
　その動きはまるで別の意思が働いているようかの動きで、次々と連なる森の木々の間を駆け抜け続けていた。
　その『ベヒーモス』の背に乗る“何か”は、黒いコートの中にゆっくりと右手を入れ、アルケニモンが持っていた写真と同じ物を四枚取り出し、写真に写る大達の顔を覚えながら、今回の任務の前に告げられた倉田の言葉を思い出す。

『貴方が知りたがっている『アイ』と『マコ』の言葉の意味。それを知りたいのならば、大門大と三体の実験体を殺しなさい。そうすればもしかしたら記憶が蘇るかも知れませんよ』

「・・・・ダイモン・・・・マサル・・・・・タイプＮ－２０８・・・・・タイプＦ－９１・・・・タイプＨ－２７８・・・コイツラ・・・・・コロセバ・・・・『アイ』・・・・・『マコ』・・・・・ノイミガ・・・・・カナラズ・・・・コロス」

ーーーズキッ！！

『インプモン』

「ッ！！」

“何か”が大達の抹消を宣言した瞬間に、“何か”の頭に強い痛みと誰かの声でのデジモンの名前が頭の中に走った。
　その事に“何か”は『ベヒーモス』のハンドルを思わず手放し、左手でフードに覆われている頭を押さえながら内心で驚愕する。

（ナンダ！？・・・・イマノ・・・・コエト、イタミハ！？・・・・・ダイモンマサルタチヲ・・・・コロセバワカルノカ・・・・カナラ

ズコロス！！『アイ』ト『マコ』ニアウタメニ！！！）

ーーーブウゥゥゥゥーーーン！！！！！

“何か”は内心で宣言すると共に、再び左手をハンドルに戻し、エンジンのフルスロットルで回しながら感じられる同胞の気配の下へと向かい出した。

しかし、“何か”は気がついてはいなかった。

“『アイ』と『マコ』に会う”。

その言葉を内心で呟いた時点で、それが誰かの名前である事実に“何か”は気がつく事は無く、狂気の思惑通りに自身が動いてしまっている事にさえも“何か”は気がつかずに、『ベヒーモス』に乗りながら大達の下に向かうのだった。

大の女難、そして狂乱の暴食ッ！後編

夕日の光が森を覆う時間帯。
その時間帯にフェイトは隠れ家から僅かに離れた森の中で、ただ一人魔法の練習を行い続けていた。
大達の隠れ家にやって来てから数日の間。琴乃、リシア、風華の世話をしながらもフェイトは再び魔力を取り戻そうと訓練をし続けていたのだ。
しかし、どれだけ頑張ってもあれだけ存在していた魔力の気配は全く感じられず、魔力の在った頃は出来たデバイス無しでスフィアの展開も出来なかった。
そしてその原因も既にフェイトはバンチョーレオモンから告げられていた。

『貴様が服用した薬は、リンカーコアから一気に魔力を噴き出させて無理やり体の治療に当てる薬だ。しかし、治療が終わった後も魔力は噴き出し続ける為に、魔力を生成しているリンカーコアは簡単に限界が訪れる。その為に薬の効果が切れたと同時にリンカーコアは完全に砕け散るのだ。貴様が薬を服用する前に告げた数千兆に一人だけが魔力を取り戻したと言う話は、運が良くリンカーコアが砕け散る事無く機能を停止した者の話だ。最もその人間も魔力を取り戻す事は出来たが、血の滲むような努力を重ねた結果らしいがな・・・だが、結局は魔力を取り戻した人間も、薬を服用する前の魔力は取り戻せなかったらしい・・・・あの薬を俺に渡した奴は告げていた。あの薬は“魔導師にとっては夢の薬であると共に、絶望を呼ぶ薬”だと』

「・・・・・・本当に二度と魔法が使えないんだね・・・」

フェイトはバンチョーレオモンの言葉を思い出すと共に、自身の指先に集まらない魔力に絶望に満ちた声を出した。
以前ならば簡単に集中させる事が出来た魔力の気配が微塵にも感じられないのだ。
数日間、フェイトは自身の知る魔力の発生の仕方や目覚めさせ方も試してみた。しかし、魔力が再びフェイトの体から現れる事は無く、ただ時間が過ぎるだけでしかなかった。
それでもフェイトは諦めずに訓練を続けているのだが、フェイトには自身がこれからどうすればいいのかも分かっていなかった。

（・・・・・例え魔力を取り戻しても・・・・私にはもうはやて達と一緒に戦う資格はない・・・・それに、私は・・・・怖い・・・・・また、力だけを求めてしまうかもしれない自分自身が・・・・）

そうフェイトが最も恐れているのは、再びブラックエアロブイドラモンの時のように力だけを求めてしまう自分自身だった。
確かにメルキューレモン達の策に嵌ってしまったのが原因だったとは言え、最終的にブイモンを暗黒進化させてしまったのはフェイト自身の心こそが原因。再び魔力を一戦う力を取り戻した時に同じ事を繰り返してしまう事こそをフェイトは恐れていた。
特にブイモンに放った一撃の感触。その瞬間の事をフェイトは忘れる事が出来ず、夜眠っている時の夢で何度も繰り返して見てしまうほどだった。
その事を思い出したフェイトは悲しげに顔を俯かせながら、自身の両手の平を静かに見つめ続ける。

その様子を離れた所から覗いていたアグモンとデジタマを小脇に抱えた大は、困ったと言うように顔を見合わせる。
実はアグモンと大、そしてガオモン達はフェイトが魔法の訓練を行っている事を初日から知っていた。

しかし、専門外としか言えない魔法の事などに大達が協力出来る筈も無く、魔法について最も知っている琴乃、リシア、風華はフェイトに協力する気が無いので如何する事も出来なかったのだ。
それでも無茶はしないようにする為に、大とアグモンは隠れて毎日見守り続けていたのだが、今日は他にも用があった。
“フェイトにブイモンのデジタマを渡す為に大とアグモンはこの場に今日は訪れたのだ”。

「兄貴、本当に渡すのかよ？如何見ても落ち込んでいるぜ？」

「・・・・・あぁ、今日渡す・・・・このまま渡さないでブイモンが生まれ変わって来たら、ブイモンの最後の言葉が無駄になっちまう・・・・本当は渡さない方がいいのかもしれないけど・・・・自分のパートナーが知らない所で生まれてたりしたら嫌だろうからな」

「・・・・だけどさ・・・・失敗したら本当に心が壊れちまうかもしれないんだぜ・・・・今日は止めておいた方が・・・・」

「駄目だ。今日渡すぞ」

「アッ！兄貴ッ！！」

背中にデジタマを隠しながら歩き出した大の背にアグモンは叫ぶが、大はアグモンの叫びを耳にしても止まらずに、悲しげに顔を俯かせているフェイトに近寄る。

「オッスッ！調子は如何なんだ？」

「・・・・大さん・・・・・・全然駄目です・・・・・・・魔法を発動させようとしても、魔力が感じられないんです・・・・・もう

本当に私は魔法が使えないんですよ」

「（こりゃかなりの重傷だな・・・・慰めるとか苦手なんだけどな・・・・・まぁ、少し話でもして見るか）・・・・・まぁ、とにかく座れよ。魔法の事とかは相談出来ねぇけど、デジモンの事や力の事なら少しは話も出来るからよ」

「・・・・はい」

大の言葉にフェイトは小さく頷き、大は口元に笑みを浮かべながら近くに存在している倒れている木の上に、フェイトと共に静かに座り込む。

そのまま大はフェイトが言葉を放つまでジッと無言で待っていると、フェイトは顔を俯かせながらポツリ、ポツリと話し出す。

「・・・・・ずっと悩んでいるんです・・・・・私は力だけを求めたせいでブイモンを死なせてしまった・・・・そんな私に生きる資格なんて在るのかって？・・・・・大さんやアグモン、それにバンチョーレオモンが助けてくれましたけど・・・・・」

「バンチョーレオモンが言っていただろう。お前が死んだら、ブイモンの想いが無駄になっちまう。だから、お前は…」

「分かっているんです！！でも、毎日見るんです！！ブイモンを暗黒進化させた瞬間の事！！この手でブイモンを殺した瞬間の事！！そして私の手の中でブイモンが消えていった事を！！・・・・・もう分からないんです・・・・結局私はブイモンが残したものさえも無駄にしてしまった」

「無駄って事は無いだろうが。まだ、ブイモンが残したものを護れ

るだろう？お前が諦めなければよ」

否定的な言葉を言うフェイトに、大は僅かに憮然としながら答えた。

少なくとも大は、ブイモンの残したものが無駄になっているとは思えなかった。確かに一番護りたかったであろうフェイトの安全は護りきる事は出来なかったが、それでも今、機動六課が無事に残っていられるのはブイモンの命を賭けた行動のおかげだ。

その事を知っている大は、フェイトに今一度その事を話そうと声を掛けようとするが、その前にフェイトは顔を俯かせながら言葉を言う。

「・・・・地上本部で初めてルーチェモンと倉田に会った時に言われたんですよ・・・・ブイモンの行動は無駄死にだって」

（倉田の野郎！それにルーチェモン！！何て事を言いやがんだ！！会った時に覚悟しておけよ！！ぜってぇぶん殴ってやるからな！！）

大はフェイトの告げた事実に怒りを覚えるが、それを出来るだけ悟らせないようにしながらフェイトの話に耳を傾ける。

「・・・・・もう何も分からないんですよ。本当にこれから如何すればいいのかも・・・・・もう一度魔力を取り戻しても同じ事を繰り返してしまうかもしれない・・・・だから、もう…」

「諦めんな！！」

「ッ！！」

大の叫びにフェイトは僅かに目を見開きながら、大を見つめてみ

ると、大は真剣な顔をしながら自身の経験を語り出す。

「力について悩むのは分かるぜ。実を言えばよ・・・・・俺もアグモンを暗黒進化させちまった事があるんだよ」

「えっ！？大さんが！？」

「あぁ、十二年以上前の事だけどな・・・・そん時に一緒に戦っていた仲間に裏切られたと思って、怒りにまかせてアグモンを暗黒進化させちまったんだ・・・・・それで俺もアグモンを一度は死なせちまったんだ」

「でも、アグモンは」

「あぁ、記憶を持って生まれて来てくれた・・・だけど、それでも俺はあの時の事を忘れない・・・俺が仲間を、アグモンをもっと信じていればアグモンを死なせずに済んだんだ・・・・その後に学んだんだ。何よりも必要なのは一緒に戦っている奴を信じる事なんだってな」

「信じる？」

「あぁ、力は一緒に合わせてこそ意味があるもんなんだ。だから、お前も諦めるなよ。ブイモンが死ぬ直前に言っていただろう？『生まれ変わっても、フェイトのパートナーになりたい』って・・・だから、それを叶えてやれよ」

そう大はフェイトに告げると共に、背中に回していたデジタマをフェイトに差し出す。

その事にフェイトは目を見開きながら、大が差し出して来たデジ

タマを凝視する。

「・・・・ブイモンの・・・・」

「あぁ、デジタマだ・・・・生まれて来るデジモンがブイモンの記憶を持っているかは分からねぇけどよ。それでもこのデジタマはフェイトが持つべきだ」

「・・・・・・」

大の言葉にフェイトは恐る恐る手をデジタマに伸ばし始める。
しかし、その手はデジタマに触れる直前で止まり、悲しげな視線をデジタマに向けると共に無言で立ち上がる。

「・・・・・ごめんなさい・・・・・やっぱり、私にはそのデジタマに触れる資格は無い！！」

「アッ！！おい！フェイト！！」

突如として走り出したフェイトの背に、大は声を掛けるが、フェイトは大の言葉を聞いても止まらずに隠れ家の方に走り去って行った。
大はその事に困ったような顔をしながら、両手で抱えているデジタマを静かに見つめながら呟く。

「お前もよ・・・・フェイトと一緒にいたんだろうな」

ーーートクンッ！

「・・・・・時間は余りないんだよなぁ・・・・どうすりゃいいん

だろうなぁ？」

僅かに鼓動を感じられるデジタマに、大はデジモンが生まれて来るのが近い事を感じながら、アグモンのいる方へと歩き出し、アグモンと共に隠れ家の方へと落ち込みながら去って行った。

フェイトとの会話をアグモン以外に聞いていた三つの影が、巨木の影に隠れていた事に気がつかずに。

「ムゥ～～」

「・・・・・・気に入りません」

「・・・・まぁ、気持ちは分かるが、殺気を二人とも抑えた方がよいぞ。幾ら殺気を送っているのが、あの金髪だけだとは言え、勘の鋭い大やアグモンに気がつかれるだろう可能性は高いのだから、気を落ち着けよ」

巨木の影に隠れながら大とフェイトの会話を聞いていた琴乃、リシアは、全身から不機嫌だと言うオーラを放ち続け、風華はそれを治めるように二人に声を掛けるが、琴乃とリシアは風華の声が聞こえていないのか、フェイトが走り去って行った方向を射殺さんばかりに睨みつける。

風華はその姿に苦笑を浮かべながらも、二人の気持ちを内心では理解していた。

二人とも大をフェイトに取られてしまうかもしれないと心配しているのだ。琴乃とリシアは助けてくれた大を心から感謝していた。あの地獄のような場所から自分達が傷つけても、外の世界に連れ出してくれた大に恩返しをしたいという気持ちも持っている。

しかし、今二人の内にある感情は恩人に対する感情ではなく、一人の男を愛する感情の方だった。

ただ助けてくれただけでは、琴乃とリシアも大に其処までの感情は抱かなかっただろうが、助けてくれた後も大は琴乃達の面倒を傷を負いながらも見続けてくれた為に、琴乃とリシアは何時の間にか大に特別な感情を抱くようになってしまったのだ。

その事を知った風華は、二人に僅かながらも協力しようと二人と一緒に大に色々と行っているのだが、肝心の大が二人の行動の意味に気がつかず、全てが無意味になってしまっていた。

その理由も既に風華はある程度は予想出来てはいるのだが、琴乃とリシアにその事を伝えるつもりは今の所は全くなかった。

（・・・流石に琴乃とリシアに万が一にでも手を出せば、大は確実に変質者の仲間入りであろうしな・・・恩人をその様な名で呼ばせる訳にはいかんし、当分は二人に理由を話す訳にはいくまい・・・まぁ、実を言えば大に気持ちを気がつかせる事が出来るとっておきの方法があるのだが・・・・知れば確実にこの二人はその手で攻めるであるから、当分は今のままで好かろう・・・・主に我の“楽しい食卓”の為に）

そう風華は内心で自身の方針を決めると、ゆっくりと不機嫌そうにフェイトが走り去った方向を睨んでいる琴乃とリシアの肩に手を置く。

ーーーポンッ！

「二人とも、気持ちは我にも少しは分かるが、そう目くじらを立ててもしょうがあるまい。肝心の大も金髪には今の所は特別な感情を抱いておらん。それにそんなに大と金髪が一緒にいるのが嫌ならば、金髪の訓練に手を貸してやれば良かろう。そうすれば、色々と邪魔をする機会も増えるであろうからな」

「フム・・・・中々に良い案ですね、風華」

「うん！それなら大と僕達が一緒にいられる機会も増えるかもしれないし、まさに“一石半鳥”だね！！」

「それを言うのならば一石二鳥ですよ、リシア」

「アッ！そうそう！その一石二鳥！」

琴乃の訂正にリシアは自身の間違いに気がつき、慌てて言い直した。

琴乃と風華はそのリシアの姿に、苦笑を口元を浮かべ出す。

そして三人は同時に思った。自分達はあの地獄の場所で殺し合いを行った事さえもあるのにも関わらずに、今はこうして楽しげに笑え合えるようになった。その事が堪らなく三人は嬉しく感じながら、仲良く隠れ家の方へと歩き出し始める。願わくばこのような日々がこれからも続く事を心から願いながら。

しかし、その三人の願いを打ち砕くかのように、凄まじいエンジン音が森の奥から鳴り響いて来る。

ーーーブゥンッ！！ブウゥゥゥゥゥゥーーーーーーン！！！！

「？何でしょうか？このエンジン音は？」

「そうだね・・・・・機械系のデジモンでもこっちに向かっているのかな？」

「・・・・・いや、この音は何か違うと我は思う・・・・・この音は知識の中にあるバイクと言う物のエンジン音ではないのか？」

「バイクですか？そのような乗り物に乗るデジモンなどいない筈ですが？」

琴乃はそう疑問に満ちた声で呟くと、リシアと風華と共にエンジン音が鳴り響いている方向に顔を向けた瞬間。

ーーーブオォォォォォーーーン！！キキィィィィーーー！！！

『ッ！！！』

三人の頭上を“黒いコートを着た何か”が乗った大型のバイク―『ベヒーモス』が飛び越え、地面に着地すると共にベヒーモスは凄まじいの音を響かせながら急停止した。

その突然の事態に琴乃、リシア、風華は驚愕に目を見開くが、すぐさまそれぞれデバイスを起動させてバリアジャケットを身に纏う。三人とも何が理由なのかは分からなかったが、三人とも本能的に目の前に現れた存在が敵だと理解出来たのだ。

そしてそれは正しかった。ベヒーモスに乗ったままの“黒いコートを着た何か”は、ゆっくりと琴乃、リシア、風華の顔を見回し、三人とって今では忌むべき名前を感情の感じられない機械的な声で呟く。

「・・・・・ミツケタゾ・・タイプＮ－２０８・・・・タイプＦ－９１・・・・タイプＨ－２７８・・・」

『ッ！！』

ーーービュン！！

「その名前で僕らを呼ぶなァァァァァァーーーーーー！！！！！」

《Ｒｉｏｔ（ライオット）　Ｂｌａｄｅ（ブレード）》

“黒いコートを着た何か”が告げた名前を聞いた琴乃と風華は目を見開き、リシアは顔を怒りに染めながら“何か”に向かって突進した。

琴乃、リシア、風華にとって嘗ての番号のような名前は過去を思い出させる起爆剤でしかなかった。そしてその名前を告げられた事で、リシアは怒りに任させて“何か”に向かって飛び掛かり、凄まじい電撃を迸らせているライオットブレードに変形したライディエルを“何か”に向かって振り下ろす。

「くらえぇぇぇぇーーーー！！！！！」

「・・・・・フッ」

ーーーガキィィィィィン！！

『ッ！！』

リシアが振り下ろしたライディエルの刃を“何か”は無造作に上げた右腕で受け止め、辺りに甲高い音が鳴り響いた。

それを目撃した琴乃、風華、そして振り下ろした張本人であるリシアは目を見開く。いかに怒りに任せた一撃だとは言え、リシアの攻撃はそれだけで並みの魔導師や成熟期デジモンを倒せる力が込められている。

それを意図も簡単に、しかも無造作に上げた右腕だけで防御した上に、ライオットブレードから迸っている高圧電流をものともしていないのだから、目の前でベヒーモスに乗ったままの“何か”の実力はかなりのものだと言う事に他ならない。

それを理解した琴乃と風華は自身の魔力を最大に高めて、同時に“黒いコートを着た何か”に向かって誘導弾を無数に撃ち込む。

「下がりなさい！リシア！！パイロシューターー！！！」

「消えよ！塵芥！！ドゥームブリンガーーッ！！」

ーーーズガガガガガガガガガッ！！

琴乃と風華は同時に誘導弾と放射弾を“黒いコートを着た何か”に向かって撃ち出し、リシアはそれを横目で確認するとすぐさま上空に飛び立つ。

それと共に“黒いコートを着た何か”は、凄まじいスピードで迫って来ているパイロシューターとドゥームブリンガーを視界におさめるが、慌てる事は無く両手を足の方に移動させると共にコートを僅かにずらし、足のホルスターに納めてある二丁のショットガン―『ベレンヘーナ』を瞬時に抜き取り、迫って来ているパイロシューターとドゥームブリンガーに向けて構える。

ーーーカッシャ！！

「・・・・・キエチマエヨ・・・・ダブルインパクトッ！！！」

ーーードドドドドドドドドドドドドドッ！！！

『ッ！！！』

“黒いコートを着た何か”がベレンヘーナを連射すると同時に、“黒いコートを着た何か”を包囲するように迫っていたパイロシューターとドゥームブリンガーは全て撃ち抜かれ爆発した。

その目にも止まらない連射に琴乃、リシア、風華は目を見開いた。全てが一瞬だった。放たれたパイロシューターとドゥームブレイカーの数は軽く数えても五十以上。その全てを一瞬の内に、しかも正確無比に撃ち抜かれたのだ。
そのまるで悪魔が乗り移ったような銃撃に琴乃、リシア、風華は目の前に立っている“黒いコートを着た何か”の正体に気がつき、警戒心を強めながらそれぞれデバイスを油断無く構える。

「・・・貴方はデジモンですね？」

「・・・・コタエル・・・ギリハネェ・・・・・オレノモクテキノタメニ・・・・・キエヤガレッ！！！ダブルインパクト！！！」

ーーードドドドドドドドドドッ！！

『クッ！！』

ーーービュン！！

再びベレンヘーナから放たれたダブルインパクトを、琴乃達は瞬時に空に飛び上がる事で避けた。
そしてそのまま“黒いコートを着た何か”に背を向け、隠れ家がある方向とは逆方向に向かって全速力で飛び立つ。
それを目撃した“黒いコートを着た何か”は、瞬時に足のホルスターにベレンヘーナを納め、ベヒーモスのハンドルを一気に回し、琴乃達を後を追いかける。

ーーーブウゥン！！ブウゥゥゥゥゥーーーン！！

（よし、追って来ているみたいだよ！）

（うむ、このままあの塵芥を隠れ家から引き離すぞ。奴の狙いは我らだ）

（えぇ、私達の問題であの場所を荒らさせたりは絶対にさせません！！）

三人とも黒いコートを着た何かの狙いが、自分達の命である事に気がついていた。

どうやって自分達の隠れている場所を見つけられたのかは分からないが、それでも狙いだけ分かれば、自分達を囮にして敵を隠れ家から離す事は可能。だからこそ、三人とも自分達の身を囮にして、“黒いコートを着た何か”を隠れ家から少しでも離そうと動いたのだ。

幸いにも追手の正体はデジモン。それならば自分達の能力を駆使して、三人同時に掛かれば負ける事は無いと言う考えを持っての行動だった。それが間違いだと気がつかずに。

「・・・・ニガサネエゾ！！！・・・・オマエタチハ、コロスッ！！」

「もう！！死ぬ気なんて無いよ！！電刃衝（でんじんしょう）ッ！！」

ーーーズガガガガガガガガガガッ！！

「チィッ！！」

ーーーブウゥゥゥゥ一一一ン！！！

リシアが放った電刃衝（でんじんしょう）を目にした“黒いコートを着た何か”は瞬

時にベヒーモスを横に動かし、電刃衝(でんじんしょう)を避けた。
その間に琴乃達は森を抜け、僅かに空き地が広がる場所に辿り着くと、そのまま同時に三人は背後を振り返り、森から抜け出そうとしているベヒーモスに向かって砲撃を撃ち込む。

「ブラストファイアーーーッ！！」

「貫ったよ！！天破(てんは)・雷神槌(らいじんつい)ッ！！！！」

「消え果てよ塵芥ッ！！アロンダイトッ！！！！」

ーーードグオオオォォォォォォーーーーーン！！！！！

「ッ！！！」

ドガアアア

爆発地点から聞こえて来た足音に、琴乃達は瞬時にデバイスを構える。
それと共に爆発によって生じた煙の中から、全身を黒を基調とした服で覆い、足にはベレンヘーナを納める為のホルスターを供え、首下には何かの機械と思われる物を下げて、両手両足に全身を覆っている黒い服よりも更に黒く輝くスパイラル状のリングを身に着け、腰から長い一本の尻尾を生やしたデジモンが、三つの瞳で琴乃達を睨みつけながら歩いて来た。
そのまるで悪魔そのものとしか言えない姿をしたデジモンに、琴乃達は僅かに恐怖を覚えるが、それを気づかれないようにしながら現れたデジモンに質問する。

「・・・・名前を聞きます・・・・貴方は何者ですか？戦う相手ぐらいの名前は知りたいのですが？」

「・・・・オレハ・・・・ベルゼブ・・・・・ナナダイマオウ・・・・ベルゼブモンダ！！！」

ベルゼブモン、世代／究極体、属性／ウィルス種、種族／魔王型、必殺技／ダークネスクロウ、ダブルインパクト
多くの悪魔型デジモンを統べる能力を持ちながら、あえて孤高の存在を守る魔王型デジモン。“七大魔王デジモン”の“暴食”の称号を持ったデジモンで、その気になれば闇の軍団『ナイトメアソルジャーズ』の頂点に立てると言われている。愛用のショットガン『ベレンヘーナ』を持ち、巨大なバイク型マシーン『ベヒーモス』を乗りこなす。性格は冷酷にして無慈悲であり、非常にプライドが高いが、決して群れたり弱者を攻撃することはない。必殺技は、鋭い鉤爪を振り上げて敵を切り裂く『ダークネスクロウ』に、二丁のショットガンを連射する『ダブルインパクト』だ。

『七大魔王ッ！？』

ベルゼブモンの名乗りに琴乃達は目を見開いた。
琴乃達も大達から全ての元凶の事を聞いている。そしてその存在が集めている七大魔王デジモンの存在も。
その七大魔王の一体が目の前に現れた事に琴乃達は驚愕するが、すぐさま驚愕を無理やり胸の内に押さえ込み、険しい顔をしながらベルゼブモンに向かってデバイスを構える。

「・・・・なるほど、如何やら倉田と言う人間は私達を抹殺したくて仕方ないようですね」

「・・・みたいだね・・・・・だけどッ！！」

「フン、貴様のような塵芥にこの命をくれてやるつもりはないわ！！」

「行きます！！」

ーーービュン！！

琴乃が叫ぶと同時に三人は三方向に飛び去り、ベルゼブモンを惑うはそうと加速魔法をそれぞれ使用しながら飛び回る。
更に琴乃とリシアは自身の持つ能力をベルゼブモンに向かって発動させ、ベルゼブモンの弱体化を行い始める。いかに七大魔王と呼ばれている強大なデジモンとは言え、琴乃達の能力はデジモンにならば絶対に通用する能力。当然ながらベルゼブモンも例外ではない。
その事を理解している琴乃達は、能力を使いながらベルゼブモンに攻撃を開始しようとする。しかし、彼女達は知らなかった。“この世には大と同じように規格外の存在が溢れている事を”。

そしてその中にベルゼブモンが名を連ねれている事を、琴乃達は知らずに戦いは始まる。
それと同時に夕日は沈み、夜の帳が訪れ始める。まるでこの後に起きる惨劇の戦いを、誰にも見られたくないと言うように夜はやって来た。

大の女難、そして狂乱の暴食ッ！後編（後書き）

次回予告。

七大魔王“暴食のベルゼブモン”と戦いを繰り広げる琴乃達。

しかし、その力は琴乃達の想像を超えていた。

傷つき倒れ伏す琴乃達。

その姿を目にした大とアグモンは怒りに燃え、ベルゼブモンの戦いを挑む。

次回、漆黒の竜人と少女、『激闘！大＆アグモンＶＳ暴食のベルゼブモン！！』

戦いの中で彼らは感じる。暴食の心に宿る悲しみを。

激闘！大&アグモンVS暴食のベルゼブモン！！前編

「ブラストファイヤーー！！！」

「アロンダイトッ！！」

ーーードグオオオオオオオオン！！！

「・・・・・」

ーーードンッ！！

琴乃と風華が放った砲撃を、ベルゼブモンは無言で立っていた場所の地面を陥没させるような勢いをもって空中に飛び上がる事で避けた。

そしてそのまま瞬時に足のホルスターからベレンヘーナを二丁引き抜き、砲撃を放った直後である琴乃と風華に向かって照準を合わせて発砲しようとするが、その直前に先に空中に飛んでいたリシアが金色の鎌ーハーケンフォームに変形したライディエルから金色の刃をベルゼブモンに向かって放つ。

「貫ったよ！！光翼斬（こうよくざん）ッ！！」

ーーーシュゥン！！

「・・・・ハッ・・・・・キエロ」

ーーーバッシュン！！

『ッ！！』

リシアが放った光翼斬（こうよくざん）を、ベルゼブモンは見る事もせずに腰から生えている尻尾で掻き消した。

それを目撃した琴乃達は目を見開きながら、音も立てずに地面に着地するベルゼブモンを見つめる。

今のリシアが放った光翼斬（こうよくざん）は、完全に隙をついた一撃だった。しかも空中と言う羽を持たないベルゼブモンが身動きが取れない場所での攻撃だったと言うのに、光翼斬（こうよくざん）を尻尾で掻き消す動きには全く無駄がなかった。

その事実に琴乃、リシア、風華はベルゼブモンが自分達の戦って来た中でも大と並ぶ最上級の実力者だと気がつき、ベルゼブモンから距離を取ろうとする。しかし、その直前にベルゼブモンは地面を凄まじい勢いで蹴りつけ、その勢いを利用して琴乃と風華に急接近する。

ーーーードン！！

「ッ！！早い！！」

「おのれ！！」

凄まじいスピードで接近して来るベルゼブモンを目にした琴乃と風華は、慌ててベルゼブモンから逃れようと空中に急上昇しようとする。

しかし、ベルゼブモンは冷静に琴乃と風華の動きを読み取り、二人が上昇しようとしている場所にいち早くジャンプし、そのまま両手に握ったベレンヘーナの照準を上昇途中の琴乃と風華に合わせようとする。だが、照準が二人に合わされる直前に、ベルゼブモンの四肢と尻尾に桜色のバインドが巻きついてくる。

ーーーガシィィィィン！

「アン？」

「ルベライト。拘束用のバインドです。動きを読んでいたのは其方だけでは無いのですよ、ブラストファイヤーーー！！」

ーーーードグオオオオオオオン！！

ルベライトによって空中に拘束されているベルゼブモンに向かって、琴乃は冷静に言葉を言いながら砲撃をベルゼブモンに撃ち込み、ベルゼブモンは砲撃に飲み込まれた。

それと共に事前に琴乃から策を聞いていたリシアと風華は同時に、砲撃が直撃した事によって発生した煙の中から姿を見せるベルゼブモンに向かって、リシアは電撃を、風華は放射弾を放つ。

「天破（てんは）・雷神槌（らいじんつい）ッ！！」

「ドゥームブリンガーーッ！！」

ーーーードグオオオオオオオオオオオオオン！！！

「・・・・・ウセヤガレッ！！ダブルインパクトッ！！」

ーーーードドドドドドドドドッ！！

『ッ！！』

ベルゼブモンが放ったダブルインパクトは、リシアと風華の一撃

を掻き消したばかりか、琴乃、リシア、風華まで向かい、三人を撃ち抜こうと弾丸は迫る。
琴乃達はその現象に驚愕しながらも慌ててダブルインパクトから逃れ、すぐさまベルゼブモンに向かって魔法を放とうとするが、その直前に空中を落下し続けていたベルゼブモンの背後からベヒーモスが飛び上がって来る。

ーーーブウゥゥゥーーーーン！！！！

「フッ！！」

ーーーードオオン！！

「エェェェェェッ！？嘘ッ！？」

飛び上がって来たベヒーモスの車輪を踏みつけて再び空に舞い上がったベルゼブモンを目にしたリシアは、信じられないと言う声を上げ、琴乃と風華もベルゼブモンの常識を外れた行動に呆気に取られた。
そしてその隙にベルゼブモンはリシアの傍に凄まじい勢いで急接近し、呆然と動きが止まってしまっているリシアに向かって鋭い右手の鉤爪を振り抜く。

「ダークネスクロウッ！！」

ーーーザン！！

「キャァァァァァァーーーー！！！！！」

『リシアッ！！！』

ベルゼブモンのダークネスクロウに切り裂かれたリシアを目撃した琴乃と風華は慌てて、地面に向かって落下していくリシアの後を追い掛け、地面に激突する直前でリシアの腕を二人で掴む。

ーーーガシッ！！

「大丈夫ですか！？」

「怪我は無いであろうな！？」

「・・・・・うん・・・・・何とか薄皮一枚で済んでいるよ」

心配そうに声を掛けて来た琴乃と風華に、リシアは二人を安心させるように声を出した。

その声に琴乃と風華は安堵の息を吐きながらも、リシアの負った怪我に目を向けてみると、確かにリシアの言うとおりバリアジャケットは肩から腰の部分まで切り裂かれてはいるが、怪我自体は僅かに血が滲み出ているぐらいだった。

「咄嗟に身を引いたからこれで済んだけどね・・・・とんでもない切れ味だよ」

「その様ですね」

リシアの言葉を聞きながら、琴乃は自分達と同じように地面に着地してリシアを引き裂こうとした右手の鉤爪を見つめているベルゼブモンを凝視する。

しかし、ベルゼブモンは琴乃達の様子には構わずに右手の鉤爪を見つめながら疑問を持っていた。

（ナゼダ？・・・・・ナンデオレハ・・・・・・アノコムスメヲ、ヒキサケタノニ・・・・ヒキサカナッタ？）

リシアは確かにベルゼブモンのダークネスクロウを寸前で身を引く事で最小限のダメージで避けた。

だが、その動きをベルゼブモンは読んでいた。リシアが身を引くと同時にベルゼブモンが右腕を更に突き出していれば、リシアを確実に命を失っていただろう。

しかし、ベルゼブモンにはそれが出来なかった。理由は自身にも分からなかったが、リシアと近くで顔を見合わせ、そのリシアの瞳の中に在る光を目にした瞬間に、リシアを切り裂く事が出来なくなってしまったのだ。

（・・・・ワカラネエ・・・・・ダガ、アノサンニント、オナジメヲシタ・・・・ナニカオ・・・・オレハシッテイル・・・・ソウダ！アレハタシカ！！アイツラトオナジ！！）

ーーービリッ！！

「ガッ！！」

『えっ！？』

突如としてベルゼブモンの四肢に巻きついているスパイラル状のリングと首に掛かっている機械から電撃が発生し、ベルゼブモンは苦痛の声を上げて頭を両手で押さえた。

その突然のベルゼブモンの変化に琴乃達は驚き、苦しみながら頭を両手で押さえているベルゼブモンを見つめると、ベルゼブモンは突如として顔を上げ、先ほどまで一切感情が感じられなかった声と

違う、凄まじい悲しみと苦痛に満ちた叫びを上げる。

「ガアァァァァァーーーーーーー！！！！！オレハ！！俺は！！違う！！違う！！こんな事をする為に蘇ったんじゃねぇ！！俺は！！ただあいつ等に会いたいだけなんだ！！！！」

「ど、如何したんだよ！？ベルゼブモンは！？」

「分かりません・・・・・ですが、今の彼が上げている叫びに込められている感情・・・・私達には覚えが在る気がしますが？」

「うむ、確かに同感だな・・・・我らには確かに、奴の叫びの中に含まれている感情に、身に覚えがあるような気がするぞ」

リシア、琴乃、風華はそれぞれ悲しみと苦痛に満ちた叫びを上げ続けているベルゼブモンを見ながら、声を出した。

ベルゼブモンの叫びの中に含まれている感情。その全ての感情を理解出来ずとも、琴乃達は僅かにではあるが、ベルゼブモンの叫びに含まれている感情を読み取った。

しかし、その感情が何なのかまで理解出来ず、苦しみ続けているベルゼブモンを見つめていると、ベルゼブモンは突如として頭を押さえていた両手を糸の切れた人形のように下ろし、再び感情が感じれない機械的な声を出し始める。

「・・・・オレノニンムハ・・・・・・・タイプＮ－２０８・・・・タイプＦ－９１・・・・タイプＨ－２７８・・・ソシテ・・・・ダイモンマサルヲ・・・・マッショウスルコト」

『ッ！！』

ベルゼブモンが告げた任務内容を耳にした琴乃達は目を見開くが、すぐさま冷静に立ち返り、再びベルゼブモンに向かってそれぞれデバイスを構え出す。

「・・・・貴方が何を苦しんでいるのかは分かりませんが、彼を、大を殺す事だけは絶対にさせません！！」

「大は僕達を救ってくれた人だ！！その人を殺させたりしないぞ！！」

「この二人と違って、我は大をどうとも想ってはいないが、我も我で大には感謝しているのでな。そやつを殺させる訳にはいかん・・・・悪いがうぬには此処で止まって貰うぞ！」

「・・・・・・行きます！！」

ーーービュン！！

琴乃が叫ぶと同時に琴乃はベルゼブモンの右側に、風華は左側に、そしてリシアはベルゼブモンの頭上に向かって飛び出した。

そのまま三人は魔法陣をそれぞれ出現させ、同時に再び魔力弾を動きが止まってしまっているベルゼブモンに向かって撃ち出す。

「パイロシューターー！！！」

「エルシニアダガーー！！！」

「電刃衝（でんじんしょう）！！」

ーーーズガガガガガガガガガッ！！

「・・・・・」

ーーードォン！！

琴乃達が放った魔力弾に対して、ベルゼブモンは腰の尻尾を勢いよく叩きつけた反動を利用して再び空に舞い上がった。

しかし、その動きを見切っていたのかリシアはベルゼブモンが移動する地点に瞬時に移動し、そのままライディエルを真っ直ぐベルゼブモンに向かって構えながら叫ぶ。

「ライディエル！！リミットブレイク！！」

《Ｒｉｏｔ（ライオット） Ｚａｍｂｅｒ（ザンバー） Ｓｔｉｎｇｅｒ（スティンガー）》

ーーーガッシャン！！

リシアが叫ぶと同時にライディエルは柄の部分がワイヤーで繋がった二本の金色の剣ーライオットザンバー・スティンガーに変形した。

それと同時に上空から凄まじい稲妻がリシアの握っているライオットザンバー・スティンガーに降り注ぎ、そのままリシアは空中で自在に身動きが取れずにいるベルゼブモンに振り下ろす。

「跡形も無く砕け散れ！！双雷（そうらい）！！雷神滅殺！きょっこーーーざんかいいいいーーーーーー！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！

リシアがライオットザンバー・カラミティからそれぞれ放った双雷（そうらい）

雷・雷刃滅殺極光斬改は辺りに電撃を迸らせながら、ベルゼブモンを切り裂こうと迫る。
しかし、迫り来る双雷・雷刃滅殺極光斬改を目にしてもベルゼブモンは慌てた様子を全く見せずに両手にベレンヘーナを握り締めながら双雷・雷刃滅殺極光斬改に照準を合わせて発砲する。

「・・・・・ハートブレイクショット」

ーーードォオン！！ドォオン！！

ーーーバッシュン！！

「ッ！！」

ベルゼブモンがベレンヘーナから撃ち出した弾丸は正確に双雷・雷刃滅殺極光斬改の中心部分を射貫き、双雷・雷刃滅殺極光斬改は消滅した。
自身の最大の魔法が簡単に撃ち破られた事実にリシアは驚愕し、思わずその場で動きが止まってしまう。その隙にベルゼブモンは右手に握っていたベレンヘーナを後方に向かって構えると同時に発砲し、その反動を利用してリシアの傍に瞬時に近寄る。

ーーードォン！！

「ッ！！しまッ！」

「・・・・ハッ・・・・ニガサネエゾ！」

ーーーガシッ！！

慌てて逃げようとしているリシアを瞬時にベルゼブモンは、右手でバリアジャケットのマントを掴み取った。
そのまま驚愕に動きが止まってしまっているリシアに、左手に握っていたままのベレンヘーナを突きつけ、至近距離で発砲する。

「・・・・シネ」

ーーーードゴオォオン！！

「ウワァァァァァァーーーー！！！！」

『リシアッ！！！』

至近距離でベレンヘーナの銃弾を食らったリシアを目にした琴乃と風華は慌てて、再び地上に落下していくリシアを救出に向かおうとするが、その直前に再びベレンヘーナの反動を利用したベルゼブモンが今度は風華の傍に瞬時に移動する。

ーーーズドォン！！

「クッ！！失せよ！！塵芥！！アロン…」

「・・・・オセェヨ」

ーーーガシッ！！！

「ッ！！」

風華がアロンダイトを撃ち出そうとする直前に、エルザードクロイツを握っている風華の右手にベルゼブモンの尻尾が巻き付き、そ

のまま無理やり右手を上に押し上げた。
そしてそのままベルゼブモンは瞬時に左手に握っているベレンヘーナをホルスターに納め、左手の鉤爪を光らせながら風華と共に地上に落下して行く。

「風華！！！」

「来る出ない！！」

「・・・・オワリダ・・・・ダークネスクロウッ！！」

ーーードスゥン！！

「ッ！！！」

ベルゼブモンが振り下ろした左腕の鉤爪に貫かれた風華を目にした琴乃は目を見開くが、ベルゼブモンと風華は琴乃の様子に構わずに地上に凄まじい勢いで激突する。

ーーードグオォォォォーーーーーーーーーーン！！！！！

「ふ、風華アァァァァァァーーーーー！！！」

地上にベルゼブモンと共に激突した風華を目にした琴乃は慌てて、風華の救援に向かおうと駆け出すが、その前に落下の衝撃で発生した煙の中から両手にベレンヘーナを握ったベルゼブモンがゆっくりと歩いて来る。

「・・・・フタリメダ・・・・・・ノコルハ・・・・・・テメダケダ！！」

ーーーカシャ！！

「・・・・・絶対に許しません！！ルシフェルオン！！リミットブレイク！！ブラスターリミット１」

《Ｂｌａｓｔｅｒ（ブラスター）　Ｍｏｄｅ（モード）》

琴乃が宣言をルシフェルオンに放つと同時に電子音声が響き、琴乃から凄まじい魔力が迸る。

その現象にベルゼブモンは僅かに目を細めるが、すぐさま右手に握ったベレンヘーナの照準を空に浮かんでいる琴乃に合わせて発砲する。

「・・・・ハートブレイクショット！！」

ーーードオォン！！

「ブラストファイヤーー！！！！」

ーーードゴオオオオオオオン！！！！

ベルゼブモンが撃ち出した弾丸と琴乃の強化された砲撃は空中でぶつかり合い、そのまま二人は互いに弾丸や砲撃を連続で放つ攻防を繰り広げ始める。

その様子を離れた所の高台から双眼鏡でベルゼブモンと琴乃の戦いを眺めている二つの影が存在していた。

その影の正体はアルケニモンと何らかの機械を首から提げているマミーモンだった。ベルゼブモンが勝手に動き出してからアルケニ

モンとマミーモンはベルゼブモンを追いかけて、琴乃達とベルゼブモンが戦っているのを目撃したのだ。

「ヒェ～、すげえぜ・・・・ベルゼブモンの奴はともかく、あの子供の方もすげ。七大魔王のベルゼブモンと互角に戦いあっていやがるぜ」

「アンタ馬鹿かい？互角何かじゃないよ。ベルゼブモンの奴は一歩もアソコから動いていないんだからね」

「エッ！？」

アルケニモンの言葉にマミーモンは慌てて戦いを覗いてみると、確かにアルケニモンの言うとおり、ベルゼブモンは一歩もその場から歩く事も止まり続け、琴乃が放つ強力無比な砲撃を全てベレンヘーナから撃ち出す一発の弾丸で相殺し続けていた。

「・・・・とんでもない射撃だよ・・・・砲撃の中心に、しかも一ミリのずれも無く弾丸を撃ち続けて、相殺しているんだからね・・・・その上、あの小娘が今使っているシステムはどうやら自分の体も傷つけるみたいだからね・・・・このまま行けば勝手に自滅するか、砲撃が撃てなくなってベルゼブモンの餌食さ」

「本当に七大魔王はルーチェモン様と同じで化け物揃いだぜ・・・・まぁ、運が無かったんだろうな。あの娘も、ベルゼブモンに殺された二人もよ」

「そうだね。敵じゃ無いのが本当に良かったよ・・・・それでも危なかったけどね」

アルケニモンはそう呟くと共に、マミーモンが首から提げている機械を見つめた。
その機械はベルゼブモンの首に掛かっている機械ー洗脳装置と、両手両足に巻きついているスパイラル状のリングー嘗て別世界のデジタルワールドでデジモンを洗脳する為に作られた機械ーイービルスパイラルの出力を上げる装置だった。一時的にベルゼブモンが洗脳から脱しかけようとした瞬間に、マミーモンは慌てて機械を操作して、再び洗脳状態にベルゼブモンを変えたのだ。
流石に七大魔王デジモンのベルゼブモンを完全に洗脳し切るのは無理だったのか。機械の出力は既に最大状態で固定されている。
「だけどよぉ？何で今までは最低の出力で洗脳出来ていたのに、急に最大出力じゃないと無理になったんだろうな？」
「知らないよ。全く、倉田の奴も何が最低な出力で充分だろうだ・・・・それだけであのベルゼブモンの心が強いって事なのかね？」
アルケニモンはそう疑問の声を出しながら、戦いの場へと目を戻してみると、既に戦いは終わりへと近づいていた。

「ハァ、ハァ、ハァ」
「モウオワリカ・・・・・スコシハヤルカトオモッタガ・・・・・トンダ・・・キタイハズレダッタナ」
息切れを起こしている琴乃に、ベルゼブモンは冷酷に声を掛けた。
その声と無傷のベルゼブモンの姿に、琴乃は初めて心の底から恐怖を感じ始める。

デジモンに対して絶対的に通用する筈の弱体化能力。そしてなのはの砲撃に匹敵する筈の砲撃さえも全く通用しなかったのだ。
自身の信じていた全てが簡単に撃ち砕かれた事実に、琴乃は心の底から絶望を感じ始めるが、自身を傷つきながらも助けてくれた大の姿が脳裏に浮かび上がり、全身全霊をルシフェルオンに込めながら今までで最大魔力をルシフェルオンに送りながらベルゼブモンに向かって構える。

「ブラスターリミット2！ブラスタービット展開！！」

ーーーガシャン！！

琴乃が叫ぶと同時にルシフェルオンの先端を模したビットが二つ出現し、琴乃と同じように魔力を集中させていく。
その姿にベルゼブモンは無表情なままベレンヘーナを琴乃に向かって構え、冷静に琴乃に声を掛ける。

「マダヤルノカ？・・・・・ムダナコトダゼ・・・・テメエノ、ノウリョクデ・・・・タショウハ・・・チカラガサッガッテイルガ、ソレデモ・・・・・・オレハマケネエ」

「・・・・私も同じ事を言った事があります。何をやっても無駄だと・・・・ですが、私は学びました！諦めなければ道が出来ると！！貴方がどれほどの力を持っていても、私はそれを超えて私達が見つけた居場所に帰ります！！集え、明星(あかぼし)！！！」

「ハッ・・・・イイメダ・・・・・・（ヤッパリ、オレハシッテイル・・・・コノメヲシタヤツラ・・・・タオセバ・・・・オレハ・・・・『アイ』と『マコ』ヲシルコトガ・・・・デキルキガスル）」

そうベルゼブモンは内心で呟きながら、琴乃が作り上げている魔力球にベレンヘーナの照準を合わせ、二人の準備が終わった瞬間に、同時に攻撃を放つ。

「全てを焼き消す焔となれ！！ルシフェリオンブレイカーーーー！！！！」

「ダブルインパクト！！！！」

ドゴオオオ

「そ、そんな・・・・」

煙の中から平然と歩いてくるベルゼブモンを目にした琴乃は、絶望に満ちた声を出しながら歩いてくるベルゼブモンを見つめる。

しかし、ベルゼブモンは琴乃の様子に構わずに琴乃の目の前で歩き、地面に倒れて動けない琴乃の眼前にベレンヘーナを突きつける。

ーーーカッシャ！

「・・・・ザンネンダッタナ・・・・・オマエノイチゲキハ・・・・タシカニ・・・オレニトドイタガ・・・・ダメージハ・・・・アタエラレナカッタ・・・・セメテモノ・・ナサケダ・・・・クルシマズニ・・・・ホカノフタリトオナジヨウニ・・・・イカセテヤロウ」

「クッ！！（此処までなのですか！！嫌です！！私はまだ大に何も返せていない！！）」

「ジャアナ」

ベルゼブモンは言葉と共に引き金に指を掛け、琴乃は悲しみに包まれながら目を瞑ってしまう。

だが、ベルゼブモンがベレンヘーナの引き金を引く直前に、突如としてベルゼブモンの肩を背後から伸びて来た手が掴む。

ーーーガシッ！！

「ッ！！」

「何してやがんだよ！！テメエは！！」

ーーードゴオオオン！！

「ガアッ！！」

肩を掴まれた事で驚いたベルゼブモンが驚きながら背後を振り返った瞬間に、ベルゼブモンの顔に肩を掴んだ大の右拳が突き刺さり、ベルゼブモンは吹き飛んだ。

それを確認した大はすぐさまデジタマを持ったアグモンと共に、地面に倒れ伏している琴乃を抱き上げながら声を上げる。

「おい！！大丈夫か、琴乃！！」

「生きてるか！！」

「・・・大、アグモン」

「遅れて済ませねぇ。リシアと風華は如何した？」

「・・・・」

大の質問に琴乃は顔を暗くしながら、顔を横に動かし、大とアグモンが不安に襲われながら琴乃の見ている方向に目を向けてみると、地面に倒れ伏したまま動く様子を見せないリシアと風華が存在していた。

その姿からは二人が無事と言う様子を見つける事が出来ず、大とアグモンは顔をゆっくりと俯かせ、大は琴乃を地面に下ろし、アグモンは持っていたデジタマを琴乃の腕の中に渡す。

「・・・・・少し待ってろ。すぐに終わらせて三人とも隠れ家に連

れて行くから」

「そのデジタマを確りと持っていてくれよ。それは大事なデジタマだからよ」

「ッ！！いけません！！相手は七大魔王デジモンです！！幾ら大とアグモンでも！！」

ベルゼブモンと戦おうとしている大とアグモンの背に向かって琴乃は叫ぶが、大とアグモンは止まらずに地面から起き上がっているベルゼブモンに向かって歩き出す。

その姿を目にしたベルゼブモンは、大に殴り飛ばされた頬を押さえながらゆっくりと立ち上がり、大とアグモンを見つめる。

「・・・・・ダイモンマサルカ？」

「そう言うテメエは倉田の仲間か？」

「ナカマ？・・・・・（ナンダ？ソノコトバハ？・・・・・ナゼ、オレハソノコトバヲ・・・・ナツカシクカンジル？）」

ベルゼブモンは大の呟いた言葉に、懐かしさを感じた。

“仲間”。その言葉こそに自身が探し求めている答えが在ると感じ、大に殴り飛ばされた頬から感じる熱さに心が動きながら大とアグモンにベレンヘーナを構える。

ーーーカッシャ！

「ダイモンマサル・・・・オレトタタカエ・・・・・オマエトタタカエバ・・・・オレノサガシテイルモノガ・・・・ミツカルキガス

ル」

「ハッ！テメエの事情なんか関係なくても戦ってやるぜ！！琴乃達を、俺の仲間を傷つけた礼！！万倍にして返してやる！！アグモン！！」

「オウッ！！」

大の叫びにアグモンはすぐさま応じ、大の前に飛び出す。

それと同時に大はポケットの中からデジヴァイスバーストを取り出すと共に、右手に宿っていたデジソウルをデジヴァイスバーストの先端に押し当てる。

それと共にデジヴァイスバーストの液晶部分にＵＬＴＩＭＡＴＥＥＶＯＬＵＴＩＯＮの文字が映り出し、大はアグモンにデジヴァイスバーストを向け、影響画面部分からオレンジ色の光をアグモンに向かって撃ち出す。

「デジソウルチャージ！！オーバードライブッ！！」

「アグモン進化ッ！！」

デジヴァイスバーストから放たれたデジソウルを体に浴びたアグモンは叫ぶと同時に、その体をデータ粒子へと一時変換させ、体を巨大に変化させる。それと共に背中に赤い十二枚の機械のような翼が出現し、胴体には赤い鎧の中心に青い宝玉のようなものへと変わり、腕にも黄色い篭手のようなものを備え、更に先に刃のような光輪が付いた巨大な尻尾も持った光竜型デジモン―シャイングレイモンへと進化する。

「シャイングレイモン！！」

「行くぞ！！ベルゼブモン！！！！」

「コイ！！ダイモンマサル！！シャイングレイモン！！」

大の好戦的な叫びにベルゼブモンも、戦い始めてから初めて好戦的な笑みを口元に浮かべながら、同時に三人は飛び出し凄まじい激闘を開始するのだった。

だが、大は気がついていなかった。自身の持つデジヴァイスバーストの液晶画面から不気味な黒い光が溢れ出し始めた事に。

激闘！大&アグモンVS暴食のベルゼブモン！！後編

「オオオオォォォォォォーーーーーーーーー！！！！！」

「フッ！！」

ーーーードン！！

大よりも先に突進して来たシャイングレイモンに対して、ベルゼブモンは自身の立っている場所を陥没させる勢いでジャンプしてシャイングレイモンを飛び越えた。

そのままベルゼブモンは空中で体を反転させて、背中を向けているシャイングレイモンにベレンヘーナの照準を合わせようとするが、その直前にシャイングレイモンの尻尾が凄まじい勢いでベルゼブモンに向かって来る。

ーーーーブン！！

「ッ！！チィッ！！」

ーーーードォン！！

自身に向かって来る尻尾に気がついたベルゼブモンは、舌打ちしながら別方向にベレンヘーナを発砲し、その反動を利用して尻尾が下りて来る範囲から脱出した。

そして地面に着地するとすぐさまシャイングレイモンにベレンヘーナを向けて今度こそ弾丸を撃ち込もうとするが、背後から大が飛び出し、ベルゼブモンに向かって渾身の力を込めた蹴りを振り抜く。

「オラアァァァァァッ！！」

「クッ！！」

ーーーガアァァァァァン！！

大の攻撃に直前で気がついたベルゼブモンは、すぐさまベレンヘーナを盾にするように構えて大の蹴りを受け止めた。

しかし、凄まじい威力が込められていたのか、ベルゼブモンは足を地面につけていながらも防御すると同時に地面に引き摺ったような後を引きながら吹き飛んで行く。

ーーーザザザザザザザザーーーー！！！

「ッ！！」

「今だ！！シャイングレイモン！！」

「オウッ！！」

「ハッ！！」

大の言葉に応じるシャイングレイモンの言葉を耳にしたベルゼブモンは慌てて、声の聞こえた方を見てみると、背中の羽を大きく広げ胸元に凄まじいエネルギーを集中させているシャイングレイモンが存在していた。

その姿を目にしたベルゼブモンはすぐさま右手に握っているベレンヘーナをシャイングレイモンに向けようとするが、その前にシャイングレイモンは極限にまで集めたエネルギーを球状にしてベルゼブモンに向かって撃ち出す。

「貫った！！グロリアスバーーースト！！」

ーーードゴオォン！！

「良しッ！きま…」

「駄目です！！その攻撃はベルゼブモンには効きません！！」

『ッ！！』

突如として大の叫びを否定するように上がった琴乃の叫びに、大とシャイングレイモンが目を見開きながらベルゼブモンに目を向けた瞬間、ベルゼブモンはベレンヘーナの銃口をグロリアスバーストに向けて発砲する。

「・・・・ハードブレイクショット！！」

ーーードォン！！

ーーーバッシュン！！

『ッ！！』

ベルゼブモンが放ったハードブレイクショットがグロリアスバーストの中心に直撃すると、グロリアスバーストは霧散した。

それを目撃した大とシャイングレイモンは目を見開きながら、平然としているベルゼブモンを見つめるが、ベルゼブモンは二人の視線など気にせずに二丁のベレンヘーナを大とシャイングレイモンにそれぞれ構える。

「ハッ！・・・・ワルイガ・・・オレニハエンキョリカラノ・・・・・コウゲキハ・・・・・キカネエゾ！！」

「彼の言っている事は本当です！！私の砲撃も全部一発の弾丸で相殺されていました！！遠距離からベルゼブモンを倒すのは無理です！！」

「・・・・なら！！接近戦だ！！行くぞ！シャイングレイモン！！」

「あぁッ！！任せろ兄貴！！」

大の言葉にシャイングレイモンは応じると共にベルゼブモンに向かって構えを取り出す。

それと同時に大は自身のデジヴァイスバーストを左手に持ちながら横に傾け、左側に備わっているセンサーの上を素早く右手で滑らせる。

「ジオグレイソーード！！！！！！」

「ムン！！」

ーーードゴオォン！！！

大が叫ぶと同時にシャイングレイモンは右手を大地に叩きつけ、地面の中に右手を入れて、そのまま何かを掴み取り、大地から引き摺り出す。

「オオォォォォーーーー！！！！！」

ーーードゴオオオオォォン！！

「ッ！！ケンダト！？」

シャイングレイモンは地面から引き摺り出した、中心に柄が存在し、その横から刃を左右に伸ばしたダブルセイバー大地の力が込められた剣ー『ジオグレイソード』を目にしたベルゼブモンは声を上げながら、シャイングレイモンが右手に握っているジオグレイソードを見つめた。

しかし、シャイングレイモンはベルゼブモンには構わずにジオグレイソードの切っ先をベルゼブモンに構える。

ーーースチャ！！

「幾らお前でも、これならば消滅させる事は出来ないだろう！」

「・・・・ハッ！ナメンナヨ！！・・・・・・タカダガブキヲモッタテイドデ・・・・オレサマガ・・・マケルカヨ！！」

「ケッ！！それは俺達のセリフだぜ！！俺とシャイングレイモンが負けるかよ！！行くぞ！！」

「オウッ！！」

大の叫びにシャイングレイモンはすぐさま応じ、右手に持っているジオグレイソードを構えながら、大と共にベルゼブモンに向かって突撃し、ベルゼブモンもベレンヘーナを両手に持ちながら大達に向かって飛び掛るのだった。

そしてその戦いを少し離れた所から、動く事が出来ずにデジタマ

を抱えながら戦い見ていた琴乃は、リシア、風華の三人同時に掛かっても歯が立たなかったベルゼブモンと互角以上の戦いを繰り広げている大とシャイングレイモンの力に、改めて大達の規格外を思い知らされていた。

（デジモンで無いから負けたと思っていましたが、そうではないんですね・・・・大とシャイングレイモンは沢山の戦いを超えて成長して来たからこそ強い・・・・・改めて自分達の世界の知らなさを思い知らされました・・・・・・ですが、絶対に何時かは辿り着きます！！大と一緒に戦う為に！！）

そう琴乃は改めて自身が目指すべき場所を決めると、大とシャイングレイモンの戦いを残さず見ようと戦いを目に力を込めながら見つめ始める。

それと同時に琴乃の背後から二つの声が聞こえて来る。

「琴乃ッ！！」

「大丈夫か！？」

「ッ！！ガオモン！！それに・・・・」

背後から聞こえて来た声に琴乃が振り返ってみると、焦った顔をしたフェイトとガオモンが琴乃に駆け寄って来た。

琴乃はガオモンはともかくフェイトの姿に顔を僅かに顰めるが、ガオモンとフェイトは構わずに琴乃の傍に近寄り、すぐさま状態を確認する。

「ムッ！！・・・・琴乃？・・・・・もしや例のブラスターシステムとやらを使ったのか？」

「ブラスターシステム！？琴乃！本当なの！？」

琴乃の状態を素早く調べたガオモンの言葉に、フェイトは悲鳴のような声を上げて琴乃に質問した。

そのフェイトの質問に琴乃はフェイトの顔を見ずに、ベルゼブモンと戦い続けている大とシャイングレイモンを見ながら答える。

「・・・・使いました・・・・出なければ、私は、私達は七大魔王デジモンの一体・・・・ベルゼブモンに殺されていたでしょう」

『七大魔王！！』

琴乃が告げた事実にガオモンとフェイトは声を荒げて、大とシャイングレイモンが戦っているベルゼブモンを見つめた。

既に戦いで互いに傷を負ってはいるが、互いに攻撃を止める事は無く、隙を見つければ一撃で戦闘が不可能になってしまう攻撃を繰り出し続け、三人は最小限に動きを持って相手の攻撃を避け続ける。

その、既に人間が介入する事は不可能としか言えない戦いに平然と参加して、ベルゼブモンに生身で挑んでいる大の姿に、フェイトは琴乃と同じように大の力に唖然とするが、大の事を良く知っているガオモンは構わずに別の場所で倒れ伏しているリシアと風華の状態をすぐさま確認しに行く。

「・・・・・ムッ！！これは！？」

「ガオモン？」

突如として上がったガオモンの疑問の声に、フェイトは訝しげな声を上げながらも琴乃を抱き上げ、ガオモンの傍に近寄って行く。

「二人とも見てくれ。リシアと風華の体には軽い傷しか無いんだ」
「ッ！！在りえません！私は確かに見ました！リシアは至近距離でベルゼブモンに銃を撃たれて、風華は体を貫かれた筈です！？それに、ベルゼブモンは此処に来た目的は私達と大の抹消だと言っていました！」
「だが、二人の体には本当に軽傷しかないんのだ」
ガオモンはそう琴乃の言葉に答えながら地面に横になっているリシアと風華を手で示し、琴乃とフェイトが恐る恐る二人の姿を見てみると、確かにガオモンの言うとおり、リシアと風華には大きな傷は無く、掠り傷程度しかなかった。
琴乃はその二人の姿に目を見開いた。確かに自身の目の前で二人はベルゼブモンに倒され、地面に落下してしまった。しかも、風華は自身の目でベルゼブモンの腕に刺し貫かれる瞬間を目にしたのだ。
それなのにリシアと風華には軽傷しか存在せず、琴乃は訳が分からないと言うように頭を悩ませるが、ガオモンは構わずにリシアと風華の状態を更に詳しく調べると、風華のバリアジャケットの背中の部分に大穴が開いている事を発見する。
「・・・・・まさか」
「如何したの？ガオモン？」
「・・・・これは私の推測だが・・・・ベルゼブモンは確かにリシアと風華に死ぬような攻撃を放った・・・・だが、当たる直前でギリギリの所で二人の体に傷がつかないようにしたんだ・・・・リシアが気絶したのは恐らく至近距離で銃の衝撃を食らった事で、風華

は腕で刺し貫いたように見せながら逆の腕で当身か何かで気絶させたのだろう」

「・・・・・・正解じゃ・・・・ガオモン」

「風華！！」

突然響いた風華の声に、琴乃は声を上げ、フェイトとガオモンも風華の方に顔を向けてみると、ゆっくりと風華の目が開く。

その姿に琴乃は僅かに安堵の息を吐き、フェイトとガオモンも安堵の息を吐きながら風華に声を掛けようとするが、その前に風華は話し出す。

「・・・・ガオモンの推測は正解じゃ・・・・ベルゼブモンは我とリシアを気絶させただけで攻撃を止めおった・・・・しかも、我が地面に激突する直前で体を入れ替えて、我を落下の衝撃からその身を犠牲にして護りおったんだ」

「そんな筈はありません！？ベルゼブモンは確かに私に二人を倒したと言っていました！それなのにどうして！？」

「・・・・其処までは我に分からんが・・・・ベルゼブモンは我らを殺す気がないのであろう」

「如何言う事なの風華？琴乃の話だとあのベルゼブモンって言うデジモンは、風華達と大さんを殺しに来たって言う話なんだけど？」

「殺す気ならばあやつの実力ならば大とアグモンが来るまでに我らを殺せた筈だ・・・・・腹立ったしいが、ベルゼブモンの本来の実力は我らを遥かに超えている・・・・・にも関わらずに、未だに我

らが生きている言う事は、ベルゼブモンは我らが死なないように手加減していたのだ」

『ッ！！』

風華が告げた事実に琴乃、フェイト、ガオモンは目を見開きながら、大とシャイングレイモンと戦っているベルゼブモンを見つめた。

そして琴乃は気がついた。確かに今、大とシャイングレイモンと戦っているベルゼブモンを相手に自身が戦える可能性はゼロだと言う事に。

もはや三人の戦いは同レベルの実力者でなければ戦いに参加出来ないレベルに変わっている。その時点からでも自身が手加減されていた事実は明白であり、琴乃は心の底から悔しく思い、下唇を思わず噛んでしまう。

フェイトとガオモンはその様子に気がつきながら、何故敵である筈のベルゼブモンが琴乃達を殺さずに、しかも出来るだけ傷も負わせない戦いをしていたのかが、分からずにベルゼブモンの姿を見つめる。

そして疑問に満ち溢れながら戦いを見つめていると、フッとガオモンの目にベルゼブモンの首から下がっている機械のような物が映る。

「（アレは？確か何処かで見た事が在るぞ。アレは確か？）・・・・・・ッ！！分かったぞ！！あの機械は洗脳装置だ！！」

「エッ！？洗脳装置？」

突然響いたガオモンの声に、フェイトは疑問の声を上げ、琴乃と風華も疑問の視線をガオモンに向けると、ガオモンはベルゼブモンの首から下がっている機械について説明し出す。

「間違いない！小型化はしているが、あの機械はずっと昔に倉田がベルゼブモンと同じ七大魔王の『ベルフェモン』を操った時に使った機械と同じ物だ！！アレを使って誰かがベルゼブモンを離れた所から操っているんだ！！！」

「それって本当なのガオモン！？」

「あぁ、私は一時期では在るが、倉田の目的を知る為にマスターと共に倉田の仲間の振りをしていた事があるんだ。その時にマスターが倉田に頼まれて、アレと同じ装置の調整を任された事がある。だからこそ、見間違いは無い。そう考えればベルゼブモンの不可解な行動も全て頷ける。自分の本当の意思と違って動かされているからこそ、琴乃達に対して不可解な行動をしたんだ」

「それが事実だとすれば他にも納得出来る所があるぞ・・・・あやつは一度だけ我らの前で感情の箍った叫びを上げたのだが、その声には我らの身に覚えのある感情が含まれていた」

「・・・・自分の意思と関係なく戦わされる・・・・・確かに私達にも身に覚えがある筈です・・・・もっと早く気がつくべきでした・・・・ベルゼブモンも自身の意思と関係なく戦わされているんですね」

そう琴乃が呟くと、意識が回復していないリシアを除いたその場にいる全員が、大と戦い続けているベルゼブモンの姿を悲しげに見つめるのだった。

そして大とシャイングレイモンとベルゼブモンの戦いも既に終わりに近づいていた。

「オオォォォォォーーーーー！！！！！」

ーーーブン！！

「チィッ！！」

シャイングレイモンが振り下ろして来たジオグレイソードを、ベルゼブモンはギリギリの所でかわし、そのまま右手に持っているベレンヘーナの銃口をシャイングレイモンに向ける。

「クラエ！！ハードブレイクショット！！」

ーーーズドォオン！！

「ガアッ！！」

ベルゼブモンが放ったハードブレイクショットをシャイングレイモンは避ける事が出来ず、胸に食らった。

それによって動きが止まってしまっているシャイングレイモンに向かって、ベルゼブモンはすぐさま走り出し、更なる追撃をシャイングレイモンに放とうとする。しかし、その直前にシャイングレイモンの肩に何時の間にか乗っていた大が飛び出し、ベルゼブモンに右拳を放つ。

「オラアァァァァァッ！！」

「ッ！！ガアァッ！！」

大の拳を避ける事が出来ず、ベルゼブモンは胸に拳を食らい地面

に向かって落下して行く。
　それと同時にダメージから復帰したシャイングレイモンが、空中で体勢が整っていないベルゼブモンに向かって、ジオグレイソードの剣先を素早く突き出す。

「ハアッ！！」

「クッ！！ナメルナ！！」

ーーーガキィィィィン！！

　シャイングレイモンが突き出して来たジオグレイソードに対して、ベルゼブモンは右手に持っていたベレンヘーナを盾の様にして構え、ジオグレイソードを受け止め辺りに甲高い音が鳴り響いた。
　その姿にシャイングレイモンと大は目を見開くが、すぐさまシャイングレイモンは冷静さを取り戻し、ベルゼブモンがベレンヘーナを使って受け止めているジオグレイソードを素早く横薙ぎに振るい、ベルゼブモンを弾き飛ばす。

「ムン！！」

ーーーブオォン！！

「グッ！！ベヒーモス！！」

ーーーブウゥゥゥゥゥゥーーーン！！

『ッ！！』

　ベルゼブモンが吹き飛びながら上げた叫びに応じるように鳴り響

いたエンジン音に、大とシャイングレイモンは慌ててエンジン音が鳴り響いて来ている背後を振り返ってみると、ベヒーモスがシャイングレイモンの背に向かって飛び上がっていた。

「しまっ！！」

ーーードゴオオオオオオン！！

「ガアッ！！」

「シャイングレイモン！！」

ベヒーモスの突進を背中に受けて苦痛の声を上げたシャイングレイモンに、大は心配そうに声を掛けた。

シャイングレイモンはその声にすぐさま意識をベルゼブモンに向けるが、一足遅く、既にベルゼブモンは大地に両足を着き、素早く両手に握っていたベレンヘーナの引き金を引く。

「ダブルインパクト！！」

ーーードドドドドドドドドドドドッッッ！！！！

（避け切れない！！なら！！）

ーーーブン！！

「ッ！！」

ダブルインパクトを避けられないと判断したシャイングレイモンは、すぐさま右手に持っていたジオグレイソードを向かって来てい

る無数の弾丸に向かって投げつけた。
ベルゼブモンはその事実に目を見開くが、ジオグレイソードに阻まれた弾丸を除いても、まだ多数の弾丸が存在し、その弾丸はシャイングレイモンに突き進んで行く。
しかし、シャイングレイモンは向かって来る弾丸に対して、自身の背中に存在している翼を光のエネルギーを集中させると同時に両手を突き出し、光のエネルギーを拡散させながら撃ち出す。

「コロナスプラッシュッ！！」

ーーーピカアァァァァァァーーーン！！

「ナニ！？」

シャイングレイモンは発したコロナスプラッシュによって残されていた弾丸も全て消滅した。
ベルゼブモンはその事実に目を見開くが、すぐさまベレンヘーナをシャイングレイモンに向かって構え、シャイングレイモンと大もすぐさまベルゼブモンに向かって構えを取る。
既に三人とも全身にかなり傷を負ってはしまっているが、大とシャイングレイモン、そしてベルゼブモンも闘志を失う事無く構えを取り続けながら互いに隙を窺い続ける。

「ハァ、ハァ、ハァ、流石は七大魔王だぜ・・・・俺とシャイングレイモンを相手にしてまだ立っていやがる・・・・燃えてくるな！！シャイングレイモン！！」

「あぁッ！！こんなにゾクゾクする戦いは本当に久しぶりだぜ！兄貴！！」

好戦的な大の叫びに、シャイングレイモンも嬉しそうに口元を歪めながら同意を示した。
大とシャイングレイモンは、自分達と互角以上に戦えているベルゼブモンの存在が本当に嬉しいのだ。
確かに琴乃達を傷つけたベルゼブモンへの怒りは二人の胸の内に存在している。だが、それ以上に大とシャイングレイモンは本当に久しぶりに、自分達と互角以上に戦えている存在に出会えた事が嬉しいのだ。
そもそも大が十二年前以上での自身の世界での事件に関わった理由も、『強い奴と喧嘩が出来る』と言うブラックと同じ戦う事こそが目的だった。そして事件の後もデジタルワールドを旅したおかげで、大は自身の父が立っている領域に辿り着いた。しかし、それは逆に自分と互角に戦える者が少なくなったと言う事実に他ならない。ましてや大にはシャイングレイモンと言う最強に近い位置に立っているパートナーデジモンまで存在している。その為にシャイングレイモンと一緒に戦えば、ロイヤルナイツ級か、四聖獣クラスのデジモンでなければ全力で戦えなくなってしまっていたのだ。
強くなった事自体を大とシャイングレイモンは後悔はしていない。しかし、やはり心の何処かで弱い者を苛めてしまっているような後味の悪さを感じていた。だからこそ、ベルゼブモンと言う本当に久しぶりの敵の出現には、大とシャイングレイモンは心から嬉しいと思っていた。“ベルゼブモンが自身の意思で戦っていればだが”。
その事実に気がついてしまった大は、シャイングレイモンと共に僅かに顔を顰め、シャイングレイモンの肩から飛び降りる。

「よっと・・・・おい、ベルゼブモン」

「ナンダ？」

「お前よぉ？何で俺とシャイングレイモンに戦いを挑んだんだ？」

「アァン？・・・・キマッテイルゼ！オレガ！サガシテイルモノヲシルタメダ！！・・・・・オマエニ、サイショニナグラレタトキ・・・・・オレハナニカヲカンジタ！・・・・・ソレガワカレバ・・・・オレハ、『アイ』ト『マコ』ヲ、オモイダサセル！！ソノタメニ、タタカッテイルンダヨ！！」

「『アイ』と『マコ』？・・・・・成るほどなぁ・・・・そいつらがお前の“パートナー”の名前か」

「パートナー？」

大の告げた言葉にベルゼブモンは思わずオウム返しのように言葉を呟いてしまった。

しかし、その言葉には戦う前に聞いた“仲間”と言う言葉以上の懐かしさを感じ、ベルゼブモンは思わずベレンヘーナを下げてしまう。

その様子を大とシャイングレイモンは目撃するが、ベルゼブモンを襲うつもりは二人には無かった。

二人とも戦いながら感じていた。ベルゼブモンの攻撃から感じられる寂しさと悲しさに。

まるで何かを探し続けているような寂しさと悲しみに満ち溢れ、捜しているものが見つからずに立ち止まっている。その様なベルゼブモンの感情が戦っていた大とシャイングレイモンには伝わっていた。

そしてそれと同時にベルゼブモンが利用されている事を二人は確信し、仲間と言う言葉に反応していたベルゼブモンに、今度は更に先に進んだ言葉を大は投げかけて見たのだ。

その結果。ベルゼブモンは攻撃を止めて、大の告げた言葉を深く考え出す。

「（パートナー？・・・・・・『アイ』ト『マコ』ガオレノ・・・・・・パートナー？・・・・・パートナー・・・・・テ・・・・テイマー！？）グッ！！グガアアァァァァァァァーーーーーー！！！！」

「兄貴！！」

「あぁッ！！分かっている！！」

突然頭を押さえながら苦痛の叫びを上げ始めたベルゼブモンの姿に、シャイングレイモンは大に声を掛け、大は頷きながら何時でも動けるようにデジヴァイスバーストを左手に持つ。

もしこれでベルゼブモンが正気に返らなければ、大は自身の持つ最大の切り札を使うってベルゼブモンを倒すつもりだった。出来ればそうならない事を大とシャイングレイモンは内心で祈りながら、苦しみ続けているベルゼブモンを見つめる。

『お前にはパートナーがいないのか？』

『ヘッ！そんなもの俺にはいらないぜ！！』

『あぁ、嫌だ嫌だ、お前らみたいな飼われているデジモンなんてよ』

（チガウ！！チガウ！！オレハ！！ホントウハ、ソンナコトヲオモッテイナカッタ！！）

次々と脳裏に浮かんで来る言葉を、ベルゼブモンは否定するように内心で声を荒げるが、今度は言葉だけではなく一つの情景が自身の脳裏に浮かんで来る。

その光景には多くのデジモン達を傷つけていく自身の姿と、自身を説得しようとしている獅子の顔を持ち、逞しい身体つきをした獣人型のデジモンの姿が存在していた。
その光景が脳裏に浮かんだ瞬間に、ベルゼブモンは再び感情が戻った声を上げる。

「止めろ！！止まれ！！！」

『ウオオォォォォーーーーーーーー！！！』

「アアァァァァァーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」

ベルゼブモンの否定の声も空しく、自身の脳裏に浮かん出来た情景の中で、自身が説得を試みてくれた獣人デジモンをその手で非情に貫き、悲しみに満ちた叫びを上げているパートナーと思われる少女の前で、獣人デジモンのデータをロードしている自身の姿が脳裏に広がった。
その情景を目にした瞬間に、ベルゼブモンは悲しみに満ちた咆哮を空に向かって上げ始めると同時に、ベルゼブモンの首に下がっている機械と四肢に巻きついているイービルスパイラルから黒い紫電が迸り始める。

ーーービリビリビリビリビリッ！！！

「ガアァァァァァーーーーーーー！！！！大門大！！！！シャイングレイモン！！早く！！早く俺を倒せ！！」

「ベルゼブモン！！」

「構うな！！俺は！俺は！！！もう二度と繰り返す訳にはいかねぇん

だ！！あいつらとの！！“樹莉（ジュリ）”のような悲しみを作らないと誓ったんだ！！だから早くしろ！！頼む！！俺を倒せ！！」

「クッ！！兄貴！！やるしかない！！」

「・・・・あぁ、分かった！！チャージ！！！」

シャイングレイモンの言葉に大は即座に応じると、左手に構えていたデジヴァイスバーストの液晶画面に映っていたＵＬＴＩＭＡＴＥ　ＥＶＯＬＵＴＩＯＮが変化し、ＢＵＲＳＴ　ＥＶＯＬＵＴＩＯＮへと文字は変化した。

それと同時にデジヴァイスバーストの左側に存在しているセンサーに大は右手をゆっくりと滑らせる。

「デジソウル・・・・・バーースト！！！！」

ーーーピカァァァァーーーン！！！

大が叫ぶと同時にデジヴァイスバーストから凄まじい量のデジソウルが溢れ出し、シャイングレイモンにデジソウルは降り注ぎ、シャンイグレイモンの体は全身が赤と白に染まっていき、背中に存在していた翼は凄まじい火炎の翼へと変わった。

それと同時にシャイングレイモンの頭上に太陽を思わせるような火炎球が出現し、シャイングレイモンがそれに手を伸ばすと、右手には炎で出来た剣が、左手には円の形をした炎の盾が装備されていた。

その姿こそ、大とシャイングレイモンが会得している究極を越える力ーバーストモードをシャイングレイモンが発動させた姿。その名も。

「シャイングレイモン！！バーストモード！！！」

シャイングレイモン・バーストモード、世代／究極体、属性／ワクチン種、種族／光竜型、必殺技／コロナブレイズソード、ファイナルシャイニングバースト、トリッドヴァイス

シャイングレイモンがバースト進化と言う特殊進化で進化して、一時的に限界能力を発動し、太陽級の高エネルギー火炎オーラを纏った光竜型デジモン。必殺技は、火炎の盾と剣を合体させ、爆発的に威力を増した大剣『コロナブレイズソード』と、全身全霊を込めて大爆発を引き起こす『ファイナルシャイニングバースト』。そして灼熱の火炎弾を連続して相手に向かって放つ『トリッドヴァイス』だ。

「大！！シャイングレイモン！！狙うのならば、ベルゼブモンの四肢に巻きついている黒いリングの様な物と、首から下がっている機械だ！！それこそがベルゼブモンを操っている元凶だ！！」

「分かったぜ、ガオモン！！シャイングレイモン！！」

「任せろ！兄貴！！」

シャイングレイモン・バーストモードは大の言葉にすぐさま応じると、右手に持っている火炎の剣と、左手に持っている火炎の盾を合体させ、凄まじい炎を噴き上げている大剣ーコロナブレイズソードを両手で握り締める。

ーーーガシッ！！ゴオォォォォォォッ！！！

「ベルゼブモン！！お前を苦しめている元凶を焼き尽くしてやるぞ！！」

「ッ！！待て！！ダメダ！！ソレダケハ！！ヤメッ！！ガアァァァァァァァァァァーーーーー！！！！」

「不味い！！急げ！！再びベルゼブモンが洗脳状態に戻る前に、ベルゼブモンを解放するんだ！！」

「オオオォォォォォォォォーーーーー！！！！！」

ガオモンの叫びに、シャイングレイモン・バーストーモードは自身の背中に存在している火炎の翼を使いながら、苦しんでいるベルゼブモンに向かって突撃し、両手で握っているコロナブレイズソードを振り抜く。

「コロナ！！ブレイズソーーードッ！！！！」

「ガアァァァァァァァァーーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

ーーーバキィィィィィン！！！！

シャイングレイモン・バーストモードが振り下ろしたコロナブレイズソードを、その身に受けたベルゼブモンは全身を炎に焼かれながら吹き飛んでいき、それと共に首から下がっていた機械と両手両足に装着されていたイービルスパイラルは一瞬の停滞も無く砕け散った。

ーーードサッ！！

「ベルゼブモン！！」

「しっかりしろ！！」

地面に倒れ伏したベルゼブモンにシャイングレイモン・バーストモードと大はすぐさま駆け寄り、ベルゼブモンの状態を調べる。

そして酷い負傷を負いながらも息をしている事を確認すると、大は安堵の息を吐き、シャイングレイモン・バーストモードも安心すると、進化を解き、元のアグモンの状態に戻る。それと同時に戦いが終わった事を確信したガオモンは、フェイトに琴乃を抱き抱えさせ、自身はリシアを背中に背負うと共に風華に肩を貸しながら大とアグモンの下へと向かい出す。

「・・・・やったんですか？」

「あぁ、だけど殺しちゃいねぇよ・・・・・コイツも倉田達の犠牲者だからな」

フェイトの質問に大はそう答えながら地面に倒れたまま、意識が戻っていないベルゼブモンに目を向ける。

その言葉にアグモンとガオモンも頷くと、ガオモンは琴乃を抱き抱えたままのフェイトに顔を向ける。

「フェイト・・・・君は一先ず隠れ家に琴乃を連れて先に戻ってくれ。この中で一番重傷なのは恐らく琴乃だろうし、君にはララモン達に頼んで、他のデジモンを呼んで来て貰いたい。ベルゼブモンを隠れ家に連れて行くために」

「うん。分かったよ、ガオモン。それじゃすぐ…」

「あらあら、隠れ家に戻っちゃうのかい？これからが面白いのにね」

『ッ！！』

突然フェイトの声を遮るように響いた女性に声に、大達は目を見開きながら声に聞こえて来た方を見てみると、薄ら笑いを浮かべているアルケニモンとマミーモンが存在していた。

「ッ！！お前ら何もんだ！？」

「へへへへへッ、俺達はルーチェモン様の部下だぜ、大門大」

「それとベルゼブモンを操作していたのは私らさ」

「ッ！！・・・・・そうか、それだけ分かりゃ！充分だぜ！！」

「ベルゼブモンの味わった苦しみの礼をしてやるからな！！」

そう大とアグモンは宣言し、アルケニモンとマミーモンに向かって飛び掛ろうとするが、その直前にアルケニモンは素早く自身の背後の地面に向かって髪の毛を投げつける。

「フッ！！」

ーーートスッ！！

ーーードオォォォォォォーーーーーーーーン！！！

『ッ！！』

アルケニモンの投げつけた髪の毛が地面に突き刺さった瞬間に、刺さった箇所の地面から巨大な黒い塔が出現した。

その見覚えがあり過ぎる黒い塔の姿に。大達は驚愕に動きが止まってしまい、フェイトが恐る恐る黒い塔の名を呟く。

「そ、そんな・・・・ゲート・・・ゲートタワーッ!?」

「何故これがこの場所に、いきなり現れたんだ!?」

突然出現したゲートタワーに、フェイトとガオモンは疑問の声を上げた。

その疑問にアルケニモンとマミーモンは、悪戯が成功したみたいな笑みを浮かべながら答える。

「決まっているだろう?私らがこれを建てているのさ」

「へへへへへッ、因みにコイツの正式な名前は“ダークタワー”だぜ」

「ダークタワーだと?」

「その通りさ。因みにコイツを建てられるのは私らだけ。ルーチェモン様や倉田でも、こんなに簡単には建てられない代物だよ」

「ハッ!なら、話は早えぜ。此処でお前らを倒せば、二度とコイツは作られねぇってことだよな」

アルケニモンに言葉に大は好戦的な笑みを浮かべながら声を出し、アグモンもそれに答えるように大に並ぶ。

此処でアルケニモンとマミーモンを倒せば、管理世界を悩ませているダークタワーの出現を防げる上に、これ以上デジタルワールドと管理世界を繋ぐ道を作るを防ぐ事が出来る。

その事に気がついたガオモンも、背負っていたリシアと風華を地面に下ろし、フェイトに下がるようにジェスチャーを送りながらファイティングポーズをアルケニモンとマミーモンに向かって取り出す。

「私も力を貸すぞ。此処で奴らを倒せれば、多くの問題が解決出来るからな」

「へッ！足手纏いになるなよ、ガオモン。兄貴！！」

「応ッ！！デジソウルチャージ！！オーバードライブ！！」

アグモンの言葉に大はすぐさま応じ、デジヴァイスバーストに再びデジソウルを込めてアグモンに向かって撃ち出し、アグモンはそれを浴びて再びシャイングレイモンに進化しようとする。

「アグモン進化！！・・・・って、アレ！？」

「なっ！？」

「進化していないだと！？」

デジソウルを浴びたに関わらず、アグモンはシャイングレイモンに進化せずに元の姿ままだった。

その事実に大とガオモンは驚愕の声を上げ、フェイト、琴乃、リシアも目を見開きながら自身の両手を見つめているアグモンを見つめた。

進化出来なかった。その様な事は少なくとも何らかの原因が無ければいけないのに、今の大とアグモンのやり取りは何時ものままだった。にも関わらず、アグモンはシャイングレイモンに進化できな

かった。
　その理由が分からず、大は慌てて自身のデジヴァイスバーストの液晶画面を見つめてみるが、ＥＲＲＯＲと言う文字以外に何も映ってはいなかった。
「どうなってんだ！？何で進化出来ないんだよ！？」
「ハハハハハハハハハハハハハッ！！当然だろうさね。何せダークタワーの近くに私らがいるんだから」
「何だと！？如何言う意味だ！？」
「へへへへへへへへッ、良い事を教えてやるよ。ダークタワーには、デジタルワールドとのゲートを作る機能と魔導師ども天敵のＡＭＦを発生させる以外にも機能があるんだ。その機能中には、俺達が近くにいる時だけ発動する機能が在るんだよ。“デジモンの通常進化を抑制するって言う機能”がな！！！」
『っ！？』
　マミーモンが告げたダークタワーの新たなる事実に、大達は声を出す事も出来ずに驚愕した。
　デジモンは例外を除いては、進化する事によって強くなる生物。進化しなくても強いデジモンは確かに存在しているが、それでも進化しなければ本来の力は発揮出来ない。その進化を抑制する機能が実在するとなれば、それは全てのデジモンにとって脅威の技術であろう。
　その技術によってアグモンの進化を封じられた事に気がついた大は、すぐさま険しい視線をアルケニモンとマミーモンの背後で聳え立っているダークタワーに向けながら足を前に踏み出す。

「ようは、そのダークタワーが在るからアグモンが進化出来ないんだな・・・・なら、ダークタワーさえ破壊すればアグモンは進化出来るって事だ！さっさと破壊させて貰うぜ！！」

「クスクスクス、そいつは無理だね大門大。アンタのデジヴァイスをよく見てみなよ？」

「何だって？」

アルケニモンの言葉に大は訝しげな声を出しながら、左手に握っているデジヴァイスバーストに目を向けてみると、デジヴァイスバーストの液晶画面から黒い光が漏れ出していた。

「なっ！？何だよこれ！？」

「兄貴！？」

「・・・・まさか！？いかん！！大！！すぐにリアライズしろ！！」

「何言ってんだよ！？ガオモン！！そんな事したら！？」

「いいから早くしろ！！このままではデジヴァイスが壊れてしまう！！早くリアライズするんだ！！“デーモンが復活する前に”！！」

「ッ！！・・・・・・チクショウ！！！デジタマ！！リアライズ！！」

ーーーピカアァァァァァァーーーーー！！！

大が言葉と共にデジヴァイスバーストを前に翳した瞬間に、デジヴァイスバーストの液晶画面から黒い光が更に溢れると共に一つのデジタマが空中に飛び出して来た。
それと同時にマミーモンが何処からともなく銃のような形をした機械を取り出し、空中に浮かんでいるデーモンのデジタマに向かってエネルギーを放射する。

「さぁ！！たんと食べてくれ！！同じ七大魔王デジモンから抽出したエネルギーを！！」

ーーービリビリビリビリビリビリビリビリッ！！！

ーーー・・・・・・ドックン！！ドックン！！ドクン！！

「・・・・な、何が起きているの？」

空中で不気味に鼓動を行い始めたデジタマの姿に、フェイトは恐怖に体を震わせながら疑問に声を上げ、琴乃もフェイトの服を怯えたように掴みながら恐怖に体を振るわせる。
それとは逆に大、アグモン、ガオモンは空中で鼓動を続けているデーモンのデジタマを見つめながら、楽しそうにデジタマを見ているアルケニモンとマミーモンに叫ぶ。

「全部計算していやがったのか！？」

「正解。まぁ、この計画を練ったのは倉田の奴さ。ベルゼブモンが洗脳していると分かれば、あんたらは確実にベルゼブモンを救おうとする。なら、逆にそれを利用してやったのさ。ベルゼブモンの洗脳機械に使用してエネルギーも同じ七大魔王デジモンのエネルギー。その同属であるデジモンが浴びれば、何らかの変化は現れるからね」

「そいつを倉田が解析していたお前らのデジヴァイスに気づかれないように、少しずつエネルギーを送り続ければ、お前らが隠していたデーモンのデジタマは覚醒するって事さ。倉田の予想が大当たりだったぜ。絶対にお前らはデジヴァイスの中にデーモンのデジタマを隠しているだろうって、言っていやがったからな。そしてお前らがベルゼブモンを解放する為に機械を破壊した瞬間に、そのベルゼブモンを洗脳する為に使っていた膨大なエネルギーは、全部デーモンのデジタマに流れたんだよ」

「フフフフフフッ、更にあんたらは進化を封じられた上に、ベルゼブモンとの戦闘でダメージも負っている。覚醒したてとは言え、万全のデーモン様にあんたらは勝てるのかね」

「チッ！チクショォォォォォーーーーーーーーーー！！！！！」

アルケニモンの言葉に大は悔しさに満ちた叫びを上げた。
それと同時に空中に浮かんでいたデジタマは深い闇に覆われ、その中から残忍さに満ちた青く輝く瞳が大達の静かに見つめるのだった

激闘！大&アグモンVS暴食のベルゼブモン！！後編（後書き）

次回予告

復活を果たすデーモン

進化を封じられながらも大達は挑むが

デーモンの力の前に絶体絶命に追い込まれてしまう。

その時に駆けつける者とは！？

そして遂に彼が蘇る。

次回、漆黒の竜人と少女、『新たなる絆、蘇れ！ブイモン！！』

新しく結ばれる絆。それが呼ぶのは一度だけの奇跡。

新たなる絆、蘇れ！ブイモン！！

大達とベルゼブモンが激闘した場所から少し離れた森の中。
その森の中を長い茶色の髪を腰の辺りまで伸ばした巫女服に似た着物を着て、両腰に二本の刀を差した女性が、かなりの速さで木々を飛び移りながら移動していた。
そのスピードは凄まじく、並みの人間では目視する事が不可能なスピードを出しながらも女性は余裕そうな顔をしながら前方へと向かい続ける。

「・・・・・どうやら先ほどから聞こえていた戦闘音が消えたようですね・・・・残念です。出来ればこの目でドクターが執着されている人間の戦いを目にして見たかったのですが」

そう女性は残念そうな声を出しながら溜め息を吐き、目的の人物が戦場から離れる前に合流しようとスピードを上げるが、女性の視界の中に突如として黒い塔が出現し、慌てて木の枝の上に立ち止まる。

ーーーートン！！

「アレは？ゲートタワー？・・・・・おかしいですね・・・・・この辺りにはゲートタワーは建っていないはず？・・・・もしや」

女性はそう言葉を呟くと、服の中から小型の通信機を取り出し、何処かへと連絡を取り出す。

「此方■■■■。ウーノ姉さま、応答をお願いします」

ーーーブン！

『此方ウーノ。■■■■、もう例の人物と合流出来たの？」

「いえ、まだですが・・・確認して起きたい事が出来ましたので連絡を」

『何かしら？もしかしてその服の事？それはドクターが選んだ服だから問題は無い筈よ』

「ウーノ姉さまは問題あると思っているのですね？」

『・・・・・・』

女性の質問にウーノは無言で返し、二人の間に静かな沈黙が満ちる。

しかし、何時までもそうしてはいられないと思った女性は、咳払いをしながら質問を再開する。

「ゴホン・・・・質問の件ですが、この辺りにゲートタワーが建っていると言う情報はあるのでしょうか？」

『ゲートタワーが？ちょっと待ちなさい・・・・・・いえ、その辺りにはゲートタワーは無い筈よ』

「ですが、今私の視界の中にゲートタワーは確かに建っています・・・・これはもしや例のゲートタワーを建てている者が、例の人物と交戦をしているのではないでしょうか？」

『ッ！！・・・・・・それが事実ならば、■■■■！貴女は計画通

りに大門大の仲間を演じると同時に、ゲートタワーを建てている者に隙を見つけて発信機を取り付けなさい！！ドクターからは私が説明して置くわ！良い！失敗は絶対に赦されないわよ。その為に貴女にはトーレ達が回収して来た研究素材を持たせたのだから・・・・失敗は赦されない！例え相手が強力な力を持ったデジモンであろうと、必ず大門大達の仲間の中に入ると同時に、ゲートタワーを建てている者に発信機を付けなさい！！』

「了解しましたウーノ姉さま。必ず任務は成功させます。その為にこれをドクターに預からせて頂いたのですから」

そう女性は呟くと共に再び服の中に手を入れ、今度は三つの機械―別世界でトーレ達が大輔達から強奪したディーターミナルを取り出すのだった。

そして場所は大達の下に戻る。大達は目の前の空中に出現した深い闇を険しい視線で見つめていた。

そして闇の中から覗いて来るように見つめて来る残忍さに満ちた青い瞳に気がついた、フェイト、琴乃、風華は金縛りにあったように動きが止まってしまう。

その瞳からは残忍しから感じられず、大、アグモン、ガオモンはフェイト達を護るように視線の前で立ち塞がる。それと同時に闇はゆっくりと地上に降りていき、闇が地上に着地すると同時に闇の中から全身を赤いローブで覆い、背中に悪魔のような翼を生やしたデジモンが姿を現す。

アルケニモンとマミーモンはデジモンが姿を現すと同時に、膝を地面について現れたデジモンに敬意を払う。

「お目覚め嬉しく思います、“デーモン様”」

デーモン、世代／究極体、属性／ウィルス種、種族／魔王型、必殺技／フレイムインフェルノ、ケイオスフレア、スラッシュネイル

全ての悪魔型、堕天使型デジモンを統一する魔王型デジモンで在ると共に“憤怒”の称号を得ている七大魔王の一体。元々は天使型デジモンの最高位に位置する『セラフィモン』であったが、デジタルワールドの”善の存在（おそらくは構築した人間といわれている）”に反逆し、ダークエリアに堕とされ、魔王となってしまった反逆戦争のリーダー格。その強大過ぎる力を抑える為に、普段は全身をローブで覆い力を抑えている。しかし、一度ローブを脱ぎ捨て、真の姿である悪魔そのものの姿を現した時には、止められる存在は皆無に近い力を発揮する恐ろしきデジモン。必殺技は、復讐心に満ち溢れた邪悪な超高熱の地獄の火炎で対象を焼き尽くす『フレイムインフェルノ』に、混沌の業火を口から吐き、相手を焼き尽くす『ケイオスフレア』。そして巨大な左手の爪で相手を切り裂く『スラッシュネイル』だ。

アルケニモンの声を聞いたデーモンは大達から目を離し、背後で膝をついているアルケニモンとマミーモンにゆっくりと振り返る。

その完全な隙を目にしたにも関わらず、大達は指一本動かす事が出来ずにデーモンの背を悔しげに見つめた。大達には分かっていた。飛び出せば、その瞬間にデーモンに八つ裂きにされてしまう事を。

万全な状態ならばともかく、今は進化を封じられている上に、ベルゼブモンとの戦いでの負傷も残っている。だからこそ、大、アグモン、ガオモンはフェイト達を護るように立ちながらも動く事が出来なかった。それにまだデーモンがルーチェモンの味方になるとは限らない。ベルゼブモンのようにルーチェモンと敵対する可能性も存在している。

その僅かな可能性を信じて、大達はデーモンがこのまま去ってく

れる事を願うが、デーモンは去る様子など全く見せずにアルケニモンとマミーモンを注意深く見つめ続ける。
それに気がついたアルケニモンとマミーモンも、僅かに慌ててデーモンにすぐさま用件を伝え出す。

「わ、私達は貴方様と同じ七大魔王デジモンのルーチェモン様に仕えている者です！」

「その通りです！ですから…」

「ほう、あの時には人間に仕えていたのではなかったのか？」

『ッ！！！』

アルケニモンとマミーモンはデーモンが告げた言葉に目を見開いた。
あの時。それが意味する事はデーモンとアルケニモン達は出会っていると言う事に他ならない。
そしてアルケニモンとマミーモンには、その心当たりが確かに存在していた。十年前の別世界での事件の時に、アルケニモンとマミーモンは確かにデーモンと会った事があった。しかも敵として。
その事実を思い出したアルケニモンとマミーモンは顔を青褪めさせていく。
よりにもよって封印されていたデーモンの正体が十年前に敵として戦ったデーモンだった。
このままでは十年前の借りを返すと言われて殺されてしまう可能性に気がつき、全身をガクガクと震わせるが、デーモンは二人の様子に構わずに二人の目の前で歩き質問する。

「状況は送られて来たエネルギーの中に含まされていた情報で、大

体は分かっている。確かにルーチェモンとその人間が考えている策は面白い」

「そ、それでは！！」

「だが、その前に質問だ・・・・・十年前に私に苦渋を味合わせたあの“異界の魂を持った呪わしき存在”！！！奴は生きているのか！！」

『ヒィッ！！』

『クッ！！』

突如として放たれたデーモンの空気を歪めるほどの殺気に、アルケニモンとマミーモンは自身に向けられた殺気でも無いのに関わらず恐怖に引き攣った声を上げ、大、アグモン、ガオモンも苦しげな声を上げた。

デーモンの殺気はそれほどまでに強力だったのだ。もし大達がフェイト達の前に立っていなかったら、それだけフェイト、琴乃、リシア、風華はショック死していただろう。それほどまでにデーモンの殺気、いや憎しみは強力すぎるのだ。

そしてその殺気を直に浴びたアルケニモン、マミーモンは恐怖で体が固まってしまうが、デーモンは構わずにアルケニモンを右手で掴み上げる。

ーーーガシッ！

「如何した？奴は死んだのか！答えろ！！貴様らが一番知っている筈だ！！」

「ヒィッ！！生きてます！！生きてますよ！！アイツは生きてこの辺りの次元世界で恐怖の代名詞として呼ばれています！！しかも、ルーチェモン様達とは敵対していますので！ルーチェモン様の仲間になれば確実にアイツと会える日が来ます！！」

ーーーバシッ！

ーーードサッ！

デーモンはアルケニモンが言葉を告げ終えると共に手を離した。
そして地面に落ちたアルケニモンは思わず自身の腰を押さえるが、すぐにその動きは止まり、不気味な沈黙を保っているデーモンをマミーモンと共に見つめると、デーモンは嬉しさに満ちた笑い声を上げ始める。

「ククククククッ、そうか、奴は生きているのか・・・・・（忘れんぞ！！奴に負わされた傷によって四聖獣どもに隙をつかれ、封印されてしまった事を！！必ず復讐してやる！！私の地獄の炎で跡形も無く消滅させてくれるぞ！！！）」

そうデーモンは内心で憎しみに満ちた叫びを上げると、ゆっくりと背後を振り返り、険しい顔をしている大達に目を向ける。

「良かろう。奴と再び会えるのならば、ルーチェモンの策に手を貸すのも一挙・・・（最も何れはその計画を私が支配し、私こそが全てを支配するがな）」

ーーーダッ！

『クッ！！』

「フン、貴様らの情報は既に得ている。私の目的の為にも、この場で消えて貰おう！！」

ーーービュン！！

「やばい！！避けろ！！」

突進して来るデーモンに気がついた大は慌てて叫び、全員が横に飛び出すが、デーモンが突進して来た事によって発生した衝撃波によって全員吹き飛ばされてしまう。

ーーードゴオオオォォォォォォン！！

『ガァッ！アァァァァァァーーーーーー！！！！！』

『キャァァァァァァァーーーーーー！！！！！』

大、アグモン、ガオモン、フェイト、琴乃、風華、そして意識を失っているリシア、ベルゼブモンは衝撃波によって次々と地面や木々にぶつかってしまう。

しかし、何とか地面に激突するだけで済んでいたアグモンは、即座に立ち上がり背を向けているデーモンに向かって空気を吸い込み、一気に炎と共に口から吐き出す。

「ベビーーーバーーーナーーー！！！！」

ーーーゴオオォォォォーーーー！！

「フン、温いわ」

ーーーバッシュン！

「なっ！？」

デーモンは振り返ると同時に右手を振り抜き、それによって発生した衝撃波で、簡単にベビーバーナーを消滅させた。

アグモンはその事実に思わず動きが止まってしまうが、すぐさまその場から離れようとする。しかし、その直前にデーモンは瞬時にアグモンの目の前に移動し、アグモンを右手で掴み上げる。

ーーービュン！！

ーーーガシッ！！

「クッ！！クソッ！！離しやがれ！！ベビーフレイム！！」

ーーードオン！！

アグモンはデーモンに掴まれながらも、即座に口からベビーフレイムを撃ち出した。

しかし、至近距離でベビーフレイムを受けたにも関わらず、デーモンは残忍さに満ちた目を細めながら、アグモンを嘲笑う。

「ハハハハハハハハッ！！温い！温過ぎる！！貴様の炎には全く熱さ感じられん！本物の炎の熱さを味合わせてやろう！！」

「クッ！！」

「フレイム…」

「アグモンを離しやがれ！！」

「ッ！！」

突然響いた声にデーモンは驚きながら背後を振り抜いてみると、拳を握り締めた大がデーモンの顔の部分に向かって拳を振り抜く。

「オラァァァァァァァァーーーーッ！！」

「フン！」

ーーーガシッ！！

『なっ！？』

大が振り下ろして来た拳を、デーモンは軽々と左手で受け止めた。その事実に大とアグモンは信じれなれないと言う顔をしながら、デーモンを見つめる。大の拳は今までどれだけの強敵なデジモンでさえも殴り飛ばして来た威力を持っている。

しかし、その拳はデーモンに届く事は無く、初めて簡単に受け止められていた。だが、それは当然だろう。確かに大の拳は究極体のデジモンにさえもダメージを与える威力を持っているが、今の大の状態が悪かった。今の大はベルゼブモンとの戦いでのダメージが回復していない上に、傷もかなり負ってしまっている。その為に本来の威力を大の拳は持っていないのだ。

「フフフフッ、ベルゼブモンの奴も少しは役に立った。情報では貴様の力は究極体クラスのようだが、どうやら今の貴様には其処までの力は無い。消えて貰うぞ！！ムン！！」

ーーードオォン！！

『グゥッ！！アァァァァァァァァーーーーッ！！！』

大とアグモンはデーモンが叫ぶと同時に、撃ち出された衝撃波によって弾き飛ばされてしまう。

そしてすぐにデーモンは大とアグモンに飛び掛り、次々と二人を玩ぶように両手を振り抜き、衝撃波を放ち続ける。

ーーードオオオォォォン！！ドオオオォォォン！！

「チクッショウ！！」

「ウアァァァァァァァーーーー！！！」

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハッッッ！！！！」

衝撃波に吹き飛ばされ続ける大とアグモンの姿に、デーモンは心の底から楽しさに満ちた笑い声を上げ続けた。

そしてその様子を離れた所で、フェイト達の救援を行いながら見ていたガオモンは、自分達の状況が不利過ぎる事を改めて思い知らされていた。

（クッ！せめてアグモンがシャイングレイモンに進化していれば、此処まで一方的な展開にはならなかったと言うのに！！デジモンの通常進化を抑制する塔だと！？そんな危険な物だったのか！？あのダークタワーは！！）

ガオモンはダークタワーの力に恐怖を覚えていた。
今まではデジタルワールドと管理世界を繋ぐだけの役割だと思っていたが、今回のアルケニモン達が告げたダークタワーの更なる力はガオモン達や他のデジモンにとっては脅威としか呼べない代物だった。通常進化が封じられてしまえば、アグモンもガオモンも普通の成長期よりも強いデジモンでしかない。
ダークタワーとアルケニモン達が一緒にいるだけで、ガオモン達までは今までにないほどの危機的状況に追い込まれてしまった。
その事実を理解したガオモンは、悔しげに顔を歪めながらも足を前に踏み出し、フェイト達に声を掛ける。

「フェイト・・・・君は琴乃達を連れて、隠れ家に逃げるんだ」

「ッ！！何を言っているのガオモン！！」

「そうです！！私達も一緒に！！」

「駄目だ！琴乃は例のブラスターシステムの影響で動ける体ではない。リシアの意識はまだ戻る気配はない。風華も思うようには体が動かん。そしてフェイトには戦う術が無い・・・・・正直言って、今の君達は足手纏いだ」

『・・・・・・・』

ガオモンの断言した言葉に、フェイト達は顔を俯かせてしまう。
しかし、ガオモンの言葉は正しかった。琴乃、リシア、風華は既にベルゼブモンとの戦いでのダメージで戦える状態ではない。そしてフェイトには全く戦う術が無いのだ。
その状態であるフェイト達を逃がそうとするガオモンの判断は正しいのだが、風華は不機嫌さを隠さずに立ち上がり、険しい視線を

ダークタワーに向ける。

「待てガオモン・・・・・確かに貴様の言うとおりだが、我は逃げる気は無いぞ」

「風華！我が侭を言うな！このままでは！」

「フン、貴様の言われるまでも無く分かっておるわ。だが、此処で逃げても何れは見つかって終わりじゃ・・・・・ならば方法は一つ。この場でデーモンとアルケニモンとか言う塵芥どもに負傷を負わせるのが良かろう・・・・・だからこそ、一番ダメージが軽い我がダークタワーを破壊するのが正解・・・・幸いにも連中の中で飛べるデーモンは大とアグモンの方ばかりで攻撃しておるからな・・・・空から攻撃すれば簡単な事だ・・・では行くぞ！！」

ーーービュン！！

「待て風華！！！！」

「戻って！！」

「駄目です！！」

飛び出した風華の背に、ガオモン、フェイト、琴乃は声を上げるが、風華は止まらずにダークタワーの上空に向かい続ける。

そして風華はダークタワーの上空に辿り着くと、自身のデバイスであるエグザードクロイツを真下に向けて魔法を放とうとする。

「絶望にあがけ！エクス…」

「スネークバンデージ！！！」

ーーーギュルゥゥゥゥーーーー！！ガシッ！！

「何！？」

風華が魔法を放とうとした直前に、ダークタワーの下から無数の包帯が飛び出し、風華に巻きついた。

その事実に風華は驚き、慌てて包帯の拘束から逃れようと体を動かすが、包帯はビクともせず、ダークタワーの下の方から笑い声が響く。

「ヒャハハハハハハハハッ！！やっぱりきやがったぜ！！ダークタワーを破壊させる訳ねぇだろうが！！」

「貴様何者だ！？」

「おいおい、名乗っただろう？俺様の名前はマミーモンだぜ」

「何！？だが、貴様は人間だったのでは！？」

「馬鹿が！こっちの姿こそが本当だ！・・・さて、そろそろお前には死んで貰うぜ！倉田の野郎からの言われているからな！」

マミーモンはそう空中で拘束している風華に告げると、右手に握っているオベリクスの照準を風華に合わせ、風華は慌てて包帯から逃れようと体を動かすが、包帯はビクともしなかった。

「クッ！！」

「ヒャハハハハハハッ！！じゃあな！！」

『風華！！』

マミーモンに撃たれようとしている風華を目にしたガオモン、フェイト、琴乃は慌てて風華を助けようと駆け出すが、マミーモンは無情にもオベリクスの引き金に指をやり風華に向かって発砲を一出来なかった。

「ベヒーモス！！！」

ーーーブウウゥゥゥゥゥーーーン！！

ーーーブチィン！！

『なっ！？』

『えっ！？』

マミーモンがオベリクスの引き金を引く直前に、突如として声が響くと同時にベヒーモスが凄まじいスピードで飛び上がり、マミーモンと風華を繋いでいる包帯を引き千切った。

マミーモン、アルケニモンは突然の事態に驚き、ガオモン、フェイト、琴乃、そして風華はベヒーモスが飛び上がる直前に響いた聞き覚えのある声に疑問の声を上げ、声の聞こえた方を見てみると、酷い負傷を負いながらも目から闘志を失っていないベルゼブモンが怒りに満ちた視線をアルケニモンとマミーモンに向けていた。

「ベ、ベルゼブモン！？」

「お前まだ動けやがったのか！？」

「ハァ、ハァ、ハァ、ハッ！悪いが俺はあの程度の攻撃は屁でもねぇ。それに、よくも！俺を操ってくれたな！！礼は確りと返してやるぜ！！」

ーーーカッシャ！

ベルゼブモンは叫ぶと共に右手に握っていたベレンヘーナをアルケニモンとマミーモンに向けた。

アルケニモン、マミーモンはベルゼブモンの宣言と殺気に一瞬怯むが、すぐにその顔は愉悦さに満ちた笑みに変わり、ベルゼブモンに向かって構えを取り出す。

「フフフフッ、粋がっているみたいだけど空元気も良い所だね。何せアンタには殆ど体力なんて残っていないんだから」

「ッ！！」

「へへへへへへッ、お前のエネルギーは全部デーモン様の復活に利用してやったからな。どうせ立っているのがやっとだろう？」

「チィッ！！」

ベルゼブモンはマミーモンの言葉に舌打ちをした。

そうアルケニモンとマミーモンが告げた言葉は正しかった。既にベルゼブモンは限界が近いのだ。

何せ究極体のシャイングレイモンと、究極体に匹敵する力を持った大と激戦を繰り広げただけではなく、シャイングレイモン・バーストモードの必殺技までもその身に受けている。それだけではなく

デーモン復活の為に、大量のエネルギーもその身から無くなってしまっている。寧ろ未だに究極体の状態でいられる方が奇跡に近いのだ。
全ての力を込めて技を撃てても一度だけ。その事を自身の状態から読み取ったベルゼブモンは、ゆっくりと両手のベレンヘーナの照準をアルケニモンとマミーモンにそれぞれ合わせる。

ーーーカッシャ！

「試してみるか？テメエら如き、今の状態でも充分過ぎるぜ」

「ハッ！言ってくれるじゃないのさ・・・・まぁ、いいさ。どうせアンタはもう一度ルーチェモン様達の所に連れて行く予定だったんだ。とっとと倒させて貰うよ！！」

アルケニモンはそう宣言すると共に自身の体を蜘蛛のような姿をした真の姿に変え、マミーモンと共にベルゼブモンに構えを取り出す。
それと同時にベルゼブモンも即座に動けるように構えを取ろうとするが、その直前にベルゼブモンの前に風華が降り立つ。

ーーートン！

「ッ！！どけ！！邪魔だぞ！！」

「フン！それは此方のセリフだ！あの塔は我が破壊するのだからな！」

「何だと！？テメエ！助けて貰って何言っていやがる！？俺にやられたダメージが回復していないだろうが！？」

「フッ、確かにその通りだが、我よりも貴様の方がダメージは深いであろう」

「クッ！」

「それに貴様には不本意ながら借りがある。それを返さないままだと、我の気がすまん」

「風華の言うとおりだ」

風華の言葉に答えるようにベルゼブモンの横にガオモンが立ち、アルケニモンとマミーモンに向かって構えを取り出す。

それと共にガオモンは離れた所でデーモンの放つ衝撃波を傷つきながらも何とか直撃だけは避け続けている大とアグモンを横目で見ながらベルゼブモンに声を掛ける。

「此処で何としてもダークタワーを破壊しなければ、大とアグモンが危ない。今は何とかデーモンも自身が覚醒したばかりで力を完全に扱えていない。ならば、アグモンがシャイングレイモンに進化すれば勝てる可能性は存在している。だからこそ、私達もお前に手を貸そう」

「・・・・ケッ！勝手にしろよ」

ガオモンの言葉にベルゼブモンは険しい顔しながら、余裕なのか相談の邪魔をして来なかったアルケニモンとマミーモンに顔を向ける。

「フフフフッ、相談は終わったのかい？」

「へへへへッ、どうせ怪我人だらけのお前達じゃ、俺達には勝てねぇけどな」

「・・・・・・フフフフッ、これを受けても同じ事は言えんだろう！！」

ーーードスッ！！

ーーーシュウウン！！

『グッ！！』

「ムッ！（これは！？）」

風華がエグザードクロイツの柄を地面に深く突き刺すと同時に、エグザードクロイツから円を描くように五百メートルぐらいの巨大な魔法陣が出現し、その範囲の中に入ったアルケニモン、マミーモン、そしてデーモンは僅かに声を上げた。

突然に自分達の力が減少したのだから、アルケニモン達の反応は当然だろう。だが、風華の能力を知っているガオモンと、琴乃とリシアの事で予想がついていたベルゼブモンは同時に駆け出し、アルケニモンとマミーモンに向かって突撃する。

『オオォォォォォォォーーーー！！！！！』

「クソッ！！マミーモン！！」

「アァッ！！任せ…」

「ベヒーモス！！！」

『ッ！！』

ーーーブウゥゥゥゥゥーーーン！！！

ベルゼブモンの声の意味に気がついたアルケニモンとマミーモンは慌ててベルゼブモンに向かって攻撃しようとするが、その前にベヒーモスは主であるベルゼブモンの横に走り込んで来る。

それと同時にベルゼブモンは怪我の苦痛に顔を歪めながらも、ベヒーモスに飛び乗り、即座にアクセルをフルスロットルに回す。

ーーーブウゥゥゥゥゥーーーン！！

「オオオォォォォォーーーー！！！！！」

「させるかよ！！くら…」

「ガオラッシュ！！！」

ーーードドドドドドッ！！

「ゲヘッ！！」

マミーモンがオベリクスを射撃しようとする直前に、全速力で駆けていたガオモンがマミーモンの顔に向かって飛び掛り、高速ラッシュを食らわせた。

それを目にしたアルケニモンは即座に両手から鋭いワイヤーを出し、ベヒーモスを使って自分達の頭上を飛び越えようとしているベルゼブモンを捕らえようとする。

しかし、その直前にベルゼブモンは両手に握っていたベレンヘーナをアルケニモンの顔に向かって投げつける。

「オラッ！！」

ーーードオォン！！

「グフッ！！」

ベレンヘーナを顔に食らったアルケニモンは声を上げた。
その隙にベルゼブモンは更にベヒーモスのスピードを上げて、アルケニモンとマミーモンの頭上を飛び越える。
デーモンはそれを目撃にすると、ベルゼブモンの好きにはさせる訳にはいかないと判断し、大とアグモンへの攻撃を止めてベルゼブモンに向かって衝撃波を撃ち込もうと右手を構えるが、その直前にデーモンの足下に直射弾が降り注ぐ。

「させないよ！電刃衝（でんじんしょう）！！」

ーーーズドドドドドドドドドドドドッ！！！

「ヌッ！！」

突然に自身の足下に電刃衝（でんじんしょう）が放たれた事にデーモンは声を上げ、電刃衝（でんじんしょう）が放たれた方向に目を向けて見ると、険しい顔をしたリシアが空に浮かんでいた。
リシアの姿にデーモンは僅かに目を細め、注意深くリシアを見つめている隙に大とアグモンが背後からデーモンに向かって同時に渾身の力を込めた拳を撃ち込む。

『オラアァァァァァァァッ！！！』

ーーードゴオオオオオン！！

「グオッ！！」

流石に背中に渾身の大とアグモンの一撃を受けたのには、デーモンもダメージを受けたのか思わず動きが止まってしまう。

大とアグモンはそれと共に背後からデーモンの両手を掴み上げ、ベルゼブモンに向かって叫ぶ。

ーーーガシッ！！

「いけぇぇぇぇぇ！！ベルゼブモン！！」

「頼むぞ！！！」

「オオオォォォォォォーーーー！！！！獣！！」

ベルゼブモンは大とアグモンの声に答えるように、ベヒーモスに乗りながら立ち上がり、右手を高く上げた。

「王ッ！！」

そして右手を腰の辺りまで引き絞り、エネルギーを右拳に集中させていく。そして自身の残っている全てのエネルギーが集まると同時に右手をダークタワーに向かって突き出す。

「拳ッ！！」

ーーードゴオォォォン！！ウオォォォォォォン！！

ベルゼブモンが拳を突き出すと同時に、拳の先から獅子の顔を模ったエネルギー波が飛び出し、ダークタワーに向かって突き進む。

遮るものが何も無い事にベルゼブモンは会心の笑みを口元に浮かべ、獣王拳がダークタワーを粉砕する事を確信する。だが、その思いを裏切るようにアルケニモンが突然ダークタワーに向かって笑みを浮かべながら叫ぶ。

「出てきな！！ゴーレモン達！！！」

『ッ！！』

ーーーガラガラガラガラガラッ！！

『ガアァァァァァッ！！！』

アルケニモンが叫ぶとすぐに獣王拳を遮るように、四体のゴーレモンが地面の中から姿を現した。

それと共にゴーレモン達は向かって来ている獣王拳に対してそれぞれ両手を広げるように構え、獣王拳はゴーレモン達に直撃し、大爆発を起こす。

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「クゥッ！！ダークタワーはどうなった！？」

獣王拳とゴーレモン達がぶつかり合った衝撃波で出現した煙を振り払いながら、ベルゼブモンはダークタワーの安否を気にする。

今のは正真正銘の今出せる全ての力を込めた獣王拳だった。それ

でダークタワーを破壊出来ていなければ、ベルゼブモンにはもはや打つ手がない。その事を理解しているベルゼブモンと大達は、ダークタワーが破壊されている事を心の底から願いながら煙の先を注意深く見つめる。
　だが、ベルゼブモン達の願いは空しく、煙の先にはダークタワーを護るように立ち塞がったゴーレモン達の姿は存在してはいなかったが、僅かに罅が入っている以外の変化が存在していないダークタワーが建っていた。

「ッ！！チクショウ！！！砕けやがれ！！！オオォォォォーーーー！！！！」

ーーーブウゥゥゥゥーーーン！！

『ベルゼブモン！！！』

　ダークタワーに向かってベヒーモスを走らせるベルゼブモンに向かって大達は叫ぶが、ベルゼブモンは止まらずにダークタワーに突進する。
　だが、その思いさえも打ち砕くかのように、大とアグモンに両手を掴まれていたデーモンが、両手に凄まじい力を込めると同時に大とアグモンを弾き飛ばす。

「いいかげんに邪魔だ！失せろ！」

ーーードゴオオオオオン！！

『グッ！アァァァァーーー！！！！！』

　デーモンに弾き飛ばされた大とアグモンは悔しげな顔をしながら

背後へと吹き飛んでいった。
デーモンはそれを確認する事もせずに、即座にその場から移動し、ベルゼブモンの進行を阻むように、ダークタワーの目の前に立ち塞がる。

ーーービュン！！

「退きやがれえぇぇぇぇぇぇぇぇーーーー！！！！」

「フン、出来損ないが。七大魔王の名を汚した罪。その命で支払うがいい。フレイムインフェルノ！！」

ーーーゴオオォォォォォーーーーー！！！

「ッ！！ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアーーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

『ベルゼブモン！！！』

ベルゼブモンの断末魔のような叫びを聞いた大達は即座に動き出し、ベルゼブモンを助けようとデーモンに向かってそれぞれ駆け出すが、デーモンはそれを横目で確認すると共に全身に力を込め始める。

「遊びは終わりだ。全員消え失せろ！！」

『やばっ！！』

アルケニモンとマミーモンはデーモンの叫びの意味に気がつき、大達とは逆に逃げようとする。

しかし、デーモンは構わずに自身の後方に存在しているダークタワーを除いた全ての方向に向かって、凄まじい衝撃波を放つ。

「オオォォォォォォーーーーー！！！！！」

ドゴオオオ

そうデーモンは内心で結論をつけると、ゆっくりと琴乃達の方へと足を進めようとするが、その直前に八つの手がデーモンの足を掴む。

ーーーガシッ！！

「ヌッ！」

突然足を掴まれた事にデーモンは驚き、慌てて自身の足元に目を向けてみると、全身に酷い傷を負いながら目から闘志を失ってない大、アグモン、ガオモン、そして首に赤いマフラーを巻いて、両手に赤いグローブを付けた小悪魔のような姿をしたデジモン ーインプモンが存在していた。

インプモン、世代／成長期、属性／ウィルス種、種族／子悪魔型、必殺技／ナイト・オブ・ファイアー、ナイト・オブ・ブリザード相手を困らせるのが好きなイタズラ子悪魔型デジモン。プライドが高い反面に実は寂しがりや。しかし、強い奴に対しても絶対に従わずに立ち向かう性格をしているぞ。必殺技は、暗黒の炎を手から出現させて相手に向かって放つ『ナイト・オブ・ファイアー』に、暗黒の氷を手から出現させて相手に向かって放つ『ナイト・オブ・ブリザード』だ。ベルゼブモンが成長期まで退化した姿。

「・・・・そ、そいつらには・・・・手は出させねぇ・・・・」

「・・・・俺達は・・・・まだ、やれるぞ・・・・」

「貴様には・・・・彼女達は・・・・指一本・・・・触れさせん」

「・・・・・ガキを・・・・苛めてんじゃ・・・・ねぇよ」

「死にぞこないどもが・・・・・どうやら跡形もなく焼き尽くしてやる必要があるようだな」

ーーーボン！

デーモンは言葉を言い終えると共に手から凄まじい熱気を放つ炎を出現させた。

それと共に手をゆっくりと大達に向けて、残忍さに満ちた目をしながら声を出す。

「フフフフッ、喜べ、この私の直接手を下される栄誉を与えてやる。フレイム！！」

「そんな事はさせない」

「ムッ！？」

『ッ！！』

デーモンがフレイムインフェルを放とうとする直前に女性の声が響き、デーモンは僅かに疑問の声を上げながら声の聞こえた方を見てみると、琴乃を地面に寝かせているフェイトが存在していた。

大達も突然のフェイトの声に驚き、フェイトを見つめるが、フェイトは気にせずに近くの地面に落ちていたライディエルとデジタマを拾い上げ、デーモンを睨みつける。

「・・・・もうこれ以上貴方には誰も傷つけさせない・・・・私の命に代えても！！！」

「・・・・ククククッ、ハハハハハハハハハハハハハハ！！！これは傑作だ！貴様は馬鹿なのか？貴様からは何の力も感じない。魔力とやらの特殊な力の気配も感じんし、ただの一般人ではないか！」

「クッ！！」

「それと貴様が持っているのはデジタマだな？・・・・・これは好都合だ。そのデジタマに私の暗黒エネルギーを与えて、暗黒デジモンにしてやろう。デジタマを渡せば、貴様だけは助けてやってもよいぞ？」

「絶対に渡さない！この！このデジタマは！デジタマから生まれてくるデジモンは！！」

ーーービキビキッ！！

『ッ！！！』

フェイトの言葉に応じるように罅が入り始めたデジタマを目にした大達とデーモンは目を見開くが、フェイトは構わずに自身の思いを叫ぶ。

「私の！」

ーーービキビキッ！！

「私の大切なパートナーーーなの！！！！」

ーーーバキィィィィィーーーン！！

『ッ！！！』

フェイトが自身の本当の想いを叫ぶと同時にデジタマは割れ、内部から一体のデジモンが飛び出した。

そのデジモンを目にした大達とデーモンは更に目を見開き、フェイトもデジタマが孵った事に気がつき、慌ててデジモンの姿を目にしようとした瞬間に、フェイトの顔に生まれたデジモンが張り付く。

ーーーピトッ！！

『・・・・・・・・・』

フェイトの顔を覆い隠すように張り付いたデジモンの姿に、大達とフェイトだけではなく、デーモンさえも呆然としてしまう。

しかし、フェイトは即座に我に返り、慌てて顔に張り付いているデジモンを右手でゆっくりと放す。

ーーーパシッ！！

「プハ～・・・・・・チビモン？」

「うん！僕チビモンだよ！！！・・・・・・フェイト！！！！」

『ッ！！！！』

チビモンの告げた自身の名前にフェイトは驚愕に目を見開き、事情を知っている大、アグモン、ガオモンも目を見開いた。

今確かに生まれたばかりのチビモンはフェイトの名を呼んだ。それが意味する事は一つ。

新たに生まれたチビモンは、ブイモンとしての記憶を継承していると言う事に他ならない。
その事実に気がついたフェイトは思わず呆然とチビモンを見つめるが、チビモンは構わずにフェイトに笑いかける。

「ずっと待っていた。フェイトが僕を呼んでくれるのを・・・・・それが前の僕の願いだったから・・・僕には前の僕の記憶は本当はあんまりない・・・・それでも君の事は忘れてない・・・・僕のパートナー、フェイトとの思い出はちゃんと受け継いでいるよ！」

「・・・・チビモン・・・・・」

チビモンの言葉にフェイトは思わず涙ぐむが、チビモンは嬉しげな笑みをフェイトに向けると、すぐに地面に降り立ち、デーモンを睨みつける。

「お前がフェイトを傷つけたんだな！！絶対に赦さないぞ！！」

「フン！小生意気な幼年期だ！私に対してそのような戯言を叫ぶとは気に入らん！！どうせダークタワーが存在している限り進化は出来んが、跡形も無く消滅させてくれる！」

「チビモン！！」

チビモンに攻撃を加えようとしているデーモンに気がついたフェイトは、慌ててチビモンと共にデーモンが攻撃してくる前に横に飛ぼうとするが、デーモンは逃がさないと言うように右手をフェイトとチビモンに向けフレイムインフェルノを放とうとする。

「消えろ！！フレイム…」

ーーーバリィィィィーーーン！！！！

「何！？」

『ッ！！』

デーモンがフレイムインフェルノを放とうとした瞬間に、デーモンの後方に立っていたダークタワーが一瞬の内に砕け散った。

その突然の事態に、デーモンだけではなく大達とフェイト、チビモンも驚き、ダークタワーがあった場所を注意深く見つめ、一人の茶色の髪を腰まで伸ばした巫女服に似た着物を着た女性を目にする。

「何者だ！？貴様は！？」

「御初にお目に掛かります。別世界のデジタルワールドの選ばれし人間の一人、ディード・リエッティと申します」

「ッ！！選ばれし人間だと！？馬鹿な！？何故この世界に！？」

女性ーディード・リエッティが告げた事実にデーモンは目を見開きながら声を上げるが、ディードは気にせずに着物の中に手をいれ、フェイトに向かって着物の中から取り出した三つの機械を投げ渡す。

「受け取りなさい！」

ーーーブン！！

「キャアッ！！危ない！」

ーーーパシッ！！

ディードが投げつけて来た機械をフェイトは驚きながらも、確りと受け取った。

それを確認するとディードはゆっくりと両腰に備えている二本の刀を抜き去り、デーモンに向かって構える。

ーーースチャ！

「さて、彼女の準備が終わるまでは私が相手をしましょう。これでも少しは戦えますので」

「人間風情が！私に対して随分な口を聞いてくれるな！」

「そう言う其方は気が短いですね？魔王の名が泣きますよ？」

「貴様・・・・・殺してくれる！！」

ーーービュン！！

「クッ！！」

大達の拘束を無理やり抜け出して突進して来るデーモンに対して、ディードは僅かに苦しそうな声を上げてデーモンと戦い出す。

そしてその間にフェイトはディードから渡された三つの同じ機械ーディーターミナルの液晶画面の部分を開けてみるが、液晶画面にはそれぞれ何かの映像が二つずつ映っているだけだった。

「何なのこの機械？一体どうすればいいの？」

「フェイト！ちょっとそれを見せて！」

「チビモン？」

足元から声を掛けてきたチビモンに、フェイトは恐る恐る持っていた三つのディーターミナルをチビモンの前に差し出し、チビモンは何かを感じるのかゆっくりとディーターミナルに手を触れる。

ーーーピトッ

ーーーピカアァァァァーーン！！！

「キャッ！！」

チビモンがディーターミナルに触れると同時にディーターミナルの液晶部分から光が溢れた。

突然発生した光にフェイトは思わず声を上げてしまうが、チビモンはフェイトに構わずその光を全身に浴び、体からデジコードを発生させる。

「チビモン進化！！！ブイモン！！！！！」

「ッ！！ブイモン！？」

ブイモンへと進化したチビモンの姿に、フェイトは驚き思わずブイモンを見つめるが、驚愕はそれだけでは治まらず、フェイトの右手に光が集まり、光が消えた後には金色の縁取りを持つ新たなディーアークが存在していた。

「ディーアーク！？一体どうなっているの！？」

次々と起きる不可思議な現象にフェイトは訳が分からないと言う様に声を上げるが、更なる現象がディーターミナルから発生する。
ディーターミナルの中から突然に勇気、友情、愛情、純真、知識、誠実のデジメンタルが飛び出し、ブイモンの頭上に向かって光をそれぞれ放ち、光の中から金色に輝くデジメンタル－奇跡のデジメンタルが姿を現し、更なる強烈な光が発生する。

ーーーピカァァァァァァーーン！！

「ヌッ！？この光は一体なんだ！？」

奇跡のデジメンタルから発生する光を遮るように、ディードと交戦していたデーモンは声を上げ、デーモンとの戦いによって負傷してしまっているディードも自身の予想を超えた事態に目を見開きながら、光の中心に立ってるフェイトとブイモンを見つめる。
一方フェイトも連続して起きる事態に困惑を隠せず、ブイモンの頭上で輝いている奇跡のデジメンタルを見つめていると、右手に握っているディーアークから音が鳴り響く。

ーーーピッピッ！

「エッ？・・・・・デジメンタルアップ？・・・・・何なのこれは？」

「フェイト！その言葉を大声で叫んでくれ！」

「ブイモン？」

「俺には何でか分かるんだ。この物質は俺達に力をくれる、だから

早く！」

「・・・・・うん！私はブイモンを信じる！！デジメンタルアップ！！！！！」

「ブイモン！！アーマーー進化！！！！！」

フェイトが叫ぶと同時にブイモンの頭上に浮かんでいた奇跡のデジメンタルが光の粒子へと変わり、ブイモンと一つになっていく。

それと共に強い光が夜を昼に変えるかのように照らし、その場にいる全員が思わず目を閉じてしまう。

そして光は徐々に治まっていき、光が消えた事を確認したフェイトが恐る恐る目を開けてみると、全身を金色の鎧で覆ったデーモンと同じぐらいの大きさを持った戦士が立っていた。その見覚えのある戦士の姿に、フェイトは目を見開き、大とアグモン、ガオモンもその戦士を呆然と見つめる。

その戦士は奇跡の果てに現れる戦士。アーマー体でありながら、究極体に匹敵する力を宿し、ロイヤルナイツの一人でもある戦士。ブイモンが奇跡のデジメンタルと一つになった時に現れる最強の戦士の一人。その名も。

「奇跡の輝き！！マグナモン！！！」

「マ、マグナモンだと！？」

現れたマグナモンを目にしたデーモンは信じられないと言うように叫び、マグナモンを見つめた。

よりにもよってロイヤルナイツの一人が予想だにしなかった事で現れたのだから、デーモンが驚くの当然だろう。

そしてフェイトにデジメンタルを渡したディードも、自身と自身

の主が予想だにしていなかった事態に呆然としながらマグナモンを見つめるが、マグナモンは構わずにデーモンに向かって拳を構える。

「デーモン・・・・俺はお前を倒す！！！ウオオォォォォォーーーー！！！！」

「返り討ちにしてくれるわ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！！！！

突撃して来たマグナモンに対して、デーモンも突進し、二体は衝撃波を撒き散らしながら激闘を開始するのだった。

新たなる絆、蘇れ！ブイモン！！（後書き）

次回予告

マグナモンへの進化を果たしたブイモン

その戦いは熾烈を繰り広げるが、決着は訪れる。

一方、地球では狂信が動き始めていた。

次回、漆黒の竜人と少女、『戦いの行方、そして黙示録の序曲』

狂信は悲しき思いに囚われた王を見つける。それが絶望への道とも知らずに。

戦いの行方、そして黙示録の序曲、前編（前書き）

フェイトの新ディーアーク設定。

基本的には以前のディーアークと機能は変わってはいないが、新たにパートナーデジモンをアーマー進化させる機能が加わっている。しかし、その為にはディーターミナルの所持が必要。

また、ヴィヴィオのディーアーク同様にフェイトのディーアークにも持ち主に力を与える機能が備わってはいるが、フェイト場合は幾つかの制約が存在している。

一つ、パートナーデジモンが成長期以上に進化している事（アーマー進化でも可能）成長期に戻った場合はフェイトも力を失う。
二つ、ディーアークを常に持っていなければならない。距離は僅かでも離れたら力は消失。
三つ、パートナーとの絆が無ければ使用不可能。何らか理由でパートナーとの絆が消失すれば、フェイトは今度こそ戦う術を永遠に失ってしまう。
以上がフェイトに課せられた制約である。

戦いの行方、そして黙示録の序曲、前編

「ウオォォォォォォーーーー！！！！！」

「クッ！！」

飛び掛かる同時に突き出して来たマグナモンの拳を、デーモンはギリギリの所で避けた。

それと共にデーモンは右手に力を込め、拳を振り抜いた直後のマグナモンの胴体に向かって拳をぶつける。

「フン！！」

ーーーードゴオォォン！！

「クッ！！負けるもんか！！」

ーーーードグウオォォン！！

「グフッ！！」

デーモンの放った拳によってダメージを負ったにも関わらずに放ったマグナモンの右拳を顎に食らったデーモンは苦痛の声を上げ、僅かに空中に浮かび上がった。

マグナモンはそれを目にするとすぐさま体を回転させ、デーモンの胴体に向かって回し蹴りを叩き込む。

「マグナキック！！！」

ーーードゴオォン！！

「ガハッ！！」

マグナキックを胴体に受けたデーモンは苦痛の声を上げながら吹き飛んで行った。

マグナモンはそれと共にすぐさまデーモンの後を追い掛け、更なる追撃をデーモンに放とうと、空中に未だに浮かんでいるデーモンに全力の力を込めた右拳を叩きつけようとする。

「オオォォォーーー！！！マグナパン…」

ーーーガシッ！！

ーーーザッ！

「ッ！！」

「調子に乗るのもいい加減しろ！！」

マグナモンが拳を振り下ろそうとする直前に、デーモンは左手で受け止めた。

それと共にデーモンは両足を地面につけて、自由に動かせる右手をマグナモンに振り下ろすとするが、今度はマグナモンがデーモンの右手を左手で受け止める。

ーーーガシッ！！

「ッ！！こしゃくな！！」

「俺はお前を倒す！！」

ーーーグググググッ！！

デーモンとマグナモンは互いに叫び合うと共にそれぞれ両手に力を込めて、力を比べを行い始めた。

その戦いを離れた所で見ていたフェイトは、新たに生まれ変わったマグナモンの力に心の底から驚いていた。

生まれたばかりにも関わらずに、あの大とアグモンでさえもダメージを負わせる事が出来なかったデーモンとマグナモンは互角に戦っている。その姿にフェイトは自身のパートナーがどれだけ凄い力を秘めていたのかと、改めて思い知らされた。

もしなのはの言葉どおりにパートナーと共に戦う道を選んでいれば、あの悲劇は起こらなかった。

目の前で行われているマグナモンとデーモンの戦いによって、改めてその事を理解したフェイトは思わず体を動かす事も無く戦いを見つめるが、そのフェイトにディードがソッと近寄って来る。

「・・・失礼しますが、呆然としている場合ではないと思います。貴女のパートナーデジモンが時間を稼いでいる間に彼らの治療を少しでも行った方がいいでしょう」

「ッ！！そうだ！大さん！アグモン！ガオモン！！」

ディードの言葉にフェイトは慌てて我に返り、地面に倒れ伏したままマグナモンとデーモンの戦いを見つめている大達に駆け寄る。

「大さん！大丈夫ですか！！」

「・・・・あぁ、何とか生きてるぜ・・・・・それにしてもブイモンの奴・・・・生まれ変わっても男なのは変わってねぇぜ」

「・・・・同感だぜ、兄貴・・・・それだけずっと思っていたんだ・・・自分のパートナーの為に戦いたかったんだ・・・・俺には分かるぜ・・・・今のマグナモンは・・・・デーモンでもそう簡単には勝てねぇ・・・・・俺達も倒れたままじゃいられねぇよな、兄貴」

「・・・そうだなアグモン・・・・マグナモンだけに任せていられるかよ」

大はアグモンの言葉に同意すると、全身に傷を負い血を流しながらもアグモンと共に立ち上がろうとする。

その様子にフェイトは慌てて大とアグモンを止めようとする。

幾ら大とアグモンでも全身に傷を負っている上に血も流し続けている状態で、デーモンに戦いを挑むなど自殺行為でしかない。その事が分かっているフェイトは大とアグモンを止めようと声を出そうとするが、その前に大の頭の上に箱が振り下ろされる。

ーーードオン!!

「ガッ!!・・・・テメエ、何しやがる!?」

大は自身の頭の上に勢いよく箱を振り下ろして来たディードに向かっての怒りの叫びを上げた。

その叫びを耳にしたディードは呆れたような瞳をしながら、両手で持っていた箱を地面に下ろし、箱の中から包帯や薬など治療道具を次々と取り出し、フェイトに手渡して行く。

「貴方は馬鹿ですか?そんな怪我を負ったままデーモンと戦うのは

無理です。せめて簡単な治療ぐらいは受けて下さい」

「彼女の言うとおりですよ、大さん。血だけでも止めておかないと、このままじゃ本当に出血死します。だから、今は大人しくしていて下さい」

フェイトはそう大に声を掛けると、ディードから渡された包帯と薬を使い手早く大の手当てを行い、ディードもアグモン、ガオモン、インプモンの治療を慣れた手つきで行っていく。

その様子を不機嫌そうな顔をしている大がディードを見つめていると、大の視線に気がついたのかディードが大に顔を向けずに、アグモン達の手当てを行いながら質問する。

「何か私に用が在るのですか？」

「・・・・お前何もんだよ？別世界のデジタルワールドの“選ばし人間”って、一体如何言う意味なんだよ？」

「簡単な事です。私達の世界ではデジモンを連れた人間の事を“選ばれし人間”と呼称しています・・・残念ながら、私はこの世界に来る時に私のパートナーデジモンとは離れ離れになってしまいましたが」

「それじゃあ？貴女は私達の仲間なんですか？」

「それは分かりません。私は貴女達の事を何も知りませんし、私も貴女方の事をよく知りません・・・・デジモンを連れて戦っていたから援護しただけです。仲間かどうかはこれからのお互いの行動次第で判断すべきでしょう・・・・・さて、手当ては終わりです」

ーーーポン！！

ディードは手当てを終えたアグモンの背を手で叩きながら声を出した。

アグモンはその声に恐る恐る体を上げて見るが、手当てされる前に感じていた激痛はあまり感じず、何とか普通に動ける程度になっていた。

「すげぇ！！全然痛みを感じないぞ！！」

「本当かよアグモン！？」

「あぁ、本当だぜ兄貴・・・・アンタ怪我の治療が上手いんだな」

「私の家は剣道場を営んでいます。その為に大抵の怪我の手当ては出来るんです・・・・最もそれは一時的なものなので、出来るだけ早く安全な場所で本格的な治療をした方が良いでしょうがね」

アグモンの言葉にディードはそう素っ気無く答えると、フェイトに治療されている大を怪しまれない程度で観察し始める。

元々ディードの目的は大達の監視。その為に大事な研究素材であったデジメンタルまで持って大達の下にまでやって来たのだ。此処で大達に死なれればスカリエッティから託された任務が失敗に終わる。だからこそ、デーモンと言う七大魔王デジモンと戦ってまでフェイトにデジメンタルを渡したのだ。

最も“奇跡”のデジメンタルの出現は完全にディードやその背後にいるスカリエッティも予想外の事態だったが、ディードはその事に関しては全くに気にしていない。

（どうせドクターの事です。今回の予想外の事態も新たな研究課題

として喜んでいるでしょうね。となればやはり彼らを護る必要もあります。それに例の私達が追っていた人物も近くに居る筈。怪しまれないように動かなければいけませんね）

そうディードは内心で現状について判断すると、治療を終えた大とフェイトに声を掛けようとするが、その直前にマグナモンの叫びが響く。

「ウワァァァァァァーーーーー！！！！！」

ーーードゴオオオン！！！！

「ッ！！マグナモン！！！！」

突然のマグナモンの叫びにフェイトと大達、そしてディードが慌てて顔を向けてみると、デーモンがマグナモンを地面に叩きつけていた。

デーモンはそれと共に、ゆっくりとマグナモンに足を向け追撃を行うとする。

それを目にしたフェイトは慌ててマグナモンの下に駆け寄ろうとする。しかし、その直前に大とディードがフェイトの肩を掴み取り押さえる。

ーーーガシッ！！

「落ち着けフェイト！！」

「貴女が行っても死ぬだけですよ」

「離して下さい！！このままじゃマグナモンが！！」

フェイトは大とディードの拘束を解こうと暴れるが、二人も此処でフェイトを行かせる訳にはいかなかった。
大はフェイトが何の力も持っていない事を知っている為に。
ディードはフェイトにもしもの事が在れば、マグナモンの進化が解けてブイモンに戻ってしまう事を危惧している為に。
特にディードはそれだけは絶対に行わせる訳にはいかなかった。デーモンと直接戦ったディードには分かっていた。マグナモンが敗れればその瞬間に戦いは大達の敗北で終わってしまう事を。
如何に応急処置を終えて動けるようになった大とアグモンが戦いに加わっても、大達の側には負傷者が多すぎるのだ。琴乃、リシア、風華、ガオモン、そしてインプモンは大とアグモンと違って動ける体ではない。もしマグナモンがいなくなればその瞬間に大達側は敗北してしまう。ディードが本来の力を使って戦えば僅かにデーモンを戦いの場から退かせる可能性は存在しているが、それを行えれば正体がばれてしまう。だからこそ、フェイトには戦いの場にはディードとしては近づいて欲しくは無かった。

「今貴女のパートナーがマグナモンにアーマー進化出来ていられるのは、貴女がいるからです。もし貴女が死んだりすればその瞬間に進化は解けて、デーモンに勝てる可能性は消えます。大人しく戦いを見守りなさい」

「でも！！」

「・・・・それ以上我が儘を言うのならば」

ーーーチャキッ！

「ッ！！おい止めろ！！」

ーーーガシッ！

ディードが腰に差している刀を抜こうとしている事に気がついた大は、すぐさま刀の柄の部分を手で押さえた。

その様子にディードは僅かに眉を顰め、大の顔を見つめると、大は真剣な顔をしながらディードに言葉を告げる。

「フェイトは本気でマグナモンの事が心配なんだよ・・・・お前は知んないだろうけど、フェイトもマグナモンも本当にお互いを思っていやがるんだ・・・・それがずっと擦れ違いばかりだった。だけど今は違う！漸くお互いが分かり合えて戦っているんだ！だから！力尽くで止めるなんて止めろ！」

「大さん・・・・」

「・・・・どうやら落ち着いた見たいですね」

そうディードは大とフェイトの様子を見ながら呟くと、腰に差していた刀から手を退かし、大達から一歩離れる。

その様子に大は安堵の息を吐きながらフェイトにアグモンと共に顔を向ける。

「フェイト。此処は俺とアグモンに任せてくれ。マグナモンは絶対に助けてやる！行くぞ、アグモン！！」

「おう！兄貴！！」

「デジソウルチャージ！オーバー…」

ーーードオオオオォォォォーーーン！！！

『ッ！！』

大がデジヴァイスバーストからデジソウルを発しようとする直前に、大達が居る場所から僅かに離れた森の中に再びダークタワーが聳え立った。

その姿にフェイト、大、アグモンは目を見開き、ディードも僅かに驚いたような顔をしながら悠然と森の中に聳え立っているダークタワーを見つめていると、マグナモンを右手に掲げたデーモンが残忍さに満ちた笑い声を上げ始める。

「グウゥッ！！」

「フフフフッ、ハハハハハハハハハハッ！！驚いたぞ！奴らがまさか此処まで使える連中だったとは！！なるほど、ルーチェモンの奴があのような雑魚どもを部下にして置く筈だ。私達七大魔王にダークタワーと言う物質は最良の武器。これだけでも私達の勝利は一気に上がるな・・・・・後はこのマグナモンを殺せばお前達の希望も消える！」

「ッ！！止めて！！」

「クソッ！！アグモン！！」

「あぁ！！」

デーモンが行なおうとしている事に気がついたフェイトは悲痛な声を上げ、大とアグモンは慌ててデーモンに向かって駆け出す。

しかし、デーモンは大達の様子になど構わずに右手に力を込めて

至近距離からフレイムインフェルノを勢いよくマグナモンに撃ち出す。

「燃え尽きろ！！フレイムインフェルノ！！！」

ーーーゴオオォォォォォォーーー！！！

『マグナモン！！』

デーモンが右手から噴き上げた凄まじい炎に包まれたマグナモンを目にした大達は叫び、フェイトは絶望に染まった顔をしながら思わず膝を地面につけてデーモンの右手に掴まれながらフレイムインフェルノの炎に包まれているマグナモンを見つめる。

デーモンは自身の最大の技が決まった事に嬉しそうな笑みを浮かべながら、マグナモンを遠くへと投げようとするが、その直前にデーモンの右手を炎に包まれながらもマグナモンが両手で掴む。

ーーーガシッ！！

「何！？」

「・・・・・待っていた・・・お前が僅かにでも気を抜く瞬間を！エクストリーム・ジハード！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオン！！

「グッ！グアアァァァァァーーー！！！！！」

マグナモンが叫ぶと同時にマグナモンの全身を包んでいたフレイムインフェルノを吹き飛ばしながら凄まじいエネルギー波がマグナ

モンの超合金製のクロンデジゾイドから放たれた。
至近距離でエクストリーム・ジハードを浴びたデーモンは思わずマグナモンを掴んでいた右手を手放し、背後へとその先に存在していた木々をなぎ倒しながら吹き飛んで行く。
それと同時にマグナモンも地面に降り立つが、すぐさまダメージからか地面に膝をついてしまう。

ーーーダッ！

「グゥッ！クソ！やっぱり無茶だったか」

「マグナモン！！」

フェイトはすぐさまマグナモンの近くに駆け寄り、マグナモンに心配そうな声で叫んだ。
その声を聞いたマグナモンはフェイトに顔を向け、フェイトの顔を見つめるが、すぐさまデーモンが吹き飛んで行った方向に顔を戻す。

「フェイト・・・・すぐに他の皆と一緒にこの場から逃げるんだ・・・・・デーモンには今のフェイト達じゃ勝てない」

「そんな！？マグナモンはデーモンにダメージを与えたんでしょう！？だったら、ダークタワーをもう一度破壊して大さんとアグモンの援護もあれば！！」

「駄目だ・・・・・戦っていて分かった・・・・・・デーモンは全然本気を出していないんだ・・・・俺と戦っていても、アイツには余裕しか感じられなかったんだ」

「ほう、生まれたばかりのくせに思ったよりも勘が鋭い」

『ッ！！』

マグナモンの言葉に答えるように響いたデーモンの声に、その場に居る全員が声の響いた方を慌てて振り向いてみると、僅かにローブが焼け焦げたデーモンが悠然と歩いていた。

そのデーモンの姿に誰もが声も無く見つめていると、デーモンは自身のローブにゆっくりと左手を伸ばし掴む。

ーーーガシッ！

「光栄に思え・・・・貴様らはこの私の真の姿を見られるのだから！」

ーーーバサッ！！

『ッ！！』

デーモンは叫ぶと同時に自身のローブを脱ぎ捨てた。

それと同時に発せられた凄まじい威圧感と圧迫感に誰もが言葉を出す事が出来ずに、ローブを脱ぎ捨てたデーモンを見つめる。

ローブを脱ぎ捨てたデーモンの姿は、正に悪魔としか表現出来なかった。

背中には悪魔のような翼が大きく広がり、巨大な角を供えた顔には残忍さしか存在せず、それと同時に左手は右手よりも長く巨大に変わっていた。

その上ローブを脱ぎ捨てると同時にデーモンの体は巨大化していき、最終的には全長二十メートルほどの大きさに変わり、地面に存在しているマグナモン、フェイト、大、アグモン、ディード、そし

てインプモン達を見下ろすほどになった。

「フフフフフフッ、この姿を見られた事を本当に光栄に思え・・・・何せ、この姿を見て生きていた者はいないのだからな！！ケイオスフレイム！！！」

ーーードゴオオォォォォォォーーー！！！

「ッ！！不味い！！ライトオーラバリア！！」

ーーーピカアァァァァァン！！

デーモンが口から吐き出したケイオスフレイムに対してマグナモンは瞬時に飛び上がり両手を前に突き出すと、背後にいるフェイト達と自身を包むほどのバリアを前面に張り巡らし、ケイオスフレイムを防いだ。

しかし、徐々にデーモンが吐き出したケイオスフレイムはマグナモンのライトオーラバリアを破るように勢いを増していき、マグナモンは苦しそうに顔を歪める。

「クッ！クソッ！！」

「ハハハハハハハッ！！何時まで耐えられる！？貴様が敗れた瞬間に全員灰に変わるぞ！！」

「この野郎！！」

「クソォ！進化さえ出来ればマグナモンを援護出来るってのによ！！」

デーモンの嘲りに満ちた笑い声を耳にした大とアグモンは悔しげな声を上げ、デーモンの攻撃を防いでるマグナモンを見つめた。
その姿には一切余裕が無く、全身の力を込めてデーモンの攻撃を防いでるようにしか大達には見えなかった。このままではマグナモンがやられてしまうと、その場にいる全員が思うが、再び現れたダークタワーによってアグモンは進化を封じられ、インプモンとガオモンは戦闘不能、空を飛ぶ事が出来る琴乃、リシア、風華は意識を取り戻す様子が無い。状況が余りにも悪すぎる事に大とアグモンは如何すればいいのかと考えるが、状況を打開出来る策が思い浮かばず悔しげに顔を歪める。
その様子に気がついたディードは、僅かに離れていた所に存在しているダークタワーに目を向け、大とアグモンに声を掛けようとする。しかし、その前にライディエルを握り締めたフェイトが大に叫ぶ。

「大さん！私がダークタワーを何とかします！だから、ダークタワーが消えたらすぐにマグナモンを援護して下さい！！」

「なっ！？おい！フェイト！！ちょっと待て！お前は！？」

「此処を頼みます！！」

ーーーダッ！！

止める大の言葉に構わずにフェイトはダークタワーがある方向に向かって全速力で駆け出した。
それを目にした大とアグモンは、フェイトを止めようと駆け出そうとするが、その前にディードがフェイトの後を追って走り出す。

「彼女は私に任せなさい！貴方達はこの場でチャンスが来るのを待

っていなさい！！必ずチャンスは作って見せます！」

そうディードは大とアグモンに向かって叫ぶともはや背後を振り返らずに、森の中に消えて行ったフェイトを全速力で追い掛けて行った。

デーモンとマグナモンが激突し合っている場所から離れた森の中。その場所には新たにダークタワーが建てられ、ダークタワーの根元には怪我を負ったアルケニモンとマミーモンが存在し、マグナモンとデーモンの様子を静かに見つめていた。

「フゥ～、危ないとこだったね・・・・まさか、マグナモンが現れるなんて完全に予想外だよ・・・もし、大門大とそのパートナーが動けていたら、覚醒したてのデーモン様じゃ負ける可能性があるからね」

「あぁ、正に危機一髪だったぜ・・・・だけどよぉ。デーモン様と言いルーチェモン様と言い、もう少し俺達を気遣って欲しいぜ。一々逃げなくちゃいけないんだからよぉ」

「そんな事を言ってもしょうがないだろうね・・・・・とにかく、何があってもこのダークタワーだけは護り抜くよ。どうせもう少しでデーモン様がマグナモンを倒すだろうけど、万が一って事もあるからね」

「了解だぜ」

マミーモンはそうアルケニモンの答えると自身の武器であるオベ

リスクを構えながら辺りを警戒し出し、アルケニモンも神経を張り巡らせるように辺りの森の木々を見回し始める。

その様子を普通の木よりも太い木の影に隠れながら見ていたフェイトは、アルケニモンとマミーモンの警戒に険しい顔をしながら、手に持っているライディエルから抜き取った四発のカートリッジの弾丸を見つめる。

（今の私は魔力が使えない・・・・だけど、このカートリッジの中には魔力がある・・・これを上手く使ってダークタワーの近くで爆発させれば、もしかしたらダークタワーは砕けるかもしれない・・・確率は低いけど、今の私にはこれしかない・・・絶対にマグナモンを死なせない！！）

フェイトはそう内心で決意を固めると、恐る恐るアルケニモンとマミーモンに気づかれないように足を前に進め、少しでもダークタワーの傍に近寄って行く。

そしてもう少しでダークタワーに一直線で走れる距離に差し掛かった瞬間に、足下に落ちていた小枝をフェイトは踏んでしまう。

ーーーバキッ！

「ッ！！其処にいるね！！スパイダースレッド！！！」

小枝が踏み折られる音を耳にしたアルケニモンは即座に体を音が聞こえて来た方に向けると同時に、両手から鋭いワイヤーースパイダースレッドを森の中に向かって放つ。

ーーーザザザザザザザザッ！

「クッ！！」

木々を切り裂きながら迫って来るスパイダースレッドの姿に、フェイトは悔しげな声を上げながらも体を前に向かって走らせる。

それによってフェイトは切り裂かれた木々の枝や僅かに触れたスパイダースレットで体が傷ついていくが、フェイトは構わずにダークタワーに向かって走る。

此処で失敗すればマグナモンが死んでしまう。それだけは絶対にさせないと言う思いを胸にフェイトはダークタワーを目指して走り続ける。しかし、それを阻むようにフェイトの前方に無数の銃弾が降り注ぐ。

ーーードドドドドドドドドドドドッ！！

「ッ！！！」

「貫ったぜ！！スネークバンテーージ！！」

ーーーギュルルルルルルルルッ！！

「しまっ！！アッ！！」

ーーーガシッ！！

銃弾によって動きが止まってしまったフェイトの隙をつき、マミーモンが両手から伸ばした包帯でフェイトを拘束した。

それと共に動きが封じられたフェイトは地面に倒れ伏す。アルケニモンとマミーモンはその姿に残忍な笑みを口元に浮かべながら包帯の拘束から逃れようともがいているフェイトに近寄り声を掛ける。

「フフフフッ、馬鹿だね。ただの人間が完全体の私らに勝てる訳ないだろう？」

「へへへへへッ、本当だぜ。さてと、先に死んで貰うぜ！」

ーーーカシャッ！！

「ッ！！（こうなったら！）」

マミーモンがオベリスクの銃口を向ける様子を目にしたフェイトは、包帯の中で握っていたカートリッジを暴発させようと動く。

しかし、その前にマミーモンは引き金に指を掛け、フェイトに弾丸を一撃ち込めなかった。

ーーードゴオォン！！

「ギャハッ！！」

「マミーモン！！」

「えっ？」

突然苦痛の声を上げながら吹き飛んでいったマミーモンの姿に、アルケニモンは驚きに満ちた声を上げ、フェイトは突然の事態に困惑した声を上げた。

それと共に地面に倒れ伏したまま動けないフェイトの目の前に背中にロイヤルブルーのマントを棚引かせ、全身を金色の鎧で覆い、肩の部分から二本の角のようなものを生やし、両腰に剣をそれぞれ差した騎士が姿を見せる。

アルケニモンはその突然現れた騎士の姿に目を見開きながら後退

り、困惑したように騎士に向かって叫ぶ。

「な、何者だいアンタ！？」

「グレイドモン。ある人物のパートナーデジモンです」

グレイドモン、世代／完全体、属性／ワクチン種、種族／戦士型、必殺技／クロスブレード

“金色の流星”との異名を持つ戦士型デジモン。両腰に『双剣グレイダルファー』を備え、神速の剣技で敵を切り裂く。その強さは究極体さえも凌ぐ強さを持ついわれ、背中につけているロイヤルブルーのマントは数々の戦いでの功績を称えられた、名誉の証と言われている。必殺技は、神速のスピードで敵を十字に切り裂く『クロスブレード』だ。

アルケニモンはグレイドモンの言葉に困惑したような顔をしながらグレイドモンを見つめるが、グレイドモンは構わずに右腰からグレイダルファーを一刀引き抜き、背後で包帯によって拘束されているフェイトに神速のスピードで振り抜く。

ーーーザン！！

ーーーパサッ

「・・・・一体貴方は？」

「答える義務は無い。こやつらの相手は私がする。お前は早くダークタワーを破壊しろ」

「・・・・お願いします」

フェイトはそうグレイドモンに頼むとすぐさまダークタワーに向かって駆け出した。
グレイドモンが敵なのか味方なのかはフェイトには分からなかったが、既に大達の下から離れてから時間がかなり経っている。このままではマグナモンの命が本当に危ない事が分かっているフェイトは、一刻も早くダークタワーを破壊しようと全速力で駆けていく。
それを目にしたアルケニモンはダークタワーを破壊される訳にはいかないと思い、フェイトを止めようと再び両手からスパイダースレッドを放つ。

「させないよ！スパイダースレッド！！」

ーーーシュルルルーー！！

「それは此方のセリフです」

ーーーザン！！

「ッ！！」

フェイトにスパイダースレットが届こうとした直前に、グレイドモンが両手に握っていたグレイダルファーを一閃し、スパイダースレットを切り裂いた。
その事にアルケニモンは目を見開くが、グレイドモンは構わずにアルケニモンに向かって神速の速さで近寄り、アルケニモンの首にグレイダルファーの刃を押し当てる。

ーーービュン！！

ーーースチャ！！

「ヒィッ！」

「質問があります。漆黒の竜人ーブラックウォーグレイモンを創り上げたのは貴女達ですか？」

「なっ！？何でアンタがその事を知って！？」

アルケニモンはグレイドモンの質問に心の底から驚き、冷徹な視線を向けて来るグレイドモンを見つめた。

その事実は本来ならば知る者が限られている事実。あの事件に関わった者だけが知る事が出来る事実。

その事を知っているグレイドモンにアルケニモンは言いようの無い恐怖を内心で覚える。まるで自分達が現れるのをグレイドモンは待っていたかのような感覚をアルケニモンは覚え、グレイドモンから離れようとする。

しかし、グレイドモンはアルケニモンを逃がさないというようにアルケニモンに向かって踏み出し、両手に握っているグレイダルファーを振り抜く。

「少しお相手をお願いします！」

ーーーブン！！

「じょ、冗談じゃないよ！！」

アルケニモンは慌ててグレイドモンの攻撃を避け、そのままグレイドモンから逃げようとする。

だが、グレイドモンは素早く体を動かしアルケニモンの逃げ道を

塞ぐように立ち塞がる。

ーーービュン！

「逃がす訳にはいきません！」

「この！スパイダースレッド！！」

ーーーシュゥゥゥン！！

立ち塞がったグレイドモンに向かってアルケニモンは両手から素早くスパイダースレッドを放った。

それに対してグレイドモンは両手に握ったグレイダルファーを素早く振るい、スパイダースレットを切り裂くが、アルケニモンは構わずにスパイダースレットを放ち続けグレイドモンの動きを押さえる。

それに気がついたグレイドモンは瞬時にアルケニモンの目的に気がつくが、構わずにスパイダースレットを切り裂き続け、ダークタワーに向かって走っているフェイトを横目で見る。

（既に発信機は取り付けました・・・・後はダークタワーを破壊出来るかどうかですが、それは彼女に任せましょう。最も失敗すれば即座に私が動きますがね）

そうグレイドモンは内心で呟くとフェイトから目を逸らし、アルケニモンの攻撃に集中しながら攻撃を防いで行く。

そして遂にダークタワーの根元に辿り着いたフェイトは、右手に持っていた四つのカートリッジを握り締めながら素早くダークタワーの根元に三つのカートリッジを埋め込む。

ーーーザッ！

「これで後は、近くで最後の一個を爆発させれば、他のカートリッジも連鎖爆発する。ダークタワー自体の強度はそう高くないから、多分これで破壊出来る筈だ・・・・・待っていてマグナモン！すぐに破壊す…」

ーーーズキュン！！

「キャッ！！」

フェイトがカートリッジを爆発させようとした瞬間に、背後からフェイトの右肩が撃ち抜かれ、フェイトは地面に倒れ伏してしまった。それと共に右手に握っていたカートリッジを落としてしまう。

そのままカートリッジは地面を転がり、その先にいたマミーモンが嘲りに満ちた笑みをしながら足下に転がって来たカートリッジを拾い上げ、苦痛に苦しんでいるフェイトに声を掛ける。

「ヒャハハハハハハハハハハッ！！惜しかったな！女！後一歩だったのによぉ！」

「クッ！！」

「やっぱおめえは殺しておいた方がいいな。まぁ、安心しろよぉ。他の連中もすぐに会えるぜ。あの世でな！！」

ーーーカッシャ！！

マミーモンは叫ぶと共にオベリスクの銃口を動けないフェイトに

向かって構え、フェイトは心の底から悔しげな顔をし、オベリスクを構えているマミーモンを見つめながら内心で叫ぶ。

（これで本当に終わりなの！？マグナモンが必死に戦っているのに！嫌だ！もうマグナモンや、それに大さん達が死ぬなんて絶対に！力が欲しい！今度は皆を、大切な人達を護る為の力が！私は護る為の力が欲しいよ！！）

ーーーピカァァァァァン！！！

「な、何だ！？」

フェイトが新たなる想い胸の内に抱いた瞬間に、フェイトの服の中に入れてあるディーアークが光り輝いた。

それによって思わずマミーモンは銃口を外し、光を遮るように顔の前に手をやる。

フェイトはその様子に構わずにまるでその光に導かれるように服の中からディーアークに取り出すと、ディーアークからデジコードが飛び出し、フェイトの体を包み込む。

ーーーギュルルルルルルルッ！！！

「な、まさか！？進化でもするってのかよ！？そ、そんな事ある筈が！？」

「ライディエル！！セットアップ！！」

「ッ！！」

驚愕するマミーモンに構わずにデジコードの中からフェイトの叫

びが響く。
　それと同時にデジコードは弾き飛び、中から執務官服に似たバリアジャケットと白いマントを背中に棚引かせ、左手にザンバーフォームに変形したライディエルを握ったフェイトが姿を現す。
「・・・・・ライディエル。ゴメンね。私は貴方の主じゃないけど、この一度だけは力を貸して・・・・貴方の主と私の大切な人達を護る為に」
《・・・・・・良いでしょう・・・・・ですが、今回限りです・・・・私のマスターはあくまでリシアですので》
「ありがとう」
　フェイトはライディエルの言葉にフェイトは柔らかな笑みを浮かべながら礼を告げ、マミーモンに向かってライディエルの刃を構える。
ーーースチャッ！
「時間が無い。貴方との戦いはすぐに終わらさせて貰うよ」
「クッ！何だから分かんねぇが！テメエごときに俺が負けるかよ！！死にやがれ！！」
ーーーズガガガガガガガガガガガガガッ！！！
　マミーモンは叫ぶと共にすぐさまフェイトに向かってオベリスクを乱射した。
　しかし、フェイトはそれを見ても焦る事は無く、冷静さを保ちな

がら加速魔法を使用し、銃弾を避ける。

《Ｓｏｎｉｃ（ソニック）　Ｍｏｖｅ（ムーブ）》

ーーービュン！！

「な、消えた！！」

突然消えたフェイトの姿にマミーモンは驚き、慌てて周りを見回そうとする。

しかし、フェイトの姿は発見出来ず、焦りを覚えながらオベリスクを再び乱射しようと思い構えようとした瞬間、マミーモンの背に手が置かれる。

ーーートン！！

「ッ！！」

「ゴメンね、本当に時間が無いの。撃ち抜け、轟雷！！サンダースマッシャーー！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオン！！！

「ギャアアアアアアアアアアーーーー！！！！！」

至近距離でサンダースマッシャーを食らったマミーモンは悲鳴を上げ、そのままダークタワーにサンダースマッシャーと共に激突する。同時にサンダースマッシャーの影響を受けた、埋まっていたカートリッジが連鎖爆発を引き起こす。

ーーードゴオン！！ドゴオオン！！ドゴオン！！

ーーーバリィィィィン！！

「ギャアァァァァァァァァァァァーーーー！！！！！」

「マミーモン！！」

ダークタワーが砕けると共に遠くに吹き飛んで行ったマミーモンを目にしたアルケニモンは声を上げ、マミーモンを追い駆けようと走り出す。

しかし、その直前にグレイドモンがアルケニモンの背後に神速のスピードで移動し、神速の速さで両手に握っていたグレイダルファーを十字の形にして振り抜く。

「貴女も吹き飛びなさい！クロスブレード！！」

ーーーブオオオン！！

「な、キャアァァァァァァァァァーーーーー！！！！！」

グレイドモンのクロスブレードが発生させた衝撃波を背に食らったアルケニモンは悲鳴を上げながら、マミーモンと同様に遠くに吹き飛んで行く。

グレイドモンはそれを確認すると、両手に持っていたグレイダルファーを腰に差している鞘に収めながらフェイトのいる方に目を向けてみると、フェイトは気絶して地面に倒れ伏していた。

「血を流し過ぎたようですね。全く困りますね」

ーーーギュルルルルルッ

グレイドモンが呟き終えると同時にグレイドモンの体からデジコードが発生し、体を覆っていく。

そしてデジコードが消えた後には巫女服に似た服を着た女性ーディードが現れ、呆れたような顔をしながらフェイトに近寄る。

「・・・・貴女が死んだら私が困りますからね・・・・・まぁ、これは貸しにしておきますよ。Ｆの遺産の申し子、フェイト・テスタロッサ」

そうディードは気絶しているフェイトに声を掛けると、フェイトの治療をしながら、森の外れの方で始まった激しい戦闘音に耳を傾けるのだった。

戦いの行方、そして黙示録の序曲、後編

ミッドに存在しているとある研究所内部。
その研究所の主であるスカリエッティは、ウーノを何時ものように背後に従えながら目の前のモニターに映っていたディードの戦いぶりに満足そうな顔をしていた。
完全体のデジモンを圧倒し、尚且つ怪しまれない動きで大達の中に入ったディードの働きぶりは正にスカリエッティが望んでいた以上の成果だった。更に捜し求めていた存在も発見する事が出来ただけではなく、発信機までも取り付けられたのだから、スカリエッティの心の内には喜びしかなかった。

「やはりディードを送って正解だったね。その上マグナモン・・・・・フフフフッ、知的好奇心が疼いてしょうがないよ」

「・・・・ドクター・・・・失礼ですが、やはりディードは私達の下に戻すべきです」

「うん？」

突然のウーノの進言にスカリエッティは珍しいものを見たような顔をしながらウーノの方を振り返った。
ウーノはそれを確認すると、険しい顔をしながら珍しくスカリエッティの考えに異を唱えるような発言を始める。

「ドクターには考えがあってディードを大門大の下に送ったのでしょうが、ディードのバイオデジモンとしての完成度はやはり姉妹の中でも一番です。来るべき私達の活動の日の為にも、ディードは私達の下にいるべきです」

「フム、なるほど、確かに君の考えは正論だ」

「では！」

スカリエッティの発言にウーノは嬉しそうな顔をしながら声を上げた。

しかし、スカリエッティはウーノの提案を僅かに面白さを含んだような微笑を浮かべながら否定する。

「残念だが、このままディードは大門大達の仲間の振りをしてスパイを続行して貰う」

「ッ！！何故ですか！？確かに大門大達も警戒すべき対象ですが！例の私達が追っていたデジモン達も発見出来たのです！ディードを大門大達も下に居させるのは、無意味とは言いませんが、優先度はかなり低い筈です！！」

「ウーノ。君は確かに私の優秀な秘書であり、最高傑作の一つだ・・・だが、実は君にも秘密にしていた事がディードにはあるのだよ」

「ッ！！」

ウーノはスカリエッティの発言に目を見開いた。

ナンバーズの中でも最もスカリエッティと共にいる自身でさえも知らされなかった事実がディードには存在している。その事はスカリエッティに最も忠誠を誓っているウーノからすれば、信じられない出来事だったが、スカリエッティはウーノの様子に微笑を浮かべながら説明し出す。

「誤解しないでくれ、ウーノ。この件は君だけではなくディード本人でさえ知らない事なのだよ。本来ならば時が来るまでは誰にも話す気はなかった。だからこそ、君も今から説明する事は誰にも話してはいけないよ。例えトーレやドゥーエ、そしてクアットロにさえもね」

「・・・・分かりました・・・・それで、ディードに隠された秘密とは一体何なのですか？」

「ふむ、私は以前から一つの考えを持っていた。それは果たして私達が手に入れた“超究極体が本当に最強”なのかとね」

「それは間違いないと思われます。“超究極体のデジタマ”を手に入れた遺跡にも、全ての究極体を越える究極体と記されていたのですから。例え七大魔王でさえ勝てる可能性は低い筈です」

「それは違うね、ウーノ。確かに力だけは全てのデジモンを上回っているかもしれない。しかし、戦いは力だけではない。そして何よりもデジモンはデータ生命体と言う特殊な生物だ。ではもしもだ。これはもしもの可能性だが、“超究極体のデジモンでさえもデータを書き換えて吸収出来るデジモンが存在しているとも考えられないかね”」

「ッッ！！！」

スカリエッティの告げた推測にウーノは全身に衝撃が走った。

そう、スカリエッティの言う通りデジモンは普通の生物ではなくデータで体が構成されたデータ生命体と言う特性を持っている。そしてデジモンの属性の中には確かにウィルス種と称されるデジモン達が数え切れないほどに存在している。

そしてその中には相手のデータを破壊する力を持ったデジモンも、もちろん存在している。
ならばスカリエッティの推測通り、超究極体のデータを書き換えて吸収する事が出来るデジモンも存在している可能性が高い。

「私がこの推測に行き着いたのは、超究極体のデジタマが封印されていた遺跡に記されていた超究極体に唯一対抗出来るとされた『アルフォースブイドラモン』の存在を知った時からだ。現にフリート君はこのデジモンの特性を利用して、ブラックウォーグレイモンにデバイスのデータ吸収能力を与えていた。その件から考えても私の推測が当たっている可能性は高い。そして万が一この推測が正解し、私達の切り札である超究極体を奪われてしまえば、私達はその瞬間に敗北してしまうだろう。だからこそ、私はその時の保険の為に最後にバイオデジモンとして生み出した１２番目のナンバーズ―ディードを他のナンバーズ以上の最高傑作として世に生み出した。そう！ディードは他のナンバーズとは違うのだよ！！何せデジモンの中でも最強と称されるロイヤルナイツの一体の因子をその身に埋め込み！戦闘機人の要素よりもデジモンとしての要素を多く埋め込んだ存在なのだからね！！」

「なっ！？ロ、ロイヤルナイツの因子をですか！？」

「フフフフッ、流石に君も驚いたみたいだね。君自身や他のナンバーズは自身の所持するＩＳを最高に発揮出来るデジモンへの進化能力を与えた。だが、ディードだけは違う。あの子には偶然にも手に入れたロイヤルナイツの因子を埋め込んだ。その結果、ディードは完全体でありながら究極体に匹敵する力を宿したグレイドモンへの進化を会得してくれたのだよ！・・・・・最も、まさかディードのＩＳ―双剣（ツインブレイズ）に適したデジモンに進化するは嬉しい予想外だったがね。だが、その代わり他のナンバーズは究極体への進化が出来たの

にも関わらず、ディードは究極体への進化が出来なかった」

「なっ！？その様な話は聞いていませんでしたが！？」

「言っていないからね。知っているのは私とディード本人、そしてディードが一番に心を許しているオットーだけなのだよ・・・さて、話は戻すが、ディードは何故か究極体に進化出来なかった。これについて私はディードのデジモンの要素を強くし過ぎた事が原因ではないのかと考えた。デジモンの進化には色々な要素が含まれるが、中でも野生のデジモンに一番必要なのは戦いの経験だと私は考え、ディードを大門大の下に送る事を考えた。彼らが行く場所には強いデジモンが多い。そして何れはロイヤルナイツや四聖獣と大門大達は戦うだろう。その時にディードが近くに居れば、ディードは確実に強く成長し、究極体への進化を会得出来ると私は考えていたのだよ。失敗しても大門大達の情報が手に入るからね。どちらにしても私達には何かしらの得が入って来る。それにこの件が上手くいけばディードの究極体は先ず間違いなく、ロイヤルナイツのデジモンである事は間違いない。上手くいかなくても、かなりの力を持つ究極体になるのは間違いないからね」

「だからディードを大門大達の下に送ったのですね。全ては私達の戦力アップの為に」

「その通りだよウーノ。それに他にも私は色々と戦力アップを図っているからね。特に今行っている研究が成功すれば、使えないと思っていた兵器ー“聖王のゆりかご”も使えるようになるだろう。その為にも！」

スカリエッティは叫ぶと共にモニターに映っていた映像を別の映像に変え、デーモンに向かって突撃するシャイングレイモンと大の

姿を見つめる。

「大門大！！そしてシャイングレイモン！！君達は何としてデーモンを倒すのだ！！全ては私達の計画の為に！！フフフフッ、ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！！！！」

そうスカリエッティは狂気に満ちた笑い声を上げながら、ウーノと共に大とシャイングレイモンの戦いを観戦するのだった。

そして時は少し戻り、シャイングレイモンが姿を現す少し前。

マグナモンは自身のパートナーであるフェイトがダークタワーを破壊する事を信じながら、デーモンが口から吐き出し続けているケイオスフレアをライトオーラバリアで防いでいた。

しかし、その範囲は当初とは比べものにならないほどに狭まり、マグナモンは両足を地面につけながらも、両手を前に突き出してライトオーラバリアを張り、背後に立つ大とアグモン、そして気絶している琴乃、リシア、風華、ガオモン、インプモンを護り続けていた。

ーーーゴオオオォォォォォーーーー！！！！！

「グウゥゥゥーーー！！ク、クソ！！」

「頑張れマグナモン！！もうすぐフェイトが必ずダークタワーを破壊する！！それまで何としても耐えろ！！」

「そうだぜ！！絶対にダークタワーは無くなる！！だから頑張れ！！」

大とアグモンはそうマグナモンに向かって励ますように叫び続ける。
その叫びにマグナモンは更に力を込めてケイオスフレアを押し返そうとライトオーラバリアの力を上げようとするが、その前にデーモンが嘲りに満ちた視線を向けながら右手をマグナモンにゆっくりと向ける。
「ハハハハハハハハッ！！中々楽しめたぞ。おかげで私も調子が少し取り戻せた。褒美だ！跡形も無く焼き尽くしてくれよう！」
『ッ！！』
デーモンが更なる攻撃を加えようとしている事に気がついたマグナモン達は目を見開き、全員が悔しげな顔をし始めた瞬間。
ーーーバリィィィィーーーン！！！
「なっ！？何だと！？」
離れた所に建っていたダークタワーは跡形も無く砕け散った。
その様子にデーモンは目を見開きながら叫ぶが、マグナモン、大、アグモンは逆に心の底から会心の笑みを浮かべ、大は瞬時にデジヴァイスバーストを構える。
「よっしゃぁぁぁぁぁぁーーー！！！！アグモン！！反撃だ！！」
「応ッ！！」
「ッ！！させんぞ！！フレイムインフェルノ！！！」

ーーードゴオォォォォォォォーーー！！！！

大とアグモンの叫びを耳にしたデーモンはすぐさま驚愕を治めると共に、右手からフレイムインフェルノを放ち、マグナモン達をライトオーラバリアごとケイオスフレアとフレイムインフェルノの炎で包み込んだ。

その様子にデーモンは自身の勝利を確信し、フレイムインフェルノとケイオスフレアを放つを止めてその場から去ろうとしようとした瞬間、燃え盛る炎の中から黄金の光がデーモンに向かって飛び出す。

「エクストリーム・ジハード！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオン！！

「ッ！！クッ！！」

ーーーバッシュン！！

炎の中から放たれたエクストリーム・ジハードに対して、デーモンは瞬時に自身の巨大な左腕を振り抜く事で霧散させた。

しかし、エクストリーム・ジハードが霧散されると同時にエクストリーム・ジハードによって作られた道から閃光が飛び出し、デーモンの顔に向かって突撃する。

ーーービュン！！

「ウオォォォォォォォーーーーーーー！！！！！」

ーーードゴオオン！！

「ガハッ！！！」

閃光ーシャイングレイモンはデーモンの顔に向かって全力を込めた拳を撃ち込み、デーモンはその威力に初めて苦痛の声を上げ、後方に僅かに吹き飛ばされてしまう。

その様子を見たシャイングレイモンと、その肩に乗っている大は険しい視線を殴られた箇所を右手で押さえているデーモンに向かって叫ぶ。

「よぉ、よくも今まで散々好き勝手にやってくれたな・・・・・何倍にして全部返してやるぜ！！」

「これ以上はお前の好き勝手にはさせないぞ、デーモン！！」

「・・・・・フフフフフフッ、ハハハハハハハハハハハハッ！！笑えれる！笑えるぞ！！」

「何が可笑しいんだ！？」

「フン、貴様ら、まさか究極体に進化した程度で私に勝てると思っていたのか？そもそも何故私達七大魔王デジモンは倒されたのではなく、封印されていたと思う？ロイヤルナイツや四聖獣と言う強力なデジモンが他にも多く存在していたのにも関わらず！」

『・・・・・・』

「分かるまい。送られて来た情報によれば貴様らはベルフェモンを一度倒したそうだな・・・・フフフフフ、確かにベルフェモンを倒

したのは褒めてやろう。“人間と融合したせいで力を半分も出せなかったベルフェモンを倒したのはな”！！！」

『なっ！？』

デーモンが告げた事実に大とシャイングレイモンは心の底から信じられないと言う声を上げた。

十二年前以上に倒したベルフェモンの力が、実は本来の実力の半分以下だった。その事実はベルフェモンとの戦いに命を賭けた大とシャイングレイモンからすれば信じられない事実だったが、デーモンは当然だと言うように声を出す。

「クククククッ、流石に驚いたようだな。私達七大魔王デジモンは、嘗てデジタルワールドを滅ぼす寸前にまで追い込んだ。その力持つ者が、究極体の力を超えた程度の力で敗れる筈はあるまい！貴様の世界のデジタルワールドの管理者だったイグドラシルですら、封印と言う消極的な方法で七大魔王を抑えるしかなかったのだ！其処に倒れている出来損ない七大魔王はともかくとしてな！！」

「・・・・・おい、今言った出来損ないの七大魔王ってのは、ベルゼブモンの事かよ？」

「その通りだ。人間などと言う塵以下の存在に味方をする七大魔王など、出来損ないの存在でしかない。貴様らを殺した後に、私が引導を渡してくれるわ！」

「そうかよぉ・・・・・だったら、残念だったな」

「何？」

「お前は此処で俺達に敗北すると言う事だ！！オオォォォォォォォーー！！！！！」

シャイングレイモンはデーモンの疑問の声に答えると共に、背中の羽を羽ばたかせながら突撃した。

その様子にデーモンは再び嘲りに満ちた顔をしながら、左腕に力を込めてシャイングレイモンを大ごと地面に向かって叩きつけようとする。

しかし、その直前にデーモンの背後から忍び寄っていたマグナモンが飛び出し、デーモンの背に向かって蹴りを叩き込む。

ーーービュン！！

「マグナキック！！！」

ーーーードゴォォン！！

「ムッ！？」

突然の背後から衝撃にデーモンは思わず動きを止め、背後に視線を向けてみると、マグナモンが全身の鎧の装甲を開けると共に両手の間にプラズマ球を作り上げていた。

「プラズマシューート！！」

ーーードドドドドドドドドドドド！！！！

マグナモンは叫ぶと共に鎧から無数のミサイルと、両手の間に作り上げていたプラズマ球をデーモンに向かって放った。

それに気がついたデーモンは自身の背中に存在している巨大な羽

根を羽ばたかせて、マグナモンが放ったミサイルとプラズマシュートを消滅させようとするが、その直前に前方から迫っていたシャイングレイモンも両手の間に光球を作り上げ、デーモンに向かって放つ。

「グロリアスバーースト！！」

ーーードゴオォン！！

「フン！！つまらん攻撃だ！！」

背後と前方からの同時攻撃に対してもデーモンは慌てずに、背後のマグナモンの攻撃には背中の羽を羽ばたかせる事で、前方のシャイングレイモンの攻撃に対して左腕を振り抜く事で全ての攻撃を相殺する。

ーーーバッシュン！！バッシュン！！

「ハハハハハハハハッ！！先ずは貴様だ！！スラッシュネッ！！」

デーモンはシャイングレイモンに向かって左腕を振り下ろそうとするが、その直前にシャイングレイモンの肩に乗っていた筈の大の姿が存在していない事に気がつき思わず攻撃を止めて辺りを見回そうとする。

しかし、その直前にデーモンの頭上から凄まじい気迫が篭った叫び声が響く。

「オオォォォォォォォーーー！！！」

「ッ！！しまっ！！ガハッ！！」

ーーードゴオォォン！！

頭上から落下して来ると同時に打ち下ろされた大の拳を顔面に食らったデーモンは苦痛の声を上げて仰け反ってしまう。

それと共に大はデーモンの頭部に存在している角に掴み取り、デーモンに至近距離で拳を撃ち出しながら叫ぶ。

「テメエに比べればベルゼブモンの奴の方が強かったぜ！！」

ーーードゴオォォン！！

「ガッ！！」

「如何した！？ベルゼブモンは俺とシャイングレイモンの拳を食らっても何度も立ち上がって来たぞ！！テメエのようなきたねぇ方法なんか使わなくてもな！！」

ーーードゴオォォン！！

「グゥッ！！な、舐めるな！！」

デーモンは叫ぶと共に顔に張り付いている大を吹き飛ばそうと手を伸ばすが、その前にシャイングレイモンがデーモンの顔に近づき、大を瞬時に掴み取る。

ーーーガシッ！！

「逃がさんぞ！！ケイオス！！」

「俺を忘れるな！！マグナキック！！」

ーーードゴオォン！！

「グフッ！！ガアアァァァァァァァァーー！！！！」

頭上からのマグナモンの踵落としを食らったデーモンは、ケイオスフレアを放つ直前だった事もあり、口の中で炎が爆発し、苦痛に満ちた声を上げた。それと同時にデーモンは内心で疑問の叫びを上げる。

（何故だ！？何故急に奴らの力が上がった！？いや、力ならば不完全だとは言え、私の方が遥かにこやつ等をよりも上だと言うのに！？一体何故だ！？）

（・・・・フン、気にいらないけどそれがデジモンと人間が力を合わせた時に発揮される力さ、デーモン）

（っ！！その声はルーチェモン！？）

突如として頭の中に響いてきた声の主の正体にデーモンは驚愕し、動きが止まってしまう。

それによって大達はチャンスだと判断し、デーモンに向かって攻撃を放つが、デーモンは大達の攻撃を両手や羽を使い相殺する。しかし、その様子に気がつきながらも声の主の正体であるルーチェモンは構わずに用件だけをデーモンに伝える。

（デーモン。今回の戦いは其処までだ。一先ず僕らの下に帰還しなよ）

（何だと！？この私に尻尾を巻いて逃げろと言うのか！？）

（そう言う事だよ。君の不用意な発言が大門大とそのパートナーデジモンの限界を超えさせてしまった。本来ならばとうの昔に戦闘不能になって死んでいても可笑しくないダメージを負っていると言うのにね・・・全く、これだからデジモンと人間の絆は嫌いだよ・・・とにかく、こっちでも予想外の事があったんだ。一先ず僕らの下に来なよ）

（断る！！私のプライドの方が重要だ！！この場で奴らを殺さねば、私の気がすまん！！貴様の指図は…）

（リリスモンが敵に回ったとしてもかい）

「（ッ！！！）・・・・・・クゥッ！！ウオォォォォォォォーーーーー！！！！！！」

ーーーブオォォォォォォォーーーー！！！！！

『クッ！！！』

突如としてデーモンは叫ぶと共に背中の巨大な羽を羽ばたかせて、巨大な竜巻を引き起こした。

その竜巻に大、シャイングレイモン、マグナモンは琴乃達の近くに降り立ち、全員を竜巻の巻き起こす突風から護る。

そして竜巻が治まると共に最大の攻撃を放とうとシャイングレイモンとマグナモンは力を溜めるが、竜巻の中から姿を現したデーモンの姿に大達は目を見開く。竜巻の中から姿を現したデーモンは、先ほどまでの悪魔のような姿ではなく、最初に現れた時のローブを全身に纏った姿だったのだ。

『ッ！！』

「フン、気に入らんが今日の所は此処までだ」

「何だと！？どう言う意味だ！この野郎！？」

「そのままの意味だ・・・・私としては腹立たしいが、今日の所は退いてやる・・・・それと言い事を教えてやろう。もうすぐこの地に人間の愚かさによって惨劇が起きる」

「なっ！？そいつはどう言う意味だ！？」

「フン、其処までは教えてやらん。だが、大門大、シャイングレイモン、そしてマグナモンよ。お前達はこの先に必ずや管理世界の人間を護る行動を行った事を後悔する。管理世界の人間の愚かさは其処まで深いのだからな。フフフフフッ、ハハハハハハハハハハハハハハッ！！」

デーモンはそう大達に言葉を告げると共に自身の周りに深い闇の霧を発生させ、霧が消えた後にはデーモンの姿は存在していなかった。

その様子に大、シャイングレイモン、マグナモンは悔しそうな顔をするが、フッと大とシャイングレイモンは糸の切れた人形のように地面に倒れ伏す。

ーーードサッ！！ドオォォン！！

「ッ！！おい！二人とも！？」

「・・・・・あぁ・・・・わりぃ・・・・マグナモン・・・・・どうも本気で・・・・俺達も限界みたいだ」

「・・・・この先の森の中に・・・・・・バタフラモン・・・・・と言うデジモンが・・・いる・・・・そのデジモンの案内が在れば・・・・隠れ家に辿り着ける・・・・後を頼む・・・・」

大とシャイングレイモンはそう言葉を告げると共に気絶し、シャイングレイモンはアグモンに戻ってしまう。

マグナモンはその事に慌てて森の中にいるバタフラモンの下に向かおうとするが、その直前にマグナモンの体は光り輝き、マグナモンはブイモンと奇跡のデジメンタルに分かれてしまう。

ーーーバッシュン!!

「なっ!?何でだよ!?何で進化が!?」

突然のアーマー体への解除にブイモンは驚き、自身の頭上に浮かんでいる奇跡のデジメンタルを見つめるが、奇跡のデジメンタルは何も答える事は無く光の粒子に変わり消えてしまう。

ーーーヒュウゥゥゥゥーーー

「・・・・・今回だけって事かよ・・・・クソッ!!待っていろよ!皆!!すぐにバタフラモンって言うデジモンを呼んで来るからな!!」

ブイモンはそう気絶している大達に向かって叫ぶと、シャイングレイモンが示した森の方へと全速力で駆け出して行くのだった。

闇に彩られた研究所内部。
その場所の通路の中を、大達との戦いから退いたデーモンは凄まじい怒気を放ちながら歩いていた。
ルーチェモンの言葉通りに退いたデーモンではあったが、やはり自身のよりも実力が低い存在から逃げ出すように退いた事はデーモンのプライドを著しく傷つけていた。
その事によって怒りのオーラを振りまき続けているデーモンの耳に、歩く先の通路の方から通路を杖で突くような音が届いてくる。

ーーーカツン！カツン！

「ムッ！」

「ホホホホホホッ、随分と怒っておるの、デーモン。そうカリカリしていては長生きせんぞ」

杖の突くような音が鳴り響き続けていた通路の先から、長い髭を顎から生やした老人のような姿をして、手に長く先に赤い宝玉が付いた杖を持ったデジモンが現れた。
そのデジモンの姿にデーモンは目を僅かに不機嫌そうに細め、そのデジモンの名を呟く。

「貴様はバルバモン」

バルバモン、世代／究極体、属性／ウィルス種、種族／魔王型、必殺技／デスルアー、パンデモニウムロスト
長い髭の老人の姿をした“七大魔王デジモン”の“強欲”の称号を持つ魔王型デジモン。悪魔の巣窟であるダークエリアの中心部に存

在し、堕天使型デジモン達を操って悪の限りを尽くしている。存在するあらゆる財宝に執着し、物欲のためならば手段を問わず、一欠けらの財宝のためにデジモンを殺す強欲で残忍な性格である。堕天使型デジモンの他に、究極体のデスモンを造作もなく操る七大魔王屈指の狡猾な策略家だ。また、邪悪なる魔杖『デスルアー』を所持している。必殺技は、魔杖によって地獄へとデジモンを誘い、邪悪化させる『デスルアー』に、ダークエリアの邪悪のエネルギーを一斉解放し、全てを焼き尽くす超高熱爆破『パンデモニウムロスト』だ。その他にも身に宿る巨大な魔力で色々な魔術を使用する事が出来る。

「ホホホホホホッ、デーモンよ。お前さんが怒るのも無理は無いが、此処はルーチェモンの言うとおりにすべきじゃ。それにもうすぐ盛大な祭りが始まる。見逃す方が惜しいぞぃ」

「ほう、貴様でも其処まで言うほどの祭りか・・・・しかし、倉田と言う人間が考えた策どおりに進むのか？」

「ホホホホホッ、進むじゃろうな。何せ倉田の信頼は連中からも厚い。それにギズモンも十体ほどくれてやったらしい。それだけではなく、既に連中が隠していた艦が十隻全て此方の地球に向かったと言う情報が入って来ておる。更に他の勢力も一斉に動き出しおった。確実に盛大な祭りに成るじゃろう。人間どもの愚かさによって。さて、お前さんもルーチェモンと倉田に挨拶ぐらいはしておけ。ワシは別室で人間どもの愚かさを観察しておるよ。ホホホホホッ」

バルバモンはそう心の底から楽しそうな笑い声を上げながら、デーモンの前を去って行き、デーモンも不機嫌さを消してルーチェモンの気配がする部屋へと歩いて行くのだった。

ミッドチルダに存在するベルカ自治区。
遥か昔に栄えていたベルカと言う国の人間の生き残りが多数存在し、ミッドチルダの行政府や管理局に赦しを貰って存在している自治区。そしてその場所には遥か昔の王一“聖王”を崇める教会が存在しいていた。
自治区の人々や管理世界の多くの人々の中にも、“聖王”を崇めている人物は数多く存在している。彼らは純粋な気持ちで“戦争を終わらせた聖王”を崇めていたのだろう。だが、その中にはベルカの国自体を復興させて、今の世界を滅ぼそうと考えている行き過ぎた考えを持つ者達も数多く存在していた。
果たしてその様な事を戦争を終わらせた“聖王”が望むのとかは関係ない。彼らにとって重要なのはベルカの国自体を復興し、次元世界に再びベルカの名を知らしめる事。
だが、その様な事は本来ならば不可能だった。何せ今の世の中は管理局による平和が作られていた。その為に自治区内部に住む人々も、ベルカの戦争は終わったと思い、戦いから離れた日々が始まり、安息に過ごしていた。しかし、その平和は管理局自身の行動によって打ち砕かれ、デジモンとの戦争が始まってしまった。当然ながらその事に最も怒るのは、世界に住んでいる人々だろう。その上、それが管理局とは違い自治区として存在を赦している場所ならば、管理局の放映を人々に知らせずに、逆に自分達の思い通りに人々の感情を操作する事も可能。
そしてもしそのような事が可能な組織のトップが狂信者になってしまえば、一体どうなるのか。答えは一つしかない。
“古きベルカの国を再興する為に、自分達の手で新たなる戦いを始める”

それが狂信者の考える事であろう。他者と手を取り合うなど彼は考えない。
何せ戦争を始めたのは、その他者の中のトップの組織ー管理局なのだ。もはや手を取り合うなど彼らは考えずに人間同士の戦争など行っている場合ではない状況ではなくとも、戦争を引き起こすだろう。
だが、彼らの策には決定的な欠点が存在していた。“象徴”が無いのだ。
確かに現在の状況ならば戦争を起こすのは可能であろう。しかし、戦争には何かしらの大義名分、そしてベルカの国を復興したと言う象徴が必要なのだ。そんな物は彼らには無い。何せ戦争を終わらせた聖王家の血筋は既に途絶えてしまっている。
他の聖王家以外の王族の血筋が残っていたとしても、その血筋では象徴としては弱いのだ。
真の意味でベルカと言う国を復興する為には、聖王家の血筋を引く人間が何ものよりも必要。
しかし、その聖王の血を引く者は管理世界には存在していない。だが、もしもその血を引く人間が存在し、それが管理世界ではなく管理外世界と言う管理局が干渉を禁じている世界に存在している事を彼らが知れば、彼らは其処にいる無関係な人々など関係なしに、どんな手を使っても手に入れようとするだろう。例え数え切れない死者が出ようと。

そしてそれは現実に起きかけていた。
現在の聖王教会のトップに立った気さくな笑みを口元に浮かべている男性ー・ゼイブ・オルシア枢機卿は自身の執務室の中で目の前に立っている司祭服を着た男性の報告に嬉しそうな顔する。
「それで、間違いなく聖王陛下の血筋なのだな？」

「はい、間違いありません。此方がその方の写真ですが、聖王家の証と呼ばれていた“王者の瞳”を持っていました」

ゼイブの質問に男性は興奮が治められないと言う様に、持っていた資料の中から写真を取り出しゼイブの執務机の上に置く。

その写真をゼイブは観察するような瞳で眺め終えると、静かに執務椅子から立ち上がり、背後に存在している窓に顔を向ける。

「やはり、聖王陛下は私達を導いてくれている。失われた筈の聖王家の血筋の生き残りが見つかり、私達ベルカ復興をお助けて下さった。管理局内部に存在している同士である倉田から、管理局が秘密裏に開発していた兵器も送られ、管理局の監視も消えた。私達の悲願であるベルカ復興は間近だ」

「はい！既に騎士団全てが枢機卿閣下に従っております！穏健派の愚か者どもに従う者は一人もおりません！！」

「当然の事だ。彼らもベルカ復活を心から思っている。その為にも聖王陛下の血筋を引くお方にはこの地に来て貰わなければいけない。準備は既に終わっているのかね？」

「はい！私達の保有している戦力全てを第九十七外管理世界に送り込んでいます！更に質量兵器を含んだ艦艇も十隻送り込んで在ります！必ずや聖王陛下を悪しき生物の手から救うでしょう！」

「そうだな。聖王陛下は私達のような忠誠心溢れる騎士達と共にいるべきなのだ。デジモンなどと言う危険生物といるべきではないのだ」

そうゼイブが言いながら見つめる執務机の上に置かれている写真

には、何処となく影があっても柔らかな笑みを浮かべながらギルモン、そして幼年期デジモンと思われる遊んでいるヴィヴィオの姿が映っていた。
その様子を普通の人間が見れば、誰もがそれを壊そうと考えないだろう。だが、この場にいるゼイブも男性も普通ではなかった。彼らは狂信者。自身の信じる者の本当の思いさえも無理やりに曲げて、自分達の考えと同じにする存在。
それによって地球に危機が迫る。しかし、ゼイブも司祭の男性も、そしてそれに付き従って騎士達も知らなかった。自分達の行おうとしている行動。それこそが本当の意味でベルカを滅ぼす結果になるとも知らずに、彼らは実行する。
カリム・グランシアが予言した聖王教会の崩壊とベルカ自治区の消滅が、成就される時が来たのだ。

戦いの行方、そして黙示録の序曲、後編（後書き）

次回予告

■■■

黙示録（メギドラモン）前編

黙示録前日のアルハザード内部研究室。
その場所でアルハザードの管制人格であるフリートが、ブラックのパートナーであるルインの最終調整を行っていた。本来ならばとうの昔に外に出て地球にいるリンディ達とルインは合流出来ていた筈だが、メルキューレモン達の攻撃からヴィヴィオ達を護る為に無理を行ってしまった為に、今日までルインの傷は完全には癒えなかったのだ。

「フゥ～、一時は本当に危なかったですが、何とか明日の昼頃にはカプセルから出られますよ」

『・・・・そうですか』

「・・・・五人の十闘士の事は気にしない方がいいですよ。アレは防げない事だったんです・・・それにルインさんとの約束を破ったのは、彼らの方なんですから」

『・・・・それでも、ヴィヴィオちゃんにまた傷が出来てしまいました・・・・私のミスですよ。もっと彼らの事を注意していれば、ヴィヴィオちゃんには傷は出来なかった筈です』

（ハァ～、これは重症ですね。やはり彼が必要ですね。ルインさんにもヴィヴィオちゃんにも・・・・一体何処にいるのでしょうか？）

そうフリートは内心で呟くが、彼女は知らなかった。
今のヴィヴィオとルインに必要な張本人であるブラックが、凄まじいスピードで地球に向かっている事を。

その事を知らないフリートは悩んだ顔をしながら、ルインの調整を万全にしようとコンソールに手を伸ばそうとするが、その直前に研究室全体に警報音が鳴り響く。

ーーービイィィィ――!!!ビイィィィィーー!!!

「ッ!!この警報音は!?」

突然鳴り響いた警報音の意味に気がついたフリートは、すぐさまルインの調整を行っていたコンソールとは別のコンソールを弄り、自身とルインの前にモニターを展開する。

「なっ!?何ですか!?この艦艇は!?」

フリートはモニターに映し出された光景に目を見開いた。

モニターの先に映し出された光景。それは十隻の、如何見ても質量兵器の発射口や砲門などが備えられた戦艦が、次元空間を航行している光景。

その艦艇は如何見ても管理局の艦艇ではない。何せ質量兵器と言う管理局が最も否定している兵器の発射口が備えられているのだから、管理局の艦艇の筈は無い。では、何処の艦艇なのかとフリートは素早くデータベースを調べようとするが、その前にルインが叫ぶ。

『これは!?まさか!?ベルカ艦!?』

「ベルカ艦?と言う事は、この十隻の艦艇は全てベルカ時代の船なのですか?」

『間違いないです・・・・何せ私は生真面目と違って、ベルカ時代の記憶をかなり保有しています・・・多少は外観は変わっています

が、あの戦争に使われていた兵器の事は忘れた事はありません』

「フム、となれば何故今更そんな前時代の兵器が姿を見せた事が重要ですね。しかもあの艦艇の進行方向にあるのは地球です・・・・この状況でアレだけの重武装艦艇が十隻も一度に地球に向かうなんて可笑しいですよ・・・・とにかく、リンディさん達にこの事を知らせてきます」

フリートはそうルインに言葉を告げると、素早く司令室へと向かい出し、残されたルインはモニターに映り続ける十隻の艦艇の姿に、言い知れない不安を感じるのだった。

黙示録前日アルハザードと同時刻。

地球の海鳴市に存在するさざなみ寮。その場所は現在では多数の幼年期デジモンが生息し、その他にも成熟期デジモンも十体近く生息しているリンディ達の地球での拠点。

その場所に今日はリンディ達の地球での支援を行ってくれている政府のリーダー、総理が訪れていた。

「粗茶ですが、どうぞ飲んで下さい」

「いや、気にしないでいいですよ、奥さん。寧ろ今日は急な来訪をしてすまないと思っていますので」

さざなみ寮のリビングに存在している椅子に腰掛けた総理は、そうお茶を出してくれた愛に声を掛けた。

その声に愛が人好きするような笑みを口元に浮かべながら総理の傍から離れると、テーブルを間に入れて同じように椅子に腰掛けた

リンディが僅かに険しく顔を歪めながら総理に質問する。

「それで、今日はどのようなご用件なのでしょうか？」

「ウム、実は君に聞きたい事があったので来たのだよ」

「私にですか？」

「そうだ。クイント君とティアナ君に聞いたのだが、君は優秀な魔導師だったと聞いている・・・・それを踏まえて質問だが、物質だけを別の場所に移動させる事は魔導師には可能なのかね？」

「可能です。管理世界では転移魔法と言うものが存在しています。この魔法は生物の転移などに主に使われていますが、確かに物質だけを転送させる事も同時に可能です。最もこの場合はかなりの技術が必要なので、上級の魔導師、しかもかなりの魔法技術に秀でた者でしか出来ないですけど」

「では、それらクリアした者ならば、誰でも可能なのかね？」

「はい。当然ながらこの魔法を使って犯罪行為に走る者もいます。それをされないように、重要な物が保管されている場所には転送妨害の装置などが付けられています・・・・・・それが如何したんですか？」

「・・・・実はだね・・・・これは政府でも限られた者しか知らないのだが・・・・一ヶ月前ほど前に、中国、アメリカ、ロシアなどの弾薬庫や兵器保管所に置かれていた弾薬や兵器が一斉に消失したと言う事件があったのだよ。しかも誰にも気づかれずに、まるで魔法を使ったように一斉に消えたのだ」

『ッ！！！』

総理が告げた事実にリンディと、リンディの横に座っていた愛は目を驚愕に見開いた。

弾薬と兵器が一斉にまるで魔法のように消えた。それだけでも魔導師が関わっているには充分過ぎる状況証拠になる。しかし、それだと一つの疑問が浮かび上がって来る。

何故その魔導師は中国、ロシア、アメリカから弾薬や兵器類を盗んだのかと言う疑問だ。

リンディの知る限り、管理局がその様な事を行う訳はない。何せ戦力が足りないのにも関わらず、管理局は未だに質量兵器の使用を認めていないのだから、管理局が質量兵器を盗む訳は無い。では、倉田達が動いたのかとリンディは考えるが、即座にその考えは切り捨てた。

今までの倉田達の行動を考えれば、質量兵器を盗む事では済まさずに、その兵器を使って地球に戦争を起こしていてもおかしくは無い。数日前ならともかく、一ヶ月以上前となれば倉田達にはしては時間が空き過ぎている。それならば別の組織なのかとリンディは考えるが、現状では思い浮かばずに首を僅かに横に振るい、総理に質問する。

「本当に一斉に消えたんですか？」

「あぁ、そうらしい。この件は本当に危なかった。もし盗まれた国が三つの内一つだけだったら、確実に第三次世界大戦が起きていただろう・・・何とか最終的には外交で済んだが、中国、ロシア、アメリカは現在でも互いに睨み合っている状況だよ。私もデジモンの事と管理局の事が無ければ、この件に全力で当たっていた所だ。それで君には心当たりは無いかね？」

「・・・・・残念ながら無いですね・・・・管理局は質量兵器を否定していますし・・・他の組織にしても其処まで大胆な行動は取らないでしょう。それに魔法の事を知らないこの世界なら、最も上手い方法で盗む事も可能ですし、余程とんでもない頭が可笑しい組織ならば別かもしれないですけどね」

「フム・・・・確かに君の言う通りだ・・・・私も当初は管理世界ではなく、何処かの組織に所属してるＨＧＳ能力者の仕業ではないかと考えていたのだが・・・送られて来た資料からそれは無いと判断したのだよ」

「何故ですか？」

「・・・・これも機密に分類されるのだが、丁度中国の武器弾薬が盗まれた時に警護を行っていた人物がＨＧＳ能力者だったのだよ。しかもその軍でもかなりの能力者だったらしくてね。同じ能力者だったら発動は感じられるから。だからこそ、何処かの組織に所属しているＨＧＳ能力者が犯人の可能性は低い。その事から考えて、どうもこの件には管理世界の人間が関わっている気がしてならない。とにかく私が持って来た資料を見てくれたまえ。痕跡だけからでも何か分かるかも知れないからね」

「分かりました。拝見させて頂きます」

そうリンディは答えると、総理が差し出して来た資料を注意深く確認して行く。

もし本当に管理世界の人間が関わっているのならば、何かとんでもない事態が起きる。そうリンディが不安に襲われながらも、渡された資料を注意深く確認して行くのだった。

リンディが資料を読んでいる時。
ヴィヴィオとギルモンはさざなみ寮の庭でフィリスと共に幼年期デジモン達と遊んでいた。
当初、さざなみ寮に来た時には元気が全く無かったヴィヴィオではあったが、パートナーであるギルモンとリンディ達の献身的な介護のおかげで前ほどではないにしても、元気を取り戻せていた。
だが、やはり以前ほどの元気は存在せず、カウンセリングが得意なフィリスかリンディ達の誰かが一緒にいなければ凄まじい不安に襲われる状態だった。
最も今の所はフィリスが一緒にいるおかげか、元気にギルモンと幼年期デジモン達と遊んでいた。

「うんしょ、うんしょ・・・・やった出来たよ!!」

「本当!?」

「うん!はい、先ずはギルちゃんの」

ヴィヴィオはそうギルモンに答えると、作っていた花冠をギルモンの頭の上に乗せた。
ギルモンはそれを大切そうに頭の上に乗っている花冠を嬉しそうに見つめ、ヴィヴィオとフィリスは優しげにその様子を眺めていると、ヴィヴィオは視線を感じ、自身の足下に座っている長い尻尾に金色の体毛した猫のようなデジモン―ニャロモンと餅のような姿をして両手を生やしているデジモン―モチモンに顔を向ける。

ニャロモン、世代／幼年期?、属性／なし、種族／レッサー型、必

殺技／フォックステイル
猫のような特性を持つ小型デジモン。いつも気まぐれで、その振る舞いが『猫』の様なの所からニャロモンと名付けられたらしい。とても好奇心旺盛で移り気な所もあるが、寂しがりやの一面もある。必殺技は、毛を針金のようにして敵を叩く『フォックステイル』だ。しかし、この必殺技で敵が怯んだ事は無いらしい

モチモン、世代／幼年期？、属性／なし、種族／レッサー型、必殺技／伸縮性に飛んだ泡
伸縮性のある外皮を獲得し、胴体下部の突起を使ってヨチヨチ歩く軟体のデジモン。気持ちが高ぶると体を膨らませる様子が、餅の様に見えるところから“モチモン”と呼ばれるようになった。しかし、見た目からは想像もできないくらい高い知性を持っている。必殺技は、普通の泡よりも伸縮性に飛んでいる『泡』だ。

「大丈夫だよ。ニャロちゃんやモチちゃん。それに他の皆にもすぐに作って上げるからね」

『ワアアアアアアアィッッ！！！』

ヴィヴィオの言葉にニャロモンやモチモンだけではなく、他のヴィヴィオ達の周りに囲んでいた幼年期デジモン達も喜びの声を上げ、ヴィヴィオとフィリスは優しげな顔をしながら幼年期デジモン達の為に花冠を作り始める。

そしてその様子を木々の影から覗いている一人の一般的な服装を着た男性が存在していた。

（フン！いい気なものだ。あの生物どもがどれほど危険なのかを分かっていない・・・・もし聖王陛下に何かあったらどうするのだ！

？）

この男性の正体。それは今地球に迫って来ている聖王教会の騎士の一人だった。

彼の他にも既に何人かの騎士達は地球に潜入し、秘密裏にヴィヴィオの捜索を行っていたのだ。そしてつい先日、偶然にも食材の買出しをアリサとすずかと共に行っていたヴィヴィオを発見し、教会本部へと連絡を取ったのだ。その結果、聖王教会は自治区を護る最低限の戦力を残し、他の全ての戦力をヴィヴィオを手に入れる為に地球へと送り込んだ。

そしてこの男性はヴィヴィオを監視する役割を持っていた。彼は教会の中でも主に潜入など扱って来たベテランだった為に、ヴィヴィオの監視を此処数日ずっと行っていたのだ。

（・・・・やはり此処は本隊が到着する前に、私が聖王陛下を保護すべきだ。ゼイブ枢機卿に連絡を取って、きょ…）

「あのすいませんけど。此処は私有地なんですよ。許可無く入り込まれるのは困るんですけどね？」

「ッ！！！」

突然に響いた女性の声に男性は目を見開きながら背後を振り返ると、優しげな笑みを口元に浮かべながら、両手を腰に回している美由希が存在していた。

（馬鹿な！？気配が全く感じられなかったぞ！？）

「あの聞いていますか？此処は私有地なんで、勝手に入り込むと警察に通報されますよ？」

「（・・・・どうやら、私の事は偶然にも迷い込んだ人間だと思っているようだな。それならば簡単だ）・・・・いや、すまない。道に迷ってしまってね。丁度建物が見えたので道を聞きに来たのだよ」

「そうだったんですが、私はてっきり此処を探りに来たのかと思っていたんですけどね？」

「クッ！！」

美由希の発言から正体がばれていると判断した男性は即座に自身の着ている服のポケットの中に手を入れ、隠していたデバイスを起動させようとする。

男性は美由希からは魔力が感じられない事から、牽制の攻撃を行って即座にその場から離脱しようと考えていた。だが、男性は知らなかった。この世には魔力など無くとも、強い者が溢れている事を。

その事を知らずに男性は手早く逃げようとデバイスを起動させて美由希に魔法を放とうとするが、その直前に男性の頭上からハート型の光が落ちて来て男性にぶつかる。

ーーーポン

「あっ」

ハート型の光に男性が触れた瞬間に、男性が美由希に抱いていた戦意が消失し、呆けたような顔をしながら動きが止まってしまう。

美由希はそれを確認すると、即座に男性の鳩尾に拳を叩き込み、男性の意識を一瞬の内に刈り取る。

ーーードスン！！

「ガハッ！！」

ーーードサッ！

「フゥ～、本当に打たれ弱いんだね。リンディさんの言うとおり、バリアジャケットって言う防護服に頼りすぎだよ」

そう美由希は気絶して地面に倒れ伏している男性の手から、デバイスと思われる機械を取り上げていると、美由希の頭の上にマリンエンジェモンが乗っかって来た。

「パピプ～」

「マリンエンジェモンもありがとね。おかげで楽に片付けられたよ。さてと、リスティさん！もう出て来ても大丈夫ですよ！」

「・・・いやはや、見事なお手並みだったよ、美由希。大の男を一発でのすなんてね」

美由希の声に応じるように別の木の影から、本来ならばティアナと共に行動している筈のリスティが姿を現した。

実を言えば数日前から男性がヴィヴィオを監視していた事を美由希達は気がついていた。元々今さざなみ寮に泊まっているメンバーは、戦闘能力の無い桃子、愛、アリサ、すずかを除けばかなりの実力者達の集まりである。加えて男性は気がついてはいなかったが、今のさざなみ寮の森の中にはデジモンが生息している。何の装備も備えもしていない者が立ち入れば、即座に分かるほどの場所とさざなみ寮は変わっていたのだ。

しかし、男性が何の目的でヴィヴィオを監視していたのかまでは

美由希達には分からなかった。だからこそ、相手の心と記憶を読み取る事とが出来るリスティを急遽呼び戻し、男性を逆に監視していたのだ。そしてヴィヴィオに対して不穏な事をしようとしていた事を即座に読み取ったリスティは、美由希に命じて男性を気絶させたのである。

「それで、結局この人何者なんですか？立ち振る舞いからかなりの戦いを経験しているように見えましたけど」

「・・・・狂信者だよ」

「えっ？」

「パプ～？」

苦虫を噛み潰したような顔をしながら告げたリスティの言葉の意味が分からなかった美由希とマリンエンジェモンは疑問の声を上げるが、リスティは構わずに背中に虫の羽を思わせるような翼を顕現させて、気絶している男性の頭に手をやりながら目を瞑る。

その何時に無いリスティの真剣な姿に、美由希はただ事ではないと判断し、リスティが声を出すのをマリンエンジェモンと共に静かに待ち続ける。

そして数分後。欲しい情報が手に入ったのかリスティは背中に生やしていた羽を消して、険しい顔をしながら美由希に顔を向ける。

「美由希・・・・すぐにさざなみ寮に残っているメンバーを集めてくれ。それとデジモンの捜索に出ているメンバーも全員呼び戻しだ・・・・海鳴は・・・・戦場に変わる」

「ッ！！！」

リスティが告げた言葉に美由希は目を見開き、全身を恐怖で震わせるのだった。

そして三十分後。さざなみ寮に残っているメンバー、リンディ、愛、フィリス、ファリン、桃子、マリンエンジェモン、リスティ、美由希、ヴィヴィオ、ギルモン、アリサ、コロナモン、すずか、ルナモン、そして一日前にデジモンを連れて戻って来ていたクイント、そのクイントに訓練をつけられていた純平、友樹、その訓練の様子を見学していたボコモン、ネーモン。最後にリンディに確認に訪れていた総理の全員リビングに集まり、部屋の端の方でロープでグルグル巻きにされ、両手足の関節と顎の骨を外されて気絶している男性を射殺さんばかりに見つめていた。

既にリスティから気絶している男性の正体とフリートからの緊急連絡を全員が聞き、地球に危機が迫っている事を知っていた。更に総理からすれば、他にも重要な事がリスティの証言から知る事が出来たのだ。

「・・・・それでリスティ・槙原君？・・・・その男が所属している組織が、例の武器強奪の犯人で間違いないのかね？」

「はい、総理。その男の記憶を読み取った所、確かに一ヶ月前に中国、ロシア、アメリカの武器庫から弾薬や兵器を強奪しています。地球は魔法には無抵抗だと分かって実行したようです。因みに彼は実行犯の一人ですよ」

「・・・・何と言う事をしてくれたんだ」

総理は気絶している男性の顔を見つめながら、頭が痛そうに顔を手で押さえ、管理世界の出身者であるリンディとクイントも本気で

目眩を覚えていた。
確かに武器弾薬を盗んだ犯人が判明したのは総理とリンディ、クイントにとっては嬉しい事だった。犯人さえ分かれば使われる前に、犯人のアジトに乗り込んで奪還する事が可能だからだ。だが、それは動かない場所での事だった。よりにもよって盗まれた武器弾薬が存在している場所が、今まさに地球に迫って来ている十隻の艦艇の中では手の出しようも無い。更にその内部に存在している連中の目的地点は地球の日本の海鳴市。
そんな場所で外国が開発した武器や兵器が使われれば、とんでもない事態が発生する。よくて冷戦状態。最悪の場合には第三次世界大戦が勃発するだろう。

「・・・・・私は以前から管理世界と言うのは疫病神だと思っていたが、今回の事で確信したよ。管理世界は我々地球にとっては疫病神としか言えないとね」

『申し訳ありません』

リンディとクイントは即座に総理に向かって土下座をした。しかし、二人は内心で総理の言葉は最もだと心の底から同意していた。
何せ管理世界が地球にした事と言えば、十年前にジュエルシードを海鳴市にばら撒いて被害を発生させた事。
闇の書と言う超危険物を放置して、その上にアルカンシェルを使おうとした事。
全く管理世界に関係無いと言うのに、人間を憎むようにデジモンを利用して東京を半壊状態に追い込んだ事。
極めつけは管理世界で信仰されている宗教の狂信者の来襲、武器強奪まで起きた。
全て地球の危機には何かしら管理世界が関わっている。此処までくればもはや管理世界は地球にとっては疫病神としか言えないだろ

う。

「言ってもしょうがない事だがね・・・・それでリスティ君？その艦隊は何時地球に到着するのかね？」

「・・・・・遅くて明日の昼ごろ。早くても早朝には到着するでしょうね」

「明日の早朝だと！？それまでに住民の避難など不可能だぞ！？」

総理は悲鳴のような声を上げて頭を抱え、他のメンバーも顔を青ざめさせた。

海鳴市の人口だけでも凡そ千人以上の人々が住んでいる。戦闘が始まった場合の事を考えれば、海鳴市だけではなく他の市の人々も逃がさなければいけない。それだけでも五千人以上の人々だ。

幾らなんでもそれだけの人々を後十数時間程度で安全な場所まで避難させる事など不可能に近い。

総理や地球に住んでいる桃子達はそれを理解し、全身を振るわせながら顔を青ざめさせる。その様子に気がついたリンディとクイントは、ゆっくりと顔を上げて同時に頷き合う。

「・・・・こうなったら、対ドミニモン用に用意していた秘密兵器を使うしかないわ」

「そうね・・・・・一度だけの切り札だったけど、もうそれしかないわ」

「リンディはん、クイントはん？何か策があるんでっか？」

互いに同意し合っているリンディとクイントの様子に気がついた

ボコモンが質問し、他のメンバーもリンディとクイントの顔を見つめると、二人は同時に頷き説明を始める。

「本当はドミニモンとの決戦の時に使用する予定だった。特殊な結界が存在しているのよ」

「その結界を使えば、指定した特性を持つ者以外の人間は絶対に入り込めない。その上、その結界内部で出た被害は現実の世界で反映される事は無い」

「何だと！？では、何故今までそれを使わなかったのだね！？そうすればデジモンによる被害はもっと少なく済んでいた筈だ！？」

クイントが告げた事実を聞いた総理はクイントとリンディに向かって怒鳴った。

当然だろう。幾ら被害は少なく済んでいても、デジモンによる被害は確かに出ている。しかし、クイントが告げた結界を最初から使用していれば、被害は全く出る事無く全てが穏便に済んで居た筈なのだから。だが、その結界を使えない理由が存在していたのだ。

「総理の言うとおり、確かにこの結界を使用していれば、デジモンによる被害は少なく済んでいたでしょう・・・・ですが、その代わりに東京の上空に存在しているデジタルワールドへのゲートが再び開いてしまう可能性が存在しているんです」

『ッ！！』

「驚くのは無理ないかもしれないけど、現実的にその可能性が高過ぎるのよ。確かにゲートを閉じる事には成功した。だけど、あくまで閉じただけなの。一度繋がった道はそう簡単には無くならない。

私達の所にいる研究者の予測では世界に多大な影響を与える何かが発生すれば、それと同時に閉じていたゲートが再び開いてしまう可能性が存在している。そして切り札の結界は、被害を絶対に出さない代わりに、世界に多大な影響を与えてしまう。予測では一度だけ。それ以降にこの結界を使用すれば確実にデジタルワールドへのゲートが開いてしまうのよ。だからこそ、ドミニモンとの決戦の時以外には使用出来なかった」

「なるほど、よく分かった。確かに再び異世界への扉が開いて、人間を憎んでいるデジモン達が来訪するぐらいならば、使わない方が正解だ。怒鳴ってしまってすまない」

「いえ、気にしないで下さい。ですが、今回はドミニモンとの決戦以上の危機です。結界を使用します。その為にも総理には万が一の事を考えて、出来るだけ海鳴市から人々を避難させて下さい」

「うむ、確かにその通りだ。すぐに動ける人員を全て動員して人々の避難を行う・・・・・それとこれは出来たらいいのだが、数名だけでも構わない。敵側から捕虜を捕ってくれたまえ。此処までくれば日本だけの事では済まないからね」

「出来るだけ善処します」

総理の言葉にリンディは深々と頭を下げながら答え、総理はそれを確認すると座っていた椅子から立ち上がりさざなみ寮を出て行った。

リンディ、クイントはそれと共に顔を青ざめさせている桃子達に顔を向けて、手早く説明を始める。

「そう言う訳で、この地は戦場に変わるわ。とにかく先ずは人々に

被害が出ないようにする為に・・・・純平君！友樹君！！」

『は、はい！！』

「戦いに出ろとは言わないわ。だけど、お願い。クイントと一緒に結界を張る準備を行って欲しいの。なのはさん、ガブモン君、ティアナ、クダモン君に輝一君、輝二君は其処で気絶している男の仲間を倒してからしか来れないわ。だから、二人にはクイントと一緒に結界の準備だけ行って欲しいのよ」

「・・・・いや、戦いにも出ます」

「・・・・僕達もデジモンと人間の共存の為に、此処に来たんですから」

「・・・・・デジモンではなく人とよ。しかも、相手は狂信者・・・・言葉では絶対に止まらない連中・・・戦うのならば相手を完全に戦闘不能にするか、殺すしか無いわ・・・・その覚悟が二人には在るの？」

「・・・・・怖いけど、放っては置けないさ。何よりもこの場所がどれほど大切なのか、もう分かっているんだ。だから、その場所を護る為にも俺は戦う」

「僕も・・・・・人と戦うのは本当に怖いけど・・・・何とか戦ってみます」

「・・・・・援護は出来ないと思ってね」

そうリンディは純平と友樹に言葉を告げると、今度は桃子達の方

に顔を向ける。
「他の皆は、一度アルハザードに幼年期デジモン達と共に避難して貰います。今回の戦いは確実に無力な人間でも攻撃して来る最低な連中が相手ですからね」
「了解だよ。確かに今回ばかりはボクらは足手纏いでしかないからね」
リスティはそうリンディの言葉に同意を示すと愛達とボコモン、ネーモンと共に幼年期デジモン達が休んでいる部屋の方へと移動して避難の準備を始めるのだった。
それを確認するとリンディも色々と準備を行う為に部屋から出ようとする。しかし、その前に突然リンディは手を引かれ、困惑しながら顔を向けてみると、不安そうな顔をしたヴィヴィオが存在していた。
そのヴィヴィオの様子にリンディは凄まじい不安に襲われながら声を掛けようとするが、その前にヴィヴィオが声を出す。
「リンディお姉ちゃん・・・・ヴィヴィオとギルちゃんもたた…」
「駄目よ。貴女も今回はギルモン君と一緒に桃子さん達とアルハザードに避難しなさい」
「ッ！！どうして！？ヴィヴィオも皆を護りたいよ！！」
「・・・・気持ちはよく分かるわ。だけどねヴィヴィオ・・・・・・今回の敵はデジモンじゃなく人間なの・・・・私達は貴女には本当は誰も傷つけさせたくないのよ・・・・だからお願い。アルハザードに桃子さん達と一緒に避難して」

「嫌だよ！！ヴィヴィオも皆を護りたい！！この場所を護りたいよ！！」

（ッ！！やっぱり！予想はしていたけど、この子は恐怖に駆られてしまっているわ！？失う事の恐怖に！）

リンディはヴィヴィオの涙を流しながらの言葉に、自分達が予想していた最悪な状態にヴィヴィオが陥ってしまっている事を確信した。

今のヴィヴィオはブラックが居た時に告げた大切な人達を護りたいと言う思いではなく、大切な人達を失ってしまうかも知れないと言う恐怖から逃れる為に戦おうとしている。前々からその兆候は確かに存在していた。だが、それが決定的になったのは間違い無くブイモンを護れずに奪われてしまった時の事が原因であろう。

確かに誰かを護りたいと言う思いは強い力を生む。しかし、今のヴィヴィオは恐怖から逃れる為だけに戦おうとしているのだ。恐怖から逃げようとする戦いは確実に悲劇しか呼ばない。現に嘗て孤独から逃れる為に戦っていたなのはは、自身の体を省みずに戦い続け、死んでもおかしくないほどダメージをその身に負ってしまった。

そして今のヴィヴィオの姿は恐怖の形は違っていても、紛れも無く嘗てのなのはと同じ状態になってしまっている。その事を確信したリンディは出来るだけ自身の心を隠すように無表情になりながら服を掴んでいるヴィヴィオの手を離す。

ーーーパシッ！

「ッ！！」

「・・・・・ヴィヴィオ。もう一度だけ言うわね。貴女は今回はギ

ルモン君と一緒にアルハザードに桃子さん達と幼年期デジモン達と共に避難しなさい。これは頼みではなく命令よ、ヴィヴィオ」

「リンディお姉ちゃんの馬鹿！！大ッ嫌い！！」

「アッ！！ヴィヴィオ！待ってよ！」

涙を流しながら走って部屋を出て行ったヴィヴィオの後を追うようにギルモンも走ろうとするが、その直前にリンディがギルモンの背に声を掛ける。

「・・・・ギルモン君」

「ンッ？リンディさん」

「・・・・あの子の事をお願いね・・・・私は嫌われちゃったから」

「・・・・うん！ギルモン！絶対にヴィヴィオを護るよ！！」

そうギルモンは悲しげな顔をしているリンディを安心させるように声を掛けると、ヴィヴィオの後を急いで追い掛け、リンディは首を横に軽く振るい明日の戦いの為の準備を急ぐのだった。

そしてそれから二時間後。

ヴィヴィオはギルモンと共に自分達が使っている部屋の中で話し合っていた。しかし、一方的に話しているのはギルモンだけであり、ヴィヴィオは布団を被って全身を隠していた。

「だからね、ヴィヴィオ。リンディさんもヴィヴィオの事が大切だから、あんな風に言ったんだよ。だから仲直りしようよ」

「・・・・・」

「ヴィヴィオ・・・・元気出してよ・・・・僕はヴィヴィオの元気な姿が見たいんだよ・・・・前みたいに明るく笑うヴィヴィオが」

「・・・・・」

「ヴィヴィオ・・・・」

何も答えてくれないヴィヴィオの姿に、ギルモンは悲しげに顔を俯かせながら声を出すのだった。

その様子を部屋の扉の隙間から覗いている三つの影が存在していた。

その内の二つは先ほどヴィヴィオとギルモンと共に遊んでいたモチモンとニャロモン、そして最後の一つは頭部から植物のような芽を生やした球根型のデジモン―タネモンだった。

三体ともヴィヴィオとギルモンの様子に悲しげに顔を歪めながら、如何すればいいのかと顔を見合わせる。

タネモン、世代／幼年期？、属性／なし、種族／球根型、必殺技／粘着性の泡

頭部から植物の芽の様なものが発芽している球根型デジモン。外敵の存在を察知すると４本の足で穴を掘り、体の部分を地中に埋めてしまう。一旦地中に潜ってしまうと頭部から生えた物が植物の擬態をとり、外敵から身を守ることができる。ただし、草食性のデジモンには効果が無い。必殺技は、粘着性に飛んだ『泡』だ。

「ヴィヴィオ、元気ないね」

「うん・・・何時もの笑顔が無いよ・・・・何かあったのかな？」
「ギルモンの話だと、リンディさんと喧嘩したんだよね・・・・・だったらさ！僕らが仲直りさせてあげようよ！」
「賛成だよ、タネモン！」
「でもさ、仲直りさせるってどうやって？喧嘩の原因も分からないのに」
『アッ！』

ニャロモンの言葉にタネモンとモチモンはハッとした様な顔をして見合わせた。
確かにニャロモンの言葉どおり、モチモンもタネモンもリンディとヴィヴィオの喧嘩の原因を分かっていない。原因が分からずに仲直りさせようとすれば、逆に悪化してしまう可能性も存在している。
その事に気がついたモチモン達は、如何すればいいのかと再び悩み始めると、モチモンがフッと一つのアイデアを話す。
「それじゃさ、早く二人が仲直り出来るように何かお揃いのプレゼントを上げようよ。今日ヴィヴィオが僕らに作ってくれた花冠とかさ」
「うん！それ良いね！」
「だったらさ、森の中を探して花を集めようよ！色取り取りの花で冠を作って、ヴィヴィオとリンディさんを仲直りさせよう！」

『賛成！』

タネモンの提案にニャロモンとモチモンも賛成し、三体はすぐさまさざなみ寮を出て森の中へと花々を探しに行くのだった。

翌日の早朝。この日は後の歴史において色々な名で呼ばれる日となった。

『黙示録の日』『ベルカ崩壊の日』『地球が本当に意味で新たなる道を歩んだ日』などなど、色々な名前がその日に付けられた。しかし、後の歴史家達は全員が口を揃えてその日をこう呼ぶ。

“先人達の残したものを、子孫が全て無にした日”

後の歴史家は口を揃えて同じ言葉を言い、その日を作り上げた連中を最低な人間だったと叫ぶ。

しかし、その事を知らない聖王教会の狂信者達は、地球の海鳴市の上空に十隻の艦艇を滞空させ、そして。

ーーードドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドッ！！！

一斉にミサイルやレーザーなど撃ち込み、地上に存在している建物や家屋など破壊し続け、次々武装した騎士達を地上に送り込んで行く。

黙示録は始まった。

再び悲しみの惨劇が世界に巻き起こる。嘆きと悲しみが空に木霊し、血の様に赤く染まった空が広がるまで、本当にもう少しなのだった。

黙示録（メギドラモン）前編（後書き）

作者のゼクスです。

次回は本気で悲しいです。

因みに作者は想像しただけで、悲しくなりました。

更新は出来るだけ早くします。

黙示録（メギドラモン）中編

嘗て数百年間栄えていたベルカと言う名の国が存在していた。
その国には沢山の王族が存在し、国に住んでいる人々を護っていた。そしてその国は次元世界の殆どの世界が巻き込まれた戦争によって滅んだ。
そしてその戦争を終結へと導いたのはベルカの最高の王族である聖王家の人間ーオリヴィエ・ゼーゲブレヒト聖王女。聖王教会が最も信仰している王族。
ヴィヴィオの元になったオリジナルの人物。その事をリンディ達は知っている。
しかし、その事とヴィヴィオには何の関係もない。例え人造魔導師として生まれて来たとしても、ヴィヴィオはヴィヴィオでしかないとリンディ達は思っているからだ。
しかし、人間の中にはそうとは思わない連中が存在している。ヴィヴィオを利用して再びベルカを再興する為に戦争を起こそうとしている人間達も確かに存在しているのだ。
そんな事を果たして戦争を終結させたオリヴィエ聖王女やベルカ戦争を経験した者が望むであろうか。
いや、彼らは絶対に望まないだろう。彼らは戦争を終結させる為に戦ったのだ。
そんな彼らが戦争を再び望む筈はない。そして何よりもオリヴィエが望んだのは。
“大地が二度と戦で枯れぬように、そして青空と綺麗な花をいつでも見られるような国になる事”
それは形が違えど管理局が成し遂げていた。
彼女の望みは形は違っても叶えられていたのだ。そんな彼女が再

び戦争を望む筈はない。
しかし、その想いは生き残ったベルカの子孫達には受け継がれなかった。もし受け継がれていれば『黙示録』は現れなかっただろう。
その事を彼らは知らずに破滅を呼ぶ。先人達の残したベルカは今日この日に、子孫達と行いによって絶望に堕ちた聖王の手によって滅びる事になった。

海鳴市結界内部。
その場所は既に現実世界の海鳴市と同じだったと分からないほどに変わり果てていた。
沢山の並んでいた建物や家屋の殆どが上空に浮かんでいる十隻の艦艇が放ったミサイルやレーザーなどによって崩れ落ち、凄まじい火の手があっちこっちで上がっていた。
そしてその火の手の中を国守山を真っ直ぐ目指して歩く数え切れない騎士達の姿が存在していた。あるものは剣型のデバイスを握り締め、あるものは槍型、弓型、ハンマー型など、接近戦を主とするアームドデバイスを握りながら真っ直ぐに自分達の王となる人物が存在している国守山を目指していた。
そのような事を目的としている人物が望んでいないなど彼らには関係ない。彼らは自分達に目的としている人物が必ず協力してくれると妄信していた。何故ならばその人物はベルカ最大の王である“聖王家”の血を引く人間。忠実なる騎士である自分達の声に必ず答えてくれと彼らは本気で思い込んでいる。
例え相手が否定しても彼らの考えは変わらない。逆に相手の声を勝手に解釈し、自分達の都合どおりに利用しようとするだろう。
しかし、彼らは知らなかった。今彼らがいる場所。其処は既に彼らの常識では推し測る事が不可能になっている地。そしてよりにもよって彼らは、現実ではなくても海鳴市を傷つけてしまった。

それだけは絶対に行ってはならなかった。この地を護る為なら世界さえも敵に回しても構わないと言う思いを抱いている女性とそのパートナーデジモンの逆鱗に完全に触れてしまったのだ。

「んっ！止まれ！！」

国守山を目指していた騎士団の騎士長が突然に叫び、背後をついていた騎士達は慌てて止まって騎士長が見ている方向に目を向けてみると、右手に杖型のデバイス－レイジングハートを握ってバリアジャケットを身に纏っている女性と獣の皮を被ったデジモンが炎の中を静かに歩いていた。

その姿に騎士達は即座にそれぞれ手に持ったデバイスを女性とデジモンに向けるが、女性とデジモンは構わずに騎士達から少し離れた場所で立ち止まり、感情が感じられない声を出す。

「・・・何しているのかな？この場所に貴方達は何をしているのかな？」

「管理局の人間か！？」

「管理局？何を言っているのかな？それよりも貴方達は、此処で何をしているの？結界が張られているけど、此処は何も知らない人達が住んでいる場所なんだよ？それなのにこんな事をして・・・・・ただで済むと思っているのかな？」

「フン！どうせ異教徒どもの世界だ！！我ら偉大なるベルカの礎になっただけでもありが…」

ーーードグオオオ

『ッ！！！』

全ての言葉を騎士長が叫ぶ前に、騎士長の姿は抜き打ちで放たれた桃色の砲撃の中に消えていった。

その余りにも正確無比かつ、魔法の発動さえも感じられない砲撃魔法にその場にいた騎士達全員が目を見開くが、砲撃を放った女性である高町なのはは冷淡に砲撃の中に消えていった騎士長の事など構わずに左手にディーアークを握り締める。

ーーーガシッ！！

「ベルカの礎？フ～ン、本当に面白い事を言うね・・・・じゃあさ、貴方達も礎になって貰うよ。私達の望む世界の為にね！！少し頭を冷やしなさい！！ガブモン君！！」

「あぁっ！！絶対にこいつらは赦さない！！」

「不味い！！あの女とデジモンを殺せ！！」

『オオォォォォーーーー！！！！！』

年配の騎士の叫びに他の騎士達は即座に応じ、なのはとガブモンに向かってそれぞれ攻撃を放とうとする。しかし、それは結局間に合わずになのはは自身の胸にディーアークを押し当てて体をデータ化させながら叫ぶ。

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「マトリスクエヴォリューション！！！」

「ガブモン進化！！！」

『ッ！！！』

なのはとガブモンの体が一つになって発生したデジコードに騎士達は目を見開いた。

彼らはデジモンと人間が融合する事など知らなかった。その知らない事実に騎士達は目を見開き、完全に動きが止まってしまうがデジコードは構わずに巨大化していき、その内部から全身が機械で出来た狼が姿を現し、騎士達を睨みつける。

「メタルガルルモンX！！！」

「クッ！！総員！こう…」

「ディバインストーム！！！」

ーーードドドドドドドドドドドゴオオオオオオン！！！！」

『ギャアァァァァァァァァーーー！！！』

年配の騎士が攻撃命令を放つ前に、メタルガルルモンXは左手に装備したガトリング銃ー『メタルストーム』から放った桜色の連続砲撃によって五十名以上の騎士達は一瞬にして消滅した。

そのメタルガルルモンXの凄まじい攻撃力に生き残った騎士達は目を見開くが、逆にメタルガルルモンXは嘲りに満ちた視線を向ける。

「何を驚いているんだ？お前達は此処に戦争をしに来たんだろう・・

・だったら！この程度の事で驚くな！！！」

「ヒィッ！！ウワァァァァァァァァァーー！！！」

メタルガルルモンXの殺意に満ちた叫びを耳にした若い一人の騎士が恐怖に駆られながらも、握っていた槍型のデバイスを持ちながら突進した。

その突進には覚悟も何もなく、ただ目の前に存在している恐怖の根源であるメタルガルルモンXを消そうとする逃げる為の行動だった。そしてそれに釣られるように他の騎士達もメタルガルルモンXに攻撃する為に飛び掛かる。

しかし、メタルガルルモンXは慌てた様子も見せる事無く、全身の火器の照準を残っている騎士達全員に合わせると同時に一斉正射する。

「ガルルバーーースト！！！」

ーーードドドドドドドドドドドドドドド！！！！

『ウオォォォォォォォーーー！！！！』

メタルガルルモンXが放ったガルルバーストを避けながらも騎士達は突撃するが、その場所が騎士達の氷付けの彫像だらけに変わるのが、少し伸びる程度の事だけでしかなかった。

そして他の場所でも戦いは始まっていた。

海上の上空。その場所に滞空していた二隻の艦艇は何とか自分達が入り込んでしまった結界から脱出する為の準備を行っていた。目標の人物に潜入していた騎士が取り付けたマーカーの反応がある事から、目標の人物は確かに結界内部にいる事を確信し、確保すると

同時に逃亡する為に準備を行っているのだ。最も彼らが知らない事だが、既に地球に潜入ししていた騎士達は全員日本政府に拘束され、マーカーも既に目標の人物から取り外され別の者に付けられている。
しかし、その事を知らない彼らは仲間の騎士達が必ず目標の人物を確保する事を信じて、海鳴市に張られている結界を解除しようと動いていた。しかし、そんな彼らの行動など関係ないというように、彼ら下に凄まじい大津波が降り掛かって来る。

ーーードボオォォォォォーーーン！！！！

突然に出現した海面全体がまるで引き上がったような大津波に、海面に浮かんでいた二隻の艦艇は瞬く間に飲み込まれ、海面の中に引き込まれてしまった。
最も艦艇の中に存在している人間達は全く慌ててはいなかった。例え凄まじい大津波であろうと、艦艇の周りにフィールドが張られていた為に、多少の衝撃しか内部には襲い掛からなかったのだ。
しかし、彼らは知らなかった。艦艇に向かって大津波を放った敵は、艦艇を海中に引き込む事こそが目的だったのだ。

ーーードゴオオォォォォォン！！！

「グッ！！何だ！？何が起きたんだ！？」

「す、すぐにモニターに映します！」

突然の衝撃に艦艇内部に乗っていた人間達は驚き、慌てて外の状況をモニターに映して見る。
そしてモニターに映った映像の先には、二隻の艦艇を囲むように存在しているシードラモン、シードラモンX、ゲソモン、エビドラモン、シェルモン、そしてその五体のデジモンの背後に存在してい

る艦艇よりも巨大なデジモン－ホエーモンが存在していた。

『グギャアアアアアアアアアーーーーー！！！』

「な、撃て！？攻撃を放て！！」

モニターに映ったホエーモン達の姿に、騎士長は慌てて迎撃を命じるが、それは不可能だった。

「だ、駄目です！？海中のせいでミサイルやレーザーが使えません！！」

「ば、馬鹿な！？ならば、旗艦に頼んで例の兵器を！？」

「通信が繋がりません！！更に周りを囲んでいる海水の中から高密度のＡＭＦ・・・・嫌、違う！？な、何だこれは！？ま、魔力が、魔力が全て“分断”されています！！防御フィールドが消滅します！！」

「な、何！？」

ーーードゴオオオオオオオオオン！！！

『ッ！！！』

『グギャアアアアアアアアアーーーー！！！！！』

管制官の報告に騎士長が困惑と恐怖に満ち溢れた声を上げた瞬間に、ホエーモン達は歓喜の咆哮を響かせながらそれぞれ攻撃を開始した。

忘れてはいけない。ホエーモン、シードラモン、シードラモンX、ゲソモン、エビドラモン、シェルモンは人間を憎んでいる。ティアナ達の説得のおかげで地球の人間には好意的になったとは言え、管理世界への人間への憎しみは忘れてはいない。寧ろ今の聖王教会の人間達の行動に再び怒りと憎しみが湧き上がって来ている。

何せ形は違えど、今の狂信者達の行動は彼らの故郷を滅ぼした管理局の行動と似ている。

故郷を滅ぼされた時の事を思い出させた連中を、ホエーモン達が赦す筈はない。

そしてホエーモン達の攻撃に成す術が無かった二隻の艦艇に乗っている人間達は、ホーエーモン達の気が済むまで恐怖を与えられ続けながら、海の藻屑となった。

ーーードゴオオオ

るなんて、完全に予想外だったわね」

「確かに・・・・“ディバイダー”・・・・ブラックが違法研究所を壊した時に手に入れた兵器・・・魔導殺しか・・・・体には異常は無いか？」

「別に何も感じないわ。それにこれはオリジナルじゃなくて、フリートさんが遊びで作ったレプリカだからね。攻撃には使えないし、防御にも使えない。使えるのは魔力を分断する機能だけ・・・・・それに結構魔力も持ってかれたわ。まぁ、ブレイクミラージュを使えば問題はないけどね」

「そうだな・・・・しかし、嫌なものだな。自分達が護りたかった場所が、擬似とは言え焼かれるのは」

「そうね・・・・」

チィリンモンの声にティアナは同意を示しながら、燃え盛る炎の街となった海鳴市に顔を向けた。

其処は既にティアナとチィリンモンが知っている海鳴市ではなかった。あらゆる建物が崩れ落ち、炎が至る所から吹き上がり、建物や家屋を炎で包み込んで行く。

正に地獄と化した煉獄の世界。それを作り上げたのは紛れも無く人間。

ティアナとチィリンモンからすれば、デジモンよりも人間の方が圧倒的に化け物にしか見えなかった。

「チィリンモン・・・・私達人間は、本当に存在していていいのかな・・・・こんな光景を見たら、バイフーモン達の考えは正解だと本気で思うわよ・・・・小さい子供さえも、自分達の勝手な考えで

利用しようとする人間を見たら」
「・・・・私にもその答えは分からない・・・・だが、連中を一人たりともに逃がす訳にはいかん・・・それだけはハッキリしている事だ」
「・・・・そうね・・・・行くわよ！」
「応！！」
ティアナの声にチィリンモンは即座に頷き、海中から海上に姿を現したホエーモン達を引き連れて全速力で海鳴市に向かい出した。

国守山麓付近。
各地でデジモンと騎士達の戦いが始まる中、何とかデジモン達の抵抗を掻い潜って来た騎士達は、マーカーの反応が出ている場所を一直線に目指していた。
当初彼らは自分達が地球から奪った質量兵器と艦艇で、そして磨き上げた騎士としての腕で目的の人物を手に入れるつもりだった。だが、蓋を開けてみれば奪った質量兵器の類はデジモン達にはあまり通じなかった上に、騎士としての腕でデジモンを倒そうとすれば、圧倒的な力を持つメタルガルルモンXに凍り付けにされてしまうだけではなく、四体デジモン―ヴォルフモン、レーベモン、ブリッツモン、チャックモンにデバイスが破壊され戦闘不能状態に追い込まれていった。しかも、自分達で地上を煉獄状態にした為に、デバイスを破壊された瞬間に騎士甲冑は消え失せて、炎の熱さによって動きが取れなくなってしまう。
そして切り札として管理局内部の同志から送られて来た八体のギ

ズモンＡＴは、メタルガルルモンＸと同等の戦力を持つバイオ・ジャスティモンに進化したクイントと、バイオ・スラッシュエンジェモンに進化したリンディと戦っている為にまともな働きをしていない。

完全に状況は彼らの予想を悪い方向で遥かに超えていた。彼らは自分達ならばデジモンに勝てると本気で思い込んでいたのだ。

ベルカの誇りを持つ自分達ならば、管理局のような無様な結末にはならない。逆にデジモンを倒してベルカの名を再び次元世界に知らしめられると本気で思い込んでいた。

それは完全に誤りだった。確かに彼らは間違っていてはいても、強い思いを持っている。しかし、彼らが戦っている相手は、それ以上に強い思いを胸に持っている者達。しかも、彼らのように何かに妄信しているのではなく自分達の信念の為に彼らは戦っている。

妄信者と信念を胸に戦っている存在。どちらの想いが強いのかなどハッキリしている。

その事が全く分かっていない彼らは、自分達に足りないのは忠義を捧げる王がいないからだと思い込み、マーカーの反応が出ている場所に向かって走り続ける。

“王さえ居れば、自分達には負けはない。王さえいれば、この不利な現状もひっくり返せる”。

そんな事を彼らは考えながら走り続け、そして遂にマーカーの反応が出ているさざなみ寮に辿り着いた。

さざなみ寮に辿り着いた数名の騎士達は興奮が隠せないと言うように息を荒くしながら、一刻も早く王を確保しようとさざなみ寮の入り口を撃ち破り中に入り込もうとする。

そして騎士達の中の一人がさざなみ寮の入り口を破ろうと、剣型のデバイスを構えた瞬間。

ーーードゴオオオオオオオン！！

「ガフッ！！」

入り口の扉が突然に凄まじい勢いで吹き飛び、入り口の前に立っていた騎士は扉の直撃を食らい遠くへと吹き飛んで行った。

その突然の事態に残っていた他の騎士達は目を見開くが、すぐさまそれぞれデバイスを入り口の先に居るであろう敵に向かって構える。だが、その顔は入り口に目を向けた瞬間に、呆然とした顔へと変わった。

何故ならば彼らの視線の先に居る敵。それは愛くるしい顔立ちと体をした妖精のようなデジモン。そして首下に目標の人物が付けている筈のマーカーを下げたデジモン。そう、彼らの視線の先に居るのは。

「パピプ～」

桃子のパートナーデジモン－マリンエンジェモンが、ニコッと微笑ましい笑顔を騎士達に向けていたのだ。

「ふ、ふざけるな！！！！！」

騎士の一人がマリンエンジェモンを目にした瞬間に、苛立ちに満ちた声を上げながら握っていた槍型のデバイスをマリンエンジェモンに向かって突き出す。

当然だろう、命からがら漸く目標の人物が居る場所に辿り着いたと思ったら、いたのは全く敵意が感じられない敵。しかも、如何見ても戦う力などもってなさそうなデジモンだったのだから、彼が怒るのも無理はない。

しかし、彼らは知らなかった。目の前にいる愛くるしい顔立ちを

したデジモンこそ、リンディ達を除いたさざなみ寮の最強の守護神である事を。

「オオォォォォォーーー！！」

「パピ？」

ーーーパシッ！

「なっ！？」

騎士が全力を込めて突き出した槍を、マリンエンジェモンは簡単に小さな手で受け止めた。

その事実に槍を突き出した騎士だけはなく、他の騎士達も目を見開きながら、槍の刃を簡単に受け止めているマリンエンジェモンの姿を見つめる。

マリンエンジェモンを侮ってはいけない。マリンエンジェモンは確かにデジモンの中でも小さく愛くるしい姿を持ったデジモンだ。だが、それと同時にマリンエンジェモンはデジモンの中でも最強に位置する究極体に上り詰めたデジモン。

何時もは愛くるしく、大人しいデジモンだが一度戦いになれば、リンディ達でもさえも苦戦するほどの実力を秘めたデジモンなのだ。

そして彼らには更なる不運が存在していた。今のマリンエンジェモンは、本気で怒っているのだ。

「パーーピーーー！！！」

ーーードゴォン！！

「グフッ！！」

『ッ！！』

マリンエンジェモンは叫ぶと同時に握っていた槍を騎士ごと持ち上げ、そのままさざなみ寮の壁に叩きつけた。

その威力は凄まじく、騎士甲冑を纏いながらも槍を持っていた騎士は口から大量の血を吐き出し、地面にずるずると落ちてしまう。

しかし、マリンエンジェモンはその騎士の姿など構わずに、残っている騎士達に怒りの炎を燃え上がらせている目を向ける。

「パーープーー！！！」

マリンエンジェモンは本気で怒っていた。

何時もは愛くるしく桃子達やヴィヴィオ、ギルモン、そして幼年期デジモン達と遊び続け戦いとは無縁な生活をマリンエンジェモンは歩んでいた。マリンエンジェモンは本当にさざなみ寮の人々、そして高町家の人々が大好きだった。

偶然にもゲートに入り込むデジモン達に巻き込まれてマリンエンジェモンは地球へとやって来た。しかし、マリンエンジェモンは他のデジモン達とは違い、人間を憎んではいなかった。だからこそ、人を傷つける事無く路頭に迷い寂しいながらも静かに地球に住んでいた。

そんな時に優しく声を掛けて受け入れてくれた桃子、美由希、士郎の三人、そしてその後出会ったさざなみ寮の人々。そのような優しい人々に出会えた事をマリンエンジェモンは心の底から喜び、本気で護りたいと想い、彼らを護り続けていた。

そしてそんな大切な人達の笑顔を汚した騎士達を、マリンエンジェモンは赦すつもりは全く無かった。

「パ～プ～～～！！！！」

ーーーポワン！！

「な、何だ！？こ・・・・れ・・・・は・・・・」

ーーードサッ！！

マリンエンジェモンが叫ぶと同時に放ったハート型の光ーオーシャンラブを受けた騎士達は驚愕に目を見開くが、すぐにその顔は呆けたような顔に変わり、光を浴びた全員が地に倒れ伏してしまった。“オーシャンラブ”。マリンエンジェモンの最大の必殺技であり、食らった相手の戦意を消失させてしまうと言う、相手に傷を負わせる事無く戦闘不能に追い込んでしまう技。

しかし、その技の本当の恐ろしさは別の所にある。戦意とは同時に何かを成そうとする意欲と読み替えてもいい。では、意欲が無くなった人間はどうなるのか。何もする気が起きない無気力な人間に成ってしまう。そして意欲が再び湧き上がるのはオーシャンラブの影響力が治まった時。

それにはデジモンさえも個人差が存在している。ましてや人間では失敗すれば死ぬまで意欲が湧き上がらないだろう。余程精神力が強い者でない限り、マリンエンジェモンに勝てる存在はいないのだ。

「パピッ！！」

地面に倒れ伏している騎士の顔を小さな体で踏みつけながらマリンエンジェモンは怒りの叫びを上げ、他にも登って来る騎士達を待ち構えるのだった。

海鳴市に張られた結界内部で激戦が続く中、アルハザードではフリートとリスティが戦場の状況を細かく調べていた。
今回の敵は本気で一人も結界の外には逃す訳にはいかない。逃せば確実に彼らは無関係な人々を人質にでもして、ヴィヴィオを要求して来るであろう。外の世界の避難が終わっていない状況で、それだけは絶対にさせる訳にはいかない。
だからこそ、フリートとその補助をしているリスティは逐一戦況をリンディ達に送り続け、全力で支援を行い続けているのだ。

「全体の約四割が戦闘不能になったようだね。例のギズモンって言う兵器の方はリンディさんとクイントさんが何とか抑えているよ」

「フム、それならメタルガルルモンXにリンディさん達の援護に向かうように伝えて下さい。幾ら普通のデジモンよりは威力が落ちるとは言え、ギズモンの攻撃はお二人にも天敵です。海上の艦艇を沈めたティアナ達も陸上にもうすぐ着きますからね」

「了解だよ・・・・・それにしてもとんでもない切り札が在ったね。ディバイダーって言うのは魔導師には完全に天敵だよ」

「フフフフッ、確かにそうですね。最もまだ研究中ですから、魔力分断機能だけしか使えないんですよ。本来のオリジナルがその気になれば、生命活動さえも分断出来る能力があります。序に言えば既にディバイダーとそれと共に付属するリアクターの殆どは私が回収済みです・・・・そう言えば二年ほど前に自分達の事を世界を滅ぼす猛毒とか言っていた連中がブラックを勧誘しに着ましたね。最も無関係な人間を何にも感じずに殺す現場をブラックが目撃して、全員ボコボコにされて二度とブラックには関わらないと確約させられましたけどね。まぁ、彼らも多分もう死んでいるでしょう。自分達の力に過信していましたから」

「・・・・・質問だけど、君の言うブラックって言うデジモンは本気で危ないのかい？」

「それはもう。特にブラックは戦う力を持たない者を平然と何も感じずに殺す奴が嫌いなんですよ。戦うのならば力を持つ存在か、信念を持った奴だけ。それ以外にはブラックは手を出しません。貴女も注意した方がいいですよ。本気で怒ったブラックは、世界さえも滅ぼす事ぐらい平然と行うでしょうからね」

「肝に銘じておくよ」

そうリスティは引き攣ったような顔をしながら答え、すぐさまモニターに映る映像を調べ始める。

それに伴いフリートも自身の前に置かれているコンソールを操作しようとするが、その動きは司令室の隅の方でモニターに映る戦いを見つめているヴィヴィオとギルモンを目にした瞬間に止まり、僅かに悲しげな顔をしてしまう。

戦いを眺めているヴィヴィオの顔は暗く、悲しげな印象しかフリートには感じる事が出来なかった。

その理由も、もちろんフリートは知っている。だからこそ、ヴィヴィオが戦場に飛び出さないように見張り続けていたのだ。一応転送装置にはロックが掛けられているが、緊急時には即座に外せる様に設定してある為にヴィヴィオが戦場に向かう事も可能だ。

最も既に戦況は事前に対策を練っていたリンディ達の方が優勢だから、万が一の事態は起きないだろうとフリートは思っていた。

しかし、その万が一が起こってしまった。今回の戦いでリンディ達は決定的なミスを犯していたのだ。

結界内部に入り込める設定の中にデジモンに関する限定的な設定を入れ忘れていたのだ。

ーーーブゥゥーーン！！！

「大変です！！」

「如何したんだい？愛？それにアリサにすずか」

「リスティ！！居ないのよ！！幼年期デジモン達の数が足りないのよ！！」

「なっ！？」

「何ですと！？」

司令室に飛び込んで来た愛、そしてコロナモンを抱えたアリサとルナモンを抱えたすずかの姿に、リスティとフリートは驚愕に満ちた声を上げてアリサの報告を聞く。

「他の子達の話だと、今日の早朝に此処に避難する前に森の中に何かを取りにいったみたいなんですよ！」

「森の中だって！？其処はもう戦場だぞ！？」

「確認して見ます！！」

フリートはそう叫ぶと共に凄まじいスピードでコンソールを操作し、国守山の森の中をサーチャーで探し回る。

そして十数秒後。国守山の頂上付近に幼年期デジモン三体の反応を見つけ、フリートは顔を一気に青ざめさせる。

「見つけました！！確かに山の頂上付近に幼年期デジモン三体の反応を感知！！アッ！艦艇の一隻が頂上付近に接近しています！！敵は艦艇の中に隠していた戦力を一気に投入して山を制圧する気みたいですよ！」

「クッ！！フリート！！すぐに転送装置のロックを外して、ボクを頂上付近に送ってくれ！！ボクなら転移して幼年期デジモン達を助けられるからね！！」

「了解です！！ロック解除！！これで転送装置は使え…」

ーーーブウゥゥーーーン！！

『ッ！！！』

フリートが全ての言葉を言い終える前に、通路への扉が開き、慌てて其方の方に目を向けてみると、既に大人の姿に進化したヴィヴィオとギルモンが転送室に向かって駆け出した。

その姿にフリートは慌ててヴィヴィオとギルモンを止めようとするが、フリートが声を掛ける前に無常にも扉は閉まり、ヴィヴィオとギルモンは迷わずに転送室の中に入り込み、そのまま海鳴市に向かって転移して行った。

「ヴィヴィオちゃん！！不味いです！！敵の狙いはヴィヴィオちゃん自身なんですよ！！」

「鴨がネギを背負って向かったようなものじゃないか！！クッ！！フリート！！すぐにボクも向かうよ！！」

「・・・・駄目です。今気がついたんですが、リスティさんの特徴

を入力したら偶然現実世界に存在しているＨＧＳ能力者が結界内部に巻き込まれる可能性が存在しています。まだ、なのはさんやティアナは狂信者連中と同じリンカーコアと言う特徴が在ったので問題はありませんでしたが、リスティさんでは現実世界に住んでいるＨＧＳ能力者を結界内部に巻き込まれてしまう可能性が高いです。同様に他の此処で待機しているメンバーも駄目です」

「それじゃ！ヴィヴィオと幼年期デジモン達を助けられないじゃないか！！」

「ウゥッ！！この結界の唯一の欠点ですよ！！まさか、こんな時に欠点が出てしまうなんて！！！ァァーー！！こんな事ならもっと違うものでは判別出来るように設定して置くべきでした！！」

フリートはそう頭を両手で抱えながら悲鳴のような声で叫びながら、如何すればいいなのかと頭の中で考え始める。

結界内部にいるメンバーを向かわせるのは不可能に近い。最強の戦力と言えるリンディ達はギズモンＡＴ達の相手が精一杯であり、ヴォルフモン達も騎士達の相手をしなければならない。他のデジモン達も同様に騎士達の相手をしなければ、戦況が一気に自分達の方が不利になってしまう。

何せ実力では問題は無くても数では圧倒的にリンディ達側が不利なのだ。連携のおかげで数の差も埋められていたが、ヴィヴィオ達の救援に向かえばその瞬間に連携は崩れて一気に戦況は騎士達側が有利になってしまう。

その事が優秀過ぎる頭脳によって分かったフリートは、本気でリンディ達以外に動ける人材がいないのかと考える。

（ルインさんがカプセルから出られるのは後一時間前後。リスティさん達は完全に結界内部に入ったらアウト。リンディさん達やデジ

モン達も動けない・・・・アレ？これって完全に手詰まりですよね。不味い！！！このままヴィヴィオちゃん達に何か在ったらとんでもない事態に発展してしまう！！誰か！！誰か動ける存在は！！）

フリートは本気で焦りながら何か手は無いのかと悩み続けるが、やはり動ける存在が思い当たらずに顔を青ざめさせる。

その様子をアリサとすずかに抱かれながら見ていたコロナモンとルナモンは、互いに同時に顔を見合わせると同時に頷きあい、アリサとすずかの手から飛び降りる。

ーーートン！

「俺達が行くぜ！！」

「僕達がヴィヴィオ達の救援に向かうよ！！」

「コロナモン！！アンタ何を言ってるよ！！」

「ルナモンもだよ！！二人はまだ戦えるレベルじゃ無いんだよ」

アリサとすずかはそう言いながらコロナモンとルナモンを止めようとする。

二人ともモニターから映る戦いの映像で、コロナモンとルナモンでは危険だと分かっているのだ。未だにコロナモンとルナモンは成熟期には進化出来ない。リンディの話では最低でも成熟期レベルでなければ戦いに参加する事も出来ないのだ。

その事はコロナモンとルナモンも確りと分かっている。しかし、それでも二人は向かうつもりだった。友であるヴィヴィオ達を助ける為に。

「ヘッ、アリサ。それでも俺達は向かうぜ」

「ヴィヴィオは僕らにとっても大切な友達なんだ！！だから、僕らは行くよ！！」

「・・・・分かったわ」

「アリサちゃん！？」

「すずか。コロナモン達を信じましょう。私達が育てたパートナーを」

「・・・・・そうだね。だけど、二人とも、絶対に無事で帰って来てよ！」

「当然だぜ！！！」

「絶対に帰って来るよ！！！」

《ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「コロナモン！！進化！！」

「ルナモン！！進化！！」

『ッ！！』

　コロナモンとルナモンが同時に叫んだ瞬間に、アリサとすずかの着ている服の中に仕舞っていたディーアークから音声が鳴り響き、コロナモンとルナモンの体がデジコードで覆われていく。

その姿にアリサ、すずか、フリート、リスティ、愛が目を見開いていると、コロナモンのデジコードの中からは四足歩行の逞しい体をつきをして、背中に赤い羽根を生やした獅子の顔をしたデジモンが姿を現し、ルナモンのデジコードの中からはウサギを思わせるような顔立ちをして、背中から幾つもの突起のようなものを生やした二足歩行のデジモンが姿を現す。それこそがコロナモンとルナモンの進化系。その名も。

「ファイラモン！！」

「レキスモン！！」

ファイラモン、世代／成熟期、属性／ワクチン種、種族／獣型。必殺技／フレイムダイブ、ファイラクロー、ファイラボム
“空を翔る獅子”と呼ばれる獣型デジモン。デジタルワールドのとある遺跡を守護する役目を持つ。勇敢な性格を持つと同時に、面倒見の良いリーダー的な存在のデジモンでもある。必殺技は、全身に炎を纏い、上空から相手に向かって急降下して突撃する『フレイムダイブ』に、炎を纏った前足で相手を引き裂く『ファイラクロー』。そして額に全身の力を集中させて火炎弾を相手に向かって放つ『ファイラボム』だ。コロナモンの進化体デジモン。

レキスモン、世代／成熟期、属性／データ種、種族／獣人型、必殺技／ムーンナイトボム、ティアーアロー、ムーンナイトキック
ウサギのような驚異的なジャンプ力を持つ獣人型デジモン。素早い動きで相手を翻弄しながら戦うのが得意である。つかみ所の無い性格をしているが、その佇まいはどこか神秘的で相手はその姿に見惚れてしまうと言われている。また、両手には『ムーングローブ』を呼ばれるグローブを身に着けている。必殺技は、両手の『ムーングローブ』から発生させた催眠効果のある水の泡で相手を眠らせる『

ムーンナイトボム』に、背中の突起から美しい水の槍を敵に向かって撃ち出す『ティアーアロー』。そしてジャンプ力を活かして空高く跳躍し、上空から急降下キックを相手の体に叩き込む『ムーンナイトキック』だ。ルナモンの進化体デジモン。

「行くぞ、レキスモン！！」

「アァッ！！絶対にヴィヴィオ達を護ってみせる！！！」

ファイラモンの言葉にレキスモンはそう答え、二体は同時に頷き合うと転送室に向かって全速力で駆け出して行く。

突然のコロナモンとルナモンの進化にアリサ達は驚き動きが止まってしまうが、すぐにその顔は喜びに満ち溢れ、アリサとすずかは互いの手を握り合い、リスティと愛も嬉しそうに顔をして見合わせる。

しかし、最後の一人であるフリートだけは何かを悩むような顔をしながら自身のコンソールに手を伸ばしていた。

（あの二体のデジモン？・・・何処かで見たような？・・・・そんな訳無いですよね。私がデジモンのことを知ったのはブラックと出会ってからですから、何かの勘違いでしょう。とにかく今はリンディさん達にもヴィヴィオちゃんとギルモン君達の事を知らせましょう）

そうフリートは内心で考えを纏めると、即座にリンディ達が持っている通信機に連絡を行うのだった。

国守山頂上付近。

その場所に存在している無事な木々の間でモチモン、タネモン、ニャロモンは色取り取りの花束で作られた二つの花冠を大切に持ちながら体を恐怖に震わせていた。
昨日の内に作って置いた花冠を取ったら即座にさざなみ寮に戻るつもりだった三体だったが、戻る前に戦いが始まり、燃え盛る炎から逃れる為に頂上まで逃げて来たのだ。戦いが終わるまでその場所に隠れていようと考えていたが、戦いは更に激しさをまして行き、三体とも恐怖に震えるしかなかった。
そして三体の恐怖を煽るように国守山の頂上付近に艦艇が出現し、次々と騎士達が姿を現し、森の中を進み続ける。その足音に三体が更に恐怖を感じると、三体が隠れていた木が突然切り裂かれる。

ーーーブザン！！

『ヒィッ！！』

ーーーピピピッ！！！

木が切り裂かれた事に気がついたモチモン達が恐怖に染まった声を上げると、二名の男性騎士が従えたギズモンＡＴの姿が存在していた。

「やはりデジモンか。この者達こそ聖王陛下を惑わす元凶生物。兵器よ！！その生物達を抹消しろ！！」

ーーーピピピッ！！

『ウワァァァァァァァーーーーー！！！！』

騎士の声に応じるようにギズモンＡＴがエネルギーを集めている

事に気がついたモチモン達は恐怖に染まった声を上げながらも、二つの花冠を護るように覆い被さる。
しかし、心の無いギズモンＡＴにはモチモン達の行動を見ても何も感じる事は無く、一つしかない目からＡＴレーザーを発射ー出来なかった。

「エキゾーストフレイム！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオン！！！

ーーービビビッ！！！！

「何！？」

ギズモンＡＴがＡＴレーザーを発射しようとした直前に、森の木々を薙ぎ倒しながら熱線ーエキゾーストフレイムがギズモンＡＴに直撃し、遠くへとギズモンＡＴは吹き飛んで行った。
その突然の事態に二人の騎士達は思わず驚きながら、熱線が放たれた方向に目を向けてみると、木々の間からグラウモンが姿を現す。

ーーーバキバキ！！

「モチモン達に手は出させないぞ！！」

「クッ！！舐めるな！！」

騎士はそう叫ぶと共にもう一人の仲間と共にグラウモンに向かってデバイスを構え、魔法を放とうとする。
しかし、その直前にグラウモンの背後からヴィヴィオが飛び出し、両手の間に虹色に輝く巨大な魔力球を作り始め、騎士達はその魔力

光に歓喜に満ち溢れた声を上げる。

『聖王陛下！！！』

「ガイア！！！フォーース！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

歓喜に溢れた叫びを上げている騎士達に構わずに、ヴィヴィオは作り上げたガイアフォースを全力で投げつけ大爆発が起こった。

それをヴィヴィオは確認すると警戒はグラウモンに任せて、モチモン達に向かって即座に走り出す。

「モチちゃん！！ニャロちゃん！！タネちゃん！！」

『ヴィヴィオ！！！』

ヴィヴィオの姿を目にしたモチモン達も喜びの声を上げ、花冠を持ちながらヴィヴィオに駆け寄る。

その姿にヴィヴィオは心の底から喜んだ。今度は間に合った。大切な友達を護る事が出来た。

そうヴィヴィオは心の底から想い、自身に向かって来るモチモン達に手を伸ばし、大切そうに抱える事が一出来なかった。

ーーービュン！！

「聖王陛下に触れるな！！！」

ーーーブザン！！！！

『ギャッ！！』

「・・・・・・えっ？」

ヴィヴィオとモチモン達の手が互いに届こうとした瞬間に、爆発によって発生した煙の中から加速魔法を使用した騎士が飛び出し、モチモン達を手に握っていた剣型のデバイスで切り裂いた。

それを目の前で目にしたヴィヴィオは、現実が信じられなかったのか呆けたような顔をして地面に目を閉じながら倒れ伏しているモチモン達を見つめる。

（・・・・何で・・・・何で・・・・だって・・・・今度は護れたんじゃ・・・・何でモチちゃん達が倒れているの？）

ーーーパタッ！！

目の前で起こった現実が信じられなかったのかヴィヴィオは、呆けたような顔をしながら地面に膝を着いてしまう。

しかし、現実が分かったグラウモンは怒りに満ちた視線をモチモン達を切り裂いた騎士に向けると同時に両手から生えているブレードに電撃を纏わせる。

ーーービリビリッ！！

「お前！！！」

「フン、聖王陛下を惑わす危険生物が！！貴様も死ぬがいい！！」

ーーービュン！！

騎士がそう叫ぶと同時に周りの木々の間から十名ほどの騎士達が一斉に飛び出し、グラウモンに向かってそれぞれ持っているデバイスを振り下ろす。

『ベルカの誇りの為に！！！』

ーーードドドドドドドドドドドッ！！！

「ガアアアアアアアアアアアーーーーー！！！！！」

ーーードスゥン！！

「・・・・グラちゃん」

騎士達の一斉攻撃を受けて苦痛の叫びを上げながら地面に倒れ伏したグラウモンの姿に、ヴィヴィオは悲しみに満ちた涙を流し始める。

しかし、周りの騎士達はヴィヴィオの様子には全く構わずにそれぞれ持っているデバイスを高々に掲げ上げる。

「我々は聖王陛下をお救いしたぞ！！悪しき生物達の手から救ったのだ！！」

『オオォォォォォーーーー！！！』

（・・・・何を言っているの？・・・・聖王・・・・何それ？）

ヴィヴィオには騎士達の歓喜の意味が分からなかった。

彼らがしたのは自分の大切な友達を傷つけただけ。それなのにまるで彼らは自分を救ったかのように声を上げている。その意味がヴ

ィヴィオには分からずに呆然とした顔をし続けていると、ヴィヴィオの前で倒れ伏していたモチモンが辛そうにしながらも顔を上げて、持っていた花冠を差し出す。

「・・・・ヴィヴィオ・・・・これ・・・・受け取って・・・・」

「・・・・・モチちゃん」

「喧嘩は駄目だよ・・・・・リンディさんと・・・・仲良くして・・・・僕らのお願い」

「モチちゃん!!」

モチモンの言葉に意味に気がついたヴィヴィオは、慌ててモチモンが最後の力を振り絞って差し出してきている花冠に手を伸ばす。

モチモン達は自身とリンディとの関係の為に頑張っていた。その事を理解したヴィヴィオは悲しみと嬉しさが混じった大粒の涙を流し、モチモンに向かって手を伸ばすが、手が届く直前にモチモンの体を剣型のデバイスが貫く。

ーーードスン!!

「アッ・・・・ヴィ・・・ヴィ・・オ・・・・」

ーーーシュウウウン!!

「モチちゃーーん!!!」

目の前で剣に貫かれてデジタマと化して消滅したモチモンの姿を目撃したヴィヴィオは悲痛さに満ちた叫びを上げた。

しかし、モチモンに剣を刺した騎士はまるでヴィヴィオの叫びなどに構わずにモチモンの近くで倒れ伏しているタネモンとニャロモンにも汚物を見ているような視線を向けながら剣を構える。

「下賤な生物風情が！尊きお方である聖王陛下に触れるな！！！」

「止めてえぇぇぇぇーーー！！！！」

タネモンとニャロモンも殺そうとしている事に気がついたヴィヴィオは慌てて立ち上がり、剣を構えている騎士を殴り飛ばそうと駆け出す。

しかし、拳を放つ前にヴィヴィオの体は無数のバインドに拘束され、動きが完全に止まってしまう。

ーーーガシィィィィィーン！！

「ッ！！」

「フゥ～、やはり操られているのですね聖王陛下。ですが、ご安心下さい。すぐにこの生物達を抹消して貴女様をお救いいたします」

「違う！！私は聖王何かじゃない！！私は！！私は！！」

「・・・此処まで聖王陛下を惑うわすとは。赦せん！！！死ぬがいい！！！」

「止めてえぇぇぇぇーーー！！！」

ーーードスウゥゥゥーーーン！！！

「アッ・・・・アァァァァァァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

ヴィヴィオの悲しみに満ちた止める声に構わずに、騎士は剣を掲げていた剣をタネモンとニャロモンに突き刺した。

それと同時にタネモンとニャロモンもデジタマへと戻っていき、デジタマはゆっくりと地面を転がりヴィヴィオのすぐ近くで止まると同時に砕け散る。

ーーーパリィィィィーーーン！！

「アアアア

その様子を騎士は確認すると満足げに頷き、持っているデバイスを地面に倒れ伏したまま動かずに居るグラウモンに向ける。

「最後の生物は我ら全員の手で滅ぼすのだ！！そうすれば、我らは正気に戻られた聖王陛下ご自身に聖騎士に任命されるであろう！！」

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオォォォォォォォーーーー！！！！』

騎士の叫びに他に騎士達もそれぞれ自身のデバイスをグラウモンに向かって構える。

騎士はその様子を確認するとバインドに拘束されながら、地面に膝をつき顔を俯かせているヴィヴィオに声を掛ける。

「聖王陛下。今しばらくお待ち下さい。もうすぐお救いいたします」

ーーーーグシャッ！！

ーーーーピクッ！！

グラウモンに向かって騎士が歩く中、地面に落ちたままだったモチモンが必死に作ったであろう二つの花冠はグラウモンに向かって歩く騎士達の足に押し潰される姿を目にしたヴィヴィオが僅かに動いた。

しかし、その様子に気がつかずに騎士達はグラウモンに向かって攻撃を開始しようとする。だが、その直前に騎士達の頭上から炎を全身に纏った獅子ーファイラモンとキックの体勢を取ったレキスモンが急降下して来る。

「貴様ら！！！赦さんぞ！！フレイムボム！！！」

「ムーンナイトキック！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

『ガアアァァァァァァァーーー！！！！！』

突然に頭上から急降下して来たファイラモンとレキスモンの一撃を、前を歩いていた数名の騎士達は避ける事が出来ずに、近くの木々に激突した。

しかし、それを見てもファイラモンとレキスモンの怒りは晴れる事は無く、逆に怒りを募らせながら騎士達を睨みつける。既にファイラモンとレキスモンはモチモン達が死んでしまった事を分かっていた。あと少し早ければ助けられたかもしれないと後悔を抱くが、それよりも今はヴィヴィオとギルモンを護る事を優先しようとする。

その姿に残っている騎士達も即座にデバイスを構え、ファイラモンとレキスモンを倒そうとするが、その直前に気絶していた筈のグラウモンがファイラモンとレキスモンの背後で立ち上がる。

ーーードスン！！

「ッ！！グラウモン！！無事だっ…」

「■■■

その咆哮を聞いた者が感じたのは圧倒的な恐怖。本能が今のグラウモンの咆哮に恐怖を抱いたのだ。
そしてそれが正しい事を現すようにグラウモンの体は一瞬の内に前触れも無く肉体を機械で覆ったメガログラウモンへと変化し、胸に描かれていた『デジタルハザードの紋章』も光り始める。

ーーーピコン！！ピコン！！ピコン！！

「な、何が起きているんだ！？」

「・・・・ファイラちゃん、レキスちゃん・・・・早くこの場所から離れて」

『ヴィヴィオ！！！』

『ッ！！』

何時の間にかバインドの拘束を破り、メガログラウモンの肩の部分に乗っていたヴィヴィオの姿に、ファイラモとレキスモンだけではなく、恐怖に固まっていた騎士達も目を見開いた。
その場にいる全員がヴィヴィオの動きを全く捉えられなかったのだ。確かに騎士達の背後で拘束されていた筈なのに、ヴィヴィオは誰にも気づかれる事無くメガログラウモンの肩に乗っていた。それだけでも何かの異常が起きていると知るには充分な事だった。
しかし、ヴィヴィオはファイラモンとレキスモンの様子にさえも構わずに、右手に持っている黒い光を溢れさせているディーアークを握り締める。

「早く逃げて・・・・もう抑えられない・・・・・このままだとファイラちゃんとレキスちゃんも殺しちゃう・・・・だから早く逃げ

て」

「・・・・レキスモン！！俺の背に乗れ！！」

「しかし！！ヴィヴィオとメガログラウモンを放っては！！」

「乗るんだ！！！俺達では今のヴィヴィオとメガログラウモンを止められない！！」

「クッ！！！・・・・分かった！！すまない！！」

レキスモンはファイラモンの悔しさに満ちた声を上げると共にファイラモンの背に跨り、ファイラモンはそのまま空へと飛び立っていった。

ヴィヴィオはそれを横目で確認すると、未だにメガログラウモンの咆哮によって恐怖で動きが止まってしまっている騎士達の光が全く感じられないオッドアイの目を向けながら、左手に持っている泥だらけになった二つの花冠を翳す。

「これ・・・何だか分かる？これね。私の友達が一生懸命作ってくれた花冠なんだ・・・そう貴方達が何の感情も抱かずに殺したモチちゃん達の想いが篭った花冠・・それを平然と貴方達は踏み躙った・・・・何でそんな事が出来るのか私には分からなかった・・・・でもね。少し考えたら分かったんだ・・・貴方達は大切にしているものを踏み躙られた事が無いんだよね・・・・だからね。私が踏み躙って上げるよ。全部全部全部全部全部全部全部全部全部全部！！！！貴方達が言っていたベルカも！！何もかもを貴方達が大切にしているものを全部この世から消して上げる！！！！マトリックスエヴォリューーーション！！！！」

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「■■■

竜タイプのデジモンの中ではもっとも凶悪かつ邪悪な性格をしている邪竜型デジモン。『四大竜』の1匹ではあるが、聖竜型である他の3匹とは一線を画す邪竜型の問題児であり、その存在は“デジタルハザード”そのもの。クロンデジゾイド（おそらくはレッドデジゾイド）製のボディに身を包む。その力はデジタルワールドの何者の“力”により封印されているが、その封印が解かれると、デジタルワールドを滅ぼすほどの大きな被害がで出ると言われている。またメギドラモンとカオスデュークモンは同一の存在ではないかという説も浮上しており、メギドラモンが発する恐怖の波動が見る者によって暗黒竜に見えたり暗黒騎士に見えたりするともいわれているそうだ。しかし現在、その姿が確認されたことはほとんど無く、現存しているのかどうかわからないため幻の存在とされている。必殺技は、口から邪悪さに満ちた炎を吐き出し、全てを一瞬の内で焼き尽くしてしまう『メギドフレイム』に、咆哮から発する衝撃波で相手を竦ませ、恐怖によってショック死させる『ヘル・ハウリング』だ。

「■■■

りながら、メギドラモンを見つめるが、メギドラモンは騎士達の様子になど構わずに残忍さに満ちた笑みを口元に浮かべながら空に向かって咆哮を叫び続ける。
　まるでこれから起きる惨劇が心の底から楽しみだと言うように、メギドラモンは血のように赤く染まった上空で滞空している七隻のベルカ艦に向かって咆哮を上げ続けるのだった

黙示録（メギドラモン）後編（前書き）

どうも作者のゼクスです

既に知っている人もいると思いますが、クリスマス特別記念小説アンケートを実地しています。

内容は三作品で。

その一、劇場版の『僕らのウォーゲーム』の話をリリカルキャラとブラック達で行う話。

その二、同じく劇場版の『ディアボロモンの逆襲』にブラック、ルイン介入。

その三、ティアナ&クダモン、なのは&ガブモンのデジタルワールドの旅です。

アンケートの期間は少し伸びて十二月の二十二日も正午までに変更しました。

感想掲示板か、活動報告に出来れば応募して下さい。

現在は一が二票

二が五票

三がゼロ票です。

黙示録（メギドラモン）後編

空と大地が赤く染まった海鳴市結界内部。
その地にいる誰もが一歩も動く事が出来ずに国守山の山頂で、僅かに浮かんでいる巨大な禍々しい赤い体を持ち凶悪さに満ちた咆哮を上げている暗黒竜ーメギドラモンを見つめていた。
しかし、見つめている理由はそれぞれ違っていた。
結界内部の海鳴市を崩壊させ、ヴィヴィオを利用しようとしていた騎士達はメギドラモンの姿とその身に纏っている自分達が捜し求めていた聖王の証である虹色の魔力光の前に動く事が出来なかった。
“あんなものが自分達が命を賭けて探していた聖王なのか”
そう言う思いを海鳴市にいる騎士達全員が抱きながら、艦艇に向かって凶悪さに満ちた咆哮を上げているメギドラモンを静かに見つめる。
そして騎士達とは違い、ヴィヴィオとギルモンの事を知っているリンディ達やデジモン達は騎士達とは違った思いを抱きながらメギドラモンを見ていた。
「ヴィヴィオッ！！」
「そ、そんな、何て事なの！？」
とある場所でギズモンＡＴと戦っていたバイオ・スラッシュエンジェモンに進化していたリンディとバイオ・ジャスティモンに進化していたクイントは、メギドラモンの纏っている虹色の魔力光を目にし、悲鳴のような声を上げた。

二人にはメギドラモンの正体がすぐに分かった。デジモンには本来魔力は存在していない。それなのにメギドラモンは虹色と言う特殊な魔力光を身に纏っている。それだけで二人にはメギドラモンの正体が分かるには充分だった。デジモンが魔力を得る事が出来る方法はただ一つ。魔力を持った人間がパートナーデジモンと融合する融合進化以外に方法は無い。

その事を知っているリンディ、クイント、そして同じように離れた場所でメギドラモンを見つめていたメタルガルルモンX、ティアナ、チィリンモンは青ざめる以外になかった。

そしてリンディ達の考えを肯定するようにファイラモンとその背に跨ったレキスモンを伴ったヴォルフモン、ブリッツモン、レーベモン、チャックモンがリンディとクイントに凄まじい速さで駆け寄って来る。

「リンディさん！！ファイラモンとレキスモンが伝えてくれたんだが、あの山の頂上にいるデジモンは、ヴィヴィオって言う子とギルモンが融合したデジモンらしいぞ！！」

「ッ！！やっぱり！！」

ヴォルフモンの報告にリンディは悲鳴のような叫びを上げ、クイントも悲痛さに満ちた顔をしてしまう。

事前にフリートからヴィヴィオとギルモンがモチモン達を助けに向かったと言う報告をリンディ達は聞いていたが、ヴォルフモンが教えてくれた事によって最悪な事態になってしまった事を確信する。

再びデジタルワールドでの悲劇をヴィヴィオとギルモンが味わった事を。

そして憎しみに果てに現れたメギドラモンがする事など一つしか考えられない。リンディとクイントはそれが何なのかを即座に思い浮かび、ヴォルフモン達に向かって叫ぶ。

「輝二君！輝一君！！純平君！！友樹君！！それにファイラモン君とレキスモン君はすぐに他の結界内部にいるデジモン達と共に現実世界に避難しなさい！！」

『なっ！？』

リンディが告げた言葉にヴォルフモン達は目を見開きながら声を上げた。

しかし、リンディとクイントは一刻の猶予も無いと言う様に持っていた通信機を繋ぎ、フリートに連絡を行う。

「フリートさん！！すぐに結界内部にいる私とクイント、メタルガルルモンX君、ティアナ、チィリンモン君を除いた全員を現実世界に転移させて頂戴！！」

『ザーー！！ザーー！！』

「ッ！？フリートさん！！フリートさん！！応答して！！」

『ザーー・・・き・こ・・て・・いま・・す・・ザーー・・・・それより・・・・電磁・・・・機械が・・・・ティアナ・・・・ブレイク・・・・ザーー・・・・レイジング・・・・ザーー・・・・ザーー！！ザーーー！！』

ーーーブチィン！！

「フリートさん！！フリートさん！！クッ！！駄目！！壊れたわ！！」

リンディは何の音も出なくなった通信機を見ながら苛立ちに満ちた声を上げ、持っていた通信機を地面に向かって投げ捨てた。
その様子を見ていたクイント、ヴォルフモン達は事態がただ事でない事に慌てて顔を見合わせリンディに質問する。

「リンディ!!フリートは何を言っていたの!?それに如何して通信機が!?この通信機はフリート特製の通信機なのよ!そう簡単に壊れる筈は無い物なのに!?」

「私にも分からないわ・・・だけどフリートさんは電磁波が如何とか言っていたわね・・・・まさか!?」

ある一つ推測に行きたったリンディは慌ててさざなみ寮の山頂で咆哮を上げ続けているメギドラモンに顔を向ける。
それと共に精神を集中させてメギドラモンを見つめてみると、メギドラモンの周りの空間が徐々に歪み始めている事を発見する。

「不味いわ!!あのデジモンは、あの人と同じように世界に異変を引き起こすデジモンなのよ!!」

「何ですって!?」

「本当なのか!?それは!?」

「あのデジモンが異変を引き起こすって!?」

クイント、ヴォルフモン、レーベモンはリンディの叫びにそれぞれ疑問の叫び声を上げながら、メギドラモンを見つめると、リンディは険しい顔をしながら己の考えたメギドラモンに関する推測を話し始める。

「えぇ、恐らく間違いないわ。今は動いていないから最小限の影響で治まっているんでしょうけど、一度動き出せば恐ろしい事態が起きる。現に少ないながらも影響が始まって、フリートさん特製の通信機が壊れた」

「ちょっと待ってリンディ！！通信機が壊れたって事は、影響は先ずは機械から始まるのよね？・・・だったら騎士達が使っているアームドデバイスは！？」

「先ず間違いなく全て壊れて、騎士達はただの人間レベルに実力が下がる・・・・そうなればこの火の海と化した海鳴市に自らを焼かれて全員死ぬ。艦艇にしてもかなりの影響が起きて、最悪の場合は・・・空中で大爆発を起こすと考えるべきよ」

『ッ！！！』

リンディが告げた推測にその場にいる全員が恐怖によって顔を青ざめさせた。

しかし、すぐにリンディの推測は正しいと理解する。何せアルハザード製の通信機が僅かな影響だけで壊れたのだ。当然ながら性能が遥かに劣るアームドデバイスや機械類など簡単に壊れるだろう。そうなればただでさえ惨劇が広がっている結界内部の海鳴市は崩壊し、最悪の場合は現実世界まで影響が出てしまう。

「・・・・クイント・・・・貴女は輝二君達と一緒に仲間のデジモン達を全て海の方に避難させて」

「リンディ！？何を言っているの！？」

「・・・・このまま、あの子達をあんな姿にさせて置く訳にはいかないわ。だから、私とメタルガルルモンX君、そしてティアナとチィリンモン君であの子を元の姿に戻す。本当はクイントも加わって欲しいけど、デジモン達を護れる力を持った護衛も必要だから」

「ッ！！・・・・確かにそれしか無いわね・・・・分かったわ」

「待ってくれ！！だったら俺も行くぞ！！俺はダブルスピリットが使える！！足手纏いにはならない！！」

リンディとクイントの話を横で聞いていたヴォルフモンも名乗り出て、自身も行くと告げるが、その肩にブリッツモンとレーベモンが手を乗せる。

ーーーガシッ！！

「ヴォルフモン・・・此処はリンディさんの言葉に従うんだ」

「あのデジモンは究極体に間違いない。しかも途方も無い力を秘めたデジモン・・・・そのデジモンが本格的に暴れだせば、クイントさんだけでは仲間のデジモン達全員を護りきれない。だから、俺達がクイントさんと一緒にデジモン達を護るんだ」

「・・・・・・分かった。リンディさん、気をつけてくれ」

「えぇ、分かっているわ。それじゃ行くわね」

そうリンディはヴォルフモン達に伝えると、背中の金属で出来た羽を羽ばたかせて、メギドラモンに全速力で向かって行く。

それをクイント達も確認すると、各地域で戦っていたデジモン達

の下に急いで向かいだし、メギドラモンが動き出すまでに避難を急ぐのだった。

そしてメギドラモンに一目散で向かっていたリンディは、内心で自分達のミスを嘆いていた。

（クッ！！こんな事なら結界内部に入れるデジモン達を成熟期に設定して置くんだった！！そうすればこんな事態にはならなかったのに！！私達のミスだわ！！）

そうリンディが内心で悲痛さに満ちた嘆きの叫びを上げながらメギドラモンに向かっていると、リンディの傍にティリンモンの背に跨ったティアナが近寄って来る。

「リンディさん！！」

「リンディ！！」

「ティアナ！ティリンモン君！！状況は分かっているわね！！」

「はい！既にメタルガルルモンXもあのデジモン、メギドラモンに向かっています！」

「ディーアークからの情報だが、メギドラモンはデジタルハザードを完全に引き起こしているらしい。機械関係はディーアーク以外は所持している全てが駄目だった。ブレイクミラージュも待機状態にして置かなければ危ない所だった」

「やっぱりそうだったのね・・・・だけど、その情報が真実なら、如何してこの程度の被害で治まっているのかしら？」

リンディがそう疑問に思うのも当然だろう。
本当にデジタルハザードが起きれば、機械の異変だけではすまない。メギドラモンがいる世界全体を滅ぼすほど天災が引き起こされるだろう。それだけの力がデジタルハザードには存在しているのだ。
制御出来れば比類なき力を発揮する力だが、メギドラモンは如何見てもデジタルハザードを制御出来ているようには見えない。にも関わらずに未だに起きている異変は僅かな機械の変調だけ、それ以外に異変は起きている様子も無くリンディ、ティアナ、チィリンモンは疑問に満ち溢れながらメギドラモンを見つめていると、チィリンモンがメギドラモンの顔の前に浮かんでいる、メギドラモンの全長からすれば米粒よりも遥かに小さな物体を発見する。

「ムッ！！アレは！まさか！？ティアナ！！リンディ！！メギドラモンの顔の前をよく見てみろ！！何か居るぞ！！」

『エッ！？』

チィリンモンの叫びにティアナとリンディは驚きの声を上げながら、チィリンモンの告げたメギドラモンの顔の前を注意深く見つめてみる。すると確かにチィリンモンの言うとおり、小さな何かがメギドラモンに対して何かを行っていた。

「ピピプ〜！！ピピプ〜〜〜〜！！！！！」

『マリンエンジェモン！？』

メギドラモンの目の前でオーシャンラブを、メギドラモンに浴びせ続けているマリンエンジェモンの姿に、ティアナとチィリモンは驚いた。

「マリンエンジェモンちゃん！！・・・・・そうよ！！メギドラモンが現れた近くにはあの子が居たわ！！だから、メギドラモンは動けなかったのよ！！」

「如何言う事ですか！？リンディさん！！」

「忘れたの？マリンエンジェモンちゃんの必殺技は相手の戦意を消失させる効力を持っている。幾らメギドラモンが憎しみの化身のようなデジモンだと言っても、マリンエンジェモンちゃんの技なら動きを抑えるぐらいの事は可能かも知れないわ」

「そうか！！だから、メギドラモンの暴走も最小限で済んでいたのか！」

「マリンエンジェモン！やるじゃないの！！これならメギドラモンが暴走す…」

ーーードドドド

とレーザーを放った七隻の艦艇に顔を向けると同時に、艦艇の旗艦と思われる艦から声が響く。

『全ての騎士達よ！！何としてもあの聖王陛下の名を穢した竜を滅ぼすのだ！！我々が絶対の忠誠を誓っている聖王陛下の名を穢すあの竜を滅ぼせ！！』

『オォォォォォォォォーーーーーー！！！！！！』

「ば、馬鹿なの！？何を言っているのよ！？あの連中は！！メギドラモンが現れたのは誰のせいだと思っているの！？」

旗艦が告げた放送と、爆発によって生じた煙に包まれているメギドラモンに向かって突撃する騎士達の姿に、ティアナは怒りと困惑に満ちた叫びを上げた。

メギドラモンが現れたのは紛れも無く聖王教会の狂信者達の行いのせい。にも関わらず、狂信者達は自分達の行いを反省する所か、メギドラモンが聖王の名を穢したと叫んだ。

自分達の行いこそが正しいと本気で彼らは思い込んでいるのだ。

その事にリンディ達はただでさえ燃え上がっていた狂信者達に対する怒りの炎が更に燃え上がる。しかし、すぐにその炎は冷水を浴びせられたかのように沈静し、恐怖に体の動きが止まってしまった。

気がついたのだ。メギドラモンが止まっていたのは、マリンエンジェモンのオーシャンラブを受け続けていたおかげだ。しかし、そのマリンエンジェモンはミサイルとレーザーの衝撃によって何処かへと吹き飛んで行った。そうなればどうなるのか子供でも簡単に分かる事だ。

だが、子供よりも聞き訳が無い狂信者達はメギドラモンへと何も考えずに進行し、空を飛べる者は逸早く煙に包まれているメギドラモンに接近して行くが、それが彼らの最後に見た光景になった。

「■■■

は、メギドラモンの暴虐に怒りを覚えてそれぞれ握っているアームドデバイスを構えようとする。しかし、その直前に全ての騎士達が握っているアームドデバイスから火が吹き上がり、爆発を起こす。

ーーードゴオン！！ドゴオン！！ドゴオン！！ドゴオン！！

「な、何だよこれ！？何でデバイスが壊れるんだよ！？」

「そ、そんなの俺が知るかよ！？」

突然のデバイスの機能停止に、生き残っていた騎士達はそれぞれ疑問の叫びを上げ、原因を調べようとするが、そんな暇は彼らには与えられなかった。

「■■■

「■■■

ジモン達を海の方に避難させていなければ、確実にメギドラモンは仲間であるデジモン達にさえも攻撃を行っていただろう。
その上遂にメギドラモンの影響力が最大限に発揮されて来たのか、結界内部の大地には地割れが発生し、凄まじいマグマがその地割れから噴き出し始めた。それによって更に戦う術と逃げる術を失った騎士達は更に焼け死んで行く。
その様子をリンディ達は見ていたが、彼らを助ける気にはなれなかった。何せメギドラモンが今行っている行動は全て、騎士達が現実世界の海鳴市で行おうとしていた行動。戦う術を持たない者に攻撃するのも、モチモン達に騎士達が行った行動に過ぎない。融合進化する前のヴィヴィオの宣言どおりに、彼らは踏み潰されている過ぎないのだ。更にメギドラモンを抑える最後の砦だったマリンエンジェモンの頑張りも、彼ら自身の行動で無になった。
“因果応報”。彼らが行おうとしていた行動が全て彼らに返って来たに過ぎない。そんな連中をリンディ達は助ける気にはなれなかった。
しかし、リンディ達としてもメギドラモンをこのままにして置く訳にはいかない。メギドラモンは確実に地球にやって来ている騎士達を全て滅ぼそうとする。既に八割以上の騎士達が灰に変わり、空に存在していた艦艇も二隻になっているが、それだけではメギドラモンは絶対に止まらないとリンディ達は確信していた。最悪の場合はミッドに存在するベルカ自治区を滅ぼしに向かうだろう。
その様にリンディ達がメギドラモンの行動を予測していると、背後に煤だらけになったマリンエンジェモンを肩に乗せたメタルガルルモンXが近寄り、リンディ達に声を掛ける。
「リンディさん・・・・メギドラモンを止めよう！！騎士達の事は別として、僕となのはは今のメギドラモンの姿を、ヴィヴィオとギルモンが憎しみに駆られてる姿なんて見たくない！！」

「・・・・私も同感だ。狂信者どもがどうなろうと知った事ではないが、ヴィヴィオとギルモンのあんな姿はこれ以上見たくはない」

「あの子とギルモンには笑顔が似合うのよね・・・・あんな憎しみに駆られた姿なんて、これ以上させないわ」

「ピプーー！！」

「・・・・そうね・・・・あの子とギルモン君は、本当に笑顔でいて欲しいわ・・・・皆！！行くわよ！！」

『応ッ！！』

「はい！！」

「ピプーー！！」

リンディの叫びにメタルガルルモンX、チィリンモン、ティアナ、マリンエンジェモンは応じると残る二隻の内、一隻に巻きつきながら、艦艇に手を突き刺し、何かを行っているメギドラモンに向かって突進していく。

「チィリンモン！行くわよ！！マトリクスエヴォリュ――ション！！！」

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「チィリンモン！！進化！！！スレイプモン！！！」

ティアナが叫ぶと同時にディーアークからも電子音声が響き、テ

ィアナとチィリンモンの体を覆うようにデジコードが出現し、デジコードが消えると共に巨大な赤き獣騎士ースレイプモンが出現した。
そしてティアナとチィリモンがスレイプモンに進化を終えると同時に、メタルガルルモンXは未だに艦艇に巻きついているメギドラモンに向かって口から絶対零度の息吹ーコキュートスブレスを放つ。

「ヴィヴィオ！！ギルモン！！ゴメン！！コキュートスブレス！！！！」

ーーーコオォォォォォォォーーーー！！！！！

「すまん！！オーディンズブレスッ！！！！」

ーーーゴオォォォォォォォーーーー！！！！！

メタルガルルモンXがコキュートスブレスを放つと同時に、スレイプモンも自身の右手に備えている聖盾『ニフルヘイム』から超低温のブリザードーオーディンズブレスをメギドラモンに向かって発生させた。
メタルガルルモンXもスレイプモンもメギドラモンを倒すつもりは無い。出来れば倒さずに元のヴィヴィオとギルモンに戻って貰う為に、先ずは凍らせて動きを止めようとしているのだ。
しかし、それはすぐに甘い考えだった思い知らされる。
自身に向かって迫って来ているコキュートスブレスとオーディンズブレスに気がついたメギドラモンはすぐさま、自身が巻きついていた艦艇から腕を引き抜き、そのまま両手で艦艇を掴み、メタルガルルモンXとスレイプモンに向かって投げつける。

「■■■

ーーーブオオォォォォン！！

『なっ！？』

メギドラモンが艦艇を投げつける姿にメタルガルルモンXとスレイプモンは声を上げるが、勢いよく投げつけられた艦艇はコキュートスブレスとオーディンズブレスをカチカチに内部で生き残っていた人間ごと凍りながらも突き抜け、そのままメタルガルルモンXとスレイプモンに向かっていく。

無論その程度の攻撃などメタルガルルモンXとスレイプモンは簡単に避けるが、メタルガルルモンXが移動した方向に既にメギドラモンが移動していた。

「■■■

それによってメタルガルルモンXは地上へと落下して行くが、メギドラモンは構う事無く口内に凄まじい炎を発生させてメギドフレイムをメタルガルルモンXに向かって吐き出す。

「■■■

（わざと相手に簡単に避けられる攻撃を放って、相手の避ける動きを予測し、その先に移動して相手に攻撃する・・・・簡単な戦法だけど、かなりの経験が必要な戦法なのよ。それを簡単に成功させるなんて、何て化け物なのよ）

そうティアナは未だに辺りを見回しているメギドラモンを見ながら声を出した。

正直に言えば、メタルガルルモンXはスレイプモンがいなければ先ほどのメギドフレイムによって倒されていただろう。それほどまでにメギドラモンのメギドフレイムは強力なのだ。

手加減など行えば、即座に此方が負けてしまう。それほどまでの力を持っているメギドラモンにメタルガルルモンXとスレイプモンは恐怖を僅かに抱くが、すぐにそれは焦りへと変わった。

ーーービキビキビキッ！！！

『ッ！！！』

突如として響いた何かに罅が入るような音を耳にしたスレイプモンとメタルガルルモンXは、慌てて音が鳴り響いた赤い空に顔を向けてみると、まるで世界自体に罅が入ったかのように空に数多くの罅が広がっていた。

「不味いぞ！！結界が壊れようとしている！！！」

「クッ！！そうなれば現実世界の海鳴市が！！」

遂に結界がメギドラモンの放つ影響力に耐え切れなくなった事に気がついたスレイプモンとメタルガルルモンXは互いに大声を出し

てしまった。
当然ながらその声はメギドラモンの耳に届き、即座にメギドラモンは煙を跡形も無く吹き散らせながらスレイプモンとメタルガルルモンXに向かって突撃する。

「■■■

ディとマリンエンジェモンに、メギドラモンは目を見開くが、リンディとマリンエンジェモンは止まらずにメギドラモンに迫る。
　このチャンスだけは逃す訳にはいかないのだ。リンディとマリンエンジェモンはスレイプモンやメタルガルルモンXと違って強力な火力は持っていない。だからこそ、接近して最大の一撃をメギドラモンに叩き込むしかないとリンディは考えていた。
　しかし、メギドラモンの警戒心の強さはかなりのもの。正面から突撃すれば確実にカウンターを貰ってしまう可能性が高い。だが、リンディはスレイプモンとメタルガルルモンXと戦うメギドラモンを見ている内に、決定的な欠点がメギドラモンには存在している事に気がついた。
　そうメギドラモンには相手に向かって攻撃を行う瞬間に、辺りに対する警戒心をゼロにしてしまうと言う大きな隙が存在していたのだ。
　その事に気がついたリンディは、今まで攻撃を行わずにメギドラモンが決定的な隙が出来るのをマリンエンジェモンと共に待ち続けていた。万が一、技を叩き込む直前に反応されてもマリンエンジェモンのオーシャンラブを使えばメギドラモンの動きを一瞬だけでも止める事が出来る。
　そしてその策は成功する直前にまで行く事は出来た。しかし、リンディは決定的な事を忘れていた。融合進化で得られるのは魔力だけではない。融合した相手が所持しているレアスキルも使う事が融合進化では出来るのだ。
　その事を忘れているリンディは全身の刃を鋭く輝かせながら、メギドラモンの背に向かって振り抜く。
「元の二人に戻りなさい！！！ヘブンズリッパーー！！！」
ーーーガキィィィィィーーーン！！！

『ッ！！！』

リンディが全身の力を振り絞って振り抜いたヘブンズリッパーがメギドラモンの体に触れる直前に、リンディが振り抜いた全ての刃は、メギドラモンの全身を覆っていた虹色の魔力光ー“聖王の鎧”によって阻まれた。

その事実にリンディだけではなくスレイプモン、メタルガルルモンX、そしてマリンエンジェモンも目を見開き思わず動きが止まってしまった瞬間、メギドラモンは全身から凄まじい炎を発生させ、炎の竜巻ーブラックの技の一つーブラックストームトルネードを発生させる。

「■■■

ルガルルモンXとスレイプモンに放とうとする。

「■■■

ちた咆哮に、メタルガルルモンXとスレイプモンは慌ててメギドラモンに顔を向けるが、もはやメギドラモンは二体の事など気にしていなかった。
例え理性を失っていてもメギドラモンは自身が今の状態になる前に起こった悲劇を忘れてはいない。
友であったモチモン達を惨殺し、優しい想いが詰まっていた花冠を平然と踏み潰された事を、メギドラモンは忘れてはいないのだ。元凶だった連中が死んだ事など関係ない。メギドラモンはベルカそのものを憎んでいる。そしてその連中が脇目も振らずに逃げ出した。
それは絶対にメギドラモンには赦せない事だった。
メギドラモンの憎しみと怒りは完全に振り切れしまったのだ。
そしてメギドラモンは憎しみと怒りに支配されながらも残酷な事を思いつく。

“連中が帰ろうとしている場所を灰燼に変える。ベルカと言うな名のつくもの全てに絶望と悲しみを与える”

そう完全に心に決めたメギドラモンは、自身の周りに虹色に輝く魔法陣を発生させ始めた。
その魔法陣の意味に気がついたメタルガルルモンX、スレイプモン、そしてダメージから回復したリンディは目を見開き、信じられないと言うようにメギドラモンの周りに出現した巨大な転移魔法陣を見つめる。

「何だと！？馬鹿な！？アレは転移用の魔法陣！？」

（如何してメギドラモンが使えるのよ！？ヴィヴィオは転移魔法なんて使えなかった筈よ！？）

そうスレイプモンとティアナが疑問に思うのも当然だろう。

ヴィヴィオは確かにブラックの技を模した魔法やデジモンの技を使う事が出来る。だが、魔法に関してはティアナとなのはが使用出来る魔法しか覚えはいない。元々仲間の中でも転移魔法が使用出来るのはリンディだけであり、リンディ自身フリートの道具を使った方が簡単に転移出来るので転移魔法は全く使用していない。

その事によってヴィヴィオは転移魔法の術式を知らない筈なのだが、メギドラモンは転移魔法を使用しようとしている。その理由が分からずにスレイプモンとティアナは疑問に満ちた顔をするが、このような状況に見覚えがあるメタルガルルモンXとリンディは何かに気がついたようにハッとした顔をする。

「そうか！あの時だ！！あの時にメギドラモンは転移魔法の術式を覚えたんだ！！」

「如何言う事だ！？メタルガルルモンX！！」

「思い出してくれ。メギドラモンは最後に破壊した艦艇の時に何かをしていた・・・・アレは艦艇の中に存在しているデータを吸収していたんだ！この世界を、地球に狂信者達が来た原因を調べる為と他の仲間の所在を知る為に・・・・その時に艦艇の中に存在していた魔法のデータも全て吸い取っていたんだ！！」

『ッ！！！』

「あの人と違って、メギドラモンは純粋なデジモンよ。だから道具も無しでデータ吸収は可能。クッ！！理性が無いと思って安心していたけど、とんでもない勘違いだったわ！！理性が無いんじゃなくて、理性の全てまで復讐に向かっていたのよ！！」

リンディはそう転移しようとしているメギドラモンを見つめなが

ら叫んだ。
　メギドラモンは本気で狂信者達が崇めているベルカを滅ぼすつもりだった。その為に事前に世界から別世界に移動出来るようにする為に転移魔法を覚えた。例え艦艇が逃れようと関係ない。メギドラモンはベルカの全てを焼き尽くすその時まで止まるつもりはなかった。
　最も艦艇が逃げ出さなければメギドラモンは、現実世界の海鳴市に影響を与えない為に本気になったメタルガルルモンXとスレイプモンに元のヴィヴィオとギルモンに戻されていた可能性が存在していただろう。
　最後に残された希望さえも、愚かな狂信者達は自らの手で費やしたのだ。その結果によって犠牲になるは逃げ出した狂信者達ではない、何も知らないベルカ自治区に住む人々だ。
　その事が思い浮かんだリンディ達は即座にメギドラモンのベルカ自治区への転移を止めようと駆け出すが、その前に転移魔法は完成しメギドラモンの体は徐々に消えていく。

ーーーシュゥン！！

「クッ！！それだけはさせないわ！！チェーンバインド！！！」

ーーーガシィィィィィーーーン！！！

「■■■ッ！？」

　メギドラモンが転移する直前にリンディは翡翠色の鎖ーチェーンバインドをメギドラモンの右腕に巻きつけた。
　その突然の事態にメギドラモンはチェーンバインドが巻きついている右腕を振り回すが、リンディは全身の力を振り絞って抵抗する。

ーーーーギュウゥゥゥッ！！

「クッ！！あの人並みの暴れ馬ね！！だけど、負けないわ！！スレイプモン君！！メタルガルルモンX君！！今の内にメギドラモンを押さえつけなさい！！」

『オオォォォォォォォォーーー！！！！！！』

リンディの叫びにスレイプモンとメタルガルルモンXは即座に応じ、転移する直前にメギドラモンを全力で押さえつけようとする。

このままメギドラモンをベルカ自治区に行かせる訳にはいかない。これ以上メギドラモンに暴虐を行わせる訳には行かないと言う思いを抱きながら、メタルガルルモンXとスレイプモンは飛び掛かる。

しかし、二体がメギドラモンに後一歩届く直前にメギドラモンは右腕に巻きついているチェーンバインドを力一杯引っ張りリンディを自身の発生させた転移魔法陣の中に引き込む。

「■■■

ーーービュン！！

「しまった！！！」

転移したメギドラモンとリンディを目撃したスレイプモンは悔しげな声を上げ、メタルガルルモンXと共に地獄絵図に変わり果てた結界内部の海鳴市上空を見つめるのだった。

地球の外側宇宙空間。

その場所にメギドラモンが逃げ出したベルカ艦は留まっていた。

彼らはメギドラモンの恐怖に負けて逃げ出したが、その事が逆に彼らの歪んだ信仰を刺激した。

“聖王陛下の名を汚した竜から、尻尾を巻いて逃げ出した”

その事実は彼らの騎士としての誇りを酷く傷つけ、もはや何振り構わずにメギドラモンを滅ぼうとする。

彼らは残っている全ての質量兵器と艦載兵器をメギドラモンがいるであろう海鳴市に向かって撃ち込むつもりだった。その事でメギドラモンが滅びる可能性や、どれだけの被害が出るかなど彼らは全く考えていない。ただ圧倒的な恐怖を植えつけたメギドラモンから逃れようとする恐怖に駆られた行動なのだ。

その事に彼ら自身は全く気がつかずに、騎士としての誇りと聖王への忠義心の為だと勘違いし、地球に向かって兵器を撃ち込もうとする。

しかし、艦内にいる枢機卿の一人が号令を放つ直前に、凄まじい速さで何かが艦艇を覆っていたフィールドを撃ち破り、そのままブ

リッジ近くの外壁に激突する。

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

「な、何だ！？何が起きたんだ！？」

突然に襲い掛かった艦艇を揺るがすほどの衝撃に、枢機卿はバランスを崩しながらも叫ぶと、オペレーターが状況を報告する。

「何が激突しました！？正体は不明です！？」

「馬鹿な！？この栄光あるベルカの艦のフィールドを簡単に撃ち破っただと！？一体何者だ！？」

「・・・・うるさい奴らだ」

『ッ！！』

突如としてブリッジと通路を繋ぐ扉の向こうから響いた聞き覚えの無い声に、ブリッジにいる誰もが扉に目を向けた瞬間、扉は跡形も無く吹き飛ぶ。

ーーーガシャアアアアアアアン！！

「ギャアアアアアアアアアアーーーー！！！」

ーーーグシャッ！！

『ッ！！』

跡形も無く扉が吹き飛ぶと同時に扉の外を護っていた騎士と思われる男性が悲鳴を上げながら飛んできて、外を見る為にブリッジを覆っていたガラスに激突し、人体がたててはいけない音をたてながら死んだ。
その死に様にブリッジにいる誰もが恐怖に青ざめた顔をしながら、恐る恐る扉の方に顔を向け、それを目にする。
漆黒の体に金色の髪。鈍い銀色の輝きを放つ頭部と胸当てを装備し、三本の爪を備えた黒い手甲ードラモンキラーを両腕に装備した黒き竜人ーブラックウォーグレイモンことブラックを。
彼らはそのブラックの姿に顔を青ざめさせた。幾ら狂信者でも管理世界に恐怖の代名詞とその名を轟かせているブラックの事はよく知っている。そしてブラックに目をつけられた者が生きていない事も。
しかし、ブラックは暴れる様子も見せずにゆっくりと足をブリッジ内部に進め、恐怖によって体が動かない枢機卿の前で立ち止まる。

「質問だ。答えれば長生き出来るぞ」

「な、何だ？・・・な、何が聞きた・・・いんだ？」

「貴様ら、地球で何をした？それだけが質問だ。さっさと答えた方が身の為だぞ！」

ーーーギン！！！

「ヒィッ！！！」

ブラックの凄まじい殺意に満ちた声と眼光に、枢機卿は恐怖に駆られ床に腰が抜けたかのように座り込んでしまう。
それは枢機卿だけではなかった。ブリッジ内部にいる誰もがブラ

ックの放つ凄まじい殺意に声を出す事が出来ず、動く事も出来なかった。
しかし、ブラックからすれば関係ない。別に彼らに聞かずとも地球に居るであろう仲間達に状況を聞けばいいのだ。それをしないのは状況を少しでも早く知る為に過ぎない。答えなければ見せしめとして一人殺すつもりだ。最も答えてもブラックは艦艇内部にいる人間を一人残らず殺す気だった。
ヴィヴィオに危険が迫っているとなれば、ブラックが見逃す筈は無い。どのような答えが出ようと、目の前に居る連中は既にブラックの中で死刑が決定していた。
しかし、その事を知らない枢機卿達はブラックの放つ恐怖に、遂に根負けしたのか地球で起きた事を全て語った。語ってしまったのだ。

そして枢機卿達が恐怖に震えながらも告げた状況に、ブラックは思わずブリッジの天井を見上げながら無力感に苛まれた。

「・・・・そうか・・・・また、俺は間に合わなかったのか」

ブラックはそう悲しみと無力感に苛まれながら声を出した。
“虹色の魔力光を発している竜が現れて、騎士達を虐殺した”。
枢機卿達が告げた事を纏めればそう言う事に他ならない。融合進化の事を知っているブラックからすれば、メギドラモンの正体など簡単に分かる。
自身が再びヴィヴィオとギルモンの危機に間に合わなかった事に、ブラックは凄まじい無力感と悲しみを覚え、辺りへの警戒を止めてしまう。
その隙に枢機卿はオペレーターの一人に何かの合図を送り、オペレーターが何かの操作を素早く行うと、ブラックの背後に存在している扉の方から音が響く。

ーーーピピッ！！

「ムッ！？」

ーーービイィィィーーー！！！！

ーーードゴオォォン！！！

「やったぞ！！！」

背後から響いた音に気がついたブラックが振り返った瞬間、扉の方からレーザーが放たれ、ブラックに直撃した。

それを目撃した枢機卿は喜びの声を上げ、扉の方から姿を現した最後の一体のギズモンＡＴを見つめ、他のブリッジ内部にいる全員も安堵の息を吐きながら喜びに満ちた顔をする。

万が一の時の為に艦内に彼らは一体だけギズモンＡＴを残していたのだ。そしてギズモンＡＴの攻撃はデジモンに対して絶対的な力を持っている。

ブラックの事もデジモンだと思っていた彼らは、ギズモンＡＴの攻撃を食らったブラックは死ぬと思っていた。しかし、彼らは決定的な勘違いをしていた。ブラックはデジモンでは無い。ダークタワーから生まれたダークタワーデジモンと言う名の物質に過ぎない。

そして物質であるブラックにデジモンに特化し過ぎた攻撃を備えたギズモンＡＴの攻撃が効力を発揮する筈もなく、ダメージを全く受けなかったブラックは即座にギズモンＡＴに向かって飛び掛かる。

ーーードゴオォォン！！！

ーーービビビビッ！！

『ッ！！！』

突然に響いた激突音とギズモンＡＴの悲鳴のような警報音に、ブリッジにいる全員がギズモンＡＴの居る場所に顔を向けてみると、ギズモンＡＴはブラックの右足に踏み潰されていた。

ーーーギリギリッ！！

「・・・・・つまらん。心の無い攻撃では俺は倒せんぞ！！」

ーーーバリィィィィーン！！！

ブラックは叫ぶと共にギズモンＡＴを踏みつけていた右足に力を込めて、ギズモンＡＴを完全に踏み潰し、ギズモンＡＴはデータ粒子に変わって消滅した。

それと共にデジタマが出現するが、ブラックは拾う事無く足を枢機卿に進め、恐怖からか涙と鼻水を流してグチャグチャな顔になっている枢機卿に声を掛ける。

「約束だった・・・・長生きするんだな！！」

ーーーブザン！！！

ーーーブシュウゥゥゥゥゥゥゥーーー！！！

「ギッ！ギャアアアアアアアアアアアアアアアーーーーー！！！！！」

『ヒィッ！！』

ブラックのドラモンキラーによって四肢を切り裂かれ、凄まじい血を傷口から噴出させている枢機卿の姿に、ブリッジにいる全員が恐怖に満ちた悲鳴を上げた。
ブラックはその声を耳にすると、達磨になって床でのた打ち回っている枢機卿から目を逸らし、恐怖に震えているオペレーター達に顔を向ける。

「如何した？治療をしてやったら如何だ？そうすれば助かるぞ・・・・最もこの屑と同じ状態になっても治療など出来るか？」

「ま、まさか・・・そ、そんな」

「フン、気がついたか。貴様らに与えたチャンスは生き残れるチャンスではない。苦しんで死ぬか、楽に死ねるかの選択だ」

『ッ！！！』

「最も、もうお前らは選択した・・・・貴様らは地獄を味わって死んでいくがいい！！オオォォォォォォーーーー！！！！」

ーーーブザン！！ブザン！！！ブザン！！

『ギャアァァァァァァァァァーーーーー！！！！！！！！』

ブラックが突撃すると同時に、ブリッジ内部に凄まじい量の血液と断末魔の叫びが響くが、ブラックは構わずにブリッジ内部だけではなく艦艇内部に全ての人間の四肢を切り落として行く。
だが、決してその中に気絶する者もショック死する者は居ない。ブラックはわざと四肢を切り落とす程度で止め、死なないように加

減しながら地獄を作り続ける。一思いにも死なせるなど絶対にブラックはさせない。ヴィヴィオとギルモンが味わった悲しみと苦痛を少しでも味合わせる為に、艦艇内部にいる人間の四肢を切り落とし続け艦の壁を真っ赤に染めていく。

そして三十分後には艦艇の中にいた人間全員が床に転がり、四肢を失った苦痛と恐怖にのた打ち回りながら悲鳴を上げていた。しかし、ブラックはそれだけでは済まさないと言うように艦艇の壁に幾つもの巨大な穴を作り、内部に存在していた酸素を抜いていく。

それによって苦痛と呼吸困難に全ての人間が苦しむが、ブラックはもはや彼らの事など気にせずに振り返る事無く地球に向かう。

後には酸欠と大量の血を流して気が狂ったように苦しむ狂信者達が残されるが、十分後には彼らは生きながらにして地獄を味わい、全員苦悶に満ちた顔をして死んでいった。

黙示録（メギドラモン）後編（後書き）

次回予告

暴走するメギドラモン。

その脅威は遂に罪の無い人々にまで伸びる。

それを阻むように立ち塞がる機動六課と真竜。

その時にメギドラモンに訪れる異変。

次回、漆黒の竜人と少女、『暗黒の騎士王！カオスデュークモン！！』

暗黒竜は全てを闇に包む騎士に変わる。それによって齎されるのは、親子の対決。

クリスマス特別記念、劇場版漆黒の竜人と少女『ディアボロモンの逆襲』前編

作者のゼクスです。

何とかクリスマスまでには完成させるつもりでしたが、前編までしか完成出来ませんでした。申し訳ありません。

ですが、二十八日までには何とか完成させます。

クリスマス特別記念、劇場版漆黒の竜人と少女『ディアボロモンの逆襲』前編

それはブラックが世に現れる前の出来事。
世界を滅ぼす力を持った悪魔のようなデジモンと、勇気と友情、そして人々の想いが一つになった時に現れた聖騎士デジモンとの戦いがあった。
その戦いは凄まじかったが、聖騎士デジモンは人々の想いを自身の力に変え、悪魔のようなデジモンを撃ち破り、世界は救われた。
それで全てが終わったかのように思われた。
しかし、悪魔は滅んではいなかった。狡猾にも生き残り、自身の目的を阻んだ聖騎士デジモンを滅ぼす為に再び動き出そうとしていた。
だが、悪魔は知らなかった。自身と同様に悪魔ごとき力を持った存在が聖騎士デジモンを象る想いの一つ勇気に救われ、例えどれほどの距離が離れていようと、勇気を救いに向かう事を。

三大天使が見守るデジタルワールド。
他のデジタルワールドと同様に広大な自然が広がる世界。
そしてその場所に存在する切り立った巨大な山脈の上空で背中の巨大な羽を生やした鳥の顔をした鳥人型デジモン―ガルダモンと漆黒の竜人―ブラックがぶつかりあっていた。

ガルダモン、世代／完全体、属性／ワクチン種、種族／鳥人型、必殺技／シャドーウィング、ファイアハリケーン
大空をかける翼と敵を切り裂く巨大なツメを持つ鳥人型デジモン。
進化条件は厳しく、選ばれたデジモンのみがガルダモンになれると言われ、大地と風の守護神と崇められて世界の平和が乱れると出現

し、平和へ導くと言われている。必殺技は、炎に巨大な鳥の形を持たせて相手に向かって放つ『シャドーウイング』に、巨大な炎の竜巻を発生させる『ファイヤーハリケーン』だ。

「オオォォォォーーーーーー！！！！！」

ーーードゴオオォォン！！

「ガアッ！！」

ブラックが突き出した渾身の力を込めたドラモンキラーを胸に受けたガルダモンは苦痛の声を上げて、山脈に激突した。

その様子をブラックはつまらそうな視線で眺めながら、地面から起き上がろうとしているガルダモンに質問する。

「フン、この辺りで最強と言われているデジモンだと聞いて来て見れば、この程度の実力か・・・正直期待外れだ」

「グゥゥゥゥッ！！シャドーウイング！！！」

ーーーピィィィィーーー！！！！

ブラックの残念さに満ちた声を聞いたガルダモンは悔しげな唸り声を上げながら立ち上がり、全身から炎を発生させ、ブラックに向かって巨大な炎の鳥ーシャドーウングを放った。

しかし、ブラックは高速で迫って来ているシャドーウイングを目にしても慌てる事無く右手を凄まじい速さで横に振り抜く。

「ムン！！！」

ーーーバッシュン！！！

「ガッ！！」

ブラックが右手を振り抜くと共に迫って来ていたシャドーウイングは簡単に霧散した。

その事実にガルダモンは目を見開きながら、自身の最大の技を簡単に霧散させたブラックを見つめる。しかし、ブラックからすれば当然の事であり、ガルダモンの驚愕などに構う事無く一瞬の内にガルダモンの目の前に移動する。

ーーービュン！！

「ッ！！」

「終わりだ。ドラモンキラーー！！！！」

ーーーードグゥオオン！！

「ガハッ！！・・・・・」

ブラックが突き出したドラモンキラーを避ける事が出来ずに鳩尾に直撃を食らったガルダモンは、口から血を吐き出し、そのまま気絶してしまった。

ブラックはその様子に心の底からつまらなそうな顔をしながらガルダモンを地面に倒れさせると、そのまま気絶しているガルダモンに背を向け、前に向かって歩き出す。

（つまらんな。此処最近はつまらん敵ばかりだ。あの女が定期健診でアルハザードに戻っている内に暴れられると思っていたが、この

程度ばかりではつまらん）

ブラックは本気で今の戦いに何も感じる事が出来なかった。
数日前にリンディがアルハザードに帰還し、自由に暴れられると思って数日間ずっと戦い続けていたのだが、正直に言えばブラックからすれば手応えが敵ばかりだったのだ。しかし、それも仕方が無いだろう。ブラックが戦いたいと思っている究極体のデジモンは滅多な事では表に出て来る事が無いデジモン達だ。完全体ではブラックの戦闘本能を満たせる者は限られている。その事はブラックも分かってはいるが、自身の本能を抑えきれずに居た。
その様にブラックが自身の戦闘本能について考えていると、ブラックの頭上に突如としてオファニモンが姿を現す。

ーーービュン！！

「・・・・何の用だ？漸く管理世界で動きが現れたのか？」

「いえ、違います。ですが、事態は一刻を争います。貴方に力を貸して欲しいのです」

「ほう、貴様が其処まで言う敵か・・・・面白い。此処最近つまらん敵ばかりだったからな。丁度暇だった所だ。場所を教えろ。すぐに向かってやる」

「場所はこの世界から離れた別世界のデジタルワールド・・・・貴方の生まれ故郷の世界です」

「ッ！！！」

オファニモンが告げた場所にブラックは衝撃を感じた。

ブラックが生まれた故郷に危機が迫っている。それが意味する事は一つしかない。親友であるアグモン、そして自身を救ってくれたヒカリ達に危機が迫っていると言う事に他ならない。
その事が思い浮かんでたブラックは、目を細めながらオファニモンに視線を向ける。

「詳しく事情を話せ。一体何があの世界で起きているのかを」

「もちろんそのつもりです。あの世界に迫っている脅威を止める為には、貴方の力も必要でしょうから」

そうオファニモンは答えると、ブラックに全てを話す。
アグモン達のいる世界に迫っている脅威。それを知ったブラックは即座に自身のパートナーであるルインを呼び出し、オファニモンの力で二度と戻る積もりは無かった故郷へと帰還する。親友であるアグモン達を助ける為に。

別世界の地球。ブラックが生まれたデジタルワールドと隣接している世界。
その場所のお台場に存在しているビルの屋上で、ブラックはルインを伴いながら静かに立ち続け、街を眺めていた。
その胸の宿る想いは郷愁の念。二度とこの世界に戻って来る積もりはブラックには無かった。
憎しみに支配され、多くのデジモン達を殺し、世界のバランスさえも限りなく危険なレベルにまで崩した自分がこの世界にいる資格は無いとブラックは考えている。例え受け入れられても、自身の罪は消えない。だからこそ、ブラックはオファニモン達にこの世界の事を知らされても、戻って来るつもりはなかった。この世界が滅び

るかもしれない危機が無ければ。

「・・・ブラック様・・・それでこれから如何しましょう？やはり、この世界にいるブラック様の仲間に接触を…」

「する気は無い。俺はこの世界の危機が無くなれば、オファニモン達の世界にすぐに戻る。連中が奴に出会う前に、俺が奴を滅ぼす・・・・お前はさっさと奴が潜んでいる電子空間を探せ」

「・・・・了解です・・・少し情報を集めて来ます・・・（ブラック様には申し訳ありませんけど、会いに行って見ましょう・・・ブラック様を救った人間達に）」

そうルインは内心で呟くとブラックに背を向け、ビルから降りて行く。

後には静かに街の中の機械関係から出て来る幼年期デジモンを険しい瞳で見つめるブラックだけが、ビルの屋上に残された。

東京の街中。

その場所に存在している道を、テイルモンを腕の中に抱いたヒカリがお台場中学に向かって急いで走っていた。

突然に東京の街中の機械関係から溢れるように姿を現した同じ種類の幼年期デジモン。

そのデジモンの危険性をヒカリとテイルモンは知っていた。そのデジモンに対する対策を取る為に、ヒカリとテイルモンは仲間である光子郎の召集に応じてお台場中学に急いでいた。

しかし、そのヒカリとテイルモンが走っている道路の先から、何処か普通の人間とは違う雰囲気を放っている銀髪に青い瞳をしてロ

ングスカートを着ている女性が歩いて来る。
その女性の姿を見た瞬間、テイルモンは何かを感じたのか女性を険しい視線を睨みつける。

「ウゥゥッ！！」

「テイルモン？如何したの？」

何時もとは違うテイルモンの様子にヒカリは疑問を覚えながら質問するが、テイルモンは答える事無く女性を睨み続ける。
そのテイルモンの視線に女性は気がついたのか、困ったような笑みを僅かに口元に浮かべながらヒカリとテイルモンに声を掛ける。

「あら？其方の変わったペットに嫌われたんですかね？」

「アッ！すいません！」

「気にしないでいいですよ。それにしても其方のペットさんといい、街の中に溢れている謎の生物・・・この街は変わっていますね・・・・まるで何か危機が迫っているような」

『ッ！！』

東京に起きている事を知っているような女性の言葉にヒカリとテイルモンは驚くが、女性はそれ以上何も言うつもりは無いのか、ヒカリの背後に向かって歩き出す。
ヒカリとテイルモンは女性の動きに警戒するが、女性は何もする気は無いと言うように無防備に前へと進み、ヒカリの横に差し掛かった瞬間にヒカリだけに聞こえるように囁く。

「気をつけた方がいいですよ。この事件の犯人は、恐ろしく狡猾ですからね。二重三重の手を打っています」

「えっ！？」

囁くように告げられた女性の言葉にヒカリは慌てて女性に顔を向けるが、振り返った先には女性の姿は全く存在せず、ヒカリとテイルモンは幽霊でも見たような顔をしながら顔を見合わせるのだった。

そして三十分後。ヒカリとテイルモンは来る途中で出会った女性の事が気になりながらも、お台場中学のパソコン部の部室の椅子に座っていた。

「ん？ヒカリにテイルモン？如何したんだ？」

「何か在ったのか？」

何かを考えているような顔をしながら座っていたヒカリとテイルモンに気がついた、ヒカリの兄である太一と金髪を短髪に整えた髪型をした男性ー石田ヤマトが心配そうな顔をして質問した。

「・・・うん・・・ちょっと此処に来る前に、女の人に会ったんだよ」

「女？誰だ？」

「分からないの・・・会った事も無い人だったから・・・・だけど、その人はこう言っていたの。今回の事件の犯人は、二重三重の手を打っているって」

「それは本当ですか！？」

パソコンの設定をしながら話を聞いていた光子郎は目を見開きながらヒカリに質問し、他のメンバー一京、賢、伊織、タケル、太一、ヤマト、そしてデジモン達もヒカリとテイルモンを見つめるが、テイルモンは更なる事実を伝える。

「間違いないわ・・・だけど、その女性は多分人間では無いわ」

「人間じゃないって！？如何言う事だよ！？テイルモン！！」

「一目見て私には分かったの・・・・あの女性は人間と言うよりも、ゲンナイに近い感じを受けた・・・立ち振る舞いにも隙は無かったし、只者では無いわ、太一」

「ゲンナイさんに近い感じ？そんな話は聞いていませんが」

光子郎はそうテイルモンの報告に疑問の声を上げた。

光子郎は定期的にゲンナイと今回の事件について連絡を取り合っていたが、テイルモンの言うゲンナイに近い印象を受ける女性が関わっているなど聞いた覚えは無い。では、ヒカリとテイルモンの前に現れた女性は何者なのかとその場にいる全員が考えるが、答えは出る事無く悩み続ける。

そして全員が悩んでいると、突如として部室のドアをノックする音が響く。

ーーートントンッ！

「デジデジ」

「モンモン」

ーーーガラガラ

「失礼します」

合言葉が答え終わると共に部室の扉が開き、カバンを肩に提げた大輔が部室の中に入って来た。

それを光子郎は確認すると、ヒカリとテイルモンが告げた謎の女性の事は一先ず置いて、部室の中にいるメンバーを見回す。

「これで全員ですね」

「ミミさん、丈さん、空さんは？」

「ミミさんは丁度今は飛行機の中です。丈さんは高校の入学手続きです。空さんは？」

「テニス部の合宿・・・今こっちに向かって居る所だ」

光子郎の質問にヤマトが椅子に座りながら答えた。

その事でこの場にいないメンバーの理由が分かった大輔は、疑問に満ちた顔をしながら光子郎に顔を向け質問する、

「で、一体如何したんですか？」

「・・・これを見て下さい」

ーーーポチン！

光子郎は持っていたリモコンを操作し、部室の中に在る大きなモニターに画像を映し出した。
その画像に全員が目を向けてみると、干してある布団の前でピースサインをしているゴーグルを首に掛けた少年の映像が映し出された。
その映像を見た大輔は笑いが抑えられないと言うように口に右手をやりながら、左手で画像を指差す。

「ハッハッハ、誰こいつ？」

「・・・・すまん、俺だ」

「ハッハッハ・・・・」

太一の言葉に大輔は乾いた笑い声を上げながら、太一の顔を見つめた。
それに気がついた光子郎は再びリモコンを操作し、今度はヤマトと共に街の中を歩いている空との画像に変える。

ーーーピッ！

「ネットの中でばら撒かれているんです」

「悪質な悪戯ですよね！？」

「犯人は分かっています・・・・ディアボロモンの仕業のようです」

「ディアボロモン？」

「三年前のネットの現れた奴の事ですよね？」

「オメガモンが倒したんじゃなかったんですか？」

「倒した筈だった」

「奴はまだ生きていたんだ」

「如何言う事ですか？」

ヤマトと太一の言葉を耳にした伊織が質問した。

それに気がついた光子郎は、自身が弄っていたパソコンの前に移動し、ディアボロモンについて説明し出す。

「あの戦いで生き残ったデータが増殖したんでしょう。奴は普通のデジモンとは違って、自身のデータをコピー出来る特殊なデジモンですから。更に奴はメールと共にクラモンを現実世界に送り込んでいます」

光子郎はそう状況を伝えると共にパソコンの画面を皆に見えるように回し、コンソールを弄ると件のメールと思われるメールを開き、クラゲのような姿をして一つ目を持ったデジモン－クラモンがパソコンに映し出された。

クラモン、世代／幼年期？、属性／解析不可、種族／分類不可、必殺技／グレアーアイ

コンピューターのバグによって突如出現した謎のデジモン。幼年期でありながら高いネット侵入能力を持っている。他のデジモンとは違い、進化ルートはひとつしかないが自分自身をコピーし、病原菌のように無数に増殖が出来ると言う恐ろしい力を持っている。人間の破壊本能が詰まったデジタマから誕生したとされている最悪の幼

年期デジモン。必殺技は、巨大な目の部分からアワのようなモノを出す『グレアーアイ』だ。

「大丈夫なんすか！？それ！？」

パソコンに映し出されたクラモンの映像に大輔は悲鳴のような声を上げながら、クラモンの画像を指差した。

当然だろう。画像からクラモンが現れると言う事は、光子郎が映し出した画像からもクラモンが現れると言う事に他ならない。その事はもちろん光子郎も分かっている。

「えぇ、これはキャプチャーして貰った映像ですから」

光子郎はそう大輔の質問に答えると共に、画像をパソコン内部のゴミ箱の中に移動させ消去した。

その事に全員が安堵の息を吐くと、タケルが光子郎に顔を向けながら声を出す。

「核ミサイルまで発射しようとした奴だ」

「現実世界に出来て来たら、何を仕出かすか分からないよ」

タケルの言葉に頷くようにパタモンも声を出し、全員が世界に迫っている危機を充分に理解し、太一は、光子郎に顔を険しくしながら向ける。

「光子郎。ネットの中にゲートを開けないか」

「何処かにクラモンをばら撒いているマザーが居る筈だ」

「そいつを叩く！」

ーーーパシッ！！

太一は声を出すと共に手を打ち合わせた。

クラモンをばら撒いている元凶である本体のディアボロモンを倒せば、少なくともこれ以上のクラモンの現実世界侵入が治まる。そう考えた太一とヤマトは、クラモンを生み出しているマザーであるディアボロモンを倒そうとネット世界に入り込もうとする。

その事に気がついたヒカリは慌てて椅子から立ち上がり、太一を止めようとするが、その前に大輔が太一に詰め寄り叫ぶ。

「俺も行きます！！」

「大輔、お前達はクラモンの方を頼む。現実世界で奴らが進化したら大変だからな」

「そうですよ。此処は『オメガモン』に任せるべきです。太一さん、ヤマトさん、ネット界へのゲートでアグモン達と合流して下さい。その後メールの発信元に誘導します。他の皆はクラモンの回収して下さい。くれぐれも攻撃を加えて進化させないように。捕まえたクラモンはＤ－３のゲートを使って僕のパソコンに転送させて下さい」

そう光子郎はパソコンを弄りながらこれからの方針を全員に伝えた。

その会話を聞いていたヒカリは僅かに落ち込んだ顔をしてしまう。ヒカリもディアボロモンの異常過ぎる強さを知っている。三年前は『ウォーグレイモン』と『メタルガルルモン』の二体が同時に掛かっても倒せなかった強敵。しかも今回の目的は確実に『オメガモン』への復讐しか考えられない。

その敵の下に自身の兄が向かう事にヒカリは凄まじい不安に襲われながら、一年前ほど前に自分達を護る為に命を散らしたこの世界の未来を知っていたデジモンが頭の中に浮かび上がって来る。

（・・・・ブラックウォーグレイモンは、この事も知っていたのかな・・・・知ってたら、如何していたんだろう？）

「大丈夫よ、ヒカリ。オメガモンは負けないわ」

「・・・うん・・・そうだね」

不安を消すように告げられたテイルモンの言葉にヒカリは、僅かに安心感を得ながら椅子から立ち上がり、光子郎の指示通りに動こうとする。だが、その胸の内にある漠然とした不安だけは消す事が出来なかった。そしてその不安が的中してしまう事を、神ならぬヒカリには分からなかった。

お台場中学の屋上。

その場所でヒカリとテイルモンの前に在られた女性ールインは耳に掛けていたイヤホンからヒカリ達の会話を全て聞いていた。何も興味本位でルインはヒカリとテイルモンの前に現れた訳ではない。

確かにブラックを救ったヒカリ達には興味は在ったが、それ以上にブラックの指示通り出来るだけ早く目的の敵であるディアボロモンの所在地を知る為に現れたのだ。

その為に気づかれないようにヒカリに盗聴器を仕掛け、ヒカリ達の行動方針を聞いていた。

「フム、なるほど。メールの出所先ですか。その場所にディアボロ

モンは・・・・・それにしてもヒカリと言う女性・・・・・如何にも気に入らないんですよね・・・何だか凄まじい最大のライバルに出会ったような？・・・・ん～～？」

ルインはヒカリに対する自身の気持ちが分からなかった。
別にブラックを救った人物だからと言って、ルインは他人にあまり興味を示す気は無かった。しかし、ヒカリの顔を見た瞬間、ルインはヒカリがリンディより、そして最も嫌っている半身であるリインフォース以上の自身の最大のライバルだと何故か確信した。別にヒカリが嫌いだと言う訳ではない。寧ろルインにしては珍しく他人でいながらも、好感が持てる人間だった。
しかし、如何してもヒカリには好感がルインは持てなかった。

「何で私はあの娘をライバルだと認識したのでしょうか？・・・・・分かりません・・・・まぁ、それよりもブラック様の所に戻りましょう。さっさとディアボロモンを倒して、元の世界に戻らないといけませんからね」

そうルインはヒカリに対する自身の想いについて考えるのを止めると、自身の主であるブラックの下に急いで向かい出した。

東京の街中に存在する路地裏。
その場所には先ほどまで数体のクラモン達が動き回っていた。しかし、そのクラモン達は既に一体まで数を減らし、最後の一体のクラモンは恐怖に震えながら仲間を殺した漆黒の竜人ーブラックから逃れようと壁に張り付いていた。

「クラ～！！！」

「フン、やはり進化出来ないようにプログラムされているか」

恐怖に震えているクラモンを見下ろしながら、クラモン達を排除していたブラックは険しい声を出した。

光子郎達とは違い、この世界に関する知識を持っていたブラックはクラモンが進化しないであろう事を確信していた。例え全てのクラモンがディアボロモンに進化したとしてと、その間には幼年期?、成長期、成熟期、完全体と五段階の進化が存在している。しかもクラモンとディアボロモン以外は自身のコピーを作り出す能力は存在していない。

その間ならば『オメガモン』ではなくても、他のデジモン達で進化したデジモンを倒す事が出来る。特にディアボロモンは『オメガモン』の力をよく知っている。だからこそ、『オメガモン』を倒す為にはあのデジモンの力以外に考えられない。

そう考えたブラックは試しに数体のクラモンに攻撃したのだが、予想通りクラモンは進化する事無く簡単に消滅した。

「貴様の主と交信が出来るのならば、死ぬ前に伝えておけ。すぐに戦いに向かってやるとな!」

「クラーー!!!」

「逃がさん!!ドラモンキラーーー!!!!」

ーーードスゥン!!!

ーーーバリィィィィーーン!!!

慌てて逃げようとしているクラモンに、ブラックは迷う事無く右

腕に装備しているドラモンキラーの刃を突き刺し、クラモンは悲鳴を上げる暇も無く消滅した。
それを確認するとブラックはその場から背を向け、認識阻害の魔法を使用し、街の中を人々に認識される事無く歩き始める。

（もうすぐルインが、敵の情報を手に入れて来るだろう。そうなればオファニモンから渡された力でネット内に入り込み、ディアボロモンを倒す！！ウォーグレイモンとメタルガルルモンの二体がかりでも倒せなかった存在！！久々に楽しめる戦いが出来そうだ）

そうブラックは内心でディアボロモンとの戦いに想いを馳せながら街の中を歩いていると、ブラックの前をチビモンとワームモンを連れた大輔と賢が通り過ぎる。

（ッ！！）

二人とチビモン、ワームモンの姿にブラックは思わず声を出してしまいそうになるが、何とかそれを押さえ込み、大輔達の姿をジッと見つめる。

「こっちの方でクラモンを見たって話だぜ」

「あぁ、そうらしいな。とにかく一体でも多くクラモンを光子郎さんの下に送ろう。光子郎さんの話だと更にクラモンが出て来ているそうだからな」

（其処まで話は進んでいたか。一刻も早くルインと合流した方がいいな）

大輔と賢の会話から状況が分かったブラックは、すぐさま近くの

路地裏の中に身を隠し、ルインとの合流を急ぐ。
だが、ブラックは気がついてはいなかった。大輔と賢はブラックの姿に気がついていなかったが、チビモンとワームモンが顔を青ざめさせ、まるで幽霊でも見たような顔をして顔を見合わせている事に。

「・・・・・なぁ・・・・・大輔？」

「・・・・・ねぇ・・・・・賢ちゃん？」

「うん？如何したんだよ？チビモン」

「ワームモンもそんなに顔を青ざめさせて？一体如何したんだい？」

チビモンとワームモンの様子が可笑しい事に気がついた大輔と賢はそれぞれチビモン達に質問した。

『・・・・・幽霊って昼間も出るの？』

『ハアァ～～～！？』

チビモンとワームモンの質問に大輔と賢は同時に訳が分からないと言う声を上げ、チビモンとワームモンを見つめると、チビモンがブラックが入って行った路地裏を恐る恐る指差す。

「・・・今さっきさ・・・・ブラックウォーグレイモンが・・・・アソコの路地裏に入って行ったんだよ」

『ブラックウォーグレイモンだって！？』

「うん、僕も見たよ・・・・歩いている周りの人達は誰もブラックウォーグレイモンの姿に気がついていなかったけど・・・僕らの事をジッと見ていたんだ」

『ッ！！』

ワームモンが告げた言葉に大輔と賢は見開き、すぐさまチビモンが指差した路地裏の中に向かって駆け出し、辺りを見回すが、ブラックの姿は影も形も存在していなかった。

「・・・いないよな？」

「あぁ・・・・見間違いじゃ無いのかい？ワームモン」

「違うよ！絶対にアレはブラックウォーグレイモンだったよ！！」

「間違いないぜ！確かにブラックウォーグレイモンだった！」

「だけどよぉ・・・・・・アイツは・・・・・」

「・・・・・」

ワームモンとチビモンの言葉に、大輔と賢は落ち込んだように顔を俯かせてしまう。

二人ともブラックの最後を知っている。何せ二人はブラックが死ぬ瞬間をその目で目撃したのだから。

自身の体を消滅させて、光ヶ丘のゲートを閉じる為にその命を使った瞬間を。夢で在ってくれと、二人やタケル、伊織、京、そしてヒカリとアグモン達は願った。しかし、現実は変わる事無くブラックは死んでしまった。

その事は大輔達の忘れられない悲しい思い出として、その胸の内に強く残っている。
そのブラックが東京の街中に姿を見せた。
「・・・・一体何が起きているんだ？・・・・ヒカリさんが会ったって言う謎の女性に、死んだ筈のブラックウォーグレイモン・・・・この東京で何が起きようとしているんだ」
更に深まる謎に賢は空を見上げながら疑問の声を上げるが、大輔、チビモン、ワームモンは答える事が出来ずに同様に疑問に満ち溢れた顔をするのだった。

ネット空間内部に存在する通路。
その場所にも大量のクラモンが存在し、通路内部を通って現実世界に出ようとしていた。
そのクラモン達とは逆にアグモンとガブモンと合流した太一、ヤマトは、クラモン達が出て来る方向に向かって真っ直ぐ進んでいた。
ーーードン！！
「ワァッ！！」
「アグモン！気をつけて！」
前方から進んで来たクラモンと激突したアグモンに、ガブモンが声を掛けた。
それと共にアグモンはすまなそうな顔をしながら、再び太一達と並ぶようにして前に進むと、太一が辺りの大量のクラモン達に顔を

向ける。
「こいつ等、俺達を無視して何しようってんだ？」
「大輔達に任せたんだろう？俺達はとにかく大元を叩くだけだ」
クラモンを見ながら上げた太一の声に、ヤマトは前方を険しい顔して見つめながら答えた。
その言葉に太一も最もだと思い、前方に顔を向けると共に自身のデジヴァイスを握る。
「行くぞ！！」
ーーーピカァァァァァァーーン！！
太一が叫ぶと共に太一のデジヴァイスとヤマトのデジヴァイスが光り輝き、アグモンとガブモンの体がオレンジ色の光と青色の光に包まれ、光が消えた後にはアグモンはウォーグレイモンの頭部に、ガブモンはメタルガルルモンの頭部に変わっていた。
それと共に太一はウォーグレイモンの頭部を掴み、ヤマトもメタルガルルモンの頭部を掴むと、二つの頭部は光の速度で前へと進み、光が通路内部に満ちる。
そして光が消えた後には、白き鎧で身を包み、背中に内側が赤く白いマントを羽織って、左腕にオレンジ色の肩当てをつけてウォーグレイモンの頭部を模した篭手に、左腕に青色の肩当てをつけメタルガルルモンの頭部を模した篭手をつけた騎士が姿を現す。
その騎士こそウォーグレイモンとメタルガルルモンが人々の平和を願う思いから融合した究極体を越えた合体究極体。最強の称号であるロイヤルナイツに名を連ねる聖騎士デジモン一『オメガモン』だった。

オメガモン、世代／究極体、属性／ワクチン種、種族／聖騎士型、必殺技／ガルルキャノン、グレイソード、ソード・オブ・ルイン

遥か昔『古代デジタルワールド期』に発生した極度の“デジタルクライシス”時に、2体の究極体デジモン、ウォーグレイモンとメタルガルルモンが平和を願う人々の強い意志によって融合し、誕生した聖騎士型デジモン。究極体を越えた合体究極体。また『ロイヤルナイツ』の一員としても高い地名度を誇っている。右腕はメタルガルルモンの特徴を色濃く残しており、大砲やミサイルなどが装備され、左肩には『ブレイブシールド』、腕には『グレイソード』と呼ばれる剣を装備し、こちらはウォーグレイモンの特徴が強く現れている。剣と大砲による攻撃、『ブレイブシールド』による防御、そして回避時や飛行時に自動的に出現する背中のマントなど、如何なる状況下の戦いにおいても対応する事が出来る優れたトータルバランスを持っている最強の聖騎士型デジモンの一体だ。必殺技は、ガルルモンを模した右腕の篭手から砲塔を出現させ、相手に向かって氷の砲弾を撃ち出す『ガルルキャノン』に、ウォーグレイモンを模した左腕の篭手から出現させたデジモン文字で『オールデリート』と刻まれたグレイソードに炎を纏わせ、相手を斬りつける『グレイソード』。そしてグレイソードから放たれる究極乱舞『ソード・オブ・ルイン』だ。

遂にその姿を現したオメガモンは右肩にヤマトを、左肩に太一を乗せて通路の先に見える広い電子空間に飛び出す。

そして飛び出した空間を見回してみると、無数のクラモン達と黒い球体の中に潜んでいるオレンジ色の髪を持ち、胸に砲塔と思われる箇所を備え、間接が存在しない長い腕を持った悪魔のようなデジモン―ディアボロモンの姿を目にする。

ディアボロモン、世代／究極体、属性／ウィルス種、種族／分類不

可、必殺技／カタストロフィーカノン、パラダイムロスト、闇の力、システムフェイル
クラモンの最終形態デジモン。ネットワーク上のあらゆるデータを吸収し、進化と巨大化を繰り返す。ディアボロモンの手足は柔らかく素早く伸び、手や足の爪は鋭く格闘戦を得意としている。またクラモンの時にあった自分自身で自分のコピーを作る能力も復活し、自身を無数に分裂させると言う恐ろしき能力を持っている究極体デジモン。必殺技は、胸の発射口から破壊エネルギー砲を相手に向かって発射する『カタストロフィーカノン』に、自身の全ての力を解放して相手と共に自爆する『パラダイムロスト』。周囲のデータを吸収し体を巨大化、無数の腕で相手を殴り続ける『闇の力』。そして自分の周りに居るデジモンのエネルギーを吸い取り、強制的に一段階退化させる『システムフェイル』だ。その他にも数多くの技を所持しているぞ。

「何だってんだこれは！？」

余りにも多すぎる数え切れないほどのクラモンの数に、太一は慌てながら声を上げた。
幾らなんでもクラモンの数が多過ぎるのだ。視界が封じられるほどの数のクラモン。その数は一万や二万でも足りないほどであろう。
しかし、オメガモンは太一の声にも慌てる事無く、自身に向かって寄り集まって来ているクラモンに目を向けながら左腕を掲げ、グレイソードを射出する。

ーーーガッシャン！！

「オオォォォォォォォーーー！！！！！」

ーーーブオォォォーーン！！

オメガモンはグレイソードを射出すると共に、全力で横薙ぎに振るい、視界を塞ぐほど存在しているクラモン達を吹き飛ばす。
しかし、すぐに吹き飛ばされた以上のクラモン達がオメガモンの周りに寄り集まり、オメガモンの動きを阻害する。

「クソッ！！ディアボロモンを！！マザーをやるんだ！！」

ーーーガッシャン！！

ヤマトの叫びにオメガモンは即座に応じ、今度は右腕を軽く振るうと、メタルガルルモンを模した篭手の口部分から巨大な砲身を展開し、黒い球体の中でオメガモンの動きを観察しているディアボロモンに照準を合わせ砲撃を撃ち込む。

ーーーードゴオォォン！！！

『クラクラクラクラ〜〜〜！！！！！』

ーーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！！

オメガモンの撃ち出した砲撃がディアボロモンに向かって進む途中で、無数のクラモン達が砲弾の前に盾のように立ち塞がり、砲撃はクラモン達に直撃し爆発を起こした。
しかし、本来の目標だったディアボロモンには砲撃の余波さえも届く事が無く、ディアボロモンはオメガモンに嘲りに満ちた笑みを向ける。
本来のオメガモンの砲撃ならば、ディアボロモンに大ダメージを与える事は確実だった。だが、ディアボロモンの周りを囲んでいる無数のクラモン達の方に問題があるのだ。幼年期のクラモン達では

砲撃を防ぐ事など不可能に近い。だが、クラモン達の数は最低でも十万以上を超えている。力が足りなければ数で補う。そして例え砲撃を連射してクラモン達を排除したとしても、クラモンには自身のコピーを病原菌のように無数に増やせると言う最悪な特性を持っている。つまり、オメガモンの凄まじい威力を持った砲撃を持ってしても全てのクラモンを消滅させるのは不可能に近い。

その上ディアボロモンは三年前の自身のミスが分かっているのか、オメガモンと今戦っているフィールドの広さは異常と言っていいほどの大きさだ。狭い場所ならば砲撃の余波で数多くのクラモン達の巻き込む事が出来るが、広すぎるフィールドでは余波からクラモン達は逃れる事が出来る。

完全に今戦っている場所はオメガモンにとって最悪なフィールドであり、ディアボロモンにとって最高の場所だった。このままオメガモンが力を使ってディアボロモンに攻撃をしても、その度にクラモン達が立ち塞がり、オメガモンの攻撃を防いでいく。そうなれば幾ら最強の騎士の一人であるオメガモンでも体力を失ってしまい、疲弊した所を襲われディアボロモンに倒されてしまう。

その事が分かった太一とヤマトは険しい顔をしながら、オメガモンの攻撃を防ぎ続けるクラモン達と嘲りの笑みを浮かべ続けているディアボロモンを睨むのだった。

現実世界渋谷区。

その場所で大輔、賢、ブイモン、ワームモンはビルの壁に置かれている巨大テレビに映し出されているオメガモンとディアボロモンの戦いを見ていた。ディアボロモンは三年前と同じように自身がオメガモンを倒す映像を多くの者に見せる為に、戦いの映像を流していたのだ。

如何見ても戦いの状況はオメガモンの方が不利だと大輔達には分

かっていた。
やはり全てがディアボロモンの策略だったと悔しげに顔を歪めていると、大輔の持っている携帯から音が鳴り響く。
ーーーピロピロッ！
「ん！何だよこんな時に？もしもし！！」
『大輔君！オメガモンの救援にはヒカリさんとタケル君が向かいました！君達はくれぐれもクラモン達をお願いします！！』
ーーーピッ！
「・・・・ヒカリちゃーーん！！」
ーーーガシッ！！
「よせ」
携帯を切ると共に走り出そうとした大輔の服の襟首を賢は掴み、大輔の動きを押さえながら声を掛ける。
「光子郎さんの指示に従った方がいい」
「って！放って置けるかよ！！」
賢の言葉に大輔は反論するように叫び、自身もオメガモンの救援に向かおうと賢に伝えようとするが、その直前に大輔のカバンの中から顔をだけを出していたブイモンがテレビを指差す。

「大輔！！アレ見て！！」

『ん？』

ブイモンの叫びに大輔だけではなく、賢とワームモンもブイモンの指差すテレビに顔を向けてみると、ヒカリを肩に乗せたエンジェウーモンと、タケルを肩に乗せたエンジェモンがオメガモンとディアボロモンとの戦いの場に飛び込む映像が流れていた。

ネット世界、ディアボロモンとオメガモンが戦っている電子空間。ディアボロモンとオメガモンとの戦いの場所に飛び込んだエンジェウーモンとエンジェモンは広いフィールドを自身の背にある翼で縦横無尽に飛び回り、オメガモンの救援に急ぎ向かう。

「お兄ちゃーーーん！！！」

「グオォォォッ！」

ーーーズドオォン！！ズドオォン！！ズドオォォン！！

接近して来るエンジェウーモンとエンジェモンに気がついたディアボロモンは折角旨く言っている作戦を邪魔されまいと、エンジェウーモンとエンジェモンに向かって胸元の発射口からエネルギー弾ーカタストロフィーカノンを連続で撃ち込んで行く。

エンジェウーモンとエンジェモンは自身に迫って来るカタストロフィーカノンを素早く避け続けるが、ディアボロモンは逃さないと言うように連続でカタストロフィーカノンを発射する。

ーーーズドオォン！！ズドオォン！！ズドオォォン！！

「兄さーーーん！！！」

「タケル！！」

「ヒカリ！！」

タケルとヒカリがやって来ている事に気がついたオメガモンは二人に体を向け、ヤマトと太一がそれぞれ名を呼んだ。

その様子にディアボロモンはますます不安を覚えてエンジェウーモンとエンジェモンに向かってカタストロフィーカノンを撃ち込むが、二体は素早く体を動かし、直撃を食らっても最小限のダメージで済む程度の抑える。

その様子にディアボロモンは更なる不安に襲われたようにカタストロフィーカノンを連射し続けるが、内心では嘲りの感情が溢れていた。自身の思い通りに全てが進んでいる。このままエンジェウーモンとエンジェモンをある箇所に追い込めば、その瞬間に自身の勝利は確実になる。

そうディアボロモンは内心で考えながら最大のカタストロフィーカノンをエンジェウーモンとエンジェモンに向かって撃ち出し、二体がその攻撃を避けた瞬間。

ーーーブオン！！

ーーーギュルルルルルーーーーー！！！

『なっ！？ウアッ！！』

ーーードオォォォォォン！！！

「ヒカリ！！」

「タケル！！」

何も存在していなかった筈の壁に突如としてゲートが開き、その先から長い手が飛び出して来たと思った瞬間、長い手にエンジェウーモンとエンジェモンは捕らえられそのまま壁に叩きつけられた。

それを目撃した太一とヤマトは慌てた声を上げ、オメガモンにエンジェウーモンとエンジェモンの救出を頼もうとするが、その前に再びクラモン達が立ち塞がりオメガモンの動きを封じる。

その事に太一とヤマトが険しい顔をしながらエンジェウーモンとエンジェモンを捕らえている敵の正体を見ようと、手が飛び出してきているゲートに目を向けてみると、ゲートの中からもう一体のディアボロモンが姿を現す。

「もう一体のディアボロモン！？しまった！？」

「クソッ！！自分の事も分裂させていたのか！？」

現れた二体目のディアボロモンの姿に、太一とヤマトは自分達のミスを悟った。

よくよく考えてみれば、ディアボロモンが生み出せるのはクラモンだけはない。自分自身も分裂させて戦力を上げる事がディアボロモンには出来る。

恐らくディアボロモンは一番最初に姿を見せていたディアボロモンが倒された時に、油断するであろうオメガモンの隙をつき、本命の二体目でオメガモンを倒すつもりだった。三年前にも使われていた手だと太一とヤマトは悔しげに顔を歪めるが、すぐにその顔は焦りへと変わる。

確かにエンジェウーモンとエンジェモンの行動のおかげで、二体目のディアボロモンの奇襲は無くなった。だが、逆にエンジェウーモンとエンジェモン、そしてヒカリとタケルが人質に取られてしまっている。これではオメガモンは攻撃する事が出来ない。
それが分かっているのか、黒い球体に隠れているディアボロモンとヒカリ達を拘束しているディアボロモンは残忍さに満ちた顔をしてオメガモンに向かってカタストロフィーカノンを連射する。

ーーーズドオォン！！ズドオォン！！ズドオォン！！ズドオォン！！ズドオォン！！ズドオォン！！

「グアアアァァァァァァァァッ！！！！」

『オメガモン！！！』

「お兄ちゃん！！」

「兄さん！！」

背中に羽織ったマントでカタストロフィーカノンを防御しながらも苦痛の声を上げたオメガモンに向かって、エンジェウーモン、エンジェモン、ヒカリ、タケルは悲鳴を上げた。
しかし、オメガモンは答える余裕が無いのか撃ち出され続けているカタストロフィーカノンの威力に耐えようと更に防御を行う。
その様子にエンジェウーモンとエンジェモンは何とかディアボロモンの手の拘束から逃れようと体を動かすが、それに気がついた二体目のディアボロモンは自身の目をギュルと回し、壁に押し付けているエンジェウーモンとエンジェモンに更に両手の力を込める。

ーーーギュゥゥッ！！

『グアァァァァァァァッ！！！』

「エンジェウーモン！！」

「エンジェモン！！」

苦痛の叫びを上げたエンジェウーモンとエンジェモンにそれぞれの肩に乗っているヒカリとタケルは叫ぶが、二体とも答える気力も無いのか苦しげな声を上げ続ける。

それと共にオメガモンに対する二体のディアボロモンの砲撃も増していき、ヒカリとタケルは悔しさと辛さが入り混じった顔をしてしまう。助けに来た筈なのに、逆にオメガモンと太一、ヤマトに危機を与えてしまった。

その事実にヒカリは自身の無力さからか涙が目元に浮かび上がり、内心で悲しみに満ちた叫びを上げる。

（また駄目なの！？またあの時見たいに助けられないの！？お願い！誰でもいい！！お兄ちゃん！ヤマトさんを！オメガモンを！！皆を助けて！！！）

ーーーブオォン！！

ヒカリが内心で助け願う叫びを上げた瞬間、二体目のディアボロモンの遥か頭上の天井に突如としてゲートが開き、ゲート内部から凄まじい漆黒の竜巻が飛び出して来ると、そのまま二体目のディアボロモンに向かって高速で落下する。

「ブラックトルネーーーード！！！！！」

「ッ！！」

ーーードゴオォォォォォーーン！！！

『ッ！！！』

突然の頭上から奇襲に二体目のディアボロモンは漆黒の竜巻の突撃を避ける事が出来ず、漆黒の竜巻に弾き飛ばされた。

その漆黒の竜巻の攻撃を目にしたオメガモン、太一、ヤマト、そして二体目のディアボロモンの拘束から逃れる事が出来たエンジェウーモン、エンジェモン、ヒカリ、ヤマトは限界まで目を見開いた。

彼らは二体目のディアボロモンを弾き飛ばした技を知っていた。本来ならばもう使い手が居ない筈の技。自分達を護る為に命を散らしたデジモンの技の一つ。

その事実に誰もが信じられないと言う顔をしながら未だに回転を続けている漆黒の竜巻を見つめていると、漆黒の竜巻は回転を治め、その中からオメガモンと同程度位に体が大きさの漆黒の竜人が姿を現し、そのまま弾き飛ばした二体目のディアボロモンに向かって突撃して行く。

その漆黒の竜人の姿を目撃したヒカリ達は、信じられないと言うように限界まで目を見開き、漆黒の竜人の名を同時に叫ぶ。

『ブラックウォーグレイモン！！！！』

「オオォォォォォォーーーー！！！！！ドラモンキラーーー！！！」

ーーードゴオォォォン！！

「ッッ！？！？」

ヒカリ達の叫びを耳にしながらブラックは自身のスピードを緩める事無く、未だに奇襲の衝撃から立ち直っていなかった二体目のディアボロモンを右腕のドラモンキラーで殴り飛ばした。
その姿にもう一体のディアボロモンは目を見開くが、すぐに驚愕を治め、今度はブラックに向かって胸元の発射口を向け、カタストロフィーカノンを連射する。

ーーーズドオォン！！ズドオォン！！ズドオォン！！

「ほう、中々の攻撃だ・・・・だが、軌道が読み易いぞ！！」

ーーービュン！！

「ッ！？」

ブラックは叫ぶと共に自身に向かって放たれていたカタストロフィーカノンの軌道を読み取り、全て簡単に避けた。
その事で驚愕して動きが止まってしまっているディアボロモンに向かって、ブラックは即座に右腕のドラモンキラーの爪先に作り上げていたエネルギー弾を投擲しようとするが、その動きは突然に止まり、背後から迫って来ていた二体目のディアボロモンの長く伸びた右拳を避ける。

ーーーギュルルルルーーーーー！！

ーーービュン！！

ーーーガシッ！！

「ッ！！」

「フッ！やはり戻って来て正解だった！！オオォォォォォォォォーーーーーー！！！！！」

ーーーブンブンブンブンブンブン！！！

「ッ！？」

ブラックはディアボロモンの右拳を僅かに首を下げるだけ避けると、そのまま頭上を通り過ぎていたディアボロモンの腕を両手で掴み取り、ディアボロモンを全力でフルスイングする。

それによって空間内部に存在していた無数のクラモン達が次々とフルスイングされているディアボロモンにぶつかり消滅するが、ブラックは止まる事無くディアボロモンをフルスイングし続け、完全に自身の周りにクラモン達がいなくなるを確認すると、ディアボロモンを壁に凄まじい勢いで叩きつける。

「オオオオオオオオォォォォォォォォーーーーー！！！！！」

ーーードゴオオォォォォォォォォォン！！

「ガッ！！」

壁に叩きつけられた二体目のディアボロモンは苦痛の声を上げると共に顔を俯かせてしまう。

しかし、ブラックはそれでは済まさないと言うように両手の間に負の力を集中させ、巨大な赤いエネルギー球を作り上げると、自身の頭上に掲げ、壁に体を預けたままのディアボロモンに投げつける

「ガイアフォーーース！！！」

ドゴオオオ

飛び出し、ブラックに向かって直進して来た。
　オメガモン達はその事に目を見開くが、殴り掛かられたブラックはそれを読んでいたと言うように軽々とディアボロモンの両拳をかわし、そのまま煙の中に隠れているディアボロモンに向かって突進する。

「ウオォォォォォォォーーーー！！！！！」

ーーービュン！！

　ブラックの突撃を今度はディアボロモンが素早くかわし、そのままブラックとディアボロモンは互いに凄まじい速さで拳や蹴りを放ち続ける。

ーーードゴオォン！！ドゴン！！ドゴオォン！！

「オォォォォォォォォーーーー！！！！！」

「ッ！！！」

　ブラックとディアボロモンは互いに凄まじい攻防を繰り広げるが、ディアボロモンとは違い、ブラックは本当に心の底からディアボロモンとの戦いを楽しいと感じていた。
　本来ならばオメガモン達が到着する前にブラックは、ルインの案内でこの場に訪れる予定だった。しかし、ディアボロモンはブラックが倒したクラモン達から情報を受け取っていたのか、進化が可能であるクラモン達をブラックとルインが選んだ侵入口に配置して、ブラックを足止めしていたのだ。最もブラックからすれば逆に本命であるディアボロモンとの戦いのウォーミングアップになった為に別に困る事は無かったが、オメガモン達と再会する事だけは完全に

予想外だった。
　最も姿を見られた以上、隠すのはもはや不可能だ。だからこそ、ブラックはオメガモン達への事情の説明は後回しにして、とにかくディアボロモンとの戦いに専念する事にした。後の事など考えていられない敵だと言うのも、もちろんあるのだが。
　その様にブラックが考えているとは知らずにオメガモン達は、ディアボロモンと互角以上の戦いを繰り広げているブラックの姿に驚愕を抑える事が出来なかった。
　ウォーグレイモンとメタルガルルモンでさえも、二体同時で掛かって勝てなかったディアボロモンを相手に、退く所か逆にブラックは押している。例えコピーであろうとディアボロモンの実力が変わる訳ではない。その事を知っているオメガモン達はブラックと二体目のディアボロモンの戦いに信じられないと言う思いを抱くが、オメガモンに向かってもう一体のディアボロモンがカタストロフィーカノンを砲撃して来る。

ーーーズドオォン！！ズドオォン！！ズドオォォン！！

「ハッ！！グレイソーード！！」

ーーーバッシュン！！

　ディアボロモンがカタストロフィーカノンを発射して来た事に気がついた、オメガモンは素早く左腕のグレイソードをカタストロフィーカノンに向かって振り抜き四散させた。
　それと共に我に返った太一とヤマトはオメガモンとヒカリ達に向かって叫ぶ。

「皆！！今はディアボロモンを倒すのが先決だ！！」

「ブラックウォーグレイモンの事は、ディアボロモンを倒した後に聞けばいい！！とにかくディアボロモンを倒すぞ！！」

『分かった！！』

太一とヤマトの叫びにオメガモン、エンジェウーモン、エンジェモンは即座に答えると、黒い球体の中に隠れているディアボロモンに向かって突撃する。

それに気がついたディアボロモンは即座にクラモン達を操り、再び自身の盾にしようと動きを行った瞬間。

ーーーブンブンブンブンブンブン！！！

《ビンゴ！！》

『ッ！！』

何処からともなく京の声が響くと同時に、次々と周りの壁に現実世界へと繋がるゲートが開き、ディアボロモンとクラモン達はその突然の現象に思わず動きが止まってしまう。

その隙を逃さずにエンジェウーモンとエンジェモンは、クラモン達の壁とディアボロモンに向かって突進する。

「エンジェウーモン！！」

「えぇっ！！オメガモン！！」

ーーーズガァン！！ズガァン！！ズガァァン！！ズガァン！！

エンジェモンとエンジェウーモンはクラモン達の壁に突撃し、ク

ラモン達の壁を破壊した勢いのままディアボロモンが隠れていた黒い球体を破壊し、ディアボロモンを球体の中から引きずり出し動きを封じた。

「お兄ちゃん！！」

「分かった！！」

「オォォォォォォーーーー！！！！！」

ヒカリと太一の言葉の意味が分かったオメガモンは即座に左腕のグレイソードを突き出しながらディアボロモンに向かって突撃し、ディアボロモンの顔にグレイソードを突き刺す。

ーーーブザン！！

「兄さん！！」

「応！！」

ーーーガッシャン！！

タケルの言葉に今度はヤマトが答えると、オメガモンは右腕の砲身をディアボロモンの胴体に押し付け、エンジェウーモンとエンジェモンがディアボロモンから離脱するのを確認するとゼロ距離で砲撃をディアボロモンに撃ち込む。

ーーーズドオォォン！！ズドオォォン！！ズドオォォン！！ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ギャァァァァァァァァーーー！！！」

『ブラックウォーグレイモン！！！』

ゼロ距離で砲撃を撃ち込まれて苦痛に苦しんでいるディアボロモンに構わずに、オメガモン、太一、ヤマト、エンジェウーモン、エンジェモン、タケル、そしてヒカリが別の場所で二体目のディアボロモンと戦っていたブラックを呼ぶ。

それに気がついたブラックは即座に戦っていた二体目のディアボロモンの体を掴むと、そのままオメガモンに向かって投げつけ、オメガモンも右腕に乗ったままのディアボロモンをブラックに向かって投げつける。

『オォォォォォォォォーーーー！！！』

ーーードゴオオオオオオオオン！！

『ッ！！！！』

ブラックとオメガモンが投げつけたディアボロモンは丁度二体の中間で衝突し合った。

それと共にブラックは再びガイアフォースを作り上げ、オメガモンも右腕の砲身に自身のエネルギーを集中させ、ブラックとオメガモンは背中合わせで寄り掛かっている二体のディアボロモンに向かって同時に必殺技を放つ。

「ガイアフォーーース！！！」

「ガルルキャノン！！！」

ーーードゴオオオ

く空間の中で困惑した顔をしながら顔を見合わせるオメガモン達だけが残されたのだった。

ネット空間内部の通路。
オメガモン達と別れたブラックは、その場所を目の前に存在している無数のクラモン達を倒しながら、全速力で通路内部を進んでいた。

「ウォーブラスターー！！！」

ーーードドドドドドドドドドドドドゴオン！！

『クラクラクラクラクラクラクラクラッ！！！』

ブラックが放ったウォーブラスターによって、十数体のクラモンは一瞬の内に貫かれ消滅した。
だが、それでもクラモンの数は全く減る様子を見せずに、逆に生き残ったクラモン達がすぐさま倒されたクラモン達以上に増殖し、ブラックの視界を覆っていく。

「チィッ！！切りが無い・・・・雑魚どもを倒したとしても無意味か・・・・やはり、一気に倒す為にはこいつ等がアレに進化しなければ不可能だな」

次々と増えていくクラモン達に、ブラックは苛立ちが募った。
幾らブラックでも無限に増え続けるクラモン達を一気に倒す事は不可能に近い。倒しても倒しても増え続ければ、ブラックも体力を消耗してしまう。そうなればブラックが知るあのデジモンが姿を見せても、ブラックは戦う事が出来なくなってしまう。
その様な事は絶対にブラックは望まない為に、ゆっくりとクラモ

ン達に構えていた両手を下ろし、現実世界に逃げていくクラモン達の背を見つめる。
　それにブラックは気がついていた。自身の知る歴史のディアボロモンの動きと、この世界のディアボロモンの動きが違っていた事に。大幅には変わってはいないが、僅かなりともブラックの知る歴史とは誤差が出て来ている事に。

（チィッ！！オメガモンがあの場にいなければ当初の計画通りに進められたが、もう無理だ・・・・仕方が無い。出来ればアイツらを巻き込みたくは無かったが、クラモン達にはアレに進化して貰うか・・・最も俺からすれば嬉しい事だ。ディアボロモンも楽しめたが、それ以上にあのデジモンには興味があるからな）

『ブラック様！ブラック様！！』

「ムッ！ルインか？」

ーーーブン！！

　聞こえて来た声にブラックが顔を上げて通路の上方に存在していたモニターに顔を向けてみると、現実世界に留まっていたルインの姿がモニターに映し出された。

『ブラック様。やはりブラック様の知っていた通りに外の世界にいたクラモン達は東京湾の方に移動を開始しました。更にクラモン達の数は増加中です』

「やはりか・・・・ならばルイン！お前はオメガモン達を東京湾に送る為のゲートを作れ！！」

『宜しいのですか？そうなればブラック様が知っている通りに状況は進んでしまう可能性が出て来ます？彼らを危険な目に合わせない為と、オファニモン達の依頼の為に動いていたのに？』

「此処まで状況が進めばもはや当初の計画通りに状況は進まん。ならば、俺が知っている歴史通りに進め、クラモン達をアレに進化させる。そうなれば形は違っても最終的にオファニモン達の依頼が完遂出来るからな」

『分かりました。では、すぐに準備を行います』

「頼む。如何やら俺にはかなりの数の客が来ているみたいだからな」

ーーービュン！！

ブラックが言葉を言い終えると同時に、ブラックの背後から数え切れないほどの触手がブラックに向かって伸びて来た。

しかし、ブラックはその攻撃を読んでいたと言うように素早く後方に体を向け、両手のドラモンキラーで全ての触手を切り裂く。

ーーーブザン！！

「フン、やはりまだ残っていたか」

そうブラックが言いながら見つめる通路の先には、顔の下が無数の触手の形をして、同じく顔の下部分から二本の手を出しているクラゲのようなデジモン―ケラモン、サナギのような形をして六本の触手を体から生やしているデジモン―クリサリモンに、六本の足を持ったクモのような形をしたデジモン―インフェルモンが多数存在していた。

ケラモン、世代／成長期、属性／ウィルス種、種族／分類不可、必殺技／クレイジーギグル
クラモンの進化系であるツメモンが更に進化した成長期デジモン。成長期になり、より強力になったその口から高速でデータを食し、１秒間に１００メガバイトものデータを食い尽くすと言われている。しかし、本人であるデータ破壊は遊びだと思っている。必殺技は、口から破壊力の高い光弾を、笑いながら相手に向かって吐き出す『クレイジーギグル』だ。

クリサリモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／分類不可、必殺技／データクラッシャー
ケラモンが進化して硬い殻のサナギのようになったデジモン。常に宙に浮いて生活しており、完全体へ進化するためにエネルギーを蓄えている状態。遠くから距離を取った後に敵に向かって突進し、頭部の角で相手を突き刺す事が出来る。また、体から生えている６本の触手は攻撃の時に使用される。ケラモンの時よりも格闘戦が得意になっているぞ。必殺技は、敵の背後に移動して体から生えている触手で、相手の構成データを破壊する『データクラッシャー』だ。

インフェルモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／分類不可、必殺技／ヘルズグレネード、コクーンアタック
クリサリモンが進化した地面をクモのように歩くデジモン。６本の手はクリサリモンの触手が進化したモノである。これによって地面を素早く移動する事ができる。あらゆるネットワークに無断に侵入しデータを破壊する。手足と首を体の中に引っ込めて、繭形態に変形する事が出来るが、一直線にしか進めないと言う欠点を持っている。必殺技は、口からエネルギー弾を相手に向かって連発する『ヘルズグレネード』に、手足と首を引っ込め繭形態に変形して、そのまま敵に突撃する『コクーンアタック』だ。

『ケラケラケラケラケラケラケラッ！！』

『サリサリサリサリサリサリサリサリサリッ！！！』

『シャアァァァァァァァァァーーーーーー！！！！！』

「まだこれだけの数が残っていたとはな」

ブラックはそう呟きながら、自身の周りを覆うように囲んでいるケラモン、クリサリモン、インフェルモンを見つめた。ケラモン達の数は既にブラックでさえも数え切れない数になっているばかりか、更に周りの通路からも姿を現している。

オメガモンとディアボロモンが戦っていた場所に辿り着く前にも同様の数がブラックの前に姿を見せていたのだが、その全てをブラックは倒した筈だった。しかし、その時の数さえも超えるほどの数のケラモン達が次々と通路の奥から姿を現し、ブラックの周りを包囲して行く。

「余程オメガモンと貴様らの戦いを、俺に邪魔されたくないようだな？」

『トウゼンダ！』

「ムッ！！」

ブラックの言葉に答えるように通路内部から合成されたと思われる声が鳴り響いた。

その合成音の主に気がついたブラックがケラモン達を見回すと、ブラックの考えが正しいと言うように再び合成した声がケラモン達

から響く。

『オマエハジャマダ！！ボクラト！オメガモントノ！アソビヲジャマスルナ！！』

「遊びだと？」

『ソウダ・・サンネンマエノトキニ・・・ボクラガ・オコナッタ・アソビデ・・ボクラハ・・マケタ！！ダカラ・・コンドハ！！ボクラガ・・オメガモンヲタオス！！サッキモ！オマエサエ・・・イナケレバ・・・コンカイノ！アソビハ！・・・・ボクラノ！カチダッタ！』

「下らん。貴様らが行っているのは遊びではない。互いの命を賭けた戦いだ！二度と遊びなどと戦いを呼ぶな！！」

『チガウ！！タタカイハ・・・アソビダ！！ボクラノ！コエニ！コタエテクレタ！アノヒトハ！・・・ソウイッテイタ！！』

「あの人だと？」

ブラックはケラモン達の言葉に疑問を覚えた。

少なくともブラックが知る限り、ケラモン達、正確に言えばディアボロモンの応答に答えた人間は存在していない。にも関わらずにケラモン達は誰かと会話したと言うような答えを返して来た。

その事こそが自身の知る歴史と今の歴史の変化を呼んだ事にブラックは気がつき、目を細めながらケラモン達に質問する。

「あの人とは誰だ？貴様らにソイツは何を教えた？」

『オマエニハオシエナイ！ボクラノアソビヲジャマシタ！！オマエハ！！！・・・・・シネ！！！！！』

『ヘルズグレネード！！！』

『ケラケラケラケラッ！！クレイジーギグルッ！！！！』

ーーードドドドドドドドドドドドドドゴオオン！！！！

合成された声がブラックに対して叫ぶと同時に、ブラックの周りを囲んでいたインフェルモン達とケラモン達が一斉に攻撃をブラックに放ち、インフェルモンが口から放ったヘルズグレネードとケラモン達が笑いながら口から放ったクレイジーギグルは、ブラックに直撃し爆発が起きた。

それと共に爆煙が発生し、インフェルモン達がブラックの生死を確認しようとした瞬間、爆煙を吹き飛ばす勢いで炎の竜巻が発生する。

「ブラックトストームトルネード！！」

ーーードゴオオオ

って、ブラックの周りを囲んでいたケラモン、クリサリモン、インフェルモンは炎にその身を焼かれながら吹き飛んで行った。
最もそれでもインフェルモン達全体から見れば二割にも満たない数だったのだが、ブラックは自身の発生させたブラックストームトルネードの炎の中から全く傷を負った様子やインフェルモン達に周りを取り囲まれながらも慌てた様子を見せる事無く姿を現し、インフェルモン達全員に鋭い視線を向けながら殺気を振り撒く。

ーーーギン！！

『ッ！！』

ーーーガタガタガタガタッ！！

ブラックの凄まじい殺気を浴びたインフェルモン達は恐怖に体を振るわせ始めた。
彼ら確かにブラックを、そしてオメガモンを倒すつもりだった。しかし、彼らは結局の所は何も知らない子供でしかない。
三年前に生まれたオリジナルのクラモンは驚異的な速さで究極体にまで進化してしまった。その為に本来ならば普通のデジモンが究極体に進化するまでに学ぶ多くの事を学ぶ事無くクラモンは成長してしまったのだ。だからこそ力は究極体クラスでも、ディアボロモンの精神は限りなく何も知らない幼年期デジモンに近い。当然ながらそのディアボロモンによってコピー、または生み出されたクラモン達の精神も幼年期デジモンでしかないのだ。
そしてブラックの殺気はそれこそ何も知らない子供が浴びれば、気絶、悪くすればショック死するレベル。何よりもオメガモン達と違ってブラックは、戦う相手は倒すではなく殺すつもりで何時も戦っている。それだけではなくインフェルモン達は知らなかったとは言え、ブラックが嫌っている言葉を言ってしまった。

“戦いは遊び”と、よりにもよって戦いに拘りを持っているブラックに真剣勝負を汚すような言葉を告げてしまったのだ。その言葉を聞いたブラックがインフェルモン達に行う行動は一つしかない。

「俺は貴様らには多少の親近感を持っていた。貴様らは形は違っていても、多くの人間に否定されていたからな。だが、貴様らは戦いを遊びなどとふざけた事を俺に言った・・・・いいだろう。貴様らにはトコトンまで叩き込んでやる！！戦いの恐ろしさをな！！」

ーーービュン！！

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

ブラックの姿が消えると同時にブラックの周りを囲んでいたインフェルモン達が吹き飛び、それと同時にブラックと数え切れないほどのインフェルモン、クリサリモン、ケラモン達との激闘が通路内部で繰り広げられるのだった。

ブラックがインフェルモン達と激闘を繰り広げている頃。

オメガモン、太一、ヤマト、ヒカリ、エンジェウーモン、タケル、エンジェモンは暗くなった広い空間の壁を調べていた。幾らブラックにゲートが開くと教えられたとは言え、現実世界には既に逃げ出した大量のクラモン達が存在している。

そのクラモン達が何かをしない筈はないのだから、オメガモン達は少しでも早く自分達の力で現実世界に出られるゲートを作れないのか調べていたのだ。

「・・・・駄目だ・・・・閉じられたこの空間から出る為には、か

なりの力を使わないと無理だ、太一、ヤマト」

「そうか。やっぱりゲートが開くまで待つしかないんだな」

「ブラックウォーグレイモンの言葉通り、この先に現れる敵の実力がディアボロモン以上だとすれば、力は出来るだけ消耗したくはない。これもディアボロモンの策の一つだったんだろう」

「二重三重どころか、それ以上の策だぜ。自分が負けた時にクラモン達が生き延びれるように仕組んでいたんだからな」

そうヤマトと太一は話し合い、ディアボロモンの底が知れない策に恐怖を覚えた。

オメガモンを倒す為に二体目のディアボロモンを潜ませていただけではなく、無数のクラモン達と言う更なる策まで用意していたのだから、ディアボロモンの策には本当に底が知れない。もしブラックの言う通り現実世界に戻った先にいるのがディアボロモン以上の実力を秘めたデジモンだとすれば、力を消耗したオメガモンでは敗れてしまう可能性が高い。

その事を考えた太一、ヤマト、そしてオメガモンはブラックの言葉を信じてゲートが開くの待とうとヒカリ達に告げる為に顔を向けてみると、疑問に満ち溢れた顔をして悩んでいるヒカリを目にする。

「ん？おい、ヒカリ？一体如何したんだ？」

「・・・・うん、さっきのブラックウォーグレイモン・・・・本当に私達が知っているブラックウォーグレイモンなのかなって？」

「・・・・恐らく間違いないだろう。あのブラックウォーグレイモンはこの先に起きる出来事を知っていた。それを知る事が出来るの

は、俺達が知っているブラックウォーグレイモンしかいない」

「そうだね、兄さん。未来の情報を知っているとすれば、異界の知識を持っているブラックウォーグレイモン以外にありえないよ・・・・生きていたんだよ。あのブラックウォーグレイモンは」

『・・・・・』

タケルの断言するような言葉に、全員が言葉も出す事無く顔を見合わせた。

“死んだと思っていたブラックウォーグレイモンが生きていた”。その事はヒカリ達からすれば本来は喜ぶべき事だったが、同時に疑問が思い浮かんで来る。

“何故生きていたのならば、今まで姿を見せなかったのか”

そうヒカリ達は疑問に思うが、答えられるブラックは既にクラモン達を追って外へと出ている為に誰も答えが見つからずに悩んでいると、オメガモンの背後に存在していた壁から光が溢れ、外へと続く通路が姿を現す。

ーーーブン!!

『ッ!!』

突然に何の前触れも無く開いた通路にオメガモン達は目を見開くが、罠と言う感じは見せる事無く明るい光に照らされている通路だけが静かに存在していた。

その通路にオメガモンは警戒しながらも足を進めるが、やはり何処にも変な所は存在せず、ただ真っ直ぐな道だけが先に伸びていた。

「・・・如何やらこの通路がブラックウォーグレイモンが言っていた道みたいだな」

「あぁ、多分、この先にブラックウォーグレイモンが言っていた敵がいるんだろう」

「よし、なら！ヒカリ！タケル！！お前らは何とか光四郎に連絡を取って別の場所から現実世界に戻るんだ！この先にいる敵が本当にディアボロモン以上の実力だったら、エンジェウーモンとエンジェモンじゃキツイからな！」

「此処はオメガモンに任させるんだ！」

「お兄ちゃん！」

「兄さん！！」

「それじゃ！行くぞ！オメガモン！」

「応ッ！！」

ーーービュン！！

太一の叫びにオメガモンは背中のマントをたなびかせながら通路内部を駆け抜け、現実世界へと戻って行く。

それを目にしたヒカリとタケルが顔を見合わせながらエンジェウーモンとエンジェモンと共に通路の中に入り込むと、今度は通路の右側の壁の方に新たな道が出現する。

ーーーブン！！

『ッ！！』

『その先に進みなさい』

「誰だ！？」

何処からともなく聞こえて来た聞き覚えの無い声にエンジェモンは右手に握っているホーリーロッドを構えながら叫び、タケルも辺りを警戒する。

しかし、ヒカリとエンジェウーモンは聞こえて来た声に何処聞き覚えのあるような気がし、辺りを見回しながら声の主を探すが、声の主は見つかる事無く再び声が響く。

『その通路は貴方達が拠点としている場所のパソコンに繋がっています。其処を通れば現実世界に安全に戻れますよ。では失礼します』

「待って！貴方はブラックウォーグレイモンの仲間なの！？」

『・・・・・答える義務はありません』

そう声はヒカリの質問に答えるとそれ以上何も告げずに通信を切り、後には困惑した顔をしながら現実世界に続く道を進むヒカリ達だけが残された。

現実世界東京湾付近の公園。

その場所でルインは公園に並んでいた椅子に座りながらフリート

特製のパソコンを弄っていた。既にブラックから頼まれた事をルインは殆ど終えたのだが、最後の一つの作業だけは手間取っていた。

ーーーカタカタカタカタッ！！

「中々にプロテクトが堅いですね。民間のパソコンでフリートが作ったパソコンに此処まで対抗するとは、思っても見ませんでした。余程デジモンに関する知識を持っているようですね・・・・まぁ、それもこれで終わりですよ」

ーーーポチィッ！

ーーーピコン！！

ルインがエンターキーを押すと同時にパソコンの画面に『完了』の文字が浮かび上がり、ルインは安堵の息を吐きながらパソコンの電源を切り、パソコンの蓋を閉じると、東京湾に集まって来ている人々と東京湾の海を覆うほどに集まったクラモン達の大群に顔を向ける。

「さて、後はブラック様が知っている歴史通りにあのデジモンが現れさえすれば、私達の計画はほぼ完了です。そしてそのデジモンを倒せさえすれば、依頼は完了です・・・・その為にも、もう一体のデジモンにも早く現れて貰わないといけませんね」

そうルインは呟くと、ブラックの情報に従って大輔と賢と離れ離れになっているであろうブイモンとワームモンの捜索を開始し始めた。

それと同時に東京湾の海に存在していた無数のクラモン達は次々と空へと舞い上がり、一箇所に集まっていくと、クラモン達は巨大

なデジタマへと変化し、不気味な沈黙を保ちながら静かに上空に浮かび続けるのだった。

お台場中学パソコン部部室。
その場所で大輔達に指示を出していた光四郎と後から合流した立原ミミは、東京湾の上空に浮かんでいる巨大なデジタマなデジタマの情報を、現場で調べている京と伊織から送られて来ているデータを分析していた。

「このデジタマのデータ量は確かにディアボロモン以上のデータですね・・・・これならばネット空間内部で映像が消える前にブラックウォーグレイモンが言っていた言葉も嘘では無いでしょう」

「それは分かったけどさ？如何してブラックウォーグレイモンが生きてるのよ？確か死んだって聞いていたんだけど？」

「・・・僕にも分かりませんよ・・・ですが、先ず間違いなくディアボロモンが流していた映像に映し出されたブラックウォーグレイモンは、僕らが知っているブラックウォーグレイモンです」

ミミの質問に光四郎は自身でも答えが分からないまでも、太一達同様にブラックが本人である事を確信していた。
何故今まで姿を見せなかったのかは光四郎にも分からないが、少なくともブラックがヒカリ達に危害を加える事は無い事だけは確信していた。でなければ、オメガモン達の危機を救いには現れない。自身の姿を見られたくないのならば、オメガモン達が戦闘不能になった後に現れるだろう。
その光四郎の言葉にミミも納得すると、再び二人で京から送られ

て来るパソコンに目を向けると、突然にパソコンの画面が光り輝き、タケルとパタモンが飛び出して来る。

ーーーピカアァァァァァーーン！！

『ウワッ！』

「ッ！！タケルさん！それにパタモン！一体如何して！？」

突然にパソコンから飛び出して来たタケルとパタモンの姿に、光四郎は目を見開きながら声を上げ、ミミも驚愕に声も出す事が出来ずに二人の姿を見つめるが、タケルとパタモンはそんな場合では無いと言う様にパソコンの画面に詰め寄る。

「待つんだ！！ヒカリちゃん！エンジェウーモン！！」

「戻って来なよ！！危ないよ！！」

「まさか！？ちょっと失礼します！！」

タケルとパタモンの様子に何かに気がついた光四郎は慌てて、パソコンを操作して見ると、タケルとパタモンが通って来た道を逆走としているヒカリとエンジェウーモンの映像を発見する。

「タケルさん！！如何してこのパソコンに現実世界とネット世界の出入り口が出来ているんですか！？」

「僕とパタモンにも分かりませんけど、閉じ込められた空間に突然にゲートが出現してこの場所に繋がっていたんです！！」

「ッ！！そんな馬鹿な！？このパソコンのセキュリティはゲンナイさんが構築してくれたのに！？一体如何して！？」

タケルの報告が信じられないと言うように光四郎は声を上げながら、素早くパソコン内部に保存されているデータやセキュリティを調べてみると、一つの事実に気がつく。

ーーーピピッ！！

「そ、そんな！？大輔君達が集めてくれたクラモン達が全部別のパソコンに転送されている！！」

『えっ！？』

光四郎の報告にタケル、ミミ、パタモンは声を上げてパソコンの画面を見つめてみると、確かにクラモン達が保存されていたゴミ箱のマークに表示されているクラモン達の数はゼロになっていた。

その事が信じられずに光四郎がゴミ箱をクリックしてみると、内部の扉が開き、クラモン達の代わりに一枚の手紙らしきモノが現れ、光四郎が操作する事無くメッセージがパソコンに映し出され、光四郎は顔を青ざめさせながらメッセージを読み上げる。

「『クラモン達は全て貰って行きます。悪用は絶対にしませんので安心して下さい。漆黒の竜人のパートナーより』」

「・・・ブラックウォーグレイモンのパートナー？・・・・何なんだ？一体何が起きているんだ？」

ありえない筈の情報にタケルは困惑した声を上げ、光四郎とミミ、パタモンも訳が分からないと困惑した顔をパソコンに表示されてい

るメッセージを向けるのだった。

東京湾。
その場所の上空にはクラモン達が寄り集まって出来た巨大なデジタマが浮かんでいた。
そして地上の公園や橋の上には沢山の人々が始まるであろうオメガモンとクラモン達の激戦に思いを馳せながら、時が来るのを待っていた。
その中にクラモン達の行進に巻き込まれてパートナーと離れ離れになってしまったブイモンとワームモンも存在し、上空に浮かんでいる巨大なデジタマを見つめていた。

「大輔、早く来てくれ」

「賢ちゃん」

そうブイモンとワームモンは自分達のパートナーが来るのを静かに待っていると、背後から銀髪に青い瞳を持った右腰の脇にパソコンを抱えた女性ールインが二体に接近し声を掛ける。

「やれやれ、やはりあの方の情報どおりパートナーと離れ離れになってしまったんですね」

『ッ！！』

「驚かなくて大丈夫ですよ。私は貴方達の敵ではありませんから」

ルインはそうブイモンとワームモンに声を掛けると、二体の横に

ソッと腰を下ろし、徐々に下降して来ているデジタマを見つめる。
その様子にブイモンとワームモンは訳が分からないと言う顔をしながらルインを見つめていると、巨大なデジタマをジッと見つめていたルインがポツリと呟く。

「生まれますね、『アーマゲモン』が」

ーーーバカァン！！

『ッ！！』

ルインが声を呟き終えると同時に、空に浮かんでいた巨大なデジタマは中心から二つに割れ、その間から巨大なデジモンが海面に向かって落下し、危なげなく海面に六本の足を着地させた。
そのデジモンの姿を見ようと、東京湾に集まって来た誰もが巨大なデジモンに目を向けそれを目にする。
それはクモのような形をしながらも、大きさはディアボロモンやオメガモンを遥かに超える五十メートルほどの体長を持ち、長く巨大な尻尾の先っぽに赤い刃を生やし、同じように長い首を持ったデジモン。
聖書における最終戦争の名を持ったディアボロモンの真の切り札。
『アーマゲモン』が遂にその姿を世に現した。

「ギギャアァァァァァァァァァァァァァーーーーーーー！！！！！！」

アーマゲモン、世代／究極体、属性／解析不可、種族／分類不可、必殺技／アルティメットフレア、ブラックレイン
とてつもない数のクラモンが集まり、融合した結果生まれた突然変異の特殊デジモン。種族も属性も謎で、凶悪な性格をしていると言

われている。生みの親であるディアボロモンを超える力を持ち、オメガモンを倒す事だけを目的として生まれた。必殺技は、巨大な口から破壊のエネルギー弾を相手に向かって放つ『アルティメットフレア』に、背中から追尾能力を持ったエネルギー弾を一度に何十発も相手に向かって発射する『ブラックレイン』だ。

「・・・・すげぇ」

アーマゲモンの姿に東京湾にいた誰もが圧倒された。
それは先に東京湾に訪れていた京、伊織、ホークモン、アルマジモン、そしてブイモンとワームモンも同じだった。彼らはブラックの言葉を信じなかった訳ではないが、それでもディアボロモン以上の実力を持つデジモンはいないと思っていた。だが、アーマゲモンの姿を見ただけで彼らには分かった。
アーマゲモンの実力はディアボロモンを、そしてオメガモンさえも超えているかも知れない事に。
しかし、自身の姿に圧倒されている人間達には構わずにアーマゲモンは辺りを見回し、オメガモンを、そして自分達の計画を失敗に導いたブラックが現れないか警戒し始める。オメガモンが現れるのはアーマゲモンからすれば嬉しい事だが、ブラックが現れるのだけは困る。アーマゲモンはクラモンの時に自身の生みの親であるディアボロモンとブラックの戦いを見ていた。その結果、自身と同様にブラックには何かまだ隠された力が存在している事を察知したのだ。
その力が何かまでは流石にアーマゲモンにも分からなかったが、オメガモンと戦うまでの間にブラックが現れるのだけは本気で邪魔な上に、自身が敗北してしまう可能性も存在している。
最も既にアーマゲモンはブラックに対する切り札を海中の中に潜ませているのだが、ブラックにオメガモンを倒す邪魔だけは絶対にされる訳にはいかない。アーマゲモンはそう考えながら辺りを見回していると、橋の近くの空間が歪み、閃光がアーマゲモンの横を通

り過ぎる。

ーーードオオオ

二体が放った必殺技は二体の中心でぶつかり合い大爆発を起こした。
しかし、爆発の衝撃は全てオメガモンの方へと流れて来て、オメガモンは慌てて空へと浮かび上がる事で避けるが、次々とアーマゲモンは口から砲撃を連射する。
そして今の攻防でオメガモンはブラックの告げた言葉が真実だったと確信した。
デジモンの必殺技は、その名の通り相手を倒す為の最大の必殺技。それなのにオメガモンの最大の必殺技であるガルルキャノンは、アーマゲモンの必殺技であるアルティメットフレアに敗れた。それだけでもオメガモンにはアーマゲモンの実力の方が、自身よりも上だという事に気がつくには充分だった。

（クッ！！ブラックウォーグレイモンの忠告を聞いて置いて正解だった。もしゲートを開いて力を消耗した状態で戦っていたら、短時間しか戦えなかった！・・・・そう言えば、ブラックウォーグレイモンは一体何処に？）

オメガモンはそうアーマゲモンの砲撃を避けながら考え、フッと自分達よりも先に外の空間に出た筈のブラックがいない事に気がついた。
ブラックの性格ならば逃げる所か逆にアーマゲモンと言う最大級の敵に戦いを挑まない筈は無い。それなのにブラックは姿を現す様子さえ見せていない。
その事がオメガモンには疑問だったが今はアーマゲモンを倒す方が先決だと思い、海面を素早く駆けながらアーマゲモンの砲撃を避け続け、そして海面を勢いよく蹴りつけると、巻き上がった海水の幕で自身の体を覆い隠す。
アーマゲモンはその様子に砲撃を止めて、オメガモンの姿を発見

にしようとすると同時に、海水の幕からオメガモンが飛び出し、そのままアーマゲモンを飛び越え、体を反転させると同時に右手の砲身から砲撃を連射する。

ーーードゴオォォン！ドゴオォォン！！ドゴオォォン！！

「ガギャァァァッ！！」

オメガモンの連射砲撃を食らったアーマゲモンは僅かに苦痛の叫びを上げながら、爆発で発生した煙の中に姿を消して行く。

その様子を見てもオメガモンは油断無く構えをアーマゲモンに向かって取るが、今度は逆にアーマゲモンが煙を隠れ蓑にしてオメガモンに向かってアルティメットフレアを撃ち込む。

「ガアアッ！！」

ーーードゴオオオオオオオン！！

「グアッ！！！」

煙の中から放たれたアルティメットフレアをオメガモンは避ける事が出来ずに直撃を食らい、海面に向かって落下して行く。

その戦いを見ていた誰もが勝負になっていない事に気がついていた。オメガモンの放つ攻撃はアーマゲモンに僅かにダメージを与える事しか出来ず、逆にアーマゲモンの攻撃はオメガモンに大ダメージを与えていく。

圧倒的としか言えない戦いに誰もが絶望感を抱き始めるが、アーマゲモンは関係ないと言う様に今度は背中から何十発ものエネルギー弾を空中で体勢を直していたオメガモンに向かって撃ち出す。

「ブラックフレアッ！！！」

ーーードドドド

『オメガモン！！』

苦痛の叫びを上げたオメガモンの姿に、離れた所の丘の上で戦いを見ていた太一、ヤマト、そして公園で戦いを見ていた京、伊織、ホークモン、アルマジモンはオメガモンの名を叫んだ。

しかし、オメガモンは答える事も出来ないのかガックリと顔を下に向けてしまい、アーマゲモンはその隙を逃さずに再びアルティメットフレアを撃ち込もうとする。だが、その直前にアーマゲモンの顔に向かって光の矢が凄まじい速さで飛んで来る。

「ホーリーアローローー！！！」

ーーードオン！！

「ガアッ？」

光の矢ーホーリーアローはアーマゲモンに直撃したが、アーマゲモンは全くダメージを受ける事無く顔を光の矢の飛んで来た方向に向け、ヒカリを肩に乗せたままのエンジェウーモンを目に捉える。

「ヒカリ！！それにエンジェウーモン！！一体如何して！？」

太一はヒカリとエンジェウーモンの姿に驚いた。

確かに別の方法で現実世界に戻った筈なのに、ヒカリとエンジェウーモンはオメガモンとアーマゲモンの戦いの場にいる。その事に太一だけではなくヤマト、京、伊織、ホークモン、アルマジモンも目を見開くが、アーマゲモンはオメガモンを倒す絶好の機会が奪われた事に怒りを覚え、エンジェウーモンに巨大な口を向けアルティメットフレアのエネルギーを集める。

「ハッ！！逃げるんだ！！」

「クッ！！」

オメガモンの叫びにエンジェウーモンは即座に応じ、上空へと逃げようとする。

しかし、アーマゲモンは即座に動き回るエンジェウーモンに自身の巨大な口の照準を合わせ、エンジェウーモンに向かってアルティメットフレアを一撃ち込めなかった。

ドゴオオオ

「グルルルルルルルルッ！！」

次々と海に落下すると同時に消滅して行くインフェルモン達の姿に、オメガモンは疑問の声を上げ、アーマゲモンは憎しみに染まった唸り声を上げた。

アーマゲモンには分かっていた。自身の目的を阻む最大の敵が現実世界に戻って来た事を。

そして誰もが突然の現象に動きを止め、爆発によって生じた煙を見つめていると、煙の中からオメガモンと同等の大きさを持った影が姿を見せ始め、ゆっくりと海の方に歩いて来る。

そして煙の中からそれは姿を現した。漆黒の体に金色の髪。鈍い銀色の輝きを放つ頭部と胸当てを装備し、三本の爪を備えた黒い手甲ードラモンキラーを両腕に装備した漆黒の竜人。

アーマゲモンが最大に警戒していた憎い敵。ヒカリ達にとっては忘れられない仲間のデジモン。

その存在はゆっくりと海面に浮かび上がり、アーマゲモンに歓喜に満ちた顔と両手に装備しているドラモンキラーを構える。

「さぁ、始めるぞ・・・・貴様と俺との戦いを！アーマゲモン！！」

「ギギャァァァァァァァァァーーーーー！！！！！」

漆黒の竜人ーブラックウォーグレイモンはそう自身に憎しみに満ちた視線を向けているアーマゲモンに宣言し、アーマゲモンは憎しみと憎悪に塗れた咆哮を辺りに響かせるのだった。

クリスマス特別記念、劇場版漆黒の竜人と少女『ディアボロモンの逆襲』中編

ラストが悩み中です。

原作どおりにインペリアルドラモン・パラディンで行くべきか。
それともブラックにオメガモンの力が宿り、オリジナルデジモンを登場させるべきなのか本気で悩んでいます。

今日中には何とか後編も完成させたいのですが、もしかしたら正月更新になってしまうかもしれません。その時は本気で申し訳ありません。

クリスマス特別記念、劇場版漆黒の竜人と少女『ディアボロモンの逆襲』後編

東京湾内。
多くの人々が集まり、オメガモンとアーマゲモンが激闘を繰り広げていた地。
しかし、今その場所では、互いに漆黒の体を持った二体のデジモンが睨み合いを行い続けていた。
片方の漆黒の竜人ーブラックはアーマゲモンと言う強敵と戦える歓喜に満ち溢れ、もう片方の五十メートル以上の大きさを持ったクモのような形をしたデジモンーアーマゲモンは、自身の計画を悉く邪魔をするブラックに憎しみに染まった視線を向けていた。
互いに形は違えど世界に否定されているデジモン達。しかし、二体ともその胸の内に分かり合うと言う感情は存在せず、どうやって相手と戦うべきなのかと考えていた。
一応アーマゲモンは既に海中にブラックに対する秘策を潜ませているが、それでも、もう一体の標的であると同時に強敵のオメガモンが存在している。ブラックだけには集中して戦えない上に、オメガモンに対しても集中して戦う訳にはいかない。
その事を考えたアーマゲモンは秘策を使う瞬間を見極めなければいけないと、ブラックに顔を向けながら考える。そしてブラックもアーマゲモンに対する戦い方を考えていた。

（人目があり過ぎるな。これではルインとのユニゾンが使えん。ルインの存在はこの世界の連中に知られる訳にはいかん・・・・かと言って、通常状態で何処までやれるかも分からんし、何とかルインとのユニゾンは見られんように行わなければ）

ブラックは既に通常状態ではアーマゲモンに自身の力が及ばない事を分かっていた。

相手はオメガモンでさえも苦戦していた強敵。その相手にブラックとしては悔しいが、通常状態で勝てる確率は限りなく低い。だからこそ、戻って来たら即座にルインとユニゾンを行いX進化する予定だったが、幾らなんでも大勢の人間が見ている前でユニゾンを行う訳にはいかない。

デジモンの事で既に手一杯のこの世界に、更に別世界の魔導技術を知られる訳にはいかないのだ。その事は事前にオファニモン達に釘を刺されている。最もその代わりにネット空間に入り込める能力と一回だけ自身の体をオメガモンクラスにまで巨大化させる事が出来る能力をオファニモン達から貰っていたのだが、正直に言えばその力を持ってしてもアーマゲモンに勝てる可能性は限りなく低いとブラックは理解していた。

だが、その程度の事でブラックはアーマゲモンとの戦いから退くつもりは全く無い。寧ろウォーグレイモンの時やデーモンの時のように、自身の実力を遥かに超える敵との戦いに強い高揚感を覚え、アーマゲモンとの戦いに闘志が高まっていた。

そして二体の高まり続ける闘志に戦いを見ていた誰もが言葉を出す事が出来ずに、二体の注視する。

先ほどまでアーマゲモンと戦っていたオメガモンも、二体の睨み合いには介入する事が出来なかった。形は違えどブラックとアーマゲモンは互いに敵視し合っている。しかもブラックは一対一の戦いに、余程の理由が存在しない限り、他者の介入を嫌っている。その中に割り込むのは幾らオメガモンでも出来なかったのだ。

それはエンジェウーモンも同じなのか自身ではこれからの戦いに介入出来ないと即座に判断すると、太一とヤマトが戦いを見ている場所に降り立ち、テイルモンに退化してパートナーのヒカリと共に戦いを見守る。

そして二体の闘志によって何の現象も発生する事無く、二体の中心の部分に存在している海が揺らめいた瞬間。

ーーービュン！！

「オオォォォォォォォーーーー！！！！！」

「ギギャァァァァァァァーーーーー！！！！」

ブラックが咆哮を上げながらアーマゲモンに向かって飛び出し、アーマゲモンも咆哮を上げながら自身の巨大な口にエネルギーを瞬時に集め終えると、アルティメットフレアを突進して来るブラックに向かって撃ち出す。

「アルティメットフレアッ！！！」

ーーードゴオオン！！

「フッ！！」

ーーービュン！！

アーマゲモンがアルティメットフレアを撃ち出すと同時に、ブラックは自身に迫って来ているアルティメットフレアの照準から離脱し、アーマゲモンの頭上に移動した。

それと同時にブラックは空中で先ほどオメガモンが行ったように体を反転させながら両手の間に大気中に存在している負の力を集中させ、巨大な赤いエネルギー球を両手に間に作り上げ、アーマゲモンの背に向かって投擲する。

「ガイアフォーーース！！！」

「ブラックレイン！！」

ーーードドドドドドドドドドドドドドドゴオン！！

ーーーバッシュン！！

「何だと！？」

ブラックがガイアフォースを放つ同時に、アーマゲモンも自身の背中から追尾能力を持っているエネルギー弾ーブラックレインーを連続で撃ち出し、ガイアフォースを消滅させた。

その上、ブラックレインはガイアフォースを消滅させただけでは留まらずに、空中に浮かんでいるブラックに向かって威力が衰える事無く次々進んで行く。

ーーービュン！ビュン！！

「チィッ！！」

ブラックは自身に向かって来るブラックレインを高速で避け続けるが、追尾能力を持っているブラックレインは避けてもブラックを追い回し続け、ブラックの右手に装備していたドラモンキラーを掠っただけで撃ち砕く。

ーーーバキン！！

「おのれ！！」

ーーービュン！！

自身の武器の一つが失われた事にブラックは僅かに苛立ちの声を

上げながらも、自身を追尾して来るブラックレインを避ける為に、海面の方に向かって飛び、ブラックレインに追尾されながらもアーマゲモンに向かって突進する。
その事に気がついたアーマゲモンは自身のギリギリの所で浮かび上がり、追尾して来ているブラックレインを自身にぶつけようとしているとブラックの策を考え、即座に再び口にエネルギーを集め、アルティメットフレアを突進して来ているブラックに向かって撃ち出す。

「アルティメットフレア！！」

ーーードゴオォォン！！

「それを待っていたぞ！！」

ーーービュン！！

「ッ！！」

ーーードゴオオオ

その激突によって必ず発生するであろう周りが見えないほどの煙こそ、ブラックが本当に望んでいた隠れ蓑。ブラックは既にインフェルモン達との戦いで、インフェルモンやアーマゲモンが気配を読み取れない事を知っていた。
アーマゲモンは目で敵の居場所を判断する。その事が分かっていたブラックは、相手の攻撃を逆手に取り、周りが見えなくなるほどの煙を発生させたのだ。
そして気配が読み取れないアーマゲモンは慌ててブラックを発見しようと辺りを見回すが、その前に顎の下からブラックの叫びが響く。

「ドラモンキラーーー！！」

ーーードゴオォォン！！

「ガハッ！！」

突然の無防備だった顎の下からのブラックの奇襲に、アーマゲモンはダメージよりも驚愕によって呻き声を上げてしまう。
しかし、ブラックは巡って来た千載一遇の好機を逃さないと言うように、突然の奇襲に動きが止まってしまっているアーマゲモンの顔に踵落としを振り下ろす。

「ムン！！」

ーーードゴオオオオン！！

「ガアッ！！」

ブラックの踵落としをモロに食らったアーマゲモンは、今度こそ

苦痛の声を上げてしまう。
　そのブラックとアーマゲモンの戦いぶりを見ていたオメガモンはある事実に気がつき、次々とダメージから回復していないアーマゲモンの頭部に右拳や左腕に残ったドラモンキラー、または蹴りなどを繰り出し続けているブラックを見つめる。

（まさか！？アーマゲモンは接近戦に弱いのか！？・・・そう言えば、こっちが接近しようとした時にアーマゲモンはブラックレインを放って牽制していた・・・アレは自分が接近戦に弱い事を隠す為だったのか！？）

　オメガモンはアーマゲモンの決定的な弱点に漸く気がついた。
　確かに強力な砲撃を撃ち込んでもアーマゲモンは微動だにしなかった。だが、よくよく考えてみればアーマゲモンは自身に敵が接近しないように動いていた。アーマゲモンの大きさはオメガモンや今のブラックを遥かに越えている大きさだ。大きさとは確かに敵との距離が離れていれば強力な武器になる。
　しかし、一度懐に入られてしまえば、逆にその大きさが弱点に変わってしまう。ましてアーマゲモンには接近戦の技が無い。長い手足を使って相手を振り払うと言う方法も存在しているが、既にブラックは顔の部分に張り付いている上に、アーマゲモンが口からアルティメットフレアを放てないように口を無理やり閉じさせる攻撃を繰り出し続けている。
　それでは幾ら強力な力を持っているアーマゲモンでも、ブラックに対して有効打は放てないだろう。
　最も自力の差ではアーマゲモンに圧倒的に分がある為に、ブラックの繰り出し続けている攻撃では有効打にはならないだろうが、それでもアーマゲモンに僅かながらもダメージを与え続けるには充分だった。

「オオォォォォォォォォォォォォォーーーーーーー！！！！！！」

ーーードゴン！！ドォン！！ズダン！！ズガアン！！

「ガアァァァァァァァーーー！！！」

「・・・・凄い」

次々とオメガモンでさえも僅かにダメージを与える事しか出来なかったアーマゲモンに、僅かながらもダメージを与え続けて行くブラックの姿に、戦いの場で、或いはアーマゲモンが世界中に配信している映像を見ていた誰もが圧倒されていた。

ブラックの戦いには諦めや絶望感、そして悲壮感など無い。逆にアーマゲモンの強さに押されるように、ブラックは戦いの中で成長していく。

嘗て戦いの中で成長していったブラックを知っているオメガモンは、あの時と同じ事が今ブラックの中で起きている事を感じていた。

だが、逆にアーマゲモンの中では憎しみと怒りが倍増して来ていた。自身の目的を阻み続け、更に僅かながらもダメージを与え続けるブラック。口からアルティメットフレアを放ってブラックを滅ぼうそうとしても、エネルギーがチャージされる瞬間がブラックには分かるのか、口にエネルギーを集めると同時に口を無理やり閉じさせて攻撃を中断させる。

その姿にアーマゲモンは憎しみと怒りが最高潮に高まり、対ブラック用に用意していた秘策を発動させる。

「ギギャァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーー！！！！！！」

ーーーーバッシャン！！ギュルルルルルルルーーーーーーー！！！！！

「何！？」

『なっ！？』

アーマゲモンが今までの咆哮を越える叫び声を上げると同時に、海中の中から四十の長い腕が飛び出し、ブラックに向かって伸びて行く。

その突然の事態にブラックは驚きながらも即座にアーマゲモンの顔から飛び退くが、次々と海中から伸びている腕はブラックを追い回して行く。

そしてそのブラックを追い回している腕に見覚えがあるオメガモン達は信じられないと言う顔をしながら腕の伸びている海面に目を向けると、同時に海中から凡そ二十体近くの悪魔のような姿をしたデジモン―ディアボロモン達が姿を現す。

ーーーバッシャン！！

『サアァァァァァァァァーーーーーーーー！！！！！』

『デ、ディアボロモン！！！』

海中から姿を現した二十体近くのディアボロモンの姿に、オメガモン達は目を見開きなが声を上げた。

ネット世界で確かに倒した筈のディアボロモン。しかもその数はネット世界で戦った時の数の十倍。

何故ディアボロモンが現実世界にいるのかと、誰もが疑問に思い、目を見開きながら上空を飛び回っているブラックに向かって長い手を伸ばし続けるディアボロモン達を見つめる。

これこそがアーマゲモンの最後の切り札にして対ブラック用に用

意した最大の切り札。現実世界に出て来ていたのは進化出来ないクラモンだけではなかったのだ。
　進化出来ないクラモン達を隠れ蓑にして、進化出来る能力を持ったクラモンも何体か紛れ込ませていたのだ。確かに大半の進化出来る能力を持ったクラモン達は、ブラックに対して送り込んでしまったので殆ど失われてしまった。だが、万が一、嫌、億が一の可能性さえも考えてアーマゲモンは海中の中で進化出来るクラモン達を進化させていた。
　敵側である選ばれし子供達は上空に浮かんでいた、自身が生まれた巨大なデジタマばかりを気にして海中にまで目がいかないであろう事も予測し、アーマゲモンは自身さえも最後の切り札の隠れ蓑にしていたのだ。
　全ては最大の仇敵であるオメガモンを倒し、ブラックと言う横槍を入れてくれた存在を完全にこの世から完全に抹消する為に、最後にして最大の切り札まで用意していたのだ。最もそれが出来るのは驚異的なスピードで進化出来るクラモンの特性が在ってこそなのだ。普通のデジモンでは先ず不可能に近い行為だ。
　そしてそれは成功を治めた。流石に同レベルの究極体の攻撃を回避し続けるのは無理だったのか、ブラックは空中でディアボロモン達が伸ばしていた腕に拘束されてしまう。

ーーーガシッ！！！ガシッ！！

「グッ！！おのれ！！」

ーーーギリギリギリギリギリギリッ！！

　空中で四十近くの腕に拘束されたブラックは拘束から逃れようと力を込めるが、ディアボロモン達は逃さないと言うように更に力を込め、ブラックを空中に押さえつける。

その様子を見ていたアーマゲモンは自身が最も憎んでいる敵を殺せるチャンスに残忍な笑みを浮かべながら口にエネルギーを集め、拘束から逃れようともがいているブラックにアルティメットフレアを撃ち出す。

「アルティメットフレアッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

『ブラックウォーグレイモン！！！！！』

「ブラック様！！」

ブラックに向かって迫るアルティメットフレアを目撃したヒカリ達は悲鳴のような声を上げ、ブイモンとワームモンが近くにいるのにも関わらずにルインも慌てて立ち上がりながら悲鳴のような叫びを上げるが、アルティメットフレアは止まる事無くブラックに進み続ける。

その姿にブラックは来るであろう衝撃に耐えようと全身に力を込めた瞬間、ブラックの目の前にオメガモンが現れ、右手の砲身の照準を迫って来ているアルティメットフレアに合わせ、砲撃を撃ち込む。

ーーービュン！！

「ガルルキャノン！！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ッ！！」

「ガアッ！！」

アルティメットフレアがガルルキャノンに相殺される様子を目にしたブラックとアーマゲモンは目を見開きながらオメガモンを見つめるが、オメガモンは構わずに左手のグレイソードをブラックを拘束している腕に振り下ろす。

「グレイソーーード！！」

『ッ！！』

ーーーシュン！！

流石に腕を切り落とされる訳には行かないのか、ディアボロモン達は即座にブラックから腕を手放し、グレイソードを避けた。

その様子にブラックは僅かに不機嫌そうな顔をオメガモンに向けると、オメガモンは済まなさそうな顔をしながら憎しみに満ちた視線を向けて来るアーマゲモンとディアボロモン達に顔を向ける。

「すまない、ブラックウォーグレイモン・・・君の戦いへの拘りは分かっていたが、相手は一対一で君と戦うつもりはないようだ」

「フン・・・そのようだな・・・・・礼を言うぞ、オメガモン」

「先に助けられたのは此方だ。それよりも」

「チッ！分かっている！気に入らんが相手が相手だからな！」

ブラックはそうオメガモンが告げようとしている言葉を読み取る

と、オメガモンと共に海面に立っているアーマゲモンとディアボロモン達に構えを取る。

「・・・・行くぞ！！」

「応ッ！！」

ーーービュン！！

「ギギャアアアアアアアーーーーー！！！！！」

『サアアアアアアアアアアアーーーーーーー！！！！！』

突撃して来るブラックとオメガモンに対してアーマゲモンは口にエネルギーを集め、ディアボロモン達も胸の発射口にエネルギーを集中させると、アーマゲモンはアルティメットフレアを、ディアボロモン達はカタストロフィーカノンを連射する。

「アルティメットフレア！！！！」

『カタストロフィーカノンッ！！』

ーーーズドオォン！！ズドォン！！ズドオォン！！ズガアァァンン！！

『フッ！！』

ーーービュン！！

向かって来ているアルティメットフレアとカタストロフィーカノ

ンに対して、ブラックとオメガモンは同時に左右に避ける事で回避し、そのまま同時にアーマゲモンとディアボロモン達を挟むように海面に着地すると、ブラックは再びガイアフォースを作り上げ、オメガモンも右手の砲身をアーマゲモンとディアボロモンに照準を合わせ、同時に必殺技を撃ち出す。

「ガイアフォーース！！！」

「ガルルキャノン！！！」

「ガアッ！！」

ーーーブザン！！

ーーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

ブラックが放ったガイアフォースとオメガモンが放ったガルルキャノンは高速でアーマゲモン達に迫り、アーマゲモンは回避出来ないと事に気がつくと、即座に十体ほどのディアボロモンを自身の下の方に移動させ、そのまま二本の巨大な足を上げガイアフォースとガルルキャノンを切り裂き、爆発が起きた。

それと同時にブラックとオメガモンに、残っていたそれぞれ五体ずつアーマゲモンの体の下に移動していなかったディアボロモンが襲い掛かって来る。

それに対してブラックは残っている左腕のドラモンキラーを構え、オメガモンも左腕のグレイソードを構えると、迫って来ているディアボロモン達を薙ぎ払う。

「ドラモンキラーー！！」

ーーーズドォン！！

「グレイソーーード！！！」

ーーーブザン！！

『サアァァァァァァーーーー！！』

ブラックとオメガモンの攻撃はそれぞれ迫ってきた五体のディアボロモンの内の一体には決まるが、残りの攻撃を免れたディアボロモン達がそれぞれ拳をブラックとオメガモンに向かって放つ。

『サアッ！！』

ーーーブン！！

「チィッ！！オォォォォォォーーー！！」

「ハアァァァァァァァァーーー！！！」

ディアボロモン達の攻撃をブラックとオメガモンが避けると同時に攻撃を放っている直後のディアロボモン達に攻撃を繰り出すが、それぞれのディアボロモン達はトリッキーな動きでブラックとオメガモンの攻撃を回避し、一体のディアボロモンがオメガモンの背に張り付いてくる。

ーーーガシッ！！

「何！？」

突然に自身の背に張り付いて来たディアボロモンに、オメガモンが慌てて背に張り付いているディアボロモンに顔を向けてみると、背に張り付いていたディアボロモンはニタリと笑いながら全身の力を全て開放する。

「パ・ラ・ダ・イ・ス・ロ・ス・ト」

ドゴオオオ

ブラックに張り付きながら自爆したディアボロモン達を目撃した太一達は悲鳴のような声を上げ、ヒカリはワナワナと体を震わせながら爆発によって生じた煙を見つめる。
そして煙が徐々に晴れていくと、背中に装着したブラックシールドと鎧がボロボロになったブラックが煙の中から姿を現し、そのまま力無く海面に体が倒れさせてしまう。

ーーードバッシャン！！ブクブクッ！！

「いやぁ」

「そ、そんな」

「ブラックウォーグレイモンが、負けた」

海中に沈んで行ったブラックを目撃したヒカリは現実が信じられないのか否定の声を上げ、同じように離れた場所で戦いを見ていた京と伊織も信じられないと言う声を上げた。
そしてブイモンとワームモンと共に戦いを見ていたルインはブラックが海中に沈むのを確認すると、即座に立ち上がり、持っていたパソコンを魔力で保護しながら走り出し、海面に向かって迷わずに飛び込む。

ーーーバッシャン！！

「おい！人が飛び込んだぞ！！」

ルインが飛び込むのを目撃した一人の男性が叫び、慌てて他の人々とブイモン、ワームモンはルインが飛び込んだ場所を見つめるが、ルインが海面に浮かんで来る事は無かった。

そしてブラックが倒された姿を目にしたオメガモンは、自身の受けたダメージや周りを囲んでいる四体のディアボロモン達に構わずに嘲りに満ちた顔を向け続けていたアーマゲモンに向かって突進する。

「ウオォォォォォォォォーーーーーーーーーー！！！！！！！」

残された全ての力を振り絞ったオメガモンの突進によって周りを囲んでいたディアボロモン達が次々と吹き飛ぶが、オメガモンは止まる事無く突進の勢いを利用してアーマゲモンの頭部にグレイソードを深々と突き刺す。

ーーードスウゥゥゥーーン！！

「ガアァァァッ！！」

深々とグレイソードを突き刺さられたアーマゲモンは苦痛の叫びを上げながら暴れるが、オメガモンは好機を逃す事はしないというようにグレイソードを更に深く突き刺し、右手の砲身をアーマゲモンの口内に滑り込ませ砲撃を連射する。

「ウオォォォォォォォォーーーーーー！！！！」

ーーーズドオォン！！ズドォン！！ズドオォン！！ズガァァァンン！！

「グゥッ！！」

口内に砲撃を連射で撃ち込まれたアーマゲモンは暴れるが、即座

に口内に撃ち込まれた砲撃を吸収し、威力を倍増させたアルティメットキャノンを逆に至近距離でオメガモンに向かって撃ち返す。

「アルティメットフレア！！！」

ドゴオオオ

遂に宿敵だったオメガモンと邪魔をしてくれていたブラックを倒した。
その事実にアーマゲモンとディアボロモン達は三年掛かった事を成し遂げた喜びに打ち震え続けるが、逆に戦いを見ていた太一、ヤマト、ヒカリ、テイルモン、京、ホークモン、伊織、アルマジモン、ブイモン、ワームモン、そして人々は絶望感が広がっていた。
最強の騎士だったオメガモンが敗れた上に、ブラックと言う強力な究極体さえも戦いに敗れてしまった。
その事実に誰もが絶望を覚えていると、二台の自転車にそれぞれ乗った大輔と賢が漸く戦いの場に駆けつけ、瞳から光を失い、仁王立ちし続けているオメガモンを目撃する。

「・・・オ・・メ・・・ガ・・モン」

「クッ！！ブラックウォーグレイモンもいない・・・・あいつ等にやられたのか」

賢はそう呟きながら歓喜に満ちた咆哮を上げ続けているアーマゲモンとディアボロモン達に目を向けた瞬間。

ーーーードバッシャン！！！

『ッ！！！』

突然に海面の一部が盛り上がり、ボロボロになった状態になりながら立ち上がるブラックを誰もが目にする。
その満身創痍としか言えない姿になりながらも立ち上がったブラックの姿に、大輔と賢だけではなく誰もが目を見開くが、驚愕はそれだけでは治まらなかった。

「ウオォォォォーーーーー！！！ブラックウォーーーグレイモン！！！Ｘ進化！！！！！」

ーーーギュルルルルルルルルーーーー！！！

「なっ！？」

「進化だって！？」

ブラックが上げた叫びの意味に気がついた大輔と賢は信じられないと言う顔をしながら、デジコードに包まれたブラックを見つめていると、デジコードは消失し、デジコードが消えた後にそれは立っていた。

それは背中に巨大な二つのバーニアを備え、通常の時よりも機械的になった鎧とドラモンキラーを装着し、赤い瞳を持った漆黒の竜人。ブラックがルインとユニゾンする事によって姿を現す漆黒の竜人が更なる進化を行った姿。その名も。

「ブラックウォーーグレイモンＸ！！」

『ッ！！！』

進化を終えたブラックウォーグレイモンＸの姿に、ブラックウォーグレイモンの事を知っているヒカリ達は目を見開いた。

幾らブラックウォーグレイモンが強くなれるとは言え、ブラックウォーグレイモンは本来ならば進化も成長もする事が出来ないダークタワーデジモン。だが、ルインと言うブラックの唯一無二のパートナーとユニゾンした時だけブラックはブラックウォーグレイモンＸに進化出来る。

その事とルインがブラックウォーグレイモンとユニゾンする瞬間を目撃していないヒカリ達は、在りえないものを見たと言う顔をしながらアーマゲモンと十四体のディアボロモン達に構えを取るブラックウォーグレイモンXを見つめる。
しかし、当人であるブラックウォーグレイモンXはヒカリ達の様子になど構わずに、歓喜に満ち溢れた顔をアーマゲモン達に向ける。

「良い攻撃だった。久々に死ぬかと本気で思ったぞ」

（ブラック様の馬鹿！！本当に！本当に危ない所だったんですよ！！幾らディストーションフィールドを使用してダメージを軽減させていても！！私がユニゾンしなければ、本気で死んでいましたよ！！）

「（少し静かにしていろ）・・・アーマゲモン、それにディアボロモンども。貴様らは最高の敵だ。だが、俺をこの姿にさせた事を後悔しろ！！」

ーーーガッシャン！！！ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

『ッ！！』

背中のバーニアを噴かせながら超高速で突進して来るブラックウォーグレイモンXに、アーマゲモン達は驚愕に顔を歪ませるが、ブラックウォーグレイモンXはアーマゲモン達の驚愕になど構わずに一番近くにいたディアボロモンに背中のバーニアの勢いによって威力を極限にまで上げた渾身の蹴りを叩き込む。

「ハアアッ！！」

ーーードゴオオオン！！

「ガハッ！！」

ブラックウォーグレイモンXの蹴りを受けたディアボロモンは苦痛の声を上げながら吹き飛ばされようとするが、吹き飛ぶ前にブラックウォーグレイモンXが右手でディアボロモンの頭部を掴み取り、渾身の力を込めた膝蹴りをディアボロモンの頭部に叩き込む。

「ムン！！」

ーーードオオン！！

「グガッ！！」

ブラックウォーグレイモンXの膝蹴りを頭部に叩き込まれたディアボロモンは、一瞬息が詰まるような声を上げた。

しかし、ブラックはディアボロモンの様子になど構わずに両手の間に一瞬の内に巨大な黒いエネルギーを作り上げ、未だに動けずにいるディアボロモンに向かって投擲する。

「ハデスフォーーース！！！」

ーーードゴオオオ

ブラックの放ったハデスフォースを至近距離で受けたディアボロモンは苦痛に満ちた雄叫びを上げながら、データ粒子に変わり消滅した。
その事実にブラックウォーグレイモンXとディアボロモンの戦いを見ていた誰もが目を見開いた。
オメガモンでさえも倒すのに時間が掛かったディアボロモンをたったの三回の攻撃で倒した。しかも必殺技ではなくただの打撃によって大ダメージを与えた隙をついての攻撃で。最もそれが出来るのはブラックウォーグレイモンXの積み重ねて来た戦闘経験のおかげだった。
短時間でディアボロモンだけではなく、インフェルモン、クリサリモン、ケラモン、そしてアーマゲモンと何度も戦いを繰り広げていたブラックウォーグレイモンXは、その戦いの中でディアボロモンが非常に撃たれ弱い事実に気がついた。だからこそ、急所と呼べる部分に連続で攻撃を撃ち込む事でディアボロモンの動きを完全に封じ、止めの一撃を与える事が出来たのだ。
そしてブラックウォーグレイモンXはそのまま残っているディアボロモン達にドラモンキラーを振り抜き、次々とディアボロモン達に大ダメージを、または消滅させながらアーマゲモンに向かって進撃する。

その様子を見ていた大輔、賢は、ブラックウォーグレイモンXの異常過ぎる強さに目を見開くが、アーマゲモンが全身の力を口に集めている事に気がつくと、慌ててブラックウォーグレイモンXだけには戦わせてはいられないと思い、自分達のパートナーであるブイモンとワームモンを探し始める。
そしてそれと同時に離れた場所からブイモンとワームモンの大輔と賢を呼ぶ叫びが響く。

「大輔！！」

「賢ちゃん！！」

『ハッ！！』

自身のパートナーの声を耳にした大輔と賢が顔を向けてみると、ブイモンとワームモンが少し高い場所に立っていた。

それを目にした大輔と賢は急いでブイモンとワームモンに駆け寄ろうとするが、多くの人々が立っていたせいで思うように前に進めず、悔しげな叫びを上げてしまう。

「ブイモーーーン！！！！」

「ワームモーーーン！！」

ーーーザッ！

二人の叫びを耳にしたのか大輔達とブイモン達を繋ぐように人々は道を開け、大輔と賢は思わず立ち止まりながら人々を見つめると、人々は大輔と賢を応援するように叫ぶ。

『いっけぇぇぇぇーーー！！』

『頑張れぇぇぇぇーーーー！！！！！』

「・・・・よし！待たせたな！！ブイモン！！」

「行くぞ！ワームモン！！」

「応！！」

「うん！！」

人々の間を駆け抜けながら上げた大輔と賢の叫びに、ブイモンとワームモンは気合の篭った声を返した。

それと同時に大輔と賢が持つＤ－３が光り輝き、ブイモンとワームモンは同時に進化する。

「ブイモン進化！！エクスブイモン！！」

「ワームモン進化！！スティングモン！！」

『ジョグレス進化！！』

エクスブイモンとワームモンは成熟期の進化を終えると同時に更なる進化を行い、光へと変わり一つに合わさる。

そして光が消えた後には背中に四枚の翼を生やし、腰に二本の砲門を装備しエクスブイモンとスティングモンの特徴を持ったデジモン－パイルドラモンが現れる。

「パイルドラモン！！究極進化！！インペリアルドラモン！！」

パイルドラモンへの進化を終えると同時に再び光が発生し、光が消えた後には巨大な体と背に翼を生やした四足歩行の竜－インペリアルドラモン・ドラゴンモードが現れた。

インペリアルドラモン・ドラゴンモードは姿を現すと同時に、そのまま東京湾の方に向かって飛び立ち、ディアボロモンを倒しながら進んでいるブラックウォーグレイモンＸの頭上を通過する。

ーーービュン！！

（ムッ！！）

ーーードゴオオン！！

自身の頭上を通過し、アーマゲモンに向かって突撃して行くインペリアルドラモン・ドラゴンモードに気がついたブラックウォーグレイモンXは、ディアボロモン達に攻撃を繰り出しながらユニゾンしているルインと会話をする。

（漸く現れたか。もうすぐだな）

（はい・・・ですが、本当に宜しいのですか？）

（フン、構わんさ。本当はこの手で奴と決着をつけたかったが、それではオファニモンの依頼が完遂出来ん。ならば多少は我慢してディアボロモンどもで気を晴らす。もう既に今回の戦いは充分に楽しめたからな）

そうブラックウォーグレイモンXはルインに答えながら自身の周りに残っている五体のディアボロモンと、アーマゲモンを護るように立ち塞がっている三体のディアボロモンに目を向け、インペリアルドラモン・ドラゴンモードに向かって叫ぶ。

「インペリアルドラモン！！ディアボロモンの方は俺に任せろ！！お前はアーマゲモンを狙え！！」

「分かった！！任せろ！！」

ブラックウォーグレイモンの叫びにインペリアルドラモン・ドラ

ゴンモードは即座に答えると、背中に備わっている砲塔からアーマゲモンに向かってエネルギー弾を連射する。

ーーードドドド

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「グガッ！！ググググッ！！ブラックレイン！！」

ーーードドドドドドドドドドドドドドドドドドドッ！！！

インペリアルドラモン・ドラゴンモードが発射したポジトロンレーザーを背中に受けたアーマゲモンは、流石にダメージを受けたのか悔しげな唸り声を上げ終えると同時に、自身の背中からインペリアルドラモン・ドラゴンモードに向かってブラックレインを発射した。

それに対してインペリアルドラモン・ドラゴンモードは即座に体を動かし、ブラックレインから逃れようとするが、追尾能力を持っているブラックレインから逃れる事は出来ず、全弾直撃を食らってしまう。

ーーードドドドドドドドドドドドドドドドドドド

残っている全てのディアボロモンをアーマゲモンに向かって蹴り飛ばし、或いは殴り飛ばすと、再び自身の両手の間にハデスフォースを作り上げ、インペリアルドラモン・ファイターモードと同時に必殺技を放つ。

「ギガデス！！！」

「ハデスフォーース！！！」

ドグオオオ

げた。
　そしてアルティメットフレアの直撃を食らったインペリアルドラモン・ファイターモードは、全身から力を失い空中に浮かび続け、戦いを見ていた誰もが絶望感を覚えるが、ただ一人ブラックウォーグレイモンXだけは諦めた様子を全く見せずにアーマゲモンに背中のバーニアを噴かせながら突進する。

ーーードオオオオオオオオオオオオオン！！

「オォォォォォォォーーーーーー！！！！！」

「ギギャ！！ブラックレイン！！」

ーーーードドドドドドドドドドドドドドドッ！！！

　突進して来るブラックウォーグレイモンXを目撃したアーマゲモンは即座にブラックレインを再び撃ち出し、ブラックウォーグレイモンXを撃墜しようとする。
　しかし、ブラックウォーグレイモンXは自身に迫って来ている何十発ものブラックレインを目にしてもスピードを緩める事無く逆に更にスピードを増して、ブラックレインの隙間を縫うようにアーマゲモンに接近し、全力を込めた右拳をアーマゲモンの胴体に撃ち込む。

「ムン！！」

ーーードグォォン！！

「ガハッ！！」

体の大きさのせいでブラックウォーグレイモンXの全力を込めた右拳をアーマゲモンは避ける事が出来ずに食らい、息が詰まったような声を上げてしまう。
その上更に追い討ちを掛ける様にブラックウォーグレイモンXを追尾していたブラックレインが飛来し、ブラックウォーグレイモンXは自身に被弾する前にアーマゲモンの傍から離れ、ブラックレインは急なブラックウォーグレイモンXの移動に対応する事が出来ず、放った張本人であるアーマゲモンに全弾直撃し爆発が起きる。

ーーードドドドドドドドドドドドドゴオオオン！！

「ガアァァァァァァァァァッ！！」

「ハァッ！！」

ーーードゴオン！！

「ッ！！」

苦痛の叫びを上げていたアーマゲモンの頭部にブラックウォーグレイモンXは踵落としを食らわせ、アーマゲモンは声も上げる事が出来ずに海面に顔をぶつけてしまう。

そしてブラックウォーグレイモンXの戦いぶりを見ていた誰もが思った。
“諦めていない。どれほどに絶望や力の差を見せられても、ブラックウォーグレイモンXは全く諦めていない”。
X進化した事によって自身の力が上がっている事などブラックウォーグレイモンXには関係ない。最後の一瞬まで諦めずにブラックウォーグレイモンXはアーマゲモンと戦い続ける。

その姿に誰もが再び希望を胸に抱いた瞬間、戦いの場から離れていた所で両手を失い立ち尽くしていたオメガモンの目に再び光が宿り、それと同時に地面に落ちていたウォーグレイモンと頭部を象った左腕と、メタルガルルモンの頭部を象っていた右腕の目の部分に光が発生し、僅かに宙に浮かび上がる。

『そうだ・・・最後まで諦めちゃいけない』

『俺達の・・・皆の心をインペリアルドラモン・・・・君に託す』

ーーーピカアァァァァァーーーーン！！！

ウォーグレイモンの頭部とメタルガルルモンの頭部が言葉を呟き終えた瞬間、オメガモンのボディは光り輝き、そのまま白きリング一『ホーリーリング』に形を変えると、上空に浮かんでいるインペリアルドラモン・ファイターモードに向かって行く。

それを目撃したアーマゲモンは、自身の本能が最大の警鐘を鳴らすのを感じると、インペリアルドラモン・ファイターモードに『ホーリーリング』を受け取らせない為にアルティメットフレアを発射しようとする。だが、発射する直前にブラックウォーグレイモンXが背中のバーニアを噴かせながらアーマゲモンに急接近し、アーマゲモンの顔の前で急停止しすると、両手をアーマゲモンの頭部に押し当てゼロ距離でガイアフォースは撃ち出す。

「邪魔はさせん！！暗黒のガイアフォーーース！！！」

ドゴオオオ

ブラックウォーグレイモンXが放った暗黒のガイアフォースを食らったアーマゲモンは、今までの中で最大の苦痛に満ちた咆哮を辺りに響かせた。
その間に『ホーリーリング』はインペリアルドラモン・ファイターモードの胸の前で再び光り輝き、今度は白い刀身の部分にデジモン文字で『ｉｎｉｔｉａｌｉｚｅ（初期化）』と書かれた剣ー『オメガーブレード』に変形した。
それを目にした大輔と賢はインペリアルドラモン・ファイターモードに向かって自身の出せる最大の声で叫ぶ。

「受け取れェェェェェェェェーーーーー！！！！」

「皆の力だァァァァァーーーー！！！！」

ーーーガシィン！！

大輔と賢の叫びが聞こえたのかインペリアルドラモン・ファイターモードは胸の前に存在していたオメガブレードの柄を右手で握った。
その瞬間、インペリアルドラモン・ファイターモードの体が光り輝き、光が消えた後には純白の翼を背中から生やし、白を基調として所々に金色の装飾が成された鎧を身に着けたインペリアルドラモン・パラディンモードが姿を現した。

インペリアルドラモン・パラディンモード、世代／究極体、属性／ワクチン種、データ種、フリー、種族／古代竜人型、必殺技／オメガブレード、ハイパープロミネンス
古代より伝わるインペリアルドラモンの最終形態。古代デジタルワールドの崩壊の危機を救ったとされる。その手に持つ大剣『オメガ

ブレード』にはデジモン文字で『ｉｎｉｔｉａｌｉｚｅ（初期化）』と刻まれている。このインペリアルドラモン・パラディンモードこそ“ロイヤルナイツ”の始祖に当たる。必殺技は、巨大な剣の一振りで敵の構成データを問答無用で初期化してしまう『オメガブレード』に、全身の全砲門より一斉放射する『ハイパープロミネンス』だ。

「これが・・・・」

「皆の・・・・」

インペリアルドラモン・パラディンモードは、自身が握っているオメガブレードから伝わる人々の力と想い感じながら、ゆっくりと苦痛に苦しみ続けているアーマゲモンに顔を向け、オメガブレードを正眼に構えながら突進する。

「ウオォォォォォーーーーーー！！！」

「ッ！！グアァァァァッ！！」

ーーーズドオォン！！ズドォン！！ズドオォン！！ズガァァァンン！！

自身に向かって背中の羽を羽ばたかせながら突進して来るインペリアルドラモン・パラディンモードに気がついたアーマゲモンは、即座にアルティメットフレアを連射し、インペリアルドラモン・パラディンモードを撃ち落そうとする。

しかし、インペリアルドラモン・パラディンモードはアルティメットフレアをその身に食らっても怯む事無く突進し、大輔と賢は同時に叫ぶ。

『いっけぇぇぇぇぇぇーーーーーーー！！！』

「ウオォォォォォォォーーーーーーーーー！！！」

ーーードスウゥゥゥゥーーーーーーーーーン！！ッ！！！

大輔と賢が叫び終えると同時にインペリアルドラモン・パラディンモードが突き出したオメガブレードの刃が深々とアーマゲモンの頭部に突き刺さり、ピタリとアーマゲモンの動きは完全に止まってしまう。

そしてインペリアルドラモン・パラディンモードがオメガブレードをアーマゲモンも頭部からオメガブレードを抜き去ると同時に、オメガブレードの刺さっていた箇所からクラモン達が溢れ返るように飛び出し、アーマゲモンの体も次々とクラモンに戻っていく。

ーーーブシュウゥゥゥゥゥゥゥゥーーーー！！！

「クラモン！！」

「このままじゃ！奴らのデータがまた生き残ってしまう！！何か方法は・・・・そうだ！ゴミ箱だ！！」

初期化されてクラモン達が空へと流れていく様子を離れた所で見ていた京、伊織はクラモン達のデータが再び逃げ出してしまう事に焦りを覚えるが、伊織は京のパソコンを見た瞬間に何かに気がついたように叫び、そのまま周りの人々に向かって叫ぶ。

「皆さんの光を！インペリアルドラモンの剣に！剣に集中させて下さい！！」

「ウオォォォォォォーーーーー！！！」

伊織のやろうとしている気がついたのかインペリアルドラモン・パラディンモードは、オメガブレードを天に高く掲げる。

それと同時に東京湾に集まっていた大勢の人々や太一達は、自身の持っている携帯やモバイル、そしてデジヴァイスやＤ－３をインペリアルドラモン・パラディンモードの掲げているオメガブレードに向け、光がオメガブレードに集まって行く。

ーーーピィィィィィーーーーー！！

「よし！！これでクラモン達を全部パソコンに転送出来・・・・・」

「如何しました？京さん？」

「如何したんダギャ？」

突如として言葉と動きが止まってしまった京の姿に、傍にいたホークモン、アルマジモンは質問するが、京は答える事無くパソコンの画面に突然に出現したデフォルメされた二頭身のルインの映像を見つめると、デフォルメ・ルインは京に深々と頭を下げながらメッセージを告げる。

ーーーピコン！！

『全てのクラモン達とディアボロモン達、そしてインフェルモン達のデータ回収にご協力ありがとうございます！！これで全てが私達の狙い通りになりますよ。因みに私達の本当の目的は、ディアボロモンの消滅ではなく、デジタマに初期化する事でした！！』

『なっ！？』

デフォルメ・ルインが告げた事実に京だけではなく、横でパソコンの画面を覗いていたホークモン、アルマジモンも驚愕の叫びを上げた。

しかし、遂にブラックウォーグレイモンXとルインの目的を明らかにしたデフォルメ・ルインは、京達の様子になど全く構わずに説明を続ける。

『あるお方の頼みでクラモン達を全て回収するように私達は頼まれていたのです。ですが、幾らなんでも万単位のクラモン達など連れて行くわけにはいかないので、一度全てのクラモン達とディアボロモン達のデータを一箇所に集める必要があったのです。そしてその状況で初期化に成功すれば、元々一体だったディアボロモンは、全て初期化され、一個のデジタマに戻ります。色々と予想外な事態も起きましたが、概ね私達の計画通りに事は進みました。貴女がたのご協力が無ければ無理な事でしたよ。本当にありがとうございました！！・・・・なお、この映像が流れ終えてから数秒後に自動的に貴女のパソコンの電源は切れて、其方に送られる予定だったクラモン達は全て私達の所有しているパソコンに転送されます。それではもう会う事は無いでしょう。さようなら』

ーーーブン！！ピッ！！

「ちょ、ちょっと！！一体如何言う事よ！？」

デフォルメ・ルインの宣言通りに電源が切れたパソコンに京は叫ぶが、パソコンは電源が切れたまま何も答えなかった。

その間にもインペリアルドラモン・パラディンモードの掲げてい

るオメガブレードに人々の光は集まり続け、全ての光がオメガブレードに宿った瞬間、インペリアルドラモン・パラディンモードとその周りを漂っていたクラモン達全てが光の柱に包まれる。

ーーーピカアァァァァァァーーーーーン！！

「よし！これで全部終わるぜ！！」

「・・・・いや！よく見てみろ！！クラモン達が空に昇って行くぜ！！」

「えっ！？」

賢の突然の叫びに大輔が慌てて光の柱の中に目を向けてみると、確かに賢の叫び通りにクラモン達は転移する事無く上昇し続け、その先に何時の間にか移動していたブラックウォーグレイモンXの右手の中に浮いている小さなパソコンの中に次々と入り込んでいた。

その様子に大輔と賢だけではなく、離れた所で戦いを見ていた太一、ヤマト、ヒカリ、テイルモン、アグモン、ガブモン、そして後から駆けつけて来た空やオメガブレードに光を送っていた人々も様子が可笑しい事に気がつくが、ブラックウォーグレイモンXは構わずに全てのクラモン達が自身の右手の中に存在しているパソコンの中に入り込むのを待ち続ける。

そして最後のクラモンがパソコンの中に移動するのを確認すると、パソコンを宙に浮かせ、訳が分からないと言う顔をしているインペリアルドラモン・パラディンモードに目を向け、瞬時にインペリアルドラモン・パラディンモードの目の前に移動する。

ーーービュン！！

「ッ！！」

「悪いが少し借りるぞ！」

ーーーードン！！

『ッ！！』

ブラックウォーグレイモンXは叫ぶと共に右手を振り抜くと共に、インペリアルドラモン・パラディンモードが右手に握っていたオメガブレードの柄の部分を殴り、オメガブレードはその衝撃によってクルクルと宙を舞ってしまう。

それに気がついたインペリアルドラモン・パラディンモードは慌ててオメガブレードに手を伸ばすが、その前にブラックウォーグレイモンXがオメガブレードの柄を左手で握る。

ーーーーガシッ！！

「ッ！！何をするつもりだ！？」

「フン、少し見ていろ。すぐに返して、ムッ！！」

ーーーーギリギリギリッ！！

インペリアルドラモン・パラディンモードの質問にブラックウォーグレイモンXが素っ気無く答えようとした瞬間に、ブラックウォーグレイモンXが握っていたオメガブレードが急に揺れ動き、ブラックウォーグレイモンXの手から逃れようとし始めた。

それを目にしたブラックウォーグレイモンXは、内心でやはりと思った。

ブラックウォーグレイモンXの力は闇の力に分類される。そしてオメガブレードの力は光に分類される力。相反する力を持つブラックウォーグレイモンXから、オメガブレードは逃れようとしているのだ。

その事は既にオメガブレードについての知識を持っているブラックウォーグレイモンXは予測していたが、最後の作業の為にはオメガブレードの力がブラックウォーグレイモンXには必要だった。

本来ならばネット世界でオメガモン達よりも前にディアボロモンの下に辿り着き、ディアボロモンが存在していた空間そのものを遮断し、ブラックウォーグレイモンXが全てのクラモン達とディアボロモンを倒し、回収したデータを持ってオファニモン達の下に戻る予定だった。だが、ブラックウォーグレイモンXの知識を越える予想外が多発し過ぎた為に、オメガブレードを使う以外にクラモン達をデジタマに戻す事が出来ない状況になってしまったのだ。だからこそ、ブラックウォーグレイモンXは何が何でも一度だけでも、オメガブレードを使用しなければいけないのだ。

「貴様からすれば俺は認められん存在だろう。だが、嫌でも従って貰うぞ！！オォォォォォォーーーー！！！！」

ーーービリビリビリビリッ！！

「ッ！！止めるんだ！！ブラックウォーグレイモン！！そのままじゃ、お前もオメガブレードも吹き飛ぶぞ！！」

力が反発し合って電撃が舞い散り始めたブラックウォーグレイモンXとオメガブレードを目撃したインペリアルドラモン・パラディンモードは、無理やりにでもブラックウォーグレイモンXとオメガブレードを引き離そうと叫びながら飛び掛かった。

しかし、ブラックウォーグレイモンXは力の反発によって発生し

ている電撃に体が傷つきながらも、自由になる右手に小さな黒いエネルギー球を作り上げ、飛び掛かって来ているインペリアルドラモン・パラディンモードに投げつける。

「邪魔をするな！！」

ーーードオン！！

「グアッ！！」

ブラックウォーグレイモンXが投げつけた黒いエネルギー球を胸に食らったインペリアルドラモン・パラディンモードは僅かに苦痛の声を上げ、胸元を手で押さえながらブラックウォーグレイモンXを見つめると、ブラックウォーグレイモンXは電撃に体が傷つきながらも強い決意が篭った叫びを放つ。

「これは俺の役目だ！！本来のオメガブレードの持ち主である貴様にも邪魔はさせん！！オォォォォーーーーーー！！！！！」

ーーービリビリビリビリビリッ！！！

「グゥッ！！否定するか！俺を！！だが、貴様は俺に従え！！！」

ーーードゴオオオ

突如として発生した爆発に飲み込まれた。
　それを目撃したインペリアルドラモン・パラディンモード達は、驚愕に満ちた声でブラックウォーグレイモンXの名を叫び、誰もが心配さと不安に満ちた顔を爆発によって生じた煙を向けると、煙の中から黒い閃光が一閃され、煙を吹き散らす。
　そして煙が吹き散った後には、黒く塗り潰れたオメガブレードを左手に握ったブラックウォーグレイモンXが存在し、賢は信じられないと言う声を出す。

「・・・信じられない・・・相反する力を、意志力で捻じ伏せて従えた・・・・オメガブレードに宿る意思が、皆の力がインペリアルドラモンだけではなく、ブラックウォーグレイモンも主と認めたんだ」

「・・・アイツ・・・やっぱあのブラックウォーグレイモンだ・・・本当に生きていやがったんだ」

　オメガブレードを従えたブラックウォーグレイモンXの姿に、賢と大輔はそれぞれ声を上げながら、使い心地を確かめるようにオメガブレードを振り回しているブラックウォーグレイモンXを見つめる。
　そしてある程度試し終えたのか、ブラックウォーグレイモンXは自身の頭上に浮かんでいるパソコンに向かってオメガブレードを構え、目を伏せながら精神を集中させると、目を見開き、オメガブレードをパソコンに向かって突き出す。

「オメガブレーーーード！！！」

ーーードスゥゥゥゥーーーン！！

ーーーピカカァァァァァーーーン！！

『ウワッ！！！』

ブラックウォーグレイモンXがオメガブレードをパソコンに突き刺すと同時に凄まじい光が発生し、様子を見ていた誰もが思わず声を上げて目を瞑ってしまう。

そして光が治まるのを確認すると、人々はゆっくりと目を開け、ブラックウォーグレイモンXを見てみると、右手に小さなデジタマを浮かばせている姿を目にする。

それと同時にブラックウォーグレイモンXは左手に持っていたオメガブレードをインペリアルドラモン・パラディンモードに投げ渡し、インペリアルドラモン・パラディンモードが握った瞬間に、オメガブレードは再び白き輝き放つ長剣に戻る。

ーーーガシッ！！

「ソイツはやはりお前が持て。オメガモンが次の世代であるお前に託した物だからな」

「ブラックウォーグレイモン・・・・お前はやっぱり生きていたのか」

「・・・・・・・違うな・・・俺は確かに死んだ・・・・今此処にいられるのは、あるデジモンのおかげだ・・・それに時間が来たようだ」

「時間だって？如何言うッ！！」

ブラックウォーグレイモンXの言葉の意味がよく分からなかった

インペリアルドラモン・パラディンモードは、詳しく話を聞く為にブラックウォーグレイモンXの肩を掴もうとしたが、手はブラックウォーグレイモンXの肩をすり抜けた。
　その事実にインペリアルドラモン・パラディンモードだけではなく、様子を地上から窺っていたんヒカリ達は目を見開くが、ブラックウォーグレイモンXはそうなる事を知っていたかのように薄れていく自身の体を冷めた目で見る。

「俺が再びこの世界にいられる時間は、クラモンのデジタマを手に入れる時までだった・・・・そしてクラモンのデジタマを手に入れた今、俺はもうこの世界から消える」

「そ、そんな!?待ってくれ!!一体誰なんだ!?お前をこの世界に再び現したデジモンって言うのは!?」

「安心しろ・・・・奴はチンロンモンと同じぐらいに信用も信頼も出来るデジモンだ・・・クラモンのデジタマは絶対に悪用はしないだろう・・・・奴が俺にクラモンのデジタマを回収してくれと頼んだのだからな・・・・それよりもインペリアルドラモン・・・お前はアグモンとガブモンからこの世界の人間達の想いを受け継いだ・・・だからこそ、俺はお前にこの言葉を送る」

「何だ!?」

「この世界の事を頼んだ。この世界にはこの後も、多くの危機が訪れるかもしれない。俺はもうこの世界には戻れない。この後の危機はお前達が自分達の力で解決しろ・・・それじゃ…」

『ブラックウォーグレイモン!!』

「ッ！！」

聞こえて来た二つの声にブラックウォーグレイモンXは自身の体が半分以上消えながらも、声の聞こえて来た方に目を向け、涙を目に浮かべたヒカリとアグモンの姿を目にする。

その姿にブラックウォーグレイモンXは僅かに胸に痛みを覚えるが、すぐにそれを振り払い、体が消え掛けながらもインペリアルドラモン・パラディンモードやヒカリ達に背を向ける。

「・・・・また、何時か会おう、俺の親友達」

ーーーシュウゥゥゥゥーーーー！！！

ブラックウォーグレイモンXが言葉を告げ終えると共に、その体は光の粒子へと変わり天に昇って行った。

その姿にブラックウォーグレイモンXが世界から再び消えた事をヒカリとアグモン達は知るが、何故か前のような悲しみは湧き上がって来なかった。逆に何時かまた再会出来ると言う確信がヒカリ達の胸に宿るのだった。

三大天使世界デジタルワールド。

その地に存在している火の街にクラモンのデジタマを持ったブラックとルインが訪れ、ブラックとルインが必ず戻って来てくれる事を信じていたオファニモンにデジタマを渡していた。

「依頼の品だ」

「ありがとうございます。新たに生まれて来るこの子はきっと、大

勢の幼年期デジモン達と歩み、多くの事を今度こそ知るでしょう」
「フン、だといいがな・・・もし新たに生まれて来たクラモンも同じ事を繰り返したら、今度こそ俺は奴を滅ぼす」
「安心して下さい。この子は私達が最も信頼しているデジモンに預けます。あの方ならば絶対にクラモンを間違った方向には進ませないでしょう」

そうオファニモンは優しげな笑みを口元に浮かべながら、クラモンのデジタマを優しく撫でる。
オファニモンがクラモンの存在を知ったのは、チンロンモンの報告のおかげだった。何も知らずに究極体にまで成長してしまったクラモン。そして大勢の人々にクラモン事態のせいだったとは言え、嫌われてしまったクラモンを助けたいとオファニモンは思い、本来ならば緊急事態でも無い限り、禁じられている他のデジタルワールドの干渉を行ったのだ。
その罰は何れ他世界のデジタルワールドのデジモン達から下されるかもしれなかったが、オファニモンはそれでもクラモンを放っては置けず、ブラックにクラモンのデジタマの回収を依頼したのだ。
その事を知っているルインはオファニモンに何れ下される罰の事を思い、悲しげに顔を伏せてしまうが、ブラックだけは険しい顔をしながら気になっていた事をオファニモンに話す。
「ディアボロモンに干渉していた奴がいたぞ」
『えっ？』
「ネット空間で内部でインフェルモン達に囲まれた時に奴らが言っていた。何者かが奴に干渉し、戦いは遊びなどと教え込んだようだ。

恐らく俺が知る歴史との違いの原因もそれだろう・・・・そしてディアボロモンに干渉した奴は相当に頭がキレる。それこそ、今の管理世界の現状に追い込んだ奴と同じぐらいにな」

「・・・・精神は子供とは言え、究極体であるディアロボモンに干渉出来る存在は限られています・・・そして他世界のデジタルワールドに干渉し、崩壊に追い込もうとする巨大な力を持ったデジモンは、一体だけです・・・・既に覚醒していたと言うのですか・・・『ルーチェモン』！！」

そうオファニモンはディアボロモンの操ったであろう巨大な悪意を持ったデジモン－『ルーチェモン』の名を、苦虫を噛み潰したような声で叫ぶのだった。

アーマゲモンの消滅の地－東京湾の遥か上空、大気圏。
その場所は本来ならばデジモンでさえも限られた数しか到達する事が不可能な場所。
しかし、その場所で悠然と十二枚の純白の翼を生やし、四つの『ホーリーリング』を身に付けた天使－ルーチェモンが冷笑を浮かべていた。

「全くディアボロモンも不甲斐ない。アレだけ僕が策を与えてあげたのに、全部潰されてデジタマに戻されるなんて、不甲斐なさ過ぎるね・・・・いや、それだけデジモンと人間の絆が脅威と言う事か。それにあの黒いデジモン・・・・アレも危険だ。僕らの計画の障害になるのは間違いない・・・・計画が本格的に動き出したら、先ずはこの世界だ。この世界のデジモンと人間の絆を完全に踏み潰す。今回はそれが分かっただけでも収穫だね」

そうルーチェモンは言葉を呟きながら地上を残忍さで満ちた目で見つめると、ゆっくりと地球に背中を向けながら、横目で地上を歩んでいる人間を見つめ更に言葉を呟く。

「楽しみにしていないよ。君達が頑張った全てを別世界の人間が踏み潰す瞬間を。どれだけ頑張っても、それを蔑ろにするのは、同じ人間なんだからね。クスクスクスッ！ハハハハハハハハハハハハハッ！！！！」

ルーチェモンはそう残忍さと冷酷さに満ちた笑い声を上げながら、空間に溶け込むようにその姿は消した。

ディアボロモンと言う地球を滅ぼす危機は確かに去った。

だが、それは更なる闇の呼び声に過ぎなかった。

本格的に時が動き出すのは九年後。その時に再びヒカリ達は漆黒の竜人と出会う。

しかし、それは喜びの再会ではなく、全てのデジタルワールドと多くの世界を巻き込む激戦への参戦だった。

暗黒の騎士王！カオスデュークモン！！前編（前書き）

遅くなりましたが、明けましておめでとうございます！！
本年もどうぞ宜しくお願いします。

今回は嵐の前の静けさみたいな話になってしまいました。
最も次回から本格的に黙示録の始まりです。

暗黒の騎士王！カオスデュークモン！！前編

崩壊寸前の結界内部海鳴市海岸付近。
その場所にはメギドラモンが暴走する前に避難したクイント、ヴォルフモン達、ファイラモン、レキスモン、そして仲間のデジモン達が集まっていた。その場にいる全員がメギドラモンの憎しみに満ちた暴虐に顔を青ざめさせていたが、同時にそれだけメギドラモンの憎しみが深い事も理解していた。
友である幼年期デジモン達を目の前で虐殺されたのだから、メギドラモンが、正確に言えばヴィヴィオとギルモンが憎しみに堕ちるのも当然の事だ。特にヴィヴィオは目の前で何度も友だったデジモンを失ってしまう瞬間を目にしている。精神的に不安定だったヴィヴィオに、再びトラウマとしか言えない光景を見せたのだから、メギドラモンに進化してしまうのも当然だろう。
その事を知っている為にクイント達はメギドラモンの行動が間違っているとは思えずに、悔やんだ顔をしながら地獄と化した海鳴市の街を見ていると、メタルガルルモンXとスレイプモン、そしてメタルガルルモンXの肩に乗ったマリンエンジェモンがクイント達の目の前に着地する。

ーーードン！！

「クイントさん！！すぐに結界を解除してくれ！」

「メギドラモンとリンディがベルカ自治区に転移してしまった！！このままではメギドラモンは本当に取り返しのつかない事をしてしまう！！」

『ッ！！！』

スレイプモンの言葉にクイント達はスレイプモンの言葉の意味に気がつき、一気に顔が恐怖で凝り固まってしまう。
メギドラモンが聖王教会だけを滅ぼす筈は無い。聖王教会だけではなく、ベルカ自治区に住む一般の人々にも間違いなく手を下すだろう。それほどまでに今のメギドラモンはベルカと言う名のつく全てを憎んでいる。
クイント達としては聖王教会が滅びるのはもはや構わない。寧ろ地球にこれだけの事をしてヴィヴィオを傷つけたのだから、地球の件が片付いた後にクイント達は報復に向かう予定だった。だが、ヴィヴィオの手を血で汚させるのは認める事だけは出来ない。例え既に地球にやって来た狂信者達を大量に殺していたとしても、それでも何も知らない一般人を殺した事実は確実にヴィヴィオの精神に修復が不可能なほどのダメージを与え、悪くすれば精神崩壊を起こしてしまうだろう。
そのヴィヴィオの姿を想像だけとは言え考えたクイントは、全身を恐怖に震わせながらスレイプモンの言葉に答える。

「分かったわ！すぐに結界を解除して、ベルカ自治区に向かいましょう！」

「だが、クイントさん？・・・どうやってアリサ達が避難しているアルハザードに連絡を取るんだ？」

「通信機や機械関係は全部駄目なんだろう？」

『アッ！』

ヴォルフモンとレーベモンの言葉にクイント、スレイプモン、メタルガルルモンXは間の抜けたような声を出して、顔を見合わせた。

そう現在海鳴市に張られている結界は確かにクイントならば解く事が出来る。だが、アルハザードと言う特殊な世界への連絡方法は限られていた。何時もは特殊な通信機で世界を超える通信を行っていたのだが、その通信機は全てメギドラモンの影響で壊れてしまった。

その上ティアナのブレイクミラージュとなのはのレイジングハートも、壊れてはいないにしろメギドラモンの影響から逃れる為に緊急停止して保護状態になっている。その為に何時もならばデバイスで行える通信も現在は出来ない。そして何よりもアルハザードに帰還する為に必要だった機械も壊れてしまっている。完全にクイント達はアルハザードにいるメンバー達が何かしらの行動を取らなければ、連絡も転移も行えない状態になってしまったのだ。

その事に気がついたクイント達は、全身から冷や汗を流して如何すればいいのかと悩んでいると、フッとクイントの頭の中に何かが思い浮かんで来る。

「（待って？転移と連絡？・・・確かそれを一度に行える物が在った様な気が）・・・・・ッ！！在った！在ったわよ！！現実世界に転移とアルハザードへの連絡が一度に行える物が！！」

『えっ！？』

「リンディが使っている部屋の中にそれは在るわ！そう！ブラック専用のアイテムの『ネックレス！！』」

ーーードゴオオオ

クイントがアイテムの名を告げた瞬間、クイント達の背後に存在している海の沖の方に、空に存在していた結界の一部を撃ち破りながら何かが落下し、凄まじい衝撃波が辺りに振り撒かれた。
その突然の事態にクイント達は即座に敵が再び来たのかと思いながら、何かが落下して来た海上地点を見て見ると、まるで海が落下して来た存在を恐れるかのように真っ二つに割れ、その間をゆっくりと何かが歩いていた。
歩いて来る存在を見たヴォルフモン、レーベモン、ブリッツモン、チャックモン、そしてデジモン達は警戒を行うがクイント、スレイプモン、メタルガルルモンXは構えも取る事無く、真っ二つに割れた海の間を歩いている存在を見つめていた。
そしてその存在はゆっくりと海の間を進みに、クイント達から少し離れた場所で立ち止まると同時に、真っ二つに割れた海は再び穏やかな海に戻り、海の間を歩いていた存在ー漆黒の竜人ーブラックはクイント達に顔を向ける。

「何を呆けている？」

『ブ、ブラック！！！』

「ブラックさん！」

（ブラック兄さん！！」

「フン、誰に俺が見える」

そうブラックは驚きに満ち溢れているクイント達に声を掛けながら、今度はヴォルフモン達に顔を向ける。
始めて見るブラックの姿にヴォルフモン達は思わず警戒するが、逆にブラックはその様子に薄笑いを浮かべ、クイントに声を掛ける。

「中々に分かっている連中だ。簡単に俺を味方と思わない所がいい」
「あ・・相変わらずね。それよりもブラック！！貴方今まで一体何をしていたのよ！？こっちは本当に不味い状況…」
「ヴィヴィオとギルモンが暗黒融合進化したのだろう」
『ッ！！』
平然と現状が分かっているように声を出したブラックの姿に、クイント達は何故知っているのかと疑問に満ち溢れた顔をブラックに向けるが、ブラックは再び平然と答える。
「此処に戻って来る前に屑どもが、宇宙から何かしようとしていたぞ。つまらん連中だったがな」
「・・・なるほど、そう言う事ね。理由は完全に分かったわ・・・
（だけど？何なのこの不穏に満ちたブラックの姿は？）」
（余りにも平然とし過ぎている）
（何時ものブラック兄さんなら、すぐさまヴィヴィオに手を出した連中を殺しに向かう筈よ）
（なのに、何なんだ？このブラックさんの姿は？）
（まるで殺気も怒りも感じない・・・ヴィヴィオを傷つけたら絶対に赦さない筈なのに）

（（（（（（（・・・・まッ！！まさか！？））））））

ある仮説に辿り着いたクイント、スレイプモン、ティアナ、メタルガルルモンX、なのはは全身が恐怖に凝り固まった。
ブラックは怒っていないのではない。逆に怒りの余りに冷静になり過ぎているのだ。
それだけの怒りを胸の内に抑え込んでいるブラックが、ベルカ自治領と言うヴィヴィオとギルモンをメギドラモンに進化させた元凶達が住んでいる場所に到着すれば、メギドラモンよりも先にブラックがベルカ自治領を滅ぼすだろう。
その光景が脳裏に浮かんだクイント達は一気に顔を青ざめさせるが、ブラックはクイント達の様子になど構わずに声を掛ける。

「クイント。リンディの奴の事だ。俺が付けていたネックレスを何処かに保管して在るだろう。すぐに持って来い」

「・・・わ、分かったわ・・・だ、だけど、その為には現実世界に戻る必要が在るから、少しだけ待っていて頂戴」

「フン、そんな時間は余り無いが、確かに仲間のデジモン達の姿を一般人に見せる訳にはいかんか・・・・だが、早くしろ。“俺が暴走する前にな”」

（（（（（（やっ！！やっぱり！！））））））

ブラックの告げた最後の言葉にクイント達は、自分達が推測した最悪な状態にブラックがなっている事を確信した。
当然ながら何時までもブラックが自身の凄まじい怒りを抑えられている筈は無い。
そして抑えが効かなくなった瞬間に、ブラックはもはや周りなど

一切気にかけずにヴィヴィオを傷つけた人間を一人残らずこの世から消滅させる為だけに動き出す。
言うなれば今のブラックは、歩く時限装置が付いた十数発核爆弾に等しいほどの存在なのだ。
その爆弾を地球で絶対に暴発させる訳はいかないと思ったクイントは、訳が分からないと言う顔をしているヴォルフモン達とデジモン達に即座に指示を行い、結界を解除を急がせる。
スレイプモン、メタルガルルモンXはブラックが冷静で居られる間に聞けるだけブラックが今まで何をしていたのかを聞きながら、内心でベルカ自治区の最後を確信するのだった。

ミッドチルダ、ベルカ自治領。
その場所は未だに平穏だった。多くの人々が街中を行き交い、観光地と呼ばれるぐらいの景観もデジモンとの戦争が起きながらも保ち、人々の活気に溢れていた。
しかし、其処に住んでいる大勢の人々が知らなかった。ベルカ自治領に本部を構えている聖王教会が、行ってはならない事をした為に黙示録（メギドラモン）を呼び覚ましてしまった事を。
そしてその黙示録（メギドラモン）がベルカ自治領に迫っている事も知らずに、彼らはまだ平穏に暮らし続けていた。
その街中の道路を一台の車が聖王教会本部に向かって走っていた。
「こんな光景を見たらデジモンとの戦争が起きとるとは思えへんな、ヴィータ」
「そうだな、はやて」
車の後部座席の窓ガラスから外の様子を伺いながら声を出したは

やてに、横の席に座っているヴィータは同意するように頷きながら答えた。

「それにしても怪我が治ったばっかりなんや。やっぱ此処はヴァイス君とサーチモンが護衛を任せた方が良かったんやないか？」

「大丈夫だ。少なくともシグナムよりは軽傷だったんだから、もう充分に戦えるし、はやての護りは元々私ら守護騎士の仕事だぜ。幾らヴァイスとサーチモンが信用出来ても、これだけは譲れねぇ」

「無理はせんといてな・・・・それでヴィータ？ほんまの所は如何思う？」

「・・・・騎士の数が少な過ぎるし、実力も一部を除いたらヒヨっ子連中ばかりだ。これじゃ実力の高い完全体のデジモンが五体襲い掛かっただけで、此処は終わりだと思った方がいい。X抗体のクラスのデジモン達なら簡単に此処は落とせるな」

「やっぱそうなんか」

ヴィータの答えにはやては頭が痛そうに手を乗せた。

数日前に機動六課にはやて宛で送られて来たカリムの手紙を読んでからすぐ、はやては色々と考え続け聖王教会に対する行動を決めたのだ。そしてその旨をカリムに伝える為にはやて自身も宛先が分からないようにして手紙を送った所、カリムから会う日の日時と時間が書かれた手紙が送られ、今日この日に会いに来た。

しかし、はやて達はカリムとの会合時間よりも五時間以上前にベルカ自治領に内部に入り、そのまま市内を警護している騎士達や装備などを気づかれないように見回り続けていた。全ては、はやてがレジアス、ゲンヤ、オーリス、そしてその他の地上本部での重要人

物達と共に計画した作戦を実行する為に、聖王教会の動きを把握する為だったのだが、その結果にはやては頭が痛くなるざるえなかった。
確かに警護は行われている。だが、それはデジモンに対する警護のレベルではなく、完全に犯罪者が街の中に入り込んでいるレベルでの警護だった。そんな警護であの人間を遥かに越える実力を持つデジモン達と戦える筈は無い。
他の地上本部が護っている街では、それこそ何時次元震がやってくるかと言うほどの万全の警備を二十四時間続けなければいけない警護を行い続けているのにも関わらず、ベルカ自治領の警備は完全にデジモンには無意味としか言えないレベルの警護だった。

「・・・・ヴィータ？確か聖王教会は全ての騎士達を集めて警護していたんやろ？その騎士達は何処にいったんや？」

「さぁ、私にも分からねぇけど。何か凄い嫌な予感がするぞ、はやて・・・・まるであの第九管理世界の時の様な嫌な予感が」

「・・・・奇遇やな、ヴィータ・・・・私も同じや・・・・ロードナイトモンにやられた脇腹の所が疼いてしょうがないんや・・・・最悪の場合の時の準備もしてあるけど・・・・それで何人救えるんやろうな」

そうはやては自身とヴィータに襲い掛かって来る凄まじい不安が的中しない事を祈る。
だが、はやてとヴィータの不安は確実に的中する事になる。聖王教会の行いこそが呼んだ黙示録（メギドラモン）の手によって、再び歴史に名を残す日が生まれようとしていた。

そして一時間後。

市内の観察をある程度を終えたはやてとヴィータは、カリムとの待ち合わせの時間が迫っている事に気がつき、聖王教会の本部に車を向かわせ、聖王教会に存在する駐車場に車を駐車させていると、白いコートを着た緑色の髪の男性ーヴェロッサ・アコースが近づき、車から降りていたはやてとヴィータに声を掛ける。

「久しぶりだね、はやてにヴィータ」

「ロッサやないか？生きていたんやな」

ーーーガクッ！！

「ひ、酷いな、はやて？」

はやての発言にヴェロッサは思わず体勢を崩しながら困ったように声を掛けるが、はやてからすれば本局の人間であるヴェロッサがこの場にいる事の方が驚きだった。

何せ今地上に本局の人間が居られる状況ではない。色々と本局は地上の邪魔やフェイトの事に対する失敗で、地上への出入り禁止を食らっている状況なのだ。それなのにヴェロッサが地上に居るのだから、はやてからすれば驚く以外の何ものでもなかった。

「まぁ、君の言葉も分かるけどね。僕は一応グラシア家の人間だから、此処に来れると言う訳だよ」

「そう言う事かいな・・・・で、質問やけど？何で殆どの騎士団を集結させていながら、あんなおざなりな警備体制なんや？」

「・・・やっぱり気がついたかい」

「私らを何処の部隊の人間やと思ってるんや？デジモンとの戦いの中心部隊やで？」

「確かにそうだったね・・・・実は僕や義姉さん達にも分からないんだよ。数日前から徐々に騎士達の数が減っていったと思ったら、今日になってあの警備だ。義姉さんや他の穏健派の人達がゼイブ枢機卿に問い質しても、“聖王教会の運命を決める重要任務に当たっている”と答えるだけで詳細は何も知らされていないよ・・・全く予言の事も在るのに、戦力を自治領から離すなんてね」

「予言やて？・・・それってどんな予言や？」

「それについては義姉さんが直接話すよ。あの予言だけは絶対に成就させる訳はいかないからね」

そうヴェロッサは、はやてに告げると、はやてとヴィータをカリムがいる執務室に案内し始める。

そして聖王教会内部通路を歩くが、通路内部で行き交う司祭やシスターの多くは管理局の制服を着ているはやてとヴィータに嫌悪感に満ちた視線を向けて来る。

その理由をはやてとヴィータはよく分かっているが、既に大勢のクラナガン市民から罵声を浴びせられているはやてとヴィータは全く気にした様子を見せずにヴェロッサの案内を通りに通路を進むが、突如としてはやてが足を止める。

ーーーピタッ！

「ん？如何したんだい？はやて？」

「いや～、ちょっと・・・・・お手洗いに行って来るわ」

「大丈夫かよ？」

「大丈夫や。すぐに戻って来るからちょっと待っとってな」

はやてはそうヴィータとヴェロッサに言葉を告げると、素早く近くの通路の角を曲がり、ヴェロッサとヴィータの前から姿を消す。

その様子にヴィータとヴェロッサは眉を僅かに顰めるが、すぐにヴィータは顔を真剣に変え、ヴェロッサに質問し出す。

「で、質問だけどよぉ。本局内部の様子は如何なんだよ？」

「・・・・一言で言って最悪だね。クロノ君や三提督、そして一部の人達を除いて全員がデジモン排除に躍起になってるよ。例のギズモンって言う兵器で勢いが出て来たからね。このままデジモン排除を続ける方針だ」

「・・・ハァ～、自分達の力じゃなくて同じデジモンから生まれた兵器に頼るか・・・本気でヤバイ状況だよな？」

「同感だね。既に各管理世界の主要都市にはギズモンが配備され始めている。これらが一気に反旗を翻せば、主要都市は全滅。管理世界は裏で隠れている連中に支配されたも同然の状況だよ」

「本気で不味いか」

ヴェロッサの現状報告にヴィータはそう険しい顔をしながら、今後如何言う行動を取るべきなのかと考えていると、通路の角から足音が響き、はやてが角から姿を現す。

それを確認したヴェロッサは僅かに頷きながら、ヴィータとはや

てに背を向け歩き始める。

「戻って来たね。それじゃ行こうか」

「そうだな」

「・・・そうやな」

ヴェロッサの言葉にヴィータとはやては答え、再び通路を進み始めると、一目見て普通の扉とは違う扉の前に辿り着き、ヴェロッサは扉をノックする。

ーーーコンコン

「義姉さん。はやてとヴィータが来たよ」

「入って貰って」

ーーーガチャン！！

扉の向こうから響いた女性の声にヴェロッサは即座に応じ、扉を開けると、部屋の中には執務机に座った金髪に法衣を着た女性ーカリム・グラシアと、その横に控えるように立つ修道服を着た女性ーシャッハ・ヌエラが存在していた。

それを確認したはやてとヴィータはヴェロッサの示すとおりに執務室の中に在るソファーにはやては座りヴィータは、はやての背後に控える。

カリムもはやてと対面するようにソファーの方に座り直し、互いに顔を見合わせあう。

「久しぶりね、はやて。元気そうで良かったわ」

「・・・・カリムも元気そうで何よりや・・・・・それで・・・・予言って言うのは一体何や？」

「・・・・これを読んで頂戴」

カリムははやての質問に顔を険しくしながらシャッハに何らかの資料を受け取り、そのままはやてに差し出す。

はやてはそれを受け取ると、背後に立っているヴィータにも見えるように資料を広げ、内部に書かれた内容をヴィータが険しい顔をしながら読み上げる。

「『愚かなる狂信は、悪戯に傷付きし王を更に傷つける。それによって王は黙示録に変わり、古の国を崇める狂信は灰となって消え果る。されどそれは始まりに過ぎない。黙示録は古の国に関わる全てを世より廃するであろう』ッ！！おい！これって！？まさか！？」

「そう・・・それが私の持つレアスキル―“預言者の著書（プロフェーティンシュリフテン）”が予言した文章の一部に書かれていた詩。聖王教会の崩壊とベルカ自治領の消滅の予言・・・その他にも多くの予言が読まれているのだけど、その内容を書き示した文字が読み解けない・・・・唯一読み解けた部分はベルカ崩壊の予言だけ」

「・・・・如何言うことだよ？騎士カリム？確かお前の予言は古代ベルカ文字で書かれているんだろう？それなのに読み解けないって一体？」

「騎士ヴィータ・・・その答えは次のページを開けてみれば分かるわ・・・多分貴女でも読み解く事は無理でしょう」

「あぁん？」

カリムの言葉にヴィータは訝しげな声を上げながら、はやての持つ資料に顔を向けると同時にはやてがページを開き、古代ベルカ文字とは全く違った記号のような文字がページの中に広がっていた。

その明らかに自身の知る古代ベルカ文字とは違った文章にヴィータは意味が全く分からずに疑問に満ち溢れた顔をする。

「何だこりゃ？全然古代ベルカ文字と違う・・・こんな文字ベルカでなんて使われていなかった」

「やはりそうですか・・・この文字については私達も調べたのですが、何処の世界の文字なのかも分からないのです・・・ですが、この文字さえ読み解ければ、未来の情報を知る事が…」

「『傲慢と狂気に支配されし法の塔。海に浮かびし四つの希望の一つを無に帰す』」

『ッ！！』

突如として何でもないように予言に書かれた内容を喋りだしたはやての姿に、カリム、ヴェロッサ、シャッハだけではなくヴィータも目を見開くが、はやては全く気にせずに更に内容を読み上げる。

「『それによって残されし、三つの希望は曇り、罪無き者達は多くが消え果る。されど、それは大いなる戦乱の始まりを告げる鐘に過ぎない』・・・この後に続くのがお前達の読んでいたベルカ崩壊の予言だ」

「ッ！！お前！！何もんだ！？」

突然に口調が変わったはやてに、ヴィータは目の前に座っているはやてが偽者だと気がつき、瞬時に自身のデバイスであるアイゼンを起動させ、バリアジャケットを身に纏うと、アイゼンを偽者のはやてに向かって振り下ろす。

「オラァァァッ！！」

ーーードゴオオオオオオオン！！

ヴィータが振り下ろしたアイゼンは寸分違わずに偽者のはやてが座っていたソファーの箇所を粉砕した。

しかし、狙った張本人である偽者のはやては素早くヴィータがアイゼンを振り下ろす前に資料を右手に握りながら飛び上がり、そのままカリムの執務机の上に簡単に着地する。

ーーートン！！

「危ないな。今の一撃で資料が破れでもしたら如何するのだ？これはかなり重要な情報なのだろう？」

「うるせぇ！！テメエ！！本物のはやてを如何しやがった！？」

ヴィータはそう執務机の上に立っている偽者のはやてに叫びながらアイゼンを構え、シャッハとヴェロッサもそれぞれ偽者のはやてに構えを取り始める。

何者かはヴィータ達にも分からないが、それでも親しいはやてに完璧に近い形で偽者のはやては化けていたのだから只者ではないとは分かっていた。特に家族としてずっと一緒に暮らしていたヴィー

タは、目の前に立っているはやてが偽者だと気がつけなかった事を本当に悔しがりながら、偽者のはやてを睨みつける。
しかし、それぞれにデバイスを構えられながらも偽者のはやてはまるで慌てる様子を見せる所か、逆に余裕そうな顔をしながら声を出す。

「安心しろ。私は彼女には傷は負わせはいない。その様な事は私のパートナーも望んでいないのでな」

「パートナーだ？・・・・まさか！？お前！？例のキツネデジモンか！？」

「フッ、正解だ！！」

ーーーバサッ！！

ヴィータの叫びに応じるように偽者のはやては左手で制服を脱ぎ捨て、脱ぎ捨てられた制服が床に落ちた後には大極図の紋章が刻まれた篭手を装備したキツネのようなデジモン―レナモンが存在していた。
突然のレナモンの登場にカリム、ヴェロッサ、シャッハは目を見開くが、ヴィータだけは険しい顔をレナモンに向ける。ヴィータは何度も機動六課を助けてくれたレナモンを、心の何処かで味方だと思っていた。今回のような突然の行動をレナモンが取って来るとは思っても見なかったのだ。
しかし、見つめられているレナモンはヴィータ達の様子など全く気にせずに、右手に持っている資料を掲げる。

「これは貰って行く。私のパートナーが聖王教会の詳細な情報を欲しがっているのでな」

「なっ！？テメエ！それを返しやがれ！！」

「断る。それにこの中に書かれている文字はお前達では絶対に読み解けん」

「待って下さい！！貴女はその文字を読めるのですか！？」

「あぁ、一番最初に書かれていた予言の文字は紛れも無く私達デジモンが使うデジ文字。他の文字は見ていないが、確実にこの予言に使われている文字の殆どはデジ文字で構成されているのだろう」

『ッ！！』

レナモンが告げた事実にカリム達は目を見開いた。

よりにもよって読み解けなかった文字の正体がデジモン達の文字ーデジ文字だった。それならば管理世界の人間が予言の内容を読み解ける筈は無い。何せ管理世界はデジモンを否定している。

そのような人間達がデジモンの事など詳しく調べる筈は無いのだから、文字と言う文化が存在している事も知らないだろう。だからこそ、予言の内容を読み解く事は聖王教会の人間には出来なかったのだ。

「だからこそ、この予言や他の情報を私が貰って行く。仲間同士で争っているお前達には無意味な物だからな」

「如何言う意味だ！？」

「こう言う意味だ！！狐葉楔（こようせつ）ッ！！」

ーーードスドスドスッ！！

『ギャァァァァァァーーーー！！』

『ッ！！』

ヴィータの叫びに答えると共に扉の方に向かって無数の木の葉ー狐葉楔（こようせつ）をレナモンが放つと、狐葉楔（こようせつ）はドアを突き抜け、それと同時に扉の向こう側から何人もの悲鳴が響き渡り、カリム達は目を見開く。

それと同時にレナモンは素早く扉の方に向かって飛び上がると、空中で体を蹴りの体勢に変え、そのまま原型を留めている扉とその周りの壁に向かって連続回し蹴りを叩き込む。

「狐回蹴（こかいしゅう）ッ！！」

ーーードドドドドドドドドドゴオオン！！

ーーーガァァァァァァァーーーン！！

『グゲフッ！！』

『ッ！！』

レナモンが扉とその周りの壁に狐回蹴（こかいしゅう）を叩き込むと、扉とその周りの壁は吹き飛び、その先に居た騎士甲冑を纏った騎士達に次々と激突して行く。

その姿にカリム、ヴィータ、ヴェロッサ、シャッハは信じられないと言う顔をするが、レナモンは最初から分かっていたかのように素早く騎士達の間を駆け向け、突然に衝撃によって止まってしまっ

ている騎士達全員からデバイスを奪い取る。

ーーーガシガシガシガシガシィィン！！

「・・・・さて、これでお前達の戦う術は消えた。まだ、やるのか？」

『ヒィッ！！』

レナモンの脅すような声にデバイスを失った騎士達は恐怖に駆られ、素早く通路の奥へと逃げていく。

その様子を軽蔑した眼差しで見ていたレナモンは、今度は状況が把握出来ていないのか、呆然としているヴィータ達に顔を向ける。

「何を呆けているのだ？すぐに先ほどの連中以上の騎士達がお前達を殺しに来るぞ」

『なっ！？』

「過激派は今回のお前達と八神はやての会合を利用するつもりだ。穏健派の筆頭だったカリム・グラシアが会合途中に惨殺された。その犯人を八神はやてとその護衛だった者に仕立て上げ、穏健派を完全に潰し、本格的な管理局との戦争を始めるつもりだ。すぐにこの場から逃げないと巻き込まれるぞ。ではな」

ーーービュン！！

「アッ！！待ちやがれ！！」

走り出したレナモンに慌ててヴィータは叫びながら追い駆けよう

とするが、その直前にレナモンの走った方向とは反対の通路の角から数名の銃器を構えた騎士達が飛び出し、執務室から飛び出し掛けていたヴィータに発砲する。

「撃て！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！

「なっ！？質量兵器！！」

銃の発砲音を聞いたヴィータはすぐさま執務室の中に飛び込み銃撃を避けた。

そしてそのまますぐさま青ざめた顔をしているカリムに詰め寄り、騎士達が使っている銃について質問する。

「如何言うこった！？アレは完全に質量兵器だろうが！？何でそんな物を教会の騎士達が使ってんだよ！？」

「し、知りません！！私にも訳が分からないんです！何で騎士達が質量兵器を持っているのか！？」

「・・これは完全にさっきのデジモンの言うとおりみたいだね・・・シャッハ？そっちはどうだい？」

ヴィータがカリムに質問している横で、ヴェロッサは自身のレアスキルである“無限の猟犬（ウンエントリヒャークト）”から送られて来ている情報を読み取り、執務室に存在している窓から外の様子を伺っていたシャッハに質問した。

「此方も同じですよ、ロッサ。完全に外も警護を行っていた騎士達

で封鎖されています。この様子だと他の穏健派の方々は全員既に拘束されている考えた方がいいでしょう」

「ハァ～、本気で困ったね。デジモンとの戦争だけで手一杯だって言うのに、こんな状況を作るなんて。過激派は本気で馬鹿としか言えないよ」

「・・・確かに此処までくれば、そうとしか言えませんけど・・・私には分かりません。何故騎士達全員がゼイブ枢機卿に従っているのか？幾らなんでもゼイブ枢機卿の力だけでは全ての騎士達を従える事は無理な筈です」

「・・・確かに同感だね・・・だけど、何かが在るんだろ。ゼイブ枢機卿に全ての騎士達が従う何かが・・・それが何かまでは分からないけどね」

そうヴェロッサはシャッハの質問に答えながらも、自身のレアスキルで情報を集めていると、カリムに聞いても埒があかないのか判断したヴィータは執務室の開いた穴の方に歩き出す。

「んな事より！はやてだ！！あのデジモンと入れ替わったはやてが教会の何処かに居る筈なんだ！？ただでさえはやてには個人戦闘力が無い上に、リインも今はいないんだ！このままじゃはやてが危ねぇ！今から探しに向かうぞ！」

ーーーガシッ！！

「待って下さい！騎士ヴィータ！！外には沢山の武装した騎士達がいるんですよ！！幾ら貴女でも一人では無理です！！」

「うっせぇ！行くっていったら！行くんだよ！！」

はやてを探しに行こうとするヴィータをシャッハは腕を捕まえて止めようとするが、ヴィータは何が何でもはやてを探しに行こうとする。

しかし、その直前にヴィータが右手に握っていたアイゼンに通信が届き、アイゼンからはやての声が聞こえて来る。

『そうやでヴィータ。此処はその部屋で大人しくしとくんや』

「ッ！！はやて！！無事なのか！？」

『ちゃんと無事やで。例のレナモンにトイレから出ようとしていた所で気絶させられたけど。それが逆に良かったわ。入れ替わった事をばれないようにする為に私を何処かの天井の中に隠した見たいや。まぁ、おかげで過激派連中に捕まらずに済んだんやから、ほんまに助かったわ』

「よし！はやて！場所を教えろ！！すぐにその場所に向かうからな！」

『その必要は無いでヴィータ。まさか、此処まで此方の考えていた通りに進むとは思ってへんかったわ』

『えっ！？』

はやての発言にヴィータ、カリム、シャッハ、ヴェロッサは訳が分からないと言う声を上げた。

今、はやては考えていた通りに進んだと発言した。何故その様な発言が出て来るのか分からずにヴィータ達は疑問に満ち溢れた顔を

アイゼンに向けるが、通信先に居るはやては構わずに言葉を告げる。
『確実に私がカリムに会いに行けば、過激派連中はそれを利用すると思うとった。だから、逆にこっちも利用し返す事にしたんや・・・・そろそろ衝撃が来るから伏せといてな。多分派手に来るで』
「はっ？おい！はやて！！一体如何言う事な…」
ドゴオオオ

スのある方向に向かって伏せながら進み、同じように付いて来たカリム達と外を見てみると、恐怖に震えて凝り固まっている騎士達とそれを見下ろす全長三十メートルぐらいの大きさを持った赤き竜ーキャロの切り札の一つー真竜ヴォルテールが存在していた。

「ギギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！！！！！」

『なっ！？』

騎士達を見下ろしているるヴォルテールの姿にヴィータ達は目を見開きながら驚愕に満ちた声を上げていると、再びアイゼンからはやての声が響く。

『キャロも派手やな。切り札の一つのヴォルテールを呼び出すなんて流石に思うてへんかった・・・（まぁ、今回はしょうがないわな。確実に過激派連中を一網打尽にしないと後の事がほんまに大変な事になってしまう。だからレジアス中将も許可を出して今回の作戦を了承したんやからな）』

そう全てがはやて達の考えた作戦通りだった。

今回の作戦の内容は、聖王教会内部に存在する過激派の一掃だった。現在の聖王教会の現状を知っているはやて、ゲンヤ、レジアス、オーリス、そして地上本部の重要人物達は、このまま聖王教会を野放しにして置く訳にはいかないと判断し、過激派連中を一人残らず捕まえる事にしたのだ。

その為にはやては自身が聖王教会に向かう情報を過激派の中の修道女に化けたレナモンを使って、過激派のトップだったゼイブ枢機卿に流した。

そして穏健派が目障りだと思っているゼイブからすれば、穏健派

を完全に潰し、聖王教会を完全に支配する好機が巡って来た思い込んで動くとはやては踏んでいた。その時に確実に動かす事が出来ない証拠と呼べる瞬間の映像を取り、地上本部に流せば幾ら聖王教会でも言い逃れが出来ない。更にはやて達に取っては嬉しい予想外な事も在った。

聖王教会の人間が質量兵器を使う瞬間の映像も取れた上に、ベルカ自治領を護っている騎士達の数も少ないと言うはやて達に取って最高の状況が生まれていた。

最もその作戦を知る人間は機動六課でも一部の者を除いた殆ど者が知らないほどの極秘任務だった。

何処から情報が漏れるか分からないのだから、出来るだけ仲間にも今回の作戦は知らせず自治領近くで待機させて置けとレジアス直々から命令され、今回の作戦の詳細を六課内部で知っているのはレナモン、ゲンヤ、オーリス、ポーンチェスモン（白）、キャロ、リュウダモン、フリード、そしてヴァイスとサーチモンだけだった。

はやてとしては漸く怪我から復帰して頑張っているヴィータにも今回の作戦の事を知らせたかったのだが、オーリスから出来るだけ知らせるなと厳命された為に、はやては個人としての感情を抑え込んで作戦を実行した。

そして最終的に作戦は成功に向かっている。後は自治領の外側に居るレジアス直々の命令で動いている地上の部隊が聖王教会に進行して過激派を全て捕らえれば作戦は完了する。

全てが終わった後にカリム達やヴィータには質問攻めにあうだろうが、それでも人間同士の戦争を行わせる位ならば増しだとはやては考え、天井の裏からゼイブが指揮を執っている部屋に向かい出す。

しかし、はやては、そして今回の作戦を実行させるように命令したレジアス達さえも知らなかった。

既に全てが遅かったのだ。聖王教会の過激派は既に取り返しのつかない事を実行してしまっている。そしてそれによって目覚めてし

まった黙示録（メギドラモン）がベルカ自治領に到着し、赤き空とベルカの血が流れている人々の無数の屍の山を作り上げるまで本当にもう少しなのだった。

暗黒の騎士王！カオスデュークモン！！中編

ベルカ自治領郊外に存在する森。
その森の中に存在する一際大きな木の頂点で、学ランを羽織った獣人ーバンチョーレオモンは遠く離れた聖王教会の様子を伺っていた。

「・・・漸く地上本部も聖王教会に対する行動を決めたようだな・・・ならば、この状況を利用して奴らは必ず動く。十闘士どもが」

バンチョーレオモンがベルカ自治領の訪れた理由は、ミッドの何処かに潜伏している五人の闘士の一人ー『土』の闘士グロットモンの目撃情報が入って来たからだった。
バンチョーレオモンが自分達を追って来ている事を知っているグロットモン、メルキューレモン、ラーナモン、アルボルモン、ダスクモンは、ミッドの各地に建っているダークタワーには姿を見せずに隠れ続けている。流石にバンチョーレオモンでも広大なミッドチルダからメルキューレモン達を見つける事など不可能だ。だからこそ、ガオモン達の仲間のデジモン達の情報を頼りにグロットモンが目撃されたベルカ自治領に訪れた。
そして丁度その時に地上の部隊と機動六課の聖王教会への襲撃現場を目撃し、目的までは分からずともグロットモンが動くに最高の状況が訪れた事を確信した。

「何が目的かは知らんが、これ以上奴らを野放しには出来ん。必ずこの拳で性根を叩き直してくれる！」

ーーーピピッ！！ピピッ！！

「ムッ！！」

バンチョーレオモンがベルカ自治領内部に向かって駆け出そうとした瞬間に、突如として羽織っているＧＡＫＵ（ガク）－ＲＡＮ（ラン）の中に仕舞って置いたフリート特製通信機から緊急呼び出し音が鳴り響いた。

その音にバンチョーレオモンは凄まじい嫌な予感を感じるが、すぐさま通信機を取り出し、フリートへと通信を繋ぐ。

ーーーピッ！

「俺だ」

『バンチョーレオモン！！今何処に居ますか！？』

「？今はベルカ自治領のすぐ近くだ。グロットモンの目撃情報が在ったのでな。何か在ったのか？フリート」

『丁度良かったです！！実は地球に聖王教会の過激派連中が襲撃を掛けたんですよ！！しかも質量兵器満載の戦艦を連れて！！』

「何だと！？それで地球は無事なのか！？」

『・・・えぇ、無事と言えば無事なのですが・・・・・・ヴィヴィオちゃんとギルモンが再びトラウマの場面を目撃して暗黒融合進化を行ってしまい・・・・“メギドラモン”に進化してしまったんです』

「ッ！！！メギドラモンだと！？」

フリートが告げたデジモンの名前にバンチョーレオモンは大声を

上げた。
　バンチョーレオモンもメギドラモンの事は知っている。何せ嘗てギルモンがロイヤルナイツの一人だったデュークモンをバンチョーレオモンは知っている。その事でデュークモンとメギドラモンの関係はバンチョーレオモンもよく分かっていた。
　そして同時にメギドラモンがどれほどまでに危険性を兼ね備えたデジモンなのかも、バンチョーレオモンは知っている。しかも融合進化と言う事はヴィヴィオの持つ全ての力もメギドラモンは受け継いでいると言う事に他ならない。

『・・・そしてメギドラモンは地球に訪れた狂信者達を殺した後に、止めようとしたリンディさんと一緒にベルカ自治領に向かって転移しました・・・目的は確実に聖王教会への復讐・・・そしてベルカと名の付く全ての破壊でしょう』

「クッ！！何と言う事だ！？・・・・分かった。丁度今機動六課の連中も聖王教会に訪れている。この件をすぐに知らせて、ベルカ自治領の人間達の避難を行う！」

『お願いします！此方からもすぐに援軍を送ります！何せ此方には…』

『聞こえるか、バンチョーレオモン』

「ッ！！・・・・・・フッ、あぁ、聞こえているぞ、ブラックウォーグレイモン！！」

　フリートの声を遮るように割り込んで来た声に、バンチョーレオモンは一瞬驚いた顔をするが、すぐに口元に僅かに苦笑を浮かべながら答えた。

その声に通信機の先にいるブラックも僅かに苦笑を浮かべたような息遣いを行い、バンチョーレオモンに声を掛ける。

『メギドラモンの影響で次元空間も僅かに不安定になっている。それ用にフリートが転移装置の調整を終え次第に、すぐに俺達も向かう・・・・狂信者どもが消えようが構わん。だが、リンディとギルモン、そして・・・・ヴィヴィオを頼むぞ』

「任せておけ。貴様が到着するまで、何としても俺がメギドラモンを押さえる。一般人は誰一人としてメギドラモンには殺させん！男の約束だ！必ず果たしてやる！！」

ーーーピッ！！

バンチョーレオモンは通信機を切ると、素早く通信機をＧＡＫＵ（ガク）ーＲＡＮ（ラン）の中にしまい込み、そのまま立っていた木から飛び降りて地面に着地し、ベルカ自治領に向かって駆け出す。

ベルカ自治領に訪れようとしているメギドラモンの暴虐を止める為に。

聖王教会内部ゼイブ枢機卿執務室。

今はその場所は矢継ぎ早に送られて来るベルカ自治領内部と聖王教会の地上本部襲撃に混乱を極めていた。本来ならば今回のはやてとカリムの会合を利用して完全に穏健派を潰す予定だったのに、逆の襲撃を利用されて過激派のメンバーが次々と突入して来た地上本部や六課の局員に捕らえられている状況になっていたのだ。

その上何故か隠して置いた質量兵器保管庫から爆発が生じて兵器の類は使用不可能になり、自治領内部で騎士達が行っていた警備体

制の穴の部分から地上本部の局員達が突入し、次々と騎士達は無力化されていく。本来の聖王教会が布いていた警備体制ならば此処まで地上は有利には事を進められなかっただろう。
しかし、現在の聖王教会の大部分の戦力は地球にいる聖王の確保に向かってしまっている為に、残されている戦力は若い騎士達しか残っていない。一応ベテランの騎士達も何人か存在しているが、其方は突如として教会の敷地内に姿を現したヴォルテールの相手で精一杯である為に、他の騎士達の援護など行う事は不可能。更に切り札の一つである今まで聖王教会が手に入れて来たロストロギアや聖遺物は何者かの手によって、保管庫の鍵が強奪され使用不可能になっている。

「何故だ！？何故此処まで一方的に管理局などと言う俗物どもに追い込まれているのだ！？」

「わ、分かりません！ですが、如何やら私達の中に裏切り者が居たとしか思えません！枢機卿閣下が持っていた鍵なども全て盗まれているのですから！」

「それこそ有り得ん！既に穏健派連中を除いた全員に聖王陛下の事を伝えてあるのだ！！忠誠を誓う騎士達に裏切り者など出る筈が無い！管理局だ！管理局の連中が盗んだのだ！！何としても連中を排除しろ！！」

そうゼイブは目の前に立っている数名の自身の部下達に命令を飛ばすが、もはや部下達もこの圧倒的な不利な状況を覆す事が出来ずに次々と騎士達から送られて来る念話や通信に混乱の渦を極める。
その様子をゼイブが立っている天井内部で聞いている者が存在している事にも気が付かずに。

（聖王やて？如何言う事や？確かカリムの話だと聖王家はずっと昔に断絶した筈？・・・それなのにその聖王が存在しとる？何か裏があるわな）

天井裏の中でゼイブ達の会話にバリアジャケットを纏って聞き耳を立てていたはやては、ゼイブの言葉に何か隠された裏が存在している事を読み取った。

聖王家は完全にその血を途絶えさせている。それは聖王教会の人間ならば誰もが知っている現実。にも関わらず、ゼイブやゼイブに付き従っている騎士達は聖王家の人間が存在して居る事を確信し切っている。聖王教会の歴史は浅くは無い。今更聖王家の人間が発見されるなど普通に考えれば如何考えても可笑しい事実だ。

（考えられるとすれば、聖遺物から採取した血液や何かで人造魔導師として聖王家の人間を現代に蘇られたぐらいやな。管理局も行っとる事やから、聖王教会が行っていても可笑しくは無い・・・・まぁ、この件は過激派連中を全員捕まえてから詳しく聞くしかないわな）

そうはやては一時聖王に対する考えを放棄すると、再び天井裏に僅かに開けた小さな穴からゼイブ達の様子を伺い出す。

此処ではやてが天井裏から飛び出してゼイブに奇襲を掛けるのは可能なのだが、個人戦闘能力がリインが居なくなれば極端に低くなるはやてでは、奇襲した後の行動が何も出来ない。だからこそ、はやては静かにチャンスを待つ。

自身の信頼するパートナーデジモンが奇襲を完全に成功に治める為に作ってくれるチャンスを。

ーーーバン！！

「枢機卿！大変です！！外にいる巨大な竜が聖遺物が納められている保管庫の方に歩き出しました！！」

『なっ！？』

突如として執務室の中に飛び込んで来た右手に槍型のアームドデバイスを握った若い女性騎士の叫びに、ゼイブ達は驚愕した。

彼らは狂信者ではあるが、それと同時に聖王に対する歪んだ忠誠心も持っている。そして聖王教会が権威を保つ為には聖遺物と言う過去のベルカの偉人達が残した物が必要。それが無くなれば聖王教会の権威は限りなく低くなる。現状、まだ聖王を手に入れたと言う通信が届いていない状況で聖遺物が失われれば、その時に警備体制を緩くした過激派への穏健派の追求が始まり、ゼイブは枢機卿の座を追われるばかりでは済まずに、過激派の勢いは完全に消えるだろう。

その事が思い浮かんだゼイブは顔を青ざめさせ、すぐさま周りに立っている部下と若い女性騎士に向かって命令する。

「何としても聖遺物を護るのだ！！聖遺物に何か在れば、ベルカの栄光が消えてしまう！！管理局など如何でもいい！！残っている全ての騎士達を保管庫に向かわせろ！！」

『りょ、了解です！！』

ゼイブの言いたい事が理解出来たのか、部下達は素早く念話や通信機などを使って残っている全ての騎士達に聖遺物の保管庫の警護を命じ始める。

しかし、通信に繋がる騎士達の数は少なく、ゼイブは顔を蒼白にさせながら頭を抱えていると、女性騎士がソッとゼイブの傍に近寄り、小声でゼイブに声を掛ける。

「枢機卿・・・実はお耳に入れたい事が他にも在るのです。今回の管理局の襲撃を手引きした裏切り者の事で」

「何だと！？まさか！？本当に裏切り者が居ると言うのか！？誰だ！？誰なのだ！？聖王陛下に不忠を働く者は！？」

「はい、それは」

ーーースチャッ！！

『ッ！！』

突如として女性騎士が槍型のデバイスの矛先をゼイブの首に当てた姿を目にしたゼイブと部下達は目を見開くが、槍を首筋に当てた女性騎士は構わずにゼイブに声を掛ける。

「降伏して貰いたい。これ以上の無駄な犠牲は出したくないのでな」

「き、貴様が裏切り者か！？」

「裏切るか？・・・・残念だが、私は裏切っては居ない。何せ私のパートナーは…」

「私やからでゼイブ枢機卿」

『ッ！！』

女性騎士の声に続くように天井裏から響いた声に、女性騎士を除いた全員が天井の目を向けた瞬間、天井をの壁をぶち破るように砲

撃が放たれ、ゼイブを除いた司祭達全員に直撃する。

ーーードゴオオオ

ゼイブが叫んでいる途中で、突如として槍をゼイブの首筋に当てていた女性騎士が槍を捨てて、ゼイブの右腕を掴み上げ、そのまま床に顔面を叩きつけた。
そして突然に激痛に顔を歪めているゼイブにはやては冷酷さに満ちた視線を向けながら、ゼイブを床に押さえつけている女性騎士に命じる。

「レナ、やってええで」

「了解だ」

ーーーゴキン！！

「ギッ！！ギャァァァァァァァーーーー！！！」

はやての命令にレナと呼ばれた女性騎士は躊躇う事無く、握っていたゼイブの右腕をへし折った。
その痛みにゼイブは悲鳴を上げるが、レナは構わずに今度は左手を握り、ゼイブに低い声で質問する。

「降伏すれば治療も受けられるぞ。それとも今度は左腕を折るか？」

「グゥッ！！ふざけるな！！ベルカの人間は脅しになどに屈するか！」

「残念だ」

ーーーゴキィン！！

「ギャァァァァァァァァァァァーーーーー！！！」

ゼイブの答えを耳にしたレナは何の躊躇いも持たずに今度は左腕をへし折った。
再び腕をへし折られた事にゼイブは苦痛と悔しさに満ちた顔をするが、はやてとレナはゼイブの様子を見ても何の感情も抱く事無く、はやてはゼイブの顔の前にシュベルトクロイツの矛先を衝きつける。

ーーースチャッ！！

「助けは来ないと思った方がえぇで。何せアンタ直々の命令で残っている騎士達はヴォルテールから保管庫を護りに向こうとる。更に既に私がこの部屋の周りに結界を張っとるから、外にアンタの悲鳴を届かへん。降伏した方が身の為やで」

「・・・・グゥッ・・・・フフフフ、笑わせるな。貴様は所詮小娘だ。それに管理局の人間が殺しの許可など出す筈は無い！例え私を痛めつけても騎士達は絶対に止まらんぞ！！」

「・・・ハァ～、ほんまに命がいらんようやな。なぁ、アンタ重要な事忘れとるで。今デジモンとの戦争状態で非殺傷設定なんて使うとほんまに思うとるんか？」

「ッ！！」

「序に言えばレジアス中将から現実見せる為に何人か殺してもええって許可貰っとる。さぁ、此処で質問や？今の現状で一体誰殺したら騎士達は暴走止まるんやろうな？」

「ま、待て！？待ってくれ！！」

はやての言葉の意味が分かったゼイブは悲鳴のような声を上げた。
ゼイブには、はやての言いたい意味がよく分かった。此処で過激派のトップであるゼイブを見せしめとして殺せば、それだけで騎士達は今回の件が捜査ではなく自分達が管理局に行うとしていた戦争で在ると言う事を思い知る。
そうなれば若い騎士しか残っていない今の聖王教会では戦意を失う者が続出し、局員に騎士達は逮捕されていくだろう。

「因みにな。私は殺すの別に気にせんで・・・・私の手はもう本当は罪の無かったデジモン達の血で染まとる。今更人間の血で汚れても私は構わんわ。因みにこの場にはレナと気絶した司祭達しか居らんし、不慮の事故として事件を解決させるのもえぇかもな」

「おのれ!!おのれ!!後一歩なのだ!!後一歩で!聖王陛下がこの地に訪れると言うのに!そしてベルカの栄光が!」

「うるさいぞ」

ーーーゴキィン!!

「ギャアァァァァァァァァァーーーーー!!!!!」

喚いているゼイブの声が耳障りだったのか、レナは再び左腕をへし折った。
それと共に再びゼイブの悲鳴が執務室に響くが、はやてとレナはゼイブの声など全く気にしない。二人にとってはゼイブの言葉は悲鳴よりも、今まで戦って来たデジモン達の憎しみの叫びの方が応える。
本来ならば何の罪も無かったデジモン達と、とんでもない罪を起こそうとしているゼイブの叫びでは、天と地ほど差が存在している

のだ。
だからこそ、はやては時間が迫っている事を確認すると、もはやゼイブの答えを待っている訳にはいかないと思い、シュベルトクロイツの先に魔力集中させ始める。

「時間や。アンタは何の答える気無い見たいやから。見せしめとして殺す事に…」

「八神はやて！！」

『ッ！！』

突如として執務室の入り口の方から聞こえて来た叫びに、その声の主を知っているはやてとレナモンが慌てて背後を振り返って見ると、肩で僅かに息をしているバンチョーレオモンが存在していた。

「ハァ、ハァ、ハァ、如何やら間に合ったか」

「バンチョーレオモンさん！？一体如何して此処に！？」

「それで所ではない！！すぐにベルカ自治領内部の人間を避難させるのだ！！もうすぐ此処にッ！！・・・・・遅かったか」

『エッ？』

執務室に存在している窓ガラスの外の光景を目にした無念さに満ちたバンチョーレオモンの声にはやてとレナ、そしてゼイブが訳が分からないと言う顔をしながらバンチョーレオモンが見ている窓ガラスの方に顔を向ける。
窓ガラスの外にはベルカ自治領を覆うほどの巨大な転送魔法陣が

空に描かれ、それを彩る虹色の魔力光が輝いていた。

ベルカ自治領内部。
その地に住む誰もが突然に上空に出現した虹色の魔力光の転送魔法陣に信じられないと言う顔をしていた。
虹色の魔力光を持つ者は聖王家の血筋の人間だけ。
その事はベルカ自治領に住む誰もが知っている真実。
そしてそれが突如としてベルカ自治領に現れたと言う事は、聖王がベルカ自治領に降臨しようとしている事に他ならない。
途絶えた筈の聖王家が現れようとしている。その事に気がついたベルカ自治領の人々はすぐさま家や建物から飛び出し、空に広がる巨大な魔法陣に向かって祈り始める。
そしてそれは地上の局員と戦っていた騎士達も同じだった。ゼイブ枢機卿から話は聞いていたとは言え、本当に聖王が存在しているとは心の何処かで信じ切れていなかった。だが、それを否定するように現れた虹色の魔力光に、地上本部の突然に襲撃によって下がっていた戦意が再び湧き上がって来る。

「聖王陛下だ！！聖王陛下が来てくれたぞ！！」

「俺達を助けに来てくれたんだ！！」

「この戦は勝てるぞ！！勝って再びベルカの名を次元世界に知らしめるんだ！！」

『オオォォォォォォーーーーーーーーー！！！！！』

存在しないはずの魔力光の出現に劣勢に追い込まれていた騎士達

の士気は再び上がり、局員達と激闘が再開され始める。
　しかし、そんな中局員達の援護を行っていたビショップチェスモンと聖遺物の保管庫に進撃した振りをしていたヴォルテールの右手に乗っているキャロ、リュウダモン、フリードは、騎士達の士気など気にせずに上空に存在している虹色の魔力光を険しい目を見ていた。

「・・・・違う・・・あの魔力光からは優しさが感じられない」

「あぁ、感じられるのは怒りと悲しみ・・・・そして憎悪だ」

「アギャァーーー！！」

「グルルルルルッ！！」

　キャロ、リュウダモン、フリード、そしてヴォルテールは上空で輝き続けている虹色の魔力光に込められた想いを読んでいた。
　虹色の魔力光が放つのは怒りと悲しみ、そして憎悪だけ。騎士達の言うような誰かを助けに来たと言う想いは全く感じられない。それを表すように徐々にでは在るが、虹色の魔力光の周りの空の色が青から血のように赤い色に変わり始めていた。
　それを目撃したキャロはバリアジャケットの中から自身のディーアークを取り出し、横に立っているリュウダモンに声を掛ける。

「リュウダモン・・・最悪の場合は、一気に究極体に行くよ」

「了解だぜ・・・・成って欲しく無いけどな」

「うん」

キャロとリュウダモンはそう言い合いながら、徐々に変わっていく空の色に恐怖と不安を感じるのだった。

そして場所は変わりゼイブの執務室でも、レナに床に押さえつけられたまま外に広がる虹色の魔力光を目撃したゼイブも歓喜に満ちた叫びを上げていた。

「ハハハハハハハハッ！！これで貴様らもお終いだ！！聖王陛下と聖王教会の精鋭騎士達が戻って来たのだ！！遠く離れた世界からまで転移されるとは！流石は聖王陛下だ！！ベルカ再興は成ったのだ！！」

「フン、何処までもおめでたい男だ」

「何だと！？」

嘲りに満ちたバンチョーレオモンの声に、レナに押さえつけられたゼイブは怒りの叫びを上げるが、バンチョーレオモンはその声を聞いてもつまらなそうな顔をするだけだった。

「アレは貴様らを助けに来たのではない。寧ろその逆、この地に存在している全てを消滅させに来たのだ」

「そ、それは如何言う意味ですか！？」

「カ、カリム！？」

突然、執務室に扉から入って来たカリム、ヴィータ、シャッハ、ロッサの姿にはやては思わず慌てた声を上げてしまった。

不味いのはレナの存在。今はまだ、出来るだけはやての切り札で

あり信頼しているパートナーであるレナの存在をばれる訳にはいかないと思い、レナの方に顔を向けてみると、既にレナの姿はゼイブの横に存在していなかった。
その事にはやては思わず呆けた顔をしてしまうが、バンチョーレオモンが素早くはやての体をカリム達の視界から隠し、そのまま小声ではやてに声を掛ける。

「レナモンならば近づいて来る人間の気配に気がつき、穴が開いている天井裏に飛び込んだ。お前もすぐに表情を戻せ」

そうバンチョーレオモンがはやてに小声で呟くと、はやては無言で頷き、表情を険しく変える。
その様子に気がつかなかったカリム達は素早くバンチョーレオモンに詰め寄り、先ほどの言葉の意味を再度質問する。

「答えて下さい！！何故聖王陛下がベルカ自治領を滅ぼすのですか！？」

「フン、まだ分からないのか。このベルカ自治領を護っていた騎士達の数が少なかった理由は一つ。こいつらは管理外世界で穏やかに過ごしていた聖王家の血を引く人間がいる地に襲撃を掛けたのだ！！」

『なっ！？』

バンチョーレオモンが告げた事実にはやて、カリム、ヴィータ、シャッハ、ロッサは信じられないと言う声を上げ、床に倒れ伏したままのゼイブの姿を見つめた。

「それだけではない。その世界に存在していた質量兵器を秘密裏に

強奪し、その世界で使用したのだ。幸いにもその世界には俺の仲間達が存在していた為に人的被害は最小で済んだが、襲撃した騎士達は愚かにも聖王家の血を引く人間の前で、友であった戦えないデジモン達を惨殺した！！」

『ッ！！』

「ちょ、ちょいまちぃ！！今何て言いました！？デジモンがいる管理外世界って！まさか！？」

「そうだ。その世界の名は地球。貴様ら管理世界の人間が第九十七管理外と呼んでいる世界だ！！」

ーーーバタッ！

「そ、そんな・・・嘘やろ」

「はやて！！確りしろ！」

床に膝を着いたはやてにヴィータは叫ぶが、はやては答える事が出来ずに膝を着いたまま顔を青ざめさせる。

地球に聖王教会の騎士達が質量兵器を持って襲撃を掛けた。それは地球こそが本当の故郷であるはやてに取っては余りにもショックする出来事だった。そして同時にはやては今回の聖王教会騎士団の動きを裏で操っていた者が何者なのかを確信する。

（ルーチェモン！！アンタはデジモンだけではなく人間の戦力を減らす為に地球に聖王がいる情報を流したんやな！！不味い！このまま聖王が降臨すれば、罪の無い人達がまた沢山死んでしまう！！）

「加えて言えば、その聖王の血を引く娘には完全体レベルまで進化出来るパートナーデジモンが存在していた・・・・そうあのロイヤルナイツに数えられるデジモンの生まれ変わりのデジモンがな」

『ッ！！』

聖王がロイヤルナイツだったデジモンの生まれ変わりをパートナーにしていた。

それが事実だとすれば、今から来る聖王が伴うデジモンは最強の一角に名を連ねるデジモンと言う事に他ならない。そして友を目の前で殺された聖王が、友を殺す元凶を作った聖王教会に味方をする筈は無い。先ず間違いなく現れる聖王は、聖王教会に復讐にやって来たのだ。

その事が思い浮かんだカリム、シャッハ、ロッサは予言に読まれた聖王教会の崩壊とベルカ自治領の消滅の予言が脳裏に過ぎる。

“愚かなる狂信は、悪戯に傷付きし王を更に傷つける。それによって王は黙示録に変わり、古の国を崇める狂信は灰となって消え果る。されどそれは始まりに過ぎない。黙示録は古の国に関わる全てを世より廃するであろう”

（愚かなる狂信とは、過激派に掌握された聖王教会！！）

（傷つきし王とは聖王陛下！！）

（あの予言はこれを意味していたのか！？）

「・・・更に貴様らに残念な知らせだ・・・いや、俺にとってもだな・・・・あの空に浮かぶ巨大な転送魔法陣から現れるデジモンは、聖王と暗黒融合進化して目覚めてしまったデジモン史上最悪にして

最凶のデジモン。その名は…」

『■■■

ベルカ自治領を覆うほどの大きさを持って空に描かれていた巨大な転送魔法陣から姿を現したメギドラモンの姿に、ベルカ自治領に住む人々誰もが目を見開いた。
メギドラモンの姿は一言で言って邪悪。その姿を見れば誰もが恐怖に駆られてしまう恐ろしき姿。
それだけではなくメギドラモンはその身に聖王家の者である証ー虹色の魔力光ー“カイゼルファルベ”を纏っている。それが意味する事はメギドラモンこそ彼らが崇めていた聖王であると言う事に他ならない。
一般的な信者達はメギドラモンが聖王である事を信じられないのか呆けた顔をして、上空に浮かんでいるメギドラモンを見つめる。
しかし、局員達と戦っていた騎士達は逆に歓喜に満ち溢れていた。聖王が忠実なる自分達に攻撃をする筈はない。あの姿はベルカと言う国に管理局の人間が襲撃を掛けた事に対する怒りの姿なのだと思い、それぞれ自身のアームドデバイスをメギドラモンに向かって掲げる。

「聖王陛下がご降臨されたぞ！！空を飛べる者は聖王陛下の御前に向かうのだ！！」

『オオォォォォォォォーーーーーーーー！！！！』

年長の騎士長の叫び大勢の騎士達が答え、次々と上空に浮かんでいるメギドラモンに飛び立つ。
現在の状況は聖王教会側が圧倒的に不利だった。だが、一目見ただけで巨大な力を宿していると分かるメギドラモンと一緒ならば勝てると思った。それは確かに正しかった。
メギドラモンがその気になれば今上空からメギドフレイムを地上に撃ちこみ、ベルカ自治領を焼け野原に一瞬で変える事が出来る。だが、メギドラモンはあえてそれを行う気は無かった。

徹底的に聖王教会、そしてベルカ自治領に住む全ての人間に二度と立ち上がれないほどの恐怖と絶望を与えてから殺す。そう地球に居た時に逃げ出した騎士達を目撃した時に決めたメギドラモンは、簡単に自身の必殺技で騎士達も自治領の住む人々も殺しはしない。恐怖と言う恐怖を味合わせて、絶望に堕ちてから全てを破壊する。

その時の事を考えたメギドラモンは、もはやヴィヴィオとギルモンだった時の面影など感じさせない狂気に満ちた笑みをニヤリと口元に浮かべ、自身に向かって来る騎士達を眺めていると、フッと右腕に巻き付いている翡翠色の鎖とその先を掴んでいるバイオ・スラッシュエンジェモンに進化したままのリンディを目にする。

「止めなさい！！ヴィヴィオ！！ギルモン君！！気持ちは分かるわ！！だけど！！もう誰も傷つけないで！！」

「■■■

て、翡翠色の鎖を消失させてメギドラモンから離れようとする。
しかし、メギドラモンの豪腕はリンディが鎖を消失させる前に迫り、そのままリンディを地上に向かって殴り飛ばそうとする。だが、その手は突如としてメギドラモンの脳裏に浮かんだモチモンの最後の言葉によって止まる。

（喧嘩は駄目だよ・・・・・リンディさんと・・・・仲良くして・・・・僕らのお願い）

ーーーピタッ！！

「えっ！？」

てっきり殴り飛ばされると思ったリンディは、メギドラモンの突然の行動に思わず声を上げてメギドラモンの顔を見てみると、メギドラモンは憎悪と憎しみに満ち溢れた顔をしながらも、悲しみに満ちた涙を目から流していた。
その姿にリンディは、もしやメギドラモンの中で何かの変化が起き始めているのではないのかと瞬時に考え、メギドラモンに声を掛けようとする。

「ギルモン君？ヴィヴィ…」

「聖王陛下に近づくな！！」

「ハッ！！」

ーーーガキィィン！！

リンディがメギドラモンに声を掛けている途中で、メギドラモン

の傍に近寄って来た若い男性騎士がリンディに向かって剣型のアームドデバイスを振るい、リンディは慌てて右手に剣状の腕で防いだ。
そしてそのまま究極体の力を持って目の前の騎士をアームドデバイスごと真っ二つにリンディはするつもりだった。メギドラモンだけではない。リンディも、そして地球に居るスレイプモン、クイント、メタルガルルモンXも、もはや聖王教会を絶対に赦す気は無いのだ。
少しずつでも漸く世界がデジモンを受け入れかけていた現状で、聖王教会の行いは確実に再びデジモンへの風当たりを強くする。そうなれば今まで頑張りが全て無に返ってしまう。リンディ達としてはこれ以上のデジモンへの風当たりは本気で不味かった。
それは地上本部や、他のデジモンとの融和を望んでいた全て者達に取っても同じだろう。だが、既にメギドラモンは聖王教会本部があるベルカ自治領に訪れてしまった。再びデジモンへの世間の風当たりは強くなる。
だからこそ、リンディ達は聖王教会をもはや赦す気は無い。例えメギドラモンが本部を破壊しようと、徹底的に聖王教会、そしてベルカにはデジモンとの融和との犠牲になって貰うつもりだ。
そう頭の中で考えたリンディは素早く目の前に存在している騎士に、自身の右手を振り抜こうとする。だが、その直前に騎士の姿を目にしたメギドラモンが、リンディの背後で再び憎しみに満ちた咆哮を響かせる。

「■■■

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

「グフゥッ！！」

リンディが止めるように言葉を告げている途中で、メギドラモンは今度は止める事無くリンディに右腕を叩きつけ、リンディは苦痛の声も上げる事が出来ずに地上に落下して行った。

その様子を目撃したメギドラモンの周りにいた騎士達と、リンディから助けられた若い男性騎士の全身に歓喜が走った。聖王陛下自ら自分達をデジモンから護ってくれた。その事実に騎士達はやはり目の前に存在しているメギドラモンこそが、自分達の聖王だと確信する。

しかし、それは重大な間違いだった。メギドラモンがリンディを攻撃したのは、リンディから騎士を護る為などではない。自身の憎しみを晴らすべき獲物を奪われない為と言う残虐さに満ちた本能的な行動だった。

それを表すようにメギドラモンはゆっくりとリンディに襲い掛かった騎士に手を伸ばす。

騎士は自身に傷が無いのかを確かめる為だと思い、メギドラモンの邪魔をしないようにする為に自身の手を下げ、自身の包み込むように広がるメギドラモンの巨大な手を見つめ、それが最後の彼が見た光景になった。

ーーーグシャッ！！

『・・・・・・・エッ？』

メギドラモンが騎士を握り潰す瞬間を目撃した他の騎士達は、呆気に取られたような声を上げ、メギドラモンが握っている右手の間から地上に落下して行く大量の血を見つめる。

そしてそのままメギドラモンの方に顔を向けてみると、メギドラモンはニヤリと口元を残忍さ満ちた笑みを浮かべ、そのまま他の騎士達に向かって豪腕を振り抜く。

「■■■

暗黒の騎士王！カオスデュークモン！！後編、上

メギドラモンがミッドチルダにその姿を現した時と同時刻。
深い闇の中。僅かな光さえも届かない地中の奥深く。
その場所には一般的な艦艇を遥かに越える巨大な戦艦が存在していた。
その戦艦は誰も乗っていない無人の戦艦。しかし、誰一人乗っていない筈なのに戦艦内部に存在しているコンピュータに僅かに光が走り、内部のコンピュータが勝手に起動する。

ーーーピピッ！！

（ナイテイル・・・・・オウガ・・・キシガ・・・・ナイテイル）

本来は意思など持たない戦艦。だが、戦艦には何時の間にか意思が宿っていた。
自身の意思が何時芽生えたのかは戦艦に自身にも分からない。自身の内部を調べていた科学者が何かを行った時に芽生えたのでは無いかと感じていたが、そんな事は戦艦は全く気にしていなかった。
しかし、それでも自身が仕えるべきだった主の事は覚えている。意思が宿る前に保存されていた記録映像に残っていた凛々しき王を覚えている。
そして今その王の血族が、すぐ近くで泣いている事も戦艦には何故か分かった。
すぐにでも王の下に向かい、その身を助けたいと戦艦は心の底から思う。だが、同時にそれは無理だと理解していた。自身の身は仕えるべき王が乗らなければ動かない。歯痒いと戦艦は心から思う。
世界を震撼させる力を宿しながら、この身は王が苦しんでいても助ける事も慰める事も出来ない。

（・・・・イラヌ・・・・・オウトキシガ・・・・・クルシンデイテモ・・・・タスケラレナイ・・・コノミナド・・・・・フヨウ！！ホシイ！！ホシイ！！ジユウニ・・・ウゴケルカラダガ！！オウトキシノタメダケニ！！タタカエル！カラダガホシイ！！！）

ーーーギュルルルルルルルーーーーーー！！！！

戦艦が強き想いの篭った声無き叫びを上げた瞬間、動力炉に埋め込まれていた青い輝きを放つ何かが凄まじい輝き放ち、それと同時に戦艦の体を蒼く輝くデジコードが覆っていく。

まるで幼虫が成虫に変わる為に蛹に変わるように、デジコードは巨大な戦艦を繭のように包み込んでいく。

そしてデジコードが戦艦を繭のように包み込み終えると、戦艦の意思は深い眠りへとついていく。再び目覚める時には自身の体は大きく変わっている事を確信しながら、戦艦の意思は一時の眠りにつく。王と騎士と共に大空を飛び回る夢を見ながら。

アルハザード司令室。

その場所ではフリートが転送装置の調整を終えるのを待つブラック、クイント、ティアナ、クダモン、なのは、カブモン、コロナモン、ルナモン、一時的に十闘士への進化を解いた輝一達、そして元々居たリスティ、アリサ、すずかがミッドに送って置いたサーチャーから送られて来るメギドラモンの映像をモニターで見ていた。

自身の周りに存在している騎士達を握り潰し、大量の血の雨を降らせているメギドラモンの姿に、アリサとすずかは青ざめた顔をして輝二と輝一に寄りそうに立ち始める。

戦いに慣れているクイント達と、事件などで血に慣れているリス

ティも、第九管理世界の悲劇に勝るとも劣らない暴虐に顔を青ざめさせるが、ブラックだけは冷静に状況を考えながらモニターの映像を見つめていた。
本来のブラックならばすぐさまヴィヴィオを傷つけ存在を殺すが、今は余りの怒りに逆に冷静に成り過ぎている為に、モニターに映る映像も平然と見つめる事が出来ていた。
しかし、周りのメンバーはブラックとは違い、あの優しかったヴィヴィオとギルモンの変わり過ぎた姿に、絶望感が浮かび始め、ティアナが青ざめた顔をしながらコンソールの近くにいるリスティに質問する。

「・・・・リスティさん・・・・質問ですけど、地上はともかく本局はこの状況になっても動く様子を見せていますか？」

「・・・・答えはＮＯだね・・・・全然艦艇も動かしてないし、本局の人間が転移する様子も無い。多分地上のせいで動けなかったとか言って、今回の責任を地上に押しつける気だよ。その後に地上を本局の支配下に置いて、ギズモンを送り込む気だね」

「馬鹿なの！自分達の欲望を優先して、またあの悲劇を繰り返すなんて！！」

リスティの説明にクイントは憤りに満ちた声を上げ、他のメンバー達も不快そうに顔を歪める。
今の状況になっても、未だに本局は自分達の勝手な考えで動いて多くの人々を犠牲にしようとしている。その事実にその場にいる誰もが怒りを覚えるが、自分達の力では本局に対して如何する事も出来ないと悔しげに顔を歪めてしまう。
しかし、誰もが悔しさに顔を歪める中、突如としてブラックだけが面白そうに笑い声を上げ始める。

「クックックックックッ、ハハハハハハハハハハハハハハハハハッッッ！！！！」

「ブ、ブラック兄さん？」

「ブ、ブラック、遂に暴走を！」

「黙れクダモン。ただこの状況を最大限に利用する方法を思いついただけだ」

『ハァッ！？』

ブラックの突然の発言に、その場に居る誰もが訳が分からないと言う声を上げるが、ブラックは構わずにリスティの傍に近寄り、そのままティアナ達に質問する。

「ティアナ。仲間にしたデジモン達は管理世界の事を如何思っている？」

「えっ！？・・・・え～と、一応管理局と一般人は別のものだと考えているわ・・・確かに管理世界の人間は、好きではないけど、それでも管理局以外は別物だと考えて、一般人にはもう手を出す気は無いって言っていわよね？クダモン」

「あぁ、確かにその通りだ。最も今回の件で聖王教会も敵だと完全に認識しているだろうが・・・・それが如何したのだ？」

「よし。ティアナ！クダモン！なのは！！カブモン！！クイント！！十闘士に選ばれた奴ら！！貴様らはすぐにデジモン達をベルカ自

治領に向かわせる準備をさせろ！！」

『えっ！？』

「まだ分からないのか！！本局はこの状況では動かん！ならば、この状況で地上本部の連中と合同で大量のデジモン達がベルカ自治領の人間達を救助すれば、それによって本局よりもデジモンの方が当てになるとミッドの連中は考えるだろうが！！」

『ッ！！！』

ブラックが告げた作戦にその場にいる全員がハッとした顔をして顔を見合わせた。

そうブラックはこの状況を完全に利用する事を思いついたのだ。確かにメギドラモンは既にベルカ自治領で暴虐を行っている。しかし、今の所は聖王教会の人間にしか手を出しては居ない。

何れは機動六課との戦いで余波が発生するだろうが、それから人々をデジモンが護ったとなれば、人々のデジモンに対する認識は確実に変わる。そして何よりも今回のメギドラモンのベルカ自治領の襲撃の原因は聖王教会こそが全ての元凶。

その事さえも戦いの後に全て地上がミッドや各管理世界に発表すれば、デジモンへの風当たりは僅かでも弱まる。最も代わりに聖王教会の人間は迫害対象になるだろうが、ブラックからすればデジモンへの風当たりを弱める事の方こそが重要。聖王教会には完全に人々の目をデジモンから逸らす生贄になって貰うつもりだった。

「更にメギドラモンが現れる前に録ったギズモンの映像も地上に渡す。それで本局内部に居るベルカの狂信者連中に協力した連中を蹴落として貰う。デジモンへの対抗策だったギズモンを横流しした幹部どもの何人かは消えるだろう。これで再び管理局の評判は地に落

ち、幾つかの世界で管理局に対する疑問が再び浮かび上がる。そしてその世界に秘密裏に接触し、デジモンとの戦争の原因を教えればいい。最も行き成り反旗を翻すなと忠告は行う。第二十管理世界が滅んだ真相を話せば、連中も行き成りの暴走はしないだろう。幸いにも管理世界はギズモンの利用価値を分かっているから、それを作り出している管理局をいきなり潰す事は無いだろうからな」

（じょ、冗談でしょう！？これだけ私達が不利だった状況を追い風に変える策を短時間で思いついたって言うの！？）

（怒りの余りに冷静になり過ぎて、逆に頭が相手を完膚なきまでに潰す方法を考えたんだ・・・・ブラックさんは元々策を考えるのも得意だった。戦いの方が重要だから、目に付かなかったけど、ブラックさんの恐ろしい所は力だけじゃない！）

（寧ろ目的が完全に定まった時に働く頭の方が一番怖いよ。ベルカ自治領に居ない聖王教会の人達への復讐も策の中に入っているから、本当にキレたブラックさんだけは敵に回したくない）

クイント、ガブモン、なのははそうブラックの考えに改めてブラックを恐ろしいと思い、他のメンバーもブラックの策に恐ろしさを抱くが、張本人であるブラックは構わずにリスティに声を掛ける。

「貴様は今の策をフリートが戻って来たら伝えろ。そしてお前がベルカ自治領に向かうデジモン達の指揮を執れ」

「・・・・・なるほどね。ボクには魔力は無い。それを利用して魔力が無い人間でもデジモンと共に戦える事を認識させろって事だね」

「そうだ。加えて言えば、貴様の特殊能力ならば、瓦礫によって動

きが封じられた人間や潰される寸前の人間も見つけられる・・・・俺が暴れ出せばメギドラモン以上の被害が生まれるからな。余計な邪魔が入らないようにする為に、さっさと一般人には消えて貰いたいんだ」

「了解だよ・・・（怖いね・・・確かにフリートの言うとおり、彼だけは絶対に敵に回したくは無い）

リスティはブラックと相対してフリートの言葉の意味がよく分かった。

戦いだけではない、他の事でもブラックは凄まじい。寧ろ戦いだけだったならば戦っている相手にだけ被害がある。他の人間には戦いで起きた余波以外の被害では出ないだろう。

しかし、ブラックは一度滅ぼすと決めた相手が集団だった場合は、物理的だけでは済まさない。自身の持つ知恵全てを使って完膚なきまでに絶望の淵に追い落とす。しかもブラックにはアルハザードと言う次元世界で最も発展した世界のバックアップまで存在している。

ブラック、そしてアルハザード。この二つの巨大な力を持った存在から逃げられる者など、ルーチェモンや倉田、そしてフリートと同ランクの頭を持ったスカリエッティぐらいだろう。

その事をブラックの説明で理解出来た誰もが同時に思った。

“絶対にブラックだけは怒らせてはいけない”

そう本人であるブラックを除いた誰もが決意する中、ブラックは自身のパートナーがいる部屋へと歩き出す。準備が終え次第すぐにベルカ自治領に向かう為に。

ベルカ自治領。今その場所は大混乱に見舞われていた。
突如としてベルカの上空に現れたメギドラモンがベルカ自治領で行った聖王教会の騎士達に行った暴虐に、誰もが目が覚めていた。
“メギドラモンは味方ではない。聖王教会を滅ぼしに来た”

その事が未だに上空で逃げ惑う騎士達を握り潰して行くメギドラモンを目撃した誰もが思い、人々はメギドラモンが地上に向かって来る前に我先に逃げていく。
そして空が飛べずに地上に残っていた聖王教会の騎士達は、全員が地面に膝を着き、絶望した顔をしながら上空で暴れ続けているメギドラモンを見つめていた。
聖王は自分達を助けに来たのでは無い、殺しに来たのだと、漸く彼らは理解する事が出来た。だが、今更全てを理解しても、もう全てが遅いのだ。メギドラモンは確実に聖王教会本部を崩壊させ、次々と騎士達を殺していく。しかもメギドラモンから逃げる事など不可能に近い。
元々メギドラモンは究極体の中で最も最悪にして最凶と呼ばれるデジモン。そのデジモンの標的に騎士達はされているのだから、例え地の果てまで逃げてもメギドラモンは追い続け、必ず騎士達を殺すだろう。
その事がメギドラモンの暴虐で分かった人々や騎士達は絶望感を抱き、標的にされている騎士達はともかく人々は少しでも早くメギドラモンから逃げようとする。

そんな中聖王教会本部の地面が一部が盛り上がり、其処からグロットモンが現れ、上空で暴虐を繰り返しているメギドラモンの姿に喜びに満ち溢れた顔をする。
「へへへへへへへへッ！！コイツはラッキーだぜ！あのデジモン

が暴れてくれれば、それだけ俺の目的が遂行しやすくなる・・・まぁ、俺様が得た力が試せねぇのが残念だがな・・・・さてと、さっさとカリム・グラシアって言う女を殺してやるか」

そうグロットモンは呟くと再び地面の中に潜り、目的の人物であるカリムの捜索を開始する。

しかし、グロットモンは重大な事に気がついていなかった。

メギドラモンがその身に纏う虹色の魔力光。その魔力光が何を意味しているのか、グロットモンは気がつかずにカリムを捜索する。自身の命が騎士達と同じぐらい危ない事も知らずに。

聖王教会内部ゼイブ枢機卿執務室。

その場所の主であるゼイブは両腕の骨を折られて床に伏せていたが、その顔は両手に走る痛みなど構わずに現実が信じられないのか絶望した顔をしながら顔を俯けていた。

「・・・夢だ・・・・そうだ・・・これは夢だ・・・・聖王・・・・陛下が・・・・あのような・・・暴虐をする筈は無い・・・・そうだ・・・これは夢なんだ・・・ハハハハハハッ」

「余りの現実に精神が崩壊したようだな」

「そうやろな。まぁ、自分達が信じていた聖王が騎士達を平然と殺したんですから。当然ですやろ・・・まぁ、全く同情心は湧かんけど」

ブツブツと顔を俯かせながら呟いているゼイブの姿に、バンチョーレオモンとはやては無表情に言葉を呟いた。

二人ともゼイブに対する同情心など全く持っていない。寧ろはやてはメギドラモンが生まれた元凶を作ったゼイブを、先ほど殺さなかった事を後悔しているぐらいである。
自分達身勝手な考えの為に罪の無いデジモンを殺したばかりか、今まで頑張って少しでもデジモンの世間に対する考えを変えようと頑張っていたのに、聖王教会の勝手な行動で全てが無になってしまうそうになっているのだから、はやてがもはや聖王教会を切り捨てようと考え始めるのも当然の事だろう。
そしてそのゼイブの横では同様に聖王教会に所属しているカリムとシャッハも、自分達が崇めている聖王に否定された事実に絶望したように顔を俯かせているが、もはやはやてはカリムとシャッハの様子など気にせずに持って来ておいた通信機のスイッチを入れ、ロングアーチに居るオーリスに連絡を取る。

ーーーピッ！

「此方八神はやてです。聖王教会は完全に終わりです。メギドラモンを誘き寄せる餌として使うしかもう役に立ちませんわ」

『ッ！！！』

はやてが通信機に向かって呟いた言葉を耳にしたカリム、シャッハ、ロッサは信じられないと言う顔をはやてに向けるが、バンチョーレオモンは、はやての言葉を聞いて当然だと言うように深く頷き、ヴィータは変わってしまったはやてに悲しげに見つめる。

（・・・・変わっちまった・・・もう夢を見ていたはやては居ない・・・・現実だけを見て、目的の為だけにしかはやては動いていねぇ・・・・・戦争だからしょうがないけど・・・・はやては大丈夫なのかよ？・・・あたし等にもはやては弱音を吐いてくれねぇ）

ヴィータは、自身が知るはやてと今のはやてが変わってしまっている事に悲しみを覚えていた。
今のはやては自分の部隊を持ちたいと夢見ていたはやてではない。自身が夢見る場所に向かう為ならば、犠牲さえも背負う覚悟を持った戦士。その道がどれだけ血塗られた道なのかは、長い時を生きて来たヴィータにはよく分かる。
そして大抵の者がその道を歩んでいる途中で道を踏み外し、地獄のような苦しみを味わう事もヴィータは知っている。
ヴィータ、シャマル、シグナム、リインフォース、リイン、ザフィーラは、はやてがその道を歩むのならば共に歩む覚悟を持ってはいるが、はやては決して一緒に来いとはヴィータ達には言うつもりはない。
自身の歩む道がどれだけ地獄なのかは、歩いている当人であるはやてが一番分かっている。
しかし、はやてはそれでも今の道から外れずに目的の場所まで向かうと誓っていた。
確かに一人では無理であろう。だが、はやてには同族であるデジモンを殺しても共に歩んでくれると誓ったレナモンがいる。はやてが今欲しいと思っているのは、家族ではなく対等な関係でいてくれるパートナー。家族であるヴィータ達には自分達で進む道を決めて欲しいと思っている。
しかし、それが同時に難しいと言う事もはやては分かっているが、既にその方法も考え付いていた。
何れはその方法の為にある人物の協力を要請するつもりだったが、今はそれ所ではないと悲しげに自身を見つめて来るヴィータから視線を外し、通信機の先に居るオーリスに現状で思い浮かぶ最善の策を伝える。
「メギドラモンの目的は聖王教会とそれに所属する騎士達や司祭に

シスターです。それならばベルカ自治領内部に居る騎士達や司祭達を教会本部に閉じ込めるんです。それだけでメギドラモンが優先的に狙う場所は此処になります。幸いにも聖王教会本部の敷地は広大です。此処でならばこの場所にいる人間を除いた人々への戦いの余波は最小で治まります」

『了解です・・・ならば、その場所での戦闘を行うのはキャロ達と貴女、ヴィータ副隊長ですね。他のメンバーであるスバル、ギンガ、エリオは、今回は住民の避難を優先して貰います。陣頭指揮は今回はヴァイス副隊長とサーチモンに行って貰います。それとメギドラモンが居る上空から徐々に異変が起きていますので、人々の避難が重要です。我々が護るべきなのは元凶である聖王教会ではなく、何の罪の無い人々の方なのですから』

「分かっとります。それとベルカ自治領に内部に展開されていた騎士達は全て転移魔法か何かを使って、この場所に転移させて下さい。一人でもメギドラモンの視界にベルカ自治領内部に残る騎士達が映れば、確実に其方にも向かうでしょうから」

『確かにその通りですね。分かりました。すぐにベルカ自治領内部に居る局員達に命じましょう・・・それと全ての騎士達転移後に聖王教会本部に大規模な結界を張ります・・・・無事に戻って来る事を祈ります』

ーーーピッ！

「さぁて、これで私らはメギドラモンを倒す以外に逃げられなくなったわ・・・・まぁ、死なないように頑張らへんとな」

「はやて！！貴女は自分が何を言っているか分かっているの！？」

何でも無いと言う様に喋ったはやてに、カリムは鬼気迫ると言う顔をしながら詰め寄った。
しかし、はやては詰め寄って来たカリムを見ても何の感慨も浮かばずに、バンチョーレオモンに声を掛ける。

「バンチョーレオモンさん？メギドラモンの影響力はどれぐらいなんや？」

「・・・奴の影響力はデジタルワールドさえも滅ぼしてしまうほどだ。言うなれば奴は七大魔王デジモン一体に匹敵する力を持った強大な存在・・・いや、世界への悪影響を考えれば、七大魔王以上に危険な存在だ」

「・・・簡単に言えば七大魔王と戦うつもりで向かった方がいいと言う事ですわな・・・ちょっと決戦が早まったか」

「そう言う事だ。それとこれをお前達のデバイスにインストールしておけ」

バンチョーレオモンはそう声を出すと共に、羽織っている学ランの中から小さなディスクをはやてに差出、はやては疑問そうに首を傾げながらディスクを受け取る。

「これは？」

「俺の所に居る研究者が急いで作ったメギドラモンの影響力を受けなくさせるデータがインプットされたディスクだ。奴の影響力はブラックウォーグレイモン以上だ。そしてその影響は先ず機械から始まる。だが、このディスクの中に記録されているデータをインプッ

トされれば影響を受けずに済む・・・最も充分なデータが取れなかった上に、緊急で作ったデータだから、長時間は持たないだろう。デバイスが壊れる前にメギドラモンを元の聖王とパートナーデジモンに戻すしかない」

「・・・ありがたいわ。ヴィータ、先にデータをインストールしときい。私はリインが到着してからインストールするからな」

「・・・分かった」

はやての言葉にヴィータは頷き、はやてからディスクを受けてとるとアイゼンにインストールし始める。

それを確認したはやてはカリムとシャッハ、そしてロッサに顔を向け、険しく顔をしながら言葉を告げる。

「此処に居て貰うで。教会本部の敷居の外から出たら、その瞬間にメギドラモンが無関係な人間を襲う。それが嫌だったら此処にいるんやな」

「・・・・変わったわね・・・はやて・・・・まるで別人みたいよ」

「・・・色々と学んだんや・・・それにデジモン達を何体も殺したから、もう昔の私には戻れへんよ」

「・・・・あのデジモンはベルカの全てを憎んでいるのでしょう？・・・貴女と騎士ヴィータも」

「狙われるやろな。だから、オーリス三佐は私らを此処に残したんや・・・まぁ、出来るだけ頑張るわ・・・それじゃ…」

ドゴオオオ

せず、リンディは地面に倒れ伏してしまう。

ーーードサッ！！

「・・・フフフフッ・・・やっぱり私は駄目ね・・・・あの子を護りたいと思って頑張ったのに・・・・結局あの子を護り切れなかった・・・・あの人は私に怒るかし…」

「大丈夫ですか！！」

「ッ！！」

突如として聞こえて来た女の子の声に、リンディは思わず驚きながら声の聞こえて来た方を見てみると、心配そうに自身を見つめるキャロとリュウダモン、フリードを目にする。

「おい！アンタ！大丈夫かよ！？」

「すぐに治療しますから！」

リュウダモンとキャロはそれぞれ心配そうな声を上げて、キャロは素早くリンディの治療を行おうと手をリンディに伸ばすが、リンディはその前にキャロの手を押さえる。

ーーーガシッ！！

「止めなさい・・・今無駄に力を使えば、メギドラモンとの戦いに支障が出るわよ」

「でも！放っておけませんよ！！」

「大丈夫よ・・・この体はがとんでもなく頑丈に出来ているの・・・・少し休めばまた戦え…」

「強がりを言うな、リンディ」

リンディの声に覆い被さるようにバンチョーレオモンの声が響き、リンディが其方に顔を向けてみると、心配そうに自身を見ているバンチョーレオモンとはやて、ヴィータが存在していた。

「バンチョーレオモンさん?・・如何してこの場所に?」

「偶然にもこの地でグロットモンの目撃情報が在ってな。フリートから大筋の話は聞いている」

「そうですか・・・・なら、伝えて置きます。メギドラモンは攻撃の瞬間に周りへの警戒を怠る弱点が存在しています・・・だけど、その弱点をカバーするように究極体に進化した事によって強化された“聖王の鎧”が存在し、並みの究極体の一撃さえも防がれてしまうわ」

『ッ!!』

リンディが告げたメギドラモンの更なる力に、バンチョーレオモンを除いたその場に居る全員が目を見開いた

絶大な攻撃力だけではなく、究極体の一撃さえも防いでしまう防御力までメギドラモンは備えている。それが事実だとすれば、メギドラモンを倒す事は事実上不可能に近いと言う事に他ならない。

だが、バンチョーレオモンだけはリンディの報告に僅かに希望を見出していた。並大抵の究極体の攻撃が通用しないと言う事は、バ

ンチョーレオモンが本気で戦ってもメギドラモンは死ぬ事は無いと言う事に他ならない。

「・・・・そうか。それならば存分に俺は戦えるな。必ず奴が来るまでメギドラモンを押さえてみせる」

「奴？・・・・まさか！？バンチョーレオモンさん！？」

「あぁ、奴が帰って来たぞ。もうすぐこの地に現れる」

「・・・そうですか・・・あの人が・・・・・・・終わったわね、ベルカ自治領は」

『はい？』

リンディの発言にその場に居るバンチョーレオモンを除いた全員が疑問の声を上げるが、リンディは答える事無く何かを悟ったような顔をする。

その姿に凄まじい不穏を感じたはやてとキャロは、リンディに今の言葉の意味を確認しようとするが、その前に上空からメギドラモンの咆哮が響く。

「■■■

そうバンチョーレオモンは聖王教会本部に向かって凄まじい速さで突進して来ているメギドラモンを見ながら呟いた。
メギドラモンが今まで動かなかったのは、ベルカ自治領内部に広がっていた騎士達が次々と何処かに消えている事に気がついていたからだ。最初はまた地球の時のように逃げようとしているのかとメギドラモンは考えていた。しかし、その騎士達が転移する時に発生している魔法陣が、聖王教会本部に現れている事に途中で気がついた。
獲物が全て集まるのならば、メギドラモンにとっては好都合だった為に今までは動かなかったが、湧き上がって来る憎しみが抑え切れなくなり、聖王教会本部に突撃したのだ。
その事を理解したキャロとリュウダモンは互いに頷き合い、キャロは自身のディーアークを右手に持ちながらはやてに向かって叫ぶ。
「八神部隊長！！早く其処の女の人を安全な場所に連れて行って、リイン曹長とユニゾンして来て下さい！！此処は私とリュウダモンとフリード、そしてバンチョーレオモンさんとで押さえますから！」
「分かったわ！頼むで、キャロ！！ヴィータ！！リンディさんを！」
「応！！」
はやての言葉にヴィータは即座に答えると、リンディに肩を貸し、そのまま飛行魔法を使用して飛んで行く。
キャロはそれを確認すると素早くフリードを真の姿である白銀の竜へと戻し、そのままディーアークを自身の胸に当て体をデータ化させながら叫ぶ。
「マトリクスエヴォリューション！！」

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「リュウダモン進化！！！」

キャロの叫びが響くと同時にディーアークからも電子音声が鳴り響き、リュウダモンとキャロの体は一つになり、巨大なデジコードの繭が出現する。

そのデジコードの出現にメギドラモンは思わず突進するのを止めて、デジコードを見つめていると、デジコードの中から両手に二本の巨大な刀を持ち、背部に巨大な刃の形をした翼を生やし、長く巨大な東洋の竜を思わせる体をして、額にインターフェースを備えたデジモンが姿を現す。

そのデジモンこそキャロとリュウダモンが融合進化した事によって現れる究極体。二人が共に歩んだ果てに手に入れた絆の象徴。その名も。

「オウリュウモン！！！」

オウリュウモン、世代／究極体、属性／ワクチン種、種族／獣竜型、必殺技／永世竜王刃（えいせいりゅうおうじん）、黄鎧（おうがい）

“電脳核（デジコア）の空想”が生み出した架空のデジモン。額のインターフェースによって電脳核（デジコア）自身の創造力までもが奇跡的に解き放たれた時に進化すると言われている幻のデジモン。元々電脳核（デジコア）内に日本の神話における“竜”や“武将”などの猛々しい戦闘データを持っていたためか、電脳核（デジコア）の創造した姿は、威風堂々とした和風の鎧を身に纏い、両腕に刀を持つ“武者竜”である。左手の刀は『鎧龍左大刃（がいりゅうさだいじん）』、右手の刀は『鎧龍右大刃（がいりゅうだいじん）』と言う名で呼ばれている。背部の翼の刃は『鎧馬大名刃（がいばだいめいじん）』と呼ばれる。必殺技は、両手に持つ二本の刀から繰り出す究極奥義『永世竜王刃（えいせいりゅうおうじん）』に、大河の土砂流のごとく荒れ狂いながら、全てを切り裂き突進する『黄鎧（おうがい）』だ。

「■■■

「■■■

暗黒の騎士王！カオスデュークモン！！後編、下

「■■■

モンに直撃するが、やはり先ほどのバンチョーレオモンの時と同様に虹色の魔力光ー“聖王の鎧”に防がれてしまった。
その様子にオウリュウモンとヴォルテールが思わず動きを止めてしまっている隙に、今度はメギドラモンが左右にいる二体に向かって同時に拳を撃ち込む。

「■■■

『ギャアァァァァァァァァーーーーーー！！！！』

メギドラモンが振り下ろした両手は瞬時に建物を打ち砕き、その内部にいた人間達は一瞬の内で瓦礫に埋もれるか、メギドラモンが腕を振り下ろした時に発生した衝撃波によって消滅した。

しかし、中には瓦礫に僅かに体が埋もれているだけの人も存在していたが、メギドラモンはそう言う者達から優先して両手を振り下ろし潰して行く。

本来のメギドラモンならばただ両腕を振り下ろすだけで、聖王教会の建物と言う建物を一瞬の内に粉砕出来る。だが、それではメギドラモンの怒りが消えない。地球ではモチモン達を殺した張本人達に恐怖を味合わせる事無く殺してしまった。だからこそ、この地にいる人間には恐怖と言う恐怖を叩き込んで殺す。

そう決めているメギドラモンは次々と恐怖に震えている騎士、司祭、シスターを次々と踏み潰して行く。地球でヴィヴィオが宣言した通りに。

その様子を離れた所でリンディを支えながら見ていたはやて、ヴィータは、目の前で行われているメギドラモンの凄まじい憎しみに満ちた暴虐に顔を青ざめさせていたが、リンディだけはメギドラモンを悲しげに見つめながら呟く。

「・・・不味いわ・・・デジタルハザードを制御し始めている」

『えっ？』

「・・・あの子は地球に居た時はデジタルハザードの力を制御し切れずに、結界で覆われていた海鳴市を跡形も無く変えたわ・・・だけど、この地に来てからあの子は狂気よりも理性が強くなって来て

いる・・・これは本来のメギドラモンならば絶対にありえない事なのよ・・・・それが意味する事はあの子達に、メギドラモンに重大な異変が起き始めている証拠だわ」

「・・・もしそれが真実やったら、どうなります？」

「・・・・理性が完全に戻って戦わなくなるのならば幸いだけど・・・あの子達の憎しみは頂点に達している。絶対にこの異変が良い方向に向かう事は無いわ。先ず間違いなく、最悪な方向への異変よ」

「・・・なぁ、何があのデジモンと聖王に在ったんだよ？・・・あそこまで聖王教会の連中を憎むなんて・・一体何をしやがったんだ？」

そうヴィータがリンディに質問すると、リンディは深く苦悩する顔をしながら顔を俯け、ヴィヴィオとギルモンに何が在ったのかはやてとヴィータに話し出す。

「・・・・あの子達は三度目の前で友達だったデジモンを失ったわ・・・一度目は管理局が滅ぼしたデジタルワールドでの虐殺の時に、あの子とパートナーデジモンはその場に居合わせてしまい目の前で外の世界で出来た初めての友達になったデジモンを殺されたのよ」

『ッ！！』

「二度目は私達の下にあった十闘士のスピリットが覚醒して、五人の闘士が目覚めた時。あの時に五人の闘士は私達の所にいたブイモン君を連れ去ろうとして、あの子達と戦った・・・結局は負けてしまい、あの子の心の傷は深くなってしまった・・・そして今回の三度目であの子達の心は限界を迎えたのよ・・・もうあの子達が自分

達の意思で止まる可能性は限りなく低いわ・・・止めるには倒すか、或いはあの子達が憎んでいる全てを差し出して治まって貰うかのどちらかなのよ」

そうリンディは言いながら、オウリュウモンとヴォルテール、そしてバンチョーレオモンと戦っているメギドラモンを見つめる。

バンチョーレオモン達も全力を込めて攻撃を繰り出し続けているが、メギドラモンがその身に纏っている“聖王の鎧”こそが難敵だった。メギドラモン自体の攻撃は単純な腕を振り抜くや、尻尾を振り下ろすと言う攻撃だった。地球で使ったメギドフレイムやブラックの技であるブラックストームトルネードは使用する様子を見せていない。地球の時よりも理性が強くなっている為に、自身の手でメギドラモンは聖王教会の人間を踏み潰す事に固執している。

それが逆にバンチョーレオモン達の付け入る隙になっているのだが、究極体に進化した事によって人間だった時よりも段違いに強化された“聖王の鎧”によって攻撃は全て防がれてしまっている。

（あの鎧を撃ち破る為には、一点だけに極限に力が込めて、尚且つ直撃した直後に他の場所に威力が分散しない技でなければ無理だわ。或いは全方位から技を放って逃げ場を無くした所に同等の威力を持った技をぶつけるかのどちらか・・・・バンチョーレオモンさんの最大の技ならば破れるかもしれないけど、破った時に威力の大部分が鎧に吸収されて決定的な一撃にはならないわ・・・・他に方法が在るとすれば、あの鎧の耐久力を上回る技ならダメージも与えられるかもしれないけど、バンチョーレオモンさんの拳で破れない所を見ると並大抵の攻撃では無理ね）

そうリンディは頭の中でメギドラモンが纏っている“聖王の鎧”を破る方法を考えるが、やはり現状では有効な攻撃方法が思い浮かばず、悔しそうに唇を噛み締める。

その様子を見ていたはやてもヴィータも自分達の力ではメギドラモンの“聖王の鎧”を破るのは無理だと感じるが、此処で何もせずに見ている訳にはいかないと思う。既にメギドラモンはバンチョーレオモン達と戦いながらも聖王教会を半壊状態に追い込んでいる。このまま行けば完全に聖王教会が崩壊し、この場に残っていた教会関係者やベルカ自治領から転移して来た騎士達が全て死ぬまで時間は掛からない。

そうなればメギドラモンの標的はベルカ自治領の人々になってしまう。一応既に聖王教会の周りに大規模な結界は張られているが、メギドラモンならば一撃で粉砕出来る強度でしかない。現在の状況でも結界はメギドラモンとバンチョーレオモン達の激突によって発生する衝撃波に耐え切れずに、結界に穴を開けて衝撃波が外に出てしまう状況。

メギドラモン自身が外に出ればその瞬間に全てが終わってしまうとはやては直感し、悔しげに顔を歪めるが、フッとリンディの言葉を思い出す。

『二度目は私達の下にあった十闘士のスピリットが覚醒して、五人の闘士が目覚めた時』

（五人の闘士？それってメルキューレモン、ダスクモン、ラーナモン、アルボルモン、それにグロットモンの事やろ？つまり、メギドラモンに取っても五人の闘士は敵って事に違いない・・・そうや！！バンチョーレオモンさんが言っとたわ！！グロットモンが近くに居るって！）

「はやてちゃーーん！！」

「ッ！！リイン！！」

聞こえて来た声にはやてが声の聞こえて来た方を向いてみると、バリアジャケットを纏ったリインがはやてに向かって飛んで来ていた。
そしてそのままリインは急いではやての肩に飛び乗り、心配そうにはやての顔を見つめる。
「無事で良かったです！（レナから緊急連絡です！！デジモンの気配がカリムさん達が居る場所に向かっているそうですよ！！）」
「私もリインが無事で安心したわ（狙いはカリムか・・・まぁ、未来の情報を知る事が出来るカリムの存在は邪魔やろな・・・レナはどうしとるん？）」
（一応気配がする方に急いで向かっているんですけど、メギドラモンに気付かれない為に移動しているので、間に合いそうにないです！間に合っても成長期のままじゃレナが危ないです！！早く進化させて援護に向かいましょう！）
「（任せておいてな！）・・・リンディさん？グロットモンもメギドラモンの標的なんですやろか？」
「えっ！？・・・・恐らくはそうね。寧ろメギドラモンに取っては騎士達よりもグロットモンを優先する筈よ。直接的に手を出した張本人だから・・・（何か在ったわね。こんなに急に話題を転換するなんて）」
リンディは、はやてとリインの様子の変化に何かが在った事に気がついた。
確かにグロットモンがメギドラモンの憎んでいる相手なのには間違いない。しかし、余りにもはやての話題の転換が急すぎた。現に

ヴィータもはやての突然の言葉の意味が分からず首を傾げながらはやてとリインを見つめていると、はやては不自然に思われないように説明し出す。

「バンチョーレオモンさんが言っとたやろ？グロットモンの目撃情報がこの辺りにあったって・・・バンチョーレオモンさんに狙われとる状況でグロットモンの本人が動くのは不自然や。つまり、部下のデジモン達に任せらへんほどの重要な何かをしに来たって事や・・・そして聖王教会内部で人間を敵視しているグロットモン本人が狙うのは、自分自身が直々の抹殺を確認しないといけない人物。それは一人しか考えられへん」

「アッ！！カリムか！！」

はやての言いたい人物の正体にヴィータも気がつき、カリムがいるであろう無事なゼイブの執務室に顔を向けた。

その言葉にはやては深く頷きながら、自身が肩を貸しているリンディに顔を向けて質問する。

「リンディさん？体の方は大丈夫ですやろか？」

「・・えぇ、戦えないけど、一人で動くには充分なほど回復したわ。それにこの体はかなり頑丈ですもの・・・大丈夫だから行きなさい」

「ありがとうございます・・・行くで！リイン！ヴィータ！」

「はいです！」

「応ッ！！」

リイン、ヴィータは、はやての言葉にそれぞれ答え、はやては手早くリインとのユニゾンを済ませると、グロットモンが現れるであろうカリム達のいる執務室に向かって飛び出して行った。
その様子をリンディは横目で確認しながら壁に背を預け、メギドラモンと戦い続けているバンチョーレオモン達を見ながら呟く。

「・・・ヴィヴィオとギルモン君を止められるのは貴方だけ・・・・早く来て・・・・ブラック」

リンディはそう呟き、ブラックが現れる時を静かに待つ。
その時こそが聖王教会の本当の崩壊の時だと知っていても、リンディはブラックが一刻も早く現れる事を心の底から願うのだった。

ゼイブ枢機卿執務室内部。
その場所には、はやてに残されたカリム、シャッハ、ヴェロッサ、そしてブツブツと同じ言葉を繰り返し呟いているゼイブが存在していた。
カリム、シャッハは自分達が崇めていた聖王に否定された現実にゼイブ同様に絶望感を覚えていたが、目の前で行われているメギドラモンの暴虐を目にし、今は顔を蒼ざめさせ体を恐怖に震わせていた。
ヴェロッサもまたメギドラモンの暴虐には恐怖を抱いているが、第九管理世界の悲劇を映像で見ていたおかげでカリムとシャッハほどには体を震わせる事無く、冷静に考え事をしていた。

（・・・あの子とその友達がいれば、こんな状況には成らなかっただろうね・・・・出来ればもう一度あの子と話がしたかったけど、これは無理かもしれないよ）

ヴェロッサは冷静に状況を考えて、自分達が助かる可能性は低い事を理解していた。
外ではバンチョーレオモン達が頑張っているとは言え、聖王の力をその身に宿したメギドラモンが存在している。メギドラモンの標的がベルカに関わる全てだとすれば、ヴェロッサ達も標的には違いない。例え過激派と穏健派の違いはあったとしても、憎しみに支配されベルカの全てを崩壊させたいと思っているメギドラモンには関係ない。
その上逃げようとすればはやてが自分達に攻撃をして来るともヴェロッサは分かっていた。

（今のはやては自分の目指す場所の為なら、僕らにも攻撃するだろうね・・・戦争で、しかも最前線で戦っていたはやてだ・・・もう前みたいな甘さは無い・・・・それに今回の件は完全に聖王教会そのものが原因。元凶と何も知らない人達の命・・・・どちらを取るかなんてハッキリしているね・・・）

「・・・・ヴェロッサ・・・・私は如何すればいいの？・・・・残された予言も奪われてしまったし・・・・その上私はこの手で予言を読み解く事が出来たあの子達を・・・・」

「・・・それは僕にも…」

「死にゃぁいいんだよ。お前らは」

『ッ！！！』

突如として聞こえて来た聞き覚えの無い声にカリム達は慌てて顔を上げて辺りを見回そうとした瞬間、執務室の右側の壁がコナゴナ

に砕け散り、グロットハンマーを振り上げたグロットモンが飛び出して来る

ーーードゴオオオオオオン！！ガラガラガラガラッ！！

「カリム・グラシア！！その命貰ったぜ！！スネークアイブレイクッ！！」

「ッ！！」

「義姉さん！！」

ーーードン！！

グロットモンがカリムにグロットハンマーを振り下ろす直前で、ヴェロッサがカリムを押し倒し、グロットモンの一撃から逃れた。しかし、グロットモンはそのままグロットハンマーを止めずに、カリムの背後に存在していたゼイブにぶち当てる。

ーーードオオオン！！

「ギャアアアアアアアアーーーー・・・・」

ーーーガラガラガラッ！！

「ヒィッ！！」

「そ、そんな！？人が石になった！？」

グロットハンマーを食らって石になりながら粉々になったゼイブ

の姿に、カリムとシャッハは恐怖と目の前で起こった事が信じられないのか顔を蒼ざめさせた。
ヴェロッサもゼイブの哀れな最後に僅かに顔を辛そうに歪めるが、カリムとシャッハを護るようにグロットモンの前に立ち塞がる。
しかし、グロットモンはカリム達の様子など構わずに、床に落ちていたゼイブの石に変わった頭部を左手に持ち、苦痛と絶望に歪んでいるゼイブの顔をカリム達によく見えるように掲げる。

「へへへへへへへッ！ちょっとミスッちまったが、次は外さねぇぜ！・・・・それにしても運がねぇ人間だ。これから朽ち果てるまで永遠に苦しみ続けるんだからよ」

「・・・永遠に苦しむ？」

「そうだぜ、カリム・グラシア。本当はお前がそうなる予定だったんだぜ・・・コイツはなぁ。こんな状態になっているが、”生きているんだぜ”」

『ッ！！』

グロットモンが告げた事実にカリム達はグロットモンの左手に乗っているゼイブの頭部を信じられないと言うように見つめた。

「俺様の技は相手を石にして粉々に砕くのさ。デジモンなら砕けた瞬間にデジタマに戻って死ぬが、人間はそうじゃねぇ。石になったまま朽ち果てるまで永遠に生き続けるのさ。その間動く事も喋る事も無い永遠の孤独と苦痛を味わい続ける。更にコイツは首から下が完全に砕けているからな・・・苦痛は想像を絶するだろうぜ！ヒャハハハハハハハハハッ！！」

『ヒィッ！！』

『ッ！・・・・・』

グロットモンが告げた今のゼイブの状態に、カリムとシャッハは恐怖に染まった声を上げ、ヴェロッサは口元を手で押さえながらゼイブの頭部を見つめた。

首から下を失った苦痛を永遠に味わい続ける。更に動く事も泣き叫ぶ事も出来ずに朽ち果てるまで苦しみ続けるのだから、正しくそれは地獄だろう。

それを頭の中で想像したカリムはワナワナを体を震わせ、シャッハも恐怖に体を振るわせるが、何とか自身を奮い立たせ自身のデバイスであるトンファーに似た形状の双剣型のデバイス―ヴィンデルシャフトを起動させ、騎士甲冑を纏いヴェロッサの横に並びグロットモンに向かって構えを取る。

しかし、グロットモンはその様子を見てもつまらなそうな瞳をシャッハとヴェロッサに向けながら、左手に持っていた石になったゼイブの頭部を窓ガラスから外に放り投げ、右手に持っているグロットハンマーを遊ぶように回し始める。

「つまんねぇ奴らだぜ。その程度の覚悟じゃ、俺様は倒せねぇぞ？」

「なら、試してみますか！！」

ーーービュン！！

シャッハは叫ぶと同時に神速の歩法を使ってグロットモンに肉薄し、右手に握っているヴィンデルシャフトを同じく神速の速さで振り抜く。

「ハアァァァァァーーー！！」

ーーーガキィン！

『ッ！！』

シャッハが振り抜いたヴィンデルシャフトをグロットモンは右手で持っていたグロットハンマーで簡単に防いだ。

その事にシャッハ、カリム、ヴェロッサは目を見開くが、グロットモンからすれば当然の事だった。

グロットモンはシャッハよりも遥かに速いフェイトの斬撃を防ぎ続けた事がある。確かにシャッハの速さも通常よりも遥かに速いが、グロットモン達デジモンからすれば、成熟期の上位か、下位の完全体レベルでしかないのだ。

「遅いぜ。遅過ぎて欠伸が出ちまう。先にお前から消えな！！」

ーーーブン！！

「クッ！！」

グロットモンの攻撃をシャッハは素早く避けるが、グロットモンは構わずに次々とグロットハンマーを振るい続ける。

「オラオラオラッ！！如何したんだ！？少しは反撃して見ろよ！！」

「このっ！！なら、お言葉どおりにして上げますよ！」

ーーービュン！！

「何ッ！？」

ーーーードオン！！

突如として今まで以上のスピードを発揮して目の前から消えたシャッハの姿に、グロットモンは思わず驚き、振るっていたグロットハンマーを思わず床に埋め込んでしまった。

その隙にグロットモンの背後に移動してシャッハは、右手に握っているヴィンデルシャフトに高密度の魔力を纏わせ、素早くグロットモンの背後に振り抜く。

「貰いました！！烈風一迅ッ！！！」

「・・・・バ～カ～、貰ったのは俺様だ」

ーーーブン！！

『ッ！！』

シャッハの烈風一迅がグロットモンに直撃する直前に、グロットモンは床に埋め込んでいたハンマーの先を起点にして、ハンマーの柄を振り子のようにしてシャッハの攻撃を避けた。

その普通なら考えられないグロットモンの避け方に攻撃を放った張本人であるシャッハだけではなくカリムとヴェロッサも目を見開くが、グロットモンは三人の様子になど構わずに攻撃を放った直後で無防備になっているシャッハに、グロットハンマーを素早く床から抜き取り、全力で振り下ろす。

「スネークアイブレイクッ！！」

「クッ！！」

「ッ！！駄目だ！！避けろ！シャッハ！！」

シャッハが右手のヴィンデルシャフトを使ってグロットハンマーを防御しようとしている事に気がついたヴェロッサは慌ててシャッハに向かって叫ぶが、既に遅くグロットハンマーはヴィンデルシャフトに直撃し、シャッハの右手は右手のヴィンデルシャフトごと砕け散る。

ーーーバキィィィィーーン！！

「・・・・えっ？」

自身の右手のヴィンデルシャフトと右手が石になって粉々に砕け散った姿に、シャッハは目の前で起きた事が信じられないのか、痛みを感じる事無く石になっている右肘辺りを呆然と見つめ、カリムもシャッハの右手の姿に限界にまで目を見開いた。

しかし、右手を砕かれた当人であるシャッハは、痛みも全く感じる事無く粉々の砕け散った右肘先を呆然と見つめていたが、徐々に現実が分かって来たのか体を震わせ、左手に握っていたヴィンデルシャフトを床に落とし、右肘を左手で押さえる。

「あ・・・・・あ・・・・・アアァァァーーーーーーー！！！！！」

「シャッハ！！確りして！！しっかり！！」

石になって右肘から先が無い右腕を左手で押さえながら膝をつい

て悲痛な叫びを上げているシャッハに、カリムは急いで駆け寄りシャッハに声を掛け続けるが、シャッハは絶望と悲痛な叫びを上げるのを止めなかった。
その様子を見ていたグロットモンは床に落ちている石になって砕けたシャッハの右手の残骸を踏み締めながら、グロットハンマーを構える。

ーーージャリッ！

「本当に馬鹿だぜ。武器同士で打ち合えば、石にならないと思いやがった。デジモンの事を知らなさすぎるぜ。さて、次は全身を粉々に…」

「悪いがさせないよ！！無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）ッ！！」

ーーーウオォォォォォォン！！！

グロットモンが攻撃を放つ前にヴェロッサが二人の前に飛び出し、それと同時に無数の魔力で出来た猟犬ー無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）を発動させ、全ての猟犬をグロットモンに襲い掛からせた。
その隙にヴェロッサはシャッハとカリムの体を抱えて、執務室から逃げようとする。
ヴェロッサの行動はある意味では正しかった。シャッハは腕を失った事で戦えない上に、カリムには戦った経験など無い。その様な二人を護ってグロットモンと戦い続ける事は不可能だと即座に判断したのだ。幸いにもグロットモンの技には遠距離など存在していない。だからこそ、ヴェロッサはグロットモンが無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）を相手にしている間に少しでもこの場から離れる事が出来ると思っていた。
しかし、そのヴェロッサの願いを否定するようにグロットモンは自身に迫って来ている無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）を目にすると、体からデジコード

を発生させ始める。

「グロットモン！！スライドエヴォリューション！！ギガスモン！！」

『ッ！！』

背後から聞こえて来た叫びにヴェロッサとカリムが背後を振り向くと、グロットモンを覆っていたデジコードが弾き飛び、デジコードの中か鉱物で体を覆った獣の土の闘士ーギガスモンが現れた。

そしてギガスモンは現れると同時に両腕を大きく横に広げ、そのまま凄まじい速さで回転し、迫って来ていた猟犬達を全て弾き飛ばすだけではなく、執務室のそのものを吹き飛ばす。

「ハリケーンボンバーーーッ！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「グアアアアアアアーーーーーー！！！」

「キャアアアアアアアアアーーーーーーー！！！！！」

ーーーガラガラガラガラガラッ！

ギガスモンのハリケーンボンバーが起こした衝撃波によって執務室は吹き飛び、外に出ようとしていたヴェロッサ、シャッハも吹き飛ばされ、辺りの天井も次々と砕けてヴェロッサ達の上から降り注いで来た。

しかし、天井の瓦礫がヴェロッサとシャッハに降り注ぐ直前で、カリムが二人を瓦礫から逃がすように二人の体を手で押し、カリム

だけに瓦礫が降り注ぐ。

ーーードン！！

ーーーガラガラガラガラガラッ！！！

「ッ！！義姉さん！！」

「カ、カリム！！」

瓦礫に埋もれるカリムを目にしたヴェロッサとシャッハは、慌てて瓦礫からカリムを助けようとするが、カリムは辛そうに顔を歪めながら首を横に振るい、瓦礫から唯一出ている右手で通路の先を指差す。

「・・・二人とも・・・・逃げて・・・・私は・・・もう駄目だから・・・」

「何を言っているんですか！？すぐに瓦礫ッ！！」

カリムの言葉を否定するようにシャッハは残っている左手で瓦礫を退かそうとするが、その前にシャッハは気がついてしまった。

瓦礫の埋もれているカリムの左腕と両足の部分から大量の血が流れている事に。

その様子にヴェロッサも慌ててカリムの左腕と両足部分に目を向けてみると、カリムの左腕と両足は完全に降り注いだ瓦礫によって潰れてしまっていた。

「・・ね・・・もう駄目なのよ・・・・・罰が今来たの・・・・・あの子と友達を自分の勝手な考えで・・・切り捨てた罰が・・・・自業

自得よ」

「クッ！！罰だったら生きているあの子に直接貰いなよ！！それが義姉さんの本当の罰だよ！！」

「そうですよ！すぐに…」

「無理だぜ、ソイツは？」

『ッ！！』

カリムを覆っている瓦礫の向こうから聞こえて来た声に、ヴェロッサとシャッハが目を向けてみると、欠伸しながらゆっくりと歩いて来るギガスモンが存在していた。

「へへへへへへへッ！そろそろ終わりだ。まぁ、自分の力と俺様の狙われた事を恨むんだな！アーース…」

「悪いがお前の思い通りにはこれ以上させん！鬼火玉（おにびだま）ッ！！」

ーーードン！ドン！ドン！！

「何ッ！？グオッ！！」

『ッ！！』

ギガスモンが技を放つ為に空中に飛び上がった瞬間に、突如としてギガスモンが立っていた横の壁の通路から狐の顔をした青い火の玉ー鬼火玉（おにびだま）が飛び出し、ギガスモンに直撃し技の発動を中断させた。

その突然の事態にヴェロッサ、シャッハ、カリムが鬼火玉（おにびだま）の炎に

包まれているギガスモンに目を向けていると、鬼火玉(おにびだま)が飛び出して来た壁の方から全身に電撃を纏った九つの尻尾を持った狐ーキュウビモンが壁を撃ち破りながら姿を現し、そのままギガスモンに体当たりを行う。

「弧電撃(こでんげき)ッ！！」

ーーービリビリビリッ！！ドオオン！！

「ガアッ！！」

ギガスモンはキュウビモンの弧電撃(こでんげき)を避ける事が出来ずに胸に直撃を食らい、そのまま背後に存在していた壁に激突した。

キュウビモンはそれを確認すると、体当たりを行った衝撃を利用してカリム達の横に着地し、九つある尻尾でカリムの上に乗っていた瓦礫を一撃の下に吹き飛ばす。

ーーードオオオン！！

「すまない。少し遅れたようだ」

「あ、貴女は！？さっきのキツネデジモン！？如何して私達を！？」

「状況が変わった。本当は教会の情報を手に入れたら逃げるつもりだったが、あの巨大な究極体に十闘士が現れたならば話は別だ。この場で奴を倒す！」

シャッハの質問にキュウビモンは簡潔に答え、壁から立ち上がっているギガスモンに向かって構えを取り始め、ギガスモンは険しい顔をキュウビモンに向ける。

「・・・テメエ・・・何で人間の味方をしていやがる？人間を信じたら、裏切られるぜ？確実にな」

「同じ事を他のデジモンにも言われたが、私はこの道を進む。そう私は決めた」

「ケッ！笑わせるぜ！・・・良い事を教えてやる！！人間は何度も同じ事を繰り返す！！自分達の目的の為ならば、平然と関係無い連中を殺すのさ！！何百年も同じ事を繰り返して置きながら、未だに人間は同じ事を繰り返す！！そのせいで今度は関係無いデジモン達まで巻き込みやがった！！もう人間を世界に残していたら、人間は何れ世界を全て滅ぼしちまう！！今滅ぼさないとデジモンは人間の犠牲になって滅びるんだよ！！」

「全ての人間がそうとは限らない。それに私は罪の無い人間を殺すのは間違っていると思っている。この戦争を引き起こした奴らはともかく、罪の無い人間を殺すのだけは納得出来ん！私は私の選んだ道を進ませて貰うぞ！」

「・・・・・ケッ！お前は馬鹿だぜ・・・（気にいらねぇ・・・コイツの目・・・あいつ等にソックリだ！ぜってぇぶち殺してやる！！）」

ギガスモンはそうキュウビモンに対する殺意を固めると、キュウビモンに向かって飛び掛ろうと構えるが、ギガスモンと違ってキュウビモンは飛び掛かる様子を見せる事無く、背後でカリムの止血を行っているヴェロッサとシャッハを護るように立ち続ける。

その様子にギガスモンは面白そうに口を歪め、キュウビモンに向かって嘲りに満ちた笑い声を上げ始める。

「ハハハハハハハッ！人間を護ろうとするとは、やっぱ馬鹿だぜ！足手纏いなんて護っていたら、死んじまうぜ！！」

ーーードン！！

ギガスモンは叫ぶと同時に空中に飛び上がり、そのままキュウビモンに向かって攻撃しようとする。

しかし、自身に向かって来るギガスモンを目にしてもキュウビモンはカリム達の前から離れようとせずに険しい視線をギガスモンに向け続ける。

此処で自身が避ければ、背後にいるカリム達にそのままギガスモンは攻撃をして来る事をキュウビモンは分かっているのだ。元々ギガスモンの目的はカリムの抹殺。

別にキュウビモンは後で倒しても構わないのだから、ギガスモンはキュウビモンを倒すよりもカリムを先に殺そうとしているのだ。それに此処でキュウビモンが避ければ、先ほどのキュウビモンの宣言を否定する行為をキュウビモンは自身が行ったと言う事実が生まれる。

避けても避けなくてもキュウビモンには何らかのダメージが負う事になると、ギガスモンは判断し、そのまま動かずにいるキュウビモンに攻撃を加えようとする。

しかし、キュウビモンは目の前に迫っているギガスモンを見ても慌てる事無く、逆に冷笑を口元に浮かべ、ギガスモンがその冷笑に危機感を覚えた瞬間、ギガスモンの頭上からヴィータが飛び出し、ギガントフォルムに変形したアイゼンを勢いよく振り下ろす。

「オラァァァァァァッ！！轟天爆砕！ギガントシュラークッ！！」

ーーードオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「グホッ！！」

突然の頭上からのヴィータの奇襲をギガスモンは避ける事が出来ずに頭部にギガントシュラークを食らい、ギガスモンは完全に空中で体勢を崩しながら落下してしまう。

その隙をキュウビモンは逃さずに自身の尻尾の先に九つの青い炎を発生させ、空中で完全に体勢を崩してしまっているギガスモンに向かって青い竜の炎を同時に九つ撃ち出す。

「狐炎龍（こえんりゅう）ッ！！」

ーーーゴオオオオォォォォォォォォーーーーーーー！！！！

「ガアアアアアアアアーーーーーー！！！！」

キュウビモンの放った狐炎龍（こえんりゅう）によってギガスモンは自身の体を焼かれてしまう。

自身の包む炎の中でギガスモンはキュウビモンとヴィータの姿を目にし、フッと頭の中に一つの疑問が浮かび上がって来る。

（如何言う事だ！？こいつ等の攻撃は完全に計算された攻撃だったぞ！？パートナーでもないのに何でこんな攻撃が！？）

ギガスモンには今の攻撃の不可解さが理解出来ていた。

幾らなんでも攻撃のタイミングが出来過ぎている。キュウビモンへの攻撃は確かにギガスモン自身の行動だが、その後の行動は全て誰かの手に平の上で踊らされていた印象をギガスモンは感じ悔しげに炎に包まれながらヴィータが出て来た天井の穴に目を向けてみる

と、バリアジャケットのポケットの中から青い縁取りのディーアークを覗かせながら、魔力をチャージしている銀髪の蒼い瞳になったはやての姿を発見する。

（ッ！！そうか！！あのデジモンのパートナーは！！）

「外に出で貰うで、ギガスモン！！ディバインバスターー！！！！」

「八神はやてェェェェェェェーーーーー！！！！」

ーーードグオオオ

突如として首をガックリと下げたカリムの姿にヴェロッサとシャッハは慌てて声を掛けるが、血を流し過ぎたのかカリムの意思は戻らなかった。
その様子を見ていたはやても、一刻も早くカリムには本格的な治療が必要だと判断するが、今この場ではそんな事をしている暇は無いと判断し、ヴェロッサ、シャッハ、ヴィータに声を掛ける。

「治療は後回しや！すぐに此処から離れんと、メギドラモンが来る！何せギガスモンが外に轟音を立てて出ていったんやからな！其処のデジモン！カリムとヴェロッサ、それにシスターシャッハを背中に乗せて貰うで！それで私を気絶させた件は無かった事にしたる！」

「フッ、良いだろう。三人とも早く私の背に乗れ」

「っておい！はやて！良いのかよ！？コイツは信用出来ねぇぞ！！」

「ヴィータ・・分かっとる筈や。もう時間は無い！」

「・・・・チィッ！分かったよ！だけどお前！ちょっとでも不審な動きしたら、アイゼンの汚れにしてやるからな！！」

「肝に銘じておこう」

キュウビモンはそうヴィータの質問に答えると、ヴェロッサ、シャッハ、カリムを自身の背に乗せやすいように体を僅かに下げ、ヴェロッサ、シャッハは気絶したカリムを抱きかかえながらゆっくりとキュウビモンの背に乗る。
それを確認したはやては、天井に存在している穴から外へと飛び立ち、次にヴェロッサ達を背に乗せたキュウビモンが、そして最後にヴィータが外へと飛び立ち、急いでその場から離れ始める。

メギドラモンがギガスモンの姿を発見する前に。

バンチョーレオモン達とメギドラモンが戦っている地点から程近い場所。

その場所にはやての砲撃によって吹き飛ばされたギガスモンが落下し、体をデジコードが覆うとグロットモンの姿に戻ってしまう。

「グゥッ！クソッ！うっかりしてたぜ！あのデジモンが八神はやてのパートナーだったのか！？・・・・それにルインって言う女の情報と違い過ぎるぜ！！・・・・クソッ！！この礼は俺様の更なる力で万倍にして返してや…」

「■■■

自身に向かって近くの建物を薙ぎ倒しながら接近して来るメギドラモンに向かってグロットモンは両手を差し出すが、メギドラモンはグロットモンの様子など構わずにグロットモンの体を右手で掴み取り、全力で握り締める。

ーーーガシッ！！ギリギリギリギリギリッ！！

「ガアァァァァァァァーーーーーー！！ど、どうなっていやがる！！何で・・・このデジモンが・・・俺様を！？」

「愚か者！！よくメギドラモンが身に纏っている虹色の光を見てみろ！貴様には覚えがある筈だ！！」

「バ、バンチョー・・レオモン・・・覚えだと・・・・」

離れた所からフリードに乗りながら叫んだバンチョーレオモンの言葉に、グロットモンは全身を襲う激痛に苦しみながらメギドラモンの纏っている虹色の魔力光を注視してみると、頭の中に自身とメルキューレモン達に果敢に挑んで来る金髪に紅と緑のオッドアイした少女ーヴィヴィオと、そのパートナーデジモンだったギルモンの姿が頭の中に思い浮かんで来る。

『ブイちゃんを放せぇぇぇぇぇぇーーー！！』

『ウオォォォォォォーーーーー！！！』

「ッ！！ま、まさか！？このデジモンはあの時のガキとパートナーデジモンが進化したデジモンなのか！？」

「■■■

■ッッッッッ！！！！！」

グロットモンの疑問を肯定するように、メギドラモンは歓喜と憎しみに満ちた咆哮を辺りに響かせた。

メギドラモンは覚えている。自身の目の前から無理やりブイモンを攫って行ったグロットモン達の事を。

聖王教会だけではない。メギドラモンは自身から友を奪っていた全てを憎んでいる。大抵の連中は既にこの世にはいないが、グロットモンは生きている憎しみを抱いている仇敵。それがノコノコと目の前に現れたのだから、メギドラモンが優先する方は決まっているだろう。

それを現すようにメギドラモンは徐々にグロットモンを締め付けている右腕に力を込めて、グロットモンを握り潰そうとする。

ーーーギリギリギリギリギリッ！！

「ガアァァァァァァァーーーーー！！・・・・・もうキレたぞ！！テメエら全員この世から消してやる！！エンシェントエヴォリューーーション！！！」

ーーーギュルルルルルルーーーッ！！

「■■■■ッ！？」

「何だと！？」

「エンシェントエヴォリューションだって！？」

（何が起きてるの！？）

メギドラモンの右腕の中でデジコードを発生させたグロットモンの叫びと姿に、メギドラモンだけではなくバンチョーレオモン、オウリュウモン、キャロも目を見開く。
その間にもメギドラモンの右腕の中に存在していたデジコードは巨大化し続け、メギドラモンは思わず右腕を開くが、その間にもデジコードは更に巨大化し、全長二十メートルぐらいの大きさになると同時に、デジコードの中から灼熱色の赤い腕が飛び出し、メギドラモンの首に掴み取ると、デジコードも消失し始め、デジコードの中から背中に火山のようなものを背負い、体が隕石のような形をして、長く太い両手足を持った鉱物型デジモンが現れる。
そのデジモンこそ遥か昔にルーチェモンと戦った伝説のデジモン。十体しか存在しない“エンシェント”の名を持つ『土』の闘士の真の姿。その名も。

ーーーガシッ！！

「エンシェントボルケーモン！！」

エンシェントボルケーモン、世代／究極体、属性／ウィルス種、種族／古代鉱物型、必殺技／アトミックボンバー、スーパーノヴァ“土”の属性を持つ、古代デジタルワールドをルーチェモンから救った伝説の十闘士デジモン。遥か古代に存在した初めての究極体であり、十体のエンシェントデジモンの中でも最高のパワーを持っている。体内では常に高温のマグマが湧きあがり、自身の強力なパワーの源にしている。ルーチェモンとの激闘の後、エンシェントボルケーモンの能力は、その後“鉱石型”や“鉱物型”等の岩石系デジモンに引き継がれて、大部分の力は『土』のスピリットに残されている。必殺技は、背中の火山を大爆発させ、その推進力で超強烈なラリアットを相手に繰り出す『アトミックボンバー』と、体内で反物質を生成し、小型のビックバンに匹敵する超爆発を相手に向かっ

て起こす『スーパーノヴァ』だ。

「■■■■ッ！？」

「馬鹿な！？何故エンシェントデジモンとして覚醒出来たのだ！？」

「へへへへへッ！驚いたか？バンチョーレオモン？まぁ、当然だろうな・・・だが、教えてやんねぇぜ・・・さて、よくもさっきは俺様を痛めつけてくれたな！！」

エンシェントボルケーモンはそうバンチョーレオモンに向かって叫ぶと、すぐさま右手で首を掴んでいるメギドラモンに顔を向ける。

その様子にメギドラモンは自身の口に凄まじい炎ーメギドフレイムを発生させ、エンシェントボルケーモンに向かって吐き出そうとするが、その前にエンシェントボルケーモンも体内で反物質を生成し、自由になっている左手を口からメギドフレイムを吐き出そうとしているメギドラモンの口の中に衝き込れる。

ーーーードボッ！！

「■■■ッ！？」

「お前防御力は高い見てぇだが、内側は如何なんだろうな？スーパーー！！！！」

「いかん！！！オウリュウモン！！ヴォルテール！！防御しろ！！」

「ノヴァッ！！」

ドゴオオオ

オオオオオオオオオオオオオン！！！！

エンシェントボルケーモンが叫ぶと同時に小型のビックバンに匹敵する超爆発が発生し、辺りが全て真っ白に染まるほどの光が溢れた。

そして爆発の影響が治まった後には、聖王教会の建物と言う建物が全て消滅し、オウリュウモンとバンチョーレオモン、フリードを護るようにヴォルテールが立ち竦み、フッとヴォルテールの体から力が抜けると、ヴォルテールは地面に倒れ伏してしまう。

ーーードオオオオン！！

「ヴォルテーール！！」

（いけない！！強制送還！！）

ーーーブン！！

ヴォルテールがもう戦えない事を即座に判断したキャロは、急いでヴォルテールを戦いの場から逃した。

その様子を見ていたバンチョーレオモンは、自分達を護ってくれたヴォルテールに向かって僅かに頭を下げ、メギドラモンとエンシェントボルケーモンが戦っていた場所に目を向けてみると、体を覆っていた虹色の魔力光が消失し、紅い装甲も灰色に変色したメギドラモンの首を右手で掲げているエンシェントボルケーモンを目撃する。

「ッ！！ヴィヴィオ！！ギルモン！！」

「アイツを倒したって言うのかよ！？」

（・・・・これが・・エンシェントデジモン・・・・全てのデジモンの祖先）

メギドラモンを倒したエンシェントボルケーモンの力にオウリュウモンとキャロは恐怖心を僅かに抱くが、エンシェントボルケーモンは構わずに右手に掲げているメギドラモンに残忍さに満ちた笑い声を上げる。

「ヒャハハハハハハハッ！！すげぇ！！すげぇぜ！！これが本当の土の闘士の力！！エンシェントデジモンの力か！！へへへへへへッ、まさか、此処までだったとはな・・・・さて、俺様を苦しめた礼だ！もう一発食らって華々しく散りやがれ！！」

「ッ！！させるか！！」

ーーービュン！！

メギドラモンを殺そうとしている事に気がついたバンチョーレオモンは、エンシェントボルケーモンの行動を止める為に全速力で駆け出しが、その前にエンシェントボルケーモンは自身の体内での反物質の生成を終え、目から光を失っているメギドラモンに再びスーパーノヴァを食らわせようとする。

「じゃあな！あの世でブイモンと仲良くしていろ！！スーパーー！！」

「ヴィヴィオ！！ギルモン！！」

エンシェントボルケーモンの叫びにバンチョーレオモンは全ての力を込めて全速力で駆けて行くが、間に合わず、エンシェントボルケーモンは再びスーパーノヴァを一発動出来なかった。

ーーードスウゥゥゥゥーーーン！！

「・・・・・・・あん？」

『なっ！？』

エンシェントボルケーモンがスーパーノヴァを発動させる直前に、メギドラモンの胸部分から鋭い矛先を持った巨大な槍が飛び出し、エンシェントボルケーモンの体を刺し貫いた。

その事実に刺し貫かれたエンシェントボルケーモンだけではなく、駆け出していたバンチョーレオモンも思わず足を止め、オウリュウモンもメギドラモンの胸部分から生えている長い槍に目を向けてみると、メギドラモンの体に徐々に罅が入って行き、メギドラモンの体は砕け散り、鈍い輝きを放つ鎧を全身に装備し、黒いマントを背中に羽織い、右手に巨大な槍を、左手に巨大な盾を装備した二十メートル前後の大きさの騎士が現れる。

ーーーバキィィィィーーン！！ガラガラガラガラガラッ！！

「なっ！？何だ！？テメエは！？」

「黒いデュークモンだと？・・・まさか、まさか！？」

「・・・我が名はカオス・・・カオスデュークモン」

カオスデュークモン、世代／究極体、属性／ウィルス種、種族／暗

黒騎士型、必殺技／ジュデッカプリズン、デモンズディザスターウィルス種の本能に目覚めたデュークモン。その精神、思考は完全にダークサイドに染まっている。まさに“デジタルハザード”が起こった状態。体はクロンデジゾイドの魔の鎧で包み、右手には魔槍『バルムンク』、左手には魔盾『ゴーゴン』を装備している。メギドラモンと同一存在と呼ばれ、その力はメギドラモンだった頃よりも遥かに上がっている。必殺技は、左手の魔盾『ゴーゴン』から全てを腐蝕させる暗黒波動を放つ『ジュデッカプリズン』に、右手の魔槍『バルムンク』から、相手に向かって連打攻撃を繰り出す『デモンズディザスター』だ

メギドラモンの体の中から現れた黒い騎士ーカオスデュークモンは、自身の右手に装備しているバルムンクの矛先が突き刺さっているエンシェントボルケーモンにゆっくりと残忍さに満ちた視線を向ける。

「随分と私達にやってくれたな・・・礼をしてやろう。一瞬で電子に返るがいい！！」

「待て！！待ってくれ！！」

「死ね。デモンズディザスターーーーッ！！」

ーーードドドドドドドドドドドドゴオン！！

「ギャアアアアアアアアアアアアアーーーーーーーーーーーー！！！！・・・・グゥッ！！」

バルムンクの矛先が突き刺さっていた部分に、何度も連打を食らったエンシェントボルケーモンは苦痛に満ちた叫びを上げるが、ギ

リギリの所で自身の右腰部分を犠牲にする事でデモンズディザスターから逃れ、そのまま後方に飛び地面に膝を着いた。
その様子を目にしたカオスデュークモンは即座にバルムンクを再びエンシェントボルケーモンに構えながら突進しようとする。
しかし、その前に右腰部分からデータ粒子を溢れさせながらもエンシェントボルケーモンは立ち上がり、背中の部分に存在している火山のようなものを大噴火させ、カオスデュークモンに向かって突撃し、強烈なラリアットを叩き込む。。

「舐めんじゃねぇぞ！！アトミックボンバーーー！！！！」

ーーーゴオオオ

エンシェントボルケーモンは自身の力がカオスデュークモンに通じなかった事が信じられないのか、次々と渾身の力を込めた拳や蹴りをカオスデュークモンに叩き込み続ける。
だが、やはりカオスデュークモンは揺るぐ事も無くゆっくりと右手のバルムンクを動かし、神速の突きをエンシェントボルケーモンの体に突き刺す。

「攻撃とは、こう言うものだ！！」

ーーードスウウゥゥゥゥゥーーーーン！！

「ガハッ！！」

カオスデュークモンの神速の突きをエンシェントボルケーモンは避ける事が出来ず、その身に中心に深々とバルムンクの矛先は突き刺さった。
その様子を目撃したカオスデュークモンは、再びバルムンクに力を込めてデモンズディザスターをエンシェントボルケーモンに叩き込む。

「今度こそ電子に返れ！デモンズディザスターーーッ！！」

ーーードドドドドドドドドゴオオン！！

「ギャアアアアアアアアアアアアアアーーーーーーー！！！！」

ーーーバリィィィィィーーーーン！！

カオスデュークモンが放ったデモンズディザスターは寸分違わずにエンシェントボルケーモンに全て決直撃し、エンシェントボルケ

ーモンは苦痛と恐怖に満ちた叫びを上げながら消滅した。
　そのエンシェントデジモンを苦も無く倒したカオスデュークモンの力にバンチョーレオモン、オウリュウモンは信じられないと言う顔を、エンシェントボルケーモンが消滅した場所の空中に浮かんでいるギガスモンのスピリットを見つめているカオスデュークモンの向けるが、カオスデュークモンはもはやこの場には用が無いと言うように背を向け、ベルカ自治領の在る方に顔を向ける。

「ベルカを滅ぼす・・・それこそが私が生まれた理由・・・ベルカの全てを・・・ベルカの血を引く人間を・・・一人残らず滅ぼす！！」

ーーービュン！！

「待て！！カオスデュークモン！！」

　ベルカ自治領に向かって飛び上がったカオスデュークモンの背にバンチョーレオモンは叫ぶが、カオスデュークモンは止まる事は無くベルカ自治領に向かって進む事が一出来なかった。

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

「何ッ！？」

『ッ！！』

　突如としてベルカ自治領に向かって飛んでいたカオスデュークモンの背に、遥か空の上から黒い何かが突撃し、無理やりカオスデュークモンを地面に落下させた。
　カオスデュークモンは自身の背に突如として食らった衝撃に驚き

ながら、自身が少し前までいた頭上に顔を上げてみると、凄まじい怒りのオーラを全身から発生させている背中に二つのバーニアを背負い、機械的な鎧を身につけ、両手にも機械的なドラモンキラーを装備した赤い瞳の漆黒の竜人ーブラックウォーグレイモンXの姿を目にする。

「少し見ない間に随分と変わったな、ギルモン」

「・・・・・ブラックか・・・・・其処を退け・・・私はベルカを滅ぼさなければいけない・・・邪魔をするなら、貴様も殺す」

「ほう、俺を殺すだと？悪いがベルカの連中には殺す以上の地獄を味合わせる予定だ。それの邪魔をするのならば、貴様には元の二人に戻って貰うぞ」

「・・・・・フフフフッ、なるほど。私達は同じ目的を持った者だが、過程が違うと言う事か・・・・悪いがベルカは私が滅ぼす！！それこそがヴィヴィオの笑顔を奪った連中への断罪であり！ヴィヴィオの願いだ！！それを邪魔をするならば！幾ら貴様でもこの手で屠るまでだ！！全てを滅ぼす！！ベルカの人間は一人残らず殺すのだ！！それこそが何の感情も抱かれずに無残に殺されたモチモン達に対する行動の報復だ！！ベルカと言う国があったせいでヴィヴィオは・・・・ヴィヴィオは・・・・」

「・・・・ならば、する事は一つしかあるまい」

「・・・・確かにそうだな」

ブラックウォーグレイモンXの言いたい事が分かったカオスデュークモンは、自身の体の大きさをブラックウォーグレイモンXと同

程度に変え、右手のバルムンクを構える。
　その様子にブラックウォーグレイモンXは僅かに感心した顔をカオスデュークモンに向け、自身とユニゾンしているルインと話し始める。

（思ったよりも奴は強い。自身の体を大きさを武器として使う気は無いようだ）

（・・・はい・・・体の大きさはブラック様ならば逆に利用すると分かっているようです・・・・ブラック様・・・本気でヴィヴィオちゃんとギルモンちゃんと戦う気ですか？）

（説得は無理だ・・・あの状態の奴は誰の言葉にも耳を貸さん・・・・奴自身が暴走を止めるか、融合しているヴィヴィオ自身が戦いを止めるしかない・・・・戦うのが嫌ならば俺から離れろ）

（・・・・・いえ、共に戦います！！私もヴィヴィオちゃんとギルモンちゃんが暴走している姿なんて見たくないです！前はヴィヴィオちゃんを助けられませんでしたが、今度は絶対に助けて見せます！！）

（フッ、ならば行くぞ！）

（はい！）

　ブラックウォーグレイモンXとルインはそう互いに同意し合うと、カオスデュークモンに向かって両手のドラモンキラーを構え、カオスデュークモンもバルムンクの矛先をブラックに向け、互いに息が詰まるほどの睨み合いを行い、同時に相手に向かって突撃する。

「オオォォォォォォォォォォォーーーーーーーーーー！！！！！」

「ハアァァァァァァァァァァーーーーーーーーー！！！！！」

ーーードオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

ブラックウォーグレイモンXの右手のドラモンキラーの爪先と、カオスデュークモンのバルムンクの矛先が激突しあった瞬間に、地面が爆裂するほどの衝撃波が辺りに巻き起こった。

今此処に漆黒の竜人ーブラックウォーグレイモンXと聖王の力を得た暗黒の騎士王ーカオスデュークモンとの激突が始まる。しかし、カオスデュークモンの身の内に居るヴィヴィオは、未だに目覚める気配を見せないのだった。

暗黒の騎士王！カオスデュークモン！！後編、下（後書き）

次回予告

カオスデュークモンに挑むブラックウォーグレイモンX

しかし、カオスデュークモンの力はブラックウォーグレイモンXの想像を超えていた。

傷つき倒れてしまうブラックウォーグレイモンX。

その時ヴィヴィオの意思は？

次回、漆黒の竜人と少女、『究極の領域！』

究極の戦いが始まり、ヴィヴィオがモチモン達の思いを真に受け継ぐ時。真の騎士は目覚める。

究極の領域！前編（前書き）

更新遅れてすいません。
色々と忙しかったので遅れてしまいました。
申し訳ありません。

究極の領域！前編

機動六課ロングアーチ。
今その場所はベルカ自治領に居る地上本部の局員達やスバル、ギンガ、エリオ、ビショップチェスモン、そしてヴァイスとサーチモンから矢継ぎ早に送られて来る情報に大混乱状態になっていた。
当初は警備が体制が緩かった聖王教会を襲撃して、過激派の司祭達や枢機卿を逮捕して聖王教会の実権を穏健派に委ねる予定だったのだが、はやてから送られて来た情報でそれ所では完全に無くなっていた。何せ管理外世界に質量兵器を持って侵略を行っただけではなく、その世界にいた聖王の逆鱗に触れて、メギドラモンを呼び覚ましてしまった。
その上、メギドラモンがベルカ自治領に現れた事によって、各交通機関や車などの乗り物は原因不明の異常を引き起こして使用出来なくなってしまっていた。
その為にベルカ自治領の住民の避難は全く進まず、更にベルカ自治領にいる人々を全て避難させるには、現在ベルカ自治領にいる局員達を総動員しても完全に手が足りなかった。それだけではなくメギドラモンを閉じ込めていた聖王教会の周りに張り巡らせていた結界も、内部から発生した巨大な爆発によって消滅し、もはやベルカ自治領をメギドラモンの手から護る最後の砦さえも機動六課は完全に失っていた。

「クッ！！住民の避難はどれだけ進んでいるんだ！？」

「凡そ二十パーセント以下です！！それに結界が吸収し切れなかった究極体同士のぶつかり合いで発生していた衝撃波によって、ベルカ自治領の建物や建築物の殆どに巨大な亀裂が発生しています！！このままでは建物の倒壊の可能性も存在しています！！」

ーーードオン！！

「クソッ！！聖王教会の連中！！とんでもねぇ事をしてくれやがったぜ！！」

管制についていたシャリオの報告にゲンヤは目の前にあった机を苛立ちげに殴り、モニターに映っているベルカ自治領の様子を隣で他のオペレーター達に指示を出していたオーリスと共に見つめる。

元々事前準備も無しで街中で究極体同士のぶつかり合いが起きる事こそが、既に次元災害に等しい強大な災害なのだ。それがよりにもよって住民の避難が全く行っていなかった場所に、突如として起きたのだから、もはやベルカ自治領の住民達が助かる可能性はゼロの等しい。当然ながらベルカ自治領内部にいる局員達やヴァイス達も助かる可能性はゼロ。

その事が思い浮かんだゲンヤは悔しげに顔を歪めながら横にいるオーリスに声を掛ける。

「オーリス三佐・・・レジアス中将は如何している？」

「・・・中将は今ベルカ自治領に近い場所の局員達をベルカ自治領に向かわせる準備と・・・・秘密部隊の出動に動いています・・・・ですが、状況が幾ら何でも急過ぎました・・・・今からではもう・・・間に合いません・・・・到着する頃には恐らく・・・全てベルカ自治領にいる人間が究極体同士の戦いの衝撃によって・・・」

「チクショウ！！」

ーーードゴン！！

手の打ち様が無い。その事実がハッキリとオーリスの報告で分かったゲンヤは再び机を怒りに任せて殴りつけ、ロングアーチにいる他のメンバー達も絶望を抱き始めた。
幾らなんでも相手が悪かった。ベルカ自治領に現れたデジモンは七大魔王デジモン以上の危険性を持ったメギドラモン。その上ゲンヤ達はまだ知らないが、メギドラモンは既に完全に理性を持ってベルカを滅ぼす意思を宿したカオスデュークモンへと進化してしまっている。
もはや完全に究極体クラスの領域に足を踏み入れている者以外が入り込めない領域に状況は悪化してしまっているのだ。その領域にただ魔力を持った程度の人間が耐えられる筈は無い。耐えられるとすれば、強靭な体を持ち、完全体にまでいかなくても戦える力を持った成熟期位のデジモン達の力が必要。
その事を逸早く理解したレジアスは、自身が隠していた部隊を緊急出動させようとしているのだが、完全に遅かった。今からでは秘密部隊がベルカ自治領に到着する頃には、ベルカ自治領は跡形も無いほどに変わり果て、数え切れない数の人々の亡骸が広がる地獄と化しているだろう。
その中には現場にいるギンガ、スバル、エリオ、ヴァイスの亡骸とビショップチェスモンとサーチモンのデジタマも存在している可能性が存在している。
仲間や家族に危機が迫っているのに、自分達には如何する事も出来ない事にゲンヤ、オーリス、ロングアーチのメンバーは悔しげに顔を歪め、顔を下に俯け始める。
しかし、次の瞬間にロングアーチ内の全てのモニターが突如として勝手に別の映像に変わり、腰まで伸びた蒼い髪に、赤い瞳を輝かせて白衣を着た女性ーフリートが映りだす。
ーーーブゥン!!

『何絶望しているんですか？ゲンヤ・ナカジマ』

「ッ！！フリート！！」

『ッ！！』

突如としてモニターに映ったフリートの姿にゲンヤは驚きに満ちた声を上げ、始めて見るフリートの姿にオーリスや他のメンバーは困惑した顔をするが、フリートは構わずに用件を伝える。

『これよりベルカ自治領に援軍が到着します。その援軍と協力して地上局員達は、ベルカ自治領の人々を避難させて下さい』

「援軍だと？・・・・・まさか！？クイント達か！？」

『はい、クイントさん達ですよ・・・・ですが、援軍はそれだけではありません。ベルカ自治領に訪れる援軍は・・・・デジモン達です！！』

『ッ！！』

フリートが告げた事実にゲンヤ達は目を見開くが、フリートは構わずにブラックが考えた戦略を教え、ゲンヤとオーリスは互いに頷きあうと、すぐさまそれぞれ準備を開始する。状況は最大に好転させる為に。

聖王教会から程近い場所のベルカ自治領都市。

その場所は聖王教会に近すぎた為に究極体同士の戦いによって発

生していた衝撃波によって殆どの建築物に亀裂が走り、何時倒壊しても可笑しくない状態になっていた。更に追い討ちを掛けるように交通機関などの移動手段が全て使用不能になってしまった上に、ありとあらゆる機械製品の殆どに異常が発生してしまっていたのだ。その為に建物内部の扉の開閉など行えず、建物内部に閉じ込められている人間も続出していた。

現在ベルカ自治領内部で機械やデバイスなどを使用出来るのは地上の局員達やギンガ達だけだった。

しかし、幾ら聖王教会の過激派を捕まえる為にかなりの数の局員が導入されていた状況とは言え、究極体同士の戦いが近くで起きている状況では、戦力が余りにも足らなかった。近くで発生している衝撃波から避難しようとしている人々を護るだけではなく、建物内部に閉じ込められた人々までも救助しなければいけない状況なのだが、大量の人々を運ぶ為に乗り物などが使用不可能になってしまっている為に遅々として避難は進んでいないのだ。

「クソッ！！サーチモン！！一体どれだけの人間が建物の中とかに閉じ込められているんだよ！？」

「最低でも数千人以上だ！！これだけの人々が建物内部に閉じ込められている！更に衝撃波の影響で崩れてしまった建物の地下にも大勢の人々が存在しているぞ！ヴァイス！！」

「クッ！！救助者の数が多すぎるぜ！！もう結界も無いって言うのによ！！」

ベルカ自治領内部の道路に止まっている装甲車の中でサーチモンの情報を聞いたヴァイスは、完全に状況が不味い事に焦りに満ちた叫びを上げた。

状況が余りにも悪過ぎた。このままでは本当にベルカ自治領にい

る全ての人間達が死んでしまう。
　そうなれば全てが終わってしまう事を理解しているサーチモンとヴァイスは現状を打開する策は無いのかと考えるが、残念ながら現状の状況の悪さでは策が思い浮かばず焦りだけが募っていくと、同じように装甲車の中で状況を調べていた一人の女性局員が青ざめた顔をしながら叫ぶ。

「ッ！！ヴァイス副隊長！今までにない威力の衝撃波が来ます！！」

「なっ！？チィ！！全員何かにしがみつけ！！」

　女性局員の報告にヴァイスは慌てて装甲車の中にいたメンバー全員に命じ、自身もサーチモンと一緒に近くに機器にしがみ付き、来るであろう衝撃波に耐えようとする。
　しかし、何時まで経っても衝撃波が来る事は無く、ヴァイス達が恐る恐る装甲車の窓から聖王教会本部がある方向を見てみると、聖王教会本部の敷地全てを覆うほどの強固な結界を張られていた。

『なっ！？』

　突然に張られた先ほどの聖王教会本部を覆っていた結界を上回るほどの強固な結界を目にしたヴァイス達は声を上げた。
　その広大な聖王教会本部敷地を覆う結界は、内側に居るであろう究極体同士の戦いによる衝撃波で響くように空間を揺らめかせるが、壊れる様子は全く見せずに衝撃波を外には一切出さなかった。
　一体誰が究極体同士の戦いで発生する衝撃波を抑える結界を張ったのかと、ヴァイス達は疑問に満ち溢れた顔をするが、驚愕はそれだけでは治まらず、ヴァイスの足元に居たサーチモンが突如として別方向に顔を向けてヴァイスに叫ぶ。

「ムッ！！ヴァイス！！ベルカ自治領内部のいたる所に転移反応だ！！・・・・・信じられん！数は軽く見ても三十以上だ！！・・・・・その上更に転移反応は出現しているぞ！！」

「何だって！？チィッ！！おい！すぐに動けるサーチャーを使って一番近い転移反応が出ている場所の映像を映せ！！」

「りょ、了解です！！」

ヴァイスの命令に先ほどの女性局員が即座に答え、装甲車の中に存在していた機器を使って転移反応が出ている場所をモニターに映してみると。

『グウオォォォォォォーーーーーー！！！！』

多数のデジモン達が次々とベルカ自治領内部に転移している姿が存在していた。

『なっ！？』

次々とベルカ自治領各地に転移して来るデジモン達の姿を目撃したヴァイス達は、限界まで目を見開きながら声を上げた。

何故デジモン達が転移魔法を使えるのかはヴァイス達には分からないが、同時に不味いと言う事は分かった。何せデジモン達は人間を憎んでいる。そのデジモン達が危機に陥っている人間を助ける筈は無い。

逆に恐怖に震えている人間達を殺す為に動くとヴァイス達は考え顔を青ざめさせるが、ヴァイス達の予想に反するようにデジモン達は建物の瓦礫を抱かしたり、建物の中に閉じ込められている人間達を助けるたり、恐怖に震えている人々を飛行出来るデジモン達の背

に乗せて人々を救助し始めた。

「なっ！？如何言う事だ！？」

「・・・・私にも分からんが、サーチした情報では転移して来たデジモン達は人々には全く危害加えてはいない。それだけではなく人々に石や瓦礫など、更に魔法を放たれても救助を進んで行っている・・・・あのデジモン達は敵ではないぞ！」

「じゃ、一体あのデジモン達は？」

「ヴァイス副隊長！ゲンヤ副部隊長とオーリス三佐から緊急連絡です！！『ベルカ自治領に転移して来るデジモン達と協同で人々の避難を行え。転移して来るデジモン達は全て味方だ。それと使えるサーチャーを使ってデジモン達と局員達が協同で人々の救助を行っている映像を余す事無く撮れ』だそうです！」

「・・・・・そういう事か。なら話は簡単だな！サーチモン！」

「ウム！何処のデジモン達かまでは分からんが、仲間となれば話は早い！恐らく何処かに指揮官の人間達が居る筈だ！すぐにサーチする！」

「任させたぞ！他のメンバーは今の連絡を他の局員達に伝えろ！！そしてデジモン達と一緒に協同で人々の救助に当たれ！！」

『了解！！』

ヴァイスの叫びに他のメンバー達は即座に答え、それぞれヴァイスの命令を実行し始める。

漸く巡って来た最大のチャンスを逃さない為に。

ベルカ自治領都市内部。
その場所でギンガ、スバル、エリオは人々の避難誘導や瓦礫などに埋まってしまった人々の救助を行っていたのだが、突如としてベルカ自治領内部に現れた多数のデジモン達の姿に警戒を行っていた。
今まで憎しみを抱いているデジモン達と戦い続けていたのだから、その判断は正しい。
しかし、今、目の前に現れたデジモン達は憎しみよりもベルカ自治領内部の人々の救助を優先していた。
彼らは確かに人間を完全に認めた訳ではない。だが、それでも罪の無い人々をもう傷つける気にはなれない上に、今回のベルカ自治領に襲撃を掛けたデジモンであるメギドラモンの前の姿であるヴィヴィオとギルモンは仲間だと認めている。
あの誰よりも優しく、幼年期デジモン達と仲良くしていたヴィヴィオとギルモンの姿は、地球に居るクイント達に説得されたデジモン達にとっても憎しみに染まっていた心を癒してくれていた。それ故に彼らは今は管理世界の人間であろうとヴィヴィオとギルモンの為に罪の無い人々を救助する。
“ヴィヴィオとギルモンに本当の取り返しの無い罪を背負わせない為に”、彼らは人々に恐怖の視線や石や魔法を撃たれようと助け続ける。
その今まで見たどのデジモン達とも違う姿にギンガ、スバル、エリオは困惑しながらデジモン達を見つめていると、金色に輝く甲殻を持って両腕にドリルがついた昆虫型デジモン―ディグモンが走って来る。
ディグモン、世代／アーマー体、属性／ワクチン種、フリー、種族

／昆虫型、必殺技／ゴールドラッシュ、ビッククラック
古代種のアルマジモンが知識のデジメンタルで進化した昆虫型デジモン。知識のデジメンタルの力を１００％発揮しており、大地を操る力を持っている。必殺技は、両手と鼻先のドリルを高速回転させ、ミサイルのように飛ばす『ゴールドラッシュ』と、ドリルを地面に刺し、地割れを引き起こす『ビッククラック』だ。

「其処を退け！！」

『ッ！！』

走って来たディグモンの叫びにギンガ達は慌ててその場から離れると、ディグモンは崩れてしまっているビルの前で立ち止まり、急いで地面を掘り始める。

ーーーギュルルルルルルルッ！！

「今からこの場所の地下に埋もれている人間達の場所まで穴を掘る！君達は私が掘った穴の中を通って来てくれ！」

「えっ！？あのそれってどう言う…」

「ディグモンの言うとおりにしなさい！ギンガ！スバル！！」

『ッ！！』

突然に空の上から響いたギンガとスバルにとって忘れる事が出来ない懐かしい声に、ギンガとスバルが慌てて上空を見てみると、チィリンモンの背から飛び降りる女性ークイントの姿が存在していた。

ーーードン！！

「久しぶりね、ギンガ、スバル」

「母さん！！」

「お母さん！！」

目の前に着地した四年ぶりに会う大切な母親ークイントの姿にギンガとスバルは喜びと困惑の声を上げた。

何故地球で動けない筈のクイントが現れたのかとギンガとスバルは困惑した顔をクイントに向け、エリオも始めて見る女性であるクイントに困惑した顔を向けるが、クイントは時間が無いと言うようにギンガ達に向かって叫ぶ。

「事情は後で幾らでも説明して上げるわ！！それよりもベルカ自治領の人々をデジモン達と一緒に救助するのよ！！あの結界だってそう長くは持たないわ！！さぁ、早く行くわよ！！」

『は、はい！！』

クイントの声にギンガ達は困惑しながらも頷き、ディグモンが掘った穴の中にクイントと一緒に飛び込み人々の救助に向かい出した。

聖王教会本部跡地。

その場所には美しい景観が広がっていた筈だった。

しかし、今その場所は荒れ果てた大地に変わり果て、未だに跡形も無く大地を変えた衝撃波が、二つの漆黒の閃光によって発生させ

られ続けていた。

ーーーキィン！！ガキィン！！ガキィッ！！ガキィィィィィーーーン！！

「オオォォォォォォォォーーーーーーー！！！！！」

「ハアァァァァァァァァーーーーーー！！！！！」

ーーーガアァァァァァーーーーン！！

二つの漆黒の閃光ーブラックウォーグレイモンXとカオスデュークモンはそれぞれ自身の武器を高速で振るい続け、互いに激しい金属音と衝撃波を撒き散らしていた。

互いの胸の内には同じベルカを滅ぼすと言う意思を宿しているが、過程が違う為にぶつかり合い続ける。

ブラックウォーグレイモンXは死さえも生温い地獄と言う地獄を味合わせた上でベルカを滅ぼす。

カオスデュークモンは自身の手で友を失わせる元凶を作り上げたベルカと言う名の付く全てを跡形も無く消滅させる為に、二体の究極体はぶつかり合う。

「ムン！！」

「フッ！！」

ブラックウォーグレイモンXの右手にドラモンキラーによる渾身に突きを、カオスデュークモンは体を反転させる事でかわし、そのまま回転した勢いを利用して右手の魔槍ーバルムンクをブラックウォーグレイモンXに向かって振り抜く。

「ハァァァッ！！」

カオスデュークモンは振り抜いたバルムンクをブラックウォーグレイモンXの胴体に叩き込もうとする。

しかし、ブラックウォーグレイモンXは経験からカオスデュークモンは行うであろう行動を予測していたのか、瞬時に自身の体を下に下げて、バルムンクはブラックウォーグレイモンXの頭上を通り過ぎる。

「何ッ！？」

「隙だらけだ！！ドラモンキラーーーー！！！」

ーーードグゥオン！！

振り抜いたバルムンクを簡単に避けられた事で動きが止まってしまっているカオスデュークモンの胴体に、ブラックウォーグレイモンXは迷う事無く渾身の力を込めた両腕のドラモンキラーを叩き込んだ。

しかし、確かに両方のドラモンキラーが叩き込まれたのにも関わらずカオスデュークモンは揺るぐ事無く立ち続け、ブラックウォーグレイモンXは自身のドラモンキラーの爪先とカオスデュークモンの間にある虹色の魔力光ー“聖王の鎧”を苦々しげに睨み付ける。

「チィッ！！」

「フン！残念だったな、ブラック。貴様の攻撃は確かに並みの究極体でも大ダメージは免れないだろう。だが、私にはヴィヴィオの聖王の鎧が存在している。この鎧がある限り私には攻撃は通らんぞ！

！」

ーーードゴオン！！

「グハッ！！」

カオスデュークモンは叫ぶと同時にバルムンクを素早く振り下ろし、ブラックウォーグレイモンXの右肩に叩きつけた。

その衝撃にブラックウォーグレイモンXは苦痛の声を上げるが、カオスデュークモンに突きつけている両腕は決して下ろさずにゼロ距離から自身の最大の技を叩き込む。

「その過信が貴様の弱点だ！！暗黒のガイアフォーース！！！」

ドゴオオオ

それを肯定するようにカオスデュークモンが吹き飛んだ時に発生した砂煙の中から足音が響き、暗黒のガイアフォースが直撃した箇所の鎧に僅かに罅が入っているカオスデュークモンが現れる。

「流石だなブラック。バンチョーレオモンでさえも撃ち破れなかった聖王の鎧を撃ち破るとは。私達と離れ離れになっても、自身の研鑽は止めなかったようだな」

「フン、少し敗北を経験したからな。もっと強くなりたくなっただけだ」

「そうか・・・だが、その力ももはや私には通じない。何よりも私には聖王の鎧が存在している。本来ならば通常攻撃でも受けるダメージは受けない。お前の最大の技を持ってしても決定的なダメージには程遠い。私はヴィヴィオに護られている。もはや私に敗北は無い！！」

「護られているだと？・・・・・フン、如何やら貴様は少し見ない間にヴィヴィオの本当の想いが分からなくなっていたようだな。俺が消える前のお前ならば決して護られているなどと言う言葉は使わないだろう」

「何だと？どう言う意味だ？」

「・・・まだ分からないのか？ヴィヴィオは貴様を護る為に聖王の鎧を使っている訳ではない！現実から逃れる為に聖王の鎧を張り続けている事に！！」

「ッ！！」

ブラックウォーグレイモンXの叫びにカオスデュークモンの全身に衝撃が走った。
そうカオスデュークモンと融合しているヴィヴィオはカオスデュークモンを護る為に聖王の鎧を張り続けているのではない。二度とモチモン達のように友達を失う現実を味わいたくない為にカオスデュークモンと融合し、聖王の鎧を張り続けていた。
その証拠にメギドラモンからカオスデュークモンに進化した事で完全にカオスデュークモンの意識は戻ったにも関わらず、未だにヴィヴィオの意識は目覚めず、本来なら融合して何時でも自由に会話出来る筈なのに、カオスデュークモンはヴィヴィオの声を聞く事が出来ない。
ヴィヴィオの意思は大切な者を護れなかった現実から逃げる為に、カオスデュークモンの胸の内で眠り続けているのだ。

「少し戦って分かったぞ。例え間違った融合進化でも、パートナーの声は聞こえる筈なのに、貴様にはヴィヴィの声が聞こえていない。その事にも憎しみに支配されている貴様は気付いていなかっただろうがな」

「・・・・・ブラック・・・貴様に何が分かるのだ!!戦えなかったモチモン達を護れなかった私達の何が今まで居なかった貴様に何が分かる!?モチモン達は本当に優しかった!ヴィヴィオとリンディの為に優しさの篭った花冠を作ってくれていた!!その花冠さえも奴らは何も感じずに踏み躙った!それだけではなく奴らはヴィヴィオのせいにして自分達の残忍な行いを正しいと宣言していた!!ふざけるな!!ヴィヴィオは泣いていた・・・・泣きながらモチモン達を助けてくれと懇願したにも関わらずに・・・奴らはモチモン達を・・・・・だからこそ、私はベルカを滅ぼすのだ!!この世からベルカと言う名の付く全てを消滅させる!!ベルカが存在する限り、ヴィヴィオのせいにしてまた暴挙を繰り返す輩が必ず現れる

！！ヴィヴィオを自身を見ずに聖王と言う妄想を見る輩がな！！だからこそ、私がこの手でベルカに本当に引導を渡す！！その邪魔だけはさせんぞ！！」

「・・・・・確かに連中を滅ぼす事には同意だ。俺もこの手で奴らに引導を渡したいからな。だが、貴様の手では滅ぼさせる訳にはいかん・・・・それに少しだけ貴様の憎しみは理解出来るぞ。俺も一度は全てを憎んで滅ぼそうとしたからな」

ブラックウォーグレイモンXにはカオスデュークモンの気持ちが理解出来ていた。

形は違えどブラックウォーグレイモンXも、ヴィヴィオとカオスデュークモン同様に全てを憎んだ。

その時の憎しみには後悔はしているが、あの時の憎しみを否定はしない。本当に絶望に堕ちた時にはこの世の全てを憎まずにはいられないのだから。

だが、それでもブラックウォーグレイモンXはカオスデュークモンには一般人を殺させる訳にはいかない。もし一般人を殺してカオスデュークモンが元のヴィヴィオとギルモンに戻った時、確実にヴィヴィオは自身のした行いの結果に絶望して心が壊れてしまう。まだ、子供でしかないヴィヴィオには耐えられないだろう。

だからこそ、ブラックウォーグレイモンXはカオスデュークモンの憎しみを理解出来ていても、カオスデュークモンを絶対に止めると言う意思を持って両腕のドラモンキラーを構え、カオスデュークモンもバルムンクの矛先をブラックウォーグレイモンXに向け、左手に装備している魔盾ーゴーゴンを構え出す。

「もはや問答無用だ・・・・私は今の私の全てを持って貴様を屠り、ベルカを滅ぼす」

「ならば、俺はお前達を元に戻し、ベルカの連中に地獄と言う地獄を味合わせて殺す」

『・・・・・・ウオオォォォォォォォーーーーーーーーーー！！！！！』

ーーーガキィィィィィィーーーン！！

ブラックウォーグレイモンXとカオスデュークモンは無言で睨み合いを行っていると、突如として互いに同時に飛び出し、ドラモンキラーとバルムンクは激突し合い、再び金属音が鳴り響いた。

それと同時にブラックウォーグレイモンXはバルムンクと激突し合っている右腕のドラモンキラーを振り抜き、バルムンクを僅かに弾くと、そのまま左腕を振り抜こうとし、カオスデュークモンはゴーゴンを構えて防御しようとするが、直前になってブラックウォーグレイモンXは左腕のドラモンキラーを振り抜かず、右足で蹴りをカオスデュークモンに叩き込もうとする。

「ハァッ！！」

完全なフェイント。更に事前に右腕のドラモンキラーで攻撃して、ドラモンキラーで攻撃して来ると言う印象を持たせたフェイント攻撃。

例え戦闘に慣れたデジモンでも簡単には気がつく事が出来ない攻撃。ブラックウォーグレイモンXとその身に融合しているルインは、この攻撃は確実に決まると確信し、その後の連携に繋げる策を瞬時に考えるが、ブラックウォーグレイモンXとルインの考えを否定するように、カオスデュークモンは蹴りが来るのを知っていたかのように僅かに体を傾けるだけでブラックウォーグレイモンXの蹴りを避ける。

ーーーシュン！！

「何ッ！？チィッ！！」

自身の蹴りが簡単に避けられた事にブラックウォーグレイモンXは目を見開くが、すぐに驚愕を治めて、そのまま右足の蹴りを放った反動を利用して避けた直後であるカオスデュークモンに向かって右腕のドラモンキラーを振り下ろそうとする。

しかし、その動きもカオスデュークモンには分かっていたのか、既にブラックウォーグレイモンXがドラモンキラーを振り下ろそうとした場所に、ゴーゴンを構えて防御する。

ーーーガァァァァァァーーン！！

「ッ！！」

（そ、そんな！？ブラック様の連続攻撃がこんなにもアッサリと防御されるなんて！？）

カオスデュークモンの一連の動きに攻撃を放ったブラックウォーグレイモンとその身に融合しているルインは驚愕した。

余りにもカオスデュークモンの一連の動きは出来過ぎている。まるで自身の行動が全て分かっていたかのような動きにブラックウォーグレイモンXは疑念を持ちながら瞬時にカオスデュークモンの傍から飛び退こうとする。

しかし、その動きさえも見切っていたのか、カオスデュークモンは瞬時にブラックウォーグレイモンXの移動しようとした先に移動する。

ーーービュン！！

「馬鹿な！？」

「現実だ！カオスショット！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

「グハッ！！」

バルムンクの矛先から飛び出した暗黒エネルギー波ーカオスショットを至近距離から撃ち込まれたブラックウォーグレイモンXは苦痛の声を上げながら吹き飛ばされた。

その一連の動きにブラックウォーグレイモンXは全身を襲う苦痛に耐えながら、地面に着地しようとするが、その前にカオスデュークモンがブラックウォーグレイモンXの前に現れ、バルムンクを振り下ろす。

「ハァッ！！」

「クゥッ！！」

ーーーガッシャン！！ドゴオオオオオオオオオオオオオン！！

カオスデュークモンがバルムンクを振り下ろす直前に、ブラックウォーグレイモンXは背中の二つのバーニアを噴かせる事で攻撃をかわし、そのまま上空に飛び上がって行く。

その動きにカオスデュークモンもすぐさま背中のマントをはためかせながらブラックウォーグレイモンXの後を追って遥か上空に飛び上がり、上空で激しい剣戟を再開する。

ーーーーーキィン！！ガキィン！！ガキィッ！！ガキィィィィィーーーン！！

「オオォォォォォォーーーーーー！！！！」

「ムン！！」

ーーードゴオオオン！！

「ガハッ！！」

ーーーバキィィィィーーン！！

繰り広げられた剣戟の合間の中でバンチョーレオモンでさえも気づかないであろうブラックウォーグレイモンXの小さ過ぎる隙を逃さずに、カオスデュークモンはバルムンクを突き出し、ブラックウォーグレイモンXに直撃した。

それによってブラックウォーグレイモンXに進化した事によって強化されていた筈のクロンデジゾイド製の鎧の一部が砕け、空に舞い上がった。

その事実にブラックウォーグレイモンXは信じられないと言う印象を抱きながらも、砕けた鎧の箇所を右手で押さえながら、険しい視線をカオスデュークモンに向け、カオスデュークモンは僅かに笑みを浮かべながら声を出す。

「気がついたようだな。私がお前の動きを完全に見切っている事に」

「チィッ！！・・・・ヴィヴィオの前で訓練などすべきではなかったか・・・・貴様、融合した事で俺の動きを学習していたな？」

「正解だ。だが、流石に今の進化した姿であるお前の動きまでは完全に把握出来ていなかった。その為に最初はお前の動きを学習する為に手加減していた・・・だが、もはや全てを見切っていた今、私に敗北はない。その上、今のお前には何時ものお前に在る筈の決定的なモノが無い。それでも戦うのか？」

「無論だ。俺に逃げるなど言う文字があると思うか？」

「いや・・・・・行くぞ！！ブラックウォーグレイモンX！！」

「来い！カオスデュークモン！！」

ドゴオオオ

衝撃波によって崩れた建物の多数の瓦礫が存在し、道路上にも無数の罅が広がっている場所。
本来ならば危険と分かっている場所に近づこうとする者はいないだろう。だが、その考えを否定するように八、九歳ぐらいの碧銀の髪を左側だけにリボンをつけてツインーテールにした紺色の右目と青色の左目の虹彩異色の少女が、聖王教会本部に向かって走っていた。
その顔は悲痛さと悲しさに満ち、まるで信じていたものに全てに否定されたように悲しみに満ちた涙を流しながら走り続けていた。
（何故です！？何故聖王家の血を引く者がこんな行いを！？最後の聖王は、オリヴィエはこんな事を望んでいなかった！！止めなければいけない！！こんな悲劇を作り上げた聖王を！オリヴィエの優しい想いを知っている私が！！）
そう少女は内心で宣言しながら、瓦礫によって足が傷つきながらも聖王教会本部に向かって走って行く。
その先に存在している今のベルカの血を引く者達が、聖王の血を引く少女に行った大罪を知る事になるとも知らずに。
そしてデジモンとの戦争が始まった真実を全て知る事になるとも知らずに、少女は前へと走り続けるのだった。

究極の領域！中編

ブラックウォーグレイモンXとカオスデュークモンが上空で激突を繰り返している時。

上空から降り注ぎ続ける衝撃波からはやて、キュウビモン、ヴィータ、リンディ、シャッハ、ヴェロッサ、フリード、そしてギガスモンのスピリットも右手に持っているバンチョーレオモンと気絶しているカリムを護るようにオウリュウモンが全員の上に覆い被さっていた。

断続的に放たれ続ける衝撃波によって既に聖王教会本部は跡形も無いほどに変わり果て、もはや結界内部で生きているのは、はやて達だけの状況になっていた。

凄まじい究極体同士の激突に、究極体同士の戦いを始めて見るヴェロッサとシャッハは顔を青ざめ、一度でも究極体と戦った事が在るはやて、オウリュウモン、ヴィータは険しい顔を上空に向け続け、リンディとバンチョーレオモンは自分達の目の映るブラックウォーグレイモンXとカオスデュークモンの戦いに不味いと言う印象を持っていた。

「・・・・これは不味いぞ。このままではブラックウォーグレイモンXは敗北する」

「えぇ、今のブラックではカオスデュークモンには勝てないわ」

『えっ？』

バンチョーレオモンとリンディの断言にはやて達は疑問の声を上げるが、唯一オウリュウモンだけは同意を示すように頷き、上空でカオスデュークモンと傷つきながらも戦い続けているブラックウォ

ーグレイモンXを見つめながら声を出す。

「同感だぜ・・・・如何言う訳か俺には分からねぇが・・・・今のブラックウォーグレイモンXには、前にヴォルテールと戦った時の迫力が感じられねぇ」

（うん、私もそう思う・・・全然殺気が感じられない。前のブラックウォーグレイモンXさんと今のブラックウォーグレイモンXさんは全然違う）

オウリュウモンとその身に融合しているキャロは気がついていた。今のブラックウォーグレイモンXには、数年前にヴォルテールとの激闘の時に感じた迫力や歓喜、そして殺気が無い事に。確かに今のブラックウォーグレイモンXでも並みの究極体は確実に倒せるだろう。

だが、恐怖が全く感じられないのだ。数年前は距離が離れていても感じる事が出来た恐怖が今のブラックウォーグレイモンXには全く感じない。

その理由が分からないオウリュウモンとキャロは自分達が知るブラックウォーグレイモンXとの違いに疑問を覚えるが、リンディとバンチョーレオモンだけは何故今のブラックウォーグレイモンXに殺意が無いのか分かっていた。

元々ブラックウォーグレイモンXはヴィヴィオにだけは手を上げる事が出来なかった。

その理由は本人であるブラックウォーグレイモンXにも分からなかったのだが、カオスデュークモンの身の内にはヴィヴィオが存在している。その為に無意識の内にブラックウォーグレイモンXは殺意を発揮する事が出来ず、結果カオスデュークモンには本気が出せなくなっていた。

更にカオスデュークモンはブラックウォーグレイモンXの動きを

完全に見切っている。
本気が発揮出来ない上に動きが完全に見切られているとなれば、幾らブラックウォーグレイモンXでも敗北するだろう。その上相手は聖王の力を得たメギドラモンを越える力を持ったカオスデュークモン。
このままいけばブラックウォーグレイモンXの敗北は間違いないと、リンディとバンチョーレオモンは確信してしまう。

（せめて、本気で戦えれば勝てなくてもヴィヴィオが目覚めるかもしれない・・・・だけど、あの子は完全に心を閉ざしている。外からの声が届く筈は無いわ・・・一体如何したら！？）

リンディはそう内心で悲痛な叫びを上げるが、自身は既に戦う事は出来ない状態。
バンチョーレオモンは戦えるが空を飛ぶ事が出来ず、オウリュウモンは、はやて達を護らなければいけない。如何考えも状況が悪すぎる。
このままいけばブラックウォーグレイモンXは敗北し、その後にカオスデュークモンは新たに張られた結界を撃ち破り、結界の外に居るベルカ自治領の人々を無差別に殺すだろう。
そうなれば本当に全てが終わってしまうとリンディは判断するが、状況を好転させる事が出来る策が思い浮かばず、悔しげに顔を歪めながらバンチョーレオモン達と共に上空で戦い続けるブラックウォーグレイモンXとカオスデュークモンを見つめるのだった。

「ドラモンキラーーー！！」

「無駄だ」

ーーーシュン！

ブラックウォーグレイモンXが渾身の力を込めて突き出したドラモンキラーをカオスデュークモンは最小限の動きで簡単に避けた。

それを見たブラックウォーグレイモンXは瞬時にカオスデュークモンが避けた方向に右足を振り抜くが、その動きも読んでいたのかカオスデュークモンはブラックウォーグレイモンXの右足を左手に装備していたゴーゴンで防ぐ。

ーーーガァァァァァーーン！！

「フッ、やはり無…」

「駄かどうかはこれを食らってから決めろ！！ハデスフォーーース！！！」

「何ッ！？」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

捨て身の攻撃を放ったブラックウォーグレイモンXにカオスデュークモンは声を上げるが、構わずにブラックウォーグレイモンXは瞬時に両腕の間に作り上げていたハデスフォースを至近距離で大爆発させた。流石にその攻撃までは予測していなかったのか、カオスデュークモンは爆発の衝撃によって僅かに吹き飛ばされてしまう。

しかし、すぐに体勢を空中で整え、ハデスフォースの爆発によって生じた煙の中に居るであろうブラックウォーグレイモンXの姿を探そうとするが、その前に身に纏っていた鎧がボロボロになりながらもブラックウォーグレイモンXがカオスデュークモンの目の前に

現れ、カオスデュークモンの鎧に僅かに広がっている箇所に両腕を押し付ける。

ーーービュン！！トン！！

「もう一度食らえ！！暗黒のガイアフォーース！！！」

ーーードゴオオオ

ーーーガッシャン！！ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

ブラックウォーグレイモンXが投げたハデスフォースは、直前に体勢を整えたカオスデュークモンが構えた左手のゴーゴンから放たれた暗黒波動ージュデッカプリズンによって一瞬の内に腐食、消滅した。

それを目撃したブラックウォーグレイモンXはハデスフォースを消滅させても威力が衰えていないジュデッカプリズンを避けるために、即座に背中のバーニアを噴かせて、慌ててジュデッカプリズンの影響範囲外にまで逃れた。

しかし、その動きも見切られていたのか、衝撃から立ち直ったカオスデュークモンがブラックウォーグレイモンXの前に現れる。

ーーービュン！！

「クッ！！」

「逃さんぞ！デモンズディザスターーーー！！！」

ーーードドドド

「ブラック！！」

地上に落下し、そのまま聖王教会本の敷地を覆っている結界の壁に激突したブラックウォーグレイモンXを目撃したリンディは悲痛な叫びを上げた。

その声が届いたのか、ブラックウォーグレイモンXは全身を襲う激痛に耐えながら、即座に立ち上がろうとする。だが、その前にカオスデュークモンが瞬時に現れ、ブラックウォーグレイモンXに止め刺す為にバルムンクをブラックウォーグレイモンXの頭部に突き出す。

「終わりだ！！」

「チィッ！！まだ、終わらん！！」

ーーーガキィィィィィーーン！！

カオスデュークモンが突き出して来たバルムンクに、ブラックウォーグレイモンXは瞬時に自身の右腕のドラモンキラーをぶつけ、バルムンクの軌道を僅かに逸らした。

その結果、バルムンクはブラックウォーグレイモンXの背後に存在していた結界に直撃し、結界に亀裂が走るが、ブラックウォーグレイモンXは構わずにカオスデュークモンの胴体に向かって左腕のドラモンキラーの爪先を射出する。

「ドラモンキラーーーー！！！！！！」

ーーーバッシュン！バッシュン！！

「クッ！！その程度の攻撃は効かんぞ！！」

ーーーガアァン！！ガアァァァァン！！

至近距離から射出されたドラモンキラーの爪先に対してカオスデュークモンは即座に左手のゴーゴンを使ってドラモンキラーの爪先を全て弾き飛ばすが、その隙にブラックウォーグレイモンXは起き上がり、カオスデュークモンから距離を取る。

ーーービュン！！

（チィ！！苛立つ！！何故俺は本気を出せん！！本気を出せさえすれば、何とかなると言うのに！！おのれ！！こんな時にまで邪魔をするのか！！俺の訳が分からん本能が！！・・・・まて本能だと？・・・・ククククククッ！！見つけたぞ！俺が本気を出せる方法が！！ルイン！！今から告げる策をよく聞け！！）

（えっ！は、はい！分かりました！）

突然のブラックウォーグレイモンXの言葉にユニゾンしているルインは驚きながら答えるが、ブラックウォーグレイモンXは構わずに自身が考えた策を告げ、ルインはユニゾンしながら顔を青ざめさせた。

（なっ！？無茶です！！幾らなんでもそれは無茶ですよブラック様！！失敗したらブラック様は本当に死んでしまいますよ！！）

（これ以外に俺の中にある訳が分からん本能を抑える方法は無い。それに旨く行けば、必ず俺に変化が起きる。どうせこのまま戦っても時間稼ぎにかならん。ならば、この方法に賭けて見るまでだ）

（・・・・・分かりました・・・・ですが、絶対に！絶対に！死んだら嫌ですよ！！ブラック様がいない人生なんて私には考えられませんし、ヴィヴィオちゃんを悲しませたら怒りますからね！！）

（フン、言われるまでも無い・・・行くぞ！！）

（はい！！）

ブラックウォーグレイモンXとルインはそう同意し合うと、即座に地面に両足をつけて、自身を追って来ていたカオスデュークモンに向かって構える。

その姿にカオスデュークモンは何かの不穏を感じたのか、自身のゆっくりと地面に着地し、右腕のバルムンクをブラックウォーグレイモンXに向かって構える。

ーーースチャッ！

「・・・・逃げるのは止めたのかブラック？」

「フン、元々時間を稼ぐなど俺には合わん・・・今から放つ一撃で貴様を倒すまでだ」

「ほう・・・・（何を企んでいる？幾ら動きが見切れるとは言え、何の動きもしなければ読めん・・・ブラックめ。その為に動きを止めたか）」

カオスデュークモンはブラックウォーグレイモンXが何かを企んでいるのかだけは分かった。

だが、その企みまでは分からなかった。幾ら動きを完全に見切れ

るとは言え、ブラックォーグレイモンXの考えまでは読み取る事が出来ない。あくまでカオスデュークモンがブラックウォーグレイモンXの動きを見切れたのは、長い間ヴィヴィオがブラックウォーグレイモンXの戦いぶりを見ていたおかげで、次に行う動きが予測出来ていたからに過ぎない。

しかし、今のブラックウォーグレイモンXは構えを取っているだけで、次に如何言う動きをするのかまでは流石にカオスデュークモンでも完全に予測する事は出来なかった。

（確率で言えば、二発受けた事によって罅が広がっている鎧の箇所に攻撃して来るだろうが・・・・あのブラックがその程度の策を考える筈は無い・・・・一体何を企んでいる？）

そうカオスデュークモンは考えながらブラックウォーグレイモンXの策を読み取ろうとするが、幾ら七大魔王に匹敵する力を持ったカオスデュークモンでも、戦いの経験はブラックウォーグレイモンXの方が圧倒的に上だった為に、策を読み取る事は出来なかった。

そして互いに闘気を十全にその身から迸らせ、互いが放つ闘気によって大気が重くなるのを離れた所から戦いを見ていたリンディ達が感じた瞬間、ブラックウォーグレイモンXは背中のバーニアを噴かせて超高速でカオスデュークモンに迫る。

ーーーガシャン！！ドゴオオオ

ーーードオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

真っ直ぐ突進して来るブラックウォーグレイモンXに対して、カオスデュークモンは即座にゴーゴンを構え、ジュデッカプリズンをブラックウォーグレイモンXに向けて放った。

それに対してブラックウォーグレイモンXは自身の右腕のドラモンキラーの爪先に黒いエネルギー球を作り上げ、迷う事無く投げつけ、爆発の衝撃によってジュデッカプリズンから逃れる。

「ムン！！」

ーーードオオオン！！

「その動きは予測していたぞ！！」

ーーービュン！！

ブラックウォーグレイモンXがジュデッカプリズンから逃れると同時に、カオスデュークモンはジュデッカプリズンを消失させ、そのまま空を飛んでいるブラックウォーグレイモンXに向かって飛び掛かった。

しかし、ブラックウォーグレイモンXもその動きは予測していたのか、瞬時に自身の両腕の間に黒いエネルギー球を作り上げ、カオスデュークモンに向かって投げつける。

「ハデスフォーース！！！」

「その動きも分かっていた！！ジュデッカプリズンッ！！」

ーーードオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

ブラックウォーグレイモンXがハデスフォースを放つと同時に、再びカオスデュークモンもゴーゴンからジュデッカプリズンを撃ち出した。
　再びハデスフォースとジュデッカプリズンは激突しようとするが、その直前にハデスフォースを放ったブラックウォーグレイモンXがハデスフォースとジュデッカプリズンが激突し合う前に、自ら放ったハデスフォースに向かって残された右腕のドラモンキラーの爪先を射出する。

「ドラモンキラーーーー！！」

ーーーバシュン！！バッシュン！！

ドゴオオオ

ーーードドドド

「さて、これで漸くベルカ自治領に迎える・・・・待っていろ。今すぐに貴様ら全員をこの世から消してくれる！！」

「ッ！！いかん！！リンディ！持っていろ！」

カオスデュークモンが今度こそベルカ自治領に向かおうとしている事に気がついたバンチョーレオモンは、即座に手に持っていたギガスモンのスピリットをリンディに渡し、そのままカオスデュークモンに向かって全速力で駆け出す。

その様子を横目で見ていたカオスデュークモンは、これ以上邪魔をされない為に、バンチョーレオモンが手を出せない空中に飛び上がろうとするが、その直前に結界の一部に亀裂が走っている所から女の子の声が響く。

「聖王！！！」

「ムッ！！」

『ッ！！』

聞こえて来た女の子の声にカオスデュークモンは声を上げ、バンチョーレオモン達も突然に響いた声の聞こえた所を見てみると、八歳ぐらいの碧銀の髪を左側だけにリボンをつけてツインーテールにした紺色の右目と青色の左目の虹彩異色の少女が悲痛な顔をしながら立っていた。

その少女を目撃したカオスデュークモンは、ゆっくりと少女の方に体を向け質問する。

「今私を聖王と呼んだのは貴様か？」

「・・・・・そうです・・・・私の名前はアインハルト・ストラトス・・・・貴方と同じようにベルカの王族ー『覇王・イングヴァルト』の子孫です」

「・・・・ハハハハハハハハッ！！そうか！！嬉しいぞ！！こんなにも早くベルカの中でも重要な血を引く人間を殺せるとはな！！」

「・・・・ぜです」

「ん？」

「何故このような暴挙を行うのですか！？何故罪の無い人々を聖王家の血を引く貴方が殺すのです！！ベルカ自治領に住む人々は貴方の先祖！オリヴィエが命を掛けて護った民達の子孫です！！それなのに何故・・・何故貴方は騎士達を殺し、罪の無い人々を殺そうとしているのですか！？」

少女ーアインハルト・ストラトスはそう大粒の涙を流しながら悲痛な叫びを上げた。

アインハルトには覇王イングヴァルトの血だけではなく、とある事情で記憶も僅かに持っているのだ。その記憶の中には大昔のベルカの民達を護る為に死んだ最後の聖王ーオリヴィエ・ゼーゲブレヒトの姿も存在している。だからこそ、アインハルトは悲しかった。オリヴィエと同じ聖王家の人間が、罪の無い人々を滅ぼうとし、聖王教会の騎士達を無残に惨殺したカオスデュークモンの姿は、アインハルトの知るオリヴィエとは掛け離れている。

何故此処までの悲劇を起こせるのかとアインハルトは再度質問しようとするが、その前にカオスデュークモンが近くに残っていた聖王教会の建物の残骸に向かってバルムンクから衝撃波を放つ。

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ッ！！」

「・・・・・・騎士達だと・・・・フフフフッ、笑わせてくれる。この地に、いや今のベルカの騎士達全てに既に騎士など名乗る資格は無い！！」

「な、何故ですか！？聖王教会の騎士達は、嘗てのベルカの騎士達の想いを受け継いだ騎士達です！だからこそ、残された騎士達は貴方の先祖を…」

「無残に私達の友を殺した聖王教会の騎士達の何処が受け継いでいると言うのだ！！！」

「・・・・・・えっ？」

カオスデュークモンの告げた事実に、アインハルトは思わず疑問の声を上げた。

“聖王教会の騎士達が無残に聖王の友を殺した”。

カオスデュークモンが告げた言葉を要約すればそうなる。

その言葉の意味が分からなかったアインハルトが呆然とカオスデュークモンを見つめると、カオスデュークモンは自身の胸にゴーゴンを消失させた左手を押し当てる。

「・・・私は確かに聖王の力を持っている。もっとも正確に言えば私と融合している、まだお前よりも幼い子供ーヴィヴィオと言う名の少女こそが本当の聖王の血を引く者だ・・・・・だが、ヴィヴィオは自分が聖王の血を引く者とは知らなかった・・・・・教える必

要も無かったからな。もはやベルカの王族など今の世の中には必要の無い存在・・・・お前とて自身の血筋の事など誰にも話してはいまい」

「そ、それは・・・・・」

アインハルトはカオスデュークモンの言葉に答える事が出来なかった。

そう今の時代にもはや王族など関係ない。例え騎士を名乗っていても、今のベルカの騎士達が忠誠を誓っているのは聖王などではなく、聖王教会と言う組織でしかない。

もはや今の時代にベルカの王族は本当ならば必要ないのだ。だからこそ、アインハルトも自身がイングヴァルトの直系の子孫であり、途切れ途切れではあるが記憶を持っている事は誰かに話した事はなかった。

だが、愚かにもそう思わなかった連中がいた。そしてその連中の行いこそが、カオスデュークモンにベルカの全てに復讐すると言う決意を固めさせたのだ。

「貴様は今の騎士達の本当の姿を知るまい・・・・奴らには、いや、もはや今のベルカの騎士達には、騎士など名乗る資格も存在していないのだ・・・・何故ならば奴らは・・・奴らは！私とそして私と融合しているヴィヴィオの目の前で友だったデジモン達を無残に虐殺したのだからな！！！」

「ッ！！・・・・デ、デジモンが友だった？・・・・デジモンは確か戦争を始めた生物なのでは？」

「フン、そう言えば管理世界の連中は知らなかったな。残念だが、その情報は管理局が流した嘘の情報だ。本当に戦争を始めたのはデ

ジモンではない・・・管理局の連中が子供のデジモン達を虐殺した事こそが全ての始まりだ！！」

「ッ！！」

アインハルトの体に衝撃が走った。

本当にカオスデュークモンの言葉が正しいとなれば、今各管理世界に迫っている危機の原因は全て人間側にあるという事に他ならない。その上本来ならば聖王に従うべき聖王教会の騎士達が、聖王の友だったデジモン達を虐殺した。

それが事実だとすれば、アインハルトが信じていた全てが崩壊する事に等しい。例え時代が変わってもアインハルトはベルカの騎士達は民を護る騎士だと思っていた。だが、それは残念ながら違った。今のベルカの騎士達は伝えられているベルカと言う国に妄信し、ヴィヴィオのせいに全てして愚かな行為を行ってしまったのだ。

「話は戻すが、聖王教会の騎士達は大量の質量兵器を持って、私達がいた管理外世界に攻め込んで来た。其処に住んでいた管理世界と関係ない人々を虐殺しようとしてな・・・・そして奴らは涙を流しながら懇願したヴィヴィオの叫びなど構わずに友だったデジモン達を虐殺したのだ・・・・その時に奴らが何と言っていたと思う。『聖王陛下の為。ベルカ再興の為』などと下らん言葉を理由にして自分達の行いを正当化していた・・・・ふざけるな！！！ヴィヴィオはそんな事は望んではいなかった！望んでいたのは友達との平穏な日々だ！！その想いさえも奴らは踏み躙り！友だったモチモン達を虐殺した！！だからこそ、私はベルカを滅ぼす！奴らが崇めていたモノを全てを踏み躙り、この手でベルカの全てを滅ぼす！！」

ーーートサッ！！

「・・・・そんな・・・・・・ベルカの騎士達が・・・・・・過去の悲劇を繰り返した・・・・そ、そんな事が・・・」

カオスデュークモンが告げた今のベルカの騎士達が行った大罪に、アインハルトは絶望し切った顔をして膝を地面についた。

アインハルトにはイングヴァルトから受け継いだ一つの悲願が存在していた。

“守るべきものを守れない悲しみを繰り返さない強さ”

その強さを得たと言う事を証明する為に、アインハルトはイングヴァルトとの作り上げた『覇王流(カイザーアーツ)』を磨き上げていた。だからこそ、大切なものを守れない悲しみをアインハルトは知っている。

その悲しみをアインハルトは知らないが、ヴィヴィオは目の前で何度も味わった。その為にヴィヴィオは全てに絶望して、ベルカの全てを憎んでしまったのだ。

その結果メギドラモンは現れ、カオスデュークモンにまで進化してしまった。ただベルカを滅ぼすと言う意志を果たす為に。

その考えを現すように、カオスデュークモンは左手に再びゴーゴンを出現させ、絶望に打ちひしがれているアインハルトに向かって構える。

「話は終わりだ。貴様は此処で絶望しながら消えるがいい！ジュデッカプリズンッ！！」

ーーードオオオ

カオスデュークモンが叫ぶと共にゴーゴンからジュデッカプリズンが放たれ、アインハルトは慌てて避けようとするが、絶望していた為か思うように体が動かず、膝をついた場所から離れられなかった。

それに構わずにジュデッカプリズンは高速でアインハルトに迫り、アインハルトが死を確信した瞬間、アインハルトの目の前にバンチョーレオモンが現れ、両腕を広げながらアインハルトを護る。

ーーードゴオオオ

に立ち続けるバンチョーレオモンが存在していた。
　その変わり果てたバンチョーレオモンの姿に、リンディ達は思わず口を手で押さえてしまうが、カオスデュークモンだけは目を細めながらバンチョーレオモンを見つめる。

「何故だ？何故その小娘を護ったのだバンチョーレオモン？その小娘は貴様とは何の関係も無い他人だと言うのに？」

「・・・・・・・・フッ・・・・・俺は約束をした・・・・・・・決して・・・・・ヴィヴィオや・・・・お前には一般人は殺させんとな・・・・後を頼むぞ・・・・・ブラック・・・・ウォー・・・・グレイ・・モ・・・・」

ーーードサッ！！

「ア、アァッ！！」

　自身の目の前で倒れ伏したバンチョーレオモンに、アインハルトは慌てて手を伸ばすと、バンチョーレオモンの体が光り輝き、光が消えた後には、金色の体毛を持って首に首飾りを付けたデジモンーレオルモンが存在していた。

レオルモン、世代／成長期、属性／ワクチン種、種族／聖獣型、必殺技／クリティカルバイト、レオクロー
近年、存在が確認された幻の聖獣型デジモン。生存個体が非常に少なく、体毛は黄金色で覆われた美しい姿をしている。頭の毛は警戒状態になると静電気を帯びて、威嚇音を発するといわれている。縄張り意識がとても強く、たとえ同種類のデジモンであっても侵入者には容赦なく攻撃する。必殺技は、成功率は低いが成熟期デジモンでさえも仕留めてしまう威力を持ったキバで敵の急所を狙う『クリ

ティカルバイト』に、鋭い爪で敵を切り裂く『レオクロー』だ。バンチョーレオモンが成長期にまで退化してしまった姿。

「バンチョーレオモン・・・・・残念だが、私は止まらん・・・・それに貴様が後を託したブラックも、もはや戦闘不能。残念だったな」

涙を流しているアインハルトの腕に抱き締められているレオルモンを見つめながらカオスデュークモンな言葉を呟き、今度こそアインハルトを殺そうとバルムンクに暗黒のエネルギーを集め始める。

それに気がついたリンディ、はやて、ヴィータ、キュウビモン、オウリュウモンは、これ以上はさせないと言うようにカオスデュークモンに向かってそれぞれ攻撃を放とうとするが、無情にも暗黒のエネルギーはバルムンクに集中し、カオスデュークモンはカオスショットを一放てなかった。

ーーーゾクッ！！

「ッ！！！」

ーーービュン！！ドン！！

『えっ！？』

カオスデュークモンがカオスショットを放つ直前に、突然に凄まじいほどの殺意が放たれ、カオスデュークモンは慌ててその場から離れた。

その突然の動きにリンディ達は思わず声を上げるが、カオスデュークモンは構わずに自身に向かって殺意を放った、地面から起き上がり始めたブラックウォーグレイモンXを見つめ、リンディ達もブ

ラックウォーグレイモンXに顔を向けた瞬間。

「ガッ！・・・・ガッガッ！ガアアアアアアアアアアアアアーーーーーーーーーー！！！！！」

ーーードゴオオオ

聖王の鎧を撃ち破って伝わって来たブラックウォーグレイモンXの拳に、カオスデュークモンは声を上げよとするが、その前にブラックウォーグレイモンXは胴体に渾身の力を込めた蹴りを叩き込み、カオスデュークモンは吹き飛んで行った。
しかし、ブラックウォーグレイモンXは即座にカオスデュークモンは追わずに、ゆっくりとカオスデュークモンに向かって足を進める。

ーーードオン！！

「グガアァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーー！！！！！」

ブラックウォーグレイモンXは理性を全く感じられない咆哮を辺りに響かせながら、カオスデュークモンに凄まじい殺意だけをぶつけるのだった。

深い闇の中。
上下左右ありとあらゆる空間が漆黒に染まった空間の中心に、二つの泥だらけになった花冠を大切そうに抱えたヴィヴィオが目を瞑っていた。
その空間には断続的に衝撃が走っているかのように揺らめき続けるが、ヴィヴィオは何も感じていないのか、ただ目を閉じ続ける。
もはやヴィヴィオは何も見たくも、聞きたくも無かった。友であったモチモン達を護れず、無残に死なせしまった。しかも地球に聖王教会がやって来たのは、自分を手に入れる為。それが意味する事は地球を危機に陥れ、モチモン達が死んでしまう原因を作ったのは

自分にあったと言う事に他ならない。だからこそ、ヴィヴィオはもうこの場所から出たくはなかった。
護れない現実にも、ただ悲劇しかない世界も見たくはなかった。
そしてヴィヴィオの意思がより深い眠りの淵に入り込もうとした瞬間、ヴィヴィオが大切に抱えていた花冠が光り輝く。

ーーーピカアァァァァァーーーン！！

（・・・・ヴィヴィオ・・・・ヴィヴィオ・・・・起きて・・・・起きて）

（・・・・・・・・・ん？）

聞こえて来た聞き覚えの在る懐かしい声に、ヴィヴィオは思わず目をゆっくりと開けてみると、ヴィヴィオに向かって優しげな視線を向けている死んだ筈のモチモン、タネモン、ニャロモンの姿が存在していたのだった。

究極の領域！後編（前書き）

アインハルト・ストラトスについて。

リリカルなのは第四期ＶｉＶｉｄのメインキャラの一人。
ヴィヴィオと同様にベルカの王族の血を引き、覇王と呼ばれていた
クラウス・イングヴァルトの直系子孫であり純血統。
容姿は九歳ぐらいの碧銀の髪を左側だけにリボンをつけてツインー
テールにした紺色の右目と青色の左目の虹彩異色の少女。
現代ではもう晴らすことのできない覇王の無念の想いを抱えて苦し
んでいる。
自分の中では未だに終っていない古代ベルカ戦争のこと、自分自身
の強さを知ること、ベルカのどの王よりも自分が強くあることを証
明する為に努力していたが、今作では現代のベルカが行った非道に
悩み苦しむ事になる。

真正古流ベルカの格闘武術（カイザーアーツ）覇王流の後継者であり、イングヴァルト
と記憶を途切れ途切れながら受け継いでいる。
ＶｉＶｉｄ本編ではヴィヴィオと友達になる事が出来たが、本作で
はどうなるかは不明。

究極の領域！後編

ヴィヴィオは目の前の光景が信じられなかった。
目の前に居るのは死んだ筈のモチモン、タネモン、ニャロモン。
確かに自身の目の前で聖王教会の騎士達にモチモン、タネモン、ニャロモンは惨殺された筈。
あの瞬間の光景が夢だった筈は無い。では、目の前にいるモチモン達は何なのかとヴィヴィオは困惑した瞳をモチモン達に向けていると、モチモン達はそれぞれ説明し出す。

（ゴメンねヴィヴィオ。僕らは本当の僕らじゃないんだ）

（僕達は本当の僕達が花冠に込めた想い）

（それがこの空間のおかげで具現化出来たんだ・・・・だから、本当の僕達はもう何処にもいない）

（・・・・そうなんだ。やっぱり本当のモチちゃん達は・・・・ウァッ・・グスッ！ヒック・・・ゴメンね。ゴメンね。ヴィヴィオが居たからモチちゃん達は・・・・ゴメンなさい。ゴメンなさい）

ヴィヴィオはそう大粒の涙を流しながら、目の前にいるモチモン達に謝罪を繰り返した。
自身がいたせいで本当のモチモン達が死んでしまったと思っているヴィヴィオには、ただ目の前にいるモチモン達に謝罪の言葉を繰り返すが、その声は突如としてヴィヴィオの手を握るモチモン達によって止まる。

ーーーキュッ！

（泣かないでヴィヴィオ。僕らはヴィヴィオに泣いて欲しくないんだ）

（うん！僕らはヴィヴィオの笑顔が大好きなんだよ！だからお願い！泣かないでよ！！）

（グスッ！でも、でも、ヴィヴィオがいたからあの人達はやって来た・・・・ヒクッ！だから、モチちゃん達は・・・・ゴメンね）

（違うよ！！ヴィヴィオは悪くない！！）

（うん！僕達は見ていたよ！ヴィヴィオは本当の僕達の想いが詰まった花冠を踏み潰されたから怒っただけだよ！ヴィヴィオは悪くないんだよ！！）

（そうだよ！！だからお願い！！泣かないで！お願いだよ！！）

モチモン、タネモン、ニャロモンはそう涙を流しているヴィヴィオに向かって叫んだ。

モチモン達はヴィヴィオを憎んではいない。本当のモチモン達も最後までヴィヴィオの事を思って死んでいった。だからこそ、自分達の死を自分のせいだと思い込んでいるヴィヴィオの姿は、今のモチモン達にも悲しい事だった。

（ヴィヴィオ！泣かないで！！確かにあの人達が来たのはヴィヴィオがいたからも知れない。だけど、ヴィヴィオとあの人達は違う。ヴィヴィオは本当に僕らの事を思っていてくれた。本当の僕達が死んだ時にも心の底から悲しんでくれた！だけど、あの人達は命を何とも思っていなかったよ！）

（そうだよ！あの人間達は自分達の勝手な考えでヴィヴィオのせいにしていただけなんだ！だから、ヴィヴィオは悪くないよ！）

（でも、モチちゃん達を護れなかった。今度は間に合ったのに、ギルちゃんも一緒に戦ってくれたのに、モチちゃん達を助けられなかった。ただ目の前でモチちゃん達が死んじゃう瞬間を見ていただけ・・・レッサーちゃんやキャロちゃん、それにブイちゃんの時も同じだった・・・・ヒック、もう嫌なんだよ。皆を友達になった子達が護れないなんて・・・・だから、もう此処にずっと…）

（ギルモンや他の皆がヴィヴィオの為にで頑張っているのに逃げるの！？）

（ッ！！ギルちゃん！！）

タネモンの言葉にヴィヴィオは目を見開き、自身と融合しているギルモンの事を思い浮かべると、突如として全てが闇に染まっていた空間に僅かに光が発生し、光の先には暴走したように赤く目を光らせているブラックウォーグレイモンXとカオスデュークモンが戦い続けている姿が存在していた。

「ガアアアアアアアアアアアーーーーーー！！！！！」

ーーードゴオォン！！

「グハッ！！クゥッ！！おのれ！！」

ーーーブン！！

自身に向かって力任せに拳を殴りつけて来たブラックウォーグレイモンXに、カオスデュークモンは苦痛を堪えながらバルムンクを振り抜いた。

しかし、その一撃は突如としてブラックウォーグレイモンXの前に出現した強力な障壁によって、一瞬だけを止まってしまう。

ーーーバリィィィーーン！！

ーーービュン！！

「クッ！！ルインか！！」

障壁が砕けている隙にバルムンクから逃れる為に、背後に僅かに下がったブラックウォーグレイモンXの姿に、カオスデュークモンは障壁を張った主の名前を叫びながら完全に獣と化しているブラックウォーグレイモンXを見つめる。

「ガッ！！グルルルルルルッ！！」

「・・・なるほど、私に動きを見切られない為に完全に理性を消して、獣、いや暴竜と化したか・・・其処までして私を止めたいとはな。だが！止まる訳にはいかん！ハアァァァァァァーーーーー！！！！」

「ガアァァァァァァァーーーーーー！！！！」

ーーードゴオオオ

カオスデュークモンと理性を完全に失ったブラックウォーグレイモンXは互いに咆哮を上げながら突進し、互いに相手の隙を狙い続ける激戦を繰り広げ始めた。

その様子をアインハルトとレオルモンをオウリュウモンの下に避難させたはやて、ヴィータ、キュウビモンは完全に変わり果てたブラックウォーグレイモンXの姿に凄まじい恐怖に襲われていた。

今のブラックウォーグレイモンXには完全に理性が宿っていない。ただ目の前に映る全てを滅ぼすと言う意志しかその身には存在していない。

それこそが嘗てアルケニモンとマミーモンが望んだブラックウォーグレイモンXの姿なのだが、その事を知らないはやて達は、ただ純粋にカオスデュークモンに暴力だけを振るい続けるブラックウォーグレイモンXの姿に恐怖を感じ続ける。

しかし、リンディだけは辛そうにブラックウォーグレイモンXの姿を見つめ、悲しげに言葉を呟く。

「・・・・其処までして・・・・ヴィヴィオを救いたいのね」

『えっ？』

「・・・・今のブラックの姿は、ブラックが最も嫌っている自身の姿なのよ。ブラックは信念の無い戦いが赦せない。それなのに今のブラックは信念も何も無く、ただ自分の本能に任せて戦い続けている・・・・それはブラックにとっては絶対に耐え難い事なのよ・・・・・・だけど、今ブラックはその信念さえも捻じ曲げてカオスデュークモンと戦っている・・・・それだけブラックもヴィヴィオを助けたいと言う事よ」

「・・・・随分と珍しいもんが見れたわな・・・・まぁ、それも長

くは持たないと思うんですけど」

「えぇ、長くは持たないわ。ただ本能だけで戦い続ければ、当然攻撃も単調になるし、防御も疎かにして隙が大きく出来るわ。今はルインさんが全力で防御し続けているから持っているけど、それも長くは持たない・・・・それまでにヴィヴィオが目覚めてくれればこの状況を変えられるのに・・・一体如何したら！？」

そうリンディは悲鳴のような声を上げるが、カオスデュークモンとブラックウォーグレイモンXは構わずに戦い続け、ブラックウォーグレイモンXは渾身の力を込めた右腕を振り抜く。

「ガアァァァァァァァァーーーーー！！！」

「フッ、確かに自らの理性を封じて全ての力を本能のままに振るえば、私の聖王の鎧は撃ち砕ける。だが、その分攻撃は単調過ぎるぞ！！」

ーーービュン！！

カオスデュークモンは叫ぶと共に体を僅かに横に動かし、ブラックウォーグレイモンXの攻撃を避けた。

確かに今のブラックウォーグレイモンXは自身の持つ生存本能を最大限に発揮して、凄まじいまでの力を得ている。だが、その反面理性的な動きは行えず、ただ殴るか蹴るかの単調な動きしか行えていない。その上防御行動さえもルインに全て任せている。

ブラックウォーグレイモンXの理性がある時の動きを見切っていたカオスデュークモンからすれば、今の本能に任せたブラックウォーグレイモンXの動きを読み取る事など簡単だった。

「バンチョーレオモンの言葉も無意味だったな。今度こそ終わりだ！！デモンズ…」

「ガアァァァァァァァーーーー！！！」

ーーーガシッ！！

「何だと！？」

カオスデュークモンがバルムンクを振り抜く前にブラックウォーグレイモンXはカオスデュークモンの懐に飛び込み、バルムンクを左腕で押さえた。

その理性的としか言えないブラックウォーグレイモンXの動きに、カオスデュークモンは目を見開きながら自身の懐に居るブラックウォーグレイモンXを見つめるが、ブラックウォーグレイモンXは構わずに右腕をカオスデュークモンに向かって振り抜く。

「ガアァァァァァァァァッ！！」

「クッ！！」

ーーーガアアアアアアアン！！

ブラックウォーグレイモンXが振り抜いた右腕をカオスデュークモンは自身に直撃する直前に、左腕に装備しているゴーゴンで防御した。

それと共に押さえられているバルムンクを引き抜こうとするが、ブラックウォーグレイモンXは渾身の力を込めてバルムンクを押さえているのか、ピクリとも動かなかった。

「クッ！！何故だ！？何故暴走していて此処まで理性的な動きが…」

「ガアァァッ！！」

ーーードグゥオオン！！

「グハッ！！」

カオスデュークモンが疑問の声を上げている途中で、ブラックウォーグレイモンXは突如として右足を勢いよく振り抜き、カオスデュークモンの胴体を蹴り飛ばした。

その反動でカオスデュークモンは吹き飛ばされるが、すぐさま体勢を整えて地面に着地し、唸り声を上げながら構えているブラックウォーグレイモンXを睨む。

「グルルルルッ！！」

「・・・・そうか。例え本能だけで動いていても、今まで蓄積した経験が体が動かすのか。厄介な」

カオスデュークモンは漸くブラックウォーグレイモンXの真の狙いに気がついた。

確かに今のブラックウォーグレイモンXには理性が存在していない。だが、数え切れないほどの戦いを越えて得た経験はブラックの骨の髄にまで染み込んでいる。その経験は既にブラックウォーグレイモンXの本能とも言っていい領域にまで完全に融合しているのだ。

カオスデュークモンがブラックウォーグレイモンXの動きを高速学習で見切っていたように、今の本能だけで動いているブラックウォーグレイモンXもカオスデュークモンの動きを蓄積した経験から読み取って動いたのだ。

「（先ほどまでは完全に立場が逆になったか。だが、攻撃そのものは単調と言う事には変わらない。恐らくカウンターに対してだけは経験が反応するようだな・・・ならばカウンターが出来ない攻撃を放つまでだ！！）これを食らうがいい！！ジュデッカプリズンッ！！！」

ーーードゴオオオ

「ガアァァァァァァーーーーー！！！」

「フッ、やはり本能に任せての行動は失敗だったなブラック！！今度こそ終わりだ！！デモンズ…」

（ギルちゃん！！止めて！！）

「何ッ！？」

「ガアァァァァァァーーーーーー！！！」

ーーードグウォン！！

「カハッ！！」

突如として自身の胸の内から響いた声に動きが止まってしまったカオスデュークモンに、ブラックウォーグレイモンXは容赦なく右腕を振り抜き、それを食らったカオスデュークモンは苦痛の声を上げながら地面に激突した。

その様子を目撃したブラックウォーグレイモンXはそのままカオスデュークモンに追撃を行おうとするが、その直前にユニゾンしているルインが叫ぶ。

（駄目です！！ブラック様！！止まって下さい！！）

「ガアァァァァァァーーーーーーー！！！」

自身とユニゾンしているルインの声さえも聞こえていないのか、ブラックウォーグレイモンXは咆哮を上げながら地面に倒れ伏して

いるままのカオスデュークモンに向かって突進し続ける。
　その様子にルインは心の底から焦りを覚えた。予想はしていたがやはりブラックウォーグレイモンXの理性は完全に眠ってしまっている。このままでは確実に動けないカオスデュークモンに攻撃を加え続けるだろう。
　そうなればヴィヴィオとカオスデュークモンの命が危ないとルインは気がつき、如何すればブラックウォーグレイモンXの理性が戻るのかと考え、一つの方法に気がつく。

（これしかないです！！ユニゾン・アウト！！）

「ガァッ！！」

ーーーギュルルルルルルルルーーー！！！

　ユニゾンしているルインが叫ぶと同時にブラックウォーグレイモンXの体はデジコードに包まれ、ルインとブラックは二つに分かれる。
　それと同時にルインは突如として進化が解けた事に困惑しているブラックに向かって、複数のバインドを出現させて、ブラックを拘束する。

「フードバインド！！」

ーーーガシィィィィィン！！

「ガアッ！？」

　自身に巻きついて来たフードバインドにブラックは叫び声を上げ、自身にバインドを巻きつけて来たルインを睨むが、ルインは辛そう

に顔を歪めながら叫ぶ。

「ゴ、ゴメンなさいブラック様！！リンディさん！！」

「えぇっ！！分かっているわ！！オウリュウモン君お願い！！」

「よっしゃ！！」

ーーービュン！！

リンディの叫びにオウリュウモンは即座に応じ、自身に巻きついているバインドを破壊しようとしている暴れているブラックの頭上に一瞬の内に移動し、そのまま右手に握っている巨大刀ー『鎧龍右大刃（がいりゅうだいじん）』を全力でブラックに向かって振り抜く。

「昔の礼だ！！ありがたく受け取れ！！！」

ーーーブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ガアァッ！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

オウリュウモンの一撃をブラックはその身に食らい、そのまま地面へと落下し激突した。

その様子を冷や汗を流しながら見ていたヴィータは、自身に横に立っているリンディに恐る恐る目を向けながら質問する。

「・・・・おい、やりすぎなんじゃないのか？幾らなんでも？」

「フッ、ヴィータさん。貴方はブラックの事を何も知らないわね。あれぐらいやらないと暴走したブラックは止まらないのよ。寧ろアレぐらいでは意識が完全に戻る可能性は三割ぐらいね」

ヴィータの質問にリンディは冷静に答え、話を横で聞いていたヴィータ、はやて、キュウビモンは冷や汗を流しながらブラックが落下した地点を見つめると、落下の衝撃で発生した煙の中から鎧に罅が入っているブラックがゆっくりと姿を現し、自身の両手を苛立ちげに見つめる。

「・・・・・チィッ！！二度とこんな戦い方はしないぞ！！今日ほど苛立つ戦いは初めてだ！！・・・フン！まさか貴様らに止められるとはな。キャロ・ル・ルシエ、リュウダモン、いや、今はオウリュウモンか」

「昔の礼を返しただけだぜ、ブラックウォーグレイモン」

（お久しぶりです！）

「フッ」

ブラックはオウリュウモンとキャロの言葉に僅かに苦笑を浮かべるが、すぐさま自身の肩に乗っかって来たルインに僅かに視線を向けながら、地面に倒れ伏したまま動かずにいるカオスデュークモンに顔を向ける。

「で、俺が暴走している間に何があった？」

「私にも分かりませんけど、突然にカオスデュークモンが絶好の機会でありながらも攻撃を止めたんです・・・・多分起きたんです・・

・・・ヴィヴィオちゃんが」

そうルインがブラックの質問に答えると同時にカオスデュークモンは僅かに体を起こすが、先ほどまでとは違い困惑に満ちた顔をしながら膝を地面に着き続ける。

（ヴィヴィオ！目覚めたのだな！）

（・・・・うん・・・・・起きたよギルちゃん・・・・・ゴメンね・・・・ヴィヴィオのせいでギルちゃんにこんな事を行わせて・・・・）

（それは違うぞヴィヴィオ！！私自身もこの姿になる事を望み、聖王教会を襲ったのだ！モチモン達を殺して平然と、あまつさえヴィヴィオのせいにして暴挙を行った連中が赦せなかった！だから私はカオスデュークモンに進化した！！全ては私が望んだ事だ！ヴィヴィオには責任は無い！）

（違うよ・・・・・ヴィヴィオがいたから・・・・ヴィヴィオが生まれたから・・・モチちゃん達は死んじゃった・・・ヴィヴィオが居なければ・・・この場所の人達だってあんな事をしなかった・・・・ゴメンねギルちゃん）

「ヴィヴィオ！！・・・・・・・ウオオォォォォォォォォォォォォーーーーーーーーーー！！！！！！」

ーーードゴオオオ

『ッ！！』

突如として怒りと悲しみに満ちた咆哮を上げて、先ほどのブラック同様に地面を爆裂させたカオスデュークモンの姿にブラックは警戒の声を上げ、他のメンバーは目を見開きながらカオスデュークモンを見つめるが、カオスデュークモンは構わずに周りに存在している聖王教会本部の瓦礫にバルムンクを振り下ろす。

「何故だ！？」

ーーーガシャン！！

「何故ヴィヴィオがこのようなもので悲しまなければいけないんだ！！」

ーーーバキィィィーーン！！

「聖王など何故存在した！？何故血を引いているだけの理由でヴィヴィオが悲しまなければいけない！！」

ーーーードゴオオオオオオオオン！！

「返せ！！返せ！！モチモンを！タネモンを！！ニャロモンを！！あの優しかった日々を！ヴィヴィオの笑顔を返せェェェェェェェェェェーーーーーーーー！！！」

ーーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「・・・・返してくれ・・・・・頼む・・・・返してくれ・・・・

」

ーーーガッシャン！！

カオスデュークモンは悲しみに満ちた呟きを上げると共にバルムンクとゴーゴンを消失させ、両目から大粒の涙を流しながら地面に膝をついた。

その様子を見ていたリンディ、ルイン、オウリュウモン、キュウビモン、フリードはカオスデュークモンの悲しみに顔を俯かせ、聖王教会と関係が在ったはやて、ヴィータ、そして古代のベルカの騎士達の想いを受け継いでいるアインハルトは現代のベルカの騎士が行った暴挙が生み出した悲劇に心を痛め、ヴェロッサとシャッハは聖王教会が生み出した悲劇に言葉も出す事が出来なかった。

ただ平穏に生きていた者に、聖王教会の騎士達は自分達の身勝手な考えで言葉では表現出来ないほどの悲しみを与えた。その結果現れたのは憎しみと悲しみに支配されたカオスデュークモン。

もしあの悲劇が起きなければ、ヴィヴィオの持っていた心の傷は完全には無理でも癒えていただろう。

だが、騎士達は自分達の勝手な考えに妄信し、自分達が崇めていた聖王の血族によって滅ぼされた。

騎士達は完全に自業自得だが、ヴィヴィオとカオスデュークモンにはもはや治る見通しが立たないほどの傷が生まれてしまった。

その事を思いリンディ達は悲しげにカオスデュークモンを見つめるが、ブラックだけはゆっくりとカオスデュークモンの前に進み、何時に無く優しげな目をしながら声を掛ける。

「・・・・聞こえているか、ヴィヴィオ」

（・・・・・パパ・・・・・・）

「昔お前と同じように全てを憎んだ奴がいた・・・・ソイツは全てに否定され、この世の全てを憎んだ。自身を生み出した世界の全てを滅ぼす為に、多くのモノを殺した・・・・憎しみから解放された時に待っていたのは後悔だけだった。今のお前と同じようにな」

（・・・・・・）

「ソイツは先に進む事を選んだ。確かに後悔は在った。自分を殺したくなった事も在ったが、ソイツには命を賭けてまで止めてくれた奴が居た。奴はどれだけ救おうとした奴に否定されようと、諦めずに挑んで来た。ボロボロになっても、死に掛けても止めてくれた奴がな。お前にも居ただろうティアナ、クダモン、なのは、ガブモン、ルイン、クイント、そしてリンディがな。それだけではない、今結界の外では大勢のデジモン達が自治領の人間どもを助ける為に動いている。お前も知っている筈だ。連中は管理世界の人間を嫌っている事を。だが、それでも奴らは動いた。自治領の人間の為でも、世界の為でもない。連中が動いた理由は一つだ。“お前やギルモンに関係の無い人間どもを殺させたくない為。お前達に心の傷を負わせない為だ”」

（ッ！！）

「ッ！！」

ブラックの告げた事実にカオスデュークモンとヴィヴィオは目を見開き、ベルカ自治領都市がある方向に顔を向けると、突如として聖王教会本部を覆っていた結界が消失し、結界が消えた後には人々の救助が終わったのか、チィリンモンの背に乗ったティアナ、メタルガルルモンX、その肩に乗ったクイント、マリンエンジェンモン、エアドラモンの背に乗ったリスティ、ヴォルフモン、レーベモン、

ブリッツモン、チャックモン、そして多数のデジモン達が次々と聖王教会本部敷地内に足を踏み入れ、ブラックとカオスデュークモンの周りを囲んでいく。
　その地球にいる筈のデジモン達の姿にカオスデュークモンとヴィヴィオは困惑した顔をして、自分達を優しげな視線で見つめているデジモン達を見ていると、ブラックは声を掛ける。

「こいつ等はお前達がいたからこそ憎しみから本当に解放された。ティアナ達の説得だけではない。お前達もいたからこそ、このデジモン達は人間をもう一度信じようと思ったんだ」

『グウオォォォォォォォォーーーーーーー！！！！！』

　ブラックの言葉に同意するようにデジモン達は咆哮を上げ、カオスデュークモンに優しげな視線を向ける。
　その様子にカオスデュークモンとヴィヴィオは自分達の心が少しずつ癒されていくのを感じた。
　自分達は護っていただけではなく護られても居た。その事が漸く理解出来たカオスデュークモンとヴィヴィオはゆっくりと自身の両手を見つめると、両手の手のひらに二つの光がそれぞれ発生し、ヴィヴィオが持っていた二つの花冠が出現する。

ーーーシュン！

「・・・モチモン・・・・タネモン・・・・ニャロモン・・・・」

（（（ヴィヴィオ・・・・ギルモン・・・・僕らはずっと友達だよ））

ーーーパアァァァン！！

「ッ！！」

モチモン、タネモン、ニャロモンの声が何処からともなく響くと共に花冠は光に包まれ、光が消えた後にはカオスデュークモンの右手に巻きつく花であしらわれたブレスレットが存在した。

それと同時に融合しているヴィヴィオの右手にもカオスデュークモンと同様に花のブレスレットが出現し、同時にカオスデュークモンの体が光り輝き、背中のマントが赤い色に変わり、鈍かった色合いの鎧も白銀に輝く鎧に変わり、カオスデュークモンは真の騎士であり、ロイヤルナイツの称号を持っていた騎士ーデュークモンに変わった。

「・・・・・そうだな。私達は友達だ。何時までも、私とヴィヴィオはお前達の事を決して忘れない・・・ありがとう」

（グスッ・・・・モチちゃん・・・・タネちゃん・・・・ニャロちゃん・・・・皆・・・ヒック・・・ありがとう。グスッ！フアァアアアアアーーーン！！フエェェェェェーーーン！！）

デュークモンとヴィヴィオはそれぞれ感謝の言葉を告げながら目から涙を零し、その様子をブラック、リンディ達、そしてデジモン達はただ静かに見つめ続けるのだった。

それと共にヴィータも戦いが終わった事を確信し、何時の間にか消えていたキュウビモンに顔を険しくするが、それどころではないと思い、はやてとオウリュウモンと共にヴェロッサ、シャッハ、カリムを救護班に送る手筈を整えようとするが、はやてはその前にヴィータに声を掛ける。

「ヴィータ。カリム達の事は頼むわ。私はちょっといかないといけない所があるさかいに」

「えっ！？おい！はやて！ちょっと待てよ！」

「じゃ、後を頼むで」

ーーーシュン！

はやては自身に向かって叫んで来るヴィータに構わずに空に浮かび上がり、何処へと向かい出した。

その様子にヴィータは訳が分からないと言う顔をするが、はやての命令どおりにカリム達を運ぶ救護班を急いで呼び出すのだった。

聖王教会本部からかなり離れた森の中。

その場所の地面が突如として盛り上がり、地面の中から全身がボロボロになったグロットモンが現れた。

ーーーボコッ！！

「グゥッ！！・・・・チクショウ！ビーストスピリットが！・・・・・カオスデュークモンめ！覚えてやがれ！絶対にビーストスピリットを取り戻して、もう一度エンシェントボルケーモンになってやる！・・・それにもうバンチョーレオモンはいねぇ・・・俺様達の脅威になる奴はいねぇんだ。この礼は必ず返してやるぜ！！」

そうグロットモンは憎しみに満ちた叫びを上げながら、自身の体力を回復させようと横になる。

幾ら自身の一部を切り捨ててカオスデュークモンの必殺技から生き残れたとは言え、その身に受けた大ダメージがなくなる訳ではない。仲間であるメルキューレモン達は今回の作戦には同行していないので、助けも期待出来ない。
最も今回のカオスデュークモンの件で、自分達を追い続けていたバンチョーレオモンが戦闘不能になってくれた事は僥倖だった。この情報をメルキューレモン達に伝えれば、今まで行えなかったデジモン達の一斉蜂起をする事が出来る。
エンシェントの力を得た自分達ならば、今の地上本部を潰す事は出来る。唯一予想外だったはやての変化に関しても、自身と戦う時にパートナーデジモンを成熟期までしか進化させていなかった事を考えれば脅威ではない。
第一自身が生きている事をはやて達は知っていても、地面の中を掘り進み続けて隠れていた自分を見つけられるはずは無い。そう考えたグロットモンは体力を回復させる為に深い眠りの内につこうとするが、眠りの淵につく直前で、この場には居ない筈の人物の声が響く。

「そんな所に寝っとたら風引くと思うんやけど、グロットモン」

「ッ！！馬鹿な！？何でお前が此処にいやがる！八神はやて！！」

聞こえて来たはやての声にグロットモンは慌てて体を起こすと、自身の目の前にゆっくりと降り立つはやてに疑問の叫びを上げた。
その質問にはやてはバリアジャケットの中から何かの機械を取り出し、その画面が見えるようにグロットモンに翳すと、グロットモンはその画面を見つめ、画面が何かに反応しているように点滅を繰り返している事に気がつく。

ーーーピコン！ピコン！

「ま、まさか！？」

「気がついたみたいやな。そうこれが反応しているのは、アンタに取り付けた地上本部技術部推奨の特殊マーカーや。耐電、耐熱、耐冷、耐ショックに優れているらしいで」

「ば、馬鹿な！？そんな物を何時の間に俺様に取り付けやッ！！」

グロットモンは叫んでいる途中で何かに気がついたように自身の体を弄り、ギガスモンの時にキュウビモンに突撃を食らった箇所を見てみると、小さな機械が取り付けられている事に気がつく。

「ッ！！あの時か！？キュウビモンが奇襲をしてきやがった時に俺様に取り付けやがったのか！？」

「正解や。メギドラモン相手でもアンタしぶとく生き残りそうやったからな。だから、もしもの時の事を考えてマーカーを取り付けたおいたんや。それに生き残ってメルキューレモン達の所に案内して貰えれば、バンチョーレオモンさんにその場所を教えてアンタ等を潰すつもりやったと言う訳か」

「ッ！！」

はやてが告げた作戦にグロットモンは声も出す事が出来ずに、大口を開けながら微笑を口元に浮かべているはやてを見つめた。

もし何も知らずにメルキューレモン達の所に戻っていれば、その瞬間に自分達は終わっていた事を理解したのだ。その作戦を短時間で考えたはやてにグロットモンは言い知れない恐怖を感じた。

（ちげえ！コイツは違う！！あのルインって言う女の情報と違い過ぎる！コイツは！コイツは誰だ！？誰なんだ！？）

自身の知る情報と違い過ぎるはやてに、グロットモンは恐怖を感じながら少しでもはやてから離れようと後ずさる。

しかしグロットモンが逃げようとしている方向に突如として影が現れ、グロットモンはその影と衝突してしまう。

ーーードン！！

「ヒィッ！！・・・・・ま、まさか！？何で隠していやがった！？」

「監視されているの知っていて切り札見せる訳ないやろ。フェイトちゃんの状態を会った事も無いのにアンタらは知っていた。つまり、あんた等の中に私らの状況を調べられる能力を持っとるデジモンが居る。ルーチェモン達にも監視されとるからな。その為に隠しておいたんや。さて、話は終わりや。バンチョーレオモンさんの事を他の闘士達に知られるのはあかんからな」

「・・・・だ、誰だ？お前は一体誰なんだアァァァァァァァァーーーーーー！！！！？？」

「私は八神はやてや。デジモンとの共存の為なら、親しい者さえも犠牲にする悪魔や・・・・さよならや“土の闘士グロットモン”」

「梵筆閃（ぼんひつせん）ッ！！」

ーーードオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ギャアァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーー！！！！！

！」

はやてがグロットモンの名を呟くと同時に、グロットモンの背後にいた影が空中に巨大な梵字が描き、梵字はそのままグロットモンの体に張り付き、グロットモンの体は梵字と共に爆発に飲み込まれた。

そして爆発によって生じた煙が消えた後にはデジタマとグロットモンのスピリットが存在し、はやては無言でデジタマとグロットモンのスピリットを腕の中に抱え、グロットモンを倒した影に声を掛ける。

「これで漸く十闘士の一体を倒せたんやな。あと四体、メルキューレモン、アルボルモン、ラーナモン、ダスクモン。全員強敵やけど絶対に倒さなあかん。頼むで■■■■」

「分かっている、はやて。では、先に戻る」

ーーービュン！！

はやての言葉に影は深く頷くと同時に、はやての傍から素早く移動して木々の間を駆け抜けて行った。

それを確認するとはやても自身の仲間の居る場所に戻る。戻った後に待つ再び始まる世界の混乱を思いながら、はやては静かに空中を移動するのだった。

究極の領域！後編（後書き）

次回予告。

カオスデュークモンの暴走は止まった。

しかし、聖王教会が行った行動は世界に再び激震を走らせる。

次々と明るみに出る聖王教会の罪に世界が混乱する中、もう一つの闇が遂に太一達の前に姿を現す。

次回、漆黒の竜人と少女、『超究極…その名はアルカディモン！』

勇気と光の前に現れる無限の欲望と深き闇。それが呼ぶのは破滅なのか？

超究極…その名はアルカディモン！前編

聖王教会本部の崩壊。
それは第九管理世界消滅以上の激震を世界に走らせた。
何せ管理局と同等クラスに管理世界に影響を持っていた組織が消滅したのだから、その波紋は各管理世界に凄まじい混乱を巻き起こした。
それだけではなく聖王教会本部を消滅させたのが、虹色の魔力光を発していたデジモンだったのと言うのも大問題だった。デジモンであろうと無かろうと、虹色の魔力光を持っていた存在が聖王教会を滅ぼした事実は聖王教会の存在意義を真っ向から否定するに充分な事実だった。
その情報を知った各管理世界の代表や有力者などは、即座に聖王教会に対する援助などをうち切り、各管理世界に存在していた聖王教会に属する教会や関連施設などを即座に閉鎖した。虹色の魔力光を持ったデジモンはこれ以上に無いほどに聖王教会を憎んでいると、各管理世界は判断したのだ。
その結果、完全に管理世界中から聖王教会に関係者達は排除されて行き、管理局本局も今回の件を利用して自分達の勢力を伸ばそうと管理世界の代表達と共に動こうとした。
それと共に本局は今回の一件で現れたメギドラモンの情報を使い、再びデジモンの評判を貶め、地上本部の権威を下げようと言う動きまで行うとしていた。
しかし、現実は本局の思惑通りには動かなかった。突如として本局とは別に地上本部が各管理世界に代表に次々と今回の事件の真相を送り始めたのだ。
その情報には今回の聖王教会本部消滅が、完全に聖王教会そのものに原因が在る事を記され、更に聖王教会が全く管理世界と無関係だった管理外世界を侵略しようとして、其処に居たデジモンの怒り

に触れ事こそが全ての元凶だと記されていた。
　その事実を知った各管理世界に大激怒の嵐が巻き起こった。デジモンとの戦争だけでも精一杯だった状況で、人間同士の戦争まで聖王教会は引き起こそうとしていたのだから、管理世界が激怒するのも当然の事だ。
　それと共に地上本部代表のレジアスは、今回の聖王教会の行動を支援していた者が本局に内部に居る事も発表した。当然ながら本局は事実無根だと叫んだが、何処から手に入れたのかは分からないが、レジアスは地球を聖王教会の騎士達と共に襲うギズモンＡＴの映像を流し、本局が今回の件を絡んでいた物的証拠を示した。当然ながらギズモンＡＴは管理局本局だけが使用している兵器。
　それを聖王教会の騎士達が使用していたと言う点だけで、本局が今回の件に絡んでいたと言う証拠には充分であり、各管理世界は正確な説明を本局に即座に要求した。

『管理世界、並びにミッドの皆さん！私は今回の件で本局に大変な疑問を抱きました！そもそもデジモンとの戦争を始める原因になったのは本局の行動こそが原因です！和平の使者を殺したからデジモン達の世界を滅ぼしたと本局は発表しましたが、それが真実なのかどうかは分かりません！何故ならば地上の精鋭部隊ー機動六課に所属するデジモン達は人々を護っています！更に、今回のベルカ自治領の時に多くの市民を助ける事が出来たのはデジモン達のおかげです！！デジモンは話す事が出来ない野生の生物ではない！人間と同様に知能と心を持った生物です！彼らは人間と心を通い合わせる事が出来るのです！その証拠に今回のベルカ自治領で、デジモン達の指揮を執っていたと思われる人物は魔力も存在していない、ただの人間でした！デジモンと心を通い合わせるのには力など必要ないのです！！』

「レジアス中将も頑張っとるな。まぁ、この状況は確実に本局を追

い落とすには最適な状況や。絶対に逃したらあかん」

自身の執務室で各管理世界やミッドに向けて演説を行っているレジアスの姿をモニターで見ながら、はやては言葉を呟き、同様に執務室にいたレナとリインもはやての言葉に同意するように深く頷く。

今回の件で確実に人々の中に再び管理局本局に対する疑念が生まれた。今回ばかりは本局も言い逃れが出来ない。何せギズモンを採用していた組織は本局だけなのだから、確実に捜査が実行され、何人かの幹部は捕まるだろう。

それを気に地上本部が一気に本局に対して攻勢に出れば、本局の権力はかなり削る事が出来るようになる。

はやてはそう次の策を考えながら自身の目の前に机の上に置いてある資料を手に取ると、呆れたような顔を思わずしてしまう。

「ハァ～、他の管理世界で生き残った聖王教会の幹部達が動いとる見たいや。何とか聖王教会の存続だけは行おうとしとるみたいやけど・・・・無理だと思うわ。何せ今まで回収していた聖遺物は全部消滅。加えて…」

「此処数日の間に次々とベルカ関係と思われる遺跡が消滅している。先ず間違いなくそれを行っているのは…」

「ブラックウォーグレイモンです。ブラックウォーグレイモンは本気でベルカをこの世から消すつもりなんですよ」

「ベルカが存在していた事を証明する全てが消えれば、何れはお伽話にベルカは変わってしまう。その為に遺跡や文化遺産をブラックウォーグレイモンは全て消滅させる気なんやろうな」

そうはやては呟きながら、目の前に存在しているベルカの遺跡な

どの消滅報告の資料を見つめた。
カオスデュークモンとの戦いの後、ブラックはヴィヴィオとギルモンをリンディ達に任せて、即座に完全にベルカを消滅させる動きを行い始めた。
その第一段階が地上本部の発表。それによって各管理世界にいた聖王教会関係者達は排斥され、路頭に迷う者も続出していると言う状況になっているが、ブラック達もはやて達も気にしなかった。
少なくとも今回の事件は聖王教会と言う組織が行った行動こそが全ての原因。知らなかったではすまない事件なのだ。
そして第二段階としてブラックは、聖王教会が存続する為に絶対に必要なベルカ遺産を消滅させる動きを行いだした。ベルカの遺産が無ければ聖王そのものに否定された聖王教会など必要ない。だからこそ、ブラックは徹底的にまで聖王教会の存在意義を潰すつもりで行動を開始したのだ。

「本気でブラックウォーグレイモンはベルカを潰すつもりや。ルインフォースも居るから、ベルカ遺跡の情報は手に入るやろうし、数日以内には管理世界の殆どの遺跡が消滅するやろう」

「シグナムが聞いたら怒りそうです」

「確かにシグナムは怒るやろうな・・・・まぁ、もう終わる事やさかい。気にしてもしょうがないやろう・・・・そう言えば、レナ？カリムとシスターシャッハの様子はどうなん？」

「カリム・グラシアは右腕以外は切断。シスターシャッハは右腕を失った。二人とも一応は重傷人と言う事でシグナム達が入院している病院にいるが・・・・監視はかなりつけられている。それに恐らくはやて…」

「分かっとる・・・・多分、カリムもシスターシャッハもベルカ自治領の人達と一緒に開拓世界行きやろな」

『・・・・・』

はやての僅かに悲しみ満ちた声にレナとリインは僅かに顔を伏せた。

ベルカ自治領の人々は確かにデジモン達の行動によって助けられた。だが、住む所を失った彼らに待っていたのは、各ミッドの都市からの受け入れ拒否と言う非情な現実だった。

ミッドの人々は今回の件でベルカの人間が信用出来なくなってしまったのだ。ウッカリ街中に入れてメギドラモンが現れるかも知れないと言う恐怖がミッドの人々の中に根付いてしまった。

現在はベルカ自治領から程近い場所に仮設された大量のテントの中で自治領の人々は過ごし、現地に派遣されているヴィータやヴァイス、サーチモン、ザフィーラ、そして地上本部の局員達に護られているが、最終的には管理外世界の開拓世界に送られる予定になっている。

「何とか罪の無い人達を護りも無く開拓世界に送るんは止めたいんやけど・・・・ミッドの行政府が承認した事を止めるんは私には無理やし・・・・レジアス中将でも無理やから・・・・諦めるしか無いわな」

はやてはそう無念に言葉を呟き、ベルカ自治領の人々が送られる予定の世界の資料を見つめた。

開拓世界。それは増えすぎた人々を無人の人が住む事が出来る世界に送り、新たなる街などを作り上げる事が出来る世界の事だ。

しかし、無人と言っても、危険な動植物など存在している為に護衛となる者が必要になる世界が殆どだった。そして現在デジモンと

の戦争が起きている状況で、ベルカ自治領の人々を護れる戦力など出せる筈も無く、ベルカ自治領の人々の護衛には付けられない。
しかも本局は腹いせなのか、ミッドの行政府や地上本部に送って来ている開拓世界の場所は、全て危険度が高い世界ばかり。そんな世界に便利な世界での暮らしになれた人々が向かえば、数日以内ベルカ自治領の人々の半数は確実に死んでしまう。
はやて、レジアスなど、今回の件ではベルカ自治領の人々には罪は無いと思っている者達は、出来れば危険が少なく、ある程度の護衛も付けられるように進言しているのだが、ミッドの行政府は聞く耳もたず、その上護衛を付ける為に無茶な条件を出して来た。

「『ベルカの住民が危険では無い事を示す為に、ベルカの国の王族の純血統を戦線に立たせろ』・・・・無理やろ。もう殆どの王族の血は薄いし、聖王の血を引く子供はベルカ嫌いになってもうたし・・・一人心当たりはあるけど・・・・駄目や・・・あの子には戦わせられへん」

「・・・確かに、あの子は純粋過ぎる・・・・恐らく真実を知ったあの子はデジモンと戦えないだろう」

「リイン達だって辛いんです・・・・・多分デジモンを殺した瞬間に、心に傷が出来てしまうです」

はやて、レナ、リインはそう悲しみに満ちた声で呟いた。
確かにベルカの王族の血を引く人間の心当たりが、はやて達には在る。
この前カオスデュークモンとの戦いの時に乱入して来た少女ーアインハルト・ストラトス。
彼女はベルカの王族ー覇王家の直接の純血統。更に覇王ーイングヴァルトの記憶まで持っているのだから、これ以上に無いほどに行

政府が出して来た条件に当て嵌まる。
だが、アインハルトは余りにも純粋すぎるのだ。もしアインハルトがデジモンと戦えば、確実にアインハルトの心に傷が出来てしまう。
そして今回の話がアインハルトに知られれば、アインハルトは大勢の人々の為に自身の身を差し出すだろう。しかし、それではいけないのだ。
その行動ではこれからの戦いでは足手纏いにしかはやてはならないと思っている。ただ他人の為に戦う行動では、何れは取り返しのつかない事が起こってしまう。八年前のなのはや、ブイモンを自ら殺したフェイト、そして何も深く考えずに人々の平和の為に身を捨ててていた嘗てのはやてのように、アインハルトは傷を負ってしまうだろう。

「・・・・とにかく、何とか別の条件を出して貰うように頼んで見るわ。聖王教会の連中はともかくベルカ自治領の人々には罪はあらへん」

「分かった」

「了解です」

レナ、リインははやての言葉に頷き、自身の仕事を片付け始め、はやても一刻も早く自身の仕事を終わらせて、行政府に進言する資料を作成しようとするのだった。
今の会話が訪ね来ていたアインハルトに、扉の外から聞かれていた事にも気がつかずに。

とある研究所内部。
スカリエッティは自身の目の前のモニターに映っている各世界の現状に、面白い事態になった思っていた。
元々ルーチェモン達と違ってスカリエッティは聖王教会が何をしようとしていても関係なかった。自身の敵になるのは、ルーチェモン達とブラック達、そして地上本部だけだと思っていたのだから、スカリエッティからすれば聖王教会が存続しようと消滅しようと関係ない。
しかし、これは同時に自分達が動く最大のチャンスだとも理解していた。今、世界は聖王教会と言う次元世界一の宗教組織の消滅によって混乱の渦が巻き起こっている。
この混乱の渦が巻き起こっている間に、自分達は動き回り、本格的に動く前の準備を全て終えてしまえばいいのだ。

「さて、状況は完全に私達が動くに最適な状況になった。漸く生まれたあの子を外の世界に出せると言う事だね」

「はい、それにトーレ達も長旅の疲れは完全に癒えています。アレもお腹が空いているようですし、即刻強力なデジモンを食べさせて成長させるべきです、ドクター」

「ウーノ。君の考えは確かに一部だけは私と違うようだね。あの子には既に大量の肉を与えているのだよ。デジモンを食べさせる必要は無い。少なくとも現在管理世界に存在しているデジモン達を食べさせる気は私には無いのだよ」

「何故ですか？」

「その理由はすぐに分かるさ。さて、トーレ、セッテを呼んで来てくれたまえ。私も久々に外の空気が吸いたいからね。それともう一

つ、地上本部に今回の事件で関わっていたと思われる本局幹部の詳細なデータをドゥーエに送るように命じてくれたまえ」

「なるほど、本局の権威を更に落とすのですね？」

「正解だ。そろそろ本局幹部達にも痛い目にあって貰いたいからね。私達が動く時の為に」

「了解しました・・・・・そう言えば、ドクター。“ゆりかご”に何が起きているのでしょうか？あのメギドラモンが現れる同時に起きた突然の異変は一体？」

ウーノがそう質問するのも当然だろう。

メギドラモンがミッドに現れると同時に、スカリエッティ達が保有していたベルカの最強の質量兵器―“聖王のゆりかご”に突然に異変が起きたのだ。

突然にゆりかごからデジコードが発生し、ゆりかごを繭のように包み始めたのだ。そのデジモンの進化を思わせるような異変にウーノ達は驚愕しながらも、即座にゆりかごを調べ始めたのだが、何も分からなかった。

しかし、スカリエッティは何かを知っているように楽しそうな笑みをしながら、現在徐々に繭の大きさが変化していくゆりかごの経過を事細かに調べていた。

「実はだね。ゆりかごの動力炉に、私が作成した人造デジコアを取り付けてみたのだよ」

「人造デジコア！？何時の間にそんな物を作っていたのですか！？」

「君達が色々と仕事をしている間にね。さて、話は戻すが、私はそ

の人造デジコアを使ってゆりかごを思いのままに動かせないか実験を行っていた。だが、残念ながらゆりかごは何の反応もしなかったのだよ。これは失敗したのかと思っていたけど、如何やら私が予想していなかった事態に発展したようだね」

「ですが、それで何故メギドラモンが現れた時に反応したのですか？」

「忘れていないかね？ゆりかごは元々は聖王の持ち物。恐らく自身の本当の主の危険に気がついて、自分の体を作り変えようとしているのだろう。興味深い現象だよ。クアットロに見張らせているから大丈夫だろうが、警戒だけはウーノもしておきたまえ」

「了解しました。では、トーレとセッテを呼んで参ります」

ウーノはそうスカリエッティに告げると、部屋を出て行った。

そして残されたスカリエッティは自分達が向かうべき場所を調べ始めるのだった。

アルハザード司令室。

その場所にはリンディ、クイント、なのは、ガブモン、ティアナ、クダモン、リスティ、美由希、真雪、純平、友樹、輝二、輝一、フリートなどの地球での主要メンバーが集まっていた。

本来ならばアリサ、すずか、コロナモン、ルナモン、愛、桃子、マリンエンジェモン、ファリン、フィリス、耕介、士郎、ボコモン、ネーモン、ヴィヴィオ、ギルモンも集まって話をしたかったのだが、慰めている耕介、士郎、ボコモン、ネーモンを除いた全員が頑張って育てながら見守っていたモチモン達の死にショックを隠せず、全

員が悲しみに淵についてしまっていた。
本当はリンディ達も悲しいのだが、現状がそれを赦してくれる筈も無く、悲しみを堪えながら何とか今後についてを話し合う事になった。ブラックとルインは現在は聖王教会の消滅の最終段階に移っている為にこの場にはいないが、リンディはそれでも話を進めようと声を出す。

「さて、今後の事だけど・・・・私とクイントは政府の外国への説明に動かなければいけないから、戦線を離れざるえなくなったわ」

「えぇ、総理からも詳しく説明出来る人物が必要になったと言う事で向かわなければいけないし、捕虜にしていた聖王教会の連中の見張り役も必要だからね」

「となれば私達がデジモンの捜索に当たり続けると言う事か。聖王教会め！滅んでも尚私達の邪魔をするか！！」

クダモンはそう怒りに満ちた声を上げ、他のメンバーも全員不快に顔を歪める。
今回の件で地球の日本を除いた各国も他世界の存在に気がついたのだ。このまま行けば大混乱が起きると推測した総理は逸早く状況を治めようと、リンディとクイントに要請して、各国の説明に動いてくれと頼んだ。
もちろんリンディとクイントも混乱など望んでいない為に即座に応じたが、それによってデジモン達の説得とドミニモンへの動きが対応が遅れてしまう。更にブラックからの報告でスカリエッティ達も裏切っている事が判明した上に、それを裏付けるようにベルカ自治領に訪れた時にクイントが会ったエリオからゼストの言付けを貰っている。
即座にその件はフリートに調べさせたが、フリートが使っていた

スカリエッティとの通信は使えず、基地にも侵入して見たが既にもぬけの殻だった。

「フリートさんはとにかくスカリエッティの捜索、並びにブラックと一緒に管理世界にやって来た他のデジタルワールドの出身者達の捜索をお願いするわね」

「了解しました！」

「次に輝一君達は今までどおり、なのはさん達と一緒にデジモン達の説得とドミニモンの動きに対応して。それと同時に残り二人の十闘士に選ばれた人達の捜索もお願い」

「泉と拓也だな。分かった。確かに一緒に戦ってくれるかはともかく、この状況なら説明ぐらいしておいた方がいいだろう」

「でもさ、二人とも本当に何処にいるんだろうな？」

「うん、拓也兄さんも泉さんもこれだけの事態になったら必ず何かしらの動きを行う筈なのに」

「二人とも動いている形跡が無い。リスティさん達がデジモンを捜索して居た時に出会っていても二人は可笑しくない筈だが」

純平、友樹、輝一は残る二つのアグニモンとフェアリモンのスピリットに選ばれている拓也と泉が姿を見せていない事に疑問を持っていた。

デジモンの事になれば、自分達と同様に二人は必ず何かしらの動きを行っていても良い筈なのだ。未だに二人が動いている形跡が全く発見出来ていない。もちろん運が悪く出会っていないだけの可能

性も存在しているが、それにしても此処まで形跡が無いのには輝一達には疑問が浮かばざるえなかった。

「嫌な予感がするな・・・・既にドミニモン達に何かを行われた可能性が在るぞ。俺達の事はオファニモン達の世界でも有名だから」

「ドミニモンが知っていても可笑しくは無いか・・・・・不味いな」

「スピリットが二人の手元には無いから、ドミニモンに襲われたら如何する事も出来ないぜ」

「ふむ、これは早急に解決すべき問題だな」

輝二、輝一、純平の言葉を聞いていたクダモンは拓也や泉の捜索を急がねばならないと判断した。

万が一、洗脳などされてまえば、その瞬間に二体の闘士が敵側に回ってしまう。そうなればドミニモン達につくデジモンが増えるだろう。既に地球にいる半数のデジモン達がリンディ達側かドミニモン達側の勢力についている。

これ以上の地球での混乱を避ける為にも、何としても残りのデジモン達を説得する必要が在るのだ。

そう考えたその場にいる全員が無言で頷き、それぞれ自分達が行うべき行動をする為に地球へと戻って行く。その先に何が待っているのかは、今は誰にも分からないのだった。

とある管理外世界の森の中。

その場所には全長八十メートルほどの大きさを持った幾つ物の武装が装備されている戦艦が、森の木々の間に身を潜めるように停泊

していた。
　そしてその艦艇の周りには木々で作られたと思わしき家々が立ち並び、更にはバリケードの役割を行うように機材で作られた壁なども存在している。
　更にその周りを護るように多数のデジモン達が存在し、静かに家々に住んでいる人々と交流を交わし続けていた。
　その中でも一際立派な建物の中では第二十管理世界から脱出した人々の中でもリーダー的な存在だった女性ースレイ・ティールと、人々の護りなど行っていたハクロ、そして太一、アグモン、ヒカリ、テイルモン、ゲンナイ、レリュー、ロップモンが集まり、険しい顔をしながら話し合っていた。

「由々しき事態が起きたようです。聖王教会が滅びました」

「更に管理世界に触れ回っている情報では、聖王教会の騎士達は第九十七管理外世界で猛威を振るったとの話も存在している。これで第九十七管理外世界に向かうのは無理になった。今我々が向かえば、混乱は大きくなるだろう」

ーーードン！！

「クソッ！！間に合わなかったのか！」

　スレイとハクロの報告に太一は悔しそうな声を上げて、テーブルを叩いた。
　第二十管理世界を脱出してから、太一達は真っ直ぐ地球に向かうつもりだったのだが、スレイがそれに待ったを掛けたのだ。
　いきなり地球に数百人以上の別世界の人間が舞い降りれば混乱の渦が巻き起こる上に、自分達が移動に使っているのは質量兵器と魔道兵器が詰まれた戦争用に戦艦。それが地球に訪れるだけで地球は

大混乱が起きると判断したスレイは、太一達に事情を説明して、自分達が隠れ住む事が出来る管理外世界の無人世界にやって来て人々が住む場所をデジモン達と共に作り上げていた。
　そのおかげでデジモンに恐怖を持っていた第二十管理世界の人々も今ではデジモン達ともに歩む事を決めて、この地に小さいながらも住む場所を作り上げる事に成功した。
　もちろん管理世界の情報を知らなければいけないから、転移魔法が使えるメンバーを管理世界に送って情報を集めたところ、今回の聖王教会の暴挙と消滅が判明したのだ。
　因みに元々の管理局の艦艇の中に存在していたギズモン達は半分はデジタマに戻ってしまったが、無事なギズモンは新たに得た艦艇の中に収容してある。

「太一君達には悪いが、現状で地球に向かうのは危険すぎる。地球に居る者達の連絡が在るまでは此処に隠れるのがいいだろう。特に私達の存在が管理局の本局に発見されるのだけは不味いからね」

「・・・・分かりました」

「太一、落ち着きなよ。ブラックウォーグレイモンの仲間が必ず僕らを見つけてくれるよ。もちろん僕らも出来るだけの事はしないといけないけどね」

「アグモン・・・・そうだな」

　アグモンの言葉に太一は何とか頷くが、その顔は心配そうなままテイルモンを抱いているヒカリを見つめる。
　ヒカリの体の中にはリリスモンのデジコアが存在している。一応はリリスモンはヒカリには何もする気は無いようだが、それでも太一は心配だった。何時リリスモンの気が変わって、ヒカリの体を乗

っ取ろうと動き出すか分からない。ヒカリは太一達には大丈夫だと告げているが、それでも相手は七大魔王の名を冠する最強のデジモン。

だからこそ、太一は一刻も早くブラックの下に居る研究者にヒカリの体を見て貰いたかったのだが、現状ではそれは不可能に近い。ブラックの下に居る仲間達が接触をして来るまでは如何する事も出来ないのだ。

「大丈夫だよ、兄さん。リリスモンも今は眠っているし、テイルモンとも毎日融合しているから今の所は融合も進んでいないから」

「・・・・・そうだな。だけど、無理はするなよ、ヒカリ。何か異変を感じたらすぐに知らせるんだぞ？」

「うん、分かっているよ」

「しかし、あの漆黒の竜人が味方だったとは」

「確かに驚きだ」

「心強いですが、少し信じられませんね」

レリュー、ハクロ、スレイはそうブラックに対してそれぞれ意見を出した。

既に太一達からブラックが味方だと言う話は聞いたのだが、その時の驚きは二度とないだろうとレリュー達は思っている。それほどまでにブラックは管理世界の者達から恐れられているのだ。

それに関しては太一達も苦笑をするしかなかったが、何とかそれを治めてゲンナイがこれからについてを話し出す。

「とにかく、我々は今後はこの世界を拠点にして、ブラックウォーグレイモン達が接触して来るまでの間、各管理世界で暴れているデジモン達の説得を行い続けよう。幸いと言うべきなのか、今回の件で管理局本局は大混乱状態のようだ。これを見逃す手は無い。出来るだけデジモン達を説得してダークタワーを破壊するんだ」

ゲンナイがそう告げると全員が真剣な顔をして頷き、ゲンナイは即座に自分達が居る世界から程近く管理世界の情報をモニターに映し出す。

「第四十管理世界。この世界からデジモン達の説得を行おう、そしてスレイとハクロはこの世界の代表に何とか接触をお願いする。如何やら私が集めた情報ではこの世界の代表も管理局本局のやり方に疑問を持ち始めたらしい」

「なるほど、もしこのまま私達の世界のように正式に管理世界から脱退する表明を行ったら、私達の世界と同じ行動を本局が行う可能性は高いですね」

「加えて今本局の信用は再び地に落ち始め、デジモンに対する疑問が管理世界に生まれて来ている。この状況で脱退表明を行えば、私達の世界の悲劇を再び本局は起こしてデジモンの評判を落とそうとするだろう。確かに向かうべきだな」

スレイ、ハクロはそうゲンナイの今後について行動に納得の声を上げた。

今管理局本局は厳しい立場に追い込まれている。今回の聖王教会の件で本局が関わっていた証拠も出されてしまっている上に、デジモンがただの危険生物で無い事も管理世界に知られてしまった。

今までは危険な生物だから排除すべきだという意見を押し通せて

いたが、ベルカ自治領でのデジモン達の行動で全てが一変してしまったのだ。加えてミッドと言う自分達の発祥の地で危険が起こったのにも関わらず、地上本部だけしか動かなかった事実も本局を追い込み材料になっていた。
それを覆す為には再び何処かの世界をデジモン達に滅ぼさせる行動が再び必要だろう。自分達の権力の為なら本局の上層部は絶対に行う事をスレイもハクロも確信している。
自らの世界で起こったあの悲劇を再び行わせる訳にはいかない。
それを理解しているスレイとハクロは何としても第四十管理世界の代表を説得するつもりだった。幸いと言うべきなのか、ハクロはともかく、スレイは第二十管理世界代表の娘だった事で顔が他の世界の代表にも知られている。それを利用する手はないとゲンナイとスレイ達は思っていた。

「そして太一達は私達が第四十管理世界の説得を行っている間に、管理局が見張っていないダークタワーの所に居るデジモン達の説得を頼む」

「分かりましたゲンナイさん」

「デジモン達の説得は任せて下さい」

「出来るだけデジモン達の説得してみせる」

太一、ヒカリ、レリューはそうゲンナイの言葉に答えて、アグモン、テイルモン、ロップモンもゲンナイの言葉に頷き、それぞれ準備を行い始める。
向かう先にルーチェモン達は違う、もう一つの闇に出会う事になるとも知らずに、太一達はそれぞれ準備を急ぐのだった。

超究極…その名はアルカディモン！中編

第四十管理世界。
その世界は他の世界と同様に魔法文明が発展して、管理局に管理世界に指定された世界だった。
当初は色々と問題も在ったが、今は何とか管理局と折り合いをつけて共に平和を望んでいた。
しかし、最近の管理局の行動にその世界の代表は疑問が隠せずに居た。確かに第九管理世界が滅んだのはデジモンの侵攻によってだったが、その前に管理局がデジモン達の世界を滅ぼしたの事実。
そして今回の地上本部の報道によって多くの人々が疑問を持った。
“本当にデジモンは分かり合う事が出来ない生物なのか”
その疑問は第四十管理世界の代表に選ばれている男性ーエドワード・ヒュレイも持っている。
余りにも最近の管理局本局の行動は行き過ぎているように彼は感じていた。元々政治にまで管理局は干渉して来る事は在ったが、それでも何とか平和の維持の為と我慢していた。
しかし、デジモンとの戦争が起きてから管理局の行き過ぎた行動はかなり露骨になって来ている。
無理やり軍備を増強する為に金などを徴発し、更には自分達が街を護っているのだから、金や食べ物などを奪って行くと言う報告まで上がって来ている。
当然ながらその問題は議会でも挙げられているが、人々を護れる戦力が管理局しかない事も事実である為にエドワードはかなり悩んでいた。
「代表。他の議員から管理局とは手を切るべきだと言う意見も出て

いますが？」

「分かっている。私も本当は手を切りたい。だが、戦力が無いのだ。この世界に在る質量兵器の殆どは管理局によって廃止され、管理局の支援が無くなれば携帯火器ぐらいしかこの世界には無くなる。フリーの魔導師を雇おうにも、殆どのフリーの魔導師は管理局に徴兵されてしまっているのだ」

「ですが、もはや管理局の行動は行き過ぎています。ミッドの地上本部の報道ではデジモンは話せば分かる生物らしいのですから、何とかデジモンと交渉すべきなのではないでしょうか」

「ウ～ム」

自身の秘書をしていてくれる女性の言葉に、エドワードは悩むような声を上げた。

確かに秘書の言葉どおりデジモンが味方となれば、それだけで現状がかなり変わる可能性が存在している。しかし、デジモン達が人間達を憎んでいるのも事実。

おいそれと答えを出せば、必ず不味い事態が起きてしまうとエドワードは理解していた。何よりもデジモンと交渉する為には戦力が必要にもなる。護るにしても交渉するにしても、それだけを行える戦力が必要なのだ。

その事を理解しているエドワードが如何すれば良いのかと悩んでいると、突如として自身の執務室の扉が勢いよく開けられ、護衛を行っていた男性が入って来る。

「エドワード様！！大変です！！」

「落ち着きたまえ、一体如何したのだね？」

「はい！実は第二十管理世界の代表だった方の娘である、スレイ・ティールが代表に取り繋いで欲しいと来ているのです」

「何ッ！？それは本当かね！？」

エドワードは男性の説明に目を見開きながら叫び、隣で話を聞いていた秘書も目を見開いた。

管理局がデジモンによって滅ぼされたと報告していた第二十管理世界の人間が生きていた。それも代表の娘だった人物が。それが本当だとすれば大変な事態になる。

何せ第二十管理世界には生き残りはいないと管理局が発表しているのだから、本当に生きた人間が居れば管理局の発表は嘘だったと言う事になるのだから。

「本当に本人なのかね？良く似た別人が名前を語っている可能性は？」

「恐らくは本人で間違いないです。各世界の代表が管理局に集まって話していた時に、秘書として動いていた彼女を私は見ましたから」

「・・・・・よし、取り次いでくれたまえ。くれぐれも管理局の連中には知られないように・・・彼女はもしかしたら管理局に対する切り札になるかもしれない人物なのだからね」

「ハッ！！すぐに連れて参ります！」

そう男性はエドワードに向かって敬礼を行いながら答えると、すぐさま部屋を出て行く。

その様子を見ていたエドワードは、もしかしたら管理局を切り崩

させる切り札が舞い降りて来たのかも知れない事実に笑みを浮かべるのだった。

第四十管理世界の首都から遠く離れた山々や崖に囲まれた地帯。
その場所を既に融合進化したビクトリーグレイモンとオファニモン、そしてアンティラモンの肩に乗ったレリューが、岩や瓦礫の間を駆け抜けながら移動していた。

「この先にダークタワーが在るらしい」

「えぇ、感じるわ。ダークタワーの闇の力と多くのデジモン達を気配を」

「その様だな・・・・レリュー、大丈夫か？」

「あぁ、私は大丈夫だから安心してくれアンティラモン。寧ろもっと早く移動しても構わないぞ」

（そう言う意味で言ったのでは無いのだが）

レリューの言葉にアンティラモンは内心で否定の声を上げながら真剣に前だけを見ているレリューの横顔を見つめ、ビクトリーグレイモンとオファニモンも心配そうにレリューを見つめる。
三体のデジモンが気にしているのはレリューの心の事だった。
何せ既に家を出て聖王教会とは完全に無縁の日々をレリューは過ごしていたとは言え、それでもレリューの実の姉は聖王教会本部にいた。
聖王教会本部の生存者が絶望的と告げられた時に、レリューが僅

かに悲しそうな瞳をしたのをアンティラモン、ビクトリーグレイモン、オファニモン、そして太一とヒカリは気がついていた。
幾ら袂を分かったとは言え、聖王教会にはレリューの実の姉が所属していたのだ。その姉の生存を気にしない筈が無いのだが、レリューはそれを気にしないように振舞っている。
レリューにとっては姉が生きていようが死んでいようが、別に構わない。
だが、それでも僅かにレリューの心の奥深くでは姉が何も言えなくなった事実が不満だった。
その事をアンティラモン達に気がつかれているとレリューは理解するが、それを表には出す気は無い。
この問題だけはアンティラモンにも触れて貰いたくないと思いながら前を見つめていると、巨大な黒い塔ーダークタワーの天辺が崖の間に見えて来る。

「見えて来たぞ」

「その様だ。それでビクトリーグレイモン、オファニモン。ゲンナイからこの地にいるデジモン達はどんな種類のデジモン達なんだ？」

「鉱物型、岩石系のデジモン達らしいわ。防御力が高いから気をつけてアンティラモン」

「分かった」

オファニモンの言葉にアンティラモンは深く頷き、万が一戦闘が始まった時の事も考えてビクトリーグレイモンはドラモンブレイカーを、オファニモンは自身の金色の槍を、レリューは愛用しているグラムサイブを構えて前に進みダークタワーの周りにいるデジモン達を目視しようとする。

しかし、ビクトリーグレイモン達の向かった先には無事なデジモン達の姿は存在せず、全てのデジモン達が傷だらけになりながら地面に倒れ伏していた。

『なっ！？』

（何だこれ！？）

（一体誰がこんな酷い事を！！）

地面に傷だらけになって気絶しているデジモン達の姿に、ビクトリーグレイモン達だけではなく融合している太一、ヒカリも悲鳴のような叫びを上げた。

そしてオファニモンはすぐさま飛び出し、近くに倒れている鉱石で構成されているデジモン―ゴツモンに駆け寄り、ヒカリと共に治療を開始する。

ゴツモン、世代／成長期、属性／データ種、種族／鉱石型、必殺技／アングリーロック

鉱石のデータを身に纏い、強力な防御力を手に入れた鉱石型デジモン。世代の低いデジモンを子分にしてシステム中をねり歩く姿は、まさにデジモンのガキ大将といったところ。怒ると噴火のような勢いで暴れまわり手がつけられなくなる。必殺技は、怒っている時のみ頭から岩を出して攻撃する『アングリーロック』だ。

「しっかりして！！すぐに傷を治して上げるわ！！」

「・・・・・アッ・・・・・オファ・・・ニモン・・・・・様・・・・・生きていてくれたんですね」

「・・・・ゴメンなさい。私は貴方の知っているオファニモンとは別のオファニモンなの」

「・・・・逃げて下さい・・・・・・四体のデジモンが・・・・この地に居るデジモン達を・・・・逃げて下さいオファニモン・・・・様・・・・」

ーーーシュウウン！！

ゴツモンは言葉を言い終えると共にデータ粒子に変わり、オファニモンの腕の中でデジタマへと戻って行った。

その様子にオファニモンとその身に融合しているヒカリは辛そうに顔を歪める。

最後までゴツモンは目の前のオファニモンが、自分達の世界のオファニモンだと信じて言葉を告げた。

死して尚も此処まで思われている三大天使のオファニモンに、今のオファニモンとヒカリは敬意を抱いてしまうが何とかそれを押し込めて、背後で悲しげな瞳をしているビクトリーグレイモン達に顔を向ける。

「ゴツモンの言葉が正しいのならば、此処を襲ったのは四体のデジモンみたいよ」

「だけど、如何して同じデジモン同士で争うんだ？今の状況じゃデジモン同士で争う筈が…」

「それは私達だからだ！ビクトリーグレイモン！！！」

『ッ！！！』

突然に響いた女性の声に、アンティラモンとレリューは慌てて見回すが、ビクトリーグレイモンとオファニモンは今の声に聞き覚えがあった。
特にビクトリーグレイモンは今の声の主を忘れては居ない。何故ならば今の声の主はビクトリーグレイモンの故郷で大輔達から大切なデジメンタルを強奪し、ビクトリーグレイモンがウォーグレイモンだった時に敗北を与えた人物。
それに気がついたビクトリーグレイモンは即座にドラモンブレイカーを構えて辺りを警戒すると、ビクトリーグレイモンの頭上からインパルスブレードを両腕に出現させ、背中にバーニアを備えた蒼い狼の獣人ーバイオ・マッハガオモンに進化したトーレが飛び掛かって来た。

ーーーガキィィィーン!!

「その首を貰うぞ!!ビクトリーグレイモン!!」

「やはり君か!」

ーーーブン!!

自身と鍔迫り合いを行うトーレに気がついたビクトリーグレイモンは、叫びながらドラモンブレイカーを勢いよく振り抜き、トーレを弾き飛ばした。
しかし、トーレはすぐさま体勢を空中で整え直し、嬉しそうな瞳をしながら油断無くビクトリーグレイモンにインパルスブレードを構える。

「あの時には名乗っていなかったな。私はナンバーズ3ートーレだ」

「そうか。質問だ！大輔達のデジメンタルと思いのデジモンタルは何処に在る！？それに此処に居たデジモン達を傷つけたのは君なのか！？」

「フッ、焦るなビクトリーグレイモン。私はお前とそして融合している人間に再会出来る日を楽しみにしていた。あの時にお前に敗北した時から、私はお前との再会をずっと待ち望んでいたのだからな」

トーレはそう嬉しそうな顔をしながら、ビクトリーグレイモンにインパルスブレードを構える。

デジタルワールドで侮っていたビクトリーグレイモンに敗北した時から、トーレはビクトリーグレイモンとの再戦を待ち望み続けていた。侮り油断していたからと言ってトーレは自身の負けを言い訳にはしない。アレは完全にビクトリーグレイモンの想いに敗北した結果だとトーレは思っている。

だからこそトーレはビクトリーグレイモンと今一度戦い、自身とビクトリーグレイモンはどちらが本当に強いのか確かめたいのだ。

それを表すようにトーレは深く腰を落とし、ビクトリーグレイモンに飛び掛かろうとするが、その直前にトーレの横から声が響く。

「トーレ、お待ち下さい」

「セッテか」

聞こえて来た声にトーレは答えながら自身の横に僅かに視線を向けてみると、トーレが人間時に着ている戦闘スーツと同じ物を着ている桃色の髪の機械的な女性ーナンバーズ７ーセッテが空中に浮かんでいた。

「邪魔をするな。私はこの日をずっと待ち望んでいたのだからな」

「それは理解していますが、少しお待ち下さい。ドクターが彼らに挨拶をしたいようです」

ーーーカツ、カツ、カツ

セッテの言葉に応じるように足音がトーレの背後から響き、ビクトリーグレイモン、オファニモン、アンティラモン、レリューはトーレの背後に居るであろう敵に身構えるが、トーレとセッテは臣下の礼をするように膝を付きながら横に移動し、トーレとセッテの間をスカリエッティがゆっくりと歩いて来る。

「始めまして異世界のデジモン達に選ばれし人間達とそのパートナーデジモンよ！私の名前はジェイル・スカリエッティ。君達と会える日を楽しみにしていたよ」

「お前がブラックウォーグレイモンの言っていたスカリエッティか！？」

「その通りだよビクトリーグレイモン君。それにしても私は運が良い。此処に居るデジモン達では私達の力を計りきれなくて困っていたのだよ。其処に君達がやって来てくれたのは本当に幸いだった」

「やはりお前達が此処に居るデジモン達を傷つけたのか！だったら、僕らはこの場でお前達を倒す！！」

ーーーガシッ！！

ビクトリーグレイモンは叫ぶと共にドラモンブレイカーを構え、オファニモン、アンティラモンもスカリエッティ達に構えを取る。

その様子にスカリエッティは嬉しそうな笑みを浮かべた。相手は姿は変わっていても、自身が憧れているブラックと互角に戦いを繰り広げた存在。その相手と戦える喜びにスカリエッティは嬉しそうに笑い続ける。

（フフフッ、私もデジモンの因子を植え付けた影響が出ている様だね。戦いはつまらない思っていたのに、今は高揚感が湧き上がって来てしょうがないよ）

「ドクター、ビクトリーグレイモンの相手は如何かこの私にやらせて頂きたい」

「フム・・・・いや、トーレは下がっていたまえ。今回は私とセッテ、そしてあの子が彼らの相手をするからね」

「ッ！！・・・・・・クッ！！了解しました」

トーレは僅かにスカリエッティの発言に苛立ちに満ちた声を上げるが、何とかそれを同意した。

その様子を横目で見ていたスカリエッティは後方に僅かに下がるトーレを確認し、内心でトーレに向かって言葉を呟く。

（トーレ。今は駄目なのだよ。今は君が動く時ではない。この場で究極体に進化するのは切り札を晒す事になるからね。ディード除いてナンバーズ一の戦力を持つ君が動くのはもう少し後だよ。此処は私とセッテの経験を得る場なのだからね）

「ドクターでは進化します。バイオエヴォリューーション！！！」

ーーーギュルルルルルッ！！

セッテが叫ぶと同時にセッテの体は蒼いデジコードに包まれ、デジコードは繭の形を形成し、内部から鋭い鎌の両腕を持ち、薄紅色の体をして蒼い鬣と尻尾を持った妖獣型デジモン―ナンバーズ7のセッテが進化したバイオ・キュウキモンが現れる。

「バイオ・キュウキモン！！」

バイオ・キュウキモン、世代／完全体、属性／ウィルス種、種族／妖獣型、必殺技／ブレイドツイスター
凶器の風を操る妖獣型デジモン。つむじ風とともに薄紅の鎌鼬から繰り出され、真空の刃で敵を切り裂く恐ろしいデジモンだ。また空戦が出来るセッテが進化した事によって空中を自由に飛び回る事が出来る。必殺技は、　敵を中心に竜巻を発生させ、真空の刃で相手を切り裂く『ブレイドツイスター』だ。ナンズバーズ7―セッテが進化した姿。

「セッテ。君はあのウサギようなデジモンとそのパートナーと戦いたまえ。丁度君の実戦相手に相応しい相手だからね」

「了解しました」

ーーービュン！！

「クッ！！マントラチャント！！」

ーーーガキィィィーーン！！

スカリエッティの言葉と共に飛び掛かって来たセッテを目撃したアンティラモンは、即座に自身の体を硬質化させながらセッテが振

り下ろして来た右腕の鎌を左腕で防いだ。
その様子にセッテは何故スカリエッティが自身の相手をアンティラモンにしたのか理解し、僅かに高揚したような声でアンティラモンとその肩に乗っているレリューに声を掛ける。

「お相手願います」

「望む所だ！アンティラモン！！」

「分かっている！！」

ーーードン！！

レリューの叫びにアンティラモンは即座に応じ、鎌を退けながら別の場所に向かって駆け出す。
この場ではビクトリーグレイモンとオファニモンの戦いに巻き込まれると、レリューとアンティラモンは判断したのだ。それはセッテも分かっているのか、アンティラモンとレリューの動きに逆らわずに後を追い駆けて行く。
そしてその場に残されたビクトリーグレイモンとオファニモンは油断無く、スカリエッティに構えを取る。相手はトーレ達の主であり、超究極体のデジタマを盗んだ人物。
どんな力を持っているかはビクトリーグレイモンとオファニモンには分からないが、油断すれば敗北してしまう可能性も存在している。
その事を理解しているビクトリーグレイモンとオファニモンは、スカリエッティを警戒し続けるが、スカリエッティは二体の構えを見ても薄ら笑いを止めずに声を出す。

「フフフフッ、怖いね。確かに君達を二体を相手にするのは辛そ

うだよ」

「だったら降参して超究極体のデジタマと大輔達のデジメンタルを返すか？」

「それは無理だよビクトリーグレイモン君。既に君達の仲間から手に入れたデジメンタルは在る人物に渡してしまったし・・・・・超究極体のデジタマも無理なのだよ・・・・何せ・・・・・既に生まれているからね！！出て来たまえ！！『アルカディモン』！！！」

ーーードオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

『ッ！！！』

スカリエッティの叫びに応じるように、スカリエッティの横の地面が吹き飛んだ。

それを目撃したビクトリーグレイモン、オファニモンは事前に告げられた事実に警戒心を最大級にまで上げ、眠っていた筈のリリスモンもヒカリとオファニモンに声を掛ける。

（ヒカリ、オファニモン。気をつけなさい。アレはかなり危険よ）

「ギッ！ギギギッ！！」

リリスモンの言葉が正しいと言うように舞い上がった砂煙の中から何かの生物の声が聞こえて来た。

その声にビクトリーグレイモンとオファニモンは本能からか、思わず後退ってしまう。

今の声の主はデジモンの天敵だと本能から理解したのだ。だが、ビクトリーグレイモン達に構わずに土煙の中からスカリエッティと

同じぐらいの大きさのピンク色の肌に、両手をカマの形にして、頭部の二本の角を生やしたデジモン－超究極体と呼ばれ恐れられているデジモン－アルカディモンがゆっくりと姿を現す。

アルカディモン。世代／成長期、属性／ウィルス種、種族／妖獣型、必殺技／ソウルアブソープション、イレイズシックル
様々なデジモンのデータを元に創られたとされる呪われしデジモン。相手のデータを吸収することで成長進化する性質を持つが、自我を持っているかは判っていない。カマのような手をしており、敵を切りつけ、そこからエネルギーを吸収する。全てが常識外の強さであり、究極体でさえも迂闊には戦う事が出来ない。必殺技は、相手のデータを分解吸収する『ソウルアブソープション』と、敵の構成データを破壊し消去する『イレイズシックル』だ。

「コイツが超究極体！？」

「既に生まれていたのね！？」

「その通りだよ・・・しかし、この子はとても危ない子でね。育ての親である私でさえも油断をすれば殺そうとして来るのだよ」

「ギッ！！」

ーーーバシン！！

『ッ！！』

突然にスカリエッティにカマを振り下ろし、アルカディモンのカマをギリギリの所で避けるスカリエッティを目撃したビクトリーグレイモンとオファニモンは目を見開いた。

二体には分かったのだ。今のアルカディモンの一撃は紛れも無く、スカリエッティを殺す為の攻撃。
利用する為とは言え、成長期まで育ててくれた親であるスカリエッティを迷わずにアルカディモンは殺そうとした。
本能とか関係なく、ビクトリーグレイモンとオファニモンはアルカディモンに思わず恐怖を抱いてしまうが、攻撃された筈のスカリエッティは嬉しそうに笑い始める。

「フフフフッ、弱い敵ばかりで更にエネルギーも吸収させなかった私に怒っているのかい？アルカディモン」

「ギッ！！ギギギギッ！！」

「やれやれ困った子だ。幼年期の時は大人しく肉で我慢してくれたのに、成長期になってからはこれだからね・・・フム、ではあそこに立っている竜人のデジモンと戦いたまえ。倒せたら食べても構わないよ」

「ギッ！！・・・・ギィィィーー！！」

スカリエッティの発言にアルカディモンは歓喜に満ちた声を上げ、ビクトリーグレイモンにニタっと笑いながら顔を向けた。
生まれてからアルカディモンは一度も本来の食事であるデジモンを食べた事が無いのだ。
先ほどまでこの地に居たデジモン達と戦っても、スカリエッティは一度も食事の許可を与えてくれなかった。それはデジモンを本来の栄養源としているアルカディモンにとっては何よりも耐え難い行いだった。
しかし、今スカリエッティは漸く食事の許可を出した。アルカディモンからすれば相手が究極体であろうと構わない。

ビクトリーグレイモンと言う強大なデジモンさえも、アルカディモンからすれば餌に過ぎないのだ。
そして自身が狙われている事に気がついたビクトリーグレイモンは、何としてもアルカディモンをこの場で倒さなければいけないと判断する。

（ビクトリーグレイモン！！奴が成長期の内に倒すんだ！！アイツはこれ以上成長させちゃ不味い！！）

「（分かっているさ太一・・・・アルカディモンは）・・・・この場で僕が倒す！！オオォォォォォーーーー！！！！！」

「ギギギギッ！！」

自身に向かって突進して来るビクトリーグレイモンに、アルカディモンも歓喜に満ち溢れた叫びを上げながら突進するが、二体のデジモンが互いに攻撃出来る範囲に入った瞬間、ビクトリーグレイモンは迷う事無く最大の力を込めたドラモンブレイカーを豪快に振り回し、アルカディモンの胴体に叩き込む。

「ドラモンブレイカーーーー！！！」

ーーードゴオォォン！！

「ギゲッ！？」

ビクトリーグレイモンにドラモンブレイカーを叩き込まれたアルカディモンは、疑問に満ち溢れた顔をしながら空中を吹き飛んで行った。
何故スカリエッティが餌だと告げた存在が、自分を吹き飛ばせた

のかとアルカディモンは疑問に思う。
　アルカディモンにとっては自分以外のデジモンは全て餌。その餌に何故攻撃されなければいけないんかと疑問に思い続けるが、ビクトリーグレイモンは構わずに空中を吹き飛んでいるアルカディモンに追いつき、今度は地面に向かってアルカディモンを叩きつける。

「ハアァァァァァァァッ！！」

ーーーードオォン！！

「ゲバッ！！」

ーーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

（フフフフフッ、良いよビクトリーグレイモン君に八神太一君。そのままアルカディモンを叩きのめしたまえ。そしてアルカディモンから慢心と油断を取り除くんだ。君達の行動こそが私の望む最強の存在にアルカディモンを成長させてくれるからね）

「貴方、何を企んでいるの！？」

　薄ら笑いを浮かべながらアルカディモンが落下した地点を見ているスカリエッティに、オファニモンは険しい声で疑問を投げつけた。
　自分達の切り札になる存在が叩きのめされているのにスカリエッティは全く焦ってはいない。
　寧ろ逆に今の状況を望んでいたと言うように笑っているのだから、オファニモンが何かを企んでいる事に気がつくには充分だった。
　しかし、スカリエッティはオファニモンの質問に答える事無く薄ら笑いを浮かべ続け、オファニモンがますます不穏を感じた瞬間、スカリエッティの体を蒼いデジコードが覆って行く。

「フフフッ、ハイパーバイオエヴォリューション！！」

ーーーギュルルルルッ！！

「やはり貴方も進化出来たみたいね。だけど私は負けるつもりは・・・・・」

（そ、そんな！？まさかアレは！？）

スカリエッティの体を覆っていたデジコードの中から出て来たスカリエッティの姿に、オファニモンは言葉も出す事が出来なくなり、ヒカリは信じられ無いと言う声で叫んだ。

デジコードの中から出て来たスカリエッティの姿は、オファニモンとヒカリは信じられ無いと言う想いを抱くには充分だったのだ。

何故ならばデジコードの中から出て来たのは、鈍い黒い装甲に両腕に手甲を装備した竜人。

その竜人の姿をオファニモンとテイルモンはよく知っている。自分達の仲間である漆黒の竜人ーブラックにソックリな姿。違う点が在るとすれば僅かに装甲の一部が白く、背中に装備している翼のような盾に勇気の紋章が描かれているだけ。

それ以外は全くブラックと変わらない姿に進化したスカリエッティを見つめていると、スカリエッティは誇るように進化した自身の名を叫ぶ。

「バイオ・カオスグレイモン！！！」

バイオ・カオスグレイモン、世代／究極体、属性／ワクチン種、種族／分類不可、必殺技／ガイアフォース

“カオス三将軍”と呼ばれているデジモンの1体。見た目はブラッ

クウォーグレイモンに似ているが、僅かに装甲に白い部分が存在し、一番異なる点は背中の“ブレイブシールド”に“勇気の紋章”が刻まれている点だ。詳細が全く不明の謎のデジモン。必殺技は、大気中の全てのエネルギーを一点に集中させて相手に向かって発射する『ガイアフォース』だ。ジェイル・スカリエッティが進化した姿。

「バイオ・カオスグレイモン！？その姿は悪ふざけのつもりなの！？」

「フフフフッ、違うね。私はブラックウォーグレイモン君の力に憧れているのだよ。だが、私は彼にはなれない。例え姿を似せても私は彼ではない・・・・だからこそ！私はカオスグレイモンの存在を知った時に歓喜した！彼ではなく、彼に似ていても全く違う存在！これ以外に私が進化すべきデジモンは居ないとね！そしてオファニモン君に八神ヒカリ君！君達ほどこの姿の私と戦うに相応しい存在は居ない！さぁ、始めようではないか？私とブラックウォーグレイモン君の力の差を確かめさせて貰うよ！！」

ーーードン！！

「クッ！！」

叫ぶと共に飛び掛かって来たスカリエッティに対してオファニモンは即座に槍を構え、スカリエッティも右腕に装備しているドラモンキラーを構え、二体は同時に相手に向かって武器を突き出す。

「フッ！！」

「ハッ！！」

ーーーガキィィィィーーン！！

二つの武器が激突すると同時に甲高い音が鳴り響いた。

今此処に無限の欲望を持つ者達と、デジモンとの共存を持つ者達の戦いが始まったのだった。

超究極…その名はアルカディモン！後編（前書き）

更新が遅れてすいませんでした。

超究極…その名はアルカディモン！後編

「ハアァァァァァァァーーーー！！！」

「フッ！！」

ーーーガキィィィィーン！！

切り立った岩山の間で殴り掛かって来たアンティラモンの拳を、バイオ・キュウキモンに進化しているセッテは即座に左腕の鎌で受け止めた。

その様子にアンティラモンとレリューは険しい顔をするが、セッテは構わずに何処からともなく機械的なブーメラン－セッテの固有武装－ブーメランブレードを空中に出現させ、アンティラモンに向かって高速で向かわせる。

「スローターアームズ！！」

ーーーブン！！

「大きく避けるんだ！！」

「ッ！！」

ーーードン！！

高速で迫るブーメランブレードを目撃したレリューの突然の叫びに、アンティラモンではなくブーメランブレードを放ったセッテが目を見開き、アンティラモンはレリューの言葉に迷う事無くブーメ

ランブレードをジャンプする事で避けた。

ーーーブザン！！

「ッ！！これは！？」

当たっても無い筈なのにブーメランブレードが進んだ先に存在していた大岩が切り裂かれる様子を目撃したアンティラモンは疑問の叫びを上げ、レリューは自身のディーアークを右手に握りながら、ブーメランブレードを自身の下に戻しているセッテを睨みつけ、アンティラモンに今の現象を説明する。

「キュウキモンは風を操る能力を持ったデジモンだ。あの女は真空の刃を自身の武器に纏わせて投げつけて来たんだ」

「なるほど、目の見える武器が本命ではなく、その周りに存在している真空の刃こそが本命の攻撃か」

「・・・初見で其処まで読まれたのは始めてですね。この場に居たデジモン達でさえも気づかなかった攻撃だと言うのに・・・・並みの攻撃ではダメージが通らない防御力を持ったデジモンに、状況を冷静に分析して指令を出すパートナー。ドクターが私の相手に選んだだけの事はありますね」

「随分と嬉しいそうだな？我とレリューと戦うのがそんなに楽しいのか？」

「楽しい？・・・・・なるほど、この感情が楽しいと言う事でしたか。では、私は今は楽しんでいるのですね？」

（この娘？進化する前の時も思ったが）

（感情が希薄すぎる。まるで人形を相手にしているような印象を感じたのは間違いではなかった）

アンティラモンとレリューはセッテとの僅かな戦いで気がついていた。

セッテの感情がかなり薄く、まるで機械を相手にしているような印象に近い事を。

アンティラモンとレリューは太一やヒカリ達には及ばなくても、それなりの戦いを越えて来ている。

それはデジモンだったり、聖王教会の過激派の騎士達だったりと色々な敵と戦って来たが、そのどの敵ともセッテは一致しなかった。

一番近いのはデジモンとの戦争が始まる前に出現していたガジェットが近いだろう。

しかし、セッテはデジモンに進化していても命を持っている存在。それなのに何故機械と戦っているような印象を受けるのかと、レリューとアンティラモンは疑問に思うが、セッテは構わずに両手の鎌と空中に浮かせているブーメランブレードの刃をアンティラモンとレリューに構える。

ーーースチャ！！

「改めて名乗らせて貰います。ナンバーズ７ーセッテと言います」

「我の名はアンティラモン」

「そのパートナーのレリュー・シュティルだ」

「では、始めさせて貰います」

ーーービュン！！

『クッ！！』

セッテが言葉を告げると共に動かしたブーメランブレードを目撃したアンティラモンとレリューは即座に、ブーメランブレードから大きく避けるように動き、ブーメランブレードが纏っている不可視の刃を避けようとする。

しかし、避けている途中で前方から向かって来ているブーメランブレードと逆に背後からアンティラモンは衝撃を食らい、それと同時に前方から向かって来ていたブーメランブレードが纏っている不可視の刃もその身に叩きつけられる。

ーーーガアァァァァーーン！！

「グッ！！何だ！？」

「分からんが気をつけるんだ！！」

「了解だレ…」

ーーーガアァァァァァーーーン！！

「グッ！！」

レリューの叫びに答えている途中で再びアンティラモンは自身の体に何かがぶつかる衝撃を感じ、再び苦痛の声を漏らしてしまう。

その様子にレリューは焦りを覚えて辺りを注意深く見回すが、余裕そうにブーメランブレードを操作するセッテとアンティラモンの

周りを飛び回っているブーメランブレードの姿しか存在していなかった。
幾らアンティラモンが防御力と回復力に優れたデジモンとは言え、攻撃を受け続ければダメージは蓄積していく。そうなれば徐々に動きが鈍り、マントラチャントが解けてしまう可能性が高いだろう。
その事を理解しているレリューは焦りを覚えながらセッテの攻撃方法を見極めようとアンティラモンの周りを旋回しているブーメランブレードを見つめていると、フッと自身の頬にブーメランブレードが纏っている風と違う風を感じる。

ーーーフゥ〜〜

「（ッ！！そうか！！奴の攻撃方法はそう言う事だったのか！！）・・・アンティラモン！！私が合図したら拳を指定した場所に叩きつけろ！！」

「ムッ！・・・分かった！」

「無駄ですね。私の攻撃は絶対に見極められません」

レリューとアンティラモンの会話を聞いていたセッテは余裕そうな声を出しながら声を出した。
自身の攻撃手段に絶対の自信をセッテは持っていた。ナンバーズの中でも初見で今の攻撃手段を見切れたのは、自身に戦い方を教えてくれたトーレだけだからこそ、その自信は絶対だった。
しかし、そのセッテの自信の打ち破るようにレリューは高速で旋回して来るブーメランブレードを険しい瞳で見つめ、不可視の刃がアンティラモンに近づいて来た瞬間に叫ぶ。

「地面に全力で拳を撃ち付けろ！！」

「応ッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「まさかッ！？」

アンティラモンが地面に右拳を叩きつけて舞い上がらせた土砂を目撃したセッテは、初めて焦りに満ちた叫びを上げた。

それと同時にレリューとアンティラモンは舞い上がった土砂の中に映る“二つの不可視の刃”を発見し、アンティラモンは前方から向かって来るブーメランブレードが纏っている不可視の刃をジャンプする事でかわし、それと同時に後方の不可視の刃の中心に拳を叩きつける。

「マントラチャント！！！」

ーーーバキィィィィーーン！！

「クッ！！」

アンティラモンが拳を振り下ろすと同時に何かが砕けるような音が響き、地面にセッテの横に滞空しているブーメランブレードと同じ物と思われる物が粉々の姿で現れる。

それを目撃したセッテは悔しそうに顔を歪め、アンティラモンは納得したように頷きながら地面に着地する。

「なるほど、見える武器自体を囮にして二つ目の不可視の武器で相手を倒すと言うのが奴の戦法と言う事だな、レリュー」

「そう言う事だ。上手く隠せてはいたが、より見えないようにする為に大目に風を纏わせていたのだろう。だから、見えている方よりも強風が存在し、私の頬にその風が当たったと言う事だ」

「・・・・まさか、其処まで読み取られるとは本気で思っていませんでした。この戦法にはかなりの自信が在ったのですけど」

「確かにこの戦法ならば並みの完全体では敗れるだろうが、相性が悪かったな。アンティラモンの防御力は究極体に迫る防御力だ。その防御力の前に敗れたと言う事だ」

（ドクターが私の相手を彼女達にしたのはそう言う訳でしたか。防御力が高い相手だけの理由だと思っていましたが、如何やら本当の目的は私の編み出した戦法の弱点を戦闘の中で理解させる為。流石ですドクター）

セッテはそう内心で自分達の生みの親であるスカリエッティに感服した。

スカリエッティはセッテ自身ですから分かっていなかったセッテの戦法の弱点を理解していた。

確かにセッテの戦法は有効な攻撃方法だが、防御力や回復能力に秀でている相手に対しては相性が悪かった。その事を理解していたスカリエッティは口で説明するよりも実戦で直接戦う事を理解させようと、セッテにアンティラモンと戦うように命じたのだ。

それによってセッテは完全に自身の攻撃方法の弱点と相性の悪さを理解する事が出来た。

やはりスカリエッティは一手も二手も先を読んで行動しているのだと、セッテは改めて自身が仕えている相手の凄さを理解しながら、今度は自身の両手の鋭い鎌をアンティラモンに向けて構える。

「如何やら貴女方には私も直接動くべきのようです。お相手願います」

「望む事だ！！」

「来い！！」

「では！行かせて貰います！！」

ーーービュン！！

ーーーガキィィィィーーーン！！

セッテは飛び掛かると同時に右腕の鎌を振り下ろし、アンティラモンも自身の右腕を振り抜き、辺りに甲高い音を響かせながら戦いを再開するのだった。

セッテとアンティラモンが戦っている地点から僅かに離れた空の上。

其処でバイオ・カオスグレイモンに進化したスカリエッティとオファニモンは、互いに武器を素早く繰り出し続けて、甲高い金属音を連続で鳴り響かせていた。

ーーーキィン！！ガキィン！！ガキッ！！ガキィィィィーーーン！！

「フフフッ！！やるね！オファニモン君！私の攻撃に此処まで対応するとは！流石は幾多の戦いを越えて来た戦士だね！！」

「褒められても嬉しくないわ！！特に・・・・その姿の貴方にはね！！」

ーーードグオオォォン！！

「グッ！！」

オファニモンは叫ぶと共に握っている槍ではなく素早く自身の右足を蹴り上げ、スカリエッティの顎を蹴り飛ばし、スカリエッティは頭を動かされた衝撃に苦痛に呻きながら動きを鈍らせた。

オファニモンはその隙を逃さずに、今度はスカリエッティの胴体に向かって槍を構え、渾身の力を込めた神速の突きを胴体に叩き込む。

「ハアッ！！」

ーーードオオオオン！！

「グハッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

頭を揺らされて動きが鈍っていたスカリエッティは、オファニモンの神速の突きを避ける事が出来ずにその身に食らい、地面へと凄まじい勢いで落下した。

オファニモンはそれを目撃しながらも攻撃の手を緩めずに、自身の周りに十個の輝く宝石を出現させ、スカリエッティが落下した地点に迷わずに宝石を放つ。

「セフィロートクリスタルッ！！」

ーーードドドドドドドドドドゴオオオオオオン！！

オファニモンが放ったセフィロートクリスタルは寸分違わずにスカリエッティが落下した地点に直撃し、辺りに凄まじい土煙を舞い上がらせた。

その様子を見ていたヒカリと融合しているリリスモンは僅かに感嘆した思いを持ちながら、オファニモンに声を掛ける。

（やるわねオファニモン。甘ちゃんかと思っていたけど、如何やら戦いに関しては違うようね。クスクス）

（悪いけどリリスモン。黙っていなさい。今私もヒカリも機嫌が悪いのよ）

（怖いわね。あの男は貴女達の逆鱗に触れたみたいね）

リリスモンはそう面白そうな声を出しながら、オファニモンとヒカリが放っている怒りのオーラに心地よさを感じていた。

オファニモンとヒカリはスカリエッティがバイオ進化した姿であるバイオ・カオスグレイモンに苛立っていた。例えスカリエッティが純粋にブラックに憧れを抱いて望んだ進化だとしても関係ない。今のスカリエッティの姿は一部を除いてはブラックに瓜二つと言っていい姿。

それはオファニモンとヒカリにとっては十年前のブラックとの戦いを思い出させる事だった。だからこそ、オファニモンとヒカリは本当に久々に怒っていた。

（絶対に倒すよ！）

「分かっているわヒカリ！私達にあの時の出来事を思い出させた罪は重いわよ！！」

「・・・・いやはや、如何やら私は知らず知らずの内に君達の逆鱗に触れていたようだね」

オファニモンが怒りに満ちた叫びを上げると同時に、煙の中から身に纏っている鎧の一部が砕け、罅が全体に広がっているスカリエッティが姿を現した。

「難しいものだね。戦うと言うのはやはり難しいよ。データでは勝てていても現実では勝てない。直接戦って改めて理解出来る。ブラックウォーグレイモン君に会わなければ私は慢心と油断によって敗北していただろうね」

「だとしても貴方は此処で私に倒されるわ。少し戦って理解した。貴方は究極体の力を完全に制御し切れていないわ！！」

「フッ、流石だね。その通りだよ。私は確かにカオスグレイモンへの進化を会得している。だが、会得と使いこなせるかどうかはやはり別物。フム、今後は私も自分の力を使いこせる訓練をしなければいけないね」

「貴方に次なんてないわ！！」

ーーービュン！！

オファニモンは叫ぶと同時にスカリエッティの目の前に一瞬の内で移動し、そのままスカリエッティに止めを刺す為に槍を鋭く突き

出す。

「貰ったわ！！」

「フッ！如何かな？」

ーーーション！！

「なっ！？」

オファニモンが突き出して来た槍をスカリエッティはまるで最初から分かっていたかのように軽やかに横に動くだけかわし、オファニモンは自身の攻撃を避けられた事に驚いた。

しかし、オファニモンはすぐさま冷静に立ち返り、今度はフェイントも混ぜて次々と並みのデジモンならば蜂の巣になるほどの速さで突きを繰り出す。

「ハアァァァァァァーーーー！！！！」

ーーーシュシュシュシュシュン！！

「フフフッ！速いね！君の攻撃は！！」

「クッ！！」

スカリエッティは余裕そうな声を出しながらオファニモンの神速の突きを全て避けた。

その様子にオファニモンは悔しげな声を上げながら、僅かに後ろに飛び、油断無く槍を構えながら突然に自身の攻撃を避けられるようになったスカリエッティに対して疑問を思う。

（実力は変わった訳ではないわ。だけど、私の攻撃に対する対処が上手くなっている）

（うん、でも如何していきなり攻撃を避けられるようになったんだろう？」

（・・・・・フフフフッ、面白いわね、あの人間）

（（リリスモン？））

突然に楽しそうな声を出したリリスモンにヒカリとオファニモンは疑問の声を上げると、リリスモンはスカリエッティの突然の変化について説明し始める。

（戦いを長引かせるのは止めなさい。あの人間は信じられないほどに頭が切れるわ。時間が立てば立つほどにオファニモン、貴女の攻撃は当たらなくなるわよ）

「ッ！！まさか！？」

「気がついたようだね。私はブラックウォーグレイモン君と違って長い間暗い場所で過ごしていたからね。戦いの経験など殆どない。実力に於いても戦い続けて来たブラックウォーグレイモン君はもとより、君にも及ばないだろう。だが、私には君達を超える頭脳を持っている。私はそれを利用して君の攻撃パターンを記憶しているんだよ。どんな強敵にもある程度の攻撃パターンは存在している。私はそれを戦いながら学習して戦っているのさ。とは言っても今まで全く戦いなどと私は無縁だったからね。此処とは違う別の場所に置かれている学習装置とリンクして支援を受けている。これでより正

確な動きが読めると言う事だよ」

「クッ！！」

スカリエッティの言葉にオファニモンは悔しげに顔を歪めた。
もしスカリエッティの言葉が事実だとすれば、戦えば戦うほどにスカリエッティは相手の動きのパターンを理解して対処出来るようになると言う事である。言うなれば今スカリエッティが行っているのは、カオスデュークモンがブラックに対して行った動きの縮小版と言っていい行動だった。
最もカオスデュークモンとは違い完全には動きを読み事は出来ないだろうが、それでも動きを読めるのは戦いに於いてはかなり有利になる事だった。
それを止めるにはスカリエッティが言う機械を破壊すればいいのだが、幾らオファニモンでも何処に在るかも分からない機械を破壊するのは不可能に近い。だからこそ、スカリエッティは嫌味のように自身の戦い方を語ったのだ。

「この戦法は君達のような強者には相性が悪いだろうね。何せ戦い続けて来た者ほど自分の動きのパターンを急に変える事など不可能だ。フフフフッ、もう君達は私の手の中に居るのだよ！！」

「・・・・・フッ、残念だったね。貴方の戦法には決定的な弱点が一つ在るわよ！」

「ほう、それは興味深い。では教えて貰いたいね。君の言う私の戦法の弱点を！」

「えぇ、今すぐ教えてあげるわ！！」

ーーービュン！！

オファニモンは叫ぶと共にスカリエッティに全速力で飛び掛かり、右手に握る槍を構える。

その動きを既に理解していたスカリエッティはオファニモンの行動に疑問を持ちながらも、その動きに対処しようとする。だが、その直前にオファニモンは槍ではなく右足を蹴りをスカリエッティの胴体に叩き込む。

「フッ！！」

ーーードグオオン！！

「グッ！！何だと！？」

自身が予測していなかったオファニモンの攻撃をその身に食らったスカリエッティは苦痛に満ち溢れながら疑問の叫びを上げるが、オファニモンは構わずに今度こそ槍をスカリエッティに振り下ろす。

「ハッ！！」

「クッ！！」

ーーーガキィィィーーン！！！

スカリエッティはオファニモンが振り下ろして来た槍を右手に装備しているドラモンキラーで防ぎ、辺りに甲高い音が鳴り響いた。

それと共にスカリエッティは即座に次のオファニモンの行動を予測する。

今までの戦いからオファニモンはこのまま槍を使って攻撃を繰り

出して来ると予測し、左手に装備しているドラモンキラーを構えようとする。だが、再びスカリエッティの予測に反してオファニモンは槍を使った攻撃は行わず、自身の周りに十個の宝石を出現させ、迷う事無くスカリエッティに向かって至近距離から撃ち出す。

「セフィロートクリスタルッ！！」

ーーードドドドドドドドドドゴオオン！！

「グアァァァァァーーーーー！！！！！」

至近距離でセフィロートクリスタルをその身に受けたスカリエッティは苦痛に満ちた叫びを上げながら吹き飛んで行く。

それと同時にオファニモンは即座に金色の槍を振り回し、吹き飛んでいる途中のスカリエッティに向かって振り下ろす。

「エデンズジャベリンッ！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「クッ！！それは受けられないね！！」

ーーービュン！！

オファニモンがエデンズジャベリンを放つのを目撃したスカリエッティは慌てて上空に浮かび上がる事でエデンズジャベリンを避けた。

それを目撃したオファニモンは即座に技の発動を中断させ、空中に逃げたスカリエッティに即座に近づき、次々と神速の突きを繰り出す。

「ハアァァァァァァァーーーー！！！」

「ヌウゥゥゥゥゥーーー！！！」

ーーーキィン！！ガキィン！！ガキッ！！ガキィィィィーーン！！

オファニモンの突きに対してスカリエッティは即座にドラモンキラーを振り抜く事で、オファニモンの攻撃を捌き続ける。

その間にもスカリエッティは頭の中で先ほどのオファニモンの行動を理解しようとする。

（一体先ほどのオファニモン君の動きの正体は何だろうか？確かに今の動きは私が覚えたオファニモン君の動き。だが、先ほどの動きは全くの別人。まるでもう一人別の・・・・・・ッ！！そう言う事だったのか！？）

ーーービュン！！

「ンッ！」

急に距離を離したスカリエッティの動きにオファニモンは疑問を覚え、思わず動きを止めてしまうと、スカリエッティは笑みを浮かべながらオファニモンに声を掛ける。

「そう言う事だったのだね。なるほど、確かにコレは私の戦法の決定的な弱点だ。最もそれが出来るのは君のような融合進化によって進化したデジモンだけだろうね」

スカリエッティはそう言いながら興味深そうにオファニモンを見

つめる。
　そうスカリエッティの戦法は確かに有効な戦い方だった。攻撃と防御のパターンが読まれれば、それだけで戦闘はかなり不利になる。現にスカリエッティに似た戦法を使ったカオスデュークモンはブラックを倒す寸前にまで追い込んだ。
　しかし、オファニモンはスカリエッティが今まで戦って来たデジモンと人間とも違う。
　オファニモンは一人でありながらも、その身の内には三つの意識を宿している存在。つまり幾らスカリエッティがオファニモンの行動パターンを読んでも、残るヒカリとリリスモンの意識がオファニモンの指示を出して行動すれば、スカリエッティの戦法は通じないと言う事に他ならない。

「やはり直接戦う事で自分達の戦い方の弱点が理解出来るよ。外に出て来たのは正解だったね」

「随分と余裕ね。貴方の戦い方が私達には通じない今、此処で貴方は敗れるのよ！！」

「フフフッ、それは困るね。だが、それよりもそろそろあちらも決着がつきそうなんだけどね」

「何ですって？」

　いきなりの横を向いたスカリエッティの言葉にオファニモンは疑問を覚え、スカリエッティが見ている方に顔を向けてみると、両腕に分離させたドラモンブレイカーを装着して、僅かに鎧の一部が消滅しているビクトリーグレイモンと両腕のカマを構えながら険しく顔を歪めているアルカディモンが互いに地面に立ちながら対峙していた。

「ハァ、ハァ、ハァ、強い」

（気をつけろビクトリーグレイモン！コイツは本気でルーチェモン以上に危ないぞ！！）

「分かっている太一！」

自身と融合している太一の言葉にビクトリーグレイモンは答えながら、苛立ちに満ち溢れて顔を険しく歪め続けているアルカディモンを睨む。

「ギギギギギッ！！」

（コイツ本気で僕を食べるつもりだ）

ビクトリーグレイモンはそう内心で僅かに恐怖を感じさせるような声を上げ、自身を食えずに苛立っているアルカディモンに油断無くドラモンブレイカーを構える。

戦い始めた当初はビクトリーグレイモンの攻撃にアルカディモンは対処する事が出来ず、その身に何度も攻撃を食らい続けてたのだが、アルカディモンには自己再生能力までも備わっていた。

それ故にビクトリーグレイモンの攻撃をアルカディモンはその身に食らうと同時にダメージから回復し、逆に倒すつもりで全力の攻撃を放ち続けていたビクトリーグレイモンの方が体力を失ってしまっていた。幾ら究極体のビクトリーグレイモンとは言え、その身から体力が無くなっていけば徐々に攻撃の精度も威力も下がって行き、その隙を衝かれてアルカディモンの攻撃を一度受けたら、頑丈な筈の鎧の一部は一瞬の内に消滅してしまったのだ。

此方からの攻撃は全て即座に回復され、逆にアルカディモンの攻

撃は究極体でも一瞬で倒してしまう力が存在している。
真面目な話ビクトリーグレイモンはアルカディモンと成長期状態のルーチェモン、戦うならばどちらかと問われたらルーチェモンだと断言すると思っている。まだ、ダメージを受ければ体力が減って行くルーチェモンの方がアルカディモンに比べればマシだろう。

（コイツを倒すにはトラインデントガイアを至近距離で撃ち出す以外ない。だけど、その為にはあのカマが邪魔だ・・・・流石に失った部分までは再生出来ないだろう。行くぞ！！）

ーーービュン！！

「ギィッ！！」

飛び出して来たビクトリーグレイモンの姿を目撃したアルカディモンは即座に両腕のカマを構え、ビクトリーグレイモンを向かえ討とうとする。
しかし、ビクトリーグレイモンはアルカディモンの予想に反してアルカディモンに飛び掛かる直前で、地面に向かって両腕のドラモンブレイカーを振り下ろし、土砂と砂煙をアルカディモンに向かって撒き散らす。

「ハァッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ギッ！？」

突然のビクトリーグレイモンの行動にアルカディモンは疑問の叫びを上げ、慌てて自身の周りに浮かび上がった砂煙の中に隠れてい

るビクトリーグレイモンを発見しようと辺りを見回すが、ビクトリーグレイモンの姿は影さえも発見する事が出来なかった。
　その事実にアルカディモンが疑問に満ち溢れながら僅かに首を傾げた瞬間、ビクトリーグレイモンがアルカディモンの背後の地面の中から飛び出す。

ーーーードゴオオオ

「ギエァァァァァァァァーーーーー！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオン！！

トライデントガイアを至近距離で食らったアルカディモンは悲鳴を上げながら吹き飛んで行き、そのまま岩山に激突した。

その様子を目撃したビクトリーグレイモンはゆっくりと両腕を地面に下ろし、ドラモンブレイカーの切っ先を地面に突き刺しながらアルカディモンが吹き飛んで行った場所を睨む。

「ハァ、ハァ、これで流石に倒せただろう」

（あぁ、幾ら超究極体でもこれだけの攻撃を受けたんだったら…）

ーーービョン！！

「何ッ！？」

太一が言葉を出している途中でアルカディモンが激突した場所から、鋭いカマが勢いよく伸びて来て、ビクトリーグレイモンを突き刺そうとする。

それに気がついたビクトリーグレイモンは慌てて地面からドラモンブレイカーを抜き取り、右手に装着しているドラモンブレイカーの刃を使って伸びて来たカマの攻撃をギリギリのところで防ぐ。

ーーーガキィィィィーーン！！

「クゥッ！！そんなこのカマは確かに斬り落とした筈なのに！？」

伸びて来たカマをドラモンブレイカーで受け止めながらビクトリ

ーグレイモンは疑問に満ちた叫びを上げた。
今ドラモンブレイカーで受け止めているカマは確かに自身が斬り落とした筈のアルカディモンのカマ。
現にそれを示すように地面には先ほど斬り落としたアルカディモンのカマが落ちている。では今防いでるカマは一体何なのかと疑問に満ち溢れながら、ビクトリーグレイモンがドラモンブレイカーで防いでいるカマを見つめていると、ドラモンブレイカーは徐々にカマが当たっている箇所からデータ化させられ始めている事に気がつく。

「ッ！！不味い！！」

ーーーバシン！！

自身の武器がデータ化させられて消滅させられる訳にはいかないと思ったビクトリーグレイモンは、慌ててカマを弾き飛ばした。
それと同時にカマは伸びて来た場所に戻って行き、カマが戻った先には伸ばしていた左腕のカマを元の長さに戻し、胸の部分に大きな傷を持ち、右腕のカマを修復しているアルカディモンの姿が存在していた。

「馬鹿な！？失った部分まで再生出来る能力を持っているのか！？」

（何て奴だ！！）

自身の体を自己修復させているアルカディモンを目撃したビクトリーグレイモンと太一は心の底から驚愕した。
幾らデジモンがデータ生命体と言う特殊な生物だとしても、戦いで腕や足を失えば、武器とは違い修復する為には専門の治療場所や設備、そして何よりもそれに秀でた他のデジモンの力が必要になる。

或いは進化する事で完全に新たな姿になる以外に、完全には失った腕や足、翼などは治らないのだ。
現にリリスモンに翼を奪われたルーチェモンは失った翼を復活させてはいない。
しかし、アルカディモンはそれらを全く必要とせずに斬り落とされた両腕のカマを自己修復、いやもはや自己再生と言う言葉がアルカディモンの能力には相応しいだろう。

「クソッ！！こんな奴が究極体以上に進化したら本当にとんでもない化け物になる！！」

（あぁ、何としても成長期の内に倒さないと不味い！！）

「分かっている、太一！！もう一度トライデントガイアを…」

「使わせる訳にはいかん！！」

「ッ！！」

突然に響いた声にビクトリーグレイモンは慌てて背後を振り返ろうとするが、その前に背後に何時の間に忍び寄っていたバイオ・マッハガオガモンに進化しているトーレが拳をビクトリーグレイモンの顔に叩き込む。

「ウィニングナックルッ！！」

ーーーガアァァァーーン！！

「ガアッ！！」

トーレの奇襲攻撃をビクトリーグレイモンは避けられず、顔面にトーレのウィニングナックルを食らい地面に倒れ伏した。
アルカディモンはその隙を逃さずにビクトリーグレイモンに向かって再生した右腕のカマを伸ばして突き刺そうとしようとするが、何故かその動きは止まり、ビクトリーグレイモンを殴り飛ばしたトーレに険しい視線を向ける。

「ギィッ！！」

「フッ・・・（如何やらドクターの策は成功したようだ。アルカディモンは自分の意思で相手を倒すと言う意思を持った。これで今回の件の重要事項は遂行出来たと言う事だな）」

トーレはそう僅かに薄笑いを浮かべながら内心で言葉を上げ、自身に向かって両腕のカマを伸ばそうとしているアルカディモンを見つめていると、アルカディモンの背後にスカリエッティが着地する。

ーーードン！！

「アルカディモン。止めたまえ。それ以上は流石に私も君を怒らざるえないよ」

「ギギギッ！！」

「勝負に水をさされた事を怒っているのは分かるがね。このまま勝負を続けても君の今の気持ちは晴れないよ。日を改めてビクトリーグレイモンとは雌雄を決するべきだ」

「・・・・・・・ギッ！！」

スカリエッティの言葉にアルカディモンは考えるような間を於き、スカリエッティの言葉に同意するように頷いた。
その行動にスカリエッティはアルカディモンが食事を以外に意思を持った事実に喜びを感じていると、スカリエッティの横にトーレが移動して来て、アンティラモンとレリューとの戦いを中断して来たセッテも並び立つ。

「フフフフッ、ビクトリーグレイモン君感謝するよ。君のおかげでアルカディモンから慢心と油断が消えて、漸く本当の自我が芽生えた」

「ッ！！そう言う事だったのか！だからお前は僕とアルカディモンを戦わせたのか！？」

「その通りだよ。君と戦う前のアルカディモンはただ本能で動く獣だった。しかし、君との戦いで考えると言う意思を手に入れた。これでアルカディモンの本格的な育成が出来ると言う訳だ。完全に自我を宿して、戦いのやり方も覚えた超究極体の育成がね！！」

「そんな事をさせるか！！！」

ーーービュン！！

ビクトリーグレイモンは叫ぶと同時にスカリエッティに向かって飛び出した。
これ以上アルカディモンを成長させる訳にはいかない。成長期状態でさえも既に究極体に迫る力をアルカディモンは手に入れているのだ。もし後一段階でも進化すれば、例え究極体デジモンでも並みの実力者達では歯が立たなくなる。
そうなれば全てが間に合わなくなる事を理解しているビクトリー

グレイモンは、何としてもこの場でアルカディモンを倒す為に衝撃波を引き起こしながらスカリエッティ達に突撃するが、その前にスカリエッティ達は転移する。

ーーーシュン！！

ーーードン！！

「クソオォォォォォォォーーーーーーーーー！！！！！」

スカリエッティ達に逃げられた事を知ったビクトリーグレイモンは地面に拳を叩きつけながら、空に向かって悔しさに満ちた叫びを上げ、オファニモン、アンティラモン、レリューも悔しげに顔を歪めてスカリエッティ達が居た場所を見つめるのだった。

ビクトリーグレイモン達が居る地点から数キロ以上離れた森の中。その場所には人間の姿に戻ったスカリエッティ、トーレ、セッテが存在し、持って来ておいた種類が豊富な大量の肉を黙々と食べ続けているアルカディモンを見つめていた。

ーーーガブガブッ！！

「ギィッ！！」

「ドクター、成功みたいですね。今までは私達に攻撃するほど文句を抱きながら食べていた肉を今は進んで食べていますよ」

「その様だねセッテ。これで漸く第一段階は終わったよ。次の段階

は究極体デジモンと決死の戦いを経験させる事だね」
「ウーノより既に究極体が存在している滅んだ管理世界の場所が報告されています」
「そうか。では、アルカディモンが食事を終え次第その世界に向かうとしよう。ウーノにも連絡して次の動きをしなければいけないからね。機動六課の動きも注視しなければいけない状況だ。君達も油断せずに自分達の実力を上げるのだよ」
『ハッ！！』
スカリエッティの言葉にトーレとセッテは即座に膝をつきながら頷き、スカリエッティはその様子に満足げに頷いて、肉を食べ続けているアルカディモンの背を見つめる。
ーーーガブガブガブッ！！
「フフフフッ、アルカディモン。君はもっと強くなれる。例え七大魔王デジモン達でさえも勝てない存在に！その時に魅せてくれたまえ！超究極体と呼ばれ恐れられている君の本当の力を私にね！！フフフッ、ハハハハハハハハハハハッ！！」
そうスカリエッティは歓喜に満ち溢れた笑い声を響かせ、自我を完全に手に入れ始めているアルカディモンを見つめるのだった。
地上本部レジアス中将の執務室。
今その場所には執務室の主であるレジアスの他に娘であるオーリ

ス、そして本来ならば機動六課隊舎で仕事をしている筈のはやて、ゲンヤの四人が集まり、はやて、オーリス、ゲンヤは険しい視線を執務椅子に座っているレジアスに向けていた。

「・・・・もう一度言って貰って良いですやろかレジアス中将？・・・・本気であの子を機動六課の部隊員に任命する気なんでしょうか？」

「・・・・残念だがコレはミッド行政府からの指示だ。ベルカの王族の直系である『アインハルト・ストラトス』を最前線で戦わせろだそうだ」

「おい、本気でそんな命令を出しやがったのかよ？ミッド行政府は？」

ゲンヤはそう怒りに満ち溢れた声を出しながらレジアスに質問し、レジアスは出来るだけ平静を保ちながら自身の執務机の上の乗っていた辞令書をゲンヤに差し出す。

それをゆっくりと受け取ったゲンヤは、はやてとオーリスにも見えるように辞令書を広げると、確かに行政府の判子が押され、アインハルトを機動六課に入局させろと言う内容が書かれていた。

その紛れも無い事実に辞令書を持っているゲンヤは思わず持っている紙を破り捨てそうになり、はやてとオーリスも怒りの余りに言葉を出す事も出来ずにいると、レジアスが説明し出す。

「一度親元に彼女を帰したのは間違いだった。彼女はベルカ自治領の人々を見張る役目を持った行政府の査察官に接触して、自分の正体を明かしたらしい。『自分が身代わりになるから、ベルカ自治領の人々の護衛を行う者を発見して欲しい』と言う事だ」

「クッ！！反対はしなかったんですか！？」

「自分の部隊に所属しているキャロの事を思い出せ八神ニ佐。キャロが機動六課で戦っている事は報道している事だ。同じ子供であるキャロを働かせて、何故彼女は駄目なのかと言われたら其処までだ・・・・本人さえも承諾している事なのだから此方が声を上げる事も出来ないのだ」

「それはつまり本当に彼女を犠牲にしろと言う事ですか。中将？」

「無論ワシも認める気は無い。実力が分からない者など、部隊に入れれば混乱を招くだけだからな。だからこそ、三日後に彼女に対する試験が行政府の人間も交えて行われる事になっている。彼女が勝てばベルカ自治領の人々には護衛者をつけられる。だが、彼女が負ければ護衛者無しで即座に開拓世界に放逐だそうだ」

「それは！？もう話し合いも無いと言う事ですか！？」

「その通りだオーリス。既に行政府は一刻も早くベルカ自治領の人間をミッドから放逐したいのだ。あのデジモン―メギドラモンが現れる事を行政府は恐れている。現れないと言う絶対の保障が在る訳ではないのだから当然だが、此処最近の相次ぐベルカ遺跡の消滅が更に拍車を掛けているのだ」

『グッ！！』

苦悩に満ちたレジアスの説明にはやて、オーリス、ゲンヤは僅かに困ったような声を出して顔を見合わせた。

急な行政府のベルカ自治領の人々放逐の決定の原因は、ブラックによるベルカ遺跡の破壊こそが元凶だった。例え人には直接的には

手を出してはいなくても、ベルカに関わる遺跡などの全てをブラックは破壊し続けている。
何時それが人間の手に伸びるかも知れない事に怯えた行政府は、一刻も早くベルカ自治領の人間を開拓世界に放逐しようと動き出したのだ。そんな時にアインハルトが自身の正体を行政府に明かしてしまった為に、行政府はアインハルトを利用して今回の急な行動に出たのだ。
例えアインハルトが勝っても負けてもベルカ自治領の人々放逐の結果は変わらないが、行政府自体が地上本部に出して来た条件は満たされている。後の責任は結果が飲めなかった地上本部の責任に行政府はするつもりだった。

「彼女が自分の正体を明かさなければ、もう少しで行政府との示談が成功していただろうが、彼女が事が知られてしまった今、もはや行政府が出して来た最初の条件を飲む以外に方法は無い」

「だがな。実力は未知数。更には子供ときて居やがるんだぞ？キャロは実戦も何度も越えて来た実力者で、リュウダモンって言う相棒も居やがるから何とかなったんだ。今まで普通の生活をしていたあのお嬢ちゃんじゃ、戦場なんて不可能だろうが」

「無論それも理解している・・・・だからこそ、三日後に行われる試験は、実戦を想定した試験と言う事が決定された」

「・・・・中将？まさか相手は？」

「お前の考えている通りだ八神はやて。彼女の相手はデジモン部隊の問題児中の問題児。そして唯一部隊の中で人間のパートナーがいないデジモンだ」

『ブッ！！』

レジアスの告げた事実にゲンヤとオーリスは同時に吹いた。
二人にはレジアスが告げた相手が誰なのか一瞬で理解出来た。何せ二人はそのデジモンにとんでもなく困らされた事が在るのだ。
それこそそのデジモンのせいで、キャロとリュウダモンが形振り構わずに究極体に進化する寸前にまで怒った事さえ在るほどの本当の問題児デジモンだった。

「おい、本気でアイツを表に出す気なのか！？」

「残念だが本気だ。それに此処のところ外に出られない為に奴の機嫌は最悪に近い状態だ」

「危険すぎます！アレが本気で不味いデジモンなのは、中将が一番に理解している筈です！」

「分かっている。だからこそ、彼女に現実を教えるのには打ってつけの相手だ。それに試験を行う場所は機動六課の訓練場所だ。万が一アレが暴れても、キャロとリュウダモンに八神はやて、そしてそのパートナーデジモンもいる。アレが暴れても充分に抑止出来る。八神はやて」

「ハイッ！」

はやてはレジアスの険しい声に思わず敬礼しながら返事をすると、レジアスは深く悩むような顔をしながら声を掛ける。

「三日後にワシも機動六課に向かう。その時に行われる試験の試験官は君に任命する。部隊長としてアインハルト・ストラトスを部隊

に入れても大丈夫か如何かを見極めろ。もし大丈夫だと判断したら彼女を部隊に入れるのだ。無論今回の試験には余計な感情は入れないように」

「・・・・了解しました」

レジアスの言いたい事が分かったはやては悩むような顔をしながらも頷き、四人は深く苦悩するように辞令書の中に入っていたアインハルトの顔写真を見つめるのだった。

超究極…その名はアルカディモン！後編（後書き）

次回予告

ベルカ自治領の人々を護る為に動いたアインハルト。

しかし、彼女が思っている以上にその道は険しかった。

機動六課で目の当たりにデジモンの力に絶望感さえも抱いてしまう時。

彼女は師と呼べる存在と邂逅する。

次回、漆黒の竜人と少女、『厳しき試練、アインハルトの師匠』

覇王の血を引く少女が再び出会うのは、多くの経験を積んだ漢だった。

厳しき試練、アインハルトの師匠　前編

機動六課の周りに存在している森の中。
その場所の一際大きな木下の地面には巨大な石が存在していた。
そしてその巨大な石は横に突然に動きだし、巨大な石の下に存在していた穴から銀髪の髪をした幼い頃のはやてに良く似た少女ー風華と体に包帯を巻いたアグモン、そしてアグモンと同様に体中に包帯を巻いて、頭にも包帯を巻いた青年ー大門大が現れ、辺りを警戒するように見回す。

「・・・・よし、誰も居ないな」

「みたいだな兄貴」

「まぁ、当然であろうな。今や栄華を極めていた聖王教会が滅んだのだ。幾ら本局とは言え、機動六課を監視している余裕など在るまい・・・・遂にオリジナルに魔法を撃ち込む時が来たようだ」

「あのな風華？俺達はそんな事の為に来たんじゃねぇだろう。詳しい状況を聞いて、デーモンの事とインプモンの事を伝えに来たんだろうが？」

「分かっておる大。だがそれでもオリジナルに魔法を撃ち込むのは兼ねてより決めていた事なのだ。幾らうぬとは言えこれだけは邪魔をさせんぞ」

『ハァ～』

風華の発言に大とアグモンは揃って溜め息をついた。

こうなる事はこの場所に来る前から大とアグモンは分かっていた。本当は大とアグモンだけで機動六課に来る予定だったのだが、直前に風華も飛び込んで来たのだ。
理由は風華の宣言どおり、オリジナルであるはやてに魔法を撃ち込む為だった。風華は別にはやてに対しては怨みは無い。だが、それでもけじめをつける為に風華は、はやてに魔法を撃ち込まなければ気がすまないのだ。だからこそ、大とアグモンが機動六課に向かう事を知った時に琴乃とリシアを差し置いて風華は大とアグモンと一緒に機動六課にやって来たのだ。
因みに風華に出し抜かれた事を知った琴乃とリシアは怒り狂い、デーモンとの戦いでの怪我の治り具合を試すと言う理由を使って、ディーアークを持っていないフェイトと一緒に魔法訓練をしている。

「まぁ、とにかく一応は警戒して隊舎に向かうぞ。俺達は本局の連中には見つかる訳にはいかないんだからよ」

「おう！分かってるぜ、兄貴」

「言われんでも分かっておる（待っていろオリジナル。我のけじめの為に犠牲になって貰うわ！）」

大の言葉にアグモンと風華はそれぞれ答えながら、穴の中から出て遠くに見える機動六課隊舎へと警戒しながら進むのだった。

ーーーゾクッ！！

「ん？・・・何やろ？今の悪寒は？」

機動六課通路内部で地上本部から戻って来ていたはやては、突然に自身の体を襲った悪寒に身震いした。
何故だかは、はやてには分からなかったが、途轍もなく自身に危機が迫っているような予感がするのだ。
その元凶までは流石に分からないが、警戒だけはして於いた方が良いと考えながら再び通路を歩き始め、思わず溜め息を吐いてしまう。

「ハァ～、ほんまにどないしたらえぇんやろう？・・・機動六課に入れないとベルカ自治領の人々は護衛無しで開拓世界に放逐・・・・恨むでアインハルトちゃん」

はやてが悩んでいるのは地上本部での出来事だった。
アインハルト・ストラトスを部隊に入れないと、ベルカ自治領の人々は無防備のまま開拓世界に放逐されてしまう。
はやてとしては聖王教会の関係者はともかく、ベルカ自治領の罪の無い人達は護りたいと思っている。だからこそ、レジアスと共にミッド行政府への説得を頑張っていた。
しかし、既に状況は、はやて達が最も恐れていた状況に向かってしまっている。確かに開拓世界は危険な場所だが、それ以上にはやて達が恐れているのは本局の行動だった。
一度デジモンの評判が上がった時に第二十管理世界を犠牲にして本局はデジモンの評判を再び貶めた。
その行動を考えれば再び上昇して来ているデジモンの評判を貶める為に再び本局は何かを行う。そしてそれの対象になる可能性が高いのは開拓世界の放逐されたベルカ自治領の人々が最も高かった。
もちろんその事は地上本部に居る局員の誰もが理解していた。だからこそ、はやて達はミッド行政府を説得しようと動いていたのだが、今回のアインハルトの行動ではやて達が最も恐れている状況になる可能性に高くなってしまった。

「・・・・・・如何考えてもあの子がデジモンに勝てる可能性はゼロや・・・・例え歴史に名を遺す“覇王”の記憶を持った直系とは言え、それはあくまで人間相手の話。デジモンは人間以上の力を持った規格外の生物やから、まともな戦闘を行った事もないあの子が勝てる可能性はほんまにないわな・・・・どないしたらえぇんや？」

そうはやては心の底から悩みながら通路を歩いていると、別の通路から漸く怪我から復帰して機動六課に戻って来たシャマルが僅かに焦りを覚えながらはやてに声を掛ける。

「アッ！はやてちゃん！丁度良かったわ・・・・実はあの人が漸く意識を取り戻したのよ」

「ッ！それはほんまやろな？シャマル」

「えぇ、とにかく直接会って話を聞いてあげてね」

「そうやな。確かに状況を教えて於いた方が良いから向かうわ」

シャマルの言葉にはやては頷き、二人はそのまま通路を歩いて医務室へと辿り着く。

そして医務室に辿り着くとシャマルは僅かに溜め息を吐きながら中にはやてと共に入り込み、一つのベットの上で体中を包帯でグルグル巻きにされているレオルモンをはやては発見する。

「バンチョー、いえ今はレオルモンさんやった。意識を取り戻したんですね？」

「あぁ、世話になっている。本来ならばブラックウォーグレイモン

達の下で治療を行うべきなのだろうが、退化してレオルモンになったとは言え俺がこの地を離れるのはこの不味いからな。大達に状況を伝えねばならんし」

レオルモンはそう言葉を言うと、ゆっくりと四肢に力を込めて立ち上がろうとする。

その様子を見たシャマルとはやては即座にレオルモンを止めようと手を伸ばす。

幾ら意識が回復しているとは言え、レオルモンがその身に負ったダメージは普通のデジモンならばデジタマに戻っていても可笑しくないほどのダメージだ。レオルモンだからこそ成長期までの退化で済んだに過ぎないのだ。

その事を理解しているシャマルとはやては、何とかレオルモンが大達の下に向かうのを止めさせ、現状についてをはやてが説明し終え、レオルモンは僅かに不快そうに顔を歪める。

「・・・・気に入らん話だ」

「まぁ、確かに子供を犠牲にする話ですから、バンチョーレオモンさんには納得が…」

「其処ではない。俺が気に入らんと言ったのは、その少女、アインハルトだったか？その娘には過去の人間の記憶が宿っていると言う話だ」

「何で其処が気にいらないと思うですか？」

「これはあくまで俺個人の考えだ。己の想いを遂げられるのは己でしかない。例え記憶や感情などが伝わっていてもそれはその時その場にいた者ではない。だが、アインハルトと言う娘はそれを遂げよ

うとしている。それは言い方が違えば、己を捨ててイングヴァルトと言う男になろうとしている事だ。確かに無念の想いを晴らそうとする想いは間違ってはいないだろう。だが、記憶と感情に囚われ続ければ最終的にその娘は“壊れるぞ”」

『ッ！！』

バンチョーレオモンの険しい言葉にはやてとシャマルは目を見開きながら顔を見合わせた。

しかし、同時にバンチョーレオモンの告げた可能性はかなり高いと言う事実に思い至る。

アインハルトは幾ら“覇王”の記憶を持っているとは言え九歳の少女でしかない。その歳の少女が凄惨と言われていたベルカ戦争の記憶を途切れ途切れとは言え見続ければ、最悪の場合はイングヴァルトの記憶に侵食されアインハルトの精神は二つの精神のぶつかり合いで精神崩壊を起こす可能性が高いのだ。

今回のアインハルトの行動もそれに関係している可能性が高い。自分が犠牲になる事でベルカの民達を救えるならばと言う考えを持ってアインハルトは行動してしまったのだ。

「例外を除いては子供の精神は脆弱だ。其処に完成された精神が入り込めば、どちらの精神が侵食されるかなど分かるだろう？」

「・・・・よう分かりましたわ。それで如何したら良いんですやろうか？このままだと確実にあの子は試験で落されます。相手はただでさえレジアス中将が結成したデジモン部隊の問題児。成熟期クラスとは言え強敵みたいですから」

「試験まで今日を入れて三日後。その娘が此処に訪れるのは明日か・・・・たったの二日、いや機動六課の訓練内容を見るとすれば一日。

その短時間で強くなり成熟期デジモンに勝てる可能性はほぼゼロだ。元々の実力がどれほどなのかも分からん状況では戦い方を教える事も出来ん。パートナーのデジモンが居る訳でもない・・・・・難しい状況だ。せめてその娘が俺が居たデジタルワールドに隣接していた地球の人間だったならば僅かながらも可能性は在ったのだが」

「と言いますと何か短期間で強くなる方法が在ると言う訳ですか？」

「あぁ・・・・・だが、それはこの世界、いや此方の次元世界の人間では無理だ。今まで誰一人としてその力を発現させた人間は居ない。現に究極体への進化を会得している者でさえも誰一人として発現させていないのだ・・・・・いや待て？」

「どないしました？」

急に何かを考え込むような顔をしたレオルモンにはやては疑問の声を上げるが、レオルモンは構わずに何かを考え込み続ける。

その様子にはやてとシャマルが困ったような顔をして顔を見合わせていると、医務室の扉が開き、顔色を真っ青に染めたリインが医務室の中に飛び込んで来る。

「はやてちゃーーん！！大変です！！」

「どないしたん？」

「そうよリインちゃん？一体如何したの？」

「今大門大さんとアグモンに、はやてちゃんに良く似た女の子が機動六課にやって来たんですよ！？」

「は、はやてちゃんに似た女の子！？ま、まさかそれって！？」

リインの説明にシャマルは一気に顔を青ざめさせた。

はやてに良く似た少女と言われて思い浮かぶのは一人しかない。管理局がはやての遺伝子から生み出した対デジモン用の人造魔導師。

その事を知っているシャマルは慌ててはやてに顔を向けるが、はやてはシャマルと違って何も慌ててはいなかった。

寧ろ来るべき時が遂に来たとはやては思っていた。どんな理由を述べてもその少女が生まれる原因を生み出した元凶には、はやても存在している。本局が勝手に生み出したからと言う言い訳をはやてはする気は無い。

憎まれているのかまでは、はやてには分からないが、それでも直接話し合う時が遂に訪れたのだと覚悟を決めながらはやては立ち上がり、リインに顔を向ける。

「それで大さん達が訪れた理由はやっぱりベルカ自治領での出来事を詳しく聞く為やろ？」

「そ、それも、もちろん在るみたいですけど！大変な事が起きたらしいんです！七大魔王デジモンのデーモンが覚醒したらしいんですよ！！」

『ッ！！！』

リインが告げた事実にはやて、シャマル、レオルモンは目を見開きながら驚愕した。

七大魔王のデーモン。それは大達が全力で護っていたデジタマに封印されていた存在。

その事をはやて達はもちろんレオルモンも知っている。はやて達地上本部の者達からすれば、何が何でも覚醒させる事だけはさせた

くはなかった。
ただでさえ既にルーチェモンを除いた七大魔王デジモンの三体は覚醒しているのだから、これ以上七大魔王の称号を持つ者が敵に回る事だけは避けたかった。
しかし、デーモンは覚醒してしまった。倉田達の策によって完全ではないとは言え蘇ってしまったのだ。
現状が更に悪化している事を理解したはやては、即座にリインに命じて大達を医務室に連れて来るように命じる。

そして数十分後。非常事態が起きた事を理解したはやては、大達を医務室に招きいれ、レオルモンの加えて互いに状況を説明しあっていた。
互いに起きた現状にそれぞれ顔を険しくし、大とアグモンはベットの上で包帯を巻かれながら横になっているレオルモンに顔を向ける。

「・・・・・本当にバンチョーレオモンなのか？」

「あぁ、見ての通り今はレオルモンになってしまったがな。しかし、俺が居ない間に其方も大変な状況になっていたようだな？」

「すまねぇ・・・・倉田の策に嵌ってデーモンを覚醒させちまった」

「俺達がもっとしっかりしていれば・・・・・本当にすまねぇ！」

大とアグモンはその場に土下座せんばかりに、はやて達に深々と頭を下げた。
大とアグモンはデーモンの覚醒は自分達の迂闊な行動のせいだと思っていた。もっとしっかりと現状を理解していれば、倉田の策に嵌る事もなかったかもしれない。

あの時にそんな余裕など無かったとは言え、まんまと倉田の策に再び嵌ってしまった事を大とアグモンは深く後悔していた。
しかし、はやて、シャマル、レオルモンは大達には何の落ち度も無いと思っている。
寧ろ七大魔王デジモン二体と充分な戦力も無く連戦して生き残ったのだから、改めてはやてとシャマルは大とアグモンの戦闘力に感心していた。

「顔を上げて下さい大さん。少なくとも今回は相手の方が上手やっただけですから・・・・それに悪い事だけやないですから。ブイモン君が蘇ってくれたし、フェイトちゃんも不完全ながらも力を取り戻した。それにゲート、いえダークタワーの隠された機能も明らかになったんですから」

「うむ、それだけでも充分な戦果だが、更には七大魔王の一体一暴食のベルゼブモンがお前達の下にいるのだからな」

「って言っても、今はレオルモンと同じで退化してインプモンになっちまっているがな」

「あの？大丈夫なんですか？相手はルーチェモンの所に居たデジモンですよ？もし、裏切ったりしたら」

「あぁ、それは絶対にねぇから安心してくれ」

「俺も同感だぜ、インプモンは絶対にルーチェモンの所には戻らねぇよ」

シャマルの質問に大とアグモンは迷う事無く断言しながら答え、医務室の壁に寄り掛かっている風華も無言で頷く。

その迷いの無い大達の断言にシャマルとはやては首を僅かに傾げる。
相手は退化してしまったとは言え、七大魔王デジモンとして恐れられているデジモン。その上大達と死闘を行った相手なのだから普通ならば警戒する。
しかし、大とアグモン、そして風華はインプモンの事を信用していた。二度とインプモンが人を傷つけたりする事をする筈は無いと確信しているのだ。
特に拳で語り合った大、アグモン、風華は尚更にインプモンが再びルーチェモン達の下に戻る可能性は無いと確信している。

「インプモンは信用出来るぜ。敵として現れたのだって、倉田達に操られていたからだし、封印されていたのも如何も自分から望んだから見たいだからよ」

「何？如何言う事だ、大？」

「詳しくは俺も分からねぇけどよ。どうもインプモンが居た世界のデジタルワールドには『デ・リーパー』って言う危険な奴が居るらしいんだ」

「そいつ等は最終的には退化させて危険性を抑えたらしいんだけど、消滅した訳じゃないからまた現れた時の為にインプモンは『デ・リーパー』って言う奴と戦う為に自分から封印されたらしいんだ」

「『デ・リーパー』・・・・・そう言えば昔、英とデジタルワールドを旅している時にそのような存在の話を聞いた事が在るぞ」

「本当か！？」

「あぁ、とは言っても俺も詳しくは知らん。だが、その存在に対してはロイヤルナイツ達でさえも恐れていた。あのイグドラシルでさえも決して触れてはならん七大魔王以上の禁断の存在だと告げていた筈だ」

『ッ！！』

レオルモンが告げた事実に大達だけではなく、横で話を聞いていたはやてとシャマル、リインも息を呑んだ。

七大魔王以上に危険とされている存在が存在していた。それが事実だとすれば由々しき事態になる。

万が一その存在が敵として現れれば世界が全て滅んでしまう可能性が存在している。その事に思い到ったレオルモンを除いた全員が顔を僅かに青ざめさせるが、レオルモンはその考えを払拭させるように首を横に振るう。

「最も『デ・リーパー』が目覚める可能性は限りなくゼロに近いだろう。アレに対しての知識はルーチェモン達も恐らく持っている。倉田一人ならば目覚めさせても可笑しくはないが、目覚めさせようとした瞬間にルーチェモンが倉田を計画など無視して殺す筈だ」

「ちょっと待って下さい、レオルモンさん？・・・・此処まで大規模な計画を緻密に練っていたルーチェモンが計画を無視してまで復活を阻止させるちゅう事は、『デ・リーパー』って存在はそれだけ危険と言う事ですか？」

「そう思って貰って構わんぞ。目覚めれば全てを消し去るらしいからな。さて話は戻すが、今回の件でダークタワーをばら撒いている連中の正体も分かった」

「アルケニモンにマミーモン。その二体が各管理世界にダークタワーをばら撒いている張本人。その上本人達が近くに居たらデジモンの通常進化が封じられる・・・・実力はどない程度何ですやろか、大さん？」

「俺達は直接は戦ってねぇから分からねぇけど、多分完全体クラスだろうなぁ」

「俺もそれぐらいだと思うぜ。だけど、七大魔王の誰かが近くにいて、しかもダークタワーが在ったらちょっと不味い相手だぜ」

「それは仕方が在るまい。デジモンにとって進化は絶対に必要な力だ。それが封じられてしまえば戦況が不利になるのはやむ終えまい。更にダークタワーには魔導師の力も抑えてしまう機能も宿っているのだ」

「警戒だけはしておくべきって事ですわな。現れた時には警戒だけはしておくように部隊のメンバーや地上本部は伝えておきます」

「頼むぞ」

レオルモンはそうはやてに声をかけると、次の問題である現在ベルカ自治領の於かれている状況を大達に説明し、アインハルトについても同時に大達に説明し出す。

そして聞き終えた大とアグモンも僅かに顔を不快そうに歪め、風華は僅かに呆れたような顔をした。

アインハルトの行動は軽率としか風華には思えなかった。自身や琴乃、リシアならばともかく、詳しくデジモンの力も分からない現状で挑むなど命を捨てる事に近い。

その上行われる試験は限りなく実戦に近い形で行われる。つまり

相手が戦闘不能になるか、敗北したと宣言しない限り試験は続けられる。
試験でありながらも限りなく実戦に近い形の戦い。試験で命を失っても事故で済まされる事になる。

「全く塵芥も良いところの小娘だ。それでその試験の審査官は貴様なのであろう？オリジナル？」

「その呼び方はやめて欲しいんやけど？」

「フン、我が如何貴様を呼ぼうと構わんであろうが・・・・それよりもだ？まさかベルカ自治領の愚か者どもを護る為にわざとその小娘を合格させる気ではないであろうな？」

「そんな気は全く無いで。私はあくまで正当な審査官として動くつもりや。実力が無ければ認める気は無い」

風華の質問にはやては迷う事無く断言した。
確かにベルカ自治領の人々を助けたいとはやては思っている。だが、部隊の足手纏いになる程度の実力しかないのならば、はやては迷う事無くアインハルトを切り捨てる。例え戦力になる可能性を秘めていてもはやては切り捨てると断言する。
今機動六課に欲しいのは即座に戦力になれる実力の持ち主。ヴァイスのように直接的な戦力ではなくても戦略的に有利になれる実力ならば、はやても認めるが、戦術的にも戦略的にも戦力に即座にならなければアインハルトをはやては切り捨てるつもりだった。
その覚悟がはやての目に宿っている事を確信した風華は面白そうに口元を笑みに歪める。自身のオリジナルが覚悟を秘めた者だと言う事が嬉しいのだ。
大とアグモンもはやての迷いの無い覚悟に僅かに驚いた顔をする

が、即座にはやての覚悟を感じ取り、感心したようにはやてを見つめていると、レオルモンが大に声を掛ける。

「大。お前に頼みたい事が在る」

「あん？珍しいな。まぁ、別に構わないぜ。レオルモンには色々と借りが在るから、俺に出来る事だったら何でもやってやるぜ」

「うむ、これは恐らくお前にしか出来ない事だ。失敗する可能性が高いが賭けて見る可能性は在る」

そうレオルモンは大に声を掛けると、大に頼みごとを説明し、その場にいる全員がその内容に驚愕するのだった。

翌日の早朝。その時間帯にキャロとリュウダモン、フリード、そしてはやてのパートナーデジモンであり、人間に変化しているレナが隊舎の入り口でアインハルトが来るのを待っていた。

本来ならば他のＦＷメンバーであるスバル、ギンガ、エリオとキャロ、リュウダモンは早朝訓練を行う予定だったが年齢が近い相手の方が話しやすいだろうと判断したはやてが、キャロとリュウダモン、フリード、そして自身が最も信頼しているレナにアインハルトの六課内部の案内を頼んだのだ。

「そろそろ来る時間ですね、レナさん」

「そうだな。だが、正直に言えば彼女が戦力になる可能性は限りなく低い」

「そりゃそうだろうな。しかも今日の訓練内容。部隊長は本気で現実を教える気だぜ。失敗したら逃げ出すかもしれないのによ」

「仕方が在るまい。遅かれ早かれ、デジモンの力は目の当たりにする事だ。試験当日にデジモンを目にするよりも、早い内に現実を見せて覚悟をはやては決めさせる気なのだろう」

「やっぱそう言う考えか」

「・・・・」

「キュル～」

レナの説明にリュウダモンは険しい声を出し、キャロとフリードも険しく顔を歪めた。

確かに試験当日にデジモンを目にしてその力を知るよりも、早い内にデジモンの力を教えて覚悟を決めさせた方が良いだろう。だたでさえアインハルトが戦う相手のデジモンは問題児デジモン。

恐らく試験では確実に血が舞う事になるとキャロ、リュウダモン、フリードは確信していた。三人ともそのデジモンの危険性を理解している。もはやそれは未来予知に近い確信だった。

「ハァ～、成長期の頃は大人しかったんですよ」

「それが成熟期に進化したら本気でヤバイ奴になっちまったからな。ブラックウォーグレイモンほどじゃないけど、アイツもかなりヤバイぜ」

「アギャーー！！」

「そんなに危ないのか例のデジモン？」

「はい」

「あぁ、危ないぜ。なんせアイツは…」

ーーーブウゥゥゥーーーン！

「ムッ！来たようだな」

リュウダモンの言葉に覆い被さるように響いた車のエンジン音にレナが顔をエンジン音が響いた方を見てみると、一台の車が走って来ていた。

そのまま車はレナ達の前で止まり、前の席から険しい顔をしているオーリスが降りて来て、レナ達に敬礼を行うと、レナ達も即座に敬礼をし返す。

「例の人物を連れて来ました。私はこれから再び地上本部で次の任務先について会議が在るので戻らねばなりませんが、彼女の案内は大丈夫ですね？」

「ハッ！この場にいるメンバーで案内をするように部隊長から命じられています。先ずは隊舎内を案内し、部隊長に面会、その後は部隊で行われている訓練を直に見て貰う予定です」

「なるほど、では彼女を引き渡します。出て来なさい」

ーーーガシャ！！

オーリスが車の後部座席に声を掛けると、車の扉が開き、内部か

ら碧銀の髪に紺色の右目と青色の左目の虹彩異色の少女ーアインハルトが自身の荷物と思われる物を入れていると思われるカバンを肩から提げながら出て来た。
　それと同時にアインハルトはレナ、キャロ、リュウダモン、フリードに向かって頭を深々と下げる。

「アインハルト・ストラトスです。宜しくお願いします」

「機動六課部隊長の秘書をしているレナ・セフィルだ」

「私はライトニング分隊所属しているＦＷメンバーのキャロ・ル・ルシエです」

「そのパートナーデジモンのリュウダモンに、使役竜のフリードだぜ」

「キュルー！！」

　アインハルトとレナ、キャロ、リュウダモン、フリードはそれぞれ自己紹介を行った。
　それを確認したオーリスは深く頷きながら、リュウダモンに車のトランクを手で示しながら命じる。

「他の彼女の荷物は車のトランクの中に入れてあります。リュウダモンはそれを彼女が使う予定の部屋に運びなさい」

「了解だぜ！」

「あ、あの私が自分で運び…」

「そんな時間は貴女にはありません。貴女はこれから機動六課内部の案内され、最終的に部隊長に会い、そのまま六課の訓練内容を見る予定なのです。試験まで残り二日。無駄に時間を過ごしている暇は貴女には存在していませんからね」

「・・・・はい、分かりました」

オーリスの説明にアインハルトは顔を僅かに俯かせながら頷いた。アインハルトには確かに時間など無い。試験まで残り二日。その後にはデジモンとの実戦に近い試験が待っているのだ。その事を理解しているオーリスは、はやての考えどおりにアインハルトには現実を知って貰うつもりだった。

そしてリュウダモンを除いたレナ、キャロ、フリードに案内されながら隊舎内に入って行くアインハルトを確認すると、オーリスは即座に車のトランクから荷物を運び出そうとしているリュウダモンに声を掛ける。

「リュウダモン。彼女は貴方の目から如何なの？」

「・・・・難しいぜ。確かに歳の割にはかなり鍛えているみてぇだけど、アイツに勝てる可能性は限りなく低いぜ。何よりも体格が問題だぜ」

「やはりそうなのね・・・・そう言えばキャロが使っていたデバイスの中に体を大人化させる強化魔法が在ったわね」

「あぁ、アレならちゃんとキャロが大切に持っているぜ。何せアレはキャロの最初の魔法の師匠からの贈り物だからな」

「なら、その魔法を彼女に教えて上げなさい」

「うん？随分とあのアインハルトって娘に肩入れするんだな？オーリスの姉さんよ？」

「・・・・失敗すれば試験であの子は死ぬわ。昨日中将の報告からゲンヤ副部隊長とデジモン部隊の隊舎に行ったのだけど・・・・アレの機嫌は本気で不味いレベルに到達していたのよ。訓練機械が張り切っていたアレに壊されていたわ」

「ブゥッ！！マジかよ！？」

「本当だから困っているのよ。ハァ～本当に困ったわ。また部隊の費用がかさんでしょうがないと中将が困っていたわ」

オーリスはそう本当に困った顔をしながら言葉を呟いた。

このままでは本当にアインハルトは試験で死んでしまう可能性が高いのだ。流石にオーリスはそんな事になられては困る。何せ試験当日には違反は行っていないかの確認をする為に行政府の人間も来る事になっている。

そんな重要人物が来る場所で子供の殺人現場を見せる訳にはいかない。幾ら試験が実戦に近い形で行われる事になっていても、流石に九歳の子供が何も出来ずに一方的にデジモンに嬲られれば折角上がって来ているデジモンの評判が再びマイナスになってしまうだろう。

その事に思い至ったリュウダモンはトランクの中に在った荷物を背中に背負いながらオーリスに質問する。

「なぁ？アイツじゃない奴にしたら如何なんだよ？」

「残念だけど他のメンバーは全員各都市に派遣される事が決まって

いるわ。今の状況は秘密部隊を表に出すには最高の状況だから、デジモンの評判を上げる為に動かす予定になっている。今回の急な試験は本当に想定外の事態だったのよ」

「まぁ、確かにそうだろうな・・・・分かったぜ。何とか後二日で少しはデジモンと戦えるようにしてなって貰うぜ。何か部隊長達も動いているみたいだからよ」

「えぇ、お願いするわね」

そうオーリスはリュウダモンに頼むと、そのまま車の中に乗り込み、地上本部へと向かって行く。

それをリュウダモンは荷物を背負いながら車が見えなくなるまで眺め、そのまま隊舎の中へと戻って行くのだった。

厳しき試練、アインハルトの師匠　後編（前書き）

ちょっとスランプに嵌ってしまいました。
更新がこれからも遅れるかもしれませんが、絶対に書く事は止めませんのでご安心ください。

厳しき試練、アインハルトの師匠　後編

機動六課隊舎内部通路。
入り口でアインハルト合流してからレナ、キャロ、フリードはアインハルトに機動六課内部を案内していた。

「此処が医務室だ。怪我をしたらならば、此処に訪れて医務官に治療を受けるといい」

「はい」

レナの説明にアインハルトは場所を覚えながら頷いた。
それを確認するとレナは前に向かって再び歩き出し、アインハルトもキャロとフリードと並びながら歩く。
静かに三人と一匹は通路を進んでいたが、フッとレナは背後にいるアインハルトに気になっていた事を質問する。

「アインハルト・ストラトス・・・君の両親は如何だった？」

「・・・・・怒られました」

「そうだろうな。誰も凄惨な戦場に自分の大切な子供を出したいとは思わないだろう・・・・だが、もしかしたら明後日の試験で全てが終わるかも知れないぞ。聞いていると思うが、お前の相手は凶暴なデジモンだ。戦闘が可能だと判断されれば嫌でも試験は続けられる。相手のデジモンが敗北宣言しない限り戦い続ける事になる」

「・・・・覚悟の上です・・・・自治領の人々を護れるのならば、この身を差し出します」

「でも、貴女の相手はそんな事は絶対に気にしないよ・・・・だってあの子は…」

「キャロ。それ以上はルール違反になるぞ」

「アッ！・・・・」

レナの言葉にキャロはフッと気がついたように声を上げ、静かに口を噤んだ。

今回の試験では互いに相手に関する情報は秘匿される事になっている。戦う相手に関しては試験当日にしか明かされないのだ。

本来ならば事前に情報を教えて対策を練るべきなのだろうが、今回の試験はより実践的なものになるようにされている。実戦では不足の事態が起きる事が多い。

それに如何対処するのかも試験課題にされているのである。

機動六課に今欲しいのは実力はもちろんだが、どんな事態が起きても即座に対処出来る人材。

その事も考慮して今回の試験は完全に実践形式で行われる事が決定されているのだ。

もちろんその事はアインハルトも知っている。自身が受ける試験は魔導師のランク試験で言えばＳＳランクに匹敵する難しい試験になっている事を。

「一応お前の対戦相手のデジモンもお前に関しては詳しくは話してはいない。だが、相手のデジモンの実力はかなりのものだ。死なないように気をつけるんだな」

「・・・・勝ってみせます。そして自治領の人々の安全を確保してみせます」

「・・・・・頑張るんだな」

アインハルトの言葉にレナは素っ気無く答え、そのまま前へと進み部隊長室へと向かい出す。

キャロ、フリード、アインハルトはその後を無言でついて行き、部隊長室の前に辿り着く。

ーーーコンコンコン！！

「八神部隊長。キャロ・ル・ルシエ一等陸士と共にアインハルト・ストラトスを連れて来ました」

「入ってええで」

「失礼します」

ーーーガチャン

部隊長室の中から響いて来たはやての声にレナは頷き、部隊長室の中へとアインハルト達と共に入り込む。

部屋の中には自身の執務椅子に座りながら仕事をしているはやてが存在し、レナはアインハルトにはやての前に行くように手で示す。

アインハルトはそれを確認するとゆっくりと執務机の前に移動し、はやてに深々と頭を下げる。

「アインハルト・ストラトスです。宜しくお願いします」

「挨拶は別にええで。もしかしたら明後日にはお別れするかもしれへん。合格出来たら本当の挨拶をしようか？」

「はい・・・・それで私はこれから機動六課の訓練を見学するのですか？」

「そうや。対戦相手のデジモンに関する情報は教えられへんけど、デジモンの強さは知っといて損はない。聖王教会で見た戦いは規格外やったから参考には絶対にならへんしな。訓練は午後から行われる予定や。それまでは自分の部屋に手荷物を置いて食堂に来るメンバーとでも話してるんやな」

「分かりました」

「覚悟を決めておくんやな。レナにキャロ、部屋への案内は頼むな」

「了解した」

「・・・はい！」

はやての声にレナと部隊長室の隅をフリードと共に睨んでいたキャロは頷き、アインハルトを連れて部屋を出て行った。

それをはやては確認するとキャロが見ていた場所に目を向け、同時に部屋の隅の風景が一瞬にして変わり、バリアジャケットを纏った風華と険しい顔をしている大とアグモンが姿を現す。

ーーーシュン！

「で、どない思います？」

「・・・如何って言われてもなアグモン？」

「・・・・俺は難しいと思うぜ兄貴」

「戦いなどした事もない塵芥だ。“覇王”とか言う者の記憶を持っていても所詮は塵芥でしか在るまい。共に居たピンク色の髪の娘は気がついていたにも関わらずに気がつかなかったのだからな」

大、アグモン、風華はそれぞれアインハルトの印象を答え、はやては右手で額を押さえた。

アインハルトが部屋に入って来る前から、大達は部屋の中に風華の幻覚魔法を使って隠れていたのだ。

それも在る意味では、はやてが独断で行った試験の一つだった。風華が使用した幻覚魔法を覚えたての魔法で在る為に僅かに風景が歪む時が存在している。

現にアインハルトが入って来てから何度も風景が歪んだりして、事情を知っていたレナはともかくキャロとフリードは不審な視線を向け続けていた。だが、アインハルトは緊張していたのかそれに気がついていなかったのだ。

「ハァ〜、緊張し過ぎやな」

「まぁ、仕方ねぇだろう。喧嘩も何にもした事がねぇんだろう？」

「そうらしいんです・・・・本当にレオルモンさんの考えが旨くと思いますか、大さん？」

「俺に聞かれても困るぜ。何せレオルモンが言っていたやり方なんざ、一度も試した事がねぇんだからよ」

「そうだぜ」

「やっぱり完全な賭けちゅうことですか・・・・旨く行ってくれれば良いんやけど」

そうはやては僅かに悩むような声を出しながら一枚の日本語で書かれた資料を取り出し、大に手渡す。

受け取った大はアグモンと風華と共に資料を見てみると、明後日にアインハルトが戦う予定のデジモンの情報が詳しく記されていた。

そのデジモンに関する情報を見た大とアグモンは僅かに顔を険しくし、はやてに僅かに視線を向ける。

「よりにもよってあのデジモンかよ」

「コイツは本当にやばいぜ。完全体でも苦戦する奴じゃねぇかよ」

「やっぱりそうなんですか・・・・成長期の時は本当に大人しいデジモンだったらしいんですわ」

「だとしたら何か理由が在ってコイツに進化したんだろうな」

はやての言葉に大は納得したような声を上げて更に詳しく資料を読んでみると、例のデジモンが出した被害が書かれていた。

店先の看板の崩壊から始まり、悪ければビルを二つ倒壊させた事も在るらしい。場所が廃棄都市区間だった事が幸いだとされているが、資料から見れば人間がいても構わずに倒壊させていた可能性が在るとも書かれていた。

その暴虐ぶりに大とアグモンは何処か納得したように深く頷く。

二人とも例のデジモンと同じ種類のデジモンとデジタルワールドで会った事があるのだ。

同種族でも大人しい者はいるが、資料の内容から察するに完全に危険な方の性格になっているらしい。

「って言うか人間のパートナーはいないのか？」
「居ないんですよ。何度も性格が近いか、相性が良さそうな局員を引き合わせていたそうなんですけど、最終的には失敗したらしく、結局パートナー無しで成熟期に進化して今の状態らしいんです」
「まぁ、パートナーっての一生の奴だからな。俺も兄貴以外にはパートナーは考えられねぇぜ」
「だよな。後はもうレオルモンが言っていた方法しかねぇか」
そう大は結論を出すとゆっくりと扉の方にアグモンと風華と共に歩いて行き、はやては祈るような想いを抱きながら外の光景を静かに見つめるのだった。

機動六課食堂。
今その場所には午前の訓練を終えたＦＷメンバーとアインハルトが楽しげな雰囲気を放って会話を交わしていた。
最初は戸惑っていていたアインハルトもスバルやギンガが積極的に声を掛け、今は何とかアインハルトも自身の事を自分から話すようになっていた。エリオ、キャロ、そして合流したリュウダモンも自身の事を少し話したりと、アインハルトとＦＷメンバーの関係は中々に良好だった。
「では、お二人はシューティングアーツと言う格闘技を？」
「そうだよ。お母さんがくれた資料を読んで一生懸命特訓したんだ」

「大変だったけど、楽しくも在ったわね・・・・そう言えば貴女も格闘技をやるみたいだけど、楽しい？」

「・・・・」

「ん？如何したの？」

突然黙ったアインハルトにスバルは疑問の声を掛け、ギンガ、エリオ、キャロも訝しげな視線をアインハルトに向けると、アインハルトは僅かに悩むような顔しながら声を出す。

「好きとか嫌いとか、そういう気持ちで考えた事はありません・・・・“覇王流（カイザーアーツ）”は私の存在理由の全てですから」

（これは完全に訳ありのようね。八神部隊長が頭を抱える訳が分かったわ」

ギンガはアインハルトの言葉に自身も僅かに頭を悩ませた。

確かに自分やスバルは必死にクイントが送ってくれた資料からシューティングアーツを学んだが、それはあくまで自分を鍛える手段として学んだ。存在理由とまでは流石には言わない。

それなのにアインハルトは迷いながらも“覇王流”は自身の存在理由だと告げて来た。

危険だとギンガは即座に判断する。戦い方に拘るのは間違ってはいないが、行き過ぎれば敗北に繋がる可能性が高い事をギンガは経験上学んでいる。

他のメンバーもアインハルトにそれぞれ差はありながらも眉を僅かに顰め、ギンガは優しくアインハルトに声をかける。

「アインハルトちゃん。これは忠告だけど、デジモンを相手にするなら先ず第一に必要な事が在るわ」

「何でしょうか？」

「相手の特徴を見切る事。そして自分が最も有利になれる戦いの場を作り上げる事の二つが一番重要ね。この二つが出来れば実力が上のデジモンでも倒せる可能性が出て来るわ。ただ何も考えずに自分の拳だけで倒せるなんて思うのは思い上がりよ。デジモンは人間を超える生物。それに勝つには力だけじゃなくて知恵も振り絞る事が大事なのよ」

（大さんは違うんですけどね・・・・そう言えば大さんとアグモン元気かな？）

デジモンとの戦い方を教えるようにアインハルトに声をかけているギンガの様子に、エリオは自身が出会った規格外の人物の事を思い出して内心で苦笑を浮かべた。

流石に大と同じ事をアインハルトに求めるのは無理だとエリオは内心で思いながら、それぞれデジモンとの戦闘についてを説明しているギンガ、スバル、キャロを見つめていると、フッと壁に掛かっている時計を見たリュウダモンが全員に声を掛ける。

「うん？・・・・おい、そろそろ訓練の時間だぜ。時間にうるせぇポーンチェスモンが今日の相手だから早めに向かった方が良いぞ」

「そうね。それじゃ行きましょうか」

「あの私は何処で訓練を見れば良いんでしょうか？」

「多分だけどはやてさんが護衛しながらの訓練所で直接見る事になると思うよ」

「そうですか」

スバルの説明にアインハルトは納得したように頷きながら立ち上がり、食器をギンガ達と共に片付け、訓練所に向かうのだった。其処でデジモンの力を思い知る事になるとも知らずに。

機動六課訓練施設。

その場所は他の部隊の訓練施設とは違い、空間シュミレータなどを使って擬似的な都市区間を作り上げていた。

そしてその場所に存在する道路上でバリアジャケットを纏い、シュベルトクロイツを持ちながらはやてはナイトチェスモンに今日の訓練では手加減無しで訓練を行うように頼んでいた。

「っという訳で今日は全力で訓練を行って欲しいんやけど」

「分かっている。オーリスから既に話は聞いているから問題はない。しかし、キャロとリュウダモン、フリードは如何するのだ？」

「キャロ達には後方からの支援を頼む予定やから安心してえぇで」

「それならば私が戦うのはギンガにスバル、エリオか・・・・・分かった。君の指示に従おう」

「ほんまにゴメンな。オーリス三佐が本当のパートナーやのに」

「気にしなくて良い。君とレナの事情は分かっているからな」

はやての言葉にナイトチェスモンは苦笑しながら答えた。

オーリスもナイトチェスモンもはやてがレナの存在を隠している事情を知っている。だからこそ、その件を責めるつもりは二人とも全く無い。

寧ろ逆にオーリスからすれば身内でも出来るだけ切り札を隠そうとしているはやての行動に好感を持てていた。

そんな風にはやてとナイトチェスモンが今日の訓練について話し合っていると、バリアジャケットを纏い、それぞれデバイスを装備したギンガ達とキャロから借りたのか訓練着に着替えているアインハルトがやって来た。

はやてはそれを確認すると全員が自分の前に並び終えるのを待ち、今日の訓練について説明し出す。

「それじゃ、全員集まったみたいやから今日の訓練について説明する。今日の訓練はナイトチェスモンとの模擬戦になる。訓練の終了はナイトチェスモンに決定打を与えるか、戦闘が続行出来ない状態にする事。キャロとリュウダモン、フリードは完全に今回は支援だけ頼むわな」

『はいっ！！』

「アインハルトちゃんは私と一緒に近くのビルから戦いを見学する」

「分かりました」

「それじゃ十分後に訓練開始。それぞれ策を考えるんやで」

『はい！！』

はやての言葉にギンガ達は頷き、ナイトチェスモンから距離を取って建物の影へと移動して行く。
それをはやては確認すると、アインハルトを腕の中に抱えてナイトチェスモンとギンガ達から戦う場から百メートルほど離れたビルの屋上に降り立ち、次々と空間モニターを自身とアインハルトの周りに出現させて行く。

「訓練はこのモニターで見て貰うわ。それと絶対にこのビルから離れたりしたらあかんで。死にたくなかったらな」

「・・・分かりました」

はやての脅すような声にアインハルトは僅かに恐怖を抱きながらも気丈に頷き、はやてはそれを確認すると険しい視線を離れた場所で巨大なダーツを構えているナイトチェスモンに向ける。

「ギンガ達から説明は聞いとると思うけど、基本的にデジモンの必殺技は一撃必殺。だから防御魔法とかは一瞬防げたら良いと思って行動する事が正解や。絶対に一撃を受けて反撃するとか考えたらあかん。デジモンの攻撃には毒を持っている奴も居るから」

「説明ありがとうございます」

「そろそろ始まるからその目で良く見ておくんや・・・・・私ら人間が一体何を敵に回してしまったのかを」

そうはやてがアインハルトに声をかけると、次の瞬間にナイトチェスモンが右手に持っている巨大なダーツを振り被りギンガ達が隠れた方向に向かって迷う事無く全力で投げつける。

「ビックダーーーッ！！」

ーーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ッ！！」

ナイトチェスモンが投げた巨大なダーツが幾つモノのビルを倒壊させる光景を目撃したアインハルトは目を見開いた。

目の前に広がった光景は完全にビルを幾つも倒壊させた攻撃。その光景をナイトチェスモンは簡単に作り上げた。あんな攻撃を連発されたら魔導師でも命が無いだろう。

アレではギンガ達が危険だとアインハルトは判断し、はやてに声を掛けようとするが、はやては気にせずにモニターを見つめる。

「まだ訓練は始まったばかりや。それにギンガ達があんな見え見え攻撃で倒せたら今頃機動六課はなくなっているやろな」

「えっ？」

はやての説明にアインハルトは疑問の声を上げてはやての見ているモニターを見てみると、ナイトチェスモンの背後からウイングロードを出現させ、その上を素早く駆けているギンガとスバルが存在していた。

ーーーーギュウゥゥゥゥゥーーーーーン！！

「行くわよ！」

「ＯＫ！！」

『ハアァァァァァァァーーーーー！！！』

「ムン！！」

ーーーガアァァァァーーン！！

自身の背後から忍び寄って拳を振り下ろしてギンガとスバルに対してナイトチェスモンは、再び出現させていた巨大なダーツを使って防いだ。

しかし、ギンガとスバルはそれを読んでいたのか即座に巨大なダーツに自身の両足に装着しているデバイスを乗せて、そのまま巨大なダーツの上を全速力で走り出す。

ーーーギュゥゥゥゥーーン！！

「クッ！！させるか！！」

ーーーブン！！

自身の武器の上を走って来るギンガとスバルを振り落とそうとナイトチェスモンはダーツを振り回した。

それによってギンガとスバルは吹き飛ばされるが、二人とも事前に作り上げていたウイングロードの上に危なげなく着地し、ナイトチェスモンの周りを撹乱するように動き回る。

ナイトチェスモンはその様子に険しく顔を歪め、二人の動きを注視するように視線を向けるが、フッとエリオが居ない事に気がつき、更に険しく顔を歪める。

（二人の動きから考えて私に対する本命はエリオか。今回はキャロ達は支援だけだから間違い在るまい。だが、一体何処にいるのだ？）

（さて、此処までは作戦通り。後は旨く相手を誘導すれば勝てるわ）

（チャンスは一度。絶対にものにしてみせる！）

ナイトチェスモン、ギンガ、スバルはそれぞれ内心で考えながら、相手の攻撃を避け続ける。

今回の模擬戦ではギンガ達が一撃でもナイトチェスモンに決定打を与えれば、その時点でギンガ達の勝利になる。

その事を理解しているナイトチェスモンは守りを固めるような動きを行いながらも、隙あらばギンガとスバルに攻撃を加える。ナイトチェスモンの一撃一撃に凄まじい威力が込められている事を知っているギンガとスバルはその攻撃を避けながらも、ナイトチェスモンと同じように僅かな隙を逃さずに攻撃し、三人は一進一退の攻防を繰り広げ続ける。

その影響で周りのビルが次々に砕けて瓦礫が舞い上がるが、ギンガとスバルはそれに対しても最小限の動きでかわし、自分達の隙を一切をナイトチェスモンに見せない。

その動きを見ていたナイトチェスモンはギンガとスバルが強くなったと心の底から思っていた。

最初にナイトチェスモンが二人に出会ったのは二年前。ゲンヤが二人を連れて来た時だった。

その時は二人とも自身が武器を振るうだけで簡単に倒せる相手だった。だが今は違う。今はギンガもスバルも僅かに油断すれば自身が倒されてしまうほどの実力を身につけている。

「（フッ、これが誰かの成長を見守る者の気持ちか・・・・・悪くはない）・・・・だが、まだ負ける訳にはいかんな！！」

ーードオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

『クッ！！』

突然地面に巨大なダーツを叩きつけたナイトチェスモンの行動によって舞い上がった衝撃波によってギンガとスバルは防御するようにシールドを前面に張った。

ナイトチェスモンはそれを目撃すると迷わずに上空に高く飛び上がり、地上で足が止まってしまっているギンガとスバルに向かって巨大なダーツを振り被る。

「これで終わりだ！！ビック…」

「猛きその身に、力を与える祈りの光を」

「ッ！！」

頭上から響いた声にナイトチェスモンが慌てて上を見てみると、本来の姿に戻っているフリードの背に乗ったリュウダモンに新たに得た槍型のデバイス―ストラーダを構えるエリオ、そして詠唱を行っているキャロの姿が存在していた。

それを目撃したナイトチェスモンは自身が嵌められた事を理解した。

スバルとギンガの目的は最初からナイトチェスモンを高くジャンプさせる事にあった。ナイトチェスモンは飛び上がれるとは言え飛行型デジモンではない。

それ故に飛び上がってからは落下するしかないのだ。その事を知っていたギンガ達はナイトチェスモンをジャンプさせるように動き回っていた。自身の周りにウイングロードを張り巡らされていたの

だから、ナイトチェスモンが其処から逃れるには空しかない。
そしてその先に本来の姿に戻ってエリオとキャロ、リュウダモンを背に乗せているフリードを待機させていたのだ。

「クッ！！ならば！！」

「させない！！ソニックムーブ！！」

ーーーシュン！！

ナイトチェスモンが今度は自分達に向かってダーツを投げつけようとしている事に気がついたエリオは即座にフリードから飛び降り、加速魔法も使用しながらナイトチェスモンに向かって落下していく。
しかし、ナイトチェスモンはダーツを投げるのを中断し、そのまま加速しながら向かって来ているエリオに穂先を構える。例え加速してしてもエリオのスピードはナイトチェスモンからすれば対処出来るレベル。わざとエリオが飛び出して来る動きを行ったのだ。
経験の少ないエリオならば確実に掛かると思っていたと思いながらナイトチェスモンはダーツの穂先をエリオに突き出そうとするが、その直前にキャロの更なる詠唱が響く。

「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に、駆け抜ける力を、ブーストアップ・アクセラレイションッ！！」

ーーービュン！！

「ハアァァァァァァァーーーーーーーー！！！」

「しまった！！」

キャロの詠唱によって空中で更に加速したエリオを目撃したナイトチェスモンは、己の失策に声を上げた。
しかし、エリオは止まる事無くナイトチェスモンが突き出そうとしていたダーツの穂先を避け、そのままストラーダの穂先に電撃を纏った魔力刃を生み出し、無防備なナイトチェスモンの胴体に叩き込む。

「一閃必中ッ！！メッサー・アングリフッ！！」

ーーードオォォン！！

「グハッ！！」

ーーードオオオオオオオオオオオン！！

エリオのメッサー・アングリフを胴体に食らったナイトチェスモンは苦痛の叫びを上げ、そのまま地上に激突した。
それと共にナイトチェスモンに一撃を加えたエリオは攻撃の反動を利用して空中で態勢を整え、そのままギンガが事前に作り上げていたウイングロードの上に着地する。
同時にナイトチェスモンは落下した地点で立ち上がろうとするが、その直前に体に鉄の鎖と青色と紫色のバインドが巻きつき、完全に動きが封じられてしまう。

ーーーガシィィィィーーーン！！

「・・・・・フッ・・・・私の負けだ」

『模擬戦終了。全員休んでえぇで』

体を拘束されながらナイトチェスモンが敗北を宣言すると同時にはやての声が響き、油断無くナイトチェスモンに構えを取っていたギンガ、スバル、エリオは安堵の息を吐きながら構えを解いた。

そしてその様子をモニターで確認したはやては、自身の横でナイトチェスモン達が模擬戦を行っていた場所を青ざめた顔をして見つめているアインハルトに顔を向ける。

アインハルトの胸の内にあるのはただ一つ。果たして自分がナイトチェスモンの攻撃を避けられるかと言う考えだけだった。

確かにナイトチェスモンの攻撃を避ける事だけを専念すればアインハルトでも何とかなる。だが、その時に生み出された瓦礫を避けられるかと問われればアインハルトは無理だとしか答えられなかった。

ただでさえ強力な攻撃力を秘めているナイトチェスモンの攻撃を一度でもその身に受ければ、確実に自分では戦闘不能になってしまう。拳を当てる事などもっと無理だろう。

ましてや相手を倒す一撃となれば、今の自分では絶対に無理だとアインハルトは内心で考える。改めて自身が受ける試験の難しさを理解したアインハルトは思わず恐怖に震えてしまう。

はやてはその様子を冷静に見つめ、アインハルトに更に絶望的な情報を伝える。

「アインハルトちゃん。今ギンガ達が戦った相手はデジモンの段階で言えば四番目の成熟期や。一応アインハルトちゃんが戦う予定のデジモンも成熟期やけど・・・・実力は五段階目の完全体に匹敵する実力の持ち主と思った方が良いわな」

ーーービクッ！！

はやてが告げた事実にアインハルトは更に体を恐怖に震わせ、恐

る恐るはやての顔を見てみると、はやては真剣な顔をしてアインハルトを見つめていた。

「・・・・・理解したみたいやな。アインハルトちゃんじゃそのデジモンに勝てる可能性は低いどころかゼロや。今ナイトチェスモンと戦っていたギンガ達やて状況が悪ければ確実に負けるほどの実力者。まぁ、それは誰にも言える事やけど」

「・・・・・私では無理なのですか？」

「今のアインハルトちゃんじゃ無理やね・・・・・だけど、たった一つだけアインハルトちゃんがそのデジモンに勝てる可能性が存在しとる。今まで誰も試した事が無い方法なんやけど・・・試してみる気は在る？」

「・・・・・・教えて下さい・・・その方法を・・・私は負ける訳にはいきませんから」

「じゃ、ついて来て貰うわ」

アインハルトの言葉にはやては険しい声を出しながら歩き始め、アインハルトは無言でその後をついて行く。

そして二人は隊舎内部に戻り、バリアジャケットではなく制服に戻ったはやては無言のままアインハルトを連れて医務室の前に辿り着く。

「この部屋の中にアインハルトちゃんが短期間で強くなれるかもしれない方法を知っとる方が居る。だけどあくまで強くなれるかもや。旨く良く保障は何処にも無い。もしかしたら無駄に終わる可能性も

十分にある・・・・それでもその可能性に賭けてみる気は在るん？」

「・・・今の私では勝てない相手ならば、その可能性に賭けて見ます。自治領の人々の為にも私は負けられません」

「・・・・義務感じゃ失敗する可能性が高いんやけど、まぁ頑張ってな」

そうはやてはアインハルトに声を掛けると、ゆっくりと医務室の扉の前から横に移動して、アインハルト自身に扉を開けるように促す。

アインハルトはその様子に一瞬悩むような顔をするが、すぐに迷いを振り払うように医務室に扉に手をかけ、扉を開けて医務室の中に入り込む。

ーーーガチャ！

「失礼します」

「待っていたぞ」

「ッ！！」

アインハルトが医務室の中に足を踏み入れると共に響いた聞き覚えの在る声にアインハルトは目を見開くが、すぐさま表情を戻し、声の聞こえて来た方に進んでみると、ベットの上で包帯を体中に巻かれながら横になっているレオルモンが存在していた。

「貴方はあの時の」

「久しぶりと言うのが正しいだろう。俺の名はレオルモンだ」

「・・・・・あの時は本当にありがとうございました！！」

「フッ、気にするな。俺は約束を果たす為に動いただけだからな」

深々と頭を下げているアインハルトにレオルモンは僅かに口元を笑みに歪めながら答えるが、すぐに表情を真剣に戻し、アインハルトに説明を始める。

「本来ならば俺が直接教えてやりたいところだが、生憎と体が思うようには動かん。だから別の奴にお前の指導を頼んである・・・・大！アグモン！この娘の事を頼むぞ！」

「分かったぜ！」

「任せてくれ！」

「ッ！！」

背後から聞こえて来た二つの声にアインハルトが慌てて背後を振り向いてみると、笑みを浮かべた大とアグモンに、何処か遠い瞳を窓の外に向けている風華が存在していた。

その始めてみる男性とデジモンの姿にアインハルトは戸惑うが、大とアグモンは気にせずにアインハルトに向かって手を差し出しながら自己紹介を行う。

「俺の名前は大門大だ。宜しくな」

「俺は兄貴の子分のアグモンだぜ。兄貴と一緒に宜しく！」

「ア、アインハルト・ストラトスです。よ、宜しくお願いします」

大とアグモンの紹介にアインハルトは戸惑いながらも答え、大とアグモンは優しげな笑みを浮かべながらアインハルトと握手を交し合う。

後にアインハルトはこの出会いを心から感謝し、風華は大の女難が更に加速した日になったと語るのだった。

厳しき試練、アインハルトの師匠　後編（後書き）

次回予告

大とアグモンと出会ったアインハルト。

それによって教えられる力。

しかし、アインハルトはその力を制御出来なかった。

そして遂に行われる試験。

その時にアインハルトが相対するデジモンとは！？

次回、漆黒の竜人と少女、『最古の成熟期、そしてデジソウル！』

想いが拳に宿る時、それは無限の力へと変わる。

最古の成熟期、そしてデジソウル！前編

医務室で互いの自己紹介を終えた後。
アインハルトはベットの上で動けないレオルモンから詳しく自身が学ぶ事になる力について説明を受けていた。

「お前が得られるかもしれん力の名前は“デジソウル”と呼ばれている」

「デジソウル？・・・・・デジモンに関係する力なのですか？」

「そう思って構わん。だが、正確に言えばデジソウルは“想いの力”と呼んでいい力だ」

「想いの力？」

「こればかりはデジソウルを得た者にしか分からん事だ・・・・さて、話は戻すが、お前にはこのデジソウルを短期間で会得して貰わねばならん。だが、デジソウルをお前が体得出来る可能性は限りなく低い」

「何故ですか？貴方の話からすればデジソウルと言う力を持っている人がいるんですよね？」

「その通りだ。お前にこれからデジソウルを教える大がその人間だ」

アインハルトの質問にレオルモンはアインハルトの背後に存在するベットにアグモンと共に腰掛けている大に目を向け、アインハルトも大に顔を向ける。

見たところ大からはレオルモンが言う特殊な力をアインハルトは感じる事が出来なかった。本当に大にレオルモンが言うデジソウルと言う特殊な力が存在しているのかと、アインハルトは思わず訝しげな視線を大に向けてしまう。
その様子を医務室の入り口の方で風華と並びながら見ていたはやては、アインハルトが抱いた疑問を察知し、端末を操作してアインハルトの横にモニターを出現させる。

ーーーブン！！

「今から大さんが私らの前でやった事をそのモニターに映すわ。確実に驚くやろうけど」

「・・・・分かりました。拝見させて頂きます」

はやての説明にアインハルトは頷き、モニターに顔を向けてみると、オオクワモンXを素手で殴り飛ばす大の姿が存在していた。
その余りにも常識はずれな映像にアインハルトは思わずポカンと口を開けてしまうが、映像は構わずに進み、ブラックエアロブイドラモンを殴り飛ばす姿と拳だけでギガスモンを戦闘不能に近い状態に追い込む映像も流れた。
アインハルトはそのデジモンを相手に一切怯まない大の戦いぶりを状況も忘れて呆然と見入ってしまう。
その姿に大は僅かに照れたように頬をかくが、レオルモンは気にせずにアインハルトに声を掛ける。

「これがデジソウルを極めた人間が辿り着く領域だ。デジソウルを極めれば魔力など無くとも、デジモンの最終段階である究極体とも互角に戦える」

「本当ですかッ！？」

「極められればの話だがな。だが、極められなくともデジソウルを纏うだけで攻撃力や防御力、回避力などが段違いに上がる。貴様ら魔導師が使う魔力とは違ってデジソウルには汎用性など無いが、己の強化と言う点だけで言えば魔力以上の強化がされるの間違いない」

「その力を私は得られるのですか？」

「言った筈だ。可能性は限りなく低い。何せこの力を此方の次元世界の人間が発現させた例はゼロだ。デジモンとの融合進化を会得している者達でも発現させた者はいない・・・・まぁ、特殊な成長をして強大な力を得ている者はいるが、それはデジソウルとは全く関係ない」

「其方の力は私には無理なのでしょうか？既に存在している力の方が可能性が高いと思うのですか？」

「無理だな。何よりもその為にはデジモンのパートナーが必要となる。運が良く短期間でデジモンのパートナーが得られたとしても、現れるディーアークにその機能が備わっている可能性が低い。それにお前が受ける試験はお前一人で行う試験だ。お前自身の実力も伴っていなければ得た力は完全に無為になってしまう。それにお前は与えられた力よりも、自身が決死の思いで得て、磨いた力の方が馴染みそうだからな」

レオルモンはそうアインハルトに説明し、アインハルトは納得したように頷いた。

確かにヴィヴィオやフェイトのようにディーアークから力を得ると言う方法も存在している。だが、その方法で得た力は体に馴染む

まで時間が掛かる。何よりもその方法ではディーアークにその機能が備わっていなければいけないと言う欠点が存在している。
運が良くデジモンとのパートナーを得られても、機能が無ければ実力が上がる事は絶対にない。
それならばデジソウルの方がアインハルトの実力の底上げを行えると、レオルモンは判断したのだ。
それにアインハルトも格闘家としての誇りが在る。道具に頼った力よりも、大のように自ら得て極める事が出来る力の方が馴染むとレオルモンは考えたのだ。

「お前も己の拳を信じる者のようだからな。ならば尚更デジソウルの方が体に馴染むだろう・・・・さて、先ずはデジソウルを体に教える方法だが、大！先ずはデジソウルを発現させろ！」

「分かってるよ。じゃ、アグモン！」

「応！」

ーーーードゴオオオン！！

「ッ！！」

いきなり拳をぶつけ合った大とアグモンの姿にアインハルトは目を見開くが、すぐにアグモンとぶつけ合った大の右拳を覆っているオレンジ色の光ーデジソウルーに呆然と見入る。
見ているだけで大の右拳を覆っているデジソウルからは凄まじい力がアインハルトには感じられたのだ。だが、それだけではなくデジソウルからは優しさもアインハルトは感じる事が出来た。
レオルモンはその様子を静かに見つめていると、次の指示を大とアインハルトに出す。

「よし、次はそのデジソウルを覆っている手を互いに握れ」

「分かってるって。ほれ」

「・・・・・」

大が差し出して来たデジソウルを発している右手をアインハルトは呆然としながら見つめる。

目の前の大の手に宿っている光は、魔力ではなく完全に未知の力。その力は本当に危険が無いモノなのかと疑念をアインハルトは思い浮かぶが、フッと自身に手を差し出して来ている大の顔を見てみる。

大の顔には何の不安も存在していない。寧ろ自身に満ち溢れている。

それに何処か安心感を与えるような雰囲気を大は与えている。

どのみち自身がデジモンに勝つにはこれしかないと思いながら、大の手にアインハルトは自身の右手をかさねる。

ーーーガシッ！！

ーーードクン！！

「ッ！！」

「ムッ！」

「おい！大丈夫か！？」

急に動きが止まったアインハルトにレオルモンは険しい瞳を向け、大は心配そうにアインハルトに声を掛けた。

他のメンバーも急なアインハルトの異変に警戒するが、当の本人であるアインハルトはそれどころではなかった。

（熱い・・・・熱い・・・・熱い・・・・体が凄く熱いッ！！）

「いかん！！大！手を離せ！」

「あぁ、分かった！」

レオルモンの叫びに大は慌てて握っている手を離そうとする。

しかし、アインハルトは逃がさないと言うように大の手を強く握り続け、大は慌てに慌てた。

手から伝わって来るアインハルトの体温がかなり高いのだ。このままだと危ないと大の横に居たアグモンも二人の手を離そうと動き出す。

だが、二人の手は固く繋がれ続け、大の手に宿っていたデジソウルが徐々にアインハルトの方に移動し始める。

ーーーショォウゥゥゥーー！

「ど、どうなってだ！？」

「クッ！！不味い！大！アグモン！！多少は手荒になってでもその娘から離れろ！！このままだとお前のデジソウルにその娘は侵食されるぞ！！」

「分かった！！アグモン！！」

「任せろ！！オラッ！！」

ーーードゴォン！！

「グッ！！」

ーーーバシッ！！

アグモンの拳を体に受けた大は僅かに苦痛の声を上げるが、その時の衝撃によって大とアインハルトの手は離れる。

それと同時にアインハルトの体はふらつき、前に向かって倒れ始める。

大とアグモンはその様子に慌ててアインハルトに手を伸ばし、倒れそうになっているアインハルトを抱える。

ーーーガシッ！

「・・・・気絶してるのか？」

「みたいだぜ兄貴」

「やはりか」

「如何言う事ですやろか？レオルモンさん」

何処か納得したように頷いているレオルモンに、はやては疑問に満ち溢れた顔をしながら質問し、大、アグモン、風華も訝しげな視線をレオルモンに向ける。

「俺の予想が間違っていた。昨日も説明したが、本来ならば大のデジソウルをその娘に与えて眠っていると思われるその娘自身のデジソウルを覚醒させるつもりだった・・・・だが、その娘には大のデ

ジソウルは強すぎた。極められたデジソウルを保持するだけの力がその娘には無い」

「って事は？」

「失敗だ。例え同じ方法を行っても再び気絶するだけだろう」

レオルモンはそう簡潔に事実を伝え、大の腕の中で気絶しているアインハルトに目を向ける。

完全にレオルモンにとっても予想外だった。大のデジソウルはレオルモンの予想を超えるほどに成長していたのだ。

その力は絶大だが、何も知らない者が保持出来る力の容量を超えていた。例え同じ事を集中して行っても、恐らく同じ結果になるとレオルモンは考えている。馴染む馴染まない以前にアインハルトの体が、大のデジソウルに宿る強大な力に耐えられないのだ。

その事実にはやてとレオルモンは最後の希望も潰えたと考えるが、大とアグモンだけは諦めずに気絶しているアインハルトを見つめる。

「けどよう。俺のデジソウルはコイツの体に移動しようとしていたんだぜ？だったら」

「お前の言いたい事は理解出来る。だが、強大な力が一気に体の中に入り込めば、何の対策も無いその娘の体は跡形も無く消滅する。お前が細かくデジソウルを操作出来るのならば話は別だが、お前に細かい操作など出来る筈なかろう」

「グッ！！」

「確かに兄貴じゃ絶対に無理だな」

「大がそのような器用な事が出来たら、明日世界が滅ぶであろう」

レオルモンの指摘に大は言葉を失い、アグモンと風華は納得したように深く頷きながら同意した。

確かに大が細かいデジソウルの操作が出来れば、レオルモンの考えた策も成功する可能性が高い。

しかし、残念ながら大は細かいデジソウルの操作など出来ない。集中などは出来ても、弱めてデジソウルを何処かに送るなど不可能だ。

自身もそう言う事が不得手である事を理解している大は言葉も出す事が出来ずに、腕の中で気絶しているアインハルトに顔を向け続ける。

「・・・・こうなったら俺がデジソウルを始めて使った時の状況をやって見るってのは如何だ？」

「良い方法だと思うけど兄貴？・・・・兄貴が始めて俺を進化させたのはコカトリモンと喧嘩していた時だろう」

「そんな方法を普通は行わんぞ。まぁ、英もデジソウルを完全に開眼させた時はサーベルレオルモンと殴り合った時らしいが」

（如何言う家族構成何やろう？・・・・デジモンと殴りあって力に覚醒って？・・・何か大さんの家族がどんな人達なのか凄まじく気になるわ）

デジソウルの開眼方法を真剣に話し合っている大、アグモン、レオルモンの会話を、医務室の入り口で聞いていたはやては、大とその父親のデジソウルの開眼の市からに呆れて内心で呟く事しか出来なかった。

普通の人間がデジモンと殴り合いなど行ったら確実に消滅しかないとはやては思っている。
力を得る以前に確実な死しか待ってない。よくデジモンと殴り合いなど行えたと思いながらはやては、呆れ半分、感心半分で大を見つめていると、フッと大の腕の中で気絶しているアインハルトの右手にオレンジ色の光が明滅している事に気がつく。

「ッ！！大さん！アインハルトちゃんの右手！！」

「うん？・・・・おい！これは！？」

「デジソウル！！」

アインハルトの右手で明滅を繰り返しているデジソウルに大とレオルモンは声を上げ、アグモンも呆然としながらデジソウルの光を見つめる。
そしてレオルモンは即座にその現象が起きている理由を推測し、その場にいる全員に状況を説明し始める。
大と手を手放し合う前に、既にアインハルトの体に大のデジソウルは入り込んでいたのだ。
量としては僅かだろうが、デジソウルを極めた大のデジソウルである。旨く行けばデジソウルをアインハルトは発現出来る可能性も存在している。

「それじゃ旨く行ったっと思って良いんですやろか？」

「まだ分からん。例えデジソウルが入り込んだとは言え、大の極めたデジソウルだ。どのような影響を及ぼすのか俺にも分からん。本来ならば大がそのまま手を握り続ける筈だったのだからな」

「だったらよう。今から俺が手を握り直したら如何だ？」

「デジソウルを纏っていないお前では意味が無い。それにその娘の手に宿っているデジソウルは元々はお前のモノだ。それが影響を及ぼして再びお前がデジソウルを発生させたら、大変な事態になる。これ以上デジソウルがその娘に流れ込めば、本当にその娘の体は消滅する。少なくとも意識が戻り、僅かに入り込んだデジソウルを制御出来る状態になるまでは手を握るなどの接触は無しだ。まぁ、万が一の時も考えてお前は今日一日は近くにいろ」

「分かった」

レオルモンの説明に大は納得したように頷きながら、アインハルトをベットの上に乗せて布団をかける。

大はそれと共にベットの近くに置かれている椅子に座り、眠り続けているアインハルトを看病し始める。

はやては大の面倒みの良さに僅かに驚きながらも、詳しくアインハルトの状態を調べる為にシャマルを念話で呼び出し、レオルモンとアグモンは大の背後からアインハルトの様子を伺い始める。

そして最後に残った風華は今の状況を考えて僅かに頭が痛そうに手で押さえながら、気になっていた事をシャマルとの念話を終えたはやてに質問する。

「オリジナル。気になっていた事が在るのだが」

「だから、その呼び方は止めてって言うてるやろ・・・・で、一体何や？」

「ウム、気になっていたのだが、其処の塵芥はデバイスを持っているのか？古代ベルカ式を扱うのならば、それ相応の設定がなさなけ

ればいかんのであろう？」

「言われて見ればそうや・・・デバイスの話は聞いとらんし、もしもの時の為にシャーリーに頼んで古代ベルカ式の簡易のデバイスを用意して貰っとくわ」

はやてはそう風華の言葉に答えながらシャーリーにも連絡を取り、風華も自身のデバイスであるエグザードクロイツを取り出し、琴乃達に今日も帰れなくなった事を伝えるのだった。

そしてその日の深夜。

アインハルトは昼間の一件から目を覚ます事無く眠り続け、大はその様子を椅子に座りながら看病し、時折シャマルに用意して貰った濡れタオルをアインハルトの額に載せていた。

その様子を隣のベットから眺めていたレオルモンは相変わらずの大の様子に苦笑を浮かべながら声を掛ける。

「相変わらず面倒見が良い奴だ。だが、今日はもう休んでおけ。お前とて体が万全ではないのだからな」

「・・・・・なぁ、レオルモン」

「何だ？」

「・・・・知香やイクトの事があるから、あんま言えねぇんだけどよ・・・・何でこっちの世界は戦う子供が多いんだろうな」

「・・・それが此方の次元世界のルールだからだ。俺も此方の世界に来てからは、十歳に満たなくても戦う子供を大勢見ている。事情はそれぞれ在るだろうが、機動六課にもキャロ・ル・ルシエとエリ

オ・モンディアルがいる。此方の世界では子供が戦うのは当然なのであろう」

「クッ！！・・・・コイツも王族とか無けりゃ、普通に暮らしていられたんだろうな」

大は僅かに険しく眉を顰めながら、アインハルトの額にタオルを置き直す。

まだ、アインハルトは九歳である。そんな大達の世界からすれば小学生の子供が、大勢の人々の為に身を投げ出そうとしている。

大にはそれが理解出来なかった。いや、理解したくなかった。

子供が子供らしく暮らせない世界は何処か間違っていると、大は思っている。自身がこの世界で出会ったエリオ、琴乃、リシア、風華も生まれはともかく普通の子供にしか大には思えない。

そしてアインハルトも大からすれば無理をしている子供にしか見えなかった。

「・・・・大、お前の気持ちは分かる。俺もそしてこの機動六課にいる誰もが今はお前と同じ想いを持っているだろう・・・だが、現状がそれを赦してくれん。八神はやて達にしても多くの人間達の事を考えて動かねばならん。全てを救う事はどれだけ力を持っていようと難しい事だ。それはお前も分かっているであろう」

「・・・・あぁ」

「悩むのは仕方が無い事だ。しかし、お前ならば俺と英が目指した場所に辿り着けると思っている。何せお前は此方の世界でも自身の考えを変えずにデジモン達を説得した。世界の絶望していた琴乃とリシアの考えを変えた。お前は俺が考えていた以上の漢に成長していた。大、お前ならば倉田達の野望も再び打ち砕ける」

「・・・・ありがとなレオルモン」

「気にするな。さて、交代でその娘の看病をすれば良いだろう。幸いにも如何やら俺達以外にもその娘の事を心配している連中がいるようだからな」

「そうだな」

レオルモンの言葉に大は苦笑しながら頷き、医務室の扉の方に顔を向けてみると、入り口から心配げにアインハルトの様子を伺っているアグモン、ギンガ、スバル、エリオ、キャロ、リュウダモン、シャマルが立っていた。

アインハルトは夢を見ていた。

夢と言っても普通の夢ではない。誰かの記憶を見ているような光景がアインハルトの目の前には広がっていた。

そう言う夢をアインハルトは物心がつく頃からずっと見ていた。その相手は自身の先祖である覇王イングヴァルト。彼の過去の光景を見るのはアインハルトにとっては馴染みに近い事だった。

しかし、今アインハルトが見ている夢はイングヴァルトの記憶に関する夢ではない。それとは全く違う夢をアインハルトは見ていた。

目の前に広がる光景はアインハルトが全く知らない何処かの都市。

何故自身がそのような夢を見ているのかと、アインハルトは疑問に思いながらジッと空中から街並みを眺めていると、何処からか恐怖を感じさせる咆哮が響く。

『グオォォォォォォォォォォーーーーー！！！！！』

（ッ！！今の叫びは！？）

聞こえて来た咆哮にアインハルトは夢なのにも関わらず恐怖に体を震わせながら咆哮の響いて来た方に顔を向けると、幾つモノのビルが一瞬にして崩壊し、その先から背中に巨大な六枚の翼を備え、熊のような体型をして頭部に巨大な角を生やし、四肢に鎖を巻きつけた七大魔王の一体にして“怠惰”の称号を持つ魔王型デジモン―ベルフェモン・レイジモードが現れる。

ベルフェモン・レイジモード、世代／究極体、属性／ウィルス種、種族／魔王型、必殺技／ランプランツス、ギフトオブダークネス

千年に一度の周期で眠りから覚める“怠惰”の称号を持つ七大魔王の座につく魔王型デジモン。通常時は“スリープモード”になって千年間は眠り続ける。しかし、一度本来の姿である怒りの形態“レイジモード”に変われば、全てが崩壊すると言われている。“怒りの権化”であるこのデジモンは、視界に入るもの全てを破壊し、葬られたデジモンのデータはデジタマに還元されることなくダークエリアの中心に送られ、魔王デジモンの餌となる。その咆哮ひとつで、完全体以下のデジモンは跡形もなくデータ分解され即死し、たとえ究極体デジモンであっても致命的なダメージを受ける事になるだろう。必殺技は、体に巻きついている鎖から発する黒い炎で敵を攻撃する『ランプランツ』に、地獄の炎を纏った爪で相手を跡形も無く消滅させる『ギフトオブダークネス』だ。

『グアガアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！』

（ヒィッ！！）

ベルフェモン・レイジモードの姿を目撃したアインハルトは、その余りにも圧倒的な威圧感に声無き恐怖の叫びを上げた。
目の前にいるベルフェモン・レイジモードが夢である事をアインハルトは理解出来ている。
しかし、それでもなおベルフェモン・レイジモードの威圧感は圧倒的だった。人間などアレの前では塵芥同然だとアインハルトは確信出来てしまった。
アレに勝てる存在など居る筈が無い。戦う以前の問題。アレの前では人間など敵になる以前にアリのように簡単に踏み潰されてしまう。
アインハルトはその事を本能的に悟り、絶望に心を染めながらベルフェモン・レイジモードを見つめていると、ベルフェモン・レイジモードに向かって近くのビルの上から飛び上がる二つの影を目撃する。

『オリャアァァァァァァッ！！』

（アレは！？大さんにアグモンさん！？）

ベルフェモン・レイジモードに向かって飛び掛かったアインハルトが知っている大よりも十歳ぐらい若い大とそのパートナーのアグモンの姿に、アインハルトは内心で叫んだ。
そして同時に無謀だと思った。アレに生身で挑むなど命を捨てる行為でしかない。
アインハルトは自身の目の前で大とアグモンは殺されてしまうと確信するが、その考えを否定するように大とアグモンは同時にベルフェモン・レイジモードの額に拳を叩き込む。

『オラッ！！』

『グオッ！！』

（ッ！！）

目の前で広がった光景にアインハルトは目を見開く以外に何も出来なかった。

絶対に勝てないと思ったベルフェモン・レイジモードを大とアグモンは拳だけで体を仰け反らせた。

その事実が信じられず、アインハルトは呆然としながら大とアグモンを見つめていると、大は何かの機械のような物を取り出し、機械から発せられた光を浴びたアグモンがシャイングレイモンへと進化する。

それと同時に近くのビルの瓦礫の中から三つの影が飛び出し、シャイングレイモンと共にベルフェモン・レイジモードと戦い始める。

アインハルトは夢で在りながらも、凄まじい激戦と分かる戦いに言葉も無く静かに戦いを見続ける。

そしてその間に戦いは終盤へと差し掛かり、大の体から凄まじいほどの力が発生した瞬間に、シャイングレイモンはバーストモードに変わり、ベルフェモン・レイジモードを撃ち破った。

（・・・・凄い・・・・これがデジソウルの・・・・大さんの力なのですか？）

アインハルトは途切れ途切れながらも大とデジソウルの力に呆然としながらも声を出した。

そしてそのまま夢は続くのかとアインハルトは思いながら、戦いが終わった後の大達に目を向けた瞬間、辺りの光景は真っ暗な空間に変わる。

ーーーシュン！！

（ッ！！・・・・何故急に周りが？）

急に変わった風景にアインハルトは不安を感じながらも辺りを見回す。

見通す先に存在するのは全て闇。暗闇しか存在しない空間。

幾らイングヴァルトの記憶を持つとは言え、アインハルトは子供でしかない。

心細さと不安を感じながらアインハルトは何か無いのかと僅かに目尻に涙を溜めながら辺りを見回していると、闇の奥深くに僅かな光を発見する。

（あの光・・・・あの光を手に入れなければ）

何故自身が闇の奥深くに存在する光を求めているのか、アインハルト自身も理解出来なかった。

しかし、闇の奥深くに存在する光を手に入れなければいけない事だけは確信し、アインハルトは真っ直ぐに光に向かい続ける。

だが、幾らアインハルトが前に進んでも一向に光の下に辿り着く事は出来い。

何故辿り着けないのかとアインハルトは深い疑問を持つが、疑問の答えが出る事は無く、今度は闇はアインハルト自身を飲み込もうと動き出す。

（早く！！早く辿り着かないと！！）

闇が背後から迫って来ている事に気がついたアインハルトは、急いで光に向かいだす。

それでもアインハルトは光の下へは辿り着けず、遂にアインハルトの体は闇に捕らえられてしまう。

ーーーガシッ！！

（いや！！離して下さい！）

闇を振り払うようにアインハルトは暴れるが、闇は構わずにアインハルトの体を覆って行き、絶望がアインハルトの心を覆う。

このままこの闇の中で自分は消えてしまう。アインハルトは何故かそれを確信し、絶望感に浸りながら助けを求めるように手を前に向かって伸ばす。

誰もその手を掴む者はいない。自身は闇の中に消えるのだとアインハルトは思いながら意識を手放そうとした瞬間、助けを求めるように伸ばされた手は誰かに掴まれる。

ーーーガシッ！！

（ッ！！）

誰かに手を掴まれた事に気がついたアインハルトは闇の中で目を開けてみると、オレンジ色の光で覆われた手がアインハルトの手を握っていた。

それと同時に闇は消滅し、アインハルトの意識は目の前に存在するオレンジ色の光に包まれながら、徐々に薄れて行き、アインハルトは目覚める。

「ハッ！！・・・・」

夢から覚めたアインハルトはベットの上で呆然とし、天井を見つめながら、何故自身が此処に居るのかを考え始める。

「・・・・私は・・・・・確か」

「気がついたか」

「ッ！！」

ーーーガバッ！！

聞こえて来た声にアインハルトの意識は完全に覚醒し、慌てて被っていた布団から起き上がった。

それと同時に声の聞こえて来た方に顔を向けようとするが、その直前に自身のベットを囲むようにしながらそれぞれ座りながら眠っている大、アグモン、ギンガ、スバル、エリオ、キャロ、リュウダモン、フリードに気がつく。

「ッ！！皆さん！一体如何して！？」

「貴様の事が心配だったらしくてな。明け方近くまで全員で看病していたのだ」

「レオルモンさん！？」

アインハルトは自身の横のベットで横になりながら話し掛けてきたレオルモンに声を掛けた。

その声にレオルモンは僅かに安堵の息を吐きながら顔を向け、アインハルトに向かって頭を下げる。

「昨日はすまない・・・・俺の注意不足でお前は気絶してしまったのだ」

「・・・・あの・・・・それで結局私は？」

「残念だがデジソウルは諦める他にない。お前の体に僅かに入り込んだ大のデジソウルが明滅を繰り返していたが、お前が目覚める少し前に完全に消えてしまった。同じ方法を繰り返す時間も無い。もはやデジソウルを覚醒させている時間が無いのだ。本当にすまない」

レオルモンは深々と頭を下げながらアインハルトに謝罪した。

本来ならば昨日の内にデジソウルを覚醒させて、今日でギンガ達や大、アグモンと訓練を行いデジソウルを体に馴染ませる予定だった。

しかし、デジソウルは覚醒する事は無くアインハルトは気絶してしまった。更にはレオルモンが考えていた方法では危険が多い事も判明している。

同じ方法を使って今度こそ旨く行くと言う保障は何処にも存在していない。失敗すれば今度こそアインハルトの体はデジソウルによって消滅してしまうだろう。

レオルモンはその事実をアインハルトに説明し、アインハルトは落胆しながら自身の右手を見つめる。

「・・・・まだ、全てが終わった訳ではないです・・・・明日の試験まで時間はまだあります・・・残りの時間を全て練習に当てます。やらないよりも、やった方が可能性は在りますから」

「・・・・そうか・・・・（何だ？昨日とは何かが違う）」

レオルモンは今のアインハルトに違和感を覚えた。

昨日までのアインハルトは何処か追いつめられている印象をレオルモンは感じていた。

しかし、今のアインハルトは僅かにでは在るが余裕を持てている

ような印象が感じられる。
一体何が在ったのかとレオルモンは訝しげな視線をアインハルトに向けていると、医務室の扉が開き、僅かに目の下にクマが出来ているはやてが入って来る。
「・・・・起きた見たいやなアインハルトちゃん」
「はい、ご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした」
「気にせんといてえぇよ・・・・まぁ、デジソウルに関しては諦めるとして・・・試験はどないする？」
「受けます。確かに私ではデジモンには勝てないかも知れません。ですが、僅かにでも勝機が在るのならば頑張ります」
「そうか・・・・まぁ、私として頑張って受かって欲しいわ」
そうはやてはアインハルトに僅かに笑みを浮かべながら答えると、懐に手を入れて小型の端末を取り出し、アインハルトの手の中に載せる。
「あの？これは？」
「簡易やけどデバイスや・・・・古代ベルカ式に合わせとるから、アインハルトちゃんなら使えるやろ。キャロからのプレゼントも入っとるから、とにかく使ってな」
「・・・はい、ありがとうございます」
アインハルトは、はやてから渡された簡易のデバイスを大切そう

に抱えながら礼を告げた。
自身が持っている簡易のデバイスを作る為にはやてが徹夜してくれた事が分かったのだ。出なければこんなに早く古代ベルカ式のデバイスなど作れないだろう。
改めてアインハルトは、はやてに礼をもう一度述べようと顔を上げるが、はやては構わずに医務室の扉の方に歩いて行く。

「とにかく試験は明日や。今日一日で何が出来るか分からへんけど、ギンガ達や大さん、アグモン、レオルモンさんに色々とデジモンとの戦い方を聞いておいた方が良いと思うわ・・・・頑張ってな」

はやてはそうアインハルトに応援の言葉を投げかけると、そのまま医務室を出て行く。
アインハルトはそれと同時に無言ではやてに頭を下げると、レオルモンに顔を向けて質問する。

「あの・・・デジモンとどう戦えば良いのか教えて貰っても…」

「昨日も言ったが、俺は見ての通り重傷だ。俺よりもお前の周りで寝ている奴らに聞いた方が良いだろう。何せ実力が上のデジモンにも勝って来た奴らだ。それに昨日会ったばかりなのにも関わらずに心配で看病しに来た連中だからな。お前が進んで聞けば喜んで教えてくれる」

「・・・・そうかもしれませんね」

レオルモンの言葉にアインハルトは覚悟を決めたように頷き、自身の周りで眠っている大達に顔を向けながら明日の試験に対する決意を固めた。

クラナガンに存在する元１０８部隊の訓練所施設。
今その場所は一体のデジモンの訓練によって壊滅に近い状態になっていた。
オーリスが数名の局員達と共に連れて来たデジモンは、自身の力を誇示するように次々と訓練用に用意されたスフィアや機材を破壊し、それだけでは飽き足らずに局員達にまで手を出そうとしたのだ。
幸いにも救援として駆けつけたビショップチェスモンのおかげで事なきを得たが、やはりオーリスは外に出すべきではなかったと改めて思いながら訓練所に置かれていた椅子に頭を押さえながら座り込んでいた。

（やっぱりあの子は危険すぎる・・・・実力が在るのは問題無いけど、一度放たしたら暴れに暴れるのは間違いないわ・・・試験なんて関係なくストラウスと戦わせたら一瞬で血の海が出来てしまうでしょうね）

オーリスは明日の試験を思い浮かべて、陰鬱とした空気を纏わざるえなかった。
このままでは折角評判が上がって来ているデジモンの評価が下がってしまうのは間違いない。
何とか最悪の事態にだけはならない方法をオーリスが考え込んでいると、一人の男性局員が何かの資料を小脇に抱えながら慌てて走って来る。

「オーリス三佐ッ！！」

「・・・・また、あの子が何かをしたの？」

「いえ、其方はビショップチェスモンが押さえているので大丈夫です。それよりも此方の資料を読んで見て下さい！」

「？・・・・拝見させて貰うわね」

局員の慌てようにオーリスは僅かに首を傾げながら差し出された資料に目を通す。

資料には明日の試験に関わる人物とアインハルトと例のデジモンの情報が詳しく記されていた。

そう言う関係の資料は既にオーリスは全て目を通していたので、殊更慌てるような内容は無いと思いながら最後の一枚の資料に目を通すと、オーリスは悔いるようにその資料を見つめた。

「・・・・これは本当なの？」

「間違いないと思われます。私も送って来た局員に何度も確認しましたから」

「・・・・・アインハルト・ストラウスとあの子が成長期だった頃の相性率が８０％を超えている。まさか、彼女が幾ら探しても見つからなかった。あの子のパートナーになれる人間だと言うの」

オーリスは呆然としながら言葉を発し、自身が握っている資料に書かれている内容を見つめるのだった。

最古の成熟期、そしてデジソウル！後編

アインハルトが機動六課にやって来てから三日目。
遂にベルカ自治領の人々の運命を決める為の試験が行われる日が訪れた。
この日の為にアインハルトは一日だけとは言え、ギンガ、スバル、エリオに稽古をつけて貰ったり、キャロから補助魔法の指導を受けたり、大とアグモンからデジモンについてを聞いたりしていた。
少しでも試験の相手であるデジモンを倒す策を考える為に、アインハルトは大達から色々と学び続けたのだ。
最もそれでも相手にするデジモンに勝てる可能性は限りなくゼロに近い。相手は完全体に匹敵する力を持った成熟期デジモン。俄仕込みの力でまともな戦闘など行った事が無いアインハルトが勝てる可能性など無いに等しい。
唯一の方法で在ったデジソウルの習得も失敗してしまっているので、アインハルト自身の実力は全く上がっていない。
しかし、それでもアインハルトは試験に挑む覚悟を持っていた。
確かに合格する可能性はゼロに等しい。だが、僅かながらも試験の相手になるデジモンに勝てる可能性が存在している。その僅かな可能性にアインハルトは全てを賭けるつもりだった。

試験開始時間十分前。
キャロから教えられた自身の体を十八歳ほどに成長させる特殊な強化魔法を使用しているバリアジャケットを身に纏ったアインハルトが、機動六課の訓練用の空間シュミレータによって作られたビル群の道路上に立っていた。
その頭上にはアインハルトと同じくバリアジャケットを纏って、空中に浮かんでいるはやてが存在し、別の安全な場所ではレジアスやオーリス、ゲンヤの他にミッド行政府からやって来た数名の役人

が試験会場を見つめていた。
その他にも事故などで試験が中止しないように機動六課のＦＷ陣が試験会場内部の四方に立っている。
更にビル群の中で一際高いビルの中には風華の幻影魔法を使用して隠れている大とアグモンもいた。
本来ならば部外者であり、本局に追われている大とアグモン、風華が行政府の人間が監視している試験会場内部に居るのは不味いのだが、大とアグモンがはやてに頼み込み試験会場内部に潜んでいるのだ。

「・・・アインハルトの奴、大丈夫か？緊張していなけりゃいいんだけどな」

「大丈夫だと思うぜ、兄貴。アイツだって緊張している場合じゃ無いって事は分かっているだろうからよ」

「アグモンの言うとおりだ、大。あの塵芥は覚悟を決めて試験に挑んでいるのだ。うぬの心配も分かるが此処は信じてみよ」

「・・・・そうだな」

風華の言葉に大は頷き、そのまま外の道路上に立っているアインハルトに顔を向ける。
その様子を目撃した風華とアグモンは、この場に琴乃とリシアが居ない事に安堵した。ただでさえ本当ならば情報を得たらすぐに戻る予定だったのに、既に二日以上も隠れ家に戻っていない。
当然ながら大と少しでも一緒に居たいと思っている琴乃とリシアの機嫌はかなり悪く、フェイトやガオモン達が必死に押さえなければ機動六課にやって来るほどになっている。
何とか今日中には戻るからと風華とアグモンが必死に説得したか

ら、機動六課に来る事はなかったが、それでも今日中に戻らなければ琴乃とリシアはやって来るだろう。何が何でも、それこそフェイト達を倒してでも。
　その事が分かっている風華とアグモンはソッと大から離れて、小声で会話をし始める。

「・・アグモン。今日の試験結果が如何なっても大は連れて帰るぞ。うぬなら分かる筈だ。大に関してはあの二人は自制が無い。我が止めてなければ本気で夜這いを行う」

「あぁ、分かってるぜ。特にアインハルトが使っている魔法は、ばれたら本気で不味いよな」

「当然だ。よもやあの魔法を機動六課で使える者が居るとは思っていなかった・・・・あの魔法が琴乃とリシアに知られでもすれば、確実に大に大人の姿になって迫るぞ。そうなれば大は・・・」

「・・・兄貴が手を出すとは思えねぇけど・・・」

「・・・確かに大ならば大人になっても子供が遊んで来たと思うかも知れんが、万が一あの二人が無理やり手を出したら、大は責任を取るぞ。そんな同情的な想いで結ばれた関係など不幸を呼ぶだけであろう。我はそのような生活を二人にも大にも送って欲しくは無い」

「・・やっぱお前が一番琴乃やリシアの事を考えてんだな」

「・・・・か、からかうな・・・我はただあの二人に幸せになって欲しいのだ・・・我が行った行動によって、あの二人には苦労をかけたからなぁ・・・とにかくだ。琴乃とリシアがこの場に来ない為にも、今日中に大を連れて隠れ家に戻るぞ」

「あぁ、分かってるって。俺も兄貴には辛い人生なんてさせたくないからな。協力するぜ」

「うむ」

アグモンの言葉に風華は真剣な顔をしながら頷き、二人は互いに握手を交し合う。

その様子を横目で見ていた大は訳が分からないと言う顔しながら試験会場に立っているアインハルトに顔を向けると、丁度はやてがアインハルトに試験の説明を行っていた。

「試験の内容は勝負や。どちらかが戦闘不能になるまで行われる。相打ちでも試験には合格。だけど、互いに戦える状態だったら戦いは続けられる。試験会場内部にある物は自由に使っても構わへん。とにかく敗北宣言しても戦いは続く。だから、対戦相手が戦闘不能になるまでは戦いは続行されると思って試験には挑んで貰うで」

「分かりました・・・・それで私の相手は何処に？」

「・・・・もう来とるよ」

「ッ！！」

はやての言葉にアインハルトは即座に警戒しながら辺りのビルを見回し、何かの生物の影は無いかと確認し始める。

デジモンの中には何かに潜む能力を持ったデジモンが居る事をアインハルトは大達から聞いている。

姿が見えないのならば地面に潜んでいるか、或いは辺りの風景に同化しているとアインハルトは判断し、注意深く辺りを警戒し続け

る。
　その様子を上空から見守っていたはやては険しい顔しながら右手に持っている時計を見つめ、秒読みを開始する。
「五・・・四・・・三・・・二・・・一！試験開始！！」
「グガアァァァァァァーーーー！！！！」
「クッ！！！」
ーーービュン！！
　はやてが試験開始の宣言した瞬間、何処からともなく獰猛さに満ちた咆哮が響き渡り、アインハルトは迷わずに横に飛びずさった。
　その瞬間、アインハルトの背後に存在していたビルの影の中から全長三メートルほどの両前足の部分に鋭い刃のような爪を何本も備え、鋭い牙と、頭部を覆う先端の鋭く尖った蝙蝠の翼の様なモノを付けた狼型のデジモンが飛び出し、アインハルトが直前まで居た場所に前足を振り下ろす。
ーーードォン！！
「グウオォォォォォォォォーーーーーー！！！」
「こ、これが・・・私の対戦相手のデジモン・・・」
　目の前で凶暴さと獰猛さだけに満たされた咆哮を響かせる狼型のデジモンに、アインハルトは驚愕するが、件のデジモンは構わずにアインハルトに残忍さだけしかない視線を向ける。

「思ったよりもやるな。今ので引き裂いて終わらす気だったが、中々に反応が良い・・・良いぞ。俺の名前を教えてやる！俺の名はサングルゥモン！！」

サングルゥモン、世代／成熟期、属性／ウィルス種、種族／魔獣型、必殺技／スティッカーブレイド、ブラックマインド
デジタルワールド創世記より生き残っている古代種デジモンに数えられる魔獣型デジモン。吸血狼をモデルとしており、サングルゥモンに血を吸われたデジモンはデジコアの情報を全て抜き取られ死に至ってしまう。自分の意志で自らをデータ分解させる特殊な能力を持っており、瞬間移動能力を保持している特殊なデジモン。必殺技は、数千の小型ブレードを高速で投げ飛ばし、相手を一瞬の内に串刺しにする『スティッカーブレイド』と、自らのデータを分解し相手の影の中に溶け込み消える『ブラックマインド』だ。

「サングルゥモン・・・・貴方が私の相手ですか？」

「あぁ、お前の事は聞いているぜ・・・クククククッ！お前中々に歯応えがありそうな奴だな・・・楽しませろ！！」

ーーードォン！！

「ッ！！」

叫ぶと同時に凄まじい速さで突進して来たサングルゥモンにアインハルトは目を見開くが、すぐさま冷静に立ち返り、横に大きく飛び去る事でサングルゥモンの突進を避ける。
しかし、避けたにも関わらず、アインハルトが身に纏っているバリアジャケットの腰の帯の部分が、サングルゥモンが突進したと同時に発生したかまいたちの刃によって引き裂かれる。

ーーーザン！！

「ッ！！・・・（あの前足の刃が特殊な風圧を生み出している・・・大きく裂けてもこの現象なら、動きが止まった時にしか接近戦は無理のようですね）」

アインハルトは自身のバリアジャケットの一部が引き裂かれながらも、冷静に状況を分析していた。

昨日一日で機動六課が戦って来たデジモン達の情報が頭の中にアインハルトは入っている。平然と物理現象を否定するような動きを取るデジモン達を見たアインハルトは、今のサングルゥモンの動きに対しても冷静で居る事が出来た。

もし見ていなかったら今のサングルゥモンの動きに囚われていたと思いながら、映像を見せてくれたはやて達に内心で心の底から感謝し、アインハルトは自身がサングルゥモンの的にならないようにする為に、特殊な歩法（ステップ）を連続で繰り返して一瞬たりとも立ち止まらずに動き回る。

ーーーシュン！！

（やるな。この女。オーリスの話だとまともに戦った事も無いとか言っていやがったが、中々如何して反応は良いじゃねぇか・・・良いぞ！獲物はやっぱりこうじゃなくちゃな！！）

サングルゥモンは自身の周りを動き回るアインハルトを見つめながら、内心で歓喜に満ちた叫びを上げた。

オーリスから今回の試験の話を持ちかけられた時、サングルゥモンはつまらないと言う感情しか持てなかった。部隊の中でただ一匹、パートナーがいなくても成長期から成熟期に進化出来たのに、与え

られる任務は犯罪者の追跡や取締りばかり。
漸く同種族であるデジモンと戦えると思ったら状況がそれを赦さず、秘密部隊の隊舎内部に拘束状態に近い状態で閉じ込められ続けていた。
サングルゥモンも一応は状況は分かっていたが、それでも納得出来るかは別であり、ずっと不機嫌な日々を送り続けていたのだ。
そして漸く外に出られると思ったら、子供の試験の為の相手を言い渡された。自分の力に誇りを持っていたサングルゥモンからすれば侮辱されたと思っていたが、思ったよりも相手の実力は上だと理解し、歓喜と残忍さに満ちた目を動き回っているアインハルトに向ける。

「良いぜ！本格的にやろうじゃねぇか！！」

ーーーードォン！！

（ッ！！更にスピードが速くなった！）

衝撃波を撒き散らしながら駆け出して来たサングルゥモンを目撃したアインハルトは驚愕し、慌てて歩法（ステップ）の勢いを上げながら、近くのビルの間に入り込む。
正面からサングルゥモンに勝てる可能性は低い。ならば動きを限定させて仕留める以外に方法はないとアインハルトは判断し、ビルの間を駆け抜けていく。

（ギンガさんが言っていた！正面から勝てないのならば策を使って相手の動きを限定させて追い込む！）

「逃げるだけで俺に勝てると思うな！！」

逃げ回るアインハルトの後を追いながらサングルゥモンは叫ぶが、アインハルトは構わずにビルの間や狭い場所を重点的に走り続ける。
サングルゥモンの体長は三メートル。人間ならば駆け抜けられる場所も大きさが違うサングルゥモンでは追って来れない。それを理解しているアインハルトは何とかサングルゥモンの苛立ちを上げるように走り回り続ける。
僅かな情報ながらも対戦相手のサングルゥモンが短気である事をアインハルトは予測していた。
ならばその性格を利用すれば良いとアインハルトは考え、試験会場を駆け続ける。既にサングルゥモンの発する衝撃波によって幾つかのビルには亀裂が走ったり、アインハルトのバリアジャケットもかなり切り裂かれている。
それでも致命傷や怪我だけはアインハルトは負わずに、自身にやって来るチャンスを待ち続ける。
そして遂に逃げ回るアインハルトに対する苛立ちが増したのか、サングルゥモンは動きを止め、自身の両前足に刃を構えると、近くのビルの影に隠れようとしているアインハルトに向かって撃ち出し、刃は空中で数千のブレードに分裂し、アインハルトに向かって高速で迫る。

「スティッカーブレイドッ！！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガガガガガッ！！！！

サングルゥモンが放ったスティッカーブレイドは一瞬の内にアインハルトが隠れようとしていたビルの壁に直撃し、ビルを一瞬の内に倒壊させる。

ーーードオォォォォォーーーン！！

「ハッ！流石にこれは避けられ…」

「覇王・・・」

「ッ！！」

突然に自身の横から響いた声にサングルゥモンが慌てて視線を向けてみると、何らかの構えを取っているアインハルトの姿が存在していた。

その体には切り傷が幾つも存在していたが、アインハルトは構わずに足先から一気に練り上げた力を拳足に変えてサングルゥモンの胴体に左拳を叩き込む。

「断空拳ッ！！！」

ーーードォン！！

『グッ！！』

拳を胴体に叩き込まれたサングルゥモンは僅かに声を上げるが、アインハルトも左手を右手で押さえながら苦痛を堪えた。

サングルゥモンの体を覆っている体毛はかなり厚く、それ自体が衝撃を散らす防御壁になっている。その為に拳を撃ち出したアインハルト自身の方もダメージを受けてしまったのだ。

その原因は完全な威力不足。アインハルトの最大の攻撃を持ってしてもサングルゥモンに決定的なダメージを与えられないと言う非情な現実だった。

その事を今の一撃で理解したアインハルトは悔しげに顔を歪めるが、すぐさま突然の事態に止まってしまっているサングルゥモンの胴体に再び左拳をぶつける。

「ハアァァァァッ！！」

ーーードォン！！

「ハッ！全然ダメージは無いぜ！！ムン！！」

「クッ！！」

ーーーザン！！

サングルゥモンが鋭い刃を付けた前足を振り抜いている事を目撃したアインハルトは慌てて背後に飛び、サングルゥモンの攻撃を避ける。

しかし、完全に避ける事は出来ずに鳩尾部分のバリアジャケットが引き裂かれてしまう。

それでも何とか傷は薄皮一枚で治まり、戦闘に支障はないと判断したアインハルトは、油断無くサングルゥモンに構えを取り、サングルゥモンも警戒するように動きを止めて、注意深くアインハルトを観察し始める。

（思ったよりもやるが・・・さっきどうやって俺の横に現れやがった？確かにビルの影に隠れるのを見てから攻撃した筈だが？）

（今の決められなかったのは不味いですね・・・・相手の実力は完全に私より上。渡されたデバイスに記録されていた幻影魔法を無理やり発動させて魔力もかなり消耗してしまった・・・それに左手がッ！！）

アインハルトは痺れて思うように動かない左手に顔を険しくした。

サングルゥモンに叩き込んだ、たったの二撃の影響でアインハルトの左手は思うようには動かない状態に追い込まれていた。威力不足が原因なのはアインハルトも理解している。
利き腕では無いのが救いとは言え、それでも左手が動かない状況はかなり不味い。更に相手はまだ切り札を隠しているとアインハルトは何となく理解していた。

（このデジモンは最初に現れた時に影に潜んでいた。つまり相手の能力は影に隠れる能力・・・・ビルが辺りに存在しているこのフィールドは相手にとって有利なフィールド）

自身の周りに立ち並ぶビルが作り上げる幾重にも存在する影の存在に、アインハルトは状況の悪さを再認識した。
サングルゥモンが影の中に潜んで移動する能力を持っているとなれば、影が多く存在する場所はサングルゥモンにとって有利な場所だと言う事に他ならない。改めて自分が挑む試験の内容にアインハルトは絶望感が湧き上がって来るが、フッと強大な敵に挑んでいた大とアグモンの姿が頭の中に浮かんで来る。

（大さんとアグモンさんはこれ以上の強敵にも挑んだ。勝てる可能性だって少ない事も理解していても大さんとアグモンさんは諦めなかった・・・・ほんの僅かな可能性でも勝てる可能性が在るのならば挑む！）

アインハルトは覚悟を決め直すと、右拳を強く握りながら腰を深く落とし、サングルゥモンに向かって構えを取る。
それを目撃したサングルゥモンも四肢に力を込めてアインハルトを警戒するように睨みながら、自身の牙と前足の刃を煌かせる。
上空からその様子を見守っていたはやては顔を険しく歪め、アインハルトとサングルゥモンを交互に見つめていた。

（アインハルトちゃんはサングルゥモンの能力に気がついとるやろうけど、一番重要な事に気がつかへんと次でアインハルトちゃんは負ける。やっぱり成熟期の完全体級に挑むのは無理やったわ！クッ！！）

はやては次の攻防で起きる事態をほぼ予測出来ていた。

それは、はやてだけではない。遠くのモニタールームにいるオーリス、レジアス、ゲンヤ、そして近くのビルの中に隠れている大とアグモンも予測していた。

そしてその結果がアインハルトの敗北に終わってしまうと誰もが分かっていた。

それでも試験を止める訳にはいかない。何故ならばアインハルトもサングルゥモンも戦闘が可能状態。

試験が始まる前に説明した試験の内容ではどちらかが戦闘不能な状態になるまで試験は終わらない。

しかも今回の試験には行政府の人間も監督している為に、試験の中止は出来ない。すればその時点で試験は終わりベルカ自治領の人々は何の護りも無く開拓世界に追放。

その事を考えたはやては止めてアインハルトを救うべきか、止めずにアインハルトを死なせるのかと苦渋の決断を迫られる。

（・・・止めたら全部終わる・・・だけど、少なくてもアインハルトちゃんは助かる・・私は・・・・）

（止めないで下さい。八神さん）

（ッ！！アインハルトちゃん！！）

突然に届いたアインハルトからの念話にはやては目を見開き、慌

てて地上にいるアインハルトに顔を向けると、サングルゥモンに油断無く構えを取りながらアインハルトは再度念話をはやてに送る。

（何かが掴めそうなんです・・・この攻防で何かが掴める。そんな気がするんです）

（・・・分かってるやろ。サングルゥモンは確実にアインハルトちゃんを殺しに来る・・・そう言う試験の内容や・・・戦闘不能状態になるまで戦い続ける。手っ取り早く試験を終わらすには相手の命を奪うのが簡単・・・サングルゥモンはそれを持ってして全てを終わらす気なんや・・相手への事情に対する同情心を抱かない相手として選ばれたデジモンやから）

（分かっています・・・このデジモンは確実に私の息の根を止める気で攻撃して来ている・・・・でも、それは本当の意味での戦場に出る事に必要な事の筈です・・・なら私はそれを乗り越えて見せますッ！！）

ーーードォン！！

（アインハルトちゃん！！）

サングルゥモンの突進する勢いで駆け出したアインハルトを目撃したはやては叫ぶが、アインハルトは止まる事無くサングルゥモンに右腕を振り被る。

「ハァァァァァァァーーーーー！！！」

「・・・・ブラックマインド」

ーーーシュン！！

突進して来るアインハルトに対してサングルゥモンはボソッと呟き、その身をデータ化させて影の中にその身を潜ませた。

それを目撃したアインハルトは即座に辺りのビルの影を見回し、サングルゥモンが現れた瞬間にカウンターを叩き込む準備をするが、次の瞬間にアインハルト自身の影の中からサングルゥモンの前足が飛び出し、アインハルトの脇腹を引き裂く。

ーーーブザン！！

「アッ！！！」

「残念だったな。俺は自分よりも小さな影の中に入り込めるんだ」

サングルゥモンはそうアインハルトの影の中から姿を現しながら、アインハルトの脇腹から流れる血に毛が濡れながら呟いた。

確実な致命傷。これで試験は終わりだと確信しながらサングルゥモンは、自身の体を完全にアインハルトの影から出そうとする。しかし、完全にサングルゥモンの体がアインハルトの体から抜け出そう直前に、サングルゥモンをバインドが拘束する。

ーーーガシィィィィーーン！！

「何ッ！？」

「ゴホッ！・・・・分かっていました・・・・貴方が私の影から現れる事は」

「まさか！？お前！？」

口から僅かに血を吐き出しているアインハルトを目にしたサングルゥモンは、アインハルトの狙いを漸く理解し、困惑と驚愕に目を見開いた。
突進して来る前からアインハルトはこの瞬間を狙っていたのだ。サングルゥモンは連続では影の中に移動は出来ない。しかも今はまだ完全にアインハルトの影から抜け出していない状態でバインドに首の部分と前足を拘束されている。
幾ら力が凄まじいと言っても、ブラックマインドで自身のデータを影に溶け込ませている状態では、発揮させる事は出来ない。アインハルトはそう考えて捨て身の戦法を使ったのだ。
もちろんバリアジャケットの強度は事前に影から確実に攻撃が出来る脇腹や胸の部分を無理やり強化しておいた。それでも脇腹は引き裂かれてしまったが、幸運な事に内臓へのダメージだけは逃れる事は出来ていた。
充分に戦える状態だと判断しながらアインハルトは右手を手刀の形に変えながら上に掲げ、バインドから逃れようと暴れているサングルゥモンに全ての力を込めて振り下ろす。

「覇王断空拳ッ！！」

ーーードゴアァァァァァッ！！！

「ガッ！！」

頭部に直撃を食らったサングルゥモンは初めて苦痛の声を上げ、アインハルトの影の中にその身を再び溶け込ませた。
それと同時に力を全て振り絞って攻撃したアインハルトは引き裂かれて血を流し続けている脇腹を左手で押さえ、ふらつきながら近くのビルの壁に背中を預ける。

ーーードンッ！！

「ハァ・・・ハァ・・・・これで決まってくれれば良いのですが・・・・」

ーーードォン！！

「ッ！！」

突如として響いた足音にアインハルトは前に顔を向けてみると、目の前に存在しているビルの影の中からサングルゥモンの両前足が出現し、怒りに顔を歪めているサングルゥモンが現れる。

「やってくれたな小娘！！」

「・・・駄目でしたか・・・・・やっぱり・・・・」

ーーードサッ！

目の前で立っているサングルゥモンの姿を見つめながら、アインハルトは膝をついてしまった。

既にかなりの量の血が脇腹から流れてしまっている。意識も朦朧とし、目の前にいる筈のサングルゥモンの姿もまともに見れないほどにアインハルトの体は限界に近かった。

その様子を目撃したはやてはアインハルトが戦えない状態だと判断し、サングルゥモンに試験の終わりを告げようとするが、サングルゥモンは構わずにアインハルトに足を進める。

「サングルゥモン其処までや！アインハルトちゃんは…」

「うるさいぞ！！まだ、終わってねぇ！！」

「何言っているんや！？アインハルトちゃんはもう」

ーーーザッ！！

「ッ！！」

響いて来た音にはやては目を見開き、慌てて音が響いた方を見てみると、意識が朦朧としながらも立ち上がっているアインハルトが存在していた。

その身に纏うバリアジャケットは脇腹から流れ続ける血によって血まみれになっていたが、アインハルトはバリアジャケットの腰帯の部分をデバイスを使って操作し、自身の腰に無理やりに強く巻きつける事で血止めを施す。

ーーーギュゥッ！！

「・・・これでまだ戦えます」

「クククッ！！やっぱりお前は良いぜ！」

「・・・無駄口をしている暇は私にはもうありません」

アインハルトはそう呟き、ふらつきながらサングルゥモンに右拳を構える。

自身が本当に限界だとアインハルトは理解していた。拳を構えても力など全く篭ってはいない。

例え今の状態で拳を振り抜いてもサングルゥモンの体毛を超えて

ダメージを与える事など不可能。それを理解しながらもアインハルトは構えだけは絶対に解かない。
何故自分が此処まで行うのかアインハルトには理解出来なかった。
ベルカ自治領の人々の為。自分の為に色々としてくれた大達の期待に応える為。などなどが頭の中に浮かぶが、それのどれでもないとアインハルトは心の何処かでも理解していた。
では何故サングルゥモンと戦うのかと考えていると、フッと自分を遠くのビルから見ている大、アグモン、風華に気がつき、同時に理解した。

（負けたくない・・・・勝ちたいんです。目の前にいるサングルゥモンを倒したい・・・・そしてあの人が居る高みに近づいてみたい！！）

ーーードックン！！

アインハルトが自身が今抱いている想いを理解した瞬間、アインハルトの心が震えた。
そして次の瞬間にアインハルトの体の中を熱い何かが駆け巡り、拳に再び力が戻るのを確かにアインハルトは感じ、脇腹を襲い続けていた激痛も治まっていく。
その突然の自身の変化にアインハルトは戸惑いを覚えるが、戸惑っているのはアインハルトだけではなく目の前で警戒し続けていたサングルゥモンもアインハルトから感じる力の気配に戸惑いを覚えていた。

（何だ！？何が起きた！？何で俺は小娘に怯えている！？）

突然に自身を襲った恐怖にサングルゥモンは困惑した。
先ほどまでのアインハルトは僅かに自身が警戒する程度の相手で

しかないとサングルゥモンは思っていた。捨て身の戦法には驚いたが、ただ少し驚いただけでしかなく、自分が恐怖を覚える相手ではアインハルトは無い。
だが、今突然にサングルゥモンのデジモンの本能がアインハルトに危険視し始めた。
目の前に居る相手は全力を持って倒さなければいけない相手。出なければ敗北するのは自分なのだとサングルゥモンは確信し、鋭い牙を煌かせながらアインハルトに全力で飛び掛かる。

ーーードン！！

「終わりだ！！小娘！！」

「負けません！！！」

勢いよく飛び掛かって来たサングルゥモンに対してアインハルトは叫び返しながら右拳を、自分の体に突き刺そうとしているサングルゥモンの牙に叩きつける。

ーーードゴオオォォン！！

ーーーバキィィィィーーーン！！

「ガアァァァァァァァァーーーーー！！！！！」

アインハルトの拳とサングルゥモンの牙が激突し合った瞬間、凄まじい衝撃波が吹き荒れ、サングルゥモンの牙が砕け散った。
サングルゥモンはその事実に目を見開きながら苦痛の叫びを響かせるが、アインハルトはそれでどころではなかった。
アインハルトの拳とサングルゥモンの牙がぶつかり合った瞬間、

アインハルトの拳を覆うようにオレンジ色の光が混ざった碧銀の“デジソウル”が発生したのだ。

「こ、これは・・・まさか・・・」

「グゥッ！！何だそれは！？お前一体何をしやがったんだ！？」

牙を失った苦痛から漸く逃れられたサングルゥモンは、アインハルトの右手に宿っている光に恐怖を覚えた。

アレは不味い。アレは危険すぎる。本能的にアインハルトの手に宿っている力の恐ろしさを理解したサングルゥモンは、もはや手加減はしないと言うように自身の前足の刃を空中に投擲し、再び数千のブレードに変えてアインハルトに撃ち出す。

「スティッカーブレイドッ！！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガッ！！

（避けられない！ならッ！！）

高速で迫って来ているスティッカーブレイドを避ける事は無理だと判断したアインハルトは、左腕を前に出し、右手を胸元に持って行きながら呟く。

「覇王流“旋衝破（せんしょうは）”」

ーーーガガガガガガガガガガガッ！！！

アインハルトが呟いた瞬間、数千のスティッカーブレイドはアインハルトが立っていた場所に直撃し、辺りを土煙が覆った。

それを目撃したサングルゥモンは自身の勝利を確信するが、次の瞬間、土煙を切り裂きながら何十本ものブレードが連続でサングルゥモンに向かって来る。

ーーーシュン！！

「何ッ！？」

土煙を切り裂きながら迫って来る自身のスティッカーブレイドの刃にサングルゥモンは叫びながら慌てて避ける。

何故自身の技が数は少ないながらも戻って来たのかと、サングルゥモンが疑問に思いながらアインハルトの居る筈の場所に顔を向けた瞬間、サングルゥモンの横からアインハルトの声が響いて来る。

「知っていますか・・・同じ所を何度も攻撃されるダメージの通りがよくなるんです」

「ッ！！」

聞こえて来たアインハルトの声にサングルゥモンが目を見開きながら顔を向けてみると、体の至る所にブレードが突き刺さったアインハルトが立っていた。

アインハルトが先ほど使った技は、相手が放った射撃系の攻撃をそのまま相手に向かって投げ返す技。

その技を利用してアインハルトは迫って来ていたスティッカーブレイドの刃を掴み取っては投げ返し続けていたのだ、最もそれが出来たのはアインハルトが発生させていたデジソウルによって反応速度と防御力が向上していたおかげであり、返し切れなかったモノは体に突き刺さった。

その為に既にアインハルトの体は顔以外には傷が無い場所は無い

ほどに傷だらけになっている。だが、アインハルトはそれでも止まる事無く全身から血を流しながらも最後の、本当に全てを振り絞った拳をサングルゥモンの胴体に振り抜く。

「これが正真正銘の最後の一撃です！！覇王断空拳！！！」

ーーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ガハッ！！ガアァァァァァァァァーーーーー！！！！」

ーーーードオオオオオオオオオオオオオオオン！！

アインハルトのデジソウルを纏った最後の一撃を胴体に受けたサングルゥモンは苦痛の叫びを上げて吹き飛び、ビルに激突した。
それと同時にサングルゥモンの体はデジコードに覆われ、デジコードが消え去った後には頭に帽子を被って両腕にベルトを巻いたデジモン ― ベアモンが気絶して倒れていた。

ベアモン、世代／成長期、属性／ワクチン種、種族／獣型、必殺技／小熊正拳突き
強力な格闘能力を持つ小熊の姿をした獣型デジモン。パンチで手を傷めないように手にベルトを巻いていて、後ろ向きに被った帽子が特徴。体に秘めた戦闘能力は小さいながらも、とても高いので侮ってはいけない。必殺技は、強烈な正拳突きを相手に叩き込む『小熊正拳突き』だ。

「其処まで！！サングルゥモンが成長期に退化した事で試験は終了！よってアインハルト・ストラウスは機動六課に正式に入隊！！」

空中で状況を見守っていたはやては試験終了を宣言し、即座に待

機させて置いた医療班を呼び寄せる。
　自身が試験に合格した事を耳にしたアインハルトは、ゆっくりと立ち上がり、笑みを浮かべようとするが、その体は血を流し過ぎた影響で後ろに倒れそうになってしまう。

「ハァ・・・ハァ・・・」

ーーードサッ！！

（暖かい）

　アインハルトが後ろに倒れ伏す直前にアインハルトの体を誰かが支え、アインハルトは背中に感じる暖かさに身を委ねながら深い眠りの内に意識は落ちてしまうのだった。

最古の成熟期、そしてデジソウル！後編（後書き）

次回予告

試験に合格したアインハルト。

それによって大勢の人々への護りはついた。

しかし、危機は別の所でも迫っていた。

輝二達の前に現れる懐かしき二人の仲間。

次回、漆黒の竜人と少女、『非道！敵は炎と風！』

最後の闘士達が目覚める。しかし、それは喜びではなかった。

非道！敵は炎と風！前編

機動六課でアインハルトの試験が終わってから五時間後。
サングルゥモンとの戦いで負った怪我を治療する為に、アインハルトは医務室に緊急搬送されたのだが、治療に当たった医務官のシャマルは、アインハルトの怪我の現状に困惑せずにはいられなかった。
何故ならば、アインハルトがその身に負った怪我は普通ならば一生療養生活を行わなければいけないほどに深かったのにも関わらず、アインハルトの怪我は凄まじいまでの速さで癒え始めたのだ。
当然ながらその報告は、ベルカ自治領の人々への護衛についての会議を終えたはやてに届き、会議を終えると同時に、はやてはシャマルと共に医務室に駆け込んだ。
そしてアインハルトの体に起こっている異変について、最もデジソウルについて詳しいレオルモンに、説明を要求していた。

「・・・説明して貰ってもえぇでしょうか？レオルモンさん・・・アインハルトちゃんに何が起きているのか詳しく」

「・・・恐らくだが、覚醒したデジソウルが影響しているのだろう。デジソウルは何も力の強化だけに特化した力ではない」

「つまり、急激に覚醒した力で、体の治癒能力も強化されていると言う事ですか？」

「その通りだ。更にあの小娘がデジソウルを覚醒させた理由には、大のデジソウルが関わっている。その影響で、デジソウルが覚醒したばかりにも関わらず、あの娘が纏ったデジソウルは覚醒したてとは思えんほどに強力だった」

シャマルの質問に対してレオルモンは自身の考えを告げ、はやてとシャマルは難しげに顔を歪めた。
何せ魔法を使えるはやてとシャマルを持ってしても、アインハルトが手に入れた力であるデジソウルに関しては未知の領域に位置する力。
デジソウルについて最も詳しいレオルモンから話を聞く以外に、アインハルトの体に起きている状況を知る術が無いのだ。
大に聞こうにも一時間前まではアインハルトの傍に居続けたが、焦った風華とアグモンに連れられて隠れ家に戻ってしまっている。最も大自身、デジソウルに関しては完全に理解している訳ではないので、聞いても無駄なのだが。
その事を知らないはやてとシャマルは、とにかくアインハルトは一安心だと思い、気になって居た事をはやてがレオルモンに質問する。

「質問なんですけど・・・アインハルトちゃんが手に入れたデジソウルを、他のメンバーも得られる事は出来ますやろうか？あの力はデジモンに対しては、かなり有効の力見たいですし」

はやてがそうレオルモンに質問するのも当然だろう。
完全体級の力を持っていたサングルゥモンに、大怪我を負いながらもアインハルトは勝利した。
その要因になった力はデジソウル。デジソウルを得られている者が増えれば、何れ訪れる七大魔王デジモン達との決戦に役立つ。
そうはやては指揮官として考えて、レオルモンに質問したのだが、レオルモンは否定するように首を横に振るう。

「止めておいた方が良いだろう。あの小娘がデジソウルに覚醒する要因になったのには、大のデジソウル以外に、死に瀕するほどの危

機的状況が関係している。そのような状態に追い込むのには、危険が多すぎる。覚醒出来ずに死んでしまう可能性が高い方法など、行うべきではない。俺も以前は大達をそのような状況に追い込んでデジソウルを成長させたが、それは大達に素養が出来ていたからだ。素養も無く、今回のような事を繰り返せば、どれだけの人間がデジソウルを覚醒させる事が出来ずに死ぬか分からん」

「・・・確かにそうですわな・・・アインハルトちゃんは本当に運が良かっただけ・・・分かりましたわ。今回のデジソウル会得は、あくまで異例中の異例とレジアス中将に報告しときます」

「それが良いだろう・・・で、シャマルだったか？」

「は、はい」

レオルモンの突然の呼びかけに、シャマルは僅かに困惑しながら答えた。

それをレオルモンは確認すると、何時に無く険しい瞳しながらシャマルを見つめ、シャマルは若干顔を赤くするが、レオルモンは構わずに声を掛ける。

「今後あの娘の体の現状を俺に逐一報告してくれ。此方の世界で始めてデジソウルを会得した人間だ。俺は医学とかは分からん。だが、デジソウルに関してはこの地で誰よりも知っている。もし何か在った時は俺が対処法を教えるから、お前が実行してくれ。見ての通り、俺は当分はまともに動けんからな」

「わ、分かりました！」

（・・・もしかしてシャマル・・・・・レオルモンさんに気があ

るんやろうか？・・・いやいやそれは流石にないわな）

何処か困惑しながらも、嬉しげな声を出したシャマルの様子をはやては真剣な顔をしながら眺めていたが、首を僅かに横に振るい、自身の考えを打ち消した。

そして三人は今後のアインハルトに処遇について話し合いを終えると、医務室で眠り続けているアインハルトをシャマルとレオルモンに任せて、はやては退出する。

そのままはやてが機動六課の通路を歩いていると、音も無くはやての背後にレナが現れ、はやての耳元に声を掛ける。

「はやて・・・例の聖王教会で手に入れた予言の三つ目の解読が終わった」

「・・・それは良い知らせや・・・で、内容は？」

「『黙示録終わりて、五つの属が消え去りし時、再び騎士達と獣達が舞い降りる。彼の者達は黙示録を知り、法の世を乱す。されど、二つの獣は闇に飲まれ消え去り、騎士達も虚空に飲まれる。妄信する正義が世に正義を名乗りし時、五つの大罪は法の内より現れる』・・・これが三つ目の詩文の予言で間違いない。四つ目の予言は残念ながら解読する事が出来ない・・・四つ目の予言の内容が書かれているデジ文字は、私達が知っているデジ文字よりも古い古代デジ文字な為に、解読は専門家以外に無理そうだ」

「三つ目の予言が分かっただけで御の字やけど・・・如何考えても最悪な予言や・・・騎士達と獣達って、ロイヤルナイツと四聖獣の事やろ」

レナが告げたカリムの予言の内容に、はやてはこれ以上に無いほ

どに顔を歪めた。
　如何考えても三つ目の予言の内容も最悪としか言えなかった。と言うよりも、成就されたりしたら確実に状況が詰んでしまう。何せロイヤルナイツと四聖獣が再び現れて暴れれば、人間側に想像絶する被害が出る。
　しかも、例えそれを乗り越えても予言には彼らが敗れてしまう条文が現れている。人間に敗北するのか、それともルーチェモン達に敗北するのかまでは分からないが、彼らが敗れると同時に最強にして最悪の称号を持つ七大魔王デジモン達が現れる。
　そうなれば確実に世界はルーチェモン達の手に落ちてしまうだろう。聖王教会と言う人間側の戦力の一つが消滅し、更にデジモン側の最強の戦力までも消え去れば、本当に全てがルーチェモン達の手に落ちてしまう。

「五つの属が消え去りし時・・・それが何を意味するのか分かれば、対策も打てるんやけど・・・とにかく、何としてもその予言だけは成就されたらあかん」

「分かっている。既にレジアス中将も動いている。ロイヤルナイツと四聖獣達が再び現れる前に、デジモンの評判を上げるようだ・・今後は私達に与えられる任務も激しさを増すと考えた方が良いだろう」

「分かっとるよ」

「それとレジアス中将から伝言だが、『今回成長期に退化したベアモンは、機動六課に所属させておけ』だそうだ。どうもアインハルト・ストラウスとの相性が良いらしい」

「あぁ、それは何となく分かるわ。確かにあの二人何か相性が良さ

そうやもん」

はやては何処か納得したようにレナの言葉に頷いた。

試験を最も近くで見ていたはやてから見ても、アインハルトとサングルゥモンの相性は悪くなかった。互いに実力だけを競いあう強敵と言う印象をはやては受けていた。

最も試験内容が内容だけに殺し合いに近い様相にはなってしまっていたが、別の出会い方ならば穏便に話は済んでいたかもしれないと、はやては思っている。

「よし、アインハルトちゃんの怪我が治ったら、ベアモンと同室で過ごして貰って、二人が本当にパートナーとしてやっていけるか確かめてみよう」

「分かった。その内容で中将達は伝えておく」

「頼むわな」

はやてはそうレナに声を掛け、レナは再び音も無くはやての背後から姿を消す。

それを確認するとはやては自身の頬を両手で強く叩く。

ーーーパン！！

「フゥ〜、此処からが正念場や。絶対にあんたらの思い通りにはさせへんで、ルーチェモン、倉田」

そうはやては新たに決意を固めなおすと、自身の仕事を終わらせる為に部隊長室へと戻って行くのだった。

その日の深夜医務室内部。
アインハルトは意識を取り戻していた。ベットの上で横になりながら眺めるのは自身の右腕。
思い出すのは、サングルゥモンを殴った時に発生した碧銀にオレンジ色の光が混ざっていたデジソウル。

「・・・・アレが・・・・デジソウル・・・・」

自身の得た力の事を思い、アインハルトは呆然と声を出してしまった。
話には聞いて大の戦いぶりを映像で見たとは言え、まさか得ただけでアレほどまでに力が上がるとは、アインハルトも思っていなかった。よくて僅かに力が上がるぐらいだと考えていたのだが、デジソウルはアインハルトの予想を超える以上に強大な力だった。
大と同じ力を手に入れた事で、アインハルトの口元は思わず綻ぶが、同時に自身の得た力の強大さにアインハルトは震えてしまう。
試験で戦ったサングルゥモンの実力は確かにアインハルトよりも遥かに上だった。
直接サングルゥモンと戦ったアインハルトには、それが誰よりも理解出来る。その相手に勝つ要因になったのは、紛れも無くデジソウルの恩恵に他ならない。
これから一緒付き合っていく事になるであろう力の事を思い、アインハルトは思わず溜め息を吐いてしまう。同時に横合いからレオルモンが声を掛ける。

「何か悩みでも在るのか？」

「・・・レオルモンさんですか」

「ほう、俺が居る事に気がついていたか。如何やら、着実にデジソ

ウルが体に馴染み始めているようだな」

「・・・・・」

レオルモンの言葉にアインハルトは、無言で自身の右腕を見つめた。

今はデジソウルの光は宿っていないが確かに試験前には感じなかった力を、アインハルトは体の奥底に感じる。使ってもいないのに感じられる力は、覇王の記憶を持つアインハルトから見ても凄まじいほど。

改めて自分が得た力の強大さにアインハルトは恐れを抱くが、レオルモンはその様子を満足げに眺めてながら頷く。

「如何やら、自分が得たデジソウルを恐れているようだな」

「・・・・はい・・・この力を本当に私は扱えるのでしょうか？」

「それは今後のお前次第だ。最もデジソウルに恐れを抱いているのは良い兆候だ」

「如何言う意味ですか？」

「自らの扱う力を把握出来ん奴は、自らの力に何れ飲まれる。力を扱うのならば、先ずはその力の危険性を知らねばならん。少なくともお前はデジソウルの危険性を理解している。その点だけでもお前はデジソウルを制御出来る素質があると言う事だ」

「・・・・・・」

アインハルトは無言で答える事しか出来なかった。

自身が本当にデジソウルを制御出来るのか不安だった。試験の時は無我夢中だった為に、本当に制御していたのかも分からない。
あの夢の中で見た大のように、本当にデジソウルを制御出来るのかと不安にアインハルトは考えるが、フッと大は如何しているのかと思い、レオルモンに顔を向ける。

「レオルモンさん・・・大さん達は如何しているんですか？」

「機動六課の連中は、次の任務先が決まるらしいと言う事で準備をしている。お前の頑張りを無駄にしない為だ。それと大、アグモン、風華だが、あの三人は隠れ家に帰ったぞ」

「帰った？」

「そう言えば、お前は大達の現状についてよく知らなかった。大達はとある事情で本局の管理局連中に追われているのだ。その為に本来ならば此処に居るのも不味かったのだが、俺が奴らを引き止めてお前の訓練に付き合っていて貰った。最も大達自身もお前に力を貸したくなったから、力を貸していたのだがな」

「・・・そうですか」

アインハルトはレオルモンの説明に、顔を見えないようにしながら答えた。
その顔は僅かに嬉しげに歪んでいた。大達が自分の為にこの場所に居てくれたのだと知って、何処か胸の内が暖かくなるのを感じ、アインハルトは口元を思わず綻ばせてしまう。
しかし、次のレオルモンの言葉を耳にした瞬間、その気持ちは一瞬で消えてしまう。

「本来ならばお前が目覚めるまで大は残ると言っていたのだが、アグモンと風華が無理やりに連れて行ったのだ。何でも風華の姉妹達が大に会えない事を寂しがって、機動六課に来ようとしているらしくてな。風華だけではなく、他の二人まで来るのは不味いか…」

「質問です」

「ムッ？」

感情が感じられない声で、突然に声を被せて来たアインハルトに、レオルモンは訝しげな目を顔を隠したままのアインハルトに向けるが、アインハルトは構わずに顔を隠したまま質問する。

「・・・その風華さんの姉妹の二人は、大さんと一緒にずっと居るんですか？」

「よく意味が分からん質問だが、俺が大の隠れ家に居た時はよく一緒に居たぞ・・・・・そう言えば風華と違って、あの二人は夜は大のベットで眠っていたが、それが如何したのだ？」

この時、もし風華とアグモンがこの場所に居たら、レオルモンの説明を何としても止めていただろう。

しかし、風華とアグモンは居らず、レオルモンの説明をアインハルトは聞いてしまった。

そしてレオルモンの説明を聞いたアインハルトは、自身でも分からない感情が胸に内から湧き上がって来る。

（この気持ちは一体？・・・何故か大さんが、他の女の子と一緒に居ると聞いただけで胸の内がざわめきます）

その様にアインハルトが自身の胸の内から沸き上がって来た感情について考えていると、突然に黙ってしまったアインハルトの様子にレオルモンは疑問に首を傾げながら、再び声を掛ける。

「何故急に黙った？」

「・・・・分かりません・・・自分でも・・・・・・そう言えばその二人は、お強いのですか？」

「少なくとも、全ての実力の面ではお前よりも実力は遥かに上だ。色々と事情が在って、風華も含めた三人とも並みの完全体を超える実力を有している。例えデジソウルを得たお前でも敗北するだろうな」

ーーーガバッ！！

「・・・・・勝ちます。その二人だけには負けてはいけない気がするんです・・・レオルモンさん！」

「ムッ！！」

急にベットから起き上がって詰め寄って来たアインハルトに、レオルモンは困惑する。

しかし、アインハルトは構わずに深々と困惑しているレオルモンに頭を下げる。

「傷が治ったらデジソウルの制御方法のご指導をお願いします！後、出来れば私の戦い方の悪い箇所のご指導も！レオルモンさんは拳を使って戦っていたと、大さんが言っていましたので！」

「か、構わんが・・・・・元々お前にデジソウルの制御方法を教えるつもりだったからな・・・お前の使っている覇王流とかはよく分からんが、拳を使った戦い方ならば教える事は出来る・・・まぁ、最終的には俺の教えは基本にしかなるまい。その基本をお前が使っている覇王流とやらに加えられるかは、お前次第だろうがな」

「それでも構いません！私は強くなりたんです！」

「・・・・分かった。お前の傷が癒えたら、本格的に鍛えてやる。その為にも今は休んでおけ」

「はい！」

レオルモンの言葉にアインハルトは頷き、もう一度頭を深々と下げると、そのままベットへと戻って行く。

それをレオルモンは確認すると、眠り始めたアインハルトに気づかれないようにソッと近くの机の上に置かれていた端末に手を伸ばし、シャマルを呼ぶのだった。

とある管理世界に存在しているベルカに関係する遺跡。

いや、その場所は既に遺跡とは呼べないほどに破壊し尽くされていた。歴史の重みを感じさせる作りは、跡形もなく粉々に砕け、嘗て大勢の人々が歩いていた思われる通路も破壊された瓦礫で全て埋もれていた。

それを行った張本人である漆黒の竜人ーブラックは、それだけの破壊を行いながらも怒りが治まらないのか、上空に浮かび上がり、負の力を集中させ、一気に遺跡に向かって赤い巨大なエネルギーを連続で投擲する。

「ガイアフォーース！！！！」

ドゴオオオ

ルインの言葉にブラックは、憎しみしか宿っていない声で叫んだ。
聖王教会が滅んでから、ずっとブラックとルインはベルカに関係する遺跡を破壊し続けていた。二度と聖王教会の過激派ような連中が現れないようにする為に、ブラックとルインは破壊と言う破壊を繰り返していた。
その結果、既に破壊されたベルカの遺跡は百近く。歴史家や考古学者が見れば卒倒するどころか、ショック死するほどまでに跡形もなく消滅させられていた。
それでもブラックとルインの怒りは治まっていない。ヴィヴィオとギルモンに癒えないほどに傷を負わせた元凶と言う呼ぶべき、ベルカと言う国に関わる遺物は全て破壊するまで二人は止まる気はなかった。
因みに今まで破壊した遺跡内部から、ユニゾンデバイスなども数体発見されたが、彼らフリートの研究室送りにされている。一応は彼らには何の罪もないので、フリートの検査が終わった後にさざなみ寮で幼年期デジモン達の世話をして貰う予定である。

「次は何処だ？」

「此処から程近い場所に、“ガレアの冥王”に関わる遺跡が存在しています。其方を消滅させてから、別の世界に向かいましょう」

「案内しろ！」

「はい！ブラック様！」

ブラックの言葉にルインは即座に頷き、ブラックの肩に飛び乗り、そのままブラックはルインの案内を聞きながら凄まじい速さで、次の遺跡へと移動して行く。
その後をついて来る暗く澱んだ気配に、ブラックとルインは険し

く顔を歪めるのだった。

地球、東京都。
デジモン達の襲撃によって半壊に近い状態に追い込まれた東京だったが、少しずつ復興が進んでいた。
最も一番有名な東京タワーは、未だに幾つかの損傷が在る為に誰も近づいては居ない。そしてそれは在る意味では幸運だった。
何故ならば、東京タワーの展望内部で鎧に全身を包んでいる主使型デジモン―ドミニモンと、その配下であるダルクモンが会話を行っていたのだ。

「フム、では、やはりこの地に存在している他のデジタルワールドへのゲートの封印が緩んで居るのだな？」

「ハッ！間違いありません！・・・先日の『偽りの希望達』の本拠地がある地での異変以降、徐々にではありますが、この場所に封印されているデジタルワールドのゲートの封印が緩んだのは事実です」

「そうか・・・・フフフフッ！やはりあの時に介入しなかったのは正解だったな！ダルクモンよ！」

ドミニモンは嬉しげな声を上げて、窓の外から見える青空を見つめる。
先日の海鳴市で起きた突然の大規模な戦いの事を、ドミニモン達は知っていた。その時にドミニモンは疲弊しているであろうリンディ達を襲う計画を練っていたのだが、それどころの事態ではなくなったのだ。
何故ならば東京に居たドミニモンの配下の天使型デジモン達から、“デジタルワールドへのゲートを閉じている封印が弱まった”と言

う報告が届いたのだ。
その事を聞いたドミニモンは、リンディ達の事などもはや構わずに一目散に東京に舞い戻った。
何せ東京に存在しているゲートが再び開けば、人間を憎んでいるデジモン達が大軍でやって来る。そうなれば、一々各地に散っているデジモン達を自分の配下になるように説得する必要など無い。人間を憎んでいるデジモン達に地球の人間を全て滅ぼさせた後で、そのデジモン達を配下にすればいいのだから。
ドミニモンはそう考え、今地球に居るデジモン達の説得を止めて、東京の上空に存在しているゲートを開く事にしたのだ。

「フフフッ！あの時に起きた強大な空間の異常が、デジタルワールドへの扉を再び開かせる鍵になるとはな。『偽りの希望』どもも案外役に立つ」

「しかし、ドミニモン様？ゲートの封印は弱まったとは言え、あの三大天使の力で成された封印です。如何に究極体の中でも強力なドミニモン様の力でも解くのは容易くは無い筈ですが？」

「その通りだ・・・悔しいが、三大天使の封印は私を持ってしても解く事は難しい。それに封印を解くのには膨大な力を消費する。そうなれば偽りの希望どもに滅ぼされてしまうやもしれない・・・だが、私には秘策が在る！」

ドミニモンはそう自信満々に宣言した。
確かにデジタルワールドへのゲートを封印している力を破るのは、ドミニモンでも不可能に近い。
命を賭けた力の暴走ならば、或いは封印を破る事が出来るかも知れないが、それでは自分の命が無いので、ドミニモンは行う気は無い。

何よりもそんな危険な方法を使わずとも封印を破れるかもしれない方法を、ドミニモンは思いついていた。そしてその手札をドミニモンは、“二つ”その手に握っていた。

「私の秘策の為には『偽りの希望』どもが持つ、アレが必要になる！元々アレは私達の世界のモノ！人間どもが、使う事自体間違っているのだ！ダルクモンよ！あの二人の様子は如何だ！？」

「・・・残念ながら中々に精神が強く、洗脳は進んでいません。流石は私達の世界を救いし英雄と呼ぶべきなのでしょうか」

「人間を褒める必要など無い！・・・・・こうなれば私直々に洗脳してくれる！何としてもデジタルワールドへのゲートを開かねばならんだ！その為ならば犠牲などやむ終えん！理想の世界の為にもな！」

「分かりました・・・全ては我らが理想とする世界の為に」

ドミニモンの言葉にダルクモンは恭しく頷き、ドミニモンは満足げに歩き始める。

そしてドミニモンが部屋を出て行くのをダルクモンは確認すると、ゆっくりと立ち上がり、ドミニモンが出て行った扉を侮蔑に満ちた視線で見つめる。

「フッ！愚かな天使だ。至高のあの方には遠く及ばん」

『■■■■■モン、いや今はダルクモンだったね』

「ッ！！ルーチェモン様！！」

突然に自身の頭の中に響いて来た声に、ダルクモンは慌てて土下座するような形でその場に膝をついた。
その顔に浮かぶのは完全に畏怖のみ。ドミニモンの時にさえ、見えなかった畏怖の感情に全身を支配されながらダルクモンは、真の主の言葉を待ち続ける。

『其方の計画は旨く言っているんだろうね？』

「ハッ！！全て万事抜かりなく進行しています！あの愚かな主天使は、私の手のひらの上で踊っています。更に封印されていたゲートも近々解けて、憎しみに支配されたデジモン達によって滅ぼされるでしょう」

『良い報告だね。なら、あの脳筋が帰って来る場所も地球にしようかな。確実に地球に居るあの連中には滅んで貰わないといけないからね』

「ッ！！」

ルーチェモンが告げた事実にダルクモンは限界までも目を見開き、全身を恐怖に震わせた。
脳筋などとルーチェモンが呼ぶ存在を、ダルクモンは一体しか知らない。そしてそれが地球に現れれば、確実に地球は滅ぶだろう。ダルクモンを含めた全てが。
自分が見捨てられてしまったのかと、ダルクモンは恐怖に震えながら敬愛する主の言葉を待っていると、ルーチェモンは何でもないように声を掛けて来る。

『実はね。管理世界が僕らの予想を超えた動きを始めて来たんだよ。その件には地球に居る連中が関わっているのは間違いないからね。

全く少し本局の木偶人形達に良い目を与え過ぎたよ。ちょっと僕と倉田が動けなかったら、アレだからね。ダルクモン。君は僕の期待を裏切らないでくれよ。ちゃんと地球にあの脳筋が現れるのを確認したら、僕の所に戻って来なよ』

「ッ！！ハッ！必ずや！ルーチェモン様の命を叶えて見せます！」

ルーチェモンの言葉にダルクモンは先ほどまで一転して、嬉しげな声を出しながら頷いた。

やはりルーチェモンは自分の事も考えてくれていたのだと喜びながら、ダルクモンは立ち上がり、ドミニモンが出て行った扉の方に歩いて行く。真の主であるルーチェモンの命令を叶える為に。

非道！敵は炎と風！中編

国連本部一室。
地球の国々が他世界の事を知ってから一週間以上経過していた。
しかし、未だに国連内部では各国の代表が論争を繰り広げている。
無理もないだろう。他の世界の存在が明らかになっただけでも大問題なのに、その世界でもかなりの権力を持った組織が、地球の国々から質量兵器を強奪。更にはその兵器類を使って虐殺まで行うとしていた。
それだけではなく、全く存在さえも明らかになっていなかった他世界の司法組織が、勝手に法を執行していた事実も明るみに出てしまった。
地球の各国には、それぞれの国が決めた法が存在している。それを他の国で使用するのは赦されない。
某世界の警察を謳っている国の組織でも、其処までの横暴な行動はした事がない。更に核を越える以上の威力を持った戦略兵器を撃ち込もうとしていたなどなど、次々と各国の政府関係者が怒り狂う事実が明るみになり、地球は大規模な混乱に見まわれていた。
何とか戦争だけにはならないようにしなければ、日本の首相と護衛として付き添って来たリンディ、クイントが管理世界の現状を説明して抑えようとしているのだが、焼け石に水に等しい状況になっている。
おかげで管理世界について最も詳しいリンディとクイントは、この一週間以上まともな休みや日本に居る仲間達に連絡が出来ない状態になっていた。
そして今日の昼ごろに、何とか総理の計らいで僅かながらも休みが取れたリンディとクイントは、僅かな時間の間に、他の場所の現状を知ろうとフリートに連絡を取ったのだが、其処で更に顔が青ざめるような事実が報告されてしまった。

「・・・ほ・・本当なの？フリートさん」

『・・・・残念ながらほぼ間違いありません・・・・“ブラックとルインさんは、暴走に近い状態に入っています”・・・・既に当初に予定していた聖王教会が管理していたベルカ関係の遺跡だけではなく、ルインさんが知っている発見されてない遺跡と、私がサーチャーを使って発見していた遺跡を、ブラックが破壊している状況です。その数は既に九十を超えています』

『ッ！？』

通信機からフリートが告げたブラックとルインの行った惨状に、リンディとクイントは顔を蒼白色に変え、顔を見合わせた。

当初のリンディ達の予定では、聖王教会に対する地球での報復と聖王教会の存在意義の消滅の為に、聖王教会が管理権限を持っていたベルカ遺跡だけ破壊する予定だった。流石に聖王教会はともかく、他のベルカの人々には罪はないとリンディ達も理解している。

だからこそ、破壊するのは“聖王教会が管理しているベルカ遺跡”だけの予定だったのだが、ブラックとルインはそれ以上の遺跡や遺物など破壊し続けていた。

「すぐに通信してブラックを止めないと危ないわよ！このままだと大変な事態になるわ！」

『・・・・既になっています・・・今回のブラックとルインさんの行動で、各世界に於けるベルカ関係者の風当たりは冷たいものになりかけています・・・・一番酷いので、ミッドチルダに残っているベルカ自治領の人々を護衛無しで開拓世界に排斥しようとして動きがありました・・・其方は何とか機動六課の方々の行動で免れる事

が出来ましたが、このままだと取り返しのつかない事態になるのは確実でしょう』

「・・・・な、何てことなの？」

フリートが告げた管理世界の現状にリンディは蒼白になりながらよろめき、クイントも予想を超える事態に蒼白になって体を震わせた。

幾らなんでもブラックとルインの行動はやりすぎている。自分達の目的は、“デジモンと人間の共存”なのに、ブラックとルインは世界を最悪な方向へと向かわせる破壊を行っている。

このままではデジモンと人間との間の亀裂は増してしまうとリンディとクイントは判断し、フリートに声を掛ける。

「すぐにティアナさんとクダモン君、なのはさんとガブモン君をブラックとルインさんの所に向かわせない！ブラックとルインさんの破壊行動を止めるのよ！！」

『了解です！！』

「・・・・・でも、一体ブラックとルインも如何したって言うの？・・何時もの二人らしくないわ」

「・・・そうね。ブラックもルインさんも現状は分かっている筈・・・それなのにこの行動は一体？」

クイント、リンディは、何時ものブラックとルインらしくない行動に、首を傾げざるえなかった。

何時ものブラックとルインならば、幾らヴィヴィオを傷つけられたとは言え、此処までの破壊行動はしない。ブラックもルインもベ

ルカに憎しみを抱いても、それを制御出来るだけの精神力を持っている。
故にブラックが聖王教会の管理している遺跡の破壊を告げた時も、ブラックならば軽はずみな行動はしないと思い、リンディ達は許可したのだ。
それなのに現在のブラックとルインの行動。完全に二人らしくない行動に、リンディとクイントが疑問を覚えながら考え込んでいると、通信機からフリートが自身の考えた推測を告げて来る。

『これは私の推測ですが・・・・もしかしてブラックは既に限界を超えて動いているのではないでしょうか？』

「それは如何言う事なの？」

『考えて見たんですよ。ブラックは不眠不休で地球に戻って来ました。そのすぐ後にカオスデュークモンと死闘。しかも精神的不安要素を抱えた状態での死闘でした。それを解消する為に、ブラックは自分の本能を暴走させて戦いましたよね？』

「えぇ、その通りよ。そして暴走を止める為にオウリュウモン君に一撃を・・・・・ッ！！まさか！？」

ある一つの可能性に行き着いたリンディは驚愕に目を見開き、クイントも目を見開いて通信機を見つめる。
そしてもしそれが当たっているとすれば、今のブラックの状態に納得も行く。だが、同時にそれは最悪な状況と言う事に他ならない。何せもし自分達の考えた推測が当たっていれば、カオスデュークモンではなく、ブラックこそが“ベルカの全てを滅ぼす存在”になってしまっている事に他ならない。
その推測が当たっていない事を心の底からリンディとクイントは

願うが、フリートは残酷な事実を伝える。

『そうです！ブラックの暴走が治まっていたんじゃないんです！？理性が在りながらも暴走状態のままだったんです！！何時ものブラックならば、確かに暴走しても自分の意志力で暴走を止めたでしょう！ですが、信じられないほどの精神的疲労が蓄積していた為に、ブラック自身も既に暴走を、いえ、ブラックの精神の奥底に封印されていた破壊衝動を抑えられなくなっていたんです！』

『ッ！！！』

『恐らくカオスデュークモンとの戦いの後は、何とか破壊衝動を制御出来ていたのでしょう。ですが、ベルカ遺跡を破壊していく内に、徐々に抑えきれなくなった。そしてそれは遂にルインさんにも影響を及ぼしてしまうほどに強大になってしまった・・・・ルインさんも元々は世界を破壊してしまうほどの、力を宿していた闇の結晶です。ブラックの増大した破壊衝動に影響され、ベルカの全てを滅ぼす状態にルインさんも陥ってしまったんです』

「・・・はやてさんが教えてくれた『ベルカ崩壊と消滅予言』は終わっていなかった・・・ベルカを滅ぼす黙示録はカオスデュークモンだけじゃなくて、ブラックも指していた」

「だとしたらリンディ・・・このままだと？」

「・・・えぇ・・・今は遺跡だけで何とか済んでいるけど、ブラックの状態が推測通りだとしたら、遺跡の後に狙うのは・・・『ベルカに関わる全ての人間』に違いないわ！」

リンディはそう焦りに満ちた叫びを上げ、クイントと通信機の先

に居るフリートは顔色を土気色に染めた。
もっと早く気がつくべきだったのだ。幾ら強靭的な力と意志力を持ったブラックにも限界は存在している。ましてや不眠不休で動き続けていたブラックに、何時もの精神力が存在している筈はない。
リンディ達は心の何処かでブラックならば暴走する筈はないと言う油断が、今のブラックとルインを目覚めさせてしまったのだ。

『更に今、管理世界にはブラックの体を構成しているダークタワーが大量に存在しています・・・何時ものブラックならダークタワーの闇の力など撥ね退けるでしょうが、今のブラックにはそれは無理です。少なからず、ダークタワーの影響をブラックは受けているのでしょう』

「・・・・フリートさん・・・私もクイントもブラックのところに向かうわ」

「えぇ、ブラックとルインの暴走は何としても止めないといけないわ・・・それに今回の事は私達の責任でも在るわ」

そうクイントは呟き、リンディも同意するように頷いた。
自分達も怒りに支配されていた事に気がついたのだ。もっと早くにブラックの状態を把握していれば、今の事態に陥る事はなかった。デジモンとの共存を目指しながらも、今の自分達が聖王教会に行っている行動は、ルーチェモン達や管理局と同じ。
そうなった責任を取る為にも、リンディとクイントはブラックとルインの暴走を止める為に動こうとするが、フリートはそれを全力で止め始める。

『駄目です！！リンディさんとクイントさんは、そのまま地球の混乱を治める為に、其処に残って下さい！何よりも二人は絶対に今の

ブラックには近づいてはいけません！！』

「それは如何言う意味なの？」

『忘れているんですか！？今の二人の体を構成している根源には、ブラックのデータが存在しています！もし今のブラックに近づけば、それが共鳴現象を起こして、二人もブラックとルインさんと同じ状態に陥る可能性が高いんです！！』

『クッ！！』

フリートが告げた推測に、リンディとクイントは悔しげな声を上げた。

そうリンディとクイントの体の奥底には、ブラックの因子が存在している。通常時のブラックならば影響は起きないが、今のブラックでは話が変わる。

フリートの推測が当たっていた場合、リンディとクイントも確実にブラックの凄まじい破壊衝動に飲み込まれ、ブラックと同様にベルカの全て滅ぼす『新たな黙示録』になるだろう。

それが分かっているからこそ、フリートはティアナとクダモン、そしてなのはとガブモンにブラックとルインの暴走を止めさせようと動いたのだ。

『今のブラックとルインさんを止められる可能性が最も高いのは、ブラックが鍛えたあの四人だけです。彼女達ならばブラックを止められるでしょう・・・ですから、如何か二人は地球の混乱を治めて下さい。それが今、二人にしか出来ない事です』

「・・・・分かったわ」

「・・・フリート・・・戦いが始まったら映像だけでも送ってくれないかしら？」

『分かっています・・・では、私はティアナ達にブラックの居場所を伝えますので、失礼します』

ーーーブン！！

「・・・ブラック」

「リンディ」

通信が途切れた通信機を辛そうに見つめているリンディに、クイントは声を掛けるが、結局何も言う事は出来ず、総理からの呼び出しが掛かるまで、二人は自分達の行動を色々と悩むのだった。

東京都から程近いとある街。

その街でデジモンの目撃情報を知った輝一、輝二、純平、友樹、そしてリスティは、街の中でデジモンを探し回っていた。

本来ならばこのメンバーにティアナとクダモン、なのはとガブモンも加わっていたのが、フリートから送られて来た緊急通信でブラックとルインの暴走を知り、即座にブラックとルインが居る世界へと向かった為にメンバーからは外れている。

リスティとしてはそれは頭の痛い事だった。何故ならばこの街に居るデジモンは、先ず間違いなく『ドミニモンの罠』だと分かっているからだ。

「・・・さ～て、ちょっと予想外の事で、強力なメンバーが離れた

けど・・・皆、分かっているだろうね？」

「分かっているさ」

「うん！」

「俺もだぜ！」

「この街に居るデジモンについては、充分過ぎるほど分かっている」

ワゴン車を運転しているリスティの質問に輝二、友樹、純平、輝一はそれぞれ答えた。

その様子にリスティは頷きながら、自身の膝元の上に置いてある資料を、助手席に座っている輝一に渡し、輝一は無言で資料を開く。

それを後ろの座席から純平達も覗いて見ると、同じデジモンと思われるデジモンの影が映し出されている写真が添えられていた。

一見、今までのデジモンの目撃情報と普通ならば変わらないが、そのデジモンの影が現れる時間に問題が在った。何故ならばそのデジモンの影が現れる時間は、“全て同じ時間帯”に限られているのだ。

資料からそれが分かったリスティ達は、間違いなく写真のデジモンの裏にはドミニモンが関わっている事は分かった。しかし、その真意までは分からず、ワゴン車に乗っている全員が首を傾げる。

「如何考えてもこのデジモンは、ドミニモンの配下のデジモンだな」

「だとしたら、目的は一体何なんだろうな？」

「こんな風に姿を見せるなんて、確実に挑発以外に考えられない・・・その理由までは分からなくても、目的の一つには俺達が関わって

いるんだろう」

輝二、純平、輝一はそれぞれ疑問に思った事を述べて、友樹とリスティも考え込むが、答えが出る事はなかった。

先日の友樹と純平と出会った港場の件以来、ドミニモンは表立っては動いていなかった。リスティ達が説得していないデジモンを配下に加えたりしている行動は行っているが、本人であるドミニモンとその考えに付き従っている天使型デジモン達が、リスティ達の前に姿を見せる事は全くなかった。

そのおかげで余計な小競り合いは起きずに済んでいたが、直接戦った輝一とドミニモンの用意周到な策をその目で目撃したリスティ達からすれば、如何にも不安しか感じずにはいられなかった。

「如何にも嫌な予感が止まないんだよね。この前での海鳴での件に関わってこなかった事といい、あのドミニモンにしては大人しすぎる気がしてならないんだよ」

「俺も同感だ・・・アイツなら、この前の海鳴での出来事に関わって来ても可笑しくなかった。寧ろあの状況で動かない時点で・・・“あの出来事以上に重要な何かが起きたんだ”」

『・・・・・』

輝一の言葉に全員が無言にならざるえなかった。

メギドラモンが現れた時にもしもドミニモンが追撃を行って来たら、リスティ達は確実に敗北していただろう。何せあの時点でメギドラモンは管理世界に移動し、リスティ達も追わざるえなかった状況。

もし追わずに居れば、その時点でミッドチルダに居る人間の大半はメギドラモンか、カオスデュークモンに殺されていただろう。逆

にドミニモンが何もしなかったからこそ、地球から一時的に総戦力で管理世界に向かう事が出来たのだ。
だが、絶好の機会にも関わらずにドミニモンは全く動かなかった。それが意味するのは一つしか考えられない。“絶好の機会を逃してでも、重要な出来事がドミニモン達側に起きた”と言う事に他ならない。

「一応フリートに色々と調べて貰っているけど・・・・今のところ変わった場所は発見出来ないらしいよ」

「ドミニモンの力で隠しているとも考えられるな・・・・となると、少し危険でも今回の罠に飛び込む必要が在ると言う訳か」

「その通りだよ、輝二。だからこそ、今回の件にはアリサ、すずか、コロナモン、ルナモンを連れて来なかったんだよ。君達はともかく、コロナモンとルナモンは漸く成熟期に進化出来たばかりだからね」

「分かっているさ。例えドミニモンがどんな手を使って来ても、乗り越えてみせる」

輝二はそうリスティの言葉に頷き、他のメンバーも頷くと、リスティはワゴン車を進ませ、遠くに見える山へとを向かって行く。

そしてそのワゴン車を近くのビルの屋上から見つめている三つの影が存在していた。
その内の影の一つは、ドミニモンの配下として付き従っているダルクモン。
残る二つの影は、全身を黒いローブを覆ってしまっている為に姿を確認する事は出来なかった。
ダルクモンはリスティ達の乗っているワゴン車が、目的の場所に

向かって行くの確認すると口元を笑みに歪める。

「よし、如何やら来ているのは十闘士に選ばれた連中のようだ。これでドミニモン様の策は成功する。連中は必ず残る二つの闘士のスピリットを持っているだろうからな」

ダルクモンはそう笑みを浮かべながら呟いた。

リスティ達の考えの通り、今回のデジモンの目撃情報はドミニモンの考えた作戦だった。

目的はただ一つ。“輝一達の下に存在している残る二体の闘士のスピリットを手に入れる事”。

とある理由でドミニモン達は十闘士のスピリットを如何しても手に入れなければならなくなったのだ。しかし、既に四体の闘士は覚醒してしまっている。

残る二体は未だに目覚めてはいないが、ドミニモン達はその二体を自分達の配下として覚醒させる気だった。そしてその為に切り札をドミニモン達は手に入れていた。

「フフフッ、連中も向かう先に居るデジモン達には驚くだろう・・・そして連中が戦い始めて、危機に陥った時こそがチャンスだ！その為にも貴様らには働いて貰うぞ！」

『・・・ハイ・・・・ダルクモンサマ』

ダルクモンの言葉に、黒いローブを着ている二人の人物は感情が全く感じられない声で頷き、ドミニモンは満足げに頷きながら、二人を伴い移動を開始する。十闘士を手に入れる為に。

山の中。ワゴン車から降りた輝一達は、リスティをワゴン車に残して山の中を歩いていた。
十闘士に進化出来る輝一達はともかく、パートナーデジモンが居ないリスティでは、強力なデジモンに襲われた時に対処が出来ない。
しかも、今回は確実にドミニモンが罠を張っている。その事を考慮してもリスティにはワゴン車の近くで待機していて貰って居た方が良いのだ。
そして四人は辺りを警戒しながら木々の間を進み、デジモンの姿は無いかと辺りを見回す。

「今のところは、デジモンはいないな」

「うん・・・・だけど、もし罠だとしたら多分、現れるデジモンは」

「昆虫か、植物系だよな。この場所で有利になるデジモンはそう言う奴らだから」

「獣って事も在りえるぞ。とにかく、警戒だけはして…」

「流石は十闘士に選ばれた者達だな」

『ッ！！』

突如として響いた声に、輝一達は慌てて声の聞こえて来た木の方を見てみると、木の頂点に立っているダルクモンの姿が存在していた。
輝二はダルクモンの姿に目を険しく、服の中からディースキャナを取り出し、輝一達もそれぞれ自身のディースキャナを取り出してダルクモンを睨む。

「お前はあの時の！」

「フッ！光の闘士に選ばれた人間よ。貴様らが持つ十闘士のスピリットを返して貰うぞ」

「やはり罠か！？何故十闘士のスピリットを狙う！？」

「答える義務は無い・・・それよりもこの場で貴様らには消えて貰う！出て来い！ヘラクルカブテリモン！！」

「キシャアァァァァァァァァーーーーーーーー！！！」

『ッ！！』

ダルクモンが叫ぶと同時に木々の間から凄まじい咆哮が響いた。

その咆哮を耳にした輝二達は慌てて咆哮が聞こえて来た方を見てみると、森の木々をなぎ倒しながら歩いて来る、全身を金色の甲殻で覆い、クワガタのような角とカブトムシの角を併せ持った昆虫型デジモン―ヘラクルカブテリモンを目撃する。

ヘラクルカブテリモン、世代／究極体、属性／ワクチン種、種族／昆虫型、必殺技／ギガブラスター、ハイメガブラスター

宿命のライバルである、カブテリモン種とクワガーモン種のデータをあわせ持って進化した究極の昆虫型デジモン。巨大なツノとハサミが特徴。カラダは黄金色に輝き、アトラーカブテリモンが失った飛行能力も復活。サーベルレオモンをも凌ぐ超音速の移動ができるようになった。必殺技は、『メガブラスター』のデータ密度を究極まで高くして、相手に向かって発射し、敵を粉々にする『ギガブラスター』と、４本の腕から超強力なエネルギー弾を発射する『ハイメガブラスター』だ。

「まさか！？このデジモン！？」

『究極体！？』

ヘラクルカブテリモンの世代に気がついた、輝二達は驚愕した。
罠だとは思っていたが、まさか究極体デジモンが存在しているとは思っても見なかったのだ。今まで輝二達達が説得して来たデジモン達は、全て完全体、成熟期、或いは成長期デジモン達ばかりだった。
何よりもフリートからの情報で、究極体のデジモンはドミニモン以外に反応が無いと言う事も在って、輝二達は、究極体は流石にいないと思っていた。

「フフフッ！流石に驚いたようだな。このヘラクルカブテリモンは、先日進化を果たしたデジモンだ。そして今回の作戦の為に投入した切り札だ！」

『クッ！！』

ダルクモンの叫びに輝二達は悔しげな声を上げ、即座にディースキャナを構える。
それと同時に輝一、純平、友樹の腕にデジコードの輪が出現し、三人は同時に出現したデジコードにディースキャナを滑らせる。

『スピリットエヴォリューション！！』

三人が同時に叫ぶと三人の体をデジコードが覆っていき、三人の体をスピリットが覆っていく。
顔に、胴体に、両腕に、両足に次々とスピリットが重なって行き、

デジコードが消えた後には闇の闘士ーレーベモン、氷の闘士ーチャックモン、雷の闘士ーブリッツモンが立っていた。

「レーベモン！！」

「チャックモン！！」

「ブリッツモン！！」

現れた三人の闘士はそれぞれヘラクルカブテリモンに向かって構える。

その様子を目撃したダルクモンは、余裕そうな笑みを浮かべたままレーベモン、チャックモン、ブリッツモンに声を掛ける。

「フッ、例え十闘士でも究極体のヘラクルカブテリモンには勝て…」

「これを見てからも、それは言えるのか！？」

「何ッ！？」

突然の輝二の叫びに慌ててダルクモンが目を向けてみると、輝一達とは違い、左手に球状になったデジコードを出現させている輝二が立っていた。

輝二はその球状の左手のデジコードに、右腕に持つ自身のディースキャナを押し当て、デジコードに滑らせる。

「ダブルスピリット！エヴォリューーション！！！」

輝二が叫んだ瞬間、球状のデジコードは輝二の体を覆って行き、ヒューマンスピリットとビーストスピリットの力が輝二の体に宿っ

て行く。

「ぐっ・・・あああああああああああっ！！！」

凄まじい二つのスピリットのエネルギーの奔流に輝二は叫び、次々と二つスピリットは輝二の体に重なっていく。

顔に、胴体に、両足に、両手に重なって行き、デジコードが消えた後には、頭部、両肩、右腕、腰、両足がヴォルフモンをベースに、体、左腕、両腿がガルムモンを、そして右腕にはガルムモンのブレードが合わさった大剣を持った闘士が立っていた。

その闘士こそ人型の柔と、獣型の豪を兼ね備えた究極体に匹敵する力を持った光の融合闘士。その名も。

「ベオウルフモン！！！」

ベオウルフモン、世代／ハイブリッド体、属性／バリアブル。種族／戦士型、必殺技／ツヴァイハンダー、リヒトアングリフ

ヴォルフモンとガルムモンが融合して誕生した戦士型デジモン。伝説の十闘士『エンシェントガルルモン』の力を最も強く受け継いでおり、光速のスピードで敵を攻撃出来る。必殺技は、大剣を使って敵に超光速で斬りかかる『ツヴァイハンダー』に、体から追尾ミサイルと主砲を撃ちだす『リヒトアングリフ』だ。

（なるほど、これがルーチェモン様が言っていた光の融合闘士か・・・・確かに凄まじい力を感じる・・だが、問題は無い。この程度ならば更なる援軍で何とかなる。最悪の場合は、私が真の姿に戻ってベオウルフモンと戦えば大丈夫だ・・・在る程度は連中を追い込まねばならんからな）

ダルクモンはそう、レーベモン達と共にヘラクルカブテリモンに

向かって武器を構えているベオウルフモンを見ながら、内心で呟いた。
確かにベオウルフモンの参戦は、多少はドミニモンの考えた策に影響を及ぼす。
しかし、潰される事だけはないと確信し、ダルクモンは両腰に差してある鞘からラ・ピュセルを引き抜き、ベオウルフモン達に向けながらヘラクルカブテリモンに叫ぶ。

「行け！ヘラクルカブテリモン！！」

「キシャアァァァァァァァァァァーーーーー！！！」

ダルクモンの命令にヘラクルカブテリモンは咆哮を上げながら背中の羽を羽ばたかせて、空中に浮かび上がる。
ベオウルフモン達はそれを目撃すると、ベオウルフモンは大剣を、レーベモンは槍を、ブリッツモンは拳を、チャックモンはロメオをヘラクルカブテリモンに向かって構える。

「行くぞ！！」

『応ッ！！』

ベオウルフモンの力強い掛け声に、レーベモン達は応じ、ヘラクルカブテリモンに向かって飛び掛かり、戦いを開始する。
その様子を離れたところの木の影から見つめている、二つの大人だと思われる二人の黒いローブを着ている人物達に、ベオウルフモン達は気がつく事無く、戦いは始まってしまった。

非道！敵は炎と風！後編

ベオウルフモン達とヘラクルカブテリモンが戦っている場所から、かなり離れた山の麓地点。

リスティはその場所で乗って来たワゴン車の運転席に座りながら、サーチャーから送信されて来るベオウルフモン達とヘラクルカブテリモンの戦いの映像に、顔を険しく歪めざるえなかった。

罠だとは分かっていたが、究極体のデジモンが居るのは完全に予想外だったのだ。

相手が完全体数体ならば、ベオウルフモン達が協力すれば何とか倒さずに気絶させる事は可能だった。しかし、相手が究極体となれば話はかなり変わる。

究極体に匹敵する力を持ったベオウルフモンが居るとは言え、究極体の力は常軌を逸している。

その相手を殺さずに気絶させて戦闘不能に追い込みには至難の技に近い。だが、それでもベオウルフモン達はヘラクルカブテリモンを殺す訳にはいかなかった。

殺せばその瞬間に、ドミニモンの策によって人間側はデジモンを殺してしまうと言う認識が持たれてしまう。それを防ぐ為にはデジモンを殺さずに戦いに勝利するしかないのだ。

（とは言っても、やっぱりキツイ相手なのは変わりないね。何とか勝って貰いたいけど・・・・・うん？）

サーチャーから送られて来る戦いの映像を見ていたリスティは、森の木々の間に映る黒いローブで身を覆った二つの人影に気がついた。

その人影はただ静かにジッとヘラクルカブテリモンとベオウルフモン達の戦いの様子を見つめるだけで、戦いの参戦する様子も全く

見せない。ダルクモン達の仲間なのかとリスティは考えるが、如何見ても黒いローブの人物達の体型は人間にしか見えない。
究極体デジモンと四人の十闘士との戦いの衝撃は凄まじい。
その衝撃にさらされるだけで命が危ないと言うのに、二つの人影は全く動かずに、ただジッと何かを待ち続けている。

（何なんだろうね？この嫌な予感は？・・・・二人の人間・・・・・究極体のデジモン・・・動く気配を見せないダルクモン・・・・うん？ちょっと待てよ。二人？何かそれが気になるね？何か重要な事を・・・僕は見逃しているような気が？）

『貴様らが持つ十闘士のスピリットを返して貰うぞ』

「ッ！！まさか！？この二人は！？」

戦いが始まる前のダルクモンの宣言を思い出したリスティは、目を驚愕に見開きながら、サーチャーに映っている人影を見つめた。
もし自身の考えた事が当たっているとなれば、全ての説明がつく。ドミニモン達も目的が十闘士のスピリットならば、尚更に強力な切り札と呼べる究極体を投入して来たのかも理解する事がリスティには出来た。
同時に、このままでは十闘士のスピリットが敵の手に渡ってしまうとリスティは判断し、即座に車から降りると、背中に虫の羽を思わせるようなフィンを展開する。

「皆！早まるな！絶対に残っている二つのスピリットを出したら駄目だぞ！！それが本当のドミニモン達の狙いなんだから！！」

リスティはそう叫びながら自身の能力を発動させて、戦いの場から程近い衝撃が余り来ない場所にテレポートする。最悪の事態を避

ける為に。

「キシャアァァァァァァァーーーー！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

『クッ！！』

ヘラクルカブテリモンが勢いよく振り下ろして来た右腕を、ベオウルフモン達は飛び去る事で避けた。

同時にヘラクルカブテリモンは、四本在る内の左腕の一本にエネルギー球を作り上げて、空中を自由に飛べないレーベモンに向かって投げつけようとする。

しかし、その直前にロメオを肩に担いだチャックモンがヘラクルカブテリモンにロメオの照準を合わせて、雪の玉を何発を発射する。

「スノーボンバーー！！！」

ーーードドドドドドドドッ！！

「キシャッ！！」

ーーーバシッ！！

チャックモンが撃ち込んで来たスノーボンバーを、ヘラクルカブテリモンはもう一本の左腕を弾き飛ばした。そのままもう一本の左腕に作り上げていたエネルギー球を投げようとする。

しかし、その直前に上空から急降下して来て両腕に雷を纏わせて

いるブリッツモンと、左右からベオウルフモン、レーベモンがヘラクルカブテリモンに飛び掛かる。

「トーールハンマーーー！！！」

「ハアァァァァァァァァッ！！」

「エーヴィッヒ・シュラーフッ！！」

ーーードオオオオオオオオン！！

「グヘエッ！！」

ブリッツモンの頭部へのトールハンマーと、ベオウルフモンの斬撃、レーベモンの槍の一撃を受けたヘラクルカブテリモンは悲鳴を上げながら地面に倒れ伏した。

それを目撃したベオウルモン達は一気に勝負を決めようとするが、ヘラクルカブテリモンは急いで立ち上がり、上空へと避難する。

ーーーブーーン！！

「キシャァァァァーーーー！！」

「チィッ！！・・・流石は究極体デジモン。あの程度の攻撃じゃダメージは余り無いか・・・なら！チャックモン！！」

「うん！チャックモン！！スライドエヴォリューション！！」

上空を動き回るヘラクルカブテリモンを見ながら叫んだブリッツモンの真意を理解し、チャックモンは体をデジコードで覆っていく。

そしてデジコードが消えた後には、白熊のような体型を持ち、先が銛のような形になっている縛った髪を何本も持って、二本のトマホークを両手に持ったデジモンが立っていた。
そのデジモンこそ氷の闘士の剛の闘士。その名も。

「ブリザーモン！！」

ブリザーモン、世代／ハイブリット体、属性／バリアブル、種族／獣型、必殺技／アヴァランチステップ、氷河魚雷（グレッチャートルペイド）
伝説の十闘士“エンシェントメガテリウモン”の力を受け継いだ、ビーストスピリット体の氷の属性を持つ獣型デジモン。2本のトマホーク『エジ』『オジ』を自在に操るぞ。必殺技は、両手に持つ『エジ』『オジ』で舞うように敵を攻撃する『アヴァランチステップ』と、先が銛のようになっている縛った髪の毛で、敵を突き刺す『氷河魚雷（グレッチャートルペイド）』だ。

「よし！ベオウルフモン！！レーベモン！！奴を地面に引き摺り下ろしてくれ！！」

『分かった！！』

ブリッツモンの真意を理解したベオウルフモンとレーベモンは即座に応じ、上空に居るヘラクルカブテリモンに向かって飛び掛かる。
そしてある程度の距離に辿り着くと、ベオウルフモンは左腕をヘラクルカブテリモンに向かって構え、レーベモンは胸もとの獅子の口を開けて、同時に発射する。

「リヒトアングリフ！！！」

「エントリヒ・メテオールッ！！」

ーーードオオォォォォォーーーン！！

「ギガブラスターーーー！！！」

ーーードゴオオオ

その隙を逃さずにヘラクルカブテリモンはベオウルフモンとレーベモンを追いかけ、頭部のツノとハサミで二人を倒すとする。

「キシャァァァァァァァーーーーー！！！」

『クッ！！』

高速で近づいて来るヘラクルカブテリモンの姿に、ベオウルフモンとレーベモンは悔しげな顔をするが、その直前にヘラクルカブテリモンの上空から雷が何本も降り注ぐ。

「ミョルニルサンダーーッ！！」

ーーービカァァァァァーン！！

「ッ！キシャッ！？」

突然の上空からの奇襲にヘラクルカブテリモンは驚愕し、慌てて雷から避けようと体を降下させる。

その瞬間、ヘラクルカブテリモンの体に先っぽに銛が備わってる何本もの髪が巻きついて来る。

「氷河魚雷（グレッチャートルペイド）ッ！！」

ーーーギシッ！！

「ッ！？」

体に巻きついて来た髪の毛にヘラクルカブテリモンは目を見開き、慌てて髪の出所に目を向けてみると、髪を伸ばしているブリザーモ

ンと、両手にブリザーモンの『エジ』と『オジ』を握って雷を纏わせているブリッツモンが立っていた。

「合体技！行くぞ！！」

「任せて！！ウオォォォォォォォォーーーーー！！！！！」

ーーーゴオォォォォォォーーーーー！！！

ブリザーモンが叫び声を上げると同時に、辺りを包むほどの吹雪が吹き荒れた。

吹雪は徐々に勢いを強め、ブリザーモンの髪の毛から逃れようとしていたヘラクルカブテリモンの体も包み込んでいく。

ヘラクルカブテリモンは何とか体を覆っていく吹雪から逃れようと身を捩るが、ブリザーモンは全ての力を込めてヘラクルカブテリモンの動きを押さえ込み、ブリッツモンは『エジ』と『オジ』を持ちながら吹雪の中に身を躍らせ、電撃と吹雪の波状攻撃をヘラクルカブテリモンに叩き込む。

『プラズマ・ダブル・トマホークッ！！』

「ギシャァァァァァァァーーーー！！！」

ブリッツモンとブリザーモンの合体技ープラズマ・ダブル・トマホークーをその身に受けたヘラクルカブテリモンは、体中を襲う激痛に叫び声を上げた。

それを目撃したベオウルフモンとレーベモンは、一気に畳み掛けようと駆け出すが、その直前に事態を静観していたダルクモンが飛び出し、レーベモンとベオウルフモンに手に持つ二振りの剣を一閃する。

「行かせんぞ！！」

『クッ！！』

ーーーガキィィィーン！！

ダルクモンの剣の一閃に慌ててベオウルフモンとレーベモンは自身の武器で防御した。

そのまま一気にベオウルフモンとレーベモンはダルクモンを動けなくさせようとするが、二人はダルクモンに違和感を覚えた。

（何だ？コイツ！？）

（これが成熟期の力なのか！？）

武器から伝わって来るダルクモンの力に、ベオウルフモンとレーベモンは内心で疑問の叫びを上げた。

二体が渾身の力を込めてもダルクモンを押し切る事が出来ない。寧ろ二体がかりで在るからこそ、拮抗しているような印象をベオウルフモンとレーベモンは感じていた。

その様子にダルクモンは笑みを浮かべながら二体の体に蹴りを食らわせる。

「フン！！」

ーーードゴォン！！

『グッ！！』

ダルクモンの蹴りを胴体に食らったベオウルフモンとレーベモンは苦痛の声を上げて、後方に僅かに後退してしまう。
それと同時にダルクモンは服の中から何らかの水晶を取り出し、近くの木々に向かって叫ぶ。

「今だ！！呼べ！！」

『スピリットォォォォォォーーーー！！！』

『なっ！？』

ダルクモンの叫びに応じるように森の木々の間から響いて来た声に、ベオウルフモンとレーベモン、そしてヘラクルカブテリモンと戦っていたブリザーモンとブリッツモンは目を見開き、声に聞こえて方に目を向ける。
同時にベオウルフモンとレーベモンのディースキャナが光り輝き、液晶画面部分に二つのスピリットの映像が現れると光が液晶画面から飛び出し、ベオウルフモンとレーベモンは慌てる。

「まさか！？」

「これは！？」

ーーーシュン！！

ディースキャナから飛び出した光にベオウルフモンとレーベモンが驚いていると、二体に背後にリスティが現れ、ディースキャナから飛び出した光が向かう方向に顔を険しくする。

「クッ！！間に合わなかった！！」

「リ、リスティさん！？如何して此処に！？」

本来ならばこの場には現れない人物の出現に、ベオウルフモンは慌てながら質問するが、リスティは構わずに二つの光を受け取っている黒いフードを被った人物達を睨む。

「それどころじゃない！！連中の狙いは最初から残っている二つのスピリットだったんだ！？」

「何だって！？それじゃ、まさか！？あの二人は！？」

リスティの短い説明にベオウルフモンは現状を理解し、レーベモン、ブリザーモン、ブリッツモンも黒いフードを被っている人物の正体を理解する。

そう、黒いフードを被っている人物達こそ、行方が分からなかった十闘士に選ばれた最後の二人。

それが何かの間違いで在ってくれとベオウルフモン達は願うが、その願いを引き裂くように黒いフードを被っていた二人の人物はフードを脱ぎ捨て、虚ろな目をしている二十歳前後の男性ー炎の闘士に選ばれた神原拓也と、風の闘士に選ばれた女性ー織本泉（おりもといずみ）が姿を現した。

『拓也！泉！』

「拓也！泉ちゃん！！」

「拓也さんに泉さん！そんな！？」

ベオウルフモン、レーベモン、ブリッツモン、ブリザーモンはそ

れぞれ拓也と泉の名を叫んだ。
　しかし、二人は答えずに目を虚ろなままにして、自分達の前に浮かんでいる光にそれぞれ携帯電話を差し出し、光が消えた後には、拓也の手には赤と黒の色のディースキャナが、泉の手には紫とピンクの色のディースキャナが握られていた。
　それを確認したダルクモンは残酷さに満ちた笑みを浮かべながら、拓也と泉に向かって命令する。

「進化しろ！！」

「・・ダブル・・・・スピリット・・・・エヴォリューション」

「スピリット・・・・エヴォリューション」

ーーーギュルルルルルーーー！！！

　ダルクモンの命令に拓也は左腕に出現した球状のデジコードを、右手に持つディースキャナでなぞり、泉も左手に出現していたデジコードの輪をディースキャナでなぞる。
　そして二人の体をデジコードが覆って行き、次々と二人の体にスピリットが装着され、拓也のデジコードの中からは頭部、肩、手、腿などの間接部分が人型で、背中に炎を思わせる翼を生やし、体と足が獣を思わせる形をして、両腕に金色に輝く篭手を装備した人と獣が融合した闘士ー『アルダモン』が現れ、もう一つの泉のデジコードからは、背中に翼を生やし、鋭い篭手を両手に装着した口元をフードで覆っている獣人ーシューツモンが現れる。

「アルダモン！」

「シューツモン！！」

アルダモン、世代／ハイブリット体、属性／バリアブル、種族／魔人型、必殺技／ブラフマシル、ブラフマストラ
炎の闘士であるアグニモンとヴリトラモンが融合して誕生した魔人型デジモン。伝説の十闘士“エンシェントグレイモン”の力を最も強く受け継ぎ、人の知性と獣の野生の力を持つ融合闘士。両腕にはヴリトラモンが装備している篭手である『ルードリー・タルパナ』を装備している。必殺技は、小型の太陽に匹敵するほどの力を集めて、相手に向かって放つ『ブラフマシル』に、両腕に装備している『ルードリー・タルパナ』を展開させて相手に向かって超高速で炎の弾丸を撃ち込む『ブラフマストラ』だ。

シューツモン、世代／ハイブリット体、属性／バリアブル、種族／鳥人型、必殺技／ギルガメッシュスライサー、ウィンドオブペイン
伝説の十闘士“エンシェントイリスモン”の力を受け継いだ、ビーストスピリット体の風の属性を持つ獣型デジモン。メソポタミア秘伝の呪文で風を操るぞ。必殺技は、鋭い爪で大気ごと相手を切り裂く『ギルガメッシュスライサー』に、その場で回転し、敵に向かって無数の風の刃を飛ばす『ウィンドオブペイン』だ。

『アルダモン！！シューツモン！！』

現れた二体の闘士に向かってベオウルフモン達は叫ぶが、アルダモンもシューツモンも答えずに構える。
その様子にベオウルフモン達は思わず背後に後ずさってしまう。幾ら操られていてもアルダモンとシューツモンはベオウルフモン達にとっては嘗て共に戦った仲間。
その相手が本当に敵になってしまったのかとアルダモンとシューツモンに顔を向けていると、リスティが辛そうにベオウルフモン達に声をかける。

「・・・クッ！！・・・・皆・・・悪い知らせだ・・・あの二体の心の声が聞こえない・・・・完全に心が閉じてしまっている」

「そんな！？」

「フフフッ！！ハハハハハハハハッ！！如何した闘士達よ！？仲間だった闘士達と敵になってしまった事が、そんなに辛いのか！？」

「ダルクモン！！貴様！？」

木の上で高笑いを上げているダルクモンに向かってベオウルフモンは怒りに満ちた叫びを上げるが、ダルクモンは気にせずにアルダモンとシューツモンに向かって命令を飛ばす。

「やれ！！」

「ウオォォォォォーーー！！！！」

「ハァァァァァァーーー！！」

「不味い！！リスティさんは離れてくれ！！」

「了解！！」

ーーーシュン！！

レーベモンの言葉にリスティは即座に答え、戦いの場からテレポートして離脱した。

それを確認したベオウルフモンとレーベモンは、迫って来ている

アルダモンとシューツモンに武器を構えるが、振るう事は出来ず、ベオウルフモンは大剣でアルダモンの拳を、レーベモンは槍でシューツモンの爪を防ぐ。

ーーーガキィィィィーン！！

『クッ！！』

「オォォォォォォーーー！！」

ーーーガァン！ガキィン！！ドォォン！！

「止めろ！！アルダモン！！俺だ！！輝二！！分からないのか！！」

「ハァァァァァァーーー！！」

叫ぶベオウルモンにアルダモンは答える事無く、拳を何度も振り抜き、ベオウルフモンを防戦一方に追い込んで行く。

そしてレーベモンとシューツモンの方も同様にシューツモンが振り抜いて来る鋭い爪を防御するか、或いは避けるかして叫ぶ。

「シューツモン！！目を覚ますんだ！！」

「ハァッ！！」

「チィッ！！」

ーーーガキィィィーン！！

シューツモンが勢いをつけて振り下ろして来た爪をレーベモンは

槍で防御し、そのまま距離を取ろうとする。
だが、その直前にシューツモンは凄まじい速さで体を回転させ始め、無数の風の刃を周りに飛ばし始める。

「ウィンドオブペインッ！！」

ーーーザァン！！

「何ッ！？グァッ！！」

『レーベモン！！』

シューツモンの放ったウィンドオブペインをレーベモンが食らうのを目撃したブリザーモン、ブリッツモンは、慌ててレーベモンに救援に向かおうとする。
しかし、その直前にダメージから回復したヘラクルカブテリモンが立ち上がり、ブリザーモンとレーベモンに向かって四本の腕の先に作り上げていたエネルギー球を投げつける。

「ハイメガブラスターーー！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

『グァァァァァァーーーー！！』

ヘラクルカブテリモンの奇襲をブリザーモンとブリッツモンは避ける事が出来ず、ハイメガブラスターの巻き起こす衝撃波を受けて地面に倒れ伏してしまう。

「ブリザーモン！！ブリッツモン！！」

「ウオォォォォォーーー！！」

ーーードゴォン！！

「グフッ！！」

一瞬の隙を衝き、アルダモンはベオウルフモンの胴体に拳を叩き込んだ。

ベオウルフモンはその一撃に苦痛の声を上げてしまい、動きが完全に止まってしまう。

アルダモンはそれを確認すると、上空に浮かび上がり、ベオウルフモン達の頭上に移動し、両手の間に小さな火球を作り上げ、徐々にエネルギーを込めて巨大化させ始める。

「ブラフ・・・」

「不味い！！リヒト！！」

アルダモンが必殺技を放とうとしている事に気がついたベオウルフモンは、左腕をアルダモンの作り上げている火球に構え、レーザーの銃口とミサイルの砲身を展開する。

同時にエネルギーを集め終えて、超圧縮した火炎球を作り上げたアルダモンが、ベオウルフモンに向かって火炎球を投げつけてくる。

「マシル！！」

「アングリフ！！」

ドオオオ

ン！！

アルダモンのブラフマシルとベオウルフモンの放ったリヒトアングリフは空中で激突し合い、大爆発が起きた。
その衝撃にその場に居る全員が吹き飛ばされ、煙が消えた後には、地に伏すベオウルフモンと上空に浮かんでいるアルダモンが存在していた。ほんの僅かな心の迷いが必殺技同士の勝負の優劣を決めたのだ。
ベオウルフモンが地に伏している事に気がついたレーベモン達は、急いでベオウルフモンを助けようと駆け出すが、その前にヘラクルカブテリモンとシューツモンが立ち塞がり、救援には向かえなかった。
アルダモンはその間にベオウルフモンの前に降り立ち、ベオウルフモンの持っているディースキャナに手を伸ばそうとするが、その直前にベオウルフモンが呟く。

「・・・グッ！！・・・拓也」

「・・・スピリット・・・・モラウ」

ベオウルフモンの呟きにアルダモンの手を一瞬止まるが、すぐに動き出し、ベオウルフモンのディースキャナを取ろうとする。
その様子にダルクモンは洗脳が完璧だと思い、他の闘士達のスピリットも簡単に手に入ると思うが、アルダモンがベオウルフモンのディースキャナに触れようとした直前、アルダモンの体から煙が次々と噴き出て来る。

ーーーシュゥゥゥーーー！！

「ガッ！・・ガァァァァァーーーッ！！」

「何ッ！？何が起きている！？」

突如として煙を体中から噴き上げて苦しみ始めたアルダモンの姿に、ダルクモンは疑問の叫びを上げた。

その突然に事態に動きが止まったのはダルクモンだけではなく、その場に居る全員の動きも止まってしまうが、徐々にアルダモンの体は煙だけではなく炎も噴き上げ始め、何かに気がついたようにレーベモンは叫ぶ。

「不味いぞ！操られている拓也じゃ！ダブルスピリットの力を制御出来ないんだ！」

「何だって！？だったらこのままだと！？」

「あぁっ！アルダモンは自分の力で身を滅ぼしてしまう！！」

「すぐに助けないと！！」

このままではアルダモンの命が危ないと理解したレーベモン達は、何としてもアルダモンへの進化を解かせようとする。

そしてアルダモンの変化に慌てていたのはレーベモン達だけではなかった。

二人を操っているダルクモンも予想だにしていなかった事態に、慌てに慌てていた。

「（不味い！！クッ！！まさか、操った事が裏目にであるとわ！？このままでは計画に支障が出てしまう！！一旦退くしかあるまい！！）・・・・ヘラクルカブテリモン！！シューツモン！！此処は一先ず撤退だ！！アルダモンを回収しろ！！」

「キシャァァァァァァァーーーー！！！」

ダルクモンの命令にヘラクルカブテリモンは即座に応じ、レーベモン達に向かって衝撃波を放ちながら、体中から炎を噴き上げているアルダモンを掴み取る。

ーーーガシッ！！

「キシャァァァァァァァーーーー！！」

「クッ！！逃がすか！！」

アルダモンを掴んで上空に飛ぼうとしているヘラクルカブテリモンを追いかけようと、ブリッツモンは背中の羽を羽ばたかせようとする。

その直前にダルクモンが右腕をブリッツモンに向けて、どす黒い色合いをしている光線をブリッツモンに向かって撃ち出す。

「チィッ！！邪魔をするな！！」

ーーービィィィィーーー！！！

「何ッ！？」

突然のダルクモンの攻撃にブリッツモンは慌てて光線をかわし、ダルクモンに顔を向ける。

今のダルクモンの攻撃からは、天使型デジモン達が扱う光の力は全く感じられなかった。寧ろ邪悪さに満ちた何かを感じられたのだ。

自身の失態にダルクモンは舌打ちをしたくなったが、何とかそれ

を押さえ込み、近くに来ていたシューツモンに命じる。

「風を巻き起こせ！！」

「ウィンドオブペインッ！！」

ーーーゴオォォォォォォーーーー！！！

『クッ！！』

シューツモンが風を巻き起こすと同時に辺りに吹き散らした無数の風の刃を、レーベモン達は慌てて避けて、ダルクモンとシューツモンが居た場所を見つめるが、既に二体の姿は何処にも無く、悔しげに顔を歪めた。

そして一時間後。リスティと合流してワゴン車に内部に戻ったメンバーは、それぞれが暗い顔をしていた。

無理も無いだろう。漸く見つかった嘗ての仲間が敵に操られてしまっているのだから、言葉も出す事が出来なくなるのは無理も無い。

更にリスティがＨＧＳの能力を使って二人の精神を調べたところ、完全に二人の精神は心を閉ざしてしまっている事が判明していた。

「・・・僕が見た二人の心は完全に何もなかったんだ。アレだと人間よりも人形って言葉が相応しいだろうね」

ーーードォン！！

「クソッ！！ドミニモンの奴！？」

リスティの説明に輝二は近くの壁に拳をぶつけ、他のメンバーも

怒りを堪えるように口を閉ざす。
拓也と泉を洗脳した犯人はドミニモンか、その配下のデジモンしか考えられない。何が目的なのかは分からないが、少なくともまともな考えで在る筈が無い。

「連中は何が目的かは分からないけど、十闘士のスピリットを狙っているみたいだね」

「と言う事は、奴らは必ず俺達のところに現れるって事か」

「その時に拓也さんと泉さんを助けだせばいいんだ！」

「アァッ！！必ず助け出してみせる！！」

友樹の輝二は宣言を放ち、その場に居る全員がドミニモン達から拓也と泉を助け出すのを誓うのだった。

とある管理世界に存在しているベルカに関係する遺跡。
その場所は凄まじい勢いで次々と破壊されていくベルカ遺跡の中でも、一際規模が大きかった。
まるで地球で言うエジプトのピラミッドを思わせるほどに、荘厳かつ優美な外観を持ち、誰かの墓を思わせるような場所だった。
そしてその場所の入り口に四つの影が立っていた。その内の二人はバリアジャケットを纏い、それぞれ銃や杖の形をしているデバイスを握る女性ーティアナ・ランスターと高町なのはが、自身のパートナーデジモンと共に遺跡内部に続く入り口を見つめていた。

「それで本当なのクダモン？」

「間違いない。微弱だが、この遺跡の最深部に生命反応が“二つ”出ている。内一つはかなり弱々しくフリートの機械でなければ判別する事も難しかったがな」

「だとしたら不味いよ・・・ブラックさんとルインさんが此処に来るまでもう時間が無い。このままだと」

『・・・・』

焦りに満ちたガブモンの言葉に、ティアナ、なのは、クダモンは無言で顔を見合わせた。

フリートからの緊急連絡で、ブラックとルインの状態を理解したなのは達はブラックとルインが次に現れる遺跡に先回りしていたのだが、その遺跡を調べている内に、遺跡の最深部から僅かながらも生命反応が出ている事を発見したのだ。

その事実になのは達の脳裏に一つの考えが浮かんだ。

“この遺跡の最深部には、過去のベルカに関わる人間が眠っている”のではないかと言う推測が、脳裏を過ぎったのだ。

もしかしたら他の遺跡同様にユニゾンデバイスが眠っていると言う可能性も存在しているが、万が一過去のベルカの人間だった場合、確実にブラックとルインは殺す為に動くだろう。

「・・・ティアナにクダモン君・・・私とカブモン君が中を調べられている間の時間を、ブラックさんとルインさんから稼げる？」

「・・・・正直キツイですけど」

「時間を稼ぐだけならば何とかなるやもしれん・・・だが、長時間は無理だと思ってくれ」

「うん！それじゃ急ぐよ！ガブモン君！！」

「分かった！！」

なのはの言葉にガブモンは応じ、そのまま二人は急いで遺跡内部に入り込んで行く。

それを確認したティアナとクダモンは、思わず疲れたような溜め息を吐いて、ブラックとルインが来るで在ろう方角に目を向ける。

「貧乏くじを引いたわね」

「仕方が在るまい・・・・十五分ぐらいは時間を稼ぎたいものだな」

「・・・そうね」

絶望感さえ漂わせているぐらいのクダモンの予測時間に、ティアナは力なく頷きながら、ブラックとルインの暴走が治まってくれている事を切に願うのだった。

非道！敵は炎と風！後編（後書き）

次回予告。

遺跡の最深部を目指して進むなのはとガブモン。

暴走する漆黒の竜人と深き闇と激突を繰り広げる赤き獣騎士。

遺跡の最深部を目指したなのはとガブモンの前に現れる者達とは！？

次回、漆黒の竜人と少女、『冥王イクスヴェリアと蘇る悪魔！！』

悪魔は三度蘇る。しかし、悪魔はその力を大切なモノを護る為に振るう。

冥王イクスヴェリアと蘇る悪魔！！前編

リンディ達が居る地球と他のデジタルワールドが繋がる前。
別世界のデジタルワールドに存在している幼年期デジモン達が暮らしている街で、一つの別れが起きていた。

『■■■■よ。わし等はこれから他のデジモン達の説得に向かわねばならん・・・あやつらの最後の願いの為にもな』

『ゴメンね・・でも、必ず帰って来るから待っていて』

『■■ッ！！』

別れを告げられた幼年期デジモンは自分もと言うように叫んだ。
自身を大切に育ててくれた親と呼べるデジモン達が、危険な場所に向かう事を理解しているのだ。例え血の繋がりなどなくとも、目の前に居る二体は自身を大切にしてくれていた。
だからこそ、離れたくないと思い二体の周りを回りながら叫び続けるが、一体のデジモンは心を鬼にして冷たく突き放す。

『駄目じゃ！！お前さんはオファニモンの力で、以前のような力なんぞ無いんじゃぞ！！本当に大切な者を得た時にしか進化も出来ん・・・ワシはもう自分よりも子が死ぬのなんぞ見たくない・・・だから待っていてくれ！！』

そう一体のデジモンは叫びながら駆け出し、もう一体のデジモンは涙を目に浮かべている幼年期デジモンに頭を何度も下げながら走り去って行ったデジモンを追いかけて行く。
残された幼年期デジモンは、悲しみの叫びを上げて涙を流すが、

二体のデジモンは止まらずに遠くへと去って行った。
それから幼年期デジモンはずっと待ち続けた。
一週間、二週間、三週間、一ヶ月と雨の日も風の日も街の入り口で親と呼べるデジモン達が帰って来るのを待ち続けた。
しかし、とある日。遂に幼年期デジモンの心は不安に押し負け、街を飛び出してデジモン達を探し始めた。当てなども殆ど無い辛い日々だったが、少なくとも人間を怨んでいるデジモンに付いて行けば何らかの情報が得られると幼年期デジモンは考えて、偶然にも見つけた人間を憎んでいると思えた一体のデジモンに付いて行った。
それが間違いの元だった。付いていったデジモンは突如として現れたゲートの中に飛び込み、幼年期デジモンも共に飛び込んで見ると、其処は見た事も無い世界だった。
しかも辺りに居るデジモン達は全員が全員、底冷えするような殺意と憎しみを放ち続け、幼年期デジモンの言葉など聞く事はなかった。それでも幼年期デジモンは親と呼べるデジモンの情報を知る為に、ゲートの先に居るデジモン達に聞きまわっていた。
しかし、運命の日。突然に人間が引き連れて来た意思の無いデジモン達に、周りに居たデジモン達が虐殺され始めたのだ。
幼年期デジモンは怖くなって逃げ出した。目の前で断末魔の悲鳴を上げ続けるデジモン達の姿を振り切り、遠く遠くへと走り続けた。
そして遂に走る体力も無くなった時、幼年期デジモンは不可思議な遺跡を見つけ、内部へと入り込んだ。外の世界が怖くなった一種の防衛本能である。
屋内ならばあの意思無きデジモン達はやって来ないと思い、遺跡の奥へと奥へと進み続け、そして最深部で一人の“カプセルの中で眠りについて少女”を発見した。
幼年期デジモンは最初、その少女が敵だと思い、遺跡の最深部から離れようとした。だが、出来なかった。何故かは分からないが、幼年期デジモンにはその少女が悲しんでいると分かった。
一人寂しく遺跡の中に居た少女の事が放っておけなくなり、幼年

期デジモンは眠っている少女を起こしてみようと試行錯誤を繰り返した。結果、少女が眠っているカプセルのシステムを理解した幼年期デジモンは、少女の意思だけが覚醒出来るように、カプセルのプログラムの一部を“食べた”。
そして少女は目を覚まし、目覚めた時に目の前に居た幼年期デジモンに問いかけた。

『貴方は誰ですか？』

『クラ～！！！』

これが古代ベルカに於いて『冥府の炎王』と呼ばれ、恐れられた少女ー“イクスヴェリア”と、嘗て世界を震撼させて破滅へと向かわせ、悪魔とさえも呼ばれたデジモンー“クラモン”との出会いだった。

そして時は現在に戻り、イクスヴェリアー以降イクスは、最初から遺跡に設置されていたカプセルの中でずっと過ごしていた。
本来ならば一度目覚めれば、僅かな時間しかイクスは起きていられないのだが、最初からイクス用に設定されたカプセルの中に留まり続けているおかげで再び長い眠りにつく事はなかった。
無論それは非常に危険な事でも在った。イクスはとある兵器に狙われている。
その兵器の名は、死者の肉体を利用して生み出される『屍兵器』。イクス自身にはその兵器の核を生み出す能力が保有されていた。
それ故にベルカ戦争を生き抜いて、未だに動き回っていた『屍兵器・マリアージュ』に、個体数を増やす為に狙われているのだ。その為に不完全ながらも覚醒したイクスの反応を感知したマリアージュ達は、イクスを求めて遺跡に内部に入り込んで来た。
そしてそれが彼らの最後になった。遺跡内部に入り込んだマリア

ージュ達は、イクスが居る最深部に辿り着く前に、イクスを護る意思を持ったクラモンが進化したインフェルモンに全て破壊されたのだ。
その事をイクスは知らない。インフェルモンは出来るだけ、イクスに戦いの事を知らせないように動いていた。
インフェルノモンは知ったのだ。イクスは戦いを好んではない。寧ろ戦いを嫌っている。
そして“死にたがっている”事をインフェルモンは知ってしまった。イクスが死ぬと思った瞬間、インフェルモンは全てを賭けてイクスを護り抜く事を誓った。
イクスを悲しませる全てが敵。絶対に護り抜くと誓いながら、インフェルモンはイクスと共に遺跡内部で過ごし続けた。
時たま外にインフェルモンは出ると、外の草花をイクスの下に持ち帰り、イクスを喜ばせたりした。
少しでもイクスの考えを変えさせる為に、インフェルモンは努力し続けていた。

「イ・ク・ス」

『何時もありがとう、インフェル』

自身が入っているカプセルの前に花々を差し出して来たインフェルモンに、イクスは微笑みながら礼を告げた。
その言葉にインフェルモンは内心で喜ぶ。此処までイクスが喜ぶようになったのには時間が掛かった。
最初は暗い表情ばかりイクスは浮かべ続けていた。インフェルモンが話しかけても、イクスの顔には悲しみしかなかった。
それでも根気よくインフェルモンが頑張り続けた結果、今では漸くイクスは笑みをうかべるようになった。インフェルモンはその笑顔が大好きだった。

この笑顔を護りたいと思いながら、インフェルモンは新しい花を物珍しそうに眺めているイクスを見つめる。

『・・・綺麗な花・・・私の時代にはこんな花は無かったから』

「・・イツカ・・・ソトヲ・・・ミラレル・・・ボクガ・・・・ミセル」

『・・・・ありがとう』

インフェルモンの言葉にイクスは心からの感謝の言葉を伝えた。

しかし、イクス自身はそれは無理だと思っている。今意識が保てて居られるのは、自分用に設定されたカプセルのおかげでしかない。一度カプセルの外に出れば、再び長い眠りについてしまうだろう。

憂いを帯びたようにイクスは顔を俯け、インフェルモンは何とかそれを慰めようとするが、その直前に遺跡の入り口の方から響いて来る足音を捉える。

ーーーダッ！ダッ！！

（マタキタ・・・イクスニハ・・・テヲダサセナイ）

インフェルモンはそう考えながら花を喜びながら見つめているイクスに背を向けて、入り口の方に向かって歩き出す。

『？・・・インフェル？・・・如何したの？』

「・・・ワスレモノ・・シタ・・・スグニ・・・モドッテクル・・・マッテイテ」

インフェルモンはそうイクスに答えると、入り口の方に向かって歩き出す。
イクスはその様子に不安が満ちた。行かせてはいけない。行けばインフェルモンがもう帰って来ないと言う予感が脳裏を過ぎり、インフェルモンに向かって声を掛けようとする。
しかし、その直前にインフェルモンがイクスに振り返り、安心させるように声を掛ける。

「ダイジョウブ・・・ボクハ・・・イクスヲ・・ヒトリニハ・・・シナイ・・・マッテイテ」

インフェルモンはそう告げると共に今度こそイクスが居る部屋から飛び出して行く。
その先に嘗て、自身を倒した漆黒の竜人が居るとも知らずに、インフェルモンはイクスを護る想いを持ちながら、外へと続く通路の中を歩いて行くのだった。

一方その頃。ティアナとクダモンに外の事を任せたガブモンとなのはは、遺跡内部を警戒しながら歩いていた。
長い時間が経っている遺跡とは言え、嘗て栄華を極めたベルカの国が残したモノである。どんな罠が在るか分かったものではない。その事も考慮してなのはとガブモンは真っ直ぐに生命反応が出ている場所を目指して進んでいく。

「急いだ方が良いよね？」

「うん・・・今のブラックさんの力は半端が無い筈だよ。スレイプモンに進化出来る二人でも長くは持たないと思う」

「そうだね・・・急がないと」

外で暴走しているブラックとルインと戦う事になるであろうティアナとクダモンを心配しながら、なのはとガブモンは先を急ぐ。

既に数え切れないほどベルカ遺跡が崩壊させられているが、まだこの場所の奥に居るかもしれないベルカの人間を助けなければいけない。

例え赦せない聖王教会が崇めているベルカに関する人間だとしても、その人物と今のベルカには直接の関係は何も無い。その事を理解しているなのはとガブモンは、真っ直ぐに奥へと進んで行くが、とある部屋の中に入った瞬間、思わずその足は止まってしまった。

何故ならば入った部屋の中は、ごく最近に何かが在ったと思われるぐらいに酷く荒らされていたのだ。

「コレって一体？」

「・・・酷いな・・まるで沢山の爆発が何度も起きたみたいだよ・・・うん？」

「如何したの？」

荒れ果てた部屋の中を見回していたガブモンになのはが疑問の声を掛けた。

その質問にガブモンは、部屋の一角に指差し、なのはは其方の方向に目を向けてみると、人型のように穴が開いている壁を発見する。

「何だろう？この穴？」

「分からない・・・だけど、この穴の回りも焼けているよ。まるで

壁に減り込んだ何かが、壁の中で爆発したみたいに」

「一体誰がこんな事を？・・・・・・ッ！！ガブモン君！！」

「うん！！」

ーーービュン！！

ーーードオォォォォン！！

突然のなのはの叫びにガブモンは即座に応じ、同時に左右の飛び去った瞬間、二人の背後から向かって来たエネルギー弾が壁に直撃して爆発を起こした。

なのはとガブモンは即座にその攻撃を放れた方向に目を向けてみると、壁に張り付くように立っている蜘蛛のような姿をしたデジモン―インフェルモンが存在していた。

『デジモン！？』

「チカヅクナ！！ニンゲン！！デジモン！！ヘルズグレネーードッ！！」

ーーードドドドドドゴオォォン！！

『クッ！！』

インフェルモンが口から放って来た連続エネルギー弾を目撃したなのはとガブモンは横に更に飛ぶ事でかわし、そのままインフェルモンに向かって叫ぶ。

「待って！！私達は戦いに来たんじゃないの！？」

「そうだ！！僕らはこの奥に居る人を助けに…」

「イクスニチカヅクナ！！」

ガブモンの言葉を耳にしたインフェルモンは怒りの咆哮を放ち、そのままガブモンに向かって飛び掛かる。

それを目撃したなのはは、慌ててバリアジャケットの中からディーアークを取り出し、ガブモンに向かって掲げて、ディーアークの液晶画面に文字が浮かび上がる。

「ガブモン君！！」

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「ガブモン進…」

「サセナイ！！ヘルズグレネード！！」

ーーードドドドドドドドゴォン！！

『なっ！？』

進化途中へのガブモンへのインフェルモンの攻撃になのはとガブモンは驚愕の声を上げ、慌ててなのはは進化途中のガブモンを護るように急いで立ち塞がり、防御魔法でヘルズグレネードを防御する。

ーーードドドドドドドドゴォン！！

「グウゥゥゥゥゥゥッ！！」

ヘルズグレネードを防御したなのはは苦痛の声を上げた。
その身に纏っていたバリアジャケットは破損し、なのはがダメージを負ったのを確認したインフェルモンは手足を引っ込め、繭のような形に変形してなのはに向かって突進する。

「コクーンアタックッ！！」

「ッ！！」

突進して来るインフェルモンを目撃したなのはは急いで避けようとするが、直前のダメージで思うように体は動かずその場に留まってしまう。
インフェルモンはその様子に笑みを浮かべながら、なのはを倒す為にスピードを更に上げて激突しようとする。
しかし、その直前になのはの背後から銀色の体毛を持った獣人ー進化を終えたワーガルルモンーが飛び出し、突進して来るインフェルモンに向かって踵落としを頭上から食らわせる。

「ガルルキック！！！」

ーーーードォン！！

「グアッ！！」

ワーガルルモンの一撃を食らったインフェルモンは苦痛の声を上げて動きが止まってしまう。
それを目撃したワーガルルモンは、追撃は行わずになのはを抱えてインフェルモンから離れ、苦痛に呻いているインフェルモンに叫

ぶ。

「止めるんだ！僕達は君と争う気は無い！！僕らはこの遺跡の最深部に居る子を助けに来たんだ！」

「グゥゥッ！！・・・・ナニ？」

「そうだよ！実は今此処に危険が迫っているの！！だから、一刻も早く此処から離れないといけないんだよ！」

「キケン？・・・ドウイウコトダ」

なのはの叫びに、インフェルモンは一先ず攻撃の手を止めて首を傾げた。

その様子に一先ずなのはとワーガルルモンは戦闘は回避出来たと思い、インフェルモンにこの遺跡に迫って来ている危機を説明する。

全ての事情を聞き終えたインフェルモンは、少なくともなのはとワーガルルモンがイクスを狙って来た敵では無い事を理解し、謝罪するように頭を深々と下げる。

「・・・スマナイ・・・イクスヲ・・・ネラッテイル・・・レンチュウダト・・・オモッテイタ」

「気にしなくていいよ・・・それよりも如何してこの遺跡の奥に居る子は狙われているの？」

「イクス・・・・“オウ”・・・ベルカ・・・トイウ・・・クニノ・・・“オウ”ダッタ・・・ソノタメニ・・・テキガ・・・タクサンキタ」

『ッ！！』

インフェルモンが告げた事実に、なのはとワーガルルモンは目を見開くしかなった。

よりにもよって、この遺跡の最深部に居る者の正体がベルカの王族。それが事実だとすれば最悪としか言えなかった。

今の暴走しているブラックとルインならば、何が何でもこの遺跡の最深部に眠っているベルカの王族を殺そうとするだろう。通常ならば直接的に関係ない遺跡に眠っていたベルカの王族を、ブラックとルインは殺さないだろうが、今の状態のブラックとルインならば確実に殺しに向かう。

その結果、更にブラックとルインの暴走は進み、本当に新たなベルカを滅ぼす黙示録となるだろう。

それだけは何としてもさせてはならないとなのはとガブモンは思い、インフェルモンにイクスが居る場所を案内して貰うように頼むが、インフェルモンは首を横に振るう。

「ダメダ・・・イクスハ・・・ソトニハデラレナイ」

「如何言う意味だい？」

「イクスノカラダハ・・・・ホトンドガ・・・キカイデ・・・デキテイル・・・・ソノタメニ・・・コノイセキノ・・ナカニオカレテイル・・・・・カプセルカラデタラ・・・ナガク・・オキテイラレナイ・・キノウモ・・・スデニ・・・・ゲンカイダト・・・・システムハ・・・・ツゲテイタ・・・・ダカラ・・デラレナイ」

「そんな！？」

告げられたイクスの現状に、なのは悲痛な叫びを上げ、ワーガル

ルモンも辛そうに顔を歪める。
つまり例え助け出しても、イクスは長くは意識を保てないと言う事になる。それでは結局助けても意味が無い。
カプセルやこの遺跡に設置されているシステムを護りながら戦えば話は別だろうが、暴走しているブラックとルイン相手にそれが出来る可能性は限りなく低い。
何せ今のブラックとルインには容赦など無い。止められたとしても、確実にこの遺跡は跡形も無く砕けるだろう。
如何すれば良いのかとなのはとガブモンは悩んでいると、なのはの持っていた通信機から連絡が届く。

『お話は聞かせて貰いましたよ！！』

「フリートさん！！そうだ！フリートさんなら！」

『はい！！状態は良く分かりませんけど、修復出来ると思います！！ですが、出来れば詳しく状態が分かるデータが欲しいですね。それが在ればより確実に、修復は旨く行きますから』

「インフェルモン君！イクスって子の体の状態が分かるデータは存在している！？」

「・・・・アルゾ！・・・イクスガ・・ハイッテイル、カプセルニツナガッテイル・・・システムナラバ・・・イクスノジョウタイガ・・・クワシクキサレテイル・・・ハズダ！！」

何処と無く興奮した様子でインフェルモンは、なのはの質問に答えた。
偶然にもイクスが外に出る為に手段がやって来た。イクスに花だけではなく、もっと多くのモノを見せられるかもしれない喜びにイ

ンフェルモンは打ち震える。
自分の力ではないが、少なくともイクスに外の世界を見せられる事だけは間違いない。
「イソゴウ！！・・・ココニ・・キケンンガ・・・セマッテイルナラ・・・イソガネバ・・・ナラナイ！」
「そうだね。なのは急ごう！！」
「うん！ブラックさんとルインさんが来るま…」
ーーーゴオォォォォォォッ！！
『ッ！！』
突如として遺跡全体が激しく揺れた。
その揺れは断続的に続き、なのはとワーガルルモンはその揺れの正体に気がつき、顔を青ざめさせるが、インフェルモンだけは外から感じられる巨大な威圧感に何かを感じる。
（・・・ナンダ？・・・ボクハ・・・コノケハイヲ・・・シッテイル・・ヨウナ・・・キガスル・・・イッタイドコデ？）
「・・・・来たんだ」
「みたいだね・・・ブラックさんとルインさんがやって来た」
遂に訪れた最悪の危機に、なのはとワーガルルモンは顔を青ざめながら呟き、インフェルモンは感じられる覚えが無い筈なのに、覚えが在るような気配に首を傾げるのだった。

なのはとワーガルルモンがインフェルモンと和解する少し前。
ティアナとクダモンは遺跡の入り口で、ブラックとルインがやって来る方向であろう南の方を見ながら、遺跡に腰掛け、しりとり行っていた。

「絶望」

「怨み」

「皆殺し」

「死体」

「異世界」

「遺体・・・・って！！何でこんな暗い言葉しか出て来ないのよ！？」

自分達が行っていた余りにも暗く物騒なしりとりの内容に、ティアナは叫んだ。
既にこの暗いしりとりは何度も繰り返していた。出る単語出る単語が全てが暗すぎる。それは二人の心情が原因だった。
無理も無いだろう。もうすぐ確実にブラックとルインとの激闘が始まる。幾ら究極体に進化出来るとは言え、相手はあのブラックとルイン。更に暴走状態と言う最悪かつ最凶としか言えない状態である。
通常状態でも出来ればブラックとルイン両方を相手にしたくない

のに、その相手との戦いの時は迫っている。ティアナとクダモンの心情が暗くなるのは当然だろう。

「ハァ～～・・・本当に貧乏くじを引いたわ」

「同感だが、今のブラックとルインは何として止めなければいかんだろう・・・・このままでは確実に破滅しか待っていないのだからな」

「そうよね。覚悟を決めるしかないわよね・・・・ッ！！」

「ん？如何しッ！！」

突如として目を見開いたティアナの様子にクダモンは質問しようとするが、クダモンも言葉を止めて、ティアナが見ている方向に目を向けると、黒い影が高速でティアナとクダモンの近くに落下して来る。

ーーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

『来たッ！！』

目の前に落下して来た者の正体に気がついたティアナとクダモンは、即座に臨戦態勢を整え、油断無く落下地点を睨む。

同時に落下した時に発生した煙を引き裂きながら、ルインを肩に乗せて凄まじい怒気と殺気を周りに振り撒いているブラックが姿を見せる。

ティアナとクダモンはその姿に余りにも何時もの違いすぎるブラックとルインに、全身が総毛だった。

フリートの作り上げたネックレスの機能で、空間への異常は押さ

え込まれて居る筈なのに、今のブラックの周りの空間は完全に歪んでいた。ネックレスの機能でさえも止めきれないほどに、ブラックの影響力が強まってしまっているのだ。
　そのブラックとルインの様子をティアナとクダモンが言葉も無く見つめていると、ブラックはティアナとクダモンに顔を向ける。

「・・・何故お前達がこの場に居る？」

「ブラック！！もう充分なほどに、聖王教会への報復は終わった筈だ！、これ以上遺跡を破壊する必要はない！！」

「これ以上の破壊は必要無い筈よ！！」

「黙れ・・・破壊せねば俺の気がすまん！全てを破壊する！！」

「そうです。ベルカは全て消えなければいけないんです」

（クッ！！完全にルインもブラックの破壊衝動に飲み込まれてしまっている！！このままでは！？）

　ブラックとルインの殺意に満ちた言葉に、クダモンはフリートの予測していた状態に、ブラックとルインがなっている事を確信した。
　今の状態のブラックとルインに説得は無意味。正気を取り戻させる為には、叩き伏せる以外に方法は無い。
　その事を理解したティアナとクダモンはブラックとルインにそれぞれ構えを取るが、ブラックとルインはティアナとクダモンを見ずに、周りの建築物に目をむけ、ブラックは両腕にエネルギー球を作り上げる。

ーーーブン！！

「消えろ！！！」

ブラックは叫ぶと同時に両腕に生み出したエネルギー球を全力で投擲した。

投げられた赤いエネルギー球は真っ直ぐに遺跡に向かい、そのまま遺跡を破壊しようとする。

しかし、赤いエネルギー球が遺跡に激突する直前に、オレンジ色の魔力弾が何発も赤いエネルギーの中心に激突して、大爆発を起こす。

ーーードゴオォォン！！

「・・・・・邪魔をするのか？」

自身の攻撃を阻んだオレンジ色の魔力弾を放った張本人ーブレイクミラージュを両手に構えているティアナにブラックは質問した。

その答えにティアナは覚悟を決めた顔をしながら頷き、バリアジャケットのポケットの中からオレンジ色の縁取りが在るディーアークを取り出す。

「えぇ、正直ブラック兄さんとルインさんを両方を同時に何て相手にしたくなかったけど・・・・今のブラック兄さんもルインさんも見るに耐えないわ」

「同感だ！今のお前達ならば、私達だけで充分に倒せるぞ！！」

「・・・ほう、愉快な事を言ってくれる・・・・ならば！！貴様らから先に破壊してやろう！！ルイン！」

「了解です！！ユニゾン・イン！！」

ブラックが名を呼ぶと同時にルインは頷き、ブラックとルインの体が一つになっていく。

同時にデジコードがブラックの体を覆い、デジコードの中でブラックは叫ぶ。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！ブラックウォーグレイモン！！X進化！！ブラックウォーグレイモンX！！」

ブラックが咆哮をデジコードの中で上げると同時にデジコードは弾け飛び、デジコードの中から背中にバーニアを備え、より機械的な鎧とドラモンキラーを装備した赤い瞳の漆黒の竜機人ーブラックォーグレイモンXが現れた。

現れたブラックウォーグレイモンXは、何時もよりも荒々しく禍々しい雰囲気を放ちながらティアナとクダモンに構えを取るが、不思議とティアナとクダモンの中には恐怖は余り無かった。

何故かは二人にも分からないが、今のブラックウォーグレイモンXには何時も感じれる恐怖が無いのだ。確かに荒々しい殺気と禍々しい気配は増している。

しかし、それがブラックウォーグレイモンXが与える恐怖とは一致しない。

その事をブラックウォーグレイモンXに鍛えられたティアナとクダモンは、誰よりも理解していた。故に今のブラックウォーグレイモンXにだけは負けられないと思いながら、ティアナはディーアークを持ちながら自身のパートナーに向かって叫ぶ。

「行くわよ！！クダモン！！」

「分かっている！！」

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「マトリクスエヴォリューーション！！」

「クダモン進化！！」

ディーアークから電子音声が流れると同時にティアナはディーアークを胸に押し付け、自身の体をデータ化させてクダモンと一つになる。

同時にクダモンの体からデジコードが大量に発生し、それは巨大な繭の形を形成していく。

そしてデジコードが消えた後には、ブラックの体長を遥かに超える大きさを持ち、六本の脚を持って体を赤い鎧で身を包み、左腕に聖弩『ムスペルヘイム』握り締め、右腕に聖盾『ニフルヘイム』を装備したデジモン－スレイプモンが現れる。

「スレイプモン！！」

「・・・・そう言えば、究極体に進化出来るようになったお前達と戦った事はなかったな」

現れたスレイプモンを油断無く見つめながら、ブラックウォーグレイモンＸは呟き、両腕のドラモンキラーを構える。

その様子にスレイプモンも右腕のニフルヘイムを空間に溶け込ませ、新たにダガーモードに変形しているブレイクミラージュを握ってブラックウォーグレイモンＸに構え、互いの気迫が最高潮に高まった瞬間。

『ウオォォォォォォォォーーーーーー！！！』

ーーードゴオオオ

冥王イクスヴェリアと蘇る悪魔！！中編

「ハァァァァァァァァァァーーーーーー！！！！！」

「ウオオォォォォォォォォォォォォォーーーーーーー！！！！！」

ドゴオオオ

空間に溶け込ませて、ガンモードのブレイクミラージュを構えて、同時に相手に向かって撃ち込む。

「ドラモンキラーー！！！」

ーーーバッシュン！！バッシュン！！

「クロスファイヤーーーショット！！」

ーーードドドドドドドドドドゴオオン！！

ブラックウォーグレイモンXが射出したドラモンキラーの爪先と、スレイプモンがブレイクミラージュから撃ち出した誘導弾ークロスファイヤーショットーは、互いの姿を覆い隠していた煙を切り裂き、真っ直ぐに相手へと向かう。

自身に向かって高速で迫るドラモンキラーの爪に対して、スレイプモンはすぐさま直前まで居た場所から飛び去る事で避ける。

逆にブラックウォーグレイモンXは、自身に向かって来る数十発のクロスファイヤーショットに対して、素早く飛び込み、全てのクロスファイヤーショットを両腕のドラモンキラーで切り裂く。

ーーーザン！！

ーーードドドドドドドドドゴオオン！！

（チッ！暴走していても冷静な判断が出来るとは）

（これが一番ブラック兄さんの厄介なところよね）

クロスファイヤーショットを全て破壊したブラックウォーグレイ

モンXの見たスレイプモンと、その身に融合しているティアナは、互いにブラックウォーグレイモンXの行動に舌打ちした。
今の一番ブラックウォーグレイモンXで厄介なところは、カオスデュークモンとの戦いの時とは違って、完全に理性も存在しているところである。
確かにカオスデュークモンとの戦いの時は暴走した暴竜状態の方が有効だったが、総合的な力で言えば今の状態の方が遥かに厄介だった。何せ暴竜状態ならば誘導弾の特性に気がつかずに、ただ相手を倒す為だけに突進するだろう。
しかし、今の状態は理性も存在しているので誘導弾を先んじて破壊する行動を行った。
自分達の攻撃の特性を知っているブラックウォーグレイモンXは、本当に厄介な敵だとスレイプモンとティアナは思う。しかし、今の攻防で二人はハッキリと確信出来た。
“今のブラックウォーグレイモンXは恐れる相手ではない”。
何時ものブラックウォーグレイモンXならば、自らの手でクロスファイヤーショットを破壊するような行動はしない。寧ろその攻撃さえも利用して、スレイプモンの動きを封じる策を考えるだろう。
身の内から溢れかえるほどの増大した破壊衝動が、ブラックウォーグレイモンXの行動を単調的に変えているのだ。
そしてそれはスレイプモンとティアナにとって、ブラックウォーグレイモンXを倒すチャンスが在ると言う事である。

（恐らくブラックとユニゾンしているルインの意識も破壊衝動に飲み込まれているだろう）

（となると、サポート関係は完全に攻撃だけでしょうね。防御しても、すぐに攻撃に来るでしょうから、隙を見て攻撃するわよ）

（了解だ。しかし、問題が在るとすれば）

スレイプモンは僅かに誘導弾が破壊された事で煙の中に隠れているブラックウォーグレイモンXから僅かに視線を逸らし、自身の背後に存在しているなのはとガブモンが入って行った遺跡を見る。
スレイプモンが上手く衝撃を向かわないようにしていたが、やはり余波は受けているのか、幾つかの柱や壁に罅が入っている。
このままブラックウォーグレイモンXと戦い続ければ、遠からず遺跡は崩壊するだろう。
暴走しているブラックウォーグレイモンXを相手に、遺跡を護りながら戦うのは不利としか言えなかった。

（せめて、私達が戦っている間に遺跡を護れる者が居れば、何とかなるの…）

「何を隠している？」

「ッ！！」

突然に顔の下から声を掛けられたスレイプモンは慌てて、声の聞こえた自身の顔の下を見てみると、右腕を構えたブラックウォーグレイモンXが浮かんでいた。
同時にブラックウォーグレイモンXは構えていた右腕を素早く振り抜き、スレイプモンの顎を殴り飛ばす。

「ムンッ！！」

ーーードゴオォン！！

「グアッ！！」

ブラックウォーグレイモンXの拳を食らったスレイプモンは苦痛の声を上げて、空中にその身が浮かび上がり、遺跡に向かって落下しそうになる。
それに気がついたティアナは、顎を殴られた事で意識が混濁してしまっているスレイプモンに向かって叫ぶ。

（スレイプモン！！）

「ッ！！グゥッ！！」

ティアナの叫びにスレイプモンの意識は戻り、空中にその身を浮かばせて遺跡への落下を防いだ。
ブラックウォーグレイモンXはその様子に、スレイプモンの背後に存在している遺跡には何かが在る事に気がつく。

「・・・如何やら余程重要な何かがあの遺跡には在るようだな？」

（・・・ブラック様・・・遺跡から四つの生命反応が出ています）

「ほう・・・二つはなのはとガブモンだとして・・・・残る二つは何だろうな？」

「クッ！！（私は馬鹿か！？幾ら暴走していても、相手はブラックだと言うのに！！）」

ブラックウォーグレイモンXの言葉にスレイプモンは、自身の行動の迂闊さを思わず呪った。
今の動きでブラックウォーグレイモンXはハッキリと認識してしまった。
“スレイプモンが護っている遺跡の内部には何かが存在している

”。
それが何なのかまでは流石にブラックウォーグレイモンXとルインにも分からないが、スレイプモンが護るほどの重要なモノが存在している事だけは確信した。
「俺との戦いよりも優先しなければならない何かか・・・・だが、関係ない！！ベルカが関わっているのならば！！」
ーーービュン！！
「させん！！」
ーーーガキィィィィーン！！
遺跡に向かって攻撃しようとしたブラックウォーグレイモンXの動きをスレイプモンは阻み、ダガーモードのブレイクミラージュとドラモンキラーがぶつかり合った。
そのまま鍔迫り合いに追い込もうとスレイプモンは考えるが、ブラックウォーグレイモンXはそうはさせないと言うように体を動かし、残っていたドラモンキラーの爪をスレイプモンに向かって撃ち出す。
「ドラモンキラーーー！！」
ーーーバッシュン！！
「しまっ！！グアッ！！」
射出されたドラモンキラーの爪をスレイプモンは今度は避ける事が出来ずに胸に食らい、苦痛の声を思わず上げてしまった。

その隙にブラックウォーグレイモンXはスレイプモンから離れ、背中のバーニアを吹かしながら真っ直ぐに遺跡へと向かって行く。
もしこの時、ブラックウォーグレイモンXを知る誰もがこの光景を目撃したら、“明日世界が崩壊すると言われても誰もが信じるだろう”。
ロイヤルナイツの数えられ、バイフーモンに認められているスレイプモンとティアナとの戦いを放棄するなど、何時ものブラックウォーグレイモンXならば絶対に在りえない。寧ろ逆に遺跡の方を放って於いて、スレイプモンとの戦いを優先するとブラックウォーグレイモンXを知る誰もが思うだろう。
しかし、今のブラックウォーグレイモンXの優先目的はベルカの遺跡の崩壊。
更にはスレイプモンが護るほどの何かが隠されているとなれば、其方を優先する。

「させん!!」

自身を放っておいて遺跡に向かうブラックウォーグレイモンXに内心で驚きながらも、スレイプモンは即座にブラックウォーグレイモンXを追いかける。
しかし、大きさ故かスピードはブラックウォーグレイモンXの方が速い為に、スレイプモンとの距離は徐々に離れ、遂にブラックウォーグレイモンXは遺跡に到達する。

遺跡内部、最深部に程近い通路。
外での戦いの衝撃に遺跡全体が揺れる中、インフェルモンに案内されながら、なのはとワーガルルモンは先を通路内部を急いで進んでいた。

幾ら外にスレイプモンが居るとは言え、今の暴走したブラックウォーグレイモンXを相手に遺跡を護りながら戦うのは辛い筈。
一刻も早くインフェルモンが教えてくれたイクスと言う名の少女を保護しなければいけないとなのはとワーガルルモンは思いながら、通路の先へと進んでいくと、一際広い空間に辿り着く。
その空間はまるで誰かを崇めるように作られ、その中心部分に幼い子供が入るぐらいの大きさのカプセルが存在していた。
インフェルモンはそのカプセルへと急ぎ足を進め、カプセルの中に入っている少女ーイクスの安全を確認する。

「イクス！！」

『インフェル？・・・如何したの慌てて？・・それにその人達は？』

イクスはそう何処か焦った様子を見せているインフェルモンに質問した。
その様子にインフェルモンは安堵の息を吐きながら、イクスが入っているカプセルを管理している機械に移動し、素早く前足を機械に乗せて操作する。

「イソイデ！・・・ソトニデル！！・・・ココハキケン！！」

『えっ！？危険って？』

「テキガ・・セマッテイル！！・・・ベルカヲ！！ニクムデジモンガ・・・チカヅイテイル！」

『・・・ベルカを憎むデジモン・・・・』

インフェルモンの言葉にイクスはカプセルの中で顔を俯けた。

ベルカを憎むデジモン。もしそれが本当に居るとすれば、イクスにとっては在る意味では嬉しい事だった。自分のような争いを呼ぶ存在は居てはならない。
そうイクスは思いながら、機械を操作しているインフェルモンと必要なデータをレイジングハートに記録しているなのは、そして辺りを警戒しているワーガルルモンに顔を向ける。

『・・・インフェル・・・そして見知らぬ方々・・・・私をこの場に置いて脱出して下さい』

「ッ！！イクス！！」

「何言っているの！？」

突然のイクスの言葉にインフェルモンは目を見開き、なのはは僅かに怒ったように叫んだ。
しかし、イクスは二人の言葉に構わずに首を横に振るいながら、カプセルの中から手で一箇所の壁を示す。

『あの壁の先に、外に繋がる安全な脱出口が存在しています。私に構わずに脱出して下さい・・・私は今の世には必要無いのですから』

「・・・・インフェルモン君・・・カプセルを開けて、大体のデータは手に入れたからこの子を連れて脱出するよ」

「ワカッテイル！！イクスハ・・・ゼッタイニシナセナイ！！」

『一体何を！？』

「悪いけど・・・貴女は絶対に連れて行くよ。ディンバインバスタ

ーー！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

なのははは宣言を放つと同時にイクスが指し示した壁に向かってディバインバスターを撃ち込み、壁は一瞬で破壊され、隠し通路が出現した。

同時にインフェルモンは、機械を操作してイクスが入っているカプセルを開く。

なのははそれを確認すると呆然としているイクスを大切そうに抱えて、カプセルからイクスを外に出す。

イクスは呆然としながら自身を抱えているなのはを見つめるが、なのはは僅かに怒ったようにイクスに険しい目を向ける。

「如何言う事情が貴女に在るか、会ったばかりの私とワーガルルモン君には分からない。だけどね。少なくとも貴女が死んだら悲しむ子が居る。だから、絶対に貴女を外に連れて行くよ」

「・・・・私は・・・・・」

「・・急ごう！！もう時間も余り…」

「ッ！！なのは！！上だ！！」

「ッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオ

し、爆発したように床は吹き飛んだ。
その現象になのははイクスを護るように抱き締めながら黒い閃光が落下した地点を見つめ、インフェルモンとワーガルルモンはなのはとイクスを護るように立ち塞がる。
同時に煙の中から足音が鳴り響き、煙を切り裂きながらブラックウォーグレイモンXはなのは達の前に姿を見せる。

「コソコソ隠れて貴様らは何をしているんだ？」

（・・・ブラックさんなのか？）

（・・・違う！この人は私達が知っているブラックさんじゃない！）

煙の中から現れたブラックウォーグレイモンXの姿を見た瞬間、ワーガルルモンとなのはは変わり果てたブラックウォーグレイモンXの姿に驚愕した。
しかし、驚愕されている本人であるブラックウォーグレイモンXは気にせずに、ゆっくりと顔をなのは達に向け、次の瞬間、インフェルモンの姿を目撃し、驚愕に動きが止まる。

「・・・・・馬鹿な・・・・・・」

『えっ？』

突然のブラックウォーグレイモンXの行動に、なのはとワーガルルモンは疑問の声を上げた。
暴走しているブラックならば、確実にイクスの姿を目撃した瞬間に飛び掛かって来ると二人は思っていたのに、ブラックウォーグレイモンXはイクスには全く目を向けずに、インフェルモンだけを見つめている。

何故イクスではなくインフェルモンなのかとなのはとワーガルルモン、そして自身が襲われると思っていたイクスはブラックウォーグレイモンXを見つめるが、ブラックウォーグレイモンXとそしてその身に融合しているルインはそれどころではなかった。
ブラックウォーグレイモンXとルインはインフェルモンがどのようなデジモンなのか良く知っている。
それ故になのはとイクスを護るように立っているインフェルモンの姿が信じられずに、ベルカに対する怒りを忘れて呆然と立ち尽くしてしまう。
インフェルモンはそれを見逃さずに、素早く自身の手足を引っ込めると、繭の形態に変形してブラックウォーグレイモンXに突進する。

「コクーンアタック!!!」

「ハッ!!グハッ!!」

ーーードオオオォォォォォォン!!

呆然として動きが止まってしまっていたブラックウォーグレイモンXは、インフェルモンのコクーンアタックを避ける事が出来ず、インフェルモンと共に背後の壁に激突した。
インフェルモンはブラックウォーグレイモンXと共に壁に激突すると同時に、引っ込めていた手足を元に戻し、ブラックウォーグレイモンXの四肢を全力で押さえ込み、口の発射口をブラックウォーグレイモンXに向けて、自身にダメージが降り掛かる事も厭わずに連続でエネルギー弾を発射する。

「ヘルズグレネーーード!!!」

ーーードドドドドドドドドドォォン！！

「グハッ！！」

「ニゲロ！！イクスヲ・・・ツレテ！！」

「・・・何だと！？貴様は！？」

自身の四肢を押さえ込みながらなのはとワーガルルモンに向かって叫んだインフェルモンの咆哮に、ブラックウォーグレイモンXは困惑と驚愕が混ざった叫びを上げた。

まさか、“あのインフェルモン”が自分よりも他人を気遣うなど、ブラックウォーグレイモンXは思っても見なかった。

それ故に本来ならば一瞬で弾き飛ばせる筈のインフェルモンを弾く事が出来ずに、四肢をブラックウォーグレイモンXは押さえつけられる。

「ハヤク！！コイツハ！！ボクガ！！オサエル！！・・・イクスヲ！！ソトニ！！」

「ッ！！インフェル！！駄目！！戻って！！」

イクスはインフェルモンに向かって手を伸ばしながら叫んだ。

インフェルモンが戦っているブラックウォーグレイモンXの実力を、イクスはおぼろげながらも感じ取っていた。

数多くの戦いを見て来たイクスでも恐怖を感じるほどの実力をブラックウォーグレイモンXは宿している。このままではインフェルモンが死んでしまうとイクスは確信していた。

自分のような罪深い存在の為に、友達になってくれたインフェルモンを死なせたくないとイクスはなのはの腕の中から抜け出そうと

動くが、その前になのははイクスを床に下ろしてレイジングハートを構え、ワーガルルモンはインフェルモンとブラックウォーグレイモンXに向かって飛び掛かる。

「離れろ！！インフェルモン！！」

「ッ！！」

ーーービュン！！

ワーガルルモンの叫びにインフェルモンがブラックウォーグレイモンXから離れた瞬間、直前までインフェルモンが居た場所を黒いエネルギー剣が通過した。

同時にブラックウォーグレイモンXは立ち上がり、警戒するように睨んで来ているインフェルモンに目を向けながら、頭上から飛び掛かって来ているワーガルルモンの爪を右腕のドラモンキラーで防ぐ。

「カイザーネイル！！」

ーーーガキィィィーン！！

「・・・・・邪魔…」

「アクセルシューターー！！」

ーーーシュシュシュン！！

ブラックウォーグレイモンXがワーガルルモンに僅かに目を向けると同時に、ワーガルルモンの背後から複数のアクセルシューター

が出現し、ブラックウォーグレイモンXの体に直撃する。

ーーードドドドドドゴオン！！

「フォックスファイヤーーー！！！」

「ヘルズグレーネード！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

アクセルシューターが直撃して爆発に飲み込まれたブラックウォーグレイモンXに、追い討ちを掛けるようにワーガルルモンから口からフォックスファイヤーを、インフェルモンはヘルズグレネードを放った。

それによって発生した爆発に巻き込まれないように、インフェルモンとワーガルルモンはなのはとイクスが居る場所に瞬時に移動し、インフェルモンはなのはとワーガルルモンに質問する。

「・・ナゼニゲナカッタ？」

「暴走しているブラックさんから簡単には逃げられない・・・それに」

「貴方が死んだら、この子が悲しむからね」

ワーガルルモンとなのははインフェルモンの質問に答えながら油断無く、ブラックウォーグレイモンXが立っている筈の場所に向かってそれぞれ構える。

そのなのはとワーガルルモンの答えに、インフェルモンは自身の足の一本にしがみつきながら、涙を流しているイクスに顔を向け、

心が温かくなった。
自分を思ってくれている者が居る。その事実はインフェルモンに不可思議な喜びを与えていた。
何故そのような喜びが溢れるのかはインフェルモン自身にも分からない。
しかし、大切な者を護らなければいけないと言う事だけは理解し、インフェルモンが油断無くブラックウォーグレイモンXが居る場所を見つめていると、ブラックウォーグレイモンXの声が響く。

「・・・・変わったな・・・昔の貴様では考えられんぞ、インフェルモン」

『えっ？』

まるで知り合いのように声をインフェルモンに掛けたブラックウォーグレイモンXに、なのはとワーガルルモンは疑問の声を上げながらインフェルモンに顔を向けるが、インフェルモン自身もブラックウォーグレイモンXの言葉に首を傾げていた。
その様子にブラックウォーグレイモンXは当然だと思った。
例え嘗て戦った相手とは言え、インフェルモンはオメガブレードの力で完全に初期化されてデジタマに戻った。ブラックウォーグレイモンXとの戦いをインフェルモンが覚えている筈は無い。
なのはとワーガルルモンにしても、ブラックウォーグレイモンXとインフェルモンの経緯を知らない。
その為にインフェルモンとブラックウォーグレイモンXが如何言う知り合いなのかと疑問に思うが、ブラックォーグレイモンXは気にせずに両腕のドラモンキラーを構える。

「・・・・無駄話は終わりだ。この遺跡は壊させて貰うぞ」

「ブラックさん！！もう充分な筈です！？これ以上の破壊に何の意味が在るんですか！？」

「意味だと？・・・・ベルカの全てを滅ぼすだけだ！！何よりも“敵”は滅ぼさんと気がすまんからな！！」

『ッ！！』

ブラックウォーグレイモンXの宣言になのはとワーガルルモンは目を見開いた。

しかし、ブラックウォーグレイモンXはもはや問答はせずに、背中のバーニアを噴かせて高速でなのは達に迫る。

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

「ウオォォォォォォォーーーーー！！！」

「（そう言う事だったんだ！？だったら！！）ワーガルルモン君！！全力で行くよ！！インフェルモン君はイクスちゃんを連れて離れて！！究極体に進化するから！！」

「ッ！！・・・ワカッタ！！」

ーーーガシッ！！

ーーービュン！！

なのはの言葉の意味を理解したインフェルモンは、急いでイクスを大切そうに抱えて脱出口に向かって飛び去った。

同時になのははバリアジャケットの中から桃色の縁取りのディー

アークを取り出し、自身の胸に触れさせて体をデータ化させ、なのはとワーガルルモンは一つになる。

「マトリクスエヴォリューーション！！」

「ワーガルルモン進化！！メタルガルルモンX！！」

なのはとワーガルルモンが一つになると同時に巨大なデジコードの繭が出現し、デジコードの繭の中から二足歩行の巨大な蒼い機械の狼ーメタルガルルモンXが出現した。

現れたメタルガルルモンXは、遺跡内部を粉砕しながら即座に右腕にレイジングハートを出現させ、ブラックウォーグレイモンXに向かって振り抜く。

「ムン！！」

「フッ！！」

ーーーガキィィィィィーーン！！

メタルガルルモンXが振り抜いたレイジングハートをブラックウォーグレイモンXは右腕のドラモンキラーで防ぎ、遺跡内部に甲高い音が鳴り響いた。

そのままブラックウォーグレイモンXはレイジングハートを弾き飛ばそうとするが、メタルガルルモンXはその前にレイジングハートを消失させて、ブラックウォーグレイモンXの力を空振りさせる。

ーーーブン！！

「何ッ！？」

「何時もの貴方なら力を押しだけで攻めない！！メタルストーム！！」

ーーードドドドドドッ！！

「チィッ！！」

空振りして体勢が崩れていたブラックウォーグレイモンXに、メタルガルルモンXは左腕のガトリング砲ーメタルストームーから超高速の弾丸を連射した。

ブラックウォーグレイモンXは即座にそれを避けるが、メタルガルルモンXは慌てる事無く自由になっていた左手に再びレイジングハートを顕現させてレイジングハートに魔力を集中させると、一気にブラックウォーグレイモンXに向かって振り抜く。

「エクセリオンバスターーーA・C・S！！！」

ーーードグオオオ

ジが入った！！長くは持たない！」

「ワカッテイル！・・・イクス・・・ソトニデヨウ」

インフェルモンは自身の足元に居るイクスに前足を差し出した。
メタルガルルモンXの言うとおり、先ほどのエクセリオンバスターA．C．Sの威力で遺跡が崩落し始めている。
このままでは遠からず崩れ落ちてしまうとインフェルモンは思いながらイクスを抱えようとするが、イクスは思い悩むような顔をしながら首を横に振るう。

「・・・インフェルに狼さん・・・・早く逃げて下さい・・・・やっぱり私は此処に残ります」

「イクス！！」

「・・・私は・・・争いしか呼ばないんです・・・・だから・・・・」

「チガウ！！イクスハ！！ヤサシイ！！・・・ボクハシッテイル！！・・・ダカラ・・ソトニ！！」

「そうだ！！死ぬなんて言ったら駄目だよ！！死んだら何もない！！君にどんな事情が在るにしても、インフェルモンの頑張りの為にも君は生きるんだ！」

死のうとしているイクスに向かってインフェルモンとメタルガルルモンXは説得するように叫んだ。
しかし、イクスは顔を俯けたまま黙り込む。埒があかないと思ったインフェルモンは、イクスを無理やりにでも連れて行こうと抱えようとする。

しかし、その直前にブラックウォーグレイモンXが消え去った穴の方から黒いエネルギー球が放たれ、真っ直ぐにイクスへと向かって行く。

ーーービュン！！

『ッ！！』

黒いエネルギー球が迫って来ている事にメタルガルルモンXと、その身に融合しているなのはは気がつき、慌てて黒いエネルギー球を撃ち落そうとする。

しかし、気がつくのが一歩遅く、撃ち落す為の準備が間に合わず、黒いエネルギー球は真っ直ぐにイクスへと向かう。

そしてイクスは自身に迫って来ている黒いエネルギー球を呆然とした顔で見つめながら、安堵の息を思わず吐く。

（これで良いんです・・・私は今の世には必要ない・・・さようなら・・・インフェル）

自身の死を確認したイクスは、最後に自身の事を思ってくれたインフェルモンの事を思いながら目を瞑ろうとする。

しかし、目を瞑る直前でインフェルモンがイクスの前に立ち塞がり、黒いエネルギー球をその身に激突させ、イクスの盾になる。

ーーードオオオオォォォォン！！

「ガッ！！」

「ッ！！インフェルモン！！」

（インフェルモン君！！）

「インフェル！！」

黒いエネルギー球を受けて崩れ落ちたインフェルモンを目撃したメタルガルルモンX、なのは、そしてイクスはインフェルモンの名を叫んだ。

しかし、インフェルモンはイクス達の言葉になど構わずに、前足の一本を勢いよく振り抜き、イクスをメタルガルルモンXに向かって吹き飛ばす。

「・・・イクス！ソトニデル！！」

ーーーブン！！

「キャッ！！」

「危ない！！」

吹き飛んで来たイクスを慌ててメタルガルルモンXは受け止めた。

それと同時にインフェルモンは全身を襲うダメージを振り払いながら立ち上がり、黒いエネルギー球が飛んで来た方に向かって飛び出す。

ーーードン！！

「イクス！！タノム！！」

「インフェルモン！！」

ブラックウォーグレイモンXが居るであろう穴に向かって飛び出したインフェルモンに、メタルガルルモンXは手を伸ばすが、インフェルモンはもはや背後を振り返る事無く穴の中に消えて行った。
それを目撃したメタルガルルモンXは何かを思い悩むような顔をするが、インフェルモンの言葉どおりに背を向けて、崩れ掛けている天井に向かってメタルストームを構える。

「・・・脱出するよ」

「待って下さい！！まだ、インフェルが！」

「大丈夫だ。インフェルモンは君を悲しませる事は絶対にしない！必ず帰って来るよ・・・だから、君は外に連れ出す！！ディバインストーム！！」

ーーードドドドドドドドドドドドドゴオオオオオオオオオオン！！！

メタルガルルモンXは宣言を放つと同時にメタルストームから桜色の砲撃を連射し、天井を完全に破壊し、外への出口を作り上げる。
それをメタルガルルモンXは確認すると、両足にフライヤーフィンを展開して、外へとイクスを連れて脱出するのだった。

一方、イクスとメタルガルルモンXと分かれたインフェルモンは、真っ直ぐにブラックウォーグレイモンXが居る筈の穴の中を進んでいた。
砲撃の影響か、その穴は広くて深いおかげで、インフェルモンは迷わずに進む事が出来る。
しかし、その身の内には一つの疑問が湧き上がっていた。先ほど

のイクスを狙った攻撃は確かにスピードは速かったが、インフェルモンが受けたダメージ自体は少なかったのだ。
　まるで最初からダメージが少なくするように考えられた攻撃に、インフェルモンが疑問を覚えながら前を進んでいると、無傷で静かに立っているブラックウォーグレイモンXが存在していた。
　インフェルモンはゆっくりと立ち止まり、ブラックウォーグレイモンXに訝しげな視線を向ける。

「・・・オマエ？・・・・ナニヲ・・・タクランデイル？」

「ほう、やはり以前の貴様よりは考える頭が在るようだな。まさか、この遺跡に生まれ変わった貴様が居るとは思っても見なかったぞ」

「コタエロ！！・・・コタエシダイデハ！！イクスヲ・・ネラッタ！オマエヲ！！ユルサナイ！！」

「フン・・・“本当の獲物”を表に出させる為だ。その為に気に入らん暴走までしていたんだからな」

「ナニ？」

　ブラックウォーグレイモンXの不可解な返答に、インフェルモンは首を傾げた。
“本当の獲物”。それが何なのかと詳しくインフェルモンは質問しようとするが、その直前に崩壊しか掛かっていた遺跡が激しく揺れ動き、次々と天井の瓦礫が落下して来る。

ーーードン！！ドオン！！

「・・・漸く現れたな」

（はい・・・本当に大変でしたね・・・後で確実にリンディさん達に怒られますけど）

「フン・・・・俺も限界が近いか」

ユニゾンしているルインの言葉に不機嫌そうにしながら、ブラックウォーグレイモンXは震えている自身の右腕に目を向ける。

ブラックウォーグレイモンXの体は本当に限界が近かった。不眠不休で動き続け、破壊衝動に身を任せたツケが来て、X進化しても力が思うように出ない状態になっていた。だからこそ、本当は全力で戦いたかったスレイプモンとの戦いを放棄したのだ。

本当の獲物との戦いの為に、僅かながらも力を温存して在るが、それで戦える相手ではない。

スレイプモンとメタルガルルモンXが居ても、勝てる確率は限りなく低いだろう。

しかし、今のこの場に予想外の存在ーインフェルモンが居る。

「・・・インフェルモン・・・力を貸せ・・・その変わりに貴様のパートナーの安全と・・・貴様の過去を教えてやる」

「・・・・・ハナシニヨル・・・・ソノ・・ナイヨウガ・・・ワルケレバ・・・ボクハ・・イクスヲ・・ツレテニゲル」

「フッ・・・本当に変わったな・・昔の貴様では考えられんぞ」

そうブラックウォーグレイモンXは苦笑しながら、インフェルモンに自身が考えていた計画の全て話し始めるのだった。

冥王イクスヴェリアと蘇る悪魔！！後編

イクスとインフェルモンが隠れていた遺跡の外。
巨体ゆえに遺跡の中に入る事が出来なかったスレイプモンは、悔しげに激しく揺れている遺跡を空の上から見つめていた。
ブラックウォーグレイモンXと違って、スレイプモンが遺跡に向かえば、その瞬間に遺跡は押し潰されてしまう。だからこそ、先に内部に入っていたなのはとガブモンを信じて外で待っていると、突如として遺跡の地下から連続で桜色の砲撃が飛び出して来る。

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「これは！？」

（メタルガルルモンXのディバインストーム！！）

遺跡の上部を跡形も無く粉砕したディバインストームを目撃したスレイプモンと、その身に融合しているティアナが放たれた箇所を見てみると、イクスを右手に乗せているメタルガルルモンXが飛び出して来る。

ーーービュン！！

「スレイプモン！！離れるんだ！？ブラックさんが追い駆けて来る！その前にこの子を安全な場所に！」

「ッ！！分かった！！」

メタルガルルモンXの叫びにスレイプモンは頷き、そのまま遺跡

から離れて近くの森に着地する。
　同時にスレイプモンは、メタルガルルモンXの右手の上で悲しげに肩を震わせている少女ーイクスに目を向けて質問する。

「その少女は？」

「遺跡の中で会ったインフェルモンって言うデジモンのパートナーだよ。古代ベルカの王族らしい」

「ッ！！・・・そうか・・危ないところだったな・・・（だが、何だこの違和感は？）」

（何でメタルガルルモンXはこんなに落ち着いている？）

　スレイプモンとティアナはイクスを地面にゆっくりと下ろしているメタルガルルモンXに、不可思議な違和感を覚えた。
　例えイクスと言うベルカの王族である少女を助けだしても、ブラックウォーグレイモンXが、暴走したままでは命が狙われる事に変わりない。なのにメタルガルルモンXも、その身の内に融合しているなのはも慌てた様子を見せていない。
　寧ろ不可思議な信頼が窺える。其処でフッとスレイプモンとティアナは、今までのブラックウォーグレイモンXの行動を思い返す。

（今までブラックはただ怒りに任せてベルカの遺跡を崩壊させていた）

（でも、もしも其処に暴走以外の別の意図が在ったとしたら・・・・）

（・・・・隠されていた意図・・・そう言えば私達がこの場に来る

事になったのはフリートの報告のおかげ）

（フリートさんは、地球に居た私達よりもブラック兄さんの行動を見ていた筈・・・・待って？そう言えば何でフリートさんは自分が見つけたベルカ遺跡の場所を伝えたの？あのマッドなフリートさんなら、大切な研究素材が在るかも知れない場所を、暴走しているブラック兄さんに教えるのは可笑しいわ）

（確かにそうだ・・・・ベルカに怒りをブラックが持っているのは、ブラックとルインの行動を見ていたフリートが一番に分かっていた筈・・・ッ！！）

（（まさか！？））

状況を並べて在る仮説に辿り着いたスレイプモンとティアナは驚愕し、イクスを慰めているメタルガルルモンXに目を向けると、なのはから念話が届く。

（ブラックさんはベルカの全てを滅ぼすって言っていた。そして“敵”は滅ぼさないと気がすまないってさ）

（ッ！！・・・・そう言う事か）

（・・・ハァ～～、本気でブラック兄さんだけは敵にしたくないわね）

なのはの念話にスレイプモンとティアナは、ブラックウォーグレイモンXとルインの真意に気がつき、本気でブラックウォーグレイモンXとルインだけは敵に回したくないと思った。

何せ全てがブラックウォーグレイモンXの計略の内だった。それ

を理解したスレイプモンとティアナは、余りにも恐ろしい計略に言葉も出す事が出来ずに遺跡に目を向けると、同時に深く澱んだ気配が遺跡の上空に現れるのを感じる。

「なるほど・・・確かにこれは我々さえも欺くに値する敵だな」

「そう言う事だね」

「・・・あの？インフェルは？」

崩壊して行く遺跡を見ながら言葉を交し合っているスレイプモンとメタルガルルモンXに、イクスは一番心配な事を質問した。

自分が遺跡内部で立ち止まってしまった為に、インフェルモンはブラックウォーグレイモンXと共に遺跡内部に残ってしまった。

自身の行いのせいでインフェルモンが危険に晒されてしまったとイクスは思いながら顔を俯けると、メタルガルルモンXが安心させるように声を掛ける。

「大丈夫だよ。インフェルモンは君を悲しませたりしない。だから、君もインフェルモンを悲しませるような事をしたら駄目だ」

「・・・でも・・・私は・・・」

「君の事情を僕らは良く知らない。だけど、君を想っていてくれているデジモンが居る事だけは忘れないでくれ」

悲しげに呟くイクスに、メタルガルルモンXは声を掛けると、スレイプモンと共に暗雲さえも立ち込め始めた遺跡の上空に向かって構える。

そして次の瞬間、遺跡の上空に立ち込める暗雲の中から凄まじい

ほどの熱量を持った、正に地獄の業火としか言い表す事が出来ない炎が降り注ぎ、一瞬にして遺跡とその周りに存在していた森の木々を灰燼に変える。

「フレイムインフェルノッ！！！」

ーーーードオオオ

在”への復讐を叶えてくれたのだからな！」

「何だと！？では、ブラックが暴走していたのは！？」

「私のせいだ！この私！！憤怒のデーモンのな！」

スレイプモンの質問にデーモンは抑えきれない歓喜を滲ませながら叫んだ。

その言葉にスレイプモンは左腕のムスペルヘイムを構え、メタルガルルモンXは右手に乗せているイクスを護るようにフィールドタイプの防御魔法を発動させながら、左腕のメタルストームをデーモンに向かって構える。

しかし、向けられたデーモンはスレイプモンとメタルガルルモンXの気配になど構わずに、ブラックウォーグレイモンXが居た筈の遺跡が在った場所を見つめる。

「ククックッ！流石に奴でも各世界に存在していたダークタワーのエネルギーを制御する事は出来なかったな」

「貴様！？ブラックにどのような恨みが在るのだ！？」

「・・・・・忘れもしない！十年前！！私は奴から受けた傷が原因で四聖獣どもにデジタマに封印されたのだ！！」

スレイプモンの質問にデーモンは、右手で左胸を押さえながら憎しみに染まった声で叫んだ。

「あの時に奴さえいなければ！！私は“ダゴモンの海”に行く事が出来たのだ！！そうすれば、私は力を得られ、何れはデジタルワールドを支配出来た！だが、それを奴と選ばれし人間達によって止めら

れたのだ！あまつさえ、その後に私は四聖獣どもにデジタマに戻されて封印された！奴さえ、奴さえいなければ全てが手に入ったのだ！」

「・・・フン！つまり、貴様はブラックに無様に敗北したから、復讐をした訳か」

「そうだ！！貴様らには分かるまい！！十年だ！十年も私の計画は遅れてしまった！だからこそ、あの屈辱を与えてくれた奴にも同様の屈辱をくれてやったのだ！！・・・仲間だと想っていたデジモンと人間に、目的を邪魔され、奴自身が忌み嫌っていた状態で死ぬのはさぞかし屈辱だろう・・・その為に私はダークタワーのエネルギーを奴に送り続けていた！同様の存在だからな。奴の意思など関係なく、暴走してくれたぞ！」

「・・・一つ聞くが？これはルーチェモンの計画なのか？」

「フン！聖王教会と言う愚か者どもを利用した計画は失敗した・・・・バルバモンとベルフェモンはともかく、私はルーチェモンの考えなどもはや知らん。私にとっての一番の重要は、奴への復讐だ！！それにこの策が上手くいけば、最終的には奴が考えている策と同様の結果が出る。文句は言わせんさ」

「ほう・・・では、お前が勝手に行った行動か・・・（これでハッキリしたぞ。同様の称号を持つとは言え、七大魔王デジモン達は完全に利害関係で動いている）」

（これなら、ルーチェモンの策が失敗し続ければ、最終的に仲違いするわね）

スレイプモンとティアナはそう内心で呟き、ルーチェモンと倉田の勢力を切り崩す方法を見つけた事に歓喜した。
今まではルーチェモン達や倉田達が如何言う関係で動いていたのか、ハッキリと分からなかった。
しかし、今のデーモンの発言で、少なくとも仲間意識や主従関係で動いていない事だけはハッキリと理解した。もしかしたらデーモンだけの可能性は高いが、少なくとも七大魔王同士の連携を潰すのは、倉田とルーチェモンの策を失敗させ続ければいい。
そうすれば少なくとも、他の七大魔王デジモン達とルーチェモンと倉田の間で不和が起きる事だけは理解した。
それを理解したスレイプモンは左腕のムスペルヘイムの照準をデーモンに合わせ、デーモンは嘲るようにスレイプモンを睨む。

「ほう、私に勝てると思っているのか？完全に力を取り戻した私を？」

「・・・・勝てる可能性は確かに低いな・・・・・私とメタルガルルモンXだけだったならばな！！」

「何を言って…」

「俺を利用するなら気配ぐらいは隠しておけ、デーモン！！」

「ッ！！」

足元から響いて来た憎憎しい相手の声にデーモンは目を見開き、地面に目を向けた瞬間、地面が爆裂したように吹き飛び、ブラックウォーグレイモンXが飛び出して来る。

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ドラモンキラーーー！！」

ーーードゴオォン！！

「ガァッ！！」

デーモンはブラックウォーグレイモンXの奇襲攻撃を避ける事が、胸に食らい地面に倒れ伏した。

それを目撃したブラックウォーグレイモンXは嘲りに満ちた視線をデーモンに向けながら、胸を押さえて呻いているデーモンに声を掛ける。

「久しぶりだな、デーモン。チンロンモンから聞いていたが、やはりお前だったか」

「クッ！！貴様！？何故生きている！？」

「簡単だ。貴様の技の威力が届かないほどの地下に潜っていたんだ。最深部でメタルガルルモンXが放った砲撃のおかげで、地下に更に潜るのは簡単だったからな」

「何だと！？・・・まさか！？」

「貴様が追って来ている事など、当の昔にお見通しだったと言う事だ。だから、逆に貴様を倒す算段を張り巡らせて居たと言う事だ！！」

ーーーガキィィィィーーン！！

「なっ！？」

ブラックウォーグレイモンXが叫ぶと同時に、半径数キロを覆うほどの結界が張り巡らされた。

その結界にデーモンは困惑したようにブラックウォーグレイモンXを見つめると、残忍さに満ちた笑みを浮かべながらブラックウォーグレイモンXは説明する。

「聖王教会の管理している遺跡を破壊している時から、俺の破壊衝動が不自然なほどに暴れている事にルインと俺は気がついた。如何にも可笑しいと思ってフリートの奴に調べさせたら、案の定俺が居る世界のダークタワーから不自然なほどエネルギーが減少している事が分かった。それで気がついた。誰かは分からんが、俺を暴走させて何かを企んでいる奴が居る事にな」

「ば、馬鹿な！？私の計画に気がついていただと！？」

「貴様だと知らなかったが・・・そして更に考えた。如何すれば怪しまれずに貴様を表に出させて、俺とルイン以外の仲間を呼べるかとな。其処でベルカの遺跡を次々と暴走して破壊していたんだ。後はフリートの奴に在る程度遺跡を破壊したら、地球に居る連中を俺とルインを止めると言う理由で呼び出せばいい。つまり、貴様はまんまと俺の考えた策に嵌ったと言う事だ。十年前のようにな」

「ッ！！」

ブラックウォーグレイモンXが告げた事実に、デーモンは愕然とした顔をして俯いた。

その様子をブラックウォーグレイモンXが油断無く見ながら、両手のドラモンキラーを構えていると、ブラックウォーグレイモンX

が出て来た穴の中からインフェルモンが出て来る。
イクスはそれを目撃すると、嬉しそうにインフェルモンを見つめながら名を呼ぶ。

「インフェル！！」

「イクス！！・・・・サガッテ！！・・コイツヲ！マズハ！！タオス！！」

イクスの言葉にインフェルモンは答えると、ブラックウォーグレイモンXに並ぶように立ち、デーモンに向かって口の発射口を向ける。
同時にスレイプモンもブラックウォーグレイモンXの横に立ち、メタルガルルモンXは後方に移動して、イクスを護りながらも全武装の照準をデーモンにロックオンする。

「・・・ブラック・・・覚悟だけはしておけ。貴様が暴走したと思っているリンディは、確実に怒り狂うだろうからな」

「フン！・・・俺はともかく、リンディとクイントには来られては本気で困るからな・・・」

スレイプモンの言葉にブラックウォーグレイモンXは、非常に不機嫌そうにしながら答えた。
実際、この場にリンディとクイントが来るのは本気で不味い。何せフリートが、リンディ達にブラックの下に来てはならない為に説明した理由は、本当に当て嵌まる事だった。
その証拠にブラックウォーグレイモンX自身もルインが共に居なければ、本当に暴走してデーモンの策に嵌っていただろう。だからこそ、ブラックウォーグレイモンXはリンディとクイントを加えず

に、ティアナとクダモン、なのはとガブモンだけを呼び寄せるようにフリートに頼んだのだ。

（俺自身も本当に限界が近い・・・インフェルモンが居るとは言え、相手はデーモンだ。メタルガルルモンXは小娘を護らなければいかんから。主戦力は俺達だけだと思え）

（ブラック兄さんは昔は勝ったんでしょう？）

（勝った訳ではない。奴の隙をついて、致命傷を与えた程度だ。それに今の奴は俺に再び嵌められて、怒り狂うだろうからな。冷静さを失わせて、逃げ道を塞いだぶん。奴は本気で俺達をこの場で殺すまで暴れるぞ）

（・・・なるほど・・・分かった）

（覚悟を決めて戦うしかないわけね。上等じゃないの！絶対に倒すわ！！）

スレイプモンとティアナは覚悟を決めたように頷くと、デーモンに向かって構える。

色々と言いたい事は確かに在るが、少なくとも七大魔王の一体を単独で倒すチャンスには違いない。配下のデジモンも居らず、ルーチェモン達の援護も恐らくは来ない。

デーモンを倒すには確かに千載一遇の好機なのは間違いないのだ。

そしてインフェルモンもまた、ブラックウォーグレイモンX達と共にデーモンと戦う気だった。

少なくとも、デーモンやルーチェモン達を倒さなければ、イクスに平穏な毎日を教えて上げる事が出来ない。せっかく外で自由にイクスが過ごせるかもしれないのだ。

イクスの平穏な未来の為にも、今回だけはブラックウォーグレイモンX達に力を貸す気になっていた。
そしてデーモンに対してそれぞれ構えをブラックウォーグレイモンX達が取っていると、憤怒のオーラを全身に纏いながらデーモンは立ち上がり、一気に自身が纏っていたローブを破り捨て、悪魔ごとき真の姿を現す。

ーーービリッ！！

「赦さん！！貴様らは絶対に赦さんぞ！！グガァァァァァァァァァーーーー！！！！」

ーーーメキメキッ！！

デーモンは咆哮を上げると共に自身の体を巨大化させて、全長二十メートルほどの大きさに変わった。
そして巨大化を終えたデーモンは、巨大になると同時に膨れ上がった左腕の研ぎ澄まされた爪を、ブラックウォーグレイモンXに向ける。

「死ねッ！スラッシュネイ…」

「ガルルバーースト！！！」

ーーードドドドドドドドドドゴオオォォォン！！

デーモンがブラックウォーグレイモンXに左腕の爪を振り下ろす直前に、後方に控えていたメタルガルルモンXが全身に搭載されているミサイルやレーザー兵器を、デーモンに向かって一斉発射した。

「ヌッ！邪魔をするな！！」

ーーードドドドドドゴオオオオオン！！

自身に向かって来るガルルバーストに気がついたデーモンは、振り下ろそうとした左腕を振り抜き、衝撃波を巻き起こしてガルルバーストを相殺した。

その隙にインフェルモンとスレイプモンはデーモンを左右から囲むように移動し、スレイプモンは右手に握ったブレイクミラージュから、インフェルモンは口からエネルギー弾を撃ち込む。

「クロスファイヤーショット！！」

「ヘルズグレネード！！」

ーーードドドドドドドドドドッ！！

「そんなモノが効くと思うな！！」

ーーーブン！！

左右から迫って来ている攻撃に対して、デーモンは今度は左右の腕を振り抜き、先ほどのガルルバーストと同様に攻撃を相殺する。

その隙にデーモンの顔の前にブラックウォーグレイモンXは移動し、全力で右腕のドラモンキラーを振り抜こうとする。

「ドラモン！！」

「させるか！！ケイオスフレアッ！！」

ーーーゴオォォォォォーーー！！！

ブラックウォーグレイモンＸがドラモンキラーを振り抜く直前に、デーモンは口から混沌の業火ーケイオスフレアーを吐き出した。

ブラックウォーグレイモンＸはその業火に飲み込まれるが、業火に飲み込まれた瞬間、ブラックウォーグレイモンＸの体は魔力粒子に変わり果てて消滅する。

「何ッ！？まさか！？幻覚！？」

「そう言う事だ！！」

ーーードゴオオオオオォォォォン！！

「グハッ！！」

ブラックウォーグレイモンＸの幻覚にデーモンが囚われている隙に、背後に回っていたスレイプモンはデーモンに勢いよく体当たりをした。

デーモンはその衝撃に苦痛に歪んだ声を上げると、同時にデーモンの頭上に本物のブラックウォーグレイモンＸが現れ、全力を込めた踵落しを叩き込む。

「ムンッ！！」

ーーードオォン！！

「グフッ！！」

「本来ならば一対一で貴様とも戦いたかったが、今回は俺も調子が

悪いんでな。此処で貴様には消えて貰う！！オオォォォォォォォーーーー！！！」

ーーードドドドドドドドドドドッ！！

「ガァァァァァァァァァッ！！」

頭部にブラックウォーグレイモンXの連続打撃を食らったデーモンは、苦痛に満ちた咆哮を辺りに響かせた。

そしてある程度デーモンへの攻撃を加え終えると、素早くブラックウォーグレイモンXはデーモンから離れ、スレイプモンはニムルヘイムをデーモンに向かって構え、極寒のブリザードをデーモンに放つ。

「オーディンズブレスッ！！」

ーーーーゴオオオオオオオオオオオオオオオオォォォッ！！

「クッ！！フレイムインフェルノ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

スレイプモンが放ったオーディンズブレスに対して、デーモンは右腕から超高温の炎ーフレイムインフェルノーを放ち、オーディンズブレスとフレイムインフェルノは互いに鬩ぎあい、巨大な水蒸気を爆発を起こした。

それによって発生した煙の中にブラックウォーグレイモンX、スレイプモン、インフェルモンは身を隠す。

しかし、そうはさせないと言うようにデーモンは背中の巨大な羽を全力で羽ばたかせ、辺りを覆っていた煙を一気に吹き飛ばす。

「オオォォォォォォーーーーーー！！！」

ーーーゴオオォォォォォォーーーー！！

『クッ！！』

突如としてデーモンが発生させた突風に吹き飛ばされないようにブラックウォーグレイモンX、スレイプモン、インフェルモンは立ち止まって身構えた。

デーモンはそれを逃さずに攻撃を加えようとするが、フッと凄まじいほどの、それこそデーモンでさえも恐怖を覚えるほどのエネルギーの集まりを感じて、慌ててエネルギーが感じられる方向に顔を向ける。

その先にはセラフィーモードにレイジングハートを構えて、幾つモノ魔法陣を出現させている、背中に金色の翼を十枚装着させたメタルガルルモンXが立っていた。

次々とメタルガルルモンXの周りには桜色の巨大な魔力球が出現し、尚もその数は増大して行く。

その余りにも非常識な光景に思わずデーモンは、思わず呆然と固まってしまうが、次々と集束して行く魔力に慌てて我に返る。

アレを撃たせてはならない。撃たれれば、その瞬間に自分が消滅してしまうと本能的にデーモンは確信し、背中の羽を羽ばたかせて全力でメタルガルルモンXに飛び掛かる。

「させるか！！」

「クッ！！不味い！！」

（このままじゃ！！）

迫り来るデーモンの姿にメタルガルルモンXと、その身に融合しているなのはは焦りを覚えた。
今、メタルガルルモンXとなのはが使おうとしている魔法は、なのはとメタルガルルモンXの究極奥義と呼ぶに相応しい大魔法。
その魔法ならば幾ら七大魔王デジモンであるデーモンでさえも、倒せる自信がなのはとメタルガルルモンXには在る。しかし、決定的な弱点がその魔法には在った。
時間がとんでもなく掛かるのである。しかも、一度発動させると、集束が終わるまで動けなくなる上に、集中力も全て総動員しなければいけないので、他の魔法や技を使用する事が出来ない。
急いでキャンセルすると言う方法も在るが、イクスが足元に居る今、急いで離れる事も出来ない。何せ急にキャンセルなどしたら、集まっていた魔力が暴発してとんでもない事態に陥る。
このままでは不味いとメタルガルルモンXとなのはが焦っている間に、デーモンは更にスピードを上げてメタルガルルモンXに飛び掛かる。

「死ねッ！！スラッシュ…」

「コクーンアタック！！」

ーーードオォォン！！

「何ッ！？」

突然の横からの奇襲をデーモンは避ける事が出来ず、繭の形態に変形していたインフェルモンの突進をその身に受けて動きが止まってしまう。
デーモンはその事実に怒りを覚えるが、インフェルモンは構わず

にデーモンの体に取りつき、自身を睨んでいるデーモンの顔に向かって連続でエネルギー弾を撃ち出す。

「ヘルズグレネーード！！！」

ーーードドドドドドドオォォン！！

「クッ！！完全体風情が！粋がるな！！」

ーーーブン！！

自身の体に引っ付いてヘルズグレネードを撃ち込んで来るインフェルモンに、デーモンは右腕を振り上げる。

しかし、その直前にデーモンの右腕を背後に回っていたブラックウォーグレイモンXが両腕を掴み取る。

ーーーガシッ！！

「ッ！！」

「そんなに慌てる必要など無いだろう、デーモン！！」

ーーーガシッ！！

「同感だな。七大魔王の称号を持つのならば、もう少し余裕を見せてみろ！」

「貴様ら！？」

自身の右腕を掴んでいるブラックウォーグレイモンXと、左腕と

体を押さえているスレイプモンに向かって、デーモンは怒りを滲ませた声で叫んだ。
何とかブラックウォーグレイモンXとスレイプモンの拘束から逃れようと、デーモンは全身の力を振り絞るが、二体は渾身の力を込めてデーモンの動きを押さえつける。
その間にインフェルモンはデーモンにヘルズグレネードを撃ち続けながらも、デーモンの傍から離れて、メタルガルルモンXの足元に居るイクスの下に向かい出す。
今からメタルガルルモンXが放とうとしてる魔法の威力をインフェルモン本能的に察知していた。
万が一だが、放たれた時の余波がイクスの下に向かったら危険だと判断し、インフェルモンは一先ず戦場から離れて、イクスの安全確保を優先する事にしたのだ。
そしてそれがインフェルモンとイクスを救う結果を呼んだ。
何故ならば、ブラックウォーグレイモンXとスレイプモンに動きを封じられながらも、デーモンは全身に力を込めて残忍な笑みを浮かべたのだ。

「グッ!!・・・・ククククッ!!私を拘束していていいのか!?」

「何だと?」

「忘れたのか!?私の技の一つを!?」

「ッ!!不味い!!スレイプモン!!離れろ!!」

「もう遅いわ!!全員吹き飛べ!!」

ーーードゴオオオ

『ガッ！！ガアァァァァァァァーーーー！！』

デーモンが叫ぶと共に発生させた衝撃波を、ブラックウォーグレイモンXとスレイプモンは避ける事が出来ず、遠くへと吹き飛んだ。
それを目撃したメタルガルルモンXは慌てて作り上げていた魔力球の幾つかを消滅させて、完成していた七つの魔力球に向かってレイジングハートを突き出す。

「クッ！！不完全だけど行くよ！！」

（うん！！セブンズ！！）

「スターライト！！」

『ブレイカーーーー！！！！！！』

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

メタルガルルモンXが放った七つの桜色の砲撃ーセブンズ・スターライトブレイカーは、真っ直ぐにデーモンへと直進する。
その砲撃の凄まじい威力を感じたデーモンは、即座に両腕を迫り来るセブンズ・スターライトブレイカーに向かって構え、フレイムインフェルノを同時に撃ち出す。

「この私に両手を使って撃たせた事を褒めてやる！！フレイムインフェルノ！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオ

デーモンが両手から撃ち出したフレイムインフェルノとメタルガルルモンXの放ったセブンズ・スターライトブレイカーは激突し合い、結界内部に大爆発を引き起こした。
そして徐々に爆発の影響で発生した煙が薄れていき、レイジングハートを杖にして立つ、全身に傷を負ったメタルガルルモンXと僅かに体が薄汚れて、背中の羽を使って爆発を防御していたデーモンが現れる。

「ククククッ！！惜しかったな。今の一撃が完成されたモノだったらならば、私も本気で危なかったぞ」

「グゥッ！！」

「何よりも貴様は愚かだ。自分よりも弱い者を庇って重傷を負うなどな」

デーモンはそう嘲りながら、メタルガルルモンXの足元に居る、爆発の衝撃を受けて気絶したイクスと、それを悲しげに見ているインフェルモンに目を向ける。
先ほどの爆発の瞬間、メタルガルルモンXは自分よりも足元に居たイクスとインフェルモンを護る為に動いたのだ。
そのおかげでイクスとインフェルモンは軽い怪我で済んでいたが、メタルガルルモンXは重傷を負ってしまった。今もレイジングハートの柄を地面に置いていなければ立つ事も出来ない。

「愚かな事だ。そのような弱き者達など、見捨てれば傷を負わずに済んだと言うのに」

「・・・約束したからだ。絶対にこの二人は安全な場所に連れて行く！！」

「笑わせてくれる！！ならば、その下らん想いと共に消えるが…」

「・・・オマエ・・・イクスヲ・・・キズツケタナ」

「ん？」

デーモンが発言している途中で、気絶しているイクスの横に立っていたインフェルモンが声を出した。

その声にデーモンはインフェルモンに目を向けるが、インフェルモンはデーモンの視線など構わずにゆっくりとデーモンに怒りに染まった目で睨みつける。

「・・・ユルサナイ・・・・・オマエ・・・・・“ケス”！！インフェルモン進化！！」

「何だと！？」

インフェルモンの叫びに、デーモンは驚愕に染まった声で叫んだ。

しかし、デーモンの驚愕など構わずに、インフェルモンの体はデータ粒子に変わり、別の存在へと書き換わって行く。

そして進化を終わった後には、伸縮自在に長い手足を持ち、胸に砲門が備わったインフェルモンの最終進化形態のデジモンが、イクスを護るように立っていた。

そのデジモンこそ、嘗て世界を滅ぼす直前まで追い込んだデジモン。

多くの人々から悪魔と称され、忌み嫌われたデジモン。しかし、今そのデジモンは護るべき大切な者の為に戦う意思を持って戦いに挑む。

必ずイクスを護ると言う意思を胸に宿し、進化を終えたデジモン

―“ディアボロモン”はデーモンに拳を構える。

「ディアボロモン！！！」

「ば、馬鹿な！？単独での究極体への進化だと！？ありえん！？ルーチェモンの話では、この世界のパートナーを得たデジモンは、人間と融合しなければ究極体に進化出来ない筈では！？」

「ソイツは、例外のデジモンだ」

「ッ！！」

背後から聞こえて来た声にデーモンが慌てて背後を振り向いてみると、傷を負いながらも立ち上がるブラックウォーグレイモンXとスレイプモンが居た。

「ソイツはパートナーなど必要とせずに、究極体に進化出来る。如何やらオファニモン達が何らかの方法で進化を封じていたようだが、貴様の行動でソイツは完全に覚醒したようだ。ディアボロモンがな！」

「グッ！！・・・・・・・フッ！ハハハハハハハッ！！例え究極体に進化しようと、私には勝てん！」

「試してみるか？」

そうブラックウォーグレイモンXは余裕そうにしているデーモンに声を掛けた。

ブラックウォーグレイモンXは知っている。インフェルモンが進化したディアボロモンがどれだけ強力な力を持っているのかを。

そしてディアボロモンの事を何も知らないデーモンは両手を強く握る。
その姿にディアボロモンも両拳を、ブラックウォーグレイモンXはドラモンキラーを、スレイプモンはムスペルヘイムを、そしてメタルガルルモンXは全身に装備している武装を構えながらデーモンを囲むようにして立つ。
その場に全員の闘志で凄まじい熱気を誰もが感じるが、誰も逃げる事は無く、全員が同時に動き出す。

『ウオオォォォォォォォーーーーー！！！』

ーーードゴオオオ

冥王イクスヴェリアと蘇る悪魔！！後編（後書き）

次回予告

遂にディアボロモンへの進化を遂げたインフェルモン。

大切な者を護る意思を宿したディアボロモンは、漆黒の竜人達と共に憤怒に挑む。

そして訪れる決着の瞬間。

次回、漆黒の竜人と少女、『憤怒との決着』

憤怒が消える時、傷つきし傲慢は動く。

憤怒との決着（前書き）

遅れてすいません。
次回は過去編を書きます。
待っていた方々、もう少しお待ち下さい。

憤怒との決着

『ハアァァァァァァーーーー！！！！！』

「フン！小賢しいわ！！」

背後から飛び掛かって来るブラックウォーグレイモンXとスレイプモン、そして前方から飛び掛かって来たディアボロモンに向かって、デーモンは嘲るように叫びながら空に舞い上がる事でブラックウォーグレイモンX達の突進を避けた。

例えインフェルモンが究極体のディアボロモンに進化したとしても、デーモンに焦りは無かった。

確かにデーモンの知るパートナーを持つデジモンの究極進化とは違った進化をディアボロモンは行ったが、同時にディアボロモンの弱点に気がついていた。

それを表すようにデーモンはディアボロモンから離れて、無防備に近い状態になって地面に倒れたまま気絶しているイクスに向かって右手を伸ばす。

「この私を“消す”などとほざいた罪は重いぞ！！貴様の大切な者から焼き尽くしてくれる！！」

「ッ！！不味い！！」

デーモンの狙いに気がついたメタルガルルモンXは叫び、傷を負った体を動かしてイクスを護ろうとする。

しかし、体中に負った怪我の為か思うようにメタルガルルモンXの体は動かず、デーモンは残忍さに満ちた笑みを浮かべながら右手に炎を生み出す。

「自らの大切などのほざいた者を護れなかった事を悔やむがいい！！フレイムインフェルノ！！」

ーーードゴオオオオオオオォォォォーーー！！！

『しまった！！』

イクスに向かってデーモンがフレイムインフェルノを放つの目撃したメタルガルルモンXとスレイプモンは同時に叫んだ。

すぐさまイクスの救出に二体は動こうとするが、ブラックウォーグレイモンXだけは慌てる事無くデーモンに目を向けながら呟く。

「・・・ディアボロモンを侮ったな、デーモン」

ーーービュン！！

『なっ！？』

ブラックウォーグレイモンXが言葉を言い終えると同時に地面に倒れ伏していたイクスは、突如として現れた“二体目”のディアボロモンに大切そうに抱えられて、フレイムインフェルの影響範囲から逃れた。

そのイクスを抱えている二体目のディアボロモンを目撃したメタルガルルモンXとスレイプモン、そしてイクスを殺そうとしたデーモンは驚愕して思わず動きが止まってしまう。

その隙を最初から居た一体目のディアボロモンは逃さず、右腕を素早くデーモンの顔面に向かって伸ばし、研ぎ澄まされた爪で引き裂く。

「シャァァァァーーー！！」

ーーーザン！！

「グアッ！！・・グゥゥゥッ！！どうなっているの…」

ーーードゴオォォン！！

「ガハッ！！」

引き裂かれた頬の傷を右手で押さえながらデーモンが疑問の声を上げようとしたが、突如として頭上から長く伸ばされた足が振り下ろされた。

その攻撃にデーモンは痛みを感じながらも、自身に攻撃して来た相手を見極めようとして目を向けると、その瞳が限界まで驚愕に見開かれた。

デーモンの視線の先には伸ばしていた足を戻している“三体目”のディアボロモンが存在していたのだ。

「ば、馬鹿な！？幻覚なのか！？」

デーモンは自身の視線の先に居る三体目のディアボロモンの姿に、驚愕と困惑の叫びを上げた。

そして驚愕と困惑をしているのはデーモンだけではない。ディアボロモンと共に戦っているメタルガルルモンX、スレイプモン、その身に融合しているなのはとティアナも困惑を隠せずにはいられなかった。

特に幻覚魔法を使えるスレイプモンとティアナには、視界に映っているディアボロモンが三体全てが本物で在る事を理解していた。

確かに限りなく本物に近い幻覚ならば、相手に対してダメージを

与える事は可能である。
　しかし、その為には相手に本物と信じ込ませる事と視界に映らなければいけない事が何よりも重要。
　デーモンのみならばいざ知らず、メタルガルルモンXとスレイプモンまで幻覚に掛ける必要性は余り無い筈。何よりもスレイプモンとティアナが見る限り、デーモンを前方と背後から囲むように立っているディアボロモン二体は本物にしか見えない。
　それはデーモンも同じなのか、困惑を隠せずに二体のディアボロモンと、イクスを護るように抱えているディアボロモンに視界を行き来させてしまう。
　そうしていると、デーモンの顔の下から殺気に満ちた声が響いて来る。

「残念だが外れだ」

「ハッ！！」

「ドラモンキラーーー！！！」

ーーードゴオォン！！

「ガハッ！！　」

　顔の下から響いて来た声にデーモンが目を向けた瞬間、デーモンの顎を忍び寄っていたブラックウォーグレイモンXが右腕のドラモンキラーで殴り飛ばした。
　その一撃にデーモンの巨体は後ろへと傾いてしまい、その隙を逃さずに二体のディアボロモンは胸元の発射口をデーモンに構えて、連続でエネルギー弾を撃ち込む。

『カタストロフィーカノン！！』

ーーードドドドドドドドドドドゴオォォン！！

「グガアァァァァァァァーーーーー！！！！！」

ーーードオオォォォン！！

空中でディアボロモン二体のカタストロフィーカノンを食らったデーモンは、苦痛の叫びを上げながら地面に落下した。

その様子をブラックウォーグレイモンXは空中に浮かびながら見下ろし、デーモンは全身を襲うダメージに苦しみながらも三体のディアボロモンに視線を向ける。

「グゥッ！！・・・・（如何言う事だ！？確かに進化したのは一体だけの筈。なのに何故三体も同じデジモンが居るのだ！？そのような事はありえんぞ！？増殖でもしないか・・・・）ッ！！まさか！？そのデジモンは！？」

「漸く気がついたようだな」

「ば、馬鹿な！？増殖能力を得ている究極体だと！？何故そのようなデジモンが此処に居るのだ！？」

『ッ！！』

デーモンの混乱に満ちた叫びを耳にしたメタルガルルモンXとスレイプモンは驚愕に目を見開き、ディアボロモン達に慌てて目を向ける。

そう、ディアボロモンはデジモンが本来持つ筈の無い力ー増殖能

力一を保有している。一体だけでも強力無比な究極体が大群で現れるなど恐怖以外の何ものでもない。
そしてディアボロモンはそれを可能にする力を秘めている。何せ自身と同じ考えを持つディアボロモン達を増殖させ続ける事が可能なのだ。
デーモンは本気で敵にしたら不味いデジモンを呼び覚ましてしまったのだ。
ディアボロモンと言う名の悪夢としか言えない力を保有している究極体デジモンを。

『シャアァァァァァァァーーーーー！！！ケス！！ケス！！ケス！！』

「ヌゥゥゥゥゥッ！！」

怒りの咆哮を上げているディアボロモン達を目撃したデーモンは、唸り声を上げながら思わず後ずさってしまう。
幾ら何でも無数に分裂する能力を保有しているディアボロモンに、ロイヤルナイツに匹敵する実力を持ったブラックウォーグレイモンX、メタルガルルモンX、スレイプモンを相手にするのはデーモンでもキツイとしか言えなかった。
だが、逃げるのも無理としか言えない。何せデーモンはルーチェモンや他の七大魔王デジモン達に内緒で独断で動いたのだ。何の成果も無く逃げ帰れば、待っているのは確実にデーモンの死である。
目の前に居るブラックウォーグレイモンX達か、ルーチェモンを含めた七大魔王デジモン四体のどちらかを相手にするならば、まだブラックウォーグレイモンX達の相手の方がマシだとデーモンは考える。
何よりも憎んでも憎みたりないほどブラックウォーグレイモンXに背を向けるなど、デーモンには出来なかった。

何とか現状を打破しようとデーモンは油断無く構えているブラックウォーグレイモンX達を見つめていると、フッと在る事実に気がつく。

「（待て？何故ディアボロモンと言うデジモンは三体だけしか増殖しない？私の実力を侮って三体だけしか分裂していないとは考えられん・・・・ッ！！そうか！！）ククククッ！！ハハハハハハハハハッ！！」

「ん？」

突如として哄笑を響かせたデーモンに、ブラックウォーグレイモンXは訝しげな視線を向け、メタルガルルモンXとスレイプモン、そしてディアボロモン達も訝しげに首を傾げるが、デーモンは構わずに哄笑を上げながら自身の巨大な左手を構える。

「ククククッ！！確かに増殖能力を持ったデジモンが居たのは予想外だった。幾ら私でも無数に現れる究極体と貴様らの相手は辛いな・・・・ディアボロモンが本当に無数に分裂出来るのならばな！！」

『クッ！！』

デーモンの言葉にディアボロモン達は悔しげな声を思わず上げてしまった。

そうデーモンの言う通り、ディアボロモンは嘗てブラックウォーグレイモンXとオメガモンと戦った時のように、自由自在に増殖出来なくなっていた。

その原因は亡き三大天使デジモン達に在った。幾らルーチェモンに利用されたとは言え、昔のディアボロモンが行った事は赦される

事ではない。三大天使デジモン達のデジタルワールドで暮らす為に幾つかの制約がその身に掛けられていたのだ。
大切な者が出来なければ進化する事が出来なくなったのもそうだが、究極体に進化を果たしても、分裂出来る数の制約がディアボロモンの体には掛けられている。
故に今のディアボロモンは最大で三体。それ以上自身を増殖させる事が不可能になっていた。
その事実に気がつかれた事にディアボロモンは焦りを覚えるが、ブラックウォーグレイモンXは全く焦る事無く、メタルガルルモンXとスレイプモンはディアボロモンの横に並び立ちながら声を掛ける。

「焦る事は無いよ、ディアボロモン。僕らも此処に居る」

「その通りだ。寧ろ本来ならば私達だけで相手をしなければならん相手だ。お前の援軍は心強い」

「・・・・ワカッタ・・・・アセラズニ・・アイツヲ・・ケス！！」

ーーービュン！！

ディアボロモンは叫ぶと共にデーモンに向かって飛び掛かり、メタルガルルモンXはレイジングハートとメタルストームを構えながら、スレイプモンは右手にブレイクミラージュと左手にムスペルヘイムの照準をデーモンに向かって合わせて誘導弾を撃ち込む。

「クロスファイヤーショット！！」

ーーードドドドドドドドドドドドン！！

「下らん！！」

ーーードオオオオオオオオオン！！

自身に向かって来るクロスファイヤーショットに対して、デーモンは左手を振り抜く事で発生した衝撃波で相殺した。
同時にデーモンは自身に向かって飛び掛かって来ている二体のディアボロモンに右腕を振り抜こうとするが、その直前にブラックウォーグレイモンXとメタルガルルモンXが砲撃を放つ。

「ブレイズキャノン！！」

「ディバインバスターーーー！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオン！！

「無駄だ！」

ーーードオオオオオオオオオオオオオオン！！

デーモンはブラックウォーグレイモンXとメタルガルルモンXが放った砲撃に対して、背の巨大な翼から発生した衝撃波を放つ事で消滅させた。
それと共に発生した煙を引き裂きながら二体のディアボロモンはデーモンに向かって飛び掛かり、同時に右腕を長く伸ばしてデーモンに向かって殴り掛かる。

『シャァァァァァァァーーー！！！』

「フン！！」

ーーードオオォン！！

ディアボロモン達が伸ばして来た右腕をデーモンは左腕で防御した。

それを目撃したディアボロモン達は僅かに悔しげに顔を歪めるが、すぐさま冷静に立ち返り、トリッキナーな動きをしてデーモンを撹乱するように動き回りながら拳を放ち出す。

デーモンはそれを両腕を使って防御し、隙あらばディアボロモンに攻撃しようとするが、それを阻害するように桜色とオレンジ色の誘導弾がデーモンに向かって来る。

「弾幕集中！！アクセルシューーターーー！！」

「クロスファイヤーー・フルバーースト！！」

ーーードドドドドドドドドドッ！！

「チィッ！！」

自身に向かって来る数え切れないほどの誘導弾にデーモンは悔しげな声を上げて、その場から飛び去る。

その方向に事前に移動していたブラックウォーグレイモンXが、連続でデーモンに向かって両腕のドラモンキラーを振り抜く。

「オオォォォォォォーーーーー！！！！」

ーーーガガガガガガガガガガッ！！

「グゥッ！！馬鹿が！私に近づけば先ほどの二の舞だぞ！」

「アレは放った後には貴様は無防備になるだろうが！俺一人に使うのはリスクが高いぞ！！」

「ヌゥッ！！」

ブラックウォーグレイモンXに自身の技の欠点を差されたデーモンは、唸り声を上げながらもブラックウォーグレイモンXの攻撃を防御し続ける。

デーモンの全身から放つ衝撃波は確かに強力だが、その為に力をかなり集中させなければいけない欠点が存在している。先ほどならば全員がかなり近い距離に居たおかげで、その欠点を無くす事は出来たが、今は違う。

メタルガルルモンXとスレイプモンもデーモンの技の欠点に気がついて、在る程度の距離になったら近づかない。そのせいで今ブラックウォーグレイモンXだけを弾き飛ばす為に衝撃波を使えば、確実に狙い撃ちされてしまう。

更にメタルガルルモンXの強力無比な砲撃も存在している。幾ら相殺したとは言え、それはあくまで不完全な状態だったおかげに過ぎない。

完全に完成していれば、自分でも敗北は免れないとデーモンは考えていた。

（チィッ！！やはりこやつ等全員を相手にするのは不利か！）

ブラックウォーグレイモンXの連続攻撃と、ディアボロモン達のトリッキーな攻撃を防ぎながら、デーモンは如何すれば現状を打破出来るのか考え始める。

だが、余裕が無いのはデーモンだけでは無かった。

ブラックウォーグレイモンX達にも殆ど余裕など存在していなか

った。

（メタルガルルモンX・・もう一度アレの準備は出来るのか？）

（ゴメン・・・僕もなのはも限界が近い・・・セラフィーモードを限界まで起動させても、スターライトブレイカー一回が精一杯だよ）

（私達の魔力も本当に残り少ないの・・・ゴメンね）

（仕方が在るまい・・・・だが、不味いな）

（ブラック兄さんも限界が近いわ。このままだと！）

そうブラックウォーグレイモンX達の限界も徐々に近づき始めていたのだ。

不眠不休でブラックウォーグレイモンXは動き続け、メタルガルルモンXは切り札の不完全使用で魔力切れが近い。

スレイプモンにしても至近距離でデーモンの衝撃波を食らった為にダメージが体に残っている。

唯一体力が充分に残っているのはディアボロモン達だけだが、一体はイクスの護りを優先しなければならない為に動けない。

究極体五体と実質互角に戦っているデーモンにメタルガルルモンXとスレイプモンは畏怖の念を抱くが、何とか勝てる方法を模索する。

（クッ！！僕らの切り札はもうばれているから、確実に邪魔をして来るよ）

（そうだな。確かにお前の切り・・・ッ！！その手が在った！メタルガルルモンX！お前はスターライトブレイカーの準備をしてくれ

！）

（えっ！？）

（そうか！その手が確かに在ったわね！なのはさん！メタルガルルモンX！準備をお願いします！）

（ッ！！分かったよ！メタルガルルモンX君！行くよ！）

「了解！！」

「ムッ！」

突如として更に距離を取るように動いたメタルガルルモンXを目撃したデーモンは、訝しげな声を上げた。

先ほどはメタルガルルモンXの強力無比な砲撃を相殺出来たと言え、それはあくまで不完全な状態で在ったからこそ。完成していれば自分でも如何する事も出来ないとデーモンには分かっていた。

故にメタルガルルモンXが距離を取ったのは先ほどと同じ砲撃を撃つ事だと判断し、デーモンは攻撃を繰り出して来るブラックウォーグレイモンXとディアボロモンに向かって、渾身の力を込めた左腕を振り抜く。

「邪魔をするな！！スラッシュネイル！！」

『チィッ！！』

ーーービュン！！

デーモンのスラッシュネイルを避けようとブラックウォーグレイ

モンXとディアボロモン達は大きく飛び去った。
　その隙にデーモンはブラックウォーグレイモンXとディアボロモン達の攻撃範囲から逃れて、セラフィービットを展開させ始めたメタルガルルモンXに向かって高速で迫る。

「やらせんぞ！！」

「俺を相手に背を向けるのは愚かだぞ！！ハデスフォーース！！！」

ーーードゴオオオオオオオオン！！

「グアッ！！」

　デーモンがメタルガルルモンXに飛び掛かろうとすると、その隙にハデスフォースを作り上げていたブラックウォーグレイモンXが投擲し、デーモンの背にハデスフォースは直撃した。
　その衝撃にデーモンは思わず動きを止めてしまい呻くが、更に追い討ちを掛けるように一体のディアボロモンがデーモンに急接近し、腕を長く伸ばして鋭い爪をデーモンの左腕に深く突き刺す。

「クラエ！！」

ーーードス！！

「馬鹿が！その程度の攻撃なんぞ！蚊に刺された程度の一撃だ！！」

ーーーガシッ！！

「ッ！！」

デーモンは叫ぶと共に自身の左腕に爪を刺しているディアボロモンの腕を右腕で掴み取った。
それから何とか逃れようとディアボロモンはもがくが、デーモンは逃さないと言うように力を全力で込めて、ディアボロモンを自身の頭上に投げ飛ばす。

「ヌン！！」

「シャッ！？」

「先ずは一体目だ！！スラッシュネイル！！」

ーーーブザーーン！！

『ディアボロモン！！』

空中で身動きが取れないディアボロモンに向かって、デーモンは鋭く巨大な自身の左腕の爪を振り下ろし、ディアボロモンの体を両断した。
それを目撃したメタルガルルモンXとスレイプモンは叫ぶが、ブラックウォーグレイモンXとその身に融合しているルインは全く慌てていなかった。二人は知っている。ディアボロモンが簡単に倒されるデジモンでは無い事を。
その考えを肯定するかのように体を両断されてもなお、ディアボロモンは両腕を通り過ぎた後のデーモンの左腕の爪に取り付かせて、最後の力を解放する。

「イクスマモル！！！！パ・ラ・ダ・イ・ス・ロ・ス・ト」

ドゴオオオ

「グハッ！！」

蹴りの直撃を食らったデーモンは僅かに仰け反るように体を傾かせる。

それを目撃したブラックウォーグレイモンXとディアボロモンは、すぐさまデーモンから離れる。

追撃のチャンスを逃した事にデーモンは訝しげに顔を歪めるが、すぐさま感じられる巨大な力に目を見開いて慌てて目を向けてみると、セラフィービットも使って巨大な魔力球を作り上げているメタルガルルモンXを発見する。

「グゥッ！！させんぞ！！」

先ほどと同じ攻撃を繰り出そうとしているメタルガルルモンXに気がついたデーモンは、右腕を魔力球を完成させる前のメタルガルルモンXに向かって構える。

しかし、次の瞬間、デーモンの体を凄まじいほどのブリザードが覆い始め、デーモンの動きを阻害する。

ーーーゴオオォォォォォーーーーー！！！

「こ、これは！？」

自身の体を覆って行くブリザードにデーモンは驚愕の声を上げて慌てて辺りを見回すと、離れた所からニフルヘイムを構えてブリザードを巻き起こしているスレイプモンを目撃する。

「・・・ククククッ！残念だったな！この程度の冷気なんぞ！！地獄の業火を操れる私には無意味だ！」

ーーーゴオオオオオオオオオオッ！！

デーモンは嘲るように叫ぶと共に全身から超高熱の炎を発生させて、体を覆っていたブリザードを溶かしていく。
同時に右腕をメタルガルルモンXに構え、左腕をニフルヘイムを構えたままのスレイプモンに向ける。

「先にあの世に行くがいい！！フレイム！！」

（来たよ！！）

「うん！！これが僕らの全力全開！！」

「（スターーライト！！ブレイカーーー！！！！）」

ーーーードグオオオオオオオオオオ

「ッ！！幻覚だと！？」

左手から放ったフレイムインフェルノはスレイプモンを素通りし、同時にスレイプモンの姿も消滅した。

その様子にデーモンは先ほどまで居たスレイプモンは幻覚だと気がつき、慌てて本物のスレイプモンを見つけようと顔を動かそうとするが、そうはさせないとメタルガルルモンXがスターライトブレイカーの威力を引き上げる。

「ウオォォォォォーーーーー！！！！」

「グゥッ！！」

徐々にスターライトブレイカーの方がフレイムインフェルノを押して来ている事に気がついたデーモンは、自身も力を込めてスターライトブレイカーを押し切ろうとする。

その瞬間、デーモンの背後からかなりの距離の位置に両腕にブレイクミラージュを握って、巨大な魔力球を作り上げているスレイプモンが現れる。

「この瞬間を待っていたぞ！！シフト・ファントムストライク！！」

（食らいなさい！！私達の全力全開！！）

「ッ！！」

「（スターーライトブレイカーーー！！！！）」

ドグオオオ

「グアァァァァァァァァァァーーーーー！！！ば、馬鹿な！！」

背後からのスレイプモンのオレンジ色のスターライトブレイカーを食らったデーモンは、苦痛に満ちた叫びを響かせた。

同時にフレイムインフェルの威力も減衰し、メタルガルルモンXの桜色のスターライトブレイカーがフレイムインフェルのを押して行き、三発の最上級の砲撃をデーモンはその身に受ける。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ギギャアァァァァァァァァァァーーーーー！！！負けん！！負けんぞ！！」

「化物が！！」

（スターライトブレイカーを三発も食らっているに！！）

苦痛に満ちた叫びを上げながらもスターライトブレイカーの中で生き残っているデーモンに向かって、スレイプモンとティアナは思わず悪態をついてしまった。

何せ並みの究極体でも消滅してしまう威力が篭った砲撃を三発も食らってもなお、デーモンは生きている。更にはスターライトブレイカーの影響範囲から逃れようとしているのだから、化物としかデーモンは評せ無いだろう。

そして遂にデーモンは全身をスターライトブレイカーに焼かれながらも、空中に脱出する。

ーーービュン！！

「シネェェェェェェェーーーー！！！」

『ッ！！』

スターライトブレイカーから逃れると共にデーモンはスレイプモンとメタルガルルモンXに両手を向けながら咆哮を上げ、スレイプモンとメタルガルルモンXは目を見開く。

しかし、次の瞬間、デーモンの体はまるで石になったかのように完全に膠着してしまう。

ーーーギシッ！！

「なっ！？・・・な・・ん・・だ・・コレは」

「貴様の敗因はディアボロモンを最後まで侮った事だったな」

「ッ！！」

聞こえて来た声にデーモンは目を見開き、僅かに動く顔で体の下を見てみると、両腕をデーモンの体に押し付けているブラックウォーグレイモンXが存在していた。

「貴様はディアボロモンの爪を刺された。奴の能力の一つにウィルスを送り込む能力が在る」

（あの時に！？）

ブラックウォーグレイモンXの言葉に、デーモンは一体目のディアボロモンに爪を差し込まれた時の事を思い出した。

そう、あの時に一体目のディアボロモンはウィルスをデーモンの

体に送り込んでいたのだ。そのウィルスは徐々にデーモンの体を侵食していたのだ。戦いの集中していた為に、デーモンは自身の体の異常に気がついていなかった。
　そして遂にウィルスはデーモンの体全体を侵食し、完全に動けない状態に追い込まれてしまったのだ。

「ウィルス種の頂点のお前がウィルスに敗北するとは、とんだ皮肉な終わりだな」

「き、き・さ・まッ！！」

「お前との因縁もこれで終わりだ！！暗黒のガイアフォース！！！」

ーーードゴオオオ

ドゴオオオ

デーモンの質問に自身の右手を突き刺している、片翼のルーチェモンは世間話するように答えた。
ルーチェモンの左背には天使型デジモンの証である白き翼は無く、逆にまるで腐食しているかのように黒い煙が吹き上がっていた。
それと同時に湧き上がって来る激痛にルーチェモンは僅かに顔を顰めるが、すぐさまその顔は歓喜に満ち溢れ、デーモンの電脳核（デジコア）を強く握り締める。

ーーーギュウッ！！

「ガアァァァァァァーーーー！！」

「デーモン。君には失望も良いところだよ。絶好の機会でありながらも、大門大達を殺せなかった事と言い、今回の独断専行。あまつさえ、敗北・・・・もう君は全く役に立たないね」

「グゥッ！！笑わせるな！！貴様は最初から私を利用する気だったのだろうが！いや、私だけではない！バルバモンもベルフェモンもリヴァイアモンも全て利用しようとして…」

ーーーギュゥッ！！

「ガッ！！」

「酷い言い草だね。これでも僕は君達を信用していたんだよ。扱い易い道具としてだけどね」

「お、おのれ！！」

「でも、君は役に立たない道具だったよ・・・でも、君には最後の最後で役に立って貰うよ。僕の糧となってね」

「ッ！！止めろ！！ヤメロオオォォォォォォォォォーーーーーー！！」

ルーチェモンのしようとしている事に気がついたデーモンは断末魔の叫びを上げるが、ルーチェモンは構わずに残忍さと歓喜に満ちた顔をしてデーモンの電脳核（デジコア）を引き抜く。

「ばいばい、デーモン」

ーーードスーーーン！！

「ギギャァァァァァァァァァーーーーーーー！！！！」

『ッ！！』

自身の電脳核（デジコア）を引き抜かれたデーモンは、断末魔の叫びを響かせながらデータ粒子に変わり、完全にその体は消滅した。

その余りにも哀れなデーモンの最後に、メタルガルルモンXとスレイプモン、ディアボロモンは目をデーモンの体を構成していたデータ粒子に向けるが、ブラックウォーグレイモンXだけは険しい視線を電脳核（デジコア）を握ったままのルーチェモンに向ける。

「・・・貴様がルーチェモンか？」

「そうだよ。会うのは初めてだね。異界の魂を持った呪わしき存在」

「フン、俺の事も知っていたか。奴らから聞いていたようだな」

「その通りさ。まさか、異界の存在が居るなんて思わなかったけどね。最も僕は別に君の知識には興味は無いんだ。どうせもう役に立たないだろうしね」

「渡す気も無いがな・・・・貴様、デーモンの電脳核(デジコア)を如何する気だ？」

「こうするのさ」

ーーーガブッ！！

『ッ！！』

ルーチェモンはブラックウォーグレイモンXの言葉に答えると同時に、ルーチェモンはデーモンの電脳核(デジコア)を口の中に入れて飲み込んだ。

その姿にメタルガルルモンX達は目を見開くが、ブラックウォーグレイモンXだけは動じる事無く両腕のドラモンキラーを構えて、ルーチェモンに向かって全速力で飛び掛かる。

「オオォォォォォォーーーーー！！！ドラモンキラーーー！！」

ーーーガシッ！！

「・・・何だ・・・と？」

ブラックウォーグレイモンXが全力で振り抜いたドラモンキラーを、ルーチェモンはまるで箸を掴むかのように左手で簡単に受け止めた。

その様子に全力で右拳を振り抜いたブラックウォーグレイモンX自身だけではなく、様子を窺っていたスレイプモンとメタルガルルモンXは信じられないと言うように目を見開く、

「そ、そんな馬鹿な・・・」

「・・・ブ、ブラックさんの攻撃を・・・意図も簡単に・・・」

『・・・・・』

目の前に広がる光景にスレイプモンとメタルガルルモンXは思わず震えた声で呟き、気絶しているイクスを護るように立っている二体のディアボロモンも瞳を険しく細める。

しかし、その驚愕の現実を作り上げたルーチェモンは何でも無いと言う風に笑みを浮かべながら、自身の左背に目を向ける。

先ほどまでは確かに黒い煙を上げて腐食が進んでいた筈の背は、腐食も完全に治まり、それどころから徐々にでは在るが、左側の羽の修復が進み始めていた。

（これでリリスモンの忌々しい呪いは解けたね。流石に進化までは出来なかったけど、デーモンの力は吸収した。後一体ぐらいかな。僕の覚醒に必要な生贄は）

「貴様！！」

ーーーブン！！

自身の事を完全に忘れて物思いにふけているルーチェモンに向かって、ブラックウォーグレイモンXは怒りに満ちた声を上げながら渾身の力を込めた左足を振り抜く。

しかし、その一撃もルーチェモンは視線を全く向ける事無く、右手だけで簡単に振り払う。

ーーーバシッ！！

「ッ！！」

「アレ？今何かしたかい？ハエが寄って来たのかと思ったよ」

「おのれぇぇぇぇぇぇぇーーーーー！！！」

ルーチェモンの言葉に怒りが頂点に達したのか、ブラックウォーグレイモンXは次々とルーチェモンに向かって両腕のドラモンキラーを振り抜く。

しかし、その攻撃もルーチェモンは右手で弾くか、或いは軽やかな動きを行って最小限にブラックウォーグレイモンXの攻撃を避けていく。

ブラックウォーグレイモンXはそのルーチェモンの余裕さに、ますます怒りを募らせて攻撃の速さを増して行くが、ルーチェモンは同じように最小限の動きで避けて行く。

その様子を離れたところから見ていたメタルガルルモンXとスレイプモンは、ブラックウォーグレイモンXの異変に気がつき慌ててブラックウォーグレイモンXに向かって叫ぶ。

「止めるんだ！！ブラック！！今のお前では勝てんぞ！！」

「そうですよ！！限界が近い体でこれ以上戦ったら、その体が持ちません！！」

「グゥッ！！」

スレイプモンとメタルガルルモンXの叫びに、ブラックウォーグレイモンXは唸り声を上げて立ち止まる。
その様子にルーチェモンは残念そうな顔をしながら、ブラックウォーグレイモンX達から離れて上空に浮かび上がる。

「残念だね。今の僕の力を確かめたかったけど、今の状態の君達じゃ相手にもならないよ・・・（まぁ、僕自身もデーモンの力を馴染ませるのに時間が掛かるし、此処は撤退するしかないんだけどね）」

そうルーチェモンは内心で呟きながら、自身の体の中で荒れ狂るうデーモンの力を制御する。
ルーチェモンの身の内では、取り込んだデーモンの力が暴れに暴れ回っているのだ。幾ら弱まっていたデーモンとは言え、同じ七大魔王に分類されるデーモンの力は、ルーチェモンを持ってしても制御し切れていなかった。
リリスモンの呪いを解く為と言え、少し無茶をし過ぎたと思いながら、ルーチェモンは余裕そうな笑みをブラックウォーグレイモンX達に向ける。

「今日のところは見逃すけど、君達の望む未来は何れ潰れるよ。管理世界の人間達の愚かさは、拭い切れないほどだからね。まぁ、せいぜい無駄な足掻きを繰り返しなよ・・・それとディアボロモン？」

「ナンダ？」

「そう殺気を振り撒かないで欲しいね。君は嘗て僕に従ったデジモンなんだからね？」

『なっ！？』

ルーチェモンが告げた事実にディアボロモンの過去を知らないメタルガルルモンXとスレイプモンは驚愕し、ブラックウォーグレイモンXとディアボロモン二体はルーチェモンを睨みつける。
その様子にルーチェモンは残忍さに満ちた笑みを浮かべて、ディアボロモンが大切そうに抱えているイクスに目を向ける。

「君の過去を知ったら君のパートナーは君を絶対に拒絶するよ」

『ッ！！・・・・・イクスガ・・・・ボクヲ・・・キョゼツ・・』

「そう。何せ君はその昔に…」

「無駄な話をするなら、俺と戦ったら如何だ？」

「ん？」

ルーチェモンの言葉を遮るようにブラックウォーグレイモンXが声を掛け、ルーチェモンは面白いものを見たように笑みを浮かべる。

「フフフッ、まさか、君がディアボロモンを庇うとは思わなかったね・・・何せ君こそが、あの時のディアボロモンを消滅させた本人なんだからね」

『ッ！！』

ルーチェモンが告げた事実に、二体のディアボロモンは目を見開いてブラックを見つめるが、ブラックは気にする事無くルーチェモンを睨み続ける。

「その原因を作ったのは貴様だろうが」

「そう言えばそうだったね。つまらない結果に終わったから、忘れていたよ。君に倒される程度のディアボロモンに任せたのが間違いだっ…」

ーーードグオオォォン！！

「ッ！？」

ディアボロモンを侮辱しようとする言葉をルーチェモンが呟こうとした瞬間、ルーチェモンの顔面は今まで最大の動きを行ったブラックウォーグレイモンXに殴り飛ばされた。

その全く見えなかったブラックウォーグレイモンXの動きにルーチェモンは顔を歪めて血が流れている口元を拭いながら、全身から殺気を発しているブラックウォーグレイモンXに目を向ける。

「もう一度俺が戦った相手を侮辱してみろ？体の事など気にせずに、貴様を殺してやる」

「・・・・なるほどね・・・・・（これは思ったよりも厄介な敵だ。僕にこうも簡単に血を流させるなんて・・・・やっぱり此処はデーモンの力を制御出来るまで、下がるしかないようだね）」

そうルーチェモンは内心で呟くと共に、その身を無言で空間に溶け込ませてその場から去っていた。

そしてルーチェモンの気配が完全に消え去ると同時に、ブラックウォーグレイモンXの体はデジコードに包まれ、ブラックとルインの二人に分かれるとブラックは地面にガックリと倒れ伏す。

ーーーバタン！！

「ブラック様！！」

「ブラック！！」

「ブラックさん！！」

（ブラック兄さん！）

（ブラックさん！）

地面に倒れ伏したブラックに慌ててルイン達は声を掛けるが、ブラックはもはや意識を保つのも本当に限界なのか、意識を遠退いて行く。

「・・・・・・ル・・イン・・・・・後を・・・・」

「はい！！分かっています！！ですから！安心してお休み下さい！！」

「・・・・フッ・・・・」

ブラックはルインの言葉に僅かに微笑むと、瞳を完全に閉ざして深い眠りの内につく。

それと共にルイン達はアルハザードの帰還する準備を始め、ディアボロモン二体は何かを悩むかのように安らかに目を閉じているイクスを見つめるのだった。

憤怒との決着（後書き）

次回予告

デーモンを倒した漆黒の竜人達。

しかし、全員が受けたダメージは深かった。

己の過去に深く悩むディアボロモン。

そして時を同じくして機動六課に新たな任務が与えられる。

次回、漆黒の竜人と少女、『水棲デジモン達の脅威』

機動六課の前に二体目の伝説は現れる。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　前編（前

魔法戦記リリカルなのはＦｏｒｃｅ（フォース）を知らない人への主要説明

エクリプスウィルス

感染したものを『ＥＣ因子保有者（エクリプスキャリアー）』、発症したものを『ＥＣ因子適合者（イバー）』と呼んでいる。　中期以降の感染者は負傷、肉体の欠損が修復するという症状が出る。再生速度や限界は個人の体質によって異なる。

ＥＣ感染者は『感染・発症・適合・病化』のプロセスを辿り、強度の『病化』は肉体そのものを兵器に変える。その他にも『高速再生』なとど呼ばれる『病化』が存在している。

因みに病化の傾向にもよるが、感染者はほぼ一般的な攻撃には不死身になる。

ディバイダー

ＥＣ兵器（エクリプスウェポン）の一部で、『魔導殺し』とも呼ばれている。

その訳は稼動状態のディバイダーは魔力エネルギーの結合分断（ゼロエフェクト）という共通性能を持ち、魔力による弾丸や物質を全て無力化すると言う、魔導師殺しとしか言えない機能が存在している為である。

リタクター

リアクトプラグとも呼ばれる。ＥＣ（エクリプス）感染者はリアクターを体内に取り込むことで、ディバイダーと自身の能力を全開放する。この二つが揃えば、『世界を滅ぼす毒』になると言われている。

沢山の応援の結果前編を先ずは投稿いたします。

因みに今回の話で、何故リンディ達が外の世界にフリートを出したくない真の理由と、フリートの本当の実力が明らかになります。
本編では発揮される事は先ず無いので、この特別編だけだと思って下さい。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　前編

アルハザード。
その場所の司令室と呼べる場所で、ブラックは壁に背を預けながら深い眠りについていた。
戦いこそが生き甲斐のブラックでは在るが、精神の安定や自身の体に蓄積している疲れなどを癒す為に、本当に時々では在るが深い眠りにつかねばならなかった。
そしてその時のブラックは決して起こしてはならない。罷り間違って無理やり起こしでもしたら、その瞬間に待っているのは絶望どころの騒ぎでは済まされず、二度と立ち上がれないほどの恐怖しか後には残らないのだから。
嘗て愚かにも眠っていたブラックに接触を図った連中が存在していた。その連中は何も知らずにブラックを叩き起こし、それだけではなくブラックが最も赦せない事を連中は行っていたのだ。
当然ながらその後に待っていたのは惨劇と言う言葉が生易しいほどに思えるほどの地獄。以後彼らは二度とブラックに近づかず、ブラックも怒りに満ち溢れて彼らの目的を全て粉砕した。
因みにその連中の目的の中に選ばれた人間以外が触れたら危険な少女も居たが、ブラックからすれば何とも無く、平然とアルハザードに少女を連れ帰ってマッドの治療を受けさせている。
話は戻すが、眠りについたブラックに近づくのはヴィヴィオ以外には居らず、ルインやリンディでさえも滅多には眠っているブラックに接触を図らない。
特に今回の眠りは激戦と不眠不休で動き続けた疲れを完全に癒す為の眠りなので、尚更に無理やり起こされでもしたら、途轍もない血の雨が降り注ぐ地獄が引き起こされるだろうから、ヴィヴィオでさえもブラックには接触は禁じられている。
誰も眠っている世界を滅ぼすかもしれない暴竜を起こしたくはな

い。
しかし、今日、その最も危険な暴竜が再び目覚めてしまう。
だが、それはこの世界の話ではなく、本来ならば誰にも辿り着く事が出来ない地ー平行世界ーで再び漆黒の暴竜は目覚めてしまうのだった。

ーーーガチャッ！！

ーーーソ〜〜

司令室の扉が突如として開くと共に、挙動不審な動きをしながら、右手に『平行世界にいってらっしゃいガン・バージョンセカンド』を持ったフリートが入って来る。
誰も居ない事をフリートは確認すると、ゆっくりと司令室の中に入り込む。そして出来るだけブラックとも距離を取りながら、左手に時計のような機械を操作し、更に机の下の中から大きな荷物が入った袋を取り出す。

ーーードン！！

「ハッ！！」

予想以上に大きな音を立てた荷物に驚き、フリートは慌ててブラックに目を向けるが、ブラックは深い眠りについたままだった。
フリートはその事実に安堵する。誰だって今のブラックの状態を知る者ならば近づきたくは無いが、その状態のブラックに近づいても行いたい賭けにフリートは今日出たのだ。

（リンディさんがこの部屋に来ない今こそ、私が平行世界に行くチャンスなのです！！この前の一件で初号機は封印されましたが、こ

のバージョンセカンドは何とか隠し通せました！更に漸く完成した私を外の世界に出せる機械！絶対に平行世界に行って研究するんです！！）

そうフリートは内心で叫ぶとゆっくりと荷物を背中に背負う。
そしてそのまま自身に向かって『平行世界にいってらっしゃいガン』を構えて、引き金を引こうとする。
しかし、その直前にフリートはうっかり移動させておいた椅子に足をぶつけ、そのまま『平行世界にいってらっしゃいガン』の引き金を引きながら床に倒れてしまう。

ーーードゴン！！

「ヘブッ！！・・・・フェエェ～～ン、痛いです・・・・ハッ！！ブラックは！？」

大きな音を立ててしまった事実に気がついたフリートは、涙目になりながらも急いで起き上がり、ブラックを確認する。
しかし、先ほどまで居た筈のブラックは、壁際の何処にも存在しておらず、フリートは全員から冷や汗を流して、恐る恐る自身が持っている『平行世界にいってらっしゃいガン』に目を向け、絶叫を響かせる。

「ギョエェェェェェェェェーーーーーー！！！またブラックが行ってしまった！！しかも眠っている状態で！このままだと大惨事がまた起きます！！リンディさんにお仕置きされる！！」

「・・・今・・・・・フリー・・・・・嫌な予感」

「ゲッ！！不味い！？リンディさんが来ます！！」

扉の向こうから聞こえて来た声に、フリートは慌てて司令室の監視カメラが記録していた映像を消して、リンディが来る前に今度は自身に『平行世界にいってらっしゃいガン』を構えて引き金を引く。

「何としてもブラックを連れ戻さないといけません！！出発！・・・・アレ？そう言えばブラックのネックレスは修理していたような」

ーーーシュゥン！！

不吉な言葉を司令室に残して行くと共にフリートは光に包まれ、後には暗い部屋だけが残されたのだった。まるでこれから行く先の世界の運命を暗示するかのように。

平行世界。

第二十三管理世界ルヴェラ。その遥か上空で二隻の艦艇が激突し合っていた。

その内の一隻ー黒い二本の刃を前方に向けているような形をしている機体ー飛翔戦挺・フッケバイン（フッケバイン）

凶鳥と言う集団の本拠地である。其処に居る構成員全員がとある特殊な病ーエクリプスウィルスに感染した事で発症するＥＣ患者。

彼らは『魔導殺し』の名を持つーＥＣ感染者専用の兵器ーエクリプスウェポンを使用する事が出来る。そしてディバイダーとリアクトプラグを彼らは得た時『世界を殺せる毒になる』と言われている。

もう一隻の艦艇はこの世界の管理局のＬＳ級『ヴォルフルム』。特務六課部隊長八神はやてが艦長を勤める艦艇である。

特務六課の目的は凶鳥（フッケバイン）の逮捕及びディバイダーの確保だった。

それ故に互いに激突し合っていたが、突如として発生したエネル

ギー干渉によって中断していた。
だが、そのエネルギー干渉が非常に不味かった。世界に影響を与えたモノは、より強大な世界に“悪影響”を及ぼす者を呼び出してしまったのだ。

「ッ！！部隊長！！大変です！！フッケバインと我が艦の上空に巨大な空間干渉が起きています！！何かが顕現します！？」

「何やて！？」

管制官から知らされた情報にはやては驚き、管制官が急いで映像をモニターに映し出すと、確かに空間が信じられないほどに捻じ曲がっている光景がモニターの先に広がっていた。
それは管理局だけではなく、凶鳥（フッケバイン）の方でも確認し、操舵室に居たフォルティスと言う男性とフッケバインの操舵手兼管制責任者ステラ・アーバインと言う少女も、モニターに映っている映像に顔を僅かに険しく歪めていた。

「・・・コレは・・・あの子の力が何かの影響を及ぼしたようですね・・・『ゼロ』因子を持つ者がこれほどの力を発揮するとは」

「如何するの？」

「・・まぁ、何が現れても大丈夫でしょう。どうせ管理局が何とかするでしょうからね。寧ろこの状況で僕らと、あの空間の歪みの先から現れる何かを相手にするのは無理でしょうからね。まぁ、それよりも先ほど頼まれた事を実行しないと不味いですし、其方を優先しましょうね」

フォルティスがそうステラに声を掛けると、ステラは無言で頷き、

準備を行い始める。
　それを確認したフォルティスがモニターに再び目を向けてみると、空間の歪みから漆黒の体を持ち、金色の髪をたなびかせている竜人が現れ、同時に空間の歪みは更に広がっていた。

「八神部隊長！！大変です！！あの歪みから出て来た生物が更に空間の異常を引き起こしています！！このままではどれだけ世界に悪影響を及ぼすか分かりません！！」

「ッ！！至急アグレッサー１に連絡！！あの竜人のような生物に砲撃を放つんや！！絶対に現させたらあかん！」

「了解です！！アグレッサー１！至急カノンを装備して竜人を砲撃して下さい！！」

『了解』

　管制官の指令のアグレッサー１―この世界の高町なのはは了承し、急いで甲板へと出て、上空に存在している竜人に向かって大型の大砲のような機械―『ストライクカノン』を構える。

「ゴメンね。貴方が何かは分からないけど、こっちも忙しいの。だから、帰って貰うよ！！発射！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

　ストライクカノンから発射された弾丸は、真っ直ぐに竜人へと向かい直撃して爆発した。
　その様子になのはや、映像で見ていた管理局の面々は安堵の息を吐き、急いでなのはは凶鳥用（フッケバイン）の準備を終えようとするが、その直前

に背後から蹴りが飛んで来る。

「この馬鹿ァァァァァァァァァーーーー！！」

ーーードォン！！

「キャッ！！」

完全に無防備なところからの一撃に、なのはは前方へと倒れ込んだ。

しかし、蹴りを放った本人ー肩を怒らせているフリートは急いでなのはの襟元を掴み上げ、怒りに満ちた叫びを上げる。

「あ、貴女！？自分がどんな惨劇の引き金を引いたと思っているんですか！？」

「え、えぇ！？貴女誰ですか！？如何してこんな場所に！？」

「うるさいです！！とにかく急いでこの艦に乗っている人間達を避難させない！でないと本当に惨劇が…」

「グウゥゥゥゥゥゥゥッ！！！！ガァァァァァァァァァァァァァァァーーーーーーー！！！！！」

『ッ！！』

突如として響き渡った怒りに満ちた咆哮に、なのはとフリートが慌てて上空に目を向けてみると、非常に不機嫌そうな顔をして怒りのオーラを撒き散らし、空間の位相を乱しているブラックが存在していた。

「アァ・・アァ・・・起きてしまった・・・しかも無理やりに・・・・もう終わりです・・・この世界は・・・・“滅びる”」

「えっ？・・あの今なんて？」

絶望感に満ち溢れて膝をついているフリートになのはは質問するが、フリートは答える事無く、無言で荷物の中から紙と鉛筆を取り出し、なのはに手渡す。

「はい・・・今すぐに遺書を書いて下さい。多分起こした張本人の貴女が・・一番初めに地獄を見るでしょうから。いや～、知らなかった事とは言え、貴女は英雄になれますよ。ブラックを起こしたんですから」

「だ、だから如何言う意味何で…」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ッ！！」

「あー言う意味ですよ。いや、何人死んだんでしょうね？」

右の方の装甲から煙を噴き上げているヴォルフラムを指差しながら、フリートは声を出した。

逆になのははその現状に言葉が出せなかった。殆ど一瞬でヴォルフラムの纏っているシールドは粉砕され、更には簡単に艦艇に甚大なダメージを与えたのだ。

それを行った犯人は先ほどの竜人しかいないと思って、なのはは上空に顔を向けるが、既にその場所にはブラックは存在せず、なの

はが首を傾げると、フリートはなのはの背後を指差す。
「さようなら、この世界の高町なのはさん」
「何処のどいつだ？眠っていた俺を起こしたのは？」
「ッ！！」
背後から聞こえて来た怒りに満ちた声音に、なのはが背後を振り向いて見ると、全身から凄まじい殺気を撒き散らしているブラックが立っていた。
ーーードン！！
「フリート。どいつだ？俺に砲撃を食らわせて起こしたのは？」
「此処に居る高町なのはさんです。ですから、どうかお怒りを静めて下さい。いや、この人だけですからね。本当に」
あっさりとフリートは、この世界の高町なのはを見捨てた。
当然だろう。知らなかったでは済まされないのだ。寧ろなのは一人の犠牲で済むのならば、フリートはなのはをブラックに平然と差し出す。
眠っていたのを無理やり起こされてしまった状態のブラックを知る者ならば当然の行動だ。
しかし、現状が全く分からず、ブラックの事を全く知らないなのはは、何の対策も行わずに不用意に素早くブラックとフリートから離れようとする。
今のやり取りで少なくとも二人が仲間なのだと理解するのは、なのはには充分だった。

ブラックとフリートがどのような相手なのか分からないが、凶鳥（フッケバイン）以外の敵が増えてしまった現状になのはは顔を険しくしながら離れようとする。
だが、その直前にブラックは右手を伸ばし、移動している途中のなのはの顔を意図も簡単に掴み取る。

ーーーガシッ！！

「ッ！！」

「死ね」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

言葉と共にブラックは掴んでいたなのはをヴォルフラムの装甲に叩きつけた。
その衝撃は凄まじく、装甲は一瞬で砕け散り、なのはは瓦礫に飲み込まれながらヴォルフラムの艦内に消え去った。
その様子にブラックはつまらなそうな顔をしながら、なのはが落としていった『ストライクカノン』を分解して調べているフリートに顔を向ける。

「フリート。此処は何処だ？」

「・・・平行世界です・・・うっかりブラックも巻き込んで来てしまいました」

「ほう、道理で壊した覚えの在る連中の船が在る筈だな」

ブラックは言葉と共にヴォルフラムから距離を徐々に離している

フッケバインに目を向けた。
その様子を横目で確認したフリートは、以前よりは落ち着いているブラックに安堵を息を吐く。

（いや～、やっぱりこの世界のなのはさんを差し出したのは正解でした。これで少なくともブラックの暴走は治まるでしょう。人間一人で世界が救えたんです。これほど有意義な犠牲は無いですね・・・・それにしてもコレ？・・・もう質量兵器ですよ。いやはや、結局辿り着く場所は同じなんですかね）

分解を終えて如何言う構成で作られているのか理解した、『ストライクカノン』だった部品を見つめながら、フリートは呆れたように内心で呟いた。
もはや魔法と言う言葉は成れの果てに相応しい領域に『ストライクカノン』は辿り着いている。
結局戦う武器が辿り着く場所は同じなのだと思いながら、フリートが『ストライクカノン』の部品を汲み直していると、なのはが消え去った穴の中から赤いゴシックドレスを着ている少女が飛び出し、ブラックに向かって持っていた先端が機械的になっているハンマーを振り下ろす。

「テメェェェェーーーー！！」

ーーーガァァァァァーーン！！

「うるさい。俺が眠っていたのを起こしたのは貴様らだろうが！！」

ーーーガァァァァァーン！！

「グゥッ！！」

ブラックは言葉と共に少女ーヴィータを持っていたハンマーごと弾き飛ばした。
同時にブラックの背後で『ストライクカノン』を新たに“作り直した”フリートは、嬉々としながら左手に装備してヴィータに向かって構える。

ーーーガチャン！！

「ブラック。貰っていいですか？作り直したコレの性能を調べたんですけど？」

「・・・フン・・・つまらん奴と戦っても満たされん・・・俺はまた眠らせて貰うぞ」

「了解ですよ・・・（寧ろ眠って貰った方がこの世界は安全になります・・・どうやらこの世界の凶鳥（フッケバイン）の連中には興味が無いようですし、このまま何も起きずに済んでくれればリンディさんのお仕置きは消えますからね）」

そうフリートは内心で呟きながら、殆ど一瞬の間に全ての問題点をクリアするように改造した『ストライクカノン』の砲身の照準をヴィータに合わせる。
逆にヴィータは変わり果てた『ストライクカノン』の形状に目を見開くしかなかった。なのはが装備していた『ストライクカノン』の大きさはかなりの大きさだったのに、今フリートの左腕に装着されているのはよりコンパクトに纏められている。
短時間で其処まで改造された事実をヴィータは信じられずに、『ストライクカノン（フリート作）』を見つめるが、驚愕はそれだけでは治まらなかった。

「さぁて、暇潰しで改造したコレの威力・・・実験台になって下さいね。ファイヤーーー！！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

フリートが『ストライクカノン』の引き金を引くと同時に、ヴォルフラムに備えられている長射程魔導砲ー『アウグスト』に匹敵する砲撃が砲身から放たれた。

その砲撃は真っ直ぐに前へと進み、その先に運悪く存在していたフッケバインの中和フィールドさえも貫いて、フッケバインの右翼部分を削り取るように消滅させて空の彼方に消え去って行った。

とんでもない威力にフッケバインに乗っているメンバーだけではなく、管理局の面々も唖然とするが、撃ち出した張本人であるフリートは不満そうにしながら、砲撃を撃って完全に砲身が砕けてしまっている『ストライクカノン』を甲板の上に投げ捨て、砲撃の余波を受けてバリアジャケットがボロボロになって体中のいたるところから血の流しているヴィータを見下ろす。

ーーードン！！

「あぁ、何ですか？この装甲の脆さ？こんなの戦争では物の役にも立ちませんよ。全く完成した時の威力の想定ぐらいは考えて欲しいですね。本当に。しかも照準が僅かに外れて直撃を逃しましたし、つまらないデバイスですね。そう思いません、ブラック」

「・・・・・」

不満そうにフリートは質問したが、既にブラックは甲板状で膝を

ついて眠りに落ちていた。
　その様子にフリートは残念そうに顔を俯けるが、すぐさま好奇心が溢れたように白衣の中からメスなどの器具を取り出し、ボロボロになって気絶しているヴィータに構える。

「クスクス、そう言えば時間が経って人間に近づいた守護騎士の体は調べた事がありませんでした。一体どのような構造で人に近づいているんでしょう・・・実験したいですね」

　危険な笑みを口元に浮かべながらフリートはヴィータの体にメスを入れようとするが、その直前に背後から怒りに滲んだ声が響いて来る。

「其処までや。それ以上、私の家族に手を出すんは、許さへんよ」

「・・・・・ハァ～、酷い言い草ですね。私は改造(なお)して上げようとしているだけなのに」

　フリートはそう言いながらメスを白衣の中に戻し、ゆっくりと背後へと振り返る。
　其処にはバリアジャケットを身の纏い、左手に『夜天の書』を持ち、左手にシュベルト・クロイツを握った、肩口まで髪を伸ばした女性ーこの世界の八神はやてが、怒りを堪えているような顔をしながら立っていた。

「公務執行妨害及び局員への傷害罪、更に局員の殺人未遂でアンタらを逮捕させて貰うで」

「へっ？・・・・・あの～最初にブラックを撃ったのはそっちなんですけどね？充分に正当防衛が成立しそうなんですけど？」

「過剰防衛や・・・さっき艦を攻撃された時に傷ついた人数は二十名・・内五名は再起不能の重傷や」

「あら～、ブラックが殺さずにいたんですか。いやいや、如何やら本気で眠いんですね」

はやてが告げた現状に、フリートは思わず唖然としながら眠っているブラックを見つめた。

てっきりフリートは先ほどのブラックの攻撃で何十人と言う単位で死んでいると思っていた。眠りを妨げられたブラックならば確実に暴走して、それこそ数百人単位の人間は地獄を見る事になるだろう。

にも関わらずに一人も死んでいないのだから、それだけ今のブラックは眠りにつきたいのだ。

しかし、ブラックの恐ろしさを知らないはやては、フリートの様子に尚更に怒りを募らせて、眠っているブラックにシュベルト・クロイツを向ける。

ーーースチャ！

「アンタがあの竜人の主やろう？今すぐに武装を全て解除するように命令して貰うで」

「・・・プッ！！プハハハハハハハハハハハハッ！！ハハハハハハハハッ！！あぁ、もう駄目です！私がブラックの主？・・・プッ！！今世紀最大の笑い話ですね・・・・貴女死にますよ」

「何やて？私が死ぬ？」

「えぇ、そうです。貴女が、いえ、貴女達が触れた者は誰にも御せない存在。己の意思と信念のみに従う最凶の存在なんですよ」

「・・・・訳が分からんへんけど。とにかく投降する意思はないんやな？」

「全然無いですね」

「なら、先に竜人を排除させて貰うで！エリオ！！」

「はいっ！！」

「ッ！！止め…」

突如として甲板状に上がって来た赤く塗装された『ストライクカノン』を持った十五歳ぐらいの少年ーエリオ・モンディアルを目撃したフリートは、その行動を止めるように手を伸ばした。

それは本当にはやて、エリオ、ヴォルフラムに乗っている局員達、そして離れたところに居る凶鳥（フッケバイン）の面々を心配しての行動だった。一度は助かったが、二度目は本当にない。

しかし、エリオはフリートの行動をブラックを護る為だと勘違いし、『ストライクカノン』の砲身を構えて発射する。

ーーードドドドドドドドドドドドドドゴオオンッ！！

「アァ・・・・・」

『ストライクカノン』から発射された弾丸は、眠っているブラックに寸分違わずに直撃して爆発を起こした。

その様子にはやてとエリオはブラックを倒せたと思い、安堵の息

を吐くが、すぐさまフリートを捕らえようと目を向けてみると、既にフリートは荷物を背負って全速力で甲板状を走っていた。

「逃がさへんよ！！」

「逃げる？馬鹿言ったら行けませんよ！？これは緊急避難です！ブラックと言う最凶の存在の暴走から逃れる為のね！！」

「・・・・・どいつだ？」

『ッ！！』

煙の中から聞こえて来た怒りを堪えているかのような声に、はやてとエリオが慌てて顔を向けてみると、全身からもはや表現する事が不可能なほど殺意と怒りのオーラを纏っている“無傷のブラック”が現れる。

ーーーードン！！

「一度目は起こした奴一人を潰す事ですませてやった・・・だが、如何やらそれだけでは足らんようだな・・・・俺が静かに眠る為には、この辺り一体を破壊する必要が在るようだ」

「ヒエェェェェェェーーーー！！！！！ブラック！！出来るだけ穏便にすませ…」

「黙れ」

「はいぃッ！！もう何も言いません！」

ブラックの低い声を耳にしたフリートは、距離がかなり離れていながらも敬礼を行い、そのまま逃げるようにヴォルフラムから飛び降りた。
ブラックはそれを確認すると、自身に向かってデバイスを構えているはやてとエリオに視線を向ける。
「さて、邪魔者を排除するか・・・一分は持たせてみろ！！」
ーーードン！！
「消えた！？」
叫ぶと同時にブラックが消失するのを目にしたエリオは声をあげ、急いで姿を消したブラックを探し始める。
全く姿が見えないブラックに、はやてとエリオは焦りを覚えるが、そんな事にはブラックは構わず、エリオの横に現れると同時に渾身の力を込めた蹴りを叩き込む。
「失せろ！」
ーーードゴオオォン！！
ーーーゴキッ！！
「ガッ！！」
「エリオ！！」
蹴り飛ばされて右腕の骨を砕けたエリオを目撃したはやては叫ぶが、ブラックは構わずにエリオを追いかけ、そのまま吹き飛んでい

る途中のエリオの襟首を掴み上げる。

ーーーガシッ！！

「グゥッ！！」

「思ったよりもバリアジャケットの強度が上がっているな。だが、フリートが作ったバリアジャケット以下だ！！」

ーーードゴオオォン！！

「グフッ！！」

ブラックは掴んでいたエリオを勢いよくヴォルフラムの装甲に叩きつけ、エリオを叩きつけた時に破壊された装甲部分から艦艇内部へと入り込む。

その先には複数に局員が存在し、血みどろになったエリオを右手に握っているブラックを目撃する。

局員達は変わり果てたエリオの姿に恐怖を覚えるが、ブラックは全く気にする事無く右手に握ったエリオを自身が開けた穴の方に右手を向けて、艦の外にエリオを投げ捨て、そのまま恐怖に震えている局員達に残忍さに満ちた笑みを向ける。

「クククククッ！今の俺は非常に機嫌が悪い。だから・・・・地獄を見せてやる！怨むならば、俺に攻撃を行った連中を怨むんだな！！」

『ヒィッ！！』

ブラックの宣言を耳にした局員達は我を忘れて逃げ出すが、既に

獲物と認識された彼らにブラックから逃げられる術など無く、次々と血みどろに局員達を変えながらヴォルフラム内を歩いて行く。

その頃、ブラックの暴走から逸早く逃れたフリートは、空を飛びながら一刻も早くヴォルフラムから離れようとしていた。
もはやブラックが止まる事はない。一度目はなのはの犠牲で済んだが、二度目はヴォルフラム内に乗っている全員が犠牲になるだろう。
それに巻き込まれるのは死んでもゴメンなのでフリートは一目散に逃げる。
そして空中を前へと進んでいると、フッと視界の先に黒いバリアジャケットを身に纏って銀髪に赤い目をして、黒い十字文様が描かれた本と銃口とリボルバーがついた剣を持った少年ートーマ・アヴェニールが入って来る。

「おや？・・もしやあの少年はエクリプスウィルスに感染しているんでしょうか？」

まるで眠るかのように空中に居るトーマを目にしたフリートは、即座にトーマの体の状態を看破した。
体に刻まれている特殊な文様。更にはトーマの横に存在しているディバイダー９９６と刻印された武器に銀十字の書。
自身の世界のディバイダーとエクリプスウィルスを調べ尽くしたフリートからすれば、トーマの状態を知るのは簡単だった。
同時にフリートは困ったように顔を歪めて空中に立ち止まる。

「困りましたね・・・・・・如何にもかなり進行しているようですし、更には感覚も幾つか使用不能状態・・・“リリィ”ちゃんが居

れば何とかなるんですけどね・・・・う～ん、でも私の世界のリリィちゃんは調整中で来れませんし、都合よくこの世界のリリィちゃんが近くに居る訳はありませんよね・・・いや～、本当に如何しましょうね？」

「・・・ほう、随分とディバイダーやエクリプスに詳しいようだな、女？」

「うん？」

聞こえて来た声にフリートはゆっくりと小首を傾げながら振り返ると、白いロングコートを着て右目を眼帯で覆った褐色肌の女性が、巨大な黒い長剣と小刀を左右の手に持ちながらフリートを見つめていた。

「答えれば穏便に済ますが・・何故其処までエクリプスやディバイダーに関して詳しい？見たところ感染している様子はないが？」

ーーーポン！

「あぁ、思い出しました。貴女確かサイファーって言う人ですね」

「ッ！！何故私の名を知っている！？」

「いえいえ、ちょっとした事で知っていましてね。まぁ、気にしないで下さいよ」

自身の名を知られている事に動揺しているサイファーに、フリートは何でもないように答えた。

因みにフリートがサイファーの事を知っている理由は、自分達の

世界でブラックのボロボロと言う言葉ですら足らないほどに地獄を味合わされたサイファーを知っているからである。

（いや～、誰なのか本気で分かりませんでしたよ。だって、私の知っているサイファーの姿は、両目は潰され、両腕は再生する端から引き抜かれ、足なんて原型留めずにグチャグチャにされていましたからね。エクリプスウィルスの病気が地獄を見せましたからね・・・不死身って本気で恐ろしいって逆に思いましたね・・・だって、死にたくても死ねなかったんですもの）

シミジミと自身の世界のサイファーが味わった地獄を思い出しながらフリートは腕を組んで、深く考え込むように何度も頷いた。

その様子にサイファーは凄まじく嫌な予感と不安を感じるが、何とかそれを押さえ込み、両手に握っているディバイダー９４４・ケーニッヒ・リアクテッドの剣先を向ける。

ーーースチャッ！！

「話は逸れたが、貴様は随分とエクリプスウィルスとディバイダーについて詳しいようだな。お前はディバイダーかリアクターを所持しているのか？」

「所持していたら如何するんです？」

「無論渡して貰おう。エクリプスウィルスに感染していない貴様が持っていても無用な代物。管理局への私達の行動の邪魔をしてくれた礼だ。素直に渡すならば、コレに食わせずに済むぞ？」

自身が握るケーニッヒ・リアクテッドを脅すように動かしながらサイファーは、フリートに笑みを向けた。

その様子にフリートは不機嫌そうに顔を歪めると、トーマに向かって接近しようとしている二つの影を視界の端に捉える。

「ん？」

「あの少年は我らの同胞だ。誰にも救われない。神でさえも『世界を殺す猛毒』である我らやあの少年を救おうとはしない。だが、我らは見捨てない。あの少年をすく…」

「あの少年は人殺しを認めているんですか？」

「いや・・・だが、すぐに慣れる。慣れなければ自己対滅しかない。それに我らとしてもあの少年は逃せない存在だからな。さて、無駄話は止めだ。ディバイダーとリアクターを渡せ」

「・・・・ハァ～、外の世界を楽しみにしていたんですけど・・・・貴女のせいでつまらなくなりましたよ」

そうフリートは不機嫌そうに背中の荷物の中に手を入れて、何かをゴソゴソと探し始める。

サイファーはその様子にフリートがディバイダーとリアクターを渡すのだと思いながら、フリートをジッと見つめるが、その左目は次の瞬間に限界にまで見開かれた。

何故ならばフリートが取り出したのは、サイファーが握っているケーニッヒ・リアクテッドの待機状態で在る長刀。更にフリートは左手に『Ｋ？ｎｉｇ』と刻印された短刀のリアクターも荷物の中から取り出す。

「さぁて、暴れるのは数千年ぶりですが、この子達の実験に付き合って貰いますよ。このディバイダー９４４・ケーニッヒ・リアクテ

ッドのね！」

ーーードスン！！

≪Ｅｎｇａｇｅ　Ｋ？ｎｉｇ　９４４！Ｒｅａｃｔ！≫

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ば、馬鹿な！？何故同じディバイダーとリアクターが存在している！？いや、それよりもＥＣ感染者でもないものが！？何故リアクト出来るのだ！？」

目の前で起きた現象にサイファーは驚愕する事しか出来なかった。当然だろう。何故ならばディバイダーとリアクターが真の力を発揮する為にはエクリプスウィルスに感染してＥＣ感染者になる事が何よりも必要。しかし、サイファーの見た限り、フリートがエクリプスウィルスに感染している様子はなかった。

何よりもディバイダー９４４・ケーニッヒ・リアクテッドはサイファー自身が握っている。似た物は在っても同じ物がない筈のディバイダーなのに、全く同じ物をフリートは持っている。

その理由が分からずにサイファーは困惑と驚愕に震えながらフリートが居た場所を見ていると、煙の中からサイファーと同種の形状をしたケーニッヒ・リアクテッドを両手に握ったフリートが出て来る。

「そう言えば名乗って居ませんでしたね。私の名前はフリート・・・・フリート・“アルハザード”」

「ッ！！・・・な・・ん・・だ・・と・・・・い・・ま・・・・な・・・・」

「私こそ次元世界に魔法を発祥させた地。全てが手に入ったと言われている地の最後の生き残りにして、アルハザードの管制者・・・フリート・アルハザードです。さて、現代の戦う者よ。私が改良したこの子に実験台になって貰いますよ！」

ーーービュン！！

「クッ！！」

ーーーガキィィィーーン！！

フリートが振り下ろして来た長刀の方にケーニッヒ・リアクテッドを、サイファーは小刀のケーニッヒ・リアクテッドで受け止め、甲高い音が鳴り響いた。

しかし、フリートは防がれた事も気にせずに、今度は小刀のケーニッヒ・リアクテッドをサイファーに向かって突き出す。

「フッ！！」

「舐めるな！」

ーーーガキィィィーーン！！ガァン！！キィン！！

フリートが突き出して来た小刀のケーニッヒ・リアクテッドを、サイファーは長刀のケーニッヒ・リアクテッドで防ぐと共に、二つのケーニッヒ・リアクテッドを連続でフリートに向かって振り抜く。

その攻撃をフリートは同じように防いで行くが、徐々にでは在るがサイファーの剣戟の方がフリートを押して行く。

サイファーにとってケーニッヒ・リアクテッドは己の一部と呼ん

でいいほどの武器。
何故同じケーニッヒ・リアクテッドが存在しているかは分からないが、熟練度ではサイファーの方が圧倒的にフリートを上回っている。
その差に気がついたサイファーは笑みを浮かべながら、大振りして来るフリートの斬撃を僅かに体を傾けるだけで避けようとする。同じ武器ゆえにケーニッヒ・リアクテッドの長さを理解している動きだ。
だが、サイファーは重要な事を忘れていた。フリートが持っているケーニッヒ・リアクテッドは同じ物ではない。“フリートが改良したケーニッヒ・リアクテッドなのだ”。

「伸びなさい！！ケーニッヒ・リアクテッドッ！！」

ーーーードオオォン！！

「ガッ！な、何だと！？」

フリートが叫ぶと同時に伸びた剣身に左肩を痛打されたサイファーは、驚愕しながら自身の肩に激突しているフリートの長刀のケーニッヒ・リアクテッドを見つめた。

「残念でしたね。この子はもはや貴女が知っているケーニッヒ・リアクテッドではないんですよ。私が改良して、エクリプスウィルスなんか必要なく使えるようにした、可愛い私の子供ですよ」

「クッ！！（迂闊だった！）」

フリートの告げた事実に、サイファーは歯噛みしながらフリートから離れた。

しかし、フリートは逃さないと言うように剣身が伸びるケーニッヒ・リアクテッドを凄まじい勢いで連続で振り抜く。

「フッ！！」

ーーーザン！！ザン！！

「チィッ！！何処まで伸びるのだ！？貴様のそれは！？」

「数百キロですよ！！」

「なっ！？馬鹿グフッ！！」

ーーードオオォン！！

告げられた事実に驚愕して動きが止まったサイファーの鳩尾に、フリートのケーニッヒ・リアクテッドが叩きつけられた。

その様子にフリートは笑みを浮かべながら、自身が与えたケーニッヒ・リアクテッドの更なる力を解放する。

「単体解放・分断（ディバイド）」

ーーードグン！

「グガッ！！」

フリートが低い声で呟いた瞬間、サイファーのリアクトはほどかれてしまった。

その衝撃にサイファーは先ほど経験した出来事ートーマにリアクトをほどかれたーを思い出すが、フリートは全く気にする事無く、

好奇心と残忍さが入り混じった笑みをサイファーに向ける。
「『世界を滅ぼす猛毒』ですか・・・なら、毒は通じるんですかね？」
「何を言っ！ゴフッ！！」
ーーーブシュゥッ！！
サイファーはフリートの言葉に疑問の声を上げようとしたが、突如として喉からせり上がって来た大量の血を吐き出した。
その血の量にサイファーは、血塗れになった手を見つめながら震えるが、フリートは全く気にする事無く残酷な言葉を告げる。
「流石に『対鋼破蝕』でも、同じディバイダーには力を発揮出来ず、更には内臓を苦しめる毒の相手は無理でしたね」
「・・・ゴフッ！！・・・何時の間に・・・毒を・・・私の体に・・・」
「無味無臭。相手に気づかれる事無く、大量の死を呼ぶ毒粉ー『インビジブル・レイザー』。嘗てアルハザードが全盛期時代に攻めて来た軍隊を一夜にして大量出血死させた凶悪な代物ですよ。ケーニッヒ・リアクテッドを解放した時に辺りに撒き散らしました。まぁ、貴女はこの子に驚いて気づけなかったでしょうけどね」
「ゴブッ！！」
フリートが事実を告げると同時にサイファーは再び大量の血を吐き出した。

このままで出血死してしまうと思ったサイファーは、何とかフリートから離れようとする。
しかし、その前にフリートは再び二刀のケーニッヒ・リアクテッドで素早く振り抜き、逃げようとしているサイファーの両腕を切り落とす。

ーーーブザン！！

「グァァッ！！」

「貴女もやって来たんでしょう？無抵抗な相手を平然と傷つける事はね」

ーーーガシガシッ！！

両腕を失って僅かに苦痛の叫びを上げたサイファーに、フリートは冷徹な視線を向けながらサイファーの手から離れた待機状態のケーニッヒ・リアクテッドと小刀型のリアクターを受け取った。
そのまま背中の荷物の中に二つとも仕舞い込み、両手を再生させようとしているサイファーに残忍さに満ちた笑みを向ける。

「私の楽しい旅行を潰してくれたお礼です。そのまま『インビジブル・レイザー』の毒に苦しみながら死になさい。後一時間もしないで全身の血が口から吐き出されるでしょうから」

「ッ！！」

「理解して絶望しましたか？では、さようなら」

ーーードゴオオオ

フリートは別れの言葉を告げると共に握っていた長刀のケーニッヒ・リアクテッドから、強力なエネルギー波をサイファーに撃ち込み、サイファーは言葉を発する事も出来ずにエネルギー波に飲み込まれて、フリートの視界の先から消失した。

「・・・あぁ、つまんないですね。これならあの二人を鍛えて上げた時の方が楽しかったですよ」

フリートは小刀の方のケーニッヒ・リアクテッドを回転させながらそう不満を漏らした。

マッドの研究者として認識されているフリートだが、実を言えばその実力は魔導師で言えばＳＳクラス。デジモンで言えば完全体の上位に匹敵する力をその身に宿している。伊達に秘奥の地と呼ばれるアルハザードが滅んだ時に生き残った訳ではない。

寧ろ生き残ってしまったからこそ、アルハザードが滅んだ時の悲劇を繰り返さない為に知識と研鑽をフリートは求めてしまった。だからこそ、リンディ達はフリートを外に絶対に出したくなかったのだ。

一度出ればアルハザードの秘奥の技術、そして己の実力でフリートはブラックと同等の危険性を、いや知識と技術だけならばブラック以上の危険性を持った存在としてフリートは君臨してしまう。

因みにフリートは自身の世界のなのはとティアナの魔導師の師匠でも在る。まぁ、既にティアナはともかく、なのはには魔法だけを使った戦いでは勝てなくなっているのだが。

「さぁて、次はあの少年を調べて見ましょうかね。如何にもあの少年は気になるんですよね」

フリートはそう呟きながら、遠くの空に浮いているトーマの下へ

と向かおうとする。
だが、次の瞬間、フリートの背後に何の前触れもなく、上半身裸の巨漢の男が出現し、手に持っているリボルバーが備わった片手斧の形状をしたディバイダー695・ランゲ・リアクテッドを、フリートの後ろ首に迷う事無く振り抜く。

ーーーズギャアァァァァン！！

ーーーゴキィィィーーン！！

巨漢の男ー凶鳥（フッケバイン）の一味の一人ードゥビルの一撃は、寸分違わずにフリートの後ろ首に直撃し、その首を180℃回して圧し折った。
そのままフリートは力を失ったように落下して行き、ドゥビルは険しい顔をしながら背後に居る口から大量の血を吐き出し続けているボロボロのサイファーを抱えた、長い髪を腰の辺りにまで伸ばして、頭にゴーグルを付け、左脇腹、右手首、左腕、左足にもタトゥーを備えた女性ー同じく凶鳥（フッケバイン）の一味の一人ーアルナージに目を向ける。

「首が180℃回っていた。もはや助かるまい」

「よっしゃ！だったらすぐにあの糞女の荷物から、解毒剤を探してサイ姉を助けるぞ！」

「あぁ、序に奴が奪ったサイファーのディバイダーとリアクターも回収しなければならない。その後にあの小僧も回収しなければな」

「そうだったな。管理局の邪魔も入らないんだし、坊主を助けて、サイ姉も解毒して全部おわ・・・」

「ん。どうし・・・・」

突如としてアルナージが言葉を止めたのを不思議に思いながら、ドゥビルはアルナージが見ている方向に目を向け、アルナージと同様に言葉を失った。

何故ならば二人の視界の先には、“首が１８０℃回りながらも、腕を組みながら空中に浮かんでいるフリート”が存在していたのだ。

「痛いですね？全く女性の首をこんなに回すなんて酷いですよ」

「ば、化物オォォォォォーーー！？」

「ヌゥッ！！」

首が完全に反対側に回っても生きているフリートに、アルナージは悲鳴を上げ、ドゥビルはランゲ・リアクテッドをフリートに向かって構える。

しかし、フリートは全くそんな事を気にせずに首に手をやって、力を込めて一気に元の位置に首を挿げ直す。

ーーーゴキン！！

「フゥ～～、酷い目に合いましたね・・それにしても今のは『短距離瞬間移動（ショートジャンプ）』ですか。扱い難いスキルを此処まで使うと言う事は、貴方がドゥビルで、後ろの女性がアルナージですね」

『ッ！！』

名乗ってもいない名前を告げられた事実にドゥビルとアルナージは目を見開き、警戒するようにフリートから距離を取った。

フリートはその様子を目撃しても動く事はなく、何処か遠い目をしながら自身の世界でブラックが繰り広げた地獄を思い出す。

（確か『高速再生』の病化だったドゥビルは、再生する端から次々と破壊され、元の形状が分からなくなって変てこな形で再生した後に、ガイアフォースを食らって体を半分失ったんでしたね。それでも再生したから、その後にも同じ事を繰り返されて断末魔の叫びを三日三晩上げ続けた後に、“壊れたんでしたね”。アルナージは怒りに駆られてディバイダーを乱射したけど、全然ダメージを与える事無く、フッケバインと共にガイアフォースに飲み込まれて大爆発。運がよく死ななかったですけど、その後にブラックに百キロ以上引き摺られて心が折れたんでしたね・・・いや～、本当にアレがブラックが作り上げた地獄の中でも最大のものでした・・・・絶対に今のブラックには近づかないようにしないといけませんね）

改めて今の状態のブラックの危険性を理解したフリートは、絶対にブラックに近づかない事を再度誓い直した。

そんな事は知らないドゥビルとアルナージは、首が１８０℃曲がっても死なないフリートを警戒するように離れるが、その直前にサイファーが更に血を吐き出す。

「ゴフッ！！」

「サイ姉ッ！！しっかりしろ！！」

「・・・アル・・お前はサイファーをフッケバインに連れて行け。輸血しなければ危険だ」

「ビル兄・・・分かった！絶対に解毒剤を手に入れて来てくれよ！」

アルナージはそう叫ぶと、急いでサイファーをフッケバインに連れて行く。
ドゥビルはそれを確認すると、右手に握っているランゲ・リアクテッドの刃先を、首をコキコキと鳴らして調子を確かめているフリートに構える。

ーーーブン！！

「素直に解毒剤を渡すならば、無駄に命を散らす事はないぞ？」

「ハッ？・・・・まさか、私を殺せると思っているんですか？」

「・・・首を折って死なないのならば、その体を跡形もなく叩き潰せばいい。流石にそうすれば死ぬだろう？」

「・・・・う～ん・・・嫌ですよ。だって、私の楽しみにしていた旅行を、あの女はつまらなくしてくれたんです。そんな相手を助けるほど、私は優しくないですからね」

「残念だ。ならば、此処で砕けて消えろ。リアクト」

ーーーザン！

ーーードオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

ドゥビルは言葉と共に自身の左手をランゲ・リアクテッドで傷つけ、ドゥビルの体は煙に包まれた。
その様子をフリートは腕を組みながら見つめていると、煙の中からランゲ・リアクテッドとリアクトして全身を鋼鉄のような鎧で纏い、皮膚や髪の色の変化して禍々しい感じを受ける怪物染みた姿に

なったドゥビルが現れた。
同時にドゥビルは長大で巨大な大戦斧となった機動状態のランゲ・リアクテッドをフリートに向かって構える。

ーーーブオン！！

「最後通告だ。解毒剤を渡せ」

「べーー！！嫌ですよ！私は認めた相手以外の頼みは聞かない主義なんです」

ランゲ・リアクテッドを構えて来るドゥビルに向かって、フリートは赤い舌を出して要求を拒否した。
その様子にドゥビルはもはや問答は不可能だと理解し、再び自身のスキルである『短距離瞬間移動（ショートジャンプ）』を使用して、フリートの背後に瞬時に移動する。

ーーービュン！！

ーーーガアァァァァァァーーーン！！

「・・・な・・ん・・・だ・・と・・・・」

背後に『短距離瞬間移動（ショートジャンプ）』すると共に振り抜いたランゲ・リアクテッドを防がれた事実に、ドゥビルは掠れた声を出した。
しかし、ドゥビルが驚いているのは防がれた事実ではなく、フリートが防ぐ為に使った武器にこそ在った。
今フリートが握っているのは、瞬時に背中の荷物の中身から取り出した片手斧の形状をした武器。つい先ほどまでドゥビルが握っていた待機状態のランゲ・リアクテッドでフリートは、ドゥビルのラ

ンゲ・リアクテッドを防いでいたのだ。

「あらあら、そんなに驚く事はないと思いますよ・・・だって、ケーニッヒ・リアクテッドが在ったんですよ。貴方の持っているランゲ・リアクテッドが無いと思いました？」

「クッ！！！」

フリートが告げた事実にドゥビルは警戒し、すぐさまフリートの傍から離れた。

それをフリートは視界に入れながら、ゆっくりと右手に握っているランゲ・リアクテッドを構えて、刃先をドゥビルに向けながら呟く。

「さて、次はこの子ですね・・・リアクト！」

ーーードゴオオオ

が改良したんですからね」

「・・・・例え貴様が何者であろうと、サイファーを助ける為に倒させて貰う！！ヌオオォォォォォォォォォォォォーーーー！！」

「返り討ちにして、貴方のランゲ・リアクテッドを貰い受けますよ！！ハアァァァァァァァァァァーーーー！！！」

ーーーガアァァァァァァァァァァン！！！

フリートとドゥビルのランゲ・リアクテッドは互いに激突し合い、深く鈍い音と衝撃波が空中に撒き散らされるのだった。

フリートの改造アイテム及び使用アイテム

『ストライクカノン』フリート作。
なのはが落とした『ストライクカノン』を改造した物。
改造される前は腕に装着出来る大型の大砲のような形状だったが、改造後はよりコンパクトに纏められ、全てのＡＥＣ兵器ー［ＡＭＦやゼロエフェクトに対抗する為に造られた魔力駆動の兵器］ーの問題点をクリアしてしまっている。
しかし、装甲の問題だけは如何する事も出来ず、更に自身が作成したデバイス並みの強度だと勘違いしたフリートの改造処置により、一発砲撃を撃っただけで大破した。因みに威力は管理局の艦艇に装備されている魔導兵器クラスの約二倍ぐらいである。

『インビジブル・イレイザー』
アルハザードが全盛期だった頃に作られた毒粉。無味無臭な為に誰にも気づかれる事無く、敵の体に入り込み、発症後は内臓に信じられないほどの激痛が襲い、更に口から常に大量の血液を吐き出す。大体何らかの処置を取らなければ、十五分後には出血死。それを免れても一時間後には内臓の激痛から発狂死に追い込む、恐ろしい兵器。
弱点は空中に撒かれてから二十分後には自然消滅してしまうので、使用者から二百メートル近く離れていれば安全圏内。

『ディバイダー９４４・ケーニッヒ・リアクテッド』（フリート改良）

ブラックが自身の世界のサイファーから奪ったケーニッヒ・リアクテッドをフリートが改良したもの。
形状自体は大きく変化していないが、剣身が数百キロ以上伸びる事や対象に対して分断（ディバイド）を掛ける事が出来る機能が追加されている。
例、魔導師に使えばバリアジャケット及びデバイスの機能使用不能。
ＥＣ感染者の場合は、リアクトしているならばそれさえも分断（ディバイド）して、リアクトを解除してしまう。
更にエネルギー波を撃ち出す機能も強化されているので、威力はサイファーの持つケーニッヒ・リアクテッドを遥かに超えている。
また、ＥＣ感染者以外にも使用が可能にされている為に、誰でも使用する事が出来る『魔導殺し』さえも『魔導殺し殺し』と言うとんでも兵器に改良されてしまった。

『ディバイダー６９５　ランゲ・リアクテッド』（フリート改良）
ブラックが自身の世界のドゥビルから強奪してフリートが改良したもの
基本的な形状はケーニッヒ・リアクテッド同様に全く変わっていないが、リアクト時の『鎧化』の形状が気に入られなかったフリートが、『鎧化』は女性ならば戦乙女の鎧と羽を、男性ならば騎士の甲冑の形状を取るように改良した。
更に一番恐ろしいのは、局地的な重力操作機能も加わっている為に、打撃時に重力を百倍にして振り下ろせば、相手は完全に圧死させられてしまう。また、軽くする事も出来るので、平然と包丁を握っているように片腕で持つ事が出来る。
柄の部分も伸縮自在ー最長五メートルーなので、相手との距離も殆ど気にする必要は無い。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　中編　ト

色々なご意見の結果、此方に投稿していた過去編は全て別作品として投稿する事にしました。
ご意見をくれた方々、本当にありがとうございます！！

過去編のタイトルは『漆黒の竜人となりし者』です。
今後とも他の作品類共々、宜しくお願いします！！

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　中編　ト

管理局艦艇ＬＳ級ヴォルフラム艦内。
今その場所は、沢山の管理局員が流した血で艦内の殆どが赤く染まっていた。
その惨劇を引き起こした張本人ーブラックは血塗れになった局員二人を引き摺りながら、艦のブリッジを目指して歩いていた。気配を感じる事が出来るブラックは、ブリッジ、そして何処か他の場所に立て篭もっている複数の人間の気配を感じているのだ。
どのような理由が在ったにしても、もはやブラックはヴォルフラム艦内に居る人間を全てを血祭りにする気だった。一度目はこの世界のなのはを潰す事で怒りを抑えた。
しかし、二度目の砲撃はもはや赦せるレベルを超えていた。だからこそ、ブラックはヴォルフラムに居る全ての局員達を血祭りに上げ、その後に跡形も無くヴォルフラムを破壊する事を決めながら通路内部を歩いている。
しかし、フッとその足は止まり、自身の右横の壁にブラックは視線を向ける。

「・・・ほう・・・珍しいな。フリートの奴が本気で暴れている。どんな心境の変化が在ったのだろうな？」

外から感じられる戦いの気配に、ブラックは僅かに口元を笑みに歪めた。
自身の世界のなのはやティアナを鍛える事以外で、フリートが本当の力を揮った事はない。
フリートは研究の方に重点を於く為に、戦う事は余り好きではないのだ。故にブラックもフリートとは滅多に模擬戦は行わないのだが、そのフリートが今本気で力を揮っている。

「凶鳥を名乗っている負け犬どもが、フリートを怒らせたのか？・・・まぁ、良い。俺には関係のない事だ」

そうブラックは呟くと共に、再び艦内を歩き始める。

今ブラックが赦せないのはヴォルフラム内に居る人間全て。例え何が起きようと血祭りに上げる事を誓いながら歩き続ける。

ヴォルフラム格納庫内。

その場所で長い金の髪を後ろに縛った女性ーこの世界のフェイトは、シャマルから治療を受け続けている全身ボロボロになったヴィータとエリオ、そしてなのはに寄り添いながら心配そうに三人を見つめていた。

その様子を格納庫内に避難していた数名の局員達とはやて、スバル・ナカジマ、そして短い黒髪にアーマージャケットを身に纏った少女ーアイシス・イーグレットと毛布に身を包んでいる腰の辺りまで長い髪を伸ばしている少女ーリリィ・シュトロゼックは心配そうに見つめていた。

「・・・シャマル・・ヴィータとエリオ・・・それになのはは」

「・・・・ヴィータちゃんは何とかなるわ・・・だけど・・・ゴメンなさい・・・エリオ君となのはちゃんは命を繋ぐのが精一杯なの・・・例え助かっても・・・二人はもう・・・二度と戦う事は愚か・・・立ち上がる事さえも無理かもしれない」

「そ、そんな！？」

『ッ！！』

シャマルが告げた事実にフェイトは悲痛な声を上げ、はやて達は顔を逸らした。

今のシャマルの言葉が真実だとすれば、管理局の切り札と呼ばれる機動六課の戦力の二人が、事実上たった一体の生物に再起不能に追い込まれたと言う事に他ならない。

はやて達の実力を知っている局員達は、起きている現実に恐怖して頭を抱えながら震え、はやては何とか現状を打開する術を考えようとする。

しかし、何も思い浮かばず、はやては顔を下に俯けてしまう。

その様子を目撃したアイシスは、外に居る自身の友達で在るトーマの事を僅かに思い、同じように顔を俯けているリリィに声を掛けようとするが、その前にリリィが精神感応を行って来る。

（怒ってる）

「えっ？・・・リリィ？今なんて？」

（・・凄く・・凄く・・・怒ってる）

「怒ってるって？・・・もしかしてこの管理局の艦艇を襲っている奴？何で怒ってるのよ」

「決まっているだろうが、貴様らが眠っていた俺を起こしたからだ」

『ッ！！！』

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

アイシスの疑問に答えるように壁の向こうから響いて来た低い声に、全員が壁へと目を向けた瞬間、壁は爆発したように吹き飛び、血塗れになった二名の局員が壁の向こうから現れた。
そして倉庫内全員が瓦礫に埋もれている血塗れの局員二人の姿に震えながら壁の向こうに目を向けてみると、全身から殺意と怒りを撒き散らしているブラックが格納庫内に足を踏み入れ、アイシスに護られるように背後へと押しやられているリリィに目を向ける。

「・・フン、知っている気配を感じて来てみたら、やはり貴様だったか、リリィ・シュトロゼック」

「ッ！！・・リリィ・・アンタ？・・あの生物と知り合いなの？」

（・・知らないと思う・・・覚えていないだけかもしれないけど）

（・・・なるほど、この世界のコイツは言葉を失ったのか。いや、あの状態から見て記憶も無いようだな。まぁ、仕方が在るまい。アレだけの地獄を作り出し、その目で見続けていたのだからな）

何も言葉を発していないリリィの様子から、ブラックはリリィの状態を正確に察した。
自身の世界ではブラックとルインが早い段階でリリィを違法研究所から救出したおかげで、言葉を失う事無く精神的外傷は最小限で済んでいた。
しかし、如何やらこの世界のリリィは救われる事は無かったのだろうとブラックは思う。
だが、別にそれに感慨を抱く事は全く無く、格納庫内に居る人間達を血祭りにしようとドラモンキラーを構える。

「さて、無駄話は終わりだ。貴様らも地獄に行かせてやる」

『ヒッ！！』

ブラックの宣言に戦う術の無い局員達は悲鳴を上げ、急いで格納庫内から脱出しようとする。

そんな事はさせないと言うようにブラックは瞬時に移動しようとするが、その前に二刀の剣が閃光のようにブラックに襲い掛かって来る。

ーーーザン！！

「ムッ！！」

ーーーガキィィィーン！！

自身に襲い掛かる二つの閃光を目撃したブラックは、瞬時に両手のドラモンキラーで振り下ろされて来た剣を防ぎ、鬼のような形相をしたフェイトと睨み合う。

「お前が・・お前がなのはとエリオを！？」

「だから如何した？」

「殺す！！」

ーーーガキィィィーン！！

憎しみに叫びを上げると共にフェイトは自身のデバイス―バルディッシュ・アサルト・ライオットブレード？の刃を振り抜いた。

その一撃もブラックは右手のドラモンキラーで簡単に防ぎ、つま

らなそうな顔をしながらフェイトと僅かに距離を取り、そのまま背後の壁を打ち砕く。

ーーードゴオオオオオオオオオン！！

「この場で戦うのは、貴様には不利だろう。貴様の力が一番発揮出来る場所で完膚なきまでに潰してやろう」

「ふざけるな！！」

ーーーガキィィィーーーン！！

嘲りに満ちた言葉を告げられたフェイトは怒りを覚えて再びライオットブレード?を振るうが、ブラックは先ほどと同じようにドラモンキラーで防いだ。

そのまま外にフェイトと共に出ようとするが、フッと面白い事を思いつき、アイシスの背後に居るリリィ、そしてフェイトの援護をしようとしていたはやてとスバルに意味深な瞳を向ける。

「おい、良い事を教えてやる。俺と一緒に居た女を捕まえた方がいいぞ・・・何せアイツはこの世界で唯一“エクリプスワクチン”を保有している奴だからな」

『ッ！！』

「・・エ・・エクリプス・・・ワクチンやて・・」

告げられた事実に、格納庫内に居た全員が、フェイトでさえも一時怒りを忘れてブラックを見つめた。

現在、エクリプスウィルスに感染したＥＣ感染者への治療法は存

在していない。特務の医療チームが治療法を探しているが、目処さえも立っていないのが現状である。
だが、ブラックの話した事が事実ならば、エクリプスウィルスへの対抗策が存在していると言う事になる。
誰もが言葉を出す事が出来ずにブラックを見つめるが、ブラックは気にする事無く背後の穴の外に広がる空中に身を躍らせ、心の中で笑みを浮かべる。

（ククククッ、やはり食いついたか。負け犬どもが関わっているようだから教えたが、思った通りになった。最もこいつ等がどれだけワクチンを求めても、フリートが連中にワクチンを渡す可能性はゼロだがな）

ブラックは、フリートがエクリプスワクチンを他人に渡す可能性はゼロだと分かっていた。
特に管理局の関係者には絶対にフリートは渡さない。例え何が在ってもフリートがエクリプスワクチンを渡す筈が無いのだ。
何故ならばワクチンを作り上げたフリートは、誰よりもその危険性を理解している。エクリプスワクチンが世に現れた時に起きる悲劇を知っているからこそ、フリートが管理局の関係者に渡す可能性は無いのだとブラックは確信していた。
にも関わらずに教えたのは、自身をこんな場所に連れて来たフリートへのささやかな復讐と、手に入れたかった物が手に入らなかった絶望、そして“自分達が所属している組織こそが原因でワクチンを渡せない絶望”をはやて達を味合わせる為だ。
簡単な絶望ではブラックの気がすまない。圧倒的な、それこそ二度と立ち上がれないほどの絶望を与えるのがブラックの目的だった。
そんな事をブラックが考えているとも知らずに、はやて達は教えられた情報を如何すべきなのか悩んでいた。
本当にエクリプスワクチンが存在しているのならば、何としても

手に入れなければならない。だが、所持してるのはブラックと共に現れた謎の女性。迂闊に動けば最悪な結末が持っているとはやては思うが、フェイトは構わずにブラックが出て行った穴に足を向ける。

「・・・八神部隊長・・あの竜人は私が押さえます。だから、エクリプスワクチンの確認の方をお願い」

「待つんやフェイト隊長！！罠の可能性が高いんやで！それにフェイト隊長一人で、あの竜人に勝てるの可能性は低い！」

「分かってる・・・それでも・・私はアイツが赦せない！！」

ーーービュン！！

「フェイトちゃん！」

ブラックの後を追うように穴から飛び出したフェイトの背に向かってはやては叫ぶが、もはやフェイトは止まらずに外で滞空しているブラックに向かって行く。

その様子にはやては苦々しげな顔をしてしまう。如何考えてもブラックの言葉は罠としか思えない。戦力分散の罠だとはやては考えるが、それは全く違っている。

ブラックの真の狙いは、はやて達に二度と立ち上がれないほどの絶望を味合わせる事が目的。戦力分散など全く考えていない。寧ろはやて、フェイト、そしてスバルが三人掛かりで挑んで来ても倒せる自信が存在している。

そんな事を知らないはやては現状で戦えるメンバーを思い浮かべ、とにかく情報を集めようと操舵席に居る人物に連絡を取り始める。

「ルキノ！例の竜人と一緒に現れた女性は何処に居るん！？」

『・・・・フッケバインの構成員と戦闘中です・・・ですが、信じられません・・・フッケバインと同じディバイダーを使用しています！！更にエクリプス反応は出ていないに、平然とＥＣ兵器を使用しているんです！！』

『ッ！！』

操舵席に居るルキノからの報告にはやて達は目を見開き、先ほどのブラックの言葉は真実の可能性が高い事を理解した。

その事実にはやては尚更に見逃せなくなった事を理解すると、困惑した顔をしているスバルに声を掛けようとするが、その直前に何かを決意した顔をしているアイシスがブラックの開けた穴に進み、はやて達に顔を向ける。

「あの、あたしがその女性からワクチンの話を聞いてきます！」

「えっ？」

「・・そのワクチンが在れば、トーマを今の状態から救えるんですよね？・・・・だったら、あたしが事情を話してワクチンの事をお願いして来ます！それにあの竜人をもしかしたら、止める手立てを知っているかもしれません！」

「待って！危険だよ！唯でさえ戦闘中らしいんだから！」

「・・・約束したんです・・・トーマがピンチになったら、来る事が出来ないかもしれないスゥちゃんの代わりに助けるって！」

「ッ！！」

アイシスの言葉にスバルは目を見開いた。
スゥちゃんとはスバルの事である。トーマとスバルは身内に近い関係に在るのだ。
そしてアイシスはスバルの事をトーマから聞いて知っている。スバルがより大勢の人々を救わねばならない立場なのも。だからこそ、アイシスは決意を決めた顔をして穴へと飛び出し、そのまま遠くで戦闘を行っているフリートの方へと向かって行く。
残されたスバルは自身が如何動けばいいのかと悩む。はやてはそれを横目で見ながら、ブラックが開けた穴へと足を進めながら声を出す。

「・・・スバル・・アンタはさっきの子の緊急確保に向かうんや」

「部隊長!?」

「・・・本当に例の女性がワクチンを持っているとしたら、それを手に入れなあかん。ワクチンが在ればフッケバインとの争いも無くなるかもしれへん・・だから、スバルはさっきの子の確保とワクチンの有無を確認して欲しいんや・・・あの竜人の相手は私とフェイト隊長でする・・頼んだで」

はやてはそうスバルに声を掛けると、穴から飛び出してブラックとフェイトの方に飛び立つ。
スバルはその背に感謝を示すように頭を下げると、自身も外に出ようと足を進めるが、その直前にリリィがスバルのバリアジャケットを掴む。

ーーーガシッ!!

「えっ？」

（・・私も連れて行って下さい。あの竜人は私を知っていた・・なら、その女性も私を知っているかもしれない。だから、説得に協力出来る筈です）

「だけど」

（私もトーマを助けたい！トーマが泣いたのは私のせいだから！だから、お願いします！！）

「・・・うん・・・分かった！行こう！トーマを助けに！！」

リリィの声なき真摯な願いにスバルは頷き、リリィを毛布ごとを抱えて穴から飛び出し、発生させたウイングロードを駆けながらフリートの下へと向かって行く。

その先でエクリプスワクチンが作り上げてしまう最悪の未来を知る事になるとも知らずに。

そしてその未来を作り上げてしまう、“組織”が何処なのかも知る事になると知らずに、彼女達は自分達の大切な人を救う為に、フリートの下へと急ぐのだった。

フッケバイン艦内医務室。

その場所ではアルナージが連れて来たボロボロな姿になったサイファーを治療しようと、フォルティスが懸命な処置を行っていたが、フォルティスの頑張りを嘲笑うかのようにサイファーの容態は悪化する一方だった。

「グブッ！！ガアァァァァァァァァァーーーー！！！！！」

「サイファーー！！しっかりしなさい！！クッ！！もう輸血用の血液が無い！！」

ーーードゴォン！！

「おい！フォルティス！！倉庫内に置いてあったサイ姉の血液型と同じ物を全部持ってきたぞ！」

ドアを蹴り開けながらアルナージは医務室内部に入り込むと、手に持っていた輸血用の血液パックを全てフォルティスに手渡す。

フォルティスは渡された血液パックの血液型に間違いがない事を確認すると、すぐさま点滴に繋げてサイファーに輸血する。

「如何なんだよ！？サイ姉は助かるのか！？」

「・・・・残念ですが・・これでは一時しのぎにしかなりません・・・医務室に置いてあった全ての薬を試しましたが・・・全て無駄でした・・・この毒は・・完全にロストロギアクラスです」

「ッ！！・・・・・嘘だろう・・・・だったらサイ姉は・・・・このまま」

「・・・・チィッ！だったら、その変な女から解毒剤を奪えばいいんだろうがよぉ」

「ヴェイロン」

医務室の扉の方から聞こえて来た声に、サイファーが目を向けてみると、好戦的な目をしている男性ーヴェイロンが医務室の中に入

って来た。

「俺が行って、女をぶっ殺してくる。解毒剤と序にソイツが持っているディバイダーもリアクターも手に入れて来てやるよ」

「ヴェイ兄！あたしも行くぜ！ぜってぇサイ姉を助けてやる…」

「・・に・・げ・・・る・・ん・・だ・・・・ゴフッ！！・・あの・・女に・・・・かか・・・わるな」

「ッ！！サイファーー！」

途切れ途切れながらも言葉を呟いているサイファーに気がついたフォルティスは駆け寄り、ヴェイロンとアルナージもサイファーを心配しながら駆け寄ると、サイファーは重大な事実を辛そうにしながらも語る。

「・・ゴフッ！！・・・・あ・・の・・・お・・ん・・な・・・は・・・・アル・・・ハザー・・ドの・・住人を・・・名乗った・・・・」

「アルハザード！？馬鹿な！それはお伽話の話ですよ！！」

「・・・ち・・が・・う・・・直に・・・たた・・・かった・・・ゴフッ！・・・・に・・げ・・ろ・・奴には・・・か・・て・・ない・・・奴は・・・・」

「サイ姉？・・おい・・サイ姉？・・・・しっかりしろよ！！おい！！」

言葉を途切れさして目を閉ざしたサイファーに、アルナージは詰

め寄りながら叫んだ。
　しかし、サイファーが目を開ける事無くなく、一刻の猶予も無くなった事を理解したフォルティス達は急いで解毒剤を手に入れようと駆け出すが、その直前に涙声になったステラの声が艦内に響く。
『皆！早くドゥビルの救援に向かってよぉ！！このままだと・・・ドゥビルが・・・ドゥビルが・・・殺されちゃうよ！！』
『ッ！！』
　告げられた事実に全員が目を見開き、ステラが送って来た映像に目を向けてみると、身に纏う鎧がボロボロになりながら、フリートが振るうランゲ・リアクテッドを、“何かに阻害されているかのように遅く防御している”ドゥビルの姿が映し出されていた。
　時間は少し戻り、フリートとドゥビルが互いにランゲ・リアクテッドをぶつけあった時まで戻れる。
　同じ武器同士が激突し合った影響で発生した衝撃波を浴びながら、ドゥビルはフリートの一撃に驚愕していた。
ーーーギリギリッ！！
（ッ！！重い！馬鹿な！？あの細腕の何処にこんな力が！？）
　自身が握っているランゲ・リアクテッドから伝わって来る、フリートの一撃に重さにドゥビルは驚愕し、信じられないと言うようにフリートを見つめた。
　しかし、フリートは構う事無く重量を感じさせる形状をしている

ランゲ・リアクテッドを軽々と操り、再びドゥビルに向かって振り下ろす。

「ハァッ！！」

ーーーガアァァァァァァァーーーン！！

ーーービリビリッ！！

「グゥッ！！（撃ち合うのは無理か！）」

手から再び伝わって来た衝撃に、ドゥビルは武器のぶつけ合いは不利だと悟り、フリートから離れようとする。

フリートはその様子に僅かに笑みを口元に浮かべると、ランゲ・リアクテッドの柄の部分を二メートルほど伸ばして、そのまま離れようとしているドゥビルに振り抜く。

ーーーガッチャン！

「タァッ！！」

「ヌゥッ！！」

ーーーダァァン！！

突如として伸びた柄の距離をドゥビルは対応する事が出来ず、フリートのランゲ・リアクテッドはドゥビルの右肩の鎧部分に直撃した。

その衝撃にドゥビルは僅かに顔を歪めるが、すぐさま冷静に立ち返ると自身が握っているランゲ・リアクテッドを目の前に居るフリ

ートに振り下ろす。

「オオオォォォォォォォォォーーーー！！」

ーーービュン！！

ドゥビルが振り下ろして来たランゲ・リアクテッドを、フリートは背後に宙返りする事で避けた。

そのままフリートは、先ほど自身が一撃を当てたドゥビルの右肩部分を見てみるが、破壊された箇所の肌の部分の傷は凄まじい速さで高速再生していた。

「流石は『高速再生』の病化ですね。今のでは難しいですか」

（・・何が難しいだ・・リアクト時の鎧装甲を破損させて、俺本体に傷を負わせるとは・・なるほど、確かに奴が持つランゲ・リアクテッドは俺と同じ代物だと思わん方がいいな）

そうドゥビルは内心で呟きながら、フリートの手の中に存在している柄の部分が伸びたランゲ・リアクテッドを見つめる。

ドゥビルが持つランゲ・リアクテッドには、柄の伸縮機能など存在していない。しかし、フリートの持っているランゲ・リアクテッドには存在している。

戦いの前にフリート自身が告げたように、フリートとドゥビルの持っているランゲ・リアクテッドは全くの別の代物と考えるべきだ。

（サイファーはそれが分からずに奴に倒された・・・恐らくあの重い一撃にも何かのカラクリが在るのだろう）

ドゥビルはそう内心で考えながら、フリートが握っているランゲ・

リアクテッドの機能を予測しようとする。
フリートはその様子を楽しげに眺めながら、右手に握っているランゲ・リアクテッドを軽々と振り回し、刃先をドゥビルに向かって構える。

「さぁて、そろそろ・・・スピードアップしますよ！！」

ーーーードォン！！

（速い！？）

急激に増加したフリートの速度にドゥビルは内心で驚愕するが、フリートは構わずにドゥビルの頭上に移動して、そのまま信じられないほどの勢いでドゥビルに向かってランゲ・リアクテッドを振り抜く。

「パワーーアップ！！」

「クッ！！」

ーーーーガァァァァァァーーーン！！

「グゥッ！！（重過ぎる！！）」

フリートが振り下ろして来たランゲ・リアクテッドを、ドゥビルは自身のランゲ・リアクテッドで防いだが、その余りにも強く、そして重い一撃に顔を歪めた。
片手でフリートがランゲ・リアクテッドを振り下ろして来ているのに対して、ドゥビルは両腕で握ったランゲ・リアクテッドで防がなければ、確実にフリートのランゲ・リアクテッドに押し潰されて

しまうと確信出来るほどの重さを感じていた。
　しかし、フリートはドゥビルの顔から内心を読み取りながらも、次々と軽々しく思えながらも、凄まじい重量を持っている一撃を繰り返し振り下ろして行く。

「ハァァァァァァァァァァーーーー！！！！！」

ーーーガガガガガガガガガガガガガガガッ！！

「ヌオオォォォォォォォォーーーーー！！！！」

　次々と振り下ろされて来るフリートの攻撃を、ドゥビルは必死に防御するが、フリートの速さについて行く事が出来ず、徐々に鎧がボコボコになっていく。
　何とかフリートの連続攻撃からドゥビルは脱出しようとするが、フリートの速さは既に当初の頃よりも上がって、ドゥビルの動きを完全に上回っていた。
　このままでは自身が敗北すると感じたドゥビルは、一先ずこの連続攻撃の嵐から逃れようと『短距離瞬間移動（ショートジャンプ）』を使用してフリートの目の前から姿を消す。

ーーービュン！！

ーーーブン！！

　突如として消え去ったドゥビルの居た場所に、フリートはランゲ・リアクテッドを空振りさせてしまった。
　フリートはその様子に僅かに不機嫌になるが、すぐに不敵な笑みを浮かべて、自身の背後で肩で息をしているドゥビルにランゲ・リアクテッドを構える。

「クスクス、如何したんです？私を殺して、解毒剤を奪うとか言ってませんでしたか？」

「クッ！！」

「まぁ、もう無理なんですけどね。幾ら『高速再生』でも、奪われた体力は再生不可能」

（この女・・やはりエクリプスウィルスを知り尽くしている・・・下手をすれば俺達以上に）

ドゥビルはフリートの言葉に、自身が最悪の敵と戦っている事を確信した。

フリートの言葉どおり、確かにドゥビルは病化で得た『高速再生』とリアクト時の鎧化で不落の戦力を得ている。だが、傷は治せても体力は回復しない。

その為にフリートのジワジワと体力を奪う戦略によって、既にドゥビルの体力はかなり失われしまっている。力だけではない。フリートはエクリプスウィルスの特性を全て理解し、その病化に在った戦術で戦っているのだ。

それを理解したドゥビルは、自身が敗北する可能性が高い事を知るが、此処で逃げる訳にもいかなかった。

今もフリートに毒を盛られたサイファーの命は危機に晒されている。何としても解毒剤を手に入れると再度心に決め、ドゥビルはランゲ・リアクテッドを構え直す。

ーーースチャッ！

「フム・・・まだ、やるんですか？（困りましたね。これ以上此処

に居たらブラックの暴走にも巻き込まれてしまいますし、あの少年を調べる時間が減ってしまう・・・・・万が一、リンディさんがブラックが居ない事に気がついて、私も居ない事を知ったら）」

ーーーゾクッ！！

自身の考えた未来予想図にフリートは全身が恐怖に震えた。
このままこの場所に留まるのは危険だとフリートは判断すると、戦いを早めに終わらせる為に自身の背中の荷物袋の中に戻していた、起動状態の小刀の方のケーニッヒ・リアクテッドを引き抜く。

ーーースチャ！

「少々時間を掛け過ぎました。そろそろ終わらせて、アソコに居る少年の下へと向かわせて貰いますね」

「ッ！！・・・・・狙いは小僧が持っているディバイダーとリアクターか？・・・それとも小僧自身か？」

「うん？小僧自身？（はて？何で分かったんでしょうね？）」

ドゥビルの言葉にフリートは油断無く構えながらも疑問を覚えた。
確かにフリートはトーマ自身の状態に心が惹かれている。しかし、それをドゥビルが本来は分かる筈はないのだ。
何せフリートは同じＥＣ患者のサイファーやドゥビルには興味は無い。ディバイダーとリアクターには興味が惹かれているので奪っているが、ＥＣ患者自体には余り興味が湧かないのだ。
にも関わらずドゥビルはまるでフリートがトーマを狙うのは当然だと言うような言葉を発した。
同じＥＣ患者だからではない。何か別の理由が、フリートがトー

マを狙っても可笑しくない理由がトーマだけに存在していると言う事になる。
その理由が何なのかと、フリートは頭の中で複数思考を展開して、自身が知るエクリプスウィルスの病化の中で、同じＥＣ患者が狙っても可笑しくは無い病化に辿り着く。

「・・・・まさか、あの少年は『ゼロ適合者（ドライバー）』・・・『ゼロ因子（ファクター）』の持ち主なんですね！！」

「ッ！！知らなかったのか！？」

「クスクスクスッ！！今日の私はついていますね！！まさか、こんな場所で『ゼロ適合者（ドライバー）』の保有者に出会えたんですから！！“ＥＣ感染者の完成形”！その力を調べられるんですからね！」

フリートは喜び抑える事が出来なかった。
エクリプスウィルスを知り尽くしているフリートでさえも、どうやれば『ゼロ適合者（ドライバー）』に成れるのかまでは分かっていない。その原因は元の世界では『ゼロ適合者（ドライバー）』が見つからなかったからだ。
他の病化は調べる事が出来たが、エクリプスウィルスに感染した中でも特殊な病化である『ゼロ適合者（ドライバー）』だけは、完全には解明し切れていない。
しかし、フリートの前に『ゼロ適合者（ドライバー）』であるトーマが現れた。
トーマの体の一部でも手に入れば、己の持っているアレが完全に完成すると喜びながら、ドゥビルにランゲ・リアクテッドとケーニッヒ・リアクテッドを構える。

「もう貴方に時間は本当に掛けられませんね！重力！！十倍！！」

ーーードグゥン！！

「ガアァァァァァァァァーーー！！何だ！？コレは！？」

急激に自身に圧し掛かってきた凄まじい圧力にドゥビルは驚愕し、分断（ディバイド）しようとランゲ・リアクテッドを稼動させる。

しかし、分断（ディバイド）は発動する事無く圧力は掛かり続け、疑問と困惑に満ちた顔をすると、ドゥビルの右肩に剣身が伸びたケーニッヒ・リアクテッドが深々と突き刺さる。

ーーードスン！！

「グゥッ！！」

「フフフフッ、無駄ですよ。今貴方には通常時よりも十倍の重力が掛かっているんです。動く事は愚か、指先一つ動かせないでしょう」

「グゥッ！！何故・・・分断（ディバイド）・・・出来ない？」

「分断（ディバイド）があくまで結合分断するのは魔力エネルギー。私のランゲ・リアクデットは魔力エネルギーなど使用していませんからね。貴方達が無敵を気取れるのは、あくまで魔導師や自分達よりも実力が低い者だけ。それ以外の強き者や力には弱いんですよ。特に私が知っている生物達の前では、貴方達は雑魚ですよ。さて、今は重力を操作して貴方を落下させていませんけど・・・海の底にでも沈んで苦しんで死んで下さいね」

ーーーブザン！！

「ガァッ！！」

フリートは言葉と共にケーニッヒ・リアクテッドを振り抜き、ドゥビルの右腕を切断した。
同時にドゥビルのランゲ・リアクテッドをフリートは切断した右腕から奪い取り、そのままドゥビルに残忍さが混じった笑みを向ける。

「さようならです。海の底でお魚と友達になって来なさい。重力操作・対象上部分・・・重力百倍！！」

ーーードグゥオン！！

「オッ！！オオォォォォォォォォォォォォーーーーーーーー！！！！」

ドゴオオオ

「フッ！！」

ーーードドドドドドドドドドドドドドゴオオォォン！！

「危ないですね。こんな危ない兵器を、か弱い女性の私に放つなんて・・・フリートさん。泣いちゃいます。シクシクッ」

「ふざけるな！！サイ姉だけじゃなく、ビル兄まで！！」

ハンカチを目頭に当てながら泣き真似をしているフリートに向かって、二門一対のガトリング砲とミサイルランチャーを備えた起動状態のディバイダー７１８を構えたアルナージが叫んだ。

しかし、叫ばれた本人であるフリートは、ハンカチを鎧の中に戻しながら何を言っているんだと言いたげな視線をアルナージに向ける。

「何言っているんですか？貴女達だって平然とやっている事でしょう？自分よりも弱い戦う力も術も無い人々を攻撃するの？まさか、自分達は『世界を滅ぼす毒』だから、何をやっても良いと思っているんですか？・・・冗談悪いですね。誰かを殺した時点で、その人物は何時殺されても可笑しくないんですよ。己の存在など関係なく、それが戦う道を選んだ者が背負うべき宿命ですよ」

「グゥッ！！」

「まぁ、自分よりも弱い戦う術の無い女性や子供を殺している連中には何を言っても無駄でしょうけど。“自分達も弱い人々を殺して、悦に入っている負け犬”の貴女達にわね」

「・・・・テメエ・・・・それ以上あたしらを侮辱したら、ただじゃ済まさねぇぞ！！あたしらはそうしねえと生きられねぇんだ！！だから、殺すんだよ！！」

「・・・・ハァ～、だったら管理局や戦う力を持っている連中を殺せばいいんですよ」

「ッ！！」

「何か勘違いしていますけどね。私は別に人殺しが如何とか気にしていないんですよ。私も一般人が知ったら侮蔑と嫌悪の視線を向けられるような研究をしていますからね・・・・だけど、貴女達は違う。貴女達は力の無い者だけを狙っている。貴女達が管理局や他の武装集団を殺したりしていたら、私は手を貸していたかもしれません。ですが、何の力も無い人々を殺した時点で、貴女達は同情される立場にはもう立てない。ただの“殺戮者”でしかないんですよ」

「うるせぇ！！」

ーーードドドド

「テメエにあたしらの何が分かる！！居るだけで社会の毒だって切り捨てられるあたしらの気持ちの何が！？」

「己の存在を力無き人々を殺す理由にするのはいけませんね。所詮それは貴女達の心が弱かったのが原因でしょう。私は知っているんですよ。貴女達以上に世界から否定されながらも、普通に暮らしている人々には手を出さない“強い存在”をね！！」

ーーーブン！！

「クッ！！」

伸びて来たケーニッヒ・リアクテッドの刃を、アルナージはギリギリのところでかわし、そのまま再び射撃しようとする。

だが、その瞬間、アルナージの背後から高速で空を飛んでいたアイシスが迫り、アルナージを全力で殴り飛ばす。

「どおぉっ！！せぇぇーーーい！！」

ーーードゴオン！！

「ぬあああああっ！！痛ぇな！誰だチクショーー！！」

「おや？」

突然の奇襲攻撃にアルナージは叫び、フリートは疑問を視線をアルナージを殴り飛ばしたアイシスに向ける。

アルナージは自身に奇襲を行ったのがアイシスだと確認すると、顔を怒りに染めて、フリートの事を見つめているアイシスに叫ぶ。

「ってぇ！ぺったん胸！てめーかッ！！邪魔しやがったのわ！」
「その呼び方、やめてってば！悪いけど、その女の人にあたしは用が在るの！！」
「へっ？私ですか？・・・・・（何か凄く嫌な予感がするんですけど）」
アイシスの言葉にフリートは自身を指差しながら疑問の声を上げた。
初対面の筈のアイシスが何の用なのかと考えてみると、フッとアイシスが来た方向に存在しているヴォルフラムにフリートは目を向ける。
ヴォルフラムの近くでは絶えずに爆発が発生し、ブラックがフェイトとはやてと戦っていた。
フリートはその様子に首を傾げざるえなかった。幾ら何でも時間が掛かり過ぎている。
暴走しているブラックならば、既にヴォルフラム内の人間全てを血塗れに変え、ヴォルフラムを跡形も無く消滅させているだろう。
しかし、ヴォルフラムは存在し、ブラックとはやてとフェイトは戦い続けている。
（何か変ですね？幾らなんでもブラックらしくない・・・・あの暴走しているブラックならば、徹底的に相手を絶望・・・・・・・ッ！！ま、まさか！？ブラック！？）
ある一つの可能性に辿り着いたフリートは、限界にまで目を見開き、ヴォルフラムとフッケバインを見回す。
その様子にアイシスは疑問を覚えるが、今ならば話を聞いてくれ

ると思い直して、アルナージとの口論を止めると、フリートに向かって用件を叫ぶ。

「あ、あの！！黒い竜人が言っていたんですけど！？貴女は・・・“エクリプスワクチン”を持っているんですか！？」

「なっ！？エ、エクリプスワクチンだぁ！んな物在る訳がねぇ・・・・」

アイシスが述べた物を否定しようとアルナージはしようとしたが、フリートが使っていた武器類を思い出し、言葉が途切れた。

エクリプスウィルスに感染していないながらもＥＣ兵器を使用し、サイファーが告げたアルハザードの事実。それらを統合すれば、アイシスの言葉が嘘ではない可能性は高い。

寧ろワクチンを持っていない方が可笑しいと思えるほどの技術を、フリートは示している。

そして問われたフリートは顔から表情を消して、ヴォルフラムの方で戦っているブラックの狙いに全身から冷や汗を流す。

（ブラック・・・本気で彼女達を潰す気ですか・・・恐ろしい）

「お願いです！本当にワクチンを持っているんだったら、トーマを助ける為に渡して下さい！トーマは巻き込まれただけなんです！！」

そうアイシスは叫ぶと共に、トーマに起きた出来事を語り出す。

偶然にも迷い込んだ違法研究所でリリィを救い、エクリプスウィルスに感染してしまった事。

ＥＣ感染者の宿命が嫌で、誰も傷つけず、殺したくないと言う想いで自滅の道を選んだ事。

その他にもアイシスは自身が知るトーマについての全てをフリー

トに語って行く。

「だからお願いです！トーマを助ける為に、力を貸して下さい」

「・・・・・確かに・・・・・今一人分だけのワクチンを私は持っています」

「じゃあッ！！」

フリートの言葉にアイシスは喜びの声を上げ、アルナージは如何すればいいのかと悩む。

アルナージとしてもエクリプスワクチンが存在しているとなれば、何が何でも手に入れなければいけない。自分達が使用するにしても何にしても、ワクチンが在れば緊急事態が起きた時に処置する事が出来る。

故にアルナージは如何すればいいのかと悩み、アイシスはトーマが救われる事を喜ぶが、フリートは無念さが混じった瞳を遠くに見えるトーマに向けながら呟く。

「・・・・・残念ですが・・・・・ワクチンは渡せません」

「えっ？」

「・・・・・もう渡せないんです・・・・・あの少年の事が世に知られてしまった時点で・・・・ワクチンを使った救いは与えられないんです・・・・“救ったのに救われなかった絶望”にあの少年を送る訳にはいかないんです」

そうフリートは心の底から無念さに満ちた声で呟き、アイシスとアルナージは困惑しながらフリートを見つめるのだった。

ヴォルフラム近くの空。
何も阻む物が存在していない空中でブラックとフェイト、はやては激突し合っていた。
いや、それは戦いとは呼べないだろう。何せ一方的に攻撃を繰り出すのは、フェイトとはやてだけであり、ブラックは二人が放った魔法をただつまらなそうに作り上げたエネルギー球で相殺する事だけしか行っていないのだ。
ヴォルフラムの外に出てから、ブラックは一度もフェイトとはやて自身に攻撃を加えていない。ただつまらなそうな顔をして、二人の攻撃を相殺する事しかしていない。例えフェイトが最大速度で攻撃して来ても、ブラックからすれば“止まっているも同然の速さ”。故にブラックは二人掛かりでも挑まれても、全く本能が満たされず、つまらなそうに相殺したり防御する事しかしていなかった。
その様子にフェイトは怒りを募らせ、ダブルブレード状態のバルディッシュ・アサルトをブラックに向かって突き出す。

「この！！ジェットザンバーーー！！！！」

ーーードグオオオオオォォン！！

「・・・こんなモノか」

ーーーブザン！！

『ッ！！』

フェイトが渾身の力と魔力を込めて放ったジェットザンバーを、

ブラックは振り下ろした右腕のドラモンキラーで霧散させた。
その様子にフェイトとはやては目を見開くが、ブラックはただつまらそうに霧散して漂っている魔力の残滓を眺める。
ヴォルフラム艦内のデータを調べた時、ブラックはこの世界が自身の居る世界から六年経過している事を知った。
六年と言う時間が存在していれば、人間が更なる領域に昇るには充分な時間だ。現にブラックの世界のなのはは六年も時間が在れば、人の身で確実に究極体の領域に辿り着けるだろう。ティアナにしても究極体の領域に確実に近づく事が出来る。最も血が滲むほどの努力と、己よりも強い実力者と戦い続ける事が最低限の条件だが。
しかし、ハッキリと言えば、この世界のフェイトとはやての実力は良くて完全体の中級クラスの中の下。その程度の実力しかブラックは二人から感じていなかった。

「この程度の実力で俺を起こしたのか？本気で潰されたいようだな」

『クッ！！』

全身から殺気を溢れ出させ始めたブラックを見たフェイトとはやては、ブラックから僅かに距離を取ってそれぞれデバイスをブラックに構える。
しかし、その様子を見てもブラックはただつまらそうな顔をしながら苛立ちだけが募っていた。目の前に居る二人は、ブラックが望んでいる強き者ではない。寧ろブラック達が最も嫌っている“管理局上層部”と同じ匂いをブラックは感じていた。

（下らんと思っていたが、此処まで下らん奴らに堕ちていたとはな）

（ブラック！ブラック！！一体如何言うつもりなんですか！？）

（・・・フリートか）

送られて来た念話の主の名を内心で呟きながら、ブラックはフェイトとはやてから視線を逸らす。

フェイトはその隙を逃さずにブラックに斬り掛かろうとしたが、意思に反して体は全く動かなかった。

既に意思は認めなくとも、体が分かっているのだ。ブラックには絶対に勝てないと言う現実を。

その事実が信じられず、フェイトは悔しそうに顔を歪めるが、ブラックは気にせずにフリートと念話を行う。

（決まっているだろうが、こいつ等をトコトンまで絶望のどん底に落とす為だ）

（ハァ～、やっぱりそう言う考えでしたか・・・まぁ、構いませんけどね。如何にも私もこの世界の八神はやて達は好きになれませんから・・・あんな兵器を“魔法”と呼んでいる連中は認められません）

（ほう、随分と貴様も苛立っているな？）

（当然です！！良いですか！アルハザードが滅びながらも魔法を残したのは、人々の平和の為です！ですが、アレは違います！！アレは・・・ただの質量兵器ですよ・・・・何で魔法をアソコまで貶めたんですか・・・“魔法は使われるモノではない”・・・・“扱うモノ”なんです）

フリートは心の底から悲しげな念話をブラックに送って来た。

ハッキリ言えばフリートは『ストライクカノン』を魔法だとは認めたくなかった。何せフリートが調べた限り、『ストライクカノン』

は完全に質量兵器と同じ構造をしている。このまま進めば確実に魔力エネルギーを素にした質量兵器が完成するだろう。
現にフリートが問題点を全て解消させ、威力だけを向上させた『ストライクカノン』は、完全に質量兵器だった。魔力エネルギーを素にしているとは言え、『ストライクカノン』は魔法ではない。
何せ使えるモノが余りにも限定され過ぎている。術者の魔力を端末内部で瞬間編成し、衝撃や硬体破壊砲、防性障壁しか『ストライクカノン』は使用する事が出来ない。
『ストライクカノン』は魔力を使用している以外は、拳銃と同じプロセスと殆ど変わらないのだ。
その事にはやて達は気がついていないだろう。恐らく魔力を使用しているから魔法と同じだとはやて達は、いや管理局は考えている。でなければ、『ストライクカノン』の実戦使用など認めない。
故にフリートは『ストライクカノン』は魔法ではなく、魔力を使用している質量兵器だと心の底から思っていた。

（・・・失望もいいところです・・・・結局魔法が最終的に辿り着いた場所は質量兵器と同じだったんですからね・・・・これならまだ、最初から質量兵器だと言われた方がマシですよ）

（ならば、もっと残念な事を教えてやる。奴らの艦から情報を引き出した。そして奴らが負け犬ども相手に切り札として使用としているのは、この世界の八神はやての魔法『ヘイムダル』だ）

（ハァ？・・・・『ヘイムダル』？・・・・ハアァァァァァァァーーー！！！！！！！？？？？？？嘘ですよね！？ルインさん曰く“欠陥魔法中の欠陥魔法の『ヘイムダル』”！！アレを本気で使用する気なんですか！？）

告げられた事実にフリートは困惑と驚愕に満ち溢れ、思わず念話

で在りながらも大声で叫んでしまった。
『ヘイムダル』。それは広域魔法に分類される大魔法の名称。しかし、『ヘイムダル』は魔法と呼べながらも、限りなく魔法ではなく大破壊兵器と呼称した方が相応しいほどに危険な魔法だった。
大質量の海水を上空に汲み上げ、そのまま空中で氷結させて超巨大な氷塊を形成し、その重量を敵に叩きつける物理攻撃。物理攻撃故に非殺傷設定など出来る筈も無く、管理局自身が定めた法の魔導運用の可否においても『限りなく黒に近いグレー』に該当する魔法。
だが、そんな理由ではやて同様に『ヘイムダル』を使用する事が出来るルインが欠陥魔法と呼ぶ訳ではない。
ブラック以外が如何なっても気にしないルインでさえも『ヘイムダル』を使用する事は絶対にないのだ。
何故ならば『ヘイムダル』は余りにも弱点が多すぎる上に、発動後の影響がとんでもない。
先ず第一に使用者が『ヘイムダル』の凍結を解除しないで、海にでも落下させてしまった場合、世界規模の大津波が巻き起こる。
第二に『ヘイムダル』使用中の術者は『ヘイムダル』だけの制御に専念しなければならない。その為に背後から忍び寄られでもすれば、その時点でアウト。更に気絶でもすれば『ヘイムダル』は海に落下して大災害が引き起こされる。
その上、大質量の海水を汲み上げるのだから海水の水位は下がり、確実に生態系に影響を及ぼしてしまう。その他にも様々な理由から『ヘイムダル』は、夜天の魔導書の中に記されている魔法の中でも欠陥中の欠陥魔法とあのルインでさえも呼ぶほどの魔法なのだ。
（正気なんですか！？あの魔法は世界なんて本当に如何でも良いと思っている、あのルインさんでも使用しない欠陥魔法なんですよ！？）
（使用する気だろうな。最もその結果がどんな事になるか、考えて

はいないようだが）

（・・・・・・・・ブラック・・・・本気で潰しましょう。絶望では恐らく目を覚まさせるには足りないでしょうから、奈落の底に突き落とします）

（フッ、いいだろう。それと上手く管理局の情報を操作して、八神はやてに『ヘイムダル』を撃たせろ。本当の恐怖を奴らに教えてやる）

（フフフフッ、なるほど、確かに面白そうですね。では、すぐに準備を開始します。それと私の方でも面白い少年を見つけました。『ゼロ因子』を持った少年です）

（・・・ククククッ！確かに面白そうだ）

フリートが告げた事実にブラックは心の底から楽しげに内心で笑った。

ブラックが予想していた以上に、はやて達を絶望に追い落とす準備が整いつつ在った。

“エクリプスワクチン”。『ゼロ因子』。この二つが揃う事で、ブラックが考えていた以上の絶望がはやて達を襲う。凶鳥（フッケバイン）は如何でも良いとしても、再び下らない言葉を言えば、ブラックは惨劇を再び引き起こす。

特務六課、凶鳥（フッケバイン）の両方に逃れる事の出来ない絶望が降り注ごうとしていた。

そんな事を知らないフェイトとはやては、何とかブラックを倒す方法は無いかと考え続けるが、突如としてブラックは二人に背を向ける。

「つまらん貴様らよりも、フリートの下に向かった連中の方が楽しめそうだ」

「ッ！！まさか、スバル達を！？」

「フン、先に奴らの方から片付けてやろう」

ーーービュン！！

ブラックは言葉を言い終えると共にスバル達が向かった方向へと飛んで行った。

それを目撃したフェイトは、スバル達を護る為に急いでブラックの後を追って行くが、例え最大速度でフェイトが追いかけても、ブラックとの距離は離れるばかりだった。

はやてはフェイトに遅れながらも急いで後を追って行くが、例え追いつけてもブラックに勝てる可能性は低い現状に顔を歪めていると、ヴォルフラムに居る、ルキノから緊急通信が届く。

『八神部隊長！本部及び本局から緊急通信が届いて、技能封印解放の許可と『ヘイムダル』の起動承認許可が届きました！！』

「ッ！！如何言う事や！？まだ魔法無効化状況の知らせは送ってないのに！？」

『分かりません！ですが、本部及び本局は何としても黒い竜人を抹消して、例の女性を捕らえるように命令しています！！その為ならば『ヘイムダル』の使用も許可するそうです！！』

「（如何言う事やろう？・・・何で例の女性を？・・・・・だけど、『ヘイムダル』なら確実に竜人を倒せる！序に凶鳥（フッケバイン）も一網打尽にし

たる！！）・・ルキノ！『ヘイムダル』の事をフェイト執務官とソードフィッシュ１に緊急連絡で伝えるんや！！『ヘイムダル』で全部終わらせる！！周辺海域に問題が無いかどうかも調べといてな！！」

『了解です！！すぐに調べます！！』

（これで全部終わる・・・あの竜人！私の仲間を傷つけた事、絶対に許さへんから、覚悟しておくんやな！！）

そうはやては叫ぶと、急いでヴォルフラムの甲板に戻って自身の切り札で在る『ヘイムダル』の準備を行い始める。

それがブラックとフリートに操られた結果で生まれた事だと知らずに、はやては自らの手で恐怖と絶望の底に落ちる準備を行って行くのだった。

（クスクス、馬鹿ですね。全部私が手を回した結果だと知らずに、踊ってくれていますよ）

背後に居るアイシスとアルナージに見えないようにしながら、フリートは送られて来るステルスサーチャーからの映像に邪悪さに満ちた笑みを浮かべた。

はやての下に『ヘイムダル』の使用許可が下りたのは、完全にフリートが裏から手を回したからだった。

ヴォルフラムから離れる時に、フリートはこの世界の管理局の情報を知る為にヴォルフラムのシステム内に自身特製のウィルスを仕込んでいたのだ。そのウィルスを使ってフリートは管理局本局に居る上層部達の下に、この世界では民衆に隠されていた大規模テロ事

件の『ＪＳ事件』の真相を自身の顔写真付きで送りつけた。
『ＪＳ事件』の首謀者、ジェイル・スカリエッティが実は管理局最高評議会が生み出した人造生命体などと言う事実が、六年の月日を経て明らかにされれば、当時その事実を故意に隠した管理局への追求は免れる事はない。
何せテロではなく、実は管理局への反逆だったのだ。大規模テロだと告げて事件の真相を隠した管理局の信頼は地に落ちるどころの騒ぎでは済まさず、確実に管理局の存在意義を大きく揺るがすだろう。
当時全てを明らかにしていれば、管理局が受けるダメージは少なく済んだかもしれない。
『ＪＳ事件』に巻き込まれて家族や友人を失った人々は、スカリエッティが捕まったからこそ怒りを抑えているのだ。もし『ＪＳ事件』が起きた原因が管理局に在ったなどと知られたら、人々の怒りは天に昇るだろう。

（ハァ～、根本的な元凶を解決せず、上辺だけを解決しても同じ事が繰り返されるだけなのに・・・・こんな事実を私の世界のリンディさん達が知ったら、嘆くどころの騒ぎではすまないかもしれませんね）

次々とウィルスから送られて来るこの世界の管理局の内情に、フリートは溜め息を吐くしかなかった。
余りにも杜撰な捜査しか行われていない。ジェイル・スカリエッティが捕まったのだから、それなりの数の違法研究を行っている場所は確実に潰せるのに、全くその箇所に手が出されていないのだ。
その場所は管理局が違法研究を支援している場所なのだが、その場所が潰された様子は全くない。寧ろスカリエッティの研究データで更に違法研究は進んでしまっている。
元凶を潰さずに残してしまった結果、違法研究はその数を更に増

えてしまっていた。

（全く、完全に元凶を潰して於けば被害は増える事はなかったでしょうに・・・自分達がどれだけの犠牲者を裏で生み出したのか、分かっていないんでしょうね）

そうフリートは思いながら、ヴォルフラム内に残して来たウィルスを操作して、はやて達を完全に潰す準備を影で進めて行く。

その様子にアイシスは疑問を持つが、今はそんな場合ではないと思い直して、フリートのワクチンの件を再度質問する。

「あの！！如何してワクチンを渡せないんですか！？」

「・・・・ハァ～、その理由は簡単ですよ。ワクチンを何処ぞの組織が手に入れたら、ＥＣ感染者を多発させて兵器として利用しようとしているからです」

「ッ！！」

「・・・・ヘェ～・・・・如何やら本当にワクチンを持っている見てぇだな」

フリートの発言にアイシスは目を見開き、アルナージは僅かに険しい視線をフリートに向けた。

その様子にゆっくりとフリートは二人へと振り返り、そのまま背中の荷物袋の中から一本の何らかの薬品が入った試験管を取り出す。

「この試験管の中身こそが私が作り上げたエクリプスウィルスを完全に排除する事が出来るエクリプスワクチン。エクリプスウィルスを利用しようとしている者にとっては、喉から手が出るほど欲しい

代物です。貴女もでしょう？」

「当然だぜ！ソイツが在ればもしもの時に助かるからな！テメエから奪う物が増えたぜ！！」

ーーーガチャン！！

アルナージは叫ぶと共に両腕に握っているガトリング砲とロケットランチャーを備えたディバイダー７１８を、フリートに構えた。

それを目撃したアイシスは、アルナージが構えているディバイダー７１８の照準からフリートを護るように立ち塞がる。

トーマはアイシスにとって大切な友達。そのトーマが今苦しんでいる。だからこそ、アイシスは何が何でもトーマを確実に救える方法を持っているフリートに協力して貰うつもりだった。

しかし、そんなアイシスの気持ちを知らないアルナージは、サイファーやドゥビルの事を急いで助ける為に怒りに染まった瞳をアイシスに向ける。

「其処退け！ペッタン胸！！こっちは時間がねえんだよ！！」

「悪いけど、あの人は傷つけさせない！トーマを絶対に助ける為にも！！」

「ハッ！話を聞いてなかったのか！？・・その女は坊主を救えねぇって言ったんだ！その女が協力しねぇ今、テメエらボンクラどもじゃあ！坊主は救えねぇんだよ！！」

ーーードガガガガガガガガガガガガッ！！

アルナージはアイシスに向かって叫ぶと共に両方の武装をロケッ

トランチャーに変えたディバイダー
７１８の引き金を引いて、数え切れないほどのロケットランチャーを撃ち出した。
その様子にフリートは左手に握っている小刀のケーニッヒ・リアクテッドを振り抜こうとするが、その動きは突如として止まり、興味深げに自身の前に居るアイシスを見つめる。
研究者であるフリートには、アイシスから僅かに匂って来る化学薬品の匂いに気がついた。
それをどのようにアイシスが使うのか興味を覚えたフリートは、ケーニッヒを振るうのを止めて、自身が装備している左手に備わっているバルーンを迫り来るロケットランチャーの群れに向かって構えているアイシスを見つめる。

「パフィ！！」

≪お任せて下さい。迎撃します≫

「白の香（ホワイトパフューム）　Ｎｏ．７　ミスティック・フライトッ！」

ーーーバッシュアッ！！

アイシスは叫ぶと同時に左手に備わっているバフュームグラブから何かを散布し、白い蝶のようなエフェクトが巻き起こった。

（防御？煙幕か？とは言え関係ねぇ！爆発でブッ飛ばしゃあーー！！）

アルナージはそう思いながら自身が放ったロケットランチャーが直撃して爆発するのを待つが、ロケットランチャーはアイシスに直撃する事無く、弾道が全て逸れて弾道はそのまま海面に向かって落

下していく。

ーーーゴォッ！！

（弾道が逸らされた？しかも不発！こいつぁ！）

「白の香（ホワイトパフューム）ミスティック・フライト・・・効果は誘導弾の誘導妨害と弾体の炸裂妨害。誘導弾もロケット弾も私には通らない！！」

ーーーバシュッ！

アイシスは自身の撒いたミスティック・フライトの効果を述べながら、今度は右手側のパフュームグラブから何か別の物を散布した。

アルナージはその様子に僅かに顔を歪めるが、すぐに笑みへと変えると共にディバイダー７１８の武装をロケットランチャーからガトリング砲に変えてアイシスに構える。

ーーージャカッ！

「ハッ！ならコイツで蜂の巣に・・・」

アルナージはそう告げると共にディバイダー７１８の引き金を引こうとする。

しかし、その直前にアルナージの背後から黒い鳥の形をした何かが複数迫って来る。

ーーーシュン！

（ッ！！黒い鳥。何時の間に？いやそれよりも、コイツは！？）

「黒の香（ブラックパフューム）　Ｎｏ．３　ハミングバードッ！」

ーーードドドドドドドドドドドドドッ！！

「うおおおおおっ！！」

アイシスが黒い鳥の正体を叫ぶと同時に、アルナージの近くでハミングバードの群れは広範囲に爆発した。

その威力にアルナージは驚愕の叫びを上げながらも、何とか爆発の中から飛び出してアイシスに反撃しようとするが、その直前に先ほどとは別の形状をした黒い鳥達が連続で迫って来る。

「Ｎｏ．５　ランブリングスパローーッ！！」

ーーードドドドドドドドドドドドドッ！！

（グゥッ！！そうだ！！コイツを捕まえた時に荷物に中に裁縫道具や化粧品に偽装していた荷物は！危険物指定の化学薬品と反応触媒！コイツは爆薬使いだ！！）

次々と食らう爆発の衝撃を浴びながら、アルナージはアイシスの正体を内心で叫んだ。

そしてアイシスの背後で戦いの様子を見ていたフリートも、僅かに感心したように何度も頷きながらアイシスとアルナージの戦いを見つめていた。

（ほう～これは中々に面白い戦い方をする子ですね・・・・これであの子が居れば、管理局の馬鹿どもに気づかれずに救える可能性が在るんですけど）

フリートはそう内心で呟きながら、アルナージに向かって更に爆薬を散布しようとしているアイシスの戦いぶりを眺める。
実際のところ、アイシスの願いをフリートは叶えても構わない。だが、管理局の存在が完全に邪魔なのだ。
もし何も考えずにトーマにワクチンを使用すれば、トーマはエクリプスウィルスから最初に解放された人物としてその名を知られてしまうだろう。更にトーマは『ゼロ因子』の保有者でも在る。
それを既に管理局は知ってしまっている。『ゼロ因子』だけではなくワクチンをその身に受けてエクリプスウィルスから解放されたトーマは、確実に実験材料として管理局から見られてしまう。
はやて達はそんな事をしないと言うだろうが、フリートは全く信用する気は無い。
どれだけはやてが頑張ろうと、管理局は所詮組織である。上の人間に命じられれば、はやてはトーマを差し出さざる得ない。それだけではなく、管理局には深過ぎる闇が存在しているのだ。
その連中は自身が所属している組織である管理局が定めた法など平然と無視する。
トーマはその連中に狙われる要素が多すぎる。何せ万年人材不足の管理局である。
エクリプスウィルスの欠点が解消出来ると知れば、自分達の兵器として使用するだろう。
フリートが最も恐れているのは、自身が作製したエクリプスワクチンから恐ろしい薬が生まれてしまう事だった。
わざと人造魔導師として生み出した子供にエクリプスワクチンを投与した後に、免疫が出来た子供にエクリプスウィルスを投与して完全な魔導殺し兵器として使用する。或いはワクチンから作り上げた定期的に打たなければ発狂するほどの激痛を受け続ける薬を餌に、エクリプスウィルスに感染している人を道具として扱うかもしれない。
それを何よりも行う可能性が高い組織が時空管理局なのだ。

『人造魔導師研究』、『戦闘機人計画』。その二つの違法研究を最初に始めた組織は、時空管理局。人材不足を解消する為ならば、全ての欠点を排除する事が出来るようになったエクリプスウィルスさえも管理局は兵器として扱うだろう。

（あの質量兵器紛いの武装を使い・・・大質量の物理攻撃魔法の『ヘイムダル』の使用さえも容認するほどに落ちぶれた組織です・・・エクリプスワクチンを手に入れたら、確実に悲劇を裏で引き起こす・・・私達の世界がそうだったように、既にこの世界の管理局は取り返しがつかないほどに腐敗し始めている・・・あの少年には本当に悪いですけど・・・ワクチンは渡せないんです・・・分かっている悲劇を引き起こす訳にはいかないんですよ）

幾らマッドであるフリートでも、自身が作り上げた薬を悪用されるのは我慢ならない。

もし悪用されている分かれば、即座にフリートはその対象をこの世から跡形も無く消滅させる為に動くだろう。だからこそ、フリートはデバイスの改造をしても、そのシステムには幾つかの厳重なロックを施している。

例外が在るとすれば、自身の世界のなのはとティアナに与えたデバイスに、クイントの頼みで作製したスバルとギンガのデバイスぐらいである。

前者のなのはとティアナはフリートに魔法の教えを受け、更にフリートが作製したデバイスの危険性を理解しているからこそ、フリートは二人のデバイスには何のロックも掛けていない。

後者のスバルとギンガの場合は、技術流出は地上本部だけとゲンヤとクイントに確約させた上に、万が一本局に流出したらクイントが全力で対象を滅ぼすと確約を貰っているからだ。

それ以外でフリートは自身の技術流出を行ったのは、スカリエッティぐらいだろう。

最もそれは大きな間違いだった。スカリエッティは結局フリートの技術を悪用してしまっている。
故にフリートは二度と同じ間違いをしない為に、先ずは相手側は本気で信用と信頼が出来るのかを調べるようになった。
その結果、この世界の管理局と八神はやて達ー特務六課ーは全く信用も信頼も出来ないと判断した。絶対に行わないなど言われても、フリートはこの世界の八神はやて達と管理局を信用も信頼も出来ない。

ーーーギュウッ！

（本当にゴメンなさい。黒髪の女の子・・・どれだけ貴女が頑張っても、私はエクリプスワクチンを渡せないんです・・・もし悲劇が始まっても、八神はやて達は自分達の知らないところだったからと言って、全てを無視するでしょう・・・・そうなれば、私は私を抑えられなくなってしまう！この世界を滅ぼしてしまいたくなってしまうんですよ！！）

右手を強く握り締めながら、フリートは体を震わせた。
もしフリートが考えている未来が現実になってしまった時、確実にＥＣ感染者となった者はワクチンを完成させたフリートを憎む。何故ならばワクチンが無ければ、ＥＣ感染者達が地獄を味わう事は無い。
フェイトが『プロジェクトＦ』の基礎理論を作り上げたスカリエッティを憎んだように、エクリプスワクチンを世に広めたフリートは、利用されるＥＣ感染者に憎まれるだろう。
そんな事態になった時、フリートは自身を抑えられる自信が全く無かった。
アルハザードには大量破壊兵器の、いや、世界破壊兵器の設計図も存在している。

フリートはそれを自在に扱う事が出来る唯一の存在。もしフリートが怒りと憎しみに支配され、禁断の兵器を使用すれば、その後に待っているのは次元世界の完全崩壊。
そんな事をフリートは絶対にしたくない。その為にもエクリプスワクチンを管理局に渡す訳には絶対にいかない。
しかし、八神はやて達と違って、純粋にトーマを救いたいと願っているアイシスには協力して上げても良いと、フリートは少し思っている。
だが、ワクチンを使った救いは与えられない。如何すればいいのかとフリートは思い悩む。
そのフリートの背後に音も無く忍び寄る影が存在し、影は無言でフリートの背に持っている刀を構えると鋭い刃をフリートの背に向かって突き出す。

ーーーガキィィィィーーン！！

「およ？」

「ググググッ！！」

影ー長い黒髪を一本に縛って、左手に白い銀十字の書に似た本と右手に刀を持っている女性ー凶鳥（フッケバイン）の首領ーカレン・フッケンバインは、自身の刀を右手に装備しているリボルバーナックルで掴んでいる、横合いから突如として割り込んで来た女性ースバル・ナカジマの姿に僅かに驚いた顔をした。
スバルはそのままカレンの刀をへし折ろうとするが、カレンは素早くスバルから離れて、険しい視線をスバルとフリートに向ける。
「いきなり割って入って来ないで欲しいわね、管理局のお嬢ちゃん？」

「・・・悪いけど、この女性は確保するように命令されているの。それにトーマを助けられる唯一の可能性を持った人だから、やらせないよ」

「ふ～ん・・・でも、邪魔をしたのはお嬢ちゃんの方みたいだけど」

「えっ？」

「・・・全く、後一歩でその女のディバイダーとリアクターを手に入れられたのに、邪魔をしてくれますよ」

フリートはそう言いながら背後に居るスバルとカレンに振り返り、背後に向けていたケーニッヒを持ち直す。

ーーーガシッ！

「怖いわね。私が刀を突き出そうとした瞬間に、そのケーニッヒを私に突き出す気だったんでしょう？何か考えているようで、実は虎視眈々と私を狙っていた。でしょう？」

「正解ですよ。凶鳥首領（フッケバイン）のカレン・フッケバイン。貴女が居る気配は感じていましたからね。全く、スバル・ナカジマには邪魔をされましたよ・・・後一歩だったのに」

（何で私の名前を！？）

「いや～、本当に怖いわね、貴女・・・・（確実にあの剣先は私の心臓に向いていた。フォルティスから聞いていたけど・・・この女、管理局とは違って平然と人殺しが出来る私達側だわ）」

朗らかな笑みをフリートにカレンは向けながらも、内心では冷や汗を流さざるえなかった。
もしスバルが割って入って来なければ、カレンは命を落としていただろう。フリートが構えていたケーニッヒは、確実にカレンの心臓に向いていたのだから。
スバルの割り込みが結果としてカレンの命を救ったのだ。
カレンはその事実に敵で在りながらもスバルに感謝し、スバルは自身がフリートの邪魔をした事に慌てるが、フリートは気にせずに背中に背負っている荷物の中から長刀のケーニッヒを取り出す。

ーーースチャッ！

「さて、如何言う用件で私を狙ったのかは予想はつきますが、まぁ、一応聞いて於きますよ」

「そう、なら用件を言うけど・・・サイファーに盛った毒の解毒剤。ドゥビルの動きを封じて海中に沈めている力の解除・・・そして貴女が所持しているディバイダー及びリアクター、最後にアンタが作ったって言うエクリプスワクチンを渡して貰いたいんだけどね？」

「その要求は呑めませんね。まぁ、解毒剤と力の解除は、貴女達が所持しているディバイダーとリアクター、そして飛翔戦艇（エスクアッド）フッケバインを全部明け渡してくれたら、叶えても良いですよ」

「そっちの方が暴利だと思うんだけどねぇ・・・・・ッ！！」

ーーーガキィィィィーーン！！

互いに朗らかな笑みを浮かべ合った瞬間、フリートとカレンは武

器を激突させ合った。
　そのまま鍔迫り合いを始めようとするが、カレンはその前に左手に握っていた本のページを開き、数え切れないほどのページを刃状にしてフリートに放とうとする。
　しかし、放つ直前に嫌な予感をカレンは感じて、使おうとしたページを慌てて自身を防御する為に広げると、カレンが使用しようとしていたページと同じ物が無数にカレンに迫って来る。

ーーーザザザザザザザザザッ！！

「クッ！！今度は私の武器って訳ね！！」

　自身がばら撒いたページに護られながら、カレンは何時の間にかフリートの右横に浮いていたカレンが持っている本と同じ本を目にして叫んだ。
　事前情報からカレンは、フリートが本来ならば存在しない筈のディバイダーとリアクターを使用して来る事は知っていたが、こうして目にするのは訳が違う。何故ならば同じ武器を使われると言う事は、その武器の能力を知られている事に他ならない。
　その上、フリートが使って来るディバイダーとリアクターは改造されている為に、カレン達はその能力が把握し切れていない。
　本当に厄介な相手が敵になったとカレンは思いながら、フリートが放ってくるページを、同じようにページを放つ事で相殺して行く。
　スバルはその戦いに自身が割って入るのは無理だと判断すると、僅かに離れた場所のウイングロード上に置いて来たリリィの下に戻り、フリートとカレン、アイシスとアルナージの戦いを見つめる。

（・・・あの・・・あの人はトーマを助けるのに協力してくれそうですか？）

「・・・ゴメン・・・今は話を聞いてくれそうにないの・・・それにこのまま此処に居たら危険…」

「既に貴様らには安全な場所など何処にも無いぞ」

『ッ！！』

背後から響いて来た声に、スバルとリリィが慌てて顔を向けてみると、フリート達の戦いを腕を組みながら見ているブラックが存在していた。

スバルはブラックを目にすると同時に、リリィを抱えながらブラックから離れて、驚愕と困惑に満ちた視線をブラックに向ける。

「そ、そんな！？如何してこの場所に！？」

「決まっている。俺の眠りを妨げた連中に絶望を味あわせる為だ・・・それに予想以上に面白い状況が出来て来た」

「えっ？」

ブラックは意味深な言葉と共に横目で別方向を眺め、スバルも其方の方に視線を向けてみると、此方へと向かって来る飛翔戦艇（エスクアッド）フッケバイン　が存在していた。

サイファーの命が本当に危機的状況に陥った事に慌てたステラが、フリートから解毒剤を奪う為にフッケバインで攻め込む事にしたのだ。

その証拠にハッチと思われる箇所に立つヴェイロンとフォルティスの姿を、ブラックは捉えていた。

（ククククッ！さぁ、これで準備は終わったぞ。さっさと『へ

イムダル』を撃て）

ブラックはそう内心で呟きながら、離れた場所に滞空しているヴォルフラムの甲板に立っているはやてに視線を向ける。

完全に『ヘイムダル』を放つ状況の準備が整い始めている。後はスバル、リリィ、アイシスがこの場から離れれば、はやては詠唱を開始して『ヘイムダル』を使用するだろう。

それが分かっているブラックは、自身を警戒するように睨んでいるスバルとリリィの背後に一瞬で移動して二人を掴み上げる。

ーーービュン！！

ーーーガシッ！！

『ッ！！』

「貴様はこの場では邪魔だ。吹き飛んでいろ！！」

ーーーブン！！

「キャァァァァァァァァァァーーーーーーーー！！！！！！」

ブラックは叫ぶと同時にスバルだけを遠くに向かって全力で投擲した。

そのままスバルの姿が視界から完全に消え去るのを確認すると、首を掴まれながらも気丈に自身を睨んで来るリリィに目を向ける。

「フン・・・如何やら貴様はこの世界の管理局とは関係ないようだから、今回だけは見逃してやろう。そしてよく思い出せ・・・お前はエクリプスウィルスを制御出来る事を・・・お前は巻き込まれて

絶望に落ちた小僧を救える事をな」

（・・・如何して教えてくれるの？）

「・・・・負け犬どもを増やさん為だ。気に入らん奴らを潰す為にも、貴様には働いて貰うぞ」

そうブラックは言いながらリリィから目を逸らし、カレンとの戦闘を一時止めてアイシスの襟首を掴んで向かって来るフリートに目を向ける。

「おや、面白い子が居ますね・・・（偶然ですが、まさかこの世界のリリィちゃんが近くに居たとわ・・これならば何とかなるかもしれませんね。この少女とリリィちゃん・・二人の力が合わさればあの少年を救えるかもしれません・・・まぁ、管理局と凶鳥（フッケバイン）が邪魔をして来るでしょうが、ブラックと私が抑えれば何とかなるでしょう）」

そうフリートは内心で呟きながら、ブラックからリリィを護るように抱き締めているアイシスを見つめる。

同時に背後からアルナージとカレンが、ブラックとフリートに向かってそれぞれ武器を構えるが、ブラックは気にする事無く、今度はアイシスの首を掴んで、遠くに見えるトーマの方に目を向ける。

「・・・準備は？」

「既に万全ですよ。後はこの二人がこの場から離れれば、迷う事無く八神はやては『ヘイムダル』を使用するでしょう」

「よし・・・そう言う訳だ。お前達はさっさとこの場から離れろ！

！」

ーーーブオン！！

「ウソォォォォォォォォォォォォォーーーーー！！！！！」

（ッ！！！！？？？？？？？）

勢いよく『ヘイムダル』の影響範囲から逃される為に投げ飛ばされたアイシスとリリィは驚愕に目を見開くが、勢いは止まる事無く遠くへと飛んで行った。

その様子を目撃したカレンとアルナージは唖然とした顔をするが、フリートはブラックの様子を面白そうに眺めて、本来ならばルインとリンディだけが座る事が出来る定位置である肩に座り込む。

「やり過ぎですよ、ブラック。幾ら二人を巻き込まない為とは言え投げるのは？」

「黙れ。本当ならばあいつ等も赦せん奴らだ。手を出さないでけありがたいと思え」

「まぁ、そうですね」

ブラックの言葉にフリートは納得したと言うように、何度も頷く。

一応アイシスとリリィもヴォルフラム艦内に居たのだから、ブラックとしては抹消したい相手。

しかし、ヴォルフラム内のデータを手に入れた時に、リリィとアイシス、そしてトーマは完全に巻き込まれただけの被害者だと言う事をブラックは知った。故にブラックは今回だけはアイシスとリリィを見逃す事にしたのだ。

最も攻撃を加えてくれば別であり、スバルなどの管理局に所属しているメンバーは完全に別なので、絶望と言う絶望を味合わせる事は決定している、
そんな事をブラックとフリートが計画していると知らないカレンとアルナージは、突如として現れたブラックに警戒するように構えを行う。

（アル。何者なの？あの竜人？）

（分かんねぇ・・だけど、アイツは管理局の艦艇に攻撃をしていた筈だぜ。その証拠に）

（えぇ・・・とんでもない血の匂いがするわ）

アルナージとカレンはブラックから漂って来る血の匂いに、警戒するようにブラックを見つめた。
その様子にブラックはつまらなそうな顔をしながら、自身の世界で地獄を味合わせたカレン達を眺める。

（フン、こうして再び負け犬連中の顔を見る日が来るとはな・・・まぁ、コイツらがどうなろうと知った事ではない）

ブラックはそう思いながら、フリートと共にカレンとアルナージを睨み合いをし続ける。
そして膠着状態にじれったカレンがブラックとフリートに再度要求の有無を問おうとした瞬間、ブラック達とフッケバインの周りに存在している大量の海水が勢いよく空に舞い上がって、一箇所に集まって行く。

ーーーズドドドドドドドドドドドドドドッ！！

「なっ！？何だこりゃ！？」

「落ち着きなさい、アル！！・・・これを待っていたの？」

突如として空に舞い上がって行く大量の海水に驚愕しているアルナージに向かってカレンは叫ぶと、冷静に海水が集まって行く空を見つめているフリートとブラックに質問した。

フリートはそれを肯定するように笑みを深め、遠くに見えるヴォルフラムの甲板上で詠唱を行っている八神はやての映像をカレン達に見えるように映し出す。

ーーーブン！！

『海より集え水神の槍、彼方より来たれ銀雪（ぎんせつ）の吐息、逆巻き連なり天に座せ』

ーーーゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！

『な・・・なっ・・・ッ！！』

はやてが呪文の詠唱を終えると共に、ブラックとフリート、カレン達、そしてフッケバインの上空に海水で作られた全長数十キロクラスの大氷塊が出現した。

その余りにも常識外れた大氷塊の出現に、フッケバインの操舵手で在るステラは震え、カレン達も唖然として自分達の上空に浮かんでいる大氷塊を見つめる。

しかし、ブラックとフリートは自分達の頭上に存在している大氷塊に慌てるどころか面白そうに見つめていた。

（イヤ～、お膳立ては色々としましたけど。本当に魔法なんて名がギリギリつけられる欠陥魔法の『ヘイムダル』を使用するとは）

（これで奴らを絶望のどん底に落とす準備が完全に終わったな。後は）

（はいはい、分かっていますよ。既にこの映像は録画中ですよ。イヤ～、八神はやて達は本部や本局に許可貰っていますけど・・・・一番重要な忘れてはいけない場所から貰っているんですかね？）

（知らん・・・それよりもアレは俺の獲物だ。負け犬どもはくれてやるが、連中は俺が滅ぼす）

（分かっていますよ。さて、先ずは降伏勧告をして来るでしょうね）

そうフリートが内心で呟くと共に、ヴォルフラムの方から拡声器で大きくなったはやての声が響いて来る。

『其処に居る凶鳥（フッケバイン）及び竜人と女性に告ぐ。この大氷塊はいかなる『防御無効』も関係あれへん抵抗しようのない物理重量。其処から急いで逃げても無駄やで、あんた等はもう充分に射程内に居るからな』

『ちょっ！・・・・そっちの変な喋りの司令官！！なに考えているの！？そんなの落としたら下に被害が！』

『心配してもらわんでも安全確認はクリア済みや。命中した後は砕いて雪にして散らすから、津波が起きる心配もあれへん』

（いやいや、確かにそうすれば大氷塊に寄る津波は消えますけど・・・・大氷塊の直撃を食らって落下するフッケバインの方は如何なん

でしょう？アレだけの大質量を受けて破壊されても、必ずその時に起きた衝撃で津波は起きるんですけど？）

はやての説明にフリートは内心で突っ込みを入れた。

例え『ヘイムダル』自身が落下しなくても、巨大な戦艦であるフッケバインは完全に別である。大氷塊の一撃は確実にフッケバインに大ダメージを与えるが、その時の衝撃でフッケバインは確実に海へと凄まじい勢いで激突するだろう。

その時に発生した衝撃によって必ず津波が島々に襲い掛かる。フリートはその時に起きる被害を頭の中で思い浮かべ、全身から冷や汗を流す。

（確実に近くの島々に存在している港場は大被害を被りますね・・・その時の被害の責任は誰が取るんでしょうか？）

そうフリートは内心で起きる被害についての疑問を考えるが、『ヘイムダル』を使用しているはやては気がついていないのか、ブラック達に自身の要求を伝える。

『警告や。速やかに武装を解除して降伏しなさい』

『クッ！！』

はやての要求にカレンとアルナージは悔しげに顔を歪めた。

しかし、ブラックだけは気にする事無く、フリートが自身の肩から降りるの確認すると共に、一瞬の内に大氷塊に近づき、右手のドラモンキラーを全力で大氷塊に叩きつける。

「ドラモンキラーーーーーー！！！！！」

ドゴオオオ

ら、砕かれた氷塊の破片が再び一箇所に集まって居る場所に目を向けると、砕かれた筈の大氷塊が槍のように先を尖らせながら、ブラックに矛先を向けていた。

『槍陣を成せ、白銀の破槌ッ！！ヘイムダル・ファランクスシフト！！！』

ーーーガキィィィィィィーーーーーーーーン！！！！

「なっ！？あんだけ砕いても復活出来るのかよ！？」

「これは不味いわね・・・術者をやれば簡単に片がつくんだけど・・・距離が離れ過ぎているのよね」

再氷結して現れたヘイムダル・ファランクスシフトを目にしたアルナージは叫び、カレンは困ったように頬を掻いた。

しかし、フリートだけは険しい瞳をモニターに映っている何処か辛そうにして、左指から血を流しているはやてに向けていた。

（・・・・ふざけているんですか？今八神はやてが使ったシステムは、間違いなく自己強化システム・・・ですが、アレは私が考案したセラフィーシステムとは違って、術者の体の事など全く考えていない欠陥システムでは無いですか！あの質量兵器紛いの兵器といい、何を考えているんです！？現代の研究者達は！？）

はやてが使用したブラスターシステムに、フリートは苛立ちを覚えざるえなかった。

そもそもフリートがデバイスを作製するさい、第一に考えるのは使用者への安全性である。

“魔法は扱うモノであり、魔法に使われるモノではない”。その

理念の下、フリートがデバイスを作製する時は、細心の注意を払って第一に使用者の状態を調べる。
そして耐えられる限界を見極めてからデバイスの作製を行い、何度もシュミレーションを行った上で、使用者に試運転を行わせる。その後も入念のチェックを繰り返した後で、漸く完成したデバイスを渡すのだ。
フリートの世界のなのはのレイジングハートに組み込まれているセラフィーモードも、何度も耐久実験を行った結果完成したシステムである。
セラフィーシステムは、なのはとガブモンが究極体に進化する事を前提にして組み込んだシステム。一応なのは単体でも使用出来るようにしては在るが、その時の事も考えてフリートは幾つモノ予防策を施し、使用した後には精密検査を受ける事をなのはに厳命している。
なのはの性格上、必ずセラフィーシステムを単体でも使用するのは決まっているのでフリートは渋々と幾つモノ制限を掛けて、なのは単体での使用を認めたのだ。
しかし、今はやてが使用したブラスターシステムは、フリートが考案したセラフィーシステムと逆の理念で作られている。
使用者、デバイス、双方の限界を超えた強化をブラスターシステムは主体としており、使用後に使用者が掛かる負担の事など全く考えていない。フリートが見た限り、使用の制限時間もブラスターシステムは存在していない。つまり、ブラスターシステムによる強化は強力だが、魔法をただ放つだけの道具として人を扱うシステムなのだ。
（このままブラックが『ヘイムダル』を砕いていくだけで、確実に八神はやては自身のシステムで潰れるでしょう・・・例え生き残っても後遺症は免れない・・・こんな欠陥だらけどころか、使用者への安全性を完全に排除しているシステムを使い続ければ・・・・“

長くは生きられない”。何れは体の内側から崩壊が始まって・・・・・死ぬでしょうね・・・それも本人が気づかない内から・・・）

フリートはそう内心で呟くと共に、はやてが映っている映像から思わず視線を逸らした。

もうフリートはこの世界の管理局が作り出しているシステムや兵器を見たくなかった。まさか、此処まで使用者の事を考えてないシステムまで存在しているとは信じられず、フリートは映像から目を逸らす。

そんな風にフリートが思っているとは知らずに、はやてはブラスターシステムの影響で受けたダメージに辛そうにしながらも、空中でヘイムダル・ファランクスシフトに囲まれているブラックに声を掛ける。

『抵抗は無駄や。砕かれるより再生する方が早い』

（下らん・・・此処まで下らん戦いは久々だ。こいつ等と戦っても満たされん）

ブラックは、はやての言葉など全く聞いていなかった。

フリート同様に、ブラックもはやてが使ったブラスターシステムの正体に気がついた。ブラックの予測では後ニ、三回『ヘイムダル』を砕けば、勝手にはやてはブラスターシステムの影響で自滅する。

充分に抵抗は、はやてに甚大なダメージを与える事が出来るのだ。最もブラックはそれを行う気はない。それでは足りないのだ。

自身の眠りを妨げたはやて達には、二度と立ち上がれないほどの絶望を与えなければ気がすまない。

そんな事をブラックが考えているとは知らないはやては、夜天の魔導書を持ち直しながらブラックに声を掛ける。

『竜人。降伏するなら今や。アンタは一緒に居た女性と違って抹消命令がでとる。降伏するなら…』

ーーードゴオオオオオオオオオオン！！

『ッ！！』

はやてがブラックに降伏勧告を行っている途中で、突如としてブラックを囲んでいた氷塊の槍が幾つも砕け散った。

それを目撃したはやてが目を見開くと、両腕のドラモンキラーで砕いた氷塊の破片に囲まれながらブラックが言葉を呟く。

「御託は終わったか？下らん事を言ったところで、貴様らを潰す事に変わりはない。潰されたくなければ、さっさとやれ」

「んなっ！？何言ってやがんだ！！おい！！糞女！すぐにあの竜人を止めろよ！！あんなの落とされたら私らまで巻き添えをくうんだぞ！？」

「無理ですよ。ブラックが私の言う事なんて聞いてくれる訳ないです。誰かに命令されるのが死ぬほど嫌いですからね。まぁ、諦めて下さい」

「なぁっ！？」

「クッ！！」

ーーーガシッ！！

フリートの発言にアルナージは驚愕し、カレンも慌ててアルナー

ジの襟首を掴んでフッケバインに逃げようとする。
しかし、その前にブラックの頭上に存在していた大氷塊が動き、ブラックに矛先を向け始める。

ーーーゴゴゴゴゴゴッ！！

『降伏せんかった事を後悔するんやな！！ヘイムダル！！投下！！』

ーーードオオオオオオオオオオオオオオオン！！

はやてが宣告を放つと同時に、大氷塊を覆っていた魔法陣が消失し、その大質量故に、ブラックに向かって凄まじい速さで落下して行く。
それに巻き込まれまいとフッケバインは慌てて進路を変えようとするが、時既に遅く、大氷塊は真っ直ぐにブラックの下へと向かって行く。
凶鳥（フッケバイン）のメンバーはその事実に全員が顔を青褪めさて、来るであろう衝撃から身を護る為に体を艦内で伏せる。
そして一番最初に激突する位置に居るブラックは高速で落下して来る大氷塊に向かって両腕を構えると、そのまま大氷塊を全身を使って受け止める。

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオ

大氷塊を完全に受け止めているブラックを目にしたはやては、目の前に広がる光景が信じられないと言うように掠れた声で叫んだ。
全長数十キロに及ぶ大氷塊を、体長三メートルほどしかないブラックが完全に受け止めてしまっている。普通ならば夢だとしか誰にも思えないだろう。
現に凶鳥（フッケバイン）のメンバーも、目の前に広がる光景が信じられないというように大口を開けていたが、彼らは更なる常識外れの光景を目にする。

「この程度・・・シェンウーモンやホエーモンに比べれば！！軽すぎるぞ！！」

ーーードオオオ

ブラックが全力投擲したガイアフォースは、凄まじい速さで上空に舞い上がっていた大氷塊に追いつき、大氷塊に激突した瞬間、遥か上空で大爆発が起こった。
はやてはその光景に甲板上で膝をつき、全身をガクガクと震わせながら、遠くに見えるブラックの姿に心の底から恐怖を抱いた。
漸くはやては理解した。理解してしまった。ブラックだけには手を出してはいけなかったのだ。
フリートの言っていたとおり、ブラックに軽はずみに触れてしまえば、その後には死しか待っていないと言う事実をはやてはたった今実感した。
しかし、時既に遅い。既にブラックは一度だけはやて達を見逃している。それに気がつかず、二度目の攻撃をはやて達は加えたのだ。
もはやブラックがはやて達を逃す筈は無い。それを表すようにブラックは全身から殺気を振り撒き、ヴォルフラムの甲板に居るはやてに残忍さしかない笑みを向けていた。

「さぁ、始めるぞ。貴様らが誰に攻撃を仕掛けたのか、骨の髄まで教えてから滅ぼしてやる。この俺の眠りを妨げた事を後悔しろ！！！」

そうブラックは宣言を放つと共に、超高速でヴォルフラムに向かって行く。
自身を怒らせた全ての者に報いを与える為に。

この日、管理世界で一つの伝承が生まれる事になった。
『全ての英知が集っている地に向かうのならば、眠れる漆黒の竜人を起こすなかれ。眠りの淵より他の意思が介在して目覚めし時、彼の者は恐怖だけを残す災厄と化すであろう。彼の者は恐怖の根源なり』

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　中編　下

次回から恐らく私の作品初めての原作キャラ死亡が起きるかもしれません。
もしそれが苦手な人は、申し訳ありません。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　後編　さ

遂に出てしまいました。原作キャラでの死亡者。
死んだのは、まさかのあの人です。

因みに死んでいなくとも、体の欠損が出た人物も居ますし、惨劇は
更に続きます。
原作キャラの死亡者が嫌だった方、本当に申し訳ありませんでした。
次回も多分でます。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　後編　さ

海面付近。
穏やかな波が続いているその地点で、全身ずぶ濡れになったスバルと、そのスバルを抱えるように右手を肩に回しているフェイトが居た。
ブラックに投げ飛ばされたスバルは、その凄まじいとしか言いようのない勢いに逆らう事が出来ず、そのまま海へと落下してしまっていた。
偶然にもブラックの後を追って飛んでいたフェイトはそれを目撃して、『ヘイムダル』使用の事も在ったので、一先ずブラックを追うのを止めてスバルの救助を行っていたのだ。

「ゴホッ！ゴホッ！！」

「大丈夫！スバル！！」

「ゴホッ！！・・・は、はい・・なんとか大丈夫です・・・だけど、あの竜人・・とんでもないパワーとスピードです・・・全然抵抗も出来なかったんですから」

「そう・・だけど、大丈夫だよ。今はやてが『ヘイムダル』を発動させている。幾ら力が在っても、『ヘイムダル』を受け止める事なんて出来る訳が…」

ーーードゴオオオ

フェイトの言葉を遮るように凄まじい激突音が上空から鳴り響いた。
スバルとフェイトはその激突音に目を見開きながら顔を音が鳴り響いた方に向けてみると、巨大な大氷塊を完璧に受け止めているブラックが存在していた。
その現実として受け入れる事が出来ない光景にスバルとフェイトは言葉を失い、呆然とブラックを見つめるが、更に現実として受け入れる事が出来ない光景が二人の目の前に広がった。
全長数十キロに及ぶ大氷塊を体長三メートルほどしかないブラックが、大氷塊を元々在った地点を遥かに超える高さに投げ飛ばし、更に巨大な赤いエネルギー球をブラックは大氷塊に向かって投げつけたのだ。そして少し経つと、遥か上空で大音量の爆発音がルヴェラ全土に響き渡る。

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「・・・う、うそ・・・・・はやてさんの『ヘイムダル』が・・簡単に・・・」

「・・嘘だ・・・『ヘイムダル』が・・破られるなんて」

目撃した光景にスバルとフェイトは掠れた声を出すしかなかった。
『ヘイムダル』がどれだけ強力な魔法なのかを、フェイトとスバルは良く知っている。事前にその効果を聞いて、絶対に力技で破られる事はないと二人は確信していた。
しかし、今その『ヘイムダル』は意図も簡単に撃ち破られてしまった。しかも、それを行ったブラックには、遠目から見てもダメージを受けている様子も疲れた様子もない。ただ自然体のまま平然と

した様子しかフェイトとスバルは感じられなかった。
目の前で起きた出来事にフェイトとスバルは恐怖に体を震わせるが、そんな事は関係ないと言うようにブラックは再びヴォルフラムに向かって超高速で飛んで行く。

「ッ！！まさか！？ヴォルフラムを破壊するつもりなんじゃ！？」

「クッ！！スバル！急いでヴォルフラムに戻るよ！今ヴォルフラムに居て戦えるのは、はやてだけだから」

「えっ！？・・・でも・・」

フェイトの言葉にスバルは思い悩むような顔をしながら、遠くの空に浮いているトーマを見つめる。
今のところトーマが動く様子はない。だが、何時トーマに異変が起きても可笑しくない状況だった。
何せ近くの場所で戦いが起きているのだから、トーマに何かしらの異変が起きる可能性は充分に考えられ、更には謎の女性で在るフリートと凶鳥（フッケバイン）も存在している。
トーマが狙われる可能性にスバルは辛そうな顔をするが、フェイトは構わずにスバルの腕を引っ張る。

「スバル！トーマの事も大事だけど、今ヴォルフラム内には沢山の怪我人が居る！もし、あの竜人がヴォルフラムを襲ったら今度こそヴォルフラムの中に居る皆の命が危ない！だから！」

「・・・・分かり・・ました・・・・トーマ・・・ゴメン」

そうスバルは遠くに見えるトーマに向かって悲しげに頭を下げると、フェイトと共にヴォルフラムに戻って行く。

その先で自分達の全てが砕かれ、絶望と恐怖しかない奈落の底に落とされる事も知らずに、二人はブラックの暴虐を止めようとヴォルフラムに急いで戻って行くのだった。

フッケバイン艦内通路。
凶鳥（フッケバイン）の構成員で在るカレン、フォルティス、アルナージ、ヴェイロン、そしてフッケバインの操舵を行っている為に動く事が出来ずにモニターで様子を見ていたステラの五人は険しい顔をしていた。

「・・皆・・分かっていると思うけど・・私らと管理局はとんでもない二人組みに喧嘩を売ったわ・・・伝説の地と言われているアルハザードの名を持った女に、とんでもなく馬鹿でかい大氷塊を簡単に破壊した竜人・・・正直勝てる可能性は限りなく低いわ。しかも女の方は恐らく私達が所持しているディバイダーとリアクターの機能を知り尽くしている可能性も在る」

「そうですね・・・カレンの言うとおり、サイファーのケーニッヒ、ドゥビルのランゲ・・そしてカレンの本を相手は使用している・・・更に相手側のディバイダーとリアクターは改造されて未知の機能が多数搭載されている。正直戦わずに逃げ出すのが一番の得策でしょう」

「ふざけたことぬかしてんじゃねぇぞ！！フォルティス！！逃げ出したら、サイ姉とビル兄が死んじまうんだぞ！！」

『そうだよ！！絶対に二人を助けないと！！』

「・・僕だって出来れば二人を助けたいです・・ですが、このまま

戦っても勝てる可能性は限りなく低い。二人も見た筈です・・・圧倒的な力で管理局が使用した大氷塊を粉砕した竜人の力を」

『・・・・・』

フォルティスの説明にアルナージとステラは言葉が出せなかった。二人もブラックを相手に勝てる可能性はゼロだと心の底から理解していた。今は管理局に意識が向いているから大丈夫だが、何時ブラックの意識が此方に向いても可笑しくはない。

特に自分達はフリートに何も考えずに喧嘩を売ってしまっている。本当にブラックが何時凶鳥（フッケイバイン）に遅い掛かって来ても可笑しくない状況だった。

フォルティスの言葉どおり逃げるのが一番の得策。しかし、逃げればフリートの毒に侵されているサイファーと海中に沈められているドゥビルの命はない。既にサイファーは毒に、ドゥビルは海中に沈められてからかなりの時間が経っている。このままでは二人の命がない事を理解しているアルナージは深く悩むような顔をしながら、ハッチの方に足を向ける。

それを目にしたカレンは、無言でハッチに向かって歩いているアルナージの背に声を掛ける。

「アル、何処に行くつもり？」

「・・皆は逃げたきゃ逃げろ・・・あたしはあの糞女から解毒剤を奪って、ビル兄を助けだす！」

「・・・・ヘッ！確かに女相手に尻尾を巻いて逃げるなんざ、俺ならしくねぇな」

「ヴェイロン！！」

上下二連の散弾銃に似た形をして折れている刀身を備えたディバイダー９２４を肩に乗せながらアルナージと共にハッチに向かって歩き出したヴェイロンの背に、フォルティスは叫んだ。
その叫びにヴェイロンは口元に笑みを浮かべながら背後に振り返り、険しい顔をして自分達を見つめているカレンに声を掛ける。

「姉貴。どっちにしてもあの女が俺達を逃がす訳ねぇよ。あの女の目的もディバイダーとリアクターなんだ。どの道ぶつかるなら、竜人の意識が管理局に向いている今がチャンスだ。少なくとも俺ら全員で掛かれば、あの女ぐらいは殺せるだろう？」

「そんな簡単な相手だと思っているんですか！？相手は嘘にしても本当にしても、伝説の地で在るアルハザードを名乗っているんですよ！？此方の手の内が全部知られている可能性まで存在している！」

「んな事は分かってるさ・・だけど、どうせぶつかるんなら今しか俺達が生き残れる可能性は低いぜ・・あの女は確実に俺達を殺しに来る・・・サイファーやドゥビルにアレだけの事をしやがったんだ。俺達を見逃す可能性はねぇよ」

「・・・確かにヴェイロンの言うとおりだね・・・確実あの女は私達を殺しに来るわ」

ヴェイロンの言葉にフリートと直接相対したカレンは同意するように頷き、険しい視線を自身に向けて来ているアルナージとステラに顔を向ける。

「・・・決めたわ。これより凶鳥（フッケバイン）はアルハザードを名乗った女に総攻撃を仕掛ける！サイファーとドゥビルを助けて、この場から急い

で離脱するわ！！」

「カレン！！」

「フォルティスの言うとおり逃げるのが一番の得策だけど、逃げられない可能性も充分に在るんだし・・なら、一か八か特攻であの女を殺すわ・・それに何も策が無い訳じゃないわよ・・例えアルハザードの技術を持ってしても簡単には撃ち破れない可能性を持った子が近くに居るんだからね」

「ッ！！まさか！？」

「そう。ゼロ因子適合者（ドライバー）の子よ。今のあの子には敵も味方もない、何も見えず聞こえず状態。その相手と戦う事になれば、幾らあの女でも注意を他に向けるのは難しいわ。あの女は確実にあの子の下に向かって戦うでしょうから、その隙をついて決定的な一撃を叩き込む。そして解毒剤が入っている考えられる背中の荷物を奪うのよ」

「なるほど・・・正面から戦うのではなく、相手が別の相手と戦っている隙を狙うわけですね」

「そのとおりよ、フォティス。悔しいけど正面からあの女に勝てる可能性は、此処に居る全員とフッケバインを使っても低いわ。なら、隙をついての不意打ちしかない。殺せなくても荷物さえ奪えば、サイファーとドゥビルを救えるわ」

「・・・いいでしょう・・その可能性に賭けます。ステラ！例の女性と竜人の動きには常時注意して、隙を見つけたら即座に報告をお願いしますよ！」

『了解！トーマ君には悪いけど、サイファーとドゥビルを救う為にも利用させて貰うわ！』

そうステラはフォルティスの言葉に答えると、即座にヴォルフラムに向かったブラックと、何処かに向かって飛んでいるフリートを監視し始める。

カレン、アルナージ、ヴェイロンはハッチの方に向かい、何時でも外に出られるように準備し始める。自分達の大切な仲間を救う為に。

しかし、彼らは知らなかった。既にステラがリアクトしているフッケバインは、別の人物に支配下に置かれ、全ての会話が聞かれている事を、彼らは全く思っても見なかったのだった。

（全く巻き込まれただけの少年を利用するなんて、何が同胞ですかね？これだから私達の世界でブラックにボコボコにされて地獄に送られたんですよ）

フッケバインの中に居るカレン達の様子をモニターで見ていたフリートは、不機嫌な顔をしながらアイシスとリリィが投げ飛ばされた方向に向かって飛んでいた。

既にフリートはフッケバイン内部にも自身特製のウィルスをサーチャーを使って仕込んでいた。今はステラに操作出来るように設定して在るが、一度フリートがウィルスに命じれば、フッケバインは完全にフリートの物になる。今それを行わないのは凶鳥（フッケバイン）がどのような動きを知る為だった。

最も知った内容はトーマを利用すると言う内容だったので、フリートは非常に不機嫌だった。

ブラック同様にフリートもトーマが偶然にも巻き込まれただけの

被害者だと言う事が分かっている。その巻き込まれただけの相手を凶鳥(フッケバイン)は利用しようとしているのだから、フリートが不機嫌になるのも当然だろう。
　戦う意思も無く、本当にトーマは偶然に巻き込まれただけなのだ。その相手を本人の意思を無視して戦わせるなど、如何考えても傲慢としか言えない。

（ハァ～管理局と言い、凶鳥(フッケバイン)と言い、何で自分達の状況を行動の正当化に利用するんですかね？戦うと選んだ時点で何時死んでも可笑しくないと言うのに）

　フリートは心の底から残念さと呆れが混じった溜め息を吐いた。
　せっかく楽しみにしていて、リンディからお仕置きを受ける覚悟をして平行世界にやって来たのに、来てみれば魔法と言う言葉を侮辱するような魔力を用いた質量兵器紛いを目撃し、『殺しに慣れる』などと言う上位級の嫌な言葉を聞かされ、更には人を道具のように扱うシステムまで見せられた。
　フリートの気分は最低値にまで下がっていた。喜べた事と言えば、トーマと言う『ゼロ因子適合者(ドライバー)』が見つかった事と自身の改造したディバイダーの性能を確認出来た事ぐらい。
　その他には嬉しい事などフリートには全然なかった。

「ハァ～、十数分前に運が良いなんて言うんじゃなかった・・・・・この苛立ちと不機嫌を晴らす方法はアレしかないですね！！管理局に徹底的な嫌がらせを行って、凶鳥(フッケバイン)を完全に潰し！この世界のディバイダーとリアクターを全て手に入れ！更に私の世界で調べなかった『ゼロ因子(ファクター)』を研究するしか私のこの気持ちは晴れません！！もうリンディさんのお仕置きを考量して動きませんよ！！全然気にせずに私らしく暴れてやります！！フフフフッ！！ハハハハハハハハハハハハハッ！！！」

そうフリートは本気で動き出す事を世界に宣言するように叫ぶと、徹底的に管理局を、特務六課を潰せる材料を集めながらブラックに投げ飛ばされたアイシスとリリィの下に急いで向かうのだった。

一方、万全の状態で放った切り札の『ヘイムダル』を完全に撃ち破られた特務六課は、恐怖によって慌てに慌てていた。

彼ら全員がはやての使用する『ヘイムダル』によってブラックを倒せると思っていた。それだけの威力が『ヘイムダル』には在ると彼らは信じていた。しかし、蓋を開けてみれば『ヘイムダル』は何の効力も発揮する事無く粉砕され、ブラックには何のダメージも与えていない。

無駄にはやての魔力を消費した事以外、『ヘイムダル』は何の効力も発揮していないのだ。

それは、はやての実力を信じていた彼らにとっては悪夢としか言えない光景だった。次々とヴォルフラム内でブラックの暴虐から運がよく生き残れた局員達は恐怖に駆られて恐慌状態に追い込まれようとしたが、なんとか医務官で在るシャマルによってそれは抑えられ、今はヴォルフラム内に存在している転送ポートに怪我人を運んでいた。

「急いで！！八神司令が魔法を放って竜人の進行を抑えている内に重傷の怪我人から本部に転送するのよ！！」

『了解！！』

シャマルの命令に無事な局員達は頷き、次々と怪我人を乗せたストレッチャーを転送ポートが設置されている部屋に運んで行く。

ストレッチャーの上に載っている局員達は全員が全員、血塗れで腕や足を失って居る者も多数居る。
医者であるシャマルには、彼らの命が残り少ない事は目に見えていたが、それでも僅かな可能性を信じて本部に送ろうとしているのだ。既にヴォルフラムの中に設置されていた医療機器はブラックに全て破壊されてしまっている為に、魔法による応急処置が精一杯の状況だった。
だが、本部に向かえばなんとか彼らを救えるかもしれない。再起不能に追い込まれたなのはとエリオの治療も行える。そう信じているシャマルは、比較的に一番軽傷なヴィータが載っているストレッチャーを転送ポートが在る部屋に運んでいると、気絶していたヴィータの瞼が微かに動く。

ーーーピクッ！

「ッ！！ヴィータちゃん！ヴィータちゃん！！」

「・・・グッ！！・・・シャ・・マルか？」

「そうよ・・・良かったわ・・・ヴィータちゃんが無事で・・本当に・・良かった」

意識を取り戻したヴィータの姿に、シャマルは目尻に浮かんでいた涙を拭きながら喜びの声を上げた。
その様子にヴィータは疑問を持って、横になりながら顔を右側の方に向け、その目は限界にまで見開かれた。
ヴィータの視線の先には血塗れになりながら苦痛の声を上げている局員達が、多数存在していた。
その地獄と呼んでも言い光景にヴィータは言葉を失い、更に別方向に目を向けてみると、自身と同じようにストレッチャーの上に載

っている、全身がボロボロな状態のなのはとエリオを目撃する。
「ッ！！なのは！エリオ！！おぃ！シャマル！！一体何が・・グゥッ！！」
「動いちゃ駄目よ！！幾ら一番軽傷でも、ヴィータちゃんの受けたダメージも深刻なものなのよ！？」
「あ、あたしが一番軽傷だって？・・・何だよそれ？・・・何が起きてんだよ！？」
現状がどのような状況なのか分からないヴィータは、怒りを込めてシャマルに向かって叫んだ。
その叫びにシャマルは辛そうな顔をして顔を下に俯けると、今起きている現状の全てを話し始める。
「・・・ヴィータちゃんが蒼い髪の女性にやられた後・・・はやてちゃんは女性を捕まえる為に再び眠っていた竜人をエリオ君に攻撃させたの・・・それが間違いだったわ・・・竜人は『ストライクカノン』の攻撃を受けてもダメージが無く・・・エリオ君をボロボロに変えた後・・・ヴォルフラム艦内に潜入・・・そして次々と局員達を襲って殺していった・・・今此処に居る局員達は運がよく生きているだけの人達だけなの」
「・・・・なんだよそれ？・・・こんな状態の連中が運が良いって言うのかよ！？」
「・・そうよ・・・死んだ局員達は・・・壁に血達磨になって張り付いていたわ・・・一緒に居た私達でも誰なのか分からない状態なの・・・こんな手足を失って激痛に苦しんでいる状況の彼らが運が

良い方なのよ・・・そして更に悪い報告が在るわ・・・・・『ヘイムダル』の使用許可を貰ったはやてちゃんが『ヘイムダル』を竜人に使用・・・・・そして『ヘイムダル』を力技で簡単に跡形も無く消滅させたわ」

「ッ！！・・・・嘘だろう・・『ヘイムダル』が・・・・」

告げられた事実にヴィータは掠れた声を出さざるえなかった。
はやての守護騎士であるヴィータは、『ヘイムダル』の威力がどれほどなのか理解している。例えはやて同様にＳＳランクの魔導師でさえも『ヘイムダル』を力技で撃ち破るのは不可能な筈。
その『ヘイムダル』を力技だけで撃ち破ったとすれば、ブラックの実力は最低でもＳＳＳランクに違いないのだ。
その事実が信じられずにヴィータは呆然としていると、シャマルの下に別の医務官が訪れる。

「シャマル医務官！転送ポートの準備が出来ました！」

「そう・・なら、八神司令の命令どおり怪我人から本部に緊急転送！その後に順番に局員達を転送よ！」

『了解！！』

「ッ！！おい！シャマル！？はやてはどうなるんだよ！？」

「・・・・・はやてちゃんは逃げられる時間を少しでも稼ぐそうよ。はやてちゃんのブラスターを使用した魔法で漸く竜人の進行を遅らせる事が精一杯なの・・・・・司令としてこの場に最後まで残るそうよ」

「ふざっけんなよ！！相手は『ヘイムダル』を簡単に破る奴なんだぞ！？はやて一人じゃ！？」

「今フェイトちゃんとスバルがこっちに向かっているわ・・・・とにかくヴィータちゃんも本部に転送するわ」

そうシャマルはヴィータに声を掛けると、一番の重傷者であるなのはとエリオを他の局員達と共に転送ポートに運ぶ。

ヴィータはその様子に悔しげな顔をせざるえなかった。はやての守護騎士で在りながらも、今のヴィータはフリートが放った砲撃の余波で体がまともに動かない状態。

助けに向かっても足手纏いにしかならない事実にヴィータは悲しげな顔をして俯いてしまう。

シャマルもその様子に悲しげな顔をしながらも、なのはとエリオの搬送を急ぎ、転送ポートの準備が万端になるのを確認すると、操舵手である、ルキノに連絡を取る。

「ルキノ！！急いで転送よ！」

『了解です！本部に緊急転…』

≪転送先緊急変更、ヴォルフラム甲板上に全ての転送先を変更します≫

『なっ！？』

突如として響き渡った電子音声にシャマル達とルキノは驚愕の叫びを上げるが、次々と転送ポートの移動先が書き換えられて行く。

ルキノはその事実に信じられず、急いで転送先を直そうとするが、ヴォルフラムのシステムは全て変更不可にされていた。

『そんな!?何が起きているの!?ヴォルフラムが・・・ヴォルフラムのシステムが全て何者かに乗っ取られています!?』

「そんな!?ヴォルフラムは管理局の艦艇なのよ!?電子戦だって問題ないように設定されている筈なのに!?」

『いやいや、全然脆いですよ。簡単に私のウィルスで支配されたんですからね』

『ッ!!』

艦内に響き渡った聞き覚えのない声にシャマル達は目を見開いた。その様子が見えているのか、声の主は楽しげな声でシャマル達に宣告する。

『残念ですけど、一人も逃がしませんよ。だって、一人でも逃げたらブラックが何処までも追い掛けて余計な犠牲が出るじゃないですか。だから、貴女達には一人残らずこの艦と共に消えて貰いますよ。いや～たった一隻の艦でブラックの暴走が止まるんですから・・・素晴らしい犠牲でしょう?管理局の皆さん?』

「ふざけないで!!貴女が誰にもして、こんな非道が赦されると思っているの!?」

『最初にブラックを撃ったのは誰でしたっけ?自分達で地獄の引き金を引いたんですよ?殺そうとしたんですから、殺されても文句言えないでしょう』

「ッ!!」

『まぁ、自分達の行動が全部正しいって思っている、貴女達には死ぬ覚悟なんて持ってないでしょうけどね・・・・・いえ、もうすぐ死んだ方がマシだったと言う絶望と恐怖を味わうでしょう・・・貴女達、機動六課だったメンバーが六年前の見逃した大罪を知るんですからね』

「・・・機動六課が見逃した大罪？・・・一体何を言っているの？」

シャマルは声の主の言葉の意味が分からなかった。それは他の局員達も同じなのか、全員が全員疑問に満ちた顔をしていた。

六年前に機動六課が解決した事件と言えば『ＪＳ事件』しかない。だが、あの事件は主犯で在ったジェイル・スカリエッティを機動六課が逮捕し、ミッドの上空に現れた『聖王のゆりかご』を消滅させた事で全て解決された筈。管理局員なら誰もが知る事実であり、見逃した大罪などない筈なのだ。

誰もが声の主が告げた事実は出鱈目だと考えるが、声の主の言葉は真実だった。

機動六課は六年前の『ＪＳ事件』の時に、最も見逃してはならない大罪を完全に見過ごしてしまっていた。その大罪が世に明るみになれば、『ＪＳ事件』の時に機動六課は、いや管理局は民衆から賞賛などされなかっただろう。寧ろ民衆は怒り狂い、管理局に罵声を放っている。

それほどの大罪が『ＪＳ事件』の背後には存在していたのだ。それが明るみになれば、管理局の信用と信頼は地に落ちる。しかし、それだけの犠牲を出しても真実を明るみにしなければならなかった。

だが、大罪の内容は世に出る事無く、闇の中に埋もれてしまった。その結果、どれだけの犠牲が出ているのか、彼らはもうすぐ知る事になる。

『はぁ～、予想通り何も知らない。知ろうとしなかったんですね・・・・もう良いです。本気で潰して上げますよ。では、緊急転送します！！』

「ッ！！まっ！！」

『待ちません！！遺書を書いてない人は、運がなかったですね。では、転送』

ーーーブン！！

転送を止めさせようとしたシャマルの声を無視して、転送ポートの中に居た全員がヴォルフラムの甲板に転送された。
そして転送が終えた者達が見たのは、何処まで続く蒼い空と吹き荒れる風に散らされる髪の毛。
最後に甲板上に立ちながら、接近して来るブラックに魔法を撃ち続けているはやての背だった。

「ッ！！シャマル！！何で此処に居るんや！？」

「そ、それは・・・・」

ーーードゴオオオオオン！！

『ッ！！』

驚愕に満ちたはやての質問にシャマルは答える事が出来ずに顔を俯かせた瞬間、はやて達の目の前の甲板に黒い何かが激突した。
はやてはその様子に己のミスを悟ってしまう。一瞬でも気を抜いてはいけなかったのだ。ほんの僅かな一瞬の隙をついて、最もヴォ

ルフラムに訪れてはいけなかった存在が辿り着いてしまった。
それは吹き上がる煙と炎の中を残忍さと歓喜に満ちた笑みを浮かべながらゆっくりと歩いていた。
平行世界の管理局が最も敵に回してはいけないと告げている存在。多くの人々が恐怖の代名詞とまで叫ぶ史上最悪にして最凶の竜人。漆黒の竜人ーブラックウォーグレイモンことブラックが、自身の眠りを妨げた存在を滅ぼせる事に歓喜していた。

「下らん攻撃だった。その気になれば簡単に辿り着けたが、それでは俺の苛立ちは治まらん。貴様らには絶望と恐怖の果てに滅ぼしてやる」

「クッ！！バル…」

ーーーブザン！！

ブラックに向かってはやてが魔法を放とうとした瞬間、シュベルトクロイツを握っていたはやての右手が空に舞い上がった。
右手を失った事実が信じられないのか、はやては呆然としながら空中から甲板上に落下したシュベルトクロイツを握ったままの自身の右手に目を向けると、はやての右手は右腕のドラモンキラーが血に染まっているブラックに踏み潰される。

ーーーグシャッ！！

「動く事もせずに立ち止まって魔法を放つのは的でしかない」

ーーープシュウウウウウウウウウーーーー！！！

「アァァァァァァァァァァァァーーーーーー！！！」

「はやてちゃん！！」

「はやて！！」

右腕の傷口から大量の血を噴き出させながら苦痛に満ちた叫びを上げるはやてに、シャマルとヴィータは急いで駆け寄ろうとする。

しかし、そんな二人の前にブラックは一瞬の内で移動し、そのままシャマルとヴィータの首下にドラモンキラーを引っ掛け、全力で甲板に叩きつける。

「フン！！」

ーーードゴオオオ

ブラックが疑問の声をはやてに掛けていると、突如としてブラックの背後から右腕のリボルバーナックルを高速回転させているスバルが飛び掛かって来た。
しかし、その完全な不意をついたと思える奇襲もブラックは既に見切っていたのか、僅かに体を横に動かす事で背後からのスバルの攻撃も簡単に避けた。
そのままブラックは流れるような動きで今度は自身に向かって背を向けているスバルに右足蹴りを打ち込もうとするが、スバルは瞬時に背後に振り向き、右手の先に発生させていたプロテクションで防ぐ。

ーーーガァァァァーン！！

「グッ！！（なんて威力なの！？）」

「ほう、少しは骨が在る奴が居たか」

自身の蹴りを一瞬とは言え防いだスバルに、ブラックは僅かに面白そうな眼をした。
しかし、逆にスバルはプロテクション越しで受けた衝撃に、右腕の震えが止まらず、左手で右手を押さえざるえなかった。
ヴィータでも認めるほどの固さを持っている防御魔法で在りながらも、ブラックの攻撃の威力を完全に防ぐ事が出来なかったのだ。
少なからず自身の防御に自身が在ったスバルは悔しげに顔を歪めながら、失った右腕の傷口の止血を行っているはやてに声を掛ける。

「はやてさん！！」

「・・グッ！・・・大丈夫や・・・でも、シャマルとヴィータが」

右腕を失った苦痛に苦しみながらも、はやてはブラックのドラモンキラーに引っ掛かったままのシャマルとヴィータを見つめた。
二人とも完全に意識を失っているのか動く様子は全くない。生きているのかどうかも分からない事実に、はやては何とか無事だったシュベルトクロイツを左手で握り、『夜天の魔導書』を横に浮かばせながらブラックにシュベルトクロイツを構える。

ーーースチャッ！！

「・・二人を・・・・放して貰うで」

「フン、そんなにこいつ等が大切か？」

「当たり前や・・・仲間であり、私の大切な家族達や・・・絶対に離して貰うわ」

「フン、俺は強くなる奴と面白くなりそうな奴は見逃すが・・・こいつ等はどちらでもない。戦う価値もない奴らだが、俺の眠りを妨げた時点で・・・終わりだ！！！」

ーーーブン！！

『ッ！！』

何の躊躇いも無く投げ捨てられたシャマルとヴィータを目撃したはやてとスバルは、即座に二人を助けようと動こうとするが、それは出来なかった。
何故ならばブラックは投げ捨てると同時に両腕のドラモンキラーの爪先にエネルギー球を作り上げ、その投擲を先をはやてとスバルの背後で震えている局員達に構えていたのだ。

シャマルとヴィータを助ければ、背後に居る局員達を見捨てる事になる。逆に局員達を護れば、気絶しているシャマルとヴィータは助かる事無く、上空から落下して死ぬだろう。
迫られた非情な二択にはやては歯噛みするが、スバルは慌てて居なかった。
この場にはもう一人ブラックの隙を狙う為に隠れている人物が居る。その人物は必ずシャマルとヴィータを助けてくれると確信していた。
それを表すようにシャマルとヴィータに閃光が一瞬の内に辿り着き、二人を救助してブラックの背後に降り立つ。

ーーートン！

「フェイトちゃん！！」

シャマルとヴィータを両腕に抱えながら甲板に降り立ったフェイトの姿にはやては喜びの声を上げた。
しかし、呼ばれたフェイトは答える事無く、シャマルとヴィータを甲板に下ろすと、怒りに染まった赤い瞳をブラックの背に向ける。
「・・何でこんな非道が出来る？・・・知っていて二人を投げたんでしょう。私が近くに居る事を？」
「当然だ。貴様の殺気と怒りに染まった気配なんぞ、調べるまでも無く感じていた」
『ッ！！』
ブラックの告げた事実にはやてとスバルは目を見開き、すぐに怒りを堪えているような顔をしながらブラックを睨みつける。

最初からフェイトに姿を現せる為にシャマルとヴィータをブラックは投げたのだ。その事実にはやて、スバル、フェイトの怒りは最高潮に達し、それぞれ殺気を滲ませながらブラックに向かってデバイスを構える。

しかし、殺気を受けているブラックは、三人の殺気をそよ風程度にしか感じていなかった。殺気を完全に物にする為には、相手を傷つけて殺す事が必要。故にブラックや共に戦っている者達の殺気は完成されている。

だが、今ブラックが三人から受けている殺気は幼稚なものでしかなかった。

（フン、傷はつけた事は在っても相手を殺した事はないようだな。でなければもう少しマシな殺気を放てる筈だ）

（・・・正解みたいですよ。調べてみたところ、此処の八神はやて達は自分達の才能と言う圧倒的な力で相手を倒すのが殆どみたいです・・ＡＭＦなど状況の悪さは在ったみたいですけど、私達の世界に比べれば温いですね。因みにですけど・・・・・『ＪＳ事件』の時にはリミッターやらなにやら枷が機動六課にはありましたよ）

（自らの実力を抑えれば、更なる高みに辿り着く筈だが？）

（それ無理ですね。何せこの世界でスカリエッティが作ったのはガジェットとか言う玩具ですから。戦っても魔力だけで何とかなる敵ですし、プログラムどおりにしか動かない兵器ですから。因みに最終的なスカリエッティの切り札は・・・・『聖王のゆりかご』と・・・この世界のヴィヴィオちゃんです）

（ほう・・・・・まさかと思うが、ただの玩具風情に敗北して、そのまま奪われたのではないだろうな？）

（・・・いや・・その・・・・・大正解です・・・・・自分達でスカリエッティを追っていながら、相手の戦力を誤ってヴィヴィオちゃんは奪われ、地上本部は壊滅したようです・・・・・管理局最高評議会はスカリエッティの配下が殺したようですけど、その下の者達は生き残っていますよ。逮捕される事無く）

ーーーブチィン！！

「グウゥゥゥゥゥゥッ！！ガアァァァ

「クッ！！・・・貴方が何だとしても罪を重ね、非道を行う事を見過ごせない！！世界に悪影響を与えるお前を倒す！！その為に私達で、その為に魔法は在る！！」

ブラックが放つ殺気に怯えながらも、フェイトはそれを振り払うように強く叫んだ。

その叫びに応じるようにはやてとスバルもそれぞれ覚悟を決めた顔をするが、その想いを踏み躙るようにブラックは殺意に満ちた瞳をフェイトに向け、一瞬の内にフェイトの前に移動する。

ーーービュン！！

「ッ！！」

「罪と非道を見過ごせんだと？笑わせるな！！」

ーーードゴオォン！！

「グフッ！！」

ブラックは叫ぶと同時に右腕のドラモンキラーをフェイトの反応速度を上回る速さで腹部に叩きつけた。

その衝撃にフェイトは口から血を吐き出し、そのまま背後に吹き飛んでいると、頭の中に聞き覚えの無い声の念話が届いて来る。

（見てから反応しても遅いんです。相手の筋肉、視線、僅かな動きにブレ。それらを統合して経験から次の動きを予測しないと、ブラックの攻撃はかわせません）

（何を言って！？）

「オオオオオォォォォォォォォーーーー！！！」

ーーードゴオォン！！

「ガッ！！」

念話の意味が分からずフェイトが疑問を覚えていると、何時の間にか回り込むように移動していたブラックの肘打ちがフェイトの背中に突き刺さった。

その威力にフェイトの背骨は軋み、全身から力が抜けそうになるが、ブラックは構わずにフェイトの左腕を掴み取り、そのままフルスイングする。

「ハァァァァァァァァァァーーーーーー！！！！！」

ーーーブンブンブン！！

ーーーゴキィン！！

「アァァァァァァァァァァーーーーーーー！！！！！」

凄まじい力でフルスイングされたフェイトの左肩は脱臼し、更に複雑に左腕は折れ曲がた。

しかし、ブラックはそれを目撃してもフルスイングを止める事無く続け、フェイトの意識は混濁していくと、再びフェイトに念話が届く。

（如何なる状況でも意識を失う事無く、最適な状況を判断を行って

危機を脱する。今の状況で行うべき事は苦痛に苦しむではなく、まともに動く右手から魔法を放つ事です）

「ッ！！プラズマスマッシャーーー！！！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

念話の言うとおりフェイトは自由に動く右手からブラックに向かって砲撃を至近距離から放った。

それによってフルスイングは止まるが、念話の主から返って来たのは残念さに満ちた声音だった。

（・・・二十五点ですね。一撃の威力だけに頼った魔法では防御されてしまえば終わりです）

「ッ！！」

聞こえて来た念話にフェイトがブラックに顔を向けてみると、左腕のドラモンキラーを顔の前に移動させて、全くダメージを受けたようすがないブラックが存在していた。

（今の時に行うべきだったのは、連続系の魔法で距離を少しでも取る事です。一撃ならば片手で防御出来ますが、連続では両腕を使わざるえなかった。これで漸く五十点。満点は連続系の魔法を連発で撃ち続け、相手の体が煙に包まれて視界が完全に遮られた後、高速移動して位置を完全に掴ませなくしてから情け容赦の無い砲撃ですね。それによってダメージが通ったと判断すれば接近戦・・・（まぁ、コレはあくまで完全体レベルでの話ですから、ブラックレベルは難易度が一気に跳ね上がりますけど））

声の主ーフリートは非常に残念な気持ちに支配された。
少しでもブラックと戦えるようにフェイトに忠告を告げているのだが、余りにもフェイトには己よりも強い者の相手への戦闘経験がなかった。
持って生まれてしまった絶対的な才能がフェイトやはやての成長を完全に潰してしまっているのである。以前なのはとティアナを教導した時にもフリートは思ったが、如何にも管理世界は魔法と言う才能に拘り過ぎている。魔法以外でも充分すぎるほどの才能は存在しているのに、それに目を向けようとしない。
その為に幾つもの素晴らしい才能は見られる事無く、最終的には魔力と言う才能だけが見られてしまう。
確かに魔法を使う上で魔力が多いに越したことはないが、魔法だけに頼った戦いは何れ限界が訪れる。
しかし、フェイト達の魔法の才能の限界は余りにも高過ぎた。限界が高過ぎた故にフェイト達は己の力に自惚れてしまっている。
何せ言う事を聞かなければ力で相手を押さえれば良いと言う考えが無意識の内に第一に来てしまっているのだ。
言うなればフェイト達が今まで築き上げた功績は、最終的に魔法と言う絶大な才能を持ってして築き上げられた功績で在る。
この場合はブラックも同じだろう。ブラックもまた絶大な力で己を恐怖の代名詞とまで呼ばれる存在に至らせた。だが、両者には決定的な違いが存在している。
それはフェイト達は己のしている事は“全て正しい”と思っている点である。
ブラックは己が正しいなどと思っていない。今は共に戦っている者達とも何れは激突すると確信さえもしている。しかし、止めろと言われて止める気はブラックにはない。己が立ち止まるのは己が死ぬ時。
そう決めているブラックは、例え全ての世界から否定されても己の歩みを止める気はなかった。

だが、フェイト達の場合は完全に違う。自分のやってる事は全て正しいと自分達自身も思っている彼女達は、己の行動こそが世界を救う“正しい”行動だと認識してしまっている。
仮に反対の意見が出ても、己の絶大な力とフェイト達を肯定してしまっている者の手によって完全に潰されるか、或いは力でねじ伏せてから、優しい言葉で弱った相手を自分と同じ思想に染め上げられてしまうかである。
しかし、今その力が完全に通じない相手がフェイト達の前に現れた。
絶大な力を持ち、否定されようとも迷いなき信念のままに力を振るうブラック。
伝説の地の主にして、魔法さえも力の一部としか思っていないフリート。
古来より力で築き上げられたモノは、同じように力によって潰されている。今その時がフェイト達に訪れたのだ。
話は戻すが、常に高みを目指しているブラックと己の力に自惚れてしまっているフェイト達では、実力どころか精神的な差も圧倒的に存在している。
その差を少しでも埋めようと、嫌がらせ的にフリートは戦い方を念話で指摘しているのだが、フリートの予測以上にフェイトには己よりも実力が圧倒的に上の戦闘者との経験がなかった。
その為に、全くフリートの指摘を活かす事がフェイトには出来ていない。

「ハァ、ハァ、ハァ」

「やはりこの程度だったか。貴様らは俺が求めている強い奴ではない」

「黙れ！！」

ーーーガキィィィーン！！

叫ぶと共にフェイトは右腕に持っていた大剣状態のバルディッシュ・アサルトを振り下ろしたが、ブラックは右腕のドラモンキラーで簡単に防いだ。

その事実にフェイトは悔しげに顔を歪めるが、ブラックはつまらなそうな顔をしてフェイトをヴォルフラムの甲板に向かって弾き飛ばす。

「フッ！！」

ーーーバキィィィィィーーーン！！

ーーーードスッ！！

「ガッ！！」

弾き飛ばすと共にバルディッシュ・アサルトの完全閉鎖型の魔力刃は砕け、その中の一際大きい刃がフェイトの右肩に深々と突き刺さった。

同時にフェイトの体はヴォルフラムの甲板に激突して、全身の骨が砕けてしまうかもしれないほどの衝撃に晒されてしまう。

ーーーードゴオオオオオオオオオン！！

「アッ！！・・・アァ・・・」

「フェイトさん！！」

「フェイトちゃん！！」

落下して来たフェイトを目撃したはやてとスバルは急いで駆け寄ろうとする。

しかし、駆け寄っている直前に凄まじい殺気を感じたスバルは無意識の内に隣を走っていたはやてを突き飛ばし、自身も急いで横に飛び去ると同時に二人の間にブラックが落下して来る

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ほう、やはり貴様は少しは有望なようだな」

「クッ！！」

自身の奇襲をギリギリのところで避けたはやてとスバルを眺めながら、ブラックは楽しそうな笑みをスバルに向けた。

特別救助隊の一員であるスバルは、知らない内にはやて達以上の危機察知能力を得ていた。何よりもスバルは在る意味ではなのは達以上に自身の力に満足していない。それ故に無意識に近い形で高みを目指していたおかげで、ブラックの完全な奇襲も避ける事が出来たのだ。

だが、それは運が良いと言う意味ではない。逆に漸く見つけた面白そうな存在に、ブラックは怒りとは違う歓喜が湧き上がっていた。

それを表すようにブラックは、もはや苦痛に苦しんでいるフェイトと右腕を失ったはやてには目も暮れず、自身に向かって油断無く構えを取っているスバルに目を向ける。

「・・・そのデバイス？・・・・そうか、貴様がこの世界のクイントの成長した娘か」

「ッ！！なんで母さんの事を知って！？」

「面白かったぞ、奴は。勝てないと分かりながらも、全身の骨が軋みながらも立ち上がって俺を楽しませた。貴様も少しは俺を楽しませろ！！」

ーーービュン！！

（右ッ！！）

ブラックが高速移動すると同時に、直感から右側から攻撃を来るのが分かったスバルは、何も考えずに体を沈ませ、振り抜かれたドラモンキラーを避けた。

その様子にブラックはますます歓喜を募らせ、次々とドラモンキラーをスバルに向かって振り抜いていく。

「オオオォォォォォォォォーーーーーー！！！」

（左！上！右！そして此処で反撃！！）

ーーーガァァァァァーーーン！！

「ククククッ！！やはり奴の娘だ！！其処に居る才能に溺れた連中は違う！己の力に満足していない貴様は面白いぞ！！」

一瞬の隙をついて攻撃して来たスバルの一撃を防ぎながらブラックは歓喜の声を上げた。

逆にスバルはその様子に尚更危機感を募らせていた。今の一撃は完全なカウンターだった。だが、そのカウンターさえもブラックは信じられないほどの反応速度で防御した。

圧倒的な実力の差を痛感して、スバルは少しでも距離を取るようにブラックから離れるが、ブラックはスバルの後を追う事無く、恐怖に震えている局員達に目を向ける。

「フン、覚悟も無く戦場に来た愚か者どもか・・・いや、其処で苦痛に苦しんでいる屑どもを信奉して来たのだろう。“作られた英雄”なんぞに付き従ったのが運の尽きだったな」

「作られた英雄？・・・・・一体何を言っているの？はやてさん達は本当に世界を救っている」

「・・・・・貴様も愚か者なのか？残念だ」

スバルの言葉にブラックの瞳から先ほどまでの歓喜が消え、残念さと失望が混じった視線をスバルに向けた。

何故そんな瞳が向けられるのかとスバルは困惑し、はやてや局員達はブラックの言葉の意味が分からず困惑した顔をしていると、突如としてはやて達の目の前にモニターが出現し、モニターが数字を刻み始める。

『3、2、1、0、ドッカーーーン！！！なぜなにフリート！！』

『はっ？』

モニター画面が突如として爆発したような映像に変わると同時に現れたフリートの姿に、スバル達は混乱し、ブラックは不機嫌そうに細めた瞳をモニター画面に映っているフリートに向ける。

「下らん事で時間を浪費する気か？」

『別に良いじゃないですか。これから教えるのは絶望しかないんですから。せめて始まりぐらいは明るく行きたいんですよ』

「フン、伝えるのならばさっさと伝えろ」

『了解です。では、何で機動六課が作られた英雄なのか。その理由はただ一つ！！六年前にミッドチルダを襲った未曾有の危機なんて呼ばれている『ＪＳ事件』は！！！・・・・実は管理局の自作自演同然の事件だったんですよね、コレが』

『なっ！？』

「で、出鱈目や！！そんな筈はあらへん！！あの事件は広域次元犯罪者のスカリエッティが起こしたテロ事件や！？機動六課はそれを解決した部隊や！！」

告げられた事実に局員達とスバルは驚愕と困惑の叫びを上げ、はやてはフリートが告げた事実を否定するように叫んだ。

しかし、フリートは全く気にする事無く、今度は別のモニターをはやての前に差し出しながら、説明を続ける。

『そもそも前提条件が間違っていますね。ジェイル・スカリエッティは確かに管理局から広域次元犯罪者の指定を受けていましたが、彼の正体は当時の管理局最高評議会がアルハザードの技術から生み出した開発コード『無限の欲望（アンリミデット・デザイア）』。つまり管理局のトップが生み出した人造生命体なんですよ。因みに彼を広域次元犯罪者に指定していた理由は、自分達から逃げても追えるようにする為と、万が一何も知らない局員達に捕まった時に真実が暴露されてもどうせ広域次元犯罪者の戯言だからって無視させるためですよ。その証拠にジェイル・スカリエッティを捕らえたフェイト・テスタロッサ・・・

あぁ、此方の世界ではハラオウンが付きますね。まぁ、とにかく彼女は根っからジェイル・スカリエッティだけを悪と認識していて追跡調査も満足にしなかったようですからね』

「アッ・・・・・」

フリートの言葉にヴォルフラムの甲板に倒れ伏したままだったフェイトは声を出せなかった。

そうフリートの言うとおり、フェイトはスカリエッティを捕まえた後、満足な追跡調査など全くしていなかった。ただ犯罪を犯したスカリエッティだけを捕まえ、その後の支援者などの追跡調査は全くしていない。

スカリエッティが捕まった後の追跡調査は別の人物が行っている。それ故に真実は世に明るみに出る事無く、闇の奥底に埋もれてしまった。その代償は凄まじく重かった。

『スカリエッティは捕まり、彼の違法研究のデータは管理局が回収しました・・・ですが、元々管理局が彼に行わせていた研究です。そう、管理局は、正確に言えば当時の最高評議会に汲みにしていた上層部はそのデータを手に入れ、結果・・・・地獄が生まれた』

ーーーブン!!

『ギャアアアアアアアアアアアアアーーーーーー!!!!』

『イヤアアアアアアアアアアーーーーーーーーーー!!!!』

『ッ!!』

突如としてはやて達を囲むように多数のモニターが映し出され、

その映像には泣き叫んでいる幼い子供に人体実験を繰り返している研究者達の姿が存在していた。
その余りの非道の内容に、ブラックを除いたその場に居る全員が言葉を失わざるえなかった。
無理やり魔力を持たない子供に魔力を持たせる実験。戦闘機人を後天的にも作り出せるようにする為の実験。更には人造魔導師を量産出来るようにする為の実験。その他にもありとあらゆる違法研究の数々が行われている映像がはやて達の前で流され続ける。

『酷いですよね。これだけの違法研究が行われているのに、法の守護者を名乗っている管理局は知らん振り。まぁ、支援して行っているのが管理局だから当然ですけど・・・アレ？さっき誰か『罪を重ね、非道を行う事を見過ごせない』、『その為に私達で、その為に魔法は在る』なんて事を言った女性が居ましたけど、これだけの罪と非道を見過ごしていてよく言えますね？管理局の執務官、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン』

「・・・・・」

フリートの言葉にフェイトは言葉を返せず、涙目になりながら両手で耳を塞ぎたくなった。
しかし、既にフェイトの両腕はブラックの攻撃によってまともに動く事が出来ず、フェイトは自身の周りのモニターから流れる子供達の悲痛さに満ちた叫びと苦痛に苦しむ声を聞き続ける。
それはフェイトだけではなく、まともな精神を持った局員達も一緒だった。モニターから流れ続ける映像から響き渡る子供の苦しむ声を聞きたくないと誰もが思い、耳を鼓膜が傷つくほど押さえる。
そんな中はやては何とか立ち上がり、モニターに映っているフリートを睨むように見つめる。

「・・・証拠はあるん？アンタが流しているこの映像かて、合成の可能性も在る・・管理局に不満をもっとる組織が管理局の評判を落とす為になりすましとるかもしれへん。管理局が行っていると言う決定的な証拠があらへんと・・私は信じらへん」

『良く言いますね。六年も経過していたら、大抵の証拠は闇の中で消えていますよ・・・まぁ、決定的な証拠なら在りますよ。何故魔力無効化状況も送っていないのに『ヘイムダル』なんて言う管理局自身も『黒に近いグレー』と認めている魔法が使用出来たと思います？』

「ッ！！・・・・ま、まさか？」

『クス、私が送ったんですよ。六年前の『ＪＳ事件』の真相。管理局の深過ぎる闇。その全てを私とブラックの顔写真付きで送ったら、管理局の上層部は慌てふためいて『ヘイムダル』の使用許可を与えたでしょう？喜んで欲しいですね。色々と手続きが必要だった『ヘイムダル』の使用許可を一瞬で与えて上げたんですから・・・クスクス、ハハハハハハハハハハハハッ！！』

「な・・なにもの・・・何や・・・・管理局のシステムに簡単に侵入出来る・・・力を持ったアンタは！？」

『クスクス、そう言えば凶鳥（フッケバイン）には名乗りましたけど、貴女達には名乗っていませんでしたね。私の名前はフリート。フリート・“アルハザード”』

『・・・・・えっ？』

告げられたフリートの名前に、その場に居る全員が呆気に取られ

た声を出した。
　アルハザード。それは次元世界では御伽噺と言われ、誰も実在を証明出来る事が出来なかった世界の名。在ると言われいるが、実際に辿り着いた者は存在せず、ただ一部の技術だけが次元世界に残されている世界。
　だが、今その世界の実在が何の前触れも無く管理局に告げられた。ただ自然に、何の躊躇いも無くフリートは自身の正体をアッサリと世に明るみにしたのだ。
　其処までアッサリと正体を告げながら、何故今更伝説の地の存在が現れたのかとブラックを除いた全員がフリートに顔を向けると、フリートは何でもないように話し出す。

『何で今まで現れなかったって言う顔ですけど、出来る訳ないでしょう。私の世界が残した技術は悪用され、正義を名乗りながら、裏では犯罪を行為を容認する組織が世界の中心になっている。そんな世界にアルハザードの絶大な技術が渡ってみなさい。確実に世界は管理局の支配化に置かれて碌な結末が生まれない。私がエクリプスワクチンを渡さない理由はただ一つ。管理局が信頼も信用も出来ない組織だからですよ。自分達で『人造魔導師と戦闘機人計画』を考えながら、自分達は実行していないと言うように語って世に流した。結果、違法研究は“珍しく”もない事実になってしまっている。そんな世界にアルハザードの技術と力は渡せませんね』

「・・・アンタが本当にアルハザードの人間なら・・・管理局の人材不足も解決出来て・・違法研究も無くなる筈や」

『あぁ、それ無理ですよ。確かに私の技術の中には普通の魔力が無い人物でも魔導師になれる技術が在りますけど、無理なんですよ。だって、この技術が世に出ても管理局は絶対に認めない。何故ならば貴女達が所属している管理局の上層部は、魔法至上主義に凝り固

まった連中。そんな彼らはその技術を認める事は無く、同時に高ランクの魔導師達もその技術を絶対に潰すでしょう。高ランク故に許されていた特権は、その技術故になくなってしまう。そんな事を贅沢に慣れ親しんだ高ランクの管理局の魔導師達は認めません。当然、貴女に与えられていた幾つかの優遇も消え去るでしょう。そうなった結果を認められます？』

「・・・・・・」

フリートの質問にはやては答える事が出来なかった。

自身だけならば確かに高ランク故の待遇など捨てられるが、他の魔導師達までも捨てられると聞かれれば、答えは否としか言えなかった。管理局とて一枚岩ではないとたった今示された。

本当に人の役に立つ技術は認めず、人を苦しめる技術を使って苦しむ者を世に生み出しているのが、管理局の闇なのだ。人造魔導師計画で完成して生まれるのは全て素晴らしい魔導師の才能を持った子供。

それ故に高ランクの魔導師として登録すれば、正体が分かる事無く魔導師の優位性だけを知らしめる事が管理局には出来るのだ。

『これが現実です。世界は貴女だけの意思では決まることはない。私の技術を渡して悪用された時、責任を取れますか？・・・・無理でしょう？そう管理局の闇は余りにも深くなり過ぎた。六年前の時はギリギリなんとかなるかもしれませんでした。ですが、今更六年前の真実を世に明るみには出来ない。明かるみになればミッドの人々は怒りと憎悪に燃えて、管理局に襲撃を行うでしょう。“実は全部管理局から始まった事件でした”。“自分達は上層部の不始末を解決しただけです”。それが機動六課が行った事の真実ですよ』

『・・・・・・』

もはや誰も言葉を出す事が出来なかった。
如何考えても六年前の『ＪＳ事件』には、管理局の非が在った事は明白。しかし、それを今更裁く事は誰にも出来ない。六年も経てば当時の証拠など残っていないし、残っていても管理局自身の罪なので完全に握り潰されてしまう。
更には事件は完全に解決したと、管理局自身が自信満々に発表してしまっているのだ。明らかになれば管理局の信頼と信用は地に落ちるどころか、ミッドチルダの人々に憎しみと怨嗟の叫びを上げられるだけではすまないだろう。
それが機動六課が見逃した赦されざる管理局の犯した大罪。見逃さずに当時の英雄と呼ばれていた機動六課が世に明るみにしていれば、管理局の闇は少なからず沈静化して違法研究も僅かながらも治まっていただろう。しかし、機動六課は起きただけの結果を解決して、全ての元凶を残したまま事件を終わらせてしまった。
その事実に辿り着いたはやては全身から力が抜けて膝を着きかけるが、そうなる前にブラックがはやての首を掴みあげる。

ーーーガシッ！！

「まだ、終わっていないぞ？貴様らに与える絶望はこの程度では終わらん。フリート」

『はいはい、次ですね。えぇ、それでは次は“何故『聖王のゆりかご』なんて言うロストロギア”がミッドチルダに眠っていたのかと言う事実ですけど、コレは簡単ですね。管理局が隠したんです。“自分達の戦力”として使う為に、スカリエッティに命じて聖王の遺伝子を盗んだんですよね。いや～凄い事してますね。自分達でロストロギアの使用を禁じているのに、ロストロギアを使用としていたんですから。何が法の守護者なんですかね？』

「だそうだ。随分な自作自演同然の事件だな、『ＪＳ事件』と言う事件は？」

「・・・・うそや・・・こんなの・・・全部・・・・・うそに・・・・・決まっと」

「フン、嘘だと思ったところで結果は変わらん・・・いや、変わっていたか。自分達の都合の悪い事実を隠して、都合の良い事実だけに変えるのが管理局だったな」

『本当に酷いですね。だから、そんな事が起きないように、実は『ヘイムダル』を使用する場面ですけど、この世界ールヴェラの行政府に送っておいて上げましたよ』

「ッ！！」

『ちゃんとあんな質量兵器紛いの魔法の使用許可は、本部や本局だけじゃなく使用する世界にも取るべきでしたね。ルヴェラの行政府の人達、保護指定にしている自然を壊されていたかもしれない事に怒りが燃え上がって、今頃管理局本局に抗議の連絡を行っているでしょう。で、ブラックは逆にルヴェラの島々を護った英雄として扱われるでしょう。だって、フッケバインが海面に落下した時に発生する津波を引き起こさないようにして、近くの島々を護ったんですから・・・物事は見方で変わるの資本ですね。クスクスクス』

「あぁ・・・ァ・・」

フリートが告げた事実にはやては掠れた声を出し、完全にその瞳は絶望感に満たされた。

完全に特務六課は追いつめられてしまった。例えブラックから奇跡的に逃れても、ルヴェラからの抗議がその後に待っている。当然、管理局はその抗議から逃れる為に『ヘイムダル』の使用者であるはやてを切り捨てる。
管理局の信頼と高ランクとは言え、一局員でしかないはやて。どちらを取るかなど決まっており、特務六課の司令であるはやてだけを裁いて全てなかった事にする。
それだけで管理局の信頼は護れるのだから、上層部は平然とはやてを切り捨てるだろう。生き残っても絶望しかない事にはやての中の何かが完全に砕けた。
その音を聞いたブラックはつまらそうな顔をしながら、はやてを全力で局員達に向かって投げつける。

「お前らが信じた奴の成れの果てだ。受け取れ！！」

ーーーブン！！

「はやてさん！！」

はやてが投げられるのを目撃したスバルは、急いで走り出し、はやてを受け止め、その瞳に目を見開いた。
もうはやての瞳には絶望しかなかった。今まで築き上げた全てはブラックとフリートと言う最悪な二人組みに完全に粉砕され、生き延びても地獄しかはやてには待っていない。
その現実を信じたくないのか、幾らスバルが呼びかけてもはやては何に応じる事無く、ただ絶望感に染まった瞳で何処か遠くを見つめているだけだった。
スバルはその事実に悲しげな顔をして顔を俯かせていると、ブラックはゆっくりとまるで恐怖をジワリジワリと味合わせるようにはやて達の下に歩む。

ーーードン！ドン！！ドン！！

『ヒィッ！！』

「そろそろ終わりにするぞ。この後はフリートの用事が在るんでな」

そうブラックは恐怖に駆られている局員達に言葉を告げると、ゆっくりと両腕のドラモンキラーを構える。

しかし、その直前に全身がボロボロになりながらも赤いゴスロリ服の騎士甲冑と纏って、手に後方部分に大型加速推進ブースターを備えた機械的な戦槌ー『ウォーハンマー』を握ったヴィータと、緑色の僧侶のような騎士甲冑を着てクラールヴィントを構えたシャマルがブラックの前に立ち塞がる。

「や、やらせねぇぞ！！」

「これ以上は、はやてちゃん達を傷つけさせないわ！！」

「ほう、流石は守護騎士か。例え人間に近づいていても、主の危機には埋め込まれているプログラムが無理をさせると言う事か」

「ッ！！なんで貴方が私達の正体を知って！？」

「ルインが居ないのが非常に残念だな。居たならばお前達を殺させたものを」

そうブラックはシャマルとヴィータを眺めながら呟くが、すぐさま両腕のドラモンキラーを構えなおしてシャマルとヴィータに飛び掛かる。

シャマルはそれを予測していたのか、事前にペンダルフォルムに変えていたクラールヴィントを操り、ブラックの進んでいる方向に巨大な楯を幾重も展開する。

「風の護盾よ！！」

「ドラモンキラーーーー！！！」

ーーーバキバキバキバキィィィィーーーン！！

シャマルが展開した堅牢な防御魔法を“風の護盾”をブラックは右腕のドラモンキラーで目の前に展開された風の護盾を全て破壊し、そのままシャマルとヴィータに襲い掛かろうとする。

しかし、その行動が分かっていたシャマルとヴィータは、即座に立っていた場所から飛び退き、迫っていたブラックの一撃を避けた。

幾ら攻撃力が在っても、幾重にも展開された障壁を砕けば威力が落ちる。シャマルは最初からブラックの攻撃を防ぐ為に障壁を展開していたのではない、僅かながらもブラックのスピードを落とす為だけに障壁を展開したのだ。

それを表すように次々とシャマルは自身の魔力を振り絞り、クラールヴィントの処理限界ギリギリまで風の護盾を展開して行き、ブラックの動きを少しでも阻害しようとする。

その顔に宿るのは死を覚悟した決意。シャマルとヴィータは自分達の主であり、家族であるはやてを護る為に決死の覚悟でブラックに挑んでいた。

（・・・・楽しかったわね、ヴィータちゃん）

（・・・そうだな・・・色んな事が在ったけど本当に楽しかったぜ）

（闇の書と別れて、はやてちゃん達と共に過ごした日々・・・本当に嬉しかったわ・・・・あの子の下に行くのが少し早くなったわね。心残りはなのはちゃんの無理を止められなかった事かしら）

（・・・シャマル）

「（後をお願いね、ヴィータちゃん。シグナムとザフィーラ、そしてアギトちゃんとリインちゃんと一緒に、はやてちゃんをお願い！！）・・クラールヴィント！！戒めの鎖！！」

ーーービュン！！

シャマルが叫ぶと共に両手の指に装着しているクラールヴィントのワイヤーが一斉に伸びて、風の護盾を粉砕しながら進んで来るブラックを捕らえようとする。

しかし、自身に向かってワイヤーが伸びて来るのを目撃したブラックは、業と右手に戒めの鎖を巻きつかせ、そのまま右手を全力で振り抜く事で引き千切り、魔法を発動させて動きが止まってしまったシャマルに一瞬で近づく。

そのままシャマルの体をドラモンキラーで貫こうとするが、その直前にシャマルごとブラックは足元の甲板から現れた拘束条に貫かれてしまう。

ーーードスドスドスッ！！

「ヌッ！！」

「鋼（はがね）の軛（くびき）・・・対象の動きを完全に停止させる魔法・・幾ら貴方の力が強くても…」

ーーーバキィィィン！！

「ッ！！」

シャマルが言葉を呟いている途中で、ブラックは何でもないというように全身に力を込めて鋼の軛（はがねくびき）をアッサリと破壊した。

その事実にシャマルは目を見開くが、ブラックは構わずに鋭く煌いているドラモンキラーの爪先をシャマルの胸元に深々と突き刺す。

ーーーードスウゥゥゥゥゥゥゥーーーン！！

「ッ！！」

「シャマル先生！！！」

ドラモンキラーに胸元を刺し貫かれたシャマルを目撃したスバルは悲痛さに満ちた叫びを上げた。

しかし、ブラックは構う事無く刺し貫いたシャマルを放り投げようとするが、その直前に刺し貫いたままのドラモンキラーにクラールヴィントのワイヤーが巻きつく。

ーーーーガシィィィィーーン！！

「なに？」

「グッ！！・・・こ・・コレを・・・待っていたわ・・・幾ら貴方でも逃げ場の無い頭上からの強烈な攻撃は・・防げないでしょう？」

ーーーーガシガシガシガシガシガシガシィィィィィーーン！！

シャマルが苦痛に苦しみながら言葉を言い終えると同時に、ブラックとシャマルの動きを完全に封じるように風の護盾が無数に引き締めあうように展開された。
流石にブラックでも連続して重ねているような障壁は一撃では全て破壊できず、また右腕のドラモンキラーは刺し貫いているシャマルの戒めの鎖のせいでまともに動かない。
自身と共に心中しようとしているシャマルに気がついたブラックは、険しい視線を魔力分解が始まって来ているシャマルに向けると、同時に頭上から悲しみに満ちた叫びが轟いて来る。

「ウワアアアアアアアアアアーーーーーーー！！！！！ウォーーハンマーーーー！！モーーード！！プラズマパイル！！最大出力！！」

≪Ｐｌａｓｍａ（プラズマ）　Ｐｉｌｅ（パイル）！≫

ーーーバシュン！！

ヴィータの叫びに応じるように『ウォーハンマー』の先端から強力な貫通破砕能力を持ったプラズマパイルが発生した。
そのままヴィータは『ウォーハンマー』を掲げて、ドラモンキラーに刺し貫かれたままのシャマルとその場から逃れようとするように左腕で引き締めあうように展開されている風の護盾を破壊しているブラックに目を向ける。
自身の消滅が近づきながらもシャマルの瞳には後悔も何も無かった。全てを覚悟し、これから起きる事を全て受け入れるような瞳をしながらヴィータに向かって最後の力を振り絞るように叫ぶ。

「やりなさい！！ヴィータちゃん！！！！」

「シャマル！！ウワァァァァァァァァァァァーーーーーーー！！！！！！！」

（さようなら・・・皆・・はや・・・て・・ちゃ…）

ーーードゴオオオ

り抜いてみせるからよ・・・だから、安心してくれよ」

そうヴィータは居なくなったシャマルに決意に満ちた宣言を告げるが、そのヴィータにモニターに映ったまま感動したように涙をハンカチで拭いているフリートが声を掛ける。

『ヒック、ヒック・・・素晴らしい行動でした。仲間と家族の為に散った騎士・・・グスッ！、本当に感動しましたよ！』

「・・・うっせぇ！！次はテメエだ！！知っている事を洗いざらい吐いて、管理局に連行してやる！！」

『アッ、それ無理ですよ。だって』

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

『ッ！！』

突如として響き渡った凄まじい音に、ヴィータや命が助かった事を喜んでいた局員達は目を見開きながら顔を向けてみると、プラズマパイルが振り下ろされた場所から僅かに離れた場所の甲板が吹き飛んでいた。

その事実にその場に居る全員がまさかと思いながら甲板が吹き飛んだ箇所に目を向けると、それはゆっくりと現れた。

その事実を誰もが信じられず言葉を失っていると、フリートは何でもないと言うように恐怖に震えているヴィータに声を掛ける。

『ブラックがあんな方法でやられる訳ないですよ。膨大な数の戦闘をこなして来たブラックの前では、決死の覚悟で挑んだ策も撃ち破られてしまうんですよね』

ーーードゴォン！！

フリートが何でもないように言葉を告げると共に全くダメージを受けた様子が無いブラックが、再び甲板上に足を踏み出し、恐怖に震えているヴィータ達を見回す。

「中々に面白い行動だったぞ。だが、それを目にしても俺の苛立ちは治まらん。さぁ、続きを始めるぞ。貴様らの絶望の続きをな！！」

そうブラックは宣言すると共に全身から殺気を放出して、獲物であるヴィータ達に向かって襲い掛かる。

特務六課の絶望と恐怖は終わらない。湖の騎士と言う掛け替えのない仲間が散っても、漆黒の竜人の暴走は止まらず、惨劇は続くのだった。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　後編　さ

今回も原作キャラの死亡者が出ました。
なお複数です。恐らく次回で凶鳥側にも出ます。

全員では無いにしろ、凶鳥側は二人ぐらいは確実に出ます。
まぁ、その他のメンバーも報いは受けますが。

原作キャラ死亡者が嫌な方々、本当に申し訳ありません。
今回の特別編ではもう自重しない事に決意を固めました。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　後編　さ

「ガアァァァァァァァァァァーーーーーーー！！！！！」

『ヒィッ！！』

恐怖しか与えない咆哮を上げながら迫って来るブラックを目撃した局員達は、我先へと逃げ出そうとする。

もはや彼らの中には自分達が世界を護る管理局員だと言う想いはない。ただブラックから逃げようと仲間意識さえも無く、甲板の入り口に向かって走って行く。

そうはさせないとブラックは瞬時に高速で動き、逃げようとした局員達を次々とドラモンキラーで深々と切り裂き、甲板を大量の血で赤く染めていく。

ーーーブザン！！ザン！！ザッシュゥゥゥーーー！！

『ギャァァァァァァァァァァーーーーー！！！！！』

「止めろオォォォォォォォーーーーーー！！！！！」

次々と血の海に沈んでいく局員達を目撃したヴィータは、目から大粒の涙を流しながら『ウォーハンマー』を構えてブラックに飛び掛かった。

それと共に『ウォーハンマー』から再びプラズマパイルが発生し、ヴィータは『ウォーハンマー』を最大加速させて極超音速でブラックに向かって『ウォーハンマー』を振り抜こうとする。

だが、振り被ったと同時にヴィータの懐に一瞬の内にブラックは現れ、『ウォーハンマー』を握っているヴィータの両手を握り潰す。

ーーーグシャッ！！

「ウアァァァァァァァァァーーーーーーーー！！！！！」

「うるさい」

ーーーードゴオオォォン！！

「グフッ！！」

両腕を握り潰されて苦痛の叫びを上げているヴィータの首元をブラックは掴み上げると、そのまま甲板に勢いよくヴィータを叩きつけた。

その衝撃にヴィータの意識は朦朧とするが、ブラックは構わずにヴィータの首を掴み上げる。

「貴様の攻撃は振り抜かなければ無意味だ。武器も如何やら大型用。そんな武器では懐に入られれば終わりだ」

「・・・な・・ん・・・で・・だ・・よ」

「ん？」

「何で・・・生きてんだよ・・・・シャマルと一緒に消えた・・・筈なのに・・」

「フン、確かにあの女の行動で四方に逃げ場はなく、頭上から貴様の一撃が振り下ろされた。だが、一箇所だけ逃げ場が在ったぞ。俺の“足元”だ」

「ッ！！・・まさか・・あの時の行動は・・・」

ブラックの言葉にヴィータはプラズマバイルを振り下ろす直前のブラックの行動を思い出した。

そう、ブラックは最初から自身の足元から脱出する為に、四方から引き締めあうように張られていた“風の護盾”を左腕のドラモンキラーで僅かながらも破壊していたのだ。足元にドラモンキラーを振り下ろす為には僅かながらも隙間が必要だった。

だからこそ、ヴィータがプラズマバイルを振り下ろす前に“風の護盾”の隙間を開ける為に破壊し、ブラックはプラズマパイルが振り下ろされると同時に足元にドラモンキラーを全力で撃ち下ろして足元の甲板を破壊したのだ。

そしてヴォルフラム内に入り込むと同時に素早く横に飛び去り、プラズマバイルを完全に避けた。

言葉にすれば簡単だが、それをあの一瞬の間に行うなど並大抵の者では出来ない。ヴィータの知る限りでも、出来る者はいないと断言出来る。

しかし、今その奇跡の領域の行動が出来る者ーブラックがヴィータ達の敵として目の前に存在している。

因みにブラックのドラモンキラーに取り付いたままだったシャマルは、ヴォルフラム艦内に降り立つと共に迷い無くブラックはプラズマパイルの中に投げ捨てた為に、プラズマパイルの衝撃と威力で跡形も無く消滅した。

自分達が何を敵に回してしまった事を理解したヴィータは、全身を恐怖に震わせてブラックを見つめると震えながら恐怖に染まっている声を出す。

「・・あ・・悪魔め・・・・」

「それが如何した？俺を悪魔と思いたければ勝手に思えばいい・・・俺が貴様らを滅ぼす事に変わりは無い！！」

ーーードスッ！！

「グフッ！！」

「ヴィータさん！！」

ブラックの左腕のドラモンキラーに腹部を突き刺されるヴィータを目撃したスバルは、ヴィータを助けようと駆け出す。

しかし、そのスバルの動きをブラックは既に読んでいたのか、素早くスバルに向かって体を向けると、ドラモンキラーに突き刺さったままのヴィータを勢いよくスバルに投げつける。

「受け取れ！！」

ーーーブン！！

「ウワッ！！」

ーーーガシッ！！

投げつけられたヴィータをスバルは慌てて受け止め、そのままヴィータの状態を確認しようとする。

その直前、ゾクリとスバルの中の本能が恐怖を覚え、ヴィータを抱いたまま横に飛び去った。

同時にブラックがドラモンキラーを突き出しながらスバルとヴィータが居た場所を通過し、ブラックは面白そうな笑みをスバルに向ける。

「やはり貴様の危機察知能力は、其処で壊れている連中よりも上のようだな」

「な、何で！？何でこんなに簡単に人を傷つけられるの！？貴方が殺した人達には戦う力なんてない非戦闘員なんだよ！？」

「ならば、何故こいつ等は此処に居る」

「えっ？」

ブラックの言葉の意味が分からず、スバルは疑問の声を上げると、ブラックは自身の足元に在る局員の死体に目を向ける。

「こいつ等は戦いが起きる場に自分達の意思でやって来た。その時点で何時死ぬかも分からん戦いに身を投じたと言う他ならん。ならば、恐怖など覚える事自体こそが覚悟が無かった証。戦いに身を投じた時点で死はどんな形でも付き纏う。今それが俺と言う形で訪れただけだ。死にたくなければ管理局など入らずに一般人として過ごせば良かっただけだ。平和を護りたいから管理局に入った？だから、死なないなど甘えでしかない」

『ですね。何かその辺りの覚悟が管理局や凶鳥（フッケバイン）には無いんですよね。自分達がやっているのに、やられるのは嫌だとか、それ我が儘でしかないですよ。まぁ、本当に偶然に巻き込まれた子は別ですけどね。そう言う子には何の手出しもしませんよ、私もブラックも。でも艦艇に乗っている局員は別です。彼らは自分達の意思で戦いの場に来たんですからね』

「・・・・・・」

ブラックとフリートの考えにスバルは完全に言葉を失わざるえなかった。
余りにも二人の考えはスバル達の考えと相反していた。戦いの場に自分の意思で出たら、その時点で死と言う宿命を受け入れている。だから殺されても文句は言えない。フリートとブラックの考えは簡単に言えばそう言う意味である
誰かを助ける為に戦っているスバルの考えと相容れない考えを持っているブラックとフリートに、スバルは如何するべきなのかと考えながら腹部から大量の血を流しているヴィータを抱えて後ろに下がっていると、フリートが残酷さに満ちた笑みを浮かべながら声を出す。

『第一ですね。充分にもう楽しい夢は見た筈ですよ。数千人の人々を自分達のミスで死なせたばかりか見殺した連中なんですから、普通に犯罪者と裁かれるべきでしょう？貴女達お得意の管理局の法とやらで？』

「・・・えっ？数千人をミスで死なせて見殺しにした？」

『そうですよ。八神はやて、フェイト・T・ハラオウン、高町なのは、そして機動六課の後見人だった連中は、ミッドチルダでジェイル・スカリエッティが暴れる事を完全ではないにしても知っていたんですよ。確か、ボケでクズで、この世から圧倒的に塵も残さず、存在自体から消滅させたい“聖王狂会”に所属しているカリム・グラシアとか言う女性のレアスキルのおかげでおぼろげながらも、『ＪＳ事件』が起きる事を事前情報で知っていた筈ですよ』

「・・・あの・・・もしかして・・・聖王教会・・嫌いなんですか？」

『大ッ嫌いですよ！！！潰して潰して、この世に生まれて来た事を死ぬほど後悔させてから血も凍るような拷問を死ぬ直前まで行い、その後に完全に治療してまた同じ事を繰り返し繰り返し、その後に電子消滅させて上げるんです！！！教会に所属しているだけで実験材料行きにしたい連中です！！！！！』

「ヒィッ！！」

恐る恐るスバルが気になった事を質問すると、フリートは憎しみに歪んだ顔をしながら叫び、スバルはその顔と叫びに恐怖の声を出した。

今の叫びだけでもフリートがどれだけ聖王教会を嫌っているのかスバルには充分過ぎるほどに理解した。同時にブラックからも聖王教会と言う単語が出てから、凍えるような殺気が漂って来ている事に気がつき、スバルはこれ以上二人を刺激しないようにする為に聖王教会関連は禁句だと心から理解した。

最も理解したところで特務六課を潰すのは変わりないので、完全に遅いのだが。

そして在る程度経つと、何とかフリートは落ち着き、ゆっくりと朗らかな笑みをスバルに向けて絶望の情報を話し出す。

『いや～見苦しいところをお見せしました。如何にもあの場所の名前を聞くと怒りが治まらないんですよ・・・（私も大切に想っているヴィヴィオちゃんを絶望のどん底に堕としてくれた連中ですからね）・・・さて、話は戻しますけど、先ほど述べた連中はカリム・グラシアのレアスキルのおかげで事件が起きる事を予見していました。此処で質問ですけど、如何やら貴女は救助隊に所属しているようですね。では、もし大地震や火災、或いは台風などの自然災害や人災が起きると分かっていたら如何行動します？』

「えっ？・・・それはもちろん起きる前に人々を避難させ・・・・・ッ！！」

フリートの言いたい事を理解したスバルは目を見開きながら、離れた場所で倒れ伏しているはやてとフェイトに目を向け、同時の自分達ー機動六課ーの行動を思い出した。

その様子にフリートは朗らかな笑みを浮かべながら、はやてとフェイトの顔の前にも、モニターを展開して再び絶望の情報を説明し出す。

『そう。起きると分かっていたら第一に行うのは巻き込まれるかもしれない民間人の避難です。ですが、当時の機動六課及び地上本部は第一に行うべきだったクラナガンの人々の避難を行っていなかったんです。まぁ、地上本部は襲撃されたせいでまともな動きは取れない状況でしたし、本局の上層部から責任追及やら何やらで思うように指令も出せなかったんですけど、機動六課は違いますよね。人的被害は確かに出ましたが、地上本部よりは少なく、何よりも隊長陣は五体満足で健在。ならば行うべきだったのは自分達の新しい拠点探しなどではなく、本局の自分達の後見人などに頼んでクラナガンの人々の避難でしょう？非公式ですが、伝説の三提督なんて呼ばれている方々も居たんですからね。でも、行わなかった。つまり、助けられたかもしれない人々を見殺しにして自分達の戦力増強に躍起になっていた。その結果が数千人のクラナガンの人々ですよ・・・何が法を護る守護者ですかね？自分達の不始末で大規模な事件を引き起こし、救えた人々を見捨てていた連中の何処が法の守護者なんですかね？』

「・・・・・」

「・・・もう・・・止めて・・」

『止めて？・・嫌ですよ。自分達の犯していた罪は確り認識して貰いますよ、フェイト・T・ハラオウン。そして壊れている八神はやて・・・高町なのはは気絶中だから教えられないのが非常に残念です』

「確かにその通りだ。奴には一番に理解して貰いたいからな」

フリートの言葉にブラックは同意を示すと、ゆっくりと甲板上に転移したまま放置されているなのはとエリオに顔を向ける。

それを目撃したスバルは、ブラックが何をしようとしているのか理解し、意識が朦朧としているヴィータを甲板上に寝かせて、ブラックを止めようとする。

だが、スバルの想いを裏切るようにブラックは高速移動を行い、一瞬の内に気絶しているなのはの前に移動し、その首を右手で掴み上げる。

ーーーガシッ！！

「フン、此処に奴が居ればコイツを如何していたと思う、フリート？」

『う～ん・・・多分ボコボコにして砲撃を雨あられに撃ち込んでいるんじゃないんですかね。何か凄く嫌うような気がするんですよ・・・（いや～居なくて良かったですね。在る意味ではブラック以上に彼女は危険です。ブラックは非殺傷設定が使えないので死ねば終わりですが、彼女達は違う。私が究極体の状態でも非殺傷設定技術をデバイスのみ完成させてしまったせいで・・・・死さえも生温い究極体の非殺傷設定魔法攻撃が可能になってしまった・・・作

らなければよかった）』

自身が生み出して技術の恐ろしさに、フリートは思わず顔を俯かせてしまった。

非殺傷設定が安全だと言うのは間違いである。何せ普通ならば死んでも可笑しくない攻撃でも死ぬ事無く、ただ苦痛だけを相手に与える事が出来るのだ。

フリートが作製した技術によって究極体の状態でも確かにデバイスによる魔法攻撃は非殺傷設定は可能になったが、究極体の攻撃は核攻撃以上の威力を持っている。幾ら威力を調節しても核攻撃が最低基準なのだから、そんなモノを非殺傷設定で受ければ拷問よりも酷い。

自身が生み出してしまった技術の恐ろしさを改めて理解したフリートは、元の世界に戻ったらデバイスの機能からオミットしようと心に決める。

ブラックはその様子を横目で確認すると、もはや時間を無駄にする気はないと言うようになのはの首を握っている右手に力を込める。

「起きろ」

ーーーメキッ！！

「グッ！！ウゥゥゥゥッ！！」

「なのはさん！！」

急激に喉元を圧迫され息が出来ずに目を覚ましたなのはは、眠っていたおかげで感じずにいた全身を奔り回る激痛と息が出来ない苦しみに苦痛に顔を歪めた。

その様子を目撃したスバルは、なのはを助けようと駆け出すが、

もはやブラックはスバルにも手加減する気がないのか、スバルの危機察知を上回る速さで背後になのはを掴みながら移動する。

ーーービュン！！

「ッ！！・・・うそ・・」

「フン、安心しろ。この女はまだ殺さん。この女にも絶望を味合わせないと気がすまんからな！！」

ーーードゴォン！！

「ガッ！！・・・・アァ・・・・・・フェイトちゃん・・・・・・はやてちゃん？」

言葉と共に甲板に投げ捨てられたなのはは、全身を襲う激痛に苦しみながらも目から完全に光を失って、右手が無くなりながら倒れ伏しているはやてと、左腕が複雑に何箇所も骨折して、右肩に深々と何かが突き刺さっていたように血を流して目から涙を流しているフェイトに言葉を失った。

少し前までの二人はそんな顔をしていなかった。自信に溢れて事件を解決しようと言う意気込みが在った筈。なのに今の二人は完全に何かがへし折れてしまったように、瞳からは絶望しか宿っていない。

自身が気絶している間に何が在ったのかと疑問に思いながら、なのはは立ち上がろうとするが、全身を襲う激痛に立ち上がる事が出来ずに倒れ伏してしまう。

「グゥッ！！」

『あぁ、止めて於いた方が良いですよ。だって、もう二度と貴女は一人では立ち上がれない体になっているんですからね』

「・・誰なの？・・・貴女は？」

『フリート・アルハザード。貴女達に絶望を与えて、ブラックに滅ぼさせる悪魔ですよ』

「ッ！！・・うそ・・アルハザードって・・・・・フェイトちゃんの・・・お母さんが向かったお伽話の場所じゃ？」

『ん？・・・・アッ！！そう言えば昔同じ事を聞かれましたね！！プレシア・テスタロッサにアリシア・テスタロッサとか言う二人が来なかったかどうか！！』

『ッ！！』

フリートの言葉になのはとフェイトは目を見開き、フェイトは険しい顔をモニターに映っているフリートに向けて質問する。

「答えて！？母さんは！プレシアお母さんはアルハザードに居るの！？」

『居ませんよ。アルハザードは確かに虚数空間の奥深くに世界ごと存在していますけど、虚数空間に世界ごと居る為と環境を護る事も在って、常に強力な防壁を世界を包み込むように展開しているんです。だから、専用の転送装置や魔法陣に、或いは事故や何かで奇跡的な偶然がない限りアルハザードには来れません。多分ですけど、プレシア・テスタロッサとアリシア・テスタロッサは何の準備もしていない状況で防壁に触れて跡形もなく細胞レベルで消滅したんじ

ゃないんですか？』

ーーーバキィィィーン！！

「・・・・そ・・そんな・・・母さんが・・死んでいた・・」

フリートが告げた事実にフェイトはショックを隠す事が出来なかった。

可能性としては充分に考えられたとは言え、それでも改めて一方的にとは言え慕っていた母親が死んだ事実は、やはりフェイトに凄まじい衝撃を与えた。

自分達が行っていた行為の結果だけではなく母親であるプレシアの死まで知らされたフェイトの瞳は、はやて同様に闇の奥底に沈もうとするが、そうはさせないとフリートが声を掛ける。

『逃げても話は続きますので無駄ですよ。では、今度は貴女達が機動六課時代に犯した最大級の罪を教えて上げましょう。実はですね。『ＪＳ事件』って起きない可能性も充分過ぎるほどに在ったんですよね』

「えっ？『ＪＳ事件』が起きなかった？・・・・・・一体何を言っているの？」

フリートの言葉に状況がよく分からないなのはは疑問の声を出すが、他のメンバーは全員が顔を暗くするしかなかった。

今までのフリートの説明は充分過ぎるほどに納得出来る説明。そのフリートが『ＪＳ事件』は起きなかったかもしれないと告げたのだから、本当に起こらずに済んだ可能性が在ったのだろう。

同時に更に自分達に絶望が降りかかる事を理解したフェイトは強く目を閉じ、スバルは何が知らされるのか怯え、何とか意識がハッ

キリしたヴィータは甲板を這いずりながら進み、ブラックの足元に辿り着いて涙を流しながら甲板に額をつける。

「もう止めてくれ・・・頼むヨォ・・・これ以上は・・・もうヤメテクレェ・・・何でもする・・・お前らの言う事だって・・・何でもキクから・・・だから・・・もう本当に・・・」

「ヴィータちゃん！？」

平伏するように涙声でブラックに命乞いを繰り返すヴィータを目撃したなのはは、驚愕せざるえなかった。

ヴィータがどれだけ意地っ張りなのかをなのははよく知っている。それこそ命乞いするぐらいならば抗って死んだ方がマシだと言うのがヴィータである。

しかし、今そのヴィータが涙声でブラックに土下座するように命乞いを繰り返している。

完全に心が折られてしまっているヴィータの様子をなのはは信じられないと言うように見つめるが、スバルや生き残っている局員達は心の底からヴィータの気持ちを理解出来ていた。

ブラックの暴虐はそれほどまでに凄まじいものだった。シャマルと言う犠牲を出しても倒すどころか、ダメージを与える事も出来ず、更にはSランクオーバーのフェイトでさえも何も出来ずに倒されたのだ。

もはや命乞いをして見逃して貰う以外にブラックの暴虐を目撃した誰もが思っていた。だが、命乞い程度で赦さないのがブラックだった。

ーーーガシッ！！

「アァ・・・アァ・・・」

無言でブラックは甲板に張り付くように土下座をしていたヴィータを掴み上げた。
もはや抵抗出来るだけの力がないヴィータは、ブラックの殺気が混じった瞳に恐怖の声を上げるが、ブラックは気にする事無く声を出す。

「今更命乞いか？俺は一度貴様らを見逃した。二度目が在ると思っているのか？」

「・・・頼む・・・本当に・・何でもする・・・だから・・もう誰も・・・傷つけないでくれよぉ・・・頼むから・・」

「ほう、何でもするか？・・・ならば、貴様の手で八神はやてを殺せと命じてもか？」

『なっ！？』

ブラックが告げた余りに酷すぎる要求内容にフリートを除いた誰もが驚愕した。
しかし、ブラックはまるで気にした様子もなく、首を弱々しく横に振るっているヴィータに声を掛ける。

「安い話だろう。高々小娘一人の命で、他の連中が助かるんだ？何でもするのだろう？」

「・・・・・出来ねぇ・・・はやてを・・・殺すなんて・・・あたしには・・・出来ねぇよぉ」

「フン、よく言えたものだ。貴様は先ほど俺に引っ付いていた女を

俺ごと消滅させる気だった筈だ。最も貴様の攻撃で死んだのは、あの女だけだったがな」

「ッ！！・・・・・・・・ハハ・・・・・・ハハハハハハハハハハハハハハッ・・・・・ハハハハハハハハハハハハッ・・・・・そうか・・・・シャマルは・・・・あたしが殺したのか・・・・・ハハハハハハハハハハハハッ・・」

「・・・ヴィータさん」

「・・ヴィータちゃんがシャマルさんを殺した・・・・うそ」

壊れたように痛々しく笑うヴィータの姿に、スバルは顔を横に逸らし、なのははシャマルをヴィータが殺した事実を信じられないと言うように声を出した。

しかし、現実にシャマルはヴィータの一撃で紛れもなく消滅した。その事実を改めて知ったヴィータは壊れたように笑い続け、胸元に入れていた待機状態のクラールヴィントは甲板上に軽い音と立てながら落下した。

ブラックはその様子をつまらなそうに眺めると、ゆっくりとヴィータを掴んだまま上空に目を向け、左腕のドラモンキラーの先に赤いエネルギー球を作り上げる。

「如何やら貴様は忘れているようだから思い出させてやろう。一度始まった戦いに！命乞いなど無意味な事をな！！」

ーーーブン！！

「ヴィータちゃん！！」

「止めろおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉーーーーーー！！！！！！！」

上空に高く投げられたヴィータを目撃したなのはは叫び、スバルはブラックの行おうとしている事に気がつき叫んだ。

しかし、二人の想いを踏み躙るように極限にまで圧縮を終えたエネルギー球をブラックは迷う事無く上空でもはや動く意志さえもないヴィータに向かって全力投球する。

「ムン！！」

ーーービュン！！

（・・・・はや・・て・・・・・）

ーーードゴオオオ

『流石はブラック。エネルギー球の圧縮率が以前よりも上ですね。彼らは今の状態の調整ぐらいにはなるんじゃないんですか？』

「なる訳ないだろうが。今の俺は完全に回復していない状態で目覚めたのだからな」

『そう言えばそうでしたね』

「・・・えせ・・・・かえせ」

「ムッ？」

漂って来てくる殺気にブラックは殺気の源であるスバルに目を向けると、スバルは怒りに染まった顔と“金色”に輝く瞳に変わり、戦闘機人モードにスバルは移行した。

「ヴィータさんをシャマルさん！！返せえぇぇぇぇぇぇぇぇーーーー！！！！！！」

ーーードオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ほう」

『コレは興味深い状況です。戦闘機人『タイプゼロ・セカンド』。あのクイントさんの遺伝子から生まれた存在・・・・興味深いですね』

「フッ、漸く少しは楽しめそうな相手が現れたか。良い殺気だ。俺を殺したくてしょうがないという殺意・・・やはり戦いはこうでは

なくてはな！！」

「黙れえぇぇぇぇぇーーーーーー！！！！！」

ーーーギュウゥゥゥゥゥゥーーーン！！！

スバルは叫ぶと同時に両足に装着させているマッハキャリバーAXを急加速させて、ブラックに向かって突進する。

それを目撃したブラックは身構えるようにドラモンキラーを構え、突進すると共に振り抜かれたスバルのリボルバーナックルの一撃を防御しようとする。

しかし、何故か防御する行動をブラックは直前で止め、スバルの一撃を僅かに横に傾けることで避ける。

ーーーシュン！！

「クッ！！ハアァァァァァァァァーーーーーーー！！！！！！！」

ーーーブン！！シュン！！ブオン！！

（何だ？何故俺の本能がコイツの攻撃を受けるなと叫んでいる？）

次々と繰り出されるスバルの両手両足の打撃攻撃を、ブラックは完全に見切りながら内心で疑問の声を上げた。

スバルの攻撃は確かに鋭く的確な攻撃である。だが、ブラックからすれば恐れる攻撃ではない。

格闘に関して言えばスバルよりも遥かに実力が上のクイントに、バンチョーレオモンと言う漢を知っている。故にブラックからすればスバルの近接戦闘術は恐れるものではないのだが、何故か本能と経験がスバルの攻撃を受けるなと叫んでいる。

攻撃を一度でも受ければ、例え自身でも膨大なダメージを受ける事は間違いない。そう直感しているブラックは、スバルの攻撃の真の意味を知ろうと、甲板を全力で蹴り上げ、浮き上がった装甲を壁のようにしてスバルに向かって蹴り飛ばす。

「フッ！！」

ーーードォン！！

「クッ！！ハァァァァァァァァァーーーー！！！！！」

ーーードゴッ！！

ブラックが蹴り飛ばした壁を避けられないと分かったスバルは、迷う事無く壁に右腕のリボルバーナックルを叩きつけ、壁を跡形もなく粉砕した。

ブラックはその粉砕された壁を目を細めるように見ると、スバルの攻撃方法の推測を更に固める為に次々と甲板を蹴り上げてスバルに向かって吹き飛ばして行く。

ーーードォン！！ドオォン！！ドゴォン！！

「こ、こんなに！！だけど！！ハァッ！！」

ーーーガァン！！バキィン！！ドォン！！

次々と迫って来る装甲板をスバルは両手足を使う事で次々と粉砕して、少しでもブラックに近づこうとする。

だが、既にブラックは大よそのスバルの狙っている攻撃を把握していた。ただ闇雲にブラックは攻撃していた訳ではない。スバルの

狙っていそうな攻撃を今まで戦って来た膨大な戦闘経験から探し、最も可能性が高いスバルの狙いに辿り着いたのだ。
それを表すようにブラックは膝を僅かに沈めると、スバルに向かって右腕のドラモンキラーを構えながら突進する。

ーーードォン！！

「ウオオォォォォォォォォォォォーーーーー！！！！！」

「（此処だ！！）プロテクション！！」

ーーーバキィィィィーン！！

全力で突き出されて来たドラモンキラーを、スバルは一瞬だけ右腕の先に作り出していたプロテクションで防いだ。
その一瞬でスバルの右肩のバリアジャケットを破壊され、深い裂傷も走るが、直撃だけは何とか避ける事が出来た。
スバルはその一瞬を見逃さず、左腕に装備しているグローブ状のＡＥＣ兵器『ＣＷ－ＡＥＣ０７Ｘソードブレイカー』でブラックのドラモンキラーを掴み、自身のＩＳである『振動破砕』を発動させる。

「ソード・ブレイクッ！！」

「ブレイクインパルス！！！」

「・・・えっ？」

目の前の光景が信じられず、スバルは呆然とした声を出してしまった。いや、それはスバルだけではなかった。

スバルの発動させた力の正体を知る誰もが言葉を出す事が出来ず、呆然と全く影響を受けた様子を見せていないブラックを見つめる。
スバルの戦闘機人としての固有技能である『振動破砕』。四肢の末端部から目標の物体に振動波を送り、共振現象を発生させる事によって対象を粉砕する一撃必殺の力。更に恐ろしいのは破壊効果は対象の外装・装甲に留まらず、内部の骨格にまで瞬時に及んでしまう為に、決まれば確実に相手を倒す事が可能となる。
しかし、今その絶対破壊のスバルの力はブラックに完全に破られてしまった。
その事実が信じられず呆然とスバルが動きを止めていると、ブラックは瞬時に右腕でスバルの右肩を掴み上げ、再びスバルの『振動破砕』を破った力を解放する。

「存分に味わえ。貴様の力をな！！ブレイクインパルス！！！」

ーーーードゴォン！！

「アァァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーーー！！！！！！！」

「スバル！！」

四肢から火を噴き上げたスバルを目撃したなのはは叫ぶが、スバルはもはやなのはの声に答える余裕もないのかブラックに顔を向ける。

「・・・いま・・・の・・・振動・・・破砕・・・」

「そうだ。昔とある局員のデバイスを破壊した時に得た力だ。貴様の『振動破砕』を受ければ確かに俺でも危なかったが、同じ力を得

ている俺には分かる。貴様が振動で俺を倒そうとするならば、その振動と逆の振動を送って無効化すればいい。何よりもこの力は強力な分、発動までに数秒のタイムラグが掛かるからな。俺の知っている者達ではその数秒で充分に対処出来る。今のようにな」

「・・そ・・そんな・・・振動・・・破砕・・・まで・・・通じない・・なんて・・・悪魔・・」

「フン、自らよりも上の者と戦っていれば自ずと敵対している相手の行動は経験から分かる。最も貴様らは状況の悪さぐらいしか経験はないようだな。圧倒的に実力が上か、或いは同等クラスの敵との経験が在ればもう少し楽しめただろうに！！」

ーーードゴオォン！！

「グフッ！！」

叫ぶと共にブラックはスバルを甲板に叩きつけた。

その様子を目撃した生き残っている局員達は全員が全員、絶望した顔をしながら膝をついてしまう。

遂にヴォルフラムに居る戦えたメンバー全員が戦闘不能に追い込まれたのだ。管理局でも実力が高いなのは、フェイト、はやては戦闘不能に追い込まれ、ヴィータ、シャマルは死亡。

そして最後に残っていたスバルも今完全に甲板に伏して沈黙した。しかもそれを行ったブラックには何のダメージも無い。悪夢としか言えない光景に誰もが絶望してしまうが、彼らの絶望はまだ終わっていなかった。

『さて、では話の続きを始めましょうね』

『ッ！！』

突如として響き渡ったフリートの声に、局員達は目を見開きながらモニターに映っているフリートを見つめた。

スバルとブラックとの戦い、そしてヴィータの死で忘れていたが、まだ本当に絶望が伝えられる話は終わっていなかったのだ。それを表すようにフリートは局員達の前と、なのは、フェイト、そしてはやての前に彼らにとっては忘れる事が出来ない悪夢の兵器ー『聖王のゆりかご』の映像を映し出す。

ーーーブン！！

『『ＪＳ事件』の時に最も恐れられていた兵器、『聖王のゆりかご』。実はコレは機動六課がもっと確りしていればミッドチルダの空に浮かばずに済んでいたんですよ』

「・・・ゆりかごが浮かばなかった？・・・何を言っている？」

『高町なのは。よく『聖王のゆりかご』の本質を思い出して見る事ですね。この『聖王のゆりかご』。一見強力な兵器に見えますけど・・・コレ欠陥兵器ですよ。だって、聖王家の血筋がいない限り使えない兵器なんですから』

「アッ・・・」

フリートの説明になのはは、今更ながら気がついた『聖王のゆりかご』の欠点に間の抜けた声を出した。

そう『聖王のゆりかご』は確かに強力無比であり、世界さえも破壊する事が出来る力を秘めた兵器だが、聖王家の血を引く人間が居ない限り動かす事も出来ない兵器なのだ。

聖王家の人間が居なければただの鉄の塊同然。だからこそ、六年前の時にスカリエッティはこの世界のヴィヴィオを狙ったのである。自分達の切り札を動かす為に最も必要だったヴィヴィオを。

『つまりですね、聖王家の人間が居なければ飛べない、使えない、ただの鉄の塊でしかないのがゆりかごなのです。だから聖王家の血を引く人間を護れてさえいれば、地上本部だけで犠牲は済んだかもしれましせん。いえ、寧ろ地上本部襲撃も行われなかったでしょう。高々十二人の戦闘機人とガジェットとか言う玩具だけで世界を曲がりなりにも護っている管理局に喧嘩を吹っ掛ける馬鹿は居ませんよ。『聖王のゆりかご』と言う絶対的な兵器が在ったからこそ、スカリエッティは喧嘩を売ったんです』

「・・それが・・如何したって言うの？・・・・現にスカリエッティは『聖王のゆりかご』を使ってミッドチルダを襲ったんだよ？」

『・・・・・まだ分からないんですか？『聖王のゆりかご』を動かす為には聖王家の人間が必要なんですよ。その子は地上本部襲撃の前には何処に居たんですか？』

『ッ！！！』

『気がついたみたいですね。スカリエッティが最も必要だった存在。聖王家の人間は管理局が、しかも高ランク魔導師数名が常時居て潤沢な予算が在った機動六課。つまり貴女達にところで保護されていたんでしょう！！狙われている事を知らなかったにしても、レリック関係で保護したんですから関連性ぐらいは考えるべきです！！地上本部で護衛に任務が在ったから？だったらスカリエッティに狙われている可能性が在る場所に、何の力も無い子供を残すべきじゃなかったんですよ！！せめて護衛の間は本局に居る後見人に預けて於

けばよかったんでしょうが！！！！そうすればスカリエッティだって動くの止めていたかもしれないでしょう！？』

「アッ・・・・まさか・・・事件が起きなかったかもしれないって言うのは？」

『そうですよ！普通に自分達の実力に慢心しないで！最悪な状況を常に想定して動いていれば！『ＪＳ事件』なんて管理局の自作自演の同然の事件は起きなかったかもしれないんです！！それで数千人以上犠牲出して、何が奇跡の部隊ですか！？貴女達、管理局は本来ならば裁かれる立場だったんですよ！・・・・でも、裁かれなかった。その結果、違法研究の進み沢山の人造魔導師は闇の中で生まれて消えて行った。それだけの罪を管理局は裏で犯している。それを六年前の貴女達は回避出来る立場だったのに、回避するどころか黙認同然で見過ごし、今では質量兵器紛いの武装や魔法を使う・・・・何かもう嫌になりましたよ、気づいても可笑しくなかった事を平然と見過ごしている貴女達には。六年前に機動六課が護ったのは聖王の血を引く子供でもミッドチルダの人々でもない。“管理局と言う自分達の行いで出した犠牲を省みない傲慢に成り下がって腐敗が進行した組織”なんですよ』

『・・・・・・』

フリートの言葉にその場に居る誰もが言葉を出せなかった。

管理局と機動六課が起こしていた深すぎる大罪。その大罪の犠牲になったのは確かに管理局員の中にも居た。だが、そもそもの原因は全て管理局にこそ在った。一番に裁かれるべきだったのに、管理局は自分達こそが世界を護ったように世界に報道し、世界から英雄視されている。

『ＪＳ事件』に巻き込まれて家族や友を失った人々は、事件を起

こしていたスカリエッティを捕まえてくれた機動六課に感謝し、機動六課の面々も喜んだ。だが、真実を知った今、彼らの感謝の言葉は逆に当事機動六課に関わっていた面々からすれば怨嗟の言葉にしか思えなくなかった。
　本来は出なくて済んだ犠牲が自分達の行動と管理局の行動によって出たのだから、それこそが自然なのだ。

『・・・言っておきますけど、この情報・・・・全部管理世界の代表や行政府に違法研究を行っている証拠付きで送信しますよ』

「ッ！！そ、そんな事をしたら！？どれだけの混乱が起きる思っているの！？」

『混乱？・・・・高町なのは、混乱だろうが戦争だろうが起きるその原因は全部管理局に在るんですよ？六年前に全てを白日の下に晒していれば出なかった混乱です。此処で私とブラックが真実を隠して、貴女達と同じ穴のムジナになるなんて真っ平ゴメンですよ。序に言えば戦争までは行きませんよ。管理世界の行政府の誰だって戦争なんて望んでいません。だから管理世界に入ったんでしょう？まぁ、当時機動六課の創設に関わっていた連中と最高評議会に付き従っていた上層部、その他にも一斉調査されて捕まる局員だけで犠牲は終わるでしょう。管理世界には二度と住めないでしょうけどね』

「・・・今管理局が混乱すればＥＣ感染者達の行動が活発化してしまう！それだけじゃなくて事件だって激増する！！だから、真実を告げるのは待って！！ＥＣ感染者達の治療法が見つかるまでは！？」

『そんなモノが見つかったら、管理局はますます増長しますよ。第一そんな時に公表しても戯言だって言われて終わりです。でも、今は違う。今は特務六課が引き起こした失態で世界は管理局に多少の

不審を持つ。そんな時にこそ公表すべきなんですよ。法の悪を教える時は・・・・・でも、確かに混乱は起きるのは事実ですね・・・・・そうです！ブラックと戦って勝てたら教えるのは止めましょう！もちろん、ハンデを幾つか上げますよ』

ーーーブン！！

ーーードン！！

フリートが言葉を言い終えると共に薬らしき物が入った小瓶と巨大な箱がなのはの目の前に転送された。

なのはは小瓶の方はともかく、巨大な金属の箱には見覚えが在った。それはヴォルフラムの倉庫内に仕舞われている筈のＡＥＣ兵器『ＣＷ－ＡＥＣ００Ｘフォートレス』と予備の『ＣＷ－ＡＥＣ０２Ｘストライクカノン』が納まっている箱。

何故それが急に現れたのかと疑問をなのはが覚えていると、フリートが小瓶の中に入っている薬について説明する。

『その薬の中身はどんな傷でも状態であろうと、瞬時に完全回復してしまうアルハザード特製の薬です。更には魔力さえもブーストする能力も秘めた特製の薬です！！最も効果終了後には途轍もない副作用が発生してしまうんですけどね。まぁ、死なないので安心して下さい・・・（最も魔導師としては完全に死にますけどね・・フフフッ、この世界の高町なのはは魔法に溺れているようですから、魔法が使えなくなったら地獄でしょう。これ以上にないほどの罰ですよ）』

フリートはそう内心で邪悪さに満ちた声を出した。

なのはに渡した薬は、以前自分達の世界でバンチョーレオモンがフェイトに服用させた薬である。

絶大な回復力を得られる反面、十分経ったら二度と魔法が使えなくなると言う欠点を持った、魔導師にとって最悪にして最強の回復力を得られるアルハザードの薬。魔法に溺れている者にとっては地獄に落ちるのと同意義の薬なのである。

最もフリートは其処までなのはに説明する気は無い。既に副作用が在ると説明はしてあるのだ。

それでも飲んだのならば後はなのはの責任である。だが、フリートは必ずなのはは飲むと確信していた。フリートが調べたところ、この世界のなのはは自身の体の事など全く気にせずに進む傾向が在る。

現に六年前の『ＪＳ事件』の時にブラスターシステムを使って負った後遺症など全く考えずに、なのはは前線に残っている。

（ハァ～自分の体を省みない人間が、誰かに何かを教えるなんて出来る訳ないでしょうに・・・それさえも分からないこの世界の高町なのはに、教導の資格は無いですよ。本来ならば私直々に潰してあげたいのですが、ブラックの獲物を奪うのは無理ですからね・・・・ブラックに全て任せます）

そうフリートは内心で呟くとモニターを消して、己の役目に戻って行く。

結果が見えている事にフリートは興味は無い。それを表すように次々とフリートが展開させていたモニターは消えていく。

ブラックはそれを確認すると、ゆっくりと思い悩む顔をしているなのはに向かって足を踏み出そうとする。だが、その足を足元で倒れていたスバルが動かない筈の腕を使って無理やり止める。

ーーーガシッ！！

「ん？」

「・・・させない・・・もう誰も傷つけさせない・・・・」

「邪魔だ」

ーーードゴォン！！

「ガッ！！」

「スバル！！」

ブラックに蹴り飛ばされたスバルになのはは手を伸ばすが、なのはの手は届く事無くスバルはヴォルフラムから落下し、完全になのはの視界から消え去った。

それを確認したブラックはこれ以上は待つ気はないと言うように全身から殺気を放出し、倒れ伏したままのなのはに向かって襲い掛かろうとする。だが、その動きは突如として止まり、ブラックが背後に顔を向けてみると、ヴィータの帽子を左腕に持っているはやてが立ち上がっていた。

「壊れたと思ったが、まだ動けたのか？」

「・・・壊れたわ・・・・・・全部・・・私が・・・・得たもの・・・全部・・・アンタらに・・・壊されたわ・・・・だけど、ヴィータとシャマルを・・・殺したアンタだけは絶対に赦さへん！！！」

憎しみに満ちた叫びを上げると共にはやては怒りと憎しみしか宿っていない目をブラックに向けた。

もはやはやての中に在るのは、自身の大切な家族を殺したブラックへの憎しみだけ。それさえ晴らせればいいと言うようにはやては

ヴィータの帽子を頭に被って、残っている左手にシュベルトクロイツを握り、横に浮いている『夜天の魔導書』に命じる。

「ブラスターーー3！！！！彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍、ミストルティン！」

ーーードドドドドドッ！！

「フン！！」

はやてが叫ぶと共に放たれた七つの魔力槍をブラックは完全に見切り、上空に飛び立つ事で全て避けた。

それを目撃したはやてはブラスターシステムの影響で全身を襲う激痛に辛そうに顔を歪めるが、もはや己の体の事さえも本当に気にしていないのか、更にブラスターシステムを使用して正三角形のベルカ式の魔法陣を足元に出現させ、上空に居るブラックに向かってシュベルトクロイツを構える。

「グゥッ！！」

「はやてちゃん！！もう止めて！！それ以上ブラスターを使用したら！？」

「はやて！！」

「・・・居らへんのや・・・もうアイツを殺せるんなら！！私は体なんかもう如何でも良いんや！！響け終焉の笛！！」

「フン、俺が憎いか。良いだろう。全力で撃って来い！！」

ブラックはそう叫ぶと共に自身の両腕の間に大気中の負の力を集中させ、巨大な赤いエネルギー球を作り上げる。
はやてはその技に『ヘイムダル』を破壊された時の事を思い出すが、本当に体の事はいいのか、ブラスターシステムで増強した魔力を魔法陣に集めて行く。
その影響で左腕の血管は次々と破裂したかのように血を噴き出し、体中からも血を流して行くが魔力を集める事は止めず、上空でエネルギー球を完成させたブラックに向かって生涯最大級の砲撃を放つ。

「跡形も無く消滅しいぃ！！ラグナロク！！！」

ーーードグオオオ

「フェイトちゃん！？」

落下する直前にバルディッシュ・アサルトを甲板に突き刺して動かない左腕を刃に回す事で落下を防いでいたフェイトは、ギリギリのところで右手でなのはを掴んだ。

その様子に気がついたなのはは、フェイトが右肩から流している大量の血に気がつき、フェイトに向かって悲痛な叫びを上げる。

「駄目だよ！フェイトちゃん！！このままだとフェイトちゃんも一緒にヴォルフラムから！！」

「・・・・なのは・・・・・私ね・・・・なのはや皆に会えて良かった・・・・だけど・・・・もう限界なんだ・・・・さっき・・・・エリオが落下するのを見た」

「エリオが！？」

「・・・・エリオは確かに・・・あの竜人に攻撃したから・・・やられた・・・だけど・・・そもそも・・エリオを・・・戦いの場に出したのは私なんだよ・・・あの女の人の言うとおり・・・・機動六課・・時代に・・私は赦されない・・・罪を見逃していた・・・・執務官で・・・誰よりも真実を・・追わなければいけなかったのに・・・それを怠って・・・エリオや皆に・・大罪を背負わせた」

「違うよ！フェイトちゃんだけの罪じゃないよ！？」

「・・・・ありがとう・・・・・でも・・・もう限界なんだ・・・・・さようなら・・・なのは・・ヴィヴィオの為に生き残って・・グゥッ！！」

フェイトは言葉を言い終えると、無理やり動かない右手を動かしてなのはをバルディッシュ・アサルトの柄まで手を近づけさせ、金色のバインドでなのはの腕とバルディッシュ・アサルトの柄に結びつける。
それを確認したフェイトは全身から力が脱力し、バルディッシュ・アサルトに回していた左腕がずり落ちて甲板から落下して行く。

ーーーズルッ！！

「ッ！！フェイトちゃーーーん！！！！！」

（・・・ゴメンね・・・・なのは・・・・生き残って・・・）

落下して行くフェイトになのはは手を伸ばすが、もはや手が届く事無く、フェイトはスバル達同様にヴォルフラムから落下して行った。
その事実になのはは顔を俯かせて声も出す事無く泣き続ける。
その間にもラグナロクとガイアフォースの激突は続き、衝撃によってヴォルフラムは更に揺れていく。
だが、徐々にでは在るが、ラグナロクを撃ち破るかのようにガイアフォースの方が押し始めた。
はやての限界を超えたラグナロクで在ろうと、ブラックのガイアフォースの方が僅かに威力を上回っていたのだ。
嘗てガイアフォースを撃ち破ったヴォルテールの大地の咆吼（ギオ・エルガ）は、大地と言う場所から魔力供給を受けていたおかげでガイアフォースを破れた。
しかし、はやてのラグナロクは『夜天の魔導書』とブラスターシステムで威力が増強されているとは言え、個人の魔力である。大地と個人では圧倒的と言う言葉でさえも足りないほどに大地の方に分

が在る。
故に限界を超えたはやての決死のラグナロクでもガイアフォースを撃ち破る事が出来ず、徐々にはやては押され始める。
既にはやての全身からはブラスターシステムの影響で血が噴き出し続けている。このままでは遠からず自身は死んでしまうとはやては理解していた。

ーーーブシュゥゥゥゥゥーーーー！！！

（・・・あかん・・・意識が遠くなって来たわ・・・・・・・ヴィータ・・・・シャマル・・・・・・）

意識を保つのも限界に近づいたはやては、徐々に瞼も下がって行き、ラグナロクも威力も落ちていく。
そして完全に意識が遠退き掛けた瞬間、被っていたヴィータの帽子が急にずり落ち、甲板に落下する。
何となしにはやてはそれに目を向け、その目は見開かれた。ヴィータの帽子が落ちた場所には待機状態のクラールヴィントが落ちていたのだ。
その事実に本当に自身の大切な家族が居ない事を理解したはやては、消えそうになる意識を無理やり繋ぎとめて、ガイアフォースの先に居るであろうブラックに目を向ける。

「（・・・・負けへん・・・・・・アイツに！！シャマルとヴィータを殺した竜人に）負ける訳にはいかんのや！！！『夜天の王』の名に命じる！！『夜天の魔導書』！！蓄えられている全魔力を！ラグナロクに供給や！！」

ーーードグオオオ

はやての命令を『夜天の魔導書』は忠実に実行し、ラグナロクの威力は更に高まり、ガイアフォースを撃ち破ろうと再び鬩ぎあいを再開する。
そして今度は徐々にでは在るが、ラグナロクの方がガイアフォースを押し始め、ガイアフォースを撃ち破ろうとラグナロクの三つの閃光は更に威力を増して行く。

「行くんやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーー！！！！！！」

自身の最大の砲撃がブラックのガイアフォースを撃ち破るのを確信したはやては叫んだ。
しかし、そんなはやての力強い願いは。

「ガイアッ！！」

「ッ！！」

「フォーーース！！！！！！」

ドゴオオオ

しまいそうになる。既にブラスターシステムの無理な使用と魔力の一斉放出によってはやての体は完全に死んでいるのも同然だった。倒れればそのままはやては死の世界に旅立つだろう。
だが、完全にはやてが倒れ伏すまえにブラックがはやての前に瞬時に移動し、その首を掴み上げる。

ーーーガシッ！！

「・・アァ・・・」

「フン、まさか俺に二発目を撃たせるとは思ってなかったぞ・・・その礼だ。貴様の守護騎士だった小娘の願いどおり、“殺さず死なせない”でやろう。悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて、永遠の眠りを与えよ」

ーーーブン！！

（・・・その・・・詠唱・・・なんで・・・アンタが・・・使えるんや・・・・）

詠唱と共に空高く投げられたはやては、ブラックが使おうとしている技の正体に気がつき、朦朧とする意識の中疑問を覚えるが、既に時遅くブラックは技を発動させる。

「凍てつけ！エターナルコフィン！！！」

ーーーガキィィィィーーーン！！！

ブラックが詠唱を終えると共に上空に投げ飛ばされたはやては、周りに存在している大気中の水分ごと凍結された。

その大きさは三十メートル前後であり、完全に凍結されたはやては氷の中で眠りについた。
この世界で十六年の年月を掛けて、漸くエターナルコフィンは生み出された役目を全うしたのだ。
八神はやてを半永久的に凍てつく眠りへと封じ込めると言う役目を。
そしてブラックはそれを確認すると落下する前にはやてが封じ込められている氷の塊を受け止め、そのまま遠方に浮かんでいるフッケバインに目を向け、迷う事無く全力投擲する。

ーーードオオォォォォォーーン！！

「これでフリートの邪魔も少しは納まるだろう。さて、そろそろ本当に終わらせるか」

はやてが封じられている氷の塊がフッケバインに直撃し、フッケバインが傾くのを確認すると、ブラックはヴォルフラムに目を向けて本格的に止めを刺そうと負の力を両腕の間に集中させる。
だが、次の瞬間、突如としてヴォルフラムの甲板から凄まじいほどの魔力が放出され、ブラックは攻撃を止めて甲板に目を向ける。
其処には三つの機械的な盾のような物ー『フォートレス』を周りに浮遊させ、腰と背中の部分に飛行ユニットらしき物を装着し、左腕にヴィータのパーソナルカラーの色合いをした『ストライクカノン』を装備し、レイジングハート・エクセリオン・単独飛行形態を横に浮かせた高町なのはが立っていた。

「・・・・赦さない・・・・貴方だけは絶対に赦さない！！！」

「ほう・・アレを飲んだのか・・・ならば少しは楽しめるか？」

なのはの状態をブラックは正確に察し、集めていたエネルギーを霧散させてドラモンキラーを構える。
その様子を目撃したなのはは、本来ならばヴィータが使う筈だった『ストライクカノン』と浮遊させていた二つの盾ー『砲戦用の大型粒子砲』と『中距離戦用プラズマ砲』が備わっている『フォートレス』の照準をブラックに合わせて広範囲攻撃を放つ。

「エクサランスカノン・ヴァリアブルレイドッ！！！シューート！！！！」

ーーーズドドドドドドドドドドドドッ！！！！！！！

「フン！！これがこの世界の貴様が辿り着いた極致か・・・・貴様に教えてやろう！！！力の本当の恐ろしさを！！ガアァァァァァァァァァーーーーーーーーーーー！！！！！！」

なのはが放ったエクサランスカノン・ヴァリアブルレイドの範囲から逃れると共にブラックは咆哮を上げながらなのはに向かって飛び掛かるのだった。

特務六課と漆黒の竜人の最後の戦いが始まった。
多くの仲間と己の最も大切なモノを犠牲にして、不屈の魂を持っているエース・オブ・エースは恐怖の代名詞と呼ばれている漆黒の竜人に挑む。
己が振るっている力の意味の本当の意義を知るとも知らずに、エース・オブ・エースの称号を持っている高町なのはは、絶望と恐怖しか与えない漆黒の竜人と戦うのだった。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　後編　さ

今回で特務六課編は終わりです。
次回はフッケバイン。その後にエピローグです。
後始末は出来るだけする予定です。次世代に繋げられるような終わりに出来るよう頑張ります！

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　後編　さ

ブラックとフリートが別世界で暴れに暴れ回っている頃、平行世界アルハザード司令室。

その場所には凄まじいまでの怒りのオーラを振り撒いている一人の女性ーリンディと、その女性の放っているオーラに怯えて、全身をガクガクと震わせながら抱き合っているなのはとガブモンが居た。

フリートの絶叫らしきモノを聞いたなのはとガブモンは、出来れば近づきたくなかった司令室に急いで駆け込み、眠っていたブラックが居ない事を知って、リンディを呼んだのだ。

リンディは即座になのはとガブモンの知らせを聞いて駆けつけ、万が一の時の為にフリートにも内緒で仕掛けておいたビデオカメラの映像を調べてみた。

その結果、最も恐れていた事態が起きた事が判明したのだ。

あの最も外に出してはいけない眠っている状態のブラックと、その気になれば次元世界を滅ぼせるフリートが平行世界に行ってしまった事をリンディ達は知った。

当然それを知ったリンディは激怒し、凄まじい怒りのオーラを背負った阿修羅に変貌してしまった。

「あ～の～マ～ッド～～よりにもよって眠っていたブラックを平行世界に送るなんて・・・潰し六千回では済まさないわよ！！」

『ヒィッ！！』

阿修羅を背負いながらのリンディの怒りに満ちた叫びに、自分達が怒鳴られた訳でもないのになのはとガブモンは涙目になって更に強く抱き合った。

今のリンディならば、あのデーモンでさえもすごすごと逃げ出し

ても可笑しくないとなのはとガブモンは確信して、自分達に被害が来ない事を強く願う。
　しかし、そんな、なのはとガブモンの切実な願いを潰すように、据わり切っている瞳をリンディはなのはとガブモンに向ける。
「二人とも、すぐにブラックとあのマッドが向かった平行世界に向かうのよ。そして何が何でも二人が取り返しのつかない事態を引き起こす前に連れ戻して来なさい」
「でででででも、リンディさん！！・・・・ブラックさんとフリートさんを追うのは別に構わないんですけど！！」
「平行世界に向かう為にはフリートさんの道具が必要です！！作っていた二号機みたいな『平行世界にいってらっしゃいガン』は、フリートさんが持って行っちゃったみたいなんですよ！？」
「心配ないわ。既に念話でティアナさんとクダモン君にお願いして、一号機の『平行世界にいってらっしゃいガン』の封印を解いて、此処に持って来て貰う手筈は整っているわ」
（ティアナ、クダモン君！！何て事をしてくれたの！？）
（もしブラックさんが誰かに起こされでもしていたら！？）
（私とガブモン君が止めなくちゃいけないんだよ！！・・・死にたくないよ・・・・無理やり起こされたらブラックさんなんて・・・止められないよ！！）
　なのはとガブモンは涙目になりながら、リンディから言われた任務の内容に絶望感が湧き上がる。

無理やり目覚めさせられた時のブラックの怒りは尋常ではないのだ。それこそ邪魔をしただけで自分達も排除対象にするのが、無理やり目覚めさせられたブラックなのだ。
以前のデーモンの時とは違う。確実に邪魔をしたら、なのはとガブモンも抹殺対象に加えられてしまう。
そんな状態のブラックと相対したくないと心の底からなのはとガブモンは思い、何とか自分達が平行世界に向かわない為の方法を必死に考え続け、なのはは一縷の望みを持ってリンディに向かって叫ぶ。

「アッ！！そうですよ！！ルインさんなら！」

「駄目よ。そう思って以前ルインさんを送ったら、ルインさんもブラックと一緒に暴れたでしょう」

「ウッ！・・・だったら、私とガブモン君だけじゃなくてティアナとクダモン君も！！」

「残念だけどなのはさん。今回の件をルインさんが知ったら、確実にブラックの後を追うわ。そうならない為にクイントに見張りをお願いして在るのよ。もしもばれた時の為にも、ティアナとクダモン君を残さないといけない。私はヴィヴィオとギルモン君の見張りをしないといけないから、動けるのは二人だけなの」

（本当は無理やり起こされでもしたブラックさんに関わりたくないだけですよね！？）

（酷い！！何で僕らだけ！？）

そうなのはとガブモンは内心で怒りに満ちた叫びを上げるが、二

人の気持ちを無視するように司令室の扉が開き、何かが入っている小箱を持ったティアナと、そのティアナの首に巻きついているクダモンが飛び込んで来る

ーーーブン！！

「リンディさん！！封印を解いて持ってきました！！」

「使用も充分に可能だぞ！さぁ、すぐになのはとガブモンを平行世界に送って、ブラックとフリートを連れ戻させるのだ！！」

（ティアナァァァァァァァーーーー！！！！！クダモーーーン！！！！怨むよォォォォォォーー！！！）

（生きて帰って来たら絶対に“Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＩ”なのォォォォォォォーーーーー！！！！）

なのはとガブモンはそう内心で絶叫を上げながら、憎しみが篭った視線を小箱の中から取り出した『平行世界にいってらっしゃいガン』を構えているティアナとクダモンに向け、念話を行う。

（悪く思わないで下さい、なのはさんにガブモン）

（以前私とティアナも暴走状態のブラックに挑んだのだ。今回はお前達の番だ）

（あの時は最終的にブラックさんの策略だったけど、今回は違うからね！！しかもフリートさんも居るんだよ！？）

（絶対に止まってくれない二人なんだよ！？）

（大丈夫です！私とクダモンよりも早く究極体に進化出来た二人なら！）

（絶対にブラックとフリートを止められる！！）

（（根拠ない事を言わないで！！））

なのはとガブモンは視線で必死にティアナとクダモンに向かって叫ぶが、二人は構わずになのはとガブモンに向かって敬礼を行う。

そのままティアナは右手に握った『平行世界にいってらっしゃいガン』の引き金を引き、なのはとガブモンは抱き合ったまま平行世界に向かった。

それを確認したティアナとクダモン、そしてリンディはなのはとガブモンが居た場所に向かって敬礼を行う。命を賭けた戦場に飛び込んだ二人の無事を心の底から願いながら。

だが、彼らは知らなかった。向かう先の平行世界。その世界は既にブラックとフリートが現れた事によって地獄が引き起こされている。

そしてなのはがその世界に最も向かってはならない人物だと知らずに、リンディ達は送ってしまったのだった。

ヴォルフラムから数百メートル下の海面付近。

その場所に突如として光が発生する。その光は徐々に形を作っていき、光が消えた後にはなのはとガブモンが揃って空中に浮かんでいた。

『・・・えっ？』

自分達が何処に居るのか認識したなのはとガブモンは思わず下の海面を見ながら、間の抜けたような声を出してしまうが、そんな事では状況は止まる筈も無く、なのはとガブモンは揃って海面に向かって落下して行く。

「うそぉぉぉぉぉぉぉーーーーーー！！！！！」

「絶対に帰ったら！あの二人は“Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＩ”なの！！レイジングハート！！セット・アップ！！」

≪ｓｅｔ（セット）　ｕｐ（アップ）！≫

なのはの呼び声にレイジングハートは即座に応じ、なのはは右手に杖の形状に変形したレイジングハートが握られ、同時になのはは光に包まれエクシードモードのバリアジャケットを身に纏う。

同時になのはは瞬時にガブモンにレイジングハートの柄部分を差し出し、衝撃を出来るだけ与えないようにガブモンを上に押し上げ、自然としか思えない流れでガブモンを背中に取り付かせる。

ーーーガシッ！！

「フゥ～・・助かったよ、なのは」

「気にしないで、ガブモン君には何時も助けられているから・・・でも、此処って？何処かの世界の海なのかな？」

そうなのはは言いながら辺りの大海原を見回し、何処かにブラックとフリートが居ないかと捜索し始める。

「フリートさんならリンディさんの状態を言えば絶対に止まるだろうし、ブラックさんもこんな場所じゃ海の中に沈んでいるだろうから、問題は多分起きないよね」

「・・・・・・ッ！！なのは！！上だ！！」

「ッ！！」

何かに気がついたようなガブモンの叫びに、なのはも即座に自身の上空から落下して来る何かに気がつき頭上に顔を向けてみる。

其処には意識を完全に失い、無防備に近い状態で空中落下を行っているスバルが存在していた。

「いけない！！ホールディングネットッ！！」

ーーーガシィィィィーーン！！

落下して来るスバルに気がついたなのはは、即座に桜色の網状ーホールディングネットーでスバルに衝撃を感じさせることなく受け止めた。

なのはとガブモンはその様子に安堵の息を吐き、スバルの状態を確認する為に近づこうとすると、遥か上空から激突音が鳴り響いて来る。

ーーードゴオオオ

やてちゃんのラグナロクだよ！？本気で殺す気で撃ってるみたい！！」

遥か上空に浮かんでいるヴォルフラムの近くで広がるガイアフォースとラグナロクの激突に、なのはとガブモンはそれぞれ叫んだ。
自分達が最も恐れていた状況になっていた事になのはとガブモンは気がついたのだ。今の状態のブラックが止まる筈は無い。確実にヴォルフラムに乗っている全員を殺さなければ止まらないだろう。
本気で不味い状況だとなのはとガブモンが焦りを覚えていると、ヴォルフラムから落下して来る数え切れないほどの人影を目撃する。

「ッ！！アレは！？不味い！暴走しているブラックさんはともかく、あの砲撃を撃っている人は艦艇に襲い掛かる衝撃の事なんて考えずに撃っている！このままだと！？」

「行くよ！！」

ーーービュン！！

このままだと危険だと判断したなのはは、人々の落下地点になる海面に急いで向かい、辿り着くと共にレイジングハートを構えて足元にミッドでもベルカでもない巨大な魔法陣を出現させ、落下して来る人々の位置を瞬時に把握する。

「ホールディングネットッ！！ファランクスシフト！！」

ーーーザザザザザザザザザザザザッ！！！！

叫ぶと同時になのはの足元に存在していた巨大な魔法陣から次々と数え切れないほどの桜色の網が飛び出し、落下して来る人々全員

を衝撃を感じさせる事なく安全に受け止めて行く。
　それはもはや魔法の絶技と呼んで良いだろう。高速で落下して来る人々の速度を全て無にして、安全に受け止めて行く。更に一度に数十人以上の人々を余す事無く受け止めている。
　もしこの場に他の魔導師が居れば、なのはの行っている事が信じられずに目を疑うだろう。
　そして全員を足元に存在している魔法陣に運び終えると、なのはとガブモンは安堵の息を吐く。

「フゥ～、流石だね、なのは」

「魔力制御を徹底的にフリートさんには鍛えられたからね・・・・それよりも、この世界のはやてちゃん・・・何を考えているの？」

　僅かに不機嫌そうに瞳を細めながら、なのはは未だに激突が続いているヴォルフラムに目を向けた。
　如何言う状況になっているのかは、なのはとガブモンには分からないが、少なくとも甲板部分から人々が落下するのだけは目撃した。つまりはやては、甲板に沢山の人々が乗っている状況を知りながらラグナロクとガイアフォースの激突を行ったと言う事である。
　ブラックはそれを狙ってやったのだろうが、何故はやてまでとなのはとガブモンは首を傾げ、同時に状況を知る妙案を思いつく。

「・・・行くよ、ガブモン君！」

「うん！！」

『フリートさん！！！リンディさんが阿修羅になって！！潰し六千回じゃすまさないって言っていますよ！！！！』

『ギャアァァァァァァァァーーーーーーーーーーーー！！！！！！赦して！！リンディさん！！出来心だったんです！！赦して下さい！！』

なのはとガブモンの叫びが響き渡ると間も空けずに、土下座しているフリートの映像がなのはとガブモンの前に映った。

その様子になのはとガブモンは頷き、土下座しながら震えているフリートに声を掛ける。

「大丈夫ですよ、フリートさん。来ているのは私達だけでリンディさんは来ていませんから・・・・・阿修羅に変貌して怒ってるけど」

「そうですよ。本当に着ているのは僕らだけですよ・・・・・凄く元の世界だとリンディさんは怒っていますけど」

『そんな不吉過ぎる情報を教えないで下さい！！・・・・・・・って！・・・・其処の連中助けたんですか？』

「ん？・・・・そうですよ。何だか艦艇から落ちて来たんで助けたんです・・全員気絶しているんですけど・・何か在るんですか？」

『・・・・運がトコトンまで無い連中ですね・・・・・死んでいた方が楽でしたでしょうに』

『えっ？』

フリートの言葉になのはとガブモンは疑問の声を上げて顔を思わず見合わせた。

何故死んだ方が楽だったなどとフリートが告げたのか疑問に覚えながら局員達に目を向けていると、フリートは今起きている状況の

全てを話し出す。
この世界の管理局が行っていた六年前の大罪。それを見逃してしまった機動六課。
ブラックが目覚めるまでの管理局の行動。凶鳥（フッケバイン）の行動。
その他にもさまざまな裏事情と現在の状況に到るまでの全てをフリートは、なのはとガブモンに説明した。
全てを聞き終えたガブモンは余りの管理局が隠していた大罪に言葉を無くし、そしてなのはは顔を俯けていた。

「・・・ねぇ、ガブモン君、フリートさん」

「な、何かな？なのは」

『な、なのはさん・・如何したんですか？』

「・・・ＳＦの小説だとさ、“自分殺し”って罪だって言われているけど、それ間違っているよね・・・だって、此処までやっていた自分を殺さないなんて間違っているよ」

（（ヒィィィィィィーーーーーー！！！！！！））

俯いていたなのはが顔を上げ、その顔を目撃したガブモンとフリートは恐怖に染まった叫びを内心で上げた。
顔を上げたなのはの表情は、それこそ誰もが魅了されるような優しげな笑みだった。だが、付き合いの長いガブモンとフリートには今のなのはの状態がどれほど危険なのか理解している。
確実に今のなのはが、この世界の高町なのはと出会った場合、高町なのはは地獄と呼ぶのさえも生温い攻撃を浴びせられるだろう。
その証拠になのはの周りからは底冷えするような冷たいオーラが漂っている。

しかし、此処でなのはを高町なのはの下に行かせる訳にはいかない。何せ高町なのははブラックが獲物として認識している相手なのだ。その相手を横槍で奪いでもしたら、それこそなのは&ガブモン対ブラックとの戦いが始まる。
何としてもそれを避ける為にフリートは、自身がこの世界のなのはに行った事を説明する。

「・・・・アレを渡したんですか？あの魔導師を確実に終わらせる薬を？」

『はい！！確実に飲むでしょうから、この世界の高町なのはは終わりです！！ですから、ブラックの獲物を奪うのは止めて下さい！代わりにこっちを手伝って下さい！凶鳥（フッケバイン）と『ゼロ因子』の子、両方を相手にしているので！！』

「・・・・しょうがないかな・・・ブラックさんが潰してくれるだろうから、見逃して上げよう」

（（フゥ～））

なのはの言葉にフリートとガブモンは内心で心の底から安堵の息を吐いた。
その様子をなのはは気がついていたが、気にする事は無く上空から感じられる膨大な魔力を纏って質量兵器にしか見えない魔導兵器を使用しているこの世界の自身と、その攻撃を全てドラモンキラーで切り裂いているブラックを見つめ、口元に冷笑を浮かべる。

（もうすぐ貴女は潰れるだろうね。でも、それに同情なんてしないよ・・・貴女が振るっている力は護る為なんかじゃない・・・ただ自分の意にそぐわない相手を“従わせる力”なんだよ・・・ブラッ

クさんと戦えばそれが分かるだろうね・・・・この世界のシャマルさん、ヴィータちゃん・・・もし来世が在ったら幸せになってね・・・無理だろうけど）

そうなのはは僅かに目を瞑ってこの世界のシャマルとヴィータに黙祷を捧げると、そのままフリートに頼んで自身が発生させているフローターフィールドに載っている局員全員をルヴェラの都市に転送して貰うように頼む。

フリートとしてはこのまま海の藻屑になって貰いたいのだが、生き残って自分達の行っていた事を改めて思い知るのも在りだとなのはに言われて納得し、その場に居る気絶している局員達、スバル、フェイト、エリオを転送用の魔法陣でルヴェラの一番近い都市に転送させた。

ーーーシュン！！

「・・・立ち上がれるのかな？」

「・・・この世界のフェイトちゃんは多分無理だね・・・他の人達も難しいと思うよ・・・次に進めるとしたらあのスバルって言う子ぐらいかな・・・・今回の経験で知ったと思うよ。前に進む為には自分達の行動も省みないといけない事を・・・・今回の経験で次に進んで欲しいかな」

そうなのはは先ほどまで居た者達に言葉を告げると、ガブモンを背負いながらフリートの救援に向かいに行く。背後から感じられる激闘の気配に心が引かれながら。

（・・・フン・・・・余計な行動をしてくれる）

「其処！『ストライクカノン』！！」

ーーードドドドドドドドドッ！！

僅かに一瞬ブラックの動きが止まるのを目撃したなのはは、迷う事無く左腕に装着している『ストライクカノン』の引き金を引いて砲撃を放った。

それをブラックは目撃すると、瞬時に左腕を背中に回して羽のように背中に装着しているブラックシールドを左側だけ左腕に装着し、『ストライクカノン』から放たれた弾丸を防御する。

ーーーガァァァァーン！！

（クッ！！アレは盾だったの！？）

「フン、下らん攻撃だ」

ーーーカチャッ！

ブラックは言葉を言い終えると共に左腕に装着していたブラックシールドを背中に戻した。

そのままブラックは自身の周りを高速で動き回っている三つの盾に目を向け、最後になのはに顔を向ける。

「下らんな。魔力が増強しているんだ。もう少しぐらい楽しませろ！！」

ーーービュン！！

「（速い！！）なら！！『フォートレス』！！」

ーーービュン！！

「ん！！」

ーーーガキィィィィーン！！

（コレは？剣か？）

なのはの叫びと共にブラックを撹乱するように飛び回っていた三つの盾の内の一つ、『近接近用実体剣』が装備されている盾がブラックに急接近してブラックは右腕のドラモンキラーで防御した。

その隙になのはは右腕に『中距離用のプラズマ砲』が備わっている『フォートレス』を装着し、僅かに動きが鈍っているブラックに照準を合わせて放つ。

「プラズマ砲！ファイヤーーー！！」

ーーーゴオオオォォォッ！！

「フン！！下らん！！」

ーーーーブザン！！

「ッ！！」

プラズマ砲を簡単に霧散させたブラックの姿になのはは目を見開くが、ブラックはもはや止まる事無くなのはに急接近し、ドラモン

キラーを突き出そうとする。
それを目撃したなのはは左腕に装着している『ストライクカノン』で、ブラックのドラモンキラーをギリギリのところで防ぐ。

「ドラモンキラーーー！！」

「クッ！！」

ーーーガキィィィーン！！

ーーービキッ！！

（ッ！！一撃で『ストライクカノン』に罅が！？）

ブラックのドラモンキラーを防いだ事で、罅が入った『ストライクカノン』を目撃したなのはは驚愕した。
『ストライクカノン』は砲撃だけではなく、重剣と突撃槍の機能も備わっている為に強固に作られている。しかし、その『ストライクカノン』が一撃だけで深い裂傷を持った。
その事実になのはは険しい顔をするが、すぐさま右手に装備している『フォートレス』の砲塔の照準を合わせようとする。
幾ら砲撃が通じなくても至近距離ならばなのはは考えたが、その考えは簡単に撃ち破られる。
なのはが照準を合わせると同時にブラックは左足を振り抜き、なのはが右腕に装備している『フォートレス』を蹴り上げる。

ーーードゴォン！！

「ッ！！」

「貴様は装備している武器に頼り過ぎているなッ！！」

ーーードゴォン！！

「ガッ！！（息が！？）」

ブラックに腹部を殴られたなのはは息を吐き出しながら吹き飛んだ。

それを追撃するようにブラックは両腕のドラモンキラーの爪先に赤いエネルギー球を作り出し、迷う事無く体勢が整っていないなのはに投擲する。

「フン！！」

ーーービュン！！

「クッ！！『フォートレス』！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

ブラックがエネルギー球を投げるのを目撃したなのはは、即座に『フォートレス』を操作して自身の前面に防御障壁を展開してエネルギー球を防いだ。

その衝撃によって爆煙が発生し、なのはの視界は遮られてしまう。

なのははその事実に険しい顔をしながら、即座に『フォートレス』を全周警戒態勢に移行させて防御の陣形を取り出す。ブラックならばこの発生した煙を利用して攻撃して来ると判断したからだ。

それは間違ってはいない。だが、なのはの考えには間違っている部分が在った。確かにブラックは煙に乗じて攻撃する気である。

しかし、なのは本人は狙っていない。ブラックが狙っているのは、

なのは自身ではなく『フォートレス』の方だった。

ーーードゴオオォォン！！

（ッ！！）

響いて来た爆発音に慌ててなのはが目を向けてみると、『近接近用実体剣』が備わっている盾がブラックのドラモンキラーによって断ち割られていた。

それを目撃したなのははブラックの狙いに気がつき、慌てて残っている二つの『フォートレス』を操作するが、時既に遅く、ブラックは『中距離用のプラズマ砲』も備わっている『フォートレス』を粉砕する。

ーーーバキィィィィーーン！！

「最初から武器破壊を狙って！？」

≪警告です！！後方より誘導弾！高速接近！！≫

「クッ！！」

ーーービュン！！

横に浮いているレイジングハートの警告になのはは素直に応じ、即座にその場から飛び退くと、背後から迫っていた赤い短剣のような閃光が通り過ぎた。

一瞬なのはは、その見覚えが在る魔法に動きが止まるが、すぐさま我に返って高速で動き回る。

ブラックはその様子に僅かに目を細めると、すぐさまなのはの後

を追いかけるように高速移動を行う。

ーーービュン！！

（やっぱりフェイトちゃんよりも速い！？でも、今の私の魔力なら何とかなる！！）

（残り時間は七分を切ったな・・・そろそろ異変が現れるだろう）

≪ッ！！警告！！マスターの魔力増強レベルが低下し始めています！！！≫

「クッ！！あの薬の効き目が終わりに近いんだ！」

レイジングハートの報告になのはも自身の増強されていた魔力が減少している事に気がついた。

半信半疑で飲んだ薬だったが、その効果は確かにフリートが告げていた通りの効果だった。いや、それ以上と言っていいだろう。何故ならばブラックに殴られてダメージを負っても即座にそのダメージも完全に回復するのだから。コレほどの効果を持つ薬が在ったのかと、なのはは内心で驚愕していた。

同時に効果が終わった後に来ると告げられた副作用も間違いないとなのはは確信していたが、その副作用がなんであろうと受け入れる覚悟が在る。

六年前にブラスターシステムを使用して負った後遺症も受け入れたのだ。今更どんな副作用が在ろうと構わないと決めてなのはは薬を飲んだ。

最もその副作用はなのはが考えている以上に恐ろしい副作用なのだが。

そんな事を知らないなのはは、何とか薬の効果が切れる前にブラ

ックを倒せる方法はないのかと考え続けると、フッと戦いを始める前に服の中に仕舞った物を思い出す。

（・・・一か八かだけど・・コレに賭けるしかない！！レイジングハート！！説得をお願いね！）

≪了解です！≫

「薬の効果が切れる前に！アイツを倒す！！」

ーーーガチャッ！！

なのはは叫ぶと共に傷が付けられている『ストライクカノン』の照準をブラックに合わせた。

その様子にブラックはなのはが何かを企んでいると直感する。

“窮鼠猫を噛む”と言う諺が在る。ブラックはそれを何度も実行し、実行された事も在る。故になのはの企みを見破ろうと注意深く警戒しながら、『ストライクカノン』の照準を合わされないように動き回る。

別段ブラックからすればこのまま時間切れを待つのも良いのだが、それでは気がすまない。

今戦っている高町なのはは、ブラックが嫌っている管理局上層部達と同種の気配が感じられる。

自身の意にそぐわないのならば圧倒的な力を見せて相手を支配する。そう言う気配がなのはからは漂っていた。

恐らくなのは自身はその事に気がついていないだろう。いや寧ろそれが当然だと思っている。

故にブラックはこの世界の高町なのはを全力で潰し、その後に絶望のどん底に落とすつもりだった。

ーーービュン！！

（クッ！！狙いが定まらない！？）

高速で動き回るブラックに『ストライクカノン』の照準を合わせる事が出来ず、なのはは焦りを覚える。

本来ならばバインドや誘導弾を使って相手を追い込むのがなのはの戦い方なのだが、ブラックの速さはフェイトを遥かに超えているだけではなく、信じられないほどの正確な先読みで隠してあるバインドの位置を完全に見切っている。

なのはの今までの戦い方が全くブラックには通じないのだ。これにはなのはは焦らざるえなかった。

何故ならば自身の全ての戦い方が通じない相手と戦った事などなのはは経験した事が無い。

十六年前にフェイトと激突した時は努力の果てに突破口が見えた。

その後の闇の書の管制人格であったリインフォースとの激闘でも、はやてを目覚めさせられればという突破口が見えた。

管理局に入局してからは、己よりも実力は低いが危険な任務を何度もこなして来た。

そして六年前に聖王として覚醒したヴィヴィオとの激闘でも、後遺症が残るほどの負傷を負いながらも勝利出来た。だが、今までの戦いの経験全てを持ってしてもブラックを倒す突破口が全くなのはには見えない。それは在る意味では必然と言っていい事だった。

今までなのはが倒して来た強敵と呼べる相手は何処か心に迷いが存在し、同時に実力の差も余り存在していなかった。迷いの在る同等の敵と自身の行いに間違いがないと思っているなのはでは、必然的に迷いの在る相手の方が不利になる。心に入り込む隙が在るからだ。

だが、ブラックは自身の行いなどに全く迷いを持っていない。それはなのはにとっては初めての経験だった。

実力でも圧倒的と言う言葉でさえも足りないほどの開きが存在し、更には迷いのない相手と戦った事がないなのはは、ブラックを責める手立てを全く思いつく事が出来ない。
更になのはは気がついていないが、既にブラックはなのはに心理戦を仕掛けていた。
魔導師にとって戦うのに必要不可欠な物はデバイスや武装。それらがなくなれば例外を除けば大抵の魔導師は無力に成り下がる。Sランクオーバーのなのはに関しても同じである。
それ故になのはは無意識の内に残っている『フォートレス』や切断武器として機能で在るブレードエッジを備えているレイジングハート・エクセリオン・単独飛行形態をブラックに向かわせる事を行えなかった。
向かわせて先の二つの『フォートレス』のように破壊されれば、それだけでなのはの戦力は減る。
万が一レイジングハートが破壊されでもしたら、その時点でなのはの敗北。重剣として使える『ストライクカノン』に一撃で深い傷をブラックは負わせているのだから、切り結ぶ事はもっと不可能。
遠距離か中距離で戦うしかなのはは出来ない状況に追い込まれていた。それを表すようになのはは焦りを覚えながら『ストライクカノン』やレイジングハートの先端から砲撃を放つが、ブラックはその攻撃を避けるか切り裂いて無効化し続ける。

「このっ！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオン！！

「無駄だ！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオ

（ッ！！不味い！？また視界が！？）

なのはが砲撃を撃ち出すと同時にブラックはエネルギー弾を投げつけ、砲撃とエネルギー弾は激突し爆発を起こした。

それによって視界が塞がれた事実になのはは慌ててその場から離れようとする。

しかし、離れる直前に煙の中から黒き手甲ードラモンキラーが現れ、『ストライクカノン』に深々とその爪先を突き刺す。

ーーードスン！！

「ッ！！」

「弱いな。貴様は！！」

ーーードゴォォン！！

「グフッ！！」

叫ぶと共に腹部を蹴られたなのはは、そのバリアジャケット越しでも伝わって来る感じた事の無い衝撃に息を吐き出した。

ブラックはその様子をつまらなそうに眺めながら、右腕のドラモンキラーを振り抜くと共に声を掛ける。

「情報では貴様は不屈のエース・オブ・エースなどと呼ばれているらしいな！」

ーーードゴォォン！！

「ガハッ！！」

「とんだ勘違いもいいところだ。貴様は不屈の心など持っていない。持っているのは、ただ誰からも必要とされなくなる事の怯えだけだ！！」

ーーードォン！！

「ガッ！！」

「不屈とは、何者にも負けず、何者にも屈さず、如何なる困難な状況でも乗り越えられる者だけが得られる称号。だが、それは己よりも強き者達を倒して来た奴だけが辿り着ける場所だ。自らよりも弱く！！迷いを持つ者だけを倒して来た貴様が名乗るのは、百年以上も早い！！」

ーーードゴオオォン！！

「アッ！！」

ーーーガシッ！！

連続攻撃を受けて息絶え絶えの状態になったの襟元を、ブラックは左腕で掴み上げた。

そのままブラックは殺気が混じった視線を、ボロボロな状態に変わったなのはに向けて語り出す。

「嘗て貴様と同じ奴が居た。孤独に怯え、孤独から逃れる為だけに力を振るっていた。そいつと貴様は同じだ・・・いや、今は違うか。今のアイツと貴様を同類に考えるのはアイツに失礼極まりないな。

自らの意にそぐわなければ力で相手を屈服させて従わせている貴様と、大切な奴らを護る為ならば嫌われようと罵られようと力を振るうアイツとでは全く別人だ」

「・・・ち・・が・・う」

「何か言ったか？」

「・・・・私は・・・誰かを従わせる・・・為に・・・力なんて・・・振るっていない・・・」

「ほう。ではお前が振るった力は何だ？相手を思いやるではなく、ただ制圧するだけの為に力を振るっている貴様は？」

「・・・傷つけずに・・・制圧する力は・・・・護る為の力！！！」

ーーードン！！

「ん？」

なのはが叫ぶと共に何かを胸元に押し当てられるの感じたブラックは自身の胸元に目を向けてみると、もはや何かを撃ち出す事など不可能な筈の『ストライクカノン』が押し当てられていた。

その様子にブラックが目を細めた瞬間、なのはは迷う事無く『ストライクカノン』の引き金を引き、『ストライクカノン』の機構内部で魔力を暴発させて至近距離で爆発を引き起こす。

ーーードゴオオオオン！！

「ムッ！！」

「（此処だ！！）レイジングハーート！！」

≪ＯＫ！！≫

なのはの呼び声にレイジングハートは即座に応じ、待機させていた『フォートレス』を操作して爆発の衝撃で体勢を僅かに崩しているブラックの背に激突させる。

ーーードゴオオォォン！！

「粒子砲！！ファイヤーーー！！！」

ーーードゴオオォォォオン！！

なのはが叫ぶと同時にブラックの背に密着していた『フォートレス』の砲塔が光り、ブラックの背中に粒子砲が至近距離で直撃した。

だが、場所が悪かったとしか言えなかった。ブラックの背中の部分には完全体の必殺技さえも防げる強硬さを誇るブラックシールドが備わっている。

その為に至近距離で粒子砲を受けてもブラック本体にはダメージは余り通る事無く、何のダメージも受けた様子を見せずに背後へと振り返り、離れようとしていた『フォートレス』にドラモンキラーを振り抜く。

「フン！！」

ーーーバキィィィーーン！！

ーーードゴオオオォォン！！

振り抜かれたドラモンキラーによって最後の『フォートレス』の盾も断ち割れ爆発した。
そのままブラックは背後に居る筈のなのはに、決着をつける為に振り返ろうとする。
だが、その直前に右手に桜色の刃の完全閉鎖魔力刃が発生させているバルディッシュ・アサルトを握ったなのはがブラックの背に向かって飛び掛かる。

「ハアァァァァァァァァァーーーーーーーーー！！！！！！！」

「ムッ！！」

（フェイトちゃん！！力を貸して！！）

これこそがなのはの最後の切り札。戦いを始める前にフェイトが残して行ったバルディッシュ・アサルトをなのはは回収していた。
砲撃も通じず、『フォートレス』の武装も通じないブラックを倒すには、直接ブラックの体に魔力刃を突き立てる以外にないとなのはは判断した。だからこそ、フェイトが残していったバルディッシュの説得をレイジングハートに頼み、虎視眈々と機会を狙っていたのだ。
そして漸くその機会が訪れた。完全にブラックはなのはに背中を見せている。今から振り向いても反撃する事は出来ず、エネルギー弾なども生成している時間は無い。
ブラックを倒せる事をなのはは確信し、増強されている魔力も振り絞りながら突進し、レイジングハートからも援護射撃を受け、ブラックの背中のブラックシールドの間に存在している隙間に突き刺そうとする。

「これで終わりだよ！！！」

「・・・・あぁ、終わりだ。貴様の負けでな！！！ブラックストームトルネーーード！！！！」

ーーードゴオオオ

「ガッ！！」

「さて、残り時間は一分を切ったぞ。そろそろ別れの言葉を貴様のデバイスに伝えたら如何だ？どうせこの先、二度と使う事が出来なくなるのだからな」

「・・・何を・・・言っているの？・・・レイジングハートが使えなくなるって・・一体？」

「貴様が飲んだ薬。アレは服用者のリンカーコアを暴発させて莫大な魔力を無理やり発生させ、それを治療に押し当てる薬だ。だが、その絶大な回復力の反面、服用者には避ける事が出来ない副作用が起きる」

「・・・リンカーコアを暴発？・・・・ッ！！・・・ま・・・ま、まさか・・副作用って・・・うそ」

「気がついたようだな。そう、薬の副作用はただ一つ。服用後十分経過すれば無理やり暴発させて膨大な魔力を発生させていたリンカーコアは、“完全に砕け散る”事だ。安い話だろう？命と魔導師としての人生ならばな」

「・・いや・・嫌！嫌！イヤァァァァァァァァーーーーーー！！！お願い！！お願いだから！リンカーコアを止めて！！お願いだから！」

大粒の涙を流しながらなのははブラックに懇願した。

同時に自身の内からアレだけ発生していた膨大な魔力が急激に減少して行くのをなのはは感じる。

ブラックの言葉が事実であるには充分な証拠をなのははその身に感じていく。それはなのはにとっては悪夢以上の地獄だった。
幼い頃に魔法と出会い、その力を振るう事に喜びを感じていたなのはには魔法が使えない自身など想像も出来ない。いや、想像する事自体を拒否していた。一度死に掛けるほどの重傷を負いながらも立ち上がったのは、再び空を飛んで魔法を振るう為。
しかし、今その力の源と呼ぶべきリンカーコアから魔力が減っていく。いや枯渇したかのようにリンカーコアの反応さえもなのははもはや僅かにしか感じられなかった。
本当に魔法が二度と使えなくなる現実に、なのはは半狂乱になってブラックに懇願する。だが、それに対するブラックの答えは救いではなく絶望だった。

「数千兆人に一人だけリンカーコアが壊れずに済んだ奴も居るらしい。奇跡に近い可能性だが、貴様は奇跡の部隊と呼ばれている機動六課の分隊長だったのだろう？ならば、俺に見せてみろ。その奇跡とやらを」

「いや、いやぁ・・・・・イヤァァァ

ると、待機状態に戻ったレイジングハートが甲板に軽い音を立てて落下する。

ーーーカンッ！！

ーーーカラカラッ！

「アァ・・アァ・・・アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！」

「うるさい奴だ。自ら選んだのだろう？あの薬を飲む事を？フリートは伝えていた筈だ。途轍もない副作用が使用後に襲い掛かる事を・・・それを覚悟して飲んだんだ。後悔などするな！！」

ーーードゴオオォォン！！

「ガッ！！」

半狂乱になって叫び続けていたなのはをブラックは躊躇う事無く甲板に叩きつけた。

バリアジャケットも身に着けずに受けた凄まじい衝撃になのはは息を吐き出すが、ブラックは構う事無く髪を掴み上げて正面からなのはを見つめる。

ーーーガシッ！！

「気絶などさせると思うなよ？貴様はまだ絶望の半分も知らんのだからな・・・よく聞け。貴様ら管理局が犯していた大罪の全てを」

そうブラックは何とか意識を保てているなのはに声を掛けると、

気絶していて聞かずに済んでいた絶望の内容を話し出す。
管理局が行っていた違法研究の数々。ジェイル・スカリエッティの出生の秘密。『聖王のゆりかご』と言う悪夢のロストロギアを隠していた管理局上層部の行動。
それを全て見逃して違法研究の促進に図らずも手を貸してしまっていた機動六課の行動。
全ての絶望しかない情報を聞き終えたなのはは言葉も完全に失い、目も虚ろになっていた。
あの未曾有の危機と呼ばれていた『ＪＳ事件』の全ての元凶は管理局に在った。そしてその真相に最も辿り着く事が出来た近い位置にいながらも機動六課は何も行わず、寧ろ管理局の闇を促進させていた。
その事実は完全になのはの中に存在していた決定的な何かを完全に砕けさせるには充分な事実だった。
だが、なのはの絶望はそれだけでは終わらなかった。

「まだ貴様の絶望は終わっていない。戦いが始まる前にフリートが言っていただろう？『聖王のゆりかご』は聖王家の血筋が居ない限り動かない欠陥兵器だと。では、何故管理局上層部どもはそんな欠陥兵器を後生大事に隠していたと思う？簡単な話だろう」

「・・・・アァ・・・・まさか・・・・ヴィヴィオを・・・生んだのは・・・スカリエッティじゃなくて・・・・管理局・・・」

「その通りだ。貴様は何も知らず、何も考える事無く聖王の血筋を引く子供を引き取った。全ての元凶である上層部が残っている状態で奴を引き取ってしまった。それが何を作り出すかなど考える筈も無いだろう。何れは貴様の娘は貴様に憧れて管理局に入る。つまり、言い方は気に入らんが逃げられた人造魔導師が懐に戻って来る訳だ。よく出来たシステムだな。自分達で『人造魔導師計画と戦闘機人計

画』を世にばら撒いておきながら、何も知らない管理局の連中が人造魔導師や戦闘機人どもを救い出し、最終的には自分達の戦力に加える。本当に上手く出来ている」

「・・・・・そんな・・・・・嘘だよ・・・・・こんなの悪いゆ…」

「夢などではなく全て現実だ。さて、そろそろ終わりだ。最後に貴様に見せてやろう。貴様が言っていた、“傷つけずに制圧する力”の一端をな！！」

ーーーードグウゥゥゥゥ――――！！！

「ヒィッ！！」

ーーーガクガクガクガクッ！！

ブラックが叫ぶと共に解放した殺気に、なのはは恐怖に染まった声を上げて全身をガクガクと震わせながら頭を抱えた。

その顔に浮かんでいるのは恐怖のみ。なのはは感じた事も無い圧倒的と言う言葉でさえも足りないほどの殺気に恐怖を感じているのだ。少しでもその恐怖から逃れようとなのはは後退りするが、ブラックは構わずに殺気を放ちながらゆっくりと右腕を伸ばす。

今なのはの目には映っているブラックの大きさは三メートルではなく、数十メートルほどにまで巨大化していた。

圧倒的な殺気を受けて湧き上がって来る恐怖心に、なのはは現実を正しく認識する能力さえも失ったのだ。そんな、なのはにブラックは殺気を振り撒きながら語りかける。

「今俺は傷を負わせる事無く、貴様を完全に屈服させた。コレがお前の言っていた“傷つけずに制圧する力”で行える事だ。貴様に言

っておく。力が誰かを護るのではない。力は所詮何処まで言っても力でしかない。誰かを護るか如何かを決めるのは意思と信念だ。それさえも分からず力を振るい、自らの意思しか認めようとしない貴様らは正に管理局そのものだ。良かったな、本当の意味の管理局員になれていて」

「アァ・・アァ・・アァ・・アァ・・ウワァァァァァァァァァァーーーーーーー！！！！」

「・・・・・フン、殺す価値も無い。貴様はそのまま不様に這いずり回るのが似合っている。そして己の行って来た行動の全てを改めて見ろ。もはや貴様に待っているのは“地獄”だけだ。救ってくれる者など・・・・（この世界のアイツだけだろうな）」

そうブラックはこの世界で唯一なのはを救える者の顔を頭に思い浮かべながら上空へと飛び上がり、もはやボロボロとしか言えないほどに外装がなっているヴォルフラムから離れて行く。

後に残されたのは漆黒の竜人の暴虐を物語るだけのヴォルフラムと、その甲板で頭と膝を抱えながら幼子のように恐怖に体を震わせて、大粒の涙と悲しみだけしかない泣き声を出し続ける、エース・オブ・エースと呼ばれた高町なのはの成れの果てだけだった。

こうして管理局が結成した最強の部隊と呼ぶべき特務六課は終わった。

何の功績も残さず、自分達の信念も完全に否定され、残ったのはただ罪深き自分達の所業だけ。後に待っているのは彼らの行いを正しく認識した民衆の怒り。それだけが特務六課に残されたモノだった。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　後編　さ

ブラックがヴォルフラムに辿り着いて暴虐を行う少し前。
『ヘイムダル』の影響範囲から逃れる為に投げられたアイシスとリリィは、身を寄せ合いながら空中に浮かんでいた。
彼女達が目撃したのはブラックが『ヘイムダル』を跡形も無く消滅させる瞬間。
当初はいきなり投げられた事に怒りを覚えていたが、そんなものは完全に吹き飛んでいた。
何せ如何考えても真正面から破る事は不可能としか思えなかった『ヘイムダル』をブラックは撃ち破ったのだ。そんな事を行える相手に怒りなどと言う感情は完全に消失していた。
寧ろ敵として認識されずに済んだ幸福にアイシスは居るかもどうか分からない神と、次元世界で信仰されている聖王に感謝していた。
リリィもブラックがどのような存在なのかまでは詳しく分からなくとも、完全に敵にだけは本当に回してはいけない事を理解し、アイシスと強く抱き合う。
そんな風に二人が己の幸運について考えていると、高速で移動して来たフリートが二人の前に辿り着く。

ーーービュン！！

『ッ！！』

「待たせてしまいましたね・・・さて、時間もそろそろ無くなって来たので、あの少年を助けに向かいますよ」

（ッ！！トーマを助けてくれるんですか！？）

「・・・・正確に言えば今の状態から助け出すだけです。そしてそれを行うのは私ではありません。私はあくまで手を貸すだけで、今の状態から助け出すのはリリィ・シュトロゼック。貴女です」

（私？）

「あの・・・本当にリリィがトーマを救えるんですか？」

フリートが告げた言葉にリリィは首を傾げ、アイシスはフリートに質問した。

それに対してフリートは無言で頷き、二人がついて来れる速さでトーマの方へと向かいだし、アイシスとリリィは疑問を覚えながらもフリートについていく。

「・・・私が診たところ、あの少年。トーマ君の状態は非常に危険です。恐らく何も考えずに、いえ、寧ろ自分の持っている力の正体も知らずに『ゼロ』を放出してしまったのでしょう・・・その結果、視覚、聴覚などの相手を識別する五感が失われています。でしょう？リリィちゃん」

（・・はい・・・今のトーマは何も聞こえないし、見えない・・念話も同じです・・・それがエクリプス発病者・・・）

「正確に言えば『ゼロ因子適合者（ドライバー）』特有の症状です。言うなればこの状態こそ“ＥＣ感染者の完成形”です。何せ念話も直接の会話も出来ないんですから、説得も何も出来ませんからね。識別出来るのは自分にとっての脅威だけですから、知り合いが近づいても認識出来ずに間違いなく攻撃が飛んで来るでしょうね」

「そんな！？だったらどうやってトーマを助けるんですか！？」

「・・・・今の状況で使える方法は完全に一つだけです。彼が持っているリアクター『銀十字の書』は保有者を守り、外敵を排除する武器管制システムです・・・ですが、保有者だけでは制御出来ず、ただ言われるままに敵性と認識した相手を攻撃します。『銀十字の書』を制御する為に必要なのは総合制御ユニット・・・リリィちゃん！！貴女が彼とエンゲージするしかないんです！！それだけが彼を救える方法です！」

（私がトーマとエンゲージ？）

「・・・・・えっ？・・・・あのリリィちゃん？・・・・もしかして何も覚えていないんですか？自分がどんな力を持っているのかも？」

自身の言葉に首を傾げているリリィの様子に、フリートは底知れない嫌な予感を感じながら質問した。

その質問に対してリリィは無言でコクリと頷き、アイシスは自身の知るリリィの情報をフリートに説明しだす。

「あの・・・如何言う意味で言っているのかよく私には分からないんですけど・・・実はリリィ・・・記憶喪失なんです」

「・・記憶喪失ですと？」

（・・・はい・・・・少しだけ思い出したのは・・私がエクリプスウィルスの感染源だった事だけで・・・他には何もまだ思い出せなくて）

「・・・・・ノオォォォォォォォォォォォォーーーーーーーーーー！！！！リリィちゃんの力が無いと無理ですよ！！今の状態の彼を救う

にはワクチンを投与するか！リリィちゃんとのエンゲージだけなのに！？私が近づいたら確実に『銀十字の書』が敵性と認識するから治療なんて無理なのに！？」

「えぇぇぇぇーーーー！！！だったら、ワクチンを投与したら如何なんですか！？」

「もっと無理です！！詳しい話はしていられないので教えられませんが、彼がエクリプスウィルスから脱した事が知られたら、確実にあらゆる違法研究所に狙われます！！そんな実験動物としての人生に彼を送りたいんですか！？」

「絶対駄目です！！」

「でしょう！・・・・・こうなったら・・・彼を説得する以外に方法はないですね」

「えっ？」

フリートの真剣な声音にアイシスは疑問を覚えるが、フリートは構わずに背中の荷物袋の中に手を入れて通信機らしき物を取り出す。

それをフリートはアイシスの手の中に乗せて、アイシスとリリィがその通信機らしき機械に目を向けると、フリートは機械の説明を始める。

「その機械は特定の念話や波長を傍受する機械です。今トーマ君は念話も会話も出来ない状態ですが、完全に声が聞こえない訳ではないです。全部会話が封じられているのならば『銀十字の書』の指令行動も聞こえない筈ですからね」

「つまりこの機械でその特定のトーマに届いている波長を調べて、それに合わせて通信を送ればトーマに聞こえる訳ですか？」

「正解です・・・後、緊急時にはコレを使って下さい」

そうフリートは告げるとアイシスの装備しているパフュームグラブの中に幾つ物薬品らしきものを詰め込んで行く。

アイシスはその様子に驚いてフリートを止めようとするが、既に全ての薬品をフリートはパフュームグラブに詰め込み終わっていた。

「今入れた薬品の効果は既に貴女のデバイスに説明を残しておきます。凶鳥（フッケバイン）かトーマ君が襲って来た時に使用するのです・・・・良いですか。貴女が手に入れた薬品は強力な物ばかりですので、使用には充分に気をつけて下さい」

「だったら効果ぐらいは説明して下さいよ！！」

「そんな時間は本当にありません。今のトーマ君は非常に危険な状態です。距離が在ったとは言え、アレだけの戦闘の気配を『銀十字の書』が見逃す訳はありません。最悪の場合は転移されるでしょう。そうなれば追う事は難しいです。何時自己対滅が起きても可笑しくない状態なんですからね・・・・とにかく私が彼と戦っている間に何としても波長を発見して下さい」

（・・・・如何して其処までしてくれるんですか？・・・・管理局って言う組織とは敵対しているのに？）

「・・・・それは全部終わった後に説明しましょう。まぁ、色々と管理局と敵対している事情は在りますけど、トーマ君を助けるのを手伝おうと決めたのは、黒髪の女の子。貴女の行動です」

「私の行動？」

「そうですよ・・・さて、そろそろ行きますので、巻き込まれない程度の距離は取って於いて下さいね！」

ーーービュン！！

「アッ！・・・あの！！私の名前はアイシス・イーグレットです！！」

「・・・フリート！！フリート・アルハザード！！それが私の名前ですよ！アイシスちゃん！！」

「・・・えっ？・・・アルハザードって・・・嘘・・・御伽噺じゃなかったの？」

フリートが告げた名前にアイシスは呆けた顔をしながらトーマへと向かって行くフリートの背を見つめ、リリィは祈るように手を組みながらフリートの背を見つめるのだった。

ルヴェラ海上、上空。

その場所でトーマ・アヴェニールは眠るように空中に横になっていた。トーマの体を覆うのは黒き形状をして攻撃型の『黒騎士』。横に浮かぶのはリアクターである『銀十字の書』そしてその手に握られるのは剣と呼べるほどの大きさを持ち、左手に盾と刃物が一体化したような武装の形態を得たディバイダー９９６。

ＥＣ感染者の宿命を受け入れられなかったトーマは、誰も傷つけ

る事無く一人で消える為にその場に漂っていた。
しかし、トーマの願いに反するように『銀十字の書』は高速で近づいて来る一つの反応を捉える。
≪敵性存在の接近を確認≫
（誰か来る・・・・来ちゃ駄目だ・・・・俺に近づくと・・・・）
≪敵性存在を排除します≫
ーーーザアアアアアアアアアアアアアッ！！！
トーマの願いに反するように『銀十字の書』は動き出し、無数にページをばら撒き始めた。
同時にトーマは立ち上がり、足元に発生させた魔法陣らしきものに立ち上がると、右手に握っているディバイダー９９６から閃光が走り、全てのページにエネルギーが充填されていく。
ーーーガウン！！
≪Ｓｉｌｖｅｒ　Ｓｔａｒｓ“Ｈｕｎｄｒｅｄ　ｍｉｌｌｉｏｎ”（シルバー・スターズ・ハンドレッドミリオン）ッ！≫
ーーードドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドッ！！！！
『銀十字の書』が命令を発すると共に全てのページからエネルギー弾が放たれ、広域殲滅射撃ーシルバー・スターズ・ハンドレッドミリオンーが接近していた存在ーフリートーへと放たれた。
高速でトーマに向かっていたフリートは、その桁外れに多いエネ

ルギー弾の数に僅かに顔を顰めるが、すぐさま背中の荷物袋の中から起動状態のケーニヒ・リアクデットを二本とも引き抜き、迫って来る桁外れのエネルギー弾に対してエネルギー波を薙ぎ払うように連続で放つ。

「ハアァァァァァァァァーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

ーーードゴオオオ

『銀十字の書』がトーマにフリートの生存を伝えると同時に、トーマから十メートルほど離れた場所にフリートが移動して来た。
そしてフリートは相殺した影響で白衣に付いた埃を払いながら、目から涙を流しているトーマに視線を向ける。

「・・・・やれやれ、コレは思ったよりも厄介な相手ですね・・・・・私は研究の方が好きなんですけど・・・全力で相対しないと不味いですね」

ーーースチャッ！

フリートは言葉と共にケーニッヒを構えなおして、油断無くトーマを警戒する。
今の攻防だけでフリートは、トーマは油断して戦っていけない相手だと判断していた。ただでさえブラックの方に複数思考の何割かを送っている状況なのだ。
油断すれば倒される事は無くても、アイシスとリリィに被害が及ぶ可能性が高い。説得する為には一定時間戦いを続けて、完全にアイシスに渡した機械が波長を読み取らないと不可能。
武装を破壊してトーマの動きを止める手段も確かに在るが、今のトーマの状態で武装を破壊でもしたらとんでもない事態が起きる。
トーマの体は何時自己対滅が起きても可笑しくない状態。そんな状態でリアクターである『銀十字の書』が失われでもしたら、最悪トーマは自己対滅を引き起こして死ぬだろう。ディバイダー９９６に関しては別だろうが、破壊でもして転移すべきだと『銀十字の書』に判断されれば其処でも終わり。
つまりフリートは、出来るだけトーマを傷つけず、武装破壊も行わずに時間を稼がないといけないのだ。

（不味いですね・・・倒すだけならば一瞬ですけど・・・時間を稼いで動かないといけませんし・・・絶対に凶鳥（フッケバイン）の横槍も来るでしょうから・・一人じゃキツイですね・・かと言って自身満々にアイシスちゃんとリリィちゃんに告げたんですからやれるだけやりますか！！）

気に入らない相手には何を積まれても動かないフリートだが、気に入った相手の為ならば無償で動く。

アイシスのトーマを心から思う行動は、アイシス本人が気づかない内にフリートの心を動かしていたのだ。

そしてフリートがケーニッヒを油断無く構えながらトーマを見つめていると、『銀十字の書』がトーマに指示を出す。

≪接近確認・・・近接戦闘機能（アサルトシフト）稼動開始≫

ーーーユラッ！

「ッ！！」

ーーーガキィィィィーーーン！！

緩やかな動きをトーマが行った瞬間、フリートは素早く左手に握っている小刀の方のケーニッヒを動かし、トーマが突き出して来たディバイダー９９６を防いだ。

（近接型のステップインにしても速い！）

ーーーガキィィィーーーン！！

一瞬で自身の目の前に移動したトーマの動きにフリートは内心で

驚愕しながらも、トーマが突き出して来た左腕の盾と刃物が一体化した武装を長刀の方のケーニッヒで跳ね上げた。
　そのままフリートとトーマは互いに武器を激突させあい、斬り合いを行い始める。

ーーーガキィン！！ガキッ！！キィン！！ガキィィィーーン！！

（ムムムッ！この歳で何気に航空剣技を使えるとは・・・ＥＣ感染者とかは別にしても恐ろしいですね・・・だからこそ、この子は戦いなど行わせるべきではない！！）

ーーーガキィィィーーン！！

「ッ！！」

「ハッ！！」

ーーードォン！！

「グッ！！」

　フリートの蹴りを腹部に受けたトーマは僅かに声を上げて剣を止めてしまう。
　その隙にフリートはトーマの剣の範囲から逃れ、仕切りなおすようにケーニッヒを持ち直しながら険しい視線をトーマに向けると、トーマは泣きながらフリートに声を掛ける。

「・・誰だか分からないけど・・・俺に近づかないで・・・今ならまだ間に合うから・・・俺は誰も殺したりしたくないから・・・」

「・・・・優しいですね。貴方みたいな優しい子がＥＣ感染者になるなんて、この世は本当に不条理ですね・・・・だからこそ、挑みたくなるんですけど」

ーーースチャッ！！

フリートはケーニッヒの剣先をトーマに構えなおした。

その動きに『銀十字の書』は即座にトーマへと指示を出し、二人はそのまま再び剣をぶつけ合って甲高い金属音を鳴り響かせ続ける。

その様子を離れたところで見ていたアイシスとリリィは、早く機械がトーマに声を伝える事が出来る波長を読み取ってくれないかと願う。

今のところは剣だけの撃ち合いにフリートが持っていっているが、何れは攻め切れないと判断した『銀十字の書』が新たな指示を出すだろう。

そうなればフリートもトーマと互角に合わせて戦うなど出来なくなる可能性が在る。アイシスとリリィはそうなる前に状況が打開出来る事を強く願いながら機械の液晶部分を見つめる。

「まだなの！早く波長を見つけてよ！！」

（落ち着いてアイシス・・・あの人が渡してくれた機械を信じよう・・・今の私達にはそれしか出来ない）

「リリィ」

（・・・私が記憶を持っていたら・・トーマを救えたのに・・・私は何も思い出せない・・・・トーマに声も掛けられない・・・私は！）

「・・・自分を責めないでリリィ・・・今はあの人が渡してくれた次善策を使おう・・・絶対にトーマを助けるん…」

「悪いが、今はソイツは困るんだよ！！」

『ッ！！』

ーーーズガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！！

「クッ！！」

突如として響いた銃撃の音に、アイシスは急いでその場をリリィを抱えながら飛び退くと、直前まで居た場所をガトリング砲の弾が通り過ぎた。

アイシスはその見覚えの在る攻撃に顔を険しくしながら顔を向けてみると、両腕にガトリング砲が備わっているディバイダー７１８を構えたアルナージが存在していた。

「無駄おっぱい！！何の真似！？」

「うっせぇ！ぺったん胸！！悪いがお前らには先に死んで貰うぜ。あの坊主には糞女の相手をして貰わないと困るからな」

「ッ！！トーマを利用する気なの！？」

「悪いとは思うが・・・こっちもサイ姉とビル兄の命がかかってんだ。そう言う訳でお前らから死ね！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガガガガガッ！！

「ッ！！この！！」

ーーービュン！！

ガトリング砲から弾が撃ち出されるのを目撃したアイシスは、素早く動き回ってガトリング砲から逃れる。

しかし、アルナージは素早くガトリング砲の照準をアイシスとリリィに合わせて引き金を引き、アイシスとリリィを追い立てるように連射し続ける。

ーーーズガガガガガガガガガガガガガガッ！！

「この！いい加減にしなさいよ！！パフィ！！こうなったら、さっき渡された薬を使うよ！！」

≪了解です≫

アイシスの命令にパフュームグラブのＡＩであるパフィは即座に応じ、フリートから渡された薬品を装填する。

それを確認したアイシスはアルナージに向かって薬品を振り撒こうとする。だが、その直前にアイシスとリリィの視界を覆うように大量のページが二人の周りに出現する。

ーーーザザザザザザザザザザッ！！

「ッ！！コレ！？」

（アイシス！！上！！）

「ッ！！」

リリィの言葉にアイシスが頭上を仰ぎ見てみると、刀を下に向けて垂直に構えたカレンがアイシスとリリィに向かって落下して来ていた。
アイシスはそれを目撃すると、即座に横に移動しようとするが、二人を囲むように無数のページが動き回り移動する事が出来なかった。
その事実にアイシスとリリィは愕然するが、カレンは止まる事無く刀をアイシスとリリィの体に突き刺そうとする。だが、その直前に遠方から突如としてトーマと激突し合っていた筈のフリートが持っているケーニッヒの刀身が高速で伸びて来て、カレンを貫こうとする。

「チッ！！」

ーーーガキィィィーーン！！

伸びて来た刀身に気がついたカレンは、即座に刀を使ってケーニッヒの刀身を防いだ。
弾かれたケーニッヒは、そのまま下へと落下してアイシスとリリィを囲んでいたページの破り、アイシスはその間から飛び出した。
そのまま二人がケーニッヒの刃が伸びて来ている方に目を向けると、左腕の小刀だけでトーマと斬りあっているフリートが存在していた。
自分達を助けてくれた事実にアイシスとリリィは申し訳なさそうに顔を俯かせていると、アイシスの持っていた機械から電子音声が鳴り響く。

ーーーピコン！！

「ッ！！やった！！波長が分かったんだ！！・・・トーマ！！！その人に攻撃した駄目！！」

「ッ！！・・・アイシス？」

突如として聞こえて来た声にトーマはフリートにディバイダー９９６を振り抜くのを止めて、声が聞こえて来た方に顔を向ける。

アイシスとリリィはその様子に喜びを感じながら、伝えなければいけない事を伝える為に機械に向かって叫ぶ。

「聞いてトーマ！！今目の前に居る人は敵じゃないの！？だから、その人に攻撃…」

ーーーズガァァン！！

『ッ！！』

アイシスが叫んでいる途中で銃声が鳴り響き、アイシスが持っていた機械は粉々に砕け散った。

その事実にアイシスとリリィは目を見開き、銃声が鳴り響いた方向に目を向けてみると、上下二連の散弾銃に折れたブレードを備えたディバイダー９２８の銃口をアイシスとリリィに構えているヴェイロンが空に浮かんでいた。

「コレで坊主に通信する方法は無くなったな」

「ッ！！お前えぇぇぇぇぇぇぇーーーーー！！！」

「ハッ！悪いが終わりだぜ。メスガキども！フレシェット・シェルッ！！」

ーーーズガァン！！

「ッ！！」

ーーービュン！！

ヴェイロンがディバイダー９２８の引き金から引くのを目撃したアイシスは、リリィを護る為に逃げる。

しかし、ヴェイロン、アルナージ、カレンは逃がさないと言うようにそれぞれ攻撃を放ち、フリートは二人の救援に向かうとする。

だが、再びアイシスの声が聞こえなくなった事で『銀十字の書』の指示を聞くようになったトーマに道を阻まれてしまう。

その事実にフリートは焦りながら、何とか状況を打開する策は無いのかと複数思考で考えていると、その耳に絶対に聞き逃す事が出来ない人物の名前が聞こえて来る。

『フリートさん！！リンディさんが阿修羅になって！！潰し六千回じゃすまさないって言っていますよ！！！！』

「ギョエェェェェェェェェェェェーーー

しかし、奇声が聞こえなかったトーマは構わずにディバイダー９９６をフリートに向かって振り抜く。

「ハァッ！！」

ーーーガキィィィィーン！！

「ッ！！」

「少し離れていなさい！！今はそれどころじゃないんですよ！！」

ーーードゴオオォン！！

トーマが振りぬいて来たディバイダー９９６をフリートはケーニッヒで受け止めると同時に、トーマの胴体に渾身の力を込めた蹴りを叩きつけた。

その威力にトーマは吹き飛ぶが、フリートは構わずに複数思考の半分以上を使用して声が聞こえて来た方にモニターを展開させる。

突如として完全に動きを止めたフリートにカレン達は最大級のチャンスが訪れたと思い、カレンは即座にフッケバインの操舵手であるステラに通信を行う。

「ステラ！！砲塔の準備よ！！」

『もう終わってるよ！！このまま砲撃をはな…』

ーーードゴオオオ

通信を行っていたステラの声を遮るように突如としてフッケバインの横に何かが激突した。
その衝撃によって傾くフッケバインを目撃したカレン達は目を見開き、急いでフッケバイン内部に居るフォルティスとステラに連絡を行う。

「フォルティス！！ステラ！！一体如何したの！？」

『・・・りゅ、竜人からの攻撃です！？管理局の艦艇からとんでもない物を投げつけて来たんですよ！？』

「とんでもないもの？・・・まさか、爆弾とかじゃないでしょうね？」

『・・・そ、そんな生易しい物じゃないですよ！？投げつけて来たのは！？』

『例の変な喋り方をしている管理局の司令官を凍らせた氷塊だよ！！』

『ハァッ！？』

ステラの報告にカレン、アルナージ、ヴェイロンは唖然とした顔をして大口を開けてしまった。
普通に考えてそんな物が飛んで来る事は考えられない。だが、現にブラックはそれをフッケバインに投げつけたのだ。はやてを封じ込めた三十メートルほどの大きさの氷塊を。
当然そんな絶対に在りえないような報告にカレン達の完全に動きが止まっていると、チャンスだと判断したアイシスがリリィを抱えながら三人の包囲網を抜け出す。

ーーービュン！！

「しまった！！クソ！！逃がすかよ！」

アイシスが抜け出すのを目撃したアルナージは、アイシスを撃ち落そうとディバイダー７１８の照準を合わせる。

その事実にアイシスは今度こそフリートから渡された薬品を使用する為に両腕を構える。

だが、その直前に何かを焦ったようにフリートがアイシスに向かって叫ぶ。

「アイシスちゃん！！そっちは駄目です！！」

≪脅威判定大。排除優先≫

ーーービュン！！

「えっ？」

（トーマ！駄目！！）

背後から響いた電子音声にアイシスが目を向けてみると、ディバイダー９９６を構えたトーマが存在していた。

その事実にアイシスの動きは完全に止まり、リリィはアイシスを斬ろうとしているトーマに向かって叫ぶが、トーマは止まる事無くディバイダー９９６を振り下ろす。

アイシスは迫る刃に死を感じて強く目を瞑り、リリィはアイシスを護るように動くが時既に遅くディバイダー９９６の刃はアイシスの体を、切り裂けなかった。

ーーーガキィィィィーーーン！！

「えっ？」

（貴女は！？）

聞こえて来た甲高い金属音にアイシスは慌てて目を開け、リリィはアイシスと自身を護った人物の顔に驚いた。

その人物は本来ならばヴォルフラムに居る筈の人物。そして二度と一人では立ち上がれないと告げられていた筈の女性。

しかし、今その女性はアイシスとリリィを護るようにトーマが振り抜いたディバイダー９９６を右手に握っている杖ーレイジングハートで防ぎ、背中に見た事も無い生物を張り付かせながらトーマと睨み合っていた。

「いけないよ。この子達は貴方の友達なんでしょう？だったら傷つけたりしたら駄目だよ！！」

ーーードゴオオォォン！！

「グウゥッ！！」

トーマの一撃を防いでいた女性ー高町なのはは叫ぶと同時にレイジングハートを振り抜き、ディバイダー９９６を弾くと同時にトーマの顎に一撃を加えた。

顎に攻撃を食らった事で頭を揺らされたトーマは体勢を崩してよろめいてしまう。その隙を逃す事無くなのははアイシスの襟を掴んで高速移動の魔法を使用してフリートの傍に一瞬で移動する。

≪フラッシュムーブ！≫

ーーービュン！！

「フゥ～助かりましたよ、なのはさん」

「もう少し相手の動きを見た方が良いですよ」

「とは言っても、一対四で魔導師殺しが全員相手だから少しフリートさんでもキツイよ、なのは。毒とかもこの子達を巻き込まない為に使えなかったみたいだしね」

そうガブモンは油断無く自分達を睨んで来ているカレン達を見ながら声を出し、なのはは掴んでいたアイシスの襟を手放すと、レイジングハートの杖先をカレン達に向かって構える。

ーーーダン！！

「・・・随分と厄介ごとに首を突っ込んだんですね、フリートさん」

「イヤ～・・・それはそうなんですけど・・・好きで突っ込んだ訳じゃないですよ」

「まぁ、構わないんですけどね・・・今私・・すっごく機嫌が悪いんです・・フリートさんはその子達と一緒にさっきの子を助けに向かって下さい。アレは、私とガブモン君が貰いますから」

「・・・・・・仕方ないですね・・・・課題です。凶鳥に魅せて上げなさい。本当に極められた魔導師の力を」

「・・・・了解です。それじゃ、あっちはお願いします」

フリートの言葉になのはは頷くと、ガブモンを背中に張り付かせながらフリート、アイシス、リリィを護るようにカレン達の前に出る。

それをフリートは確認すると、状況が分からずに困惑しているアイシスとリリィを連れてトーマの下へと急いで向かって行く。

アルナージはその動きに気がつきディバイダー７１８の照準をフリート達に構えようとするが、なのはがそれを遮り、カレンは訝しげな視線をなのはに向ける。

「・・・貴女？・・・確か管理局の人間でしょう？何であっちで竜人に襲われているのに、その仲間の女を護るの？」

「・・アレと私を一緒にしないでくれるかな・・・私はアレが嫌いなんだから」

「アレ？・・・・・なるほどね。管理局の方に居る女性とアンタは違うと言う事ね。さしずめ人造魔導師かしら？」

「少し違うね・・・でも、教える義務はないし、敵の貴女達に教える義理も無いから教えないよ」

「そう・・・まぁ、別にいいんだけど・・もしかして貴女一人で私達三人と戦う気なのかしら？」

「一人じゃなくてもう一人居るよ。私のパートナー、ガブモン君がね」

「はぁっ？・・・・・おいおい、まさか、その背中に張り付いてい

るマスコットの事か？プッ！！プハハハハハハッ！！笑えるよな、ヴェイ兄！あんなマスコットと魔導師が私らを倒す気だぜ！！」

アルナージはそうなのはとガブモンを見ながら大声で笑い声を上げた。

その顔に浮かぶのは完全な嘲り。ヴェイロンもアルナージのほどではないにしても、嘲りに満ちた視線をなのはとガブモンに向けていた。

魔導師が自分達に勝てないと言う絶対の自信を持っているからだ。何故ならば自分達の手には魔導殺しの武器であるディバイダーが存在している。

稼動状態のディバイダーは魔力エネルギーの結合分断（ゼロエフェクト）という共通性能を持ち、魔力による弾丸や物質を全て無力化する。それ故に彼らは相手が魔導師ならば勝てると確信し切っている。

ガブモンにしても如何見てもガブモンの容姿は、戦闘に特化した生物には見えない。寧ろマスコットのぬいぐるみにしか彼らには見えなかった。

「ヘッ！！テメエの背中に張り付いているマスコット！剥製にしてステラのぬいぐるみにしてやるぜ！」

「・・・・もう良い？そろそろ始めるよ。油断なんてしないでよね。一瞬で終わったら、気分が晴れないから！！ディバインバスターー！！！！！」

ーーードグオオオ

へと飛び出し、カレンとヴェイロンを護るようにディバインバスターの前に立ちはだかった。
自身に近づけばディバインバスターが分断（ディバイド）される事が分かっている故に行動。
それが正しいと言うようにアルナージに迫っていたディバインバスターは一定の距離に達した瞬間に分断（ディバイド）される。

ーーーパン！！

「ハッ！！やっぱ無駄だったな！！コレで吹き飛べ！！」

ーーードドドドドドドドドッ！！

アルナージは余裕の笑みを浮かべながらロケットランチャーに切り替えたディバイダー718の引き金を引き、なのはとガブモンに向かって撃ち出した。
その攻撃に対して素早くなのはは何処に攻撃を放つのが効率がいいのかを見切ると、迷わずに背中に居るガブモンに指示を出す。

「ガブモン君！！真ん中辺りになるロケットに攻撃！！」

「プチファイヤーーーー！！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「へぇ、ただのマスコットじゃなかった訳か！だけど、弱い事には変わりねぇ！ヴェイ兄！カレン！！此処はあたしに任せて糞女の方を！」

「ハッ、すぐに来いよ」

（・・・・・何で最初に今の攻撃をあの生物は放ったなかったの？）

アルナージの言葉にヴェイロンは頷くが、カレンだけはなのはの動きに疑問を持っていた。

今ガブモンが放った攻撃からは魔力がカレンには感じられなかったのだ。それは魔導殺しを持っている自分達には切り札となる攻撃。なのになのはは最初に魔力攻撃を放った。

その事にカレンは訝しげに顔を歪めるが、アルナージは構わずに煙の中から飛び出したなのはに向かって行く。

「オラッ！！逃げているだけじゃ勝てねぇぞ！魔導師！！」

「・・そうだね。攻撃もしないとね！！ディバインバスターーー！！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

「馬鹿の一つ覚え…」

「バーースト！！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

それを目撃したカレンは最初のなのはの攻撃の狙いに気がつき、慌ててヴェイロンに向かって叫ぶ。

「まさか！？ヴェイロン！！アルの救援に向かいなさい！！」

「あん？」

「あの女！アルが分断（ディバイド）出来る距離を最初の砲撃で測っていたのよ！！視界を確実に遮られる爆発を引き起こす為にね！！」

「ッ！！チィッ！！」

カレンの説明にヴェイロンは急いでアルナージの救援を行う為に向かい出す。

しかし、既に時遅く、完全に視界を煙に遮られてしまって辺りを見回しているアルナージになのはは高速移動の魔法を使用して急接近する。

≪フラッシュムーブ！！≫

ーーービュン！！

「ハァッ！！」

「クッ！！」

ーーーガァァァァァーン！！

なのはが振り下ろして来たレイジングハートを、アルナージはギリギリのところで右手に持っていたディバイダー７１８で掲げて防

御した。
　それを目撃したなのはは、即座にレイジングハートを横に振り抜いて今度はアルナージが握っている左側のディバイダー７１８に叩きつける。
ーーーガアァァァァーン！！
「クッ！！馬鹿が！？ディバイダーは兵器なんだぞ！？その程度の攻撃で壊れるか！！」
　アルナージはそう嘲りながらなのはから離れてディバイダー７１８の引き金を引こうとする。
「終わりだ！！食らえ！！」
ーーーカチャッ！！
「・・・・えっ？」
「もう撃てないよ。だって、内部の回路が壊れてるからね」
「ハァッ？・・・壊れている？」
ーーーカチャッ！カチャッ！
　なのはの言葉の意味を理解したアルナージは、何度も引き金を引いて弾丸を放とうとするが、ディバイダー７１８は何の反応も示さなかった。
　その事実が信じられず呆けた顔をアルナージがしていると、なのはは一瞬の内でアルナージの懐に入り込み、レイジングハートの杖

先をアルナージに突きつける。

ーーースチャッ！！

「ッ！！」

「知っている？デバイスやディバイダーってね、凄いデリケートなんだよ。外装がどれだけ強くても、内部の回路自体は繊細。だから、もし回路自体に強い衝撃が加わった場合、すぐに不良を起こすの」

「・・・・嘘だろう？・・・・たったアレだけの衝撃でディバイダーが壊れるわけねぇだろうが！？」

「だって、殆どの衝撃はディバイダー内部だけに徹っていたから貴女が感じた衝撃は少なく済んだんだよ。コレが私の実家に伝わる武術の技法の一つ『徹』。素手、木刀、真剣でも何でも衝撃を徹す技法でね。私才能無いから頑張って使えるようになったのはコレだけなんだけど」

ーーードオオォン！！

「グフッ！！！」

「徹底的に鍛えて貰ったから、お父さんからはコレだけ免許皆伝貰っているんだよ」

内臓にダメージを受けて苦しんでいるアルナージに、なのはは優しげに声を掛けた。

だが、アルナージはそれどころではなかった。感じた事も無い衝撃。幾らエクリプスウィルスに感染していてもダメージや痛みだけ

は如何する事も出来ない。
　しかもダメージを受けている場所は内蔵と言う鍛える事が不可能に近い箇所。それ故にアルナージは苦しむが、忘れてはいけない事が在った。
　なのはの一撃を受けて機能不全に陥ったディバイダー７１８には分断（ディバイド）の機能さえも停止してしまっている。それ故にもはやなのはの魔法を遮るモノが完全になくなった。
　なのはがそれを見逃す筈は無く、素早くレイジングハートの杖先を苦しんでいるアルナージに向かって構えて大威力の砲撃魔法を撃ち出す。

「ストライク・スターズ！！！」

ーーードグオオオ

「プチファイヤーーーー！！！！」

ーーーゴオオオオォォォォォォーーーー！！！

「クッ！！」

ーーービュン！！

ガブモンが放ったプチファイヤーをヴェイロンは慌てて避け、カレンと並ぶように空中に浮かぶ。

「・・・ヴェイロン・・・あの女を私達が知っている魔導師と考えるのは止めなさい・・・あの女は魔法にだけ頼った連中とは違うわ」

「・・あぁ、分かったぜ、姉貴」

そうカレンとヴェイロンは同意し合うと、それぞれ武器を構えながらレイジングハートを持ち直しているなのはとガブモンを見つめる。

その様子に気がついたなのはは左手にディーアークを握り、自身の横にフローターフィールドを発生させると、ガブモンはなのはの背中から降りてフローターフィールドに飛び乗る。

ーーートン！！

「・・・そろそろ準備運動は終わりだね、ガブモン君。凶鳥潰（フッケバイン）すよ」

「了解！！」

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「ガブモン進化ッ！！」

ーーーギュルルルルルルルルルーーー！！！

『なっ！？』

突如としてデジコードに覆われたガブモンの姿を目撃したカレンとヴェイロンは驚愕した。

しかし、デジコードに覆われたガブモンは構わずに進化を行い、デジコードを内部から突き破るように銀色の体毛に覆われた腕が飛び出し、完全体に進化を終えたワーガルルモンが現れる。

「ワーガルルモン！！」

「随分と私のパートナーを馬鹿にしてくれていたけど、ワーガルルモン君を見てまだマスコットなんて馬鹿に出来るかな？」

「グルルルルッ！！」

「・・・ヴェイロン・・・私が魔導師の方をやるから、アンタは獣人の方をお願い」

「あぁ、分かってるぜ！！フレシェット・シェルッ！！」

ーーーズガァン！！

ーーービュン！！

「消えただと！？」

不意打ちのつもりで撃ったフレシェット・シェルを避けて姿を消したワーガルルモンにヴェイロンが驚愕した。
そんなヴェイロンの頭上に何時の間にか飛び上がっていたワーガルルモンは、事前になのはが作り上げていた小規模のフローターフィールドを足場にしてヴェイロンに向かって飛び掛かる。

ーーービュン！！

「なっ！？」

「ガルルキック！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「ガッ！！」

「ヴェイロン！？」

内臓に届くほどの衝撃を胴体にフッケバインに向かって吹き飛んだヴェイロンに向かってカレンは叫んだ。
その間にヴェイロンを蹴り飛ばした反動を使ってなのはの方に向かってワーガルルモンは空中で宙返りを行い、なのはは魔力を込めながら振り被っていたレイジングハートをワーガルルモンが向けて来ている足に向かって振り抜く。

「行って来るよ」

「気をつけてね！！ハァッ！！」

ーーードゴオオオ

ワーガルルモンの蹴りを受けた箇所を押さえながら、ヴェイロンは険しい声を出した。
エクリプスウィルスで強靭になっている筈の体を持ってしても、ワーガルルモンの一撃は体の芯に届いた。
もし生身の人間が受けていたら内臓が破裂していたかもしれないと考えながら、ヴェイロンがディバイダー９２８を肩に担ぎ直して自身が吹き飛んで来た方向に目を向けると、その目は驚愕に見開かれた。
何故ならばヴェイロンが向いた方角から、凄まじい速さで飛んで来るワーガルルモンを目撃したのだ。

ーーードオオオオオオン！！

「フゥ～、何とか辿り着けた」

「テメエ・・・あの竜人と同じ化け物かよ・・・此処から姉貴が居た場所までどれだけ距離が在ると思っているんだぁ？」

自身の目の前で危なげなく着地を決めたワーガルルモンにディバイダー９２８の銃口を構えながらヴェイロンは質問した。
その質問に対してワーガルルモンは鋭く尖った両手の爪を構えながら、獰猛な笑みを口元に浮かべてヴェイロンに顔を向ける。

「悪いけど、君達は倒させて貰う。僕は余り戦いは好きじゃないけど・・・君達は普通に暮らしていた人々を襲っているみたいだね」

「あぁん？・・・ハッ！結局テメエも管理局の連中と同じで殺しは止めろっていいてぇのか？」

「・・・別に殺しは否定する気は無いよ・・・だけど、ただ普通に

暮らしていたけどの者を理不尽な理由で殺すのは気に入らない。お金や物品の交換なんかで理不尽に戦えない人々の想いを踏み躙るのだけは赦せないッ！！」

「上等だぜぇ。そんな大口を叩くんだ！覚悟しやがれよぉ！糞狼！！」

ーーーズガァン！！

「覚悟するのはそっちだ！！ウオオオオォォォォォォーーーン！！！」

ヴェイロンが撃ち出して来た銃弾を避けると同時にワーガルルモンは咆哮を上げて、ヴェイロンに向かって飛び掛かるのだった。

こうして伝説の地で鍛えられた魔導師とそのパートナーであるデジモンと、魔導殺しの武器を振るう凶鳥（フッケバイン）との戦いが始まるのだった。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　後編

更新遅れてすいません。

原作を何度も読み直したのですが、凶鳥（フッケバイン）の行動理由が如何しても理解し難い部分が在ったの時間が掛かりました。遅れて申し訳ありません。

尚、次回凶鳥（フッケバイン）側の死亡者が明らかになります。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　後編　さ

凶鳥（フッケバイン）となのは、ワーガルルモンが戦闘を開始した頃。
特務六課を完膚なきまで潰し終えたブラックは、ゆっくりと空を飛びながらフッケバインに向かっていた。最も別段ブラックは凶鳥（フッケバイン）となのは、ワーガルルモンの戦いに手を出す気は無い。
興味が在る相手ならばブラックは割り込んで戦うが、凶鳥（フッケバイン）は自身の世界で完膚なきまで跡形も無く叩き潰した連中。故にブラックは、全くこの世界の凶鳥（フッケバイン）に興味が湧かないのだ。
自身の眠りを妨げた特務六課は潰したが、この世界の凶鳥（フッケバイン）はブラックに対しては何もしていない。それ故に潰す気も起きず、かと言ってフリートの手伝いもブラックはする気にはなれない。
寧ろ手加減しても強大過ぎるブラックでは、トーマを間違って再起不能にしてしまう可能性が高い。だからこそ、罷り間違ってトーマを再起不能にさせない為にもフリート、アイシス、リリィだけでトーマを助けるしかないのだ。
とにかくブラックはどちらにも興味が湧かず、如何すればいいのかと悩んでいた。

（・・・とにかく何処か眠れる場所を探すしかないな・・・これからこの世界での動きを考えれば、少しでも体力を回復する必要が在るからな・・・奪うか）

そうブラックは内心で呟くと共にフッケバインに目を向けた。
ヴォルフラムの方は既に航行が難しい状態になっている。この場で奪うのならば、凶鳥（フッケバイン）の本拠地でも在る飛翔戦艇（エスクアッド）フッケバイン。
飛翔戦艇（エスクアッド）フッケバインは管理局艦船を大きく上回る機動力と相転移能力を持っているだけではなく、装甲は大半の魔導武装を無効化し、修復能力さえも宿している。更には過去にアルカンシェルに耐

え切った経歴さえも持っている。最もブラックの世界のフッケバインは、魔法とは全く関係ないガイアフォースを食らって修復が不可能なほどに大破してしまい、フリートが悲しみの絶叫を上げたりしたのだが、この世界のフッケバインは無事に残っている。
今後のこの世界で行う後始末を考えるのならば奪って於いて損はないとブラックは判断する。

「・・・フン、どうせフリートが何か仕掛けを施しているんだ。奪って有効的に活用させて貰うとするか」

ーーービュン！！

ブラックは考えを決めると、フッケバインに向かって飛んで行くのだった。
其処で嘗て自身の世界の凶鳥（フッケバイン）を完膚なきまでに潰し、絶望と恐怖しか与えなかった惨劇と言う名の地獄を引き起こす結果を作り上げてしまった、“あのブラックの逆鱗に真っ向から触れる言葉”を再び聞く事になると知らず、ブラックはフッケバインに向かって行くのだった。

ーーーガキィィィーーン！！

ーーードォン！！ガァァン！！ブザン！！

「クッ！！」

「ン！！」

空中でそれぞれ攻撃を放ちながら激突を繰り返していたカレンとなのはは、それぞれ悔しげに顔を歪めながら離れた。
同時になのはは素早くレイジングハートの杖先をカレンに向け、自身の周りに複数の桜色の誘導弾を発生させてカレンに向かって放つ。

「アクセルシューーターーー！！シューート！！」

ーーードドドドドドドドドドドッ！！

「無駄なのは分かっているでしょう！！」

ーーーザザザザザザザザザザザザッ！！

高速で迫って来るアクセルシューターに対して、カレンは即座に左手に握っている白い本からページを振り撒き、自身を護るように前方に展開した。
アクセルシューターはそのページへと迫るが、一定の距離に近づくと分断（ディバイド）されて霧散してしまう。

ーーーパッシュン！！

（ページ一枚一枚にも分断（ディバイド）能力が備わっているんだね・・・と言う事はバリアジャケットと魔法防御も無効化されると考えて間違いないよね・・・少し厄介かな）

（この女・・・無駄に魔法攻撃を繰り返しているように見えるけど、その実、私の攻撃方法を分析しているわね・・・何て厄介な相手！！）

カレンは思わず内心で叫びながら、次々とアクセルシューターを放ちながら一定以上に距離を近づけさせないなのはの姿に焦りを覚えていた。
今まで多くの魔導師や管理局の局員とカレンは戦って来たが、そのどの相手とも目の前のなのはは一致しなかった。大抵の魔導師は自身が放った魔法を無効化されれば僅かに動揺を見せる。
ベルカ式の魔導師にしても強度の病化であるカレンからすれば接近戦に追い込まれても、デバイスとの強度の差で勝つ事が出来ていた。だが、目の前に居るなのはは全く違っていた。
一見近づけさせないように魔法を放っているように見えながら僅かでも情報を集めて対抗策を考え、隙を見て接近戦に追い込めばアルナージに使った衝撃を相手に徹す技法を使用されて内蔵にダメージを受ける。
何よりもカレンにとって一番厄介なのは、なのはが手に握っているレイジングハートの強度だった。

（何て強度なのよ！？ＥＣ感染者で強度の病化の私よりも硬いなんて！？この刀お気に入りだったのに！？）

自身の罅と刃毀れだらけの刀を見ながらカレンは内心で毒づいた。
最初カレンはレイジングハートを破壊する事でなのはの無力化を図ろうとしたのだが、逆に刀の方に罅が入った。
カレンは『斬鉄』も行えるのだが、相手が悪かったとしか言えなかった。フリートの改造によって強化されたレイジングハートの外装の金属はダイヤモンドよりも遥かに硬いクロンデジゾイド。
色自体は白で塗られているが、クロンデジゾイドの中で最も強度が高いレッドデジゾイドがレイジングハートには使用されている。
その為に並大抵の金属では逆にぶつけた方が壊れるのだ。その上衝撃にも凄く強いので、なのはがアルナージのディバイダー７１８に使用した方法でさえも撃ち破れない。

つまり、なのはのレイジングハートを撃ち破れるのはレッドデジゾイドを破壊出来るだけの力も持った者か、それだけの技術を持った者だけでしかないのだ。
そして残念だがＥＣ感染者であろうとカレンには、レッドデジゾイドを破壊出来るだけの力と技術は無かった。
寧ろ今だに刀が原型を留めていられるのは、なのはのおかげである。刃毀れと罅だらけとは言え、なのはが接近戦で多用している『徹』を使うには充分。衝撃を相手に叩きつける為になのははカレンの刀を破壊しないようにレイジングハートを振るっているのだ。

「考え事していて良いのかな？・・・バーースト！！！」

「しまっ！？」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

なのはの叫びと共に分断（ディバイド）されない距離に在ったアクセルシューターが全て爆発し、カレンが展開していたページの複数は爆発によって生じた炎に焼かれ、カレンの視界は煙に覆われた。
その事実にカレンは険しい顔をしながら即座にその場から飛び退くと、レイジングハートの杖先を構えたなのはが煙の中から突進して来て直前までカレンが居た場所を通り過ぎる。

ーーービュン！！

（クッ！！何て反応速度！？だけど、背を見せている今ならやれる！！）

カレンはそう内心で叫ぶと、背を見せたままのなのはに向かって複数のページを放とうとする。

しかし、その直前になのははレイジングハートの柄部分を肩に乗せて、そのまま迷う事無く砲撃を背後に向かって撃ち出す。

「ディバインバスターーーー！！！」

ーーードグオオオ

（大体情報は集まったし、ダメージも充分に通る事が分かった。これなら何とかなるね。不死身って言う話だったけど、デジモンの中に居る体力までも回復出来るタイプとは完全に違う。あっちに比べればまだマシな相手だよ）

そうなのはは内心で呟きながらも、油断無くカレンの僅かな動きも逃さないと言うように注視する。

確かに一般的な魔導師ではカレン達、ＥＣ感染者達の相手は難しい。だが、デジモンと言う種族と戦い続けたなのはからすればＥＣ感染者達はまだ優しい相手だった。

デジモンの中には平然と大威力の砲撃を受けても立ち上がる相手もいるし、一発受けただけで即死する攻撃を撃って来る相手もいる。それだけではなく中には致命傷を与えても即座に完全回復するデジモンまで存在しているのだ。

そのデジモン達に比べれば、まだカレンはなのはにとっては本当に優しい相手だった。

ピエモンのように瞬間移動を連続で発動させ、回避不可能に近い必殺技を放って来る訳ではなく、ルーチェモンのように砲撃を至近距離で食らわしてダメージが与えられない訳ではない。

カレンは確かにエクリプスウィルスのおかげで強靭な肉体と力を得て、魔法さえも無効化してしまう力を持っている。だが、あくまで魔法を無効化するのはディバイダーとリアクターが必要。それに全くダメージが通らない訳ではない。

爆発の衝撃にはダメージを受けるし、再生にも多少の時間は掛かる。何よりも体力が回復する訳ではない。倒すのは確かに難しい相手だが、“殺す”のはなのはにとっては簡単な相手だった。

（分断（ディバイド）出来ないゼロ距離から心臓辺り目掛けて砲撃を放てば確実に命を奪える。ＥＣ感染者だからって無敵な訳じゃない。それにあくまで魔力の結合分解（ディバイド）を行えるのは武装の方。彼女自身は分断は行え

ない）

（間違いなく彼女は私を殺す気で戦っているわね・・・不味いわね。彼女は魔法が通じない相手に慣れている・・・・気になるわね。以前にもディバイダーを持っているＥＣ感染者と戦った事が在るのかしら？）

カレンはなのはの戦い方に疑問を持っていた。

余りにもなのはの戦い方は魔法が通じない相手に慣れ過ぎている。自分達のようなＥＣ感染者で在り、ディバイダーやリアクターを所持している者の数は少ない筈。

だが、なのはの戦い方は魔法が通じない相手に対する対処も充分に出来る戦い方。

魔法が通じない相手と戦い続けなければ出来ない戦い方なのだ。或いは不利な状況、もしく己よりも遥かに上の実力者と戦わなければ此処まで対処に無駄が無い戦い方は出来ないだろう。

其処がカレンには疑問だった。相手があのエース・オブ・エースと言われている高町なのはの人造魔導師にしても、そうでないにしても此処まで圧倒的な実力差をカレンは感じた事が無い。

（それに連れていたあの生物。魔力を全く使った形跡がないのに、ヴェイロンを一撃だけでフッケバインにまで蹴り飛ばした。嫌な予感がするのよね。何かとんでもない事を見逃しているような気が？）

「考え事は終わり？・・・そろそろ続きを始めるよ」

「・・・・ねぇ、提案して良いかしら？」

「ん？」

「元々私達が争う理由なんてないでしょう？私達は其方のアルハザードを名乗った女性が持っている解毒剤とドゥビルを海中に沈ませている力の解除をしてくれれば撤退するわ」

「・・・・駄目だよ。私は貴女達を逃がす気ないよ」

「何故なの？貴女が私達と戦う理由は…」

「在るよ。貴女達、凶鳥（フッケバイン）は管理外世界で主に殺しを行っている・・・・それが私が貴女達と戦う理由。ねぇ、貴女は考えた事が在る？・・・・自分達の行動で生まれる悲劇を？」

「・・・・さぁ、考えた事は多分無いわね。依頼が在れば殺しもやるし、何よりも私達、ＥＣ感染者は殺さないと生きられないからね。そう言う意味で集落の殲滅の依頼とかは結構助かってるのよ」

「・・・・ただ平和に暮らしている人達を殺す事に何とも思わないんだね・・・・だから、私は貴女達を潰すよ。私の大切な人達は管理外世界で暮らしている。貴女達がその人達の平和を壊すかもしれない。それだけは絶対に赦せない！！レイジングハート！！モード！セラフィーー起動！！」

≪ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ≫

「なっ！？・・・何なの？その膨大な魔力は！？」

突如として発生した膨大な魔力にカレンは驚愕し、金色の輝く槍の形状に変わったレイジングハートを握っている、金色の十枚の翼を背中に備えたなのはに向かって叫んだ。

しかし、なのはは答える気はもはやないと言うようにレイジング

ハートを構え、無数の数え切れないほどのアクセルシューターを作り上げていく。

「一分・・・今から一分間。貴女は見た事も無い魔法を知る事になる」

「面白いわね・・・でも、幾ら魔力が上がっても、私の手には魔導殺しが在るのよ。無駄な事して…」

「ねぇ、何処見て話してるの？」

「ッ！！」

背後から聞こえて来た声にカレンが慌てて背後に目を向けてみると、カレンの背中にレイジングハートを突きつけているなのはが存在していた。

（幻覚魔法！？そんな！？何時の間に…）

「ディバインバスターーーー！！！」

ーーードゴオオオ

が居る場所に顔を向ける。

「この！！よくもやって…」

「バイディングチェーン」

ーーーガシィィィィーーーン！！

「ッ！！」

カレンが叫ぼうとした瞬間、カレンの四肢に突如として桜色の鎖が巻き付いてカレンの動きを完全に封じた。

その事実にカレンは一瞬だけ驚くが、すぐさま冷静に立ち返り、左手に握っている本からページをばら撒き、自身の四肢に巻きついている鎖を分断（ディバイド）しようとする。

「こんな物は無駄よ！！分…」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

カレンが分断（ディバイド）しようとした瞬間、鎖は突如として爆発を起こしてカレンを飲み込んだ。

その衝撃にカレンが言葉も出す事が出来ず、爆発の影響によって四肢を失いながら目を動かしていると、左手にカレンが握っていた筈の本を持っているなのはがカレンの目の前に現れる。

ーーービュン！！

「今貴女が分断（ディバイド）しようとしたバイディングチェーンには、一定の行

動が行われたら爆発するように設定してある術式が組み込まれていたの。私が組み込んだ設定は、この本からページを放つ事・・・分(ディ)断(バイド)される前に爆発したら分断(ディバイド)なんて出来ないでしょう？」

「グゥッ！！」

「そしてコレが貴女の傍から無くなった今、魔法を遮る物はもうないよね」

「止め…」

「そう言った平和に暮らしていた人達に貴女達は止めた事が在る？無いよね・・・だから、私も止めないよ。エクセリオンバスターーA．C．Sッ！！」

ーーードグオオオ

「ハァ、ハァ、ハァ・・・やっぱりセラフィーの生身での使用はキツイかな・・・でも、何とかなったね」

なのははそう言いながら、カレンから奪った白い本を見つめる。
主と離れ離れになった事によって白い本は完全に機能を停止していた。それを確認したなのはは、一先ずレイジングハートの内部に収納して於こうとするが、その直前になのはの右横の空中から手が伸びて来て白い本を握る。

ーーーガシッ！！

「・・・フリートさん・・・何時シャマルさんの旅の鏡を覚えたんですか？」

ーーーブン！！

『別に覚えていませんよ。この魔法は元々アルハザードにも存在している魔法ですからね。研究の時とか別の場所に保管して在る物を取る時とか使っていますから・・・それよりも・・セラフィーを起動させていたみたいですね。ちゃんと精密検査を受けて貰いますからね？』

そうフリートはなのはの前にモニターを展開させながら言葉を告げ、なのはが持っていたカレンの本を空間を越えて回収する。
それを確認したなのはは、フリートならば預けても安心だと安堵の息を吐きながらフリートの言葉に真剣な顔をして頷く。

「分かっていますよ・・・・それよりもそっちは如何なんです？」

『もう少しぐらいですね・・・此方は大丈夫でしょうから、フッケ

バインの方で戦っているワーガルルモンの援護に向かって下さい・・・まぁ、必要は無いでしょうけど・・・・ブラックも向かっているんですよね』

「ブラックさんが？だったら尚更大丈夫なんじゃないんですか？」

『いえ、コレはワーガルルモンの方の心配ではなく・・・・凶鳥（フッケバイン）の方なんですよ。追いつめられた連中がもしあのブラックの逆鱗に真っ向から触れる言葉を言ってしまったら…』

「・・・・」

フリートの心配になのはは何も答える事が出来なかった。

なのはも嘗てブラックが行った自身の世界の凶鳥（フッケバイン）に対する惨劇と言う名の地獄に至る経緯を知っている。最もその時の行動に対しては誰も何も言う事は無かった。

ブラックだけではなく、凶鳥（フッケバイン）の考え方にはなのは達もそれぞれが憤りを持っている。

特に管理外世界で在る地球に住む大切な人々を巻き込むような考えを持っている凶鳥（フッケバイン）に対して、なのはは手加減する気は無い。例えそれは異世界でも同じだった。

自らの大切な者達を何が何でも護り抜くと言う信念を持っているなのはからすれば、管理外世界で力を振るい、何も知らずに平和に過ごしている人々を平然と殺し続けている凶鳥（フッケバイン）の行動は見逃す事は出来ない。

話は戻すが、万が一ブラックの逆鱗に触れる言葉を再び凶鳥（フッケバイン）のメンバーの誰かが言ってしまった時、惨劇と言う名の地獄が再現されるだろう。

「・・・・分かりました。万が一そうなった時は、ワーガルルモン

君と一緒にフッケバインから離れますね」

『それが良いでしょう・・・今のブラックはただでさえ無理やり起こされて機嫌は最悪です。まぁ、例えブラックがその状態にならなくても凶鳥（フッケバイン）の連中にもそれ相応の報いを与えますよ』

「どっちにしても凶鳥（フッケバイン）にとっては地獄ですね・・・それじゃそっちは頼みますね。必ず助けて上げて下さい」

『了解です。それでは』

ーーーブン！！

フリートは言葉と共に通信を切ってモニターの展開を止めた。
それを確認したなのはは、即座にカレンを吹き飛ばしたフッケバインの方に目を向け、そのまま出来るだけ体に負担を掛けない程度の速さでフッケバインに向かって行くのだった。

フッケバイン甲板上。
ワーガルルモンとヴェイロンは激突を繰り返した。だが、ダメージを受けているのは殆どヴェイロンの方であり、ワーガルルモンは自身の素早い機動力を発揮して甲板上を駆けてヴェイロンを翻弄していた。

「ボールディブローー！！」

ーーードゴオオォン！！

「グゥッ！！」

一瞬の内にヴェイロンの懐に潜り込んだワーガルルモンは連続でボディブローを叩き込み、ヴェイロンは内臓にまで響いて来る衝撃に苦痛の声を上げた。

しかし、ヴェイロンは何とか体を襲う激痛を振り払い、左手に装着しているグローグラブ－硬質金属で作成された爪がつき、引火性の強い液体燃料の噴射口が掌にある手甲－をワーガルルモンの右手に向かって伸ばす。

ーーーガシッ！！

「右腕頂き…」

「フッ！！」

ーーードゴオオオォォン！！

ーーーゴキィン！！

「んなッ！？」

ヴェイロンがグローグラブから液体燃料を噴出しようとした瞬間、ワーガルルモンは右足の膝をヴェイロンの左肘に叩き込み、ヴェイロンの左腕は折れた。

その事実にヴェイロンが驚愕して動きが止まってしまうと、ワーガルルモンは折れたヴェイロンの左手から右腕を引き抜き、そのまま両腕のカギ爪を全力で振り抜く。

「カイザーネイル！！」

ーーーザッシュゥン！！

「グガアァァァァァァァァーーーーーーーーーー！！！！！」

ワーガルルモンのカイザーネイルで全身を切り刻まれたヴェイロンは苦痛の叫びを上げ、甲板に膝をついてしまう。

その隙にワーガルルモンは大きく息を吸い込み、口の隙間から蒼白い炎が溢れ出た瞬間、ワーガルルモンは迷う事無くヴェイロンに向かって高熱の蒼い炎を吐き出す。

「フォックスファイヤーーー！！！」

ーーーゴオオオオオオオオオオオーーー！！！！

「クソッ！！」

ーーービュン！！

ワーガルルモンがフォックスファイヤーを放った事に気がついたヴェイロンは、全身から血を流しながらも甲板を転がり、フォックスファイヤーから逃れた。

既にワーガルルモンの攻撃がディバイダーやリアクターの力で防げない事をヴェイロンは理解している。

何せ今フッケバインの甲板上には、内部に入れるだけの大穴が開いているのだ。その穴は戦いを始めた当初、ワーガルルモンが開けた穴である。

空を飛べないワーガルルモンは、ヴェイロンに空を飛ばれたら多少不味い事態に追い込まれる。それならば飛ばせなければいいとワーガルルモンは判断し、戦いを始めた最初の頃にフォックスファイ

ヤーを放って甲板上に大穴を開けた。
　それを目撃したヴェイロンは自身が不利になると理解しながらも甲板上で戦うしかない状態に追い込まれたのだ。今フッケバイン内部に居るのは、フリートが使用した毒に犯されているサイファーに、フッケバインの操舵を行っている子供のステラ、そしてフォルティスの三人。
　凄まじい力と魔力とは違う力を振るうワーガルルモンを相手にするのは難しい。故にヴェイロンは不利ながらもワーガルルモンと甲板上で戦うしかないのだ。空に飛び上がれば、その瞬間にワーガルルモンは迷う事無くフッケバイン内部に侵入してしまう為に。

「この糞狼が！！バードショット・シェルッ！！」

ーーードゴオォォン！！

ーーービュン！！

　ヴェイロンがディバイダー９２８から放った散弾のように広範囲に広がるバードショット・シェルを、ワーガルルモンは上空に高くジャンプする事で避けた。
　それを目撃したヴェイロンはチャンスだと思い、右手に持っているディバイダー９２８の銃口を頭上に居るワーガルルモンに向け、ディバイダー９２８の引き金を引く。

「フレシェット・シェルッ！！」

ーーードォン！！

「ハッ！！まともに受けたぜ！これなら…」

「カイザーネイル！！」

ーーーブザン！！

「ッ！！」

フレシェット・シェルがワーガルルモンに直撃したのを目撃したヴェイロンが叫んでいると、突如として煙の中から紅い爪のような閃光が走り、ディバインダー９２８を持っていたヴェイロンの右腕を肩口から切り落とした。

その事実を信じられず、呆然と甲板に転がって行く自身の右腕をヴェイロンが見つめていると、全くダメージを受けた様子を見せないワーガルルモンが煙の中から出現し、円月を描くように後方宙返りしながらヴェイロンの頭頂部に向かって蹴りを叩きつける。

「円月蹴りッ！！」

ーーードオオォン！！

「ガハッ！！」

ーーードサッ！！

『ヴェイロン！！』

頭に蹴りを叩きつけられたヴェイロンは、その凄まじい衝撃に頭を揺らされ、甲板に崩れ落ちた。

それを映像で見ていたステラは悲痛な叫びを上げるが、ヴェイロンは答える事が出来ずに甲板に倒れ、ワーガルルモンは甲板に落ちていたヴェイロンに右手からディバイダー９２８を回収する。

ーーーガシッ！！

「君は自分の体の頑丈さと治癒能力に頼り過ぎているね。幾ら体が頑丈でも中身まで鍛えるのは難しい。特に脳とかはね」

「・・・グゥ・・・テメエ・・・一体何だ？・・・・魔力も・・持ってねぇ上に・・・エクリプスに感染している訳でも・・・ねぇのに・・・その力は・・・」

「それが僕らの種族だ。僕らの種族はその気になれば、世界だって滅ぼせる力を持った者も居る」

「んだと！？」

『嘘！？そんな生物聞いた事ない！？』

「当然だよ。僕らの種族は滅多な事じゃ他の世界になんて現れない・・（交流が在る地球は別だけどね）・・・それに君達のようにむやみやたらに力も振るう事はない」

告げた言葉に驚愕しているヴェイロンとステラに、ワーガルルモンは何でもないように答えながら右手に持っているディバイダー９２８を眺め、漂って来る血の匂いに眉を顰める。

「・・・・・酷い血の匂いだ・・・この武器からは人の血の匂いが酷く匂う・・・どれだけの罪の無い人達を殺して来たんだ！！」

「・・ハッ！！んなの・・一々覚えているかよ」

「何だって？」

ヴェイロンの発言にワーガルルモンは僅かに瞳を険しくし、ヴェイロンを睨むように見つめていると、突如としてステラが叫びだす。

『もういい加減にしてよ！！私達はサイファーの毒を解毒する薬とドゥビルの力の解除をしてくれれば消えるよ！！だから、今すぐに両方を渡すようにアルハザードを名乗っている女の人に言って！？』

「・・・・言う気は無いよ。君達は此処で潰れて貰う。君達を見逃せば、また何処かで罪の無い人達が死んでしまう。それに最初にフリートさんに手を出したのは君達の方だ」

『貴方の世界には手を出してないでしょう！？私達は管理世界でもちょっと犯罪行為しかしていないし！“ちゃんと管理外世界でやっているんだから”！！』

ーーーブチィッ！！

「ふざけるな！！！」

『ッ！！』

ワーガルルモンの怒りに満ちた咆哮にステラは目を見開き声が出せなくなるが、ワーガルルモンは構わずに目の前に映っているステラを睨む。

「管理世界？管理外世界？・・・それは誰が決めたんだ？・・管理外世界の人達が決めた訳じゃない！！勝手に君達管理世界の人間が言っているだけだろう！！それに命の重さに世界なんて関係在るも

のか！！ただ平和に暮らして、穏やかに過ごしていた者の命を奪う権利なんて、誰にも無いんだ！！君達が管理世界から認められない存在だとしても、管理世界と無関係な管理外世界の人達の命を奪う権利は無い！！」

『・・・・権利なら在りますよ』

ワーガルルモンが叫びを終えると、ステラが映っていた映像に突如としてフォルティスが映りだし、ワーガルルモンに話しかけて来た。

その言葉にワーガルルモンは怒りに満ち溢れた視線をフォルティスに向けると、苦笑いをフォルティスは浮かべながら話し出す。

『僕らが人を殺す時は、ちゃん後腐れなく殲滅します。それを行う時は、依頼や報酬が在る時。武器を向けられた時。僕らの目的の障害となる時。ＥＣ感染者である僕らが生きる為に必要な時。そう言う時は遠慮無く殲滅させて貰ってます。君も知っているでしょう？ＥＣ感染者は人を殺さなければ生きられない。だから殺すんですよ。生きる為に何かを殺すのは人なら誰も行っています。僕らの場合はそれが人だっただけの話ですよ』

「・・・・・・・・なら、何で管理局や他の武装組織を狙わずに何の力も無い人達を殺す？」

『・・・面倒は出来るだけ少なくしたいんですよね。僕らの最終目的の為には、“出来るだけ邪魔は少なくしたいですから”。管理局の人間を大量に殺したり、他の武装組織を潰したりしたら動き難くなりますからね』

「・・・・良く分かったよ・・・君達が自分のしている行為を何も

理解していないのが良くね」

そうワーガルルモンは呟くと、漸くダメージから回復して斬り落とされた右腕の再生も終えたヴェイロンに背を向けて甲板を歩き出す。

ヴェイロンはその様子に疑問を覚えながら、何とか立ち上がり、ワーガルルモンが右手に握ったままのディバイダー９２８に目を向ける。

「おい、何処に行く気だ？戦いを止めるんだったら、ソイツは置いて…」

「もう君にはコレは必要ないよ・・・もうすぐ潰される君にはね」

「あん？訳が分かんねぇ事言っていやが…」

ーーードゴオオオ

ーーーグゥッ！！

「ガアァァァァァァァァッ！！」

ワーガルルモンの言葉に答えると共に黒い閃光ーブラックは右足で踏みつけているヴェイロンに更に力を込め、ヴェイロンは苦痛の叫びを響かせた。

しかし、ブラックはそれでは済まさないと言うようにヴェイロンの両腕を握り締め、そのまま両腕を引っ張りながらヴェイロンを踏み続ける。

ーーーギュゥゥゥゥゥーーー！！！

「ガァァァァァァァァァァァーーーーーーーーー！！！」

『ヴェイロン！！』

背骨を踏まれながら両腕を引っ張られているヴェイロンに向かってステラとフォルティスは叫ぶが、ブラックは気にする事無く残忍さに満ちた笑みをヴェイロンに向ける。

「俺には絶対に認められん事が在る。それは“戦う意思の無い者を身勝手な理由で巻き込み、利用したり殺したりする事だ”。随分とふざけた事をほざいていたな。依頼が在った？管理外世界？邪魔が入るから？・・・ふざけるな。貴様らはただ怖いだけだろうが。管理局や武装組織に付け狙われるのが！！」

ーーーブザン！！

ーーーゴキィン！！

ーーーブシュゥゥゥゥゥゥーーーーー！！！

「グガァァァァァァァァァァーーーー！！！アァァァァァァァァァァ

ーーードン！！

ワーガルルモンは叫ぶと同時に甲板から飛び降りて、海面に向かって落下して行った。

後に残されたのはブラックが甲板に開けた巨大な大穴と、ワーガルルモンの言葉に意味が分からずに呆然としているステラとフォルティスが映っているモニターだけだった。

再び惨劇と言う名の地獄の扉が開いた。己と同類で在りながらも、特務六課同様に凶鳥（フッケバイン）は最も手を出してはいけない漆黒の竜人の逆鱗に触れてしまったのだった。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　後編　さ

今回登場のオリジナル魔法。

バイディングチェーン。

なのはがフリートの教えから学んだアルハザードの魔法の一つ。

対象の四肢などを空間に固定させ、相手が一定の行動を行った場合、周囲に漂っている魔力素を起爆剤にして大爆発を引き起こす。

今回、カレンの四肢が失われるほどの爆発が起こったのは事前になのはが分断（ディバイド）を逆に利用して周囲に高密度の魔力素の振り撒いていた為である。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　後編　さ

今回でフッケバインは終わりました。
次回はエピローグと後始末のお話になります。
また、今回のラストで最初の後始末が終わりますので。

なのはがカレンと戦い、ブラックがフッケバインを強襲する少し前。
アイシスとリリィを連れたフリートは、なのはとカレンが戦っている地点から少し離れた空で、警戒するように自分達を見つめているトーマと向かい合っていた。
しかし、何気にフリートは追い込まれていた。何故ならば持って来ていた道具の中で唯一トーマと会話出来る通信機がヴェイロンに破壊され、トーマと会話する事が再び出来なくなったのだ。
通信機が無ければトーマと会話して説得する事が出来ず、『銀十字の書』の指令だけに従う無事にトーマを止める術が無いに等しい。

（ウゥゥ・・こんな事ならもっと道具を持って来るんでしたね・・・かと言って今在る道具で、彼を目覚めさせる事が出来る道具は・・・全部危険な物なんですよね・・本当に如何しましょう？）

実を言えばトーマを傷つける事を前提に考えれば、幾つかトーマを目覚めさせる方法がフリートは持っていた。
だが、そのどれもが失敗すればトーマの命を危険に晒してしまう。フリートにはそれが出来ない。
もし相手が凶鳥（フッケバイン）のような連中だったらフリートは迷う事無く実行するが、完全に巻き込まれただけの被害者でしかないトーマに行うのはアイシスとリリィの手前無理である。
状況を打開する方法は無いのかとフリートが並列思考を展開出来るだけ展開しながら考え込んでいると、アイシスがすまなさそうにフリートに声を掛けて来る。

「・・ゴメン・・・私がもっとしっかり周りを注意していれば・・・

」

「・・後悔するよりもコレからですよ、アイシスちゃん・・・通信機が無くなった今、彼を今の状態から助け出すには・・・やはり、リリィちゃんの力が必要ですね・・私が彼の意識を取り戻すのは難しいですし・・」

（・・・あの・・・何か私が記憶を取り戻す道具は無いんですか？・・記憶が戻れば、トーマを救えるのなら、私は何でもします！！だから！）

「・・・・私が見たところ、リリィちゃんが記憶を失っているのは精神的なものからです。恐らく自分のせいで人が死ぬところを見続けたせいで、防衛本能から少しでも辛さを忘れようと記憶を本能が封じているんです・・・なら、方法が一つだけ在ります」

そうフリートは告げると、背中の荷物袋の中から一つの小瓶を取り出し、リリィの目の前に翳す。

「この薬は記憶を司る部分を刺激する薬です・・・ですが、記憶とは何も良いものばかりではない。この薬を飲んだ場合、酷すぎる記憶を持っていた者は辛すぎる記憶を思い出して発狂してしまうんです・・特にリリィちゃんが記憶を失ったのは辛すぎる現実の為です・・・此処まで言えば分かりますね？」

「・・・もしリリィがそれを服用した場合・・・研究所での辛い出来事も全部思い出す」

「えぇ、その通りです」

アイシスの言葉にフリートは神妙な顔をしながら頷き、アイシスとリリィは無言でフリートの手に握られている薬が入った小瓶を見つめた。
薬を飲めば確かにリリィの失われた記憶が戻る可能性は高い。だが、飲めば同時にリリィは辛すぎる記憶も取り戻す。それはリリィにとって最も辛い出来事を思い出すと言う事実に他ならない。
だからこそ、フリートは今持っている薬ではなく、通信機と言う多少手間は掛かるが、其方の次善策を採用したのだ。だが、残念ながら通信機はヴェイロンに壊されて使用する事が出来なくなった。

「この薬を飲むか、飲まないかはリリィちゃんに任せますよ」

（・・・飲みます。飲んでトーマを救う方法を思い出します！！私は、私に笑いかけてくれた、トーマを救いたいから！！）

「・・・良い覚悟ですよ。アイシスちゃん。リリィちゃんが薬を飲んだら強く抱き締めて上げて下さい。誰かの温もりを感じるだけで、結果が大きく変わる事が在りますからね」

「・・・うん！」

「では、二人とも頑張って下さい！私は彼を押さえますからね！！」

フリートはそう叫ぶと、リリィの手の中に薬を渡し、両手にケーニッヒを持ちながらトーマへと迫る。

≪敵性存在急接近！迎撃を開始します！！≫

「・・俺に・・・近づかないでくれ！！！」

ーーーガキィィィィーン！！

『銀十字の書』の指示にトーマは悲しみに満ちた叫びを上げながらディバイダー９９６を振り抜き、フリートが右手に握っていたケーニッヒを激突させた。

そのままフリートとトーマは顔を近づけあい、フリートは左手に握っているケーニッヒを持ち直すように回転させながら叫ぶ。

「女の子二人が貴方の為に頑張っているんですよ！！だったら、少しは『銀十字の書』の指示に抗いなさい！！」

ーーーガキィィィーン！！

「グゥッ！！」

「少しだけ痛い目には在って貰いますからね！二人もの可愛い女の子に心配を掛けた罰ですよ！！ハァァァァァァァーーーー！！！」

「グゥッ！！ウオォォォォォォォォォーーーーー！！！」

ーーーガキィン！！キィン！！ガァン！！ガキィィィィーン！！

フリートとトーマは互いに武器を振るいながら咆哮を響かせ、剣戟を空中に鳴り響かせ続ける。

その様子を見ていたリリィは覚悟を決めたように薬を右手に持ちながら、左手で小瓶の蓋を開ける。

ーーーカパッ！

「・・・リリィ！絶対に離さないから安心してね！何が在っても、暴れても絶対に離さないから！！」

（うん！・・・トーマ・・・絶対に助けるから！！）

そうリリィは決意に満ちたように精神感応を使って叫び、そのまま薬の中身を飲み干す。

ーーーゴクッ！！

（ッ！！！？？？？？？）

「リリィ！！」

薬を飲み干すと同時に体を一際強く震えさせたリリィに、心配げにアイシスは声を掛けるが、リリィはそれどころではなかった。

次々と脳裏に過ぎるのは自身に触れて断末魔の叫びを上げる人々の顔。

原型も留めず、ただの肉塊に変わってしまう人達の姿。その全てが自身に触れてしまった人々の末路。

どれだけ望んでも止められる事は無く、次々と数え切れない人々を殺してしまった自身。リリィはその事実を改めて思い出し、アイシスの腕の中で暴れ出す。

（いやあぁぁぁぁぁぁぁーーーーー！！止めて！！みんな！皆を私に近づけさせないで！！）

「グゥッ！！リリィ！！しっかりして！！」

暴れ回るリリィをアイシスは強く抱き締める。

リリィはその動きに更に暴れるが、アイシスは自らが殴られながらもリリィを決して離しはしない。今誰よりも苦しんでいるのはリリィであり、そしてトーマだとアイシスは分かっているのだ。
二人ともエクリプスウィルスと言う毒に翻弄されて苦しんでいる。それからアイシスは助け出す事はアイシスには出来ない。ならばせめて苦しみを和らげるかもしれないと考え、アイシスはリリィを抱き締め続ける。
リリィはその間にも辛さしかない日々の記憶を思い出し続けていた。『壊れ始めた』と言われても適合者を探す為に人を殺され続ける日々。地獄としか言えない日々の記憶にリリィの心は限界に至ろうとするが、その直前に一つの記憶が思い浮かび上がって来る。

『大丈夫・・・・泣かないで・・・・俺がいますぐ・・助けるから』

自分が苦しみながらも自身に笑いかけてくれた少年。
巻き込んでしまって命に危険の脅かしてしまったのに、それでも自身を助けると言ってくれた少年。
リリィはその大切な記憶が脳裏に浮かび、トーマを絶対に助けると思った瞬間、リリィは全ての記憶を完全に取り戻す。

「・・・リリィ」

「・・・・・アイシス・・・私をトーマのところに連れて行って・・・お願い」

「ッ!!リリィ!!貴女声が!?」

「全部思い出した・・・あのフリートって人が言って通り、私はトーマを助けられる!!」

「・・うん！！行こう！！」

リリィの力強い叫びにアイシスは頷き、二人はそのままフリートと剣戟を繰り返しているトーマへと向かって行く。
その様子をトーマに着ている白衣を切り裂かれながら剣戟を繰り返していたフリートは横目で確認すると、記憶が戻った事を瞬時に理解する。

「（旨く言ったようですね。ならば！！）ハァッ！！」

ーーーガキィィィーーン！！

「クッ！！」

フリートが強く振り抜いたケーニッヒによって、トーマが右手に握っていたディバイダー９９６は跳ね上がるように押し上げられた。
それを確認したフリートは素早く荷物袋の中からカレンが使用した本の同じ物を取り出し、複数のページをトーマの周りに展開させる。

ーーーザザザザザザザザザザッ！！

≪対象、飽和攻撃と思われる物を展開・・・飽和射撃で殲滅します≫

フリートの攻撃を『銀十字の書』は予測すると、自身もページを複数展開させて射撃を行うとする。
その瞬間、フリートは笑みを浮かべ、ケーニッヒを伸ばしながら振るい、自身が展開していたページの先に居る人物に向かって叫ぶ。

「今ですよ！！アイシスちゃん！！」

「特別パューム！！エネルギー遮断！！」

ーーーパッション！！

「ッ！！」

フリートの叫びに答えるようにページの向こうからアイシスの声が響いたと思った瞬間、ページの隙間を縫うように赤色の蝶が無数にトーマの周りを飛び交った。

その赤色の蝶はトーマが『銀十字の書』に充填していたエネルギーを次々と霧散させて行き、トーマと『銀十字の書』は突然の事態に動きが完全に止まってしまう。

「今アイシスちゃんが使ったのは、私が開発した特殊な薬物！一定レベルのエネルギーを完全に遮断して霧散させてしまう薬品ですよ・・まぁ、効果として私もケーニッヒのエネルギー系の攻撃は使えなくなりますが、それでも充分過ぎるほどでしょう！！」

ーーービュン！！

≪後方より接近反応！！≫

「ッ！！」

トーマの後方から飛び出して来た反応に気がついた『銀十字の書』は警告を発し、慌ててトーマは後方へと振り返ってディバイダー９９６を振り被る。

しかし、振り抜く直前にトーマの体は強くリリィに抱き締められ、背後からフリートとアイシスがトーマの両腕を掴み取って動きを封

じる。

ーーーガシッ！！

「トーマ！！駄目だよ！！リリィ！早く呼び掛けて！！」

「うん！！お願い！！トーマ！！少しで良いの！！心を開いて！！」

「ウワァァァァァァァァァァーーーー！！！！」

ーーーバシッ！！

「キャッ！！」

（グゥッ！！何と言う力なんですか！？不味いです！！）

トーマは叫ぶと同時にアイシスとフリートを両腕から引き剥がした。

そのまま右手に握っているディンバイダー９９６を振り抜き、リリィに一太刀を浴びせる。

ーーーブザン！！

「リリィ！！」

トーマにリリィが切り裂かれるのを目撃したアイシスは悲痛な叫びを上げた。

しかし、リリィは一太刀浴びせられながらも、ディバイダー９９６を握っているトーマの右手を握りながら呼び掛ける。

ーーーガシッ！！

「・・・トーマ・・・私思い出したの・・・私が何なのかを・・・絶対に助ける・・だから、少しで良いの心を・・・開いて・・・『リアクト・エンゲージ』」

ーーーシュウウウウウウーーー！！

リリィが呟くように声を出した瞬間、リリィとトーマの体が光り輝き、リリィの体は光へと変わってトーマと一つになる。
そしてリリィはトーマと一体となると同時に『銀十字の書』の管制となって急いで作業を行い始める。

≪自動防衛機能を遮断、視覚・聴覚の復帰、武装解除、エクリプスウィルス抗体作動≫

ーーーシュウウウウーーー！！

リリィがトーマの体の中で作業を行うと同時にトーマの体を覆っていた『黒騎士』は解除され、ディバイダー９９６も消え去る。
同時のトーマの五感は回復して行き、それを確認したフリートは即座にアイシスに指示を出す。

「アイシスちゃん！！すぐに彼を！！」

「はい！！」

ーーーガシッ！！

「ワッ！！・・・アイシス？」

「他の誰に見えるの？・・・全く心配掛けて」

（良かった、トーマ）

「リリィ？」

自身の内から聞こえて来た声にトーマは疑問の声を上げるが、リリィは嬉しそうな雰囲気を出しながらトーマに声を掛けて来る。

（もう大丈夫だよ・・・エクリプスの制御は私が行うから・・・『銀十字の書』も制御しているから・・安全・・・・）

「リリィ？・・・おい、リリィ！！」

突如としてリリィの声が途絶えた事にトーマは慌てて叫ぶが、リリィは答える事は無かった。

トーマの様子が可笑しい事に気がついたアイシスも、心配そうにトーマを見ていると、フリートが横から声を掛けて来る。

「安心しなさい、初めてのリアクト・エンゲージで気を失っただけです。しっかりと安全な場所でリアクトを解除して休めば意識を取り戻しますからね」

「ッ！！・・・アンタは？」

「トーマ。安心して、この人はトーマを助けるのに協力してくれた人だからね」

警戒するようにフリートを見ているトーマを安心させるようにア

イシスは声を掛け、フリートも笑みを浮かべながら頷く。

「まぁ、警戒するのは当然ですけどね・・・さて、私と一緒に来て貰って良いでしょうか？色々と今後の君の身の振り方も決めないといけませんからね・・・管理世界に残って暮らすのか、それとも管理外世界で暮らすのかをね」

「ッ！！・・それって一体如何意味ですか？」

「それについてもちゃんと説明しますから、安心して下さい。まぁ、此処で私から離れて管理局の艦艇に行くのも構いませんけど・・・・色々と大変になりますよ。出来ればついて来て貰いたいですね」

「・・トーマ・・此処はフリートについて行こう。信用出来る人だからね」

「・・・・分かった・・だけど」

「怪しい動きなんてしたら、この首切っても構いませんよ」

『ブッ！！』

何でもないように自身の首を差し出して来たフリートの姿に、トーマとアイシスは同時に息を噴いた。

その姿を楽しげにフリートが見ていると、バインディングチェーンで気絶しているカレンとアルナージをグルグル巻きにして拘束して運びながらガブモンを背中に張り付かせたなのはが飛んで来る。

「フリートさん！あっちもブラックさんが侵入したんで終わるでしょうから、そろそろ中に入り込みましょう。後、コレ、私とガブモ

ン君が回収した物です」

フリートに近づいたなのははそう言いながら、ディバイダー718とディバイダー928をフリートに差し出した。

それを確認したフリートは嬉しそうに二つのディバイダーを背中の荷物袋の中に仕舞い込む。

なのはとガブモンはその様子に安堵しながらカレンとアルナージをフッケバイン内部に転送して貰うように頼もうとするが、その直前にトーマがなのはを見ながら声を出す。

「・・なのはさん？」

「うん？・・・・あぁ、そうか。君はアレと知り合いなんだね」

「アレ？」

「え～と、混乱しないように言うけど、此処に居るのは君の知っている高町なのはとは別人なんだよ。だから、同一人物だと思わない方が良いよ・・・（思われたら、絶対になのはは怒るだろうからね）」

首を傾げているトーマに、なのはの背に張り付いていたガブモンが説明した。

アイシスとトーマは一瞬見た事も無い生物が言葉を話した事に驚くが、使い魔の一種だと考えて納得し、目の前に居るなのはを見つめる。

如何見ても目の前に居るなのははトーマが知っている高町なのはにしか見えず、アイシスもヴォルフラム内で見た人物にしか見えなかった。

最もその事を指摘したら、なのはは確実に不機嫌になるだろう。

それほどまでになのははこの世界の高町なのはが嫌いになっているのだから。
故に指摘される前に話を進めるべきだとフリートとガブモンは即座にアイコンタクトを交し合い、フリートは笑みを浮かべたままトーマとアイシスに声を掛ける。

「其方についても後で説明しますから・・・とにかく行きましょうね」

「行くって何処にですか？」

「フッケバインですよ。凶鳥（フッケバイン）との話し合いは終わっていますので安心して下さいね」

『ハァッ？』

フリートが告げた向かう場所にトーマとアイシスは唖然とするが、フリートは構わずに気絶しているカレンとアルナージを連れて先に向かっているなのはの後を追いかけていく。
トーマとアイシスは状況が良く分からず困惑したように顔を見合わせるが、このまま此処で呆然としていても始まらないと思い、フリートの後を追ってフッケバインに向かって行くのだった。

フッケバイン内部操舵室。
その場所はフッケバインを操作する為にステラがリアクトする場所であり、フッケバインにとって最も重要な地点でも在った。
其処を破壊されでもしたら、フッケバインは海面に向かって激突してしまう。しかし、今までその場所まで辿り着けたものはいない。

何故ならば魔導殺しとリアクターを所有している凶鳥(フッケバイン)のメンバーが内部に居るだけではなく、魔導師(ディバイダー)がフッケバイン内部に入り込む為には中和フィールドを越えなければいけない。故に特務六課のメンバー以外にフッケバイン艦内に侵入出来た魔導師は居なかった。

だが、今フッケバイン内部に最凶と呼ぶに相応しい漆黒の竜人ーブラックが入り込んだ。

フッケバインは知らず知らずの内にブラックが最も赦せない言葉を、ワーガルルモンに向かって叫んでしまったのだ。それを耳にしたブラックが止まる筈は無い。

ただでさえ機嫌が悪かった状況で、嘗てブラックの世界の凶鳥(フッケバイン)が告げた禁断の言葉を再び耳にしたのだ。特務六課同様に凶鳥(フッケバイン)もまた、ブラックの“敵”として認識されてしまった。

しかし、ステラ、フォルティスはブラックの怒りの理由が分からずに操舵室内で困惑していた。

何故あの特務六課のメンバーを潰したブラックが今度は自分達を狙い始めたのかと、ステラとフォルティスは困惑しながらも状況を打開する方法を考える。

「と、とにかく！ステラ！僕はヴェイロンの救援に向かいます！貴女はカレンに救援の指示を！」

「・・・・嘘・・・・嘘だよ・・・・」

「ステラ？・・・・如何しました？」

「・・・カレンお姉ちゃんが・・・・・カレンお姉ちゃんが・・・・“負けた”」

「ッ！！・・・・・・在りえない・・・・そんな事が在りえる筈がない！？僕らの手には魔導殺しが在る！魔導師(ディバイダー)が僕らに触れられる筈が

…」

「貴様らの下らん尺度で奴を語るな。虫唾が走る」

ーーードゴオオオ

く見えるように掲げ、ステラとフォルティスは一気に顔を青褪めさせた。
如何見てもサイファーの状態は死期が近い重病人と同じ状態。そんな重病人の両手両足を切り落とし、更には引き摺って来たのだ。
しかもブラックが内部に入り込んでから十分と時間が掛かっていない。入り込んだ地点から操舵室までの距離は通路を考えれば距離が在る筈。
それでもブラックはヴェイロンをズタボロの状態に変え、更にはサイファーまでも発見してこの場に連れて来た。如何考えても普通に通路を歩いて辿り着いた可能性はゼロに近い。
事実ブラックは侵入してからヴェイロンの両足を切り落とし、その後に“真っ直ぐ”操舵室に向かったのだ。

「・・・ま・・まさか・・・・壁を破壊しながら・・・此処まで・・・」

「ほう、思ったよりも考える頭が在るな、小娘。その通りだ。脆い壁だったが、コイツを叩きのめしながら進むには充分な硬さだったぞ」

恐怖に震えながら呟いたステラの声にブラックが笑みを浮かべながら、今度はズタボロになって全身が血塗れになっていたヴェイロンを掲げた。
そうブラックが内部に侵入してからヴェイロンをドラモンキラーの代わりに振るって、壁を壊しながら真っ直ぐに操舵室に進んで来たのだ。その途中でサイファーが休んでいた医務室が存在していたのは、サイファーにとっては生涯最大の不幸だっただろう。
もしブラックが進んでいた途中に医務室が無ければ、死期が近く気配が薄れていたサイファーをブラックは見逃していた。死の直前までサイファーは本当に運が無かったのだ。

ブラックとフリートに関わらなければ長生き出来ていただろう。だが、既に全てが遅い。
それを表すようにブラックは自身の無事な右横の壁に向かって完全に意識を失っているヴェイロンを叩きつけ、無理やり意識を回復させる。

「フッ！！」

ーーーゴオオオ

「フォルティス！！」

蹴り飛ばされて背後の壁に減り込んだフォルティスを目撃したステラは、心配そうに叫んだ。

しかし、他人の心配などステラにはしている余裕はなかった。それを表すようにブラックはサイファーも別方向の壁に叩きつけ、ステラの頭を掴む。

ーーーガシッ！！

「ヒィッ！！」

ーーーガクガクガクッ！！

「さて、貴様は言い分なら自分達の世界の外では犯罪を行っても良いようだな。ならば、此処で俺が貴様を殺しても構わない訳だ・・・何せ此処は俺が眠っていたアルハザードの外なのだからな」

「・・・・嫌・・・・違う・・・・違う・・・」

「や、止めなさい！・・・ステラはフッケバインの操舵手！・・・彼女が死ねばフッケバインは墜落しますよ！！墜落すればただではすまない！」

「それは“何時”の話だ？」

『えっ？』

顔を押さえながら叫んだフォルティスの忠告を、ブラックはつまらなそうな顔をしながら質問し返し、ステラとフォルティスは意味

が分からず疑問の声を上げた。
フッケバインの操舵手はステラ。それが凶鳥（フッケバイン）メンバーの共通の認識だった。だが、既にそれは違っていた。
何故ならば何が何でもフッケバインを欲しがっている研究者が近くに居たのだから。そしてブラックの言葉が正しいと言うように突如としてステラとフッケバインのリアクトが勝手に解除される。

≪リアクト解除・・本機は以後フリート・アルハザードを主と認識します≫

『なっ！？』

ーーーブン！！

『フフフフッ！！キャハハハハハハハハッ！！イヤ～、この為にずっと隠していたんですよね。自分達が信用と信頼をしていた兵器に裏切られる貴方達の顔が見たくて、この瞬間までウィルスに汚染させていたシステムを擬装させていたんですよ！！・・プププッ、何が『ステラはフッケバインの操舵手』でしょうね。トーマ君と戦う前から既にフッケバインは私の物ですよ！！』

フッケバイン艦内に響いた電子音に驚愕していたフォルティスとステラに追い討ちを掛けるように、操舵室内部にフリートが映っているモニターが出現した。
そのフリートが告げた言葉の意味を理解したフォルティスとステラは、唖然とした顔でフリートが映っているモニター映像を見つめると、フリートは笑みを向けながらステラに声を掛ける。

『感謝して欲しいですね。如何にも貴女はフッケバインの自動操縦の航行中は、思考・計算機能の大半をフッケバインに使用されてし

まう為に言語能力と複雑な思考能力を失うようですから、完全にリアクトが解除されてリンクも途切れた今、もうそんな事はないですよ。だって、全てのフッケバインの操縦は私がこれから行うんですからね。いや～人助けって本当に心が安らかになりますよ。クスクス』

そうフリートは言いながら邪悪さに満ちた笑みをステラ、フォルティス、ヴェイロン、サイファーに向けた。

逆にステラとフォルティスはフリートの言葉の意味を理解し、限界にまで顔を青褪めさせた。何せ自分達の本拠地(アジト)でも在った飛翔戦艇(エスクアッド)フッケバインが簡単に奪われたのだ。これで管理局に対して無敵と言えた艦が使用不可能になった。

何よりもフッケバインを失えば移動手段も限られてしまう。そうなれば管理局の追っ手から逃れる方法は限られる。それを理解したステラは、何としてもフッケバインを取り戻そうとリアクトを再び行うとするが、その前にブラックがステラをリアクトする為に必要な装置に叩きつける。

「ムン！！」

ーーードゴオオン！！

「ガッ！！アァ・・」

「ステラ！！」

「受け取れ！！」

ーーードオン！！

「グゥッ！！」

叩きつけられて呻いていたステラに向かって叫んだフォルティスに向かって、ブラックは迷う事無くステラを投げつけた。

その攻撃をフォルティスが避ける事は出来る筈も無く、かなりの勢いで向かって来るステラを体を使って受け止めるが、衝撃を完全に殺す事が出来ず壁に再び背中から激突した。

フォルティスはその衝撃に呻くが、そんな暇は与えないと言うようにフォルティスの顔の前にブラックの足の裏が迫り、フォルティスは頭部を壁に減り込まされてしまう。

ーーードォン！！

「・・・・フォルティス・・・」

頭部を壁に減り込まされてしまったフォルティスを目撃したステラは、全身を襲う激痛に苦しみながら声を出した。

しかし、ブラックは気にする事無くステラの右腕に手を伸ばし、そのまま吊り上げるようにステラの体をフォルティスの腕の中から取り出す。

ーーーガシッ！！

「今貴様は何故自分達が襲われているのか疑問を覚えているだろう？」

「・・・・何で・・・私達は・・・何も・・」

「そうだな。貴様らは確かに俺には何もしていない。だが、今まで貴様らが殺して来た奴らもそう思って死んだのだろうが！！！」

ーーードゴオオォン！！

「アァッ！！」

ブラックはステラの疑問に答えると同時に全力で壁に叩きつけ、ステラはその衝撃に苦痛の声を上げた。

「コレが貴様らのやっていた事だ。自らの業を理由にして、無関係な連中を殺して来た貴様らがな！！」

ーーードォン！！

「アァッ！！」

「戦う術も無く、意思も持たない連中だけを付け狙い。そんな奴らを殺して来た貴様らが風情が“凶鳥”だと？笑わせるな！！」

ーーーブザン！！！

「キャァァァァァァァァァァァーーーーーーーー！！！！！」

ブラックは叫ぶと同時にステラの右腕を限界まで引っ張り、右腕を引き千切った。

その激痛にステラは悲鳴を操舵室内部に響かせ、ステラの悲鳴を聞いたフォルティスは僅かに動き、床に転がっていたヴェイロンとサイファーも右腕が在った場所から血を流しているステラを見つめた。

「・・・止めなさい・・・ステラは・・」

「子供だと言いたいのか？笑わせる。貴様らも殺して来たのだろう。戦う術の無い女子供を？・・・それで自分達が行われるのは嫌などとほざくな。貴様らがそう言う事を行った時点で、貴様らもやられても構わんと言う事だ」

『とある世界の言葉に“因果応報”と言う言葉が在るんですよ。自ら行った事は巡り巡って返って来る。貴方達、凶鳥（フッケバイン）に今それが襲い掛かっただけですよ・・・・まぁ、既にそれを味わう事無く“逝ってしまった人物”も居ますけど、苦しんで死んだからよしとしましょうかね』

『・・・・えっ？』

その場に居るブラックを除いた全員がフリートの言葉の意味が分からず疑問の声を上げた。

“逝ってしまった人物”が居る。その言葉が正しければ誰かが既に死んでいると言う事になる。

それが誰なのか凶鳥（フッケバイン）の面々には分からなかった。カレンとアルナージはなのはに倒されたが、未だボロボロになりながらも存命している筈。海中に沈められているドゥビルも、ステラがフッケバインの操縦権限をフリートに奪われるまでは確かに生命反応が在った筈なのだ。

その他の面々はこの場にズタボロでは在るが、全員何とか生きてこの場に居る。では、フリートが言う死んでいるメンバーは誰なのかとフォルティスが考えると、フッとフリートが言っていた言葉が脳裏に過ぎる。

『トーマ君と戦う前から既にフッケバインは私の物ですよ！！』

「ッ！！・・・まさか・・」

『漸く気がつきましたか？そうですよ。実は貴方達が私を襲う作戦を考えていた時から、既に海中に沈めていた“ドゥビルは溺死していたんですよね”。いや～、本当に彼は運が無かったですよ。リアクト解除して重力百倍にして海中に沈めたら、その先の海底付近に切り立った岩が在りましてね。背中からグサって深々と突き刺さったんですよ。で、それをサーチャーで見た私は其処で固定して放置していたんです・・海底って怖いですね。でも、この時点では死んでいなかったんですよ。『高速再生』の病化故に死ぬ事が出来ずに、酸素も吸えずに苦しんで彼は逝きました。ＥＣ感染者だからって死なないなんて思ったら大間違いですよね』

「・・・嘘・・・ドゥビルが死んでいた・・・嘘だよ」

フリートが告げたドゥビルの死の事実に、ステラは右腕を失った痛みも忘れて体を震わせながら涙を両目から流した。

助ける為に頑張っていたのに、実はもう死んでいた。その事実にステラだけではなくその場に居る全員が呆然とするが、フリートは気にせずに声を掛ける。

『運が無いですよね・・・で、そろそろ最終段階に移行する頃合ですけど・・・“耐えられます”？』

ーーードクッ！！

「グゥッ！！ガバッ！！ガアアア

「サイファーーー！！一体何が！？」

突如として断末魔の叫びを上げながら大量に血を口から吐き出したサイファーを目撃したフォルティスは叫び、ステラは涙を流しながらサイファーを見つめ、ヴェイロンも苦しむようにもがいているサイファーに目を向ける。

そのサイファーの豹変に全く慌てていなかったブラックは、説明してやれと言うようにフリートに視線を放ち、フリートは頷いて説明を始める。

『『インビジブル・イレイザー』の毒の最終段階に移行したんですよ。出血死を運良く免れても、発狂死確実の激痛が全身を襲う。因みにその激痛は筆舌し難いほどでしてね。もうこの状態になったら解毒剤も無意味なんですよね。だって、解毒剤を使用して助かっても精神に何らかの異常が起きますからね。このまま死なせて上げるのが幸せですよ』

「・・いや！！お願い！！何でもする！？何でもするから！？欲しいものも、ディバイダーやリアクターだって全部渡すから！！サイファーを助けて！？」

『ハァ？何言っているんです？もう貴女達が所有していたディバイダーやリアクターは手に入れたんですよ。フッケバインも私の物。其処に居る優男のもブラックが手に入れてくれる。食糧なんかはフッケバインの中の物を奪えばいい。もう貴女達から欲しい物は全部手に入れたも同然なんですよ。それに私はちゃんとカレン・フッケバインに要求を告げて於きましたよ。『貴女達が所持しているディバイダーとリアクター、そして飛翔戦艇（エスクアッド）フッケバインを全部明け渡してくれたら、解毒剤と力の解除は行う』とね。それを無視して攻撃して来たのは貴女達。因みにあの時点で要求を受け入れてくれれ

ば、盛れなくエクリプスワクチンも序でに上げていたかもしれませんね。ディバイダーやリアクターがなくなったら、今後の生活が大変でしたでしょうから・・・・『ゼロ因子』を持っている訳でもない、貴女達には興味もないですし、其方の要求を聞く義務は無いんですよ』

「だそうだ。それにフリートが言っていただろう、死なせてやるのが幸せだと。よく味わえ。お前らがやって来た事をやられる側の気持ちをな」

そうブラックは言いながらステラをもがき苦しんでいるサイファーに近づける。

ステラは何とかサイファーを助けようと残されている左手を伸ばすが、既にサイファーはステラが近くに居る事も分からないのか、苦しみ続ける。

「ガァッ！！・・ガァァ・・・アァァァーー・・・アァ」

「サイファーー！！死なないで！お願いだから！！」

遂に苦しむ声さえ上げられなくなったサイファーを目撃したステラは、両目から涙を流して懇願するが、サイファーに左目からは徐々に光が失われていく。

そして遂に目から完全に光が失われ、最後にビクッとサイファーの体が痙攣したかと思われるように震えた。

「・・・サイファー？・・・ねぇ、サイファー？・・・嘘だよね・・・サイファーーー！！！！」

「死んでいる奴に何も言っても答えんぞ」

「・・フェ・・・ヒック・・・グス・・ウワァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーー！！！！」

サイファーの死の事実を改めて知らされたステラは大声で泣きだし、フォルティスとヴェイロンも辛そうに顔を伏せた。

しかし、ブラックとフリートはその様子を冷めた目で見ていた。今ステラがサイファーの死で悲しんでいても、それを彼らは何の力の無い人々に行って来たのだ。

自身の意思で戦う事を選んで死んだ者。ただ穏やかに暮らしていて、それを何の感情も抱かずに奪われた者の死。どちらも悲しみと言う点では同じだが、理不尽なのは後者の方だろう。

凶鳥（フッケバイン）はそれを行って来たのだ。故にフリートとブラックに同情心は無い。

「コレが貴様らの行って来た事だ。理不尽な理由で命を何の感情も抱かずに奪い、それに対して何の感情も抱かなかった」

ーーードゴォン！！

「ガハッ！！」

ブラックは言葉と共にステラを近くの壁に向かって叩きつけた。そのままブラックは床に落ちて苦痛に苦しんでいるステラを見下ろし、自身に向かって憎しみに染まった視線を向け始めたフォルティスとヴェイロンに目を向ける。

「ほう、俺が憎いか？そうだろうな。憎みに浸るのは貴様らには最高だろう・・その憎しみを理由に力を振るえばいいのだからな」

「・・・貴方が何で在ろうと・・僕らの気持ちは分からないでしょう？・・・エクリプスに感染したが故に社会の毒として僕らは切り捨てられる。そんな僕らの気持ちが！？」

「・・・だから何だ？」

『ッ！！』

フォルティスの自分達の運命を呪うような叫びを、ブラックはつまらなそうな声で切り捨てた。

「社会の毒？エクリプス感染したから？・・・だから、関係ない連中を殺していい理由になるのか？なる訳ないだろう。貴様らが殺してた連中は貴様らがどんな事情なのかも知らず、管理局が勝手に管理外世界と決めた場所だ。その場所に居る連中が貴様らを社会の毒だとほざいたのか？ほざいているのは管理局と管理世界だ。それも貴様ら自身の行いからだ」

『勝手に理由をつけられて殺される側からすれば堪ったものじゃないですね。彼らはただ平穏に暮らしていただけですよ。今ブラックと私がしている事は貴方達自身が行って来た事です・・・・・まぁ、確かに貴方達にも不幸な部分が在りますね。エクリプスウィルスに感染した為に今のような人生を歩んだ事は確かですから・・・特別にエクリプスワクチンを接種させて上げますね。それも大々的に管理局や各管理世界の行政府及び貴方達が襲った管理外世界の人々や政府に教えてね』

『ッ！！』

微笑みながらフリートが告げた言葉にステラ、フォルティス、ヴ

エイロンは限界にまで目を見開いた。
凶鳥(フッケバイン)が管理局などの組織から対処が困難とされている理由は、保有する戦力の強力さと拠点が移動すると言う点からである。だが、もしその全てを失われた状態で野にでも放たれれば、確実に家族や友人を殺されて復讐に来る者、保有していると思われるディバイダーやリアクターを付け狙う者に狙われるだろう。
ましてや違法研究が横行する世の中。未だに発見されていないEC感染者の治療方法を求めて、違法研究者などは凶鳥(フッケバイン)の面々を狙うだろう。善良な一般市民だったトーマよりも、凶鳥(フッケバイン)のような凶悪犯罪集団と呼ばれていた者達を狙った方が、万が一、真相が明るみになった時のダメージは少なく済む。
特に魔導殺しと言う魔導師に対して絶対的な力も失っていると分かれば、家族を殺されても復讐する事が出来なかった者が動かない筈は無い。確実に家族や友を殺された復讐に動く者が出るだろう。
それに気がついたステラ、ヴェイロン、フォルティスは一気に顔を蒼白に染めるが、フリートとブラックは構わずに残忍さに満ちた笑みを浮かべあう。

『私って本当に優しいですね、ブラック。アレだけ苛立つ事をやられたのに、最終的にワクチンを与えて上げるんですからね。私って何時聖人になったんでしょう？』

「さぁな。だが、こいつ等も喜ぶだろう。お前に要求していたワクチンが貰えるんだ。しかも大々的に宣告されて管理世界だけではなく管理外世界にも知られるんだ。多くの連中が“お礼参り”にやって来るだろう」

「・・止めて・・・お願い・・お願いだから・・」

「何だ？エクリプスウィルスに感染して苦しんでいたのだろう？そ

れから救われるんだ。もっと喜べ」

『そうですよ。喜んで下さいよね。だって、“ワクチンを要求したのはそっちなんですからね”。今更要らないなんて通用しませんよ・・・あぁ、でも・・その前に私達に喧嘩を売った報いは受けて貰いますね。ブラック、此方も殆ど終わりましたので・・・“手短に、尚且つ苦しみを与えて絶望に落として下さい”』

ーーーブン！！

ーーーガッシャン！！

フリートは言葉を言い終えると、モニターを消した。同時に操舵室へと続く通路から隔壁が張られたような音が鳴り響く。

その意味を理解したフォルティス、ステラ、ヴェイロンは一気に顔を蒼白どころから土気色に染めた。

この状況で、更にフリートが最後に言い残した言葉から推測すれば、ブラックが今から行う事は一つしか考えられない。“フォルティス、ステラ、ヴェイロンを死なない程度”にズタボロにする気なのだ。

しかも圧倒的な力を振るうブラックには、強靭な肉体を得ているEC感染者とかは全く関係ない。逆に強靭な分、長く苦しみ、尚且つ普通ならば死ぬ怪我でも生き残るのだ。それは地獄が長く続くと言う意味に他ならない。

「さぁ、始めるぞ。安心しろ。ズタボロなどと言う言葉が生易しいほどにしてやるが、“死なせてはやらん”。お前達は生きて自分達がやって来た行為の意味を知れ」

「ヒィッ！！・・・助けて・・助けて！！お願いだから！！」

「黙れ小娘。これを乗り越えれば貴様らは“世界から否定される存在”ではなくなるのだからな。認めたくはないが、同じ“世界に否定されている俺は嬉しいぞ”。救われる貴様らの存在が」

「・・な・・何ですって・・・今なんて？」

「言い忘れていたが、俺も貴様らと同じように世界に否定されている。俺は其処に居るだけで空間の位相をずらし、世界に悪影響を与え続ける。故に俺は常に世界に否定されるが・・・弱い連中には手を出す気は無い。だから、貴様らの行動は理解出来ても認める気はない。さて、話の時間は終わりだ。そろそろ、“地獄の始まりだ”」

そうブラックは呟くとゆっくりとステラを握りながら、ヴェイロンとフォルティスに近寄り、そして。

『ギャアアアアアアアアアアアアアアアーーーーーーーーーーー！！！！！！！』

操舵室内部に断末魔の悲鳴が轟いた。その悲鳴は翌日の昼頃まで鳴り響き、途中から二人分多く断末魔が増えた。

しかし、その声は隔壁に遮られている為に終わった後に訪れたトーマ、リリィ、アイシスが聞く事は無く、知っているフリート、ガブモン、なのははブラックが隔壁の向こうから出て来るまで放置していたのだった。

こうして管理局が対処が困難な相手として手を焼いていた凶悪犯罪集団一凶鳥（フッケバイン）は崩壊した。

それを行ったのは管理局ではなく、偶然迷い込んでしまった平行世界の者達。しかし、全てが終わった訳ではなかった。もうすぐ全

てが明らかになる。管理局が行っていた大罪を世が知り、世界が変わる時が訪れるのだった。

何処かの暗い部屋の中。
其処には幾つモノ、モニターが展開され、多くの人々が一つの大型モニターに映っている映像を見つめていた。
大型モニターに映っているのは、はやてがヘイムダルを使用する瞬間の映像。そのモニターを見つめていた誰もがヘイムダルには息を呑まざる得なかった。如何考えてもヘイムダルは魔法と呼ぶよりも質量兵器と呼ぶのが相応しい。
それを管理局員であるはやてが使用しているのだから、その場にいる全員が言葉を失わざる得なかった。その後も映像は続き、ブラックがヘイムダルを真っ向から撃ち破られる瞬間の映像も映し出され誰もが呆然としたが、そのすぐ後に映像は消され、一人の部屋の中に座っていた男性が声を出す。

「以上が我がルヴェラで行われた管理局の行動だ。無論、我が世界はあのような質量兵器に属するような魔法の使用許可は出していない」

『・・・フゥ〜、何時から管理局は質量兵器の使用を認めたのだ？アレは如何考えても危険過ぎるぞ』

『同感だ。映像で八神はやては使用後には雪として散らすと宣言していたが、あの巨大な艦艇の方が海に落下した場合は如何する気だったのだ？専門家ではない、私でも近くの港場に津波が襲い掛かっていたと分かるぞ』

『何よりもルヴェラは文化保護を第一にしている世界だ。あのような危険な魔法の使用許可は事前にルヴェラに取るべきだっただろう。それを行わずにあの魔法の使用・・・・管理局は管理世界の政府を蔑ろにしているとしか思えん』

モニターに映っている先の人物達はそれぞれヘイムダルの使用について意見を述べ、管理局に対する不満を上げた。

彼らは管理世界の代表の中でも管理局の行動に不満を覚えている者達である。今回のルヴェラでのヘイムダルの勝手な使用の情報を知り、ルヴェラの代表と連絡を取り合ったのだ。

「厳重に抗議も行ったが、管理局からはヘイムダルの使用指示を出していないと返って来た」

『フム、切り捨てられたな、八神はやては』

『管理局上層部の連中が良く使う手だ。自分達に責が及ぶ前に下と切り捨てて保身を図る。連中からすればミッドチルダを救った八神はやても捨て駒と言う事か』

『いや、その八神はやてが作り上げた部隊がミッドチルダを救ったと言う『ＪＳ事件』とて、怪しい部分が存在していただろう』

『・・・・確かに・・・・何故管理局の発祥の地であるミッドチルダに『聖王のゆりかご』などと言うベルカの悪夢の遺産が存在していたのか・・・・私の世界が管理世界に決定される前から遺跡などを管理局は無許可で盗掘して遺産をロストロギアなどと勝手に決め付けて持ち出した。連中は特にロストロギアの回収を第一としていた』

『その管理局が自らの発祥の地のロストロギアを見逃すなどありえ

まい。やはり『聖王のゆりかご』は管理局が隠していたと考えるのが正解だろう』

ーーードン！！

『最近の管理局の行動は目に余る部分が多い！！もし今回のヘイムダルが投下されていた場合、ルヴェラでの犠牲は多数出ていたぞ！！その犠牲を如何する気なのだ！？』

『だが、抗議したところで下を切られて上層部に影響は与えられん・・・・管理局には権限を与え過ぎた。このままでは近い内に管理世界で在ろうと、アルカンシェルなどの兵器を海上だからと言う理由で使用しかねんな・・現に今回は相手はあの凶鳥（フッケバイン）とは言え、ヘイムダルなどと言う危険極まりない魔法を世界に無許可で使用したからな・・・せめて事前に声掛けぐらいは行うべきであろうに』

一人の代表の怒りを治めるように別の代表が声を掛けるが、その人物の顔も苦虫を噛み潰したような顔だった。

当然だろう。もし今回ヘイムダルがフッケバインに激突していた場合、途轍もない被害が出ていたのだ。その犠牲を管理局は見ていない。彼らは世界に住んでいる人々の代表として選出されたのだ。

世界に住む人々が安全に、そして平穏に暮らす為に管理局にも投資しているのに、その管理局に人々の生活が脅かされた。赦せる事ではないのだ。

特に古き良き暮らしを愛するルヴェラの者達からすれば、その自然を壊されかけたのだ。代表は何とかその怒り治める為に苦心している状況である。

「一応特務六課の関係者と思われる局員達は治療は受けさせているが、管理局から渡せと言う指示が来ている。それと例のルヴェラを

救ってくれた竜人と女性は指名手配にするようだ」

『フン、今回の不祥事を全て竜人と女性に擦り付ける気だな。ルヴェラを自らが犯した不祥事で危機に晒して起きながら』

『・・だが、あの竜人は何者なのだ？・・・アレほど生物の話など聞いた事は…』

『無いのは当然ですよ』

『ッ！！』

突如として響いた声にモニターに映っている代表達と部屋の中に居たルヴェラの代表は目を見開いた。

その声の主が誰なのかと全員が疑問を覚えると、彼らの前に先ほどまでヘイムダルの使用映像に映し出されていたフリートの映像が出現する。

ーーーブン！！

『こんばんわ。管理世界の代表の皆さん。私はフリート。フリート・アルハザード。この度はご迷惑をお掛けしてしまいましたね』

『アルハザードだと！？馬鹿な！？アレはお伽話の世界では無いのかね！？』

フリートが告げた名前に一人の代表が信じられないと言うように叫び、他の代表達も唖然としてフリートを見つめた。

その様子にフリートは自身の世界が御伽噺だと完全に認識されている事に不満を僅かに覚えるが、それを表に出す事は無く朗らかな

笑みを浮かべたまま声を出す。

『勝手に私の世界を御伽噺にされているのは不満ですけど・・今は構いません。それよりもですね。良い情報を上げますよ。管理局が解決した六年前の『ＪＳ事件』・・・アレは管理局の自作自演同然の事件なんですよね』

『なっ！？』

『信じられないのは当然ですけど、全て事実ですよ。その詳細も話して上げますね・・・そして今回お騒がせしたお詫びに、素晴らしい技術を管理世界の代表方々にお渡しします・・・“一般人でも魔法が使えるようになるデバイスの技術”』

『・・・・フム、詳しく話を聞こう。君の正体が本当にアルハザードの関係者はともかく、色々と管理局の裏を知っているようだからね。内容次第では君と手を結ぼう』

『話が早いお方は好きですよ・・・では、話しましょう。管理局の裏が引き起こして来た大罪の歴史を』

そうフリートは告げると、全てを代表達に話し出す。今回の事件の顛末。管理局が犯して来た違法の数々。そして六年前の『ＪＳ事件』の真相の全てを各管理世界の代表達は知るのだった。

とある管理局の収監施設。
その場所の一室に一人の男性が存在していた。囚人着を着せられているその人物こそ、トーマがディバイダー９９６を手に入れ、リリィをエクリプス感染源として利用していた違法研究所の研究者だった。
その人物が拘束されている部屋の扉が突如として開き、一人の管理局員の制服を着た蒼い髪に赤い目を持った女性が入って来る。

「こんにちは」

「・・・何か用かね？既に知っている事は全て話した筈だが？」

「そうらしいですね・・・でも、用はそんな事では無いんですよ。ただ“消えて貰う為に来たんですよね”」

「何を言って？」

ーーートスッ！

女性の言葉に疑問を男性が覚えて質問しようとした瞬間、フリートは目にも止まらぬ速さで男性に首筋に注射を打った。
その動きに慌てて男性は女性から離れるが、とき既に遅く、男性の腕は急激に膨張し始める。

ーーーボコボコッ！！

「ガアッ！！アアアアアアアアアアアアアッ！！・・・こ、この症状は！？・・・ま、まさか！？」

「はい、エクリプスウィルスを注射しました。随分と殺して来たよ

うなんですけど、研究者なら先ずは自分で試しましょうね。まぁ、EC保有者にはなれませんよ。それは私が改良したエクリプスウィルスで投与された相手はただの肉塊に変わるんですよ。ジワジワと時間を掛けてね」

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

「安心して下さい、一人じゃ寂しいでしょうから、貴方の助手をしていた女性にも既に投与して来ました。監視カメラの映像も挿げ替えていますし、貴方の断末魔の声も外には届かないように感知されない結界を張り巡らして於きますので、安心して苦しんで下さいね」

「助けて・・助けてくれ！！アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

「そう言った被験者やリリィちゃんの声を聞いた事はないでしょう。明日の朝に本物の管理局員が見に来る頃には貴方だった肉塊が此処に残されるでしょう。では、さようなら」

女性ーフリートはそう告げながら断末魔の叫びを上げている男性に背を向け、部屋の扉を閉めた。

翌日、管理局員が部屋に訪れると、其処には男性の姿は存在せず、ただの肉の塊だけが部屋の中に存在していたのだった。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　エピロー

遅れて申し訳ありませんでした。

今回は先ずは世界全体の後始末で、次回はトーマ達や特務六課、そして凶鳥（フッケバイン）の個人編に映ります。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　エピロー

特務六課が事実上完全敗北した情報は即座に管理局本局と特務六課の本部に届いた。

当然ながらその情報を聞いた局員達は、最初は誰も信じられなかった。全ての戦力が集まっていた訳ではないが、八神ヴィータ、エリオ・モンディアル、スバル・ナカジマ、八神はやて、フェイト・Ｔ・ハラオウン、そしてエース・オブ・エースの高町なのはと言う特務六課の主要戦力がヴォルフラムには集結していたのだ。

そのメンバーが集まっていた場所が敗北するなど管理局に居る誰もが信じられなかったし、特にヴォルフラムに居なかった特務六課のメンバーが一番信じられなかった。だが、信じられない事だけはそれだけでは終わらず、管理局にルヴェラからヘイムダルの使用に関する抗議が怒りを顕にしながら届いたのだ。

ヘイムダルの使用に関しては確かに本局と本部に認可が貰えれば使用が赦される事になっていた。だが、ルヴェラの抗議で残っていた特務六課の者達は一番重要な場所である、“使用する世界の行政府の認可”を完全に忘れていた事に気がついた。ヘイムダルを使用される側の世界からすれば、確かに事前にヘイムダルなどと言う限りなく黒に近いグレーの魔法の使用は知って於きたい。

知らないで使われて民衆に被害が出た時には、管理局だけではなくその世界の行政府にも被害が及ぶのだから。

今回はブラックの行動で被害が出ずに済んだが、ルヴェラ行政府への無許可でのヘイムダルの使用が赦される筈も無く、正式に謝罪するようにルヴェラから抗議文が山のように管理局に届いていた。

その報告は当然ながら本部に残っていた特務六課のメンバー達にも届き、正式な謝罪が上層部からルヴェラにされると思われていたが、予想は完全に裏切られる事になった。

「如何言う事ッスか！？」

「落ち着いてウェンディ」

ルヴェラでの出来事から翌日の第三管理世界―ヴァイゼン―に存在する特務六課の駐留所に存在する一室で、怒りを顕にしているウェンディ・ナカジマを落ち着かせるようにギンガ・ナカジマは声を掛けた。

しかし、ウェンディは興奮を押さえられないと言うようにギンガが持って来た文章が書かれた紙をテーブルに叩きつける。

ーーードン！！

「コレが落ち着ける訳ないッスよ！『ヘイムダルの使用は特務六課八神司令の独断であり、本局及び本部は一切の認可を出していない』！こんな事が許されるッスか！？」

「・・・上層部は今回のヘイムダルの使用の不祥事を全部八神司令に押し付ける気なのだろう」

ウェンディが叩いた紙に書かれている内容を、椅子に座りながら読んでいた右目に眼帯をつけている銀髪の少女―チンク・ナカジマ―は険しい声を出し、ウェンディは険しい目をチンクに向ける。

その他にも六課の制服を着たキャロ、ディエチ、アルト・クラエッタも険しい視線をチンクに向けると、チンクは文章を見ながら話し出す。

「今回の不祥事は上層部側にも非が在る・・・ヘイムダルの使用認可を出した者も確実に処罰が下るだろう・・それから逃れる為に上層部は八神司令に全てを擦りつけたのだ」

「・・・でしょうね・・・それにもう正式にその文章はルヴェラの行政府に渡されているわ・・・ルヴェラに居る皆が如何言う状況なのかは分からないけど・・・少なくとも特務六課は完全に終わりでしょうね」

「クッ！！」

「・・・・私達も現地に向かって詳しく状況を知りたいが・・・ルヴェラが入れてくれる保証も無い・・・何よりも一体八神司令達は何に破れたのだ？・・・凶鳥（フッケバイン）では無いと言う話らしいが、一体何に？」

ーーーバタン！！

「その情報が手に入ったわよ」

『ティアナ！！』

突如として部屋の中に執務官服を着て飛び込んできたティアナの姿に、部屋の中に居た全員が目を向けた。

ティアナはそれを確認すると持っていたディスクを素早く端末に入れて映像を映し出す準備を始める。

「ルヴェラに居る局員から送られて来たヴォルフラムに居た司令達の戦闘映像よ。旨くルヴェラの行政府が回収したヴォルフラム内に入り込めて、戦闘映像だけを回収出来たわ」

「・・それでヴォルフラムに乗っていた皆は如何しているのだ？」

「・・・・・行政府の監視下に置かれながら、病院に居るらしいわ・・・・戦闘映像を回収した局員の話だと・・・ヴォルフラムは信じられないほどに荒らされて・・・大量の血で壁が染まっていたらしいわ」

『ッ！！』

ティアナが告げたヴォルフラムの惨状にギンガ達は目を見開いた。

大量の血で壁が染まっていると言うヴォルフラム。如何考えても惨劇が起こったとしか思えない。だが、はやて達が居る場所で惨劇が起きたなど誰も信じられずに困惑したように全員が顔を見合わせていると、ギンガがフッと口元に手をやりながら呟く。

「・・まさか、リイン指令補とザフィーラさんが急に倒れて・・・入院していたシグナムさんの容態が急変したのは、八神司令自身に何かが起きたからじゃ」

そうギンガは心配げに呟き、他のメンバーも心配そうに顔を見合わせあう。

今日の昼頃に突然リインとザフィーラは倒れて、ヴァイゼンに存在する病院に緊急搬送されたのだ。原因は主である八神はやての異変だとされ、同時刻にサイファーに重傷を負わされて入院していたシグナムも容態が一気に悪くなって今は集中治療室から出られない状態になっていた。

その事を思い出した全員が凄まじい不安に襲われながら映像を映そうとしている準備を行っているティアナに目を向けると、準備が終わったのかティアナはギンガ達に振り返る。

「準備が終わったわ・・・それじゃ映像を映します」

ーーーポチッ！

ティアナは言葉と共に映像を映す為のスイッチを入れて、モニターが出現した。
そのモニターに映る映像に全員が目を向け、そして全員が“地獄”を目撃した。
次々と壁に叩きつけられて体の一部を失ったり、肉片に変わって行くヴォルフラム内の局員達。
たったの一撃で再起不能に追い込まれたなのはに、同じく再起不能にされたエリオ。ヘイムダルを完全に撃ち破るブラック。更にはSランクオーバーのはやてとフェイトが二人掛かりで挑んでもダメージを与える事が出来ず、逆に圧倒されていく映像。
そのどれもを映像を見ていたティアナ達は現実が信じられず、呆然としながらそれだけの“悪夢と言う地獄”をたったの一体で作り上げた漆黒の竜人ーブラックを見つめる。

「・・・なんッスか・・・この生物・・・」

「・・・ありえん・・・八神司令達がまるで赤子では無いか」

「・・・エリオ君が」

次々と映し出されていく悪夢の映像にウェンディ、チンク、キャロはそれぞれ声を出し、他のメンバーも顔を青褪めさせていた。
しかし、次々と悪夢と言う名の映像は続き、遂にフェイトが左腕を複雑に折られ、ヴォルフラムの甲板に叩きつけられるところまで映像は続くが、その瞬間に急に映像に映りが悪くなる。

ーーーザザザザザザザッ！！

「急に如何したのかしら？」

「分かりませんけど、とにかく先に進めて見ます」

急に映像の映りが悪くなった事に疑問を覚えたギンガがティアナに質問したが、ティアナにも原因が分からず先へと映像を進める。

そして一定の場所に進むと、何故かはやてが甲板に倒れ、シャマルとヴィータがはやてと局員達を護るように立ち塞がる映像が映し出された。

何故映像の映りが悪くなったのかと全員が疑問を覚えるが、次の瞬間に映し出された映像に目は見開かれ考え事など完全に吹き飛ぶ。映し出されたのはシャマルが特攻を行い、ブラックの動きを封じたところで、ヴィータがシャマル諸共ブラックにプラズマパイルを振り下ろす瞬間の映像。

その映像に全員が目を見開き、キャロは悲しげに顔を俯かせながら目に涙を浮かべる。

「・・そんな・・・シャマルさんが・・」

「・・・あの竜人を倒すにはそれしかないかもしれないが・・・シャマル殿が・・・」

「・・でも、これで全部終わった筈だわ。幾ら力が強くても、あの一撃を避けられる筈は・・・・」

悲しみにくれるキャロを少しでも慰めるようにティアナは声を掛けようとしたが、その声は完全に失われた。

何故ならば映像が新たに映し出したのは、シャマルと共に死んだと思われたブラックがヴォルフラム内から無傷で現れる様子。

シャマルの決死の特攻が完全に無意味だった事を知らしめる映像

に、ティアナ達は言葉を失いながらモニターを見つめていると、再びブラックは局員達を殺し、ヴィータを完全に戦闘不能に追い込んで行く。

「・・酷い・・」

「ウッ！！」

「・・地獄だ・・八神司令達は地獄を見たのだろう」

次々と行われていくブラックの暴虐に、部屋の中に居る全員が顔を青褪めさせ、手で口を押さえる。

そのまま映像は続くと思われたが、再びスバルがヴィータを抱える場面の辺りで映像の映りが悪くなる。

ーーーザザザザザザザザザッ！！

「・・・また映像の映りが悪くなったわ？」

「機器に何らかの異常が起きているんでしょうか？」

ギンガとティアナは突然に映りが悪くなる映像に訝しげに顔を歪め、他のメンバーも疑問を覚えながら映像を見ていると、再び映像が復活する。

その映像を目撃したティアナ達は、信じられないと言うように目を見開いた。

映し出された映像は、恥も外聞も無くブラックに土下座するように命乞いを涙ながらに行っているヴィータの姿だったのだ。

ヴィータがどれだけプライドが高いのか知っている面々は、命乞いを行うヴィータなど信じられずに呆然としてしまうが、命乞いな

ど関係ないと言うようにブラックはヴィータを殺した。
再び仲間が失われた事実を知ったティアナ達は辛そうに顔を歪めるが、映像は関係なく進み、今度はスバルが戦闘不能に追い込まれる映像が映し出される。

「ッ！！スバル！！」

「嘘ッス！？振動破砕が破れられるなんて、嘘ッスよ！？」

「・・だけど、現に破られてスバルも戦闘不能に追い込まれた・・・これでヴォルフラムに居た戦えるメンバー全員が戦闘不能になった・・・もう竜人を止められる者が居ないよ」

『ッ！！』

ディエチの言葉に全員がハッとしたように顔を見合わせた。
そう、既にフェイトは戦闘不能に追い込まれ、ヴィータとシャマルは死亡。エリオとなのははその前から再起不能状態。残されているはやても右腕を失い、ティアナ達には理由は分からないが甲板に倒れ伏している。
ヴォルフラムに居た戦えるメンバー全員が何のダメージも受けていないブラックによって、戦闘不能に追い込まれたのだ。この先に広がる映像はブラックによる蹂躙劇以外に在りえないと理解し、全員が恐怖に震えながら映像に目を向けてみると、再び映像は映りが悪くなっていた。

ーーーザザザザザザザザザッ！！

（コレで三度目・・・・何で急に映りがこんなに悪くなるのかしら？）

（何か作為を感じるわね）

三度目の映像の映りの異変にティアナとギンガはそれぞれ変だと言う印象を抱いた。

一度や二度ならともかく、既に三度目。更にウェンディ、キャロ、チンク、ディエチ、アルトは気がついていないが、ティアナとギンガは気がついていた。映像が戻った後に映っている局員達とフェイト達は、まるでこの世の全てに絶望したかのように暗い雰囲気を纏っていた。

何かが映像が悪くなった時に起きたのだとティアナとギンガは思うが、情報の少なさから答えが出る事無く、モニターを見つめていると、再び映像は映りだす。

そして映し出された映像に全員が言葉を完全に失った。映し出されたのはブラックのガイアフォースとブラスターシステムを使用して限界を超えて放たれたはやてのラグナロクが激突し合っている瞬間の映像。その衝撃によって次々と甲板から落下して行く局員達の姿が映し出されたのだ。

その光景にティアナは完全にはやてには周りが見えていない事に気がつき、焦りを覚えて険しい声を出す。

「・・不味いわ・・・この映像が報道されたら本当に八神司令は終わりよ」

「えぇ・・・“自分の部下に構わずに砲撃を放った司令”・・・この映像は確実にはやてさんを追い込むわ」

「そんな！？」

ティアナとギンガの険しい声にキャロは悲鳴を上げるが、事実こ

のガイアフォースとラグナロクの激突は更にはやてを追い込むに充分な映像だった。
　上層部としては絶対にヘイムダルの使用は、はやての独断だった事にしたい。それを知らしめるに充分過ぎるほどの情報が手に入ったのだ。
“謎の生物と交戦して精神が追い込まれた為にヘイムダルを独断で八神はやては使用した”。
　それを表すにガイアフォースとラグナロクの激突は充分だった。何故ならば映像に映っているはやては、自身の体さえも全く気にせずに限界を完全に超えてラグナロクを放っているのだ。更に周囲の局員にさえ全く気を配っていない。精神状況が追い込まれていた事を示すには充分だろう。
　その事実に誰もが悲痛さを顔に浮かべるが、そのまま映像は続き、はやての限界を超えたラグナロクでさえもブラックにはダメージを与える事が出来ず、敗北したはやてがブラックに氷の中に封印されたところで映像はプツリと途切れる。

ーーープツッ！！

「・・・・・コレがヴォルフラムに居た皆が戦った相手」

「・・・ＡＥＣ武装も全く通じず、更にはＳランクオーバーが二名も同時に掛かって全くダメージを与えられなかったとは・・・だが、それよりも今の映像ではヴォルフラムにいた全員が死んだのでは？」

「そんな事はないですよ！！だって、ルヴェラで治療を受けているって情報が入っているじゃないですか！？」

「キャロの言う通りよ、チンク・・・それよりもこんな状況じゃ、凶鳥（フッケバイン）を追うどころじゃなくなるわ・・・下手をすれば特務六課は解

散して処罰を受ける事になるわよ・・・特に八神司令は全ての責任を取られてしまうかもしれないわね」

『・・・・・』

ティアナの言葉に誰もが言葉を出せなかった。

だが、現状ルヴェラからの抗議を逃れるには、はやてを切り捨てるのが一番である。

ヘイムダル使用の実行者であり、更に先ほどの映像から精神が不安定だったのは明白。これ以上に無いほどにはやては上層部の捨て駒として利用されるのに適していた。

それに対してティアナ達は如何する事も出来ない。所詮執務官だろうと捜査官だろうと、管理局上層部からすれば局員の一人。今回は更に管理局とルヴェラの関係が悪くなるほどの不祥事なのだ。

もしヘイムダルの使用認可に上層部が関わっていたとばれれば、管理局への責任追及は増大するだろう。当然ながら認可を出した上層部も裁かれる。それから逃れるには生贄をだすしかないのだ。

八神はやてと言うこれ以上にないほどに生贄に適した人物が居るのだから、上層部は今回の責任を全てはやてに押し付け、上辺だけの謝罪をルヴェラにするだろう。それで全てが終わるのだから。

その事実に行き着いたティアナ達は、全員が顔を暗くさせながら俯いてしまう。

その瞬間、突如として部屋の扉が開き、フェイトの執務官補佐のシャリオ・フィニーノが慌てて入って来る。

ーーーバタン!!

「大変です!!上層部が明日の昼頃に今回の件の謝罪を述べるそうです!!同時に今回の事件の顛末も話すそうですよ!」

「本当なの！？」

「はい！！・・・・でも・・・内容は謝罪だけじゃなくて・・・“特務六課の解散及び、今回のヘイムダルの無断使用した八神はやての処罰”も報告するそうです」

『ッ！！』

「やっぱり上層部は、はやてさんに全ての責任を擦りつける気なのね」

「・・はい・・・それとその報道会見の時には、ルヴェラの行政府代表だけではなく・・各管理世界の代表も出席するらしいです」

『ッ！！』

シャリオが伝えた情報にティアナ達は目を見開いた。

しかし、すぐさま当然だと理解する。今回ヘイムダルを無断使用されたのはルヴェラだが、他の管理世界でもヘイムダルを使用されていた事は充分に考えられる。管理世界の代表達としては、ヘイムダルなどと言う危険すぎる魔法の無断使用を赦す筈が無い。

だからこそ、各管理世界の代表達はルヴェラの代表に管理局が偽りなく謝罪を述べるか確かめる為に出席するのだとティアナ達は考える。

実際はとんでもない事を引き起こす為に集まるのだが、重要な部分の記録を消された映像しか見ていないティアナ達には分かる筈も無く、何も出来ない無力感にティアナ達は憤りを覚えるのだった。

とある管理世界の深い森が群生している場所に存在する管理局の研究所。
その場所には多数の局の研究者達が、管理局自身が違法と定める研究を行っていた場所だった。
だが、今その場所には局の研究者達は一人も存在せず、巨大な黒い戦艦ーフリート達が奪い取ったフッケバインが研究所の近くの森の中に隠されていた。
昨日、特務六課と凶鳥（フッケバイン）を壊滅させた後、フリートは自身が管理局本局のデータベース内部から抜き取ったデータを調べて、管理局に不満を持っている管理世界に存在する管理局の違法研究所を襲撃したのだ。
理由は管理局が違法を行っていると言う決定的な証拠を得る為であり、研究所内部に存在していた違法のデータと研究者達、そして身勝手な欲望で犠牲にされ掛けていた人造魔導師の子供は、今朝訪れた行政府の人間と軍に引き渡して在る。因みにフリートが情報操作を行っているので、全く管理局には情報が届いていない。

「と言う訳で、明日の昼が管理局のご臨終の時間ですね」

「自分達の汚名を晴らす為にマスコミを入れて会見する場が、実は管理世界の代表達から糾弾の場だなんて思っても見てないでしょうね」

研究所の一室で薬品を調合していたフリートの背に、なのはが声を掛けると、フリートは笑みを浮かべて手に薬品を持ちながらなのはに振り返る。

「連中もこんな短時間で各管理世界の代表に真実を知られるとは思っても見ていなかったでしょうしね。更に管理世界の代表と私が手

を結んでいるとは夢にも思っていないでしょう」

「フリートさんだから出来る事ですからね・・・・それでこの世界のフェイトちゃん達とアレはどんな状況なんですか？」

「フェイト・テスタロッサ及びスバル・ナカジマを含めた局員達全員は未だ意識を取り戻す事無く、ルヴェラの病院で治療中・・・ルヴェラの海に放置して来た八神はやてが眠っている氷塊は行政府が回収して厳重に監視しています・・・で、最後にこの世界の高町なのはですが・・・・精神病棟の隔離病室の中で拘束着を着せられていますよ」

「魔力を失ってブラックさんの殺気を直に浴びたんだからしょうがないですね」

「えぇ・・・少しでも物音がしただけで体を恐怖に震わせているらしいですからね・・・このままだと」

「自殺なんてさせませんから、安心して下さい・・・アレはこの世界のヴィヴィオを引き取っているんです・・・あの子が成人して独り立ちするまでは意地でも親を続けさせますよ」

「・・・フム、なら早めに接触した方が良いですよ。既にガブモンがこの世界のヴィヴィオちゃんの護衛を影ながら行っているとは言え、確実に混乱が起きたら“聖王狂会”の馬鹿が動くでしょうからね。私は管理世界の代表達と少し動いて、その後にトーマ君の治療をしないといけませんし、凶鳥（フッケバイン）の連中もさっさとワクチンを打って何処かの管理外にでも放逐するつもりですからね。ブラックは今日一日眠って、明日の取材までには起きるでしょうけど。ブラックが動くとしたら、他のＥＣ感染者達かヴィヴィオちゃんに関する事ぐ

らいでしょうからね。管理世界に関しては動く筈がないでしょうから」

「分かっています・・・それじゃ、後はお願いしますね」

そうなのははフリートに険しい声で答えると、待機状態のレイジングハートを強く右手に握りながらフリートに背を向けて部屋から出て行く。

フリートはその様子に一抹の不安を覚えるが、今のなのはならば殺す事まではしないだろうと考えて、すぐさまエクリプスワクチンの精製作業を再開する

「う～む、やはりこの世界のアルハザードに行くのが一番なんですけど・・・・なのはさんとガブモンが赦してくれませんでしたからね」

当初フリートはフッケバインを手に入れた後、この世界のアルハザードに行くつもりだった。

この世界の自身が現存しているかは分からないが、少なくとも管理世界に存在している研究所よりは設備が揃っているはず。一人分しか持って来なかったエクリプスワクチンを凶鳥（フッケバイン）のメンバーとトーマ、更に他のＥＣ感染者達の分を増やす為にはアルハザードの設備を利用するのが最も手っ取り早いのだが、なのはとガブモンがそれを止めたのである。

万が一、この世界のアルハザードにもフリートが現存していた場合、とんでもない厄災をこの世界の管理世界に残す事になる。リンディと言うフリートに対する絶対的な抑止力が存在しないこの世界で、この世界のフリートが暴れ回った場合、それは悪夢としか言えないだろう。

それだけではなくフリートがもう一人増えるなど、なのはとガブ

モンからすれば悪夢を通り越して地獄だ。一人でさえも押さえきれないのに、更にフリートがもう一人増えて、互いに出会いでもしたらどんな科学変化を引き起こすか分かったものではない。
故になのはとガブモンは究極体のメタルガルルモンXに進化すると言う脅しまで行って、フリートのアルハザードを行きを止めたのである。
フリートとしては不満だったが、流石に今の装備でメタルガルルモンXとやり合う勇気まではなく、渋々と乗っ取った管理局の研究所でエクリプスワクチンの精製を行っているのだ。
そしてある程度ワクチンの精製が完了し始めると、部屋の中にトーマとリリィの様子を見ていたアイシスが入って来る。

ーーーブゥン！！

「ヤッホー！フリート！ワクチンの作成はどんな感じなの？」

「もうすぐ終わりますよ、アイシスちゃん・・・それでトーマ君とリリィちゃんの様子は如何ですか？」

「リリィはまだ本調子が無いから横になっているけど・・・・・トーマは落ち込んでいるかな・・・自分を家族だって言ってくれていた・・・スゥちゃんが所属している組織の裏を知って・・」

そうアイシスは僅かに自身も落ち込んだようにトーマの状態をフリートに話した。
昨日の夜の内に、フリートは何故エクリプスワクチンを渡せなかったのか、その理由をトーマ、アイシス、そしてリアクトの解除を終えたリリィに説明している。
スバルが所属している管理局と言う組織の裏に存在している深過ぎる闇と、その闇が行っていた大罪の数々。当初トーマはそれを信

じられず、フリートに不信を顕にしていたが、フリートが強襲した管理局の研究所が行っていた違法研究を目撃して真実だと理解して落ち込んでしまっていた。
アイシスも管理局の行っていた大罪の数々には言葉を失ったが、直接知り合いが管理局に関わって居た訳ではないので、トーマほどには落ち込まずに済み、今までトーマを励ましていたのだ。

「スバル・ナカジマ自身は関わっていないんですけど、特務六課に居た元機動六課の隊長陣は完全に別ですよ。連中は本気で六年前の『ＪＳ事件』の真相を知れる立場だったんです。それなのに見過ごして、違法研究の促進に少なからず関わっていたんですからね。全く呆れて言葉も出ません。まぁ、自分の組織の上層部が全ての元凶だったとは夢にも思っていなかったでしょうけどね」

フリートはそう不満を顕にしながら呟くと、精製が完了したエクリプスワクチンを試験管の中に入れて用意して置いた保存機に保管して行く。

ーーーカチャカチャ

「まぁ、もうすぐ全部終わりですけどね。連中も管理局もね。それにその混乱の隙に管理局内に存在しているトーマ君とリリィちゃんの情報を全部書き換える予定です。それでトーマ君は再び自由に管理世界を歩けるようになりますよ」

「そうなんだ・・・それに関しては良かったかな」

フリートの言葉にアイシスは安堵の息を吐いた。
一時は本当に管理外世界でトーマは暮らす事になるかも知れなかったのだ。エクリプスワクチンの危険性を理解したアイシスが考え

ても、トーマが管理世界で普通の生活を行うのは非常に難しいと思っていた。
だが、フリートはこれから起きる混乱を利用して、管理局内部に存在しているトーマとリリィに関する情報を全て書き換える事で、トーマとリリィが普通に管理世界で暮らせるようにするつもりだった。
幸いと呼ぶべきか、トーマとリリィの存在を詳しく知っていたのは特務六課、凶鳥（フッケバイン）、そしてリリィが居た違法研究所の研究者だけ。既に研究者の方は始末をつけたし、凶鳥（フッケバイン）も終わり。後は管理局内部のデータとディバイダーとリアクターを作り出している場所さえ潰せばトーマとリリィは完全に自由の身になる。
そしてこの世界のディバイダーとリアクターを回収し、凶鳥（フッケバイン）とは別のＥＣ感染者達を片付けてからフリート達は元の世界に戻るつもりだった。既に大体のＥＣ感染者達の居所は補足している。
管理局の真実が明らかになって世界が混乱している隙に、フリート達が動き、この世界に存在している魔導殺（ディバイダー）しを全て回収する。

（私が管理世界に提供する予定の“一般人でも魔法が使えるようになるデバイス”の存在を強く知らしめるのに、魔導殺（ディバイダー）しは不要ですからね。全部貰って行きますよ）

そうフリートは内心で呟きながらエクリプスワクチンが入った保管庫を自身が持って来ていた荷物袋の中に仕舞いこみ、背中に背負い直す。
そのままアイシスと共に研究所から出てフッケバインに戻ろうとするが、その直前にフッとフリートの動きは止まり、机の上に置いておいた待機状態のデバイスのカードを取る。

「アッ！忘れていましたよ・・・アイシスちゃん、コレ上げますね」

ーーーポン！！

「何コレ？・・・待機状態のデバイスみたいだけど？」

「昨日の内に完成させた試作品の“魔力が無い一般人でも魔法が使えるようになるデバイス”ですよ」

「ブッ！！」

フリートが何でもないように告げたデバイスの正体にアイシスは息を噴き出し、全身をワナワナ震わせながら手に持っている待機状態のデバイスを見つめる。

当然だろう。今アイシスが持っているデバイスは魔法が使えない一般人に取っては夢の結晶と呼んでいいデバイス。

それを何の前触れも無く渡された事にアイシスは驚きながらフリートに恐る恐る目を向けてみると、フリートは何処となく楽しげな笑みを浮かべながら声を出す。

「イヤ～、実はですね。管理世界にそのデバイスと同じ機能の物を渡す予定なんですけど・・・調子に乗って渡す予定だった使いこなせてＡランクからＡＡランクの予定が・・・・使いこなせればＳランクからＳＳランクになって仕舞いましてね。廃棄するのも何なんで、アイシスちゃんに上げますよ。アッ！安心して下さい。ちゃんと管理世界の代表に渡す物は別に在りますので」

「・・・・もしかして・・私の正体ばれてる？」

「イーグレット・セキュリティ・サービス、代表取締役令嬢でしょう？」

「ハハハハハ・・・流石はアルハザードの研究者ね」

何でもないようにトーマやリリィにさえ隠していた自身の素性を知っているフリートに、アイシスは乾いた笑い声を出すしかなかった。

「まぁ、令嬢ですから色々と在るんでしょうから、正体を隠していたのは分かりますけどね・・そのデバイスはお父さんやお兄さんにでも渡して上げて下さい。どうせ管理世界の代表に渡すよりもちょっと高性能な程度のデバイスですからね」

（Sランクオーバーになれるかも知れないデバイスがちょっと高性能程度！？・・・フリートと私達の価値観は絶対に違うわ）

そうアイシスは内心で自分達と全く違う価値観を持っているフリートに、ゲンナリした思いを抱くが、フリートは構わずに先へと歩き出す。

それを目撃したアイシスは慌てて渡されたデバイスをポケットに仕舞い、フリートの後を追って研究所の外に出て行くのだった。

翌日の昼近く、その日は後の歴史に於いて重要な日とされていた。

ルヴェラでの管理局の不祥事を知ったマスコミなどが管理局本局に集まり、同時に各管理世界の代表も集まっていた。

今回の不祥事はマスコミも注目し、他の管理世界の代表も見逃す事が出来ない事態とされ、一種のサミットのような状況になっていた。

故に不祥事の事実が報道されたルヴェラだけではなく、他の管理世界の報道関係者も集まり、全管理世界に謝罪の場とされる場面は

報道される予定となっている。そんな中、件の不祥事の現場となったルヴェラの代表と例の秘密裏に連絡を取っていた代表達は用意された本局内部の待ち室に集まっていた。

「・・・分かっていると思うが、今日我々は今の管理局を終わらせる」

「うむ、もはや管理局に世界の平和は任せては於けん」

「完全に潰さないにしても、今の上層部と機動六課の隊長陣に設立に関わっていた関係者全員には消えて貰うしかないだろう」

代表達はそれぞれ意見をいい、他のメンバーも難しい顔をしながらも同意するように深々と頷いた。

フリートから聞かされた管理局の裏を知った彼らは、今の管理局を潰す事を決意してこの場に訪れていた。

だが、完全に管理局を潰す訳には流石にはいかなかった。元々管理局は司法組織で在りながらも、異様なほどに職域の広がっている組織だ。

その為に管理局を完全に潰せば、一気に管理世界は混乱状況に追い込まれる。本来ならば管理局を潰して新たに司法組織を代表達としては立ち上げたかったが、時間的猶予の問題が在る為に次善策として今の管理局上層部を潰して、政府主導で組織を再編する事で同意し合ったのだ。

「かのアルハザードの女史から一般人でも魔法が使えるようになるデバイスの技術が提供されるとは言え、すぐには人材は育たんからな」

「えぇ・・・全く管理局には呆れるしかないですな。潰しても潰さ

なくても問題を残すのですから・・・とは言え、私達にも責任は在ります」

「さよう・・その責任を取る為に今こそ動かねばならん・・しかし、公金を違法研究に注ぎ込む上層部は腐っているとしか言えん。アレは民間人からの税金でも在るのだぞ？」

「知らない間に違法研究の資金を提供させられていた民間人や私達を馬鹿にしているとしか上層部連中は思えん・・・さて、そろそろ時間が近い。皆さん、行くとしますか」

「女史は如何しているのでしょうか？姿が見えませんが？」

「大丈夫であろう。恐らく此処ぞと言う時に姿を見せるつもりでしょう。一応彼女は管理局から指名手配を受けそうになっている。注意しない方が可笑しい。彼女を敵に回すのだけは絶対に避けねばならん」

「アルハザードの技術にあの竜人を敵に回すのだけは絶対にしてはならん」

そう一人の代表が決意に満ちた声で宣言すると、他のメンバーも同意するように力強く頷いた。

伝説の地と言われている今の管理世界では作成する事が難しかったデバイスを簡単に完成させたフリート。

管理局の最大戦力と呼べる特務六課を無傷で完膚なきまでに潰し、ヘイムダルを力技で破り去った漆黒の竜人ブラックウォーグレイモン。

この二人だけは絶対に敵に回してはいけないと理解した代表達は、絶対に二人を敵に回さない為に管理局上層部を潰す為に、部屋を出

て会見場へと向かうのだった。

ルヴェラでの不祥事の謝罪を行う会見場。
その場所の一角でルヴェラに居なかった特務六課のメンバーであるティアナ達は上層部から指示に従って、会場の警備を行っていた。
最も表向きは警備とされているが、本当のところはルヴェラの代表や訪れる他の代表達の怒りに目を向けさせる為である。表向きはヘイムダルの使用指示を上層部は出していない事になっている。
故に少しでも自分達に怒りを向けさせない為に、無事に残っていた特務六課のメンバーを人身御供にする為に上層部は会場の警備を行わせているのだ。
そして当然ながら怒りの視線を向けるのは代表達だけでは済まず、情報を知っているマスコミなどもティアナ達に僅かに侮蔑が篭った視線を向けながら写真などを撮っていた。

「・・・設立当時とは全く別の状況ですね」

「・・そうね。でも、今の状況じゃしょうがないわ」

ティアナの言葉に同意しながらも、ギンガは自分達に向けられる視線は当然だと思っていた。
設立当初は期待されていた管理局特務六課が逆にルヴェラを危機に陥れたのだ。期待を裏切られたどころか、マイナスの状況を作り出した特務六課に向けられる視線が良いもので在る筈が無い。
その証拠にティアナ達が特務六課の関係者だと分かっている記者や各管理世界の代表だけではなく、今回の不祥事で立場が悪くなった管理局員達も、同じ管理局員であるティアナ達に怒りを堪えているような視線を向けて来ていた。

その視線に居心地に悪さをティアナ達が感じていると、蒼い髪をポニーテイルにして黒いゴスロリ服を纏った“十歳前後”の赤い瞳の少女が、法律関係と思われる本を胸に抱えながらティアナに声を掛ける。

「・・・あの管理局の人ですよね？」

「えっ？・・・えぇ、そうよ・・如何したの？こんなところで一人で？」

「お父さんと一緒に来たんですけど、はぐれちゃったんです」

「そう・・なら、お父さんの容姿を教えてくれるかしら？」

「え～と・・・黒い髪を肩口まで伸ばしていて、背も高くて・・・後其処の女の人達みたいに金色の目をしているんです」

少女はそう言いながらウェンディ、ディエチ、チンクを手で示した。

金色の瞳と言う特徴にティアナとギンガの瞳は一瞬険しくなるが、男性の戦闘機人の存在など聞いた事は無く、更には本局内部と言う事で偶然の一致だと納得して少女の目線に顔を合わせる。

「ゴメンね。見てないわね・・・もしかして今日の記者会見に参加する人なの？」

「はい・・・・でも、はぐれてしまったの・・この本を渡さないといけないのに」

少女はそう落ち込んだように呟くと共に悲しげに顔を伏せ、胸に

抱えていた本を強く抱き締める。
　ティアナとギンガはその様子に困ったように顔を見合わせると、少女はフッとティアナの着ている執務官の制服に気がつき、顔を見えないようにしながら邪悪さに満ちた笑みで口元を歪める。

「・・この本・・今日の会見にとっても必要なんです・・・・だって・・・“もうすぐ白に覆われていた真っ黒な黒が見えるようになるんです”・・コレは重要な本になりますよ」

「えっ？・・・何を言っているの？」

　突然の少女の意味深な言葉にティアナは僅かに顔を険しくしながら質問し、ギンガ達も訝しげな視線を少女に向ける。
　そのような視線に向けられている事に気がつきながらも、少女は気にした風な様子を見せる事無く更に意味深な言葉を続ける。

「・・・皆さんは選択を迫れるんですよ・・・“法の敵になれば少しだけお仲間さん達を救う事が出来ますけど、世界の敵になれば救いも無く絶望だけが皆さん覆う”。さぁ、皆さんはどちらを選びます？」

「貴女？・・・子供じゃないわね」

　目の前に居る少女が得体の知れない何かだと気がついたティアナは、ゆっくりとポケットの中に仕舞って在る待機状態のクロスミラージュに手を伸ばし、ギンガ達もそれぞれ自身の武装に手を伸ばし出す。
　しかし、少女はその様子に気がつきながらも笑みを絶やす事無く、胸に抱えていた本を床に置いてティアナ達に背を向ける。

「攻撃して来ても良いですけど？・・・マスコミが居る場所で無力にしか見えない子供に魔法を撃ったら、ただでさえ不人気な特務六課が更に底辺に落ちますよ。まぁ、やっても良いですけど・・・覚悟を決めなさい」

ーーーゾクゥッ！！

『ッ！！』

突如として少女から発せられた殺気にティアナ達は目を見開き、思わず体の動きが止まってしまう。

それでも震える事は無く、力強い瞳で少女を見つめると、少女は笑みを浮かべながら楽しげにティアナ達をそれぞれ見つめる。

「クスクス・・あの堕ちた三人に関わったから、貴女達も堕ちている思っていたんですけど・・もう巣立っていたようですね。その巣立ちが良い方向に向かうかどうかはこれから次第ですけど。選択を間違えてはいけませんよ。間違えれば全てを失いますからね。クスクス、キャハハハハハハハハハハーーー！！！！！」

少女はそう大声で笑いながらティアナ達に背を向けて走り出した。

ティアナはその姿に一瞬呆然してしまうが、すぐさま少女を追いかけるために駆け出そうとする。

だが、ティアナ達の視界の先を走っていた少女の姿は、フゥッとまるで霞にように消え去り、ティアナは困惑しながら地面に落ちていた一管理局自身が定めた管理局法について記されている一法律書を拾い上げるのだった。

二十分後。本格的な謝罪の会見が開かれ、管理局の上層部に連なる局員達に、今回の不祥事の引き金を引いたはやてと親しい管理局

内で“伝説の三提督”と呼ばれている、レオーネ・フィルス、ミゼット・クローベル、ラルゴ・キールが、各管理世界の代表者達と向き合っていた。
其処には友好的な雰囲気など存在せず、それどころか代表者達からは殺気さえも漂っていた。
その理由が分かっているレオーネ、ミゼット、ラルゴは本当に頭が痛くなっていた。今回の不祥事は完全に管理局が護る筈の管理世界を蔑ろにしているとしか思えない行動だった。
管理局はスポンサーや各管理世界から出されている予算で運営しているのに、その管理世界に何の説明も無く質量兵器に属している魔法を使用されたのだから、代表達が激怒しているのも当然だとレオーネ、ミゼット、ラルゴは理解している。ましてやその責任を管理局上層部が取る気はないと示しているのだから。

「このように、特務六課の司令だった八神はやての精神状況は追いつめられていました。それ故に認可も取らずにヘイムダルを使用したのです」

一人の局員がラグナロクを放っているはやての映像を巨大スクリーンに映し出し、ヘイムダルの使用は、はやての独断で在った証拠を示す。
その言葉に代表達は侮蔑を込めた視線を向かい側に座っている局員達に向ける。既に彼らはフリートからヘイムダルの使用は上層部からの指示だった証拠を貰っているのだ。茶番としか上層部側の言い分はいえないのだが、今は続けさせる気だった。今上層部が行っている茶番が続けば続くほど、真実を明らかにした時に管理局が負うダメージはより深くなる。
政府主導で今後は管理局を運営させる事を民衆に認めさせるのには、管理局上層部が立ち上がれないほどのダメージを負わせる必要が在るのだから。

最も既に充分過ぎるほどに上層部を潰させるだけの証拠を代表達は渡されているのだが、フリートとブラックに誰かが手を出させない為には上層部の発言は嬉しい。
ヴォルフラムの内部に存在していたデータを秘密裏に入手し、フリートがアルハザードの関係者だと知っている上層部は、何としてもフリートとブラックを指名手配にして局員達に捕らえさせてその技術を手に入れたい。手に入れば人造魔導師研究が促進するのは間違いない。
故に何としてもフリートと、その使い魔と考えられるブラックを広域指名手配にする為に、ブラックのヴォルフラム内での暴虐を巨大スクリーンに映し出していた。
元々フリートから事前に映像を見せて貰った代表達はともかく、一般人でしかないマスコミ関係者などはブラックの余りの暴虐に全身が恐怖に震えざるえなかった。だが、それで良い。ブラックに手を出す危険性を世界が知るのにはこの場は最も適切だった。
それ故に代表達はブラックの暴虐を映し出している上層部達を諌める事無く、上層部の好きにさせておいた。流石に気分悪そうに口元を押さえ出したマスコミ関係者を目撃したレオーネ達が映像を止めさせて、上層部の関係者の一人の局員が代表達に顔を向ける。

「このようにこの生物は非常に危険な生物です。ルヴェラでのヘイムダルを受け止めたのは、偶然でしかないのです。この生物及びその関係者と思われる女性は指名手配にすべきなのです！」

「だが、この生物がヴォルフラムに攻撃を行ったのは・・ヴォルフラムの局員が先に攻撃したからだと我々の調べで判明しているのだよ？誰だっていきなり攻撃されたら、防衛を行うだろう？」

「確かにそうですが、この生物の力は見逃す訳にはいきません！もしこの生物が民間人が集まっている街などに出現でもしてしまえば、

どれだけの被害が出るのか図りしれません！！」

「・・・なるほど・・・だが、女性の方は別であろう？」

「それは違います！確かに主ではないかもしれませんが、ならば逆に竜人を止めるべきだったのです！そうすればヴォルフラムの局員達は無事に済み、尚且つ八神はやてのヘイムダルの独断使用も在りえませんでした！全ての元凶は竜人と女性に在るのです！故に彼らは指名手配にすべきです！！」

（（（（（（凶鳥相手（フッケバイン）に使用する気だったくせに、何を言っているんだ！！！））））））

局員の発言に代表達全員が内心で怒りに満ちた叫びを上げた。

元々ヘイムダルは対凶鳥用（フッケバイン）に使用を認められている魔法。そんな話は聞いていない代表達はもはや怒りを通り越して、呆れたように局員達を眺める。

レオーネ、ミゼット、ラルゴも完全に頭を抱える。だが、話は更に進み、代表達にブラックとフリートの指名手配に納得して貰えたと判断した局員が叫ぶ。

「以上の事柄から、ヴォルフラムを襲った竜人とその仲間と思われる女性は広域指名手配にすべき…」

『・・・クスクス、キャハハハ

代表達は来たと思いながら覚悟を決めたように全身に力を込める。
しかし、事情が分からない局員達は慌てたように声の出所を探そうとすると、突然会場の電気が全て消え去る。

ーーーブン！！

「なっ！？何だ急に！？一体誰が！？」

『誰かと聞かれれば答えて上げますよ！！』

ーーータンタカッターン！！

ーーーパカッ！

『ッ！！』

何処からかファンファーレのような音が鳴り響くと同時に、代表達と局員達の向かい合っていた中心部分が開き、ゆっくりと誰がせり上がって来る。
その訳が分からない事態に局員たちだけではなく、マスコミ関係者も唖然としながら目を穴部分に向けていると、蒼い髪をポニーテイルにして黒いドレスを身に纏った女性ー管理局が指名手配にしようとしていたフリートが現れる。

「どうも管理局から指名手配にされかけているフリートですよ！！マスコミ関係者の皆さん、こんにちは！！」

『ブゥッ！！』

何でもないようにマスコミ関係者が持っている報道機器に手を振

りながら挨拶をしたフリートに、代表達を除いた全員が噴き出した。
よりにもよって問題の人物が本局内部に、しかも管理局関係者が集まっている場所に現れたのだから、その行動は正しいだろう。
しかし、問題の人物であるフリートは、気にした様子もなく上層部達の目を向ける。

「警備がザル過ぎますよ？昨日の夜中の内に潜入して、勝手に会場を改造させて貰いました。コレで世界を護っているなんてよく言えますね？」

『なっ！？』

フリートの発言に上層部達だけではなくレオーネ達も驚愕した。
その様子にフリートは楽しげな笑みを浮かべていると、次々と我に返った警備を行っていた武装局員達がフリートを取り囲むように集まって来る。

ーーーザザザザザッ！！

「動くな！？大人しくして貰うぞ！？」

「嫌ですよ。だって、大人しくしたら・・・“管理局の違法研究が世に明かせないじゃないですか”？」

『・・・・・えっ？』

何でもないように告げたフリートの言葉に事前に知っていた代表達以外の全員が唖然とした声を出した。
その様子にフリートは笑みを深めながら、ドレスの中から一つの小型機械を取り出し、先ほどまでヘイムダルの使用の瞬間を映して

いた巨大スクリーンを右手で示す。

「は～い、マスコミ関係者の皆さん！絶対に報道機器を巨大スクリーンに向けないで下さいね！とっても残酷な映像が広がりますので！・・・では、映像スターート！！」

ーーーポチッ！！

『ギャアアアアアアアアアアアアアーーーーーーーーーーー！！！！！！』

『イヤァァァァァァァァァァーーーーーーーーー！！！！！！』

『ッ！！』

フリートが手に持っていた機械のスイッチを押すと同時に、巨大スクリーンに苦痛の悲鳴を上げる子供の姿が映し出された。

それだけではなく映像に映し出されるのは、管理局が違法と定めている違法研究の数々。

人造魔導師の量産の為に犠牲になる子供達。後天的にでも機械を体に埋め込めるかどうかの実験を行う研究者達。魔力が無い為に焼却処分にされる子供。更には人造魔導師同士で殺し合いまで行わせる“管理局員の制服”を着た者の姿がスクリーンには映し出された。

その映像に誰もが言葉を失い、呆然としていると映像は更に進み、フリートはスクリーンに映し出された局員を示す。

「御覧下さい！コレは全部管理局が裏で行っている違法研究の数々です！因みに偶然にもこの場に居ますね？・・・子供同士の殺し合いを平然と行わせている局員の一人が・・・そうでしょう！リオク・ハルディ中将さん！！」

「ッ！！」

フリートが弾劾するように椅子に座っていたリオクを指差すと、全員がリオクに目を向けた。

その様子にフリートは楽しげな笑みをリオクに向けながら、映像を映しながら背後に居る代表達に声を掛ける。

「管理世界の代表の皆さん！コレが管理局が裏で行っていた違法研究です！！因みにこの違法研究の資金は・・管理世界から出されている公金を横領して行われています」

「・・・で、出鱈目だ！？全て貴様が捏造したモノだろうが！？管理局から指名手配にされない為に管理局を貶める出鱈目の映像を流しているだけだ！？」

「いや、リオク中将。彼女の言葉は出鱈目ではないよ」

『ッ！！』

突然の一人の代表の言葉に全員が驚愕しながら目を向けると、目を向けられた代表は腕を組みながら話し出す。

「昨日の早朝にだが、私の世界の行政府に匿名の通報が届いてね。『私達の世界に存在する管理局の研究所が違法を行っている』っと言う通報がね・・無論、そのような話は信じられなかったが、ルヴェラでの出来事が在ったらからね・・・まさかと思って人を派遣したら・・色々と出て来たよ。君達が支援している研究所の中での違法の証拠の数々と、君達が産み出したと思われる人造魔導師の子供がね」

『なっ！？』

フリートの発言を擁護するように代表が告げた事実に、マスコミ関係者は騒然とした顔しながら叫んだ。

管理世界の代表までもが管理局に違法を認めたのだ。もはや管理局が違法を行っているのは明らかな事実。更にフリートが映し出した映像も、如何見ても捏造した映像には見えない。

偽造にしろ何にしろ、管理局を徹底追求出来るだけの証拠がこの場には揃っていた。

まるで示し合わせたような代表達とフリートの行動に、リオクを含めた上層部達は怒りを顕にしながら叫ぶ。

「貴様ら！？犯罪者と手を結んだのか！？」

「犯罪者？・・・何を言っているのかね？何時彼女が犯罪者だと私達に管理局は告げたのかね？彼女はルヴェラの危機を救ってくれた竜人の仲間なのだよ？」

「さよう。それに指名手配にすると君らはまだ宣言していない・・・・第一、君達が犯罪者だとか如何とか言える立場なのかね？・・・・六年前のミッドチルダで起きた『ＪＳ事件』の主犯、ジェイル・スカリエッティと手を結んでいた君らがね」

『ッ！！』

『なっ！？』

最も知られては不味い情報が既に知られている事に上層部達は驚愕し、マスコミ関係者などの事情を全く知らなかった者達は信じられないと言うように声を上げながら代表者達と上層部を見回した。

その様子を目撃したフリートは何処からともなくマイクを取り出し、自身の口元にマイクを運ぶ。

『え～、皆さん混乱しているでしょうけど、それは真実ですよ。正確に言えばジェイル・スカリエッティは当時の管理局最高評議会がアルハザードの技術で作り出した人造生命体です。つまり、管理局は違法研究を行わせる為にジェイル・スカリエッティを世に生み出したのです！！』

「これが事実だとしたら、六年前の『ＪＳ事件』は大きく様相を変える事になる・・君達管理局は確か、『ＪＳ事件』は“大規模テロ”だと宣言していたね？・・・だが、ジェイル・スカリエッティは実は管理局の関係者だった」

「・・・だとしたら・・『ＪＳ事件』は大規模テロなどではなく、管理局への反逆だったと言う訳だ」

「いやはや、酷い話になるね。君達は君達の犯した違法によって事件を引き起こす原因を作り上げ、ミッドチルダのクラナガンに住んでいた全く関係ない数千人の人々を巻き込んだ事になる・・・・ふざけるな！！」

ーーードゴォン！！

『ッ！！』

遂に冷静でいられなくなったのか代表の一人が怒りの叫びを上げ、上層部達を睨みつけながら指を指す。

「我々は管理局を信じて行動して来た！？その為に予算も出して来

たのだ！？全ては世界に住む人々の平和と安全の為だ！！」

「なのに今回のルヴェラでの不祥事！？更には『ＪＳ事件』では自分達が原因で在りながら、平然とした顔をして全てを隠した！？更には違法研究だと？・・・しかも渡していた予算を横領していた？・・・我々管理世界を馬鹿にするのもいい加減にしろ！！」

代表達はもう怒りを隠す事無く、上層部やレオーネ達、そして警備を行っていた局員達を睨みつけながら叫んだ。

だが、その怒りは当然だった。代表達はその世界に住む人々の安全の為に管理局に管理世界に指定される事を認めた。しかし、その信用と信頼を完膚なきまでに管理局は裏切った。それだけではなく知らない間に違法研究の共犯にされていたのだ。代表達が怒りを抑える事が出来ないのは至極当然な事だった。

それを目撃したフリートは笑みを消して、真剣な瞳を自身の周りを取り囲んでいる武装局員達を見回す。

「さて・・貴方達は如何しますか？此処で私や代表達を捕まえるのか？それとも、安全な場所にずっと隠れていて命を物のように扱って来た管理局の上層部を捕まえるのか？」

『・・・・・』

武装局員達はフリートの質問に答える事が出来なかった。

如何考えても非は管理局側に在る。此処でフリートと糾弾した代表達を捕まえれば、報道を見ている人々は怒りを爆発させるだろう。それから逃れるには非を認めて上層部達を捕まえるしかない。

だが、どちらにしても今の管理局は完全に終わる。それを理解した武装局員達は持っていたデバイスを取り落とす。

ーーーカチャカチャ！

「フム、潔いですね」

「・・・・・めだ・・・全て出鱈目だ！！貴様ら管理世界の代表と、其処に居る犯罪者の丁稚上げだ！？」

「・・・ハァ～、まだ下らない事を言っていますね？」

喚き始めたリオクの声を耳にしたフリートは呆れたような視線をリオクと他の上層部に向けた。

それは近くの席に座っていたレオーネ、ミゼット、ラルゴも同じ気持ちだった。もはや言い逃れが出来る状況ではない。寧ろ言い逃れを続ければ続けるほどに、管理局の立場は悪くなっていく。

今回の会見は管理世界の全てに報道されているのだ。言い逃れが出来る筈も無く、理は確実に代表達側に存在している。この場でフリートと代表達を捕まえでもすれば、逆に管理局は管理世界を蔑ろにすると明らかにする事でしかない。

何をしても全てが遅い。この会見を開いた時点で、管理局上層部の命運は完全に終わっていたのだ。

「君達が何を言おうと、我々は管理局への徹底的な調査を行う事を宣言する！コレが認められない場合は、我々の世界は今後管理局への予算を出さない！」

「因みにですけどね。貴方達の管理局のスポンサーになっている企業関係者にも、全部真実を送っておきました」

『ッ！！』

「彼らもこんな事を行っている場所にお金は出せないそうです・・・だって知らない間に違法研究の共犯にされていたんですよ？アッ！管理局から得られる利益の変わりは、私が渡した“一般人でも魔法が使えるようになる技術”で補填するそうですよ」

『何ィィィィィッ！？』

フリートが何でもないように告げた技術に、マスコミ関係者達は信じられないと言うように声を上げた。

それを目にした代表達は笑みを口元に浮かべながら、フリートの正体を話し出す。

「彼女の本名はフリート・アルハザード。管理世界に於いて伝説の地と呼ばれているアルハザードの人間だ。今回のルヴェラでの行動の謝罪として、無償で我々管理世界が夢にまで見た技術！誰もが平等に魔法を使えるようになる技術を提供してくれたのだ！既にそのデバイスは管理世界の全ての行政府に渡されている！違法研究などではなく、人道に全く反していない技術が管理世界に持たされたのだ！」

『オオオオオオオオオオッ！！！』

一人の代表の告げた事実にマスコミ関係者はどよめき、全員が顔を見合わせた。

逆に管理局上層部はその技術に顔面が蒼白になった。もしその技術の安全が立証されれば、高ランク魔導師の優遇は消え、犯罪を犯しても減刑は絶対になくなる。

犯罪を犯していた局員達を捕まえても、問題は少なくなるのだ。更に不味いのはフリートの正体まで明らかにされてしまった。

これではフリートを捕まえようとしたのは違法研究を行わせる為

だと思われ、フリートを指名手配にする事など不可能になる。完全に管理局は八方塞がりの現状に追い込まれたのだ。
それを理解したリオクは全身をワナワナと震わせ、錯乱したように自身の制服から待機状態のデバイスを取り出し、起動させてフリートに向かって魔法を放とうとする。

「貴様さえ居なければ！？」

ーーーズキュン！！

「グゥッ！！」

リオクが魔法を放とうとした瞬間、オレンジ色の魔力弾がリオクの右手に激突した。
その痛みにリオクが呻くと、リオクを含めた上層部達を取り囲むようにティアナ、チンク、ギンガ、ウェンディ、キャロ、ディエチが姿を現す。

「・・・違法研究の支援容疑でリオク中将他、上層部の方々を拘束させて貰います・・・宜しいですね、ミゼット本局統幕議長、ラルゴ武装隊栄誉元帥、レオーネ法務顧問相談役？」

「・・・ええ、構わないわ・・厳重に拘束して頂戴」

ティアナの質問にミゼットは疲れたような声をしながら頷いた。
それを確認したティアナ達は次々とリオクと上層部達をバインドで拘束し、フリートは笑みを浮かべながらティアナに声を掛ける。

「選びましたね？・・・法の敵になる事を」

「・・・・私達は自分達の信じる事の為に動いただけよ」

「そうですか」

ティアナの言葉にフリートは楽しげに笑いながら頷き、項垂れているリオクと上層部達に近寄って声を掛ける。

「助けなんて来ないと思って下さいね・・・私だけじゃないですよ、本局に来ているのは・・今頃貴方達の直属の部下や仲間の上層部全員、血祭りに在っていますからね」

『ッ！！』

「せいぜい檻の中で己の行って来た事を後悔するんですね・・・クスクス」

フリートはそう笑い声を上げながら上層部達とティアナ達、そしてミゼット達に背を向けて去って行く。

この後、管理局の持っていた権限は全て一時凍結され、管理世界の調査団による徹底的な追及が始まり、最終的に現在の管理局の重要な役職に納まっていた全員が職を止める事になると言う次元世界最大規模の大不祥事にまで発展した。

当然ながら管理世界の全てが大激怒し、事前に代表達が動いていなければ大混乱にまで発展していたと後の歴史家達は口々に声を揃えていう。

最終的に管理局は完全に民間の信頼を失い現在は政府主導の下で組織を再編される事が決定し、職域が異様に広かった事もあって幾つかの組織に細分化される事が最終的に取り決められたのだった。

また、管理局が報道したブラックの暴虐によってフリートとその

出身世界である、アルハザードを探す者は誰も出なかった。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　エピロー

遅れて申し訳ありません。
少し仕事が忙しくなった事と風邪に掛かってしまい遅れてしまいました。

今回は二人のなのはとの出会いと、スバルへの説明が大体です。
トーマと再会させる為にも、如何してもこの場面は必要だったので。
次回で本格的な六課の今後とフッケバイン及びＥＣ感染者の後始末を行います。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　エピロー

管理局が違法研究を行い、歴史に名を残すほどの大事件だったミッドチルダを襲った未曾有の危機とされた『ＪＳ事件』の元凶だった事実が管理世界に明らかにされてから一週間が経過した。

明らかにされた当初、それこそ管理世界の殆どの人々は怒りに支配され、近場に存在していた管理局の駐在所に物を投げつけるなどと言う事件が多発していた。何とかそれらの事件を収束に向かわせる為に管理世界の代表者達は事前の話し合いで用意していた調査団を管理局が関係している研究所や本局、或いは支部などに送り込み、少しでも早く事態を終わらせようとした。

だが、次々と管理局の関係していた研究所から違法の数々の証拠が大量に発見され、更には横領などの罪も本局内部から発見されたりして世界の怒りはそれこそ上がる一方の状況になっていた。

その上、六年前の最高評議会だった人間の年齢が百歳以上を超えていたと言う矛盾さえも発覚され、管理局内部の矛盾点が次々と代表達に届き、代表達は頭が痛くなる一方だった。

最終的に管理局内部で捕らえる事になった犯罪者の数は、上も下も問わずに合計１５００名以上。

更に調査団が追求しなければいけなかったのは、ミッドチルダ行政府の依頼で『ＪＳ事件』に於ける機動六課の行動だった。

『ＪＳ事件』の元凶が管理局に在った事が明らかになった今、当時事件を解決に導いた機動六課の行動は徹底的に追求しなければいけない。未だルヴェラで治療を受けている者はともかく、当時機動六課にＦＷメンバーやロングアーチのメンバーとして所属していたティアナ、ギンガ、キャロ、アルトなどは連日連夜調査団に当時の状況を追及される立場になっていた。

その結果、機動六課が実は地上本部の許しも無く、勝手に本局が増やした部隊である事実が明らかになった。この事実に代表達や組

織の構造などを知っている調査団達は目を見開かざるえなかった。
何故ならば本局と地上は同じ管理局でありながらも、互いにいがみ合っていたと言う情報が手に入っていた。そんないがみ合っている状況で、話し合いも何も行わずに勝手に部隊を増やすなど、互いに軋轢を増す事でしかない。この時点で代表達はまさかと言う思いに囚われながら、更に追求して調べた結果、機動六課の出現で地上本部の一部が激怒としていた事実が明らかになった。
更にはジェイル・スカリエッティを捕まえた後のおざなりとしかいえない捜査の数々に、調査団や代表達は呆れざるえなかった。
最終的に機動六課の設立に関わったクロノ・ハラオウン、リンディ・ハラオウン、レティ・ロウランなどの支援者達は魔力を封じた上での文化が存在しない開拓世界への永久追放処分。非公式ながらも支援していたレオーネ、ミゼット、ラルゴも罰則は免れる事は無く、彼らもクロノ達のように永久追放処分が決定された。
管理世界に残しでもすれば、その後は確実に『ＪＳ事件』の被害者の遺族達から確実に付け狙われる。だが、それはあくまでクロノ達を護る為ではなく、クロノ達を殺しでもして罪を背負わされてしまうかもしれない遺族の方を護る為に処分だった。

そして問題の機動六課部隊長であり、今回のルヴェラでの不祥事を引き起こした八神はやては、封印されている氷塊のまま永久封印するべきではないかと言う意見が代表達の間から出ていた。
最初は正式な裁判を行う為に氷塊の中からはやてを引きずり出そうと削岩機や数名のフリーの魔導師で氷塊を砕こうとしたが、削岩機は逆に破壊され、フリーの魔導師達の全力の魔法でも氷塊はビクともしなかった。
氷塊の正体がクロノ・ハラオウンが使用しているデュランダルに記録されている『エターナルコフィン』によるモノである事までは判明したが、強度が圧倒的に違っている為に加熱しても解ける事が無いと言う事が明らかになった。更に詳しく内部のはやての状態を

スキャンしたところ、全身のいたる所で血管が破裂し、体中に負っているダメージの事も考えれば、逆に氷塊から出した瞬間にはやては死んでしまう可能性が高いと医者から宣告された。そのような状態のはやてを治せるとしたらフリートぐらいしかいないと多くの医者が匙を投げている。

因みに一応代表達の何名かは正式にはやてを裁判に掛ける為にフリートに依頼してみたが、フリートは全く興味が湧かなかったのではやての治療を拒否している。その為に未だ本決まりではないが、はやてはこのまま何処かの氷結世界に放置しようと言う考えが代表達の間で飛び交い始めた。

予断だがはやてにエターナルコフィンを使用されたと言う事実は、某管理外世界のイギリスに住んでいる元管理局の提督に届き、提督は使い魔と共に苦悩に追い込まれたらしい。

残る機動六課の隊長陣の二人、フェイト・T・ハラオウンと高町なのはについて治療が終わり次第、洗いざらい当時の状況を聞きだし、その後に処分が決定される事になっている。

最もフェイトにしろ、なのはにしろ、二人とも精神的に酷い状態なので状況が聞けるのは当分先になってしまうと思われている。

その他にも管理局の裏については現在も調査が行われ、世界が安定を見せるのは先だと言うのが多くの専門家の意見だった。その混乱の中で愚かにも動こうとしている管理世界の闇が居ると、一部の者達を除いて誰も知らずに、世界は混乱を治めようと動いていた。

ミッドチルダ・クラナガン、深夜に近い時間帯。

金髪に紅と翠のオッドアイの少女がクラナガンの街中を逃げるように走っていた。

ウサギのヌイグルミのような物を大切そうに抱えながら少女は、全速力で行き交う人々の間をぶつかりながらも走り続けていた。そ

の後を追うのは聖王教会の司祭服を着た何名かの男性。
今日、少女が眠る前に突如として連中は少女が住んでいる家に押し入り、少女を誘拐しようとした。
何とかギリギリのところで逃げ出す事が出来たが、しつこく連中は少女を追い続けている。
そして少女は自身の身を隠すように路地裏に滑り込み、そのまま追って来ている者達から身を隠すように縮こまる。

「・・・ママ・・・ママ・・・ヒック・・フェッ」

少女は涙ながらにウサギのようなヌイグルミを抱き締めて自身の母を呼ぶが、その声に少女の母は答える事は無かった。
逆にその泣き声は追って来ている男の耳に届き、ゆっくりと少女の方に移動する。

「・・見つけましたよ、聖王陛下」

「ヒィッ！・・・がう・・・違うよぉ！」

男性の呼びかけに少女は強く否定するように首を横に振るった。
だが、男性は構わずに少女へと狂気に染まっているとしか思えない笑みを浮かべながら近づき、その手を伸ばし出す。
少女はその姿に全身が恐怖に凝り固まり、届かないと思いながらも叫ぶ。

「・・・けて・・・助けて・・・・助けてぇぇぇぇぇぇぇーーーーー！！！！」

「無駄ですよ。もはや管理局に居た高町なのはは来ない。さぁ、本来居るべき場所に戻られ…」

「ソイツの居場所はソイツが決める事だ」

「ッ！！」

「えっ？」

突如として路地裏に響いて来た声に、男性は慌てて周りを見回し、少女が疑問に声を上げた。

そして次の瞬間、男性の右横から鎧を身に纏い、両手に漆黒の篭手を装備した竜人ーブラックが壁を撃ち破りながら姿を見せる。

ーーードゴオオォォン！！

「ガアァァァァァァァァァァッ！！」

「ば、馬鹿な！？漆黒のりゅう…」

「失せろ！！」

ーーードゴオォォン！！

「グフッ！！」

男性が全てを叫び終える前にブラックは右手のドラモンキラーを男性の腰部分に振り抜き、男性を壁に叩きつけた。

そのままブラックは全身を襲う激痛に苦しんでいる男性を殺意に満ちた視線を放ちながら見下ろし、左手のドラモンキラーの爪先に赤いエネルギー球を作り上げる。

ーーーブン！！

「やはり、下らん奴らがこの世界にも居たか」

「グゥッ！！・・・何故・・何故！？管理局に攻撃した貴様が此処に居る！？」

「勘違いをしているな。俺は管理局だから攻撃したのではない。気に入らんから攻撃したんだ。そして貴様も気に入らん奴だ」

ーーーードゴォン！！

ーーーゴキィン！！

「ガアァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーー！！！！！」

ブラックは言葉と共に右足を振り下ろし、右肩の骨を粉砕された男性は悲鳴を響かせた。

しかし、ブラックはその様子を見ても何の感情も抱く事は無く、ゆっくりと右手のドラモンキラーの爪先に男性の服に引っ掛ける。

「如何した？何故叫びなど上げる？貴様らがやろうとしている事は、こう言う痛みが連続する事だ。だったら、この程度で叫ぶな！」

「ヒィッ！！・・助けて・・助けてくれ！？」

ーーーブチィッ！！

「・・・何処の世界でも貴様ら狂信者どもは俺を苛立たせる。消え

ろ」

そうブラックは呟くと共に左手のドラモンキラーの爪先に作り上げていたエネルギー球を掲げ、男性を跡形も無く消滅させようとする。

しかし、その直前にブラックの耳に恐怖に震えながらも小さな声が届いて来る。

「・・止めて・・」

「ムッ？」

聞こえて来た声にブラックはエネルギー球を霧散させ、ゆっくりと自身の背後を振り返ると、全身を恐怖に震わせながらも力強い瞳を自身に向けている少女が存在していた。

その瞳にブラックは僅かに面白そうな笑みを浮かべ、ドラモンキラーに引っ掛けていた男性を壁に叩きつけて気絶させる。

ーーードゴォン！！

「ガッ！！」

ーーーガクッ！！

「つまらんな」

男性が気絶したのを確認したブラックは、つまらなそうな瞳を男性に向けながら地面に下ろす。

そのままブラックは少女の方に目を向けて、恐怖に体を震わせながら力強い瞳を向けて来ている少女に声を掛ける。

「何故このクズを殺すのを止めた。コイツは貴様を利用しようとした奴だ・・それなのに何故だ？」

「・・・だって・・その人にも家族が居るから・・・・殺したりしたら、その人達は悲しむよ」

「ならば、貴様を利用して引き起こそうとした戦争は如何なる？コイツを、いや、こいつらを逃せばどれだけの者が犠牲になると思う？」

「・・・・・」

「答えられまい。貴様の母親が居る管理局も同じだ。貴様も報道で見た筈だ。奴らは目先で起きた事だけを終わらせ、その影に隠れていた闇を放置した。結果は如何だ？多くの犠牲が生まれていた」

「・・・・・・」

「・・・如何やらお前はまだ“道”を見つけていないようだな」

何も答える事が出来ずに顔を俯かせている少女の様子に、そうブラックは呟くと、ゆっくりと少女に近寄って右手を差し出す。

「少しだけ俺について来い。貴様の母親の下に連れて行ってやる」

「ッ！！・・ママのところに・・・本当に？」

「本当だ・・・だが、貴様の母親は絶望のどん底に落とした。奴はこのままでは確実に死を選ぶだろう・・・それから救えるのはこの

世界で貴様だけだ。選べ。この世界に留まって下らん狂信者どもに狙われるのか？それとも地獄に落とした俺の手を握るのかをな？」

そうブラックは右手を差し出しながら少女に質問し、少女は思い悩むように顔を俯かせる。

目の前に居る相手は自身の母親が居た艦艇を襲撃して特務六課を事実上崩壊させた存在だと、テレビなどの報道で告げられていた。だが、同時にその原因も報道され、『ＪＳ事件』の裏に隠されていた事実も少女は知っている。

一概に目の前の相手が悪だと言えない現状に少女は如何すれば良いのか考え込み、何かを決意したように力強く頷きブラックに目を向ける。

「・・行く・・・だけど、絶対にママに会わせて」

「フン、良いだろう。その後に俺を如何するのか決めろ。戦うのか、それとも見逃すのかをな」

そうブラックは呟くと、目の前に居る少女ーこの世界のヴィヴィオを自身の右肩に乗せて、その場から転移する。

後に重傷を負って気絶していた聖王教会の関係者達は、偶然に通りかかった民間人からの報告で病院に運ばれる事になった。だが、そのすぐ後にミッド行政府に聖王教会の一部の暴走の情報が何処からか匿名で届き、聖王教会本部にまで強制査察が入る事態に発展する事になるのだった。

ーーー・・バル、スバル！

「・・う・・ん・・・ギン・・姉？」

聞こえて来た声にスバルはゆっくりと目を開け、自身の視線の先に映る人物に目を向けた。

その人物は楽しげにスバルを見つめて、自身の右手をスバルの前に掲げて挨拶する。

「ハロ～！スバル・ナカジマ！二週間ぶりですね！」

「キッ！キャァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」

ーーーガシャン！！

自身の目の前に居る人物の正体ーフリートに気がついたスバルは病室全体に響くほどの悲鳴を響かせながら横になっていたベットから転げ落ちた。

その時に頭を打ってしまい、スバルはぶつけてしまった後頭部を押さえて床に転がる。

フリートはその様子に不満そうな顔をしながら、膝を折ってスバルの後頭部に出来ているタンコブに右手を伸ばして回復魔法を掛ける。

ーーーシュゥン！！

「全く、折角治療して上げたのに、貴女は何をしているんですか？」

「ツゥ～・・って！？如何して此処に居るんですか！？」

「いや～、ブラックから頼まれましてね。『クイントの娘は面白く

なりそうだ。他の連中はともかく、奴だけは治療しろ』と言う風に頼まれてわざわざ来て上げたんですよ・・・いや～本当に貴女は運が良いのか、悪いのか分かりませんね・・ブラックに獲物として認識されているんですからね」

フリートはそう僅かに憐れみを込めた視線をスバルに向けながら呟き、頭のタンコブの治療を終えると、用意していた器具の片づけを行いだす。

ーーーカチャカチャ！！

「全身の調子が悪かった機械類も修理しておきましたから、後二、三日ベットの上で横になっていればもう大丈夫ですよ。まぁ、明日にはお仲間さん達が漸くルヴェラに来れますから、それまでは休んで於くんですね」

「仲間？・・・ッ！！もしかして、ティアやギン姉達が！？」

「そうですよ。最終的に彼女達は各管理世界の代表達の告発に協力した感じになっていますので、少しだけ風当たりがよくなりましたよ」

「告発？・・・まさか？」

「はい、貴女が眠っている間に世界は大きく動きましたよ」

そうフリートは笑みを浮かべながらスバルに声を掛けると、部屋の中に備えられているテレビの電源のスイッチを入れてテレビをつけた。

スバルはテレビの方に目を向けてみると、その先に映っていたの

はフリートと代表達が管理局上層部を糾弾する映像。そして、ティアナ達が上層部の局員達を連行する映像だった。

「彼女達は自分達の信じる道を選びました。八神はやて、フェイト・T・ハラオウン、そして高町なのはと違って管理局に妄信する事無くね。そのおかげで多少は特務六課の民衆への評判は変わりました。現在悪名で呼ばれているのは機動六課の隊長陣だったメンバーぐらいですよ」

「・・ティア・・ギン姉・・皆・・」

「さて、私が此処に来たもう一つの本題に入らせて貰いますよ・・・昨日、トーマ君にエクリプスワクチンを接種させました」

「ッ！！トーマにワクチンを！？」

「はい。今回の混乱の隙に管理局内部に存在していたトーマ君に関するデータは全て書き換えて、トーマ君がエクリプスウィルスに感染していた事実を全て完全に消去しました。これでトーマ君は何にかに追われる事も、何処かの組織に無理やり所属させられて利用される事もなくなりますよ」

フリートはスバルと対面するように椅子に座りながらそうスバルに説明し、スバルは何処か安堵したように息を吐く。

少なくとも一番心配だったトーマが無事で在る事も更にエクリプスウィルスによって苦しむ事もなくなった事を知る事が出来た。それだけはスバルにとっては今回の戦いで一番嬉しい情報だった。

最もすぐにその嬉しさは在る考えが脳裏に浮かび上がり、恐る恐るフリートに顔を向けると、フリートは無言で頷いて声を出す。

「残念ですけど、彼も知りましたよ・・貴女が所属している管理局と言う組織の隠されていた闇の数々を・・・まぁ、私が貴女達を絶望のどん底に叩き落とした時よりは優しくですけどね」

「・・・トーマも・・・真実を・・・」

「隠しておくのは無理でしたからね。で、何か他に質問在ります？今の内ですよ？」

「・・・・私以外の皆は如何したんです？・・・全員・・あの竜人が殺したんですか？」

「いえいえ、貴女がヴォルフラムから落下した後はブラックは誰も殺していませんよ。寧ろ死なせてしまうような流れを作ったのは八神はやてですね」

「ッ！！・・・はやてさんが？」

「えぇ、ヴォルフラムへの影響を全く考えずに近距離で大威力の砲撃を撃ち出し、狙ってやったブラックのガイアフォースとの激突で甲板に居た局員及びフェイト・T・ハラオウンは何もする事が出来ずに海面に向かって落下・・・・まぁ、途中で私の弟子とそのパートナーが救助を行ったので全員生きていますよ。アッ！貴女も救助したので後で礼ぐらいは言った方が良いですよ。序でに言えば大抵のメンバーはこの病院に入院していますので」

「・・そうですか」

スバルはフリートの言葉に複雑そうな声で答えた。

目の前にいるフリートはヴォルフラムを強襲して多くの局員達を

殺し、ヴィータとシャマルを殺したブラックの仲間。だが、同時に管理局の闇を世に明らかにした相手でも在る。
スバル自身、管理局が行っていた大罪の数々は赦されるべき事ではないと理解している。
その大罪を見逃したばかりに奪われた命の数々。自身もその一人だった事実にスバルは落ち込んで顔を俯かせてしまう。

「・・・どれだけの・・命が消えていたんですか？・・管理局の裏の行動で？」

「数え切れませんね。管理局の表の行動自体で失われた命も在りますからね・・貴女の所属している救助を専門にしている場所はともかく、ロストロギア関係なんかは犠牲を最小にする為に何百人も犠牲にする事も在りますから・・・現に貴女は知らないでしょうけど、管理外世界で闇の書が起動した時なんて、管理局はアルカンシェルを撃ち込もうとしていましたよ。最初は本当に多くの人々を守るつもりだったんでしょうけど、何時の間にか其処に住んでいる人々ではなく、より大勢、世界全体ばかり目を向けて人を見なくなっていたんですよ。管理局は・・・そして八神はやて、フェイト・T・ハラオウン、高町なのはも」

「・・・・」

「知っています？ブラックが高町なのはに力の意義について質問した時、高町なのはは『傷つけずに相手を制圧する力は護る為』だなんて言っていましたよ？如何思います？」

「・・・・・違うと思います・・・なのはさんの考えを否定するのは嫌ですけど・・・私はそれは違うと思います・・・私の『振動破砕』だって、本当は危険な力ですから・・・力は危険なものでも在

るんですよね？」

「正解ですよ。貴女と高町なのはには違う部分が存在しています。高町なのはは最初から非殺傷設定と言う力で戦って来た・・・だけど、貴女には非殺傷設定出来ない『振動破砕』を持っていた。コレが大きく力に対する考えの差を生みましたね。高町なのはは己が振るっている力の危険性を全く理解していなかったんですよ。例えば非殺傷設定で魔法を放って、ヘリにでも魔法が直撃すればヘリは地面に激突します。所詮魔法は非殺傷設定だろうが、殺傷設定だろうが危険な力なんですよ。それさえも理解せずに高町なのはは力を振るい続け、力に溺れてしまった」

そうフリートは険しい声を出しながら、この世界の高町なのはを厳しい言葉で評した。

だが、それが偽りないフリートのこの世界の高町なのはに対する印象だった。ブラックとの戦闘だけではなく、フリートは記録されている高町なのはの管理局での行動を全て見た。その結果、フリートは非常にこの世界の高町なのははつまらないと言う印象を持った。

どれだけ人を救っていても、それは最終的に管理局員としてあるべき行動から。自らの力に溺れ、管理局と言う巨大な組織の歯車に完全になっていたこの世界の高町なのはは、フリートには全く興味対象ではない。己の力の危険性を理解せずに進み、勝手に自爆したりしている相手に興味などフリートは無いのだ。

「・・・まぁ、その報いは充分に受けていますよ。何せもう高町なのはは魔導師ではないですからね」

「ッ！！如何言う意味ですか！？」

「うん？・・・・あぁ、そう言えば詳しくあの高町なのはに渡して

いた薬の効果を言っていませんでしたね。あの薬は一時的に魔導師にとって命と言っていいリンカーコアを暴発させて、絶大な魔力と回復力を与える薬なんです。ですけど、そんな無茶にリンカーコアが持つ筈はないので、十分したらリンカーコアは完全に砕け散ってしまう副作用が在るんです。つまり、一度あの薬を服用したら最後、魔導師は奇跡が起きない限り、二度と魔法が使えないただの一般人になってしまうんですよね、コレが」

「・・じゃあ、もしその薬をなのはさんが飲んだりしたら」

「もう飲んでいますよ。で、ブラックと戦って完敗しました」

「ッ！！」

告げられた事実にスバルは目を見開き、慌ててフリートを見つめた。

その様子にフリートは深く何度も頷きながら、現在のなのはの状況を説明しだす。

「敗北して魔力を失った後に、高町なのはは気絶している間に聞き逃していた管理局の闇を知りました・・・・その時点で絶望のどん底に落ちましたけど、最後にブラックは殺気を高町なのはに浴びせたんですよ。彼女が言う『傷つけず相手を制圧する力』の本質を教える為にね。その結果、高町なのはは恐怖に支配され、魔力も失った事も在って、現在はこの病院の精神病棟、その中でも最も隔離が厳しい場所に全身を拘束されて閉じ込められています・・だって、自由にすれば魔力を失った事実で自殺するでしょうからね。力に溺れていた彼女に、力を失ったのは何よりも勝る地獄ですから」

「そんな・・・」

教えられたなのはの現状にスバルは完全に言葉を失わざるえなかった。
あの不屈のエース・オブ・エースと呼ばれていたなのはが魔力を失い、更には精神病棟に拘束中だと告げられたのだから、当然だろう。特に自殺するかもしれない可能性まで在ると告げられたのだ。
スバルはその事実が信じられずに、思い悩むような顔をするが、フッとなのはが魔導師でなくなってしまった先を考えてみる。だが、その先は全くスバルには思い浮かばなかった。
なのはは確かに言われてみれば何時も魔法を使っている印象を持っている。フリートが言っていた力に溺れていると言う言葉はあながち間違いではないとスバルは気がついた。

「分かりました?高町なのはから魔法が奪われると言うのは、何にも勝る地獄なんですよ。まぁ、一応彼女に生きる理由を与える為の切り札がこっちに向かっていますから、何とかして上げますよ」

「切り札?・・・こっちに向かっている?・・・あのそれってもしかして、ヴィヴィ…」

ーーードン!!

「フリート医師!大変です!?」

「ん?」

突如として部屋の中に慌しく入って来た病院の医師の叫びに、フリートは小首を傾げながら振り向いた。
スバルも医師の様子に不穏な空気を感じて、息を整えている医師に顔を向けてみると、医師は慌てながらフリートに声を掛ける。

「大変なんです！例の精神病棟に隔離していた高町なのはが、体調を確認する為に拘束を解いた看護婦の隙をついて病室から逃げ出しました！」

「なのはさんが！？」

「・・・ハァ～、全く、アレほど拘束を解除する時は麻酔薬を注射してから外すように言っておいたのに」

「・・申し訳ありません・・・此処数日は精神も安定していたので大丈夫だと思って油断しました」

「・・・まぁ、別に構わないんですけどね・・・・二週間・・・・それだけ伸びていた“彼女”との出会いが今日になっただけですからね」

『・・・えっ？』

何処か遠い瞳をしながら窓の外を見つめながら呟かれた意味深なフリートの言葉に、スバルと医師は訳が分からないと言う声を上げた。

しかし、その声を聞いてもフリートは遠い瞳を止める事は無かった。この二週間、フリートが言う“彼女”はフリートに頼んで徹底的にこの世界の高町なのはの経歴や任務内容、その他にも教導内容、在りとあらゆる高町なのはに関する情報を調べ上げた。

その結果、非常に“彼女”の機嫌は、それこそ眠りから無理やり目覚めさせられたブラックと同じぐらいに悪くなっていた。因みにフッケバインに同居状態のトーマ、アイシス、リリィはその機嫌の悪さに当てられ怯えたりしていた。

そして何時高町なのはと接触するのかと戦々恐々とフリートとガブモンはしていたが、遂に今日互いに接触する時が訪れてしまった。
フリートはこれから起きる事を思い、僅かに高町なのはに同情心を抱いていると、とにかく高町なのはが行方不明だと言う理解したスバルがベットから飛び出そうとする。

「グゥッ！！」

「フリートストップ！！」

ーーーバシッ！！

「キャッ！！」

ベットから飛び出そうとしたスバルの額にフリートはデコピンを食らわせ、スバルを無理やりベットに横にならせた。
そのままフリートは瞬時にスバルの四肢にバインドを出現させてベットの上に拘束しながら、苛立ちを込めた視線をスバルに向ける。

「何をしているんです？・・・言った筈ですよね？二、三日はベットの上で横になっていなさいとね。まだ、治療が終わったばかりなんですからね。今動いたら折角の治療が無駄になりますから」

「グッ！！で、でも！？言ったじゃないですか！？なのはさんは魔力を失ったから、自殺するかもしれないんでしょう！？だったら…」

「絶対に死にませんから安心して下さい・・・・・そんな事を“なのはさん”が赦す筈はないんですからね」

「・・・はっ？・・・“なのはさん”？・・・一体何を言って…」

ーーードオオォォォォン！！

『ッ！！』

スバルがフリートに質問しようとした瞬間、突如として病院の屋上の方から爆発音のような音が鳴り響いた。

その音にスバルと医師は目を見開くが、フリートだけは何処か遠い瞳をしながらスバルが移動出来るようにする為に車椅子の用意をナースセンターに手配するのだった。

爆発音のような音が鳴り響く少し前の病院の屋上。

其処には誰一人存在せず、静けさと緩やかな風しかその場所にはなかった。

しかし、突如として屋上の扉が開き、扉の向こうから蒼白い肌と痩せこけた顔をして、死人にしか見えない様相になった、高町なのはが屋上に姿を現す。

その足取りもまるで亡者が這い回るように緩やかであり、全てに絶望しきった暗い雰囲気を全身からは発していた。

そして屋上に誰も居ない事を確認すると、高町なのははゆっくりと屋上の中央に向かって歩いて行き、何時もどおりに魔力を集中させてスフィアを作り上げようとする。だが、スフィアが現れる事も魔力が集中する気配は全くなかった。

その事実に蒼白になっていた高町なのはの顔色は更に青褪め、絶望したように屋上に膝をつける。

ーーーバタッ！！

「・・・・ハハハ・・・・・・夢だよ・・・・こんなの・・・・魔法が使えなくなるなんて・・そんなの夢だよ」

改めて魔法が使えなくなった事実を知った高町なのはは、絶望感に満ち溢れた声で現実を否定するように呟いた。

しかし、現実は変わる事無く屋上に涼やかな風が吹き、高町なのはの頬を撫でて行く。だが、その何時もなら穏やかな気持ちになれる風も、今の高町なのはの心を癒せる事は無く、逆になのはの心を追いつめる。

“二度と魔法が使えない”。その事実は魔法が使える事が存在意義に等しいほどになっていたなのはの心を深く追いつめていた。言うなれば、自身の絶対に無くてはならない半身を失った事に今のなのはは等しい。それほどまでになのはにとって魔法は無くては成らないモノだった。だが、その魔法は二度と使う事が出来ない。此処数日は精神病棟に隔離されていた為に本当に魔法が使えなかったのかは分からなかったが、今二度と本当に魔法が使えないと言う事実が示された。

その現実を否定するようになのはは頭を両手で抱えるが、現実は変わる事無く、突如としてなのはの耳に物音が届く。

ーーーコツン!!

「ヒィッ!!」

ーーーガクガクガクッ!!

耳に届いた僅かな物音に高町なのはは、全身をガクガクと恐怖によって震わせながら尻餅をついて後退る。

その顔に浮かんでいるは圧倒的な恐怖。ブラックの凄まじい殺気を無防備に近い状態で浴びた今の高町なのはは、僅かな物音でさえ

も恐怖の対象になっていた。
屋上に辿り着くまでの間、それこそ病室から飛び出した高町なのはにとって世界が完全に変わって見えた。
歩く人々。通路を人々が行き交う為に響く物音。その全てが今の高町なのはにとって完全に恐怖の対象にしか感じられなかった。心配して声を掛けて来る人物さえにも高町なのはは恐怖を感じる。
高町なのはは誰も居ないと思って屋上に向かったのではない。病院の中に居る人々から逃げる為に屋上に辿り着いたのだ。

（・・・怖いよ。全部全部怖い・・・こんなにも怖いのはもう嫌だよ！）

恐怖しか感じられなくなった世界を否定するように高町なのはは内心で叫び、ゆっくりと立ち上がり、屋上の縁へと向かい出す。
その屋上の縁の先には何も存在していない。何よりも魔法が使えなくなった高町なのはは、もう空を飛ぶ事は不可能なのだ。先に進めば待っているのは死の世界だけ。しかし、高町なのははその世界こそを今望んでいた。
ゆっくりと高町なのはは今の世界から逃れる為に屋上の縁へと進んで行くと、突然に屋上の扉が開き、“左腕が肩口辺りから無くなって、右腕を肩から布で吊るしている”病院着を着たフェイトが飛び出してくる。

ーーードン！！

「なのは！！」

「ヒィッ！！」

慌てて飛び込んで来て叫んだフェイトの声にも、高町なのはは恐

怖に染まった声を上げて頭を抱えた。
その高町なのはの姿にフェイトは一瞬呆然とするが、それでもこのままでは不味いと即座に理解して、高町なのはに急いで歩み寄る。
「なのは！駄目だよ！そっちに行った…」
「来ないで！！」
「ッ！！・・・・・なのは？」
突然の高町なのはの悲鳴のような叫びにフェイトの足は止まり、疑問に満ちた声をフェイトは出した。
その声に高町なのはは全身をガクガクと震わせながら両腕で肩を押さえながら、自身の背後に居るフェイトに向かって声を出す。
「・・お願いだから・・・来ないでよ・・・怖いの・・もう何もかもが怖いんだよ・・・フェイトちゃん」
「如何したの？ねぇ、なのは？」
何時もと違う様子の高町なのはの姿に、フェイトは不安を覚えながらゆっくりと高町なのはに近寄ろうとする。
だが、次の瞬間突然に高町なのはは立ち上がり、全速力で屋上の縁に向かって駆け出し、フェイトは目を見開きながら高町なのはに向かって叫ぶ。
「駄目！！なのは！！」
（・・・コレで全部終わる・・・この怖い世界から・・・・魔法が使えなくなった世界から解放され…）

「る訳ないよ。“高町なのはさん”」

ーーーガシィィィィーーーン！！

『ッ！！』

突如としてフェイトの背後から伸びて来た四つの桜色の鎖によって、屋上の縁から飛び出す直前だった高町なのはの四肢は完全に封じられ動きが止められた。

その桜色の魔力光が作り上げる鎖とその直前に響いた声に、フェイトと高町なのはは信じられないと言う思いを抱きながら背後を振り向いてみると、右手にレイジングハートを握りエクシードモードのバリアジャケットを身に纏った“なのは”が、ガブモンを横に伴いながら立っていた。

在りえない人物の出現に高町なのはとフェイトは呆然とするが、なのはは構わずに左腕から発していた桜色の鎖ーバインディングチェーンを全力で引いて屋上の縁から高町なのはを引き離す。

「フッ！！」

ーーードォン！！

「キャッ！！」

屋上の縁から引き戻され、背中を床に打ち付けた高町なのはは悲鳴を上げるが、なのはは構わずに呆然としているフェイトの横を通り過ぎて、冷たさだけしか存在していない顔を苦痛に呻いている高町なのはに向け、レイジングハートの柄を高町なのはの顔の横に振り下ろす。

ーーードン！！

「ヒィッ！！」

「怖い？・・・そうだよね。今の力を失って、ブラックさんの殺気を何の覚悟も持たずに浴びた、貴女にはこんな少しの事でも怖く感じるだろうね」

そうなのはは冷たさに満ちた声で高町なのはに向かって呟き、レイジングハートを持ち直しながら高町なのはを見下ろす。

「色々とこの二週間調べたよ。貴女の管理局での経歴。教導内容。フリートさんに調べられるだけ調べて貰って、映像に残っていた全部の行動を見たよ」

「・・フリート？・・・・・まさか・・・・・貴女はなのはの人造魔導…」

「違うよ、フェイト・Ｔ・ハラオウンさん」

「ッ！！」

「私はこの女の人造魔導師とかじゃないよ・・・それよりも“最も近く、最も遠い存在”。それがこの女と私の関係だよ」

「“最も近く、最も遠い存在”？・・・一体何を言っているの？」

「悪いけど、私は貴女と問答しに来たんじゃないよ・・・・・この女と“Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＩ”に来たの」

そうなのははフェイトに向かって言葉を告げると、ゆっくりとレイジングハートの先端を高町なのはに向かって構えだす。
その姿にフェイトはなのはがやろうとしている事に気がつき、慌ててなのはを止めようとするが、その直前にガブモンがフェイトの背中に向かって飛び掛かる。

「タアッ！！」

ーーードン！！

「キャッ！！」

無防備な背中からのガブモンの一撃にフェイトは悲鳴を上げて前に向かって倒れてしまう。
ガブモンはそれを確認するとフェイトの背中に乗りながら、出来るだけなのはを刺激しないようにフェイトに耳元で呟く。

「邪魔をしちゃ駄目だよ・・・今、なのはは本当に機嫌が悪いんだよ。だから、大人しくしていてね」

「・・ウゥ・・ウゥ」

そうガブモンはフェイトに向かって呟くが、既にフェイトに立ち上がる力は無かった。
元々フェイトを含めたヴォルフラムに居た全員が絶対安静を言い渡されている。その中でもブラックと直接戦ったフェイトは、本来ならば歩く事さえも至難だった。それでも看護婦達が慌てている様子となのはが逃げ出した事を知って、病室から無理に抜け出してなのはを捜索していたのだ。

だが、今のガブモンの一撃でフェイトは本当に限界を超えた為にもはや立ち上がる事は出来ずに呻き続ける。
その様子にガブモンはフェイトがもうなのはの邪魔をする事は無いと判断すると、ゆっくりとなのはに向かって深く頷き、なのはも頷き返して服の襟元を掴んで高町なのはを無理やり立ち上がらせる。

ーーーガシッ！！

「じゃあ色々と話そうか・・・・知っている？こう言う時に非殺傷設定は役に立つんだよ・・・だってね。非殺傷設定で攻撃すれば、魔力ダメージだけで済んで“傷がつかないんだからね”」

「ヒィッ！！・・・・止めて・・・・お願い・・・・」

「何で？だって、コレは貴女もした事だよ。“六年前の機動六課時代の時に模擬戦でもう戦う力もなくて、気絶する直前だったティアナ・ランスターさんに非殺傷設定だから魔法を使用して戦闘不能に追い込んだ”んだからね」

「ッ！！」

なのはの言葉に高町なのはは目を見開き、今の状況を思い返してみせる。
様々な状況は違うが、確かに“戦闘不能状態で在りながらも、追い討ちをかけるように魔法を撃ち込む”状況は同じだった。
それを表すようになのはは右手に持っていたレイジングハートを待機状態に戻し、右手の先にクロスファイヤー・ショットの術式を浮かべだし、高町なのはは全身をガクガクと恐怖に震わせる。

ーーーガクガクッ！！

「ねぇ、怖い？・・・だよね。非殺傷設定だろうと殺傷設定だろうと・・・対抗手段を持たない人達にとっては攻撃魔法は恐怖の対象でしかない。コレが貴女の振るっていた力。魔法が使えない人達が感じている恐怖だよ」

「・・・・違う・・・私が振るっていた力は」

「『傷つけずに相手を制圧する力は護る為に在る』・・・・・笑わせないでよ！！」

「ッ！！」

「どんな力でも、非殺傷設定だろうとね！力は何も出来ない人達からすれば、恐怖の対象にしか見えないんだよ！！・・・・私も昔は貴女と同じだった・・・自分が力を振るって戦えば・・・沢山の人達を救える・・・そんな馬鹿な考えを持っていたんだよ」

「・・・・馬鹿な考え？」

「そうだよ・・・・馬鹿な考えだよ・・・貴女さぁ？『管理局の白い悪魔』なんて影で呼ばれているよね・・何でそんな風に呼ばれていると思う？」

「・・・・・・」

「答えられないでしょう。だから、今教えてあげるよ！！」

ーーーバシッ！！

「ッ！！」

突然突き飛ばされた事に高町なのはは目を見開いてなのはを見つめるが、なのはは構わずに自身の周りに浮かべていたクロスファイヤー・ショットを高町なのはに向かって撃ちだす。

「クロスファイヤー・ショット！！」

ーーードドドドドドドドドゴオォン！！

「いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーー！！！！！！」

「なのは！！」

迫って来るクロスファイヤー・ショットに高町なのはは悲鳴を上げ、フェイトも高町なのはに向かって叫ぶが、クロスファイヤー・ショットは止まる事無く高町なのはに迫る。

その事実に高町なのはは身に力を込めるが、同時にそれは無意味だと理解する。体に力を込めた程度で魔力による攻撃が防げる筈が無い。その程度で防げるほど魔法は甘くないのだ。

何の力も無い者が魔法を使われた時に受ける事を、高町なのはは今ハッキリと理解した。ただ蹂躙されるしかない事実に、高町なのはは自身が行って来た事の意味を理解して来るであろう衝撃を思うが、衝撃が来る事は無かった。

クロスファイヤー・ショットが高町なのはに直撃する直前に、クロスファイヤー・ショットは突然に向きを変えて高町なのはの横を薄皮一枚の距離を保って通り過ぎた。

その精密としか言えない魔力操作の動きに、フェイトは同じ魔導師としてなのはの横顔を信じられないと言うように見つめるが、当人のなのはは不愉快そうに顔を歪めながら尻餅をついている高町な

のはを見つめていた。

「・・・気分が凄く悪くなるよ。何の抵抗も出来ない相手に魔法を放つなんてね」

そうなのはは言いながら膝を折って高町なのはとの視線を合わせて、険しい瞳を高町なのはに向ける。

「どんな気分？・・・・自分が行った事を自分自身が味わうのは？」

「・・・」

「答えられないでしょう。だって、ただ恐怖しか感じられなかったんだから・・・これがね。強い相手が弱い相手に力を振るっている時に、相手に与えている恐怖だよ。私も貴女も魔導師としての才能が在り過ぎた・・・在り過ぎたから貴女は自分の力に溺れて、何でも出来るなんて思うようになった」

「・・・・私が力に溺れたんだったら・・・貴女も溺れて」

「いないよ・・・だって、私は知っているから・・・自分よりも強くて、絶対に折れない信念を持っている者達をね・・・それに沢山の人々が死んだり、護りたいと心の底から思っていた場所を目の前で破壊された事も在るんだ」

なのははそう高町なのはに儚げな笑みを浮かべながら告げた。

その儚げな笑みに、高町なのはは目の前に居る相手が自身の知らない地獄を見て来た事を直感した。

その地獄がどれほどのモノだったかは高町なのはには分からない。だが、少なくとも目の前に居るなのはが自身が経験した事の無いほ

どの数多くの経験を積んでいる事だけはハッキリと理解した。

「・・・・何を見たの？・・・貴女は？」

「・・・自分よりも遥かに強大で絶対に折れない信念を持っている生物と戦って、全部否定されたんだよ。私がその時に持っていた考えをね・・・ただ逃げる為だけに力を振るって沢山の人達を知らないところで悲しませていた。ただ逃げる為だけに力を振るったばかりに・・・沢山の人達を悲しませた。貴女は其処から全ての悲しませた人達の気持ちを無視して進んだみたいだけど、私は一度其処で立ち止まったんだ。本当の自分の気持ちを理解する為に」

なのはと高町なのは。二人の始まりはそれこそ完全に同じだった。しかし、一点だけの違いが二人の歩みを完全に変えた。互いに一度生死を彷徨うほどの大怪我を負った時期は同じだが、それを行った相手が余りにも違いすぎた。

高町なのはに大怪我を負わせたのはこの世界のスカリエッティが作り上げた、ただ言われた命令だけに従うガジェット？型と言う心も何も無い機械兵器。

なのはが全てを否定された相手は、ブラックと言う世界全てに否定されても絶対に己の歩みを止めない最凶の存在。その信念に触れ、ガブモンと言う心の底から自身の全ての委ねられる信頼が出来る相手とであった事で、なのはは一度立ち止まって多くを学ぶ機会を得られた。

だが、高町なのははそう言う相手と出会う事が出来なかった。この世界のフェイトにしろ、はやてにしろ。高町なのはにとっては全てを委ねても良い相手でなかった。だからこそ、今高町なのはは自殺しようとしたのだ。本当に信頼出来て頼る事が出来る相手が居ない世界に絶望して。

「悲しいよね。この世界には貴女が本当に信頼出来る人が誰も居ない・・居るのは力で屈服させた相手だけ・・・・だから、力を失った貴女にとってこの世界の全部が恐怖しか感じられなくなった」

「・・・違う・・・それは違うよ！！私はなのはに救われて本当に嬉しかった！！だから…」

「・・・・でも、この人はそうは思っていないみたいだよ・・・じゃなければ、貴女の言葉で止まって居た筈だもの」

「ッ！！」

なのはの言葉にフェイトは目を見開き、慌てて高町なのはに顔を向けると、高町なのははフェイトの顔が直視出来ないのか顔を横に逸らす。

その様子にフェイトは完全に言葉を失い、呆然としたように動きを止めると、なのははゆっくりと立ち上がり、今度はフェイトに顔を向ける。

「・・ただ相手の全部を肯定する関係が、親友じゃないんだよ・・・時にはその行動をよく考えて間違っていたら、例え二度と会えなくても止めなくちゃいけない。ただ肯定するだけの関係は互いの為にならない時も在るから・・・それを今回で知ったでしょう？フェイト・T・ハラオウンさん？」

「・・・それは・・」

なのはの質問にフェイトは答える事が出来ずに顔を俯かせた。

思い出すのは今はこの病院の集中治療室に居る二度と立ち上がれないと宣告されているエリオ。

ＩＦの話になるが、もしエリオが管理局になど入らずに一般人として過ごしていれば、機動六課時代の大罪を背負う事は無く、今回のブラックとの戦闘で一生治らない怪我を負う事も無かった。
その事実を改めて理解したフェイトは顔を深く俯けると、なのははフェイトから視線を外しながら声を掛ける。

「私が言える事じゃないけど、本当に相手の事を考えるなら、どんな行動でも中途半端にするのだけは絶対に駄目だよ・・・中途半端に動けばその先は絶望だけだからね」

「・・・・・」

もはやフェイトはなのはの声に答える事が出来ずに顔を深く俯けさせ続け、なのははフェイトがもう全てを、己が犯して来た大罪を理解している事に気がつく。

（・・・これなら、少しだけ助けて上げて良いかもね。立ち上がれなくても、誰かを支える事は出来るからね）

そうなのははフェイトの状態を看破すると、何時の間にかスバルを乗せた車椅子のハンドルを握って、屋上の扉の方に居たフリートに視線を僅かに向ける。
フリートはその視線の意味を理解して一瞬だけ顔を険しくするが、渋々となのはの視線の意味を肯定するように頷く。なのははそれを確認すると即座に恐怖に震えている高町なのはに向き直ろうとするが、その直前にガブモンとなのはは近づいて来る気配を感じて上空に顔を向ける。

「・・・来た」

「うん・・・ブラックさんが来たよ」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

『ッ！！』

ガブモンとなのはが呟いた瞬間、病院の屋上に空高くから黒い閃光が落下して来た。

その閃光にスバルとフェイトは目を限界にまで見開き、高町なのはは全身を恐怖に震わせながら黒い閃光が落下した地点に目を向けると、右肩にヴィヴィオを乗せたブラックが足を踏み出す。

ーーードン！！

『りゅ、竜人！？それにヴィヴィオ！？』

「屑どもに狙われていたからな。連れて来てやったぞ」

自身に向かって叫ぶスバルとフェイトに構わず、ブラックは右肩に乗せていたヴィヴィオを屋上の床に下ろす。

そして下ろされたヴィヴィオは二人のなのはの姿に一瞬困惑した顔をするが、即座にブラックの姿に怯えている高町なのはの方に歩み寄る。

「ママッ！！」

「ヒィッ！！」

「えっ？・・・ママ？」

ヴィヴィオが高町なのはに歩み寄ろうとした瞬間、高町なのはは恐怖に満ちた声を出してヴィヴィオから顔を隠すように体を伏せた。
その様子にヴィヴィオは混乱したように自身の目の前で恐怖に震えている高町なのはを見つめると、なのはがヴィヴィオの肩に両手を置いて優しく声を掛ける。

ーーーポン！

「今ね。貴女のお母さんは全てに怯えているの。力を失って何もかもにね・・・貴女も覚えが在るでしょう？・・・全部が全部恐怖にしか見えなかった事が」

「ッ！！」

なのはの言葉にヴィヴィオは六年前の“聖王”として覚醒してしまった時の事を思い出した。
あの時に確かにヴィヴィオは目に映る全てが恐怖にしか感じられず、高町なのはの呼びかけさえも偽りにしか思えなかった。その状態に今高町なのはは成っている。
その事実を理解したヴィヴィオは何故ブラックが自身を此処に連れて来たのか理解し、決意に満ちたように高町なのはを強く抱き締める。

「ママ」

ーーーガシッ！

「ヒィッ！！・・・離して！離して！」

「大丈夫だよ、ママ。私は絶対にママから離れないから・・・ママ

も言ってくれたよね。何時だって、どんな時だって助けてくれるって。私も助けるよ。世界中の何からだって、ママを護って見せるから」

「ヴィヴィオ・・・・」

自身に呼び掛けてくれるヴィヴィオの言葉に、高町なのはの恐怖は徐々に収まっていく。

今自身を満たしてくれているのはヴィヴィオの暖かさ。それを理解した高町なのはもヴィヴィオを抱き締め返すと、なのはが声を掛ける。

「温かいでしょう？・・・それがね。戦わずしても得る事が出来る誰かの温かさだよ。戦えば確かに得られるモノも在るけど、戦わなくても得られるモノも確かに在るんだよ・・・昔の私も貴女もそれを忘れていた。力を振るって得られる称賛ばかりを感じて何時からか普通の歩むだけで得られていた温もりを見失っていたんだよ」

そうなのはは高町なのはに声を掛けると、ゆっくりとガブモンを背中に張り付かせて足にフライヤーフィンを発生させて最後に高町なのはに伝えるべき事を伝える。

「もう貴女は空を飛びないけれど、地上でも得られるモノは沢山在るから。それを大切な娘と探すんだね。それがこれから貴女が出来る事だよ」

「・・・貴女は見つけたの？」

「・・見つけたよ。だから、私が空を飛ぶ時はその大切なモノを護る時だけ。それじゃ、もう会う事は無いだろうけど、頑張って歩む

んだね」
なのははそう呟くと、ガブモンを背中に取り付かせたまま屋上から飛び去り、フゥッと空中に体を溶け込ませるように姿を消失させた。
その様子をブラックは確認すると自身を見つめているスバルに僅かに目を向けるが、すぐさまヴィヴィオに僅かに意味深な瞳を向け、自身がこの場に留まる理由はもはや無いと言うように空中に体を浮かばせ、フリートに声を掛ける。
「フリート。場所は判明したのか？」
「はいはい、既にフッケバインの中にデータを全部取り揃えていますので、なのはさんとガブモンと一緒に動いて下さいね」
「フン・・・まぁ、つまらん連中だから構わん・・・後は任せたぞ」
ブラックはそう呟き終えると即座に全速力でその場から飛び去って行った。
フリートはそれを確認すると、すぐさま自身に視線を向けているスバルに意味深な瞳を向け、そのまま屋上に倒れ伏したままのフェイトに歩み寄る。
「フェイト・T・ハラオウン。自分のして来た事に後悔していますか？」
「・・・してます・・・私は裁かれるんですよね？」
「まぁ、無罪放免にはならないのは間違いないでしょうね。どのような結果になるにしても覚悟は決めておくんですね・・・さて、最

低限のアフターケアはするつもりですから、選ばせて上げますよ。“失った左腕と肩から上に上がらなくなった右手の完全治癒か、エリオ・モンディアルの体を治療するか”。さぁ、どっちを選び…」

「エリオの治療をお願いします」

「・・・・・後悔はないんですね？此処で両腕の治療を逃せば、二度と貴女は戦えずに悲惨な結末が待っていますよ？」

「・・・・構わない・・・・・この両腕は私の罪の証だから・・・背負って生きないといけないから」

「・・了解しました。序でに残っている八神はやての守護騎士連中も助けて上げますよ・・（まぁ、生き残った守護騎士達には八神はやてを救えるチャンスを上げますかね。さて、如何言うチャンスにしましょうか？）」

フリートは内心でそう呟きながら手配していた看護婦や医者を呼び寄せて、フェイトと高町なのはを運び出す。

ヴィヴィオが居れば高町なのはは落ち着いていられるとフリートは医者や看護婦に説明し、フェイトと高町なのはは同室にさせ、二人の世話をヴィヴィオは行うのだった。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　エピロー

様々なご意見をありがとうございます！

最終的によかったと指摘された部分を一つのまとめて書きました。

次回こそは漸く後編と本編です。同時に更新する予定なのでお待ち下さい。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　エピロー

とある管理世界に存在している山岳地帯。
その場所は何かを隠すには最適な場所。そしてその場所の山間の洞窟の中に、とある管理局が犯罪集団として認めている危険な武装組織のアジトが存在していた。
その武装組織は凶鳥（フッケバイン）同様に無関係な一般人から、金品や食料などを強奪して殺害に及ぶ集団とされていた。本来ならば管理局が早急に殲滅しなければいけない組織なのだが、その組織はオリジナルとレプリカのディバイダーとリアクターを所持している為に、凶鳥（フッケバイン）同様に管理局にとっては戦うのが難しい組織だった。
それ故にその武装組織は凶鳥（フッケバイン）の名を語り、多くの人々を殺し続けていた。
だが、今その組織のアジトに、突如として短期間で管理世界にその名を知らぬ者が居ないほどの存在になったブラックとなのは、ガブモンが強襲し、次々と武装組織のメンバーを無力化していった。
大抵の組織の構成員はブラックの殺気を浴びただけで泡を噴きながら気絶し、ディバイダーとリアクターを持った者達は己の力を過信してなのはとガブモンに挑み、逆にボコボコにされてしまったのだ。
そしてブラックは逃げ出そうとしていた組織のリーダーを捕まえ、一撃でボロボロに変えてから尋問していた。

「・・それで？何処のどいつが貴様らにレプリカのディバイダーとリアクターを与えた？答えろ」

「グッ・・・・・ヴァンデイン・・・・コーポレーション・・・・代わりに・・俺達は・・魔力を資質が・・在る奴ら・・攫って・・・差し出した・・」

「ほう。やはり連中だったか・・・もう良い。この後来る連中が訪れるまで、寝ていろ！！」

ーーードゴオォン！！

「ガハッ！！」

ーーーガクッ！！

ブラックは叫ぶと共に掴み上げていた武装組織のリーダーを壁に叩きつけた。

その衝撃に武装組織のリーダーは完全に気絶してしまう。ブラックはそれを冷めた目を見つめるが、すぐさま背を向けて前に歩き出し、先ほど手に入れた情報を吟味する。

（この世界でも連中が影で動いていたか。そして連中の背後には管理局の関係者が居る可能性が高い・・・シュトロゼックと『銀十字』・・・アレだけは全て回収するか破壊しなければならん！！必ず！！）

そうブラックは内心で怒りに満ちた叫びを上げながら決意を固めた。

シュトロゼックと『銀十字』。この二つはブラックにとって在る意味では最も深い関係が存在しているディバイダーとリアクターだった。何せこの二つの基になった物は『古代ベルカの魔導書』。

『銀十字の書』はその中でも禁忌と呼ばれている書なのだ。そして同時に『夜天の魔導書』、或いは『闇の書』にも関係している書物。つまり現存しているレプリカの『銀十字』や新たに作られた『シュトロゼック』は、『夜天の魔導書』のデータも使用されて生ま

れた可能性が存在していた。
その事を知ったブラック、フリート、リンディ、そして『夜天の魔導書』の根幹だったルインは、すぐさま自分達の世界に存在していたディバイダーとリアクターを回収するか、或いは破壊する行動を行う事にしたのだ。
最悪の事態、『第二の悲劇の闇の書を世に生まれさせない』為に、ブラック達は自分達の世界でディバイダーとリアクターの全てを回収し、それを生み出した全てを滅ぼした。
流石にこの世界では其処までは行えないが、少なくとも本型のディバイダーとリアクターの破壊。
そして何よりも『シュトロゼック』を作り上げた連中の抹殺だけは、ブラックとフリートは行うつもりだった。例え異世界でも『第二のルインフォース』を作らせる訳には絶対にいかない。
どれだけルインが自身の存在に苦しんでいたのか、ブラックとフリート、そしてリンディは知っている。故にブラックとフリートは本型のディバイダーとリアクターを破壊し、『シュトロゼック』の開発に関する全てのデータの消去を行うつもりだった。

（・・・残るオリジナルの『銀十字の書』とレプリカの『銀十字』を持っている奴らの居場所はもう少しで確定する・・・ならば、今向かうべきなのは『シュトロゼック』を作り上げている『ヴァンデイン・コーポレーション』・・・待っていろ！二度と悲しむルインのような存在は生ませんぞ！・・・・グッ！！）

ーーーガクッ！！

突如としてブラックはよろめき、床に膝をついてしまう。
それを偶然に前の方の通路で目撃したなのはとガブモンは、慌てて苦しげに顔を歪めているブラックに駆け寄る。

「ブラックさん！！」

「確りして下さい！！」

「・・・・チィッ！！・・回復した体力が無くなって来たのか」

心配そうになのはとガブモンがブラックに駆け寄ると、ブラックは自身の両腕を忌々しげに見つめて叫んだ。

そもそも今のブラックは万全な状態ではない。寧ろ限界を超えて動き続けた為に、深い眠りの淵についていた状態だったのだ。だが、特務六課の攻撃によって不完全な状態で目覚め、その後にも色々と動き続けた為に、遂に回復していた体力も底をつき掛けていた。

それを補う為に時間が在れば睡眠を取っていたが、それでも補い切れないほどに体力が底をつく寸前になってしまった。

それを理解していたなのはとガブモンは幾度と無くブラックに元の世界に戻ろう進言したのだが、ブラックと、そしてフリートは頑なに『銀十字』、そして『シュトロゼック』を作り出している場所を潰すまでは戻らないと言って聞かなかった。

『銀十字』と『シュトロゼック』の生み出された経緯を知らないなのはとガブモンには分からなかったが、何か譲れないモノが在ると言う事だけは理解して、こうしてブラックと共に行動しているのだ。

「・・・・第十六管理世界のヴァンデイン・コーポレーション・・・其処の第４工場に向かうぞ。その場所に『シュトロゼック』製作の責任者が居る事を掴んだ・・・・・必ず潰す！！」

ーーードン！！

ブラックは宣言すると同時に無理やり立ち上がり、通路の先へと

進んで行く。
　その何時に無く焦っているブラックの背中を目撃したなのはとガブモンは顔を見合わせる。
「・・・やっぱり何か在るみたいだね？」
「うん・・・ブラックさんもフリートさんも何かを隠しているのは間違いないよ・・・だけど、それが何なのかな？」
「・・・・もしかしたらだけど、ブラックさんとフリートさんが回収を躍起になっているのは、全部本型のディバイダーとリアクター。トーマ君が渡してくれた『銀十字の書』って言うリアクター・・・アレに似たのを私は見た事が在るの」
「えっ！？一体何処で！？」
「・・・・『夜天の魔導書』・・・はやてちゃんが所持していて、ルインさんが本当はいる筈のロストロギアだよ」
「ルインさんが？・・・・・・まさか！？」
「うん・・・多分だけど、ブラックさんとフリートさんは、『第二のルインさん』を生み出さない為に本型と『シュトロゼック』を回収する気なんだよ」
　そうなのははガブモンに自身の推測を語り、ガブモンは確かに在り得るかもしれないと思う。
　誰よりもブラックは自身の状態を把握している筈。なのに今、ブラックは限界を超えて動き続けている。嘗て自分達の世界のヴィヴィオの為にブラックは無理をしたように、唯一無二のパートナーだ

と思っている、ルインの為ならば動いても可笑しくは無い。
なのはとガブモンはそうブラックとフリートの行動の意味を確信し、同時に自分達も全力で動かねばいけないと心に決める。
ルインがどれだけ自身の存在に苦しんでいたのかは、共に行動しているなのはとガブモンには良く分かっている。
欲望の為に生まれた悲劇の世界の敵。再びそれを世に生まれさせる事だけは絶対にさせてはならないとなのはとガブモンも確信し、二人は急いでブラックの後を追って行く。

この十数時間後、第十六管理世界に在る兵器開発メーカー『ヴァンデイン・コーポレーション』の『シュトロゼック』製作の責任者である第八企画室室長がいた第４工場が漆黒の竜人と蒼い機械の狼に襲撃され、壊滅状態に追い込まれた。
それを知った第十六管理世界の行政府は、その場所には何かが在ると即座に判断し、救助隊に加えて調査団を送り込み、第４工場で２００を超える大量のレプリカのディバイダーとリアクターの残骸と思われる鉄屑とエクリプスウィルスの感染実験のなれの果てと思われる肉塊、そして生きているのが不思議な状態になっている研究者達を発見する。
その結果『ヴァンデイン・コーポレーション』が違法研究を行っている事が明らかになり、『ヴァンデイン・コーポレーション』の重役達と社長、そして会長全員が逮捕される事態になる。
この事件から数週間後、漸く再編が在る程度纏まった管理局が漸く活動を再開し、違法研究を行っている場所を次々と摘発して行くのだった。また、漆黒の竜人と蒼い機械の狼は『ヴァンデイン・コーポレーション』の事件以降、管理世界には姿を見せる事はなかった。

「・・・と言うのが私達がルヴェラに来る前に手に入った情報よ、スバル」

ルヴェラに存在する病室の一室、その場所で漸く事情聴取を終えてルヴェラに来れたティアナはベットの上で横になっているスバルに、自身が知っている管理世界で起きている出来事を全て説明していた。

ティアナから管理世界で起きている現状を聞いたスバルは、まさか企業までディバイダーとリアクターに手を出していたのかと唖然とする。

その様子にティアナは無理もないと思った。何処で開発や製造されているのかも分からなかったディバイダーとリアクターが、まさか管理世界に認められた工場で製造され、更には違法研究まで行われていたのだ。確実に今回の一件も管理局に打撃を与える出来事だとティアナは思いながら、気になっていた事を質問する。

「・・それで・・トーマとは会えたの？」

「・・・まだだよ・・・あのフリートって言う人の話だと・・・数日以内は此処に来る見たいだけど」

「そう・・・・・知っていると思うけど、トーマに関する情報は全部消去されていたわ。例の施設で捕まえた所員も投獄されていた施設内部で隠し持っていたエクリプスウィルスを自身に投与して“自殺”したみたいだから、トーマがあの施設に侵入したのを知っているのは私達だけよ・・・・如何する？」

「・・・・・私は隠すよ・・・もしトーマがワクチンでエクリプスウィルスから解放された情報が、管理局や世間に知られたら」

「・・・先ず間違いなく、トーマは狙われるわね。それも違法研究を行っている場所全てから」

スバルの言わんとしている事を理解したティアナは、険しい声を出した。

時空管理局。管理世界の企業。それらが違法研究を挙って行っていたのだ。エクリプスウィルスと言う人を兵器に変えてしまう最悪のウィルスを克服した存在の情報が知られれば、必ずトーマは狙われるだろう。

次元世界を護っている組織に所属しているティアナからすれば、本来ならばエクリプスワクチンは是が非でも手に入れたい。だが、そのワクチンから生まれる悲劇を考えれば、在る程度違法研究が取り締まれた場合で無ければいけないと内心で判断し、スバルの考えに頷く。

「分かったわ。私もトーマにそんな辛い日々を送らせたくないし、ギンガさん達も同意する筈だから・・・エクリプスワクチンの存在は私達だけの秘密で良いわね？」

「うん・・・ありがとう、ティア・・・本当に」

ティアナの言葉にスバルは心の底から感謝の言葉を告げ、ティアナは笑みを浮かべる。

しかし、すぐにその顔は真剣な顔つきに変わり、気になっていた事をスバルに質問する。

「・・・で、アンタは何を隠しているの？」

「ッ！！」

在る事実を付かれたスバルは、顔を強張らせて俯いてしまう。
ティアナやギンガ達に隠している事。それは先日病院の屋上で目撃したなのはの存在だった。
あの後にトーマの事情も在ったので、フリートはスバルにだけは自分達の正体を明かした。
存在しているかどうかさえも定かではなかった平行世界の存在。それが自分達なのだとフリートは語り、スバルに自分達の正体を硬く口止めを願った。
如何しても行動を共にしているトーマ達の為に、一人ぐらいは事情を知っている人物が欲しいと思って、ブラックが僅かながらも認めているスバルにだけ話したのだ。
その時にフリートはスバルに頭を下げたり、スバルの頼みで病院に入院しているヴォルフラムに乗っていた局員達の治療を行ったりした。
流石に平行世界の存在がばれるのは不味いと判断したスバルは、フリートの頼みを了承して平行世界の存在を墓まで持っていこうと決めたのだが、付き合いの長いティアナにはスバルが何かを隠している事は一目瞭然だった。

「・・・まぁ、隠している事はあの人達関係でしょうから・・・聞くのは止めておくわ・・・何か絶対に頭が痛くなる事態になりそうだからね」

「・・・ハハハハハハ・・・正解だよ、ティア・・・・聞かない方が良いよ」

「そうするわ・・・さて、それじゃ私はシグナムさん達の治療を見ているギンガさん達の所に行くわね」

そうティアナはスバルに声を掛けながら背を向け、病室を出て行

こうとする。
　スバルの下にティアナしか居ないのは、ティアナ達が訪れると共に運ばれて来たはやての守護騎士であるシグナム、ザフィーラ、リインフォース？（ツヴァイ）、そしてシグナムの融合騎であるアギトの四人の治療が、フリートの手によって行われている最中だからで在る。
　万が一、事情を全て聞き終えた時に家族であるシャマルとヴィータを殺された怒りを持ってフリートにシグナム達が襲い掛かった場合、氷塊の中からはやてを助け出す術が完全に失われてしまう。
　そうなったら二度とはやては外の世界に出られずに氷塊の中で永遠に凍りついたまま、永久凍結封印の刑に服されてしまう。はやてを正式に裁判に掛けたい代表達の命令で、状況を説明する為にスバルの下に訪れたティアナを除いた全員が治療中のシグナム達を監視している為に、この場には居ないのだ。
　そろそろ手術が終わる頃だと思いながらティアナは病室の扉に手を掛けようとすると、その直前に病室の窓ガラスが開き、シグナム達の治療を行っている筈のフリートが平然と入って来る。

ーーーガラガラガラッ！

「よいしょっと、失礼しますよ」

『ブッ！！』

　窓ガラスを開けて入って来たフリートの姿にティアナとスバルは噴き出し、ワナワナと震えながらフリートに目を向けると、フリートは椅子に座りながらティアナとスバルに目を向ける。

「ちょっと身を隠す為に、この部屋に居させて貰いますね」

「なっ！？何て所から入ってくるんですか！？って！それよりもシグナムさん達の治療はどうなったんですか！？」

「もう終わりましたよ。元々重傷だった『烈火の将』と赤い髪の融合騎の治療は終わって、八神はやてから送られる魔力が少なくなって動けなかった『盾の守護獣』、そして『祝福の風』と呼ばれている融合騎も、独立した存在に直して於きましたからね。コレで八神はやてが居なくても彼らは消えません。それで意識が覚醒する前に手術室から出て来たんですよ。何せ私は彼女達の家族の『湖の騎士』と『鉄槌の騎士』を殺した漆黒の竜人の仲間ですからね・・・そんな私があの場に居たり、目立つ場所に居たら・・どうなるか分かりますよね？」

「・・・・確かに・・冷静になる前に怒りに任せて攻撃して来そうですね。周りとか考えずに」

「そう言う訳で、説明が終わって落ち着いたら此処に呼びに来て貰うようにギンガ・ナカジマに頼んで来ましたので、暫らく失礼します」

そうフリートはティアナとスバルに事情を説明し終えると、自身の横に空間モニターを展開して何かの情報を吟味し出す。

その様子にティアナとスバルは思わず顔を見合わせるが、確かにシグナム達には冷静になって貰わねばならないとティアナは思い、スバルに意味深な視線を送ってから病室を出て行く。

スバルはその様子に困ったような顔をするが、トーマの状態だけは確認しようとフリートに質問する為に声を掛けようと目を向けてみると、フリートは何時に無く険しい目をしながら一つの資料を見ていた。

「あの？」

「・・・・スバル・ナカジマ・・・・・貴女達が使っていたＡＥＣ兵器の開発場所、『カレドヴルフ・テクニクス』と管理局の関係は深いんですか？」

「えっ？・・・・はい、色々な武装や機械類を提供してくれる場所ですから・・・管理局とは関係は深いですけど・・それが何か？」

「・・『ＣＷ－ＡＤＸ（アーマーダイン）ラプター』、『自立作動型汎用端末（デバイス）』・・・人型の戦闘端末・・・・・・・・・・繰り返す気なんですか」

「えっ？」

何時に無く険しいフリートの声に、スバルは疑問の声を上げるが、フリートは構わずに自身の前に存在している一つのＡＥＣ兵器に関する情報を睨んでいた。

“ＣＷ－ＡＤＸ（アーマーダイン）ラプター”。『ストライクカノン』や『フォートレス』同様にＡＥＣ兵器に分類される兵器だが、『ストライクカノン』や『フォートレス』とは形状が余りにも違う兵器だった。

何せ『ＣＷ－ＡＤＸ（アーマーダイン）ラプター』の形状は完全に人型。個体の意志や人格を持たない機械端末で、プログラムに沿っての自律行動や遠隔操作が可能な上に、筋力は常人の数十倍に達し、高温・極低温・有毒ガス下でも活動可能な兵器。

だが、フリートはそれに良く似た兵器の存在を知っている。それ故に再び戦争を繰り返そうとしているのかとフリートは考えていた。

（・・・調査団の報告資料から、ロストロギアのデータや物品が幾つか消えている事が判明・・・・・間違いなく自分達に関係が深い企業に渡していますね・・・・六年前もジュエルシードが盗まれた

とかされていますけど、裏でスカリエッティに渡したんでしょうね・・・・・アレ？・・そう言えば、この世界のスカリエッティは管理局の収監施設の中に居るんですよね・・・・・凄く嫌な予感がして来ました）

言い知れない嫌な予感にフリートは顔を歪めざるえなかった。

何せスカリエッティは自分達の世界でブラックの影響を受けた相手である。例え直接会ってはいなくても、ブラックの映像を見たりすれば、確実にこの世界のスカリエッティにも何らかの影響が起きるだろう。

それに思い至ったフリートは、代表達にスカリエッティの監視の強化を依頼しようと心に決めながら、空間モニターを一時消して自身に顔を向けているスバルに目を向ける。

「それで？何か質問が在るみたいですけど、何ですか？」

「・・・え～と・・・・トーマは元気ですか？」

「なのはさんの話だと、少しずつですが元気が戻って来ているようです。一両日中には此処に来るでしょう・・『シュトロゼック』を開発していた場所は潰しましたし、『銀十字』を持っている連中の大体は潰しましたから・・・トーマ君達が此処に来たら私達は戻りますよ」

「・・・そうですか・・・・・私の事、トーマは何か言っていましたか？」

「別にコレと言って何も言ってはいないようですけど・・・・まぁ、個人の事なので私は口を出せませんから、数日一緒に居たぐらいでは親しくなれませんし・・・・それに、あの子の闇を晴らせるのは

貴女達家族か・・・リリィちゃん、そしてアイシスちゃんぐらいでしょうからね」

「トーマの闇？」

「えぇ・・・まぁ、それは私が口を出せる事ではないので言いませんけどね・・・・・それとコレを渡しておきます」

フリートはそうスバルに告げると、何処からともなく何らかのデータディスクを取り出し、スバルの右手に載せた。

スバルは渡されたデータディスクは何なのかと疑問を覚えながらフリートに目を向けると、フリートは険しい顔をしながらデータディスクの中身を話し出す。

「それの中には記録されているのは、凶鳥（フッケバイン）の連中を名乗っている偽者達の拠点の情報が記録されています」

「ッ！！」

「本と銃剣のレプリカを持っている連中と多人数の構成員を伴った組織だけは潰しましたが、残りのニ組は残っています・・・再編された後もエクリプス関係の捜査は続行されるでしょうから、役立てて下さい」

「・・・潰さないんですか？全部？・・・貴女達なら私達がやるよりも、簡単に潰せる筈なんじゃ？」

「確かに潰せますけど・・・・それはこの世界の為になりませんよ。確かに私としても全てのディバイダーとリアクターは欲しいですけど・・・・・流石に全部回収する事なんて短時間では無理ですから

ね。『銀十字』と『シュトロゼック』の回収だけで手一杯です・・・・だから、残りは貴女達の仕事ですよ・・・・如何かエクリプスウィルスから生まれる悲劇を回避して下さい」

フリートはそう言いながらスバルに向かって深々と頭を下げた。

その様子にスバルは目を見開くが、フリートは構わずに頭を下げ続ける。

確かにフリート、ブラック、なのは、ガブモンの四人が全力で動けば、全てのディバイダーとリアクターを回収して、エクリプスウィルスをこの世から消す事が出来る。

だが、それはこの世界が成した事ではなく、フリート達と言う別の世界の人間が成した事だ。

その結果はこの世界には良い影響を与える事は先ず無い。故にフリート達は、『第二の闇の書を生み出す』可能性が高い『銀十字』と『シュトロゼック』以外には手を出す気は無い。

フリート個人の意思としては出来れば全てのディバイダーとリアクターを回収したいが、其処までは行う事は出来ないので、せめて『銀十字』と『シュトロゼック』だけはと思って動いている。

それを読み取ったスバルは、真剣な顔をしながら頷き、手に持っているデータディスクを大切そうに持ちながらフリートに向かって頷く。

「・・・分かりました・・・必ずエクリプスウィルスの悲劇を止めて見せます・・・その果てにどんな真実が在っても、全て明らかにします」

「・・・頼みますよ、スバル・ナカジマ」

スバルの言葉にフリートは笑みを浮かべながら土下座の体勢で再び頭を深く下げて、その後に立ち上がる。

同時に病室の扉がノックされて、キャロを伴ったティアナが病室の中に入り込み、フリートに視線を送ると、フリートは頷いて病室の扉に向かいながらティアナに声を掛ける。

「中庭に行きましょう。其処で八神はやてを氷塊から助け出します」

「分かりました。シグナムさん達を加えた全員を中庭に呼んで来ます」

フリートの言葉にティアナは頷き、中庭に向かって歩いて行くフリートの背を確認すると、シグナム達を呼ぶ為にギンガ達に向かって念話を行うのだった。

銃数分後の病院の中庭。其処には転送用の魔法陣を準備しているフリートと、そのフリートの手伝いを行っているキャロとティアナの姿が存在していた。

その転送陣が運んで来るモノを聞いたティアナとキャロは、少しでも早く準備を終えようと急ぐが、フリートは慎重に準備を進めて行く。

その様子にキャロは気になっていた事をフリートに質問しようと、意を決してフリートに質問し出す。

「あの！」

「ん？・・・何ですか？」

「・・・え～と・・・・・・エリオ君とフェイトさんの事ですけど・・・・フェイトさんから聞きました・・・エリオ君の体の治療は行っ

てくれたみたいですけど・・・・・フェイトさんの両腕は・・・・その」

「・・・・残念ですけど、彼女の腕の治療は行いませんよ。彼女自身が選んだ事ですから」

「でも！？・・・・フェイトさんは・・・・・自分のした事を後悔しているんです・・・・だから・・・・お願いします！フェイトさんの腕を治して下さい！お願いします！！」

キャロはそう叫ぶと、フリートに向かって土下座を行うように深々と頭を下げた。

確かに六年前にフェイトが犯したミスは赦されるものではない。だが、それでもキャロ、そしてエリオにとってフェイトは大切な家族だった。

既にキャロはティアナからフェイト、なのは、そして氷塊から助け出されたはやては管理外世界に永久追放され、その後には二度と行政府から送られた管理世界の人間以外とは接触が禁止される事になるだろうと聞いている。

それが意味するのはキャロとエリオも、行政府からの許可が貰えない限りはフェイトと会う事も連絡を取る事も出来なくなると言う事だ。更には三人とも、それぞれ別の世界に送られ、クロノやリンディと共に二度と会えないと告げられている。

因みにクロノの妻であるエイミィと、二人の子供は、第九十七管理世界から離れて、クロノに付いて行く準備を行っている。行政府関係者も親と二度と子供に会えなくなるのは不味いと判断し、クロノと共にエイミィとその子供達に付いて行く事を許可した。

更にその時に海鳴市に居るなのはの実家にも事情を説明しに、行政府関係者が向かったのだが、その時にかなりの悶着が在ったらしく、事情を説明しに行った行政府関係者は戻った時にゲッソリとなっていたらしい。

話は戻すが、現在、フェイトがまともに両腕を使えない事を知っているキャロは、これからのフェイトの生活の事を考えて、何としてもフリートにフェイトの両腕、或いは片腕だけでも治して貰えないかと頼んでいるのだ。
そう言う事情が分かっているフリートとしては、如何したものかと悩むように顎に手をやりながら考え込む。
実を言えば、今のキャロの頼みは、別の人物ーエリオーからも言われていた。
治療を終えて何とか体が動くようになったエリオは、這うようにしてフリートの下に辿り着き、フェイトの両腕の治療を願い出たのだ。
そして今はキャロからも頼まれている。本気で如何したら良いのかとフリートは悩み続け、最終的に結論を決める。

「・・・・・右腕の治療・・・それだけは行います。左腕の方は私ではなく、別の場所で義手を付けて貰って下さい・・・それが本当に最後のアフターケアです」

「ッ!!・・・・・ありがとうございます!」

フリートの告げた言葉にキャロは嬉し涙を流しながら感謝の言葉を告げ、ティアナも良かったと言うようにキャロの肩に手を置く。
本来ならばフリートからすれば、フェイトの両腕は治療する必要は無いのだが、キャロとエリオの真摯な想いに僅かに心が動き、右腕だけの治療はする気にはなった。最も本当にそれ以上の事をする気は無い。
自身の罪を認めているフェイトも、其処まではフリートには頼りはしないだろう。既にフェイト、そして今はヴィヴィオと共に居るなのはも、自分達が犯した罪を償う覚悟は出来ている。
これ以上の介入はその覚悟を穢す事だと理解しているフリートは、

フェイトの右腕の治療だけで終わらせる事にしたのだ。
その様子にフリートは難しげに、キャロとティアナはフェイトの腕が片方だけでも万全になる事実に喜んでいると、険しい顔をしたシグナム、ザフィーラ、アギト、リインを伴ったギンガ、チンク、ディエチ、ウェンディが歩いて来る。
それを目撃したフリートは自身を射殺さんばかりに睨みつけて来ているシグナム達に顔を向けて、真っ向から睨み合いを始める。

「・・・・・貴様がヴィータとシャマルを殺し、主を凍り付けにした竜人の仲間の女か？」

「その通りですね、『烈火の将』シグナム」

憎しみさえも篭っているようなシグナムの質問に、フリートは淀む事無く答えた。
その瞬間に、シグナム達の全身から殺気が溢れるが、フリートからすればそよ風も同然にしか感じられず、シグナム達を見つめ続ける。

「さて、事情はもう既に聞いていると思いますので手短に説明しますけど…」

「その前に質問良いですか？」

「ん？」

突然質問して来たギンガの姿に、フリートは僅かに小首を傾げると、ギンガは先ほども病院内で目撃した者の姿を思い出しながら質問する。

「さっきですけど・・・・この病院の中でなのはさんに付き添っているヴィヴィオを見ました・・・ヴィヴィオは如何して此処に居るんですか？・・・・ミッドチルダに居るノーヴェの話だと・・・ヴィヴィオが住んでいた家が誰かに襲われて半壊状態になっているらしいんです・・・・・貴女達がヴィヴィオを連れ去って此処に連れて来たんですか？」

「・・・確かに私達が此処に連れて来たのは間違いでは在りません・・・ですが、家を半壊にしたのは別の連中です・・・・連中はあの子を利用する為にヴィヴィオちゃんが暮らしていた家を襲ったんです」

「あの・・・それは誰ですか？・・貴女達じゃなかったら、一体誰が？」

ティアナは恐る恐るフリートに質問した。凄まじく嫌な予感を感じながら。

ヴィヴィオの姿はティアナ自身も確認している。流石に話をしている時間は無かったので、ヴィヴィオから詳しい事情は聞いていないが、少なくとも今のフリートの言葉は偽りではないと経験から直感出来た。

確かにフリート達はヴィヴィオを此処に連れて来たのだろう。だが、そもそもフリート達がヴィヴィオが住んでいた家を半壊にする必要性がない。ヴィヴィオの実力では如何する事も出来ない集団なのだから、家など壊さずにヴィヴィオを簡単に捕まえられる。

では、フリート達で無ければ一体誰がヴィヴィオを連れ去ったのかと疑問をその場に居る全員が覚えていると、フリートはその名を口にするのも嫌だと言うような顔をしながらティアナの質問に答える。

「・・・あの子の家を襲って連れ去ろうとした犯人・・・それは“聖王狂会”の狂信者集団ですよ」

『聖王教会！？』

告げられた組織の名前にその場に居る全員が驚愕の叫びを上げ、シグナム達ベルカ関係者は信じられないと言うように目を見開いた。

それを確認したフリートは、険しい顔をしながら管理局と同様に闇が存在している聖王教会について語り出す。

「管理局に闇が在れば、当然ながら同等クラスに次元世界に影響力を持っている“聖王狂会”にも闇は存在しています。そしてその闇の目的は一つ。“古のベルカの再興”。その為の旗頭として最初にヴィヴィオちゃんを連れ去ろうとしたんですよ、連中わね」

「馬鹿な！？そんな事をベルカの騎士達が行う筈がない！」

「それは個人的な思い込みですね・・・ベルカの騎士だからやらないと言う保障は何処にも無いんですよ。現に法の守護者である管理局だからやる筈がない思っていたら、やっていたでしょう？違法研究を」

『・・・・・』

その場に居る誰もがフリートの言葉を否定する事は出来なかった。

フリートの言うとおり、法の守護者である管理局が犯罪など犯す筈はないと言う先入観を持っていたら、裏では管理局は平然と違法を行い続けていた。その結果が今の世界の惨状である。

ならば、フリートの言うとおり、聖王教会の中にもベルカの復興を望む集団が居ても可笑しくは無い。いや、寧ろ居ない方が可笑し

いのだ。
聖王教会の教義は『ベルカ戦争を終わらせた聖王陛下の偉大さを世界に知らしめる』。
この教義の見方を変えれば、『真のベルカ戦争の勝者はベルカの人間』と言うように見える。だが、今ではベルカは自治区が認められているだけに影響力は下がっている。それに不満を持っている者は聖王教会の中にも確かに居るのだ。
その連中からすれば、今回の管理局の不祥事は動くに最適な状況。それ故に連中はヴィヴィオを攫おうと動いたのだ。自分達が理想とするベルカの復興の旗頭にする為に。

「とは言っても、“聖王狂会”の連中にも調査団が近々送られる予定ですけどね。理由としてヴィヴィオちゃんを攫おうとした件だけではなく、六年前に機動六課に支援していたカリム・グラシアの存在も在りますし、調査を行わない理由なんて無い状況ですからね・・・さて、ではそろそろ話を進めましょう」

ーーーシュン!!

『ッ!!』

「その剣は!?」

「何でお前がその剣を持ってんだよ!?」

突如としてフリートの右手に出現したケーニッヒ・リアクテッドの姿にティアナ達は目を見開き、その剣で重傷を負わされたシグナムとアギトは疑問の叫びを上げた。
その質問に対してフリートは地面にケーニッヒを突き刺し、背後に存在している用意していた転送用の魔法陣に魔力を送りながら答

える。

「この剣は私が改造した剣ですよ。貴女達が戦ったサイファーのケーニッヒは別の場所に保管して在ります・・・・では、コレから八神はやてが封じられている氷塊を呼び出します。準備しておくんですね」

「何だと！？」

フリートの告げた言葉にザフィーラは叫び、事前に事情を聞いていたティアナとキャロ以外は目を見開くが、フリートは気にせずに転送用の魔法陣を発動させる。

同時に魔法陣は強く光り輝き、中心部分が一際光り輝いたと思った瞬間、三十メートルぐらいの氷塊が出現し、その中に居る右手を失い、全身が赤に染まって眠るように目を閉じているはやてをシグナム達は目撃する。

ーーーードン！！

『主！！』

「はやてちゃん！！」

「はやて！！」

氷塊の中に閉じ込められたはやてを目撃したシグナム達は急いで駆け寄るが、ティアナ達は顔を俯かせてしまう。

外側から見てもはやての状態は充分に重傷だと判断出来る。事前に内部をスキャンした時の情報を知っているティアナ達は、改めて見る事が出来たはやての状態に落ち込んだように顔を俯かせる以外

に何も出来なかった。
外側から見てもはやてが生きているかどうかを判別するには困難な状態なのだ。内部をスキャンして手に入れた情報は間違いは無いと改めて理解したティアナ達は、確かにこの状態のはやてを救えるのはフリートしか居ないと理解する。
しかし、シグナム達は自分達で何とかはやてを氷塊の中から救い出す事は出来ないかと動き出す。

「氷ならあたしだ！！オラァッ！」

ーーーゴオオォォォォーーーーー！！！！

アギトは叫ぶと共に両手から炎を撃ち出し氷塊を溶かそうとする。
だが、アギトの炎を受けても氷塊には全く変化が現れなかった。
その事実にシグナム達は目を見開き、ザフィーラは自身の姿を人型に変身させると、右拳を振り被り氷塊に叩きつけようとする。

「コレならば如何だ！？」

「駄目です！！」

ーーーガシッ！！

「ヌッ！！ギンガ？」

いきなり背後から羽交い絞めにして来たギンガに、ザフィーラは驚いて動きを止めた。
それを確認したギンガは、自身が知るはやてが封印されている氷塊についての情報を全て話し出す。

「ザフィーラさん！落ち着いて下さい！この氷塊は強力な削岩機を使っても壊れなかっただけじゃなくて、魔導師の魔法でさえもビクともしない硬度を持っているんです！もし拳を撃ちつけでもしたら、逆に拳が砕けますよ！」

「何だと！？」

「・・・それだけじゃなくて・・・・もし氷からはやてさんを助け出せても・・・五分もしないではやてさんは息を引き取るらしいんです・・・この氷塊は、はやてさんを封じているんじゃなくて・・・寧ろはやてさんの消え掛けている命を繋ぎ止めているらしいんです」

「馬鹿な！？それでは主はやては！？」

顔を俯かせながらキャロが告げた事実にシグナムは愕然としたように叫んだ。

もし本当に今のキャロが伝えた情報が真実ならば、氷塊こそがはやてを護っていると言う事になる。

逆に外にでも無理やり出せば、五分と経たずにはやては死んでしまう。つまりはやてを氷塊から出す為には、五分以内にはやてを助け出す方法が必要なのだ。

だが、如何考えても氷塊の外側から見たはやての状態は五分以内で治療が終わる怪我ではない。寧ろ十数時間に及ぶ大手術が必要だろう。そんな事を氷解を破壊し終えた直後に行える筈は無い。

だからこそ、それを理解した代表達はそれが行えるフリートに依頼したのだ。もちろん報酬も用意していたのだが、はやてに興味は無いフリートは幾ら報酬を詰まれてもやる気が湧かなかったので、なのはの行動が無ければ放置したままだっただろう。

その唯一はやてを氷塊から助け出せて治療が行える希望としか言えないフリートに、シグナム達だけではなく、ティアナ達も視線を

向けてみると、其処には何らかの器具の準備を行っているフリートの姿が存在していた。

「あの～、何をしているんですか？」

「決まっているでしょう。八神はやてが氷塊の中から出て来れたら、即座に応急処置を行う準備ですよ」

「ッ！！氷塊から主を救い出せるのか！？」

「・・・・貴女達次第ですね・・・良いですか、コレから八神はやてを救い出す方法を教えます」

そうフリートは告げると、地面に刺しておいたケーニッヒの剣身を掴んで引き抜き、シグナムに向かって差し出す。

シグナムはＥＣ兵器の一つであるケーニッヒを差し出された事に困惑するが、フリートは早く握ってくれと催促するように動かし、恐る恐るシグナムはケーニッヒを握る。

ーーーガシッ！！

「・・・・・・それで、この剣を渡して如何する気なのだ？・・・・まさか、この剣で氷塊を切り裂いて主を救えというつもりでは…」

「大正解です。そのケーニッヒに貴女達が保有している魔力を全て注ぎ込み、ブラックが施した氷塊の封印を打ち破るんですよ」

『ッ！！』

告げられた方法にシグナム達は驚愕に目を見開き、シグナムの手

に握られているケーニッヒを見つめる。

「ブラックが施した封印は、それこそSランクの魔導師が命を賭けた特攻を行って漸く成功率が十パーセントに達すかぐらいに強力な封印です」

「Sランクが命を賭けて十パーセント！？」

「はい・・・まぁ、他に方法が在るとすれば、真竜ヴォルテールを呼び出して、全身全霊を込めた鉄拳を氷塊に叩きつければ、流石に氷塊は壊れるでしょうけど・・・・内部に居た八神はやても粉々に砕けるでしょうから、お勧め出来ませんね・・・それでも呼びます？キャロ・ル・ルシエちゃん」

「絶対に嫌です！」

フリートの質問にキャロは首を何度も横に振るって否定の叫びを上げた。

流石に死んでしまう事が分かっているのに、ヴォルテールを呼び出したくは無い。第一その方法では確実に氷塊の内部に居るはやても粉々に砕け散ってしまう。

はやてを救うならばフリートが最初に告げた方法以外に無い。だが、それでも命を賭けて十パーセント。その可能性に賭けるしかないのかとシグナム達は顔を険しくするが、フッとティアナは先ほどフリートが告げた言葉を思い出す。

『貴女達が保有している魔力を全て注ぎ込み』

「ッ！！・・まさか！？シグナムさん達だけじゃなくて皆をこの場所に集めたのは！？」

「気がついたみたいですね。確かに一人では十パーセントの成功率ですが、この場に居る全員が全ての力をケーニッヒに込めれば、成功率は格段に増えて七十から八十に引き上がります」

「確実に成功する訳じゃないんですか！？」

「無理ですよ。本来ならば人間が解ける封印ではないんですからね・・・（寧ろブラックの体力が不完全だったから、私の改良したケーニッヒの力と此処に居るメンバー全員で破れる可能性が在るんですからね）」

そうフリートは内心で叫んで来たリインの言葉に呟いた。

本来の万全な状態のブラックが放ったエターナルコフィンだったならば、それこそ同世代の究極体か、究極体と同レベルの力を持っているヴォルテール級ぐらいしか破る事は出来ない。一応、セラフィーモードを使用したなのはならば撃ち砕く事は可能だろうが、それだって封印されている者は確実に消え去るだろう。

不完全な状態で使用されたエターナルコフィン。そしてシグナム達と言う多大な魔力を持った存在と、フリートが改造して切れ味が増しているケーニッヒが在るからこそ、はやてを氷塊内部から助け出す事が出来るのだ。

「かなりの魔力を消費するでしょうが、幸いと言うべきなのか此処は病院ですので安心してください。ちゃんと準備はしておきましたからね」

フリートはそう言いながら、右手で中庭に続く通路に居る救護班達を手で示す。

その様子にシグナム、ザフィーラ、アギト、リインは覚悟を決め

たように頷きあい、ティアナ達に向かって土下座を行う。

「頼む！！お前達の力を貸してくれ！？」

「主を救いたいのだ！？」

「頼むよ！」

「お願いしますです！どうか力を貸して下さい！」

シグナム、ザフィーラ、アギト、リインはそれぞれ土下座を行いながらティアナ達に叫んだ。

自分達の力だけでは、はやてを氷塊の中から救い出す事は不可能。幾らフリートの治療によって完全に独立した存在になっていても、保有していた魔力容量が増えている訳ではない。

フリートの話ではこの場に居る全員で漸く七十から八十の成功率なのだ。自分達だけでは、はやてを救えない事実には悔しいが、主で在り、家族であるはやてを救う為ならば自分達のプライドなど要らないとシグナム達は思いながら頭を下げ続ける。

その様子にティアナ達は顔を見合わせ、意を決したように頷くと、様子を見守っていたフリートにティアナが代表して質問する。

「如何すれば剣に魔力を宿せるんですか？」

「魔力蓄積機能を加えたので、剣の柄を握って魔力を送れば蓄積されていきます。その蓄積した魔力を剣を振り下ろす時に解放して、氷塊を砕く訳です。ですが、この行為にはかなりの剣の腕前が必要になりますので・・・・この場で出来るのは其処にいる『烈火の将』ぐらいですね」

「そうですか・・・・分かりました」

フリートの答えにティアナは頷き、シグナムが握っているケーニッヒの柄を握って、自身の魔力を限界ギリギリまで注ぎ、ケーニッヒの柄は淡くオレンジ色に光り出す。

ーーーボゥッ！

「グッ！！・・・・シグナムさん・・・はやてさんを頼みます」

そうティアナは呟くと、魔力が殆ど無くなったのか荒く息を吐きながら地面に膝をつく。

それを確認したギンガは、次にケーニッヒの柄を握り、自身の魔力を注ぐと、ウェンディ、チンク、ディエチ、そしてキャロも次々にケーニッヒに魔力を送り込んで行く。

「お父さんからも、はやてさんを頼まれているんです・・・絶対に氷塊から助け出して下さい」

「色々と在ったッスけど・・・やっぱり、はやてさんには生きて欲しいッス・・・頼むッスよ」

「どんな形で在れ、我々は六年前に止めてくれ恩が在る・・・どうか私の力も使ってくれ」

「私達の力で救えるなら、安いから・・・・だから、必ず助けて上げて」

「お願いします！私達の皆の力ではやてさんを助けて！その後支えて上げましょう！」

ギンガ、ウェンディ、チンク、ディエチ、そしてキャロはシグナム達に向かって言葉を告げながら、自身の限界ギリギリまで魔力を注ぎ込み、ティアナ同様に荒く息を吐きながら地面に膝をつく。
それを確認したザフィーラとリインは、次は自分達だと言うようにケーニッヒの柄を握り、自身の魔力を送り込みながらシグナムに声を掛ける。

「頼む、将よ。俺にはコレぐらいしか出来ない。だが、どうか主を救ってくれ！」

「お願いしますです！シグナム！！はやてちゃんを助けて上げて下さいです！！」

ザフィーラ、リインはそう言いながら自身の魔力をケーニッヒに送り込み、ティアナ達以上に魔力を消費したのか、指一本動かす事が出来なくなり、地面に完全に倒れ伏してしまう。
シグナムはその様子に覚悟を決めたようにケーニッヒの柄を強く握り、自身の融合騎であるアギトに顔を向ける。

「・・アギト・・行くぞ！」

「応よ！！ユニゾン！イン！！」

ーーーゴオオォォォォォーーー！！！

シグナムの呼びかけにアギトは応じると、アギトの体は光へと変わり、シグナムと一つになった。
その瞬間に、凄まじい炎がシグナムが居た場所から噴き上がり、炎の中から背中に炎の翼を四翼生やし、バリアジャケットを身に纏

って長刀のケーニッヒを右手に握ったシグナムが姿を現す。

「・・・・皮肉だな・・・私達を切り捨てた剣と同じ物で、主を救うのだから」

（あぁ・・・だけど、コイツには皆の想いが宿ってんだ・・・絶対に助けるぞ！！）

「無論だ！！」

自身の内に居るアギトの叫びにシグナムは応じ、両腕でケーニッヒを握りなおし、自身とアギトの魔力を限界寸前まで送り込んで行く。

既にケーニッヒからは膨大な魔力が噴き上がり、解放の時を今か今かと言うように待ち焦がれるように複数の魔力光が剣身から発生していた。

それを確認したシグナムはゆっくりと氷塊の前に向かって歩いて行き、ケーニッヒを正眼に構えながら、自身の主を封じている氷塊に向かって全力で振り下ろす。

「砕けろオォォォォォォーーーーー！！！！」

（砕けやがれェェェェェェェェェェーーーーーー！！！！）

ーーーガキィィィィィーーーン！！

ーーーードオオォォォォォォォン！！

『グッ！！』

シグナムが振り下ろしたケーニッヒが氷塊に激突した瞬間、甲高い音が鳴り響き、同時に凄まじい衝撃波が発生した。
その衝撃に地面に膝をついていたティアナ達は呻き、フリートは中庭以外に衝撃が行かないようにする為に結界を即座に強力な結界を張り巡らして行く。
それを目撃したティアナ達は、結界のおかげで衝撃が病院を襲う事はないと安堵の息を吐き、そのまま氷塊はどうなったのかと目を向け、その目は驚愕に目を見開かれた。
この場に居る全員の魔力を込めて、シグナムの最高としか言えない斬撃を受けても、氷塊は僅かな傷を持った以外は顕在したままだった。
ケーニッヒの剣身を受けている箇所からは、絶えず衝撃波が渦巻き、ケーニッヒを振り抜こうとしているシグナムを弾き飛ばそうと反発し合っていた。

ーーーードオオオオオオオオオオオオオッ！！

「グゥッ！！」

（クソォォォォォーーーー！！なんで砕けねぇんだよ！？）

絶えず襲い掛かる凄まじい衝撃波に全身を傷つけられたシグナムは苦痛の声を漏らし、アギトはシグナムの内で悔し涙を流しながら叫んだ。
この場に居る全員の魔力を限界ギリギリまで注ぎ込んで、シグナムが振り下ろしたケーニッヒを持ってしても氷塊に付けられた傷は僅かでしかない。同時にシグナムは気がついていた。
今僅かでもケーニッヒを振り下ろす為に使っている力を緩めれば、その瞬間に自身は弾き飛ばされてしまう。そして何時までも今の状態が続けられる筈は無い。

何せ氷塊とケーニッヒの間では絶えず衝撃波が放たれているのだ。言うなればシグナムとユニゾンしているアギトは、衝撃波が巻き起こる爆心地のすぐ近くに居ると言う事だ。
そんな所に幾らバリアジャケットを身に纏っていても、シグナムの体が持つ筈は無い。現に既にシグナムのバリアジャケットはいたるところに傷が存在し、血が流れ始めている。
はやてを救えないのかとシグナムが絶望感を抱き、僅かにケーニッヒの柄から力が抜けそうになった瞬間、背後から二つの手が伸びて来てケーニッヒの柄を握っているシグナムの両腕を支え、シグナムの背中にも誰かが支えるように温もりが感じられた。
一体誰なのかとシグナムが僅かに背後に目をやると、バリアジャケットを身に纏って右腕でケーニッヒを握っているシグナムの右腕を支えているフェイトに、同じく白と黒のバリアジャケットを纏い十六歳前後に成長したヴィヴィオ、そしてシグナムの背を支えているスバルが存在していた。

『グゥッ！！』

「ッ！！テスタロッサ！？ナカジマ！？それにヴィヴィオ！？何故お前達が！？」

「コレだけ中庭で衝撃が起きていたら、結界が張られていても分かるよ！シグナム！！」

「なのはママはに頼まれたの！はやてお姉ちゃんを助けて上げてって！それに私も助けたい！はやてお姉ちゃんや！シグナムさん達を！？」

「まだ万全じゃないですけど！支えるぐらいは出来ます！だから！」

「ッ！！分かっている！ハァッ！！」

ーーーガキィィィィーン！！

ーーービキビキ！！

フェイト、ヴィヴィオ、スバルの救援に僅かに余裕が出来たシグナムは、裂帛の気合と共にケーニッヒに力を込めて氷塊に向かって押し込んだ。

同時に氷塊に鋭い亀裂が入り、それを目撃したティアナ達は喜びの笑みを浮かべそうになるが、ティアナ達を護るようにフィールドタイプの防御魔法を使用していたフリートだけは顔を険しくする。

「不味いですね」

「えっ？・・・何が不味いんですか？」

「・・・・・時間が掛かり過ぎました・・・ケーニッヒの剣身が衝撃波に持ちませんよ」

ーーービキビキッ！！

『ッ！！』

フリートの言葉を肯定するように、突如としてケーニッヒの剣身に亀裂が走った。

それを目撃したシグナム、スバル、フェイト、ヴィヴィオは目を見開く。もうすぐ氷塊が砕けると言うのに、使用している武器の方が限界に到ってしまった。

このままでは、氷塊が砕け散る前にケーニッヒの方が砕け散って

しまうと誰もが思うと、フリートは突然に自身のポケットの中に手を入れて、待機状態のクラールヴィントとグラーフアイゼンを取り出す。

「・・・形見として後で渡す予定でしたが・・・悪いんですけど・・・最後に変わった形で役目を果たして貰いますよ！行きなさい！」

ーーーブン！！

フリートは叫ぶと共に待機状態のクラールヴィントとグラーフアイゼンを、氷塊に剣身を埋め込んでいるケーニッヒに向かって投げた。

その行動に何の意味が在るのかとその場に居る全員が疑問を覚えていると、ケーニッヒの剣身にクラールヴィントとグラーフアイゼンが触れ合った瞬間、亀裂の入ったケーニッヒの剣身に翠色と紅色の魔力が注ぎ込まれる。

その二つの魔力光にシグナム、フェイト、スバル、ヴィヴィオは目を見開くが、力が更に加わった事だけは理解し、渾身の力を込めてケーニッヒを振り下ろす。

『砕けろオォォォォォォォォーーーーーー！！！！！！』

ーーーギリギリッ！！

ーーーバキィィィィィィィーーーーン！！！

シグナム達の気合の篭った叫びと同時にケーニッヒの剣身は深々と氷塊の中に入り込み、氷塊全体に亀裂が走り、氷解は跡形も無く砕け散った。

同時にケーニッヒの剣身も跡形も無く砕け散り、フリートは僅か

に悲しげに顔を歪めるが、すぐさま用意していた医療道具を握って、氷塊から抜け出したはやての治療を開始する。
はやての状態はそれこそ一分一秒を争うほどの重傷。氷塊から全身全霊を使ってはやてを助け出したシグナム達の行動を無にしない為に手早く応急処置を済ませて行く。
その淀みの無い手捌きに誰もが唖然とするがフリートは構わずにはやての止血を終えると、今出来るだけの治療を回復魔法を常時発動させながら行い、在る程度の治療を終え、待機させていた医療チームを通信機を使って呼び出す。

「すぐさま手術室に八神はやてを搬送！同時にこの場に居るメンバーの診察をお願いします！八神はやての治療後に全員治療しますので！」

『了解です！！すぐさま全員分のストレッチャーを用意します！』

「お願いします！大体の応急処置は終わりましたので、すぐに八神はやては手術室に搬送…」

ーーーガシッ！！

「ん？」

突然通信機を持っていた腕を左手で掴まれたフリートは疑問の視線を、腕の主であるはやてに目を向けた。
自身に気がついたと分かったはやては、弱々しげに息を吐きながら、フリートに声を掛ける。

「・・待ってや・・・・私よりも・・・・シグナム達や・・・・皆を・・・」

「其方は他の医者達でも大丈夫です。第一貴女がこの場では一番の重傷なんですよ。だから、少し眠っていなさい！」

ーーートスッ！！

「アッ・・・・・」

フリートは叫ぶと同時にはやてに麻酔を注射し、はやては深い眠りにうちにつく。

それを確認したフリートは、やって来た医療チームに指示を出しながら、はやてを伴って手術室へと急行し、シグナム達は他の医者に介護されながらはやての手術の無事を祈るのだった。

その日の深夜近く。

無事に手術を終えたはやては全身を医療器具に繋がれながら目を覚まし、辺りを見回してみると、部屋の外が見える窓ガラスの先で通路の壁に寄り添いながら眠っているティアナ達を目にする。

自身の命が助かったのだと理解したはやては、氷塊が砕け散る直前に目撃した幻影を思い出す。

はやてが目撃した幻影は、死んだ筈のシャマルとヴィータが必死に自身を氷塊から助け出そうとした姿。朦朧とした意識が見せた幻影なのかもしれないが、それでもあの時の光景をはやては忘れられなかった。

そして氷塊から自身を助け出そうと必死になっていてくれていただろうシグナム達の事を思う。

あの氷塊が何によって発生していたのかを、ブラックの詠唱を聞いていたはやては理解している。本来ならば自身を助け出す事など

不可能に近かった筈なのに、氷塊内部から助け出してくれたシグナム達には感謝してもしきれない事だ。
だが、今のはやては何故自分を氷塊の中から助けだしたのかと苛立ちを覚えていた。
もはや今の世界に自身の居場所など無い事をはやては理解している。氷塊の外の世界には、自身が今まで築き上げた全てが存在せず、逆に待っているのは人々の怨嗟の声。
それならばあのまま氷塊の中で眠っていたかったとはやてが思っていると、病室の中にマスクを付けているフリートが入って来る。

「・・・如何やら起きたようですね・・・手術は成功しました。一ヶ月後には病院から出ても大丈夫…」

「・・・何で・・・助けた・・・んや」

「ん？」

呼吸器を付けられながらも弱々しく呟いたはやての声を耳にしたフリートは、僅かに顔を訝しげに歪めながらはやての傍に近寄ると、はやては苛立ちが篭った声を出す。

「・・・そんなに・・・・私を・・・苦しめたいんか？・・・・こんな地獄しかない・・・世界に・・・」

「何か勘違いをしていますね。私は貴女が封じられていた氷塊を此処に転移させて道具を渡しただけですよ。助けたのは貴女の家族である守護騎士達と残っていた特務六課のメンバーです。それとですね。死にたいとかふざけた事を言わないで下さい」

ーーーギン！！

「ッ！！」

フリートは言葉を言い終えると同時に殺気を放ちながら目を僅かに細め、殺気を浴びたはやては目を見開いた。

それを確認したフリートは、ベットの横のテーブルの上に置いてあったはやてのカルテを見ながら声を出す。

「全く・・・他の二人・・高町なのはとフェイト・T・ハラオウンは裁きを潔く受け入れる気になっていますよ。その結果がどんな事になると、もう二人は必ず受け入れるでしょう・・・でも、貴女は自らが犯した罪から逃げようとしている。自分達で言っていたでしょう？管理局法を犯したのならば、キチンと裁かれないといけないってね・・・だったら、自分が言った言葉どおりに最後まで責任を取りなさい。責任者は責任を取る為に居るんですから。それに貴女を助ける為に彼女達は限界ギリギリまで魔力を渡したんですよ？」

そうフリートは言いながら病室の外の通路で、毛布を体に掛けられながら眠るように目を閉じているティアナ達に目を向けた。

ティアナ達は衝撃波が巻き起こっていた中心に居たシグナム、フェイト、ヴィヴィオ、スバルと違って怪我自体は負ってはいなかったが、それでも消費した魔力容量を考えれば、本来ならば病室で安静にしてなければいけない状態なのだ。

にも関わらず、ティアナ達は自分達の身よりも手術が終わったはやての事を心配して病室の前ではやてが目覚めるのを待っていた。最も流石に限界だったのか、途中で眠ってしまい、フリートが気を利かせて毛布を被せたりした。

それはシグナム、ザフィーラ、リイン、アギトも同じだった。特に衝撃波が巻き起こっていた中心にいたシグナムは全身に裂傷を負って、今は体中に包帯が巻かれている状態になっている。

それだけの被害を被って助けたはやてが自らの死を望み、更には助けられた事に苛立ちを覚えられたらシグナム達とティアナ達の行動は報われないだろう。

「貴女には最後まで責任を取らないといけない義務が在るんですから。部隊長としての責任。特務六課の司令として動いた責任。その責任を背負う覚悟で動いていたんでしょう？死ぬのならば、最後まで取ってから死になさい。それが貴女が世界に出来る償いですからね」

ーーーバタン！

フリートはそうはやてに告げると、カルテに何かを書き込んでから病室を出て行った。

残されたはやては、フリートの告げた言葉に悔し涙を流し、枕や布団を涙で濡らして行く。

そして病室から出たフリートは、扉が完全に閉まっているのかを確認しなおすと、窓ガラスから見えない位置ではやての考えを聞いていたシグナム、ザフィーラ、リイン、アギトに目を向ける。

「コレが貴女達、守護騎士が八神はやてを甘やかした結果ですよ。本来の騎士は主が間違った時には誰よりも先にそれを正すのが役目でしょうに、正さずに全面肯定し続けた結果が先ほどの会話です」

「クッ！！」

『・・・・・・』

フリートの言葉にシグナムは悔しげな声を上げ、ザフィーラ、リイン、アギトは何も反論する事が出来ずに顔を暗く俯かせてしまう。

はやての手術が終わった後、フリートは治療が終わったシグナム達を呼んで『はやてが必ず助けられた事を怨む』と告げていたのだ。そんな筈はないとシグナム達は否定したが、現実はフリートの予測どおりになった。

結局はやては自らが犯した罪の責任を取らずに死を望んでいた。

それを先ほどのフリートとはやての会話で思い知ったシグナム達は自分達の今までの行動を鑑みて、暗く顔を俯かせてしまう。

それを確認したフリートは、眠ったふりをしながら聞き耳を立てているティアナ達の様子を確認してシグナム達に声を掛ける。

「貴女達がただ全面的肯定ばかりしていた為に、八神はやては自身が持っている力の本当の危険性を忘れてしまった。消えた『夜天の魔導書』の管制人格は何の為に貴女達を残したんでしょうね？自らの主が行く道を“支えて欲しかったからではないんでしょうかね”？」

『・・・・・・』

（・・・・私達も同罪ね・・・はやてさんだから大丈夫なんて甘えていた為に、今回のような事態になってしまった）

眠った振りをしながらフリートとシグナム達の会話を聞いていたティアナは、自分達もシグナム達と同罪だと思う。

それは同じように眠った振りをしているギンガ、ウェンディ、チンク、ディエチ、キャロも同感だった。そもそも今回のヘイムダル使用の不祥事を引き起こす前に誰が気がつくべきだったのだ。

ヘイムダルがどれだけ危険な魔法なのかは、概要を聞けば大体分かる筈。なのに誰も気がつかず、ヘイムダルは使用されてしまった。

今回は結果的には被害は出なかったが、もし完全に使用されていたらどれだけの被害を何も知らない一般人が被っていたかは想像が

つかない。確かに凶鳥(フッケバイン)のような犯罪者達を捕まえる事は重要な事だが、それで一般人に被害が出てしまったら本末転倒もいいところだろう。
それを改めてフリートとシグナム達との会話で理解したティアナ達は、自分達ががこれからも進む道の険しさを思い、心を引き締める。
正義という言葉に溺れるだけではない。自身の振るう力にも溺れてはいけないのだ。もし溺れれば今回のはやて達のような結果が待っている。自身の行動の結果の責任も背負い、その上で進まなければいけない。
ティアナはその事を改めて理解し直すが、それでも前に進んでみせると内心で誓う。

(一からやり直しね・・・今回の件が終わったら執務官の資格を返上して、一局員としてやり直す。そして改めて目指すわよ。兄さんが目指していた本当の執務官を)

そうティアナは内心でコレから自身が進む道を決めた。
それはティアナだけではなかった。ギンガ、チンク、ディエチ、ウェンディ、キャロも自身がこれからも歩む道の事を考え直し、それぞれ一からやり直す事を内心で誓う。
そのようにティアナ達が改めて自分達の進む道を考えていると、シグナム達と睨み合っていたフリートは突如としてシグナム達に背を向ける。
「・・・・遅いかもしれませんけどね。自分達の今抱いている想いを八神はやてに伝えて挙げるんですね。それが今八神はやてを救う最後の方法ですよ。後病室に入るのならマスクは着用して下さいね」
フリートはそうシグナム達に告げながら、ティアナ達が座ってい

る椅子の端に置いてあるマスクが入った箱を指で示し、明後日行う予定になったフェイトの右腕の治療の準備をする為に借りている診察室へと歩いて行く。
　その背中にシグナム達はもはや声を掛ける事無く、四人は覚悟を決めたように顔を見合わせると、フリートが示した箱からマスクを取り出して着用すると、ゆっくりと病室の扉を開けて中に入り込む。
　突然入り込んで来たシグナム達の姿にはやては目を見開くが、シグナム達は構わずはやてが横になっているベットに向かって土下座を行う。

「主はやて・・・・申し訳ありませんでした・・」

「・・・我らが不甲斐ないばかりに・・主にばかり負債を背負わせ・・・そしてこのような結末に・・」

「・・ごめんなさいです・・・・はやてちゃん」

「・・・すまねぇ・・・」

　シグナム、ザフィーラ、リイン、アギトはそれぞれ土下座を行いながらはやてに謝罪した。
　最もこの程度で自分達の罪が赦されるとはシグナム達は思っていない。犯していた罪は、これから先の人生で償わねばならない。それでも今出来る事は、はやてに謝罪を述べるぐらいでしかない。
　そして突然謝罪されたはやては困惑するようにシグナム達を見つめていると、シグナムとザフィーラは頭を床につけながら一番伝えたい言葉を告げる。

「主はやて・・・今更かもしれませんが・・・此処に一つの誓いを行わせて貰います」

「・・我らは主との平穏を望みます・・・ですが、もし主と我らの望む平穏が違えた時は・・我らは主と戦うやもしれません」

「シグナム・・・ザフィーラ」

「ですが！！もし貴女の望む未来の中に、我々の望む平穏が在るのならば、我々は主の剣となり盾と成って、共に歩み、貴女の体と心を全身全霊を持って今度こそ主を支えて見せます！この誓いだけは絶対に違えません！」

「ッ！！・・・・・・そうやなぁ・・・・・一から全部やり直しや・・・なぁ、シグナム、ザフィーラ、リイン、アギト・・・・私が帰って来た時に、また家族として受け入れてくれる？」

『ハッ！』

「もちろんです！！」

「当然だぜ！！」

はやての質問にシグナム、ザフィーラ、リイン、アギトは迷い無く答えた。

その答えにはやての口元は僅かに笑みを浮かべ、僅かに視線を自身が横になっているベットの隣に置かれていたテーブルの方に向ける。

テーブルの上には、まるで自分達の役目は終わったかのように色褪せて完全に機能が停止してしまっている待機状態のクラールヴィントとグラーフアイゼンが載っていた。

「・・・・・ゴメンな・・・シャマル・・・ヴィータ・・・・そっちには私は・・まだいけへん・・・全部・・・償ってから・・・・・逝くわ・・・・・・・」

そうはやては呼吸器の中で呟き、シグナム達に見守られながらゆっくりと目を閉じて深い眠りに淵につく。

テーブルの上に載っている色褪せた待機状態のクラールヴィントとグラーフアイゼンも、シグナム達のようにまるではやてを見守るように僅かに色褪せた身を輝かせたのだった。

この日から一ヵ月後、在る程度体が回復したはやてはティアナ達に連行されて、新たに仮設された裁判所でルヴェラでの不祥事と機動六課時代の行動による裁判を受ける事になった。その首にはデバイスとしての機能が完全に失われたクラールヴィントとグラーフアイゼンがアクセサリーのように掛かっていた。

最終的にはやてには、所持していた『夜天の魔導書』を没収され、魔力を封印されて禁錮十年の刑期を終えた後に、クロノ達同様に管理外世界に永久追放が裁判で下された。

その世界には既に永久追放が決まっていたシグナム、ザフィーラ、リイン、アギトが存在し、十年後に五人は再会を果たし、その世界に存在している孤児院で寿命が終わるまで働き続けたらしい。

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　エピロー

長らくお待たせいたしました。
今回で特別編は終わり、本編と同時更新です！！

特別編？　凶鳥ＶＳ特務機動六課ＶＳ恐怖の根源・・・そしてマッド　エピロー

次元空間内部。
その空間を第二十三管理世界ールヴェラに向かって高速で移動している一隻の黒い艦艇ー飛翔戦艇（エスクアッド）フッケバインが存在していた。その速さは現行している管理局の艦艇を遥かに上回り、更に某マッドのプログラム改良によって操舵手だったステラが扱っていた頃よりも更に性能は上がっていた。
例え管理局の索敵能力を持ってしても、もはやフッケバインを捉えるのは不可能だろう。その凄まじい機能を誇る飛翔戦艇（エスクアッド）フッケバインは、真っ直ぐにルヴェラに向かって進路を取っていた。
別段ルヴェラを強襲しに行く訳ではない。ルヴェラに人を送り届ける為に向かっているのだ。
現在フッケバインには元の持ち主だった凶鳥（フッケバイン）のメンバーは一人も乗っていない。凶鳥（フッケバイン）のメンバーは全員は、某マッドがとある世界に送ったのだ。
それ故に現在フッケバインに乗っているのは凶鳥（フッケバイン）のメンバーではなく、この世界の管理世界でも恐怖の代名詞として呼ばれ始めているブラックに、フリートとブラックを連れ戻しに来た平行世界のなのはとガブモン、そしてルヴェラで保護したトーマ、アイシス、リリィの六人だった。
その内のブラックはフッケバインの内部の一室で眠りにつき、残る五人が何をしているのかと言うと。

「皆！夕食が出来たよ！」

「分かりました！それじゃ！運びますね！ほら、リリィも！」

「うん」

フッケバイン内部の食堂で夕食の準備を行っていた。
エプロンを身に着けたなのはが調理場から料理をアイシスとリリィに手渡し、渡された二人はトーマとガブモンが用意していたテーブルに食事を並べていく。
次々とテーブルの上に載せられていく料理の数々にアイシスとリリィは楽しげに笑みを浮かべ合い、トーマは苦笑を浮かべながらエプロンを外しているなのはに声を掛ける。

「すいません、高町さん。こんなに料理を作って貰って。一人じゃ大変だったんじゃないですか？」

「気にしないで良いよ、トーマ君。料理を作るのは楽しいし・・・それに明日にはお別れだからね」

「アッ・・・そうでしたね」

なのはの言葉にトーマは僅かに顔色を暗く染めた。
その様子にやはり悩んでいるのかとなのはは思うが、コレばかりは自身で答えを出すしかないと思って追求は行わなかった。
トーマが悩んでいるのは明日ルヴェラでスバル達に会う事だった。エクリプスウィルスの治療を行う為にアイシスとリリィと共にブラック達と共に行動し、ワクチン接種後の経過も良好だと診断されたトーマは、家族であるスバルの下に送り届けられる事になったのだ。
リリィの方もフリートに改良によってエクリプスウィルスは完全に除去され、今後は二度と誰かにエクリプスウィルスを感染されるような事はなくなった。
その事実にリリィは誰よりも喜んだ。何せリリィはその身に宿っていたエクリプスウィルスのせいで沢山の人々を殺してしまった過去が在る。そのせいでトーマにエクリプスウィルスを感染させた事

実も在った為に、リリィは誰よりもその事実に苦しんでいた。だが、フリートのおかげでそれは完全に除去されたので二度と誰かを触れただけで死なせてしまうような事は無くなった。
その事に断片ながらもリリィの過去を聞いたトーマとアイシスも喜び、今日はお別れの事も在ったので小さなパーティーのような感じになっていた。
最もブラックだけは睡眠を取っているので食堂には居ないのだが、それでも数週間は共に暮らしたなのはとガブモンはトーマ達の為に頑張って料理を振るう事にしたのだ。
その事が分かっているトーマは一時自身の悩むのを止めて、なのはが差し出して来た料理を運び始め、その背になのはは優しげに声を掛ける。

「・・トーマ君・・・難しいかもしれないけど、少なくともスバルさんは本当に貴方を家族として受け入れるつもりだったみたいだよ。君と同じように悩んでいるみたいだから」

「・・・ありがとうございます」

「頑張ってね」

そうなのははトーマの背に優しげな声を掛け、トーマは僅かになのはに向かって頭を下げて料理をテーブルに運んで行く。
その背中になのはトーマならば今抱いている悩みを乗り越えられると信じる。出会って数週間だが、トーマは優しい人間だと言う事だけはなのはとガブモンにはよく分かった。それこそ戦いなど無縁な生活を送って欲しいと思えるほどに。
確かにトーマには戦いの才能が存在している。だが、その才能とトーマの優しい心は一致していない。
でなければ自らトーマは死を選んだりしないだろう。幾ら才能が

在るからと言って戦いの道を強要するのは間違っている。自身も再び戦いの道に戻る時は、かなりの覚悟を持たなければいけなかった故に戦いの道を強要する気はなのはには無かった。
“己の道は流されたり、強要されたりして見つけるモノではない”事をブラックとガブモンとの出会いで学んだなのはは、トーマ自身で答えを見つけ出して欲しかった。もちろん相談されたりすれば助言はするが、あくまで助言までである。
そしてなのは、ガブモン、トーマ、アイシス、リリィは並び終えた料理をそれぞれ楽しげに会話をしながら食べ始め、五人はそのまま共に居られる最後の日を楽しく過ごした。

その日の深夜。トーマは自身の相棒であるカメラ型のインテリジェントデバイス―スティードを伴ってフッケバインの通路を歩いていた。

≪全く、いい加減にトイレの場所ぐらいは覚えて欲しいですね≫

「そうは言っても、この艦やたら広いんだからしょうがないだろう、スティード？」

≪その通りですが、場所ぐらいは覚えて下さい。数週間もこの艦で過ごしたんだんですから≫

「とは言っても明日にはルヴェラで降ろされるだけどな・・・・・」

スティードの言葉にトーマは答えるが、突如としてその顔は暗く染まった。
その様子にスティードは自身のミスを悟る。夕食の時には他の皆が明るく振舞って居た事でトーマも悩みを一時は忘れる事が出来たが、悩みが晴れた訳ではないので今の会話でぶり返してしまったの

だ。
何とかスティードはトーマに元気を取り戻して貰おうと声を掛けようとするが、その前にトーマが声を掛けて来る。
「なぁ、スティード・・・俺、スゥちゃんに再会した時に、如何したら良いんだろうな・・・高町さんやガブモン、フリートさんの言うとおり、スゥちゃんは確かに管理局の裏には関与していなかったけど・・・それでも俺が再会してスゥちゃんに迷惑は掛からないかな？」
≪・・・既にトーマがエクリプスウィルスに感染していた情報は管理局のデータベースからも削除されています。更にフリート女史が特務六課のメンバーに貴方がエクリプスワクチンで治療された事を口止めさせていますので、会っても大丈夫な筈です≫
「・・・分かってるさ・・・それでも俺が会って…」
「貴様が悩んでいるのは、クイントの娘の事だけでは在るまい。己自身の内に在る闇の事もだろう」
『ッ！！』
突如として背後から聞こえて来た声にトーマは目を見開き、スティードは無機物でありながらも感じられる圧倒的な威圧感に一人と一体は恐る恐る背後を振り返ると、二人の視線の先に通路にフッケバインの一室で眠っている筈のブラックが立っていた。
トーマはただ立っているだけのブラックから感じられる威圧感に、足がガクガクと震えざるえなかった。見ただけでハッキリと分かる。ブラックの全身から溢れんばかりに放たれている威圧感は、信じられないほどの激戦を繰り広げて来た得たものだと。

トーマ自身スバルに知り合いの高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやてなど管理局で有名な人物と出会った事は在るが、その人物達をただ立っているだけでブラックは上回っていると瞬時に理解出来た。

もし戦いになればエクリプスウィルスに感染して強靭になっていたとしても、自身には敗北の未来しかないとトーマは確信出来る。何よりも既にブラックはフッケバインの本来の持ち主だった凶鳥（フッケバイン）のメンバーに地獄を味合わせているのだ。実戦などの経験が数度しかなく、更にはその時に力を与えてくれていたエクリプスウィルスも既にトーマの体には存在していない。

ブラックに勝てる可能性など存在していない事実を心の底から理解したトーマは、悔しげに顔を思わず歪めると、フッと自身に掛かっていた威圧感が消えている事に気がつき、恐る恐るブラックを見つめる。

それを確認したブラックは、まるで付いて来いと言うように首を動かし、トーマとスティードは疑問を覚えながらブラックについて行く。

そしてフッケバイン艦内の食堂に辿り着くと、ブラックは再び無言でトーマに椅子に座るように促し、トーマは椅子に座りながらブラックに質問する。

「・・何か俺に用が在るのか？」

「・・・少しだけお前と話がしたかっただけだ」

「話って？・・・一体何だよ？」

「・・・・・お前は少しだけ昔の俺に似ているから気になった。だから最後に話がしたくなった」

「似ている？・・・・俺とアンタがか？」

「そうだ・・・・嘗て俺もお前と同じように自らの死を選んだ事が在る。己の存在に悩んでなぁ」

「ッ！！」

ブラックの発言にトーマは目を見開き、その隣に浮かんでいたスティードもブラックにカメラアイを向けた。

その様子にブラックは無言で頷き、クイントやリンディ、そしてルインしか詳しく知らない己の過去をトーマに話し出す。

「嘗て俺はお前がエクリプスウィルスの殺人衝動に悩んだように、この体が世界を歪める事実に苦しんだ。しかもこの体に埋め込まれた理由が、“不要になったから捨てた意思”だと分かった時は内心で笑っていたぞ。その上、殆どのモノを奪われていたからな」

「奪われた？」

「そうだ・・俺がこの体に成る前に持っていた記憶。その殆どを奪われ、名も家族も、如何言う人生を歩んだのかも全て奪われた。丁度お前が自身の故郷を滅ぼされた時のように」

「ッ！！」

「悪いと思ったが調べさせて貰ったぞ。ヴァイゼン遺跡の鉱山の事故の唯一の生き残り。事故で片付けられていたようだが、とんだ見当違いも良い事件だ。管理局の内部のデータベースに存在していた事故の資料。注意深く専門家辺りが見ればアレはこう言うだろう。“完全に人の手によって行われた破壊だとな”」

「・・・・何処に居るんだ？・・・・・アンタはもう知っているんだろう？俺の故郷を壊した奴らを！！」

「・・・・凶鳥（フッケバイン）の負け犬ども名乗っている四組の連中の誰かだろう。丁度先日も第十八管理外世界などと呼ばれている世界で、集落を襲った奴らが居る。その内の本と銃剣のレプリカディバイダーを持った奴らがお前が管理局に言った証言の奴らと一致している・・（最もその二人組みは潰したがな）」

「そいつらは何処に居るんだ！？教えてくれ！？」

「・・・・やはり復讐するつもりか」

「ッ！！」

自身の胸の内を悟られ、トーマは驚愕に目を見開くが、ブラックは構わずに壁に寄り掛かりながら話を再開する。

「本気で復讐を行うのなら教えてやろう。俺も復讐心については理解出来るからな。だが、行うのならば覚悟しろ」

「殺されるかもしれない事か？・・・・・そんなのは出来て…」

「馬鹿が。誰がお前の死だと言った。俺が言った覚悟とは、お前の家族連中や小娘どもも巻き込む覚悟の事だ」

「何を言って？」

「分からんのか？貴様が復讐に向かって返り討ちにあえば、当然奴

らを貴様を家族として受け入れようとした連中は恨み、そして小娘どもは貴様が死んだ事実に嘆き悲しむぞ？」

「ッ！！」

ブラックの言っている意味をトーマは理解し、愕然としたように自身の両手を見つめた。

そう、もしトーマが誰とも親しくならずに一人で復讐に向かえば、結果はともかくトーマや復讐相手にしか犠牲は出ない。だが、既にトーマはスバルやナカジマ家の面々やアイシス、スティード、そしてリリィと言う大切な人々を得ている。

トーマの事を大切に思っている者達からすれば、トーマが死ぬ事は何よりも認められないだろう。

ブラックの言う覚悟とは、復讐を行うにしても、その結果に対する責任が取れるのかと言う覚悟の事だった。

「この艦に乗っていた負け犬ども、そして管理局連中には自身の行いの結果に対する覚悟がない。自分達の役所や存在を理由にして、無関係な連中を好き勝手に殺していた・・・その結果がどうなったのかは、お前は既に見ているだろう」

「・・・・・」

ブラックの言葉にトーマは答える事が出来ずに顔を俯かせた。

凶鳥（フッケバイン）、そして管理局。二つの組織は自分達の存在理由を理由にして、好き勝手に無関係な人々を巻き込むような事を行って来た。その結果、最終的には二つの組織は完膚なきまでに潰された。

管理局にしてもブラック達が確かに手を貸したが、最終的に管理局を否定したのは管理世界に生きる人々。己の行いの結果を考えずに進めば、その先に待っているのは無関係な人々を巻き込んでの崩

壊しかないのだ。
　その事を現状の管理世界で起きている事から理解しているトーマは、ブラックの言葉に反論する事が出来ずに顔を俯かせていると、ブラックは壁から離れる。

「一つ言っておくが、貴様の仇を追うのは構わんが、再びエクリプスウィルスに感染するような事態は避けろ。それはお前を救ってくれた小娘どもへの裏切りだ・・・それにワクチンを作った奴へのな」

「ワクチンを作った？・・フリートさんの事か？」

「違う。確かにフリートもワクチンの精製は行ったが、もう一人、フリートと協力してワクチンを作った奴が居る。ソイツは自身のせいで死んで行く奴らを見続け、俺がアルハザードに連れて行った時に、フリートにエクリプスワクチンの精製協力を頼んだ奴だ。そのせいで無理をし過ぎて今は調整層の中で休んでいるがな」

「自分のせいで死んで行く人達を見ていた？・・・・・・ッ！！まさか！？」

「気がついたか。フリートと共にワクチンを作った存在。それは俺達の世界の『リリィ・シュトゼロック』だ」

「ッ！！・・・アンタの世界のリリィが」

　ブラックの告げた事実に恐る恐るトーマは自身の両腕を見つめた。
　今は何とも無い両腕。だが、それでも確かに体内にエクリプスワクチンを接種された時の事をトーマは覚えている。
　あのフリートが接種してくれたワクチンが別世界のリリィが必死になって作ってくれた物だった事実と、自身を元の状態に戻してく

れた時のリリィの行動を思い出し、トーマは両腕を見ながら苦笑を浮かべる。

「ハハハッ・・・・・助けるって言ったわりに、逆に俺はリリィに助けられていたんだな・・・これじゃ死ねないよなぁ・・・」

≪トーマ≫

「・・・・・EC感染者連中やその背後に居る連中には、何れこの世界の連中が相応の報いを与えるだろう。お前はまだ戻れる。こっちに来るのならば、そして戦いの道を選ぶのならば多くを学んでから覚悟を決めてから来い」

「・・・・・そうさせて貰う・・・・・ありがとう」

トーマはブラックに感謝の言葉を告げると、ゆっくりと椅子から立ち上がって食堂から出て行く。

スティードもトーマの後を追うように移動するが、その前にブラックがスティードに声を掛ける。

「言い忘れていた。小僧に伝えておけ。“過去を忘れる必要は無い。過去が在ってこそ、今のお前が居る”のだとな」

≪了解しました・・・・竜人。トーマに旅を止めさせる“きっかけ”をくれた事を感謝します≫

「・・・早く行け。俺ももう寝るからな」

そうブラックはスティードに向かって素っ気無く言葉を告げると、スティードは頭を下げるように自身の高度を僅かに下げ、トーマの

後を追って行く。
ブラックはそれを確認すると、ゆっくりと食堂から出て行き、自身が眠っていた部屋に辿り着く。
同時にブラックの体は急に傾き、壁に寄りかかりながらズルズルと床に座り込む。

ーーードサッ！

「・・・・・俺らしくも無い・・・・・だが・・・・あの小僧は・・・まだ戻れる・・・・・負け犬どものように憎しみに飲まれるな・・・・・憎しみさえも逆に飲み込んで進め・・・・」

そうブラックはこの場には居ないトーマに向かって呟くと、ゆっくりと瞳を閉じて深い眠りの中に落ちて行くのだった。

とある管理外世界に存在する孤児院。
その場所は戦争などで家族を失った子供達が運ばれて、一時の保護施設として扱われる場所だった。
しかし、戦争が終わったと同時に盗賊やら傭兵崩れが出没するようになり、孤児院は危機を幾度と無く向かえていた。
政府などから送られて来る職員は役に立たず、このままでは子供達が殺されてしまうと孤児院の職員達は思っていた。だが、数週間前に突如として孤児院の近くの森が光り輝いたと思うと、数名の男女が折り重なるように気絶していたのだ。
当然ながら最初は孤児院の職員達は怪しんだが、現れた全員が目を覚ますと同時に恐怖に震え続け、仕方なく孤児院で保護する事にした。
そして数週間の時が経過し、何とか一般的な生活が送れるぐらい

まで精神が回復した元凶鳥首領(フッケバイン)カレン・フッケバインは、孤児院の近くの丘に存在している二つの墓の前で手を合わせていた。
その墓の中に埋葬されているのは仲間だったドゥビルとサイファー。他のメンバーと違って死んでしまった二人は、最終的に遺体を墓の中に埋めたのだ。

「・・・・・・数週間か・・・早いわね。二人が死んで、私達が地獄を見た時から」

ーーーブルブルブルッ！！

自身が地獄を見た時の出来事を思い出したカレンは、両腕で体を抱き締めながら震えた。
カレン、ヴェイロン、ステラ、アルナージ、そしてフォルティスが味わったのは正に地獄としか言えなかった。
喉が枯れるほどに悲鳴を上げても、暴虐は終わる事無く、両腕や両足は再生するはしから潰され、或いは引き抜かれ。頭部を除いた全身の骨と言う骨を潰されると言う地獄を味わった。
命乞いなど関係ないと言うようにブラックはカレン達に、一般人が味わう事が絶対に出来ない拷問と言う名の地獄を与え続けた。それこそ殺してくれと途中で叫ぶ者も居たが、そんな願いをブラックが叶える筈などなく、半日間ずっと拷問は続いたのだ。唯一ステラに関してだけは最初の腕を引き抜かれた後は、他のメンバーよりは軽い暴虐で済まされたが、その後は当然ながら何もする事が出来ずにカレン達の拷問を目の前で見せられ、酷い精神的外傷を負ってしまっている。
現に漸く動けるようになるまで精神が回復したのはカレンとフォルティス、そしてヴェイロンの三人だけで、未だにステラとアルナージは精神が回復する兆候さえも見せずに部屋の中で縮こまっているような状態である。更には急に半狂乱になったように暴れる事も

在り、常に施設の職員が一人はついていなければ自殺しても可笑しくない状態だった。
そのようにカレンは現状を思い出しながら、自分達がこの世界に来る直前に着ていた服の中に入れられていたフリートからの手紙をポケットとの中から取り出す。

「・・・・・“この世界で死ぬまで生きろ”ね・・・・・外の世界に出れば、即座に私達がワクチンでエクリプスウィルスから脱した事を公表する・・・・命は助かったけど、もう何もする気が起きないわね。凶鳥(フッケバイン)は完全に潰れたわ」

もはやカレン達の心は完全に折れていた。
命が助かったから、ブラック達に復讐を行う気など全くカレンには湧かない。寧ろ今生きていられるのは、ブラックとフリートの気まぐれでしかないのだ。もう一度戦うどころか、二度と会いたく無いと言うのがカレンの本音だった。
何よりも既に無敵を叫んでいられた力の源で在ったディバイダーとリアクターは全てブラック達に奪われ、エクリプスウィルスも治癒されたのだ。もはやカレン達は生身の人間でしかなく、デバイスなども存在していないこの世界では魔法をまともに使用する事も出来ない。
更に手紙には旅行中だった他のメンバーや親戚も近々地獄を味合わせてから、この世界の何処かに送られると記されていた。
あのブラックとフリートだけではなく規格外の魔導師であるなのは、更には魔法とは全く違う力を振るうガブモンが相手なのだ。残りのメンバー全員が束になっても勝てる可能性はゼロだと言うのがカレン達の本音だった。先ず間違いなく自分達がブラックから味わった地獄か、或いはフリートの扱う毒で苦しめられてからこの世界に送られるだろう。
完全に凶鳥(フッケバイン)は終わったのだとカレンは思いながら立ち上がると、

背後から慌てているにフォルティスが走って来る。

「カレン！！ヴェイロンから連絡が入って、例の盗賊連中がこっちに向かっているらしいですよ！」

「そう・・・なら、子供達と職員は地下に倉庫に避難。後ステラとアルもね。張り巡らした罠で相手が混乱している隙に、制圧するわよ」

「了解です・・・しかし、僕らの傭兵家業は変わりませんね」

「まぁ、この世界にツテがない私達が出来るのはこれぐらいよ。一応身体強化の魔法は使えるし、大抵の連中には負けないわ・・・・・それじゃ行くわよ。私達を助けてくれた孤児院を護りにね」

そうカレンはフォルティスに向かって僅かに微笑みながら声を出し、自分達を受け入れてくれた孤児院を護りに行くのだった。

数年後、この世界で一つの護衛専門の自警団が名を上げる。だが、その自警団は決して誰かから奪う事などせず、寧ろ力の無い人々から感謝される集団だった。その組織に敵対した盗賊などは名など存在しない筈のその集団をこう呼ぶ。

“凶鳥（フッケバイン）”盗賊や犯罪者達に凶兆を与える集団として、世界にその名を知らしめるのだった。

ルヴェラに存在する病院の手術室前。

手術室の前には松葉杖を二つ横に立て掛けているエリオと、心配げに手術室を見ているキャロが居た。

今手術室の中では先日のキャロの頼みを聞き入れたフリートと、

病院の医師達がフェイトの右腕の手術を行っている。
フリートと言う死ぬ寸前だったはやてを治療した人物が手術を行っているとは言え、それでもフェイトの事が心配だったキャロと、何とか松葉杖をつきながらでは在るが歩けるようになったエリオはこうして手術室の前でフェイトの治療が無事に終わる事を願っていた。
先ほどまではなのはとヴィヴィオも一緒に居たのだが、既に二時間近く待っている事も在って今は飲み物を買いに行っている。
そのように二人が手術室から出て来るであろうフェイトの事を待っていると、心配げにキャロがエリオに声を掛けて来る。

「エリオ君・・・・体は大丈夫なの？」

「・・・・・・リハビリは必要だけど、何とか大丈夫だよ」

「良かった・・・・・・ねぇ、エリオ君・・・コレから如何するつもりなの？」

「・・・・・　一からやり直そうと思っているよ・・・このまま管理局を辞めて一般人に戻ったら、本当に僕らが犯した罪の償いにはならないから・・・最初から全部やり直そうと思ってるんだ」

「・・・私も同じだよ・・・・最初からやり直そうと思ってる」

キャロはそうエリオに自身の考えを告げた。
二人とも、このまま管理局を辞める事だけはするつもりは無かった。それでは自分達の行いのせいで出してしまった人々の犠牲を無駄にするような事でしかない。
もしかしたらフェイトは管理局に残る事を望まないかもしれないが、例えフェイトに言われてもエリオとキャロは管理局を辞める気

は無かった。
自分達が本当に望んだ事を、今度こそやり遂げる為にも管理局に残る道を二人とも選んだのだ。
そのように二人が自分達の行く末について考えていると、手術室の扉の上に存在していたランプの色が赤から青に変わり、手術服を身に纏って口にマスクをつけたフリートが出て来る。
その姿に一瞬だけエリオとキャロは凄まじい悪寒を感じるが、フリートは気にせずに帽子をマスクを外して二人に声を掛ける。
「終わりましたよ。フェイト・T・ハラオウンの右腕は完全に治療が終わりました。後は何処かの別の病院で左腕に義手でも取り付けて貰って下さいね」
「ありがとうございます！！」
キャロはフリートに向かって深々と頭を下げ、エリオも松葉杖を使って立ちながら頭を下げた。
それを確認したフリートは僅かに頷くと、二人の間を通り過ぎながら声を掛ける。
「今日は彼女とは話は出来ないでしょうけど、明日目覚めたらよく話し合う事ですね。次に会う事や話す事が何時になるか分からないんですからね」
そうフリートはエリオとキャロに声を掛けると、その身を通路の曲がり角に入れて二人の視界から姿を隠し、エリオとキャロはその背に向かって頭を下げ続けた。
そしてフリートは自身が誰にも見られていない事を確認すると、着ている服の中から試験管に入った赤い血を楽しげに眺める。

（クスクス、旨く手に入りました。私達の世界では既に滅んだアルザスの民の血。コレとフェイト・T・ハラオウンの価値では比べ物になりませんよ）

フリートがフェイトの右腕の治療を了承した本当の理由は、アルザスの人間であるキャロの血こそに在った。

この世界では如何だかは分からないが、フリート達の世界ではアルザスの民は自らの所業によって追放したキャロ以外に誰一人生き残っていない。全員が共に暮らしていた竜か、或いは契約していた竜に惨殺されてしまっているのだ。

その為に以前から竜と共に生きる事が出来ていたアルザスの理由を調べたかったフリートは、唯一の生き残りで在るキャロの血を手に入れたかった。だが、それは出来なかった。

何せフリート達の世界のキャロの実力は、この世界のキャロとは比べものにならないほどに高い。更にはリュウダモンと言う究極体の進化を会得しているデジモンに、フリードリッヒとヴォルテールと言う強力な二体まで存在しているのだ。もっと言えばキャロはその気になれば、ヴォルテールの配下の竜達全てを呼び出す事が出来る。流石にそんな相手の血を手に入れるのはフリートでも難しく、諦める寸前だった。

だが、この世界のキャロならば血を手に入れる事は簡単に出来る。フェイトの右腕の治療の報酬にキャロの血をフリートは手に入れたのだ。

（血液が足りないので輸血を求めたら簡単に了承してくれましたからね。『ゼロ因子』を保有していたトーマ君の血液や髪の毛などの体の一部。ディバイダーやリアクター。更にはアルザスの巫女の血。楽しい研究材料が沢山手に入りました・・・・・ウゥ、でもケーニッヒが・・・・帰ったら必ず修復して上げますからね）

そうフリートは内心で呟きながら、翌日にトーマがこの場所に訪れる事を伝える為にスバルが居る病室に向かうのだった。

翌日の昼頃。
漸く治療が完全に終わったスバルに、ギンガ、ウェンディ、チンク、ディエチなどのナカジマ家の面々は病院の前でトーマが来るのを待っていた。
昨日の内にフリートからトーマが今日の昼頃に来るのは分かっていたので、こうして病院に居たナカジマ家の面々全員で待っているのだ。ティアナ、キャロは家族の再会と言う事で席を外している。
そしてその場に居る全員がトーマが来るのを待っていると、スバル達の視線の先でリリィとアイシス、そして道案内をして来たと思われるフリートが映る。
その姿にスバルはすぐにでも飛び出したい気持ちになるが、それを何とか押し込めてトーマ達が来るのを待っていると、トーマ達はスバル達から僅かに離れた場所で立ち止まり、フリートは三人から離れる。

「それじゃ、私は本当にコレで失礼しますよ。どうか元気で頑張って下さいね」

「色々とありがとうございます」

「ありがとね、フリート」

「あの！本当にありがとうございました！・・・そっちに居る人にも頑張ってって！伝えて下さい！」

「必ず伝えますよ。リリィちゃんも勉強頑張って下さいね」

リリィの言葉に意味が分かっているフリートは笑みを浮かべながら頷き、その身の周りに転移用の魔法陣を発生させると、その場から転移する。

それを確認したアイシスとリリィは、家族との再会の自分達は無粋とだと判断すると、トーマの両手を二人で握りながら声を掛ける。

「頑張りなさいよ！」

「トーマ・・・自分の気持ちを伝えて上げて・・・・皆、トーマの事を本当に大切に思っているみたいだからね」

「アイシス・・リリィ」

アイシスとリリィの励ましの言葉にトーマは僅かに嬉しげな笑みを浮かべ、アイシスとリリィはそれを確認すると、僅かにトーマから離れる。

トーマは二人に向かって頷くと、ゆっくりとスバル達の方に足を進め、在る程度の距離になると足を止めて、自分の事を見ているスバル達に声を掛ける。

「・・・その・・・・色々と何を話せばいいのか悩んでいたんだけど・・・・コレだけは最初に言うよ・・・・『ただいま、スゥちゃん、皆』

「ッ！！トーマ！！」

ーーーギュッ！

トーマの言葉に遂に限界に達したのかスバルは走り出し、トーマを強く抱き締めた。
それと同時にギンガ、チンク、ウェンディ、ディエチもトーマに駆け寄り、心配げにそれぞれトーマに声を掛ける。

「体は大丈夫？」

「お前の状況は毎日聞いていたが、心配でなぁ・・・本当にもう大丈夫なのか？」

「うん・・大丈夫だよ、ギンガさん、チンクさん」

自身の事を心の底から心配してくれていたギンガとチンクの様子に、トーマは場違いながらも僅かに嬉しい気持ちを抱きながら答えた。
その答えにスバル達は心の底から安堵の息を吐く。エクリプスウィルスがどれほど危険なウィルスなのかをスバル達は知っている。フリートからは完全にトーマの体に感染していたエクリプスウィルスを除去したと聞いていたが、やはりこうしてトーマの無事を確認出来たからこそ心の底から安堵する事が出来た。
そして六人は再会を心の底から喜んでいると、フッとトーマは真剣な顔つきに変わり、スバル達に何かが来ると思いながらトーマの言葉を待つ。

「・・スゥちゃん・・・皆・・・俺さ・・・ミッドの学校に進学しても良いかな？」

「トーマッ！・・・それって」

「・・うん・・・皆の家族になりたいんだ」

トーマは何処か悩むような顔をしながらも、自身の想いをスバル達に伝えた。

今回のエクリプスウィルスの件に関わる前から、トーマにはナカジマ家の人々から養子縁組の話を貰っていた。その踏ん切りをつける為に進学前にトーマは旅していたのだが、先日のブラックとの会話で多少は踏ん切りをつける事が出来た。

今更かもしれないが、スバル達と家族になりたいと思っている自身の本心に気がついたのだ。

トーマは自らが出した答えにスバル達がどんな答えを返してくれるのかと、悩みながらも待っていると、フッとスバルに暖かく抱き締められる。

「・・・ありがとね、トーマ・・・私ね・・・もしかしたらトーマに嫌われたかもしれないって思っていたんだ・・・管理局が、私達が見逃していた罪をトーマはどう思っているのか、ずっと考えていた」

「スゥちゃん・・・・」

「でも、今のトーマの答えで私もハッキリ自分の気持ちが分かった・・・家族になって欲しい・・・良いかな？」

「・・うん・・・スゥちゃん・・・ありがとう・・・俺に優しさを、暖かさをくれて本当にありがとう」

そうトーマは自身の本心をスバルに伝えると、スバルとトーマは互いに強く抱き締めあいながら涙を流し、周りに居たギンガ達も嬉し泣きしながらトーマを見つめる。

その様子を離れたところで見ていたアイシスとリリィは、無事にトーマとスバル達が再会出来た事を喜び合うのだった。
この後、正式にナカジマ家の養子になったトーマは、ミッドチルダのとある学校に進学して勉学に励む。
その学校には実家からの許可を貰ったアイシスも入学し、二人は学校で仲良く過ごし合う。
そして同様にナカジマ家に住む事になったリリィは、自身の過去に犯してしまった所業を償う為に医者の道を歩む事を決意し、トーマの通っている学校に入学する為の勉強を行い出す。
また、何故かナカジマ家にリリィが住む事になった時に宛先不明人からの手紙が届き、同時に多額の預金が入っている預金通帳がリリィ名義で届いた。その差出人が誰なのかは即座にナカジマ家の面々は分かり、その預金を使ってリリィは医者になる為の勉強に励むのだった。

最後になのはとフェイトに関してだが、機動六課時代に捜査官だったフェイトはともかく、教導官と言う捜査には余り関わらなかったなのはに関しては在る程度の恩赦が与えられた。
なのはは最終的に遺族関係者やヴィヴィオに関するベルカテロの関係も在る程度落ち着くまで、身を隠すと言う意味も兼ねて無人世界カルナージに二年間の保護観察処分。その後に地球への移送が裁判で下された。また、ヴィヴィオに関しても友達との連絡に関してはかなりの制限が設けられてしまったが、保護監察官に選ばれた人物を伴っての通信は赦される事になった。在る程度聖王教会に関する取り締まりが決まるまでは、友達である者達との連絡が取れない事をヴィヴィオは悲しんだが、取り締まりが決まった後は連絡が自由に取れるようになると告げられ、その日が来るのを待っている。
そしてフェイトは捜査官と言う重要な職につきながら事件を見逃していた責任を取らされ、魔力永久封印の後にリンディやクロノとは全く別の管理外世界に永久追放が下された。

互いに連絡を取れるのも保護監察官の許しが出て、監視下に置かれている状況でしか赦されない事が決められた。だが、保護観察期間内の問題を犯さなければ、何れは連絡を自由に取れるので二人とも大人しく指定された世界で暮らしているらしい。
なのはは最終的に地球に帰還した後は、母親である桃子の指導の下、ヴィヴィオと共に翠屋を継ぐ道を選び、フェイトは時々連絡が届くエリオとキャロから話を聞きながら、自らが住んでいる世界に在る孤児院で働き続けた。
尚、管理局本局内の無限書庫で働いていた某室長はなのはに会えるように進言したらしいのだが、判決が甘くなる事が在る為にその許しが貰えたのは十年以上先の出来事と告げられ、自身の恋に絶望してしまったらしい。

アルハザード内部、大型武器庫倉庫内部。
その場所はフリートが趣味や研究やら何やらで開発した大型の武器類が大量に存在している場所だった。
全長十メートルは在るほどの装甲車に、巨大な艦艇が何隻も存在していた。更にはヴィヴィオの見ているアニメなどを参考にして作った人型のロボットらしき物も何十体と立ち並んでいる。
そしてそのようなフリートの趣味と研究が満載した兵器群の場所に、突如として光が発生して艦艇の形を象ったと思われた瞬間、黒き飛翔戦艇(エスクアッド)フッケバインがその身を出現させた。

ーーードォン!!

現れたフッケバインは立ち並ぶ艦艇の一箇所にその身を納め、全ての機能を停止させた。
同時にフッケバインの装甲板の一部が開き、その場所からブラッ

クが現れると、真っ直ぐに倉庫の出口へと向かい出す。

ーーードン！！

「・・・俺は部屋に戻って眠る・・・・・二度と俺を巻き込むな」

そうブラックはフッケバイン内部に居るフリートに向かって声を掛けると、振り返る事無く自身が眠っていた部屋に向かって歩いて行く。

その様子を確認したフリートは恐る恐るフッケバインの内部から出て、周りへの警戒心を最大にしながら歩き出す。因みになのはとガブモンは、バージョン？の『平行世界に行ってらっしゃいガン』を使って向かったブラックとフリートと違い、初期の『平行世界にいってらっしゃいガン』を使ったので此方の世界の時間経過で一日経たないと戻って来れないので、明日にならないと現れない。

ーーーガクガク、ブルブル！

（な、なのはさんと、ガ、ガブモンのは、話だと・・・リ、リンディさんが阿修羅になって、お、怒っているら、らしいですから・・・・ヒィッ！！）

耳に届いて来た僅かな物音にフリートは飛び上がらんばかりに恐怖に震えた。

どんな屈強な相手でも恐怖を感じる出来事でも平然と笑えるフリートだが、リンディのお仕置きだけは完全に別だった。幾ら実力と言う点では、在りとあらゆる開発した道具を使って互角に持ち込めるとは言え、フリートはリンディに勝てる気がしない。既に本能からしてフリートはリンディに敗北しているのだ。

特に今回のお仕置きは間違いなく今までの比では済まない。何せ

体調不良で眠っていたブラックまで巻き込んでしまったのだ。失敗すればルインまでもお仕置きに参加するかもしれない。
故にフリートは出来るだけ物音を立てないようしながら、自身の隠し研究室に向かおうと通路を深く静かにしながら歩いて行く。
そして後一歩で隠してある研究室に辿り着きそうになるが、そんな事を今のリンディが許す筈が無かった。

「あら～♪フリートさん？何処に行くのかしら」

ーーービキッ！！

背後から聞こえて来た声にフリートの体は、石のように固まってしまった。
声の主はその様子に楽しげな笑みを深め、フリートは錆びた機械が無理やり動くような音を立てながら背後へと振り返り、天使のような微笑を浮かべているリンディと、冷たい目をしている、ルインを目撃する。

ーーーギリギリギリッ！！

「リンディサン・・・ルインサン・・・イッタイ・・ナンノ・・ゴヨウデショウカ？」

「聞く必要が在るのかしら？」

「体調不良のブラック様をよくも巻き込んでくれましたね、フリート」

（ヒィィィィィィーーーーー！！！）

何処までも優しい声のリンディと、感情を感じさせない声のルイン。対照的な二つの声を耳にしたフリートは、全身が恐怖に凝り固まった。
確実に今回のお仕置きは今までのレベルを遥かに超える事になるのは間違いない。アチラの世界でなのはとガブモンが告げていたように、潰し六千回では本当に済まされないだろう。
何とか逃げる方法は無いのかとフリートは即座に思考を開始するが、そんなフリートの期待を裏切るようにリンディが声を掛けて来る。

「逃げようとして無駄よ、フリートさん。ダークエヴォリューション」

ーーーギュルギュルッ！！

リンディが小声で自身の進化を告げる言葉を呟くと、リンディの全身を黒いデジコードが覆い尽くす。
その様子にフリートはバイオ・ズドモンに進化するつもりなのかとフリートは思うが、デジコードの中から現れたのは、三つの顔を全て怒りに染め、四本の腕を持った魔人型デジモン－フリートへの絶大な怒りが与えた進化体－バイオ・アシュラモンだった。

「バイオ・アシュラモン！！」

「ほんとに阿修羅ですかァァァァァァァァァァーーーーーー！！！！？？？？？」

バイオ・アシュラモンの姿を目撃したフリートは、絶叫を通路内部で響かせた。
そしてバイオ・アシュラモンに進化を終えたリンディはゆっくり

と四本在る腕を確かめるように動かし、フリートに向かって構える。
それを目撃したフリートは即座に逃げようとするが、その体に黒い鎖が次々と巻きつき、完全に動きが封じられてしまう。

ーーーガシィィィィーン！！

「こ、コレは！？バイディングチェーン！？ルインさん！」

「さっき戻って来たブラック様は酷く疲れていました。赦すと思っているんですか？フリート」

バイディングチェーンでグルグル巻きになって床に倒れ伏したフリートに、ルインはやはり感情を感じさせない声で答えた。
別段リンディやクイントと違って、ルインはフリートが外に出ても全く気にしない。世界が如何なろうとルインには関係ないのだから。だが、今回はブラックをフリートは巻き込んでしまった。
ただでさえ深い眠りについていなければいけない状態のブラックを、巻き込んだのだからルインがフリートを赦す筈は無い。
その声にこの場には味方が居ない事を悟ったフリートは絶望感が心の底から湧き上がり、ゆっくりと四本の腕を振り被っているリンディに目を向けると、リンディは一切の手加減無く振り下ろす。

「この馬鹿マッドォォォォォォ！！！！！一度その体が粉々になって反省しなさい！！阿修羅神拳（あしゅらしんけん）ッ！！」

ーーードドドド

リンディが渾身の力を込めて放った阿修羅神拳(あしゅらしんけん)を全身に食らったフリートは、絶叫を通路の内部に響かせた。
しかし、それでもリンディは止まる事無く拳を打ち下ろし続け、拳が止まった時には床は完全に陥没し、その場にはフリートが居たと言う痕跡は一切残っていなかった。

「・・・ハァ～、明日には絶対に復活しているでしょうね」

「でしょうね・・・さて、フリートが持って来たフッケバインのデータを調べましょう。行った世界にどんな迷惑を掛けたのか調べておいた方がいいでしょうから」

「そうね。行きましょう」

ルインの呼びかけにリンディは頷き、二人はフリートが乗って来たフッケバインへと向かうのだった。

フリートの隠し研究室内部。
その場所には幾つもの人が入れるだけのカプセルが存在し、フッとコンソールの光が走ったと思うと、一つのカプセルが起動し始める。

≪第四百五十ボディの完全消滅を確認。意思素体移行を開始。第四百五十一体ボディを起動≫

ーーープシュウゥゥゥゥーーーー！！！

「ゲホゲホッ！！・・・ハ、ハ、ハ、本当に死ぬかと思いました」

カプセルの入り口が開くと、内部に入っていた先ほどリンディが消滅させた筈のフリートが出て来る。
そしてカプセルの中から出たフリートは、素早く用意していた新しい服を身につけ、リンディに消滅させられる前に転移させておいた荷物袋の中から今回の戦利品の数々を机の上に並べていく。

「フフフフッ、やはり平行世界は素晴らしいです！私達の世界で手に入らない物も沢山手に入りましたからね！・・・次は一分間で戻って来れる『平行世界行ってらっしゃいガン』を作製して見せますよ！！ハハハハハハハハハハハッ！！」

隠し研究室の中にフリートのマッドな笑い声が響き渡った。
マッドの暴走は止まらない。次にマッドが向かう世界は何処なのか、それは誰にも分からなかった。
因みにこの後、この計画がリンディにばれてフリートのお仕置きが行われたのは言うまでもない事だった。

水棲デジモン達の脅威　前編

アルハザード、フリートの研究室。
その場所でデーモンとの戦いを終えたなのは、ガブモン、ティアナ、クダモン、そして部屋の主であるフリートが、治療カプセルの中で眠っている少女―“冥王・イクス・ヴェリア”―を見つめていた。
デーモンとの戦いの後、ディアボロモンとイクスを連れてなのは達はアルハザードに戻り、戦いの余波の影響を受けて気絶してしまったイクスの治療をフリートにお願いしたのだ。
因みにルーチェモンとの邂逅の後に倒れたブラックは別室でルインに回復魔法を掛けられながら深い眠りについている。
そして共に来たディアボロモンは何かを思い悩むようにイクスから離れて、同じく別室で待機している。

「う～ん？」

「如何ですか、フリートさん？イクスちゃんは大丈夫なんですか？」

「・・・完全に元の状態に戻すのは難しいですね。レイジングハートが記録して来たデータも如何やら完全ではなかったようですし・・・第一ですね。こんな年端もいかない容姿の少女の体からは、こんな物騒どころか、人の尊厳を穢すような兵器の作製機能なんてオミットした方が良いですよ」

「む？・・・どのような機能が彼女には備わっているのだ？遺跡の奥深くに眠っていたのだから、特殊な存在だとは分かっていたが」

「・・・“屍兵器精製機能”」

『ッ！！』

フリートが告げた不吉過ぎる言葉になのは、ガブモン、ティアナ、クダモンは凄まじい嫌な予感に襲われた。

“屍兵器精製機能”。如何考えても真っ当な兵器の呼称ではない。寧ろ危険極まりない兵器の呼称だと思いながらなのは達がフリートを見つめていると、フリートは一つのデータをなのは達の目の前に映し出す。

「屍兵士・・・正式呼称『マリアージュ』。ブラックとルインさんが破壊した遺跡の中に存在していたデータベースから発見した古代ベルカの兵器の一つです」

（しっかりとブラック兄さんとルインさんが遺跡を破壊する前にデータやベルカの遺産は回収していたんですね）

（こう言う遺産にはフリートは目が無いからな・・それ以上の技術を持ちながらも、アルハザードが姿を消した後の文化は気になると言う事か）

自分達に隠れてしっかりとベルカの残した遺産やらデータを回収していたフリートに、ティアナとクダモンは内心で不満を漏らしながらジト目でフリートを見つめる。

それはなのはとガブモンも同じなのか、ジト目でフリートを見つめ、フリートは気まずそうに咳払いをする。

「コホン・・・話は進めますけど、この子、イクスヴェリアはそのマリアージュを産み出す為の核を体内から無限に生産出来る機能が本来ならば備わっていました」

「備わっていましたって事は、今は無理なんですか？」

「正解です、ガブモン。現在彼女にはこの機能は一応は備わっていますけど、色々と機能不全に近い状態です。本来備わっていたマリアージュに対する命令や指揮系統の機能も機能不全です。同時にコレはかなり危機的状態でしたね」

「如何言う意味ですか？フリートさん」

「・・・実はですね・・もう二、三年前ぐらいですけど、実は私、各管理世界に放っているサーチャーの一つで起動しているマリアージュを偶然にも捉えた事が在るんですよ」

「何だと？・・・それではまさか、古代ベルカ時代から生き残ったマリアージュが今も現代に残っていると言う事なのか？」

「その通りですよ、クダモン・・・如何にも他のベルカ遺跡から手に入れたマリアージュのデータからですと連中は人語は解するんですけど・・・知能が昆虫並み等しいみたいなんです・・しかも如何見ても機能が異常をきたしていたんですよ。もしイクスヴェリアが生き残っている事を知っていた場合、確実にマリアージュは個体数を増やそうと彼女を狙っていた筈なんです。何時彼女が目覚めたのかは知りませんけど、目覚めたと分かれば確実にマリアージュは彼女の下に訪れていた筈なんですが？」

ーーーガチャン！

「・・・ソノトオリダ」

「ディアボロモン！！」

研究室の中に足を踏み入れて来たディアボロモンに気がついたガブモンが叫び、他のメンバーもディアボロモンに目を向けると、ディアボロモンは何処か落ち込んだ印象を放ちながらイクスが入っているカプセルに近づく。

因みに分裂していたもう一体のディアボロモンは、戦闘終了後に突如としてデータ粒子に変わり、再び一体のディアボロモンに戻った。目撃したルインの話だと、恐らくは三大天使の科した制約の内に一つだと考えられるらしい。

ディアボロモンはゆっくりとイクスの前に辿り着くと、なのは達に自身が遺跡の中で戦った相手の事を話し出す。

「・・・キミタチガ・・・ボクラガイタ・・・イセキニ・・クル・・・スコシマエニ・・・ヘンナヤツラガ・・・ヤッテキタ・・・ヤツラハ・・イクスニ・・リョウキヲ・・・フヤシテ・・モラウト・・・イッテイタ」

「フム、もしかしてですけど？・・・その連中倒した後に爆発なんてしませんでした？」

「・・・アァ・・タシカニ・・ヤツラハ・・・ボクガ・・タオシタアトニ・・・バクハツシタ」

「あの人型みたいに開いていた壁の穴は、そいつ等を倒した時の爆発の後だったのか」

「フリートさん、もしかして？」

「間違いなくマリアージュですね・・・連中は行動不能になった後

に、自らの体を燃焼液に変化させて自爆するんですよ・・・恐らく生き残っていた仲間か部下を発見して数を増やしていたんでしょう。そしてディアボロモンが目覚めさせたイクスヴェリアの反応を辿り、あの遺跡に辿り着いていた。最もまさか、その場所にディアボロモンが居るとは夢にも思ってなかったでしょうけどね」

「・・・・ソウダ・・・ヤツラハ・・イクスヲ・・ミズカラノ・・リョウキヲ・・フヤス・・ドウグトシテミテイタ」

「千年以上動いていたから、何処かそのマリアージュにも機能不全が起こっていますね。本来はそのような行動を取る事は出来ない筈です。イクスヴェリアはマリアージュを操作出来る機能が備わって居ます。幾らその機能が使用不可能に陥っていても、イクスヴェリアを利用する考えなんて浮かぶ筈は在りませんから」

フリートは自身の知る情報とディアボロモンが伝えてくれたマリアージュに関する情報の違いに、険しい声を出した。

幾ら現在のイクスがマリアージュに対する指揮や命令を行う機能が使用不可能になっているにしても、そのマリアージュ達の行動は如何考えても可笑しい。万が一、そうなってしまった時に安全装置ぐらいは本来はマリアージュに備わっている筈なのだ。

(考えられるとすれば、ベルカ時代に誰かがマリアージュ内部にウィルスを組み込んでイクスヴェリアを殺すように命じていたか・・或いは長い年月動き続けて不良を起こしていたか・・・・考えても分かりませんね。何せ残っていたマリアージュは確実にディアボロモンが全部壊したんでしょうからね)

そうフリートは内心でアッサリとマリアージュに対する考えを放棄した。

何せ生き残っていたマリアージュは既にディアボロモンに破壊されているのだ。跡形もなく消滅した者は、幾らフリートでも調べようが無い。
それ故に一先ずマリアージュに関しての考えは放棄しようとフリートは決めると、ディアボロモンが思い悩む顔をしながらフリートに声を掛けて来る。

「・・キキタイコトガアル・・・イクスハ・・・ドレグライデ・・カラダガ・・ナオル？」

「フム・・・・・・そうですね。スカリエッティから貰っておいた戦闘機人に関する情報と私の技術力ならば三日ぐらいで完全に治療は終わって、治療カプセルから出られるでしょう」

「ミッカ・・・・・ナラ・・スグニ・・オシエテクレ・・・“ボクハ・・イッタイ・・ナニヲシタンダ”？」

「はい？」

ディアボロモンの質問の意味が分からずフリートは思わず小首を傾げると、事情を知っているなのは達が説明をフリートに行い出す。

「あの・・実はディアボロモンとブラックさんは知り合いみたいなんですよ」

「それにルーチェモン共知り合いみたいで、ルーチェモンはイクスちゃんがディアボロモンの過去を知ったら拒絶するって言っていたんです」

「拒絶？・・・・・・・・・・アッ！！もしかして九年ぐらい前に

ブラックとルインさんがオファニモンの依頼で回収したデジタマ！アレがディアボロモンのデジタマだったんですね！」

なのはとガブモンの説明にフリートは思い当たる節が在った事を思い出した。

九年ほど前、まだ管理世界にデジモンの反応が出ていなかった時に、一度だけブラックはルインと共に自身の故郷に戻った事が在る。残念ながらその時に何が在ったのかはフリートは知らない。

何せ当時はネックレスの機能も今ほど性能が良かった訳ではないし、更にブラックとルインが故郷に戻った時は調整の為にリンディに頼んでアルハザードに持って来て貰ったのだ。

だが、断片的は在るがフリートとリンディはその時に起きた出来事を知っている。

“ブラック同様に世界に否定された存在と戦いに向かい、デジタマを三大天使の世界に運んだ”。

其処までしか残念ながらフリートは知らず、ディアボロモンの質問には答える事が出来ないのだが、フリートの言葉で自身の過去を知っていると判断したディアボロモンは両手をフリートの肩に置く。

ーーードン！！

「ゲフッ！！」

「オシテクレ！！・・ナニヲシタンダ！？イッタイ！ボクハ！・・・ナニヲ！？」

「痛い！凄く！痛いですよ！！助けて下さい！！」

究極体のディアボロモンに力を込められながら両手を肩に置かれているフリートは苦痛の叫びを上げながら、隣に居るなのは達に向かって助けを求める。
その叫びになのは達は即座に動き、ディアボロモンを落ち着けようと、フリートに伸ばしている両腕を掴みながらそれぞれ声を掛ける。

「落ち着いて！ディアボロモン君！」

「今君は究極体なんだ！？」

「幾ら潰されて、粉々にされても、更には原形を留めなくても復活するフリートさんでもキツイわよ！」

「その通りだ！死んでも可笑しくない攻撃でも平然と生き残るフリートだが、流石に究極体はキツイぞ！」

「何気に完全体なら大丈夫な発言をしないで下さい！ティアナ！クダモン！！」

自身の存在を何気に化け物呼ばわりしているティアナとクダモンに向かって、フリートは体を襲う痛みも忘れて叫んだ。
その様子にディアボロモンは多少落ち着きを取り戻し、ゆっくりとフリートから手を離すと、深々とフリートに向かって頭を下げる。

「・・スマナイ・・・アノ・・デジモンノ・・ハツゲンデ・・・アセッテイタ・・・イクスハ・・タイセツナ・・ヒトナンダ・・・・ボクハ・・・」

「・・気にしないで良いですよ・・それと残念ですが、私も良く知

らないんです。多分ですけど、一度ブラックとルインさんが別の地球に向かった時に回収したデジタマのデジモンが、貴方だったんでしょうけど」

「ガブモン君も知らないの？」

「うん。僕がブラックさん達と一緒に行動していた時には、一度もブラックさんとルインさんが別のデジタルワールドに行ったなんて話は聞いた事がないよ」

「となれば、ルインから聞くのが一番だな」

「そうね。それじゃとにかくルインさんを呼んで来ま…」

ーーーブゥーーン！！

「その必要はないぞい！」

「僕らが説明するよ」

『ッ！！』

突如として研究室内部に叫びながら入って来たボコモンとネーモンの姿に、なのは達は驚いた。

その様子にボコモンとネーモンは頷き、信じられないと言うように自分達を見つめているディアボロモンに優しげながらも何処か悲しげな雰囲気を纏ってボコモンが声を掛ける。

「・・・ルインはんから聞いてまさかと思ったが・・・久しぶりじゃのう・・クラ・・いや、もう究極体のディアボロモンか・・・元

気そうで何よりじゃ」

「うん・・・・・本当に大きくなったね。別れて数ヶ月ぐらいなのに」

「・・・“トウサンタチ”」

『ハァッ！？』

ディアボロモンの発言になのは達は間の抜けような叫びを上げて、ディボロモンとボコモン、ネーモンに目を交互に向けるのだった。

一時間後。ボコモンとネーモンからディアボロモンの事情を聞いたなのは達は難しげな顔をして、ボコモンに確認するようにクダモンが質問する。

「話を纏めるぞ。つまりブラックの故郷の地球の電子データ内部で最初にディアボロモンは生まれ、信じれない速さで究極体に進化した。その時にディアボロモンは遊びで、“核ミサイルを撃ち出した”訳だな」

「その通りじゃ・・ワシらもオファニモン達から事情を聞いただけじゃがなぁ」

「その時は最終的に世界中の人々が、ディアボロモンと戦っていたその世界のパートナーデジモンだったオメガモンに力を送ってディアボロモンを倒した訳ね？」

「その通りじゃ、ティアナはん」

「僕らはそう聞いているよ。だけど、その二年後ぐらいにディアボロモンは蘇ったんだって」

「その時のディアボロモンはオメガモンに復讐する気じゃったらしい。そしてその復讐心を利用してディアボロモンを裏から操っておったのが…」

『ルーチェモン』

ボコモンの言葉に続くようになのは、ガブモン、ティアナ、クダモン、そしてフリートは苦虫を噛み潰したような顔をしながら声を出した。

九年前から既にルーチェモンは活動していた事には驚いたが、その用意周到の無さには言葉が出す事が出来なかった。

ブラックが当時のディアボロモンを背後で操っていた存在に気がつけたのも、ディアボロモンが口を滑らせたかでしかない。もし口を滑らせていなければ、ブラックでもディアボロモンの背後に居た存在には気がつけず、行動が僅かに可笑しかったとして思えなかっただろう。

改めて自分達が戦う存在に恐ろしさを感じ、なのは達は覚悟を更に決めなければと思っていると、嘗ての自身の所業に苦しんでいるディアボロモンに目を向ける。

「・・・ナンテコト・・ボクハ・・・シテシマッテイタンダ・・・」

「ディアボロモン・・・・すまんかった。このお前さんの過去を知らせるのは、お前がもう少し成長してからとネーモンと決めていたのじゃ・・・」

「うん・・・でもね。もう君は昔の君じゃないよ。だって見つけら

れたんでしょう？本当に心が赦せる相手を」

「・・・・・・スコシ・・ヒトリニ・・シテクレ・・・トウサンタチ・・・・ハナシテクレテ・・・アリガトウ」

そうディアボロモンはボコモンとネーモンに感謝の言葉を伝えると、ゆっくりと研究室から出て行く。

暗さしか感じられないディアボロモンの背中に、ボコモンとネーモンは自分達のミスを思って落ち込む。

「・・やはり一人でデジタルワールドに残すべきではなかったのう」

「うん・・・でも、そのおかげでディアボロモンは漸く見つけられたんだよ。自分の最高のパートナーを」

「・・少し確認したいのだが、お前達がブラックとルインが回収したデジタマから生まれたディアボロモンを育てたのだな？」

「その通りじゃ、クダモン。その関係で一度ルインはんとは会った事が在るのじゃ」

「では、インフェルモンまで奴を進化させていたのだな？」

「違うよ。僕らが育てていたのは幼年期のクラモンの頃だけだよ」

「えっ！？ちょ、ちょっと待ちなさいよ！貴方達がこっちの地球に来たのは三、四ヶ月ぐらいでしょう！？その時にクラモンで・・・・・なのはさんとガブモンが遺跡で出会った時には完全体のインフェルモン・・それで今は究極体のディアボロモン・・・・僅か三、四ヶ月で正式にパートナーも得ていないのに究極体に進化したって事

なの？」

『ッ！！』

ティアナの発言にデジモンの進化について知っているなのはとフリートは顔を見合わせ、ガブモンとクダモンも思わず口を開けながらディアボロモンが出て行った入り口に目を向ける。

ディアボロモンの進化速度は異常としかなのは達には思えなかった。コレがパートナーを得ているデジモンならば話は別だが、ディアボロモンとイクスは正式なパートナーでは無い。

なのにディアボロモンは既に究極体に進化している。異常過ぎる進化速度になのは達が困惑に顔を染めていると、事情を知っているボコモンが話し出す。

「本来のディアボロモンの進化速度を考えれば遅過ぎるぐらいなんじゃ。ワシらがオファニモンに聞いた話じゃと、嘗てのディアボロモンは生まれて半日も経たずにして究極体に進化したそうじゃからな」

「馬鹿な！？生まれて半日も経たずに究極体だと！？」

「そうじゃ・・・じゃが、それこそがディアボロモンの最大の不幸じゃった。力は究極体でも、中身は生まれたての幼年期。善も悪も無い。完全に無垢な存在じゃった。だから、遊びで核ミサイルなんて言う兵器も撃ち出せたのだとオファニモン達は言っておった。しかも起爆を封ずる方法がディアボロモンを倒す以外になかったからのう」

「遊びで核ミサイルなんて撃たれたら堪らないけどね」

「確かに堪らん。失敗すればその世界の人々の多くは死に、戦争にまで発展していただろうからな」

「じゃが、それはあくまで昔のディアボロモンの事じゃ・・・今のあやつには何の関係もないのじゃが・・パートナーに成ってくれるかもしれんこの子が受け入れてくれるか如何か？」

そうボコモンは悲しげに呟きながら、カプセルの中で眠るように目を瞑っているイクスに目を向ける。

ディアボロモンが今一番恐れているのは間違いなく、イクスに自身が拒絶されるかも知れない事だろう。だが、コレばかりはイクスとディアボロモンの自身でしか答えを出す事が出来ない。

当人で居ないボコモンやネーモン、そしてなのは達が何かを言って解決出来る問題ではないのだから。

出来る事ならばイクスには、ディアボロモンの過去を知っても受け入れて欲しいとその場に居る全員が思っていると、フッとフリートはリンディからの指示を思い出し、なのはとガブモンに声を掛ける。

「アッ！そうでした！なのはさん、ガブモン！実は向かって欲しい世界が在るんですよ？」

「ん？如何言う事だ？現状ではなのはやガブモン、そしてティアナと私も地球に向かうべきでは無いのか？・・・奪われてしまったのだろう？残っていた『炎』と『風』のスピリットが」

そうクダモンは険しい声で地球で起きてしまった現状を呟き、その場に居るフリートを除いた全員の顔が強張る。

既にフリートから残っていた二つのスピリットがドミニモン達に奪われてしまった事と、そのスピリットの持ち主だった拓也と泉が

洗脳されてしまっている情報をなのは達は聞いていた。
　まさか、自分達がブラックを止める為に地球を離れている間に、そんな事になっていたとは思ってなかったなのは達は、輝二達と共に一刻も早く拓也と泉を助け出そうと考えていた。
　だが、在る情報を手に入れたフリートは、リンディとクイントとの相談の結果、なのはとガブモンに在る世界に向かって貰わなければいけないと判断していたのだ。

「・・実はですよ。漸く発見したんですよ。ブラックと一緒に此方の世界に来た別世界の地球の人とそのパートナーデジモンが居る世界が」

「ッ！！本当ですか！？」

「はい・・如何やら第二十管理世界の人々と一緒に、人が全く住んでいない環境が整った世界に移動していたようなんです・・・・ですが、問題はその世界に近々ベルカ自治領の人々が送られると言う情報が届いたんですよ」

「何だと！？それは不味いぞ！？万が一、滅ぼされた第二十管理世界の人間達が生きていると言う情報が管理局本局に渡ったら！？」

「えぇ・・・先ず間違いなく本局は彼らを殺そうとするでしょう。更に如何やら彼らは秘密裏に各管理世界に接触を図って、デジモンとの和平を進めているらしいんです。その情報が本局に知られでもしたら、どうなるか考えるだけで恐ろしいです・・ですから、リンディさんとクイントさんが、なのはさんとガブモンにその世界に向かって欲しいと伝えてくれと頼まれたのです」

「・・・・確かに不味いですよね・・・分かりました。体力と魔力

が回復したらすぐにガブモン君と一緒に向かいます。ティアナ、クダモン君。私達が居ない間、地球や皆の事をお願いね」

「僕らの分まで頼むよ」

「分かっています。なのはさんとガブモンも無事に戻って来て下さい」

「必ず護ってみせる。其方も気をつけてな」

ティアナ、クダモンはそうなのはとガブモンに声を掛け、なのはとガブモンは二人に向かって頷くと、フリートが告げた世界に向かう為の準備を始める。

それを確認してフリートはイクスの治療を行う為の準備を始め、ボコモンとネーモンはディアボロモンの心配しながら部屋を出て幼年期デジモン達が居る場所へと向かうのだった。

一方その頃。機動六課訓練施設。

その場所では訓練用のシュミレータが起動させられ、複数のビルが立ち並ぶ場所になっていた。

そのビルの間を十六歳ぐらいまで成長してバリアジャケットを纏ったアインハルトと、ストラーダを構えたエリオが互いにビルの間を駆け抜けながら激突し合っていた。

「フッ！！」

「クッ！！」

ーーーガキィィィーン！！

一瞬の隙を衝いて繰り出して来たアインハルトの拳を、エリオは右手に握っていたストラーダで防御した。

そのままエリオは素早くストラーダを持ち直し、アインハルトに向かって振り抜こうとする。

だが、その動きは突如として止まり、アインハルトに追撃を受けないようにしながら背後へと飛び退くと、直前までエリオが居た場所を魔力弾が通り過ぎる。

ーーービュン！！

「クッ！」

「旋衝破（せんしょうは）」

ーーーバシッ！！

（ッ！！不味い！？）

≪ソニックムーブ！！≫

ーーードン！！

エリオが避けた魔力弾をアインハルトは素早く左腕を伸ばす事で受け止め、エリオに向かって掲げる。

それを目撃したエリオは高速移動魔法であるソニックムーブを使用し、辺りのビルの壁を跳ねるように移動してアインハルトから離れる。

アインハルトは自身から高速で離れて行くエリオに、左腕に持っ

ている魔力弾を当てるのは不可能だと判断すると、エリオが移動しようとしているビルの壁に向かって投げつける。

「其処です！！」

ーーーブン！！

ーーードォン！！

「クッ！！」

自身が向かおうとしていた先で爆発が起きたのを確認したエリオは、ソニックムーブを解除して、自身に向かって駆けて来るアインハルトに向かってストラーダを構え直し、二人は激突を再開する。

その二人の戦いぶりをかなりの距離が離れたビルの屋上でライフルモードの『ストームレイダー』を構えながら見ていたヴァイスは、苦笑いを浮かべていた。

「全く・・・・正直自信が無くなりそうだなぁ・・・俺なんかよりも充分にあっちの二人が機動六課の戦力になりそうだぜ」

「俺からすれば、この距離から精密に俺の指示通りに弾が撃てる貴様の方が恐ろしいがなぁ」

苦笑を浮かべながら呟いたヴァイスの横に居たレオルモンは、そうヴァイスの精密射撃に賞賛の言葉を出した。

その言葉にヴァイスは僅かに誇らしげな笑みを浮かべるが、すぐさまストームレイダーに付いているスコープに目を移し、今度はエリオに向かって拳を振り抜こうとしているアインハルトに向かって

魔力弾を撃ち出す。

ーーードン！！

「・・・・・今度は失敗したようだぜ、レオルモンの旦那」

「そのようだ。やはりまだまだ辺りへの注意が疎かになっている」

二人の視界の先には魔力弾の直撃を受けて、体勢が崩れてしまったアインハルトに追撃を行っているエリオが映っていた。

今、アインハルトとエリオは訓練の真っ最中だった。内容は『敵と戦っている時に、遠方から撃たれる魔力弾の対処』。戦いの場では何が起こるかは分からない。誰かが放った攻撃が間違って飛んで来る可能性も充分に存在している。

その時に即座に対処が行えるようにする為に、今回の訓練はレオルモンの指導の下に行われていた。

前回のアインハルトの試験から二週間近く。体の治療が終わったアインハルトや、入院していたシグナム、リインフォース、そしてユーノや新たにユーノと契約を結び直したアルフなどのメンバーが終結していた。

だが、機動六課の本来持っている戦力が加わっても、次の任務先には本当に命を賭けざるえない戦場だった。何故ならばその場所には『究極体のデジモンが存在している可能性が在ると言う情報が地上本部と機動六課に届いていた』。

事の起こりは数日前。機動六課の新たな任務先についての会議が行われた時から始まる。

機動六課会議室。その会議室内で部隊長の八神はやて、監査官の

オーリス・ゲイズ、機動六課副部隊長のゲンヤ・ナカジマと復帰したシグナム、リインフォース、ユーノ、アルフ、そしてヴィータとザフィーラを含めたＦＷメンバーにアインハルトとベアモンなどの主要メンバー達の他にオブザーバーとしてレオルモンが集まっていた。

「・・・さて、次の機動六課の任務先が決まったわ。入院していたライトニング分隊長シグナムとリインフォース分隊長が復帰し、新たにユーノ分析官とその使い魔のアルフ、それに民間協力者のアインハルトとベアモン陸士が機動六課に加わってくれたけど・・・・次の任務先は此処に居るメンバー全員でも生きて帰って来れる人間はおらへんかもしれへん」

『ッ！！』

はやてが告げた事実にシグナム達や１０８部隊の隊員達は目を見開くが、事情を知っているオーリスとゲンヤは、はやての言葉に同意するように深く頷く。

その様子を目撃した会議室内に居る全員が次の任務先は何処なのかと思いながらはやてを見つめると、はやては視線でシャリオに合図を送り、シャリオは真剣な顔をしながらモニター画面に映像を映し出す。

そのモニターに映った画像に全員が視線を向けてみると、モニターには大海原だけが存在し、自分達が破壊すべき対象であるダークタワーの姿は影も形も存在していなかった。

モニターに映る映像に誰もが疑問を覚えながら首を傾げ、ギンガは手を上げながら質問する。

「あの八神部隊長？・・・・ゲート、いえダークタワーは何処に在るんですが？・・・映像を見る限りでは映っていないようですけど？」

「・・・・この映像に映っている水深約二百メートル前後・・・・その場所からＡＭＦの反応が感知されとる・・・つまり、映像に映っている大海原の水深約二百メートルから八百メートル以内の何処かにダークタワーは確実に存在しとるんや。探査機なども使用して情報を集めようとしたんやけど・・・・全部破壊されたわ」

『ッ！！』

告げられた事実に会議室内の全員が目を見開き、モニター画面に映っている大海原を見つめた。

今まで破壊して来たダークタワーは、何処に在るかはその巨大さによって視界で捉えれる事が出来ていた。だが、今回は違う。場所もハッキリと分からない上に、ダークタワーが存在している場所は海の中。

幾ら魔導師でも海の中を当ても無く捜索するなどバリアジャケットを身に纏っていても不可能だ。

更には探査機が破壊されたと言う事は、海の中にはデジモンが存在していると言う事になる。どんなデジモンなのかと皆が不安に思うと、はやては再びシャリオに指示を出して、今度は海の中を何かが探索している映像を映し出す。

「無人の探査機を使ってダークタワーを捜索していた時の映像や・・・皆覚悟してみてな」

そうはやてが険しい声で告げると、全員が集中して映像を見だす。

ダークタワーの正確な位置までは分からなくても、少なくとも探査機を破壊したデジモンの姿だけは映し出されている。コレから戦う相手はどんなタイプのデジモンなのかと見極めるようにモニター画面を誰もが見つめていると、モニターに一瞬だけ金色の金属色を

した何かが映ったと思われた瞬間、突如としてモニター画面から爆発音が鳴り響き、砂嵐のような映像に移り変わる。

ーーードゴオオォン！！

ーーーザザザザザザーーーー！！

「・・・今のは一体？」

「一瞬だけ金色の金属みたいなのが見えたけど・・・それだけじゃ分からねぇ…」

「・・・まさか『メタルシードラモン』か」

「えっ？メタルシードラモン？」

シグナムとヴィータの疑問に答えるようにレオルモンが告げたデジモンの名前を横で聞いていたアインハルトが呟き、会議室に居る全員がレオルモンに顔を向ける。

「・・・今の映像だけでは確証は持てんが、水中で金色の金属の体を持ったデジモンと言えば、『メタルシードラモン』以外に考えられん」

「・・・やっぱりそうですか・・・シャーリー、三つ目の映像をお願いや」

「了解です」

はやての命令にシャリオは頷き、即座にはやての指示通り三つ目

の映像をモニター画面に映し出す。
全員がそのモニターに目を向けてみると、蛇のような長い体を金色の金属で覆い、鼻の部分が砲塔になっているサイボーグ系のデジモンが海から姿を現している映像が映し出されていた。
そのデジモンの姿にレオルモンは苦虫を噛み潰したような顔をしながら、モニター画面に映っているデジモン一『メタルシードラモン』の姿を睨む。

「間違いなくメタルシードラモンだ・・・・究極体だ」

『ッ！！』

告げられたメタルシードラモンの世代に会議室内にいる全員が騒然となった。
今まで機動六課が戦って来たデジモンの最大世代はX抗体タイプも加えて完全体まで。一応は聖王教会の時にエンシェントボルケーモンやメギドラモンと言った究極体デジモンとも相対したが、メギドラモンと戦ったのはレオルモンに、オウリュウモンに進化したキャロとリュウダモン、そしてキャロが召喚したヴォルテール。
エンシェントボルケーモンに関してはカオスデュークモンが戦ったので相手にしていない。その後にグロットモンをはやてとレナは倒しているが、それはあくまで体力を失っているグロットモンを倒したので在って、究極体のエンシェントボルケーモンを倒した訳ではないのだ。
今回の任務こそ機動六課が本格的に究極体と一戦を交える事になる任務だった。会議室内部の誰もがはやての言葉の意味を理解する。本当に全員が生きて帰って来れる可能性は限りなく低かった。
その事を理解した全員がそれぞれ顔を見合わせていると、更に悪い情報をはやては無表情に告げる。

「更に悪い情報が在るわ。今回の任務・・最悪の場合は究極体二体を相手にする事になるかもしれへん」

『なっ！？』

「信じられへんと思うけど、その可能性は充分に考えられるんや・・・シャーリー、最後の映像を」

「了解です・・・映します」

ーーーブン！！

はやての指示にシャリオは従い、モニター画面を操作して先日聖王教会での出来事の時に現れたエンシェントボルケーモンの姿を映し出した。

「このデジモンは私とヴィータが目撃したところ、グロットモンが進化した究極体デジモン。レオルモンさんの言うところ、『エンシェントデジモン』と呼ばれているデジモン達の一体や。全部で十体居るそうやけど・・・問題はこのデジモン達こそが十闘士達の真の姿と呼んでいいデジモンと言う部分や」

「本来ならばエンシェントデジモンが現れる事など不可能に近い筈なのだ」

「何故だ？元々十闘士達の真の姿なのだろう？ならば元に戻る事など」

「確かに貴様の言うとおりだ、烈火の将。だが、考えてみろ。エンシェントデジモン達は自らの力を『剛』と『柔』の二つに力を分離

させた。二つに別たれた力が再び一つに戻る為には膨大なエネルギーが必要になる。それも究極体の中でも上位級に匹敵するエネルギーがなぁ」

「それだけのエネルギー反応が現れれば、地上本部のセンサーに反応が現れる筈です。ですが、そのようなエネルギー反応は現れず、更には地上本部が保管しているエネルギー関係のロストロギアは全て無事ですので・・・・レオルモンの言うとおり、何故十闘士達がエンシェントデジモンに戻れたのかは謎です」

そうレオルモンの説明を補足するようにオーリスが言葉を告げ、隣に居たゲンヤも深く頷く。

エンシェントデジモンの詳細についてレオルモンから説明を聞いたオーリスとゲンヤは、第一に地上本部が保管しているエネルギー関係のロストロギアが盗まれたのではないかと考えた。

だが、レジアスが調べたところそのような報告は挙がる事は無く、全てのロストロギアの無事が確認された。その事実に地上本部の面々は喜んだが、逆に何故グロットモンがエンシェントデジモンに戻れたのかと言う謎が残されてしまった。

レオルモンも情報の少なさから答えが出る事は無く、十闘士の居場所を捜索しているガオモン達からも疑問しか返って来なかった。

直接本人達から聞くしかないと理解し、はやてはグロットモンを倒した時に問い詰めるべきだったと自身の失態を憎んだ。時間が無かったとは言え、せめて何故エンシェントデジモンに戻れたのかと言う情報だけは聞くべきだったのだ。

ーーーギシッ！！

（完全に私の失態や・・・・グロットモンが他の十闘士達と接触する前に倒そうと考えて急ぎ過ぎたわ・・・必ず今回の任務で十闘士

達がエンシェントデジモンに戻れた理由を聞き出してみせる！）

そうはやては強く右手を握り締めながら内心で宣言した。

そのままはやてはゆっくりと右手を開き、モニター画面に映っているエンシェントボルケーモンの映像を右手で叩いて注目を集める。

ーーーバシッ！！

「一番の問題はエンシェントデジモンが一体だけの筈が在る訳ない。必ず残りの十闘士達もエンシェントデジモンの力を取り戻しとるに決まってる」

「つまり主・・・二体目の究極体と言うのはエンシェントデジモンと言う事でしょうか？」

「部隊長や、シグナム・・・・そう言う事やから各員覚悟を決めておいて貰うわ。では、今回の作戦についての取り決める。全員それぞれ意見を出して貰うわ」

そうはやてが告げると、次々と何とか姿を映す事が出来た今回の任務先に居るデジモン達の姿を映し出し、それぞれの意見を聞いて作戦の詳細を決めて行くのだった。

そして現在。何とか作戦が在る程度決まり、機動六課隊長陣とFWメンバーはそれぞれ課せられた訓練を行っていた。

今回の作戦の要と呼んで良いスバルは現在、サーチモンと共に機動六課隊舎近くの海の中に潜って訓練中。

ギンガはザフィーラと共にはやてが凍らせた海の上で、互いに模擬戦を繰り返し。

ヴィータ、シグナムは完全体に進化したリュウダモンとキャロと

空中で模擬戦を。
リインフォースは、はやて、ゲンヤ、オーリス、リインと共に作戦に使う予定の影響範囲などの話し合いを行っている。
そして最後のエリオとアインハルトは、レオルモンとヴァイス、そしてベアモンの監督の下に訓練を行っていた。

「そろそろ決着がつきそうだな」

「確かに・・・ならば、模擬戦が終わった後は、少し休憩を挟んでからエリオは烈火の将から訓練を受け、アインハルトはベアモンと共にデジソウルの訓練だな」

「・・・どれぐらい使いこなせて来ているんだ?例のデジソウルとか言う力は?」

「・・・・まだ、漸く初歩を学び終えた程度だ。成熟期ならば在る程度は戦えるだろうが、完全体相手はまだ不可能だろう。ベアモンが居れば話は別だろうがなぁ」

「そうか・・・だけど、ベアモンもサングルゥモンには進化出来なくなったんだろう?」

「その通りだ」

ヴァイスの質問にレオルモンは険しい顔をしながら頷いた。
先日のアインハルトが終わった後に、機動六課に入隊させられたベアモンだったが、何故かベアモンは成熟期体だったサングルゥモンへの進化が出来なくなってしまっていた。
その事実にはベアモンはショックを受けたが、サングルゥモンと言う危険な性格をしていたデジモンに戻らずに済んだ事をオーリス、

ゲンヤ、そしてはやては喜んだ。訓練器具や備品などをサングルゥモンは壊していたのだから、その安堵は当然だろう。
話は戻すが、進化が出来なくなったベアモンは落ち込みながらもアインハルトと訓練をし続け、少しずつでは在るが親睦が深まって来ていた。コレならばディーアークが出現するかもしれないと、ベアモンのパートナーで悩んでいたオーリスは喜んだのだが、ディーアークが出現する気配は全く無かった。

「それにしても分からねぇな。食事や訓練も一緒にしているのに、何で、ディーアークが出現しねぇんだ？俺の時は喧嘩しながらでも、サーチモンとのディーアークは結構早く現れたんだが」

（・・・考えられる原因は、やはりデジソウルか・・・・・一応フリートに頼んでは在るが、奴も色々と忙しい状況だ・・・・出来るだけ早く完成出来ればいいが）

そうレオルモンがベアモンの進化の鍵になるかも知れない物について考えていると、アインハルトとエリオの模擬戦が終わりに近づいていた。

「フッ！！」

ーーーブン！！

「クッ！！」

（今ッ！！）

アインハルトが勢いよく突き出して来た左拳を、エリオは僅かに体勢を崩しながらも避けた。

それを目撃したアインハルトは即座にチャンスだと判断すると、此処数日スバルとギンガから教えて貰った技を使おうと、静止させた体を回転させようとする。
しかし、その直前にエリオは握っていたストラーダの矛先を下に向けるように持ち替え、地面に突き刺す。

ーーーードスッ！！

「サンダーレイジ！！」

ーーーードオオォン！！

「ッ！！」

エリオが地面にストラーダの矛先を地面に突き刺すと同時に、電撃がストラーダの先端部分から迸り、地面が爆発した。
その突然の事態にアインハルトは一瞬動きを止めてしまうが、即座にバックステップを行ってエリオの追撃から逃れようとする。だが、逃げる直前に爆発によって生じた煙を切り裂くように、ストラーダの穂から魔力をロケットのように噴射して加速力を伴ったエリオが飛び出し、アインハルトの首横をストラーダで貫く。

「スピーーアアングリフッ！！」

ーーーードォン！！

「・・・・・私の負けです」

自身の首横に存在しているストラーダの姿に、アインハルトは悔しげに唇を噛みながらも素直に自身の敗北を認めた。

その事実にエリオは安堵の息を吐きながら、僅かに嬉しげに口元に笑みを浮かべていると、素早く駆けて来たレオルモンが声を二人に掛ける。

「模擬戦は終了だ。エリオ、中々の動きだった。そのまま精進に励め」

「はい！レオルモンさん！」

「フッ・・・そしてアインハルト！！」

「は、はい！！」

エリオと違って怒鳴られるように声を掛けられたアインハルトは、直立不動の体勢をしながらレオルモンに答えた。

その返事にレオルモンは僅かに目を細めながら、先ほどの模擬戦の指摘すべき点を考えながらアインハルトに声を掛ける。

「愚か者！！お前がスバル・ナカジマとギンガ・ナカジマから教えられた技は、熟練した使い手でなければ使いどころが難しい技だと教えた筈だ！！先ほどの時も使うのならば、更に追撃を行って、エリオの体勢が崩れたのはフェイントかどうか見極めてからが正解だ！！」

「も、申し訳ありません！！・・・・焦ってしまいました」

「フン！デジソウルと言う力を得たからと言って自惚れるな！デジモンとの実戦を考えた訓練では、エリオの方がまだまだ上なのだ！」

「はい・・・」

「・・・だが、動き自体は中々のレベルになって来ている。今回は失敗したが、次は上手く出来るように、今一度スバル・ナカジマとギンガ・ナカジマから先ほどの技の使いどころを学び直せ。あの技は応用も可能な技だ。お前ならば研究を重ねれば更に発展が出来る・・・精進を積むようにしておけ！」

「はい！！」

レオルモンの言葉にアインハルトは力強く返事を返した。
それを確認すると、レオルモンは今度は先ほどの模擬戦での指摘部分をエリオとアインハルトにそれぞれ行い、暫らく時間が経つと、両手にミネラルウォーターを持ったベアモンが歩いて来る。

「レオルモンさん！頼まれた物を持って来たよ！」

「うむ、では渡してくれ」

「はい、アインハルトさんにエリオ君」

「ありがとうございます、ベアモン」

「ありがとね、ベアモン」

ベアモンが差し出して来たミネラルウォーターをアインハルトとエリオはそれぞれ受け取り、模擬戦で消費した水分を補充していく。
そんな中、アインハルトとエリオが考えるのは目の前に居るベアモンの事だった。
此処二週間近く、機動六課内で共に行動していたのだが、エリオとアインハルトは目の前で微笑みながら飲み終えたミネラルウォー

ターを片付けているベアモンが、あの獰猛なサングルゥモンと同一のデジモンとは思えなかった。
サングルゥモンの性格は簡単に言えば、戦い好きで獰猛さを持った正に獣のような性格だった。
だが、ベアモンの性格はそれとは全く違う。ベアモンは機動六課に来てからは、まだ部隊と言うものに慣れていないアインハルトのフォローを行ったりして、一日でも早くアインハルトが機動六課のロングアーチの面々などにも受け入れられるように動いている。
その他にもロングアーチのメンバーの事務的な仕事を進んで手伝ったり、レオルモンや他のメンバーに鍛えられているアインハルト達と共に自身も実力をつけようと進んで動いている。
そのような優しげであり向上心を持っているベアモンが、あのサングルゥモンと同一のデジモンだとは、サングルゥモンに進化する前のベアモンを知っているキャロ、リュウダモン、オーリス、ゲンヤ以外は二重人格のデジモンではないのかと疑うほどだった。
だが、アインハルトにとっては、今のベアモンの性格はかなり助けられていた。もしベアモンが居なければ、引っ込み思案なところが在る自身が機動六課の面々と親しくなるのは時間が必要だったと思っている。

（ベアモンには助けられてばかりですね・・・何時かお礼をしなければ）

「ん？・・・アインハルトさん？・・何か僕に用が在るんですか？」

「いえっ！・・・その・・・飲み物をありがとうございます」

「気にしなくていいですよ。水分がなくなって倒れたら大変ですからね」

「その通りだ・・・さて、充分に休憩は取れたな。では、エリオ！」

「はい！」

「先ほどの模擬戦の映像を持って烈火の将のところに向かうのだ。アームドデバイスを使う奴の視点から、先ほどの模擬戦の様子を確認しろ。その後は何時もどおりシグナムと訓練を行え」

「分かりました！それじゃ、アインハルト、ベアモン。訓練頑張ってね！」

「エリオさんも頑張って下さい」

「シグナムさんに宜しくね！」

アインハルトとベアモンはそうシグナムが居る場所に向かって走って行くエリオの背に声を掛け、次に自分達が行う訓練を考えて決意に満ちた視線をレオルモンに向けるが、レオルモンは走って行くエリオの背を険しく見ていた。

その様子にアインハルトとベアモンは疑問を覚えて質問しようとするが、レオルモンは質問される前に二人に背を向けて声を掛ける。

「行くぞ。次の任務までにデジソウルの基礎だけでも徹底的に鍛える。ベアモンも成長期のままでも在る程度は戦えるようにしなければいかんからなぁ」

レオルモンはそうアインハルトとベアモンに告げると、そのまま無言で歩いて行く。

アインハルトとベアモンは何時もと違うレオルモンの様子に疑問を覚えるが、時間が無い事を思い出して、今日の訓練へと向かうの

だった。

ミッドチルダに存在するとある深い森の中。
メルキューレモン、アルボルモン、ラーナモン、そしてダスクモンの四体はその場所で木に背を預けながら、難しげに顔を歪めていた。

「今日で一ヶ月近く・・・・グロットモンは戻って来ない・・・・やはり、倒されたと考えるべきだろうな」

「全くもう！せっかくエンシェントデジモンの力を取り戻したのに！全然発揮出来ないでやられるなんて・・・ほんと馬鹿なんだから！！」

「落ち着け、ラーナモン。恐らく相手も究極体だったのだろう。お前も感じた筈だ・・・“憎しみと殺意に染まった波動”を」

「それは・・・・」

落ち着かせるようにアルボルモンに声を掛けられたラーナモンは、少しだけ感情が落ち着き、顔を俯かせた。
この一ヶ月近く、メルキューレモン達は聖王教会本部に向かったグロットモンの帰還を待っていた。
聖王教会で起きた出来事については、距離が在り過ぎた事も在ってメルキューレモン達には詳細を知る事が出来なかったのだ。情報を最も知ってそうなのはグロットモンぐらいなのだが、何の音沙汰も無い事からグロットモンは、正体までは分からなくとも究極体デジモンに倒されたのだと判断するしかなかった。

それはエンシェントデジモンと言う絶大な力を取り戻したメルキューレモン達からすれば脅威的な出来事だったが、それが機動六課に協力している可能性は低いと判断していた。
彼らは距離が離れながらも感じていたのだ。メギドラモンが放っていた『世界さえも焼き尽くそうとする憎しみと殺意の波動』を。
そのような危険過ぎる存在を、指揮官として成長して来ているはやてが部隊に加える筈はないと、同じ指揮官としてメルキューレモンは判断していた。敵味方も無い存在を部隊に入隊させる筈はないのだから。

「機動六課の連中がグロットモンの情報を知っているのは間違い在るまい。ラーナモン。お前は漸く進化を果たしたメタルシードラモンと共に情報を聞き出して来るのだ」

「聞き出すだけでいいの？」

「フッ・・・潰せ。そろそろ奴らは目障りだ。これ以上連中を調子付かせれば、危険を呼ぶからな。エンシェントデジモンの本当の力を奴らに知らしめて来い！」

「了～解～♪この私の美貌で従えさせたデジモン達と一緒に潰して来て上げるわね。跡形も無いほどに連中全員を海の藻屑にして来るわ！」

ラーナモンはそう告げると、ゆっくりとメルキューレモン達から離れて森の木々の間へと消えて行った。
それを確認したメルキューレモンは次のアルボルモンと何かを考えるように目を閉じているダスクモンに声を掛ける。

「アルボルモン、ダスクモン。お前達二人は私と共に機動六課隊舎

を襲撃だ。究極体相手に戦力の出し惜しみなど出来る筈は無い。手薄になった機動六課の本拠地を潰して終わらせるぞ」

「了解だ・・・だが、バンチョーレオモンが現れるのではないか？」

「フッ、本当にバンチョーレオモンが居るのならばな」

「何？」

「恐らく既にバンチョーレオモンは居ない。此処一週間近く、私は自らの姿を晒す行動を行い続けた。だが、奴は現れなかった。私達を追っている奴が見逃す訳はないと言うのにだ。其処から考えられるのは、恐らく聖王教会の時にエンシェントボルケーモンとバンチョーレオモンは激突して相打ちになったのだろう。或いは現れた例の究極体と戦って負傷して動けないかのどれかだ」

「なるほど」

メルキューレモンの説明にアルボルモンは同意するように深く頷いた。

確かに姿を晒したのにバンチョーレオモンが現れない状況は如何考えても可笑しい。今まで僅かにでも姿を晒せば、即座にバンチョーレオモンは駆けつけていた。なのに此処最近はバンチョーレオモンが一切姿を見せていない。

其処からメルキューレモンはバンチョーレオモンに重大な何かが起きた事を悟った。

そしてそれが真実だった場合、自分達の最大の障害が完全に消え去った事に他ならない。もしかしたら罠の可能性も充分に考えられる。それを確かめる為にも機動六課を襲う必要性は存在していた。

アルボルモンはそれを理解し、メルキューレモンの策に同意する

ように頷くが、ダスクモンは目を開けるとメルキューレモンとアルボルモンに背を向けて歩き出す。

「ダスクモン！！何処に行くつもりだ！」

「俺がお前の策に従っていたのは、エンシェントデジモンの力を取り戻す為だ。取り戻した今、俺は勝手に行動させて貰う」

ダスクモンはそう告げると、止まる事無く森の奥へと消えて行き、メルキューレモンはその背に舌打ちする。

「チッ！！レーベモンと違って相変わらず協調性が無い奴だ」

「同感だ。だが、奴が裏切る事は先ず無い。今の奴は数え切れないほどのデジモン達の無念を背負っているのだから」

「・・・・・・まぁ、構わん。では、行くぞ、アルボルモン」

「あぁ」

メルキューレモンの呼びかけにアルボルモンは頷き、ラーナモン、ダスクモン同様に森の奥へと歩いて行った。

自分達の会話を地中深くで聞いていた三体のデジモンの存在に気がつく事無く、それぞれが動き出したのだった。

水棲デジモン達の脅威　中編

機動六課作戦当日。ダークタワーが存在している地点の海上付近。メルキューレモン達との作戦を決め合った後、ラーナモンはこの場所に訪れ、デジモン達に指示を出し、今は海面に平然としながら立ち続けていた。

そして海の中に隠れているデジモン達と共に機動六課が訪れるのを待ち構えていた。

「良い！！連中は泳ぎながらの戦いなんて出来ないわ！先ず間違いなく足場を作る為に海を凍らせようとする筈よ！そうなったら私達は一々凍らされた海を破壊しないと海から出られなくなるわ！そうならない為にも、帽子を被って背中に黒い羽を生やしている女と銀髪に赤い目をしている女を集中的に攻撃しなさい！他の連中はどうせ海の中には来れないんだから、最初に集中的に攻撃する対象はその二人の女よ！！」

『グウオォォォォォォォーーーーーーー！！！！！』

ラーナモンの命令に海中に隠れているデジモン達は、同意するように咆哮を響かせた。

その叫びに含まれるのは圧倒的な歓喜。十闘士の一人で在るラーナモンに従う事と、漸く身の内に宿っている憎しみを晴らす事が出来る機会が訪れた事への歓喜だった。

その様子にラーナモンは満足そうに頷きながら、機動六課のメンバーがやって来る方向に目を向けていると、突如として海中でラーナモンの傍に居たデジモン達が離れ、僅かに水面に金色の光が現れる。

「十闘士。俺様は如何すれば良いんだ？」

「アンタは私のお呼び出しが掛かるまでは海面の中に居なさい。メルキューレモンの考えだと、最初にやって来る連中以外は陽動の可能性が高いらしいわ。なら、アンタは例の黒い塔を護る事に専念していなさい」

「グルゥッ！！」

「苛立つのは分かるわ・・・だけど、安心しなさい。ちゃんと貴方も獲物も残しといて上げるわよ」

「・・・期待させて貰うぞ」

ラーナモンの言葉に海の中に隠れているデジモンは、とりあえず納得したのか、ラーナモンの指示通りに海の底に潜って行く。

それを確認したラーナモンはとりあえず切り札のデジモンが作戦を了承してくれた事に安堵の息を吐く。

ラーナモンとしてもさっさと機動六課の面々は潰したいのだが、グロットモンに関する情報を聞き出さないといけない。エンシェントデジモンの力を手に入れたグロットモンを倒したデジモンの情報は、聞き出さないと不味いのだ。最有力候補はバンチョーレオモンだが、もしもバンチョーレオモン以外にも強力なデジモンが地上本部に存在していた場合、デジモン達の一斉蜂起の時の最大の障害になるかもしれない。

後の為にもラーナモンは今回の戦いで、グロットモンに関する情報を機動六課から聞き出さないと不味いのだ。

（全くもう！あの馬鹿！エンシェントデジモンの力を手に入れて負けるなんて！・・・・・まぁ、良いわ。どうせ『土』のスピリット

さえ取り戻せば、再びグロットモンの奴を蘇らせられるんだし、恩を売って於いて私の言いなりにしてやるわ！！フフフッ！！）

そうラーナモンは内心でグロットモンを助け出した後の行動について考えていると、ラーナモンの横の海面からイルカのような容姿をしている水棲哺乳類型デジモン―『ルカモン』―が何処か慌てたように顔を出した。

ルカモン、世代／成熟期、属性／ワクチン種、種族／水棲哺乳類型、必殺技／シェイキングパルス
会話を研究するソフトの特殊な信号から発生したイルカのような姿をした水棲哺乳類型デジモン。海の中でしか生活できないが、高速で泳ぐことが出来る。仲間同士では超音波で会話をする。必殺技の『シェイキングパルス』は、口から発する超音波を最高出力で発射する攻撃技だ。また、超音波を使い通信手段としても使えるぞ。

「仲間より伝令です！！四方の方角からこの場所を目指している武装を施した船が四隻接近中！！フィールドタイプの防御系の技を使用しているらしいです！！」

「間違いなく機動六課の連中ね・・・・・（でも、そいつ等は本命の八神はやて達ではないわ。恐らく私達の攻撃の影響を外に出さない為の結界班ってところでしょうね）」

「ッ！！更に仲間から伝令！！上空から接近する三人の人影と竜タイプのデジモンの背中に乗った子供を捕捉したらしいです！！三人に関する容姿に関しては剣を握った女に、ハンマーを握った赤い髪の子供、そしてラーナモン様が優先目標と定めた人物の服を着ている女です！！」

「そいつらよ！！方角はどっちなの！？」

「アチラです！！」

ラーナモンの質問にルカモンは自身の顔を動かして方角を示し、ラーナモンは急いでそちらの方に目を凝らす。

そしてラーナモンは、自分達が居る場所を一直線に向かって来るリインとのユニゾン状態のはやてに、バリアジャケットを身に纏っているシグナムとヴィータ、そして全長十メートルほどの大きさに右手に金色の球体を、左手に緑色の球体を持った東洋の竜そのもののような姿をした－リュウダモンの完全体のデジモン－『ヒシャリュウモン』の背に乗ったキャロを視界の先に捉える。

ヒシャリュウモン、世代／完全体、属性／ワクチン種、種族／獣竜型、必殺技／成龍刃（せいりゅうじん）、縦横車（じゅうおうぐるま）

リュウダモンが持っている“デジコア（電脳核）”の最深部に刻み込まれていた“龍”や“武将”と言ったデータの封印が解かれ、ほぼ完全な姿へとなった完全体の獣竜型デジモン。まさに“龍”と呼ぶに相応しい姿をしており、その移動力を活かしデジタルワールド中を駆け巡っていると言われている。神のように讃えられる存在であり、大人しい性格であるが、両手に持つ“金竜”と“角竜”と呼ばれる玉に触れると途端に怒りを顕にする。その玉は、今は亡き仲間の魂（電脳核の情報）が込められた結晶体であるという。もし傷をつけたならばその者の命の保障は無いであろう。必殺技は、自らが鋼鉄の刃と化して敵を真っ二つにする『成龍刃（せいりゅうじん）』と、己の巨体を利用して敵の上下左右全てを包囲し攻撃を放つ『縦横車（じゅうおうぐるま）』だ。

「来たわね！！・・・・・（居るのは八神はやてに守護騎士二人、そして完全体のデジモンにキャロとか言う小娘ね・・・・・・居ないわね。もう一人の厄介な女が・・・となれば、アレは・・・）・・

・・まぁ、良いわ。メガシードラモン達！！」

ーーーバッシャン！！バッシャン！！

『グウオオオォォォォォォォーーーーーー！！！！！』

ラーナモンの呼びかけに答えるように、海中から頭部に巨大なツノを生やした海蛇のような姿をしたデジモン一『メガーシードラモン』二体が咆哮を上げながら姿を現した。

メガシードラモン、世代／完全体、属性／データ種、種族／水棲型、必殺技／サンダージャベリン、メイルシュトローム

シードラモン種が規則的進化して、体も一回り大きくなった形態の水棲型デジモン。頭部を覆う外殻が硬度を増し、頭頂部にイナズマ型のブレードが生えたことで兜の役割を果たし、防御力が増した他、ブレードには発電装置が仕込まれており、電撃を放つことも可能になった。知性や泳ぐスピードも発達し相手を執念深く追い回し仕留めるぞ。必殺技は頭部のツノから放つ強力なイナズマ『サンダージャベンリン』と、物凄い冷たい津波を起こし、敵を凍りつかせる『メイルシュトローム』だ。

メガシードラモン達が現れるの確認したラーナモンは、自分達の方に向かって進行して来るはやて達を指差しながら、全身に力を溜めているメガシードラモン二体に指示を出す。

「先ずは連中の分断よ！！やりなさい！！」

『メイルシュトーーーム！！』

ーーーザアアアアアアアアアアアアアアーーーーーーー！！

！！！

メガシードラモンが咆哮を上げると同時に、穏やかに流れていた海面が荒れ狂い、はやて達に向かって物凄く冷たい大きな波ー『メイルシュトローム』ーを発生させた。

発生させられたメイルシュトロームは真っ直ぐにはやて達に向かって直進する。ラーナモンはその様子に思わず笑みを浮かべた。

此処ではやて達がメイルシュトロームを避ければ、メイルシュトロームの勢いは止まらずに真っ直ぐに進み続ける。その結果は確実にその先に存在している島々に影響を与えるだろう。その辺りの事は地上本部も分かっているので、事前にダークタワーが存在している地点から近い場所に島々に住んでいる人々の避難は終えている。

更に万が一にでも人々が住んでいる場所に津波の影響を与えないようにラーナモン達が居る地点から、約一キロ近く放たれた場所に強力な結界を張り巡らして在る。だが、そう何度も完全体の一撃には耐えられない。更に今回は究極体デジモンの存在も在るのだ。

機動六課の面々としては、後の究極体との激突も考えるならば結界の強度は出来るだけ下げたくない筈。

それをメルキューレモンから事前に聞いていたラーナモンは、必ず動きを止めてはやて達はメイルシュトロームを止めようと動く筈だと考えるが、その考えを否定するようにヒシャリュウモンがメイルシュトロームに向かって飛び掛かる。

「俺がやるぞ！！」

「部隊長！！」

「了解や！！チェーーンバインド！！」

ーーーガシィィィィーーン！！

キャロの叫びの意味を即座に察したはやては、シュベルトクロイツを握っている右手とは逆の左手からチェーンバインドを放ち、ヒシャリュウモンの背に乗っていたキャロの体に巻きつけた。
同時にはやてはヒシャリュウモンの背からキャロをチェーンバインドを使って引き離し、ヒシャリュウモンはそれを確認すると自らを鋼鉄の刃に変化させて、迫り来るメイルシュトロームに突進する。

「ウオオォォォォォォォォーーーー！！！成龍刃（せいりゅうじん）ッ！！」

ーーーブザァァァァァァァーーーン！！

ーーーードバァァァァァァァーーーー！！！

成龍刃（せいりゅうじん）に変身したヒシャリュウモンの一撃によってメイルシュトロームは、中心辺りから分断され、激突した衝撃によって津波は吹き飛んだ。
ヒシャリュウモンはそれを確認すると、即座に元の姿に戻るが、そのヒシャリュウモンを狙うように二体のメガシードラモンは巨大なツノの先端に電撃を集中させていた。

『サンダー…』

「クッ！！」

二体のメガシードラモンがサンダージャベリンを放とうとしている事に気がついたヒシャリュウモンは、即座に避けようとする。
しかし、そうはさせないと言うようにメガシードラモン達はヒシャリュウモンに頭部のツノの照準を合わせサンダージャベリンを撃ち出そうとするが、その直前に一筋の閃光が一体のメガシードラモ

ンのツノに激突する。

「翔(か)けよ、隼(はやぶさ)！」

≪Ｓｔｕｒｍｆａｌｋｅｎ(シュツルムファルケン)ッ！！≫

ーーードゴオオオォォォォォン！！

「グウオオォォォォォォーーーー！！！」

電撃を集めていたツノにシュツルムファルケンを食らった一体のメガシードラモンは、自身の集めていた電撃とシュツルムファルケンが直撃した時に発生した爆炎と衝撃波に苦痛の声を上げた。

その様子を目撃したもう一体のメガシードラモンは慌てて先ほどの攻撃が飛んで来た方向に目を向けると、ボーゲンフォルムに変形したレヴァンティンを構えているシグナムが空中に浮かんでいた。

もう一体のメガシードラモンは自身の仲間を攻撃したシグナムに怒りを覚え、即座にサンダージャベリンを放とうとする。だが、その直前に急接近していたヒシャリュウモンがメガシードラモンに向かって突進する。

「オラアァァァァァァァーーーーーー！！！」

ーーードゴオォン！！

「グォッ！！」

「お前らの好きにはさせねぇぞ！！」

「グオオオオォォォォォォォーーーーー！！！」

ーーードゴオオォォォン！！

ヒシャリュウモンとメガシードラモンは互いに叫びあうと共に自身の体を激突させあう。

その間にシュツルムファルケンのダメージから何とか復帰したもう一体のメガシードラモンは、自身に攻撃を加えたシグナムに怒りに染まった目を向け、シグナムはレヴァンティンをボーゲンフォルムからシュベルトフォルムに戻す。

≪Ｓｃｈｗｅｒｔｆｏｒｍ（シュベルトフォルム）≫

ーーーガチィィィン！！

（クッ！！完全に隙を衝いたシュツルムファルケンでも、海と言うフィールドで強化された奴は倒しきれないか・・・コレでは例の究極体にはシュツルムファルケンを以ってしてもダメージは与えられないかもしれん）

自身の最大の魔法の一つを持ってしてもメガシードラモンを倒せなかった事実に、シグナムは内心で悔しげな声を上げた。

しかも今の一撃はメガシードラモンが必殺技を放つ直前の状態での一撃だった。それを以ってしても海のフィールドで力が倍増しているメガシードラモンを倒す事は出来なかった。改めて成熟期デジモンと完全体デジモンの力量の差をシグナムは感じながら、レヴァンティンをメガシードラモンに向かって構え、油断なく睨みあいを続ける。

その間に足元にベルカ式の魔法陣を発生させながら、はやてがヴィータにキャロを預けながら海を凍らせる為に詠唱を行っていた。

「仄白き雪の王、銀の翼以て、眼下の大地を白銀に染めよ」

詠唱を殆ど終えたはやては、俄然に広がる広大な海を凍結させようとシュベルトクロイツを構える。

だが、その直前に突然に海から巨大な水柱がはやてとヴィータ、キャロを囲むように四本立ち昇る。

ーーードオオォォォォォォォォン！！

『グウオオォォォォォォッ！！』

『ッ！！』

はやて達を囲むように立ち昇った水柱の中から、ティロサウルスを思わせるような体をしたデジモン―『ティロモン』―が四体それぞれの水柱から飛び出して来た。

ティロモン、世代／アーマー体、成熟期、属性／ワクチン種、データ種、フリー、種族／海竜型、必殺技／トーピードアタック、テイルアンカー

古代種の因子を持ったテイルモン・ギルモンが誠実のデジメンタルで進化した海竜型デジモン。現在では通常進化の成熟期デジモンとしても確認されている。別名『深海のジェット機』と呼ばれ、水中でのスピードは成熟期でありながら、究極体のメタルシードラモンと争うほどに速い。縄張りを荒らす者には容赦なく攻撃する。水中の匂いは1キロ先までかぎわけられるので、一度狙われたら逃げるのは不可能に近い。必殺技は、追尾魚雷を敵に向かって発射する『トーピッドアタック』と、長い尻尾で敵を切り裂く『テイルアンカー』だ。

『テイルアンカーーー！！！』

「クッ！！ヴィータ！！」

「応よ！！」

はやての叫びの意味を即座に理解したヴィータは、抱えていたキャロをはやてに向かって投げる。

それを確認したはやては、即座にキャロに衝撃がいかないようにしながら大切そうに抱える。

ヴィータはそれを横目で確認すると同時に握っていたグラーフアイゼンからカートリッジを排出し、ラーケテンフォルムにアイゼンを変形させ、そのまま推進剤を排出しながら右斜めの方向からティルアンカーを振り下ろして来るティロモンに向かって突撃する。

「ハァァァァァァァッ！！ラーケテンハンマーー！！！」

ーーードゴオォン！！

「グォッ！？」

ヴィータが繰り出したラーケテンハンマーはティロモンのテイルアンカーと激突し、ティロモンはその衝撃によって空中で体勢が崩れてしまう。

それを確認したキャロは両手に装着しているケリュケイオンをヴィータと自身を抱えているはやてにそれぞれ向け、既に詠唱を終えていた補助魔法を発動させる。

「ブーストアップ・アクセラレイションッ！！」

ーーードンッ！！

『グオッ！？』

キャロが機動力の強化魔法を唱え終えると同時に、ヴィータとはやては強化された速さを遺憾なく発揮し、ヴィータが吹き飛ばしたティロモンが居た方向から包囲網を脱出した。

ティロモン達は急激なはやて達の移動速度の強化に対応する事が出来ず、それぞれ振り下ろそうとした尻尾を戻して海中に戻って行く。

ーーーバッシャン！バッシャン！！バッシャン！！

「よし！！はやて！！このまま上空に…」

「させないわよ！！」

ーーードオオオオォォォォン！！

『ッ！！』

ラーナモンの叫びが海面の方から響くと同時に、再び天に届かんばかりの水柱が今度はヴィータ、はやて、キャロを囲むように複数出現した。

その水柱をヴィータ、はやて、キャロが警戒するように見回していると、一瞬水柱の中で何かが光ったように見えた瞬間、水柱から透き通った刃が幾重にはやて達に向かって飛んで来る。

ーーーブザン！！ブザン！！ブザン！！

『ッ！！』

ーーーザッシュウゥッ！！

自分達を囲むように聳え立っていた水柱から放たれた透き通った水の刃を、はやて達は即座に避けた。

その時に急激な移動によってキャロが被っていた帽子が飛び、帽子は水の刃によって一瞬にしてバラバラに切り刻まれた。

はやて達はそれを目撃し、信じられないほどの切れ味を持った水の刃に僅かに目を見開いていると、海面に立ちながら己の能力で水柱を出現させたラーナモンが得意げに叫ぶ。

「フフ～ン♪驚いたでしょう？超高圧で放った水の刃は、その気になればダイヤモンドさえも切り刻めるわ。そして私の、『水』の闘士の力が浸透した海の水を、水柱の中に隠れているデジモン達が放てば、アナタ達なんて細切れよ・・・そして、もう一人もね！！」

ーーードバァァァァァァァーーン！！

『ッ！！』

ラーナモンが叫ぶと同時にはやて達が居る地点からかなり離れた場所で巨大な水柱が立ち昇り、それを避けるように上昇するリインフォースがいた。

そしてリインフォースの近くに存在している水柱から、突然にイカの足を思わせる足が出現し、ゲソモンがリインフォースを追い立てるように足を伸ばし、リインフォースの動きを封じようとする。

はやて達はその様子に顔を険しくすると、再びラーナモンが得意げにはやて達に声を掛ける。

「やっぱり貴女達は囮だったのね。フフ～ン♪大抵の相手なら氷の魔法を使っていただけの八神はやて、アンタを警戒したでしょうけど、残念だったわねぇ。私達、十闘士には守護騎士、そして『闇の書』の管制人格だった銀髪女の知識が存在しているわ。アンタ達、『闇の書』に関わっている連中の行動はお見通しよ！オホホホホホホホッ！」

「・・・・・プッ！！プククッ！！？」

「ん？」

突然に含み笑いをし出したはやてを目撃したラーナモンは、高笑いを止めて訝しげにはやてと、その周りで何かを企んでいるような顔をしているヴィータとキャロを訝しげに見つめた。

ラーナモンの知る情報では、海を広域範囲で凍結させる事が出来る魔法を使えるのは、はやてとリインフォースだけ。それ以外の機動六課メンバーは、メルキューレモンの力で監視していたが誰一人氷結関係の魔法を使用出来る様子は無かった。

故にラーナモンは、はやて、そしてリインフォースを警戒するように動いた。今の状況ではもはや大規模な氷結魔法をはやてとリインフォースが使用する事は出来ない筈。海さえ凍結されなければ、自分達の勝利は確実だとラーナモンは考えていた。

しかし、はやて達には焦りを覚えている様子がない。一体何故なのかとラーナモンが僅かに思考をはやて達から逸らした瞬間、強烈な冷気をラーナモンは海面から感じる。

ーーーゾクッ！！

「ッ！！まさか！？不味いわ！！全員海の中に深く潜り…」

ーーーゴオオオオオオオオォォォォォォォーーーーーーーー！！！

『ッ！！』

ーーーガキィィィィィィーーーーン！！

ラーナモンが全てを叫び終える前に、海から凄まじい冷気が立ち昇ったと思われた瞬間、半径数百メートル以上の海が完全に凍結された。

それを海が凍結する直前に上空に飛び上がる事で避けていたラーナモンは、凍りついた海に着地しながら、上空でデバイスを構えなおしているはやて達に疑問に満ちた視線を向ける。

「・・・どう言う事よ？・・・何で、何で八神はやても管制人格も詠唱を唱える隙なんて与えなかったのに、何で海が凍りつくのよ！？」

そうラーナモンは疑問に満ちた叫びを上げるが、はやて達は答える事無く、海と共に凍り付いて動く事が出来なくなったメガシードラモン達から離れたシグナムとヒシャリュウモンと合流する。

凍結した海の上空。

その場所の上空には、地上本部から貸し出された武装隊の最新ヘリコプター『ＪＦ７０４式ヘリコプター』が、横に真の姿に戻っているフリードリッヒを伴いながら後部ハッチを開けて滞空していた。

後部ハッチには酷く疲れた顔をした民族衣装を思わせるバリアジャケットを着たユーノが、クロノから餞別として渡された『氷結の

杖・デュランダル？』を握りながら、成人女性に姿を変えたアルフに支えられていた。

「ハァ、ハァ、ハァ、ク、クロノの奴・・・何が現在の技術も使って魔力消費を少なくしただよ・・・僕の魔力を全部使って一度だけの使用がやっとじゃないか」

そうユーノは握っているデュランダル？を見ながら、本局に居るであろうクロノに向かって不満の声を漏らした。

『氷結の杖・デュランダル？』。それはユーノがエリオと共に機動六課に向かう時にクロノから餞別代わりに渡されたストレージデバイスだった。十年前に最初にクロノの恩師であるグレアムが作ったデュランダルは、ブラックに強奪されてしまったが、開発に作られたデータだけはそのまま残っていた。

それをクロノはグレアムから受け取り、『闇の書』の時に使用しようとした『デュランダル』よりも遥かに高性能の『デュランダル？』を開発していた。対ブラック用の予定だったが、機動六課の現状からそんな事は言っていられないと思ったクロノは、機動六課に向かうユーノにデュランダル？を渡したのだ。

最もミッドに訪れてすぐに本局の局員達に強襲され、今日までデュランダル？は陽の目を見ることが出来なかったのだが、それが逆に今回の海の凍結の切り札になった。

長い間、無限書庫の処理をしていて前線から離れていたユーノと、同じようにフェイトとの実力差が開いて戦線を離れていたアルフでは本格的な機動六課の戦力にはならない。

それを理解していたはやては、後先考えないで海を凍結するようにユーノに指示を出したのだ。

そうすれば、はやてとリインフォースは海を凍結させる為に使う魔力を消費せずに済む。究極体との激闘を考えるのならば、出来るだけ力は温存しておきたかったはやては、直接の戦力にならないユ

ーノに海の凍結を命じ、アルフにはその補佐を命令したのだ。
自身の長年のブランクが分かっているユーノとアルフは、はやての命令を了承し、氷結魔法が使えるはやてとリインフォースを囮にして虎視眈々と凍結させる機会を上空で待っていた。
そして作戦は成功を収めた。少なくともデュランダル?を使用しての『エターナルコフィン』の威力で、メガシードラモン二体と水柱の中に潜んでいたデジモン達を封印する事が出来た。
流石に究極体のメタルシードラモンと、『水』の闘士であるラーナモンは無理だったが、相手の戦力の何割かは封じる事が出来たのは間違いない。

「ハァ、ハァ・・・僕達が出来るのはここまでだ・・・・皆、後を頼むよ」

「頼んだよ!」

ユーノとアルフはそうヘリコプター内で待機していたザフィーラ、ギンガ、エリオ、アインハルト、ベアモン、サーチモン、そしてスバルに声を掛けた。
その言葉に全員が覚悟を決めたように頷き返すと、サーチモンが全員の顔を見回しながら作戦を告げる。

「では、作戦を説明するぞ。私のサーチ結果では、海の奥深くに例の究極体のメタルシードラモンは待機している。恐らくその位置にダークタワーは存在しているのだろう。同時にエターナルコフィンの影響範囲よりも深く潜っていたデジモン達が動き出している。連中は凍結された海を粉砕して出て来るだろう。私はヘリ内部から連中が出て来る位置を、全員に逐一連絡する」

「まるでモグラ叩きね」

「そのお通りだな、ギンガ・ナカジマ。だが、この策が一番有効だ。それに分かっている筈だ・・・最初に一撃を加えてダメージを僅かなりとも与える事が出来れば、デジモン達の動きは鈍る。そのデジモン達の後に控える究極体との激戦を考えれば、僅かでも体力を温存しなければならん。究極体二体との戦いでは、最初の一撃が肝心だ」

「分かっているわ」

「うむ」

サーチモンの考えにギンガとザフィーラは同意するように頷き、エリオ、アインハルト、ベアモン、スバルも深く頷く。

それを確認したサーチモンは、近くに置いてある通信機を使用し、ＪＦ７０４式ヘリコプターを操縦しているヴァイスに連絡を行う。

「ヴァイス！此方の準備は完了した！」

『分かった！手筈どおりエリオ、アインハルト嬢ちゃん、ベアモンはフリードの奴に背を乗って海に向かえ！！』

「分かりました！アインハルト、ベアモン！！」

「はい！」

「分かっています！！」

エリオの呼び掛けにアインハルトとベアモンは即座に答え、後部ハッチの出口にエリオ達が乗りやすいように身を寄せていたフリー

ドッヒの背に飛び乗る。

ーーードン！！

「よし！フリード！頼むよ！！」

「グウオオォォォォォォォーーーーーー！！！！！」

ーーードォン！！

フリードはエリオの呼び声に咆哮で応じると共に、凍結した海に高速で飛翔して行った。

サーチモン達はそれを確認すると、ヴァイスにエリオ達が向かった事を伝えて、自分達もＪＦ７０４式ヘリコプターに乗りながら戦場へと向かって行く。

ーーービュン！！

『クゥゥゥゥゥッ！！』

高速で空を飛翔しているフリードッヒの背に乗りながら、訓練で何度も乗ったとは言え、風を切るような感じに慣れないエリオ達は思わず声を漏らした。

しかし、フリードリッヒはスピードを緩めることはない。空を飛んでいるとは言え、完全体デジモン相手では自身のスピードでは勝てない事をフリードリッヒは知っている。背に乗っている三人の事は気になるが、そんな事は気にしていられない状況なのだ。

その考えを表すようにサーチモンから念話がエリオ達に届いてく

る。

（前方百メートルから巨大なデジモンの反応が出ているぞ！）

「ッ！！フリー…」

「グゥオォッ！！」

エリオがサーチモンからの情報を伝える前に、フリードリッヒは口を前方に向かって大きく開け、口内に炎を発生させる。

同時にフリードリッヒが進んでいた方向の先の凍結された海が断ち割れ、巨大なハンマーを両手で握り、背中に巨大な甲羅を背負ったズドモンが現れる。

ーーーガアァァァァァン！！

「ウオオォォォォォォォーーーーーー！！！！」

「グウォォォォォッ！！」

ーーードオォォォン！！

ズドモンが氷海から現れると同時に、フリードリッヒは口から火炎砲ー『ブラストレイ』を撃ちだした。

氷海から抜け出すと同時に迫り来るブラストレイを目撃したズドモンは、一瞬目を見開くが、即座に両手で握っているハンマーを構え、ブラストレイに向かって振り抜く、

「消え失せろ！！」

ーーーブン！！

ーーーバッシュン！！

ズドモンがハンマーを振り抜くと共にブラストレイは霧散した。
そのままズドモンは握っているハンマーを上空にいるフリードリッヒに投げつけようとするが、その直前にズドモンは自身の顔の目の前にフリードリッヒの背から飛び出したアインハルトを目撃する。

「ハァァァァァァァァーーーー！！！！」

ーーーードゴォン！！

「グォッ！！」

ーーーードオオォォォォォォーーン！！

アインハルトがズドモンの鼻先に右拳を叩きつけると、ズドモンは信じられないと言うように目を見開きながら氷海に背中から激突した。
そしてアインハルトはズドモンに拳を叩きつけると同時に発生したオレンジ色の光が混ざった碧銀の“デジソウル”を全身に纏いながら、空中で体勢を整えなおし、凍結した海に危なげなく着地する。
そのままズドモンに更なる追撃を加えるためにアインハルトは走り出そうとするが、その直前にズドモンが現れた時に断ち割れた氷海の間から、半漁人を思わせる容姿をして、手にモリを握り、ウェットスーツに身を包んだ水棲獣人型デジモン－ハンギョモンが二体飛び出して来る。

ハンギョモン、世代／完全体、属性／データ種、種族／水棲獣人型、

必殺技／ストライクフィッシング
ウェットスーツに身を包み、海を自在に泳ぐ水棲獣人型デジモン。背中には水中高速移動モーターが備わっており、高速で水中を移動する。水中での戦闘能力は凄まじく、手に持つ愛用のモリ『トレント』で獲物を倒す。必殺技は、手に持っている『トレント』を敵めがけ投げつける『ストライクフィッシング』だ。

ーーードバン！！ドバン！！

『シネェェェェェェェェーーーー！！！』

「クッ！！」

海から飛び出して来たハンギョモンを目撃したアインハルトは立ち止まり、ハンギョモン達に拳を構え直そうとする。
それを目撃したハンギョモンは、即座にトレントを持ち直して、アインハルトの拳が届かない位置から投げつけようとするが、その直前にハンギョモンの頭上からエリオとベアモンが降って来る。

「スピーーアシュナイデンッ！！」

「小熊正拳突きッ！！」

ーーードゴオオオォォォン！！

『グゥッ！！』

頭上からのエリオとベアモンの奇襲攻撃をハンギョモン達は避ける事が出来ず、それぞれ打撃を食らい、体勢が崩れてしまう。
アインハルトはその隙を逃さず、即座にその場で自身の体を回転

させるように動かし、ハンギョモン達に右掌を全力で突き出す。

「覇王空波断（仮）ッ！！」

ーーードゴオオオォッ！！

『グゥッ！！』

アインハルトが右掌を突き出すと同時に放った衝撃波を、ハンギョモン達は避ける事が出来ずにその身に食らい吹き飛んだ。

エリオとベアモンはその隙にアインハルトの傍に近寄り、ゆっくりと起き上がるズドモンとハンギョモン達を油断なく見ながら、それぞれ構えを取る。

「アインハルト。もうすぐリインフォースさんがこっちに来る。強力な遠距離攻撃が出来るリインフォースさんが来るまでは、連携して攻めるよ」

「はい、エリオさん」

「相手は完全体だ。フリードリッヒがズドモンの相手をするから、僕らはハンギョモン達に一先ずは集中して攻めよう」

「了解、ベアモン」

「それが得策ですね・・・（でも、何れは私も大さんのように）」

ベアモンの作戦にエリオとアインハルトはそれぞれ答えながら、トレントを構えながら立ち上がるハンギョモン達に向かって飛び掛かるのだった。

各場所でそれぞれが戦闘を開始している中、はやて、ヴィータ、シグナム、キャロ、ヒシャリュウモンは、怒りに満ち溢れた顔をしているラーナモンと睨みあっていた。
事前にはやて達が考えていた策を見破っていながら、まんまとラーナモン達は、はやて達の策に嵌ってしまった。その事実にラーナモンは自身のプライドが傷つけられ、可愛らしかった顔が鬼の形相に変わっていた。

「赦さない。ぜっえぇぇったいに！！アンタ達を赦しておけないわ！！」

「・・・・・ヴィータ、シグナム。二人ともギンガとザフィーラが向かった地点に向かうんや」

「ッ！！しかし、主！？」

「シグナム・・分かっとるやろう？・・・・生き残っているデジモン達の殆どは完全体や・・・幾らギンガやザフィーラでもキツ過ぎる・・・（スバルはメタルシードラモンが出て来るまでは温存しておかないとあかんやろう？）」

「・・・・分かりました。ヴィータ、行くぞ」

「・・応」

シグナムの呼びかけにヴィータは、はやてに寂しげな視線を僅かに向けるが、はやては構わずにラーナモンに険しい視線を向け続け、

シグナムとヴィータは僅かに寂しさを覚えながらギンガとザフィーラの援護に向かいだす。
　その様子を目撃したラーナモンは、自身の知るはやての情報との食い違いに僅かに呆然とするが、すぐさま全身に力を込め始め、はやてはキャロとヒシャリュウモンと共にラーナモンを見下ろす。

「質問や・・・アンタら十闘士はどうやって『エンシェントデジモン』の力を取り戻したん？」

「答えるわけないでしょう！特に、コレから死ぬ連中になんてねッ！！ラーナモン！！スライドエヴォリューーション！！」

ーーーギュルルルルルッ！！

　ラーナモンが叫ぶと同時に、その身から蒼いデジコードが発生し、ラーナモンの体を包み込んだ。
　はやて達はその様子にビーストタイプに進化するつもりなのだと思い、何が来ても対応できるように身構えていると、デジコードの中から下半身がイカの胴体の形をして、腰の部分に長い足を１０本も供え、紫色の髪をたなびかせた女性の部分を上半身にした水棲型デジモン－『水』の『剛』の闘士『カルマーラモン』が出て来る。

カルマーラモン、世代／ハイブリット体、属性／バリアブル、種族／水棲型、必殺技／ネーロコルソ、タイタニックチャージ
伝説の十闘士『エンシェントマーメイモン』の力を受け継いだ『水』の属性を持つビーストスピリット体の水棲型デジモン。ズル賢く短気な性格をしている。水棲型デジモンでありながら水中戦だけではなく空中戦も得意。陸上では１０本の触手でヤドカリのように移動する。必殺技は、口から相手に向かってイカ墨を吐き出す『ネーコロルソ』と、体をドリルのように回転させ、敵に突撃する『タイタ

ニックチャージ』だ。

「オホホホホホホホホホホホホホホホッ！！！カルマーラモンッ！！」

『・・・・・・・』

デジコードの中から高笑いをしながら出て来たカルマーラモンの姿に、はやて達は言葉を何も出せなかった。

余りにもラーナモンの時とはカルマーラモンは、性格も姿も変わり過ぎていた。もし目の前で進化されていなければ、同一のデジモンだとはやて達は思えなかっただろう。更にカルマーラモンの容姿は、一つの生物をどうしても連想させずにはいられず、ヒシャリュウモンとキャロは思わず呟いてしまう。

「・・・なぁ・・・アレってよぉ？・・・・イカだよなぁ？」

ーーーピクッ

「・・・ス、スルメだと思うよ」

ーーーピクピクッ！！

「イカでもスルメでも関係ないわ。エンシェントデジモンに進化される前に倒す。それだけは変わらへんよ。始めようか、『スルメデジモン』」

ーーーブチィッ！！

「キイィィィィィィッ！！よくも！！よくも！！その忌まわしい

単語を！！もう八つ裂きでは絶対に済まさないわ！！生きている事が地獄だと思えるような、血も凍るような目にあわせて上げるわよお！！」

カルマーラモンはそう怒りに満ちた叫びを鬼の形相をしながら上げ、空中に飛び上がってはやて、キャロ、ヒシャリュウモンに攻撃を行い、戦闘を開始するのだった。

戦いは開始された。機動六課のメンバーと『水』の闘士を加えた水棲デジモン達との戦いが。

だが、真の強敵である究極体は未だに姿を見せず、機動六課メンバー達は自分達の本拠地に迫る最大の危機を知らないのだった。

水棲デジモン達の脅威　後編

機動六課の主力メンバーがカルマーラモン達と激戦を繰り広げている頃。
機動六課隊舎近くの海から忍び寄る二つの影が存在していた。
影の正体は、機動六課本拠地に奇襲を行う為にやって来たアルボルモンとメルキューレモン。
ダスクモンの予想外の単独行動で戦力は減ってしまったが、主力メンバーが存在していない機動六課の本拠地を潰すには過剰としか言えない戦力だった。
海の中から僅かに顔を出しながら、連絡用に自分達について来たルカモンの報告を聞いていたメルキューレモンは、報告の内容に苦々しい想いを抱かざるえなかった。

「クッ！！やはり八神はやての成長は著しいか」

「同感だ。俺達の知る八神はやてとは、全くの別人としか思えん」

「ルインフォースから得た情報で使えるのは守護騎士と管制人格だけだと判断すべきだな・・・まぁ、その情報も必要なくなるやもしれんが」

そうメルキューレモンは呟きながら、遠くに見える機動六課隊舎を眺める。
やはり究極体相手に戦力の出し惜しみなどしていられないのか、警備はかなり手薄になっている。
機動六課を潰すには最適な状況になったとメルキューレモンは思いながら、出来るだけ気配を隠して海を泳いでいると、横を泳いでいたアルボルモンが気になっていた事を質問して来る。

「そう言えば、もしもしグロットモンを倒した奴らが機動六課ならば隊舎に『土』のスピリットはあるのか？」

「ないだろうな。恐らくヒューマンとビースト。それぞれ別の場所に厳重に封印しているだろう。或いはバンチョーレオモンが生きていればアルハザードに送った可能性も考えられる」

「なるほど・・・では、その情報も」

「無論手に入れる。バンチョーレオモンの生死も重要だが、『土』のスピリットの所在も重要だ。そして今の私には例えバンチョーレオモンが生きていても、“消滅させる術”が存在している」

「そうだったな」

「フッ！さっさと機動六課の本拠地を潰すぞ、アルボルモン！これ以上不確定要素が現れるのは困るからな！」

メルキューレモンは叫ぶと共に僅かに泳ぐスピードを上げ、アルボルモンはその後をついて行き、二体は人知れず機動六課の本拠地に進んで行く。

その先で自分達が作り上げてしまった因縁の相手が待ち構えている事も知らずに。

「ハアァァァァァァァァーーーーーーー！！！！！」

ーーードゴオォン！！

「グォッ！！」

氷海の上に作り上げられた紫色の道ー『ウイングロード』の上で加速しながら、氷海に立っていたハンギョモンに、ギンガは渾身の力を込めた拳を叩き込んだ。

その威力にハンギョモンは息を吐き出しながら吹き飛ぶが、ギンガは一瞬も気を緩める事無く、ハンギョモンと辺りを警戒するように見つめる。

エリオ達とは別の場所に降下したギンガとザフィーラは、その場所に氷海を破壊しながら現れたデジモン達と戦いを繰り広げていた。エリオ達は違い、ズドモンのような完全体の巨大なデジモンは現れていないが、代わりにギンガ達が降下した場所には成熟期のデジモン達が多数存在していた。

ーーードオォォォン！！

「シャァァァァァァァァーーーーーー！！！！」

「ッ！！」

背後から聞こえて来た破砕音と咆哮に、ギンガが顔を向けてみると、氷海を破壊しながら飛び出して来たティロモンが空中に居た。

完全な奇襲攻撃だとティロモンは確信し、目の前に居るギンガを自身が持つ大きな口でギンガを飲み込もうとする。だが、その直前にティロモンの下から拘束条が飛び出し、ティロモンを空中に縫い止める。

「縛れ！鋼（はがね）の軛（くびき）ッ！！」

ーーードスゥゥゥゥゥーーン！！

「グガッ！？」

「今だ！ギンガ！！」

「はい！！」

ザフィーラの叫びにギンガは即座に応じると、鋼（はがね）の軛（くびき）によって空中で動きが封じられているティロモンに向かってウイングロードを伸ばし、その上を素早く駆け抜けてティロモンの目の前に辿り着く。

同時にギンガはティロモンに向かって飛び掛かり、ティロモンの額に向かってフィールドを発生させて硬質化させた左拳を叩き込む。

「ナックルバンカーーーー！！！」

ーーーガァァァァァン！！

「ガッ！！」

ギンガのナックルバンカーを額に食らったティロモンは苦痛の声を上げ、目が白目を変わると、その身からデジコードが発生し、デジタマへと戻った。

それを確認したギンガは、ティロモンを殴り飛ばした時の衝撃を利用してウイングロードの上に戻り、警戒するように氷海の上で辺りを見回しているザフィーラに目を向ける。

「ザフィーラさん！」

「今、シグナムとヴィータをこちらに送ったと言う連絡が主から届

いた！船の方から向かっているビショップチェスモンはアインハルト達の援軍に向かうそうだ！」

「分かりました！なら、それまでは二人で！ハァァァァァァァァァーーーーー！！！」

ザフィーラの報告にギンガは応じると同時に、近寄って来ていたハンギョモンに向かって突撃する。

その動きは素早く、ハンギョモンはトレントを構えながらギンガに応戦するが、ギンガは自身のデバイスであるバーストキャリバーを旨く操って撹乱するようにハンギョモンの周りを動き続ける。

今回の作戦では、最初にデジモン達を倒す事が決まっていた。今までダークタワーの破壊を優先していたのは、ダークタワーが発生させているＡＭＦの存在が大きかった。

強力なＡＭＦが発生しているだけで、機動六課だけではなく管理局の部隊全てが力を発揮出来なくなる。故に少しでも戦いを有利にする為にＡＭＦを発生させているダークタワーの破壊を今まで優先していた。だが、今回の場所ではデジモン達を先に倒す事が有利に繋がると、はやて、ゲンヤ、オーリスは考えた。

何せ今までと違ってＡＭＦが発生しているのは、ギンガ達が居る地点から約二百メートル下の海底。

それならばデジモンを倒した後にダークタワーの破壊を行った方がいいとはやて達は判断し、こうして海を凍結させて現れるデジモン達と戦闘を行っていたのだ。

そしてギンガとザフィーラはシグナムとヴィータの応援が来るまで、氷海から現れるデジモン達に少しでもダメージを与えようと動くが、突然に凍結した海から振動をザフィーラは感じる。

ーーーゴゴゴゴッ！！

「ムッ！？」

（いかん！！大型のデジモンが現れるぞ！すぐに高く飛び上がれ！！」

「ギンガ！！」

「はい！！」

サーチモンの念話を聞いていたギンガも即座に応じ、ウイングロードを空高く展開させて、ザフィーラと共に氷海から離れた。

次の瞬間、ギンガとザフィーラが居た地点の氷海が割れ砕け、その場所から古代の生物であるアノマロカリスを思わせる姿をしたデジモン―『アノマロカリモン』が現れる。

アノマロカリモン、世代／完全体、属性／データ種、種族／古代甲殻類型、必殺技／スティンガーサプライズ

古代生物の調査や発掘を行っている研究所のデータバンクにコンピュータウィルスが感染し、古代生物のデータを取り込み進化した古代甲殻類型デジモン。コンピュータウィルスが感染し、古代生物のデータを取り込み進化した。古代に食物連鎖の頂点にいた生物同様、旺盛な食欲と、高い補食能力を身につけている。頭部から生えた触手を器用に使って敵を捕まえ、尻尾から生えた鋭いブレードで仕留める。戦況が不利になると海底の土を鋭い触手で巻上げて身を隠す。だが、逃げるのではなく頭部から突き出ているレーダーアイは暗視装置のように敵を捕捉し、逆転の機会を狙う。必殺技は、左右の前肢をクロスさせて、衝撃波を放つ『スティンガーサプライズ』だ。

ーーーガァァァァァーン！！

「シャアァァァァァァーーーー！！！！」

（気をつけろ！奴は獰猛な完全体デジモンだ！遠距離攻撃も備えているぞ！！）

「スティンガーサプライズッ！！」

ーーーブザン！！

『クッ！！』

サーチモンから念話が届くと同時にアノマロカリモンは左右の前肢をギンガとザフィーラに向かって動かし、鋭い刃上の衝撃波をギンガとザフィーラに向かって放った。

それを目撃したギンガとザフィーラは左右別々に直前まで居た場所から離れ、迫って来ていたスティンガーサプライズを避けた。

しかし、アノマロカリモンはその動きを見切っていたのか、頭部に生えている触手をギンガとザフィーラに向かってそれぞれ伸ばす。

「シャァッ！！」

ーーーギュルルルルルルルーーーーーー！！！

（不味いわ！！）

（避けきれん！）

自分達に向かって伸びて来た触手を目撃したギンガとザフィーラは、即座に避ける事が出来ないと判断し、防御するように障壁を展開しようとする。

アノマロカリモンはそれを目にすると同時に再び前肢をクロスさせてスティンガーサプライズを放つ為の準備を行い出す。防御するならば動きは先ず止まる。その隙に己の必殺技を放ち、ギンガかザフィーラのどちらかの命を奪うつもりだった。
ギンガとザフィーラをその動きに気がつくが、如何する事も出来ずに悔しげにアノマロカリモンを見つめていると、アノマロカリモンに向かって飛び掛かる二つの影を目撃する。

「ラーケテンハンマーーー！！」

「紫電一閃ッ！！」

ーーードゴオオオォォォォォォォン！！

「ギギャァァァァァァァァーーーーー！！！！！」

アノマロカリモンに飛び掛かったヴィータとシグナムは、それぞれアノマロカリモンの頭部から飛び出していた触角に強力な一撃を叩き込んだ。
その一撃によってアノマロカリモンの触覚は氷海に落下し、アノマロカリモンのその苦痛に暴れる。
シグナムとヴィータはその隙にギンガとザフィーラの傍に近寄り、ザフィーラは二人にそれぞれ視線を送りながら横に来たシグナムに質問する。

「主はキャロとヒシャリュウモンと共に『水』の闘士を相手にしているのか？」

「・・・あぁ、私とヴィータは此方の援護を命じられた」

（懸命な判断だ。我らの情報は闘士達に知られている。それらも考量して主はこちらにシグナムとヴィータを送ったのだろう）

ザフィーラは内心で、はやてがギンガとザフィーラの下にシグナムとヴィータを送った本当の意味を推察した。

ミッドチルダに居るメルキューレモン、アルボルモン、ダスクモン、そしてラーナモンがルインフォースの記憶を見たことはレオルモンから既に説明されている。その結果、はやて、ゲンヤ、オーリスはシグナム達では十闘士に勝てる可能性は限りなく低いと考えた。

何せシグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シャマル、リインフォースの五人は、戦いの経験を得ることは出来ても生物のように努力しても成長することは出来ない。それ故に歴戦の戦士であり、闇の書の記憶を全て見たメルキューレモン達はシグナム達の戦いの癖、魔法、攻撃の速さ、防御のタイミングなどが全て見切られているのだ。もちろんメルキューレモン達全員がシグナム達の動きを見切っている訳ではないが、それでも圧倒的なアドバンテージがメルキューレモン達とシグナム達の間には存在している。

はやて達はその辺りを考量してシグナム達とメルキューレモン達を戦わせるのは危険だと判断した。

ザフィーラはその辺りの事情が分かっている。ダスクモンと戦った時のシグナムの映像を見たが、シグナムの剣はダスクモンに完全に見切られ、ダスクモンの一方的な戦いにしかなっていなかった。

（やはり主は成長された。優しさだけの指揮官ではなく、厳しさと非情さを持った指揮官に）

今のはやては嘗ての理想に燃えていたはやてではない。

入院していたシグナム達と違って、機動六課にずっと居たザフィーラは知っている。

部隊長の仕事をしながらも、はやてが影で自身の実力を上げる訓

練を行っている事を。苦手だった並列処理も鍛え、体力をつける為に早朝に長距離のジョギングを行い、レオルモンに接近戦の手解きをはやては受けている。
少し前のはやては、適性の低さからそれらの訓練を行わなかったが今は違う。接近戦が苦手だった筈のなのはは、厳しい訓練を繰り返して接近戦の弱点を克服した。だからこそ、はやても更なる己の実力アップを望んで訓練を行いだしたのだ。そのはやての訓練にザフィーラは口を出す事が出来なかった。
ザフィーラ達守護騎士はどうしても無意識の内にはやてを擁護する動きを行ってしまう。それ故にはやての成長の妨げになってしまうかもしれないと不安に思ったザフィーラは、レオルモンに出来るだけはやてに厳しく訓練を行ってくれと頼むのが精一杯だった。
レオルモンもフリート辺りから守護騎士の特性を聞いたのか、ザフィーラの頼みを了承してアインハルト達同様に厳しくはやてを鍛えている。
話は戻すが、はやての行動をずっと見ていたザフィーラは、はやての真意を理解していたが、病院に入院して戦列から離れていたシグナム達には、はやての変化に戸惑わざるえなかった。
少し前のはやてならば多少の不利があろうとも、シグナムとヴィータと共にカルマーラモンと戦っていた筈。カルマーラモンさえも必ずはやてはシグナム達と共に戦うと思っていた。
しかし、はやてがあの場で戦いのメンバーに選んだのはキャロとヒシャリュウモン。
シグナムとヴィータはそれ故にはやての変化にどう接すればいいのかと悩みを抱えるが、そんな暇は与えないと言うように、先ほどの一撃のダメージから回復したアノマロカリモンと氷海の上に立っていたハンギョモンが上空に居るシグナム達に構えを行い出す。
「シャアァァァァァァッ！！」

「グゥッ！！」

「シグナム！！ヴィータ！！今は目の前の敵に集中しろ！！相手は我と同等以上の実力を持ったデジモン達だぞ！！」

「ッ！！・・・分かっている！レヴァンティン！！」

≪Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ（シュランゲフォルム）ッ！！≫

ーーーガチャン！！

我に帰ったシグナムの叫びにレヴァンティンは即座にカートリッジを排出して、連結刃にその身を変形させた。

ヴィータもシグナムの様子に一先ず悩むのを止めて、ギンガと共に氷海の上に立っているハンギョモンに向かいだす。

そしてザフィーラはシグナムと共にアノマロカリモンに向かいながら、フッと視線をはやて達がカルマーラモンに向ける。

（・・・もはや、今の主に必要なのは我らではなくお前だ・・・主を支えて、助けになってくれ。レナ・セフィル・・・いや、『レナモン』よ）

そうザフィーラは内心ではやてが隠している自分達の最後の家族になるかもしれない、はやてのパートナーに激励を内心で贈り、シグナムと共にアノマロカリモンとの戦いに集中するのだった。

「死になさい！！」

ーーービョン！！

カルマーラモンは怒りの叫びを上げると同時に、腰の辺りから生えている十本の足をはやてに向かって勢いよく伸ばした。

それを目撃したはやては自身の前面に右手を伸ばし、プロテクションを発生させて自身に向かって伸びて来ていた足を三本受け止める。

ーーーガキィィィーン！！

「グッ！！」

「オホホホホッ！！足は三本だけじゃないわよ！！」

ーーービュン！！

「ッ！！」

カルマーラモンは叫ぶと共にはやてが受け止めている足とは別の足を操り、はやての四肢を封じようとする。

しかし、その直前にキャロを背に乗せたヒシャリュウモンが、素早い動きでカルマーラモンに向かって突進する。

「オラァァァァァァァァァーーーー！！！」

「チィッ！！」

ーーービュン！！

突進して来るヒシャリュウモンに気がついたカルマーラモンは、

即座にその場から飛び退くことで突進を避けた。
　そのままカルマーラモンはヒシャリュウモンに向かって口を向けようとするが、その直前にカルマーラモンに向かって複数の誘導弾が迫って来る。

「アクセルシューターーーー！！」

「邪魔すんじゃないわよ！！」

ーーーバッシュン！！

「クッ！！（やっぱりレオルモンさんの言っていたとおり、ビースト体の十闘士の実力は完全体クラスみたいやね）」

（リインもそう思うです・・・でも、エンシェントデジモンになったら究極体デジモンに）

（分かっとるよ、リイン・・・・でも、気迫で負けたら、尚更に勝てへん・・・絶対に気迫だけは負けないで戦う！！）

（はいです！！）

　はやての気迫のこもった言葉にリインも同意を示し、自身の周りで動き回っている誘導弾を足で消滅させているカルマーラモンにシュベルトクロイツを構えなおす。
　それを横目で目撃したカルマーラモンは、はやてが大威力の魔法を放とうとしていることを予測し、ヒシャリュウモンからも距離を取るようにして離れると、自身の体を高速回転させてドリル状に変わる。

「タイタニックチャージッ！！」

ーーーギュルルルルルルルルルッ！！！

「ディバインバスターーー！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオン！！

ーーーバッシュン！！

「なっ！？」

はやてが撃ちだしたディバインバスターは、カルマーラモンのタイタニックチャージに触れると同時に霧散した。

砲撃を受けても全くダメージを受けていないカルマーラモンの姿に、はやてだけではなくキャロとヒシャリュウモンも目を見開いていると、カルマーラモンは高速回転を続けながら高笑いしだす。

「オホホホホホッ！！無駄よぉ！！高速回転している私に、その程度の砲撃なんか通じないわよ！！」

（クッ！！昔、ブラックウォーグレイモンがバードラモンの必殺技を撃ち破った原理と同じみたいやね）

（みたいです。でも、ブラックウォーグレイモンよりは回転速度は遅いみたいですよ、はやてちゃん。コレなら何とかなるかもしれないです）

（情報ありがとう、リイン・・・・なら、攻める方法はあると言うことや）

リインからの情報にはやては打開策を思いつき、ヒシャリュウモンの背に乗っているキャロに意味深な視線を送る。
キャロとヒシャリュウモンはその視線の意味を事前に打ち合わせていた策を使用する合図だと理解し、はやてに向かって僅かに頷く。
カルマーラモンは突然に動きが止まったはやて、ヒシャリュウモン、キャロの様子に訝しげに眉を顰めるが、何かをやられる前に倒そうと回転速度を更に上げながら落下を開始する。

ーーーギュルルルルルルルルッ！！！

「何か企んでいるみたいだけど、無駄よ！！何せ凍らされていても、此処は、私達が有利なフィールドなんだかね！！」

ーーーードゴオオオオオオオォォン！！

ーーーガガガガガガガガガガガガガガガッ！！

『ッ！！』

叫ぶと同時に氷海に落下して、削岩機のように氷海を掘り進むカルマーラモンを目にしたはやて達は目を見開いた。
そして即座にカルマーラモンの目的に気がつき、凍りついていない海の深度に達する前に攻撃をしようとするが、間に合わなかった。

ーーービキビキビキッ！！！！

「不味いです！！」

「俺の傍に寄れ！！早くしろ！！」

氷海に入った亀裂を目撃したキャロが叫ぶとヒシャリュウモンは、はやてに自身の傍に寄るように叫んだ。
その叫びに即座にはやてはヒシャリュウモンの背に飛び乗り、キャロと共にフィールドタイプの防御魔法を発動させて来るであろう最大級の“災害”に対抗しようとする。
そしてはやて達が防御を堅め終えた瞬間、氷海に入っていた亀裂が更に広がり、亀裂の間から海の水さえも巻き上げた竜巻が現れる。

ーーードオオオオオォォォォォン！！

ーーーゴオオオオオォォォォォォォーーーー！！！！！

『クッ！！』

氷海の亀裂の間から現れた竜巻の威力にはやて達は思わず声を漏らし、ヒシャリュウモンは竜巻に巻き込まれないように距離を取ろうとする。
しかし、ヒシャリュウモンの動きは読まれていたかのように、次々と竜巻から氷塊が幾重にもヒシャリュウモンに向かって飛んで来る。

ーーードン！！ドン！！ドン！！

「なっ！？クソ！！」

ーーービュン！！

次々と竜巻から飛んで来る氷塊をヒシャリュウモンは全速力で避けるが、氷塊は止まる事無くヒシャリュウモンを狙い続ける。

連続で竜巻から放たれる氷塊を目撃したはやて、キャロは、自分達の作戦で凍らせた海を逆に利用して来るカルマーラモンの行動に顔を険しく歪めざるえなかった。
流石は『水』の闘士の称号を持つデジモンと言うべきなのか、カルマーラモンも凍らされた海を逆に利用する攻撃を放って来ている。更に不味いことにカルマーラモンが発生させている竜巻は、少しずつではあるが移動を開始していた。
ユーノとアルフが放ったエターナルコフィンによって、全てではないが半分近くのデジモン達は凍結封印されている。エターナルコフィンは強力な魔法だが、外部からの衝撃や加熱などで凍結が破られてしまう弱点がある。もちろん使用された時の威力によって強度は変わるが、海のフィールドの力でパワーが増しているカルマーラモンならば、エターナルコフィンを破壊することが出来る。。
このままでは凍結封印されているデジモン達が目覚めてしまうと確信したはやてとキャロは、もはや一刻の猶予もないことを理解し、キャロはヒシャリュウモンに向かって叫ぶ。

「ヒシャリュウモン！！行くよ！！」

「了解だぜ！オオオォォォォォォォォォーーーーーー！！！！」

ーーービュン！！

ヒシャリュウモンはキャロの叫びに応じると共に全速力で竜巻に向かって突撃する。
その様子を竜巻の中心で回転しながら見ていたカルマーラモンは、自身の勝利を確信していた笑みを口元に浮かべていた。ヒシャリュウモンにはギンリュウモンやリュウダモンの時のような遠距離系の技が存在していないことを、カルマーラモンは見抜いていた。
もし遠距離系の技が使えるのならば、メガシードラモンが発生さ

せたメイルシュトロームを遠距離から破壊していただろう。だが、ヒシャリュウモンが使った技は『成龍刃(せいりゅうじん)』と言う、自身の体を巨大な刃に変化させて切り裂く技。

『成龍刃(せいりゅうじん)』は確かに強力な技だが、ビースト形態の『水』の闘士の力が浸透し、更には大小の氷塊まで内部で吹き荒れている竜巻を撃ち破ることは出来ない。

故に自身に敗北はまずないとカルマーラモンは確信するが、一つだけ気に掛かることがあった。事前の情報で得ていたはやてのパートナーデジモンが一向に姿を見せていない。今の状況はかなりはやて達にとって不利な状況の筈。なのに、姿は全く確認できず、接近して来る気配もヒシャリュウモンしか感じることが出来ない。

「(可笑しいわね？・・・・まぁ、今更八神はやてのパートナーが現れても私の勝利は揺るがないけどね)・・さぁ、止めよ！！」

ーーーゴオオオォォォォォォォォォーーーーーーーーー！！！！！

カルマーラモンが叫ぶと同時に竜巻に勢いは更に増した。

ヒシャリュウモンはその竜巻の威力に巨体でありながらも、体が揺さぶられそうになるが、必死に堪えながら真っ直ぐに竜巻に突進する。

一体何をする気なのかと、流石にカルマーラモンは疑問を抱きながら、伸ばしている触手で氷塊をヒシャリュウモンに投げ飛ばそうとした瞬間、ヒシャリュウモンの背から防御魔法を使用したままのキャロとはやてが飛び上がり、ヒシャリュウモンは自身の体を巨大な刃に変化させる。

「オオオォォォォォォォォォォォォーーーーーーー！！！！！成龍刃(せいりゅうじん)ッ！！」

ーーーガキィィィィィーーーン！！

「オホホホホホホッ！！真っ向勝負のつもりなの！？その程度での攻撃では、私の竜巻は敗れないわよ！！」

自身が発生させている竜巻に成龍刃（せいりゅうじん）と化して激突しているヒシャリュウモンに向かって、カルマーラモンは嘲りの言葉を放った。

幾ら完全体のヒシャリュウモンでも、海のフィールドで力が倍増している『水』の闘士が発生させている竜巻を撃ち破ることは出来ない。それが正しいと言うように、ヒシャリュウモンは竜巻から弾き飛ばされようとしていた。

自身が吹き飛ばされてしまうかもしれない事実に、ヒシャリュウモンは刃に変化しながら悔しい想いを抱くが、自身が成すべきことの為に力を更に込めて竜巻に自身の体を押し込める。

ーーービシッ！！

「なっ！？」

僅かながらも竜巻の中に刃を押し込めたヒシャリュウモンの姿に、カルマーラモンは驚きの声を上げ、即座に触手で掴んでいた氷塊をヒシャリュウモンに向かって投げつける。

「この！！吹き飛びなさいよ！！」

ーーードドドドドドドドドドドゴオォォン！！

「グゥッ！！・・・・・アァ・・・・吹き飛んでやるよ」

「えっ？」

「ただしなぁ！！俺のパートナーと仲間を竜巻に入れたらなぁ！！」

「なんですって！？」

ヒシャリュウモンの叫びにカルマーラモンは驚愕するが、ヒシャリュウモンは構わずに押し込めていた体を勢いよく竜巻の外側に戻し、竜巻に僅かな数瞬だけ亀裂を入れた。

そして次の瞬間、僅かに入った亀裂からキャロの補助魔法を受けて限界ギリギリまで移動速度を上げたはやてが、キャロを抱えながら飛び込んで来る。

カルマーラモンはその姿に焦りを覚え、近くで飛び回っている氷塊を掴み取って、はやてとキャロに向かって構える。

何が目的なのかはカルマーラモンには分からないが、自身の知るはやてに関する情報の違いから、何かを企んでいることだけは予測し、何かをされる前にはやてとキャロを倒そうとする。

「コレを食らって竜巻に巻き込まれて消滅しなさい！！自分達の魔法の効果を呪いながらね！」

ーーーブン！！

カルマーラモンは叫ぶと同時に自身と同じぐらいの大きさの氷塊をはやてとキャロに投げつけた。

それを食らえば、ヒシャリュウモンと言う護りがないはやてとキャロは、竜巻に巻き込まれてしまい、跡形もないほどに消滅するだろう。

しかし、はやてとキャロは焦る事無く事前に打ち合わせていた策を使用する為に、キャロは自分達の前に転移用の魔法陣を発生させる。

「呼ぶんや！！キャロ！！」

「はい！彼方より此方へ、夜天と共にありし金色の狐よ、夜天と我がもとに！」

「ッ！？まさか！？この為に竜巻の中に！？」

キャロの詠唱と二人の前に浮かんでいる転移用の魔法陣の意味を理解したカルマーラモンは、目を見開きながら驚愕に満ちた叫びを上げた。

それが正しいと言うように魔法陣は強く輝き、次の瞬間、魔法陣の中から全身に電撃を纏ったキュウビモンが飛び出し、はやてとキャロに迫っていた氷塊に突進する。

「二人はやらせんぞ！！弧電撃（こでんげき）ッ！！」

ーーーバキィィィィーーン！！

「クッ！！」

キュウビモンの弧電撃（こでんげき）によって砕けた氷塊を目撃したカルマーラモンは悔しげな声を上げ、回転を一時止めてキュウビモンを迎え撃とうと触手を構える。

無理やりには近かったが、自身の発生させている竜巻の唯一の弱点だった中心部分に入り込まれてしまった。その事実にカルマーラモンは悔しい想いを抱くが、すぐにそれはキュウビモンに迫っていながらも余裕の笑みに変わる。

（クス、ミスったわね、八神はやてと小娘。召喚するんだったらヒ

シャリュウモンにすべきだったのよ。所詮キュウビモンは成熟期デジモン。ビースト形態の私に勝てるはずはないわ！この勝負貰ったわよ！）

カルマーラモンはそう自身の勝利を確信しながら、キュウビモンに触手を伸ばそうとする。

しかし、次の瞬間、キュウビモンの背後に居たはやてが自身のバリアジャケットのポケットの中からディーアークを取り出し、キュウビモンの背に向かって叫ぶ。

「行くで！！キュウビモン！！」

「応ッ！！」

≪ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ≫

「キュウビモン進化！！」

ーーーギュルルルルルッ！！

「ッ！？まさか！？」

聞こえて来た電子音声とデジコードに包まれたキュウビモンを目撃したカルマーラモンは、その意味を理解し、信じられないと言うように叫んだ。

だが、デジコードの内部に居るデジモンはカルマーラモンの叫びなどに止まらずに、デジコードを突き破るように飛び出した。

そのデジモンは陰陽師が着るような服を纏い、袖の下から霊符を何枚も引き抜き、狐の顔をしていた。そのデジモンこそキュウビモンが、はやてとの絆を深めて完全体へと至ったデジモン。その名も。

「タオモン！！」

タオモン、世代／完全体、属性／データ種、種族／魔人型、必殺技／狐封札（こふうさつ）、梵筆閃（ぼんひつせん）

陰陽道に精通し、あらゆる技を駆使して戦う完全体の魔人型デジモン。特に呪術の能力が高く、霊符や呪文の攻撃を得意としている。また暗器の達人でもあり、様々な武器を袖の下に隠し持っている。非常に寡黙で多くは語ることはなく闇に潜み闇に生きる存在である。必殺技は、袖の下から霊符を取り出し、敵の体に巻きつけて爆発させる『狐封札（こふうさつ）』と、巨大な筆で呪文を唱えながら梵字を空中に描き敵に飛ばして大爆発を引き起こす『梵筆閃（ぼんひつせん）』だ。

「う、うそ！？一体何時の間に完全体に！？」

「グロットモンも同じことを言っていたぞ？」

「ッ！！・・・アンタがグロットモンを！？」

「フッ！狐封札（こふうさつ）ッ！！」

ーーーバラバラバラッ！！

「クッ！！」

突如としてタオモンが袖の下からばら撒いた霊符を目にしたカルマーラモンは、即座にその場から飛び退き、霊符から逃れようとする。

しかし、まるで霊符は自身の意思があるかのように空中で方向を変えて、カルマーラモンを追尾する。

カルマーラモンはその攻撃に危機感を感じ、水中に逃れようとするが、その横合いから竜巻の勢いが弱まったことで入り込むことが出来たヒシャリュウモンが飛び込んで来る。

ーーードオオォォォォォォン！！

「オラアァァァァァァァァーーーーーー！！！！！！」

「ゲッ！？」

竜巻を突き破って現れたヒシャリュウモンの姿に、カルマーラモンは目を見開きながら叫び、その場で急停止した。

同時にカルマーラモンを追っていた霊符が追いつき、次々とカルマーラモンの体を覆うように巻きついて来る。

ーーーガシガシガシガシガシガシッ！！

「しまっ！？」

「爆ッ！！」

ーーードゴオオォォォォン！！

「キャァァァァァァァァァーーーーーー！！！！！！」

口元に手をやりながらタオモンが念を込めながら叫ぶと同時に、カルマーラモンに張り付いていた全ての霊符が爆発し、カルマーラモンは全身を爆発によって生じた炎に焼かれながら吹き飛んだ。

その方向には吹き飛んで来るカルマーラモンを待ち構えていたように、全身を桃色の魔力光で覆ったヒシャリュウモンが存在し、ヒ

シャリュウモンは迷う事無くカルマーラモンを自身の巨大な尾で竜巻の外に向かって弾き飛ばす。

「さっきの礼だ！！」

ーーーーバシィィィィーーーン！！

「ゲブゥゥゥゥゥゥゥゥーーーーーーーーーー！！！！！！」

顔面を尾で強打されたカルマーラモンは悲鳴を上げながら吹き飛び、竜巻を貫いてその先に存在していた凍りついたままのメガシードラモンに激突する。

ーーードゴオオォォォォン！！

「グッ！！」

ーーーズルズルズルッ！！

「・・・ウゥ・・ウゥ・・・顔が！？顔が！？私の顔が！？」

凍り付いていたメガシードラモンから氷海に滑り落ちると同時に、カルマーラモンはヒシャリュウモンに強打された自身の顔を押さえた。

そしてすぐさま全身から憎しみに炎を噴き上げ、自身を痛めつけたタオモンとヒシャリュウモンが居る方向に顔を向ける。

「よくも！よくも私の顔を痛めつけて・・・く・・・れ・・・」

憎しみの叫びを上げていたカルマーラモンだが、その声は徐々に

小さくなった。
何故ならばカルマーラモンの視界の先には、空中で巨大な魔法陣を発生させながらシュベルトクロイツの矛先をカルマーラモンに向けているはやてが存在していた。
「終わりや。天よりそそぐ矢羽となれッ！！フレースヴェルグッ！！」
ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーー

『ッ！！』

「クッ！！」

ーーービュン！！

切羽詰まったサーチモンの念話が届いたタオモンは、即座にはやての傍に近寄り、はやての体を迷う事無く蹴り飛ばす。

「逃げろ！！」

ーーードゴオオオォォォン！！

「グッ！！」

タオモンの蹴りを食らったはやては苦痛の声を上げながら吹き飛んだ。

同時にタオモンが蹴りの反動を利用してその場から離れた瞬間、直前まではやてとタオモンが居た地点に向かって、氷海を粉砕しながら閃光が通り過ぎる。

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！

『ッ！！』

天に向かって氷海から立ち昇る閃光によって、はやてが放ったフレースヴェルグは吹き散らされた。

フレースヴェルグの脅威が去ったことでカルマーラモンが安堵の息を吐いていると、突然に氷海全体を揺るがすほどの振動が響きだ

す。

ーーーゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！

「コレって？もしかして？」

「あぁ・・・間違いねぇ・・・きやがるぞ」

キャロを背に乗せながら空に浮かんでいたヒシャリュウモンは、氷海を揺るがしている存在が何者かを理解し、表情を険しくする。

同時にタオモンの蹴りのダメージから回復したはやても、氷海か現れるデジモンの正体を理解し、僅かに体を恐怖に震わせながら呟く。

「・・・来る・・・『メタルシードラモン』が」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオォォォン！！

『ッ！！』

突然にカルマーラモンの近くの氷海が割れ砕け、その場所から巨大な水柱が立ち昇った。

それを目にした全員が水柱に目を向けた瞬間、水柱の中から苛立ちを堪えた声が大気を震わせながら聞こえて来る。

「・・ふがいねぇ・・・ふがいなさ過ぎるぞ！！」

『ッ！！』

水柱の中から聞こえて来た声に、カルマーラモンを除いたデジモ

ン達全員が恐怖に震えるが、声は構わずに叫ぶ。

「てめぇら！！ここはどこだ！？ここは俺様達水のデジモン達の縄張りだぞ！？その場所で人間なんて下等な種族に好き勝手やらせてんじゃねぇぞ！！」

ーーードバァァァァァァァァァァン！！

一際大きな叫びが水柱の中から響いた瞬間、水柱は吹き飛び内部からメガシードラモンよりも二周りも巨大で全身を金属で覆い、鼻先が砲塔の形をしているデジモン ー今回の機動六課の任務遂行の最大級の障害の一体ー『メタルシードラモン』がその姿を現した。

メタルシードラモン、世代／究極体、属性／データ種、種族／サイボーグ型、必殺技／アルティメットストリーム、ヘルスクイーズ、ポセイドンディバイド

対陸海空迎撃用デジモンとして作られた三体のうちの一体で、最後に作られた水中迎撃用のサイボーグ型　デジモン。全身を最強の金属『クロンデジゾイト合金』で覆ったシードラモンの最終形態の一つである。水棲デジモンでは最速の移動スピードを誇る上に、全身のメタルボディーは大抵の攻撃を跳ね返してしまう性質まで秘めている。必殺技は、鼻先の砲塔から巨大なエネルギー砲を発射する『アルティメットストリーム』と、自身の巨体をくねらせ、光を放って発生させた水の柱で敵を弾き飛ばす『ヘルスクイーズ』。そして海を操り、　巨大な津波を起こし、相手を飲み込む『ポセイドンディバイド』だ

「十闘士！！」

「ワッ！！な、なによ！？」

突如として咆哮を上げるように呼ばれたカルマーラモンは驚き、メタルシードラモンに向かって叫び返した。
その声にメタルシードラモンは怒りに満ちた視線をカルマーラモンに向けながら質問する。

「テメエ！何だその不様な姿は！？テメエは俺様たちのリーダーなんだろう！？これ以上不様を晒すんだったら、俺様はテメエらには従わねぇぞ！？」

「・・・・・フン！！分かってるわよ・・・見てなさい。私の華麗で美しく、そして最強の姿を見せてあげるわ！エンシェントエヴォリューーン！！」

ーーーギュルルルルルルルルルッ！！

『ッ！！』

カルマーラモンが叫ぶと同時に発生した巨大なデジコードを目撃したはやて達は目を見開いた。
しかし、デジコードは一切はやて達の様子になど構わずに巨大化し続け、一定の大きさになった瞬間に、突如としてデジコードは弾けとんだ。
そしてはやて達がデジコードのあった場所に目を向けると、金色の三叉の鉾を右手に持ち、下半身が人魚姫を思わせるように魚の形をし、上半身と頭部を鎧と兜で覆い、至るところを銀鱗で覆った女性の姿をしたデジモンが存在していた。
そのデジモンこそ、嘗てルーチェモンを封印した伝説の闘士の一体。『水』の闘士、ラーナモンとカルマーラモンの真の姿。その名も。

「エンシェントマーメイモン！！」

エンシェントマーメイモン、世代／究極体、属性／データ種、種族／古代水棲獣人型、必殺技／グレイト・メイルストローム、クリスタルビロー

古代デジタルワールドを『ルーチェモン』の反逆から救った伝説の『十闘士』の１体で、水の属性を　持つ古代水棲獣人型デジモン。輝く銀鱗は深海を照らし、黄金の三つ又の鉾を持つ。海流や津波などありとあらゆる水を手足のように扱う事が出来る。エンシェントマーメイモンの怒りに触れた大陸や島は、その能力によって消滅したといわれている。必殺技は、巨大な渦巻きを発生させ、全てを水中へと呑み込ませてしまう『グレイト・メイルストローム』と、水を超硬質なクリスタルの弾丸に変え、マシンガンの様に敵に向かっていくつも撃ちだす『クリスタルビロー』だ。

「こ・・これが・・・『水のエンシェントデジモン』」

エンシェントマーメイモンを目撃したはやては、心の底から溢れてくる恐怖心を隠す事が出来なかった。

今、エンシェントマーメイモンは何かを行ってる訳ではない。ただそこに存在しているだけで、圧倒的としか言えない威圧感を全身からエンシェントマーメイモンは放っていた。それはエンシェントマーメイモンだけではない。横に居るメタルシードラモンからも同様の威圧感が感じられていた。

その場に居る機動六課メンバー全員がエンシェントマーメイモンとメタルシードラモンが発している威圧感に、恐怖を隠す事が出来なかった。

その様子を眺めていたエンンシェントマーメイモンは、口元を笑みに歪めながら金色に輝く三叉の鉾を構えだす。

「さぁ、始めましょう、機動六課。貴女達はここで消えるのよ。せいぜい、私達の強さを思い知りながら消えていきなさい！！オホホホホホホホホホッ！！」

本当の戦いが始まる。海のフィールドで力が増している究極体二体と複数のデジモン達と言う圧倒的な敵との、機動六課の戦いが始まるのだった。

水棲デジモン達の脅威　後編（後書き）

次回予告

遂にその姿を現したエンシェントマーメイモンとメタルシードラモン圧倒的な力の前に究極体に進化したオウリュウモンでも危機に追い込まれてしまう。

次々と襲い掛かる水の脅威に、機動六課が危機に陥る時。

二つの閃光が戦場に現れる。

次回、漆黒の竜人と少女、『エンシェントマーメイモンとメタルシードラモン』

機動六課の切り札が究極に届く時、勝負の行方は分からなくなる。

エンシェントマーメイモンとメタルシードラモン　前編

機動六課がデジモンと激戦を繰り広げている地点から数キロ離れた場所。
その場所を高速で飛行する二つの影が存在していた。その二つの影の内の一つ―赤と黒の色合いのバリアジャケットを身に纏った少女―は、非常に不機嫌そうな顔をしながら自身の横合いを飛んでいる、黒いレオタードを思わせるようなバリアジャケットとマントを羽織った少女を睨んでいた。

「・・・貴女に道案内を頼んだ私が馬鹿でした」

「ウッ！！・・・だって！仕方がないだろう！海は広いんだ！？僕が正確な場所なんて分かるはずないだろう！？」

「威張って言うことではありません・・・全く、コレで間に合いでもしなかったら、せっかくの大と一緒にお風呂に入れるご褒美が消えるんですよ」

「それ駄目！？せっかく約束を取り付けたんだから！？」

「だったら、自分のデバイスの案内に従うべきだったのです。それなのに貴女と来たら、真っ直ぐ進めば辿り着けるなんて思って、見当違いの方向に向かっていたではないですか」

「・・・・・ねぇ？・・・見当違いってどう言う意味？」

ーーーガクッ！

意味が本当に分からないというように質問して来た黒いバリアジャケットの少女に、もう一人の赤と黒のバリアジャケットの少女は思わず空中で体勢を崩してしまう。
しかし、何とか体勢を整えなおし、不機嫌そうな視線をもう一人の少女に向ける。
その視線に黒いバリアジャケットの少女はうろたえながら距離を取るが、赤と黒のバリアジャケットの少女は溜め息を吐くことで不満を吐き出し、真っ直ぐ先に視線を向ける。

「とにかく、急いで機動六課の救援に向かいますよ。あの女の頼みなど別にどうでもいいですけど、大の頼みです。手を貸してあげましょう」

「そうそう！オリジナルの頼みは別にどうでもいいけど、大の頼みは別だからね」

「・・・・それに・・・・もう一つ。大からデジソウルを与えられたと言う女・・・泥棒猫の顔がどんな顔なのかを確かめなければいけません」

「うん！！僕らを差し置いて、大から何かを貰うなんて赦せない！」

「待っていなさい！泥棒猫！その顔がどんな顔なのか、確かめてやります！！」

そう赤と黒のバリアジャケットの少女は気炎を吐きながら叫ぶと、横を飛んでいる少女と共に真っ直ぐに機動六課とデジモン達が戦っている場所を目指すのだった。

凍りついた海。
その場所で機動六課メンバーの主力と、その地に現れたデジモン達が激戦を繰り広げていた。
だが、今その場所で動く者は二体のデジモン―究極体のメタルシードラモンとエンシェントマーメイモンだけだった。
機動六課のメンバーも、メタルシードラモンとエンシェントマーメイモンの仲間のデジモン達も、二体の究極体が放つ圧倒的な威圧感に息をするのも苦しんでいた。
特にデジモン達の敵として、この場に居る機動六課メンバー全員が理解していた。一瞬でも気を抜けばその瞬間に自分達は死んでしまう。常に気を張り巡らして臨戦態勢を整えなければ、一瞬の内に敗北してしまうと、機動六課の誰もが理解していた。
それが正しいと言うようにメタルシードラモンは海中に隠していた自身の巨大な尾を出し、エタナールコフィンを受けて凍結封印されてしまっている仲間のデジモン達を見回す。

「・・・・チィッ！！何時まで寝てやがるんだぁ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオォォォン！！

ーーービキビキビキビキッ！！

『ッ！！』

メタルシードラモンが咆哮と共に振り下ろした尾の一撃によって、氷海全体に罅が入り込んだ。
それを目撃した機動六課メンバー全員が不味いと思った瞬間、凍結されていたデジモン達の場所にまで罅は広がり、全てのデジモン達が自身を封印していた氷を破壊しながら一斉に目を覚ます。

ーーーバキィィィィーン！！

『グウゥゥゥ

（加えて言えば、凍結封印したデジモン達も復活・・・・幾らオウリュウモンかて、メタルシードラモンとエンシェントマーメイモンの二体を同時相手は無理や。周りのデジモン達の事を考えて、向かわせられるメンバーは…）

「フフ～ン。考えている暇なんて上げないわよ！！数多の海水よ！私の鉾の先に集まりなさい！！」

ーーーズドドドドドドドドドドドドドドドドドッ！！！！！

「この現象！？・・・不味い！！主！！」

「・・・・ま、まさか・・・・そんな」

エンシェントマーメイモンが叫ぶと同時に起こした現象を目撃したリインフォースは、驚愕と困惑に満ちた叫びを上げ、同じようにその現象が意味することを理解したはやては恐怖から体が震えた。

罅割れた氷海の隙間から、次々と海水がエンシェントマーメイモンの持つ鉾の先に向かって舞い上がり、巨大な球体状に海水は集まっていた。どれだけの量の海水が集まっているのかは、はやて達には分からなかったが、少なくともエンシェントマーメイモンが集めた海水が解放されでもしたら、大洪水ではすまないことだけは、ハッキリと誰もが理解出来た。

同時にメタルシードラモンを除いたデジモン達は次々と海の中に向かって飛び込み、エンシェントマーメイモンが行なおうとしていることの影響を受けない為に海中の奥深くへと逃げていく。

コレからエンシェントマーメイモンが行なおうとしていることには、敵も味方もない完全な広範囲殲滅系の攻撃。はやて達もそれを理解していたが、海の中に潜ることなど出来ないはやて達は悔しげ

に顔を歪めながら、それぞれ少しでもダメージを減らそうと防御魔法を発動させていく。
その様子を眺めていたエンシェントマーメイモンは、はやて達の行動を嘲笑うかのように自身の三叉の鉾の先に集めていた海水で構成された巨大な球体を空に高く投げる。

ーーービュン！！

「無駄よ！！その程度では止まらないわよ！！解放！！」

ーーードオォォォォォォン！！

ーーーバッシャァァァァァァァン！！

『ッ！！』

エンシェントマーメイモンが叫ぶと同時に、空高く舞い上がっていた海水の球体が解放され、濁流のように海水が降り出す。
一見、ただ海水を上空で解放して濁流のような雨を降らせただけに見える攻撃。だが、その海水の雨の一滴残らずにエンシェントマーメイモンの絶大な力が込められている。並みの究極体でもその攻撃にはダメージを避けることは出来ないだろう。
その攻撃が濁流のように今、はやて達に向かって逃げ場も与えずに降り注いでいる。
そしてはやて達は、それぞれ防御魔法を発動させながら悔しげに迫りくる濁流の雨を見ながら、一人の残らず雨に飲み込まれた。

ーーーザザザザザザーーーー！！！ザァァァーーー！！

「フフ〜ン♪呆気ないわね。まだ進化したばかりの一撃なのに、機

動六課は終わったわ」

「・・・・・・フッ、どうやら歯応えのある奴がいたようだぞ？」

「ん？」

何処となく楽しげに声を掛けて来たメタルシードラモンの言葉に、エンシェントマーメイモンは疑問を覚えながら自身が降らした雨の影響で発生した白い霧の先を見つめると、霧の中に映る二本の巨大な刀らしき物を握った、竜の影を発見する。

その影にエンシェントマーメイモンが僅かに顔を歪めた瞬間、影は握っていた右手の刀を一閃し、自身の姿を隠していた霧を吹き散らし、エンシェントマーメイモンとメタルシードラモンのその正体を晒す。

ーーーザン！！

「ヒシャリュウモン進化！！オウリュウモン！！」

自身の究極体への進化を終えたオウリュウモンは、右手に握っている『鎧龍右大刃（がいりゅうだいじん）』と、左手に握っている『鎧龍左大刃（がいりゅうさだいじん）』を油断なくエンシェントマーメイモンとメタルシードラモンに向かって構える。

その間にオウリュウモンの巨体に隠れて、エンシェントマーメイモンの攻撃を避けたはやては、即座に無事なメンバーを確認しだす。

（皆！無事やったら、念話に答えてや！！）

（・・・・・此方・・ギンガです・・・少し負傷は負いましたけど、私とシグナムさん達は戦えます。タオモンさんが護ってくれました）

（此方リインフォースです、主。此方はフリードが翼をやられましたが、他のメンバーは私も含めてビショップチェスモンのおかげで無事です）

（此方ヴァイス・グランセニック！ヘリは無事！切り札のスバルには傷一つありませんよ、部隊長！）

（よし・・・・負傷を負ったフリードはヘリに搬送。ユーノ君かアルフに頼んで回収。他の戦闘が可能なメンバーは当初の予定どおりメタルシードラモンに攻撃開始。正しアインハルト、エリオ、ベアモンの三人は、結界を張っている部隊員達と共に浮上してくるデジモン達への攻撃を優先。さっきのエンシェントマーメイモンの攻撃で、デジモン達はメタルシードラモンを除いたデジモン達は全員海の底に隠れたから、氷海に挙がって来るデジモン達はサーチモンでサーチ出来る・・・・三人とも、今度はフリードの援護も、ビショップチェスモンもリインフォースの援護もないで）

（此方アインハルトです・・・・分かっています）

（でも、これが今の僕らに出来ることです・・・・精一杯頑張ります！！）

「・・・・よし！総員！戦闘再開！！」

『了解！！』

はやての号令に無事なメンバー全員は同時に力強く叫び、それぞれ与えられた任務を実行する為に駆け出す。

その様子を目を細めながら見ていたメタルシードラモンは、即座

にはやて達の作戦の内容を看破し、僅かに感心したように頷く。
（ほう・・・・下等な連中だと思っていたが、少しは考える頭があるようだな）
「メタルシードラモン。アンタは八神はやて達をやりなさい。変わりに、あの究極体は貰うわよ」
「あん？」
エンシェントマーメイモンの告げた内容に、僅かにメタルシードラモンは不機嫌そうに目を細めた。
先ほどまでメタルシードラモンは、エンシェントマーメイモンの命令どおりに海の底でダークタワーを護っていた。メタルシードラモンにとっては非常に不満な内容の命令だったが、自分達の仲間を呼ぶ装置を失う訳にはいかないと了承して命令どおりに動いた。
ならば、一番の強敵であるオウリュウモンと戦ってもいいだろうとメタルシードラモンは思うが、エンシェントマーメイモンは左手で自身の頬を撫でる。
「カルマーラモンの時にアイツに顔を尻尾で叩かれたのよ。その例をしないと気がすまないのよ」
「・・・・・チィッ！！噂に聞いた人間とデジモンが融合進化して現れる究極体と戦いったかったんだが、まぁ、いいぜ・・・・（それに思ったよりも人間も楽しめそうだ）」
メタルシードラモンはそう内心で思いながら、自身に向かって来ているはやて達に目を向ける。
海の中に潜んでいた時からメタルシードラモンは、はやて達の行

動を観察していた。絶対的に不利な場所でありながらも、僅かな油断の隙をついてはやて達は多少は自分達に有利な状況に持ち込み、カルマーラモンを倒す寸前まで追い込んだ。
故郷を滅ぼした人間が下等な存在だと言う考え自体は変わっていないが、はやて達は油断をしてはならない相手だと言うことだけは理解していた。
そしてそれぞれが戦う相手を決めると、メタルシードラモンは身をくねらせながらはやて達の方へと向かい、エンシェントマーメイモンは右手に握っている金色の三叉の鉾を構えながらオウリュウモンに向かって飛び掛かる。

「さぁ、さっきの顔の礼は充分にしてあげるわよ!!ハァァァァァァァーーーーー!!!」

「オリャァァァァァァァァァァーーーーーーーーーーーー!!!!!!」

ーーーガキィィィィィィーーーン!!

ーーーガキン!!ガキン!!キィン!!ガキィィィーーー!!

エンシェントマーメイモンとオウリュウモンは互いに咆哮をあげながら、自身の武器を相手に向かって振るい、甲高い金属音を鳴り響かせた。
そのままエンシェントマーメイモンとオウリュウモンは互いに素早く武器を連続で振るい、次々と甲高い金属音を鳴り響かせ続ける。
その間にメタルシードラモンに向かっていたはやて達は、先ず先制して攻撃を放とうと、罅が広がった氷海を走っていたビショップチェスモンが自身の握っている杖からメタルシードラモンに向かっ

て砲撃を放つ。

「食らえ！ビショップレーザーーーー！！！」

ーーービィィィィィィーーーー！！！

ビショップチェスモンが撃ち出したレーザーは、真っ直ぐにメタルシードラモンに向かって直進する。

その攻撃にどう対処するのかと、はやて達はメタルシードラモンの行動を注視するが、メタルシードラモンは何の行動も取ることなく、ビショップレーザーをその身に受ける。

ーーードオォォォォォォォン！！

「ヌッ！？」

何の行動もする事無く自身の必殺技をその身に受けたメタルシードラモンの姿に、ビショップチェスモンは訝しげに顔を歪めた。

究極体のメタルシードラモンならば、完全体のビショップチェスモンの必殺技を吹き散らすことぐらい可能な筈。なのに何故避けることも防御することもなく、その身に必殺技を受けたのかと誰もが疑問を覚えた瞬間、ビショップチェスモンに向かってビショップレーザーがはね返って来る。

ーーービィィィィーーーーー！！！

「何ッ！？クッ！！」

ーーードオォォォォォーーン！！

はね返って来た自身の必殺技に、ビショップチェスモンは驚愕しながらも急いでその場から飛び退いてビショップレーザーを避けた。
同時に様子を伺っていたはやては、自身のシュベルトクロイツをメタルシードラモンに向かって構え、強力な砲撃をメタルシードラモンに向かって放つ。

「これならどうや！？フレースヴェルグッ！！」

ーーードグオオオオォォォォォォン！！

「あん？つまんねぇ！攻撃だ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオン！！

はやてが放ったフレースヴェルグに対して、メタルシードラモンは自身の巨大な尾をフレースヴェルグに向かって振り抜き、フレースヴェルグを消滅させた。
その隙にメタルシードラモンに向かって近づいていたシグナムとヴィータは、自身のデバイスに渾身の力を込めてそれぞれ技をメタルシードラモンの体に向かって放つ。

「紫電一閃（しでんいっせん）ッ！！」

「轟天爆砕！ギガントシュラークッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

シグナムとヴィータが放った技は、寸分違わずにメタルシードラモンの体に直撃した。
だが、シグナムとヴィータの渾身の力を込めた技を受けても、メ

タルシードラモンは揺るぎもせず、つまらなさげにシグナムとヴィータに目を向ける。

「・・・・何か今したか？」

『クッ！！』

「攻撃って言うのは、こう言うもんだぜ！！ヘルスクイーズッ！！」

ーーードォン！！ドォン！！ドォン！！

『ッ！！』

メタルシードラモンが咆哮を上げると同時に、その身が光り輝き、氷海を貫きながら巨大な水柱が幾重にも出現した。

シグナムとヴィータはそれを目撃し、それぞれ高速移動の魔法を連続で発動させながら水柱を避けるが、それを追い立てるように水柱はシグナムとヴィータを囲んでいく。

メタルシードラモンはその様子を眺めながら、鼻先に存在している砲塔にエネルギーを集中させ、水柱に囲まれているシグナムとヴィータに向かって砲撃を撃ち込もうとするが、その直前にメタルシードラモンの顔に向かって黒い墨で書かれた梵字が飛んで来る。

「梵・筆・閃ッ！！」

ーーードゴオオオオオォォォン！！

梵字がメタルシードラモンの額にぶつかると同時に、梵字は大爆発を起こし、メタルシードラモンの顔は煙に包まれた。

それを成したタオモンは持っていた巨大な筆を何処かに仕舞うと同時に、右手の袖の下から数枚の霊符を取り出し、シグナムとヴィータを囲んでいる水柱に向かって投げつけ、印を唱える。

「爆ッ！！」

ーーードォン！！ドォン！！ドォン！！

タオモンが印を唱えると同時に霊符は爆発を起こし、水柱を吹き散らした。

その隙に水柱の囲いから逃れたシグナムとヴィータは、自分達を助けたタオモンに訝しげな視線を向ける。

「・・・お前、あのキツネデジモンだな？」

「そのとおりだ。今は完全体に進化してタオモンだがな」

「チィッ！！」

ヴィータの質問にタオモンは何でもないように答え、ヴィータは思わず舌打ちし、シグナムも警戒するようにタオモンを見つめる。

聖王教会の件の時に、タオモンがはやてを襲ってなり代わっていたことは機動六課内に知れ渡っている。それ故に裏の事情を知らないヴィータとシグナムはタオモンを警戒するようになっていた。

特にヴィータは、まんまとはやてと入れ替われていたことにも気がついていなかった件から、他のメンバーよりもタオモンを警戒している。最もタオモンに襲い掛かることは出来ない。

今の状況は猫の手どころかキツネの手も借りたい状況なのだ。それ故に事前に行われた会議で、タオモンが現れても攻撃せず、協力して戦うようにはやて、ゲンヤ、オーリスから命令されている。

元々タオモンは事情を知らないメンバーには、警戒しながら協力するように命令されていた相手なのだ。
それ故にヴィータは悔しげに顔を歪め、シグナムも不満を隠せないようにタオモンを見ていると、傍に飛んで来たザフィーラが二人に向かって叫ぶ。

「何をしている！？今は目の前の相手に集中しろ！！」

「だけど、ザフィーラ！！コイツは！？」

「忘れたのか、ヴィータ！？今の我らの相手は究極体だ！？全員が生きて帰る為にも、私情を捨てろ！」

「・・・チィッ！！分かったよ」

ザフィーラの叫びにヴィータは渋々ながらも頷き、顔が煙に包まれたままのメタルシードラモンに目を向けた瞬間、煙の中に一瞬閃光が走り、煙を吹き散らしながら砲撃が飛んで来る。

「アルティメットストリームッ！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオォォン！！

『ッ！！』

煙を吹き散らしながら放たれた巨大な砲撃は、真っ直ぐにシグナム、ヴィータ、ザフィーラ、タオモンに向かって直進する。
それを目撃したタオモン達は、急いでその場から飛び退いてアルティメットストリームを避けようとするが、巨大すぎる砲撃の前に完全に避け切ることが出来ず、アルティメットストリームの衝撃に

吹き飛ばされてしまう。

ーーードグオオオ

ンガは構わずに渾身の力を込めた右腕のリボルバーナックルをメタルシードラモンの額に向かって撃ち込む。

「獅子獣破斬ッ！！」

ーーードゴオオオオォォン！！

「グッ！！」

メタルシードラモンの額にギンガの獅子獣破斬が決まり、その衝撃にメタルシードラモンは僅かに呻いた。

漸くダメージらしいモノを与えられたことにギンガは僅かに喜ぶが、獅子獣破斬を放った影響で痺れる右腕を左腕で押さえながら、ウイングロードの上に飛び移り、そのままウイングロードの上を走り出す。

額に受けた衝撃にメタルシードラモンは首を振るいながら、自身にダメージを僅かにでも与えたギンガに目を向け、右腕を押さえているギンガを目撃する。

（どうやらさっきの一撃は自分にもダメージが行くようだな・・・・それだけの技を放ってこの程度のダメージ・・・・少し過大評価をしていたか？）

メタルシードラモンはそう内心で呟きながら、自身に攻撃を放ったギンガと、怪我を負いながらも立ち上がろうとしているタオモン達、そして隙あらば砲撃を撃ち込もうとしているはやてとビショップチェスモンを眺める。

今までの攻防、そして先ほどのギンガの一撃から、はやて達には自身を倒せるだけの威力を持った切り札がない事をメタルシードラモンは悟っていた。だが、同時にメタルシードラモンは疑問を覚え

ていた。
　エンシェントマーメイモンの情報から、はやて達が究極体と交戦したことがあることを聞いていた。
　二体の究極体を相手に、何の勝算も無しに戦いにやって来る筈がない。それ故にメタルシードラモンは、はやて達の行動を伺っていたのだが、今の絶好の一撃と呼んでいいギンガの一撃も、さしてそれほどダメージをメタルシードラモンは受けていない。

（・・・・・俺の勘違いか？・・・何か企んでいると思っていたんだが・・・・まぁ、別にいいか。さっさと終わらせてやる！！）

　メタルシードラモンはそう行動を決めると、全身に力を込めて海を操ろうとする。
　しかし、その直前にメタルシードラモンは自分以外に海を操ろうとしている存在に気がつき、はやて達に構わずにオウリュウモンと武器を激突させあっているエンシェントマーメイモンに目を向ける。

（あの野郎！？まさか！？）

（ん？・・・何や？何で急にエンシェントマーメイモンに目を向けたん？）

　急なメタルシードラモンの行動にはやては疑問を抱くが、メタルシードラモンは構っている暇はなかった。
　今、エンシェントマーメイモンがやろうとしていることは、流石に同じ究極体であるメタルシードラモンでもダメージを確実に受けてしまう。それをエンシェントマーメイモンが行う前に、メタルシードラモンは海中に急いで潜ろうとする。

「チィッ！！」

ーーードボオオォォォォン！

「潜った！？まさか、海中から攻撃を仕掛ける気なんか！？」

突然の攻撃を止めて海中に潜んだメタルシードラモンの行動にはやては目を見開き、氷海の上に立っていたビショップチェスモン、ギンガと、ダメージから少しだけ回復したタオモン、シグナム、ヴィータ、ザフィーラも訝しげな思いを抱く。

何故攻撃を止めてメタルシードラモンは海中に潜んだのかと誰もが疑問に思った瞬間、オウリュウモンと交戦していたエンシェントマーメイモンは、突如としてオウリュウモンから距離を取って、三叉の鉾の先から超硬質なクリスタルに変えた水をマシンガンのように撃ち出す。

「フフ～ン♪クリスタルビローーーッ！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガガッ！！

「チィッ！！オオオォォォォォォォーーーーーーー！！！！！」

ーーーガキガキガキガキガキッ！！

エンシェントマーメイモンが撃ち出して来たクリスタルビローを、オウリュウモンは両手に握る武器を振り抜いて弾き飛ばした。

そのままオウリュウモンはエンシェントマーメイモンに追撃を行うとするが、その直前に罅割れた氷海の下から聞こえて来る振動のような音を耳にする。

ーーーゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！

「ッ！！まさか！？」

「漸く気がついたみたいね・・・でも、もう遅いわよ！！呑み込まれなさい！！グレイト・メイルストローームッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオォォォ

に、クリスタルに水を固めて晒しものにして挙げるわ。私達に逆らった愚かな連中としてね」

水柱の中に閉じ込められているはやて達と、渦の中で苦しんでいるオウリュウモンを眺めながら、エンシェントマーメイモンはそう叫んだ。

それと同時にエンシェントマーメイモンの横にメタルシードラモンが海中から現れ、つまらなさげにはやて達とエンシェントマーメイモンを眺める。

「・・・・・おい、あいつ等は俺の獲物じゃなかったのか？」

「別にいいでしょう。どうせメルキューレモン達の作戦が終わった後には、この世界を滅ぼすのよ。獲物なんて沢山出来るんだから」

「チィッ！！・・・・・・・まぁ、良いぜ。代わりに別行動を取っていた連中を寄越せ。そっちは俺が消す」

「・・・・まぁ、良いわよ」

「フン！！アルティメット！！」

『ッ！！』

アインハルト、エリオ、ベアモンが向かった方向に砲撃を放とうとしていることに気がついたはやて達は、水柱の中で目を見開くが、メタルシードラモンは構わずに砲撃を一放てなかった。

ーーードグオオオ

「ガアァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーーーー！！！！」

「なっ！？」

『ッ！！』

メタルシードラモンが砲撃を撃ち出そうとした瞬間、メタルシードラモンの背後から桜色の砲撃が現れ、メタルシードラモンの後頭部に直撃した。

その威力にメタルシードラモンは苦痛に満ちた叫びを上げ、エンシェントマーメイモンとはやて達は目を見開いた。

同時にはやて達を閉じ込めている水柱の間を閃光が走り、閃光が握る金色の刃が次々とはやて達を閉じ込める水柱に一閃されると水柱は消滅し、はやて達は解放される。

ーーードバァァァァン！！

「ゴホッ！ゴホゴホッ！！・・・・ハァ・・ハァ・・・一体何が起きたんや？」

水柱の中から解放されたはやては、飲んでしまった水を吐き出しながら自分達を助けたのは誰なのか疑問を覚えて辺りを見回すと、エンシェントマーメイモンとメタルシードラモンを睨みつけながら上空に浮かぶ、蒼い髪をツインテールにして、両手に金色の刃を発生させているデバイスを握っている十歳ぐらいの少女を発見する。

その少女の顔にはやて達は目を見開き、特にその人物をライバルとしていた見ていたシグナムは、信じられないと言うように呟く。

「・・・まさか・・・・・テスタロッサ！！」

ーーービュン！！

「コラ～！！！誰がオリジナルだ！？僕の名前はリシア！！オリジナルの苗字で呼ぶな！！」

「ウォッ！！」

目の前に一瞬で現れた少女ーリシアーの姿にシグナムは驚愕した。しかし、リシアは構わずにシグナムに詰め寄り、怒りで顔を赤くしながらシグナムに向かって叫ぶ。

「いいか！！僕の名前はリシアだぞ！オリジナルの名前や苗字で絶対に呼ぶな！！呼んだら承知しないぞ！」

「オリジナルだと？・・・・まさか、お前は！？」

「フン！」

リシアの正体に気がつき、シグナムは驚愕しながら叫ぶが、リシアは構わずにメタルシードラモンとエンシェントマーメイモンを睨む。

「あいつ等が敵だなぁ！僕がやっつけてやる！！」

「待て！お前一人で勝てる相手でないぞ！？」

メタルシードラモンとエンシェントマーメイモンに飛び掛かろうとしているリシアを、慌ててシグナムは止めようとするが、リシア

は構わずにグレイト・メイルストロームに閉じ込められたままのオウリュウモンに目を向ける。

（・・・・ムゥ、流石に僕でもアレは無理だ。となると発生させているデジモンを倒す以外にないな）

（・・・・質問えぇ？）

（ムッ！この声！？お前が風華のオリジナルだな！？）

（オリジナルって呼ぶのは止めて欲しいんやけど、アンタは大さんのところに居るフェイトちゃんの人造魔導師の子やね？）

（・・・・そうだぞ！でも、僕は名前はリシアだぞ！？）

（リシアちゃんか・・・・・質問や。アンタは私らの敵として来たん？）

（違うぞ！大の頼みで援護に来たんだ！後序でにフェイト・テスタロッサの頼みで）

（そうか・・・それだけ聞ければ充分や）

リシアからの念話で少なくとも味方だと確証することが出来たはやては、一先ず納得した。

大本人が来ないことは疑問だが、少なくとも援軍が来てくれたのは現状では嬉しい。更に先ほどの桜色の砲撃から少なくとも、もう一人援軍が来ているのは間違いない。

少ない戦力だが、援軍の参戦は、はやてにとっては嬉しい報告だった。そして瞬時にはやては、風華から聞いていたリシアが持って

いる能力を考えて作戦を練る。

（・・・・よし！戦闘可能な全員！先ずはオウリュウモンを自由にする為に、エンシェントマーメイモンへの攻撃を開始する！そしてメタルシードラモンがエンシェントマーメイモンの援護を開始した瞬間、『切り札』を使用！もう充分に仕込みは終わったわ！一気に決めるで！）

『了解！！』

はやてからの念話に動けるメンバー全員が動き出し、エンシェントマーメイモンに向かって飛び掛かる。

その様子に疑問を抱きながらも、メタルシードラモンとエンシェントマーメイモンは、はやて達を迎え撃つ為にそれぞれ構えだす。その上空に潜んでいる、機動六課の本当の切り札が動き出そうとしていることに気がつかずに、二体の究極体は動き出すのだった。

エンシェントマーメイモンとメタルシードラモン　中編（前書き）

大変遅れて申し訳ありませんでした。
ですが、漸く納得がいくものが書けました。

因みに活動報告の方に、ちょっとした特別編が掲載されています。

エンシェントマーメイモンとメタルシードラモン　中編

はやて達が戦っている地点から、数百メートルほど離れている場所の氷海。
その場所ではエンシェントマーメイモンが最初の攻撃を放つ前に海の中に隠れたデジモン達と、結界を張っていた機動六課のメンバーにアインハルト、エリオ、ベアモンが加わりながら戦いを繰り広げていた。

『サンダージャベリンッ！！』

ーーービリビリビリッ！！

ーーードオオォォォォォーーン！！

『クッ！！』

「ハアアアアアアアアアアーーーーーー！！！！！」

メガシードラモン二体が放って来たサンダージャベリンを、部隊員達はかわし、アインハルトは全身にデジソウルを纏いながらメガシードラモンに向かって飛びかかった。
それを目撃したメガシードラモンはアインハルトが飛び上がって来る方向を即座に予測し、自身の身をくねらせてアインハルトの攻撃を避けた。
アインハルトはその様子に悔しげに顔を歪めざるえなかった。エンシェントマーメイモンの攻撃によって、アインハルト、エリオ、ベアモンが空を飛ぶ為に必要だったフリードリッヒが負傷してしまった為に、アインハルトやエリオは飛び上がって攻撃する以外に方

法がなくなってしまったのだ。
　他の部隊員達の援護はあるが、敵のデジモン達の中には完全体が多数存在している為に、アインハルトとエリオ、ベアモンの援護まで行いきれなかった。

（クソッ！！どうして！？どうして！サングルゥモンに進化出来ないんだ！？）

　デジモン達との戦いが続く中、ベアモンは自身が進化出来ないことを内心で悔しがった。
　先ほどからベアモンは再びサングルゥモンに進化しようと、全身に力を込めている。だが、幾ら力を込めても、以前サングルゥモンに進化した時のような力が湧き上がって来ない。
　成長期の自分では今の戦いに挑むのは無謀に近い状態。だからこそ、再びサングルゥモンに進化しなければいけないのに、ベアモンの体は進化を始める兆しすらない。

（どうして！？どうして！？一番力が必要な時に進化出来ないんだアァァァァァァーーーー！？）

　ベアモンはもはや内心で絶叫を上げざるえなかった。
　主戦力のメンバーは究極体二体を相手にしている為に、この場に来ることは出来ない。
　今は何とかなっているが、もはや敗北は時間の問題に近い状況に追い込まれてしまっている。
　デジモン達の攻撃によって負傷を負っていく部隊員達。アインハルトとエリオも必死にデジモン達に応戦するが、巨体のデジモン達には攻撃が届かず、更には氷海の下に隠れると言う戦法が相手側には存在している。
　空を飛ぶ術を失い、更には結界の維持の為に動けない部隊員達が

居る状況では、状況を好転させる術が思い浮かばず、ベアモンが悔しげに顔を歪めながら顔を上げてみると、メガシードラモン達と戦っているエリオとアインハルトの背後の氷海が僅かに動くのを目撃する。

ーーーガタッ！！

（まさか！？）

アインハルトとエリオを背後から襲いかかろうとしている敵の存在に気がついたベアモンは、目を見開いた。

そして即座に気がつく。今、二人の背後から襲いかかろうとしている敵の存在に気がついているのはベアモンだけ。周りに居る仲間の部隊員達に状況を伝えている暇はない。ならば今から自身が走って間に合わせられるかと、ベアモンは内心で考える。

だが、即座にそれは無理だと頭の中で誰がか告げる。

（ムダダ。セイチョウキノオマエデハ・・・マニアワナイ）

（黙れ！！間に合わせるんだ！！僕は絶対にアインハルトさんやエリオ、そして仲間の部隊員達を護る！！）

（ナラドウスル？）

「（決まってる！間に合わないんだったら・・・）間に合わせるに決まっているだろうがアァァァァァァァーーーーー！！！ベアモン進化！！」

ーーーギュルルルルルルルッ！！！

ベアモンが咆哮を上げると同時に、ベアモンの体の奥底から力が湧き上がり、ベアモンの体はデジコードに包まれた。
そのデジコードの内部から両前足の部分に鋭い刃のような爪を何本も備え、鋭い牙と、頭部を覆うように先端の鋭く尖った蝙蝠の翼の様なモノを付けた狼型のデジモンが凄まじい速さで駆け出し、アインハルトとエリオの背後に一瞬の内に辿り着き、同時に二人の背後から氷海を粉砕しながら現れたハンギョモンを弾き飛ばす。

ーーードゴオオオオォォォン！！

「グベアッ！？」

『えっ！？』

背後から響いて来た音にアインハルトとエリオは驚愕しながら背後を振り返り、他の場所で戦っていた部隊員達も思わず顔を向け、見覚えがある狼型のデジモンを目撃する。
そのデジモンの姿に誰よりもアインハルトは驚いていた。何故ならばそのデジモンは自身が戦い、成長期に戻した筈のデジモン。だが、今そのデジモンは再び現れ、獰猛さに満ちた笑みを浮かべながらメガシードラモン達を睨み、咆哮を轟かせる。

「グルゥゥゥオォォォォォォォォォォォォーーン！！」

『サングルゥモン！？』

「アァン？他の誰に見えるよぉ？小娘に小僧」

驚愕しているアインハルトとエリオに向かって、サングルゥモンはベアモンの時には全く見せなかった獰猛な笑みを浮かべながら答

えた。
　そしてサングルゥモンはゆっくりと自身を警戒するように睨んで来ている二体のメガシードラモンに目を向け、一瞬の動きで自身の両足に備わっている刃を放つ。

「スティッカーブレイドッ！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！！！

『グゥッ！！』

ーーーバッシャン！！バッシャン！！

　サングルゥモンが放った刃が、途中で数百の刃に分裂するのを目撃した二体のメガシードラモンは、流石に避け切れないと判断したのか、海中に潜ってスティッカーブレイドを避けた。
　それを目撃したサングルゥモンは、素早く動く二体のメガシードラモンに険しく目を細め、苛立ちが篭った声でアインハルトとエリオに声を掛ける。

「チィッ！！何弱気になってんだぁ！？特に小娘！？テメェ？随分とデジソウルが弱っているじゃねぇかよぉ！？」

「そ、それは・・・・」

　サングルゥモンの叫びにアインハルトは答えることが出来ずに声が小さくなり、顔を僅かに下に俯けた。
　アインハルト自身にもサングルゥモンの言葉の意味が分かっている。戦い始めた当初、アインハルトの全身を光り輝きながら覆っていた筈のデジソウルは、今では僅かに明滅する程度にまで弱まって

いた。
デジソウルは想いの力。想いが弱くなれば弱くなるほど、その力は低下の一歩を辿る。
自分達が敗北してしまうかもしれないとアインハルトが弱気になってしまったので、纏っていたデジソウルも弱まってしまったのだ。当然ながら弱まってしまったデジソウルでは本来の力は発揮出来ず、更には防御力も低下して危険が増える。
その事をレオルモンの教導で知っているサングルゥモンは、弱気になって来ているアインハルトとエリオを立ち上がらせようと発破を掛ける。

「レオルモンの野郎が言っていただろうがぁっ！？『強敵だろうと何だろうと、最後の一瞬まで弱気になるな』って！？お前らが会ったって言う大門大は、この状況でも諦めんのか！？」

『ッ！？』

サングルゥモンの叫びにアインハルトとエリオは大の戦いぶりが脳裏に浮かんだ。
確かに大ならばこの状況でも諦める事無く、寧ろ誰よりも先陣をきって皆を鼓舞するだろう。
夢の中で七大魔王デジモンの一体と戦う大とアグモンの姿を目撃したアインハルトは、サングルゥモンの言葉どおりだと思い、数日一緒に過ごしたエリオも同意するように思わず頷いた。
そしてサングルゥモンはアインハルトとエリオに向かって、周りを見てみろと言うように首を動かす。
アインハルトとエリオはその動きにつられて周りに目を向けてみると、ズドモンやハンギョモン達と戦い続ける部隊員達を目撃する。
低ランクながらも彼らは諦める事無く、デジモン達に挑んでいた。ある者達は二人がバインドなどでデジモンの動きを封じて、残りの

メンバーが攻撃を加えたり。結界を維持しているメンバーに被害がいかないように全力で防御魔法を張り続ける部隊員達もいた。
戦っている誰一人として諦めている者はいなかった。戦う理由はそれぞれかもしれないが、諦めると言う想いだけは誰一人持っていなかった。
それを目にしたアインハルトとエリオは、自分達が何時の間にか諦めそうになっていたことに気がついた。諦めるわけにはいかないと二人は思う。
此処で諦めたら、今までの全てが台無しになってしまう。サングルゥモンの言葉でそれを思い出したアインハルトとエリオは気合を入れなおし、拳やストラーダを構えなおす。
サングルゥモンはその様子に笑みを深めると、即座に自身の背中に二人が乗れるように体を僅かに下げて、アインハルトとエリオが背に飛び乗ると同時にサングルゥモンはその場から離れる。

ーーービュン！！

ーーードゴオオオォォォォン！！

「グウオォォォォォォォォーーーーーー！！！！！」

サングルゥモンが移動すると同時に、直前までサングルゥモンが居た地点の下から、メガシードラモンが飛び出して来た。
その様子をサングルゥモンは険しく睨みながら氷海の上を走り、背に乗っているアインハルトとエリオに向かって叫ぶ。

「いいか！お前らも俺も、機動六課から見たら下の実力だ！だが、何時までも下に居る気は俺にはねぇ！！お前らはどうだ！？」

「僕も同じ気持ちだ！」

「私もです！絶対に大さんが居る極地まで辿り着きます！」

「良い返事だ！行くぞぉ！！」

ーーードォン！！

背に乗る二人の答えにサングルゥモンは笑みを深めると同時に、氷海を蹴りつけて急加速を行い、メガシードラモンに向かって突撃した。

その動きに気がついたメガシードラモンは、自身に向かって突撃して来るサングルゥモンとその背に乗っているアインハルトとエリオに頭部に備わっているツノを構え、サンダージャベリンを放とうとする。

しかし、メガシードラモンがサンダージャベリンを放とうとする直前に、メガシードラモンの上空をヴァイスが操縦する『ＪＦ７０４式ヘリコプター』が通過し、通過する直前に飛び降りたサーチモンが振動電波を放つ。

「ジャミングヘルツ！！」

ーーービィィィィィィィーーーーー！！！

「ッ！！グギャァァァァァァァーーーー！！！！？？」

突然に神経の中枢にまで届いて来た振動電波によって、メガシードラモンは錯乱してサンダージャベリンを放つのを中断してしまう。

それを目撃したサングルゥモンは、走っていた勢いを利用してメガシードラモンに向かって高くジャンプする。

ーーードン！！

「ウオオオォォォォォォォォォォォォーーーーーー！！！」

「ッ！！」

聞こえて来たサングルゥモンの咆哮にメガシードラモンは一瞬だけ我に返るが、時すでに遅く、サングルゥモンの背からアインハルトが飛び出し、光り輝くデジソウルに包まれた右拳をメガシードラモンのツノに向かって振り下ろす。

「ハアァァァァァァァァァーーーーーー！！！！！」

ーーードゴオオォォォォン！！

ーーーバキィィィィーーン！！

「ギギャァァァァァァァァァァァーーーーーーー！！！！！」

アインハルトの拳がツノに激突した瞬間、ツノ全体に罅が広がりメガシードラモンのツノは砕け散った。

それには拳を放ったアインハルトだけではなく、エリオ、サングルゥモンも驚くが、今はそんな場合ではないとサングルゥモンは即座に思い、背に乗っているエリオに向かって叫ぶ。

「決めろ！エリオ！！」

「はい！ストラーダ！！」

ーーードン！！

エリオの叫びに応じるようにカードリッジを排出したストラーダの矛先の横部分に備わっているバーニアが吹き上がり、エリオはツノを失った苦痛に苦しんでいるメガシードラモンに向かって急加速しながら突撃する。

「ウオオォォォォォォォォォォォーーーーーー！！！メッサー・アングリフッ！！」

ーーーードスゥゥゥゥゥーーーン！！

「ギッ！！ギャァァァァァァァァァァーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！」

エリオのメッサー・アングリフは寸分違わずにメガシードラモンの額に直撃し、メガシードラモンは苦痛に満ちた咆哮を響かせながらデータ粒子に変換され、デジタマになった。

エリオはそのデジタマを右手で掴み取ると、ストラーダのバーニアを上手く使って氷海に着地し、アインハルトを背に乗せたサングルゥモンと合流する。

「二人とも！大丈夫！？」

「はい！エリオさんも無事のようですね」

「フン！あそこまでのチャンスを逃していたら、俺の爪で引き裂いていたところだぜ」

そうアインハルトとサングルゥモンはそれぞれエリオに声を掛け、エリオは僅かに嬉しそうな笑みを浮かべると、先に氷海に着地して

いたサーチモンから念話が届く。

（三人とも！足元に気をつけろ！！）

『ッ！！』

「チィッ！！」

ーーーガシッ！！

サーチモンの念話にサングルゥモンは即座に反応し、エリオの襟首のバリアジャケットを銜えると、即座にその場から飛び退いた。

同時に直前までサングルゥモンが居た地点の氷海が砕け散り、三体のティロモンが飛び出して来る。

ーーーードゴオオォォォォォーーーン！！

『キシャァァァァァァァァーーーーー！！！！！』

『クッ！！』

氷海から飛び出して来た三体のティロモンの姿に、サングルゥモン、アインハルト、エリオは即座に身構えて迎え撃とうとする。

しかし、その直前、金色の閃光がサングルゥモン達の間を通り抜け、飛びかかって来ているティロモン達の間を通り過ぎる。

ーーービュン！！

「何！？」

『ッ！！』

目撃した金色の閃光にサングルゥモン達はそれぞれ驚愕し、一体何者なのかとティロモン達の背後に目を向けてみると、背中にロイヤルブルーのマントを棚引かせ、全身を金色の鎧で覆い、肩の部分から二本の角のようなものを生やした騎士のようなデジモンが立っていた。

そのデジモンはゆっくりと両手に握っていた刀一『双剣グレイダルファー』をそれぞれ腰に備えている鞘に戻し、ポツリと呟く。

ーーーチィンッ！

「クロスブレード」

ーーーザン！！ザン！！ザン！！

「なっ！？・・・一瞬で三体のデジモンを切り裂いた・・・なんて剣技だ」

『・・・・・・』

十字に身を切り裂かれて消滅したティロモン達を目撃したエリオは、僅かに恐怖が滲んだような声で呟き、サングルゥモンとアインハルトも信じられないと言うように謎のデジモンを見つめる。

目の前にいるデジモンはデジモン部隊に居たサングルゥモンにも身覚えがなかった。何よりも一瞬で三体の成熟期デジモンを葬ったことから考えれば、少なくとも完全体の上位レベルのデジモンなのは間違いない。

しかし、デジモン部隊でそんなデジモンや進化させることが出来るパートナーには、サングルゥモンは覚えがない。では、何者なの

かとサングルゥモン、アインハルト、エリオがデジモンを睨んでいると、ゆっくりとデジモンは顔をサングルゥモン達に向け、アインハルトに視線を向ける。

（彼女が大門大からデジソウルを与えられた人間・・・ドクターが興味深い対象だと言ってい者ですね）

（ッ！！・・・・何でしょうか？あのデジモンの視線からは友好的な気配が感じられない・・・寧ろ・・私を）

「・・・・・・・敵は残っている。早く援護に向かうべきだと思われるが、機動六課の部隊員」

ーーードン！！

（私を動物か何かで見ているような気配を感じる！）

飛び上がって他の戦いの場に向かった謎のデジモンの背中に、アインハルトは言い知れない嫌な予感を感じた。

しかし、今はそれどころではないと即座に思う。あのデジモンが敵であるにしろ、味方であるにしろ、今は少しでも戦力が欲しい状況なのだ。それを理解しているアインハルト、サングルゥモン、エリオは、一先ずロングアーチに現れたデジモンの情報を送りながら、他の部隊員達の援護に向かうのだった。

一方その頃。究極体二体と戦いを繰り広げているはやて達は、自分達の切り札を使用する瞬間を見極めようと、二体の究極体が放つ攻撃を決死の思いで回避し続けていた。

「チィッ！！ちょこまかと！！アルティメットストリーム！！！」

ーーードグオオオ

していることに気が付いた。

（クソッ！！あの蒼い髪の小娘！！奴には何か特殊な力がありやがる！さっきの俺様にダメージを与えた砲撃を放った奴の姿も見えねぇ！これがあの連中の切り札か！？）

メタルシードラモンはそう内心で苛立ちに満ちた声で叫び、戦いの場を見回す。

機動六課に居る唯一の究極体のオウリュウモンは、未だにエンシェントマーメイモンが発生させた『グレイト・メイルストローム』に捕らえられているいるために身動きは取れない。しかし、『グレイト・メイルストローム』を発生させているエンシェントマーメイモンにも、メタルシードラモンと同様に力の減少が起きているのか、『グレイト・メイルストローム』を維持するのが精一杯の状況になっていた。

その事実にメタルシードラモンは現れた蒼い髪の少女ーリシアーと、もう一人、遠距離から攻撃を放ってくる人物には自分達ーデジモンーにとって危険な力を持っていることを察するが、対抗手段が浮かばなかった。力を込めても、海のフィールドで上がっていた力が戻る様子はない。

つまり、デジモンを相手に戦いを有利に運べる能力だと言うことまではメタルシードラモンは理解していたが、その対抗策までは浮かばず苛立ちが募っていた。

それはエンシェントマーメイモンの方も同じだった。リシアが現れるまで優勢に戦いが進められていたのに、今は五分五分の戦いに持ち込まれていた。

「この！！いい加減に死になさいよ！！クリスタルビローーーッ！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガガガッ！！

「デアボリック・エミッション！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

エンシェントマーメイモンが黄金の三叉の鉾の先から撃ちだしたクリスタルビローに対して、リインフォースがはやて達を護るようにデアボリック・エミッションを発生させ、クリスタルビローを防いだ。

その様子にエンシェントマーメイモンは苛立ちが満ち溢れ、今度は足元の海を操ろうとする。

だが、先ほどまでは自由に操れた海は全くエンシェントマーメイモンの意に従わなかった。その原因はオウリュウモンを封じている『グレイト・メイルストローム』にあった。

海水を操って発生させた『グレイト・メイルストローム』は強大な威力を持ち、並みの究極体でさえも粉々になる威力を持っている。しかし、オウリュウモンは並みの究極体ではなかった。

他のメンバーが必死に戦っているのを『グレイト・メイルストローム』内部で感知し、何としても外に出ようと『グレイト・メイルストローム』の内側で暴れているのだ。当然ながらそれを押さえるだけの力は海のフィールドで強化されたエンシェントマーメイモンにはあったのだが、今のエンシェントマーメイモンにはそれだけの力がなかった。

メタルシードラモン同様にエンシェントマーメイモンにも力の減少が起きている。それ故にオウリュウモンを押さえている力が弱まってしまった為に、戦いは苦戦を強いられていた。

「あぁん！もう！！苛立つわね！！ちょこまかと！？メタルシードラモン！！大技で勝負を決めるわよ！」

「・・・・・・悪いが断るぞ」

「なっ！？」

「連中が居る方向をよく考えてみろ・・・確かに俺様達が大技を使えば、海に奴らを呑み込めるが・・・その先にあるのは配下のデジモン達だぞ？」

「ッ！！」

エンシェントマーメイモンは目を見開きながら、慌ててはやて達が居る方向に目を向けてみる。

メタルシードラモンとてエンシェントマーメイモンが告げた策を考えなかった訳ではない。だが、究極体のメタルシードラモン達が発生させた大津波は、メガシードラモンの『メイルシュトローム』の比ではない。それこそ島を水没させるほどの大津波をメタルシードラモン達は簡単に放てる。

しかし、はやて達の後方にはメタルシードラモン達の配下のデジモン達と機動六課の部隊員達が存在している。人間を敵として見ているエンシェントマーメイモンとメタルシードラモンからすれば、一気に勝負を決められる状況なのだが、確実に配下のデジモン達まで巻き込んでしまう為に大津波を発生させて、はやて達を一気に葬ると言う策は使えなかった。

「こんな時の為にルカモンどもを配置していたんだが・・・お前の後先考えない『グレイト・メイルストローム』のせいでルカモンどもは離れたからなぁ」

「グゥッ！！」

メタルシードラモンの皮肉混じりの言葉に、エンシェントマーメイモンは何も言うことが出来なかった。
その様子に僅かに苛立ちを治めたメタルシードラモンは、冷静に状況を打開する策を考える。
今までの戦いから、遠距離攻撃を行ってくるのは、はやて、リインフォース、ビショップチェスモン、そして離れたところから砲撃を放って来る姿を一向に見せない相手。
近距離はシグナム、ヴィータ、ギンガ、そしてリシア。それらをサポートするように動いているのがザフィーラとタオモン。

(上手く連携が出来ていやがる。穴があるとすれば、キツネの完全体と剣とハンマーを持っている二人の人間だな)

メタルシードラモンはタオモンとシグナム、ヴィータの間に存在するわだかまりに気が付いていた。
他のメンバーにはない決定的な隙。其処から相手を切り崩そうとメタルシードラモンは冷静に戦術を決めるが、それを実行する前に戦況が有利にならないことにじれったエンシェントマーメイモンがはやて達に向かって叫ぶ。

「こんな時間稼ぎ見たいな戦法を取っていていいのかしら!?」

「なんやて?」

「フフン♪・・可笑しいと思わないの?何で十闘士が私だけしかいないのか?・・・今頃はアンタ達の本拠地はメルキューレモンとアルボルモンに強襲されてなくなっているわよ!!」

『なっ!?』

エンシェントマーメイモンが告げた事実に、リシアを除いた全員が驚愕に満ちた叫びを上げながら目を見開いた。
その隙をエンシェントマーメイモンは逃さず、今操れるだけの海水を黄金の三叉の鉾に集中させ、特大のクリスタルビローを作り上げて、はやて達に向かって全力で放つ。

「貫ったわ！！クリスタルビローーー！！！」

ーーードオオォォォォォォォーーーーーン！！！！！

『ッ！！』

迫り来るクリスタルビローにはやて達は慌てて回避行動を取ろうとする。
しかし、事前に動きが止まってしまっていた為に、もはや回避出来る時間はなく、魔法を放とうにも巨大なクリスタルビローを粉砕する威力を持った魔法を唱えている時間もなかった。
エンシェントマーメイモンはその様子に自身の勝利を確信するが、ただ一人、エンシェントマーメイモンの言葉に動揺していなかったリシアは、ザンバーフォームを形態に変形させていたライディエルをクリスタルビローに向かって全力で振り抜く。

「やらせるわけにはいかない！！雷神滅殺！きょっこーーーざん！！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！

「グゥゥゥッ！！」

リシアの雷刃滅殺極光斬（らいじんめっさつきょっこうざん）と巨大なクリスタルビローは空中で激突し、凄まじい音が辺りに鳴り響いた。
しかし、リシアの渾身の力を込めた雷刃滅殺極光斬（らいじんめっさつきょっこうざん）を以ってしても、クリスタルビローの進行は止まることも逸れることもなく、真っ直ぐに進み続ける。
エンシェントマーメイモンはその様子に無駄な足掻きだと嘲笑うとするが、その直前にクリスタルビローの横合いから巨大な桜色の砲撃が突き進んでくる。

「ルシフェリオンブレイカーーーッ！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオォォォォォン！！

「琴乃ッ！！」

クリスタルビローの横合いに激突したルシフェリオンブレイカーを目撃したリシアは、僅かに喜びの声を上げた。
同時に真っ直ぐに進んでいたはずのクリスタルビローは僅かに軌道がはやて達への直撃から外れ、見当違いの方向へと飛んで行く。
リシアと琴乃はその様子に安堵の息を吐くが、次の瞬間、メタルシードラモンが琴乃がいる地点の方に鼻先の砲塔を向けてエネルギーを充填し出す。

「やっと見つけたぞ！！」

「しまっ！！」

「終わりだ！！アルティメット…」

ーーービュン！！

「悪いがやらせんぞ！！狐封札（こふうさつ）ッ！！」

ーーーバラバラバラバラバラッ！！

「なにっ！？」

メタルシードラモンがアルティメットストリームを撃ちだす直前に、タオモンが素早く両手の袖の下から大量の霊符をメタルシードラモンの顔の前にばら撒いた。

自身の俄然に広がる大量の霊符にメタルシードラモンは慌ててアルティメットストリームを放つのを中断し、その場から離れようとするが、既に遅くタオモンは印を唱え終える。

「爆ッ！！」

ーーードドドド

「二発目だ！！翔けよ、隼！」

≪Ｓｔｕｒｍｆａｌｋｅｎッ！！≫

ーーードゴオオオォォォォォォン！！

「ググアァァァァァァァァッ！！！」

流石に口の中への攻撃はメタルシードラモンでも堪えたのか、口から煙を噴き上げながら苦痛に満ちた叫びを辺りに響かせた。

それを目撃したエンシェントマーメイモンは嫌な予感を感じ、一先ず態勢を立て直すために海の中に潜ろうとする。だが、その直前に離れたところで詠唱していたリインフォースが魔法を発動させ、エンシェントマーメイモンの足元の海が再び凍りつかせる。

「眼下の大地を白銀に染めよ。来よ、氷結の息吹ッ！！アーテム・デス・アイセスッ！！」

ーーーゴオオオオォォォォォォォォォォーーーーーー！！！

ーーーガキィィィィィィーーーン！！

「なっ！？このっ！！よくも！！」

潜ろうとしていたことが災いし、下半身ごと氷結させられたエンシェントマーメイモンは、何とか逃れようと右手に握っている鉾を氷海に振り下ろそうと掲げる。

しかし、そうはさせないと言うように、何時の間にか上空に舞い上がっていたはやてが、右手に握っているシュベルトクロイツの矛先をエンシェントマーメイモンに向け、詠唱を終えていた魔法を発

動させる。

「遠き地にて、闇に沈め。デアボリック・エミッションッ！！」

「なっ！？」

ーーードゴオオオ

エンシェントマーメイモンはその現象に目を見開き、急いでウイングロードの上の方へと目を向けてみると、ブーストキャリバーのギア・エクセリオンを発動させ、両足から蒼い魔力翼を展開したスバルがウイングロードの上を凄まじい速さで駆け抜けていた。

「いくよ！！相棒！！」

≪了解です！相棒！！≫

ーーーギュウウウゥゥゥゥゥゥゥーーーン！！

スバルの呼びかけにブーストキャリバーは即座に応じ、その速度を更に上げていく。

両足から展開させている蒼い魔力翼もあって、さながらその姿は蒼い閃光。その速度は既に完全体の上位級でさえも追いつくことが難しい速さになっていた。当然ながらそんな速度で走っているスバルには凄まじい負担が掛かっている。

しかし、スバルはその負担をものともせずにエンシェントマーメイモンに向かってウイングロードの上を駆け続ける。漸く訪れた千載一遇の好機。この場に居る全員が命を賭けて作り上げてくれた好機を無駄にしない為に、スバルはウイングロードの上を自身が信頼する相棒と共に走る。

エンシェントマーメイモンはそのスバルの姿に、言い表すことが出来ない危機感を感じ、右手に握っている鉾をスバルに向かって構えようとする。

「く、来るんじゃないわよ！！クリスタル…」

「轟天爆砕！！」

「獅子獣ッ！！」

「ッ！！」

聞こえて来た叫びにエンシェントマーメイモンは慌てて目を向けるが既に遅く、スバルやはやてに気が向いている隙に接近していたヴィータとギンガが、自分達が放ってる最大の技をエンシェントマーメイモンが握っている鉾に向かって叩き込む。

「ギガントシュラーークッ！！」

「破斬ッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオォォォォン！！

ーーービリビリビリビリッ！！

「グゥゥゥゥッ！！」

ヴィータのギガントシュラークとギンガの獅子獣破斬を食らった鉾に凄まじい衝撃が走り、エンシェントマーメイモンはその衝撃に鉾を振るうことが出来なくなった。

ならば、左手からクリスタルビローを撃ちだそうとスバルに向かってエンシェントマーメイモンが左手を抜けた瞬間、エンシェントマーメイモンの左腕の真下から拘束条が発生し、エンシェントマーメイモンに左腕の動きを完全に封じる。

「攻撃など、放たせん！！縛れ！！鋼（はがね）の軛（くびき）ッ！！」

ーーードスウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥーーン！！

「キャァァァァァァァァァーーーーー！！！！腕が！私の腕が！？」

ザフィーラが発生させた鋼の軛（はがねくびき）によって、左腕の動きも完全に封じられたエンシェントマーメイモンは焦りに満ちた叫びを上げた。

その間にもスバルはウイングロードを駆け続け、遂にエンシェントマーメイモンの顔の前に辿り着き、自身の持つＩＳである振動破砕のエネルギーをブーストキャリバーの協力で右手のリボルバーナックルに圧縮する。

ーーーギュウゥゥゥゥゥゥゥゥゥーーーー！！！！

「ウオオォォォォォォォォォォォォ！！！」

「ヒィッ！！やめ！止めてェェェェェェェーーー！！！！！」

「これが私の最大の技！！振動拳（しんどうけん）ッ！！！！」

ーーードゴオオオオオオォォォォォォォン！！

スバルは叫ぶと同時に右拳の先に圧縮していた振動エネルギーを、リボルバーナックルのナックルスピナーの螺旋回転を加えながら、エンシェントマーメイモンの額に自身の全てを込めて叩き込んだのだった。

エンシェントマーメイモンとメタルシードラモン　後編　上（前書き）

お待たせしました。
しかし、まだスランプから抜けきれていないので次回の更新も遅れるかもしれません。

その時は申し訳ありません。

なお活動報告でちょっとした作品は続いています。

エンシェントマーメイモンとメタルシードラモン　後編　上

ＩＳ（インヒューレントスキル）『振動破砕』。
戦闘機人でもあるスバル・ナカジマが保有している先天固有技能。通称インヒューレントスキル。
四肢の末端部から接触した目標の物体に振動波を送り、共振現象を発生させる事によって対象を粉砕する接触兵器。その威力は凄まじく、接触した対象の外装・装甲に留まらず、内部の骨格や機械部品にまで瞬時に及んで相手を破壊する、まさに一撃必殺の兵器。
しかし、その力はスバル自身にも降りかかる為に失敗すれば自身にさえも牙を向ける諸刃の兵器でもあた。
スバルは自身はその力を忌避していたが、母親であるクイントとのバイオ・グラップレオモンの姿を見てから自身の力とも向き合い、ブーストキャリバーの支援も受けて完全に操れるようになった。だが、それとは別に『振動破砕』にはデジモンとの戦いに於いて決定的な弱点があることが、デジモン部隊で訓練を行っていた時に判明していた。
相手の固体振動を読み取って共振現象を引き起こす為に接触した後に数秒間はどうやっても、スバル自身の動きが完全に止まってしまうと言う弱点があったのだ。本来ならばこの弱点は人間相手には弱点とも呼べない部分はあるのだが、デジモンだった場合は完全に別だった。
デジモンは人間と違って自身に対する危険察知が強い。数秒もあればスバルから距離を取ったり、あるいは攻撃を繰り出したりすることが出来る。故に究極体のデジモンでさえも倒せる可能性が秘められていたはずの『振動破砕』が使用出来なかった。
だが、機動六課全員が一丸となって避けることも防御することも出来ない状態に相手を追い込むことが出来れば、『振動破砕』を使うことが出来る。

そして今、全ての条件がクリアされ、完全に動きが封じられていたエンシェントマーメイモンの額に、スバルの振動拳(しんどうけん)が突き刺さった。
どちらも完全に動きが止まったまま数秒ほど時間が経過し、その様子を離れたところで起き上がりながら見ていたメタルシードラモンは、動きが完全に止まっているエンシェントマーメイモンの様子に疑問を覚えて叫ぶ。

「何してやがる!?さっさとその女を殺しやが…」

ーーーグラッ!!

「何ィッ!?」

背後に倒れるように体が傾いたエンシェントマーメイモンの姿に、メタルシードラモンは驚愕の叫びを上げた。
同時にエンシェントマーメイモンの体に、スバルが振動拳(しんどうけん)を叩き込んだ箇所から罅が広がり、エンシェントマーメイモンは震えながら自身の罅が入っている手を見つめる。

ーーービキビキビキッ!!

「・・そ・・そんな・・・・わ、私が・・・・・・エンシェント・・・・デジモン・・・力を・・・取り戻した・・・・はず・・・なのに・・・・イヤアァァァァァァァァァァァーーーーーー!!!!!」

ーーーバキィィィィィィーーーン!!

「・・やった・・・・やった!!!」

全身に罅が広がって悲鳴を上げながら消滅したエンシェントマーメイモンの姿に、スバルは歓喜に満ち溢れた叫びを上げた。
同時にエンシェントマーメイモンが発生させていた『グレイト・メイルストローム』が消失し、肩で息をして全身が傷だらけになりながらも閉じ込められていたオウリュウモンが解放される。
その事実に僅かながらもはやて達は嬉しそうにするが、すぐさま表情を引き締めてエンシェントマーメイモンが消滅すると同時に空中に出現した『水』のビーストスピリットに目を向け、近くに居たギンガが『水』のビーストスピリットを掴み取る。

ーーーガシッ！！

「部隊長！回収しました！！」

「よくやったわ！・・・だけど・・まだ終わってへんようやね」

はやてはギンガの言葉に答えながら氷海の上に倒れ伏しているラーナモンに目を向ける。
それを氷海から目撃したラーナモンは、全身を襲う激痛に苦しみながらも、メタルシードラモンにむかって叫ぶ。

「グゥッ！！・・・・メタルシードラモン！！早く！ビーストスピリットを回収しなさい！！そうすれば。また私はエンシェントマーメイモンに進化出来るわ！！」

「・・・・・・・」

「ちょっと！！どうしたのよ！？返事をしなさい！」

「・・・・・・黙ってろ」

「えっ？」

呟くようなメタルシードラモンの声にラーナモンは疑問の声を上げ、はやて達も様子が可笑しいメタルシードラモンを警戒するように距離を取る。

メタルシードラモンはそれを確認すると共に、ラーナモンに僅かに視線を向け、そして即座に空に向かって大音量の咆哮を響かせる。

『グアガアァァァァァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーーーー！！！！！』

『グッ！！』

メタルシードラモンの凄まじい大音量の咆哮に、はやて達は思わず耳を押さえた。

タオモンとビショップチェスモンも大音量の咆哮に顔を僅かに辛そうに歪めるが、即座に自分達が居る場所に向かって迫って来る者達に気がつく。

「ッ！！この気配は！？」

「ヌゥ！！」

「どないしたん？」

自身の横に浮かんでいたタオモンと、氷海の上に立っていたビショップチェスモンの異変に気がついたはやては、嫌な予感を感じてタオモンに質問した。

それは他のメンバーも同様なのか、タオモンとビショップチェスモンにそれぞれ疑問に満ちた視線を向けるが、タオモンとビショップチェスモンは顔を険しく歪めながら一方向だけを真剣に見つめる。

「・・・・・来る」

「えっ！？・・・・・・・・まさか！？」

タオモンがポツリと呟いた言葉の意味を理解したはやては、慌ててタオモンとビショップチェスモンが見ている方向に目を向ける。

その方向の先ではメタルシードラモンの配下のデジモン達とエリオ達を含めた局員達が戦っていたはず。

そしてその方向にタオモンとビショップチェスモンが目を向ける理由は一つしかはやては考えられず、嫌な予感をはやてが覚えると同時に、視界の先に水飛沫を上げながら移動して来るデジモン達を目撃する。

その水飛沫の音に他のメンバーもデジモン達が向かって来ていることに気がつくと、琴乃とリシアは静かにデジモン達が来るのを待っているメタルシードラモンを睨む。

（クッ！！気づかれましたか！）

（不味いよ！琴乃！！僕らの能力の弱点に気づかれちゃった！！どうしよう！？）

琴乃とリシアは表面上を慌てた様子は見せなかったが、内心では自分達の能力の弱点に気づかれてしまったことに慌てていた。

広域に能力を発生させられる風華と違って、琴乃とリシアはそれぞれ一体ずつしかデジモンを弱体化させることが出来ない。先ほどまではエンシェントマーメイモンとメタルシードラモンの二体だっ

たから問題はなかったが、デジモンの数が一斉に増えれば能力の対象を絞りきれない。
　究極体のメタルシードラモンには能力を使わなければならないのは間違いないが、他のデジモン達が襲って来れば琴乃とリシアもそちらを対処しなければならない。
　自分達の能力の弱点を見極めたメタルシードラモンの観察眼に、琴乃とリシアは苦々しい思いを抱かざるえなかった。
　それは、はやても同じ気持ちだった。漸くエンシェントマーメイモンを倒せたと思ったのに、メタルシードラモンは一気に自分達の方が有利になる策を実行して来た。
　指揮官として優秀なのはエンジェントマーメイモンではなく、紛れもなくメタルシードラモンの方だったと思いながら、はやては悔しそうにメタルシードラモンを睨んでいると、メタルシードラモンの横にズドモンが海上から顔を出す。

ーーードボン！！

「メタルシードラモン様！生き残っている全員！集合いたしました！」

「そうか・・・・・随分と減ったな」

　ズドモンの報告にメタルシードラモンは自身の周りに集まった配下のデジモン達を見回す。
　戦いが始まる前で五十体以上は配下のデジモンがいたのに、今は半分近くにまで数が減っていた。
　その事実にメタルシードラモンは目を瞑ると、横にいたズドモンが握っているハンマーをはやて達に向かって構えながら叫ぶ。
「メタルシードラモン様！まだ我々は戦えます！共に戦い一気に戦

況を巻き返し…」

「撤退しろ」

「ハッ？・・・・今なんと？」

「撤退しろと告げたんだ！！今すぐ生き残っている奴らと、そこで倒れている十闘士と一緒に撤退しろ！！」

『なっ！？』

メタルシードラモンの叫びに配下のデジモン達やラーナモンだけではなく、叫びを聞いたはやて達も驚愕した。

はやて達はてっきりメタルシードラモンが配下のデジモン達を呼び戻したのは、再び態勢を整えて攻勢転じる為だと考えていた。だが、メタルシードラモンが告げた命令はその逆。“配下のデジモン達の撤退命令”だった。

その事実にメタルシードラモンが完全体の頃だった時から仕えていたズドモンは信じられず、メタルシードラモンに進言する。

「何故です！？まだ、我々は戦えます！！共に人間達を！？」

「・・・・ズドモン」

「ハッ！」

「・・・・お前は分かっているはずだ・・・・もうこれ以上戦えば、更に配下のデジモンの数が減る・・・そして何よりもこいつらは、エンシェントマーメイモンを倒した今、俺を集中して攻撃するはずだ。例え自分の命が消えてもな」

そうメタルシードラモンはズドモンに告げながら、自身をずっと睨んで来ているはやてに目を向ける。
油断しているつもりはなかった。だが、侮っていた。自分達の故郷のデジタルワールドを卑怯な手段で滅ぼした組織の人間だと思い込んでいてしまった。
それが唯一メタルシードラモンが持っていた隙。その隙の為に指揮官として不適切だとメタルシードラモン自身も思っていたラーナモンの指示に従った故の行動の結果、半数以上の配下のデジモン達を失った。
恐らくはやて達は本当に命を賭けてこの場に来ている。ならば、エンシェントマーメイモンを倒した今、次に狙うは紛れもなく同じ究極体のメタルシードラモン。先ほどのスバルの一撃で相手側にも究極体を撃ち破れる力があることがハッキリした。
デジモンの力を下げる能力と究極体デジモンでさえも大ダメージどころか敗れてしまう力。
それを他の地で戦っているデジモン達に伝えねばならないと、メタルシードラモンは先のことを考えてズドモンに撤退の指示を出したのだ。

「ズドモン！！伝えろ！人間達にはデジモンの力を下げる能力と究極体を倒せる力を持っていることを、他のデジモン達に！！」

「・・・・メタルシードラモン様」

「行け・・・そこに倒れている十闘士を連れて・・・・殿(しんがり)は俺がやる」

「・・・・・・ハッ！！必ずや今回の戦いの顛末を各地のデジモン達にお伝えします！！ご武運を！！」

ズドモンはそう叫ぶと共に周りにいた配下のデジモン達に指示を出し、生き残っていたルカモン達はラーナモンを回収すると、そのままメタルシードラモンの背後の海に撤退して行く。
機動六課の誰もがその動きに対して対処を行えなかった。何故ならばメタルシードラモンが全身から今まで以上の威圧感を発して、琴乃、リシア、オウリュウモンを含めたこの場にいる機動六課メンバーの動きを封じていた。
そしてメタルシードラモンを除いた全てのデジモン達の撤退をメタルシードラモンは確認すると、ゆっくりとその身を揺らしながら、自身にずっと険しい瞳を向けているはやてに目を向ける。

「・・・・名前を聞いておきたい。俺の最後の相手のリーダーだからな」

「・・・機動六課部隊長・・・八神はやて。それが私の名や」

「八神はやてか・・・・・・行くぞ!!!グウウウォォォォォォォォォーーーーーーーーーーー!!!!ポセイドンディバイドッ!!!!」

ーーーゴボオオオオオオオオオオオオオオオオオォォォォォォン!!!!

メタルシードラモンが咆哮を上げると同時に、メタルシードラモンの背後の海がせり上がり、メガシードラモンの『メイルシュトローム』を遥かに超えるほどの大津波が発生した。
それを目撃したはやては、即座に事前に詠唱を終えておくように命じていたリインフォースに念話で指示を送る。

（リインフォーース!!）

「はい！！眼下の大地を白銀に染めよ。来よ、氷結の息吹ッ！！アーテム・デス・アイセスッ！！」

ーーーゴオオオオオオオオオオォォォーーーーー！！！！！

リインフォースが詠唱を終えると同時に凄まじい冷気が発生し、メタルシードラモンが発生したポセイドンディバイドを凍りつかせようとする。

しかし、ポセイドンディバイドに込められているメタルシードラモンの力の方が上なのか、リインフォースが詠唱したアーテム・デス・アイセスの影響が余り発生せず、ポセイドンディバイドは凍りつく様子を見せずに進行し続ける。

ーーーゴオオオォォォォォォォッ！！

「クッ！！駄目です！！止まりません！！」

「なら！もう一発や！！眼下の大地を白銀に染めよ。来よ、氷結の息吹ッ！！アーテム・デス・アイセスッ！！」

ーーーゴオオォォォォォォォォォォーーーーーーーー！！！！！

止まらないポセイドンディバイドを目撃したはやては、即座に自身も続いて詠唱を終えて二発目のアーテム・デス・アイセスをポセイドンディバイドを発動させた。

流石に二発動時のアーテム・デス・アイセスは影響を免れなかったのか、ポセイドンディバイドの一部が凍りつき始め、僅かに進行速度が遅くなる。

タオモンはその隙を逃さすに握っていた大量の霊符をポセイドン

ディバイドに向かってばら撒き、地上にいたビショップチェスモンに指示を送る。

「ビショップチェスモン！！私がばら撒いた霊符に攻撃を放て！！」

「了解だ！！ビショップレーザーー！！！！」

ーーービィィィィィーーーーー！！！！！

ーーードゴドゴドゴドゴドゴドゴドゴドゴゴオオオオオン！！！

ビショップチェスモンが放ったビショップレーザーは、寸分違わずにタオモンがポセイドンディバイドに向かってばら撒いた霊符に直撃し、連鎖爆発を起こすように次々とポセイドンディバイドの目の前で爆発した。

その影響でポセイドンディバイドの一角に大穴が開き、その場所から避けるように大津波は真っ二つに分かれて海に戻って行く。しかし、完全に巻き上がっていた海水の全てが海へと戻る直前に、海水を撒き散らしながらメタルシードラモンが突進して来る。

ーーードオオオオオオッ！！

「グオォォォォォォォォォーーーーーー！！！！」

『ッ！！』

咆哮を上げながら迫り来るメタルシードラモンにタオモン、ビショップチェスモンは、目を見開いて慌てて回避行動を取ろうとするが、回避行動を取ろうとした瞬間、ビジョップチェスモンの足の氷海が砕ける。

ーーーバキィィィーン！！

「ヌゥッ！！」

「ビショップチェスモン！！」

砕けた氷海に足を取られたビショップチェスモンを目撃した、タオモンは慌てて叫ぶが、ビショップチェスモンは動けなかった。

何時までも足場に使用していた氷海が持つはずがなかった。繰り広げられ続けた戦いの影響で、遂にビショップチェスモンなど飛べない者が足場にしていた氷海の限界が訪れたのだ。最悪のタイミングで。

当然飛べるタオモンと違って飛べないビショップチェスモンはメタルシードラモンの突進を足が取られたことで避けることが出来ず、悔しげに自身に向かって突進して来ているメタルシードラモンを見つめる。

（ここまでか・・・すまん、オーリス）

「馬鹿やろう！！諦めんのは、はえぇんだよ！！」

『ッ！！』

ーーーガキィィィーーーン！！

突然に声が響くと同時にメタルシードラモンの目の前に巨大な刀ーオウリュウモンの『鎧龍左大刃（がいりゅうさだいじん）』ーが現れ、噛み付こうとしていたメタルシードラモンの歯と激突した。

ーーーギギギギッ！！

「ググググッ！！」

「ヌゥゥゥッ！！オラァァァァァァァーーーー！！！！！」

ーーーードォォン！！

「チィッ！！」

渾身の力を込めてオウリュウモンは、メタルシードラモンが噛み付いている鎧龍左大刃（がいりゅうさだいじん）を振り抜き、メタルシードラモンを弾き飛ばした。

その事実にメタルシードラモンは悔しげに舌打ちを行いながら、タオモンとビショップチェスモンの前にいるオウリュウモンを睨みつける。

「チィッ！！エンシェントマーメイモンの野郎にかなりのダメージを食らったくせに、やりやがるな」

「ヘッ！！悪いが、結構俺達の最初の師匠はキツイ訓練をしてくれたからな。そう簡単には倒れるかよ！！」

「ハァッ！！そうか！！」

ーーーードゴオオオオオォォン！！

オウリュウモンとメタルシードラモンは叫びあうと同時に、メタルシードラモンは尾を、オウリュウモンは右手に握っている鎧龍右大刃（がいりゅううだいじん）を振り抜き、激突させあった。

その衝撃に離れたところにいたシグナムとヴィータは感じ、オウリュウモンを援護しようと飛び出そうとした瞬間、背後の海の中からモリが飛んで来る。

『ストライクフィッシングッ！！』

ーーービュン！！ビュン！！

「なにっ！！クッ！！」

「このっ！！」

ーーーガキィィーン！！

背後からの奇襲攻撃に気がついたシグナム、ヴィータは慌てて自身の武器を振るって、迫っていたモリを弾き飛ばした。

弾き飛ばされたモリは、海へと落下して行くが、海に落下する直前にそれぞれのモリを海から出て来た手が握り、シグナムとヴィータがその相手を見極めようとすると、海の中から頭部にハンギョモン二体を乗せたメガシードラモンが出て来る。

ーーードバァァァァン！！

「こいつら！？」

「先ほどのデジモンと一緒に撤退していなかったのか！？」

「・・・・マモル」

「何？」

「・・メタルシードラモンサマ・・・・マモル！！」

「グウオオォォォォォォーーーーーーー！！！」

一体のハンギョモンの言葉を肯定するようにメガシードラモンは咆哮を上げ、もう一体のハンギョモンは自身の武器であるモリー『トレント』ーをシグナムとヴィータに向かって構える。

その動きにシグナムとヴィータは、目の前の三体がメタルシードラモンを護るためにこの場に戻って来たことを悟った。それだけあのメタルシードラモンは配下のデジモン達に慕われていたという事実。

そしてシグナムとヴィータは同時に何かを感じた。何が違う。何かが、何かが自分達の持つはやてへの忠誠心と違うと二人は感じた。

それは漠然とした何かなのだが、その何かが今の自分達とはやてには必要なのだとシグナムとヴィータは感じるが、その何かが掴めなかった。

（クッ！！何なのだ！？この違和感は！？）

（何かちげぇ！クソッ！！何なんだよ！？）

漠然と身の内から湧き上がってきた違和感にシグナムとヴィータは、思わず動きが止まってしまう。

その隙をハンギョモン二体は逃さず、持っていたトレントを振り被り、シグナムとヴィータに向かって全力を込めて投げつける。

『ストライクフィッシングッ！！』

ーーービュン！！ビュン！！

『ッ！！』

投げつけられたトレントにシグナムとヴィータは気がつくが、既に迎撃は間に合わずに、真っ直ぐにトレントは進む。

シグナムとヴィータが来るであろう衝撃に目を見開いた瞬間、横合いから蒼い閃光が二つ走り、シグナムに向かっていたトレントを人間形態のザフィーラが、ヴィータに向かっていたトレントを『水』のビーストスピリットを抱えたギンガが殴りつける。

「ヌゥン！！」

「ハァァァッ！！」

ーーーガキィィィィーーン！！

『ッ！！』

「ザフィーラ、ギンガ！！」

自分達を助けてくれたザフィーラとギンガにシグナムは声を上げるが、ザフィーラとギンガはかまわずにメガシードラモンとハンギョモン二体に向かって拳を構える。

「ギンガ・・お前は『水』のビーストスピリットを抱えている。無理はするな・・それは絶対に渡してはならない物だからな」

「はい！」

「シグナム！ヴィータ！！止まっている場合ではない！我は決めた

はずだ！此度の戦いでは、相手にどんな覚悟があろうと戦いを止めんと！」

「・・・分かっている！」

「んなのは・・分かってんだよ・・（だけど・・クソッ！！）」

ヴィータは頷きながらも、漠然と湧き上がってくる感情に振り回されていた。

その感情が何なのかさえもヴィータとシグナムには分からない。しかし、同じ守護騎士であるザフィーラにはその感情が何なのかを理解していた。

だが、今はそのことを話している場合ではないと思い、目の前にいるハンギョモン達に向かって拳を構える。

（主が新たにたてようとしている策の実行の邪魔は、させるわけにはいかん！盾の守護獣・・・・いや！ザフィーラの名に賭けてこやつらには絶対に邪魔はさせん！）

そうザフィーラは叫ぶとシグナム、ヴィータ、そしてギンガと共に三体の完全体デジモンとの激闘を始めるのだった。

その頃、一先ず作戦を立てる為に集まっていたはやて、リインフォース、琴乃、リシア、そしてスバルはメタルシードラモンを倒す策を考えていた。

「質問やけど、琴乃ちゃんとリシアちゃんが同時に一体のデジモンに能力を発動させたら、どないなことが起きる？」

「・・・・そうですね・・恐らく重ねがけならばその分だけ相手の力は下がるでしょう・・・・ですが、やったことはありませんから確証はありません。私とリシアの力は同一のモノですから、もしかしたら最終的に相殺が起きて結局力が下がらない可能性もあります」

「そうか・・・なら、質問を変えるけど・・・メタルシードラモンの動きを封じるのは…」

「そんなの僕ら出来ないよ」

「無理ですね・・・私達は攻撃力、防御力、機動力などは強いのですが・・・逆に補助能力が低いんです」

「つまり、お前達は単騎での戦闘能力は高いが、サポートなどは難しいと言うか？」

「その通りです」

リインフォースの質問に、この場では隠してもしょうがないと思った琴乃は、自分達の魔導師としての弱点を語った。

魔導師一人だけで、デジモンを殲滅すると言うコンセプトの基に人造魔導師として生み出された琴乃、リシア、風華。その攻撃力、防御力、機動力など個人の戦闘能力として異常過ぎるほどに高いのだが、その反面、誰かをサポートする能力は非常に低い。

これが共に生み出された琴乃、リシア、風華の三人ならば話は変わるのだが、他の者だった場合は難しい。何せ使える魔法の殆どが攻撃魔法、防御魔法、加速魔法。一応拘束魔法も少ない数ではあるが使えるのだが、メタルシードラモン相手に通じる魔法ではない。

そのことを琴乃の説明で理解したはやては、動きを封じるのは自

分とリインフォースでやるしかないと判断し、決め手はやはりスバルの『振動破砕』しかないと感じる。
　既に琴乃とリシアの能力はメタルシードラモンに知られている。しかし、スバルの『振動破砕』の正体まではメタルシードラモンは至っていない。分かっているのは、スバルの一撃には究極体に大ダメージを与える何かが宿っていると言う事だけ。

「スバル？・・・もう一つの切り札を使って貰うことにしたから」

「えっ！？でも、アレは！？未完成なんですよ！？成功確立が低いから、今回の任務じゃ使わないんじゃ・・・」

「そう思っとたけど・・・もう使うしかあらへん・・・本当は一か八かはやりたくなかったけど・・・もうやるしかない！」

「・・・分かりました！！絶対に決めてみせます！！」

「よし！！琴乃ちゃん！リシアちゃん！！力を貸して欲しいんやけど！！」

「・・・・いいでしょう・・・しかし、終わった後に要求があります。泥棒猫との対面を要求します」

「ハッ？・・・・・泥棒猫？」

「そうです！！絶対に会わせて貰います！！」

「わ、分かったわ・・よう分からへんけど、要求は叶えるから・・手を貸して貰うわ」

そうはやては鬼気迫る琴乃の様子に疑問を持ちながらも頷き、自身が考えた策を四人に説明する。

戦いの終わりの時は近づいていた。

その結末がどのような形に終わるのか分からないが、戦いの終わりは本当に近いのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1827k/

漆黒の竜人と少女

2011年10月5日22時30分発行